転生したら平民でした。生活水準に耐えられないので貴族を目指します。

蒼井美紗

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。

このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
転生したら平民でした。生活水準に耐えられないので貴族を目指します。

【Ｎコード】
Ｎ２１２５ＧＺ

【作者名】
蒼井美紗

【あらすじ】
【Ｍノベルス様より書籍１～４巻発売中、コミカライズ１～４巻も発売中です！】
気がついたら異世界で八歳の子供となっていた。最初は異世界に興奮してたけど、平民に転生したから、お風呂ないし、水洗トイレじゃないし、料理は素材の味だし、日本の方が全然いい！
日本に帰りたいけど無理そうだから、この世界で快適な生活を目指すことにした。けど自分で作るのなんて無理だし……

え？　貴族は魔法具で水洗トイレ？　お風呂もあるの？　じゃあ俺、貴族を目指す！

そう決めた主人公が異世界で快適な生活のために奔走していたら、いつの間にか世界の救世主になっていた物語。

※カクヨムにも掲載しています。

※コミカライズの原作はｗｅｂ版ではなく書籍版ですのでご了承ください。ｗｅｂ版と書籍版ではストーリーが異なります。

※本編完結済みで、番外編を更新中です！

1、転生（前書き）

初めて小説を書いたので初心者ですが、楽しんで読んでいただけたら嬉しいです。よろしくお願いします！

追記
※コミカライズの原作はｗｅｂ版ではなく書籍版ですのでご了承ください。ｗｅｂ版と書籍版ではストーリーが異なります。

1、転生

「レオン！　大丈夫か！？」
「レオン！　目が覚めたの！？」

うぅ～、なんかうるさいな。それよりも頭が痛い。うるさいのも頭にガンガン響くし、静かにしてくれ。
そう思いながら重たい瞼をなんとか上にあげたら、目の前に知らない人がいた。誰だ？　ていうかここどこだ？
混乱していると木の天井が視界に入る。俺の家は白い天井だったはずなのに……

「レオン、大丈夫なの？　あなた階段から落ちて頭を打ったのよ。少しの間気を失ってたみたいだけど、体調が悪いとかない？」

階段から落ちた……それにレオンって誰だ？　俺は市ヶ谷涼介。レオンなんて外国人みたいな名前の人知らないし……
あぁ頭が割れるように痛い、この良くわからない状況について考えるのがめんどくさい。
もう一度寝よう。多分これは夢だ。寝て起きればいつもの日常に戻ってるはず。
そう思って俺は目を閉じた。

「ふぁ～。よく寝た……ってここどこ！？」

そういえば、知らない場所で目を覚ます夢を見たような……もしかして、あれって夢じゃなかった！？
なんで俺こんな場所にいるんだろう。確か大学に講義を受けに行って、講義が直前で休講になったんだ。それで家に一度帰ろうとして、それでその後どうしたっけ？

あれ、覚えてない。いや、何かが爆発したような記憶があるようなないような……ダメだ思い出せない。
ん、俺の手なんか小さくないか？　そう思って恐る恐る体を見下ろしてみると……明らかに小さくなっている。え、どういうこと？
子供になってる！？

「あー、あー」

声も違う！　なんか高い声になってる。マジでどういうこと？
そういえば夢で知らない人に囲まれてたような。それにレオンって呼ばれてた。もしかして、俺がレオンになったとか？　いやそんな馬鹿なことある訳……

そこまで考えた時、突然頭にレオンだった頃の記憶が流れ込んできた。なんだこの記憶、俺はレオンになったのか？

なんでそんなことに……それに、記憶によるとここは日本じゃないどころか地球でもない。もしかして異世界転生ってやつ？　あれって物語の中だけじゃないの！？　じゃあ、俺は地球で死んだのか？

そうして俺が混乱を極めている時、俺が寝ていた部屋にひとつだけあるドアが突然開いた。

「レオン目が覚めたの？　もう大丈夫？」

この人はレオンの母さんだ、レオンの記憶からわかる。でもレオンの記憶では大好きな母さんだけど……俺にとっては知らない人だ。

レオンが市ヶ谷涼介になってるってことは、絶対に知られない方がいいよね。誰も信じてくれないだろうし、悪魔が憑いたとか言われて気味悪がられても困るし……

ここはレオンになりきるしかない。

「母さん、おはよう。どこも痛くないし大丈夫だよ。俺、階段から落ちたんだよね？」

「そうよ！　ちゃんと気をつけなきゃダメじゃない。母さんほんとに心配したんだから」

「ごめんね。これからはちゃんと気をつけるよ」

「そうしてちょうだい。それよりレオン、もう母さんたちは朝ごはん食べちゃったけどレオンは食べられる？」

母さんはとても心配そうに俺の顔を覗き込んだ。ここは心配させない方がいいんだろうけど……混乱してお腹は空いてないし、もう少し一人でいて頭を整理させたい。

「今はまだお腹空いてないから良いかな。お昼ご飯は食べるよ」

「そう？　じゃあお昼ご飯までちゃんと寝てなさいね」

そう言って俺の頭をポンポンと撫でてから、母さんは部屋を出て行った。

ふぅ～、なんか疲れた。でも頭の中を整理しないと。

とりあえず俺は地球で死んだのか？　良く覚えてないんだけど、

とにかくこれは夢じゃなくて地球に戻ることはほぼ不可能ってことかな。
せっかく大学受験頑張って、行きたかった大学に行ってたのにな。それに、お母さんにもお父さんにも友達にももう会えないのか……
地球でのことを考えていると次から次へと目に涙が浮かんでくる。
そのまましばらく俺は静かに泣いていた。しかし、泣いていてもしょうがないし、とりあえず現実を受け入れることにした。
「よし！　悲しいけどとにかく今は現状を理解しないとだ」
両手で自分の頬を叩いて気合を入れる。まず考えないといけないのは、レオンの記憶についてだ。これは不思議なんだけど、体はレオンなのに人格は完全に市ヶ谷涼介になってしまっている。
レオンの今までの記憶は思い出そうと思えば思い出せるけど、思い出そうとしない限り頭に浮かんでくることもない。
その記憶によると、レオンはつい最近八歳になったばかりのようだ。八歳のお祝いをした記憶がある。
季節は一応あるようだけど、夏は暑くなりすぎず冬もそこまで寒くならないので過ごしやすいみたい。
また、レオンが暮らしているのはラースラシア王国という国の王都ラスリアらしい。そして、レオンの家族はそこで食堂を開いている。父さんがジャン、母さんがロアナ、妹がマリーの四人家族だ。
レオンの日常は食堂が開いている時は家の手伝い、閉まっている時は近所の子達と近くの森に、果物や山菜、薪などを拾いに行っている。また少ないお小遣いで買い食いなどもしているようだ。
レオンの知識では一年の日数や一日の時間など正確なことはわからないけど、教会が各地域ごとにあり、そこから鳴る鐘の音で時間

を把握しているらしい。
朝の鐘、お昼の鐘、夜の鐘、就寝の鐘の４回鐘がなる。そして、朝の鐘で鳴る鐘の回数が曜日を表しているようだ。

１回　火の日
２回　水の日
３回　風の日
４回　土の日
５回　回復の日

この五つの曜日を繰り返しているようなので、一週間は五日なのだろう。
回復の日は日曜日のようなものなのかと思ったけど、レオンの記憶で食堂はよっぽどの事情がなければ年中無休のようなので、この世界に休日の概念はないのかもしれない。
またお金は日本円に換算すると、鉄貨が十円、小銅貨が百円、銅貨が千円くらいのようだ。もっと価値の高い硬貨もあるのだろうけど、レオンは見たことがない。

そしてこれが一番大事だ。この世界、魔法があるみたいなんだ。レオンの記憶では、魔法はほとんどの人が基本的には使える。
一人一属性の魔法が使えて、属性は、火魔法、水魔法、風魔法、土魔法、身体強化魔法、回復魔法の六属性。魔力量によってどれほどの魔法が使えるのか決まるようだ。
八歳頃に教会で魔力測定をしてもらい、自分の属性と魔法の使い方を覚えるらしい。レオンは最近八歳になったのでこれから行く予定みたいだ。これは楽しみだな。

それから忘れてたけど、もう一つ大事なことがあった。この世界の発展度合いだ。

この世界、少なくともレオンの生活圏では、地球よりはるかに発展していない。まず水道なんてものはなく井戸水だ。よって必然的に、お風呂もないし水洗トイレもない。

お風呂は桶に汲んだ水を使いタオルで体を拭くだけ、トイレはボットン便所のようなもので汲み取り式だ。

まあ、この部屋を見れば発展度合いがわかるよね。この部屋はガラスの窓なんてものはなく木でできた引き上げ式の窓。ベッドも一応木枠があるけど、その上に藁があり布を敷いただけ。

電気もない。蝋燭が置いてあるので、夜はそれを使うのだろう。今は窓が開いていて、自然光だけだ。それとさっき母さんが出て行ったドア。それしかない。

これは生活水準をなんとか引き上げないと、耐えられない気がする。やっぱり情報収集だ。

レオンの記憶からわかる重要なことはこのぐらいかな。やっぱりまだ子供だから曖昧な知識も多いし、知らないことも沢山あるんだろう。それはこれから知っていかないと。

とりあえずこの世界に適応して、俺がレオンになったことを知られないようにしないとだな。

1、転生（後書き）

毎日投稿する予定ですので、また明日続きを投稿します。

ー追記ー
☆評価欄の下に新作へのリンクを貼ってありますので、よろしければそちらも読んでいただけたら嬉しいです！

「婚約破棄された可憐令嬢は、帝国の公爵騎士様に溺愛される」

という作品です！

2、出会い

さて、これからどうするか。母さんは寝てろって言ってたけどもう寝られそうにない。とりあえず、家を探検してみるか！　記憶と実際に見るのは全然違うからね。

そう思ってベッドから降りようと足を下ろしたところで、ベッド脇に靴が置いてあることに気づいた。家は土足みたいだ。

靴を履いてみると、草のようなものを編んで作られていることがわかる。ちょっとチクチクするけど今は我慢だ。この世界にこんな靴しか無いなんてことはないだろう。

ベッドから降りて部屋に一つだけあったドアを開けてみる。そろりと顔を出して部屋の外を覗くと、右側は行き止まりとなっていて窓が開けられていた。そして正面にはもう一つ部屋があり、左側には下り階段があった。

まずはもう一つのドアを開けてみることにする。

「失礼しまーす」

小さな声でそう言ってそっとドアを開けた。なんとなく他人の家をこっそり覗いてるような気分になってしまう。

もう一つの部屋は物置部屋みたいなものだった。今の俺が見てもよくわからないので、ここは入らない方がいいかな。

次は下の階に行こう。そう思ってギシギシとうるさい階段を下っていくと、真っ直ぐな短い廊下があり、廊下の突き当たりにドアが一つ、右側にドアが二つ、左側にドアが一つあった。

右側のドアから開けてみると一つ目のドアはトイレで、二つ目の

ドアは机と椅子が置いてありリビングのようだった。

中に入ってみると、リビングの奥にもドアがあることが分かる。鍵がかかっていたので開けてドアを開くと、小さな庭と井戸があった。隣の家や後ろの家とは木の柵で遮られていて、家の前の道からも庭に入れないように木の柵があるので、中庭のような感じだ。

タライなどが立て掛けられていて、家と木の柵を繋ぐように紐が通っているので、洗濯もここでするのだろう。レオンの記憶では、このタライを使って布で体を拭くようだ……

それだけなんて耐えられない。この世界にはお風呂がないのかな。もしそうだったらどうすればいいんだ……

でも絶対お風呂はどこかにあるはず、そう信じたい。この世界に慣れてきたらお風呂探しをやろうかな。

次は階段側から見て、左側にあったドアを開けて見ることにした。左側のドアからは物音がしているので、母さん達がいるのかもしれない。

少し緊張しつつ左側のドアを開けると……、そこは厨房で母さんと父さんが料理をしていた。

「レオンどうしたの？　まだ寝てなくていいの？」

「母さん、もう良くなったから大丈夫だよ」

改めてよく見てみると、綺麗な母さんだ。金髪に琥珀の瞳でまだ二十代だろう若さ。レオンの記憶では優しいけど怒ると怖い母さんだ。

「レオン、大丈夫かい？　階段から落ちて頭を打った時はどうしようかと思ったよ」

「父さん、心配かけてごめんね。もう全然元気だから大丈夫！」
「そっか、本当に良かった」

父さんは心底ホッとしたように顔を緩めている。父さんは茶髪に茶色い瞳ですごく優しそうな雰囲気の人だ。そして実際、家族思いでとても優しい。

「ジャン、手を動かさないと開店に間に合わないわよ！」
「ごめんロアナ、すぐやるから」

父さんと母さんを見て、レオンは思わず苦笑いをしてしまった。この家族は母さんが強いみたいだね。
でも、父さんが母さんのことを大好きなのは見ていればわかる。今も怒られながらも顔はにこにこしているし。

「母さん、マリーは？」

俺は妹にも実際に会ってみたかった。市ヶ谷涼介には下の兄弟がいなくて、弟や妹が憧れだったのだ。

「マリーは食堂の掃除をしてくれているわ。レオンも体調が大丈夫なら手伝ってきなさい」
「うん」
「マリー！　レオンも手伝ってくれるわよ！」

そう母さんが食堂の方に呼びかけた。食堂と厨房は、間にカウンターはあるけど繋がっているのだ。

「やった！　一人じゃ大変だったの～」

そんなマリーの声が聞こえてくる。俺は厨房からさっきの廊下に戻り、廊下の突き当たりのドアを開けた。そこが食堂につながっているのだ。

「お兄ちゃん頭大丈夫？　もう痛くない？」
「もう大丈夫だよ。心配かけてごめんね」
「もうお兄ちゃんたらドジなんだから～」

マリーはそう言いながら、頬をぷくっと膨らませた。俺はその様子に、思わずまじまじとマリーを見つめてしまう。
マリーは茶髪に琥珀の瞳で、お人形さんのように顔が整ってる。これは可愛すぎる。犯罪に気をつけなければいけないな……
マリーは五歳だけど立派に店の手伝いをしていて、すでに店の看板娘になりつつあるらしい。俺は変な輩からマリーを守ることを心に誓った。もうすっかり兄バカだ。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん！　ボーッとしてどうしたの？　やっぱりまだ頭痛いの？」

やばい、マリーを凝視していたのが体調が悪いように見えたらしい、マリーを心配させてしまった。

「もう全然大丈夫だよ。さあ、お兄ちゃんも仕事するかな！」
「ほんとにー？」

マリーは疑うような眼差しを向けてきたが、俺がうんうんと首を縦に振っていると納得してくれたらしい。

「じゃあ、お兄ちゃんは玄関の外の掃除してきて。私は中の掃除してるから」

そう言ってマリーは外を掃く用の箒を渡してくれる。

「わかったよ。じゃあ掃除してくる！」

俺はそう言って箒を手に持ち、食堂にある外へ繋がっているドアを開けた。

「うわぁ～！」

思わず大きな声を出してしまってから、慌てて自分の手で口を押さえた。

でもまだ感動が引かない。レオンの記憶から知識としては知っていたけど、実際見るのは全然違う。凄い、本当に異世界だ！

まずドアを開けて目に入るのは、馬車が余裕ですれ違えるほどの大通りで、そこにはたくさんの馬車や人が行き交っていた。家は基本的に木造の家が多いみたいで、二階建てほどの家が所狭しと並んでいる。

でも、この光景だけだとタイムスリップしたとも考えられるのか。ただここが異世界ということは、レオンの記憶に魔法があることから証明済だ。

それにしても感動する。すごく綺麗な街並みというわけではなく、日本と比べたら発展してないし汚いけど、異世界という感動がそれを打ち消している。

でも俺はずっとここで暮らしていかないといけないんだよな……そう考えると、感動が薄れてきてもっと綺麗なところがいいと思ってしまう。

まあ、今そんなことを考えてもしょうがないよね。俺は気合を入れるために両手で自分の頬を叩き、右に一歩足を踏み出した。しかし丁度そちら側から歩いてきていた人がいて、思いっきりぶつかってしまう。

そして、その反動で俺は尻餅をついた。

「いてて……、え？」

痛みに耐えながらもぶつかってしまった人に謝ろうと上を向くと、俺は驚きで言葉を失った。

そこにいたのは騎士だったのだ。フルプレートの鎧は着ていないけど、簡易の鎧を着て腰には剣がある。赤髪で茶色い瞳のかっこいい人だった。

この世界に貴族がいるのかわからないけど、服や佇まいから絶対に偉い人だろうと思って、慌ててその場で正座して謝ろうとしたら男性が手を差し出してきた。

「君、大丈夫か？　ぶつかってしまってすまない」

そう言われて、一瞬何を言われたのか理解できずボケッとしてしまったが、慌てて立ち上がり謝った。

「こちらこそ申し訳ありません。ぶつかってしまって、お怪我はございませんか？」

思わず日本にいた頃の癖で、敬語で丁寧に返してしまった。子供がこんな話し方をして変に思われただろうか……そう思い男性の顔を見上げると、男性は眉間に皺を寄せていた。

やっぱり敬語はダメだったかと俺がわたわたと慌てていると、男性に聞かれた。

「君はその言葉遣いをどこで覚えたんだ？君はこの食堂の子供だろう？　学ぶ機会なんか無いと思うが……」

もしかして、子供とか関係なく丁寧な言葉遣いがダメなのか！？

やばい、どうしよう……

「えっと……その……、近所のお爺さんが、教えてくれたんだ」

そう言って誤魔化そうとしたけど、男性はまだ難しい顔をしている。どうしようかと焦っていると、ふと男性の顔が和らいだ。

「そうか、偉いな」

そう言って俺の頭をポンポンと撫でてくれた。俺は心底ホッとして、思わずため息を吐いた。

「俺の名前はフレデリックって言うんだ。君の名前は？　それと怪我は大丈夫か？」

「俺はレオンです。怪我は大丈夫です。ぶつかってごめんなさい」

今度は丁寧にならないように気を付けて答えた。

「レオンか、今は時間がないから寄れないが今度食堂に寄らせてもらうよ」

男性はそう言ってにっこりと微笑んでくれる。

「は、はい！　待ってます」

俺もにっこりと笑うと、フレデリックさんはもう一度俺の頭をポンポンと撫でて去っていった。

「ふぅ、なんとか誤魔化せたかな」

今回はやばかった。これから気をつけないと……

というか、なんで敬語なんて話せたんだろう？　少なくともレオンが話せたなんてことはないと思うけど。

よく考えてみれば、俺は皆の話してる言葉が日本語として完全に理解できるし、話す時も日本語を話すのと同じように話せる。

文字はどうだろう？　そう思って地面の土に文字を書いてみた。そうすると日本語を書くかのように異世界の言葉を書けるし、その言葉を読むことができた。

これは……どういうことだ？　少なくともレオンの記憶では、レオンは読み書きができなかった。

よく分からないけど、とにかく俺はこの世界の言語を、日本語と同じように話せて読み書きできるということだ。便利だし、とりあえずありがたいと思っておこう。でも気をつけてバレないようにしないとだよね。

そんな考察をしていると、家のドアが開きマリーが出てきた。

「お兄ちゃん終わった？」

そこで初めて気づいた。まだ掃除してない！俺は慌てて箒で掃き始める。

「も、もうちょっとかかるかなぁ」

あはは、と乾いた笑いを浮かべながらマリーを見ると、マリーが疑いの目で見つめてきている。

「お兄ちゃんサボってたでしょ」

「そ、そんなことないよ！　もう終わるからマリーは家の中に入ってて」

マリーはジーッと俺を見つめていたが、納得したのか少し表情を和らげた。

「じゃあ早くしてね。開店になっちゃうから」

「わかったわかった。もうすぐ終わるから」

マリーはそう言って家の中に戻っていった。

やばい！　早く掃除しなきゃ！　俺は必死で掃除をした。

2、出会い（後書き）

しばらくは毎日投稿します。毎日２０時過ぎに投稿予定なので是非読んで頂けたら嬉しいです！！

面白いと思ってくださったら、ぜひ評価、感想、レビューもよろしくお願いします！

3、異世界の食事

やっと掃除が終わった……綺麗になった玄関先を見て満足していたそのとき、大きな鐘の音が聞こえてきた。これがお昼の鐘か……そう思っていると家のドアが外側に大きく開きマリーが出てきた。

「お兄ちゃん終わったの？　お昼の鐘が鳴ったからもう開店だよ！」
「お、終わったよ。綺麗になってるでしょ？」
「本当だ。じゃあそんなとこに立ってないで早く中を手伝って！」
「分かった分かった。今行こうと思ってたんだ」

マリーは逞しく育ってるな……そう思いながら家に入ろうとしたらまたマリーに怒られた。

「お兄ちゃん！　ドアを固定してからでしょ」
「そうだった、ごめん忘れてたよ」

食堂に入る前に玄関のドアを大きく開いて、ストッパーで固定した。この国でお店が開いている時は、ドアを開けっぱなしにしておくことが多いらしい。そうでない店もあるけど、お店の明るさの為や文字が普及してないが故の習慣のようだ。
そうしてお店のドアを開けたら、すぐに一人のお客さんがやって来た。

「もう開店したのか？」
「はい！　いらっしゃいませ！」

マリーがお客さんに、にっこりと笑顔で答える。お客さんはそん

なマリーを見て顔がだらしなくニヤけている。マリーは本当に看板娘としての役割を果たしているみたいだ。俺も頑張らないと！　そう思い、お店の中に入った。
そうするとどんどんお客さんが入ってくる。うちは結構人気の食堂みたいだな。俺は次々とお客さんを席に案内していった。

うちの食堂の昼メニューは、ステーキセットか豚肉の野菜炒めセットの二つだけだ。固いパンにスープと水がセットの内容で、メインをステーキか豚肉の野菜炒めか選べる。
結構がっつりメニューなので男性客が多く、ステーキの方が頼まれる割合が高い。
また新しいお客さんだ。かなりガタイの良いおじさんが来た。

「いらっしゃいませ、ステーキか豚肉の野菜炒めどっちにしますか？」
「ステーキを頼む」
「はい、ステーキ一つ！」

この世界は、日本のように丁寧な接客は必要とされてない。笑顔で働いてれば高評価な店になるくらいだ。

「レオン、ステーキよろしく」
「うん！」

俺の仕事は注文を聞いて出来上がったら、先に注文したお客さんから順番に食事を出していくことと、テーブルの片付けだ。セットのパン、スープ、水はマリー担当だから俺はステーキか豚肉の野菜炒めを出せば良い。
器とカトラリーは木製だから割る心配はないけど、お客さんの数が多くて結構大変だ。

「レオン、野菜炒めとステーキ三つできたよ」
「はい、持ってくね！」

そうして忙しく仕事をしていると段々客足が収まってきて、最後のお客さんが店を出てお店は閉店となった。
お店は閉店時間が決まっているわけではなく、お客さんが来なくなったら閉店になる。なので日によって閉店時間はまちまちだけど、皆お昼の鐘が鳴ると食堂に来るからそこまで差は出ないようだ。

「皆お疲れ、お腹空いたなぁ」
「私達もお昼にしましょうか」
「お昼！　やったー！　凄くお腹空いてたの」

レオンの家族は、食堂の昼営業が終わってからお昼ご飯になるらしい。俺もお腹が空いてたから早く食べたい。

「レオンも食べるわよね？」
「うん！　お腹空いた！」
「じゃあ皆でご飯にしましょうか。今日はステーキが二枚残ってるから半分ずつ食べられるわよ」
「やった～！　最近野菜炒めばっかりだったから嬉しい！」

いつもお昼ご飯は昼営業の残りを食べるみたいだけど、そうなると必然的に野菜炒めが多くなる。マリーは最近、野菜炒め飽きたとずっと言っていた。
今は満面の笑みでステーキを待っている。父さんはそれを見て苦笑しながら言った。
「マリー、今から焼くからもうちょっと待ってて。マリーの分は大

きめにしてあげるから」
「大きめ！？　やったー！」
「あらあらマリーはステーキが好きなのね」

母さんまで笑っている。俺も思わず笑ってしまった。すごく素敵な家族だ。日本の家族のことを思い出すと悲しいけど、この家族の一員になれて良かったと思った。

「父さん！　俺も大きめがいいな！」
「レオンもかい？　じゃあ大きくしてあげよう」
「もう、二人とも子供なんだから」

父さんと母さんが顔を見合わせて笑っている。

「じゃあ二人ともリビングで待ってなさい」
「「はーい！」」

俺とマリーは二人揃って返事をして、リビングに向かった。
リビングには机と四人分の椅子があり、マリーと俺は隣同士でマリーの前が母さん、俺の前が父さんが定位置らしい。
いつもの定位置に座った。

「お兄ちゃん、ステーキ楽しみだね！」
「そうだね。美味しいよね！」
「うん！　私ステーキ大好き！　もう四日間もステーキ残らなくて食べてないんだよ。ちゃんと数えてたんだ！」

そう言ってマリーは、腰に手を当てて自慢げに胸を反らしている。顔も得意げだ。
俺の妹、か、可愛い……！　もう兄バカ一直線になりそうだ。

「マリーは偉いね。ちゃんと数えられたんだ」

そう言いながらマリーの頭をポンポンと撫でてあげると、マリーはとても嬉しそうに笑った。可愛い……！

俺がマリーの可愛さにデレデレしていると、リビングのドアが開き父さんと母さんが入ってきた。

「ご飯できたわよー」

「はい、これマリーとレオンのステーキだよ」

「きゃ～！　やった！！」

「美味しそう！！」

そこには焼き立てのとても美味しそうなステーキがあった。この世界に来てから初めての食事だ。口に合うといいんだけど……でも匂いはめちゃくちゃ美味しそう。じゅるり、思わず涎が垂れそうになる。

「パンとスープと水もね。はいどうぞ」

「二人は野菜炒めも食べるかい？」

「私はステーキだけでいい！」

「俺は野菜炒めもちょっと食べたいかな」

「はい、これレオンの野菜炒めね」

他の料理も美味しそうだ！　早く食べたい。

「じゃあ食べましょうか、いただきます」

俺はその言葉に心底驚いた。この世界でも「いただきます」と同じような意味の言葉があるのかな。それが翻訳されてるとか？

よく分からないけど……、とりあえず便利だからいいか。考えてもわからないし。とにかく今は食べよう！

「「「いただきます！」」」

俺はまずステーキをフォークに刺した。この世界は個人でナイフを使う習慣はないようで、ステーキは食べやすいサイズにすでに切られている。

ぱくっとステーキを一口食べる。

「美味しい！」

「お兄ちゃん美味しいね！」

ほんとに美味しい。日本で食べた牛肉のステーキと同じ味だ。この世界の食べ物は日本と変わらないのかもしれない。

でもレオンの記憶では、食事のレパートリーは少ないようだ。ということは、素材は同じだけど調理法が発展してないってことなのかもしれないな。このステーキもすごく美味しいけど、塩味だけだ。

パンとスープも食べてみよう。ぱくっ……硬っ！？　めちゃくちゃ乾燥したフランスパンって感じだ。まあ、良く噛めば食べられるし味はいいけど、食べづらさはある。

スープは……ごくっ、うん。不味くはないけど塩味だけだから少し物足りなく感じる。やっぱり出汁がないからかな。

野菜炒めはどうだろう？　これは……普通に美味しいな。日本でも食べ慣れた味だ。日本でも野菜炒めは塩味だったからかもしれない。

うん、高望みしなければ普通に美味しいご飯だ。これは本当に良かった。食事が口に合わなすぎてキツいってことはなさそうだ。

もっと美味しいご飯についてはこれから考えよう。そんなことを

考えながら食べていると、いつの間にか食べきっていた。

「美味しかった。ごちそうさま」

「私も食べきったよ。美味しかった！」

横を見るとマリーも食べきっていて、満面の笑みで満足そうにしている。それを父さんと母さんもニコニコと見ている。

幸せだな、この異世界でこの家族を大切にしていこう。そう思った。

3、異世界の食事（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿する予定です！ぜひ読んで頂けたら嬉しいです。

面白いと思っていただけたら、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！！

4、普通の森

「母さんと父さんは夜メニューの準備をするから、レオンとマリーは遊んできて良いわよ」
「そうだね。気をつけるんだよ」

母さんと父さんのその言葉に、マリーが今思い出したかのように椅子から立ち上がり叫んだ。

「忘れてた！　お兄ちゃん、今日ニコラお兄ちゃんとルークと森に行く約束してたの！」
「そうなの？」
「うん、お兄ちゃん忘れたの？」
「い、いや覚えてたよ。早く準備しないとね」

俺は内心焦りながらマリーにそう答えた。確かにレオンの記憶を探ると……約束したみたいだ。
この記憶って、自分から思い出そうとしない限り出てこないから少し不便なんだよね。……まあ、ないよりは全然マシだからありがたいけど。

ニコラとルークは隣にある道具屋の子供達だ。いわゆる幼馴染で仲が良く、頻繁に一緒に遊んでいるらしい。ニコラが俺と同い年で、ルークがマリーと同い年なところも仲が良い理由だろう。

「今日は森に行くの？　獣よけの鈴は絶対に持っていくのよ」
「もちろん、忘れないから大丈夫だよ。たくさん果物採ってくるね！」

獣よけの鈴とは、森に行く時に必ず持っていくものらしい。日本でいう熊よけの鈴みたいな物だろう。レオンの記憶では森に魔物がいるということはなく、小動物や熊がいるぐらいみたいだ。それも森の深いところにいるので浅いところではほとんど出会わず、獣よけの鈴を付けていれば一切出会わないらしい。

異世界には魔物がいるのが定番だけど、この世界にはいないのかな。あれは物語の中だけだったのか……まあ、いないならそれは良いことだ。実際魔物と戦うなんて無理だし怖すぎる。

「お兄ちゃん、準備しよう！」

マリーは俺の手を引いて、階段を上がり二階の物置部屋に入った。森に行くときは革製のブーツに履き替えて、ナイフと皮袋に入った水、収穫したものを入れる背負い籠を持って行くらしい。

今の俺の服装は、ゴワゴワしたTシャツのようなものと同じ素材で作られた紐で結ぶタイプのズボンだけど、服はそのままで森に行くようだ。

よしっ、準備できた。ナイフを腰につけてるのってなんか緊張するな。子供でもナイフを持つところが異世界だ。

「マリー、準備できた？」
「できたよ！」
「じゃあお水を入れたら行こうか」

飲み水は井戸の水なので、水を汲むのにも井戸に行かなければいけない。井戸はポンプ式ではなく紐で引き上げるタイプなので、水を汲むのも大変だ。

俺は井戸に着くと桶を落とし水を入れ、ぐっ……ぐっと勢いよく

紐を引いた。予想以上に重くて手が痛くなる。

ふぅ～、やっと上まで来た。八歳の体だと井戸の水を汲むのも一苦労だ。水を皮袋に入れ、森に行く準備は完了だ。

「じゃあ、マリー行こうか！」

「うん！」

俺達は厨房のドアを開け、父さんと母さんに挨拶してから家を出た。

「行ってきます！」

「いってらっしゃい。気をつけるのよ」

「暗くなる前には帰ってくるんだよ」

「はーい！」

家を出ると隣の家に向かう。隣の家はうちと同じような作りで、食堂部分が道具屋になっている感じだ。ナイフや皮袋、麻袋など日常で使う様々な道具を売っている。

「こんにちは！　ニコラとルークいる？」

「あら、マリーちゃんいらっしゃい」

「おばさん、こんにちは」

「レオンも来たのね。ニコラとルーク、もうすぐ来ると思うからちょっと待っててね」

お店のカウンターにはニコラとルークの母さんがいた。おばさんって呼んでるけど、うちの母さんと同い年くらいのまだ若い人だ。少しふくよかで優しい笑顔が印象的で、今もレジ代わりのカウンターの中で椅子に座って、にっこりと笑いかけてくれている。

「今日はおじさんいないの？」
「ベンは仕入れに行ってるのよ、ごめんなさいね。森から帰ってきたときにはもう家にいると思うから会えるわよ」
「やった～！　私おじさん大好き！」
「うふふ、それを聞いたらベン大喜びよ」

ベンとはニコラとルークの父さんで、凄く明るくて元気な人だ。マリーはおじさんが大好きでよく会いに来ているらしい。ちなみにおばさんの名前はサラだ。

「レオンとマリー、お待たせ」
「ニコラ！　大丈夫、そんなに待ってないよ」

ニコラが扉を開けてお店の方に来た。ニコラは緑の髪に緑の瞳で、日本人の俺からすればかなり奇抜な色だけど、この世界では普通の色だ。レオンの記憶から、ルークは青の髪に青の瞳らしい。こっちも凄い色だよね……

「ルークもあと少しで来るから」
「ニコラお兄ちゃん、今日は果物採ろうね！」
「そうだな。いっぱい採ろう」
「うん！」

ニコラはマリーを実の妹のように可愛がってくれている。今も顔を優しげに緩めてマリーの頭を撫でている。ニコラは歳の割にしっかり者で、頼りにできるやつだ。

「ごめん！　待ったー？　靴が上手く履けなくてさぁ」

ルークがそんな言葉を口にしながらお店の方にやって来た。

「ルーク大丈夫だよ。靴履けたの？」

「もう完璧だぜ！」

ルークは腰に手を当てて胸を反らし、えっへんと得意げにしている。ルークはニコラと違って少しやんちゃな男の子だ。でもレオンの記憶からして、優しくて素直な良い子のようだ。

「ルーク遅いよ！　もうっ、早く行かないと果物採る時間無くなっちゃうでしょ」

「ごめんごめん、俺がマリーの分も採るの手伝うからさ」

「ほんとに！？　やったー、ありがと」

マリーは最初、眉間に皺を寄せて怒っていたけど、ルークが果物を採るの手伝うと言った途端満面の笑みになった。レオンの記憶で食べたことがある甘いものは森の果物しかなかったから、果物は貴重な甘味なんだろう。

「じゃあ行こうか。獣よけの鈴は持った？」

「持ったよ！」

ニコラが最後の確認をして出発になった。レオンの記憶で王都は塀で囲まれているとかはなく、住宅などが密集している場所を過ぎると畑や牧場が広がり、家はポツポツと建っているだけになる。

家の前を通っていた踏み固めただけの道路をずっと進んでいくと畑や牧場が見え始め、そのまま少し進むと右に逸れた道がある。その道を十分くらい進むと森に辿り着くのだ。俺達は黙々と歩き、子供にしては速い速度で森に着いた。

「少し休憩してから果物を見つけようか」
「ニコラお兄ちゃん、私はまだ大丈夫だよ。早く果物見つけようよ！」
「ちゃんと休んでからな。疲れても家まで歩かないといけないんだから」
「……そっか。は～い」

俺達はニコラの言った通り少し座って休憩することにした。森まで歩いて三十分くらいだけど、子供の体では結構疲れるのだ。

「兄ちゃん！　果物いっぱい採れるか？」
「今はまだ本格的に暑くなってないからな。採れるものも少ないと思う」
「なんだよ、ちぇ～」
「ニコラお兄ちゃん、果物採れない？」

マリーがまだ採れるものが少ないと聞いて涙目になっている。それを見たニコラは慌てて言った。

「い、いや、今の時期でも採れるものもある！　なあレオン」

そこで俺に聞くの！？　マリーが涙目で俺を見上げてくる。えっと、レオンの記憶で今の時期に採れるものは……木苺だ！
この世界って植物とか動物とか、日本と一緒のものが多いな。少し違うものもあるけど似ているものが多い。

「マリー、今の時期は木苺が採れるよ。探してみよう？」
「本当！？　木苺好き！　甘くて美味しいよね」
「木苺採れるのか！？　やったぜ、俺あれ好きなんだ」
「じゃあ、今日は木苺を探すことにしようか」

「うん！」

マリーが満面の笑みで頷いてくれた。機嫌が治ったみたいで良かったな。俺はホッと息を吐き、ニコラをジト目で見つめた。ニコラめ、俺を犠牲にしやがって……そう思って見つめていたら、ニコラと目が合い目線で謝られた。

俺はその様子を見て精神年齢二十歳として情けなくなり、ニコラを責めるのはやめた。

なんかレオンの体になってから、行動や思考が子供に戻ってる気がする。もしかしたら少しレオンに引っ張られてるところもあるのだろうか。……まあ今は子供なんだし、レオンに引っ張られてるくらいが丁度良いかな。

「じゃあ木苺を見つけよう」

「そうだね」

俺達は森に入り手分けして木苺を探した。しかし森に入ると言っても本当に森の外縁部だけで、すぐに森の外に出られるところまでしか入らない。森で迷ったら危ないからだ。

奥に入ると川が流れているけど、そこまで行くのはもう少し大きくなってからと決まっている。

「木苺あったよ！」

マリーの叫び声が聞こえてきた。俺はその言葉を聞いて慌ててマリーがいるところに向かうと、たくさんの木苺が実っている木が見える。

ニコラとルークも駆けて来て、目をキラキラと輝かせている。ニコラは大人びて見えるけど、こういうところは子供らしくて可愛い

な。

「収穫しようか。マリー麻袋持ってきたからこれに入れてね」
「うん、ありがとうお兄ちゃん！　たくさん嬉しい」
「そうだね。頑張って採って母さんと父さんにもあげようか」
「うん！」

マリーは小さな手で一生懸命木苺を収穫し始める。俺もマリーと一緒に収穫を始め、ニコラとルークも逆側から収穫を始めている。
結構たくさんあって大変だな。でもこの世界に甘いものってほとんどないみたいだし、果物を食べてる記憶も森で採ったものぐらいしかないから貴重なのだろう。頑張って採ろう。

それから一生懸命に収穫を続け、麻袋がいっぱいになったところで手を止めた。

「そろそろ終わりにしようか。もう袋いっぱいだし」
「ほんとだ。いっぱいだね！」
「こっちもかなり採れたから大丈夫だ」
「俺がいっぱい採ったんだ！」

三人とも木苺がたくさん採れて瞳がキラキラしている。俺も思わず顔に笑みが浮かぶ。

「休憩しながら少し食べちゃう？」
「うん、食べる！」
「じゃああそこの石に皆で座ろう」

腰掛けられる程度の高さの石に皆で座り、木苺を食べることにした。色は濃いし美味しそうだけど味はどうだろう……ぱくっ……

…すっっぱっい！！
なにこれ、めちゃくちゃ酸っぱい！　確かに甘さはある。だけどそれを上回る酸っぱさが強くて甘さをほとんど感じない。
皆は食べられるのか？　そう思って横のマリーを見てみると、ニコニコと美味しそうに食べている。

「マリー、酸っぱくないの？」
「なんで？　甘くて美味しいよ！」
「ほんとに？　ニコラとルークは？」
「甘くて美味しいな」
「めっちゃうまいぜ！　やっぱり木苺最高だな！」

皆本当に美味しそうに食べている。何でだろう……苺と言ったらもっと甘くて瑞々しいんじゃ。
そうか、俺は日本でたくさん甘いものを食べてたからこれが酸っぱく感じられるんだ。生まれてから甘いものといったら森の果物しかなければ、これが甘いものとなるんだろう。

皆はそれで良いかもしれないけど、俺はもう甘くて美味しいものをたくさん知っている。甘い果物も食べたいし、ケーキ、クッキー、チョコレート、思い出すだけで食べたくなる。
砂糖があれば簡単なお菓子なら作れるかもしれない。砂糖を見つけないと、これは急務だ。そんなことを考えていると、皆が休憩を終えて立ち上がっていた。

「今日はまだそんなに時間が経ってないから、薪も拾って帰ろう」
「そうだな。俺が一番拾うぜ！」
「一番は私だもん！」

三人がそんな会話をして薪拾いを始めている。薪といっても地面

に落ちている枝を拾うだけだけど、結構重労働だし重くて持って帰るのも大変だ。

なんで俺達がそんな薪を拾って帰るのかというと、薪を持って帰るとお小遣いが貰えるからだ。うちは食堂なので、薪は大量に消費する。基本的には購入しているけど、結構な金額になるので少しでも節約するために、森に行くと枝を拾ってきて薪がわりにするのだ。

他の家でも節約のために森から拾ってきている家も多いようで、ニコラとルークの家もその一つらしい。

「お兄ちゃんも早く拾ってよ！」

「ごめんごめん、今拾うよ」

マリーに急かされて俺も薪拾いを始めたけど、背負い籠がどんどん重くなるし中腰なのも辛い。でもマリーやルークが弱音を吐かずにやってるから、年上の俺が弱音を吐くわけにはいかない。俺も頑張らないと。

この世界の子供は強いな。そう思いながら薪拾いを続けた。

「そろそろ遅くなってきたから帰ろう」

ニコラのその言葉を皮切りに、皆で帰る準備を始めた。この世界には時計がないので正確な時間は分からないけど、太陽の位置で大体の時間は分かるらしい。

「よし、皆大丈夫か？」

「うん、大丈夫！」

「俺もまだまだ歩けるぜ！」

「俺も大丈夫だよ。帰ろうか」

帰りは皆で黙々と家に向かって歩いた。そして行きよりも少し時間をかけて家まで辿り着いた。

4、普通の森（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方はぜひ評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

5、砂糖のありか

「「ただいまー！」」

まずはニコラとルークの家に来た。マリーがおじさんにどうしても会いたがったからだ。

「おかえりなさい。マリーちゃんとレオンも来たの？」

「マリーがおじさんに会いたいって言ってて」

俺は苦笑しながら答えた。

「会いたいの！　おじさんいる？？」

マリーが待ち切れないかのようにソワソワとしている。

「ちょっと待ってて、今呼ぶわね」

おばさんは椅子から立ち上がり、ドアを開けてお店の奥に呼びかけた。

「ベン～！　マリーちゃんとレオンが来てるわよ」

おばさんがそう呼びかけると、お店の奥からドタドタと足音が聞こえてガタイの良いおじさんが現れた。

しかしおじさんと言ってもまだ若いが……この世界は結婚が早いのか子供がいても親がみんな二十代だ。

「マリー来たのか！？　おー！　お前はいつでも可愛いなぁ」
おじさんはそう言ってマリーを抱き上げた。マリーはキャッキャッと嬉しそうに笑っている。
マリーは軽々と高く抱き上げてくれることが嬉しいようだ。確かに俺たちの父さんは背も高くないしガタイも良くないからな……がんばれ父さん。俺は密かに父さんを応援した。
「レオンも来たのか！　よしよし、順調にでかくなってるな」
おじさんはマリーを抱き上げたまま俺のところに来ると、俺の頭をガシガシとかき混ぜた。
「おじさん！　頭がぐしゃぐしゃになるよ！」
「そんなことは気にするな！　男だろう？」
いや、男だから気にしないって意味わかんないし……でもこんな豪快なところも人に好かれるところなんだろうな。ずっと笑顔で目はとても優しく俺たちを見ている。
マリーがおじさんを好きな理由がわかった気がした。マリーは人を見る目があるな。
でもだからといって安心できない。俺がマリーに近づく男は警戒しなければ……！
マリーを守る決意を新たに気合を入れていると、マリーは既に下ろされていて、もう帰ろうとしていた。
早いな！　マリー、お兄ちゃんを置いていかないでくれよ。そう思いながら俺も急いでマリーを追いかけた。
「おじさん、おばさんまた来るね。ニコラとルークもまたな」
「うん、またね」

「マリーちょっと待って！　お兄ちゃんを置いてかないでよ」

そう言うとマリーは家のドアの前で立ち止まり、俺をジト目で見てきた。

「だってお兄ちゃん最近ぼーっとしてるんだもん。話しかけても聞いてないこと多いでしょ」

マリーは俺をジーッと見てくる。や、やばいな。俺がいろいろ考え込んでいるのに気付かれてたか??　でも俺がレオンじゃないことは気付かれてないはず……まだ大丈夫だよな……

「そんなことないよ！　ちゃんと聞いてるよ。ちょっとぼーっとしちゃうことが多いだけ！　これからは気をつけるから」

俺が慌ててそう言い訳をしていると、マリーはしばらく俺の顔をジーッと見てから言った。

「それならいいけど……ちゃんと話聞いてよね」

「うん！　ちゃんと聞くよ。ごめんね」

「まあいいよ、家入るよ？」

「そうだな」

マリーはドアを開けて家の中に入っていった。俺はホッと安堵の息を吐いてマリーに続いて家に入った。これからはもっと気をつけないとだな。

「「ただいまー！」」

「あら、帰ってきたの？　おかえりなさい」

「どうだった？　果物は採れたかい？」

父さんと母さんは厨房にいるようだが、カウンターから顔を出してくれている。

マリーは食堂のカウンターにある椅子によじ登り、麻袋を開けて中を見せた。

「母さん父さん見て！　こんなに採ったんだよ！」

「あら、木苺じゃない。本当に沢山ね。凄いわマリー」

「本当だ。これだけあればいっぱい食べられるな。夜ご飯の後にみんなで食べようか？」

「うん！　楽しみ！」

マリーは父さんが出してくれた大きめの木の器に木苺を移している。すごく笑顔で嬉しそうだ。よっぽど木苺が好きなんだな。

俺はもう少し甘くして食べたい……砂糖があればジャムにするのに……

母さんに砂糖のこと聞いてみるか。

「母さん、甘い調味料ってないの？」

「甘い調味料？？　どうして？」

「えっと……そう！　甘い調味料があればもっと木苺が甘くなるのにって思ったから」

不自然じゃないよな……？　どうか砂糖あってくれ！

「そうねぇ。蜂蜜とか砂糖とかかしら」

「砂糖あるの！？」

「レオン、砂糖のこと知ってるの？」

「い、いや、たまたま聞いたんだ。砂糖って甘い調味料があるって」

「そうなの。でも砂糖も蜂蜜もこの辺では売ってないわね」
「え！？　どうして？」
「平民は甘いものにお金をかけられるほど裕福じゃないから、砂糖や蜂蜜は売れないのよ。他の調味料より高いし」

そんな……でも砂糖はあるってことだよな！　この世界にないわけじゃない。あとはどうやって手に入れるかだ！

「じゃあどこに売ってるの？」
「王都の中心街になら売ってると思うわ」
「王都の中心街？」
「そうよ。ここは王都の西の外れなの。中心街は王様がいて貴族様たちが住んでるところよ。高級なお店がいっぱいあるからそこなら売ってるわ」

やっぱりいるのか、王様と貴族……！　もしかして貴族じゃないと甘いもの食べられないとか……？

「じゃあそこに行ったら買える？」
「多分買えないわ。中心街にあるお店は貴族とその関係者しか入れない店も多いそうよ。それに入れたとしてもすごく高いから買えないわ」
「そうなんだ……」
「それに、中心街は遠いわよ。乗合馬車で2時間以上はかかるわ」
「そっか……じゃあ……諦めるよ」
「それがいいわね。レオンはもう八歳だから教えとくけど、貴族様に目をつけられたら大変よ。この辺に来ることはないから大丈夫だと思うけど、失礼なことをしてはいけないわ。良い貴族様もいるけど、理不尽な貴族様もいるからね」

貴族怖い……できる限り近づきたくないな。でも砂糖は貴族のところにあるなんて！
これは他の売ってる場所を見つけた方が良さそうだな。

「母さんありがとう！　甘い調味料は諦める！　木苺そのままでも美味しいからね」

俺はそう言いながらにっこりと笑って、母さんを安心させた。さっきから母さんが怖い顔になっていたのだ。
そうすると、母さんはふっと顔を緩ませて言った。

「じゃあ夜ご飯の後は木苺を食べましょう！」
「うん！」

しかし、あの木苺を食べるのは辛い……なんとか砂糖なしで美味しくする方法はないか……
何がいいだろう……フレンチトーストに掛けるとか？
パンケーキに混ぜ込むとか！
パンケーキに混ぜ込むのいいかもしれない！そう思いついて、俺は早速母さんに厨房を使って良いか聞いた。

「母さん！　俺、木苺を使った料理考えたんだ。厨房を使ってもいい？」
「レオン本当に？　料理なんてしたことないのに……」

料理をしたことないのにレシピ考えたのは不自然だったか……？
でも絶対作ってみたい、あれは酸っぱすぎる。

「母さんと父さんが料理してるとこ見てたからだよ」

そう言って無邪気な目で母さんを見つめると、母さんはふっと笑って頭を撫でてくれた。

「じゃあ、作ってもらおうかしら」

「レオンが料理をするのか？　父さん楽しみだな」

父さんも笑顔で楽しみにしてくれている。これは頑張らないと！

「じゃあ、レオンが料理できるスペースを空けとくから、先に荷物を片付けて手を洗ってきなさい」

「うん！」

「マリーもレオンと一緒に荷物片付けてきなさい」

「わかった！　お兄ちゃんが料理するの？　楽しみ！」

マリーが無邪気に楽しみにしてくれている。これはプレッシャーになってきたな……美味しくできてくれるといいんだけど。

マリーと一緒に二階の物置部屋に来て、荷物を置いた。籠を下ろした時、薪のことを忘れていたことに気づいた。薪は厨房に持っていったほうがいいだろうから、また下に持っていかないとだな。

「マリー薪のこと忘れてたね。下に持ってこうか」

「うん！　お小遣いもらわないと！」

マリーは木苺からお小遣いに意識が逸れたみたいだ。お小遣いで何を買おうか今から迷っている。

「じゃあ下に行こう」

マリーと薪を籠のまま持って下に降りていくと、母さんがちょう

ど厨房から出てきたところだった。
「母さん、薪も拾ってきたんだ」
「あらそうなの、ありがとう。厨房の薪置き場に置いてきてくれる？」
「「はーい！」」
俺とマリーは厨房に入り、厨房の端にある薪置き場に枝を積み上げた。
「薪も拾ってきてくれたのか、ありがとな」
「うん！　私いっぱい拾ったよ！」
「マリーは偉いなぁ」
父さんは得意げなマリーの頭を優しく撫でている。
「じゃあ籠を置いて手を洗ってくるね」
「私も！」
俺たちは二階に籠を置きに戻り、中庭に行くためにリビングに入るとそこには母さんが待っていた。
「二人とも薪を持ってきてくれたお小遣いよ」
「やった～！　ありがと！」
「母さんありがとう」
「いいのよ、屋台で何か買いなさい」
「「うん！」」
俺とマリーは自分の木箱の中にお金を入れた。
リビングには四つ小さな木箱があり、自分の大切なものを入れる

箱にしているのだ。
お金を仕舞ったら、俺とマリーは中庭に行き井戸の水を汲んで手を洗った。
マリーはこの後リビングで少し休むようだ。俺はパンケーキを作らないと！　頑張ろう！

「じゃあ俺は厨房に行くからね」
「うん！　お兄ちゃん美味しいご飯作ってね！」
「わかったよ。頑張ってくるね」
そう言って俺は厨房に向かった。

5、砂糖のありか（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿予定です！読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューも是非よろしくお願いします！

6、木苺パンケーキ

厨房に行くと父さんは夜メニューの準備を継続していたが、母さんが木苺を持ちスペースを開けて待ってくれていた。

「母さんありがとう」
「いいのよ、レオンの料理に興味があるもの」
「父さんもすごく楽しみだ」
「そんなに期待しないでね？　美味しいか分からないから」

そんなに期待されても困るよ。砂糖もないんだし、作り方も曖昧だから上手くできるか分からないし……
うっ……期待の眼差しが凄い……頑張ろう

「じゃあ始めましょう。木苺の他には何を用意すればいいの？」

えっと、確かパンケーキは小麦粉と卵と牛乳と砂糖で作れるんだった気がする……多分……もっと料理しとくべきだった……
あれ？　でも牛乳ってあるのかな？　冷蔵庫ないのに牛乳なんてなさそう。

「えっと、牛乳ってある？」
「牛乳はここには無いわね。保存ができないし、冬ならある時もあるけど今はないわ」

やっぱりそうだよな……牛乳がないとすると、水で作るしかないかな？　小麦粉と水と卵で作るパンケーキもあったはず。ただ、その場合は砂糖で甘くするから美味しいんだよな。砂糖ないから、小

麦粉と水と卵に木苺で味付けしたものになるけど、それって美味しいのか？
まあ、何事も挑戦だな。
「母さん、小麦粉と卵と水が欲しいんだけどある？」
「あるわよ」
母さんは、すぐに食材を準備してくれた。
「これで全部ね。これをどうするの？」
「えっと、器で全部を混ぜ合わせるんだ」
「パンと似てるわね。作るのはパンなの？」
「パンには似てるけど違うんだよ」
俺はそう言って、器に卵と水を入れて混ぜ、そこに小麦粉を入れていった。結構ドロドロな感じだった気がするから、このくらいかな？
俺がそんな適当な感じで作っていると、母さんが青ざめた表情で俺を止めた。
「レオン！　待ちなさい。そんなに水をたくさん入れてドロドロじゃない！」
「この料理はこれでいいんだよ」
「でも、無駄にならないかしら？」
「大丈夫だよ……こういうレシピってないの？」
「ないわね。パンを作るときは固まるように水は少ししか入れないし、卵も入れないわ。小麦粉は基本的にパンを作るときにしか使わないし、卵は茹でるか焼くかするだけよ」
それはこの世界料理が発展してないはずだよ……覚えてるものは

少しずつ作ろう。卵ってめちゃくちゃ便利なのに。

「でも、俺のレシピはこれでいいんだよ」

そう言っても、母さんはまだ不安そうだ。まあ、俺は今まで料理なんてしたことないんだから、不安なのも当然だよな。

困っていたら父さんが助け舟を出してくれた。

「ロアナ、レオンがやる気になってるんだからやらせてあげればいいじゃないか。無駄にならないように少しずつ作ればいい」

「それもそうね。レオン少しずつよ」

「うん！　ありがとう！」

父さんありがとう……！　今度何か絶対お礼する！　俺ができることなんて少ないけど絶対！

「よしっ！　こんな感じでいいと思う」

俺は、ちょうどいいドロドロ具合になったので手を止めた。後はここに木苺を入れれば完成だ。

そこで俺は顔を上げると、唖然とした顔をしている母さんと父さんと目があった。

「レオン……？　もしかしてそれで完成なのかい？　それを食べるのかい？」

父さんに恐る恐る聞かれた。

「違うよ！　これはまだ途中だよ。これから木苺を入れて焼くんだ」

「そうなのね、まだ途中ならおいしそうに見えなくてもしょうがな

いわね」

母さんがそんなことを言った。そんな得体の知れないものを見るような目で見なくてもいいのに！　まあ、確かにこのままでは不味そうだけど……

これは早く完成させたほうがいいな。

俺はさっき卵を溶いた器を水で濯ぎ、そこに木苺を入れて木べらで潰し始めた。そのまま入れてもいいけど、潰したほうが味が染み込みそうだと思ったのだ。

もうレオンにとってもどんな味になるのか分からない。

しばらく木苺を潰して、そこそこの量になったところでさっき混ぜた器に木苺を入れた。そしてまた混ぜ合わせる。

混ぜ合わせたら、そのままの木苺も何個か入れた。実の食感があったほうが良いかもしれないからな。

「よし！　できたよ！　後は焼くだけなんだけど、フライパン使っていい？」

「ええ、いいわよ。このフライパンを使いなさい。火はつけるからちょっと待ってね」

そう言って母さんは、手を竈に入れてある薪にかざすと『火種』と一言呟いた。すると、さっきまで全く燃えていなかった薪が燃えている。

俺は驚いて言葉を失いながらも、これが魔法か……！　と思った。レオンの記憶にはあったが実際に見たのは初めてだ。

凄い！　かっこいい！　異世界だ！　と俺は心の中でテンションマックスになっていた。

レオンの記憶では母さんも父さんも属性は火だが、魔力量が少なく一日に一度くらいしか使えないらしい。

俺も早く魔法を使ってみたい！　教会に魔力測定に行くのがすご

く楽しみだ！
そんなことを考えながら竈を見つめて立ち尽くしていると、母さんに話しかけられた。
「レオン？　ぼーっとしてどうしたの？　早く焼かなくていいの？」
俺は魔法への妄想を膨らませていたところから我に返った。そうだ……今はパンケーキを作ってるんだった。
「ごめん母さん、魔法かっこいいなぁって思ってたんだ」
「レオンも八歳になったんだからすぐに使えるようになるわよ。今度教会に行きましょうね」
「うん！　楽しみ！」
俺が満面の笑みでそういうと、母さんは苦笑いをしながら言った。
「今は魔法じゃなくて、料理を完成させないとよ」
「はーい」
俺はとりあえず魔法への興奮を抑えて、料理に集中することにした。
この厨房は大人が立って使えるタイプの竈なので、踏み台を置いてもらって竈の前に立ち、パンケーキを焼こうとした。
しかし、焼こうとして気付いた。バターがあったほうが美味しくできそうだ。牛乳がなかったからないかな？
「母さん、バターってある？」
「バター？　あまり使わないからどうだったかしら」
母さんが棚を探している。そんなに忘れられてたようなバター大

丈夫なのか？　冷蔵庫とかないし……
そう思っていたら、バターが見つかったようだ。
「あったわよ！　後ちょっとしかないけど大丈夫？」
見たらスプーンで一掬い分くらいはあったので足りるだろう。
「大丈夫だよ！」
腐ってないのかと思ったが、見た目は普通だし匂いも変じゃないから大丈夫だろう。
そう考え、俺はフライパンにバターを入れ火にかけた。そしてバターが溶け始めたので、先ほど作ったものをフライパンに流し入れた。少し量が多かったので二回に分けることにしたから半分だけだ。
たしか、プツプツと泡が出始めたらひっくり返すんだよな。
しばらく待っていても、プツプツと泡が出てこない。でも、もう焼けてる気がするんだけど……俺は裏側を見てみたが、結構焼けている。もうひっくり返した方がいいよな。これ以上は焦げそうだ。
別のもう少し大きな木べらを持って来て、ひっくり返そうとする。しかしうまくいかない。これ難しいな……
しばらく格闘していると、父さんが助け舟を出してくれた。
「それをひっくり返すのか？　父さんがやるよ」
「ほんとに？　父さんありがと」
父さんにフライパンと木べらを渡すとヒョイっと簡単にひっくり返した。
凄いさすが料理人だ！
「父さん凄いね！　かっこいいよ！」

「そうか？　嬉しいなぁ」
父さんはすごく嬉しそうにニコニコしている。
「それにしても良い匂いになってきてるね」
「うん！　美味しそうでしょ」
さっきから結構良い匂いが漂ってきている。パンケーキの匂いではないけど……でもとりあえずよかった、匂いは成功だ。
「確かに良い匂いがするわね。焼く前の状態はすごく美味しくなさそうだったのに」
母さんはストレートに言い過ぎなんだよな。まあ、あれじゃあしょうがないけど、俺はまだ半分残っている焼く前のパンケーキを見てそう思った。
そろそろいいかな？　木べらで裏面を確認してみるとしっかり焼けているようだ。
「よし！　これで完成だよ！　お皿ある？」
「これを使いなさい」
「ありがとう！」
母さんが出してくれた器にパンケーキを盛りつけた。
そして、もう一つも同じように焼いた。とても良い匂いだ。お腹が空いてくる。
「夜の営業までもう少し時間があるから、みんなでおやつとして食べちゃおうか？」
「そうね。でも竈の火が大きいままで心配だから、お行儀悪いけど

厨房で食べちゃいましょうか。母さんはマリーを呼んでくるわ」
「ほんとに！？　やった！」
「レオン、父さんと四人分に切り分けておこうか」
「うん！」

そんな会話をして母さんはリビングにマリーを呼びに行って、俺と父さんはパンケーキを切り分けて四つのお皿に盛りつけた。
ちょうど盛り付け終わった時、厨房のドアが開きマリーが入ってきた！

「お兄ちゃんの料理できたの！？　すごく良い匂い！」
「できたんだよ。食べてくれる？」
「うん！　楽しみだったの！」

美味しければいいんだけど、俺はドキドキしながらみんなにフォークを配った。

「じゃあ食べようか。いただきます！」
「「「いただきます！」」」

俺は恐る恐るパンケーキを口にした。もぐっ……もぐっ……悪くない！
明らかにパンケーキではないけど、これはこれで美味しい！　ちょっとだけモチモチとしてるような、どっちかというとお好み焼きみたいな食感だ。そのまま木苺を食べた時よりは酸っぱさもあまり気にならなくなってる。

成功と言えるかは微妙だけど、まあ、不味くないなら成功だろう。割とクセになるかも。
俺は安心してパンケーキを食べていると、みんなが静かなことに

気づいた。
みんなを見てみると、父さんと母さんはパンケーキを一口食べて固まっている。マリーは黙々と食べ続けている。
美味しくなかったのかな……？
「みんな、もしかして美味しくない……？」
俺は心配になってそう声をかけた。結構美味しいと思ったんだけど、口に合わなかったかな？
そう思っているとみんながぶんぶんと激しく首を横に振っている。
「レオン、違うんだ！　美味しくてびっくりしてただけだよ。食感が面白くていいね」
「そうよ。さっきのがここまで美味しいなんて驚いちゃって。絶対に美味しくないと思ってたもの」
「お兄ちゃん！　これ美味しいよ！　食感が好き！　また作ってね！」
驚いてただけか……よかった。俺はすごくホッとして息を吐いた。
でもこの料理でここまで驚いてくれるんだったら、日本の料理を食べたら驚きっぱなしだな。俺はそんなこと思いながら緊張に強張った顔を緩めた。
「美味しいって言ってもらえてよかった」
「本当に美味しいわ、材料も簡単だしアレンジもできそうね」
「レオンは料理の才能があるんじゃないか？　これからも思いついたものがあったら作ってみるといいよ」
「ほんとに！？　ありがとう！」
親の贔屓目とか入ってると思うけど、嬉しいな。もっと美味しい

ものを作れるように頑張ろう。
俺が思いついたわけじゃないからちょっと複雑だけど、みんなが喜んでくれてよかった。

「もう終わっちゃった。お兄ちゃん、すっごく美味しかったよ！」
「マリー美味しかった？　よかったよ。また作るからね」
「うん！　また木苺採りに行こうね！」
「そうだね」

マリーは本当に美味しかったようだ。満足そうに笑っている。
その時、夜の鐘が聞こえてきた。

「もう時間なのね。夜の営業始めるわよ」
「そうだね。レオンとマリー、食堂の方お願いしてもいいかい？」
「「うん！」」

6、木苺パンケーキ（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、ぜひ評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

7、準貴族のお爺さん

俺とマリーは夜営業の中でも比較的忙しい開店から一時間ほどだけ手伝う。
夜ご飯は自宅で食べる人が多く、お店に来るのはほとんどお酒とおつまみを楽しみにくる人だけなので、あまり忙しくないらしい。
夜のメニューは、エールと日替わりのおつまみセットの二つだけ。みんながその二つを頼むので、接客はとても楽のようだ。
そんなことを考えていると、一人お客さんが来た。

「いらっしゃいませ、お好きな席どうぞ」
「エールとおつまみセットを頼む」
「はい。すぐ持ってきますね」

このお客さんのように常連さんで、メニューもわかっているので説明の必要もない。
この後は、五人のお客さんが来て客足が途絶えた。

「レオン、マリー、二人はもう下がっていいわよ」

母さんに呼ばれた。これで俺たちの仕事は終わりだ。
俺とマリーが厨房に行くと、母さんが俺たちの夜ご飯を渡してくれた。
この後は、夜ご飯を食べて体を拭いて寝るだけだ。母さんと父さんはお客さんが帰ってからご飯を食べて寝る準備をして寝る。

「マリー、夜ご飯食べようか」
「うん！　お腹空いた！」

そんな話をしながらリビングに行き、二人で夜ご飯を食べ始めた。

「「いただきます！」」

今日の夜ご飯はパンと野菜たっぷりのスープだけど、この世界の夜ご飯は軽くが普通らしい。

夜ご飯は沢山食べないで、反対に朝とお昼ご飯は沢山食べる。

仕事を頑張れるように、夜以外を沢山食べる習慣があるようだ。

もぐっもぐっ……パンは硬いけどスープにつければ割といける。

「お兄ちゃん、木苺の料理ほんとに美味しかったね」

「パンケーキね」

「パンケーキ？　そういう名前なの？」

「そう、お兄ちゃんがつけたんだ。覚えやすいだろう？」

別の名前をつけても絶対にパンケーキって呼んじゃうから、もうパンケーキって名付けたことにした。

味は全然パンケーキじゃないんだけど……

「うん！　パンケーキまた食べたいなぁ」

「また作るよ。木苺も採りに行かないとね」

「うん！　私がいっぱい採るよ！」

そんな会話をしながら夜ご飯を食べ、体を拭きすぐに寝室に向かった。

マリーは疲れたのかベッドに入った途端に眠ってしまったようだ。

寝室は一つしかなく家族全員で寝ているのでちょっと狭いが、それも良いなとマリーの寝顔を見ながら思った。

そして、俺も疲れていたのかそのまますぐに眠りに落ちた。

次の日の朝、朝の鐘で目が覚めた。

「うぅ～ん、ふぁ～よく寝た」

俺は目が覚めてベッドの上で起き上がり、びっくりして動きを止めた。一瞬ここがどこだかわからなかったのだ。

そうだ……俺なぜか異世界でレオンになったんだっけ。本当に夢じゃなかったんだなぁ

そんなことを思っていると、隣から声が聞こえた。

「レオンぼーっとしてどうしたの？起きたなら顔洗ってきなさい」

「母さん、おはよう。起きるよ」

母さんと父さんもベッドから起き上がっている。今起きたところのようだ。マリーはまだスヤスヤと寝ている。

母さんと父さんはすぐ下に降りていった。俺もその後に続き下に降り、顔を洗ってリビングの椅子に座った。

昨日はなんか現実感がなかったけど、本当に俺はずっとこの世界で生きていくんだなぁ。

そんなことをしみじみと考えていると、母さんがマリーを起こして連れてきて、父さんが朝ご飯を持ってきてくれた。

「じゃあ食べましょうか、いただきます」

「「いただきます」」

「いただき……ます……」

マリーはまだ眠いようで、目を擦ってなんとか目を覚まそうとしている。
朝ご飯は、パンと目玉焼き、肉野菜炒めのようなものだ。どれも塩味だが素材の味で美味しい。
「今日は何か予定はあるの？」
母さんがそうマリーに聞くと、マリーは予定を思い出して目が覚めたようだ。
「今日はルークと屋台に行く予定なの！」
「あらそうなの、それは楽しみね」
母さんは優しい笑顔でマリーを見つめている。
マリーはルークと出かけるのか。ならちょうどいいな。一人で街を見て回りたいと思ってたんだ。
「お兄ちゃんも一緒に行く？」
「ううん、俺は他に予定あるからいいよ」
「そうなの？　じゃあまた今度ね！」
「うん。今度は一緒に行こうね」
俺は朝ご飯を食べた後、洗濯を手伝い家の掃除をした。そしてお昼には営業の手伝いをして、自由時間になった。
「じゃあ、行ってきます！」
「気をつけるのよー」
「はーい！」
俺はお小遣いで貯めていたお金を持って外に出た。気になるもの

があったら買ってみたかったのだ。
しかし鉄貨5枚しかなかったので、買えるとしてもちょっとした食べ物くらいだろう。お金も稼ぎたいよなぁ。
知識を売るにしても適正に買い取ってくれる人が必要だし、物を作るのは元手がないし……今は無理そうだよなぁ。
そんなことを考えながら、俺は家から森に行くのと反対方向に歩いていった。
レオンは家から遠くには行ったことがないからこの街のことはよくわからないが、こちら側にちょっとした広場がありそこに屋台があるらしい。
まずは広場に行き、そこから少し行ったことのないところにも行ってみることにした。

２０分ほど歩くと広場についた。家から広場までは大通りをずっと歩けばたどり着く。そしてそのまま広場の向こう側に大通りが続いている。
広場の奥の通りに行ってみようかと思ったが、広場の左右にも大通りよりは少し細い道があることに気づいた。
なんとなく、狭い道の方が面白いお店があるような気がして、俺は左側の道を行ってみることにした。

左の道をしばらく進んでいると、殆どがただの住宅のようだがたまに工房のようなものがある。
看板にトンカチとノコギリの絵が描いてある工房や、服の絵、糸の絵、木の絵など様々な絵が掛けられている。家具工房や、服飾工房、紡織工房、木工工房などだろうか？
中からは話し声や大きな音が聞こえてくる。
そんな工房と住宅を通り過ぎしばらく歩いていると、文字が書かれている看板があった。平民はほとんどの人が文字を満足に読めないから、看板は絵が主流なのに……

そう考えつつ何気なく看板の文字を読むと、魔法具工房と書かれていた。
魔法具工房！？　魔法具なんてあったのか！　魔法具ってもしかして日本にあった機械みたいなものかな？　それなら俺の欲しいものが色々あるかもしれない！
俺はとても気になり、どうしても魔法具を見てみたくなったので、失礼かと思いながらも工房を覗いてみることにした。

「こんにちは～、誰かいますか？」

声をかけてみたが誰も出てこない。物音もしない。

「こんにちは～！　誰かいませんか～！」

今度は少し大きな声で呼びかけてみた。すると奥のドアが開き人が現れた。

「そんなに大きい声を出さんでも聞こえとるわい」

かなりのお爺さんだった。顔はシワが寄ってて、髪は薄く腰が曲がっている。
このお爺さんが魔法具を作っているのだろうか？
疑問に思っているとお爺さんから話しかけてくれた。

「それでお前さんは何用じゃ。こんなところに用がある奴なんておらんと思っていたがのぉ」
「魔法具に興味があって……」
「なんじゃと、お前さんは文字が読めるのか？」

あっ……！　文字読めるのダメなんだっけ、普通に読めるからつ

い読んじゃうんだよなぁ。
ど、どうしよう……でも色々教えてもらいたいから文字が読めることにした方がいいかな。
「近くに文字を読める人がいて教えてもらったんです」
本当はそんな人いないと思うけどそう言ってみた。
「そうなのか、それは幸運じゃったのぉ」
「文字が読めるのってそんなに珍しいんですか？」
「平民では珍しいぞ、文字が読めるのは余裕がある商人くらいじゃ」
「そうなんですね。俺は幸運だったってことですね」
あははと笑いながらそう答えると、お爺さんはまた俺に疑いの目を向けてきた。
「お主はその話し方も教わったのか？」
「話し方？」
「そうじゃ、さっきから適切な敬語を使っておるじゃろ」
あ……つい年上の人には敬語使っちゃうんだよなぁ。気をつけてたのに！
「ええ、文字を教わった人に教えてもらったんです」
「それにしても自然に身についておるのぉ、平民で使う敬語はもっと崩れたものじゃろ？　商人では綺麗な敬語を使う平民もおるが……お主本当に平民か？」
なんか凄い疑われてる……これってまずいのか？　どうしよう……俺が冷や汗をかいているとお爺さんが表情を少し緩めた。

「まあ、師が良かったんじゃろうな」

お爺さんは俺を疑うことをやめたようだ……良かったぁ。俺は心底ホッとしてそっとため息を吐いた。

そういえばさっきから平民とか平民じゃないとか言ってたり、お爺さんも敬語を理解してるみたいだけど、お爺さんって平民じゃないの？

「お爺さんは何者ですか？　平民じゃない……とか？」

「わしか？　わしは一応貴族じゃ。ただ準貴族だから平民と変わらんよ」

やっぱり……！　嫌な予感がしてたんだ。でもなんで貴族がこんなところに？　それに準貴族ってなんだろう？

「準貴族ってなんですか？」

「準貴族は貴族の子供のことじゃよ。その家の当主になれば貴族になれるが、次男以下は貴族になれず準貴族のままのやつが多い。わしもその一人じゃ」

「なるほど、そうなんですね」

そんな仕組みがあるのか……長男は家を継いで貴族になるが、そのほかの子供は準貴族のまま。じゃあ準貴族の子供は？

「準貴族の子供はどうなるんですか？」

「それは平民になるんじゃよ。そうじゃないと貴族が増えすぎるじゃろ」

「貴族も結構大変なんですね……じゃあ次男以下に生まれたら貴族になる道はもうないってことですか？」

「いや、一代限りの爵位がもらえれば貴族になれるぞ。騎士爵と言ってな、子供に爵位を継がせることができないものじゃ。何か大きな功績を挙げたりするともらえるんじゃよ」
「そうなんですね……」

貴族も大変なんだな。貴族に生まれれば一生安泰なのかと思ってたよ。そんなことを考えていると、お爺さんが呆れた目でこちらを見ていることに気づいた。

「何ですか？」
「はぁ、お主自分のおかしさに気づいてないのか？」
「おかしい？　何か変なことでも言いましたか？」
「違う。変なことを言わなすぎるのじゃ。お主はまだ七、八歳ってところじゃろ。それなのに貴族の仕組みという難しい話題を的確に理解し、疑問点を質問してくる。明らかに平民の子供じゃないじゃろ」

やっっばい……！　つい情報を得られるのが楽しくて質問しすぎた。もう誤魔化せないかな？　教えてもらったとか言っても無理があるか？
そんなことを考えながら俺が内心焦りまくっていると、お爺さんから話を進めてくれた。

「まあ、何か理由があるんじゃろうから言いたくないのなら言わなくても良い。わしはもう歳じゃ。最後に面白い子供に出会えて良かったと思っておくわい」
「えっと……ありがとうございます？」
「だがな、わしはいいが他のやつの前ではあまり異質なところは見せん方が良いぞ。悪い奴もたくさんいるんじゃからな」
「はい！」

凄く良いお爺さんだ。良かった……これからはもっと気をつけよう。

7、準貴族のお爺さん（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！！

面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューを是非よろしくお願いします。

8、魔法具工房

「それでじゃ、お主は魔法具に興味があるんじゃったか？」
「そうです！」

やばい、色々ありすぎて本題を忘れるところだった。

「そもそもなんですけど、魔法具って何ですか？　一度も見たことないんですけど……」
「それは当たり前じゃ。魔法具は貴族にしか出回っていないからな」
「何でですか？」
「高いからじゃよ。平民が一生かかってもとても買えるような値段ではない」
「そんなにですか……？」
「ああ、原料も貴重なものだからのう。安くなることはないな。平民に魔法具が出回るようになるのは難しいじゃろう」

そんな……せっかく便利なものが見つかったと思ったのに……俺は期待が大きかっただけに絶望感を感じていた。
貴重な原料ってなんなんだろう？　それが手に入ればなんとか魔法具を作れるか……？

「原料って何ですか？」
「原料は魔石と魔鉄じゃ」
「魔石と魔鉄……？　何ですかそれ？」
「魔石は透明な宝石みたいなものでな、魔力を流し込むとその流し込んだ魔力の魔法を発現させられるものじゃ。魔鉄は、魔力を流すと自由に変化させられる鉄のことじゃ。魔鉄で形を作って魔石をは

め込んで作るのが魔法具と呼ばれている」

それって、電池と鉄みたいなものか……？　やっぱり機械みたいなのがあるのか！　欲しい……！

「その魔石と魔鉄はどこで手に入るんですか……！？」

俺は興奮してそう聞いたが、その答えに一気にテンションが下がった。

「魔石と魔鉄が採れる鉱山は、すべて国営で国が買い取ってるから手に入らんよ。魔法具もそのまま国営の工房で作っとるからな」

なんと……それじゃあ絶対に手に入らないじゃないか！　なんとかして手に入れる方法はないのか……

砂糖もだが魔法具まで貴族が独占してるなんて！

あれ？　でもここって魔法具工房なんだよな？　国営のはずなのになんでこんなところにあるんだ？

「お爺さん、この魔法具工房はなんでここにあるんですか？　国営の工房で造られるんじゃ……？」

「ああ、この工房は特別じゃ。わしは最近まで国営の工房で働いてたんだが歳をとってやめてな、普通はそのまま隠居するんじゃが、わしは魔法具を作り続けたいと思ってな。この工房を始めたんだ」

「そんなに簡単に工房を始められるんですか？」

「普通は無理じゃな。わしの昔の発明が功績となって爵位がもらえる予定じゃったんだが、その爵位の代わりとして自分の魔法具工房をやることを許可されたんじゃよ。最近は自由気ままに新しい魔法具を考えてはそれを売ってるんじゃ」

「そうだったんですね……じゃあ、他には国営じゃない工房はない

ってことですか？」
「ないと思うぞ。そうそう認められないじゃろうし、引退してからも魔法具を作りたいやつなんてあんまりいないからのぉ。工房の給金は良いからお金には困らんからな」

ということは国営じゃない魔法具工房はここだけってことか？
これはめちゃくちゃラッキーだ！　ここに来なければ魔法具の存在を知ることもできなかったんだからな。
ここで作ってる魔法具はお金さえ払えば売ってもらえるんだろうか……？

「お爺さん、もし俺が魔法具を買えるだけのお金があったら売ってもらえるんですか？」
「いや、売ることはできない。この工房を開く条件は、すべての魔法具を国営の工房に売ることじゃからな。貴重な原料を無駄にしてないかを確認するためじゃろうな」

そうか……原料も流出しないように、お爺さんに売った量と買い取った量で確認してるってことか……
じゃあ魔法具を手に入れることは不可能ってことか？　貴族になるのは無理だろうし……
せっかく便利なものを見つけたのに……諦めるなんてできない！
俺はおじいさんに素直に聞いてみることにした。

「お爺さん、俺は食堂の息子でただの平民ですが、魔法具を手に入れる方法はありますか？」
「そうじゃのぉ。難しいと思うが王立学校に行けば可能性はあるかもしれんな。それに王立学校を卒業すると役人になれるんじゃが、王城の役人寮は魔法具が使われとるぞ」

王立学校！！　この世界に学校なんてあったんだな。
でもそこに行けば魔法具を使った快適な生活を手に入れられる可能性があるってことだよな。なら俺は王立学校を目指す！！
でも平民がいけるのか？

「そこって平民でも行けるんですか？」
「一応誰でも受験できるから受かれば入学できるぞ」
「お金とかは……？」
「授業料と教材費は無料じゃ。だが、貴族ばかりだから付き合いに金がかかるじゃろうし、服も良いものを着なければ周りから浮く。あと学校は中心街にあるから、その近くで暮らすお金もかかるじゃろう」

授業料と教材費がかからないのは良いが、その他にかなりお金がかかりそうだ……
やっぱり金策を考えなくてはいけないな……

「受験って難しいんですか？」
「貴族の子が小さい頃から勉強して受ける試験だからのぉ。平民はほとんど受からないぞ。平民で受かるのは豪商の子くらいじゃな」
「学校って何歳から行くんでしょうか？」
「学校は十歳から十五歳までの5年間じゃ。お主は何歳じゃ？」
「今年八歳になりました」
「じゃあ、あと二年弱くらいじゃな。試験は冬の終わりで、春から学校じゃ」

あと二年あるなら勉強すればいけるはず……俺の頭は大学生なんだからな！
あとはどうやって勉強するかだが……

「お爺さんに勉強を教えてもらうことってできますか？」
「わしはもう忘れてることも多くて教えられんよ。教材もないし、実家との仲はあまり良くなくてな」
「そうですか……」

既につまづいた……俺の頭なら算数とかなら大丈夫だろうけど、歴史とかは一切わからないし……
とりあえず勉強については後で考えよう。おじいさんを困らせてもしょうがないしな。

「じゃあ勉強については自分で考えてみます。それでお金のことなんですけど……」

俺は一つの金策を思いついていた。お爺さんは魔法具を考えてると言っていた。ということは注文を受けて作っているのではなく、新しいものを発明してるということだ。
それなら俺の知識を売ればお金になるんじゃないかと思ったのだ。

「俺が考えた魔法具が良いと思ったらそのアイデアを買ってくれませんか？」
「お主が考えた魔法具を？　魔法具を見たこともないお主がどうして思いつくのじゃ？」
「そこは……秘密です。ダメですか？」

俺はこれがダメだったらまた一から考えないといけない、なんとかお爺さんに受け入れてほしいと願いながら返事を待った。

そしてしばらく経ってからお爺さんは答えた。

「まあ、いいじゃろう。ただしお主が考えたことにはできんから、わしが考えたことになってしまうぞ？　それでもいいのか？　使用料もわしに入ることになる」
「それは全然良いです。使用料って何ですか？」
「ああ、説明してなかったな。魔法具は最初に発明した人に優先的に作る権利が与えられる。しかし他の人もそのアイデアを使う使用料を払えばその魔法具を作れるのじゃ。これは王宮に登録するからしっかりとした制度で、後からの変更はできんぞ」

なるほど……特許のようなものか。本音を言えば俺の名前で登録したいが、そんなことできないからしょうがないよな。

「それでも良いです。ただし、使用料も考えて俺のアイデアを買ってくださいね」
「ふん、良いアイデアじゃったらな」
「良いのを考えますよ。本当はこれから今ある魔法具について聞きたかったんですけど、ここに来てかなり時間が経ってるので、また今度来たら既存の魔法具について教えてもらえますか？」
「ああ、わしはいつでもここにおるからいつでも来ると良い」
「ありがとうございます！　絶対また来ます！　あ、お爺さん名前を聞いても良いですか？　俺はレオンです！」
「わしはマルセルじゃ」
「じゃあまた来ます！」

俺はそう言って工房を出て、家に向かって駆け出した。これからの展望が少し見えて、足取りはかなり軽くなっていた。

8、魔法具工房（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！！

面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

9、既存の魔法具

それから数日はマリーと出かけたり、ニコラやルークと森に行ったりしていたので魔法具工房へは行けず、あれから四日後の今日、俺はまた魔法具工房へ向かっていた。

今日はとても暖かくそよ風が吹いていて、気持ちの良い日だ。

俺は天気の良さとこれから魔法具について教えてもらえるということで、足取りも自然と軽くなり前よりも早く魔法具工房にたどり着いた。

「こんにちは！　レオンです」

俺は元気にドアを開けて中に入り、奥に向かって少し大きめに挨拶をした。

この工房は、玄関を入った部屋は机と椅子と少しのインテリアしかないような簡素な部屋だ。応接室のようなものだろうか……？

そして部屋の奥にドアが一つあり、そのドアの奥が作業場となっていると推測できる。

そんなことを考えながら待っていると、奥のドアが開いてマルセルさんが入ってきた。

「マルセルさんお久しぶりです！　時間がなくて遅くなっちゃったんですけど」

「レオンか、別に大丈夫じゃよ。それで今日は魔法具を見たいんだったか？」

「はい！　新しい魔法具を考えるのにも今ある魔法具を知らないと無理ですからね」

「じゃあついてくるんじゃ」

そう言ってマルセルさんは奥のドアを潜っていった。俺は慌てその後を追う。

ドアの奥は廊下となっていて、左側の壁にドアが二つと階段が一つあり、廊下の突き当たりにドアがもう一つあった。

マルセルさんは廊下の突き当たりのドアを開いて部屋に入っていく。

そちらが作業場なのか……？　俺は物珍しそうにキョロキョロと家の中を見回しながら、マルセルさんに続いて部屋に入った。

部屋の中は真ん中に大きな机があり、壁際には大きな棚が置かれている。そして、椅子が一つと長椅子が一つ置いてあった。

机の上にはたくさんの紙の束と、鉄のようなものや宝石のようなものがあった。多分これが魔鉄と魔石だろう。

「マルセルさん、ここは作業場ですか？」

「ああ、ここの方が実物があるから説明しやすいかと思うてな」

「ありがとうございます！　凄いですね！」

俺はどんどんとテンションが上がっている。どんな魔法具があるのか知りたい！

「レオンはその長椅子に座れ」

「はい。ありがとうございます」

「それで魔法具の種類じゃが、一番有名な魔法具はこれじゃ」

マルセルさんはそう言いながら天井を指さした。

ん？　どういうことだ？　と思いながら天井を見上げてみると、そこには電球があった。

「でんっ……！」

俺は電球と叫びそうになって寸前で口を押さえて止めた。セーフだ。多分……

「なんじゃ、どうした？」

「いえ、なんでもないです。これ凄いですね！　この部屋窓が開いてないのに明るいなぁって思ってたんです！」

「そうじゃろう。これは光球じゃ。回復属性を魔石に組み込んである。一度魔石が満タンになるまで魔力を入れれば三十日は光り続けるんじゃ。光を消したい時は魔石を外せば良いぞ」

ん？　光球は回復属性なのか……そう言えばこの世界、光属性ってないんだよな。

それに光を消す時は魔石を外せばいいってことは、遠隔操作できるスイッチのようなものはないってことか……

やっぱり日本の機械ほど便利ではないんだな。

でもこの世界で俺にとっては画期的すぎる！　蝋燭の光は薄暗いし、少し匂いもするし……

「回復属性の魔力で光るんですか？」

「そうじゃ、回復属性にはライトの魔法もあるじゃろう？」

「俺、魔法をあまり知らないんです。魔力測定もこれから行くところで」

「そうなのか。魔法は火、水、風、土、身体強化、回復の六属性じゃが、その中に様々な魔法があるんじゃ。どこまで使えるかはその人の魔力量と素質次第じゃな」

この世界の魔法はそんな仕組みだったんだな……まあ、魔法は教会に行ってから覚えよう。

「魔法は教会に行ってからちゃんと覚えることにします！　それで、光を消す時は魔石を外すって言ってましたけど、スイッチのようなものはないんですか？」
「スイッチ……とはなんじゃ？」

もしかして、この世界にスイッチの概念がないのか？　だからこの言葉に翻訳されないとか？
でも良く考えてみれば、機械がなければスイッチなんて要らないもんな。魔法具になければないんだろう。

「えっと……ボタンみたいなもので、そのボタンを押すと光がついてもう一度押すと光が消える仕組みのようなものはないんですか？」
「そんなものはないな、でも確かにそんな仕組みを魔法具に作れたら、いちいち魔石を外さなくて良くなるのか、便利じゃな。でもどうやればいいのかわしには見当がつかん」
「そうですか……その仕組みを考えたらそれも買い取ってもらえますか？」
「ああ、それは喜んで買い取るんじゃが、そんなこと本当に出来るのかのぉ」
「それは、任せてください！」

俺はマルセルさんにニッコリと笑顔を向けた。多分機械の仕組みを応用すればなんとかできるんじゃないかと思うんだけど……魔法が使えるようになったら試させてもらおう。
とりあえず今は他の魔法具だな。

「他の魔法具も見せてもらえますか？」
「ああ、ここにはない魔法具もあるんじゃがな。他の魔法具は、水洗トイレ、水道、送風機じゃな」

水洗トイレあるのか！！　それだけで貴族になりたい。それに水道も！　送風機って扇風機と同じようなものだよな。
凄い……この世界にはないと思ってたものばかりだ！
絶対に王立学校に行こう！　俺は決意を新たにした。
他にはどんな魔法具があるんだろう？？

「その三つなら家にあるが見るか？」
「あるんですか！？　見ます！」
「じゃあ、まず送風機はこれじゃ」

マルセルさんはそう言って机の上にあった四角い筒を指差した。
え？　これ？？　扇風機を想像してたからイメージと違うな。

「これですか？」
「そうじゃ、この上の凹みにこの魔石を嵌めると作動する」

そう言ってマルセルさんが魔石を嵌め込むと、少し強めのそよ風が俺の頬を撫でた。
凄い！　本当に風が来る！
威力の調節はできないのかな？

「これって風を強くしたりできるんですか？」
「それは魔石に込める魔力によって決まるんじゃ。だから魔力を使い切ってまた入れる時か、魔力を上書きすれば変えることはできるぞ」

魔石に込める魔力の強さとかイメージで決まるってことか……途中で気軽に変えられないのはちょっと不便だけどそこはしょうがないな。

「次は水道と水洗トイレじゃな。水道はこっちじゃ」

そう言ってマルセルさんが案内してくれたのは、階段を上がった先の台所だった。

「これが水道じゃ、この上に魔石を嵌め込むと水が出るんじゃよ」

水道は手のひらサイズよりも短く細い筒のようなもので、その筒の片方が塞がっていて、そこに魔石を嵌め込むところがあった。

そこに魔石を嵌め込むと筒の反対側から水が出るらしい。

「使ってみてもいいですか？」

「良いぞ。飲めるから飲んでみるか？」

「そーなんですか！？　じゃあ飲んでみます」

俺はマルセルさんからコップを受け取り、そこに水を入れた。魔石を嵌めてから数秒待つと水が出てくるようで、日本の水道と大差がない感じだった。

「じゃあ、いただきます」

俺は恐る恐る水を口に入れて一口飲み干した。

ごくっ……美味しい！　これは日本で飲んでた天然水と同じような感じだ。魔法の水って美味しいんだな……

「すごく美味しいです！」

「そうじゃろう。魔法の水は美味しいし安全じゃから、貴族は飲み物にも料理にもみんなこれを使うんじゃよ」

ますます貴族が羨ましい……

「じゃあ最後は水洗トイレじゃな」

トイレは一階の廊下にあったドアの一つだった。

トイレのドアを開けてまず驚いたのは、和式じゃなくて洋式トイレだったことだ。

そして、日本のトイレでは手を洗う場所の真ん中に、魔石を嵌め込むところがあった。

魔石を十秒ほど嵌め込んで、流れたらまた外すのだそうだ。

少し日本に比べると不便さはあるがそんなことは気にならない。

なんせ俺の家はボットン便所だからな。あれは匂いがきついし落ちそうで怖いし嫌いだ。

マルセルさんと俺は作業場に戻ってきて、椅子に座り一息ついた。

「それで魔法具はどうじゃった？」

「すごく便利で素晴らしいと思いました！」

「それは良かったわい」

マルセルさんは魔法具を褒められたことが嬉しいのか顔を少し緩めている。本当に魔法具が好きなんだな。

魔法具は本当に凄かった。この世界にはないと諦めてたものばかりだった。だけど、見ているうちに何個か疑問が湧いてきたんだ。

まずは魔法具と魔法はどちらの方が効率がいいのか。例えば送風機で風を送るのと、風魔法を使える人が風を送るのはどちらの方が魔力を使うのだろうと思った。

また、自分の持っている属性の魔法しか魔石に注げないってことは、自分の持ってる属性の魔法具しか作れないんじゃないかって思

ったんだ。
これらの疑問をマルセルさんに聞いてみた。
「まずは効率の話じゃが、これは魔法具の方が圧倒的に高い。少ない魔力で長期間使うことができるのが魔法具の一番の利点じゃ。また、自分の属性しか作れないのは基本的にはそうじゃな。しかし、他の属性のやつに魔法を注いで貰えば他の属性の魔法具も作れるぞ。実際工房ではよく行われていたわい」
「そうなんですね。じゃあもし魔石の魔力が切れたらどうするんですか？」
「それはその属性持ちに魔力を入れてもらうんじゃよ。基本的に魔法具を使うのは貴族で、貴族は家に使用人がいるから誰かしらがその属性を持ってるものじゃ。またその属性を持ってる人がいなくても、魔法具工房にお金を払えば魔力の補充をしてくれるんじゃ」
そーなのか……少しめんどくさい性能なんだなぁ。まあ、しょうがないよな。
とりあえず魔法具がどんなものか分かったから、これから魔法具にできそうな機械を考えよう！
「マルセルさん、説明してくれた四つの魔法具の他に魔法具はないんですか？」
「失敗作なら多数あるが、日常で使われているのはこれだけじゃ」
え！？　この四つだけ！？　少なくないか……？
「結構少ないんですね……」
「魔法具はまだ作られ始めて数十年じゃ。その中で成功してないものも多々あってな」

そーなのか……今頭に思い浮かんでるものだけでも何個もあるぞ……！　これはお金になるかもしれない！！

「マルセルさん今何個か思いついたんですけど、少し頭の中でまとめたらアイデアを聞いてもらえますか？」

「もう思い浮かんだのか！？　まあ聞くだけならいいじゃろう」

「ちょっと待っててください」

そう言って俺は、頭の中で魔法具にできそうな機械を思い浮かべた。

9、既存の魔法具（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューを是非よろしくお願いします！

10、魔法具のアイデアと銀行

俺はまず、自分が欲しいものを考えてみることにした。
とりあえず冷蔵庫と冷凍庫、あとは電子レンジにドライヤーとエアコン、それからコンロみたいなのもあったら便利だよね。でもコンロとかって誰か思いついてそうだけど、成功しなかったのかな？

「マルセルさん、一つ聞いてもいいですか？」
「なんじゃ？」
「料理をするための火の魔法具のようなものは開発されてないんですか？　誰かが思いつきそうですけど……」
「ああ、それならずっと研究されとるんだが成功してないんじゃ」
「なんでですか……？」
「魔法具は魔石を魔鉄に嵌め込むことで作動すると言ったじゃろう。魔石だけ魔鉄だけではダメなんじゃ。それで火魔法は魔鉄を溶かしてしまうんじゃよ。多分魔鉄は魔法の火に弱いんじゃろう。だから火魔法で魔法具を作っても使ってるとすぐ壊れてダメなんじゃ」
「そうなんですね」

魔鉄は魔法の火に弱いのか……それだと難しいか。でも絶縁体のようなものを魔鉄と魔石の間に入れればできなくもないか？
いや、でも魔石は魔鉄に触れなければ発動しないから……これは今の俺の知識では無理だな。別の魔法具を考えよう。

まずは冷蔵庫。この世界に氷魔法は無いみたいだから、なんとか水魔法を使って作れないか考えよう。

「マルセルさん、水魔法で出す水って凍るギリギリまで冷たくでき

ないんですか？」
「そうじゃな……魔法で出す水の温度は変えることができるが氷を作り出すことはできない。これが今までにわかっていることじゃ。できる可能性はあるかもしれんのぉ」
「マルセルさんは何属性なんですか？」
「わしは回復属性じゃ、だから今試してみることはできないな」

マルセルさんって回復属性だったんだ。そういえばこの工房って他の人いないよね。

「他の属性の魔法具を作る時はどうしてるんですか？」
「王宮から材料を買うときに、魔石に魔力をあらかじめ込めておいてもらうんじゃよ」

そーいうことか……あらかじめ込めてもらう魔力を零度以下の水に出来るかなんて言っても、絶対理解してもらえないよね。しょうがない今は試せないけど、とりあえず水魔法で出す水の温度は変えられるってことは覚えておこう。

確か何かのテレビで、零度以下の水の実験をやってたんだよね。それは何かしらの刺激があれば瞬時に凍るって言ってた気がする。
もしその水を作り出せるのなら、水魔法でその水を出して風魔法で刺激を与えれば細かい氷が作れるんじゃ無いかと思うんだけど……試す方法がない。
自分が水属性なら試せるし、まずは自分の魔法属性を知ってからの方が良いかもしれない。まずは教会に行った方がいいな。

「マルセルさん、色々と思いついたんですけど、自分の魔法属性と魔法の使い方を知ってからの方が効率が良いと思うので、教会で魔力測定をしてからまた来るのでもいいですか？」

「ああ、わしは全然構わんぞ。ただその前に報酬についての話をしても良いか？」
「はい。それは俺の方からお願いしたいです」
「レオンがこの前来てから考えてたんじゃが、とりあえずわしが良いアイデアだと思ったものには金貨一枚払おう。それから、もしレオンが考えたアイデアが魔法具となり、王宮に登録されたら白金貨５枚を払おう。これでどうじゃ？」

えっと、金貨一枚と白金貨五枚……ってどれくらいの価値なんだろう。レオンは銅貨までしか知らなかったんだよね。

「お金の価値がよくわからないのですが、教えていただけますか？」
「そうじゃったか、すまんな。レオンは平民ということをすぐに忘れてしまうわい」

そこからマルセルさんがお金について丁寧に教えてくれた。それをまとめるとこんな感じだ。

鉄貨　１０円
小銅貨　１００円
銅貨　１，０００円
銀貨　１０，０００円
金貨　１００，０００円
白金貨　１，０００，０００円

レオンの記憶から鉄貨が十円くらいで、全ての貨幣が十単位で次の貨幣にいくようだったので、日本円に当てはめてみるとこんな感じになると思う。ただこれはあくまでも適当に当て嵌めただけだから、合ってるかはわからない。

それでこの教えてくれた価値に基づいて考えると、金貨一枚は十万円、白金貨五枚は五百万円となる。

十万円と五百万円。十万円と五百万円！？！？

え！？　こんなにもらっていいの？？　多すぎない？

「マ、マルセルさん、金貨一枚と白金貨五枚って多すぎませんか！？」

「いや、これでも少ないくらいじゃ。魔法具は貴族が買うものだから高く売れる。それに使用料はかなり高いのじゃ。だから魔法具は儲かる。特に新しい魔法具を開発した時は面白いくらい金が入ってくるんじゃよ」

そうなのか。原料も貴重だし高いんだろうなとは思ってたけど……凄いな。

とりあえず、貰えるものはもらっておこう。

「マルセルさん本当にありがとうございます。精一杯新しい魔法具を考えます！」

「ふん、レオンが何も思いつかなかったら一鉄貨も払わんからいいんじゃ」

マルセルさんは挑戦的な眼差しで俺をみている。絶対に良い魔法具を考えよう！！

「絶対に思い付きますから、お金を用意しておいてくださいね！」

俺はそこまで言って思った。そういえばお金ってどうやって貰えばいいんだ……？　そんな大金持ってたら怖くて夜も眠れない。銀行的な仕組みはあるのだろうか。

「マルセルさん、お金ってどうやって貰えばいいんでしょう？　金貨とか白金貨とかを貰っても持ってるのが怖すぎます」
「そうか、レオンは口座を持ってないのか。これは作らないとダメじゃな」
「口座……？」
「ああ、平民にはあまり知られてないじゃろうが、この国にはお金を預けられていつでも引き出せる仕組みがあるんじゃ」

マルセルさんが色々説明してくれたことをまとめると、国営の銀行があるらしい。この国の国民なら誰でも口座を作れてお金を預けられるけど、平民はお金が貯まることがあまりないので豪商くらいしか利用していない。貴族と貴族の屋敷で働く使用人は全員口座を持っているそうだ。
そして銀行の本店が王都中心街の王城のそばにあり、支店は貴族の領地の領都にあるらしい。口座を作るのも、預け入れと引き出しもどこでもできるそうだ。

「じゃあ俺は口座を作らないといけないんですね」
「そうじゃな、口座があればわしの口座からレオンの口座に直接お金を移せるから安全じゃ」

口座は便利そうだし絶対作っとくべきだな。でもそうなると一度中心街に行かないといけないけど……子供でも作れるんだろうか。

「口座って俺が行っても作れるんですか？」
「作れるじゃろうが、貴族でもない平民の子供が行ったら怪しまれるな。レオンは格好からして裕福そうではないしのぉ。まあ、わしと一緒に行けば大丈夫じゃよ」
「え、一緒に行ってくれるんですか？」
「ああ、家の魔法具に魔力を補充してもらうついでじゃ」

ついでだと言っているが、絶対優しさからついて来てくれるんだろう。マルセルさん優しいな……

言ったら絶対にそんなことないっていうから言わないけど。俺はそんなことを思いながら顔がニヤけるのを必死に抑えていた。

「いつ中心街に行きますか？」

「レオンの行ける時で良いぞ」

うーん……俺の自由時間は昼営業の後から夜営業までだけだから、四時間くらいしかないんだよね。中心街は乗合馬車で二時間くらいかかるって母さんが言ってたから、休み時間だけで行って帰ってくるのは無理だろう。

そうなると、昼営業の手伝いを休めるか母さんに聞いてみないとわからない。

「母さんに家を空けていい日を聞いてくるので、それから予定を決めるのでもいいですか？」

「わしは大丈夫じゃよ」

「ありがとうございます！　じゃあまた来ますね。次に来る時までに教会にも行けたら行ってきます」

「ああ、いつでもいいからな」

「はい！　じゃあ今日はこれで帰ります」

「気をつけるんじゃよ」

「色々教えていただいてありがとうございました！」

マルセルさんに挨拶をして工房から出て、家まで駆け足で帰った。夜営業の前に、教会に行く日と中心街に行って良い日を決めたかったのだ。

「母さん父さん、ただいまー！」
「レオン早かったのね」

母さんが厨房の方から顔を出してくれた。俺はカウンターのところまで行き、椅子に腰掛けて母さんに話しかける。

「母さん、今度行きたいところがあるんだけど、お昼の手伝い休んでもいい？」
「行きたいところ？　お手伝いを休むのは良いけど、どこに行くの？　一人で行くの？」

まあ、当然聞かれるよね。なんて言えばいいだろう、本当のことを言ったら絶対ダメって言われる気がする。
この前貴族の話をしたときに、母さん怖い顔してたしなぁ。

「えっと……中心街に行くんだ。今日仲良くなったお爺さんが今度用事があって行くんだって。俺も一緒に連れて行ってくれるって言ってくれたんだけど……ダメ？」

母さんはしばらく難しい顔をしていたけど、「まあレオンも八歳だしね」と言って許可してくれた。
この国の成人は十五歳だけど、八歳を超えれば一人で生きていける歳だと思われている。多分八歳の時に魔法を覚えるのが関係しているのだろう。

「母さんありがとう！」
「楽しんできなさい。でも中心街に行く前に教会に行くことにしましょう。魔法が少しでも使えた方が便利よ」
「教会！！　やったー！　いつ行くの？」

やっと魔法が使える！　俺は嬉しくてワクワクが止まらなくなってきた。

「そうねぇ、明日の夜営業はお休みにして明日の午後に皆でいきましょうか」

「うん！　じゃあ中心街には明後日に行ってきてもいい？」

「いいわよ」

「なんだ、明日は教会に行くのかい？」

父さんが仕込みが一段落したのか会話に加わってくる。

「ええ、明日の夜営業は休みにして、午後に皆で教会に行こうかって話してたのよ」

「それは楽しみだ。レオン良かったね」

「うん！」

父さんが満面の笑みで俺の頭を優しく撫でてくれた。その間に母さんは、俺が中心街に行くことも父さんに話している。

「レオン、中心街には貴族がいっぱいいるんだから、目をつけられないようにするんだよ。目立つ行動はしないこと。約束できる？」

父さんが真剣な表情で俺の目を見て言ってきた。

「うん。約束するよ」

俺も真剣な表情で答えると、父さんはいつもの柔和な笑みに戻った。

「楽しんで来るんだよ」
「うん！」
俺は明日と明後日が楽しみで軽い足取りで、夜営業の準備を始めた。

１０、魔法具のアイデアと銀行（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします！

11、魔力測定

次の日の朝、俺は教会に行く嬉しさで朝からテンションが高かった。

「お兄ちゃんずっとニコニコしてるね！」

「マリー、今日は教会に行くんだよ。お兄ちゃん魔法を使えるようになるんだ！」

「もうっ！　お兄ちゃん、昨日それは何度も聞いたよ！」

俺は嬉しさを抑えきれずに何度もマリーに話してしまい、半ば呆れられていた。

しかしこの嬉しさを抑えることはできず、朝ご飯を食べてずっとソワソワしっぱなしだった。

俺はいつもする洗濯や掃除に全然集中できず掃除は適当に済ませ、マルセルさんのところに、明日中心街に行けることを知らせに行くことにした。

「じゃあ明日のこと知らせに行ってくるねー！」

「気をつけて行くのよー」

「はーい！」

俺は返事をしながら家から飛び出して、マルセルさんの家まで走った。お昼営業までもうあまり時間がないのだ。

「マルセルさんこんにちはー！」

マルセルさんの家に着き声をかけた。少し待っているとすぐに奥

のドアから顔を出してくれた。

「レオンどうしたんじゃこんな時間に？」

「明日中心街に行けることになったので知らせに来ました」

「ずいぶん早かったな。じゃあ明日わしの家に集合で良いか？　家からなら乗合馬車乗り場もすぐじゃしな」

「はい！　大丈夫です！」

「じゃあ準備しておくわい」

「ありがとうございます！　また明日来ますね！」

そこまで話をして、俺はマルセルさんの家を出て、また家まで走った。太陽の位置を見る限り、もう少しで昼の鐘がなるだろう。

「ただいまー！」

俺がドアを開けてそう言ったのとほぼ同時に、昼の鐘がなった。

「レオンドア開けといてー」

厨房から母さんに言われたので、俺はドアを固定してそのまま厨房でお客さんを待った。

すぐにお客さんが来たので、そのまま昼営業の手伝いを始めた。

そしてお昼営業が終わり、今はみんなでお昼ご飯を食べている。

「マリーは一緒に行くかい？　ニコラやルークたちと遊びに行ってもいいけど」

「一緒に行く！！」

「そうか、じゃあ四人で行こうな」

マリーと父さんがそんな会話をしている。今日はみんなで教会に行くらしい。

教会は歩いて二十分くらいのところにあるので、歩いていけるようだ。

「母さん、魔力測定ってどうやってやるの？」

「まずは魔力量を測るのよ。魔力を流すと魔力量が表示される金属板みたいなものがあって、それで測るの。一から五までの数字で表示されて、五が一番魔力量が多いのよ。それで、魔力量がわかったら魔力属性を探すのだけど、これは全ての属性の基礎魔法を順番に使ってみて、使えたものが自分の属性よ」

魔力量は装置を使って測るけど、それで属性はわからないってことか。端から試してみて使えたものが自分の属性ってことだな。

「母さんと父さんは火属性なんだよね？　簡単に使えるようになったの？」

「ええ、他の属性は使おうとしても全然ダメだったけど、火属性だけはすぐに使えたわ。レオンは何属性かしらね」

自分の属性はすぐに使えるってことか。俺は何属だろうな……出来れば回復属性がいいな。自分の怪我を自分で治せるのはでかいよな。

「俺は回復属性がいいな！　どの属性が多いとかってあるの？」

「回復属性は便利よね、教会に行ってお金を払わなくてもいいし。でも属性の偏りはあって、火属性が一番多くて回復属性が一番少ないと言われてるわ」

「そーなんだ……じゃあ回復属性は無理かなぁ」
「そんなに極端に少ないわけじゃないから可能性はあるわよ」
属性に極端な偏りはないけど、多い少ないはあるってことか……
……俺の属性めっちゃ気になるな……まあ、教会に行けばわかるか。

それから昼ごはんを食べ終わり出かける準備をして、みんなで教会まで歩いてきた。
教会は、真ん中の建物が上に塔がついた礼拝堂みたいなもので、左右に少し小さい建物があり渡り廊下でつながっているようだった。
全体的にこじんまりとしているが、小綺麗な建物だ。

「母さん、左右の建物はなんなの？」
「孤児院と治癒院よ。教会には必ず併設されているの」

教会は孤児院と病院の役割も果たしているのか……凄いな。そういえばこの世界って信仰はどうなんだろう？

「母さん、みんな教会に熱心にお祈りに来るの？」
「うーん、そう言う人もいるけど少数ね。教会は沢山あるけどお祈りするところっていうよりも、魔力測定の場所とか治癒院って認識してる人の方が多いと思うわ」
「そうなんだね」

この世界は宗教が強いってことは無さそうだな。元日本人としては、宗教が強いのはめんどくさいのでよかった。

そんな会話をしながら俺たちは教会の中に足を踏み入れた。教会

の中は、奥に神様の像らしきものがあり、その手前にその像に向けて長椅子が並べられている。

「こんにちは。今日はお祈りですか？」

中に入ると修道服を着た女性が話しかけてくれた。それに父さんが答える。

「今日はレオンの魔力測定をしてもらいたくて来たんだけど、今からできるかい？」

「はい、今日は他の人もいないので待たずに出来ますよ」

「それは良かった。じゃあレオンをよろしく頼むよ」

「はい。ではレオン君こちらに来てね」

そう言って修道女が、礼拝堂の側面にあるドアの一つを示している。

「俺一人で行くの？」

俺は教会で一人になることがなんとなく不安でそう言ったが、魔力測定は一人でやるものらしい。

「じゃあレオン頑張るんだよ。父さんたちはこの椅子で待ってるから」

「レオンしっかりね」

「お兄ちゃん頑張って！」

そう言って送り出されながら俺はドアを潜り部屋に入った。

入った部屋は真ん中にテーブルがあり、その上に金属板が置いて

ある。そして椅子が向かい合わせに二つだけあった。
「では手前の椅子に座ってね」
「はい」
俺は少し緊張しながらも、言う通りに手前の椅子に座った。
「では魔力測定を始めるわ。まずは魔力量を測るのでこの金属板に手を置いてね。手を置くと自動的に魔力が引き出されるから、その感覚を覚えておいて、魔法を使う時と同じ感覚だから」
「わかりました」
俺はそう答え、緊張しながら金属板に手を置いた。
そうすると、体の中から何かが引き出されていく感覚がある。これが魔力なのか……今までは一切気づかなかった。
一度この装置で魔力に気づくと魔法が使えるようになるのかもしれないな。
それからしばらく魔力が抜き取られたところで、修道女から声がかかった。
「そろそろ手を離して」
「はい」
「これで魔力量が測れたわ。あなたの魔力量は……五よ。凄いわ、一番魔力量が多い数値ね。兵士の試験も受けられるわよ」
「兵士の試験……？」
「騎士になるには王立学校を卒業しないとダメだから、騎士はほとんどが貴族だけど、兵士は魔力量が四か五なら平民でも簡単な試験でなれるのよ。給金が高いから人気の仕事よ」
「そうなんだ！　じゃあよかったです！」

俺はつい敬語を使いそうになるのを我慢して、子供っぽく見えるように頑張って会話をした。
しかし、兵士のことは知らなかったな……給金が高いのはいいけど、俺は王立学校を目指してるから兵士にはならないな。

「それじゃあ次はあなたの属性を見つけましょう。魔法の属性が何種類あるか知ってる？」
「はい！　火と水、風、土、身体強化、回復の六つです！」
「合ってるわ、それぞれの属性の一番簡単な魔法を使ってみて、使えたものがあなたの属性よ。属性は一人に一つだけだから、一つ使えるものが見つかればそれがあなたの属性となるわ。まずはどれから試してみたい？」
「回復がいいです！」
「わかったわ、回復属性で一番簡単なのはライトの魔法よ。人差し指を前に出してその先が光るようにイメージしてライトと唱えるの。魔法に一番重要なのはイメージよ。イメージに魔力を乗せれば魔法が発動する。慣れてきたら唱えなくても使えるようになるわ。やってみて」
「はい！『ライト』」

俺は指先が光ることをイメージして、さっきの魔力を意識してライトと唱えた。すると指先がイメージしていた通りに光った。
凄いっ！！　使えた！！　やっぱり魔法かっこいいなぁ。

「できました！」
「あなた回復属性だったのね、よかったわね。魔法は一度コツを掴めば、そのあとは練習すればすぐに使えるようになるわ。とにかくイメージが大切だから練習するのよ。他の回復属性の魔法はヒールとピュリフィケイションで、ヒールは傷を治す魔法、ピュリフィケイションは汚れを綺麗にする魔法よ」

回復と浄化の魔法ってことか。

「これから練習します！」

「あなたは魔力量が五だから骨折とかも治せるかもしれないわ。しっかり練習しなさい」

「はい！　病気は治せないの？」

「回復魔法で病気は治せないわ。怪我だけよ」

「そうなんだ」

本当に病気は治せないのか？　今まで聞いてきた話をまとめると、魔法はその属性でできる範囲で、イメージと魔力量によって決まるってことだろう。

回復属性なら病気も治せそうだけど……今度試してみたいな。まあ、また家に帰ってからだな。

「じゃあこれから練習頑張ってね、魔法は使えると便利だから。あとあなたは回復属性で魔力量も大きいから、治癒院でも働けるわよ。興味があったらぜひ来てね」

修道女が獲物を見るような目で微笑みこちらを見ている……うっ……早く逃げたほうがいいかも……

このままだと治癒院で働かされそうだ。

「じ、じゃあ、ありがとうございました」

そう言って俺が椅子から立ち上がりすぐ後ろにあるドアから出ようとすると、お姉さんは獲物を見るような目のまま送り出してくれた。

ふぅ、あんまり教会には来ないようにしよう……

そんなことを考えながら礼拝堂に戻ると、みんなが待っていた。

「レオン終わったのかい？」

「うん！　俺は魔力量が五で回復属性だったよ！」

「魔力量が五だったのか！　それは凄いね。回復属性なら怪我したらレオンに治してもらえるな」

「そうね、これからは怪我したらレオンに頼むわ」

「お兄ちゃん回復属性だったの？　じゃあ怪我しても大丈夫だね！」

「マリー、怪我はできるだけしちゃダメだぞ」

「はぁ～い」

父さんと母さんはそんな俺とマリーの会話を聞きながら、優しく微笑んでくれていた。

俺は家族のみんなを治せるこの属性でよかったと心から思った。

「じゃあ、家に帰ろうか」

「そうね、今日の夜ご飯は記念に豪華にしましょうか」

「豪華なご飯！！　やった～！」

「母さんありがとう！！」

俺たちはそんな会話をしながら教会を出て、家へと向かって歩き始めた。

俺は、この優しい家族を守ることができる魔法を、しっかりと使えるようになろうと決意を新たにした。

１１、魔力測定（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！！

面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューを是非よろしくお願いします！

12、魔法の練習

教会から帰ってきて、マリーは隣のおじさんのところに遊びに行き、父さんと母さんは夜ご飯の仕込みをしている。
豪華なご飯にしてくれるって言ってたから楽しみだ！

俺は早速魔法の練習をしようと思い、リビングに来た。
まずはライトの復習からだよな。教えてもらったように指先に光をつけるイメージで……

『ライト』

指先に俺がイメージした通りの光がついた。これって光の大きさを変えられるんだろうか？
そう思い試してみると、かなり強い光から弱い光、また白い光や黄色い光などイメージ通りになることがわかった。
次は唱えずに魔法を使ってみよう。
指先に光が灯るイメージをして、魔力を指先の方に動かしてみる。するとイメージ通りの光が灯った。
成功だ……！　魔法って凄いな。イメージ通りのことが魔力を使ってできるなんて、どういう原理か全然わからないけどとりあえず凄い！

よしっ！　次はヒールを試してみるか。
でもヒールがしっかりできてるかを試すには、怪我してるところがないとだよなぁ。
痛いのやなんだけど……でも練習のためだ！　そう気合を入れて俺は二階の物置部屋に来た。

そして森に行く時に持っていくナイフを手にし、自分の指先を少し切りつけた。
痛っ！　これ治せなかったら最悪だ……そう思いながら俺は、傷が治るイメージをしてヒールと唱えた。

『ヒール』

凄い……治った！　なんか嘘みたいだ。もう傷があった場所すらわからない。
でもライトの魔法よりかなり魔力を使った気がする。治るまでに時間もかかった。
もっと詳細なイメージをしたほうがいいのかな？
確か傷が治るのは、血小板が血を止めてから細胞が修復するとかだったか？
詳しいことはわからないけど、イメージしないよりはマシかもしれない。
そう思ってもう一度指先を切って、今度は俺の知ってる限りのイメージでヒールを使ってみた。
するとさっきの半分ほどの魔力と時間で傷が治った。
凄い！　やっぱりイメージが大切なんだな……

もしかして、しっかりとイメージすれば骨折よりも大きな傷も、病気も治せる可能性があるんじゃないか？
でもこれは試しようがないな。そんな大きな怪我はしないに越したことはないから、試す機会がないことを祈ろう。

そう考えながら、俺はリビングに戻った。
次はピュリフィケイションだ。これは汚れを綺麗にするんだよな。
俺は部屋に置いてあった木箱に、埃が積もっているのを綺麗にしようと、ピュリフィケイションを使った。

『ピュリフィケイション』

すると少し光ったら、まるで新品のように木箱が綺麗になっている。

これは凄い！　めちゃくちゃ便利じゃないか？

もしかして体にも使える……？

そう思いつきすぐに使ってみたら、自分の体にも使えた。この世界に来て水で洗うだけでスッキリしなかった髪が、凄くさっぱりだ！

これは毎日しよう。俺の服とかベッドも綺麗にしよう。

俺が異世界に来て悩んでいた色々がとりあえずの解決だ！

俺はテンションが上がり、まずはこの部屋を全部綺麗にしようと思い、部屋全体にピュリフィケイションを使おうとした。

そしてそのまま目の前が暗くなり意識を失った。

「うぅ～ん、ん？？　あれ、俺なんでこんなとこで寝てたんだ？」

俺はリビングの机に突っ伏して寝ていた。

たしか魔力の練習をしてて……それでどうしたんだっけ？

そうだ！　ピュリフィケイションをこの部屋に使おうとしたら急に目の前が真っ暗になったんだ。

俺は少しの間意識を失ってたんだろう……

原因は多分魔力の使いすぎだな。今はほとんど魔力が感じられない。

少しずつ回復してはいるけど、全回復にはまだまだ時間がかかりそうだな。

魔力は一気に使いすぎると気を失うってことか……気をつけないとだな。

それにピュリフィケイションは、ヒールと比べても何倍も魔力消費量が多かった。
多分、俺が詳細なイメージができないからなんだろう。ヒールは体の組織のことを考えると消費魔力が抑えられる。
しかし、ピュリフィケイションはそういうイメージができていない。
なぜなら、日本では汚れが突然消えて綺麗になるなんて現象あり得なかったからだ。
これはピュリフィケイションは自分にたまに使うくらいがいいんだろうなぁ。せっかく悩みが解決すると思ったのに。
もうあの臭くて汚いトイレやベタベタで気持ち悪い髪の毛とおさらばできると思ったのに……

まあしょうがないか。念願の回復魔法だったし、魔力量は五だしこれで文句を言ってたらバチが当たりそうだ。

そういえば……俺は最初に回復魔法が使えてしまったから他の属性を試さなかったけど、他の属性を使おうとするとどうなるんだろう？
ちょっと試してみよう。俺は以前母さんが使っていた火魔法を試してみることにした。
人差し指を立てて、その先に火が灯るイメージで……

『火種』

俺がそう唱えたら指先に火が灯った。

「うわっ！！」

俺は何も起きないと思っていたからすごく驚き、思わず椅子から立ち上がってしまった。
えっと……どういうことだ？
確か一人一属性しか使えないんだよな？　もしかして他の属性も使えるとか……？

俺は中庭に移動して、とりあえず水魔法を試してみることにした。
魔法名もわからないので、とりあえずイメージして魔力を使ってみる。
井戸の桶の前に立ち、その桶が水で満たされるイメージをして魔力を消費すると、一瞬で桶の中が水で満たされた。
やっぱり……そのあと風魔法、土魔法、身体強化魔法も試してみたが、すべて問題なく使うことができた。

えっと……これはもしかして俺が転生者だからとか……？
というかそれしか考えられないよな。
うわぁーー！　また隠さないといけないことが増えたよ。いや、これって隠さなくてもいいのか？？

でも、もし知られたら確実に偉い人に目をつけられるよなぁ。
実験台とかにされたら……ダメだ！　絶対に知られない方がいい！　せめて偉い人の後ろ盾があるとか、自分が偉い人になれたとかそういう時以外は内緒にしよう。

でも一人で抱えてるのも辛いよなぁ。
マルセルさんになら話してもいいかな……？　なんかあの人なら大丈夫な気がするな。俺の勘だけど……
次に会った時に考えるか。

とりあえず隠し事は増えたけど、自分の身を守るという点と便利

さではラッキーだよな。
他の属性も練習しよう。

まずは火魔法からだな！　ここでは派手な魔法はできないから、とりあえずファイアーボールを飛ばさないで空中に作ってみるか。
やっぱり火魔法と言えばファイアーボールだよな！　憧れだ！
俺はファイアーボールが俺の前に浮かぶようにイメージをして魔力を使った。
するとイメージ通りのものができた！　凄い！！
もっと効率を良くするには、イメージだよな。火は酸素を消費して燃えるから、それをイメージすればいいのか？
そう思って次はそのイメージでやってみると、さっきの五分の一ほどの魔力で同じ大きさのファイアーボールが作り出せた。
やっぱりイメージの力ってすごいな……

俺は水魔法でウォーターボール、これは空気中の水蒸気をイメージした。
風魔法でウインド、ただ風を起こす魔法だがこれは見えない空気をイメージした。
土魔法でロック、ただ石を作り出す魔法だがこれは石を浮かべる時は無重力、作り出すときは土の圧縮をイメージした。
身体強化魔法でブースト、ただ足が速くなる魔法だが筋肉量がアップする様子をイメージした。

これら四つの魔法は全てイメージすることで、消費魔力を減らすことができた。
魔法名は適当につけただけだ。特にいらないが、あった方がカッコいいからな。
もっと色々できそうだったが、ここでは試せないから、今度森にでも一人で行って試そうと思う。

とにかく俺はどの属性の魔法も使えるようだ……
これからトラブルに巻き込まれそうだけど、まあ良かったと思おう。とりあえず今は。
魔法具のために魔法を試してみるのも全部俺一人でできるしな。
そうだ！　氷が作れるか試してみよう！

俺は、零度以下の少しでも刺激があれば凍る水を、頭の中でイメージした。
えっと確か水は、水分子が動いてて氷は水分子が動かないんだったけ……？
もっと勉強しとくべきだったよなぁ。とりあえず俺が知ってる限りのイメージを思い浮かべて、井戸の桶の中を水で満たした。
見た目は普通に水だが……すぐに刺激を与えないといけないんだよな。
俺は桶を持って横に振った。すると中の水がバキバキッと一瞬にして凍りついた。
凄い……できた！！　これで冷蔵庫作れるんじゃないか！？

俺はテンションが上がり、もっと練習しようとしたところで、リビングから母さんの声が聞こえた。

「レオンー！　夜ご飯よ」
「はーい！　母さん今行くよ！」

氷が見つかったらまずいと思い、桶を井戸の中に入れて隠し、リビングに戻った。

「母さんお待たせ」

リビングに行くとマリーと父さんももう座っていた。

「レオン何してたの？」

「魔法の練習だよ！　ヒールも使えるようになったよ！」

「あら、凄いじゃない！　じゃあさっきナイフで少し指を切っちゃったんだけど、治してもらえるかしら」

「うん！『ヒール』」

俺が母さんの手を取りそう唱えると、怪我はすぐに治った。

「凄いな……」

「えぇ、こんなにすぐできるなんてね……」

母さんと父さんが驚いている。何にそんなに驚いてるんだろう？

「どうしたの……？」

「え、えっと、普通はもっと傷が治るまでに時間もかかるし、傷跡も少し残ることが多いのよ。だからレオンの魔法がすごくて驚いちゃって」

「ああ、父さんも驚いたよ。レオンは魔法の才能があるのかもな」

父さんはそう言いながら優しく笑って頭を撫でてくれた。

全ての属性が使えるだけじゃなくて、回復魔法も異常だったなんて……これからは無闇に魔法を使うのはやめよう……

「お兄ちゃん凄いね！　私にもして欲しい！」

「マリーは怪我してないだろう？　怪我はできるだけしないようにして欲しいけど、もし怪我しちゃった時はお兄ちゃんが治すからね」

「うん！　お兄ちゃんありがとう！！」

「じゃあご飯食べましょうか」
「「「「いただきます！」」」」

今日のご飯は一人一枚のステーキだった。いつもの夜ご飯だったら考えられない豪華さだ。

「父さん母さんありがとう！　すごく美味しい！」

俺がそういうと、優しく微笑んでくれた。
幸せだな、俺の不思議な力で絶対に家族のみんなは守る！　そう誓った。

１２、魔法の練習（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューを是非よろしくお願いします！

13、初めての馬車

次の日、俺は朝起きてからウキウキと出かける準備をしていた。なぜなら今日は中心街に行く日だからだ。

とりあえず少しでも中心街で浮かないように、一番新しい服に着替えて、森に行くときの革靴を履いた。

ボロくて継ぎ接ぎの服に、草を編んだ靴よりはマシだろう。この辺の人たちは良く言えば物を大切に使うので、服が破れても直して使う。最後はその服を雑巾にして擦り切れて使えなくなるまで使う。

なので継ぎ接ぎがない服は貴重なのだ。

その貴重な一着を着て、革靴を履き、腰には小さな麻袋にお小遣いを全部入れてくくりつけた。

お小遣い全部といっても小銅貨数枚分、日本円で何百円分にしかならないが、無一文よりはマシかと思ったのだ。

よし、準備完了！　早く行こう！

まだ朝早いが、そわそわしてしょうがないのだ。

マルセルさんのところに行って早すぎても、魔法具を考えてればいいしな。

そう考えて、俺はマルセルさんのところに行くことにした。

「じゃあ母さん父さん行ってきます！　マリーも行ってくるね、食堂よろしくね」

「気をつけるのよ」

「気をつけるんだよー」

「お兄ちゃん、帰ってきたらお話聞かせてね！」

「うん！　行ってきます！」

マリーは俺が中心街に行くと聞いて、ずっと一緒に行きたいと駄々をこねていた。しかし、母さんが今日のお昼を木苺のパンケーキにすると言ったら、急に言わなくなった。
マリーは時々大人びているが、やっぱりまだ子供だなぁとほっこりした。マリーに何かお土産でも買えたら買ってきてあげよう。

そんなことを考えながら歩いていると、マルセルさんの家にたどり着いた。
いつものようにドアを開けようとすると、今日は鍵がかかっているようだ。
流石に早すぎたかもしれない……
俺はドアをコンコンと叩いて少し大きな声で呼びかけた。

「マルセルさん！　おはようございます！」

それからしばらく待っていると、ドアが開きマルセルさんが出てきてくれた。

「レオン、早すぎじゃよ」
「ワクワクして居てもたってもいられなくて……」
「はぁ、まあ向こうでのんびり出来るし良いかのぉ」

マルセルさんは呆れたような表情でため息をひとつ吐きそう言った。

「本当は昼の鐘の乗合馬車でいいかと思ったんじゃが、一つ早い馬車に乗れるじゃろう、今からすぐに行くのでいいか？」
「はい！　すぐに行く方がいいです！」
「ちょっと待っておれ」

そう言ってマルセルさんはまた家の中に入っていった。準備がまだだったんだろう。

それから数分後、マルセルさんはいつもの服よりもかなり上等な服を着て出てきた。

布の質も柔らかくてかなり良さそうだし、色合いも鮮やかだ。

こんな姿を見ると、マルセルさんが準貴族だっていうのが理解できるな……いつもはただのお爺さんって感じだからな。

こんなこと本人には言えないけど。

俺がそんなことを考えながらボーッとしていると、マルセルさんは怪訝な顔で俺の顔をのぞいていた。

「レオン？　何をボーッとしとるんじゃ。まさか似合わないとでも思っとるんじゃなかろうな」

「そ、そんなことないです！　ただ本当に貴族みたいだなーって思っただけで……」

「この格好は貴族の中では一番下のものじゃよ。平民でも裕福な商人はもう少し良いものを着ていたりするぞ」

「そうなんですね……」

そう考えると俺の家は結構貧しいんだろうなぁ。まあでも、王都に住めてるんだから地方よりはマシかもしれないけど。

「じゃあ行くぞ、乗合馬車乗り場は広場の近くにあるんじゃ」

「はい！　あっ……乗合馬車っていくらかかるんですか？」

俺は馬車のお金のことを全く考えてなかったことに気づき、恐る恐るそう尋ねた。

「中心街までなら銅貨一枚くらいじゃよ」
「銅貨一枚！？」

どうしよう既に予算オーバーだ。俺は小銅貨数枚しか持ってないのに……
俺がどうすればいいかとおろおろ悩んでいると、マルセルさんがそれに気づき呆れたように言った。

「レオン、お主に払わせるわけがないじゃろ。そんなに慌てなくても大丈夫じゃ。そもそも今日は全部わしが払うつもりじゃよ」
「え！？　それは、凄くありがたいですけど、いいんですか……？
俺なんてただの他人なのに……」
「ただの他人だなんて思っとらんよ。そう思ってたら中心街にわざわざ連れて行くわけないじゃろ。わしは結婚してないから子供も孫もいないんじゃ。レオンを見てると孫がいたらこんな感じだったのかと思うてな、嬉しいんじゃよ」

マルセルさん……なんていい人なんだ！！
俺、絶対マルセルさんに恩返ししよう。魔法具頑張って考えよう！　それに、マルセルさんになら俺の属性のこと言っていいかもしれないな……
そう思ったら俺は少し気持ちが軽くなった。やっぱり誰にも言えないっていうのは辛いからな。
今は中心街を楽しんで、帰ってきたら話そう。

「マルセルさん！　ありがとうございます！」

俺が満面の笑みでそう言うと、マルセルさんは少し照れたのかそっぽを向いてしまった。

「別にいいんじゃよ。ほらそろそろ着くぞ」
「はーい！」

乗合馬車乗り場は、広場より少し家から離れた方向にあった。
何台か馬車があり、様々な方面に馬車が出ているらしい。御者がどちらの方面に行くかの看板を持っているが、文字が読めない人のために声にも出してくれているようだ。
俺たちが行くのは中心街なので、中心街行きの馬車のところに行く。

「二人じゃが乗れるか？」
「はい、一人銅貨一枚です」
「こいつの分もで銅貨二枚じゃ」
「ありがとうございます。どうぞ」

お金を払うと馬車に乗ってもいいらしい。
馬車は布のようなものが掛けられている幌（ほろ）馬車で、馬は二頭いる。馬車の後ろ側から入るようだ。
馬車の中に入ると左右に木でできた長椅子がついていて、中には四十代くらいに見える夫婦と、まだ十代後半くらいの女性が座っていた。
俺とマルセルさんが椅子に座ると、夫婦が話しかけてきた。

「こんにちは、今日は観光ですか？」
「わしらは少し用があって行くんじゃよ」
「あらそうなんですね。私たちは観光で行くんです」
「それはそれは、ぜひ楽しんでくだされ」

夫婦の奥さんとマルセルさんがそんな会話をしている。

観光で中心街に行けるような人もいるんだなぁ。でも確かに夫婦の格好は綺麗に染めてある服で継ぎ接ぎもない。マルセルさんのより少し劣るが良い服を着ている。
平民の中では裕福な人たちなんだろうな。
それに比べてもう一人乗っている女性は、俺の家と大差ないか俺の家より貧しそうだ。
俺は一着だけあった継ぎ接ぎのない服を着ているが、この女性は中心街に行くのに継ぎ接ぎだらけの服を着ている。
そんなに貧しいのに何をしに行くんだろう？
俺が不思議そうに見ていたのに気づかれたのか、女性と目があった。

「君、何か用？」
「あ、えっと……中心街に何をしに行くのかなぁと思っただけで……ジロジロ見てごめんなさい！」

お姉さんは少し機嫌が悪そうだったから、俺は慌てて謝った。

「別に謝らなくてもいいわよ。私は仕事を探しに行くの、別に珍しいことじゃないわ。この辺は仕事が少ないから中心街に仕事を探しに行く人は多いわよ。貴族や商家の下働きとか仕事はたくさんあるからね」
「そうなんですね……ありがとうございます」

俺がなんとなくお礼を伝えると、お姉さんはふいっとそっぽを向いてしまった。機嫌を損ねたんだろうか……？　もう話しかけない方がいいよな。

それにしても、中心街に仕事を探しに行く人ってそんなにいるんだな。貴族の下働きとか言ってたけど絶対辛い仕事だろ、理不尽な

貴族とかだったら最悪だし……
俺、絶対頑張って王立学校に入ろう。
そんなことを考えていると馬車が動き出したようだ。馬車に乗るの初めてだからワクワクする！
そんな呑気なことを考えていられたのは最初だけでした。馬車乗り心地悪すぎ！！
とにかく揺れる、お尻が痛い！　快適な車を経験したことのある俺には辛すぎる。
でもみんな平然と乗ってるし、文句言えないし！
もう早く着いてくれ！！！

１３、初めての馬車（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします！

１４、中心街と銀行

はぁ、はぁ、今やっと、乗合馬車から降りて中心街の入り口の広場に着いた。
もう辛すぎた。ひたすら揺れる。地面も土だからボコボコしてるし、ガッタンガッタンずっと揺れてた。
コンクリートが恋しい！
それに椅子も、クッション性皆無の木の椅子だから、お尻が痛すぎる！

「レオン、どうしたんじゃ行くぞ」
「は、はぁ～い」

俺はなんとかマルセルさんに付いて行った。
ここは中心街の入り口の一つのようで、大きな広場になっている。
この広場の先からは石畳となっていて、街がすごく綺麗だ。誰でも入れるけど、俺みたいな貧しい平民丸出しの格好だと浮く。
さっきのお姉さんのような人もいるけど、仕事が見つかればそこのお仕着せをもらえるので、あまり汚い格好をしている人がいないようだ。
石畳の大きな道を歩いて行くと、両脇には高級そうなお店がたくさん並んでいる。貴族のお屋敷はどこにあるんだろうか？

「マルセルさん、貴族のお屋敷ってどこにあるんですか？」
「貴族の屋敷は大通りには面していない、道をもっと入って行ったところにあるんじゃ。この辺は男爵の屋敷、もう少し進むと子爵の屋敷、伯爵、侯爵、公爵と王城に近づくにつれて、高い爵位を持つ貴族の屋敷がある構造じゃ」

「そうなんですね」

じゃあ貴族の屋敷は見れないかなぁ。ちょっと興味あったんだけど、まあ貴族とはあんまり関わらない方がいいって母さん言ってたから見れなくてよかったかもな。

でもマルセルさんも貴族なんだけどね。

しばらく歩いてるけど、マルセルさんは歩みを止めない。これって銀行に向かってるんだよね？　こんなに遠いの？

「マルセルさん、銀行に向かってるんですよね？」

「ああ、用事は先に済ませた方が良いじゃろ」

「こんなに遠いんですか？　貴族の人も歩くんですか？」

「貴族は自分の家の馬車で移動するんじゃよ。中心街は、貴族の屋敷の一つ一つがすごく広いから、必然的に広くなってるんじゃ」

こんなところまで貴族が優遇とは……！　もう貴族になりたい……

「でももう少しで着くぞ」

マルセルさんがそう言うと、視線の先にすごく大きな建物が見えてきた。

周りを騎士の人が巡回していて、少し物々しい雰囲気もある。もしかしてあれが銀行……？

「あれが銀行ですか？」

「そうじゃよ」

めちゃくちゃ入りづらっ！　これは俺一人で来ても門前払いされそう。誰でも利用可能って言っても、絶対建前だけのやつだよこれ。

マルセルさんがいてよかったぁ。

建物に入る時絶対に止められると思ったが、予想に反して入る時には誰に止められることもなかった。

しかし中に入ってみてその理由がわかった。中にも騎士がずらりと並んでいたのだ。

これは……悪いことを企む奴なんていないってことだな。

俺は何も悪いことをしていないのになんだかビクビクとしながらマルセルさんの後を歩き、一つの受付にたどり着いた。受付は若い男の人だった。

「こんにちは、ご用件はなんでしょうか」

「今日はこの子の口座を作りたくてきたんじゃが、すぐにできるかのぉ」

「そちらのお子様ですか？」

「そうじゃ」

「失礼ですが、口座が必要には見えないのですが。口座は三年間お金の動きがないと失効してしまいますが、大丈夫ですか？」

「おお、大丈夫じゃよ、口座開設のお金もちゃんと払うぞ」

「かしこまりました。ではこちらの書類に記入をお願いします。できればご本人様に書いていただきたいのですが、代筆が必要ですか？」

「いえ、字は書けるから大丈夫じゃ」

「かしこまりました。ではよろしくお願いします」

なんか疑われてたみたいだけど大丈夫みたいだ！　よかったぁ、ドキドキした。

それで、この書類を書けばいいのか。

書類に書くのは名前、性別、年齢、住んでいる街の名前だけだっ

た。一瞬街の名前が思い出せなかったが、レオンの記憶を探ってすぐに思い出した。
王都ラスリアだ。覚えとかないとだな。
書類を全部書いて受付の人に渡すと、それを確認して今度は水晶玉のようなものを取り出してきた。
「これに魔力を少し流してください。あなたの魔力を記録します」
俺は言われるがままに魔力を流した。すると水晶玉は少し光った。
「これであなたの魔力を登録しました。口座を作成するのに十分ほどかかりますので、少しお待ちください」
そう言って受付の人は後ろに下がって行った。
えっと、さっきの水晶玉ってなんだ？　あれで魔力が登録できたのか……？　というかすごいオーバーテクノロジーじゃないか？
どういうことなんだ？
「マルセルさん、さっきの水晶ってなんですか？」
「ああ、あれは魔力を登録できる水晶玉でな、これから口座にお金を入れるときもお金を下ろす時も、あれで本人確認ができるんじゃよ」
「えっと……あれは誰かが発明したものですか……？」
「いや、あれは百年程前に森の奥にあった教会から見つかったものなんじゃ。確か水晶玉が百個ほどあってな、最初は何に使えるものかわからなかったらしいんじゃが、研究の末、魔力で個人の識別ができ、全ての水晶が繋がってることがわかってな。それから銀行に使われるようになったんじゃよ」
「そうなんですね……誰かが作ったものなのでしょうか……？」

「いや、あれは神の遺物だろうと言われておる」
「神の遺物……？」
「そうじゃ、出処がわからず壊せないし劣化しないものを神の遺物と呼んでおるんじゃ。あの水晶玉は使い道がわかったから良いが、まだ使い道が分からないものもあるらしいぞ」
「そんなものがあるんですね……」

まさかそんなものがあるなんて……この世界ってもしかして本当に神様がいるのか……？　いや、地球にもいたのかもしれないか。
今は考えてもわからないことだな。
そこまで考えた時、受付のお兄さんが帰ってきた。

「お待たせいたしました。こちらがレオン様の銀行カードです」

俺は銀行カードを受け取った。木で作られているようで、そこには俺の名前と口座番号、登録店名が書かれていた。

「そちらの銀行カードを受付で見せてもらい、魔力で本人確認が取れたらお金の引き出しや預け入れ、振り替えなどができます。銀行カードは紛失されますと、再発行には銀貨一枚かかりますのでお気をつけください。それでは本日は口座作成で銀貨三枚です。お支払いお願いいたします」

銀貨三枚！？　そんなに高いのか！　それは平民はほとんどの人が作れないよ。というかマルセルさんにそんなに払ってもらっていいのか……？

「銀貨三枚じゃ」
「確かに承りました。本日はありがとうございました」

受付の人はそう言って軽く頭を下げた。この世界は頭を下げる文化はあるのか……うちの周りでは誰もやらないから初めてみた……

って、今はそんなことじゃなくて、お金だ！

俺は既に出入り口の方に向かっているマルセルさんを慌てて追いかけた。

「マルセルさん、あんなに高いのに払ってもらっていいんですか？」

「今日は全部わしが払うと言ったじゃろ？　それよりもそのカードを無くさないように、首からかけられるものを買った方が良いな」

マルセルさんはそう言ってどんどんと歩いて行ってしまう。ここは素直にお礼を言った方がいいか。

「マルセルさん、ありがとうございます。でもこれ以上はもういいですよ！」

「いや、買った方がいいじゃろう。それにわしは今まで、誰かにお金を使うってことがなかったんじゃ。わしに買わせておくれ」

そんなこと言われたら断れないじゃないか……！

「じゃあ、よろしくお願いします」

「よし、じゃあこれからは中心街の観光じゃ。お昼も食べないとな」

「はい！」

俺は少し苦笑いをしながらマルセルさんに付いて行った。

１４、中心街と銀行（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューを是非よろしくお願いします！！

15、中心街を観光

銀行を出て、中心街のお店を見ながらマルセルさんと歩いている。

「まずは昼ごはんにするかのぉ。レオン何が食べたい？」

「うーん、どんなお店があるんですか？」

「そうじゃなぁ、格式高いレストランとおしゃれなカフェ、普通に平民向けの食堂もあるぞ」

「ここにも平民向けの食堂があるんですね」

「それはそうじゃ。ここらのお店の従業員はほとんど平民じゃし、貴族の屋敷で働いてる平民も多くいるからな。じゃが、レオンの家があるあたりよりは値段は高いな」

やっぱり中心街の方が物価が高いのか。というかこの三択だったら俺が選ぶの一つしかないじゃん。

「平民向けの食堂で」

「よし、おしゃれなカフェじゃな」

「マルセルさん、そんなこと言ってないです！」

「わしが行きたいからいいんじゃ。本当はレストランが良かったんじゃが、流石にドレスコードがあるからのぉ。レオンの格好では入れんからな。でも服を買ってから行くのもありじゃろうか？」

服を買ってから！？　流石にそれはダメだろう。

「カフェで、カフェに行ってみたいです！」

「よし、じゃあカフェに行くかのぉ」

なんか、嵌められた気がする……
まあ、カフェ行ってみたいからありがたく奢ってもらおう。

それからしばらく歩くと、目的のカフェに着いた。
外見は普通の綺麗な家という感じだが、外にはおしゃれな看板がかかっていた。
中に入ると、平民の家にあるような木目丸出しで、装飾も何もされていない机とは違い、白く色が塗られていて縁が複雑に彫られているオシャレなテーブルと椅子があった。

「いらっしゃいませ。あちらの机でよろしいでしょうか？」
「レオン良いか？」
「は、はい。そこで大丈夫です」

突然話を振られるとは思わず、焦ってしまった。
店に入ると、若い女の人が席に案内してくれた。

働いてる人はみんな平民だと思うけど、やっぱり貴族に接することがあると、言葉遣いとか立居振る舞いとか教えられるんだろうな。
普通に敬語を使ってるし、俺の周りにいる人とは違う。

「ではこちらがメニューですので、注文が決まりましたらお声がけください」

そう言って店員さんは下がって行った。

「レオン、どれがいいんじゃ？」
「ちょ、ちょっと待ってください」

マルセルさんは既にメニューを見ていたので、俺も慌ててメニュ

ーに目を落とした。
カフェと言うだけあって、メニューにはオシャレな名前が並んでいた。フレンチトーストやサンドウィッチ、ジャムトーストなど、俺の知っているものも多くあるが、いくつか聞いたことのない料理がある。

これは推測だが、俺の翻訳機能が日本に似たようなものがあるものは日本の名前に翻訳して、日本にないものはこっちの名前そのままの発音でカタカナに変換されているんだと思う。
そして俺が話した言葉もこの世界の言葉に翻訳されているんだろう。すごく便利だけど、不思議な能力だよな……

まあ、便利だからいいか。今はお昼ご飯だ！
どれがいいかな……よしっ、サンドウィッチとフレンチトーストにしよう。

「マルセルさん、俺はサンドウィッチとフレンチトーストがいいです」
「飲み物はどうするんじゃ？」

そっか、飲み物もメニューにあるんだ。平民の食堂はどこでも果実水だから、この世界に来て初めて飲み物を選ぶな。
えっと……紅茶と緑茶、フルーツジュースがあるみたいだ。って、緑茶もあるのか！？
この世界ってやっぱり日本的だよなぁ。なんでなんだろうか……
でも紅茶と緑茶って同じ茶葉からできるから、どっちもあるのが普通なのかな？

「紅茶でお願いします」
「わかった。なら頼むぞ」

マルセルさんが店員さんを呼んで注文してくれた。マルセルさんはジャムトーストと紅茶を頼むみたいだ。

この世界の食文化は発展してないって思ってたが、実際は貴族とその周辺では発展しているのかもしれないな。

まだ最近発展しはじめて、平民まで浸透していないとかなのか？

「マルセルさん、貴族の食事は平民のものよりかなり発展してるんですか？」

「そうじゃな。十数年前に戦争が終わってから急激に発展しとるんじゃよ。それまでは、貴族の方が量が多く肉の良い部位を食べていたくらいじゃったが、最近は調理法が色々発展しとるんじゃ。それに、砂糖が輸入できるようになって甘味も増えてきとるよ」

戦争があったのか……戦争が終わってて本当に良かった。

これからは平民の食卓も豊かになるかな？

「じゃあそのうち平民の食事も豊かになりますよね？」

「まあ、いずれはそうなるじゃろうが、何十年も先の話だろうのぉ。裕福な層には比較的早く広まるかもしれんが、貧しい層は中心街との関わりも薄いからのぉ」

そうなのか……また貴族かよ。もう貴族になりたい！　羨ましすぎる。そのためにはとりあえず王立学校だよね。

俺が王立学校入学への決意を新たにしていると、料理が運ばれてきた。

「お待たせいたしました」

まずは飲み物が運ばれてきて、そのあとに食事だ。
フレンチトーストもサンドウィッチもすごく美味しそう。思わずお腹がぎゅるぅと鳴ってしまった。
は、恥ずかしい……早く食べよう。

「じゃあ食べようか、いただきます」
「いただきます！」

俺はサンドウィッチから食べることにした。ナイフとフォークが置いてあるから、これで食べた方がいいんだろうな。
異世界で初めての銀食器だ。やっぱり貴族は食事マナーとかも決まってるんだろう。
マルセルさんをチラッとみると日本の銀食器の使い方と大差ないようなので、俺も普通に食べることにした。

フォークでサンドウィッチを固定してナイフを入れてまず驚いた。このパン硬くない！
貧しい平民に食べられてるパンは、カチカチのフランスパンみたいなやつなのに、これは食パンに近い……パンも発展してきてるんだな。

俺はまず一口食べてみることにした。
ぱくっ……美味しい！　めちゃくちゃ美味しい！
レタスとチキンにハーブトマトソースのようなものがかかっている。日本で食べても普通にレベルが高いサンドウィッチだ。
俺はあっという間に食べ切ってしまった。

次はフレンチトーストだ。こっちは見た目はフランスパンだけど、すごく柔らかい。

ぱくっ……美味しすぎる。甘い。
これは確実に砂糖が使われてるな……日本のフレンチトーストと大差ない。それどころか甘いもの食べたかったからより美味しく感じる。
涙が出そうなほど美味しい。やっぱり食事って大事だな。
最後に紅茶を飲む。日本で飲んでた紅茶よりフルーティーな紅茶だった。日本のより美味しいかもしれない……
めちゃくちゃ満足だ、また来たいな。そんなことを考えながら満面の笑みで一息ついていたら、マルセルさんが話しかけてきてくれた。

「美味しかったか？」

俺はやっとそこで、食事に夢中でひたすら無言で食べてしまったことに気づいた。

「ご、ごめんなさい。俺夢中で食べちゃって……」
「別にいいんじゃ、美味しそうに食べてて良かったぞ？」

マルセルさんがちょっと揶揄うように言ってきた。
は、恥ずかしい……次は気をつけよう。

「えっと……すごく美味しかったです。ご馳走様です」

俺は恥ずかしくて思わず声が小さくなってしまった。
マルセルさんはそんな俺にちょっと笑ってから言った。

「それなら良かったわい。じゃあ次は買い物に行くかのぉ」

そう言ってマルセルさんが席を立ち会計をしてくれたので、俺も後に続いて店を後にした。

「じゃあ、次は革製品の店じゃな。銀行カードの他に、お金も少し入れられるようなものがいいじゃろう」

革製品って絶対高いよな……でも何を言っても変わらないだろうしありがたく買ってもらおう。

「ありがとうございます」

そうしてしばらく歩くと、かなり大きなお店の前に着いた。ここは貴族や富裕層向けの革製品を中心に扱う商会の本店らしい。

「いらっしゃいませ。本日は何をお探しですか？」

「銀行カードとお金が少し入れられるもので、首から下げるタイプのものが欲しいんじゃが」

「かしこまりました。それではこちらの商品がおすすめです」

そう言って店員さんが見せてくれた商品は、日本でいうと首にかけるタイプのパスケースのようなものだった。

「レオン、どれがいいんじゃ？」

どれがいいと言われても、どれも大差ないように思える。強いて言えば、色が濃いか薄いかくらいだが……

「えっと、色が濃い方がいいかな」
「こちらでございますね、それでしたらこちらの商品は、丈夫な皮を使っているのでおすすめですよ」
店員さんが色が濃いものの中でのおすすめを教えてくれた、ありがたい。
「じゃあそれでお願いします」
「かしこまりました。銀貨五枚ですがよろしいですか？」
「大丈夫じゃ」
「ではこちらでお会計お願いいたします」
銀貨五枚！？　五万円ってことだよな、そんな高いのか。でももうマルセルさんお金払ってるし……
どんどんマルセルさんへの恩が積もっていくな。いつか恩返ししないと……
マルセルさんが買ったものを持ってやってきた。会計は終わったようだ。
「レオン、銀行カードを入れておけ。無くしたら困るじゃろ？」
「はい、本当にありがとうございます」
「いいんじゃよ、気にするな。お金を使う相手がいなかったから余っとるんじゃよ」
マルセルさんは笑ってそう言った。本当にありがたい。絶対に恩返ししよう。
そう思いつつ、俺は買ってもらった財布に銀行カードを入れた。実際手に持ってみるとパスケースよりかなり大きく、もう首にかけ

られる財布だったので財布と呼ぶことにした。

これならいつでも服の下に身につけておけるから、寝てる時もずっと身につけてよう。防犯にはそれが一番だ。

それに、こんな品の良い財布を持ってたら、お金持ってますと言ってるようなものだから、中心街以外では服の外に出さないことにしよう。

「ちゃんと入ったか？」

「はい、完璧です。ありがとうございます」

「いいんじゃよ。わしはこれからレオンに稼がせてもらう予定じゃからの」

「はい。魔法具頑張って考えます！」

「まあ、焦らなくても良いわい。じゃあ、そろそろ帰るかのぉ」

「そうですね。時間かかりますしそろそろ帰りましょうか」

そう言って、最初に乗合馬車を降りた広場に向かって歩き出した。

１５、中心街を観光（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューを是非よろしくお願いします！

16、再会

乗合馬車がある広場に向かって歩いていて、広場が見えて来たと少し気を緩めた時、一瞬よろめいて前から歩いて来た人にぶつかってしまった。

「すみません！　お怪我はないですか？」

「ああ、大丈夫だ。あれ？　たしか君は……食堂の子じゃなかったかい？　確かレオンだったよな。なんでこんなところに？」

俺はそう言われて、慌ててぶつかった人の顔を見て驚いた。異世界に転生した日、食堂の前でぶつかった男の人だったのだ。

「あの時の、たしか……フレデリックさん？」

「覚えててくれたのか」

良かった名前思い出せて……もう会うことはないと思ってたから忘れかけてたよ。

「またぶつかってしまって、すみません」

俺が謝っていると、マルセルさんが俺に何かあったことに気づいて戻って来てくれた。

「レオン、どうしたんじゃ？」

「マルセルさん、この方にぶつかってしまって……」

「申し訳ない……え？」

マルセルさんは一緒に謝ってくれようとしたが、フレデリックさんを見て何故か固まっている。どうしたんだ？

「あなたは確か、マルセル殿では？」

「は、はい。マルセル・ロンコーリと申します。フレデリック様に会えるとは光栄でございます」

マルセルさんがすごく丁寧な口調でフレデリックさんに挨拶している。マルセルさんのファミリーネーム、ロンコーリって言うんだなぁとか、俺はどうでもいいことを考えていた。

「マルセル殿とレオンはどんな関係が？」

「はい。私は今レオンの家の近くで魔法具工房をやっておりまして、レオンが家を訪ねて来て知り合ったのです。フレデリック様はレオンを知っているのですか？」

「ああ、以前休みの日にレオンの家のあたりに行った時に、食堂の前で偶然会ったんだ。レオンとはもう一度話してみたいと思っていた。ちょうどいいからこれから少し話さないか？　マルセル殿もいいか？」

えっと……マルセルさんが敬語で話してるってことは、少なくともマルセルさんより身分が高いってことだよな。ということは確実に貴族ってことか……

絶対断れないじゃん！！

「はい。少しなら話す時間はありますが……マルセルさんは大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫じゃ。フレデリック様、是非ご一緒させてください」

「よし、じゃあ行こうか。そこのカフェでいいだろう」

そうして俺たちはカフェに行き、飲み物だけを注文した。そして今、飲み物が運ばれて来たところです。はい。気まずいです！！

カフェに来てからまだ一言も話していない。マルセルさんは緊張してるし、この人そんなにすごい人なの??

俺は何も分かってないから無闇に話すこともできない。何が地雷か分からないのって怖いな。

そんなことを思いながら戦々恐々としつつ、なるべく所作を心がけて紅茶を飲んでいると、やっとフレデリックさんが話しかけてくれた。

「レオン、ちゃんとした自己紹介をしてなかったが、私はフレデリック・タウンゼント。近衛騎士団所属の騎士だ。二度も出会うなんて君とは縁があるみたいだな」

「あ、ありがとうございます。俺はレオンです。王都の外れにある食堂の息子です」

俺はすごく緊張してなんとか答えを返した。

この世界ってどのくらい貴族の力が強いんだろうか？　良い貴族も悪い貴族もいるって言ってたけど、この人はどっちなんだ……！

「君とマルセル殿は何をしに中心街に来たんだ？」

どうしよう……この人が信用できるか分からないから、どこまで話していいのか。とりあえず銀行に行ったことは秘密にした方がいいよな。

「えっと、カフェに行きました。マルセルさんが連れて来てくれて、

すごく美味しかったです」
「そうか、最近貴族の間では食文化が発展してるからな。そういえばこのお店はブルスケッタが美味しいんだ。食べられるか？」
「た、食べられますけど、いいです！」
俺は慌てて断ったけど、フレデリックさんは笑顔で頼んでしまった。

「レオンは将来、食堂を継ぐのか？」
フレデリックさんに何故かそんなことを聞かれた。
俺はなんて答えようか迷ったが、平民でも王立学校を受験する人は、受かるかは別にすればたくさんいると聞いていたので、それは言っても大丈夫かと思い素直に答えた。
「王立学校を受験しようと思ってます。受かるかは分からないんですけど……」
「ほう、そうなのか。なんで王立学校を？　まあ受験するだけならたくさん平民もいるが、何か理由があるのか？」
「はい、マルセルさんの工房で魔法具が素敵だなと思って、役人になれば寮に魔法具があると聞いたので……」
「ははっ、確かに魔法具は便利だよな。やっぱりレオンは面白いな。普通の平民とは違う。大体の平民は、成り上がりたいからとお金がたくさん欲しいから、これしか答えない」
なんかフレデリックさんがすごく笑ってる。俺の答え変だったか？？　魔法具に憧れるだろ！　あんなに便利なんだから。
「笑っちゃってごめんな、それで勉強はできてるのか？」

「いや、それが教えてくれる人に心当たりがなくて……教材だけでも貰えるといいんですけど……」
「教えてくれる人は必要ないのか？　もしかしてレオンは読み書きが既にできるのか？」

あっ！　また余計なこと言ったかも……俺は慌てて自分の手で自分の口を塞いだが、もう手遅れみたいだ。
変に誤魔化さない方がいいだろう。

「はい、読み書きはできるんですが、どんな試験かも分からないので教材が欲しいんです」
「読み書きはどこで教えてもらったんだ？　それに敬語も」
「近くに住んでたお爺さんが教えてくれたんです。それで覚えました」
「そうだったのか、君は運が良かったんだな」
「はい、ありがたいです」

マルセルさんに言ったのと同じ設定で話したが、なんとか理解してもらえただろうか？　フレデリックさんはずっと僅かに微笑んでいて、優しそうだけど本心がわからない。
なんか俺を疑ってるような気もする……

「じゃあ教材は私が用意しよう」

フレデリックさんが笑顔でそう言った。なんか企んでる可能性もあるけど、他の人に教えてもらえるアテもないし……お願いしようかな。

「えっと、お願いしてもいいですか？」
「ああ、次に休みが取れた時、君の食堂に持っていこう」

「本当にありがとうございます！」
そこまで話した時、先程頼んだブルスケッタが運ばれて来た。
「じゃあ少し食べようか」
フレデリックさんはそう言って、一皿で運ばれて来たブルスケッタを、自分の取り皿にナイフとフォークで移し、優雅に食べている。
俺もなんとか真似をして食べた。美味しい……！
トマトとチーズが絶妙だ。
「やっぱり美味しいな。私はこれが好きなんだ」
「はい、美味しいです！」
「マルセル殿も食べてくれ、レオンとばかり話していて悪いな」
「いえ、いいのです。いただきます」
マルセルさんはまだ緊張が解けないようだ。フレデリックさんてそんなにすごい人なのか……？　もしかして俺やばい人に目をつけられてる……？
後でマルセルさんに聞いてみよう。
それからは他愛もない話をしばらくして解散となった。
「じゃあレオンまた、マルセル殿も今日はありがとう」
「はい。またよろしくお願いします」
「こちらこそご一緒できて光栄でした」
そうしてフレデリックさんは去っていった。
俺たちは二人とも疲れた様子で、広場まで歩き始めた。
多分時間にすれば三十分くらいだったんだろうけど、その何倍も

疲れた……

「マルセルさん、フレデリックさんって何者ですか？」

「フレデリック・タウンゼント様じゃよ。タウンゼント公爵家の前当主の三男じゃ。公爵家の爵位は継がないが、騎士としても優秀だから、騎士爵をもらうだろうと言われておる。実家の爵位は公爵じゃし、本人も騎士爵をもらうということで、貴族の間では有名な人物なんじゃ。それに、まだ１８歳という若さですでに近衛騎士団に所属というのも異例じゃ」

なんか、すごい人なんだな……というか俺にとっては貴族ってだけでみんなすごい気がして、違いがよくわからない……

そもそも公爵って貴族の頂点でいいんだよな？　俺の記憶ではそうだけど……

「マルセルさん、貴族の爵位ってどういう順番なんですか？」

「貴族は下から男爵、子爵、伯爵、侯爵、公爵じゃよ。一代限りの騎士爵や準貴族は、実家の爵位によって変わるのじゃ」

やっぱり俺が知ってる順番であってるんだな。

そうするとフレデリックさんは……俺すごい人と知り合いになった気がする。

でもこれが、いいことなのか悪いことなのかわからない。まあ、いいことだと思っとこう。そうじゃないと不安すぎる。

その後、俺とマルセルさんはかなり疲れていたので、言葉少なに乗合馬車で帰った。

とりあえず悪い人ではなさそうだったからと自分に言い聞かせ、俺は不安を押し殺した。

１６、再会（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューを是非よろしくお願いします！

閑話　不思議な子供（フレデリック視点）

俺はフレデリック・タウンゼント。タウンゼント公爵家の三男で近衛騎士団に所属している。

公爵家の人間として外面は取り繕ってるから、強くて優しい貴公子なんて言われるが、実際はそんなんじゃない。

気心の知れた友達の前では、雑で好奇心旺盛な性格で、平民同士の遠慮のない距離感が好きだったりする。

あの日もいつものように、休みの日に王都の外れに探索に行き、平民の食堂で食事でもしようと思っていたんだ。

馬に乗って王都の西の外れに着き、馬を預けて平民の服に着替えようと、王都に何ヶ所か借りている部屋に行こうとした途中で、子供とぶつかってしまった。

俺はまだ、馬に乗るための簡易の鎧を着ていたので、怖がらせないように謝って、そのまま立ち去ろうとしたが、その子供が突然平民には似つかわしくない言葉遣いで話しかけて来た。

難しい敬語を使っていて、明らかに食堂の息子ではありえない。

それどころか商人の中でも、貴族とやり取りのある豪商しか、平民で使える者はいないような言葉遣いだった。

俺は、その場ではその子供の言い訳に納得したように見せていたが、その子供を怪しみ、他国のスパイだったらまずいと思ってその子供のことを調べさせた。スパイなら教育も受けてるだろうと思ったのだ。

この国は十数年前に戦争は終わり、他国とは停戦協定を結んでいるが、やはり相手を陥れたいと考える奴らはいくらでもいる。

念には念を入れた方がいいと思い、公爵家の影を使って調べさせた。

そうすると、母親、父親、妹は至って普通の平民で、あのレオンという子供も、特別不審な点はないという結果だった。生まれも育ちもあの家のようだ。

どういうことだ……？　じゃあどこであの言葉遣いを覚えたんだ？

そう思い、レオンの生活圏内に没落貴族や豪商が実家の者がいて、レオンと頻繁に会っているかも調べさせた。

しかしそんな人もいなかった。

ますますわからない、今度食堂に行き直接話してみようと思っていた時、王都の中心街でレオンとばったり遭遇した。

中心街にいることにも驚いたが、マルセル殿といることになにより驚いた。マルセル殿は魔法具開発者として有名なのだ。

俺は、もしレオンがスパイで、マルセル殿が騙されているのだとしたらまずいと思い、二人をお茶に誘った。

そして今がその帰り道、やはりレオンという少年はおかしい。

敬語もだが、所作や食べ方までもしっかりと躾された貴族の子供と同等だ。それに読み書きもできるという。

どこで学んだのかが全くわからない。

ただスパイではなさそうだった。

そもそもスパイなら、平民なのにあんなに疑われることばかりしないだろう。

とにかく不思議でよくわからない。しかし、有能なことは確かだろう。話していてとにかく頭の回転が早く、大人と話しているよう

だった。
それに俺の勘だが、これから何か大きなことをやらかしてくれる気がする。
できれば目の届くところに置いておきたいな。まずは教材を届けるついでに、どれほどの学力があるのか確かめたい……
それと、王立学校もうちの屋敷から通わせるのがいいかも知れない。
あの子は優秀だが、自分の優秀さに気づいていなさそうなところがあった。経済など少し難しい話題を何気なく振ってみたが、普通に受け答えしていて、それが平民では異常だということに気づいていなそうだった。
隣のマルセル殿の方がよほどハラハラしていたよ。
この国にも危険な貴族はたくさんいるし、他国もまだまだ危険視しなければいけない。
あの子はそういう輩にすぐに騙されてしまうに違いない。そうなった時、あの子の頭脳が敵のために使われるのは脅威になる可能性がある。さらに、タウンゼント公爵家側の勢力にとって、レオンが有益な存在だと知られれば、レオンが消される恐れもある。
やはり、監視下に置きたい。
ここは父上と母上、兄上達にも話をしておいた方がいいだろう。
俺はそのまま実家に向かうことにした。

その日の夕食の席、俺はタウンゼント公爵家で久しぶりに家族と顔を合わせて食事をしていた。
いつもは騎士寮に住んでいるので、実家で食事をすることは少ないのだ。

食事の席には、父上と母上、次兄が揃っていた。
この国の貴族は、基本的に15歳から自分の子供が15歳になるまでの期間、当主として領地にいて領地経営をする。
なので公爵家現当主である上の兄上とその妻と子供は、領地にいるのでここにはいない。
当主を子供に譲ると王宮で働くことになるので、王都の屋敷に戻ってくる。よって父上と母上はここにいる。

食事中は最近の近況などを話し、一通り食事が終わって食後にワインを飲んでいる時、父上が話すきっかけをくれた。

「それでフレデリック、何か話があるんだったか？」
「はい、父上。平民のレオンという少年について話があります」

貴族は家族同士でも、特に父上に対してはしっかりとした言葉遣いが必要だ。俺は平民のような家族関係が羨ましいが、この家は他の貴族家と比べると家の中の身分は厳格ではないし、家族仲も良いので良い家に生まれて良かったと思っている。

「平民だと？」
「はい。その平民は王都の西の外れで食堂をやっている家の長男で、歳は八歳。私が王都の西の外れに行った時、不注意でぶつかってしまって、その時に知り合いました。そして今日中心街で再会しまして、カフェでお茶をして来たところです。レオンは、まず最初に知り合った時、綺麗な敬語を使っていました。平民ではありえないような言葉遣いで、私は公爵家の影を使わせていただき、その平民を調べましたが怪しいところはなく、かと言って誰かに学んでいる様子もないとのことでした」

綺麗な敬語を使う平民、というところにやはり皆不信感を覚えるようで、最初より真剣に話を聞く体勢になっている。

「そして今日ばったりと中心街で出会いまして、カフェで食事をしたところ、食事のマナーもよく躾けられた貴族の子と同等でした。他愛もない話の中に難しい話も織り交ぜましたが、全て理解し的確に返されまして私も驚きました。また、読み書きもすでに出来るようです」

「それはどういうことだ？　うちの影が調べたのなら、怪しいところがないというのも間違いのない情報だろうし、学んだ様子もないというのは本当なのだろう。それならば学ばずとして全て完璧にこなすということか？　そんな子供が本当にいるのか……」

父上がとても混乱している、他のみんなも同じように混乱しているようだ。

でもわかる、俺もまだ混乱してるくらいだ。

「それで父上、レオンは王立学校に行きたいようなのです。もし学校で有能さがわかり、他の勢力の貴族家や他国のものに目をつけられてしまっては、損失が大きい可能性があります。私が教材を用意する約束をしたので、もし王立学校に入学となった時には、うちの屋敷から通わせるのはいかがでしょう」

「ふむ、確かにそこまで有能な人材なら、早めに確保しておくべきだな。うちの勢力を後押しする人材になるやも知れん」

「はい。それにリュシアンがレオンと同じ歳に王立学校に入学するので、学校での様子もわかりますし、レオンなら良い友人になると思います」

リュシアンとは上の兄上の長男だ。ちょうどレオンと同じ年に王

立学校に入学する。

「そうか、リュシアンと同い年なのか。そのレオンという平民がそれほど有能なのならば、リュシアンにも良い友となるだろう。レオンが王立学校に行くことになったら、家から通うことを許可しよう。それから、一度会ってみたいから今度連れてきてくれ」

「ありがとうございます。では予定を合わせて連れてきます」

「ああ、楽しくなりそうだな」

ああ……父上の好奇心を刺激しちゃったみたいだ。父上は珍しいもの新しいものが凄く好きなんだよな。

まあ、認められたから今日のところは良しとしよう。

「ああ、それとフレデリック、レオンに一応見張りはつけておけよ」

「かしこまりました。影を一人つけておきます」

すぐに信用することはできないので、俺も影をつけるつもりだった。父上から申し出てくれたのはありがたいな。

そんな話で夕食はお開きになった。

レオンがこの国にとって有益となればいいんだが。そう思いながら、俺は騎士寮へと戻った。

閑話　不思議な子供（フレデリック視点）（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします！

17、全属性

中心街から帰ってきて三日が経った。
俺はマルセルさんに属性のことを話そうと決意し、工房に来ている。隠していてもいずれバレるだろうし、それなら最初から自分で言った方が良いと思ったのだ。
それに、マルセルさんなら気味悪がったりはしないと思う……多分……

今は作業場で向かい合って座っているところだが、いざ打ち明けるとなると緊張してきて、頭がまとまらない。
やっぱりやめようかな……でもマルセルさんなら大丈夫だよな……？　うん、信じよう。

「それで、今日はどうしたんじゃ？　魔法具を考えたのか？」
「魔法具も色々考えたんですが……その前に俺の属性について話を聞いてもらえますか？」
「レオンの属性？　確か回復属性じゃったんだろう？」
「そうなんですけど、実は他の属性も使えるみたいで……」
「他の属性……？　他の属性じゃと！？」

マルセルさんは椅子から立ち上がり、大声で叫んだ。
俺は緊張していたせいか、思わずビクッと震えて椅子の上で小さく飛び上がってしまった。

「ああ、すまんかった。怒ったりしとるわけじゃない。ただ驚いたんじゃ」

俺はマルセルさんのその言葉を聞いて心底ホッとした。
よかったぁ……とりあえず嫌悪感はなさそうだ。

「それで、他にどの属性が使えるんじゃ？」
「えっと、全部です……」
「なっ……」

マルセルさんは今度は声も出ないようで、絶句し固まっている。
やっぱり全属性使えるっておかしいんだよな。一人に一つの属性が当たり前って感じで、複数の属性が使えるなんて教会でも考えられてすらいないようだった。
じゃあ、俺はなんで使えるんだろう。
多分転生したのが影響してるんだとは思うんだけど、そもそもなんで転生したのかわからないし。

「全部とは本当か！？」
「はい。使ってみましょうか？」
「使ってみてくれ！」

マルセルさんの鬼気迫る顔に押されて、俺は全部の属性魔法を使ってみせた。

「使徒様じゃ……」

マルセルさんはそういったまま、また固まってしまった。
使徒様ってどういうこと？　ちょっとマルセルさん固まってないで教えてくれよ～。

「マルセルさん。マルセルさん！　マルセルさん！！」
「はっ！？　使徒様申し訳ありません」

「俺はレオンです！　使徒様なんかじゃないですよ！」
「でも、全属性を……」
「とにかく落ち着いてください。俺はレオンです」

それからしばらくマルセルさんは混乱していたが、やっと落ち着いてきたようだ。

「取り乱してすまなかったな。全属性を使えるのは使徒様だけじゃと思っとったから、混乱してしまったんじゃ」
「その使徒様って、なんですか？」
「使徒様は神様から遣わされたお人で、全属性を使い、様々な知識を持っておられるそうだ。何百年も昔に使徒様がいらっしゃったという記録が、残っておるらしい」
「そんな歴史が残ってたんですね」
「そうじゃ。その歴史以降、全属性はおろか、二つ以上の属性が使える者も一人として現れていない。じゃからレオンが使徒様だと思ったんだが、本当に違うのか？」

そんな存在がいたのか……俺は使徒様なのか？
俺は全属性が使えて、転生者だから色々と知識はある。
だけど神様なんて知らないし、知識も半端なものばかりだ。そもそも使徒様って神様に会ったことがある存在だよな。
それなら、俺は使徒様じゃないだろう。俺は神様なんて知らないし。

「俺は神様から遣わされてないし、使徒様じゃないですよ」
「そうなんじゃな、また使徒様が現れたとなったら人々の信仰心も上がると思ったんじゃがのぉ」

「信仰心ですか？」
「そうじゃ、この世界はミシュリーヌ様を信仰しているが、使徒様が現れてから数百年経ち、もう信仰心が残ってる者はあまりいなくてのぉ。わしはもっと信仰心を持つべきじゃと思っとるんじゃがな」

この世界の神様ってミシュリーヌ様って言うのか。確か教会にあった像は女神像だったから、神様は女性なんだよな。
というかマルセルさんは信仰心が強い人だったんだな。俺は宗教の力は弱い方がいいんだけど……

「今はどのくらい教会の力ってあるんですか？」
「今は教会の力などないようなものじゃ。教会は全て国営じゃし、働いておる人もほとんど国に雇われとる奴じゃ」
「そーだったんですね」

この世界の教会は国営だったのか！　じゃあ教会とは名ばかりの施設ってことだな。
よかった。これで宗教と政治の対立とか、めんどくさいことが起きる可能性はほぼなくなったな。

「俺は使徒様じゃないから、信仰心をあげることはできませんね」
「そうじゃな、まあいいんじゃよ。話が逸れてすまんかったな」
「いえ、教会のこと聞けたのでよかったです」

マルセルさんは少しがっかりしているようだ。宗教の問題は複雑だから、下手に口を出さない方がいいよな。

「それで、俺の魔法のことなんですが……」
「そうじゃったな、レオンが使徒様でないんじゃったら、なんで全属性の魔法が使えるんじゃ？」

「俺もそれが不思議で、マルセルさんに聞いてみたかったんです。今までの歴史で、使徒様以外に二属性以上使えた人は、いなかったってことですよね」
「そうじゃ。今までの歴史で使徒様以外には存在しない。とりあえず、レオンが全部の属性を使える理由はわからんが、誰にも言わない方がいいじゃろうな」
「やっぱりそうなんですか？」

やっぱり隠すべきなんだなぁ。確かに強すぎる力って争いの元なんだよな。

「レオンが信頼できる貴族の後ろ盾を得られた時には、能力を明かしても良いかもしれん。しかし、無闇に能力を明かすと、お主の力を求めて他国や危険な貴族が、お主を獲得するためや排除するために動き出す可能性がある。強い力は欲しがる奴もいれば、排除したがる奴もいるんじゃよ。最悪家族が狙われるかもしれん。家族を匿える権力を得るまで、隠しておった方が良い」

怖っ！！　今の俺はまだ子供で、家族を守る力もないからな。自分が権力を得るか、信頼できる貴族と出会うまでは絶対に隠すべきだな。

「こうなるとお主は、絶対に王立学校に行くべきじゃな。もしお主が平民のままその能力が知られたら、一生飼い殺しのようになるか、お主を邪魔だと思った貴族に消されるかのどっちかじゃな。しかし、役人となって信頼を得てからその能力を明かせば、王の側近や貴族になれる可能性もある。貴族になるには、王立学校を卒業していないとダメじゃからな。とにかく今は絶対試験に受かるんじゃ」

一生飼い殺しのようになるなんて絶対に嫌だ。俺一人だけなら逃

げられるかもしれないけど、この世界には既に大切な人たちがたくさんいるから、見捨てることなんてできないし……

とにかく今は王立学校に入学して、役人になるまでは隠し通す！

いや、役人になるまでというか、権力を得て信頼を得るまでだな。

「わかりました！　とにかく今は隠して、権力を得てからなら明かしても大丈夫ってことですね」

「そうじゃ、絶対じゃぞ」

「はい。家族を危ない目に遭わせたくないですから」

俺とマルセルさんは、お互いの目を見てしっかりと頷き合った。

マルセルさんは本当にいい人だ……この人に相談して良かった。

１７、全属性（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！！

面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！！

18、製氷機

ついでに、マルセルさんに魔法具の相談もしよう。俺が全属性なことを隠さないといけないとなると、作れる魔法具が制限される可能性もあるからな。

「マルセルさん、魔法具の相談もしていいですか？　俺が全属性を使っちゃいけないとなると、考えてきた魔法具は作れないかもしれません」

「ああ、良いぞ。レオンの考える魔法具には興味があるからな」

「ありがとうございます！　冷蔵庫って言う食べ物を保存するための、冷たい箱のようなものを考えたんですけど……」

「ああ、でもそれは氷が作れないから無理じゃぞ」

「それが、氷を作れたんです」

「なんじゃと！？」

マルセルさんがまた驚いて停止している。今日はマルセルさんを驚かせすぎだろうか。心臓が止まらないか心配だ。

「ええっと、大丈夫ですか……？」

「あ、ああ、大丈夫じゃよ。今日はお主に驚かされっぱなしで疲れるわい」

「ごめんなさい……」

「いいんじゃよ。それで氷が作れるってどうやってじゃ？」

「水魔法で氷になる寸前の水を作り出して、その水に刺激を与えると氷になるんです」

「一度やってみてくれんか？」

俺は、マルセルさんが渡してくれた器に凍る寸前の水を出し、器を揺すって刺激を与えて凍らせた。
その様子を見たマルセルさんは、しばらく難しそうな顔をしながら考え込んでしまった。
どうしたんだろうか？　なにかまずかったか？

「これは、水魔法の使い手なら誰でもできると思うか？」

俺はそう言われて考え込んでしまった。
俺は現代の知識があり、イメージできるから作れるのかもしれないよな。この世界の人に作れるかはわからない……
いや、俺が凍る寸前の水とだけ考えて魔法を使ってみればいいのか。それができれば、この世界の人でもできるかもしれない。

「もう一度魔法を使ってみてもいいですか？」
「ああ、いくらでも良いぞ」

俺は新しい器に今度は凍る寸前の水、とだけ考えてイメージをせずに魔法を使った。すると先程の五倍ほどの魔力が使われたが、水は生成できた。
成功したんだろうか……？　俺は恐る恐る器を手に取り、揺らして刺激を与えてみた。すると水はバキバキッと氷に変わった。
できた！　これなら普通の人にもできるかも！　でも魔力がかなりある人じゃないと無理かもだな。

「マルセルさん、多分魔力が多い人ならできると思います。凍る寸前の水と考えて魔力を使えばできます。ただ魔力がかなり必要だと思うので、どのくらいの魔力を持っていればできるのかは分かりません」
「そうか……お主は魔力が五じゃったな。魔力が五で水属性の奴に

試してもらうかのぉ」

マルセルさんが他の人を集めて試してくれるようだ。これなら冷蔵庫もできるかもしれないな。よかった。

「魔法については後で試してみることにするが、魔法具の形は決まっとるのか？」

「はい！　大体なら決まってます。縦長の箱型で、中にはいくつか棚があって、一番上の部分に氷を作る機能をつけたいと思います。それで、箱の部分は魔鉄ではなく普通の鉄製にして、氷を作る部分だけを魔法具にすればいいかと思うのですが、どうですか？」

「ああ、魔鉄はできる限り節約した方がいいじゃろうから良いと思うぞ。だがそれだと冷蔵庫という名称よりも、製氷機の方がいいんじゃないか？」

確かに……！　魔法具の部分は製氷機だな。というか冷蔵庫っていう売り出し方よりも、氷を作れるって方がいいかもしれない。

冷蔵庫として作ろうと思っていた鉄製の部分は作らないで、魔法具部分だけで売り出そう。それで各々工夫して使って貰った方が便利だよな。

「そうですね。名前は製氷機にします。用途も限定しないで、氷を作れる魔法具ってことにします。それなら自由に使ってもらえると思うので」

「そうじゃな。その方がいいじゃろう。じゃあ一つ作ってみよう」

マルセルさんはそう言って、魔石と魔鉄を机の上に並べた。

「今回はレオンが作ってみるか？　魔力量が五なら魔鉄も使えるぞ」

「いいんですか！？　作ってみたいです！」

「じゃあまず魔鉄を手に持ち、変化させたいイメージを思い浮かべるんじゃ。それで魔力を流せばその通りに変化する」

俺は、溶けにくいように大きい氷が作れる方がいいと思い、三十センチ四方の器をイメージした。そして魔石を嵌め込むところを二つイメージして魔力を流した。

すると、魔鉄がみるみる形を変えていき、すぐに俺のイメージ通りのものが出来上がった。

魔鉄すげぇ！！

「できました！」

「なんでこの形なんじゃ？　わしはてっきり水道のような形にするのかと思ったんじゃが、それに魔石を嵌め込むところが二つあるようだがなんでじゃ？」

「氷は溶けにくいように大きい方が良いと思って、この形にしました。でもこの形にすると中まで刺激が届かなくてしっかりとした氷にならないので、風魔法で水の中心と外側から同時に風を送り刺激を与えるんです」

最初に氷を作ってから何度も氷を作ってみたのだが、水の量が増えるほどしっかりと凍らなくなってしまうのだ。

その理由はわからないが、水の中心と外側から同時に風魔法で風を起こすと綺麗に固まることを発見した。

何故それで綺麗に固まるのかはよくわからないが、そもそも魔法がよくわからない原理なので、考えないようにしている。

魔法は適当でも良いところがすごいよな。うん、俺に向いてるな。

「レオン、一つの魔法具に二つの属性魔法を組み込むのも初めてのことなんじゃぞ。まあ、お主に常識を説いても意味がない気がする

からやめておくか……」

なんかマルセルさんが呆れた目をしている。

失礼な！　俺は常識人だぞ！　常識人だよな……？　もしかしてこの世界では色々ずれてるとか……？

いや、考えないようにしよう。今更だ……

俺は二つの魔石をもらい、魔法をイメージしながら魔力を込めた。

そしてまずは風属性の魔石を嵌め込む。氷を作りながら気づいたんだが、微風を先に発生させているところに水を出現させた方が、魔力効率も氷の出来も良いのだ。

魔法具の中に手を入れてみると、微風が発生している。こっちは成功だな。

そして水属性の魔石を嵌め込む。そうすると、数秒後に氷が出来上がった。多分成功だ！

俺は魔石を外し、氷を箱から取り出した。綺麗な真四角の氷が出来上がっていた。大成功だ！！

「マルセルさん！　完成しました！　どうですか？」

「これは凄いな……夏でも食材を腐らせることなく保存できるようになるし、欲しがる者はたくさんおるじゃろう。それにさっき器で作った氷よりよほど質が高そうじゃな」

「そうなんです！　水魔法だけで水を発生させて揺らして氷にすると、シャーベット状の氷になったり表面だけ凍ったりするんですけど、最初に風魔法で微風を起こしたところに水を作り出すと、硬くて綺麗な氷になるんです」

「ということは、水魔法の魔力量が五ある人でも、綺麗な氷を作ることは出来ないってことじゃな。風属性のやつと協力しないといけない。これは売れるかもしれんな」

良かった！　これでマルセルさんに少しは恩返しできただろうか……

「じゃあわしは、水属性の魔力量が五のやつに、氷が作れるか確かめてもらってから、これを王宮に持っていき登録してもらう。それで良いか？」

「はい！　あ、でもその確かめてもらった人に、アイデアを横取りされるなんてことはないんですか……？」

「それは信頼できる友人に頼むから大丈夫じゃよ。それに水属性と風属性の融合じゃから、すぐに思いついて真似できるやつなんかおらんわい。一応その日のうちに登録に行くし大丈夫じゃ」

「それなら大丈夫ですね！　じゃあよろしくお願いします」

「ああ、任せておけ。王宮に行くついでにレオンの口座にお金も入れとくから、後で確かめるんじゃぞ」

「はい！　ありがとうございます！」

俺はひと段落ついて窓から外を見上げて気づいた。もう夜営業が始まっちゃう！！

「マルセルさん！　もう俺行きますね！　夜営業に遅れちゃうので」

「ああ、気をつけるんじゃぞ」

「はい！　また来ますね！」

俺はそう言ってマルセルさんの家を飛び出して、家まで駆けて帰った。

１８、製氷機（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします！

19、夕食会への招待

それから数日間はマリーとニコラ、ルークと一緒に森に行ったりと、いつも通りの日常を過ごしていた。
今も昼営業の真っ最中だ。
そろそろ客足が少なくなってきているので、もう少しで営業も終わりだろう。
お腹空いたなぁ、早くお昼ご飯食べたい。
そんなことを考えていると、一人お客さんがやってきた。

「いらっしゃいませ！　ってフレデリック様？」

そこにはフレデリック様がいた。
しかし、質素な服を着ていて、親しみやすい笑みを浮かべている。
フレデリック様の正体を知らない人が見たら、少し裕福な平民くらいにしか思わないだろう。

「レオン、今日は君に話したいことがあってきたんだ」
「なんでそんな格好を？？」
「いつもの服だとみんなに怖がられるし、普通に接してもらえないからな」

そんな理由で平民の格好をする貴族なんて、普通いないだろ。
というかこの人って全く貴族っぽくないよな。最初にぶつかった時もにこやかだったし、他の貴族だったら無礼者って斬られてもおかしくないんじゃないか？
いや、もしかしたらこの世界の身分制度って、あんまり厳格じゃないのかもしれないな……王立学校を平民も受験できるし、銀行を

平民も使えるし、よく考えたらおかしいよな？
俺にとっては良いことなんだけど……でも身分制度があることに変わりはないんだから、気をつけるべきだな。

俺がそんなことを考え込んでいると、フレデリック様が不思議そうに俺の顔を覗き込んできていた。

「レオンどうしたんだ？　もしかして似合ってないか？」
「ち、違います！　ただ貴族様もこんな格好をすることがあるんだなと思って……」
「レオン、俺が貴族ってことは公には内緒だからな」
「は、はい！」

俺は慌てて口を手で塞ぎ、激しく首を縦に振った。

「ところで、まだ営業中だよな？　お昼を食べてもいいか？」
「はい、ぜひ食べていって下さい。ステーキと豚肉の野菜炒めから選べますが、どちらが良いですか？」
「そうだね、ステーキを頼むよ」
「かしこまりました。少々お待ちください」

俺はそう言ってカウンターに行き、父さんと母さんにステーキセットを頼んだ。
そして、お客さんが帰った席を片付けに行こうとしたところで、マリーに呼び止められた。

「お兄ちゃん、ちょっと来て」

マリーはひそひそ声で俺を呼んでいる。俺も声のボリュームを落として、マリーのところに行った。

「マリー、どうしたの？」
「あのお兄さんと知り合いなの？」
「お兄さんって、さっき話してた人のこと？」
「そう、なんかお兄ちゃんがいつもと違う感じで話してたから、大丈夫かなと思ったの」

俺がフレデリックさんに敬語で話してるから、不安に思ったのか？　マリーは優しいなぁ。
俺は顔が緩むのを必死に抑えながら、マリーにフレデリック様のことをどう伝えればいいか迷っていた。
貴族ってことは秘密だと言われたし……

「マリー、あの人は俺のお友達だから大丈夫だよ。ただ偉い人だから、失礼なことをしないようにしてただけなんだ。だから心配しなくてもいいからね」
「そーなの？　なら良かったの」
「マリーもあの人には失礼なことしちゃダメだからね。あの人の対応はお兄ちゃんがするから、マリーは他のお客さんをよろしくね」
「わかった！」

フレデリック様は信用できる人だと思うけど、まだわからないからな。できる限り俺が対応した方がいいだろう。
失礼なことをして不敬だと言われても困るし……

そんなことを考えていると、ステーキセットが焼き上がったらしい。

「レオン、ステーキお願いね」
「うん！　持っていくよ」

俺はフレデリック様の席にステーキセットを持っていった。
「お待たせいたしました。ステーキセットです。ごゆっくり召し上がって下さい」
「ありがとう。ではいただくよ」

フレデリック様は木製のフォークだけで、どことなく優雅さを醸し出しながらステーキを食べていく。
俺がフレデリック様の正体を知ってるからかもしれないけど、内から出る気品のようなものは服を替えても隠せないんだな。

しばらくして、フレデリック様はご飯を食べ終えたようだ。

「ごちそうさまでした。レオンちょっといいか？」
「はい、なんでしょうか？」
「レオンのことをうちの家族に話したら、ぜひ会ってみたいという話になってね。今夜の夕食に招待してもいいだろうか？　夕食の後に教材も渡そうと思うんだが」

夕食に招待って、フレデリック様の家に？　それってタウンゼント公爵家にってことだよな！？　なんで俺が！？
やっぱり俺ってなんか疑われてるのかな……言動がおかしいとか？　でも今更子供っぽくしてもおかしいし……
でも、そもそも断ることなんてできないよな。もう行くしかないってことだ。
行くしかないのか……胃が痛くなりそうだ……

「はい、あの、両親に外出していいか聞いてきてもいいですか？」
「いいけど、私も一緒に行こう」

「え、でも貴族ってことは内緒なんじゃ……」
「それは不特定多数の人には内緒だけど、君の家族はその限りではない。子供を預かるのには、身分を明かさないとだからな」
「それは、ありがとうございます」

俺とフレデリック様はカウンターまで歩いていき、俺が父さんと母さんを呼んだ。もうお店に他のお客さんはいない。

「父さん、母さん、ちょっと話があるんだけど」
「レオン？　どうしたの？」
「どうしたんだい？」
「あのね、今日このフレデリック様のお家にお呼ばれしてて、これから出かけてもいい？」

俺がそういうと、二人は少し警戒した顔でフレデリック様を見た。

「この人はレオンの知り合いなの？」
「あなたはどなたですか？」
「ご挨拶が遅れて申し訳ありません。私はフレデリック・タウンゼントと申します。王宮で近衛騎士団に所属している者です。レオンとは先日知り合いまして、本日は夕食に招待したいのですがよろしいでしょうか？」

フレデリック様のその言葉を聞いて、二人の顔はみるみる真っ青になっていき、２人ともその場に跪いた。

「た、大変申し訳ありません」
「申し訳ありません」

母さんと父さんはそう言ったっきり頭を下げている。

「頭を上げて下さい。そんなに怖がらなくても、不敬だなどということはありませんよ。それで、レオンを招待しても良いでしょうか？　夕食に招待ですので、今日は屋敷に泊まってもらい、明日には必ずここまで送り届けますので」

父さんと母さんは不安そうな表情で俺とフレデリック様を見つめていたが、貴族に逆らうことはできないのか、俺への招待を了承した。

「はい、レオンをよろしくお願いします」
「ありがとうございます、安心してください。じゃあレオン、このまま行くけどいいか？」
「はい、大丈夫です。母さん、父さん、行ってくるね。心配しなくても大丈夫だから」
「気をつけるのよ」
「うん、じゃあ行ってきます」

そうして俺はフレデリック様に連れられて店の外に出た。
大丈夫とは言ったけど、心配だ……なんで公爵家の方々が俺になんて会いたいんだ？
フレデリック様は良い人そうだけど、まだよくわからないし……公爵家の方々なんて怖すぎる……

「レオン、あの馬車で行くからな」

うちの食堂から少し離れたところに一台の馬車が置いてあった。外見はしっかりとしているが質素な感じの箱馬車だ。

「あれは、なんの馬車ですか？」

「公爵家の馬車だ。お忍びで来たい時に使うものなんだ」
「そんな馬車もあるんですね」

馬車に近づくと、御者の人が扉を開けてくれた。

「じゃあ、先に乗ってくれ」
「い、いいんですか？」
「ああ、どうぞ」
「ありがとうございます」

恐る恐る馬車に乗り込むと、外側と違って内側はとても豪華な作りだった。
床にはフカフカのカーペットが敷かれていて、クッション性のある椅子、高級で中はとても明るかった。

「凄い……！」
「ははっ、一応公爵家だからな。これでもそんなに豪華じゃない方なんだが」
「す、すみません！」
「いいんだ。座ってくれ」
「はい、失礼します」

やっぱり公爵家は凄いな！　フカフカの椅子は座り心地いいし、馬車の揺れも直接響かないから楽だ。
それよりもこれから公爵家か……何を言われるんだろう？　平民の子供としてはおかしすぎて疑われてるんだろうか……
どんどん不安になってきた……

「そんなに不安そうにしなくても大丈夫だぞ」
「本当ですか？　なんで俺は呼ばれるんでしょうか？」

「ただ両親が会いたいって言ってるだけだから」
「でも、フレデリック様の両親って公爵様なんじゃ……」
「いや、もう兄上が公爵を継いでるから、父上は前公爵だ。この国は息子が15歳になると爵位は譲って王宮で働くのが通例なんだ」

そうなんだ。でも、現公爵でも前公爵でも俺にとっては変わらないんだけど……どっちにしても貴族だ。

「それでもなんで俺に会いたいんでしょうか……？　フレデリック様もなんで気にかけてくださるんですか？」
「それは……」

何だこの間！　めっちゃ気まずい！　言いにくいことでもあるのか……？

「レオンの信頼を得るためには正直に言った方がいいかな。最初は疑ってたんだ、他国のスパイなんじゃないかって。でも話してみると違うみたいだし、君のことを調べさせてもらったけど怪しいところはなかったから、疑いは晴れた。でもスパイじゃないとすると、君は平民にしては優秀すぎる。話していると頭もいいし、頭の回転も早い、話す相手によってスムーズに態度を変えているし、マナーもしっかりしている。公爵家としては君を味方に引き入れたい。これで納得してくれたか？」

やっぱり疑われてたのか……！　調べられてたなんて一切気づかなかったし……
でも今は完全とまでは行かなくても疑いは晴れていて、俺の優秀さを評価してくれてるってことか。

これは、積極的に友好関係を築くべきかもしれない。

やっぱりこれから貴族の世界に入っていくなら、身分の高い後ろ盾は必須だよな。
公爵家に後ろ盾になってもらえたら、これからがかなり楽になるかもしれない。
優秀さも積極的にアピールした方がいいかもな。

「疑いが晴れて良かったですし、そこまで能力を買ってもらえて嬉しいです。ありがとうございます」

そのあとは、フレデリック様と他愛もない話をして、馬車の時間を過ごした。
フレデリック様の方も打算ありで俺に近づいていることがわかり、少し安心してリラックスすることができた。相手が近づいてくる理由がわからない時が一番不安なのだ。
俺は公爵家の方々も、フレデリック様のような気さくな方だったらいいなと考えながら、馬車に揺られた。

１９、夕食会への招待（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします！！

20、時計とお風呂

豪華な馬車での優雅な時間の末、タウンゼント公爵家にたどり着いた。
まず驚いたのは敷地の広さだ。
門から屋敷まで馬車で数分かかる。その途中では、いくつかの建物や綺麗な庭をたくさんみることができた。
そして屋敷にも驚きだ。窓からチラッと見えただけだが、とても大きい建物で三階建てほどの高さがあり、とにかく横に大きい建物だった。

「レオン、私の後ろをついてくるんだ」
「は、はい！　わかりました」

俺は急に緊張してきて、変な汗が出てきた。
馬車のドアが外側から開き、フレデリック様がまずは外に出たので、俺もそれに続いて馬車から降りた。

「おかえりなさいませ、フレデリック様」
「ただいまアルバン。レオン、執事のアルバンだ」
「アルバンです。よろしくお願い致します」
「は、初めまして、レオンと申します。こちらこそよろしくお願い致します」

俺が挨拶を返すと、アルバンさんは少し驚いたような顔をして、頭を下げてくれた。
この世界の人って、普通に頭を下げてお辞儀をしている。日本人の俺としては親しみやすいからいいけど、なんでこんなに日本と共

通点があるんだろう……？　俺がこの世界に来たのと関係あるのかな……

「レオン、君は客人として招かれているから、何かあったら遠慮なくこのアルバンか他の使用人に伝えるといい」
「はい、ありがとうございます」
「では、メイドに客室まで案内させます」
「ああ、よろしく頼むよ。レオンまた夕食の時に」
「はい、また夕食で」

なんとかにこやかに挨拶をしたけど、フレデリック様行っちゃうの！？　ここで一人にされるの不安でしかないんだけど！？

「レオン様、メイドのアンヌでございます。お部屋にご案内いたします」
「レオンです。よろしくお願いします」

俺はペコリと頭を下げて挨拶をした。アンヌさんは多分四十代くらいの年齢で、おば様という言葉が似合う優しい雰囲気の人だ。

「まあまあ、頭をお上げください。レオン様は御客様なのですから、使用人に頭を下げる必要はありませんよ」
「でも、俺は平民ですし……」
「それでも御客様であることに変わりはありませんよ。ではお部屋はこちらですわ」

俺はアンヌさんについて客室まで歩いたが、客室にたどり着くまで驚きの連続だった。
まずエントランスはとても広く、天井には大きなシャンデリアがあった。一つ一つに光球が使われていて、電気を消す時もつける時

もめちゃくちゃ大変だろう。シャンデリアが下まで下がってくるような仕組みはあるんだろうけど、それにしても光球の数が多くて大変そうだ。
そしてエントランスを抜けて階段を上がったが、床には全て絨毯が敷かれていて、フカフカで歩きやすい。
二階の廊下には、花瓶に花が生けられていたり、絵が飾ってあったりと豪華だった。

そんな日本でも、物語の中でしか見たことがないような家の中を歩き、客室にたどり着いた。

「レオン様、こちらでございます」
「ありがとうございます」

アンヌさんが扉を開けて待ってくれているので、俺は部屋の中へ足を踏み入れた。
部屋を入った先の空間には、ローテーブルとソファーがあり、部屋の左側は間にある目隠しで、見えないようになっている。
そちら側を覗いてみると、ベッドと小さなテーブル、それから扉が二つあった。

「レオン様、これからの予定を確認してもよろしいでしょうか？」
「は、はい！」

俺は慌てて入り口の方にいるアンヌさんのところに戻った。

「ソファーにお座り下さい」
「ありがとうございます。アンヌさんは座らないんですか？」
「私は使用人ですので、御客様の部屋でソファーに座ることはできません」

「そうなのですね、わかりました」

やっぱり貴族の使用人は大変そうだな……

「ではこれからの予定ですが、夕食会まであと二時間ほどですので、その間に湯浴みを済ませていただいて、お髪を整え、服を着替えていただきます」

ちょっと待って……なんであと二時間ってわかるんだ？　もしかしてこの世界って時計あるの！？

「ちょっと予定の前に一つ質問してもいいですか？　もしかして時計ってあるんですか？」

「時計ですか？　ございますよ。この屋敷には全ての部屋に時計がございます。また、使用人は小型の時計をいつも持ち歩いております」

まじか！？　この世界に時計ないのかと思ってたよ。俺の家になくてここにあるってことは、時計も高いってことだな。

待って、これで一日が何時間かわかるんじゃないか！？

「この部屋の時計ってどれですか？」

「こちらでございます」

アンヌさんがベッドの方の小さなテーブルに置かれていた置き時計を持ってきてくれた。

地球の時計と全く一緒だ……一から一二までの数字と、短針、長針、秒針がある。

ここでも日本との共通点だ……もしかして一日も二十四時間なのか？

「今は、十六時五分であっていますか？」
「はい、その通りでございます」
「一日は二十四時間ですよね？」
「そうですが……それが何か？」
「いえ、時計が珍しかったので確かめてみただけです。話を逸らしてすみません」

この世界って日本との共通点が多すぎるんだよなぁ。なんか作為的なものがある気がする……
まあ、とにかく時計が存在していたのはよかった。出来るだけ早く買いたいな。

「では、まずは早速湯浴みをしてくださいますか？」
「湯浴みってどこでするんでしょうか？」
「そちらにある左側のドアがお風呂でございます。右側はお手洗いです」
「お風呂！？　お風呂があるんですか！？」
「はい。ございますよ」
「入ってもいいんですか！？」
「入っていただかないと困ります。夕食会のための準備ですので」

やった！！！！　やっとお風呂に入れる！　異世界で初めてのお風呂だ！

「そうですよね、すみません。では入ってきます」
「はい。お手伝いさせていただきます」

お手伝い……？　もしかして洗ってくれるってことですか？

「いえ、一人で入れますので！」
「でもお風呂の使い方などもありますし、お手伝いしないわけには参りません」
うぅ……そう言われるとこの世界のお風呂の使い方なんてわからない……
「じゃあ、よろしくお願いします」
「はい。お手伝いさせていただきます」
アンヌさんがドアを開けて入った先は、脱衣所のようなところで、長椅子やテーブルなどが置かれていた。
その奥の扉の先がお風呂のようだ。服を脱いでお風呂の方に入る。
アンヌさんはメイド服が濡れないように、分厚いエプロンのようなものを着て、腕を捲っている。
うわぁ～、久しぶりのお風呂だ！　お風呂は五人くらいが体を伸ばして入れるほど大きな湯船があり、その周りは石のようなものが敷かれていた。
湯船の中にはお湯がたっぷりと入っていて、湯気で曇っている。
「アンヌさん、お湯はどうやって作ってるんですか？」
「水道のお水で湯船を満たし、そこに火魔法を使えるものが魔法を使い適温まで温度を上げております」
「そうなんですね、ありがとうございます」
魔法でやってるのか。でもこのお湯を温めるには、火属性の魔力が最低三はないとダメだろうから、お風呂専用に使用人を雇ってるってことか？
水魔法で凍る寸前の水を作れたから、お湯も作れるんじゃないか

と思ってやってみたけど、常温以上にはならなかったんだよな。多分温めるのは水属性の魔力じゃダメってことなんだと思う……魔力はやっぱりよくわからない。

「お風呂専用の使用人がいるのですか？」

「そうではございません。貴族様に雇われている使用人、特に下働きは火魔法のレベル三以上のものを優先的に雇うのです。火魔法は魔法具にすることができませんからね」

優先的に雇ってるのか……貴族ってお風呂好きなんだな。

俺なら水魔法と火魔法ですぐにお湯を作れるんだけど、湯船がないからなぁ……そんなものを設置する場所もないし……そもそも湯船ってめっちゃ高いんだろうな……

うちではお風呂は無理だな。そもそも家族みんなが、そんな邪魔なものいらないって言いそうだし……

俺がそんなことを考えていると、アンヌさんが椅子を持って来てくれていた。

「レオン様、こちらにお座りください」

ダイニングテーブルに合わせたような大きさの椅子があり、そこに座るようだ。

俺が座ると、アンヌさんは湯船から桶でお湯を汲んで、少しずつ俺の体と頭にかけてくれた。

めちゃくちゃ気持ちいい～。シャワーがないから、桶でお湯をかけないといけないんだな。

これは手伝ってくれる人がいないと大変だ……

「アンヌさん、貴族の方達はみんなメイドさんに手伝ってもらって

湯浴みをするんですか？」
「皆さん手伝い付きで湯浴みをされますが、八歳ごろからは男性は従者の手伝いで、女性はメイドの手伝いです。お子様は皆メイドがお手伝いさせていただいております」
「俺は八歳ですが……」
「存じております。ですがちょうど空いている従者がいなく、まだ八歳ですので私が付かせていただきました。従者の方がよろしかったですか？」
「いえ、大丈夫です」

結構年配のメイドさんだと思ってたけど、こういう手伝いもあるからなんだな。

「ではお髪に石鹸をつけて洗っていきます。目を閉じていてください」
「はい」

気持ちいい～。美容院で髪を洗われてるみたいだ……眠くなるな……

「お加減いかがでございますか？」
「気持ちいいです」
「それは良かったです、では流しますね」

ふぁ～、気持ちよかった……

「お体はご自分で洗われますか？」
「はい。自分でやります」
「では私は外で待っておりますので、ごゆっくりどうぞ」

俺は布を濡らして石鹸をつけて、身体中をゴシゴシ洗った。たまにピュリフィケイションをやってはいるが、やっぱり実際に洗うのはいい。

入念に洗ったあと桶に水を汲んで綺麗に洗い流し、湯船に浸かった。

「あ〝あ〜、きもちよすぎる〜」

久しぶりのお風呂だ。大量のお湯に浸かるのはやっぱり良い……貴族最高だな……

俺は十分お風呂を堪能して脱衣所に戻った。

するとアンヌさんが、タオルやお水を用意しておいてくれたので、体を拭き水を飲んで、置いてあったバスローブのようなものを着てお風呂から出た。

「寛げましたか？」

「はい。とても気持ちよかったです」

「それは良かったです。それではお着替えとお髪のセットをしても良いでしょうか？」

「それはいいんですけど……他に服なんて持ってませんが？」

「レオン様が夕食会に出席するとき用にと、フレデリック様が服を用意してくれております。ですのでそちらにお着替えください」

服まで用意してくれてるの！？　なんかもらいすぎで逆に怖い気がしてきた……俺そんな期待に添えるほど有能な人間じゃないと思うんだけど……

ではこちらにお着替えください。

そう言って渡された服は、色鮮やかで布も多く使われていて、肌

触りも抜群のいかにも高そうな服だった。
この服がいくらなのかなんて怖くて聞けない……
着てみると、着心地も抜群で凄く体に馴染む。俺サイズとか教えてないし、というか俺も自分のサイズを知らないのに、サイズ感も合ってるし……もうあんまり考えないことにしよう。
「とてもよくお似合いです。ではこちらの椅子に座ってください」
「はい。ありがとうございます」
そこは化粧台で、壁に鏡がかかっていた。
俺は初めて自分の顔をしっかりと見た。今まで水面に映った顔は何度も見ているが、ここまではっきりと見たことはなかったのだ。
やっぱり綺麗な金髪に飴色の瞳だ……顔も整ってるし、これが俺だなんて信じられないよな。日本人の俺は良くも悪くも、どこにでもいそうな普通の顔だったから、ギャップが凄い……
「ではお髪をワックスで少し整えますね」
「はい。よろしくお願いします」
アンヌさんは前髪を少しかき上げるような形で分けて、髪型を整えてくれた。
「終了でございます。ではそろそろ時間ですので、食堂までお送りいたします」
「よろしくお願いします」
俺はこれから会う公爵家の方々に少し緊張しながらも、勇気を出して立ち上がった。

２０、時計とお風呂（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

21、タウンゼント公爵家

アンヌさんに食堂まで案内してもらい、中に入ると既に公爵家の方々は席についていた。
俺は遅れてしまったかと慌てそうになったがなんとか抑えて、しっかり頭を下げ、にこやかに挨拶をした。

「初めまして、レオンと申します。この度は夕食にご招待いただき大変嬉しく存じます」

俺はそう挨拶をした。どんな言葉遣いがいいか、さっきまで記憶を探って必死に考えていたのだ。
公爵家の方々は一瞬驚いたような顔を浮かべたが、すぐににこやかな表情に戻り、一番奥に座っている壮年の男性が挨拶を返してくれた。

「レオン君よく来てくれたね。そんなに緊張しないで座ってくれ」

多分この人がフレデリック様のお父様だろうな。
アンヌさんが席まで案内して椅子を引いてくれたので、俺はできるだけ優雅に見えるように気をつけながら、椅子に座った。
緊張しないでって言われても無理だ……雰囲気が高貴すぎて自然と背筋が伸びる。
何かやらかさないように細心の注意を払わないと……

「それでは食事の前に簡単な自己紹介をしておこう。まず私だが、タウンゼント公爵家の前当主、リシャール・タウンゼントだ。そしてそこにいるのが私の妻カトリーヌ」

やっぱりこの人がフレデリック様のお父様か。貫禄があるな……

「リシャールの妻カトリーヌ・タウンゼントですわ。レオンさん、よろしくお願いしますね」

「よろしくお願いします」

フレデリック様のお母様だとは思えないほど若く見える。凄いな……この世界は、貴族の間では美容法も確立しているのかも。

「そしてそこにいるのが、次男のジュリアンと三男のフレデリックだ。長男は公爵家を継いで領地にいるので、ここにはいない。また長女も既に嫁に行っているのでいない。また機会があったら紹介しよう」

「次男のジュリアン・タウンゼントです。以後お見知り置きを」

「はい。よろしくお願いします」

「私のことはもう知ってるだろうが、三男のフレデリック・タウンゼントだ。改めてよろしく」

「よろしくお願いします」

皆さんオーラは高貴な雰囲気で近寄りがたく思うが、優しく笑ってくれているので、良い人たちなのかなと思う。

でも、貴族はポーカーフェイスも上手そうだし、今はまだ信用しすぎないほうがいいかな……

「では自己紹介も終わったことだし、まずは食事を楽しもう」

リシャール様がそういうと、使用人の方が食事を運んできてくれた。

まずはスープと籠に入ったパンが運ばれてきた。

「では、食事に感謝していただこう」
「「「いただきます」」」

リシャールさんの後に続いて、みんなで食前の挨拶をして食べ始めるようだ。俺は出遅れたので、小さな声で「いただきます」と言って、食べ始めた。
まだパンとスープしか運ばれてきてないから、この世界の貴族の食事はフルコースのようだ。カトラリーも左右にたくさん並んでいて、日本でお父さんに連れて行ってもらった、フランス料理と似ている。

俺は他の人が外側のカトラリーから使っているのを横目で確認して、カトラリーを手に取りスープを一口飲んだ。
美味しい……！！　かぼちゃのポタージュスープのような味だ。
パンも食べてみる……ふわふわでめっちゃ美味しい。幸せだ……やっぱりパンは柔らかくないとな。

そこからは合間に他愛もない話をしながら、料理を楽しんだ。どの料理もとても美味しく、貴族の食事が急速に発展しているというのも頷ける内容だった。

「レオン君、満足してもらえたかな？」

リシャール様にそう尋ねられた。

「はい！　とても美味しかったです」
「それは良かったよ。では少し真面目な話をしてもいいかな」

リシャール様がそう言って、真剣な顔になった。
そうだ、呑気に料理を楽しんでたけど、なんで今日ここに連れてこられたのかまだ何も聞いてないんだった。
……急に緊張してきた。

「はい。大丈夫です」
「レオン君、君に折り入って頼みがあるんだ」
「頼み、ですか……？」

貴族が俺に頼むことって何だろう？？　俺に頼まなくてもなんでも手に入りそうだけど……

「今この国にはたくさんの貴族がいるんだが、ちょうど勢力が二分している。一つが私たちも属する勢力で、平民とも助け合い、身分関係なしに有能な人材は取り上げるべきだという考え。もう一つは歴史ある今の貴族家を大切にし、もっと貴族と平民の身分を厳格にするべきだという考え」

この国ってそんなことになってたのか……俺にとっては後者の勢力が勝つと都合が悪いな……

「この国の仕組みは、数百年前に使徒様が作られたものなんだが、そこで貴族は特権を得る代わりに、平民の最低限の生活や身の安全は保証する。貴族が平民を支配するのではなく、互いに助け合って生きていく。と定められたんだ。しかし、最近はミシュリーヌ様を敬っている人も減り、この規約はもう守る必要はないって声がどんどん大きくなっているんだよ」

また使徒様か……全属性を使ってたみたいだし、なんか気になるよな……

それにしてもそんな決まりがあったのか。だからこの公爵家の皆さんは、平民の俺に対しても誠実に対応してくれてるんだな。

「フレデリックから君はとても優秀な平民だと聞いたよ。さっきまで君の様子を見てたけど、言葉遣いも食事のマナーもほとんどできている。君がどこで学んだのかってことは不思議だが、それは追及しないことにする。その代わり、私たちの勢力の助けとなってくれないかい？　とにかく平民にも才能のあるものがいるという事実が大切なんだ。ここ何十年も大きな活躍をするような平民がいないことも、向こうの勢力が活気付いている原因なんだよ。レオン君、よろしく頼む」

そう言ってリシャール様は頭を下げた。貴族が俺に頭を下げるなんて……！　俺は慌てながら、まずは頭を上げてもらおうと声をかけた。

「あ、あの、頭を上げてください！」

えっと、どうしよう。とにかく身分制度を厳格にしたい派と、平民でも優秀な人材はどんどん拾い上げた方がいい派で、今は貴族が二分されてるってことだよな。

それで、昔に神の使徒様によって貴族は平民を支配せず助け合って生きていくように決められたけど、信仰心がほとんど残ってない今では、それを守る必要もないという声が大きくなっている。

まとめるとこんな感じだよな。

あれ……？　でも貴族なら平民は支配して、自分たちの力を強くしたいって思うのが普通じゃないのか？

なんで貴族の間で勢力が二分してるんだろう……？

「あの……一つ聞いてもいいですか？　リシャール様はなぜ平民を

守るような勢力に属しているのですか？　貴族なら貴族の力を強めたいと思うのが、一般的ではないんですか？」
「私は、強い力で押さえつけるのは国の未来のために良くないと考えているんだ。国を作っているのは結局人だ、それも多くの平民だ。貴族の力が今以上に強くなり平民が抑圧されれば、いずれ国がダメになると考えている。私たちの勢力は、私と同じような考えの者がほとんどだ」

素晴らしいな……自分の力を強くすることを考えるのではなくて、国の未来を考えてってことか。
この国の貴族は悪い人ばかりではないみたいだ。この人のためなら力を貸したいな。
それに俺にとっても公爵家が力を貸してくれるのなら、心強い。

「あの、大きな助けになることはできるかわかりませんが、ぜひ手助けさせてください」
「本当か！？　レオン君、ありがとう」

リシャール様がまた頭を下げてくれた。
貴族はみんな腹黒くて、平民を見下してるのかと勝手なイメージを持ってたけど、そんなことはないんだな。
まあ、タウンゼント公爵家の方々にもそういう部分はあるんだろうけど、理不尽に平民を見下しているようなことはないようだ。
この人たちなら信頼できるかも知れない……

俺の属性のことも、明かしてもいいかな。せっかく俺のことを頼りにしてくれてるのに、嘘をついてるっていうのも心苦しいし、何よりこれを知った上で守ってほしいという打算もある。

「レオン君にはまず王立学校に入ってもらって、そこで好成績を残

して欲しい。王立学校にはこの屋敷から通うと良い。公爵家の庇護があると周りがすぐに理解できるだろう。そして卒業後は王宮で国のために働いてもらいたい」

公爵家の屋敷から通うって、ここに住むってことか！？　それは毎日緊張で倒れそうだ……なんとか断れないか……

「屋敷に住まわせてもらうのは悪いです！　中心街に部屋を借りるので大丈夫です……」

「遠慮しなくていいんだ。君の後ろ盾をはっきりと示すためにも、君の安全のためにもこの屋敷から通った方がいい」

そこまで言われたら断れないじゃないか……

「はい……ありがとうございます」

「気にしないでくれ。ところで、レオン君は魔力量と魔法属性はもう測定したのか？」

「はい、測定しました。魔力量は五で、魔力属性は……」

どうしようか、全属性だと言ってもいいだろうか。ここで隠すことは簡単だけど、そうしたらこの後ずっと隠して生きていくことになるんじゃないか。

いずれ何かの拍子にバレたら信用を失うかも知れない……

やっぱり今伝えるべきだよな……

「レオン君？　どうしたんだい？」

「あの……魔力属性は……全属性なんです……」

「え？　なんて言ったんだ？」

「全属性……全ての属性魔法が使えるんです」

俺がそういうと、全員が大きく口を開けて、ポカーンと固まっている。貴族でもこんな顔することあるんだなぁ。

それからしばらく待っていると、皆さんが段々とフリーズから戻ってきた。

「えっと、全属性が使えるってそれは事実なのか……？」
「はい。使ってみましょうか？」
「ああ、使ってみて欲しい。話を聞いただけでは信じられなくてな」

俺は全ての属性魔法を使ってみせた。

「本当に使えるとは……もしかして、使徒様なのですか！？」

また来たよ、使徒様。俺は使徒様じゃないんだって。
神様になんて会ったことないし。
使徒様じゃないよな……？　多分違うはずだ……

「使徒様じゃないです！　なんか使徒様との共通点は多いんですけど、神様には会ったことないです」

そういうと、リシャール様はまた考え込んでしまう。

しばらくして、考えがまとまったみたいだ。

「レオン君、君が全属性持ちのことは周りには内緒にしてくれないか？　あまり広く知られないようにしたほうがいいと思う。君は魔力測定の時は何属性になったんだ？」
「回復属性です」
「じゃあレオン君はしばらく回復属性ってことにしてくれ。レオン

君が地位を得たら公表してもいいと思う。とりあえず、王立学校卒業までは秘密だな」
「かしこまりました。バレないように気をつけます」
そこで話はとりあえず終わり、お開きの雰囲気となった。
「よし、じゃあ今日の話はこのくらいにしようか。レオン君、これからよろしく頼むよ」
「はい！　こちらこそよろしくお願いします」
そう言って、リシャール様、カトリーヌ様、ジュリアン様は食堂から退出して行った。
フレデリック様は残って俺のところに来てくれた。
「レオン、公爵家のために力を貸してくれてありがとう」
「いえ、俺にとってもありがたいことなので全然いいんです」
「しかし、レオンが全属性だったとは本当に驚いた」
「隠してててごめんなさい……あんまりたくさんの人に言わないほうがいいかと思って」
「ああ、賢明な判断だな。これからもまずは王立学校卒業までは隠すべきだろう」
「わかりました」
フレデリック様も怒ってないみたいでよかった……
「これから教材を渡したいんだが、大丈夫か？」
「はい！　よろしくお願いします」
「じゃあ、応接室まで行こう」
やった！　やっと教材をもらえる！　この世界の情報を手に入れ

るのは凄く苦労してるから、学べるのは嬉しいのだ。
日本にいる時はあんなに勉強嫌いだったのにな……

しばらく歩いて応接室に着き、俺とフレデリック様、俺のメイドとしてついてくれてるアンヌさん、フレデリック様の従者の方の四人で応接室に入った。

２１、タウンゼント公爵家（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします。

22、王立学校の教材と買い物

応接室で席に着くと、フレデリック様はアンヌさんにお茶の用意をお願いして、従者の方には教材を持ってくるように頼んでいた。
使用人を当たり前のように使えるところを見ると、やっぱり貴族だよなぁ。俺はなんとなく悪い気がして、自分でやりたくなってしまう。

しばらくして、お茶の準備が整い教材も揃った。

「レオン、これが王立学校の入学試験のために、必要な勉強だ。基本的には、読み書きと計算、簡単な歴史だな」
「中を見てもいいですか？」
「ああ、何か疑問があったら聞いてくれ」

フレデリック様が渡してくれた教材は三冊の本だった。
一つ目は簡単な国語のようなもので、ページの半分以上は文字を書けるように勉強するための内容だった。そして後半は文章読解力を鍛えるものだ。
これは勉強する必要がないな。俺はこの世界の言語を日本語と同じように読み書きできるので、日本で大学まで行っていた俺には、今更小学一年生の国語をやれと言われても勉強の必要はない。

二つ目は簡単な算数だった。足し算と引き算に簡単な掛け算と割り算、それだけだ。分数や小数もなければ、図形などもない。それは入学した後に学ぶのだろうか？　これも勉強の必要はないな。

三つ目はこの国の歴史だった。この国の歴史が、昔のことは大雑

把に、最近のことは結構詳しく書かれている。
これは読みたい！　勉強するべきだし、この国のことを知りたかったんだ。

「どうだ？　中身はわかるか？」
「はい。読み書きと計算の方は既にできるので教材はいらないです。歴史の教材はお借りしてもいいですか？」
「読み書きと計算の方はいらないのか！？　本当に？」
「はい。歴史の教材だけで大丈夫です」

もしかして一応そっちも借りて、勉強してるようにみせたほうがよかったか……？　でもなんか今更な気もするんだよな。
タウンゼント公爵家の方々とは長い付き合いになりそうだし、あんまり隠さなくてもいい気がする。

「まあ、レオンが大丈夫だというのならそうなのだろう。じゃあ歴史の教材だけ貸そう。返すのは試験が終わったらでいいからな」
「本当にありがとうございます！　皆さんのお役に立てるように頑張ります！」
「ああ、是非頑張ってくれ」
「はい！」

そうして俺は歴史の教材だけを貸してもらい、客室に戻った。
タウンゼント公爵家の皆さんは良い人たちみたいだし、俺が勢力の助けになる代わりに、俺の後ろ盾になってくれそうだったし。今日は最高の結果だったな。
俺は緊張していたからなのか、安心した途端に眠くなり、すぐに寝てしまった。

「ふぁ～。なんか久しぶりにすごく気持ちよく寝れた気がする……」
あれ？　いつもの家じゃない……
そうだ、昨日はタウンゼント公爵家に来て泊まらせてもらったんだった。
俺、寝過ごしてないよな？　そう思ってベッドから降りてソファーの方に行くと、アンヌさんが既に控えてくれていた。
「おはようございます、レオン様」
「おはようございます、アンヌさん。俺、寝過ごしたりしてませんか？」
「朝は、皆様それぞれのお部屋で朝食を食べて、お仕事に行かれますので大丈夫でございます」
そうなんだ。それなら良かった。
俺はほっと胸を撫で下ろし、アンヌさんに聞いた。
「俺も朝ごはんをいただけるのでしょうか？」
「はい。レオン様には朝食を食べていただいたら、お家までお送りするようにと、フレデリック様から申しつかっております。なので私が馬車でお送りいたします」
それはありがたいな。でも公爵家の方々に挨拶をしなくても良いのだろうか？
「公爵家の皆様へ挨拶をしなくても良いのでしょうか？」
「奥様は屋敷にいらっしゃいますので、奥様に帰宅の挨拶をしてい

ただければよろしいかと思います」
「わかりました。ありがとうございます」
「ではまずはお着替えからですね。こちらの服にお着替えください」

そう言ってアンヌさんが渡してくれた服は、俺が着てきた服よりもよほど上等な服だった。
貴族の服とまではいかないけど、平民の中でも富裕層が来ていそうな服だ。

「これは、俺の服じゃないですけど……？」
「はい。こちらは旦那様からの贈り物でございます。平民の中で浮かない程度の服を用意したとのことです」

平民の中で浮かないって、確かに富裕層の中でなら浮かないけど、家の周りでは浮きまくるよこの服！
でもせっかくの贈り物を貰わないっていうのもダメだよな……

「ありがとうございます。リシャール様にもお礼を伝えてもらえますか？」
「かしこまりました」

そうして俺は服を着替えて朝ごはんを食べ、タウンゼント公爵家の屋敷を辞去することになった。

「カトリーヌ様、この度はお招きくださりありがとうございました」
「私たちも楽しかったわ。これからもよろしくお願いするわね」
「はい。これからもよろしくお願いします」

挨拶をしてアンヌさんと馬車に乗り込んだ。ここに来た時と同じ馬車のようだ。

「レオン様、中心街でどこか寄るところがありましたらお寄りしますが、いかがいたしますか？」

どうしよう……銀行によって残高を確認したいのと、時計が欲しいんだよなぁ。中心街に来るのも大変だし、ここは甘えちゃってもいいかな。

「えっと、銀行と時計屋に行きたいのですが、時計はいくらで購入できるのでしょうか？」

「そうですね。一番シンプルなものでしたら、金貨一枚ほどあれば十分購入できると思います」

やっぱり高いなぁ。でも予想の範囲内だし、やっぱり時計は欲しい。

「では、銀行、時計屋の順番で行っていただけますか？」

「かしこまりました」

アンヌさんが御者に伝えてくれたようで、馬車が動き出した。

銀行に着くと、アンヌさんが俺の後ろに控えてついて来てくれた。馬車にいて良いと言ったんだが、家に送り届けるまではレオン様付きのメイドですから、と譲ってくれなかった。

俺は以前口座を作った時の窓口に向かった。できるだけ慣れてる人が良かったのだ。ここは2回目だが緊張するからな。

「いらっしゃいませ。本日はどのようなご用件でしょうか？」

「口座の残高確認とお金を引き出したいです」
「かしこまりました。銀行カードを確認してもよろしいですか？」
「よろしくお願いします」
「ありがとうございます。ではこちらの水晶玉に魔力を少し流してください」

窓口の男性は、俺の服装とメイドのアンヌさんを見て少し驚いた様子だった。以前ここに来た時の俺を覚えていたんだろう。逆の意味で目立ってたからな。
でもその後は淡々と業務をこなしてくれている。ありがたい。

「レオン様ですね、本人確認が取れました。まずは口座残高ですが、こちらが現在の残高になります」

口座残高は小さな紙に書いて渡してくれるようだ。
それを見てみると、残高が白金貨十枚と書いてあった。なんか多くないか！？　今度マルセルさんにあったら聞いてみよう……

「ありがとうございます。では金貨一枚分を引き出していただけますか？」
「かしこまりました。金貨でよろしいですか？　銀貨や銅貨などにお分けいたしますか？」
「では、銀貨十枚でよろしくお願いします」
「かしこまりました。少しお待ちください」

引き出すときに、細かい硬貨で引き出せるのは便利だな。平民の間では、金貨以上はほとんど使えないから気をつけよう。
しばらく待っていると、受付の男性が銀貨を十枚持ってきてくれた。

「お待たせいたしました。お確かめください」
俺はしっかり十枚あるか確認して、財布に入れた。
「大丈夫です。ありがとうございます」
「また何かありましたらお越しください。ありがとうございました」
「こちらこそありがとうございました」
そうして俺は、少し早足でアンヌさんと馬車に戻った。やっぱりこの厳格な雰囲気は緊張する。
「では次は時計屋に行きます」
「はい。お願いします」
それから程なくして時計屋についた。銀行とかなり近い位置にあるようだ。
「レオン様、このお店は貴族か貴族家の紹介があるものしか入れないので、私が先に入ります」
「そうなのですね。よろしくお願いします」
やっぱりそんなお店もあるんだなぁ。
今でも結構貴族と平民の間には差があると思うけど、これ以上なんてことになったら怖いな……
頑張ってタウンゼント公爵家の勢力を手助けしよう。
お店に入ると柔らかな物腰の壮年の男性が出てきて、アンヌさんが懐から何かの紋章のようなものを見せると、すんなりと中に入れてもらえた。

もしかして、貴族家の紋章のようなものだろうか。

「いらっしゃいませ、本日はどのような時計をお探しですか？」

男性が俺に向けて話しかけてくれた。俺はお客として認定されたようだ。

「持ち歩けるサイズの時計で、シンプルで丈夫なものが欲しいんですが」

「かしこまりました。それでしたらこちらの商品が良いかも知れません」

男性が見せてくれたのは、シンプルな懐中時計だった。

デザインもシンプルだし、値段も銀貨五枚ほどからだ。

これって結構安いよな。もしかしたら現代日本で懐中時計を買おうとすると、もっと高いかも知れない……

俺は端から懐中時計を見比べていく。

ほとんどの懐中時計が、蓋はシンプルなもので、デザインがなかったが、一つ懐中時計の蓋の部分に木の実のようなものが装飾されていた。

やっぱりデザインがあった方がオシャレだな。

シンプルなものよりは高そうだけど……

「この蓋に木の実がデザインされているのはいくらですか？」

「そちらは銀貨八枚と銅貨二枚でございます」

日本円で八万二千円か。高いけど、ずっと使うものだしいいかも知れないな。

「じゃあそれをお願いします」
「かしこまりました」

そうして俺はお金を払い、懐中時計を受け取って内ポケットに仕舞った。これからはいつでも懐中時計を持ち歩きたいから、全ての服に内ポケットをつけないとだな。

そして馬車に戻り、そのあとはそのまま家まで送ってもらった。

「それではレオン様、私はこれで失礼いたします」
「はい。アンヌさん色々とありがとうございました」
「では、失礼いたします」

俺は達成感と共に結構な疲れを感じながら、家に戻った。

２２、王立学校の教材と買い物（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします！

23、家族と話し合い

「ただいまー！」

俺が家のドアを開けてそう声をかけると、母さんと父さんが厨房から慌てて駆け出してきた。

「レオン！　良かったわ、無事だったのね」

「レオン！　何もされなかったかい？　帰ってきてくれて良かった」

母さんと父さんが、目に涙を浮かべながら喜んでくれている。

こんなに心配してくれてたなんて、寄り道なんかしないで早く帰ってきたほうがよかったかも……

「二人とも俺は大丈夫だよ。何もされてないし、夕食会に招待されて、ご飯を食べながら少し話しただけだから。それどころか、服までもらっちゃったし……」

「そういえばすごくいい服を着てるね……これ高いんじゃないか？」

「レオン、こんなもの貰ってしまって大丈夫なの？　後からお金を請求されても払えないわよ」

今度は二人ともあわあわと慌て始めた。

俺はなんだか力が抜けて思わず笑ってしまった。やっと緊張感から解き放たれた気分だ。

「これは貰ったものだから大丈夫だよ」

「そうなの？　でもなんで貴族様が、レオンに服をくれるのかしら？　それにそもそもなんで夕食会に呼ばれたの？」

「レオン、母さんと父さんにしっかり説明しなさい」

どうしよう……二人に嘘はつきたくないけど、どこまで言えばいいのか……

流石に転生したことは言えないから、俺が読み書きや計算をできるってことは隠しておいた方がいいよな。

そうすると、全属性のことは話した方がいいかもしれない……気味悪がられないかな。父さんと母さんに嫌われたら結構凹むかも……

でも王立学校に行くことも言わないとだし、これ以上誤魔化すわけにはいかないよな。

俺が母さんと父さんに話をする決意をしたその時、家のドアが開いた。

「ただいまー！　あっ！　お兄ちゃん帰ってきたの？　良かったぁ」

マリーが帰ってきたみたいだ。マリーにも話を聞いてもらったほうがいいよな。

「おかえり、マリー。お兄ちゃんから話があるから聞いてくれる？」

「うん！　聞くよ！」

「ありがとう、母さんと父さんも俺の話を聞いてくれる？」

「ええ、リビングに行きましょう。今日の夜営業はお休みにする予定だったから、話が長くなっても大丈夫よ」

「うん。ありがとう」

そうして俺たちはリビングに移動し、みんなで席についた。

「じゃあレオン、話してくれるか？」

「うん。昨日俺を夕食会に誘いに来てくれた人は、フレデリック様

って言うんだけど、最初は本当に偶然知り合ったんだ。それで、俺が王立学校に入りたいと思ってることを知ったら、教材を貸してくれるって言ってくれて、昨日はそれを受け取りに行ったんだ」

俺がそういうと、母さんと父さんはかなり驚いたような表情になった。

「レオンは王立学校に行きたいの？　でもどうして？」

「それにどこで王立学校について知ったんだ？　この辺からは受験する人なんてほとんどいないと思うけど……」

平民もたくさん受験するって言ってたのに、この辺の平民は受験しないのかよ！　まあ、たしかにこの辺で、王立学校の話を聞いたことなんてないけど……

「王立学校のことは、一緒に中心街に行った人が教えてくれたんだよ。マルセルさんって言うんだけど、その人が魔法具を作ってる人で魔法具を見せてくれた。それで俺が、魔法具に興味があるって言ったら、王立学校に行けば魔法具もあるし、役人になれば魔法具のある生活を送れるって言われて、王立学校に行きたいって思ったんだ」

「魔法具って、たしか貴族が使う便利な道具だよね？」

「そうだよ！　すごく便利で画期的なものなんだ！　まだこれからどんどん発展していくと思う！」

俺がそう言うと、父さんと母さんはふふっと笑って言った。

「レオンは本当に魔法具が好きなのね。目が輝いてるわよ」

え！？　俺そんなに顔に出てる？　なんか恥ずかしい……

でもこの不便な世界で、便利なものがあるならそこに飛びつくのもしょうがないよな、うん。

「レオンが王立学校に行きたいって言うのはわかったよ。父さんと母さんは応援するよ。レオンの生きたいように生きればそれでいい」

「マリーも！　お兄ちゃん応援する！」

「本当に！？　みんなありがとう」

そんな無謀なことやめなさいって言われるかと思ってた……認めてもらえると嬉しいな。話して良かった……

「でも王立学校に合格できるの？　家では勉強を教えてあげることはできないわよ……」

「それは大丈夫！　フレデリック様が教材を貸してくれて、少し教えてもらったから。マルセルさんにも教えてもらえるし」

「それはありがたいけど……なんでそこまでしてもらえるのかしら……？　うちはただの平民でお金もないのに」

やっぱりそこ不思議に思うよなぁ。全属性のこと話さないとダメだよな……

「それには理由があるんだけど……あのさ、俺の魔力属性って回復だったでしょ？　実は、他の属性も全部使えるんだ。それで、全属性の人はすごく珍しいから、力を貸して欲しいって言われたの。その代わりに、俺の手助けもしてくれるって」

俺がそこまで言うと、母さんと父さんはポカーンと口を開けたまましばらくフリーズしてたが、しばらく経つと口をはくはくと動かし始めた。

何か言いたいけど、驚きすぎて何も言えないって感じかな。

一番最初に口を開いたのはマリーだった。

「お兄ちゃん、全部の魔法が使えるってこと？　凄いね！　かっこいい！　マリーも全部使いたい！」

気味悪いと思うんじゃなくて、かっこいいって言ってくれるなんて……マリーはまだ子供でよくわかってないのかもしれないけど、それでも嬉しい。

「マリーありがとう。でもこれは誰にも言っちゃいけないんだ。内緒にできる？」

「うん！　できるよ！」

俺はマリーから勇気をもらって母さんと父さんと目を合わせた。

「父さん母さん、俺のこと怖いとか気味悪いとか思う？」

俺は目を見てそう聞こうとしたが、怖くなって途中で俯いてしまった。肯定されたらどうしよう……

「レオン、母さんたちがそんなこと思うわけないでしょ」

「そうだよ。そんなことでレオンのことを気味が悪いなんて思うわけない。逆に全部の属性魔法が使えるなんて、すごくてびっくりしてただけなんだ」

「そうよ、母さんも驚いちゃって。でもさすが私たちの子ね。自慢の息子よ」

母さんと父さんがそう言ってくれる。俺は安心感と嬉しさで思わず涙が出てきてしまう。

「母さん、父さん、ありがとう」

俺は満面の笑みを浮かべながらそう答えた。

「当たり前よ。このことは誰にも言わないし、私たちはレオンのことを応援するわ。貴族様がレオンの力を必要としてくれて、レオンのことも助けてくれるって言うなら心配いらないわね。精一杯頑張りなさい」

「父さんは、レオンが後一年と少しで家を出て行ってしまうのは寂しいけど、レオンを応援してるからね」

「私もお兄ちゃんのこと応援してるよ！」

「みんな……ありがとう。俺、頑張るよ！」

みんなが応援してくれて嬉しい。俺、転生したのがこの家族で良かった。

「じゃあ、今日は夜営業もお休みだし、みんなでご馳走を作って食べましょうか！」

「そうだね。マリーは何が食べたい？」

「パンケーキ！」

「ふふっ、マリーは本当にパンケーキが好きなのね。でもパンケーキはデザートにしましょう。ご飯は何が食べたい？」

みんながそんな会話をしているときに思い出した。アンヌさんが教材を入れてくれたカバンに、家族へのお土産も入れてくれたんだった！

「みんな、実はフレデリック様の屋敷のメイドさんが、お土産を持たせてくれたんだ！　見て！」

「お兄ちゃん、これなあに？　お塩？」

「マリー、これは砂糖だよ」
「砂糖？」
「そう。すっごく甘いんだ」
「そうなの！？　甘いの大好き！」
「今日はこれで、俺がフレンチトーストを作るよ」
「まあ、レオンが作ってくれるの？　楽しみだわ」
「レオンの料理は美味しいからな」

みんなが笑ってくれてる。良かった……

「中心街のカフェで食べたやつを再現するから、絶対美味しいよ！」
「本当に！？　やったー！　美味しくて甘いの好き！」
「じゃあみんなで食堂に行こうか」
「ええ、そうしましょう」
「「うん！」」

そうして俺たちは、家族みんなで食堂に向かい、一緒にフレンチトーストを作った。家族みんなで作ったフレンチトーストは、中心街で食べたものより美味しく感じた。

ちなみにフレンチトーストは大好評で、マリーが砂糖の虜になってしまった。
俺は中心街に出かけるたびに、家へ砂糖をお土産に買ってこないといけなくなった。まあ、凄く喜んでくれるからいいんだけどね。

２３、家族と話し合い（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします！

閑話　全属性の平民（リシャール視点）

私は少し緊張しながら、王城にある陛下の執務室のドアを潜った。

私はこの国の宰相なので、この部屋に来ることに緊張しているのではない。昨日屋敷に来たレオンという少年について、陛下に話しておかなければいけないので、それについて少し緊張しているのだ。

さて、陛下はどんな反応をされるか……

陛下は、平民でも優秀な人材はどんどん登用するお方だから、レオンを公爵家で面倒を見ることについては異論ないと思うが、全属性のことについてどう反応されるか……

私も昨日見たときには本当に驚いた。実際にこの目で全ての属性魔法を使うところを見ても、まだ信じられないほどだ。

レオンは使徒様ではないと言っていたが、あの平民だとは思えない頭の良さや洗練された立居振る舞い、言葉遣い、全てにおいて使徒様であるという証明だと考えられる。そして、極め付けは全属性だ。

私は、九割以上レオンは使徒様だと思っている。本人には言えないが、レオン様と呼ぶべきだな。

もしかしたら、なんらかの理由で正体を明かしてはならないのかもしれない。それならば気付かぬふりをしつつ、全力でお守りせねばならん。

そのためにも陛下に協力してもらわねば。

「陛下、おはようございます」

「ああ、おはようリシャール」
「本日は、執務の前にお話しするお時間をいただいても良いでしょうか？　できれば人払いもしていただきたいのですが」
「良いけど……人払いするほどの話なのか？」
「その方が良いかと思います」
「分かった、じゃあ人払いを頼む」

陛下のお名前はアレクシス・ラースラシア。この国の現国王だ。とても有能で優しさと厳しさを併せ持つ素晴らしいお方だ。

執務室に陛下と私だけになり、ソファーに移動し向かい合って座った。

「それでなんの話だ？」
「はい。レオンという名の平民の少年のことなのですが」
「平民？」
「はい。歳は八歳で、王都の西の外れにある食堂の息子です。最初はフレデリックが偶然知り合い、とても有能な平民だと言われて、昨日公爵家の夕食に招待しました。最初は有能と言ってもたかが知れてると思ったのですが、言葉遣いや立居振る舞いはしっかりと躾けられた貴族の子供と同等レベルで、難しい話も難なく理解しているようでした。それだけでも信じられないと思いますが、さらに全ての属性魔法が使えるのです」
「全ての属性魔法だって！？　もしかして……使徒様なのか？」

いつもは余程のことがなければ動じない陛下が、とても驚かれている。それも仕方ないだろう。

「私も使徒様だと思いました。しかし本人は、使徒様ではないと言っています。私は何か理由があり、正体を隠してらっしゃるのでは

ないかと思っていますが、陛下はどう思われますか？」
「話を聞いただけだとわからないが、たしかに全属性が使えて、様々な知識を持っているのは使徒様そのものだ。もし使徒様が正体を隠しておられるのなら、気付かぬふりをしつつお守りした方が良いだろう。平民嫌いの貴族が手を出したら大変だからな」

やはり陛下も私と同じ結論に辿り着くか。

「私も同じ考えでございます」
「それでレオン様はこの後どうするんだ？」
「レオン様本人は王立学校に行きたいと言っております。フレデリックが教材を渡したのですが、読み書きと計算はできるからいらないと言われたようで、歴史だけ勉強するそうです」
「それは……！　リシャール、レオン様は使徒様でほぼ間違いないだろう。王になったものしか読めない使徒様の伝記があるのだが、それによると使徒様は、読み書きと計算は完璧だが、歴史は一から学んだと書かれていた」

なんと……そんな伝記があったとは。これはレオン様は使徒様でほぼ決まりだな。

「それは……もうレオン様は使徒様と考えても良いでしょう。しかし私たちが気づいたことは、気付かれないようにしなければいけません」
「そうだな、この話はとりあえずここだけで他言無用としよう」
「はっ！　レオン様が全属性のことはいかがいたしますか？　レオン様本人には、王立学校を卒業するまでは隠すようにと言っておいたのですが」
「とりあえずそれで良いだろう。全属性のことがバレて騒がれるのも、使徒様の本意ではないだろうからな。王立学校を卒業して貴族

にすれば、平民嫌いの貴族も手を出せないだろうから、それまでは公爵家で守ってくれるか？　もちろん王家も最大限助力しよう」
「もちろんです。王立学校へは公爵家から通わせる予定です。ちょうど息子の長男リュシアンがレオン様と同い年なので、良い友になってくれれば良いと思っているのですが……」

リュシアンは賢い子だし、差別意識もないと聞いているので多分大丈夫だろう。

「それは良い。それならばうちの子供たちもレオン様と同い歳だな。子供たちには、レオン様が全属性のことを教えた方が良いだろうか？」
「いえ、子供たちは賢いと言ってもまだ子供。卒業までは全属性のことは隠し、とても優秀な平民だから仲良くするように伝えておけば十分では？」
「それもそうだな。俺も一度会ってみたいが、厳しいか？」

陛下と会うには、レオン様を王城に連れてこないといけない……それは目立ちすぎるだろう。

「それは少し難しいかと思います。今はまだレオン様を目立たせない方が良いでしょう。レオン様自身は守れても、レオン様の家族を守れない心配があります」
「それもそうだな……しかし、レオン様が王立学校に入学すれば嫌でも目立つぞ。それも勢力のトップであるタウンゼント公爵家の後見付きだ」

それも考えていた問題だ。レオン様を誘き出すために家族を攫うのは十分に考えられる。
万が一レオン様の家族に何かがあって、怒らせてしまったら大変

だ。使徒様を怒らせるなんてことはあってはならないからな。
レオン様が使徒様だと公表し、全属性を使ってもらうのが一番良い解決策なんだが、本人が隠しているのでそれは無理だろう。
家族も公爵家で匿った方が良いかもしれないな。

「レオン様の家族に護衛として影をつけるか、本人たちが望めば公爵家で雇うことも考えようと思います」
「ああ、それが良いな。もし護衛をつけることになったら、王家の影も貸し出そう」
「ありがとうございます」

話がひと段落して、私と陛下は、従者が淹れてくれていた少し冷めたお茶を口にした。

「これから忙しくなりそうだな。今の時期に使徒様が現れたのは、魔物の森の広がりと関係があるのだろうか」
「私もそれは考えました。今のような時期に使徒様が現れるなど、神の思し召しとしか思えません」
「なんとか魔物の森の広がりを抑えなければ、あと数十年でこの世界は魔物に支配されてしまうだろう。それを防ぐ希望の光となってくれたらいいが……」
「そのためにも、使徒様は全力でお守りせねばなりません」
「そうだな、特に危ない貴族家をリストアップしておいてくれないか。警戒を強化しよう」
「かしこまりました。明日までには必ず」

そこまで話して私と陛下の秘密の会議は終わった。
私は、使徒様がこの世界を救う救世主となって下さることを、密かにずっと願っていた。

まずは使徒様を、正体には気づいてないふりをしつつ、なんとかお守りしなければならない。
家の者の中に秘密をばらすような者はいないと思うが、もう一度レオン様のことは秘密だと通達しておこう。
明日からまた忙しくなるな。
私は気合を入れて、執務に取り組み始めた。

閑話　全属性の平民（リシャール視点）（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします！

閑話　神様のミス（ミシュリーヌ視点）

「やばい……！　せっかく地球から連れてきた魂だったのに、転生させるの失敗しちゃったぁ～」

なんで私ってこんなに運がないの！？　せっかくシェリフィーに地球の日本から魂をもらったのに！

せっかく大好きな日本を真似た世界を作り上げたのに！

まあ、前に使徒として転生させた子によって、日本っていうより地球の中世ヨーロッパみたいな世界にされちゃったんだけど……

……あれは人選ミスだった。

それでも、これから発展していく先が楽しみだったのよ。このままだとこの世界は、また魔物にやられて人間が絶滅しちゃうかしら……

それはダメ！　次の世界を作るほどの神力なんて、いつ溜まるのかわからないし。とりあえずシェリフィーのところに行かなきゃ！

「シェリフィ～、助けて！　この前あなたにもらった魂を転生させるの失敗しちゃったの！　どうすればいい？」

「ミシュリーヌ、失敗したってどういうこと！？　私の世界から持っていった魂よね。大切に扱いなさいって言ったでしょ！」

シェリフィーが綺麗な黒髪を振り乱して怒っている。私はしゅん……と小さくなって謝った。

「ごめんなさい……」

シェリフィーは私に近づいてきて、私の頭をぐりぐりし出した。
「痛い！　シェリフィー痛い～」
「あなたが悪いんでしょう？　大人しくやられなさい」
「痛い、本当に痛いって！　ごめんなさい～」
私が必死に謝ったらシェリフィーはやっと止めてくれた。
「それで、なんで失敗なんてしたのよ？」
「それが、あの魂とピッタリと合う体が私の世界にあったみたいなの。それで運悪くちょうどその人間が死んで、魂が離れた瞬間だったのよ！　その体に引っ張られて、日本から連れていった魂がその体に入っちゃったの……」
「別の人の体と魂がピッタリと合うなんて、そんなことあり得るのかしら？　それ本当？」
「本当よ。私は嘘なんかつかないでしょ！」
本当は、日本からの魂を私の使徒として、王族の子供に転生させるつもりだったのよね。それなのに貧しい平民の体に入っちゃうなんて……！
「確か、あなたの世界は魔物の森に侵食されていて、人間を助けたいからそのために転生させるってことだったわよね？」
「そうなのよ！　そのために神界で全てを説明してから能力を付与して、一番高い身分に転生させる予定だったのに……」
「能力も付与できなかったの？」
「全属性魔法と全言語理解はなんとか付与できたわ。でも私と会話するための神物を渡せなかったから、連絡できないのよ。貧しい平民に転生しちゃったし、転生の目的も伝えられてないの……」

本当なら転生させてからも定期的に連絡して、私が指示しながら世界を救ってもらうはずだったのよ……

それから中世ヨーロッパ風になっちゃった世界を、日本に近づけてもらうつもりだったのに……

「あなたの世界が魔物に侵略されるまで、どのくらいの時間があるのよ？　次に転生させられるようになるまでどのくらいかかるの？」

「もうあと数十年しか余裕はないわ、……それで次に転生させられるのは数百年経たないと無理よ。もう神力を使いすぎてほぼ空っぽなの」

「何にそんな神力を使ったのよ！？」

「だって……前の世界は人間が絶滅しちゃってどうしても人間の世界が良かったから、もう一つ今の世界を作ったでしょ。まず新しい世界を作るところでたくさん神力を使ったの。それに、今の世界も早く人間が産まれて欲しかったし、日本に近い環境にしたかったから、色々手を入れて時間を早送りにしたの。それで殆ど神力は無くなったわ」

私が一つ目に作った世界は、全ての生物に魔力を与えたら人間は魔物に絶滅させられてしまった。だから二つ目の世界は人間だけに魔力を与えればいいんだと思ったのよ！　私って頭いいでしょ？

私が大好きな、シェリフィーの世界の日本という国をイメージして世界を作ったわ。すごく頑張って、似たような植生にしたのよ。魔力があるからちょっと違うところもあるんだけどね……一つ目の世界で魔物を増やす原因になった稲は作らなかったり。まあ、そんなこと些細な問題よね。

途中で日本から使徒として転生させた子が、日本風じゃなくて中

世ヨーロッパが好きだとか言って、全然日本ぽくなくなっちゃったのはショックだったけど……それでもこの世界は気に入っていたのに。

私はこの世界を作るときに一つミスを犯していたの。三百年前以上前にやっとそのミスに気づいたんだけど……

なんと……一つ目の失敗した世界とこの世界を、小さな穴で繋げてしまってたみたいなのよ！　なんであんなミスをしたのかしら……

その穴はどんどんと大きくなって、植物や動物がこの世界に入り込んで、この世界に魔物の森を作ってしまった。本当はこの世界に魔物はいないはずだったのに……

このままだと、また一つ目の世界と同じように魔物に人間は滅ぼされてしまうわ。そう思って、穴を塞ぐための神具と本をこの世界に落とした。私、頑張ってると思わない？

でも神具と本は誰にも見つけられず、見つかった時にはその言語を扱える人達が戦争でほぼ絶滅して、誰もその本を読めなかったみたい。

結局魔物の森はどんどん広がっている。その穴を塞いでもらうために、今回は転生させる予定だったのに……失敗するなんて。

「もう何もできないなら、その人間が自分から動いて世界を救ってくれることを祈るしかないんじゃない？　というか、魔物も可愛いじゃない。私は魔物の世界でも良いと思うけど？」

「私は人間が好きなの！　人間の世界がいいのよ！　シェリフィーの世界だって人間の世界じゃない」

「私は人間の世界にしようとしたわけじゃないわよ。ただ魔力がな

い世界だと、頭が良い人間が勝ち残るみたいね。ミシュリーヌも魔力がない世界にすれば良かったんじゃないの？」
「だって、シェリフィーが言ってたじゃない。魔力がないと世界がそのうち滅亡するって」
「まあ、そうなのよね。魔力以外のエネルギーを人間が使うと、どんどん世界が壊れていくみたい」
「だから私はそれを阻止しようと思って、魔力がある世界にしたのよ！」

そこまでは良かったんだけど……どこで間違えたのかしら？　いいえ、違うわ！　私は間違えてないのよ。運が悪かっただけ。

もう今までの反省はいいから、これからのことを考えないと……。とにかく、今の名前はレオンだったかしら？　そのレオンに頑張ってもらうしかないのよね。こっちから連絡する術があるといいんだけど……

「何か連絡できる方法はないかしら」
「神託ならそんなに神力を使わないんじゃないの？」
「シェリフィー、それよ！」

そうよね！　神託ならレオンに直接じゃなくても伝えることはできるかもしれない！
でも待って……私ってこの世界で全然信仰されてないんだった……どうしよう。だって神力が空っぽで神託もできなかったんだもの。
「シェリフィー！　私ってこの世界で全然信仰されてないんだった……どうしよう」
「どうしようって、それは自業自得でしょ。そもそも私だって、信仰なんて全然されてないわ」

「神様なんてそんなものよね。本当にどうしようもないのかな……神託したら信じてくれると思う？」
「まあ、時間をかけないと信じてもらえないでしょうね。……とりあえず見守るしかないわよ。もしダメだったら、また地球に遊びに来たらいいじゃない」
「それはありがたいけど～、自分の世界がいいのよ」
「それはまあ、頑張りなさい」
「心がこもってない！」
「はいはい、次遊びに来る時までに、漫画の続きを手に入れておくから元気出しなさい」
「本当に！？　シェリフィー大好き！！」
「もう、現金なんだから。とにかく今は見守るしかないわよ。そろそろ自分の世界に帰りなさい」

シェリフィーが苦笑いで手を振ってくれている。

「は～い。でも何かできることがあるはずよ。絶対に人間を救ってやるんだから！」

私はそう決意して、自分の世界であるミユソルーテに戻った。

閑話　神様のミス（ミシュリーヌ視点）（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！！

面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします。

２４、お好み焼き

今日は俺とマリー、ニコラ、ルークの四人で、森へ採取に行く予定だった。

しかし朝起きてみると、外は大粒の雨が降っている。

「マリー、今日は森へ行くのは無理そうだね」

「そうなの。行きたかったのに……」

マリーがかなり落ち込んで、悲しそうだ。俺はなんとか励まさなきゃという使命感に駆られて、あわあわと慌てながら言った。

「マ、マリー、えっと……今日はみんなで料理するっていうのはどう？」

俺が苦し紛れにそう言うと、マリーはぱぁっと顔を明るくして、ブンブンと縦に首を振っている。

「お兄ちゃん！　みんなでお料理したい！」

「じゃあ、うちは営業の邪魔になっちゃうから、ニコラとルークの家に行こうか」

「うん！！」

「マリー、絶対にできるとは限らないからね。それに厨房を使わせてもらえるかも、聞いてみないとわからないし。ニコラとルークにも聞いてからだよ？」

「わかってるよ～！　私もう子供じゃないから！」

マリーが拗ねて顔を背けてしまった。少し意地張ってるマリーが

可愛い……俺の妹は絶対世界一だ……

「じゃあ、昼営業が終わったら二人の家に行ってみようか」
「うん！」

それから昼営業が終わり、俺とマリーは隣の道具屋に来ていた。

「おばさん、こんにちは！　ニコラとルークいる？」
「あらあら、マリーちゃんじゃない。こんにちは。今日は雨だから森に行くのは中止じゃなかったの？」
「森に行けない代わりに、みんなで料理をしようかって話をしたんです」
「そうなの！　みんなでお料理！」
「それはいいわねぇ～、ニコラとルークを呼んでくるわ。厨房は好きに使ってくれていいわよ」
「ありがとうございます！」

厨房使わせてくれて良かったな。何を作ろうかなぁ～、お好み焼きならみんなで簡単に作れると思うけど……ソースがないからなぁ。塩を振れば美味しいかな？
塩でも美味しいだろう！　多分……
考えてたらめちゃくちゃお好み焼き食べたくなってきた。ソース欲しい……

「レオンとマリー、どうしたんだ？」
「今日は森にはいけないぜ？」
「ニコラ、ルーク。今日は森に行けないから、その代わりにみんなで料理をしようかと思ったんだ」
「それはいいけど……俺とルークは料理なんかしたことないぞ？」

「それは大丈夫。誰でも簡単に作れるレシピを考えたから」
「レオンが……？　お前レシピなんて考えられたのか？」

ニコラとルークがちょっと疑わしそうに俺を見ている。俺だって料理くらいはできるんだからな！

「俺だって少しは料理できるんだから！」
「お兄ちゃんの料理とっても美味しいんだよ！」

マリー……お前は良い妹だよ……お兄ちゃん泣いちゃうよ。

「まあ、それならいいけど。それで材料はあるのか？」
「それは、買ってこないとダメかな？」
「こんな雨の中買いに行くのも大変だぞ。母さん！　うちにある材料なら使ってもいい？」
「家の夜ご飯を作ってくれるのならいいわよ～」
「おばさん本当に！？　ありがとう！」

よし！　これで作れるな。あとは材料があるかどうかだけど……もし無かったらうちに取りに行けばいいか。

そして厨房に来て材料を見てみると、お好み焼きに使う材料は全て揃っていた。

「これだけあれば作れるよ。じゃあ早速作ろうか」
「俺たちは何をやればいいんだ？」

えっと、お好み焼きは確か……千切りキャベツに卵、小麦粉、水を入れて混ぜて、それをフライパンで焼き、薄切りのお肉を載せて

裏返して焼く。これだけだったよな？
多分合ってるはずだ……分量は全くわからないけど、そこはなんとなくだよな。

「じゃあ、ニコラは俺とキャベツを千切りにしてくれないか？　マリーは小麦粉と卵を用意してくれ。ルークは水を汲んできて欲しい」
「俺は包丁を使ったことないけど大丈夫か？」
「ナイフとそんなに変わらないから大丈夫だよ」
「お兄ちゃん、マリー準備するね！」
「俺も水汲んでくるぜ！」

マリーとルークが準備に入ったので、俺とニコラはキャベツを切り始める。

「どうやって切るんだ？」
「俺がやるから見てて、こうやって細長く切って欲しいんだ」
「わかった」

ニコラは最初こそ苦戦していたがどんどん上達していき、今は料理をしたことがないと言うのが信じられないほど様になっている。
ニコラ凄いな……刃物の扱いが上手いのかな？

俺とニコラがキャベツの千切りを終えた頃、マリーとルークは準備を終えていた。

「じゃあ次は、このキャベツの千切りが入った器に、卵と小麦粉、水を入れる。卵は二個で、小麦粉は一番小さい器の半分くらい、水はコップに半分くらい入れて欲しい」

多分そのぐらいの量で失敗はしないはず……

「ここに小麦粉をそのまま入れるのか！？」
「そんな料理聞いたことないぜ？」
「大丈夫。美味しくなるから信じて」
「大丈夫なの！　お兄ちゃんの料理は美味しいんだよ！」
「まあ、マリーがそう言うならいいけど……」

え！？　俺よりマリーの方が信用あるのかよ……
俺も頑張ろ……とりあえず今は、美味しいお好み焼きを作れば信じてくれるだろう。

「よし！　みんな入れてね」

みんなは恐る恐るながらも、俺の言う通りにしてくれた。

「次はこれを満遍なく混ぜるんだけど、結構力がいるからニコラやってくれるか？」
「ああ、任せとけ」

ニコラは結構体が大きく筋肉がついているので、力仕事は得意なのだ。
ニコラが混ぜていくと、どんどん混ざっていく。段々と俺が知ってるお好み焼きの素になった気がする。

「ニコラ、そのくらいで終わりでいいよ。次は焼くんだけど、竈に火を入れないと」

先にやっておけば良かった……ついつい日本のように、すぐ火がつくと考えちゃうんだよなぁ。

「そういえば、この家って火属性の人っているの？」
「ああ、俺が火属性だったんだ」
「ニコラは火属性だったんだ！　じゃあ、竈に火を入れるのは簡単だ」
「俺の属性が火属性ってわかってから、毎日母さんにやらされてるからな。『火種』だけは完璧だ」
「じゃあよろしく」

ニコラは言葉の通り、すぐに火をつけてくれた。
俺はフライパンに少し油を引いて、フライパンが温まったところでお好み焼きを焼き始めた。

「ニコラ、豚肉を薄切りにしてくれる？」
「ああ、どのくらいの量だ？」

お好み焼きは四つくらい焼けそうだから、一つに三枚で十二枚くらいでいいかな？

「十二枚くらいでよろしく」
「わかった」

俺はニコラが切ってくれた豚肉をお好み焼きの上に置き、ひっくり返した。豚肉を薄切りにするのは難しかったようで、結構厚切りだからちゃんと焼かないとだな。
ひっくり返すときに形が崩れなくて良かった。

「すげぇ！　俺もやりたい！」
「私も！！」

ルークとマリーには、ひっくり返すのがカッコよく見えたらしい。

「一人ずつ順番ね」
「「うん！」」

それから、ルーク、マリー、ニコラの順でお好み焼きを焼いた。ルークとマリーはひっくり返す時に少し崩れてしまったが、自分で焼けて嬉しそうなので良しとしよう。

「これで、塩をかけたら完成だよ。三枚は夕食に残して、一枚は食べちゃおうか」
「うん！　早く食べたい！」
「めちゃくちゃ良い匂いだぜ」
「確かにお腹が空く匂いだな」

みんなお腹が空いたみたいだ。確かにご飯作ってるとお腹空いてくるよな。
俺は苦笑しながらみんなに言った。

「じゃあ、俺が四等分するからお皿とフォーク出してくれる？」
「はーい！」

俺は争いにならないように綺麗に四等分し、みんなの皿に載せた。

「じゃあ食べようか？　いただきます！」
「「「いただきます！」」」

ぱくっ……美味い！　お好み焼きって塩でも美味いんだな。
でもソースをかけたお好み焼きが食べたくなる……！　ソースも欲しいんだけど、ソースの原材料なんてよく知らないしな……誰か開発してくれないかなぁ。

「美味いな」
「これめっちゃ美味いぜ！」
「お兄ちゃん！　これも美味しい～！」

みんな美味しいと思ってくれたみたいだ。良かった。

「美味しいって言ってもらえて良かったよ」

俺は安堵の笑顔で、みんなは満面の笑みで、お好み焼きを食べ切った。

そのあとみんなで片付けをして、俺とマリーは帰ろうとしたんだが、その時にニコラが少し深刻そうな様子で話しかけてきた。

「レオン、ちょっと話があるんだがいいか？」
「話……？　まあいいけど」
「お兄ちゃんどうしたの？」
「マリー、お兄ちゃんちょっと用事思い出したから、先に帰っててくれる？」
「そうなの？　わかった！」

マリーはそう言ってうちに帰っていった。それにしてもニコラが俺に話ってなんだろう……？

「ルークは上に行ったからリビングでいい？　今誰もいないから」
「いいけど……」

誰にも聞かれたくない話ってこと？　俺は話の内容を不安に思いながらもニコラについて行った。

２４、お好み焼き（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします！

25、ニコラの夢

俺とニコラは、リビングに来て向かい合って座った。ニコラは話しづらそうに少し俯いている。

「それで、話って何？　他の人に聞かれたくないことなの？」
「あのさ……レオンは王立学校を受験するんだろう？」
「知ってたんだ。そうだけど……それがどうしたの？」

俺が王立学校に行くことと何か関係がある話なのか？

「レオン……俺にも勉強を教えてくれないか！　母さんたちが、レオンは頭が良くて王立学校を受験するって話してるのを聞いて……」

え？　どういうことだ？　ニコラも王立学校に行きたいってことか？

というか母さんたちの前で、頭の良さを出したことなかったはずなんだけど……俺って全然隠しきれてないのかも。絶対にレオンは頭を打ってから変になったって思われてる気がする……

もう気にしたら負けだ。

「ニコラも王立学校に行きたいってこと？」
「そうなんだ……俺、魔力測定で火属性だったって言っただろ。魔力量は五だったんだ。それで兵士を目指そうと思ってたんだけど、レオンが王立学校に行くって聞いて、俺も騎士を目指せるんじゃないかって思って」
「なんで騎士になりたいんだ？」
「なんでって、当たり前だろ！　騎士はみんなの憧れじゃないか！

それに給金だって兵士とは比べ物にならないし……」
「でも、貴族の中に入っていくのって大変だと思うよ。それに、騎士の方が危険なこともあるだろうし」

確かに騎士はカッコいいけど危険も伴うだろうし、貴族の中に入っていくのは予想以上に大変だよな。
貴族の中に入っていってる俺がいうことじゃないんだけど……
……でも俺は魔法具とか生活水準向上の為だし、そもそも全属性だから一生隠し通さない限り権力との付き合いは必須だし。
多分一生隠し通すなんて無理だからな……こんなに便利なのに使わないなんて無理だ。

ニコラは今の生活しか知らないんだから、生活水準を向上させたいなんて思うわけないし、やっぱり憧れかな？
憧れだけじゃ、途中で挫折すると思うんだよなぁ。
それにニコラはお金もないだろうし、お金もない中で中心街で暮らすのは大変だろう。
俺がお金を貸すのもありだけど、友達とのお金の貸し借りはあまりしたくない……

「王立学校に受かったら中心街に住まないといけないし、学校で使う文具や服も買わないといけないんだ。かなりお金がかかるから、そのお金も稼がないといけないよ。生活も大変だと思う。それでもニコラがどうしても騎士になりたいのなら俺は応援するけど、どうする？」
「レオンは……レオンはお金とか住む家とかは大丈夫なのかよ……」
「俺はお金はあるし、住むところも決まってるんだ。でもそこにニコラもお願いするのは難しいと思う。ニコラも貴族の屋敷に住むのは気が休まらないだろう？」

俺が苦笑いしてそう言うと、ニコラはかなり驚いたのか口を半開きにして固まっている。
やっぱり貴族の屋敷から通うのってあり得ないよなぁ。リシャール様に押し切られたんだ。

「レ、レオンは貴族の屋敷に住むってことか！？」
「そうなんだ。ちょうど知り合った貴族が屋敷に住んでもいいって言ってくれたんだよ」
「それって大丈夫なのか！？　危なくないのか……？」

ニコラがかなり心配してくれてるのがわかる。こんなに心配してくれる友人がいるなんて、幸せだな。

「大丈夫だよ。悪い貴族じゃないみたいだし、この前も屋敷に招待してくれたけど大丈夫だったよ」
「それならいいけど……レオンって凄かったんだな。貴族と知り合って屋敷に住まわせてもらえるなんて……」

なんかニコラの素直さを見てると、色々隠してるのに罪悪感を感じるな……でも言うわけにはいかないしな。

「運が良かったって言うのもあると思うよ。それでニコラはどうする？　本当に王立学校に行って騎士になりたいなら勉強を教えるけど？」
「なんか、レオンの話を聞いてたら少し気持ちが揺らいできたよ……確かに憧れだけじゃ大変そうだし、レオンは凄すぎて参考にならなそうってことがわかった」

なんかそれ、喜んでいいんだかわからないんだけど……

「ニコラがそう思うなら兵士を目指せばいいんじゃない？　兵士も平民の中では給金が高い方だし、家からでも通えるし」
「そうだな……そうするか。レオン、話を聞いてくれてありがとな！　お陰で迷いがなくなった」
「別に大したことしてないからいいんだよ。じゃあ、俺も帰るね」
「ああ、またな」
「うん、またね」

俺はニコラとそう挨拶をして家に帰った。

「ただいまー」
「やっと帰ってきたのね！」
「え？　何かあったっけ？」

家に入ると父さんと母さんが、俺を待ち構えていた。今日何かある日だったっけ……？

「今日お隣さんで作った料理の作り方を教えてくれるわね？」

母さんが有無を言わさないような笑顔でそう言ってきた。そういうことか、マリーから料理のことを聞いて食べたくなったんだな。

「作り方を教えるのはいいけど、今から？」
「そうよ！　今日の夜ご飯にしましょう」

えー、さっき食べたばっかりなんだけど……
でも母さんめちゃくちゃやる気になってるし、隣で父さんも静かにやる気だし。夜ご飯もお好み焼きだな。
まあ、美味しいからいいんだけど。

「じゃあ厨房で教えるよ」
「ええ、早く行きましょう。材料は何が必要なの？」
俺は母さんの質問攻めに遭いながら厨房に行き、説明しながらもう一度お好み焼きを作った。

「混ぜるものを変えればいろんな味ができると思うから、いろいろ試してみたらいいと思うよ」
「そうね。これはやりがいがあるわ。ジャン、これ昼営業で出すのもいいんじゃない？」
「手軽だしありふれた材料でできるから良いかもしれない。野菜を追加したり、肉を変えたりするのもいいかも」
「そうよね！　早速色々試しましょう！」
「そうだね。そういえばこの料理の名前は決めたのかい？」
「うん！　お好みのものを入れて焼くってことで、お好み焼きだよ」
「わかりやすくていいわね。じゃあ作るわよ！」

母さんと父さんがすごいやる気になってるので、俺は厨房から避難した。あのまま厨房にいたらずっと手伝わされるに決まってるからな。

俺はリビングで歴史の教材を読むことに決めて、リビングに行った。マリーはいなかったので、二階で休んでるのかもしれないな。

教材はここ何十年かの歴史についてまとめてあるようだ。
この世界は数十年前まで大規模な戦争をしていたが、二十年くらい前にこのラースラシア王国の国王が、領土拡大を目論む国を全て併合し、それ以外の国とは停戦協定を結び世界を平和にした。しかし、世界は平和を手に入れたかと思ったが、魔物の森が脅威となっ

ている。今度は各国で力を合わせて魔物の森の侵攻を止めている。

細かいことはたくさん書いてあるが、大きくまとめるとそのようなことが書いてあった。

魔物の森って……そもそもこの世界には魔物がいたのか……

それに魔物の森の侵攻を止めているってことは、魔物の森は広がってるってことか……？　どのくらいのペースなんだ？　そもそも魔物の森ってどこにあるんだろう？

情報が足りなすぎて全然わからない……今度フレデリックさんに聞いてみたいな。

俺は不安を抱えながらも今はどうすることもできないので、不安をしまい込むように教材を閉じて、夜営業の準備に向かった。

２５、ニコラの夢（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします。

26、魔物の森

しばらくは穏やかな毎日が続いていた。俺はマルセルさんのところで魔法具を考えたり、家の手伝いをしたり、マリーとニコラ、ルークと森に行ったり、屋台巡りをしたり、歴史の教材を読んで勉強したりしていた。

そして、俺が転生してきた時は少し肌寒いくらいの気温だったのが、最近は暑くて長時間外にいると辛いくらいの気温になってきた。

そんな穏やかな日常を過ごしながらも、俺はずっと魔物の森についてが頭に引っかかっていた。

マルセルさんにも聞いてみたが、教材に書いてある以上の詳しいことは知らず、最近の魔物の森についての情報も持ってないようだった。マルセルさんが学生だった時代は、まだそれほど魔物の森が問題になってはいなかったようだ。

フレデリックさんに聞いてみたくても、自分から公爵家を訪れる勇気はなく、フレデリックさんがうちに来てくれるのを待つしかない。

そんなじれじれとした毎日を過ごしていると、やっとフレデリックさんが食堂に来てくれた。

「いらっしゃいま……フレデリック様！　やっと来てくれたんですね！」

「え？　レオンどうしたんだ？　何か俺に用事でもあったのか？」

「歴史の教材を読んでどうしても気になってることがあったんですけど、フレデリック様が来ないから聞く機会がなくて……」

「それはすまなかったな」

フレデリックさんが苦笑いをしている。
やばいっ……ずっと魔物の森のこと聞きたいと思ってたから、つい責めるようなことを言っちゃった。
フレデリックさんは俺のところに来る義務なんてないのに……

「ご、ごめんなさい！　つい、勢い良く……」
「別にいいんだ、来れなくて悪かった。確かにレオンからの連絡手段があった方がいいな」

フレデリックさんはそう言って、紋章のようなものが彫られている少し大きめなコインを俺に渡した。

「これは……？」
「公爵家の関係者である証だ。これを門番に見せて、名前と誰に貰ったかを言えば中に入れてもらえるから、アルバンにでも伝言を頼めば俺まで届くだろう」

それって結構すごいものなんじゃ！？　俺がもらっていいのか？
なんか持ってるの怖いんだけど……

「こんなすごいもの貰ってもいいんですか？」
「ああ、ただ無くさないようには気をつけてくれ。レオンの容姿や名前は門番に伝えておくから、他の者が拾っても使える可能性はかなり低いんだけどな」
「絶対に無くさないように気をつけます！」

一番なくしちゃダメなやつだ……財布の奥に入れて肌身離さず持ち歩こう。

「それで、レオンは何が聞きたいんだ？」
俺はそこでハッと気づいた。フレデリックさんをまだ席に案内してない！
「ごめんなさい！　その前に席にどうぞ！　お昼食べますか？」
「ああ、ありがとう。じゃあ先にお昼を食べようかな」

そうしてフレデリックさんがお昼を食べ切って、他のお客さんもいなくなったので、お昼営業は終了になった。
母さんと父さんが食堂を使っていいと言ってくれたので、食堂で話をすることにして向かい合わせで座った。

「それで何かわからないところでもあったのか？」
「はい。教材を読んでて魔物の森のことが気になって。魔物の森ってなんですか？」
「魔物の森か……」

俺が魔物の森のことを口に出すと、フレデリックさんはかなり厳しい顔になった。
それから少し考えをまとめるようにして、口を開いた。

「魔物の森は普通の森とは違って、魔物が住んでいる森だ。魔物とは魔法を使える動物のことだな」
「魔法が使える動物ですか……？」
「ああ、弱い魔物は普通の平民でも倒せるくらいだが、強い魔物は騎士が何人もいないと勝てない。結構厄介な奴らだ」
「魔物の森ってどこにあるんですか？」
「魔物の森はこの国の東の端にある。ここからは馬車で二週間はか

かるくらいの距離だな。だから王都まで魔物が来ることはないから大丈夫だぞ」

魔法を使える動物って怖いな……遠いから大丈夫って言ってるけど、本当に大丈夫なのか？

「でも、騎士団が侵攻を止めてるって書いてありました。ということは魔物の森は広がってるってことじゃないんですか？」

「まあ……確かに魔物の森は広がってるが、騎士団が木を切り倒し、外縁部の魔物は定期的に倒してるから大丈夫だ。広がる力と抑える力が拮抗してるくらいだからな」

フレデリックさんはそう言って、少し嘘くさいような作り笑いをした。普通の子供ならそれで騙せただろうけど、俺は騙されないぞ。

これは、魔物の森の広がる力の方が強いのかもしれないな……もしそうだったら人間が住むところがどんどん飲み込まれていくってことか。

もっと情報が欲しい。でも、フレデリックさんはこれ以上教えてくれそうにないし、情報規制が掛かっているとかかな？

大勢に知られてパニックになっても大変だからな。

でももし村や街が飲み込まれてるのなら、どうやって隠してるのだろう？

先に適当な理由をつけて引っ越しさせて、立ち入り禁止とかだろうか。

まあ、今考えてもしょうがないな。これも情報収集しないとだ。俺に何かできるのかはわからないけど、全属性だし能力だけはあるからな。

「フレデリック様、教えてくださってありがとうございます。騎士

団の方々が止めていてくれてるなら安心ですね」

俺はそう言って安心させるように子供らしい笑みを浮かべた。

今は何も気づいてないふりの方がいいだろう。フレデリックさんが情報を漏らしたことになっても迷惑がかかるしな。

それからフレデリックさんが帰っても、俺はずっとさっきの話について考えていた。

この世界に魔物なんて存在がいたなんて……この世界には脅威となる存在があまりいないと思ってたから、攻撃魔法の練習は一切してこなかったけど、これからはやるべきかもしれない。

俺は全部の属性魔法が使えるんだから、組み合わせて強い攻撃魔法もできるかもしれないし、自分の身を守る術は先に身につけるべきだったな。

とにかく時間がある時に一人で森に行って、魔法の練習をしよう。

それにこれは俺の推測だが、魔力量の限界まで使って回復、を繰り返していると、魔力量がちょっとずつ増えてる気がするんだよな。

これは俺だけに起きる現象なのか、他の人もなのかはわからないけど、多分俺だけだろう。マルセルさんも生まれつきの魔力量が変わることはないって言ってたし。

また俺だけの特殊能力だけど、これには感謝しないとだな。とにかく強くなれるなら強くなるべきだ。俺の能力が他の人と違って規格外なのは、いつものことだ。

とにかく森で魔法の練習だな！　頑張ろう！

そこまで思考をまとめたところで、マリーの声が頭の中に入ってきた。

「お兄ちゃん！」

俺は深く考え込んでいたので、マリーに呼びかけられて思わずビクッとしてしまった。びっくりした～。

「お兄ちゃん、何に驚いてるの？」

「何でもないよ。ちょっとマリーの声にびっくりしただけ」

「そうなの？」

マリーが不思議そうに俺の顔を覗き込んでいる。

「うん、大丈夫だよ。それで何の用？」

「お兄ちゃん忘れたの！？　今日は父さんが用事があるから、母さんと一緒に買い出しに行くって朝に言ったでしょ！」

「ご、ごめん！　そうだったね」

俺が周りを見てみると、買い物籠を持った母さんも立っていた。

「レオン、難しい顔で考え込んでどうしたの？　買い物に行くわよ」

「う、うん！　俺が持っていく籠は？」

「机の上に置いてあるわ」

俺は慌てて籠を掴んで、母さんとマリーに続いて家を出た。

さっきまで考えてたことはとりあえず頭の隅に追いやって、買い物に集中しようと母さんの隣に並んで歩いた。

２６、魔物の森（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします。

27、攻撃魔法

それから数日後の午後、俺は魔法を練習するために森に来ていた。いつもマリーたちと来ている森の外縁部ではなく、少し奥に行き川の近くの開けた場所を練習場所にした。

まずは何から始めるか……とりあえず魔法について知ってる知識をまとめよう。

まずは属性だが、魔法は六属性に分かれていて火属性、水属性、風属性、土属性、身体強化、回復の六つだ。俺は回復属性ってことになってるが、全部の属性が使える。

次は魔法の種類だが、魔法はイメージした現象が発現するから、種類分けできるものではない。イメージの力によって変わる。ただし、水属性の人が火魔法を使えないように、その属性によって使える魔法の範囲が決まる。また、俺が知ってる限り、ほとんどの人が魔法名を声に出して魔法を使うが、それはイメージを補完するもので声に出さなくても魔法は使える。

最後は魔法の威力だが、魔力をたくさん使うほど威力が増す。故に魔力量が少ない人は弱い魔法しか使えない。しかし、詳細なイメージをすることで、魔力の消費量を大幅に減らすことができるので、イメージ力を鍛えれば魔力量が少ない人でも、少しは強い魔法が使えるようになるだろう。しかし日本の知識を使っているので、俺以外の人には今のところできていないと思われる。

あと、俺は魔力を限界まで使うと、魔力量が少しずつ増えてるみたいだ。多分これも俺だけに起きる現象な気がする……取り敢えず

多いに越したことはないから魔力量も増やしとこう。

魔法について今わかってることはこのくらいだな……とにかくイメージが大事だ。

まずはどの魔法の練習をするのがいいんだろうか。魔物などと戦うことを想定するなら、攻撃力が高い魔法がいいだろう。やっぱり火魔法かな。

火の矢でファイヤーアローとかカッコいいよな！　ファイヤーボールより貫通力もあって威力が高そうだし。一度やってみるか。

俺は川縁にある大きな岩に向かって、素早く飛んでいく火の矢をイメージして魔法を使った。すると一本の火の矢が岩に向かって一直線に飛んでいった。凄い！　できた！

しかし、火の矢は岩に当たって消滅してしまった。岩を見てみると傷跡ひとつ付いていない。威力が足りなかったのか？　もう一度、今度はスピードをもっと上げるイメージをして魔法を使ってみた。しかし岩には傷跡ひとつついていない。

なんでだ？　スピードの問題じゃないだろうし、岩は硬すぎたのか……あっ！　そうか、俺は火を実体のないものとして考えてるから、貫通力をつけるのは無理なのかもしれない。

それならどうするか、ファイヤーボールも燃やす力はあるけど同じ結果になるよな……

……もしかしてだけど、全属性使えるなら、魔法を組み合わせることもできるんじゃないか？

例えば土魔法で石の矢を作って、それに火を纏わせて飛ばすとか。それめちゃくちゃ強そうだな。

よし、まずは土魔法で矢を作ることをイメージして、火魔法を纏

わせる。それを岩に向けて飛ばしてみる。速度はできるだけ早く、銃の弾丸のイメージだ。
ドンッ……おお、結構大きい音がしたな。明らかにさっきまでよりは威力が高いだろう。
岩を見てみると、矢の先端が岩に突き刺さっていた。
成功だ！　でも、石の矢を作るのに割と魔力を消費するんだよなぁ……もっと小さい矢でもいいか？　いや、そもそも魔法で飛ばすんだから、矢の先だけでいいんじゃないのか？

俺は矢の先だけ、少し尖った弾丸のようなものをイメージして作り、それに火を纏わせて飛ばしてみた。
するとさっきと同じくらい岩にめり込んでいて、消費魔力はかなり減った。
大成功だ！！　これは使い勝手の良い魔法になりそうだな。名前はどうしよう？　ファイヤーアローって言っても、もう矢じゃないからな……
弾丸って確かバレットって言うんだった気がするから……ファイヤーバレットでいいか！　うん。かっこいい。まあ、名前は特に必要ないんだけど、気分の問題だ。

よし！　じゃあ次だ。ファイヤーバレットは単体への攻撃だから、範囲攻撃魔法も考えようかな。
範囲攻撃って言ったら、風魔法かな？　トルネードとかできそう！
とりあえず小さめの竜巻をイメージしてやってみよう。そう思ってやってみたが、結構魔力を消費するわりに攻撃力はあまりなかった。
確かに風によって何かが切れるってイメージしづらいよなぁ……かまいたちとかって実際の現象として見たことないし。
それなら……竜巻の中にさっきのバレットを出現させたらいいんじゃないか？

そう思ってやってみたら、竜巻の中のものを無差別に切り刻むという、非常に残酷な攻撃になった。竜巻の中に入れてみた太めの枝が、バラバラのボロボロになっている……ま、まあ、威力が高いのはいいことだよな。

とりあえず強い魔法ができてよかった。でも結構魔力を消費するんだよなぁ。まあ、やばい時の必殺技って考えれば良いか。名前は……ロックトルネードとかかな。

それから俺はどんどんと攻撃魔法の開発と練習をしていった。

水魔法でウォータージェット。岩が少し削れるくらいの威力しかないが、消費魔力量が少ないのが魅力だ。

火魔法でファイヤーボール。これは火の温度を上げて、熱での攻撃力上昇を考えてみた。

土魔法でウォール。土を盛り上げて壁を作る魔法だ。強固な壁にするほど消費魔力量が多くなるので、あまり強度は上げられないが防御には便利だろう。

身体強化魔法でビルドアップ。特定の部位の筋肉量を上げて、力を上げる魔法だ。これはかなり使い勝手はいいだろう。何にでも応用可能だ。剣とかを使うときにも使えるかもしれないな。

攻撃魔法はもう十分だ。というか……ちょっとやりすぎたかも。

俺は周りを見渡してそう思った。岩は何度も攻撃されてひび割れてるし、木々は嵐の後のようにぐちゃぐちゃだ。

これ、やばいかな……？　でも結構森の奥に来たし、こんなところまで来る人はいないだろう。多分……

それよりも、実際に攻撃魔法を試してみたいな。

魔物の森に行くわけにはいかないし……この森にも熊や猪などの普通の獣はいるって言ってたよな。その獣を倒してみるか？
たとえ獣でも命を奪うのは嫌だけど、もし経験してなくて魔物を倒すのを躊躇って自分が殺されたら……それが一番最悪だよな。やっぱり経験しとくべきだ。

俺は獣よけの鈴をしまって、川が見えるくらいの位置で帰り道はわかるようにして森の奥に進んだ。
三十分くらい歩くと、ガサガサッと音が聞こえてきた。
俺はどこから獣が出てきてもいいように、周りをよく観察しながら耳を澄ませた。

……ガサッ

後ろだ！　俺は後ろから音が聞こえてきたのですぐに後ろを振り返ると、真っ黒な熊が俺に向かって突進してきているところだった。
俺はすぐ足にブーストをかけて、思いっきり横に飛んだ。木の枝で腕や足を引っ掻いたが、そんなこと構っていられない。俺はすぐに立ち上がり熊の方を向いた。

熊ってこんなに攻撃的なの！？　しかもかなり大きい。さっきは少し気づくのが遅れてたらやばかったよな。やっぱり魔法だけに頼らないで訓練も大事かも……
そんなことを考えていると、また熊がこちらに突進してくる。俺は熊の頭を狙ってファイヤーバレットを放った。
しかし、ファイヤーバレットは熊の頭の少し上を通り過ぎ、後ろの木に当たって木を粉砕させた。
やばい！　外れた！
どうしよう……動いてる相手に当てるの思ったより難しいぞ！
俺はまた横に飛び退いて熊を避けた。

今度こそ絶対当てるために、次は胴体を狙ってファイヤーバレットを放つ。
すると、熊には当たったが熊の右肩あたりにめり込み、致命傷にはなっていないようだ。
やばい……逆に怒らせたかも！　また熊が俺の方に突進してきていたので、俺は急いでロックトルネードを放った。
ロックトルネードを消すとそこには、熊だっただろうものしか残っていなかった。

うぇっ……気持ち悪い……
やっぱりロックトルネードは威力が高すぎるな……本当に危ない時以外は使うのやめよう。
というかかなり危なかった。魔法が使えるからって自分の力を過信し過ぎてたかも。もっと命中率を上げる練習もしないとだし、自分の訓練もしたほうがいいかもしれないな。
これからは魔法の練習と体力作りだな。

そこまで考えてハッとした。やばい……今何時だろう？　というか時計壊れてないかな！？
慌てて時計を見て見ると、壊れてなかったみたいだ。よかった……けど、もう17時過ぎてる！
やばい！　あと1時間以内に帰らないと！
俺は自分についた傷をヒールで治し、ピュリフィケイションで服を綺麗にして、家に向かって駆けて帰った。

２７、攻撃魔法（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューを是非よろしくお願いします！

28、火魔法の魔法具

それから季節一つ分ほどは、いつも通りの穏やかな日常が過ぎていった。その間に毎日魔法の練習とトレーニングをしていた俺は、かなり強くなったと思う。魔力量もかなり増えた。

でももっと頑張る予定だ。魔物とも騎士とも戦ったことがないから、どこまで強くなればいいのかがわからないのだ。まあ、強くて悪いことはないだろう。

最近は、魔法の練習とトレーニングに時間を取られて、マルセルさんのところに全然行っていなかったので、今日は久しぶりに、マルセルさんのところに行くことにした。

最近は冬になったのでとても寒く、たまに雪が降って積もる日もある。冬になったらストーブやドライヤーが切実に欲しくなったのだ。

俺には魔法具を買えないかもしれないが、とにかく現物を作らないことには始まらない。

火魔法と風魔法を使ってストーブのようにすることもできるが、かなり魔力を消費するし、ずっと続けるには集中力が必要ですごく疲れるのだ。

結局竈に火がついている厨房にずっといて、暖をとることになる。寝るときは重いが、家にある布を全て掛けて寝ている。

とても寝苦しい。切実にストーブが欲しい。

「マルセルさん！　お久しぶりです！」

俺はマルセルさんの家のドアを開けて、家の中に呼びかけた。そうすると、奥から「入っていいぞ」と声が聞こえてきたので、俺は遠慮せず家の中に入っていった。

「マルセルさん、こんにちは」
「おお、レオン久しぶりじゃな」
「最近来れなくてすみません」
「別にいいんじゃよ、それで今日は何の用じゃ？」
「今日は、火魔法の魔法具を考えたいなと思って来ました。冬になったら寒くて、どうしても欲しくなったんです」

俺は苦笑いしながらマルセルさんにそう言った。

「それは構わんが、火魔法の魔法具は成功せんぞ？　魔鉄が熱に耐えられんからな」
「そうなんですよねー、だから頑張って考えようと思いまして。もしかしたら良い方法が思いつくかもしれませんし」

俺はそう言って、どうしたら火魔法の魔法具が成功するのか考え始めた。
まず、魔法具は魔石を魔鉄にはめ込むことで、魔石に組み込まれた魔法が発現するものだ。発現するときは魔石から発現する。
例えば、水道なら魔石から水が出てくる。光球なら魔石が光る。送風機なら魔石から風が出る。
火魔法は魔石から火が出るので、魔鉄が熱に耐えられなかった。それが失敗原因だ。

どうすればこの問題を解決できるか……例えば魔石周りの魔鉄を絶縁体で覆うとか……？　この世界の絶縁体ってなんだろう？　ゴ

ムとか石とかかな？　でもこの世界でゴムって一度も見たことがない気がする。
確かゴムの木って日本では作られてなかったよな。熱帯地域が原産だった気がする。それならこの国は、植生が日本に似ているから、ゴムの木はないのかもしれない。
他国にはあるのかもしれないけど、それを探すのは大変すぎるなぁ。というかそもそも、ゴムって電気は通さないけど熱では溶けるんじゃないか？　ダメだ。
そうなると石だけど、石を加工するのが大変過ぎるし、石って重すぎる。
絶縁体を使うのは無理か……そもそも魔石が魔鉄に触れてないといけないんだから、いくら絶縁体を使っても、魔石が触れてるところから熱が伝わるよな。
絶縁体はダメだ。

じゃあ他の方法だけど……何があるだろう？　火魔法が魔鉄から離れたところに発現すれば簡単なんだけどなぁ。

……あれ？　俺が作った製氷機って、風魔法を魔石から離れたところに発現させてなかったっけ？
そうだよな！　それなら火魔法も同じことができるんじゃないか？
なんで今まで気づかなかったんだろう！　魔石から発現する魔法は、魔石から直接発生するっていう固定観念があったよな。製氷機を作ったときは、氷が作れることに意識が向いてて気づかなかった。
とりあえず試してみたい！

「マルセルさん！　魔石から発現する魔法は、魔石から直接発生しますよね」
「それは当たり前じゃろ？　魔石なんだから」
「でも製氷機を作るとき、俺は風魔法を魔石から離して発現させせま

した」
「確かに風魔法を使っていたが、あれは魔石から風を出してるんじゃなかったのか？」
「はい！　あれは箱の真ん中から風を発生させてたんです」
「まさか……そんなことができるとは……でもそうじゃな、なんで今まで気づかなかったんじゃろうか……」
「固定観念ですね。思い込んでることって、気づけないものですよ。それで、火魔法を試してみてもいいですか？」
「ああ、良いぞ」

マルセルさんは魔石と魔鉄をくれたので、まずは魔鉄を変形させることにした。今回はストーブを作りたいけど、ストーブの周りの部分を魔鉄で作ると、そこが溶けちゃう可能性がある。
なので魔鉄は、真ん中に魔石を嵌め込める一枚の薄い板にした。そして魔石には、魔鉄の上に三十センチくらいのところに発現するようにして、小さいファイヤーボールを込めた。

魔石を魔鉄にはめ込んでみると、しっかりと三十センチ上空にファイヤーボールが発現した。
成功だ！！　もしこれでも魔鉄が解けてしまうようなら、間に石などを入れればいいかと思ったが、熱は上に行くのでこのままでも大丈夫みたいだ。

「マルセルさんできました！　これで周りは普通の鉄格子のようなもので覆えば、完成ですね！」
「レオン……わしたちが諦めてたものをこうも簡単に作られると……まあ、レオンだからしょうがないか」

何それ！？　俺そんなに常識はずれじゃないよ！
マルセルさんが最初は驚いていたが、だんだんと呆れた顔になっ

てくる。

「俺だからしょうがないってなんですか！　でもこれで便利になりますね」

「それはそうじゃが……これは王宮に届け出るのはやめておいたほうがいいかもしれんぞ」

「なんでですか？」

「この前の製氷機でもかなり目立ったからのぉ。これ以上わしが目立つと絶対に探られる。多分レオンにたどり着く奴もでてくるじゃろう。お主は目立つのは避けたほうがいいじゃろ？」

「そうですけど……そんなに目立ちますか？」

「目立つに決まっておる！　今まで魔法具が作られ始めて数十年で四つしか商品化したものはないんじゃぞ。それなのに一年のうちに何個も登録したら、目立つに決まっておるじゃろうが！」

そ、そうか……そう考えると登録しないほうがいいかもしれないな……

「じゃあ登録はやめてくれるとありがたいです……」

「それが良いな」

「でも、これはどうしましょう？　それに、この前の製氷機で、風魔法を魔石から離れたところに発現させちゃったので、気づかれるのも時間の問題じゃないですか？」

「うっ……確かにそうじゃな。この前登録したときに作った製氷機は渡してしまったから、気づかれるのは時間の問題じゃろう」

「それなら他の人に先を越される前に、火魔法の魔法具も登録したほうがいいんじゃないですか？」

俺がそう言うとマルセルさんはしばらく考え込んでいたが、結局魔石から離れたところに魔法を発現させられることに気付かれたら

同じだと思ったのか、登録することに渋々頷いてくれた。

「まあ、それなら今回は登録しよう。でも今回が最後じゃ！　これからはお主が地位を得たら、自分で登録するんじゃぞ」

「はい、そうします！　それで、これも自分用は確保できないですか……？　思ったんですけど、俺は貴族じゃないので魔法具を買えなくても、マルセルさんなら買えるんじゃないですか？」

俺は「魔法具は全て王立の魔法具工房に売るから、売ることはできない」と言ったマルセルさんの言葉を真に受けていたが、マルセルさんの工房にも魔法具はある。

それなら、王立の魔法具工房か魔法具店のようなところでなら、買えるんじゃないかと思ったのだ。平民には買えなくても、貴族になら買えるだろう。

「まあ、そうじゃな……確かにわしの工房からレオンに売ることはできないが、わしが魔法具店で買ってきたものをレオンに売ることはできる。それなら問題はない」

「やっぱりそうなんですね！　じゃあ、ストーブだけ買ってもらえますか？」

「まあ、いいじゃろ」

やったぁ！！　ストーブが手に入る！

これで耐えられない寒さだけは、なんとか凌げる！

俺はそのあとストーブの他に、料理用コンロと湯沸かし器の魔法具部分も作り、普通の鉄で作るところは大体の設計図を書いた。どうせ登録するなら、思いつく火魔法の魔法具を全部作ってしまえと思ったのだ。

これでマルセルさんが、贔屓の工房に魔法具と設計図を持ってい

ってくれて、その工房で完成まで作られるらしい。
その完成品を持って王宮に登録に行くそうだ。
俺の分のストーブを買ってくることも、約束してくれた。

「じゃあ、これを全て登録したら、ついでにお主の口座にお金は振り込んどくぞ。魔法具を購入する分は引いておくからな」
「はい！　ありがとうございます！　あっ、そういえばこの前口座を見たら、マルセルさんが言ってた金額より多かったんですけど、どうしてですか？」
「あれは、水魔法の新しい使い方を見出したと言うことで、報酬が出たからその分じゃよ」
「そんな報酬なんて出るんですね。その分までくれるなんてありがとうございます！」
「あれはわしが発見したわけではないからな。お主がもらって当然じゃよ」

俺に伝えないで自分がもらうこともできたのに、正直にくれるなんて、やっぱりマルセルさんは良い人だな。
俺がニヨニヨとマルセルさんをみていると、マルセルさんは恥ずかしくなったのか急に俺を追い出し始めた。

「レオン、もう時間なんじゃないか？　そろそろ帰ったほうが良いぞ」

マルセルさんが俺を追い払うように、あっち行けと手を振っている。

「はぁ～い。じゃあそろそろ帰りますね」

俺は苦笑いしつつそう言って、マルセルさんの家を出て、うちに

向かってゆっくりと歩き出した。

２８、火魔法の魔法具（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします！

29、魔法具の設置

火魔法の魔法具を作ってから数日後、マルセルさんの家に行くと、ストーブと料理用コンロ、湯沸かし器が完成していた。

「もう完成したんですね！」

「ああ、もう登録も終わったぞ。本当にわしが開発してるのかと疑われて危なかったんじゃが、上からの指示が来たらすぐに登録されたんじゃ。レオン、王宮の上層部と繋がりがあるのか？」

マルセルさんは俺にじーっと、疑いの目を向けている。

俺は王宮に知り合いなんていないし、そもそも貴族の知り合いはタウンゼント公爵家の方々だけだし。

あ、そういえばリシャール様は王宮で働いてるんだっけ？

……まあよくわからないけど、登録できたならいいじゃないか。

「よくわからないですけど、タウンゼント公爵家の方々ですかね？　でも登録できたならいいじゃないですか」

「待て！　レオンはフレデリック様だけじゃなくて、タウンゼント公爵家の方々とも繋がりがあるのか！？」

「あれ……？　マルセルさんに言ってませんでしたっけ？　この前屋敷に招待されたんです」

「屋敷に招待じゃと！？　それは……」

そのあとマルセルさんは、小声でぶつぶつと「レオンの異常さなら興味を持つのもしょうがないか」とか「タウンゼント公爵家の勢力にはレオンは使える人材なのか」とか言っていたが、そのうち納得したようだ。

「まあ良い。レオンのことは深く考えないに限るからな。とにかく登録はできたから、ストーブの購入金額を引いた、白金貨十四枚と金貨五枚を口座に入れといたぞ」

俺はなんだか釈然としないが、ここで俺は異常じゃないとか言っても説得力がないので、やめておくことにした。

「ありがとうございます。後で確認しておきます」
「ああ、そうしてくれ。それで、ストーブはどうやって持って帰るんじゃ？　わしが持ってる荷車を貸そうか？」
「貸してもらえるとありがたいです！　明日にでも返しにきます」

そうして俺はマルセルさんから荷車を借り、ストーブを持って家に帰った。

「ただいまー！　父さん、ちょっと手伝ってくれる？」
「おかえり、レオンどうしたんだ？」
「これ重いから家の中に運ぶの手伝ってくれる？」
「いいけど……これなんだい？」
「魔法具だよ、これならうちでも使えるから！」

父さんは魔法具って聞いて、とにかく驚いている。魔法具は貴族が使うものっていう認識だからな。

俺はもっとたくさん家に魔法具が欲しいんだけど、料理用コンロは厨房を改築しないと設置できないから無理だ。平民の家に魔法具を設置するための工事はしてくれないらしい。

水洗トイレも水道も、そもそも中心街では下水道のようなものがあって成立しているので、この家ではできない。お風呂も同じだ。

お風呂はさらに湯船を設置する場所もない。
マルセルさんの工房は、魔法具が設置されてるけど、国によって特例で下水道が引かれているらしい。爵位の代わりってことだろう。羨ましい。
俺はピュリフィケイションを魔石に込めて浄化の魔法具を作ればいいんじゃないかと思ったが、マルセルさんに聞いてみるとそれは無理そうだった。ピュリフィケイションはかなり魔力を消費するが、魔法具にしても同じらしく、トイレ一回分を綺麗にするのに、最大限魔力が込められている魔石で、二回ほど魔力を込め直さなくてはならないそうだ。それでは実用は無理だよな。

こんな感じで俺の家で魔法具を使うのはほぼ無理なのだ。だが、ストーブならどこに置いても使えるし、改築工事もいらないので俺の家でも使える！
本当は魔法具全部を使って便利な家にしたいが、それは無理なので諦めている。快適な生活は役人になってからだな。でもどうせなら貴族になりたいけど……もっと便利そうだし。

俺がそこまで考えたところで父さんがフリーズから戻ってきた。
「ま、魔法具って貴族が使うやつだろう？　なんでレオンが持ってるんだ？」
父さんがそう小声で聞いてきた。やっぱり魔法具があるって知られない方がいいんだよな。盗まれる可能性もあるし。使うとしたらリビングと寝室だな。
「マルセルさんと仲がいいから、それで手に入れられたんだ」

俺がそう言うと、父さんは納得したようだった。俺が貴族と知り合いだったりしてるから、だんだんと慣れてきているようだ。父さんも母さんも、俺のことについては深く考えないようにしてるところがある。

「じゃあ、早く家の中に運んじゃおうか」

「うん！」

俺と父さんでとりあえず寝室に運ぶことにした。母さんも魔法具に驚いていたが、父さんの「レオンが持ってきたんだ」の言葉に納得したようだ。それで納得されるのも喜んでいいのかよくわかんないな。まあ、いいけど……

マリーは魔法具がよくわかってないようだったが、とにかく暖かくなることに喜んでいた。

その日の夜、寝室で俺は、母さんと父さんに魔法具の使い方を教えて、魔力を込める際のイメージについても教えた。

「魔力を込めるときのイメージは、魔石から三十センチほど上空に、小さなファイヤーボールを作るイメージだよ」

二人とも火属性だからすぐにできるかと思ったけど、魔力量が少なくて上手くいかない。

「レオン、母さんも父さんも魔力量が少ないから、そもそもファイヤーボールも作れないのよ？」

そうか……それだと難しいかも。

でも、酸素の概念とかイメージ力を鍛える練習をすれば作れるよ

うになるんじゃないか？　俺もそのイメージでかなり消費魔力量を減らせたからな。

俺は母さんと父さんに、酸素についての説明をして、できる限りイメージ力を高める練習をしてもらった。

「なんとなくでも理解できた？」
「まあ、少しは理解できたけど、これで何かが変わるのかしら？」
「これでファイヤーボールが使えるようになるなんて、信じられないな」
「とにかくやってみようよ！　ここだと危ないから中庭に行こう」

そうして、三人で中庭にやってきた。マリーは疲れてたのか、俺たちが話しているうちに寝てしまったようだ。

「じゃあ、さっきのイメージでファイヤーボールを作ってみて。手のひらから少し離れたところに、小さめのイメージで」

二人とも恐る恐るではあるが、ファイヤーボールを試してみてくれた。すると、二人とも小さなファイヤーボールを作れるようになった。

凄い！　大成功だ！！

やっぱりイメージ力ってかなり大事なんだな……この方法を使えば、この世界の魔法の強さがかなり高まる気がする。でも、敵を強くしちゃう可能性もあるから気をつけないとだな……

「レオン凄いわ！！　本当にできるようになるなんて」
「レオンありがとう。日常生活でも使えるし、自衛にもなるよ」
「使えるようになってよかった！　これで魔法具にも魔力を込められると思うから、戻ってやってみよ！」

寝室に戻り、母さんと父さん二人に魔力を込めてもらうと、どちらも問題なく魔力を込めることができている。

「これでいつでも暖かく寝れるね！」

「それは本当に嬉しいわね。冬は寒くて眠っていても目が覚めたりしていたから」

「これで風邪をひくこともなくなりそうだね」

母さんと父さんが喜んでくれてよかった。

「でもこれは周りの人には知られないほうがいいわ。この魔法具のことも、さっきの魔法の使い方のことも」

母さんが少し顔を険しくしてそう言った。

「特に魔法の使い方の方は影響力が大きそうだ。レオン、他の人には安易に教えてはいけないよ」

やっぱりそうだよなぁ。広めるなら全属性のことを明かせるようになった時かな。

「うん、わかってるよ。母さんと父さんも内緒にしてくれる？」

「私たちがレオンを危険に晒すようなことを、言うわけないじゃない」

「その通りだよ」

「母さん、父さん、ありがとう」

母さんと父さんは、絶対前のレオンと違うことに気づいてると思

う。でも何も言わずに変わらず愛してくれる。本当に嬉しい。俺も家族を危険に晒さないように気をつけよう。

そこで話を終わりにして、ストーブをつけて寝ることにした。部屋も布団もぬくぬくで、すぐに深い眠りに落ちた。

やっぱりストーブ最高だ……

２９、魔法具の設置（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします。

30、母と父の実家

寒く厳しい冬を超えて、暖かい春がやってきた。次の冬には王立学校の試験を受けて春には入学なので、ここで暮らすのもあと一年だ。

少し寂しいが、一生の別れでもないのでワクワクしている気持ちの方が強い。

そして、俺が転生してから一年経ったことになる。あっという間だった。日本での記憶はまだ残っているけれど、俺はレオンだと言う気持ちの方が強くなっている。

日本を忘れていくことは悲しいけれど、この世界で生きていくためにはいいのかもしれない。

まあ忘れられないものもあるけれど、快適で便利な生活とか、醤油や味噌、米などの日本の味とか、テレビやスマホ、ゲーム、漫画などの娯楽用品とか、やっぱり全然忘れられない！！

思い出せば思い出すほど欲しくなる……とりあえずは、快適な生活を手に入れる！　その後に醤油や味噌、米も手に入れたい。どうすればいいのかわからないけど……

でも諦めずに行こう！

そんな春のある日の朝、母さんと父さんに唐突に言われた。

「レオン、マリー、明日から一週間、おじいちゃんとおばあちゃんの所に行くからね」

俺はその言葉を聞いて衝撃を受けた。そういえば、普通に考えて

おじいちゃんとおばあちゃんって存在するよな……
今まで必死に生きてきたから思いつかなかった。それにこの一年で一度も会ってないし。
レオンの記憶では……すごく小さい時に会ったことがあるかも。でも小さい頃の記憶すぎて、曖昧でよくわからない。

「おじいちゃんとおばあちゃん？」

マリーが首を傾げて聞いた。俺が覚えてないくらいの時にしか会ってないなら、マリーは覚えていないだろう。

「そうよ。私の母さんと父さん、ジャンの母さんと父さんのことよ。マリーが生まれた時に行ったきり一度も会いに行ってないから、今年は行こうかと思ったのよ」
「レオンとマリーに会ったら、みんなすごく喜ぶと思うよ」

全然会いに行ってないってことは、近くに住んでないってことだよな。王都にいないとか？

「おじいちゃんとおばあちゃんは王都にいないってこと？」
「王都にはいるんだけど、父さんの両親は農業をやってて、ロアナの両親は畜産をやってるから、王都の郊外にいるんだよ。実家は隣同士なんだ」

森に行く時に見えてる農地にいるってことか！　実家が隣同士ってことは二人は幼馴染ってことだよな。やっぱりこの世界は両親の紹介とかで結婚することが多いのかな？
というか、父さんと母さんは、なんで農業と畜産を継がなかったんだろう？

「父さんと母さんはなんで仕事を継がなかったの？」
「父さんは次男だからね。兄さんが継いでるんだ」
「母さんの家も兄さんが継いでるわ」

そういうことか、それで結婚して街に来て、お店をやってるってことだな。

……ということは、この家は結婚してから買ったってことだよな？　この家って結構いい家だと思うけど買ったのかな？　買ったのなら高そうだけど……

俺の家は、中庭があって井戸がついてる。最初は各家に井戸があるのが当たり前だと思ったんだけど、これはすごく贅沢なことらしい。大体の家が、その地域で一つくらいの井戸を共有しているそうだ。

「父さんと母さんは結婚してこの家に越してきたの？」
「そうよ。最初は小さな部屋を一つ借りて、お互いにどこかの工房に雇ってもらおうと思ってたんだけど、実家に仕入れに来てくれてた商人さんが、この家を紹介してくれたのよ。確かお金持ちの商人さんが、食堂をやりたい次男のために作った家だったらしいわよ。でもその次男には子供ができなくて、食堂を継ぐ人がいなかったから私たちに話が来たのよ」
「この家を安く買えたことは本当にラッキーだったよね。ロアナともずっと一緒にいられるし」
「ジャン……」

二人が見つめあってなんだかラブラブな雰囲気を出し始めた。気まずい……何か話題を振らないと。

「え、えっと、あのさ、おじいちゃんとおばあちゃんの家ってどの

くらい遠いの？」
「そうねぇ……馬車で行ければそんなに時間はかからないんだけど、歩きだから結構遠いのよ。朝に家を出て夕方くらいには着くかしら？」

え！？　そんなに遠いの？　というか歩きで行くの！？

「馬車はでてないの？　乗合馬車とか」
「農地の方に乗合馬車はでてないわよ。商人さんの馬車に運良く乗せてもらえたらラッキーだけど、行きは農地で売る商品を、帰りは街で売る商品を載せてるから、余分に人を乗せられる商人さんはあまりいないわね」

そうなのか、歩きか……
まあ、トレーニングもしてるし、身体強化魔法も使えるんだし、そんなに大変じゃないだろうけど。
俺は魔法を使えるんだから、みんなの荷物も持つくらいの心意気じゃないとダメだな。

「それなら歩きで行くしかないね。頑張って歩くよ！　荷物も持つからね！」
「あら、ありがとね。それで今日は明日の準備をするわよ！　今日から営業はお休みにするわ」
「うん！　何を持っていけばいいの？」

歩きならそんなにたくさんの荷物を持っていけないよな。そんなに必要なものってないのかな？

「レオンとマリーはいつも森に行く籠に、自分の服を入れて準備してね。あとは一応の護身用に、獣よけの鈴とナイフも準備するのよ」

「わかった」
「私も！」

それくらいなら全然持てるな。何かお土産でも持っていこうかな？

「母さん、何かお土産とか持っていってもいいかな？」
「それは凄く喜ぶと思うわ」
「何がいいと思う？」
「そうねぇ、どっちの両親も外での仕事だから、日を避けられるものとか、手ぬぐいとかが喜ぶんじゃないかしら」
「わかった！　じゃあ俺はお土産見てきてもいい？」
「いいわよ。気をつけてね」
「うん！」

俺はそう言って出かけようとした時にふと思った。そういえば、おじいちゃんとおばあちゃん以外にも、お兄さん夫婦とその子供もいるんじゃないか？

「あのさ、母さんと父さんのお兄さん夫婦と子供もいるんだよね？」
「ええ、いるわよ」
「じゃあお土産もっと必要かな？」
「あったら喜ぶだろうけど、なくても良いと思うわよ。いつもお土産なんて持っていかないもの。向こうに着いたら一緒に遊んで仕事を手伝えば十分よ」
「そうか……まあなんか考えてみるね！　行ってきます！」

俺は家を出て、お店がたくさんある通りに向かいながら考えていた。何がいいかな？　まずは服とか布を売ってる店を見てみよう。
俺はこの辺では一番良いものが売ってそうな、布製品のお店に来

た。

「いらっしゃい。何が欲しいんだい？」

店員さんはふくよかなおばちゃんだ。俺は不自然にならないように、敬語を使わないように答えた。

「おじいちゃんとおばあちゃんにプレゼントを買いたいんだ。手ぬぐいとかってある？」

「あるよ。この辺だね」

そこには色を染めてない手ぬぐいがほとんどだったが、いくつか色を染めてある手ぬぐいもあった。

「この色付きのっていくら？」

「それは一つ小銅貨五枚だよ。色がついてない方は小銅貨二枚だ」

五百円と二百円か。まあそこまで高くはないな。

ここは色付きのにしようかな、せっかくのプレゼントだし。

「青と赤を二つずつちょうだい」

「はいよ、小銅貨二十枚だ」

「銅貨二枚でもいい？」

「いいよ」

「じゃあこれで」

「ありがとね！」

俺は青っぽい手ぬぐいと赤っぽい手ぬぐいを、二つずつ買った。

おじいちゃんとおばあちゃんで色違いがいいかと思ったのだ。

よし、あとはどうしようかなー。この世界って物がたくさんある

わけじゃないから、お土産って困るかも。

俺は他の人たちへのお土産に迷いながらお店がある通りを歩いていると、木製の食器を売っているお店を見つけた。食器なら壊れて買い換えることもあるだろうし、お土産にいいかもしれないな。

そう思ってそのお店に入ってみた。このお店の主人はがっしりとしたおじさんだ。

「いらっしゃい！　坊主お使いか？　何が欲しいんだい？」

「お使いじゃなくて、今度おじさんたちに会うからお土産を探してたんだ。何かいいものある？」

「それならちょうどいいものがあるぞ！　これ、竹でできた水筒なんだ。なんか、昔はこれが主流だったが、ある時から何故か皮袋が流行り始めて、最近またこっちが流行ってきてるんだとよ。俺も使ってみたけど、絶対こっちの方が便利だぜ。なんで皮袋が流行ったんだかわからねぇよ」

竹もあったんだ！　そういえばいつも行く森にもあるかも……？

あんまりしっかり見たこと無かったから、気づかなかった。

絶対竹の水筒の方が使いやすいだろ！　皮袋めちゃくちゃ飲みづらいし。なんで皮袋が流行ったんだろ……？

まあ、何が流行るかはわからないけど、何か作為的なものを感じるな……

「坊主これ買うか？」

「それ一ついくら？」

「これは一つ銅貨一枚だ。そんなに高くねぇだろ？　坊主には買えねぇか？」

安いな……やっぱり原材料がどこでも取れるからかな。

それより、お土産にこれいいかもしれない！　外で働くなら水分補給は必須だし、麻紐がついてて首から下げられるし、腰にくくりつけることもできるから便利だよな。
これ俺も欲しいし、家族の分も買おう。
うちに四つとお兄さん夫婦に四つで全部で八個だな。

「じゃあ、これを八個ちょうだい」
「八個！？　そんなに金持ってんのか？　全部で銅貨八枚だぞ？」
「ギリギリ持ってるんだ。はい、銀貨で払うんでいい？」
「お、おお、持ってるならいいんだ。ちょっと待ってろ、たくさん買ってくれたからサービスで麻袋に入れてやるよ。持って帰るの大変だろ」
「ありがとおじさん！」
「いいんだ、はいよ。お釣りの銅貨二枚と竹の水筒八個だ」
「ありがとう！」
「おう、また何かあったら来いよな」
「うん！」

よし、いい買い物できたな。これで俺が森に行くのも便利になるな！　本当は水魔法を使えば水筒なんていらないんだけど、俺は回復属性ってことになってるから、バレないように水魔法を使えないんだ。早くいつでも使えるようになりたい……

あとは子供達だけど、何が必要かわからないし、確か砂糖が残ってたから、持っていってお菓子でも作ってあげればいいかな。
俺はそう考えて、家へと帰った。

３０、母と父の実家（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューを是非よろしくお願いします！！

31、祖父母の家

「ただいまー」

俺が家に帰ると、父さんと母さんは忙しく準備をしていた。

「あら、結構早かったのね？　何を買ってきたの？」

「いいものがあったかい？」

俺が家の中に入ると二人は準備の手を止めて、俺が持っていた麻袋の中身を覗いてきた。

「手ぬぐいと竹の水筒を買ってきたんだ。手ぬぐいはおじいちゃんたちにお土産で、水筒がおじさんたちに。それとこの水筒はすごく便利だと思うから、うちの家族四人分も買ってきたよ」

俺はそう言って竹の水筒を一つ取り出し、二人に見せた。二人は興味深そうにそれをじっと見ている。

「竹がこんな風に使えるなんて驚きね」

「昔はこの水筒が主流だったけど、いつからか皮袋に水を入れるのが主流に変わったんだって。でも最近はまた竹の水筒が流行り始めてるらしいよ」

「そうなのねぇ。うちの分までありがとう。それじゃあ明日のお出かけでは、この水筒を使いましょうか」

「そうだね。こっちの方が便利そうだ」

そうして、明日のための準備は進んでいった。

次の日の朝。

「レオン、マリー、起きなさい」

いつもは鐘で目が覚めるのに、今日は母さんに起こされた。まだ外は暗い。

「母さん……？　起きるの早くない？」

「今日はおじいちゃんとおばあちゃんの家に行くって言ったでしょ。夜までに着かなかったら大変だから、早めに出発するのよ」

「そうなんだ……」

ふぁ～、まだ眠いな……

「顔洗って着替えて準備しなさい。ご飯ももうすぐできるから、早く食べちゃってね」

「はーい」

俺は眠い目を擦りながら起き上がった。マリーはまだ母さんに起こされている。

そのあとは、眠さでいつもよりゆっくりとした動きになりながらも、顔を洗ってご飯を食べて、荷物の確認もした。

流石にその頃になると目もぱっちりと覚めてきた。マリーも起きて準備を終えたようだ。

「よし、じゃあ行くわよ」

「ロアナ、家の鍵はちゃんと閉めてね」

「閉めたわよ。忘れ物もないわよね」
「大丈夫だよ。じゃあ行こうか」
「「うん！」」

俺たちはまだ日が上り始めたくらいの時間から、農地の方に向かって歩き出した。
森までは行ったことがあっても、それより外に行ったことがなかったので、かなりワクワクしていた！

しかし、その楽しみも長くは続かなかった。
はぁ～疲れた……いや、身体強化も使えるし体はどうにでもなるけど、ずっと同じ景色の中を歩くのは精神的に疲れてくるのだ。
最初は畑にも、畜産をやっている人が飼っている動物にも、テンションが上がっていた。
しかし一時間も経つとすぐに飽きてきて、そろそろお昼になるだろう今となっては、別の景色が見たいと思ってくる。歩いても歩いても同じ景色なので、進んでる感じがしないのだ。
それに日を避けられるようなところがほとんどないため、日差しも辛い。休憩したいなぁ～。
そう考えていた時、ちょうど母さんが言った。

「そろそろ休憩にしようかしら？　あそこに大きな木があるでしょ。あそこまで頑張りましょう」

少し遠くにかなりの大木が見える。日陰もあって休憩にはもってこいだろう。もしかしたら休憩所のような役割を果たしているのかもしれない。

「やっと休憩？　私疲れた～」
「マリー、もう少しだからな？　頑張れ」

マリーは今まで弱音を吐かずに歩いてきたが、流石に疲れたようだ。まだ六歳だからな。
マリーは自分の服くらいしか持ってないが、それでも大変だろう。午後は俺が持ってやるのもいいかもしれない。俺は身体強化を使えば少しの荷物くらい軽々持てるからな。

それからしばらく歩き、大木の下に着いた。

「じゃあお昼ご飯にしましょうか」

そういえば今日のお昼のこと何も考えてなかった……！
母さんと父さんが何か持ってきてくれたのか？

「お昼のこと忘れてたよ……何か持ってきてくれたの？」
「もちろんよ。食べなきゃ歩けないわ」
「でもダメになっちゃうから、そんなに凄いものはないからね」

母さんと父さん、ありがとう……！
お昼のこと考えたらめちゃくちゃお腹空いてきた。

「はい、パンと干し肉よ。一人一つだからね」

そう言って母さんが渡してくれたのは、いつも食べてる硬いパンと、塩漬けにして干された干し肉だった。

「ありがとう」

みんなで仲良く「いただきます」と言って食べ始めた。
俺は干し肉を初めて食べるので、少しワクワクしながらぱくっと

一口食べた……が食べられなかった。
硬っ！！　なんとなくサラミっぽいのかなーと思って食べたら、予想の倍は硬くて噛み切れなかった。
もう一度、今度は気合を入れて食べるとなんとか噛み切れた。もぐっもぐっ……味は結構いけるな……もう少し柔らかければ美味しいんだけど。

「結構硬いんだね」
「干し肉だから硬いのはしょうがないわ」

母さんと父さんはそう言いながらも結構普通に食べている。大人と子供では顎の強さが違うんだろう。
マリーはかなり苦戦しているようだ。

「母さん……私これ食べられない……」

マリーはしばらく干し肉と格闘していたが、流石に諦めたようだ。

「マリーはナイフで細かくして食べるといいかもしれないわね。少し貸しなさい」

母さんがマリーの干し肉を受け取って、ナイフで薄く切っていく。マリーはそれを受け取って食べているが、それなら問題なく食べられるようだ。
俺もナイフで切って食べようかな……いや、もしかしたら身体強化を顎にかければ食べられるんじゃ？
俺は面白いことを思いついたと思って、早速試してみた。すると、さっきまでは木でも食べてるのかっていうほど硬かった干し肉が、サクッと簡単に噛み切れる。
凄い……！　流石魔法だ！

そうしてお昼を終えて、俺たちはまた歩き出した。
マリーが結構疲れているようだったので、マリーの荷物は俺が持つことにした。これならなんとか歩き切れるだろう。マリーを抱き上げて運ぶには、流石に重いからな。

「そろそろ着くわよ。あそこに見えるのが母さんの実家で、あっちが父さんの実家よ」

やっと着くのか～！　もうそろそろ日が沈み始めている時間帯だ。予想より遠かったな、疲れた。
道の左側にあるのが母さんの実家で、右側にあるのが父さんの実家らしい。本当に近くにあるんだな。
俺たちは父さんの実家に泊まるようだ。そっちの方が余ってる部屋があるらしい。

父さんの実家の玄関前について、父さんがドアをコンコンと叩いた。

「ただいまー」

父さんがそう言った途端、中がバタバタっと騒がしくなり、しばらくするとドアが開いた。

「ジャン、やっと来たのね。それから、ロアナちゃんに、レオンとマリーね！　みんないらっしゃい」

ドアを開けてくれたのは、優しそうな四十代後半くらいのおばさんだった。

それから中に入ると、そこまで広くないリビングにたくさんの人がいて、机の上にはたくさんの料理が並んでいた。

「いらっしゃい！　待ってたのよ」

それからいろんな人と挨拶をして、ここにいる人が誰だかやっとわかった。

まずは父さんの方のおじいちゃんとおばあちゃん、それからおじさんとおばさんとその子供三人。

また、母さんの方のじいじとばあば、おじさんとおばさんに二人の子供。

総勢十三人が出迎えてくれた。なんで俺たちが来ることを知ってるのかと思ったが、ここに買い付けに来る商人に言付けを頼んでいたようだ。

その日はそのままみんなでたくさんの話をした。

おいしいご飯を食べて、お土産を渡して感激で泣かれて、パンケーキの美味しさに驚かれて、子供たちとも遊んで、楽しく幸せな夜の時間を過ごした。

前世では家族を大切にできなかった分、ここでの家族は大切にしよう、そう強く思った。

３１、祖父母の家（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします！

32、病気の牛と回復魔法

父さんの実家に泊まって、次の日の朝。俺は疲れからぐっすりと眠れたのか、日が上り始めてるくらいの時間に目が覚めた。しかし、マリーはまだ寝ているが、父さんと母さんの姿はない。

まだいつもなら寝てるくらいの時間なのに……

俺は不思議に思って、リビングのほうに行ってみると、みんなが集まって朝ごはんを食べているところだった。

「あら、レオン早いわね。今日は疲れてるだろうから、寝かせておこうと思ったんだけど、もう起きて大丈夫なの？」

「うん。ぐっすり寝たからもう眠くないよ」

「ならレオンも仕事の手伝いをするかい？」

「仕事の手伝い？」

「そうよ、母さんと父さんはお互いの実家で仕事を手伝う予定なの。レオンはどうする？」

それ楽しそう……！！　どんな感じで農業や畜産をしてるのか興味あるし、特に畜産を見てみたい！！

「俺もやりたい！　動物見てみたい！」

「なら私と一緒に行きましょう。早く準備してご飯食べちゃいなさい」

「はーい！」

俺がそう母さんと話していると、おじいちゃんが話しかけてきた。

「レオン、明日は畑も手伝ってくれよ？　ずっとあっちにいたら寂

しいからな」

おじいちゃんが畑を選ばなかったことをちょっと拗ねている。昨日も思ったけど、孫大好きな人たちだよな……頻繁に会えないからなのか？

「わかったよ！　明日は畑ね」

そんな話をしつつ、俺は準備をして、母さんと母さんの実家へ向かった。

「じいじ、ばあば、俺も手伝っていい？」

呼び名で区別をつけるため、母方の祖父母はじいじとばあば。父方の祖父母はおじいちゃんとおばあちゃん。そう呼び分けているらしい。

「おお、レオンか！　よく来たな」

じいじは大袈裟なくらい喜んでくれた。

「じゃあまずは、餌やりを手伝ってもらうかな」

「わかった！」

そうして連れて行かれた牛舎の牛は、驚くことに乳牛だった。この世界、乳牛なんていたんだ！

でも、乳牛って自然にいるものだっけ？　よくわからないけど、この世界って日本にいたものは結構いるんだよな。しかも何故か、現代日本にいたものだ。いつかその理由がわかるのだろうか？

じいじに聞いてみると、基本的には食べるための牛や豚、鳥を育ててるらしい。しかし一部の畜産家は、昔の偉い人から乳牛が与えられていて、それを今でも育てているそうだ。基本的にじいじは乳牛の世話で、おじさん夫婦が他の動物の世話をしているらしい。

牛乳は基本的にはバターなどに加工して、貴族家や豪商などが買うようだ。冬ならそのままの牛乳も売るらしいが、夏は保存が難しいので売れないらしい。確かに腐ったら大変だもんな。

製氷機ができたら、夏でも牛乳が売れそうだな。金持ちの貴族なら、牛乳を運ぶために製氷機を使うとかありそうだし。それでじいじたちの生活がもっと豊かになればいいな。

「レオン、こっちだ」

「はーい」

俺はまず牛たちに餌をやった。餌は牧草のようなものだったが、たくさん持つと結構重くてこれだけでもかなり重労働だ……

それが終わったら次は搾乳だ。最初はじいじに教えてもらいながら搾乳をする。

「レオン、まずは乳頭の付け根を親指と人差し指でぎゅっと抑えて、上から順番にゆびに力を入れていくんだ」

「こう？」

「そう、上手いぞ！」

じいじはそう言って俺の頭をガシガシと撫でてくれた。

そこからは俺も一人で黙々と乳を搾った。だんだん手が痛くなってきたが、なんとか搾り切れた。疲れるな……

身体強化は、使うと繊細な手加減が難しくなるから、牛が可哀想かと思って使わなかったのだ。

俺は最後まで搾り終わったと思って、う～ん！　と伸びながら立ち上がったが、そこで端にもう一頭いたことに気づいた。
あともう一頭いたのか……でもなんであいつだけ他のと少し離れてるんだ？

「じいじ、あの子も搾乳するの？」
「ああ、あいつか。あいつは今乳頭炎にかかってるから乳が出ないんだ。なんとか治してやろうと思って清潔にして世話してるんだが、なかなか治らなくてな」
「乳頭炎？」
「ああ、乳頭が赤く腫れて乳が出なくなる病気なんだ。乳頭をきれいに清潔にしてやると大体が治るんだが、あいつは長引いててな。可哀想だから早く治してやりたいんだがな」

清潔にすれば治ることが多いってことは、乳頭にばい菌とかウイルスが入って炎症を起こしてるってことだよな？
もしかして……回復魔法で治せるんじゃないか？
これは怪我じゃなくて病気だろうし、回復魔法が病気にも効果があるのかもわかるかも！
試してみたいな。

「じいじ、俺の魔法は回復属性なんだけど、魔法試してあげてもいい？　効果があるかわからないけど悪い影響はないと思うし……」
「それは別にいいが、回復属性は怪我にしか効かないんだろう？」
「でも、俺の魔力量は五だし、もしかしたらってこともあるから」
「それなら、やってみてくれ」

俺はじいじの了承を得て、その牛の元へ行った。
乳頭を見てみると、結構赤くなっていて痛そうだ。確か炎症は、体に入ってきたウイルスと戦ってるから起きるものだったよな。そ

れなら悪いウイルスを除去してあげればいいはずだ。
俺は乳頭に手をかざし、ばい菌やウイルスを除去するイメージをした。詳細なイメージなんて無理だからなんとなくだ。アニメ絵のイメージでも、イメージしないよりはマシだろう。
頭の中でばい菌を除去して炎症を抑えるイメージを固めて、魔法を使った。うっ……結構魔力を使うな。イメージが曖昧だからだろうな。でも治ったはずだ。
俺は、さっきまで赤く腫れ上がっていた乳頭を見てみた。すると他の牛と同じ状態に戻っていて、赤みも残っていない。成功だ！！
……ということは、病気も治せる可能性があるってことだな。やっぱり俺の予想通りだ。でも魔力をかなり使うから、もっと魔力量を増やさないとダメだな……まだまだ特訓しなきゃ。

そんな考察をしていると、じいじが焦れたように呼びかけてきた。

「レオン、どうだったんだ？」
「多分治ったと思うよ！」
「本当か！？」

じいじが慌てて牛の元にやってきて、乳頭を確認している。

「本当に治ってるな……レオン、凄いな！　さすが俺の孫だ！！」

じいじの喜び方が半端ない。これは周りに言いふらさないように言っといた方がいいかも……

「じいじ、このことは他の人には内緒だよ？　うちの牛も治してくれとか言われたら、大変だから」
「わ、わかった……」

じいじは渋々と言った感じだが了承してくれた。絶対周りの人に自慢して回る気だったな。まあ、孫の不利益になるようなことはやらなそうだから大丈夫だろう。

それからはまたお手伝いを再開した。次は牛舎の掃除だ。
まずは床に落ちているフンなどを取り除いて綺麗にし、牛が寝ているところもきれいに掃除をする。
それから牛の飲み水を入れてる桶を井戸に持っていき、綺麗に洗ってから水で満たす。すごく辛かった……何度水魔法を使いたいと思ったかわからない。
じいじとばあばは水属性と火属性らしいが、魔力量が少なく仕事で使えるほどではないらしい。

そこまで終わったところで、そろそろお昼になるところだったので、俺と母さんは一度父さんの実家に帰ることにした。お昼はそっちで食べることになっているようだ。

父さんの実家に帰ると、マリーと父さんがお昼の準備をしていた。料理は料理人に頼もうってことらしい。
お昼は新鮮な野菜と牛乳を使った、ミルクスープとパンだ。いつも同じ味のスープばかり食べてるから、ミルクスープはめちゃくちゃ美味しかった。

お昼を食べてからはまた母さんの実家に戻った。するとじいじが楽しそうに俺を呼ぶ。

「レオン、こっちに来い。これからバターを作るから一緒に作ろう」
「本当に!?　作る!」

バター作りなんて初めてだ。
そういえば、前にパンケーキを焼いた時バターがあって高級品じゃないのかって思ったけど、実家で作ってるなら手に入るのは当たり前だな。
ステーキの肉も原価高くないのかって思ってたけど、実家から安値で買ってるとかなのかもな。

「よし、じゃあ作ろうか」

バターの作り方は、牛乳から分離させた乳脂肪分を、回せる樽みたいなのに入れてひたすら回すというものだった。当然だけど、全部手作業だ。
牛乳から分離させるところはじいじがやってくれていたので、俺は回すだけだったがめちゃくちゃ大変だった。とにかく筋力と体力がないと、できないだろう。
あと、牛乳やバターを冷やす必要があるのか、井戸から冷たい水を汲んでくるのも頻繁で大変そうだった。

日本でどうやってバターを作ってたか知らないけど、多分機械だったんだろうなぁ……機械が欲しい！！

バターは結構長い時間をかけて、やっと完成した。

「よしっ、完成だ。このバターはレオンにあげるぞ。初めて作ったバターだからな」
「本当に！？　ありがとう！」
「バターはしばらく保存できるだろう。家に持って帰って料理にでも使いなさい」
「うん！　ありがと」

確かに、母さんもバターは常温で置いてて普通に使ってたし、常温でも長く持つのかもな。この世界の夏は日本ほど暑くないから、日陰に置いておけばしばらく大丈夫なのだろうか？　一応こっそりと氷で冷やしておこう。

難しいだろうけど、製氷機がどんどん平民にも行き渡って欲しいな。

「レオン、父さんの実家に帰るわよ」

え！？　もうそんな時間なの！？　午後ずっとバター作ってたってこと！？　それは疲れるよ。

「母さんちょっと待って！　じいじありがとう！！」

俺は慌ててじいじにお礼を言って、母さんを追いかけた。

３２、病気の牛と回復魔法（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします！

33、畑仕事と森

次の日の朝。
今日はおじいちゃんの畑仕事を手伝うことにした。畑では小麦と野菜を育てているみたいだ。小麦は秋に種を植えて夏の初め頃に収穫し、小麦を収穫した畑で夏野菜を育て、収穫したらまた小麦の種を植える、というサイクルらしい。
また、小麦の栽培時期に植えなければいけない野菜は、別の畑で育てているようだ。

今日はちょうど小麦の収穫をするようで、その手伝いをする。

「レオン、そこの鎌を持って小麦畑に来てくれ」
「はーい！」

この世界にはもちろん機械はないので、全て手作業で収穫だ。畑は結構広い……これは終わりが見えないな。
俺が畑に行くと、おばあちゃんやおじさんたち、父さんも収穫を始めていた。

「レオンはここから始めてくれ」
「わかったよ」

ザクッザクッザクッ……
ザクッザクッザクッ……

暫くは無言で麦を刈り続けた。ふぅ～、かなり疲れた。結構進んだかと思って後ろを振り返ると、全然進んでない！

やばい……このペースだといつになっても終わらなそうだ。そう思って周りを見てみると、おじいちゃんは俺の三倍は進んでいる。
なんで！？　なんかコツでもあるのか？
見ていると、一振りで刈れる麦の量が全然違う。鎌の使い方なのかな？
なんとか真似しようとしてみたが上手くいかない。俺は技術を身につけることは諦めて、せめて少しでも役に立てるように、休まず麦を刈り続けた。

それからしばらくして、お昼休憩になった。

「レオン、結構頑張ってたな。初めてにしては上出来だ」
「本当に！？　ありがとう」

お昼の席でおじいちゃんがそう褒めてくれた。俺は思ったよりも役に立っていないかもと思って落ち込んでいたので、なんだか嬉しい。自然と顔がニコニコしてしまう。

「ああ、レオンたちが手伝ってくれたおかげで仕事がかなり捗った！　午後は森にでも行くか？　まだ今の時期なら採れる山菜もあるはずだ」
「行きたい！」

いつも森の同じ場所にしか行ったことがなかったからな。別の森も楽しみだ！

「よし、じゃあ俺とレオンでたくさん山菜を採ってくるか」
「うん！」

そんな話をしていたら、一緒にお昼を食べていたマリーも森に行

きたがった。

「私も！　私も一緒に行きたい！」
「マリーも行きたいか、でも森はちょっと遠いぞ？」
「うん！　いつも森行ってるから大丈夫だよ！」
「そうか、じゃあ一緒に行くか」

俺とマリーとおじいちゃんは、お昼を食べきってから森に行く準備をした。

「じゃあ行ってくるね！」
「気をつけるんだよ。おじいちゃんに迷惑かけないようにね」

父さんがいつもと違う森に行くのを心配している。ちゃんと獣よけの鈴も持ったし大丈夫なのに、父さんは結構心配性なんだよな。

一時間近く歩くと森にたどり着いた。確かに少し遠い。
いつもの森とあまり変わらないようだったが、街の近くの森はたくさんの人が出入りしてるから、外縁部なら人が踏んだような道も結構あるが、ここにはほとんどなかった。
あまり人が入ってない森なんだろう。たくさん収穫できそうだ。

「よし、じゃあ俺の後にマリー、最後がレオンで行こう。何かあったらすぐ知らせるんだぞ」
「うん！」
「わかったよ」

そうして俺たちは森の中に入っていった。
森の中はいわば、食材の宝庫だった。木苺などの果物もたくさん

採れたし、タラの芽などの山菜も少し大きくなっていたが、まだギリギリ採れる時期だったようで結構取れた。

「お兄ちゃん！　大量だね！」

マリーはさっきからずっと嬉しそうにしている。いつもの森はたくさんの人が行くから、こんなに採取できないからな。確かにこれは楽しい、俺でもテンションが上がってくる。

「二人とも、この辺はいつも人が入っていかない場所だから、足場も悪いし獣もいるし気をつけるんだ。獣よけの鈴を持っていれば大丈夫だとは思うが、念の為だ」

「はーい！」

「気をつけるよ」

それからもしばらく採取をして、籠がいっぱいになってきたのでそろそろ戻ることにした。

「そろそろ戻ろうか」

「うん！　おじいちゃんいっぱい採れたね！」

「そうだな～」

おじいちゃんがマリーの可愛さにやられてデレデレしている。流石マリーだ。既におじいちゃんを骨抜きにしている。

まあ、あの可愛さならしょうがないよな。

そんな馬鹿なことを考えている時、どこからかガサガサっと音がした。

俺はハッとして辺りを警戒すると、茂みからまだ小さな子熊が現れた。一瞬可愛いと和んでしまったが、すぐに気持ちを引き締めた。

子熊がいるってことは親熊もいるってことだ。子熊が俺たちの近くにいることを知れば、すぐに襲ってくるかも知れない。

「おじいちゃん、ここはすぐに離れた方がいいかも」

「そうだな。親熊が来る前に早く行こう」

そう言って俺たちがこの場から足早に去ろうとしたその時、さらに奥の茂みから親熊が姿を現し、俺たちの姿を見た途端怒って突っ込んできた。

どうしよう……おじいちゃんとマリーを見てみると、おじいちゃんはマリーを抱き抱えて熊の直進から逃げている。

俺もとりあえず同じ方向に逃げた。

ただし熊は方向転換して、俺たちの方に突進してくる。このままだとまずいな。おじいちゃんはマリーを抱えてるからあまり早く動けないだろうし……

できれば俺の能力はバレないようにしたいんだけど……でも死んだら元も子もない。俺はナイフを手に、身体強化だけは使うことにした。

俺は突進してきている熊の側面まで走り、魔力を思いっきり右足に集めて、熊を横から右足で蹴り飛ばした。

流石に熊を遠くまで飛ばすのは無理だが、熊は体勢を崩して倒れたので、なんとか突進を止めることはできた。

しかし、熊はすぐに起きあがろうとしている。俺は起き上がる前に仕留めようと、ブーストをかけて熊に一瞬で近づき、腕にビルドアップをかけて熊の首を目掛けてナイフを振り下ろした。

しかし、ナイフの切れ味があまり良くなく、深くまで刃が入らない。なんだよこのナイフ！　使えない！
俺が動揺した一瞬の隙をつき、熊が腕を振るって俺を突き飛ばそうとしてきた。咄嗟に足にビルドアップをかけて熊を蹴って後ろに飛びのく。

危なっ！！　油断は禁物だ。

熊は俺の一撃で怒り狂ったようで、さっきよりも早いペースで俺に向かって突進してくる。俺はギリギリで突進を避け、その隙に熊の首をナイフで切りつけた。
よしっ！　今度はさっきよりも深く切れたようで、首からかなり出血している。

しかし熊はまだ俺に向かって突進しようしてくる。まだ死なないのか！？
俺はまたナイフを構えて熊と対峙した。
しかし、熊はその途中でズドンッと倒れ、そのまま動かなくなった。
死んだのか……？
恐る恐る近づきナイフで触ってみたが、一切動かない。死んでるな。

……誰にも怪我がなくてよかった。結構危なかったな。
やっぱり魔法だけじゃなくて、剣の腕とか体術も磨くべきな気がする。全属性を隠そうとすると、回復魔法かバレない程度の身体強化魔法しか使えないからな。
でもどうやって学ぶかが問題だ。
確か、王立学校では剣の授業もあるんだよな。とりあえず剣の授業は取って、真剣に授業を受けよう。

しかし獣よけの鈴をつけてたのに熊に会うって、なんて運が悪いんだ。
まあ、特殊なものじゃなくてただの鈴なんだろうから、万能でないのはしょうがないんだけど。

俺がそんなことを考えていると、おじいちゃんとマリーが俺の元へ来た。

「死んだのか……？」
「多分、二人とも怪我してない？」
「ああ、俺は大丈夫だ」
「マリーも平気だよ！　お兄ちゃん凄いね！　カッコ良かった！」

マリーが興奮してカッコ良かったと言ってくれる。
……頑張って良かった。

「それにしてもレオン、すごく強いんだな……」
「俺、剣の才能があるのかも」

俺はなんとか誤魔化そうと、頭をフル回転させながらおじいちゃんと話していた。
できる限り知られちゃいけないって言ってたからな。

「でもすごく慣れてるようじゃなかったか？」
「それは……前にも熊と会ったことがあるんだよ。あの時は死ぬかと思った。今回は慣れてたから冷静に対処できたんだ」
「そうなのか……？」

おじいちゃんがまだ納得できない顔をしている。なんとか話を逸

らさないと……

「それより森で熊と会うことってあるの？」

「いや、俺が知ってる限りじゃほぼないな。たまに熊の姿を見たとしても、襲ってくることはあまりないと聞く。レオンは熊と戦うのが二回目だなんて、運が相当悪いんじゃないか？」

前のは獣よけの鈴をつけてなくて、わざわざ森の奥に入り込んだからだけど……今回のは偶然だよな。

俺って運悪いのかも、気をつけよう。

「これからはもっと気をつけるよ。それよりこの熊どうする？」

「持って帰ることもできないし、このまま置いておくしかないな。俺は解体もできないんだ。レオンのじいじならできるだろうが、ここまでまた戻ってくるほど、熊の肉や毛皮が欲しいわけでもないからな」

「だよね。じゃあ他の獣が来ないうちに早く帰ろうよ」

俺が辺りを見回すと、子熊ももうここにはいなかった。他の親熊を連れてこられても困るからな。

「じゃあマリー帰ろうか。怖くなかった？」

「ちょっと怖かったけど、お兄ちゃんが倒してくれたからもう大丈夫！」

「マリーは偉いなぁ」

おじいちゃんがそう言いながらマリーの頭をガシガシと撫でている。

俺たちはいつもより足早に森を抜けて帰路についた。

そうそう獣には会わないと分かっていても、緊張していたようで、森から出たらホッとして体の力が抜けた。

３３、畑仕事と森（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします！

３４、山菜の天ぷらと帰宅

俺たちが森から帰った時には、既にあたりが薄暗くなっていた。熊との戦いで時間を消費したからだ。

「ただいまー」

「おかえりなさい！　遅かったじゃない」

俺が声をかけると、母さんが慌てて迎え入れてくれた。

みんな結構心配してくれていたようで、ホッとした顔をしている。

「何かあったの？」

「実は帰ろうとしたところで熊に襲われたんだ」

「熊！？　怪我はなかったの！？」

「うん、運良く倒せたから大丈夫だよ」

俺が熊に襲われたというと、みんなすごく驚いた顔をしていたが、怪我はないというとホッと息を吐いていた。

でもその後にどうやって熊なんかを倒したのか、質問攻めになる。

俺がしどろもどろに答えていると、おじいちゃんが助け舟を出してくれた。

「レオンは剣の才能があるみたいだ。ナイフで身軽に倒していた」

おじいちゃんがそういうと、みんなは俺を褒め称えて深く追求はされなかった。よかった～、おじいちゃんありがとう。

「まあ、怪我がなかったのならいいわ。それよりもずいぶんたくさ

ん採れたのね」
母さんが籠を見ながらそう言った。
「うん。山菜や木苺がたくさんあったんだ」
「私もいっぱい採ったの！！」
「凄いわねぇ。じゃあ、明日は山菜を使ったご飯にしましょうか」
「うん！」

そして次の日の夜ご飯。
俺たちが明日の朝帰るので、今日の夜ご飯はまた全員で集まって食べることになった。
昨日の山菜を使ったご飯だ。

母さんたちが午後の仕事を早く切り上げて、ご馳走を作るらしい。俺もご飯作りに加わることにした。
山菜でどうしても作りたいものがあるのだ。ズバリ、山菜の天ぷらだ！

この世界はあまり揚げ物がなく、あるとしても素揚げくらいらしい。しかしそれも油が勿体無いので、平民の間では揚げ物は一切見ない。
今回はご馳走だし、油を多めに使わせてくれるだろう！
「母さん、俺も一緒に作っていい？　昨日の山菜でレシピがあるんだ」
「本当に？　まあ、レオンのレシピは美味しいからいいわよ」
「ありがとう！」
「何が必要なの？」

確か天ぷらは、卵と小麦粉と水を混ぜたものに野菜をつけてあげればいいんだよな。多分……

「卵と小麦粉と水と油が欲しい！」

「それだけでいいの？　それならあると思うわ」

そう言って母さんが、おばあちゃんからこれらの材料をもらってくれた。

「まずは卵と小麦粉と水を混ぜるんだ」

「またそれなのね。レオンのレシピはいつも卵と小麦粉をドロドロにするわ。初めての人は絶対に反対するわよ。ドロドロにしないでパンにしてっていつも思うもの」

母さんはそう言いながらも準備を整えてくれた。

俺はまず卵を入れて溶く、そこに小麦粉を少し入れて混ぜ、水を入れて混ぜてみた。ちょっと水っぽい気がする……

少し小麦粉を足して、また混ぜる。

ドロドロしてるな。多分これで合ってるはず……

俺は少し不安になったが、何事も挑戦だと開き直った。

「母さん、フライパンに油を多めに入れて欲しいんだけどいい？」

「多めってどのくらい？」

「本当は小さい鍋に半分くらい油が欲しいんだけど、それは流石に無理だよね？」

「そんな勿体ない使い方できるわけないわ！」

「だよね。だから、フライパンに小指の先くらいの深さでいいんだけど、それもダメ？」

母さんはしばらく難しい顔で悩んでいたが、渋々了承してくれた。
「まあ、今日はご馳走だからいいわ」
「母さんありがとう！」
「後でおばあちゃんとおばさんにもお礼を言っとくのよ」
「はーい！」

そうしてフライパンに油を入れて温まったところで、さっきの液につけた山菜をフライパンに投入した。

実際の天ぷらより油が少ないから揚げ焼きみたいになってるけど、まあしょうがないよね。
俺はたくさんの山菜をどんどん揚げていった。
よし、これで最後だ。

「できた！　完成だよ！」

俺がそう言って周りを見ると、いつのまにか母さんの他におばあちゃんやばあば、おばさんまで集まっていた。
「珍しい料理ね」とか、「本当に美味しいのかしら」とか好き勝手なことを言っている。母さんが「レオンの料理は美味しいのよ」って弁護してくれてる。
母さんありがとう……

そうして夕食は出来上がった。山菜の天ぷらとステーキ、山菜の炒め物、スープ、パンというとても豪華な食卓だった。

「いただきます！」

みんなで手を合わせて食べ始める。
俺はまず山菜の天ぷらからだ。塩をかけてあるからそのままでいけるはずだ。
サクッ……美味い！！　天ぷらだ。この世界に来て初めて和食を食べた気がする！！
俺が美味しさに感動して山菜の天ぷらを味わっていると、みんなも興味があるのかチラチラと見ている。
最初に食べたのはマリーだ。
「う～ん！　これすごく美味しいよ！」
マリーが満面の笑みでそういうと、みんながこぞって食べ始める。
「美味い！」「これは凄いわ！」そんな声がたくさん聞こえてきて嬉しい。
やっぱり日本食は美味いよな。
俺は他の食事も全て味わって、大満足の夕食を終えた。

そして次の日の朝。
俺たちは自宅に帰ることになった。
「みんなまた来るねー！」
「レオン、絶対また来るんだぞ。またバター作ろうな」
「俺ともまた山に行こう」
「今度来たらもっとたくさんレシピを教えてね」
みんなが思い想いのことを口にして見送ってくれる。誰もが笑顔で優しい顔だ。

この人たちと家族でよかった……

俺は遠くに行くまでずっと手を振り続けていた。

「レオン、マリー、楽しかったかい？」

「うん！　すっごく楽しかったよ。また来たいな」

「私も！　絶対また来たい！」

「そうか、良かったよ。また来ようね」

「今度は滞在をもう少し伸ばしてもいいかも知れないわね」

本当に楽しかった、また来たいな。俺がこれから貴族の世界に入っていったとしても、ずっと大切にしたい家族だ。

帰りは楽しかった思い出で気持ちが高まっているからか、行きほど疲れを感じずに家までたどり着くことができた。

それでも街に着いた時はもう日が暮れかけている頃で、今日の夜ご飯は簡単なものにして早めに寝ようかと、みんなで話しながら家までの道を歩いていく。

やっと家が見えてきた。そう安堵した時、家の前に誰かがいることに気がついた。うちのドアの前に立ってるよな？　誰だろう？

「母さん、父さん、うちの前に誰かいない？」

「ほんとだね。誰だろう？」

俺たちが少し足早に近づくと、その人も俺たちに気づいたようでこちらを向いた。

「アンヌさん！」

そこにいたのは、タウンゼント公爵家メイドのアンヌさんだった。

「どうしたんですか？」

「大旦那様からレオン様への伝言をお持ちしました」

「もしかして何日も待っていてくれたとか……？」

もしそうだったらすごく申し訳ないことをしたと思いながら、恐る恐る尋ねた。

「いえ、本日の昼に伺ったのですが留守のようでしたので、日が沈むまではと、ここで待っていただけですので、半日ほどです」

それでも結構な時間じゃん！

「あの、そんなに待たせてすみません。どうぞ中に入ってください」

「いえ、もう公爵家に帰らないといけませんので。この手紙をお渡ししてすぐに失礼します」

「本当にすみません。ありがとうございます」

俺はこれから長期間留守にする時は、何かしら伝言を残しておこうと心に刻んだ。

「では、私はこれで失礼します」

「はい。ありがとうございました」

アンヌさんは本当に手紙を渡しただけで帰ってしまった。

「レオン？　今の人は誰なんだい？」

「公爵家のメイドさんなんだ。俺に手紙を持ってきてくれてたんだって」

「公爵家の方を待たせていたなんて……」

父さんと母さんが顔を青くして慌てている。俺は慌てて二人を安心させるために言った。

「いや、多分大丈夫だと思うから心配しないで！」

多分タウンゼント公爵家の方々はこんなことで怒らないと思う。でもこちらとしては申し訳ないからこれからは気をつけよう。

「そうなのか？　それならいいけど……」

「うん！　疲れたから家入ろう？」

「そうね。なんだか疲れたわ」

そうして俺たちはやっと家に辿り着いた。最後の最後でどっと疲れた気がする。

早く手紙読まなきゃ。そう思いながら家へと入った。

３４、山菜の天ぷらと帰宅（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします。

35、公爵家からの手紙

家に帰ってきた日は疲れていてすぐに寝てしまったので、手紙をまだ読んでいない。
次の日の午後、何が書いてあるのか少し怖いが手紙を開くことにした。

手紙は日本でいう時候の挨拶から始まり、かなり装飾された文言が並んでいる。
内容は大きく分けて二つだった。一つは秋の終わり頃に公爵領に行くので一緒に行かないかという誘い。もう一つは近いうちに公爵家に来てくれというものだ。

なんで俺が一緒に公爵領に行くんだ？　そもそも公爵領ってどこにあるんだろう。この世界の地図どころかこの国の地図も見たことがないから、位置関係が全くわからない。
でも、公爵家からの誘いはほぼ命令だよな。さすがに断れない。色々良くしてもらってるしな。それに王都の外に行ってみたかったんだ！
俺はこの世界で、王都の中心街と西の外れ、農業地区の三ヶ所しか行ったことがないからな。これは楽しみだ！

もう一つの近いうちに公爵家に来てくれっていうのは、どういうことだろ？　公爵領に行くのと関係があるのかな。まあ、これも行ってみればわかるか。
とりあえず早い方がいいだろうから、明日行ってみようかな。

俺は厨房に行き、母さんに聞いてみた。

「母さん、明日公爵家に行ってきても大丈夫？　できるだけ早くきて欲しいって手紙に書いてあったんだ」

「ええ、うちは大丈夫だから行ってきなさい。失礼のないようにするのよ」

「うん！」

俺と母さんがそんな話をしていると、父さんが少し悩むような仕草をしている。

「父さんどうしたの？　何か心配事でもある？」

俺がそう聞くと、父さんはゆっくりと首を横に振りながら答えた。

「違うんだ。心配事じゃないんだけど……レオンはこれからも家を空けることが増えるだろうし、学校に行ったら家を出るだろう？それなら従業員を雇った方がいいんじゃないかと思ったんだよ」

「確かにそうね。マリーが一人では大変だろうし、一人くらい雇ってもいいかもしれないわ」

「なんかごめんね……」

普通の子供なら親の仕事を手伝って、そのまま跡を継ぐんだろうからこんな悩みはなかったはずなのに……

俺がそう思って少し落ち込んでいると、母さんと父さんは慌てた様子になった。

「違うんだレオン！　お前が悪いとかそんなことはないんだよ。前は父さんと母さんの二人だけでお店をやってたんだから。でも最近

はお客さんが増えたし、従業員を雇うのは当たり前なんだ」
「そうよ。今まで手伝ってくれてありがとう」
そう言われると心が軽くなるな……でも新しい従業員の人が一人前になるまでは、しっかり働こう！
というか、従業員ってどうやって募集するんだろう？　張り紙をしても読めない人が多いだろうし……
「新しい従業員の人が一人前になるまでは頑張るよ！　それで、従業員ってどうやって募集するの？」
「働き手の募集は教会に出すのよ。教会に行って雇用条件や給金を伝えると、それを張り紙にして教会の掲示板に張ってくれるの。仕事を探してる人はそこに行って、仕事を探すわ。文字が読めない人には、教会の人が内容を読み上げてくれるから、とても便利なのよ」
そんな仕組みがあったのか。というか教会めちゃくちゃ万能。孤児院と病院併設の市役所みたいな感じだよな。
「便利なんだね。いい人が来るといいな！」
「そうね、働き者の子が来てくれると助かるわ」
「今度父さんが募集を出しに行ってくるよ。レオンはうちの仕事は気にせず、やりたいことをやっていいからね」
「うん！　父さん、母さん、ありがとう」
いい両親すぎる……絶対に親孝行する！！
そして次の日の朝。
俺は乗合馬車に乗り、タウンゼント公爵家に向かっている。服はこの間もらった服を着てきた。公爵領に行くならもう少し服を買っ

た方がいいかもしれない。

しばらく馬車に揺られていると、中心街に入る広場にたどり着いた。ここからは歩きだ。この間行った時に道は覚えたけれど、結構遠いから頑張って歩かないと。

歩き以外の移動手段があるといいよなぁ。例えば転移魔法とか飛行魔法とか。この世界にはそういう便利な魔法はないんだよな。

あとファンタジー世界の定番、アイテムボックス！　あれも欲しいよな。あったらめちゃくちゃ便利だ。

そんなことを考えながら歩いていると、タウンゼント公爵家の門前まで辿り着いた。

「すみません、リシャール様から手紙をもらって来たんですけど、これがその手紙です」

「確認するのでしばらくお待ちください」

門番さんはそういうと、手紙を持って門番の詰所のようなところに入っていった。しばらく待っていると戻ってきた。

「確認が取れましたのでお入りください。今迎えを呼んでいますので、もう少しお待ちください」

「はい、ありがとうございます」

門番さんに促されて敷地の中に入り少し待つと、アンヌさんが迎えに来てくれた。アンヌさんの隣には十代後半くらいに見える男性がいる。お屋敷の使用人の服を着てるから、新人さんとかなのかな？

「レオン様、わざわざお越しいただきありがとうございます。こちらにいるのは使用人のロジェでございます。レオン様がこちらのお

屋敷にいる際は、ロジェが身の回りの世話をいたします」
「ロジェです。よろしくお願いいたします」
「はい。こちらこそよろしくお願いします」

ロジェさんは無表情でにこりともせずに挨拶をしてきた。なんか感じ悪いな、平民の俺の世話なんて嫌だってことか？
俺がそんなことを考えながら微妙な表情でロジェさんを見つめていると、アンヌさんが少し苦笑いをして教えてくれた。

「ロジェは仕事に関してはとても優秀なのですが、真面目すぎるせいか愛想がなくて申し訳ありません。誰にでもこの調子なので、レオン様の下で働くのが嫌だというわけではないのです」
「そうなんですね……」

どうせなら愛想が良くて仲良くなれそうな人が良かったよ！　今の話を聞いてるはずなのに、表情は一切変わってないし。気難しそうだ……先が思いやられるな。

「では、私はこれで失礼いたします。ロジェ、レオン様をよろしくお願いします」
「かしこまりました。レオン様、お部屋にご案内いたします」

アンヌさんはロジェさんに俺を任すと、他の場所に行ってしまった。ロジェさんと二人きりはきついよ、アンヌさん戻ってきて～！
ロジェさんはご案内しますと言ったっきり、一言も喋らず淡々と歩いてるし。仲良くなる気ゼロですか！？

そうして気まずい時間を過ごして案内されたのは、以前も使った客室だった。

「レオン様。本日は夕食の席の後、リシャール様からお話があると思います。それまではご自由にしていただいて構いません。しかし、夕食の前に入浴とお召し替えだけは済ませていただきますので、そのつもりでお願いいたします」
「わかりました。昼食はどうすればいいのでしょうか？」
「昼食はこちらの部屋にご用意いたします。それから、私はこの屋敷の使用人でレオン様は客人ですので、敬語は必要ありません。呼ぶときも敬称なしでロジェとお呼びください」
「でも、ロジェさんの方が年上ですし、俺は平民ですから」
「いえ、それは関係ありません。どうぞ、敬語も敬称もなしでお願いいたします」

うっ……有無を言わさないような目で見られている。さっきまで無表情だったくせに。
年上を呼び捨てにするのとか全く慣れないんだよなぁ。でもこれからは必要なことかもしれないし、ここで慣れとくのもいいのかもしれないな。

「わかった。じゃあ、ロジェと呼ぶね」
「はい。これからよろしくお願いいたします」
「こちらこそよろしく。それでこれからなんだけど、銀行に行きたいんだけどいいかな？」
「かしこまりました。では、昼食後に馬車を手配しておきます」
「ありがとう」

そうして俺はロジェに給仕してもらい、まだ少し気まずい昼食を食べて、少し食休みをしてから銀行に向かって馬車に乗り込んだ。ロジェはついてきてくれるらしい。

銀行では財布のお金が少なくなってきていたので、また何かに使

えるように銀貨十枚を下ろした。これで口座残高は白金貨二十四枚と金貨三枚、日本円で二千四百三十万円ほどだ。
財布には銀貨十枚と銅貨八枚で十万八千円だ。
これで暫くは保つだろう。結構お金は持ってるが、これから何にお金がかかるかわからないので、できるだけ貯めておきたいのだ。
銀行に行った後は特に用もないので、また屋敷に戻ってきた。夕食に向けて準備をしなければいけない。

３５、公爵家からの手紙（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！！

36、公爵家での夕食と回復魔法

「レオン様、まずはご入浴からです」

ロジェは帰ってきて開口一番そう言った。全く効率しか考えてない。もうちょっと雑談とかないのかよと思いつつ風呂場に向かうと、ちょうど良い温度のお風呂が用意されていた。

ロジェが手配していたのだろうか。確かに仕事はできるのかもしれない。

ロジェに手伝ってもらい風呂に入り、用意されていた豪華な服に着替えた。

「レオン様、髪の毛をセットしますのでこちらにお座りください」

「うん、ロジェは仕事の手際は本当に良いな」

俺はこれから接することが増えるであろうロジェと仲良くなるため、まずは褒めてみることにした。

「仕事ですので当然です」

ロジェはいつものようにそっけなくそう言ったが、少しだけ口元が緩んでる気がする。初めての無表情以外の顔だ！　これからはストレートに褒めるのがいいのかもしれないな。

少しは仲良くやっていけそうでよかった。ずっと気まずい雰囲気じゃ俺も嫌だからな。

「できました。では食堂まで行きましょう」

そうして俺は食堂に向かった。食堂にはリシャール様とその妻カトリーヌ様、フレデリック様の三名がいた。フレデリック様の一つ上のお兄様である、ジュリアン様は今日はいないようだ。
そしてフレデリック様は騎士寮にいるはずなのに、また公爵家にいるみたいだ。フレデリック様も関係がある話なのかな？

「本日はお招きありがとうございます」
「こちらこそ呼び出してしまってすまないな。まずは夕食を楽しもう」

それからは他愛もない雑談をしながら、穏やかに時間が過ぎていった。
そして夕食もそろそろ終わりになる頃、リシャール様が徐に本題を話し始めた。

「今日レオン君を呼んだのは手紙にも書いたように、公爵領行きのことについて話したかったからなんだ。私の長男のクリストフは公爵位を継いでるんだが、クリストフの長男リュシアンがレオン君と同い年でね、今度王立学校に通うため王都の屋敷に越してくるんだ。そこでリュシアンを迎えに行くついでに、クリストフに会って、公爵領も見てきて欲しい。レオン君のことはすでに手紙で伝えているから心配はいらないよ」
「はい。公爵領に行くことについては構いません。王都以外も見てみたいと思っていましたから」

こんな誘い断れるわけないよな。クリストフ様達がいい人だといいな。まあ、この公爵家の人ならあまり心配はいらないかもしれないけど。

「それは良かった。では日程についてはあとで詳細を伝えよう」
「はい、よろしくお願いします」
「それからもう一つ話があるんだが、レオン君は貴族が着るような服を持ってないだろう？　明日仕立て屋が来ることになってるから、この機会に仕立ててておくといい」

それはありがたいけど……いくらかかるんだろう。公爵家に来る仕立て屋さんの服ってめちゃくちゃ高そう。
オーダーメイドってことだよな？　俺は中古服くらいでいいんだけど……

「それはありがたいんですが、あまりに高いものだと買えないのです……」
「ああ、金額の心配はいらない。全て公爵家が払うから安心してくれ」

え！？　逆にそんな高価なものを払ってもらう方が怖いんだけど……

「そんな、高価なものですし自分で払います。お金も多少は持っていますし」
「いいんだいいんだ、気にしないでくれ」

そう言われても気にするよ！　じゃあ何かしらお礼とかできないかな。
俺があげられるものといったら……魔法具なら作れるけど材料がないし、回復魔法とか？　怪我とか病気の人がいればお礼になるかな。

「せめて何かお礼をさせてください。回復魔法を使うとか、材料があれば魔法具も作ります」
「ちょっと待ってくれ、魔法具なんて作ったことがあるのか？　あれは全部、王立の魔法具工房で作られてるんだが」

あっ！！　これって内緒だったのか？　俺は慌てて口を押さえたが、もう遅い。
でも良く考えたらもう全属性のことも知られてるし、隠す必要ない気もするな。話しちゃってもいいか。
マルセルさんごめんなさい！　俺はマルセルさんに心の中で謝罪しながら、魔法具を作ってることを話すことにした。

「マルセルさんが近くで工房をやっていて、そこで作らせてもらってたんです。あの、マルセルさんは悪くないので罪になったりしないようにしてくれますか……？」
「マルセル殿か。確かフレデリックが会った時に一緒にいたと言っていたな。まさか……最近たくさん登録された魔法具は、レオン君が考えたものなのか！？」
「は、はい……でも私では登録できないので、マルセルさんの名前で登録してもらったんです」
「そうか……なんでこんなに発明できるのかと疑問に思ってたんだ。それに新技術のものばかりだったからな。一気に魔法具研究が進んだとも言われている。これから公開されてたくさん売り出される予定だ」

やっぱり疑問に思われてたのか！　というかそんな大事になってたのか！？
俺が考えてる以上に、俺は常識はずれなのかもしれない……ちょっと落ち込むな。
もっと便利な機械を知ってるから、どんな魔法具を考えても、凄

いものだとあまり思えないんだよな。

……気をつけよう。

「すまないな、少し驚いてしまって話が逸れた。レオン君、これからは魔法具を開発するのはとりあえずやめた方がいい。もし何か思いついたなら、レオン君が個人で使う分の魔石と魔鉄は手配しよう。しかし登録するのは、レオン君が王立学校を卒業するまでは待ってくれ」

「はい。マルセルさんにも言われたので、とりあえず魔法具開発はやめようと思ってます」

「それならいいんだ。それでお礼の話だったな」

「はい、でも魔法具がダメなら、回復魔法を使うくらいしかできないんですけど……」

でも俺なら、病気も治せるとは思うんだよな。まだ人間には試したことがないのが難点だけど。怪我も簡単なものしか治したことないし。

「まだ回復魔法はあまり試したことがないので、どこまで治せるかわからないんですが、この前病気の牛も治せたので、病気も治せる可能性はあります」

「何！？　それは本当か！？　君は本当に使徒様なんだな……」

最後の方が小声で何を言ってるかわからなかった。

「え？　なんて言いました？」

「いや、なんでもない。それより君に頼みたいことがある。アルバンを治してやってくれないか？」

リシャール様の話によると、執事のアルバンさんは六週間ほど前から体調を崩していて、どんどんと衰弱してしまっているらしい。
今はアルバンさんの息子さんと使用人達が、なんとか仕事を肩代わりしているそうだ。まだ引き継ぎもしてなかったので大変らしい。

「アルバンの家系は、何代もずっと執事として仕えてくれているんだ。俺はアルバン達も家族のように思っている。ダメでも構わないから、診てやってくれないか？」
「はい。力になれるかわかりませんが、なんとか頑張ってみます」
「ありがとう」

リシャール様はそう言って頭を下げた。公爵家のリシャール様に頭を下げられたら、絶対に失敗できない……
俺はかなりプレッシャーを感じながら、決意を込めて拳を握った。

その後、リシャール様は明日診てくれればいいと言ってくれたが、できるだけ早い方がいいだろうと思い、アルバンさんの元に案内してもらった。
リシャール様とフレデリック様も一緒に来るようだ。アルバンさんは普段使用人部屋に住んでいるが、お世話をしやすいようにとのことで、今は客室にいるらしい。

ロジェに先導されて歩くこと少し、一つの客室にたどり着いた。ここにアルバンさんがいるようだ。
ロジェが扉をコンコンと叩き、中に声をかけた。
「リシャール様、フレデリック様、レオン様がお越しです」
そう声をかけると、中で少しの時間バタバタと人が動いている気

配がして、ドアが開いた。部屋の中はかなり薬草を使っているのか、薬草臭さが漂ってくる。この世界は病気に対する治療法はあまり発展していないようだ。

「お待たせいたしました」

開けてくれたのはこの屋敷の使用人のようだった。交代でアルバンさんの世話をしているのだろうか。

俺たちが部屋の中に入ると、ベッドに寝ていたアルバンさんが、なんとか起きあがろうとしている。

前に見た時よりかなり痩せてやつれてしまっているようだ。

「大旦那様、フレデリック様、レオン様、見苦しい姿を申し訳ありません。ゴホッ、ゴホッゴホッ」

アルバンさんはなんとか起き上がり話し始めたが、声を出すと咽せてしまうようだ。

「アルバン、見苦しいなどとは思わない。それに無理に起き上がらなくても良いから寝ていろ」

「そうだ、体に負担のかかることはしない方がいい」

リシャール様とフレデリック様がそういうと、アルバンさんはまたベッドに横たわった。かなり辛いのだろう。

「レオン、どうだ。治せそうか？」

フレデリック様が小声でそう聞いてきた。俺も小声で答える。

「まだわかりません。ですが、やってみます」

俺はそういうと、アルバンさんのベッドの横までいった。

「アルバンさん、今から回復魔法を使います。これで治る保証はありませんが、試してみてもいいでしょうか？」

「はい。治る可能性が少しでもあるなら……お願いします」

「わかりました。楽にしていてください」

アルバンさんのおでこを触ってみるとかなり熱い。高熱が出ている。それから咳だ。さっきもかなり苦しそうだったし、今も呼吸自体が苦しそうだ。

俺は医学の知識なんてないから詳しいことはわからないけど、肺炎とか結核とかかな。とにかくウイルスが、肺に炎症を起こしてるってことだよな。

それなら上半身を中心に、体に害のあるウイルスや菌を消滅させるイメージでいいかな。あまり詳細なイメージはできないから魔力をかなり使うだろうけど、どんどん魔力量も増えてるからできることを祈りたい。

最近は、最初に魔法を使い始めた時の百倍以上にまで魔力が増えているんだ。できるはずだ。

深呼吸をして心を落ち着けて、気合を入れた。

よしっ！　俺はさっきのイメージを頭に浮かべながら、アルバンさんの体に向かって魔力を発動した。

そうするとアルバンさんの体が光に包まれる。

うぅ～、かなり魔力を持っていかれる……でもまだだ、まだウイルスを消し切れてない……

不思議なことに、回復魔法の光で身体を包むと、どこが悪いのかもなんとなくわかるし、どこまですれば完治したのかもなんとなく

わかるのだ。これも俺の特殊能力なのかもしれないな。
そんなことを考えながらずっと魔力を流し続ける。
まだだ……もう少し……終わった！

はぁ、はぁ、はぁ、俺はほとんど魔力が残っていなくて、なんとか立てる状態だった。ギリギリだった。
病気を治すにはもっと魔力が必要だな……

俺はなんとか息を整えて、アルバンさんに声をかけた。

「アルバンさん終わりました。体調はどうですか？」

アルバンさんは徐に起き上がると、立ち上がって部屋を歩き回り始めた。

「凄いです！！　あんなに苦しかった息も全く苦しくないですし、体も軽いです！　レオン様本当にありがとうございます。この御恩は一生忘れません。何かありましたら必ず私がお助けいたします」
「治ってよかったです。そんな大袈裟なことじゃないですよ」

アルバンさんは顔色もかなり良くなってるしもう大丈夫だろう。よかったぁ。
俺は心底安心して部屋を出ようと後ろを振り返ると、呆然としたリシャール様とフレデリック様がいた。
え？？　喜んでくれないんですか？

「お二人ともどうしたのですか？」
「あ、ああ、いや、本当に治ってしまって驚いているんだ……」
「ああ、レオン、君は本当に凄いね……」

二人はまだ呆然としている。俺はなんとか二人を現実に戻して、部屋から退出することにした。
ロジェも無表情が崩れてかなり驚いているようだったから、俺かなり規格外なことやらかしたのかも……まあ、今更だけど。

「レオン君、君が病気を治せることは絶対に秘密にするんだよ。これが知られたら君の身はかなり危険になる。それから、この能力については陛下にも相談する。もしかしたら治療の依頼が来るかもしれないが、もし依頼が来たら、回復魔法を使うのは嫌ではないかい？」

まあ、今まで治せなかった病気が治せるとなれば、権力者はこぞって俺を狙うよな……怖っ！
内緒にしとこう。俺の知り合いが病気になった時だけ、こっそり使うことにしよう。
あと陛下に相談って、陛下って王様だよな。なんか凄いことになってる……まあ、リシャール様達も公爵家の人々だから今更なんだけど……
依頼は、俺の力でたくさんの人が救えるのなら断る理由はないよな。王家や公爵家からの依頼ってことは、俺の身の安全も考えてくれるんだろうし。
いや、王家って信頼できるのか？　まあ、リシャール様が信頼してるなら大丈夫だと信じよう。

「この能力を言いふらすようなことはしません。依頼については、私の身の安全が保障されるならお受けしようと思います」
「本当か！　ありがとう！」
もしかしたら、王族とか偉い人で誰か病気の人がいるのかな……？

「では、今日はゆっくりと休んでくれ。明日は仕立て屋が来るから、たくさん注文しなさい。ロジェには最低何着注文するか伝えてあるから、遠慮しないように」
「はい。ありがとうございます」
「レオン、また今度な」
「はい。お休みなさい」

そこで一度話は終わりになり、俺たちはそれぞれの部屋へと戻った。

３６、公爵家での夕食と回復魔法（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします。

37、仕立て屋

次の日の朝。
俺はロジェに起こされて目覚めた。

「レオン様、本日は仕立て屋が来ますので、そろそろ起床の時間です」

う～ん……まだ眠い……
やっぱり昨日慣れない治癒をしたからかな。魔力はほとんど回復してるけど、身体はだるいな……

「レオン様、顔色が優れないようですが大丈夫でしょうか？」
「うん……ちょっと疲れてるだけだから大丈夫」

起きないとだよな。よしっ！
俺は気合を入れて起き上がり、目一杯伸びをして目を覚ました。

「ふぅ。もう大丈夫だよ」
「それではこちらをお使いください」

そう言ってロジェが、小さな水が入った桶と布を持ってきてくれた。
俺はそれで顔を洗い、服を着替えて支度を整えた。服は公爵家からの借り物だ。

「ではこれから朝食の用意をしますので、お席でお待ちください」

ロジェはそう言って、別の使用人が持ってきてくれたワゴンから朝食の用意を始めてくれる。
本当に無駄がないな……やっぱり仕事はできるんだなぁ。俺がそんなことを考えながらぼーっとしているうちに、朝食の用意はすぐに整ったようだ。

「ロジェありがとう。いただきます」

うん……美味しい。少し柔らかめのパン、ジャム、小さなオムレツ、紅茶、の朝ごはんだ。
この世界で料理が発展し始めててよかった。異世界で定番の不味い料理だったら、耐えられなかったな。
このジャム砂糖たっぷりで甘い。う～ん、幸せ。

そんな朝食を終えて、ソファで一息ついていると仕立て屋が公爵家に到着したようだ。

「ご案内してもよろしいですか？」
「うん。よろしくね」
「かしこまりました。レオン様はソファーに座ったままお待ちください。仕立て屋が来ても立ち上がる必要はありませんので、そのままでお願いします」
「わかったよ」

俺は平民だから身分は同じなのに、公爵家の客人が仕立て屋に頭を下げるのはダメだそうだ。
身分差は難しいな。いずれは覚えないといけないだろう。

しばらく待っていると仕立て屋が部屋まで来た。たくさんの布や

デザイン画のようなものを持っている。

「本日は当店をお呼びくださり、ありがとうございます。レオン様にピッタリの服を仕立てさせていただきます」

部屋に来た三人のうち、一番前にいた壮年の男性が挨拶をした。

「はい。こちらこそよろしくお願いします」

「では、まず採寸からさせていただいてもよろしいでしょうか？」

「では、こちらの衝立の奥でお願いいたします。レオン様こちらへ」

ロジェが衝立の向こうに促してくれるので、それに従う。俺はよくわからないので、ロジェに任せとけば間違いないだろう。

そして衝立の向こうに行くと、仕立て屋の若い男性とロジェの手で、手早く採寸された。

採寸が終わったら次はデザインを決める。俺と壮年の男性がソファーに向かい合って座った。

「本日は何着仕立てますか？」

うーん、俺は全然わからない。確かロジェが知ってるんだよな。

「ロジェ、何着仕立てればいいんだ？」

「はい。王立学校でも着られるように、下級貴族と同程度ほどの服を三着ほど。それから就寝の際に着る夜着を二着。また、王宮にも行けるような晴れ着を一着。この晴れ着も下級貴族程度のものでお願いします」

そんなにたくさん仕立てるのか！？　やっぱり貴族ってお金かか

りそう……今回お金を出してもらえて助かったかも。

「では、その六着を仕立てます」

「かしこまりました。ではまず、晴れ着からデザインをお決めしましょう」

そこからはデザイン画を見て、どのデザインがいいかを決めて、どの布がいいか、飾りはどれにするかなど、ひたすら決めていった。

俺は貴族の服なんてよくわからないので、ほとんどロジェにお任せだ。ロジェなら恥ずかしくない服を決めてくれるだろう。

全ての服を決めた時には、二時間くらい経過していた。

疲れた〜。俺的には服なんて着れればなんでもいい気がするけど、色々慣例があるみたいだ。

今回公爵家で服を作ってもらって本当によかった。もし自分で作ってたら、どんな服にすればいいのかわからなかっただろう。

「それでは仕立て終わりましたら、公爵家にお届けするので良いでしょうか？」

「はい。公爵家にお願いします」

「かしこまりました。本日はありがとうございました。これで失礼させていただきます」

そう言って仕立て屋の人達は屋敷から帰っていった。

本当に疲れたし、お腹空いた。

もう昼食の時間だよな。話は昨日で終わったからもう帰ってもいいんだろうけど、お昼食べさせてもらえないかな〜。

「ロジェ、俺のお昼って準備されてるのかな？」

「はい。レオン様が望む限りいつまでもこの屋敷にいていいと、大

旦那様からの伝言です」

いつまでもって、そんなに長居するつもりはないけどね、嫌でもあと半年くらいでここに住むようになるんだし。

まあこの屋敷の方がご飯美味しいし、お風呂もあって水洗トイレで、便利でいいんだけど。

でも、あと半年くらいしか一緒にいられないんだから、家族を大事にしないと。最初は本当の家族だと思えなかったけど、今では俺の中でもどんどん大事な存在になっている。なんか、家族のこと考えてたら家に帰りたくなってきたな。お昼食べたら早めに帰るか～。

「ロジェ、お昼だけもらってもいいかな？　お昼食べたら帰るよ」

「かしこまりました。では昼食の準備をしてきますので少々お待ちください」

そうして俺が昼食を食べて一息ついている時、部屋のドアがノックされた。

コンコン。

「アルバンでございます」

アルバンさんだ。体調がおかしいとかあったのかな！？

俺は慌てて、ロジェにドアを開けるように言った。

アルバンさんは、痩せた体型は戻っていないものの、以前見た時のようにハキハキと動いていた。顔色も良く、やつれた感じも少し消えている。とりあえず良かった。

「レオン様、お時間をいただきありがとうございます」

「いえ、俺は大丈夫ですが、何か体調に異変などありましたか？」

「いえ、そのようなことはありません。とても調子が良いのです。

今日はレオン様に再度お礼を言いにきました」

なんだ、体調がおかしいんじゃなければ良かった。回復魔法で人の病気を治すのは初めてだったからな。

「昨日は私の病気を治していただき、本当にありがとうございました。レオン様には一生感謝してもしきれません。本当は、私はもうダメだと思っていたのです。それがこんなに元気になりまた働けるなど、夢のようでございます。本当に感謝いたします」

アルバンさんはそう言って深く頭を下げた。目には涙が浮かんでいるようだった。

俺はもらい泣きしそうになり、慌てて涙を拭ってアルバンさんに頭を上げてもらった。

「アルバンさんを治すことができて良かったです。これから体調に異変などありましたら、遠慮なく言ってください」

「はい。本当にありがとうございました。今後、レオン様のお力に必ずなりますので、何かありましたら私にお声がけください」

「はい。ありがとうございます」

そうしてアルバンさんは退出していった。こんなに感謝される力を得られて良かった。もっとこの力を活用できるように練習しないとだな。

俺は清々しい気持ちで、公爵家から家に帰るために馬車に乗り込んだ。

３７、仕立て屋（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします！

閑話　王女様の病状（リシャール視点）

昨日の出来事には本当に驚いた。まさかあのような奇跡を目の当たりにできるとは……

アルバンはあと四週もつかどうかだと、薬師から聞いていたのだ。それをあの一瞬で治してしまうとは。

レオン様は絶対に使徒様で間違いない。あのような神にも等しい偉業を成し遂げるなんて……未だにこの目で見たものが信じられない。

私は昨日の出来事が衝撃的過ぎて、一睡もできなかった。いや、あのような光景を見たものは皆そうなるだろう。とにかく早く王宮に行き、陛下に知らせなくては。

もしかしたら、王女様の命も助かるかもしれない。

私は早めに起床し素早く準備をして、王宮に行こうとした時だった。部屋のドアがコンコンと叩かれた。

従者がドアを開けるとそこにいたのはアルバンだ。

「大旦那様、おはようございます。朝早くから申し訳ありません」

「いや、いいんだ。それより体調はどうなんだ？」

「本日はその報告に来た次第です。体調はすっかり良くなりまして、体力は落ちていますが今日からでも働ける程でございます。私のことを気にかけてくださり、本当にありがとうございました。これからも誠心誠意お勤めしたいと思います」

なんと……！　今日から働けるほどだと！？

昨日はあんなに衰弱していたのに……なんという効果だ。
だが確かに、痩せたのは戻っていないが、顔色も良く、これから普通に食事を取れればすぐに戻りそうだな。

「いや、礼ならレオン君に言ってくれ。私は何もしていない」
「かしこまりました」
「私はこれから、陛下に昨日のことを報告するのだが、もしかしたらアルバンに直接話を聞きたいと言われるかもしれない。そのように言われたら登城してもらうがいいか？」
「はい。私に否やはありません」
「わかった。ではそのつもりでいてくれ」

そのあと私は王宮に辿り着き、足早に陛下の執務室へと向かった。
「陛下、おはようございます。速やかにお耳に入れたいことがございます。人払いをお願いいたします」

陛下の執務室に入り、私はすぐにそう言った。
「リシャールがそこまで焦ってるのは久々に見るな。みんな、少し席を外してくれないか」

そうして人払いをされた部屋で、陛下と向かい合ってソファーに座っている。
「それでどうしたんだ？　そんなに慌てて」
「陛下、落ち着いて聞いてください。昨日屋敷にレオン様が来たのですが、レオン様は回復魔法で病気まで治せるようです」
「病気を！？　それは本当か！？」

陛下が思わず立ち上がって驚いている。そこまで驚くのも無理はない。今まで病気には薬草などで対処するしかなく、かかったら治らない病気も多かったのだ。

「陛下、本当です。当家の執事アルバンが、高熱と咳が続き衰弱し、薬師にはあと四週ほどの命だろうと言われていました。しかし昨日の夜、レオン様が回復魔法を使ったところ、完全に回復いたしました。まだ体力は戻っておりませんが、本日の朝にはもう働けると言っていたほどです」

「なっ……そんなことができるのか？」

疑問に思われるのも無理はない。私もこの目で見てなお信じきれていないのだから。

「疑問に思われるのも当然だと思います。しかしこの目でハッキリと確認いたしました」

「それじゃあ……マルティーヌの病気も治るかもしれないのか！？」

「私もそう考えて、陛下に報告に来た次第です。レオン様に確認したところ、依頼があれば魔法を使うのは構わないとのことでした」

「本当か！？　それで、レオン様はどこにいるんだ？　もしそんな力が知れ渡ったら、まだ身分もないレオン様にはとても危険だ」

「はい。レオン様に危険が迫るのを出来るだけ避けるために、一応無闇に魔法を使わないようにとは言っておきました。しかし、昨日の力を見るとレオン様は使徒様で間違いないでしょうから、私たちが心配せずとも自分で解決される気もします。しかし不意をつかれるなど、もしものこともあり得ますから、レオン様の警護はより厳重にしてあります」

「ああ、病気が治せるなどと知られたら、いつどこで誘拐されるかわからない。警護を厳重にし、レオン様の家族親族にも影をつけて

おいた方がいい」
「心得ております。それで、マルティーヌ様の容体はどうなのでしょうか？」

マルティーヌ様は、この国の第一王女でちょうどレオン様と同い年の姫様である。マルティーヌ様の双子の兄が第一王子であるステファン様だ。
マルティーヌ様は冬の頃から体調を崩されて、現在は起き上がるのも困難な状況だと聞いている。レオン様に治していただけるといいんだが……

「マルティーヌは高熱が続き、吐き気もひどく、最近は食事も満足に食べられないそうだ。薬師はもう長くないと……」

陛下が目に涙を浮かべながらそう話されている。
そんなに病状が進んでいたとは……もう少し猶予があると思っていたのだが、一刻も早くレオン様に見てもらうべきだろう。

「陛下、すぐにでもレオン様に見てもらってはどうでしょうか？」
「ああ、でもあの状態から回復させるのなんて可能なのだろうか……」
「陛下が弱気になってどうするのですか！　マルティーヌ様を励まさなければダメでしょう」

こんなに弱気になっている陛下はらしくない。それだけマルティーヌ様は危ない状況ということか。
これは、今日すぐにでもレオン様に来てもらった方がいいかもしれない。そう思っていると陛下が何かを決意した目で言った。
「そうだな。レオン様を王城に招待したい。今すぐ来ていただく事

はできるだろうか？」
「かしこまりました。すぐにでもレオン様に、来ていただきましょう。私が今から屋敷に行き、レオン様と共に戻って参ります」
「しかし、どうやって城に入れる？　できる限り目立たないようにしなければいけない。北宮殿に入ると嫌でも目立つ」

北宮殿は、王族の皆様の住居だ。
この王宮は、王の執務室や謁見の間などがある中央宮殿、役人の主な仕事場である東宮殿、騎士たちの主な仕事場である西宮殿、そして北宮殿に分かれている。
この中でも北宮殿は警備が厳しく、使用人もあまり入れ替わらないのでよそ者がいるとすぐにわかるのだ。

「できる限り目立たぬよう、私の従者見習いとして同行させましょう。マルティーヌさまのご病気が治れば、少なからず目立つことはしょうがありません。調べればレオン様にたどり着く者もいるでしょうが、私たちで守り抜きましょう」
「そうだな、ではそうしよう。まずはレオン様を連れてこの執務室に来てくれるか。それから私の客人ということで北宮殿に案内しよう」
「かしこまりました。では屋敷に戻りレオン様を連れてきます」
「ああ。リシャール、ありがとう」

陛下が私に頭を下げている。

「陛下、それはマルティーヌ様が治られた時に、レオン様にしてあげてください」
「そうだな。よろしく頼むよ」

私は足早に執務室を出て、屋敷に戻った。まだ昼を少し過ぎた頃だから、レオン様は屋敷にいるだろう。
そう思っていたのだが、屋敷に帰ってみるとレオン様は既に帰ったという。ロジェが公爵家の馬車で送っていったそうだ。

「レオン君が屋敷を出たのはいつ頃だ！？」
「まだそれほど経ってはいません」
「今すぐ追いかけて戻って来てもらってくれ、馬車ではなく馬に乗れる者が行くんだ。依頼があると伝えればわかるだろう」
「かしこまりました」

使用人がすぐにレオン様を追いかけてくれたようだ。できる限り早くしてくれよ。
でも街中ではあまりスピードは出せない。馬なら馬車より早いとは言っても、そこそこの時間はかかるだろう。
私は落ち着かない気持ちになりながら、屋敷でレオン様を待った。

閑話　王女様の病状（リシャール視点）（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします！

38、王宮

俺は今、公爵家から家に帰る途中だ。
乗合馬車で帰ろうと思ってたんだが、ロジェが馬車で送ってくれるというので、ありがたく送ってもらっている。

アルバンさんを治すことができて、とても清々しい気持ちだ。人を助けられる能力でよかった。
アルバンさんを治したときに、回復属性の光で身体を包み込むと、どこが悪いのかなんとなくわかるような感じがした。実際に治しきったタイミングもわかったのだ。
もしかしたら、あれは高性能なＣＴのような魔法なのかもしれない。今度家族にも試してみよう。自覚症状がないだけで病気があったら大変だからな。
でもかなり魔力を使うから、魔力量を増やすのはこれから必須だ。

そんなことを考えていると、外が少し騒がしい気がする。誰かが大声で話しているようだ。
どうしたんだ……？

「ロジェ、外が騒がしいけど大丈夫かな？」
「確認いたします」

ロジェがそう言ったとき、馬車が減速していき止まった。何かあったのかな？

「レオン様はこのまま座っていてください。確認してきますので」

そう言ってロジェは外に出ていってしまった。一人置いていかれるとなんだか不安だ……
でもここは街中だし、深刻な事態とかはないと思うんだけど。
不安に思いながら待っていると、しばらくして少し困惑した様子でロジェが帰ってきた。

「どうしたの？」
「タウンゼント公爵家からの使いで、レオン様にもう一度屋敷に来ていただきたいそうです。依頼があるとのことです」
依頼！？　それって回復魔法の依頼のことだよな。もしかしてアルバンさんに何かあったとか！？
それなら早く戻らなきゃ。

「多分、回復魔法の依頼だと思う。早く戻ろう」
「かしこまりました。御者に伝えてまいります」

俺をわざわざ呼び戻すってことはかなり危ない状態ってことなのか？　でもアルバンさんはすごく元気そうだったけどな……
アルバンさんじゃなくて他の人なのかもしれない。その人の病状が悪化したとか？
俺は不安に思いながら馬車に揺られて公爵家に戻った。

公爵家に戻ると、屋敷の前に別の豪華な馬車が止まっていて、リシャール様が待っていた。

「レオン君、呼び戻してしまってすまない」
「いえ、私は全然大丈夫なのですが、何かあったのでしょうか？」

「その話は移動しながらでもいいか？　あまり人に聞かれたくない話なんだ」
「かしこまりました」
「こっちの馬車に乗ってくれ」

俺とリシャール様は、豪華な方の馬車に乗り込んだ。従者も乗せないようで、二人きりだ。
そんなに重要な話なのか……
俺は馬車が動き出したところで、リシャール様に話しかけた。

「何かあったのですか？」
「ああ。この国の第一王女様、名をマルティーヌ様というんだが、冬ごろから体調を崩していてな。私は昨日、レオン君に診て貰えば、もしかしたら治るんじゃないかと思ったんだ。そこで陛下にレオン君のことを話したところ、マルティーヌ様の病状がかなり悪いらしく、一刻を争うらしい。そこで急遽、レオン君に来てもらうことにしたというわけだ」

第一王女様が体調を崩しているのか。それも一刻を争う状況となればこの慌てぶりも頷けるな。というかリシャール様って、陛下と直接話せる関係なのか？　結構高い役職とか？　まあ前公爵だからな……
そんな俺の疑問が伝わったのか、リシャール様は答えをくれた。

「レオン君には私の役職を話したことはなかったかな？　私はこの国の宰相なんだ。だから陛下とも直接話せるし、王族の方々とも面識がある」

リシャール様って宰相なの！？　予想以上にすごい人だったんだな……まあ、心強い味方だから俺にとってはいいことだけど。

というか、今はそんなことより王女様のことだ。

「レオン君。どうかマルティーヌ様を救ってほしい」

リシャール様はそう言って頭を下げた。

治してあげたいけど……治せるかはわからない。絶対治しますとは言えない……

でもこのまま何もしなければ絶対後悔する！　俺が人の生死を握ってるのは凄く怖いけど、治すために全力を尽くそう。

「はい。絶対とは言えませんが、全力を尽くします」

「本当か！？　本当にありがとう」

それから少しの間、無言で馬車に揺られると馬車は止まった。

「レオン君、君の存在をなるべく隠したいから、私の従者として振る舞ってくれ。まずは陛下の執務室に行くが、陛下は君のことを全て知っているから、心配しなくてもいい」

「わかりました」

陛下も俺のこと全て知ってるのか……まあ、リシャール様が話したってことだろうから、味方になってくれるのだろうし、これ以上心強い味方はいないな。

今はそんなことじゃなくて、治療に集中しよう。

俺はリシャール様の斜め後ろを歩き、ついていった。途中何人かすれ違ったが、みんなリシャール様をみると端に避けて少し頭を下げるので、俺に気づいた人はほぼいないと思う。

しばらく歩くと、豪華な扉にたどり着いた。護衛だろうか、騎士が二人扉の前にいる。

「開けてくれ」

リシャール様がそういうと、騎士はすぐに扉を開ける。多分リシャール様は顔パスなんだろうな。

部屋の中には、豪華な服を着た金髪に碧眼のカッコいい人がいた。この人が王様なのだろうか、まだ若いように見える。

ドアが完全に閉まって室内に三人だけになった。護衛の騎士とか従者はいないようだ。人払いされているんだろうか……緊張するな。

「陛下、レオンを連れてまいりました。レオン君、こちらがこの国の国王、アレクシス・ラースラシア様だ」

この国の王様はアレクシス様って言うんだな。覚えておこう。

「リシャールありがとう。君がレオンだな。リシャールから君のことは聞いている。どうか、どうかマルティーヌを治してほしい」

そう言ってアレクシス様は深く頭を下げた。この国の王様に頭を下げられているなんて、俺は落ち着かなく慌てながら、なんとか言葉を返した。

「あ、あの、頭を上げてください。陛下が頭を下げるなんて……それに、まだ治せたわけではありませんから」

「それもそうだな。お礼はマルティーヌが治ってからとしよう」

そう言われるとめちゃくちゃ緊張するんだけど！　これで治せないなんてことになったら……

いや！　そんなことは考えない。絶対治そう。

「では陛下、北宮殿に参りましょう」

「そうだな。ではついてきてくれ」

そうして俺たちは陛下に続いて、王宮の中を歩いた。流石に王宮の中を歩く時は護衛なしではダメなようで、二人の騎士がついてきている。

北宮殿って言ってたけど、王宮も何個かに分かれてるってことなのかな？　ちょっと聞きたいけど、今そんなことを聞ける雰囲気ではない。後で聞く機会もあるだろう。

王宮はかなり広いようで、結構進んだがまだ着かないらしい。それからもしばらく歩いていると、一つの扉の前にたどり着いた。また、扉の前には騎士が二人いる。

騎士は陛下が近づくと、ビシッと敬礼をした。

俺にも親しみのある、右手を顔の右上でビシッと揃えるあの敬礼だ。この世界はお辞儀といい、敬礼といい、日本と共通点がありすぎるよな。何か意図的なものがあるとしか思えない。

「扉を開けてくれ」

アレクシス様がそう言うと、騎士の方たちは扉を開けてくれた。俺についても何も聞かれなかった。多分、陛下が連れてきた人なら入れてくれるのだろう。

扉の向こうは部屋になっているのかと思ったが、長い渡り廊下に繋がっているようだ。そして扉の反対側にも騎士が二人いる。かなり厳重な警備だな。

この先が北宮殿なのかな？　もしかして北宮殿って王族の居住区とかなのか？

渡り廊下を渡り切ると、また扉があり騎士が開けてくれた。
その扉を潜りしばらく歩くと、かなり豪華な扉の前にたどり着いた。ここが目的地だろうか？
扉の前には女性騎士が二人いることからしても、王女様の部屋のようだ。

「陛下！　いかがされましたか？」
「マルティーヌの見舞いにリシャールが来てくれたんだ。扉を開けてくれ」
「はっ！」

女性騎士二人は扉を開けてくれた。俺は少し怪しいものを見るような目で見られたが、陛下が連れてきた人物なので止められることはないようだ。良かったぁ。

部屋の中に入ると、王女様のメイドさんが三名と護衛の騎士が二名いた。皆陛下を見て、端によって頭を下げている。

「皆、少しの間席を外してくれるか。お前たちもだ」

陛下が王女様のメイドさんと騎士、それから自分の騎士に向かって席を外すように言った。

「しかし……」

陛下の騎士の方々はすぐに廊下へ下がったが、王女様の騎士は少し難色を示しているようだ。

「あまり長い時間ではないから心配するな。この部屋の中に危険も

ないし大丈夫だ」
「かしこまりました……ですが、リシャール様の従者の方は下がらせないのですか？　知らない方がいる時に、マルティーヌ様の側を離れるのは不安なのですが」
「彼は大丈夫だ、私が保証しよう。マルティーヌと同い年だからな、少しはマルティーヌも安らぐかもしれない」
「そうですか……かしこまりました」

騎士の方々は渋々ながら了承してくれたようだ。皆が下がっていき、扉が閉められた。
この部屋には国王のアレクシス様、第一王女のマルティーヌ様、宰相のリシャール様、俺の四人だけになった。
なんか今更だけどすごいメンツだな……

部屋の奥にベッドがあり、王女様が寝ているようだ。アレクシス様はそちらに行き、置いてあった椅子に腰掛けた。

３８、王宮（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします！

39、王女様

「マルティーヌ、大丈夫か？」
「お、とう、さま……？」

アレクシス様が呼びかけると、微かに目を開けて掠れた声を出した。

マルティーヌ様は多分俺と同い年くらいだと思う。金髪に薄いピンクの瞳の女の子だ。今はかなり痩せてしまって、やつれているので分かりづらいが、多分凄く可愛い子だと思う。

俺と同い年ってことはまだ九歳くらいだろう。そんな歳で病気で苦しんでいるなんて……

息も荒いし、体を少し動かすのだけでも凄く辛そうだ。ご飯もあまり食べられないのだろう。ベッド近くのテーブルにパン粥のようなご飯があるが、ほとんど食べられていない。

部屋には薬草の匂いが充満しているので、薬師も最善を尽くしているのだろうが、あまり効果はないのだろう。

これはなんの病気だろう……とりあえず回復魔法で全身を覆って調べてみればわかるかもしれない。

「レオン君、娘を、マルティーヌを助けてあげられるか？」

アレクシス様は少し涙ぐんだ声でそう俺に問いかけてきた。

「はい。まだわかりませんが、全力を尽くします」
「うん。君が最後の希望だ。マルティーヌをよろしく頼む」

アレクシス様はそう言って俺に席を譲ってくれた。俺は椅子を少しベッドに近づけて、座った。

「マルティーヌ様、これから回復魔法をかけますので全身を楽にしていてください」

俺がそういうと、マルティーヌ様は少し頷いてくれたような気がする。

よしっ！　俺は気合を入れて回復魔法を使った。

マルティーヌ様の全身を回復魔法で覆うと、たくさんの悪い何かがあることがわかった。この反応はアルバンさんの時とは違うから、ウイルスではない気がする。悪い細胞がある感じかな。ということは癌とか？

それに……移動している？

悪い細胞は、血液の流れとともに移動しているような様子を見せているのだ。いや、血管に沿って悪い細胞があるのか？

よくわからないけど、これって血液の病気ってことだよな。うーん、俺には医学の知識がないからわからない。俺が医学部に行っていれば、もっとこの能力を役立てられたのに！

まあ、今は何の病気かを診断する必要はないんだ。とにかく治せばいい。俺はもう一度気合いを入れた。

とにかくこの悪い細胞を、全て取り除くか正常に戻せばいいんだよな。俺は全て正常に戻るようにイメージしながら、回復魔法をどんどん使っていった。

うっ……これかなり魔力を消費する……

やっぱりイメージが曖昧すぎるな。でも医学の勉強なんて今更で

きないし、しょうがないから魔力量で勝負だ。
魔力が足りるかギリギリだけど、体が小さいからなんとかなるかも……

俺は遠のきそうな意識を必死に保たせて、魔力を注いでいった。

どのくらいの時間が経ったかわからない。俺にとっては何時間にも思えたけど、実際は数分しか経っていないかもしれない。
やっと治療が終わった。確認しても、どこも悪いところはないようだ。
治せたんだ……良かったぁ。
そう思って安心したところで、目の前が暗くなって俺は意識を失った。

あれ？　ここどこだ？
目が覚めたらやけに豪華な天井が目に入った。俺、公爵家に泊まってたんだっけ……？

違う！　治療してそのまま意識を失ったんだ！
どうなったんだろう？　成功したのか？
俺は焦って勢いよく起き上がった。するとそこは、まだマルティーヌ様の部屋だった。
俺はソファーに寝かされていて、反対側のソファーにはアレクシス様とリシャール様が座っている。

「レオン君、気がついたのか？」
「突然意識を失ったから驚いた。多分魔力切れだろうと寝かせておいたんだが、大丈夫か？」

「は、はい。もう大丈夫です！　それよりもマルティーヌ様は？　治しきれたとは思うのですが……」
「マルティーヌはまだ寝ている。レオンが意識を失った後、少し話をしたらすぐに眠ってしまったんだ。ただ、体がすごく楽になったと言っていたから、多分治ったんじゃないかと思う」
それなら良かったぁ。俺はやっと緊張から解き放たれたような気分になった。
「レオン、本当にありがとう。君には感謝してもし足りない。何か欲しいものはないか？　私にできることならできる限り叶えよう」
「ありがとうございます」
そう咄嗟に言われても難しいな……なんだろう？　今一番欲しいものは……
魔法具が使われた便利な屋敷が欲しいけど、それはこれから自力でも手に入れられるものだからな。
やっぱり自分や家族を守るためにも、地位と力が欲しいよな。俺の能力はこの世界で異端みたいだし。
「あの……できれば自分と家族を守るために地位と力が欲しいです。俺の能力は貴族や他国からも狙われると聞いたので」
俺はそう言ってチラッとアレクシス様を見ると、かなり驚いたような顔をしていた。
もしかして望みすぎだろうか？　やっぱり相応のお金とかの方が良かったかな。
俺がワタワタと慌てながら、要求を変えようと口を開きかけた時、アレクシス様が言った。

「あまりにも子供らしくないことを言うものだから、少し驚いただけだ。そんなに慌てなくていい」

アレクシス様は苦笑しながらそう言った。

「君の願いはできる限り叶えよう。しかし貴族の地位は王立学校を卒業しないと与えられないから、それからになる。力の方は、レオンと家族には影の護衛をつけておくから心配しなくていい」

良かった！　それなら安心だ。自分はなんとでもなるけど、家族を人質に取られたらまずいと思ってたんだよな。

ひとまず安心だ。

「ありがとうございます！」

そこまで話した時、ベッドの方から音が聞こえてきた。

マルティーヌ様が起きたのだろうか？　陛下がすぐにマルティーヌ様の方に駆けていく。

「マルティーヌ、目が覚めたのかい？」

「お、と、……」

声が掠れてしまって上手く出せないようだ。陛下が水を飲ませてあげる。ゆっくりだけど水は飲めるみたいだな。

「お父様、ずっと苦しかったのに、苦しくなくなっているのです。気持ち悪くもないですし、体もだるくないです」

マルティーヌ様はそう言って不思議そうにしている。まだ自分の

力で起き上がれるほどには回復してないようだが、ご飯を食べられるようになればすぐに元に戻るだろう。本当に良かったな。

「マルティーヌ、本当に良かった……マルティーヌの病気はね、そこにいるレオンが治してくれたんだ」

「レオン……？」

二人の視線が俺に注がれた。

「マルティーヌ様、初めまして。レオンと申します」

「あなたが私の病気を治してくれましたの？」

「はい。回復魔法で治しました」

「本当にありがとう。私とても辛かったのです。今はとても楽になりました」

マルティーヌ様はそう言って微笑んだあと、少し不思議そうな顔になった。

「でも、回復魔法でってどういうことですか……？」

「マルティーヌ、レオンは特別な力を持っていて、回復魔法で病気を治すことができるんだ。ただこの力が知られると大変だから、内緒にできるか？」

マルティーヌ様はしばらく考え込んでいたが、やがて静かに頷いた。

「かしこまりました。レオンは命の恩人ですもの。レオンのことは内緒にいたします」

分かってくれて良かった。それにしても王女様だとやっぱり大人

っぽいんだな。お淑やかって感じだ。

「あの……レオンは病気を治せるってことですよね？」

「そうだけど、それがどうしたんだい？」

「それなら私に、回復魔法を教えてくださいませんか！」

マルティーヌ様が目をキラキラとさせて俺にそう頼んできた。え？　どういうこと？　なんで急にそんな話になったんだ？

というか、さっきまでのお淑やかな雰囲気が飛んでいったような……？

俺が混乱を極めていると、アレクシス様もなぜか同意している。

「それはいいかもしれないな。マルティーヌは魔力量が五で回復属性だ」

「はい！　私も病気の方々を治せるようになりたいですわ！」

「レオン、マルティーヌに魔法を教えてくれないか？」

え？　気づいたら俺がマルティーヌ様に魔法を教えることになってるんだけど！？

なんでこうなった……まあ、教えるのはいいんだけど、魔力量も足りないだろうしできるようになるとは限らないよな。というかできるようにならない可能性が高い。

「あの、教えるのはいいのですが、できるようにならない可能性も高いですよ？」

「ああ、それはわかっている。レオンは特殊だからな。ただ可能性があるなら教えてあげて欲しい。マルティーヌもやる気になっているからな」

マルティーヌ様の期待の眼差しがグサグサと突き刺さる。これは断れないよ……

「はい。それで良いならお教えします」

「本当に！？　レオン、ありがとう」

マルティーヌ様が満開の笑顔になった。

かっ……かわいい……

俺は思わずそう思ってしまったが、ブンブンと首を横に振って考えを振り払った。九歳の子供になんてことを考えてるんだ！　あれ？　でも俺も九歳だからいいのか……？

俺がそんなことを考えて慌てていると、アレクシス様とリシャール様の間で、今後の話が進んでいた。

「魔法を教えると言っても、レオンを王宮に連れてくるのは目立ちすぎます。どうするのですか？」

「うーん、そうだね……タウンゼント公爵家で教えるのはどうだ？」

「うちの屋敷でですか？」

「ああ、レオンがタウンゼント公爵家に行くのは大丈夫だろう？だからマルティーヌも公爵家に行かせればいい」

第一王女がそんなに頻繁に出かけられるのか？

「何か理由がないと、マルティーヌ様が頻繁にうちに来るのは違和感がありますが……」

「うーん、カトリーヌに魔法を教えてもらうという口実でいいんじゃないか？」

「確かにカトリーヌは、回復魔法では優秀ですが、普通はカトリーヌが王宮に出向きます……」

「そうか……じゃあカトリーヌの従者としてレオンを連れてきたらいい。身の回りの世話をする以外の従者なら男性もいるだろう？」
「そうですね。それなら良いでしょう」

なんか俺は話にも入れず、王宮に来ることが決まってしまったみたいだ……

まあ、いいんだけどね。

「ではレオン、カトリーヌの従者に扮して、マルティーヌに魔法を教えにきてくれるか？」
「かしこまりました」
「レオン、これからよろしくね」
「はい、マルティーヌ様」
「ではマルティーヌの体調が戻り次第、レオンには王宮に来てもらう。リシャールはカトリーヌにも話をしておいてくれ」
「はい。カトリーヌもマルティーヌ様に会えるとなれば喜ぶでしょう」

そこでこの話は一旦終わった。次はこれからどうするかについての話だ。

マルティーヌ様が病気だったことは一般的にはほとんど知られていないらしい。しかし、北宮殿で働く使用人や騎士はほとんどの者が知っているようだ。

マルティーヌ様付き以外の使用人は、薬師の治療の甲斐あって治ったと言えば大丈夫だろうが、マルティーヌ様付きの使用人と騎士、薬師は納得できないだろうとのことだ。

「私はマルティーヌ付きの使用人と騎士、薬師には、真実を告げて秘密にするよう言うしかないと思うのだが。皆信用できる者達だろう？」

「ですが、それだとどこからか漏れる可能性が高いと思われます。明確なことは言わず、マルティーヌ様には、明日起きたら急に治っていたと、言ってもらった方がいいのではないでしょうか。そうすれば、奇跡が起きたとなるだけでしょう。誰も回復魔法で病気が治せるとは考えません」
「そのようなものか。確かに我らは、レオンの能力を知っているからレオンが何かをしたと思うが、そうでない者はまさか回復魔法で病気が治せるとは考えないだろうな」

確かにこれで明日の朝、マルティーヌ様が治っていたからといって、リシャール様の従者の子供が治したとは誰も考えないだろうな。

「ではマルティーヌ、明日の朝までは体調が治ってないふりをしてくれるか？　そして明日の朝になったら、寝て起きたら体調が良くなってましたと言うんだ」
「はい。私はそれでいいですが、私の病気はいつ死んでもおかしくないことくらい誰でもわかるような状況でしたわ。それが一晩で治るなんておかしいと思います」
「確かにそうだが、おかしいとは思っても誰が治したかまではわからないだろう。レオンのことを隠すのは王立学校を卒業するまでだから、時間稼ぎができればいいんだ」
「そうなのですね。では私は明日の朝に、寝て起きたら治ったことにいたします」
「ああ、頼んだ。また明日部屋に来る」

アレクシス様はそう言って、マルティーヌ様の頭を優しく撫でた。

「じゃあ、そろそろ退出しよう。マルティーヌまた後で」
「マルティーヌ様、良くなられて本当に良かったです。またお元気な姿を見せてください」

「マルティーヌ様、またお会いできる時に、お元気な姿を拝見できることを心待ちにしています」

そう声をかけて俺たち三人は部屋を出た。

３９、王女様（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします！

閑話　奇跡（アレクシス視点）

私は先ほど見た光景が、夢じゃないかと未だ疑ってしまう。
私の娘マルティーヌは、冬ごろに体調を崩し、後何日保つかわからないとまで言われていた。
実際部屋に行った時のマルティーヌは、命の灯火がすぐにでも消えてしまいそうなほど衰弱していた。

しかし、レオン様が回復魔法を使ってマルティーヌの全身が優しい光に包まれると、どんどんマルティーヌの顔色が良くなっていく。
数分後、光が消えた時には呼吸は安定し、明らかに衰弱した様子がなくなったのだ。確かに痩せてしまっているのはそのままなのだが、生気が戻ったとでも言うのだろうか。

そのまま少しの間眠った後は、元気に私たちと会話ができるほどまで回復していた。奇跡だとしか思えない。
リシャールに話を聞いた時は半信半疑だった。しかし、このまま助からないのならば、最後に賭けてみようと思ってレオン様に頼むことにしたのだ。
レオン様には感謝してもしきれない。あれだけの力があるとなれば必ず争いの種になるだろう。私は必ずレオン様の助けになろう。

その日は最近あまり眠れていなかったのと、マルティーヌが助かった安堵でぐっすりと眠れた。
朝方目が覚めたが、まだマルティーヌが治ったことは伝わってきていない。そろそろだろうから、私も知らなかったフリをしなければならないな。

ベッドの上で寝たふりをしていると、しばらくして外が慌ただしくなり、私の従者が足早にベッドに近づいてきた。

「陛下、まだ少し早いですが至急の連絡がございます」
「なんだ？」
「マルティーヌ様のご病気が治られたとのことです！」
「なんだと！？」

私は慌てたように飛び起きた。不自然ではないだろうか……？

「それは本当なのか！？」
「はい。すぐにお召し替えをしてマルティーヌ様の部屋へ行かれますか？」
「ああ、すぐに頼む」
「かしこまりました」

バレてないみたいだ、良かった。私は意外と演技力があるのかもしれない。

従者に素早く着替えさせてもらいマルティーヌの部屋に行くと、ちょうど私の妻で第一王妃のエリザベートと、マルティーヌの双子の兄で第一王子のステファンが来たところだった。

「エリザベート、ステファン、マルティーヌが治ったと言うのは本当か！？」
「私もさっき聞いたところなので存じませんわ」
「父上、マルティーヌに会えばわかることです」
「そうだな」

そう話をして、マルティーヌの部屋に入るとベッドに体を起こしているマルティーヌがいた。
一晩寝たことで、より顔色が良くなっている。本当に良かった。

「マルティーヌ、治ったと言うのは本当なのか？」
「お父様、お母様、お兄様。朝起きたら体が楽になっていたのです。もう大丈夫ですわ」
「マルティーヌ！　本当なの！？　もう辛くないの？」
「はい、お母様」
「マルティーヌ……良かったわ……」

エリザベートはそう言って泣き出してしまった。ステファンも涙ぐんでいるようだ。
本当に良かった……レオン様がいなければ、マルティーヌを失った悲しみの涙になるところだったのだ。それを嬉し涙に変えることができたのはレオン様のおかげだ……

私がそう思って安心感に顔を緩ませていると、エリザベートがこちらをジーッと見ていた。何かを疑っているような顔だ。
なんだろうか？　私は何かおかしな言動をしてしまったのだろうか？　上手く演じられたと思っていたんだが。

「アレクシス、この後話がありますわ。朝食を共にいたしましょう。ステファンもよ」
「かしこまりました。母上」
「それは別にいいが……何の話だ？」
「それは朝食の時に」

エリザベートはそう言ったっきり、またマルティーヌの方に視線を戻して色々と話している。

まさか昨日のことがバレてしまったのだろうか……
まあ、エリザベートやステファンには、いずれレオン様のことは話そうと思っていたからいいんだが、自分の態度でバレたのはなんだか釈然としない。
私はこれでも一国の王だ。心の中で何を思っていてもそれを表には出さないようにできるし、秘密にすることも慣れているのだが……

それからしばらくマルティーヌと話をして、私たち三人は部屋を退出した。
部屋を出ると、さっきまで笑顔で嬉しそうにしていたエリザベートが、急に私を追及するような顔になった。

「では、あなたの部屋で朝食にいたしましょうか」
「……ああ、では私の部屋へ行こうか」

私は内心では少し動揺しながらも、それを顔には出さないようにし、にこやかな笑顔で二人を部屋へと誘った。

部屋に着くと、すぐに使用人に命じて朝食の準備をさせる。なんだか雰囲気が気まずいので早く説明してしまいたかったのだ。
エリザベートとステファンは口も硬いし、これから協力してもらうこともあるだろうから、話しておいたほうがいい。特にこれからマルティーヌはレオン様と関わるのだからな。

朝食の準備が終わると使用人は全員下がらせた。レオン様のことは機密事項だ。できる限り知る人間は少ない方がいい。

「まずは朝食を食べようか？」
「ええ、食べた後は私の質問に答えてもらいますからね」

「わかってる」

そうして少し気まずい朝食を終えて、そのまま本題に入る。

「それで、エリザベートは私に何を聞きたいのだ？」

「マルティーヌのことです。マルティーヌはもう長くないと薬師から聞いていました。あれほど急に治るなんてあり得ませんわ」

「それを、なぜ私に聞くんだ？」

「あなたは昨日の夜、リシャール様とマルティーヌの部屋を訪れたそうじゃないですか。その次の日にマルティーヌの病気が治るなんてタイミングが良すぎますわ。それに、マルティーヌの部屋でのあなたの態度、何か秘密がある時のものでしたもの。他の方は騙せても私は騙せません。さあ、あなたの知っていることを私にも説明して頂戴」

さすがエリザベートだ。さっきの態度は完璧だったはずなのに気付くなんて。

「全て話す……マルティーヌが治った理由は、病気を治せる回復魔法使いに頼んだからだ。昨日リシャールの従者としてついてきていた、レオンという名の少年がその魔法使いだ」

「まさか！　本当にそのような魔法を使える者が存在するのですか？」

「ああ、話すと長くなるんだが……」

そこからはエリザベートとステファンに、レオン様の存在を初めて知った時からの顛末を、隠さず全て話した。

「まさか……全属性だなんて……レオン様は使徒様なのですね」

「いや、本人は使徒ではないと言っている。私とリシャールは、十

中八九レオン様は使徒様だと思っているが、本人が否定している以上、あまり言わない方がいいだろう。何かの理由があって身分を明かせないのかもしれないからな」
「それもそうですわね。私も気をつけます」

エリザベートは深く頷いている。理解してくれたようで良かった。

「ああ、それからレオン様の身は、能力が知られれば狙われる危険もあり、非常に危ない。レオン様のことについては他言無用だ」
「かしこまりました」
「ステファンも誰にも話してはいけないよ」
「分かっています。ですがレオン様は、私の同級生になるのですよね？」
「ああ、そうだよ」
「それならば、レオン様と関わることも多いでしょうから、レオン様の能力を私が知っていることは、本人には話してもいいですか？」

確かにそうだな。本人にまで隠す必要はないだろう。

「それは構わない。今度レオン様が王宮に来た時に、私からも言っておこう」
「よろしくお願いします」
「では、レオン様のことについてはこれぐらいでいいか？」
「いえ、私も是非レオン様にお礼を言いたいですわ。マルティーヌの命の恩人ですもの。レオン様と会う機会を作ってくださいませんか？」
「私も会ってみたいです！」

うーーん、今度マルティーヌに魔法を教えに来る時に、少し会う機会を設ければいいか。

「じゃあ、今度レオン様がマルティーヌに魔法を教えに来る時に、授業の後で会う機会を設けよう」
「ありがとうございます！　レオン様に何かお礼の品を用意しなくては。あなたはレオン様の欲しいものなどを知っていますか？」
「いや、知らないな。無難に装飾品や服でいいんじゃないか？」
「それもそうですわね。レオン様に相応しいものを用意しますわ」

エリザベートがすごく張り切っているな……凄いものを贈りそうだが、マルティーヌの命の恩人なんだ。どんなに高価なものを贈ったって安いものだろう。

「レオン様が来る日が決まったら、また連絡する」
「楽しみにしていますわ」
「私も楽しみです」

家族の笑顔が守られて良かった。レオン様には本当に感謝しなければいけないな。

閑話　奇跡（アレクシス視点）（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします。

４０、魔法の授業

俺は今、カトリーヌ様と公爵家の馬車で王宮に向かっている。
マルティーヌ様の病気を治してから数週間ほど経った。マルティーヌ様は順調に回復され、魔法の授業をしても差し支えないほどになったので、俺が呼ばれたのだ。

「私も一緒に行けるなんて本当に光栄だわ。私にも回復魔法の指導をしてくれるのでしょう？」
「カトリーヌ様の為になるかわかりませんが、指導させていただきます」
「謙遜することないわよ、マルティーヌ様のご病気もアルバンの病気も治してしまったんですもの。私なんかよりよほど凄い使い手よ。私、今日をとても楽しみにしていたのですわ」
「そう言っていただけて嬉しいです。ありがとうございます……」

マルティーヌ様を治したあの日、リシャール様と公爵家に帰り、カトリーヌ様に今までの流れを説明した。
そうするとカトリーヌ様は、病気が治ったことにとても喜ばれて、また、自分も一緒に回復魔法を学べることを殊の外喜んでおられるのだ。
リシャール様が言うには、新しいことが大好きな好奇心旺盛な性格らしい。
確かにカトリーヌ様の視線が、たまに獲物を狙うような目になっていることがあるんだよな。できれば距離を取りたくなる……まあ、悪い人ではないんだけど……

そんな少し気まずい時間を耐えていると、王宮にたどり着いた。どこで授業を行うのだろうか？

カトリーヌ様とともに案内されて進んでいくと、一つの応接室に着いた。中にはアレクシス様とマルティーヌ様がいる。

「陛下、王女殿下、お久しぶりでございます」

「ああ、そこまで改まらなくとも良い。久しぶりだな、カトリーヌ」

「カトリーヌ様、お久しぶりです」

カトリーヌ様が挨拶をしているが、俺は従者ってことになってるから喋っちゃダメだ。カトリーヌ様の後ろに立って静かに待つ。

しばらく挨拶と他愛もない話をして、一度話が途切れた。そこで陛下が人払いをする。

「では皆下がってくれ。カトリーヌの教える技術は門外不出なのだ。皆に聞かれないようにとのことだ」

「その通りですわ陛下。ですが、私の従者は魔法を教えるのに必要ですから、残してくださると助かります」

「そうか、ではカトリーヌの従者以外は下がるんだ」

そう言うと皆納得したのか下がっていく。そうしてドアが閉められて部屋には四人だけになった。

「レオン、ソファーに座っていい」

「ありがとうございます。失礼いたします」

俺は少し緊張して、ソファーに座った。

「最初だから私もここへ来たが、次からはマルティーヌだけだからな。マルティーヌが人払いをするんだ。今回理由を説明したから、次からはスムーズに人払いできるだろう」
「はい。ありがとうございます、お父様」

マルティーヌ様は体調が完全によくなられたようで、少しふっくらされてとても可愛らしくなっている。
豪奢なふわふわとした金髪に、キラキラとした薄いピンクの瞳。お人形のような可愛さだ。いや、人間らしさが加わってお人形より可愛いかもしれない。
笑顔になると破壊力が十倍だ……

そんな馬鹿なことを考えていると、アレクシス様に呼びかけられた。俺は少しビクッとしながらも、考えていたことを悟られないように、平然とアレクシス様の方を向いた。
二人がけのソファーに向かい合って座っていて、俺の前にマルティーヌ様、カトリーヌ様の前にアレクシス様が座っている。

「レオン、来てくれてありがとう。これからは一週間に一度ほどお願いしたいが大丈夫か？　カトリーヌも大丈夫だろうか？」
「ええ、私はいつでも来られますわ」
「はい、私もいつでも大丈夫です」
「ではこれからは週に一度、回復の日に来てもらうので良いか？」
「かしこまりました」

えーっと確かこの国は一週間が五日で、火の日、水の日、風の日、土の日、回復の日を繰り返してるんだったよね。
そういえば、まだ一年が何日か何ヶ月かって知らないな。話に出て来たこともない。レオンの記憶や年齢があることから一年という区切りがあるのはわかるけど、それ以上細かいことはわからない。

ずっと何週間や何日で話してたんだよな。まあ、そのうち知る機会もあるだろう。
とりあえずは、一週間をしっかりと覚えておこう。
「それでは早速今日の授業を始めてもらおう。今日は私も聞かせてもらう」
「はい、では授業を始めさせていただきます。まず皆さんは、イメージで魔力の消費量が抑えられることをご存知でしょうか？」
「イメージで、ですか？　確かにイメージをしっかりしないと魔法が発動しないと教えられますが、イメージで消費魔力量が減るのは聞いたことがありませんわ」
マルティーヌ様が不思議そうに首を傾げている。
「私もそんな話は聞いたことがないな」
国王であるアレクシス様が知らないとなると、知られていないってことだな。
この世界では、発現する現象をイメージして魔法を使うことはあっても、なぜその現象が発現するのかについてはイメージしない。後者をイメージすると消費魔力量が減るのだ。
まずはそこからだな。
「マルティーヌ様は、回復属性の魔法を使って傷を治されますよね？　ではなぜ傷が治るのかご存知ですか？」
「何故ですか？　それは魔法を使ったからです」
マルティーヌ様が当然のことのように言っている。
この世界は魔法が存在してそれがすごく便利なものだから、なぜその現象が起こるかの理由を深く考えた人がいないのだろう。理由

は魔法だからで全て完結してしまうのだ。

「ですが回復魔法を使わなくても、いずれ傷は治ります。それは何故だか考えたことはありますか？」

「回復魔法を使わなくても傷が治るのですか！？」

え！？　そこから！？

確かに貴族だと、傷ができてもすぐにお抱えの魔法使いが治してしまうので、自然治癒を見たことがない可能性もある……

貴族の使用人も見苦しくないように、見えるところの傷はすぐに治してしまいそうだ。

平民は軽い怪我くらいでは治癒院に行かないから、自然治癒も普通なんだけど……

でも平民はそれを知っていても、研究するような余裕がないし、その原因を突き止めようなどと考える人もいないのだろうな。そもそも教育をほぼ受けていないから。

「回復魔法を使わなくても傷は治ります。回復魔法はその手助けをしているようなものなのです」

「そうなのですね……」

「はい。そして、自然治癒する仕組みを理解し、回復魔法を使う時にそれをイメージすることで、消費魔力量が抑えられます」

そこからは俺が知ってる限りの自然治癒の仕組みを説明した。人体の仕組みもほぼ分かってなかったので、説明するのはとても大変だったが、なんとか理解してもらえたと思う。俺の拙い知識だが、何も知らない状態だった今までに比べたら、遥かにマシになっただろう。

「なんとなくわかりましたわ！」
「私も理解できました。実際にやってみたいわ」
ふぅ～。やっと理解してもらえた……一時間以上かかったよ。
今度は実践だけど、貴族や王族の皆さんに傷をつけるわけにはいかないし、自分の指でも切るしかないか……
「何か刃物があれば、指を少し切って試してみるのがいいと思うのですが、持っている方はいますか？」
「ああ、私が持っている」
そう言ってアレクシス様は、上着の裏から小さめのナイフを出して貸してくれた。
これってもしもの時のための暗器っていうやつ？
怖っ……気にしないのが一番だな……
俺は少し恐々とそのナイフを受け取り、自分の指を切った。
「ではマルティーヌ様からやってみてください。イメージをしっかりと固めてくださいね」
「はい！」
マルティーヌ様が魔法を使うと、俺の指先は少しだけ光り、光が消えた時には傷は綺麗さっぱりなくなっていた。
「魔力の消費量はどうでしたか？」
「凄いですわ！　いつもよりかなり少ない魔力しか使っていません。いつもなら一回しか魔法を使えないとしたら、後四回は使えそうですわ！」
ということは、五分の一ほどの魔力しか消費してないってことか。

よかった～。成功だ！
そのあとカトリーヌ様もやってみたが、同じように消費魔力量を抑えることができたようだ。

なんかすごく疲れた……何も知らない人に一から教えるのってこんなに大変なんだな。日本の義務教育すごいよ。
今日はもう終わりにしよう。一度にたくさんのことをやりすぎても、訳がわからなくなるだろう。
病気を治す練習は次回からだな。といっても、教えたからといってできるとは限らないんだけど……一番の問題は魔力量なんだよな。
風邪とかなら、何回かに分けて少しずつ治癒すれば、治せるようになるかな？　まあ、それも次回やってみてからだ。
今日はこれでやっと終わりだ。疲れた……

「それでは今日はここまでにしましょう。次回までに練習しておいてください」
「はい！　レオン、本当にありがとう！　あなたの魔法はすごいわね。教えてもらえて嬉しいわ」
「マルティーヌ様にそう言っていただけると嬉しいです」
「そんなに他人行儀じゃなくてもよろしいのに……マルティーヌと呼んで、敬語もなしでいいのよ？　レオンは私の先生なのだから。私はレオン先生と呼んだほうがいいかしら？」

いやいや、王女様に向かってそれは無理だろ！　それに先生なんて呼ばれるほどのことはできないし。

「マルティーヌ様を呼び捨てなどできません。今まで通りでお願いします」
「そうなの……？　まあ、今はまだしょうがないかしら。これから

よね」

マルティーヌ様が少し不満げな顔をした後、なんだか不穏なことを言った。これからも、マルティーヌ様を呼び捨てで呼ぶようなことにはならないと思います！

マルティーヌ様が少し不満げだがなんとか納得してくれたところで、やっと終わりの雰囲気が漂って来た。帰ったら休もう、そう安堵していたら、その雰囲気をぶち壊した人がいた。

「レオン、君のイメージは回復魔法以外もあるんだよな？　火魔法のイメージも教えてくれないだろうか？」

アレクシス様がにこにこと有無を言わさない笑顔で見つめてくる。え？　今からですか？　もう疲れたので帰りたいんですけど……

うぅ……流石に断れない。

俺は泣きそうになりながら了承した。

「かしこまりました」

そこからは空気の概念と酸素についての説明をした。

……また一時間くらいかかったよ。

けどその甲斐あって、やっと理解してもらえたようだ。この世界になかった概念を説明するのって本当に難しい。

「では小さなファイヤーボールを作ってみてください」

「ああ、おおっ！　これは凄い。十分の一ほどまで魔力の消費量が

抑えられているな」

アレクシス様はそう感心したあと、少し難しい顔をして黙り込んでしまった。

この方法をどこまで知らせるかで悩んでいるのだろう。安易に広めては、敵を強くする可能性があって危険だからな。

「レオン、君はこの方法を広めることについてどう思う？」

「はい。広く大勢の方に広めようとは思っていません。敵も強くなりますし、危険だと思います。ただ今日のように、信頼できる人には教えてもいいと思っています」

俺が決意を込めた目でそういうと、アレクシス様は納得したようで少し表情を緩めた。

「そうだな、私もそれがいいと考えていた。君が王立学校を卒業したら、魔法の使い方を教える教師をやって欲しいと思う。もちろん私の信頼できる人にだけだ」

王立学校を卒業したらって、まだ入学もしてないのに進路決定ですか！？

そんな先のことはよくわからないけど、でもアレクシス様は信頼できると思う。悪い話じゃないよな……

「先のこと過ぎて今はまだ確実なことは言えませんが、お引き受けしてもいいと思っています」

「本当か！？　ありがとう。では、それまではあまり知られないように気をつけてくれ」

「かしこまりました」

「それから先のことというが、そんなに先ではない」

なんでだ……？　王立学校は五年間あるんだよな？

「まだ五年以上先ではないのですか？」

「違う。王立学校は毎年冬の終わりに卒業試験をするが、全学年の生徒が受ける。それで受かったものは卒業となるから、一年生でも卒業試験に受かれば一年で卒業だ。大体は皆、三年や四年くらいまで受からないが、一年で卒業する者もいる。私はレオンは一年で卒業するんじゃないかと思ってる」

そんな仕組みなのか……面白いな。

というか、なんか期待の目で見られてる。俺ってそんなに頭がいいわけじゃないんだよ。

ただ日本で勉強してきた記憶と、成人した思考力があるだけなのに。卒業試験、必死で頑張らなきゃかも……

「そうなのですね、頑張ります」

「ああ、就職先はいくらでも用意できるから頑張ってくれ。私の側近にしてもいいな……だがすぐには流石に無理だから、宰相の補佐につけるのもありか……」

なんだか俺の関知しないところで就職先が決まりそうだ。ありがたいけど、すごくありがたいんだけど、急すぎるし早すぎるよ！

「まあ、まだ一年以上あるから考えておく。それで今日これからなんだが、私の妻とマルティーヌの双子の兄が、君にお礼を言いたいそうなんだ。それからお礼の品も贈りたいらしい。この後会ってもらえるか？　二人は君の能力のことは全て知ってるから、心配はいらない」

その二人ってことは……王妃様と王子様！？
また凄い人たちだ……もう開き直ってくる。いちいち緊張とかしてたら身がもたない。

「はい。しかし、お礼はアレクシス様から貰ったので十分なのですが……」
「まあ、お礼の品を決めるのにすごく張り切っていたから、貰ってやってくれ」

アレクシス様が苦笑しながらそう言った。王族が張り切ったお礼品って、もらうのが怖いんですけど！　もらってもどこに保管しとけばいいかわからないし、俺は庶民なんです！
俺が戦々恐々としていると、アレクシス様がベルを鳴らして従者を呼び、二人を呼んでくるように頼んだ。
俺は二人が来るまで、できるだけ動揺を顔に出さないように頑張って気合を入れた。

４０、魔法の授業（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします！

41、第一王妃と第一王子

俺が少し緊張しつつ、カトリーヌ様の従者の振りに戻って立ち上がり待っていると、部屋に二人が入ってきた。そして、アレクシス様がまたすぐに使用人を全員下がらせる。

とても綺麗な金髪にピンクの瞳の女の人と、かっこいい金髪に碧眼の男の子だ。双子っていう割には顔があまり似ていないな。二卵性とかなのかな？

王子様は陛下にそっくりで、マルティーヌ様は王妃様にそっくりだ。

二人は向かいのソファーに座った。かなり大きなソファーなので、四人で座っても余裕なのだ。

「第一王妃のエリザベート・ラースラシアですわ」

「第一王子のステファン・ラースラシアです」

第一王妃と第一王子だったのか！　ということは未来の国王の可能性が高いってことだ。なんか、周りにすごい人が多すぎて麻痺してきたな……あまり驚かなくなってきたよ。

「お初にお目にかかります。レオンと申します」

「エリザベート様、殿下、お久しぶりでございます」

俺とカトリーヌ様は順番に挨拶をした。そして、俺は勧められてまたソファーに戻った。

「そこまでかしこまらなくても良いですわ。今日は公的な場ではないもの。私、レオンにどうしてもお礼を言いたかったのです。マルティーヌの命を救っていただき、本当に感謝しています。ありがとう」
「レオン、私からもお礼を言いたい。妹を救っていただき感謝する」
そう言って二人は頭を下げた。
落ち着かない！　王族に頭を下げられているのって落ち着かなすぎる。
「あの、頭を上げてください。自分にできることをしただけですから、あまり気にしないでください」
「そんなわけにはいきませんわ。今日はたくさんのお礼の品を用意しました。ぜひ受け取って頂きたいわ」
エリザベート様の前には、さっきメイドの方が置いていったものがたくさん積まれている。
もしかしてこれ全部お礼の品とか……？
多すぎます！！
「あの……お礼は既にアレクシス様からもらっているのですが……」
「あら、アレクシスからのお礼と私からのお礼は別物ですわ」
そうなんですか……俺からしたら一緒ですけどね！
受け取らない方が逆に不敬だよね。素直にもらっとこう。
「そうですか……わざわざお礼の品を頂けるなんて、ありがとうございます。とても光栄です」
俺が頑張って引き攣らないように笑みを浮かべてそう言うと、エ

リザベート様は顔をパァッと輝かせた。
……なんか嫌な予感。
「喜んでもらえて嬉しいわ。是非一つずつ紹介させてくださいな。私、心を込めて選んだのですよ」
これを全部一つずつ説明するのか！？　何時間かかるかわからない量だよ……でも王妃様の頼みなんて断れない。
エリザベート様を止められるのはアレクシス様しかいない！　俺がそう考えて視線をアレクシス様の方に向けると、一瞬目があったものの、さりげなく目を逸らされた。
アレクシス様！？　止めてくれないのですか！？　もしかして国王様なのに、妻の尻に敷かれているんですか！？
はぁ……エリザベート様を止められる人は誰もいなそうだ。光栄なことなんだし、紹介していただくか……
「ありがとうございます。どんな品なのか楽しみです」
俺はにこやかな笑みを浮かべてそう言った。多分引き攣ってたけど……
「まずはこちらの品ですわ！　これはブローチなのですけど、宝石ではなく魔石なんですのよ」
「魔石ですか……？」
「ええ！　魔石は込める魔力によって様々な色に変化するので、とても良い装飾品なのですわ。これから流行らそうとしているのよ。魔鉄に嵌め込まなければ魔法は発動しませんし、安心してくださいね」

ええ～、貴重な魔石を装飾品にしちゃうんですか。俺は魔法具にしたい。
というかこれってめちゃくちゃ高いんじゃないか？　エリザベート様、これは流行らないと思います……これを買うなら魔法具を買うと思います。
高位貴族になら流行るのかな？

「えっと……それは凄いですね。たくさんの色に変わるのなら、服の色にも合わせられますね」
「そうなのですわ。その日の気分で色も変えられるし、是非つけてくださいね」
「はい。頂きます」
「では次ですわ！　次はこちらのお洋服ですね。こちらは私お抱えの仕立て屋に頼みましたの。最高級の糸を使って、とても豪華なものに仕上げましたのよ」

なんかすごく豪華だ……これってステファン様が着るような服じゃないか？　俺はもらっても困るんですけど！
こんな豪華な服、公的な場では着れないし、私服として着るのはありえないし……着る場面が一切思い浮かばないんですけど！

「あの、ありがたいんですけど……この服を着る場面がないんですが……」
「あら、でもレオンは王立学校を卒業したら、貴族の地位をもらうのでしょう？　マルティーヌを治したお礼に、アレクシスにそう頼んだと聞きましたわよ？」
確かに地位が欲しいとは言ったけど、もう貴族の地位をもらえること確定してるの！？　平民がそんな簡単に貴族の地位なんてもらえないと思うんだけど……

「平民がそんな簡単に貴族の地位などもらえるのですか？」
「そんなに簡単では無いけど、レオンには功績があるし、これからもたくさん功績を残しそうですからね、貴族の地位くらいもらえると思いますわよ。ですよね、アレクシス」
「ああ、王立学校を卒業すれば可能だろう。色々と考えているから楽しみにしていてくれ」
「はい……ありがとうございます」

色々とってなんだろう。なんか嬉しいんだけど、ちょっと怖いような……
俺のイメージでは騎士爵とか男爵とか、下位貴族の爵位がもらえるのかなって思ってたんだけど、この服だともっと上の爵位だったりする？
明らかに公爵家くらいじゃないと釣り合わない服装だ。
地位はあった方がいいけど、それに伴う義務が多そうだし、そこそこでよかったんだけどな。なんかこれから大変になりそう。
いや、既に大変なんだけどね……

「では、この服は大切に保管しておいてくださいませ。サイズは大きめに作ってありますから、着る時にお直ししてくださいね」
「はい。ありがとうございます」
「では次ですわ。次は……」

この後一時間以上、エリザベート様によるお礼の品紹介が続いた。豪華な装飾品や服、それから仕立てる前の布などを頂いた。凄いものばかりでありがたいんだけど、とにかく疲れた……
他の人たちも結構疲れている。アレクシス様、ステファン様、マルティーヌ様は少し苦笑い気味なので、エリザベート様の暴走はよくあるのかもしれない。

王族も大変だね……

「これで以上ですわ。気に入っていただけましたか？」
「はい。とても豪華な品をこんなにたくさん頂いてしまって、本当にありがとうございます。全て大切に使わせて頂きます」

エリザベート様がとても満足そうに微笑んでいる。とりあえず良かった。
エリザベート様が満足したのを確認して、アレクシス様がフォローしてくれた。

「これらのお礼の品は、レオンに贈ったものとすると不自然だから、全て箱に入れてエリザベートからカトリーヌへのお礼の品として、公爵家に持ち帰ってくれるかい？」
「かしこまりました。公爵家のレオンの部屋に、丁寧に保管しておきますわ」

アレクシス様とカトリーヌ様がそんな会話をしている。公爵家に置いておけるのなら良かった。流石にこれを俺の家に持ち帰ったら怖いからな。公爵家なら安心だ。

「レオンもそれでいいか？」
「はい。私の家では保管が難しいので、そちらの方が助かります」
「では、そうしてくれ」

俺へのお礼の品の管理方法が決まったことで、お開きの雰囲気となった。

「じゃあ今日は結構時間も経ってしまったから、これでお開きとしよう。レオンとカトリーヌは一週間後にまた来てくれるか？」

「かしこまりました」
「よし、じゃあレオンはカトリーヌの従者の振りに戻ってくれ」
そうだった。俺は一応目立たないように、カトリーヌ様の従者として来てたんだった。疲れて忘れるところだったよ。
俺は立ち上がってカトリーヌ様の斜め後ろに立った。
そうすると、アレクシス様がベルを鳴らして従者や護衛を呼ぶ。
「こちらの荷物は公爵家に運びますので、馬車まで運んでいただいてもよろしいですか？」
カトリーヌ様がそういうと、王宮の使用人が何人か連れてこられて、荷物を運び出していく。
俺も一つ服を持ち、カトリーヌ様の後ろに続いて部屋を出た。
そして馬車まで行き、公爵家へと帰った。
公爵家では、いつも俺が使っていた客室を、俺専用にしてくれるようだ。ありがたい。
そして荷物を片付けて、俺は家に帰った。
今日はとにかく疲れた……また授業は一週間後だよな。それまではゆっくりしよう。

４１、第一王妃と第一王子（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします！

42、王女様とお茶会

マルティーヌ様に何度か魔法を教えに行って、しばらく経った頃、お茶会に誘われた。
カトリーヌ様はエリザベート様とお茶会をするので、俺とマルティーヌ様の二人でのお茶会らしい。完全に人払いをされて行われるそうだ。

なんで二人でなんだ……？　俺は疑問に思いながら王宮に向かった。すると、北宮殿の庭にある東屋に案内される。
カトリーヌ様に教えてもらったが、この宮殿は四つに分かれていて、中央宮殿は王の執務室や謁見の間などがあるところ、東宮殿は役人の主な仕事場、西宮殿は騎士たちの主な仕事場、そして北宮殿が王族の住居になっているらしい。

東屋には既にお茶やお菓子が準備されていた。俺は椅子に座ってマルティーヌ様を待つ。
しばらく待つとマルティーヌ様が一人の護衛と共にやって来た。そしてマルティーヌ様が席に着くと、その護衛は声が聞こえない程度の所に下がった。

「レオン、こんにちは。本日は来てくださってありがとう」
「マルティーヌ様、お招きくださり光栄です」

今日のマルティーヌ様は、お茶会仕様なのかいつもより豪華なドレスを着ていて、装飾品もたくさん身につけている。なんか、顔が整いすぎてて、服装と相まって現実じゃないみたいだ……
俺は思わず、じっーとマルティーヌ様を見つめてしまった。本当

にこんなに可愛い人って実在するんだなぁ。
そして、それから少し経って気づいた。
……ヤバいっ！　見過ぎてたかも！
俺は、慌てて目を逸らす。マルティーヌ様を見つめ過ぎないようにと、いつも気をつけてたのに。
だって、気をつけなかったらずっと見ちゃうだろ？
神様が相当頑張ったんだろうという完璧な容姿に、可愛らしい自然な笑顔だぞ！　何回見ても見惚れるんだよ！
「レオン、もっと態度を崩していいと、いつも言っているのに」
「ですが……マルティーヌ様は王女様ですから」
「私がいいと言っているのだから、そんなのは関係ないわ。私はあなたともっと仲良くなりたいの」
マルティーヌ様はそう言って、少し頬を膨らませて怒っている。
最近はいつもマルティーヌ様に、態度を崩せと言われているのだ。何故だか俺は気に入ってもらえたらしい。
それはすごく嬉しいんだが、流石に平民が王女様を呼び捨てで呼ぶとかおかしいだろ。
でも、だんだん断りきれなくなって来てるんだよなぁ。
「ですが、周りの方の目もありますし……」
「それはそうですけど……でも、今日は私たち二人だけよ。二人きりの時はもっと態度を崩すっていうのはどう？」
マルティーヌ様がいいことを思いついたと言わんばかりに、パァッと顔を輝かせてそう提案して来た。
うっ……もう断る口実がない……

まあ、二人だけの時なら、周りの人に不敬だと言われることもないだろうからいいか。二人だけの時なんてほとんどないだろうし。

「わかりました。では二人きりの時だけですよ」

「ええ、それでいいわ！　では私のことはマルティーヌと呼んでね。敬語もなしよ！」

マルティーヌ様が、とても嬉しそうにそう言った。この笑顔には逆らえない！！　俺は苦笑しながら頷いた。

「はい」

「レオンと仲良くなれた気がして嬉しいわ！　レオンとは王立学校でも同級生ですもの。私、王立学校をとても楽しみにしているの」

そうか……王立学校でも同級生なのか。俺は知らないふりをしてひっそりと過ごしたい。

でも公爵家から通うんだし、絶対目立つんだろうな。公爵家の勢力向上の手助けをするって言っちゃったから、もうしょうがないことだけど。

でも、全属性のことや魔法のイメージのことはまだ隠しとくんだから、そこまで目立たずにいけるかな？　いや、それは無理だろうな……

俺が目立たずに隠れていられるのは、王立学校入学までだろう。そのあと学校では、公爵家の後ろ盾のある平民として頑張って、卒業したら全属性とかも公表するのかな？　それで貴族位を貰うとか、とにかくずっと目立ちそうだ……

今は庶民を謳歌しておこう。今しか謳歌できないだろうから。

「王立学校では、よ、よろしくね。マルティーヌ、ど、同級生で、

良かったよ」

おぉぉぉ！　なんかすごく話しづらい！　敬語の方が全然話しやすい。王女様に敬語を使ってないっていうのが落ち着かなすぎる。

「なんだかとても不自然よ？　もっと気軽に話して欲しいわ。私とレオンは対等な関係だと思ってくれて構わないから」

そんなふうに思えないから！　全然対等じゃないし！

でも、もう普通に話そう。頑張れ俺。クラスの女子と話した時のことを思い出すんだ！

「わかったよ」

今の自然に言えたんじゃないか！？　一言だけだけどな……でもいける気がする。慣れてきたぞ、さすが俺！

「じゃあ、これからは楽しくお話ししましょう！　私、レオンに聞きたいことがたくさんあったのよ」

「うん。聞きたいことって何？」

「レオンの好きな食べ物はなんですの？」

「好きな食べ物？」

「そうですわ！　レオンのこと何も知らないのですもの。基本的なところから聞かなくては」

確かに、俺たちって魔法の練習ではよく会ってるけど、基本的に魔法の話しかしないからな。

俺の好きな食べ物ってなんだろ？　日本にいた時だったら、お寿司だったんだけどな……あとピザとか。

この世界ってピザあるのかな？　あるかもしれないけど見たこと

ないから、答えるのは危ないか。
うーん、この世界にあるものだったら……フレンチトーストかな。久しぶりに食べた甘い食べ物が、かなり強く記憶に残ってて、フレンチトーストが大好きになったのだ。

「フレンチトーストかな。マルティーヌは？」
「あら、レオンは甘いものがお好きなのですね！　私も好きですわ。ただ私の一番好きな食べ物は、やはりピザですわね」
「ピザ！？　ピザってあるの！？」

俺は思わず勢いよくそう聞いてしまった。

「ありますけど、なんでレオンが知っているのですか？　最近王宮の料理人が開発したものですのよ」

やっぱい……久しぶりにやっちゃったよ。つい興奮して……

「え、えっと、そう、タウンゼント公爵家でたまたま聞いたんだ。ははっ……」

俺はそう誤魔化そうとしたが、マルティーヌの疑いの視線は緩まなかった。むしろもっと強くなっている。

「ピザは、まだ北宮殿でしか作られていないはずです。リシャール様もカトリーヌ様も、北宮殿でご飯を食べられることはありませんから、知らないはずですわ」

うっ……どうしよう。どうすれば誤魔化せる？
俺が、背中に冷や汗をダラダラとかきながら、内心でめちゃくちゃ動揺していると、マルティーヌ様は少し難しい顔をした。

「私、ずっと聞きたいことがあったのです。お父様には、絶対にレオンに聞いてはならないと言われているのですが、気になって仕方がないのです。それに、レオンは何を聞かれたからといって、怒ったりするような人には、私には思えません」
「聞きたいこと……？」

アレクシス様が、俺に聞くのを止めていることがあるってことか？　なんだ？　別に何を聞かれても怒ったりしないけど……

「何を聞かれても怒るようなことはないよ？」
「そうですか……私はその言葉を信じます。では、質問をしても良いですか？　これを私が聞いたことは、秘密にしてもらえますか？」

そんなにやばいこと聞かれるの……？
なんか緊張してきた……俺は少しドキドキしながら、一度ごくっと唾を飲み込んで答えた。

「今から話すことは、他の人には言わないことにする」

俺がそういうと、マルティーヌ様は俺を真剣な表情で見つめた後、少し息を吐いて覚悟を決めたようだった。

「ありがとうございます。……では、レオンは全属性の魔法を使えますよね？」
「うん」

それはみんな知ってるんじゃないのか？

「そしてたくさんの知識を持っている。それも私たち王族が知らないようなことも」
「う、うん……」
「私たちはそんな存在を一人知っています。使徒様ですわ」
「使徒様の話は、俺もリシャール様から聞いたことがあるよ。でも俺は使徒様じゃないよ？」

これも既に伝えてあるよな？

「それは本当ですの？　何か理由があって隠しているとかではないのですか？　多分他の方々は、レオンのことを使徒様だと思っています。ただ、何か理由があって身分を明かせないのだろうと。なのでレオンに使徒様のことを問うのは、禁忌のように扱われています」

そんなことになってたのか！？　まあ、確かに全属性で様々な知識を持っている子がいたら、そう思うのも当たり前か……

「俺は本当に使徒様じゃないよ。使徒様なんて存在、聞くまで知らなかったんだから」
「では、全属性魔法が使えるのは置いておくとしても、どこで知識を得たのですか？」

どうしよう……本当のことを言ってもいいのだろうか？　使徒様ってことにした方が楽なんだろうけど、嘘をつくのも嫌なんだよな……

マルティーヌ様は本当のことを知っても俺を嫌ったりしないかな？　既にアレクシス様やリシャール様の庇護を受けているような状態だから、マルティーヌ様に嫌われたとしても大きな影響はないと思う。

……でも嫌われたくないな。せっかく仲良くなれてるのに。

でも嫌われたくないからと言って、嘘をつくのは違うよな。こうやって真正面から聞いてきてくれたんだから、俺もそれに応えたい。何となくはぐらかすのは嫌だ。

信じてもらえるかわからないけど、本当のことを話してみよう。

よしっ！　俺は気合を入れてマルティーヌ様の目をしっかりと見て、話し始めた。なんとなく緊張から敬語に戻ってしまう。

「これから話すことは誰にも話したことはありませんし、できれば他言無用でお願いしてもいいですか？　あまり、たくさんの人に知られたいことではないのです」

「わかったわ。ここだけの話として、誰にも言わないことにします」

「ありがとうございます。私は……別の世界で生きた記憶があるんです。ここは全く違う世界で成人過ぎまで生きて、多分爆発か何かに巻き込まれて、気づいたらこの世界で八歳のレオンになっていました。私の知識の元は、全て前の世界で得た知識です」

俺がそういうと、マルティーヌ様は理解できないような顔をしたあと、難しい顔をして考え込んだ。

「レオンは、別の人として生きた記憶があるということよね？」

「はい」

「そしてそれは、この国やこの世界の他の国ではなく、別の世界の国ということかしら？」

「その通りです」

「そんなことがあり得るの……？」

「私も他の人からこんな話を聞いたら、信じられないと思います。でも事実なんです」

マルティーヌ様は、それからしばらく考え込んでいる。こんな話をしたら気味悪がられるだろうか。それともあり得ないと笑われるだろうか。

しばらく居心地の悪い時間が続いた。俺は緊張で冷や汗をかきながらもじっと座って待っている。

それから結構な時間が経ち、やっとマルティーヌ様は顔を上げた。考えはまとまったようだ。

俺の目をまっすぐに見て、何かを決意したような凛とした顔で告げる。

「私はあなたの言葉を信じることにするわ。そして、誰にも言わないことにする」

そこまで言うと、マルティーヌ様は少し恥ずかしそうなツンとした顔になり、言葉を続けた。

「誰にも言えない秘密を持って生きるのは、大変だと思うわ。私には何でも話してくれていいわよ。まずは……レオンの前の世界での生活について、聞かせて欲しいわ」

「マルティーヌ様……」

俺は九歳の女の子のその言葉に、思わず泣きそうになった。自分で思っていたより、この世界で気を張っていたのかな。やっぱり、母さんにも父さんにも言えないっていうのが、結構堪えてたんだよな。

俺は何となくホッとしたような、本当の自分を曝け出してもいい場所を見つけたような気がして、体の力が抜けた。

優しいようなちょっと誇らしいような顔で、可愛く笑っているマルティーヌ様を見て、俺も笑顔を浮かべた。

「マルティーヌ、俺の昔の話を聞いてくれる？」

「ええ、当然ですわ。私達は友達ですもの！」

マルティーヌはとても綺麗な、満開の笑顔でそう答えた。

４２、王女様とお茶会（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

43、日本での暮らし

「レオンは前の世界で何をしていたの？　働いていたのかしら？」
「いや、俺はまだ学生だったんだよ。前の世界は二十二歳まで学ぶ人が多かったんだ」

そういうと、マルティーヌはとても驚いたようでポカーンとしている。この世界は最長で15歳までだからな。それに15歳で成人だし、二十二歳まで学生って聞けば驚くよな。

「二十二歳まで学ぶなんて……凄いですわね。でもそんな歳まで学んでいられたということは、レオンは貴族だったのですか？」
「ううん、前の世界に貴族はいなかったんだ。明確な身分制度はなかったよ」
「それは……私には想像するのが難しいですわね……本当に違う世界なのですね。食べ物とかも違うのかしら？」
「そうだね、この世界より発展してたと思うよ。でもこの世界も最近急速に発展してるみたいだから、そのうち追いつくんじゃないかな？」

日本は食文化に関してはかなり発展してたからな……本当に美味しいものがたくさんあった。ラーメンもカレーもお寿司も大好きだったなぁ。それに甘いものも、ケーキ、クッキー、アイスも大好きだった……

俺は懐かしくなり、思わず思考を日本へ飛ばしていると、マルティーヌ様は少し悲しそうな顔をした。

「悲しいことを、思い出させてしまったかしら……？」

「違うよ！　ただ、懐かしいなって思っただけなんだ。思い出したら食べたくなってきちゃったよ」
「どんな食べ物ですの？　作り方を教えてくだされば王宮の料理人に作らせますわ！」

マルティーヌが一転、とても楽しそうな顔になりそう聞いてきた。
そうだなぁ。俺が何となくの作り方を知っていて、何かこの世界で作れそうなものがあるかな？
シチューとか、パスタとかかな。この世界にあるのだろうか？

「例えばシチューってある？　ミルクスープのもっと重たい感じの料理なんだけど。あっ……牛乳ってこの時期にはここまで持って来られないか」
「シチューというのは初めて聞きましたわ。私、冬に飲むミルクスープが好きなのです！　ぜひ食べてみたいです。牛乳は、レオンが作った製氷機を使わせますので大丈夫でしょう」

確かにあれを使えば大丈夫だな。あれって実用化されたのか？
まあ、王女様ならいくらでも使えるのか……流石王族だ。

「じゃあ、一つはシチューで決まりだね。あとは、この世界にパスタってある？」
「パスタ……ですか？　初めて聞きましたわ。さっきから不思議な発音の言葉ですのね」

シチューとかパスタはこの世界にないから、日本語の発音のままで翻訳されないんだな。

「この世界にはまだないんだね。パスタは材料もすぐ揃うし作れると思うよ」

「本当ですの！？　では今度、その二つの料理を料理長に作ってもらいましょう。次のお茶会は料理の試食会ですわね！」

マルティーヌが満面の笑みで、凄く嬉しそうにそう言った。またお茶会やるのね……まあ、喜んでくれるならいっか。

俺も思わず笑顔になった。

「それは楽しそうですね」

「ではレオン、レシピを書いてくださる？　レオンが考えたことは公にしない方がいいでしょうから、誰が考えたかは明かさずに、料理長にレシピだけ渡しますわ」

「誰が考えたか追及されない？」

「それは大丈夫ですわ。私は第一王女ですもの」

マルティーヌは、少し得意げに胸を張ってそう言った。

さっきからいちいち可愛いな！　ふぅ～、落ち着け俺。

俺の方が精神は大人なんだ。たとえ体に精神が引っ張られてたとしても、大人だからな。

「じゃあ、レシピ書くね」

俺は、マルティーヌがさっきの護衛の方に頼んで、持ってきてもらっていた紙とペンを受け取り、レシピを書き始めた。

えっと、多分シチューは、この世界のミルクスープに、小麦粉を入れればできるはず。炒めた野菜に小麦粉を振り入れてまた炒め、そこにいつものように牛乳や水を入れて、味付けをすれば大丈夫なはずだ。

それからパスタは、まず麺だけど、小麦粉に油と卵と塩を入れればいいんだよな。一度だけお母さんと作ったんだ。でも分量は覚え

てない……

小麦粉は、うーん……とりあえず両手で取って四回分くらいにしとこう。確か油は少なかったはずだから、スプーンに半分弱くらいかな。卵は一個で、塩は少々。こんな適当でできるのだろうか？

……分量は試行錯誤してくださいって書いとこ。

とにかくこれらを混ぜて、捏ねて固まればいいんだよな。そして一つに固まったら、小麦粉をまぶして十分ほど休ませる。休ませたら丸い木の棒で、二ミリくらいまで伸ばして、また小麦粉をまぶして三つ折りくらいに折り畳み、細く切っていく。この時は……二ミリくらいの細さでいいかな？

あとは茹でるだけだ！　茹で時間は……全くわからない。五分とかかな？　とりあえず五分前後、最適な茹で時間は麺によって変わるって書いとこ。

よしっ！　これであとはソースだけど、何パスタがいいだろ？　これで出来上がるのって、少し太めのもちもち生パスタだよな。それなら塩味とかよりも、トマトとかの方が合いそうかな。あとはクリームとか。

うーん、トマトにしよ！　俺の完全な好みだ。それに今の時期ならトマトはあるだろう。

トマトソースの作り方も一応書いた方がいいかな？　でもピザがあるんだし、トマトソースはあるよな？

それなら、トマトソースにベーコンや鶏肉を入れたものを、ソースにして欲しいって書いておくか。そしてそのソースをパスタにあえて完成っと。

できた！　なんか曖昧な部分ばかりだけど、プロの料理人なら作ってくれるはず。

「マルティーヌ、書けたよ」
「レオンありがとう！　次はこの料理の試食会兼お茶会ね！　楽しみだわ」
「俺も楽しみだよ」

マルティーヌがあまりにも嬉しそうなので、俺は苦笑いしてそう言った。

「では、今日はそろそろお開きにしましょうか」
「そうだね、また次の授業で」
「ええ、次の授業の時にお茶会の日程を伝えますわね」

そうしてその日のお茶会は終わった。

それから二週間近く経った今日。二度目の二人きりのお茶会が開催されている。
俺は今、前回と同じ東屋の席に着いたところだ。目の前には既に料理が並んでいる。まだ出来立てなのか少し湯気が上っていて、とても美味しそうだ。

「マルティーヌ様、とても美味しそうですね」
「レオン、今は二人きりなのだから敬語はなしよ！」

そうだった……あれから二人きりになることなんてなかったから、すっかり忘れてたよ。

「ごめん……忘れてたよ」
「もう！　忘れるなんて酷いですわ！」

マルティーヌが少し拗ねた様子で頬を膨らませて、プイッと横を向いている。怒ってるんだけど可愛い。

「本当にごめん、それよりもとても美味しそうにできてるね」

「そうでしょう！？」

俺が食事に意識を持っていくと、さっきの怒りは無くなったようだ。よかった。

「料理長が新しいレシピにとても張り切っていましたの。満足できる仕上がりになったそうですわ。私も今日初めて食べますの！」

「マルティーヌも初めてなの？」

「ええ、このお茶会まで食事には出さないように言っておいたのです。折角ですから、レオンと驚きを分かち合いたかったのです……」

マルティーヌはそう言いながら少し恥ずかしくなったのか、顔が赤くなり声が小さくなっている。

可愛い……！　もう語彙力が無くなってるけど、とにかく可愛いんだ！　それしか言えない。

俺は内心悶えながらも何とかそれを表に出さないようにし、にこやかな笑顔を浮かべてマルティーヌに言った。

「それは、嬉しいよ。ありがとう」

「いっ、いいんですっ！　別にレオンのためとかじゃなくて……自分のためですからね！」

マルティーヌは精一杯誤魔化してるが、バレバレだ。でもわざわざ指摘はしない。俺は大人だからな。

「そうだね。それより冷めちゃうから早く食べよう」
「ええ！　さっきからとてもいい匂いでお腹が空いてましたの」
「じゃあ、いただきます」
「いただきます」

俺はまず、トマトパスタから口に入れた。う～ん！　美味しい！
日本の味とは少し違うけど、これでも充分美味しいな。料理長凄い。幸せ……
マルティーヌをチラッて見てみると、とても驚いた顔をしたあと、顔が緩んでいるから美味しいのだろう。気に入ってもらえたようでよかった。

「レオン、これはとても美味しいですわ！」
「良かった。料理人さんたちも腕が良いんだね。俺の記憶の味と似ているよ」
「本当ですの？　では、私は今レオンの前の世界の料理を食べているのですね。何だか嬉しいですわ！」

マルティーヌ、本当にいい子だよなぁ。どうしたらこんな子に育つのだろうか？　王族の教育が凄いのかな……
まあ、今は食事だな。

よし、シチューも食べてみよう。俺はスプーンでシチューを一口分掬い、口に入れた。
おおっ！　シチューの味だ。なんだか安心する味だな。俺は添えてあったパンを千切って、シチューにつけて食べる。
う～ん、幸せ！

俺がシチューを堪能していると、マルティーヌもシチューを食べ始めたようだ。

「これは……ドロドロとしていて本当に美味しいのかと思いましたけど、予想以上に美味しいですわね。パンによく合いますわ！」

気に入ってもらえたようでよかった。

それからしばらくは、少し会話をしながらも夢中になって食事をした。そして、俺とマルティーヌはとても満足のいく食事を終えた。

「レオン、あなたのレシピは素晴らしいわね！　他にもあるの？」

「うーん、他にもたくさんあるけど、この世界でもすぐに作れそうなもので、俺がレシピを覚えてるものってなると、あんまりないかも」

「そうなのですか？　レオン、レシピを思い出すのですわ！」

そんな無茶な。醤油と味噌、麺つゆとか調味料がないから難しいんだよなぁ。

あれ？　でも貴族の方々に、醤油とか味噌があるかを聞いたことはないよな。もしかして、高いけどあるっていう奇跡起きる！？

俺は少し興奮気味にマルティーヌに尋ねた。

「マルティーヌ、醤油とか味噌ってこの世界にある？　調味料なんだけど！」

「す、すごい勢いですわね……でも聞いたことありませんね。一応、料理人やお父様にも確認しておきますわ。みそとしょーゆですか？」

マルティーヌが「発音しにくいです」と言いながらそう言っている。

「うん、たしか大豆っていう豆から作られてるんだ」

「聞いておきますわ」
「ありがとう！」

マルティーヌが俺の勢いに、ちょっと引いていたことにも気づかないくらい、俺は興奮していた。醤油と味噌があったら食べたいものがたくさんある！！

「では、結果は次の授業の時にでもお教えします」
「うん！　よろしくね」

この日のお茶会はそう言って終わった。

俺はウキウキと次の授業の日を待ち、やっと訪れた王宮で聞かされた。「誰も醤油や味噌という調味料は知らないそうですわ」という言葉を。

かなり落ち込んだ。少しあるかもって期待したから、なおさらに落ち込んだ。

醤油や味噌の作り方なんてわからないよ！！　どうすればいいんだ！！

４３、日本での暮らし（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします！

４４、新しい従業員

月日が流れ、季節は秋の終わり頃になった。俺は夏から秋にかけては、家の手伝い、マルティーヌへの授業や、偶にお茶会などをして過ごした。

そしてタウンゼント公爵家から、三日後に公爵領へと出発するので、二日後には公爵家へと来てほしいと連絡が来た。

「母さん、父さん、俺二日後からしばらくの間、公爵家の皆さんと公爵領に行くから、家を空けるね」

「公爵領！？　王都から出るってことなの？」

「そうだけど……言ってなかったっけ？」

あれ？　色々あって忘れてたかも……

「聞いてないわよ！　そういうことは早く言いなさい！」

「それで、公爵家の方々と行くのかい？」

「うん。まだ誰が行くのかは知らないけど、公爵家の皆さんと行くよ」

「それなら心配はいらないだろうけど……これからそういうことは早く言うのよ」

「ごめんね、ついうっかりしてて……」

俺は、ははっと苦笑いしながら、何とか母さんの追及を躱した。

「でも、ちょうどタイミングが良かったかもしれないわね」

「そうなの？　何かあるの？」

「うちで働いてくれる人が見つかったんだよ。ちょうど明日から来

てくれることになってる」
「そうなの！？　それは良かった！」
俺がいないとマリーが大変だから、そこだけが心配だったんだ。
「どんな人なの？」
「ちょうど今年成人した、十五歳の男の子よ。料理に興味があって、仕事の合間に教えて欲しいって頼み込んできたのよ」
「やる気はありそうで、優しそうないい子だったよ」
それは良かった……うん？　ちょっと待って。
男なのか？　それに料理人になりたい……
ということは、うちの店を継ぎたいってことか？　もしかしてマリーが危ないんじゃないか！？
「ねぇ、本当にその子を採用しちゃったの？」
「そうよ？　何でそんなこと聞くのよ。一度会ったけど、いい子だったわよ」
「でも、男の子だとマリーが危ないんじゃない？　同性で仲良くなれる、女の子の方がいいんじゃないの？」
俺は必死にそう母さんに言ったが、全く受け入れてもらえない。
「危険なんてないから大丈夫よ。それに、確かにマリーの婿に来てもらうのもいいかもしれないわね」
何でそんな話になるんだよ！　俺は今真逆の話をしてたはずなんだけど！！
「ロアナ、流石にそれは気が早いよ」

おお！　父さん頑張れ！！

「でも確かに、二人の相性が良ければいずれはありかもしれないね。この食堂も継いでもらえたら嬉しいし」

父さーーん！！　味方じゃなかったの！？

まあ確かに俺が継がないとなると、この食堂はマリーが継ぐことになるわけで、そうすると婿に来てもらわないとダメなんだよな……

しょうがない！　俺がその男を見極めてやる！！　マリーに釣り合わないところを見つけたら、絶対に反対してやるんだからな！！

俺はそう決意して、次の日を迎えた。今日はその男が初めて出勤してくるのだ。

俺が厳しい顔でドアを睨んで立っていると、マリーに邪魔だと言われた。

「お兄ちゃんそんなところに立ってると邪魔！　早く準備手伝って！」

「マリーごめんな。でも新しい従業員には最初が肝心なんだ！　最初に舐められたらダメなんだ！」

「もう、何を言ってるの！？　早く準備して！　それに、お兄ちゃん以外はもう会ったことあるからね」

「え！？　マリーももう会ったのか？」

俺が慌ててそう聞くと、マリーは少し不機嫌そうに答えた。

「うちに一度来たんだから当たり前でしょ。お兄ちゃんは出かけていなかったんだよ」
「その時、何もされなかったか？　嫌なこととかなかったか？」
俺が慌ててそう聞くと、マリーは俺がうざくなったのか、少し怒ったような顔になった。
「凄くいい人だったよ。その日仕事を手伝ってくれて手際も良かったし、お兄ちゃんより頼りになるかも」
マリーはそう、低く静かな声で言った。
ガーン……マリーにそんなこと言われるなんて……
最近出掛けてばかりであまり構ってやらなかったのがいけないのか？　マリーも反抗期なのか？
俺がそんなことを考えながら呆然と突っ立っていると、食堂のドアが開いて茶髪に茶色い瞳の、優しそうな青年が入ってきた。
「こんにちは」
「あ！　イアンさん！」
マリーがその青年の元に駆けていく。もしかして、そいつが新しい従業員？
「今日はお兄ちゃんがいるから紹介するね！　これがお兄ちゃん」
「初めまして、イアンです」
「初めまして、マリーの兄！！　でレオンです」
俺が「兄」をことさら強調して挨拶をすると、マリーが俺を睨んできた。何でだマリー。お兄ちゃんのことは嫌いになったのか？
俺は泣きそうになりながら、このイアンとか言う青年の粗を探し

てやろうと躍起になった。

「ロアナさん、ジャンさん、今日から頑張ります！」

「ああ、イアン、よろしく頼むよ」

「イアンよろしくね。とりあえずマリーと一緒に、食堂の仕事を覚えてくれる？」

「はい！　マリーちゃん教えてくれる？」

「うん！　まずは机をこの布で拭くの……」

マリーがイアンに付きっきりで仕事を教え始めた。イアンは時折相槌を打ちながら真剣に聞いている。

真面目じゃないか……

とりあえず仕事を始めるようだ。手際良く掃除をしていく。かなり丁寧にやってるし、実際綺麗になっている。

仕事もできるじゃないか……

母さんと父さんに呼ばれて、今日の昼メニューの味見をするそうだ。食べると、とても美味しいと満面の笑みだ。

いい奴じゃないか……

……悪いとこがないじゃないか！

いや、いいことなんだけど、いいことなんだ。うちで働く従業員がいい奴なのは喜ばしいことだ。

でも、何だかマリーが取られたみたいで寂しいじゃないか。

俺は少しシュンと落ち込んで、とぼとぼと動き出して手伝いを再開した。

すると、イアンが俺の方に寄ってきた。なんだ？　何か俺に文句

があるとか？　マリーは俺のものだとか言われるのか？　俺が頭の中で、そんな被害妄想を繰り広げていると、イアンが話しかけて来た。

「レオン君、君は凄く優秀で王立学校に行くんだろう？　凄いよ、尊敬するよ！　俺がこの食堂を守るために頑張るから、レオン君は食堂のことは気にせずに学校で頑張ってね」

うぅ……なんていい奴なんだ！！

俺はこんなにいい奴に剣呑な視線を向けていたなんて……！　イアン君ごめん！　俺の負けだ。君のことはしょうがないから認めることにするよ。

「イアン君、ありがとう。食堂とマリーを頼むよ」

「ああ、任せておいてくれ」

イアンはそう言ってにっこりと笑った。うぅ……いい奴すぎて俺がダメなやつに思えてくる……

俺も仕事頑張らなきゃ！

そこからは、俺もしっかりと食堂の手伝いを頑張った。イアン君にも仕事を教えて、仲良くなれた気がする。

でも、マリーがお兄ちゃん離れをしちゃったみたいで悲しいけどな。さっきから俺よりイアンに話しかけてるし。

悲しいけどしょうがないよな。うん……

俺はそんな複雑な感情を抱えつつ、何とか仕事を終えた。これからはイアンも一緒にお昼を食べるようで、お昼の後は料理を教わるらしい。

俺は何となく、今日だけは一緒にお昼を食べたくなくて、用事が

あるから出かけると言って家を出た。

家を出て何となく広場の方にとぼとぼと歩き始めると、後ろからマリーに呼び止められた。

「お兄ちゃん！」

「え？　マリーどうしたの？」

俺は困惑してそう聞くと、マリーは少し心配そうな顔で言った。

「なんか、今日のお兄ちゃん途中から元気がなかったから、体調悪いのかなって思ったの。大丈夫？」

マリーは本当に心配してくれているようで、少し首を傾げて見上げてくる。

うぅ……マリー！！　俺の異変に気づくくらい、気にしてくれてたなんて……！

俺は嬉しすぎて、さっきまでの複雑な気持ちなんて吹き飛んだ。とにかく嬉しい！

俺はマリーをぎゅっと抱きしめて言った。

「マリー、お前は本当にいい子だな。自慢の妹だ。お兄ちゃんは、マリーのお兄ちゃんで良かったよ」

「急に何言ってるの？」

「ううん、お兄ちゃんはマリーが大好きだよってこと」

「マリーもお兄ちゃんのこと大好きだよ！」

マリーがそう言ってにっこりと笑った。

イアンがいい奴で、マリーのこの笑顔を守ってくれるならマリー

をあげてもいいだろう。俺はそう思った。
俺がずっと守ってあげられるわけでもないからな。まあ、出来る限り守り続けるけど！！

「お兄ちゃんまたお出かけしちゃうの？」
「うーーん、やっぱり後で行くことにする。うちで一緒にお昼食べようか」
「うん！！」

俺はマリーと仲良く家に戻った。

４４、新しい従業員（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします！

45、旅の準備

公爵家に行く日となった。
ロジェが馬車で迎えに来てくれて、俺は公爵家の馬車で屋敷まで向かっている。
やっぱり乗合馬車とは乗り心地の良さが違うな。この柔らかい椅子が衝撃を吸収するんだ。お尻が痛くならなくて快適に乗れる。でも揺れるところは同じなんだよな。
何とかして馬車の改良できないかな？　魔法具を使ったら何とかなる気もするけど……まあ、時間があったら考えるか。

そんなことを考えていると、すぐに公爵家の屋敷についた。俺はロジェに連れられて、いつもの客室まで案内される。

「レオン様、以前仕立て屋に注文した服と、他にも必要と思われるものは全てお荷物にまとめてありますので、準備は既に完了しております。本日はごゆっくりされてください」

もう準備もしてくれてるのか。俺では何を持っていけばいいかわからないから、ありがたいな。
そういえば今更だけど、公爵領ってどこにあるんだろう？　そもそもこの世界の地図って見たことないんだよな。馬車で行くんだろうけど、どのくらいかかるのかな？

「ありがとう。今更なんだけど、公爵領ってどこにあるか知ってる？　この国の地図とか見たことないからよくわからなくて」
「公爵領の領都へは、馬車で三日ほどかかると聞いたことがあります。ただ、地図は機密情報ですので、大旦那様の許可がない方には、

お見せ出来ません」

そういえば、地球でも地図は軍事機密だったって聞いたことがあるな。それだと見せて貰えないかな？

「ただ、レオン様ならば許可が降りるかもしれません。本日は大旦那様が屋敷にいらっしゃいますので、地図をお借りできるか聞いてみましょうか？」

「本当に！？　じゃあ聞いてみてくれる？」

「かしこまりました。少々お待ちください」

ロジェはそう言うと、部屋を出ていった。

許可が出て欲しい！　この国の地図は見てみたいとずっと思ってたんだ。この国がどこにあって、王都がどこにあるのかもわかってないからな。この世界の地図も見られるなら見てみたい。ここは大きな大陸なんだろうか？

俺がうきうきしてしばらく待っていると、ロジェが丸めた大きめの紙を二枚持って来た。

「お待たせいたしました。大旦那様の許可が取れましたので、周辺国も合わせた地図とこの国だけの地図、両方お持ちしました」

許可が出たのか！　凄くありがたいな。結構俺のこと信頼してくれてるんだな。俺も信頼を裏切らないように、公爵家のために頑張ろう。

俺がそんなことを考えている間に、ロジェが机の上に地図を広げてくれる。

「こちらが周辺国も合わせた地図です。この国、ラースラシア王国

はこちらです」

ロジェは、まずこの世界の地図を見せてくれた。

その地図に書いてある範囲では、一つの大陸しかなく、その大陸の左下に位置するのがラースラシア王国のようだ。

国の南と西は海に面していて、北側には沢山の国がある。この国は一番の大国のようで、左右に長い。

国の東側は、大きな森が広がっていてその先はわからないのか、表記されていない。これが多分、魔物の森なんだろう。この大陸の東側は全体的に魔物の森が広がっているようで、そこから先は表記されていない。

既に魔物の森がどこまで続いているのかも、わからないのかもしれないな。

それにしてもこうやって改めて見てみると、本当に地球じゃないんだな。何故か妙にそう思った。日本では世界地図を目にする機会もよくあったからだろうか。

そんなことを考えていると、ロジェがこの国の地図も広げてくれた。

「それからこちらが、この国の地図です。王都はここ、公爵領はこの範囲です」

この国の地図は、世界の地図よりも少し詳細に書かれていた。王都は国の中心より少し南西にあるようだ。

公爵領は王都の南東方面にある、海に面した広大な領地だった。領都も海の近くにあるらしい。

もしかしたら海産物も食べられるかも！！　この世界では川魚を少し食べたくらいで、ほとんど肉しか食べていない。行くのが楽しみになって来たな。

「ロジェは王都以外に行ったことがあるのか？」
「いえ、私は王都で生まれ育ち、この街を出たことはありません。今回はレオン様に同行して公爵領へ行けるということで、大変感謝しております」

ロジェはそういって少し顔を緩ませた。おおっ！　ロジェがそんな顔をするなんて、実際はかなり楽しみにしてそうだ。
この旅で仲良くなれたらいいな。この後も長い付き合いになるんだから。

「海とか見てみたいよね」
「はい！　あ、申し訳ありません。確かに興味はあります……」

ロジェは思わず反射的に答えてしまったようで、慌てて取り繕っているが、いつもの鉄仮面が崩れて慌てている様子が窺える。そんなに海が楽しみなのか。
俺は思わず笑ってしまった。

「ははっ……見てみたいって頼んでみるよ」
「はい。ありがとうございます」

ロジェは、少しだけ顔を赤くしてそう答えた。どんどん慣れて、素を出してくれるようになればいいんだけど。
堅苦しいのは、俺が好きじゃないからな。

それからはのんびりお茶を飲みつつ、地図を頭に入れる時間にした。
そうして夕方ごろ。俺は準備を整えて食堂に行き、今は公爵家の皆様と夕食を食べているところだ。

今日はリシャール様、カトリーヌ様、フレデリック様が一緒にいる。

「レオン君、明日は朝早く出るから今日はしっかり休んでくれ」
「はい。ありがとうございます。公爵領にはどなたが行かれるのですか？」

俺はまだ、誰が一緒に行くのか聞いていないのだ。

「ああ、言ってなかったかな？　私とカトリーヌ、フレデリックの三人が公爵領へ行くことになっている」
「そうなのですね。でも、お仕事は大丈夫なのですか？」

俺は、リシャール様やフレデリック様は仕事が休めないから、カトリーヌ様だけ行くのかなと思っていたのだ。

「仕事は大丈夫だ。この国では、領都に帰るための長期休暇を取ることができるんだよ。少しの間なら私がいなくても大丈夫なはずだ」
「そのような便利な制度があるのですね」
「ああ、騎士にもその制度があるんだ。それで今回は私も一緒に行ける。まあ、護衛も兼ねてってことだな」

フレデリック様がそう言った。護衛って、道中危険でもあるのか？　俺は思わずフォークに肉を刺したまま、固まってしまった。

「何か危険でもあるのですか？」
「いや、ほとんどないよ。ただ念のためだ」

そうなのか、それなら良かった。俺は安心して肉を口に入れた。もぐっもぐっ……美味い。

「領都にはリュシアン様を迎えに行くんですよね？　他にも何か予定があるのですか？」
「いや、特別な予定はないよ。ただレオン君に領地を案内したいと思ってる。どこか行きたい場所はあるかい？」
俺の行きたい場所に連れていってくれるのか！？　それなら俺の答えは一択だ。
「海がある街に行きたいです。海産物も興味があります」
「それなら、領都の近くに港町があるからそこへ行こう。あの街は新鮮な海産物があるから、食事はとてもおいしい。私も好きなんだ」
「あの街に行くのですか？　私も楽しみだわ。料理がとても美味しいのよ」
カトリーヌ様も好きなのか！　期待が高まるな。
美味しい海産物は最高だからな！
というか製氷機が広まったら、王都でも海産物が食べられるようになるのだろうか？　さすがに氷漬けにしても、何日も経つとダメなんだろうか？
いや、氷漬けならいけるだろう。楽しみだ！
まずは一足先に本場の海産物だな。俺は海鮮バーベキューを思い出して、思わず涎が垂れそうになってしまった。
危ない危ない。考え出したらキリがないから、とりあえず美味しい料理の数々は、頭の片隅に追いやっておく。
「そこまで美味しい料理があるなんて、凄く楽しみです」
「ああ、楽しみにしていてくれ」
そうして和やかなムードの夕食は終わった。そして、その日は早

めにベッドに入り、早々に眠りに落ちた。

４５、旅の準備（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

46、公爵領へ

次の日の朝。いつもよりかなり早く起こされた。

「レオン様、本日は出発が早いのでそろそろ起床されませんと、遅刻してしまいます」

「うぅ～……わかった。起こしてくれてありがとう」

俺はまだ眠い目を擦りながら、なんとか起きた。まだ外は暗い。公爵領までの道中は、途中にある町の代官邸に泊まるらしい。最初に泊まる予定の街は少し遠いので、出発を早くしないといけないようだ。

俺は両手でパチンっと頬を叩き目を覚ました。うぅ～勢いよくやり過ぎて痛かった……

でも、目は覚めたからよしとしよう。

「ロジェおはよう」

「おはようございます。もう荷物は使用人が積み込んでおりますので、レオン様はご自分の準備をして下さい」

「わかった。ありがとう」

「はい、まずは朝食にいたしましょう。ご用意しますので、こちらで顔を洗ってお待ちになっていてください」

そうして俺は、朝ごはんを食べて豪華な服に着替え、準備を整えた。

「では参りましょう。玄関ホール横の応接室に集まることになっております」

ロジェに先導されてたどり着いたのは、玄関ホールの横にある応接室だった。ちょっとした来客などに使うのだろう。まだ誰も来ていないようだ。

俺はソファーに座って、ロジェが淹れてくれたお茶を飲みながら待つ。しばらくすると、フレデリック様がやって来た。

「レオンおはよう。早いな」

「フレデリック様、おはようございます」

「少し緊張してるか？」

そうかな？　自分では気づいてなかったけど。

でも確かに、何日もずっと貴族の方々といるのは初めてだから、緊張してるのかも。公爵家の方々には慣れてきたけど、領都にいる方達には初めて会うし。

「確かにそうかも知れません。フレデリック様のお兄様達には初めてお会いするので……」

「そんなに緊張しなくてもいい。兄上も皆いい人たちだ。それにレオンのことも伝えてあるからな」

そう言ってもらえると少し安心するな。

そのあとはフレデリック様と他愛もない話をしていると、リシャール様とカトリーヌ様が来た。

「皆揃ってるな、では出発しよう。馬車に乗ってくれ」

そうして俺たちは、馬車に乗って公爵邸を出発した。一際大きく

て豪華な馬車に四人で乗り、そこに使用人が二人乗り込んだ。他の使用人はもう一つの馬車に乗るらしい。また、荷物などが詰まった馬車が二台あるようだ。合計四台の馬車で道を進んでいく。そして周りを、公爵家の騎士や兵士が囲んでいる。

フレデリック様の他にもこんなに護衛がいるんだな。まあ、公爵家なんだし当然か。権威を示す意味合いもあるのだろう。

馬車は順調に進み、王都を出た。馬車の窓を開け外を見ると、畑が一面に広がっている。ポツンポツンと家が建っているのも見える。たまに教会のようなものもあるので、王都の街からかなり離れると教会は設置されているのだろうか。確かに、ここまで離れると町の鐘の音も聞こえないからな。

というか、ここはまだ王都なのだろうか？

「リシャール様、ここはまだ王都なのですか？」

「ああ、しばらくは王都の農業地帯が広がっている。もう少し行くと、公爵領の農業地帯だ」

王都から公爵領の領都までは、踏み固められた土剥き出しの道だが街道も整備されているらしい。

そしてその街道に沿って、農業地帯と街があるようだ。

俺はしばらく外を眺めていたが、流石にずっと同じ景色が続くので飽きてきて、窓を閉めた。

「レオン君は好きな食べ物はあるかい？」

唐突にリシャール様にそう聞かれた。好きな食べ物？　なんで急にそんな話なんだ？　俺は少し不思議に思いつつ答えた。

「そうですね。基本的になんでも好きですが、公爵邸で頂いたことのある、牛肉の煮込み料理が好きです」
「ああ、あれか。私もあれは好きだな。あの味付けは最近作られたものなんだが、肉も柔らかくなってとても美味しい」

ビーフシチューとは少し違うが、似たような味わいのソースで煮込まれた牛肉が、とても柔らかくて美味しいのだ。公爵家の夕食で食べた料理の中で一番気に入っている。

「では、お昼は牛肉が食べられる店にしよう」
「お昼ご飯はお店で食べられるのですか？」

途中に街があるってことだろうか？　そんなに街って頻繁にあるのか？

「公爵領に入ったところに街があるんだ。お昼は少し過ぎるが、できればお店で食べたいからな」

そういうことか。王都との境に街があるんだな。

「それは楽しみです。初めて王都以外の街に行きます」
「ああ、楽しみにしていてくれ。少し王都とは雰囲気も違って、楽しめると思うよ」

それからしばらく馬車で進むと、その街に着いたらしい。窓から外を見てみると、家が密集している。

「王都以外の街には、中心街のようなところはあるのですか？」

「いや、無いよ。ただ高級なお店が並ぶ通りはあるかな」

馬車は、街一番の大通りを進んでいく。街の人々は馬車を驚いたようにみるが、貴族の馬車だとすぐにわかるのか、あまりジロジロ見ることもなく去っていく。

貴族は平民にとって、あまり関わりたくない存在だからな。タウンゼント公爵家の方々は理不尽なことはしないだろうが、理不尽な貴族もいると聞くし。

しばらくして馬車が停まった。かなり豪華な作りのお店だ。リシャール様の従者が、先にお店に入っていく。貴族を迎え入れるために先触れを出すのだろう。お店にとってはかなり急だよな。

それから少しの間待たされ、お店からは壮年の男性が出てきた。そして、リシャール様の従者が馬車に戻ってくる。

「皆さま、準備が整ったようです」

「わかった」

そういうとリシャール様は、俺にまず馬車を降りるように言ってきた。身分が低い順なのだろうか？

馬車から、俺、フレデリック様、リシャール様、カトリーヌ様の順で降りる。

リシャール様は馬車を降りてカトリーヌ様をエスコートすると、二人でお店の方へ歩き始めた。フレデリック様もそれに続いていくので、俺もそれに続く。

「タウンゼント公爵家の皆さま。本日は当店にお越しくださり誠にありがとうございます。お席をご用意しておりますので、どうぞ中へお入りください」

「ああ、急に来たにも関わらず、迅速な対応感謝する」
「当然でございます」

店内は結構豪華な作りだった。公爵家の屋敷と比べたらかなり見劣りするが、中心街にあるお店くらいの豪華さはあるようだ。
俺たちは個室に案内された。四角い部屋に、大きな丸テーブルと椅子が四つある。リシャール様が一番奥に座り、俺が一番手前のドア側に座った。

「メニューはこちらでございます」

そう言って店員さんが、一人に一つメニューを渡してくれた。メニューは、メイン料理を何種類かあるお肉料理から一つ選び、その他のセットは決まっているようだった。
鶏肉のハーブ焼きや、牛肉、豚肉のステーキ、牛肉の煮込みなどがメニューに並んでいる。
俺はやっぱり牛肉の煮込みかな。さっき話してたら食べたくなってきたんだ。

「牛肉の煮込みをいただこう」
「私は鶏肉のハーブ焼きがいいわ」
「私は豚肉のステーキで」

皆さんがどんどん頼んでいく。俺も頼まないと。

「私も牛肉の煮込みでお願いします」
「かしこまりました。では少々お待ちください」

そう言って店員さんは出ていき、この部屋には四人と二人の従者、二人の護衛だけとなった。

多分従者や護衛の方も交代で食事をとっているのだろう。

「やはりレオンも牛肉の煮込みにしたのか」

「はい。先ほど話していて食べたくなってしまったので」

リシャール様に聞かれたので、俺は少し苦笑しながらそう答えた。

「確かにあれは美味しいですものね。でも私には昼から食べるには重いわ。鶏肉くらいがちょうどいいですわ」

「確かにカトリーヌには、少し重いかも知れないね」

そんな話をしていると、店員さんがスープの入った鍋をワゴンに乗せ入って来た。そして使用人の方が先に少しスープを飲んだ。

俺は一瞬何をしてるんだろう？　味見かなと思ったが、ハッと気づいた。

多分これ毒味だ！　凄い、本当に毒味なんてするんだ！

でも、いつも公爵家の食堂で毒見なんてしてるっけ？　わからない……あんまりじっと見たことがなかったからな。広い食堂だし、もしかしたらしてたのかも。

そして、それが終わると食器にスープが盛られ、給仕された。今食器を、使用人の方が箱から出した気がする。

もしかして食器も持参なのか？

そういえばこのカトラリーも、いつも公爵家で使っているものと同じかも。

やばい……貴族って怖い。

お腹を下すくらいの弱い毒を使って、毒を取り除く回復魔法の練習しとこうかな……家に帰ったらすぐしよう。毒草は森に生えてるから手に入るし。

俺は気を取り直してスープを一口、口に入れた。
おおっ！　結構美味しい。こういう高級なお店には、中心街で開発された新しい調理法も広まってるのかもな。
というか、チェーン店的なやつなのかも。この世界にあるかはわからないけど。

そこからは、公爵領についての話を聞きながら、食事を堪能した。牛肉の煮込みは美味しかったが、公爵家の料理人の方が腕がいいのか、ソースの味がいつもの方が美味しかった。でも満足だ。

俺たちは食後のお茶を飲みながら少し食休みをして、また馬車に乗り込み街を後にした。

４６、公爵領へ（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします！

47、代官邸

それからしばらく馬車に揺られ、暗くなり始めた頃に少し大きな街に着いた。

公爵領の街は領都以外は代官が管理していて、小さな街だと代官邸もこじんまりとしているが、大きな街なら結構豪華な建物らしい。代官邸は公爵家で建てるものらしいので、権威を示す意味もあるのだろう。

この街は結構大きな街で代官邸も広いので、俺たちが泊まっても余裕だそうだ。

街中を馬車で通り過ぎ、代官邸の敷地に入り玄関前で馬車が止まった。使用人が先に降り、次に俺、フレデリック様と先程と同じ順番で馬車を降りる。

代官邸の前には、代官らしき少し豪華な服を着た人と、その後ろにたくさんの使用人が並んでいた。結構使用人もたくさんいるんだな。

さっき馬車の中で聞いたが、大きな街の代官は、基本的に下位貴族の三男以下らしい。王宮で役人として働くのではなく、貴族に雇われて代官になる者も結構いるそうだ。この街の代官もそのうちの一人で、男爵家の三男だった人らしい。準貴族ってやつだな。

屋敷の前で頭を下げていた男性が顔を上げた。四十代くらいに見えるおじさんだ。お腹はでっぷりしていてかなり太っている。

「お待ちしておりました。公爵家の皆様にお越しいただけて、大変

光栄でございます。精一杯のおもてなしをさせていただきますので、どうぞごゆるりとお過ごしくださいませ」

おじさんは、にこやかな笑みを浮かべてそう言った。すごくフレンドリーに見えるけど……なんだか裏があるような笑顔だ。なんでそう思うんだろうか？

なんか、嘘っぽい笑顔なんだよな。権力者に媚びへつらうようなというか……

とりあえず、あまり近づかないようにしよう。

「モルガン、久しいな。一日だけだがよろしく頼む」

「リシャール様、お久しぶりでございます。お元気そうで何よりです。では中へどうぞ。お部屋にご案内いたします」

このおじさんはモルガンさんというのか。俺たちはモルガンさんの先導で屋敷の中に入る。屋敷の作りは、公爵家の王都の屋敷とあまり変わらなかった。あの屋敷より、質素で小さいというだけだ。俺はこのくらいの方が落ち着く。

というか、この屋敷でも日本にあったら十分に豪邸だよな。俺もこの世界の価値観に染まって来たようだ。

俺たちが泊まる客室は二階にあるようで、階段を登っていき奥の部屋から、リシャール様達が案内されていく。

「リシャール様はこちらのお部屋をお使いください。カトリーヌ様はこちら、フレデリック様はこちらです」

次は俺かと思ったが、俺の部屋は案内されない。なんでだ……？

「モルガン、レオン君の部屋はどこなんだ？　レオン君のことは私

たちと同じ扱いにするように伝えたはずだが？」
「承知しております。しかし大変申し訳ありませんが、客室はこの三部屋しかないのです。なのでレオン様には、空いている使用人の部屋を使っていただくことはできないでしょうか？」
「使用人の部屋だと？　他にも部屋があるではないか？　そこは客室ではないのか？」

リシャール様がそう聞いた時、僅かにだがモルガンさんの顔に焦りが浮かんだように見えた。しかし、俺はまだ背が低いから下から表情を覗けるので気づいたが、他の人は気づいていないだろう。

「そこは、物置として使っているのでございます。皆様がいらっしゃる時は今まで三名を超えたことがありませんでしたので、他のお部屋は物置として有効活用した方がいいかと思いまして……勝手なことをして大変申し訳ございません」

客室にもできる部屋を物置にしてるなんて、おかしな話だ。本当にそうなのだろうか？
俺は少し疑問に思いながらも、ここで口を出すとややこしくなりそうなので黙っていた。

「モルガン、部屋はあるのだからしっかり客室として整えておくんだ。あと二つか三つは客室を増やしておけ。今までは、たまたま三名以下だっただけだ」
「かしこまりました。大変申し訳ございません」
「それで、今日はどうするか……」

リシャール様が悩み始めてしまった。俺は平民なんだし、別に使用人の部屋でも構わない。
俺は慌ててそう伝えた。

「リシャール様、私は使用人の部屋でも構いません」
「いや、でも君をそんな扱いにするのは流石に……」
「ですが、身分的に私が部屋を使って、他の方が使用人部屋を使うなんてもってのほかですし。今日一日だけですから」

俺がそういうと、リシャール様はかなり悩んでいるようだったが、結局了承してくれた。

「では、本当にすまないが、レオン君は使用人部屋を使ってくれるか？」
「はい」

そうして話が終わり、俺は公爵家の方々と分かれ、ロジェとともに使用人の部屋に案内された。

「こちらをお使いください」

モルガンさんは一応丁寧な言葉を使ってはいるが、俺を蔑むような目で見てくる。
ああ、この人は平民を見下すタイプの貴族なんだな。もしかしてさっきの客室の件も、平民の俺を豪華な客室に入れたくなかっただけなんじゃないか？

「ありがとうございます」

俺がそういうと、モルガンさんは俺を強く睨んでから去っていった。
あの人ってバカなのかな？
リシャール様が、わざわざ自分と同じ待遇にするよう要請してく

るという意味を理解してないんじゃないか？　さっきもリシャール様は、俺に使用人部屋を使わせることを躊躇っていた。少し考えればかなり大事な客人なんだと予想がつくだろう。
その客人にあんな目を向けたりすれば、俺がリシャール様にチクったら一瞬で終わりってことに気づかないのだろうか。多分、貴族である自分は平民には何をしても構わない、という思考が根付いているのだろう。
モルガンさんは、リシャール様達の前では上手く隠していたのかもしれないけど、タウンゼント公爵家の敵対勢力に属しているんじゃないか？　そのことはリシャール様に伝えた方がいいかもしれない。
はぁ～。一泊だけだけど、めんどくさくなりそうだ。

そこまで考えたところでロジェが部屋にやって来た。

「レオン様、隣の使用人部屋を貸していただけましたので、私はそちらに泊まります。何かありましたらすぐにお呼びください」
「うん、ありがとう」
「それにしても、公爵家の客人であるレオン様にこのような部屋を使わせるとは」

ロジェはわかりやすく顔を顰めていた。感情を出すなんて珍しいな。

「それに、この部屋は少し埃っぽいですね」
「そうなんだよ。簡単でいいから掃除をしてくれる？」
「かしこまりました」

この部屋に入った時から思っていたが、かなり埃っぽいのだ。多分掃除もされていないのだろう。

こんなにわかりやすく嫌がらせをしたら、自分を追い込んでるって気付かないのだろうか。ちょっとバカすぎて逆に怒る気になれない。

俺がリシャール様に、先程の言動やこの部屋の実態を告げれば、モルガンさんはすぐにクビになるのかもしれないけど、あの人が代官として優秀ならそれはしない方がいいのかな？　俺が一晩我慢すればいいだけだしな。

でも、タウンゼント公爵家の勢力とはぶつかる考え方だから、クビにしてもらった方がいいのだろうか？　俺はまだ、貴族の実態をよく知らないからわからないんだよな。勢力と仕事は別かもしれないし。

とりあえず様子見だな。

ロジェが部屋をきれいに掃除して、体を拭くために桶に水を入れて持って来てくれた。

「レオン様、この部屋はお風呂がありませんので、本日は体を拭くだけで我慢していただけますでしょうか？」

「拭くだけで大丈夫だよ、ありがとう」

俺はロジェに手伝ってもらいながら、体を清め家の中で着る服に着替えた。

それからしばらくして夕食の時間になったようで、この屋敷の使用人が食堂まで案内してくれた。使用人の方達はモルガンさんに逆らわないようにしているだけで、俺を積極的に害そうとかは考えていないようだ。まあ、同じ平民だし、そんなリスク高そうなことしないよな。

食堂に行くと、既にモルガンさんは座っていて公爵家の方々がい

なかったので、また何かされるんじゃないかと身構えたが、すぐにフレデリック様が来てくれたことで事なきを得た。なんか疲れる…

…

４７、代官邸（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします！

48、使用人の噂話

夕食は公爵家の方々がいるからか、終始和やかなムードで進んだ。食事も王都の屋敷で食べるものより少し劣るが、そこそこに美味しく満足できる味だった。

「レオン君、部屋はどうだろうか？　不便なことはないか？」
「はい。お風呂がないことが少し残念ですが、特に不便はございません」
「風呂か……それなら私の部屋で入るといい」

え？　リシャール様の部屋でお風呂を借りるってことか？　そんな図々しいことできるわけない！！

「いえ、先程ロジェにお湯を用意してもらい、体を清めたので大丈夫です。お気遣いありがとうございます」
「そうか？　それならいいんだが……」
「はい。今晩一日だけですし、なんの問題もありません」
「それなら良かった」

ふぅ～、なんとか理解してくれたようだ。リシャール様の部屋のお風呂なんて、落ち着いて入れるわけない。
それからリシャール様は、モルガンさんとこの街の財政の話に移ったようだ。

俺は少し疲れたから先に休んでもいいかな？　リシャール様はまだ話が長引きそうだし。あまりモルガンさんと同じ空間にいたくない。

そう思っていると、カトリーヌ様とフレデリック様が先に部屋へ戻ったので、俺もそれに続いて部屋に戻ることにした。

「旅の疲れもありますので、お先に部屋へ戻らせていただきます」
「ああ、レオン君また明日」
「はい。リシャール様もごゆっくり休まれてください」

そう言って食堂から退出した。なんか、この屋敷にいると気が休まらなくて疲れるな。やっぱり他人からの悪意って怖い。俺は改めて、今までの人たちがどれだけ良い人たちだったかを思い知った。

部屋に戻って夜着に着替える。
ふぅ〜、もう寝ようかな。

「レオン様、お茶でもお淹れしましょうか？」
「う〜ん、今日は疲れたからいいや。もう寝ることにするよ」
「かしこまりました。では私も下がらせていただきます」
「うん。ロジェ、いつもありがとう」

平民の俺に真摯に仕えてくれているロジェが本当にありがたい存在だと気づき、俺は思わずお礼を述べた。
すると、ロジェは少しだけ顔を綻ばせた。

「レオン様にお仕えするのは、私の仕事ですから」

言葉はそっけないんだけどな。まあ、それがロジェだから、そこはもう気にしてない。
でも本当に、俺に嫌な顔一つせず仕えてくれるのはありがたいな。

俺はロジェが部屋を出てからベッドに横になったが、平民というだけであそこまで見下してくる貴族がいることに驚いて、なんとなく眠れないでいた。
やっぱり実際に会うと、身分の差を見せつけられて衝撃だな。

そんなことを考えながらベッドの上でゴロゴロとしていると、外から誰かの話し声が聞こえて来た。
使用人だろうか？　若い女の人の声なので、新人のメイドさんかもしれない。

俺はなんとなく話の内容が気になって、魔力を耳に集めて聴力を強化した。身体強化魔法を耳に使うと、少しだけ聴力がアップするのだ。あくまでも少しだけなので使い勝手は良くないのだが、こういう時は有効だ。

おおっ……聞こえるようになった。

「私、公爵家の方々にバレるんじゃないかってヒヤヒヤしちゃったわ」
「私もよ。まあ、帰られるまで気は抜けないけどね」
「そうよね。でも、モルガン様も客室の家具を売るなんて、何を考えているのかわからないわ」
「それがね……誰にも言わないで欲しいんだけど、家具を売ったお金を自分で使ってるらしいわよ」
「え！？」
「声が大きいわよ！」
「こ、ごめん。それよりも本当なの？」
「ええ、モルガン様と執事が話しているのを聞いた使用人がいるんですって」
「執事もグルってこと？？」

「いや、話によると執事は止めたらしいわよ。私たち平民じゃモルガン様には逆らえないわよ」
「それもそうね」

そこまでは何とか聞こえたが、それ以上は遠くに行ってしまい聞こえなくなった。

なんかすごいこと聞いちゃったな……
俺への嫌がらせで部屋を貸せないのかと思ってたけど、そんな事情があったのか。
モルガンさんは、この街のお金を着服してるってことだよな。家具を売ってまでってことは、税金の中抜きとかもしてるのか？
どうやってやるんだろ？
よくわからないけど、収穫を少なく報告して差額分を着服するとか、そんな感じかな。とにかく犯罪だ。
そしてモルガンさんは、代官としても有能じゃないってことだな。有能どころか有害だ。

これはリシャール様に報告するべきだな。
俺はリシャール様に面会できるか確認してもらうため、ロジェを呼ぶことにした。いつもならベルを鳴らせばいいが、この部屋からだと聞こえない可能性があるので、ロジェの部屋がある方の壁をノックすることになっている。
コンコン。俺がノックをすると数秒後にロジェが部屋へとやって来た。早っ！

「レオン様、どうされましたか？」
「リシャール様に話しておきたいことがあるんだけど、今から面会ってできるかな？」
「今からだと失礼になるかと思いますが、明日ではダメなのでしょ

うか？」
「うん、できる限り早く伝えた方がいいと思う」
「かしこまりました。私が面会できるかお聞きして来ますので、レオン様はこちらでお待ちください」
「わかった」

そう言ってロジェは部屋を出て行った。面会できなかったら明日伝えることになるけど、多分早い方がいいだろう。
それから数分後ロジェは部屋に戻って来た。

「レオン様、面会して頂けるようです。いつ来てくれてもいいとのことですので、今すぐ行きますか？」
「うん。すぐ行こう」
「かしこまりました」

そうして俺は少し緊張しながら、ロジェの後に続いてリシャール様の部屋に向かった。

コンコン。

「レオン様がいらっしゃいました」

ロジェがそういうと、リシャール様の従者の方がドアを開けてくれた。リシャール様はソファーに座って、俺を待っていてくれたようだ。

「リシャール様、こんな時間に申し訳ありません。お時間をとって頂きありがとうございます」
「いや、全然いいんだ、気にしないでくれ。それで、こんな時間に面会に来るということは何かあったのか？」

「はい。ですが他の方に聞かせてもいい話か、判断できません」
俺はそう言って、この部屋にいる従者の方や護衛の方に目を向けた。
「そうだな……皆少し下がっていてくれ」
リシャール様がそういうと、皆心得ているように下がっていく。いつも思うけど、公爵家で働く方々ってレベル高いよな。
「それで、なんの話だい？」
「はい。モルガンさんのことなんですが……」
俺はそこから先ほど聞いた噂話と俺の推測を話した。
平民を見下していることについては、とりあえず黙っておくことにした。貴族としては、特に問題がない可能性もあるからな。
俺の話を全て聞くと、リシャール様は難しい顔をして考え込んでしまう。
そして、しばらくすると徐に口を開いた。
「レオン君、このことはとりあえず他の人には言わないでくれるか？　私がしっかりと対策を考える。実際の証拠を押さえてからだが、モルガンには代官をやめてもらい、王都で罪を問われることになるだろう」
罪に問うには、実際にお金を着服していた証拠が必要なようで、少し慎重にやらないといけないらしい。
まずは家具を売った先のことを調べて、その後に余罪についても調べるそうだ。

とりあえずリシャール様に任せておけば大丈夫だろう。

「今回はレオン君のおかげで助かったよ、感謝する。モルガンの本性を見抜けなかったのは私の責任だな……」

リシャール様はモルガンさんの本性を見抜けなかったことで、自分を責めているようだ。

でも人の本性を見抜くのは難しいよな。最初は誠実だったけど、仕事をしていくにつれて欲に流されるってこともあるだろうし。

「確かにリシャール様の責任もあるかもしれませんが、人の本性を見抜くのは難しいですから、代官が好き勝手できないような仕組みが大切だと思います」

俺がそう言うと、リシャール様は少し興味を持ったようだ。

「ほう。例えばどんな仕組みが良いだろうか？」

やばい……リシャール様が興味を持っちゃったよ。

例えばどんな仕組みだろう？　俺はそういうことに詳しいわけじゃないんだよな。安易に言わなきゃよかった！

うーん……

「そうですね。例えば権力を分散するとかはどうでしょうか？　農業地区をいくつかに区切ってその中で長を決め、その地区の長に収穫量を提出させるんです。そして提出先を代官邸と領都の公爵邸の二箇所にしておけば、誤魔化すことは出来なくなります」

こんなんでいいんだろうか？　結構適当な思い付きで言ったんだけど……

というか、こんなことは既に行われてるか？

「確かに一考の余地はありそうだ。クリストフと話し合うことにしよう」

おおっ、意外と好印象？　俺はホッとして、静かに息を吐き出した。

「では、モルガンのことは私に任せて欲しい」

「はい。私に口を出す権利はありませんから。聞いてしまった噂話が、無視できるような内容ではなかっただけなので」

俺がそう言って苦笑すると、リシャール様も少し苦笑して答えてくれた。

「旅の疲れを癒すどころか、疲れさせてしまって申し訳ない。部屋に戻って休んでくれ」

「はい。失礼いたします」

その後すぐにリシャール様が使用人を呼び戻し、俺はロジェとともに自分の部屋に戻った。

リシャール様に話して少しスッキリしたからか、その後はぐっすりと眠れた。

４８、使用人の噂話（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします！

49、公爵領の領都へ

次の日の朝はスッキリと目が覚めて、食堂で朝食をとり出発の準備を整えた。昨日リシャール様に話したからか、モルガンさんに会っても昨日ほど緊張することもなかった。

そして出発の時間だ。

「この度は、この街にお寄り頂きありがとうございました。皆様の旅の安全を祈っております」

「ああ、世話になったな。帰りも寄る予定だからよろしく頼む。帰りは一名増えるので、あと二つの客室もそれまでに準備しておいてくれ」

リシャール様がそういうと、モルガンさんは少し顔を強張らせたがすぐに笑顔に戻り、頭を下げた。

「かしこまりました。お待ちしております」

そうして俺たちは馬車に乗り、また領都へと出発した。

モルガンさんはどうやって、あと二つも客室を準備するのだろうか？　家具は基本的にオーダーメイドだし、公爵家で使うような家具は高価だ。家具を売ってしまったのなら、お金も時間も足りないだろう。

……まあ、俺が考えることじゃないな。あの人を心配する義理なんかないし。

その後の旅路はすごく順調だった。
二日目に泊まった代官邸の代官は、物腰柔らかで穏やかな人で、俺にも普通に客室を用意してくれていた。平民を見下すような態度もなく、身体をゆっくりと休めることができた。
皆こんな風に穏やかな貴族だったり、タウンゼント公爵家の皆さんみたいに良い人たちならいいのに。でも昨日のモルガンさんみたいな人が、貴族の半数以上を占めてるんだよな。
ということは、王立学校に行けばあんな感じの貴族の子供がたくさんいるってことか。すごく憂鬱だ……
俺はひっそりと一年間暮らしたい。公爵家に住まわせてもらうけど、一人で王立学校まで歩いて行くようにすればあまり目立たないかな？　公爵家の馬車なんかで行ったら目立ちすぎる。

……でも、俺は公爵家の勢力を後押しするって約束したから、公爵家の後ろ盾があることを示さないといけないのか？　うわぁ～！　めちゃくちゃ目立つし、めんどくさい奴に絡まれそう。
こうなったら逆に、これから会うリュシアン様と仲良くなって、めんどくさい奴を排除してもらうのがいいかもしれないな。
よしっ！　頑張って仲良くなろう。

俺がそんな決意をしたところで、領都に着いたようだ。

「レオン君、領都についたぞ。これから領都の大通りを馬車で進むから、街並みを見るといい」
「はい」

俺は同じ景色ばかりなので、見飽きて締めていた窓を開けた。まだ領都に入ったところなのだろう。家がポツポツとあるくらいだ。

しばらく進むと、家が密集しているところに近づいてきた。おおー！　王都と同じくらい栄えてるかも。さすが公爵領の領都だな。

最初は王都の俺の家がある地区のような、少し貧しい格好をした人達がたくさん歩いていたが、段々と服装が華やかになっていく。この辺は貴族と取引するような商人がいる地区みたいだ。

そして、そこも通り過ぎると目の前に豪華な公爵邸が見えて来た。

凄い！！　屋敷の規模や豪華さは王都のものと変わらないが、とにかく敷地が広い。王都の屋敷の敷地も、こんなに広い必要があるのかと思ったが、ここはその倍はある。

自分の領地の領都だから、いくらでも敷地を確保できるのだろうな。庭師が大変そうだけど……

敷地の中を馬車で進み、屋敷の入り口前に馬車が停まった。屋敷の前には若い男性と女性、俺と同じくらいの男の子と二歳くらいに見える男の子がいた。そしてその後ろに使用人がずらりと並んでいる。

多分あの人たちが現公爵一家なのだろう。

俺たちは馬車から降りて、現公爵一家と対面した。

「父上、母上、フレデリック、レオン、長旅ご苦労様です。ようこそおいで下さいました」

「クリストフ、久しいな。ソフィア様とリュシアンも元気そうで何よりだ。そしてそちらが新しい子かな？」

「はい。アルベールと言います。私の次男で三歳になったところです」

まだ三歳なのか。茶髪に金の瞳の可愛い子だ。

「アルベール、父上に挨拶を」

「お祖父様、初めまして、アルベールです」

アルベール様はまだ少し辿々しい言葉遣いで、そう挨拶して、ペコっと頭を下げた。多分たくさん練習したのだろう。挨拶した後にちゃんとできて嬉しかったのか、ニコッと笑った。

かっわいい〜！　なにこの子、とりあえず可愛い。このぐらいの歳の男の子だと、生意気な感じだと思ってた。貴族として教育されてるからか、大人しくしているし、人見知りもあまりしないのか、俺たちのことを興味津々な様子で見ている。

こんなに可愛い弟だったら欲しい！！

俺がそんな風に内心身悶えていると、リシャール様達も同じような気持ちみたいだ。皆さん顔がだらしなく緩んでいる。

リシャール様、威厳ゼロの顔になってますよ。

リシャール様はしばらく顔を緩めていたが、ハッと正気に戻るとわざとらしく咳払いをして、アルベール様に言った。

「アルベール、何か困ったことがあったら私に言うんだぞ。それから、何か欲しいものがあったら直ぐに言いなさい」

リシャール様、威厳を出すんじゃなかったんですか。最初は少し厳しい顔を作ったが、すぐに可愛い孫を見るおじいちゃんの顔になっている。

何でも買ってあげるって、典型的なダメなおじいちゃんじゃん。アルベール様はよく分からなかったのか、少し首を傾げている。

その様子を見て、クリストフ様は苦笑いだ。

「父上、アルベールに何でも買い与えるのはおやめ下さい。わがま

まな子に育ってしまっては困ります」
「まあ、そうだな……では、必要なものがあれば私が買おう」
リシャール様はどうしても何か買ってあげたいらしい。クリストフ様だけではなく、ソフィア様やリュシアン様まで苦笑いを浮かべている。
「では、何か必要なものがあればお伝えします」
「ああ、よろしく頼むぞ」
「それから、君がレオンだね。私はタウンゼント公爵家の現当主、クリストフ・タウンゼントだ。そして、妻のソフィアと長男のリュシアン、次男のアルベールだ」
クリストフ様は俺の方を向いて、そう紹介をしてくれた。クリストフ様は茶髪に金の瞳で優しそうな方だ。
「初めましてクリストフ様、ソフィア様、リュシアン様、アルベール様。レオンと申します」
「クリストフの妻、ソフィアですわ」
「長男のリュシアンだ」
「アルベールです」
ソフィア様は青髪に青の瞳で細身の綺麗な方、リュシアン様は青髪に金の瞳で、九歳ながら既に精悍な顔つきをしている。なんだか強くてしっかりしてそうだ。アルベール様はとにかく可愛い。
「では自己紹介も終わったことですし、屋敷に入りましょう。父上、母上どうぞお入り下さい」
リシャール様達はクリストフ様に従って屋敷の中に入っていくの

で、俺も後に続いた。なんか、家族の集まりに一人部外者がいるみたいで、落ち着かないんだけど！

俺は少し肩身が狭い思いで後を付いていった。

そうして歩いてたどり着いたのは、かなり広い応接室だった。大きなソファーが机を挟んで二つあるが、一つに余裕で六人ぐらい座れそうだ。

一つのソファーにはクリストフ様御一家が座り、もう一つに俺たちが座る。

俺は座っていいのかと少し躊躇ったが、クリストフ様が「レオンも座ってくれ」と言ってくれたので、ソファーに腰掛けた。

はぁ～、緊張する。俺はじんわりと滲んでくる手汗を、さりげなくズボンで拭った。

４９、公爵領の領都へ（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします！

50、現公爵一家

「父上、母上、それからフレデリックも、リュシアンを迎えに来てくださりありがとうございます」
「お祖父様、お祖母様、叔父上、ありがとうございます」

リュシアン様めちゃくちゃしっかりしてる。九歳とは思えないな。これが貴族教育の賜物なのか。
俺は九歳だけど、中身は成人済みだからな。

「リュシアン、お前に何かあったら大変だからな。迎えにくるのは当然だ」

リシャール様は威厳を取り戻そうと、カッコよくそう言ったのだろうが、顔が緩みすぎてて全く威厳はない。
小さい子だからデレデレとかじゃなくて、孫だからデレデレなんだな。
ずっと思ってたけど、タウンゼント公爵家って貴族の中ではかなり家族関係が良好だ。俺のイメージでは貴族って、殺伐とした家族関係のイメージだったんだけど。
他の貴族をあまり知らないからなんとも言えないが、この家は貴族の中では特殊な気がする。
俺って最初にフレデリック様と知り合ったの、かなりラッキーだったよな。それにマルセルさんと知り合ったのも。他の人だったらいいように利用されたり監禁とかもあったかもしれない。

……そう考えると怖っ！　本当に良かった。

「私は、王立学校に行くのをとても楽しみにしていたのです！　剣の授業が楽しみです」
「そうか、リュシアンは剣が好きなのか。剣の腕を磨くのはいいことだ。自衛にもなるからこれからも頑張りなさい」
「はい！」

リュシアン様が目を輝かせてそう言っている。剣が好きなのか、やっぱり強そうだと思った。九歳にしてはガタイもいいもんな。
というか剣の授業か……俺も楽しみだな！
全属性は隠さないといけないから身体強化は使えないけど、何事もまずは基礎を身につけてからだ。俺も頑張ろう。攻撃の手数は多い方がいいし、魔法は接近戦にはあまり向いてないからな。

「レオンも私と同じ年に入学するんだよな？」

リュシアン様が、急に俺に話を振って来た。

「えっと、そうです。これからよろしくお願いします」

俺がそう言って頭を下げると、リュシアン様は目を輝かせた。

「私は同い年の友達は初めてなんだ。レオン、これからよろしく！」

リュシアン様がそう言ってニカッと笑った。こんなに友好的だとは思わなかった。俺が平民ってことは聞いてるはずだよな。タウンゼント公爵家方々は凄いな、ありがたい。

「よろしくお願いします」

俺も笑顔でそう返した。そうするとリュシアン様は少し周りを見

渡して、小声でクリストフ様に尋ねた。
「父上、今ここでレオンの能力の話をしてもいいのでしょうか？」
「そうだな……皆は少し下がってくれるか」
クリストフ様は少し悩んだ後、使用人を皆下がらせた。そうして使用人が全員廊下に下がった。
「リュシアン、ここでなら話していい。一応使用人にも聞かれないようにするんだ」
「わかりました」
リュシアン様はクリストフ様とそう話すと、俺の方をまた向いた。
「レオンは全部の属性魔法が使えるのだろう？　私にも魔法を見せてくれないか！　私は火属性なんだが、もっと魔法が上手くなりたいんだ」
リュシアン様も、俺が全属性を使えることを知ってるのか。そう少し驚いていると、リシャール様が補足をしてくれた。
「本当は子供達には伝えないでおこうと思ったんだが、ステファン様とマルティーヌ様には知られてしまったからな。王立学校で一緒にいることも多いだろうから、リュシアンにも伝えておくことにしたのだ」
確かにマルティーヌ様は知ってるみたいだったけど、ステファン様もなのか。まあ、知ってる人がいた方が気が楽ではあるからいいか。

「そうだったのですね。リュシアン様、私で良ければ魔法をお教えしますし、魔法をお見せします」
「本当か！？　レオン、ありがとう」

リュシアン様めちゃくちゃいい子だ。仲良くなれそうで良かった。

「レオン、できれば今ここで全部の属性を使ってみてくれないか。父上から手紙で聞いてはいるが、実際にも見てみたいのだ」

クリストフ様にそう言われた。確かに聞いただけでは信じられないのも無理はない。

「はい。魔法を使うのは構いません。では、火魔法から使いますね」

そうして俺は、火、水、風、土、身体強化の順で魔法を使った。最後は回復属性だ。

「最後は回復属性ですが、怪我などがあればそれを治すのでもいいのですが、病気がないか調べる魔法もあります。皆様の体の状態をお調べしましょうか？」

俺はあれから回復魔法を、毎日魔力が無くなるギリギリまで練習していたのだ。体の不調やその原因を見極める魔法は、かなり精度が上がっている。ずっと家族やマルティーヌと練習していたからな。

以前より少ない魔力で全身を覆えるようになったし、頭痛や腹痛などウイルスなどが原因でないものもわかるようになっている。

ただ、ウイルスや病原菌、悪性の細胞などは取り除けるが、ただの頭痛を治すことはできないんだよな。腹痛も食べたものが原因ならそれを取り除けるんだが、心因性の腹痛などは治せない。まあ、そこまで万能なものはないってことだな。

「それはありがたい！　ここにいる全員をできるのだろうか？」
「はい。病気を治すのには魔力を使いますが、調べるのにはそこまで魔力を使いませんので」
「ではよろしく頼む」
「はい。誰からにしましょうか？」
「父上からだな」
「かしこまりました」

俺はリシャール様のところに行き、リシャール様を回復属性の魔力で覆った。

……あれ？　下腹部に小さな腫瘍のようなものがあるかも？
これって、悪性腫瘍とかかな？　多分悪性のものしか感知しないはずだからそうなのだろう。
まだかなり小さいが、今のうちに気づいて良かったかも。このくらいなら、そこまで魔力も使わずに治せるだろう。

そう考えていると、俺が黙りこくってしまったことに不安になったのか、リシャール様が様子を窺うように俺を見てきた。

「レオン君、何かあったのか？」
「あ、すみません。下腹部に小さいのですが病変があるようです。今治してしまってもいいですか？」

俺がそういうと、リシャール様はとても驚いた表情をした。

「でも、私は体調も悪くないが……」
「まだ体調に影響があるほどではないのだと思います。今なら簡単に治せますので大丈夫ですよ」

俺はリシャール様を安心させるように、笑顔でそう言った。そうするとリシャール様も少し顔を緩める。

「そうか、君に見てもらって良かったよ。よろしく頼む」

「はい。ではいきますね」

俺は下腹部に魔力を集めて、魔力を少し多めに流し込んだ。すると回復魔法が少し強く光り、リシャール様の病変は無くなった。

「これで大丈夫です」

「レオン君、ありがとう。君には助けられてばかりだな。これからはたくさん恩返ししなければいけないようだ」

リシャール様が少し笑ってそう言うので、俺も少し笑って答えた。

「リシャール様や公爵家の方々にはすごく良くしてもらっています。このくらい当然ですよ。では次はカトリーヌ様ですね」

そうして俺はカトリーヌ様、フレデリック様を確認し、どこも悪いところがなかったのでクリストフ様の方を向いた。すると、クリストフ様達はポカーンと何かに驚いたような顔をしている。

え？　どうしたの？

「えっと、どうしたのですか？」

「あ、ああ、すまない。本当にあれで父上の病気が治ったのかい？　あんなに簡単に治せるとは本当に驚いてね」

そうか、初めて見たから驚いているのかな？　でもリシャール様は、見た目にはなにも変わってないと思うんだけど？

「でも、リシャール様は見た目に変化がないのでわかりにくいと思いますが……？」
「ああ、でも魔力はとても神聖な光を放っていた」
神聖な光？　普通の光じゃないか？
まあいっか、気にしないことにしよう。なんか感動してくれてるから良いだろう。
確かに他の人が怪我を治す時は、魔力の光なんてほとんどないからな。俺は魔力がバカみたいに多いからできるんだ。
「では、次はクリストフ様でよろしいですか？」
「ああ、よろしく頼む」
「では失礼します」
それからクリストフ様、ソフィア様、リュシアン様、アルベール様の順に調べたが誰も悪いところはなかった。
「皆さま健康なので大丈夫です。これから体調が悪くなることがありましたら、ぜひ私におっしゃってください」
「レオン、ありがとう。とても心強いよ」
「私も安心したわ。ありがとう」
「喜んでもらえたのなら良かったです」
それからはしばらく他愛のない話をして、俺たちは客室に案内されることになった。
客室でしばらく休んだら、夕食だ。海の幸とか出るのかな？　楽しみだ！

５０、現公爵一家（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

51、魔法の授業（リュシアン編）

結果、夕食に海の幸はありませんでした。

港街から領都までは馬車で三時間はかかるようで、まだ製氷機が普及してないから、領都まで運んでくるのは難しいらしい。今の季節なら大丈夫だろうけど、危険性があるものをわざわざ食べる必要はない、という考えのようだ。

確かにそうだけど……！　製氷機は早急に普及が必要だ。ただ平民に買うことはできないから、公爵家が買って貸し出すことになるだろう。そうすると盗難されないように監視も必要だからその人員も必要になるし、頻繁に使うのなら魔力を込められる人も必要だよな、

……結構大変そうだ。

それに、そんな大量に作れるのかという問題もある。魔鉄や魔石がどの程度あるのかわからない。平民にも広げられるほどあるのだろうか？

問題点は山積みだな。

まあ、とりあえずは港街に行って、海の幸を堪能しよう！

海の幸はなかったけど夕食は普通に美味しかった。そして夕食が終わった後は、旅の疲れもあるだろうからと早々に休んだ。

俺は部屋でベッドに横になると、すぐに眠りについた。

「レオン様、おはようございます」

う～ん……ロジェが俺を起こしている。でもまだ眠い。

「レオン様、本日はリュシアン様に、魔法をお教えするのではなかったのですか？　そろそろ起きなければ間に合いません」

「うん、起きるよ……」

そうだ。今日はリュシアン様に魔法を教えるんだった。俺が遅刻はダメだろう。

よしっ！　起きるか。俺はベッドの上で起き上がり、うーんと伸びをした。

「ロジェおはよう」

「おはようございます。リュシアン様の従者からの伝言ですが、リュシアン様は本日レオン様に魔法を教えてもらうことをとても楽しみにしておられるようで、できれば予定の時間よりも早く、準備が終わり次第来て欲しいとのことです」

「そうなの？　じゃあ結構急いだ方がいいってことだよね」

「はい。リュシアン様は既に朝食を終えられているようです」

それ早すぎない？　というか今、俺を待ってるってこと！？　俺が待つのはともかく待たせるのはダメだろう。

急がなきゃ！

「ロジェ、すぐに朝食の準備をして。俺は着替えておくから」

「かしこまりました」

そうして俺は、今までで一番急いで準備をした。

なんか朝から疲れたよ。

「レオン様がお越しです」

ロジェがリュシアン様の部屋の扉を叩き、そう言った。魔法の練習には外の方がいいのだが、リュシアン様の部屋に呼ばれたのだ。

ドアが開き部屋に入ると、リュシアン様が金の瞳をキラキラと輝かせて、ソファーに座って待っていた。

第一印象は精悍でしっかりとしたイメージだったが、昨日の応接室での様子や今の様子からして、素は好奇心旺盛なところがあるようだ。まあ、まだ九歳だからな。

「リュシアン様、おはようございます」

「レオンおはよう。座ってくれ」

「失礼いたします」

「皆はレオンにお茶を準備したら下がってくれるか」

リュシアン様がそう言うと、使用人達はテキパキとお茶の準備だけをして下がって行った。護衛の方もすんなりと下がっていった。

俺は結構信用されてるのかもな。というか、公爵家の使用人ってやっぱりレベル高い。

「レオン、今日は魔法を教えてくれるのだろう？」

「はい。リュシアン様は火属性でしたよね？　魔力量はいくつなのでしょうか？」

「レオン、同い年なのだしそのように改まって話さなくてもいいぞ！　せっかく初めての友達なのだから、もっと仲良くなりたい」

また言われた……マルティーヌ様といい、リュシアン様といい、俺は平民だということをわかっているのだろうか？

「ですが、私は平民ですし……」
「そのようなことは関係ない！　確かに公の場や他の人がいる場所では改まった言葉遣いも必要だが、二人しかいない時はいいだろう？」

これいくら断っても意味ないやつだ……
まあ二人きりの時ならいいよな。これの問題点は、俺がタメ口に慣れて他の人がいる場でも言葉が崩れてしまうことなんだよな。気をつけないと。

「じゃあ、二人きりの時だけはそうするよ」
「ありがとう！　私のことはリュシアンって呼んでくれ」
「わかったよ。これからよろしく、リュシアン」

俺がそういうと、リュシアンは本当に嬉しそうに破顔した。こんなに喜んでもらえるのなら良かった。

「じゃあ魔法を教えてくれるか？　私の魔力量は四なんだが、大丈夫だろうか？」
「うん、魔力量はいくつでも魔法を教えるのに支障はないよ。ただ、どの程度で魔力切れが起こるのか、一応確認しておきたかったんだ」

俺が魔法を教えるのは王立学校を卒業してからと言われているが、例外で全属性のことを知っている人には教えてもいいと言われている。

「それなら良かった。火魔法だから外の方がいいよな？　魔法の練習場があるんだ」
「ならそこに行こう」

そうして俺とリュシアンは、外にある魔法の練習場へと行った。
そこは屋敷の裏にあって、開けた場所で岩や的が置かれている。
リュシアンの従者と護衛、それからロジェは少し離れたところにいる。会話は聞こえないほどの距離だ。

「リュシアンは魔法を使うときに、イメージをしてるよね？　どんなイメージ？」
「それは、火をイメージしている」
「それって燃えている火をイメージして、火魔法を使ってるってことだよね？」
「そうだな」
「じゃあそのイメージに、今から俺が教えるイメージを加えて欲しいんだ」

そうして俺は、またまた空気や酸素についての説明をした。リュシアンは剣術が好きなようだったから頭はどうなのだろうと思っていたけど、かなり理解が早かった。
考え方は柔軟だし、記憶力もいい。剣の腕も強くて頭もいいとは、王立学校に行ったらめちゃくちゃモテそうだな。

「レオン、なんとなくわかった気がするからやってみてもいいか？」
「うん、さっきのイメージで魔法を使って、ファイヤーボールをあの岩に当ててみて」
「わかった。『ファイヤーボール』」

おおっ！　結構スピードがあるな。リュシアンは魔法の腕もいいのかもしれない。
「どうだった？　いつもより少ない魔力で使えたと思うんだけど？」

「レオン！　これは凄い！　今までの半分以下の魔力しか使ってない」
「それなら良かったよ」
とりあえずできたなら良かった。俺は安堵して少し体の力を抜いた。
「それじゃあ、そのイメージを忘れないようにね。すぐにイメージできるようにしておけば、咄嗟にも使えると思うから」
「わかった！　レオンありがとう」
「いいんだよ。友達でしょ？」
俺がそういうとリュシアンはすごく嬉しそうな顔になった。確かに領主の子だと領地で友達もできないもんな。
「うん！」
「じゃあ。そろそろ終わりにして戻る？」
「うーん、その前にレオンの魔法を見せてくれない？」
「魔法？　昨日見せたけど……」
「昨日は攻撃する魔法じゃなかっただろ？　攻撃魔法を見せてくれないか？」
「まあ、いいけど……ファイヤーボールでいい？」
「うーん、レオンは全部の属性魔法が使えるんだよな？　それを組み合わせた魔法とかできないのか？」
うっ……できるけど威力が高すぎるんだよな。あれを見せたら怖がられないかな？
「えっと……できないよ」

俺はそう否定したが、少し視線を泳がせてしまったので、リュシアンには嘘だとバレバレだったようだ。俺のことをジト目で見てくる。

「レオン、嘘はよくないぞ」
「うっ……だけど、威力が高すぎるんだよ」
「じゃあ威力を抑えてやればいいじゃないか」

まあ、確かにそうか。見てるのはロジェとリュシアンの従者と護衛の方だから、全属性は見せても問題ないよな。
他の方々の従者や護衛には最初の時に全属性であることがバレているから、公爵家の人間のお付きの使用人には伝えてあるらしい。

「じゃあファイヤーバレットって魔法をやってみるね。土魔法で作った矢じりに、火魔法で火を纏わせたものなんだ」
「なにそれ。凄くカッコ良さそうだ！」
「俺もそう思う」

俺は褒められてちょっと嬉しくなった。今までは森で練習してただけだからな。それに最近は回復魔法の練習ばかりで、使っていなかった。久しぶりだ。
えっと、どのくらいの魔力でやれば小さな威力になるだろう？とりあえず前の時と同じくらいの魔力量でやれば大丈夫だよな。あの時は岩にめり込んだくらいだったし。
俺はなんとなく、ファイヤーバレットと口に出して魔法を使った。その方がかっこいいという理由だけだ。

『ファイヤーバレット』

俺が放ったファイヤーバレットはかなりのスピードで岩まで飛ん

でいき、岩を爆散させた。
やばい！！　俺は瞬間的にそう察知して、俺たちの前に魔力をかなり込めて頑丈にし、ウォールを作った。

ドガンッ……

凄い音がして、その後静寂が訪れた。

やばい……なんでこんな威力になったんだ？　俺、前の時と同じくらいの魔力を込めたはずなんだけど？　もしかして魔力量が増えすぎて繊細なコントロールができなくなってるとか？
確かに回復魔法は結構魔力を使うから、繊細なコントロールは必要ないんだよな。
うわぁ～、やっちゃったよ。

周りを見てみると、ウォールを作ったので周りの地面が沈んでいて、小さな岩の破片が散乱している。
遠くでは、使用人の方達が呆然としているようだ。
横を見ていると、リュシアンが驚きに口を開けてポカーンとしている。
この事態どう収拾すればいいんだ？
誰か助けてくれー！！

51、魔法の授業（リュシアン編）（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします。

52、後始末と複合魔法

最初に我に返ったのは、リュシアンの護衛の人だった。凄い勢いで駆けてきて、リュシアンの前で止まる。

「リュシアン様、お怪我はありませんか！？」

リュシアンは、その言葉でやっと我に返ったようだ。

「あ、ああ、怪我はないから大丈夫だ」

やばい、今更気づいたけど、俺めっちゃ怒られるんじゃないか？公爵家の子息を危険に晒したってヤバそう……

そう気づいて戦々恐々としていると、リュシアンがキラキラした目で俺の方を向いた。

「レオン！　凄い威力だな！」

「あ、ああ、ちょっと魔力を込めすぎちゃった。ごめん……岩壊しちゃったし」

「そんなのいいんだ、岩なんてまた持ってくればいいんだから。私もレオンも怪我していないし」

「そうか、それなら良かった」

俺はホッとして少し顔を緩ませた。しかしそこで気づいた。護衛の人がいたのに敬語使ってなかった！

俺が護衛の人とリュシアンの顔を交互に見てワタワタとしていると、何に焦っているのかわかったのか、護衛の人が声をかけてくれた。

「俺はうるさく言わないから大丈夫だぞ？　リュシアン様と仲良くなってくれてありがとな。いつも大人ぶっていたから、逆に年相応のリュシアン様が見れて良かった」

護衛の人がそういうと、リュシアンは恥ずかしくなったのか顔を赤くして抗議している。

「ジャック！　それは言わないでくれ」

ジャックさんというのか。ジャックさんはそんなリュシアンを見て優しく笑っている。

良い主従関係を築けてるんだな。ジャックさんいい人だ。

そんな感じで三人で話していると、他の使用人も駆け寄ってきた。また、屋敷の中からリシャール様、クリストフ様、フレデリック様も出てきたようだ。

「何があったんだ？」

リシャール様が少し慌ててそう聞いてくる。

これは誤魔化せないよな……正直に言った方がいい。

「すみません！　私がリュシアン様に魔法を見せたところ、威力を間違えてしまって……」

「どんな魔法を使ったら、こんなことになるんだ？」

リシャール様が、少し強張った顔で恐る恐る聞いてきた。やっぱりこれってやばい威力だよな……

複合魔法のことを説明した方がいいんだろうけど、使用人には聞かれない方がいい気がする。

「えっと……」

俺はチラッと使用人の方を見てから、リシャール様を見た。

するとリシャール様は俺が言いたいことがわかったのか、使用人を下がらせてくれた。

「これなら大丈夫だ」

「ありがとうございます。私が先ほど使った魔法は、二つ以上の属性魔法を組み合わせたもので、私は複合魔法と呼んでいます」

「組み合わせる……？　そんなことができるのか？」

「はい。先ほど使ったのは土魔法と火魔法を複合させた、ファイヤーバレットという魔法です」

俺がそういうと、リシャール様はしばらく考え込んでしまった。クリストフ様やフレデリック様も難しい顔をしている。

「レオン君、それは二人で魔法を使って複合させることもできるのだろうか」

確かに……！　練習すればできるかもしれないな。それができれば結構強いんじゃないか？　というか、今まで試したことがないのだろうか？

「わかりませんが、できるかもしれません。今まで試したことがなかったのですか？」

「魔法を攻撃に使う時は、戦争の時か魔物と戦う時だからな。基本的には剣で戦い、魔法は補助的役割なのだ。魔力量が五であっても、

攻撃に使えるような魔法は何度も使えるものではないからな」

じゃあ、攻撃魔法はあまり発展してないってことなのか。でも、これからも補助的役割としてしか使わないのなら、複合魔法はいらないんじゃないか？

「そうなんですね。でもそれなら、これからも複合魔法はいらないんじゃないですか？」

「いや、レオン君が魔法を教えることになれば、今までよりもたくさん魔法が使えるようになるのだろう？　それなら後衛として魔法を専門に使う者を置くのも、有効的かもしれない」

確かに、今までの三倍以上は魔法を使えるようになるだろう。それなら複合魔法で後衛から攻撃するのも有効かもな。

「確かにそうですね、じゃあやってみましょう。私が土魔法で矢じりを作るので、リュシアン様がそれに火魔法を纏わせてくれますか？」

「わかった。さっき見た魔法のようにやればいいんだな」

「では行きます」

『バレット』

『ファイヤーボール』

俺が空中に作った矢じりに、リュシアンがファイヤーボールを纏わせた。

「では三、二、一、で飛ばしましょう。行きます、三、二、一」

ドュンッ……俺が作ったバレットとリュシアンのファイヤーボー

ルが岩に向かって飛んでいったが、俺の方がスピードが速くバレットが先に岩にたどり着き、その後にファイヤーボールが岩に着いた。
うーん、これでもバレットが熱せられることで効果はあるけど、微妙だよな。
スピードを合わせるのは結構大変だ。かなり練習をすればできるかもしれないが、難しいな。

うーん、ロックトルネードならスピードを合わせる必要はないし、広範囲に攻撃できるしそっちの方がいいかもしれない。

「これは、スピードを合わせるのが難しいですね。もう一つの複合魔法、ロックトルネードというのがあるんですが、そちらの方が簡単にできるかもしれません」

俺がそういうと、リシャール様は「もう一つあるのか」と少し驚いたような呆れたような顔をしたが、俺だからと納得したのかすぐに切り替えたようだ。

「では、それをやってみてほしい」
「かしこまりました。これは土魔法と風魔法を使うのですが、どちらかを使える方はいらっしゃいますか？」
「私が土魔法を使える」

フレデリック様がそう言った。フレデリック様は土属性だったのか。

「では土魔法で、複数の矢じりを作っていただくことはできますか？」
「先ほどレオンが作っていたやつか？」
「そうです。私が風魔法でトルネードを作るので、その中に矢じり

を作り出してほしいです」
「土魔法で作り出した物を浮かせることができないのだが、作り出して投げ入れるのでもいいだろうか？」
えっと……外から投げ入れても大丈夫なのだろうか？　弾かれる気もするな。それに今回は、作り出した矢じりを浮かせる必要はなくて、トルネードの中に作り出せればいいんだよな。
「この魔法では、矢じりを浮かせる必要はないんです。トルネードの中に作り出せればいいのですが、遠くに作り出すことはできますか？」
「あまりやったことがないな……試してみよう」
フレデリック様がそう言って土魔法を使うと、しっかりと離れた空中に矢じりが作り出されていた。
「できるみたいだ」
「では、今回はそれで大丈夫です」
俺はそのまま魔法を試そうと思ったんだが、フレデリック様が俺をジーッと見つめてきている。え？　何？
「どうしましたか？」
「土魔法で作り出したものを、浮かせるにはどうしたらいいんだ？」
「えっと……今回は必要ないですが？」
「それでも知りたいんだ。教えてくれないか？」
え～、説明するの結構大変なんだよな。俺はそう思って、フレデリック様を止めてくれる人を探すために周りを見てみると、皆さん興味津々の顔で俺の説明を待っている。はぁ～、説明するしかない

か。
それからは、この世界には重力があるという話から始めて、無重力の話までを説明しきった。土魔法で作ったものを浮かせるには、無重力のイメージが一番いいのだ。イメージなしに浮かせようとすると、魔力がかなり必要になり、普通の人では不可能になる。

……やっと終わったな。

結構理解してもらうのに時間がかかったし、皆さんが興味津々で質問攻めだった。俺もそんなに詳しくは知らないので、なんとか知ってる知識を集結させて答えた。とにかく疲れた。
でも、これからが本番だ。

「では、ロックトルネードを試してみてもいいですか？」
「ああ、脱線させてすまないな。よろしく頼む」
「かしこまりました。では、トルネードを作ります。矢じりがこちらに飛んでくると危ないので、壁も作ってもいいでしょうか？　向こうを覗けるほどの穴は開けておきますので」
「ああ、構わないよ」
「では、『ウォール』」

俺はトルネードを作る予定の場所をウォールで囲った。これで大丈夫だろう。覗き穴もしっかりと作られている。

「ではいきます。『トルネード』フレデリック様お願いします」
「わかった。『バレット』」

俺が出現させたトルネードに、フレデリック様が出現させたバレットが巻き込まれて、凶悪な感じになっている。
何か物を放り込んでみた方がわかりやすいよな。あの的を使って

もいいだろうか？

「クリストフ様、あの的をロックトルネードの中に入れてもいいですか？　威力がわかりやすいと思うのです」

「ああ、良いよ」

「ありがとうございます」

俺は、カカシのような木と布でできた的をロックトルネードの中に放り入れた。

バキバキッバキバキッ……

すぐにバラバラに砕け散った。やっぱりこの魔法は凶悪だ。使い所は考えないとだよな。

それからは少しだけトルネードを維持し、しばらくしてから魔力を流すのを止めて、トルネードを消した。バレットは現実の土を使って作るのでそのまま残っている。

土魔法は魔力から土を作り出すこともできるのだが、身近にある土を使った方が消費魔力量が減るのだ。それゆえに、ほとんどの場合は現実の土を使う。

ふぅ～、とりあえず成功してよかった。俺は複合魔法が成功したことに満足して、後ろを振り返った。すると皆さん驚愕の表情で固まっている。

おおっ……やっぱり結構驚いてるみたいだ。まあ、かなり凶悪な魔法だからな。

「どうでしたか？　一応魔法は成功しましたけど……」

「ああ……あまりにも威力が高くて驚いただけだ。これは、魔物相手にはいいかもしれないな」

リシャール様がそういうと皆さんフリーズから戻ってきて、今度

は難しい顔で考え込んでいる。
色々使える場面を考えているのだろう。でもとりあえず疲れたから屋敷に戻りたい。もうお昼過ぎてるし、お腹空いた。

「あの、屋敷に戻りませんか？　もうお昼も過ぎてますし……」
「もうそんな時間なのか！　そうだな、考えるのはまた後にして一度屋敷に戻ろう。陛下にも相談が必要だろう」

リシャール様は最後に不穏な言葉を言って、屋敷に戻って行く。
また陛下に相談するような案件なんですか！？
目立たないようにって思ってるのに、なんでやり過ぎちゃうんだ……

俺は疲れて少し足取り重く、屋敷の方へと歩き出した。

５２、後始末と複合魔法（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです。
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしく
お願いします。

53、港街と海の幸

次の日の朝。
昨日は大変だった。昼食の後は、俺の知識に興味を持った皆さんに質問攻めに合い、魔法についても聞かれ、気がついたら夜だった。
すごく疲れた。本当なら、今日は一日休みたいと思うところだが、俺はテンションが上がっている。

なぜなら、今日は港街に行く日なのだ！！

海の幸楽しみだ。久しぶりに海や船も見れるかな？　塩も作っているのだろうか？
俺はワクワクしながら朝の準備を終えた。
一緒に港街に行くのは俺とリュシアン、フレデリック様とリシャール様、カトリーヌ様だ。他の人は家でのんびりしている方がいいらしい。海の幸を食べなくていいなんて！　日本人としては考えられない。

ロジェも、パッと見はいつも通りの無表情に見えるが、いつもより顔が緩んでいるし、海に行くのを楽しみにしているのが伝わってくる。

「ロジェ、やっと海に行けるね」
「はい。レオン様にお仕えしていて良かったです！」

ロジェはいつもの無表情はどうしたんだと言いたくなるほど、目が輝いている。
お仕えして良かったって言われても、理由が海に行けるからって

誰に仕えてても一緒じゃん！　俺は海に負けてるんだな。なんか落ち込む……

俺が落ち込んでいるとその理由がわかったのか、ロジェがちょっと慌てたように見える。慌てるロジェなんて珍しいな。

「あ、あの、レオン様にお仕えするのはとても楽しいです。レオン様は使用人のこともよく考えてくださいますし、感謝も伝えてくれますし、とてもやりがいがあります。さらに海に行けるなんて、レオン様にお仕えできて良かったです」

ロジェはそんなふうに思ってくれていたのか。俺はかなり嬉しくなった。まあ、理由の最後は海だけど……それは聞かなかったことにしよう。

「ロジェがそんなふうに思ってくれていたなんて嬉しいよ。これからもよろしくね」

「はい。これからも誠心誠意お仕えいたします」

「じゃそろそろ時間だから行こうか？」

「そのようですね。では参りましょう」

そうして俺とロジェは、屋敷の玄関ホール横の応接室に向かった。俺が一番乗りだったが、すぐに五人全員が集まった。最後はリシャール様だ。

「皆集まってるな。では行こうか」

馬車に乗って港街に向かう。港街までは馬車で三時間ほどかかるらしい。日帰りでは大変なので、今日は港街で一泊するようだ。

「その港街は大きな街なのですか？」
「そうだな……そこまで大きくはないが活気はある。塩を作っていたり漁をしている者がほとんどだから、無骨な男が多い。皆肉体労働をして食べる量も多いから、食堂はたくさんあるな」

俺の疑問にリシャール様が答えてくれる。そういう感じか。職人の街って感じなのかな。

「海の幸は、その街の人達は食べるんですか？」
「ああ、皆毎日食べているそうだ。ただ内陸に住んでいる者はその美味しさを知らないから、買おうとも思わないし食べに来ようともしない。だから他の街に売られることはほとんどない。干物なら遠くへでも売れるんだけどな。需要がないから売れないんだ」

確かに干物なら売れるもんな。すごく美味しいのに勿体ない。皆食べてみれば美味しさに気づくはずなんだけどなー、初めて見る人は見た目もダメなのかな？
確かに地球でも、海の幸を食べない地域では見た目が気持ち悪いとか言われてたよな。食べれば美味しいとわかってくれると思うんだけど。

「海の幸が他の街に売れたら、街はかなり発展しますよね」
「私が公爵だった頃に一度やろうとしたことがあるんだが、干物を王都に持って行ってもあまり流行らなかったんだ」

そーなのか？　でもなんでだろう……食べてもらえればハマる人もいると思うけどな。

「食べてもらったなら、干物にハマる人はいなかったんですか？」

「少しはいたんだが、そこまでたくさんの人には受け入れられなかったな。食べづらいとか食べる場所が少ない、臭いとか言ってたな」

まあ確かに骨はあるけど、骨が少ない魚もいるし身がたくさんある魚もいると思うけど。そういう魚は干物にならないのかな？

俺の干物のイメージはアジだもんな。確かに骨は多くて食べるのが大変だ。

臭いは、生臭いってことか？　焼けばなくなると思うけど……干物の作り方でも変わりそうだよな。

俺は干物の作り方なんて知らないからなー、本当に使える知識が少ない。スマホさえあれば！　どれだけスマホに依存していたかがよくわかるよ。

この世界で気づいても意味ないんだけどね……

とにかくほとんどの人にとって、無理して食べるほど好みの味ではないってことだよな。確かに食べ慣れてないと、干物の美味しさには気づけない気がする。

「リシャール様は海の幸好きなんですか？」

「ああ、私は好きだな。ただ干物よりも港街で食べる料理の方が好きだ」

「私も好きだぞ。肉とはまた違う味わいで良い」

「私も大好きですわ。ただ干物はあまり食べませんわね」

リシャール様とフレデリック様、カトリーヌ様も好きらしい。リュシアンはまだ食べたことがないのだろうか？

「リュシアン様は食べたことがありますか？」

「父上も母上も好んでは食べないので、食べたことはないな。今日は楽しみだ」

「そうなのですね。私もとても楽しみです。たくさん食べましょう」
「そうだな！」

そうして馬車に揺られること三時間、港街に着いたようだ。馬車の窓を開けると、潮風が吹いてくる。
凄い……！　海の匂いがする！

……なんか懐かしい匂いだ。

馬車は街の中をしばらく進むと、他の家よりは少し豪華な家に辿り着いた。この街の代官邸のようだ。
大きな街ではないので、代官邸も今まで泊まってきた街のものと比べて、こじんまりとしている。ただ、俺たちが泊まれるだけの部屋はギリギリあるようだ。部屋がないというのも他の人が来なかった理由らしい。それに、部屋はあっても豪華な部屋ではないからな。

代官邸の前には、日に焼けて健康そうなおじさんがいた。かなりがっしりとした体型だ。

「皆さんお久しぶりです。坊ちゃん方は初めましてですね。トニーと申します」
「私はリュシアンだ」
「私はレオンです。よろしくお願いします」

トニーさんは平民の代官らしい。小さな街の代官にまで貴族を雇うことはないようで、平民の中では優秀で人望厚い者を公爵邸で教育して、代官として育てるらしい。

「皆さんには狭い家だとは思いますが、精一杯おもてなしさせて頂

きます」
「トニーありがとう。一泊だけだがゆっくりさせてもらうよ」
「ではお部屋にご案内いたします」

そうして案内された部屋は、豪華ではないが綺麗に掃除された部屋だった。ただ、貴族がいない代官邸は下水道を通してないようで、トイレは家にいくつかある汲み取り式のものでお風呂はなかった。まあ、田舎の小さな街ならしょうがないな。

とりあえずトイレ一つを完全に綺麗にするくらいなら、俺の今の魔力量があれば、半分程度消費するだけで綺麗になるだろう。トイレ一つは綺麗にしておくか。

それにしても、俺の今の魔力量はかなり増えたはずなんだけど、トイレを一つ綺麗にするだけで魔力を半分も使うなんて、ピュリフィケイションの効率が悪過ぎる。なんかいいイメージがないかな……

ちなみにトイレを綺麗にしたら、皆さんにとても喜ばれた。汲み取り式のトイレってかなり汚いし臭いからな、俺も嫌いだ。というかずっと使うのは耐えられない。

お昼の時間まではしばらく部屋で休むことになり、馬車の疲れを癒すために少しゆっくり休んだ。

そしてお昼になり、食堂にみんなで集まっている。これから料理が運ばれてくるところだ。

「皆さんは海の幸をご所望だと聞いておりましたので、料理人に海の幸をふんだんに使った昼食を作ってもらいました。楽しんでいただけたら幸いです」

やった！　やっとお魚が食べられる！

流石に生は出てこないかな？　でも新鮮なら生で食べる文化もあ

るかもしれない。生でなければ焼き魚とか？
ただの焼き魚でも嬉しい！

俺がうきうきして待っていると、料理が運ばれてきた。ここでの料理はコースではなく、一度に一人分が全て並べられるようだ。
ぱっと見て生はなさそうなので、その文化はないんだな。まあ、生はよほど新鮮で気を使ってないと危ないから、火を入れた方が安心でいいだろう。

俺はまずスープに口をつけた。
美味い……！　この味って絶対海老だ！
海老出汁のスープだ。やばい、美味すぎる。久しぶりに出汁の味を食べた気がする……王都の料理も発展はしているけど、出汁はなかったからな。
俺はすぐにスープを飲み切ってしまった。

「レオン様はすごく美味しそうに食べますね。海老は今の寒くなってきた頃が一番美味しいんですよ」

トニーさんにそう言われてしまった。
は、恥ずかしい……でもめちゃくちゃ美味しいんだからしょうがない。

「すごく美味しいです！　この白身魚はなんですか？」

俺は恥ずかしくて話を変えるために、そう聞いた。

「それはサワラですね。暑い時期がよく獲れるんですが、今の時期もまだ獲れます。どんな料理にも合うんですよ」
「そうなんですね。では次はこれを食べてみます」

サワラなんだな。美味しそう。
俺はフォークで一口分だけ取り、ぱくっと口に入れた。
う～ん、美味い！　これバター焼きだ。めちゃくちゃ贅沢だな。
俺はサワラのバター焼きも夢中で食べ切った。

後二品だ。一つはタコの足をそのまま塩焼きにしたもの。もう一つはホタテを焼いたもののようだ。
まずはタコから。もぎゅもぎゅ……かなり弾力があるタコだ。でも噛めば噛むほど旨味が出てきて美味い！　これはタコの唐揚げにしたら絶対美味しいと思う。
揚げ物ってないのかな？　あんまり浸透してないのだろうか？
でも素揚げは一度食べたことあるし、調理法としてはあるよな。それなら、俺が唐揚げを作ってもそんなに変じゃないはずだ。
後で厨房使わせてもらえるなら、タコの唐揚げ作りたい！　揚げ物するならついでにフィッシュフライもいいかも。今日の夕方にでも聞いてみよう。

最後はホタテだ。ぱくっ……美味っ！
これもバターだ。ホタテを焼いたところにバターを溶かしたのだろう。めちゃくちゃ美味い。残ってる汁まで美味しい。
ふぅ～、とても満足だ。やっぱり俺は日本人だな。肉も好きなんだけど、海の幸が食べたくなるんだ。

俺は大満足で、昼食を終えた。

５３、港街と海の幸（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思った方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

54、海と海産市場

昼食を終えて少し休んだ午後、俺は海に向かって馬車に揺られていた。一緒にいるのはリュシアンだけだ。
他の人は既に見たことがあるから、わざわざ見に行かなくてもいいらしい。

「すごく楽しみだ。海は先が見えないほど広いのだろう？」
「そうだよ！　楽しみだよね」

馬車の中には俺とリュシアンしかいないので、敬語は使わなくも大丈夫だ。使用人や護衛は歩いてついてくるらしい。街の中だと馬車でもそこまでのスピードは出せないからな。

「海に行った後は、海産物を売ってる市場や屋台に行ってみたいんだけど、いいかな？」
「少し見て歩くくらいならいいだろう。護衛でジャックもいるからな」
「本当に！？　やった！」
「何か面白いものでもあるのか？」
「美味しそうな魚とかを買って帰れば、夕食に使ってもらえるかなって。後は俺が作りたい料理もあるから、その食材も買いたいな」
「レオンは料理ができるのか？」

リュシアンがかなり驚いている。あれ？　実家が食堂だって知らないんだっけ？

「俺の家は食堂だから」

「そうなんだ。私もレオンの料理を食べてみたいな」
「じゃあ、帰って厨房を使わせてもらえたら作るよ」
「それなら、たくさん買って帰らないとな。お祖父様からお金は預かってるんだ」
「そうなの？　じゃあ遠慮なく使わせてもらうよ」

俺たちはそう言って笑い合った。

そうしてしばらく馬車に揺られていると、海辺に着いたらしい。馬車から降りると、目の前には広い海が広がっている。

おぉ！　久しぶりの海だ！
潮風が気持ちいいな。凄い……海はどの世界でも同じように広大だな。

俺はしばらく海を静かに眺めて、それからロジェの方に振り返った。ロジェは目をキラキラとさせて海に見入っている。
ふふっ……子供みたいな顔だ。

「ロジェ、海を見た感想は？」
「あ、レオン様。凄いです！　こんなにも広くて綺麗だなんて、見られて良かったです」
「ロジェ、子供みたいにキラキラした顔で見てたよ」
「なっ……そんな顔はしていないはずです」

ロジェは必死に否定している。そんなに否定しなくてもいいのに。もういつもの無表情に戻ってしまった。
まあ、最近はかなり表情が変わるようになったしいいか。前より仲良くなれたよな。一緒にいて気まずさも感じない。

俺は、ロジェの方からリュシアンの方に視線を戻した。

「リュシアン、海広くて凄いな」

使用人に聞こえないように、小声でそう言った。

「レオン、凄いな！　こんなにたくさんの水があるなんて、すごく広くて綺麗だ」

やっぱり初めて見ると感動するよな。俺は懐かしさに感動だ。

しばらくして皆が感動から戻ってきたところで、俺たちは港の近くにある市場へ行くことにした。そこまでは、馬車で数分なのですぐに着く。

俺たちは馬車から降りて、市場に足を踏み入れた。

おー！　活気がある。もうたくさんの人が周りにいるから、敬語を使わないとだよな。

「リュシアン様、気になるお店があったら寄ってもいいですか？」

「ああ、どんどん寄ろう！　私もたくさんの店を見たいからな」

市場では木箱のようなものに水を入れて、そこに魚や貝、タコなどが種類ごとに分けて入れられていた。

まずはタコの唐揚げを食べたいから、タコを買いたい。後はフィッシュフライのための白身魚だけど、なんの魚がいいんだろ？　わからないからさっき食べたサワラでいっか。

それとフライをするならアジフライもいいよな。アジもあったら買おう。後はブリを食べたいからブリだな。ブリの塩焼きは俺の大好物だったんだ。

そんなことを考えながら歩いていると、タコを売っているお店があった。

「リュシアン様、タコを買ってもいいですか？」
「ああ、ではあのお店に行こう」
「かしこまりました」

俺はお店に行き、おっちゃんに声をかけた。

「こんにちは、タコを買いたいんですけど」

俺がそういうと、お店のおっちゃんが怪訝な顔でこちらを見てきた。

「もしかして貴族様か……？」
「俺は違うけど、こちらはタウンゼント公爵家のリュシアン様だよ」
「タウンゼント公爵家って、領主様じゃないか！　こんなところに来てもらえるなんて、ありがたいことで」

おっちゃんは、急にリュシアンに向けてぺこぺこと頭を下げ始めた。この辺に貴族が来ることはないのだろうか？

「急に来て悪いな」
「いえいえ、ありがたいです」
「この辺に貴族様が来ることってないの？」
「こんな小さな街に貴族様が来ることなんか、ほとんどないに決まってるだろ。タウンゼント公爵家の方も、代官様のところに来るだけだったしな」

そうだったのか。じゃあ俺はまた規格外なことをしたんだな。そして、それにリュシアンを巻き込んじゃったのか。
ごめんリュシアン……でもこれからもこういうことあると思う。

「それで、タコを買いたいんだけどいいかな？」
「おう！　今日は生きのいいのがあるぞ。そこの箱のが一番だな」
「じゃあ良さそうなのを三つお願い。あと、サワラとアジとブリが欲しいんだけど、どこに行けばあるかな？」
「それなら三つ隣のところが、生きのいいのがよく揚がってるぞ」
「そうなんだ、ありがとう！」

そうして俺は、タコを買ってロジェに持ってもらい次の店に行く。

「こんにちは！　サワラとアジとブリが欲しいんだけど」
「はいよ！　何匹ずつだい？」
「うーん、サワラは三匹、ブリは一匹、アジは六匹でお願い。いいのを選んでね」

今度は元気なおばちゃんだった。おばちゃんは俺たちの服装は全く気にしていない。商人の子供くらいに思ってるんだろうか。

「これでいいかい？」
「うん！　美味しそうだね」
「そうさ、うちの人は漁がうまいんだ」

そうして上機嫌のおばちゃんから魚を買って、とりあえずミッションクリアだ。
俺はロジェが持っている木箱の中に、バレないように精製した氷を入れた。これで時間を気にしなくてもいいだろう。

よしっ！　次は食べ歩きかな。この市場は魚を買うだけではなく、歩きながら食べられるようなものが売っているのだ。

「リュシアン様は何か買いたいものがありますか？」

「私はよくわからないからレオンについていくよ。全てが新鮮で楽しいからな」

「それなら次は食べ歩きをしませんか？　流石にリュシアン様はダメでしょうか？」

「いや、今日くらいはいいだろう」

やった！　リュシアン様の従者の方は少し止めたそうな顔をしていたが、リュシアンが楽しそうにしているので、止めないことにしたようだ。

何を食べようか。魚を捌いて焼いたものや、タコを串に刺して焼いたもの、貝を焼いたものなどがある。

うーん、悩むけど貝が食べたい！

「リュシアン様、ホタテを食べませんか？」

「ああ、今日の昼にもあったやつだな。私もあれは好きだった」

「では行きましょう」

俺はホタテを売っているお店に向かった。

「こんにちは。ホタテをもらえますか？　個数は……」

何個だろう？　従者と護衛の方たちも食べるかな？　聞いてみるか。

「皆さんは食べますか？」

「いえ、私たちは遠慮させていただきます」
「いや、お前たちも食べればいい。たまにはいいだろう」
「ですが……」
「せっかくだから皆で食べればいいじゃないか。リュシアン様、ありがとうございます」

護衛のジャックさんがそういうことで、皆で食べることに落ち着いた。

「結局何個だい？」
「五個でお願い！」
「五個だね。今から焼くからちょっと待ってな」

お店のおばちゃんは五個のホタテを焼いてくれた。そして、鉄串のようなもので身を貝殻から外して塩をかけてくれる。めちゃくちゃ美味そう！

「ありがとう！」
「リュシアン様どうぞ。あ、毒見をした方がいいでしょうか？」
「私がします」

リュシアン様の従者の方が少し食べて確認した後、リュシアン様にホタテを渡した。

「ありがとう。ではいただこうか」
「はい！」

俺は思いっきりホタテにかぶりついた。身が大きくて一口では食べきれない。
うっま～！　旨味がじゅわ～っと出てきて口の中が幸せ。少しの

塩味だけだから、素材の味が生かされて美味しい！　やっぱり海の幸は新鮮さと焼きたてだな。

俺は大満足で食べ終えた。最高だった。

「リュシアン様、とても美味しかったですね！」

「美味しすぎてびっくりしたぞ！　お腹が空いていたらもっと食べたかった」

「では、ホタテも買って帰りましょう。すみません、ホタテを二十個ください」

「はいよ、ありがとね」

俺はホタテを買って、また次のお店を見に行こうとした時、ふとホタテの貝殻が、大量に箱に詰められているのが目に入った。

この貝殻ってどうするんだろ？

「おばちゃん、この貝殻ってどうするの？」

「これかい？　これは海岸に捨てちまうよ」

捨てちゃうの！？　じゃあ海岸にはたくさんの貝殻があるってこと？

「その海岸にはたくさん貝殻があるの？」

「ああ、山になってるよ」

「そうなんだ、ありがと」

貝殻って結構使い道あるんじゃなかったっけ？　テレビで見たことある気がする。確か焼いて粉状にして畑に撒けば、肥料になるんじゃなかったかな？

多分だけど、試してみればわかるだろう。もし肥料が作れたら、

この街の特産品になるかもしれない。
そうすればもっと海産物も注目されて、王都でも食べられるようになるかも！
とりあえず貝殻を持って帰りたいな。

「おばちゃん、この貝殻もらってもいい？　持って帰る箱がないから箱も一緒に。少しお金も払うけど」
「本当かい！？　こんなものをお金払って引き取ってくれるなんて、断る理由がないよ」
「ありがと」

貝殻はリュシアンの従者の方が持ってくれた。多分十キロ以上あると思うけど、結構力持ちなんだな。

「レオン、あんなものを買ってどうするんだ？」
「ちょっと思いついたことがありまして、試してみる予定です。とりあえずたくさん買いましたし、代官邸に戻りましょうか？」
「そうだな。結構時間が経っているからな」

そうして俺たちはたくさんの戦利品を抱えて、代官邸へと戻った。

５４、海と海産市場（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んだ頂けたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします。

55、レオンの魚料理

市場から代官邸に帰ってきた。とりあえず貝殻は庭に置いてもらって、先に夕食を作ることにしよう。もう夕方だから、早めに作り始めないとだろう。

俺は厨房を使ってもいいか、リシャール様に許可を取りに行った。

ロジェが、リシャール様の部屋のドアをコンコンと叩く。こんなに急に訪ねて大丈夫かと思ったが、何か用事があればいつでも訪ねてきて良いと言われていたらしい。それなら遠慮はいらないよな。

「レオン様がお越しです」

リシャール様の従者がドアを開けてくれた。俺は勧められてソファーに座る。

「リシャール様、急に訪れてしまい申し訳ありません」

「気にしないでくれ。レオン君ならいつ来てくれても構わない。それでどうしたんだ？」

「はい。夕食に海の幸で作りたいものがありまして、厨房を使う許可をいただけないでしょうか？」

「レオンくんが作るのか？」

「そうですが……」

なんでそんなに驚いているのだろう？

「君は料理ができるのか？」

そっか、俺が料理できることは知らないんだっけ？　まあ、できると言えるほどの腕前ではないんだけど。

「実家は食堂ですので少しはできます。そこで海の幸を使って料理がしたいと思いまして、許可をいただけませんでしょうか？」

「レオンくんの料理か、それは楽しみだな。では、トニーと料理長には、レオン君が厨房を使うことを言っておこう。もう少し経ったら厨房に行くといい」

「ありがとうございます」

そうして俺は、少し時間を潰してから厨房に向かった。そこには中年くらいの優しげなおじさんがいた。この人が料理長かな？

「レオン様、料理長のナセルと申します」

「レオンです。厨房を使わせていただきありがとうございます」

「いいんですよ。レオン様の料理を楽しみにしてます。手伝えることがあったらなんでも言ってください。こちらの木箱がレオン様が購入されたものです」

「ナセルさん、ありがとうございます。私は海産物の捌き方はよくわからないので、お願いしても良いでしょうか？」

「もちろんです」

ナセルさんはにっこりと笑ってそう言った。優しそうな人でよかった。手伝ってもらえるならスムーズに料理が進みそうだ！

俺はまず、買って来たものを確認した。タコ、サワラ、アジ、ブリ、ホタテだ。

タコとサワラ、アジは揚げ物にする。タコは唐揚げにして、サワラとアジはフライにしたい。まずは捌かないとだな。

「ナセルさん、サワラとアジを捌いてもらえませんか？」
「かしこまりました。どういう形で捌けばいいのでしょうか？」
うーん、フライって尻尾がついてて三角みたいな形だったよな。三枚おろしってやつかな？
「三枚におろしてもらうことってできますか？　こう、薄くなるように。あとその時に骨も取って下さい」
「かしこまりました」
ナセルさんは手際良く魚を捌き始めてくれた。
よしっ、俺も準備しよう。まずはフライの準備だな。確かフライは、小麦粉、卵、パン粉をつけて揚げればいいんだよな。俺は小麦粉を平皿に用意し、卵を器に割り、ナセルさんに昨日のパンの残りをもらってそれを頑張って細かくした。
おろし金がなかったからめちゃくちゃ大変だった……包丁で頑張ったけど、少し荒いパン粉になってしまった。
まあ、歯応えがあっていいだろう。
「レオン様、全て捌き終わりました。次は何をすればいいですか？」
早っ！　次はタコを切って貰おうかな。
「次はタコをぶつ切りにしてもらえますか？　一口サイズくらいでお願いします」
「かしこまりました。タコは下処理が必要なので少し時間がかかりますが、よろしいでしょうか？」
タコって下処理が必要なのか。確かに俺はスーパーで売ってるタ

コしか知らないもんな。あれは下処理済みなんだろう。というか、そもそもスーパーのタコは生のタコじゃないよな。

「はい。よろしくお願いします。下処理の仕方を見ていても良いでしょうか？」

「もちろんです」

俺はナセルさんから下処理の仕方を学ぼうと、ナセルさんの手元をしっかりと見た。

ナセルさんは、包丁を使い手際良く内臓のようなものを取り、その後タコに塩をまぶして揉み込んでいる。しばらく揉み込み滑りがたくさん出てきたところで、水で洗い流す。そしてそれが終わると、どんどんぶつ切りにしていく。めちゃくちゃ手際が良い。凄いな……

「これくらいの大きさで良いでしょうか？」

「はい。それくらいでお願いします」

「かしこまりました」

ナセルさんは、すぐにタコをぶつ切りにしてくれた。俺はそれに下味として塩をまぶす。これで美味しいかはわからないけど、醤油がないし何も味がないよりはいいだろう。あとは揚げる前に小麦粉を付けるだけだ。これでタコは終わりだな。

次は……そういえばフライって味ないよな？　また塩じゃ味気ないし……何かソースを作れないかな？

うーん、この世界で作れるもので思いつくのはトマトソースだけど、トマトって今の時期に採れるのかな？　俺の家では、寒い時期の野菜は大根とか白菜が多かった気がする。トマトはなかったよな。

「ナセルさん、今の時期ってトマトはありますか？」

「トマトですか？　もう流石に採れない季節だと思いますが……」
「そうなんですね……じゃあトマトソースは無理ですね」
「生のトマトではなく、トマトソースが欲しいんですか？　それならば作れますよ」
「本当ですか！？」
「ええ、乾燥させたトマトをオイルにつけて保存していますので、それを使えば美味しいトマトソースが作れると思います」
「では、お願いしてもいいですか？」
「はい。任せてください」

ナセルさんは笑顔で請け負ってくれた。ありがたい！　これでフライも美味しく食べられるな。
あっ、でもその前にブリだけ捌いて欲しい……

「ナセルさん、本当に申し訳ないんですが、ブリを先に捌いてもらってもいいですか……？」
「かしこまりました」

ナセルさんがいなかったら、捌くのにめちゃくちゃ時間がかかった割に、不恰好になってたはず。絶対に美味しさも数段落ちただろう。本当にありがたい。俺も捌き方を覚えたいな。
俺はナセルさんが捌いている様子をじっと観察して、何とか技術を盗もうと頑張った。ナセルさんも俺の様子を見て捌き方を教えてくれた。
そして、俺が買ってきたものとは別でアジが数匹あったので、そのうちの一匹を自分で捌いてみたのだが、ガタガタで無駄にしたところも多く、散々な出来栄えだ。
もっと練習しなきゃダメだな。これは自分用にしよう。

ブリは塩で焼くだけの予定なので、俺はホタテを準備することに

した。
ホタテで作りたいのは、ホタテのオーブン焼きだ！　俺は日本にいる時あれが大好きで、近くのレストランに行くといつも食べていた。
家で再現しようとしたこともあったので、何となく作り方はわかっている。ここのオーブンの使い方はわからないが、そこはナセルさんに任せよう。ナセルさん本当にありがとうございます。

あ、オーブンを使うには先に火を入れておかないとだよな？　早めに伝えておいた方がいいかも。

「ナセルさん、オーブンを使いたいのですが準備をしてもらえますか？」
「かしこまりました。使えるようになるまで少し時間がかかりますが大丈夫ですか？」
「はい！　これから準備をするので大丈夫です」
「では準備をしておきます」
「ありがとうございます」

よしっ！　あとはオーブンで焼く準備をするだけだ。
ホタテのオーブン焼きは、まず貝殻と身を分けるんだよな。それで窪んだ方の貝殻は洗っておいて、身も水で洗って水気を拭き取っておく。たしか、身の黒い部分は取り除くんだったはずだ。
そして、ホタテを貝殻に戻してあとは味付けだな。
俺が好きな味付けは、ニンニクのやつなんだけど……ニンニクってあるかな？

「ナセルさん、ニンニクってありますか？」
「ニンニクですか？　そこにありますけれど、それは牛肉の臭みを目立たなくするために使うものですよ？」

それにしか使われてないの！？　確かに今まで、あまりニンニクを使った料理ってなかったかも。

「それ以外には使われてないんですか？」

「使われてませんね。そもそも料理に使われるようになったのも最近なのです」

「そうなんですね。でもこの料理にはニンニクがあると美味しくなるんです。使ってもいいですか？」

「レオン様にお任せします。ただ、どのように使うのか拝見しても良いでしょうか？」

「全然いいですよ」

ニンニクはかなり使える調味料だからな。ナセルさんが使い方を覚えて、もっとニンニクを使った料理が発展して欲しい。

「ニンニクはこんな感じでみじん切りにして、料理に入れるとかなり美味しくなります。トマトソースに入れてもいいですし、煮込み料理に入れてもいいですね」

「トマトソースや煮込み料理に……今度試してみましょう」

「ぜひ！　どんな料理にでも基本的には合いますので、どんどん使ってみてください」

俺はニンニクをみじん切りにして、ホタテの上に乗せた。そしてさらに塩を振って、上にパン粉をまぶした。

完成だ！　あとはオーブンで焼くだけだな。

「ナセルさん、オーブンはもう使えますか？」

「はい。そちらをオーブンで焼くのですか？」

「そうです」

「では危ないので私に任せてください」
ナセルさんはそういうと、鉄の板にホタテを乗せてオーブンに入れてくれた。
「しばらくしたら焼き加減を見てみましょう」
「お願いします。ではその間に他の料理も仕上げます。ブリは塩で焼くのですが、お願いしてもいいですか？」
「塩を振って焼くだけでいいのですか？」
「はい。シンプルなのも食べたくて」
「かしこまりました」

ナセルさんがブリを焼いてくれているうちに、俺は揚げ物だ。
ナセルさんに油をもらい、鍋に入れて油を温め始めた。たくさん油を使えるっていいな。
そして、油が温まるまで下準備をして待つ。タコには小麦粉を付け、アジとサワラには小麦粉、卵、パン粉をつける。
準備が終わった頃に油が温まったので、順番に揚げていく。失敗しないように気をつけなきゃ。
揚げ物のいい音がする……お腹空くなぁ。

全部揚げ終わった。ホタテのオーブン焼きもさっき出来上がったし、ブリも焼けたみたいだ。
完成だ！！　思ったよりも上手くできた気がする。後は美味しいと思ってもらえれば、完璧だな。
「ナセルさん、手伝っていただいて本当にありがとうございました。ナセルさんがいなければ、絶対にここまで上手には作れませんでした」
「私は料理人ですから、手伝うのは当然ですよ。私の方こそ新しい

料理をたくさん拝見できて、とても為になりました。ありがとうございます。では、レオン様は食堂に向かってください。私と使用人が料理を運びますので」
「わかりました。ありがとうございました」

俺はナセルさんにお礼を言って食堂を出た。食堂を出たところではロジェが待っていてくれたが、俺の姿を一瞥するとすぐに顔を顰めた。

「レオン様、食堂に行く前にお部屋でお召し物を替えましょう。汚れています」
「そう？」

俺は自分の服を見下ろしてみる。すると小麦粉がついていたりパンのカスがついていたりしていた。確かに汚れてるな。

「確かにそうだね。急がないと夕食になるから早く行こう」

そうして俺は部屋で服を着替えてから、食堂に向かった。

５５、レオンの魚料理（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んだ頂けたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

56、夕食と貝殻の使い道

俺が食堂に行くと、既に皆さんは食堂に揃っていた。

「遅れて申し訳ありません」

「いや、レオン君が夕食を作ってくれたのだろう？　遅れるのは仕方ない。それよりも君の料理が楽しみだ」

「私もとても楽しみですわ。レオンの料理は初めて食べますもの」

リシャール様とカトリーヌ様は、とても楽しみにしてくれているらしい。

「先ほど買ったものを使ったのだろう？　私も楽しみだ」

「いつも食べている料理とは違うのだろうか？　期待している」

リュシアンとフレデリック様も、ワクワクしている様子だ。なんか凄いプレッシャーなんだけど！　美味しくないって思われたらどうしよう……

俺がそう思って「あまり期待しないでください！」って言おうとしたら、料理が運ばれて来てしまった。

もう、皆さんの口に合うよう祈るしかない。

使用人の方が運んできてくれた料理は、綺麗にお皿に盛り付けられて、高級料理のように見えた。俺が作ったとは思えない。とりあえず、全て一口ずつ食べてみよう。

まずはブリの塩焼きからだな。

ぱくっ……うん、美味い。やっぱり塩焼きは美味い。だけど

米が欲しくなる！！　これはダメだ、白米が食べたい。

次はホタテのオーブン焼きだ。

ナイフで切ってフォークで食べる。最初はサクッとした食感があるけど、すぐにじゅわ～と旨みが出て来て口の中に広がる。やばい……美味すぎる……ニンニクも効いているな。これは絶品だ。

ホタテのオーブン焼きは完璧だな。次はフライだ。トマトソースをかけて、サクッ……美味っ！！　サクサク食感最高すぎる。トマトソースも絶品だ。流石ナセルさん、美味しいです。

次は最後、タコの唐揚げだな。ぱくっ、おおっ噛めば噛むほど旨みが出てくる。醤油につけた方が美味しいけど、塩でもいけるな。

ふぅ～、全部めちゃくちゃ美味しい。良かった、大成功だな。俺は皆さんの反応を見るために周りを見回した。

あれ？　なんか静かだな……もしかして美味しくないとか？

「あ、あの、お口に合いませんでしたか？」

「レオン君！」

「は、はい！」

「これは美味すぎるぞ！　なんなんだ、特にこのホタテのオーブン焼きという料理、何個でも食べられる」

「私はこのサクサクした料理が好きですわ。食感がとても面白く、トマトソースとよく合いますわ。パンにも合いますわね」

美味しいのなら良かった。リシャール様はホタテのオーブン焼きが好きみたいだ。わかります。

カトリーヌ様はフライが好きみたいだな。

「レオン、ここまで美味しい料理を作れるとは驚いたぞ！　私はアジのフライが好きだ」
「私はタコの唐揚げだな。ただタコを焼いて塩をかけたものとは、また違う美味しさがある」

リュシアンはアジのフライで、フレデリック様はタコの唐揚げらしい。美味しいと思ってもらえて良かった。
俺は安心して続きを食べ始めた。
リシャール様は「この料理を王都で食べるには製氷機があれば……」などと、ぶつぶつと呟いていたのでいずれ王都でも食べられるようになるかもな。
リシャール様、頑張ってください！

そうして大満足の夕食を終え、その日はすぐに眠りについた。慣れない料理をして結構疲れていたのだ。

そして次の日の朝、今日はお昼を食べたら領都に帰るので、それまでにホタテの貝殻の処理をしてみようと思っている。

朝食後、庭にやって来た。
確かホタテの貝殻を、焼いて砕いて肥料にしてたよな。あれ？
その前に水につけるんだっけ？　真水につけてたような気がする。
うーん、よく覚えてないな。
とりあえず長期的に試して効果をみるしかない。五分の一を今焼いて粉にしてみよう。あとは、水につける日数を変えて試してみるしかないな。

俺は五分の一ほどの貝殻を手に取り、土魔法で少し窪ませた地面

に入れた。そしてそこに火魔法で火を注ぎ続け、貝殻をしっかり焼いた。他の焼き方がいいのかも知れないけど、とりあえず焼けば大丈夫だろう。

よく覚えてないから、適当にやってみるしかないのだ。

後はこれを粉々にするんだよな。俺は土魔法で硬い石の器のようなものを作り、そこに貝殻を入れた。そして土魔法で作った硬い石の棒で貝殻を砕く。

おー、結構簡単に砕けるな。でも細かくするのは大変かも。俺はしばらく無心で砕き続けた。

よしっ！　このぐらいでいいかな？

俺がそう思って立ち上がったところ、ロジェが怪訝な表情で粉々になった貝殻を見ている。

「レオン様、先ほどから何をされているのですか？」

「実験だよ」

「実験とは、何のでしょうか？」

「この貝殻を粉々にしたものが、肥料になるかもしれないんだ。とりあえず少し作ってみようと思ってね。リシャール様やクリストフ様に説明するにも、現物があった方がいいからね」

ロジェは俺の説明を聞いて少し納得したようだった。

「この粉を入れる袋を持って来てもらってもいい？」

「かしこまりました」

そうしてロジェが持って来てくれた袋に貝殻の粉を入れた。とりあえずここまでだな。後は領都に戻って、他の貝殻は真水につけて試してもらうしかない。焼かないで粉々にしてみるのもありかも？

あとは、どのくらいの量をどのくらいの頻度で使うのかも試さな

いとだよな。確かめないといけないことがたくさんある。
ここまで知識が曖昧だと、リシャール様も困るだろうか？
うーん……でもゴミになっていたものが有効活用できる可能性があるのだから、相談するだけしてみよう。

本当は、こういう知識を話すと何でそんなことを知ってるんだと疑問に思われるから、今までは話さないようにしてたんだ。だけどマルティーヌによると、リシャール様やアレクシス様は俺のことを使徒様だと思い込んでいるらしい。それならば、色々な知識を知っていることを疑問には思わないだろう。
俺が自分から使徒様だと嘘をついたわけじゃなくて、否定してるのに相手が勘違いをしてくれてるのなら良いよな。ちょっとだけ勘違いを利用させてもらって、少しでもこの世界を自分の為に改善したい。
とりあえず、海の幸を王都で食べられるようにするための一歩になれば良いな。この肥料が港街の特産品になって、今より街が注目されたら海の幸にも注目が集まるかもしれない。需要が高まれば必ず供給も上がるはずだ。製氷機も作ったし、輸送に問題もないだろう。
まあ、こんなに上手くいくとは限らないけど、やらないよりはマシだからな。

昼食まで時間があったのでとりあえずリシャール様に話してみようと思い、ロジェに面会できるか確認してもらったところ、いつでも来てくれと返答があった。
俺とロジェは、貝殻と貝殻の粉を持ちリシャール様の部屋を訪ねた。

「それで今回はなんの話なんだ？」

リシャール様は、俺がソファーに座るのと同時に人払いをしてくれた。俺の話はいつもやばい話だって思われてるのかな……まあ、否定はしないけど。

「今回はホタテの貝殻の話です」

「ホタテの貝殻とは、昨日の夜食べた料理のホタテか？」

「はい。ホタテの貝殻は焼いて砕くと肥料になるのです」

「なっ……本当か！？」

「はい。そんなに慌てるようなことですか？」

「いや、貝殻は特に使い道のない邪魔なものだと思っていたからな、驚いたんだ。それを有効活用できるのならばありがたい。海岸にもゴミとして積み上がっていると聞いている」

確かに、邪魔な山が宝の山になるかもしれないもんな。

「それでどうすれば肥料になるのだ？」

「あまり正確なことは言えないのですが、とにかく砕いて土に混ぜればいいのだと思います。ただ砕く前に焼いたり、何日間か真水につけたりすると効果が変わるはずです。一番効果的な作り方はわからないので、そこは試行錯誤してもらうしかないのですが……」

「いや、それだけわかっていれば簡単に試行錯誤できる。冬の間に何パターンか作ってみて、夏野菜で試してみるのがいいな。とりあえずは領都の屋敷の畑でやるのがいいだろう。上手くいったらこの街で作らせるか。街の特産品になるかもしれないな……」

リシャール様は、後半は完全に独り言で自分の思考の沼に沈んでしまった。

話を進めていいかな……？

「リシャール様？」
「ああ、すまない。つい考え込んでしまった」
「いや、大丈夫です。それからどれほどの量を土に混ぜ込むのか、どのくらいの頻度が最適かもはっきりとしたことは言えないのですが……それでも良いでしょうか？」

確か、肥料って量が多すぎてもダメなんだよな。日本でお母さんがやってた家庭菜園では、肥料をあげすぎてダメになったって言ってた気がする。

「ああ、新しいことを始めるのに試行錯誤するのは当然だ。ホタテの貝殻が使えるかもしれないという情報だけでありがたい。確かに、どれほどの量を使えば良いのかも試してみないとダメだな。今まで使っていた肥料との併用なども試してみるべきだろう……」

リシャール様がまた思考の沼に沈みそうだ。これは、早めに話を終わらせた方が良さそうだな。

「リシャール様、この袋に入っているのが真水にはつけずに焼いて砕いたものです。この木箱には市場でもらって来た貝殻がそのまま入っています」
「これか、結構細かく砕くんだな」
「どのぐらいの細かさがいいのかも試行錯誤して欲しいのですが、粗すぎるのはよくないと思います」

リシャール様は、貝殻の粉をじっと眺めてから顔を上げた。

「レオン君、有益な情報をありがとう。君には世話になってばかりだな。何か恩返しできたらいいんだが」

リシャール様がそう言って、少し申し訳なさそうにしている。

「いえ、私はタウンゼント公爵家の方々にはとても良くして頂いているので当然です。逆に、私がもっと恩返ししなければならないと思っています。今回も曖昧な情報で申し訳ないです」

最初に会った貴族が公爵家の方々のように良い人たちでなければ、家族を人質に取られて、無理やり何かをさせられていた可能性もある。俺自身が監禁された可能性もある。魔法が使えるとは言っても、万能ではないからな。

最初の頃はあまり危機感がなかったので、本当に俺はタウンゼント公爵家の方々と会えて幸運だった。もう一生分の恩があると思っている。

「そう言ってもらえて嬉しいよ。では、この話は領都に帰ったらクリストフと話し合うことにする。またレオン君に話を聞くかもしれないが良いか？」

「はい。いつでも聞いてください」

そうしてリシャール様との話は終わった。リシャール様は、使用人に海岸から貝殻を持って来させるようだ。たくさんないと様々なパターンが試せないからな。

公爵家への恩返しは、真剣に考えた方がいいかもしれない。凄く良くしてもらってるのに、返せているものが少なすぎる。また使えそうな知識を思い出したら、リシャール様に伝えることにしよう。

それからは、自分の部屋に帰りのんびりとした後、皆さんと昼食を食べて港街を後にした。
とても充実した二日間だった。

５６、夕食と貝殻の使い道（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

閑話　クリストフとの話し合い（リシャール視点）

私は領都の公爵邸に戻り、すぐにクリストフと話し合いをした。
昨日レオン様から提案された貝殻の使い道は、実際に野菜がよく育つのならばかなり売れるだろう。本当に、驚くほどたくさんの知識をお持ちだ。ゴミの山が宝の山になるかもしれないのだ。早く試してみなくては。

「父上、すぐに話したいことがあるとはなんですか？　レオン様が作ったという料理のことでしょうか？　それならば、リュシアンから凄く美味しかったと、うんざりするほど聞かされたばかりなのですが」

クリストフが少し疲れた顔をしているのはそれが理由か。確かにあの料理は美味しかった。
ナセルに聞いたら知らない調理法が沢山あったと言っていたな。料理の知識まであるとは、本当に底が知れない御人だ。

「確かにあの料理は美味しかった。すぐにでももう一度食べたいくらいだ」
「父上までその話ですか？　食べられない料理の話をされても、虚しいだけなのですが」
「すまないな。ただ私の話は別のことだ」
「別の話とはなんでしょう？」
「これだ」

私はそう言って、従者が隣に置いてくれていた木箱を机に乗せ、蓋を開けた。

クリストフの顔がとても怪訝な表情になっている。

「これは、ホタテの貝殻ではないですか？　このようなゴミをどうして持って帰って来たのです？」

「レオン様から教えていただいたんだが、この貝殻は焼いて細かく砕くと、肥料になるらしい」

「これが肥料ですか！？」

クリストフがかなり驚いているようだ。無理もない、今までゴミだったものだからな。

「この白い粉が、レオン様が焼いて砕いて作ってくださったものだ」

私はそう言って袋に入った粉を見せた。

「ここまで細かくする必要があるのですね」

「レオン様によれば、粗すぎるものは良くないらしい。どれほどの細かさが一番効果的かはわからないので、試行錯誤して欲しいとのことだ。また、焼いて砕くと言ったが、焼く前に真水に何日間かつけたものや、焼かずに砕いたものも試して欲しいそうだ」

「かしこまりました。では何パターンかの粉をつくり、次の夏野菜で試してみましょう。どの肥料が育ちが良くなるか、野菜がおいしくなるかなども調査させます。他に情報が漏れないように、公爵邸の畑でやるべきですね」

「その方がいいだろう。そして、効果があると分かったときは公爵家で貝殻を買い取り、領主主導の事業とするべきだろう」

何せ使徒様から与えられた事業だからな。平民に任せて頓挫したなんてことになったら大事だ。これは公爵家が主導になるべきものだろう。

レオン様は本当に素晴らしい御人だ。私達の為に知識を授けてくださるとは。レオン様は公爵家に返しきれない恩があると仰っていたが、使徒様を良い待遇で受け入れ全力で手助けするなど当然のことだ。

早くレオン様が、使徒様の身分を隠さなくても良くなるといいんだが。それまでは今まで通りに、優秀な平民の子供として接するようにしなければ。

「分かっております。レオン様からの事業でしたら、公爵家主導で行うのは当然でしょう。私が責任を持って行います」

「クリストフ、頼んだぞ」

クリストフは本当に頼もしい領主になってくれたな。リュシアンも逞しく育っている。タウンゼント公爵家は安泰だ。

私は安心してクリストフとの話し合いを終えようとしたところで、クリストフがもう一つ話があると言ってきた。

「父上、モルガンのことですが……」

モルガンの話か。レオン様から話を聞いたときは本当に驚いた。モルガンは、私が領主だった頃から仕えてくれていたからな。ただ、公爵家のお金を横領するなど、許してはいけない行為だ。お金は街に還元しなければ、いずれ街が衰退してゆくものだ。それもわからないとは。

しかし、それだけならまだ良かった。モルガンの一番の罪は、レオン様を使用人部屋に追いやったことだ。しかも部屋が使えなかった理由は、金のために家具を売り払ったからしい。絶対に許してはおけん。

レオン様がお優しく、使用人部屋を割り当てられることに不満を

漏らすことがなかったから、良かったようなものだ。もしお怒りになられていたらと考えると、肝が冷える。
私の部屋を使って下さいと言いたかったが、流石に公爵家の客人とはいえ対外的には平民のレオン様が客室で、前公爵である私が使用人部屋というのも無理があったのだ。
あの日は寿命が縮まるかと思った。だが、帰りもあの街に泊まる予定だったよな。それまでにしっかりと整えなくては。

「モルガンのことはどうなった？」
「はい。とりあえずレオン様とリュシアンの客室を整えられるように、公爵邸から家具を運ばせています。公爵邸の使用人も何人か行くように指示しましたので、問題なく整えてくれるでしょう。それと同時に、公爵家の騎士と兵士を数人向かわせました。モルガンはとりあえず捕らえ、街の兵士詰所に拘束するよう言ってあります。モルガンは準貴族ですので、もう少し慎重にするべきかとも考えましたが、実家とも縁が切れているようなのでそこまでの配慮は必要ないでしょう」
「そうだな。とりあえずはそれで良いだろう。問題は証拠が出てこなかった場合だが……」

証拠を上手く破棄している可能性もあるからな。その場合どうするか……
ただ今回は使用人から証言が得られるだろうし、家具がなくなっていることは事実だ。

「今回は、簡単に証拠が見つかると思われます。家具を売った先の業者を見つければ簡単でしょう。真っ当な商人に売るとは思えませんから、闇商人など後ろ暗いことをしている連中に売ったのでしょう。ただ、家具は運ぶのが大変ですから、遠くに行くような連中には売れないはずです。あの街の中か、近隣の街や村に行けば見つか

ると思われます。モルガンを拘束したら、証拠を見つけるように指示を出してあります」
「確かにそうだな。では証拠が見つかり次第王都に送ってくれ、後は私が処理しておこう」
「ありがとうございます」
「万が一証拠が見つからなかった場合は、解雇しておけ。理由は公爵家の客人への無礼な態度、とでも言っておけばいいだろう」
「確かにそうですね。平民だからという理由で、公爵家の客人に無礼な態度をとるような者は必要ありません」

普通は平民であったとしても、公爵家の客人には相応の態度をとる。さらに今回は私からの通達で、レオン様は客人なので丁重に扱うように言っておいたのだ。
それなのにあの態度とは、モルガンには平民を見下す思考が刷り込まれているようだ。そのような者は公爵家には必要ない。

敵対勢力のスパイかとも思ったが、それならばあそこまでわかりやすい態度を取ることもないし、モルガンの実家は確か中立の立場だったはず。既に実家との縁も切れているようだし、配慮するべき点はないということだ。
他の問題に繋がらない点は良かったが、今後は貴族を雇い入れるときに、より注意しなければならないだろう。
レオン様への危険を少しでも減らすためにも必須だな。

「では後は頼むぞ」
「かしこまりました」

私は今後のことを考えて少し不安を感じながらも、クリストフの執務室を出た。

―モルガン視点―

やっと帰ったか、あの忌々しい平民め！　平民のくせに公爵家の客人など、生意気にも程がある！

私は苛立ちを隠しきれず、ドタドタと大きな音を立てながら執務室へ向かった。

「おい！　早く来い！」

私は執務室に入るとすぐに執事を呼んだ。

「モルガン様、いかがいたしましたか？」

「客室をあと二つ用意しなければならなくなった。今すぐに整えろ！」

「で、ですが……客室に入れられるような家具はございません。その……モルガン様が売ってしまわれたので……」

「貴様！？　私が悪いというのか！！」

全くこれだから平民は嫌なんだ。無能だが私の慈悲で雇ってやってるというのに、ミスがあれば全て私のせいとは、使えないにも程があるな。

「そ、そのような事は、ございません」

「家具がないのであれば、買えば良いではないか！」

「で、ですが、そのお金もございません……」

「そんなもの、工房に安く作らせればいいではないか！　貴族からの依頼なら泣いて喜ぶであろう。何しろこの私からの依頼なのだからな。こんなことも考えられないとは、無能もここまでくると嘆かわしいものだ」

「ただ……工期が間に合わないかと……」
「そんなもの寝ずにやらせれば良かろう！　早く依頼して来い！」
「はっ……はいっ！」

やっと行ったか、流石に無能すぎるな。あいつはそろそろ解雇した方がいいかもしれん。
まあ、これで客室も整えば完璧だな。

それから数日間は、今まで通りの平穏な日々を過ごした。あの忌々しい平民がいないだけで素晴らしい気分だ。
それよりも、早く収穫の時期にならないものか。収穫の時期にならなければ多くのお金が入ってこない。
これ以上家具を売るのは流石にまずいからな、何かいい方法はないか。

……ドタドタッ

なんなんだ、うるさい！　私がせっかく良いアイデアを思いつきそうだというのに！
私が騒いでる使用人を叱ってやろうと立ち上がりかけたところで、執務室のドアが開いた。
そのドアから執事が駆け込んでくる。

「おい！　うるさいぞ！　もっと静かに動けんのか！」
「モ、モルガン様、公爵家の騎士と兵士が来ております！」

なんだと？　公爵家の騎士が何の用だ？
私がそう思ったところで、執務室に騎士と兵士が入ってきた。

「貴様がモルガンだな。公爵家より捕縛せよとの命が出ている。捕らえろ！」
「はっ！」
兵士が二人私のところに来て、手を縄で縛られる。
「きっ、貴様ら！　私にこんなことをして只で済むと思っているのか！」
「これは公爵家の決定だ」
公爵家の決定だと！？　何故こんなことになったんだ！
「早く歩け！　ほら、さっさとしろ！」
「私は貴族だぞ！　話を聞け！」
「話なら、これから詰所でたっぷりと聞こう」
なんでこんなことに！？　私は貴族だぞ！！

閑話　クリストフとの話し合い（リシャール視点）（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

57、帰宅とお土産

今日は王都へ帰る日だ。港町に行ったりリュシアンと魔法の練習をしたり、とても有意義な時間を過ごすことができた。
ホタテの貝殻で作る肥料も、色々研究してもらえるみたいだし、これであの港街が注目されて、海の幸がたくさん出回るようになるといいな。製氷機も作ったし、運搬に問題はないはずだ。

俺たちは早めに起きて準備を済ませ、馬車の前に集まっている。リュシアンは別れの挨拶をしているようだ。

「父上、母上、行ってまいります」
「ああ、しっかり励むんだ。王都に行った時に、成長しているのを楽しみにしているぞ」
「はい！」
「リュシアン、皆さんに迷惑をかけないようにね。体には気をつけて頑張るのよ」
「母上、分かっています」

うぅ……この歳で親と離れて暮らすなんて……
絶対寂しいし、悲しいよな。泣ける……

そう思って目に涙を溜めていると、皆に不思議そうな顔で見られた。
え？　なに？
「レオン、どうして目に涙を浮かべているのだ？　もしかして目に

ゴミでも入ったのか？　それならば早く洗ってきたほうが良いぞ」

リュシアンにそう言われた。いや、違うんですけど、別れて暮らさないといけない家族の姿に涙してたんですけど！　え？　皆泣かないの？

ここは涙の別れのシーンじゃないの？

「えっと……リュシアン様は寂しくないのですか？」

「何がだ？」

何がって、それは両親と離れて暮らすこと以外にないでしょうが！

「クリストフ様とソフィア様と離れることが、寂しくないのですか？」

「うん？　寂しくなんかないぞ。当たり前のことではないか。レオンは何を言っているのだ？　それに父上も母上も春の月を祝うパーティーのために、近々王都に来るのだぞ？」

え？　そうなの！？　もうしばらく会えないんじゃないの？　というか、春の月って何？

「それよりもとても楽しみだ！　王立学校に行けばたくさん友達もできるかもしれないし、とてもワクワクするな。パーティーでは、あまり同年代の子供と話すこともなかったのだ」

ああ……そうですか……

俺の涙を返してくれ！！　そして春の月が何かを教えてくれ！

「……確かに楽しみですね。ところで、春の月とは何ですか？」

俺がそう言うと、リュシアンはポカーンとかなり驚いたような顔をした。

「知らないのか？」

「はい。初めて聞きました」

多分暦みたいなやつだろうけど、俺はこの世界の暦知らないんだよね。誰も言わないし一度も聞いたことないから、結局聞かずに来てしまった。もしかしたら暦がない可能性もあるのかと思ってたんだ。

「春の月、夏の月、秋の月、冬の月で一年で、それをずっと繰り返すだろう？」

「そうなのですね。では春の月は何日なのでしょうか？」

「十八週、九十日に決まってるじゃないか！　本当に知らないのか？」

「はい。平民では浸透していないのです」

「……そうなのか。わざわざ王立学校の試験にすることでもないし、学ぼうとしなければわからないのか……」

リュシアンはそう言って呆然とした顔をしている。何か別れの時にこんな話してごめんね？　まあ、またすぐ会えるのならいいのか。

俺はそんなことを思いながら、リュシアンの顔を見つめていた。するとリシャール様に声を掛けられる。

「何を話してるんだ？　そろそろいいか？　出発するから馬車に乗ってくれ」

「……はい。お祖父様」

リュシアンはまだ衝撃を受けたままの様子で馬車に乗った。俺も

その後をついて馬車に乗る。

そうして馬車は公爵領の領都を出て、王都に向かって進み出した。

「お祖父様、レオンが暦を知らないのです……」

「……そうなのか？　ふむ、確かに学ぼうとしなければ知らないのも当然か……」

「今まで話に出て来たことがなくて、先ほど初めて知りました」

「ではここで教えておこう」

そうしてリシャール様が教えてくれた所によると、一年は春の月から冬の月までの四ヶ月、一月は十八週で九十日。一年は三百六十日だそう。春の月の第一週から年が変わるようだ。

しかしこの国は年の変わり目をそこまで重視していないようで、平民の間では新年を祝うということはないらしい。暦も浸透していないようだ。

そんな状態だから俺が今まで知ることはなかったんだな。他の人も冬の終わりとか春の初めとか言ってただけだったし。

俺は今まで気づかなかったけど、冬の終わりは冬の月の第十八週、春の初めは春の月の第一週を指す言葉らしいのだ。それは気づくわけないよね。

そうして俺が新しい知識を覚えつつ、馬車は進んでいった。しかし帰りは行きと同じ道を帰るだけなので、特に目新しいこともなく過ぎていく。

ただ、行きと唯一違ったのはモルガンさんがいなくなっていて、俺の客室も用意されていたことだ。

俺がリシャール様に話をしてからあまり時間が経ってないが、も

う対処をしたのかと少し驚いた。
まあ、俺にとっては快適な部屋で眠れて、悪意の視線を向けられることもなく、いいこと尽くめでとても穏やかに過ごせたので問題はない。逆に早く対処してくれて助かった。この街に泊まることだけが少し憂鬱だったのだ。

そうして特に何事もなく、王都の公爵邸へと辿り着いた。着いた時はもう夜遅かったので、俺は公爵邸に一泊し、次の日に家に帰ることにした。

そして次の日の朝。見送りにはリュシアンが来てくれた。他の皆様は仕事が溜まっていて忙しいみたいだ。

「レオン、次に会えるのは試験の日か？」
「うーん、多分そうだと思うけど、試験会場が違うんじゃないかな？」
「でも、試験の日は公爵家から会場に行くのだろう？」
確かに……！　全然考えてなかったけど、俺の家からじゃ遠すぎて試験時間に間に合わない可能性もあるな。
「確かにそうだね。試験の日の前日から公爵家に来てもいいかな？」
「やっぱりそうだよな！　私がお祖父様に伝えておく」
「リュシアンありがとう。じゃあまた後で」
「ああ、試験の日が楽しみだ」

そうして俺はロジェとともに馬車に乗り、家に帰った。またリュシアンと会えるのが楽しみだ。仲良くなれて良かったな。

家に向かって馬車に揺られながらなんとなく街を眺めていたが、知っている場所に帰ってきたって感じで凄く落ち着く。やっぱり知らない土地に行くのは、楽しかったけど疲れたみたいだ。それに公爵家の皆さんとずっといるのも、緊張感あるしな。

そうしてぼんやりと外を眺めていると、家の近くに着いた。

「ではレオン様、試験日の前日の午後、こちらに馬車でお迎えに参ります。準備を済ませてお待ちください」

「分かったよ。ロジェ、旅の間はありがとう。これからもよろしくね」

「仕事ですので当然です。また公爵邸にいらっしゃったときには、精一杯お仕えさせて頂きます」

「うん。じゃあまた、公爵邸に行く時に」

そうして俺は馬車を降り、家に入った。

「ただいまー！」

俺がそう言いながら家に入ると、食堂にはマリーとイアンがいた。

「マリー、イアン君、ただいま」

「お兄ちゃん！　おかえりなさい！」

「レオン君、おかえりなさい」

マリーが飛び上がって喜んでくれている。マリー、そんなに寂しかったのか？　うぅ……そんなに悲しんでくれてたなんて、お兄ちゃんは嬉しいよ。

そう思ってマリーに抱きつこうとすると、マリーから俺の方に来てくれる。マリーから抱きついてきてくれるのか！？　俺は嬉しくて両手を広げて待っていたが、マリーが一向に来ない。うん？　ど

うしたんだ？

「お兄ちゃん！　その木箱の中身って何？　もしかしてお土産！？」

マリーは俺が手に持っていた木箱を見て、目をキラキラさせている。

うぅ……マリーはお兄ちゃんよりお土産なんだな。上げて落とすなんて、マリーもやるようになったじゃないか……うぅ、マリーがつれない！　悲しい！

俺がマリーとそんなやりとりを繰り広げていると、母さんと父さんが厨房からやってきてくれた。

「レオンおかえりなさい。怪我はしなかった？　体調は大丈夫なの？」

「レオン、おかえり。楽しかったかい？」

「ただいま！　母さん心配しすぎだよ。どこも怪我してないし元気だから大丈夫だよ。それに凄く楽しかった！」

俺がそう言うと、二人は顔を緩めて安心したように笑っている。心配してくれてたんだな。無条件に心配してくれる人がいるのっていいものだ……

これから一緒に暮らすことはできなくなっちゃうけど、いずれはまた一緒に暮らせるように頑張ろう！

「それで、その木箱の中身はなんなの？　二つもあるみたいだけど」

「これは皆へのお土産だよ！　とってもおいしいものなんだ。夜ご飯を俺が作ってみんなに振る舞うよ。あっ、でも今日って夜営業やる？」

「レオンが帰ってきたんですもの。今日は休みにするわ」

「そうだね」
「ありがとう！　それなら昼営業が終わったら、俺が料理するね」
頑張って料理を作ろう！　海の幸の美味しさを皆に味わって欲しくて、氷漬けにして魚や貝などを持って帰ってきたのだ。
ついでに中心街で、油とか必要なものも買ってきたから完璧だ。
「お兄ちゃんの料理、美味しいから楽しみ！」
「俺も食べたい！　食べて行っちゃダメかな？」
マリーがすごく嬉しそうで、それを見たイアン君がとても羨ましそうにそう言った。
「もちろんイアン君も食べていいよ。材料はたくさんあるから大丈夫！」
「本当に！？　レオン君ありがとう！」
イアン君はガッツポーズしながらめちゃくちゃ喜んでる。
「でも、海の食材食べたことないよね？　それなのにそんなに食べたいの？」
「そんなの決まってるよ！　海の食材なんて食べる機会これから絶対ないよ。珍しいものは食べてみたいでしょ！」
ま、まあそっか、そういうものだよね。
「じゃあこの話は一旦終わりにしましょう。もうすぐ昼営業が始まるわよ」
「本当だ！　じゃあ俺も着替えてくるね。久々にお店手伝うよ」
「じゃあレオンは着替えてきて、マリーとイアンは準備の続きね」

「はい！」

そうして俺は食堂の隅に木箱を置いて、服を着替えるために二階に駆け上がった。

５７、帰宅とお土産（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

58、レオンの魚料理（自宅編）

お昼営業が大盛況で終わり、午後になった。
よしっ！　頑張って作るぞ！

俺は気合を入れて厨房に行った。母さんと父さんは料理を手伝ってくれて、マリーとイアンは見学だ。皆んな、海の食材に興味津々らしい。
俺は木箱を台に乗せて、蓋を開けた。大きい木箱には氷漬けの海の幸が入っていて、小さい方は中心街で買ってきた油などだ。足りないと困るから買ってきた。

「これって……氷？　なんでこんなに氷があるんだ？」

イアン君が不思議そうにそう言っている。確かに真冬なら、外に水を張っておけば氷ができることもあるが、今はまだ冬の初め頃の季節だからな。

「これは、貴族の方が魔法具を貸してくれて作った氷なんだ」

俺の能力をあまり明かしてはいけないから、そう答えた。平民は魔法具のことを、貴族が使う便利な道具くらいの認識しかしてないので、大抵の場合は魔法具と言えば納得する。

「そうなんだ。やっぱり魔法具って便利なんだなー、氷まで作れるのか」
「そうなんだよ、羨ましいよね。それで、氷の中にあるのが海の食材だよ」

俺は次々と机の上に並べていく。ブリ、アジ、サワラ、ホタテ、タコの五種類だ。

「これで全部だよ。こっちから、ブリ、アジ、サワラ、ホタテ、タコって言うんだ」

俺がそうして説明していると、皆が一歩ずつ後ろに後ずさっている。え？　どうしたの？

「皆どうしたの？」

「レ、レオン君、それはなんだ！？」

「それってどれのこと？」

イアン君が何かを怖がっているように俺にそう尋ねると、母さん、父さん、マリーも首を激しく縦に振って同意している。

「え？　皆どうしたの？」

「そ、それだよ、その気持ち悪い形のやつ！　一番端にあるやつ！」

「え？　タコのこと？」

そっか！　一度も見たことがないと、タコってすごく奇妙なものに見えるんだよな。怖がっても仕方ないのかも。

確かに地球でも、海外のタコを食べない地域の人は皆んな怖がってた気がする。

「これは見た目は気持ち悪いかもしれないけど、美味しいから大丈夫！」

俺がそういうと、皆は半信半疑ながらも少し体の力を抜いてくれ

た。
ただ、タコの処理は俺がやらないとだな。
「あと、その硬そうなやつはなんだ？　食べられるのか？」
「硬そうなやつって、ホタテのこと？　ホタテは中身を食べるから大丈夫。外側は食べないんだ」
「そうか、それならいいんだ」

イアン君はやっと安心したようだ。魚は川魚があるから、見たことはあるもんな。見たことが無いものは怖がって当然か。
でもこの世界って、川魚はほとんど食べないんだよね。たまに川で魚を取ってきた人が売り歩いてたりするけど、それもあまり見ない。完全にメインは肉だ。
川魚は一部の魚好きが、自分で獲って食べてるって感じなんだよな。

川で真剣に魚を獲れば結構な量が獲れると思うんだけど、それでもすぐに獲り尽くしちゃうのかな？　まあ、養殖もしなければ、そこまで大量には獲れない気がする。
ずっと食べ続けるには向かないから、あまり食べられなくなったのだろうか？
確かに日本でも海の魚はよく食べてたけど、川魚ってあまり食べる機会はなかったかもな。旅行に行ったときにヤマメを食べたけど、その一回だけかも。
「それでレオン、どうやって調理すればいいんだ？」

父さんにそう聞かれた。父さんの目が、いつもより輝いているように見える。やっぱり料理人としては、新しい食材を料理できるのは楽しいんだろうか。

「うーん、魚を捌くのは難しいから俺がやるよ。港街で教えてもらったんだ。母さんと父さんは、捌いた魚の調理をお願いしてもいい？　レシピは教えるから」
「わかったわ」

レシピはどうしようかな？　ここにはオーブンがないからホタテのオーブン焼きはできない。うーん、ニンニクと塩胡椒で炒めればいいか。
アジとタコは前と同じで、フライと唐揚げでいこう。
サワラはムニエルにしようかな？　確かムニエルは、塩を振って小麦粉をまぶして油でよく焼くんだよな。その後にバターを入れればできるはず。一つくらい挑戦してもいいだろう。
あとはブリだけど、ブリって塩焼きか照り焼きかブリ大根しか思いつかない。でも照り焼きもブリ大根も、明らかに調味料が足りないんだよな。やっぱりシンプルに塩焼きだな。

まずは時間がかかりそうな揚げ物からいこう。俺はなんとかアジを捌いて、タコの下処理をしてぶつ切りにしていく。下処理は結構大変で身体強化魔法を使ってしまった。
ふぅ～やっと終わった。多少はマシに捌けたはずだけど……

……もっと練習しないとダメだな。

まあ、見た目はともかくとして、なんとかその二つは捌き終わった。

「母さん、アジは小麦粉につけて溶いた卵に浸して、そのあとパン粉を全体的につけて欲しいんだ。あっ！　パン粉を作らなきゃだった。まずは細かくパンを砕いてくれる？」

「パンを砕けばいいの？」
「そう。みじん切りくらいまで細かくして欲しいんだ」
「そんなに細かくするの！？」
「粗すぎると、アジにくっつかなくて失敗するんだよ」
「そうなのね。じゃあ母さんはパンを細かくして小麦粉と卵を準備すればいいのね」
「うん！　ありがとう」

母さんは早速パンを細かくしてくれている。俺より手際がいいみたいだ。さすが本職の料理人。

「父さん、父さんはこのタコに塩で味をつけてくれる？　それでしばらくおいたら小麦粉をつけて揚げるから、鍋に油の準備もお願い。鍋の半分くらい油を入れてね。あと、火もつけてくれる？」
「半分！？　鍋の半分も油を使うのかい？」
「そうなんだ。残った油もまた使えるし、俺が油も買ってきたから大丈夫だよ」
「まあ、それならいいか……」

父さんはかなり驚きながらも、準備を始めてくれた。
俺はその間に、サワラとブリを捌いていく。

「レオン、パンはこのくらいでいいかしら？」
「うん！　完璧だよ！　じゃあ母さんはアジを小麦粉と卵とパン粉につけたものと、タコに小麦粉をつけたものを揚げてくれる？　父さんが油は用意してくれてるから、油が温まったら揚げて欲しいんだ。この前に、俺がおばあちゃんの家でやったのとほとんど同じだよ」
「ああ、あの時の料理と同じなの？　少し違うみたいだけど」
「ちょっと違うけど似た料理なんだ」

「そうなのね。母さんやってみるわ」

母さんは腕まくりしてやる気満々だ。早速油の温度を確かめてるようだ。あっちはとりあえず母さんに任せよう。

「レオン、父さんはどうすればいい？」

「父さんはサワラとブリを焼いて欲しいんだ。まずサワラは、塩を振って小麦粉をまぶしてからフライパンで焼いて、焼けてきたらバターを少し入れれば完成。ブリは普通に塩を振って焼くだけだよ！」

「それならそこまで大変じゃないな。やってみるよ」

「うん！　ありがと！」

よしっ……！　これであとはホタテだけだ。ホタテはまず、身を取り出さないと。

俺は料理用のナイフでひたすらホタテの中身を取り出していく。そうしてホタテと格闘していると、イアン君が俺のところに来た。

「レオン君、それ俺もやってみていい？　それなら難しくなさそうだから」

「やってくれるの？　ありがとー、実は結構疲れてたんだよね」

「代わるよ、さっきまでやり方は見てたから大丈夫だと思う」

そうしてイアンくんが代わってくれた。結構疲れてたからありがたい。

俺はその間に、ニンニクをみじん切りにしてホタテを焼く準備をする。

「レオン君、全部できたよ」

「ありがとう！　本当に助かったよ」

俺はホタテを受け取り、清潔な布で少し水気を拭く。この布には俺がピュリフィケイションをかけておいた。布の雑菌でお腹を壊したなんてことになったら嫌だからな。

あとは焼くだけだ。父さんと母さんはそろそろ終わるだろうか？　見てみると父さんの方はもう焼き終わりそうだ。母さんはまだ苦戦している。ただ、揚がっているものを見ると、美味しそうだから大丈夫だろう。

「父さん焼き終わった？」
「今ちょうど終わったよ。凄くいい匂いで、父さんお腹空いちゃったよ」
「もうちょっと待ってね。あとこれ焼いたら終わりだから」
「それはさっきの硬そうだったやつの中身かい？　ホタテだっけ」
「そうだよ。これをニンニクと塩で焼くんだ」
「じゃあそれも父さんが焼くよ。レオンはできたものから準備してくれるか？　イアンもいるから食堂にしよう」
「わかった！　じゃあよろしくね」

そうして俺はマリーとイアン君と、出来上がったものを食堂に並べてカトラリーやお皿を用意した。水も準備して完璧だ。

厨房に戻ると、父さんはもう片付けを始めようとしていて、母さんはまだ揚げている。
もう少しで出来上がるな。そう思ったときふと気づいた。

……やばい！　フライのソースのこと考えてなかった。

どうしよう全然考えてなかった。やっぱりソースあったほうが美味しいよな。この家にはトマトあるんだろうか？

「父さん、トマトってある？　保存してあるやつとかでもいいんだけど！」
「トマト？　トマトはないかな。うちではドライトマトはあまり作らないんだよね。冬には冬の野菜があるからね」
「そっか……」

どうしよう。冬の野菜で何かソース作れるかな？

「ちなみに今うちにある野菜って何？」
「うーん、小松菜、ブロッコリー、白菜、あと人参かな」

人参！　確か日本にいたときに、お母さんが人参ソースにハマってた気がする！
あれってどうやって作ってたんだっけ？　確かお母さんが、塩と油だけのやつが一番好きとか言ってたはず。
ということは、人参をみじん切りにして塩と油で炒めればいいのか？　でもそれだとソースじゃないよな？　ソースにするには、もう少し水気があるものを入れないといけない気がする。
うーん……少し水を入れればいいのかな？
とりあえず作ってみよう。

「父さん、人参をみじん切りにしてくれる？」
「まだ何か作るのかい？」
「フライにつけるソースを忘れてたんだ。人参ソースを作ろうと思って」
「人参ソースなんて聞いたことないけど、まあレオンの料理はいつも美味しいからね。人参をみじん切りにすればいいんだよね？」
「うん！　できる限り細かくお願い！　父さんありがとう！」

父さんは素早く人参のみじん切りを作ってくれた。かなり細かくしてくれたようだ。
俺はそれをフライパンに入れ、少しだけ水を入れて油と塩を入れた。これで火を通していけばいいのかな？
少ない量で作ったので、少し火を通すと段々と水気が飛んで、見た目ではソースのようになってきた。
これで美味しいのだろうか？　まあ、美味しくなかったら塩をかけて食べてもらおう。

そうしているうちに揚げ物も終わったようで、食堂には海の幸の料理がずらりと並んでいる。
凄くいい匂いだ！　美味しそう！！

「じゃあ、皆で食べようか」

父さんがそう言って席に着き、他の皆も席に着いた。

「レオン、素敵なお土産をありがとう。いただきます」
「「いただきます！」」

５８、レオンの魚料理（自宅編）（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

59、魚料理実食

皆は食べようとするも、味の想像ができないからか少し躊躇している。知らないものを食べるのって結構怖いよな。
そこで俺は、先に一口食べることにした。まずはサワラのムニエルにしよう。
サワラのムニエルを一口分取り、ぱくっと口に入れた。
う～ん！　美味い！！

「このサワラめっちゃ美味しいよ！　皆食べてみて！」

俺がそういうと皆一斉にサワラに手を伸ばす。やっぱり未知のものを食べるのは、ちょっと怖いんだな。
俺は少し苦笑いしながら皆の様子を眺めた。
マリーは一口食べたあとは満面の笑みで、ひたすらサワラを食べている。イアン君は一口食べて驚いた顔のまま、フリーズしてる。

「お兄ちゃん！　これ凄く美味しい！」
「それはサワラのムニエルだよ」
「それ！　美味しい！」

名前はよくわかってなさそうだが、とにかく美味しいようで良かった。

「これは驚きだな……」
「ええ、こんなに美味しいなんて。海の魚は身が柔らかくて美味しいわね」
「それにこの味付けも美味しい」

父さんと母さんも気に入ってくれたようで良かった。イアン君はやっとフリーズから戻り、二口目を食べている。

「イアン君、美味しい？」

「めちゃくちゃ美味しい！　美味しくてびっくりしてるよ」

それだけ言って、イアン君はひたすら食べ始めた。ここまで喜んでもらえると嬉しいなぁ。

俺も食べよう。次は、人参ソースを試してみるか。

俺はアジのフライに、人参ソースをつけて食べてみた。

おおっ！　このソース適当に作った割には美味しいかも。俺はトマトソースの方が好きだけど、これも割といけるな。

「お兄ちゃん、これをつけて食べるの？」

「そうだよ。ただこのソースが好きじゃなかったら、塩をかけて食べるのでも美味しいからね」

「わかった！」

そう言ってマリーは、アジのフライに人参ソースをつけて食べた。

「う～ん、マリーこれ好き！　サクサクで美味しい！」

マリーのその言葉を聞いて、サワラばかり食べていた他の三人もアジのフライに手を伸ばす。

「本当ね！　サクサクでとても美味しいわ」

「ああ、このソースも美味しいね」

「レオン君！　これも最高だよ！」

そのあとは俺が食べなくても、思い思いの料理に手を伸ばして食べている。
全て美味しいみたいで良かった。ここまで喜んでもらえると、本当に嬉しいな。

俺も安心して、他の料理にも手を伸ばす。タコの唐揚げとブリの塩焼きは安定の美味しさだ。ホタテはどうだろうか？　ホタテを一口食べてみると、かなり美味しい。
おおっ！　オーブン焼きにしなくても結構いけるんだな。でも、やっぱりオーブンで焼いた方がもう一段階美味しい気がする。後で皆にそっちも食べさせてあげたいな。

そうして大満足で食事は終わった。

「お兄ちゃん！　全部凄く美味しかったよ！」
「ええ、これは最高のお土産ね」
「本当だね。すごく美味しかったし、作るのも楽しかったよ」
「どれも本当に美味しかった！」

そんなに喜んでもらえるなんて、嬉しいなぁ。この家族の一員で良かった。そう思って俺は自然と笑顔になる。

「そう言ってもらえて本当に嬉しいよ。皆ありがとう。また海に行く機会があったら、お土産買ってくるから食べようね！」
「うん！　お兄ちゃん絶対だよ！」

マリーがかなり食い気味にそう言った。マリーは美味しいものに目がないんだよな。皆少し苦笑いだ。

「マリー、約束するよ」
「やったー！」

そのあとは俺が港街の話をしたりしながら、穏やかな時間が過ぎていった。やっぱり家族といるのは落ち着くな、そう思った。

次の日の朝。
俺は昼営業が終わるとマリーに捕まった。マリーは昨日食べた魚が忘れられなかったようで、川魚でもいいから食べたいと言い出したのだ。
そこで魚を獲れるかわからないけど、森に行くことになった。

「じゃあ行ってきまーす」
「気をつけるのよー」

俺とマリーは家を出て森までどんどんと歩いていく、早く行くだけ魚がたくさん獲れるかもしれないと、マリーが張り切っているのだ。
でも川魚って冬も獲れるの？　俺のイメージでは春とか夏なんだけど……

「マリー、さっきも言ったけど、魚が獲れるとは限らないからね。冬は獲れないかもしれないし」
「わかってるよ！　でも行ってみなきゃわからないでしょ！」

マリーはずっとこの調子だ。意外と頑固なんだよなぁ。
俺とマリーは寒い冬空の下、森まで頑張って歩き川に辿り着いた。
さて、これからどうすればいいのか。釣りなんかしないから釣竿

なんてないし、川に入るのはこの寒さでは流石に無理だ。それにこの川って、中心部とか結構深そうだよな。川は流れがあるし安易に入ると危ないんだ。
一応糸だけは持ってきてみたけど、そもそも魚なんて居るのか？
俺はとりあえず川をじっと眺めて魚を探してみる。隣でマリーも同じことをしている。

「マリー、魚いなさそうだよ」
「もっと探せばいるかも！」

またしばらく、川をじっと見つめて魚を探す。

「マリー、やっぱりいないんじゃない？」

俺がそういうと、マリーは少し落ち込んでいる。

「やっぱりいないのかなぁ」

うっ……そんなに落ち込まれると、もう帰ろうとは言いづらい。

「多分、冬は魚も奥に隠れてるとかじゃないのかな？　一応糸を持ってきたんだけど、これで魚が釣れるか待ってみる？」
「糸……？」
「そう。糸の先にエサをくっつけて川の中に沈めるんだ。それで魚が食いついたら、引っ張り上げる」
「お兄ちゃん凄いね！　それなら魚獲れる？」
「うーん、これでも難しいと思うけど、とりあえずやってみる？」
「うん！」

とりあえず、マリーが笑顔になったから良かった。

俺はその辺の地面から小さな幼虫を見つけて幼虫を糸で縛り、糸を短い木の枝に結んだ。即席の簡易釣竿だ。
こんなもので釣れたら奇跡だな……
それでもマリーはワクワクしてるからいいか。

「じゃあこれを川の中に入れてみるね」
「うん！」

それからしばらくは、ずっと木の枝を持って待っていた。流石に寒すぎるので、俺は枯葉や枯れ技を集めて火をつけた。少しは暖かくなったけど、ずっと外にいると風邪をひきそうだ。
マリーは寒そうにしてるけど、自分で言い出したからか木の枝を持って我慢している。

さっきから一時間は経ってるけど、魚の影も見ないし釣れる気配は一切ない。流石にそろそろ終わりにして帰った方がいいかな～。

「マリー、そろそろ帰ろうか。また夏になったら釣りに来ようよ。多分夏なら釣れるよ」

俺がそういうと、マリーの目にはみるみる涙が溜まっていく。え？　なんで！？　そんなに魚が釣れないのが悲しかったの！？

「マ、マリー、泣かないで。魚料理はできないけど、お兄ちゃんが他の美味しい料理を作るから」

俺がそう言ってもマリーは涙を流して無言だ。

「マリー、どうしたの？」

もう俺は大混乱だ。どうやって慰めればいいのかもわからなくて、ひたすら慌てることしかできない。

「ひっく……ひっ……お兄ちゃん……春には、家から出て、行っちゃうん、でしょ？」

マリーが泣きながらそう言った。

え？　魚じゃないの？

「うん。王立学校に行くから家には住まなくなるかな」

「じゃあ……夏になっても、お兄ちゃんと、一緒に釣りに、行けない？　ひっく……ずびっ……」

マリーは俺が家から出て行っちゃうのが寂しくて泣いてるのか？

俺と夏に釣りに来れないかもって思って泣いてるのか？

そんなにマリーが、俺が家から出て行くことを悲しんでくれてたなんて……！

俺はめちゃくちゃ嬉しくて、でもマリーにつられて俺まで悲しくなってきた。

「マリー、夏には一緒に釣りに来れるよ。家から出ても頻繁に帰ってくるからね。だから釣りにもいけるし、他のことも一緒にできるよ」

「ほんとう……？　お兄ちゃんもう帰って来なくなっちゃうんじゃないの？」

「そんなことあるわけないよ！　お兄ちゃんはマリーが大好きだから、家に帰ってくるに決まってるよ」

「良かった……」

マリーが泣きながら笑っている。俺はマリーが安心できるように

ぎゅっと抱きしめて背中を撫でてあげた。
そうだよな。マリーは大人びてるけどまだ子供だもんな。急に家族と会えなくなるって思ったら寂しいんだろう。
俺はマリーを落ち着かせながら決意した。

家族で一緒に、安全で快適で幸せな生活をできるように頑張ろう。
今、俺の家族は凄く危険な立場にある。俺を疎ましく思った貴族が狙いやすいのは家族だからだ。アレクシス様が、家族を守るために影の護衛をつけてくれたようだけど、それにずっと甘えてるわけにはいかない。
できる限り早く俺も地位を得て、敵対勢力を排除する手助けをしよう。地位を得たら自分で家族に護衛をつけることもできるだろうし、家族ということで近くの安全な場所に呼ぶこともできるかもしれない。
でも、できる限りみんなの嫌がることはしたくない。食堂を続けたいなら、別の場所でも続けられるようにしたいな。

王立学校で目立つのは嫌だとか思っていたけど、リシャール様の勢力を後押しするためなら、積極的に頑張ろう。
というか今更だけど、全属性のことも王立学校で隠さなくてもいいんじゃないか？
いや……流石に全属性まで知られると、さらに過激な集団が出てくるのかもしれない。それにアレクシス様は他国の心配もしていたな。
やっぱり全属性は、俺が地位を得てからだな。平民にはいくらでも手を出せても、俺が貴族になれば手を出しづらくなるのだろう。まだこの辺の事情がよくわかってないけど、ちゃんと学ばないとだな。

とにかく家族と自分を守るために、家族皆で幸せな生活を送る未

来のために、頑張ろう。

最初から能力のことはひた隠しにして、家族と幸せに生きて行くのでも良かったと思うこともある。でも一生隠し続けるなんて難しいだろうし、何かの拍子にバレた時が大変だ。そう考えると今の状態はかなり良いとも考えられる。

それに、できればもう少し生活水準は上げたいしな。最低でも水洗トイレとお風呂が欲しい。というか、下水道が欲しい。

そんなことを考えていると、マリーは落ち着いてきたようだ。

「お兄ちゃん……もう大丈夫だよ」

マリーは少し照れ臭そうにそう言った。俺の前で泣いたのが恥ずかしいのだろう。そこは指摘しないことにして、俺はできる限り優しい笑顔を浮かべた。

「じゃあ、そろそろ帰ろうか？　歩ける？」

「うん。もう大丈夫！」

元気に戻ったようだ。良かった。

俺とマリーは、行きよりもゆっくりと歩き並んで家まで帰った。

５９、魚料理実食（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューもよろしく
お願いします！

60、試験の準備

公爵領に行ってから六十日ほどが経過し、遂に明日は試験日となった。

この期間はゆっくりと過ごした。勉強をしようかとも思ったが、もうやることがないので早々にやめた。歴史も試験範囲は本当に表面的なことだけなので、覚えることは少ないのだ。もっと深い歴史を知りたいと思うが、そこは授業で教えてもらえるのだろう。

それから毒消しの魔法の練習も上手くいかなかった。冬にはちょうど良い毒がなかったのだ。一番お手軽に手に入るのがじゃがいもの芽なので、春になったらやろうと思う。

今日はロジェが家まで迎えにきてくれる予定だ。確か来てくれるのは午後だったから、俺は午前中に準備をして、馬車が来るのを待っている。

「レオン、明日の試験頑張りなさい。あなたなら大丈夫よ」
「レオンなら、落ち着いてやれば大丈夫だよ」
「母さん、父さん、ありがとう。頑張ってくるね！」

今日は、母さんと父さんの方が落ち着かないみたいだ。俺に落ち着いてと言っているが、二人の方がそわそわしている。俺は思わず笑ってしまった。

「ははっ……二人の方が落ち着いてよ。俺なら大丈夫だから」
「そうね、レオンなら大丈夫よね。もちろん母さんは信じてるのよ」
「父さんもだよ。でも急にお腹が痛くなったらとか、貴族に絡まれたらとか、色々心配が……」

「父さん、そんなこと言われたら逆に緊張してくるから」
「ごっ、ごめん！」

父さんはさらに慌てている。俺の周りを歩き回っている。父さんそろそろ落ち着こうか……
でも俺は、そんな二人の様子を見て逆に冷静になれてる気がする。慌ててる人を見てると逆に冷静になれるって本当なんだな。

そんな感じで食堂の椅子に座って待っていると、ドアをコンコンと叩く音がして「ロジェと申します」と声が聞こえた。
俺は椅子から立ち上がって、すぐにドアを開けた。

「レオン様、お迎えに参りました」
「ありがとう。もう準備も済んでるからすぐ行くよ」

俺はそう言って準備した荷物を持ち、母さんと父さんの方に振り返った。

「母さん、父さん、頑張ってくるね」
「ええ、頑張りなさい」
「レオンなら大丈夫だよ」

二人は、なんとか不安を表に出さないようにしているのか、少しぎこちない笑顔を浮かべている。
俺はそんな顔を見てまた笑ってしまった。

「ははっ……二人とも変な顔だよ」
「ちょっと、公爵家の使用人の方の前でそんなこと言わないの！
えっと、ロジェさんでしたよね？　レオンをよろしくお願いします」
「よろしくお願いします」

母さんと父さんはロジェに向かって、深く頭を下げている。ロジェは頭を下げられることがあまりないからか、少しだけ慌てているように見えたが、すぐにいつもの表情に戻った。さすがロジェだな。

「はい。レオン様にしっかりとお仕えさせて頂きます」

そう言ってロジェも頭を下げた。

お互い頭を下げ合う異様な光景になってるよ。俺は間に割って入った。

「母さん、父さん、じゃあ行ってくるね。試験終わったら帰ってくるから」

「ええ、頑張りなさい。ご馳走作って待ってるわ」

「レオン、頑張るんだよ。いってらっしゃい」

「行ってきます！」

そうして俺は、ロジェとともに馬車に乗り込んで公爵邸に向かった。

公爵邸に着くと、すぐにいつもの客室に通された。この部屋は、これから俺がこの屋敷に住む時にも使っていいようで、俺の部屋となったらしい。エリザベート様から頂いたお礼の品も置いてある。改めて見ても豪華すぎるな。

「レオン様、明日のご予定ですが、公爵家の馬車でリュシアン様とともに王立学校までお送りします。馬車は途中までしか入れませんので、そこからは試験会場に歩いて向かって頂きます。身分で試験会場が違いますので、受付をお間違えのないよう、お気をつけくだ

さい。こちらが受験票ですので、受付にお渡しください」

そう言ってロジェが渡してくれたのは、小さな紙だった。俺の名前と受験番号、所属が書かれている。所属のところにはタウンゼント公爵家と書かれてるけど、これって所属がない人はどうするんだ？

「この所属がない人ってどうするの？」

「所属がない方はあまり受験されません。貴族の子であれば自分の家が所属となりますし、平民でも受験するような子供は商家の子が多いので、商会が所属となります。そのどちらにも属さない場合は、住んでいる地区の教会を所属とすることが多いそうです。所属は受験結果が届けられる場所になるので、わかりやすいところにするのでしょう」

そういうことなんだ。俺は平民なのに、タウンゼント公爵家所属ってめちゃくちゃ目立ちそう。他にも平民で貴族の所属って人いるのかな？

「平民なのに、貴族家が所属になってる人って他にもいるの？」

「ほとんどいないそうです。ただ、騎士として騎士爵を持っている方が、剣の才能のある平民を騎士にするため、王立学校に通わせるというのは稀にあるようです」

ということは、公爵家所属の平民は常識ではあり得ないってことか……

普通に友達ができるといいな……怖がられるか、嫉みでいじめられるかの未来しか見えて来ないよ。

「明日の予定の続きですが、試験が終わりましたら、朝に馬車を降りた場所までお戻りください。公爵家の馬車が待機していますので、

リュシアン様とともにお帰りいただければと思います」
「わかったよ、ありがとう。今日この後って予定ある？」
「本日のご予定は特にありません。夕食は公爵家の皆さんと、食堂で食べて頂くことになっています」

じゃあ、あと一時間くらいしか時間ないな。中途半端な時間だし、ここでのんびりしてるか。
そうして俺は、ロジェが淹れてくれたお茶を飲みながら、ゆっくりとした時間を過ごした。
明日の試験は大丈夫だと思うけど、やっぱり少し緊張するな。まあ、不合格ってことは流石にないと思う。

でも、ハプニングはあるからな。日本で試験を受けたときは、何かあったっけ？　こういう時は経験を生かさないと。
そういえば、シャーペンの芯を入れ忘れてて、試験中に芯が終わりかけて焦ったことがあった。あの時はめちゃくちゃ焦ったんだよな。辛うじて最後まで書き切れたんだよ。でも確かあの試験落ちたんだよな～、やっぱり焦ってるとダメなんだ。明日は平常心で行こう。
あれ……？　俺はそこまで考えて、重大なミスに気づいた。
やばい、もしかしてかなりやばいかも……

俺、自分のペン持ってないじゃん！！

この世界の試験って、自分でペンを用意するのかな？　俺持ってないよ！？　この世界はペンって高級品だよね。借りたりできるのかな？
平常心とか以前の問題じゃないか！　なんで気づかなかったんだろう。

「ロジェ！　試験って自分のペンを持っていくの？　それなら俺、自分のペン持ってないよ」

俺が慌ててそう言っても、ロジェは全く動揺していない。え？　ペンって借りられたりするの？　大丈夫なの？

「レオン様、ペンがない者や忘れてしまった者には、学校で貸し出しをしています。そこまで慌てる必要はありません。それから、レオン様のペンやインクは、大旦那様が用意してくださいました」

借りられるのにも驚きだけど、リシャール様が用意してくれたの！？

ありがたいけど、めちゃくちゃありがたいけど、恩ばかりが積み上がっていくよ。本当に申し訳ない。

あとでお金を払いたい。でも、受け取ってくれないんだろうな。とにかく夕食の時にお礼を言わないと。

でも、今回は本当に助けられたな。もっとしっかりしないとダメだ。試験が終わったら、王立学校で必要なものをちゃんと聞いて、入学前に買い揃えに行こう。

「こちらが、レオン様のペンとインクです」

そう言ってロジェが持ってきてくれたペンは、シンプルで使いやすそうな物だった。銀行で借りたペンもこんな感じだったから、一般的なものなんだろう。金属で作られてていて、インクをつけて書くタイプだ。

「ありがとう。他に明日必要なものってある？」

「他にはないかと思われます」

じゃあ、とりあえずゆっくりできるな。ペンのこと忘れてたのはちょっと焦ったけど、とりあえず大事にならなくてよかった。
俺は問題にならなかったことに安心して、少し力が抜けたので、そのまま力を抜いてソファーに身を沈めた。ちょっとお行儀悪いけど、ロジェしかいないからいいか。
そう思って夕食までゆっくりと休んだ。

６０、試験の準備（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思ってくださった方は、評価、感想、レビューを是非よろしくお願いします。とても励みになります！

61、試験前日の夕食

それからはゆっくり過ごして、夕食の時間になった。今日の夕食の席にいるのは、リシャール様、カトリーヌ様、リュシアン、俺の四人だ。

俺は忘れないうちに、リシャール様にペンのお礼を言っておく。

「リシャール様、使いやすそうなペンをありがとうございます。ペンが必要なことを失念しておりまして、とても助かりました」

「ああ、王立学校では必要だろうと思って作らせておいたんだ。役に立ったようなら良かったよ。本当はもっと豪華で装飾のあるペンにしたかったが、普段使いならシンプルな方がいいだろう」

「はい。とても使いやすそうでした。早速明日から使わせていただきます」

シンプルなのを選んでくれて良かった。豪華なペンなんて持ってたら、目立つ要素をまた追加するところだったよ。特に、豪華なものとか持ってたら、嫌がらせで壊されそうだし。

そんなことを考えていると、リュシアンがとても嬉しそうに、俺の方を向いた。

「レオン、久しぶりだな。明日の試験は大丈夫か？」

「リュシアン様、お久しぶりです。大丈夫だとは思いますが、気を抜かず頑張ります」

「そうだな。私も大丈夫だとは思うが、明日は精一杯頑張ろう」

俺も緊張はしてないが、リュシアンもあまり緊張していなそうだ。

いつも通りに夕食を食べている。まあ、リュシアンも頭がいいみたいだし、落ちることはないだろうからな。
そもそも王立学校の入学試験は、学ぶ機会がある貴族ならばそこまで難しくはない。基本的な計算と読み書き、簡単な歴史だけなのだ。今まで真面目に学んでいれば、まず落ちることはない。
貴族は全員合格が通常らしいが、何年かに一人は貴族でこの試験に受からない人がいるらしい。その場合は家から出されるそうだ。
結構厳しいけど、王立学校を卒業しないと、貴族にも準貴族にも、役人にも騎士にもなれないからな。そんな人間を家に置いておくことはしないんだろう。
たまに優しい家だと使用人として雇うこともあるらしいが、自分の家に使用人として雇われるって、そっちの方が残酷じゃないかとも思う。

ただ貴族にとってはその程度でも、学ぶ機会を得るのが難しい平民は、ほとんど受からない。
平民で受かるのはかなり裕福な豪商の子供がほとんどで、子供の教育にお金をかけることができる人たちだけだ。そうでなくても、少しでも学ぶ機会に恵まれた者は、もしかしたらにかけて受験するらしいが、殆どが受からない。
そう考えると、今頃は最後の追い込みで、必死で勉強してる子供がたくさんいるのかもな。特にサボり気味だった貴族の子供たちは必死だろう。

「レオンはいつからこの屋敷に住むんだ？」

リシャール様にそう聞かれた。まだ受かってもいないのに、受かる前提で話が進んでるよ。今必死に勉強してる子供達が不憫に思えてくる。まあ、その子達は自業自得でもあるんだけどね。

「入学の数日前から住みたいと思っているのですが、良いでしょうか？　必要なものを準備する期間も欲しいので」
「入学の数日前だな。ではそのように使用人には伝えておこう」
「ありがとうございます」
「これからはレオンと一緒に住めるのか、楽しみだな！」

リュシアン様がかなり喜んでくれている。ここまで喜んでもらえると悪い気はしない。

「私も楽しみです。私は貴族社会のことには疎いので、色々と教えてください」
「ああ、勿論だ！」

リュシアン様と仲良くなれて良かった。これからの生活を考えると、かなり心強い味方だろう。
全員がタウンゼント公爵家の皆さんみたいな、いい人たちだったらいいんだけど……絶対そうじゃない人がいっぱいいるんだろうな。

……強い心で頑張ろう。

「レオン、マルティーヌ様との魔法の授業は、王立学校に入学するまでしたので終わりましたけど、偶にはまた教えてくださいね」
「カトリーヌ様、お声がけいただければいつでもお教え致します」
「それは嬉しいわ！　今度は同じ屋敷に住んでいるのですもの。前よりもたくさん教えてもらえるわね」

マルティーヌへの魔法の授業は、王立学校入学とともに終了になった。
大部分を教え終わったというのもあるし、王立学校に入学すれば俺の顔が広まるので、王宮に頻繁にいくのは目立ちすぎるからとい

うのもある。特に魔法のことはまだ隠してるからな。

今まで頻繁に行っていたので、同一人物だとすぐにバレるんじゃないかと思ったが、服装や髪型を使用人のようにしていたので、それを変えればあまりバレないだろうと言われた。

アレクシス様が言うには、今まで俺が王宮に行く時は、できる限り人目に触れないようにしていたらしい。そんな状態で、使用人の顔を正確に覚えてるものはあまりいないそうだ。まあ、そう言われるとそうかもと納得した。

ただ一番危険なのは、マルティーヌが最後の授業で言っていた言葉だ。「これからは、王立学校でいつでも教えてもらえますものね！」そう言っていたのだ！

王女様が頻繁に平民の俺のところに来ていたら、目立つというか、王女様狙いの貴族から嫌がらせがヤバそうなんだよな。

すごく危険だ。俺に回避の術はないんだけど……

ただアレクシス様から、ステファン様とマルティーヌは俺と会ったことがないはずだから、最初から知り合いのように振る舞わないことと言われている。

王立学校で仲良くなったように見えるのなら良いそうだ。それならばマルティーヌも流石に自重するだろう。頭は良いんだから。まあ、最初だけかもしれないけど。

ステファン様は数回話した程度で、あまり親しく話したこともないので大丈夫だと思う。これから仲良くなれたらいいな。

俺の身に危険が及ばないように今まで隠してもらってたんだから、ちゃんと気をつけないと。

俺がマルティーヌと元々仲が良いと知られたら、絶対に理由を探られる。すると、結局病気が治った背景には俺が関係あるんじゃな

いかと、疑われることになるだろう。
それは極力避けたい。全属性のことは地位を得て簡単に手出しができなくなってからがいい。それでも危険に変わりはないが、平民よりは遥かにマシだろう。

そんなことを色々考えながら食べていたら、いつの間にか食べ終わっていた。今はとにかく明日を乗り切ろう！　その後のことは試験が終わってから考えればいいんだ。

「では二人とも、今日は早めに休んで明日はしっかりと頑張りなさい」
「はい、お祖父様。頑張ってきます」
「かしこまりました、リシャール様。全力を尽くして参ります」

そうして夕食は終わりになり、今日は早めに眠りについた。明日は頑張ろう。

６１、試験前日の夕食（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思って下さった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします。とても励みになります！

62、入学試験

次の日の朝。
今日は試験当日だ。俺は流石に少しだけ緊張しつつ、朝の準備を進めていく。
なんか大学受験の日みたいな緊張感があるな。まあ、あの日の方がもっと緊張してたけど。俺は少し格上の大学を狙ってたから、合格できるかギリギリだったのだ。合格発表の日は緊張でやばかった。俺の受験番号を見つけた時は思わず涙ぐんだほどだ。
それと比べたら今日は、大学生が小学校を受験するようなものだ。そう考えたら流石に受かるだろう。

俺はお腹が痛くならないように、朝食をいつもより少なめに食べて、準備を終えた。
ふぅ〜、頑張ろう！

部屋から出て玄関ホールに向かう。馬車は既に待機していて、俺が馬車の前までたどり着くとリュシアンもすぐに来た。

「リュシアン様、おはようございます」
「レオン、おはよう。今日はお互い頑張ろう」

少し挨拶をして、すぐに二人で馬車に乗り込んだ。護衛は馬車の外にいるので、馬車の中は二人だけだ。少しの間だけ、言葉を崩して話せるな。

「レオン、二人きりになったぞ！」
「そうだね。ずっと従者の方もいるし、あんまり親しく話せる機会

ってないよね」
「私は、いつでも親しく話して欲しいのに」
「うーん、それは難しいかな」

流石に平民の俺が、リュシアンを呼び捨てで呼んだり敬語なしで話していたらおかしいだろう。
それに他の人の前でも崩して話すようになったら、絶対どこかでボロが出る気がするんだよな。
立場を弁えないといけない場だったのに、呼び捨てで呼んじゃうとか。俺そういうミスしそうだから、二人きりの時だけの方がわかりやすくていいのだ。
まあ、リュシアンの護衛のジャックさんだけは、近くにいる時も崩して話していいって言われてるから、そうしてるけどね。

「まあそうだよな……それよりも、今日の試験は楽しみだな」
「楽しみなの？」
「ああ、同年代の子供と会うのは春の月を祝うパーティー以来だからな。パーティーではほとんど話せないし楽しみだ」

そっか、王立学校は貴族の子供が、社交を学ぶ場でもあるのかもな。身分についてや、身分による接し方、立ち居振る舞いは、学んでも実践しなければわからないことがあるのだろう。
貴族の子供は、王立学校に入るまでは殆どが領地にいるらしい。確か一年に一回、冬の終わり頃に王族主催で開かれるパーティーに出席するときだけは、王都に行くと行っていた。五歳くらいになると参加するそうだ。
ということは、それ以外で領地から離れることはないってことだよな。領地を持ってない貴族は、子供に爵位を引き継げない騎士爵だけだからな。

「王立学校では、沢山友達が出来るといいね」
「そうだが、深く付き合わない方が良い貴族も多い。そういう貴族の子供は注意しなければいけないな。同じ勢力の子供達と会うのが楽しみだ！　レオンもタウンゼント公爵家所属だ。気をつけた方がいいぞ」
「そ、そうだよね。俺も気をつけるよ」

凄い……こういうところは流石、貴族の子だな。
でも本当に、俺も気をつけないとだよな。とりあえず、タウンゼント公爵家に敵対している貴族家の子供には、近づかないようにしよう。
仲良くなるのなら、同じ勢力の子供か最低でも中立の家の子供だな。まあ俺は平民だし、貴族の子供と仲良くなれるかはわからないけど。
リシャール様から教えてもらった、要注意リストの子供は特に気をつけよう。
昨日の夜、ロジェを通して要注意人物のリストを貰ったのだ。俺にとって危険のある貴族の名前が列挙してあって、かなりの数だった。こんなにいるのかとゲンナリしたものだ。その中でも特に覚えておいた方がいい貴族は、これから頑張って頭に入れていこうと思う。

それからもリュシアンと少し話をしていると、馬車が動き出した。王立学校は公爵家からそう遠くない場所にあるので、馬車で行くとそんなに時間はかからない。これからは毎朝、こうして行くことになるんだろうな。
しばらくして、馬車が止まった。
「リュシアン様、レオン様、王立学校に到着いたしました」

御者の方がそう言って、馬車の扉を開けてくれた。俺とリュシアンは少し緊張しつつも、馬車から降りる。
降りたところは、王立学校の敷地内にある馬車の停留所だった。周りにも大小様々な馬車があり、中から俺くらいの歳の子供が出てくる。馬車から出てくるってことはほとんどの子供が貴族ってことだよな。
俺は、改めて気を引き締めた。

「試験が終わりましたら、またこの場所にお越しください。お待ちしております」
「わかった。行ってくる」
「ありがとうございます。行ってきます」
「行ってらっしゃいませ」

御者の方が深く頭を下げて送り出してくれたので、俺とリュシアンは建物の方に歩いていく。
先程の馬車の停留所は、王立学校の正門を入って左側のスペースにあるようだった。ここからざっと見るだけでも敷地内はとても広く、たくさんの建物がある。
そして、敷地は高い壁で囲まれているようだ。門には騎士がいて、中には関係者しか入れないのだろう。

建物の方に歩いていくと、まず目に入るのは正面にある一番大きな建物だ。縦の大きさは三階建てくらいだろうけど、横に大きい。見た目にも豪華さが漂う建物で、貴族の屋敷のような雰囲気がある。
その建物の右側にはもう少しこじんまりとした、質素な建物がある。こちらの方が古そうな建物だ。もちろん俺の家の近くにあったら十分に豪華なのだが、真ん中の建物と比べてしまうと数段劣る。もしかして、真ん中の豪華な建物が高位貴族が通う建物で、右側の

建物が下位貴族と平民とか？　そんな区別ってあるのかな？
この世界なら普通にありそう……
そして、真ん中の豪華な建物の左側には、大きさは少し小さいが豪華さでは劣らない建物がある。これは何に使うのだろうか？　うーん、考えてもわからない。
それから、その建物のさらに左側には、かなり大きな建物がある。例えるなら、学校の体育館のような感じだ。訓練場とかかな？
今、正面から見えるのはこれだけだ。入学したら施設案内とかあるのかな？　楽しみだ！

そんなことを考えつつ歩いていくと、王立学校の職員の人たちがいて、受験者を案内している。
それによると、貴族は真ん中の豪華な建物で、平民は体育館のような建物へ行くらしい。

「リュシアン様、私はあちらへ行きます。ご健闘をお祈りいたします」
「ああ、レオンも健闘を祈る」
「ありがとうございます」

そうして俺はリュシアンと別れて、平民が集まる建物へと向かった。
建物の入り口には、机が並べられていて受付の人が数人いる。俺は空いている受付に行き、受験票を渡した。
すると受付の人は、名簿で俺が登録されてるかを確認して、受験票を返してくれた。

「確認できましたので、会場にお入りください。会場にいる職員に受験票を見せていただければ、席までご案内いたします」
「ありがとうございます」

そうして会場に入ると、中は日本の受験会場と似たような雰囲気だった。等間隔に机と椅子が並べられていて、三割くらいはもう座っている。ただ、結構広いので、職員の方々は大変そうだな。
少し懐かしい気持ちになりながら会場を眺めていると、職員の方がやってきた。

「受験票をお見せいただけますか？」
「はい。よろしくお願いします」
「ありがとうございます。レオン様ですね、お席は少し遠いのでご案内いたします」

職員の方はそう言うと、スタスタと歩いていってしまったので、俺も慌てて追いかける。俺の席はかなり前の方だった。入り口は後ろにあるので結構遠い。

「こちらがお席です。試験開始まで座ってお待ちください」
「はい。ありがとうございます」

なんか流石に緊張してきたな。ただ待ってる時間って長く感じる。なにか教材でも持ってくればよかったけど、必要ないかと思って持ってきてないんだよな。
少しソワソワとしながらしばらく待っていると、試験開始時間になったのか、三人の職員が前から入ってきた。

「これから、王立学校入学試験を始めます。時間は一時間、途中退出は原則認められませんのでご注意ください。また、私語厳禁ですので違反した場合は不合格となります。では試験問題を配布します」

そうして配られた試験用紙は、Ａ４サイズより少し大きい二枚の

紙で、問題と解答欄が一緒になっている形式だった。
日本の小学校のテスト用紙みたいな感じだ。

「では、始めてください」

俺は、一番初めの問題から解いていく。まずは計算問題のようだ。やっぱりめちゃくちゃ簡単だな。
順調に計算問題を終え、読み書きの問題、歴史の問題を終えた。
もう終わっちゃったよ、まだ十分くらいしか経ってない気がする。これは流石に合格できると思う。
あと五十分、暇だな。

俺はカンニングをしていると言われないように、何気なく少し周りを見てみた。周りにいるのは、大体が平民の中では豪華な服を着ているので、商会の子供たちなんだろう。頭を悩ませているようで、もう解き終わった子はいなそうだ。
やっぱり商会の子供といっても、勉強にそこまで時間を割けなかったり、お金を掛けられない家の子供は、この問題でもかなり難しいんだろうな。そう考えると、平民で受かるのはごく僅かっていうのもわかる気がする。

そんなことを考えながら、なんとか五十分やり過ごすと試験が終わった。

「試験は終了です。これから試験用紙を回収するので、全員分回収できるまでは、席を立たないでください」

職員が後ろから、試験用紙をどんどん回収していく。受験者数も多いが、職員も沢山いるのですぐに回収は終わったようだ。

「では、本日の試験はこれで終わりです。試験結果は受験票に書かれた所属へと送られるので、各自確認してください」

ふぁ～、やっと終わった。合格は間違いないと思う。というか多分、全部合ってるはずだ。間違えようがなかったからな。

俺は暇すぎて少し眠くなった目を擦りながら、立ち上がり外に向けて歩き出した。リュシアンも終わったかな？

６２、入学試験（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思って下さった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！　とても励みになります！

63、プレオベール公爵家

俺が馬車の停留所まで歩いていくと、既にリュシアンは馬車の前で待っていた。
馬車に乗っててくれていいのに！　俺は早足で馬車まで近づく。

「リュシアン様、お待たせしてしまい申し訳ありません」
「別にそれほど待ってない。それで試験はどうだった？」
「はい。試験は問題ないかと思います」
「それなら良かった。今更レオンと一緒に通えないなんて嫌だからな。私も完璧だ」

リュシアン様はそう言って、少しだけ安心したような笑顔で笑った。二人とも合格できそうで良かった。やっぱり大丈夫だろうとは思っててもも、少しだけ緊張してたんだな。

「リュシアン様なら当然でございます」
「レオンの方が楽勝だろう？　ははっ……こんなところで立ち話じゃなくて、馬車に乗ろうか」

確かにな。そう思って俺たちは馬車に乗り込もうとしたが、乗る寸前に後ろから声を掛けられた。

「お前、タウンゼント公爵家だよな？」

後ろを振り向くと、赤茶の髪に茶色の瞳の、尊大な態度の男の子がいた。服装がリュシアンと同じくらい豪華だからこの男の子も公爵家なのか？

俺は頭を下げながら後ろに下がった。

「私はリュシアン・タウンゼントだ。お前は確か、プレオベール公爵家の長男だったか？」

「そうだ。私はアルテュル・プレオベールだ」

プレオベール！　プレオベール公爵家なのか！？

確かに現当主の長男が、リュシアンと同い年だと聞いてたけど、こんなに早く会うなんて。

プレオベール公爵家は、タウンゼント公爵家の敵対勢力筆頭の貴族だ。つまり、俺が一番警戒しないといけないのが、プレオベール公爵家なのだ。

「私に何か用か？」

リュシアンが少し緊張しているように見える。それもそうだよな、一番気をつけるように言われてる相手だ。

「お前に会ったら忠告してやろうと思ってたんだ。今までは話す機会もなかったからな。タウンゼント公爵家は、平民を有能なら取り立てるべきだとか言ってるそうじゃないか。そんな戯言は今すぐ撤回した方がいい。卑しいものと馴れ合うと、お前も卑しくなるぞ」

なんだこいつ……まず、リュシアンとアルテュル様は、同じ公爵家だから身分は対等なはずだ。それなのに最初から上から目線で、リュシアンに対しても尊大な態度をとっている。

普通は、仲良くなるまで礼儀正しくするだろ！　それが表面的なものだったとしても。

それに何を言うのかと思えば、卑しい平民と馴れ合うなって、何がしたいんだ？　裏では勢力同士の争いがあるにしても、普通なら

それをこんなに堂々と言わないだろ。

「私は平民のことを卑しいとは思っていない。平民にも優秀なものは沢山いるし、そもそも平民がいなければ国は成り立っていかない」

「お前……！　せっかく忠告してやってるって言うのに！　父上はいつも嘆いておられる。卑しい平民どもが、神聖な貴族の領域を犯しているのだと」

俺は敵対勢力って聞いてたけど、ここまで平民を毛嫌いしているとは。

「優秀な平民には、力を振るってもらった方が国にとっては良いことだ。この王立学校にも優秀な平民が集まってくるではないか。その者たちが私たちより劣っているとは思わない」

「そんなことはありえない！　平民は野蛮で国を壊すに決まっている！　この王立学校に、平民を受け入れてることがそもそもおかしいのだ」

「それは昔からの伝統だ。そもそもこの国は、貴族と平民で力を合わせて発展してきたのだ。その歴史を忘れたのか。使徒様の教えを忘れたのか」

「使徒様など本当にいたのか怪しいものだ！　大方、卑しい平民が皆を騙したのだ。平民などと力を合わせずとも、我ら貴族だけで国は回る。平民は貴族の命令を聞いているだけで良いのだ！」

「お前……！　使徒様を貶すのか！？」

やばい……！　リュシアンは冷静だから大丈夫かと思ってたのに、リュシアンまで怒っちゃったら収拾つかないよ！

なんか二人の言い合いを聞いてると、争いの根幹が見えてきた気がする。

要するに、未だ使徒様を崇拝してる貴族と、使徒様の教えなど捨

てて自分たちの利益を大きくしたい貴族、に分かれてるんだな。

確か使徒様の教えは、『貴族は特権を得る代わりに、平民に対して最低限の生活や身の安全は保証すること』『貴族が平民を支配するのではなく、互いに助け合って生きていくこと』だったよな。

こうやって改めてこの教えを考えると、身分制度がある世界に受け入れられるのは、難しい教えだよな。これが受け入れられたってことは、使徒様はよほど尊敬されてて影響力があったんだな。

まあでも、どんなに尊敬されていたとしても、時と共に薄れていくものだ。そう考えると、タウンゼント公爵家の勢力の方が少し劣勢なのかもしれない。

ただ、人間は理想や未来のためではなく、今の実益のために動く人の方が多い。そう考えると、勢力が拮抗しているってことは、使徒様の威光は無くなってはいないのだろう。

また、リシャール様が以前言っていた『貴族の力が今以上に強くなり平民が抑圧されれば、いずれ国がダメになる』この言葉のように考えてる貴族も少なからずいるのだろう。

うーん、これは時間が経てば経つほど、タウンゼント公爵家の勢力が不利になりそうだ。なぜなら、敵対勢力は味方に引き込むのが簡単だからだ。少し実益をちらつかせれば、靡く者も多いだろう。

そこで俺の出番なわけだな。使徒様が現れないなら、優秀な平民を掬い上げて、国のために使えるところを示せばいいというわけだ。

もし俺が使徒様なら簡単だったのだろう。その事実を公表して特別扱いで、王立学校を卒業していなくても高位貴族の身分を与えれば済む話だった。全属性魔法でも使えば、みんなが信じるのだろう。

まあ、今でもやろうと思えばできるんだけど、流石に嘘をつくのは良くない。神様に天罰でも落とされたらと考えると怖いしな。

だから回りくどいけど、王立学校では全属性以外での優秀さを見せつける。そして卒業したら貴族の身分を与えられるから、全属性を明かして高位貴族にすればいいってことだ。
まだ貴族の身分を得てない時に全属性を明かすのは、貴族や他国、様々なところから狙われて危険すぎるからな。
流石に使徒様でないのに王立学校を卒業せず、特別扱いで貴族の身分を与えるのは出来ないのだろう。

なんかややこしいけど、この国の現状と俺の置かれてる状態が頭の中でまとまってきた。今までは情報は得ていたけど、なんとなく現実感がなかったんだよな。
俺の周りにいたのはいい人たちばかりだったし。

それで、今のこの状態はどうしよう？　さっきから二人で睨み合ってて一触即発って感じだ。ただ俺が割り込むと絶対拗れるよな。俺が平民だって知ったらもっとややこしくなりそうだ。
でも、これから一緒に学校で暮らすんだから、俺のことは絶対にバレるし拗れるんだよな。それはもう諦めてるんだけど、せめて入学までは平穏でいたい。

俺がそう考えてリュシアンに声をかけようかずっと迷っていると、誰かが近づいてきた。

「お前たち、何を騒いでいるんだ」
「殿下……！　お久しぶりでございます」
「お久しぶりでございます」

ステファン様だ！　二人を止めてくれそうな人が来たぞ！　リュシアンとアルテュル様が深く頭を下げたので、俺もそれに倣う。

「ああ、そこまでかしこまらなくても良い。ここは王立学校だからな。それで何があったのだ」
「殿下のお耳に入れるようなことではございません。このような目立つ場所で騒ぎを起こしてしまい、大変反省しております」
「私も、大変反省しております。申し訳ありませんでした」

リュシアンが殿下の質問に答え、アルテュル様がその後に続いた。
「そうか、それならもう帰るといい。お前たちの馬車が動かなければ、帰れないものが大勢いるぞ」

そうなのだ。この馬車の停留所はロータリーのようになっているのだが、アルテュル様が馬車の通り道の方に立っているので、帰りたくても帰れない馬車が大勢いる。
ただ、公爵家に文句を言える人もいなく、皆我慢して待っているのだ。
アルテュル様はヒートアップして気づいていなかったようで、慌てて道を開けた。
そして殿下の手前、何も言えず自分の馬車の方へ去っていった。
やっといなくなった～。

「殿下のお手を煩わせてしまい。大変申し訳ございません」
「いや、気にしなくていい。レオンには返しきれない恩もあるしな」

ステファン様が最後の言葉を俺たちにしか聞こえない程度の小声で言って、軽く俺に笑いかけて去って行った。
あの歳でめちゃくちゃスマート！　さすが王族！！
俺はステファン様のスマートさに感動していたが、リュシアンは納得しきれないような顔をしている。

うん？　どうしたんだ？

「レオン、まず馬車に乗ろう」

「はい」

そうしてやっと馬車に乗ると、リュシアンは俺に詰め寄ってきた。

「レオン、ステファン様とも知り合いなのか！？　俺は聞いてないぞ！」

「え？　言ってないっけ？」

「聞いてない！」

「あれ？　でもマルティーヌ様に、魔法を教えに行ってたことは知ってるよね？」

「それはお祖母様から聞いた。だが、ステファン様もとは聞いてないぞ！」

「いや、ステファン様にはたまにしか教えてないから。マルティーヌ様に教えてるところに、ステファン様が来てたってだけだよ」

ステファン様と最初に会ったのは、マルティーヌを治したお礼の時で、それからは数回しか会ってない。

「じゃあ、返しきれない恩ってなんだ？」

あっ！　もしかしてリュシアンは、俺がマルティーヌを治したことを知らないのか？

「リュシアン、なんで俺がマルティーヌ様に魔法を教えることになったのか知ってる？」

「それは……レオンがすごい魔法使いだからじゃないのか？」

やっぱりリュシアンは知らないんだ。言ってなかったんだっけ？
でも思い返してみると、俺が全属性で病気も治せることは話に出てたけど、マルティーヌ様のことは話してなかった気がする。
そもそもマルティーヌ様が重い病気だったことも、ほとんどの人には知られてないんだよな。
これは、リュシアンに言っていいのかわからない。

でも、ステファン様があんなことを言ったってことは、リュシアンにも伝えていいってことか？　俺では判断できないな。帰ったらリシャール様に聞こう。

「これは話していいのか分からないから、リシャール様に確認してからにするよ」
「そうなのか？　……わかった」

俺の真剣な雰囲気が伝わったのか、リュシアンは頷いてくれた。

俺はその日のうちに、リシャール様にこの話をしたところ、リシャール様がアレクシス様に確認を取ってくれた。
それによると、リュシアンには話してもいいそうだ。ステファン様は、タウンゼント公爵家の人達はレオンの能力を知っていると聞かされていたので、リュシアンはとっくに知っていると思っていたらしい。
そこでリュシアンに、俺がマルティーヌを治したことを話した。するとかなり驚いていたが、ステファン様の言葉に納得ができたようだ。

これでやっと一件落着だ。ただ試験を受けに行っただけなのに、めちゃくちゃ疲れたよ。

６３、プレオベール公爵家（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思って下さった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！　とても励みになります！

64、礼儀作法とダンス

試験が終わって次の日の朝。
俺は家に帰ろうと思って帰り支度を始めると、ロジェにそれを止められた。

「レオン様、大旦那様からの伝言です。所属が貴族家になっている者は高位貴族から順に採点されるので、レオン様の試験結果は今日か明日にでも届くそうです。よって、本日も公爵家に泊まられて、試験結果を受け取ってからご実家に帰られた方が良いのではないでしょうか？」

そんなに早いんだ。それなら、公爵家で結果を待ってた方がいいかもしれないな。

「じゃあそうするよ」

でもそれだと、今からめっちゃ暇になるな。どうしようか？　リュシアンは何してるんだろう？

「リュシアン様は、日中何をされてるかわかる？」
「はい。基本的には家庭教師による授業か、剣術の練習でございます」

楽しそう！　俺も一緒に受けさせてもらえないかな？

「それって俺も一緒に受けていいかな？」
「どうでしょうか。私では判断できませんので、大奥様に聞いてま

いります」

そうしてロジェがカトリーヌ様に聞いてくれた結果、俺はリュシアンの授業を一緒に受けられることになった。

授業はリュシアンの部屋で行われるそうなので、俺はロジェとともにリュシアンの部屋を訪れた。

部屋に入るとまだ先生は来ていないようで、リュシアンがソファーに座っている。

「レオンおはよう。レオンと一緒に授業を受けられるなんて嬉しいよ！」

「リュシアン様おはようございます。一緒に受けさせていただき、光栄です」

「今日は午前中は礼儀作法とダンス、午後は剣術なんだ」

礼儀作法！　これはありがたい。身分による正しい作法を知りたかったんだ。何か特殊な作法とかあるかもしれないからな。

それに剣術も楽しみだ！　ただ、ダンスは一度もやったことないけど大丈夫だろうか？　というか、もしかしてダンスって必須なのかな？

「リュシアン様、ダンスは踊れなければいけないのでしょうか？」

「そうだぞ。ダンスが踊れなければパーティーで恥をかくだろう？　それに王立学校の授業でもダンスがあるぞ？」

え！？　そうなの！？

知らなかった……真剣に覚えなきゃだよ。

そんな話をしていると、先生が来たらしい。俺は立ち上がって先生を迎え入れる。

「リュシアン様、本日もよろしくお願いいたします」

「ああ、私の方こそよろしく頼む。今日はここにいるレオンも一緒に授業を受けるのだが、構わないだろうか？」

「レオンと申します。よろしくお願いいたします」

「レオン様ですね。もちろん何人で受けていただいても構いませんわ」

「ありがとう。レオン、こちらは礼儀作法とダンスの先生だ」

この人が両方教えてるのか。少し細身でタレ目の優しそうな人だ。

先生とともに、机に座って授業が始まった。

「もうリュシアン様に教えることはあまりないので、今日はせっかくレオン様がいらっしゃるのですから、レオン様が知りたいことをお教えするというのはどうでしょうか？」

「それはいい！　レオン、何か知りたいことがあるか？」

それはありがたい。礼儀作法とダンス、どちらも基本から教えて欲しいな。

「私はどちらもしっかりと習ったことがないのです。特にダンスは全くの初心者ですので、基本から教えていただければ嬉しいです」

「まあ、それは本当なのですか？　それにしては言葉遣いがしっかりされていますけど……」

「礼儀作法は、見て学んだものや聞きかじりの知識なので、しっかりとした作法は知らないのです」

自分のやっていることが合ってるのか、いつもビクビクしてるの

だ。一応周りに合わせてるし、今まで指摘されたことはないから大丈夫なのかもしれないけど、できればしっかりした知識を身につけたい。

「では、礼儀作法については、リュシアン様がお持ちの本で勉強されるのがいいかと思います。今日だけで全てを教えるのは難しいですし、レオン様は既に礼儀作法を身につけておられるようなので、後は本で知識を補完すれば大丈夫でしょう」

「それはいいな。先生が書いてまとめてくれた本なのだ。とてもわかりやすくまとまっているから、私も重宝した。しばらくレオンに貸しだそう」

凄いな、この先生が書いた本なのか。リュシアンがそこまでいうのなら、良い本なんだろう。貸してもらえるのはありがたい！

「ありがとうございます。では、その本をお借りいたします」

「レオン様ならば、礼儀作法はすぐにでも身につけられるでしょう。それでは、今日は礼儀作法ではなく、ダンスの授業をいたしましょう」

先生がそういうと、二人は席を立ち部屋の外へと歩いていく。俺も慌てて付いて行った。

しばらく歩くと、端にソファーと小さな机が置かれているだけの部屋に辿り着いた。ここはダンスの練習をする部屋だろうか。

「それでは、本日はレオン様がいらっしゃるので、もう一度基礎から復習いたします。基礎は重要ですから、リュシアン様も真剣に練習なさって下さい」

「わかってる」

「よろしくお願いします」

そこからきついダンスの練習が始まった。最初はダンスの基本となる姿勢の練習からだったが、とにかくこれに全然合格が出ない。自分ではしっかりと立っているつもりなのに、ダメ出しをくらうこと一時間弱、やっと合格が出た。

「レオン様、その姿勢です。その姿勢をキープしたままダンスを踊ります。間違っても、背筋を丸めるような姿勢になってはいけません。それから、胸を反らすのもいけません。あくまでも垂直を保つのです。肩には力を入れずにリラックスですよ」

この姿勢、慣れるまではかなり辛い。いい姿勢と言われると、どうしても胸を反った姿勢になっちゃうのだ。いつもは使わない筋肉を使ってるのか、身体中が疲れて来た……明日は筋肉痛だな。

「日頃からその姿勢を意識すれば、見栄えも良いですよ。これからはその姿勢で生活して下さい」

え！？　これで毎日生活するの？

確かに見栄えはいいだろうけど……疲れる。貴族ってすごいな。確かにみんな姿勢いいなって思ってたんだ。

「では、その姿勢のまま歩いてみましょう。絶対に姿勢を崩さないでください」

「はい」

俺は歩き始めたが、歩くと姿勢が崩れる。

「レオン様、姿勢が崩れています。胸を反りすぎてはいけません」

「かしこまりました」

「レオン様、肩に力が入っています。もう少し力を抜いて下さい」
「はい」

その後はひたすらにダメ出しを受けながら、姿勢を保つ練習で終わった。それだけなのにめちゃくちゃ疲れた。
ダンスの練習なのにダンスをせずに終わったよ。

「この姿勢を自然にできるようになれば、後はステップを覚えるだけです。王立学校入学まで毎日練習すれば、授業でも苦労することはないでしょう」

そう言われたら毎日やるしかないな。頑張ろ。

「先生、今日はありがとうございました。リュシアン様も、貴重な授業時間を私のために使っていただき、ありがとうございました」
「私は仕事ですから、レオン様は真面目に練習してくれましたので、教え甲斐がありましたわ」
「私は既に一通り教わっているから、いつも復習なんだ。今日はレオンがいたから復習が捗ったよ」
「そう言っていただけると、ありがたいです。今日は本当にありがとうございました」

そうして午前の授業が終わり、リュシアンと一緒に昼食を食べた。
午後は剣術だ。俺とリュシアンは昼食を食べて少し休んでから、訓練着に着替えて庭に向かった。

６４、礼儀作法とダンス（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思って下さった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！　とても励みになります！

65、剣術と試験結果

リュシアンと庭に行ったが、誰もいない。
あれ？　まだ先生は来てないのかな？　俺がそう思った時、ジャックさんが俺たちの前に出て来た。
どうしたんだ？　いつもリュシアンの後ろで目を光らせてるのに。
「では、練習を始めましょうか」
「ジャック、今日はレオンがいるから基本から頼む」
え！？　ジャックさんが先生なの！？
でも確かに、護衛ならいつも一緒にいるし、先生にはもってこいなのかも。
「ジャックさんが先生なんですね」
「そうだ、俺は厳しいぞ」
ジャックさんが揶揄うような顔で、そう俺に言ってきた。望むところだ！
「厳しくお願いします！」
「おお、やる気あるな。剣を握ったことはあるのか？」
「ありません」
「じゃあ握り方からだな」
そう言ってジャックさんは、俺に木剣を渡してくれた。
「リュシアン様は素振りをしていて下さい」

「わかった」

リュシアンは一人で素振りをやるようだ。かなり様になっていてカッコいいな。俺も早くやってみたい。

「握り方だが、基本は右手が上で左手が下で両手持ちだ。ただ利き手が左の場合は、逆の持ち方をする奴もいるな」

「わかりました」

この世界の剣は両手剣なのか。盾は持たないのかな？

「剣を両手で持つのなら盾は持たないんですか？」

「ほとんどは持たない。たまにそういう奴もいるが、基本的に防御は鎧だな。まあ将来的に盾を持つにしても、両手剣が基本だから基本をやっておいて損はない」

「はい。よろしくお願いします！」

「じゃあ持ってみろ」

俺は言われた通りに木剣を握り、前に突き出すようにして持った。これ結構重いな。

「これでいいですか？」

「それでいい。じゃあまずは、一番基本の素振りからだな。上から下への振り下ろしを五十回だ。本当は百回だけど初心者だからな。始めっ！」

「はい！」

俺は、木剣を上から下に振り下ろす素振りを始めた。

これ思ったより辛い……とにかく木剣が重くて腕がパンパンになるし、どんどんキレとスピードがなくなっていく。

「後二十回だ！　ペースを落とすな」
「はいっ！」

ペースを落とすなって言ったって、これめちゃくちゃ辛いよ。魔法の練習に加えて、体力作りと筋トレはしてたんだけど、剣を振るのってこんなに大変なんだ。子供の体だとキツイ……

ただリュシアンは、汗をかきながらもずっと素振りをしている。やっぱり毎日の積み重ねが大事だよな。俺も頑張ろう。

身体強化魔法を使ってもいいけど、あの魔法は元々の身体能力をより高めるものだから、元の身体が鍛えられているほどより強くなれる。だから、実戦以外では使わずに鍛えたい。

「五十！」

やっと終わった……腕が痛いし、結構息も上がってる。これは辛い。なんだかんだ魔法の練習を優先させて、体力作りは後回しにしてたからな。もっとやらなきゃダメだ。

「次は、右上から左下への振り下ろしだ。また五十回だぞ。始めっ！」
「え！？　まだあるんですか！？」
「これで終わりなわけないだろ？」

マジか……右上から左下への振り下ろしってことは、逆の振り下ろしもあるんじゃないか？　マジかよ……

俺は疲れた身体に鞭打って、なんとかまた素振りを始めた。

「一……二……三……四……四十九……五十！」
「はぁ……はぁ……はぁ……」

やばい、めちゃくちゃ疲れた。俺は膝に手をついて荒い息を吐いている。身体中汗だくだ。
ジャックさん厳しすぎです！
「次いけるか？」
「ちょ、ちょっと待ってください！　少し休んでもいいですか？」
「まあいいだろう。少しだけだぞ」
俺はその言葉を聞いた瞬間に、地面に座り込んだ。こんなに辛いなんて……
リュシアンも、こんなに辛い練習をいつもやってるのか？　そう思ってリュシアンの方を見てみると、素振りを終えてジャックさんと実践形式の練習をしている。
今は、ジャックさんが守ってるところにリュシアンが攻めて、守りを突破する練習らしい。
リュシアン凄いな……俺から見たら、剣を自由自在に扱っているように見える。途中途中でジャックさんのダメ出しが入ってるから、まだまだなんだろうけど、素人目にはかなりの実力に見える。まだ十歳なのに。
さっき素振りをしたからわかるが、剣を自由自在に扱うにはかなりの鍛錬が必要だろう。よほど小さい時から剣の鍛錬をしてたんだな。
そんなことを考えていると、ジャックさんがこちらに戻って来た。リュシアンは一度休憩のようだ。
「ジャックさん、リュシアンはかなりの実力に見えるんですけど、貴族は皆リュシアンくらい剣を扱えるんですか？」
「そんなことはないぞ。確かに貴族の次男以下は、騎士になるか文

官になるかだから、騎士を目指してる奴は割とレベルが高い。ただ、家を継ぐ長男や文官を目指してる奴は、剣をほとんど扱えない奴も多いな。一応、王立学校で剣術の授業があるから貴族なら最低限はできるが、それ以上に鍛錬する奴は少ない」

そうなのか。確かに剣の鍛錬をする理由がなければ、こんなに辛いことはやりたくないよな。

でも、リュシアンは長男だよな？　なんでこんなに真剣にやってるんだ？

「でも、リュシアンは長男ですよね？」

「そうだな。リュシアン様はただ剣が好きなんだ。小さい頃に剣に興味を持たれて、それから毎日欠かさず鍛錬している。それに剣の才能もあるらしくてな、まだ十歳なのにかなりの実力だ」

リュシアン凄いな……俺も負けないように頑張らないとだ。俺はまた、気合を入れて立ち上がった。

「続きをお願いします！」

「よしっ！　次は左上から右下への振り下ろしだ」

「はい！」

そうしてその後、右下から左上への振り上げと、左下から右上への振り上げをして、素振りは終了となった。

マジで疲れた……

「最後までできるなんて思ってなかったぞ。根性ある奴は剣術に向いてる。これからも毎日やれば、必ず強くなれるだろう。その剣は貸してやる」

「ありがとうございます！」

俺はやり切った達成感で、なんだか感動していた。この木剣で毎日練習しよう！
そう決意しているところに、リュシアンがやって来た。
「レオン、五十回ずつの素振りをやり切ったのか？　凄いな、絶対無理だと思ったぞ。私でもさすがに厳しい」
え？　普通は百回なんじゃなかったの？
「でも、普通は百回やるってジャックさんが」
「それはジャックの普通だろう？　私はまだ子供で身体ができてないからな、最初は十回ずつから初めて、今は三十回ずつだな」
なんだよそれ！？　やっぱり流石にキツすぎるんじゃないかと思ったんだよ！
「ジャックさん！！」
「ごめんごめん、ちょっとした悪ふざけのつもりだったんだよ。ただ予想以上に練習についてくるから、楽しくなってやらせてたら最後まで行ってたんだよな」
ジャックさんが苦笑いしながら頭を掻いている。
悪ふざけって、こんなに辛かったのに！！
はぁ～……まあ、為になる練習だったしもういいけど。ただこれからは、毎日三十回ずつくらいから始めて、だんだん増やしていこう。これを毎日やってたら身体を壊しそうだ。
「では、今日の練習はここまでにしましょう」
「そうだな、ジャックありがとう」

「ありがとうございました」

俺は少し不本意ながらも、しっかりと頭を下げる。お礼は重要だからな。

それから、俺たちはそれぞれの部屋に帰った。

俺は部屋に帰ってすぐ、お風呂で汗を流した。とにかく汗だくで気持ち悪かったんだ。さっぱりした！

そして、夕食の時間まで休もうとのんびりしていると、部屋に使用人が来た。初めて見る人だな。何の用だろうか？

ロジェが応対して部屋に戻ってくると、手には一通の封筒を持っていた。

「レオン様、王立学校の試験結果が届いたようです」

おお！　もう来たのか。こんなに早いんだな。

俺はロジェに渡された封筒を丁寧に開き、中を確認する。中には二枚の紙が入っていた。

一枚目は試験結果のようだ。俺は少しドキドキしながら、紙を封筒から取り出す。

……合格だ！

大きく合格と書いてある！

良かったぁ。合格してるだろうと思いながらも、ちょっとだけ緊張してたんだ。とりあえず安心だな。俺は安心してもう一枚を取り出す。

もう一枚は入学式の日程だった。入学式なんてあるんだな。日本の式とは全然違うのだろうか？　ちょっとだけ楽しみだ。

俺は結果をリュシアンに報告したくて、リュシアンの部屋を訪れてもいいか、ロジェに聞きに行って貰った。
少しソワソワしながらロジェが帰ってくるのを待っていると、少し困惑した顔のロジェと共にリュシアンがやって来た。

「レオン、受かったか！？」
「リュシアン様！？　どうしてここへ？　私が行こうと思っていたのですが？」
「私がこちらに来た方が早いではないか」
「まあ、それはそうですが……」

普通は俺がリュシアン様を訪れるんだと思いますけど……まあ、この屋敷の中ならそこまで厳密にしなくてもいいのか。

「そんなことよりもどうだった？　レオンなら合格だよな？」
「はい。合格していました。リュシアン様もですよね？」
「当たり前だ。よしっ、これで一緒に通えるな！」

リュシアンが無邪気に喜んでいる。ここまで無邪気なのは珍しいな、いつもは大人っぽいから。まあ、俺と二人の時は結構子供っぽいところもあるけどな。
俺は少し驚きながらも、リュシアンの喜びに釣られて嬉しさが増してきた。

「一緒に通うのが楽しみです。これからもよろしくお願いします！」
「当然だ。こちらこそよろしく」

俺とリュシアンは握手を交わして、満面の笑みで笑い合った。なんか、これからが楽しみになってきたな。

「あっ、そうだ。ついでにこれを持ってきたんだ」

そう言ってリュシアンが渡してくれたのは、礼儀作法の本だった。

「ありがとうございます。大切に読ませていただきます。いつまで借りていていいのですか？」

「私はもう覚えた内容だから、いつまででも良いぞ。レオンが覚えたら返してくれればいい」

「かしこまりました。ではしばらくお借りしますね」

これで礼儀作法も間違えることはなくなるな。もし覚えきれないようだったら、紙に書き写すのもありかもしれない。今度紙をたくさん買ってこよう。王立学校でも使うだろう。

「では、そろそろ夕食だから一度部屋に帰ることにする。突然押しかけて悪かった」

「いえ、わざわざ来ていただいてありがとうございます」

リュシアンは嵐のように去っていった。よほど合格が嬉しかったんだな。やっぱり大人っぽくても、まだ十歳の子供だ。俺はそれを実感して、なんだか微笑ましい気分になった。

「レオン様、そろそろ食堂へ参りましょう」

「そうだね、行こうか」

６５、剣術と試験結果（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思って下さった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！　とても励みになります！

66、お祝いのご馳走

次の日の朝。
俺は家に帰ることにした。公爵家の方々には昨日の夕食時に帰ることを告げていたので、すぐに帰れる。俺は朝食を終えて、すぐに馬車に乗った。
入学式までは六週間ほどあるので、家族と過ごせる時間を大事にしようと思ったのだ。
ロジェに送ってもらい、家の近くに馬車が止まった。

「レオン様、到着いたしました。入学式の一週間前の日に、お迎えにあがります」
「ありがとう。じゃあまた後でね」

俺は馬車を降りて、家の扉を開けた。

「ただいまー！」

俺がそういうと、厨房から母さんと父さんが飛び出てきた。マリーとイアン君は元々食堂にいたので、そのまま駆け寄ってくる。

「お兄ちゃん！　おかえりなさい」
「レオン！　試験は大丈夫だったの？　何もされなかった？」
「母さん落ち着いて、試験受けてくるだけなんだから、何もされないよ」
「そ、それもそうよね」
「レオン、おかえり。試験はどうだった？」

父さんが、落ち着いた優しい笑顔で聞いてくれた。

「試験は合格したよ！　六週間後くらいに入学式があるんだって」

「レオン、よくやったね」

父さんはそういうと、俺の頭をガシガシと撫でてくれた。父さんにしては激しい。

「と、父さん、頭ぐしゃぐしゃになっちゃうよ」

俺がそう言って父さんの顔を見上げると、父さんはとても嬉しそうな、でも少し悲しそうな顔をしていた。

「父さん？　どうしたの？」

「ごめんね……思いっきり祝ってあげようと思ってたんだけど、やっぱりレオンが家を出ていっちゃうのは寂しいなって思ったんだ」

「父さん……大丈夫だよ。王立学校にいても頻繁に帰ってくるから！　すごく遠いところに行くわけじゃないよ」

俺がそういうと、父さんはやっと心の底から笑ってくれた。将来は、家族みんなで快適に暮らせるように頑張ろう。俺は改めてそう決意した。

「そうか、そうだよね。こんなこと言ってごめんね。じゃあ、今日はレオンの合格祝いをしようか！　今日は臨時休業にしよう」

「それがいいわ！　王立学校に合格したんだもの。盛大にお祝いしないとだわ」

「お兄ちゃんおめでとう！」

「レオン君、おめでとう」

嬉しい。俺のことでここまで喜んでくれる人がいるって幸せだな。

「みんな、ありがとう！！」

「じゃあ、今日は父さんたちが作るから。レオンはリビングで待っていてね」

「そうよ。母さんたちもレオンにたくさん調理法を教えてもらって、オリジナル料理を考えたのよ」

そうなのか！？　オリジナル料理って母さんと父さん凄いな。俺は前世で知ってる料理を再現してただけだから、俺より全然凄いよ。

「二人とも凄いね！」

「楽しみにしていてね。じゃあレオンはリビングに行って」

そうして俺はリビングに追いやられた。あれ？　マリーも来ないのか？

「マリーとイアン君は？」

「二人も手伝ってくれるのよ」

「そうなの？」

「うん！　美味しい料理作るよ！　私にもできるんだから」

マリーが満面の笑みで、ちょっと誇らしげにそう言った。か、かっわいい～。俺の妹マジ天使。

「マリー、ありがとう。楽しみにしてるね」

「うん！」

それから一時間ほどリビングで待っていると、みんなが料理を大

量に持ってリビングに来た。
凄くいい匂い！
「レオンお待たせ」
「美味しい料理いっぱい作ったの！」
机の上にどんどん料理が並んでいく。まずはいつものパンにスープ、水。
「これが今日のメイン料理、ステーキフライよ！」
そう言って母さんが俺の前に置いてくれた皿には、牛カツが乗っている。凄い！　肉を揚げる料理は教えてないのに、アジのフライから思い付いたのかな？
「レオンが教えてくれたアジのフライを見て、牛肉を揚げても美味しいだろうと思ったのよ」
「父さんが揚げたんだ。上手くできてるだろう？」
「うん！　凄く美味しそうだよ！」
「それから、ソースも作ってみたんだ。前にレオンが、フライにはトマトソースが合うと言っていたから、ドライトマトのオイル漬けを、近くの家から少し買ったんだ」
ソースまで作ってくれるなんて……！　絶対美味しい、早く食べたい！！
「お兄ちゃん、これはマリーとイアンさんで作ったの！」
そう言ってマリーが持ってきてくれたお皿には、クッキーが入っていた。俺がマリーに、他の甘いもののレシピをねだられて前に教

えたんだ。オーブンがないのでフライパンで焼くしかないのだが、結構美味しくできた記憶がある。

「この前おじいちゃんの家から商人さんが来て、バターを置いていってくれたの。それに砂糖もお兄ちゃんが買ってきてくれてるから、クッキー作ったんだよ！」

「凄いなマリー、嬉しいよ」

このクッキーはかなり良くできてる。焦げてもいなそうだし、とてもいい匂いだ。早く食べたいな！

「じゃあ、冷めないうちに早く食べましょう」

「そうだね、早く食べようか。じゃあ、レオンおめでとう！」

「「「おめでとう！！」」」

みんなが笑顔で俺の方を見てそう言った。

「……ありがとう。嬉しい」

俺は思わず泣きそうになり、なんとか笑顔を作って泣き笑いのような顔でそう言った。

それからはみんなで一斉に食べ始めた。まずは牛カツから食べよう。牛カツは一切れサイズに切ってあったので、俺はフォークで刺してソースにつけ、一口食べる。

サクッ……もぐっもぐ……めちゃくちゃ美味い！！　やばい、これめちゃくちゃ美味いな。牛にも塩味が少しついてて、トマトソースの味とマッチしてる。これをパンに挟んだら、美味しいカツサンドになるな。

カツサンドでも食べてみたい！

「父さん、ナイフでパンを薄く切ってくれる？」
「どのくらいに切ればいい？」
「うーん、これくらいでお願い」

俺は指で一センチくらいを示して、父さんに薄いパンを二つ切ってもらった。そして片方にトマトソースを塗って、カツを挟んだ。
ぱくっ……やばい、これもめっちゃ美味い！　やっぱりパンと一緒に食べると美味しいな。

「お兄ちゃんその食べ方美味しいの？」
「うん、凄く美味しいよ！　肉とソースがパンによく合うんだ。別々で食べるより一緒に食べた方が美味しい」
「ほんとに！？　じゃあ私もそれで食べたい！」
「わかったわかった、パンを切ってあげるからちょっと待ってね」
「父さんありがとう！」
「ジャンさん、俺にもお願いします」
「ジャン、私にもお願いね」

みんなカツサンドにして食べるみたいだ。カツサンドってパンに挟むだけなのに、めちゃくちゃ美味しくなるんだよな。

「う～ん！　美味しい！」
「本当ね、パンに挟んだだけなのに美味しくなるわ」
「これなら歩きながらでも食べられるから、持ち帰りで売ったら売れるかもね」

俺が何気なくそう言うと、母さんと父さんの目つきが変わった。
何かギラギラしてる……

「レオン！　それはいいかもしれないわ！」
「そうだね。試しに何日か売ってみるのもいいかもしれない。時間がない人も買っていくかもね」

凄い勢いだな……

「レオン、やってみてもいいわよね！」
「う、うん、勿論だよ。頑張ってね」
「早速明日からやってみようか。いつもの昼営業より、少し早めに売り出すのもいいかな？」
「それもありね！」

二人は話に夢中になってしまったので、俺はさりげなく話から抜け出した。そして、デザートでマリーとイアン君が作ってくれたクッキーに手を伸ばす。
サクッ……サクッサクッ……めちゃくちゃ美味しい！
甘くてサクサクで幸せだ。

「マリー、クッキー凄く美味しいよ！　イアン君もありがとう」
「本当！？　良かった！」
「初めて作ったらちょっと心配してたんだ。良かったよ」

これはマジで美味しい。俺的には日本のクッキーにも劣らない。マリーが作ってくれたことを考えたら、日本のより美味い！

「本当に美味しいよ！　また一緒に作ろうね」
「うん！！」

そうして俺のお祝いという、幸せな昼食を終えた。本当に楽しく

て美味しかった。幸せだ……

６６、お祝いのご馳走（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思って下さった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！　とても励みになります！

67、クッキー作り

昼食を終えて暫く後、イアン君は家に帰り家族四人でゆっくりしている時間に、俺は徐に話し出した。

「母さん、父さん、マリー。俺は王立学校に受かったから、六週間後くらいには中心街に引っ越しするね」

「そうね。引っ越しは大変だから、早めにしなくちゃよ。住む家は決めてあるの？　公爵家の方が紹介してくれたのかしら」

あれ？　公爵家の屋敷に住むこと言ってなかったっけ？

「公爵家の屋敷に住まわせてくれるんだけど、言ってなかったっけ？」

あっ……やばい……

母さんがめっちゃ怒ってる！　俺何でいうの忘れてたんだよ！

「レ～オ～ン～！　そういう事は早く言いなさいって言ったでしょ！」

「ごっ、ごめん！　言ったつもりだったんだよ」

「公爵家に住まわせてもらうなら、挨拶くらいはしなきゃよね？　それなら、私たちが公爵家のお屋敷に行かないといけないのかしら？　でも、私たちみたいな平民は追い返されるわよね？」

母さんは怒りが収まって、今度は慌て始めたみたいだ。

「母さん、落ち着いて。挨拶はいらないと思うよ。俺が母さんと父

さんからの伝言として、挨拶しておくよ」
「それで大丈夫なの？」
多分それで大丈夫だろう。母さんと父さんは作法も何も知らないし、公爵家の皆様も逆に困るだろう。
「大丈夫だよ。心配しないで」
「レオン、挨拶にはいかないとしても、手土産くらいは何か渡した方がいいかな？　いつも送り迎えしてくれてる人になら渡せるだろう？」
うーん、手土産って言っても、うちから渡せるもので公爵家の皆さんが喜ぶものが思い浮かばない……
渡すとしたら手作りお菓子とかかな？　食べてくれるのかはわからないけど、公爵家の皆様が食べてくれなくても使用人の方が食べてくれるだろう。
クッキーなら持って行きやすいし、クッキーにしようかな。
「クッキーを作って渡すのがいいと思うよ。持ち運びしやすいし、すぐにダメにならないからね」
「じゃあ、引越しの前の日にクッキーを作ることにするよ。レオンも手伝ってくれるかい？」
「うん！　勿論だよ」
それからしばらくは何事もなく、平和な日常が過ぎていった。俺は、マルセルさんの所へ入学の報告に行ったり、森に行ったりと平和に過ごした。
軽い毒を使って、解毒の回復魔法の練習をしようと思ったけど、春や夏にならないとあまり種類がなかったので、もう少し後でやる

ことに決めた。

そんな平和な日々を過ごして、ついに明日が引越しの日だ！　今日は一緒にクッキー作りをする。

昨日は中心街まで行って、砂糖とバターを大量に買ってきたから、今日はたくさん作れるな。

「レオン、もう一度作り方を教えてくれるか？　この前はマリーと作ってたから、しっかりと見てなかったんだ」

「うん！　まず材料は、小麦粉と砂糖とバターだよ」

「それは用意してあるわ」

「材料さえあれば作り方は簡単なんだ。この三つを混ぜて形を作って焼くだけだよ」

一番難しいのは分量なんだけど、この前作った感じだと砂糖は結構入れた方が良さそうだった。バターもしっかりと固まるくらい入れないとダメだ。

「分量は、この大きい器に入る分の小麦粉に対して、砂糖が小さいお皿くらい、バターも同じくらいかな？　とりあえず、やりながら試してみるのがいいと思う」

そうして俺たちは三つをボウルに入れて、よく混ぜてこねていく。

ふぅ～、これくらいでいいかな？

「多分これくらいでいいと思う。あとは一口サイズにしてフライパンで焼けば完成だよ！」

「結構簡単なのね。ただバターと砂糖をたくさん使うから、この辺では流行りそうにないわね」

確かにこの辺で流行るのは、ずっと先のことだろう。そもそも、まだお菓子の文化が定着してないしな。

「この辺で流行るのは難しいだろうね。でもうちで食べるだけなら、どんどん作ってね。バターはじいじの家から手に入るし、砂糖はたくさん買ってきて置いておくから」

マリーがすっかりお菓子の虜だからな。帰ってくる時は砂糖を買ってこないとだ。

母さんとそんな話をしていたら、父さんが焼く準備をしてくれていた。

「じゃあ母さんとレオンは、どんどん形を作っていってね。父さんが焼いていくから」

「わかったわ」

「うん！」

俺はどんどんクッキーの形を作っていく。そして半分くらい作り終わったところで、中心街でこっそり買ってきたものを取り出した。そしてそれを、クッキーの上にはめ込んでいく。

「レオン、それは何？」

「これはアーモンドって言うんだ」

「アーモンド？」

「そう！　これだけで食べても美味しいけど、クッキーに入れると美味しいと思うんだ。何枚か試しに、アーモンド入りクッキーを作ってみるね」

「そうなのね。楽しみにしてるわ」

昨日中心街まで砂糖を買いに行った時、別の売り場にアーモンド

に似たものを見つけたのだ。商人さんに聞いてみると、最近輸入され始めたみたいでまだあまり売れないと言っていた。
一つ味見にもらって食べてみると、日本のアーモンドとかなり似た味だった。日本のものより少し小さいくらいだ。
俺はクッキーに合うんじゃないかと思って、一袋買ってきたのだ。結構高かったが、お金はあるからこのくらいの贅沢はいいだろう。

「父さん、アーモンド入りのは火が通りにくいかもしれないから、普通のよりもよく焼いてくれる？」
「わかったよ」

そうして、普通のクッキーが百枚ほどとアーモンド入りが二十枚出来上がった。
一人一枚ずつ味見として食べてみる。

まずはアーモンドからだな。ザクッ……めちゃくちゃ美味しい！
よく焼いたからちょっと香ばしさが強いけど、それもまた良さになってる。アーモンド入りもありだな。
父さんと母さんの方を見てみると、ちょうどアーモンド入りを食べるところだった。

「う～ん、これ美味しいわ！　アーモンドすごく合うわね」
「ああ、食感が面白いな。ほのかに甘くて味も美味しい」

二人にも高評価みたいで良かった。これなら公爵家に持っていっても大丈夫だな。

「美味しいね、完璧！　じゃあ、公爵家に持っていく籠に入れちゃうね」

俺は新しく買ってきた籠に新しい布を敷いて、クッキーを綺麗に並べて入れていく。普通のクッキーが七十枚とアーモンド入りが十枚だ。残りは家族みんなで食べることにする。マリーも喜ぶだろう。

「すごく綺麗な布ね。どこで買ってきたの？」

「中心街だよ。公爵家に持っていくのなら、この辺で売ってる布だと失礼かなと思ったんだ」

「確かにそうね。手触りもすごくいいわ」

この布は、この辺で売ってるものの十倍以上の値段だからな。ただ、高いだけあって見た目も手触りも良い。これなら公爵家でも浮く事はないだろう。

「よしっ！　あとはこれをロジェに渡せば完璧だね」

「結構残ってるけどそれだけでいいの？」

「うん。あとはみんなで食べようよ！」

「それはマリーが喜ぶね。レオンはいいお兄ちゃんだね」

父さんがそう言って、俺の頭をぐしゃぐしゃに撫でてくる。父さん、最近頭ぐしゃぐしゃにしすぎ！

「父さん、またぐしゃぐしゃになっちゃうよ！」

「まあ、いいじゃないか」

俺は父さんの手から逃れて、残りのクッキーをお皿に盛りつけた。

「じゃあ、リビングに持っていくね！　マリーが待ってると思うから。父さんと母さんも早く来てね！」

俺はそう言って、厨房を出てリビングに向かった。

６７、クッキー作り（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思って下さった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！　とても励みになります！

68、引っ越しと入学準備

次の日の朝。
今日は俺が公爵家の屋敷に引っ越す日だ。ただ、必要なものは屋敷に揃っているので、ほとんどうちから持っていく物はない。いつも出かける時と同じような荷物の少なさだ。
ロジェは午前中の早い時間に来てくれると言っていたので、そろそろ来るはずだ。
俺は食堂の椅子に座っていて、母さんと父さんはそわそわと周りを歩き回っている。マリーは俺の隣に座っている。二人とも緊張しているようだな。ロジェとは前にも会ったのに。
俺は苦笑いしながら、母さんと父さんを眺めていた。

すると、家のドアが叩かれる音がする。
コンコン。

「おはようございます。ロジェでございます」

俺がドアを開けると、いつもの従者の格好をしたロジェが立っていた。

「来てくれてありがとう。母さんと父さんから渡したいものがあるから、少しだけうちに寄ってくれる？」

俺がそう言うと、ロジェが少しだけ不思議そうな顔をしながら、食堂に足を踏み入れた。
すると母さんと父さんがロジェの前に並び、深く頭を下げる。

「これからレオンがお世話になりますが、よろしくお願いします」
「迷惑をかけるようなことがあれば、叱ってください。レオンをよろしくお願いします」
「はい。誠心誠意お仕えさせていただきます」

ロジェもそう言って頭を下げた。それから、母さんがクッキーが入ってる籠を持ち、ロジェに手渡した。

「これ少しですが、公爵家の皆様に渡してください」

ロジェは少し戸惑ったようだが、しっかりと受け取ってくれた。

「かしこまりました。私が責任を持って届けます」
「じゃあ、母さん、父さん、マリー、行ってきます。また休みの日に帰ってくるからね！」

俺は寂しい雰囲気にならないように、笑顔で明るくそう言った。すると、母さんと父さんは泣き笑いのような表情になった。

「レオン、辛いことがあったらいつでも帰ってきていいのよ。頑張ってきなさい」
「うん。母さんありがとう」
「レオン、レオンは父さんの誇りだよ。頑張ってね」
「ありがとう。頑張ってくるよ！」

俺は少し俯いているマリーの前に行き、しゃがみ込んで下からマリーを見上げた。
するとマリーの目には涙がたくさん溜まっていて、今にも溢れそうだった。

「マリー、お兄ちゃん行ってくるね。いつでも帰ってこれるから泣かないで」

俺はそう言って、マリーの頭を優しく撫でた。

「うぅ〜、お兄ちゃん……頑張ってね……絶対に帰ってきてね」

「うん。休みの日はできるだけ帰ってくるよ。だからその時は、また一緒に料理したり森に行ったりしようね」

「うん……待ってるね」

「ありがとう」

俺は最後にマリーをぎゅっと抱き締めてから、立ち上がった。このままマリーと話していたら、俺まで泣いてしまいそうだったのだ。

「じゃあ行ってきます！」

俺はそう言って、家から外に出た。少し寂しいけど、いつでも帰って来れる距離だ。これから始まる新しい生活への希望もある。

これから頑張ろう！

そうして馬車に乗り込み、中心街の公爵邸に着いた。公爵邸ではいつも通り、客室に案内される。いや、今日からは客室ではなく俺の部屋だな。

「レオン様、本日は特に予定はありませんが、いかがいたしますか？」

うーん、どうしようかな。必要なものは早めに買ったほうがいいだろうから、午後にでも必要なものを聞いて買いに行こうかな。

「王立学校で必要なものを買いに行きたいんだけど、何が必要か一覧みたいなものってあるのかな？」
「王立学校で必要なものでしたら、私が存じ上げております。本日買いに行かれますか？」
「うん。昼食を食べてから午後に行こうかな」
「かしこまりました」
「そういえば、食事って食堂でとるのかな？　今までは食堂だったり自分の部屋だったりしたけど」

今まで朝食は自分の部屋だったけど、夕食は食堂だったよな。昼食は自分の部屋が多かったけど、食堂で食べることもあった。

「基本的には朝食、昼食は各自の部屋でとられます。夕食は食堂に集まってとられることが多いです。ただ、昼食でも食堂でとったりと例外もございますので、絶対のルールのようなものはございません」
「そうなんだ。じゃあ今日は、自分の部屋で食べるのでいいかな？」
「問題ありません。すぐにご用意いたします」

それから俺は昼食を食べて、少し休んでから必要なものを買うために中心街に出かけた。今はロジェとともに馬車の中だ。

「必要なものって何があるの？」
「まずはペンとインクですね。レオン様は一つ持っておられますが、予備としてもう一つずつ持っておられると良いとのことです。それから紙束です。授業の教科書は無料で配られますが、メモを取ったりするのに紙束があったほうが便利だそうです。さらに、それらを入れる鞄も一つ必要ですね。王立学校へは基本的に従者を伴わないので、皆さん鞄を一つお持ちになるそうです」

確かに必要だな。紙束は多めに買っておこう。授業以外にもあったら便利だ。ずっとメモ帳が欲しいと思ってたんだよな。そう考えると、インクも多めに買ったほうがいいかもしれない。それに鞄も必要だな。ずっと使えるようにしっかりした物を買いたい。

「あとは服ですね。剣術の授業で着る、動きやすい服があると便利だそうです。それから、パーティーに着ていける服がない方は、ダンスの授業で着る服も購入するそうですが、レオン様は以前晴れ着を購入されていますので、こちらは必要ないでしょう」

確かに剣術の授業を、貴族の服でするわけには行かないよな。だからといって平民の服は論外だろうし、動きやすい良い服を買うべきだな。

「じゃあ、その五つを買いに行こう。お店に行く前に銀行に寄ってくれる？」

「かしこまりました。ただ、レオン様が必要なものを購入される時の為にと、大旦那様からお金を預かっております。ですので、レオン様がお金を支払う必要はございません。何かご趣味で買い物をされたいとのことでしたら、銀行へ向かいますが如何いたしますか？」

またお金出してくれるの！？　俺ほとんどお金使ってないよな。せっかく貯めてたのに……まあ、お金が必要になる時はあるだろうから、貯めとけばいいんだけど。

ここまで至れり尽くせりだと本当に申し訳ないな。でも、絶対に断っても押し問答になるだけだろうし、とりあえず好意は素直に受け取っておこう。

「それはありがたいね。後でリシャール様にお礼を言わないと。じ

ゃあ今は、銀行は行かなくていいや。このままお店に行ってくれる？」

「かしこまりました。では、紙を売っているお店から向かいます」

そうしてロジェが御者に告げて馬車は紙を売っているお店についた。

ロジェに聞いたところ、紙を売っているお店は白紙の紙を売っているだけで、本などは売っていないらしい。本は中古の本を売っている本屋で買うか、誰かから借りた本を持ち込んで、書写屋で書き写してもらうそうだ。

新しい本は、研究者が結果をまとめるなどして作る場合が一番多いらしい。物語を書く小説家のような人も少しはいるが、小説は新しい物語を欲しい人が、小説家に依頼をして初めて作られるそうだ。

「レオン様、到着いたしました」

「ありがとう」

お店に入ると店内は狭く、すぐにカウンターがある。紙は裏の倉庫にあるのかな？　カウンターには綺麗な格好をした四十代くらいに見える女の人がいる。

「いらっしゃいませ。本日はどのような御用でしょうか？」

「こんにちは、王立学校で使う紙束が欲しいんですが」

「かしこまりました」

そう言うと女の人は、カウンターの後ろにある扉から奥に行き、紙の束を持ってきてくれた。一つの束で二十枚くらいのようだ。

とりあえず三つくらい欲しいな。足りなかったらまた買えばいいだろう。

「一束で二十枚ですが、いかがいたしますか？」
「では三つ下さい」
「かしこまりました」

ロジェがお金を支払ってくれて、お店を後にした。
それから、ペンとインクを売ってるお店、鞄を売ってるお店、前に公爵家に来てくれた仕立て屋を訪れて、それぞれ必要なものを買った。
これは途中でロジェから聞いたんだけど、貴族は基本的に屋敷に商人を呼ぶ。しかし、自分から出向いて買い物をしたい時は、貴族がお店に行くこともあるらしい。
そこは気分次第で自由なんだそうだ。また、すぐに商品が欲しい時も自分でお店に出向いたり、従者に買いに行かせたりするらしい。

「レオン様、必要なものは買い終わりましたが、どこか行かれたい場所はございますか？」
「いや、特にないよ。屋敷に戻って欲しい」
「かしこまりました」

俺は必要なものを買い終えて、屋敷に戻った。

６８、引っ越しと入学準備（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白いと思って下さった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！　とても励みになります！

69、歓迎会と剣術

俺が屋敷に戻ると、あと少しで夕食の時間だった。結構時間が経ってたんだな。

俺は部屋で少しだけ休んだあと、すぐに食堂に向かった。食堂に行くと、リシャール様、カトリーヌ様、リュシアン様に加えて、クリストフ様とソフィア様、ジュリアン様、フレデリック様もいた。

なんで皆さん揃ってるんだ？　というか、俺が一番最後！？　時間遅れてないと思うんだけど……

俺は少し慌てつつ、皆さんに挨拶をした。

「皆さん、お久しぶりでございます。遅れてしまったようで、申し訳ございません」

「いや、我々が早かっただけだから気にしなくていい。それよりも席に座ってくれ」

「かしこまりました」

リシャール様がそう言ってくれたので、俺は自分の席に座った。

「では改めて、レオン君タウンゼント公爵家にようこそ。これからよろしく頼む。今日はささやかだが、君の歓迎会のつもりだ。楽しんでもらえたら嬉しい」

俺の歓迎会！？　そんな事やってもらえるなんて思ってなかった……ちょっと恐縮しちゃうけど、嬉しい。凄く嬉しい。

今までは、俺と公爵家の間には壁があったけど、それが少し薄くなった気がする。埋められない身分差はあるんだけど、それでも公爵家の仲間に入れてもらえたような気がする。本当に嬉しい。

いつも公爵家に来ると緊張してたけど、少し肩の力が抜けた。

「皆さん、私のためにわざわざ歓迎会を開いてくださり、本当にありがとうございます。とても嬉しいです。公爵家の役に立てるように頑張りますので、これからもよろしくお願いします」

俺はそう言って頭を下げた。そして顔を上げると、皆さんが優しい笑顔で見守ってくれていた。

なんだか、ここも俺の居場所になった気がするな。

「こちらこそよろしくな。では、美味しい料理を食べて楽しんでくれ」

リシャール様のその言葉で、料理が運ばれてきた。まず運ばれてきたのはスープだが、香りが海老だった。

海老のスープ！？　でも、ここは王都なのに……

俺の困惑がわかったのか、リシャール様が説明をしてくれた。

「レオン君は海の幸がとても好きな様子だったから、陛下に頼んで製氷機を使わせてもらったんだ。領都に製氷機を送って、クリストフとソフィア様が王都に来る時に海の幸を持ってきてもらった。ナセルがレシピも書いてくれたので、美味しい料理になってるはずだ。堪能してくれ」

めちゃくちゃ嬉しい！！　しばらくは食べられないと思ってたんだ。

「ありがとうございます！　とても嬉しいです！！」

「レオンの好きなものがわからなかったからナセルに頼んだんだが、喜んでもらえたら嬉しい」

クリストフ様が、少し苦笑いをしながらそう言った。
やばい……ちょっとはしゃぎすぎたかも……
俺は少し落ち着きを取り戻した。

「海の幸はどれでも好きなので大丈夫です。持ってきていただいて本当にありがとうございます。クリストフ様とソフィア様は、パーティーのために王都に来られたんですか？」
「そうだ。毎年この季節は、王族主催のパーティーがあるからな。領地にいる貴族も、皆王都に集まっている。アルベールはまだ幼いから留守番だ」

そういえば、パーティーがあるから冬の終わりには、毎年王都に行くって言ってたな。パーティーなんて名前だけど、絶対に腹黒いやりとりが展開される疲れる集まりなんだろう。貴族も大変だな。
そんな話をしながらスープを堪能していると、次の料理が運ばれてきた。
おおっ！！　ホタテのオーブン焼きだ！！　うちではオーブンで焼けなかったから食べたかったんだ！
ぱくっ……めちゃくちゃ美味しい……

「とても美味しいです」
「これは……私も初めて食べましたが、とても美味しいですわ」

ソフィア様が驚いた様子でそう言った。ソフィア様は一緒に港町に行かなかったので、まだ食べたことがなかったのか。
「これは……！　海の幸が美味しいのは知っていたが、この料理は特に美味しい」

そう言ったのはジュリアン様だ。ジュリアン様は、子供の頃に海の幸は食べたことがあるんだろう。ただ、オーブン焼きの美味しさに驚いている様子だ。

「この料理はレオン君が考えたものなんだ。港街の料理人もとても驚いていたよ」

「なんと……レオンは料理もできるのか。凄いな……」

なんかジュリアン様の中で、俺がめちゃくちゃ凄い人みたいになってる気がする。そんなことはないのに。

「私の実家は食堂ですので、料理には親しみがあるのです」

「それでもレシピを考えられるのは才能だよ」

日本の料理を再現してるだけだから、そう言われても素直に喜べないんだけど、でも事実を言うわけにはいかないしな。

「ありがとうございます」

そんな話をしつつ、とても美味しい夕食を楽しんだ。めちゃくちゃ美味しかった……幸せ。

そして、食事を食べ終わってそろそろ解散かなと思った頃、俺が持ってきたクッキーが出された。

公爵家の方々に出してもらえるんだ！

「こちらはレオン様のご両親からです」

「父と母から皆様に、ご挨拶代わりとして手作りのお菓子です。本当は直接ご挨拶に伺いたいと申していたのですが、作法も何も知りませんのでこちらでご容赦ください」

俺が給仕してくれた人の後に続いてそう言うと、皆さんクッキーをとても興味深そうに眺めている。この世界でクッキーってまだ見たことないもんな。

まだお菓子は発展し始めたところなのか、中心街でもフレンチトーストとかジャムパンとか、砂糖を固めたものとか、その程度のものしか見かけない。

「これは初めて見るものだが、どのような味なのだ？」

「これは、砂糖を使って作った甘いお菓子です。名前はクッキーと言います」

「クッキーか。二種類あるようだが、この上に乗ってるものはなんなのだ？」

「それはアーモンドと言って、最近輸入され始めたもののようです。そのまま食べても美味しいのですが、クッキーにも合いますので少し乗せてみました」

「ふむ……では頂こう」

リシャール様は、少し躊躇いながらもクッキーを口に入れた。すると、リシャール様の顔がみるみる驚きの顔に変わっていく。

「こ、これは……美味しいな」

リシャール様は、それだけ言うと黙ってしまった。

「皆さんも是非食べてみてください」

俺がそう言うと、皆さんは一斉にクッキーに手を伸ばした。

「これは美味しいわ！　サクサクとした食感とくどくない甘さ、香ばしい香り、素晴らしいわ！」

「そ、それは良かったです」

カトリーヌ様がめちゃくちゃ興奮してる。こんなカトリーヌ様初めて見たよ。甘いもの好きなんだな。

「うん。これは美味しいな」
「いくらでも食べられる」
「素晴らしい味ですわ」

皆さんに大好評のようだ。良かった。
俺は安心して、俺の前にも出されたクッキーに手を伸ばす。う～ん、やっぱり最高に美味しい！

「レ、レオン君！　これはレオン君が考えたレシピなのか？」
「はい」
「素晴らしい！」
「リ、リシャール様？」

リシャール様は、拳を握って天井を見上げて立ち上がってしまった。どうしたんだ？　リシャール様壊れた？

「このレシピは革命だ！　このレシピでお菓子作りが急速に発展するだろう」
「そんなにですか？」
「間違いない！　これは明らかに、今までにはなかった作り方で作られたものだろう？　今まで甘いものといえば、砂糖をパンに乗せたり、砂糖を卵に溶かしてパンに染み込ませたり、砂糖をジャムに入れたり、その程度だったのだ」

確かに今までなかったレシピかもしれないけど……そこまで言う

ほどかな？　フレンチトーストとかジャムはあったんだし、そのうちクッキーのようなものもどんどん開発されていっただろう。

「このレシピを教えてくれないか？　もちろん相応の対価は支払おう」

リシャール様は少し落ち着いたのか、席に着いて俺にそう聞いてきた。このレシピに対価って、そんなに大層なものじゃないんだけど……

「レシピはお教えしますが、対価は必要ありません」

「だが、君が開発したものなのに対価もなしではダメだろう」

「いえ、公爵家の皆様には本当に良くしていただいているので、そのお礼も兼ねてです。そこまで凄いレシピというわけではないですし」

「だが……」

「うーん、ではレシピをお教えする代わりに、定期的にクッキーを食べさせていただけると嬉しいです」

「本当にそれで良いのか？」

「はい」

そこまで凄いレシピじゃないし、公爵家の皆さんに少しでも恩返しできればと思ってたからな。

それに、これからも新しい料理やお菓子をちょくちょく作るだろうし。俺はレシピで稼ぐことよりも、レシピを広めてどんどん食文化が発展してくれる方が嬉しい。

「では後ほど料理長に教えてやって欲しい」

「かしこまりました」

それから入学式までの一週間は、毎日リュシアンとともにダンスと剣術の練習をして過ごした。
今日は入学式前日で、一週間の練習成果を見る日だ。まずはダンスからだ。

「では、これから練習の成果を確認いたします。レオン様は一週間しか練習できていませんけれども、今の時点での実力を確認させていただきます」
「かしこまりました。よろしくお願いします」

ダンスは、基本的な一曲を一通り踊って実力を確認する。この国の貴族のダンスと言ったら、社交ダンスだ。したがって相手が必要だが、相手はダンスの先生が連れてきた女の子が務めてくれるらしい。誰なのか聞いたところ、先生の弟子だそうだ。
最初はリュシアンからだ。リュシアンはとても優雅で流れるように、ダンスを踊っていく。俺の目には既に完璧に見える。ただ一曲終わった後、先生が細かいところの指導をたくさんしていたので、まだまだなのだろう。
このレベルでまだまだなら、俺はどうなるんだ？　一通り踊れるかも怪しいんだが。まあ、一週間しか練習してないししょうがないよな。

俺は開き直って、今のできる限りで精一杯踊った。ぎこちなかったが、なんとか相手の足を踏むこともなく、姿勢は保てたと思う。自分の中でも満足だ。

「レオン様のダンスはまだまだぎこちなく、初心者丸出しという感じです。ただ、相手に合わせようとしている努力は感じられました

し、何よりも姿勢が崩れていませんでした。一週間でここまでできれば十分でしょう。これからも練習を続ければ、すぐにうまく踊れるようになると思います」

やった！！　まさかの褒められた！！

めちゃくちゃ嬉しい。

「ありがとうございます。これからも練習を続けます」

ダンスは日本で一度もやったことがないから、今の俺の努力の成果だ。それが認められたって言うのが思いのほか嬉しい！

「では、お二人ともこれからも練習を続けてください。これで練習は終わりです」

「はい。ありがとうございました」

「ありがとうございました」

そうしてダンスの授業を終えて、俺とリュシアンは剣術のために庭に行った。

「今日は、お二人の練習成果を確認します。確認方法は私との模擬戦です。まずはリュシアン様からです」

ジャックさんはそう言って、リュシアンと木剣を持ち向かい合う。

「では行きます！」

先手はジャックさんだ。ジャックさんがリュシアンに右上から斬りかかる。リュシアンはそれを剣で受け流して、左側に回り、左から斬りかかろうとした。しかし、ジャックさんは素早く体を捻りリ

ュシアンの剣を受け止める。
力比べになるとリュシアンは分が悪く、どんどん押されている。リュシアンは一度体勢を立て直すために、剣を弾いて後ろに下がろうとしたが、ジャックさんの方が一枚上手だ。リュシアンが剣を弾こうとした瞬間に少し力を抜き、リュシアンが前のめりに体勢を崩したところで、首に木剣を当てた。

「私の勝ちですね」
「やはりジャックは強いな。まだまだ勝てないよ」
「いえ、リュシアン様が大きくなられて力をつけられたら、結果がどうなるかはわかりません」

それからしばらくは、良かった点や悪かった点を説明して、リュシアンは終わったようだ。
次は俺だ。少し緊張してきた。

「次はレオンだな。まだ型も身に付いていないだろうが、全力でかかってこい。全力の戦いで剣術は成長するからな」
「はい！　よろしくお願いします！」
「では、始め！」

俺はその声が聞こえてすぐに、ジャックさんに右上から斬りかかった。ジャックさんはそれを受け流そうと剣を構えたが、俺はジャックさんの剣とぶつかる寸前に剣を振り下ろすのをやめ、もう一度振り上げて、左側から首を狙って思いっきり剣を振った。俺が勝てるとしたら、フェイントしかないと思ってたんだ。
ただジャックさんは即座に反応し、俺の左からの攻撃を簡単に受け流した。そして体勢が崩れた俺の首に木剣を当てた。

「終わりだ」

はぁ～、やっぱりダメだったか。流石に勝てるとは思ってなかったけど、もう少し焦ってくれるかとは思ってたのに。

「レオン、今のは結構良かったぞ。フェイントを使ったのは面白かった。ただ、それが防がれた後のことも考えないとダメだ。まだまだこれからだな」

「はい！」

まだまだだけど、褒められたのは嬉しいな。これからも頑張ろう。

「では、明日は入学式なので、今日はこれで終わりにします。王立学校に入学してからも、剣術の鍛錬は怠らないようにしてください」

「わかった」

「はい！」

俺とリュシアンは、気持ちのいい疲れを感じながら部屋に戻った。明日は入学式だ。

６９、歓迎会と剣術（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んで頂けたら嬉しいです！
面白いと思って下さった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！　とても励みになります！

閑話　現実逃避（ミシュリーヌ視点）

「シェリフィー来たわよ！」
「ミシュリーヌ！？　つい最近帰ったところじゃない。地球から連れていった魂の子はどうなったの？」
「レオンね。ミルソユーテに戻ったはいいけど、やっぱり神力もないし何もできることが思いつかないから、しばらくはいいかなと思って」
「確かに何もできることはないかもしれないけど……せめて見守ってあげなさいよ！」
「……でもできることないんだから、見守っててもしょうがないでしょ？　見守るにも神力が必要なのよ。それよりも日本のお菓子が食べたいわ！」

日本のお菓子は本当に美味しいのよ。どら焼きも饅頭も大福も、どれも絶品だわ！　このお菓子を自分の世界で食べたいから日本にできる限り似せた世界にしたのに……
前の使徒のせいで日本っぽくなくなっちゃったし、それはいいにしても魔物に滅ぼされそうになってるし、なんでこんなことになっちゃったのかしら。
どうにか助けたいけど今はできることもないし……とりあえず甘いものを食べてから考えればいいわよね！

「甘いものを食べれば、いい考えも思い浮かぶと思うのよ！」
「もうあなたって人は……はぁ～、まあいいわ。甘いものを食べたら帰るのよ！」
「もちろんよ。シェリフィー大好き！　私どら焼きと饅頭と大福が食べたいわ！　あとわらび餅も！」

「そんなにたくさん取り寄せたら、神力を消費するじゃない」
「消費すると言っても微々たるものでしょ。それにシェリフィーは神力が有り余ってるじゃない」

自分の世界のものを神界に取り寄せるには神力が必要だけど、本当に少ない神力で取り寄せられる。私は日本が大好きだから、私の世界にも日本と似せた国を作って、日本の娯楽に埋もれた暮らしをしたいのよね。
それを実現したいだけなのに、なんで上手くいかないのかしら？
今は地球の神界に来て、シェリフィーに頼むしかないから凄く不便だわ……

「確かに神力は余ってるけど……まあいいわ。どら焼きと饅頭と大福とわらび餅ね。はいどうぞ」
「シェリフィーありがと～！　あと漫画もお願いしていい？　この前一巻読んだやつの続き！」
「それを食べたら帰るんじゃなかったの！」
「食べながら読むのよ」
「もう分かったわよ。これで最後だからね！」
「うん！　シェリフィーありがとう！」

この漫画の続きが気になってたのよ！　この前一巻だけ読んだら凄く面白くて、シェリフィーに聞いたら完結してるって言うから、最後まで読みたかったのよね。
おやつもあるし。うふふ……幸せだわ。

う～ん、どら焼き最高！　中のあんこも美味しいし、外側の皮も最高に美味しい。それから私は漫画の世界に入り込んだ。美味しいお菓子と漫画、最高の組み合わせね。

「ミ……リーヌ……ミシュ……ヌ……ミシュリーヌ！」
「はぇ、あれ？　あ、シェリフィー？　どうしたの？」
今ちょうどいいところだったのに。敵の本拠地に乗り込むところよ。
「あなたいつまでいるつもり！？　何度呼びかけても反応しないんだから！」
「いつまでって、漫画を読み終わるまでだけど？」
「もうとっくに読み終わってるでしょ！　それ五回目よ」
え、五回目？　確かに何回も読んだかも……でも面白いから何回読んでも初めて読んだみたいに、ハラハラドキドキするのよね。漫画って文化は素晴らしいわ。
「そろそろ帰りなさい」
「でも今いいところなんだけど……」
「もう五回も読んでるんだからいいでしょ！　私も一緒に行くから帰るわよ！」
シェリフィーは私の手を引いて、ミルソユーテに向かって飛び始めてしまった。
「ちょっ、ちょっと、そんなに強く手を引かないで」
「そうでもしないと帰らないでしょ」
そうしてシェリフィーに引っ張られて、私はミルソユーテに帰ってきた。

「ミシュリーヌ、レオンの様子を見るくらいの神力はあるんでしょう？　レオンの様子を映して」
「なんで？」
「なんでって、私の世界から連れていった魂でしょ！　転生させるのを失敗したからって、放置しないで見守りなさいよ！」
「は、はいっ！」

シェリフィーが怖い、鬼の形相だわ。私は少ない神力を使ってレオンの様子を映した。

「ここはどこなの？」
「あれ……これって、王立学校の入学試験よ！　なんでレオンがこんなところに？」

王都の外れにある食堂の息子に転生したはずなのに、何故か王立学校の入学試験を受けている。
どういうことなの？

「ミシュリーヌ、王立学校ってなんなの？」
「この国に一つだけある学校よ。貴族とお金を持ってる一握りの平民しか通えないのよ」
「なんでそんな学校の入学試験を受けてるのよ？　確か失敗して貧しい平民に転生したのよね？」
「分からないけど……多分、優秀さから受験することになったのよ。さすが私の使徒ね！」

やっぱり私が能力を付与すると違うのね。さすが私の使徒、優秀だわ！

「あなたは結局何もできてないでしょ。全属性魔法と全言語理解の能力を付与しただけじゃない。あなたの使徒だからじゃなくて、私の世界の魂はやっぱり優秀なのよ」
「そうじゃないわよ、私のおかげよ！」
「ミシュリーヌ、まだレオンと話せてもいないんでしょう？　あなたのおかげってことはありえないわ」

うぅ……確かに何もできてないけど、辛うじて能力の付与はしたんだからね。それのおかげかもしれないじゃない。

「とりあえず誰のおかげかは置いといて、レオンが少しでも高い地位に近づいてるのは良かったじゃない。この世界を救ってくれる可能性が、一％くらいは上がったんじゃない？」
「たった一％なの？」
「だってそうでしょ。レオンはこの世界がどんなに危機的状況かも知らないし、どうすればそれを防げるのかも知らないんだもの。この状況で世界を救ってくれたら奇跡ね」
「うっ……まあ、そうなんだけど……」

どうにかレオンに知らせる方法はないかしら。私が前にこの世界に落とした神物を手に持ってくれれば、連絡できるのに。確か別の世界との穴を塞ぐ杖と本は、この国の王宮にあるのよね？　どうにか王宮でそれを手にしてくれればいいんだけど……

一回神託できるほどの神力ならあるけど、神域である中心街の教会にいる人に一人限定くらいしか無理。そうすると適当な人に神託しても、気のせいだと思われて終わる可能性が高いし……その人が信じても周りの人に信じて貰えない可能性もあるし。
神託するなら王様がいいけど、中心街の教会に来てるところなんて見たことないわよね……やっぱりどうしようもないわ。

「シェリフィー、いくら考えてもいい方法が思いつかないのよ……王宮にある神物を手にしてくれれば連絡できるんだけど、それをどうやって伝えるかが問題なの。神託は中央教会にいる人に一度が限界だし……」

「一番の問題はあなたの神力が少なすぎることよ。もう諦めて、レオンが王宮に行って神物を手にしてくれるのを待つしかないんじゃない？　その時が来るまでずっとレオンを見守ってなさい。その瞬間を逃したら最悪よ」

「そうよね……」

「地球に来てたら、レオンが神物に触れても気づけないでしょ？　これからミシュリーヌはこの世界から出るの禁止よ」

「そんなぁ～」

これから地球に行けないなんて……漫画が、お菓子が、私の大好きなものがぁ～！

「人々の信仰心が上がれば神力の回復も早まるんだから、信仰心回復に努めたほうがいいんじゃない？　少ない神力を使って、信仰心回復のために頑張りなさい」

そんな簡単に言うけど、信仰心を高めるのって凄く大変なのよ！　基本的に私への信仰心がすごく薄いか、別の勝手に作った神を信仰してるかなんだから。

でもレオンがいる国は私への信仰心は一応残ってるみたいなのよね……それなら、頑張ればまだ可能性はある？

神託は神力を消費しすぎるから他のことを考えないと。今の神力だと……中央教会にある私の女神像を光らせるくらいなら、できる

かしら？
あの女神像と教会の一部は私が作ったものだから光らせることはできるけど……光らせるくらいで何かが変わるのかしら。
でも、やらないよりはマシよね。人間の世界をまた魔物に壊されるのは見たくないわ。魔物は野蛮で嫌いなのよ。なんとか頑張らないと！

「シェリフィー、私頑張ってみるわ！」
「ミシュリーヌ、いい顔になったじゃない。頑張るのよ。たまにはお菓子を差し入れに来てあげるから」
「本当に！？　シェリフィー大好き！」

よしっ、私の世界を救うために頑張ろう！

閑話　現実逃避（ミシュリーヌ視点）（後書き）

このお話で第一章完結です！
次のお話から第二章になりますが、第二章開始まで一週間ほど投稿はお休みします。
ここまで読んで頂いてありがとうございます。これからもよろしくお願いします！

ちなみに第二章は王立学校編です！！

70、入学式の朝

今日は王立学校の入学式だ。
緊張で昨日は寝付きが悪く、今日は朝早くから目が覚めてしまった。
緊張してもしょうがないんだけど、試験の日にあんな出来事があるとどうしても憂鬱になるんだよな。
俺は緊張しながらもなんとか準備を終えて、少し早めに玄関に向かった。

するとそこには、リシャール様とカトリーヌ様がいる。どこかに出掛けるのかな？

「リシャール様、カトリーヌ様、おはようございます」
「レオン君、おはよう。いよいよ今日から王立学校だな。しっかりと頑張ってくれ」
「かしこまりました」
「無理せずに頑張るのですよ。気分の悪い思いも多々あるとは思いますが、公爵家を頼ってくれていいですからね」
「はい。ありがとうございます」

二人はそう言って俺を馬車に送り出してくれた。もしかして俺たちのお見送りで来てくれてたのか？
やっぱり、めちゃくちゃいい人たちだな……

それから少し待っていると、馬車のドアが開きリュシアンが入ってきた。
ドアが閉まると馬車が動き出す。

「リュシアンおはよう。ついに入学式だね」
「ああ、ワクワクするな！」

リュシアンは本当にワクワクしているようで、緊張感のかけらもなさそうだ。俺はこんなに緊張してるのに。
まあ、リュシアンは公爵家の長男だから、表立って何かをされるようなことはないだろうからな。俺は逆に嫌がらせをされる未来しか見えない……
強く生きよう……

「一緒に通えるのは嬉しいけど、教室も違うだろうし、顔を合わせる機会はあんまりないのかな？」
「そうかもしれないが、父上が合同の授業もあると言っていたから、会う機会もあると思うぞ」

そうなんだ……嬉しいけど会う機会がない方が平和だった気がする。でも平民の有能さを見せつけないとだからな、頑張ろう。
あれ？　でも有能さを見せつけるだけなら、良い成績をとって一年で卒業するだけでいいんじゃないか？　別に貴族の方々と会う必要はないよな。
そう考えると合同授業なんていらないかも。

リュシアンとそんな話をしながら馬車に揺られていると、すぐに会場に着いた。今日の入学式は貴族や平民で会場が分かれてはいないようで、俺が試験を受けた体育館のような建物に案内された。
王立学校の中では、基本的に従者や護衛を伴わないことになってるので、俺とリュシアンだけで歩いている。いつもは誰かしらを伴ってるから少し新鮮だな。ただ、安全面は大丈夫なのだろうか？

まあ、学校の周りは門以外高い壁で囲われてるし、門には騎士が沢山いる。中に不審者が入り込むことはできないのだろう。
それに、隠れた護衛とかいそうだよな。例えば職員に扮した護衛とか、めちゃくちゃ強い掃除の人とか。なんとなく俺のイメージだけど。

しばらく歩きリュシアンと建物の中に入ると、この前とは全く別の建物になっていた。まるでパーティー会場のようだ。
床にはカーペットが敷かれ、丸テーブルがたくさん置いてあり、一つのテーブルに椅子が五つずつ置かれている。
机の上にはグラスとお皿が置いてあるけど、食事も出るのか？
全然想像の入学式と違うな。

「新入生の方はこちらにお越しください。お席にご案内いたします」
職員の方が受付でそう言っているので、俺とリュシアンはそちらまで歩いていく。

「合格証明書を提出して頂けますか？」

合格証明書とは、合格したことが書かれていたあの紙のことだろう。入学式の案内に持ってくるように書かれていた。
俺とリュシアンは合格証明書を提出する。

「ありがとうございます。リュシアン・タウンゼント様とレオン様ですね。こちらが学生の証となるブローチです。王立学校の校内にいる時は、身に付けるようにしてください」

そうして渡されたブローチは、葉っぱのような形に青い宝石が埋まっているものだった。これって宝石なのかな？　無くさないよう

に気をつけなきゃ。

「では、職員がお席にご案内いたします」

横にいた職員がリュシアンを連れて行き、俺にも違う職員が来て席に案内してくれた。

リュシアンの席は、奥にある舞台の一番近くの席だ。多分舞台の近くから、身分の順なんだろう。

平民である俺の席は、当然一番後ろの端だ。俺的にはここが目立たなくて一番いい席な気がするけど。

ただ王立学校は、建前だけだが身分は関係ないことになっているので、生徒の座っている椅子やテーブルには貴族や平民で差がない。

高位貴族に粗末な椅子に座らせるわけにはいかないので、必然的に俺が座ってる椅子も良い椅子となっている。まあ、俺はいつも公爵家でこのレベルの家具に囲まれてるんだけどな。

周りを見てみると、後ろの方に座っている子たちは少し恐縮していたり嬉しそうな顔をしていたりするので、貴族でも下位貴族では、そう贅沢はできないのだろう。

そういえば平民はほとんどいないって聞いてたけど、俺以外の平民はいるのだろうか？　豪商の子供とかが何人かはいるはずだけど、見た目では判断できないな。

俺の今の格好だって、下位貴族相当のものだし。これ以上良い服を着ると身分が低いくせにと言われるし、これ以上ランクを落とした服を着てると、これだから平民は貧乏で嫌なんだと言われるらしい。

なので豪商の子供も、俺と同じくらいのレベルの服を着ているのだろう。それだと本当に見分けられないな。

俺が人間観察をしながら時間を過ごしていると、俺の隣の席に男

の子が来た。茶髪に金の瞳で綺麗な顔立ちだが、なんだかすごくおどおどとしてて、かなり緊張してる感じだ。顔は青白くて今にも倒れそうだけど、大丈夫か？
この様子だと多分平民だよな？

「あの……大丈夫ですか？」

俺がそう話しかけると、その子はビクッとわかりやすく驚いてこっちを見た。より顔が青白くなっちゃったよ。

「あ、あ、あの、申し訳ありません……」

え？　なんで謝られたんだ？　俺のこと貴族だと思ってる？

「私は平民ですが……」

俺がそういうと、その子はあからさまにホッとした様子で、少し体の力が抜けたようだった。

「良かった……僕もです」
「じゃあ、同じ平民同士仲良くしませんか？　崩した口調でも良いでしょうか？」
「うん、仲良くしてくれるのはすごくありがたいかも。僕緊張しすぎて倒れそうだったんだ」
「見てたらわかるよ。今にも倒れそうな顔色だよ。俺はレオン、君は？」
「僕はロニー、よろしくね」

ロニーはそこで、やっと少し笑顔を見せてくれた。それにしてもこの子は豪商の子供なのかな？　そんな感じしないけど、それに服

装も平民の中でなら良い方だけど、この学校だと浮くレベルだ。

「ロニーは商人の子供なの？」

「ううん、僕は王都の外れで母さんと貧しい暮らしをしてたんだけど、母さんが病気で死んじゃって、妹と孤児院で暮らしてたんだ」

「そうなの？　なんで王立学校に？」

「それが、孤児院の先生ですごく熱心な人がいてね、隙間時間で僕たちに勉強を教えてくれてたんだ。まあ、ほとんど時間は取れないんだけどね。僕はその時間が凄く楽しくて熱心に勉強してたら、ロニーは頭がいいから王立学校を受験しなさい、卒業できれば役人になって高い給金がもらえるわよって言われて、それで受験したんだ。でも貴族がたくさんいる学校だなんて知らなかったんだ。合格した後でそのことを言われて……」

まさかの孤児院育ちなのか……それで合格できるんだからかなり頭はいいんだろうけど、ここでやっていくのは大変だろうな。

「僕、そんな学校通えないって言いたかったんだけど、孤児院で大騒ぎになってお祝いしてもらったら何も言えなくなっちゃって……この服も教会の人とか孤児院出身の人たちが、必死にかき集めてくれたお金で買ったものなんだ。そこまでしてもらったらもう入学するしかなかったんだ。でも平民はほとんどいなくて貴族ばっかりだって、不敬だとか言って殺されないかな？　僕怖いよ……」

そんな経緯だったのか……それならこのビビり方も頷けるな。王都の外れなら、貴族の怖さは知っていても実際に会うことはなかっただろうし。

「今更怖がっててもしょうがないから、平民同士助け合って頑張ろうよ！」

「うん……もうここまできちゃったから腹は括ってるんだ。ちゃんと勉強して卒業して役人になって、お金を稼いだら妹と孤児院のみんなに、お腹いっぱい食べさせてあげるんだ。皆多分お腹を空かせてるだろうから」
「孤児院で十分なご飯が食べられないの？」
「うーん、僕はあの孤児院しか知らないけど、子供の数の割に国からの給付金が少ないから大変だって言ってたよ」

そうなのか……国営の孤児院って聞いてたから環境はいいのかと思ってたけど、そうでもないんだな。まあ、確かに普通の平民の暮らしを見てたら、孤児院が裕福なわけないか。みんな孤児院に行きたがるようになっちゃうもんな。最低限生きていけるくらいなのかも。

最初はわからなかったけど、俺の家は王都の外れでは恵まれてる方なんだよな。小さなアパートの部屋みたいなところに一家四人で暮らしてて、かなり貧しい人たちもいる。大通りから少し外れると、どんどん貧しくなっていくんだ。

それにしてもまだ十歳なのに、自分が稼いで孤児院と妹にお腹いっぱい食べさせてあげたいなんて……めちゃくちゃ泣ける話だ。

俺は今の話を聞いただけで、ロニーの力になってやりたいと思っていた。我ながらちょろいな。

「ロニー、俺たちはもう友達だ。助け合っていこう。ロニーが危なそうだったら俺が助けるよ！」
「本当に？　ありがとう、レオン」

そこまで話したところで段々と会場が暗くなって、奥にある舞台だけが照らし出された。会場の壁に取り付けられていた光球の魔石が取り外されているようだ。

入学式が始まるな。

７０、入学式の朝（後書き）

今日から第二章開始です！！
これからもよろしくお願いいたします。
基本的に今までと同様、毎日２０時過ぎに投稿する予定です！
面白い、続きを読みたいと思って下さったら、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！！
とても励みになります！

71、入学式

まず舞台上に上がってきたのは、金髪に金の瞳で背が高く、かなりカッコいい人だ。なんとなく誰かに似てる気がする？　誰だっけ？
俺が必死に思い出そうと考えていると、その人が挨拶を始めた。

「新入生諸君、王立学校入学おめでとう。私はこの学校の校長をしている、トリスタン・ラースラシアだ」

トリスタン・ラースラシア！？　ラースラシアって言ったよね？
ということは、アレクシス様の兄弟！？

そういえば前に、アレクシス様には弟と妹が一人ずついるって言ってた気がする。あの時は色々あって頭がいっぱいで流しちゃったけど、弟さんは王立学校の校長をしてたんだ。妹さんはどこかに嫁いだのかな？

「私が校長になってまだ数年だが、王立学校をより良い学びの場所にしたいと思っている。これからしっかり励んでくれ」

トリスタン様の話は軽い挨拶だけで終わった。最後に舞台を去るときに目があった気がするんだけど、気のせいだよな。絶対気のせいだ。考えないようにしよう。
俺が内心でそう言い聞かせていると、隣から小さな声が聞こえてきた。

「やばいよ……絶対やばい……校長が王族だなんて聞いてないよ……そんなの平民はいつ殺されてもおかしくないじゃないか……」

ロニーがまたネガティブになってる。ラースラシアって名前を聞けば誰でもわかるもんな、王族だって。
普通怖いよね。俺も怖いよ、どんな人かわからないし。俺に友好的な人なら心強いけど、否定的な人だったら怖すぎるよ。もう目をつけられてる可能性あるし……

「ロニー、できるだけ目立たず強く生きようね」
「うん、僕目立たないことには自信あるんだけど、この学校ではそれが逆に目立ちそうなんだ」

確かに。平民の中にいたら目立たない物静かな子ってなりそうだけど、この学校では平民丸出しのダサいやつ、いつもおどおどしてうざい奴ってなりそう。
というか、この学校では平民ってだけで目立つんだよな。特に豪商の子供じゃない平民ってなるとほとんどいないから、それだけでめちゃくちゃ目立つ。

「最悪は俺がなんとかするから、そんなに怖がらなくても大丈夫だよ」
「でも、レオンも平民だよね？　それなら何もできないじゃん。そういえば、レオンはなんで王立学校に来たの？　豪商の子供？　服装も豪華だし」

うーん、タウンゼント公爵家の後ろ盾でって言ったら絶対怖がるよな。今は言わないほうがいい気がする……

「うーん、俺も王都の外れの食堂の息子なんだよ。だけどちょっと貴族と縁があって、王立学校を受験できることになったんだ」
「そうなの？　貴族の縁って？」

「ロニーと同じような感じだよ。たまたま勉強する機会があって、他の子供よりできたから受験してみろって言われたって感じ」
「そうなんだ。僕たち似た境遇なんだね。なんか仲間がいるみたいで心強いよ」

ロニーはそう言って少しだけ笑った。とりあえず嘘は言ってないからいいだろう。ロニーが慣れてきたら、タウンゼント公爵家のことは話せばいいか。今それを話すのは流石に可哀想だ。何日か通えば慣れるだろう。

そこまで話したところで、また舞台に人が上がっていく。あれは、ステファン様じゃないか。

「新入生代表として挨拶させていただく、ステファン・ラースラシアだ。今年は、私と妹のマルティーヌも入学しているので、例年より学びが活発になることを期待する。これから長い期間を共に過ごすのだ、仲良くしてくれると嬉しい。王立学校では身分は関係ないことになっている。最低限の礼儀を弁えていれば、身分関係なしに仲良くしたい。皆もここにいる時だけは、身分はあまり気にせず活発に議論を交わしてほしい」

凄いな、こんなに大勢の前で堂々と話せるのか。流石王族だ。それに身分関係なくって言ってくれてるのもありがたい。第一王子のステファン様がそう言ってくれれば、あまり表立っては平民だからと差別できないだろう。
まあ、隠れてやるだけな気もするけど……それに、馬鹿なヤツはどこにでもいるからな……

「それでは、これからささやかながら、新入生同士で交流を深めるためのパーティーを開催する。周りの者と話して交流を深めてほし

い」

ステファン様がそう言って席に戻ると、給仕の人がたくさん現れて、身分が高い席から順番に料理が置かれていく。また、光球へ魔石も取り付けられて、また建物が明るくなっていく。

料理は、軽く食べられるようにサンドウィッチやローストビーフ、サラダなどのようだ。給仕の人が大皿から各々の皿に盛り付けている。

料理が盛り付けられたテーブルから、歓談が始まっていくようだ。従者もいないので毒見もなしに料理を食べるのかと思って観察していると、誰も料理に口をつけていない。これって形だけってことか？　後で職員の皆さんが食べるとか？　それなら料理を出す必要あるか？

まあ、慣習と言われればそれまでだけど……

席が後ろの方になると、料理に手をつける子供も現れ始めた。毒殺を警戒する必要がないってことなのかな？

こういうの見てると、身分が高いのも大変だな。

俺は少し迷ったが料理を口に運んだ。まだ俺の存在はあまり知られてないし、大丈夫だろう。早めに毒を除去する魔法を作らないとダメだな。回復魔法でできる気がするんだよなー。

というか、これからお昼ご飯は学校で食べるんだよな？　従者を連れてくるのか？　それともお弁当とか？

いや、お昼を食べるために家に帰る可能性もあるか、結構近いし。

その辺のこと聞いてなかったから、今日帰ったら聞いてみないとだな。

とりあえず考えるのは一旦やめて、このテーブルにいる子供たちと交流を図ろうと思い、周りを見てみる。

俺の右隣にいるロニーは、サンドウィッチをとても美味しそうに

食べているのでとりあえず後回しだ。このテーブルは五人座っているので、あと三人いる。
俺の左側に三人並んでいて、遠くの二人は女の子で仲が良さそうに話しているので、俺のすぐ左の席に座っている子に話しかけてみる。

「初めまして、レオンと申します」

俺がそういうと、その子供は不機嫌そうにこちらを見て言った。

「お前初めて見る顔だけど、どこの商会の子供なんだ？」

は？　初対面で何この態度。もしかしてめちゃくちゃイラつく感じのガキですか？　すでに仲良くなれそうにない！

「私は商会の子供ではないです。食堂の息子ですけど」
「ふんっ、やっぱりそうか。この辺に座ってるのは平民だ。貴族と取引のある大きな商会の子供は、皆の顔を知っているからな。顔を知らないってことは貧しい平民だと思ったんだ。俺はお前みたいなやつと関わるつもりはない」

むっかつく！！　何こいつ。豪商の子供だからって、結局は同じ平民じゃないか。貴族ばかりの王立学校で、商会の子供ってことを誇ったって意味ないだろ！
はぁ～……こいつは自分より下の地位にいる奴を見つけて、いじめたいだけなんだ。それでちっぽけな優越感に浸りたいタイプだ。
めんどくさいから関わらないようにしよう。

俺はもう話すのはやめて、食事に集中することにした。こんなやつと話してたら気分が悪くなるだけだ。

「おい、お前なんか言えよ。俺の言葉を無視してもいいと思ってんのか？」

はぁ？　お前が関わらないって言ったのに、なんで話しかけてくるんだよ！

もう敬語で話すのもやめてやる。同じ平民だからいいだろ。

「うるさい。関わりたくないんじゃなかったの」

「お前……！　俺にそんな口を聞いて、うちの商会は貴族様御用達のヴォクレール商会だぞ！」

凄い商会なのかもしれないけど初めて聞いたし、それに直ぐに家を自慢する奴って、自分には自慢できるところがないって言ってるようなもんだよな。

マジでめんどくさい。

「すごいねー」

とりあえず適当に褒めておいた。

あんまり使いたくないけど、めんどくさい奴にはタウンゼント公爵家の力を使ってもいいかな？

もう目立ちたくないとか無理なことがわかった。商会の子供でもない平民っていう時点で、めちゃくちゃ悪目立ちしてるんだな。それなら隠すよりも公爵家に守ってほしい。

俺が言ったところで信じてくれないだろうから、リュシアンに来てもらわないとかな。後は、公爵家の紋章でも見せればいいのかな？　ただ、それなら信じてもらえるだろうけど、それをやりたくない自分もいる。もう少しだけは平穏に過ごしたい……

はぁ～、前途多難だ。

71、入学式（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューを是非よろしくお願いします！
とても励みになります！！

72、施設案内

それからは、ロニーとポツポツと会話をしつつサンドウィッチを食べて、ささやかなパーティーは終わった。

なんか疲れた。

「それでは、これからクラスごとに施設案内をいたします。まずはAクラスからです」

この学校は五つのクラスに分けられていて、Aクラスが高位貴族のクラス、Bクラスが中位貴族のクラス、CとDクラスが下位貴族のクラス。そしてEクラスが騎士爵と平民のクラスとなっているらしい。

今は、Aクラスの人達が職員に誘導されて外に出ていっている。その様子をぼーっと眺めていると、こっちを見ている視線があることに気づいた。

誰だろ？　俺もその人物をしっかりと見るために、目を凝らしてみる。うーん……マルティーヌ！？

マルティーヌは俺の視線に気づいたみたいで、俺と目が合うと満足したのか少しだけ微笑み、ステファン様の方に向かって歩いて行った。

今の誰にもバレてないよな……？　俺は恐る恐る周りを見てみるが、誰も気づいた様子はない。セーフだ。

マルティーヌと俺の繋がりは、秘密にしないといけないと言われている。知り合った理由が病気を治したことで、公表するわけにはいかないからな。

最初は初対面として振る舞い、リュシアンを通じて知り合ったと

いう体ならいいそうだ。リュシアンと俺の繋がりは、隠す必要はないどころかアピールした方が良いくらいだからな。
それにしても、さっきみたいなのは心臓に悪いからやめてほしい……

それから、Bクラス、Cクラス、Dクラスと案内され、最後に俺のクラスの番になった。
やっとか。残っているのは三十人くらいだ。Aクラスは十人くらいしかいなかったから、クラスによって人数のばらつきがあるんだな。

「それではEクラスの皆さん、私について来てください。施設をご案内いたします。まず、今いるこの建物は訓練場と言って、剣術の授業やダンスの授業で使用します。この訓練場が、西側の一番端にある建物です」

訓練場の前の入り口から外に出ると、渡り廊下のような感じで、建物と建物がつながっていた。
左側にはグラウンドのような広場がある。ここはなんだろう？

「左側の広場は、魔法の訓練場です。魔法の授業で使用いたします」

先生がそう言うと、隣を歩いていたロニーが顔を青くした。

「どうしたんだ？」
「魔法の授業なんてあるの？　僕、魔法は苦手なんだ。魔力量が一しかないからほとんど使えないし……」
「そうなんだ。でも、魔力量が少ない貴族だっているんだし、大丈夫じゃない？　魔力量が多い人だけ魔法の授業があるのかもよ」
「それなら良いんだけど……」

確かに魔力量が一しかないと、授業をしても意味ないよな。選択授業とかあるのかもしれない。

そんなことを考えながら渡り廊下をまっすぐに進むと、豪華な建物の入り口に着いた。

正門から見た時に、真ん中に豪華で横に長い建物があり、その右側に少しこじんまりとした古い建物。左側に小さいが豪華な建物、そして訓練場があった。

ということは、この建物は少し小さいけど豪華な建物だな。職員の方はこの建物に入っていくようだ。

「この建物は食堂です。一階は高位貴族の方が使う特別食堂となっていますので、皆さんが使用することはないと思われます。二階と三階は誰でも使用できる大食堂です。学生は昼食が無料で食べられますので、ぜひ活用してください。では、大食堂へご案内いたします」

そう言って職員の方は二階へ上がっていく。もっと詳しく説明してほしかった。特別食堂ってなんだろ？　今日帰ったら聞いてみるしかないな。

二階に上がると、たくさんの机と椅子があり、奥にカウンターがある。カウンターで料理を注文して、自分で料理を机に持っていき食べるスタイルのようだ。日本の大学の学食にそっくりだな。ただ、食べ終わった食器の片付けは、専門の人がやってくれるのでそのままでいいらしい。

三階は、机と椅子がたくさん並んでいるだけで、二階の席が満席だった場合は三階を使うらしい。

平民は三階を使った方が良いとか、暗黙のルールがありそうだな。とりあえず、三階を使っておけば文句は言われないだろう。

「レオン、昼食が無料だって！　凄いよ！」

ロニーがかなり興奮してそう告げてきた。まあ、ロニーは満足に食事を取れない生活をしてきたんだから騒ぐのはわかるけど、ちょっと声が大きい。聞かれたら馬鹿にしてくる奴が絶対いるから！

「ロニー、声が大きいよ」

俺は小声でそうロニーに告げた。ロニーはすぐに口を塞いだが、少し遅かったようだ。

「やっぱり貧乏人は卑しいんだな。昼食が無料で食べられることにそこまで騒ぐとは、恥ずかしくて同じ平民だと思われたくない」

さっき俺の左隣に座ってた奴だ。絶対こいつが何か言ってくると思ったんだ。

「それにお前の服装は貧相すぎないか？　貧乏がうつるから近寄らないでくれ」

はぁ？　この服は孤児院の人たちが必死に集めてくれたお金で買ったんだぞ。そうロニーが言っていた。それを馬鹿にするとは、絶対許せん！

俺が文句を言ってやろうと口を開きかけた時、ロニーが一足先に口を開いた。

「ご、ごめんなさい！」

「ロニー！　ロニーが謝る必要なんてないよ」

「でも、今騒ぎを起こすわけにはいかないし、僕が謝れば丸く収ま

るなら良いんだ」

確かに今は、まだ施設案内の途中だったな。そのことに気づいて、俺も少し落ち着いた。

「ロニーがそう言うなら……」

絶対いつかやり返してやる！

俺がそう誓っていると、食堂の案内は終わったようだ。

「それでは次の建物に参ります」

食堂のある建物を一階まで降り、入ってきた方と逆の扉から外に出ると、少しだけ渡り廊下があり、直ぐにより豪華な扉がある。

これが、正面から見た時に真ん中にあった建物だな。かなり豪華で横に長かった。

職員の方はその建物に入っていく。おお、この建物は高位貴族しか入れないとか、そこまでの差別はないんだな。

「この建物が本館です。一階は先生達の個人部屋があります。先生を訪ねたい時は、しっかりノックをして入室許可を得てから部屋に入るようにしてください。一番奥にある広い部屋は王立学校で働く職員の部屋ですので、何か不都合がありましたら、そちらの部屋に知らせてください」

一階はここで働く人のスペースなんだな。

この学校の職員は、様々な雑務をこなしている感じなので、日本で言う事務の人みたいな感じだ。しかしそれよりもたくさんの人数

がいるし、仕事内容も多岐に渡っているようなので、王立学校の使用人って感じだな。
先生は授業をすることだけが仕事なのか、そのほかの雑務はやらないみたいだ。さっきの入学式も横にずらっと並んでいたのが先生達だろう。パーティーが終わるとすぐに全員建物から出て行ってしまった。
多分先生達は貴族か準貴族で、職員は平民なのだろう。

「それでは二階に上がります。二階はAクラスとBクラスの教室がありますが、そのほかの施設はありませんので、そのまま三階に行きます」

階段は建物の中心にあった。階段の左右に建物が伸びていて、最終的に行き止まりになる作りのようだ。
二階はAクラスとBクラスってことは、ここにリュシアンやマルティーヌ、ステファン様がいるんだな。

「ここが三階です。三階は、Cクラス、Dクラス、Eクラスの教室があります。皆さんはEクラスですので、Eクラスの教室へご案内いたします」

Eクラスの教室は、階段を上がって左に続く廊下を進んだ、一番奥の部屋だった。同じような部屋が八つほどあったので、他の学年の教室もあるのだろう。今日は、先輩方は休みみたいだな。
広さは、日本の教室よりも少し広いくらいの大きさだ。前には、先生が使うのであろう机と椅子が置いてあり、先生の方を向くように、生徒の机と椅子が配置されている。
机と椅子は、木で作られた簡素なものだ。これってクラスによってグレードが変わるのかな？
ちょっと興味ある……リュシアンに聞いてみよう。

「皆さんはこれから、基本的にこの教室で授業を受けます。隣の教室はEクラスの二年生の教室です。明日から授業が始まれば、他の学年の生徒も登校してきます」

やっぱり他の学年の教室なんだな。学年ごとに教室をまとめるのではなく、クラスごとにまとめてるのがこの学校らしい。

高位貴族の子供達を一箇所にまとめていた方が、守りやすいとかの理由もあるんだろうな。

「それでは次の建物に参ります」

次の建物は、正面から見た時に右側にあった、少し古そうな建物だった。豪華さはあまりなく、質素堅実って感じだ。日本の小学校の建物に似ている気がする。

「この建物は研究棟です。一部の学生は放課後に集まって研究活動をしていますが、その時に使われるのがこの建物です。火魔法研究会や剣術研究会、魔法具研究会などたくさんの研究会があります。研究会には主催している先生の許可があれば入れますので、興味のある方はぜひお入りください」

部活とかサークルみたいなものか！　この世界にもあるんだな。魔法具研究会とかめちゃくちゃ面白そう。

でも、魔鉄と魔石って簡単にはもらえないと思うけど、この研究会には少し分配されているのだろうか？　それなら入りたいな！

剣術研究会とかも楽しそうだよな。毎日鍛錬するのかな？　どれに入るのかリュシアンにも聞いてみよう。

「それでは次で最後の建物です」

そう言って連れてこられたのは、本館の後ろにある建物だった。結構大きな建物だな……なんだろう？

「こちらは図書館です」

図書館！！　図書館なんてあるのか！！

「学生なら出入りは自由ですので、受付にブローチを見せれば入ることができます。図書館の中で本を読むのであれば無料で読めますが、図書館の外に持ち出す場合には保証金が必要になります。保証金は本一冊につき銀貨一枚です。本を返却した時に保証金はお返しするので、本を紛失しない限りお金がかかることはありません」

素晴らしい……！　この世界に来て、ここまでたくさんの本があるところを初めて見た。日本ではあまり本を読まなかったけど、それは他に娯楽がたくさんあったからだ。娯楽が少ないこの世界で本はとても貴重だ。

図書館最高だな。絶対ここには近いうちに来よう。

「それでは、これで施設案内は終了となります。これから皆さんのクラス担当の先生から、授業についての説明がありますので教室に戻ってください。ありがとうございました」

これから本当に学生生活が始まるんだな！　わくわくして来た！

72、施設案内（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

73、担当の先生と授業内容

俺たちは教室に戻ってきて、各々席に着いた。席には名前が書いてある紙が置かれていたので、すぐに自分の席が把握出来た。
俺の席は、廊下側から二列目の一番後ろ。右隣がロニーで、左隣があの嫌な奴だった。あんな奴と隣なんて最悪だ。
机の横には、カバンを入れる籠みたいなものが付いていたので、そこに鞄を入れる。

それからしばらくロニーと話しながら時間を潰していると、教室に一人の先生が入ってきた。
結構ガタイの良い、四十代くらいに見える男性だ。日に焼けていて明らかにスポーツマンって感じだな。

「皆揃ってるな！　俺はこのクラスの担任になった、スティーブ・オーブリーだ。スティーブ先生と呼んでくれ。剣術の授業を担当している。これからよろしくな」

なんか、暑苦しそうな人だな。剣術の先生ってところが納得だ。ファミリーネームがあるってことは貴族なんだろうけど、貴族っぽさがない。今の服装も生地は上等な物みたいだけど、動きやすそうな簡素な服を着ている。

「この学校は生徒より先生の方が立場が上ってことになってるから、身分関係なく先生には敬語を使うんだぞ。先生は基本的に、生徒には謙らないことになっている。まあ、これは建前だけのことも多いけどな」

建前だけとか先生がそんなことを言っても良いのか？　でも、正直な先生で好感が持てるかも。当たりの先生かもしれないな。

「いろいろ説明しないといけないことがあるんだが、まずは自己紹介からだ。俺が名前を呼んだら自己紹介してくれ」

そこからは身分が高い順に自己紹介となった。騎士爵の子供たちがどんどんと自己紹介をしていく。

名前と得意なことなどを自由に言っているが、こんなにたくさん聞いても覚えられないよ。日本でも思ったけど、自己紹介ってあんまり意味ないよな。三人目で既に覚えるのは諦めた。

その代わり子供達を観察していると、結構がっしりとした、鍛えている体型の子供が多いことに気づいた。騎士爵ってやっぱり武勇でもらうことが多いのかな？　それなら子供にも剣を教えるよな。たまにひょろっとした体型で肌も白い子供がいるので、その子供の親は研究とか武勇以外で、騎士爵をもらったのだろうか。

それから性別でも違いがある。やっぱり女子の方が鍛えてない人が多いみたいだ。ただ、何人か明らかに強そうな女子もいるので、女性騎士を目指しているのだろう。

まあ、全部俺の推論だけどな。

そんな推論をしているうちに、俺の左隣のやつの順番が来た。やっとこいつの名前がわかるな。

「次、サリム」

「はい。サリムと申します。ヴォクレール商会の長男です。得意なことは計算です。何かご入用のものがございましたら、是非当商会をご贔屓ください。これからよろしくお願いいたします」

サリムっていうのか、というかこんなとこで宣伝かよ、ブレない

奴だな。さっきまでの俺に見せてた蔑みの表情はなんだったんだと思うほどの笑顔だ。商売人としては優秀なのか？

「次、レオン」

ついに俺の番だ。こういうの結構苦手なんだよな。

「はい。レオンと申します。計算と魔法が得意です。これからよろしくお願いします」

よし、無難に終わったな。こういうのは目立たず無難に終わらせるのが一番なんだ。

「次で最後だな、ロニー」

「はっ、はいっ！」

ロニーは緊張で慌てすぎて、立ち上がると同時に椅子にぶつかり机にぶつかり、大きな音を立ててそれによりまた慌てている。はぁ～これじゃあ、めちゃくちゃ目立ってるよ。

「おい、落ち着け。自己紹介するだけだぞ？」

スティーブ先生がそういうことで、少しだけ落ち着きを取り戻したようだ。

「は、はい……すみません……ロニーと申します。よろしくお願いします」

それだけを小さな声で言って、そのまま席に着いた。こんな性格でこれからやっていけるのか？

「よし、とりあえず自己紹介は終わりだ。同じクラスの仲間なんだ。これから仲良くやってくれ」

仲良くなんてできるのか不安しかない。このクラスは騎士爵の子供しかいないからまだマシだと思うけど、それでも爵位があるなしには大きな差がある。

騎士爵だと貴族の中では底辺だから、逆に平民には威張り散らせると思って、平民を虐めることで日頃の鬱憤を晴らす奴とかもいそうだよな。やっぱり全然マシじゃないかも……

平民同士でも仲良くできそうにないし、前途多難すぎるよ。

「とりあえず今日は、授業の説明をして教科書を配ったら終わりだ。まずは授業だが、基本的にはこの教室でクラス単位で受けてもらうことになる。午前に二つ、午後に二つで一日に四つの授業だ。その四つのうち、最後の授業だけが合同授業となっていて、一年生のすべてのクラスが合同で行われる。回復の日は休みなので一週間のうち四日授業があるが、そのうちの二日が剣術で、魔法とダンスが一日ずつだ。剣術とダンスは必修だが、魔法は魔力量が四以上の者のみ必修となる。魔法の授業がない者は自由時間だ」

回復の日は休みなんだな。ということは、四日行って一日休みのサイクルってことだ。

それに、結構合同授業があるんだな。俺が一番気をつけないといけない時間だ。ただ、剣術の授業とか、ちょっとだけ楽しみでもあるけど。

「じゃあ、一週間の時間割を配るぞ。これ最初に配っておけば楽だったな」

時間割なんてあるのかよ！　最初に配ってくれればさっきの説明がもっとわかりやすかったのに。
配られた時間割には、曜日と時間と授業内容が書かれていた。これによると、一つの授業は一時間半で授業の合間に二十分の休みがあり、お昼休みは一時間半ある。
お昼休み結構余裕あるな。
合同授業は、剣術、魔法、剣術、ダンスの順番らしい。それ以外の普通の授業は、計算、読み書き、歴史、礼儀作法などそこまで難しくなさそうなものから、経済、政治など日本では大学生がやるようなものまである。魔法具の授業もあるみたいだ。魔法具って魔力量が多くないと作れなかったはずだけど、全員参加なのかな？
それに、これって自動翻訳で経済と政治って訳されてるんだろうけど、どの程度の難易度なんだろう？　かなり真面目にやらないと一年で卒業するの難しいんじゃないか？　頑張らなきゃ……

「基本的には、一年間この時間割で授業があるから無くさないようにな。変更がある場合は前日までに知らせることになってる。それから、毎朝一つ目の授業の二十分前くらいに俺が来て、出席確認と連絡をするからその時間には教室に来ているように」

日本でもあった、朝の会みたいなやつか。なんか学生に戻った感じでちょっとだけテンション上がる！　まあ、本当に学生に戻ってるんだけどね、異世界で。

「何か質問とかあるか？」
「はい。剣術の授業など、着替えが必要な場合はどこで着替えればいいのですか？」
「ああ、その説明を忘れてたな。訓練場には広い更衣室がある。個人の鍵付きロッカーもあるから、そこで着替えて荷物はロッカーに入れるんだ」

「わかりました。ありがとうございます」

一番前の席に座ってる、真面目で堅物そうな女の子が質問をした。鍵付きのロッカーがあるのはありがたいな。俺の荷物なんて、その辺に置いておいたらすぐに盗まれるか嫌がらせをされるかに違いない。

「他にあるか？」

誰も質問しない。まあ、実際に生活してみると疑問って出てくるものだよな。

「まあ、おいおい疑問点があったら聞いてくれ。毎朝クラスには来るからな。それじゃあ、教科書とロッカーの鍵を持ってくるからちょっと待ってろ」

そう言ってスティーブ先生は教室から出て行ってしまった。ちょっと教科書もらうのも楽しみなんだよな。

俺がわくわくしながら先生を待っていると、ロニーが小声で話しかけてくる。

「レオン、僕目をつけられたかな？」

「うん？　さっきの自己紹介のこと？」

「そう」

「まあ、目立ってはいたけどあれくらいなら大丈夫じゃない？　でも、もう少し堂々としてた方がいいよ。試験に受かって正当に入学してるんだから」

「そうだよね。僕もそうしたいんだけど、どうしても緊張して……今まで貴族様となんて会ったこともなかったから」

確かに初めて貴族と会うのが王立学校って、かなり緊張するかもな。貴族ばかりだし、ずっとこの中で生活していくことを考えたら緊張するのかも。

俺はなんだかんだ、タウンゼント公爵家の方々とか王族の方々に会ってるから慣れたんだな。

どうやったら緊張が解れるだろう？　日本では、人をジャガイモだと思え、とか言われてたよな。あとは、手に人って書いて飲み込むんだっけ？

「周りの人を皆ジャガイモだと思えば緊張しないって、聞いたことあるよ」

「ジャガイモ……？　なんでジャガイモなの？」

「それは知らない」

「とにかく試してみるよ」

「うん。あとは、手に人って書いて飲み込むといいんだって」

「手に人って書くの？」

「そう。こうやって書いて、飲み込むような感じにするんだけど、効果があるかはわからない」

「とりあえずやってみる」

「頑張って」

ロニーが手に人って書いて何回も飲み込んでる。小声でジャガイモって呟いてる。なんかますます怪しい人にしちゃったかも……

ロニー、役に立たなくてごめん。

それからしばらくして先生が戻ってきた。先生が鍵の束を持っていて、後ろには教科書を持った職員が何人かいる。

「待たせたな。じゃあ渡していくから、名前呼んだ奴から前に取りにきてくれ」

そうして俺たちは、ロッカーの鍵と教科書を受け取った。教科書はあまり分厚くはないが全教科分ある。この世界に来て、この量の本を持ったのは初めてだ。

「教科書は卒業の時に回収するから大切に使えよ。紛失したりもう使えないほど傷付けたりしたら、一冊につき銀貨一枚払ってもらうことになってるから気をつけろ」

教科書返さないといけないのか。確かに印刷技術がないから、この量の本を毎年用意するのは大変だよな。

多分傷んできたものを、毎年何冊か新しくしてるんだろう。そして、その新しい教科書はＡクラスの人たちに配られるんだろうな。俺に配られた教科書は結構傷んでるし。

「これで今日は終わりだ。明日から学校が始まるから遅れないようにな。じゃあ、解散」

73、担当の先生と授業内容（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

74、レオンの後ろ盾

やっと終わったか……疲れた。早めに馬車まで行かないと、リュシアンを待たせてるかもしれないからな。

そう思って立ち上がり、教室から出ようとしたところでロニーに話しかけられた。

「レオン、もう帰るの？」

「うん。早く行かないと人を待たせてるかもしれないから」

「そうなの？　レオンがよければ一緒に帰ろうかと思ったんだけど、そう言えばレオンってどこに住んでるの？　僕は少し遠いんだけど、安いアパートを見つけたからそこに住んでるんだ。もし同じ方向なら一緒に帰れるかな？」

どうしよう……タウンゼント公爵家のこと話しても大丈夫かな？

ロニーも少しは落ち着いたみたいだし、後で知った方がショックがでかいよな。嘘をつくのも嫌だし。

タウンゼント公爵家的には俺との関係を公表して、レオンの後ろ盾はタウンゼント公爵家ってことを強調したいだろうから、逆に話した方がいいだろうし。

「ロニー、驚かないで聞いてね」

「うん。どうしたの？」

「入学式の時に、貴族との縁があって王立学校に入学したって言ったけど、その貴族がタウンゼント公爵家なんだ。それで公爵家の屋敷に住まわせてもらってる」

「公爵家……？　レオンが、公爵家の、屋敷に、住んでるの？」

「そう。だけど俺は平民だからあまり気にしないで。今まで通り友

達でいてくれたら嬉しい……ただ、そういうことだから一緒には帰れないんだ……ごめんね」
「うん、それは別にいいんだけど……公爵家？」
ロニーは頭の処理が追いついていないらしく、ぼーっとしている。ロニー、急にこんなこと言って本当にごめん！
でも、とりあえず今は帰ってもいいかな。リュシアンとはいえあまり待たせるのは良くない。
「じゃあ、あまり待たせられないから、とりあえず今日は帰るね」
「うん……」
とりあえずロニーには、事実を話したからいいことにしよう。また明日ちゃんと説明すればいいよな。
俺は自分でそう納得して、今度こそ帰ろうと教室の出口に足を踏み出した。しかしそこで、また俺を止める声が後ろから掛かった。
「お前、確かレオンだったか？　そんな嘘ついていいと思ってるのか」
サリムだ。あぁー、こいつマジでめんどくさい。急いでるっていうのに。
「嘘じゃなくて本当のことだよ」
「公爵家が平民の後ろ盾になって王立学校に通わせるなんて、絶対にあり得ないだろ。今すぐ撤回した方が身のためだぞ」
こんな嘘つくわけないだろうが、なんで本当だとは思わないんだ？　まあ、公爵家が平民の後ろ盾になって王立学校に通わせるなんて、今まではなかったのかもしれないけど、公爵家の名前を使った

嘘を平民が言うわけないじゃないか。

「別にお前に信じてもらう必要はない。俺は嘘をついてないからな」

「じゃあ、お前は騙されてるんだな。どこかの詐欺師にでも引っかかったんじゃないか？　ははっ、笑えるな」

どこの詐欺師が子供を騙して王立学校に通わせるんだよ！　詐欺師にメリットないだろうが！

サリムって馬鹿なのかな？　でも試験には受かってるんだよね。まあ、あんなの真剣に勉強すれば受かるか。多分ギリギリで入学できたタイプだろうな。

もうめんどくさい、無視でいいかな。そのうち、俺がタウンゼント公爵家の馬車に乗ってくることが知られて、嘘じゃないって理解するだろう。それまで放置でいいや。

俺はめんどくさすぎて、そのまま放置して帰ろうとした。

「お前逃げるのか！」

逃げるんじゃねぇよ！　こっちは忙しいんだ！

俺はちょっと頭に来て、振り返って言い返してやった。

「逃げるんじゃないから。俺は忙しいんだよね。お前みたいな、めんどくさくて話が通じない馬鹿に付き合ってる暇はないの」

俺がそういうとサリムは怒りが頂点に達したのか、顔が真っ赤になっている。

そうして、サリムがまた何かを叫ぼうとした瞬間、俺の後ろから声が掛かった。

「レオン、何やってるんだ？」

その声に、サリムは驚きの表情を浮かべたままフリーズしている。まだ教室にはほとんどの生徒が残っていたが、その誰もが俺の後ろを見てフリーズしている。

この声は……なんでこの教室にいるんだ？

俺は後ろを振り返り、その声の人物に挨拶をした。

「リュシアン様、このような場面を見せてしまい申し訳ございません」

リュシアンなんでこの教室に来たんだよ！　まあ、俺にとってはタウンゼント公爵家の後ろ盾があることを示せて、感謝すべきことなのかもしれないけど、それにしてもめちゃくちゃ目立ってるよ。さすがにEクラスの教室に来るのはやりすぎじゃないか？

もう、目立たず過ごすのは無理だな……何日かは普通の平民としていけるかと思ってたのに……まあ、この学校だと普通の平民がめちゃくちゃ目立つから、どっちもどっちだけど。

でも、商人の子供でもないただの貧しい平民なのに、公爵家の後ろ盾があるって目立つ要素がプラスになってないか？　はぁ～、考えるのはやめよう。

それにしても、Aクラスの人がEクラスの教室に来るってありなの？

なんでここに来たんだろう……？　もしかして、馬車で待ってても俺が来ないから迎えに来たとか！？

サリムなんか無視して、早く行けばよかった……

「もしかして、馬車でお待たせしてしまいましたか？」

「いや、私もまだ馬車には行ってないから大丈夫だ」

それなら、なんでこっちに来たんだ？

「それなら良かったです。では、私に何か御用でしょうか？」

「ああ、レオンを紹介しろと言われてな。ステファン様、マルティーヌ様、こちらへどうぞ」

リュシアンがそういうと、ステファン様とマルティーヌが扉の向こう側から教室に入ってきた。

え！？　なんで二人が来たの！？

「こちらが私の友人のレオンです。平民ですがとても優秀で、話していると勉強になる事もたくさんございます」

そうか、初対面ってことになってるんだよな。もしかして、これからボロが出ないように、早めにリュシアンからの紹介って形で会わせてくれたのか？

それはありがたいけど……ちょっと目立ちすぎだよリュシアン。

「お初にお目にかかります。レオンと申します」

「レオンだな。私は第一王子でステファン・ラースラシアだ。ステファンと呼んでくれ」

「私は第一王女でマルティーヌ・ラースラシアですわ。マルティーヌと呼んでくださいね」

「かしこまりました。ステファン様、マルティーヌ様、よろしくお願いいたします」

俺がそう言ってしっかりと頭を下げると、ステファン様は威厳ある表情で頷き、マルティーヌは少し笑顔を見せてくれた。

その笑顔に、教室にいた他の子供たちがざわつく。皆フリーズか

らは戻ったみたいだね。

「私、レオンともっとお話ししたいですわ」

「ああ、私も少し話してみたいな」

「では、これから公爵家の屋敷にいらっしゃいますか？　王宮には、事前に申請していなければ訪れるのは難しいでしょう」

「それはありがたい。では公爵家の屋敷に伺おう」

なんか公爵家に一緒に行くことになってませんか？　俺も一緒にですよね？　話の流れ的にそうですよね！

なんかこの流れは流石に無理がないか？　普通こんな話になるのか？　まあ、俺が考えてもしょうがないか……

というか、リュシアンとステファン様、マルティーヌって仲良かったっけ？　多分今までは、パーティーで会ったことがあるくらいじゃないのか？

今日一日で仲良くなったのかな？

「レオンもそれでいいだろうか？」

「大変光栄なことでございます」

この流れで俺が断れるわけない。

「レオンと話していた君も、レオンを連れて行ってしまってもいいか？　まだ話があるようなら少しは待つが」

リュシアンがサリムに向かってそう言った。サリムはまだフリーズしていたが、その言葉で我に返ったようだ。さっきは真っ赤だった顔が今度は青くなってる。

「め、滅相もございません。もう話は終わっていますので、気にな

さらないでください」
「そうか、それならいいんだ。じゃあ行こうか」
「かしこまりました」

俺はリュシアンに付いて歩き出しながら、チラッとロニーの方を見た。ロニーはまだ目の前で起こってることが理解できてないのか、フリーズしたままだ。
俺がロニーに視線を合わせると、目があった。とりあえず見えてるようで良かった。
俺は口パクで「ごめん」と告げて教室の外に出た。明日しっかり話そう。

それからはかなり目立ちながら、三人の後ろをついて歩き、四人で公爵家の馬車に乗った。
王家の馬車は俺たちの後ろをついてきて、二人を公爵家から王城に送り届ける役目を果たすらしい。
はぁ～とにかく疲れたけど、まだ気が抜けないな……

７４、レオンの後ろ盾（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが気になると思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

75、馬車の中の親睦会

馬車に乗ると、まずはマルティーヌが話しかけてきた。

「レオン、最近会ってなかったから久しぶりね！」

「はい。お久しぶりです」

「もう、なんでそんなに他人行儀なの。ここでは敬語は必要ないわ。二人きりの時と同じでいいわよ」

でもステファン様もいるし、リュシアンもいるし……

「ですが……」

「レオン、マルティーヌとリュシアンには砕けて話しているのだろう？　二人に聞いたぞ。私にも同じで敬語は要らないし、ステファンと呼び捨てにしてくれ」

ステファン様も！？　それに、なんでそのことを話してるんだ？

「レオン、私たち三人はレオンの話で意気投合して友達になったのだ。私もステファン、マルティーヌと呼んで、砕けた口調で話すことを許してもらった。周りに他の者がいない時はいいだろう。この四人だけでいる時はかしこまった口調はなしでいこう」

「レオン、お兄様は自分だけレオンと距離があるように感じて、寂しいのよ」

「マルティーヌ！」

ステファン様は、焦ったようにマルティーヌを止めたが、少し遅かったみたいだ。俺たちはバッチリと聞いてしまった。

「そこまで焦らなくても良いのではありませんか？　お兄様はしっかりしすぎなのです。少しは気を抜いた方が良いですわよ」

マルティーヌがそう言うと、ステファン様は恥ずかしそうに俯いてしまった。堂々とした王子様の姿しか見てなかったから、こんな姿は新鮮だな。

しかし、仲間外れに感じて寂しいとか結構可愛いところもあるんだな。もう王子様として完成されてるのかと思ってたよ。でも、良く考えたらまだ十歳だもんな。

俺たちと話すことが、少しでも息抜きになってくれたら嬉しい。

そんなことを考えていると、ステファン様が復活したようだ。さっきまでより少しだけ表情が柔らかくなった気がする。

「確かにそうだな。私だけに敬語を使われるのは、距離を感じて寂しいのは確かだ。私にも親しく接してくれないか？」

そんなこと言われたら、了承するしかないじゃないか。

まあ確かに、マルティーヌとリュシアンには砕けた口調で話してるんだし、ステファン様だけ仲間外れにするのも微妙だよな。

他の人がいない時だけなら良いだろう。俺がしっかり使い分ければいいんだ。頑張れ、俺。

「わかった。じゃあ、ステファンって呼ぶよ。これからよろしくね」

「ああ、レオンありがとう」

ステファンはそう言って、嬉しそうに笑った。なんでこの三人は俺が敬語を使わないと嬉しそうにするんだ？　普通は逆じゃないか？

「そういえばレオン、さっきはどうしたんだ？　何か言い合ってたみたいだけど、私はレオンが怒っているのを初めて見たぞ」

そうリュシアンに聞かれた。さっきの言い合いか……どこから聞かれてたんだろう？

「どこから聞いてたの？」

「レオンが言い合っていた相手が、逃げるのか！　って叫んだところからは聞こえてたぞ。その後にレオンかなり怒ってただろ？　あんなことをいうレオンは初めて見た」

そこ聞かれてたのか！　結構イラついてて、汚い言葉遣いだった気がする……今まで保ってた良い子のイメージが！

まあ、そんなイメージがあったのかわからないけど。

「あの時はイラついてて……聞いたことは忘れてください。お願いします」

「あれは、忘れられないぞ」

リュシアンが少し笑いながらそう言った。リュシアン、俺を揶揄って楽しんでるだろ！　たまにそういう子供っぽいことするんだよな。

「リュシアン！」

「ははっ……わかったわかった、忘れるように努力はする。それよりも何であんな言い合いになったんだ？」

「それは……俺がタウンゼント公爵家の後援を受けてるって話を聞いてたみたいで、そんなのは嘘に決まってるって言われて、そこから言い合いになっちゃったんだ」

今思えばもっと冷静でいれば良かった。入学式の時からイライラが溜まってたから爆発したんだよな。でも、今思い出してもムカつくな。

「確かに、今まで公爵家が平民の後見をすることなんて、なかったからな。レオンがタウンゼント公爵家所属の平民だと、広めた方がいいかもしれないな」

やっぱり広めるよね。まあ、それによって俺は煩わしいいじめが減るというメリットがあり、公爵家は勢力の後押しとなるというメリットがあるんだから、広めた方がいいよな。

「その方がいいかもね。でも、多分俺が言っても信じてくれないよ」

「うーん、どうすればいいだろうか？　レオンが公爵家の馬車を使っているからいずれは広まると思うが、できれば早い方がいいだろう」

リュシアンと俺が悩んでいると、ステファンが助け舟を出してくれた。

「それならば、昼食を共にすればいいのではないか？　レオンが公爵家の特別食堂で食事を取れば、すぐにでも広まるだろう」

「確かにそれはいいな！　レオンはそれでいいか？」

えっと……まず俺は、特別食堂が何か良くわかってないんだよな。

「ちょっと待って、俺は特別食堂が何かよく知らないんだけど……」

「説明されなかったのか？」

「うん。高位貴族が使うものだから関係ないって感じで、説明が省かれたんだ」

「そうなのか。特別食堂は確か、二十部屋くらいあるんだ。一つ一つの部屋に小さな厨房と食堂があって、一年単位で借りることができる。高位貴族はそこを借りて、家から料理人と従者を連れてきて昼食を取るんだ」

そんな仕組みになってたのか！　そういえば、昼食の毒見はどうするんだろうかと思ってたけど、そんな方法で解決してたんだな。

「そんな仕組みになってたんだ」

「ああ、公爵家で特別食堂を借りているからレオンもそこで一緒に食べよう」

これはありがたい！　俺も毒殺は気をつけないといけない立場になるだろうから、お昼ご飯をどうするか迷ってたんだ。

「ありがとう。一緒に食べさせてもらうよ」

これで昼食の問題は解決だな。そう思ったけど、これからが大変だった……

「お兄様、私達もリュシアンとレオンと共に昼食を取りませんか？」

マルティーヌが突然そう言った。え？　二人も一緒に食べるの？

「マルティーヌ、それはいいな」

「ですよね、お兄様！」

「王家と公爵家の共同で、特別食堂を借りるのも良いかもしれない」

「それは素敵ですわ！」

何か二人の間だけで意気投合している。でもちょっと待って！！

二人と毎日一緒にお昼を食べてたら、流石に目立ちすぎるだろ。それに、王族が特定の公爵家に肩入れとかしてもいいのか？　仲が良い人がいるのはいいと思うけど、共同で借りるのは流石に肩入れしすぎじゃないか？

「ステファン、マルティーヌ、公爵家と共同で借りるのは、タウンゼント公爵家ばかりを贔屓しているように見えて良くないんじゃないか？」

俺がそういうと二人は、ハッと気づいたような顔をした。

「確かにそうだな……二人と仲良くなれて少し舞い上がっていたみたいだ。共同で借りるのは流石にやりすぎだな」

「確かにそうですわね……」

二人とも凄く落ち込んでしまった。そんなに落ち込まれると、俺が悪いみたいじゃないか。

どうすればいいだろう？　何か良い案はないかな？

「えっと……共同で借りるのはやりすぎだけど、たまには昼食に招待という形にして、一緒に食べればいいんじゃない？」

俺がそう言うと、ステファンとマルティーヌの顔が輝いた。

「それですわ！　特別食堂に友人を招待するというのは皆やっていることですし、問題ありませんわ」

「確かにそれなら良いだろう。ただ、リュシアンとレオンばかりを招待するわけにはいかないから、他の高位貴族も招待すべきだな」

「それは……気が乗りませんわ」

マルティーヌのテンションが急に下がった。他の貴族の子供たちがそんなに嫌なのだろうか？　友達が増えるのであれば良いことだと思うけど？

俺のそんな疑問がわかったのか、ステファンが少し苦笑いで説明してくれた。

「高位貴族の子息たちは、マルティーヌと会うとあからさまにアピールしてくるから、それにうんざりしてるんだ」

「そうなのですわ。あの方達は、私を自分の地位を上げるための道具としか見ていないのです。そんな方とは友達になんてなれませんわ」

そっか……この国は確か一番の大国だから、マルティーヌは他国に嫁に行くよりは降嫁する可能性が高いのか。そうなれば、可能性のある高位貴族の子息はアピールするよな。

こんな歳から、もう結婚のことを考えないといけないなんて……それはうんざりするかも。

「その点レオンとリュシアンは、とても自然に私と話してくれてありがたいのです！　私を政略結婚の駒ではなく、一人の人として見てくれていると感じています。二人ともありがとう」

マルティーヌはそう言って、花が咲くように笑った。それは今まで見た笑顔の中で、一番綺麗な笑顔だった。

俺はしばらく見惚れてしまい、その言葉にスムーズな返しをすることができない。

俺って女の子慣れしてないんだよ！　日本で二十年以上生きてきたのに、情けなさすぎる。

「マルティーヌはとても明るく聡明だ。親しく話したのは今日が初

めてだが、とても楽しいしこれからも仲良くしたいと思っている。これからもよろしく」

俺が慌てていると、リュシアンがスマートにそう返していた。俺、十歳に負けてるよ！

そんな言葉すらすらと出てこない！　貴族教育がすごいのか、リュシアンが凄いのか、俺がやばいのか、わからないよ！

「リュシアンありがとう。高位貴族にも貴方のような方がいると知れて良かったわ」

二人がお互いに微笑み合っている。なんかいい雰囲気だな。リュシアンなら身分は申し分ないし、もしかしたらこの二人が結婚することもあるのかもしれない。

「レオン？　そのような怖い顔をしてどうしたの？」

俺が考え込んでいると、いつの間にか二人の話は終わったみたいだ。マルティーヌが俺の顔を覗き込むようにしている。

俺はそんなに怖い顔をしてただろうか？　ただ、少し考え込んでしまっただけだ。

「怖い顔なんてしてた？　ちょっと考え込んじゃっただけだよ」

「そう？　それならいいのだけど……」

「うん。それより、俺の方こそマルティーヌと友達になれてとても楽しいんだ。ありがとう」

俺がそういうと、マルティーヌは途端に笑顔になった。

「はい！　私もとても楽しいですわ」

この笑顔が曇るようなことになってほしくないな。俺はそう思った。

７５、馬車の中の親睦会（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

76、特別食堂と研究会

話が盛り上がっていたが、公爵家の屋敷に着いたので、一度話はやめて屋敷に入ることにした。
ステファンとマルティーヌが来るという急な事態だが、俺たちが馬車で数分待ってる間に色々整えてくれたようだ。やっぱり公爵家の使用人、めちゃくちゃ優秀だな。

俺たちは屋敷で一番豪華な応接室に入った。お茶を用意してもらい、使用人や護衛は下がらせたので部屋には四人だけだ。

「それでさっきは話が脱線したけど、昼食に招待をする形で、たまには共に食事をするのでいいか？」

ステファン様がそう切り出した。

「私は……レオンとリュシアンと昼食を共にするためならば、他の方達との食事も我慢しますわ」
「それならば、たまには共に昼食を取ろう。貴族の子息子女との交流を深めるために王家の特別食堂に招待する、という形でいいだろう」

それだと俺はどうなるんだろう？　平民の俺も王家の特別食堂に入ることができるんだろうか？

「ステファン、俺は平民だけど王家の特別食堂に入れるのか？　というか平民も招待できるのか？」
「ああ、レオンは公爵家の後見付きだから、リュシアンと共に招待

すれば大丈夫だろう。それに、そもそも特別食堂へ誰を入れるかは借りている家の自由なんだ。私たちが王族だから、少し気を遣わないといけないだけだ」

そうなのか、それなら俺も入れそうだな。この流れで俺だけ仲間外れは少し寂しいから良かった。

「そうなんだ。俺が入れるなら良かったよ」

「そこは心配いらない。ではまとめると、王家と公爵家は別々で特別食堂を借り、レオンは普段公爵家の特別食堂で食事をする。王家が高位貴族の子息子女を昼食に招待するので、その形でたまには一緒に昼食を食べる。これでいいか？」

「うん。それでいいと思う」

「私も問題ないと思うぞ」

「ええ、私もそれで良いですわ」

「じゃあ決定だな。帰ったら通達を出す準備をしておこう」

凄いよな、こんなふうに気軽に話してるだけで、決まっていくことが大きい。さすが王族だな。

俺たちは話が一段落したので、お茶を飲んで少し落ち着いた時間を過ごした。さっきまで話し続けていたから喉が渇いていたのだ。

よし、とりあえずこの話は一旦終わりだよな。俺、研究会について聞きたかったんだ。今話してもいいかな？

「とりあえず昼食の話は終わりでいいよね？　俺、皆に聞きたかったことがあるんだけど、今話してもいい？」

「ああ、なんの話だ？」

「研究会のことなんだけど、さらっとしか説明されなかったからよくわからなかったんだ。皆は詳しいこと知ってる？」

俺の今のところのイメージは、大学のサークル活動みたいな感じなんだけど、どうなんだろう？

俺の疑問にはリュシアンが答えてくれた。

「研究会は、先生たちの研究を手伝う学生の会って感じだな。王立学校の先生たちは、自分の専門分野の研究者でもあるんだ。その分野に特に関心がある学生が先生の部屋に集まり出したのが始まりで、今では研究会という名前がついて、専用の建物があるようになったみたいだな」

なんか俺のイメージと少し違ったな。サークルっていうよりは大学のゼミ活動みたいだ。先生主体の研究会ってことだな。

「なんとなくイメージは掴めたよ。確か先生の許可があれば入れるんだよね？　皆は研究会に所属するの？」

「いや、研究会には一部の生徒しか所属しないから、そもそも考えてなかったな。レオンは所属したいのか？」

「うん。ちょっと興味あるんだよね。一番興味あるのは魔法具研究会かな」

どんな研究をしてるのか興味がある！　新しい魔法具の開発なのか、今までの魔法具をより良くする開発なのか。

この世界の魔法具は、スイッチ機能がないところがすごく不便なんだ。そこを改善できたら魔法具がかなり便利になるはずだ。研究会ではそこの研究をしたいな。

俺は新しい魔法具の開発を止められているけど、既存の魔法具の改良ならいいんじゃないだろうか？　それなら登録もしないだろうし。

それに、全属性をバラさないようにすればいいのなら、回復属性でできる魔法具なら良いよな！

「そうか……レオンが所属するのならば私も一緒に所属しよう」
「え？　いいの？　もし帰りの時間が合わなくなるのが不便だとかなら、俺は歩いて帰るのでもいいけど？」

公爵家は、ゆっくり歩いても三十分かからないからな。全然苦痛じゃないし良い運動になるだろう。

「いや、そういうことではない。ただレオンの近くにいると面白そうだからだ」

なにその理由。リュシアン、俺のことびっくり人間みたいに思ってない？

「それならば、私も魔法具研究会に所属しよう」
「私も所属しますわ」

え！？　そんな簡単に決めていいの！？

「皆、俺に気を遣わなくていいんだよ？」
「気を使ってるわけではない。ただ、レオンは沢山魔法具を開発していただろう？　開発する過程が気になっていたんだ」
「そうですわ。レオンの近くにいると勉強になることが沢山ありますもの」

これは……喜んでいいのか？　まあ、皆と一緒に所属できるなら、楽しそうだからいいか。
でも、先生と先輩がびっくりしそうだ……急に公爵家の長男と第一王子、第一王女が来るんだからな。
ごめんなさい……先生と先輩。

俺はまだ見たこともない人たちに、あらかじめ謝罪をしておいた。なんか、俺のせいで凄いことになっちゃったよ。

「じゃあ、皆で一緒に魔法具研究会に所属しようか。所属するにはどうすればいいのかな？」

「所属するのなら早い方がいいだろう。明日の放課後に皆で集まって、魔法具の先生のところへ行こう」

「それならば、また私たちがレオンを迎えに行こうかしら？」

いや、それはやめてくれ！！

「マルティーヌ、それは目立ちすぎるよ。一階の玄関ホールで集合じゃダメかな？」

「まあ、それでもいいわね」

「じゃあ明日の放課後に、玄関ホールに集合としよう」

ステファンがそうまとめて話は終わった。明日も大変だな……

まず明日は、教室に入った途端に注目される可能性が高い。それからロニーに説明しないといけないし、サリムがどう接してくるのかもわからないし、考えるほど憂鬱になる。

ダメだ！　楽しいことを考えよう！

久しぶりの授業楽しみだし、研究会の様子も興味がある。楽しみだ。うん、楽しみだ！

「明日からが楽しみだね」

「ああ、レオンに会ってより楽しみになった。レオンといると退屈しなそうだからな。同じクラスならもっと良かったんだが」

「私も同感ですわ。今からでもレオンを同じクラスにしたいくらいですわ」

それだけは絶対にやめてくれ！　高位貴族のクラスに、一人平民とか絶対に無理！

というか、そんなことができるのか？　王族の権限でできるのか？

「それは流石に無理だよね……？」

「まあ、流石にそれはできないだろう。できるのならば既にやっている」

できなくて良かったぁ……セーフ！

「俺は今のクラスに馴染んでるから、このままでいいよ」

「そうなのか？　でも初日から揉めてなかったか？」

リュシアンが余計なことを言った。それは忘れてって言ったのに！

顔がちょっと面白がるような感じになっている。リュシアンのいじわる！

「確かに今日の様子だと、クラスに馴染んでるとは言えない気がするが……」

ステファンがちょっと笑いながらそう言った。皆忘れてって言ったのに！

「大丈夫だよ！　あれはちょっと思い違いみたいな感じだから……多分、明日には仲良くなれるよ！」

多分表面上だけなら、関係回復はできるはずだ。タウンゼント公爵家の後ろ盾があることが分かっただろうから、表立って何かをしてきたり言ってくるようなことはないだろう。

あいつが馬鹿じゃなければ……馬鹿じゃないよね？　なんか不安

になってきた。

「それならいいけど」

「うん。大丈夫だよ。それに仲良くなれた友達もいたんだ」

「そうなのか？　なら今度合同授業の時にでも紹介してくれ」

紹介……ロニーを紹介したら緊張でぶっ倒れそうだな。でも少し慣れてくれれば大丈夫だろうか？

「名前はロニーって言うんだけど、今日はすごく緊張してたから、もう少し慣れてからの方がいいかも」

「それならレオンのタイミングで紹介してくれ」

「わかったよ」

「私にもよろしく頼む」

「私にも紹介して欲しいわ」

「勿論だよ」

ロニーごめんね、三人に紹介することになっちゃったよ。俺は内心でロニーにめちゃくちゃ謝った。

「マルティーヌ、そろそろ時間だから帰ろうか」

「もうそんな時間になりましたの？　本当ですわ。楽しい時間はあっという間ですね」

俺も時計を見てみると、もう結構時間が経っていた。俺たちは応接室を出て、玄関ホールまで来た。

「ではまた明日」

「また明日お会いしましょう」

ステファンとマルティーヌはそう言って、王家の馬車の方に歩いていく。

「はい。お気をつけてお帰りください」

「また明日、お会いできれば嬉しいです」

俺たちもそう言って二人を見送った。それにしても長い一日だったな。

ふぁ～、なんか疲れたよ。俺は欠伸を一つして屋敷に帰ろうとしたところで、ふと思い出した。そういえば、一つ気になってたことを聞き忘れたな。今まで色々あって完全に忘れてたけど、思い出すとめちゃくちゃ気になる。どーでもいいことかもしれないけど気になる。

俺は屋敷に戻ろうと歩き出したリュシアンを引き止めて、小声で聞いた。

「リュシアン、Aクラスの教室にある机と椅子ってどんな感じなの？」

「机と椅子？　何でそんなこと聞くんだ？」

「いや、クラスによって差があるのかなって気になってたんだ」

「そういえば……確かにレオンのクラスにあるものは、私のクラスのものと違ったな」

「やっぱりそうなの？」

「ああ、私のクラスのものは一回りほど大きくてクッションが座面と背面にあったぞ。確かレオンの椅子にはなかったよな？　あと、装飾ももっと豪華だな」

やっぱりかぁ～、身分に差はないっていっても全然あるな。まあ、それは建前だけだって言ってたし。そもそもクラスも身分の順で分

けられてるしな。本当に平等なら身分関係なくクラス分けするだろう。
これが王立学校の常識なんだろうから、俺が馴染んでいくしかないな。

「リュシアン、教えてくれてありがとう」
「ああ、こんなことが知りたかったのか？」
「うん」
「それならいいんだが……」

リュシアンが不思議そうな顔をしている。身分によって設備に差があることに、全く疑問を感じていない証拠だな。これがこの世界の普通だ。

「疲れたから屋敷に戻ろうか」
「そうだな」

う～ん、本当に疲れたから今日は早く寝よう。明日からまた大変だからな。

７６、特別食堂と研究会（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！面白い、続きが気になると思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

とても励みになります！！

77、ロニーへの説明

次の日の朝。
今日から本格的に授業の始まりだ！　凄くワクワクしてるはずなんだけど、教室に行った時の反応をいろいろ考えて落ち込んでいる。俺は無理にでもテンション高く振る舞い、朝の支度を終えた。
昨日の夜早く寝ようと思いつつ、色々考えて結局夜遅くまで眠れなかった。時間をおいて冷静になったら、自分がどうなるのかに思い至ったのだ。
これからの俺は、腫れ物のように扱われるか、無視されるか、平民のくせにときつく当たられるか、悪い想像しかできない。
多分想像通りなんだろうな……普通に俺と友達になってくれる優しい子はいるだろうか？　クラスにも友達が欲しい……ロニーはどんな反応をするだろうか？　ロニーに怖がられるのが一番ショックでかいかも……

俺はリュシアンと共に馬車に乗り、王立学校へ向かう。

「到着いたしました」

そう言った御者の声が聞こえた。憂鬱だなと思ってる時ほど着くのが早く感じられるんだよな……
でも行くしかないか！　うん、行こう！
俺とリュシアンは馬車を降りて、本館に入った。そして階段を上がっていく。
俺の足取りはどんどん重くなるよ……

「レオン？　大丈夫か？」
「はい。昨日のことがあって色々考えてしまい、少し憂鬱なだけなので……ご心配ありがとうございます」
「そうか。しっかりと仲直りするんだぞ」
「かしこまりました」

リュシアンは、俺が憂鬱な原因を昨日喧嘩した相手と会うからだと思ってる。だけど違うんだよな……サリムはどうでもいいんだ。それよりも、クラス全体の反応とロニーの反応の方が気になるし怖い。

「では私はこっちだから行くぞ」
「はい。行ってらっしゃいませ」
「ああ、また放課後に」
「放課後、玄関ホールに参ります」

そうしてリュシアンと別れて、俺は自分の教室までトボトボと歩いた。
できるだけゆっくりと歩いたが、そんなに遠くないのですぐに着いてしまう。
もう気合を入れるしかないな！　よしっ！

俺は気合を入れて、教室の扉を開けた。そうして一歩教室に足を踏み入れると……

……思ったほど反応はなかった。

ジロジロ見られたりもしないし、睨まれたりもしない。
これは……皆昨日のことは気にしてないってことか？　それはありがたい！

俺は少し心が軽くなって席に着いた。まだロニーが来てないので誰かに話しかけてみようかと考えて、前の席に座っている男の子に話しかけてみることにした。

「初めまして」

俺がそう声をかけると、あからさまにビクッと体が震えて恐る恐る後ろを振り向いてくる。

なんか顔色悪いけど大丈夫？

「……何のようでしょうか？」

「用があるわけではないんですけど、近くの席なので仲良くなりたいなと思ったのですが？」

「えっと……すみません！」

その子は、そう言ってどこかに走り去ってしまった。えっと……どう言うこと？

俺は席を立って他の子にも話しかけてみようと思ったが、俺が近づこうとするとみなさりげなく遠ざかっていく。

これって……やっぱり腫れ物のように扱われてる？　それとも無視されてる？

でも俺がいじめられそうな雰囲気っていうよりは、皆が俺に怯えてるみたいなんだけど……

公爵家の後ろ盾があるって言っても俺は平民だし、このクラスの皆は騎士爵の子供だよな？　それならそんなに怯えることない気がするけど。

もしかして、公爵家の後ろ盾って俺の予想以上にすごいのかな？

凄いのだろうとは思ってたけど、俺自身は平民だから身分が上がったわけでもないし、実感は全然ない。

とりあえず、皆が怖がってるから話しかけるのはやめよう。話しかけて怖がられるのって、なんか寂しいな。
俺は落ち込んで席に着いた。ステファン、マルティーヌ、リュシアンもいつもこんな気持ちなのかな？　これは結構寂しいね。

とりあえず静かに座っていると、サリムが教室に入ってきた。サリムなら話してくれるかもと思って目を合わせたが、俺と目が合うとすぐに目を逸らされてそのまま声を発さずに自分の席に座ってしまった。
なんか……これなら昨日の方がマシだったかも……
俺は思い切って、サリムに話しかけることにした。

「サリム」

サリムは、俺が名前を呼ぶとビクッとして恐る恐るこっちを向く。

「あっ、敬語の方がいいかな？　同じ平民だしタメ口でいい？」
「いや、タメ口で大丈夫です……」

サリムが敬語になってるし、昨日の勢いはどうしたんだよ！

「なんでそんなにビクビクしてるの？」
「それは……昨日不敬なことを言ってしまったので」
「あれは確かにイラついたけど、ただの喧嘩だよ。俺は平民なんだし不敬も何もないでしょ」
「ですが……レオン、様は公爵家の後ろ盾をお持ちのようでしたので……昨日のことは本当に申し訳ありませんでした！」

サリムがいきなり謝ってきた。えっと……公爵家の後ろ盾ってそ

んなに怖いの？

「公爵家の後ろ盾ってそんなに怖いの？」

「そんなことも知らない……！　あっ……すみません……えっと、公爵家は貴族の頂点ですのでとても畏れ多く……」

サリムは一瞬、昨日のように俺を怒鳴りつけようとしたが、すぐにまたしおらしい態度に戻ってしまった。

「あの……すみませんが、用事を思い出したので失礼します！」

サリムが教室から出て行ってしまった。

とりあえず、公爵家の後ろ盾は平民や下位貴族にとっては、凄く怖いもののようだ。

多分これって中位貴族くらいからは、平民のくせに公爵家の後ろ盾くらいで威張りやがってって言われるパターンだな。下位貴族だととにかく近づくなって感じなのかも。なんか寂しい……

とりあえず誰にも話しかけられないし、俺はロニーが来るのを待った。

しばらく待っていると、ビクビクとしながらやっとロニーが現れた。

「ロニーおはよう！　やっと来てくれたんだね」

俺はロニーを逃さないように、さりげなく腕を掴んで椅子に座らせた。他の友達を作ることはもう諦めたけど、ロニーは昨日友達になったんだから話せばわかってくれるはずだ。

友達がクラスに一人もいないなんて絶対に嫌だ！　それにロニーと仲良くしてれば、他の人も怖がらなくなってくれるかもしれない。

「ロニー、昨日は急に帰っちゃってごめんね」
「い、いや、僕は全然大丈夫だよ」

ロニーは昨日以上にビクビクしてる。はぁ〜、やっぱり怖がられてるのかな。

「昨日は驚かせてごめん。俺はタウンゼント公爵家の後ろ盾で王立学校に入学したんだ。だから公爵家の屋敷に住まわせてもらってる。だけど、俺が食堂の息子で平民であることに変わりはないから」
「そ、そっか……」
「だから……昨日みたいにこれからも仲良くしてくれないかな？」
「え、えっと……でも、立場が違うし……」
「立場なんて同じだよ。俺自身はただの平民なんだから」
「でも、そうは、思えないと言うか……やっぱりそれは、違うというか……」

やっぱりまだ怖がられてるみたいだな……俺このままこのクラスで友達できずに終わるのかな。
せっかくの学生生活でぼっちなんて悲しすぎる……
俺は、さっきから怖がられたり腫れ物のように扱われたりして、めちゃくちゃ落ち込んでいる。

これ以上ロニーを怖がらせたら可哀想だよな。俺はロニーの腕を離して自分の席に着いた。
ちょっとだけ学生生活への期待もあったんだけど……灰色の生活になりそうだ。
はぁ〜、俺はなんだか疲れて、腕を枕にして机に突っ伏した。こうしてると何も目に入らなくていいな……俺いじめられてるみたいだ。いや、みたいじゃなくて実際いじめだよな。みんなに避けられ

るんだから。
　でもこの場合は、俺自身に何かをされる可能性はないからいじめよりはマシなのかな。でも下位貴族からは避けられて無視されて、中位、高位貴族からはいじめられそう。
　なんか俺って可哀想すぎない？　どうすればいいんだ？　全属性のことを明かすとか？　でもそうしたら敵対勢力や他国に狙われて、その代償として友達ができるかと言えばできない気がする。なんかより怖がられそう。
　どうしようもないじゃん……

「レ、レオン！」

　俺が自分の世界に現実逃避していると、ロニーに名前を呼ばれた。

「ごめんなさい！」

　え？　なんで俺が謝られてるの？
　俺はびっくりして顔を上げて、ロニーの方を見た。するとロニーは泣きそうな顔になっている。
　え？　なんで泣きそうなの？　俺のことがそんなに怖かったの？
　それは流石にめちゃくちゃ落ち込むよ？

「僕……昨日のことにびっくりして、高位の貴族様と知り合いなんて怖いと思っちゃって……最低な態度とったよね。本当にごめんなさい！　昨日一日話してレオンが良い奴だって知ってたのに……」

　そう言ってロニーはついに泣き始めた。
　ちょ、ちょっと！　これだと俺が泣かせたみたいじゃないか！
　男ならそんな簡単に泣くなよ！

「ロニー、俺は別に大丈夫だから、とにかく泣き止んで！　これだと俺が泣かせたみたいだから！」
「で、でも……僕最低なことを……友達を怖がるなんて……」
もっと泣き顔が酷くなってきた。
「ロニー、気にしてないから！　確かに公爵家の後ろ盾があるって聞いたら、俺でも怖いと思うだろうし……」
なんて言えばいいのかわかんないよ！
大丈夫だよ？　それはもう言ってる。
気にしないで。　それも既に言ってる！
どうすれば伝わるかな……うーん……
「ロニー、じゃあ改めて友達になってくれる？」
「……許して、くれるの？」
「許すも何も別に怒ってないし」
「レオン……あり、がとう……」
ロニーはそう言うと、泣き止むどころかより泣き出した。え？
なんでそうなるの！？

７７、ロニーへの説明（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！！

面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

とても励みになります！！

78、魔法具の授業

しばらくしてロニーは落ち着いたので、やっとちゃんと話せるようになった。
ロニーは泣いたのが恥ずかしかったのか、顔を赤くして体を小さくしている。穴があったら入りたいってやつだな。確かに、俺がロニーだったらめちゃくちゃ恥ずかしいだろうな。

「レオン……さっきまでのことは忘れて欲しい……」
「えっと、忘れるように努力はするよ」

多分忘れられないけど。

「努力じゃなくて絶対に忘れて！！」
「わ、わかったよ。絶対に忘れる。もう思い出さない」
「絶対だよ！」

なんかロニーがおどおどしてない。さっきまであんなに怖がってたのに、もう全然そんな感じないし、なんなら昨日より自然体じゃないか？
泣いたらスッキリして怖さも無くなったとか？　まあ、俺は自然体でいてくれた方が嬉しいからいいんだけど。それにこの学校で過ごしていくには、図太いくらいじゃないと辛いよな。

「そう言えば昨日はロニーの話をあまり聞けなかったけど、ロニーはどこに住んでるんだっけ？」
「歩いて一時間くらいのところにある、安い部屋に住んでるんだ」
「中心街の外ってこと？」

「そう。中心街を出てすぐのところ」
「そうなんだ。今度遊びに行きたいな！」
俺がタウンゼント公爵家の屋敷に住まわせてもらえなかったら、住んでた可能性がある場所だもんな。
「別に来てくれてもいいけど何もないよ？」
「それでも興味あるよ。それに、今度うちにも遊びに来てよ」
「うちって、公爵家の屋敷のことじゃないよね！？」
「違うって、流石に公爵家の屋敷に俺の友達は呼べないよ。俺の実家のこと」
「そっちね。レオンの実家は食堂なんだよね？　それは行ってみたい！」
「じゃあ休みの時にね」
「うん！　楽しみだな」
そこまで話したところで、スティーブ先生が教室に入ってきて話は中断させられた。
ロニーと友達になれて良かった……本当に嬉しい。普通の友達っていいよな。ステファン、マルティーヌ、リュシアンも友達だし一緒にいて楽しいんだけど、やっぱり身分差があると完全には気が休まらないんだよな。
そのあとは朝の連絡を聞いて、授業になった。
一限目の授業を受けて、次は二限目の授業である。今日の二限目の授業は魔法具の授業なんだ！　俺は結構楽しみにしていた。
授業の時間になって教室に先生が入って来た。結構なおじいちゃん先生だ。少し腰が曲がっていて、日に当たっていない肌の色をし

ている。
研究に明け暮れて、部屋に閉じこもってるタイプの先生な気がする。この先生が魔法具研究会の先生なのだろうか？
「わしはブエラ・ロンゴだ。これから魔法具のことを君たちに教えることになる。よろしく頼むぞ」
話す時は結構ハキハキと話すみたいだな。なんだか魔法具一筋って感じの雰囲気が漂っている。
「この授業は最初の数回で基本を教えたら、あとは実践になる。魔鉄と魔石が少しだけ授業のために融通してもらえるから、実際に今作られている魔法具を作る授業じゃ。魔法具を作れるのは魔力量が四以上の者だけなんだが、魔力量が四以上の者は立ち上がってくれ」
そう言われて立ち上がったのは、十人弱くらいの人数だった。当然俺も立ち上がる。
「今立ち上がった者の名前を控えるから、端から名乗ってくれ」
自己紹介の時の順番で立ち上がってる者だけ名乗っていき、最後に俺が名乗って終わりとなった。
「座っていいぞ。では今名乗った者たちは実践に参加してもらう。逆に今座っていた者たちは、基礎の授業が終わればこの授業の時間は自習で構わない。この教室で静かに自習をしても良いし、訓練場の使用許可を得て剣術の訓練をしても構わん。図書館に行くのも良いだろう」
やっぱり実践はできる人だけなんだな。魔法具を作れるのは嬉し

いけど、自由な時間も結構羨ましい。俺だったら絶対に図書館に行くな。

「まず今日は基礎の授業じゃ。基礎は魔法具を作らない者にとっても知っておくと便利な知識だから、しっかりと聞くように。卒業試験では魔法具の基礎も出題範囲だからな」

そうなのか！　そう言えば卒業試験あるんだよな。色々あって忘れかけてたよ。

俺は紙とペンを取り出して、しっかりと聞く体勢を作った。

「魔法具とは、魔鉄と魔石を使って、魔法の現象を継続的に効率良く発生させる道具だ。魔鉄の歴史は……」

そこからは魔鉄と魔石の歴史の話になった。魔鉄と魔石は、かなり前から発見されていたらしい。ただ、最近になるまで魔法具を作れることは、発見されていなかったそうだ。

魔鉄は魔力で形を変えられることは分かっていたので、高級な鉄として王家や貴族に独占されていたらしい。ただ、魔法の火に弱いので使い道は限定されていたようだ。基本的には精巧な装飾品として使われていた。

魔石は、皆同じ形と大きさで掘り出されるので、珍しい宝石として、とても高級な装飾品に使われていたらしい。

そしてその二つの装飾品を組み合わせた、魔鉄と魔石での最高級の装飾品が作られた。最初は魔石に魔力を込めなかったので気づかなかったが、何かの拍子に魔石に魔力を込めてしまい、魔法が発動し続けることに気づき、魔法具が作れることに気づいたそうだ。

偉大な発見とか発明とかって、偶然の産物が多いよな。魔法具も

そうだったんだ。
確かに魔鉄は、どうやって掘り出されて精製されてるのか知らないけど、見た目は普通の鉄だった。
魔石も見た目はただの丸い宝石って感じだ。魔力が込められるなんて考えないだろう。

「魔鉄を魔法で変化させるには、頭の中で変化させたい形を正確に思い浮かべ魔力を流し込む必要がある。魔力があればあとは訓練次第でできるようになるだろう。魔石に魔力を込める時は、魔法具で発現して欲しい現象を頭に思い浮かべながら魔力を込める。そして、魔石を魔鉄に嵌め込めば、魔力が尽きるまで魔法が発動し続けるという仕組みじゃ」

改めて聞くと、やっぱりスイッチ機能があったら便利なんだよなぁ。どうにかして作れないだろうか？
魔法具研究会で、スイッチ機能をつける研究をしたいな。

「今までに開発されている魔法具は、光球、水道、水洗トイレ、送風機の四つだ。この四つは王立学校にもあるから皆に馴染みもあるだろう。ただ最近新しい魔法具が何個も開発されている。今までは情報が公開されてなかったんだが、最近公開されて少しずつ作られ始めているそうだから、そのうち出回るじゃろう」

おお！　俺が考えた魔法具ついに作られ始めたのか！
これでより快適な世界になればいいな。

「新しい魔法具は、製氷機、ストーブ、料理用コンロ、湯沸かし器の四つだ。これらの魔法具は本当に素晴らしい！！　魔石から離れたところに、魔法を発現させられるという事実に気づいたんじゃ！
わしはなんで今まで気づかなかったのかと数日は落ち込んだぞ。

やはり固定観念はダメだ。皆も柔軟な思考を持って魔法具を考えて欲しい」

途中から先生のテンションがマックスになった……なんか、本当に魔法具馬鹿って感じの先生かも。

俺が開発したことはバレないだろうけど、気をつけよう。質問攻めにあってめんどくさそう。

というか、もしかしてだけど、この人マルセルさんのところに突撃してないよね？　もしそうだったらマルセルさん本当にごめんなさい。

前に海の幸のお土産を持って行った時は何も言ってなかったけど、俺に気を遣って言わないでくれてたとか？

俺も身分を得たら、魔法具を開発して俺の名前で登録しよう。そうすれば、マルセルさんへの注目も少しは無くなるだろう……多分……

そこからの授業は、ロンゴ先生による新しい魔法具の素晴らしさ紹介で終わった。凄い先生だな。皆唖然として聞いてたよ。

なんか、俺の作ったものをあそこまで褒められると、誇らしいっていうよりバレたら怖いって感じだ。

この先生が魔法具研究会の先生なら、魔法具馬鹿の集まりの予感しかしない。まあ、ちょっと楽しそうではあるんだけどね。

７８、魔法具の授業（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

79、特別食堂での昼食

先生大興奮の魔法具の授業が終わり、お昼休憩になった。俺はタウンゼント公爵家の特別食堂に行かないといけない。早めに行ったほうがいいよな。

「レオンはお昼どうするの？　大食堂で食べる？」

俺が椅子から立ち上がると、ロニーにそう聞かれた。

「ううん、俺は公爵家の特別食堂で食べないといけないんだ。一緒に食べられなくてごめんね……」

「別に気にしなくて大丈夫だよ。多分レオンがいなかったら、お昼どころか一日中一人だったから」

そんな悲しいこと言われると、ロニーを一人で大食堂に行かせる申し訳なさが募る……

うーん、ロニーを公爵家の特別食堂に招くのって無理なのかな？

流石に無理かな……

一応、ロニーの意思だけは聞いておこう。

「ロニー、もし公爵家の特別食堂でロニーも食事を取れるって言われたらどうする？」

「僕も！？　そ、それは、ちょっと無理かな……」

ロニーは自分が公爵家の特別食堂にいるところを想像したのか、少し顔を青ざめさせてそう言った。

やっぱりそうだよな。絶対にそういうと思った。大食堂で一人で

食べたほうが気楽だもんな。そこで友達ができる可能性もなくはないし。

「やっぱりそうだよね。じゃあ俺は行ってくるね。また午後にね！」

「うん。行ってらっしゃい」

そうして俺は特別食堂に急いできたんだけど、衝撃の事実に気づいた。俺、公爵家の特別食堂の場所知らない！！

朝は色々考えて頭がいっぱいで、お昼のことなんて頭から抜けてた。また放課後にねって言って別れた気がする……何やってるんだ俺！

今日は大食堂で食べることにするか？　でもリュシアンは俺がくると思ってたら、心配するよな。

どうしよう……たくさんの扉が並んでるけど、全部番号が書かれてるだけで、借りている貴族家の名前は示されていない。端から開いて確かめるなんて論外だし……

リュシアンがまだ来てなくてこれから来るのならいいんだけど、すでに特別食堂の中にいた場合どうやって見分ければいいのかわからないよ！

俺が焦ってオロオロしていると、近くの扉が開き中から使用人が出てきた。

あれ？　この人リュシアンの従者の方だ！

俺は知ってる人を見つけて心底ほっとした。この場所に留まって、他の貴族が来たら絡まれる予感しかしないし、マジで安心した。

「レオン様、こちらの部屋にお入りください」

「ありがとうございます」

部屋に入ると、そこまで広くはないがかなり豪華な部屋だった。

部屋の奥には扉があり、真ん中に大きめのテーブルと六つの椅子がある。
その一つの椅子にリュシアンが座っていた。
「レオン、今日の朝は昼食のことを忘れていてすまなかった。レオンに、タウンゼント公爵家の特別食堂の番号を教えていなかったよな？」
「いえ、私も忘れていて申し訳ありませんでした。リュシアン様の従者の方が案内してくれましたので、迷わずに済みました。ありがとうございます」
「いや、いいんだ。座ってくれ」
「かしこまりました。失礼致します」

俺が席に座るとリュシアンが従者の方に給仕を頼み、昼食を全て並び終えると、厨房に下がらせた。
奥にある扉から料理を運んで来たので、そっちが厨房になっているんだろう。従者の方は厨房に下がっていった。

「レオン、そこまで大きな声でなければ厨房まで声は聞こえないから大丈夫だ」
「そうなんだ。じゃあ普通に話すね」
「ああ、じゃあ食べようか」
「うん。いただきます」
「いただきます」

う～ん、美味しい！　公爵家の料理人って腕がいいんだよな。どの料理も絶品だ。

「レオン、授業はどうだった？」
「うーん、まだ二つしか受けてないけど結構楽しかったよ。魔法具

の授業があったんだけど、なんていうんだろう……魔法具に情熱を注いでる先生だった」

凄い先生だったよな……後半はひたすらに魔法具の素晴らしさを語ってた。

「あの先生が魔法具研究会の先生なら、面白そうだけどちょっと大変そうかも」

「魔法具の先生は一人しかいないはずだ。多分その先生が魔法具研究会の先生だろう」

「そうなんだ。リュシアンは今日魔法具の授業あるの？」

「ああ、私は三限が魔法具の授業だ。少し楽しみだな」

あの先生は、Aクラスでもあのスタイルを貫くのだろうか？　この学校は、一応先生の方が立場が上だってことになってるけど……建前だけとも言ってたよな。

でも、あの先生ならあの感じを貫きそうだ。あのタイプの人は魔法具の研究以外のこと、例えば出世や身分とかは全然気にしないタイプな気がする。最低限の礼儀さえ守ればいいだろって思ってそう。

リュシアンにとっては、そういうタイプの人に会うほうが珍しいだろうから楽しめるんじゃないかな？

「多分楽しめると思うよ。リュシアンのクラスはどんな雰囲気なの？　穏やかな感じ？」

「そうだな……表面上は穏やかに見えるけど、裏では何を考えているのかわからないって感じだな。ただ、同じ勢力に属する貴族家の子供とは、少し仲良くなれた気がするぞ。後は、ステファンとマルティーヌと一緒にいると、恨まれるか擦り寄られるかのどちらかが多いから、少しだけ疲れるな。純粋に私と仲を深めたくて話しかけてくれる者は貴重だ」

やっぱり貴族って怖い……リュシアンも大変だな。リュシアン友達ができるかもって楽しみにしてたのに、落ち込んでるのかな？

「思ったほど学校楽しくない？」

「なんでだ？？　私はすごく楽しいぞ」

「でも、恨まれたり擦り寄られたりが多くて疲れるって……」

「ああ、確かに疲れるが、それもまた楽しいだろう？　それに少しは仲良くなれそうな者もいるし、何よりレオン、ステファン、マルティーヌと仲良くなれたからとても楽しいぞ！」

「そ、そっか……それなら良かったね」

やっぱりリュシアンも貴族だな。たぶん腹の探り合いや恨まれたり擦り寄られたり、そういうことが当たり前の価値観なんだろう。

俺ならそんなの嫌だ……って言いたいけど、既に俺もその状況なんだよな。日本でのほのぼのとした学生生活が懐かしすぎる。

「レオンはどうなんだ？　学校は楽しいか？」

俺はどうなんだろう？　結構散々な学生生活の始まりだったよな……

でも友達もできたし、やっぱり学校という空間は懐かしくて好きなんだ。皆で授業を受ける雰囲気も好きだし。

それに、まだ二つの授業しか受けてないけど、授業内容も結構楽しそうだった。

「俺は、大変なこともあるけど楽しいかな」

「それなら良かった！」

リュシアンが満面の笑みで笑った。こうやって、リュシアンと一

緒にお昼ご飯を食べられるのも楽しいしな。
それによく考えれば、この世界での学びは贅沢なものなんだ。思いっきり学べる環境なんてすごく贅沢だ。ここで文句ばかり言っていたらバチが当たるよな……この学校でできる限りのことを吸収しよう。

「せっかく学べる機会をもらえたんだ。楽しまないと損だよ。公爵家のためにも精一杯頑張るね」
「ああ、レオンありがとう」
「こちらこそ、仲良くしてくれてありがとう。これからもよろしくね」
「当たり前だ！」

この後もリュシアンと色々な話をしながら、楽しい昼休みを過ごした。
午後も頑張ろう！

７９、特別食堂での昼食（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

80、ロニーの働き口

リュシアンと昼食を食べた後、三限の授業を終えて次は合同で行われる剣術の授業だ。

剣術の授業は訓練場の更衣室で着替えないといけないから、少し急がないと間に合わなくなる。平民が遅れたら今でも悪目立ちしてるのにより目立つだろう。絶対に遅れないようにしないと。

「ロニー、早めに訓練場に行こう。俺たちが遅れたら、絶対文句言われてかなり悪目立ちするよ」

「そうだよね。早く行こう」

俺とロニーは鞄を持って一番に教室を出て、早足で訓練場に向かった。

「僕、剣術なんてやったことないよ。練習だから本物の剣は使わないだろうけど、当たったら痛いよね？」

「当たったら痛いだろうけど、最初は剣の持ち方とか素振りとかをやるだけじゃないかな？　最初から剣が当たるようなことはないと思うよ」

「そうかな？　それならいいんだけど……レオンは剣術やったことあるの？」

「リュシアン様と一緒に少しだけやったことがあるんだ。でも本当に少ししかやってないから、初心者と変わらないよ」

俺も剣術をしっかりと習い始めたのは、一週間前くらいだ。毎日素振りはやってるけど、まだ初心者と変わらないだろう。

剣術の授業では、しっかり学んで少しでも強くなりたい。魔法は

得意だけど手数は多いほうが良いからな。接近戦には剣術の方が便利だし、剣は盾の代わりにもなるだろう。

ロニーとそんな話をしながら早足で歩いて、訓練場についた。すぐに男子更衣室に入ると、入り口の少し先に衝立が置いてあり、その奥にロッカーがある。

確か、クラスごとにまとまってロッカーがあるんだよな。たぶん俺たちのロッカーは入り口の一番近くだろう。そう思って入り口の近くから探し始めると、すぐに見つかった。

やっぱりそうだよな。一番人が通るところはＥクラスで、奥がＡクラスなんだろう。

「ロニー、見つけたよ」
「本当に？　ありがとう」
「じゃあすぐに着替えちゃおうか」
「そうだね。他の人の邪魔にならないように、すぐに出たほうがいいよね」

俺たちは素早く着替えて、更衣室から出た。ロニーはいつもより体を縮こませているが、その理由は訓練着だろう。

ロニーの訓練着は、私服よりも数段劣る品質のものだった。多分、訓練着を同じ品質で揃えるほどのお金は集まらなかったんだろうな……

この服だと、俺の家の周りでも「新しい服買ってもらったの？良かったわね」って言われるくらいのレベルだ。

たぶんこの学校だと、めちゃくちゃ浮くだろうな……

「レオン、やっぱりこの服じゃダメかな？」
「うーん……ちょっと浮くかもね」
「やっぱりそうだよね……品質の良い訓練着を買えるほどのお金は

なかったんだよ」

多分この服だと、かなり浮くし馬鹿にされるだろう。ロニーはいい奴だから、できれば虐められる要素は少なくしてあげたい。

でも俺がお金を貸すのはどうなんだろう？　ロニーは遠慮しそうだし……

何かバイトを勧めるとか？　でも、この世界ってほとんど学校がないから、学校終わりの短時間だけ働ける仕事を見つけるのは大変そうだ。

ロニーはバイトをしているのかな？

「ロニーは今仕事をしてるの？　学校がない日だけとか、放課後とか」

「今はまだしてないよ。そんな都合の良い仕事なんてすぐに見つからないんだ。雇うなら一日中働ける人を雇うからね。僕も仕事をしたいと思ってるんだけど……」

やっぱりそうだよな……でもロニーは読み書き計算ができるし頭がいいんだから、それを活かせる仕事はないのかな？

「読み書き計算とか、ロニーの頭の良さを活かせる仕事はないの？」

「それは考えたことはなかったけど、それでも少しの時間しか働けない人を雇うことはないと思うな。でもそうだね……一応探してみるよ」

読み書き計算を使う仕事で一番に思い浮かぶのは商人だけど、短時間しか働かない人を雇うなら、ずっと働いてくれる人を雇って必要な教育するのかな？　まあ、俺ならそうするかも。

うーん、結構難しいな。

いっそのこと、俺がお店をやってロニーを雇うとか？　今なら元手もあるし結構いいかも。
放課後と回復の日だけの屋台とかはどうだろう？　屋台って申請すれば誰でもできるんだよな。
それなら必要なものは俺が買って、ロニーを雇って売り上げは折半にすれば良いんじゃないか？　もし利益がなくても、一定の給金をあげれば良いし。
それ結構良い気がする！　あとは何を売るのかだよな。それから、ロニーが休日に時間を取れるかも重要だ。

「ロニー、休日は働く時間を取れるの？　勉強しないとダメかな？」
「うーん、多分大丈夫だと思うけど……一応休日の午前中は勉強の時間にしたいかな」
「それなら放課後と休みの日の午後、俺と一緒に屋台をやらない？」
「屋台？」
「そう。俺が屋台を始めてロニーを雇うって形でどうかな？　給金は利益の半分で、利益が出なくても一定の給金は渡すよ」
「えっと……それはすごくありがたいんだけど、屋台を始めるのって凄くお金がかかると思うよ？　それにそんな簡単に利益なんて出ないと思うけど……」

確かにそうなんだけど、俺が持ってるお金で足りないってことはないだろう。それに、売れそうなものは色々思い浮かぶんだ。この世界で受け入れられるのか、確認しながら売ればいいだろう。

「お金はあるから大丈夫！　それで、もし屋台をやるってことになったら働いてくれる？　俺は、放課後研究会に所属する予定だから、屋台にはあまり行けないと思うんだけど……」
「もちろん！　って言いたいとこだけど、どのくらい給金もらえるのかな？」

うーん、どのくらいがいいんだろう？　放課後に三時間くらいと、休日は午後に六時間くらいだよな。
時給千円と考えれば時給銅貨一枚だ。一週間で十八時間だから、銀貨一枚と銅貨八枚。少し上乗せして一週間で銀貨二枚くらいでどうだろう？

「一週間に銀貨二枚を固定給にして、利益が出たらその半分は給金に上乗せっていうのはどうかな？」
「え……え！？　それはさすがに僕がもらいすぎだよ！」

そうなのか？　この世界の基準がわからないな。

「その半分でも高い給金だよ！　それに、そんなにもらってるのに利益の半分ももらうことなんてできないよ」

うーん、そんなに言われると少し下げた方がいいのかな？　でも固定給はこれでいいと思うんだ。利益の半分はちょっと減らそう。

「じゃあ固定給は銀貨二枚で、利益の二割を上乗せでいい？」
「そ、それでもかなり貰いすぎだよ！　そもそも従業員が利益をもらうことなんてないから！」
「確かにそうなんだけどロニーと二人だけでやる屋台だし……銀貨二枚と利益の二割でいいよ」
「うーん……まあ、貰えるのならありがたく貰うけど」
「じゃあこれで決定ね！　色々準備するから決まったらまた話するよ」
「うん。僕のためにやってくれるんだよね？　本当にありがとう」
「別に、俺も屋台やってみたかったから、色々売ってみたい物もあったんだ」

そこまで話したところで、他の生徒もたくさん訓練場に入ってきたので話をするのはやめた。

「じゃあとりあえず授業頑張ろうか」

「うん。憂鬱だけど頑張るよ」

８０、ロニーの働き口（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが気になると思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

81、貴族の思考

俺たちは、訓練場の端の方に寄って静かに授業が始まるのを待つことにした。ロニーの服装のこともあるし、できる限り目立たない方がいい。

訓練場には基本的に身分が低いものから集まるようで、最初は同じクラスの人たちが集まってきて、段々と身分が高い人が集まってきている。

端に寄ってはいるが、皆ロニーの服装を見て顔を顰め、聞こえるように悪口を言ってくる者もいる。

「あのような見窄らしい格好をした者と同じ生徒だとは、不愉快だな」

「なぜ雑巾のような服を纏っているのだ？　視界にも入れたくない」

そんな声がたくさん聞こえてくる。多分平民を見下してるタイプの貴族だろう。凄くイラつくし反論したいが、流石に貴族に楯突くわけにはいかない。

ロニーは隣で、背を縮こませて俯いている。助けてあげたいけど……今の俺では何もできない。同じ平民の俺が何を言っても馬鹿にされるだけだし、悪口がより酷くなるだけだろう。

「レオン……僕と一緒にいると何か言われるかもしれないけど、ごめんね」

「そんなの気にしなくていいよ。ロニーがいなくて俺だけでも色々言われるんだから」

「うん……」

少しでもロニーを助けてあげるために、早めに屋台の話を進めた方がいいな。
そんなことを考えていると、三人ほどの貴族がこちらに近づいてくる。今訓練場に入ってきた貴族だから、高位貴族だよな？　なんでこっちにくるんだ？
こっち来ないでくれー！　めちゃくちゃ怖いんだけど！
俺とロニーは、できる限り存在感を消すために顔を俯かせて小さくなっていたが、足音が近づいてきた。

「おい、そこの平民」

これって俺たちに話しかけてるんだよな……最悪。
俺は嫌々ながらも顔を上げて、話しかけてきた人を見た。
話しかけてきた人は、真ん中で偉そうな態度を取ってる人だ。この人って……試験の日にリュシアンと言い合いになってた人だよな？　たしか、プレオベール公爵家のアルテュル・プレオベールだ。
うわぁ～、マジで最悪。

「私でしょうか？」
「お前ではない、そっちの見窄らしい格好をしている方だ」
「わ、私に何か御用でしょうか……？」

ロニーが震える声でそう答えた。

「視界に入るのも不愉快だ。今すぐこの場から立ち去れ」
「で、ですが……授業を受けなければなりません……」
「お前のような卑しいものが学んだところで、高が知れている。王立学校をやめて働けばいいではないか。平民が学んだところで意味はない」

マジでこいつ嫌いだ……平民だって王立学校に通う資格はあるし、卒業できれば役人になれるんだから通う意味あるからね！

それを直接言ってやりたい。イラつく……！

ロニーは完全に萎縮してしまって、俯いて今にも泣きそうだ。どうしよう……どうにかしてとりあえず、この場は見逃してもらえないだろうか？

「あ、あの……ご不快にさせてしまい大変申し訳ございません。次の授業までに服装は改めますので、どうか今回だけは見逃していただけませんでしょうか？」

「貴様は誰だ？　うん？　確かお前は……リュシアンと共にいた者ではないか？　お前は従者ではなかったのか？」

「私はタウンゼント公爵家の後見で王立学校に通っております、レオンと申します」

俺がそう言った途端、アルテュル様の顔がすごく厳しくなった。

「タウンゼント公爵家が、平民の後見をして王立学校に通わせてるだと？」

あれ？　これって言っちゃいけなかったのかな？　でもリュシアンは広めるって言ってたしいいんだよね？

「今すぐ辞退するんだ。そして王立学校を辞めろ」

「えっと……それは私の判断ではできないのですが」

「タウンゼント公爵家は、なぜこのように血迷ったことをしているのだ。卑しい平民の後見をするなど考えられぬ。公爵家の名前が汚されるではないか！」

俺に怒ってもどうしようもなくない？　マジでめんどくさい、早くどっか行ってくれないかな。

「私に言われましてもどうすることもできないのですが……」

「そっちの見窄らしい服を着ている者も、タウンゼント公爵家の後見なのか！？」

「い、いえ……私は貴族の後見は得ておりません……」

また矛先がロニーに向かっちゃったよ。ロニーは後ろ盾もないから俺よりも立場が弱いんだ。

「それならば貴様は今すぐやめられるではないか！　早くこの訓練場から出て行かんか！」

「で、ですか……」

「視界に入れるのも不愉快なのだ！」

はぁ～、本当にこいつうざいな……めちゃくちゃイラつく。もう言い返していいかな？　ここまで我慢したんだからいいよね？

そう思って俺が口を開こうとした時、アルテュル様の後ろから声が掛かった。

「アルテュル、何を騒いでいるんだ」

リュシアンだ！　ステファンとマルティーヌもいる！

助かったぁ～。

「リュシアン！　卑しい平民の後見をしてるとは何事だ！？　公爵家の名前に泥を塗るような真似は今すぐ止めるんだ。この前も忠告したはずだが？」

「アルテュル、私もこの前言っただろう？　有能な平民には力を奮

ってもらった方がこの国のためになるのだ」
「そんなことあるわけがないだろう！？　平民に神聖な貴族の領域を穢されているのだ！　卑しいものと馴れ合うとお前まで卑しいものになってしまうぞ！」
「平民は卑しいものではない。平民がいなければ国が成り立たないのだと、なぜわからない」
「平民は貴族によって生かされているのだ！　父上はいつも言っているぞ！　貴族のお陰で平民は生きていけるのだと」

またこの不毛な争いが始まったよ……多分この二人は一生分かり合えないだろう。
アルテュル様もヤバいけど、この思想を植え付けたアルテュル様の父親がやばいよな。絶対に会いたくない……
アルテュル様の父親って、現プレオベール公爵ってことだよな。プレオベール公爵家、絶対近づきたくない……

でも、アルテュル様の考えをしている貴族が半数はいるんだよな。
さっきから、アルテュル様の言葉に頷いてる貴族も結構いる。頷いてる全員が要注意人物だな。
多すぎて覚えきれないよ……

「お前たち、こんな場所で言い合いなどするのではない」
「殿下！　殿下はリュシアンが正しいというのですか！？」

そんなこと一言も言ってないだろ。まあ、内心はそう思ってるのかもしれないけど……
リシャール様に聞いた限りでは、王族はタウンゼント公爵家と同じ考えのようだ。ただ、敵対勢力の貴族がかなり多いので、安易にどちらかを支持できないらしい。内戦の火種になってしまうんだろうな。

「そんなことは言っていない。ただ、ここは学びの場だ。このように争うための場ではない」
「それは……申し訳ございません。ただ、殿下はどうお考えなのですか！？　リュシアンと仲が良いようですが、やはり私が間違えているというのですか！？」
「リュシアンと仲が良いことは、私の考えと関係はない。私はどちらの意見も正しいと思っている。歴史を重んじるのは大切だ。しかし、時代によって変化させることもまた大切だ。どちらの方が重要だとはいえない。その時々で臨機応変に決めて行かなければいけないことだ。ただ、ルールや決まりは守らなくてはならない。それを守らなくなれば国はどんどん荒れていくのだ。この王立学校は平民も受け入れている。それが今のルールだ」

ステファンさすが王子様だ！　めちゃくちゃカッコいい！　上手くどちらの肩も持たずにまとめたな。

「かしこまりました……申し訳ございません」
「私も、このような場で言い合いをしてしまい、申し訳ございません」

アルテュル様とリュシアンがそう謝って、この場は収まった。
とりあえず良かったけど、いつも助けてもらえるわけじゃないだろう。少しでも目立たないように、次の授業までにはロニーの服装を整えるべきだな。この際、給金の前借りって事でお金を渡しても良いか。そうしてでも服装は整えるべきだ。

81、貴族の思考（後書き）

毎日20時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

82、剣術の合同授業

それから少しして、訓練場に先生が入ってきた。スティーブ先生ともう二人若い男性がいる。

「これから剣術の授業を始める！　俺は剣術の授業を教えるスティーブ・オーブリーだ。この二人は剣術の授業に助っ人で来てもらってる騎士の二人だ。この授業は、ふざけたり真剣でないと怪我をすることもある。俺たち三人の言うことはしっかりと聞くように」

この二人は騎士なのか。確かに格好が騎士の軽装って感じかも。なんかカッコいいな……

「これから何回かの授業は、全員で基礎から始める。経験者も基礎は大事だ。復習の意味でもしっかりと参加するように。基礎を全て教え終えたら、レベル別にチーム分けして実践形式の練習も取り入れる。では、まずはここにある木剣を一人一つ持っていくように」

騎士の二人が運んできた大きな箱の中に、木剣がたくさん入っているようだ。

Ａクラスの人から順番に木剣を選んでいく。

「レオン……さっきは僕のせいで巻き込んでごめんね」

ロニーが、木剣を取るための列に並びながら俺にそう謝ってきた。

「ロニーのせいじゃないよ」

「でも最初は、僕の服装のせいで目をつけられたから」

「そうだけど、途中からはどっちかっていうと俺のせいって感じだったし。どっちも悪くないんだから謝らないでよ」
「そうだよね……ありがとう」
「それよりも、服装早めに整えた方がよさそうだね」
「僕もそう思ったんだけど……お金がなくて」
「さっき屋台の話したでしょ？　その給金を前借りって形で貸すから、明日にでも買いに行った方がいいよ」

俺がそう言うと、ロニーは一瞬驚いたような顔をした後、すぐに申し訳なさそうな顔になった。

「そんなことまでしてもらえないよ。僕、レオンに迷惑かけてばかりだよね……ごめんね」
「迷惑だなんて思ってないよ。友達が困ってたら助けるのは当然でしょ？」
「レオン……本当にありがとう。お金よろしくお願いします」
「うん、後で渡すね」

そんなふうに話がまとまると、ロニーは少しホッとしたような顔になった。やっぱり服装でここまで目立つのは嫌だよな。今日は耐えてもらうしかない。

「そんなことより、剣術の授業頑張ろうね」
「そうだった……色々あって授業のこと忘れてたよ」
「今日は基礎だけだろうし、そこまで厳しくないんじゃないかな？」
「そうかな？　でも厳しくても、剣術の授業頑張ることにする！　少しでも強くなった方が良さそうだし……」

やっぱりそう思うよな。身の危険を感じるから少しでも強くなろうと思うんだ。俺ももっと強くなりたい。

「お互い頑張ろうね。筋トレとかも毎日やったら良いと思うよ」
「うん！」

そんな話をしていると、俺とロニーの順番になった。俺たちは、何本か残っていた木剣から適当に選びとる。
かなり古くて傷がついたようなものしかなかったが、それはしょうがないだろう。

「全員木剣を持ったか？　では剣の持ち方から教える。基本的には、右手が上で左手が下で両手持ちだ。ただ利き手が左の場合は、逆の持ち方をする奴もいる。そこはやりやすい方で良い」

ジャックさんから教わったのと同じだな。

「よしっ、次は素振りをする。剣に慣れるためにも身体を作るためにも、素振りは大切だ。強くなりたい奴はできる限り毎日やるように。では俺がやる素振りをまず見てくれ」

おお！　スティーブ先生の素振りカッコいい……速いし形もしっかりしているようだ。
スティーブ先生って結構強いのかも。

「しっかり見てたか？　では全員で一緒にやる。とりあえずは二十回だ。いくぞ、一……二……三……二十！」

ふぅ～、この学校で溜まってたストレスが洗い流されるようで、めちゃくちゃ気持ちいい。
流石にこの程度なら疲れなくなったな。

「はぁ……はぁ……はぁ……」
「ロニー大丈夫？」
「う、うん……なんとか……」

ロニーはめちゃくちゃ疲れてるみたいだ。腕も痛そうにしている。素振りって慣れてないとかなり疲れるんだよな。

「次はお前達が素振りをしているところを、俺たちが見て回る。アドバイスはしっかりと聞くように。ではいくぞ、一……二……三……そこの赤髪のお前、肩に力が入りすぎだ。十……十一……十二……二十！」

ふぅ～流石にちょっと疲れてきた。

「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」
「ロニー大丈夫か？」
「も、もう、ダメ……かも……」

ロニーは今にも倒れ込みそうだ。ロニー体力なさすぎるよ。平民の子供って基本的に体力あるものじゃないのか？

貴族の子供は、騎士になる予定がなくても最低限の剣術はやってきた人が多いようで、疲れてはいるがロニーほどではない。

何人か体型がかなり太ってる子供だったり、逆にヒョロヒョロで弱そうな子供は、ロニーと同じくらい疲れているようだ。多分、最低限の剣術の鍛錬もサボってきた子供達だろうな。

「この程度で音を上げているような奴は、卒業試験もクリアできないぞ！　剣術の卒業試験は全ての型の素振りを十回ずつすることだ。綺麗な型で、止まらずに最後までやる事が求められる」

剣術の卒業試験って素振りができればいいのか。全ての型って、ジャックさんに教えてもらった五つのことかな？　もしその五つなら、五十回の素振りができればいいってことだよな。
それは凄くありがたい。剣術の卒業試験は難しくなさそうだな。

「卒業試験って剣術もあるの……」

ロニーは逆に、さっきの話で絶望している。

「ロニー、素振りをすればいいだけなんだからそんなに難しくないよ。体力をつければ大丈夫だと思うよ」
「そうかな……その体力作りが大変だと思うけど……」
「うーん、多分、授業を真剣に受けてるだけで大丈夫だと思うよ？　もしそれでも不安だったら、家で筋トレをするとか、時間がある時にランニングとかすればいいと思う」
「そっか……そのくらいなら頑張れそうだよ」
「うん、頑張って」
「レオンは全然疲れてなさそうだね」
「俺は鍛えてるし、剣術も少しやったことあるから」

そこまで話していると、ロニーも少し回復してきたようだ。さっきよりは辛くなさそうな顔になってる。

そこからの授業は、足捌きのやり方を教わったり、別の素振りの型を教わったりした。
剣術の授業は結構楽しいかもしれない。スティーブ先生が、身分を気にしない姿勢なのも好感触だ。高位貴族で少し嫌そうな顔をしている人もいたが、学校では先生を敬うというルールがあるからか、文句は出なかった。
うーん、やっぱり身体を動かすのって気持ちいい！

「よしっ！　今日はこれで終わりにする。木剣はしっかりと箱に片付けてから帰るように」

終わった～！　まだ学校に通い始めて一日目なんだよな……凄く長かった気がする……

俺とロニーは、貴族の方々が更衣室に入って行ったのを確認し、最後に更衣室に入り、素早く着替えて更衣室の外に出た。まためんどくさい貴族に絡まれたら最悪だからな。

早着替えが特技になりそうだよ。

「ロニー、なんか疲れたね」

「わかる……僕早く帰って休みたいよ……」

「大変なことも多いけど、これから一緒に頑張ろうね」

「うん。これからもよろしくね」

俺とロニーは疲れ切って、そんな会話をしながら教室に帰った。

８２、剣術の合同授業（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

83、魔法具の研究会

剣術の授業が終わり、俺とロニーは教室に戻ってきた。あれ？今気づいたけど、教室に戻ってくる必要なかったかも……

「ロニー、なんで教室に戻ってきたんだっけ？」
「え？　なんでって……なんでだっけ？」
「多分戻ってくる必要なかったよね」
「そうかも……授業終わったら帰っていいんだよね」

日本での癖で教室に帰ってきちゃったよ。荷物も全部訓練場に移動させるし、そのまま帰ればいいんだな。

「せっかく戻ってきたけど、帰ろうか」
「そうだね。レオンはこの後予定あるんだっけ？」

俺たちは、玄関に向かって歩きながら話し続けた。

「うん。魔法具の研究会に行く予定」
「研究会に入るの？」
「そう。魔法具に興味あるんだよね。ロニーは研究会入らないの？」
「うん。特に興味があるものもないし、それならその時間働いてお金を稼ぎたいから」
「そっか。それなら早く屋台の話を進めないとだね」
「よろしくね」
「俺もやりたいことだったからすぐにやるよ」
「レオン、本当にありがとう。絶対後で恩返しするから」
「友達を助けるのは当然だからいいんだよ」

「でも……じゃあ、レオンが何か困ってたら今度は僕が助けるね」
「それいいね。ありがとう」

そんな話をしていると、すぐに玄関までたどり着いた。玄関にはまだリュシアン達は来ていなかった。

「俺はここで待ち合わせしてるから」
「そうなんだ。じゃあまた明日ね！」
「うん！　また明日！」

ロニーが帰ってしまうと、人がまばらな玄関ホールは少し寂しい。日本の学校と違って土足で校内に入れるから、玄関ホールを使わない人も結構いるんだろうな。さっきの授業にいた皆は、訓練場から直接帰ったんだろう。

俺はじっくりと校内を見たことがなかったので、この機会にと思って、玄関ホールを眺めてみた。こうやって改めて見てみると、学校とは思えない雰囲気だな。

装飾品がたくさん飾ってあって、凄く豪華な雰囲気だ。

本当に今更だけど、俺が日本からこの世界に来て今この場所に立ってるって、凄いことだよな。人生何が起こるかわからないって本当だな。

学校という場所は、嫌でも日本を思い出させる。もうこの世界に来て一年以上経ってるけど、今までは色々必死で、日本のことは思い出さないようにしていた。でも、こうして学校で暇な時間ができると、どうしても思い出しちゃうな。

……日本って本当に良い国だった。それに、俺は良い人たちに囲まれてたよな。家族も友達も大好きだった。

もう会えないのか……今初めてそれを、しっかりと実感した気がする。なんとなく世界に一人ぼっちの気分になってきた。寂しいな。

ただ、日本の家族には会えないけど、この世界の家族には会えるもんな！　そうだよ、日本の家族の分まで、この世界の家族を大切にしよう。

母さん、父さん、マリーに会いたくなってきた。休みがあったらすぐに帰ろうかな。

「レオン待たせたか？」

そんなことを考えて少し寂しい気持ちになっていると、後ろからそう呼び掛けられた。

ちょっとビックリした～。

「リュシアン様、私も今来たところです」
「レオン……？　どうしたんだ？」
「え？　何のことですか？」
「気づいていないのか？　泣いているぞ」

え？　泣いてる……？

俺は慌てて自分の頬を触ってみると、確かに濡れていた。全然気づかなかった。確かに日本のことを思い出して寂しくなってたけど、泣くつもりなんてなかったのに。

「こ、これは……目にゴミが入っただけです。気にしないでください」
「本当か？」
「本当です！　もう大丈夫です」

「そうか、それならいいんだが」
何とか納得してくれたみたいだ……良かった。これから気をつけないとだな。
「それよりも、ステファン様とマルティーヌ様はどうされたのですか？」
「ああ、お二人は先にロンゴ先生のところにいらっしゃっている。先程廊下でお会いしたのだ。私はレオンを呼びに来た」
「そうだったのですね、ありがとうございます。では私たちも行きましょう」
俺はリュシアンの後ろに続いて、ロンゴ先生の部屋まで行った。
「ロンゴ先生、リュシアン・タウンゼントです。入っても良いでしょうか？」
「どうぞ」
「失礼いたします」
部屋に入ると、奥には執務机があり、その手前に応接セットなのか机とソファが置かれている。
そして、部屋の左右には天井までの棚があり、本や魔法具、魔鉄、魔石などがたくさん置かれている。
凄いな……魔法具の先生の部屋ということが一目でわかる雰囲気だ。ちょっとワクワクする。
ロンゴ先生は執務机に座っていて、ステファンとマルティーヌが左側のソファーに座っている。
どんな挨拶をしたらいいんだろうか？　ロンゴ先生にとってみれば俺とは初対面なのか？

俺は迷いつつも、とりあえず当たり障りのない挨拶にとどめた。
「ロンゴ先生、レオンと申します。よろしくお願いします」
「ああ、確か今日授業をしたクラスにいたな。とりあえず座ってくれ。リュシアン様もどうぞお座り下さい」
覚えてもらえてたんだな。俺はちょっとビックリしつつも、リュシアンと共に右側のソファーに座った。
「それで、本日はどのようなお話でしょうか？」
ロンゴ先生がそうステファンに聞いた。
「話の前に一つ良いでしょうか？　ロンゴ先生は私達の先生ですので、敬語や敬称は校内では必要ありません」
「ですが……授業中であればそういたしますが、今は放課後ですので」
「ロンゴ先生がそうおっしゃるのでしたら良いのですが、必要ないということだけ伝えておきます」
「かしこまりました。私からすれば、ステファン様が私に敬語を使うなど恐れ多いことなのですが……」
「それは、生徒は先生を敬うという王立学校の決まりですので」
身分制度がある世界での学校ってめんどくさいな。生徒だけど王子、先生だけど身分は下ってめんどくさい関係性だ。その点、俺は楽だよな。とりあえず全員を敬っておけば完璧だ。
「お兄様、どちらも敬意を持って接するということで良いではないですか。それよりも本題に入った方が良いと思いますわ」
「マルティーヌ、確かにそうだな。話が逸れてしまい申し訳ありま

せん。今日の本題は、ここにいる四人で魔法具研究会に入りたいというお話なのですが」
「え？　ま、魔法具研究会にステファン様とマルティーヌ様、リュシアン様が入られるのですか？」
「入りたいと思っています。それからレオンも一緒です」

俺忘れられてるよ……まあ、この三人が入ることに比べたら、俺が入ることなんて何でもないことだよな。
……ちょっと悲しい。

「えっと……もちろん入っていただけるのはありがたいことなのですが、何故魔法具研究会に入って頂けるのでしょうか？　お恥ずかしい話ですが、今現在魔法具研究会に所属している生徒は二人しかいなく、とても小さな研究会なのです」

二人しかいないのか！？　魔法具を研究する人はあまりいないのだろうか？　かなり夢があるものだと思うんだけどな。

「理由はレオンが所属するので、私たちも共に入ろうと思ったのです」
「レオン……」

そこで初めて、ロンゴ先生がしっかりと俺の顔を見た。今までは他の三人に意識がいっていたからな。先生、俺のことも認識してください。

８３、魔法具の研究会（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

８４、思わぬ繋がり

「レオン……あれ？　レオンって聞いたことあるぞ……も、もしかして、レオンってあのレオンか！？」

あのレオンってどのレオンだ？

「あのレオンと言われてもわからないのですが？」

「レ、レオンは、平民だよな？」

「はい。そうですが……」

「マルセルを知っているか？」

え？　マルセルさん？　ロンゴ先生ってマルセルさんの知り合いなの！？

「ロンゴ先生はマルセルさんを知っているのですか！？」

「やっぱり知っているのか……ではお前が……」

そこまで言ってロンゴ先生は、少し困ったように顔を顰めてしまった。何か悩んでいるようだ。

何だろ？　うーん、もしかしてロンゴ先生は、俺が新しい魔法具を作ったことを知っているのか？　マルセルさんとかなり仲が良いのなら、マルセルさんが頼ったってことも考えられる。

それなら、それを話していいのか悩んでるとか？

俺が魔法具を作ったことは、マルティーヌは知っていたし多分ステファンも知ってるだろう。リシャール様にも話したからリュシアンも知っているだろうか？　まあ、もし知らなくても教えても構わない。三人は俺が全属性なことを知っているしな。

でも、本当にロンゴ先生が知っているのだろうか？　マルセルさんなら隠そうと頑張ってくれそうだ。それでも、隠しきれずに気づいたってことはあり得るよな。

今思えば、あの魔法具を作ったことはかなり危険な行為だった。あの時はお金を稼ぎたくて後先考えてなかったから……マルセルさんにめちゃくちゃ迷惑かけてたかも。

「ロンゴ先生は、マルセルさんから私のことを聞いているのですか？」

「いや、私とマルセルは昔からの付き合いで、そのマルセルが新しい魔法具を次々と開発していると聞いて、本人の元を訪ねたのだ。何故そんなに新しい魔法具を開発できるのかと」

やっぱりそういう人いるんだ……マルセルさん、迷惑かけてごめんなさい！

「マルセルは、自分の工房を持って集中して研究できたからだと言っていたが、それだけであそこまでの成果を上げられるとは考えられない。マルセルはそこまでの天才的な才能はなかったのだ。わしと同じようにな。そこでわしは少し調査をしたところ、あの魔法具が開発された時期に、レオンという名の平民が工房に出入りしていることを突き止めた」

やっぱりそうやってバレることあるんだ……本当に迂闊だったな。他にもバレてる人いるのかな？　怖すぎる。

でもそこまでバレても、俺が開発したと思う人は少ないだろう。それに全属性までたどり着くことはないはずだ。魔法具を開発する人たちは、自分の属性以外の魔法具を開発する人もいるらしいからな。まあ、それが成功した事例はほぼないんだが。

「そこでわしはマルセルに、レオンという平民のおかげで開発できたのかと問い詰めたんじゃ。そうしたらマルセルにお主のことを自慢されたよ」

え？　自慢しちゃったの！？

「レオンの発想力はすごいと。その発想力に助けられて、新しい魔法具が思いついたと言っていた。ぜひ一度会ってみたかったんだ！！　まさか王立学校にいるとは。さすが頭も良いんだな！　素晴らしい！　わしにも助言してくれないか！」

そういう話にしてくれたんだ……マルセルさん本当にありがとう。

「はい。私で良ければ先生の助けになれればと思います。ただ、マルセルさんにもそこまで効果的な助言ができたとは思っていないのですが……」

「そんなことはない！　あそこまで素晴らしい魔法具を開発する手助けになったのだ！　製氷機も火魔法の魔法具も素晴らしいものだ！」

ロンゴ先生のテンションがどんどん上がっていく。他の人が置き去りになってるよ……

「ロンゴ先生、少し落ち着いてください」

「あっ……大変申し訳ございません。ずっと会いたかった人に会えて興奮してしまいました」

ロンゴ先生がステファン達に謝る。

「私達のことは気にしなくて構いませんよ。ロンゴ先生が、魔法具を真剣に研究している事が伝わってきました。それよりも、私達が研究会に入ることは認めてもらえるのでしょうか？」
「勿論でございます」

おお、今度は簡単に認められたよ。でも良かったな。これで魔法具の研究ができるのか、ちょっと楽しみだ。
全属性は明かせないけど、回復魔法を使う魔法具とか、今までの魔法具の改良とかならできるもんな！

「ありがとうございます。それでは、本日から研究会の活動に参加しても良いのでしょうか？」
「それは良いのですが……魔法具研究会は、基本的に個人で活動をして、話し合いたいことがあるときだけ話し合うというやり方なのです。ですので、活動と呼べるようなものはありません。研究会の教室は所属している生徒はいつでも使用可能です」

それは気が楽でいいな。自由に活動できるってことか。

「もし何かを思いついて魔石や魔鉄を使用したい時は、私に言っていただければ必要な分だけお渡し致します。そして、できた完成品は私の元に持ってきていただきます。また、魔法具を改良したい時も私に言って頂ければ、研究用の魔法具をお貸しします」

おお！　魔石と魔鉄も使えるなんて最高だな！
何を研究しようかな？　回復魔法の魔法具もいいけど、やっぱり魔法具の改良をしたい。どうしてもスイッチ機能をつけたいんだよな。

「皆さんはどんな研究をする予定なのでしょうか？」

ロンゴ先生のその言葉に、ステファン、マルティーヌ、リュシアンは皆俺の顔を見た。
えっと……俺が答えるの？　まあ、そうだよね。だって皆は、俺が魔法具研究会に入るから一緒に入るんだもんね。
「私達は、魔法具の改良を中心にやっていきたいと思っています。新しい魔法具も考えますが、まずは魔法具の改良からですね」
俺がそういうと、ロンゴ先生は目を輝かせて身を乗り出している。
「それは、どんな改良を考えているのだ？　構想はあるのか？」
「はい。一応少しは考えているのですが、魔法具にスイッチ機能をつけたいと思っているのです」
「すいっち……とは何だ？」
あ……久しぶりに翻訳されなかったのか？　スイッチっていう概念がないのか？
「えーと、今の魔法具は魔石をつけると魔法が発動し続けますよね。それを魔石をはめ込んだまま、魔法の発動と停止をできるようにしたいと思っているのです。もしそれが難しければ、魔石の取り外しをもう少し簡単にできるようにしたいです。魔石をいちいち取り外すのは大変だと思うので」
「それは……！　今までその改良は考えたことがなかった！　もしそれが実現できたら素晴らしいことだ！」
「そ、そうですか……」
ロンゴ先生のテンションがやばい……先生興奮しすぎです！！

「今すぐにその改良に取り掛かろうではないか！」
「ちょっ、ちょっと待ってください。その前に先輩達に紹介していただけないのでしょうか？」
「それもそうだな……では、研究会の教室をご案内するついでに、魔法具研究会に所属している生徒二人をご紹介致します」

ロンゴ先生は、ステファン達に向き直ってそう言った。先生結構暴走してるから、ステファン達に敬語を使っても意味ないんじゃないか？　まあ、形が重要なのかな。

「今すぐに研究棟に向かうので良いでしょうか？」
「はい。よろしくお願いします」
「かしこまりました。ではご案内致します」

ロンゴ先生はそういうと、いくつかの魔法具を鞄に入れて部屋を出た。研究会の教室で改良の話をする気満々だな。

８４、思わぬ繋がり（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

85、研究会の先輩方

俺たちはロンゴ先生の後ろをついて歩いていく。ロンゴ先生はよほど改良の話がしたいのか、歩くのがめちゃくちゃ早い。
俺は一番後ろを歩いていたが、小走りじゃないと置いていかれそうだ。かなりのおじいちゃん先生なのに、何でこんなに速いんだ！？
かなり早足だったので、すぐに研究棟に着き教室に案内された。魔法具研究会の教室は二階の一番奥のようだ。
コンコン。

「ロンゴだ。入るぞ」
「どうぞ～」

ロンゴ先生が教室に入っていく。俺たちは廊下で少し待っているように言われたので待機だ。

「先生がこっちに来るなんて珍しいですね。どうしたんですか？」
「何か新しい魔法具を思いついたのですか？」
「違う。今日はこの研究会に新しく所属する生徒を連れてきた」
「え！？　新しい生徒が来るのですか！？」
「良かったですね！　私達が卒業したら、この研究会は生徒がいなくなると心配していたのです」
そんな話し声が聞こえてきた。何か俺以外の三人が入ったら、かなり驚かせそうで申し訳ないな……
「皆さん中へどうぞ」

そんなことを考えていたら、ロンゴ先生が廊下に戻ってきてそう言った。

「紹介する。この度、魔法具研究会に所属することになった四人の生徒じゃ」

「え……？」

二人の先輩達は、驚きで大きく口を開けて固まっている。

「ステファン・ラースラシアだ」

「マルティーヌ・ラースラシアですわ」

「リュシアン・タウンゼントだ」

「レオンです。よろしくお願いいたします」

そう自己紹介をすると、二人の先輩は思いっきり頭を下げて急いで自己紹介をしてくれた。

「お、お初にお目にかかります！　ヴァネル子爵家三男、ミゲル・ヴァネルと申します」

「お初にお目にかかります！　ルデュック男爵家次男、ロイク・ルデュックと申します」

「ここは王立学校だ。そこまでかしこまらなくても良い」

「か、かしこまりました」

二人は可哀想なほど恐縮している。まあ、この三人が来たらこうなるよな。

「これから仲良くするように」

ロンゴ先生、そんな簡単にまとめるのでいいの！？　二人も愕然とした顔してるよ。仲良くって言われても困るでしょ。

「では好きな席をお使いください。レオンはこっちだ」

「はい」

ロンゴ先生は早く研究がしたいんだな。やっぱり最初の印象通り、この人は魔法具馬鹿だ。

俺がロンゴ先生に続いて広い机に行くと、他の人たちも皆付いてきた。十分な数の椅子もあるしいいのかな？

「ここに座ってくれ。皆さんも一緒に研究いたしますか？　それならばそちらの椅子をお使いください」

「ご一緒させていただきます」

「ロンゴ先生、私たちはどうすれば良いでしょうか？」

「ミゲルとロイクは自分の研究を進めても良いぞ。ただ、ここで見ているのも勉強になるだろう」

「かしこまりました。では私たちもご一緒させていただきます」

大きな四角い机に皆で座った。俺はロンゴ先生の隣だ。

「レオン、どのような改良を考えているのかもう一度話してくれないか？」

「はい。魔法具は、魔石をいちいち外さなければいけないところが不便だと思っていたのです。そこを何とか改良したいです。例えば光球ですが、光を消す時は魔石を外さなければ光は消えません。それを魔石をつけたまま光をつけたり消したりできるようにしたいのです。その操作が光球から離れたところでもできると尚良いです。例えば天井についている光球を、部屋の入り口で操作できるととても便利だとは思いませんか？」

「素晴らしい発想だ！！　魔法具がすでにとても便利なものだから、それ以上に便利にしようと考えるものはあまりいなかったのだ。もしこれが実現できたら凄いぞ」

そうなのか？　確かに魔法具はまだ歴史が浅いって言ってたな。そこまで研究が進んでないのかもな。

「それで、どうすればそれが実現できるかの案はあるのか？」

「はっきりとした案はないのですが……魔石と魔鉄の間に何かしらの素材を挟んでそれを動かせるようにするとか、魔石自体を遠隔で動かせるようにするとか、色々考えてはいます」

俺もハッキリとこれだっていう案はないんだよな。何らかの素材を挟み込んだら、それを取り除けば魔法が発動するけど、またそれを挟み込むにはどうしたらいいのかわからない。

魔石を遠隔で動かすのも、俺が思いつくのは魔石に棒のようなものを取り付けて、遠くからでも取り外しができるようにするくらいだな。

うーん、それじゃあ便利とは言えないよな……

日本でスイッチ機能って言ったら一番に思い浮かぶのは電気だけど、あれってどういう仕組みだったんだろう？

確か……電気は鉄を通っていくから、それをスイッチによって離したりくっつけたりして、電気のオンオフをしてたんだよな？

……ダメだ！！　全然覚えてない！！

もっと理科の授業とか真剣に聞いてればよかった。でもとりあえず詳しい仕組みはわからないけど、電気のスイッチはあのシーソーみたいなやつだよな。

例えば、魔鉄の板の上に普通の鉄で作った支柱を置いて、その上

に普通の鉄で作った板を置く。そして、その板の右側の裏には魔石、左側の裏には魔石と同じ重さの何かをつければ、シーソーのような感じで右側を押したら魔法が発動して、左側を押せば魔法が切れるようにできるよな。

あれ？　そもそも魔石って魔鉄に嵌め込むけど、嵌め込まないで触れさせるだけでもいいのか？

「ロンゴ先生、魔石を魔鉄に嵌め込むと魔法が発動しますけど、魔石を魔鉄に触れさせるだけでも魔法は発動するんですか？」

「うん？　それは普通に発動するぞ。ただ嵌め込めるようにした方が便利だからそうしてるだけじゃ。魔石は丸いから、転がってしまわないようにな」

「そうなんですね」

それなら、さっき俺が考えたシーソー型のスイッチは簡単に実現できるな……

ただ、その機能がつけられても結局天井まで行かないといけないのなら、魔石を普通に外すのと労力は変わらないよな……

……うん？　ちょっと待てよ。

魔法って魔石から離れたところにも発現させられるんだよな？

それって火魔法でも風魔法でもできたんだから、回復魔法でもできるよな？

それなら、光球も魔石から離れたところに光の玉を作り出せればいいんじゃないか！？

待って、何で気づかなかったんだろう。何となく光球は電球と同じだと思ってたから、魔石自体が光るという前提を変えられるとは思い付かなかった。

離れたところに光球を作り出せるなら、さっき考えたスイッチ機

能を部屋の隅に設置すれば、日本と同じようにスイッチを押して電気のオンオフができるんじゃないか！？

というか、すでにスイッチ機能もいらないのか？　魔鉄の箱と普通の箱を用意して、魔石を入れ替えるだけでオンオフができるよな。

うーん、でもそれだと魔石がなくなる可能性もあるし、入れ替える労力がかかるか。スイッチ機能もしっかりと作れたら、あった方がより便利になるな。

「レオン、どうしたんだ？　さっきから驚いたり考え込んだりしているが」

そうロンゴ先生に言われて、ここが研究会の教室だということに気づいた。

周りを見回してみると、皆の注目を浴びている。やばい、考え込みすぎた……

８５、研究会の先輩方（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

86、魔法具の改良

「すみません！　考え込んでしまって」
「それはいいけど、何か思いついたのか？」

ステファンにそう聞かれた。新しい魔法具の情報ってすでに出回ってるんだよな？　確かロンゴ先生が授業で言っていた。

「はい。新しく登録された魔法具には、魔石から離れたところに魔法を発現させる技術が使われてますよね。それを光球にも応用すれば、魔法具を天井に設置する必要もないと思ったのですが……」
「それは……素晴らしい！　素晴らしいぞ！」

おぅ……ロンゴ先生大興奮で拳を握って立ち上がっちゃったよ。

「なぜわしはそのことに気づかなかったんじゃ！！　光球は魔石が光るものだと思い込んでいた。レオン、お主の発想力は素晴らしい！」

痛いっ！　ロンゴ先生、そんなに強く肩を掴まないでください！

「お、お役に立てて、良かったです」
「早速やってみるぞ！　この中に回復属性が使える人はいますか？」
「私が回復属性です」
「レオン、お主は回復属性だったのか！　ではすぐに試してみよう」

ロンゴ先生はそう言って、カバンに詰め込んでいた魔法具の中から光球を取り出した。

「これに魔法を込め直してみてくれ」
「かしこまりました」

えっと……天井に光球が浮かぶようにすればいいんだよな。この部屋なら三メートル上くらいかな？　でも、今魔法具は机の上に置いてあるから、二メートル上くらいのイメージがいいのか……

これはあれだな、魔法具を置く場所によってどんな魔法を込めればいいのかが変わるよな。魔法は使う部屋ごとに込めてもらわないとダメだな。

「ロンゴ先生、今気づいたんですけど、これって魔法具を置く場所や部屋の形、大きさでどんな魔法を込めるのかが変わるので、その部屋ごとに魔法を込めてもらわないとダメですね」
「確かにそうじゃな……ただその程度の労力は問題ないだろう。貴族の屋敷には回復属性の者がいるだろうし、もし居なくても家まで来て貰えばいいからな」
「確かにそうですね。ではやってみます。魔法具はこの場所に置いて使うということでいいですか？」
「とりあえずはそれで良いぞ」
「かしこまりました」

しっかりと光球が浮かぶ場所をイメージして……天井の三十センチ下くらいがいいかな？
よしっ……『ライト』

「できました」
「では魔石を嵌め直してくれ」
「はい」

おおっ！　ちゃんと天井に光球が作り出された。

「凄い！　凄いぞ！！」

「とりあえずこれで、離れたところに光を作り出せることは証明できましたね」

「レオン……君は簡単に凄いことをやってくれるね」

「お兄様、それがレオンですわ」

「ですが、これは新しい魔法具に使われた技術を光球に応用しただけですので……他の方でもすぐに気づかれると思いますが？」

ステファンにそう言われたが、これってそんなに凄いことだろうか？

「いつかは誰かが気付いただろう。ただ、光球は魔石が光るもの、という固定観念を崩して、この事実に気づける者はあまりいないだろう。一度気づいてしまえば簡単なことなのだがな」

確かに固定観念があると、簡単なことにも気づけなくなるんだよな。うーん、そんなものなのかな？

ただこれで完成ではなく、スイッチの機能をつけたい。

「そんなものなのですね。ただ、これだけでも便利になるので良いと思うのですが、できればもう少し便利にしても良いでしょうか？」

「レオン、これをもっと便利にするのか？　もう十分じゃないか？」

リュシアンに少し呆れた顔でそう言われた。いや、スイッチ機能はあった方が便利だろう。

「もう少しだけなので」

「レオン、今すぐに話してみるんじゃ」

ロンゴ先生はめちゃくちゃ乗り気だ。思いっきり身を乗り出してくる。うっ……先生顔近すぎです。

「わ、わかりました。すぐに説明します」

そのあと俺は、さっき考えたスイッチ機能についての説明をした。

「これはかなり便利になるぞ……」

「はい。この機能を壁に埋め込んでもいいですし、魔石を取り替えるのが大変ならば、壁に埋め込むのではなく簡単に取り外せる箱型のようにして、壁に取り付けるのでも良いと思います」

「レオン……これは素晴らしい！　どの魔法具にも応用可能ではないか！　水道にも水洗トイレにもこの機能を取り付けたら、かなり便利になるぞ！　送風機もいけるな。新しい魔法具にもいけるぞ。全ての魔法具に取り付けられるではないか！」

確かに、水洗トイレとか水道とかはかなり便利になるな。いちいち魔石を取り付けて取り外すのめんどくさかったんだ。まあ、贅沢な悩みなんだけどね。

「確かに全てに応用可能ですね」

「すぐに試してみなければならない！　わしはこれから贔屓の鍛冶屋に頼んで、サンプルを作ってもらう。とりあえず光球でいいだろう。急がせて明日の放課後に持ってくるから、明日の放課後は必ず研究会に来るんじゃ」

「は、はい……」

ロンゴ先生の勢いが凄すぎる……

「形になったら王宮に持っていき、技術登録するぞ！」
「技術登録って何ですか？」
魔法具の登録とはまた違うのか？
「魔法具の登録と同じようなものじゃ。便利な仕組みなどを開発したときに技術登録をすると、その仕組みを広く広めて開発者は他の者がその仕組みを使ったときに使用料をもらえるんじゃ」
これも特許制度みたいなものなんだな。
「この仕組みは魔法具登録ではないのですか？」
「ああ、これは幅広く応用できるし技術登録じゃな。レオンの名前で登録するんじゃ、お主も一緒に王宮に行くんじゃぞ」
「え！？　私もですか？」
「お主が考えたんだからそうに決まってるだろう？」
確かにそうだよな……前は俺が登録したら流石におかしかったから出来なかったけど、今は王立学校に入学してるし、公爵家の後見もあるから登録できるのか。全属性を明かすわけじゃないし。前に新しい魔法具を登録するなって言われたけど、技術登録ならいいよね……多分。
それに、登録できれば定期的にお金が入ってくるってことだよな。ちょっと嬉しいかも！
「確かにそうですね。一緒に王宮に行っていただけるのですか？」
「わしの生徒の開発じゃ。一緒に行くに決まってるだろう？」
「ありがとうございます！」
ロンゴ先生、少し変人だけどいい人だ。俺一人で行くのは流石に

怖すぎる。

「とにかくサンプルを作ってみてからじゃな。わしは鍛冶屋に行かないといけないのでこれで失礼する。皆さん、お先に失礼させていただきます」

ロンゴ先生はそう言って、嵐のように帰っていった。一瞬だったな……

それで、俺たちはどうすればいいんだ？　先輩二人は、先生がいなくなって所在なさげにそわそわしている。

「ステファン様、先生は帰ってしまわれたようですが、この後はいかが致しますか？」

「そうだな……少し早いがもう帰るとするか」

「そうですね。ミゲル様とロイク様はまだ残られますか？」

「う、うん。私たちはもう少し残って研究するよ」

そういえば、二人は何の研究をしてるんだろう？

「お二人は何の研究をされているのですか？」

「私たちは、ピュリフィケイションの魔法具を何とか作れないか研究してるんだ。二人とも回復属性だから」

おお！　それ俺も研究したい！　普通の魔法具は魔力効率が良くなって、魔法を使うより大幅に少ない魔力で使える。しかし、ピュリフィケイションは魔力効率が変わらないんだよな。そしてピュリフィケイションは元々魔力効率が悪すぎるから、もし魔法具を作ったとしても結局使えないんだ。

確かトイレを綺麗にするとしたら、満タンに魔力を込めた魔石で何回か魔力を込め直さないと無理なんだったよな。それは効率悪す

ぎて実用にはならない。
何とか魔力効率を上げられれば良いんだけどな……
「確か魔法具にしても魔力効率が変わらず、使える魔法具にならないのですよね？」
「ああ、ただでさえ効率が悪い魔法なのに、魔法具にしても変わらないんじゃ誰も使ってくれない。何とか効率を良くして、使えるものができないかと思ってるんだ」
「どんな魔法具を考えているのですか？」
「例えば、持ち運びできるトイレがあれば便利だと思ってるんだ。馬車の旅などにあればかなり便利だとは思わないか？　用を足したら綺麗に浄化してくれるのが理想なんだけど……」
「それは素晴らしいですわ！」

突然マルティーヌが話に入ってきた。

「その魔法具が完成したら、馬車の旅は格段に便利になりますわね。私もその研究をお手伝いいたします！　私も回復属性ですの！」

おぅ……マルティーヌも暴走し出したよ……
二人の先輩たちは完全にフリーズしている。王女様と一緒に研究とか、意味わかんない状態だよね。

「レオンも一緒に研究しましょう。レオンも回復属性ですよね？」
おぅ……俺も巻き込まれたよ……マルティーヌめちゃくちゃイキイキしてる。これは断れないです。先輩ごめんなさい。

「はい。私も回復属性ですのでお手伝いいたします」
「ミゲル、ロイク、マルティーヌとレオンも研究に加わってもいい

か？」

ステファン様が一応二人に意思確認してくれたけど、これで断れる人はこの国にいませんよ！

「は、はい。もちろんでございます」

「とても、心強いです」

二人は顔を青ざめさせながらそう言った。先輩方、共に頑張りましょう。

「ステファン様、四人がその研究をするのでしたら私達はどういたしますか？」

「確かリュシアンは火属性だったよな？」

「はい」

「私は水属性だから、一緒に一つのことを研究するのは難しいかもしれないな……」

「それならば、それぞれで新しい魔法具を考えますか？」

「そうだな。新しい魔法具を考えるのは面白そうだ」

二人は新しい魔法具を考えるのか。火魔法と水魔法で新しい魔法具か……俺も何か考えてみようかな。

「では、私たちは帰るとしよう。ミゲル、ロイク、これからよろしく頼む」

「はい。こちらこそよろしくお願いいたします」

「よろしくお願いいたします」

そう挨拶をして、俺たち四人は帰路に就いた。

ふぅ～、大変なこともあるけどこれから楽しくなりそうだ。ちょ

っとワクワクしてきたな。

８６、魔法具の改良（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

87、涙の理由

馬車の停留所に着き、ステファンとマルティーヌに別れの挨拶をして公爵家の馬車に乗り込もうとしたら、マルティーヌに止められた。

「レオン、少し話があるのだけど良いかしら？」
「話ですか？」
「お兄様、王家の馬車を少し貸していただけますか？」
「それは、私はいない方がいいということか？」
「ダメでしょうか？」
「いや、少しの時間なら構わないが」

二人だけで話したいってことか？　ますますなんの話かわからない。

「では話が終わるまで、ステファン様は公爵家の馬車でお待ちになっていて下さい」
「ああ、リュシアンありがとう」
「では、レオンはこちらに」
「かしこまりました」

本当になんの話だろうか？　俺は首を傾げながら王家の馬車に乗り込んで、マルティーヌの正面に座った。

「マルティーヌ、突然話があるってどうしたの？　二人にも聞かせられないこと？」
「先ほど気になることがありまして……ロンゴ先生の部屋に来る前、

レオン泣いていたでしょう」
「え？」

何でマルティーヌが知ってるんだ？　俺言ってないよな？　リュシアンが言ったとか？
いや、あの時からずっと一緒にいたけど何も言ってなかったはずだ。

「何でそんなこと……」
「ロンゴ先生の部屋に入ってきた時、目元が少し赤くなっていましたし目も潤んでいましたわ」
「本当に！？」

最悪だ……パッと見てわかるほどだったってこと？

「でも、それだけなら目にゴミが入ったとか、色々理由が考えられるよね？」
「ええ、ですがレオンの顔が少し寂しそうな顔をしていたので。剣術の授業の時や研究会の時も、何度かそんな表情をしていましたわ」

うわぁ～めちゃくちゃ無意識だった。そんな顔してるつもりなかったのに。確かに、研究棟の質素な雰囲気が少し日本の学校に似てるなとは思ったけど……

「最初は、何でそのような顔をしているのだろうと不思議だったのですけど、もしかして昔を思い出してるからではないかと思ったのです。……違いましたか？」
「ううん、合ってるよ。前の世界では長い間学校に通ってたから、学校という場所がすごく懐かしくて……たくさんの思い出があるんだ。日本の学校とは似てないけど、それでも思い出しちゃって」

玄関とか日本の学校とは全く違うのに、日本の下駄箱の様子とか、毎朝友達と通ってたなとか、教室の様子とか、学校の先生とか、色々思い出しちゃうんだよな……

訓練場も体育館みたいだなって思ったし、跳び箱の授業が嫌いだったんだよな。八段飛べる奴とか意味わかんなかった。

今考えてもやっぱり色々思い出しちゃうな……

「やっぱり、思い出しちゃうと悲しくなるし、自分がこの世界で一人ぼっちのように感じるんだよね……この世界にも家族や友達がいるのにね……」

もう日本のことはあまり思い出さなくなってたのに、学校に来たら日本の思い出が無理やり掘り起こされたみたいなんだ。

「レオン……私もお兄様もリュシアンもレオンの友達で、レオンのことを大切に思ってるわ。それに、他にもあなたのことを大切に思ってる人がたくさんいると思うわ。だってレオンは素敵な人だもの」

「ありがとう。嬉しいよ」

「ええ……気の利いたことを言えなくてごめんなさい」

「ううん、そんなことない。凄く嬉しいよ。俺のことを見てくれてたことも嬉しい」

そうなんだよな……この世界にも大切な人はたくさんいるんだ。

でも、身分がある世界だし、前の世界よりは打算で付き合ってくれてる人が多いことも確かだと思う。俺が何の能力を持っていなくてもずっとそばにいてくれる人は、少ないんじゃないだろうか？

こんなこと考えても仕方ないんだけど……それに、こんなこと考えたら皆に失礼だよな。

もう、ネガティブなことを考えるのはやめよう。
俺はそう決めて顔を上げ、マルティーヌに大丈夫だって言おうとした時、マルティーヌの方が少し早く口を開いた。
「私が最初、レオンに仲良くして欲しいって言った時のこと覚えてる？」
「最初？　うーん、よく言われてたからどれが最初だかわからないな」
俺は少し笑ってそう答えた。するとマルティーヌは少し頬を膨らませて、ちょっと不機嫌そうな顔になる。
「そこまで厳密にじゃなくていいの！　最初の頃のことよ。私の病気を治してもらって、魔法を教えてもらい始めた時のこと」
「うん。覚えてるよ」
「あの頃は、レオンの凄い能力がこの国のためには必要だと思ったの。だからレオンと仲良くなろうとしてたわ」
「うん。何となくそうだろうなって思ってたよ」
最初からあそこまでぐいぐい来られたら、流石に能力目当てかなって思うよね。
「でもすぐにそんな気持ちは消えたわ。レオンは私に対して恩を着せて利用しようとか、そんなことを考えなかったでしょう？　レオンはいつも優しく誠実で、私のことを一人の人として扱ってくれた。それがとても嬉しかったの」
「そんなの当たり前じゃない？」
「いいえ。今まで私に近づいてくる人は、皆自分の為だったわ。皆、私のことを出世の道具としてしか見ていなかったもの」

マルティーヌはそう言って少し寂しそうな顔をした。
まだ十歳にもなってない頃からそんな環境で育っていたなんて……
俺はなんて言って慰めればいいのかわからず、口籠ってしまった。
俺の方が年上のはずなのに……ダメだな。

「私はレオンの人柄に触れて、すぐに国の為なんてことは忘れたわ。レオンの能力は関係なしに、レオンと仲良くなりたいと思ったの。だから二人でお茶会なんて結構強引なことをしちゃったわ」
「確かにあれは強引だったね」
「しょうがないでしょ。レオンは他の人がいる場所では、絶対に態度を崩してくれないと思ったから」
「確かにそうだったと思うよ。マルティーヌが強引に来てくれたから仲良くなれたんだよね。ありがとう」

俺が笑顔でそう答えると、マルティーヌは少し恥ずかしくなったのかちょっとだけ顔を赤くして横を向いてしまった。

「別に、お礼を言われるようなことじゃないわ」
「ふふっ……それでもだよ」
「コホンッ……話が逸れたけど、私はレオンが凄い人じゃなくても、国にとって有益ではなくても、レオンの友達よ。それを伝えたかったの。こんなこと、第一王女の私が言ってはいけないのだけれど……」

……凄いなマルティーヌは、いつも俺が一番欲しい言葉をくれるんだ。

「マルティーヌ、本当に嬉しいよ。ありがとう」

俺が心からの笑顔でそういうと、マルティーヌは綺麗な笑顔で笑い返してくれた。前より大人っぽくなったな……本当に綺麗だ。

「今度、前の世界の学校の話も聞いてくれる？　思い出しても誰にも話せないから、結構辛いんだよね」
「ええ、もちろんよ！」
「ふふっ、ありがとう」

俺とマルティーヌは二人で笑い合って、それから俺は公爵家の馬車に戻った。なんだか心が軽くなった気がする。

「ステファン、待たせてごめんね」
「ああ、それほど待っていない。もういいのか？」
「うん。もう大丈夫」
「そうか。じゃあリュシアン、私は帰るな」
「ああ、また明日」

ステファンはそう言って、王家の馬車で帰っていった。

「レオン、何の話だったんだ？」
「うーん……」
「言えないことなのか？」
「そうだね、とりあえず秘密かな」
「とりあえずなのか？」
「今はまだ？」
「それ同じ意味じゃないか？」
「ふふっ……」
「何で笑ってるんだ？」
「なんか楽しくなってきちゃった！」

マルティーヌと話したら寂しい気持ちがほとんどなくなって、何だかよくわからないけど楽しくなってきた。

「よくわからないけど、良かったな？」

「うん！」

皆と友達になれて良かった。これからもずっと仲良くしていけたらいいな。

「そうだ。話変わるんだけど、俺が屋台をやりたいって言ったら許可をもらえると思う？」

「屋台？　何で屋台なんかやるんだ？」

「色々売ってみたいものがあるのも理由の一つなんだけど、一番は俺の友達の働き先を作りたいんだよね」

「レオンの友達って、剣術の授業で一緒にいた子か？」

「そう。ロニーって言うんだけど、孤児院出身でお金がなくて困ってるんだ。そこで一緒に屋台をやれたらいいと思って」

「孤児院出身でよく王立学校に入れたな」

リュシアンが結構驚いてるから、孤児院出身の人が王立学校に入学できることはほとんどないんだろう。そう考えると、ロニーはかなりの天才だよな。

「孤児院でたまたま勉強する機会があって、そこで有能さがわかって勉強させてもらえたらしいよ。ただ、勉強だけに時間を使えたわけじゃないだろうし、本当に頭がいいんだと思う」

「やはり平民にも有能な者は多くいるのだな。有能なものが、お金を理由に王立学校を去るのは惜しい。屋台の話は許可が出ると思うぞ」

「本当！？」

「ああ、ただお祖父様に聞いてみてくれ。私は屋台について詳しいことは知らないからな」
「うん！」

８７、涙の理由（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

88、屋台の話

その日の夜。
夕食の席で、俺はリシャール様に屋台の話をした。

「リシャール様、私が屋台をすることはできるのでしょうか？」
「屋台？」

リシャール様は、フォークに刺した肉を口に運ぶ途中で手を止め、不思議そうな顔でそう聞き返してきた。
突然屋台をやりたいって言われても、何でって思うよな。

「何で屋台をやりたいんだ？」
「売ってみたいものがあるのも理由の一つですが、王立学校での友人がお金に困っていまして、彼の助けになりたいのです」
「それは立派だが……屋台はよほど成功しないと赤字になるか、日々暮らしていくのがやっとくらいの利益しか出ないぞ？」

やっぱりそんなに甘くないよな。でもそれでもいいんだ。実験的な意味合いもあるし。

「それでも構いません。屋台を始めるのはあくまでも私で、私が友人を雇うという形にするので」
「まあ、それならば構わないが……」
「本当ですか！？」
「ああ、良い経験にもなるだろう」

良かった！　とりあえず第一関門突破だな。

「ありがとうございます。屋台を始めるためには何が必要なのか、教えていただけますか？」
「ああ、屋台を始めるには、屋台販売権を得るだけですぐに始められる。どの広場で屋台をするのだ？　屋台は広場でしかできないことになっていて、その管轄はそれぞれの広場で異なる」
「中心街の入り口の広場で屋台を開きたいと思っています」
「それならば中央教会が管轄だな。行けばすぐに権利を得られるだろう」

そうなんだ。教会って本当に便利だよなー、日本でいう役所だ。もう教会とは名ばかりになってるよね。まあ、かなり便利だからありがたいんだけど。

「では、明日の放課後にでも権利を得て来ます」
「ああ、だが屋台で何を売るのだ？」

屋台で売るものは色々考えている。まず、屋台に買いに来る人は基本的に平民で、皆軽く食べられるものを求めている。仕事の合間に軽食として買う人もいれば、夕食として買っていく人もいる。
よって、売るものは食べ物で決まりだ。やはり需要がないものを売ってもしょうがないからな。
あとは何の食べ物を売るのかが重要なんだけど、日本のお祭りを思い出して色々と考えてみた。
たこ焼き、焼きそば、お好み焼き、唐揚げ、かき氷、クレープ、じゃがバター、たい焼き、チョコバナナ、フライドポテト、焼き鳥、わたあめ、たくさんの屋台が思い浮ぶ。

どれもやってみたくてかなり悩んだけど、結局はクレープに決めた。クレープなら中身を変えればいいので、季節によって材料がな

くて閉店ということにはならない。それに様々な組み合わせを作れるので、飽きられることもないだろう。作り方も何となくわかるしな。

今度厨房を借りて、まずは俺がクレープを作れるように頑張らないとだな。色々試してみよう。

「クレープという食べ物を売ろうと考えています」

「くれーぷ？　聞いたことがないな」

「私が考えた料理です」

本当は前世の料理なんだけど……

「レオンのオリジナル料理ということか！　それならば、屋台で売る前に一度屋敷で作ってくれないか？」

「それは……もちろんお作りしますが、まだこれから試行錯誤したい料理なのです。完成したらでよろしいでしょうか？　また、試行錯誤するために厨房をお借りしても良いでしょうか……？」

「ああ、もちろんだ。いつでもレオンに厨房を貸すように言っておこう」

「ありがとうございます！」

よしっ、これで屋台ができるな。まずはクレープの試作をして、それが完成したらロニーに作り方を教えて……

あっ！！　屋台自体も用意しないとダメだった。忘れるところだったよ。

「リシャール様、屋台はどこで購入できるのでしょうか？」

「ああ、屋台なら購入ではなく貸し出してもらえる。中央教会に行った時に、屋台を借りる契約もしてくると良いだろう」

屋台は貸し出しなのか。確かに皆同じ形の屋台だった気がする。
貸し出しなら、保管を考えなくて良いから楽でいいな。忘れずに借りる契約もしてこよう。

「かしこまりました。いろいろ教えて頂いてありがとうございます」
「いや、このくらい大したことじゃない。それよりもクレープを楽しみにしているぞ」
「はい。精一杯作らせて頂きます」

よしっ頑張るぞ！　俺もクレープ食べたいし。
話がまとまって俺がそう決意していると、カトリーヌ様が興味津々の様子で話しかけてきた。

「レオン、その料理はどのような味なのですか？」

カトリーヌ様、かなり興味を持ってるみたいだな。

「クレープは中に挟むもので味が変わるので、どのような味にもできるのです。甘いデザートにもなりますし、食事にもなります」
「それは……想像するのが難しいですわね。ただ、どのような味にもなるというのはとても興味深いですわ。食べるのを楽しみにしています。甘い味も作るのですよ」
「かしこまりました」

確かクッキーの時も、カトリーヌ様は大興奮してたよな。甘いもの本当に好きなんだな。
カトリーヌ様、甘いクレープはたくさん作ります。

そして次の日王立学校に行き、ロニーに屋台ができそうだという

ことを話した。

「ロニー、おはよう」

「おはよう」

「昨日言ってた屋台のことなんだけど、許可が出たからできそうだよ。今日の放課後にでも、中央教会に行って屋台販売権を貰ってくるよ」

「え？　もう！？」

ロニーがかなり驚いたのか、今までで一番大きい声を出した気がする。

「うん、そうだけど……早すぎた？」

「ううん、ただもっと時間かかると思ってたからびっくりしただけ。早いのはありがたいよ」

「それなら良かった」

「いつから屋台始められそうなの？」

うーん、とりあえず明日の放課後に中央教会に行って、屋台販売権を得て屋台を借りる契約をしよう。そしてその帰りに食材を買って、クレープの試作をしてみれば良いだろう。

もし明日でクレープが形になれば、すぐにでも屋台を始められるよな。

「次の回復の日の午後から始められるかも」

「え！？　そんなに早いの！？」

「うん。屋台は借りられるみたいだから、そこまで準備は必要ないんだ。食材と必要な調理器具を買えばすぐにでも始められるよ」

俺がそういうと、ロニーが少し不思議そうな顔をした。どうした

んだ？

「そういえば、屋台では何を売るの？　聞いてなかったよね？」
「あれ？　その話してなかったっけ？」
「うん」
「忘れてた。クレープっていう食べ物を売ろうと思ってるんだけど……作り方をいつロニーに教えればいいかな？」

流石に公爵家の屋敷に呼ぶわけにはいかないし、ロニーも嫌だろう。ロニーの部屋には厨房なんてなさそうだよな。
あれ？　というかロニーって料理したことあるのか？

「ロニーって料理したことあるの？」
「うん。孤児院では順番に料理の手伝いをしてたから、基本的なことはできるよ」
「それなら大丈夫だね。ロニーの部屋には厨房ある？　厨房というか台所か」
「台所だね、部屋にはないよ。大家さんのところにあって、声をかければ借りられるんだ。ただ、使いたい人が多いからいつも誰かが使ってて、結局僕は屋台で買ったものを食べてるよ」

それだと、そこでクレープの作り方を教えるのは難しいな。うーん、屋台で教えればいいのか？
そうだよな。初日の営業日は俺がクレープを作ることにして、作りながら教えればいいか。

「初日の営業日は俺がクレープを作るから、その時に一緒に教えるよ。そんなに難しくないから」
「わかった、よろしくね。それでどんな料理なの？」
「うーん、説明が難しいから実際に見てもらった方が早いと思う」

「そうなの？　それなら教えてもらう時を楽しみにしてる！」

この世界は、なぜかパンを焼く以外でほとんど小麦粉を使わないから、クレープの説明をしても受け入れてくれないだろう。母さんにもドロドロで不味そうって言われたからな。

でも何で、パンケーキとかガレットとかが生まれなかったんだろうな？　作り方は簡単なのに。

いくら考えてもわからないんだけど……ちょっと気になるよな。

「じゃあ、次の回復の日は予定を入れないでくれる？」

「うん！　僕は学校が休みの日はほとんど予定ないから大丈夫だよ」

「そっか、じゃあよろしくね」

「楽しみにしてる」

８８、屋台の話（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

89、歴史の授業と図書館

ロニーと朝に屋台の話をして、今は二限目が始まるところだ。今日の二限目は歴史なのでちょっと楽しみだな。

授業時間になって少し経ってから、かなり歳をとったおじいちゃん先生が現れた。

「わしが歴史の授業を担当する。これからよろしく頼むぞ」

そう言って歴史の授業が始まった。自己紹介もなしなの！？　結構なおじいちゃん先生だけど、大丈夫なのかな。

かなり腰は曲がってるし顔はヨボヨボだ。ただ、髪の毛だけは綺麗な緑色のまま。パサパサだけど……

そういえば、この世界の人って歳をとっても白髪にはならないのかな？　今まで白髪の人にあまり会ったことがないかも……？

「では、この国が作られたところから話を始めよう。五百年程前、この大陸には大国がなく小国が乱立していた。国が生まれてはすぐに滅ぶ。戦乱の世じゃった」

日本でいう戦国時代みたいなことだよな。その時代に転生しなくて本当に良かった。

「人はどんどん死んだ。子供は生まれても育たなかった。環境が悪すぎたのじゃ。戦いにより土地は荒れ、作物が育ちにくくなった。食べるものが減っていった。それによりまた争いが激しくなる。そんな悪循環が起きていた」

やばすぎるだろ……そんなに酷い状況だったのか？　下手したら人間絶滅するじゃん。

「そんな時、ある小国に一人の少女が生まれた。その少女は神の使徒様じゃったのだ。使徒様は全ての属性魔法を使いこなし、様々な神の知識を持っていたそうだ」

使徒様の話だ！　今までずっと使徒様だって言われてきたからめちゃくちゃ気になる。

「使徒様にはどんな攻撃も効かない。使徒様は何もないところから物を取り出せる。使徒様は長い距離を一瞬で移動できる。このような逸話がたくさん残っておる」

使徒様ってそんなにすごい人だったのか！？　全然俺とは違うじゃん！

それにしても、どんな攻撃も効かないってバリアみたいだ。それに、何もないところから物を取り出せるのはアイテムボックス、長い距離を一瞬で移動するのは転移だよな。

なんか、小説の中の話みたいだ。

……うん？　でも、それってこの世界の話だよな？

それなら、この世界でそれらの魔法は使えるってことなのか？

それとも使徒様限定かな？

今度試してみたいな……

「そんな使徒様が戦乱の世をまとめたのじゃ。たくさんの国を併合して、ラースラシア王国を作った。それがこの国の始まりじゃ」

そこからの話は、戦乱の世の話だった。異世界の戦国時代の話なんてかなり興味があるけど、俺はずっと使徒様のことが気になっていた。

使徒様の話はさらっと終わっちゃったけど、どんなことをしたのかもっと詳しく知りたいな。俺と同じような能力を持ってる人だし、興味があるのだ。

図書館に行けば使徒様についての本があるだろうか？

俺はそう考えて、授業が終わりリュシアンと昼食を食べてから、図書館に向かった。お昼休みはかなり長いので、ご飯を食べた後に時間が取れる。

うーーん、やっぱり図書館いいな。俺は図書館に入り深呼吸をした。なんとなく雰囲気が落ち着くんだよな。

さて、使徒様の本はどこにあるだろうか？

俺は自分で見つけたいなと思ってしばらく歩き回っていたが、見つけられなかったので断念して受付にいる職員に聞いてみた。

「すみません。使徒様の歴史についての本を探しているのですが、どこにあるかわかりますか？」

「はい。ご案内いたします」

俺がそう尋ねると、すぐに受付から出てきて案内してくれた。図書館の職員って本の場所全部覚えてるの？　それだったら凄いな。

「こちらの本でよろしいでしょうか？」

案内してくれた場所にあった本は『使徒様の偉業』というタイトルの本だった。

「この本で大丈夫です。案内ありがとうございます」

「いえ、では失礼致します」

俺はその本を手に取って、近くにある椅子に座って本を開いた。
最初の数ページは、とにかく使徒様を称える文言が並んでいる。
これを書いた人は使徒様を崇拝してたんだな。
それが終わると、やっと使徒様が残した偉業についての話が始まった。頻繁に使徒様の凄さを称えることに話が逸れるので読みづらかったが、そこを飛ばして読めばそれほど内容はないのですぐに読み切った。

ざっと読んだ話をまとめると、

ラースラシア王国を作った。
貴族制度やその他様々な制度を作った。
お辞儀や敬礼など神様の仕草を広めた。
一日三食という神様の習慣を広めた。
「いただきます」「ごちそうさま」という神に感謝する言葉を教えてくれた。
酪農と畜産を発展させた。
大豆はそのまま、小麦粉はパンとして食べると健康になれると教えてくれた。
全属性の魔法を使えた。
この世界にない魔法も使えた。

こんな感じだった。

えっと……使徒様って何者？　こんなことあるのかわからないけど、使徒様って俺と同じで日本からの転生者だったりする？
いや、流石にそんなことはないかな……でも、お辞儀とか敬礼とか、日本と同じだからなんでなんだろうって思ってたんだ。

それにいただきますとごちそうさまも。この世界に似たような言葉がないと翻訳されないからこの世界でも通じることに驚いたけど、使徒様が広めたものだったなんて。

でも、大豆はそのまま小麦粉はパンとして食べると健康になれるってどういうこと？　そんな話は日本で聞いたこともないよな。そういう健康法でもあるの？

というか、その教えがあったからこの世界でパンケーキがなかったのか。

それに大豆！　この世界には大豆があるのに、そのまま食べる以外の調理法を見たことがなかったから不思議だったんだ。絶対この教えのせいだよ。

もしこの教えがなかったら、醤油や味噌とか調味料が開発されてたかもしれないのに！　使徒様余計なことを！

酪農と畜産を広めてくれたのはありがたいけどさ……

この世界はもともと植生や気候が日本みたいなんだけど、それだけで人々の生活まで日本的になるわけがないもんな。

今まで感じてきた日本ぽいと思ったことは、全て使徒様が関わってると考えても良いだろう。

確かめる術はないけど、俺と同じで日本からの転生者って可能性が高い気がする。

そう考えると、俺って同じ転生者だから神の使徒なのか？　でも、神様と会ったことないしな。

うーん……そういえば、前の使徒様はなんで神の使徒様だと認められたんだろう？

神様と会話ができたとか？　何か証となる物を持ってたとか？

予言ができたとか？

その辺のことは書いてないし、さっきの授業でも言ってなかった

からわからないけど、何かしら神の使徒だと認める証があったんだろうな。
そう考えると、俺は神の使徒じゃないよな。皆に認めさせるようなものもないし、そもそも神様と会ったことないし。

とりあえず、これはいくら考えてもわからないからやめよう。この中で特に気になるのは、この世界にない魔法も使えた、この点だよな。これってさっき言ってた転移魔法とかのことだろうか？
俺は全属性という点では使徒様と同じだから、もしかしたら使徒様が使ってた魔法が使えるかもしれない。
これは試してみたい！
今日の放課後に少し時間を作って訓練場でやってみようかな。多分誰もいないだろう。

俺は放課後を楽しみにしながら本を棚に戻し、図書館を出て教室に戻った。早く放課後にならないかな。

「レオン遅いよ！　もう授業始まる時間だよ？」
「ごめん、ちょっと図書館行ってたんだよ」
「図書館？　何か気になる本でもあったの？」
「そう。使徒様について調べてたんだ」

結構良い本があったよな。まだ良い本があるかもしれないから、図書館は頻繁に行こう。

「使徒様ってこの国を作った人だよね？」
「そうだよ。歴史の授業で気になったんだよね」

そこまで話したところで先生が来た。それからは、しっかりと午後の授業に集中した。

８９、歴史の授業と図書館（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

90、魔法の授業

次の授業は魔法の授業だ。また合同授業なので、訓練場に行かないとだな。
ただ、魔法の授業は着替える必要がないので、そこまで焦らなくても良い。荷物をロッカーに仕舞うだけだ。

「ロニー、訓練場に行こうか」
「うん？　次は魔法の授業だよね？」
「そうだけど……」

ロニーが不思議そうな顔をしてるけど、なんでだろう？

「僕は魔法の授業は受けないよ。魔力量が一しかないからね」
「そうだった……忘れてたよ」

そうだ。魔法の授業は、魔力量が四以上の人だけ必修なんだった。

「じゃあ授業に行くのは俺だけだね」
「うん。僕は先に帰るよ」
「そっか。じゃあまた明日ね」
「うん。また明日！」

ロニーはそう言って帰っていった。王立学校ではいつもロニーと一緒にいたから、いないと寂しいかも……
俺はそう思いながら、一人で訓練場に向かった。

訓練場に着きしばらくすると生徒が集まってきたが、剣術の授業

よりかなり少ない人数しかいない。
魔力量が四以上の人って意外と少ないんだな。確かに母さんと父さんも少ないって言ってた。そういえばマリーはまだ魔力測定してないよな？　そろそろだろうか？
次に帰ったときは測定し終わってるかもしれない。それを聞くのも楽しみだな！

そんなことを考えながら待っていると、魔法の先生が訓練場に入ってきた。なんかいっぱいいるな。
一、二、三……六人だ。そっか、属性ごとに先生がいるんだ。
「では魔法の授業を始めます。魔法の授業は属性ごとに分かれて行います。また、今回は訓練場に集まってもらいましたが、次回からは外にある魔法の訓練場に集まってください。雨の日は例外です」
確か施設案内の時に、外に魔法の訓練場があったな。次からはあそこでやるのか。
外だと暑そう……
「では属性ごとに別れてください。私は水魔法です」
それから先生達が自分の属性を告げて、それぞれの属性に分かれた。回復属性は、俺の他に三人しかいない。回復属性が一番少ないって本当なんだな。
もちろんマルティーヌも一緒だ。
「私はジョフリー・オッセン、回復属性魔法の担当です。よろしくお願いします」
生真面目そうな若い男の先生だ。結構厳しそうだな。

「この授業では、回復属性の魔法を魔力が尽きる寸前まで使ってもらい、魔法の精度を高めることを目指します。他の属性は、剣で戦いながらどのように魔法を使うのかについて学びますが、回復属性は戦いの最中で使うことはありませんので、そちらの授業は行いません」

おぅ……魔力が尽きるまでただただ魔法を使うだけの、脳筋な授業だったよ。

それって意味あるのか？　まあ、慣れてくれれば少しは精度が上がるのかな……？

「皆さんも知っていると思いますが、魔法を発動させるには、発動させた後に起こる現象をしっかりとイメージすることが大切です」

この世界では、魔法を発動させた後に起こる現象のイメージについては、しっかり学ぶんだよな。ただ、一番重要なのは魔法が発動するまでの過程なんだよね。

まあ、この過程は現代日本で生きた記憶がある俺だから知ってることなんだけど……もう少しこの国でも研究とかすればいいのに。

便利すぎるものがあると、思考停止するのかな？

「回復魔法を使うときのイメージは、怪我がない状態をしっかりと思い浮かべることです。例えば腕の切り傷を治すのであれば、自分の腕を見てイメージを固めてから魔法を使うと良いでしょう」

うーん、このイメージもないよりはマシなんだろうけど……あまり効果があるとは思えない。

この授業で、俺の規格外な魔力量とか規格外な回復力は隠さないといけないよな。この授業、意外と大変かも……

普通の人ってどのくらいで魔力が切れるんだろうか？　マルティーヌにも消費魔力量を減らせるイメージを色々教えちゃったから、全く参考にならないんだよな。他の人をしっかり観察しておかないとだな。

というか、マルティーヌにも気をつけてもらわないと！

俺はそう気づいてマルティーヌの方に視線を向けると、マルティーヌもちょうどこちらを向いていた。

マルティーヌは俺と目が合うと、周りに気付かれない程度に首を縦に振ったけど、これはわかってるってことだろうか？　まあ、信じるしかないな。

「それから、回復魔法の練習は怪我人がいなければ難しいので、これからは騎士団の訓練場に通い練習をします。次回からはこの訓練場に集合した後、王立学校の馬車で騎士団の訓練場まで向かうことになりますので、覚えておいてください」

騎士団の訓練場に行くのか。確かに怪我人がいた方が練習は効率的だよな。

それに騎士団の訓練場なんて楽しみだ！！

「今日は騎士団の訓練場にはいけないので、ライトの魔法を練習をします。ライトの魔法は光の大きさや強さ、色をイメージすることが大切です。これから私がいう通りに、それらを変えてください」

ライトの魔法か。そういえば実家にいるときは、リビングや寝室でずっとライトの魔法を使ってたけど、公爵家の屋敷はどこでも明るいから使ってなかったな。

平民の家はオイルランプやロウソクで灯りをとるので、基本的に薄暗いのだ。昼間は窓を開けて外の光が入ってくるけど、それでも

時間によっては薄暗くなる。それが嫌で、俺が家にいる時は基本的にライトの魔法をずっと使っていた。
母さんたちは眩しすぎるって言ってたけどね。
でも、母さん達も段々と明るいことに慣れたみたいだったから、薄暗い状態に戻るって不便だよな……
実家にも光球を取り付けてあげたいけど、母さんと父さんは回復属性じゃないから魔力の補充ができないし……
マリーが回復属性だったら、光球を買っていくのもいいかもしれない。

「それではまず、手のひらほどの大きさの光を作り出してください。光の強さは弱く、色は白です」

久しぶりのライトの魔法だ。『ライト』
うん、特に問題なくできたみたいで良かった。周りを見てみると、皆も問題なくできているようだ。

「問題ないですね。では、色を赤色に変えてライトを天井付近に移動させてください」

それからしばらく、同じような指示に従ってライトの魔法を練習した。段々飽きてきたな……
早く騎士団で実践練習したいなぁ。

「はい。皆さん問題ないです。ライトを消してください」

ふぅ〜、やっと終わったか。俺はライトを消して何気なく周りを見てみると、皆汗をかいて息が荒くなっている。
え？　なんで？　特に何もしてないよね？

「では疲れたと思うので、少し休憩してください。あなたは……なんで疲れてないのですか？」

オッセン先生が俺を見て不思議そうな顔でそう言った。

え？　なんでって言われても困るんだけど……皆立ってたから疲れたの？　それとも魔法を使ったから？　でも、魔法なんてライトしか使ってないし。

「えっと……何故皆さんは疲れてるのでしょうか……？」

これを聞いたら変に思われるかなと思いつつ、聞いてみた。俺のその言葉を聞くと、オッセン先生はかなり驚いた顔をした後、呆れた顔になる。

「それは、魔法を使ったからに決まっているでしょう？」

やっぱり魔法なのか……！　でもライトだけだよ？　俺はライトを使ってて魔力が切れたことなんてないけど……

仮にもここにいるのは魔力量が四と五の人だよね？　普通の人ってそんなに魔力量少ないの！？

「え、えっと、そうですよね。私は人より魔力量が多いみたいです……」

これで騙されてくれるかな？　ライトしか使ってないしありえない魔力量ではないはず……

「確かに魔力量が五の人には、四に限りなく近い人とかなり魔力量が多い人がいます。あなたはかなり多い方なのでしょう」

やっぱりそういう差ってあるんだ！　セーフ、危なかった……これからは王立学校卒業までは、ちょっと魔力量が多い人程度になるように気をつけよう。

「それは嬉しいです」
「その魔力量を活かせるように、鍛錬に励んでください」
「かしこまりました」

ふぅ～、変に思われなくて良かった。それにしても、ライトって普通の人にとっては結構魔力を消費してるんだな。いや、色を変えたり大きさを変えたり動かしたりしたから余計かもしれない。
まあ、いずれにしても普通の人の魔力量を、大体は把握するべきだな。

それからは、それ以上魔法を使えないのでオッセン先生の話を聞き、授業は終わりとなった。
次の授業も楽しみだ。騎士団の訓練場なんて男の夢だからな！

９０、魔法の授業（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

91、スイッチ機能

魔法の授業を終えて魔法具研究会の教室に向かっているが、マルティーヌと一緒なのでさっきからすれ違う人皆に見られていて居心地が悪い。早く着いてくれ～！

「レオンは先程のライトで、魔力量はどの程度残っているのですか？」

「そうですね、先程のライトではほとんど魔力量は減っていません。私も正確なことは分かりませんが……」

俺は周りに人がいないことを確認して、小声でそう言った。誰かに聞かれたら大変だ。

ライトの魔法は魔力効率が良い魔法なので、あまり魔力を消費しないのだ。俺にとってはあの程度なら魔力量にはそこまで変化がない。

「そ、そうなのですね。流石レオンですわね……」

マルティーヌも小声でそう返してくれた。

「マルティーヌ様は、先程のライトではどの程度魔力を消費したのですか？」

マルティーヌは周りの子ほどではなかったが、少し疲れているような様子だった。

「そうですわね……半分以上は確実に消費しましたね」

そんなになのか！？　マルティーヌは魔力量が五の中でも結構多い方らしいから、他の人はもっと魔力を消費したってことだよな。それは疲れてるよ。
普通の人って予想以上に魔力量が少ないんだな……これだと攻撃魔法があまり発展しないのも理解できる。すぐに尽きる魔力を頼りにするよりも、剣の腕を上げた方が確実だもんね。

「レオン、ライトの魔法も魔力効率を上げるイメージはないのですか？」

マルティーヌが、俺に聞こえるか聞こえないかくらいの小さな声でそう聞いてきた。
うーん、ライトの魔法は色々試してみたんだけど、効果的なイメージが思いつかないんだよな。
日本だと電気で光がつくからそれをイメージしようとしたんだけど、電気の仕組みをほとんど理解してないからか、あまり効果がなかった。
それからは考えることを放棄したんだ……ライトの魔法は元々魔力効率が良いから、真剣に考える必要がなかったんだよね。

「効果的なものが思いついていないのです。もし思いついたらお教えいたします」
「そうなのですね。もし思いついたらお願いしたいですが、無理にとは言いませんわ。私にはライトの魔法を使う機会はほとんどありませんので」

確かに、どこにでも光球があるから使わないよな。

「かしこまりました」

そんな話をしながら歩いていると、魔法具研究会の教室に到着した。
扉を開けると、そこにはミゲル先輩とロイク先輩、ロンゴ先生がいた。リュシアンとステファンはまだ来てないみたいだな。
「おお！　レオンやっと来たか！　マルティーヌ様、お越しくださり光栄です」
「私は魔法具研究会に所属しているのですから、来るのは当たり前ですわ。ここは学校です。そこまでかしこまらなくてもよろしいのですよ」
「かしこまりました。ありがとうございます」
ロンゴ先生、マルティーヌと話してる時にチラチラと俺の方を見たらダメだよ。ロンゴ先生は本当に魔法具馬鹿なんだな。
「ロンゴ先生、スイッチの機能はどうなりましたか？」
「完璧じゃよ！　この魔法具を見てくれるか？　レオンが説明してくれた通りの形で作ってみたのじゃ。ただ、そのままだと魔石が魔鉄に触れた状態で維持されないという問題があったから、そこは改善しておいたぞ」
確かにそうか。シーソーに全く同じ重さのものが載っていたら、水平になるよな。片方を押しても手を離せば水平になるな。
「押した方に少しだけ板がズレるようにしてある。右を押したら板が少し右にズレるので、右の方が重くなり押さえていなくても板が水平に戻ることはない。逆を押した時も同様だ」
おおっ！　確かにこれなら水平に戻ることはないな。シーソーの

支点が移動するって感じだ。ただ、これだとスイッチ機能は壁などに横向きで取り付けるのは難しい。
まあ、そこは別に良いか、基本的に魔法具に取り付けるものだしな。わざわざ壁に嵌め込むと魔石の交換が大変だし。
それよりもこれって俺の目から見ると結構細かいけど、この世界って鍛治の技術力は高いのかな？　うーん、よく分からないけど、高いのなら問題ないか。

「素晴らしい機能ですね。改善までしていただきありがとうございます」
「そうだろう！　スイッチを押してみてくれるか？」
「私が押して良いのですか？」
「お主が考えたのだからな」
「では、押させていただきます」

俺はそっとスイッチに手を添えて、右側を押した。魔石は右側につけることにしたのだ。
押した感じはすごく軽くて、右側に板が少しだけスライドして固定された。魔石が魔鉄にコツンと当たる音が結構綺麗だ。
上を見上げると光球がしっかりと部屋を照らしている。
これは便利だな。魔石を紛失する心配もいらなくなるし、わざわざ嵌め込むのよりよほど楽だ。
俺は今度は左側を押してみた。さっきと同じように左側に固定されて、光球は消えた。完璧だ！

「完璧ですね！」
「そうじゃろう！　では、次の回復の日に技術登録に行くぞ。その日に光球の改良版の魔法具登録もするからな」

俺だけの技術登録でいいのかな？　それに、光球の魔法具登録も

するの？

「技術登録は私の名前だとおっしゃられていましたけど、改良して下さったのはロンゴ先生と鍛治師の方ですから、三人での技術登録でなくてもいいのですか？」

「いや、こういうのは最初のアイデアを出した者と決まっている。最初の発想が大事なんじゃ。そこがあれば改良なんぞ誰にでもできるわい」

そうなのか……？　まあ、それならありがたく登録させてもらおう。

「そうなのですね。では、ありがたく登録させていただきます。それから、光球の魔法具登録もするのですか？　光球は既に登録されていると思いますが」

「ああ、既存の魔法具を改良した場合は改良版として登録し、使用料の三割をもらうことができるんじゃよ。まあ、有益な改良として認められた場合だけじゃがな」

そんな仕組みもあったのか、結構しっかりしてるよな。改良版の魔法具登録なら登録してもいいのかな……？　うーん、さすがにリシャール様に確認したほうが良い気がして来た……今度確認してみよう、技術登録のことも。

「そのような仕組みもあったのですね。そちらの登録もお願いしたいのですが、私の名前で登録しても良いのか確認してからでも良いでしょうか？」

「ああ、構わんよ。登録の日までに確認して来てくれ。もしダメならばどうするのかも決めて来てくるのじゃぞ。それで、回復の日に王立学校の正門前に集合でいいか？」

「はい。時間は何時ごろでしょうか？」
「わしは何時でも良い」

うーん、回復の日はロニーと初めての屋台をやる予定なんだよな。屋台は午後からだとしてもその前に必要なものを買い揃えたいし、できるだけ早い方がありがたい。

「私はできる限り早い時間が良いのですが、登録にはどれほどの時間がかかるのでしょうか？」
「登録は三十分程で済むだろう。登録は九時からじゃから、それより早く行っても意味はないぞ」
「それならば、正門前に九時でよろしいですか？」
「ああ、それで良い」
「かしこまりました。よろしくお願いいたします」

よしっ、その時間なら十時過ぎには終わるだろうから、それから買い物もできるな。学校に通い始めて初めての休日なのに、かなり忙しくなりそうだ……

「レオン、話は終わりましたか？　それならば私もスイッチを押してみて良いかしら？」

マルティーヌにそう話しかけられて、ロンゴ先生との話に熱中しすぎたことに気づいた。
やばいと思って急いでマルティーヌの方を振り返ると、マルティーヌは別のテーブルで、二人の先輩方とピュリフィケイションの魔法具について話し合っていたようだ。先輩たちがめちゃくちゃ緊張している。
流石にまだ慣れないよな。先輩たち、放っておいてごめんなさい……

「はい。感想をいただけたら嬉しいです」

俺は自然な笑顔を作ってマルティーヌにそう言った。今回は笑顔が引き攣らなかった。最近ポーカーフェイスが上手くなってきたかも！

「かしこまりました」

「こちらがスイッチ機能のついた光球です。右側を押すと光球が出現し、左側を押すと光球が消えます」

俺がマルティーヌのところに持っていき説明していると、先輩二人も興味深そうに眺めている。先輩たちにも試してもらおう。

「マルティーヌ、それがスイッチ機能付きの光球か？」

うわっ……いきなり真後ろから声が聞こえた。めちゃくちゃビックリした。

後ろを振り返ると、ステファンとリュシアンだ。部屋に入ってきたのに気づかなかったよ。

「お兄様、その通りですわ。今試してみようと思っていたのです」

「そうなのか。ではやってみてくれ」

「かしこまりました」

マルティーヌがスイッチを押すと、先程と同じように光球が出現する。

「おお、これは便利だな。マルティーヌ光球を消してみてくれ」

「はい。まあ、すぐに消えましたわ。これはかなり便利ですわね。

いつもメイドたちは光球の取り外しが大変そうですもの」
「これは凄いな。かなり便利になる」
ステファン様は興味深げに魔法具を手に取り、スイッチをオンにしたりオフにしたりしている。
「ステファン様、私も押してみて良いでしょうか？」
リュシアンが隣からそう声をかけた。目がキラキラしているので好奇心が抑えられなかったみたいだ。
ステファンが少し苦笑しながら、リュシアンに魔法具を渡す。
「おおっ！　これは凄いですね。これがあればかなり便利になると思われます。パーティー会場には早めに設置すべきではないでしょうか？」
「確かにそうだな。あのシャンデリアの魔石の取り外しはかなり重労働だと聞いたことがある」
パーティー会場に大きなシャンデリアがあるのかな？　俺のイメージ通りの大きさだったら、一つ一つ魔石を取り付けて取り外すのは大変すぎるな。
ただ、この魔法具でシャンデリアを光らせるのはかなり難しいかも……正確な位置にライトを発現させないとだよな。
いっそのことシャンデリアの一つ一つを光らせるのは諦めて、全体的に光らせる感じにするのかな？　まあ、その辺は俺が考える必要はないだろう。
「皆様、こちらの魔法具はいかがでしょうか？」
「ロンゴ先生、素晴らしいと思います。手元で魔石を取り外すだけで天井付近の光球を操作できるのも素晴らしいですし、このスイッ

チ機能もかなり便利になると思われます。水洗トイレや水道など他の魔法具にも取り付けたい機能です」
「ご満足いただけたのなら良かったです。次の回復の日に登録に行きますので、すぐに普及すると思われます」
「では、その時を楽しみにしています」

ステファン様は、とりあえず満足したようで魔法具をテーブルの上に置いた。先輩たちがさっきから試してみたくてそわそわしているので、俺は先輩たちの方に魔法具を持っていく。

「ミゲル様、ロイク様、試して感想をいただいても良いでしょうか？」
「あ、ああ、私たちでいいのか？」
「はい。先輩たちの意見もお聞きしたいです」
「わかった」

先輩たちは、好奇心に満ちた目で魔法具を手に取り、スイッチをオンにしたりオフにしたりしている。

「これは素晴らしいな！　魔法具全てを便利にする！　革命だよ！」

ミゲル先輩は、大興奮で拳を握って立ち上がりながらそう言った。お、おう……この人も魔法具馬鹿だったのか……

「ミゲル……！　騒ぎすぎだよ！」
「ロイク！　お前もやってみろよ！　素晴らしい発明だぞ！　これは……んぐっ」

ミゲル先輩の興奮がおさまらないのを察知して、ロイク先輩がミゲル先輩の口を手で塞いだ。

ロイク先輩、ミゲル先輩がめちゃくちゃ苦しそうですけど大丈夫ですか？　それ、鼻まで塞いでませんか？

「ぷはぁ……ロイク！　殺す気か！」

「ミゲルがうるさいからだろ」

そこでミゲル先輩は、やっと全員に注目されていることに気づき顔を青くした。

「も、申し訳ございません！」

「別に構わない。それで、スイッチ機能は良かったのだな」

ステファンが話を無理やり戻した。

「は、はい！　スイッチ機能は本当に素晴らしいです。この発明で全ての魔法具がより便利になると思われます」

「レオン、皆に受け入れられそうだ。良かったな」

「はい。とても嬉しいです」

皆の反応がかなり好意的だから広まりそうだな。作る人は大変になるだろうけど、頑張ってもらおう。

「では、この魔法具は回復の日までわしが大切に保管しておくぞ」

「はい。よろしくお願いします」

「では、わしはこれで失礼します。御用がありましたら、お手数ですが部屋までお越しください」

ロンゴ先生はそう言って教室を出て行った。予想より早く終わったな。これなら訓練場に行く時間もあるだろう！

「リュシアン様、私もやりたいことがありまして席をはずしても良いでしょうか？　リュシアン様がお帰りになる頃までには戻って参ります」
「何なのだ？　私も一緒に行こうか？」
「いえ、リュシアン様に来ていただくほどのことではないので、私だけで行って参ります」
「そうか、それなら良いのだが気をつけるんだぞ」
「かしこまりました」
俺は皆に挨拶をして教室を退出し、魔法の訓練場に向かった。

91、スイッチ機能（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

92、空間魔法

魔法の訓練場に行ってみると、案の定誰もいなかった。誰かに見られたら大変だから都合がいいな。よしっ、頑張ろう。
確か歴史の授業によると、使徒様はバリア、アイテムボックス、転移が使えたんだよな。
これって属性にしたら何属性だろう？　うーん、空間属性とか？
とりあえず、俺の中では空間属性ってことにしよう。

まずは、アイテムボックスから試してみよう。なんでアイテムボックスからなのかっていうと、一番使えたら便利だから！
これが使えたら便利なんてものじゃないよ。もし時間経過がなければ食料品をいくらでも保管できるし、お金も全て持ち歩ける！
銀行に全てを預けて置くのは少し怖いから、定期的に引き出してアイテムボックスに貯めて置くのもありだよね。絶対に使いたい！！

よしっ……イメージはどんな感じだろうか？　無限の異次元空間が広がっていて、その空間に物を自由に出し入れできる感じかな。異次元空間は時間が停止していて、中に入ってるものはリストとしてわかるのが良い。そして思い浮かべるだけで取り出せたらなお良いな。
空間に小さな穴を開けてそこから出し入れするイメージかな。うん、なんとなくイメージが固まってきたぞ。
日本でアニメ見まくってた俺を舐めるなよ！

よしっ……『アイテムボックス』
俺はそう唱えながら右手から魔力を放出すると、右手の少し先にブラックホールのようなものが出現していた。

おおっ！　凄い！！　もしかして成功！？
俺って天才かも！！！！！

俺は持っていた銅貨を手に持ち、一枚その中に入れてみた。手を中に入れるときに何かを感じるかと思ったが、何も感じないようだ。ただ、中に入れた手は見えなくなったので、傍から見たら腕の先が消えた変な人になりそうだな。これは、周りに人がいる時はカバンの中で出し入れしたほうがよさそうだ。
俺は銅貨をアイテムボックスの中で手放して、手を引いた。すると手は、普通にアイテムボックスから出てきた。ちゃんと動くな……ふぅ～、とりあえず良かった。
ちょっと緊張してたんだ。

俺はもう一度手を異次元空間に入れると、今度は頭の中にアイテムリストのようなものが浮かび上がった。
うわっ！　なんか変な感じだけどめっちゃ便利だ！　銅貨一枚ってあるな。これどうやって取り出すんだろうか？
うーん、念じればいいのか？　俺は銅貨一枚と頭の中で念じてみた。すると手のひらに何かが触れたので、それを掴んで取り出してみると銅貨だった。便利すぎる！
もっと検証してみよう。

今度は銅貨と銀貨を十枚ずつ入れてみると、リストには銅貨十枚、銀貨十枚と書かれている。
これって枚数指定もできるのかな？　俺は銅貨二枚と念じてみると、思った通り銅貨が二枚だけが取り出せた。本当に便利だな。

次は大きなものが収納できるのか試したいな。俺は魔法の訓練場に置いてあった岩を収納できるか試してみることにした。でも、これは持ち上げられないし……手で触れて収納と念じればいいのかな

？

収納！　……ダメだな。うーん、アイテムボックスの入り口に触れさせればいいのかもしれないから……そっか、手のひらに入り口を出現させればいいのかもしれない。

俺は最初に出していたアイテムボックスの入り口を消して、岩に手のひらを当てて魔法を使ってみた。すると、影も形もなく岩がなくなった。

おおっ！　できた！！

リストを見てみると、銅貨、銀貨に続いて岩が追加されていた。手のひらにアイテムボックスの入り口を作り出せれば、なんでも簡単に収納できるじゃないか。便利すぎる！

それに銅貨と銀貨もそのままだから、入り口を消しても中身はそのままってことだな。完璧だ。

よし、あとはこの岩をどうやって取り出すかだけど、手を中に入れて掴むことはできないよな。

手のひらにアイテムボックスの入り口を作って、岩を取り出すように念じれば出てくるのかな？

俺はさっき岩を消した場所に、岩を出現させるように念じて手のひらをかざし、アイテムボックスの入り口を作った。

するとさっきの場所に同じように岩が出現した。完璧すぎる！

あとは……細かいものを収納したらどうなるかだな。俺は訓練場の地面の砂をそのまま収納するのと、袋に入れて収納するのと、二種類で収納してみた。

そしてリストを確認すると、袋に入れた方は訓練場の砂一袋となっているが、そのまま入れた方は一握りの砂となっていた。うーん、砂をそのまま入れたら砂一粒一粒がリストになるのかと思ったけど、そうはならないんだな。それならば、細かいものを入れる時は袋に入れたほうがいいよな。

あとは最後に、時間経過があるかどうか試したい。これはすぐに検証できないから、氷をアイテムボックスに入れてしばらくして取り出してみよう。

俺は魔法で器を作り、その中に氷を作り出してアイテムボックスに仕舞った。これでとりあえず思いつく検証は終わったな。

完璧だ。これは完全にアイテムボックスだ！　俺も空間魔法を使えるんだ！　俺は嬉しすぎて、思わずガッツポーズをしてしまった。

あれ？　でも嬉しすぎて忘れてたけど、空間魔法が使えるってことは俺は使徒なのか……？

うーーん、これはいくら考えてもわからないんだよな。とりあえず保留にしておくしかないか。

そんなことより次の魔法だ！　バリアを試してみよう。バリアは、透明な壁があるイメージだよな？　透明な壁ってガラス？　でもガラスはすぐに壊れるし……

うーん、壁っていうよりもさっきの異次元空間を作り出すイメージの方がいいかもしれない。どんな攻撃も吸収する壁とかめちゃくちゃ強そう！　でもそれだとアイテムボックスに魔法が入っちゃう可能性があるのかな？　それは嫌だな……

やっぱりアニメとかでよくある物理魔力障壁かな。でもあれってどんな材質なんだ？　魔力なのかな……

まあいいや、とりあえずやってみよう！

『バリア』

うっ……作り出せたけど結構魔力を消費するな。アイテムボックスが全然魔力消費しなかったから油断してたよ。

バリア一枚で俺の魔力の一割くらいかも。ただ、それで攻撃を防

げるのなら絶対使うべきだな。
あとは、バリアの形を変えられるかだけど……体に沿うように、透明スーツみたいにできないかな？
俺は透明な全身鎧を着るイメージでバリアを使った。すると全く重さを感じない透明な鎧が現れた。成功だ！
魔力の消費量はあまり変わらないみたいだし、戦う時はこれを纏うべきかも。維持するのにはそこまで魔力を消費しないみたいだし、戦闘中でも使い続けられるな。
あとは、これの耐久度を調べたいんだけど……小さなバリアを出してそれに攻撃してみるか。

俺は手のひらサイズのバリアを作って、それに攻撃してみることにした。手で触ってみた感じはガラスっぽいな。
まずは殴ってみよう。拳を握ってかなり力を入れて殴った。

ガンッ……いったい！！

素手で殴るんじゃなかったよ、痛すぎる。バリアには傷一つ付いてないな。
じゃあ次は剣で攻撃してみたいけど……剣はないから魔法で作った石で殴りつけてみよう。

ガキンッ……凄いな、まだ傷一つ付いてない。

なら魔法だ！　俺は少し遠くからスピードをつけてバレットを放った。いけっ！！

ガゴンッ……え？　まだ割れないの！？
もう一回だ！　バキンッ……ピキッピキッ……ガッシャーン！

おおっ、ついに割れた。というか割れるものなんだな。そして、割れた破片は残らないでそのまま消えてしまった。
これはかなり強力なバリアだ。さっきの魔法は前に岩を破壊したのより強い威力だったし……バリア使えるな。

とりあえず、バリアはこれでいいだろう。あとは転移だけど、転移ってどういうイメージなんだ？　俺が一度分子レベルまで分解されて、別の場所で再構築されるとか？
なんかそれは怖い。あとは、異次元空間を通って別の場所に出るとか。うん、それの方が安全そうだな。
そっちのイメージでとりあえず目に見える場所に転移してみよう。

『転移』

おおっ！　体がふわっと浮いて、一瞬真っ暗な世界に入り込んで別の場所に出てきたって感じだ！　すぐに成功するとは思ってなかった……もしかして俺って魔法の天才？
なんか嬉しいかも。俺は思わずニヤニヤしてしまったが、頑張って気を引き締めて検証を再開した。

次は見えないところに転移してみよう。さっきの岩の裏側をイメージして……『転移』
できた！！　この程度の距離なら転移可能だな。ただ、この程度の距離でも結構魔力を消費している。これは、長距離の転移は無理かもしれないな。
とりあえず魔力があと四割くらいしかないから、最後に一度少し遠くに転移してみるか。
でも、転移先の状況ってわからないよな？　多分転移先に物や人がいたらその上に転移したりぶつかったりする気がする……それに、

人がいたらどこから現れたんだって大騒ぎになる。
うーん、どこに転移するのがいいだろう？
ダメだな……王立学校じゃ試せない。転移するなら実家から森とかの方がいいな。
あとは、人を連れて転移できるか、物を持って転移できるか、転移先に人がいた場合、物がある場合など、色々検証したいことがあるけど……転移が使えることを明かせないと無理だな。

空間魔法が使えることは、タウンゼント公爵家と王家に言った方がいいだろうか？
……言ったら使徒様として祭り上げられる未来しか思い浮かばない。別にそれはもう諦めてるからいいんだけど、俺は使徒様じゃないから神様からの罰が怖いんだよなぁ。使徒様だって騙した罰で天罰が下るとか……あるのかな？

……なんかありそう。とりあえず知らせない方向で行こう。今のところはその方がいいだろう。よしっ方針決定だな。

ふぁ～、色々試して結構疲れたから戻るか。そろそろリュシアンも帰るだろう。

９２、空間魔法（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

93、中央教会で登録

空間魔法を試したあとは、リュシアンと合流してすぐに屋敷に帰った。そして次の日の放課後。

今日は研究会には行かず、中央教会で屋台販売権を得て屋台を借り、材料を揃えてクレープの試作をするつもりだ。

今は王立学校を出発した馬車の中にいるが、何故かリュシアンも一緒にいる。今日は研究会に行かずに帰るから、馬車じゃなくて俺だけ歩きで帰るって言ったんだけど、リュシアンも一緒に帰って買い物に付き合うって言われて断れなかった。リュシアンがいても楽しくないと思うけど、いいのかな？

「リュシアンは本当に帰るので良かったの？　中央教会や銀行、お店に行くから忙しいし楽しくないと思うけど」

「レオンといると楽しいぞ！　レオンがやることは新しいことばかりで楽しい」

「まあ、それならいいんだけど……」

俺ってそんなに新しいことやってないと思うけどな。まあ、楽しんでくれてるならいいか。

「それで、どんな材料が必要なんだ？」

うーん、屋台をやるにはまず調理器具が必要だよな。クレープを作るには鉄板で皮を焼かないといけないから、鉄板とお玉は必要だ。本当は生地を丸く伸ばすための道具があればいいんだけど、無ければお玉で代用するのでもいいだろう。

それからひっくり返すフライ返しも必要だし、生地を作るボウル

も必要だな。あとはクレープを作る場所としてまな板、包丁も必要だ。

また、クレープの中身をどうするかにもよるよな。一応今のところは、おかずクレープ一種類と甘いクレープ一種類にしようと思ってる。もっとたくさんの種類を作ろうかと思ったけど、屋台って基本的に一つのものしか売ってないから、あまり増やさない方が受け入れられるだろう。

できればマヨネーズかそれに近いものは作りたいから、それを作るためにボウルと泡立て器も必要だな。泡立て器ってあるのかな？

なければフォークで代用しよう。あとフライパンも一つは必要だ。それから、スプーンも盛り付けなどにあったら便利だろう。

とりあえずこのくらいかな……とりあえず今日は思いついたものを買って、また足りなければロニーと回復の日に買えばいいだろう。

「とりあえず調理器具は、鉄板、フライパン、お玉、フライ返し、ボウル数個、まな板、包丁、泡立て器、スプーンかな。また足りなかったら買い足すよ」

「結構必要なんだな。食材は？」

食材は……おかずクレープは簡単なんだ。豚肉を塩で焼いて、その時期の新鮮な野菜とマヨネーズと合わせる予定だ。ただ、マヨネーズを作れるのかって問題はあるんだけど、色々試せばそれっぽいのはできるはず！　確か、卵と塩、油、あとお酢だっけ？　砂糖だっけ？　その辺をよく混ぜればいいんだよな。できるはず……多分。

問題は甘いクレープだ。材料をしっかり考えないと、どうしてもコストが高くなる。この世界で売ってるもので思いつくのは、砂糖、果物、蜂蜜、メープルシロップだな。

ただ、果物はたくさん栽培されてないようで結構高いし、メープ

ルシロップは輸入品らしくたまに見かける程度だ。
そうなると、蜂蜜と砂糖だな……この二つも高いけどそこまでもないし、中心街や周りの市場では普通に売っている。
うーん、そういえばバターも中心街でなら買えるよな。それなら蜂蜜バターとか美味しそう！
とりあえずそれでいこう。そこまで甘いクレープに拘らずにおかずクレープだけでも良いんだけど、なんとなくクレープ屋に甘いクレープがないって俺が嫌なんだよな……まあ、売れなかったらすぐにやめるけどね。その時はおかずクレープの種類を増やそうかな。

よしっ、あとはクレープの生地だな。生地は……小麦粉と、卵、砂糖かな？　確かクレープの生地って少し甘かった気がするし。とりあえず小麦粉、卵、砂糖があれば形にはなるはず！　本当は牛乳が欲しいんだけど簡単に手に入らないから……水で代用だな。前のパンケーキの時は形にはなったし大丈夫だろう。

「食材は小麦粉、卵、砂糖、蜂蜜、バター、豚肉、野菜、油、塩、お酢かな。これでできるはず」
「結構色々必要なんだな。今日帰ったら作ってみるんだよな？」
「うん、そうだよ」
「私も食べてみたい！」
「もちろんだよ。他の方にも試食して欲しいんだけど、いいかな？」
「いいに決まってる！　お祖母様はすごく楽しみにしていたぞ」
「それは頑張らないとだね」

そんな話をしていたら、中央教会に辿り着いた。こんな近くまで来たのは初めてだけど、凄く大きな建物だな。

「じゃあ行ってくるね。リュシアンも行く？」
「ああ、馬車にいても暇だから一緒に行くぞ」

「じゃあ行こうか」

俺はリュシアンと一緒に中央教会に入っていく。中央教会の入り口は大きな扉になっていて、開きっぱなしみたいだ。中は礼拝室なのかと思ったら、日本の市役所みたいに受付がたくさんある。これ教会じゃなくない？

「何か、教会っぽくないね」

俺が、リュシアンに聞こえるギリギリくらいの小声でそう言うと、リュシアンは不思議そうな顔をした。

「そうか？　私にとってはこれが教会だが……」

「そうなの？　領都の教会もこんな感じ？」

「ああ、ここより小さいが作りは同じだな」

俺の家の近くの教会は、俺がイメージする礼拝室が主な教会だった。ということは、重要なところから市役所風に改装してるのかな？　確かに行政的な役割を担うなら、礼拝室では不便だもんな。

俺は中をぐるっと見回してみる。結構広いなぁ、目的によって受付が分かれている作りのようだ。一番端に礼拝室はこちらと看板があるので、一応礼拝室も奥にあるみたいだな。

俺は商売関係の受付に行き、空いている受付に話しかけた。

「こんにちは。屋台販売権が欲しいのと屋台を借りたいんですけど、こちらの受付で良いのでしょうか？」

「はい。こちらで手続き致します。では、こちらとこちらの書類に記入頂けますか？」

「はい」

書類は簡単なもので、名前と年齢、住んでいる場所くらいしか書くことがなかった。

「これで大丈夫でしょうか？」

「はい。こちらで処理させていただきます。屋台販売権は一年ごとに更新する必要があり、その度に銀貨一枚お支払いいただきます。本日は初回登録料として銀貨三枚です。また、屋台の貸し出しは半年ごとの更新で、貸し出し料は半年で銀貨五枚です」

そこまで高くないのか……？　いや、屋台をするのは平民の中でも貧しい人が多いから、それを考えるとかなり高いな。もしかして、広場によって値段に違いがあるのかもしれない。俺が屋台を出すのは中心街の入り口にある広場だから高いのかもな。

「本日は合計銀貨八枚です」

「はい。これでお願いします」

俺は銀貨八枚をピッタリ渡した。結構ギリギリだったよ……銀行行かないとやばいな。

というか、屋台始めるって元手がないと辛いんだな。そういえば、広場で屋台がたくさんある中で、地面に布を敷いただけとか木のテーブルだけとかで物を売ってる人達がいた。

あの人たちって屋台が借りられない人なのかも。

「確かに受け取りました。こちらが屋台販売権、こちらが屋台貸し出し証です。屋台では基本的に何を販売しても良いですが、法に触れるものは禁止されていますのでお気をつけください。また、屋台に損壊などがあった場合は損害賠償が発生いたしますので、丁寧に使用をお願いします。他に質問はございますか？」

「そうですね……使用できる井戸はあるのでしょうか？」

「ございます。広場には二箇所井戸がありますので、お好きな方をご使用ください」
「ありがとうございます。他には……今は思いつかないので、疑問点が思い浮かんだらまた聞きに来ても良いでしょうか？」
「はい。いつでもお越しください」

そうしてスムーズに登録は終わった。そしてそのあとまずは銀行に行き、白金貨十枚分を金貨や銀貨など、その他の細かい硬貨にして下ろしてもらった。日本円に換算すると、大体一千万円くらいなので一気に大金持ちになった気分だ。なんか怖いな。
盗まれないように、鞄に入れる振りしてアイテムボックスに入れておいた。これでしばらくは安心だな。

よしっ！　次はついに買い物だ。

９３、中央教会で登録（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

９４、中心街で買い物

「リュシアン、買い物はどこに行ったら効率的かな？」
「そうだな……調理器具はタウンゼント公爵家がいつも使っている商会があるから、そこに行けばいいだろう。食材は市場に行くのが早いんじゃないか？」
「ありがとう！　じゃあまずは商会からでいい？」
「そうだな。そちらはすぐ近くだから先に行くべきだ」

リュシアンは、すぐに御者に行き先を告げてくれた。そして、馬車に揺られること五分ほどでその商会に着く。

俺たちが馬車を降りて建物の中に入っていくと、入り口の近くにいた従業員が対応をしてくれて、店の奥にいた従業員が裏に入っていった。
誰か呼びに行ったのかな？

「リュシアン・タウンゼント様、お越しくださり光栄です。申し訳ございませんが、そちらの方を紹介していただけますでしょうか？」
「ああ、こちらはレオン、我が家の客人だ。今日はレオンの買い物で私は付き添いだ」

凄いな。リュシアンのことは顔を見ればわかるのか。リュシアンは、まだ王都に住み始めてからそれほど経ってないのに。写真もないから絵姿で覚えるのだろうか？　それともさりげなく顔合わせなどがあるとか？

「ありがとうございます。レオン様、お初にお目にかかります。シ

ュゼーグル商会のリュカと申します」
「タウンゼント公爵家でお世話になっている、レオンと申します。よろしくお願いします」

そうして挨拶を終えたところで、さっき裏に入った従業員が中年のおじさんを連れてきた。優しそうに見えるけど、厳しさも兼ね備えてるって感じの人だ。

「リュシアン様、当店まで足をお運びくださり光栄です。レオン様、お初にお目にかかります。シュゼーグル商会の商会長、ジスランと申します」

俺の名前いつ聞いたんだろう？　さっきの会話聞いてたのかな？　というか、お店に入ってからの一連の流れがスマートでカッコよすぎる。有能な従業員と社長って感じで羨ましいなぁ。
日本ではサラリーマンになってバリバリ仕事をこなしてやるって思ってたのに、就職もできなかったからな……悲しくなるよ。

「タウンゼント公爵家でお世話になっている、レオンと申します。よろしくお願いします」
「こちらこそ、よろしくお願いいたします。本日はどのような御用でしょうか」
「はい。今度屋台を始めたいと思っておりまして、そのための調理器具が欲しいのですが」
「かしこまりました。調理器具ならばたくさん揃えております。こちらへどうぞ。リュシアン様もご一緒にご覧になりますか？　応接室へご案内もできますが……」
「私も一緒に見るぞ」
「かしこまりました。ではリュシアン様もこちらへ」

そうして案内されたのは、店の奥にある一角だった。凄い！　かなりの量の調理器具があるな。これはワクワクしてくる。

「どのような調理器具が欲しいか、お決めになられていますか？」

「はい。鉄板、フライパン、お玉、フライ返し、ボウル数個、まな板、包丁、泡立て器、スプーンが欲しいんですが」

「かしこまりました。ではまず鉄板ですが、大きさが三種類ございます……」

この後、必要な調理器具を全て吟味しながら選んでいたら、かなりの時間がかかってしまった。三十分以上はかかったかも……でも良いものが買えたな！

鉄板は、クレープが二枚焼ける大きさにした。慣れてきたら二枚同時に焼いてもいいし、片方は焼いた皮を温めるために使ってもいいだろう。泡立て器も形状は違うけど、それっぽいものは買えた。その他の物も、使いやすくて丈夫そうなものを選んだ。めちゃくちゃ良い買い物が出来たな。

「本日はありがとうございました。またお越しくださいませ」

「はい。また調理器具が必要になった場合は、ご相談させていただきます」

「お待ちしております」

俺は支払いを済ませ、リュシアンと共に馬車に戻って来た。ふぁ～、ちょっと疲れたよ。馬車の中は買った調理道具でいっぱいだ。

「リュシアン、時間かかっちゃってごめんね」

「私も楽しかったから大丈夫だぞ」

「そっか、それなら良かった」

俺はホッとして思わず笑みが溢れた。途中から、待たせてリュシアンに申し訳ないと思ってたんだ。

あれ？　そういえばこれらの調理道具って、屋台に置きっぱなしにはできないから毎回持っていかないといけないんだよな？　そうすると荷車がないと無理じゃん！　これに食材も追加で持っていかないといけないし。

ロニーの家に荷車で調理器具を運んでおいて、ロニーには学校が終わったら一度家に帰って、荷車を持って屋台に向かってもらおう。その途中にある市場で食材も買えば完璧だな。

それには荷車を買わないと。

「リュシアン、荷車ってどこで買えるのかな？」
「何で急に荷車なんだ？」
「この調理器具を、毎回屋台まで運ばないといけないから」
「そういえばそうだな……荷車なら屋敷に余っているものがあるはずだ。それを使えばいいだろう」
「え！？　いいのかな？」
「ああ、そこまで高いものでもないしいいだろう」
「ありがとう！」

良かった！　少しでも節約できるのは嬉しい。予想以上にお金かかってるもんな。

「次は市場に行くので良いんだよな？」
「うん！」

それから少しの間馬車に揺られて、市場に着いた。市場って言っても中心街にある市場だから、高価なものが売られていたり、綺麗なお店が多い。

それに、普通の市場は馬車が入っていけないところが多いけど、ここは馬車が入れるほどの広さがある。俺は今、馬車の窓を開けてお店を吟味しているところだ。

「あっ、ここで馬車を止めてもらえますか？」

俺は御者に向けてそう言った。小麦粉が売ってるお店と調味料が売ってそうなお店があったのだ。

市場には、リュシアンは安全のために降りられないから俺だけだ。今日は学校からそのまま来て、ジャックさんがいないからな。前に護衛なしで行きと帰りは大丈夫なのかと聞いたら、御者はとても強く護衛になるから大丈夫なのだそうだ。

「じゃあ行ってくるね」

「ああ、気をつけろよ」

馬車から降りてまずは小麦粉のお店を見てみる。うーん、小麦粉ってやっぱり一種類しかないんだよな。日本には薄力粉とか強力粉とかあったはずだけど……

まあ、もしここで何種類かあったとしても、俺には違いがわからないから変わらないんだけどね。

「すみません、小麦粉一袋ください」

「はーい。銅貨一枚です」

「これで」

「ありがとうございまーす」

次は調味料のお店だな。おおっ！　油と塩とお酢に蜂蜜まである！　当たりの店だ。

「すみません。油とお酢と蜂蜜を一瓶ずつと塩と砂糖を一袋ずつください」
「ちょっと待ってください」
「わかりました」
「えーと、油とお酢と蜂蜜を一瓶ずつと、砂糖と塩を一袋ずつ……銅貨九枚です」
「はい。銀貨一枚でも良いですか？」
「大丈夫ですよ」
「じゃあこれでお願いします」
「はい。じゃあ、お釣りで銅貨一枚です。ありがとうございます」

うわっ……めちゃくちゃ重い……
俺は何とか全てを持ち上げて馬車に戻った。

「ふぅ～、重かった……」
「欲張って買ってくるからだ」
「だって……一緒に売ってたからついでだと思ってさ」

リュシアンが呆れた顔をしてる。俺そんなに残念な子じゃないからね！　ちょっとしたミスだから！

「次行こう！　御者さん進んでくださーい！」
「かしこまりました」

この後、卵、バター、豚肉、野菜を買った。野菜はレタスを買いたかったんだけどまだ収穫時期じゃないみたいで、キャベツにした。その時その時の旬のものを買えば良いだろう。

「これで全て買えたのか？」
「とりあえずこれで大丈夫だと思う！」

「そうか、じゃあ屋敷に帰るぞ」
「うん！　付き合ってくれてありがとね」
ちょっと疲れたけど、帰ったら試作しないと。夕食まで後二時間くらいしかないから急がないとだな！

９４、中心街で買い物（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

95、クレープの試作

屋敷に馬車が到着すると、ロジェとリュシアンの従者が待っていてくれた。

「レオン様、お帰りなさいませ」
「ロジェ、ただいま。馬車に買って来たものがたくさん入ってるから、全部厨房に運び込んでくれる？　クレープの試作で何時でも厨房を使って良いって言われてるから大丈夫だと思うんだけど、その確認もお願い」
「かしこまりました。では、レオン様はまずお着替えをいたしましょう」

確かに、今着てる服はいい服だから汚れたら大変だな。

「そうだね。一度部屋に行くよ」
「かしこまりました」
「レオン、クレープ楽しみにしているぞ」
「はい。美味しいものをお作りいたします」

これからが大変だ、頑張らないと！

俺は部屋に戻って簡素な服に着替えて、厨房に来た。厨房では、夕食作りのためにたくさんの料理人が忙しく動いている。俺は厨房の三分の一ほどを自由に使っていいそうだ。
凄くありがたいが、料理人の皆さんの視線は結構厳しくて居心地が悪いな。まあ、厨房は料理人にとって重要な場所だから、素人が

入って来たら気に入らないのもわかる。
ナセルさんが寛容過ぎたんだよな～。美味しいものを作るから許してください。

「あの……レオン様ですよね？」
「え？　は、はい！　私がレオンですが……？」

三人の料理人さんが突然話しかけて来た。まだ何もしてないんだけど、どうしたのかな？

「俺たちレオン様の手伝いをするように言われているので、何でも言ってください」
「え？　いいのですか？」
「はい。そう言われましたので」
「そうですか。ではよろしくお願いします」

何となく、めんどくさいと思ってるようなやる気のない雰囲気だけど、仕事はしてくれそうだからいいだろう。人手はありがたい。

「では、二人の方は水を汲んで調理器具を洗っていただけますか？もう一人の方は、私の補助をして欲しいです」
「かしこまりました」

まずは生地を焼いてみよう。それができたら次はマヨネーズを作る。そこまでできれば難しいことは何もないな。キャベツを切って豚肉を焼くだけだ。

よしっ！　俺はボウルとお玉を先に洗ってもらって、生地作りを始めた。

「今日はクレープという料理の試作をします。まずはボウルに小麦粉と卵、砂糖、水を入れて混ぜます」

俺がそういうと、俺に付いてくれた料理人さんはすぐに材料を持って来てくれた。めちゃくちゃありがたい。

分量はどのくらいだろうか……ホットケーキの時と同じか少し水が多いくらいにしてみよう。

俺は小麦粉に砂糖を入れて混ぜ、そこに卵を入れて混ぜて、最後に水を入れて水の量を調整した。

うーん、多分このくらいでいいはずだ。とりあえず焼いてみよう。鉄板をセットして温め、その上にお玉で生地を流し入れた。そしてお玉の底で円を描くように生地を伸ばしていく。

そのまま少し待っていると生地が焼けてきたので、フライ返しで裏返し、まな板の上に焼けた生地を載せた。

おおっ！　ちょっと分厚いけど焼けてる！

あとは味だな。俺は味見として一口食べてみた。うん……結構いけるな。悪くない味になってる。日本で言ったら、めちゃくちゃ美味しいわけではないけど普通のクレープ屋さんって感じだ。

とりあえず生地はこれで良いだろう。

「すみません、さっきやったのと同じように、残りの生地で焼けるだけ焼いてもらえますか？」

「かしこまりました。ただ、初めてやるので失敗してしまうかもしれませんが……」

「それは別に大丈夫です。その場合はまた生地を作って貰えますか？　三十枚程度作ってもらえると嬉しいです」

「かしこまりました」

その間に俺はマヨネーズを作ろう。調理器具を洗ってくれていた

二人にも手伝ってもらえるかな？　ちょうど洗い終わったみたいだ。

「調味料を作りたいのですが、手伝っていただけますか？」

「調味料ですか……？　かしこまりました」

よしっ、マヨネーズは確か……卵と塩、油、お酢を混ぜればいいんだよな？　分量はよくわからないけど。

「とりあえず……ボウルに卵を一つ入れて、塩を少しとお酢と油を入れてよく混ぜてください。お酢と油の量は塩よりは多いくらいでお願いします」

「かしこまりました」

それから料理人さんが凄く頑張って混ぜてくれたが、マヨネーズにならない。何でだろう……？

何か材料が違うのかな？　確かこの三つで良かったはずなんだけど……分量が違うとか？

う～ん、そういえばお菓子作りとかだと卵白だけ使ったりするよな。マヨネーズもそうなのかな？

「これで良いのでしょうか？」

「うーん、これは失敗ですね。お皿に移して次を試しましょう。次は、卵の白身部分だけを使います」

「白身部分だけですか？　……かしこまりました」

そしてまた料理人さんが頑張って混ぜてくれたが、またマヨネーズにならない。

何で！？　さっきより遠くなった気がするんだけど。

ということは、卵黄だけ使うのかな？

「すみません、次は卵黄だけ使ってやってみてもらえますか？」
「……かしこまりました」

いっぱい手伝わせてごめんなさい……！！　俺が自分で混ぜてもいいんだけど、子供の力だとかなり大変な作業だし、身体強化を使うと流石におかしいと思われるから……

それからしばらく混ぜてもらうと、俺が知ってるマヨネーズに近づいてきた。卵黄だけ使うのが正解だったんだ！

ただ、まだ何かが違う……うーん、油が足りないのかな？　マヨネーズってかなり油がたくさん入ってるもんな。前に、トーストにマヨネーズを塗って焼いたことがあるけど、かなり油が出てきてた。

「もう少し油を増やしてもらえますか？　少しずつお願いします」

うん。見た目はマヨネーズに近づいたような気はする。でもやっぱりちょっと違うな。

一度味見をしてみるか。

……あれ？　でもこれって生卵だよね……食べても大丈夫なのかな。食中毒とか怖くない？

そう考えたら食べるのが急に怖くなってきた。それにリシャール様達に出して、食中毒になったりしたら大変だよね。どうにか魔法で調べられないかな？

うーん、ヒールみたいに回復属性の魔力を通してみればわかるかもしれない。

俺は料理人さんに別の手伝いを頼んで少し目をそらしてもらってる隙に、マヨネーズに回復属性の魔力を通してみた。人に害がある物を判別するイメージだ。

……うわっ、なんかヤバいやつがある。これ食べちゃダメなやつだ！

気づいて良かった……後はこれをどうやって除去するかだけど、ヒールと同じような感じで殺菌できないかな？

そう思って魔法を使ってみた。すると悪いものが全てなくなっている。おおっ、凄い！　さすが魔法だ。

でもこれだと毎回俺がいないとダメじゃん……屋台でマヨネーズ使えないよ。どうすればいいかな。

そういえばリシャール様が前に、俺が個人で使う分の魔石や魔鉄は融通してくれるって言ってたよね。それならリシャール様に頼んで魔石と魔鉄を貰ったら、殺菌の魔法具を作ってロニーに渡せばいいか。

ロニーの家に置いてもらって、卵自体を殺菌しちゃえばいいよね。屋台まで持っていくのは危ないだろうから。

そうなると、卵の状態で殺菌できるのか確かめないと。俺は卵に回復属性の魔力を通して殺菌してみた。

できる。完璧だな。

ふぅ～とりあえず問題解決だ。良かったぁ。

後はマヨネーズを完成させられれば完璧だな！　俺は指で少しだけマヨネーズを取り舐めてみた。うーん、美味しいけど日本のものには全然辿りついてない。

何がダメなんだろう？　混ぜる順番？

それから俺は一通り混ぜる順番や分量を試してみて、とりあえずかなり美味しいマヨネーズが作れるようになった。

最初に卵黄と塩とお酢を混ぜて、そこに油を少しずつ加えて混ぜていくのが一番いい気がする。それにこの世界のお酢は少し独特な

んだけど、量は多めの方が美味しいかも。
とは言っても、日本のマヨネーズのお酢の分量がわからないから、これでも少ないのかもしれないけどね。

「これで完成です！」
「これで完成ですか？　これは美味しいのですか？」
「はい。食べてみますか？　そのままよりも野菜につけた方がわかりやすいと思います」

俺は買ってきたキャベツを少し切って、マヨネーズをつけて料理人さん達に渡した。

「どうぞ」

料理人さん達は恐る恐るながらも、自分で作ったので変なものは入ってないとわかっているからなのか、マヨネーズ付きキャベツを口に入れた。

「おおっ！　これ美味いぞ！！」
「本当だ！　何だこれは！？」
「そのままのキャベツがこんなに美味しく食べられるなんて……！」

料理人さん達は大興奮で美味しさを伝えてくれる。顔は満面の笑みだ。
気に入ってくれたみたいで良かったぁ……

「気に入ってもらえて良かったです！」
「はい！　これは素晴らしい発明ですよ！」
「良かったです。それでは続きも手伝ってもらえますか？」
「かしこまりました！」

凄くやる気になってくれたみたいで良かった。

「あと少しなのでよろしくお願いします。生地は焼き終わりましたか？」

「はい。焼き終わりました」

「では、次は豚肉を塩焼きにしてください。お二人はキャベツを細く切って欲しいです」

「はい！」

よしっ……俺はその間に蜂蜜バターのクレープを作ってしまおう。まずはバターを適量取って、生地に伸ばしていく。うーん、まだ温かさがあるから一応は溶けるけど時間がかかるな。屋台では、鉄板の上で生地を温めながらやったほうがいいかも。

そして、バターを溶かしたらその上に蜂蜜を垂らして、半分に畳んで丸めて完成だ！

これ絶対美味しいな。甘い匂いとバターの匂いが最高すぎる。

俺は次々に作ってお皿に乗せていく。しかしその過程でふと気付いた。日本だとクレープは紙で巻いて売るけど、この世界ではどうしよう？

スープを売ってる屋台とかだと、料理はその場で食べてお皿は回収するんだよな。うーん、でもそれだとお皿を洗う手間が結構大変だから……パンを売ってる屋台はそのまま売ってるから、クレープもそのままでいいかな？

生地は少し厚めにしてるし、そのままでも支障はない気がする。とりあえずそのまま売ることにして、問題が起きたら考えよう。

よしっ、これで十五個目だから蜂蜜バターは終わりだな。あとは豚肉の方だ。名前は……豚肉サラダクレープでいいかな？

そっちを作ろう。まずはマヨネーズを塗って、キャベツを敷き詰めてその上に豚肉を乗せる。そして畳んで丸めて完成だ。
これは、見栄えのために豚肉を置く位置を考えた方がいいな。上の方に見えるように置いて下側にも少し入れて……これでいいだろう！

「これで完成です！　これを夕食の際に一人一つずつ出ししてもらえますか？」
「かしこまりました。では、片付けはお任せください。そろそろ夕食の時間ですので」
「ありがとうございます。では、本日使用した器具は全てひとまとめにしておいてもらえますか？　後で別の場所に運びますので。日持ちしない食料品は、厨房で使ってください」

俺はそう言って急いで厨房を出た。早く着替えて食堂に行かないと！

９５、クレープの試作（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思って下さった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

96、クレープの試食

俺が食堂から出るとロジェが待っていてくれたので、ロジェとともに部屋に戻り、服を着替えて食堂に来た。マヨネーズを作るのに手間取ってギリギリだったよ。

今日はリシャール様、カトリーヌ様、クリストフ様、ソフィア様、リュシアンが食堂にいる。

「レオン、先ほど聞いたが今日はクレープを作ってくれたのだな」

「はい。先ほど作りました。甘いクレープと食事のクレープの二種類を作りましたので、食べて感想をいただけたらと思います」

「おおっ！　それはとても楽しみだ」

美味しいと思ってくれたらいいんだけど、口に合わなかったらと思うと緊張する。マヨネーズは料理人さん達にかなり好評だったし、大丈夫だと思うけど……

「リシャール様、本日はレオン様のお料理と料理人が作った夕食の両方があるのですが、どちらを先に召し上がられますか？」

リシャール様の従者の方がそう聞いている。

「そうだな……レオンの料理を先に持ってきてくれ。一度完成形も見たいからそのままで頼む」

「かしこまりました。少々お待ちください」

そういえば、クレープを一人一つ食べるのはかなりきついよな。もし食べられても夜ご飯が食べられなくなる。

「リシャール様、クレープは結構ボリュームがありますので、一つを切り分けて食べるのが良いかと思います」
「それなら完成形をみてから皆で切り分けて食べるとしよう」
「私は甘いクレープを多めに欲しいですわ」

カトリーヌ様、本当に甘いものが好きなんですね……
そこまで話したところで、給仕がクレープを運んできた。一人一皿で二つのクレープが乗っている。ここから切り分けて食べればいいのかな？

「こちらは、レオン様が作られたクレープでございます」
「おお、これがクレープなのか。初めてみる形の料理だな」

リシャール様は興味津々で、様々な角度からクレープを眺めている。

「こちらの料理は屋台で売りやすいように丸めてありますが、今日のようにナイフとフォークで食べるのでしたら、このように丸めずに四角に畳むだけでも良いのです。丸く焼いたものを半分に畳むだけでも良いですし、盛り付けはアレンジ可能です」
「畳める料理とは、面白いな。ではいただこう」

リシャール様は、クレープを三分の一ほど切り取り小皿に移し、そこから一口分を切り取って口に入れた。
まずは食事のクレープから食べたようだ。

「おおっ……これは美味しい……なぜこんなに美味しいのだ？　キャベツと豚肉だけではないのか？」
「そちらには、マヨネーズというソースを入れてあります」

「もしかしてこの白いものか？」
「はい」
リシャール様は、今度はマヨネーズだけをフォークに取り口に入れた。
「おおっ！　これだ！　このソースがとても美味い。これは何で作ったものなんだ？　こんなものは初めて食べた」
「気に入っていただけて嬉しいです。こちらはオリジナルのソースで、卵で作ったものです」
「卵からできているのか！？　これは本当に素晴らしい美味しさだ」
リシャール様は卵で作られているというところにかなり驚いていたが、今はそれよりもマヨネーズに夢中のようだ。
やっぱりマヨネーズはみんな好きだよな。俺も大好きなんだよ。
「レオン！　これは本当に美味しいぞ！　今まで食べたものの中で一番美味しいかもしれない！」
リュシアン、今までで一番は言い過ぎじゃないかな？　俺は少し苦笑いしながら答えた。
「気に入っていただけて嬉しいです」
「レオン、このマヨネーズはたくさんの料理に合いそうだな。肉などにも合うのではないか？」
「はい。肉につけると合うと思われます。それから、野菜やじゃがいもなどにもよく合うでしょう」
クリストフ様は最初は驚いた顔をしていたが、今は研究者のような顔で、真剣にマヨネーズに合う料理を考えているようだ。マヨネ

ーズって基本的に何にでも合うからな。とにかくマヨネーズをつけておけば、合わないことはないだろう。
俺は日本にいた時かなりマヨネーズに頼っていて、色々なものに付けていた。ハンバーグにも焼き魚にも結構何でも合うのだ。アスパラ、インゲン、ブロッコリーとかもマヨネーズをつけるだけで最高に美味しくなるんだよな！

「ただマヨネーズには欠点がありまして、生の卵を使うので食中毒の危険があるのです。このマヨネーズは私の魔法で殺菌しているので大丈夫なのですが、屋台にずっと私がいるのは難しいので、屋台でマヨネーズを使うために魔法具を作りたいと思っています。そこで、魔石と魔鉄をいただいても良いでしょうか？」

俺がそう言うとリシャール様は少し遠い目をした後、了承してくれた。

「魔法で食中毒の危険を排除できるところに驚かなければいけないのだろうが、レオンだからな……前にレオンが使う分は融通すると言ったし、魔石と魔鉄を融通するのは構わない。しかし、このマヨネーズは魔法を使わなくても食べることはできないのか？」

うーん、そう言われると確かに日本には魔法なんてないんだし……どうやって菌を殺してたんだろう？　何かしらの技術があったのかな？
そもそも日本は生卵で卵かけご飯が食べられるし……

「申し訳ありませんが、私には分かりません」
「そうか、それならばしょうがないな。ここまで美味しいものを広められないのは勿体ないが……」
「私が作る魔法具を広めて、卵は全て殺菌をすることにすればいい

のではないでしょうか？　とは言っても、そんなに大規模なことができるのかは分かりませんが……」
「いや、確かにそうだな。回復魔法で食中毒の危険を排除するなど今の状態では登録できないが、レオンが貴族になってこの魔法具を登録すれば広めることは可能だろう……生産者に渡せば効率がいいな……」

リシャール様は色々思いついたようで考え込んでしまった。リシャール様、マヨネーズ普及のためにも頑張ってください。
俺はリシャール様から視線を外して他の方を見回した。そうするとカトリーヌ様と目が合う。

「レオン！　この甘いクレープは素晴らしいですわ！」
「カトリーヌ様、私も同感ですわ。これは素晴らしい美味しさですわね」

カトリーヌ様とソフィア様は甘いクレープを気に入ってくれたらしい。リクエストだったし良かった。

「これは蜂蜜ですよね？」
「はい。蜂蜜とバターです」
「この生地も少し甘さがあるようですけれど……？」
「生地にも砂糖を少し入れて、甘くしてあります」
「これは本当に素晴らしいですわね。毎日でも食べたいですわ！」
「気に入っていただけて良かったです」

カトリーヌ様、甘いクレープ一つ分食べ切る勢いだけど、そんなに食べて大丈夫なのかな？
凄く嬉しそうに食べてるから絶対止められないけど……

まあ、とにかく気に入ってもらえたみたいで良かった。俺も食べよう。まずは豚肉サラダからだ。
一口分を切って、ぱくっ……もぐっむぐっ……うん。美味すぎる。やっぱりマヨネーズ美味すぎるな。最高だ！
俺はあっという間にクレープの半分ほどを食べてしまい、慌ててやめた。この後のご飯が食べられなくなっちゃうよ。
次は蜂蜜バターだ。ぱくっ……うん！　甘くてめちゃくちゃ美味しい！　やっぱり甘いクレープ最高だな。幸せすぎる……ほのかに香るバターの香りと蜂蜜の甘さが、完璧にマッチしてる。これは大成功だな。

屋台の料理はこれでいけるだろう。あとはロニーに教えて、問題が起きたら解決していけばいいな。
次の回復の日から始められそうで良かった～！

「では、こちらの二つの料理で、次の回復の日から屋台を始めようと思います」
「ああ、これなら人気も出るだろう」
「ありがとうございます。頑張ります！」

クレープが完成して一安心だ。あれ？　あと何か聞こうと思ってた気がする。リシャール様に聞こうと思ってたんだよ……何だっけ？？

うーん……あっ！　魔法具の登録をしてもいいのか聞こうと思ってたんだった！　危ない、忘れるところだったよ。

「リシャール様一つお聞きしたいのですが、前に新しい魔法具の登録は王立学校を卒業するまでやめるようにと言われました。ですが、魔法具の改良の登録は良いのでしょうか？　あと技術登録もしたい

のですが……」
「魔法具登録？　技術登録？　何でそんな話になったのだ？　先程の殺菌の魔法具なら登録はまだやめて欲しいが」
「いえ、殺菌の魔法具ではないのです。実は、魔法具研究会で魔法具の改良をしたところ、先生に登録すべきだと言われてしまいまして……」
「ちょっと待ってくれ、情報を整理するぞ。そもそもレオン君は魔法具研究会に所属したのか？」
「はい。お伝えしてませんでしたか？」
「聞いてないな」

そういえば、昨日と一昨日は仕事が忙しいとかで夕食にリシャール様はいなかったんだ。それで報告せずに今日まで来ちゃったってことか。
誰かが絶対報告してると思ってたんだけど、よく考えれば王立学校の中のことは自分で報告しないとすぐに知る術がないのか。

「伝えるのが遅れましたが、私とリュシアン様は魔法具研究会に所属しました。ステファン様とマルティーヌ様もです」
「何というメンバーなのだ……」

リシャール様が呆れたような疲れたような顔になった。何か……ごめんなさい。

「話を続けても良いでしょうか？」
「ああ、続けてくれ」
「魔法具研究会で光球を改良しようと考えまして……」

そこからは、光球をどのように改良したのかについてとスイッチ機能についての説明をした。

「話はわかった。それでスイッチ機能の技術登録と、光球の改良の魔法具登録をする予定なのだな」
「そうです。私の名前で登録しても良いのでしょうか？」
「そうだな……全属性がバレないのであればいいだろう。光球は回復属性だからな。技術登録も属性は関係ないから良い」
「ありがとうございます！」

良かった～！　これで登録できたら定期的にお金も入ってくるし、便利になるだろうし最高だな。

「レオン君、君の行動にあまり制限はしたくないのだが、全属性だけは明かさないように気をつけてくれ。これだけは絶対だ。もし君が全属性持ちだと知られたら、他国から血眼になって狙われるだろう。できる限りの力で守るつもりだが、絶対とは言えない。君はまだ平民だ。貴族ならまだしも、平民では連れ去られたら助けることはできないかもしれない」

リシャール様は凄く真剣な表情で俺にそう告げた。絶対にバレないようにしよう……

「はい。気をつけます」

俺も真剣な表情でそう返すと、リシャール様は途端に顔を緩めた。

「それだけ気をつけていれば、あとは自由に学生生活を楽しんでくれ」
「はい！　ありがとうございます」

そこからは和やかなムードで夕食を食べ終え、部屋に戻った。ふ

ぁ～今日は疲れたな。
ただ、俺にはまだ一つやることが残っている。アイテムボックスの検証の続きだ。俺は使用人もいなくなった部屋のベッドの中で、この前入れておいた氷を取り出してみた。
おおっ！　一切溶けてない。入れた時と何も変化がないように見える。これは時間が経過してない可能性が高い！

俺はテンションが上がりつつも何とか抑えて、もう一つ入れておいたものも取り出した。こっちは熱湯だ。
もしアイテムボックスの中が、気温が低いだけで時間経過がある場合、氷の実験だけではわからないと思ったからだ。
凄い……もう見ればわかる。水面からもくもくと湯気が上がっている。完全にアイテムボックスに入れた時のままだ。
これで決まりだな！！　俺のアイテムボックスは時間経過なしの優れものだ。これはめちゃくちゃ嬉しい結果だ。
とりあえずは、食料をこまめに買ってアイテムボックスに仕舞っておくことにしよう。これでいつ何があっても食料に困ることは無くなった。毛布やベッドもできれば入れておきたいけど……これは追々だな。

……あれ？　今思いついたけど、アイテムボックスに生き物って入れられるのかな。
例えば生きたままの魚とか、植物とかはどうなんだろう？　もしかして人間も入れられるの……？
怖っ！　もしそうだったら怖い。アイテムボックスの中って時間経過がないんだよね？　生き物を入れたらどうなるんだろう……そもそも入らないのかな。
今度試してみた方が良いかも……川で魚釣って入れてみよう。土ごとの植物とかも試す価値あるな。

ふぁ〜、でもとりあえず後でだ。もう流石に眠いから寝る……明日も頑張ろう。

９６、クレープの試食（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

97、ダンスの授業

次の日、学校に行きロニーにクレープが完成したことを伝えた。

「ロニーおはよう！」

「おはよう。朝からテンション高いけどどうしたの？」

「昨日クレープを作ってみたんだけど、無事に成功したんだよ！」

「そうなんだ！　それは良かったよ」

ロニーはかなり嬉しそうに顔を綻ばせた。ロニーも早く仕事をしたいだろうからな。

「それで、次の回復の日から屋台を始めるのでいい？」

「もちろん！」

「俺は朝早くから、ロンゴ先生と一緒に魔法具登録と技術登録で王宮に行かないといけないんだ。だからそれが終わったら、ロニーの家に行ってもいい？」

「いいけど、僕の家知らないよね？　屋台に集合でもいいよ？」

そういえばロニーの家知らなかったな。確かにロニーの家に行く必要はないか……でも、いつもロニーは家から屋台に向かって食材を買いながら行くのだろうから、そこから練習したいよな。

「でも、ロニーには毎回荷物を持って、屋台まで食材を買いながら行ってもらわないといけないから、その練習もしたいんだ」

そういえば、ロニーに毎回荷物を持ち運びしないといけないことを伝えないと。

「ロニー、屋台に荷物はずっと置いておけないから、荷物はロニーの家に置かせてもらって、屋台を開く時に毎回持っていってもらわないとなんだけど、大丈夫？」
「どのくらいの量かな？　僕の部屋はあまり広くないんだけど……」
「荷車に乗せて半分もないくらいだよ。荷車も用意したから持ち運びは大丈夫だと思う」
「そのくらいなら大丈夫だよ！」
「それなら良かった。じゃあ、次の回復の日は学校の正門前に集合で、荷物を持ってロニーの家まで行って、そこから市場で買い物をしながら屋台に向かうのでいい？」
「うん。僕はそれで大丈夫だよ」
「じゃあその予定で！　時間は十二時頃かな」
「それでいいんだけど、僕は時計持ってないからお昼の鐘が鳴ってから学校に向かうことになるよ」

そっか……最近は当たり前のように使ってたから忘れてたけど、時計って高いんだった……今度ロニーにプレゼントしようかな？　でも理由がないし……仕事のボーナスであげるとか？　それありかも。

「それで大丈夫だよ。俺が時間を合わせるから」
「ありがとう！　じゃあその予定で」

よしっ、これであとは買い物をして、ロニーにクレープの作り方を教えるだけだな。
そういえば今気づいたけど、食材を買うためのお金はロニーに定期的に渡さないといけないな。あと、荷物を荷車から部屋に持ち運ぶための大きめの袋と、荷車に荷物を載せてその上から被せる大きめの布も必要かも。

次の回復の日に一緒に買えばいいか。

そこまで考えたところで先生が来た。とりあえずまずは、今日の授業に集中だな。

その後は真面目に授業を受けて、最後の授業になった。今日の最後の授業はダンスの合同授業だ。

ダンスは毎日しっかり復習してるけど、まだまだぎこちないからなぁ……まあ、平民なんてダンスをできなくても当然だからいいだろう。

ダンスの授業も訓練場で行われるので早く移動しないといけない。

「ロニー、訓練場に行こうか」

「うん。早く行かないとだよね」

俺とロニーは、早足で訓練場まで歩きながら会話をしている。

「レオンはダンスをしたことあるの？」

「公爵家で少し習ったことがあるだけだよ」

「習ったことあるの！？」

「うん。でも本当に少しだけだから、まだまだぎこちないし上手になんて踊れないよ？」

「それでも一応は踊れるんでしょう？　僕はやったことなんてないよ……」

ロニーがまた落ち込んでしまった。ロニー、落ち込む必要はないんだよ。どちらかと言えば俺がおかしいんだから！　自分で言って悲しいけど……

「えっと……普通平民はダンスをする機会なんてないから、できなくて当然だよ！　多分基礎から教えてくれるんだろうから、大丈夫だと思うよ」
「そうかな……それならいいんだけど」

どんな先生かにもよるよな。基礎から丁寧に教えてくれる先生であってくれ！
俺とロニーは更衣室に鞄をしまい、訓練場に向かった。まだほとんど生徒は来てないみたいだ……良かったな。
しばらくすると生徒がどんどん集まり、先生が入ってきた。
先生は細身で背が高い四十代くらいの女性だ。少し厳しそうな顔つきをしている。なんか嫌な予感がする。

「これからダンスの授業を始めます。私はアデル・グラミリアン、厳しく指導いたしますのでしっかりとついて来るように。ダンスを踊れないなど、人としてあり得ませんわよね。皆さんは既に踊れると思いますので、どれだけ優雅に美しく踊れるかに重点を置いた授業にいたします」

これは最悪な先生だよ……基礎から教えてくれるなんてことは絶対にないな。というか、ダンスを踊れないなんて人じゃないみたいなこと言ってたけど、それだと平民は皆人じゃないってことになるんですけど！
この人平民を見下してるタイプの人なんだな……まあ、そういう先生もいるだろうってことは覚悟してたけど、実際にいるとめんどくさすぎる！
一応この学校では身分は関係ないと謳っているけど、先生があからさまに差別していいのか？

……いや、この先生は明確に平民を差別してるわけではない

のか。さっきは、ダンスを踊れないのは人としてあり得ないって言ったただけだし……明確に言わなくても間接的に差別してるようなもんだけどね。

はぁ～、この授業疲れそう……

「ダンスの授業の目的は、王立学校の卒業パーティーでダンスを踊れるようにすることです。卒業パーティーには、皆様のご両親もご出席されるので、しっかりと練習いたしましょう。今から真剣に練習すれば、卒業時には完璧に踊れるようになっていることでしょう。では、まずは基本の曲を一曲通して踊っていただきます。三回に分けて踊っていただきますが、女性の方が少ないので、数人の方には二回踊っていただきますわね」

え！？　最初から一曲通して踊るの！？

確実に踊れる前提の授業じゃん！　平民は完全無視なんですね！！

「レオン、どうしよう……僕踊れないよ」

ロニーが小声でそう言ってきた。そうだよね……俺も何とか踊れる程度だよ。

でも、平民でちゃんと踊れる人はいないと思うから、一人だけ踊れないってことはないと思うんだけど……

「多分平民は皆踊れないから、一人だけ目立つことはないと思うんだけど……」

今周りを見回してみても、結構顔を青ざめさせてる人がいるから大丈夫だと思う。平民だけじゃなくて騎士爵の子供でも結構いるな。

「それではまず、ＡクラスとＢクラスの皆様に踊っていただきまし

ょう。女性が数人足りないので、Ｃクラスの女性はお手伝いをお願いします」

先生のその言葉で、女子はステファンに男子はマルティーヌに、一斉に群がった。凄いな……二人ともご愁傷様。

もう勢いが凄すぎる。貴族では我が強くないとやっていけないのだろうけど、それにしてもぐいぐい行き過ぎじゃないか？　一見動きはお淑やかなのに、肉食獣の群れに見えるよ。

「皆ありがとう。ただ、私はマルティーヌと踊ると決めているんだ」

「そうなのです。私はお兄様と踊るので皆さんと踊れませんの。申し訳ございません」

二人とも双子で本当に良かったな……これなら争いが丸く収まる。一人だけだったらと考えると怖い。誰を選んでも争いが起きるだろう。

皆諦めて、近くの相手と組むようだ。リュシアンの相手は誰だろう？

……おおっ！　かなり可愛い金髪美少女だ。

他の貴族と比べるからかもしれないけど、かなり大人しそうな子だな。この肉食獣の群れの中で見るとオアシスに見える。

リュシアンさすがだよ……

「では踊ってもらいますわね」

グラミシアン先生がそう言うと、先生と共に訓練場に来ていた二人の方が音楽を奏で始める。

そして、それに合わせて皆がダンスを踊る。さすがだな……皆か

なり上手い。今までしっかり練習してきたんだろうな。
アルテュル様も踊ってるけどかなり上手い……貴族でいるための努力は怠ってないんだな。
はぁ～……そう言う人が一番厄介なんだよ。貴族であることに胡座をかいて、特権は使うけど義務を負わないような人だったら蹴落とすのも楽なのに。
そんなことを考えながら見ていたら、ダンスが終わった。

「皆さん、とても良いですわ。このレベルのダンスが今の段階でできているならば、卒業する頃には素晴らしいダンスが踊れるようになるでしょう。ダンスを踊ることができるのは当たり前ですわ。重要なのはどれほど優雅に美しく踊れるかです。これからもしっかりと練習してください。では次はCクラスとDクラスです」

その後のCクラスとDクラスの生徒も普通に上手かった。貴族にとってダンスが踊れるのって本当に基本なんだな。

「では最後、Eクラスです」

どうすればいいんだ……ついに順番が来ちゃったよ。

97、ダンスの授業（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

98、Eクラスのダンス

Eクラスは騎士爵の子供たちがどんどんペアになり、女子の数が足りないのでDクラスの女子に声をかけてペアになっている。
どうしよう……俺たち平民はどうすればいいのかわからず、その場に突っ立ったままだ。そもそもダンスを踊れないのに貴族の方を誘っても恥をかくだけだし……
俺は最低限踊れるけど他の子やロニーは無理だろうし。ロニーは俺の横で真っ青な顔で少し震えている。

「そこ！　早くペアを組みなさい。授業が進まないでしょう」

先生が蔑みの目で俺たちを見ながらそう言ってきた。この先生本当に嫌いだ！！
俺は一応踊れるからペアを組んでもらって踊ればいいんだけど、そもそもペアを組んでもらえるのかわからないし……誘って断られたらショックがでかすぎる……
ロニーはどっちにしても踊れないし。
ここは素直に言うしかないか。

「グラミシアン先生。私たちはダンスを踊れないのですが……」
「まあっ！　ダンスを踊れない人がいたのですね。思い至りませんでしたわ。人ならば皆ダンスを踊れるものだと思っていましたけど、踊れない方々もいるのでしたね。配慮が足りず申し訳なかったですわ」

この先生本当にむかつく！　何でこんなに上から目線なんだ？
爵位が上の貴族なのかな？

「グラミシアン先生。この者達は平民なのでダンスなど覚えられないのでしょう。我々高貴な者に付いて来られないのは当たり前なのです。寛容に受け入れてやらねばなりません」
「アルテュル様、さすがのお考えですわ！　確かにできないことを強要するのは良くありませんわね。平民をいじめていると勘違いされても困りますもの。では、ダンスを踊れない者は踊らなくてよろしいですわ」

アルテュル様とグラミシアン先生めちゃくちゃ意気投合してるし。アルテュル様と意気投合できる先生とか絶対好きになれないな。
あれ？　……そういえば、前にリシャール様からもらった敵対勢力のリストに、グラミシアンってあったよな。確かグラミシアン侯爵家だ！
うわぁ～もうこの授業受けたくないよ。この先生はグラミシアン侯爵家の子供……じゃないだろうから、夫人かな？　歳的に前侯爵の夫人かもしれない。なんで先生なんかやってるんだよ。
はぁ～、何にしても俺の敵ってことだな……色んなところに危険人物がいて疲れる。

「では踊れる者だけで踊ってください。踊れない方は、次の授業までに踊れるようになっておいてくださいね。ただ、安心してください。次の授業から踊れない方は自由時間にいたします。できないことを無理に強要するのは良くありませんからね」

尤もらしいこと言ってるけど、要するに平民にダンスを教えたくないってことだよな。平民はダンスなんてどうせ踊れないのだからやるだけ無駄ってことだよな！
めちゃくちゃむかつく！！

周りを見回すと、さっきまで顔を青くしていた平民の皆は、怒りたいけど怒れないやるせない表情をしている。
せめて俺だけでも踊ってやるか！　でもペアになってくれる人はいるだろうか……？
俺は顔を上げて、ペアになってくれる子を探すために周りを見回した。
ただ、俺と目が合うと皆顔を逸らしてしまう。友達の少なさがこんなところで仇になるなんて。
「ではダンスを始めましょう」
ダンスが始まっちゃうよ！　えぇい、もう勢いだ！
「ちょっと待ってください！　私も踊って良いでしょうか？」
俺がそう言うと、先生はかなり引き攣った笑顔で俺の方を向いた。
「ダンスを踊れないのならば無理に踊る必要はありませんよ？　できないことを強要することは致しませんわ」
「いえ、踊れるので大丈夫です」
「お前、卑しい平民が踊れるわけがないだろう！」
アルテュル様また入ってきたよ……本当にうるさい。
「私は平民なので、皆様のように優雅に美しく踊ることはできませんが、ダンスを踊ることは平民にもできます」
「そんなことはあり得ない！　父上が平民はダンスも踊れぬ芸術も理解できぬ卑しい者だと言っていたぞ！」
アルテュル様って本当に馬鹿なんだな……さっきはダンスを踊れ

てて完全に無能ではないんだと見直したのに。やっぱり無能だったかも……

というかもしかして、アルテュル様って親が言ったことをそのままストレートに信じてるのか？　平民は本当にダンスを覚えられないし踊れないと思ってるのだろうか？

もしそうだとしたら、よく言えば凄く素直なのかもしれない……その場合は親が最悪すぎるな。まあ今のこの世界の貴族としては、アルテュル様の考え方でも普通なんだろうけどね。

「では、私のダンスを見て確かめてみてください。誰かペアを組んでくれる方はいらっしゃるでしょうか？」

俺は内心凄く緊張しながら、この言葉を言った。勢いでダンスが踊れるって言っちゃったけど、誰もペアになってくれなかったらどうしよう……

心臓バクバクだ……もし誰もいなかったら、リュシアンが女性パートを踊ってくれないかな？

俺が内心では動揺しつつも、それを悟られないように余裕のある表情をつくり待っていると、一人の女の子が進み出てきてくれた。

「私がお相手を務めますわ」

マルティーヌ！？　え？　俺と踊ってもいいの！？

特定の相手と踊ると色々めんどくさいことにならない？

「私はとてもありがたいのですが……良いのでしょうか？」

「ええ、もちろんですわ」

マルティーヌはにっこり笑って俺の手を取った。

「マルティーヌ様！　なぜそのような男と踊るのですか！　どうせ踊れないのですから放っておけば良いのです！　その男と踊るのでしたら私と踊っていただけませんか？」

アルテュル様がそう言って、俺たちの間に割って入った。

「そ、そうですわ。マルティーヌ様のお手を煩わせる必要はございませんわ」

先生も慌ててそう割り込んできた。

「いえ、私が踊ってみたいと思ったからいいのです。それに、他の方は誰も踊ろうとしなかったではありませんか」

「それはそうなのですが……」

「では、先生がレオンと踊るのですか？」

「レオンとは……？」

「あら、先生は生徒の名前も覚えていらっしゃらないのね。授業の前に覚えておくのが礼儀ではないかしら？　もし先生には難しいお仕事でしたら、代わりの方を用意するように進言いたしますわ。いかが致しますか？」

マルティーヌ怖い……結構怒ってるのね。先生は顔が真っ青になってるよ。

「も、申し訳ございません。次の授業には必ず、すべての生徒の名前を覚えてきますので……ですが、なぜマルティーヌ様は名前を知っているのですか？」

「レオンは友達だからですわ。そんなことよりも、早くダンスを始めましょう」

「か、かしこまりました」

グラミシアン先生は、自分は直接平民を差別してるわけではないし、罰せられることはないって思ってたのかな？

それか、平民如きの問題で王族が口を出すことはないって思ってたのかな？

まあ、どっちもだろうな。多分ここに俺がいなかったら、マルティーヌも口出しすることはなかっただろうし。

俺って皆にかなり守ってもらってるよな……本当にありがとう。絶対に恩返しする。

皆の役に立てるように頑張ろう。

「マルティーヌ様、その者と友達とはどういうことですか！？」

まためんどくさいやつが来たよ……

「そのままの意味ですわ」

「何故そのようなことに……今すぐに友達などやめるべきです！卑しい平民といるとマルティーヌ様にまで影響があるかもしれません！　もしや……リュシアンのせいですか！？　この者は平民とも助け合うべきだとふざけたことを言う男です！　まさか……マルティーヌ様もそのお考えなのですか……？」

「そうではありませんわ。ただ、私はこの国の王族として、この国を守らなければなりません。国を守るためにルールを守ることは重要なのですわ。この学校では身分は関係ありませんので、私は誰とでも仲良くなります。それに、レオンはタウンゼント公爵家の所属です。他の平民とは違いますわ」

「ですが……」

「アルテュル様は平民は卑しい者だと言いますが、平民のことをどれだけ知っているのでしょうか。人から聞いた情報ではなく、ご自

分の目で確かめてみては如何でしょうか？　もしその上で今までと同じ考えだと言うのならば、それを貫き通してください。まずは知ろうとすることが大切ですよ」

マルティーヌ色々言ってるけど大丈夫なのか……？　王族は内戦にならないように、どちらの勢力にも今のところは肩入れしないんだったよな？

まあ、言質を取られなければいいのかな？　そう考えると上手く躱してるのかも。

「では、音楽をお願いします」

マルティーヌがそう言うと、音楽が奏でられ始めた。

「レオン、ダンスは踊れるの？」

音楽が始まると同時に、マルティーヌが小声で話しかけてきた。

「最低限なら」

「私はレオンについていくから、遠慮せずに踊ってくれて構わないわよ」

「わかった……マルティーヌ、本当にありがとう」

「楽しんで踊りましょう」

マルティーヌはそう言って花が咲くように笑った。凄く綺麗だ。

「足は踏まないように気をつけるよ」

「それは気をつけて欲しいわね」

何か強張っていた身体から、変な力が抜けていく気がする。ふぅ

～、練習を思い出して自分の最大限の力で踊るだけだ。
そこからのことはあまり覚えていないが、気がついたら踊り終わっていた。

「レオン、とても踊りやすかったわ！　もう少し練習すれば美しく踊れるようになるわよ」
「お褒めに預かり光栄です。お相手ありがとうございました」

俺たちは最後に軽く笑い合って、ダンスを終えた。

「先生、次の授業からは、ダンスが踊れない人には基本から教えてあげるのが良いと思いますわ。ダンスが踊れない人にどのように教えれば良いのか、ご存知でしょうか？」
「ぞ、存じております」
「では大変だと思いますが、よろしくお願いしますね」
「……かしこまりました」

頭を下げた先生の顔がちょうど見えたけど、めちゃくちゃ真っ青な顔をしてた……改めて、王族って凄いんだな。

「アルテュル様、平民でもダンスを踊れる方もいるみたいですわね」
「確かに……そのようですね」

アルテュル様は考え込むような顔でそう言ったっきり、俯いてしまった。
アルテュル様は親の育て方が俺からみると歪んでるだけで、多分本質は素直で良い子なんだよな……これで何かに気づいてくれるといいんだけど。

「では、少し早いですが皆様の実力がわかったところで、本日の授

業は終了とします」

やっと終わったぁ～！　俺はマルティーヌと別れてロニーのところに行った。

「ロニー、次からはダンスを教えてもらえるみたいで良かったね」
「うん……レオンって凄いね」
「違うよ。あれは俺が凄いんじゃなくて、マルティーヌ様が助けてくれたから」
「確かにそれもあるけど、最初に声を上げただけで凄いよ。僕にはできないよ」
「そうかな？　ありがと」

そう言ってもらえると、結構嬉しいかも。勇気出して良かったな。まあ、あの時はイラついてたからって感じなんだけどね。
俺とロニーは皆が帰った後、最後に更衣室に来て荷物を取り、帰路についた。

９８、Ｅクラスのダンス（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです。
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

閑話　レオンの有能さ（マルセル視点）

「マルセル！　いるか！」

玄関を激しく叩いてるやつがいる……誰じゃ……うるさくしおって！

わしは食べかけの夕食をそのままに、玄関まで向かい扉を開けた。するとそこには、予想通りの人物がいた。

「ブエラ、貴様か。もう夜なのにうるさいんじゃ！」

「マルセル、レオンに会ったぞ！」

「会ったのか……どうじゃったのだ？」

わしは我が物顔で工房に入っていくブエラの後に続いて、工房に入った。

「あれは本当に平民なのか？　発想力には目を見張るものがあるが、普通発想というのはその分野についての知識をしっかりと持ってる者にしか、生まれないものなのだがな」

「わしの言った通りであっただろう？」

「ああ、そうだ、レオンはわしの研究会に所属することになったぞ。既に次の回復の日に登録に行くことになった」

「登録だと！？」

レオンのやつまだ入学して数日しか経っていないのに、もう登録するようなものを発明したのか？

確か、新しい魔法具の登録はやめるように言われているはずじゃが……それは解禁になったのか？

いや、入学の挨拶に来た時に、全属性は明かせないから隠すのが大変だと言っていたはずだ。それならば、全て解禁にはなっておらんじゃろう。回復属性だけは解禁になったのかもしれんな。

それにしても、最初に会った時から常識がなくて、次々と歴史に残るような事をしでかすやつじゃったが、王立学校でもそれは直ってないようじゃ。

最初に会った時は本当に驚いたものだ。服装や外見はこの辺にいくらでもいる普通の平民なのに、言葉遣いや仕草が貴族のような変な子供だった。

もし最初に会ったのがわしではなく悪どい貴族ならば、すぐにその異常さから連れ去られたじゃろうな。

その後も次々と驚かされた。新しい魔法具を次々と作り出していくのだ。あれには驚いたどころではない。

最初に製氷機を作り出した時は、歴史が変わると年甲斐もなくワクワクしたものじゃ。ただその後の火魔法の魔法具は、もう驚きが麻痺してたんじゃな、驚きよりも呆れが勝っていたわい。

レオンは家族を危険に晒したくない、自分の立場も危険にしたくないと言いながら、バレたら様々なところから狙われるようなことをするから、わしの肝が冷えたもんじゃ。危なっかしくて仕方がなかった。

今は公爵家で守られてるようだから大丈夫じゃろう。ただ、もし何かあればわしは何においても助けに行こうと決めておる。

何故ここまでレオンに肩入れしているのかが自分でもわからんのじゃが……家族もいなく実家とも縁が切れてるわしに、突然現れた孫のような存在だと思ってるのじゃ。

最初は変な子供、次は面白い子供だと思っていたが、今では自分の孫のように思っておるなんて……人生は何があるかわからんもの

じゃ。長生きはしてみるものじゃな。

「聞いてるのか？」
「おお、なんじゃ？」
「レオンの登録の話じゃよ！」
「そうだったな。それで何を発明したのじゃ？」

全属性は明かせないのなら、回復属性を使った魔法具か？

「これじゃよ」
「これは……？　魔法具なのか？」

変な形の箱……なのか？　手のひらサイズの小さな箱じゃが、上が変な形だ。左側が沈んでいて右側が盛り上がってる。これは何なのだ？

「その盛り上がってる方を押してみるんじゃ」
「下に押してみればいいのか？」
「そうじゃ」

わしは恐る恐る、盛り上がっているところを押してみた。すると思ったよりも軽い力で押すことができて、金属板が右側にスライドして止まった。
何も起こらないが……どういうことじゃ？

「上を見てみろ」

上には天井しかないが……そう思いながら上を見上げてみると、そこには二つの光球があった。

「ど、どういうことじゃ？」
「この箱の右側を押すと光がつくんじゃ。左側を押すと消えるぞ」
「ほ、本当か！？」

わしは慌てて左側を押すと、光球が一つ消えている。これは……革命じゃないか！　これでどれほど生活が便利になるか。
これはどのような原理なんじゃ？　何故この箱の鉄板を動かすだけで光球が現れたり消えたりするんじゃ！

「これはどういう原理なんじゃ！　レオンが考えたのか！？」
「ああ、あのレオンという少年が一日で考えてしまったんじゃ。これは鉄の板の右裏側に魔石がついていて、箱の底が魔鉄になっている。だから、右側を押して魔石と魔鉄をくっつけることで魔法が発動する」
「それではこの箱の中で光るだけではないか！　何故天井付近に光球が発生してるのじゃ！」
「火魔法の魔法具と同じ原理じゃよ」

火魔法の魔法具……そうか！　光球も魔石から離れたところに発現させられるのか！
何故気づかなかったんじゃ……光球は魔石が光るものだと思い込んでおったわ。

「何故わしは思いつかなかったのかとショックじゃ……」
「大丈夫じゃ、わしもまだショックを受けておる……」

やはりレオンは凄いな……本当に天才じゃ！
さすがわしの孫　（みたいなもの）！！

それにしても本当に凄い、この光球はすぐに広まるだろう。それ

にさっきは光球への驚きで受け流したが、この箱の機能もかなり良くできてるな。

「光球への驚きで霞んでしまったが、この箱の機能もかなり良くできているな」

「そうなんじゃ、それにこれは他の魔法具に応用可能じゃ。水道や水洗トイレにこの機能をつけたら、かなり便利になると思わんか」

確かにこれはかなり便利になる。魔石を手から滑らせて肝を冷やすこともなくなるし、紛失する危険性もかなり下がる。なによりも押すだけというのが便利じゃ！

この機能もこうやって見てみると単純なものなのに、何故思いつかなかったのか……やはりこれを思いつける発想力を持つレオンは凄いな。

「魔法具に革命が起こるぞ……」

「そうじゃろう！　だから次の回復の日に光球の改良魔法具登録と、スイッチ機能の技術登録をしてくる」

「スイッチ機能？」

「ああ、この箱の機能の名前じゃよ」

何故か聞いたことがある言葉じゃな……。そういえば、レオンが昔に言っていた気がする。遠くから光球をつけたり消したりする機能があったら良いと。

その時もスイッチとか言っておったな。それを実現したのか……。

「スイッチとはどんな意味があるんじゃ？」

「わからんが……レオンがそう呼んでおったからそう名付けるのじゃろう」

結局言葉の意味は分からんままか。レオンはたまに聞いたことのない言葉を言うことがあるんじゃよな。まあ、天才とはそういうものなんじゃろう。

「しっかり登録して来てくれよ」
「わかっておる。それでじゃ、今日はもう一つ話があるのだ」
「なんだ？」
「今度、研究会に顔を出してくれんか？」
「わしが研究会に？　何でじゃ？　ブエラがいるのならわしはいらないだろう」
「お前じゃなきゃダメなんだ。マルセルは回復属性だろう？　今研究会で、ピュリフィケイションの魔法具を研究してるようなんだが、上手くいってないみたいでな。他の視点が加わると進むかもしれんじゃろう？」

ピュリフィケイションの魔法具とは……何とも難しいものに挑戦しておるな。あれは魔力消費が激しすぎて使い物にならないんじゃ。何故か魔法具にしても魔力効率が上がらんし。

「確かにそうだが、わしも長年研究して半分諦めておる。それでもいいのか？」
「ああ、一度でいいから顔を出してくれ。それに、最近話題の新しい魔法具を開発したお前が来たら、喜ぶと思うからな」

わしにとっても若い考え方に触れるのは良いことかもしれんな……それに、レオンにも会いたいし行くとするか。

「それじゃあ、今度顔を出そう」
「ありがとな。わしが予定を決めても良いか？」
「ああ、良いぞ」

「ならまた後で予定を決めて手紙を出そう」

王立学校なんて本当に久しぶりに行くことになる……少し楽しみじゃ。

「よしっ……それじゃあ今日はそろそろ帰るぞ。明日は朝早いからの」

「ああ、またな」

ブエラはそう言ってすぐに帰っていった。あいつは魔法具のことなると、いつも嵐のような男じゃわい。

それにしても、レオンと会ってから色々と巻き込まれることが増えたのぉ。年甲斐もなくワクワクするわい。

閑話　レオンの有能さ（マルセル視点）（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです。
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

99、魔法具登録と技術登録

今日は王立学校に入学してから、初めての回復の日。
俺は朝早くに起きて、王立学校の正門前に向かっている。今日はロンゴ先生と登録に行くのだ。
歩いて行こうと思っていたのだが、ロジェが馬車を出して自分も付いて行くと言って聞かず、結局馬車で向かっている。

「ロジェ、別に歩いていくから良かったのに」
「私の仕事は、レオン様が快適に過ごせるようにお手伝いをすることですから。遠慮されなくても良いのです」

まあ確かに、個人的な理由にロジェを付き合わせるのは悪いかなと思って、遠慮したところはあるけど。
どうしても遠慮しちゃうんだよな。やっぱり庶民の考え方が抜けない。まあ、今も平民だから庶民なんだけどね……生活は全然庶民じゃないけど。

「確かにちょっと遠慮してたけど……」
「私に遠慮は不要です」
「でも、色々指示されたら嫌じゃないの？」
「いえ、逆に頼っていただけない方が、自分は役立たずなのだと思ってしまいます」

そうなの！？

「ロジェが役立たずなんて思ったことないからね！」
「ありがとうございます」

ロジェの顔が微妙に緩まった気がする。今までロジェのことを思って遠慮してたのが逆効果だったなんて。
これからは遠慮せずに頼るようにしよう。

「これからは遠慮しないようにするよ」
「そうなさってください」

王立学校の正門前に着くと、ロンゴ先生が既に待っていた。俺の方が早く着いて待ってようと思ってたのに！
俺はロジェに続いて馬車を降りた。

「ロンゴ先生、お待たせして申し訳ございません」
「いや……それはいいんじゃが……」

ロンゴ先生が凄く驚いている。ポカーンと口を開けて固まっているようだ。えっと……何に驚いてるの？

「ロンゴ先生、いかが致しましたか？」
「いや……レオンは、タウンゼント公爵家所属の平民だとは聞いてたんだが、出かける時に御者と使用人付きで馬車を貸し出してもらえるほど優遇されていることに驚いたのじゃ……」

そこ！？　そういえばあまり考えたことはなかったけど、いくら後ろ盾になってるからってこの扱いは格別に優遇されているのか。
他の例を知らないからよくわからないけど、先生がかなり驚くほどの高待遇ってことだな。まあ、確かに申し訳なくなるほど良くしてもらっていると思う。
本当に感謝してもしきれないな。

「公爵家の皆様には、本当に良くしてもらっています」
「そのようじゃな……」
「では、ここにいてもしょうがないですから行きましょうか。ロジェ、ここまで送ってくれてありがとう。帰りは自分で帰るから大丈夫だよ」
「レオン様、ロンゴ様もご一緒に馬車でお送りいたしますが？」

え？　ここまでじゃなくて王宮まで送ってくれるの？

「いいの……？」
「勿論でございます」
「そっか……それならお願いしようかな。ロンゴ先生、馬車でお送りしますのでお乗りください」

俺がそういうと、ロンゴ先生はギョッとしたような顔をした後、あたふたと慌て始めた。

「そ、そんな、公爵家の馬車に乗るなど……」

公爵家の馬車に乗るのって、貴族のロンゴ先生もそんなに慌てるようなことなのか。
俺はいつも乗ってるんだけど……

「遠慮しないでください。どうぞ」

俺がそう言ってロジェが馬車の扉を開けると、ロンゴ先生はかなり緊張した様子で馬車に乗り込んだ。

「し、失礼いたします……」

「では、レオン様もどうぞ」
「ありがとう」
「それでは王宮に向かいます」

しばらく馬車を走らせて着いた場所は、王宮の近くにある大きな建物だった。登録などはこの建物で出来るみたいだ。ここに着くまで、ロンゴ先生はガチガチに緊張してたけど大丈夫かな？

「到着いたしました」

馬車からロジェが降りて、俺、ロンゴ先生の順番で降りる。こういう時はお客様が最後だったはずだ。礼儀作法を習っておいて良かった。

ロンゴ先生は、馬車から降りて少し緊張がほぐれたみたいだ。

「レオン、では行くぞ。こっちだ」

ロンゴ先生についていくと少し大きめの扉があり、中に入ると中央教会と同じような作りになっていた。違いはこっちの方が少し規模が小さいくらいかな。

俺たちは三人で、空いている受付まで歩いていく。ここは目的によって受付が分かれていないようで、どこに行っても良いみたいだ。

「本日はどのようなご用件でしょうか？」
「今日は魔法具の改良登録と技術登録をしたいのだが」
「かしこまりました。では別室に案内させていただきます」

受付の男性がカウンターから出て来て、俺たちを応接室に案内してくれた。

「しばらくお待ちください」

応接室に入り、ロンゴ先生と俺がソファーに座り、俺の後ろにロジェが立った。

その状態でしばらく待っていると、先程の受付の男性に連れられて、かなりお年を召した女性と四十代くらいに見える真面目そうな男性がやってきた。

「こちらの方々は、魔法具登録の責任者と技術登録の責任者です」

「よろしくお願いします」

「こちらこそよろしくお願いいたします」

二人に頭を下げられたので、俺たちも頭を下げて挨拶をする。

「それでは、まずは現物の確認からです。登録したい魔法具と道具を出してください」

「かしこまりました。ですが、どちらも同じものなので一つしかないのですが」

そう言ってロンゴ先生が、机の上に光球の改良版を出した。小さな長方形の箱の上にスイッチが付いている。日本の公園でこれを見たら、不審物で通報するだろうな。

「こちらを考えたのはここにいるレオンですので、レオンに説明させます。レオン説明しなさい」

「かしこまりました」

説明するの俺なら先に言っといてよ！！　俺は内心動揺しつつ、それを表に出さないように気をつけて説明を始めた。

「これは改良版の光球です。上に飛び出しているところと凹んでいるところがありますが、この機能をスイッチ機能と言います。このスイッチの右側を押すと光球が現れ、左側を押すと光球が消える仕組みです。押してみてください」

俺がそう言うと、二人は恐る恐るながらも魔法具を手に取り、まずは男性がスイッチを押した。

すると天井に光球が現れる。

二人は天井を見上げて、かなり驚いた顔になっている。

「これは、どういうことなんだ？」

「ひ、左側を押してもいいですか！」

女性が興奮した様子で、男性にそう問いかける。

「ど、どうぞ」

「ありがとうございます！」

今度は女性が、スイッチの左側を押す。

「これは……本当に素晴らしい改良です！　どういう原理なのですか？」

そう女性の方に聞かれた。最初は厳しい人かと思ったけど、今は好奇心旺盛な顔になっている。

「これは火魔法の魔法具と同じ原理です。火魔法を魔石から離れたところに発現させられるのなら、ライトでもできるだろうと考えました」

「確かにそうですね……ただ、それを思いつく頭の柔軟性が素晴らしいです」
「ありがとうございます」

そんな話をしていると、女性の勢いに押されていた男性が話しかけてきた。

「魔法具も素晴らしいが、このスイッチ機能も素晴らしい。これは鉄板の裏に魔石をつけてあるのか？」
「はい。そして箱の底部分だけが魔鉄になっています。この機能を、水道や水洗トイレなど他の魔法具にも取り付けたら便利になるだろうと考えて、技術登録をしたいと思っています」
「それは素晴らしい！　かなり便利になる」
「ありがとうございます」

かなりの好感触で良かった。結構緊張してたんだけど一安心だ。俺がホッとしていると、受付の男性が俺の前に二枚の紙とペンを置き、男性と女性に問いかけた。

「では、登録をするということでよろしいですね？」
「もちろんです」
「当然だ」
「かしこまりました。ではレオン様、こちらの用紙をご記入ください」
「はい」

その用紙は名前や所属、現在の職業、銀行の口座など、かなり細かく書くものだった。やっぱり屋台販売権とかよりしっかりしてるんだな。まあ、当たり前だよね。

「書けました」
「確認させていただきます。……ありがとうございます。不備はないのでこのまま受理させていただきます」
「よろしくお願いします」
「魔法具の改良登録では使用料の三割、技術登録では使用料の全てがレオン様の口座に振り込まれますので、定期的に確認をお願いいたします。毎月第一週と第九週に振り込まれます」
「かしこまりました」

これで定期的にお金が入ってくるから、前よりもお金の心配はいらなくなるかも！
ちょっと安心だな～。

「では、これで登録は終了となります。こちらはサンプルとして頂きますが、よろしいでしょうか？」

持ってきた魔法具はサンプルとして持っていかれちゃうんだ。いいのかな……？
俺はロンゴ先生の方をチラッと見ると先生が頷いてくれたので、了承の意を伝えた。

「どうぞお持ちください」
「ありがとうございます」

その後すぐに応接室を退出し、登録は完全に終わりとなった。
何事もなく終わって良かった。

９９、魔法具登録と技術登録（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

１００、ロニーの家

俺たちは登録を終えて馬車に乗り、今はロンゴ先生を送って王立学校の正門前に着いたところだ。

「ロンゴ先生、今日は登録に付き合っていただき本当にありがとうございました」
「いや、いいんじゃよ。何事もなく登録できて良かったな」
「はい！　また学校でよろしくお願いします」
「ああ、また学校でな」

そうしてロンゴ先生を送り届け、俺は一度屋敷に帰ってきた。登録が予想以上に早く終わったな。
ロニーとの約束は十二時過ぎだから、ちょっと早いけどお昼を食べちゃおうかな？　食べたらちょうど良い時間だろう。

「ロジェ、ちょっと早いけどもうお昼って食べられるかな？」
「はい。この時間ならば問題ありません」
「それなら昼食の準備をよろしく」
「かしこまりました」

それから俺はゆっくりとお昼を楽しんで、屋敷を出る時間になった。

「レオン様、本当に荷車を引いてお一人で行かれるのですか？　荷車は使用人に引かせてレオン様は馬車でお送りしますが……」
「ううん。一人で行くから大丈夫だよ！　これからは俺の友達が、毎日荷車を引いて仕事に行かないといけないから、どのくらい大変

なのか知っておきたいんだ」
「そうですか……それならば致し方ありませんが……」
ロジェはかなり不満そうながらも、なんとか了承してくれた。なんか最近のロジェ、前より過保護になってない？
これが使用人の普通なの？　今度リュシアン達に聞いてみようかな。

「じゃあ行ってくるね」
「行ってらっしゃいませ。お気をつけください」

俺は心配そうなロジェに見送られて屋敷を出た。荷車にはこの前買った調理器具が載っていて、蜂蜜や塩、砂糖、小麦粉、油、お酢、バターなど保存ができるものも載せてある。結構な重さだな。
身体強化を使う必要はないが、結構力を入れないとスムーズに進まないって感じだ。荷車を平民の間で使っていても目立たない古いものにしてもらったから、より力が必要なのかもしれない。
実は新しいものを用意してくれたんだけど、あまりにも綺麗で装飾まで施されてて、ロニーが持っていたら一瞬で盗まれそうだったからやめてもらった。普通に目立たないのが一番だ。

荷車をごろごろと引きながら歩いて、馬車の時の倍以上の時間がかかってようやく王立学校に到着した。
ふぅ～これはいい運動になるな。まだロニーはいないようだ。
荷車に腰掛けて、ロジェに持たされた竹でできた水筒から水を飲む。もちろん水はバレないように水魔法を使っている。やっぱり水は作りたてが一番美味いな。
そうして一息ついていると、すぐにロニーがやってきた。

「レオン！　ごめんね、待った？」
「ううん、俺も今来たとこだよ」
「それなら良かった。これが必要な荷物？　結構多いね」

ロニーが、荷車の上にある荷物を見ながらそういった。

「そう。毎回持っていくのは大変だと思うけど、大丈夫？」
「うん！　このくらいなら大丈夫だと思うよ」
「それなら良かった。じゃあロニーの家に案内してくれる？　そこまでは俺が荷物を運ぶよ」
「わかった！」

ロニーはそういうと、俺の隣に並び軽い足取りで歩き始めた。ロニー、いつもより明るいし生き生きとしてるし楽しそうだな。何かいいことでもあったのかな？

「ロニー、何かいいことでもあった？」
「え、何で？」
「いや、いつもより楽しそうだから……」
「え！？　僕そんなに浮かれてた！？」
「うん……わかりやすく」

俺がそういうと、ロニーは両手で顔を覆って立ち止まった。耳が少し赤くなってるな。

「うわぁ～恥ずかしすぎる……実は、今日すごく楽しみにしてたんだ。僕は孤児院で育ったって言ったでしょ？　孤児院の皆は家族みたいなものだから友達って感じじゃないし、孤児院の外で友達を作る機会もなくて、友達と遊ぶの初めてなんだ……だから楽しみ

で……」

ロニー、そんなこと言われたらうるっと来ちゃうじゃないか！俺でよければいつでも遊ぶから！

「それに、今がいつもより伸び伸びしてるのは、ここが王立学校の中じゃないからっていうのもあるかも。学校ではいつも緊張してるから……」

確かに！　今日のロニーは変な緊張感がなくて自然体なのか。いつも自然体でいた方が絶対良いと思うけど、あの学校じゃ難しいよね……

「そんなに楽しみにしてくれてたなんて嬉しいよ」

ちょっとだけ落ち込んでしまった雰囲気を元に戻すために、俺が少し揶揄うような口調でそう言うと、ロニーはちょっとだけ怒ったような顔をした。

「レオン！　揶揄うの禁止！」
「ははっ……ごめんごめん」
「もう、早く行くよ！」
「わかったよ」

そう言うと、ロニーはスタスタと一人で歩いて行ってしまう。

「ちょっ、ちょっと待って、速過ぎるから！　荷車があるんだって！」
「しょうがないなぁ。待ってるから早くきてー！」

そんなやりとりをしながら俺はすごく嬉しかった。ロニーが俺に対して一歩引いたような態度を取らずに、完全に自然体で接してくれてることが思いのほか嬉しかった。
やっぱりこう言う関係性が良いよな。クラスの他の子達ともこうなれたらいいのに。
そんなことを考えながら、俺は頑張って荷車を引いた。

それからはロニーも機嫌を直してくれて、二人でお喋りしながらゆっくり歩き、しばらくしてロニーの家に辿り着いた。

「ここが僕が住んでる家だよ。一階の右端が僕の部屋」

ロニーの家は裏路地を進んだ先にあって、古い木造二階建てのアパートみたいだった。

「本当に何もないけど、部屋の中も見てみる？」
「いいの？」
「うん。公爵家の屋敷に住んでるレオンからしたら、物置みたいなものだろうけど……」
「公爵家の屋敷には俺でもまだ驚くよ。俺の実家は平民だから、こっちの方が落ち着くかも」
「確かにそうだよね。じゃあどうぞ！」

ロニーはそう言って部屋の扉を開けてくれた。一応鍵は付いてるようだ。
俺は恐る恐る部屋に入っていく。この世界は、基本的に靴を脱ぐ習慣がないので土足だ。

部屋に一歩足を踏み入れて、俺は衝撃を受けた。
え？　狭すぎない！？　扉を開けて部屋に入ると、すぐに並べた

木箱の上に布を乗せただけの簡易ベッドが置いてあり、部屋の奥に窓がある。ベッドの隣には小さなテーブルが辛うじて置かれていて、椅子を置くスペースはなかったのかベッドが椅子代わりのようだ。

この部屋にあるのはそれだけだ。それ以外には何も目につかない。

えっと……これが平民の普通の暮らしなの？　荷物はどこにあるの？　俺の実家は平民にしては恵まれてる方だって思ってたけど、俺が思ってる以上に恵まれた環境だったのかもしれない。

「ロニー、荷物はどこにあるの？」

「荷物？　木箱の中に入ってるよ？」

そっか……ベッド代わりの木箱は収納ケースでもあるってことか。狭い部屋ではこれが一番効率的なのかもしれないな。

「狭くて驚いたでしょ」

ロニーが苦笑いしながらそう言った。

「えっと……」

俺は何て言ったら正解なのかがわからず、めちゃくちゃ焦っていた。いい部屋だね、なんてお世辞を言ったところでバレバレだろうし、ストレートに狭いねって言ってもいいのかわからないし……

「遠慮しなくていいよ。僕も狭いなぁって思ってるから」

「うん……狭いなぁって思った」

「ははっ、レオン正直！　でも本当に狭いんだよね。ここは一人用の部屋だから家族用の部屋に住めばもっと広くなるんだけど、こっちの方が安いんだ。部屋が広くても使い道ないしね」

確かに広い部屋があったところで使い道はないのか。それならこの狭さでもいいのかもしれない。

「確かに広くても、活用しなかったら無駄だもんね」

「そうそう。あっ、この調理道具は一つ木箱が空いてて、そこに入れられるから大丈夫だよ。荷車は大家さんに頼めば、置いておくスペースを貸してもらえるんだ」

「それってお金かかる？」

「うーん、確か少しだけかかった気がする……でもそのくらいならお金を持ってるから大丈夫」

「いや、そのお金は俺が出すよ。屋台のために必要な道具を運ぶための荷車なんだから」

これは俺が出すべきだ。本当なら俺がお金を出して、もう少し綺麗で広い部屋に引っ越しさせてあげたいけど、それはやりすぎだからな……

「え？　でも普通はそこまでお金を出してくれることはないよ？」

「それでもいいの。これが俺の屋台のルールだから！」

「そうなの？　それならありがたくお金出してもらうけど」

「じゃあ決定ね。後で大家さんに確認して金額教えてね」

「うん。でも大家さんの家すぐそこだよ？　今から聞きに行く？」

そう言ってロニーが指さしたのは、アパートのすぐ隣にある小さな一階建ての家だった。

そっか……普通大家さんは近くに住んでるよね。

「じゃあ行ってみようか」

「わかった！」

「あっ！　その前にちょっと待って」
俺はロニーを呼び止めて、家の中から家の扉を閉めた。そして小声で話しかける。
「渡したいものがあるんだけど、他の人に知られたらヤバいんだ。だから小声で話してね」
「わかったけど……何？」
ロニーが恐る恐るそう聞いてきた。
「これだよ」
「これって、小さな箱？」
「そう。これ魔法具なんだ」
「まほっ……んぐっ」
ロニーが大きな声を出しそうになったので、慌てて口を手で塞いだ。
「ロニー、大きな声出しちゃダメだよ」
「ご、ごめん。でも魔法具って凄く高いんだよね？」
俺が渡したのは殺菌の魔法具だ。あの後リシャール様がすぐに魔石と魔鉄をくれたので作ったのだ。箱の中に卵を入れて魔石を嵌め込むと、数秒で完全に殺菌される。
ただ、これを作るのは結構大変だった。人体に有害なものを全て取り除ける魔法具にすると、魔力消費が多すぎるのだ。これは卵の殺菌に絞って魔力を込めることで、何とか魔力消費を減らした。
スイッチ機能は、鍛冶屋に頼まないといけないから諦めた。

「高いけど、公爵家から貰ったものだから大丈夫」
「そうなんだ……それで、なんでその魔法具を僕に渡すの？」
「この魔法具は卵を殺菌するもので、これから教えるレシピには生の卵を使うから必ず殺菌しないといけないんだ」
「生の卵って……その魔法具を使えば食中毒の危険がなくなるの？
そんなことができる魔法具なんてあるの？」
「あるんだよ。でもまだあまり出回ってないものだから、これを俺以外の人に見せたり、これの話をしたらダメだからね。ロニーが危険な目に遭うから。だから卵は前日に買って、家で殺菌してから屋台に持っていってくれる？」
「う、うん。僕、絶対に話さないよ。それに殺菌もちゃんとする！」

ロニーはちょっと青ざめた顔でそう言ってくれた。ロニーは魔力量が少ない上に平民だから、魔法具なんて王立学校に来るまでみたこともない。
だから、この魔法具が他の魔法具と違って異常だと言うことに気づかないんだ。ロニーからしたら全ての魔法具が異常に凄いものだからな。
なんとなく、ロニーを騙してるみたいで罪悪感が湧くけど、ロニーの身の安全のためにも知らない方が良いこともあるだろう。

「ありがとう。よろしくね」
「うん！　任せて」
「それから、これ週に一回くらいは魔力を補充しないといけないから、魔石だけを週に一回、王立学校に持ってきてくれる？」
「わかった。忘れずに持っていくよ」
「うん。ありがと！　じゃあ今度こそ大家さんのところに行こうか」

そうして話を終えて、俺とロニーは部屋を出た。

１００、ロニーの家（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

１０１、市場で買い物

俺とロニーは、大家さんの家に向かって歩いている。と言ってもすぐに着く近さなんだけどね。

その短い距離を歩いていて、ふと疑問に思った。

「そういえば、トイレとか井戸はどこにあるの？　あと調理場もなかったけど……」

「トイレは裏にあるよ。水場は向こうに歩いて二分くらいのところ。調理場は大家さんの家の調理場を貸してもらえるんだ。お金かかるんだけどね」

ロニーにそう説明されて、一番近かったトイレを覗きに行ってみた。貧しい平民の生活に少しだけ興味があったのだ。俺の実家は平民の中ではかなり恵まれてるからな。

アパートの裏側に行くと、すぐにトイレを見つけることができた。木で作られた壁と扉があるからそこがトイレだろう。俺は怖いもの見たさでおそるおそる扉を開けて、中を見て愕然とした。地面にただ穴が掘ってあるだけだったのだ。

ボットントイレのほうが全然マシだな……だってこれ、穴の端が崩れたら中に落ちない？　俺はその想像をして寒気がしてやめた。

ダメだ、俺ここで生活できないよ……実家のトイレでさえなんとか我慢してるのに。

最初は平民に転生したことを不運だと思ったけど、実はかなり幸運だったかも。俺の実家って平民の中では相当恵まれてるよ……

予想以上に貧しい平民の生活が辛い。

「レオン？　どうしたの？」

そうロニーに呼びかけられて、ハッと現実に戻ってきた。そうだ、ロニーにトイレに行くと言って来たんだ。
これ以上待たせたら心配させちゃうよな。俺は考えていたことをとりあえず頭の隅に押しやって、ロニーのところに戻った。

「レオンお腹でも痛いの？」
「違う違う！　大丈夫だから大家さんのとこに行こうか」
「それなら良いけど……じゃあ行こうか」

そうして再び、ロニーと大家さんの家に向かい家の前に着いた。
コンコン……

「こんにちは、ロニーです」

ロニーが大家さんの家の扉を叩き、そう言った。すると中から優しげな声が聞こえてくる。

「はぁ～い。ちょっと待っとくれ」

扉を開けて出てきたのは、白髪で背が低めのお婆さんだった。優しげな顔でにこにことしている。

「ロニーか、どうしたんだい？　それにそっちの子は？」
「こっちはレオン、僕の友達だよ！」
「おぉ、そうかそうか。友達とは良かったねぇ」
「レオンと申します。よろしくお願いします」
「ロニーをよろしく頼んだよ」

大家さんはそう言って微笑んだ。この人めちゃくちゃいい人だな。

話してると落ち着くなぁ。

「それで、今日は何の用だい？」
「実はこれから荷車を使うことになったから、荷車を置くスペースを貸して欲しいんだ」
「ああ、そんなことかい。それならどこに置いてもいいよ。お金は月の家賃と一緒に徴収するからね」
「ありがとう！　それで月にいくら？」
「月に銅貨六枚だよ」
「わかった！　大家さんありがとう」

待って、月に銅貨六枚？　ってことは約六千円！？　この世界は一月が九十日だから、地球で考えると三ヶ月で六千円……
安すぎるよ、予想以上に安かった。これくらいならいくらでも払うよ。

「じゃあまたね！」

ロニーがそう言うと、にっこりと微笑んで大家さんは家の中に戻っていった。

「レオン、月に銅貨六枚だって。大丈夫？」
「うん。そのくらいなら全然大丈夫だよ」
「それなら良かった」

というか安すぎるよ！

「じゃあ、毎月の第一週の給金に上乗せして渡すね」
「ありがとう！」

あっ！　それ以外にもロニーにお金を渡す必要があったんだ。食材を買うお金を渡さないと。

「ロニー、毎日食材を買ってもらうお金も渡さないといけないから、今回だけは給金と一緒じゃなくて今日の終わりにでも一週間分を渡すね。それで次からは、材料費は給金に含めて渡すことにする」
「そっか……これからはお金の管理もしないといけないんだね。そんな大金持ったことないから怖いけど頑張るよ」
「うん。今日これから市場に行くから、首からかけて服の中に隠せる布袋を買おうか。そこにお金を入れておけば安心だよ」
「うん！　じゃあ途中にある市場に寄って屋台に向かおうか」

そうして俺たちは、まず市場に向かって歩き出した。今はロニーが荷車を押している。

「ロニー、一人でも押せそう？」
「ちょっと重いけど、この程度なら頑張れるかな。僕も体力つけないとだから頑張るよ」
「確かにこれで体力がついたら、剣術の授業は楽になるね」
「そうだよね！　よしっ頑張ろう」
「でも、頑張りすぎには注意してね。どうしても疲れてる日は屋台休みでも良いから」

結構ハードスケジュールになるだろうし、体調崩したら大変だからな。

「いいの？　でも毎日やる予定だったんだけど……」
「体調崩したら大変だから、疲れたら休むくらいが良いと思うよ」
「……確かにそうだね。体調崩したら何日も休まないといけなくなるし。レオンありがとう」

「良いんだよ。気にせず休んでね」
「うん！　そういえば今日は、市場に行ったらまず何を買うの？」
「まずは、ロニーのお金を入れる布袋と荷車の荷物に被せる丈夫な布を買いたいんだ。しっかり被せておけば盗まれる心配もなくなるでしょ？　あとは、荷車からロニーの家に調理器具を運びやすいように大きな布袋も欲しいな。それを買ったら今日の食材かな」
「じゃあまずは布製品を売ってるお店からだね。ちょうど市場の入り口付近にあるんだ」

それはちょうど良かった。じゃあそこで布製品を買ったら食材を買って屋台だな。
食材は、豚肉、キャベツ、卵を買えば大丈夫だ。

俺たちはゴロゴロと荷車を押しながら頑張って歩き、市場の入り口にたどり着いた。市場は日本でいう昔の八百屋さんみたいな感じで、建物の外側にたくさんの商品が置かれているので、荷車を持っていても買い物がしやすい。中にあるものもお店の人に言えばすぐに取ってもらえる。

「レオンここだよ！」
「結構たくさんあるね」

かなり品揃えが良い店のようだ。布の質は良くないが、ロニーが使うにはそっちの方が悪目立ちしなくていいだろう。

「いらっしゃい！　坊主たち何が欲しいんだ？」
「丈夫で首から下げられる小さめの布袋と、荷車の荷物が全て入るくらい大きな布袋と、荷車の荷物に被せる丈夫な布が欲しいんだ」
「その三つだな。ちょっと待ってろ」

お店のおじさんはそういうと、お店の中から俺が言った三つを探してきてくれるらしい。
ちょっと待っていると、手にいっぱいの商品を持って戻ってきた。
「小さめの布袋はこの三つのどれかがいいだろう。大きい布袋はこれ一つしかなかった。丈夫な布はこの五つから選んでくれ」
「ありがと！　ロニーどれがいい？」
「うーん、小さめの布袋はこれが良いと思う。首からかける紐が丈夫みたいだから」
「じゃあそれにしよう。後は丈夫な布だけど、どれがいいのかな？」
俺には触ってみても、どれも同じようにしか思えないんだけど。どれも丈夫ではあるけど水は弾かなそうだし……
あれ？　そう言えば雨が降った時のこと考えてなかった！　雨が降った時ってどうしてたっけ？
うーん、実家に住んでる時は皆ほとんど濡れたままだった気がする。冬なら外套を着てたな。
というか、そもそも雨だと必要最低限しか外に出ないんだよな。
とりあえず雨の日の屋台は休業で、途中で雨が降ってきた時は濡れたらやばいものにだけ外套を被せておけばいいかな。後は木箱も一つあれば良いかもしれない。
木箱に入れて外套を被せれば完璧だろう。
「レオン、ぼくはどれでもいいと思うよ」
「じゃあこれでいいか。おじさんこれで！」
「はいよ。また来てな」
俺たちはお金を払ってお店を後にした。

「ロニー、さっき思いついたんだけど、雨の日の屋台はお休みでいいからね。でも、途中で雨が降ってくることもあるでしょ？　そういう時の為に、木箱を一つと外套を一つ荷車に乗せておくようにしようと思ったんだけど、どう思う？」
「確かに雨の時はお客も来ないだろうから休みでいいかもね。途中で降ってきた時も、木箱と外套があれば完璧だと思うよ」
「良かった。じゃあその二つも買っておこうか」
「じゃあ、まずはあそこのお店かな！」

俺たちはその後に、木箱と外套を購入し食材も購入して市場を出た。

「よしっ……じゃあ屋台に行こうか」
「うん！　やっとだね。僕かなり楽しみにしてたんだ！　僕が屋台で商品を売る方になるなんて……」
「屋台をやりたかったの？」
「孤児院ではお小遣いなんてもらえないから、屋台に行ってもいつも何も買えなかったんだ。妹と屋台をやる人になれば、売ってるものを好きなだけ食べられるねっていつも言ってたんだよね」
「そうなんだ……」

ロニーの子供時代のことを思うと、目から水が……
ロニーにも妹さんにも、屋台のご飯を好きなだけ買ってあげたい！

「あっ、もちろん僕は雇われてるだけだから売り物を食べたりしないよ！」
「ロニー……好きなだけ、好きなだけ食べていいから！　それも給金のうちだからね。遠慮しないでお腹空いたら好きなだけ食べていいからね」
「で、でも……それは流石にダメなんじゃ……」

「いいんだよ！　俺の屋台なんだから、俺がいいっていうならいいんだよ」
「確かにそうだけど……」
「遠慮しなくていいからね！」
「う、うん、ありがと」

食材のお金、ちょっと多めに渡すようにしよう……

「じゃあ早く行こうか。ロニーにクレープの作り方を覚えてもらわないといけないし」
「うん！」
「そういえば、ロニーはお昼ご飯食べた？」
「食べてないよ？　学校がないからね」

もしかして、学校がないと昼食は抜きってこと？　でも確かに、ロニーは仕事が見つからないっていってたし、収入がなければ生活を切り詰めるしかないもんね……
そこまで頑張って王立学校に通って、確か将来の夢は自分が稼いで孤児院の皆にお腹いっぱい食べてもらいたいって言ってたよな……ロニー良い子すぎる！！
良い子すぎて泣ける！

「じゃあ、屋台に着いたらクレープを作って食べようか。自分が売るものの味は分かってないとね！」
「そっか、味は知っておいた方が良いよね。食べるの楽しみだな！」
「美味しいの作るよ」

めちゃくちゃ美味しいクレープ作るから！！

１０１、市場で買い物（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！！

面白い、続きが気になると思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

とても励みになります！！

１０２、屋台の開店準備

市場から屋台がある広場まではかなり近く、俺とロニーは市場を出てすぐに広場に着いた。そして屋台に向かう。俺が借りることができた屋台は運良く井戸の近くで、結構便利な場所だ。

隣はスープを売ってるおっちゃんと串焼きを売ってる兄ちゃんみたいだ。隣だし、仲良くなれたらいいな。

「ロニーここだよ！」

「おおっ！　ここがレオンの屋台なんだね。何かわくわくしてきたよ」

「結構嬉しいよね！」

自分の屋台なんて、予想以上にわくわくするな。

「じゃあ準備しようか」

「うん。まずは何をすればいい？」

「まずは調理器具を水で洗う為に、水を汲んでこようか」

「了解！　……レオン」

「何？」

「水を汲んでくる桶がないよ？」

「……あぁ～！　忘れてたよ！」

準備万端だと思ったのに、最初から躓いたよ！　買ってくるしかないかぁ……走ればそんなに遠くないし。

「どうする？」

「俺が買ってくるよ」

「レオン、ちょっと待って！　他にも忘れてるものない？」
「他に……」

あっ！！　薪がない、火がつけられないよ。
俺全然ダメだな。薪がなかったら何もできないよ！

「ロニー、薪も忘れてた」

そういえば、火はどうやってつけるんだ？　ロニーって何属性だろう？　もし火属性じゃなかったら、火打ち石も買わなきゃだよね。
俺、忘れてること多すぎるよ。

「ロニー、ちなみに何属性？」
「僕？　火属性だよ？」
「おお！　さすがロニー！　じゃあ火種は使えるよね？」
「うん。魔力量が少ないから火種を数回しか使えないんだけどね」
「それが使えるだけでかなりありがたいよ」

じゃあ、薪と桶を買ってこよう。

「それじゃあ、薪と桶を買ってくるね」
「うん。よろしくね」

そこまで話したところで、隣のスープの屋台からおっちゃんの笑い声が聞こえてきた。

「ははははっ……お前たち、面白すぎるだろ。屋台やるのに、薪と桶忘れるって……」
「そんなに笑わなくてもいいのに……ちょっとしたミスだから！」

俺はおっちゃんの屋台に向かってそう叫んだ。

「ちょっとしたミスなのか？　大きなミスじゃないか？」

別に買いに行けば良いんだから！　俺はおっちゃんなんか無視して早く買いに行こうと思い、市場の方に向かって走り出そうとしたが、走り出せなかった。

何故なら、おっちゃんが俺たちの屋台まで来ていて桶を差し出していたからだ。

「これ、使えよ」

「え？　でもこれおっちゃんのでしょ？」

「俺はもう一個あるからいいんだ。お前たちにやるよ。屋台頑張れよ」

おっちゃん……めちゃくちゃいい人じゃん！！

無視しようとか思ってごめん！

「おっちゃんありがとう！」

「いいってことよ。ついでに薪も少しなら持っていっていいぞ」

「おっちゃん最高すぎる」

俺がめちゃくちゃ感動していたら、また逆の屋台から声がかかった。

「こっちの薪も使っていいぞ」

串焼きを売ってる兄ちゃんだ。

「兄ちゃんもいいの？」

「ああ、坊主たちが困ってるんじゃ、助けないわけにはいかないだろ」
「兄ちゃんもありがと！」

二人とも良い人過ぎる！！

「ロニー、お隣さんめちゃくちゃ良い人で良かったね！」
「うん！　二人とも本当にありがとう！」
「いいってことよ、頑張れよ」
「応援してるぞ」

俺とロニーはめちゃくちゃ気合が入り、やる気いっぱいで準備に取り掛かった。
まずは水を汲んできて、調理器具を洗っていく。そして調理器具を全て並べ終えて、食材を持ってくる。
今のうちに火も起こしておく。

「よしっ……じゃあ作り方を教えるね。クレープは二種類あるんだけど、一つは豚肉サラダ、一つは蜂蜜バター。生地の作り方はどっちも同じだから、まずは生地の作り方から教えるよ」
「わかった。よろしくお願いします！」

ロニーはやる気満々だ。これならしっかり覚えてくれるだろう。
そこからは、この間試作した時に見つけ出した分量をロニーに教えながら、クレープの作り方を教えていく。
ロニーは孤児院で料理の経験があるようで、予想以上に上手だった。少しマヨネーズには手こずっていたけど、慣れてくれば手早く作れるようになるだろう。これなら次からは一人でも大丈夫だな。

「うん、それで完成！！」

「おお〜、これで出来たの？」
「そう！　食べてみて」
「じゃあ……いただきます」

ロニーがぱくっと豚肉サラダクレープを口にした。するとロニーの顔が、みるみる驚きの表情に変わっていく。

「レ、レオン、これ、何でこんなに美味しいの？　凄いよ！！　これなら絶対に売れる！！」
「売れると思う？」
「確実に売れるよ！　このソースが美味しいんだ。マヨネーズだよね？　作るの大変だけど、こんなに美味しいのならいくらでも作るよ！」

ロニーは大興奮で褒めまくりながら、クレープを食べ続けるという器用なことをしている。

「僕これ大好き。これを毎日食べられるなんて幸せすぎる」
「そんなに喜んでもらえて嬉しいよ。じゃあもう一つも食べてみて。こっちは甘いクレープだからデザートだよ」
「僕甘いものなんてほとんど食べたことない……いただきます」

ロニーは感動した様子で蜂蜜バタークレープを一口食べると、そのままフリーズしてしまった。
えっと……ロニー大丈夫かな？

「ロニー、どうしたの？　美味しくなかった？」

俺のその言葉にロニーは思いっきり首を横に振り、目に涙を浮かべた。

え！？　何で！？

「こ、これ、こんなに美味しいもの、初めて食べたよ。甘くて、幸せの味だね。妹にも、孤児院のみんなにも、食べさせてあげたいな……」

ロニーはそう言って静かに涙を流した。やばい……いつものことだけど、ロニーが良い子すぎる！　俺までもらい泣きしちゃうじゃん！

「ロニー、今度休みで予定を合わせられる時に一緒に孤児院に行ってもいい？　それで、皆にクレープを作ってあげようよ。俺たちからのお土産ってことで」
「本当に？　いいの？」
「うん！　その代わり俺の実家にも遊びにきてね」
「もちろん行くよ！　レオン……本当に色々ありがとう」
「友達を助けるのは当たり前だよ」
「うん、そうだね。僕もレオンが困ってたら助けるから！」
「ありがと！　じゃあとりあえず、今日は屋台を頑張ろうか」
「僕めちゃくちゃ頑張るよ」

ロニーは元気を取り戻したみたいだ。とりあえず一安心だな。ロニーは結構辛い境遇なのに、優しく良い子に育っていて、いつも妹や孤児院の皆のことを考えていて、マジで泣かされる。
せめて孤児院でもお腹いっぱいのご飯が食べられたらいいのにな。でもそんなことを言ったら、貧しい平民だって満足にご飯が食べられてない人もたくさんいるし……難しい問題だ。
とにかく今は屋台を頑張ろう！
あっ……そうだ。

「ロニー、おっちゃんと兄ちゃんの分のクレープも作ったから渡しに行こう」
「そうなの？　確かにさっきのお礼にいいかもね！」
俺とロニーは、ちょうどお客さんがいなかったおっちゃんの方に向かった。
「おっちゃん！　さっきはありがとう」
「これ、僕たちが売るクレープって料理なんだ。良かったら食べてね。こっちが豚肉サラダクレープで、こっちが蜂蜜バタークレープだよ」
「おお、わざわざありがとな。貰っちゃってもいいのか？」
「うん！　さっきのお礼だから」
「ちょうど腹減ってたんだよ。ありがとな」
おっちゃんはでかい一口で、バクっと一気に三分の一ぐらいを口に入れた。すごく豪快な食べ方だな。
「ん？　んん？　何だこれ！　坊主たち、これめちゃくちゃ美味いぞ！」
「本当に！？　やったー」
「こっちの甘い方も美味っ」
おっちゃんは凄い勢いで食べていく。本当に美味しいと思ってくれてるんだな。一安心だ。
「ありがとう！　じゃあ次からは買いに来てね」
「これは買いに行く。いくらなんだ？」
「どっちも一個小銅貨四枚だよ」
「そっかぁ～結構高いな。でもこの味ならそれも納得だし、順当な

値段だな。本当に美味い」

おっちゃんはめちゃくちゃ喜んでくれたみたいで良かった。とりあえずは売れそうだな。

「じゃあ次は兄ちゃんのところに行こうか」

「うん！　というかレオン、一個小銅貨四枚で売るなんて初耳なんだけど。僕は聞いてないよ」

ロニーがジト目で見つめてくる。

「ご、ごめん。伝えるの忘れてたよ。原価を考えると、この値段くらいじゃないと利益が出ないんだ」

「まあ、値段は良いと思うよ。もう少し上げてもいいくらいだと思う。材料に蜂蜜や砂糖、バターも使われてるし、味もすごく良いから小銅貨五枚でも売れると思う」

凄いな……やっぱりロニーって頭良いんだ。普通十歳の子供は原価と利益なんて考えられないよな。それに物の価値も理解してるみたいだし。

「小銅貨五枚でも良いかと思ったんだけど、できるだけたくさんの人に買ってもらってクレープを広めてほしいから、この値段にしたんだ」

「そっか、まあレオンが決めた値段に従うよ」

俺も最初は小銅貨五枚にしようと思ってたんだ。だけど、自分だけが儲かるのではなくてこの世界の食文化に発展してほしいから、たくさんの人に食べてもらえるように安くしたいんだ。

人は美味しいものを食べるとそれを再現したいと思うし、その過

程で新しいものが生まれるからね。
「ありがとう。じゃあ小銅貨四枚でよろしくね」
「うん！」
そこまで話したところで、兄ちゃんのお店にお客さんがいなくなったのでクレープを渡しにいく。
「兄ちゃんさっきはありがとう。これお礼だよ！」
「僕たちの屋台で売るものなんだ。美味しいと思うから食べてみて！」
「わざわざお礼に来てくれるなんてありがとな。いただくよ」
そう言って兄ちゃんは、ぱくっとクレープを口にした。一口食べて一瞬フリーズしたと思ったら、その後すぐにこっちが引くくらいのペースで食べ始めた。
すごく喜んでくれてるんだよな……？
「兄ちゃん、美味しい？」
「おぅ、ふごくおひしひろ」
何言ってるか全然わかんないよ。
「なんて言ったの？」
「ひょっとまっへ……坊主たち、天才じゃないか！！　こんなに美味いものは初めて食べた」
兄ちゃんは口に詰め込んだクレープを飲み込んでから、クレープをめちゃくちゃ褒めてくれた。
やっぱり美味しいって言ってもらえるのは嬉しい。

「ありがとう！　これからは隣で売ってるから買いに来てね。一個小銅貨四枚だから」
「小銅貨四枚か……ちょっと高いが買えない金額じゃないな。絶対に買いに行く」
「待ってるね。じゃあまたね」

そんな会話をして、俺とロニーは自分の屋台に帰った。

「好感触で安心したよ……これなら全く売れないってことはなさそうだよね」
「これは絶対に大繁盛するよ。ただ、ちょっと高いから最初に買ってもらうのが大変かもね。一度買ってもらえれば絶対にまた来てもらえるし、周りの人に広めてくれるだろうから、どんどんお客さんは増えると思うよ！」
「そっか……そうなってくれたら良いな」
「うん！　僕頑張るから！」
「ロニーありがとう」
「それはこっちのセリフだよ。僕を雇ってくれてありがとう」
「じゃあ、二人で頑張ろうか」
「うん！　開店しよう」

よしっ、屋台開店だ！　これから頑張るぞ！

１０２、屋台の開店準備（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

１０３、クレープの屋台開店

俺は屋台に下がっている木の板をひっくり返して、開店を示した。ダイヤのようなマークが書かれている方を表にしていると開店、何も書かれてない方を表にしていると閉店らしい。

他の広場の屋台ではこんな板はなかったと思うけど、この広場の屋台ではこのシステムが採用されているようだ。まあ、いちいち店員に聞かなくてもぱっと見でわかりやすいし、便利で良いよな。ひっくり返すのを忘れないようにしないと。

「じゃあ、生地を焼いてお客さんが来るのを待ってようか。生地は提供する前に鉄板に乗せて温め直せば大丈夫だから」

「わかった。じゃあ生地は作り置きして良いってことだね」

「うん。大丈夫だと思う」

「じゃあ作るね」

ロニーが生地を焼き始めた。真剣な表情なので邪魔しないようにしよう。そのうち慣れてきてサッと焼けるようになるだろう。

俺は何か足りないものがないか、屋台をざっと見回して考えた。うーん、日本の屋台と比べて何かあるかな……

日本とは設備が違うから参考にならないことも多いんだけど、日本の知識が役に立つことも結構あるんだ。

うーん、やっぱりクーラーボックスだな。あれが作れたら良いんだけど、そもそも製氷機を使えないから無理だし……

そうだ。生地とマヨネーズはボウルで作ってるけど、ボウルを井戸から汲んだ水に入れておけば、温度が上がらなくて良いかもしれない。今の季節ならまだ大丈夫だけど、夏は絶対にやった方がいい

な。

俺は、ロニーが一枚生地を焼き終わったところで声をかけた。

「ロニー、今よりも暑くなったらボウルに入った生地とマヨネーズは、井戸水にボウルごと浸けて冷やしておいた方がいいと思う。だから、桶は二個買っておいた方がいいね」

「確かに暑くなったら冷やしておいた方がいいね。豚肉もそうした方がいいんじゃない？」

「確かにそうだね。じゃあボウルも買い足した方がいいかな？」

「うーん、あと二個くらいあると便利かも」

「わかった。じゃあ後で買っておくよ」

「よろしくね」

他に足りないものは……今のところ思い浮かばないな。まあ、これから続けていくうちに足りないものが見えてくるだろう。

よしっ、俺は呼び込みでもしようかな。買ってくれた人が多いだけ口コミで広まるだろうし。

誰か買ってくれそうな人いないかな……おっ、あそこのおばちゃん何買うか悩んでるっぽいな。

「そこのおばちゃん！　うちの屋台で買っていかない？」

俺がそう呼びかけると、おばちゃんはこちらを向いて歩いてきてくれた。

「まだ小さいのに屋台やってるなんて凄いねぇ。何を売ってるんだい？」

「クレープって食べ物だよ。豚肉サラダクレープと蜂蜜バタークレープの二種類。めちゃくちゃ美味しいよ！」

「クレープ？　聞いたことないねぇ」
「俺がレシピを考えた新作なんだ。皆に大好評なんだよ！」
「本当かい？　いくらなんだい？」
「一つ小銅貨四枚！　ちょっと高いけどその分美味しさは保証するよ」
「ちょっと高いよ。でもそうだね、新しいレシピっていうのは気になるし一つもらおうかな」

よしっ、お客様第一号だ。

「本当に！？　おばちゃんありがと。どっちがいい？」
「豚肉の方がいいね」
「りょーかい！　ちょっと待ってね。ロニー、豚肉サラダクレープ一つだよ」
「もう作り始めてるよ」

ロニーは会話を聞いて作り始めていたようだ。おおっ、さっきより手際良くなってる。
ロニーはすぐに作り終わり、おばちゃんにクレープを渡した。

「おばちゃんどうぞ。小銅貨四枚ね」
「はいよ。ありがとね」
「こっちこそありがとう。また来てね」
「美味しかったらまた来るよ」

おばちゃんはそう言って遠ざかっていった。

「ロニー、売れたね」
「レオン、売れたね」

俺たちはそう言って顔を見合わせ、お互い満面の笑みになった。自分たちが作ったものを買ってもらえるのって、予想以上に嬉しいかも！！

でも俺は致命的なミスに気がついていた。お釣りを用意してなかった！　幸いアイテムボックスには結構な量の小銅貨も入ってるから大丈夫だと思うけど、次からはしっかり用意しないとだな。

俺はさりげなく荷車から取り出したように見せて、小銅貨をアイテムボックスから取り出した。

「ロニー、これお釣りとして使ってね」

「確かにお釣り必要だよね！　僕気づいてなかったよ。さすがレオンだね」

ロニーは無邪気な顔でそう褒めてくれるが、俺も今思い出したんだ。でも、それは黙っておこう。

「ありがとう。次からは他のお金と一緒に渡すね」

「うん！」

忘れてること多すぎるな。もっとミスがないように頑張ろう。そう気合を入れたところに、さっきのおばちゃんが走って戻ってきた。

え？　何かダメなところがあったのかな？

「おばちゃんどうしたの？　何かダメだった……？」

「違うよ！　何だいこれは、美味しすぎてびっくりだよ！　家族にも買って帰りたいから、後三つ同じものをお願いね。後もう一種類甘いのもあっただろう？　そっちも二つお願い」

「わ、わかった。今すぐ作るからちょっと待ってね」

いきなりの大量注文だ。美味しくて追加注文してくれるなんて嬉

しすぎるよ！
俺とロニーは急いで作り上げて、おばちゃんに手渡した。おばちゃんはカゴに布を敷いて、そこに入れて帰るようだ。
クレープを手渡されたおばちゃんは、すごく嬉しそうだ。
「これは皆すごく喜ぶよ。ありがとね。また買いに来るよ」
「おばちゃんありがと！　友達にも宣伝しといてー」
「任せときな！」
おばちゃんのネットワークはすごいから、結構広まるかもしれないな。出だしは最高だ！
それからは俺が呼び込みをしつつ結構お客さんが来てくれて、大好評のまま材料が終わり閉店となった。
今は片付けをしてるところだ。
「レオン！　本当に凄いよ！　初日から売り切れだよ」
「確かに凄いよね……どのくらい材料を仕入れるのかも難しいかも。最初はよくわからないだろうから、少し多めに買ってくれていいからね。余ったらロニーが家で食べちゃって」
「いいの？」
「全然いいよー。細かいことは気にしないで」
「レオンがいいならいいんだけど……僕のこと信用しすぎじゃない？」
「ん？　なんで？　ロニーのことを信用するのは当たり前でしょ」
「でも、僕たちまだ会ってからそんなに経ってないよ？」
確かにそう言われればそうだな……でも、ロニーは悪いことはしないと信じられる。こういうのって直感もあるからな、理由はって

言われると難しい。
　それにこの屋台はロニーを助けるために始めたんだし、目的が利益を上げることじゃないから、細かいことは気にしなくていいかって思っちゃうんだよな。

「理由はよくわからないけど……直感かな？　それに、ちょっと話しただけですぐにわかるよ。ロニーは良いやつだって」
「あ、ありがと……」
「まあ、そういうことだから、これからよろしくね！」
「うん。任せて！」

　そうして大成功の開店初日を終えて、俺たちは帰路に着いた。帰りに市場により、桶やその他足りなかったものは買い揃えた。
　これでとりあえずは大丈夫だろう！

「じゃあ、明日からはロニーに任せてもいい？」
「うん！」
「何かあったらすぐに言ってね。お金が足りなくなったとか、売れなくなったとか、何でも遠慮しないで」
「そうするよ。そういえば、売り上げってどうすればいいの？　今日はレオンがいたからすぐに渡せたけど、学校で渡せばいい？」
「うーん、学校で渡してもらうのが一番いいよね。席が隣だし布袋に入れて渡せば他の人にはわからないと思うから、そうしようか」
「わかった。じゃあ毎日持っていくね」

　売り上げはそれでいいとして、ロニーへの給金と材料費、お釣りはいつ渡せばいいかな……
　回復の日が一番材料費が高くなるだろうし、回復の日の前の日、土の日に渡せばいいか。

「ロニーへの給金と材料費、お釣りは、土の日に一週間分を渡すね」
「わかった。よろしくね」
「うん。とりあえず今日は、一週間分の材料費とお釣りだけ渡しておくよ」

俺は一週間分の材料費とお釣りを計算して、それより少し多めに布袋に入れてロニーに渡した。

「これでよろしく」
「うん！　これをどんどん増やすからね！」

ロニーはかなり気合が入ってるみたいだ。ここまでやる気いっぱいなロニーは初めてみたよ。いつもは恐縮してやりたくないって感じなのに。
やっぱりお金を稼げるってなるとやる気が出るのかな。
俺はロニーの様子に思わず笑ってしまった。

「あははっ……今のロニーならすごく増やしてくれそう。期待してるよ」
「ちょっ、ちょっとレオン、笑うのは酷いよ！　僕は気合を入れてるんだから！」
「ごめんごめん……いつものロニーと違いすぎて。いつもそんな感じでいたら友達も増えるんじゃない？」
「王立学校じゃ生意気だって言われるだけだよ」
「まあ確かにね……あの学校は平民に優しくないからね」

あの学校じゃ、自分の素を出せなくてもしょうがないよなぁ。でも勿体ない。

「でも、他の学年には同じような境遇の平民もいるかもしれないし、

もしかしたら貴族でも仲良くできる人が見つかるかもよ」
「うーん、確かにそういう平民の人がいたら仲良くなりたいな。でも、貴族様はやっぱり難しいよ……」
「まあそうだよね。そこは無理に仲良くする必要はないと思うけど、でもまだ学校は始まったばかりだから、これから仲良くなれる人が見つかるかもしれないよ」
「確かにそうだね。希望は捨てないようにするよ。最初から怖がるのもできる限りやめるようにする」
「うん。それがいいよ」

そこまで話したところでロニーの家に着いた。俺は荷物をロニーの部屋に運ぶのを手伝ったが、これなら一人でも大丈夫そうだ。やっぱり大きい布袋を買って良かったな。

「レオン、残った食材はどうすればいい？」
「うーん、次の日まで保存できるものは明日使っても良いし、できないのはロニーが食べて良いよ」
「いいの？」
「うん。公爵家に持って帰っても処分するだけだと思うから、食べてくれるのならありがたいよ」
「じゃあ、遠慮なくもらうね。でも、これってどうすれば良いのかな？」

そう言ってロニーが示したのは、卵白だった。卵黄だけ使うから卵白は大量に余るんだよな。
卵白の使い道なんてわからないよ。確かお菓子作りには卵白だけを使うレシピがあった気がするけど、ケーキだっけ？　よく覚えてないし、どうやって使うのかもわからない。小麦粉に卵白を入れて混ぜれば良いのか？　それとも卵白を型に塗るんだっけ？　あれ、塗るのは油だっけ？

……こんなのいくら考えてもわかる訳ないよね！

だって俺、お菓子作りなんて殆どしたことないし。お母さんがたまに作ってたのを見たことがあるくらいだ。

お母さんもケーキは作ってなかったんだよな。

「俺もどうすれば良いのかわからないけど、普通にフライパンで焼いたら、目玉焼きの白身部分だけの料理が出来上がるんじゃないかな？」

あれ？　今咄嗟に思いついたけど、なんかそれ面白そう。目玉なし焼きって名前にしたら売れないかな？　俺良いこと思いついたかも！

「ロニー！　目玉なし焼きって名前にして売ったら売れるかな！？」

俺が大興奮でそう言うと、ロニーは苦笑いで俺を見ている。

「えっと……ダメ？」

「別にレオンの屋台だからやりたいのならやってみても良いと思うけど、僕は売れないと思うかな」

「そうかな？　どこがダメだと思う？」

「まず、名前がダサい」

グサッ……めちゃくちゃストレートに言うな。俺の心に突き刺さったよ。

「あとは、ほとんどの人は目玉焼きの黄身が好きだから、白身だけだと買わない」

グサッグサッ……

「それから、……」

「ロニー」

「ん？　何？」

「もう俺の心はボロボロだから、その辺にしようか。白身だけの目玉焼きは売らないことにするよ」

「うん。それが良いと思うよ」

素のロニーは結構グサグサ言うタイプなんだね。王立学校ではかなり萎縮してるから、俺に素を出してくれるのは嬉しい。

「じゃあ、白身はどうしようか？　ロニーが食べる？」

「そうだね。確かに焼いて塩をかければ美味しく食べられるだろうから、僕が貰おうかな。大家さんとかご近所さんに分けてあげてもいい？」

「それはもちろん！」

「ありがとう。じゃあ僕がもらうよ」

とりあえず、屋台の卵白はこれでいいな。でも、確か卵白はお菓子に使えたはずなんだよなー。

この世界でケーキって見たことないし、それには卵白を使う気がするんだけど……ケーキを食べたいのにレシピは全く思い出せない！

俺が考えても絶対に思い出せないから、料理人さんに試行錯誤してもらうしかないよな。でもそんなことを頼める知り合いの料理人さんなんていないし……

うーん、これはまた後で考えよう。とりあえず今日は帰らないとまずい。

「じゃあもう遅いから、そろそろ俺は帰るね」
「うん！　ここまで送ってくれてありがとね。気をつけて帰って」
「市場にも寄りたかったから良いんだよ。じゃあね」

そうして俺は少し小走りで公爵家に帰った。急がないと夕食の時間になっちゃう……！

かなり急いで俺が息切れしつつ公爵家の前に着くと、門番さんがすぐに気づいて門を開けてくれた。さすがに顔を覚えてくれているみたいだ。
そして敷地内に入り屋敷に向かって歩き出すと、屋敷の方からロジェが歩いてくるのが見えた。歩いてるのにめちゃくちゃ速いな……使用人の特殊能力？

「ロジェ、屋敷で待っててくれればいいのに」
「私はレオン様の従者ですので、お供いたします」
「まあ、ロジェがいいならいいけど……そういえば、ロジェもクレープ食べた？」
「はい。レオン様が作られたものを頂きました」
「どうだった？」
「とても美味しくて驚きました。特に豚肉の入った方のソースが絶品でした」

マヨネーズか。やっぱりマヨネーズって美味しいよね。
ロジェはマヨラーになれる資質があるな。

「今日屋台で売ったんだけど、大好評で売り切れだったよ」
「それはおめでとうございます。ただ、あの美味しさならば当然です。これからはより繁盛するでしょう」
「やっぱりそうかな？」

そうなるとロニーがすごく大変になるよな……たまには手伝いに行こうかな。まあ、ロニーに聞いてみて考えよう。

とりあえず、まずは早く寝たい……今日は色々頑張りすぎて子供の体は限界だよ。

１０３、クレープの屋台開店（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

閑話　信仰心アップ大作戦（ミシュリーヌ視点）

私は覚悟を決めたの。この世界で私への信仰心を高めて神力を溜めて、神託をしてこの世界を救う！

神託はレオン本人かこの国の王にするわ。絶対にこの世界を、人間の世界を救ってみせるんだから。魔物なんかの好きにはさせない！

一番は中心街の教会にレオンか王が来てくれたら話は早いんだけど、どちらも来ない。これはもう仕方がないわ。だから教会の外にいる時に神託をしないといけない。

ただ神域の外である中心街の教会以外の場所への神託は、一気に必要な神力が多くなるのよ……数十倍かしら？　今の現状では全く神力が足らないわね。

そこでまずは信仰心を高めて神力が溜まるスピードを上げることにする。そして溜まった神力を使って神託をする。完璧な計画よね！

ただ信仰心を上げられなかった場合は計画が頓挫するけど……そんなことあるはずがないわ。だって、この私がやるんだもの！

そうして気合を入れたんだけど、その計画を立てた矢先に私のやる気を削ぐような事態が起こったわ。実は……レオンが礼拝室の手前まで来たのよ！

そのまま礼拝室に入ってくれれば神託ができる。さらに女神像に触れてくれれば、レオンと神託ではなく直接会話できる。そう思って期待したわ。

それなのに……それなのに、レオンは何で礼拝室に来ないのよ！
普通は自分の能力は女神様のおかげかもしれない～とか思って、お祈りくらいはするでしょう！

レオンが帰っちゃってからしばらく落ち込んだわ。折角頑張らなくても解決したと思ったのに……目の前にどら焼きがあるのに食べられないみたいな気持ちだったわよ。
でも落ち込んでいてもしょうがないから、とりあえず最初の予定通りに信仰心を高めることにする。まあ信仰心を高めるために出来ることが、女神像を光らせることくらいしかできないのだけれど……

それでも何もやらないよりはマシよね。とりあえず、今の礼拝室の様子を見てみようかしら。

……人が少ないわね。三人しかいないじゃない。

熱心に祈ってる若い女と歳をとった男が二人。誰もいないよりはマシだけど、こんなに少ないと悲しくなってくるわ。私への信仰心はどれだけ下がってるのかしら……
とにかく、早めに光らせた方が良さそうね。ええと、光の種類は白くて柔らかい感じが良いのよね。そんな光が一番神聖な光として崇められるって、シェリフィーに聞いたことがある。今の神力を使えば……一日くらいは光らせられるわね。

よしっ……光れ！

「な、何じゃこの光は……」
「女神様じゃ、女神様が降臨なされたのじゃ！　ありがたや～」

「何と神聖な光……女神様……まだこの国をお見捨てになられてはいなかったのですね……」

ふふっ、完璧ね。礼拝室にいた三人は腰を抜かして驚いてるわ。この光をたくさんの人が見れば信仰心が上がるに違いない！　さあ、腰を抜かしてないで早く他の人を連れてきなさい。

……誰もその場から動かないじゃない。なんでなの？　神聖な光に見惚れて目が離せないとか？　一度光を止めてみようかしら……

あ、三人とも我に返って動き出したわ。光に見惚れてたのね。後はたくさん人が集まったらまた光らせて、それを繰り返していれば確実に信仰心が上がって神力が溜まるようになるはず。私だってやればできるじゃない！

それからは人が集まったら一定時間光らせて、というのをしばらく繰り返したわ。朝早くから始めたのにもう夕方に近い。神力もそろそろなくなりそうだし……とりあえずはここまでにして休もうかしら。

こんなに頑張ったんだもの。残り少ない神力でご褒美を取り寄せてもいいわよね……？　私は自分の中で神力の消費を正当化して、クレープを取り寄せた。

最近レオンがクレープを開発したのよ。これは沢山食べないと失礼よね。う～ん、すごく甘くて美味しそうな香り……幸せ。

そうして私がクレープを堪能して休憩していると、中央教会の礼拝室が騒がしくなってきた。何かあったのかしら。私はもう何もしてないけど……？

不思議に思って見てみると、礼拝室に見覚えのある顔の男が入ってくる。

確か……この顔は、この国の王じゃない！？　何でここに来たのよ！　女神像が光るって王様が来るほどの出来事だったの！？
それを早く教えなさいよ！　もし知っていれば神託をするための神力を残しておいたのに……もうほとんど空っぽじゃない！

私のバカ、何で残しておかなかったのよ！　もう本当に私ってバカ……とりあえず、あと数分なら光らせることはできるわ。それだけでもやっておくべきよね。うぅ～、本当に私ってダメね……

……次は絶対に失敗しないわ。これからは神力が溜まるように、毎日少しだけ光らせるのに神力を使って、あとは溜めておくことにしよう。それなら信仰心も上がるだろうし、溜まるのも早いわよね！

それからしばらくして……

「ミシュリーヌ久しぶり。頑張ってるかしら？」
「シェリフィー来てくれたの！？　ありがとう！」

シェリフィーが来てくれた。最近は本当に退屈だったから、凄く嬉しい。私は喜びのあまり、シェリフィーのところまで飛んでいき抱きついた。

「ちょっ、ちょっと、急に何よ」
「最近暇でしょうがなくて、何度地球まで行こうと思ったかわからないわ！」
「暇って……貴方は信仰心を高めるために忙しいんじゃなかったの？」

「そうだけど……神力は神託のために溜めてるから、毎日少しずつしか使ってないのよ。だから暇なの」
「あなたの仕事はそれだけじゃないでしょ？　レオンのこともしっかりと見てるの？　魔物の森や他の国の様子は？」
「そ、それはちょっと、後でやる予定というか……これからというか。神力もないから……」

他の仕事のことなんてすっかり忘れてたわ。でも神力がないんだし、観察しても何もできないんだもの。それでもシェリフィーは把握してることが大切っていうんでしょうけど……

「ミ～シュ～リ～ヌ～～、やるべきこともやってないのに何が暇よ！！　それにその手に持ってるものは何かしら？　それクレープじゃないの？」

シェ、シェリフィーが怖い……目が据わってるわ。これはやばいくらい怒ってる時の顔よ。ど、どうしよう、とにかく逃げないと！
私がシェリフィーから離れるように飛ぼうとしたその瞬間、シェリフィーに腕を掴まれた。

「これ、どうやって手に入れたのかしら？」
「そ、それは、レオンがこの世界でクレープを開発したから……取り寄せて味を確かめようと……」
「味を確かめる？　本当に理由はそれだけ？」
「う、うん。もちろんそうに決まってるわ！」
「そうなの。じゃああなたの後ろに大量に積んであるクレープは、何かしら？」

やばい……、たくさん取り寄せたところだったのを忘れてたわ。

「あ、あれはね、その、たくさん食べても飽きないかの検証を……」
「そんな検証必要ないでしょ！　ただでさえ神力がなくて溜めてるのに、無駄に消費してどうするのよ！」

シェリフィーの雷が落ちたわ、怖すぎる……誰か助けて～！

「あなたこの世界を守る気あるの！？　私の世界から魂を持っていったのよ！　それを無駄にしたなんて結末は許さないわ……！」
「ご、ごめんなさい。ちゃんと、ちゃんと考えてるから！　もう少し経ったら、神の領域の外にいる人間にも神託をする神力くらいは溜まるわ。そうしたらこの国の王に神託をするから！」
「本当に？　そんなに上手くいくのかしら？」

そ、それは私もわからないけど、でも大丈夫よ。私がやるんだもの、失敗はありえないわ……多分。

「大丈夫よ！」
「はぁ～まあいいわ。とにかく頑張りなさい。とりあえず差し入れよ。これを大事に食べて、クレープの取り寄せはやめなさい！　わかったわね！」

凄いっ、どら焼きにお饅頭に和菓子がたくさん！　ケーキもホールであるわ！

「シェリフィー、ありがと！！」

こんなにたくさんの地球のお菓子に囲まれてるなんて……幸せだわ。

「じゃあそろそろ帰るわね」

「え！？　今来たところじゃない、もう帰るなんて早すぎるわよ」
「でも私がいたら仕事の邪魔でしょう？」
「そんなことないわ！　休みも必要だもの！」
「あなたは休みばかりじゃない……」
「そんなぁ～。私シェリフィーと会うのを楽しみにしてたのよ」

さすがに来てすぐ帰るなんて早すぎる。もっと話したいことがたくさんあるのに。

「クレープがたくさんあるから、クレープパーティーをしましょう？」
「何よそのパーティー」
「クレープを食べながら、その素晴らしさについて語り合うのよ」
「楽しくなさそうだわ……」
「シェリフィー酷い！」
「ふふっ……冗談よ。わかったわ、もう少しあなたと話してから帰ることにする」
「本当！？　ありがとう！」

久しぶりにシェリフィーとゆっくり話せるわ！　たまにはこういう時間も必要よね。

閑話　信仰心アップ大作戦（ミシュリーヌ視点）（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

閑話　光る女神像　前編（アレクシス視点）

いつものように執務室でリシャールや文官たちと仕事をしていたところに、一人の騎士が火急の連絡ということで入ってきた。魔物の森で何か問題でも起きたのか……？

「陛下、中央教会の職員が火急の連絡があるとのことですが、こちらに通しても良いでしょうか？」

魔物の森ではないのか。しかし、中央教会の職員が火急の連絡とは……今までにないことだ。一体何があったのか。

すぐに話を聞いた方が良さそうだな。

「ここに通せ」

「かしこまりました」

何が起きたのかわからないが、面倒ごとの予感しかしないな。魔物の森と国内の情勢で手一杯なのに、これ以上の面倒ごとは聞きたくない。だが聞かなければいけないのが私の立場だ。

はぁ～、気合を入れ直さなければ。

「リシャール、なんの話だと思う？」

「私にもわかりかねますが……中央教会で至急陛下のお耳に入れなければならないこととなれば、思いつくのは女神様関連の話だけでございます」

「だが、女神様についての火急の連絡など何かあるだろうか……

…まさか！！　神託があったのか！？」

私は思わず立ち上がってしまった。確か使徒様がいらっしゃっていた時代には、女神様からの神託は何度かあったと記録にある。
今はレオン様がいらっしゃる。本当に神託があったのかもしれない……

「陛下、そのように慌てずに座ってお待ちください。すぐに中央教会の職員が参ります。話を聞いてから対策を協議いたしましょう。とりあえず、すぐに手をつけなければならない仕事はありませんので、本日は通常の仕事は終わりにいたしましょう」
「そうだな。リシャールありがとう。では、今やっている仕事は明日以降に回す。片付けを始めてくれ」

私がそう言うと、文官達は仕事の片付けを始めた。私はもう一度椅子に座り中央教会の職員が来るのを待つ。
それからしばらく待ち、文官達があらかた片付けを終えたところで中央教会の職員が来た。

「陛下、急な御目通りを許可していただき大変ありがたく存じます」
「ああ、それで何があったのだ？」
「はい。本日の九時頃、中央教会礼拝室の女神像が神聖な光を放ちました。目撃者は三名、皆平民です。目撃した平民は光が収まった後、その事実を中央教会の受付ホールにて叫び、その場にいた人々は皆礼拝室に殺到しました。そして礼拝室に人がたくさん集まると、また女神像が光を放ち始めたようです。今は噂を聞きつけた平民がたくさん押し寄せております。女神像には指一本触らせないように常駐の騎士が対応中です」

神託ではなかったか……ただ、女神像が光るとはどういうことだ？
中央教会の礼拝室と女神像は神の遺物だ。劣化することも壊れる

ことも汚れることもない。人の悪戯ということはあり得ないだろう。そう考えると、女神ミシュリーヌ様からの何らかの知らせだろうか……？

詳しくはわからない、わからないが……女神様はこの国を、この世界をお見捨てになられてはいなかったのだ。それだけはわかる。

使徒様がこの国を作られてから数百年。なんの音沙汰もなく、女神様の存在を信じてはいたものの、心の底では既に見捨てられたのではないかという気持ちを否定しきれなかった。

それによって近年は特に、女神様や使徒様の教えを守り続ける大変さを痛感していた。既に半数以上の貴族に信仰心はなくなり、自らの権利を高めるために教えに背こうとしている。女神様や使徒様の教えが形骸化し始めている今、教えに背く勢力が現れることも必然だ。

これは頭の痛い問題であったが、解決するのは難しかった。王家が正式に女神様や使徒様の教えを守ることを表明すれば、内戦が起こる可能性が高かったのだ。

今までは教えに従うことが当たり前であったが故に、女神様や使徒様の教えの支持を表明していなかった。その事実をうまく使い、のらりくらりと躱してきたのだが……それも限界が来ていた。

一部のものが権力を得て他のものを虐げる国は、いずれ廃れていくのだ。そのことを考えても、国として教えに背く選択をするなどあり得ない。

今回の出来事を大々的に知らせ女神様や使徒様の教えを広めれば、また信仰心も高まるだろう。

これは、王家の考えを示す良い機会なのかもしれないな。

「報告ご苦労。今もまだ光を放っているのか？」

「私が中央教会を出た時はまだ光っておりました」
「わかった。これから対応を協議するので下がってくれ。とりあえずは混乱を収めるために騎士を派遣しよう」
「かしこまりました。大変ありがとう存じます。では、失礼いたします」

中央教会の職員は下がって行った。まずは混乱を抑えるための人員が必要だろう。私は職員を連れてきた騎士に告げた。

「まずは中央教会に騎士を派遣する。とりあえずは十名、第一騎士団から派遣だ。それで足りなければ増員してくれ」
「かしこまりました」

次は今後の対応を話し合わなければ……まずはリシャールと二人で話し合ってどこまで話を通すのか決めよう。

「リシャール、今後の対応を協議する。他の者は下がってくれ」

執務室の中に私とリシャールだけになり、私たちはソファーに向かい合って座った。

「私は此度のこと女神様からの何らかの知らせだと思う。お前はどう思う？」
「私も同意見です。あの女神像は神の遺物でございます。人が悪戯で光らせることはできませんので、神聖な光を放っていたということは女神様本人によるものだと思われます。どのような意味があるのかは分かりかねますが、思いつくものを挙げるとするならば、大きな災害の可能性、魔物の森の異変などでございます」

リシャールの考えはわかる。女神様からの知らせだからな。何かしら悪いことが起こる前兆であろう……
それが何なのかわかれば対策のしようもあるのだが。
「何かしら悪いことが起こる前兆である可能性が高いな。ただ、その内容がわからなければ対策は難しい。とりあえず、魔物の森に常駐している騎士の数を増やすべきだろうか？」
「このようなことが起こるとはただ事ではないでしょう。できる限りの対策はしておくべきだと思います」
「では、魔物の森に常駐する騎士の数を増やす。詳細は後日、騎士団長を集めた会議で決めよう」
「かしこまりました。手配しておきます」
そこで一旦沈黙が流れた。多分リシャールも考えてることは同じであろう。
「リシャール、女神様はこの国を見捨ててはおられなかったな。レオン様が我々の元に現れてくださった時にもそう思ったが、レオン様が使徒様だという確固たる確証は未だなかった。だが今回の出来事で私は確信した。また女神様がこの国に戻ってきてくださったのだ。そして、使徒様を遣わしてくださったのだ」
「陛下……私は信じておりました。女神様はこの国をお見捨てにならられてはいないと。それが証明されて大変嬉しく存じます。それから、レオン様は使徒様で間違いないでしょう。ただ、それを隠されている以上、今までと同じように気づいてないふりをしているのが良いと思われます」
「レオン様については今まで通りでいこう。ただ、今回の出来事は伝えてくれるか？」
「かしこまりました」

何かしら理由があって隠しておられるのだろうが、今回の出来事が何かのきっかけとなると良い。

「それから、今回の出来事は国中に大々的に知らせることにする。また、それに合わせて女神様や使徒様の教えも再度広める予定だ」

「それは……！　では、王家は私達の勢力を支持するということでしょうか？」

「ああ、女神様や使徒様の教えを支持し、平民とは助け合っていくことを徹底させる。理不尽に権力を振りかざしていたら、相手が平民であろうと貴族も罪に問うことにする。昔はそのような仕組みだったのだ。いつからか形骸化してしまったが……」

「陛下のご決断には敬服いたします。ただ、急にキツくしてしまうとそのまま内戦になる恐れもございます。ここは少しずつ厳しくしていかれるのが良いのではないかと愚考いたします」

「確かにそうだな……しかし、女神様からの知らせがあってなお、それに背くものがいるだろうか？」

貴族ならば使徒様の素晴らしさと並んで、その力の強さや怖さも学んでいるはず……逆らうとは思えないが。

「自分の権利を高めようとしていたところにそれと逆のことを言われ、受け入れられるものは少ないと思われます。また、自らの目でその怖さを知らなければ、納得できない者も多数いるでしょう」

確かに貴族の中には、生まれながらに権力を持っていることから、自分が選ばれた強い存在だと誤解している者も多数いる。

今のタイミングでも内戦になってしまうだろうか？

「王家が女神様や使徒様の教えを支持したら、今のタイミングでも内戦は避けられないと思うか？」

「いえ、今のタイミングで少しずつ厳しくしていくのであれば、勢力を変える貴族もいるでしょうし、そうでない貴族も表面上は従うと思われます。しばらくは様子見となるでしょう。そのあとどうなるかは、陛下の手腕に懸かっております」

それならばどうにかなる。すぐに内戦となってしまうと打つ手がなくなるが、そうでないならばやりようはあるだろう。内戦となり罪のない国民の命が奪われる事態は何としても避けなければならない。

レオン様が使徒様として力を示されて、国を導いてくれるのが一番早いのだが……人任せではいけないな。私がこの国の王なのだ。

「それならばどうにかなるだろう。優秀な臣下もいることだしな」

「恐れ入ります」

「では、国民に伝える内容などを詰めたいところだが、まずは女神像を見に行かないか？」

「見に行かれるのですか……？」

リシャールは先程までは従順な臣下の顔をしていたが、急に顔が崩れて呆れたような顔になっている。

そんな顔をしなくてもいいだろうに。神聖な光ともなれば見に行きたいだろう？

「この国の王として一度見ておくべきだろう」

「……確かにおっしゃる通りでございます。では手配いたしましょう」

リシャールはそう言って、下がった文官と護衛騎士を呼び戻した。

「これから陛下と私で中央教会の礼拝室に視察に向かう。急だが手

配を頼む」
「かしこまりました」

閑話　光る女神像　前編（アレクシス視点）（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします。
とても励みになります！！

閑話　光る女神像　後編（アレクシス視点）

それからしばらく待ち、やっと手配が整ったようで私達は中央教会まで来ていた。外には平民が大勢いたが、礼拝室までは完全に人払いを済ませてあるようで静かだ。

礼拝室に入ると女神像は光っていない。ここには一度だけ来たことがあるが、以前と何も変わらないように見えるな。

「今は光っていないようだな。最後に光ったのはいつだ？」

「三十分ほど前でございます」

「どの程度の間隔で光るのか決まりはあるのか？」

「今のところ規則はないようです。数分の時もあれば一時間ほど空けて光った時もあります」

「そうか」

ではいつまで待てば光るのかわからないな。こうして見ていると特に変わった様子はないが……本当に光るのだろうか？　実際に見ないと信じられないな。

そう思った時だった。急に女神像が神聖な光を放ち始め、光はどんどん強くなっていく。

凄い……心が洗われるような神聖な光だ。強い光だが眩しいと感じることはない。

どこか優しさも感じるような光だな。私は光に目を奪われて、暫くの間見つめ続けていた。

「リシャール、これは凄いな」

「はい……正直ここまで素晴らしいものだとは思っておりませんで

した」
「私もだ」
私は自然と片膝をつき手を組み、祈りの体勢になった。この光を見ると自然と祈りたくなる。不思議な力を持つ光だな……
私が膝をついたことで驚いた者がいたようだが、これから女神様と使徒様の支持を表明するのだから良いだろう。
他の者も皆、私に続き祈りの体勢になったようだ。
……女神様。この国をどうか、お見守りください。
それからしばらくはそのまま祈り続け、光が収まったところで立ち上がった。光は数分で収まったが、もしもっと長い時間光っていたとしたら、その時間ずっと祈っていたかもしれない。
そう思うほど神聖な光だった。
「リシャール、戻ることにしよう」
「かしこまりました」
女神像の視察を終えて執務室に戻り、またリシャールと二人での話し合いを再開した。
「リシャール、凄い光だったな」
「はい……思わず見惚れてしまいました。それほどに強く優しい光でした。あれは女神様のお力によるものとみて、まず間違いないでしょう」
「ああ、あれは人が作り出せる光ではない。女神様のお力だろう。とりあえず、貴族にも中央教会を訪れるように通達を出しておこう。あの光を見れば考えが変わる者もいるだろうからな」

「ご指摘の通りだと思われます。通達を出しておきましょう。女神像が光る周期が分かりましたら、それも通達に加えておきます」
「頼んだぞ」

あの光を見れば女神様や使徒様の教えを守ろうと、考えを変える者も現れるだろう。

「それから平民への通達だが、騎士に兵士詰所まで行かせてそこで口伝するので良いだろうか？」
「兵士長を騎士団詰所まで呼ぶのではないのですか？」
「最初はそう思ったが、兵士長だけを呼ぶとその者が誤った情報を伝えた場合、その地区全員が誤った情報を聞くことになる。それを防ぐためにも、兵士全員に聞かせた方が良い。その後は兵士に各家を回って伝えて貰えば良いであろう」
「確かに、おっしゃる通りでございます。ではその方法で伝えるとして、内容はいかがいたしますか？　口伝である以上、あまり長い内容は避けた方が良いと思われます」

長い内容では、間違えて伝わったり一部が伝わらなかったりする。とりあえずは今回の出来事と、女神様と使徒様の教えとして、平民と貴族が助け合うという内容で良いだろう。

「中央教会の女神像が神聖な光で輝いたこと。女神様と使徒様の教えでは貴族と平民は助け合っていくべきとあること。この二つでいいだろう。また、貴族が理不尽なことをしているようなら、兵士詰所か教会職員に訴えるように付け足したいのだが」

女神様や使徒様の教えを盾に、平民に反乱を起こされたら大変だ。特に今まで圧政を敷いてきた領地は危険だろう。それを防ぐためにこの言葉を付け足した方が良いと思うのだが、逆に貴族を挑発しす

ぎるだろうか？

「平民の反乱を防ぐためにこの言葉を付け足した方が良いと思ったが、貴族を挑発しすぎると思うか？」

「そうですね……貴族は今の状態では下手に動けないと思われますので、これで良いでしょう。その程度の通達であれば、とりあえず表立って行動してくることはないと思われます。ただ、訴えのあった貴族は罰するのではなく、まずは注意程度に留めておいた方が良いと愚考いたします」

「確かにそうだな。ではその方針でいこう」

「かしこまりました」

後は貴族への通達だが、これは多くを語らない方がいいだろうな。貴族は言葉の端々を切り取ったり拡大解釈したりするので、少ない言葉で伝えるのが一番なのだ。

「貴族への通達は、女神様と使徒様の教えをしっかりと守る、という言葉だけで良いだろうか？」

「貴族へはそれだけで全てが伝わるでしょう。できる限りお言葉は少なくした方が良いので、それだけで充分でございます」

「では貴族への通達と平民への通達、よろしく頼む」

「かしこまりました。すぐに手配いたします」

これからまた忙しくなりそうだ……まずはエリザベートとステファン、マルティーヌにこの話をしなければな。

今日は夕食の時間を早めてもらい、その後に時間を作ろう。ステファンとマルティーヌには、王立学校で苦労をかけるかもしれないからな。

王族に生まれたからにはしょうがないのだが、それでも我が子には、出来るだけ穏やかに楽しく過ごしてほしいと思ってしまう。そ

のために私が出来ることは全てやろう。

「では本日はこれで終わりにしよう。レオン様に伝えておいてくれ。もちろんリュシアンにも」

「しっかりとお伝えします。では、私は諸々の手配を済ませてから帰宅いたしますので」

「ああ、よろしく頼む。明日に回せることは回して良いからな」

「かしこまりました。恐れ入ります」

そうしてリシャールと別れて、私は北宮殿へと帰った。

これから何かが起きそうな予感がする。ステファンに王位を引き継ぐまで、平和に過ごすのが目標だったのだが……

こうなったらステファンに王位を引き継ぐまでに、全ての問題を解決する心持ちでいこう。

私は心の中で気合を入れ直し、北宮殿への扉を潜った。

閑話　光る女神像　後編（アレクシス視点）（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです。
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューを是非よろしくお願いします！
とても励みになります！

１０４、国内情勢

昨日はクレープの屋台を開店させ、今日はまた授業の日だった。先週で学校にも少し慣れたので、落ち着いて一日を過ごせた。
今はリュシアンと馬車に乗り、屋敷に帰るところだ。

「二週間後に招待されるなんて、予想以上に早かったよね」
「ああ、ステファンもマルティーヌも張り切ってたからな。早いだろうとは思っていた。私たちが一番のようだぞ」
「やっぱりそうなんだ。まあ、俺も楽しみだったからいいんだけどね」

今日の研究会の時に、ステファンとマルティーヌから昼食への招待状をもらったのだ。
貴族の子息子女を招待するとは言ってたけど、予想以上に早かった。何か手土産とか持っていった方が良いのだろうか？

「何か手土産とか必要かな？」
「王立学校での招待だから特に必要ないと思うぞ」

確かに手土産を持っていっても、お昼まで持ってるのも大変だよね。アイテムボックスに入れておけばいいんだけど、まだ秘密にした方が良いと思うし……

「確かにそうだね。一緒にお昼食べるの楽しみだな～。そういえば、王家の特別食堂って貴族の特別食堂と違うの？」
「いや、作りは全く同じだぞ。ただ、机や絨毯などの家具や装飾品は各家が準備するから、中身は全く違うだろうな」

「え？　そうなの？　じゃあ公爵家の特別食堂も？」
「ああ、家で用意したものだ」
そうだったのか……特別食堂ってすごく豪華な内装なんだと思ってたけど、公爵家が用意したものだったとは。
それは豪華だよね。

そんな話をしながら公爵家の屋敷に帰ると、夕食の前にリシャール様から話があると言われた。リュシアンも一緒のようだ。
なんの話だろう……？　俺は何もやらかしてないはずだよな？
スイッチや光球については報告したし、屋台についても話は通してるし……多分大丈夫なはず。

とりあえず悩んでもしょうがないので、リュシアンと共にリシャール様の部屋に向かった。
怒られるようなことはしてないから多分大丈夫！
そう割り切って部屋に入ると、リシャール様はいつも通りの表情で迎え入れてくれた。

「急に呼んですまなかった。座ってくれ」
「ありがとうございます」
「失礼いたします」

俺とリュシアンは、リシャール様の向かいのソファーに並んで座る。この様子だと怒られることはなさそうだな。
そう安堵した瞬間、リシャール様の表情が真剣なものに変わった。
え！？　やっぱり怒られるの！？
何もしてないはずなんだけど……

「夕食まで時間があまりないので本題に入るが、二人は今日の出来事を知っているか？」

うん？　怒られるんじゃないみたいだ。

それは良かったけど、今日の出来事ってなんだろう？　今日は先週と同じように授業を受けて、研究会に行っただけだよな？

「私は思いつく出来事がないのですが……」

「そうか。リュシアンはどうだ？」

「私もレオンと同じで、思い当たる出来事はありません」

「そうか……まだ大きく広まってるわけではないのだな」

何があったんだろう？

「実は本日のお昼過ぎ、中央教会の女神像が光ったと職員が陛下に伝えにきた。私と陛下は実際に中央教会に出向いたのだが、思わず膝をついて祈りを捧げたくなるような神聖な光だった」

女神像が光った？　それってどういうこと？

誰かが光らせたとかじゃなくて自発的に光ったってことだよね？

「そのようなことが起こっていたのですか！　まさか……神託があったのですか！？」

「いや、神託はなかった。ただ、中央教会の女神像は神の遺物だ。それが光ったとなれば、女神様からの何らかの知らせであろう」

「そうですか。確かにそう考えるべきですね」

「ああ、だが陛下とも話し合ったが何の知らせかは分かっていない。ただこれだけは事実だ。女神様は我々の国をお見捨てになったのではないということだ」

「お祖父様……とても喜ばしいことです」

「その通りだ。そこで陛下は決断をなされた。王家は女神様と使徒様の教えを支持するそうだ。必然的に公爵家の勢力を後押ししてくださることになる」
「そこまで話が進んだのですね……では、これからは王立学校で敵対勢力により気をつけます」
「ああ、とりあえず表面上は従うだろうが、ヤケになって何かを起こすかもしれない。一応今までより一層警戒するんだ」
「かしこまりました」

リュシアン凄いよ。さすが公爵家長男。さすが小さな頃から英才教育を受けてきた子供。
俺は全く事態が飲み込めてない。話の展開が早すぎるよ！
どういうこと？　女神像が光っただけで、何でこんなに難しい話になるの？　というか女神像が光ったって何？　イルミネーションみたいにピカピカ光ったの？　女神様が本当に光らせたってこと？
ダメだ……色々わからなすぎる。

「あの～……ちょっと話がわかっていないのですが、詳しく説明してもらえませんか？」

俺がそういうと、リュシアンが驚いたような顔をした。

「レオンはいつも凄く頭がいいのにどうしたんだ？」

いや、いつものは日本教育の賜物で、この世界の神様の話とか貴族の話には弱いんだよ！

「私は平民なので貴族の話にはまだ疎いのです」
「確かにそうだった……レオンが平民ってことを忘れそうになるな」

そこ忘れないで！　結構大切なところだから！

「私が質問には答えるぞ」

リュシアンが少し自慢げな顔でそう言った。絶対俺に教えられることがあって喜んでるな。俺は思わず笑いそうになって、慌てて口元を手で押さえて誤魔化した。

今のリュシアンは、小学校で習ったことを家で自慢げに話す子供みたいだ。リシャール様も苦笑している。

最近のリュシアンは、こんな風に子供っぽいところを出すようになったんだよな。俺に気を許してくれたのなら嬉しいけど。

「ではまず、女神像が光ったということですが、これはよくあることなのですか？」

「そこからか！？」

いや、だってこの世界魔法とかあるし、女神像も光るものかもしれないじゃん！

その辺の常識がよくわかってないんだよ。普通は光らないものだろうけど、俺にとっては日本が常識でこの世界は色々非常識だと思ってるから……

「女神像が光るなど普通ありえないことだろう！」

や、やっぱりそうなんだ。そこは非常識じゃなかった。

「補足すると、女神像が光ったという記録は残っていない」

リシャール様がそう補足してくれた。ということは、今まで一度

も光ったことのない女神像が何故か急に光ったってこと？
日本に置き換えると、仏像が急に光り輝いたってことだよな……
……

「それは異常事態ではないですか！？」
「だからそう言っているだろう！　その驚きはさっきやったぞ！」
「そ、そうでしたね……やっと理解しました。それで、何故光ったのですか？」
「だ～か～ら、わからないから困っているのだ！　先程の話は聞いていなかったのか！？」

さっきは前提が理解できてなかったから、話が全く頭に入ってこなかったんだよ。ごめんリュシアン。

「申し訳ありません。とにかく異常事態だということは理解しました。しかし先程王家が公爵家の勢力を後押しするという話がありましたが、何故そのようなことになるのですか？」
「それは、女神様がまだこの国をお見捨てになられていないということが分かったからだ」
「レオン、女神様は使徒様がいらっしゃっていた時代には何度か神託もなされていたのだ。ただそれから数百年、何の音沙汰もなかった。それが今回女神像が光ったことで、女神様がまだこの国をお見捨てになられていないということがわかった。そこで王家は、女神様と使徒様の教えを支持することにされたのだ。今までは内戦の恐れがありできなかったが、今は今回の理由もあり、敵対勢力の貴族も表面上は従うだろうからな」

そういうことか！　やっと理解できたよ……なんかややこしいな。

１０４、国内情勢（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします。
とても励みになります！

１０５、リュシアンの気持ち

今までの話をまとめると、公爵家の勢力が有利になるんだよな。それに、もし女神様が神託をしてくれたら一発で公爵家の勢力が勝てそうだ。神様なんて強大な存在に逆らいたい人なんていないだろうし。

あれ？　ちょっと待って……もしかして俺の存在意義が消えかけてる！？

もし女神様への信仰心が高まってまた教えを守ろうってことになれば、平民の優秀さをわざわざ示さなくてもいいよな？　そうなれば俺は公爵家にとって特に必要ないんじゃないか……？

いや！　でも、女神様の教えは平民と助け合うことだから酷い扱いは受けないだろうけど……でも、怖いことに気づいちゃったかも。

公爵家の皆様は凄く良い人達だしそんなことないって思いたいけど、でも俺が使える人材だから優しくしてくれてるっていうのもあるわけで……

でも、魔法はかなり使えるからまだ有能だと思ってもらえるか？

全属性だし！　あぁ～でもそれも、もし使徒様がまた現れたらそっちの方が凄いに決まってる！

待って、頭がごちゃごちゃだよ……

「えーと……ということは、公爵家の勢力が勝てるということですか？　もう対立もなくなるのでしょうか？」

「いや、そんなことはない。神託があったわけでも使徒様が現れたわけでもないからな。それに、一度欲をかいて手に入るかもと思ったものを手放すのは案外難しい。敵対勢力の貴族達はそう簡単に考

えを変えることはないだろう。逆に今まで王家がどちらの支持も表明していなかった時より、危ない状況になるかもしれない」
「そーなんですね……ただ、それだと女神様に逆らうことになりませんか？」
「そうなるが、今までいくら女神様から音沙汰がなかったとはいえ、現状で既に逆らっている者が多くいるのだ。今更考えを覆すのは余程のことがないと厳しいだろう」

そんなものなのか……誰か逆らってる人に天罰でも起きない限りわからないって感じかな？
でも確かにそうかも。実感湧かないよね。
俺も神様なんて言われても実感湧かないし。

それなら、まだこれからも貴族間での対立は続くんだな。まだ俺は役に立てる人材なんだ……良かった。
本当は対立がなくなったほうが良いはずなのに、俺は思わずホッとして表情を緩めた。さっきまでは結構顔が強張っていたみたいだ。

「レオン君にはこれからも、家の勢力の手助けをお願いしたい。これからは表面上は何もなくても、水面下では色々と起こるかもしれない。気をつけてくれ」
「かしこまりました」

リシャール様にそう言ってもらえて心底ホッとした。俺は深く頭を下げてから顔を上げる。すると、難しい顔をしたリシャール様と目があった。どうしたんだろう？

「レオン」

急に隣のリュシアンからそう呼ばれた。そっちを向くと、リュシ

アンは悲しそうな顔をしている。
……どうしたの？
「どうされたのですか？」
「レオンは、用済みになれば私たちがレオンを捨てると思っているのか？」
……え？　俺はその言葉を言われて思わずフリーズしてしまった。何で俺が考えてたことわかったの？
「そんなことはありませんが……私が必要なくなったら、ここにいる理由は無くなると思いました」
「そんなことはないぞ！　レオンは私の大切な友達だ！　それだけでここにいる理由になるだろう？」
「リュシアン様……」
「レオンにとって私は、そんな簡単に捨てられるような関係なのか！？」
リュシアンが泣きそうな表情で怒っている。そんなつもりじゃなかったんだ。でも。リュシアンからしたらそう感じるよな……
俺、タウンゼント公爵家の皆様に本当によくしてもらってるのに、失礼なこと考えてた。もし能力だけが目当てなら、一緒に公爵領に行く必要もなかったし、毎日一緒に夕食を食べる必要もないよな。
……家族のように大切にしてもらってたのに。
……リュシアンとも兄弟のように過ごしてきたのに。
俺は馬鹿だ。
「本当にごめん……そんなつもりじゃなかったんだ。リュシアンの

ことは本当に、本当に大切な友達だと思ってる！　ただ、最初に公爵家に招かれた理由は俺の能力だったから……本当にごめん！」
「次、次にまたさっきみたいなこと言ったら許さないからな！」
「うん。もう絶対に言わない。約束する」
「言わないだけじゃなくて、考えてもダメだからな！」
「わかった。もう考えないよ」
「……それならもういい」

リュシアンはそこまで言って恥ずかしくなったのか、俺とは反対を向いてしまった。耳まで真っ赤だ……

俺は真剣に反省していたのに、思わず顔が緩んでしまう。だって、リュシアンが照れてるの珍しいんだ！
思わずニヨニヨした顔でリュシアンを眺めた。リュシアンって俺のこと予想以上に好きなんだな。なんかすごく嬉しい。胸がぽかぽかする。
貴族だからとか平民だからとか関係なく、これからはもっとこの関係性を大切にしよう。身分に拘ってるのは俺の方だったのかも。
そんなことを考えながらずっと見つめていると、視線を感じたのかリュシアンが俺の方を見た。

「なっ……何でこっちを見てるんだ！　それにその気持ち悪い顔は今すぐやめろ！」
「え？　そんな顔してる？」
「してるぞ！　だらしない顔だ！」

なんかリュシアンがめちゃくちゃ子供っぽい。年相応って感じだ。いつもは大人っぽくて凄いと思ってたけど、やっぱり子供らしい方が素が出てて良いな。俺は思わず笑ってしまった。
するとリュシアンが今度は怒ったような顔になった。

やばいやばい。流石にこれ以上からかったら本格的に怒られそうだ。俺はそう思って仕方なく前を向いた。
そこで俺の顔はサァッと青ざめた。や、やばい！　リシャール様いたんだった！
ずっと放置してたよ。それだけじゃなくて、リュシアンに思わずタメ口で話しちゃったよ！

「リ、リシャール様、申し訳ございません」
「うん？　何で謝るんだ？」
「いや、その、リュシアン様に敬語を使っていなかったですし、リシャール様を放置してしまい……」
「そんなこと気にしなくて良い。リュシアンとはいつもそうして話しているのか？」
「……はい。他の方がいない時は」
「そうか。そこまで二人が仲良くなってくれて嬉しいよ。これからもよろしく頼む」

えっと……お咎めなし……？

「良いのですか……？」
「ああ、他の者が周りにいない時ならば問題はない」

そうなのか……良かったぁ。でもこれからはもっと気をつけないと。もうタメ口で話す方が慣れてきちゃって、思わずタメ口が出ちゃいそうになるんだよな。本当に気をつけよう。

「リュシアン、レオンと仲良くなれて良かったな」
「はい！」
「これからも仲良くしなさい」

「お祖父様、かしこまりました！」

リュシアンが満面の笑みでそう答えた。リュシアン子供モード入ってるな。いや、違うか。いつもが大人っぽいモードなのかな？外行きモード？

何にしても、リュシアンと仲良くなれて良かった。これからもずっと友達でいれたら嬉しいな。

俺はリュシアンとずっと友達でいられるとわかり凄く安心して、幸せな気持ちでニコニコと笑っていたが、そうなると今度は貴族の対立が怖くなってきた。

今までは、遠いところで起きる出来事みたいに感じてたけど、実際に俺の身に降りかかるかもしれないことなんだよな……そう考えると怖い。

しかも今までより内戦が起こる危険性は高くなるみたいだし……そもそも、内戦ってどうやって起こるんだろう？

貴族も兵力を持っていて武力で王位を目指すとか？　もしそうなったら確実に平民も巻き込まれるよね！　ヤバい、もっと真剣に考えないとダメかも。

ちょうど良い機会だし、リシャール様にちゃんと聞いておこう。

１０５、リュシアンの気持ち（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！

１０６、貴族の私兵団と魔物の森

「リシャール様、一つお聞きしても良いでしょうか？　王家が女神様と使徒様の教えを支持すると、それと反対の勢力が内戦を仕掛けてくる恐れがあるのですよね？　その内戦ってどのように起こるのでしょうか？　それから、凄く基本的なことかもしれませんが、貴族ってそれぞれで武力を持っているのですか？」

俺がそう聞くと、リシャール様はかなり驚いたような顔をした。そして、リュシアンに呆れた声で言われた。

「レオンって、貴族にとっては当たり前のことを知らないよな。誰も知らないようなことは知ってるのに……」

それはしょうがないんだよ！　この世界の基礎知識を学ぼうと思っても、何が基礎知識なのかがよくわからないから、学び漏れてることがかなりあるんだ。

「確かに王都に住む平民ではその辺りのことは知らなくても当然だな。レオン君にはしっかりと説明しておくべきだろう」

リシャール様その通りです。ありがとうございます！

「是非よろしくお願いします」

「ああ、まず貴族の武力についてだが、それぞれの貴族が私兵団を持っているんだ。基本的には王都の兵士と同じで、魔力量が四か五の平民を雇っている。領都に本部があり、それ以外の街には支部がある。基本的な業務は街の治安維持だが、貴族によっては明らかに

街の治安維持には過剰な人数を雇っていて、領都で軍事訓練をさせていることもある」

ということは、それぞれの領地にかなりの兵士がいるってことなのか。じゃあ内戦ってことになったら、敵対勢力の貴族たちが持っている兵力が王都に向かうってこと？

何それ……めちゃくちゃ怖いじゃん。今まで何となく遠い世界の話を聞いてる感覚だったけど、やっぱりこの世界って争いが身近にあるんだな……

「明らかに過剰に兵士を雇えば、その分支出は増え収入は減る。そこで税を増やし民は苦しむことになる。そんな状態になっている領地の貴族には勧告をしているが、魔物の脅威への対処のためと言われてしまうと、こちらとしても受け入れざるを得ない状況だ」

確かに魔物への対処って言われると困るよな。今は魔物の森の外縁部で防げてるって言っても、それもいつまで持つかわからないわけだし。

あれ？　今なんか引っかかったんだけど……そうだ。長男ではない貴族って、王立学校を卒業したら騎士になる人も多いよね。そうしたら騎士団で働くんだよね？　もしかして、騎士団も半数は裏切る可能性があるってこと！？

「あの、リシャール様、怖いことに気付いてしまったのですが……もしかして騎士団って半数は信用できないのですか？」

「いや、流石にそんなことはない。基本的に騎士団では王家に忠誠心があるものを重用し、そうでないものは第二、第三騎士団に所属させるからな。忠誠心がないものは騎士団をすぐに辞めていくのだ。そして辞めた元騎士は、先ほど述べた貴族の私兵団で団長などの役

職を務めていることが多い。もちろん全ての者の心の内を見抜けるわけではないが、そこまで心配はいらないだろう」

そうなのか……とりあえず最悪の状態じゃないみたいで良かった。騎士団は基本的に信用できるってことだよね。

でも、また新たな疑問が生まれたよ。騎士団って幾つもあるの？

「えっと、騎士団って幾つもあるものなのでしょうか？」

「その話もしていなかったか。騎士団は四つある。王族の護衛をする近衛騎士団、王城や王都を守る第一騎士団、剣術がメインで魔物と戦う第二騎士団、剣術に加え魔法も使い魔物と戦う第三騎士団、この四つだ。第二、第三騎士団は、一年のほとんどの期間を魔物の森に派遣されているんだ」

「そのような仕組みだったのですね」

確かに王家に忠誠心がなくて騎士になって、ずっと魔物の森に派遣されてたら辞めたくもなるのかも。貴族の私兵団に行けば役職がもらえるんだし。

「それからどうやって内戦を起こす可能性があるかだが、基本的には武力行使だろう。この国は基本的にどの領地も、農業に適した気候なのだ。それゆえ、物流を止めるなどの経済的な反乱は考えにくい。確かに物流を止められると痛手になるような、広い農業地帯を持つ貴族もいるが、それでもすぐに影響が出るほどではない。レオン君も知っている通り、王都の周りも農業地帯だからな。唯一考えられるのは塩だが、それもタウンゼント公爵領で生産しているので、他の貴族から物流を止められてもすぐに影響は出ないだろう。もちろん長期的に数年単位でやられると段々と状況は悪化するだろうが、短期的なものならば凌ぐことはできるし、その間に対策も考えられる」

確かに王都を出てしばらくの間は、ずっと畑が広がっていた。経済的な反乱って影響が出るまでに時間がかかるだろうし、この国の現状ではあまり効果的な策とは言えないんだな。

「だが、今は長期的なことを考えても意味はないのだ。その頃には魔物の森の脅威が今よりも広がって、それどころではなくなるだろうからな。そうか、魔物の森についての話もしておいた方がいいな」

え？　数年で魔物の森の脅威が広がってそれどころではなくなるの……？

魔物の森の話って、もっと数百年とかの話じゃないの！？

「リシャール様、どういうことでしょうか？　魔物の森はそこまで危険な状態なのですか？」

俺がそう聞くと、リシャール様は真剣な表情で俺とリュシアンを交互に見つめた。

「この話は未だ大々的には知らせていない情報だ。混乱を避けるために平民に公布することは避けている。今は貴族の当主や王城の役職持ちの間でのみ共有されている。それゆえ、しばらくはここだけの話にすると約束してほしい。リュシアンもだ」

え？　リュシアンも知らないんだ。　確かに王立学校でも魔物の森についてはほとんど聞かない。

魔物の森が広がっていて危険ですが、騎士たちのおかげで広がりを抑えられています。

この程度の話だけだ。そんなにひどい状況なんだろうか。

「ここだけの話にすると、約束いたします」
「私もです」
「わかった。お前たちを信じて話そう。魔物の森は、年々広がるペースが上がってきている。数年前までは騎士の数を増やすことで何とか凌げていたが、ここ最近は止めるのは不可能になりつつある。今は何とか広がるスピードを遅らせて、魔物の森に飲み込まれる村や街の住人を事前に移住させている状態だ」

そんなにひどい状態なのか……

「移住させる口実として、平民には騎士団の訓練に使うから立ち入り禁止になるとだけ伝えているが、殆どの者が魔物の森の影響だと思っているだろう。これ以上街が飲み込まれれば、魔物の森に街が飲み込まれているという情報が広がり、大混乱になる可能性が高い」

どのくらいの速度なのだろうか。それに魔物の森が広がるってどういうことなんだろう。普通の森とは植物が違うのかな？

「どのくらいの速度で魔物の森が広がっているのでしょうか？　また、広がるとはどのような様子なのですか？」
「魔物の森の植物は普通の植物とは違い、ありえない成長速度のものや動物のように動けるもののもいるのだ。それによって広がる速度がかなり速い」

そんな不思議植物がいるの！？　異世界怖すぎる……

「広がる速度についてはずっと一定というわけではないので正確なことは言えないが、このままでは後十数年で王都まで魔物の森が広がってくるのではないかと予想されている。数年前はまだ抑え込めると思われていたのだが……」

……え、後十数年！？　俺がまだ二十代の頃ってことじゃないか！　その頃に王都まで来るって……予想以上に猶予がない。
この国の王都が飲み込まれれば、人が住める部分はかなり少なくなっているだろう。もしそんな状態になったら食料も何もかも取り合いで、確実に戦争になる。魔物に殺されるか、争いで殺されるか、食べ物がなくて命を落とすか……辛すぎる。

というか、貴族はこの事実を知ってるんだよね？　内戦なんてやっても意味ないよね？
だって、もし国を手に入れたとしても、すぐに国が滅びる可能性があるんだから。

「リシャール様、その現状を貴族の方々は知っているのですよね？
それならば内戦をやっている場合ではないと考えると思うのですが……」
「そのように考えてくれれば良いのだが……実際に魔物の森の脅威が身近にない貴族には危機感が伝わっていないのだ。数年前まで抑え込めていたのも良くないのだろう。危険だと言っても、結局は抑え込めると思っている貴族が多い。もっと現実は深刻なのだがな」

そんなものなのか。でも確かに俺もそうだった。魔物の森が広がっていて危ないって話は知ってたけど、日常に追われて深く考えていなかった。
実際に身近に危険がないと、危機感は共有されないものなんだよな……

……でも、魔物の森に接している敵対勢力の領地が全くないってことはないよね？
それならば、その領地の現状を聞いてヤバいって思わないのかな？

「敵対勢力で魔物の森と接している領地もあるのですよね？　その領地の貴族から危機感が共有されないのでしょうか？」
「実は、敵対勢力で魔物の森と接している領地を持つ貴族はいないのだ」

え、全くいないの！？　何でそんなに偏ってるの？

「何故そんなに偏っているのでしょうか？」
「ああ、王家は魔物の森の対策に多くの人材や資金を投入している。また、魔物の森の外縁部では騎士団と貴族の私兵団が協力して戦っている。そのため、王家に恩を感じて支持してくれる家が多いのだ。さらに魔物の森の脅威に晒されていると、貴族だとか平民だとかいう身分の前に、助け合って人間が生き残ろうという考えに変わるらしい」

そういうことか……でもそれって、もし魔物の森がなかったら、王家を支持してくれる貴族は今よりもかなり少なかったってことだよね。
魔物の森は厄介だけど良い面もあるのか……なんか複雑だね。

でもその事実ってかなり危ないよね。だってもし内戦になったとしたら、王家を支持してくれている貴族は魔物の森の対処に兵力を割かないといけないから、内戦になった時に王家を助けるために多数の兵力を出せないってことだ。
内戦をしてたら領地が魔物の森に飲み込まれました、そんなことになったら馬鹿みたいだもんね。

現状をしっかり知ると、今ってかなりやばい状態だ……もし内戦になることがあったら数年以内に起きる可能性が高く、ほぼ確実に

武力での内戦になる。
そしてその内戦は、今のところ王家が不利ではないかと思われる。あとは女神像が光ったことで、どれだけ王家の支持に傾くかだよな。
さらに、内戦がどんな結果になったとしても確実に国が荒れて、そんな時に魔物の脅威が迫ってくる。

今までは自分のことに精一杯で、この国のことについてはあまり意識を向けてこなかったけど、この国ってかなり危機的状況じゃないか？
一番最悪なパターンは内戦で国がボロボロになって、魔物の森に飲み込まれるパターン。
一番良いパターンは内戦を回避して、魔物の森の脅威に対して皆で立ち向かうパターン。
でもその場合でも魔物の森がどうにもならなかったら、最終的には争いが勃発するようになって魔物の森に飲み込まれる。

一番良いパターンも全然良くないよ。
この状況をどうにかできるのだろうか。俺が手助けをできるならしたいけど、いくら魔法が使えると言っても俺一人の力なんてたかが知れてるし……
俺がそう悩んでいると、リシャール様は少しだけ優しい顔になった。

「厳しい話をしてしまってすまないな。この問題は私たち大人が対処をする。お前たちは、まずは伸び伸びと学園生活を送れば良い。そして卒業したら、私たちのことを助けてくれるか？」
「お祖父様、当然です。お力になれるよう、より精進いたします」
「リュシアンは頼もしいな。レオン君は貴族ではないのに巻き込んでしまってすまないが、これからもよろしく頼む」
「いえ、何も知らされずに巻き込まれる平民よりは、今の方が対策

も考えられますしありがたいです。私もお役に立てるように努力いたします」
「ありがとう。凄く頼もしいよ」
とにかく今は自分の大切な人を守れるように、魔法の練習をして剣の練習をするくらいしかできないよな。
俺は俺にできることを精一杯頑張ろう。

そこからは少しだけ雰囲気を変えて、王立学校での出来事について雑談をして、俺とリュシアンはそれぞれの部屋に戻った。もうすぐに夕食になる時間だ。

それにしても、衝撃的な話ばかりだったな。
まずは神様の話だ。過去に使徒様がいたり神の遺物があったりして神様は身近だなと思ってたけど、神託があるってことは神様は本当に実在するってことだよな。神様は実在してるって言わないか……神在？
よく分からないけど、本当にいるんだな。
というか神様が本当にいるならこの状況どうにかできないのかよ！　って思うけど、もしかしたら神様がこの状況を作り出してる可能性もあるんだよな……
魔物に人間がやられる様子を見て楽しむ神様とか……？　怖い、怖すぎる。凄い力を持つものには近づかないに限るな。

でも、神様のことよりも衝撃だったのは、魔物の森の話だ。この世界がそこまで危機的状況だったなんて……衝撃的な話すぎて、逆にあまり実感が湧かない。
今はまだ俺に何ができるかはわからないけど、とりあえず力だけはつけておこう。

これから平和じゃない時代が来たら、その時は力が全てだからな。
人と戦うにしても魔物と戦うにしても……
もっと力をつけよう、俺はそう決意を固めた。

１０６、貴族の私兵団と魔物の森（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

１０７、新たなお友達？

昨日の衝撃的な話から一夜明けて、俺たちはいつも通りの日常を過ごしていた。

あの話を聞いたからといって、俺たちに今すぐ何かできるわけではないからしょうがない。

昨日の話は忘れられないけど、とりあえずいつも通りの日常を過ごすしかない。俺がどんなに心配していても何も変わらないし。でも、今までよりは攻撃力を身につけることに特化していこう。そう思った。

それから昨日の夜考えたのは、一度魔物の森に行ってみたいってことだ。やっぱり話に聞いただけでは上手くイメージできないし、一度見るだけでもどんな風に魔法や剣術を鍛えれば良いのかわかると思うんだ。

今度、リシャール様に話してみようと思う。

ただ、魔物の森のことばかり考えてるわけにもいかない。俺は今日もいつも通りに一日授業を受けて、次は四限の魔法の授業だ。回復魔法のグループは、今日から騎士団の訓練場に行き実践形式の授業になる。

かなり楽しみだな。

「レオン、じゃあ僕は帰るね。屋台頑張ってくるよ」

「うん！　頑張ってね。俺は魔法の授業行ってくる」

「騎士団の訓練場に行くんだっけ？」

「そうなんだ。実践形式の授業になるんだって！」

「レオン……何でそんなにワクワクしてるの？」
ロニーが呆れたような目で俺を見てくる。何でって……騎士団の訓練場なんて男のロマンじゃないか！
「騎士団の訓練場に行けるなんて、楽しみに決まってるじゃん！」
「でも、騎士は殆ど貴族様だよ？　力も強い貴族様なんて怖くない？」
「うーん、そうかな？　別に大丈夫だよ」
俺は魔法があっていざという時は身を守れるから、あんまり怖いって意識はないんだよな。俺本人じゃなくて家族や友達に矛先が向く方がよっぽど怖い。

「レオンぽいね。まあ頑張ってね」
「うん！　また明日ね」
「また明日」

そう言ってロニーと別れて、訓練場に向かった。
訓練場に着きしばらく待っていると、一人の生徒がやって来た。回復魔法のグループは全部で四人だが、俺とマルティーヌの他は、男の子と女の子が一人ずつだ。
男の子の方は、あからさまではないが俺のことを良く思っていないような様子だった。ただ、女の子の方は穏やかで優しそうで、俺にも笑いかけてくれたんだよな。この学校ではかなり珍しい。基本的に嫌われるか怖がられるかだからな。
そして、今やって来たのは女の子の方だ。この前は話せなかったけど話しかけてもいいかな……？
俺を蔑んだ目で見てくることもないし、怖がっている様子もあまりない。仲良くなれたら嬉しいんだけど……

そんなことを考えてぐるぐると悩んでいると、女の子の方から俺に近づいて来た。

「初めまして。私はダリガード男爵家三女、ステイシー・ダリガードです。ステイシーと呼んでくださいね。回復属性の方は少ないですから、仲良くしてもらえると嬉しいです」

ステイシー様はそう言ってにっこりと微笑んだ。

王立学校でこんな……こんな対応をされることがあるなんて！！

俺は思わず泣きそうなほど感動した。普通に仲良くしてくれる人がいるなんて思ってなかった。

「初めまして、レオンと申します。よろしくお願いいたします」

「もっと緩く接してくれていいのですよ。友達になりましょう？」

「わ、私で良いのでしょうか……？　自分で言うのもおかしいですが、私は平民なのですが」

「それがどうかしたのですか？　皆同じ生き物ではありませんか。花も木も虫も動物も、生きているものは皆友達ですわ」

い、生き物？　急によく分からない話になったぞ。

えっと……この女の子、不思議ちゃんって感じなのかな？　よく言えば天然？

「生きているものは皆友達ということでしょうか？」

「ええ、おっしゃる通りですわ。なので私、食事が嫌いなのです。お友達を食べるなどあり得ませんわ。ただお父様とお母様がどうしても食べろとおっしゃるので、お野菜たちから一部をもらって食べているのです。葉っぱの一部や根の一部や実を泣く泣く貰っていますの。お父様に、人の髪の毛が抜けるようにいらないものを貰って

いるだけだからと言われ、納得はしたのです」

この子ヤバいくらいの不思議ちゃんだった……突き抜けすぎていじめられるとかもないタイプの子だ。

お父さんとお母さんは優しい人たちだったんだな。普通の貴族なら家から追い出されるか、家から出されないにしても王立学校には行かせてもらえなかったかも。

そもそも身分が高い人への作法とかできるのかな？　生き物は皆友達だと思ってるのなら、身分なんか関係ないと思ってそう……いや、流石にそれだと王立学校に行かせてもらえないか。最低限の作法はできるんだろうな。

でもヤバいくらいの不思議ちゃんだけど、普通に話しかけてもらえたことが嬉しすぎてヤバいよりも嬉しいが勝ってるよ。

「植物にとって葉や実は、適度に取ってもらった方がよく育つということもありますので、余分な部分をもらうのならば、逆に喜ばれているのではないでしょうか？」

「本当ですか！？　それならば良かったです。これからは毎日、取って欲しい葉や実がないか聞いてみることにいたします」

聞いてみる？　聞いてみるって誰に？

……余り突っ込まない方が良いかも。

「そうしてみると喜ばれるかもしれませんね」

「レオンと友達になれて良かったです。今度私のお友達に紹介させていただけませんか？」

「友達とは……？」

「まずは屋敷の畑にいる子たちに紹介させてください」

やっぱり人間じゃないのね！　俺は思わず、ステイシー様が畑の野菜に向かって俺を紹介しているところを思い浮かべてしまった。

「ふふっ……ははははっ……」

やばい……めちゃくちゃツボに入った！　笑いが止まらないよ。待って、誰か助けて！

ステイシー様は不思議そうに首を傾げてるし。

俺はなんとか笑いを抑え込んで、ステイシー様に謝った。

「ステイシー様、本当に申し訳ございません。ステイシー様のお屋敷に行くところを想像したら、楽しくなってしまって」

「まあ、私のお友達に会うことをそんなに楽しみにしてくれているのですね」

ステイシー様は満面の笑みでそう言った。ステイシー様違います。全然違います。

俺は思わずまた笑いが込み上がって来そうになり、腹筋に力を入れてなんとか抑えた。ただ、顔が不自然ににやけてしまうのは戻せない。

そんな不思議な会話を繰り広げていると、訓練場にもう一人の男の子が入ってきて、そのすぐ後にマルティーヌもやって来た。

俺は話すのをやめようと思い、ステイシー様から少し距離を取るために一歩を踏み出したが、そこでステイシー様が大きな声を出した。

「あっ！　忘れていましたわ」

俺はその声に驚いて思わずステイシー様の方をもう一度向くと、

ステイシー様は申し訳なさそうな顔をして言った。

「レオン、私お部屋にいるお花たちのことを忘れていましたの。怒られてしまいます。レオンを紹介するのはそちらが先になります。畑の子達に会うことを楽しみにしてくださっているのに、大変申し訳ないのですが……」

「ぶはっ……」

俺は思わず吹き出して慌てて自分の口を手で覆った。待って、それは反則。笑わせに来てる？

しかも、もう一人の男の子もマルティーヌも聞いてるんだけど！

俺は流石にここで笑ってたらヤバいと思い、なんとか笑いを抑え込んだ。ステイシー様予想通りだけど、空気読めないのですね！

「ステイシー様、どちらが先でも大丈夫です。お屋敷に行く機会がありましたら、その時はご紹介をよろしくお願いいたします。このお話はまた後にいたしましょう。そろそろ授業も始まりますので……」

「そうですわね！　楽しみにしています」

何故かダリガード男爵家の屋敷にお邪魔することになってしまった。別に嫌ではないんだけど、どんな貴族かもわからないしリシャール様に聞かないとだよな……そこはちょっと面倒くさい。

ステイシー様は平民ということを気にしなくても、他の方は違うかもしれないし……でも、王立学校で普通に話してくれる人が増えたという点では、本当にありがたいし嬉しい。

そこまで考えたところで強い視線を感じてそっちを向くと、マルティーヌと目が合った。

えっと……なんか怒ってます？　ちょっとオーラが怖いんだけど。

俺何もしてないよ！？
マルティーヌはツカツカと早足で俺のところまでやって来た。
「レオン、先程はとても楽しそうでしたけれど、何を話されていたのですか？」
何をって言われても困る……強いて言えば野菜について？　それともお友達について？
「ステイシー様の、お友達についてです」
これしか答えようがないよ！
「お友達ですか……？　共通のお友達でもいますの？」
マルティーヌが途端に不思議な顔になった。分かるよ。普通そう考えるよね。でも違うんだよ。
俺がどう言おうか悩んでいると、横からステイシー様が会話に入って来た。
「王女殿下、ダリガード男爵家三女、ステイシー・ダリガードでございます。レオンとは私の畑のお友達のことについてお話ししておりました」
「畑のお友達ですか……？」
「はい！　とっても可愛いのです。私がお水をあげるととても喜んでくれます。悩みも真剣に聞いてくれますし、私たちはとても仲良しなのです」
「そ、それは良かったですね……」
「はい！　王女殿下もぜひお屋敷にいらしてください。そして私のお友達に紹介させてください」

「も、申し訳ありませんが、あなたのお屋敷に出向くのは難しいですわ」
「そうなのですか？　何故でしょう？」

何故でしょうって、当たり前のことだよね！？
マルティーヌがかなり困惑している。ステイシー様、マルティーヌの方が身分が上だと一応は理解しているみたいだけど、とりあえず敬語を使えばいいくらいに思ってるよね！？　全然違うからね！
ステイシー様のお父さんとお母さん！　あなた達の子供、すごく危なっかしいですよ！
マルティーヌが助けを求めるように俺の顔を見た。ここで助けを求められても困る、困るけど何か言わないとだよね。

「ステイシー様、マルティーヌ様がお屋敷に出向くのは難しいと思われます。私はいつでもお屋敷に伺えますので、私だけではダメでしょうか？」
「レオン……申し訳ありません。あなたとの約束が先でしたのに、他の方と約束をしてはダメでしたね……」

全然違います！　全然違うけど、もうその認識でいいです。

「とにかく、マルティーヌ様ではなく私がお屋敷に伺います」
「かしこまりました。皆でレオンをお待ちしております」

よしっ……とりあえずマルティーヌからは意識を逸らせたな。ただ、俺がステイシー様のお屋敷を訪れることは決定事項みたいになってしまった。
もうしょうがないよね。リシャール様、もし面倒くさいことになってしまったら本当にごめんなさい！

そこまで話したところで、訓練場にオッセン先生が入って来た。

１０７、新たなお友達？（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！

１０８、騎士団の訓練場

「皆さん集まっていますか？　訓練場の前に馬車がありますので、それに乗ってください」

先生のその言葉で、俺たちは馬車に向けて歩き出した。その途中で、マルティーヌが俺に近づいて小声で話しかけてくる。

「レオン、あの子は何ですか？」

「私もよく分からないのですが、ちょっと不思議な子みたいです。悪い子ではないと思うのですが……マルティーヌ様はステイシー様のことを知っていましたか？」

男爵家はたくさんあるだろうから知らないかもしれないけど、あそこまで不思議な子なら有名になっていてもおかしくないよな。

「初めて知りましたわ。確かに悪い子ではなさそうでしたが……レオン、屋敷に行くと約束していましたが大丈夫ですの？」

「私では判断できませんので、リシャール様に相談しようと思います」

「それが良いですわね。そうですわ、先ほどは助けてくださってありがとう」

「いえ、マルティーヌ様にはいつも助けていただいているので」

「それでも助けようとしてくれたことが嬉しかったのです」

そんな話をしながら馬車に乗り込んだ。馬車はしっかりとした作りの馬車で、座面にはクッションもある。豪華な作りではないが乗り心地は悪くなさそうだな。

馬車には先生も一緒に乗るので、なんとなく緊張感漂う雰囲気になっている。馬車に乗ってから誰も一言も話さない。
この先生って悪い先生じゃないと思うんだけど、厳格な雰囲気というか、融通が利かなそうな雰囲気というか、背筋がビシッと伸びる感じなんだよな。気軽に話しかけられる雰囲気ではない。
俺は揺れる馬車の中で雰囲気に押されて、出来るだけ姿勢良く保てるように頑張った。そのおかげで到着した時には、身体中が痛くて疲れたよ。次からはもう少しリラックスして乗ろう。

騎士団の訓練場は王宮のかなり近くにあるみたいだ。馬車から降りるとすぐそこに王宮が見える。何かあったら迅速に守れるようになんだろうな。
俺たちが馬車から降りると、一人の騎士が出迎えに来てくれた。背が高くてかなりガタイが良さそうだ。

「今年もよろしくお願いいたします」
「こちらこそ回復してもらえるのはありがたいです。回復魔法を使える人は少ないですし、魔力量も限りがありますので。回復魔法を使って治すほどでもない怪我はそのままにしていますし」
「ありがとうございます。そう言っていただけるとこちらとしても頼みやすいです」
「王立学校は皆の母校ですからね」

そんな話をして先生は俺たちの方を振り返った。

「こちらは第三騎士団の騎士の方です。これからの授業では、第三騎士団の訓練に参加させてもらうことになりますので、迷惑をかけないようにしっかりと練習に励んでください」
「はい」

返事をしながら俺は疑問に思った。第三騎士団ってことは、昨日聞いた魔物の森に行ってる騎士団だよな？　王都にいることもあるんだな。王都で何をやってるんだろう？

先生に聞こうと思ったが、先生は騎士の方に続いて訓練場の方に歩いて行ってしまった。先生早いよ！

とりあえず後でリュシアンにでも聞いてみればいいか。そう思って俺も歩き出すと、隣にマルティーヌがやって来た。

「レオン、何か疑問点があったの？」

「え？　何でわかったのですか？」

俺は小声でそう返す。

「レオンは考えていることが顔に出るのでわかりやすいのです。それで何が疑問だったのですか？」

そんなに顔に出てる！？　最近ポーカーフェイスができるようになったと思ってたのに！　俺はかなりショックを受けつつマルティーヌの質問に答えた。

「先程先生が、第三騎士団と言っていたことが気になったのです。第三騎士団は魔物の森にいるのではないのですか？」

「基本的にはそうですが、王都に家族がいる者もおりますし、定期的に王都に帰ってきてこちらで訓練することになっているわ」

「確かにそうですね。知りませんでした」

「レオンに教えられるなんて嬉しいですわね！　今までと逆ですわ」

マルティーヌが最後の言葉を、殊更小さな声で呟いた。確かに今までは俺が先生だったからね。

「マルティーヌ先生。これからもご教示いただけますでしょうか？」
俺が少しふざけた声音でそういうと、マルティーヌが途端に嬉しくて誇らしいような顔になった。めちゃくちゃ可愛い。
「もちろんですわ！」
マルティーヌが笑顔になってくれて良かった。さっきから怒ってたり戸惑ってたりの表情が多かったからな。やっぱり笑顔が一番だ。
「この先が訓練場です。危ないので一人で動かずに、皆で固まっていてください」
マルティーヌとそんな話をしていると、訓練場に着いたみたいだ。俺たちは馬車を降りて一度建物の中に入り、その中をしばらく歩いてまた扉の前に立っている。この扉の先が訓練場なんだろうか？
騎士の人がその扉を開けると、その先は広いグラウンドのようなところだった。たくさんの騎士が剣を持って訓練している。魔法を使ってる人もいる。
凄い……！　凄くカッコいい！　これこそ男の憧れだ！
俺たちが訓練場に入ると、壮年の騎士って感じでかなりカッコいい騎士の方がこっちに歩いて来た。
凄くカッコいい！　強そうだ！
「私は第三騎士団の団長をやっている、ジェラルド・フェヴァンだ。皆の回復よろしく頼む。王女殿下もよろしくお願いいたします」
「私は授業で来ているのだから一生徒ですわ。皆と同じように接し

てください」
「かしこまりました。では皆こっちに来てくれ」
フェヴァンって聞いたことあるな……確か侯爵家だったはずだ。最近は頑張って貴族の名前を覚えてるのだ。
フェヴァン侯爵家はタウンゼント公爵家と同じ勢力だったはずだから、この人はそこまで警戒する必要はないな。
王家が女神様と使徒様の支持を明確にしたことによって、今まで以上に気をつけないとだから大変だ。ただ、今のところは今までとの違いはあまりない……アルテュル様はどう思ってるのだろうか？
とりあえずまた絡まれるまでは様子見かな。
それよりも、第三騎士団の団長ってことはフェヴァン侯爵家を継いだわけではないんだよな。それなら次男や三男で騎士一筋なのかも。
そういえば……フェヴァン騎士爵家ってあった気がする。もしかしたらこの人がフェヴァン騎士爵なのかもな。貴族の身分はややこしくて難しい。
「ここに座ってくれ。怪我人は順次来ると思うから、魔力が無くならない程度に治して欲しい。もし酷い怪我があったとしても騎士団の治癒士がいるから大丈夫だ。俺たちの中にも回復属性の者もいるしな。酷い怪我の者もとりあえずはこちらに送るから、あまり気負わずにやってくれ。じゃあ頼んだぞ」
フェヴァン様はそう言って訓練している人達の中に戻っていった。
俺たちが案内されたのは、訓練場の端にある簡易の休憩所みたいなところだ。先生が俺たちの前に立つ。
「魔力が尽きるギリギリまで回復を続けてください。もう無理だと

思ったら後ろに下がって休んでもらって結構です。酷い怪我の者には出来る限りの治療をして、治癒しきらなければその旨を告げてください。治った状態をしっかりイメージするのですよ。回復魔法は治る早さやどれだけ綺麗に治るかが、イメージによって決まります。酷い怪我の場合は、治った状態のイメージがしっかりできないと治らないこともありますので気をつけてください。まあ、慣れてくれば出来るようになるでしょう。数をこなすことが大切です」

先生はそう言って後ろに下がってしまった。回復魔法って失敗することもあるんだ……初めて知ったよ。俺ってやっぱり常識がないんだな。気をつけないと。

先生は後ろから皆の様子を確認するみたいで下がっていった。

よしっ！　頑張って治すぞー！！

１０８、騎士団の訓練場（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！

１０９、回復魔法の特訓

しばらく怪我人は来ないかなと思って余裕で座って待っていたら、すぐに怪我人がやってきた。今まで怪我をしていたけど治療してなかった人も来ているのだろう。

俺たちの前にはそれぞれ椅子が置かれていて、そこに怪我人が座っていく。俺の前にも怪我人が座った。

「軽く切っちゃったんだけど治せるかな？」

頬がザグっと切れている。これ軽くなの？　めちゃくちゃ痛そうなんだけど……

それにしても木剣で訓練してるはずなのに、何でこんな傷ができるんだろうか。魔法も使うからかな？

「治せますよ」

俺は切れている箇所に手を翳して、怪我が治るイメージを膨らませて魔法を使った。

「『ヒール』はい。治りました」

「え？　もう治ったの！？」

騎士の方が驚いたような顔をして、自分の頬を触っている。そんなに驚くようなこと？　この程度なら簡単に治せるよね？

「君は凄く腕がいいんだね！　怪我があった場所が触ってわからないし、それに凄く早かったし。ありがとう」

「い、いえ、魔法は得意なので……」
「そうなんだ！　将来有望だね」
「ありがとうございます……」

その騎士の方は軽い足取りで訓練に戻っていった。
あの程度の怪我を治すだけであそこまで驚かれるのか。俺はさりげなく周りの皆を見回してみた。
すると軽い切り傷を治すのに時間がかかってるし、治し終わっても傷跡が残っている。
やばい……こんなにレベル低かったんだ。俺、どうやったら治すのに時間をかけられるのかわからないよ！　それにどうやったら傷跡が残るの？
魔法では出来る限り目立ちたくないんだけど……常人レベルの優秀さならいいよね。というか、これ以上力を抑えるの無理だ。

そんなふうに悩んでいたら次の怪我人が来た。とりあえず、出来る限り力を抑えよう。

「酷い打撲なんだが治してもらえるか？」

次の人は、腕に赤黒い打撲痕があった。めちゃくちゃ痛そう……

「はい。治すので腕を前に出してもらえますか？」
「ああ、これでいいか？」
「はい。『ヒール』治りましたよ」

かなり痛そうだったのですぐに治して、大丈夫か確認しようと思い怪我人の顔を見上げた。すると何故か口を開けて、ぽかーんと惚けた顔をしている。
え？　もしかして今のもやりすぎだった！？

内出血は難易度低いんだけど……

「えっと……どうかしましたか？」

「な、な、なんで！？　なんでそんな一瞬で治せるんだ！？」

やっぱり治すのが早すぎるのか……でも、どうやって遅くするのかがわからないんだよ！

もう、回復魔法が得意ってことで押し通すしかない。

「回復魔法はかなり得意なんです。魔力量も多いですし」

「そうなのか……それだけでここまで早く綺麗に治せるのか？」

「私は恵まれているようです。あっ、次の怪我人が来ましたので……」

「……わかった。治してくれてありがとう」

「いえ、また訓練頑張ってください」

なんとか誤魔化せた……？　もう誤魔化せたことにしよう。

「次の方どうぞ」

「ああ、よろしく頼む」

次の怪我人はかなり痛そうに足を引きずってるみたいだ。捻挫かな？　もしかして骨折？

「足ですか？」

「木剣を足に思いっきり受けたんだ。当たりどころが悪かったのか……これは骨が折れてると思う。だから……」

「凄く痛そうですね。すぐに治します」

「え……？」

凄く痛そうだ。脂汗を浮かべてるし早く治してあげないと……それにしても、この世界は回復魔法があるからって怪我しすぎじゃないか？　まあ、すぐに治せるから無茶するのもわからなくはないけど。

「『ヒール』はい。治りましたよ」
「え？　あれ？　痛くない！？　なんで治せるんだ！？」

えっと……もしかして骨折を治すのはダメだった？

「治すのは無理だろうから、無理でも騎士団の治癒士のところに行くから気にするなって言おうとしてたのに……」

何それ！　もっと早く言ってよ！！　流石に骨折を治すのはヤバかったのかも……
どうしよう。なんとか魔力を使い切って治せたことにしようかな。それならまだ誤魔化せるはず……！
疲れ切った演技だ。意識が途切れる寸前を演じるんだ。俺頑張れ！

「はぁ……はぁ……無理かと、思っていたんです、けど、なんとか治せたみたいです……もう、痛みはないですか？」
「ああ、もう完璧に治ってる。学生なのに凄い治癒士なんだな。治してくれてありがとう」

騎士さんはそう言ってニカっと笑いかけてくれた。この人いい人だ……！　それに、騙されてくれたみたいでよかった。騙してごめんなさい。

「いえ、訓練、頑張ってください」
「おう！　しっかりやってくる」

そう言って騎士の方は訓練に戻って行った。よしっ！　とりあえずセーフだ。
この後は後ろに戻って、疲れた様子で休んでれば完璧だろう。俺は椅子から立ち上がり、後ろに下がった。

「オッセン先生、魔力がほとんどなくなったので休みます」
「はい。ただ、君は魔力量が多かったはずですが、酷い怪我でも治したのですか？」
「はい。三人目の方が足の骨折で、それを治して魔力がほとんどなくなりました」

それにしても、この世界ではいくら魔法を使っても魔力量は増えないはずだよな。それなのにベテラン治癒士の方が酷い怪我でも治せるのは何でなんだろう？
うーん、何度も魔法を使っていれば、魔法を使うのに慣れてきて消費魔力が抑えられるようになるのかな？　もしかしたらそうかも。それに、慣れてくれば治すイメージも明確になってくるからな。
魔法の熟練度みたいなものなんだろう。

まあ、俺にはほとんど関係ない話だな。魔力量はどんどん増えていくし、イメージも日本での記憶のおかげでこの世界の人よりは明確だし。

「骨折……骨折を治せたのですか！？」

え？　先生にもそんなに驚かれるほどなの？

「骨折を治すには魔力が必要なのはもちろんですが、切り傷などわかりやすいものと違ってイメージしにくいので、魔力があっても治

せないという人も多いのです。君は魔力量も多い上に魔法の扱いも上手なのですね」

骨折ってそんな扱いだったの！？　俺にとっては切り傷を治すのと同じだったから……そんなの知らないよ！

「わ、私は、回復魔法が他の人より得意みたいです」

「そうみたいですね。使えば使うほど上手くなりますから、才能に胡座をかかずしっかりと鍛錬してください」

「はい！」

とりあえず常人レベルには収められたみたいだ……良かった。

俺は後ろにあった椅子に座り、身体を休めているフリをして他の人の魔法を観察した。

マルティーヌの様子を見てみると、俺が授業をしていた時よりも時間をかけて、傷跡を少し残すように治している。マルティーヌ、力の抑え方がめちゃくちゃ上手いな。

ステイシー様は、軽い切り傷にかなりの時間をかけて治している。もう結構疲れているみたいだから、魔力終わりかけてるのかも。

もう一人の男の子は、ステイシー様と同じくらいの時間がかかって治しているが、まだ魔力は少し余裕がありそうだ。軽い切り傷程度なら後一人はいけそうだな。

それにしても、若くて自信がありそうな男性騎士は殆どがマルティーヌのところに行っている。ステイシー様のところには若くてあまり自信がなさそうな人達。男の子のところにはもう少し年上の騎士達。

多分マルティーヌのところに行ってるのは、実家が高位貴族の若い貴族達なんだろうな。あわよくばお近づきになれたらって感じか

な。
ステイシー様のところに行っているのは、若いけど実家の身分が低くてマルティーヌのところにはいけない人って感じだ。
男の子のところには、もう結婚してる人達かそういうのに興味がない人って感じだな。
そういえば俺のところに来たのも、若いとはいえない騎士が多かった。

こうやってみてると面白いな……そんなことを思いながら治療風景を眺めていると、皆が後ろに下がってきて授業は終わりになった。

「これからは毎週この授業になります。回復魔法の授業は週に一度しかないですけど、魔法は使えば使うほど上手くなりますので授業外でも積極的に使ってください。では、王立学校に戻ります」

俺たちは騎士の方達に挨拶をして、馬車に乗り王立学校に戻った。毎回普通のレベルに合わせるのは辛すぎる。回復魔法の練習にはなるけど、どうせならもっと何十人もバンバン治して魔法に慣れたいなぁ。
全属性を明かせるようになったら、アレクシス様に頼んで騎士団でたまに回復魔法の練習をさせてもらおう。

でもとりあえず一年は我慢だな。疲れ切った演技、頑張ろう。

１０９、回復魔法の特訓（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします。
とても励みになります！

110、アルテュル様の戸惑い

次の日の放課後、今は剣術の授業が終わり、ロニーと更衣室で服を着替えたところだ。

「とりあえず、屋台が順調みたいで良かったよ」
「うん。特に問題なく開店してるよ。かなり売り上げもいいと思う！」
「それは良かった。何かあったらすぐに言ってね」
「分かってるよ」

ロニーは毎日屋台の状況を報告してくれる。今のところ大きな問題も起きてないみたいで安心だ。

「一度買ってくれた人は、殆どの人が二回目も買いに来てくれるんだ」
「味を気に入ってくれてるってことだよね。どっちの方が売れてる？」
「やっぱり豚肉サラダかな。でも蜂蜜バターも、贅沢な材料の割に安いからって買っていく人が結構いるよ」

蜂蜜バターの方が原価が高いからな。豚肉サラダの利益がかなり出るからこそできる値段設定だ。

「上手く行ってるみたいで安心だよ」
「あっ、でもレシピを教えてくれってたまに言ってくる人がいるんだ。でも普通お店のレシピなんて教えないし、無理ですっていえば諦めていくよ」

「それって危ない感じじゃないの？」
「うん。皆一応聞いてみてるって感じの人ばかりだから」
「そっか……それならいいけど、強引な人がいたら自分の身を守ることを一番に考えてね」
「うん！　でもたくさんの人がいる広場で強引なことなんてしたらすぐに捕まっちゃうよ」

でも、行き帰りで何かをされるってこともあるかもしれないし、周りの目を考えないような馬鹿な人がいないとも言えないよな。
そうなったらレシピは渡してもいいだろう。一番の優先はロニーの身の安全だ。
でも、レシピを渡しても信じてもらえられないと思うんだよね。生の卵を使ってるし……そうなったら、公爵家から卸してもらってる特別な卵だって言って貰えば良いかな。あながち間違いではないし。

基本的に平民は、貴族が関わっているものには極力関わらないから、そう言ったことでロニーが危険になる可能性はほとんどないと思う。
こんなこと考えたくはないけど、貴族は平民を簡単に切り捨てると思われてるから、ロニーを攫っても人質にならないから意味はないと思われるだろう。
まあ、もし万が一そんな事態に陥ったら、俺は絶対に助けに行くけどね！　でも流石に公爵家は動かないだろうな。

「行き帰りに襲われることもあるかもしれないし、ロニーの身の安全を一番に考えて、もし危ないと思ったらレシピは渡してもいいからね」
「え！？　いいの？」
「うん。でも、レシピを聞いて生の卵を使ってるって知ったら信じ

てくれないだろうから、そうしたら公爵家から卸してもらってる特別な卵だから生で食べられるって言えば良いと思う。公爵家って聞いたらそれ以上関わってくる平民はいないでしょ？　とにかく、ロニーの身の安全が一番優先だからね！」
「確かにそう言われたら平民なら関わらないよね。僕だったら怖くて全力でその場を離れるよ。レオン、ありがとう！」
「うん！　後ロニーなら言わないと思うけど、殺菌の魔法具のことだけは秘密にしてくれる？」
「それは何があっても言わないから大丈夫！　それに、そもそも魔法具のことを言う機会はないと思うよ」
「まあ確かにそうだよね。聞いてくるとしてもレシピだよね」
「そうだよ。でも気をつけるね！」
「うん。ありがと」

そんな話をしながら更衣室から外に出ると、訓練場にはステファンとマルティーヌ、リュシアン、それにアルテュル様がいた。
えっと……何事？　俺が疑問に思っているとステファンが俺に近づいてきた。

「レオン来たか」
「えっと……私を待っていらしたのですか？」
「ああ、アルテュルからレオンに話があるから仲を取り持ってほしいと言われてな」
「アルテュル様がですか……？　何の用でしょうか？」
「さあ、私たちも何も聞いていないのだ。とりあえず私達もそばにいるから話を聞いてあげてくれ」
「かしこまりました」

なんだろう…　？　また何か文句かな。でもそれならわざわざ俺のことを待ってまで言うことじゃないよな……

俺はそのままステファンに付いて行こうとして、ロニーを巻き込んでいることに気づいた。
ロニーは先に帰してもらえるかな？　流石にこのメンバーにロニーを放り込むのは可哀想すぎる。

「ステファン様、私の友人は先に帰っても良いでしょうか？」
「ああ、アルテュルはレオンに話があると言っていただけだから良いと思う」
「ありがとうございます。少しだけお待ちください」

良かった～。流石にロニーがここにいるのは辛いだろう。俺は少し後ろに立っているロニーを振り返った。するとロニーは真っ青な顔をして、少し震えていた。流石にこのメンバーにはまだ慣れないよね。

「ロニー、先に帰っていいらしいから、また明日ね」
「う、うん。レオンは大丈夫？」
「うん。リュシアン様もいるし大丈夫だよ」
「そっか……それなら僕は先に帰るよ。また明日ね」
「うん。屋台よろしくね」
「わかった」

少し小声でそんな話をしてロニーは足早に帰って行った。

「ステファン様、お待たせして申し訳ございません」
「気にするな。では行こう」

俺はステファンの後についてアルテュル様のところに向かった。

「アルテュル、レオンを連れてきた」

「ありがとうございます」
「アルテュル様、私に何か御用でしょうか？」

俺がそう聞くと、アルテュル様は口を開きかけては閉じると言ったことを繰り返して、一向に何も話さない。
どうしたんだ？　いつもはあんなに饒舌に話してたのに。

「えっと……いかが致しましたか？」

なんで何も話さないの！？　俺から何か話さないといけないとか？
俺は困ってリュシアンを見た。するとリュシアンが助け舟を出してくれるようだ。アルテュル様の前まで歩いていく。

「アルテュル、私達も暇ではないのだ。何も言うことがないのならもう行ってもいいか？」
「まっ、待ってくれ。話はあるんだ……」
「ならば早く言えばいいだろう？」
「わ、わかった」

本当にどうしたんだ？　いつもの勢いもないし、自信満々な様子も鳴りを潜めている。
どことなく戸惑っているような雰囲気だ。
それからしばらく待つと、やっとアルテュル様が話し出した。

「この前のダンスの授業で、マルティーヌ様に平民のことをどれだけ知っているのかと言われた。それから私は考えたのだ。その上で私は何も知らないということに気づいた。父上から平民は卑しい存在だと、そう聞いていた情報しかなかった」

え？　急になんの話？

「だから屋敷の者に聞いてみたのだ。メイドや執事、父上にもう一度聞いてみた。しかし皆同じ答えを返してくる。平民は卑しい存在だと。我々貴族とは違う生き物だと」

メイドも執事もそう言ってるの！？　プレオベール公爵家は洗脳が得意なの？　それとも、そう言わないと何か不利益があるとか。

「だから私は思ったのだ。やはり私は間違えていないと。しかしその矢先に、王家が女神様と使徒様の教えを支持したと聞いた。平民とは助け合うべきだという教えだ。私は何が正しいのかわからなくなったのだ……父上にどっちが正しいのだと聞いたが、何も答えてはくれなかった。私はどうすればいいのだ！？」

アルテュル様って、やっぱり素直なだけなんだな……根は悪い子供じゃない。小さな頃から周りにいる人全員に平民は卑しい存在で貴族とは違うと聞かされれば、それを信じて当然だろう。

どっちが正しいのかは難しいが、この世界は女神様がいる世界で女神様の教えがあり、その教えを王家も支持した。ということは、そちらが正解になるのだろう。

アルテュル様は今まで教えられてきた常識が間違えていた、ということを受け入れられるのだろうか？　まだ十歳の子供なんだ。

「私は混乱したが、そこでマルティーヌ様の言葉をまた思い出した。自分の目で見て確認してみるべきだと。だから、俺に平民のことを教えてくれないか？　お願いする！」

アルテュル様はそう言って、俺を強い目で凝視してくる。十歳の子供が自分でここまで考えてこの結論に至るのは本当に凄いよね……アルテュル様はただの馬鹿な貴族ではないんだな。

今まで色々言われてきたけど、アルテュル様も被害者みたいなものだ。俺が少しでも手助けできるなら助けてあげたい。

「アルテュル様」
「な、なんだ！？」
「私で良ければ平民についてご説明いたします」
「い、いいのか？」
「もちろんでございます」

俺はそう言って、ニッコリとアルテュル様に笑いかけた。

「あ、ありがとう……」

ヤバい……わんぱく坊主を手懐けた感じ！　なんか達成感ある！
俺は思わず顔がにやつきそうになり、なんとか抑え込んだ。

「アルテュル様、本日は何かご予定がお有りですか？」
「いや、特にないが……」
「ではこれから、平民の生活をご覧になりませんか？　リュシアン様、良いでしょうか？」
「ああ、レオンの好きにしたらいいぞ」
「ありがとうございます」
「アルテュル様、いかが致しますか？」
「よ、よろしく頼む。ただ、リュシアンとは仲良くするなと言われているんだ……」

確かに敵対勢力の子供だもんね。貴族ってめんどくさいなぁ……
それだとタウンゼント公爵家の馬車にアルテュル様を乗せて連れ回すのは難しいな。
うーん、王立学校の馬車ならいいかな？

「ステファン様、王立学校の馬車を借りることはできるのでしょうか？」
「ああ、できると思う」
「それならば、王立学校の馬車を借りてそれに乗り外に行くのはどうでしょう？　アルテュル様の迎えの馬車には、今日だけ研究会に参加するとでも言っておけば問題ないでしょうか？」
「それなら大丈夫だろう」
「ではアルテュル様にはそのように連絡していただいて、また訓練場にお戻りください。訓練場の前に馬車を用意しておきます」
「わかった。よろしく頼む」

アルテュル様はそう言って訓練場を出て行った。
よしっ、頑張ってアルテュル様に事実を教えないと。俺はなんだか凄くやる気が出てきた。

１１０、アルテュル様の戸惑い（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！

１１１、異常なほど偏った知識

俺はリュシアンの方を向き、急な予定変更を謝罪することにした。

「リュシアン、そういうことだから今日は研究会に行けなくなっちゃった。ごめんね……多分帰ってくるのも遅くなるから、先に帰ってくれる？」

「何を言ってるんだ？　もちろん私も行くに決まっているだろう？」

「え？　いいの？」

「レオン一人で行かせるわけがない」

「そっか……実は一人だと上手くできるか不安だったんだ。ありがとう」

リュシアンが来てくれるならすごく心強い。まずは馬車の中でアルテュル様の平民に対する知識を聞いて、それを正しつつ現実を見せてあげよう。今日の出来事でアルテュル様の中で何かが変わったら嬉しいな。

「レオン、もちろん私も行くからな」

「私もですわ」

「え？　ステファンとマルティーヌも行くの！？」

「もちろん行くに決まっている」

「別に無理しなくていいんだよ……？」

「面白そうだからな」

「ええ、こんな面白そうなこと逃すわけにはいきませんわ」

なんかすごく楽しそうだけど、悪い顔をしているような……？

まあ、そんなに一緒に来たいのなら断る理由はないか。

「じゃあ、一緒に行こうか」
「ああ、それでは馬車を手配しに行こう」
「うん！　そういえば馬車はどうすれば借りられるの？」
「職員の部屋に行けば借りられる」
「そうなんだ。それなら俺が借りてくるよ！」
「いや、私も一緒に行こう。その方がスムーズだ」

確かに、ステファンがいたらスムーズに進まないことの方が少ないよな。

「それならよろしく。じゃあ行こうか」
「ああ、マルティーヌとリュシアンは待っていてくれ」
「お兄様わかりました」
「待ってるぞ」

俺とステファンは早足で職員の部屋に行き、馬車を借りた。ステファンに一緒に行ってもらって本当に良かった。
ステファンが入った瞬間に職員が一人飛んできて、用件を聞いたら他の職員が一気に動き出して、気づいたら馬車を借りられてたよ。
ステファンは「馬車を借りたい」しか言ってないのに！流石王族だね。

その後俺たちは馬車を訓練場の前まで頼み、歩いて訓練場まで戻った。
すると、訓練場にはすでに馬車が来ていた。マルティーヌとリュシアン、アルテュル様は既に馬車へ乗り込んでいるみたいだ。

「待たせたな」
「いえ、馬車の手配ありがとうございます」

ステファンの言葉にリュシアンがそう答える。そうか……アルテュル様がいるから言葉を崩せないんだな。
ちょっと面倒くさいけどしょうがない。

「では、まずはアルテュル様が平民について知っている知識を教えていただけますか？」

馬車はとりあえず中心街の入り口の広場に向かってもらうことにして、その途中でアルテュル様に色々質問をすることにした。

「ああ、ただ知っていることは殆どないな。平民とは接点があまりないんだ。平民は卑しい者だということや、貴族は選ばれた存在で平民は貴族とは違う低俗な者だということ。平民は神聖な貴族の領域を汚し国を壊そうとすること。貴族は平民に命令をして役割を与えることで、正しい方向に向かわせられること。このぐらいだな」

うわぁ～碌でもない情報しかないじゃないか。本当にそれだけなのか？　屋敷でも平民が働いて役に立っていると思うけど……

「屋敷では平民も働いているのではないのですか？　そこでの接点などは？」
「屋敷に平民はあまりいないぞ？」

いないってどういうこと？　使用人はたくさんいるよね？

「掃除をする方や、アルテュル様の身支度を整える方は、いらっしゃらないのでしょうか……？　また、食事を作る方も平民だと思いますが……」
「掃除とは、屋敷を綺麗にすることだよな？　そのような下働きの

者は、主人の目に映らないようにするものだろう？」

そうなのか？　タウンゼント公爵家では普通に挨拶もしてくれるけど……俺にはどっちが正解なのか分からない。

そう思ってリュシアンの方を見ると、俺の視線の意図がわかったのか答えてくれた。

「使用人は、主人の目に極力映らないことが望ましいとしている貴族も最近は多いぞ。昔はうちのような家がほとんどだったのだがな」

「そうなのですね」

それも、使徒様の影響が薄れたことに起因するものだろうな。平民の立場からすると、やっぱり良い変化じゃない。

それにその状態だとアルテュル様は、本当に平民と接することはないのかもしれない。

「身支度を整える方はいらっしゃるのですよね？」

「ああ、だが平民ではない」

そっか、高位貴族の従者だと下位貴族ってこともある。そう考えると本当に平民と接点ないな。

でも、料理を作るのは平民だよね？　それなら、料理長には会ったことがあるんじゃないのか？

「料理を作る方にはお会いしたことはありますか？」

「……そもそも、食事とは作るものなのか？　買ってくるものではないのか？」

「材料は買いますが、それを調理するのは平民の料理人ですが……」

「どういうことだ？」

え？　それこっちのセリフなんだけど……料理を作るってことを知らないってこと！？

流石にそこまでとは思ってなかった。アルテュル様って知識が偏りすぎてるよね……平民が関わることについての知識を、意図的に教えてないのかな？

なんでそこまで徹底して平民を嫌うのかわからない……

それにここまでしたら、アルテュル様は将来何もできないじゃないか。領地の政策とかを考える上でも、平民の仕事って必要な知識だよね？

待って、もしかして……それが狙い？

貴族は子供が十五歳になったら当主を譲らないといけない。だからアルテュル様のお父さんは、アルテュル様を傀儡貴族に育て上げようとしてるとか……？

そうだったらお父さんが怖すぎるし、アルテュル様が可哀想だ。でも確かに食事を調理するということは知らないのに、礼儀作法やダンスはできるんだよな。

最低限貴族として外に出ても不自然がないように、そのために必要な知識だけ教えてるとか……怖っ！

でもお父さんだけじゃなくて、お母さんもいるはずだよね？　お母さんとお父さんのグルとか？　やばい、怖い想像しか思い浮かばなくて辛い。

子供を道具としか思ってないようなこんな予想、外れてくれてたらいいんだけど……

とにかく今はアルテュル様に少しでも色々教えてあげないと！

「パンを召し上がったことがありますか？」

「もちろんあるに決まっているだろう？」

「では、パンはどのように作られているのかご存知ですか？」
「パンは買ってくるものだろう？」
「パンは買ってくるものですが、パンを作っている人がいるからこそパンを買えるのです。何もしないで待っているだけでパンが突然現れたりはしません」
「それは……」
「パンは小麦粉と卵などいくつかの材料を組み合わせて、調理をして作るのですよ」
「小麦粉……？」

小麦粉も知らないの！？

「小麦粉はご存知ないですか？　卵はどうですか？」
「卵は知っているぞ。ゆで卵だろう？」
「ゆで卵は卵を熱湯で茹でて、卵の殻を剥いて出来上がるものです」
「そうだったのか……。それに小麦粉も知らない」
「小麦粉とは、小麦という植物の実を細かく砕いて作られる白い粉のことです。そして、小麦粉からパンが作られるのです」
「パンとは植物なのか！？」

そこで驚くの？　アルテュル様の驚きポイントが一切わからない。

「パンが植物というわけではないですが、植物から作られています」
「そうだったのか」
「ええと……他にも植物をたくさん召し上がられていると思いますが、ご存じありませんか？」

流石に野菜が植物ってことは知ってるよね。

「知らないわけがないだろう？　野菜はたくさん食べている」

流石にそれは知ってるか。良かったぁ～。

「では、野菜がどのように作られているのかご存知ですか？」
「野菜が作られている……考えたこともなかった」
「ですが、植物ということはご存知なのですよね？」
「ああ、ということは、野菜はそこらに生えているものを採ってくるのか？」
「いえ、そこらに生えているものではなく、しっかりと畑を作り、そこに種を植え、雑草を取り、丹精込めて育てて、食べられるまで成長したところで採るのです。勝手に生えてくるものを採るだけではありません」
「そうか……」

アルテュル様の周りの大人が最悪すぎる。偏った知識だけを与えて当たり前のことを教えないなんて。何も教えられずほぼ屋敷から出ることもなければ、こんなに何も知らない子供になるのか……
でもこの学校に合格する知識はあるんだから、本当に知識が偏ってるんだな。
もう話すよりも実際に見てもらった方が早いな。

「アルテュル様、実物をご覧になった方が早いと思われます。市場に行き、その後どこかの食堂やパン屋で実際に作るところをご覧になりませんか？」
「ああ、見てみたい」

アルテュル様が決意したような目でそう言った。アルテュル様って、多分地頭は良くて素直で良い子なんだよ。本当に周りの大人がダメだっただけで。

「ステファン様、その予定で良いでしょうか？」
「ああ、市場では馬車から見るだけになるがそれでも良いか？　もし何か買いたいものがあれば、御者に頼めば買ってくれるだろう」
「はい。それでも構いません」
「ならまずは市場に行こう。後は食堂かパン屋だったな」
「できればどちらも行けたら良いのですが……厨房を見せてもらえるでしょうか？」
「交渉はやらせておくから心配するな」

ステファンはそう言って、鞄から紙を取り出してペンとインクで器用に何かを書き始めた。そしてそれを御者に渡す。
えっと……御者の方は王族の護衛とかってこと？　その紙を誰かに渡して交渉してもらうのかな？
ということは、周りにステファン達の護衛がいるってこと？　全然気づかなかったよ……さすが王族。
王立学校にもさりげなくいるんだろうな。まあ、俺に害がある人たちじゃないし気にしないようにしよう。

「では、まずは市場からだな」

１１１、異常なほど偏った知識（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！

112、平民の生活と役割

市場まではもう少し時間がかかる。また別の話でもしようか……俺がそう考えていると、アルテュル様が小さく呟いた。

「リュシアン、お前は食事が作られていることを知っているのか？」
「ああ、当たり前だろう？」
「ステファン様とマルティーヌ様は、知っておられるのですか？」
「ええ、学びましたわ」
「王族は平民の暮らしも知っておかなくてはならないからな。少なくとも私はそう思っている」
「そうですか……」

アルテュル様はそう言ったきり黙ってしまった。かなり落ち込んでいる様子だ。なんか虐めてるみたいで可哀想になってきたよ。
それに今はまだ分からないかもしれないけど、この話の行き着くところは、アルテュル様の周りの大人が何故教えなかったか、だからな。
俺が口を出したら不敬だと言われるかもしれないけど、口を開かずにはいられなかった。

「アルテュル様、私の立場で意見を言うなど烏滸がましいことかもしれませんが、学んでいないことを知らないのは当然のことだと思います。……知らないことがあるのならば、これから学ばれていけば良いのではないでしょうか？　私に答えられることでしたら、いくらでもお答えいたします……」
「そうだな……ありがとう」

全然上手いことは言えないけど、これで良かったのだろうか？お父さんとの関係などはアルテュル様が考えないといけないことだからな……。それに、プレオベール公爵家がこれからどうするのかも。

「レオン、市場に着くまでに平民のことについて教えてくれ」
「かしこまりました。では、平民が普段何をしているのかについてお話しいたします」
「ああ、よろしく頼む。考えてみれば、私は平民が何をしているのか何一つ思いつかないからな」
「先程述べたように、野菜を栽培している者、酪農や畜産をしている者、食事を作っている者、食器やカトラリーを作っている者、それらを売っている者、アルテュル様が普段食べている食事にもこれだけの平民が関わっています」
「そうか……」
「また、今アルテュル様が着ているお召し物も平民が作っています。糸を作り布を織り、服を作っています。お屋敷にある家具も、平民が木を切り加工して作っています。お屋敷を建てたのも平民でしょう」
「そんなにも平民に支えられていたとは……これでは本当にいらないのは私ではないか。私は今まで何もしていない」

この話を聞いただけでそんなふうに考えられるなんて、本当に素直な子なんだよな……

「貴族には貴族の役割があるのではないでしょうか。それは私ではなく、リュシアン様に聞いた方が良いと思われます」
「そうだな……リュシアン、教えてくれるか？」
「ああ、いつでも教える。だがもうすぐ市場に着くからこの話は後でだな」

「わかった」

馬車が市場に着き、速度が殊更ゆっくりになる。

「アルテュル様、ここが市場でございます。たくさんの物を売っていますのでご覧ください。質問があればお答えいたします」

「ああ、あそこにある大きな袋はなんだ？」

「あちらは小麦粉を売っている店でございます。その隣は調味料ですね。塩や砂糖などが袋に入れられています。実物をご覧になりますか？」

「見てみたい」

「かしこまりました」

俺は御者さんに小麦粉と塩、砂糖を買って欲しいと告げた。すると馬車が止まり、少しの時間が経つと御者さんから三つの袋を渡される。

仕事早いな……というか御者さん馬車から降りてなかったよね？

また王族の護衛の人かな？

こんなに至れり尽くせりの生活に慣れたら、ダメ人間になりそうだよ。

「アルテュル様、こちらが小麦粉、こちらが塩、そしてこちらが砂糖のようです」

「これがそうなのか……どれも似たようなものだな。食べてみても良いのか？」

「小麦粉はこのままでは危険ですが、塩と砂糖であればこのまま食べても問題ありません。ただ、ここにはカトラリーがないので素手で召し上がっていただくことになってしまうのですが……。もしそれでもよろしければ、私で良ければ毒見をいたします」

「いや、毒味は良い。素手で食べてみよう」

そう言ってアルテュル様は、塩を手で一掴みとった。え？　それは食べ過ぎだよ！　つかみ取りのお菓子じゃないんだから！
塩がひとつまみでどれほどしょっぱいのかも知らないんだな。

「ア、アルテュル様！　お待ちください！」
「なんだ？　やはり食べてはいけないのか？」
「いえ、そうではなく量が多すぎるのです。塩は指先で少しつまむ程度でもかなりしょっぱいので、少量から試してみてください」
「そうなのか。この程度か？」

今度は指先に少し乗る程度の塩の量になった。これなら良いだろう。

「その程度でしたら問題ありません」
「わかった」

アルテュル様はそう言って、塩をペロッと一舐めした。すると途端に厳しい顔に変わる。

「なんだこれは……全く美味しくないではないか」
「調味料とはそれだけで食べても美味しいものではないのです。他の食材と合わせることで美味しい料理に仕上がります」
「これが美味しくなるなど信じられんな」
「確かに塩だけを食べるとそう感じられるかもしれませんが、普段アルテュル様が召し上がっているお食事にもたくさん使われていると思います」
「本当か……？」

やっぱり信じられないよね。今までの人生でここまで常識が違う

人と会ったことがないから、説明が難しい！
そう思っていたらステファンが助け舟を出してくれた。
「アルテュル、それも食堂に行き実際に作っているところを見ればわかるだろう。私も以前に塩をまぶして焼いた鶏肉と、塩をつけずにそのまま焼いた鶏肉を食べ比べたことがあるが、塩をつけた方が圧倒的に美味しかった」
やっぱり貴族は貴族同士の方がお互いの気持ちがわかるんだね。まあ、ステファンは王族だけど。
それにしても、ステファンは常識あると思ってたけど、それも全て学んだ結果なんだな。俺が今まで当たり前のように生活する中で身につけてきたことだから、改めて学ぶっていうのが変な感じだ。
「ステファン様もそのように学ばれたのですね」
「ああ、アルテュルも食べ比べてみればわかるだろう。食堂に行ったら作って貰えば良い」
「かしこまりました。私のためにご協力いただき感謝いたします」
「気にしなくて良い。それより砂糖も食べてみろ」
「かしこまりました」
アルテュル様はそう言うと、砂糖をさっきの塩と同じくらい手に取り口に入れた。
「これは……確かに甘いが、このまま食べるとそこまで美味しいとは思えないな」
「やはり砂糖も塩と同じで、料理して更に美味しくなるのです」
アルテュル様はその言葉を聞くと、しばらく黙り込んでしまった。何かを考えているようだ。

そうして少しの時間が経つと、また市場に目を向ける。
「レオン、あそこのお店は何を売っているのだ？　緑のものや他の色のものもあるが……」
「あのお店は野菜を売っています」
「野菜なのか！？　野菜とはあのような大きなものだったのだな」
「あちらも実物をご覧になりますか？」
「ああ、それからあの店で売っているものと、あっちの店と……」

そこからアルテュル様は、目につくお店全ての商品を網羅するかのように、購入し実物を見て、時には試食をしていった。
もう馬車の中が商品でいっぱいになってきた。流石にこれ以上はヤバそうだ。
俺はリュシアンに目配せをして、アルテュル様を止めてもらうことにした。流石に俺が止めるのはどうかと思うからな。

「アルテュル、そろそろ食堂に行く時間だぞ」
「ああ、もうそんな時間になるのか？」
「既に三十分以上は市場にいるからな」
「もうそんなに経ったのか……では、次の場所に行こう。ステファン様、マルティーヌ様、長い時間付き合わせてしまい申し訳ございません」
「私が無理に付いてきたのだから良い」
「そうですわ。それに、市場に来る機会などそうありませんから、結構楽しんでいますわ」

確かに二人は王族だからな。貴族よりもこういう場所に来るのは大変そうだ。
そう考えると二人を連れ回してるのって結構ヤバいのか？　かな

り護衛がいるみたいだし……
まあ、俺が考えることじゃないか。二人とも楽しんでるみたいだから良しとしよう。

「そうおっしゃっていただけて嬉しく存じます」
「では、食堂に向かってもいいか？」
「よろしくお願いいたします」

そうして俺たちは、馬車で王族の護衛の人たちが予約した食堂に行くことになった。

１１２、平民の生活と役割（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！

113、厨房の見学

馬車でたどり着いたのは、中心街から少し外れた小さな食堂だった。多分中心街の食堂よりその外の方が、アルテュル様が訪れていたことがバレないからだろう。

中心街のお店は、貴族向けでなくても貴族の使用人がたくさん利用してるからな。

馬車がお店の前にぴったりと止まり、馬車の扉が開かれた。扉を開いたのは、よくある貴族家の使用人の服を着ている男性だ。この人は王族の護衛の人なのかな？

その男性に従って馬車を降りて、皆でお店の中に入っていく。お店の中に入ると、中には深く頭を下げて待っている人が二人いた。

「面を上げよ」

ステファンがそう言うと、二人は頭を上げた。五十代くらいに見える男女だ。夫婦かな？

というかそれよりも、凄い！　めちゃくちゃカッコいい！！　面を上げよ、とか言ってみたい！

王様みたいだ。まあ、ステファンは本物の王子様なんだけど、仲良くなったらたまに忘れそうになるんだよね。

でもこういうところで思い出す。かっこいいなぁ。

ステファンにはオーラがあるんだよね。人が無意識に従っちゃうオーラが。俺は全然ないからな……オーラ欲しい。

そんなバカなことを考えていたら話が進んでいて、皆で厨房に行くことになっていた。

厨房に行くと、ちょうど俺の実家と同じような作りで懐かしい雰囲気だ。母さんと父さん、マリーは元気かな。

「では、まずは鶏肉をそのまま焼いたものと塩をまぶして焼いたものを作ってくれ」

「かしこまりました」

ステファンがそう言うと、二人はテキパキと動き始める。ただ顔は強張っていることから、かなり緊張しているようだ。手も震えているように見える。そんなに緊張しなくてもいいのに……

俺は二人の緊張を少しでも和らげようと、二人の手伝いを申し出た。

「ステファン様、私もお二人を手伝っても良いでしょうか？　私なら何を説明すれば良いのかも理解していますし」

「確かにそうだな。ただ作っているところを見るよりも、説明してもらえた方がありがたい。レオンよろしく頼む」

「かしこまりました」

俺は緊張している二人に近づいていく。すると、俺が近づくだけで二人はビクッとした。本当に可哀想なほど緊張してるな。

俺は適度な距離を保ったところで立ち止まり、二人に挨拶をした。

「こんにちは。俺はレオンです。俺は平民だからそんなに緊張しなくていいよ。俺も手伝うから、もう少しリラックスしても大丈夫だよ」

俺はわざと敬語を使わずに、平民だということを信じてもらえるように話した。

「へ、平民なのか……？」
「うん！　王立学校に通ってるけど平民だよ。実家は西の外れにある食堂なんだ」
「そうか。それなら親の手伝いもしてたのか？」
「そうだよ！　だから色々手伝えるからね」
「それはありがたいわ。よろしくね」
「よろしくな」

二人は目に見えて顔の強張りが解け、ホッとした顔をした。やっぱり同じ平民がいると安心するよね。
貴族だけだと、平民の気持ちなんてわかってくれなさそうって思うし。

「じゃあ始めようか。まずは鶏肉からだよね。鶏肉はある？」
「ああ、さっき必要なものは全て貰ったから、大量にあるぞ」

おじさんがそうやって示した先には、大量の食料や調味料が置かれていた。こんなに大量にあったら、何人いても食べきれないレベルだよ。
多分騎士の人たちも貴族だから、どのくらいが必要なのか分からなかったんだろうな。

「じゃあおじさんは鶏肉を準備してね。おばさんはフライパンの準備と竈に火を入れてくれる？」
「わかった」
「私はフライパンと竈だね」

おじさんが食材の中から鶏肉を持ってきた。鶏肉は一羽丸々だ。肉屋で必要な部位だけ買えるのに、どこが必要か分からなかったんだな……

おじさんはもも肉を取り出すみたいだ。

「アルテュル様、今おじさんが捌いているのが鶏肉です。これは鶏肉一羽丸々ですので、ここからもも肉や胸肉など部位に応じて捌いていきます。本日はもも肉を使います」

「これが鶏肉……？」

「私も丸々一羽は初めてみたな」

「あまり美味しそうには見えませんわね」

皆は結構引いてるみたいだ。ステファンとマルティーヌも丸々一羽は初めてなんだな。確かに俺も、丸々一羽の鶏肉はこの世界に来て初めてみた。

リュシアンは動じていないようだけど、見たことあるのかな？

「ちなみに、おじさんが鶏肉を捌くのに使っているのが包丁です」

「包丁というのは初めて聞いたが、そのナイフのようなものを包丁というのか？」

「おっしゃる通りです。料理に使うための刃物を包丁と言います」

「わかった」

アルテュル様は少しでも多くのことを学ぼうとしているようだ。本当に素直だよな。普通ならプライドが邪魔をして、素直に教えを乞うのは難しいだろう。

俺もできる限りのことを教えられるように頑張ろう。

「おばさんは竈に火を入れています」

「竈は暖炉みたいだな」

そうか。確かに貴族の屋敷には暖炉があるから、竈は理解しやすいのかも。

でもそれも、ストーブが普及したら必要なくなっちゃうのか。なんか勿体無いな。暖炉ってカッコいいのに。

「暖炉と似たような仕組みです。貴族様のお屋敷では暖を取るために使われますが、厨房では料理をするために使われます」

「料理をするのに火をどのようにして使うのだ？」

え？　ちょっと待って……もしかして焼くとか煮るとか、そんな調理法も理解してないのか。

でもよく考えてみれば、教えられなかったら知らないままなんだな……。いつも出来上がった料理だけを食べてれば、調理法なんてイメージできないだろうし。

でも料理って温かいよね？　なんで温かいのか考えたらわかる気がするけど。

「基本的に料理とは、食材を焼いたり煮たりして作るのです。アルテュル様が普段召し上がっている食事は、温かいものばかりですよね？　それは火で調理しているからなのです」

「そうなのか……食材が元々温かいわけではないのだな。確かに先ほどたくさん実物を見たが、どれも冷たかった。しかし、火で焼いてしまえば炭になるのではないのか？」

「いえ、勿論焼きすぎてしまえば炭になりますが、適度に焼くのであれば問題ありません」

「そうなのだな」

本当に驚くほど知識が偏ってる。流石に傀儡貴族にするつもりだったとしても、このくらい教えてあげた方がよかったんじゃないの？　アルテュル様のお父さんも極端すぎるよ。

もう何の意図もなしに、アルテュル様が嫌いだからとか言われた方が納得できる気がする……

「今おばさんが手にしたものをフライパンと言いまして、それを火で温めてその上で食材を焼きます」

そこまで説明が終わったところで、おじさんがもも肉を一口サイズに捌き終わったようなので、早速焼いてもらう。

「こちらが一口サイズに切った鶏肉です。こちら半分には塩をかけて、こちら半分には何もかけずに焼きます」

そうして鶏肉を焼いてもらい、お皿に塩をかけたものとかけてないものを、一つずつ盛り付けて渡していく。

毒味はした方が良いのかな？　そう思って俺がステファンに聞こうとすると、一緒に来ていた王族の護衛の方が、どこからかカトラリーを取り出して毒味をしてしまった。

素早い……この人って護衛じゃなくて従者なの？　それとも従者の仕事もできる護衛？

全く分からないけど、有能なことは確かだよね。今も毒見が終わったら、皆の分のカトラリーを手渡してるし。

それどこから取り出したの？　不思議すぎる……色々突っ込みたいけど教えてくれなさそうだし、とりあえずスルーしよう。

「では、何も味付けしてない方から食べてみてください」

俺がそう言うと、皆は躊躇わずに鶏肉を口に入れた。

俺の分もあったので、俺も食べてみる。うん、不味くもないけど美味しくもない。鶏肉そのものの味だ。

「アルテュル様、いかがでしょうか？　これが何もつけていない鶏肉本来の味です」

「美味しくないな……」
「では、塩をまぶした方を食べてみてください」
アルテュル様は塩をまぶした方を口に入れた。口に入れた瞬間に驚くような顔になり、ひたすらにもぐもぐと食べている。美味しかったのだろう。
俺も食べてみよう。うん、美味しい。普通に美味しい。
「こっちは美味しいな……あの塩をかけるだけでここまで美味しくなるとは驚きだ」
「塩だけで食べるとそこまで美味しくなくても、他の食材と合わせて調理をすると美味しくなるのです」
そこからはアルテュル様のリクエストで、牛肉の煮込み料理を作ってもらい、その後にパンを焼いてもらって皆で食べた。
この食堂が選ばれた理由は、お店でパンを焼いているからのようだな。基本的にパンはパン屋から買ってくるのだが、たまに拘って食堂で作ってる人もいるんだ。
アルテュル様は終始驚いた様子で、頻繁に質問を繰り返しできる限りたくさんのことを学ぼうと努力していた。

そうして食堂を後にして、俺たちは王立学校に戻ってきた。いつもの研究会が終わる時間より少し遅くなっちゃったな。早めに解散した方が良いだろう。
馬車から降りるとアルテュル様が皆に挨拶をして、最後に俺の方を向いた。
「レオン……今日は色々教えてくれてありがとう。助かった」
「お気になさらないでください。また何かありましたらいつでもご

説明いたします」
「ああ、その時はよろしく頼む。じゃあな」

そうしてアルテュル様は、足早に馬車乗り場に帰っていった。
今日の出来事がきっかけで、アルテュル様にとって良い方向に進んだらいいな。俺は心からそう思った。今まで結構ひどいことも言われてきたけど、アルテュル様も被害者だからな。

「じゃあ帰ろうか。なんか疲れたよ～」
「そうだな。もういつもより遅い時間だぞ」
「ステファンとマルティーヌも帰るよね？」
「ああ、流石にもう帰らないとだな」
「お父様が心配するわね」
「父上は少し心配性すぎるのだ」

アレクシス様心配性なんだ。確かに王族だけど、子供大好きって感じだもんな。俺の中では王族って家族の仲も殺伐としてるイメージなんだけど、この国は全くそんなことはない。

「じゃあまたね」
「また明日」
「うん！」

そうしてステファンとマルティーヌと別れて、俺とリュシアンは帰路についた。

１１３、厨房の見学（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！面白い、続きが読みたいと思って下さった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします。

とても励みになります！

１１４、王族との昼食会

アルテュル様と市場に行ってから、見かけ上は平穏な毎日が続いている。アルテュル様は以前のように、俺たちに罵詈雑言を言うようなことは無くなった。

それによって俺たちの生活は前より平穏になったけど、合同授業などで見るアルテュル様が、一人でいることが増えたので少し心配だ。前は取り巻きの人がいたのに。

でも俺から話しかけるわけにもいかないし、とりあえず様子見をするしかない。今度リュシアンにでも近況を聞いてもらおうかな。

そんな感じで二週間が経ち、今日は王家から昼食への招待を受けた日になった。

俺とリュシアンは特別食堂への入り口で待ち合わせをし、二人揃って王家の特別食堂に向かった。

コンコン。

「リュシアンとレオンでございます」

「入れ」

「失礼いたします」

ドアを開けて入った先は、公爵家の特別食堂と作りは同じだったが豪華さがまた一段階上だった。流石王族だな。

「座ってくれ。従者は下がらせて私が呼ぶまでこの部屋には入らないように言ってあるから、丁寧な態度は崩してくれていい」

「わかった。じゃあいつものように話すぞ？」

「ああ、そうしてくれ。レオンもな」
「わかったよ」

俺たちはそんな会話をしながら席に着いた。テーブルの上には既にたくさんの料理が置かれている。従者の方が運ばなくて良いように全ての料理をテーブルに並べたからか、凄く豪華な感じだ。

「やっと一緒にお昼を食べられたわね」
「結構早かったと思うけど？　リュシアンと早いねって話してたんだ」
「早くないわよ！　私はもっと早くしたかったわ。でもお兄様が準備が必要だというから……」
「王立学校で子供だけとはいえ、王族が沢山の貴族を招いて昼食会をするのだ。準備に時間がかかるのは仕方がないだろう」
「それは分かっていますが……」
「まあまあ、こうして無事に昼食会ができたんだから、とにかく楽しもうよ。ね、リュシアン」
「あ、ああ、せっかくの時間なんだから楽しまないとだよな」
「確かにそれもそうね。ではまずは食事をいただきましょう」

ふぅ～、危うく第一王子と第一王女の兄弟喧嘩が始まるところだったよ、危なかった。
俺たちはまずは食事を堪能することにして、しばらくはぽつりぽつりと世間話をしながら昼食を楽しんだ。
王族の食事は、勿論めちゃくちゃ美味しかった。

そしてあらかたお昼を食べ終わり、食後に紅茶を飲みながらまったりしていたところでリュシアンが口を開いた。

「そういえばレオン、友達を紹介してくれるって言ってたよな。確

か名前はロニーだったか？　あの時はまだ緊張してるから無理だって話だったけど、そろそろいいんじゃないか？　訓練場でよくレオンと一緒にいる者だよな？」

そういえばそんな話してたな。確かにロニーも最初の頃よりは慣れて来てるから良い気もするけど、この三人に紹介したら慣れてるとか関係ない気がする。

でもずっと断ることはできないし、ごめんロニー。悪い人たちじゃないのは俺が保証するから頑張ってくれ。

「確かにそろそろ慣れて来ただろうし紹介するよ。ステファンとマルティーヌにもだよね」

「ああ、よろしく頼む」

「勿論私にもお願いしますわ」

「じゃあいつが良いかな？　今日の放課後とか？」

「そうだな。では、今日の放課後に玄関ホールに待ち合わせでいいか？」

放課後の玄関ホールって、生徒は殆どいないから丁度いいかもな。

「うん。それでお願い」

「楽しみが増えましたわ。気合を入れていかないとですわね！」

「マルティーヌ、気合は入れなくていいからね。いつも通りでいいからね」

いつものマルティーヌで充分ロニーの心臓には悪いから、気合を入れたマルティーヌなんて攻撃力が増すだけだから！

「そうだ。三人共教室で少し時間を潰してから玄関ホールに来てくれる？」

「何でだ？」
「ロニーは普通の平民なんだ。貴族との待ち合わせで平民が遅れていくとかロニーの心臓がもたないよ」
先に三人が待ち構えてるのは、流石にロニーが可哀想だよな。少しでも攻撃力を弱めておかないと、ロニーの心臓がやばい。
ただそのことを理解できないのか、ステファンが首を傾げて不思議そうにしている。
「私たちが許しているのならいいと思うが？」
「ダメなんだよ。平民にとっては貴族より先に待っていたという事実と、貴族よりも遅れたが許されたって事実は全く違うから！　だから絶対にゆっくり来てね。教室で十分くらい時間を潰してから玄関ホールに向かって、お願い！」
「まあ、レオンがそこまで言うならいいが……」
「ありがとう！」
これで少しはロニーへの心労が減るだろう。こういう認識の違いを感じると、この三人は王族と貴族なんだなって改めて思うよな。まあ逆に言えば、それ以外のところでは王族と貴族ということを忘れかけてるってことなんだけど……。でもしょうがないよね！　普通に話してると忘れるんだよ！
「何かお近づきの印に贈り物をした方が良いかしら？」
マルティーヌがまた不穏なことを言い始めた。贈り物なんていらないから！
「マルティーヌ、贈り物はいらないからね。笑顔で挨拶するだけで充分だから！」

「そうかしら？」
「そうだよ！　絶対だからね！」
「まあ、わかったわ」

そうして俺が何とかロニーへの負担を減らそうと奮闘していると、リュシアンがふと何かを思い出したような声を上げた。

「そういえば今日魔法具の授業があったんだが、その授業の終わりにロンゴ先生に言われたぞ。今日の研究会は必ず全員参加だそうだ」
「そういえばリュシアンと話していたな。授業の話をしていたのかと思ったが、研究会の話だったのか」
「その伝言ならば、私たちにも直接伝えてくだされば良かったのに」
「ロンゴ先生が、王族に話しかけると目立つからと言っていたぞ」
「確かにそうですけど……」

マルティーヌは納得がいかないのか、少し頬を膨らまして不機嫌そうだ。でも俺はロンゴ先生の気持ちがめちゃくちゃわかる。
王族と話してると目立つんですよね。そして何の話をしているのかと聞き耳を立てられるんですよね。教室で話しかけたら注目の的ですよね。ロンゴ先生、めちゃくちゃわかります！

ロンゴ先生とこの話で語り合いたくなったが、とりあえずこの話は置いておこう。まずは、必ず全員参加ってとこだよな。何かあったのだろうか？　今まではこんなこと一度もなかったよな……

「何かあったのかな？　ロンゴ先生は理由を言ってたの？」
「言ってなかったぞ。理由を聞いても教えてもらえなかったんだ。ただ、ロンゴ先生は深刻そうな顔と言うよりも楽しそうな顔をしていたな」

じゃあ何か良いことがあったってことか？　ロンゴ先生の良いことっていえば、新しい魔法具を思いついたとか？
確かにそれなら全員を集めてもおかしくないかも。

「新しい魔法具でも思いついたのかな？」
「その可能性もあるかもしれないな」
「もしそうだったら、ロンゴ先生に先を越されてしまったわね。まだピュリフィケイションの魔法具は全然進展していないのに……」
「ピュリフィケイションの魔法具はやっぱり難しいよね」

どうしても魔力効率が悪すぎるんだよな。何とかして良いイメージがないかずっと考えてるんだけど思いつかないし……。何か他の方法も考えないとだよな。

「私とリュシアンも、まだまだ新しい魔法具は思いついていない」
「私は自分で作ろうとしてみて、初めてレオンの凄さがわかったぞ。あんなに沢山の魔法具を思いつくなんて、天才だな」
「ああ、私もそう思う」
「私も改めてレオンは凄いと認識を深めてるわ」

そ、そんな、急に褒められると照れるんだけど！
しかも俺の実力っていうよりも、日本の発明家達の実力だし。マルティーヌはそのこと知ってるよね？
そう思ってマルティーヌを見てみると、悪戯が成功したような顔をしていた。うぅ～、やられた。
ここで俺が前世の記憶を持っていることを話しても良いんだけど、それでもこの話をするのはどうしても怖くて先送りにしてしまう。この話をして気味悪がられたら、流石に立ち直れない。
結局俺は、素直にお礼を言うしかなかった。

「……ありがと」

そうして生暖かい空気のまま昼食会は終わりとなり、俺は教室に帰った。ロニーに放課後のことを話さないと。

１１４、王族との昼食会（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思って下さった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします。
とても励みになります！

115、ロニーと三人の友達

俺が教室に戻り席に座ると、既にロニーは席に着いて次の授業の準備を始めていた。
俺はロニーに申し訳ないと思いながらも、意を決して先程決まった話をする。

「ロニー、本当に申し訳ないんだけど……」
「うん？　改まってどうしたの？」
「実は今日の放課後に、ロニーをステファン様とマルティーヌ様、リュシアン様に紹介することになったんだ」

俺がそう言うと、ロニーは次の授業の準備をしている態勢のまま完全にフリーズしてしまった。
えっと、大丈夫かな？　やっぱり刺激が強すぎた？

「ロニー？　大丈夫？」
「はっ、う、うん、だ、だい、大丈夫」

全然大丈夫じゃなさそう。ロニーは震える手でぎこちなく持っていた紙を机に置いて、俺の方を向いた。

「えっと、さっき僕の耳に聞こえたのは空耳？」
「ううん。本当のこと」
「本当のこと……今日の放課後？」
「そう」
「そんなの聞いてないよ！」

ロニーは涙声でそう言って、焦りまくっている。どうしよう、やっぱり早すぎたかな？
いや、早すぎるとかいう問題じゃないよな。

「ロニー、良い人達だからそんなに緊張しなくても大丈夫。ロニーは聞かれたことに答えるだけで良いから」
「でも、王子殿下と王女殿下と公爵家の御子息様だよ……緊張しないのなんて無理だよ！」
「うーん、じゃわかった。緊張しても良いけど、多少何かやらかしたところで怒られたりはしないから、心配しないでね」
「それさっきと言い方が変わっただけだよ！」

ロニーには本当に申し訳ないけど、とりあえず今日の放課後を乗り越えてもらうしかない。

「ロニーの紹介は放課後の玄関ホールでやることになったから、今日の四限が終わったら急いで着替えて玄関ホールに行こうね」
「あれ？　今日の四限って剣術の授業だよね？　僕たち更衣室に入るの一番最後だけど大丈夫かな！？」
「大丈夫だよ。いつも一番最後に入るけど一番最初に出てくるでしょ？」
「そうだけど、今日に限って着替えに手間取ったり……」

俺たちは「王立学校に入学して一番磨かれたスキルは何ですか？」と聞かれたら、迷わずに「早着替えです」と答えるくらいには着替えるのが早くなった。
いつも通りにやれば大丈夫だと思うけど、ロニーの手が震えてヤバくなりそうな予感もする……
俺のそんな不安な表情が伝わったのか、ロニーが意を決したような顔で言った。

「僕、剣術の授業はお休みすることにするよ」
「え？　いや、ちょっと待って！　それはダメだよ」
「だって、授業なんて落ち着いて受けられないよ！　剣術の授業が始まる時間から玄関ホールで待ってれば、僕が遅れることはないよね」
「それはそうだけど……」

流石にあの三人と会わせるので授業を休ませるのは、申し訳なさすぎる！

「ロニー、剣術の授業は合同授業だからロニーがいなかったら不思議に思うと思うよ」
「た、確かにそうだね……じゃあ僕はどうすれば良いの！」
「ロニー落ち着いて。そんなに気にしなくても大丈夫だから。とにかくいつも通りにすれば大丈夫」
「そんなこと言われても、気にしないなんて無理だよ！」

その後も何とかロニーを宥め続けて、いつも通りに剣術の授業を受けることに成功した。
そして剣術の授業が終わり、今は玄関ホールで三人を待っているところだ。ロニーはさっきまで心配してたのは何だったんだって言うほど、秒速で着替えて玄関ホールまで来た。
ロニーって緊張が突き抜けると、逆にすごい力を発揮するタイプなんだな。

「レオン、そろそろかな？」

ロニーが小声でそう聞いて来た。別に小声じゃなくても良いのに、

さっきから小声で話しかけてくる。

「まだもう少しかかるんじゃないかな」

俺が三人に、教室で十分くらい時間を潰してから来てって言っちゃったからな。こんなに早く来れるなら教室で待ってもらう必要なかった。

「そっか……」

うぅ～、ロニーの緊張が俺にまで伝わってくる。俺は緊張する必要なんてないのに、なぜか緊張して来たよ！　俺が遅れて来てって言ったんだけど、三人とも早く来て！

そんな緊張感の中で数分待っていると、三人が階段を降りて来るのが見えた。

隣のロニーがビクッと動いたのが感じられたが、何とかそこで堪えたみたいだ。

「レオン、待たせたな」

ステファンが代表してそう言った。

「いえ、私達も今来たところですので。こちらこそお時間を頂きありがとうございます」

「いや、私達から頼んだのだから良い」

そう挨拶をして、俺は緊張でガチガチに固まっているロニーの背中を軽く押して、一歩前に出させる。

「こちらが私の友達で、ロニーです」

「この者か。私はステファン・ラースラシア、レオンの友達だというお主に会ってみたかったのだ、無理を言ってすまなかったな」
「い、いえ、お、お目にかかれて、光栄です。ロニーと申します」
「そのように緊張しなくても良い。お主はレオンの友達だからな、私とも仲良くしてくれると嬉しい」

ステファンはそう言ってロニーに右手を差し出した。
あちゃ～、平民は王族に仲良くして欲しいなんて言われたら嬉しいよりも怖いが先に来るんだよな。それに握手なんて難易度高い。
でも断るのは流石に不敬すぎる。ロニー頑張れ！
俺がそう心の中で応援していると、ロニーはガチガチに緊張しながらカクカクと手を差し出した。

「み、身に余る光栄でございます」

ロニーよくやった！　顔が白くなってる気がするけどよくやった！
ただ、あと二人いるから頑張って……

「私はマルティーヌ・ラースラシアですわ。私とも仲良くしましょう！　よろしくお願いしますね」
「私はリュシアン・タウンゼントだ。レオンの友達同士、よろしく頼むぞ」

そうしてロニーは、何とか三人との挨拶を終えた。ロニー良くやったよ！　でも、もう力尽きてるから早く解散にしたほうが良いな。
そう思って俺は口を開きかけたが、少しだけステファンの方が早かった。

「ロニーはいつも放課後は何をしているのだ？　魔法具研究会には入ってないが、他の研究会に所属しているのか？」

「いえ、研究会には所属しておりません」
「そうなのか、それならば魔法具研究会に所属しないか？　楽しいからオススメだ」

ステファンやめてあげてー！　ロニーは断りたくても断れないから！　ここは俺が何とか断ってあげるしかない。

「ステファン様、ロニーは研究会に所属する代わりに放課後は働いているのです。私の屋台の従業員をしてくれています」
「レオンの屋台……？」

ステファンが不思議そうに首を傾げた。あれ？　クレープの屋台をやることってステファンに言ってなかったっけ？
……確かに考えてみれば、リュシアンにしか言ってなかったかも。

「レオン、屋台とは何のことですか？」

マルティーヌにも言ってなかったか……ここで言ったら大変なことになりそうだけど、しょうがないよね。ロニーごめん。

「私がクレープという食べ物を売る屋台を始めたのです。そしてその屋台で働いてくれているのがロニーです」
「クレープとは何ですの？」
「説明が難しいのですが……小麦粉などで作った薄めの生地に、様々な具材を挟み込んで作る料理です。中に挟み込む食材で味が変わります、屋台では豚肉サラダクレープと蜂蜜バタークレープを売っております」

俺がそう説明をすると、マルティーヌの目が輝き始めた。やばい……

「私、その料理にとても興味がありますわ！　その屋台でしか食べられないのですか？　それならば、屋台まで出向きますわね」
「マルティーヌだけで行くのはダメだ。私も一緒だからな」
「お兄様も興味があるのですか？　もちろん一緒に参りましょう」

話の流れがやばくなって来たよ。あの屋台に王族が二人も来たら、大騒ぎでロニーが大変すぎる！　流石にそれは回避しないと。

「ステファン様、マルティーヌ様、お待ち下さい。屋台にお二人が向かわれると大騒ぎになってしまいますので、他の場所でクレープを召し上がられるのは如何でしょうか？　私で良ければいつでもお作りいたします」

俺はそう言って、二人にこの提案を了承しろと目で合図を送りまくった。

「そうだな、他の場所で食べられるのであれば、屋台まで出向く必要はない」

良かった……最悪の事態は回避した！

「ただ、作るのはレオンではなくロニーでお願いしたい。いつも平民が食べているものを食べるのも、王族の務めだからな」

おぅ、何故そうなる。俺はステファンの顔をじーっと疑うように見ていると、ステファンはいたずらが成功したような顔をした。
平民が食べてるものを食べるのが王族の務めだとか、絶対にただの建前だ！　多分ただロニーと仲良くなりたいだけだな。平民の友達が珍しいのはわかるけど、ロニーの心労も考えてあげて！

ロニー本当にごめん。これは断れないかも。でも断れないけど、屋台に来るよりはマシだよね。そう思うことにしよう。

「……かしこまりました。ではどこでお作りすれば良いでしょうか？　特別食堂の厨房をお借りできれば、そこでお作りいたしますが」

「そうだな。学校でも良いがゆっくりとできないからな……今度の回復の日、公爵家で作ってもらうのはどうだろうか。リュシアンどうだ？」

「はい。問題ありません」

リュシアン即答なの！？　確認してからとかじゃないの！

「レオンとロニーもそれでいいか？」

それでいいかって聞かれても、リュシアンが良いって言ってるから良いんだろうし、断る理由がない。

「問題ありません」

「ぼ、僕も、問題ありません」

「では、それで決まりだな。時間などはまた連絡しよう」

そうしてまた回復の日に会うことが決まり、ロニーの紹介は終わった。三人は一足先に研究会の教室に行くようなので、今はロニーと二人だけで玄関ホールにいる。

「ロニー、公爵家に来ることになっちゃったね。止められなくてごめん」

「ううん、止められないのはしょうがないよ……。それよりも、屋台に来るのは止めてくれてありがとう」

「それは流石にやばいと思ったから」

「それだけでもありがたいよ」

そこまで話したところで、ロニーは緊張の糸が切れたのかへなへなと床に座り込んでしまった。

「ロニー！？　大丈夫？」

「うん……大丈夫。ちょっと力が抜けただけだよ。とりあえず終わって良かった」

「そうだね。あとは次の回復の日だけど、公爵家の人達も皆優しいから心配しないで。俺が出来る限り一緒にいるようにするし」

そう言うと、ロニーにガシッと腕を掴まれた。

「レオン、その言葉忘れないでね！　絶対だからね！　公爵家で一人にされたら……怖すぎる」

「わかった。約束するよ」

そこでロニーは、はぁ～と深く息を吐いて立ち上がった。

「とにかく、回復の日は精一杯頑張るよ。今日話した感じで悪い方達じゃないのは分かったし」

「それは良かった」

「じゃあ、取り敢えず僕は帰るね」

「うん、また明日ね。あっ、そうだ。今日の屋台は休みにしていいからね」

ロニーも流石に疲れてるだろうし、よく休んだ方が良いだろう。

「え？　何で？」

「だって、ロニー疲れてるでしょ？」

「うーん、身体は疲れてないから全然働けるし、逆にじっとしてても落ち着かないだろうから働きたいかな」
「そうなの？　まあ、それならロニーの好きにしてくれていいけど」
「じゃあ屋台頑張ってくるよ！」
「わかった。よろしくね」
「うん、また明日ね」

ロニーはそう言って帰っていった。ふぅ～、なんか俺の方が疲れたかも。俺はそんなことを考えつつ、ゆっくりと研究会の教室に向けて歩き出した。

１１５、ロニーと三人の友達（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします。
とても励みになります！

116、特別教師

ロニーと別れて研究会に向かい、教室の扉を開けると既に皆揃っていた。まだロンゴ先生は来てないようだ。
ステファンとリュシアンは各々新しい魔法具を考えていて、マルティーヌと先輩二人はピュリフィケイションの魔法具を研究しているみたいだ。
二人の先輩たちも最初は恐縮しっぱなしだったけど、流石に少し慣れて来たようでマルティーヌとたまに言葉を交わしながら研究している。
俺もまたピュリフィケイションの魔法具を考えるか。そう思って三人の方に向かった。

「遅れて申し訳ありません」
「私達も今始めたところよ。また魔力量を少し増やしてみたけどダメみたいだわ」
「そうですか……」

俺たちは今、魔石に込める魔力量によって魔力効率が変わるのではないかを試しているところだ。
少ない魔力から始めて段々と増やして試しているが、今のところ魔力効率への変化はない。

「とりあえずこのままこの検証は続けますが、望みは薄そうですね」

そう言ったのはロイク先輩だ。最初はこちらから質問しなければ一切話さなかったのに、最近はマルティーヌを交えて議論もできるようになって来た。

「まあ、諦めずにやりましょう」
「かしこまりました」

そうして俺たちがいつものように研究を開始して数分後、教室のドアが開きロンゴ先生が入って来た。

「皆いるな。今日は全員に集まってもらって悪かった。実は、今日は特別教師を連れて来たんじゃ」

特別教師？　新しい魔法具を思いついたんじゃなかったのか。特別教師って誰だろう？　魔法具工房の人かな。

俺がそんなふうに色々考えていると、ロンゴ先生に続いて先生と同じくらいの年齢の男性が教室に入って来た。

俺はその人を見て、思わずフリーズしてしまった。

え！？　なんでここにいるの！？

「特別教師をしてくれる、マルセル・ロンコーリ殿だ」
「マルセル・ロンコーリじゃ。今日一日だけだがよろしく頼む」
「マルセルはわしの昔馴染みでな、火属性の魔法具を開発したのはマルセルじゃ。また、マルセルは回復属性じゃから、今研究しているピュリフィケイションの魔法具に助言してもらうといい」
「わしが何かできるかは分からんが、できる限り協力しよう。今日一日よろしく頼む」

確かにロンゴ先生はマルセルさんと知り合いだって聞いてたけど、まさか王立学校に連れてくるとは。

本当にびっくりした。

俺がまだ驚きから抜けきれずにフリーズしていると、皆が椅子から立ち上がりマルセルさんのところに集まった。

「マルセル殿、ステファン・ラースラシアだ。よろしく頼む」
「マルティーヌ・ラースラシアですわ。よろしくお願いしますね」
「王子殿下、王女殿下、お初にお目にかかります。マルセル・ロンコーリと申します。よろしくお願いいたします」
「マルセル殿のことは魔法具の開発者として知っている。国の発展への寄与、感謝する」
「勿体無いお言葉です。今後も精進いたします」

そうしてマルセルさんは全員と挨拶をして、ついに俺の番になった。

「レオン、久しぶりじゃな」
「お久しぶりです。マルセルさんが来るなんて想像してなくて、凄く驚きました。でも嬉しいです！　何かこんなことを言ったら失礼かもしれませんが、マルセルさんがいると実家に帰ったみたいに落ち着きます」

俺がそう言うとマルセルさんは一瞬フリーズした後、優しく笑ってくれた。流石に失礼なことを言いすぎたのかと思ったけど、良かった。

「わしもレオンに会えて嬉しいぞ。やはり破天荒な奴がいなくなると家の中が静かでな」
「それって、俺がうるさいってことですか！？」
「まあ、確かに騒がしいかもしれんな」

そんなことないはず。いや、でも確かにマルセルさんには、迷惑ばかりかけてるかも……
俺がそうして今までの行いを思い出していると、マルセルさんが

ふと思い出したように言って来た。

「そうじゃレオン、お主この前に光球の改良魔法具登録をしたじゃろ？」

「はい、しましたけど……」

「そのおかげでわしにもまたかなりお金が入って来そうじゃから、一応礼を言っておくぞ」

うん？　何でマルセルさんにお金が入るんだ？

俺以外でお金が入るのは、元々の光球の開発者だけだと思うけど。

……え、もしかして光球の開発者ってマルセルさん！？

「マルセルさんが光球の開発者だったんですか？」

「うん？　そうじゃよ。もしかして言ってなかったか？」

「聞いてませんよ！！」

「そうじゃったか？　言ったような気もするが……」

「絶対に聞いてないと思います」

「そうか。まあ今言ったしいいじゃろう」

そういえば最初の頃にマルセルさんが、何かを開発した功績で騎士爵がもらえる予定だったって言ってたよな。

それが光球だったのか。ちょっと考えればわかることだったな。

既存の魔法具って四つしかなかったし。

「感動の再会はそろそろ終わりにしてもらってもいいじゃろうか？」

俺が色々考え込んでいると、ロンゴ先生が揶揄うような口調でそう言って来た。

「別に感動の再会なんてしてません！」
「感動の再会なんかじゃないわい！」

マルセルさんと完全にセリフがかぶってしまった。その事実に俺は何となく恥ずかしくなってしまい、それ以上反論するのをやめた。
周りの皆も生温かい目で見るのはやめてくれ！　特にリュシアン！！

「わかったわかった。じゃあ、そろそろ研究を再開してくれ。マルセルはマルティーヌ様のところじゃ」
「わかった。王女殿下、よろしくお願いいたします」
「私のことはマルティーヌでいいわ。よろしくね」
「かしこまりました。マルティーヌ様」

俺たちは今度は五人で、さっきまで研究していた机に戻った。

「今までにどのような研究をしていたのか、お聞きしても良いでしょうか？」
「ええ、今までは魔石に込める魔力量によって、魔力効率が上げられないかの検証をしていたわ。ただ、望みは薄そうね。あと考えているのは、魔鉄の大きさで魔力効率が変わるのか、魔鉄と魔石が触れる面積で魔力効率が変わるのかよ。どう思われるかしら？」
「そうですね……どれも良い結果にはならない可能性が高いと思われます。何故なら、似たような検証は今までに何度もされているので……」
「やはりそうなのね」

そこで皆黙り込んでしまった。ピュリフィケイションの魔法具は本当に難しい。どんなイメージをしてもあまり効果はないんだよな。
唯一効果があったのは、魔法具にする時に漠然と汚いものを綺麗

にするイメージよりは、何を綺麗にするのかを明確にイメージして特定の物を綺麗にする魔法具にした方が、消費魔力量は抑えられる。
ただ、普通にピュリフィケイションを魔法で使うときはやってることだから、そのイメージをしても魔力効率が悪いのは変わらない。もっと何か違う発想が必要なんだ。
例えば魔石を砕くとか？　そういえば割れた魔石ってどうなるんだろう？

「マルセルさん、割れた魔石ってどうなるんですか？」
「ああ、割れた魔石は全く使えなくなるんじゃよ。だからただの宝石として加工されるか廃棄されるかじゃな。ただ、魔石はかなり頑丈じゃから、割れることなんて滅多にないぞ」
「そうなんですね……一度溶かして再度丸く加工してもダメなんですか？」
「ああ、確か試そうとしたらしいが、そもそも溶けないと聞いたことがある」

溶けないのか……、でもそれなら温度が低いだけの可能性もあるよな。この世界って鍛冶は結構進んでるから、最低でも鉄が溶ける温度では試したんだろう。でも、それ以上で溶けるのかもしれない。日本にも融点が高い金属はあったし。
試してみたいな。この世界には魔法があって俺は魔力が豊富だから、高温の火は作れる気がする。
でも全属性は明かせないし、これは試してみるにしてもまた後でだな。後で絶対に試そう。

でもこれが今試せないとなると、また他の方法を考えないといけない。他に何かあるだろうか……
あれ？　そういえば製氷機の時に魔石を二個つけたけど、あの時みたいに魔石を何個もつけても意味ないのかな？

あの時は別の属性のもので二個だったけど、今度は同じ魔法を込めた二個にすれば、魔力効率が上がったりしないかな。

「あの、魔石を二個つけるのはどうでしょうか？」

「ああ、それも前にやったことがあるが、結局は意味がなかったぞ。魔力効率は一切変わらなかった」

魔力効率が一切変わらないんじゃ、魔石を一つつけて何度も魔力を補充するのと、魔石を複数つけて補充回数を減らすくらいの差しかないってことか。

しかも補充回数を減らすって言っても、一つの魔石に魔力を補充するので精一杯の人が多いから、魔力を補充してくれる人が見つからなかったら、結局一つの魔石しか使わない結果になりそうだな。全く意味がない。

うーん、なんとか複数魔石をつけることで魔力効率が上がるといいんだけどな。

一つ一つに魔力を込めると効果がない。なら魔石同士をくっつけるとか？　いや、それで解決するなら既に誰かがやってるだろ。

あとは……複数の魔石を一つの魔石だと思って同時に魔力を込めるとか？　そんなことできるのだろうか？

でも試してみる価値はありそうだ。

「マルセルさん、複数の魔石を一つの魔石だと思って、同時に魔力を込めたらどうでしょうか？」

「それは試したことはないが、そもそも一つの魔石に魔力を込めるので普通は精一杯なのじゃ」

そうだった……。でも、満タンに魔力を込めなければできるよな？

「満タンに魔力を込めなければ良いのではありませんか？」
「確かに……それは試したことがないかもしれんぞ。やってみるか」
そう言ってマルセルさんは、ロンゴ先生から魔石を五つと魔鉄をもらい戻ってきた。

１１６、特別教師（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします。
とても励みになります！

117、ピュリフィケイションの魔法具

マルセルさんは魔鉄を薄くお皿のように伸ばして、その上に魔石を五つ置いた。魔石は五つが真ん中に固まって置かれている形だ。

「まずはこの形で試してみるので良いでしょうか？　全ての魔石が一つの魔鉄に触れていれば、成功する確率も上がるかもしれません」

「ええ、とりあえずこれでやってみましょう」

「皆で順番に試してみましょう。では、マルティーヌ様からお願いいたします」

「わかったわ」

マルティーヌは真剣な表情で全ての魔石に触れて、魔力を込めた。

「ダメですわ。一つの魔石にしか魔力が込められません」

「そうですか……」

それからマルセルさんと先輩達が順番に試してみたが、皆失敗した。次は俺の番だ。

「最後はレオンじゃな。やってみてくれ」

「わかりました」

俺は頭の中で五つで一つの魔石となるように、五つ全てが繋がっているイメージをして魔力を込めた。

……これは……、無理だな。魔石と魔石の繋がりがないから、五つの魔石に一つの魔法を込めることは不可能だ。逆に何かしらの繋

がりを作ることができれば、成功するような気がするんだけど……

「レオンどうじゃ？」
「これはできませんね」
「やはりそうか……」
「ただ、魔石と魔石に何かしらのつながりを作ることができれば成功する気がします」

ただ、どうやって魔石に繋がりを作るのかが問題だよな。

「私もそのように感じたわ。魔石同士が繋がっていなくて通り道がないことが原因ではないかしら」
「マルティーヌ様もそう思われましたか」
「ええ、ただその方法が全く思いつかないのよね」
「マルセルさんはどうすれば良いと思いますか？」

俺がそう聞くと、マルセルさんはしばらく考え込んだ後に口を開いた。

「魔石を一つ砕きその破片をそれぞれの魔石の間に嵌め込めば、全ての魔石が一つの魔石で繋がることにはならんか？」
「確かにそれは可能性あるかもしれません！」

同じ種類の魔石で繋げれば可能性あるかもしれないよな！　とりあえず試してみる価値はありそうだ。

「とりあえず思いついたことは試してみましょう。割れた魔石はあるのでしょうか？」
「ブエラに聞いてこよう」

マルセルさんはそう言ってロンゴ先生のところに行くと、一つだけ割れてしまった魔石があったようでそれを持って戻ってきた。

「ちょうど一つだけあったぞ。とりあえず適当な大きさのものを持ってきたから、魔石の間に並べてみるとしよう」

そうして俺たちはまた魔力を込めてみた。まずはマルティーヌからだ。

マルティーヌはしばらく難しい顔で魔力を流そうと努力していたが、結局ダメだったようだ。

「やはり先ほどと変わりませんわ。やってみて気がついたのですけれど、割れた魔石に魔力が流れるのであれば、割れてない魔石にも魔力が流れるのではないかしら」

確かに……割れてない魔石同士で魔力が流れなかったんだから、割れてる魔石でもダメだよな。

さっきは気づかなかったよ。

「確かにマルティーヌ様のおっしゃる通りですな」

マルセルさんはそう言って少し落ち込んでしまった。

「まあ、失敗したということはダメだということが分かったってことですから、一歩前進ですよ！　次を考えましょう。でもその前に、とりあえず全員試してみましょうか」

そうして俺たちはまた順番に試してみたが、誰も成功しない。俺もやってみたが手応えはさっきと同じだ。

そこで俺たちはアイデアがなくなって、皆黙り込んでしまった。

そんな気まずい沈黙を破ったのはロイク先輩だ。

「あの、先ほどは魔鉄に乗せただけでしたが、しっかりと魔石と魔石の間に魔鉄を挟み込むのはどうでしょうか？」

「確かに試してみる価値はあるかもしれんな……」

マルセルさんはそう言って魔鉄の形状を、薄いお皿からいくつかの仕切り板が飛び出している形状に変えた。

そしてその間の一つ一つに魔石を嵌め込んでいく。

「よしっ、これで良いじゃろう」

次こそは！　そう思って気合を入れたが、これも全員が失敗した。

うーん、どうしても繋がってる感じがしないんだよな。魔石から魔鉄には魔力が流れていくけど、魔鉄から魔石には流れていかない感じだ。

何となくイメージとしては、魔石に弾かれてる感じだよな。それならば魔石の中側を繋げれば良いのか？　でもそんなのどうやって……

そこまで考えた時、ふと頭の中に思い浮かんだものがある。針金を使ったら繋がらないだろうか？

日本って充電コードとかも、全部銅線で繋がってたよな。それなら、魔鉄線で繋げられないかな？

魔鉄で針金を作るのは簡単だ。あとはそれをどうやって繋げるかだな。魔鉄って魔石の中に埋め込めるのだろうか？

「マルセルさん、魔鉄って魔石の中に埋め込めるのですか？」

「魔鉄を魔石の中に埋め込むのか？　考えたこともなかったわい。やってみなければわからんのぉ」

「じゃあやってみます」

俺はそう言って、まずは魔鉄で針金を作った。そして魔石に差し込むように力を入れる。

しかし、魔石はつるっとしていて丸いので針金が刺さらない。それに魔石はかなり硬いんだ。これは何か別の方法で穴を開けないと刺さらないかもしれない。

でも魔石に力尽くで穴を開けたら、魔石が割れたことになって魔石自体が使えなくなりそうなんだよな……

もっと魔石が魔鉄を取り込んでくれると良いんだけど。俺は魔石に穴を開けてみるのは最後の手段とすることにして、思い当たることを片端から試してみた。

そうして色々試すこと数十分、遂にできた！！

魔石と魔鉄の両方に俺の魔力を注いでいる状態で、二つをくっつけるようなイメージで魔鉄線を魔石に通すようにすると、驚くほどに全く抵抗がなく魔鉄は魔石に取り込まれた。

凄い！　それから俺は魔鉄線を他の魔石にも取り込ませて、最後に魔鉄線をくっつけて完成とした。

これならいけるんじゃないか……？

俺はこの一連の流れをずっと見守ってくれていた皆に、完成品を見せた。

「とりあえずできました。これであとは魔力が込められるかですね。あと、もし魔力が込められても魔法が常時発動してしまうのでは使えないので、そこも重要ですね」

俺はどうか成功してくれと願いながら、五つのまとまった魔石をマルティーヌに手渡した。

「では、マルティーヌ様からよろしくお願いします」
「私で良いのかしら？　レオンがやってみるのでも良いのよ？」
「いえ、マルティーヌ様にお願いしたいです」
「それならばやってみるわ」

マルティーヌはそう言って真剣な表情になり、魔石に魔力を注いだ。するとすぐに驚いたような表情になる。

「できたわ！　これは成功よ！」
「マルティーヌ様本当ですか！？」
「ええ、流石レオンね。やってみると良いわ」
「やってみても良いですか？」
「ああ、早くやってみるんじゃ」

俺は皆に背中を押されて魔石の前まで来た。そして緊張しながら魔石に手を翳し、ピュリフィケイションの魔法を流し込む。すると一つの魔石だけではなく、全ての魔石が繋がったような感覚で魔法が入っていく。凄い！！
しかも魔法が発動していない。大成功だ！

俺は全ての魔石に、魔石一つ分の魔力だけを入れた。あとはこれで魔力効率が上がってるかだ。
今は魔石一つ分の魔力しか入れてないから、これで魔石を使ってみればどれほど魔力効率が上がったのかわかる。

「五つの魔石が一つの魔石となったように、魔力を入れることができました。そして魔法も発動していないので大成功です！」
「やりましたわね！」
「連結させた魔石に合わせて魔石一つ分の魔力だけを入れたので、

どれほど魔力効率が上がっているのかテストしても良いでしょうか？」

「早くやってみましょう！」

俺たちは魔力効率を正確に測るために、小さな木箱に泥を詰めてそれを何回綺麗にできるかで魔力効率を図っているのだ。俺も今回は、木箱を綺麗にするイメージで魔力を込めた。

その木箱は、ミゼル先輩とロイク先輩がすぐに用意してくれたようだ。

「ありがとうございます。ではやってみます」

俺はとりあえず片手に魔鉄、片手に魔石を持ってその二つをくっつけることで魔法を発動させた。

すると木箱の中は新品のように綺麗になる。まずは一回だ。魔石一個で作るピュリフィケイションの魔法具だと、二回目はいつも綺麗にしきれずに魔力が終わってしまう。

次が完璧に綺麗になれば、とりあえずは成功だ。俺はドキドキしながら二回目のピュリフィケイションを使った。

……おおっ！！　完璧に綺麗になってる！

少なくとも魔力効率は上がってるってことだ。何をしても上がらなかったのに……遂にできた！！

俺が満面の笑みで皆を見上げると、マルセルさんは優しく微笑んでくれていて、マルティーヌは飛び上がって喜んでいる。

そして、ロイク先輩とミゲル先輩は抱き合って号泣している。確かに二人は何年もやってきた研究だもんね。俺たちより感動はひとしおだよな。

「やったぞ！　ロイク！　俺たちの長年の研究の成果がやっと出たんだ！　マルティーヌ様、マルセル様、レオン、本当にありがとうございます」
「ミゲル、本当だね。皆さん本当にありがとうございます！」
「二人の今までの研究と手助けがあってこそだわ。やったわね」

マルティーヌはそう言って二人に手を差し出した。そして二人は恐る恐るその手を取り握手をする。

「私たち全員の成果よ。誇りましょう」
「はい！」

先輩方は全く同時に息の合った返事をして、また涙ぐんでいる。マルティーヌとも仲良くなれたようで良かった。

「では、どれほど魔力効率が上がったのか確認しても良いでしょうか？」

俺は皆が感動しているところに悪いとは思いつつそう言った。さっきからそれが気になって仕方がなかったのだ。
そして俺のその言葉に皆は我に返ったらしい。また真剣な表情に戻っている。

「そうだった。その確認をしなければいけないな。すぐに次の泥を準備する」

そう言ってミゲル先輩が準備をしてくれて、また検証が再開した。

１１７、ピュリフィケイションの魔法具（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！

118、メリットとデメリット

それからしばらく検証を続け、そして結果が出た。何と十五回だ！　十五回も完璧に綺麗にできた。これは凄いなんてものではない。魔力効率が十倍以上になったということだ。

これで持ち運びトイレが完成する！

「これでやっと持ち運びトイレが完成しますね」

「そうですわね。これで旅の問題が一つ解消ですわね！」

俺たちがそうやって喜んでいると、マルセルさんが少し呆れた表情で言ってきた。

「まさか本当にここまで効率の良いものを作り出してしまうとは思っていませんでしたが、これは持ち運びトイレなどという小さな問題には留まりません。この魔石を繋げられるという技術は、かなり影響が大きいでしょう」

まあ確かにこの技術は凄いよな。もしこれによって他の属性も魔力効率が上がるのならば、魔法具の革命になる。

そこの検証もしたほうが良いな。あと、今回は魔石を五個でやったけど、魔石の数を増やしたり減らしたりするとどうなるのかも検証したい。

「確かにこの技術は凄いものだわ。これはお父様に報告するのが先かしら？」

「マルティーヌ様、まずはその前に他の属性魔法ではどうなるかの検証や、魔石の最適な数の検証などもやってから報告するのが良い

のではないでしょうか？」
「確かに検証も必要ですが、簡単な検証のみに留めて、マルティーヌ様のおっしゃる通り先にご報告するのが良いかと思います。レオンも宰相様に報告するのだぞ。これは魔法具登録ではなく技術登録になると思いますが、どのみち職員では手に負えないでしょう」

これはそんなに凄いものなの？　魔法具の魔力効率が上がったところで、便利にはなるけどそこまでじゃないのかな。
俺がそんなふうに疑問に思っていると、マルセルさんが解説してくれた。

「まずこの技術の凄いところは、今まで廃棄したくても出来なかったものを簡単に廃棄できるということじゃ。毒物や人体に影響があるものなど、焼いても廃棄できないものは王宮が回収しているのは知っているか？」
「知らなかったです」
「そういったものは王宮で回収して一つの場所に捨てているのだ。本当は全てピュリフィケイションで消せたら良いのだが、それは効率が悪すぎるゆえ、このような制度になっている。ただ、これからは魔法具を使えばできるようになる」

確かにそういうものにはかなり便利だな。よく考えたら下水の行き先とかもあるのだろうから、そこで使えば簡単に綺麗にできる。
でもそれって良いことじゃないか？　そこまですぐに報告が必要だとは思わないけど……

「問題はここからじゃ。ピュリフィケイションは生物以外は全て消すことができる。それゆえに犯罪の隠蔽が容易になるのじゃ。例えば毒殺を試みるのも容易になる。毒をピュリフィケイションで消してしまえば、証拠は完全になくなるからな」

怖っ……めちゃくちゃ怖い話になってきた。でも毒って元々少ない量だろうから、回復属性の人なら消せるんじゃないのかな？

「毒って少量なので、魔法具を使わなくても消せるのではないですか？」

「いや、毒を消すのにはただの水を消すことの何十倍もの魔力が必要なのじゃ。それゆえに魔力量が五の者でも、本当に少量しか消すことができない」

ピュリフィケイションって、消す対象で消費魔力量に変化あったっけ？　あまり考えたことなかった。

毒とか消したことないし……逆に水も消したことがない。拭けばいいしそのうち乾くからな。

よく考えてみたら、自分の体の汚れとトイレくらいにしか使ったことないかも。これからは色々に使ってみよう。

「それからこれが一番の問題じゃが、もし他の属性でもこの技術が有効だった場合、攻撃魔法を誰でも使えるようになる。今までも魔法具を魔物対策に使えないか研究はあったんじゃが、魔石一つ分の魔力で攻撃魔法は数発しか撃てなかった事で実用には至っていなかった。もともと攻撃魔法は魔力量が多い者でも数発しか撃てない。それが魔法具になったところで倍に増える程度、ましてや途中で魔石に魔力を込め直さなければいけないのでは全く使えなかったのじゃ」

確かに戦闘中に魔法具を取り出して、魔石を魔鉄にくっつけて魔法を発動させるのも面倒くさいよな。魔法具を持ってるのも邪魔だろうし、それなら剣で戦ってたほうが良いと考えるのもわかる。

でも今回の開発でそれが解消されるなら、魔物対策には良いこと

じゃないの？

「これから攻撃魔法が戦いの主軸になるようになれば、もちろん魔物対策には朗報だろう。ただし、戦争の形が完全に変わることになる。今までよりも犠牲者が増えることが予想される」

確かにそうか。今までは剣が戦いの主軸だったのが攻撃魔法に変わるんだ。犠牲者は増えるだろう……地球の歴史でも同じようなことがあったよな。

この技術、公表しないほうが良いんじゃないか？

「マルセルさん、この技術は公表しないほうが良いのでしょうか？」

「いや、わしに判断はできんよ。それゆえに陛下と宰相様に相談が必要じゃ。上手く使えば有益な技術であることは間違いない。ただ悪影響もあるからな」

確かに今の情勢では難しいよな。魔物の森の対策には今すぐにでも使いたいだろうけど、敵対勢力に渡ってしまったら厄介だ。でも、魔法具は基本的に王家が管理してるんだし、短い期間で大量に手に入れることは不可能だろう。

そう考えると、逆に王家が有利となって内戦が起こらなくなる可能性もあるのか。難しい……

犯罪の証拠隠滅が容易になってしまうのは、仕方がないと考えるしかないよな。そもそも貴族って、ピュリフィケイションがなくても簡単に証拠隠滅しそうだし。

「では、これから他の属性でも有効かどうかだけ検証をして、本日帰ったら報告するので良いでしょうか？」

「ああ、そこだけは検証しておいたほうが報告もしやすいじゃろう」

それから俺たちは、ステファンとリュシアンも巻き込んで検証をした。誰も持っていない属性の検証はできなかったけど、検証できた属性にはどれも有効だということがわかった。

しかも、ピュリフィケイションよりも魔力効率が上がる属性もあった。これは本当に凄いものを開発してしまったかもしれない。

そして検証を終えると、ステファンとマルティーヌはアレクシス様に、俺とリュシアンはリシャール様に報告するということですぐに帰路についた。

ロイク先輩とミゲル先輩には、せっかく研究が上手くいったのにお祝いモードにならなくて、本当に申し訳ないよな……。

できれば開発者として王宮に呼ばれて褒められるとか、そうでなくても謝礼がもらえるとかはあったらいいと思ったけど、ステファンもそんなことを言ってたから多分その辺は考えてくれるだろう。

とにかく今はリシャール様に報告しないと。俺は頭の中で何を言うべきか纏めながら、リュシアンと共に馬車に揺られた。

１１８、メリットとデメリット（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです。
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！

119、リシャール様に報告

屋敷に帰ると、珍しくすでにリシャール様が帰ってきていた。そこで俺とリュシアンは、リシャール様の部屋を訪れて報告をすることにする。

夕食まではまだ一時間以上あるから余裕だろう。

「二人から話があるとは珍しいが、どうしたのだ？」

「お祖父様。本日魔法具研究会で、ピュリフィケイションの魔法具を作ることに成功いたしました」

リュシアンがそう言うと、リシャール様はかなり驚いた様子で固まっている。

「何と……研究しているのは知っていたが、まさか成功するとは。あれは何十年も研究されて、結局ダメだったのだが……」

「実は、魔法具の魔力効率をさらに高める方法を開発いたしまして、その方法を使うことでピュリフィケイションの魔法具が実用に足る物となりました」

「魔法具の魔力効率をさらに高められたのか！？　それは、全ての属性魔法に応用可能な方法なのか？」

「はい。まだ色々と検証は必要なのですが、他の属性にも応用できることは確認済みです。ただ、土属性と風属性の者はいなかったのでまだ検証できていません。本日はマルセル殿が研究会に来ていたのですが、検証を進める前にまずは報告をすべきだと言われまして、そこでお祖父様に報告している次第です。ステファン様とマルティーヌ様は陛下にご報告されています」

魔法具研究会は回復属性の人が多くて、他の属性が少ないんだよね。一般的には回復属性が一番少ないはずなのに、珍しい研究会なんだ。

「そうか……とりあえず報告してくれて助かった。まだ実物も見ていないのでよくわからないが、安易に公開するのは避けた方が良さそうだな。魔力効率はどれほど上昇するのだ？」

「ピュリフィケイションの魔法具は十倍を超えるほどでしたが、他の属性ではもっと効果が高いものもありました。火属性は二十倍ほどでしょうか」

「二十倍だと！？」

リシャール様がそう叫んで、ソファーから立ち上がった。そこまで驚くことなのか……まあそうだよな。今までの二十倍の魔法が使えるようになったんだから。そう考えると結構やばいものを作っちゃったのかもしれない。

「それは本当なのか！？」

「はい。しかしまだ検証途中ですので、もっと上がる可能性もあります」

「そ、そうか……もっと……」

リシャール様は今度はそう呟いて、ソファーに力無く座り込んでしまった。

それほど衝撃的なものだったのか。俺たちはやっと成功した嬉しさの方が勝っていて、客観的に見てどれほど凄いものなのか考えていなかった。

「とりあえず、今この場で作ってもらうことはできるか？　魔石と魔鉄はすぐに用意できる」

「私は魔力がもうあまりないのですが、レオンでしたら作れます」
リュシアンがそう断言して俺を見た。リュシアン、俺の魔力は無限だと思ってるよね。一応俺の魔力も尽きることはあるんだからね。まあ、今はまだまだ大丈夫なんだけど。
「はい。私はまだ魔力が十分にありますので作れます」
「では作ってみてくれ」
リシャール様はそういうと、席を外させていた従者を呼んで魔石と魔鉄を用意した。いつも不思議なんだけど、この屋敷って魔石と魔鉄が常備されてるのかな？
まあ公爵家だし宰相だし常備されていても良いのかもしれないけど、誰も魔法具作成の趣味とかなさそうなんだよね。
「ではレオン君、作ってみてくれるか？」
「かしこまりました」
そこからは実際に作成しながら、どのような作りになっているのかを説明していった。作るのはそれほど大変ではないのですぐに出来上がる。
「これが一つの魔石のような働きをします。今は魔石の数が五個なのですが、この数を増減させて検証することでより効果を上げられるかもしれません」
俺はそう言いつつ、リシャール様に魔石を手渡す。
「これはよく思いついたな。これで魔力効率が二十倍とは、本当に素晴らしい技術だ。だがこれを広めることによる悪影響もあるだろ

う。それについて二人は気づいているか？」
「はい。マルセル殿から聞きました。犯罪の証拠隠滅が容易になることや、戦争など争いでの犠牲者が増えることなどでしょうか？」
「その通りだ。パッと思いつくだけでもその辺りは考えつく。もちろん沢山のメリットも存在する。ピュリフィケイションの魔法具が実用化すれば、下水の処理や不可燃性のゴミの処理などがかなり楽になるだろう。それだけではなく、各種魔法具の魔力補充頻度が下がるメリットも、便利さという観点から見ればかなり大きい」

やっぱりその辺がメリットなんだな。

「ただ、その分デメリットも考慮しなければならないだろう。やはり一番大きな問題は、攻撃魔法の魔法具が作られて争いで使用されることだ。ただ、魔石と魔鉄は王家が管理しているのでその点も考えると、王家にとっては有利な技術とも考えられる」

やっぱりそうなるよな。こういうのは材料を押さえてるところは相当有利だ。でも相手も手に入れる手段がないわけではないんだろう。今現在持っている魔法具を作り替えることもできるし。貴族の間では魔法具は普通に買えるものだからな。

「犯罪の証拠隠滅については、今までもピュリフィケイションで毒を消すなどは行われていた。本当に少量の毒ならば魔力量が多い者は消すことができるのだ。それゆえに、これについては今までとそこまで変わらないだろう」

そこまで言うと、リシャール様は頭の中で思考をまとめているようで考え込んでしまった。この技術を広めてもいいのか考えてるんだろうな。

俺はリシャール様が考え込んでる時間で、毒について考えていた。毒を回復魔法で除去できるか試してみようと思ってはいるんだけど、まだ試してないんだよな。

だって毒を回復させられるかを確かめるには、自分が毒を食べなければいけない。どうしてもそれが憂鬱で後回しにしてたんだ。お腹を壊すくらいの弱い毒でも苦しいだろうし……

……あれ。でも殺菌の魔法具って卵の菌を取り除けたよね？　それなら毒も食べる前に取り除けるんじゃないのか？　というか、そもそも菌と毒ってほぼ一緒じゃない？

なんで気づかなかったんだろ……これからは何かを食べる前にはとりあえず回復属性の魔力を流してみよう。毒殺を怖がる必要なかったじゃん！

魔法具も作れるかな？　殺菌の魔法具って魔力効率が悪くて用途を限定しないと作れなかったんだ。でも魔石連結の技術を使えば、殺菌の魔法具も人体に悪影響があるものを全て除去する魔法具として作れる。

そして多分その魔法具って毒も除去するよね……本当になんで今まで気づかなかったんだろう。

この魔法具は作って、リシャール様やアレクシス様にあげようかな。毒見役とかはいるだろうけど、その上でさらに魔法具を使ったらより安全になるはずだ。

そうして考えがまとまって顔を上げると、リシャール様が俺を見つめていたようでバチッと目があった。

えっと……もしかして俺待ちだった！？

「あの、私を待っていてくださったのですか？　申し訳ありません

……」
「いや、別に良いんだが何を真剣に考えていたのだ？」
「先程の毒の話から毒を除去する魔法について思い出しまして……。もしかしたら毒を除去する魔法具を作れるかもしれません」
「また新たな情報だ……」

リシャール様はそういって少し遠い目をした。リシャール様に色々負担をかけすぎたよ……リシャール様ごめんなさい！

１１９、リシャール様に報告（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします。
とても励みになります！！

１２０、毒除去の魔法

「も、申し訳ありません！　今ふと思いついただけですので、また後で検証してご報告いたします」
「いや、ついでだから今報告してくれ。それに悪い情報ではなく良い情報なのだろう？」
「そうですね……良い情報だと思います」

毒殺の心配がなくなるとなったら良い情報だよな。でも、多分公表はできないだろうな……

「では話してくれ」
「かしこまりました。以前クレープを作った時に、殺菌の魔法についてお話ししたのは覚えていらっしゃいますか？」
「ああ、生の卵を食べられるようにするものだったな」
「おっしゃる通りです。あの魔法は、卵の中にいる目に見えないけれど身体に悪影響を及ぼすものを除去しているのです」
「そのようなものがいるのか！？」

リシャール様はかなり驚いた様子で、ソファーから立ち上がりかけたがなんとか踏みとどまった。

「いつもそのように危険な物を食べていたとは……」
「いえ、確かに生で食べると危険ですが加熱することによって死滅します。したがって生で食べなければ問題はありません」
「そうか……それならば良いのだが。それで、その話と毒はどのような関係があるのだ？」
「はい。生卵に入っている悪いものと毒は、人体に悪影響を及ぼす

と言う点で似たものです。したがって、殺菌の魔法と同じように毒も除去できるのではないかと考えました」
「そうなのか……。もしそれが本当にできるのであれば、毒殺の危険が完全に排除できる。その魔法は魔法具にできるのか？」
「殺菌の魔法具は用途を限定することで何とか実用まで持っていきましたが、今回の魔石連結の技術を使えば用途の限定なしに実用化できると思われます。なので毒除去の魔法具も同じようなものだと推測できます」
「そうか……試しに今作ってみてくれないか？」

リシャール様はそういって、先程用意した魔石と魔鉄を渡してくれる。でもまずは毒が除去できるかを試したいから、毒が入った植物とかが欲しいんだよね。

「ありがとうございます。ですが魔法具を作る前に毒を除去できるかを試したいのですが、毒の入った植物や食べ物などを用意していただけますでしょうか？　また、毒入りの料理なども用意していただけると助かるんですが……」

でも毒なんてすぐに用意できないかな。気軽に買えるものでもないだろうし……、もし難しければじゃがいもとかでもいいよな。
俺がそう考えて口を開こうとしたら、その前にリシャール様が了承してくれた。

「わかった。すぐに用意させよう」

……毒ってそんなにすぐ用意できるんだ。やっぱり貴族って怖い。

それから十分程経って、俺の目の前には美味しそうな料理の数々といくつかの植物が並べられた。料理は見た目には毒が入っている

ことなど全くわからない。毒殺ってマジで怖いな……

毒殺の危険性を排除するためにもこの魔法は成功させないと。そう気合を入れて、俺はまず植物の方から試してみることにした。

とりあえずはよく知っているじゃがいもから。これは芽の部分に毒があるんだよな。そう思って全体に回復属性の魔力を行き渡らせると、ハッキリと毒がわかる。

回復属性の魔力を行き渡らせた時の感じは言葉にしづらいけど、何もない時は全体的に真っ白い雲のようなイメージなんだ。何か悪いものがある時はその雲が紫っぽくなっている。その大きさや濃さ、範囲で重症度がわかるんだよな。あとはこれを取り除けるかだ。

俺は病気を治すときや殺菌するときと同じように毒を除去しようと魔法を使った。

すると呆気なく毒を除去できたようだ。うん、できるとは思ってたけどやっぱり簡単にできたな。毒を除去した後にもう一度じゃがいもを魔力で確認してみたけど、もう毒はなくなっていた。

それから綺麗な花や葉っぱなどを次々と試していったが、全て毒を除去できた。

「毒の除去はできたのか？」

「はい。今試した物は全て毒を除去できたみたいです。では次は料理で試してみますね」

料理に入った毒は除去できるのだろうか。全体に毒素が行き渡っていたら難しいような気もするけど……。そう考えつつ俺は、とても美味しそうに見えるスープの皿を手に取った。そして魔力を行き渡らせた。

うわぁ～、凄い毒が入ってるよ。もう紫を通り越して黒に近い。これは食べたら命が危ないんじゃないかな？

俺はちょっと引きながら毒を除去してみた。すると、こちらも普

通に除去することができる。でも強い毒だから結構魔力を消費するな。
やっぱり毒が強いほど、そして毒の量が多いほど魔力を消費する。
まあ、俺の魔力はもはや尽きることはないくらいまで増えてるから、全然気にすることはないんだけどね。気をつけないといけないのは、転移魔法を使った時くらいだ。また転移魔法の練習もしないと。

「リシャール様、このスープの毒は除去できました。試しに食べてみても良いですか？」

俺がそう言って一緒に用意されていたスプーンを手に取ると、リシャール様が慌てて止めた。

「まっ、待て！　それはダメだ。万が一失敗していた場合命を落とす可能性が高い」

やっぱりそんなに強い毒だったんだ……。じゃあもう少し軽い毒から試そう。自分で除去したとはいえ流石に怖い。

「ではどれで試すのが良いでしょうか？」
「うむ……どれも試してほしくはないが、試すのであればそのジャムトーストだ」
「かしこまりました」

俺はジャムトーストを引き寄せて魔力を流す。おおっ、これは薄紫って感じで綺麗な色だ。それでも毒であることに違いはないんだけどね。弱くて少量の毒なんだろう。

「ではいただきます」

リシャール様とリュシアンは凄く心配そうにこちらを見ているけど、とりあえず無視して躊躇なくジャムトーストを一口食べた。
うん。普通に美味い。でも一口食べただけだと毒のないところを食べた可能性もある。そう思って、とりあえず一つを食べ切った。
とりあえず今のところ、体調に変化はないな。自分に回復魔法をかけてみてもどこにも悪いところはない。

「今のところ大丈夫ですが、この毒はどのような作用があるのでしょうか？」
「ああ、食べてすぐに酷く腹を下すらしい」
「それならば大丈夫そうですね」
「本当に毒を除去できるのだな……」
「あのリシャール様、他にも命の危険はないような弱い毒はありますか？」
「ああ、その紅茶も腹を下す程度だろう」
「これですね」

俺はリシャール様の言葉を聞いて紅茶を手に取った。そして、毒を除去しないままに一口飲む。コクッ……毒を除去しなくても味はあまり変わらない。毒が入ってることなんて気づかないかも。
そんなことを考えながら紅茶を飲み、その後に自分を回復属性の魔力で覆う。おおっ……さっきは無かったのに今回は体に異常がある。確かにそこまで強い毒ではないみたいだ。ただ早めに回復させたほうが良いな。
俺は病気を治す時と同じように自分に回復魔法をかけた。すると簡単に治すことができる。
よしっ、これで毒はもう怖くないな。基本的には口に入れる前にチェックをして、最悪は食べてしまっても回復できる。
あとは魔法具にできれば完璧だ。

「では魔法具を作ってみます。リシャール様とアレクシス様は腕輪や指輪を付けることはできるのでしょうか？」
「私と陛下が？　つけることはできるが何故だ？」
「毒除去の魔法具はお二人が一番必要ではないかと思ったのです。お二人に作らせていただいても良いでしょうか？」

俺がそう言うと、リシャール様は驚きの表情を浮かべた後感極まったような表情に変わり、深く頭を下げた。

「レオン君、本当にありがとう。ぜひよろしく頼む」

俺はそんなリシャール様の様子に慌てて頭を上げてもらった。リシャール様は公爵家の当主だった人で今の宰相なのに、平民の俺に頭を下げすぎなんだよね。こっちの心臓に悪いです！

「リシャール様、頭を上げてください！　そこまで大層なものではないですし、材料もいただいているので……」
「いや、これは素晴らしいものだ。しっかりと礼を言わせてくれ」
「では、魔法具が成功してからでお願いします」
「まあ、確かにそうだな……。では作ってみてくれるか？」
「はい」

そうして俺は毒除去の魔法具を作り始めた。

１２０、毒除去の魔法（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします。
とても励みになります！

１２１、毒除去の魔法具

魔石は宝石として使われていたほど綺麗なので、装飾品としても全く問題はない。俺が思いつくシンプルな腕輪でも綺麗な装飾品になった。

魔法を発動させる方法は、魔石の腕輪と魔鉄だけの指輪を作って、それを合わせることで魔法が発動するようにした。別々の腕につければ簡単に魔法を発現させられるだろう。

魔法の発動範囲はとりあえず、半径五十センチほどの球体で、お皿の近くで魔法を発動させれば毒を除去できる。回復属性の魔法はどうしても光が発生してしまうのでそこも改善した。消費魔力量は少し増えるけど、光が発生すると周りにバレるからな。

一番の問題は、毎回毒の種類や毒の強さが変わるものをしっかりと除去できるのかだけど、これは魔石に込める魔法をちょっと工夫してみた。

俺がいつも使っている、回復属性の魔力を対象に流し込むやつ、スキャンとでも言えば良いかな。いつも俺はスキャンをしてから悪い部分を見つけ出して、それに対して回復魔法を使っている。なので魔石に込める魔力も、スキャンからの毒除去で一つの魔法になるようにイメージして魔力を込めた。

これで毒の強さや量に応じて適切な魔力が使われるはずだ。

「とりあえず完成しました。この腕輪と指輪を合わせることで魔法が発動します。魔法の発動範囲は半径五十センチ程の球体にしてあるので、お皿の近くで発動させてください」

「凄いな……これで毒を除去できるのか。腕輪と指輪ならば身に付

けていても問題はない。魔法を発動させると周りに気づかれるだろうか？」
「いえ、光は発生しないようにしましたので、周りの方には気づかれないと思います」
「それはさらに素晴らしいな……」
「とりあえず私が一度試してみても良いでしょうか？」
「ああ、よろしく頼む。そこの牛肉の煮込みにしてくれ」
「かしこまりました」

俺は料理の近くで腕輪と指輪をカチリと合わせて、数秒で離した。何も起きないからわからないけど、多分これで除去できているはず。魔力を流して確かめてみたが、毒は一つもない。
あとはこれよりも強い毒で試してみれば、どんな毒でも除去できるようになっているのか試せるな。

「リシャール様、牛肉の煮込みよりも強い毒が入っている料理はどれでしょうか？」
「それならばそのチキンステーキだが、何をするのだ？」
「強い毒でも弱い毒でも、等しく除去出来るのかを確認したいのです」
「そういうことか。それならば試してみてくれ」
「はい」

そうして俺はチキンステーキにも毒除去の魔法具を使ってみたが、問題なく毒は全て除去されていた。完璧だ！
毒見とこれを組み合わせたら、ほぼ毒殺の危険は無くなるだろう。

「私の魔法でも確認したところ、どのような毒でも完全に毒を除去出来ていました」
「本当に凄いな……。魔力はどれほど持つだろうか」

「そうですね……確かなことは言えませんが、毒が一度もない場合は百回ほどは使えるかと思います。ただ実際に毒があり除去するとなると一気に魔力が減りますので、残りの魔力量を見て毒があったのかを確認できると思います。強い毒であると満タンの魔石三分の一程度の魔力は消費しますので、魔力が残り三分の一以下になる前に魔力を補充してください。またもし魔法具を使用して魔力がゼロになった場合、不完全な除去しかできず毒が残っている可能性もあるので、その食事は絶対に召し上がらないでください」

「わかった。しっかりと注意事項を陛下にもお伝えしておく。この魔法具への魔力の補充はレオン君にしか頼めないが、毎回頼んでしまっても良いのだろうか？」

確かに、そもそも毒を除去する魔法なんて俺にしか使えないからな。殆どの人は軽い怪我しか治せないし。

王立学校を卒業したら、マルティーヌにやったような授業をもっと大勢の人にやりたい。怪我とかはもっと効率良く治せるようになるだろう。

ただ毒除去や病気治癒は魔力量頼みだから、他の人がやるのは難しいんだよな……。マルティーヌも結局は軽い風邪を数日に分けて治すくらいしか出来なかった。

どうにかして魔力量って増えないのかな？　その方法が見つかれば問題解決なんだけど。俺のように馬鹿みたいな魔力量にはならなくても、二、三倍になるだけでかなり変わると思う。

とりあえず今は俺が魔力を込めるしかないな。

「勿論です。同じものを二つお作りして、いつも予備を持っておくのが良いかもしれません」

「ああ、そうしてもらえると助かる。また、他の王族の方々や私の家族の分もお願いして良いだろうか……？　勿論相応の対価は支払う」

それは俺から言おうと思ってたんだ。リュシアン、ステファン、マルティーヌも危険度は高いだろうし。持ってくれていた方が俺も安心だ。

「勿論です。ただ、この魔法具はまだ公には明かせないですよね？」
「そうだな……この魔法具を明かすのはレオン君が王立学校を卒業してからになるだろう。不便をかけて本当にすまないな」
「いえ、それは私のセリフです。本当にお世話になっていますし、守ってくださってありがとうございます。それで毒除去の魔法具を明かせないとなると、バレないように誤魔化せるようにした方が良いですよね……」

この魔法具を公には明かせないとなると、他の人に聞かれた場合の誤魔化しが必要だ。見た目で魔石だとわかるし、魔石の色で回復属性だとわかる。

魔石の色は何も魔力が入ってないと無色透明で、込める魔力によって色が変わる。火属性は赤、風属性は緑、水属性は青、土属性は茶色、身体強化属性は白、回復属性は黄になる。そして魔石の色は魔力が使用されると、段々と端から無色透明に戻っていく。

なので黄色の魔石が嵌っていたら、すぐに回復属性の魔法具だとバレてしまう。

でもそうか、丁度ピュリフィケイションの魔法具を売り出すんだから、腕輪型のピュリフィケイションの魔法具も作れば問題解決かも。全身を綺麗にしてくれる魔法具とかあったら最高だよね！

あっ……でもそもそも魔石連結の技術を公表できないとダメだ。

「リシャール様、魔石連結の技術は公表できないのでしょうか？」
「いや、まだ陛下と相談していないので確定ではないが、この技術は公表することになるだろう。メリットが大きいし、デメリットも

王家が管理することで最小限にできる。また、今まで出来たものの規模が大きくなるだけだからな。ゼロが一になる訳ではない」

そうなのか。公表できるなら良かった。それなら、腕輪型のピュリフィケイションの魔法具を作ることで解決だな。

「それは良かったです。この技術が公表できるのであれば、腕輪と指輪を見た方が疑問に思われないように、ピュリフィケイションの魔法具の腕輪型も開発することにいたします。したがって、もしその魔法具は何だと聞かれたら、ピュリフィケイションの魔法具だとお答えいただけますか？」

「そこまで考えてくれるとは、本当にありがとう。その魔法具はどのような用途なのだ？」

「全身の汚れを落とすものにしようかと思っています」

「何だと！？　その腕輪も欲しいな……ただ二つもつけていたら怪しまれるだろうか。いや、予備ということにしておけば……」

リシャール様、そこで悩むのですか！？　俺はちょっとだけ苦笑しつつ代替案を提示した。

「リシャール様、全身の汚れを落とす魔法具はまた別の形でお作りいたします。例えば、服に隠れるようにペンダント型は如何でしょうか？」

「それはいい」

「お祖父様、いつものシャキッとしたお祖父様にお戻りください。素が出ています」

リシャール様ってしっかりしてて本当にできる宰相なんだけど、たまに気が抜けるのか素が出るんだよね。俺を身内認定してくれたんだと思っていつも嬉しいんだ。

「ごほんっ……すまなかったな。ではそれらの魔法具を頼みたい。魔石と魔鉄はうちにあるものはいくらでも使ってくれて構わない。ロジェに言えばすぐに用意するだろう」
「かしこまりました。ありがとうございます」
「では随分と話が逸れたが、魔石連結の技術については公表することになるだろう。その場合は魔石を連結させる技術を技術登録として、ピュリフィケイションの魔法具を魔法具登録することになる。よって、後ほど登録したい魔法具を全て作成してサンプルとして私のところに持ってきてくれ。この登録は職員ではなく私がやることにしよう」
「かしこまりました。ありがとうございます」
「また陛下と相談して、何かあれば伝えよう。毒除去の魔法具についても伝えておく」
「はい。よろしくお願いします」

そうして俺たちはいち段落して、毒の入ってない普通の紅茶を飲んで一息ついた。毒入りのものは一箇所にまとめておいて、少しずつピュリフィケイションで消していくらしい。
そうだ、この機会にもう一つ話したいことがあったんだよな。もう今日はキャパオーバーだろうか？
でもとりあえず話してみてもいいかな。

「リシャール様、もう一つお話があるのですが……」
「何だ？」

嫌な顔せずに聞いてくれるリシャール様が本当に良い人すぎる。ありがとうございます。

「魔物の森についてなのですが……一度、魔物の森を訪れてみたい

のです」

１２１、毒除去の魔法具（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！

１２２、魔物の森への行き方

俺がそういうと、リシャール様は途端に難しい顔になった。

「それは何故だ？」

「やはり話に聞いただけでは想像しにくいですし、実際に目で見た方が対策も考えられると思うのです。また、どのように鍛えれば良いかもわかると思います」

俺はリシャール様の顔を見ながら真剣な表情でそう言った。この世界って異世界なのに日本のような環境だから、魔物の森とか言われてもどうしても現実だと思えないんだよね。アニメの設定みたいだと思っちゃうし……、いくら話に聞いてもその時は危機感を覚えるけど、それもどんどんと薄れていく。

だから実際に見てみたい。この前聞いたような不思議植物とか実際に見ないと対策なんて思いつかないし、魔物だってどんな力を持っているのか全く知らない。

「それはそうだが……子供がわざわざ危険な場所へ行く必要はない。また魔物の森の近くは、騎士団と貴族の私兵団以外は立ち入り禁止としている」

やっぱりそうなのか……でもどうしても一度行ってみたい。危険だと言っても騎士が一緒にいれば余程のことが起こらない限り大丈夫だろうし、立ち入り禁止と言ってもアレクシス様とリシャール様が許可を出してくれれば絶対に入れるはず。

だからまずはリシャール様を説得しないといけないんだよな……

「リシャール様、貴族の当主はほとんどの者が魔物の森の現状を知っているのですよね？」
「ああ、そうだ」
「では、他の方はどこまで知っているのでしょうか？　例えば配偶者や子供には知らせている貴族が多いのですか？」
「いや、基本的には爵位を継ぐ子供が爵位を継ぐタイミングで知らせている家が多いようだ。配偶者には知らせている者と知らせていない者がいるだろう。基本的にはあまり他へは知らせていない」

やっぱりそうなのか……リュシアンも知らなかったからね。魔物の森の脅威が迫っているのに呑気に内戦を考える貴族が現れるのは、そこも問題なんだよな。
確かに多くの人に知られれば混乱が生じて大変なことになるのは分かるけど、それでもせめて貴族の当主とその家族には知らせても良いと思う。それで実際に魔物の森を見てもらうのが一番早い。
ただ敵対勢力の大人達は魔物の森に近づくことはないだろうから、そこで子供達に魔物の森へ行ってもらうのはどうかな。
王立学校の課外学習とかで魔物の森に行って実際の状況を見れば、それを親に伝えるだろう。また、課外授業に参加しなかったとしても、学校で他の生徒が魔物の森について話していたら嫌でも耳に入るだろう。
貴族の子供達だけならばそこまで大混乱になることはないはずだ。それなら俺も魔物の森に行けるし。

でも俺が魔物の森に行けるように、王立学校には通ってる他の平民も行けることになるんだよね。そこから平民の間に噂が広まることは考えられる。
うーん……、でもそもそも、今の段階は既に噂として魔物の森が危ないと広まっても仕方がない段階だ。多分そのうち嫌でも広まると思う。

それなら、その噂が広まることを予測した上で平民にお触れを出した方が良いんじゃないのかな？　少し嘘を含めるのはしょうがないとして、魔物の森の脅威が迫っているけれど、皆で団結すれば乗り切れますとか。兵士を募集しますとか。
その方向に舵を取る時期だと思うんだよな。そうすれば馬鹿な貴族も少しは現実が見えると思うけど。

「リシャール様、魔物の森について多くの人に知られれば混乱が生じることを懸念するのはわかります。しかし、貴族家の者には全員に知らせても良いのではないでしょうか」
「しかし……知らせる者が増えれば、それだけ話が広まる危険性が高まるのだ」
「それは分かります。ですが、既に隠し切る段階は過ぎているのではないでしょうか。今は魔物の森の脅威について噂が広まることを前提として行動するべきだと思います」
「……確かにそろそろ隠し通すのも難しくなり、陛下とも今後の対応を協議しているところなのだ」
「そうだったのですね。……私の意見を述べても良いでしょうか」
「ああ、どんな意見でも良いので聞かせてくれ。やはり外部からの意見で気付かされることは多々あるからな。最近は外部から意見を聞くと言っても貴族だけになり、考え方が凝り固まってしまうのだ」

リシャール様は平民の俺の意見をしっかりと聞いてくれるし、本当に柔軟で優秀な人だよな。アレクシス様もそうだ。
俺はどんな意見を言ってもしっかりと聞いてくれるだろうと、安心して口を開いた。

「まず、魔物の森についての噂が流れて混乱するのを避けるため、事前に平民に対して魔物の森についての情報を伝えるのが良いかと思います」

「平民に伝えては混乱が起きるのが早まるだけではないか？」
「いえ、伝え方を工夫すれば良いかと思います。例えばですが、魔物の森が広がりこのままではいずれ人が住む場所は無くなってしまう。しかし皆で力を合わせれば打ち勝てる。実際に今は騎士達が抑えている状況だ。だが騎士達だけでは力が足りなくなっているのも事実、そこで魔物の森に対処するため皆の力を借りたい。具体的には魔物の森対策に協力してくれる兵士への応募とそれに伴い必要になる食料の提供をお願いしたい。もちろん相応の対価は支払う。このような感じはいかがでしょうか？」

今咄嗟に考えただけだから粗があるだろうけど、大筋はこんな感じで良いと思うんだよな。平民にこの情報を伝えてから貴族に魔物の森の現状を伝えれば、流石に馬鹿な貴族でも本当にヤバい状況だと理解するんじゃないかな。それでも理解できない貴族は……いそうだけど、でも少数なはずだ。多分……。

俺はリシャール様がどんな反応を示すか少し怖かったけど、恐る恐るリシャール様の顔を見た。するとリシャール様はかなり驚いた様子で考え込んでいる。そんなに驚く要素あったかな？

「レオン君……、有益な意見の提供感謝する。私達は平時の際は平民に助けられているのだから、有事の際こそ平民を守らなければいけないと考えていた。そのため騎士と今現在の兵士だけで解決しなければと思っていた。しかし他の者にも協力して貰えば良いのだな……」

……何でそんな考え方になったんだ？　女神様が平民と貴族は助け合ってって決めたはずなのに。

もしかして……、貴族は平民の最低限の生活を保障しないといけないって言うのが曲解されて、平民は守るべき存在だってなっちゃ

ったのかな？
もしそうだとしたら、どちらの勢力も考え方が極端すぎるよ！
「何も知らされずに魔物の森に飲み込まれるくらいならば、しっかりと情報を得て自分も戦いたいと思う平民が大多数だと思われます」
「確かにその通りだ。陛下と今の意見を参考に話し合おう」
「よろしくお願いします。それからもう一つ意見があるのですが、王立学校の課外授業として、長期の休みに魔物の森へ遠征に行くのはどうでしょうか。もちろん自由参加になると思いますが、子供の頃から実態を見ておけば危機感も高まりますし、子供から大人へ危機感が共有されることもあると思うのです」
「……確かにそうだな。実際に見ることで危機感が高まるのは事実だろう……」
「敵対勢力の家の子供は遠征に参加しないかもしれませんが、学校で嫌でも話が耳に入ってくるでしょう」
「確かに効果が見込めそうだ。子供から大人への情報共有とは、思いつかなかったな……」

上手くいくかは分からないけど、やる価値はあると思うんだよな。というか何で今まで思い付かなかったのだろうか？
うーん、この世界って学校はほとんどないから、学校を活用するって考え方がなかったのかな。あくまでも王立学校は、貴族の子供達が知識を得て人脈を広げるところって感じだもんな。
日本では学校教育で思考を統制することについてとか、たまに話題になってたからね……歴史の授業でもやったし。
そういうのを知らないと意外と思い付かないのかも。
「どちらの意見も陛下と話し合って前向きに検討する。レオン君、貴重な意見感謝する」
「いえ、思いついたことを言っただけですので。粗もたくさんある

と思いますが、検討していただけたら嬉しいです」

そうしてリシャール様との話は終わり、俺とリュシアンは自室に戻った。

ちょっと話は逸れたけど、これで魔物の森に行けるかもしれないな。ずっと気になってたけど遂にだ。

俺は好奇心と恐怖心が混ざったような妙な気持ちで、自室に戻った。

１２２、魔物の森への行き方（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。読んでいただけたら嬉しいです！
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！
とても励みになります！！

閑話　新たな技術の活用法（アレクシス視点）

本日も仕事の山を片付けようと気合を入れたところで、リシャールから大事な話があると言われ人払いを頼まれた。昨日ステファンとマルティーヌから聞いた魔法具の話だろう。

まさか子供達があのような仕組みを考えつくとは……

まあ、レオン様がいらっしゃるのだから当然かもしれないが、それにしても驚くほどの発明だった。

「リシャール、魔法具の話か？」

「魔法具についてと、もう一つレオン様からのご提案についてのお話がございます。まずは魔法具についてからでよろしいでしょうか？」

レオン様からの提案とは何だろうか。かなり内容が気になるが、まずはお互いに情報を得ている魔法具の話からするのが効率的だろう。

「ああ、それで良い」

「かしこまりました。陛下も既にご存知かと思いますが、魔石連結の技術についてでございます。陛下はあの技術、どのように扱うべきだとお考えでしょうか」

昨日ステファンとマルティーヌから話を聞いて、様々なメリットデメリットを考えた。公表することによるデメリットはもちろんあるが、明らかにメリットがそれを上回るだろう。

「私は公表すべきだと考えている。一番の懸念は攻撃魔法具として

使われることだが、魔石と魔鉄は基本的に王家が管理している。それゆえにそこまで大きな問題にはならないと思うのだが、リシャールはどう思う？」
「私も同意見でございます。魔法具を誰にどれほど売ったのかは全て記録してありますので、どの家に幾つの魔石と魔鉄があるかもわかります。したがって攻撃魔法具として使えるという事実は、王家にとって有利となるでしょう」

やはりリシャールもそう考えるか。

「では、この技術は公表することとする」
「かしこまりました。レオン様とリュシアンには、登録したい魔法具のサンプルを作成し、全て私の元へ持ってくるようにと伝えておきました。私が手続きをして魔石連結の技術と各種魔法具を登録しておきます」

流石リシャールだな、仕事が早い。

「ああ、職員では不安だからな。よろしく頼む。登録された有用な魔法具は優先的に作らせて活用しよう」
「魔法具が登録されましたら、魔法具の活用法について会議をいたしましょう」

明らかに国のためとなる魔法具の使い道であれば、会議で却下されることはないだろう。まあ、文句の一つや二つは言われるだろうが。

「それから魔法具について、もう一つお話があるのです」

魔法具についてもう一つ話？　ステファンとマルティーヌからは

この話しか聞いてない。

「何の話だ？」

「実は……レオン様が毒除去の魔法具を開発されまして、これが実物でございます」

「毒除去の魔法具だと！？」

そのような夢みたいな魔法具を開発したとは……つくづくレオン様には驚かされてばかりだ。

「はい。この魔法具は今のところ公表できませんが、陛下と私用にお作りくださいました。これから私たちの家族分も作っていただけるとのことです」

「それは……本当にありがたいことだ。毒見役がいるとは言っても不安は付き纏う。レオン様には感謝してもしきれないな……」

「私達にできる方法で……、少しでもレオン様に恩返しいたしましょう」

私はリシャールのその言葉に力強く頷いた。今は国も大変な状態だが、レオン様に不利益なことが起こらないように最大限力を尽くそう。

私はそう決意を固めてリシャールから魔法具を受け取った。

「この魔法具ですが、こちらの腕輪を左手にこちらの指輪を右手に着けていただきます。そして食事の近くで二つを重ね合わせることで、人体に害のあるものを除去するようです。効果範囲は半径五十センチほどらしいのでお気をつけください」

人体に害のあるものを除去するとは……そのような魔法具を作れるということは、レオン様はそのような魔法が使えるということだ。

使徒様とはこれほどまでに桁違いの力を持っているのだな。

「これは常に身につけるようにしておこう。シンプルだが洗練されたデザインで付けていて違和感がない。だがこれが魔法具だということは誰の目からも明らかだな……どう誤魔化せば良いだろうか」

この魔石を見れば一発で回復属性の魔法具だとわかるだろう。腕輪型の光球と言っても無理がある……

「レオン様はその対策も考えてくださいました。ピュリフィケイションの魔法具で腕輪型のものを作っていただけるようです。何でも身体を綺麗にしてくれる魔法具だとか」

「何だと！？　それも欲しいな……、二つ着けていては不自然だろうか」

「私も全く同じことを申したところ、レオン様が別のタイプの身体を綺麗にする魔法具を作ってくださるとのことでした」

「そうか、それはありがたい」

王族としての服装はどうしても豪華さを重視するために、夏はかなり暑い。服の中は汗だくで気持ち悪いことが多々あったのだが、それも解決するのか。レオン様には返しても返しきれぬ恩が積み重なっていくな。

「では毒除去の魔法具については、レオン様が王立学校を卒業されるまでは公表しないということで良いな」

「はい。そのようにいたします」

これで魔法具についての話は終わりだな。次はレオン様の提案についてだ。先程からその内容がずっと気になっていて、まずそれを聞かなければ他のことが手につかない。

「リシャール、魔法具の話はとりあえず終わりで良いか？　あとは登録されてからの会議で決めよう」
「かしこまりました。では、レオン様からの提案についてですね」
「ああ、先程からずっと気になっていたのだ」
「レオン様からのご提案は、魔物の森の脅威が迫っていることを皆に公表してはどうかというお話でした」

魔物の森についてのことを公表する……？　皆とは貴族のことか？

「皆とは貴族のことか？」
「いえ、貴族は勿論ですが、平民も含めた全国民でございます」

なっ！？　そんなことをしたら国中が大混乱でパニックになるではないか！
それにそのようなことをしても意味はない。結局は騎士が抑え込めるかにかかっているのだから、悪戯に平民を不安にさせたところで国内が不安定になるだけではないのか？
確かにそろそろ情報の規制も難しくなり、平民の間にも噂が広まるかもしれないが、それを自ら早める必要はないだろう。
……ただレオン様のご提案だ。何か重要な意図があるのかもしれんな。

「そのようなことをしても、国内を不安定にさせるだけだと思うのだが……」
「私も最初はそう思いましたが、レオン様の話を聞くうちにそうすべきだと考えを改めました」
「どのような意図があるのだ？」
「はい。魔物の森の脅威について事実を知らせると同時に、皆で力を合わせれば打ち勝てると希望を与える。その上で騎士たちだけの

力では厳しくなっている現実を伝え、皆の力を借りたいと要望するのだそうです。具体的には魔物の森対策に協力してもらう兵士の募集とそれに伴い必要となる食料の提供。またそれに対して相応の対価を支払う。このようにして平民の力を借りて皆で立ち向かうように誘導することで、パニックも避けられ人手と物資を確保できるとのことです」

……確かにレオン様のおっしゃる通りだ。

今まで平民は守るものと考えて共に戦ってもらうなど頭になかったが、このような事態の中では力を合わせねばならないのか。

私は使徒様の教えを理解しているようで、本質では理解できていなかったのだな……。

「リシャール、レオン様のそのご意見はもっともだな。何故その考えに至らなかったのかと自分を恥じるほどだ」

「私もそのように感じました……。レオン様は、平民としても何も知らされずに魔物の森に飲み込まれるよりは、自分の力で戦いたいと思うだろうとおっしゃられていました」

「確かにおっしゃる通りだ。このご意見については内容を精査した後、すぐ実行に移そう」

「かしこまりました。それからもう一つレオン様からのご提案がありまして……」

何と……ここまで有益なご提案をいくつもしていただけるなど、本当にありがたいことだ。

「なんだ？」

「王立学校の行事として、魔物の森への遠征を行ってはどうかとのご提案です。それによって子供たちの間で危機感が共有されること

で、それが大人にまで広がる可能性もあるのではないかと」

……そのように王立学校という場を使うなど、考えつきもしなかったな。

王立学校とは子供を教育する場としか考えていなかったが、確かに王立学校で学んだ考えが各家に広がることになるのか……

遠征に参加しなくとも、王立学校内で嫌でも情報を耳にするだろう。

「リシャール、それも素晴らしいご提案だな」

「私もそう思います。王立学校の新たな可能性に気づくことができました。私はレオン様と話していると、どれだけ自分の視野が狭いのかを思い知らされます……」

「私も同じだ。こうしてリシャールから話を聞くだけでも、自分がどれほど考えが浅いのかがわかる。レオン様から多くのことを学ばせていただこう」

この遠征は却下する理由がないな。騎士をしっかりとつければ危険度も低いだろうし、貴族の間に魔物の森の脅威について共通認識が広まるきっかけになるだろう。

強制参加にしては貴族からの反発も大きいだろうから、まずは自由参加だな。ただ参加することによるメリットを提示すれば、参加する貴族が増えるやもしれん。

何が良いか……

「リシャール、この遠征は採用だ。今年の秋の休みからが良いだろう。強制参加にはできないから自由参加になるが、何か参加するメリットを提示できないだろうか？　貴族が子供を参加させようと思うような強いメリットがあると良いのだが……」

「確かにそのようなものがあれば参加率も上がるでしょう。そうですね……参加した者には勲章を与えるのはいかがでしょうか？　魔物の森に挑んだ者への勲章を新たに作るのです。そして遠征に参加した者には勲章を授与すれば、参加率は上がると思われます。もちろん今現在魔物の森の最前線で戦っている騎士や兵士にも授与しなければなりませんが……」

確かに貴族は見栄を張りたがる者が多い。遠征に参加するだけで勲章をもらえるとなれば、子供を参加させる貴族も増えるだろう。

そのうちに勲章を持っていない家の方が少数派になれば、必ず持っていない家は子供を参加させる。さらに王立学校に通う子供がいない家では、騎士団に所属する者も現れるかもしれない。

やる価値はあるな。

「リシャール、それは良い考えだ。とりあえずその方向で話を進めよう」

「かしこまりました。では本日決めたことの詳細を詰めて、またご報告いたします」

「ああ、よろしく頼む」

そうして私とリシャールの話し合いは終わり、その後は通常の執務に追われることとなった。

レオン様のおかげで希望が見えてきた。私も王として期待に応えられるようにしなければ。

閑話　新たな技術の活用法（アレクシス視点）（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

１２３、研究会での報告

次の日の放課後、俺たちはまた研究会の教室に集まっていた。
昨日の報告の結果をまとめて、ロンゴ先生と先輩達に知らせるためだ。マルセルさんにはロンゴ先生が伝えてくれるらしい。

「昨日父上にお話ししたところ、魔法具の登録は問題ないと言われた。デメリットも王家にとってはそこまでマイナスにならず、メリットがかなり大きいからだそうだ。しっかりと管理さえすれば、国の発展に大きく寄与する技術だと仰せだった」

アレクシス様もその意見なのか。それなら魔法具が登録されることは確実だな。

「お祖父様も同じような意見だった。魔法具は登録されるだろうとのことだ。それゆえに、登録したい魔法具は全てサンプルを作って持って来て欲しいそうだ。お祖父様が登録をしてくれるらしい。登録用紙も預かってきている」

今日の朝、王立学校に行く前に技術登録と魔法具登録の用紙を渡された。それに皆で名前を書くようにということらしい。
今回の技術と魔法具は皆で考えたものだから、そういう場合は全員の名前を併記して登録して、使用料は頭割りだそうだ。

「では、皆で登録したい魔法具を作りましょう。私は持ち運びトイレを作りたいですわ。ミゲルとロイクも一緒に作りませんか？」
「はい！　是非作らせてください」
「私もです！」

「では作りましょう。使いやすい形などもしっかり考えないとですわ」

そうして三人は一つのテーブルに向かっていった。残ったのは俺とリュシアンとステファンだ。

「レオンはどうするんだ？」

俺はとりあえず、ピュリフィケイションで身体を綺麗にする魔法具を作りたい。

あと本当は、ヒールも魔法具にできたらいいと思ってるんだけど、ヒールは実際に患者がいて患部を見ていないと上手くいかないんだよね。

前にヒールを魔法具に込められないか試したけど、どこをどんなふうに怪我しているのかわからないとダメだったんだ。多分他の魔法よりイメージが大事なんだと思う。回復魔法はイメージがしっかりしてないと失敗することもあるらしいし。

それでも無理やり作ろうとしたんだけど、そうすると怪我をしているところを全て治すといった漠然とした魔法になって、魔力効率がかなり悪くなるんだよね。

あっ……でも、昨日毒除去の魔法具を作る時にスキャンしてからの毒除去も成功したから、同じようにすればヒールも魔法具にできるのか？

……なんかできる気がする。でもヒールの魔法具って多分公表できないやつだよね。スキャンって相当魔力量が多くないとできないし、魔石連結で魔石に入れられる魔力量が増えたからこそ込められた魔法なんだ。

うーん、俺しか出来ないのなら確実に公表できないだろうし、ヒールは普通に誰でも魔法で使えるし、それなら今は作らなくてもい

いかな。

「私は身体を綺麗にする魔法具を作ろうと思っています。お二人はどうされますか？」

「私達は思いつくものがなくてな。レオンと一緒に作っても良いか？」

「もちろんです」

そうして俺達三人は、マルティーヌ達とは別のテーブルに座った。そして俺は昨日作った毒除去の魔法具と、全く同じ形の魔法具を作っていく。身体の表面や髪の毛などに付いた汚れを取り除くイメージで……

よしっ、完成だ。昨日一度作ったからすぐに出来上がるな。

「レオン、それはどの様にして使うのだ？」

ステファンが不思議そうに魔法具を見ている。身体を綺麗にするからお風呂の魔法具って名前かな？

……流石にそれはカッコ悪いか。洗浄の魔法具とかの方が良いかな。

「これは洗浄の魔法具と言いまして、こちらを左手首にこちらを右手の指に着けて使います」

「腕輪と指輪なのか」

「おっしゃる通りです。試されますか？」

「ああ、試してみよう」

そうしてステファンは洗浄の魔法具を装着した。

「この二つを合わせれば魔法が発動するのか？」

「はい。数秒合わせていただければ魔法が発動すると思います」
ステファンが俺の言葉に頷いて腕輪と指輪を合わせると、ステファンの顔が驚きの表情に変わった。この魔法具も光を発さないようにしたので周りから変化はわからないけど、毒除去の魔法具と違って本人は違いがわかるからね。
「これは……素晴らしいな。汗でベタついた感触も全くなくなる」
「こちらの魔法具は皆様に受け入れられるでしょうか？」
「ああ、貴族は皆欲しがるだろう。暑くても正装をしなければならない時などには必須になりそうだ。騎士も欲しがるだろうな」
昨日のリシャール様の反応でもわかったけど、皆が欲しがるのなら良かった。もしかしたら、貴族はお風呂に入れるからいらないのかもと思っていたんだ。
「ステファン様、私も試してよろしいでしょうか？」
「ああ、試してみてくれ」
「かしこまりました」
そう言って今度はリュシアンが魔法具を試す。
「確かにこれは凄いな……。一度知ったらやめられないぞ」
「どこか不都合な点はありませんか？」
「そうだな……、今は全身全て綺麗になってしまうが、首から下だけが綺麗になる魔法具を欲しい者もいると思うぞ」
「確かにそうだな。女性はメイクをしているし、男性もワックスで髪を固めている者もいる。休憩室で使うのであれば全身を綺麗にしてからまた整えれば良いが、退出できない場面で使いたい時は身体だけのものもあったら便利だろう」

「確かに、おっしゃる通りですね。貴重なご意見ありがとうございます」

確かにこの魔法具で全身を綺麗にすると、メイクやワックスなども落ちてしまう。身体だけの洗浄の魔法具と全身の洗浄の魔法具の二種類作っておいた方が良いかも。やっぱり貴族が使うものは貴族の意見を取り入れた方が良いものになるね。

そう思いつつ、俺は魔法具を作り上げた。

ふぅ～、思いのほか早く終わっちゃったよ。まだマルティーヌ達は熱心に作ってるみたいだし……

二人が研究していた魔法具の話でも聞こうかな。

「お二人はどのような魔法具の研究をしていたのですか？」

「私は結局良い魔法具が思いつかなかったのだ。水属性は水を出せることが一番の利点だからな、色々と考えたが全て水道があれば事足りるものしか思いつかない」

確かに水属性って難しいのかも、水道は強い。何か考えるとしたら……、洗濯機かな。

洗濯機を作ったら洗濯がかなり便利になる……あれ？　そういえばピュリフィケイションって服も綺麗にできるよね？　さっきの洗浄の魔法具は身体を綺麗にしたけど、服を綺麗にする魔法具があったらそれも売れそうじゃないか？

貴族の服は高いから傷まないようにしたいだろうし、前にロジェが洗濯には気を使うって言ってた。

それならピュリフィケイションでの服の洗浄は、貴族にはもってこいの品だな。これも作ろう！

でもそうなると水属性の魔法具が思いつかない……。うーん、水

を使う場面といえば、水道、トイレ、お風呂そのくらいだよね。
何か作れるとすればお風呂だろうか？　お風呂なら足りないのはシャワーだけど、シャワーを作るとしたらお湯をまず作らないといけない。火属性と組み合わせるにしても難しいし……。そもそもお湯なら、既に水道と湯沸かし器があるんだから作れる。あとはシャワーの仕組みだけだから、それは技術登録だよね。

そうなると水属性は何もない……あっ、でも洗濯機も作ったら需要あるのかな？　貴族の服はピュリフィケイションで綺麗にするとしても、使用人の服や訓練着なんかは洗濯機で洗っても良いだろうし。

そうだよ、洗濯機を作っても良い気がする。そして服を綺麗にするピュリフィケイションの魔法具も作ろう。

名前は……クリーニングの魔法具とかでいいかな。

……本当はもっとかっこいい名前を考えたいんだ。だけど魔法具はわかりやすい名前が一番だろうし、そうなると結局そのままのダサい名前になるんだよね。光球みたいなかっこよくてわかりやすいやつが理想なんだけど。

そういえば、光球ってマルセルさんが開発したんだよね？　もしかして名前を考えたのもマルセルさんだったりする？

もしそうなら、マルセルさん名付けのセンスあるよ。俺も名付けのセンスが欲しい、マルセルさんに負けてる！

まあでも……、今回はクリーニングの魔法具でいいか。

俺は名付けについては早々に諦めて、ステファンに魔法具について話すことにした。

１２３、研究会での報告（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

１２４、新しい魔法具作成

「ステファン様、一つ思いついた魔法具があるのですが、それを一緒に作られませんか？」
「今思いついたのか！？　レオンは本当に規格外だな……」

ステファンが呆れたような顔でそう言った。そんなこと、なくもないけど……

「ただレオンが思いついたものはレオンが作れば良いだろう？」
「いえ、私は回復属性ですのでステファン様がお作りください」

本当は自分の属性でない魔法具を思いついた時でも、誰かに魔力だけを借りて思いついた人が登録するんだけど、俺はこれ以上目立ちたくないのでステファンに登録して欲しい。
そんな思いを込めてステファンの顔を見つめていると、理解してくれたのか了承してくれた。

「わかった。しかし登録は連名とする。これは譲らない」
「……かしこまりました」
「それで、どのような魔法具を思いついたのだ？」

ステファンがそう言って興味津々の顔で聞いて来たが、リュシアンがそれを遮った。

「お待ちください、私が考えている魔法具について先に話をしてもよろしいでしょうか？」
「ああ、リュシアンの話をしていなかったな。そちらが先で良い」

「ありがとうございます。レオン、私は作りたい魔法具を考えたのだ。お風呂に入ったあと、髪を乾かす魔法具はどうだろうか？」

俺はその提案を聞いてかなり驚いた。

リュシアンは自分でドライヤーを作ろうと思いついたんだよな。その発想ってなかなかできないと思う……やっぱりリュシアンって天才だ。

「それは素晴らしい発想だと思います」

「ああ、だが上手くいかないのだ。炎を近づけ過ぎれば髪が燃えるし、遠ければあまり意味はない。そこでレオンの意見も聞いてみたいのだが……」

「そうですね……、やはり風魔法を使うのが良いかと思います。炎と風で熱風を作り出せればそれによって髪が乾くでしょう。ただ、風によって炎まで髪の方に来てしまうとそれもまた髪が燃えてしまいますので……」

「風か。確かに良いかもしれないぞ。考えてみよう」

リュシアンはそう言って真剣に考え込んでしまった。リュシアンって魔法具を作る才能があるんじゃないか？

俺はどんな魔法具が出来上がるのかワクワクしながら、リュシアンの様子を見ていた。髪を乾かさずにそのままでいるのは嫌だと思ってたんだよね。夏はいいんだけど冬は寒い。

俺もリュシアンに負けないように頑張ろう。

「ステファン様、では私たちも魔法具を作りましょう」

「ああ、それでどのような魔法具なのだ？」

「洗濯機という魔法具を作りたいと思います」

「洗濯とは、服を洗うことだよな？」

「はい。水魔法で水がぐるぐると回るようにし、そこに服を入れる

ことで服が綺麗になるような魔法具です」

そうだ。洗濯機を作るなら脱水の魔法具も作った方が良いかも。脱水の魔法具を作るなら風魔法だよね。

リュシアンのドライヤーも風魔法だし、風魔法の人って誰かいたっけ？

うーん、多分公爵家と王家にはいるんだろうから、その人に頼めば良いのかな。

「もしそれが作れたのならば、使用人にとっては便利になるであろうな」

「はい。しかし貴族の服では洗濯をして傷めたくない服も多々あると思いますので、そういう服のためにピュリフィケイションで服を綺麗にする魔法具も作ろうと思っています」

「それは素晴らしい。そちらはより喜ばれるだろう」

「ではどちらも作りましょう」

そうして俺たちは、各々魔法具を作りはじめた。

クリーニングの魔法具はどういう形にしようか迷ったけど、四角い箱のような形にした。服はそれぞれ形が違うので、箱の中のものを綺麗にする魔法の方が効率的なのだ。服は畳めるからね。

そうして魔法具はすぐに完成した。俺は日本で様々なものを見てきたから、どういう形にしようか迷うことがないのですぐに作り終わる。

ステファンを見てみると、まだどのような形にするか悩んでいる様子だ。

「ステファン様、何かお手伝いできることはございますか？」

「いや、私一人で頑張ってみる」

「かしこまりました」

それなら……、リュシアンを手伝おうかな。やっぱり火と風を組み合わせるのは難しく考えがまとまらないみたいだ。ここに風魔法を使える人がいないから、試してみることもできないのが大変な理由だよね。

俺は周りを見回して皆が真剣に魔法具作りに取り組んでいることを確認し、リュシアンだけに聞こえる音量で言った。

「リュシアン、俺が風魔法を使おうか？」

「でも、全属性は秘密だぞ？」

「この部屋でバレちゃダメなのはロンゴ先生と先輩達だけだけど、ロンゴ先生はさっき自分の部屋に戻ったし、先輩達は背を向けて真剣に魔法具を作ってるし大丈夫だよ。風は目に見えないし」

「そうか……なら頼む。この鉄の箱の中に火が作られるんだが、周りの温まった空気を送る感じで風魔法を使ってみてくれないか？」

「わかった」

リュシアンが指し示したのは、両掌に乗るほどの鉄の箱に４本の足がついているものだった。足の先には石かレンガのようなものがついている。

これを机などに置いて使うのか。今日までにここまで考えて鍛冶屋に作ってもらったんだな。やっぱりリュシアンは魔法具を作る才能があるよ。

俺は鉄の箱に手を近づけてみたが、かなり熱そうだ。周りの空気も熱くなっているので、周りの温まった空気を送るように風魔法を使ってみた。

すると確かに温かい空気はきた。だけどちょっと、いやかなり微妙な温かさだ。これでも良いのかもしれないけど、もう少し温度が高い方が良さそうだよな。

「リュシアン、もう少し温度が高い方が良くない？」
「今同じことを思っていたんだ。どうすれば良いだろうか？」
「うーん、箱の上部に細かい穴を開けたら？　火の温かさって上に行くから、そうすればもっと空気の温度が上がると思うよ。それに上に穴を開けるだけなら、火に風が当たるわけではないから危険度も低いと思うけど……」
「確かにそうだな。また鍛冶屋に頼まなければいけないか」

うーん、できれば今やってみたいな。穴を開けるだけなら工具があればできそうだけど、これそこまで分厚い鉄じゃなさそうだし。

「何か穴を開ける工具はないのかな？」
「私はわからないが、この部屋には色々あるぞ？」

そうなんだよな。この部屋には机の上や棚に様々な道具が入っている。ロンゴ先生の部屋に入りきらないものがこの部屋に送り込まれてる感じだ。
俺は道具類がありそうなところに重点的に探していった。すると、トンカチの端が鋭く尖ったようなものがあった。本来の用途はわからないけど、これは使えそうだな。
そう思ってその工具を持ちリュシアンのところに戻った。

「これで穴を開けられるか試してみるね」
「ああ、そのようなもので鉄に穴が開けられるのか？」
「わからないけどやってみるよ。危ないから下がっててて」

リュシアンが遠くに下がったのを確認して、俺は皆から一番離れた部屋の隅で、皆に背を向けて穴を開ける。
工具が壊れないようにバリアを使いたかったのだ。バリアは時々試しているけどかなり頑丈で、魔力を込めるほど頑丈になる。なの

で工具をバリアで覆ってしまえば、鉄でも穴が開けられると思う。
俺は工具をバリアで覆い、バリアで鋭く尖った部分を作った。そして身体強化魔法を使い、鉄の箱に向かって工具を振り下ろす。
どのくらいの力を込めれば良いのかわからなかったので軽めにやったが、しっかりと穴が開いたようだ。
ちょっとやりすぎたぐらいだ……。バリアの切れ味が凄すぎる。
それから何度か同じようにして穴を開けた。とりあえずお試しだからこのくらいで良いかな。

「リュシアン様できました」

今度は皆に聞こえる音量の声だったので、敬語で呼びかける。するとリュシアンはすぐに近づいてきた。

「おおっ。しっかりと穴が開いたな」
「これで試してみましょう」

そうしてまた火を発現させて風魔法を使ってみた。するとさっきよりは温度が上がっている。こっちの方が良い！

「さっきよりもこちらの方が良いな。これで完成だ！」

リュシアンは満面の笑みで嬉しそうにしている。ほとんどリュシアンが考えたからね。

「リュシアン様、凄いですね！」
「ああ、かなり嬉しいぞ」

それからしばらくして皆の魔法具が完成した。マルティーヌ達の

持ち運びトイレも使いやすい形に仕上がったようだ。
そこで俺はリシャール様から渡された登録用紙を取り出し、皆に名前だけを書いてもらった。
魔石連結の技術は俺だけの登録で良いって皆に言われたけど、今まで皆で考えた結果だしピュリフィケイションの研究をしていた四人の連名にした。マルセルさんは名を連ねなくても良いそうだ。
その他の魔法具もそれぞれ作った人の名前を書いた。ドライヤーはもちろんリュシアンの単独だ。

「ではこれらのサンプルと登録用紙を持ち帰り、お祖父様に責任を持って渡そう」
「ああ、よろしく頼む」
「よろしくお願いいたします」

そうして今日の研究会は終わりとなり、俺とリュシアンは屋敷に帰りリシャール様に魔法具を渡した。
回復属性でない魔法具もあったことに驚いていたけど、全て登録してくれるそうだ。乾燥機も屋敷で作って追加で渡しておいた。
それから魔石連結の技術だけど、魔石の個数での魔力効率の変化については、技術登録後に王宮で研究してくれるらしい。王宮で引き受けてもらえるならばありがたいとお任せした。
また、魔物の森への遠征についても行われる予定で調整中だそうだ。秋の休みって言ってたから、秋の休みは予定を入れないようにしておかないと。

これでもっと生活が便利になったら嬉しいな。でも次からの研究会では何をしようか……、また新しい魔法具をのんびり研究かな。
そんなことを考えながら俺は自室に帰った。

１２４、新しい魔法具作成（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

１２５、レオンの待遇

今日は遂に回復の日、クレープ会をやる日だ。ロニーはこの会が決まってから、今日までずっと緊張していた。
今日は少しでもロニーがリラックスできるように頑張って手助けしようと思う。まあ、ロニーは公爵家の屋敷にいるっていう事実だけでずっと緊張してそうだけどね。

そして俺は今、ロニーを迎えにいく馬車の中にいる。ステファンとマルティーヌはお昼時に屋敷に来るらしいので、その前にロニーを迎えに来ているのだ。
俺がロニーを迎えに行くと言ってもロニーは荷車をひいていくからと散々断ってたけど、荷物も沢山あるし何より公爵家は広場よりさらに遠いので無理矢理迎えにいくと約束した。
公爵家の馬車だけど、俺の実家にもよく来ていた質素な馬車だから大丈夫だろう。

そうして公爵家からしばらく馬車に揺られ、ロニーの家の近くまで来た。ロニーの家の前までは道が狭くて行けないので、馬車には少し離れたところで待ってもらい俺はロニーの家まで歩いて向かう。
本当は一人で行こうと思ってたんだけど、ロジェが当たり前のように付いてくるから二人だ。
最初はどこにでも従者がついてくるのは窮屈だと思ってたけど、最近は慣れてきた。自分ではあんまり自覚はないけれど、もう貴族の生活に染まってるのかもな。
そんなことを考えつつ裏路地を進み、ロニーの家の前まで辿り着いた。そしてロニーの部屋のドアをノックする。

「ロジェ、俺がやるからね」
「……かしこまりました」

ロニーへの声掛けは流石に俺がやった。ロジェは俺にやらせるなんてって感じだったけど、ロジェの声で呼びかけられたらロニーの心労がまた追加されちゃうよ。

「ロニーいる？」
「は～い。ちょっと待ってー」

俺がロニーに呼びかけるとそんな声が返ってきて、すぐに部屋のドアが開く。結構声が明るいから緊張しすぎてやばいって感じじゃないのかも。

「レオンお待た……」

あぁ……せっかくロニーがにこやかで明るい顔だったのに、ロジェが視界に入った瞬間に顔が強ばって固まっちゃった。
確かにロジェって無表情だから、初対面の人は怖いのかもしれない。服装も公爵家の使用人のものでかっちりとしているし、俺も最初は無愛想で怖い人だと思ってた。
今ではロジェが俺の従者で良かったと思ってるんだけど、初見だと良いところはわからないよね。

「ロニー、こちらは俺の従者でロジェ。無表情だけど怖くないから大丈夫だよ」
「ロジェと申します。よろしくお願いいたします」
「あ、は、はい！　あの、ロニーと申します。よろしくお願いいたします」

そうして二人は挨拶をしたが、すぐに沈黙が場を支配する。ロジェは必要以上に話さないしロニーも気軽に話しかけるタイプじゃないし、もしこの二人だけにしたらめちゃくちゃ気まずい空気が流れそうだ。

俺はこの微妙な空気を断ち切るように、殊更明るく声を出した。

「ロニー、荷物は三人いるから荷車じゃなくても持っていけるかな？」

「う、うん！　三人ならギリギリ持てると思うけど、持ってもらってもいいの？」

「勿論だよ。じゃあ荷物を運んじゃおうか」

そうして三人で手分けして荷物を持ち、また歩いて馬車に戻る。荷物はロジェが大量に持ってくれたので俺とロニーは楽チンだ。

ロニーはその事実に恐縮して何とか自分で荷物を持とうとしてたけど、ロジェがどんどん持っていってしまったので諦めたみたいだ。

「レオン、レオンに従者なんているの？　僕聞いてないよ！」

歩きながらロニーに、小声だけど強い口調でそう話しかけられた。確かにロニーにはロジェの話をしたことなかったかも。

「ロジェの話はしたことなかったよね」

「驚くから事前に教えてよね！」

「そんなに驚く？」

「驚くに決まってるよ！　普通貴族の後見がある平民は、従者として働いてることはあっても従者がついてることはないよ！」

やっぱりそうなんだね。前にロンゴ先生にも驚かれたんだ。俺の待遇ってかなり良いんだろうなぁ、本当にタウンゼント公爵家には

感謝だ。

「でも、俺にはロジェがついてくれてるんだよね。多分俺の待遇ってかなり良いんだと思う」

「かなりどころじゃないよ！　ありえない待遇だからね！」

「そんなに？」

そんなに言われるほどありえない待遇なのか。

まあ、俺が普通の平民だと考えるとそうなのかも。この待遇になったのは俺が全属性って理由も大きいだろうし。

「そういえばずっと聞いてなかったけど、レオンは何で公爵家に後見していただけることになったの？」

確かにそれ疑問に思うよね。でも何でって言われると困る。

最初はただの偶然と……、公爵家の勢力にとって俺の身分と能力が望ましかったからだよな。

「うーん、説明が難しいんだけど、公爵家の勢力にとって俺の能力と身分が役に立つものだったからかな」

「でももしそうだったとしても、普通はここまでの高待遇にならないよ」

そう言われると……、改めて考えると何でだろう？　最初からこんな待遇だったよね？　やっぱり俺が使徒様との共通点があるからかな。マルティーヌに使徒様だと思われてるって前に言われたし。

そう考えると、使徒様として祭り上げられないようにもっと気をつけないと。使徒様を騙った罪とかで天罰を受けたら防ぎようがない。

「まあ、公爵家の皆さんが凄く良い人たちだからじゃないかな。だからロニーも心配しなくて良いからね」

全属性のことも言えないので誤魔化してそう言うと、ロニーは釈然としない顔をしながらも頷いた。

「納得できないけど……わかったよ」

それからしばらく歩き馬車にたどり着いたので、俺たちは荷物を全て乗せて馬車に乗り込む。

ロニーはリラックスした様子で座ってるけど、意外と緊張してないのかな？

「ロニー、そんなに緊張してない？」

「うーん、何かもうなるようになると諦めたというか……ちょっとは慣れたのかも。今はあんまり緊張してないよ。でもお屋敷に行ったら流石にやばいかもしれないけど」

おおっ！　ロニーが成長してる。これから貴族と接することも増えるだろうし、慣れておくとこれから先は楽になるだろう。

「段々慣れていくといいね」

「うん。レオンは慣れすぎだけどね。本当に平民なの？」

ロニーが恨みがましいような目で俺をじーっと見つめてくる。

「俺も最初は緊張してたけどもう一緒に住んでるし……。こんなこと言ってもいいのかわからないけど、もう一つの家族というか、そんな感じなんだよね」

この前リュシアンとリシャール様と話して、その気持ちが芽生えたんだよな。もう今となっては公爵家の屋敷は帰る場所だし、落ち着く場所になっている。

「はぁ～。既にわかってたんだけど、今日でより理解したよ。レオンは特別なんだね。レオンだから、これで全部納得することにする」

なんか俺が普通じゃないみたいじゃないか。まあ確かにそうなんだけど、何も反論できないけど、でも素直に頷きたくない。

「……そんなことないと思うよ」

俺はせめてもの抵抗で小声でそう返した。するとロニーは俺をジト目で見て口を開く。

「レオンは普通じゃないからね！　絶対特別だから！　レオンはもう平民だと言わないように！」

「でも、俺は平民だし……」

「すご～く特別な平民ね！！　絶対に普通の平民じゃないから！！」

「まあ、そうかもしれないけど……」

「かもしれないじゃなくて絶対そう！　わかった！？」

「わ、わかったよ……」

なんかロニーが強くなってる。もしかして色々に巻き込んでる俺のせい？　良いことなのかもしれないけど、なんかごめん……

そうしてそんな話をしているうちに、屋敷に到着した。そして馬車から降りると、使用人が来て荷物を下ろしてくれる。

「荷物は全部食堂に運んでくれる？」
「かしこまりました。荷物は使用人に運ばせますので、レオン様とロニー様はお部屋でお待ちください。ロニー様の客室もご用意しておりますが、いかがいたしますか？　レオン様の部屋にお茶をご用意することもできますが」
「ロニー様！？　僕の客室！？」

ロニーがロジェの言葉に驚き声をあげて、うるさかったことに気付いてハッと口を手で塞ぐ。

「ロニー様はリュシアン様とレオン様のお客人ですので、客室もご用意しております」
「あ、ありがとうございます。ただ、あの、レオンの部屋でお願いします」
「かしこまりました。ではお部屋にご案内いたします」

そうして歩き始めたロジェに続いて、俺とロニーは歩き出した。

１２５、レオンの待遇（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューを是非よろしくお願いします。

１２６、レオンの部屋

ロニーと共に俺の部屋に入りソファーに座ると、ロジェはお茶の準備のために部屋を出た。

「レオン、僕が客人ってどういうこと！？」

「俺も初めて聞いたんだよ。多分リシャール様とリュシアン様の話でそうなったんじゃないのかな？」

今回ロニーとステファン、マルティーヌが公爵家を訪れることは、リュシアンがリシャール様に報告したんだよね。俺はその場にいなかったからどんな話がされたのか知らないんだ。

「そうなんだ……。何かもう色々驚きすぎて疲れたよ……まだ何もしてないのに」

「まだこれからが本番だよ。でも高待遇なのは良いことだから、そこは喜んでおけば良いんじゃない？」

「まあそうだよね。邪険にされるよりは絶対に良いしありがたいよね。でも期待に応えなきゃと思って逆に緊張するよ！」

ロニーはそう言いつつも、どこか吹っ切れたような顔をしている。やっぱりちょっとは慣れてきてるのかも。

「そういえばここがレオンの部屋なんだよね？　レオンがこんな良い部屋に住んでるなんて……それくらい事前に教えてくれたっていいのに」

ロニーは俺の部屋を見回しながらそう言った。確かにロニーには、

公爵家でのこととかあまり話さないようにしてたんだよね。怖がられたくないなって思いが無意識にあって避けてたんだ。
でもこれからはもう少し話すようにしようかな。

「これからは公爵家でのことも話すことにするよ。ちなみにここが俺の部屋だけど、元は客室だったんだ。そこを俺の部屋にしてくれたの」
「そうなんだ……。普通は平民なら使用人部屋とかだよね？　平民に客室を与えるって普通じゃないよね？　もしかして、公爵家ではこれが普通なの？　違うよね、絶対レオンがおかしいんだよね。レオンといると何が普通なのかわからなくなってくるよ……」

ロニーが遠い目をしながら何かをぶつぶつと呟いている。でも声が小さすぎて何を言っているか聞こえない。

「ロニー？　何言ってるの？」
「独り言だから気にしないで……」
「それならいいけど……。そうだ、まだ時間もあるし何か疑問とかあれば何でも答えるよ」

俺がそう言ったところでロジェが入ってきて、二人分の紅茶を淹れてくれた。
そしてその紅茶を飲みながら話を続ける。

「この部屋ってレオンが一人で使ってるんだよね？」
「そうだよ」
「その衝立の向こうは？」
「ベッドがあって、トイレとお風呂に続くドアがあるよ」

俺がそういうとロニーがまた遠い目をする。

「じゃあレオン専用のトイレとお風呂ってこと？」
「そう。最初は俺もかなり驚いたよ」
「僕も今凄く驚いてるよ……。じゃあ疑問とかじゃないんだけど、部屋を見て回ってもいい？」
「全然良いよ！　案内するよ」

俺たちはそうしてソファーから立ち上がり、まずはお風呂から見て回ることにした。

「このドアがお風呂に繋がってるんだ。入ると脱衣所があって、脱衣所の奥にあるドアの向こうがお風呂だよ」

俺がそういうとロニーは恐る恐る脱衣所に入り、お風呂のドアを開けた。

「うわぁ～広い！　お風呂の実物って初めて見たよ。こんな感じなんだね」
「ロニーもお風呂入りたい？　それならクレープ会の後に入ってくれても良いけど」
「いや、僕はいいよ。一度入るとまた入りたくなりそうだから」
「そっか」

俺はいつでもここに入りに来ていいよって言おうかと思ったけど、それはやめておいた。
お風呂に入るためだけに公爵家に来るのは流石に厳しいよね。役人になれば大浴場のようなものがあるらしいから、お風呂にも入れるようになるだろう。

「じゃあ次はトイレだね」

そうして次はトイレへと案内した。特に説明することもないので中をざっと見るだけだ。トイレは王立学校にもあるからそこまで珍しくはないだろう。
そうして部屋にある様々な装飾品も紹介していき、最後にクローゼットの中を見せることになった。

「本当に見てもいいの？　別に中まで見せなくてもいいけど？」
「でもさっき気になってるみたいだったから。全然見ていいよ。面白いものが入ってるわけじゃないけど」
「じゃあ、失礼しまーす……」

ロニーは控えめにそう言ってクローゼットを開けた。クローゼットの中身はとにかくたくさんの服や装飾品だ。ロジェが片付けてくれているので、中は綺麗で見やすい。
王立学校に行くためにリシャール様が買ってくれたものもあるし、自分で後から買い足したものもある。
一際目立ってるのは、エリザベート様がくれた服と装飾品だな。とにかく豪華でリュシアンかステファンの服みたいだ。サイズも大きいし、ここまで豪華な服を着る機会はない気がする。

「何か、凄いね……」
「ほとんどが頂いたものなんだよ」
「そっか……」

ロニーは言葉少なにそう言ってクローゼットを閉めた。
そしてソファーに戻り、少し冷めた紅茶を一口飲んで徐に口を開いた。

「僕は今日で本当によく分かったよ。さっき馬車でも言ったけど、

レオンを平民だと思うことはやめる。どう考えても平民の生活じゃない！　貴族様の中でもかなり上位の生活だからね！」
「ま、まあそうかもしれないんだけど……、でも一応身分は平民だからね？」
「ううん、もうレオンっていう身分なんだよ」

ロニーはそう言いながら、うんうんと一人で深く頷いている。俺はそんなロニーの言葉に釈然としない気持ちを抱えながら、どことなく不安も感じていた。
これでロニーが俺と距離を取ったら悲しいな……

そう思っていたらロニーが顔を上げて、ビシッと俺を指さしてきた。

「レオン！」
「な、何？」
「とりあえず、これから王立学校で貴族様に絡まれたらレオンが助けてね。それから平民って馬鹿にされたら、レオンのこの生活のことをさりげなく話すことにするから！　うん、王立学校での問題がほとんど解決した気がするよ。もっと早く言ってくれたら良かったのに！」

俺はロニーのその言葉を聞いて、嬉しくて思わず笑ってしまった。

「レオン、何笑ってるの！」
「ごめんごめん、ロニーが逞しくなったなと思って」
「そうかな？　でももしそうなら、確実にレオンの影響だから！」

俺はさっき少しだけ頭をよぎった馬鹿みたいな考えはすぐに消し去り、笑顔でロニーに答えた。

「ロニー、王立学校で俺が助けるのはいいんだけど、その代わり他の友達が作りづらくなるよ？　高位貴族からは陰口を叩かれて、下位貴族からは怖がられるよ？」
「もうそれはしょうがないよ。今は貴族様全員から実害の恐れがあるわけだから、それがなくなるだけでもありがたい。それに……他の友達なんて、全くできないし……」
「ロニー、まだ可能性はあるよ、多分……」
「レオンも同じだからね！　僕を憐れんだ目で見てるけど、レオンも僕以外の友達作れてないよね！？」

グサッ……その事実からは目を背けてたのに……

「そ、そんなことないから。俺にはリュシアン様達がいるし、研究会の先輩方がいるから」
「その方々は例外だから！　研究会の先輩達は、本当に友達って言えるの？」
「うっ……友達、うん、知り合い？」
「その程度なら僕もいるからね！　いつも食堂の一人席でたまに目が合う人がいるんだから」
「目が合うだけ……？　話したことは？」
「それはないけど……」
「ロニー、それは知り合いとも言わないよ？」
「顔は認識してるから知り合いなの！」

俺はそこまで言い争ったところで、また笑いが込み上げてきた。
真面目に争ってたけど、めちゃくちゃ低レベルな争いだ。

「ロニー、お互いに傷つくだけだからやめようか」
「僕もそう思ってたとこ」

そうして二人でおかしくなって笑っていると、俺の部屋をノックする音が聞こえた。来たのは使用人だったようで、ロジェが対応して俺たちの元まで来た。

「お荷物を全て運び終えたようです」
「ありがとう。じゃあ厨房に行こうかな」
「かしこまりました」

ロニーだけを厨房に向かわせるのは流石に可哀想だと思ったので、俺も一緒に向かう。
ステファンはロニーが作ったクレープが良いって言ってたけど、あれはロニーと仲良くなりたい口実だろうから俺が手伝っても問題ないと思う。

そして厨房に行くと、前にクレープを試作した時と同じ場所が空けられていて、その時に手伝ってくれた料理人さんが並んで待っていてくれた。

「お久しぶりです。また手伝ってくださるんですか？」
「はい！　お手伝いいたします。本日の昼食は公爵家の皆様もクレープを召し上がりたいとのことで、その分もお作りいただけますか？」

料理人さんの態度がこの前よりやる気に満ち溢れている。この前のクレープ作りで少しは認められたってことかな。俺は何だか嬉しくなって笑顔で答えた。

「そうなんですね、もちろん構いません。それから今日はこちらのロニーが主導で調理をします」

俺はそう言ってロニーを紹介した。

「ロニーです。よろしくお願いします」

「こちらこそよろしくお願いします」

そうして軽く顔合わせをしてからクレープを作り始めた。ロニーは毎日屋台で作っているからか、手際も良く出来上がりも綺麗で完璧だ。

卵はあらかじめ殺菌済みのものを用意してある。そもそも公爵家の食事にはたまにマヨネーズが使われるようになったんだけど、全て俺があらかじめ殺菌しているんだ。

まだ殺菌の魔法具のことは知られないほうが良いらしい。なので料理人さん達は特別な製法の卵だと思い込んでいる。

そうして順調にクレープを作り、全て作り終わるとクレープをワゴンに乗せて、俺とロニーはリュシアンの部屋に向かった。

既にステファンとマルティーヌも来ているらしい。

リュシアンの部屋に近づくほどにロニーが緊張しているのが俺にも伝わってくるけど、ロニーはこの前一度会ったからか何とか緊張を抑え込んでいるようだ。

そうして緊張感のある空気の中リュシアンの部屋まで辿り着き、ロジェが部屋のドアをノックした。

１２６、レオンの部屋（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

127、クレープ会

「レオン様とロニー様がお越しです」

ロジェがそう言うとすぐにドアが開き、部屋の中に招き入れられた。

「やっと来たか。とりあえず座ってくれ」

中に入るとステファンにそう言われたので、俺とロニーはリュシアンの隣に座る。

三人掛けのソファーの一つにステファンとマルティーヌ、そしてもう一つのソファーにリュシアンと俺とロニーだ。

俺たちが座ると、皆の従者がすぐにテキパキとクレープと紅茶を用意してくれて、テーブルの上は華やかになった。

「ご苦労。皆は下がってくれ」

そしてステファンがそう言い他の皆もそれに頷くと、使用人達は部屋から退出していった。部屋の中にはいつもの四人とロニーだけだ。

ここまで一瞬の出来事で、ロニーが目を白黒させている間に準備は整ってしまった。凄い早業だったな……

「よしっ、これで人払いもできたし楽にしてくれ。レオンとリュシアンもいつものように話そう」

ステファンが珍しく、子供らしい顔でそう言った。いつものよう

にってタメ口でってこと？　ロニーがいるのにいいのかな？

「ロニーがいるのに良いのですか？」

「ああ、ロニーは言いふらしたりするような者ではないだろう？それに、公的な場や他の多数の者の目がある場以外では、そもそも当人同士が納得していれば良いのだ。ロニーも楽に話してくれ」

まあ、確かにそうか。プライベートでは自由だよね。

ロニーは話がよく分からず不思議そうな顔をしつつも、ステファンの言葉に何度も頷いている。絶対に言いふらしませんと言わんばかりだ。

「じゃあ普通に話すよ。でも最近、特にリュシアンなんだけど、こっちで話してることが多いと思わず敬語を忘れそうになるんだよね」

「この前、お祖父様の前で完全に忘れてたよな」

「あれは！　まあ、俺のミスだね……」

「私達とも敬語を忘れるくらい話す時間が欲しいですわ」

マルティーヌがそう言って頬をぷくっと膨らませる。

「マルティーヌとステファンは王立学校で会うことが一番多いから、周りに他の人がいないって結構難しいよね」

「では、もっと昼食会をやりましょう！」

「それはいいけど、まだ他の貴族との昼食会をやってないんじゃないの？」

俺が苦笑いでそう言うと、マルティーヌはその事実を思い出したのか途端に落ち込んだ。

「そうでしたわ……。これからは苦痛の昼食会が待っているのです

わ」
「マルティーヌ、ただその苦痛を乗り越えたらまたリュシアンとレオンとの昼食会ができる」
「お兄様！　そうですわね！」
「でも、そうしたらまた苦痛の昼食会をやらないといけないんじゃない？」

俺がそう言ったらマルティーヌがまた落ち込んでしまった。そしてその様子を見て皆で笑う。
そんな俺たちの様子に隣のロニーが唖然としていることに気づいた。そうだよね、いつもは絶対敬語を使ってるもんね。

「ロニー、俺たちいつもはこんな感じなんだ。周りの目がある時はちゃんと敬語を使ってるけど」
「そうなんだ……」

ロニーは驚きすぎて頭が回っていないのか、ぽつりとそう言っただけでまだ唖然としている様子だ。

「ロニーも敬語でなくて良いぞ？」

リュシアンがロニーにそう言った。するとロニーはハッと我に返った様子で、頭をブンブンと横に振っている。

「め、滅相もございません。あの、僕はこのままで話させていただきます……」
「そうか？　まあ強制はしないが」
「では、このままで！」

ロニーは必死に敬語で話すことを死守したようだ。確かにタメ口

で話すなんて怖いよね……俺はもう慣れちゃって敬語で話す方が違和感を覚える。
やっぱり俺ってこの生活に染まってきてるな。

「そんなことよりも早くクレープを食べないか？」
「そうですわ。先程からとても良い匂いがしてお腹が空きました」
「そうだね、じゃあ食べようか」

そうしてまずはクレープを食べることにした。俺たちの前には、大きめの皿に二つのクレープが綺麗に盛り付けられている。昼食代わりなので一人二つずつだ。
既にクレープを食べたことがある俺とリュシアン、ロニーは驚きもなく普通にクレープを食べたけど、ステファンとマルティーヌは一口食べてかなり驚いている様子だ。

「こ、これは凄く美味しいですわ！　なぜこんなに美味しいのかしら？　この白いソースは何ですの？」
「これは驚いた……確かにこの白いソースが美味しい。これは初めて食べる味だが、何のソースだ？」
「これは何で作られているのですか？」

ステファンとマルティーヌがマヨネーズに驚いている。やっぱりマヨネーズって美味しいし、初めて食べると驚くよね。

「それはマヨネーズっていうソースだよ。俺が考えたんだ。生の卵と油、お酢、塩で作ってる」
「生の卵って、それは食べて大丈夫なの！？」
「魔法具で生でも食べられるようにしてるから大丈夫だよ」

俺がそう言うと二人は驚いた表情を浮かべた。

殺菌の魔法具のことって二人に言ってなかったっけ？　うーん、殺菌は言ってないかもしれないけど、毒除去の魔法具についてはアレクシス様が伝えてるんじゃないのかな？

「アレクシス様から毒除去の魔法具について聞いてない？」

「それは聞いたが……、あれは毒を除去するだけではないのか？」

そうか、毒除去と卵の殺菌が結びつかないのか。確かに厳密には違うものなのかな。

でも俺にとっては、人体に害のあるものを除去するという点で同じようなものなんだよな。毒除去、殺菌、病気治癒、この三つの魔法はかなり似ている。

「うーん、説明が難しいんだけど、あれは人体に悪影響のある物質を除去するから、卵の中にある悪いものも除去できるんだ」

「毒を除去できるというだけでも驚きましたけど、そのような効果まであるなんて凄いですわね……」

マルティーヌがそう言ったところで、俺はロニーがこの場にいることを思い出した。

ロニーには全属性も明かしてないし俺が病気を治せることも、何も教えてないんだよな。別に教えてもいいんだけど、ロニーを危険に晒す可能性は上げない方が良いだろう。

まだ魔法具の話しかしてないし、ここでやめておいた方が良いな。そう思って俺は話を変えることにした。

「蜂蜜バタークレープの方はどう？」

「蜂蜜の甘さとバターの風味がマッチして、とても美味しいですわ！」

「それなら良かった」

「このクレープはレオンが開発したんだよな？」
「そうだよ」
「今は屋台で売っているだけなのか？」
「そうだけど……？」

ステファンに少し真剣な表情でそう聞かれた。何の話だろう？

「もっと、屋台の数を増やしたりお店を作ったりはしないのか？
これは貴族向けのカフェなどで売れるだろう」

……そんなこと考えたこともなかった。元々ロニーが働く場所を探してたから始めたものだったし、ロニーが王立学校を卒業したらやめるつもりだったんだよね。

「今まで考えたこともなかったよ。ロニーが王立学校を卒業したらやめる予定だったし……。あっ、でもロニーがこれからも続けたいならそれでも構わないけど！」

俺がそう言ってロニーの方を見ると、急に話を振られたロニーは少しビクッとしながらも顔を上げた。

「ロニーはどうなんだ？」
「僕は……、王立学校を卒業したら役人となって働きたいと思っていました。しかし役人にこだわっているのではなく、お金を稼ぐことができるという理由で選んだので強い思い入れはないのです。それで、最近は……、僕は役人よりも今の仕事の方が向いているのではと思い始めました。僕は料理が好きですし、買ってくれた人が喜んでくれるのも嬉しいですし……」

ロニーそんなふうに思ってたんだ。もっとちゃんとロニーの考え

も聞かないとダメだな。

１２７、クレープ会（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

128、ロニーの将来

ロニーがこれからもこの仕事を続けたいなら、今みたいに屋台でやるだけじゃなくてお店にした方が良いのかな。この世界ってケーキ屋みたいなデザート専門店ってないから、カフェ併設のスイーツ店みたいなのができたらかなり人気出ると思うんだよね。

そのためにはもっとスイーツを開発しないとなんだけど……まずはスイーツの開発をしてくれる料理人を探さないとダメだよな。

「ロニーがこれからもこの仕事を続けたいのなら、今は屋台だけどいつかはお店にできるように頑張るよ」

俺がそう言うと、ロニーは少しだけ迷うような表情を浮かべた。

「もしかして、どこか働きたい食堂があるとか？」

「ううん！　そんなところはないよ。これからもずっと働けるのは本当にありがたいんだけど……、僕レオンに頼りすぎじゃない？」

「そんなことないよ！　逆に俺がロニーに頼りすぎなぐらいだよ。お店にするとなればかなり大変だと思うけど、力を貸してくれる？」

「勿論！　僕で良ければ精一杯働くよ」

「じゃあこれからもっと頑張ろっか。目指すは大人気のスイーツ店かな！」

「スイーツ店？　クレープ店じゃないの？」

「クレープ店もいいけど、スイーツの専門店ってないからやってみたいんだよね。でも、もうこうなったらどっちも作ろうかな。別にお店は一つしか作れないなんてことはないし、夢は大きく持たないとね！」

俺とロニーがそうして盛り上がっていると、マルティーヌがキラキラした瞳で話に加わってきた。

「スイーツの専門店なんて素敵ですわ！　絶対常連になります！」

勢いがすごい……マルティーヌがこの勢いなら、実現すればかなり流行るかもしれない。俺は思わず苦笑いを顔に浮かべながらそう思った。

「マルティーヌが常連になってくれたらありがたいよ」

ちょっと話題になりすぎる気もするけど……、まあお店をやるときはそのくらいの方がありがたいよね。

スイーツ専門店なら最初は貴族向けになるだろうし。そのうち庶民向けのお店も中心街の外に作りたいな。

お店をいくつも作るとなると、人もたくさん雇わないとだよね。かなり大変だと思うけどちょっとワクワクしてきた！

俺がお店を出すとしたら一番の問題は何だろう。とりあえず初期の開店資金くらいはあるだろうからお金は大丈夫だ。やっぱり一番は信用かな。仕入れとかをするときも平民のしかも子供の俺だとかなり舐められそうだ。

公爵家は俺の後見をしてくれているけど、俺がお店を出すとなったらどうなるんだろう？

そもそも俺がお店を出しても良いのかな？　屋台は普通に認められたけどお店はまた違う気がする。

「リュシアン、俺がお店を出すのって良いのかな？」

「ああ、普通に許可が出ると思うぞ。たぶん公爵家がお店の後援をすることになるんじゃないか？」

「後援してもらえるの？」
「多分頼めば出資もしてくれるな。だけどレオンは出資の必要はないだろう？」

お金はあるから出資の必要はないかな……。出資してもらうと色々ややこしくなりそうだし。

「出資の必要はないかな。後援は本当にありがたいよ」
「後でお祖父様にお店について話せば、当然のように後援してくれると思うぞ」

公爵家が後援してくれるのならば、後は努力するだけだ。今さっき思いついたことなのにもう道筋が見えてきたよ……やっぱり身分って強いな。精一杯頑張って良いお店にしよう！
そうなると一番の問題は料理人の確保だよね。お店が作れたって肝心のスイーツが微妙だったら流行らない。今の状態でもクッキーやパンケーキ、甘いクレープなどは作れるけど、それだけだと物足りないだろう、やっぱりケーキが欲しい。
俺の曖昧な知識を聞いて開発してくれる、スイーツ専門の料理人が必要だな。早速今日の夕食時にでもリシャール様に聞いてみよう。
本当にワクワクしてきた！　お店をやるのも楽しみだし、何よりケーキが食べられるかもしれない！

「ロニー、多分進めたら本当にお店が始まるけど、大丈夫？」
「うん！　僕ワクワクしてきたよ！　僕がお店をできるなんて夢みたいだ」
「お店をやるとしたら、ロニーには店長を任せても良い？」
「え！？　店長はレオンじゃないの！？」
「うーん、でも俺は卒業したら役人として働かないといけないから。それに将来的には何店舗もやることになるかもしれないし、全ての

お店の店長はできないでしょ？」

俺のイメージ的には社長みたいな役職が一番望ましいんだよな。まあ社長って大変だろうから、他の仕事をしながらできるのかって問題はあるけど……

というかそもそも、この世界って会社とか法人の考え方はないよね？　何店舗もお店を経営する人はどうしてるんだろう？

「誰に聞いたら良いかわからないんだけど、何店舗もお店を経営してる人ってどうやってるの？　全てのお店の店長になるわけないよね？」

俺がそう聞くと、その疑問にはステファンが答えてくれた。

「そういう場合は商会を立ち上げるのが一般的だ。貴族が店をやる場合は必要ないが、平民の場合は商会を作ってそこで全ての店舗をまとめている。仕入れなどもやりやすいからな」

商会か……じゃあ俺も商会を作った方が良いのかな？　というか今更だけど、商会って何？

「あの、今更の質問かもしれないけど、商会って何なの？　深く考えたことなかったんだよね」

俺がそう言うと、リュシアンが呆れた顔で俺をみた。

「レオンはいつも当たり前のようなことを知らないよな」

「それは俺が平民だから！」

「でもレオンは絶対に平民が知らないようなことはたくさん知ってるだろ？」

「それは、まあそうなんだけど……」
「まあ、レオンがおかしいのは今に始まったことじゃないからな」
反論出来ないけど反論したい！　でも出来ない！
「それで、リュシアンは商会が何か知ってるの？」
「ああ、商会は簡単に言えば、平民が作れる形だけの家のようなものだ。何かを契約するときに商会の名前で契約できる」
うん？　平民が作れる形だけの家ってどう言うこと？　説明聞いてますますわからなくなったんだけど。
「……どういうこと？」
「そうだな……貴族は皆生まれた家に所属しているだろう？　私なら何かを契約するときは、個人でもできるがタウンゼント公爵家としても契約できる。店を出すときもタウンゼント公爵家の店ということで、何店舗もまとめて経営可能だ。そういう貴族の家のようなものを、平民が形だけは作れるのが商会だ」
そういうことか、何となくわかった。要するに会社みたいなものだよな。貴族は生まれながらに家という会社に所属しているけど、平民は所属してないから自分で作れるよって感じだ。
「何となくわかったよ。商会を作るのに条件とかあるの？」
「いや、確か難しい条件はなかったはずだぞ。でも毎年お金を支払う必要があったはずだ」
毎年お金を払わないといけないから、むやみやたらと増えないんだな。でも俺にとってはお金を払えば登録できるのはありがたい。

「じゃあ、とりあえず商会を作ろうかな」
「それが良いな」
「どこにいけば作れるの？」
「普通は教会だが、多分お祖父様に言えば登録してくれるんじゃないか？　貴族の後援があると無条件で作れたはずだ」
「それは流石に申し訳ないから、自分で登録に行くよ！」
「まあ、その辺もお祖父様に話してみれば良いと思うぞ」
「確かにそうだね」

でもそもそもの話、ロニーが卒業してからじゃないとお店を開けないのか。そうなると準備期間が必要だとしてももう少し先の話かな？　ロニーって何年で卒業できるんだろうか？　もし五年かかるのならあと数年先の話になる。

「ロニー、お店を始めるとしたら卒業してからが良いよね？」
「その方がありがたいかな」
「何年で卒業できそう？」

俺がそう聞くとロニーは、ちょっと不思議そうな顔をした後に口を開いた。

「何年って一年で卒業するよ？」
「え？　一年で卒業できるの！？」
「そんなに驚くこと？　レオンだって一年で卒業するでしょ？」
「そうだけど……、普通は早くて二、三年とかだよね？」
「でもそれは、貴族様が人脈を広げつつ王立学校に残るからじゃないの？　僕は平民でお金もないし、早く卒業して働きたいから」

ロニーの中ではそんな認識になってたのか……、ロニーが純粋で良い子すぎる。多分貴族達は、実力不足で普通に卒業できないだけ

だと思う……
まあ、実際のところはわからないよね！
「ロニーは卒業できそうなの？」
「うーん、普通に勉強してれば大丈夫だと思う」
ロニーって、孤児院育ちで王立学校に入学して地頭が良いんだなと思ってたけど、やっぱりかなり頭良いんだね。何なら俺より絶対に頭良いよ。
俺は前世のアドバンテージがあるだけだから、すぐロニーに抜かれそうだ……もっと勉強も頑張ろう。
「それなら、次の春からお店が出来るように準備を進めてもいい？」
「うん！　僕も手伝うからね！」
そう言ったロニーはすごく嬉しそうで、ワクワクしたような顔をしていた。その顔を見て何だか俺も嬉しい。絶対成功させよう！
俺はやる気十分で気合を入れた。

１２８、ロニーの将来（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

１２９、レオンのお店

そうして話が一段落すると、マルティーヌが商会の名前を決めようと言ってきた。

「商会の名前って自由に決められるの？」

「そうよ。他の商会とかぶっていなければ自由に決められるわ！何か良い名前を考えましょう！」

「うーん、俺ってこういうセンスないんだよね。ロニー何か思いつく？」

「僕も全然センスないんだ……」

「では皆で考えましょう！」

そうして皆で商会の名前を必死に考えた。まず口を開いたのはステファンだ。

「スイーツを売るのだから、それにちなんだ名前が良いと思うんだ。スイーツフルとかはどうだ？」

「それって……甘いもの沢山って意味だよね？」

「そうだ」

ステファンは自慢げにそうだって言ってるけど、そのまま過ぎない？

「ステファン、それはちょっと……微妙かな……」

俺がそう言うと、ステファンは衝撃を受けたような顔をして落ち込んだ。もう見るからに思いっきり落ち込んでいる。そんなに落ち

込むほど自信あったのか。俺は思わず笑いそうになりながら、何とかそれを抑えた。
ステファンもたまに子供っぽいところあるよね。
「ごめんごめん。悪くはないと思うけど、もう少し捻った名前が良いかなと思ったんだ。それに少し可愛い名前過ぎる気がして」
「確かにそれもそうだな」
俺がそう言うと、ステファンは気を取り直してまた名前を考えているようだ。クレープフル、マヨネーズフルとか言ってる声が聞こえてくる。何で全部フルが付いてるんだろう。
……ステファン、名付けのセンスはないんだな。
俺は思わず吹き出しそうになるのを何とか抑え、自分でも名前を考え始めた。
うーん、どうせなら日本的な名前が良いかな。こっちの世界の言葉に翻訳されないものなら、もしこれから先の未来に日本から転生してきた人がいたとして、気づいてくれるかもしれないし。そんな人がいるのかわからないけどね。
甘いものを売るからそれにちなんだ名前でも良いけど、そのうちにスイーツじゃない日本料理屋とかも出来たら良いなって夢があるから、甘いものに拘らずに名付けたい。今は醤油も味噌も何もないから無理だけど、そのうち手に入ると信じている。
うーん、日本って名前は翻訳はされないだろうけどそのまますぎるよね。ジャパン、ジャパニーズ、ニッポン、この中ならジャパニーズとか良いかも。
「ジャパニーズとかどう思う？」

俺がそう言うと皆が顔を上げた。
「じゃぱにーず？」
「そう、ジャパニーズ商会」
「うーん、ちょっと言いづらいぞ」
「確かに発音が難しい。もう少し言いやすい名前が良いんじゃないか？」
「そっか……どう変えたら言いやすい？」
俺がそう言うと、皆が口の中でジャパニーズと唱えながら最適な発音を探してくれている。
「そうね、私はジャパーニスなら良いと思うわ」
「確かにそれなら言いやすいな」
「ジャパーニス商会ね」
うーん、日本の面影が残ってるか微妙な感じだけど、そのぐらいでいいか。ジャパーニスって何となくかっこいいし。
「うん、ジャパーニス商会にする！」
「決定ね」
「ロニーも良い？」
「うん！　凄くカッコいいよ。それにレオンの商会なんだから、レオンが決めることだよ」
「確かにそうだね。じゃあジャパーニス商会で決まり！」
そうして皆で俺のお店についての話で盛り上がり、クレープ会は終了となった。急展開だったけど、お店をやるのはかなり楽しみだ。
でも不安なのは、俺に仕事を回せるかだよね。商会の会長ってか

なり忙しそう……無理そうだったら人を雇えば良いのかな？
うーん、まあ今そんなことを考えてもしょうがないか。そうなったときに考えよう。

「では、今日はこれで帰ることにする。またお店について決まったことがあれば教えてくれ」
「レオン、スイーツ専門店楽しみにしているわ！」

ステファンとマルティーヌはそう言って、先に帰っていった。
そして今は、ロニーを送るために二人で馬車に乗っているところだ。リュシアンも一緒に送ると言ってくれたけど、ロニーが流石に疲れてそうだったので遠慮してもらった。

「ロニー、さっきはどんどん話が進んじゃったけどお店をやるので良いの？　ロニーの就職先が決まることになっちゃうけど……」
「うん！　僕からお願いしたいくらいだよ。王立学校に入って役人は向いてないと思ってたんだ……役人って貴族様と働かないといけないでしょ？　でも他に良い働き先も思いつかないし仕方がないって諦めてたんだけど、レオンのお店で働けるのなら絶対にそっちが良い！　レオンありがとう！」

ロニーは少し身を乗り出しつつそう言った。そんなに乗り気ならもう遠慮することはないな。絶対に成功させて給料も多く出せるように頑張ろう。

「ロニー、絶対成功させようね」
「うん！」
「まずは料理人を見つけてスイーツの開発と、商会への登録とリシャール様に後援のお願いかな。そして開発の目処がついたら店舗を決めて内装を決めないとだよね。メニューも決めて仕入れも確認し

ないとだし……本当にやることが山積みかも。実際にお店を開くとなったら人も雇わないとだし……」

やばいな。ロニーが卒業した時からお店を始めるにはかなり忙しくなるかも。俺も卒業できるように最低限の勉強は必要だし……ロンゴ先生には申し訳ないけど、研究会は休むことが多くなりそうだ。

「レオン、一つだけお願いがあって……、無理だったら全然良いんだけど……」

俺が今後について色々と考えていると、ロニーが歯切れ悪くそう言ってきた。何のお願いだろう？

「聞けるお願いなら聞くよ？」

「うん、出来たらで良いんだけど……お店の従業員に、僕の孤児院の家族を雇ってくれたら嬉しいなって思ったんだけど……、ほんとに、出来たらでいいんだけど！」

そっか、ロニーは孤児院の皆にお腹いっぱいご飯を食べさせてあげたくて、役人になるって言ってたんだよな。

「孤児院ってどういう仕組みになってるの？　何歳で出ないといけないとか、どういう仕事に就くとか」

「孤児院は十五歳まではいられるんだ。だから皆は八歳ぐらいから仕事をし始めてお金を貯めて、十五歳になったらそのお金で一人暮らしを始める。でも子供ができる仕事なんてほとんどないし給金も低いから、殆ど貯まらないんだけどね。孤児院は食事も少ないから稼いだお金で食べ物を買うことも多いし……。だから孤児院を出たら貧乏暮らしになる人が多いかな。仕事が見つかって働ける人はましだけど、仕事がないと日雇いの仕事とかで食い繋ぐ感じになる。

だから、着の身着のままで中心街に来る人も多いかも。下働きの求人はたくさんあるし住み込みも多いからね」

そーなのか、やっぱり結構過酷なんだな。中心街で見つけられる住み込みの仕事だって当たりを引いたら幸せかもしれないけど、酷い労働環境のところとかもあるんだろう。

この国の仕組みを変えて辛い思いをしてる人を救う！　そんな高尚なことは言えないけど、知り合いくらいは救っても良いよね。誰を雇うのかは俺の自由なんだし。

「そうなんだね。実際に会ってみないと決められないけど、ロニーの孤児院の子達を雇うのは構わないよ。俺の店で働きたいと思う意欲がある子なら大歓迎だよ」

「本当！？　レオンありがとう！　なら今度孤児院に来てくれるときに会ってみて」

「そうだね。休みに孤児院に行くって話してたけど、夏の長期休みで良いかな？」

王立学校には夏の初めと秋の終わり頃に二回の長期休みがある。その時がちょうど良いだろう。

「うん！」

そうして俺はロニーを送り届けて、公爵家に戻った。

今日は色々あって疲れたけど、夕食の時にリシャール様に話さないとだな。俺はリシャール様に話すことを頭の中でまとめつつ、馬車に揺られた。

１２９、レオンのお店（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

１３０、お店についての相談

屋敷に帰って少し休むとすぐに夕食の時間となった。今は夕食を食べ終えて、食後のゆったりとした時間が流れているところだ。

そこで俺は、徐に今日の話を切り出した。

「リシャール様。実は本日考えたことなのですが、私の商会を作ってお店を始めようと思っています。お店を始めても良いのでしょうか？」

「お店？　突然何でそんな話になったんだ？」

「はい。屋台で私の友達であるロニーを雇っているのですが、ロニーがこれからもこの仕事を続けたいと思っていることを知りまして、それならばお店を始めたいと思ったのです。私も作りたい料理がたくさんありまして……」

俺がそう言うと、リシャール様は納得したような顔をして一つ頷いた。

「そうか、そういうことならば全く構わない。レオン君の料理はもっと広めるべきだと思っていたからな。レオン君の店ならば公爵家が後援をする、完成するのが楽しみだな」

「後援していただけるのですか？」

凄くあっさりと言ったな。そんな簡単に後援しても良いのだろうか。まだお店の内容も言ってないのに。

最近よく思うけど、皆の俺に対しての信頼が厚すぎて逆に心配になる。

「勿論だ。レオン君は屋台も成功しているようだし問題ないだろう。それでどのような店にするのだ？　やはりクレープ店か？」
「ありがとうございます、お店については勿論クレープも売るつもりですが、とりあえず最初のお店はスイーツ専門店にしようと思っています」
「スイーツ専門店？　カフェのようなものか？」
「いえ、カフェではサンドウィッチなど食事も売っていますが、私のお店では甘いものだけを売るようにしようと思っています。基本的にはスイーツをお持ち帰りいただくお店にして、隣にカフェを併設しそこで食べていただくこともできるようにする予定です」

俺がそう言うと、リシャール様ではなくカトリーヌ様がすぐに反応した。

「レオン、そのお店は素晴らしいわ。必ず開店させるのです。甘いものだけのお店なんて……楽園ですわね」

カトリーヌ様はそう言ったっきり、うっとりとした顔で自分の世界に入り込んでしまった。多分スイーツに囲まれた様子を思い描いてるんだろうな……
カトリーヌ様がこの様子ならお店の未来は明るいかもしれない。やっぱり平民向けじゃなくて、貴族向けのお店にしたほうが良さそうだな。
今回は完全に貴族向けにするとしても、今後は平民向けのお店も出店したい。スイーツを誰でも気軽に楽しめるのが理想だ。

「レオン君、カトリーヌの様子を見ていればお店は流行りそうだが、甘いものだけを売るのでは客が減るのではないか？　それにカフェなどで食べられるものを売るだけではあまり意味がないと思うのだが……」

「はい。今あるスイーツを売るだけではお客様に来ていただけないでしょう。そこで新しいスイーツを作ろうと考えています」
「新しいスイーツですって！？　レオン、それは本当なの！？」

カトリーヌ様が、新しいスイーツの言葉に反応して自分の世界から戻ってきたようだ。カトリーヌ様って、スイーツのこととなると本当に周りが見えなくなるよね。普段は優しさと腹黒さも兼ね備えた貴族女性の見本のような人なのに。
まあ俺は、スイーツに目を輝かせているカトリーヌ様、結構好きだけどね。

「まだ作れる確証はありませんが、どういうものを作るかの構想はあります。そこでご相談なのですが、スイーツ専門の料理人さんを紹介していただけないでしょうか？」
「素晴らしいわ！　あなた、必ず良い方をご紹介するのよ」
「カトリーヌ、少し落ち着くんだ。勿論全力で料理人を探すが……スイーツ専門の料理人は私の知る限りいないのだが」
「確かに、私も聞いたことがありませんわね」

そうなんだ……確かにこの世界はスイーツが少ない。でもフレンチトーストとかは普通にあったし、少しはいるのかと思ってたけど……
あれ？　そういえば前にクッキーの作り方を教えたよね？　この屋敷でクッキーを作ってる人は他のお菓子の開発とかしてないのかな。あれから何度かクッキーが食後に出てきたりしてるし。

「リシャール様、以前クッキーの作り方を料理人さんに伝えましたが、このお屋敷でクッキーを作ってる方は他のスイーツについては開発などしていないのでしょうか？」
「ああ、この屋敷では料理長がクッキーを作っているらしい。だが

未だクッキーも満足のいくものが作れず、試行錯誤しているようだ。それゆえに他のスイーツには手を出せていないだろう。普段の業務の合間にやっているからな」

そうなのか……料理長を引き抜くわけにはいかないよね。それにクッキーを作ったことがあるだけなら、他の料理人もすぐ同じレベルになるだろうし。

もういっそのこと普通の料理人を紹介してもらって、その人に色々教えればいいかな？　うーん、でも俺もよく覚えてないレシピを作ってもらいたいから、スイーツの開発に熱心な人が良い。

俺がそうして悩んでいると、リシャール様が何かを思いついたような声を上げた。

「そうだ。確かダリガード前男爵と奥方がスイーツ好きで、スイーツの研究をしていると以前耳にしたことがあるな……」

そんな人がいるんだ！　ダリガード前男爵様に会ってみたいな。

あれ……ダリガード？　ダリガードってどこかで聞いたことがあるような……そうだ！　確かステイシー様の実家だよ。

「ステイシー・ダリガード様が同級生でいらっしゃるのですが、そのご実家でしょうか？」

「そういえば、リュシアンと同い年の孫がいると言っていたな。ダリガード家は一つだけだから間違いないだろう。友達なのか？」

「知り合い、でしょうか。回復属性の授業で一緒なのです。成り行きで屋敷を訪れる約束をいたしまして、訪れても良いのかリシャール様に確認しようと思っていたところです」

「そうか、それならば丁度良い。ダリガード前男爵に連絡を取り、スイーツの件でレオン君が訪れることを伝えておこう。多分スイーツの研究をしている料理人もいるはずだ」

リシャール様はすぐにそう言ってくれた。ということは、ダリガード男爵家は公爵家側の勢力なんだな。
ステイシー様の実家ってところは少し不安だけど、スイーツの研究をしている料理人はまさに俺が求めている人材だ。是非とも協力してもらいたい。

「ありがとうございます！」
「ダリガード前男爵とその奥方はとても穏やかな方だ。レオン君の力になってくれるだろう。他にも何かあったらすぐに言ってくれ、できる限り力になろう」
「いつも本当にありがとうございます。よろしくお願いします」

俺が心からの感謝を込めてそう言うと、リシャール様は優しく微笑んでくれた。本当にありがたい、いつも助けられてばかりで恩が返しきれてない。
今回はお店を成功させて、まずは良い報告を出来るように頑張ろう。
ダリガード男爵家の料理人はどこまでスイーツの研究をしているのだろうか。協力的な人で、一緒にケーキを作ってくれる人だったら良いな。

１３０、お店についての相談（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

131、ダリガード男爵家

リシャール様に話をしてから丁度一週間後の回復の日。俺はダリガード男爵家を訪れるために朝から準備をして、今はロジェと共に馬車に乗っている。

先週の話し合いの後リシャール様がすぐに連絡を取ってくれて、快く了承してもらえたみたいだけど、どんな人達かわからないのでちょっと心配だ。

ステイシー様を王立学校に通わせているのだから良い人達だとは思うけど……結構緊張する。

「ロジェ、そろそろ着くかな？」

「もう少しお時間がかかります。……緊張しておられますか？」

「うん、ちょっと緊張してる。見てわかる？」

「私には分かりますが、初対面の方には分からない程度です」

「そっか、それなら良かった。ダリガード前男爵様とその奥方様がどんな方々かわからないから、少し緊張してるんだよね」

「私が知っている情報で良ければお話できますが、いかがいたしますか？」

「本当？　何でも良いから情報があれば教えて欲しい」

「かしこまりました。ダリガード男爵家は、貴族としては異端な家として有名でございます」

「異端な家？」

そう言われるとより緊張するんだけど。異端な家って、ステイシー様みたいな方がたくさんいるとかじゃないよね？　もしそうなら俺の手に負えないよ。

「はい。ダリガード男爵家は家を重視しないと有名なのです。家よりも家族や自分の幸せを優先するとか」
「それって……、貴族としての利益よりも幸せに暮らせることを重視してるってこと？」
「そのような解釈で良いと思われます」

それって、俺にとっては凄く馴染みやすい家なんじゃないか？
そんな家だからステイシー様も伸び伸びと育ったのかな。何か一気に緊張が解れたかも。

「それなら、平民だからと蔑まれることもないかな？」
「そこまでは分かりませんが、大旦那様のご紹介ですのでそういったことはないと思われます」

確かにそうか。リシャール様がそんな家を紹介するはずないよね。
「確かにそうだね。ちょっとは緊張も解れたよ、ありがとう」
「お役に立てたのでしたら良かったです」

ロジェとそんな話をしつつ馬車に揺られ、しばらくしてダリガード男爵家に着いた。
ダリガード男爵家は中心街の端にあり、屋敷はこぢんまりとしながらも綺麗に整えられているようだ。何となくだけど、落ち着くようなホッとする雰囲気が流れている。
そんな屋敷の敷地内に馬車は入って行き、すぐに屋敷の前に辿り着いた。ロジェに促されて馬車を降りると、屋敷の前には優しそうなご夫婦とステイシー様が待ってくれていた。
「君がレオン君だね。ダリガード男爵家にようこそ。私はダリガー

ド前男爵のピエール・ダリガードだ。ピエールと呼んでくれて構わないよ」
「私はピエールの妻、キャロリン・ダリガードよ。キャロリンと呼んでくださいね」

このお二人が、ステイシー様のお祖父さんとお祖母さんなんだな。笑顔で微笑んでくれていて、凄く優しそうな人達だ。

「初めまして、レオンと申します。ピエール様、キャロリン様、よろしくお願いいたします」

俺が二人にそう挨拶を返すと、ステイシー様が嬉しさを隠せない表情で話しかけて来た。

「レオン、ダリガード家にようこそ」
「ステイシー様、本日はよろしくお願いいたします」

そうして皆さんと挨拶を交わし、俺は屋敷の応接室に通された。応接室まで歩いた感じでは、屋敷の中は質素だけれど温かみがある雰囲気で、俺はかなり好きな感じだ。公爵家の豪華な屋敷にも慣れたけど、やっぱりこじんまりとしているのは落ち着くよね。

そうして入った応接室には、机を挟んでソファーが二つあり、ダリガード家の皆さんが一つのソファーに座ったので俺はもう一つのソファーに一人で座る。

ソファーに座り紅茶が準備されると、早速ピエール様が話しかけてくれた。

「レオン君は王立学校で、ステイシーと仲良くしてくれているようだね。ステイシーは他の子と少し違う部分があるから、友達ができないのではと心配していたんだ。レオン君のような素敵な友達がで

きて良かったよ」

ピエール様は心からの笑顔でそう言った。

友達だったのか……、俺とステイシー様が友達と言っていいのかはちょっと引っかかるけど、ここで否定するのは絶対に違うってことは確かだ。

「いえ……、私の方こそステイシー様と知り合えて良かったです」

「そう言ってもらえて嬉しいよ。ステイシーは可愛いだろう？　自慢の孫なんだ」

そう言われると確かに、外見は可愛い。ふわふわの金髪ボブヘアで瞳も金色、顔はかなり整っている。

でも見た目の良さを打ち消すくらいの不思議な子だから、可愛いというより不思議っていう印象が勝るんだよね。

まあ、それを素直には言えないけど。

「とても可愛らしい方だと思います」

「本当かい！？　ステイシー良かったね」

「嬉しいです。ですが私のお友達でもっと可愛い子がいますの。レオンとも仲良くなれると思います。そうだ！　その子を連れて来ますわ」

ステイシー様はそう言って、他の人の言葉を聞かずに応接室から出て行ってしまった。やっぱりステイシー様って不思議な子だ……

ピエール様はそんなステイシー様の様子を見て苦笑いしていたが、すぐに俺の方に意識を戻して謝ってくれた。

「レオン君、ステイシーに悪気はないんだ。許してやってくれるかい？」

「許すも何も、怒ったりしていませんので」
「それなら良かった。あの子は貴族としての礼儀作法も覚えているし、王立学校に入学できるほどには勉強もできるんだけど、どこか他の子とはズレていてね」
「確かにそうですね……」

俺は何て返せば良いのか分からず、曖昧な返事になってしまう。そうして少しの間気まずい空気が流れたが、それを破ったのはキャロリン様だ。

「私はあの子の将来が心配だわ」

キャロリン様はステイシー様が出て行ったドアを見ながら、心配そうな顔でそう言った。

「まだ子供だから、これからどうなるかは分からないよ」
「ですが他の子ならば、そろそろ婚約者を決める年頃ですわ。もちろんステイシーが貴族にこだわらないのであれば、結婚しなくても良いですけれど、準貴族として生きていくとしてもあの子にお仕事などできるのかしら」
「王立学校には通えているのだから心配いらないと思うけど、やっぱり頼れる人のところに嫁いでくれるのが一番安心できるね」
「そうよね……」
「貴族よりも、生活に困らない程度の平民が良いかもしれない。商人だと貴族と同じで大変だろうから……」
「貴族に雇われている兵士や役人かしらね……」

二人はそこまで話したところで、一斉に俺の方を見てきた。え？
俺？　もしかして俺のところにステイシー様を嫁がせたいの！？
いやいや、それはないです！　そんなに見ないでください！

１３１、ダリガード男爵家（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

132、ステイシー様の将来

「レオン君、ステイシーは可愛いだろう？」
「そ、そうですが……」
「ステイシーはどうだい？」
「どうだと言われても……、私は平民ですので……」
「ステイシーにとっては、平民の方が重荷でなくて良いかもしれないからね」
「レオン君、ステイシーは優しい子ですわよ」

凄い、お二人の猛プッシュが凄い。そもそも今初対面だよね！？こんな得体の知れない平民に大事なお孫さんを嫁がせても良いのですか！？

「あの、お二人は私のことをほとんどご存知ないのでは……？」
「確かにそうだけど、少し話しただけでレオン君が良い子だというのはわかるよ。私も貴族の一員だからね、人を見る目はあるつもりだよ」
「それにレオン君は、公爵家の所属で王立学校に通っている平民よ。それだけで信用に値するわ。将来は役人となれば給金も良いでしょうし、ステイシーも苦労なく過ごせるわね」

キャロリン様はそう言ってにっこりと笑顔を浮かべた。怖い……笑顔なのになぜか怖いです！　やっぱり貴族は貴族なんですね！
俺はこのままだと押し切られそうだと思い、キッパリ断ることに決めた。まだ結婚なんて考えられないし、ステイシー様は良い子なんだけど、毎日あの不思議な子と一緒にいるのは……ちょっと厳しい。

「あの、申し訳ありませんが、お断りさせていただきたく……」
俺がそう言うと、二人は一斉に笑いを堪えきれない表情になった。
「ははっ……レオン君、少しからかいすぎたみたいだね。すまなかったよ」
「レオン君ごめんなさいね。途中から楽しくなってしまって」
なんだ……からかってるだけかぁ。でもそうだよね、まだ結婚なんて早すぎる話だよね。
俺がそう思ってホッとしていると、また爆弾が投下された。
「でもステイシーを妻にって話は本気よ？　まだ知り合って日が浅いものね。もっと仲良くなってからまた話をしましょう」
待って……また話をするのですか！？　もういいです。もうこの話はここで終わりでいいです。
それに、ステイシー様の気持ちもあるよね！　絶対俺なんかと結婚したくないはずだよ！
「ステイシー様は、私ではご不満だと思いますが……」
俺がそう言ったところで、ちょうどステイシー様が戻ってきた。
手には綺麗な花が咲いている植木鉢がある。
「ステイシー、良いところに戻ってきたわね！」
「お祖母様、どうしたのですか？」
「ちょうど今ステイシーとレオン君の将来について、前向きに話し合っていたところなのよ」

前向きに！？　前向きになんて話し合ってません！

「私とレオンの将来ですか？」

「そうよ。ステイシーはレオン君とずっと一緒にいたくないかしら？」

「ずっと一緒にいられたら、楽しそうです」

「そうよね」

キャロリン様待ってください！　ステイシー様は絶対に理解してないです！　今の返事も、よく分からないけどずっと遊べたら楽しいよね、くらいの軽い返事ですよ！

この流れはまずい、ピエール様も苦笑いしてるだけじゃなくて止めてください！

俺はなんとか話を逸らそうとして、別の話題を提供することにした。

「ス、ステイシー様は、将来やりたいことなどはおありですか？」

俺がそう言うと、ステイシー様は途端に目を輝かせた。もしかして何かやりたいことがあるのかな？

「実はあるのです！　私は植物も動物も皆友達だと思っているので、ずっと食事が嫌いでした。ですがこの前レオンに取った方が良い葉や実もあると言われて、それを農家の方に確認したところ本当でした。なので私はそれらを積極的に食べていますが、それらを使った料理店をやりたいです！」

まさか……この前の何気ない一言がそんな影響を及ぼしてるなんて。

「それは素晴らしい夢ですね」

ピエール様とキャロリン様も初めてそんな話を聞いたのか、凄く驚いた顔をしている。

「レオンありがとう。ですが、野菜や果物しかない料理屋など流行りませんよね……」

「いや、そんなことはないと思います。ステイシー様は、野菜の中でも食べられないものはおありですか？」

「今までは仕方なくお野菜を食べていたので、全て食べることはできます。ですが動物は一切食べません。食べたくありません」

「……それならば、流行るお店が作れると思います」

「本当ですか！？」

多分野菜や果物だけを使ったヘルシー料理店にしたら、結構お客さんが入るんじゃないかと思う。平民向けではなくて貴族向けのお店にすれば、ダイエットをしたい人が来てくれるんじゃないかな。

「はい。動物を使わないというよりも、ヘルシーで太らない料理として売り出したら良いと思います」

「確かにそうですね……私、そのお店をやりたいです！」

そこまで話が進んだところで、ピエール様とキャロリン様が驚きから戻ってきた。

「ちょっ、ちょっと待ってくれるかい！　ステイシーは本当にその料理屋をやりたいんだね？」

「はい、やっても良いでしょうか……？」

「もちろんだよ！　ステイシーにやりたいことができるなんて凄く

嬉しいよ」
「本当ですか！？　お祖父様、ありがとうございます」
「ステイシー、あなたに素敵な夢ができて良かったわ」
「お祖母様、ありがとうございます」

ステイシー様はそう言ってとても嬉しそうな笑顔で笑った。やっぱりピエール様とキャロリン様って、めちゃくちゃ良い人達だな。

とりあえずステイシー様にやりたいことがあるのなら、嫁ぎ先を焦って探すこともないだろう。俺にとっても良かった。そう思って安心していたら、ピエール様が急に深刻な表情を浮かべた。何か問題でもあるのかな？

「ただ一つ問題がある……。お店を始めるのにはかなりのお金が必要だけど、うちにはそんな大金はないんだ。どうやってお金を作り出すか……」

お金の問題か、そうだよね。普通はそこが一番の問題になるんだよ。俺はお金だけは潤沢にあるから失念してた。

「お祖父様、やはり難しいでしょうか……」

ステイシー様はさっきまでテンションが高かったのに、目に見えて落ち込んでいる。そんなステイシー様を見て慌てたのはピエール様だ。

「ス、ステイシー、無理なんてことはない！　私がなんとかするからね」
「あなた、ここは決断する時だわ。スイーツの研究をやめればお金も貯まるのではないかしら？　ステイシーの卒業まで五年もあるもの。それまでにはどうにかなるわよ」

「……確かにそうだね。スイーツの研究をやめればその分のお金が貯められる。ただ折角ここまでやってきたのに……」
「孫の幸せの方が重要よ」
なんと、まさかのスイーツ研究のせいで貧乏だったのか。もしかしてこの家が質素なのも、スイーツの研究にお金を使いすぎていたから？
良い人達なんだけど、やっぱり貴族としてはちょっとズレてるよね……

１３２、ステイシー様の将来（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

133、ステイシー様のお友達

「キャロリン、確かにそうだね。ステイシーの幸せの方が重要だ。スイーツ研究はもうやめることにする。あっ、でもレオン君は、スイーツ研究についての話があるのだったかい？」

そうなんです。でもダリガード家でスイーツ研究をしなくなるのなら、研究をしていた料理人さんを簡単に引き抜けるかも知れない。タイミング良かったかも。

「はい。もしかしたらスイーツ研究の問題は解消できるかも知れません」

「本当かい？　詳しく話してくれ」

「私はクレープという料理の屋台をやっているのですが、その屋台をお店にしてスイーツの専門店を始めたいと思っております。そこで、そのお店で出す予定のスイーツのレシピを考えているのですが、一緒に試行錯誤してくれるような料理人を探しているのです。その話をリシャール様にしたところ、ピエール様をご紹介いただきました。もしよろしければ、スイーツの研究をしていた料理人を私が雇っても良いでしょうか？　スイーツの研究も引き継がせていただきます」

俺がそう言うと、ピエール様はかなり驚いたような表情をしたあと、嬉しそうに破顔した。本当にスイーツが好きなんだな。

「それは本当にありがたい申し出だよ、レオン君ありがとう。クレープがレオン君の屋台だったことも驚きだ」

「クレープを食べていただけたのですか？」

「もう何度も食べているよ。新しいスイーツがあるという噂を聞いてすぐ買いに行ったけれど、食べて本当に驚いた。凄く美味しくて頻繁に買いに行っているよ」
「ありがとうございます。とても嬉しいです」
「確かにあの味はお店にしても売れるだろうね。でもクレープの専門店ではなくて、スイーツの専門店にするのはなぜだい？」
「私は甘いものが好きなので、もっとスイーツも発展してほしいと思っているのです。その先駆けのお店になればと思っています」

俺がそう言うと、ピエール様とキャロリン様は勢い良く立ち上がり、キラキラした瞳で身を乗り出してきた。

「レオン君、君は素晴らしいよ！」
「本当ね！　スイーツの発展を考えているなんて！」
「あ、ありがとうございます」

本当にスイーツが大好きなんだな。頑張って美味しいスイーツを作ったら、絶対お二人に食べてもらおう。

「まずは本人と会ってみた方が良いね。スイーツの研究が大好きな料理人で、熱意は保証するよ」
「ぜひ会ってみたいです。ピエール様、本当にありがとうございます」
「それはこっちのセリフだよ。レオン君のお店ができたら食べにいくのが楽しみだ」

ピエール様はそう言って優しく微笑んでくれた。なんて良い人なんだ……！　リシャール様も本当に良い人だと思ってたけど、やっぱり類は友を呼ぶのかな。
良い人に囲まれすぎて逆に怖いぐらいだ。

「では早速料理人を呼んでこよう」

ピエール様はそう言って部屋から出て行った。もしかして、従者に呼んできてもらうんじゃなくて自分で呼びにいくの！？　そんな貴族もいたんだね……

俺がそう驚いていると、キャロリン様が苦笑いで俺に話しかけてくれた。

「はしたなくてごめんなさいね。あの人いつも自分が動いてしまうのよ。お客様がいらっしゃってる時は従者に頼みなさいと言っているのに……」

「いえ、私は気にしませんが……そのような方を初めて見て驚いたのです」

「貴族としては褒められた行為ではないわ」

キャロリン様はそう言いつつも、ピエール様が出ていったドアを見て優しく微笑んでいる。キャロリン様はそんなピエール様が好きなんだろうな。

ロジェが言っていた、貴族として異端って意味が理解できた。でも俺はこの家かなり好きだ。

「私は平民ですので気になさらないでください。私も全て従者に頼む貴族のやり方には、まだ慣れていないのです」

「あら、そうなのね。では今日はいつも通りにすることにしますわ」

キャロリン様はそう言って微笑んだ。

「そうしてください」

「ではまずお茶のおかわりを用意しないと。レオン君はステイシー

と話していてね」

キャロリン様はそう言って部屋を出てしまった。部屋には俺とロジェ、ステイシー様とその従者の四人だけだ。

貴族の屋敷を訪れて、訪れた先の家人がいなくなるって変な感じだな。そう思って少し居心地の悪さを感じていると、ステイシー様が話しかけてくれた。

「レオンのおかげで私のお店ができそうです。ありがとう」

「いえ、私は少し助言しただけですので」

「これからも何かあれば相談しても良いですか？　レオンもお店をやるのですよね？」

「はい。私はスイーツの専門店をやる予定です」

「ではお店を始める同士、仲良くいたしましょう」

「よろしくお願いします」

ステイシー様って変なところもあるけど、基本的には普通にまともなんだよね……。なんであんな感じになっちゃったんだろう。

まあ、考えても分からないか。俺は早々に思考を放棄して、ステイシー様の前のテーブルに置いてあるプランターを見た。そこには綺麗な白い花が咲いている。

「ステイシー様、そちらがご紹介くださるもの？　方？　ですか？」

「そうです！　この子がお花のお友達の中で一番可愛いのです。レオンも仲良くなれると思います」

「そ、そうなのですね……」

「名前はユキです。自己紹介してあげてください」

じ、自己紹介！？　花に自己紹介する、考えるだけで面白すぎる。でもステイシー様は真剣なんだから笑っちゃダメだ。絶対ダメだぞ

！　俺は自分にそう言い聞かせて、真剣に自己紹介をした。

「初めまして、レオンと申します。えーと、ステイシー様の友達です。よろしくお願いします」

「ユキはとても喜んでいるみたいです！」

ステイシー様が満面の笑みでそう言った。何か、だんだん怖くなって来たんだけど。

喜んでるって……本当に植物の気持ちがわかるとか、そんなことある……？　いや、流石にそんなことは……でもここって異世界だし魔法とかあるし……

「あ、あの、ステイシー様？」

「なんですか？」

「さっき喜んでるって言ってましたけど、何故わかったのですか……？」

「何故、ですか？　見ればわかります。ほら、喜んでいる気がしませんか？　さっきよりも花弁がツヤツヤしています」

「そ、そうですか？　そうかもしれません？　あの、ユキちゃんの声が聞こえるとか、そういうことではないのですよね……？」

「声ですか？　聞こえませんよ？」

「そうですよね。それなら良いのです」

ふぅ～、植物と話せるとか、そういう特殊能力を持っているわけではないんだな。そこは良かった。良かったのか？　でも植物の気持ちがわかるなんて絶対辛いよね。そんな能力を持ってなくて良かった。

そうして俺が安堵のため息を吐いていると、部屋にピエール様とキャロリン様が戻ってきた。二人は大柄で強面の男性を連れている。この人がスイーツの料理人なのかな？

何か……料理人っていうより、兵士とかが似合いそうな感じだ。
「レオン君、彼がスイーツの研究をしてくれている料理人で……」
「お祖父様、お待ちください」
そうしてピエール様が料理人さんを紹介し始めてくれたその時、ステイシー様がそれを遮った。どうしたんだろう。
「ステイシー、どうしたんだい？」
「お祖父様、レオンにお友達の紹介もしましたので、私はお先に失礼したいです。先程のお店について、早く料理人と相談したいのです。料理長が毎日私の食事を作ってくれていますから、そのレシピが使えると思います！」
「確かにそうだね……ステイシーが美味しく食事ができるように、いつも試行錯誤してくれているからね」
そうか、ステイシー様の食事のために毎日試行錯誤しつつ、野菜だけの料理を作ってたんだよな。それは絶対使えると思う。そのノウハウを家の中だけに眠らせておくのはもったいないよ。
「そうですよね。では、私は料理長のところに行ってきます！」
ステイシー様はそう言って、すぐに部屋から出て行ってしまった。家だからかも知れないけど、ステイシー様めちゃくちゃ自由だな。でも、楽しそうで良いよね。
俺はステイシー様を見て、自分の顔が自然と笑顔になっていくのを感じた。

１３３、ステイシー様のお友達（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします。

１３４、スイーツ専門の料理人

ピエール様はステイシー様が部屋を出て行くのを見送った後、ソファーに腰掛けた。そしてキャロリン様もその隣に腰掛け、料理人さんは立ったままだ。

「レオン君話が逸れてしまってすまないね。ステイシーに付き合ってくれてありがとう。それじゃあ料理人を紹介するよ。スイーツの研究をしてくれているヨアンだ」

「ヨアンと申します。よろしくお願いいたします」

ヨアンさんは緑の髪に緑の瞳で、かなり背が高くガタイが良い人だ。吊り目気味で顔も迫力があるので、初対面だとちょっと怖い。今が真顔だからよりそう感じるのかもしれないけど。

でもそこまで年上じゃないと思う。二十歳ぐらいか、もう少し上かな。

「レオンです。よろしくお願いします」

「ヨアンにはレオン君のお店について軽く説明しておいたけど、改めてレオン君から話してくれるかい？」

「かしこまりました」

俺はピエール様にそう返事をして、身体ごとヨアンさんの方を向いた。

「ヨアンさん、私はスイーツ専門店を始めたいと思っています。カフェのようにサンドウィッチなど食事のメニューを一切出さない、スイーツだけのお店です。そこで新しいスイーツを一緒に開発して

くれる料理人を探しているのですが、私に力を貸していただけないでしょうか？」
「ピエール様から、これからもずっとスイーツの研究を続けるのは難しいかもしれないと言われていますので、スイーツの研究を続けられるのは本当にありがたいです。またそのお店も素晴らしいと思います。ですが、条件を聞いてから決めても良いでしょうか？」

確かにそうだよね。条件も聞かずに決められないよね。
うーん、条件か……給金はどのくらいが適当なんだろう。とりあえず今もらっている給金と同じくらいは出すと言っておけば良いかな。
あとは住む場所とか働く場所かな。住む場所は今の段階では自分で探してもらうしかないし、働く場所も決まってない……。
あれ？　これって条件最悪じゃないか？　絶対に来てくれない気がする！　どうしよう……とりあえずヨアンさんの意見を聞こう……

「ヨアンさんはどのような条件を望んでいるのでしょうか？　できる限り要望には応えたいと思っています」
「そうですね……スイーツを毎日食べられるようにしてほしいこと、研究費をできる限り上げて欲しいです」
「それだけで良いのですか……？　給金や住む場所、働く場所と時間などは要望がありますか？」
「いえ、給金は最低限暮らしていければ良いです。住む場所や働く場所などもどこでも構いません。スイーツを食べられて研究できるのであればそれ以上は必要ありません。あっ、ただ料理人として身綺麗にしたいので、お店に着替える場所と体を清められる場所が欲しいです」

ヨアンさんって強面な顔をして、実はスイーツ馬鹿なのかもしれない……。でもそれぐらいの人の方が研究が上手くいきそうだ。是

非とも力を貸してほしい。

「ではまず、ヨアンさんは基本的にスイーツ食べ放題とします。経費で買った材料で、好きなだけスイーツを作って食べていただいて構いません。ただ食べるのは休憩時間や仕事が終わってから、それから食べて良いのはヨアンさんだけとします。また研究費は基本的に上限を設けません。足りなければその都度追加するので言ってください」

俺がそう言うと、さっきまで少し緊張していたのか、強面だったヨアンさんの顔がみるみる崩れていく。

「ほ、ほ、本当ですか！？　その条件は、本当なんですか！？」

「は、はい。本当です……」

ヨアンさんが凄い勢いで聞いてきた。ヨアンさん、圧が凄いよ……。その強面でその勢いで迫られたら、子供は普通泣きます！

俺のそんな心の声が届いたのか、ヨアンさんは俺の方に近づいてきていた分を、ゆっくりとまた遠ざかっていった。

「す、すみません、つい嬉しくて……」

「いえ、大丈夫ですよ。その条件で良いですか？」

「勿論です！　これ以上ない条件です！　本当にありがとうございます！」

ヨアンさんは距離は遠いままだけれど、それでも凄い勢いでそう肯定してくれた。そして最後に勢い良く頭を下げた。

なんか……、ヨアンさん強面で大柄な人だけど、こんなこと言うのおかしいだろうけど、ちょっと可愛いかも。

「顔をあげてください。こちらこそ力を貸していただきありがとうございます。他の条件ですが、給金は今ヨアンさんがもらっている金額に、住む場所を用意するお金を足したものとします。なので住む場所は自分で探していただきたいです。働く場所はまだお店が決まっていないので、どこか厨房を借りるので少しお待ちください」
「はい！　最初の二つの条件さえ守っていただければ、他はなんでも構いません」

なんでも良くはないでしょ！　ヨアンさんってスイーツの研究をやり出したら周りが見えなくなるタイプかも。ちゃんと時間で帰らせたりしないと……
俺がそんなことを考えていると、ピエール様が良いことを思いついたというように、声を上げた。

「そうだレオン君、お店ができるまではうちの厨房を使ってくれて構わないよ。ヨアンも慣れているだろうし、色々と揃っているからね」
「え？　いや、それは悪いです！」
「いいんだよ。気にしないでくれ」
「ですが……」

流石にそれは申し訳なさすぎる……

「そうだ、ではこうしよう。うちの厨房を貸す代わりに、ステイシーのお店についても助言してもらえないだろうか？　ステイシーもレオン君と会えて喜ぶと思うんだ」
「それはもちろん良いのですが……、本当に厨房をお借りして良いのですか？」
「もちろんだよ」

……何て良い人なんだ。全員がこんな貴族だったら良いのに。せめてものお礼で、研究途中のスイーツとして美味しいスイーツを差し入れしよう。

「本当にありがとうございます。では、研究途中のスイーツも味見していただけますか？」

「ああ、それはこちらからお願いしたいくらいだよ」

「では頑張って、美味しいスイーツを作ります」

「楽しみにしているよ」

そうしてその日は話を終えて、俺は公爵家に帰ってきた。

ヨアンさんは、とりあえず一週間は荷物をまとめたりの期間として、次の回復の日に屋敷から引っ越すことに決まった。ピエール様は、住む場所も今まで通り屋敷の使用人部屋を使っても良いと言ってくれたけれど、流石にそれは甘えすぎなので丁重にお断りした。

それなので住む場所はヨアンさんが探してくれるようだけど、場所を選ばなければすぐに見つかるみたいだ。この一週間は部屋を探したり新しい生活に慣れる期間として、仕事は来週の回復の日からになった。

これからは俺も毎週ダリガード男爵家に行くことになるな。

まずはとにかくスイーツの開発をして、その目処が立ったらお店の場所を決めたり商会を立ち上げたり、かなり忙しくなる。大変だろうけど、ワクワクするな。

そしてその日の夕食の時、俺はリシャール様に今日のことを報告した。

「リシャール様、本日ダリガード男爵家を訪ねましたが、スイーツ研究をしていた料理人を紹介していただけました。とりあえず、こ

れからはスイーツの研究をする予定です」
「そうか、それなら良かった。その者はどこで研究をするのだ？まだ店は決まっていないだろう？」
「はい。ダリガード前男爵様が厨房をそのまま使って良いとおっしゃって下さいまして、ご好意に甘えることにしました」

本当にありがたい提案だった。ピエール様にも恩返ししないとだよな。

「それはありがたいな。しかし早めに店の場所を決めた方が良いのではないか？」
「スイーツ開発の目処がついたらで良いと思っていたのですが、それでは遅いでしょうか？」
「そうだな……店は中心街に開くのだろう？」
「その予定です」
「それならば早い方が良いだろう。良い立地の店は売りに出されてもすぐに買われてしまう。それに改装工事にも時間がかかるからな」

確かに言われてみればそうだよね……買ったらそのまま使えるとは限らないんだ。まずはお店を準備した方が良いかも。

「確かにそうですね。では早めにお店を準備しようと思います。売り出している店などはどこで探せば良いのでしょうか？」
「教会で探せるが、私の方で探しておこう。私の方が早く沢山の情報を手に入れられるからな。そうだ、レオン君は商会の登録はする予定なのか？」
「はい。商会の登録もしようと思っています」
「では商会の登録と店を探すのは私がやっておこう。何件か良い店を探してくるからその中から選んでくれ」
「そこまでやっていただいても良いのでしょうか……」

流石にリシャール様に頼りすぎな気がしてるんだよね。凄くありがたいんだけど……

「もちろん良いに決まっている。タウンゼント公爵家はレオン君のお店を後援するのだから当然だ。それにこの程度のことならば、そこまで時間もかからないからな」

「……本当に、本当にありがとうございます！　必ず成功させます！」

「楽しみにしているよ」

それからリシャール様にジャパーニス商会という名前を伝えたり、お店の立地や作りで望ましいものを伝えたり、牛乳の仕入れについての話などをして、夕食は終了となった。

話がどんどん進んでいって俺がついていけてないくらいなんだけど、しっかり頑張ろう。とにかくまずはケーキの開発だな。

１３４、スイーツ専門の料理人（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

１３５、スイーツ研究開始

ダリガード男爵家を初めて訪れた日から一週間が経ち、今日はまたダリガード男爵家に来ている。この一週間でジャパーニス商会の登録は終わり、お店も探し始めてくれているようだ。

王立学校でロニーに進捗を伝えたら、あまりに早い展開に言葉を失っていた。ロニーの気持ちは心からわかる。俺も展開が早すぎてついていけてないくらいだ。

とにかくやるべきことの優先順位を決めてやっていかないとだよな。まずスイーツの研究は必須だ。

今日からヨアンさんとスイーツ開発だから、しっかり頑張らないと！　俺は気合十分でダリガード男爵家に向かった。

ダリガード男爵家に着くと、キャロリン様が迎えに出てきてくれた。

「レオン君いらっしゃい」

「キャロリン様、本日からしばらくお世話になります」

「私たちもスイーツの開発は楽しみにしているわ。頑張ってね」

「はい！」

そんな会話をしつつ、キャロリン様に厨房まで案内された。厨房は屋敷の規模にしてはかなり立派なもので、設備も整っているようだ。

厨房には、ステイシー様と二人の料理人、それからヨアンさんがいた。

「レオン、来たのね！　今料理人とお店で出せる料理について話し

合っていたの」
「ステイシー様、おはようございます。もうお店で出す料理について考え始めているのですか？」
「私も食べるものだし、早い方が良いものが出来上がるでしょ？」
「確かに、ステイシー様の日々のお食事も向上いたしますね」
「そうなのよ！」

ステイシー様は野菜だけの料理を作るのがよほど楽しいのか、かなりテンションが高い。このままだとステイシー様の料理開発に付き合わされそうなんだけど……
俺がそう思って困っていると、キャロリン様が助け舟を出してくれた。

「ステイシー、レオン君はお仕事で来ているのだから邪魔してはダメよ。レオン君が休憩の時や手が空いているときに相談に乗ってもらいなさい」
「そうでした……レオン、ごめんなさい」
「いえ、ここを借りる条件として、ステイシー様への助言をすることになっていますので構いません。……ただ、時間を決めていただけるとありがたいです」
「では、休憩時間や仕事が終わった後にいたします」
「ありがとうございます」
「二人で上手くやるのよ。そうだ、レオン君は昼食はどうするのかしら？」

キャロリン様は丸く収まったことに安心した笑顔を浮かべて、そう聞いてきた。

「昼食は自分で作って食べる予定です。……使用人の方の休憩所などをお借りしても良いでしょうか？」

「それはいいのだけれど、どうせなら昼食は一緒に食べましょう。ピエールも回復の日は休みでほとんど屋敷にいるのよ。皆で食べた方が美味しいわ」
「お祖母様、それは素敵な考えです！」
「そうよね。ではそうしましょう」

ま、待って、どんどん話が進んでいくけど一緒に食べるの！？ヨアンさんもロジェもいるから……

「キャロリン様、大変ありがたいのですがヨアンさんもいますので……」
「あら、ヨアンももちろん一緒よ。レオン君とヨアン、それからレオン君の従者の方の分も昼食を作れるかしら？」

キャロリン様の中ではもう一緒に食べることは決定事項のようで、料理人さんに俺たちの分も作れるのか聞いている。

「はい。材料は余分がありますのでお作りすることは可能です」
「では三人分追加で作ってちょうだい」
「かしこまりました」
「では私がいたらお仕事も進まないでしょうから、失礼するわね。昼食を楽しみにしているわ」

俺たちが唖然としているうちに、キャロリン様は段取りを決めて厨房を出て行ってしまった。
えっと……一緒に昼食を食べることになったんだよね。しかもヨアンさんとロジェも一緒みたいな感じじゃなかった？
俺がどうすれば良いのかわからずロジェの方を見ると、ロジェも少し困った顔をしていた。そこで俺はロジェに小声で話しかける。

「ロジェ、一緒に昼食をいただいてもいいのかな？」
「レオン様はお誘いをお受けして良いと思います。しかし私は従者ですので……」
「多分ロジェの分も、使用人さんたちの食事じゃなくて、俺たちと同じメニューが用意されるよね。それってこの家の普通なのかな？」
「私には分かりかねますが……、ヨアンさんに聞いてみるのが良いのではないでしょうか？」
「そうだね」

俺たちがそうして話していると、ステイシー様が二人の料理人を連れてやってきた。

「レオン、先程はろくに挨拶もせずにごめんなさい。こちらがうちの料理を作ってくれている料理人です」
「レオン様、よろしくお願いいたします」
「レオンと申します。よろしくお願いします」
「この二人はいつも厨房にいるので、何かあれば言ってください」
「かしこまりました」
「では、私たちは料理の研究に戻りますね」

ステイシー様と料理人さん達は、そう言ってまた研究に戻って行った。残されたのは俺とロジェ、ヨアンさんの三人だ。

「ヨアンさん、お久しぶりです」
「はい。今日からよろしくお願いします」
「お願いします。それで早速聞きたいことがあるんですけど、先程キャロリン様が言っていた一緒に昼食を食べるのは、ヨアンさんや従者のロジェも同じ席で食べると言うことでしょうか？」
「はい、そうですが？」

ヨアンさんは俺の質問に不思議そうな顔をしている。もしかして、この家って使用人も一緒に食事をするのが当たり前なの？

「この家では良くあることなのですか？」

「……当たり前ではないのですか？」

「普通の貴族の家では、使用人は使用人専用の休憩室などで食事を取ります。主人と席を共にすることはほとんどありません」

「そうなのですね……知りませんでした。この家では使用人とともに食事を取ることも珍しくはありません」

そうなんだ……、貴族としてはかなり驚きだけど、この家の中ではこの家のルールに従うべきだよね。

「そうなのですね。ではありがたくご一緒させていただきましょう。ロジェも一緒に食べるよ」

「しかし主人と共に食事をするなど……」

「でも、それがこの家のルールなんだから従わないとでしょ？」

「それもそうですが……」

「これはもう決定だからロジェに拒否権はありません！　ということで一緒に食べようね」

ロジェは真面目だから俺と一緒に食事をすることに抵抗があるみたいだけど、強引に決定にしてしまった。

いつもロジェは給仕をしてくれるけど、一緒に食べたことってなかったんだよね。ちょっと嬉しいかも！

「……かしこまりました」

「じゃあ昼食についてはそれで決まりで、スイーツの研究を始めましょう！」

俺がそう言うと、ヨアンさんは途端に目をキラキラとさせて頷いた。

「はい！　あっ、でもその前に一つ良いでしょうか？　私はレオン様に雇われている身ですから、敬語も敬称も必要ありません。もちろん、レオン様のお好きに呼んでいただいて構わないのですが……」

そっか、ヨアンさんは年上だから自然に敬語と敬称を使ってたよ。やっぱりまだここは慣れないんだよね。

でも段々と慣れていこう。

「わかった。じゃあヨアン、これからよろしくね」

「はい。こちらこそよろしくお願いします！」

「それじゃあ、まずは荷物の整理からかな」

俺は厨房にある台の上に、沢山並べられた荷物を見てそう言った。スイーツの研究に必要そうなものを色々と持ってきたのだ。さっきこの家の使用人さん達が運び込んでくれた。

「沢山ありますね……」

「全てスイーツ作りに必要だと思うものだからね」

「宝の山ですね！」

ヨアンはガタイが良くて強面なのに、スイーツのことになると目がキラキラして顔つきが幼くなる。絶対熱心に研究してくれるだろう。本当に得難い人材だ。

俺も負けないように頑張ろう！

１３５、スイーツ研究開始（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューを是非よろしくお願いします！

136、生クリーム

「まずはこれ、ヨアンはこれを知ってる？」
「これは……魔法具ですか？」
「そう。製氷機なんだけど……」
「これが、これが製氷機なのですね！　欲しかったのですが、ピエール様がまだ手に入らないとおっしゃられて」
「リシャール様が融通してくれたんだ。あっ、リシャール様はタウンゼント公爵家の前当主で宰相様なんだけど、一応名前を覚えておいてね。お店はタウンゼント公爵家に後援していただける予定だから」

ヨアンは俺がタウンゼント公爵家の所属になっていることは知ってるはずだけど、多分貴族についての知識なんてないだろう。

「はい。ピエール様からタウンゼント公爵家の皆様については教えていただきました」
「そーなんだ、それなら大丈夫だね。これからも必要があれば教えるよ」
「よろしくお願いします」
「それで製氷機はここに置かせてもらうことになったから、魔力がなくなったら魔力を込め直してもらうから教えてね。しばらくは使えると思うけど」
「かしこまりました。ありがとうございます！」

とりあえず説明が必要なのは製氷機と……、あと牛乳についても説明しなきゃ。

「それからこの中に入ってるのが牛乳なんだけど、牛乳は飲んだことある？」
「はい、何度か飲んだことはありますが……」
「牛乳はスイーツ作りに必須なんだ。だからリシャール様に頼んで定期的に手に入るようにしたから、牛乳の使い方も覚えて欲しい」
「ぎゅ、牛乳で新しいスイーツが作れるのですか！？」
「うん。というかほぼ全てのスイーツに牛乳って使われるかも。そのくらい必須だよ」

俺がそう言うと、ヨアンは驚いた顔をした後すぐ不思議そうな顔になった。

「レオン様は、なぜそのようなことを知っているのですか？」
「それは、自分で色々と開発してみたからかな」
「まさか……既に新しいスイーツを開発されているのですか！？」
「まだいくつかだけどね。ほとんどは完成まで辿り着いてないんだ」
「それでも凄いです！　俺は……ずっと研究をさせていただいていたのに、ほとんど成果を上げられませんでしたので……」

俺は前世のレシピを再現してるだけだからね。完全に反則だから落ち込む必要はないよ！　そう言ってあげたいけど言えない……

「俺のはたまたまだよ。ヨアンは今までの研究でどんなスイーツを考えたの？　それからどんなスイーツを知ってる？」
「はい。知っているスイーツは、ジャムやフレンチトーストなどカフェで売られているものと、レオン様の屋台で売られているクレープは知っています。研究では完成したものはありませんでした。唯一完成したのは香ばしい蜂蜜のようなものなのですが……パンにつけると比較的美味しいですが、それだけでは食べられないものです」

ヨアンはそう言って落ち込んでしまった。
でも、落ち込む必要はないんじゃないかな？　香ばしい蜂蜜ってカラメルな気がする。それならそれは大成功だよ！
カラメルならクリームにかけてもそれだけで美味しいよね。そうだ、クリームもあるんだよ！
バターを作る前の段階がクリームだったはずだと思ってそれも仕入れてもらったけど、多分砂糖を入れて泡立てれば俺の知ってる生クリームになるはず。
……テレビでそんな番組を見たから、多分合ってると思う。もしこれが作れたらスイーツ研究はかなり進むよね！

「ヨアン、こっちは牛乳じゃなくてクリームって言うんだけど、これを泡立ててヨアンが作った香ばしい蜂蜜をかければ美味しいと思う。とりあえずやってみようよ」
「クリーム、ですか？」
「そう、バターになる前段階のもの、みたいな感じかな。これをボウルに入れて砂糖を加えて泡立て器で混ぜれば、美味しいものが出来ると思うんだ。とりあえずやってみてくれる？」
「かしこまりました」

ヨアンは不思議そうな顔をしながらも、生クリーム作りを始めてくれた。ヨアンはガタイが良くて力もありそうだから、多分スイーツ作りに向いてると思う。
俺の曖昧な記憶だけど、スイーツ作りは重労働だってお母さんがいつも言っていた。とにかくかき混ぜるものが多かったはずだ。日本にも自動でかき混ぜる機械があったよね。
あれなんて名前だっけ。ハンド、ハンドプロセッサー？　いや、それフードプロセッサーだよ。ハンド、ハンドシェイカーだっけ？
うーん、なんか違う気がする。
うわぁ～こういうときにスマホがあれば調べられるのに！　凄く

気持ち悪い。絶対に思い出したい。
ハンド、ハンドじゃないのかな？　オートプロセッサー？　違うな、多分ハンドは合ってるはず……

……ハンド、ハンド、ハンドミキサーだ！！

スッキリしたぁ～。マジで良かった。これ思い出せなかったら知る術が一切ないんだよね。思い出せて良かった。
ハンドミキサー、あれを作れたら便利だと思う。また後で考えてみようかな。

俺がそんな馬鹿なことを考えている間に、ヨアンの準備が整ったようだ。

「レオン様、クリームの量と砂糖の量はご存知ですか？」
「いや、全くわからないんだよね……。でもかき混ぜてこぼれないように、ボウルの半分より少ないくらいで良いと思う。砂糖は……そのスプーンで二杯くらいかな。とりあえず作ってみて試行錯誤だね」
「かしこまりました」
「これからもこんな感じで試行錯誤してもらうことになるんだけど、良いかな？」
「もちろんです！　今まではもっと手探りで砂糖を焼いてみたり、溶かしてみたり、小麦粉と砂糖を水に溶かして煮詰めてみたり、失敗ばかりでしたので」

小麦粉と砂糖を水に溶かすって、大量の水にってことだよね？
確かに何も知らない状態だとそういうことになるのか……
たぶん少量の水を使えばパンになると思って水を多くしたんだろうけど、極端すぎたんだね。

そう言えば、パンケーキってまだ俺の実家から流行ってないのかな。それならパンケーキも教えてあげよう。
パンケーキに生クリームなんて、幸せの味だよね！　なんか俺までワクワクしてきた。
これでチョコがあったらいいんだけどな……まだこの国でチョコって見てない気がする。チョコは日本でも輸入がほとんどだったし、この国では作られてないのかも。
他の国で作られていて輸入されてれば、どこかには売ってるかもしれないけど……今度探してみようかな。売ってるとすればカカオそのままだろうか？　それならアーモンドとかを売ってたお店に聞けばわかるかもしれない。
でもカカオが手に入っても、それをチョコレートにできるかと言われたら全くやり方がわからない。とにかくそのままだと苦いってことは知ってるけど……まあ、手に入ったらこれも試行錯誤だな。

「じゃあこれからよろしくね。とりあえず今は、そのクリームをとにかく沢山混ぜてみて。そのうちに重い質感になって来ると思う」
「分かりました」
「じゃあその間に、俺はヨアンの香ばしい蜂蜜ってやつを作ろうかな。作り方を教えてくれる？」
「勿論です！」

それからヨアンはひたすらクリームを混ぜて、その間に俺はカラメルを作った。香ばしい蜂蜜はやっぱりカラメルだったようで、凄く良い匂いだ。
「レオン様、質感が変わってきましたが……これで良いのでしょうか？」

ヨアンに呼ばれてクリームを見にいくと、しっかりと重たい感じで出来上がっている！　やっぱり砂糖を入れて混ぜるので正解だったんだ！

「たぶんこれで完成だよ！　とりあえずこれだけで食べてみよう」
「レオン様、こちらをお使いください」
「ロジェありがとう」

ロジェがすぐにスプーンを用意してくれたので、俺はそれを使ってクリームを一口食べる。
やばい……めちゃくちゃ美味しい！！　日本で食べてたやつだ！！　これ大成功だよ。もう少し砂糖が多くても良いかもしれないけど、この国の人は甘いものに慣れてないからこのくらいでもいいかも。

「ヨアン、食べてみて！　ロジェも！」
「ではいただきます」
「私もいただきます」

ヨアンは待ちきれない様子で、ロジェは恐る恐るクリームを一口分取り口に入れた。すると二人はかなり驚いた表情になる。

「レオン様！　これは革命です！」
「確かにこれは……今までにない食感と味です。甘くて美味しいです」
「そうだよね！　これはいろんなスイーツに応用できると思う。とりあえずカラメルをかけて食べてみようか」
「からめる……？」

あっ、とっさにカラメルって呼んじゃったよ。

「この香ばしい砂糖の名前、カラメルって名付けたんだけど良いかな？」
「カラメル、良い名前ですね。良いと思います！」
「ありがとう。じゃあ掛けるね」

そうしてお皿に少し分けたクリームに、カラメルをかけて食べてみた。うん、めちゃくちゃ美味しい。やばい……久しぶりだからかクリームが泣きそうなぐらい美味しい。

「カラメルも凄く合うよ」
「本当ですね！」

ヨアンは自分が作ったものがスイーツに役立つとわかって、凄く嬉しそうだ。

「レオン様、レオン様と出会えて良かったです……」
「大袈裟だよ。これからもっと沢山のものを開発してもらうんだからね」
「精一杯頑張ります！」

それからは午前中いっぱいで、ヨアンにパンケーキとクッキーの作り方を教えて昼食の時間となった。たぶんヨアンなら研究してより美味しくしてくれるだろう。
今日作った、生クリームを乗せてカラメルをかけたパンケーキとクッキーは、昼食後に皆さんにお出ししようと思って人数分用意した。ピエール様とキャロリン様に喜んでもらえたらいいな。

１３６、生クリーム（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

137、スイーツの試食

昼食はダリガード男爵家の食堂でいただけるようで、食堂に向かうと大きなテーブルにたくさんの料理が並んでいた。ピエール様とキャロリン様、ステイシー様、二人の料理人さん、ヨアン、俺とロジェという大人数での食事のようだ。

貴族では流石にこんな光景はないからちょっと嬉しいかも。料理人さんと一緒に食事をするっていいよね。食べた感想を直に伝えられるし、美味しさを分かち合える。

皆が席につくと賑やかに食事が始まった。

「レオン君、厨房の使い勝手はどうだい？」

「とても良いです。改めて使わせていただきありがとうございます」

「いや、いいんだよ。スイーツ開発のために設備を整えたからね。活用してもらえるとありがたい」

ダリガード男爵家は、屋敷はこじんまりとしていて質素だけど、厨房だけはかなり設備が整っている。本当にスイーツが好きなんだなと厨房を見ればわかる。

「厨房とスイーツ開発にお金をかけすぎて、他のところは質素になっているのだけれどね」

「キャロリン、それは言わない約束じゃないか」

「私もスイーツ開発にお金をかけるのは賛成だったのですけれど、流石に装飾品や服などが少なすぎますわ。男爵家として最低限は整えなくては」

「わかっているよ。これからはレオン君が研究を引き継いでくれた

からね。まずは服を新調しようか」
「そうですわね」
服とか装飾品にかけるお金を削ってまでスイーツ開発にお金を使ってたのか……確かに甘味って高いもんね。砂糖も研究するのなら大量に使うだろうし、蜂蜜も安くはない。メープルシロップは売ってたけど輸入品でかなり高かった。果物も高いし……そう考えるとお金がないと無理だな。
俺はお金の心配はないからそこはありがたい。今でさえかなりの金額が口座にあるし、これから魔法具や技術使用料でずっとお金が入ってくるし……逆に使わないと俺がお金を持ち過ぎになる。
というか今更だけど、今までピエール様達がやっていた研究を俺が引き継ぐ形なら、ピエール様達にもお金を払ったほうが良いんじゃないか？
料理人も引き抜いちゃったわけだし……これって研究成果の横取りみたいだよね！？
「ピエール様、ヨアンを私が雇ったことで今までの研究成果も私が手にする形となってしまいましたので、その分お礼の品やお金をお渡ししたいのですが……」
「いや、そんなことは気にしないでくれ。成果とは言ってもそこまでの成果はあげられなかったからね」
「ですがそういうわけには……」
ここはちゃんとしておいた方が良いよね。でも受け取ってくれなさそうだよな……
「本当に気にしなくて構わないよ。美味しいスイーツを開発してくれればそれで満足だよ」

せめて何かピエール様達に喜んでもらえることがしたい……何かないかな。うーん、やっぱりスイーツかな。

「では、お店のスイーツを定期的に贈らせていただきたいです。今はまだ開発途中なので難しいですが、お店ができたときには必ず」

「そうだね。それは凄く嬉しいよ」

「ええ、とても楽しみだわ」

ピエール様とキャロリン様は、とても嬉しそうな顔でそう言って微笑んでくれた。

「美味しいスイーツをお届けするので、楽しみにお待ちください」

俺は笑顔でそう言った。でも、実際はこの後に新作のスイーツを食べてもらう予定なんだけどね。今そのことを伝えた方が良いかな？

本当はサプライズの予定だったんだけど、昼食の量が結構多いからお腹がいっぱいで食べられなくなりそうだし、今スイーツの話をしちゃったし……。とりあえず今伝えちゃおうかな。

「早速ですが、本日の昼食後にもスイーツの味見をしていただけますか？」

俺がそう言うと、二人はかなり驚いた様子で目を見開いた。

「それは、もう新しいスイーツを開発したのかい！？」

ピエール様がかなり驚いた様子でそう叫んだ。こんなに驚いてくれるとちょっと嬉しいな。そう思って返事をしようと口を開きかけ

たその時、ヨアンの声に遮られた。

「ピエール様、レオン様は素晴らしいのです！　次から次へと新しいアイデアを考えられて、とても美味しいスイーツができました」

「ヨアン本当かい！？」

「はい！　私が作りましたので間違いありません」

俺がピエール様に答える前に、前のめりでヨアンがピエール様に報告している。サプライズにしようって言ったから黙ってたけど、本当は言いたくて仕方がなかったんだな。

ヨアンって本当に外見と内面のギャップが凄い。俺が言うのも変だけど、しかもヨアンに全く相応しくない言葉かもしれないけど、ヨアンって可愛い系だ。俺は自分でそう思って思わず笑いそうになってしまった。

ヨアンを外見しか知らない人が聞いたら可愛いとは対極にあると思うだろうけど、スイーツに目を輝かせているところを見たらわかってもらえるはず！

「まあ、なんてことかしら。もっと早く言ってください。昼食を食べ過ぎてスイーツが食べられなくなるところでしたわ」

「キャロリン様申し訳ございません。本当はサプライズにしようと思っていたのですが、昼食の量が多く皆さんがスイーツを食べられなくなるのではと思い、急遽お伝えしたのです」

「そうでしたの。伝えてもらって良かったですわ。では早くスイーツの時間にいたしましょう！」

え、もう？　まだ昼食も結構残ってるけどいいの？　俺はそう思ったが、ピエール様もすぐに食べたいようでスイーツを持ってくるように指示している。昼食は他の使用人で残りを食べたり、夕食にも回せるものは回すらしい。

「レオン君、どんなスイーツなんだい？」
「はい。パンケーキに生クリームとカラメルを乗せたものとクッキーでございます」
「どれも聞いたことのないスイーツだね……生クリームは言葉はわかるが、どのようなものか想像もできない」
「名前は私が名付けたものですので、実物を見て覚えていただけたら嬉しいです」
「そうだね、凄く楽しみだよ。今人生で一番幸せな時間かもしれないな。新作スイーツが運ばれてくるのを待っているなんて……！」
「あなた、本当ですわね！　ついに念願の時ですわ」

凄い……、ピエール様とキャロリン様のスイーツへの愛が凄い。ケーキが出来上がってから食べてもらった方がよかったかな？　でも生クリームもこの世界になかったものだろうし、多分喜んでくれるはずだよね。

そんなことを考えていると、ついにスイーツが運ばれてきた。パンケーキは四等分して、四分の一が一人分だ。ステイシー様にも生クリームのカラメル掛けを用意した。
ヨアンに聞いたら、ステイシー様は卵はダメだけど牛乳は飲めるらしい。これなら乳製品と砂糖しか使ってないから、食べるのに抵抗感はないだろう。

「レオン、私にもあるのですか？」
「はい。ステイシー様のは生クリームのカラメル掛けです。そちらは乳製品と砂糖しか使っていないので食べるのに抵抗はないと思ったのですが……。ステイシー様は牛乳を召し上がられるとお聞きしましたので」
「乳製品は食べられます！　とても嬉しいです！」

ステイシー様は満面の笑みでそう言った。喜んでくれたみたいで良かった。

「ではレオン君、早速いただいてもいいかな？」

「はい。そちらのお皿がパンケーキで、パンケーキの上に乗っている白いものが生クリーム、その上に掛かっているのがカラメルです。それからそちらの小皿に乗っているのがクッキーです」

「カラメルとは香ばしい蜂蜜のことだったんだね」

「はい。カラメルと名付けました」

「いい名前だ。では早速パンケーキから」

ピエール様はそう言って、パンケーキを一口大に切りカラメルの掛かった生クリームを上に乗せて、ぱくっと一口食べた。

数回咀嚼して、すぐにピエール様の顔が満面の笑みに変わる。

「レオン君、本当に美味しい、素晴らしいスイーツだよ」

「ありがとうございます」

「あなた、このクッキーも最高に美味しいですわ。手軽に食べられるのも魅力ですわね」

「クッキーは、お茶を飲むときに一緒に召し上がられると良いと思います」

「確かにそうね……レシピを教えてもらうのはダメですから、これからはヨアンにクッキーを作ってもらっても良いかしら？」

別にレシピを教えてもいいんだけど、これからはお店を始めるんだし無闇に教えない方が良いのかな。とりあえず秘密にしておこうか。

「もちろんです。こちらの厨房をお借りしている間はいくらでもお

作りいたします。ヨアンよろしくね」
「はい！　まだまだ試行錯誤をして良いものに仕上げたいので、味見していただけるとありがたいです」
「楽しみにしているわ」

そうしてスイーツの試食は大成功で終わった。皆に喜んでもらえると本当に嬉しい。
それに生クリームのパンケーキは本当に美味しかった。この勢いでケーキも作るぞ！

１３７、スイーツの試食（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

１３８、ケーキの作り方

賑やかな昼食とスイーツの試食を終えて、また厨房に戻ってきた。ここからは俺もレシピがよくわからないから大変だ。でもヨアンなら必ずやってくれると信じてる！

まずはとにかくケーキを作りたい。やっぱりスイーツ専門店といえばケーキだよね。ケーキと言ってもショートケーキやチョコレートケーキ、チーズケーキにフルーツタルトなど、多種多様なケーキが存在するけど、まずは一番の基本であるショートケーキを作りたい。

やっぱり苺のショートケーキだな！　もしあれがこの世界で作れたら感動すると思う。幸いこの世界はフルーツの栽培も行われていて、日本と同じようなフルーツが購入できる。だから苺は手に入れられる。

まあ、かなり高いんだけどね。でも品種改良からしないとダメとかじゃないし、お金をかければ手に入るのは本当にありがたい。

だから苺のショートケーキは作れるはずだ。

ということで、まずはショートケーキを作ろう！　ショートケーキに必要なのは、スポンジケーキと生クリーム。とりあえずこれがあればケーキになるはず。

一番の問題はスポンジケーキなんだよね。あれってパンと似てるけど、パンよりもふわふわでとろけて甘くて美味しいんだ。あれをどうやって作るかなんだけど……

うーん…とりあえずパンケーキは作れたから、それと作り方は似てるはずなんだよね。卵と小麦粉、牛乳、砂糖あとはバターも使うのかな。この辺をどうにかして混ぜ合わせて焼けばスポンジケーキ

になるはず……多分……。あれってもっと特殊なものが入ってたのかな？

あぁ～！　なんで俺の趣味は料理じゃなかったんだ！！　料理なんて最低限しかやってなかったよ！　大学に入ってからは一人暮らしだったけど、便利なコンビニのお弁当とスーパーのお惣菜があったし。作る時も焼肉のタレでお肉を焼くだけとか、パスタを茹でて市販のソースに絡めるだけとか……日本って本当に素晴らしい国だった。

ケーキなんてスーパーで数百円で買えたんだ。コンビニにもたくさん売ってたし、コンビニの新作スイーツとか買ってたよなぁ……あんなに便利な世界だと自分で作らなくて当然だよ。

とにかく、お母さんがたまにお菓子作りをしてた記憶を呼び覚ますんだ！

確か……何となくだけど、やっぱり何かを混ぜてたんだよね。生クリームもそうなんだけど、その前に生地を作るときに何かをとにかく混ぜてた気がする。さっき名前を思い出した、ハンドミキサーを使ってた。

小さい頃に手伝いをしたことがあったはずなんだよ……その時は、確か白いものが出来上がったはずだ。

それでその白いものに小麦粉を混ぜて、焼くんだっけ？　多分そんな感じ……

「ヨアン、これからはレシピがまだないから研究になるんだけど、小麦粉、牛乳、砂糖、卵、バターこれらを使って生地を作って、それをオーブンで焼くと美味しいものが出来上がると思うんだ。さっき作ったパンケーキみたいな感じで、でもパンケーキよりもふわふわで口の中でとろけて、軽くてしっとりしていて甘いもの。俺の考えではそんなものが出来上がるはずなんだけど、まだ成功してないんだ……」

「さっきのパンケーキを参考に、それよりもふわふわで軽くてしっとりしていて甘いもの……」
「そうなんだ。それでそのふわふわで軽い感じを実現するために、小麦粉に何か軽くてふわふわなものを混ぜたいんだけど、それをどう作れば良いのかわからないんだよね」
「小麦粉に混ぜる軽くてふわふわしたもの……」
「そう、さっきの生クリームみたいな感じのやつかな」

俺がそう言うと、ヨアンは真剣に何かを考えているようだ。それからしばらくしてまた口を開いた。

「確かに先程のパンケーキにふわふわとしたものを混ぜて焼けば、食感は変わるでしょう。とりあえず、生クリームを混ぜて焼いてみても良いでしょうか？」

うーん、それって生クリームが溶けて悲惨になる気がするけど……とりあえず試してみれば良いか。

「とりあえず何でもやってみて。あと、卵白だけとか卵黄だけとかを使うとうまくいくかもしれない。前に卵黄だけはスイーツじゃない料理に使えたんだよね。卵白がスイーツに使える気がするんだけど……」
「卵白ですね。とりあえず色々と試してみます」

それからヨアンはとりあえず生クリームに小麦粉を加えて焼いてみるようで、クリームを必死に混ぜ始めた。
確かにクリームを相当頑張って混ぜると硬めのクリームになっていくから、もしかしてこれが正解だったりするかな？　俺の記憶でも白いものだったはずだし。

俺も何か手伝おうかと思ったけど、ヨアンの邪魔になりそうなので大人しく見ていることにした。ヨアンはかなり手際が良いしとにかく力があるのでスイーツ作りに向いている。生クリームも手動とは思えない速さで出来上がるんだよね。

もしかして……ヨアンって身体強化属性なのかな？

「ヨアン、答えたくなかったらいいんだけど、ヨアンって何属性なの？」

「はい、身体強化属性の魔力量が五です。さっきから使っていたのわかりましたか？」

「ううん。力があるにしても、さっきからずっと混ぜてて手が疲れてる様子もないと思って」

「料理は基本的に体力必須なので、この魔法にはかなり助けられてます」

「兵士になろうとかは考えなかったの？　身体強化属性って有利なんじゃなかったっけ？」

確か身体強化属性で魔力量が四以上あると、訓練をすればかなり強くなれるって聞いたことがある。上手く部分的に強化したり一瞬だけ筋力アップさせたりできるようになれば、長時間使い続けられるし剣との相性も良いらしい。

身体強化属性って魔法具にできないし、これから攻撃魔法具が作られたらもっと重宝される気がする。

前に一度試したことがあるんだけど、身体強化の魔法を魔法具に込めることはできても、全く魔法が発動せずに魔力だけが減っていくんだよね。

いや、あれは発動してるけど効果がないのかもしれない。自分に使ってもダメだったから魔法具としては全く使えない。

「そうですね、最初は兵士になろうと思ってました。それで試験も

受けて合格したのですが、合格祝いに家族が連れて来てくれたカフェでフレンチトーストを食べたんです。その美味しさに感動して、兵士はやめてその日からそのカフェで働き始めました」

まさかの兵士になる予定だったなんて、家族も複雑だったんじゃないか？　兵士になれたお祝いでカフェに連れて来たら、兵士を辞めるって言い出すんだから……

衝撃的な展開だよね。

「家族には反対されなかったの？」

「いえ、うちの家族は自分の好きなことをやれば良いって考えの緩い家族なので、好きにすれば良いよって感じで」

「それは良かったね」

「はい！　今でも家族仲は悪くなくて、たまに実家にも帰ってます。カフェで五年ほど働いて、貴族の屋敷に雇われたと報告したときは、お祝いをしてくれました」

カフェで五年働いてたのか。そういえば、ヨアンって何歳なんだろう？

「そういえば、ヨアンって何歳なの？」

「二十二歳です。十五歳から五年ほどカフェで下働きをして、ダリガード男爵家には二年ほどお世話になっています」

「そっか……、ヨアンの家族は平民に雇われることになって反対したりしないかな？」

「大丈夫だと思います。今度報告に一度帰ってみます」

「それなら良かった。じゃあ、お店ができたらお店に招待しようか」

「いえ、うちは裕福ではないのでレオン様のお店には来れないと思います。レオン様のお店は貴族向けのお店になるのですよね？」

確かにそうか……でも息子のデザートを食べたいだろうし。お店に来てもらうのはハードルが高いだろうから、ヨアンに持って行ってもらうのが良いかな？

「それなら、ヨアンが作ったスイーツを持って実家に行けば良いんじゃないかな。実家で作るのだと設備も材料もないでしょ？　氷を割って布で巻いてスイーツと一緒に箱に入れれば、数時間は持つと思うよ」

「本当ですか！？　俺の実家は中心街からそこまで遠くないんです。乗合馬車で一時間ぐらいなので持っていけると思います」

「それならそうすれば良いよ」

「ありがとうございます！　多分凄く喜ぶと思います」

「まだ先の話だけど平民向けのお店も作りたいと思ってるから、そうなったらお店に来てもらおうね」

「はい！」

そんな会話をしながらもヨアンはずっと手を動かしていて、生クリームに小麦粉と卵とバターと牛乳を混ぜたものが出来上がった。

そしてそれを焼いたけど、結果は大失敗。まだまだ成功までの道のりは遠そうだ。

「これはダメだね」

「そうですね……でも失敗したということは、この作り方はダメだと分かったということです。絶対に美味しいスイーツを作って見せます！」

「ふふっ……確かにそうだね。諦めず頑張ろうか！」

「はい！」

「じゃあ次の回復の日まではここに来れないかもしれないから、それまでは今日みたいな感じで研究をお願い。材料は毎日届くようになってるから、もし足りないものとかあれば届けてくれた人に伝え

て。そうすれば俺まで届くから」
「かしこまりました。一週間でできる限り進めておきます」
「うん。クッキーとかパンケーキの練習もしていいからね。あとは何か思いついたものがあれば何でも試してみて、美味しければメニューに採用するから」
「はい。頑張ります！」

そうして一日目のスイーツ研究は終わった。まだまだ先は長いけど、生クリームも作れたし少しは希望を持てる結果だったな。
俺は足取り軽く馬車に乗り込み、公爵家へと帰った。

１３８、ケーキの作り方（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

139、ロニーの作戦

それから数週間、未だスイーツの研究は上手くいっていない。しかしヨアンもまだまだやる気だし、全く悲観してはいない。俺のヒントがあったとしてもそんなにすぐ作れるものではないだろうし、そもそもヒントがヒントになってない感じだったし……

まあ、使う材料がわかってるだけでもかなりのアドバンテージだよね！　材料があっていればだけど……多分、合ってるはず……。

そうしてスイーツの研究を進めつつ、他のことも並行して進んでいる。お店の場所についてはいくつか候補が決まったらしいので、二週間後の回復の日にロニーとヨアンと見に行く予定だ。

今は土の日の最後の授業が終わったところだ。明日は回復の日だからまたダリガード男爵家に行かないと。どれほど研究は進んだかな。

そんなことを考えながら訓練場を出てロニーと歩いていると、ロニーに少し深刻な様子で話しかけられた。

「レオン、ちょっと相談があるんだけど……」

「相談？　……どうしたの？」

「屋台のことなんだ」

「何か問題があった？」

「うん。物理的に何かをされたわけではないんだけど、かなり迷惑をかけられてるって感じで……」

ロニーの様子からすると、結構深刻な感じなのかな。それならちゃんと時間をかけて話を聞いた方が良いだろう。

今日は研究会を休んでロニーの家にお邪魔しようかな。

「ロニー、今日家に行ってもいい？　そこで話を聞くよ」
「僕はいいけど、研究会はいいの？」
「研究会は自由参加だから。それよりも屋台の問題の方が大事だよ。ロニーに危険が及ぶかもしれないし」
「そっか、ありがと」
「ロニーが悪いわけじゃないから！　じゃあリュシアンにだけ今日はロニーと帰ることを伝えてくるから、ロニーは玄関で待っててくれる？　すぐ行くよ」
「わかった、正面玄関ね」

そうして俺はリュシアンを探し出して、今日はロニーと一緒に帰ることを伝えた。屋台のことで問題があるみたいと伝えたら、手に負えなかったら報告しろと言ってくれた。そう言ってもらえると、本当に心強いよね。

それからはすぐ玄関に戻り、ロニーと合流してロニーの家までやって来た。今は丁度部屋に着いたところだ。

「狭いけど入って」
「ありがとう。ここ座っていい？」
「うん」

俺とロニーはそれぞれ木箱やベッドに座り、話をする体制を整える。

「それで何があったの？」
「一昨日からなんだけど、ガタイが良くて怖い感じの男の人が沢山屋台に来るんだ。屋台の前に陣取って座り込んだり、買わないのに無意味に列に並んだり。それによって他のお客さんはかなり減っち

ゃったんだよね。でも物理的に何かをされたわけではないから兵士を呼ぶのも違うし……」

それは……結構厄介かも。物理的に何かをされていなければ注意するぐらいしかできないだろうし。

うーん、こういう場合ってどうすればいいんだろう。日本なら警察に相談だったけど、兵士の詰所に相談してもこの程度のことでは動いてくれない気がする。

「結構厄介だね」

「そうなんだ。でも昨日から色々考えて、とりあえず対策がまとまってるから聞いてくれる？」

「そうなの！？」

ロニー凄すぎる……やっぱりロニーって頭良いんだな。勉強だけじゃなくてこういう時にも発揮されるのか。俺って頭脳だけなら、ロニーにそのうち負けるだろうな。いや、もう負けてる可能性も……

「うん。まず何で今回の妨害が行われたのかだけど、とりあえず僕が見た感じだと、誰かに雇われて今回の妨害をしてるんだと思う。五人くらいが連携してやってるし、全員初めて見た人だし、お金がもらえなきゃあんなことやる意味ないから。だから目標としては、雇い主を突き止めて、もうこんなことができないようにすること」

「うん。それは重要だね」

「そうだよね。それでその方法だけど、今回は敵の羞恥心を煽るのと、その他大勢の人を味方につけて助けてもらおうかと思ってるんだ。具体的には、一日限定でクレープの無料配布をやる。一人一回限定で、普段のクレープの三分の一程度の大きさにすれば、費用も抑えられると思う。それで列に並んだ人皆にクレープを渡すことにすれば、妨害して来てる奴らにもクレープを渡すことになるでしょ

？」
「うん。そうなるけど……それに意味があるの？」
「クレープを渡すときに大声でこう言うんだ。いつもお金はないけど匂いだけでも嗅ぎたいと思って来てくれてるんですよね。それに感動して今日は無料配布をすることに決めたんです。いつもありがとうございます！　こう言うことで、クレープも買えないほどお金がないということで羞恥心が煽られる。多分次の日からは、屋台に来てクレープを買わない妨害はやり辛くなる」
「確かにそれは意外と有効かも……」
「あとは普通に他の人にもクレープを食べてもらえるから、美味しいと思った人は次の日も買いに来てくれると思う。更に、いつもいる怖い人はお金がない可哀想な人って認識になってるから、怖がって近づかない人も減ると思う。それによってお客さんが増えれば、妨害しようとしても他のお客さんが邪魔だと妨害を止めてくれるかもしれない。少数では立ち向かえなくても大勢だと立ち向かえるからね」
「ロニー、凄いね」

ロニーが凄すぎて相槌を打つことしかできない。ロニーって十歳だよね？　十歳の子供がこれを考えてるんだよ！？　普通に考えてありえないよ！　ロニーが本当に天才すぎる！
待って……ここまでだとは正直思ってなかった。話し方もわかりやすいし……
ロニーみたいな平民もいるんだから、その子が埋もれたらそれこそ損失だよね。ロニーがお店で働いてくれるの、本当に頼もしい。

「レオンの方が凄いよ」
「絶対そんなことない。ロニー凄い」
「ふふっ……ありがと。でもまだ続きがあるんだ」
「そうなの！？」

まだ続くのか。本当に凄すぎる。

「うん。それで妨害できなくなった男達はどこへ行くか、多分雇い主のところに行くと思うんだよね。後は雇い主がどんな人かにもよるんだけど、こんな低レベルな妨害をするような人なら、次は高い確率で物理的な攻撃を仕掛けてくると思う。昼間はそのまま捕まるし目立ちすぎるから、たぶん夜に屋台を壊すとかじゃないかな。これはあくまでも予想だけどね。だからさっきの作戦をした日の夜に屋台の側で見張っていれば、男達が来ると思う」

「確かにそうかも……ロニー本当に凄いよ」

「ありがと、でもここからが問題なんだよね。ここからはレオンの力を借りないといけないんだけど……、公爵家に頼んで兵士を二人ほど借りて来れないかな？　男達が屋台を壊してるところを見て現行犯で逮捕しないとダメなんだ。後から言っても証拠がないって言われるだろうし。それで現行犯で逮捕したら黒幕を聞き出せると思う」

「確かにそうだよね。言い逃れされたら、俺たちが見たってだけだと弱いよね」

この世界にもカメラがあったら楽なのに、こういうところはカメラがないと本当に不便だ。やっぱり発言に信頼がある立場の大人が必要だよね。

「そうなんだ。本当は自分達だけで解決できる作戦を考えられたら良かったんだけど……、僕もまだまだだよね。もっと勉強もして頑張らないと」

「いやいや、充分だよ！　この作戦かなりよくできてると思う！」

「結局はレオンに頼らないと無理だったから……」

「いくらでも頼ってくれていいからね！　それにほとんど頼ってな

いし！」

何度でも言うけど十歳だからね！　十歳ではありえないほどの作戦を考えてるのにまだ反省してるなんて、もうすでに俺も負けてるな……。そしてこの先も頭脳ではロニーに勝てなさそうだ。

「ありがとう。それで、この作戦でどうかな？」
「良いと思う。やってみる価値は大いにあるよ」
「良かったぁ～。こういう作戦は初めて考えたから、話すのちょっと緊張してたんだ。公爵家から兵士は借りられそう？」
「うーん、多分借りられると思う。今日話してみるね」

多分公爵家に言ったら、兵士長とかが来てくれそうな気がする。後はリュシアンが自分もついていくって言いそうだな……まあ、護衛がいれば危ないことはないと思うけど、出来ればリュシアンには留守番してもらう方針でいこう。でもリュシアンってこういうの好きそうなんだよね。

「それなら良かった！　今日からの屋台はどうする？」
「今日は休みにしよう。それで明日回復の日だよね、明日の昼間から作戦決行が良いかな。俺も屋台に行くよ」
「確かに早い方が良いよね。じゃあ明日よろしく！」
「うん！　明日は迎えに来るから家で待っててね」
「え？　広場に集合でいいよ？」
「でも、もしかしたら襲われるとかあるかもしれないし……。こんな話聞いたら心配だから」

ロニーって魔力も少ないし、身を守る術がないんだよ。何か対策を考えた方が良いかもしれないな。今回のはこれで解決できるとしても、これからもロニーは危険に晒される可能性がありそうだし…

…。

一番良いのは護衛をつけることだけど、それは無理だよなぁ。後は……バリアって魔法具にできるのかな？

もしできるのならそのネックレスとかをあげて、肌身離さず持ち歩いて貰えば良いかも。バリアを透明にして、常時発動でもわからないようにすれば良いかな？

うーん、でもそれだと魔力がすぐ無くなりそうだし、鎧を着てるようなものだから、座った時とか絶対に気づくよね。

そうなると常時発動型じゃなくて、ペンダントに魔石を固定しておいて、危ない時に魔石を押し込んだらバリアが発動するとか、魔鉄の指輪で触れたら発動するとかが良いかな。バリアをロニーの体からスライドさせるようにすれば敵も排除できるし、ロニーの周囲一メートルくらいに侵入不可って感じにすればその後も安心だ。

それだと使った場合バリアはバレるけど、ロニーの安全には代えられないよね。とりあえずその魔法具も今度作ってみよう。

「とにかく迎えに来るから勝手に行かないでね！　すれ違いになっちゃうから」

「わかったよ。レオンは心配性だなぁ」

「何かあってからじゃ遅いからね！」

「わかったわかった。ちゃんと家にいるよ」

「じゃあまた明日ね。公爵家でやることもあるしもう帰るよ」

「うん。また明日」

そうして俺は、リシャール様に話す内容を頭の中で整理しながら、急足で公爵家に戻った。

１３９、ロニーの作戦（後書き）

毎日２０時過ぎに投稿しています。
面白い、続きが読みたいと思ってくださった方は、評価、感想、レビューをよろしくお願いします！

１４０、作戦準備

公爵家についてすぐ、まずはロジェにリシャール様に話があると伝言してもらった。

「レオン様、夕食後に人払いをするのでそこで話を聞いてくださるそうです」

「ありがとう。でも、なんで人払いなんだろう？」

「それは……レオン様のご報告は、いつも広められないものばかりだからかと……」

「……そんなことはないと思うけど」

俺が納得できない顔でそう言うと、ロジェは信じられないという顔を一瞬だけして、すぐにいつもの真顔に戻って言った。

「確かに、一度くらいは普通のご報告もありましたね」

「ロジェ、別に気を遣ってくれなくていいから。さっき何言ってんだこいつ、みたいな顔をしたの見たからね！」

「それは、申し訳ございません。ただ、レオン様が今までのご報告の内容を覚えていらっしゃらないのかと思いまして」

「ちゃんと覚えてるよ！」

最近ロジェは、こんなふうにズバッと言うことが増えた。まあ遠慮がなくなって嬉しいんだけど、遠慮がなくなりすぎじゃない！？

「……確かにいつも、公表できないやつとかそんな報告ばかりだったけど、たまには普通の報告もした方が良いのかな？　というか、普通の報告って何だろう？」

「レオン様は貴族の御子息様ではありませんし、普通の平民でもありませんので、あまり気にする必要はないかと思います」

また言われた。皆して俺が普通じゃないって言うんだよなぁ。まあ、間違えてはいないんだけど。

……反論できないことが辛い。

もう気にしないのが一番だな。普通よりも特別の方が良いよね。そうだよ、俺は特別なんだ。

なんか虚しい……

「もう気にしないことにする」

そうして、最終的には俺に大ダメージが残ったロジェとの会話を楽しみつつ時間を潰し、夕食の時間となった。

夕食はいつも通り穏やかに過ぎていき、すぐに食後の時間になる。ここからは俺の報告の時間だ。

「リシャール様、ご報告があります」

「ああ、今回は何の報告なんだ？」

リシャール様は嫌な顔一つせず、優しくそう聞いてくれる。今まで大変な報告ばかりしてたのに……リシャール様が優しすぎる。

「今回は屋台についてのお話です。屋台の運営をしてくれているロニーから本日聞いたのですが、誰かから雇われたようなごろつきが、営業妨害をしてきたようです」

俺がそう言うと、さっきまで優しい顔だったリシャール様の顔が一気に厳しくなった。

「それは、具体的にどのような内容なのだ？」
「はい。物理的に何かをされたわけではなく、クレープを買わずに屋台の前に居座ったり、購入の列に並ぶのにクレープを買わなかったりと、迷惑だけれど注意しかできないようなものなのです」
「確かに……それだと兵士がいたとしても注意程度だろうな」
「はい。しかしそれによって売り上げも減っているようで、何か対策をしなければなりません。そこでロニーがどうするのか作戦を考えてくれたのですが、その作戦にリシャール様の力をお借りしたいと思っています。まずは作戦の内容を聞いていただけますか？」
「ああ、話してくれ」

それから俺は、今日ロニーから聞いた作戦をリシャール様に話した。そして兵士を借りたいことも伝えた。

「この作戦を考えたのはロニーだったな。ロニーとはレオン君の友人の平民で間違いなかったか？」
「はい。王立学校で同じクラスで、私の友達です。そして平民で間違いありません」
「ロニーはどこかの商会の子供なのか？」
「いえ、ロニーは孤児院出身です」
「孤児院だと！？」

リシャール様はかなり驚いた様子でそう声を上げると、何かを考え込むように黙ってしまった。
もしかして、ロニーも優秀な平民として公爵家に引き込めないか考えてるとか？　確かにこの作戦を孤児院出身の平民が考えたと知ればそうなるか……
それってロニーにとっては良いことなのかな。うーん、後ろ盾ができるのは良いことだと思うけど、ロニーは役人になるよりはお店をやりたいって言ってたんだよな……

俺がそんなことを考えていると、リシャール様が顔を上げた。

「レオン君、正直孤児院出身の平民でここまで優秀な者がいるとは驚いている。ロニーは魔法や剣も使えるのか？」

「いえ、魔力量が少なく魔法の授業は受けていません。剣術も授業で初めてやったようです」

「では、頭だけが良いのだな」

「はい。あの……ロニーをどうしようとお考えですか？」

「公爵家の勢力の助けになってもらえないかと思っている。ロニーは将来やりたいことなどあるのだろうか？」

「実は、ロニーは私と一緒にお店をやる予定です」

俺がそう言うと、リシャール様は一気に明るい顔になった。

「そうか、それは良い。公爵家が後援している店の中心人物となれば、公爵家との繋がりも印象付けられるだろう。ロニーにも定期的に公爵家へ来てもらいたいな。それによって繋がりも印象付けられる」

ロニーは予定通りお店で働けて、その上で公爵家との繋がりができるのは良いことだよね。最初はかなり緊張すると思うけど、そのうち慣れるだろうし。今度ロニーを公爵家に連れてこよう。

いつがいいかな……そうだ、今度お店の候補を見に行くときに、ヨアンと一緒に連れてこようかな。

「かしこまりました。お店の候補を見に行く際、ロニーと料理人のヨアンを同行させても良いでしょうか？」

「確か、二週間後の回復の日だったな」

「はい」

「その日ならば屋敷にいるから構わない」

「ありがとうございます。ではその日にお連れします」
「よろしく頼む。すまない、話がずれたな」
そうだよ、屋台の話をしてたんだった。
「先程の作戦はかなり良くできていた。やってみる価値はあるだろう。兵士の派遣については手配しておく」
「ありがとうございます！」
良かった。これであとは作戦が成功することを祈るだけだ。そう思って俺が安心した瞬間、今まで黙っていたリュシアンが声を上げた。
「レオン、私も一緒に夜の見張りをするぞ」
やっぱりそう言われると思った。別に来てもらってもいいんだけど、万が一何かあったら大変だ。
「それはありがたいのですが、危険もありますのでお気持ちだけ受け取らせていただきます」
「兵士もいるのならば大丈夫だ」
「ですが……リシャール様、よろしいのでしょうか？」
俺はもうリシャール様に判断は任せようと思い、リシャール様に話を振った。
「リュシアン、お前が行く必要はないだろう？」
「お祖父様、私は兵士が犯罪者を捕らえる場面を見たことがありませんので、後学のためにも見学したいです」
「ふむ、確かに一度見ておくのもありかもしれんな」

この流れはリュシアンも来ることになりそうだ。リュシアンって、基本的には頭が良くて運動神経も良くて優秀な子供なんだけど、結構子供っぽいところがあるんだよね。

まあ、それがリュシアンのいいところだと思ってるけど。

「では、私も参加して良いでしょうか？」

「そうだな。レオン君は良いか？」

「はい。ただ夜だけの参加でも良いでしょうか？　昼間は普段と変わらず営業をした方が良いと思うので……」

リュシアンは佇まいや服装などとにかく目立つからな。リュシアンが昼間の屋台に来たら、それだけで作戦は失敗しそうだ。俺は何度か屋台にも行ってるし大丈夫だろう。

「そこの邪魔はしないぞ」

「では夜の見張りの時はお願いします。明日は普通に昼の営業をしてから、荷物を片付けて公爵家に来るので良いでしょうか？」

「ああ、兵士の準備をしておこう」

「ありがとうございます」

そうして話を終えて、俺は自分の部屋に戻った。

「ロジェ、一つ頼みがあるんだけど」

「はい。何でもおっしゃってください」

「明日ロニーと昼の営業をしたら、荷物をロニーの家に片付けてからまた公爵家に来ないといけないんだけど、ロニーの家に馬車で迎えに来てもらうことって出来る？」

ロニーの家から公爵家は結構遠いし、屋台の営業をした後に歩くのは辛いと思うんだよね。俺は大丈夫なんだけど、ロニーは辛いだろう。それにその後も見張りをやらないといけないし、体力は温存しておいた方が良い。

「もちろん差し支えありません。何時ごろお迎えに上がれば良いでしょうか？」

「うーん、明日は早めに終わると思うから、十六時ぐらいかな」

「かしこまりました。ではその時間に参ります」

「ありがとう。よろしくね」

これで準備は完璧かな。後は明日の昼間にロニーと作戦を実行して、夜に見張っていればいいだけだ。もし明日の夜に誰も来なかったら数日見張らないとかな……それは大変だから明日来て欲しい。

数日経っても何も起こらなかったら作戦を考え直さないと。でも何も起こらなかったら逆に不気味な気がする。やっぱりロニーが心配だよな……

そうだ、バリアの魔法具を作れるか試すんだった。

俺は部屋に一人だけになってから、アイテムボックスから魔石と魔鉄を取り出した。魔石と魔鉄は、リシャール様が自由に手に入るようにしてくれたので、アイテムボックスにいつも一定数入れている。

やっぱりアイテムボックスって本当に便利だ。お金もたまに引き出してアイテムボックスに溜めてるし、食料や服、食器など使えそうなものはたくさん入れるようにしている。

よしっ、作ってみるか。バリアはどんな形でも作れるけど、周りの人にバレるから常時発動は無理なんだよね。それに本人も動きづらくなっちゃうし。

だから緊急事態に発動できるようにしたいんだけど、形をどうす

るのが良いかな……

魔法具を持ってることがバレない方が良いと思うから、ネックレスで服に隠れるようにかな。それで普段は発動しないように、それでいて緊急時には簡単に発動させられるように、それが理想だ。

そうなると……やっぱり指輪とネックレスかな。この世界って男性でも指輪をしてる人が結構いるし、魔鉄だけのシンプルな指輪なら目立たない。緊急事態の時も、指輪をしてる手でネックレスを握るだけでバリアが発動するし、簡単で良いだろう。

そうと決まればあとは作るだけだ。バリアが長く持つように魔石連結で魔石を繋げてネックレス型にする。魔石連結は、一本の魔鉄線で繋がっていれば魔石同士の距離などは関係ないので、ネックレス型にもできる。そして魔鉄だけでシンプルな指輪を作って……完成だ。

あとはどんな魔法にするかだけど、バリアはロニーの一メートル四方くらいにしたい。でも突然そこにバリアが現れるのだと、バリアの中に人がいた場合が危険だ。だからロニーのすぐ近くから、段々とバリアが広がっていくような魔法にする。速度を速くしすぎると敵が吹っ飛びそうだから、あまり速くしすぎない。

うん、多分これで良いはず。あとはこれを明日渡せば完璧だ！

ふぁ～、いつもは寝てる時間に作ってたから眠いや。明日に備えてもう寝よう。俺はそう思ってベッドに入り、すぐ眠りに落ちた。

１４０、作戦準備（後書き）

いつもここに同じことを書いてたのですが、よく考えたら毎日同じことを書かれてもめんどくさいよなと気づきました。今更ですが笑
これからは書きたいことがある時に書くことにします。
いつも感想や評価、本当にありがとうございます！　とても励みになっています！

１４１、作戦決行～昼～

そうして次の日の朝。
俺は朝起きて今日の準備を整えて、昨日作ったバリアの魔法具を試してないことに気づいた。そうだ、昨日眠すぎて作ってすぐ寝ちゃったんだよね。
ちゃんと使えるかの性能テストは必要だ。そう思ってロジェにしばらく部屋に一人にして欲しいと頼んで、バリアの魔法具のテストをすることにした。

昨日作った魔法具をアイテムボックスから取り出して、魔法具を作動させる。すると魔法具を起点としてバリアが発現し、一メートルほどスライドして止まった。
おおっ、成功だ！　でも一応成功だけど、パッと見ただけでも問題があるな。
まずバリアが上下にないことが一番の問題だ。横はバリアで守られていても、上から何かを投げ込まれたら避けようがない。さらに、下からも剣ぐらいなら通るほどの隙間がある。……これはダメだな。
上下にもバリアを追加しよう。でも上はそのまま追加でいいけど、下は大変じゃないか？　下は地面があるから……その場合はどうすれば良いんだろう？　このバリアって何かにぶつかったら止まるのかな？　いや、ぶつかったものを破壊していきそうだよね。
うーん、バリアが何かに触れた場合は、バリアの動きを止まるようにしておけば良いのかな？　そうしておけば、地面に触れたバリアはすぐに静止して、下からの攻撃も防いでくれるはずだ。

よしっ、それでいこう。俺はそう決めると、魔法具に込める魔法を変更してバリアの魔法具を完成させた。

そして試しに発動させてみる。うん、我ながら完璧な仕上がりだ。ただ最後に一つだけ問題が残るんだよね。それは魔石の色だ。
魔石の色は込めた魔法属性で変わるけど、空間属性は黒になるらしい。禍々しい黒ではなく凄く綺麗な黒なんだけど、これは明らかに今までにはない色の変化だ。多分ロニーは疑問に思うだろう。でも秘密で押し通すしかないよね。ロニーなら深く追及しないでいてくれると思う。
よしっ、そうと決まったらあとは、ロニーに魔法具を渡すだけだな。俺は魔法具が無事完成したことに安堵して、大きく息を吐いた。
そしてすぐにロジェを呼び朝食を準備してもらう。食べずに研究をしてたからとにかくお腹が空いたのだ。

そんな慌ただしい朝を過ごして、俺は今ロニーの家に向かって歩いているところだ。ロジェは馬車で送ると言ってくれたけど、今日はなんとなく歩きたい気分だった。
段々と夏が近づきつつあるけれど、まだぽかぽかと暖かい春の陽気で、たまに吹く風が少し冷たくてとても気持ちいい。
そんな季節の移り変わりを感じながら歩き、ロニーの家まで辿り着いた。

「ロニー、来たよー」
「はーい。レオンおはよう」

俺がドア越しに呼びかけると、ロニーがすぐに返事をしてドアを開けてくれた。

「おはよう。もう準備できてる？」
「うん。あとは荷車に荷物を運ぶだけ」
「じゃあこのまま屋台まで行っちゃおうか」
「いつもよりちょっと早いけどいいの？」

「うん。今日は無料配布でしょ？　いつもより多めに準備したいし、いつもと違うサイズで作るから少し練習した方が良いと思うんだ」
「確かにそっか。じゃあ荷物を運んじゃおう」

そうして荷車を部屋の前まで持って来て、ロニーが渡してくれた荷物を俺が荷車に乗せていく。そしてすぐに準備が完了した。
準備も終わったので出発しようと思ったけど、一つ忘れてることに気づいた。

「あ、そうだ。ロニーに渡したいものがあるんだよね。ちょっとだけ部屋に入ってもいい？」
「いいけど……？」

なんで部屋に入るのかと不思議そうな顔をしたロニーと部屋に入り、俺はポケットから出すフリをしてアイテムボックスからバリアの魔法具を取り出した。

「これをロニーに、肌身離さず着けていて欲しいんだ」
「これって指輪とネックレスだけど……魔法具？　黒？」
「そう。何かあったときに身を守る魔法具。何か危険なことがあったら、指輪をネックレスに触れさせれば発動するんだ。危険がなくなるまではネックレスを離しちゃダメだからね。その魔法を発動させてる間は、ロニーの周りに危険な人は寄って来れないから、発動させながら上手く逃げて」
「そんなに凄い魔法具を僕に……？　というか前から思ってたんだけど、魔法具って実在してる魔法しか込められないんだよね？　そんなに凄い魔法なんてあるの？」

やっぱり疑問に思うよね、ロニーは頭が良いし当然だ。でもだからこそ、追及しない方が良いところは聞かないでくれるはず。

今回も秘密だと言えば納得してくれるだろう。ロニーにも本当のことを言いたいけどまだ言えないから……。早く王立学校を卒業したいな……

「そこは、公爵家の秘密だから今はまだ言えないんだ。ごめんね……」

「そ、そうなんだ。それなら聞かないよ。というか言わないで！」

ロニーは必死にそう言った。公爵家の秘密なんて聞きたくないらしい。わかる、俺もロニーの立場だったら絶対に聞きたくないよ。

「うん、今は言わないでおくよ。でもそれは持っていてくれる？」

「うん、本当にありがとう。凄く心強い」

「ロニーを危険に晒してる原因は俺だからね……」

「そんなことないよ！　僕も望んでやってることだから、レオンの所為じゃないよ」

「そっか……そう言ってくれてありがとう」

「本当のことだからね」

「うん。じゃあ、今日は一緒に頑張ろう！」

「うん！」

そうしてロニーにバリアの魔法具を渡して、そのまま部屋を出て市場に行き、買い出しを済ませて屋台まで来た。

「じゃあ僕がマヨネーズの準備をするから、レオンには他の準備を頼んでいい？」

「わかった」

屋台についてからは二人で黙々と準備を進め、手早く開店準備を

済ませた。
そして、ついに無料配布の宣伝をする。
「本日限定で、ミニクレープを一人一つ無料で食べられるよ。興味がある方は是非どうぞ！」
俺が声を張り上げてそう言うと、近くにいた人が疑いながらもたくさん来てくれた。
一番乗りは若いお兄さんだ。
「無料って本当か？」
「うん。ミニクレープなんだけど本当だよ。どっちのクレープがいい？」
「無料なんて太っ腹だな！　豚肉サラダで頼む。ずっと気になってたんだが、少し高いから手が出せなかったんだ。ありがとな」
「美味しかったらまた買いに来てよ！」
「ああ、そうするよ」
そんな感じでどんどんと人がやって来る。俺が声に出して呼び込んでるのもあるけど、木の板に書いて立て掛けてるのも良いのかもしれない。この辺は中心街に近いから、文字を読める人も割といるんだ。
今回の作戦のためにやったことだけど、意外とこれからの売り上げにもつながるかも。
そう思って忙しく働いていたら、柄の悪そうな大柄な男が五人現れた。五人のうち三人は屋台の前を陣取って座り込み、他の二人は列に並んだ。
これは……完全に営業妨害だな。それに予想より怖い。ロニーはこんな人が来てる中、一人で営業してたのか……

「ロニー、あの人たちで間違いない？」
「うん」
俺が小声でそう聞くと、ロニーはそう頷いた。
「じゃあ、とりあえず列に並んだ二人にクレープをあげて、その流れで座り込んでる三人にもクレープを上げちゃおう。三人には俺が持っていくよ」
「わかった。豚肉サラダでいい？」
「うん。そっちで良いと思う」
そうして他のお客さんのクレープを作りながら、ロニーが三人分のクレープも追加で作ってくれる。そしてついに列に並んだ二人組の順番が来た。
二人組に対応するのはロニーだ。
「どっちのクレープがいい？」
ロニーがそう聞くと、二人は下卑た笑いを浮かべてどちらを買おうか悩んでいるそぶりを見せた。
「うーん、どっちがいいかなぁ。でも高ぇな。俺たち金ねぇんだよ。なぁ？」
「ひっひっひっ。そうなんだよなぁ～。金ねぇから買えねぇんじゃねぇか？」
「でも一度食ってみてぇよなぁ」
そんな会話をしながら、二人組は屋台の前から退こうとしない。これで時間を稼いで営業妨害をしてるのか。確かに厄介かも。というか、話し方がイラつくな。

そんな会話をしている二人に向けて、ロニーが良い笑顔で大声で言った。

「今日は無料だからお金の心配はいらないんだ！　最近よく屋台まで来てくれて、いつもお金がなくてクレープを買えない人達だよね？　今日は無料だから食べてみて！　お兄さんたちのおかげで無料配布をやろうと思ったんだ。ありがとう！」

ロニーが満面の笑みでまだそう言うと、二人組は顔を真っ赤にして怒りの形相になった。

「な、こ、小僧！　馬鹿にするんじゃねぇよ！」
「別に馬鹿にしてないよ？　クレープはちょっと高いよね」
「お、俺たちはこの程度の値段、いくらでも買えらぁ！」
「そうなの？　でもさっきはお金がないって言ってなかった？」
「そ、そんなこと言ってねぇよ！」
「じゃあ僕の聞き間違いかな？　まあ何にしても、今日は無料だから食べていって。お金がなくても大丈夫だから！」

ロニーはまた大声でそう言って、二人に豚肉サラダクレープを無理矢理手渡した。

「ちゃんと食べてね。あっ、後そこに座ってる三人のお兄さんも、お金がなくてクレープ買えなかった人だよね？　お兄さんたちも今日は無料だから食べてね！」

ロニーがそう言ったので、俺はクレープを持って三人組のところまで行く。そして順番にクレープを手渡していく。

「はい。今日は無料だからどうぞ！　クレープはちょっと高いから

いつも買えないんだよね？　今日は存分に味わってね。あと、お金が稼げるようになったら買いに来てくれたら嬉しいな！」

俺はできる限り無邪気に、悪気がないように、満面の笑みを浮かべてそう言った。

三人組の男性は何が起きているのかわからない様子でポカーンとしていたが、周りにいた他のお客さんの声で我に返ったようだ。

「あの人たち、お金がないのにクレープがそんなに食べたかったのね」

「クレープは安くないけど、普通に働いていけばたまには買える程度の値段だけど……」

「子供がたくさんいるんじゃないか？」

「それか仕事をクビになったとか……」

あちこちで三人組の男性をチラチラと見ながら、そんな会話がされている。

それを聞いた三人組の男性は、顔を真っ赤にしてクレープを持ったまま立ち上がった。そして一番近くにいた男性が、腕を振り上げて俺に殴りかかってこようとしたが、殴る寸前ここが人がたくさんいる広場だと気付いたらしい。振り上げた腕をなんとかそのまま下ろして、そのまま足早に去って行く。

力を入れすぎて額には青筋が浮かび、手は握りしめすぎて血が滲んでいるようだった。

そしてその男性が去った後、他の四人もその後に続き立ち去った。皆立ち去るときに射殺すような目つきで俺を睨みつけてきた。

様子を見るにかなり怒っているようだ。これは、予定通りに成功するかもしれない。多分この後は雇い主のところに行くだろう。そこで屋台を壊す方向にシフトしてくれればいいけど。

一番厄介なのは怒りの矛先が俺やロニーに向くことなんだよね。もし直接俺たちに危害を加えてくることがあったとして、俺の場合は全く問題ない。問題はロニーの時だ。ロニーもバリアの魔法具を持っているから大丈夫だと思うけど、万が一ということがある。

その時のために、今夜男たちが現れなかったら屋台はしばらく休みだな。ロニーも馬車で送り迎えしよう。

まあ、それは今考えてもわからないことだ。とりあえず上手くいって良かった。

俺は一旦安堵してロニーのところに戻り、ロニーに話しかけた。

「ロニー、作戦成功だよね？」

「うん。上手くいったと思うよ」

「だよね、とりあえず良かった。じゃあ早めに終わりにして帰ろうか」

「うん！　準備してある生地があと少しだから、これが終わったらでいい？」

「それで良いよ」

「ありがと。じゃあ後少し頑張ろう」

そうしてその後は、ロニーと共にクレープの無料配布に精を出し、それが終わると屋台を手早く片付けてロニーの家に戻った。

後は夜の見張りだ。頑張ろう！

１４２、作戦決行～夜～

広場からロニーの家に戻る途中、大通りから裏路地に入るところに馬車が止まっていて、ロジェが待機してくれていた。

「ロジェ、待っててくれたんだ。ありがとう」
「私はレオン様の従者ですので、当然でございます。お荷物をお持ちいたしましょうか？」
「ううん、ロニーと二人で荷物を片付けてくるから、ロジェは馬車で待ってて」
「かしこまりました」

そんな話をしてロジェとは一旦別れ、ロニーと家に向かう。

「レオン、もしかして僕たちを迎えに来てくれたの？」
「そう。俺が頼んだんだ。屋台で働いて、また公爵家の屋敷まで歩くのは大変でしょ？　しかも今日は夜の見張りもあるし」
「確かにそうかも……」
「だから体力は温存しとかないと。ロニーも馬車に乗ってね」
「うん。ありがたく乗らせてもらうよ」

そうしてロニーの家に荷物を片付けて、馬車で公爵家まで移動する。
公爵家に到着し俺の部屋に行くと、ロジェが今夜手伝ってくれる兵士を連れてきてくれた。
「レオン様。こちらの兵士三人が、今夜見張りに参加する者たちで

す」
「レオン様、よろしくお願いいたします」
三人はしっかりと頭を下げて、そう挨拶してくれた。
「こちらこそよろしくお願いします。今夜のことについては聞いていますか？」
「はい。大旦那様から伺っております」
「それなら大丈夫ですね。ではお手数おかけしますが、よろしくお願いします」

それから数時間後、二十二時の少し前ぐらいに公爵家を出発した。大体二十二時までにはほとんどの屋台は閉まるのだ。居酒屋などの飲み屋はやっているが、広場の屋台は夜遅くまでやらない。
公爵家から広場の近くまでは馬車で向かい、そこからは目立たないように歩いて向かうことになっている。今は馬車の中にいるけど、俺とロニー、リュシアンと護衛のジャックさん、兵士の方が三人乗っているのでちょっと狭い。いや、兵士の方たちはガタイもいいからかなり狭い。
そうして狭い馬車の中でしばらく耐えていると馬車が止まった。
ふぅ、やっと馬車から出られるよ。馬車を降りて辺りを見回すと、そこは広場まで歩いて十分程の目立たない場所だった。
中心街の中なので、道路には少しだけ街灯があり、真っ暗で何も見えないということはない。中心街の外は街灯など全くないので、夜に出歩く時は各々ランタンのような光源を持たないとダメだけど、中心街は少しだけ街灯があるんだ。
「では、三チームに分かれよう。絶対にバレないように、また必ず捕まえるんだ！！」

「かしこまりました」

リュシアンがキラキラした瞳で凄く楽しそうにそう言って、俺たちは三チームに分かれた。リュシアン楽しんでるな……

チーム分けは、リュシアンとジャックさんのチーム、俺とロニーと兵士一人のチーム、兵士二人のチームで合計三チームだ。事前に屋台を監視できて目立たない場所を調べておいたので、それぞれそこへ向かう。

「ロニー、来るとしたら何時頃だと思う？」

「多分日付が変わる頃じゃないかな。その時間なら広場に人はいないし、さらに居酒屋とかで飲んでる人がいるから静まり返ってるわけでもない。物音を立てても目立たないから、その時間が一番可能性高いと思う」

「確かにそうだね。じゃあ後二時間もあるのか……もう少し遅くに来ても良かったかな」

「でもこの時間ぐらいから広場に人はいなくなるから、万が一を考えて見張ってた方が良いよ」

「確かに、見逃したらせっかくの作戦が台無しだもんね」

でも待ち時間がめちゃくちゃ長いな……。今更だけど、見張りってずっと見てるだけだから暇だ。なにか見張ってる時にできることがあれば良いんだけど。

日本で見張りの定番と言ったらあんぱんと牛乳だよね。でもこの世界にあんぱんはないし牛乳は気軽に手に入らないし……こっちの世界だったらジャムパンと水かな。

……なんか夢がない。でもあんぱんは作れないよなぁ。そもそも餡子って何で作られてるんだっけ。確か……小豆で良いんだっけ？

多分小豆であってるはず。

この世界に小豆ってあるのかな。市場で探してみたことがないからわからないけど、今まで食べたことはないと思う。
というか考えてみると、この国ってあまり豆を食べないよね。大豆をそのまま食べるぐらいだ。
今度探してみて小豆があれば、餡子を作って和菓子にも挑戦しようかな。俺和菓子って結構好きなんだよね。一番好きなのはわらび餅なんだけど、餡子のお饅頭も好きだ。
問題はいつものことだけど、作り方だな。

……レシピ本が欲しい。切実にレシピ本が欲しい。というかインターネットが使えるスマホが欲しい。

こんなあり得ないことを考えててもしょうがないな。思い出すんだ！　頑張れ俺！
確か……餡子は小豆を煮て砂糖を入れるだけじゃなかったっけ？
でも、煮るだけで餡子になるのかな……煮詰めるのか、軽く煮たらすり潰すのか……。
正確には分からないけど、でもケーキよりはハードルが低い気がする。今度時間がある時に挑戦しようかな。

そんなことを考えていると、ロニーにジト目で見られていることに気づいた。
や、やばい、見張りをするの忘れてた。

「ロニー……？」
「レオン、今絶対に何か考えてるでしょ。それで屋台を見てないよね？」
「ご、ごめん、ちょっと考え込んでた。ちゃんと見張るよ」
「しっかりね」
「うん。頑張るよ」

それからは余計なことを考えずに、ひたすら真剣に見張を続けた。そしてそれから二時間が経過し日付が変わる頃、ついに昼間の五人組が現れた。

「ロニー、来たね」
「うん」

俺たちは辛うじて聞こえるぐらいの小声で、そう会話をする。

「どこまでやられたら捕まえに行く？」
「やっぱり実際に屋台が壊されてからが良いと思う。その方が良いですよね？」

ロニーが兵士さんにそう聞いた。

「ああ、実害がなければ捕まえられないからな」

そうして俺たちが会話をしている間にも五人組の男たちは俺たちの屋台に近づき、ついに一人の男が屋台を蹴った。さらに五人のうち二人は剣を持ち、屋台に向かって振りかぶっている。

ドガンッ……ガンッ……バギッバギッ……

おおっ……凄い勢いだ。なんの恨みがあるんだってくらい、思いっきり屋台を壊していく。

「もう良いでしょうか？」
「ああ、行こう」

兵士の方のその声に従って、俺とロニーは屋台まで走った。周りを見てみると、他の皆も出てきたようだ。

「お前たち、何をやっている！」
「なんだ！？　なんで兵士がいるんだ！？」
「に、逃げろ！」
「大人しく捕まれば手荒な真似はしない」
「大人しく捕まるわけねぇだろ！　早く逃げろ！」
「ダメだ！　こっちにも兵士がいる！」

五人の男は兵士の声に逃げようとしたが、兵士が上手く逃げ道を塞いでいる。

「ダメだ。しょうがねぇやっちまおう！　数はこっちの方が勝ってるんだ。相手は兵士とガキだけだ！」
「そうだな！　兵士なんて怖くねぇよ！」

剣を待っていた男達は剣を構え、剣を持っていなかった男はナイフのようなものを取り出して構えた。そして一斉に襲ってくる。

「おらぁ！」

一人の男が兵士に向かって、上から思いっきり剣を振り下ろした。兵士はそれを最小限の動きで躱し、男の腕を蹴り上げる。そしてその反動で男は剣を落とし、兵士はそれを素早く回収した。
この男達、剣を持ってるけど剣術を習ったことはないみたいだ。とにかく力任せに剣を振ってるだけのように見える。
それにしても、兵士も剣を持ってるけど使わないのかな？　もしかして、できる限り怪我させないようにしてるのかも。黒幕の情報を聞きたいって言ったからそうしてくれてるのかな。

剣をなくした男は一瞬怯んだ様子を見せたが、ナイフを取り出してまた構えた。そしてその男がナイフを持って、再度兵士に正面から向かって来る。
兵士はそれを先程回収した剣で難なく受け止めるが、その瞬間に兵士の背後からもう一人の剣を持った男が、首を狙って思いっきり剣を横に振った。

「危ない！」

俺は思わずそう叫んで咄嗟にバリアを使おうとしたが、寸前で踏み止まった。兵士が背後から襲ってきた男の剣もなんなく受け止めていたからだ。
兵士はナイフを持った男の腹を蹴り飛ばし、その後で背後の男に対処したようだ。
そして背後の男の剣を受け止めた後、男の手首を剣で叩き男を無力化した。
そうして目の前の兵士が二人の男を倒す頃には、他の男達も皆倒されたようで、戦いは俺たちの勝利で終了した。
凄いな、兵士って強いんだな。カッコいい……！

１４３、作戦の結果

ふぅ〜、俺は無意識に固く握っていた手を解き大きく息を吐く。見てるだけなのに、身体に力が入ってたみたいだ。男達は兵士を殺そうとしていたから、結構怖かった。

できればこんな経験はしなくて良いほど平和なのが一番だけど、この世界ではこの経験も役に立つのだろう。屋台のことが解決するのも良かったけど、この戦いを見れたことも良かったな。

俺がそんなことを考えつつ身体に入った力を抜いていると、兵士が男達を縛り終えたようだ。

「この男達はどうしますか？」

「レオン、どうするんだ？」

リュシアンにそう聞かれた。あとは黒幕を聞き出せれば成功だ。

「黒幕を聞き出したいんだ」

俺はそう言って男達に近づいていく。すると後ろから声がかけられた。

「レオン、僕も一緒に行くよ。作戦を考えたからには最後までやらないとね」

ロニーは覚悟の決まった表情でそう言った。

「そうだね。じゃあ一緒に行こう」

そうして二人で男達の下まで歩いていく。俺たちが近づくと、男達はあからさまに嫌そうな顔をして怒鳴ってきた。

「お前ら、屋台をやってる小僧だよな？　お前らが嵌めやがったのか！？」

「お前らいつかぶっ殺してやる！」

うわぁ……自分に殺意が向けられるのって想像より怖い、近づきたくない。でも黒幕を聞き出さないと意味がないし、頑張らないと。

俺は止まりそうになる足に喝を入れて、男達の元まで歩いて行く。そして男達の目の前で止まり、極力威厳のある声で問いかける。

「一つ聞きたいことがあるんだ。誰に雇われてやったの？」

「はっ、そんなこと言うわけねぇだろ！　馬鹿な小僧だな！」

「ギャハッハッ、違いねぇや。馬鹿正直に答える奴がどこにいるんだ！」

男達はそう言って、俺たちを馬鹿にするような声を上げる。やっぱりすぐに話してくれないか。俺がそう思ってどうすれば良いのか悩んでいると、ロニーが静かに口を開いた。

「雇い主に命を助けられたとか、大きな恩があるとか、そういう理由があるの？」

「あぁん？　違ぇよ、金だよ金！　お前らみたいに金に不自由したことないやつにはわかんねぇんだよ！」

「ということは、雇い主には金で雇われただけってこと？　なら隠す理由はないんじゃない？　拷問を受けて吐かされるか自分から話すか、どっちがいい？」

「はぁ？　なんで拷問なんか受けることになってんだよ！　俺らが

やったのは屋台壊しただけだろ？　それなら罰金ぐらいだろうが！」
「そんなことも知らねぇのか？　お前馬鹿なんだな。ギャハッハッ」
男達はまた、俺たちを馬鹿にするような声をあげる。そして、それをまた遮るのはロニーの冷たい声だ。
「まだ自分が何をやったのか理解してないみたいだけど、あの屋台は普通の屋台じゃないよ。公爵家に所属している平民が借りてる屋台だから。自分達が何をやったのか、わかった？」
ロニーが冷たい声と表情でそう言った途端、さっきまで威勢が良かった男達は一気に顔色が悪くなった。
「公爵家？　そ、そんなこと聞いてねぇよ！　平民がやってる屋台で、売り上げを減らしたら金がもらえるって言われて。屋台を壊したらもっと金がもらえるって言われて……」
「知らなくても実際にやったのは事実だからね。公爵家に手を出したとなれば、死刑は免れないんじゃない？　良くて鉱山送りかな？」
「そ、そんな、俺たちは知らなかったんだ！！」
「そうだよ！　そんなこと聞いてねぇよ！」
「君たちの雇い主に、わざと情報を隠されてたんじゃないの？」
「あ、あいつ……！」
さっきまで、どこに向けたら良いのかわからなかった怒りの矛先が見つかったようで、男達は雇い主への憎悪を滲ませている。
「君たちを騙した相手を庇う必要なんてないんじゃない？　むしろここで教えてもらえれば、僕たちがそいつを捕まえてあげる。もしかしたら君たちは知らなかったってことで厳罰を免れるかもよ？」
「ほ、本当か！？」

「可能性はあるんじゃないかな。君たちが素直に教えてくれたらだけどね」
「も、もちろん教えるに決まってる！　あんな奴捕まえてくれ！　俺たちも騙された被害者なんだ！」
「それで、その雇い主は誰なの？」
「ヴォクレール商会の、サリムって奴だ！！」

……え？　サリムって、同じクラスのサリム！？
それって本当なの？　同姓同名のサリムとかじゃなくて？

「それって本当？　サリムの歳は？」
「本当だ！！　お前らと同じぐらいじゃねぇか？」

マジか……まさかサリムがこんなことをやらせたなんて。最初は突っかかって来てたけど、俺がタウンゼント公爵家の所属だって知ってからは関わってこなかったのに。
なんでこんなことをしたんだろう。確かに頻繁に蔑むような眼は向けられてたけど、実害がないから放置してた。

「ロニー、サリムって本当かな？」
「嘘を言う意味がないし本当だと思う。確かにいつもレオンを怖い目で見てるよね」
「うん。そっか、サリムかぁ……サリムを擁護する訳じゃないけど、クラスメイトってところはちょっとだけショックかも」
「確かに、毎日一緒に授業を受けてたからね」
「……うん。とりあえずこれをリシャール様に伝えて、サリムも捕まえてもらおうか」
「そうだね」

それからは、公爵家兵士の方に王都兵士の詰所まで連絡に行って

もらい、男達は王都兵士に引き渡した。
そして俺たちは屋敷に戻る。

屋敷に戻ると、日付も変わった真夜中なのにリシャール様が俺たちの帰りを待ってくれていた。そこで報告のために皆で応接室に移動する。

「結果はどうだったのだ？」
「はい。作戦通りに男達がやって来て屋台の破壊を始めましたので、現行犯で逮捕し兵士に引き渡して来ました。そして黒幕も聞き出せたのですが、その黒幕がクラスメイトのサリムだったのです」
「サリムとは、平民か？」
「はい。ヴォクレール商会という商会の息子です」

俺がそう言うと、リシャール様は少しだけ難しい顔で考え込んだ後、真剣な表情で俺に聞いて来た。

「レオン君、サリムという平民は友達なのか？」
「いえ、どちらかと言えば嫌われているようで、最初の頃に口論になって以降話しておりません」
「そうか、それなら良かった。もし友達ならば辛いかと思ったんだ」

リシャール様はそう言いつつ顔を緩めた。そんなところまで気にしてくれるなんて、本当に優しい人だ。

「ご心配には及びません。それで、サリムはどうなるのでしょうか？」
「そうだな……。捕えた男達からサリムの名が出るのであれば一度捕らえられるだろう。しかし実際に男達へ仕事を依頼した契約書などが出てこない限り、重い罪になることはないな。罰金程度の可能

性が高い。本人が罪を認めれば別だが」

そうなるのか、確かに証拠不十分ってことになるのかな？

「だがサリムという少年は、今まで通りの生活を送ることはできなくなるだろう。公爵家に手を出したと知られれば、王立学校を辞めることになる可能性が高い。あとは実家の商会を放逐される可能性もあるな……」

確かにどんな親かにもよるけどあり得るかも。自分の立場が大切なタイプの親だったら、公爵家に手を出すような息子はすぐに放逐しそうだ。

もしそうなった場合、サリムが流石に可哀想というのもあるけど、それよりも逆恨みが怖いな。できればサリムを目の届くところで監視していた方が安心する。

うーん、どうすれば良いだろうか。俺がそうして悩んでいると、リシャール様が良い提案をしてくれた。

「サリムを助けたいのか？」

「いえ、流石にそこまでサリムに対して同情心は湧かないのですが、逆恨みが怖いなと思いまして」

「確かにそうだな。ふむ、では公爵家の下働きとして雇うのはどうだろうか？　影をつけて余計なことはできないように監視しつつ、性根から鍛え直せば良い」

「それは……ありがたいのですが、あまりにも公爵家の皆様に申し訳ないので……」

人を一人育てるのはそれだけで大変だろうし、さらに俺に恨みがある人を育てるのは大変すぎるだろう。使用人の方達の負担も増えるだろうし。

「私は構わない」
「ですが、使用人の方々に大きな負担をかけてしまうのではないでしょうか……？」
「確かにそうか。アルバン、どうなんだ？」

話し合いの場にはアルバンさんもいたので、リシャール様がアルバンさんにできるのかどうかを聞く。

「はい。可能でございますが、使用人たちへの負担が増すことは事実だと思われます。しかし此度の話、私個人でお受けしても良いでしょうか？」
「それは、アルバンが一人でサリムの教育をするということか？」
「はい。私の息子も育っておりますし、一人分の教育が増える程度ならば業務に支障はありません」
「それならば良いのだが、なぜアルバンがそこまでやるのだ？」
「レオン様への恩返しでございます。レオン様には私の命を救っていただきました。その恩返しがしたいと常々思っておりましたが、レオン様に私の力が必要な場面は殆どなく、未だその機会に恵まれておりません。そこで今回のお話をお受けしたいと思った次第です。もちろんこれだけで恩が返し切れるとは思っておりませんが、少しでもお役に立てればと思います」
「そうか……そういう理由ならば良いだろう。ではアルバン頼むぞ。サリムが放逐されたならば拾って連れてこい。そしてウチの使用人に相応しいレベルまで教育するんだ」
「かしこまりました」

アルバンさん、あの時の治療をそんなに感謝してくれてたのか……。俺はもう忘れかけてたよ。
なんて義理堅くて良い人なんだ。

俺もサリムは好きではないけれど、放逐されてのたれ死ねば良いのにとは思えない。最低限命は救えて逆恨みの危険も無くなるのなら本当にありがたい。ここはありがたくアルバンさんに甘えよう。

「アルバンさん、ありがとうございます」
「レオン様への恩返しですから。精一杯務めさせていただきます」
「よろしくお願いします」

そうして作戦の報告会は終了となった。黒幕はかなり驚きだったけど、作戦は大成功と言っていいだろう。本当にロニーは凄い。黒幕を聞き出す時の誘導尋問も完璧だったし。

ロニーは今夜、公爵家の客室に泊まることになっているので今はかなり緊張しているようだけど、段々と貴族にも慣れてきているし、どんどん優秀になっていく。俺もロニーに負けないように頑張らないとだな。

１４４、サリムの処遇

次の日の朝。起床してすぐに、ロジェがリシャール様からの伝言を伝えてくれた。

「本日の朝早く、ヴォクレール商会に兵士が入りサリムを捕らえたようです。また、現在は自宅を捜索し契約書等を探していますが、望みは薄いようでサリム本人も罪を認めないことから、罰金程度で釈放されるだろうとのことです」

「やっぱりそうなったんだ。サリムの両親はどうなんだろう？」

「兵士の話によりますと、事の顛末を聞いた父親は、すぐにサリムは自分の子供じゃないと話し始めたようです。母親も同様でして、サリムと家族でないアピールをする事で、公爵家から睨まれる確率を少しでも減らしたいという思惑があるのでしょう。よってサリムはほぼ確実に放逐されると思われます」

そっか……なんかサリムが可哀想になってきたよ。サリムは俺を蔑んでくるし屋台をめちゃくちゃにするし、本当に嫌いな奴なんだけど、それでも両親から他人扱いされるのは可哀想だと思っちゃう。

こうなると、アルバンさんに頼んで良かったかも知れないな。サリムにとっては、嫌っていた俺がいる屋敷で働くのは嫌だろうけど。

まあ、今までの逆恨み防止プラス、仕返しも込めての保護って感じでいいか。

「サリムの確保は出来そう？」

「準備は整っているとのことです」

「それなら良かった。じゃあ後はお任せすれば大丈夫だね」

これで屋台の問題はとりあえず解決だな。
ふぁ～、昨日夜遅かったから眠いし疲れてるけど、今日も王立学校に行かないと。
俺は眠い目を擦りながら準備をして、いつも通りに馬車に向かった。そして馬車に乗り込んで気づいた。

ロニーがいる！！

そうだ。昨日はロニーも客室に泊まったんだよね。寝惚けてて完全に忘れてたよ……。初めて公爵家に泊まったけど大丈夫だったかな？

「ロニーおはよう。よく眠れた？」
「うん、でも緊張していつもより眠りは浅かったかも。部屋が広すぎるしベッドも大きすぎるし、何より僕にも使用人の方が一人ついてくれて、そんな立場になるなんて思ってなかったから、とにかく緊張だった……」

確かに普段と違いすぎる環境だと落ち着かないよね。
あれ？　でも俺って、初めて公爵家に来た時も意外とすぐ順応してた気がする……。ぐっすり寝てたような……？
まあ、日本での記憶があるからだよね。断じて俺が鈍いわけではないはずだ。

「最初はしょうがないよ。回数を重ねれば慣れて来て、広いベッドで寝れるのラッキーぐらいになるから」
「回数を重ねるつもりはないよ！？」
「でも、ロニーは定期的に公爵家に来るんだよね？」
「え？　何その話、全く聞いてないんだけど！」

あれ？　……確かに色々あって言ってなかったかも。

「リシャール様からの伝言で、ロニーも公爵家が後援するお店の中心人物になることだし、定期的に公爵家に来てもらいたいだって。だから、お店の報告とかで来ることになるんじゃないかな？　そうだ、今度店舗の候補を見に行くでしょ？　その日も公爵家に寄ってから見に行くからね」

「レオン、いつも言ってるけど、そういう大事なことは早く言ってよ！！」

「ご、ごめん、でも今回は色々ある中で言われたから。いつもはすぐ言うようにしてるよ」

「ちゃんとすぐ言ってね！　ふぅー、それで店舗を見に行く日ってことは、次の回復の日だよね。何の話をするのかな？」

「多分だけど、世間話とかその程度じゃないのかな？　ロニーとは既に何度か会ってるし……昨日も会ったからね」

公爵家的には、優秀な平民が公爵家と縁があるという事実が大事なんだろうから、話の内容は重要じゃないはずだ。

「それだけ？」

「あとはお店について聞かれる可能性はあるかも。でも、それももう少しお店の話が進んでからかな。そんなに気負わなくて良いと思うよ」

「そっか、それならちょっと安心かも」

ロニーは重要な話はないという事実に肩の力を抜いたようだ。前は貴族に会うってだけでガチガチに緊張してたのに、この国の宰相と会うことになってもそこまで緊張していない。ロニーも段々と慣れてきて感覚がおかしくなってるな。……仲間ができたようで、何となく嬉しい。

そうしてロニーとそんな話をしていたら、馬車にリュシアンもやって来た。

「リュシアンおはよう」
「レオン、ロニー、おはよう」
「リュシアン様、おはようございます」

リュシアンはいつもシャキッとしてるのに、今日は結構眠そうだ。

「リュシアン眠そうだね？」
「ああ、いつも夜更かしすることなんてないからな……」
「昨日のリュシアン張り切ってたもんね。目がキラキラしてたよ？何だっけ、必ず捕まえるぞ、おー！　って言ってたよね？」

俺は揶揄うような口調で、おー！　のところで拳を上にあげてそう言った。
すると、リュシアンの顔は一気に真っ赤になる。凄い、めちゃくちゃ珍しいリュシアンだ。写真に収めたい！

「う、うるさいぞ！　おー！　などとは言っていないぞ」
「そうだっけ？　でも似たようなことは言ってたよね。凄く楽しそうだったよ？」
「そ、そんなことはない。私は真剣にやっていただけだ」

リュシアンはそう言って顔を横に背けた。耳まで真っ赤になっている。
そこを突いてもっと揶揄おうと思ったけど、流石にこれ以上は可哀想かな。そう思って、俺はリュシアンの言い訳を肯定してあげることにした。

「確かにそうだよね。昨日は手伝ってくれてありがとう」
「当然だ。レオンは友達だからな」
「ありがと。そのおかげで最後まで上手くいったみたいだよ。今日の朝のことも聞いた？」

俺がそう聞くと、リュシアンは頷いたがロニーは首を傾げている。まだロニーまでは情報が行ってなかったのか。

「サリムがどうなったか聞いてない？」
「朝は色々初めてのことだらけで一杯一杯で、ゆっくり話す時間はなかったんだ」
「そっか、じゃあ今話すよ。サリムは兵士に捕らえられたって。それで兵士は家を捜索してるけど、契約書とかは見つからなそうだし、サリムも自分は関係ないって立場を崩さないみたいだから、多分罰金程度で釈放されるだろうだって」
「そっか。それでサリムは放逐されちゃうのかな？」
「うん。兵士に事情を聞いた父親の態度からして、放逐の可能性が高そうみたい」
「そうなんだね……僕たちからしたらサリムが放逐された方が今後虐められなくて良いだろうし、放逐されたとしても公爵家で保護してくれるのなら心配はいらない。でも、ちょっとだけ可哀想だと思っちゃうかも。自業自得だけど、親に捨てられるのって辛いよね」

やっぱりロニーもそう思うのか、それは凄く分かる。でも今回は自業自得だし、どうしようもないよね。
これからサリムが良い人生を送れたらいいけど……
でもそこはもうサリム自身の問題だし、俺たちが口を挟むとややこしいことになるだろう。

「それは分かるよ。でも自業自得だしどうしようもないよね。もしこれからサリムが改心して今後話すことがあったら、普通に接してあげれば良いんじゃないかな？」
「そうだね。そうするよ」

黒幕がサリムだったというところでちょっとだけ後味が悪いけど、屋台の問題は解決したし作戦もかなり上手くいった。

「これで問題も解決したからまた屋台を始められるね。お店についても安心して進められるし、ロニーの作戦のおかげだよ。ありがとう」
「いや、レオンの力を借りたからだよ。こちらこそありがとう」
「ううん。俺はほとんど何もしてないよ。本当にロニーの作戦が凄かったんだ」
「ああ、私も作戦は聞いたが、あれは全てロニーが考えたのだろう？　ロニーは才能があると思うぞ」

ロニーは俺が言っただけでは信じてなかったけど、リュシアンにまで褒められてちょっとは自分のことが認められたようで、嬉しそうに笑った。

「ありがとうございます」

そうして三人で色々な話をしつつ、王立学校まで馬車に揺られた。他にも色々とやることはあるけれど、勉強も頑張らないとだ。

閑話　最高の朝と最悪の夜（サリム視点）

今日は気持ちのいい朝だ。今頃屋台が破壊されてることに気づいた誰かが兵士に伝え、それがレオンまで伝わっている頃だろうか。悔しがるレオンの様子を考えるだけで胸が躍る。

ふんっ、あいつが俺より目立つから悪いんだ。俺が平民の中で一番恵まれているはずだったのに、あいつはどんなズルをしたのか知らないが公爵家に取り入って、あまつさえ屋台で大成功など、受け入れられるわけがない！

あいつは平民の中でも王都の外れにある食堂の息子だぞ！？　俺は貴族とも取引のある大商会、ヴォクレール商会の息子だ。生まれた時から格が違うんだ！

大方屋台で成功を納めたのも、公爵家のアイデアを横取りしたとか、そんなところだろう。公爵家もレオンを排除した俺に感謝して欲しいものだ。

さて、王立学校に行ってレオンの顔でも拝んでやるかな。落ち込んでるか怒ってるか、はたまた悔しがってるか、どんな表情でも笑えるな。しっかりと目に焼き付けなければ。

そう思って部屋から出ようとしたその時、廊下をバタバタと走る音が聞こえてきた。

誰だうるさい奴は、無能な使用人がいるようだな。

「おい、今走っている使用人は誰だ？　主を不快な気持ちにさせるなど、使用人として無能だ。すぐにクビにしろ」

俺がそう言うと、従者は一礼して言った。

「かしこまりました」

こいつは俺の言うことに従順で有能な従者だ。今度褒美をやるべきかもしれないな。俺は使用人思いで完璧だな。

そうして朝から気分よく部屋を出たところで、さっきからうるさい音を立てている使用人が、俺の所まで一目散に駆けて来た。

「サ、サリム様！　大変です！」

「うるさいぞ」

「も、申し訳ありません。ただ、それどころではないのです！　兵士が、兵士がサリム様を捕らえにやってきております！」

兵士が俺を捕らえに？　何故だ、昨日の奴らが捕まって俺のことを話したのか！？

全く、せっかく人が雇ってやったというのに使えない奴らだ。ただあいつらの言葉よりも俺の言葉が信用されるのは確実、口頭での契約のみだったし重い罪になることはないだろう。

公爵家もたかが平民の屋台のことで表に出てくることはないだろうし、そもそも今頃は俺に感謝してるかもしれないんだ。もしそうならば軽い罪もなくなるな。

全く心配することはない。

「落ち着け。何かの間違いに決まっているだろう？　誰かが俺を羨んで嘘を吐いたのだ」

「た、確かにその可能性はありますね……」

そこまで話した時、兵士が家の中まで入ってきて一直線に俺のところまで来た。

「ヴォクレール商会所属のサリムだな。器物損壊罪の容疑で捕らえ

よとの命が出ている。縛って連れていけ！」
「はっ！」
三人の兵士がいて、偉そうな奴の命令で二人の兵士が俺の手を縛り上げた。そして俺はそのまま兵士の詰所まで連れていかれる。
乱暴な奴らだ。後で父上に頼んで罰を与えてやる。

そのあとは兵士の詰所で事情を聞かれたが、ひたすら「知りません」と答えていれば終わりだ。
やっぱりなんてことはなかった。軽い罰金は課されたが父上がすぐに払ってくださるだろう。この程度でレオンを陥れられるのならば安いくらいだ！
ただ父上には叱られるだろうか？　いや、公爵家から感謝状でも届いていれば逆に褒められるかもしれないな。
俺はそう思いながら、作戦が上手くいった高揚感で足取り軽く兵士の詰所を出た。しかしそこで足が止まる。

何故迎えがきていないんだ。普通は俺が出てくるまで馬車で待っているものだろう！　あの従者は命令に忠実で使えると思っていたが、気が利かないようだな。
はぁ～、無能ばかりで困る。あいつもクビだな。
それにしてもどうやって帰るか。兵士に伝言を頼んでもいいが、さっきまで俺を犯人扱いしていた奴らだ。頼りたくはない。
そうなると歩いて帰るしかないか。この俺を歩かせるなど、あの従者は本当に無能だ！　クビにするだけではなくて罰を与えてからクビだ！
従者にどんな罰を与えようか考えながら歩くこと数十分、やっと家まで着いた。
はぁ～、この俺が帰ってきたと言うのに迎えもないとは。本当に

無能しかいないのか。

「帰った。帰ったぞ！　誰かいないのか！　俺が帰ったのに誰も迎えにこないとは何事だ！？」

俺がそう言うと、家の中からドタドタと足音が聞こえてくる。やっと誰か来たか、これは使用人全員に罰を与えた方が良いかもしれない。

ただ、今駆け付けてる使用人だけは罰を軽くしてやろう。そう思って誰が現れるのか待っていると、現れたのは父上だった。

「父上？　どうされたのですか？」

「サリム、お前、お前……なんてことをしてくれたんだ！！」

父上は我を忘れたような怒りの形相で、喉が潰れるんじゃないかというほど大声でそう言った。

「な、何のことでしょうか？」

「お前、公爵家が後援している屋台を壊させたのだろう！？」

「そ、それは男たちが勝手に言っているだけで……現に罰金だけで帰って来れましたし……」

「そんな建前を聞いてるんじゃない！！　本当はお前が指示をしたのだろう！？」

「た、確かにそうですが……。ただ平民の屋台を壊しただけです。そこまで問題にはならないはずですが……」

「平民の屋台ではない！！　公爵家が後援している屋台だ！！　その違いが分からないとは言わせないぞ！！」

な、何で父上はこんなに怒っているのだ。公爵家の後援があるというよりは、ただ何らかのズルで公爵家に所属できただけの、レオ

ンがやっている屋台のはずだ。所属しているとは言っても使用人のようなものだろうし……

使用人の問題に、いちいち公爵家が関与するはずもない。

「確かにレオンがやっている屋台ですが、レオンは公爵家に所属していると言っても下働きとかのはずです。そこまで問題になるはずがありません」

「ならば何故、こんなものが送られてくるのだ！？」

「これは……？」

「公爵家からの手紙だ！！　此度の屋台への襲撃は、公爵家への攻撃と見做しても良いかと書かれている！！」

「なっ……そんな意図はありません！」

「そんな意図はなくとも、公爵家がそう思ったらそうなるのだ！！　もうお前はヴォクレール商会から放逐する。二度と私の前に現れるな！！」

放逐……？　放逐！？　何故俺がそんなことをされなければいけないのだ！

「父上、何故ですか！？」

「うるさい！　公爵家に目を付けられたとなれば商会は存亡の危機だ！　お前なんかに構ってる暇はないんだ。早く消えろ！　おい、こいつを敷地外に放り出して二度と中に入れるな」

「かしこまりました」

俺は父上に付いてきていた従者に腕を掴まれて、敷地の外まで引きずられた。

父上はいくら呼び掛けても、もうこちらを見てくれない。何でこんなことになったんだ……何故、何故……

俺は屋敷の外に放り出されて、どこにいけばいいのか分からずしばらく呆然としていた。
それからそこに、どれほどの時間いたのだろう。誰にも見向きもされないまま数時間、遂に喉の渇きが限界になりもう一度父上に謝ろうと家に入ろうとした。
しかし入り口は完全に閉められていて、兵士の見張りまでいる。兵士に話しかけてもまるでいないように無視される……そんな……本当に俺はもう家に戻れないのか……

俺は感情に任せて泣き喚いた。泣いて泣いて泣きまくって、泣きながらふらふらと目的もないまま歩き回り、どこか分からない裏路地で力尽きた。もうあたりは真っ暗だ。
本当なら美味しいご飯を食べて、ふかふかのベッドで寝ていたはずなのに……何故こんなことに……どこから俺は間違えたんだ……
そう思いながら硬い地面に座り込んでいると、俺の前に一人の男性がやってきた。上質な使用人の服を着ている。
どこかの貴族の使用人だろうか。もしかしたら執事かもしれないな。もう疲れ切って頭も働かないし、何だか眠くなってきた……
そう思いながらぼんやりとしていると、唐突にその男性に話しかけられた。

「少しは反省したか？」
「反省……？」
「助けて欲しいか？」

ああ、助けて欲しい。もう喉が渇いて疲れ切って限界だ。

「助けてくれ……」
「では付いてくるんだ」

そうして俺は知らない男性に腕を引っ張られて無理矢理立たされ、近くにあった馬車に乗せられた。

「これからお前には私が自ら教育をする。その腐った性根から叩き直すから覚悟するんだな。泣き言を言っても逃げることは許さない」

俺はそんな言葉を聞いたのを最後に意識を手放した。なので、そのあと男性が何を言ったのか、聞くことは出来なかった。

「レオン様やそのご友人を蔑むような態度や此度のこと、許すことは到底できない。しかしこの子もまだ子供。教育者が悪かったのも事実だろう。まだ今からなら人生をやり直せるはずだ」

１４５、お店の内覧

屋台の問題も片付き、それから一週間は穏やかな毎日が過ぎていった。

サリムは王立学校を退学になり、公爵家の屋敷で下働きとして働いているそうだ。しかし俺は一度も姿を目にしていない。何でも、俺とは絶対に会わないように細心の注意を払っているらしい。

教育が終われば普通に会話もできるって言われたけど……どんな教育をするんだろうか。ちょっと怖くて聞けないでいる。まあ、アルバンさんだから酷いことはしないと思うけど……

そして今日は店舗候補の内覧に行く。どんなお店があるのか凄く楽しみだ。

先程ロニーとヨアンと共にリシャール様と歓談をして、今はそれも終わり馬車で公爵家を出た。最初の店舗は中心街でもかなり王城に近いところにある店舗らしいので、完全に貴族向けのお店にするのなら良い立地だと思う。

「ロニー、ヨアン、今はまだ三人しかいないけど、これから頑張ってお店を盛り上げていこうね」

「うん！」

「全力でスイーツ開発に努めます！」

「ありがとう。そうだ、さっきはちゃんと紹介できなかったから今するね」

ロニーとヨアンは今日が初対面なんだけど、公爵家に着くとすぐにリシャール様との歓談になったから、二人の間では紹介をしていないのだ。

「ロニー、こちらがヨアン。今まではダリガード男爵家でスイーツの研究をしていたんだけど、これからはお店でスイーツの研究をしてもらう。あとはお店が始まったら料理長もやってもらいたいと思ってる」
「ヨアンさん、よろしくお願いします」
「こちらこそよろしくお願いします」

二人はまだギクシャクとした様子で、頭を下げて挨拶をした。

「ヨアン、こちらがロニー。王立学校の同級生で俺の友達。今はクレープの屋台で働いてもらってる。新しいお店では店長をやってもらう予定だよ」
「ロニーさん、よろしくお願いします」
「こちらこそよろしくお願いします」

二人はまたさっきと同じセリフで挨拶をして、頭を下げた。うーん、凄く固い。もっと打ち解けて欲しいんだけど。やっぱり敬語と敬称は無しにした方が打ち解けてくれるかな？

「二人とも、もっと仲良くなるために敬語も敬称も無しにしない？　お店を始める初期メンバーってことでこれから一緒に頑張っていくわけだし、もっと打ち解けよう！　ということで、二人の間の敬語はなし。あと、ヨアンは俺に敬語を使わなくてもいいよ。同じ平民だしね」
「い、いえ！　レオン様にはこのままで！　ただ、ロニーさんとはもっと打ち解けようと思います」

ヨアンはそう言った後、ロニーの方に身体を向けた。

「ロニーと呼んでもいいか？」
ロニーはその言葉を聞いて、さっきまで緊張してる様子だったのが少し和らいだ。そして笑顔を浮かべて返事をする。
「はい。じゃなくて、うん！　僕もヨアンって呼んでもいい？」
「勿論だ。これからよろしく、ロニー」
「よろしくね、ヨアン」

うん、さっきよりは柔らかい空気になった気がする。この後に一緒に仕事をしていけば、どんどん仲良くなっていくだろう。
俺がそう思って安堵していたら、ロニーが少し言いづらそうにヨアンに尋ねた。

「僕、ヨアンに一つ頼みがあるんだけど……」
「何だ？」
「新しいスイーツの作り方を僕にも教えてくれないかな？　僕はお店でスイーツを作ることになるのかわからないけど、料理は好きだから教えて欲しいんだ」
「そうなのか！　勿論いいに決まってる。店舗ができたら休憩時間や仕事の後に教えるぞ」
「本当！？　ありがとう！」

ロニーはヨアンの言葉に凄く嬉しそうにしている。
そういえばお店を作ることは決めてたけど、誰がどの仕事をするのかは全然決めてなかったよね。ロニーも料理人がやりたいのかな？
「ロニー、お店が始まったらどんな仕事を任せるか決めてなかったけど、ロニーも料理人がやりたい？」

本当はロニーには、店長としてスタッフの管理や食材の調達、売り上げの管理など、その辺の業務をやってもらえたら嬉しいんだけど、本人が料理人をやりたいのなら無理にとは言わない。そっちの仕事はまた別の人を雇えば良いからね。

「ううん、僕は店長として色々な雑務をやるよ。多分そっちの方が向いてると思う。料理は好きだけど趣味としてもできるし。得意なことをやった方が良いからね」

「そっか、じゃあロニーは店長としてよろしくね」

「うん！　任せて！」

「頼もしいよ」

実際ロニーほど店長に適した人物もいない。完全に信頼できるし、能力も申し分ないどころか一つの店舗の店長には勿体ないくらいだ。そのうち複数の店舗を持つことができたら、それを統括する立場になってもらいたいぐらいだ。

「ヨアンは料理長で良い？」

「勿論です！　スイーツを作る仕事なんて幸せです。ただ、スイーツの研究をする時間もあったら嬉しいです」

確かにそうなんだよね。しばらくは料理長としてやってもらうけど、他の料理人を雇ってヨアンには研究をしてもらった方が良い気もする。

他にもまだまだ作りたいものは沢山あるし、新商品を出すためにも研究は必須だ。そう考えると何人か料理人を雇うべきだな。

「確かにヨアンにはこれからも研究を続けて欲しいから、他にも料理人を雇うよ。それで日々のスイーツ作りはその料理人に任せて、ヨアンは研究をできるように考えるね」

「レオン様……ありがとうございます！！　レオン様に出会えたことが俺の人生最大の幸運です！！」
「ヨアンはいつも大袈裟だよ」
「大袈裟じゃないです！　これは本心ですし事実です！」

ヨアンは本当にスイーツのことになると勢いが凄い。その勢いで研究してくれるからありがたいんだけど。

「ありがとう。これからもよろしくね」
「はい！　まずは今の研究を形にしてみせます！」

そんな話をしていたら、一店舗目に到着したようで馬車が減速して止まった。
普通の内覧だと、不動産屋のような人が店舗の説明をしてくれるらしいんだけど、それだとゆっくり見られないと思ったのか今回はロジェが説明をしてくれることになっている。事前に情報は全て手に入れてあるらしい。やっぱりロジェって本当に有能。
なので今回は出迎えもなく、ロジェが店舗の鍵を開けてくれた。

「レオン様、こちらの店舗は以前装飾品店でしたが、住居兼店舗だったため、台所などの設備は一通り整っているようです。しかしあくまでも台所でしかないため、厨房としては少し狭いところが難点でございます。最も良い点は王城に近い立地です」

ロジェが店内に入ったところでそんな説明をしてくれる。基本的に中心街では、王城に近いほど高級なお店が並んでいるので、王城近辺でしか買い物をしない貴族もいるそうだ。
だから貴族向けに商売をするならこれ以上ない立地なんだけど、購入金額はかなり高い。基本的にこの国では店舗を賃貸するということはなく、賃貸はあくまでも住居、それも部屋単位での話なので、

お店を始める時は購入することになる。
まあお金はあるからいいんだけど、でも厨房が狭いのは致命的だよなぁ。

お店に入ると、まずは広い空間が広がっている。今はほとんど何もなく壁に棚がある程度だけど、ここが売り場スペースだったのだろう。
そして奥に扉があり中に入ると、短い廊下があり左右に二つずつの部屋と階段がある。左側の扉がトイレとお風呂、右側の扉が台所と倉庫という感じだ。
階段を登ると二階には三部屋あり、どれもただの広い部屋だった。多分ここが生活空間だったのだろう。

「うーん、意外と広くないんだね」
「はい。貴族は基本的に、装飾品などを購入する際、屋敷に商人を呼び寄せますので、そこまで広い店舗は必要なかったのかと」

確かにそうか。服とか装飾品を買う時は、屋敷に商人を呼び寄せるのが普通だよね。でもこの世界の貴族は、自分で店舗に出向くことも割とあるみたいだけど。

うーん、ちょっとこの店舗だと狭すぎるかなぁ。奥にカウンターを作ってそこにショーケースを設置するとして、カフェスペースはほとんどなくなる。テーブルが二つぐらいしか置けないだろう。

「二人とも、ここはどう思う？」
「うーん、基本的にはスイーツを持ち帰りできるお店にして、カフェを併設するんだよね？　それだと狭すぎるんじゃない？」
「やっぱりそうだよね」
「それに厨房も少し狭すぎると思います。俺一人で作るのならば良

いですが、他にも料理人を雇うとなるともう少し広さが欲しいです」
「そうだよね。俺もここはちょっと違うかなと思ってる。じゃあ次を見に行こうか」
俺がそう言うと、ロジェが心得たように頷いてくれた。
「かしこまりました。では次の店舗にご案内いたします」

１４６、お店の決定

そうしてまた馬車に乗り移動して、到着したのは中心街の丁度真ん中辺りの場所だった。この辺のお店はさっきまでよりも高級な雰囲気がなくなって、貴族の屋敷で働く使用人なども利用する。まあ、使用人でも上の方の使用人だけどね。下働きはやっぱり給金も低いみたいだ。

馬車から辺りを見回してみると、高級なカフェが結構あるようだ。スイーツ専門店には雰囲気も合ってるかもしれない。さっきの場所は、高級なフレンチレストランみたいなお店しかなかったから、ちょっとイメージと違ったんだよね。

馬車を降りて店舗をしっかりと見てみると、さっきの店舗よりもかなり大きい。それにレンガ造りで凄くオシャレだ。

この国って貴族の屋敷や豪商の家などは石造りやレンガ造りがほとんどだけど、逆に平民の家は木造がほとんどなんだ。だから貴族向けのお店をやるなら、石造りかレンガ造りの方が良い。

ロジェが鍵を開けてくれて中に入ると、中はかなり広いスペースが広がっていた。まずドアがお店の右端にあり、中に入ると目の前にカウンターがある。そして左側はかなり広いスペースだ。今は何もないけれど、ここをカフェスペースにできそうだな。

「この店舗は以前カフェでしたので、広い飲食スペースがございます。それから厨房もかなり広いです。問題は厨房の設備が古いことと、二階がないことです」

やっぱり前はカフェだったのか。多分この広いスペースが飲食ス

ペースだったんだろうな。

「とりあえずさっきの店舗よりは良い気がする」

「うん、僕もそう思う。このお店凄くオシャレだよね！」

ロニーはかなり気に入ったみたいだ。確かに外装だけじゃなくて内装もオシャレなんだよね。内装でもアクセントにレンガを使って、それ以外の場所には壁紙が貼ってある。この内装はそのまま使えそうだ。

広いスペースの奥にあるドアは、どこに繋がってるんだろう？

「ロジェ、あのドアの先は？」

「あそこはトイレです。お客様用のトイレが設置されています」

そうなんだ、この国では珍しいかも。

奥まで行きドアを開けてみると、結構広い水洗トイレだった。これはお客様に便利で良いかもな。

「とりあえず全部見てみようか」

俺は皆を振り返ってそう言って、カウンターのところまで戻った。この空間にはあとカウンター裏のドアしかないので、多分この先に厨房などがあるんだろう。

ドアを開けるとまずは廊下があり、右側にドアが一つ、左側にドアが二つある。

右側のドアから開けてみる。おおっ、厨房だ。それもかなり広い。さっきの店舗の厨房とは比べ物にならない広さだ……三倍くらいはある気がする。

「レオン様、ここならば十分な広さですね」

「広さは十分だね」

でも設備はやっぱり古いかな。料理用コンロもないし、調理台も新しくした方が良いかも。シンクも古いな……

でも厨房は元々使いやすいように改装するつもりだったし、古いのは大きな問題ではない。逆に改装するのに躊躇わなくていい。

「改装は必要だけど、広さも十分だし良いと思う。ヨアンはどう思う？」

「俺も良いと思います！　この広さならば他に料理人がいても問題なさそうです。特に調理台の広さが良いですね。スイーツ作りは広い調理台が必要なので」

「そっか、じゃあ改装する時も調理台の広さはこのままがいいかな？」

「はい。よろしくお願いします！」

そうして皆で厨房を見て回る。ヨアンは真剣な顔で、この厨房でスイーツを作るときのイメージを膨らませているようだ。

俺はそんな厨房の奥に向かった。厨房の奥に鍵がついているドアがあったのだ。多分外に出るドアだと思うけど、裏路地に出るのか、それとも裏庭とかあるのかな？

そう考えつつドアを開けてみると、狭いながらも裏庭があり裏庭の先には門があった。その門の先が裏路地のようだ。

裏庭には特別なものはなかったけど、唯一地面に鉄の扉がある。これって何だろう？

「ロジェ、これが何かわかる？」

「こちらは地下室への入り口でございます。食料を保存するために使われていたようです」

地下室！　それは嬉しい！　地下室に氷をたくさん入れておけば、地下室全体が冷えて大きな冷蔵庫のようになるだろう。

「中は見られるの？」
「はい。鍵を預かっております」

ロジェはそう言って鍵を開けて、扉を上に引っ張って開いてくれた。見た目よりは重くないみたいだ。

「レオン様、何があるのですか？」
「食料を保存する地下室だって。ヨアンも見に行く？」
「はい！」
「レオン、僕も行くよ。地下室なんて初めてだ」
「じゃあ皆で行こうか」

中は真っ暗だったので、俺はライトの魔法を唱えて階段を降りる。ここを使うようになったら光球を設置しないとだな。
そんなことを考えながら下まで降りると、そこはかなり広い地下室でいくつか棚も設置されていた。地上よりも空気がひんやりとしている。ここに氷を置いたら完璧だな。

「ここいいね。製氷機で作った氷を入れておけば食料の保存に最適だよ。スイーツは傷むのが早いから、冷蔵設備は必須なんだ」

でもここだけじゃなくて、厨房にも冷蔵庫があったら便利だよね。あとスイーツを陳列するショーケースにも、冷蔵機能をつけないとダメだ。
そうなると冷蔵庫を開発するのは必須だな。でもこの地下室も絶対有用だと思う。

「レオン様、厨房とこの地下室はどちらも素晴らしいです。スイーツ作りには最適な店舗だと思います」
「レオン、僕もこのお店が良いと思うな」
「やっぱりそうだよね。俺もそう思ってたんだ。でも、まだ見てない部屋も一応見ておこうか」
「確かにそうだね。厨房の反対側に部屋があったよね？」

そうして建物の中に戻り、他の部屋も見てみた。廊下の反対側にあった二つの部屋は、一つは水洗トイレでもう一つは何もない広い部屋だった。多分広い部屋は従業員の休憩スペースとかに使ってたんだろう。ここには家具を入れて、休憩スペース兼事務所って感じにしたらいいかも。

うん、この店舗良いよ、凄く良い。俺の想像通りの店舗だ。でも一つ問題があるとすれば、やっぱりお風呂がないことかな。あとは更衣室も欲しい。
料理人は言わずもがな、飲食店に身綺麗さは必須だからね。仕事着にはこのお店で着替えて欲しいし、自宅にお風呂がない従業員がいたら、仕事の前にお風呂に入って欲しい。
やっぱりお風呂と更衣室は設置しよう。でも屋敷の中に増築は難しいよな……うん、中庭の方に増築しようかな。それなら屋敷に手を入れるわけじゃないし、そこまで大変な工事にはならないはずだ。

というかこんなに色々考えたけど、まだこの店舗に決めたわけじゃないんだけどね。でも、俺の中ではもうこの店舗を買うことで決まっている。
ここはかなり理想に近い店舗だし、立地も申し分ない。もうここ以上に良い物件はなさそうだ。

「ロニー、ヨアン、俺はこの店舗が良いと思うんだけど、二人はど

う思う？」
「僕もここで良いと思う」
「俺も良いと思います」
「じゃあ決定でいいかな？　そうだロジェ、後何店舗候補があったの？」
「はい。あと一店舗候補がございました。しかしレオン様達が話されている様子から、こちらの店舗の方が良いと思われます。もう一つの店舗はとにかく大きな店舗なのですが、中心街の外れに位置し、木造で少し古めかしい建物です」

中心街の外れ、しかも木造となるとそれだけで候補からは外れるな。他に良い店舗がなければそこも良かったんだろうけど、ここが良すぎるからね。

「じゃあ最後の店舗は見なくても良いかな。ここに決めるよ」
「かしこまりました。ではお手続きをしておきます。遅くとも明日からは、レオン様のお好きなように店舗を改築出来ると思います」
「わかった、ありがとう」

改築するのがかなり楽しみだな。二人の意見も聞きつつ、快適な空間に仕上げよう！　俺はそう気合を入れた。

１４７、お店の改装

改装って結構時間がかかるから、できる限り早く始めた方が良いだろう。二人の意見も聞いて、今日には改築案を出しておこうかな。店舗にいる時の方が、イメージが湧きやすいし。

そう思って、二人に改装案を聞いておくことにした。

「じゃあ店舗をどんなふうに改築したいか、三人で意見をまとめようか。まずはロニー、何か意見ある？」

「うーん……とりあえず、外観と基本的な内装はそのままで良いと思う。でもカウンターは変えた方が良いかな。今は木で作られた質素な感じだけど、カウンターもレンガを使ってオシャレにした方が良いと思う」

「確かに、その方が良いかも。カウンターには氷で冷やすガラスのショーケースを作ろうと思ってるんだけど、その土台部分をレンガで作ればいいかな？」

この世界は中心街になら普通にガラスがあるから、ガラスを使うことはそこまで目立たないと思うんだよね。ただ問題は作れるかなんだけど。まあ、やってみないとできるかなんてわからないよね！

幸い氷は作り出せるし、可能性はあるはずだ。

もしダメだったら普通のカウンターにしよう。そして普通に冷蔵庫を作るしかない。もし冷蔵庫も作れなかったら……、その時は地下室に保存しておくしかないな。それはかなり不便だから、せめて冷蔵庫は完成させたい。

「え……、ガラスを使うの！？　それに、しょーけーす？　って何？」

そっか、この世界にはショーケースがないのか。確かにガラスは窓にしか使われてないかも。よく考えたらガラスの食器やコップもあまりないよね。貴族の屋敷にたまにあるぐらいだ。

「ガラスで中が見える箱を作りたいんだ。その中にケーキが入ってたらお客様も選びやすいと思わない？」
「それは確かに良いかもしれないけど……ガラスの箱って新しいものだから、作るのも大変じゃないの？」
「そうなんだよね。だからもし作れなかったら普通のカウンターにするよ」
「そっか、まあそれなら任せるよ」
「ありがと。普通のカウンターにする場合は、今の大きさでレンガにすれば良いかな？」
「うん！　もう少し大きくても良いとは思うけど、今の大きさでも良いと思う」
「わかった。じゃあその方向で進めるね」

そうしてカウンターについてロニーと方向性を決めたあと、次はヨアンの方を向いた。

「ヨアンは何か要望ある？」
「はい。料理用コンロなどを設置して、厨房の設備を新しくしていただきたいです。それからお風呂か、身体を拭ける場所が欲しいです」
「厨房は完全に新しくする予定だよ。お風呂も中庭に増築しようかなと思ってるんだけど、中庭じゃだめかな？」
「いえ、増築していただけるならどこでもありがたいです」
「それなら、お風呂は中庭に増築するね。更衣室も作るから」
「それはありがたいです！」

「やっぱり必要だよね。他には何かある？」
「そうですね……今のところ特には思い浮かびません」
「わかった。ロニーは他に何かある？」
「ううん、基本的にはレオンにお任せするよ」

二人はそう言って頭を横に振った。よしっ、じゃあ後は俺がどんどん決めていこうかな。

「それじゃあ、とりあえず屋敷に戻ろうか。二人の意見を取り入れつつ、お店の改装については俺が決めてみるよ」
「うん！　仕上がりを楽しみにしてるよ」
「俺も楽しみです！」

そうしてお店を決めて、馬車でロニーとヨアンを自宅まで送り届け、俺は屋敷に帰った。

屋敷の自分の部屋に戻ったら、ここからは内装を決める時間だ。自分のお店の内装を、お金を気にせず好きに決められるなんて最高かも。なんかワクワクしてきた！

俺は机に紙とペンを用意して、まずは必要なものを書き出していくことにした。細かいものは後で買い揃えるとして、時間がかかるものからだな。

まずはカウンターとその上に置くケース、飲食スペースの机と椅子、それから厨房の調理台とシンク、料理用コンロ、オーブンはあったから改修だけしてもらおう。あとは休憩スペースにソファーと机かな。それからロニーの仕事用の机も用意しよう。

……大きなものはこれで全部かな？　あっ、お風呂と更衣室を忘れてた。お風呂と更衣室を中庭に増築。地下室の光球も必要だったな。地下室の棚も改修して増やしておこう。

うん、とりあえずこんなものだろう。

「ロジェ、とりあえずここに書いてあるものを用意したいんだけど、どこに頼めば良いのかな？」

俺は紙を見せながらロジェにそう言った。

「はい。公爵家で贔屓にしているところがありますので、そこに頼めば良いかと思います。家具類は既製品を購入されるのでしたら商会で良いですが、デザインから決められるのでしたら工房に頼むことになります。それからガラスのショーケースは既存品がありませんので、工房に頼むことになります」

家具類はデザインから頼むのもいいと思うけど、俺はそういうセンスってないんだよね……。とりあえず既製品を見て、気に入ったのがあればそれで良いかな。

「とりあえず家具類は既製品でいいかな。もし気に入ったのがなければ工房に頼むことにする。他にもお店に売ってないものは工房に頼むよ。お風呂や更衣室も工房だよね？　間取りとか考えておくね」

「かしこまりました。では諸々の手配をしておきます。次の回復の日にまとめて屋敷に呼び寄せるので良いでしょうか？　それともレオン様が工房や商会を回られますか？」

「俺が回るよ、その方が早そうだし。家具とかは結局見に行かないとでしょ？」

「家具類は実物をご覧になりたいのであれば、お店まで伺う必要があります。屋敷に呼び寄せる場合は、デザイン画をご覧になれます」

やっぱり実物を見ないとイメージが湧かないよね。全部のお店や工房を回るのが一番早いな。

「やっぱり実物を見たいから俺が行くことにする」
「かしこまりました。では次の回復の日に全てを回れるように手配しておきます」
「ありがとう。よろしくね」

そうしてお店の内装についての話を進めて、また一週間後の回復の日、俺はロニーとともに工房や商会を回った。ヨアンはスイーツの研究をしたいということで、今回は別行動だ。
まずは商会で家具を買ってお店に運んでもらう。商会にはオシャレな家具がたくさんあって、とても満足できる家具が買えた。ただ飲食スペースの机と椅子は数が足りなかったので、同じものを足りない数の分だけ追加で注文してくれるようだ。
休憩スペースのソファーは、ふかふかで座り心地が良いものが買えた。座り心地が良過ぎて立ち上がりたくなくなる危険性もあるけど、疲れを癒してくれるだろう。
最近はお金があり過ぎて逆に困ると思ってたけど、お金があって良かった。お金を気にせずに買い物できるのって、本当に最高！かなり楽しい！

「レオン、全部高いけど……、お金は大丈夫なの？　もうかなりの金額になってるよね？」

商会から工房への移動途中、ロニーにそう聞かれた。

「うん。魔法具開発と技術開発でお金はあるから大丈夫なんだ。気にしないで」
「レオンってそんなに稼いでたんだね。お金あるのは知ってたけど予想以上だったよ。ちなみに、まだまだあるの？」
「うーん、多分まだ一割も使ってないかな？　それに使用料でどん

どん増えていくんだよね」
「そっか……、凄いね……」
ロニーが遠い目をしてそう言った。確かに、俺もそんな顔をしたくなるようなレベルの金額だ。まあ、こういう時にお金に困らないから本当にありがたいんだけどね。
そんな会話をしつつ工房やお店を回り、最後にガラス工房にやって来た。ロジェがアポを取ってくれたので、俺たちが工房のドアを叩くとすぐに人が出てきてくれる。
最後の注文だ、頑張ろう。

１４８、ガラス工房

工房から出てきたのは、五十代ぐらいに見える筋骨隆々なおじさんだ。少し緊張してるみたいだけど、どうしたんだろう？

「初めましてレオンと申します。本日はよろしくお願いします」

「おう、あっ、はい？　俺は、この工房の工房長だ、です。敬語は苦手で、す」

あっ、もしかして俺が貴族だと思ってるのか？　確かにロジェが話を通したのなら公爵家が来ると思うか。おじさんには悪いことをしたかも。

「敬語は使わなくていいですよ。俺は平民なので」

「何だ、そうなんか。はぁ～、早く言ってくれよ……貴族様から連絡が来て工房に来るって言われて、まじでビビってたんだぜ。普通貴族様は工房に来ることなんてないからな」

え？　そうなの？　でも商会で売ってないものが欲しい時は工房で注文するんじゃないの？

俺がそう疑問に思っていると、察したロジェが説明してくれた。

「レオン様、ほとんどの貴族は商会に売っていないものを欲しがるということはないのです。もしあった場合でも、欲しいものの概要を従者に伝え、工房に来るのは従者のみとなります。ただレオン様はご自分で足を運ばれたいようでしたので、今回はレオン様が訪れるように調整いたしました」

「そうなんだ。ロジェありがとう」

やっぱりロジェって本当に優秀だ。最近は俺の考えもわかってくれて、言わなくても俺の意向に沿って仕事をしてくれる。
今は俺がタウンゼント公爵家にお世話になってるから俺に仕えてくれてるけど、今後はどうなるんだろうか。ロジェさえ良ければ、今後も俺に仕えてほしいな。まあ、これはリシャール様やクリストフ様とも話し合わないといけないことだ。

「とりあえず俺は平民なので、敬語や態度に配慮する必要はありません。いつも通りにしてください」
「おう、ありがとよ！　なんならお前も、レオンだったか？　敬語やめてくれや。なんか落ち着かないからよ」
「そう？　それなら普通に話すよ。じゃあ、早速注文してもいい？」
「ああ、まず中入れや。そこの椅子に座ってくれ」

おじさんはそう言って、俺たちを工房の中に入れてくれた。中に入ると応接室のようなものはなく、工房の隅に机と椅子が置いてあり、そこに案内された。

「それでガラスのケースが欲しいんだったか？」
「うん。かなり大きめのケースが欲しいんだけど、作れる？」
「ああ、枠を木工工房に頼めば作れるはずだ。木が嫌なら鍛冶屋だな。少し時間はかかるが作ることはできる」
「本当！？　じゃあ、そのガラスケースの中に氷を入れて、中を冷たく保つことって出来るかな？」
「氷だぁ？　それってあれだろ？　冬に桶に水張っとくとできてるやつだろ？」
「それ！　それをガラスのケースの中に入れて、ケースの中を冷たく保ちたいんだ。ケースの中を冬のようにして、食料を保存するの」

俺がそう言うと、おじさんはよくわかってないような不思議そうな顔をした。
そうだよね、よく考えたらおじさんはガラス工房の人で、冷蔵技術なんて知らないよね……。テンションが上がって思わず聞いてしまった。

「俺にはわからねぇな。そもそも氷って冬が終わると溶けちまうだろ？　ならずっと冷やしておけねぇんじゃねぇか？　それに冬なら外に出しとけば保存できるからわざわざ家の中で冬を作り出す必要はないし、夏は氷がねぇだろ？」
「ううん。氷は魔法具で作れるんだ」
「そうなのか、貴族様ってのはすげぇんだな。でも氷があっても夏じゃすぐ溶けちまうだろ？」

確かにそうなんだよね、そこが一番難しいんだ。俺もどうすれば良いのかはよく知らない。
ただ、たしか冷気は下に行くから、氷は箱の上の方に置けるようにした方が良いんだと思う。あとは出来るだけ断熱効果があるようにして、出来るだけ密閉させた方が良いのだろう。それで氷を定期的に変えれば……できるのかな？
とりあえずおじさんには、ガラスケースで密閉出来るのか聞いてみよう。

「おじさん、ガラスのケースってどのくらい密閉できる？」
「ん？　なんだ？　みっぺい？」
「密閉は、うーん、ガラスケースの中の空気が、外に漏れないようにすることかな。できる？」
「空気が漏れないようにって、どういうことだ？」
「あ、そっか、違う。そう、隙間のこと！　ガラスのケースって隙間が全くないように出来る？」

「それならわかるぜ。枠とぴったり合わせれば、ほとんど隙間をなくすことはできるはずだ」

やっと通じた……この世界にない概念なのか、このおじさんが知らないだけなのかはわからないけど、言葉がわからない人に伝えるのってやっぱり難しい。

とりあえず最低限の密閉はできるのか。まあどれほど隙間がないのかは怪しい気もするけど。でもとりあえず作ってもらおうかな。もし使えなくてもそのうち使い道もあるだろうし。

お店に置いて中に展示物を入れるのとかでも良いよね。貴族が見て楽しいものといったら……お花とか？　定期的に交換するのが大変だとしてもありだ。

まあ、そんな感じで使い道もあるだろう。

「じゃあおじさん、この設計図の大きさで作ってくれる？」

俺はそう言って、お店で測ってきた寸法から書いた設計図を渡した。書いたのはロジェだけど。

「こんなに大きいのか」

「うん。作れそう？」

「ああ、問題ないぜ。六週間ぐらいはかかるけどいいか？」

「うん！　じゃあよろしくね」

「おう！　任せとけ」

そうしてとりあえずガラスのケースを頼んで、俺たちは工房を出た。

ふぅ～、疲れたよ。なんか冷蔵機能付きガラスのショーケースは上手くいかない気がしてきた。勢いで作ろうとしてたけど、よく考えたら問題だらけだよね。ちゃんと考えてからやらないとダメだな

……勢いだけで突っ走らないように気をつけよう。
何となくのイメージで出来そうだなと思ったやつは、ほとんどの確率でできない気がする。よく考えたら材料が足りないとか、技術的に無理とか、俺の知識が足りないとか。

ガラスのショーケース、作りたかったんだけどな。
例えばだけど、ガラスのショーケースの中に桶に入れた氷を置いて、溶けたら定期的に変えるようにする。それだけで冷蔵になるのだろうか？　隙間がないといっても密閉は無理だろう。この世界ってゴムを見たことがないし。窓も木枠にガラスが嵌め込んであるのだ。
だから密閉は難しい。そんな空間に氷を置いておくだけで良いのだろうか。またガラスケースって光を通すから、よく考えたらケースの中は暖かくなっちゃうんじゃないのかな？　窓際とかかなり暑かったりするよね。
お店にはガラスの窓があって、昼間はずっとカーテンも開けてるだろうし、太陽の光が差し込んだら氷なんてすぐ溶けちゃう気がする。
それに同じ空間で氷が溶けてるのって、湿度が凄いことになりそうだ。ケーキがダメにならないのかな？　ビシャビシャのケーキになりそう……。

こうして考えたら本当に問題だらけだ。氷を使って効率の良い冷蔵設備にしたいけど、俺ってそういう知識は全くないんだよね……。どうすれば上手くいくのか見当もつかない。
日本で理系だったら、もう少し知識が役に立ったのかもしれないのに。俺って文系で、しかもこの世界では全く役に立たない学部だったんだ。日本にいる時はそれが楽しくて学んでたんだけど、今となってはマジで役に立たない。もし転生することがわかっていれば、絶対に理系を選んだのに！

まあ、今更嘆いてもしょうがないんだけど。俺ができる範囲で考えよう。この世界で俺が冷蔵設備を作るとして、一番可能性が高いのはやっぱり魔法と魔法具だ。

というかもうそれしかない。スマホがあれば話は違うんだけど、あるのは俺の頭脳だけだし。もうこの世界に来て数年経って色々忘れてきてるし。

魔鉄と魔石でどうにかできないか考えてみよう……これはかなりの難関だ。今度実家に帰る時、マルセルさんの工房に行こうかな。久しぶりに会いたいし、冷蔵設備への助言をもらえるかもしれない。

うん。その時までは、とりあえず保留だな。

１４９、生クリームのお披露目

お店のことで忙しく毎日を過ごしていたが、俺は一つ重大なミスを犯していた……。そのミスに気づいたのは一昨日の回復魔法の授業だ。

授業に行く馬車の中で、何気なくステイシー様が放った一言。「レオン、また今週もうちに来るのですか？　それならば、一つ試食をして欲しい料理があるのです」この一言で、俺が毎週ダリガード男爵家に行っていることが、マルティーヌにバレたのだ。

もちろん隠しているつもりはなかった。でも色々忙しくて言うのを忘れていたというか、言う必要があると思っていなかったというか、もう言ったつもりだったというか……とにかく、マルティーヌへの報告を忘れていたのだ。

マルティーヌがステイシー様のその言葉を聞いた時は、本当に怖かった。責めるような目で一分くらい睨まれたと思ったら、「何故レオンは、ダリガード男爵家に毎週行っているのかしら？」そう冷たい声で言われた。

……本当に、怖かった。

とにかくやばいと思って、俺は必死に今までの流れを説明して、ステイシー様の屋敷で何をしているのか事細かに話した。でも、生クリームの話をしたところで、マルティーヌの怒りがより酷くなった。

甘いものが好きなマルティーヌに、新しいスイーツの情報をすぐに伝えなかったのは完全に俺のミスだ……。とにかく、次はすぐに伝える、絶対。

それからは何とかマルティーヌに謝って、今日生クリームをお披露目することで許してもらったのだ。
公爵家で今度は生クリームの試食会だ。ヨアンに今日だけ特別に公爵家に来てもらって、生クリームを乗せたパンケーキを作ってもらっている。公爵家の皆の分もだからヨアンは大変だろう……ヨアンごめんね。

そうして今は、公爵家の応接室に俺とリュシアン、ステファンとマルティーヌだけがいて、目の前には出来立てのパンケーキがある。ついさっき運ばれてきたもので、食欲をそそる甘い匂いが部屋中に広がっていて、お腹が鳴りそうだ。
ヨアン流石だな、前よりも盛り付けがかなり進化している。パンケーキの上には生クリームと共にいくつかのフルーツが盛り付けられていて、カラメルは別の容器に好みで掛けるようにと添えられている。

「わぁ、レオン、これがパンケーキなの!?　とても良い香りだわ!」
「うん。下の生地がパンケーキで、上に乗ってる白いのが生クリーム、別の容器に入っている焦茶色のものがカラメル。カラメルは好みで生クリームやパンケーキに掛けて食べてね」
マルティーヌを筆頭に、ステファンとリュシアンも待ちきれない様子で目を輝かせている。この様子だと今話しても何も頭に入ってないな。俺は苦笑しながら皆に言った。
「じゃあ食べてみて、感想を聞かせてね」
そう言った途端、皆は一斉にカトラリーを手に持ち、優雅さは保

ちつつも最大限の速さでパンケーキを口に運ぶ。
マルティーヌはパンケーキに生クリームとフルーツを添えて一緒に一口、ステファンはパンケーキだけを一口、リュシアンは生クリームだけをまず一口。
最初にどう食べるのかで結構性格が出るよね。マルティーヌはとにかく甘いものは全部好きだと言わんばかりに一斉に、ステファンは初見の生クリームはとりあえず避けてパンケーキだけ、リュシアンはとにかく珍しい生クリームから。
俺はもちろん、まずはパンケーキだけを食べる。この素朴な甘さが良いんだ。次は生クリームとパンケーキ、生クリームの甘さが加わるとまた別次元の美味しさになる。そして次は生クリームにカラメルを掛けてパンケーキと一緒に、甘さの中に少し苦味が加わることでまた別の味わいになる。最後にフルーツは生クリームと共に、少し酸味のあるフルーツが生クリームの甘さとマッチして最高に美味しい。
うん、最高だ。最高すぎる。スイーツって、甘いものって、幸せだ。

俺がそうしてパンケーキを堪能していると、皆は半分ほど食べて少し落ち着いたようで、感想を話し始めた。

「レオン、こんなに美味いものを隠しているなんてズルいぞ！」
「ああ、リュシアンに完全に同感だ」
「本当ですわ！　こんなに美味しいものを独り占めしていたなんて」

感想というか、俺への文句だけどね。確かにこの三人にはもう少し早く教えても良かったかもしれない。

「ごめんごめん、隠してるつもりはなかったんだよ。まだ完全に完成というわけじゃないし、わざわざお披露目するほどでもないかな

って。お店もまだ開店しないし……」
「これで完成ではないのか！？」
「うん。ヨアンが色々と試行錯誤して美味しくしてくれてるから、もう少し変わると思うよ」

実際このパンケーキも、俺が最初に教えたものよりかなり美味しくなっている。ヨアンが分量などを色々と試行錯誤してくれて、食感や味がだいぶ変わったのだ。
そう、一つ驚いたことがある。実はこの世界にもはかりがあったのだ。
もちろん日本のものとは違う形状で、多分正確さもそこまでではないのかもしれない。でもはかりがあるのとないのでは大違いだ。それによって味にムラがなくスイーツが作れるようになった。元は料理というよりも、薬師が使っていたものらしい。
だからこれからもっと改良されて、美味しくなっていくのは確実だろう。ヨアンはかなり張り切ってるし。

「そうなのか……これ以上美味しくなるなど想像もつかないぞ」
「楽しみにしてて。それにお店では、パンケーキ以外にもたくさんのスイーツを売り出す予定だよ」

俺がそう言うと、今度はマルティーヌが驚きの声を上げた。

「そんなにたくさんのスイーツを開発したの！？」
「今開発してる途中だよ。いくつ完成までいけるかわからないけど、できる限りスイーツの種類は増やす予定」
「素晴らしいわ！　新しいスイーツが開発されたら、今度はしっかりと報告するのよ、絶対よ！」
「ちゃんと報告するよ。でもそろそろ夏の休みでしょ？　その間は難しいかなぁ」

俺がそう言うと、三人ともがキョトンとした顔をして首を傾げた。
「何故だ？　王立学校がない分、このような時間を確保しやすいのではないか？」
「そうですわ。何か予定でもあるの？　私、夏の休みはレオンと頻繁にお茶会をしようと思っていたのだけれど」
え！？　そうなの！？
確かに夏の休みについては何も話してないけど……。俺はずっと実家に帰るつもりだったから、皆もそう思ってるのかと思ってたよ。
「俺は実家に帰るつもりなんだ。あとはロニーが育った孤児院にも行く予定。夏の休みが始まったらすぐに帰るよ？」
「そ、そうなの！？　私、週に数回はレオンとお茶会をしようと思っていたのに……」
マルティーヌがそう言って落ち込んでいる。ステファンとリュシアンも少しだけテンションが下がっているようだ。
えっと……実家に帰らない方が良かった？　でも、実家には帰りたいし、母さんと父さん、マリーに会いたいし。
「皆ごめんね？　えっと……皆は夏の休みは何をしてるの？」
「そうだな。基本的には屋敷で授業の復習をしつつ、王立学校で知り合った相手と交流する期間だな」
「じゃあ、皆は中心街からは出ないってこと？」
「基本的にはそうだぞ。だからレオンもそうだと勝手に思い込んでたが、確かにレオンは貴族ではないからな」
「中心街にいないとダメとかはないよね？」
「ああ、それは自由だ」

それは良かった。それなら、皆には悪いけど俺は今までの予定通り、孤児院に行って実家に帰ろう。でも少し早めに帰ってきて、皆とお茶会をしようかな。

「じゃあ、俺はとりあえず実家に帰るよ。でも少し早く帰るようにするから、帰ってきたらお茶会をしてくれる？」
「絶対よ！　結局ギリギリに帰ってくるとかはダメよ」
「わかったよ。気をつける」

そうして皆と夏の休みの約束をしつつ、パンケーキを堪能し、生クリーム会は終了となった。
生クリームパンケーキは、とにかく幸せの味だった。夏の休みが終わる頃には、ケーキがなんとか形になると良いな。

閑話　女神様の成長（ミシュリーヌ視点）

な、な、なんということなの……

私は久しぶりにレオンの様子を覗いて、その光景に衝撃を受けた。

最近は私なりにちゃんと神力を溜めていたのよ。女神像を定期的に光らせて信仰心も上がったから、前よりも格段に溜まるようになった。神域外にいる王に神託をするにはもう少し時間がかかるけど、それでもあと半年ぐらいで溜まるはずだったのよ……

それなのに、それなのに……、何で生クリームなんて開発してるのよ！？　生クリームが嫌な訳じゃないのよ、逆に大好きよ！　あの甘くてふわふわでとろける食感、埋もれたいぐらい好きだわ。本当ならレオンには褒美を与えたいぐらいだけど……でも、でも、今じゃないでしょ！？

今は神力を溜めないといけないから、生クリームを作り出せない。生クリームとカラメルが乗ったパンケーキ……食べたい、凄く食べたい、でも神力を溜めないと。

でも食べたい、少しぐらいならいいかしら？　いや、一度食べたら少しじゃ止まらないわ。でも食べたい……

だ、ダメよ、ミシュリーヌ、我慢よ。このままだと本当にこの世界が滅びちゃうわ。でも、あんなに美味しそうなものが。白くて、甘くて、とろけて……じゅるり。ひ、一つぐらい……

――ダメ！　やっぱりダメ！

ここは我慢よミシュリーヌ。神託をしてから好きなだけ食べれば

良いのよ！

「うわぁ～ん！　なんでレオンは今開発するのよ！」

私は断腸の思いで下界を覗く扉を消した。

はぁ、はぁ、とりあえず耐えたわ。でもさっきまで見ていた美味しそうな生クリームが……目を閉じても開いても浮かんでくる！

もうどうすれば良いの！？　そうだ、何か気が紛れることをすれば良いのよ。何が良いかしら……神力を使わずにできること。この空間にあるものを使って……

そう考えて、私は自分の神界を見回した。でもこの空間って、本当に何もないのよね。神界は神力さえ消費すれば自分の思い通りに作れるけど、私は神力を他のことに使っているから、まだ神界には殆ど何もない。

シェリフィーのところは日本や世界中の昔の建物や現代の建物が何十個もあって、遊ぶところも沢山あるのよね。私はボウリングと温泉が好きだわ。あとカラオケも楽しいわね。頑張っていくつか曲を覚えたんだから！

……はぁ～、そんなことを今考えてもしょうがない。シェリフィーのところに行くのは禁止にされちゃったし。私とシェリフィーは同じ頃に生まれたはずなのに、何でこんなに差があるのかしら。私は運がないのよね……

とりあえずここには地面とソファーと机と、シェリフィーが持ってきてくれた大きな棚しかない。

棚にはシェリフィーが持ってきてくれた日本の甘味に状態保存をかけて入れておいたんだけど、何日か前に食べきってしまった。や

っぱり一日に五個じゃなくて四個までにすれば良かったかしら……

何冊かシェリフィーがくれた漫画本ならあるけど、もう何百回も読んだし、面白いけど生クリームの誘惑には勝てない。こんなことならもっと面白いものをもらっておけば良かったわ。いつもスイーツばかりもらってた私のバカ！

はぁ……、神は何も食べなくても生きていけるはずなのに、何でこんなに我慢できないのかしら。

それもこれも、スイーツが美味しすぎるのが悪いのよ。それに神の身体も悪いわ。いくら食べても太ることもお腹を壊すこともないし、ずっと永遠に楽しめるのがいけないのよ！　満腹も感じないから本当にいくらでも楽しめる。

でも満腹を感じない代わりに空腹も感じないはずなのだけど……でも、空腹を感じなくても美味しいものは食べたいわよね。それが普通よ。

もう、限界だわ……さっき見た生クリームが鮮明に思い出される。目を閉じたらあの白いクリームのことしか考えられなくなる。一つだけならいいわよね。一つだけ、一つだけなら……

私が誘惑に負けて、神力を使い生クリームのパンケーキを作り出そうとしたそのとき……神界にお客様がやってきた。

「ミシュリーヌ、頑張ってる？　様子を見にきたわよ。それにしても……いつ来てもここは殺風景ね」

「シェ、シェ、シェリフィ～！！」

「うわっ……何よ。どうしたの？」

「うぐっ、ひっく、ひくっ……」

「ちょっと、なんで泣いてるのよ！？」

「レオンが、レオンが、生クリームのパンケーキを作り出したのよ！？」

私が泣きながらそう叫ぶと、さっきまで心配そうだったシェリフィーは呆れたような顔をした。

「レオンって、日本から転生させた子よね？」
「そうよ。そのレオンが生クリームを作ったのよ！」
「良いことじゃない」
「でも、今の私は食べられないのよ……」
「そんなの我慢すれば良いだけじゃない。神託をするための神力を溜めているんでしょう？」
「そうよ。あと半年ぐらいで溜まるわ」
「凄いじゃない。その調子で頑張りなさい」

シェリフィーは軽くそう言ってソファーに座り、お茶を時空間から取り出して優雅に飲み始めた。

「ちょ、ちょっと、シェリフィー！　私にとっては大問題なのよ。何とか耐えてたけど、耐えきれなくなってたところだったんだから」
「何か他のことでもして気を紛らわせなさい」
「そうしようとしたわよ。でもここには何もないの！」
「確かにね……もう少し神界も充実させなさいよ。いつ来ても殺風景で、眷属の一人もいないし」

私もそうしたいけど神力が足りないのよ。シェリフィーのところは眷属が沢山いて良いわよね。一緒に遊ぶことも話すこともできるし楽しそうで。
それにシェリフィーが信仰されなくても、眷属が信仰されていれば神力は溜まっていくのだから。シェリフィーの潤沢な神力が羨ま

しい。
本当に、何でこんなに差があるのかしら……
「そうしたいけど、神力がないのよ。何でこんなに差があるの！」
「ミシュリーヌが計画的に神力を使わないからよ。でも今少し我慢をすれば、そのうち神力にも余裕ができて、私のところみたいにできるわよ。そうだ、前の世界からの神力はないの？」
「前の世界は人間がいなくなっちゃったから。少しは神力が溜まるけど微々たるものよ。やっぱり高度な意思を持つ種族がいないとダメね。信仰してもらわないと神力はほとんど増えないわ」
「確かにそうね。その中でも人間はすぐに増えるし神力には最適な種族よね。まあとにかく今は我慢よ。今我慢してミシュリーヌの世界ミユソルーテを救えば、すぐにいくらでもスイーツを食べられるようになるわ」
「そうよね……」

そうよ、今我慢すれば上手くいくはずなのよ。人間はまだ絶滅してないし、私が神託をすればレオンが世界を救ってくれるはず。そうすれば地球のように発展するはず！
今は我慢よ、ミシュリーヌ、頑張るのよ！

「……今は我慢する。この世界の行先を考えたら我慢できる。頑張る、頑張るのよ私」
「じゃあ、そんな頑張ってるミシュリーヌにプレゼントがあります」
「プレゼント！　本当！？」
「ふふっ……本当よ」

そうしてシェリフィーが出してくれたのは、大量のスイーツが詰められた棚だった。さらに机の上には、新しい漫画本と小説も沢山ある。

「全てに状態保存はかけてあるわ。計画的に楽しむのよ」
「シェ、シェリフィー、ありがどう〜、ひっぐ……」
「ちょっと、こんなことでそんなに号泣しないでよ」
「だって、うれじいんだもん……えぐ、ひっぐ……」
「汚いわね、泣き止みなさい。漫画本と小説は最近のおすすめよ。特にこの小説！　この作者の小説が最高に面白いのよ！　この作者が死んだら、魂を神界に呼び寄せて望めば眷属にしようかと思ってるわ」

シェリフィーがキラキラした瞳でそう言った。シェリフィーは本が大好きなのよね。シェリフィーの神界には馬鹿みたいに大きい図書館があって、本の数は行くたびに増えている。

「それは良かったわね」
「そうなのよ！」

それからは、しばらくシェリフィーによる小説のおすすめポイントを聞いた。そして数時間経って、やっと満足したシェリフィーは自分の世界へと帰っていった。
凄くありがたいけど、楽しかったけど、ちょっと疲れたわ。でも気分転換になったし地球のスイーツももらったし、もう少し頑張れそう。
シェリフィーありがとう！　大好き！

１５０、夏の休み前日

それから数週間。遂に今日で授業が終わりとなり、王立学校は、明日から夏の休みになる。

夏の休みとは王立学校で夏にある休みのことで、夏の月第一週から第十二週までの六十日間がお休みだ。

六十日もあると長いと思うかもしれないけど、俺はとにかく忙しい。やりたいことが山積みなのだ。

まずは実家に帰りたい。そしてロニーの孤児院に行ってお店の従業員も雇いたい。孤児院でクレープを作る約束もしている。それから森に行って転移魔法やアイテムボックスの検証もしたいし、冷蔵設備の研究もしたい。マリーと釣りに行く予定もあるし、マルセルさんのところも尋ねたい。マルティーヌ達とのお茶会の予定もある。

こうして思いつくものを挙げていくだけで凄い数だ。俺ってまだ子供なのに、働きすぎじゃない？

まあ、自分からやってることが多いから頑張るけどね。

まず最初は、ロニーと共に孤児院に行く予定になっている。そして孤児院にしばらく滞在し、そのままロニーと俺の実家に行く。そのあとロニーはまた孤児院に帰って、俺は実家でしばらく過ごす予定だ。

久しぶりに実家に帰るのが本当に楽しみだ。いつでも帰れる距離だからとか言っておきながら、忙しすぎて全く帰れてないからな……マリーに謝らないと。

早くマリーに会いたい！　もちろん母さんと父さんにも！

今は王立学校で、夏の休み前最後の授業が終わり、ロニーと明日の予定を確認しているところだ。

「ロニー、明日は何時集合にする？　中心街近くの市場で買い物をしてから孤児院に帰るんだよね？」
「うん！　確か十二時の乗合馬車があったから、広場に十一時に集合ぐらいかな？」
「わかった。じゃあその時間に行くよ！」

早速夏の休み初日に孤児院へ行く予定なのだ。市場でお土産や中心街でしか手に入らないクレープの材料を買って、乗合馬車で孤児院へ向かう。
ロニーが育った孤児院は、俺の実家から近くはないけど遠くもない微妙な距離にあるようだ。ただ俺の実家から中心街までよりは近いみたいだから、行き来もそこまで大変じゃないと思う。

そうしてロニーと話をして、俺は研究会へは行かずにすぐ帰宅し、公爵家の馬車でダリガード男爵家に来た。
しばらくは俺も来れないから、色々と伝えておかないといけないことがあるんだよね。
ダリガード男爵家に辿り着くと、ちょうどステイシー様も帰ってきたところだったようで、屋敷の前で鉢合わせた。

「ステイシー様、今お帰りですか？」
「そうです。レオンは何の用ですか？」
「実は明日からしばらく実家に帰るので、ヨアンにそれを伝えようと思いまして」
「そうなのですか？　しばらくレオンが来ないなんて寂しくなりますね」

ステイシー様はそう言って少しだけ寂しそうな顔をした。そんな顔されるとちょっとだけ罪悪感を刺激される。

マルティーヌ達も同じような顔をしてたけど、俺がしばらくいなくなることを悲しんでくれる人がいるのって、かなり幸せだよな。

「しばらくと言っても、十二週間なのですぐですよ。その間の助言はできなくなってしまいますが、申し訳ありません」

「それは気にしないで下さい。レオンがまた来るときにびっくりさせられるような料理を考えておきます！」

「楽しみにしてますね」

ステイシー様とそんな会話をして、俺はヨアンがいる厨房に向かった。

「ヨアン、研究はどう？」

「はい！　かなり良い感じです！　実は三日前に大発見をしまして！」

厨房に行くとすぐに、ヨアンが大興奮でそう告げてくる。凄い勢いだけど、何か開発に成功したのか？

俺は顔をずいっと近づけてくるヨアンから、身体を後ろに反って少し距離を取り、ヨアンに尋ねた。

「な、何か開発に成功したの？」

「はい！　これを見てください！」

そう言ってヨアンが見せてくれたのは、白くてふわふわしてそうな何かだった。生クリームとはまた違う。

これだ、これだよ！　お母さんがケーキを作るときに使ってたのこれな気がする！！

「ヨアン！　これどうやって作ったの！？」

「これは、卵の卵白をとにかく混ぜたら出来ました。実はしばらく研究に行き詰まっていまして、そこでレオン様が卵白が使えるかもとおっしゃっていたので、卵白をどろっとしたものが無くなるまで混ぜようと思ったのです。そしてそれをカラメルと小麦粉と混ぜてみようかと。そこで身体強化を使い卵白を混ぜていたのですが、混ぜながら今後の研究について考えていたところ混ぜすぎてしまいまして、気づいたらこれが出来上がっていたのです！」

そんな偶然だったのね。でもその偶然最高だよ！　確かこれに小麦粉と他にも幾つか材料を混ぜて、オーブンで焼けばスポンジケーキができるはず、多分。

「ヨアン凄いよ！　これを使って色々試してみた？」
「はい。レオン様がおっしゃられたように、小麦粉などと混ぜてオーブンで焼いてみましたが、微妙な仕上がりでして……。まだ分量などを試行錯誤しているところです。ただ、これは美味しいものが出来上がる予感がします！」
「それは楽しみだよ。美味しいと思ったものは、全部作り方をメモしておいてね。後でどれが良いか食べ比べして決めようか」
「かしこまりました！」

本当にヨアン凄い。多分これが正解なんじゃないかと思う。これでケーキにまた一歩近づいた！
この白いふわふわのやつ、なんて名前だっけ……？
確か日本での名前があったと思うけど……、これは全く思い出せない。一度ぐらいは聞いたことあるはずなんだけどな。うーん、ダメだ、わたあめしか出てこない。
別に日本の名前を思い出す必要はないし、もう新しい名前を決めちゃおうかな。白くてふわふわで雲や雪みたいだから……ユキ、スノー、クラウド、ホワイト。

うーん、何かしっくりこないな。

「ヨアン、この白いものの名前決めた？」
「いえ、卵白を混ぜたものと呼んでいます」
「じゃあ名前を決めようか。その方が便利でしょ？」
「確かにそうですね。何が良いでしょうか？」
「それが難しいんだよね。何か良い案ある？」
「そうですね……新しいものを開発したときには、開発者の名前がついたり、地名がついたりすると聞いたことがあります」

確かに……！　それは盲点だった。人の名前が物の名前になったりすることもあるよね。
じゃあヨアン、ダリガード、その辺が良いかな？

「じゃあヨアンとか？」
「それはダメです！　自分で自分の名前をつけるとか恥ずかしすぎます！」
「確かにそうか……、じゃあダリガード？」
「それは良いですが、貴族家の名前を付けるのはどうなのでしょうか？」

確かに。それは後々問題になりそうな気がする。じゃあ二つを合わせた造語かな。
ヨダリ、アンダリ、ヨアダ、アンガー、アンガード、ヨアガード、ヨガード……ヨガードが一番しっくりくるかも。

「じゃあ、二つを合わせてヨガードはどう？」
「ヨガード、ヨガード、そうですね、良いと思います！」

ヨアンは何度かヨガードと口の中で唱え、それから大きく頷いた。

「良かった、じゃあ決定ね。この卵白を混ぜて作られる白いものはヨガード！」
「かしこまりました。これからはヨガードをもっと活用できるように研究します！」
「よろしくね。俺はこれからしばらく夏の休みで来れないから、その間は何も手伝えないんだけど……」
「それは仕方がないことです。レオン様が戻ってこられるまでに研究を進めておきます」

ヨアンはそう言って頼もしく頷いてくれた。本当にヨアンと出会えて良かった。信頼できる料理人だし、とにかくスイーツへの情熱が凄い。
ヨアンがいなかったら、もっと開発まで時間がかかってただろう。それか、最悪何も完成しなかったかもしれない。
俺がそんなことを考えていたら、ヨアンが急に真剣な表情になり、姿勢をビシッと正して口を開いた。

「レオン様、一つお願いしたいことがあるのです。レオン様は夏の休みの間、クレープの屋台は休みにするとおっしゃっていましたよね？　俺にクレープの屋台を代わりに任せていただけないでしょうか！」

ヨアンはそこまで言うと、勢いよく頭を下げた。

「ヨアン、そんなに改まらなくても良いよ。でも何でクレープの屋台をやりたいの？　研究の時間が減るけど……」
「もちろんレオン様が許可されないのであれば無理にとは言いませんが、私は自分の料理を大勢のお客様に食べていただいたことがないのです。カフェでは下働きをして、賄いを作ったりでしか料理を

させてもらえませんでした。ピエール様に雇っていただいてからも、ダリガード男爵家の方々にしか食べていただいたことがなくて……」

そうだったんだ。確かにそれだと、一度お客様に食べてもらうってことを経験しても良いかもしれない。

ただクレープは、マヨネーズの問題があるんだよね。ヨアンに魔法具を渡すのは避けたいから、やるとしたら公爵家から殺菌済みの卵をヨアンに渡してもらうしかない。

そうなると、かなりの数の魔石に殺菌の魔法を込めて公爵家に置いておいてもらわないとダメだ。

うーん、そこまで迷惑かけるのはなぁ……

ヨアンはスイーツの料理人だし、甘いもののクレープだけでやって貰えば良いかな？　うん、それで良いかも。

そしたら蜂蜜バタークレープと、もう一つはどうしよう。クレープは高価なものを使えないのが難しいんだよね。製氷機を使うわけにもいかないし。

果物は厳しい、生クリームも難しいだろう。できるとしたら……カラメルかな？　でもカラメルだけでは美味しくないと思う。

うーん、もう一種類だけでも良いかなぁ。まあ、あの屋台は利益を求めてるわけじゃないし良いか。生で食べられる特別な卵が、しばらく入手できなくなったことにしておこう。

「じゃあヨアンにはクレープの屋台をやってもらおうかな」

「本当ですか！？」

「うん。でもお昼の時間が終わるまでね。お昼の時間が終わったら屋台は終わりにして、ヨアンは休憩を取ってから午後に研究。それで良い？」

「はい。ありがとうございます！」

「でも豚肉サラダクレープの方は、特別な卵が手に入らなくてソー

スの材料が用意できないから、蜂蜜バタークレープの一品だけになるけど良い？」
「問題ありません」

そうしてヨアンと夏の休み期間のことについて色々と話し合い、夕食に間に合うかギリギリの時間にダリガード男爵家を出て帰路についた。

ヨアンが屋台をやってくれるとは思ってなかったけど、休みにしなくて良いのはありがたい。やっぱり十二週間も休みにしておくと、お客さんに忘れられるのではと思ってたんだ。

これで何の問題もなく実家に帰れるな！　俺は久しぶりに帰る実家に少しそわそわとしつつ馬車に揺られた。

１５１、夏の休み開始！

今日は夏の休み初日だ！！
俺は朝から公爵家の皆さんに挨拶をして回り、ロニーとの集合時間に間に合うように屋敷を出た。
里帰りは流石に俺一人なので、ロジェは付いてきていない。最初はロジェも付いてくるって言ってたんだけどね、流石に俺が断った。別にロジェがいるのが嫌ではないんだけど、ロジェも俺がいない間に休暇を取れるかもしれないし、俺の家族もロジェがいたら気が休まらないだろう。

そういえば……、ロジェって家族はいるのかな？
王都出身ってことは聞いたことあるけど、ロジェの家族について聞いたことはなかった。うーん、こういうことって本人から話してもらえるまで聞かない方が良いのだろうか？　とりあえず、聞くのはやめておこうかな。
仲良くなっていけばそのうち話してくれるよね。

そんなことを考えつつ広場まで歩き、集合時間より少し早く広場までたどり着いた。
広場に着き辺りを見回すと、遠くにロニーがいるのが見える。なんかロニー、めちゃくちゃ大きい鞄？　布袋？　を持ってるけど、何をそんなに入れてるんだろう。あれに物を詰め込んだらかなり重いだろう。
俺は、そんな重い物を持っているロニーを待たせるのは大変だと思って、足早にロニーの元へ向かった。

「ロニー、お待たせ」

「レオン！　僕も今来たところだよ」
「それ、何が入ってるの？　重くない？」
「ああ、これね。今は何も入ってないから重くないんだ」
「そうなの？　じゃあ何でそんなに大きな袋を持ってるの？」
「これは、孤児院の皆へのお土産を入れる予定なんだよ。向こうに着いたら長持ちする食材を沢山買って、それを持っていこうかと思って。屋台の仕事で少しお金が貯められたからね」

ロニーはそう言って、にっこりと嬉しそうに笑った。
うぅ……ロニー良い子。良い子すぎる。俺も何か孤児院にプレゼントしたいな。
数日は泊めてもらうんだし、手土産は必須だよね。

「じゃあクレープは俺からのお土産ってことで、クレープの材料は俺が買うよ」
「そんな悪いよ。別にレオンはお土産なんて買っていかなくても良いんだよ？」
「ううん、俺が買っていきたいだけだから。それに泊めてもらうのに手土産もなしじゃ悪いでしょ？」
「別に何もなくて大丈夫だと思うよ？　まあレオンが買っていきたいのならいいけど……」
「うん、俺が買っていくよ！　じゃあ市場に行こうか」

そうして俺とロニーは市場に向かい、クレープの材料を買って乗合馬車に乗った。
クレープの材料は、小麦粉など長持ちするものは少し多めに買っておいた。残ったら孤児院に置いてくれれば良いからね。

それからしばらくは久しぶりの乗合馬車に揺られ、数時間でロニーの孤児院近くに着いた。久しぶりにクッションのない馬車に乗っ

たけど、やっぱりお尻が痛いし疲れるな。乗合馬車と比べると改めて感じるけど、公爵家の馬車って本当に乗り心地最高だ。
うぅ～ん、俺は馬車を降りて思いっきり伸びをした。固まっていた身体が伸びて気持ちいい。そして伸びをしつつ、馬車乗り場の周囲をぐるっと見回してみる。
実家周辺とあまり変わりはないな。王都は実家周辺と中心街しか行ったことがなかったから、ちょっとだけ別の場所を楽しみにしてたんだけど、変わらないんだね。まあ、乗合馬車乗り場があるのは大通り沿いだし、そこは変わらないか。同じ王都だし。

「レオン、こっちに市場があるんだ。孤児院も同じ方向だから行こう」
「わかった。王都はどこも、あんまり変わらないんだね」
「まあ同じ王都だからね。僕もこの辺と中心街しか知らないけど、やっぱり同じような感じ？」
「かなり似てるよ。特に大通りだからかもしれないけど」
「確かに大通りはどこも同じような感じかもね。でも路地に入っても工房があってアパートがあって、同じような感じじゃない？」
「確かにそうかも」

そんな話をしつつ俺とロニーは市場に向かった。その後はついに孤児院か、ちょっと緊張してるけど楽しみだな。今まで教会に入ったことはあるけど、孤児院に入ったことはないんだよね。
どんなところなんだろう。孤児院の情報なんて手に入れる術がなかったし、孤児院の子供達と交流するようなこともなかったし、全くわからない。
というか、普通に孤児院に泊めてもらう予定だったけど、俺って孤児院に入れてもらえるのかな？　そして泊めてもらえるのか？
なんか不安になってきた。

「ロニー、聞いてなかったんだけど、孤児院って俺も入っていいの？　泊めてもらう予定だったんだけど、もしかして難しかったりする？」
「ううん、僕の孤児院は大丈夫だよ。孤児院によっては断るところもあるかもしれないけど、僕のところは凄く当たりの孤児院なんだ」
「孤児院に当たりとかあるの……？」
「うん、結構あるみたいだよ。僕も勉強して色々調べて知ったんだけど、孤児院は一応国営だから国から費用が出されてるでしょ？でもそれを職員さんが私的に使ってるところもあるらしいんだ。それによって子供たちの食べるものが減って苦しいところも多いみたい。まあ、それでも生きていけるぐらいは食べさせてもらえるらしいけどね」

……それって犯罪じゃないの？
そんな孤児院がそのままなんて。それに、酷い孤児院なら子供が逃げ出して訴えるとか、当たりの孤児院に子供が殺到するとかが起こりそうだけど。

「それって犯罪だよね？」
「そうだけど、そこまで大きな金額でもないし、少なからずそういう事をやってる孤児院が多いんだって。だからそのまま放置みたいだよ。それに国が平民の、それも孤児を気にかけてくれることなんてないよ。もっと大きな問題が沢山あるんだろうし。私的に使ってると言っても、良い食材を買って職員だけで食べるとかその程度だからね」
「そうなんだ……。当たりの孤児院に子供が殺到するとかはないの？」
「それはないかな。実際に生活してみないと、どの孤児院が当たりかはわからないから。ハズレでも生きていくことはできるし、最初に辿り着いた孤児院にずっといるのが普通だよ。そもそも当たりを

知らないから、ハズレということに気づかないと思う」

そっか……そうだよね。

やっぱり孤児院があるとは言っても、孤児って過酷なんだな。多分国も問題を解決したいと思いつつ、他にたくさんの問題があって後回しにしてるんだろう。仕方がない部分もあるんだろうな。

「ロニーは当たりの孤児院で良かったね」

「僕は本当に運が良かったよ！　孤児院での生活は大変なこともあったけど、凄く楽しかったよ。勉強も教えてもらえたし。皆に会うのが楽しみだ！」

「俺もどんな人がいるのか楽しみだよ。友達になれるかな？」

「同い年の人も結構いるよ。でもレオンは友達じゃなくて従業員を雇うんでしょ？」

「そうだった。働きたいと言ってくれる人がいたら、面接して雇う予定」

「じゃあ、まずは僕がレオンのお店で働くのに適している人に声をかけてみるよ。あとはレオンも気になった人には声を掛けてあげてね」

「うん！　ありがと」

そうして俺たちは、話に夢中で遅くなっていた足を速く動かして市場まで急いだ。そして市場でたくさんの食料を買い、孤児院にやってきた。

ロニーが育った孤児院は、俺の実家近くの孤児院と同じように教会併設のようだ。真ん中に教会があり、その左右に孤児院と治癒院がある。多分どこも同じ作りなんだろうな。

ロニーは慣れたように孤児院の方に向かい、入り口のドアを開けた。鍵はかかっていないようだ。

「夜以外は鍵をかけないんだ。盗まれて困るような高価なものはないし、孤児院は来るもの拒まず去るもの追わずがモットーだから」

そのモットー、孤児院として良いのか悪いのかわからないな……まあ、誰でも入れるのは良いことなんだろう。

扉を開いた先は広い食堂のような場所だった。大きな机と椅子が沢山あり、いくつかドアがあるのが見える。今は誰もいないようだ。

ロニーは躊躇なくその中に入っていくので、俺もロニーの後に続いた。

152、孤児院

「ただいまー！」

ロニーが声を張ってそう言うと、すぐにドアの一つが開き、中から同い年くらいの女の子が出てきた。

「あ！　ロニー帰ってきたの！？」

「エマ！　久しぶり」

ふわふわな茶髪のボブヘアに茶色の瞳で、笑顔が可愛い女の子だ。やっぱり前世が日本人だった俺からすると、この色合いは落ち着く。

「王立学校は？　何かあったの？」

エマと言うらしい女の子が心配そうにそう聞いた。

「王立学校は、夏の月前半と秋の月後半に十二週間お休みがあるんだ。今はそのお休み期間だから帰ってきたんだよ」

「そっか。じゃあロニーはしばらくここにいるってこと？　それは嬉しい！」

「ふふっ……そんなに喜ぶこと？」

「喜ぶに決まってるよ！　だってロニーは、もうここに帰ってくることはないのかと思ってたから」

「ここには皆もいるし帰ってくるよ」

ロニーはそう言って優しい顔で微笑んだ。何か、何か凄く良い雰囲気じゃない！？　俺、邪魔なんじゃない！？

……転移魔法ですぐにこの場から立ち去りたい。

そう思ってできる限り存在感を消していると、エマちゃんが俺の方を向いた。そして俺に話しかけてくれる。

エマちゃん、本当にありがとう。もうこの空気には耐えられなかったんだ。

「あなたはロニーのお友達？」

「うん。王立学校で同じクラスなんだ」

「わぁ！　じゃああなたも優秀なのね！」

「ロニーほどじゃないよ」

俺はエマちゃんからの素直な賞賛が照れ臭くてそう謙遜したら、ロニーにすぐ突っ込まれた。

「レオン、嘘はダメだよ。僕なんてレオンの足元にも及ばないから」

ロニーはジト目で俺を見つつ、そう言ってきた。

「でも、純粋な頭の良さならロニーの方が……」

「レオンは自分がどれだけ規格外なのか、まだわかってなかったんだね。わかるまでひたすら、レオンの素晴らしさについて語ってあげようか？」

ロニーが笑顔を浮かべてそう言ってくる。でも笑顔なんだけど、綺麗な笑顔なんだけど、何故か怖い！　あの純粋だったロニーがいつの間にそんな表情を覚えたのか……

俺か、もしかして俺のせいなのか。

「ロニー、なんかごめん」
「ん？　何で急に謝るの？」
「何となく謝りたかったんだ……」

まあでも、強くなるのはいいことだよね。俺はそう考えることにして話を変えた。エマちゃんが完全に置いてきぼりになっちゃってるし、早くエマちゃんを紹介してもらおう。

「ロニー、こちらの女の子は？」
「ああごめん、紹介してなかったね。こちらはエマ、僕たちと同い年だよ。エマ、こちらはレオン。王立学校の友達なんだ」
「改めて初めまして。ロニーの友達でレオンです。よろしくね」
「私はエマ、エマって呼んでね。レオン、これからよろしく！」

そうしてお互いに挨拶をして笑い合ったところで、エマが出てきたドアがまた開き、俺たちより少し小さな女の子が出てきた。

「お兄ちゃん！！」

その女の子は満面の笑みでそう叫んで、ロニーのところまで一直線に走りロニーに抱きついた。

「うわっ……リズ、痛いよ」
「お兄ちゃん、お兄ちゃん、お兄ちゃんだぁ」

ロニーがリズと呼んだ女の子は、ロニーに抱きついたまま頭をぐりぐりと押し付けている。

「リズはロニーが中心街に行ってから、ずっと元気がなかったんだよ」

「そうなの？　リズ、寂しかった？」
「うん、だって……だってぇ～、ひっ、ひっく……」
「ちょっ、ちょっとリズ、泣かないでよ。本当にどうしたの？」
「お兄ちゃんと、離れるの、初めてだったから……お兄ちゃんもお母さんみたいに、もう会えなくなるのかと思ったの」

確か、ロニー達のお母さんって病気で亡くなったんだよね？　そっか……小さい頃にお母さんと死に別れて、唯一の家族であるお兄ちゃんとまで会えなくなったら不安になるよね。

「リズ、大丈夫だよ。僕はいなくならないよ。また一緒に住むこともできるし、いつでも会えるようになるよ」
「本当？」
「うん！　お兄ちゃんがお金を稼げれば一緒に住めるよ」
「そっか……そっか、良かったぁ」

リズちゃんはロニーのその言葉を聞いて、安心したような顔でやっと笑顔を見せた。泣き止んでくれたみたいで良かった。
それにしてもかなり可愛い子だな。これは大きくなったら大変そうだ。

「じゃあリズ、レオンにご挨拶しようか」
「レオン？」
「そう。僕の友達のレオンだよ」

ロニーがそう言って俺を紹介してくれたところで、リズちゃんはやっと俺を認識したようでこちらを向いた。そして数秒目が合ったと思ったら、素早くロニーの後ろに隠れてしまった。

「うわっ、リズ？　ご挨拶は？」

ロニーの後ろからちょっとだけ顔を出して俺を観察している。もしかして、人見知りなのかな？
何か王立学校入学時のロニーみたいだ。ちょっとビクついてる感じが似てる。やっぱり兄弟だな。

「レオンごめんね、リズは人見知りなんだ。慣れると大丈夫なんだけど」
「大丈夫だよ」

俺はロニーにそう言って、ロニーの後ろにいるリズちゃんをひょいっと覗き込んだ。

「初めまして。お兄ちゃんの友達のレオンです。お名前教えてくれる？」
「……リズ」
「リズちゃんって言うんだ。よろしくね」
「……リズでいいよ」
「ありがとう。じゃあリズ、よろしく」
「うん。レオン……、よろしく」

リズはそう言ってちょっとだけ笑顔を見せてくれた。まだ警戒心は抜けないみたいだけど、ちょっとは心を許してくれたかな？
俺がそうしてリズとコミュニケーションを取っていると、ロニーが何かを思い出したような声を上げた。

「あっそうだ。エマ、急に来ちゃったけど泊まれる部屋ってある？
なかったら掃除しないとだよね？」
「うーん、確か二人しか入ってない四人部屋があったから、そこを使えば良いんじゃない？」

「そっか、じゃあそこを借りることにする」
「うん。どのぐらいここに居るの？」
「夏の休みは十二週間なんだけど、その間は基本的にいる予定かな。でも途中でレオンの家にも行く予定だから、ずっといるわけじゃないかも」
「そうなんだ。じゃあ、とりあえず院長先生のところに行く？」
「そうする」

そうしてエマとロニー、リズは先程二人が出てきたドアとは別のドアに向かっていく。俺もそれに付いて行き中に入ると、そこは廊下に繋がっていて、左右にたくさんの部屋があった。
そしてその廊下を少し進むと突き当たりにドアがあり、三人はそのドアを開けた。
おおっ、結構広い。ドアの先は裏庭につながっていたようだ。子供なら十分に走り回って遊べるような裏庭に、数十人の子供達がいる。
木箱に座って大人の話を聞いていたり、庭をただただ駆け回っていたり、木の枝を剣のように持ち素振りをしていたり、様々なことをして過ごしている子供がいる。

そんな子供達が一斉に俺たちの方、いやロニーの方を見た。そしてロニーの顔を少しの間凝視すると、一斉に駆け寄ってくる。

「ロニー、帰ってきたの！？」
「中心街はどうだったの？」
「美味しいものあったぁ？」
「王立学校は？？」
「うわっ……ちょ、ちょっと皆、勢いが凄すぎるよ」

ロニーが皆に囲まれてタジタジだ。ロニーって皆に慕われてたん

だな。ここにいるのは俺たちより小さい子ばかりみたいだし、皆のお兄ちゃんみたいな感じなのかも。
確か孤児院って十五歳までいられるんだよね？　年上の人達はどこにいるんだろう？
俺がそんなことを考えながらロニーの様子を見ていると、先程子供達に何かを教えていた大人がこっちに歩いてきた。
三十代ぐらいに見える女の人で、ふんわりとした雰囲気で優しそうだ。

「皆、ロニーが困っているわ。落ち着きなさい。ロニー久しぶりね。元気だったかしら？」
「院長先生！　元気にやっています。最初は大変でしたけど、王立学校にも慣れてきました」
「それは良かったわ。ロニーに王立学校へ行かせるのは、酷だったかしらと思っていたのだけど」
「今では王立学校を受験させてくれたこと、本当に感謝しています。僕が王立学校でやっていけているのはレオンのおかげなんです。紹介しますね、こちら王立学校で仲良くなった、友達のレオンです」

ロニーがそうして俺を紹介してくれたので、俺はしっかりと挨拶をする。

「初めましてレオンと申します。ロニー君とは仲良くさせていただいてます」
「アシアです。この孤児院の院長をやっています。ロニーと仲良くしてくれてありがとう」

アシアさんはそう言って優しく微笑んでくれた。この人が凄く良い院長先生だということは、もう見ただけでわかる。雰囲気が柔らかいし、子供達を見る目が凄く優しい。

確かにどんな院長先生なのかで、孤児院の雰囲気って変わるよね。
この孤児院が当たりというより、アシアさんが当たりなんだな。

153、院長先生

「院長先生、これから十二週間程ここに泊まっても良いでしょうか？　レオンも数日だけお願いしたいです」
「ええ、もちろんいいわよ。ここはロニーの家なんだから、遠慮せずに帰って来なさい」
「院長先生、ありがとうございます！」
「では二人分の食事も追加で作らなくてはね。仕事に行っている皆もそろそろ帰ってくるでしょうし、夕食を作りはじめましょう。今日の料理担当は、エマとリズだったかしら？　下拵えは終わった？」

アシアさんはそう言って二人の方を見た。料理担当とかあるんだな。だからロニーも最初から料理ができたんだ。

「はい！　もうほとんど終わってます」
「ありがとう。では厨房に行きましょう。配膳担当の子も後少ししたら来なさい。ロニーとレオン君はゆっくりしていてね」
「ううん、僕たちも手伝います。食材もお土産で色々買って来て、それにお土産でスイーツもあるんです！　それも作らせてください」

ロニーはそう言って、食材が沢山入って重い布袋を少しだけ持ち上げた。重すぎるので立ち止まるたびに床に置いているのだ。ここに来るまでも、俺とロニーが交互で頑張って運んできた。

「そんなに買って来て、大丈夫なの？　かなり重そうだけど……。それにスイーツなんて高いでしょう。そうでなくとも王立学校はお金がかかるのに……」

アシアさんはそう言ってロニーを凄く心配そうに見ている。確かに屋台で働き始める前のロニーだったら、お土産は無理だったよね。

「レオンがやってる屋台で働いてるので、お金が少しは貯まってるんです。それから、スイーツはレオンからのお土産です」

「レオン君が屋台を？」

「レオンはちょっと……、特殊なんです。僕は本当に助けられています」

ロニーがそう言うと、アシアさんは何か言いづらい事情があると思ったのか、そこで追及をやめてくれた。

「ロニーに良い友達ができて良かったわ」

「はい！　僕には勿体無い、本当に良い友達です！」

ロニー、そんなこと思ってくれてたなんて……！　照れるけど嬉しい。最近はロニーに呆れられてばかりだったからね。

そうして俺たちが話し込んでいると、ロニーの袖を引っ張る存在が現れた。

「お兄ちゃん、屋台で働いてるの！？」

リズがキラキラした瞳でロニーにそう聞いている。確かロニーが言ってたな。妹と、屋台で働けたら好きなだけご飯が食べられるね、と話してたんだっけ。

リズにとっては屋台で働くのは憧れなんだな。確かに自分のお店っていいよね。

「そうなんだ。クレープっていう食べ物を売ってるんだよ。お土産で材料を買って来たから、今日の夜に皆にも作るね」

「本当！？　嬉しい！」
「では厨房まで移動しましょう」

そうして俺たちは厨房まで向かうことになった。その途中で俺は、ロニーにずっと疑問に思っていたことを聞いてみる。

「ロニー、皆アシアさんには敬語を使ってるけど、なんで使えるの？」

平民は敬語なんて使えないのが普通なのに、皆がアシアさんに対しては敬語を使ってるんだ。さっきからずっと疑問に思っていた。

「院長先生が、敬語と簡単な計算ぐらいはできるようにって教えてくれるんだ。その二つ、特に敬語ができると、中心街で良い仕事場を見つけられる可能性が高くなるからって。本当は読み書きも教えたいみたいだけど、それは流石に時間がなくて難しいんだよね。皆少しは出来るけど」

そうなのか……それは凄いな。この世界って学ぶためにはかなりのお金がかかるのが普通だし、無償で教えるような人は殆どいない。

孤児院という特殊な場所だけど、たくさんの子供相手に無償で勉強を教えているなんて……。これを応用すれば、この世界でも義務教育ができそうだ。

義務教育までは無理でも、教会で授業を受けられるようにすれば、この国の教育レベルは格段に上がるだろうな。

まあ、それをするのが難しいんだけどね。

何にしても、ロニーはこの孤児院に来て本当にラッキーだったな。というか、アシアさんて何者？

教会の職員って基本的には平民だよね？　確か前に聞いたことが

ある。読み書きの簡単な試験があるから全く勉強したことがない人には無理だけど、少しでも学ぶ機会がある人なら簡単に合格できるって聞いたことがある。
でもその程度で敬語とか教えられないだろうし……

「凄くありがたいことだね。アシアさんって、何でそこまでの知識があるのかな？　普通は教会の職員って平民だよね？」
「本当にありがたいよ。僕も気になって聞いたことがあるんだけど、院長先生の親が準貴族だったんだって。それで学ぶ機会があったらしいよ」

アシアさんの親が準貴族ってことは、祖父母は貴族ってことか。アシアさんの身分は平民だけど、貴族の子孫なんだな。

「そうなんだ。何でここの孤児院長になったんだろう？」
「僕もよく知らないんだけど、中心街は疲れるから嫌だったって言ってたよ。準貴族を親に持つ平民は、中心街の様々な施設で職員として働く人が多いんだって」

そうなんだ……。そう言われると、今まで準貴族の子供の行き先とか考えたことなかったけど、確かに王立学校にも職員がいるし、そういうところで働いてる人が多いのかもしれないな。
でも学んでいるなら王立学校に入ろうとか思わないのかな？　卒業すれば役人になれるのに。

「今ふと思ったんだけど、準貴族の子供って王立学校に入らないのかな？」
「うーん、僕も知らないけどあんまりいないよね？」
「うん。いるとしたら俺たちのクラスだよね？」
「そうだけど……あっ、確か一人だけ女の子が、準貴族の子供って

言ってた気がする」

なんと、いつの間に女子と話してたんだ。俺なんてクラスの女子どころか、学校で女子と話したことなんてないのに。

いや、二人いたか。マルティーヌとステイシー様だ。でもマルティーヌはまた別枠だし、ステイシー様は誰にでも話しかけそうだし……

でも、俺に話してかけてくれる二人はめちゃくちゃ貴重だ。大切にしよう……

「そんな子がいたんだ」

「うん。確か馬鹿にされるのは分かってるけどどうしても入学したかったって言ってたから、もしかしたら貴族に見下されるのが嫌だから入学しない人が多いのかも」

確かに祖父母は貴族だけど自分は平民、凄く微妙な立ち位置だよね。貴族に見下されるのも嫌だろうし、入学すれば嫌な思いをすることも分かりきってる。

それにわざわざ辛い王立学校に行かなくても、良い就職先があるのならそっちで良いよね。平民が入学しても役人になれるってだけだし、役人になれても貴族と働いてたら一生下に見られそうだし……

そう考えると、平民が王立学校に行くメリットって殆どなくない？

貧しい平民が、一発逆転で役人を目指して入学するのはありだけど、すでにそこそこ恵まれてる平民だと入る意味がないのかも。

実際に平民は、殆ど商会の子供ぐらいしかいない。多分商会の子供は、貴族との伝を求めてるのとステータスの意味合いなんだろう。

「確かに準貴族の子供が王立学校に入るメリットって、あまりない

かも」
「そうだよね。僕もそう思う」
ロニーと小声でそんな会話をしつつ歩いていると、厨房に辿り着いた。
厨房に行くには、裏庭からまず食堂へ行き、食堂を通って別のドアに入り辿り着く。最初にエマとリズが出て来たドアの先が厨房だったようだ。

１５４、夕食とクレープ

厨房に入ると、中は大人数の食事を作るからか結構広かった。設備は古そうだけど使いやすそうな厨房だ。

「では、二人は夕食をよろしくね」

「かしこまりました！」

アシアさんがそう言うと、エマとリズは手際良く夕食を作りを始める。そして二人が問題なく作り始めたことを見届けて、アシアさんは俺たちの方に来た。

「ロニー、レオン君、お土産を受け取ってもいいかしら？」

「勿論です」

「では、そこの台の上に置いてくれる？」

そう言われたので、俺はかなり重い袋を何とか持ち上げて台の上に載せた。全属性がバレないように身体強化の魔法は使っていなかったので、とにかく重かった。やっぱりあの魔法を使わないと、まだ子供の身体は貧弱だな。

「とても沢山、しかも日持ちするものばかりだわ。本当にありがとう。これであの子たちの食事量が増やせる」

アシアさんはお土産の中身を一つ一つ見てそう言い、嬉しそうに微笑んだ。この人は、本当に子供たちが好きなんだな。こっちまで嬉しくなる笑顔だ。

「院長先生、こちらに入っているものは、僕たちが皆に振る舞うスイーツを作るために使うので、それ以外のものを棚に片付けてもらえますか？」
「分かったわ。そのスイーツは今すぐに作るの？」
「はい。皆の分を作るのは大変なので、すぐに作り始めたいと思います。調理器具を借りても良いですか？」
「ええ、勿論よ」
「ありがとうございます！」

ロニーはアシアさんとそう話をすると、クレープの材料を次々と取り出して準備を進めていく。
俺もロニーを手伝ってクレープ作りを開始する。ただ、今回作るクレープは蜂蜜バターの一つだけなので、そこまで大変ではないだろう。
いつもはマヨネーズ作りに一番時間がかかってるからね。

そうしてエマとリズが夕食を作り、アシアさんが食材を片付けて、その隣で俺とロニーがクレープを作る。そんな慌ただしくも心地よい時間が流れ、暫くすると夕食が出来上がった。今は配膳担当の子が食堂に料理を運んでいるところだ。
この孤児院の子供たちは、誰一人として摘み食いをしないし、自分の食事を大量に確保しようともしない。こうして見ていても皆が助け合って争いは起きていないようだ。
これって凄いことだよね。かなりしっかりと躾けられている。多分アシアさんの教育が凄いんだろうな……。アシアさんって、学校の先生に向いていると思う。

「今日は夕食を配膳したら、ロニーとレオン君からのお土産のスイーツも一人一つ配膳するのよ」
「はい！　ロニー、スイーツって美味しいのか！？」

「凄く良い匂い……、美味しそう！」

配膳の子達はスイーツの言葉を聞いた途端に、目を輝かせてロニーのところに殺到した。

「皆落ち着いて。凄く甘くて美味しいよ。だから早く食べられるようにどんどん運んでね」

「わかった！」

「ロニー、一人一つってこの大きいのが一つなの！？」

「そうだよ」

「やったー！」

そうしてテンションマックスの子供たちがテキパキと準備をしてくれて、食堂には夕食の準備が整ったようだ。

厨房を軽く片付けて食堂に向かうと、皆は席について俺たちが来るのを待っていた。

お腹が空いてるだろうに、待てるなんて本当に凄い子達だな……。この子達ならいくらでも仕事がありそうだけど、孤児ってだけでイメージが悪いのかな？　ロニーは仕事を探すのが大変って言ってたし。

食堂にはここへ来た時はいなかった、年上の人たちも皆席に着いている。結構大きい人もいるけど、一番年上でも十五歳なんだよね。そうは見えない人も数人いる。

凄くガタイが良くて背も高い男の子がいるけど、まだこれからも成長するとしたら多分相当大きくなるな……鍛えてそうだし兵士にでもなりたいのかも。

「皆、今日はロニーとその友達のレオン君が来てくれています。皆の前に置いてある一皿は二人からのお土産なので、二人にお礼を言

いましょう」
「ありがとうございます！！」
アシアさんの言葉に合わせて、皆が一斉にお礼を言ってくれた。
何かくすぐったい気分だ。
「では、今日も食事ができることに感謝をして、いただきましょう」
「いただきます！！」

そうして孤児院での夕食が始まった。メニューは至ってシンプルで、硬いパン一切れと野菜スープだ。スープにはたくさんの具材は入っているけど、それでも育ち盛りの子供たちには少ないだろう。
確かにこれだと、働いて稼いだお金は食費に消えていくよね。それで結局はお金が貯められずに、孤児院を出るときに殆どお金がなく苦労することになるんだな。
問題は、孤児院の運営費が少ないことと、孤児が多いことだ。というか、この孤児院でこれだけの食事量だったら、職員が孤児院のお金を私的利用してるところはどんな食事なんだ？　もっと悲惨だとすると、パンと水だけとか？
もしそうなら、最低限生きていけるだけの食事は食べられているとは言っても、病気などで亡くなる子が多そうだ……。やっぱり、日本よりは厳しい世界だな。

改善するには、まず職員が不正をできないような体制を整えて、その上で孤児院に回すお金を増やすこと。それから孤児となる子供の数を減らすために、もう少し衛生環境を整えて病気で死ぬ親を減らすことだよね。
この世界って怪我は回復魔法で治せるのに病気は治せないから、病気にかかると死ぬ可能性がかなり高い。普通の風邪でも危険だ。基本的には薬師が煎じた薬湯を飲むぐらいだからな……。あれって

効果あるのだろうか？
回復魔法で病気を治すのが無理でも、せめてもう少し衛生観念が広まれば病気での死亡者も減る気がするんだけど。
一応糞尿を外にそのまま捨てるとかはないから、最低限は保たれてるけど、それでも手洗いの習慣が根付いていなかったり、まだまだ問題がある。
基本的にこの世界の人、特に平民って、泥で手が汚れたとか目に見える汚れが付かない限り洗うことはないんだよね。実際は雑菌だらけで汚いと思うけど。
中心街はもう少ししっかりとしている。俺の予想だけど、多分使徒様が広めたんじゃないかな。それが平民にまで浸透しなかったんだろう。
確かに井戸水を汲むのは大変だし、頻繁に洗うのが面倒くさいのはわかる。

こうして考えると、問題点と改善すべきところはわかるんだけど、今の俺がどうにかできることじゃないんだよなぁ。多分、国としても他にもたくさんの問題があるんだろうし。
とにかく今は、魔物の森のことと貴族の勢力争いで手一杯なんだろう……。こういう細かいことは放っておかれるよね。俺にしたら貴族の勢力争いなんかより、よほど衛生環境を整える方が大切だと思うけど。

そんなことを考えながら久しぶりの硬いパンをスープに浸して食べ進めていると、周りの子供達がざわざわと騒ぎ出した。

「すげぇ！　こんなに美味いもの初めて食った！」
「これ凄いね！　美味しいね！」
「幸せ……」
「生きてて良かった……」

皆が思い思いの感想を口にしながら、クレープを食べているようだ。喜んでもらえて良かった。
俺は皆の様子を見ながら、隣に座っているロニーに話しかけた。

「ロニー、喜んでもらえて良かったね」
「うん！　本当は一度美味しいものを知って、そのあと食べられないのは可哀想かとも思ったんだ。でもクレープは平民でも買えるものだし、皆も一生懸命働けばこれが食べられるっていう希望になるかなって。やっぱりこの後、孤児院を出た後の人生を悲観してる子は多いから……」
「そっか。じゃあ皆が働いて稼いだら気軽に買いに来られるような、庶民向けのスイーツ店も作らないとね」
「そうだね。僕頑張るよ！」
「うん。一緒に頑張ろうか」

最初は貴族向けのお店からだけど、できる限り早く庶民向けのお店も始めたいな。庶民向けは、とにかく無駄を省いてコストを下げて値段を安くしよう。逆に貴族向けは、装飾を増やして貴族に受ける豪華なものにして、値段は少し高めにしよう。
あとは、あのクレープの屋台も止めないでずっと続けようかな……。そのためには屋台の従業員も必要になるけど。

「ロニー、従業員として推薦したい子を決めた？」
「うん。何人かは決まってるよ。レオンが話してみて、雇っても良いと思ったら雇ってもらえたら嬉しい」
「わかった。ちゃんと話してから決めるよ」
「うん。明日紹介するね」

そうしてその日の夕食は終わり、そのあと少しだけ皆と話してか

ら、俺とロニーは貸してもらった部屋で早めに眠りについた。やっぱり長距離移動は子供の身体には疲れるのだ。

１５５、従業員の面接

次の日の朝。
俺たちは朝食を済ませて、食堂でロニー推薦の子供達と相対している。
他の子供達は仕事に行ったり、裏庭で遊んだり勉強したりと、思い思いの時間を過ごしているようだ。

今目の前に座っているのは、女の子が二人と男の子が三人の合計五人。女の子の一人は昨日最初に会ったエマで、他の子達は名前は知らないけれど、皆昨日見た記憶がある。男の子の一人は、昨日凄くガタイが良いと思った男の子だ。

「レオン、この五人は僕が声を掛けて、皆レオンのお店で働きたいと言ってくれたんだ」
「わかった。じゃあ一人ずつ話していくので良い？」
「うん。よろしく」

俺は端の人から順番に話していこうと思い、まずは右端にいた男の子に声を掛けた。
一応俺が雇い主になるのだから、舐められないようにできる限り威厳を出そう。そう気合を入れて話しかける。

「初めまして、レオンです」
「初めまして、ポールです。十四歳です。僕は料理が好きで料理人になりたくて……、昨日食べたクレープ本当に美味しくて感動しました！　僕も美味しいスイーツを作れるようになりたいです！」
「ポールは料理人志望なんだね」

「はい！」

ヨアンの研究時間を増やすためにお店に料理人を入れようとは思ってたけど、他のお店で働いた経験のある料理人と、今まで働いたことのない料理人のどっちが良いんだろう？

技術的な問題は確実に経験がある料理人だけど、その場合はお互いの意思が強くて衝突する可能性も高いだろう。

……素人を育てた方が上手くいくのかな。

「今まで料理の経験はある？」

「孤児院の厨房での経験と、近くの食堂で雑用の仕事をしています」

一応食堂で働いていた経験もあるのか。雑用だったのなら、料理人の仕事内容は把握しているけど、料理人としての経験があるわけではないって感じだろう。そのくらいの子が一番良いのかもしれない。うん、雇っても良い気がするな。

「食堂の仕事は辞められる？」

「他にもその食堂で働きたい子はいるので、一週間ぐらいで辞められると思います」

「そっか、うん。ポールには俺のお店で働いてもらいたいな。これからよろしくね」

俺がそう言うと、ポールは嬉しそうに立ち上がった。

「ほ、本当ですか！？　ありがとうございます！」

「まだ給金とか正確には決まってないんだけど、それでも大丈夫？」

「はい！　ロニーのお友達なら安心です」

ロニーって皆に信頼されてるんだな。本当にロニーには助けられ

ている。
　それから俺は順番に皆と話していき、次々と採用を決めた。何故なら皆凄く真面目な良い子で、やりたい仕事も被ってないし、不採用にする理由がなかったのだ。多分ロニーが考えて選んでくれたんだろう。
　ドニという名前の男の子を警備担当、キアラという女の子を給仕として雇った。
　俺は警備担当のことなんて考えてなかったけど、確かにこの前の屋台の一件もあるし、有名になってきた以上は必要だよね。ドニは十三歳の男の子で、まだ背はそこまで高くないけれど、身体は鍛えてあるので見た目は強そう。十分抑止力になるだろう。さらに身体強化魔法の魔力量が四なので、これから鍛えればかなり強くなると思う。将来有望な男の子だ。
　キアラは赤色の癖毛が可愛い十四歳の女の子。ハキハキと話す明るい女の子なので、給仕に向いてると思う。敬語もしっかりしているし、すぐに即戦力になれるんじゃないかな。

「ドニ、キアラ、これからよろしくね」
「はい。しっかりとお店を守ります」
「はい！　精一杯働きます」

　よしっ、次は凄くガタイの良い男の子だ。昨日から目立っていた。

「初めまして、レオンです」
「俺はリビオです。力には自信があるので警備担当を希望します」
「魔力属性と魔力量を聞いても良い？」
「火属性で魔力量は五です」

　おおっ、魔力量が五は強い。この子は鍛えればかなり強い兵士になるだろう。ただ火魔法は安易に街中で使えないのが難点なんだよ

ね。
うーん、でも腕っ節だけでも十分強そうだ。結構鍛えてるんだろうな。
俺も鍛えてるはずなんだけど、何でこうならないんだろう？　俺はリビオと自分を見比べてそう思った。俺って鍛えても、見た目がムキムキで強そうにはならないんだよね。どちらかといえば……、弱くて侮られる感じだ。
何故だ……まあ、まだまだこれから成長するんだし、これからに期待だよね。

俺はガタイの良いリビオに若干羨ましさを感じつつ、面接を続けることにした。

「剣は使える？」
「ドニと同じで自己流では使えます。剣がなかったので木を削ったものしか使ったことはありませんが」
「そっか。じゃあリビオにも、ドニと一緒に剣の基本的な使い方は学んでもらおうかな。それでお店の警護をお願いしてもいい？」
「はい。よろしくお願いします」

ドニは活発な感じだけど、リビオは寡黙な感じだ。落ち着いた戦士って雰囲気がある。まだ十五歳なのに。
これで四人、あとはエマだけだ。

「エマ、改めてよろしくね」
「はい！　改めまして私はエマです。まだ十歳なので他の方より子供ですが、精一杯働きます。給仕をやりたいです！」
「うん。エマは柔らかい雰囲気で給仕が似合うと思ってたんだ。是非お店で働いて欲しい、よろしくね」
「ありがとうございます！　よろしくお願いします！」

そうして俺は、ロニーに推薦された五人を全員雇うことにした。
いつから中心街に来てもらおうか。できる限り早い方が良いけど、俺が実家にいる時は色々対応できないから……ロニーが中心街に戻る時に、一緒に来て貰えば良いかな。
俺は少し早めに中心街に戻ってマルティーヌたちとのお茶会をする予定だし、その時に皆が住む部屋も整えておきたい。
各自で部屋を探してもらうのでもいいんだけど、安いところは治安が悪いし、やっぱり飲食店の従業員だから清潔な家に住んで欲しい。

ここはお店の従業員寮を整備するべきだよね。給金から維持費や家賃を差し引く形にすれば、皆も面倒がなくていいと思う。
どこか、お店の近くか中心街の入り口付近で、良い建物を一棟買いたいな。そしてそこを改装すれば、良い従業員寮に出来るだろう。

「じゃあ、皆には俺たちの夏の休みが終わる時、ロニーと一緒に中心街に来てもらいたい。あと十二週間後ぐらいかな。ロニー、皆を連れてきてくれる？」
「うん。早めがいい？」
「ううん。逆にギリギリがいいかな。俺が早めに帰って皆が住む場所を整えておくから、早く来てもらっても住む場所がないかも。あっ、ロニーもそこに引っ越してくれる？　従業員寮を作ろうと思ってるんだ」
「本当に？　いいの？」
「もちろん」

俺がそう言うと、ロニーは嬉しそうに笑った。皆とまた一緒に暮らせることが嬉しいんだろう。

「皆も住む場所は準備するから、あまり心配せずに中心街に来てね。生活に必要なものは最低限整えておくよ。あっ、仕事着は支給するから」
「ありがとうございます」
後は話しておくことはないかな……。あっ、そうだ。一つだけ思ったことがあるんだよね。ロニーの推薦に、妹のリズがいなかったんだけどいいのかな？
「ロニー、リズは推薦しないの？」
「リズは悩んだけど……、人見知りだし給仕には向かないと思って。それにまだ小さすぎるから」
確かにそうなんだけど、せっかくロニーとリズがまた一緒に暮らせる機会なのに……。ロニーが帰ってきた時のあの様子を見たら、また引き離すのは可哀想だ。
リズも雇っちゃダメかな？　確かに即戦力にはならないかもしれない。でもロニーが成長してるようにリズも成長するだろうし、さっき料理の手際は良かったから料理人なら向いてると思う。
完全に贔屓で俺の自己満足かもしれないけど、リズが働きたいと言ったら雇ってあげたい。最初は下働きでも良いし。
「リズが働きたいなら俺は雇いたいと思ってる」
「でも、それは僕の妹だからでしょ……？」
「それもあるけど料理の手際は良かったし、何よりロニーの妹なら優秀だと思う。またリズを残していくの可哀想じゃない？」
「そうなんだけど……」
ロニーは贔屓でリズを雇うことに抵抗があるみたいだ。でもこの世界って贔屓ばかりだし、コネがある人が勝つみたいな感じだし、

あんまり気にしなくて良いと思うけど。

「何か引っかかることがあるの？」

「いや、リズよりも優秀な子がいるのにいいのかなって」

「でもロニーの妹っていう立場も、才能と同じだよ。コネがあるのも才能だと思うよ」

「確かに……そっか、そうだね。うん、じゃあリズも呼んできていい？」

「もちろん！」

そうしてロニーはリズを呼びに行き、数分後にリズを連れてやってきた。

リズは少し緊張しているようだけど、ロニーに隠れることなく一人で歩いている。

「あの、リズと申します。給仕は苦手だけど、料理を作るのは好きです。是非働かせてください。よろしくお願いします！」

「もちろん。リズ、改めてよろしくね」

「はい、精一杯働きます！　お兄ちゃんとまた一緒に暮らせるようにしてくれて、本当にありがとうございます」

リズはそう言って、目に涙を浮かべながら綺麗に笑った。おおっ……この笑顔を自然に出せるようになったら、確実に給仕で人気が出るな。マリーと良い勝負になりそうだ。まあ、勝つのはマリーだろうけどね。そこはマリーの兄として譲らない。

「じゃあとりあえずは全部で六人、皆これからよろしくね。何か聞きたいことはある？」

「はい！」

元気よく手を挙げたのはドニだ。

「はい、ドニ」

「レオンさん、様？　なんとお呼びすれば良いですか？」

「うーん……」

別になんでも良いけど、雇い主ってことで呼び方はちゃんとした方が良いかな？

ヨアンはレオン様って呼ぶし、それで統一しようかな。

「なんでも良いんだけど、一応レオン様で統一しようか。でも仕事以外の時は気にしなくて良いからね」

「わかりました。レオン様！」

「うん。ドニは元気で良いね。他に何か質問はある？」

今度は誰も手を挙げない。とりあえず質問はなさそうだな。まあ、まだ何も分かってないし、働きながら段々と疑問点も出てくるだろう。

「何か疑問があれば、いつでも遠慮せずに聞いてね。俺にでもロニーにでも。あと中心街に料理長がいるから、また後で紹介するよ」

「はい！　よろしくお願いします」

そうしてとりあえずこの場は解散となった。

とりあえず従業員を雇えて良かった。でも、これだとまだ足りないよな。皆まだ若いし、皆をまとめる立場の人を雇いたい。

給仕を教えられる人を一人と、警備担当をまとめられる人を一人は最低限必要だ。でもどこで探せば良いのだろうか。教会で募集する？　うーん、でも誰でも良いわけじゃなくて信頼できる人が良いし……

うん、リシャール様に相談が一番かな。俺が勝手にやるより良さそうだ。

俺はそう結論づけて、とりあえず考えるのをやめた。また中心街に戻ったらやることが沢山だな。

156、兵士ごっこ牢屋バージョン

そうして午前中は皆の面接をして終わった。それからお昼を食べて午後の自由時間、俺とロニーは小さい子たちに手を引かれ、裏庭に連れて行かれていた。

「ロニー、レオン、遊ぼう！」
「何して遊ぶー？」
「兵士ごっこー？」

子供たちは、身体は小さいのに凄くパワフルだ。マリーは大人びていたし、こんなに沢山の小さな子達と遊ぶのは初めてだな。
ロニーは流石に慣れているようで、上手く話をしながら裏庭に向かっている。

「レオン、何か新しい遊び教えてー！」
「え！？　新しい遊び知ってるのか！？」
「兵士ごっこはもう飽きたのー」
「なら屋台ごっこは？　屋台ごっこ！」
「それも飽きたのー」
「レオンー、何か新しい遊びないー？」

子供たちに次々とそう尋ねられた。新しい遊び……何かあるかな。鬼ごっこやかくれんぼはありふれすぎてるか。あとは、だるまさんが転んだとか、缶蹴りとか。うーん、なんかしっくり来ない。そもそも、缶蹴りに使えるような缶がないし。

そうだ、ケイドロとかどうだろう。あれなら鬼ごっこを捻った遊

びだし、面白いんじゃないかな。兵士ごっこの新しいパターンとして受け入れられそうだ。

「皆、兵士ごっこって何をしてるの？」
「皆で剣を持ってね、悪者を倒すんだ！」
「悪者って？」
「これが悪者だよ！　これが剣！」

そうして子供たちが教えてくれたのは、地面に埋められた小さめの丸太と削られた木の枝だった。
木の枝で丸太を倒すのか。

「悪者が倒れたら兵士の勝ちなの！」
「そうなんだ。じゃあ今日は新しい兵士ごっこをやろうか。兵士ごっこ牢屋バージョン！」
「牢屋？」
「牢屋っていうのは、悪者を捕まえておく部屋のことだよ。ルールの説明をしてもいい？」
「ちょっと待って！　皆も呼んでくるから！」

そうして俺の周りにいた子供たちが皆を呼びに行き、ロニーとアシアさんも俺の下に来た。そして子供達が全員話を聞く態勢になったところで、俺はルールを説明する。

「新しい遊びの名前は、兵士ごっこ牢屋バージョンです！」
「……レオン、何その微妙な名前」

俺が気合を入れて発表すると、すぐにロニーから突っ込みが入った。

「え？　かっこよくない？」
「うーん、まあいいや。続けて」
「う、うん」

ロニーは微妙な顔をしているけど、子供たちも不思議な顔をしているけど、とりあえずこの名前で良いことにして話を続けることにした。

「まずは皆を兵士チームと犯罪者チームに分けるんだ。この時に犯罪者チームの方が少し人数を多くしてね。それで次に、犯罪者を捕まえておく場所を決める。今回は俺が書いちゃうね」

そうして俺は、地面に十分な大きさの四角を書いた。

「この四角の中は牢屋とする。犯罪者はとにかく兵士に捕まらないように逃げて、もし兵士にタッチされたらこの牢屋に入らなければならない。兵士はとにかく犯罪者を捕まえて、捕まえた犯罪者を牢屋に入れる。そして犯罪者が全員捕まったら兵士の勝ち、犯罪者が一人でも生き延びれたら犯罪者の勝ちとなる。ここまでは分かった？」
「うん！　分かったー」
「犯罪者を捕まえれば良いんだな！」
「私がいっぱい捕まえるー」

うん、分かってるのか分かってないのか微妙だけど、やってるうちにすぐ覚えるだろう。

「それからあといくつかルールがあるよ。犯罪者は捕まったら牢屋に入らないといけないって言ったけど、一つだけ牢屋から出られる方法があるんだ。それは、仲間の犯罪者が牢屋から助け出すこと。

まだ捕まってない犯罪者が牢屋に捕まった仲間をタッチしたら、タッチされた犯罪者は牢屋から出られるんだ」
「そうなの！？　犯罪者を逃しちゃダメー」
「そう、犯罪者を逃さないように、兵士は牢屋の監視もしないとね」
「うん！　俺が絶対に逃さないぜ！」

ルール説明はこれぐらいかな。そうだ、あと一つ大問題なのはこの世界では気軽に時間が図れないことだよね。
何分経ったら犯罪者が勝ちとか決められない。そうすると少しルールを変えたほうが良いかな。
うーん、それか何か時間を測れるものを作ろうかな。古い木のコップとかがあれば、それの底に穴を少しだけ開けて、水がなくなったら終わりとか。

「皆、あと一つルールがあるんだけどちょっと待ってて。アシアさん、古くて要らないコップとかありますか？」

俺は皆に少しだけ待ってもらって、アシアさんにそう聞いた。

「確かあると思うけど……」
「時間を測るのに使いたいんです」
「それならば持ってくるわ」

そうしてアシアさんが持ってきてくれたコップは、底に少しだけ亀裂が入ってて水が漏れてしまうものだった。
ちょうど良いな。漏れる勢いからして、多分三十分ぐらいかな？
とりあえず半分だけ入れて、十五分ぐらいにしてやってみよう。

「皆、さっきの犯罪者が勝つ条件だけど、このコップの水が全てなくなった時に、一人でも犯罪者が逃げられていたら犯罪者の勝ちに

なるよ。そしてこの水が全て無くならなくても、犯罪者が全員捕まれば兵士の勝ち。ルールわかったかな？　難しかった？」

いざ説明してみると、意外とルールが多くて難しかったかな。俺も話しながら内容をまとめてたから、わかりづらい説明になった気がする。

でもそんな心配とは裏腹に、皆はやる気満々だ。分かってない子もいるみたいだけど、半分ぐらいの子は理解してくれているみたい。

「俺はわかった！」

「私もー」

「よく分からなかった……」

「分からなかった子も、とりあえずやってみればわかると思うよ。じゃあ、とりあえずやってみようか。まずはチーム分けからだね。兵士チームがやりたい人！」

「はーい！！」

俺が兵士チームをやりたい人を募集すると、もれなく全員手を挙げた。まあ、そうなるか。誰でも兵士をやりたいよね。

「皆兵士をやりたいのはわかるけど、毎回役割は変えるから、今回は犯罪者をやってくれる人はいる？」

「えー、俺は兵士が良いー」

「カッコいい兵士になるんだ！」

「じゃあ、じゃんけんで決めようか」

それが一番公平だろう。俺がそう思って提案すると、途端に皆が不思議そうな顔をする。そして隣のロニーに不思議そうに聞かれた。

「レオン、じゃんけんって何？」

まさか……！　じゃんけんってこの世界にないの！？
確かに思い返してみると、今まで一度もやったことないかも。家ではマリー可愛さにマリーを優先してたし、王立学校に行ってからはじゃんけんで決めようなんて言える相手はほとんどいないし。身分があるから、話し合う必要もなく優先順位が決まるし。
言えるとすればロニーぐらいだけど、二人だとじゃんけんで決めるようなこともないんだよね。
今更気づいたよ……結構衝撃。

じゃんけんを教えるか……でも、そもそもこの世界でじゃんけんなしにどうやって決めてるんだろう？

「ロニー、大人数をチーム分けをしたい時って、いつもはどうしてるの？　あとは一つのものを取り合う時とか」
「チーム分けしたい時と取り合う時？」
「そう。例えば、孤児院の食事は調理班と配膳班に分かれてるでしょ？　あれってどうやって決めてるの？」
「院長先生が決めてるよ」
「じゃあ、五人いるのに食べ物が一人分しかない時は？　その食べ物が分けられないような時」
「うーん、大体は話し合いだけど、小さい子に譲ることが多いかな」

身分が高い人やまとめるような人がいればその人が決める、そういう人がいなければ話し合いって感じかな。
それで上手くいってるのなら、じゃんけんは教えなくていいか。色々と教えすぎても分からなくなるだろうし。

「そうなんだ。じゃあ、今みたいな時は俺が決めていいの？」
「うん、いいと思うよ」

「じゃあ皆、ここから右側にいる人は最初に犯罪者をやってくれる？」
「えー、俺犯罪者なのー？」
「そうだけど、役だからね。それにまた次は役割を変えるから」
「まあそれならいいけどー」
「じゃあ、とりあえずやってみようか！」

それからは皆でケイドロ、いや兵士ごっこ牢屋バージョンを楽しんだ。皆はすぐにルールを覚えて、一回が終わるとすぐに次をやりたがるほどこの遊びを気に入ってくれた。

「これ楽しい！　レオン、これ楽しい！」
「レオンありがとー！」
「もう一回！　もう一回やろ！」
「やるー！」

子供達って本当にパワフルだな。ずっとテンションが高い子供達に付き合って、身体は疲れなくても気持ちが疲れてきた。子供達って凄い。

「皆、やりすぎると疲れちゃうから、今日はここまでにしておこうか」
「えー！」
「もっとやりたいー！」

俺がそんな子供たちの様子に困っていると、ずっと見守ってくれていたアシアさんが止めてくれた。

「皆、やりすぎるのは身体にも良くないのよ。また明日やりましょう」

「……はーい」
「レオン君、楽しい遊びを教えてくれてありがとう。楽しみながら体力作りになるし、チームワークも鍛えられるし良い遊びね」
確かにそう言われると、連携して捕まえたり味方を助けたり、チームワークも鍛えられる遊びなのかも。少しでも役に立てたのなら良かった。
「レオン、この遊び僕は知らなかったよ。これ面白いね。今考えたの？」
ロニーにそう聞かれた。実家で流行ってたと言ったらすぐ嘘だとバレそうだし、思いついたことにするしかないか。
「前からこんな遊びがあったら面白いかなと思ってたんだけど、人数が足りなくてできなかったんだ。今回は子供達がたくさんいるからちょうど良いと思って」
「確かに大人数の方が楽しい遊びだね」
「そうなんだよ。皆が楽しんでくれて良かった」
俺たちがそんな話をしつつ休憩していたら、また別の遊びを始めていた子供たちから悲鳴が上がった。
「きゃー！　院長先生、大変！！」
「ご、ごめん、俺……」

157、健康診断

すぐに悲鳴が上がった場所に向かうと、頭から血を流した女の子が倒れていて、木の枝を持った男の子が呆然と佇んでいた。

「何があったの！？」

「い、院長先生、剣の練習しようと思って木の枝を振ってたら、頭に当たっちゃって……」

男の子が院長先生にそう説明した。

「わかったわ。ここは……、剣の練習をして良いエリアね。何でここに入ったの？」

アシアさんは男の子に説明を求めながら女の子を抱き起こし、女の子も意識があるようなので女の子にも話しかけた。

木の枝で深く切れてるから出血はひどいけど、そこまで重傷ではなさそうだ。良かった……

「院長先生、ごめんなさい……虫を追いかけてたら周りを見てなくて……。本当にごめんなさい」

女の子が泣きながらそう謝っている。

「そう、周りを見ずに走るのは危ないわ。もし本当の剣だったらもう命はなかったかもしれないのよ」

「うん……気をつけます」

「反省しているのならいいわ。これからは気をつけるのよ」

剣の練習をするエリアとか決まってるんだな。皆が思い思いに遊んでいるように見えるけど、結構ちゃんとルール分けされてるみたいだ。

「今日は回復魔法が使える職員がお休みなのよね。仕方がないから私はこの子を治癒院に連れて行くわ。ロニーとレオン君は自由にしていてね」

「あの……、私が回復魔法を使いましょうか？」

回復魔法が使える職員がいないと聞いて、俺はそう言った。

「レオン君は回復属性なの？」

「はい。魔法はかなり得意なので、すぐに治せると思います」

「それはありがたいわ。じゃあ頼んでも良いかしら？」

「勿論です」

俺がそう言うと、院長先生は女の子を庭に一つだけあるベンチに下ろした。

「じゃあ、すぐに治すからね」

「うん。ありがとう……」

俺がそう言うと、女の子は安心したように少しだけ笑顔になった。

俺は女の子の傷に手をかざして傷を治しつつ、とりあえず全身を魔力でスキャンした。どうせ治すなら、他に悪いところがないかも確認しようと思ったのだ。

すると、お腹の辺りに少しだけ悪いものがある。

何か悪いものでも食べたのかな？　ちょっと腐ってるものとか……

とりあえず、それも何も言わずに治しておいた。

「はい、綺麗に治ったよ」
「ありがとう！　あれ？　お腹が気持ち悪くなくなった？」
「本当？　痛いのが治って、気持ち悪いのもどこかに行っちゃったのかもね」
「嬉しい！　ありがと！」

女の子はそう言って、元気に駆けていった。
元気になってくれて良かった。俺はそう思ってロニーとアシアさんの方を振り返ると、ロニーは呆れた顔を、アシアさんは驚いた顔をしていた。
えっと……今回は何もやらかしてないはずなんだけど。スキャンも魔力が見えないようにしてたし……

「レオン君は……凄く回復魔法が上手いのね。治すのが早いし、とにかく傷痕一つ残らずに綺麗だったわ。熟練の治癒士みたいね」

そっか、最近は回復魔法の授業でも皆が慣れてきたのか、何も言われなくなっていたから忘れてた。そこも他の人と違うんだっけ。

「魔法は得意なんです。授業でも練習してますし」
「そうなのね。王立学校の授業は凄いのね……」
「そうだ。他の子達の様子も見ていいですか？　皆を治すことはできませんが、酷い怪我の子から何人かは治せるので」

本当は皆を治してあげられるんだけど、それは流石におかしいからとりあえずそう言っておいた。
そして皆を診察するフリをして、スキャンをしてあげたい。さっきの子みたいにお腹を壊してる子がいるかもしれないし、もしかしたら病気の子もいるかもしれない。

そういう子がいたらさりげなく治しておこう。いつでも会える人は体調悪くなってからでも間に合うかもしれないけど、この子達とはまた会えるとは限らないからね。

でも、いつも会える人たちもたまにはスキャンしておいた方が良いのか。辛い症状を我慢してるかもしれないし、自覚症状が出ないうちに状態が酷くなるかもしれない。

うん、とりあえず実家に帰ったら皆にはすぐやろう。

そういえば、ロニーにスキャンをしたことないかも。

「レオン君、本当にありがとう。職員に一人回復属性の人がいるのだけれど、皆すぐに怪我をするから治し切れてないのよ。その人は魔力もそこまで多くないし」

「そうなのですね。じゃあ俺が皆を見ます」

「ありがとう。皆を順番に連れてくるわ。ロニーも手伝って」

「はい」

そう言ってアシアさんとロニーは子供たちの方に向かっていたので、俺は咄嗟にロニーを呼び止めた。

「ロニー、ちょっと待って」

「え？　何？」

ロニーは体調が悪そうじゃないから大丈夫だろうと思うけど、一度気になったらどうしても気になる。一度スキャンしておきたい。

今度、マルティーヌ達にもまたやっておこうかな。

「ちょっとだけ動かないで」

「いいけど……」

俺は不思議そうな顔をしたロニーに近寄って、回復属性の魔力を流した。魔力は見えないようにしているから、ロニーは本当に何をされているのか分からないだろう。

……うん、ロニーはどこも悪いところはないみたいだ。良かった。

「うん、もういいよ」
「え？　本当に何だったの？」
「うーん、ちょっと確認？　そう、ロニーよりまだ俺の方が身長高いなって確認」
「何で今？」
「なんか負けたかもって思ったから」
「本当！？　僕レオンに勝つことを目標にしてるから！」
「まだ俺の方が勝ってるかな」
「すぐに追い抜くからね！」

ロニーはそう言ってアシアさんを追いかけていった。
咄嗟に出た身長の話だけど、ロニーに抜かされそうなのは事実なんだよね……。最初は俺の方が確実に大きかったのに、最近はロニーに近づかれてる感じだ。
まあ、まだ子供だからこれから成長するだろうと思っている。日本の俺はちょっと背が低かったからな。ちょっと、ちょっとだけだけど。
だからこの世界の俺は背が高くなりたい。いや、必ずなるはずだ。そう信じてる。父さんは背が高くないけど、母さんも別に背が高くないけど、でも信じてる。

そんな馬鹿なことを考えていたら、アシアさんが子供達を連れてきてくれた。
そこから、俺は子供達を順番に診ていった。全員をスキャンで確

認しつつ、怪我が酷い子を治していく。
酷いとは言っても切り傷や擦り傷程度だけど、放っておけば化膿しそうな怪我もあったので治せて良かった。
本当は全員治してあげたかったけど、流石に魔力量がおかしいことになるから無理だ。やっぱり能力を隠すって大変だよな……。

そんなことを考えつつ子供達を診ていき、ついに残すところ五人だ。俺はやってきた小さな男の子に魔力を流す。まだ三歳ぐらいだろう。

……この子、悪いところがある。まだそんなに酷くはなさそうだけど、既に症状があるんじゃないのかな。
俺はさりげなく回復魔法を使って治していく。結構魔力が必要だな……、多分症状はあっただろう。

「どこか辛いところはある？」
「あのね、僕の身体はおかしいの。皆みたいに走れないの」
「そうなの？」
「うん。すぐ疲れちゃうの」
「そっかぁ……じゃあ、お兄ちゃんがマッサージしてあげる。お兄ちゃんのマッサージは疲れが取れるんだよ？」
「本当！？」
「本当だよ。じゃあ腕を出してくれる？」
「うん！」

そうして男の子を二、三分マッサージして、完全に悪いところは治した。

「どう？　身体は楽になった？」

俺がそう言うと、男の子は立ち上がって俺の周りを駆け回り始めた。

「凄い、凄い！　走っても疲れないよ！」

男の子は小さな身体で、凄く楽しそうに走り回っている。そしてしばらく走り回ったところで、地面にあぐらをかいて座っていた俺に飛び込んできた。

「お兄ちゃん、ありがとう！」

そう言って満面の笑みで見上げてくる。

か、かっ、可愛すぎる……幼児に性別は関係ないな。とにかく可愛い！！

「良かったね」

「うん！」

男の子は元気よくそう返事をすると、皆のところに戻っていった。うん、癒された。可愛かった。とにかく可愛かった。そして元気にしてあげられて良かった。

それから残りの四人を診て、特に何事もなく終わった。

「レオン君、本当にありがとう」

「いえ、数人の子を治しただけですし」

「それでも、治癒院に行くほどではないけれど、酷い怪我の子ばかりだったわ。治癒院に払うお金がなくて、怪我もそのままにしている場合が多いのよ。余程酷かったり怪我したところが悪くない限りは」

「大変ですね……」

「まあ、言っても仕方がないことね」

アシアさんはそう言って子供たちの方に向かっていった。そろそろ夕食の時間か、手伝いに行こうかな。俺はそう思って厨房に向かった。

158、久しぶりの実家

それから数日は孤児院で過ごし、今日は孤児院から俺の実家に行く予定の日だ。
数日孤児院で過ごしただけで、完全に子供達に情が移ってしまっている。特に一緒に遊んでいた小さな子達は尚更だ。
皆は俺が今日行ってしまうという話を聞いて、孤児院の前まで見送りに来てくれた。

「レオン君、またいつでも来て良いのよ」
「はい、ありがとうございます。また寄らせていただきます。孤児院の子達を数人雇わせていただきましたので、皆の里帰りがてら一緒に来ようと思います」
「楽しみにしているわ」

俺とアシアさんがそう話していると、我慢し切れないように子供達が俺のところに寄ってくる。

「レオンー、帰っちゃうの？」
「うん。また絶対来るからね」
「いつ来るの？　明日？」
「明日はちょっと無理かなー。いつ来るとは言えないけど、絶対に来るよ」
「……本当？」
「うん！」

俺に特に懐いてくれていた四歳の女の子が、俺の服を掴みながら上目遣いでそう聞いてくる。目には涙が溜まっていて今にも溢れそ

うだ。
すっごく可愛いんだけど、めちゃくちゃ罪悪感を刺激される。俺が悪いことをしている気分だ。
俺は女の子の目線に合わせるようにしゃがみ込んで、頭を軽く撫でた。

「今はお別れだけど、また会えるからね」
「うん。……あのね、わたし、お勉強頑張る。だから、レオンのお店で働ける？」
「俺のお店で働きたいの？」
「うん……」
「そっか。もう少し大きくなったら働けるかもしれないよ。もしその時にまだ働きたいと思ってくれたら、俺のお店に来てね」
「そっか……、うん。わたし、頑張る！」

女の子はそう言って俺の服から手を離した。今度は泣きそうな顔じゃなくて、決意を込めた良い顔をしている。

「じゃあまたね」
「うん！　またね」

そうして俺は子供達と次々とお別れをしていった。こんなに子供達に慕ってもらえるなんて思っていなくて、本当に嬉しい。ここにはまた絶対に来たいな。

それからしばらく子供達とお別れをして、次は俺が雇った六人のところに向かう。仕事がある人もいるのに、休みを取って見送りに来てくれたらしい。

「皆はまた十週間後ぐらいかな。ロニーと一緒に中心街に来てね。

住む場所は整えておくから」
「かしこまりました！　レオン様、本当にありがとうございます」
六人はそう言って深く頭を下げた。
「そんなにかしこまらなくても良いよ。俺の方こそ、これからよろしくね」
「はい！　精一杯頑張らせていただきます！」
「じゃあ、またね」
そうして俺は、皆に見送られてロニーと共に孤児院を出た。凄く充実した数日間だったな。本当に楽しかった。
そうして孤児院を出て、ロニーと共に乗合馬車乗り場に向かって歩く。
「レオン、皆にかなり好かれてたね」
「本当に良い子達ばかりだったから。それにしても、本当に楽しかった。来て良かった」
「本当？　子供達の世話ばかりで嫌じゃなかった？」
「全然！　確かに毎日ずっと続くのは大変かもしれないけど、それでも皆可愛いし楽しい気がする」
「確かにね。僕も子供達と遊んでるのは嫌いじゃないよ。そうだ、レオンにも妹がいるんだよね？　会うの楽しみだなぁ」
「紹介するよ。すっっごく可愛いから！　早く会いたいなぁ」
マリーに会うのは本当に久しぶりだ。もう少しで会えるとなったら凄くテンションが上がってくる。早く帰りたい！

「じゃあ、早くレオンの実家に行こうか」
「うん！　あっ、その前にどこか寄りたいところある？」
俺がそう言うと、ロニーは歩いていた足を止め真剣に悩み始めた。
「どこか寄りたいところがあるの？」
「ううん。寄りたいところというか、レオンの実家に行くのなら手土産とか必要かなと思って。何が良いと思う？」
「手土産なんて必要ないよ？」
「でも、レオンだって孤児院にクレープの材料を買ってくれたし、何か買って行った方が良いよ。レオンの家族は何が好きなの？」
改めてそう言われると、反応に困るかも。マリーはとにかく甘いものが好きだ。あとはステーキとか食べ応えがある肉。母さんと父さんは……、どんなものでも美味しそうに食べてるからわからないな。
服装はいつも同じようなものだし、そもそも平民の服にオシャレさなんてないし。手土産にするとしたら実用品が良いよね。
そうなると……布とかかな。俺の実家は食堂だから、布の消費量が他の家より多いんだ。食堂の掃除や机を拭くのにも頻繁に使うし。あとは厨房でも使う。
まあ、それでも擦り切れるまでは使うから、すぐに新しいものというわけではないんだけど。それでも交換頻度が高いから、母さんが大きな安い布を買って布巾を自作しているんだ。
その布ならいくらあっても困らないだろうし、母さんと父さん二人にとっても嬉しいだろう。布の大きさによって値段も調節できるし。
「母さんと父さんは仕事で使うものが良いから、布が良いと思う」
「布？」

「そう。安くて大きめの布を買って布巾を手作りしてるんだ。だからその布が良いかなと思って」
「じゃあ、お二人にはそうするよ。レオンの妹は？　マリーちゃんだっけ？」
「うん。マリーで合ってるよ。マリーはお肉と甘いものがとにかく好きなんだ。だからクレープを作ってあげるのが一番喜ぶと思う。クレープの材料は俺が実家用に買ってあるから、実家でクレープ作りを手伝ってくれる？」
「それで良いの？」
「うん。それが一番だと思う」
「じゃあ、頑張って美味しいクレープを作るよ」

そうして今後の方針を決めた俺たちは、乗合馬車に乗って実家の近くまで行き、必要なものを買って実家に向かった。
乗合馬車を降りた時、懐かしくて少しだけ泣きそうになったのは内緒だ。忙しくて寂しさを感じる時間もなかったけど、ちょっとホームシックだったのかもしれない。
今実家までの道を歩いているけど、本当に落ち着く。

「レオンの実家ってこの大通り沿いにあるの？」
「そうだよ」
「食堂をやってるって聞いてたから良い立地なのかと思ってたけど、予想以上に良い立地なんだね」
「うん。確か知り合いの伝手で、良い物件を安く買えたらしいよ」
「そうなんだ。そんな幸運なこともあるんだね」

そうして話しつつ歩き、ついに家の前に到着した。今は十四時過ぎだから、お昼ご飯を食べて夜営業の準備を始めるぐらいの時間かな。
そう考えて、俺は勢いよくドアを開ける。

「ただいまー！」

俺がそう言うと、ちょうど厨房にいたらしい父さんがカウンター越しに顔を出して、焦ったように大声を出した。

「レオン！？　どうしたんだい！？」

そしてその声に驚いた母さんとマリーが、奥から食堂にやってくる。

「レオン！？　どうしたの？　何かあったの？」

「お兄ちゃん！　お兄ちゃんだ！」

母さんは必死な形相で俺にそう聞いてきて、マリーは嬉しそうに飛び上がって俺に抱きついてくる。

完全にカオスだ。そこに父さんまで加わってくるし、奥からイアン君まで出て来た。

「ちょっ、ちょっと、皆落ち着いて！　王立学校が夏の休みになったから帰ってきただけだよ！」

俺が声を張り上げてそう言うと、母さんと父さんはやっと落ち着いてくれた。

「夏の休み？」

「そう。夏と秋に十二週間ずつ休みがあるんだ。だから心配いらないよ」

「そうなの。それなら良かったわ。突然帰ってくるからびっくりしたじゃない」

「ごめんね」
「まあいいわ。レオンおかえりなさい」
母さんがそう言って優しく微笑んでくれた。父さんもその横で優しく笑ってくれている。
「母さん、父さん、ただいま」
「お兄ちゃん！　おかえりなさい！」
「マリーもただいま。イアン君も久しぶり」
俺は未だ抱きついているマリーの頭を撫でつつ、後ろにいるイアン君にも挨拶をした。
「レオン君久しぶり。元気そうで良かった」
「うん。元気だよ」
「お兄ちゃん、もう学校は終わったの？　もうどこにも行かないの？」
「ううん。学校が少しの間お休みだから帰ってきたんだよ」
「そうなんだ……」
マリーはまだ俺が学校へ行ってしまうと聞いて、しょんぼりとしている。
マリー、マリーが可愛すぎる！！　やっぱり俺の妹最強。誰よりも可愛い。本当に可愛い。
「マリー、でも六週間以上はここにいるよ」
「本当？」
「うん。前に約束してた釣りにも行こうね」
「うん！！」

そこまでマリーと話したところで、俺は後ろで一連の流れを見守ってくれていたロニーを呼ぶ。

「皆、王立学校の友達のロニー、数日だけ遊びに来たんだけど、良いかな？」

「ロニーです。よろしくお願いします」

「王立学校にお友達ができたのね。もちろん大歓迎よ！　ロニー君よろしくね」

「ロニー君、いくらでもゆっくりしていくと良いよ」

「ありがとうございます」

ロニーは母さんと父さんとそう挨拶をすると、マリーと目線を合わせるように少しだけ屈んで、マリーにも挨拶をした。

「マリーちゃん、ロニーです。よろしくね」

「お兄ちゃんのお友達？」

「そうだよ」

「じゃあロニーお兄ちゃんだ！　よろしくね！」

マリーはそう言って満面の笑みを浮かべた。マリー、まじで天使。マジで可愛い。

俺が久しぶりのマリーに感極まっていると、ロニーに腕を叩かれて現実に戻された。そして小声で話しかけられる。

「レオン、あの方は誰？」

「ああ、イアン君ね」

俺はロニーと小声で話していた音量を上げて、イアン君をロニーに紹介することにした。

「ロニー、うちの従業員のイアン君だよ」
「イアンさん、よろしくお願いします」
「うん。よろしく」

そうして一通り挨拶を終えたところで、母さんがロニーに声をかけた。

「こんなところで立ちっぱなしで話してないで、もっと中に入って。二人は昼食は食べたの？」
「ううん。まだ食べてない」
「じゃあ、準備するから食べちゃいなさい。レオンはロニー君をリビングに案内して。イアンは厨房よ」
「はーい」
「わかりました」

そうして母さんと父さん、イアン君は厨房に向かったので、俺はロニーをリビングに案内することにする。

159、実家の味

「ロニー、こっちがリビングだよ」

そう言って俺が食堂から廊下に続くドアを開けようとすると、ロニーに呼び止められた。

「待ってレオン、手土産を渡すの忘れてたんだけど……」

「あっ、確かにそうだね。母さんがお昼を持ってきた時に渡せば良いよ」

「わかった」

「じゃあ、まずはリビングね」

そんな会話をしてロニーをリビングに案内する。マリーも一緒に付いてくるみたいだけど、マリーは出かける用事とかないのかな？

「マリーは今日お出掛けしないの？」

「うん！　昨日森に行ったから今日は行かないよ」

「そっか」

「だからお兄ちゃん達と一緒にいる！」

マリーはそう言って、凄く楽しそうに俺たちの後をついて来た。やっぱりマリーは天使だ。

俺はそんなマリーに顔を緩めつつ、ロニーに家の説明をしていく。

「ロニー、右側の扉が厨房で左の奥がトイレ、そしてこのドアがリビングへの入り口だよ」

「凄いね……本当にこの建物全てがレオンの家なんだ。僕はお母さ

んが生きている時は狭い部屋一室が家だったし、孤児院はまた感覚が違うし……。今も狭い部屋一室が僕の家だから、なんか変な感じだ」
「そっか、この家の中ならどこに入っても良いから遠慮しないでね」
「うん。ありがと」
「じゃあ、そこの椅子に座って」

俺はリビングのドアを開けてロニーを中に招き入れ、ロニーに椅子を勧めた。そして俺とマリーも椅子に座る。

「う～ん、やっぱり馬車に長時間乗ってるのは疲れるね」
「わかる。あれはいつまでも慣れないよ」
「だよね」

俺が机に身体を預けて脱力していると、ロニーも少し疲れたように椅子の背もたれにもたれ掛かった。

「馬車？」
「マリーはまだ馬車に乗ったことないんだっけ？」
「うん。お兄ちゃん達は乗ってきたの？」
「そうだよ」
「いいなぁ～！」

マリーは馬車に乗ってきたという話でかなり興奮しているようだ。確かに、平民は馬車に乗る機会ってそうそうないよね。乗合馬車の料金だって安いわけではないし。
なんか最近金銭感覚がヤバくなってるな……ちゃんと初心を忘れないようにしよう。お小遣いを全てかき集めても乗合馬車には乗れなかったあの頃を。
うん、思い出した。そうだよ、最初はマルセルさんにお金を出し

てもらったんだよ。

「マリーも乗ってみたい？」
「うん！！」
「そっか。じゃあ今度乗ってみる？」
「本当！？　乗りたい！」
「うん。じゃあ今度馬車に乗ってみようか。約束ね」
「やったー！　お兄ちゃんありがとう！」

中心街まで行かなくても、一番近場の馬車乗り場まで乗るだけでも楽しめるだろう。今度乗せてあげよう。

「そうだ、マリーにお土産があるんだよ」
「お土産？」
「そう。クレープっていう甘い食べ物」
「甘い食べ物！！」

俺が甘い食べ物と言うと、マリーの瞳が一気にキラキラと輝き出した。

「うん。マリー好きでしょ？」
「うん。甘いもの大好き！　でもね、最近は母さんがあんまり食べさせてくれないの……」
「そうなの？」
「うん。お兄ちゃんが砂糖を沢山買ってくれたでしょ？　あれもまだ沢山残ってるんだよ。私は毎日でもパンケーキとクッキーを食べたいのに、たまにしか許してくれないの」

マリーがしょんぼりとしてそう言った。確かに甘いものを食べすぎるのは良くないけど、あの時の砂糖がまだ沢山残ってるほど食べ

てないのか。それは流石に節制しすぎじゃないかな。何でだろう？

……そうだ、確か俺が母さんに言ったんだ。

砂糖は食べすぎると身体に悪いから少しずつっていうのと、しっかりと歯を磨かないと危険だよって教えた。

もっとどの程度なら食べても良いとか、詳細に教えてあげれば良かった。

「マリー、甘いものを食べ過ぎるのは良くないんだけど、毎日かなりの量を食べるとかじゃなければ、そこまで気にする必要はないよ。俺が母さんに言っておいてあげるね」

「本当！？　じゃあこれからはもっと食べられる？」

「うん。今までよりは多く食べられるようになるよ」

「やったー！　じゃあ、お兄ちゃんのお土産も食べられる？」

「もちろん。でもそのお土産を作るのはロニーなんだ。俺よりロニーの方が美味しいのが作れるんだよ」

俺がそう言うと、マリーは途端に尊敬の眼差しをロニーに向けた。

「ロニーお兄ちゃん、美味しい甘いものが作れるの？　凄いね！！」

「ありがとう。でもレシピを考えたのはレオンなんだよ。それを作るのが僕ってだけで」

「じゃあ、お兄ちゃんも凄い？」

「うん。マリーちゃんのお兄ちゃんは本当に凄いんだよ」

「そうなんだ！　お兄ちゃん凄いね！」

マリーはそう言って、今度は俺のことを尊敬の眼差しで見つめた。

マリーに尊敬されるだけで、色々と頑張って良かったと思える。

本当に、頑張って良かった。

俺が目指してるスイーツ専門店も確実にマリーが喜んでくれるだろう。そう考えるともう必死で頑張るしかないな！！

そうして俺がやる気を滾らせていると、リビングのドアが開き、母さんと父さんが入ってきた。

「お昼できたわよ。ステーキのお肉はもう残ってなかったから、野菜炒めだけどごめんなさいね」

母さんがそう言いつつ、俺とロニーの前に山盛りの野菜炒めを置いてくれる。

「あとは、パンとスープとお水だよ」

そして父さんが他のものも机に並べてくれる。久しぶりに実家のご飯だ。凄く嬉しい！

「母さん、父さん、ありがとう！」

「あの、こんなに沢山ありがとうございます。これ、少しですけど使ってください」

「あら、これは布よね？　貰って良いの？」

「はい。ぜひ使ってください。今回は突然来て受け入れていただいて、ありがとうございます」

「そんな、手土産なんて良かったのに。でもこれはありがたくいただくわね。ありがとう」

「いえ、こちらこそありがとうございます」

そうしてロニーは手土産を渡すことに成功したようだ。

「じゃあ二人とも冷める前に食べちゃってね」

「うん。いただきます！」
「僕もいただきます」

俺はとりあえず野菜炒めを沢山取って、大きく一口食べた。うん、この味だ。実家の味だ。めちゃくちゃ美味い。
よく炒められた野菜は少しシャキシャキしているけど全体的にしんなり食感で、塩味だけの味付けが野菜の旨味や甘みを引き出している。
噛めば噛むほど甘みが出てきて本当に美味しい。豚肉には多めに塩味がついているので、少し濃い味付けが食べたい時は、豚肉を食べるとそれも満たされる。そしてまた野菜の旨味を楽しむ。
歯応えがあるちょっと硬いパンも、それを浸して食べるスープも、ただの井戸水も全部美味しい！　凄い、公爵家で食べているご飯の方が絶対に美味しいのに、懐かしい実家の料理ってだけで五割増ぐらいで美味しく感じる。
俺は大満足で昼食を食べ進めた。そしてとりあえず落ち着いたところで、隣のロニーを見る。

「ロニー、口に合わないものとかはない？」
「大丈夫！　凄く美味しい！　しかも量が多いよね。毎日こんなに沢山食べられるの？」
「うん。大体このぐらいの量かな」

確かに孤児院の食事と比べたら多いよね。

「うちは食堂だから、営業の残り物を食べてるんだ。だから量は沢山あるんだよ。毎日同じものだけどね」
「凄いね。屋台の経営者がずっと憧れだったけど、食堂の経営者も凄い！」
「ロニー忘れてない？　ロニーもお店の経営者になるんだよ？」

俺は苦笑いを顔に浮かべつつ、ロニーにそう言った。

「そ、そうだったね。感動で一瞬だけ忘れてたよ。そういえば、お店はスイーツの専門店だよね？　お昼ご飯はどうするの？　毎日スイーツ？」

「いや、流石にそれは身体に悪いよ。多分順番にお昼休憩を取ってもらうことになるんだけど、料理人に従業員のお昼を作ってもらうことにしようかな」

従業員のお昼の問題も考えないとだな。周りのお店で買ってもらうのは流石に高すぎるだろうし、お店で準備した方が良いだろう。

サンドウィッチとかシチューとかを作ってもらって、それを随時食べてもらうのが良いかな。うん、料理人に簡単な料理を作ってもらおう。

冷蔵設備ができたなら保存の問題もないし。

「また考えておくよ。でもロニーは心配しないで。お昼はちゃんと準備するから」

「ありがと」

そこまでロニーと話したところで、マリーが首を傾げながら俺に質問してきた。

「お兄ちゃん、スイーツのお店をするの？　スイーツって甘いものだよね？」

「うん。お兄ちゃんこの食堂とは別に、甘いものだけを出すお店をするんだ」

「本当に？　お兄ちゃん凄い！　私も、私もそのお店行きたい！」

マリーは一気にテンションが上がったようで、俺のお店に行きたいと期待の眼差しで言っている。
マリーにも来てもらいたいけど、でも中心街なんだよね。実際に開店してから来てもらうのは難しいだろう。裏口から従業員のエリアだけならいけるかもしれないけど……
万が一何かあったらと考えると怖い。俺の家族ってだけで誰かに目をつけられそうだし、極力怖いところには近付いてほしくない。

「マリー、お店に来てもらうのは難しいんだ。でもその代わりに美味しいスイーツを沢山作ってあげるから、それで許してくれる？」
「そうなの……？」
「うん。来てもらうこともできるかもしれないけど、絶対と約束はできないんだ」
「そっか……、わかった」

マリーは少し悲しそうな顔をしつつも、そう了承してくれた。マリーが、マリーが成長している！　大人になってる！　でも成長は嬉しいけど……、ちょっと悲しい気持ちもあるな。かなり複雑だ。
しかしそんな俺の複雑な心境を他所に、マリーはすぐに気持ちを切り替えたようで、いつもの明るい笑顔に戻ってしまった。

「じゃあお兄ちゃん、美味しいスイーツを作ってね！」

とりあえずお店に行けなくても、美味しいスイーツが食べられれば良いのかもしれないな。
俺はそんなマリーの様子に思わず苦笑いを浮かべつつ、返事をした。

「うん、勿論だよ。すっごく美味しいのを作るからね」
「うん！」

そうして楽しいお昼の時間は終わった。
その後はマリーと一緒に、ロニーに家の中を案内して、夜営業の手伝いをロニーも一緒にやり、かなり疲れて夜は早めに眠りについた。
流石にベッドに五人は寝れなかったので、俺とロニーはリビングに布を敷いて寝た。ベッドより寝心地は悪いけど、疲れていたので眠れないと言うこともなく、朝までぐっすりだった。

160、ロニーとマリー

次の日の朝。リビングに父さんと母さんが起きてきたことで目が覚めた。

「レオン、ロニー君、朝だよ」
「二人とも起きなさい」

うぅ～……あれ？　何でリビングで寝てるんだっけ。
そうだ、昨日はロニーが泊まったんだった。そう思って隣を見ると、ロニーもちょうど起き上がったところだった。

「ふぁ～、ロニーおはよう。母さんと父さんもおはよう」
「うん。おはよう……」

ロニーもまだ眠そうだ。そういえば寝起きのロニーってレアだな。まだ寝ぼけてる感じだし、あんまり朝は強くないのかも。
そんなことを考えつつ自分もまだまだ眠い。でも起きないと……、顔を洗ってこよう。

「ロニー、顔洗いに行くけど行く？」
「うん……」

そうして二人で寝ぼけつつ布団代わりにしていた布を片付け、顔を洗って身支度を整えた。そして朝食を食べ終わると、母さんと父さんが厨房を使う前に、俺とロニーで厨房を使いクレープを作ることにした。

「母さん父さん、じゃあ厨房借りるからね」
「ええ、片付けはしっかりしてね」
「うん。できたら皆を食堂に呼ぶから家にいてね！」
「父さん達へのお土産を作ってくれるんだったかい？」
「そうだよ！　イアン君の分も作るから、イアン君が来たら食堂で待つように言っておいてね」

そう言って俺とロニーはしばらく厨房に篭り、手慣れた動作でクレープを作り上げた。蜂蜜バタークレープなので結構すぐに出来上がる。
数十分で手早く作り終えて、皆を食堂に呼んでクレープを運んだ。

「皆お待たせ！　お土産のクレープだよ」
「お兄ちゃん早く！　すっごく良い匂い！」
「本当ね。これはバターと、何か甘い匂いね」
「凄くお腹が空く香りだ」
「レオン君、匂いでお腹空いてきたよ」

皆は待ちきれないように、そわそわと食堂の椅子に腰掛けている。匂いは高評価のようだ。

「どうぞ、食べてみてください。この料理はレオンの屋台で売ってるものなんです」
「レオンの屋台？」

ロニーが何気なくしたその説明で、皆が不思議そうな顔になった。

「うん。中心街の入り口の広場で屋台を始めたんだ。そこで売ってるのがこのクレープで、ロニーにも手伝ってもらってるんだよ」
「そうだったの。レオンが屋台を……レオンも大人になったのね」

「本当だね。まだ子供だと思っていたのに」
「あれ？　お兄ちゃんはお店をやるんじゃなかったの？」

母さんと父さんが俺の成長に感動しているところを、マリーのそのセリフがぶった斬った。

「え？　お店……？」
「うん、マリー合ってるよ。母さん父さん、今度中心街にお店を開くことにしたんだ。このクレープとかパンケーキ、あとはクッキーみたいなスイーツ専門のお店。あっ、そのお店を開く関係で商会も立ち上げたんだよ」

俺がそう報告をすると、屋台の時は成長に感動していた二人は、今度は何を言われたのか理解できないようで大混乱だ。

「え、えっと、ちょっと待って。レオンが中心街でお店をやるの？」
「うん。そうだよ」
「商会を立ち上げたって、商会って、あの商会なのかい？　レオンが、商会を立ち上げたのかい！？」
「商会がいくつもあるのかわからないけど、多分父さんが思ってる商会だよ」
「レオン！　中心街のお店なんて、考えられないぐらい高いものでしょう？　そんなの買えるわけないわよね。もしかして、公爵家にお金を出してもらったの！？」
「母さんも父さんも落ち着いて、公爵家にお金を出してもらったんじゃなくて、自分でお金を出したから大丈夫。王立学校で魔法具研究会ってところに所属してて、そこで開発した魔法具で稼げたんだ。だから心配しないで」

俺がそう言うと、母さんと父さんはさらに混乱したような様子な

がらも、とりあえず心配はいらないというところだけを飲み込むことにしたらしい。
まあ、自分たちの子供が中心街にお店を買えるほど稼いでるって知ったら、それは混乱するよね。

「そ、そう。心配いらないならいいわ」
「そ、そうだね。とりあえず、周りに迷惑をかけてないなら、いいよね」
「うん、それは大丈夫だよ。じゃあ話が逸れちゃったけど、クレープ食べてみて。温かいうちの方が美味しいから」

俺がそう言うと、母さんと父さんは二人揃って深呼吸をして、気持ちを落ち着かせたようだ。二人とも俺のおかげで、いや、俺のせいで耐性がついてきたのかも。

「そうね、いただきましょう。ロニー君いただくわね」
「ロニー君いただくね」
「はい。ぜひ食べてみてください」
「いただきます！」
「俺もいただきます」

マリーとイアン君はもう待ちきれないようで、すぐに食べ始めた。今回は手に持って食べられるように巻いてあるので、皆手掴みだ。貴族に出す場合は盛り付けを変えた方が良いけど、平民に出す場合は食べやすく巻くのが一番良い。

「お、お……、美味しい！！」
「マリー美味しい？」
「うん！！　これすっごく美味しい！！」
「ふふっ、そんなに？　喜んでくれて良かったよ」

マリーは一口食べてかなり気に入ったようで、大興奮だ。ここまで喜んでくれると嬉しいな。

「本当ね。これは美味しいわ……」

「食べやすさも良いね」

「これ美味しすぎるよ！」

母さんと父さん、イアン君もクレープを気に入ってくれたらしい。喜んでもらえて良かった。

「ロニー君、とても美味しいわ。ありがとう」

母さんがロニーの方を向いて、優しい笑顔でそう言った。それを聞いたロニーは凄く嬉しそうだ。

ロニーをうちに連れてきて良かった。

そうしてクレープのお土産を振る舞い、父さんと母さんは昼営業の準備に戻っていった。

「お兄ちゃん、このクレープはお兄ちゃんが作ったの？」

「うん。お兄ちゃんとロニーで作ったんだよ」

「ロニーお兄ちゃんも作れるの？」

「そうだよ。ロニーの方が上手いんだ」

「そうなの？」

マリーは俺がそう言うと、何かを悩む仕草をしつつ考え込んでしまった。その仕草が母さんそっくりで思わず笑ってしまう。精一杯背伸びしてる感じが可愛すぎる、俺の妹、マジで可愛すぎる。

そんな可愛い仕草をしつつ何かを考えること数十秒、マリーが目

を輝かして顔を上げた。そして一言。

「ロニーお兄ちゃん！　ちょっと来て！」

「えっ、ちょっ、ちょっと、マリーちゃん？」

マリーはロニーの手を引いて、食堂の隅に向かう。そしてロニーに屈んでもらい、何か内緒話をしているようだ。

何の話をしてるんだろう。というか、マリーが俺じゃなくてロニーを選んだなんて……、何故だ。

俺がその事実に愕然としていると、マリーが俺の方に駆け寄ってきた。

良かった。やっぱりマリーが一番好きなのはお兄ちゃんだよな。そう思って安堵していると、マリーに爆弾を投下される。

「お兄ちゃん。これからロニーお兄ちゃんと厨房でやることがあるから、お兄ちゃんは入って来ないでね。絶対だよ！」

な、な、な、何で！？

「マリー、何でお兄ちゃんはダメなの？　お兄ちゃんも一緒じゃダメ？」

「お兄ちゃんはダメなの。リビングにいてね」

マリーはそう言って、またロニーのところに戻って行ってしまう。ロニーの顔を見ると、少し苦笑いしつつもマリーに従うようだ。

そうして俺が現状を飲み込めずに愕然としているうちに、二人は厨房に行ってしまった。

それからしばらく呆然と立ちすくんだ後、急に我に返った。マリーに、マリーに、嫌われた……？

そんな想像をした瞬間、目に涙が浮かんでくる。
うぅ……俺は何をしたんだろう。マリーに嫌われるようなことしてないはずだけど。最初に帰ってきた時はあんなに喜んでくれたのに。クレープも喜んでくれたのに。
クレープが一つじゃ足りなかったのか？　マリーのは二つにすれば良かったかな。いや、いっそのこと好きなだけ食べさせてあげれば……
俺がそんな馬鹿なことを考えていると、後ろから声をかけられた。

161、世界一のクッキー

「レオン君、大丈夫？」
「あっ、イアン君……」

そうだ。まだイアン君がいたんだったっけ。

「イアン君、仕事は？」
「さっき厨房に行ったけど、マリーちゃんとロニー君がいるから俺はお休みになった。流石に狭いからね」
「そっか……。うん？　厨房に行ったの！？」
「うん。気づいてなかったの？」
「呆然としてて……」

俺は食堂をイアン君が出入りしてたことにも気づかなかったのか。我ながら慌てすぎだ。

「レオン君、大丈夫？」
「ううん、大丈夫じゃない。全然大丈夫じゃない。マリーとロニーは何してたの？　俺に言えないようなこと？」
「はははっ……レオン君涙目だよ？」

イアン君が笑いを堪えられないというように、吹き出しながらそう聞いてきた。

「だって、マリーに嫌われたかも……。マリーが、俺は邪魔だって。イアン君、どうすれば良いかな！？」
「ちょっ、ちょっと落ち着いて。レオン君、面白すぎる。ブハッ、

ハハハッ……」

イアン君が耐えきれないというように大爆笑し始めた。笑いすぎて苦しそうなぐらい爆笑している。

イアン君、今は笑ってる場合じゃないからね！　一大事だから！　人生一番の危機だから！

「イアン君笑いすぎ！　今は危機的状況だよ？」

「だ、大丈夫だよ。マリーちゃんは、レオン君のこと、大好き、だと思う、よ？」

イアン君が大爆笑しつつ、息も絶え絶えにそう言った。

「でも、だったら、だったら何で俺は入っちゃいけないの！？」

「それは、何か理由があるんだよ。とりあえず、リビングで待ってよう？」

俺はそうして何とか笑いを収めたイアン君に手を引かれ、リビングまで引きずって連れて来られた。

「ちょっとレオン君？　もう少しちゃんと歩いて！　全く、マリーちゃんのこと好きすぎるでしょ」

「そんなの当然だよ！　あんなに可愛いんだよ？　もう世界一可愛いんだよ？　大好きに決まってる！」

「そ、そうだね……」

俺がそう宣言をすると、イアン君が少し引いてるように見えるけど、そんなの関係ない。マリーは可愛い。本当に可愛い。世界一可愛い。

「イアン君だって可愛いと思うでしょ！？」
「それはそうだけど……。でもレオン君、マリーちゃんもいつかは誰かと結婚するんだからね？」
「……そんなのわかってるけど、まだ先だから。まだまだ先だから。それに、俺が納得できる人じゃないと認めないから！」

マリーが結婚なんて考えられないけど、考えられないけど……、でも、優しくて強くて明るくて楽しくて頭が良くて収入が良い、そんな人なら認めなくもない……かも。

「そんなこと言ってたら、マリーちゃんに嫌われるよ？」
「それは嫌だ。嫌だけど……」
「じゃあ、マリーちゃんの自由にさせてあげないと」
「でも、マリーに相応しい人じゃないと。優しくて強くて明るくて楽しくて頭が良くて収入が良くて……」
「レオン君！　そんな完璧な人いないから。マリーちゃんを大切にしてくれる人ならいいじゃん」

……そんなことはわかってるんだよ。でもまだ、マリーには可愛い妹でいて欲しい。お兄ちゃんが一番でいて欲しい。
娘がお嫁に行くお父さんの気分だ。実際はそんなに歳の差はないんだけど、気持ち的には娘ぐらい歳の差があるから、本当にお父さんの気分なんだ。
……世の中のお父さんの気持ちが理解できる。

「ロニー君とかは？　相性良さそうじゃない？」
「ロニー！？　ロニーは……」

あれ？　ロニーってもしかして、超優良物件なのでは？
給金も高くなるだろうし、優しいし頭はいいし、最近は明るくな

ってるし身体も鍛えてるし。

「……反対する理由が思い浮かばないかも」

「それ、そんなに落ち込むことじゃないでしょ」

「そうだけど……」

そうして俺がイアン君に面倒くさく絡んでいたら、リビングの扉が開きマリーとロニーが入ってきた。

凄く良い匂い……クッキーを作ったのかな。

そう思っていると、マリーが運んできたお皿を俺の前に置いてくれた。そして満面の笑みで一言。

「お兄ちゃん、私からのプレゼント！　お店を始めるのおめでとう！」

マリーがそう言って、俺に満面の笑みを向けてくれた。

……もしかして、サプライズのために俺が入っちゃいけなかったの？

「こ、これ、お兄ちゃんのために作ってくれたの？」

「そうだよ！　ロニーお兄ちゃんに手伝ってもらったけど。お兄ちゃんを驚かせようと思ったの！」

「ま、ま、マリー。あ、ありがど……ひっ、ひっく……」

俺は嬉しくて感動して、一気に涙が溢れ出てきた。ヤバい、止まらない。嬉しすぎる。さっきまで落ち込みまくってたのが嘘のように素晴らしい気分だ。

マリーが俺のために作ってくれたなんて。お店を始めるお祝いなんて。お店を始めて良かった……！

「お兄ちゃん!?　大丈夫?　どうしたの?」

マリーが心配そうに俺の顔を覗き込んでくる。俺はそんなマリーを思わず抱きしめて言った。

「マリー、本当に嬉しいよ。ありがとう。これは嬉し涙だから気にしないで」

「そっか。なら良かった!　じゃあ食べてみて!」

「うん、貰うね。いただきます」

俺はそう言ってクッキーを一枚手に取り、サクッと一口食べた。

うん、美味い。これが世界一美味い。

世界一のクッキーは確実にこれだ。異論は認めない。

「マリー、すっごく美味しいよ。ありがとう」

「本当?」

「うん。今まで食べたクッキーの中で一番美味しい」

「やったー!」

マリーは俺がそう言うと、両手を広げて喜んでいる。マジで天使。

そんなふうに無邪気に喜んでいたマリーだったけど、ふと何かを言おうか迷っているような表情に変わった。

「マリー、どうしたの?」

「うーん……」

「何か言いたいことがあるなら、何でも言っていいよ?」

「何でもいい?」

「うん」

「じゃあ、私も一つ食べていい?　それはお兄ちゃんのために作っ

たんだけど、マリーも食べたくなっちゃったの」
……なんて可愛いお願いなんだ！　俺は顔がデレっと崩れそうになるのをなんとか抑え、平静を装ってマリーに頷いた。
「もちろん！　マリーが作ってくれたんだから一緒に食べよう？」
「うん！」

俺がそう言うと、マリーは一瞬で顔を輝かせて俺の隣の椅子によじ登り、クッキーを美味しそうに食べ始めた。
そして一枚食べ終わると、クッキーを二枚手に取りイアン君とロニーにも渡しに行く。

「はい！　二人にもあげる！」
「マリーちゃんありがとう」
「ありがとう。嬉しいよ」

俺は二人にはあげるって言ってないと、思わずそれを止めそうになったけど、寸前のところで耐えた。
しょうがない。本当はマリーが作ってくれたクッキーは全部俺が食べたいけど、一枚なら許してやらないこともない。
お皿の上には後五枚のクッキーがある。全部今食べちゃうのはもったいないなぁ。アイテムボックスに入れて、落ち込んだ時にでも食べるために保管したい。
俺はそう思って三人がこっちを見てない時に、バレないようにさっと二枚のクッキーをアイテムボックスに仕舞った。
アイテムボックスを使えて本当に良かった。この魔法を一番有効活用したかも知れない。このためにある魔法かもしれない。

それからは残りのクッキーを食べつつ、三人と楽しく談笑しなが

ら時間が過ぎていった。
穏やかで楽しくて、本当に幸せな時間だった。

その後は、ロニーと共に食堂の手伝いをしたり森に行ったりして一日を過ごした。そしてロニーはまた一晩泊まって、次の日の午前中に孤児院に帰っていった。
両親がいないロニーをうちに招待するのはどうなのかと少しだけ思ってたんだけど、招待して良かったな。マリーともかなり仲良くなっていたし、ロニーも楽しそうだった。
また機会があったらうちに遊びに来てもらおう。

１６２、二人の魔力測定

ロニーが孤児院に帰ってから数日間は、特に何事もなく穏やかに日々が過ぎていった。俺も久しぶりの実家での生活をかなり満喫できた。

そして今日は大きなイベントがある日だ！　実はマリーとルークが魔力測定に行くのだ。ちょうど二人とも八歳になり、二人同時に行くことになったらしい。

魔力測定が終わったら、うちの家族四人とニコラとルークの家族四人で、食堂でお祝いをする予定だ。

「マリー、準備できたなら早く来なさい」

「は～い！」

マリーが母さんに呼ばれて二階から降りてくる。

「お兄ちゃん、見て！　新しいお洋服！　可愛い？」

マリーはそう言って、俺の前でくるくると回ってみせた。マリーは今日のために新しい服を買ってもらったのがかなり嬉しいようで、服を買ってもらった一昨日からずっとあの調子だ。継ぎ接ぎもなく綺麗に染めてある服なので、嬉しいのもわかる。

「お兄ちゃん、可愛い？」

「うん。すっっごく可愛い！　マリーに似合ってるね」

「本当！？　やったー！」

このやりとりは一昨日から数十回は繰り返されているけど、何度

やっても本当に可愛い。このやりとりなら、後何十回でも何百回でも繰り返せるな。
薄い緑のような色に染められているワンピースは、この季節にぴったりだ。腰の上で縛っている紐は濃い緑で、良いアクセントになっている。
母さんと父さんにお願いして良かった。

実はこのワンピース、マリーが欲しがってたけど高くて買えなかったものらしいのだ。それを俺がマリーに聞いて、母さんと父さんにお金を渡した。
本当はもっと実家にお金を入れてもいいんだけど、うちは生活に困るほど貧乏ではないし、余分なお金は危険の元だし、今まで物は買ってきてもお金を渡したことはなかった。でもマリーが喜んでくれるのなら少しはいいよね。
この服ならちょっと頑張ればこの辺の平民でも買える服だし、悪目立ちすることもないだろう。

「二人とも行くわよ。もう皆外で待ってるわ」

母さんにそう言われてマリーと一緒に外に出ると、ニコラとルーク、おじさんとおばさんも揃って待っていた。

「あっ！　おじさん！」

マリーはおじさんを見つけた途端、すぐに突進して行く。まだマリーのおじさん好きは健在なんだな。

「おうマリー、可愛くなったか？」

おじさんは突進してきたマリーを難なく受け止めて、そのまま抱

き上げている。マリーは凄く嬉しそうだ。

「お洋服！　新しいの買ってもらったの！」

「そうかそうか、良かったなぁ～」

「うん！！」

そんなマリーとおじさんの様子を見守っていると、俺の側にニコラとルークがやってきた。実家に帰ってきてからまだ会ってなかったので、かなり久しぶりだ。

「ニコラとルーク、久しぶり！」

「久しぶり。レオンは……変わらないな」

ニコラが俺の身長を確認するようにしてそう言った。気を遣わなくていいから！

何かニコラは大きくなってる。この春から夏にかけてで、数センチは背が伸びたんじゃないか？　俺はまだ成長期が来ないんだよ……

「久しぶり！　本当だ、俺もすぐに追いつくぜ！」

二歳年下のルークに追いつかれる俺って、成長遅過ぎない？　まあおじさんと父さんを見れば、その理由は一目瞭然だけどね。父さんが小さいと言うよりも、おじさんがデカすぎるんだ。

「ルーク、魔力測定楽しみだね」

「おう！」

二人とそんな話をしていると、ルークがおじさんに呼ばれた。

「ルーク、行くぞ」

「は～い！！」

教会に行くのはおじさんおばさん、母さん、マリー、ルークの五人だ。父さんと俺とニコラは、食堂に残ってお祝いの準備をする。

「じゃあ気をつけてね。ご馳走を作って待ってるよ」
「うん！　楽しみ！」
「すぐ戻ってくるぜ！」

父さんのご馳走という言葉にマリーとルークが反応して、二人はテンション高く教会の方に駆けていった。
多分帰ってくるまで一時間ぐらいだろう。急いで準備をしないと。

「じゃあ父さん、準備をしようか」
「うん。二人のお祝いだから頑張らないとね」
「俺も手伝う。何をすれば良いんだ？」
「ニコラには、食堂の机や椅子の配置と配膳をお願いしようかな」
「わかった」
「レオンは父さんと厨房ね」
「うん！」

そうして三人で分担して、ご馳走作りが始まった。メニューはいつもの牛肉のステーキと豚肉の野菜炒めにスープ。そしてそれに加えて、チキンステーキとカツサンドだ。

「父さんはカツを揚げるから、レオンはパンを切ってくれる？　パンを切り終わったらトマトソースもお願い」
「分かった。トマトソースはこの具材で作れば良いんだよね？」
「そうだよ」

俺は父さんの指示に従って、できることをどんどんこなしていく。パンが少しガタガタしていたりするけど、まあご愛嬌だ。
そうしてしばらく忙しく動くこと数十分。一通りの料理が出来上がった。あとは牛肉のステーキとチキンステーキを焼くだけだ。

「この二つは焼き立てが美味しいから、皆が帰ってきたら焼き始めようか」
「そうだね。じゃあ他の出来上がった料理から運んじゃうね。ニコラ、ここのやつよろしくー」

そうして今度はニコラと二人で机の上にご馳走を並べていく。カトラリーや水も忘れずに準備して……完璧だ！

「あとは皆が帰ってくるのを待つだけだね」
「ああ、楽しみだな！」

ニコラはご馳走を見て目を輝かせている。背は伸びても、やっぱりまだ子供っぽいところもあるんだな。そう思いつつニコラと話していると、食堂のドアが開き皆が帰ってきた。

「ただいまー！」
「おかえり。父さん、皆帰ってきたよー！」

俺が大声で厨房にそう言うと、父さんがステーキを焼き始めた音が聞こえた。

「マリー、ルークおかえり。魔力測定はどうだった？」
「お兄ちゃん！　マリーね、回復属性だったの。お兄ちゃんと一緒だよ！」
「そうなの？　それは嬉しいなぁ」

「魔力量も四だったんだよ！」

回復属性の魔力量が四だったのか。それは治癒院に勧誘されただろうな。俺は自分の時を思い出して思わず苦笑いになる。

「練習すれば怪我も治せるようになるね」

「私たくさん練習する！」

「マリーは偉いなぁ。皆もマリーがいたら安心できるね」

「うん！」

マリーがそうして喜んでいる横で、ルークが少しだけ落ち込んでいるように見える。自分が望む属性じゃなかったのかな？

「ルーク、どうしたの？」

「俺、身体強化属性の魔力量が一だったんだ……。使えないよな。身体強化属性は魔力量が四か五なら兵士として使えるけど、それ以外だとあまり使えないって」

「それ誰から聞いたの？」

「前に近くに住んでるやつがそう言ってたんだ」

「そっか。でもそれは間違いだよ。身体強化属性はちゃんと練習すればかなり使えるよ」

身体強化属性が一番便利な属性じゃないかと、最近は本当に思っている。

「そうなのか？」

「うん。例えば悪い人から家族や大切な人を守れるよ。他の属性だと周りを巻き込んじゃうから使えないこともあるけど、身体強化属性はそれがないから使いやすいんだ。後は日常生活で他の人が動かせない重いものを動かせたり、他の人だと運べないものを運べたり、

力が必要な仕事で役に立てるよ」
「本当か？　でも魔力量が一だと一瞬しか使えないって」
そうか。確かに漠然と身体強化魔法を使うと、全身が強化されて魔力をかなり消費するんだよね。
必要な部分だけ強化できるようになると、かなりの節約になる。
「練習して必要な部分だけを強化できるようにすると、何回か使えるはずだよ。俺の友達もそう言ってた」
「そうか、そうなのか。じゃあ、俺頑張るぜ！」
ルークはそう言って笑顔になった。うん、いつもの元気なルークに戻って良かった。
そう俺が安堵したところで、父さんが焼き立てのステーキを持って食堂にやってきた。
「ステーキも焼けたよ。皆席に着いてね」
「おおっ！　すげぇ、でかいステーキだ！！」
「ステーキ！　ステーキ！」
マリーとルークはずっと大興奮だ。多分このお祝いが終わった瞬間に、糸が切れたように寝るだろうな。
「ジャン、まだ持ってくるものはある？」
「後ステーキが一枚置いてあるから、それをお願いしていい？」
「分かったわ」
「じゃあ皆、まずは座りましょう。ルーク、飛び跳ねてないで座りなさい」
おばさんのその声に従って皆は自分の席に座った。そして母さん

も戻ってきて準備が全て整う。

「マリーとルーク、魔力測定おめでとう。これで二人も一人前ね。今日は二人のお祝いだから、好きなだけ食べて良いのよ。じゃあ、皆で楽しく食事をしましょう。いただきます！」

「いただきます！！」

１６３、二人のお祝い

母さんの声に従って皆でいただきますと挨拶をして、一斉に食事に手をつける。

俺はまずカツサンドからだ。

おおっ……、サクッとした食感の後にくる噛みごたえのある肉の旨み、さらにその後口の中に広がるトマトソースの味わい。うん、めちゃくちゃ美味しい。

このカツサンド、食堂でお持ち帰りメニューとして売ってるらしいんだけど、かなり売れてるみたいだ。この美味さなら納得だよね。俺なら毎日買う。

まだこの辺にしか広がってないみたいだけど、この美味さならもっと人気が出ると思う。まあ、他のお店に真似されちゃうだろうからそこが大変だけどね。

俺がそんなことを考えつつカツサンドを堪能していたら、父さんがマリーとルークに話しかけた。

「マリーが回復属性で、ルークが身体強化属性だったのかい？」

「そう！　怪我は私が治すよ！」

マリーはそう言って、やる気十分の顔で瞳をキラキラとさせている。可愛い。

そんなマリーを微笑ましげに見つめつつ、おばさんが口を開いた。

「それは心強いわねぇ。ベンはすぐに怪我をするのよ。これからはマリーちゃんに頼もうかしら」

「え、おじさん怪我してるの！？」

おじさんが怪我をしてると聞いて、マリーは一気に心配そうな顔になった。

「ハハっ、そんな顔をしなくても大丈夫だ。仕事柄、手を切ったりちょっとした傷ができやすいんだ」

「そうなのよ。商品を片付けてる時とかに、ちょっとした怪我をしちゃうみたいなの」

「じゃあ、その時は私が治してあげるね！！」

おじさんがマリーを安心させるように笑いながらそう言うと、マリーはおじさんに向かって満面の笑みでそう言った。するとその様子を見ていたルークが、ちょっとだけ恥ずかしそうに口を開く。

「お、俺も怪我したら、マリーが治してくれるのか？」

「うん？　もちろん治すよ？」

「そ、そうか。期待してるぜ！」

ルークはそう言って、少し恥ずかしそうにステーキにかぶりついた。

お？　もしかして、もしかして、ルークはマリーのことが好きなのか！？　マリーは全く気付いてなさそうだけど、大人四人はルークを微笑ましそうに見守っている。ニコラも……気づいてそうだな。

わかる、子供の恋愛なんて大人からしたら微笑ましいよね。俺も対象がマリーじゃなければ、穏やかな心で微笑ましく状況を見ていられただろう。

でも、でも、マリーはダメだ！　ルークには悪いけど、マリーは諦めてもらおう！

俺がまたそんな馬鹿なことを考えていると、母さんが口を開いた。

「ルークの身体強化属性は、仕事には良かったわね。重いものを持つこともあるでしょう？」

え？　ルークってもう仕事が決まってるの？

「ルークはもう仕事が決まってるの？」

「俺は道具屋をやるんだぜ！」

「ルークは俺の後を継いでくれるんだよな」

そうだったのか……確かにニコラが兵士になるって言ってたから、お店を継ぐとしたらルークしかいない。

この世界では当たり前なのかもしれないけど、この歳でもう決めてるなんて凄いな。

そういえば、マリーはどうするんだろう。

「マリーは、将来やりたいこととか決まってるの？」

俺がそう聞くと、マリーはさも当然とばかりに頷いた。

「うん。食堂をやるんだよ？」

逆に、何でそんなに分かり切ったことを聞くのって感じだ。まあ確かに、この世界の平民で自分のお店があるのはかなり恵まれているから、お店の子供に生まれたらそれを継ぐのが当たり前なんだろう。

でも、俺が継がなかったから無理にとかじゃないのかな……

「マリーは、食堂の仕事が好きなの？」

「うん！　料理するのも好きだし、食べた人が喜んでくれるのも好

き！」

そう言ったマリーの顔には嘘や誤魔化しは一切なく、本当に心からそう思っているようだった。

……良かった。俺は安堵して少しだけ強張っていた顔を緩めた。

「そっか、それなら食堂の仕事は楽しいね」

「うん！　すっごく楽しいよ！」

マリーも少しずつ成長してるんだなぁ。まだまだ子供だと思ってたのに、なんかちょっと寂しい。

俺がそうして少しだけ感傷に浸っていると、話はニコラの将来についてに変わっていた。

「ニコラは兵士になるのよね？」

そう聞いたのは母さんだ。

「うん。兵士の試験を受ける予定。今は試験に受かるように体力作りから始めてるんだ」

「そうなのね。兵士になれたら給金も良いし将来安泰ね」

「そうだけど、でもそれを言ったら一番はレオンだ。レオンは王立学校に行ってるから、卒業したら役人になれるんだよな？　それとも騎士になるのか？」

ニコラがそう言って俺に話を振ってきた。

「ロアナから話を聞いた時は本当に驚いたわ。まさかレオンがそこまで頭が良かったなんて。本当に凄いわ！」

「本当だよな。俺らの誇りだ！」

おばさんがそう褒めてくれて、おじさんは手を伸ばして頭をガシガシと撫でてくれた。

「ちょっ、ちょっとおじさん、頭がぐらぐら揺れるよ！」
「ハハっ、すまんな。そんなんじゃ騎士になれないぞ」
「俺は騎士にはならないんだよ。役人になる予定なんだ」
「まあそうだな。レオンは弱そうだもんな。ハハハっ」

確かに外見は弱そうだけど、これでも意外と強いんだからね！
まあ、魔法を使えばの話だけど。

「役人になれたら本当に凄いわねぇ」
「でも、貴族様と働くのだから心配は尽きないわ」
「確かにそうね」
「今でも毎日心配なのよ。その点ニコラは兵士になるんだから安心よね。貴族様との関わりはほとんどないし、それでいて給金は高いし、ずっと近くにいてくれるでしょう？」
「確かにそう考えると、兵士になってくれた方が心配は少ないわねぇ」

母さんとおばさんはそんなふうに二人で話し始めてしまった。こうなったらしばらく話が尽きないんだ。
俺は巻き込まれないように母さんたちから目を逸らして、ニコラに近況を聞くことにした。

「ニコラは普段、どんな訓練をしてるの？」
「今は体力作りだから、走り込みぐらいしかしてないかな。どうやって鍛えれば良いのかよくわからないんだ」
「そっか。兵士の試験って何があるの？」

「魔力量を測るのと魔法の試験。あとは体力測定とちょっとした模擬戦らしい」

魔力量もまた測るんだ。そういえば、兵士は魔力量が四か五の人しかなれないんだったな。

「結構いろんな試験があるんだね」

「そうなんだ。聞いた話では落ちることもあるらしい。体力が無かったりあまりにも弱かったりすると、結構落とされるみたいだぞ」

「確かに、体力ないと仕事にならなそうだもんね。でもニコラなら大丈夫そうだ。かなりガタイも良くなってきてるし、見た目も強そう。試験って十五歳から受けられるんだよね？」

「ああ、十五歳から三回まで挑戦できる」

「それなら十五歳になる頃には、もっと背も伸びて強くなってるよ。そうだ、今のうちから筋肉はつけすぎない方が良いかも」

確か筋肉をつけすぎると、背が伸びづらくなるんじゃなかったっけ？　そんな話を聞いたことがあるような気がする。……これって根拠のない話なんだっけ？

あー、こういう時にすぐ調べられるスマホが欲しい！

「そうなのか？　何でだ？」

「確証はないんだけど、筋肉をつけすぎると背が伸びづらくなるって聞いたことがあるような気がする……。だから今は体力をつけることを重視して、筋肉をつけすぎない方が良いと思う。もう少し背が伸びてから筋肉をつけても遅くないでしょ？」

「確かに、まだ時間はあるからな」

そういえば、工房で働く子やお店を継ぐ子は八歳を過ぎると段々と仕事を始めるけど、兵士になる子って十五歳まで仕事ができない

よね。それまでって鍛えてるだけなのかな？

「今更かもしれないけど、兵士になる人って十五歳までは何してるのが普通なの？」

「基本的にはどこかで働いてるのが普通だ。体力作りも兼ねて建設現場で雑用をするとか、木こりの雑用とか、そういう仕事だ」

「じゃあ、ニコラもやってるの？」

「ああ、俺は荷運びの仕事をしている」

「荷運び？」

「荷物を指定の場所から場所まで運ぶ仕事だ。基本的には馬車から荷物を下ろしたり馬車に荷物を乗せたりだな。荷車で運ぶこともある」

そんな仕事もあるのか。

俺って魔法具のために王立学校に一直線だったから、普通の平民の仕事をあまり知らないんだよね。ちょっとはその知識も身につけよう。

「かなり体力が必要そうだね」

「そうなんだ。体力や力もついて金をもらえるんだから、ありがたい仕事だ」

「確かに訓練しつつお金をもらえるんだから、良い仕事だね」

皆も将来のために色々と頑張ってるんだな。ニコラは兵士になるために、ルークは道具屋を継ぐために、マリーは食堂を継ぐために。

俺も皆に負けないように頑張らないと。

そうして皆の将来について話をしつつ、二人のお祝いの食事会は進んでいった。

そしてマリーとルークがはしゃぎすぎて眠そうになってきたとこ

ろで、食事会はお開きとなった。
久しぶりに皆と話せて本当に楽しかった。やっぱり実家は落ち着くな。

１６４、マリーと釣り

今日は遂にマリーとの約束を果たせる。そう、釣りだ。
王立学校に入学する前に、マリーとまた釣りに来ようと約束したからね。俺は実家に帰ってきてすぐ、釣り竿と釣り針、釣り糸を用意した。

「お兄ちゃん！　今日は釣りに行く日だよね！」
「そうだよ。今日の午後に行こうね」
「うん！　楽しみ！」
「今回はちゃんと釣りの道具を準備したから、多分釣れると思うよ」

前は釣り針もない状態だったし季節も悪かったから、あれは釣れなくてもしょうがない。でも今日は季節的にも釣れると思う。

「本当？　いっぱい釣ってお魚食べたい！　お兄ちゃんのお魚料理、すっごく美味しかった！」
「お魚料理って、前にお土産で買ってきたやつだよね？」
「そう！」
「そっか……」

あの料理は海の魚を使ったからな。流石に川魚で同じクオリティは無理な気がする。
でも川魚は川魚で別の美味しさがあるよね。内臓を取って塩焼きにしたら美味しいはずだ。

「前のと同じものは作れないけど、川魚は塩焼きにしたら美味しいと思うよ」

「本当？　私頑張って釣るね！」
「うん。頑張ろうね」

そうして気合十分なマリーと、午後になって川までやって来た。マリーは終始ご機嫌で、スキップでもしそうな勢いだ。

「はい。これがマリーの釣り竿ね。針がついてて危ないから気をつけるんだよ」
「うん！　これどうやって使うの？」
「この針に餌をつけて、川の中に糸を垂らして魚が食いつくのを待つんだ」

俺も釣りの知識はあんまりないけど、とりあえずやり方はわかるのでそれを説明していく。

「じゃあマリーが餌を見つけるね！　確か小さな芋虫みたいなやつならいいんだよね？」
「うん。とりあえずどの餌が良いのかわからないけど、それで良いんじゃないかな」
「じゃあ、お兄ちゃんの分も見つけてあげる！　お兄ちゃんは他の準備してて」

マリーがそう言って餌を見つけ始めてくれたので、俺は魚を待つ間に座っていられるような椅子を作ることにした。マリーには全属性のことがバレているから、魔法を使えて凄く便利だ。
俺は土属性で硬すぎない即席の椅子を作って、魚を捌くための石造のまな板も作った。そして水魔法で持って来た木の桶に水を満たし、釣れた魚の保管場所も作る。
そして適当に木の枝を拾って来て、いつでも火をおこせるように

しておく。これで釣れた魚をここで捌いて焼くこともできる。
父さんと母さんのためにいくつかは持って帰りたいけど、やっぱり釣ってすぐ食べるのが釣りの醍醐味だよね。ちゃんと塩も持って来てあるし完璧だ。
あと必要なものはあるかな……、そう考えて辺りを見回していると、マリーが手に芋虫やミミズのようなものをたくさん持ってやって来た。

「お兄ちゃん！　いっぱいいた！」

す、凄いなマリー。満面の笑みで可愛い女の子が芋虫を差し出す図、なかなか破壊力が高い。
俺は引き攣りそうになる顔をなんとか取り繕い、笑顔でマリーにお礼を言った。

「た、大量だね。ありがとう」

この世界の人って虫に対する忌嫌感があまりないんだよね。俺はいつも虫にビビりまくって、皆に不思議そうな目で見られていた。今は流石に慣れたけど、でも皆ほど大丈夫じゃない。

「どれがいいかな？」
「うーん、多分どれでも大丈夫だと思うよ。順番にやってみようか」
「うん！」

マリーは俺のその言葉を聞いて、両手に持ったうねうねの中からどれが良いかを選んでいる。
俺はその光景に耐えられず、土魔法で即席の器を作りマリーに差し出した。

「マリー、これに入れて選ぼうか」
「うん。ありがと！」

マリーはそう言って器に入れてくれたけど、器の中でうねうねしている。やっぱり気持ち悪い。

「じゃあ、私はこの子にする！」
「そ、そっか。じゃあ俺はこれにするよ」

そうして二人で釣り針に餌をつけ、椅子に座って魚が食いつくのを待つことにした。
それから三十分ほど、マリーは真剣な顔で川と釣り糸を見つめ続けていたが、ピクリとも動かない釣り糸に流石に飽きて来たらしい。

「お兄ちゃん、どのくらいで釣れるの？」
「どうなんだろうね。俺もわからないなぁ」
「そっかぁ」
「飽きて来た？」
「ううん！　もうちょっと頑張る！」

マリーはまた気合を入れ直して釣り竿を握りしめた。

しかしその決意もすぐに薄れたようで、暇そうに足をぶらぶらとさせながら、辺りをキョロキョロと見回し始めた。

「お兄ちゃん、川って何で流れてるの？　どこから来るの？」
「川は山の上から流れてくるんだよ。雨水が流れて来てるんだ」
「そうなの？　でも今日は雨降ってないよ？」
「ここは降ってないけど山では降ってるかもしれないし、降った雨がすぐに流れてくるんじゃなくて、一度土に染み込んでからそれが

溢れ出て流れてくることもあるんだよ」
「そうなんだぁ。お兄ちゃん頭いいね！」

マリーは笑顔でそう褒めてくれたけど、多分これはほとんど理解してないな。俺は苦笑いしつつマリーの好奇心を無駄にしないように、マリーが興味を持てる話をすることにした。

「じゃあマリーに問題です。この川の水は最後にどこに行くでしょうか？」
「最後に？　うーん、また山に戻る！」
「ブッブー。違います」
「うーん、うーんと、じゃあ、水溜りになる！」
「ちょっと惜しい！　正解は、海に辿り着くんだ」
「海？」

マリーは海と言う言葉を聞いて、不思議そうに首を傾げた。

「そう。前にお土産でお魚を持って来た時に、海の魚って言ってたでしょ？」
「うーん、言ってた気がする？」
「その時に持って来たお魚が住んでいたところが、海っていうところなんだ。その海に川は辿り着くんだよ」
「じゃあ海は、とっても大きな水溜りなの？」
「そう、すっっごく大きいんだ。それに海は水溜りじゃなくて塩水なんだよ。マリーが想像できないくらい大きいんだけど、どのくらいだと思う？」

俺がそう言うと、マリーは一生懸命大きなものを考えているようだ。しばらく悩んでマリーが出した答えは……

「教会ぐらいの大きな水溜り！」
教会だった。確かにマリーの周りで大きなものと言ったら、教会が一番大きな建物なのかも。
「もっと全然大きいよ」
「そうなの！？　うーんと、じゃあね、この森ぐらい！」
「もっとかなー」
「本当に？　そんなに大量のお水があるの？」
「そう、この国よりも大きいよ。もしかしたらこの大陸より大きいかもしれない」
俺がそう言うと、マリーはよくわからないような顔をした。確かにこの国の大きさとかイメージできないよね。マリーからしたら王都の大きさもイメージできないだろう。
地図もないしな……。
うーん、そうすると伝えるのが難しい。
「見渡す限り全部海で、終わりが見えないんだよ。終わりが見えない水溜り」
「じゃあ、遠くを見てもずっと水溜りってこと？」
「そう。見えないところもずっと水があるんだ」
「そうなんだ、凄いね！　見てみたい！」
「そうだね、いつか海を見に行きたいね。海の近くの街なら魚料理がたくさん食べられるんだよ」
「そうなの！？　行きたい！！」
マリーは目を輝かして前のめりでそう言った。急に勢いが凄い。
……この話は止めた方が良かったかもしれないな。すぐに行けないのに可哀想なことしたかも。

でも絶対に連れて行ってあげたい。母さんと父さんも一緒に連れて行ってあげたいな。

自分で馬車が用意できたら行けるだろうか？　あとはリシャール様に頼んでも行ける気がする。商会の馬車に乗せてもらうとかもありかも。

うん、どんな方法にしろ絶対に連れて行ってあげよう。

「すぐには無理だけど、いつか一緒に行こうね」

「本当！？　お兄ちゃんありがとう！」

マリーがそう言って満面の笑みを浮かべたところで、ふとマリーの釣り竿が目に入った。

……あれ？　もしかして魚釣れてない？

「マリー、もしかして魚釣れてるんじゃない？」

「え？　本当だ、引かれてるよ！」

「す、凄いよ！」

「これどうすればいいの？　お魚さんが逃げちゃう！」

「マリー落ち着いて、釣り竿を引けば大丈夫なはずだから。釣り竿の先端を上に持ち上げるんだ」

俺がそう言うとマリーが思いっ切り釣り竿を引いて、一匹目の魚が釣れた。

凄い、俺までテンション上がる！

「やったー！　お兄ちゃん釣れたよ」

「凄いよマリー！」

マリーはビチビチ跳ねている魚をガシッと掴み嬉しそうだ。

「これ食べられる？」
「うーん、ちょっと待ってね」

俺はマリーから魚を受け取り、回復属性の魔力で毒などがないかを確認した。
うん、毒はないから食べられそうだ。でも美味しいのかな？　俺って川魚には全く詳しくないから、これが何の魚なのかわからない。まあでも、食べてみればいいか。

「これ食べられるよ。今食べてみる？」
「うん！」
「じゃあお兄ちゃんは食べる準備をするから、マリーはもう少し釣っててくれる？」
「わかった！」

よしっ、どうやって捌くのかよくわからないけど、海の魚で捌き方は覚えたしいけるはず。
最悪ピュリフィケイションとか使えるから大丈夫だろう。俺はそう思って魚を捌き始める。
お魚さん、美味しくいただくのでごめんなさい。そう心の中で謝ってまずは魚を締める。そしてそれから捌いていく。
必死に格闘すること十分ほど、少しガタガタだけど何とか捌けた。やっぱりもっと練習が必要だな。でも内臓も取れたし良くできた方だろう。
これを土魔法で作った石串に刺して、塩を振って準備完了だ。あとはさっき集めた薪に火魔法で火をつけて焼いていこう。

「マリー、焼き始めるよ」
「はーい。お兄ちゃん、もう一匹釣れたよ」

「え？　本当？」
「うん！　桶に入れておいたからね」

捌くのに真剣で全く気付かなかった。というか、そう話をしている間にもう一匹釣れている。凄い、今釣れる時間帯なのか？　それともマリーが覚醒したのか？
わからないけど凄い釣れてる。これなら母さんたちへのお土産も十分だな。

それからしばらく魚が焼けるまで俺も釣りをして、魚が焼けたので食べることになった。俺はもちろん……釣れなかった。やっぱりマリーが覚醒したのかもしれない。まさか釣りの才能があったとは。

「お兄ちゃん、これそのまま食べるの？」
「うん。食べて良いところだけを残してあるからそのまま食べていいよ。あっ、でも骨には気をつけてね。あと頭と尻尾は食べない方が良いかも」
「はーい。いただきます！」

マリーはそう言って魚にかぶりついた。

「う～ん！　美味しい！」
「本当？　お兄ちゃんももらっていい？」
「うん！」
「ありがと」

そうしてマリーから受け取った川魚を食べてみる。
おおっ……まじで美味しい。泥臭さとか全くない。ちょっとだけ甘みを感じるほくほくの身だ。ここまで美味しいと思ってなかった。

「美味しいね」
「ね！　私もっと釣る！」

その後はかなり張り切ったマリーが五匹追加で釣って、俺も何とか一匹釣って、合計十匹も釣れて大成功で終了となった。
たまには釣りも楽しいな。今度はニコラとルークも誘ったらいいかもしれない。そう思いながら家に帰った。

１６５、魔法の検証　前編

実家に帰って来てからひたすらのんびりしたり、マリーたちと遊んだり、屋台巡りをしたりと楽しく過ごしていたが、流石にやるべきことに取り掛かろうということで、今日は一人で森に行くことにした。

人が入ってこないような森の奥まで行き、魔法の検証をする予定だ。アイテムボックスに生物が入れられるかの検証と、転移魔法の検証をしたい。

今までは一人になれることも少なくて、最低限の検証しかできなかったからね。

「ちょっと出かけてくるー」

「お兄ちゃんどこに行くの？」

俺がカウンターから厨房を覗きつつそう言うと、ちょうどマリーも厨房にいたようで、少し心配そうにそう聞かれた。

マリーは久しぶりに俺が帰ってきたのが嬉しいみたいで、前よりも俺と一緒にいたがるのだ。また俺がいなくなることを不安に思っている節がある。

……えへへ、嬉しすぎる。

夏の休みが終わって中心街に帰るのが今から憂鬱だ。多分俺は妹離れできない。一生できない気がする。マリーが可愛すぎるのが悪い。

そんな馬鹿なことを考えてだらしなく緩んだ顔を、なんとか気合

いで引き締めてマリーに返事をする。
「森に行くんだよ」
「そうなの？　一人で行くの？」
「うん。訓練と魔法の練習をするんだ。マリーはルークと遊ぶんだっけ？」
「うん！」
「じゃあ、お兄ちゃんは頑張ってくるから、マリーは楽しんでね」
「わかった。お兄ちゃん、帰ってくるよね……？」
「もちろん帰ってくるよ」
俺はまだ少し心配そうなマリーに、明るく笑いかけてそう言った。
「そうだよね。じゃあ、行ってらっしゃい！」
「うん。母さんと父さんも行ってくるね」
「気をつけるのよ」
「暗くなる前に帰ってくるんだよ」
「はーい！」
そうして俺は家を出て、ウォーミングアップとして森まで走って向かった。森までは皆で歩くと三十分ほどかかっていたけど、普通に走って十五分ほど、身体強化を使うと十分弱で辿り着く。
日頃の成果が出て着々と体力はついてるな。公爵家の広い庭を走ったり剣術の練習をしたりと、リュシアンと一緒に日頃から鍛えるのは続けているのだ。このまま頑張れば、魔法がなくてもそこそこの強さにはなれると思う。
やっぱり魔法に頼りすぎるのは良くないからね。ちゃんと鍛えないと。
そんなことを考えつつ走っていると、すぐに森に辿り着いた。し

かし今回は森の外縁部ではなく奥に向かうので、もう少し進んでいく。流石に森の中は走れるような状態ではないので早歩きだ。普段人が入らないほど奥に進めば、全く整備されていなくて歩きづらい。

こういう時に便利な魔法があったら良いんだけど。理想はウインドカッターみたいなやつだ。あれで邪魔な木や草を切り倒していけたらかなり楽だろう。でも風魔法で物を切る魔法は、何度挑戦してもできないんだよね。

かなりの強風で物を薙ぎ倒したり吹き飛ばすことはできるんだけど、切ることはできない。そもそも風で物が切れるって原理がわからないからな……。多分イメージできなくて使えないんだと思う。

そうなると他の属性だけど、ちょうど良い物が思いつかない。水魔法のウォータージェットは使えるかもしれないけど、あれも切るというより薙ぎ倒す、抉り取るって感じなんだよね。火魔法は山火事の危険性があるからダメだし、後は土魔法だけど……地面を掘り返して道を作る？

それなら多分できると思う。でも俺が通るためだけにそれをやるのもなぁ。やっぱりナイフや剣で切るのが一番早い。この短いナイフで頑張るか……

そう思ってナイフを手に持ったところで、ふと思いつくことがあった。そういえば土魔法で石って作れるけど、鉄とか剣とか作れないのかな？

鉱石だって土魔法の範囲のような気がするけど……。なんで今まで試さなかったんだろう。

俺はそう考えて、土魔法を使って鉄を作ってみることにした。とりあえず手のひらに乗るくらいの小さめの鉄の塊をイメージして……魔力を込めた。

「うわっあ！　びっ、びっくりした。予想以上に魔力が必要だった……」

俺は魔力が一気に使われるのを感じて、途中で魔法を止めた。それでも一割近くは魔力が減っている。

手にはイメージした半分以下の鉄の塊。一応成功したけど……、これは魔力がかなり必要だ。気軽に使える魔法じゃないな。

でも最近は転移魔法を使わないと魔力を使い切るのが難しかったし、これからは鉄を作って魔力を使い切るのは良いかも。魔力はできるだけ使い切った方が量が増えていくから、寝る前にできる限り使うようにしているのだ。魔力は一晩しっかり寝れば、次の日には完全に回復している。

鉄はアイテムボックスに貯めておけば使い道もあるだろうし、無駄にはならないだろう。そうだ、この鉄って魔法で自由に形を変えられたりするのかな？

そう思って実践してみるが、一度作った鉄を自在に操ることは不可能だった。まあ、そこまで万能じゃないよね。

とりあえず、今はナイフで道を作って進んでいこう。ナイフにバリアを纏わせれば、かなり頑丈で怖い程の切れ味のナイフになるし。

そうして俺はバリアを纏わせたナイフで、スパスパと草や枝を払って森の奥に進んでいった。

そうして進んでいて気づいた。もしかして、最強の魔法ってバリアなんじゃないか？　俺はバリアを元々想定していた使い方じゃなくて、道具を補強して切れ味を鋭くするために使ってるけど、尖ったバリアをそのまま攻撃に使ったら、最強なんじゃ……？

そう思って手のひらサイズの小さなバリアを作り出し、それを自

在に動かして草や枝を払ってみた。バリアは魔力を消費すれば自在に動かせるのだ。
おぅ……、凄い切れ味だ。これって自由自在に動かせて遠隔操作もできて刃こぼれの心配もいらなくて、さらに防御もできる代物だよね？

……怖っ！　バリア怖っ！

え、もう俺が使う魔法ずっとこれでいいじゃん。
まあ問題は遠隔になる程、そしてバリアが大きくなるほど魔力消費量が増えることだけど、それでもしばらくは使い続けられる。
長期戦には向かないけど、強い敵と戦う時とかにはかなり使えるだろう。そんなに強い敵がいるのかは知らないけどね。
うん、これも攻撃魔法のバリエーションに加えよう。これから一番愛用する魔法になりそうだ。

そんな検証もしつつ進んでいき、確実に他の人はいないだろう森の奥の河原に辿り着いた。十分な広さがあるし、ここを俺の魔法練習場にしようかな。
まずは転移の検証からだ。部屋の中で一人の時に練習していたので、見える範囲への転移はもう完璧だ。さらに近い距離で見えない範囲への転移もできる。
転移先に物が置いてある場合は、それを避けて転移するので座標が少しずれることもあるけど、概ねイメージした通りのところに転移できるようになった。
例えば俺の部屋のベッドの上から、浴室の中への転移も完璧だ。転移先を頭の中に思い浮かべて魔法を使えば、一瞬真っ暗になった後、すぐにイメージ通りの場所まで転移できる。

よってあと検証したいことは一つ、どれほどの長距離転移が可能かどうかだ。
とりあえずこの場所を覚えて、森の入り口まで戻ってここに転移できるか試してみよう。たぶん感覚的にここまで一キロから二キロぐらいだと思う。この距離が転移できたら凄いよね。
そう考えて俺は森の外縁部までまた戻り、誰も人がいないことを確認して転移魔法を使った。
すると一瞬で森の奥の河原に戻る。

「凄い！　成功だ！」

本当に凄い！！　イメージした通り、転移魔法を使って瞬きほどの時間で森の奥の河原に立っていた。
使った魔力は今の俺の魔力で一割弱だ。これは凄い。本当に凄い。今の魔力量なら十キロほどの転移が可能ってことだ。
実家からこの場所に直接転移することもできるし、公爵家から俺の家までも転移できる。これでいつでも帰って来れる！

……まあ、空間魔法を使えることを明かせばなんだけどね。うーん、ここまで便利だともう隠しておくのも面倒くさくなるな。自由に使いたい……。
でも、使徒様って祭り上げられるのは怖いんだよなぁ。だってこの世界って神様がいるみたいだし、天罰とか怖いし、使徒を騙ったとか言われても困るし。でも便利さを取りたい気持ちもある。

悩む、めちゃくちゃ悩むけど、とりあえず不便なのは仕方がないとして隠す方向ではいよう。でも、隠れてなら使おう。こんなに便利なものを全く使わないなんて無理だ。
そうだ、公爵家から森への直接転移なら、誰にもバレずに森に来れるんじゃないか？　これで魔法の練習はいつでもできるな。

頑張って魔法の練度を上げて、さらに魔力量が増えていけば、国中どこでも転移できるようになりそうだ。本当に凄い！

ただ一点不便なのは、一度行ったことがある場所じゃないと転移できないことだ。まあでも、それは仕方がないよね。それでもこんなに便利な魔法はない。

港街にだって行けるようになるかも。いつでも海の幸が食べ放題だ。そう考えたら、魔力量をもっと真剣に増やさないとダメだな。最近は、これ以上いらないんじゃないかと思ってサボり気味だったけど、ちゃんと魔力を使い切って増やそう。

１６６、魔法の検証　中編

よしっ、あと検証したいのは他の人を連れて転移できるのか、それから大きな物も一緒に転移できるのか。その辺かな。

他の人に検証に付き合ってもらうのは難しいから、とりあえず物の検証だけはしておこう。

そう考えて、俺は河原にある大きめの岩と一緒に転移してみることにした。

俺の腰ほどの高さで、持ち上げることはできないほどの大きさだ。遠くへの転移は魔力さえあればできることが分かったから、とりあえず近くに転移してみる。

岩に手を触れて一緒に転移するイメージで転移魔法を使うと……、大きな岩も一緒に転移することができた。

思いの外簡単にできたな。必要な魔力量もそこまで増えてない。もっと必要な魔力量が増えるかと思ってた。

じゃあ次は、岩に触れないで一緒に転移できるか試してみよう。そう思って岩の隣に立ち、岩には触れないで一緒に転移するイメージで魔法を使う。

おおっ……できた。さっきよりも魔力は必要だけど、転移はできる。結構使い勝手の良い魔法かも。

後は何かあるかな。そうだ、大きな物じゃなくて物の数を増やしてみよう。俺は足元にある沢山の小石と一緒に転移してみた。すると、岩と一緒に転移した時と同じぐらいの魔力消費量で転移できる。

凄いな。結構万能な魔法かも。

じゃあ後は……、物だけを転移させられるかだな。俺は自分は転

移せずに岩だけに転移魔法を使ってみた。いや、厳密には使おうとしてみた。しかし魔法は発動しない。
ということは、転移魔法は俺が転移する前提で他の物も転移させられるってことだな。

色々と検証してみた結果。
転移魔法は物と一緒に転移しても消費魔力量はあまり増えない。大きい物でも数が多い物でも消費魔力量は同じぐらい。ただ、一緒に転移したい物に触れていた方が消費魔力量は少なくなる。物だけを転移させることはできない。こんな感じかな。
転移魔法は、今いる場所と転移先の間を時空間で繋げるようなイメージだから、そこを繋げるのに一番魔力を消費するのだろう。そしてその時空間をどれだけの物が通るかは、あまり関係がないのかもしれない。
さらに時空間を繋げるのに、距離が長くなればなるほど魔力を消費するんだと思う。うん、何となく転移魔法がわかってきたな。
後は人と転移できるかだけど、多分物と同じように一緒に転移できる気がする。また機会があったら人でも試してみよう。

よしっ、とりあえず転移魔法の検証は終わり。当面の目標は魔力量を増やすことだな。
次はアイテムボックスだ。アイテムボックスに生物を入れられるのか試そう。

俺は手軽に捕まえられるということで、土の中にいる虫と川にいる魚を捕まえることにした。
虫は土魔法で土を掘り返せばすぐに見つかる。うん、でかいミミズが発見できた。気持ち悪い……
後は魚だ。この前はマリーと釣りを楽しむってことで頑張って釣

ったけど、今日は魚を捕まえることが目標だから、魔法を駆使しよう。

俺は川の中に泳いでいる魚を見つけて、土魔法でその魚の真下の土を尖った石針のように変形させ、下から魚を貫いて捕まえた。

やった！　さすが俺、頭いい！　そう思って意気揚々と魚を回収して気付いた。

……やばい、突き刺したら魚は死んじゃうよ。

生きてる魚をアイテムボックスに入れないと意味無かった！　ミスった……ま、まあ、そんなミスもあるよね。

気を取り直して、今度は水魔法を使って魚を捕まえることにした。土魔法を周りの土を使用して使うように、火魔法や水魔法も周りの火や水を使用して使うこともできるのだ。

土と違ってそもそも火や水を準備するのが大変なので、火魔法や水魔法は魔力から作り出すことがほとんどだけど、一応既にあるものを使うこともできる。

そこで、俺は魚が泳いでいるところをウォーターボールにして、魚を捕まえることにした。そして無事成功した。完璧だ！

後はここから魚を手掴みで捕まえれば……あれ？　待って、あっ……え？　何で……とうっ、えいっ……！

はぁはぁ、魚を手掴みで捕まえるのって、こんなに難しかったの？　もう全身びしょ濡れなんだけど、なんか効率悪いことしてる気がする。

そうだよ、土魔法で大きな桶を作って、そこにウォーターボールごと入れればよかった。そこから少しずつ水を抜いていけば楽だったよ。

でも、今それをやったらなんか負けた気がする……。どうせもうびしょ濡れだし、手掴みで捕まえてやる！
こいつと俺の真剣勝負だ！

俺はそう意気込んで、それからまた数分魚と死闘を繰り広げ、遂に魚を捕まえることに成功した。

「遂に捕った！！　俺の勝ちだ！」

と、そこで我に返る。
何でこんなに馬鹿なことを真剣にやってたんだろう……ま、まあ、達成感あったしいいとしよう。

そうして俺は、最初に捕まえたミミズと小さな桶に入れた魚を、アイテムボックスの中に収納する。収納できるのかと心配したが、その心配とは裏腹に普通に収納することができた。とりあえず生物を入れることは可能らしい。後は取り出してどうなっているかだな。
そう考えて、アイテムボックスに入れた数秒後に取り出してみる。

……おう、マジか。

さっきまでうねうね動いていたミミズも、ピチピチと跳ねていた魚も、どっちも完全に死んでいるようだ。一切動かない。
衝撃なんだけど……。アイテムボックスに生物を入れると死ぬってことだよね？　え、待って、これって人とか入れられるの？
マジで怖いんだけど、そんなに怖い物だったのアイテムボックスって！？　でも、人で試してみることなんてできないよね。ちょっ、ちょっと待って、転移は大丈夫だよね？

俺はそう思い慌ててもう一匹魚を捕まえて、その魚と共に転移してみた。
すると簡単に転移できて、転移した後も魚は元気にピチピチと跳ねている。ふぅ～、とりあえず良かった。転移は大丈夫そうだ。
問題はアイテムボックスだな。万が一にも間違えて人を入れないように気をつけないと。

……でも、よく考えたら、魔物と戦う時はこれ以上最強の攻撃はないんじゃないか？　だって、触れるだけで収納できて、取り出したら死んでるんだよ？
魔物も収納できるのかな……でも魔物だって、魚とかと一緒だよね。

……いや、違うか。

確か魔物は魔力があるんだ。もしかしたら、魔力を持つものは収納できないとか、そんな性能の可能性もある。もしそうなら、人間にも魔力があるから収納できないことになる。
あれ？　でもそういえば、俺ってあの空間に手を入れられるよね？　あの空間に入ることってできるのかな。

思いついたらかなり気になる。とりあえず、どこまで入れるのか実践してみよう。試してみないと、怖くてこれから使えなくなりそうだ。
俺はアイテムボックスの入り口を作り出して、慎重に、かなり慎重に、手を入れていった。いつも無造作に手を突っ込んでいたけれど、先程の魚たちをみたら怖くて慎重になってしまう。
でも、自分の魔法で死ぬことはないと思うんだ。そう考えつつ慎重に手を奥に入れていくと、肩の少し手前ぐらいのところでそれ以上入らなくなった。

両手を入れてみると、肘ぐらいまでしか入らない。

はぁ～、マジで良かった。多分俺が入れる体積が決まってるんだな。ということは、万が一にも俺がアイテムボックスに入って死ぬことはないってことだ。本当に良かった。

後の問題は人と魔物が入れられるかだけど、とりあえず魔物の森に行けた時に、魔物を入れられるか試してみよう。もしそれができたら人も入れられる可能性が高い。

もしできたら魔物を簡単に倒す手段になるけど、それでも魔物が入らないことを願っちゃうよ。だって人間も入れられるとか怖すぎる。

とりあえずこれからも便利だから使うけど、細心の注意を払おう。

１６７、魔法の検証　後編

「さむっ」

急に寒気がしてきた。さっき水でびしょ濡れになったことと、アイテムボックスの怖い性能の為だ。

どうしよう、この服乾かさないと。火魔法と風魔法で乾かすか……。それまで全裸とか嫌だけどしょうがないな。

そう考えて服を脱ごうとしたところで、ふと思いつくことがあった。

そういえば、ウォーターボールを川の水で作れるんだから、服の水気を取り出すこともできるんじゃないか？

というか、火魔法も火があればその火を使ってファイヤーボールを作れるんだよね？　それなら、例えば火事になったとして、火を制御して消すこととかできるんじゃないのかな？

なんか俺って、全属性のことや馬鹿みたいな魔力量がバレないように気をつけてるから、魔法のことをちゃんと探究したことってなかったかも。こうしていざ、魔法の検証をしていると、次々と疑問が浮かんでくる。

回復魔法だけは使えるから色々な魔法を作り出したけど、他の属性は殆ど手付かずだったよな。ついでだから、思いついたことは色々試してみよう。

そう考えて、とりあえず服の水分を集めるようにイメージして、魔法を使ってみることにした。

服に含まれた水分を、一箇所に集めるイメージで……

……うん、出来るみたい。

めちゃくちゃ簡単にできてびっくりした。今着ている服は完全に乾いていて、空中には服から集めた水が小さなウォーターボールとなって浮かんでいる。

髪の毛も乾かせるかな？　そう思って髪の毛にも同じように魔法を使ってみる。すると髪の毛も簡単に乾かせた。

この魔法、めちゃくちゃ便利じゃん。髪の毛を乾かすのに手間取ってた今までは何だったんだ。冬とかかなり寒かったのに。

でも、こんな魔法のこと一般的に知られてないよね？　公爵家でも聞いたことないし、王立学校でも聞いたことない。何でだろう……？

まあ確かに、細かい魔法だから魔力の消費量は多い。だから他の人にはできないのかな？

うーん、最近は自分の魔力量が増えすぎて、一般の人の魔力量がよくわからなくなってるんだよね。俺にとっては微々たる魔力でも、普通の人にとっては不可能な魔力だったりする。

そう考えると、他の人にはできない可能性もあるな。

あと考えられるのは、わざわざ魔法で乾かす必要はないっていうのもありそう。干しておけば自然に乾くのに、そんなに沢山の魔力を使う必要はないよね。

普通の人にとって魔力は貴重だから、魔法を使わなくても簡単に代用できることには魔法を使わないのが普通だ。

そう考えると、この使い方は普及しないのかも。

でもこの魔法、魔力量が馬鹿みたいに多い俺にとっては、かなり便利な魔法だ。とりあえず、髪の毛を乾かすのには毎日使おう。

そう結論づけて、服から取り出した水分を川に戻した。
そして次は火魔法の検証をしよう、そう思ったところでふと、川を泳いでいる魚が目に入った。
そして、少し怖いことを思いついてしまう。いや、かなり怖いことかも。

……さっきの魔法なんだけど、もしかして、もしかして何だけど、生き物の水分も取り出せたりする？

そう思いついてしまった。
もしできたら……凄く怖い魔法になりそう。何でこんなこと思いついちゃったんだ！　でも、怖いけど試さないわけにはいかない。一度思いついちゃったら気になるし……
と、とりあえず、まずは植物で試してみよう。俺はそう思って、近くにあった木に手をかざして、木の中の水分を取り除くイメージで魔法を使ってみた。すると魔法が発動しない。

はぁ～、とりあえず良かった。また怖い魔法を生み出したかと思った。
その後色々と試してみた結果、切られた木の枝や葉っぱ、死んだ魚や虫などの水分は取り出すことができた。
もちろん血も取り出すことができたよ。うん、やっぱり怖い魔法かもしれない。でもまあ、生き物に使えないなら良いよね。逆に倒した動物の血抜きとかは簡単に出来るし、ポジティブに考えよう。

とりあえず水魔法の検証は終わり！　もう水魔法怖い。水魔法ってかなり色々出来るんだな。というか、こんなに色々出来るのに、何で水魔法で温かいお湯が作り出せないのか不思議だ。
前に水魔法で常温以上の水を作り出せなくて、なんとか試行錯誤したけど、火属性の魔力も使えば熱湯を作り出すことはできた。

でもそれって俺が全属性だからできることで、他の人にはできない方法だからな……。魔法って便利なのか便利じゃないのかよくわからない。

まあ、便利なのは確かなんだけど、融通がきかないところも結構ある。

俺の予想では、水属性は温度を下げることはできるけど上げることはできない。逆に火属性は温度を上げることはできるけど下げることはできない。

でもこの法則なら水魔法で氷を作れても良いと思うけど、水魔法で作り出せるのはあくまでも液体なんだ。やっぱり融通がきかない。

本当に魔法ってわからないことだらけだよね。まあ俺からしたら、こんな不思議な力があること自体がおかしいから、深く考えるだけ無駄なのかもしれないけど。

だってイメージで魔力消費量が減るとか、普通に考えておかしいよね。最初はこの法則を発見してテンション上がってたけど、考えれば考えるほどイメージで魔力消費量が減るとか曖昧な基準すぎる。

そもそも魔法がある世界なのに、日本の知識がここまで使えるのも不思議だ。そもそも空気中に酸素があるのかどうか、火が燃える時に酸素が必要なのかどうか、そもそも人間は酸素を吸っているのか、その辺が実際のところどうなっているのかさえわからないんだ。

魔力なんてものがあるし、人は魔素を吸って生きています、火も魔素を使って燃えていますとか言われても驚かない。

まあ、空気中の酸素をイメージすると火魔法の消費魔力量が減るから、多分酸素はあるんだろうけど……。もしかしたら酸素と思ってるものが酸素じゃない可能性もあるよね。どこまで地球と同じなのかは疑問だ。

こうして考え始めたら、魔法って疑問だらけで考えれば考えるほ

どドツボにハマる。正解なんてわからない。
もう深く考えるだけ無駄だよなぁ。調べることもできないし、自分で究明しようってほどの熱意もないし。
結局俺にとって重要なのは、何故そうなるかの理由じゃなくて、これをしたらこうなるという事実だけなんだよね。
だから、うん……、とりあえず考えるのをやめよう。俺にこの疑問の答えを見つけることは不可能だ。それこそ神のみぞ知るだな。

俺はそう結論づけて、とりあえず魔法の検証に戻ることにした。後は火魔法の検証だけだな。火をコントロールできるのかどうか、もしこれができたら火事の時に使えて、被害を減らせるはずだ。
俺はまず、近くの枝や枯れ草をかき集めてそこに火魔法で火をつけた。そして火がついたら魔力の供給を止める。
火魔法で火をつけても、魔力供給を止めた後は魔力は消費していないので、今現在枝が燃えているのは純粋に魔法とは関係ない火となる。
よってこれをコントロールできれば、火事の時に使える魔法になるはずだ。

そう思って俺は今燃えてる火を使って、ファイヤーボールを作り出してみた。するとファイヤーボールは簡単に作り出せる。しかし枝が燃えているのはそのままに、もう一つファイヤーボールが作り出されただけだ。
一瞬火の勢いは弱まったけど、すぐにまた燃え上がってしまう。
うーん、このやり方じゃダメなのかな。次はファイヤーボールを作るんじゃなくて、魔力でコントロールして火そのものを消滅させてみよう。そう考えてしばらく頑張ってみたけど、全く出来ない。
火を動かすことはできるけど、火を消すことはできないのだ。

うーん、何でだろ。でもよく考えてみると、実際の土を使って魔力で作った石は消せないけど、魔力だけで作った石は消せる。水も同じだ。川の水で作ったウォーターボールは消せないけど、魔力で作ったウォーターボールは消せる。そう考えると、火を消すことはできないのかもしれないな。

じゃあ、やっぱり火事の時は水で消すしかないんだな。

魔法も万能のように見えて万能じゃない。そこが面白いけど面倒くさいところでもある。まあ、なんでもイメージ通りに魔力さえあればできたら、それは魔法最強すぎるか。ちょっとは不便なところがあるぐらいの方が面白いよね。

とりあえず色々検証したから、忘れないように今日のまとめを書いておこう。

俺はそう思ってアイテムボックスからペンと紙を取り出した。

まずはアイテムボックス。

今日の成果としては生き物を入れることが可能、しかし入れた生き物は死んでしまう。自分はアイテムボックスに一定以上入ることはできない。

今後の課題は魔物と人を入れられるのか。とりあえず魔物を入れられるのか検証する。

次は転移魔法。

今日の成果としては魔力さえあれば長距離転移も可能。大きな物も沢山の物も一緒に転移可能。しかし物だけを転移させることは不可能。また、生き物と一緒に転移することは可能。

今後の課題は、人と一緒に転移できるかどうか。

後はその他の魔法属性について。
とりあえず今日わかったことは、土魔法で鉄が作り出せること。水魔法で物に含まれた水分や、死んだ生物の水分などを取り出すことが出来ること。しかし生き物の水分を取り出すことはできないこと。

これぐらいかな。うん、予想外に怖い検証結果のものもあったけど、かなり有益な検証ができたと思う。
これからはもっと魔法も使って、魔法で色々と試してみよう。俺の魔力量があればかなり便利な使い方ができそうだ。

そこまで書いたところで、ペンと紙はアイテムボックスに仕舞い、俺は思いっきり伸びをして息を吐き出した。疲れたし、もう暗くなってきたから帰るかな。
家に直接転移したいけど、突然俺が家の中に現れたら不審に思われるだろう。ここは走って帰るか。
そう考えて、俺はまた体力作りのランニングをしつつ家に帰った。

もうこんなに魔法が使えれば、体力作りなんて必要ないんじゃないかと思いつつも、とりあえずは続ける予定だ。もしかしたら、そこが生死を分けることもあるかもしれないし、剣で戦う可能性もあるからね。
まあバリアと魔法が、あれば負ける気はしないんだけど。でも魔物の森とか何がいるかわからないし、俺が予想もつかない敵がいるかもしれない。
とりあえず鍛錬は続けよう。そんなことを考えながら、家まで走り続けた。

１６８、カツサンドについての相談

魔法の検証も終えて、そろそろマルセルさんのところに行って冷蔵設備の開発をしないとだな。そう考えていたある日の午後。

とりあえずマルセルさんの工房に行こうかと思っていたら、母さんと父さんに呼び止められた。

「レオン、実はレオンに相談があるのよ。聞いてくれる？　今日は何か予定があるの？」

俺に相談って何だろう。別にマルセルさんのところに行くのは今日じゃなくても良いし、とりあえず二人の話を聞こうかな。そう思って俺は返事をする。

「今日必ずしなきゃいけない予定はないし、もちろんいいよ。でも俺に相談ってどうしたの？」

「実はカツサンドのことについて、相談があるのよ」

「カツサンド？　確かかなり売れてるんだったよね？　持ち帰り限定で販売してるんでしょ？」

俺が首を傾げてそう言うと、父さんが困ったような顔で口を開いた。

「そうなんだけど、最近は他のお店にも真似をされて以前ほどは売れなくなってるんだ。だから何か良い案がないかと思って。カツサンドを考えたのはレオンだろう？　父さんと母さんで他の種類も考えてみたんだけど、カツサンドを超えるものは作れてないんだ」

「そうなのよ……。そこまで欲張らなくて良いかとも思ったんだけ

ど。やっぱりこのチャンスを逃さずに、もっと売れる商品を増やせたらいいと思って。それに、レオンのレシピは売らないと勿体無いわ。スイーツのお店はやるって言ってたけど、食事は出さないんでしょう？」

確かに食事も色々と思い浮かぶものはあるけど、お店としてやる予定はない。そう考えると、うちの食堂のメニューにするのが一番良いのかも。チャンスを逃すのはもったいないし、うちの食堂がもっと人気店になってくれたら嬉しいし。

でも、真似されるのは仕方がないよなぁ。カツはすぐに真似できるような物だし、そのカツをパンに挟むだけだからね。トマトソースもありふれた物だし。うーん、カツサンドを超えるものって言われても難しい。

そもそもこの世界って、元々サンドウィッチはあるんだよね。この辺では見たことないけど、中心街のおしゃれなカフェではあったりする。

確か王立学校の入学式でも出たよね。そのサンドウィッチは確か……、いくつかの野菜と肉の塩焼きを挟んだ物だったはず。

となると、もっと変わり種があった方が面白いだろう。

うーん、卵サンドはやっぱりマヨネーズが欲しいし、ツナは無理だし、照り焼きもソースがないし……、難しい。

後は……そうだ、コロッケなんていいかも！

コロッケなら、カツサンドと同じトマトソースで良いよね。カツとはまた違う味と食感で美味しいかも。それにカツよりも重くないから、カツサンドが重すぎる人にも食べてもらえるかもしれない。

というか、俺も久しぶりにコロッケ食べたい！

「母さん父さん、一つ思い浮かぶものがあるんだけど、試しに作ってくれる？」
「本当かい？　もちろん作るよ」
「さすがレオンね！　レシピを考えることに関しては天才だわ」

母さんと父さんがそう言って、笑顔で俺の頭を撫でてくれる。なんか嬉しい。母さんと父さんに褒められるの嬉しい。よしっ、頑張って思い出して作ろう！
そう気合を入れて、俺は二人と共に厨房に向かった。

「レオン、それで必要な材料は何だい？」
「えっと……」

確かコロッケは茹でたジャガイモを潰したやつに、ひき肉と玉ねぎを入れて……、後はカツと同じように揚げれば良いはず。
他に何か入れるんだっけ……うーん、思いつくものといったらにんにくとかバターとか、後はにんじんとか？
まあ、何を入れたら美味しくなるかは試行錯誤して貰えば良いか。基本だけ教えることにしよう。

「とりあえず、一番重要なのはジャガイモで、後は細かくしたお肉と玉ねぎ。お肉と玉ねぎを炒める時に、バターで炒めるとより美味しくなるかも。それから、にんじんとか他の野菜もお好みで入れたら美味しくなると思う」
「それなら材料はあるわね。でも、玉ねぎは一年中手に入れるのは難しいわ。ジャガイモなら保存できるかしら？」
「そうだね。ジャガイモは保存して一年中出すこともできるかもしれない。でも玉ねぎは流石にそこまで保存はできないね」

そうか、そうだよ。この世界はいつでも野菜を手に入れられるわけじゃないんだった。完全に忘れてた。
でもジャガイモが手に入るなら、その時期で手に入るものを使っても美味しくできるはずだ。

「ジャガイモとお肉があれば、とりあえず美味しくなると思うよ。後はその季節の野菜を使って作れば良いと思う。あと、ジャガイモをカボチャに変えてもいけるかも！」

確かカボチャコロッケもあったよね。コロッケとはまた違う甘さがあって、カボチャコロッケも美味しいんだ。

「じゃあ、母さんと父さんで色々と試してみるわね」
「うん！　色々とアレンジできると思うからやってみて。じゃあ、考えた中で一番基本的な作り方だけ教えるね。まずはじゃがいもを茹でて、細かく潰すんだ」
「ジャガイモを茹でで潰すのね。じゃあそれは母さんがやるわ」
「うん。その間に父さんは、牛肉と豚肉を細かくしてくれる？」
「細かくってどのくらいだい？」

そう言われると……、どのぐらい細かくすればミンチになるんだろう。まあ、みじん切りぐらいかな。

「うーん、みじん切りぐらいかな。どのぐらいがいいかは後で色々やってみて」
「わかった。じゃあ、後で試してみよう。レオンも味見を頼んだよ」
「もちろん！」

そうして、母さんがじゃがいもを茹でて潰していき、父さんがミンチ肉を作っていく。

最初に終わったのは父さんだ。

「レオン、このぐらいの量でいいかな？」

「うーん、多分良いと思う。じゃあこの肉とみじん切りにした玉ねぎを一緒に炒めてくれる？　今回はバターなしで、他の野菜も入れないでね。味付けは塩でお願い」

「みじん切りの玉ねぎを入れてバターはなしで、味付けは塩だね。じゃあレオン、そこの玉ねぎとって」

「はーい」

ジャガイモってバターがめちゃくちゃ合うし、バターで炒めたら美味しいと思う。でもバターは安いものじゃないから、使わなくてよければその方が良いだろう。

「レオン、そこのフォークを取ってくれる？」

「これ？」

「そうよ」

「レオン、こっちにそこの塩も取ってくれるかい？」

「はーい」

そうして俺も二人の手伝いをしつつ、コロッケ作りは着々と進んでいった。

「よしっ、ジャガイモはできたわ」

「こっちも炒めたよ」

「じゃあ次だね。次は父さんが炒めたものを、母さんが潰したジャガイモに混ぜるんだ。そして混ぜたら塩で味を整えて、手のひらサイズの楕円形に固めたら、それをカツと同じように揚げるの」

俺はそう説明しつつジャガイモを混ぜていき、混ぜたものを成形

しようとジャガイモを手に持つ。

「あ、熱っ、熱いっ！」

手に持とうと思ったら熱すぎて無理だった。まだこんなに熱いなんて予想外だ。めちゃくちゃびっくりした。

「レオン！？　大丈夫？」
「火傷してないかい！？」
「うん、大丈夫だよ。何とかセーフ」
「良かったわ。気をつけなきゃダメよ」
「はーい」

それから少し冷めるまで待ち、気を取り直して成形していく。

「こんな感じで楕円形に成形していくんだ。でも形はどんなのでも良いと思う。そしてこれに小麦粉と卵とパン粉をつけて、揚げれば完成だよ。ソースはカツサンドと同じで良いと思う！」
「わかったわ。じゃあ私が成形するから、ジャンは揚げる準備をしてちょうだい。ソースもよろしくね」
「わかったよ」

そうして役割分担をして調理を進め、ついにコロッケが完成した。

169、もう一つの工夫

「美味しそう！」

さすが母さんと父さんだ。初めて作ったにしてはかなり良く出来てると思う！　形も綺麗だし揚げ上がりも完璧だ。

「味見してみましょうか」

「うん！」

母さんのその言葉を聞いて、俺は揚げたてのコロッケにガブっとかぶりついた。まずはソースをつけずにそのままだ。

「あっ、熱っ……、はふっ、ふ……うん、美味しい！！」

めちゃくちゃ熱かったけど凄く美味しい。衣はサクサクで中はホクホク、味はしっかりとついている。肉の旨味も出てるしマジで美味しい。

次はソースをつけて……ザクッ、うぅ～ん！　めちゃくちゃ美味い！　このソースが凄く合う。これは絶対に売れる、絶品すぎる。

「母さん父さん、すっごく美味しいよ！」

「ええ、本当に美味しいわ。母さんはカツよりこっちの方が好きね」

「父さんも凄く好きな味だよ。これは確実に売れる」

「本当？　良かったぁ」

「レオンは本当に天才だね。そうだ、この料理の名前はもう決めてあるのかい？」

「うん！　コロッケって名前にしようと思って。だからパンに挟ん

だらコロッケサンド！」

何の捻りもないそのままな名前だけど、まあそれが一番覚えやすくて良いよね。

「コロッケね。これからはカツサンドと並んで人気商品になるわよ」
「早速明日から始めようか。とりあえずジャガイモを沢山買ってこないとだね。後、お肉はみじん切りにしちゃうから、切れ端とかでも良いと思うんだ。安く売ってもらえるように交渉しないと」
「私に任せなさい。そういうのは大得意よ！」
「ふふっ、確かにロアナは買い物が上手いよね」

母さんと父さんは、早速明日からコロッケサンドを売り出す話し合いを始めている。
でも、コロッケサンドもいずれは真似されるよね。もう真似されることは仕方がないんだけど、それでもこの食堂が発祥だとわかると良いよな。
何か印をつけたりしたら良いのかな？　日本だったら包装紙に店名を印字するけど、包装紙なんてないし。そもそも店名もないから……。うーん、何が良いだろう。

……パンに焼印を入れるとか？

うん、それありかもしれない！　他のお店と差別化できるだろう。どういう焼印が良いかな。何かのイラストかそれとも文字か。
いっそのこと、漢字っていうのもありかも。俺が書いた文字は全てこの世界の文字に自動的に変換されちゃうけど、文字を書くというよりイラストを描くという感じで漢字を書くと、漢字も書けるんだよね。気づいた時は全く役に立たないと思ってたけど、こういう時には使えるんだな。

漢字って他の国の人が見たら、絵みたいだって言われてたし。
後は何の漢字が良いかだな。サンドだから『挟』とか、揚げ物だから『揚』とか。
うーん、なんかしっくりこない。お店の『店』、食堂の『食』や『堂』……
……そうだ、『族』にしようかな！
家族の族だし、一族や貴族にも使われるから、何となく繋がりとかの意味がありそう。
うん、『族』にしよう！　画数も多いし何となくかっこいいだろう。
焼印は俺が魔法で作るとして、問題は鏡文字にしないといけないことだよね。族の鏡文字は……
ダメだ、何かに書かないとわからない。
「母さん父さん、他のお店に真似される対策としてもう一つ案があるんだけど、それを作ってくるからちょっと待ってて！」
俺は二人にそう言って、中庭に来た。そして地面に族の鏡文字を書いていく。
えっと、こうなって、こうなって……あれ？　なんか違うかも。こうして、こっちに線が来て……、待って、めちゃくちゃ難しい。
こうなったら鏡を使おう。俺はアイテムボックスから鏡を取り出して、地面に書いた『族』の字を映し出してどうなるのか確認した。
そして鏡を見ながら、また地面に鏡文字を書いていく。
うん、できた！　後はこれを鉄で作れば良いだけだ。この前魔法の検証で鉄を作ってみて良かった。早速役に立つ時が来たな。

大きさは手のひらの半分以下ぐらいで、漢字の部分が飛び出るように、そして持ち手部分は鉄じゃ無くて石が良い。文字はこれだ。俺は頭の中で構造をイメージしつつ、地面に書いた文字をじっと見てイメージを膨らませていく。

そしてイメージが固まったところで魔法を使う。

うぅ……やっぱりめちゃくちゃ魔力を使う。

ただ鉄の塊を出すより、細かいものを作る方が倍くらい魔力を使うかも。

……はぁはぁ、一気に魔力を使うと疲れる。

でも作れた！　魔力は後一割ぐらいしか残ってないけど、完成したからよしとしよう。

うん、見た目は完璧だ。後は使ってみてだな。

俺は疲れたのでピュリフィケイションを自分で使わずに、アイテムボックスから連結魔石を取り出して、そこにピュリフィケイションの魔法を少しだけ込めて、魔法具でピュリフィケイションを使った。この方が少ない魔力で魔法が使えるのだ。

そうして今作った焼印と自分の手を綺麗にし、厨房に戻った。

「母さん父さん、出来たよ！」

「レオン、それどうしたの？」

「それはなんだい？」

「これは焼印だよ」

「焼印って、なんなの？」

え？　この世界に焼印ってないんだっけ？

確かに、思い返してみると見たことないかも。日本だとお饅頭とかどら焼きとかにもよく使われてたけど、そもそもお饅頭なんてな

いからな。
家具とかにも使われてないっけ？
……いや、確か公爵家の家具には焼印がされているものもあった気がする。多分、高級なものにしかされてないんだな。
そう考えるとうちのパンに焼印して大丈夫かな？　まあ、食べ物にしてるのは見たことないし大丈夫か。

「焼印は文字とかイラストを転写するものなんだ。これは鉄で出来てるから、火で熱してパンに付ければパンにこの形が描けるんだよ」
「そんなものがあるのね。でもいつそんなものを買ったの？　高かったんじゃない？」
「ううん、俺が作ったから大丈夫。俺って他の人より魔法が得意でしょ？　だから作れるんだ」

俺がそう言うと二人はかなり驚いた顔をしたけれど、すぐに納得してくれた。
母さんと父さんには全属性のことも明かしてるし、魔力量が多いことも明かしてるから隠さなくて良いのは楽だ。二人は絶対に言いふらしたりしないし。
最近隠すのが面倒くさくなってきて、早くどこでも魔法が使えるようになりたい。

「レオンは本当に凄いわね。でも何回も言ってるように、他の人に安易に言っちゃダメよ。レオンなら危険な目にあっても大丈夫なのかもしれないけど、それでも心配よ」
「そうだよ。もしレオンの力を知った人がいたら、危険な目に遭うのかもしれないからね。気をつけるんだよ」
「うん！　ありがと！」

純粋に俺のことを心配してくれると、本当に嬉しいな。俺は思わず顔が綻んでしまう。

「じゃあ話を戻すけど、この焼印でパンに印をつければ、カツサンドとコロッケサンドの発祥はうちのお店だって、お客さんに印象付けられると思うんだ」

「確かにそうね。コロッケもそのうち真似されるでしょうし、それは良いかもしれないわ。他に焼印なんてやっているところはないから、確実に目立つわね」

「レオン、パンに印をつけてみてくれないかい？」

「うん！」

父さんにそう言われて、俺は焼印を火で炙ってパンにジュッと押し付けた。

おおっ、結構綺麗についた！　完璧だ！

「こんな感じ！」

「なんだか……、不思議なイラストね。これは何なの？」

「深い意味はないんだけど綺麗かなって思ったんだ。どう思う？別のイラストの方が良い？」

「いや、父さんはかなり好きだな。カッコいい感じだよ」

「確かにそうね。この印をお店の外にも印字したらどうかしら？」

二人とも気に入ってくれたみたいだ。良かった。

「確かにこの印の看板を作ったら良いかもしれないね。ベンに作ってもらおうか」

ベンって隣のおじさんだよね？　おじさんそんなこともできるんだ。

「おじさんって看板とか作れるの？」
「そうだよ。手先が器用で上手く作るんだ。仕事ではやってないけど知り合いのとかはよくやってるよ」
「そうなんだ。凄いね」
「今度頼みましょう」
「じゃあ、この焼印は採用？」
「もちろんよ。レオン本当にありがとう。母さんたち頑張るわ」
「レオンには本当に助けられてるよ。ありがとう」

そう言って俺の頭を優しく撫でてから、母さんと父さんは焼印を押す仕事はいつやるか、パンの両方につけるかなど色々と話し合いを始めた。
うちの食堂の役に立てて良かった。

「あっ、そうだ。もし壊れちゃった時のために何個か作って、二階の部屋に置いておくね」
「ありがとう。厨房で使うものが置いてある場所に置いておいてくれるかしら？　新しい布で包んでおくのよ」
「うん！　一日に一個しか作れないからまた明日作るよ。じゃあ俺はリビングで休んでるね」
「ええ、ありがとう。そうだ、まだお腹は空いてる？」
「うん、まだまだ食べられるよ」
「じゃあ、コロッケサンドを一つ作るからおやつで食べなさい」
「本当に！？　ありがとう！」

そうして俺はコロッケサンドを一つもらってリビングに戻った。
ちょうどマリーが出かけてる日だったから、帰ってきたら大はしゃぎだろうな。
コロッケに大騒ぎするマリーの様子を思い浮かべて、幸せな気持

ちになりながらコロッケサンドを食べた。
うん、最高に美味い。幸せだ。

１７０、冷蔵設備の開発　前編

コロッケを作った次の日。
俺は今日こそマルセルさんの工房に行こうと決めて、お昼の後に家を出た。今は工房に向かっているところだ。
今日のお昼ご飯はコロッケサンドだったんだけど、やっぱりめちゃくちゃ美味しかった。マリーは予想通り大興奮で、かなり気に入った様子で食べていた。
多分しばらくはコロッケ三昧の食事になるんだろうな。母さんと父さんも、もっと美味しくできないか気合を入れて開発してたし、しばらくはコロッケの味見と余ったコロッケの食事になりそうだ。
そこまで食べたら流石に飽きるだろうけど……まあ、仕方ないよね。

そんなことを考えつつマルセルさんの工房まで歩き、工房に辿り着いた。なんか久しぶりだ。
俺は少し緊張しつつドアをノックして、マルセルさんに呼びかける。

「マルセルさんこんにちは！　レオンでーす」

俺がそう呼びかけると工房の中からバタバタと人が走る音が聞こえ、すぐにドアが開きマルセルさんが顔を出した。

「レオン、何でここにいるんじゃ！？」
「え、な、何でって……、夏の休みで実家に帰ってきてるんですよ？」

俺がマルセルさんの勢いに驚きつつそう答えると、マルセルさんは何かに気づいたような顔をして大きく息を吐いた。

「はぁ～、確かにそうじゃったな。夏の休みなんてすっかり忘れてたわい。レオンがここにいるなんて、何か問題があったのかと驚いたぞ」

「驚かせてごめんなさい？」

「まあいい、わしが勘違いしただけじゃからな。入って良いぞ」

「はい。ありがとうございます」

マルセルさんはそう言って工房の中に戻っていく。何か帰ってきてから皆に驚かれてるよな。そんなに問題を起こしそうだと思われてるのか……、ちょっと落ち込むぞ。

「それで、今日は何か用があるのか？」

「マルセルさんに会いにきたっていうのもあるんですけど、一つ相談があって」

俺はいつもの定位置に座りながらそう答えた。

「相談って魔法具か？」

「はい。魔法具というか、もし魔法具を使わなくても作れるのならそれでも良いんですけど……」

「どういうことじゃ？」

「実は、今度スイーツの専門店を始めるんです。なので、そのお店に冷蔵設備を取り入れたいと思っていて……」

「まっ、待て！」

俺が説明を始めたら、すぐにマルセルさんに止められた。まだ何も言ってないけど？

「何ですか？」
「レオンがお店を始めるのか？」
「そうなんです。スイーツの専門店にする予定で、スイーツってすぐに傷むので冷蔵設備が必須なんです」
「そ、そうか……。わしはレオンが店を始めることに驚いてるんじゃが、まあ、レオンなら店ぐらい始めるか。確かに店を始めるぐらい、今までやってきたことと比べたら、普通のことじゃな。うん、そうじゃな」

マルセルさんはそう自分に言い聞かせて、自分を納得させているようだ。
そんなに驚くことだろうか？　マルセルさんなら俺がどれだけお金を持ってるのかも知ってるし、公爵家にいることも知ってるのに。お店ってなるとまた違うのかな？

「そんなに驚きますか？」
「いや、よく考えたらレオンじゃし、そこまで驚くことではないな。ただ、スイーツ専門店というところにはそれでも驚くぞ。甘いもの以外は売らないということか？」

そうだった。この世界はケーキ屋とかないもんね。

「はい。基本的にはスイーツだけを売るお店にしようと思っています」
「そうか、それで冷蔵設備が必要なんじゃな」
「そうなんです。スイーツは傷みやすいので冷蔵設備が欲しくて……。何とか氷を使って冷蔵設備を作れないかと思っています。特にガラス張りの箱の中を冷やせるような冷蔵設備が理想です。ただガラス張りは難しそうなので、最悪は断念するのでも構いません」

実は実家に帰る直前にガラス工房から連絡が来て、一応ガラスのショーケースは完成してるんだ。今はお店の中に置いたままにしてある。

見た目はかなり良くて使えるかと思ったけど、意外と隙間があって、特にケーキを出し入れする取り出し口のところに隙間が多かった。氷を入れて冷やしてみたけど、冷え方は微妙だったし氷はすぐに溶けて湿度が凄かった。結露も凄かったんだよね。

まあ結露は室温を調整したり、この前開発した水魔法で水分を取り除いたりで対処出来るだろう。でも隙間はどうにもならない。

ガラス工房の人は傑作だって感じだったし、あれ以上は難しいのだろう。そうなると、やっぱりガラスのショーケースは難しい気がする。

「また難しいことを……」

「すみません。氷で出来たらいいんですが、もしそれが出来なければ魔法具を使ってどうにかならないかなと思いまして……」

俺がそう言いつつマルセルさんをチラッと見ると、マルセルさんは仕方がないというような様子で頷いてくれた。

「わかった。わしも考えてみよう」

「本当ですか！？　ありがとうございます！」

やっぱりマルセルさんは優しい。いつも助けてくれて、本当にありがたい。何でも相談できるお爺ちゃんって感じで、落ち着くんだよな。

「さっきガラス張りの箱と言っていたが、なぜガラス張りなんじゃ？」

「はい。お店のカウンターにガラスの箱を置いて、その中にスイーツを展示したいと思っています。そのためガラスの箱の中を冷やしたいんです」
「またお主は、奇妙なことを考えるな」
「変でしょうか？」

俺がそう言うと、マルセルさんは少しだけ考え込んだあと、首を横に振った。

「いや、もし作れたらお店の目玉となるじゃろう。貴族は新しいものが好きだし流行りそうじゃ」
「本当ですか！？」

マルセルさんがそう言ってくれるなら、作れたら上手くいきそうだ。そうなると、やっぱりガラスのショーケースは諦めたくない。

「ああ、それでガラスの箱は作ってみたのか？」
「はい。大きいのでお店に置いてありますが、大きさはここからその辺りぐらいまでの横幅で、高さは俺の身長より少し小さいぐらいです」
「それはまた、随分と大きいな」
「カウンター代わりにもしようと思って、その大きさになりました。そしてできる限り隙間をなくしてもらうようにお願いしたのですが、やはり難しいようで繋ぎ目部分に隙間が多いんです」
「まあ、そうじゃろうな。中に氷を入れてみたか？」
「はい。冷えることには冷えたのですが、スイーツを保管するには微妙な温度で、さらに湿度が凄くて結露も凄くて……」

問題点が山積みすぎて、どこから改善していけば良いのか途方に暮れたんだよね。そしてとりあえずお店に設置して、実家に帰って

きた。時間をおけば良いアイデアも浮かぶかなと思ったのだ。まあ、現実逃避とも言う。

でも実家に帰りつつ、隙間時間にどうすれば良いのか少しは考えてみた。そこで辿り着いた結論は、やっぱりとにかく密閉すること。とりあえずしっかり密閉すれば、冷えるようにはなるだろう。

でも、その密閉がかなり難しい。隙間に布を詰め込むとかも考えてみたけど、貴族向けのカフェに不恰好すぎるし、中身を取り出すのも仕舞うのも大変すぎる。

さらに結局は、密閉できたとしても湿度の問題は解消されない。というかそもそも、スイーツって湿度があったほうが良いのかないほうが良いのか、どっちかわからない。

湿度がなさすぎても乾いちゃう気がするし、ありすぎたらびしょびしょで美味しくなくなる気がする。

やっぱり問題点が多すぎて大変だ……

と、そこまで考えたところでマルセルさんが口を開いた。

「まず一つ聞くが、予算は考えなくて良いのか？」

「はい。とりあえず考えなくても大丈夫です」

「それならば、密閉性の問題はすぐに解決する。魔鉄を使えば良いんじゃ」

……魔鉄？　確かに、確かにそうだ！　魔鉄なら隙間ゼロも可能だ。

「それはいいかもしれません！　あれ、でもそれだとガラスは無理ってことですよね……」

「いや、そうじゃない。魔鉄を変形する時に、ガラスもはめ込んで変形すれば良いんじゃよ」

「ガラスをはめ込んで……？」
「そうじゃ、ちょっと待っておれ」

そう言ってマルセルさんは、工房の端から一枚のガラスを持ってきてくれた。俺が両手を広げたぐらいの大きさでかなり大きい。

「このガラスを窓にするようにして魔鉄を変形させるんじゃ」

そうか……魔鉄を変形させる時って、魔鉄だけじゃなくて何かに魔鉄を沿わせることもできるんだ。

「やってみます！」
「魔鉄はこれだけあれば足りるじゃろう」

そう言ってマルセルさんが差し出してくれた魔鉄を変形させて、まずはガラスの枠になるように魔鉄を形作った。そしてそのまま魔鉄で箱を作り、ガラスの反対側には全く隙間のない引き戸を作る。

ふぅ～、できた！

「マルセルさんできました！」
「ああ、見事じゃな」

俺の目の前にあるのは、工房の机に何とか載っているサイズの魔鉄の箱で、片面は一面ガラス張りになっている。隙間は全くない。ガラスの反対側は引き戸になっていてスムーズに開くが、閉じると境目がわからないほどにピッタリだ。

俺は日本の記憶から全面ガラス張りに拘ってたけど、確かに中が見えるだけでいいなら一面でも良いんだ！

後ろからは扉を開ければ中が見えるし、スイーツの場所は覚えれば良いだけだ。そうだ、引き戸の一部をガラスにすれば中も見える

ようになるな。本番はその改良をしても良いかも。

こんなに簡単に解決するなんて、やっぱりマルセルさんに相談して良かった！　俺だけだとどうしても日本での記憶に引っ張られるし、そもそも俺はものづくりの知識なんて皆無なんだから。やっぱり本職は違うな。

１７１、冷蔵設備の開発　後編

「マルセルさん、凄いです！」
「そこまで褒められることではないわい。お主の方が余程凄い。それに、これだとただの中が見える箱じゃ。これを冷やすのが難しいんじゃろ？」
「確かにそうでした……」

この中に氷を入れたらそこそこは冷えるはずだけど、やっぱり氷を入れ替える手間があるし、そもそも店頭でお客さんがいるところで、氷を入れ替えてるのもどうなんだろうって思うよね。氷を入れ替えてる時は中の冷気もどんどん逃げていくし。
そうなると、氷を中に入れないで冷たい空気だけを送り込んだ方が良いのかな？　ケースの中に管のようなものを繋げて、その管から冷気が入るようにすればできる気がする。

「マルセルさん、氷を直接中に入れるのではなくて、冷気だけを風魔法で送り込むのはどうでしょうか？」
「確かに……、その方が良いかもしれんな。ただどうやって冷気を作り出すかじゃが……」
「例えばなんですけど、ケースの中に管を繋げてその管の先に氷を入れる箱を作ります。そしてその箱から風魔法で冷気を送り込むのはどうでしょうか？　氷を直接入れるより満遍なく冷えると思いませんか？」

俺がそう言うと、マルセルさんは少しだけ考え込んだ後に頷いた。
「確かに良いかもしれんな。それならば管を二本にして、空気を循

環させるのが良いじゃろう。とりあえず作ってみなければわからんな」
「確かに二本にして循環させるのは良いかもしれません。とりあえず作ってみます！」
「ああ、まずはさっき作ったケースを変形させて、ケースと箱を繋げる管を二本作るんじゃ。そして風魔法を魔石に込めて、ケースから管を通って箱、箱からまた管を通ってケースに空気が戻るように、循環するようしてみてくれ」
「わかりました！　やってみます」

そうして俺は魔鉄をまた変化させて、ケースの右側上部から魔鉄の管が出るようにして、その管の先に大きめの箱を作った。そしてその箱から今度はケース左側下部に管を通す。箱の上部は隙間ゼロの扉にして、氷を出し入れできるようにする。
そして魔鉄部分が完成したら、魔石に風魔法を込める。風魔法は風量を調節して、ケース全体に冷気が回るように、空気を動かすような魔法にしていく。ケースの左側下部から空気を取り込んで、右側上部から空気を排出するようにして……
よしっ、完璧だ！

「マルセルさんできました！　製氷機ってありますか？」
「あるぞ。ついでに魔力を込めておいてくれ」
「わかりました」

そうして俺はマルセルさんから製氷機を受け取り、魔力を満タンまで込めて氷を作った。そしてその氷を先程作った箱の中に入れる。
後は風魔法の魔石をケースに嵌め込めば……

「これで完璧だと思います！」
「じゃあしばらく待ってみて、どれほど冷えているか確認しよう」

マルセルさんはそう言って、俺が作った魔鉄ケースを隈なく観察し出した。俺もそれに倣ってケースを観察する。どこか改善できるところはあるかな……

「レオン、氷が溶けた時の水を排出する設備も必要じゃ」

「あっ、忘れてました。作っておきます」

俺は溶けた氷が一箇所に集まるように少しだけ魔鉄を変形させて、水が外に排出される仕組みを追加した。その下にはとりあえず桶を置いておく。

「他に気になるところはありますか？」

「いや、結構よくできてると思うぞ。ただこれだと、湿度の問題が解決してないな。それに水を排出する場所が隙間となっておる」

確かにそうなんだよね。氷を直接入れてなくても、氷が溶けて冷えた空気を流し込んでるんだから、同じようなことだ。それに水を排出するところは必ず必要だし……

それを解消するとしたら、どうすれば良いんだ？

「確かにそうなんですが、どうやって解消すれば良いのでしょうか？」

「そうじゃな……」

そう言ってから共に考え込むこと数十分。最初に口を開いたのはマルセルさんだ。

「レオン、思いついたぞ！　この管の周りを冷やすのはどうじゃ？　そうすれば中の空気も冷たくなるのではないか？」

「確かに……鉄が冷やされれば空気も冷えますよね！　それなら湿度は上がらないです」
「今ケースの中は冷えてるか？　温度を確認したら次の改良じゃ」
「はい！」

そうして俺は、ケースの引き戸を開けて中に手を入れてみた。するとひんやりとした冷気が漂っている。

「うわぁ……めちゃくちゃ冷えてます。涼しい……」
「本当か？」

マルセルさんも俺の隣にやってきて、ケースの中に手を入れた。

「これは……、良いな」
「これってケースを冷やすのだけじゃなくて、部屋を冷やすのにも使えませんか？」
「確かにそうじゃな……。もしこれから試すものが上手く行った場合は、空気を冷やす機能だけで売れるかもしれんぞ」
「今のこの状態じゃダメなんですか？」
「ああ、これだと氷と送風機で部屋を冷やすのとあまり変わらんからな」
「確かに、そうですね」
「今貴族の間では、氷と製氷機を使って部屋を冷やすのが主流になっているらしいんじゃ。だがその方法には、常に湿度の問題が付き纏う。書物のあるところでは使えなかったりな。そこが改善できれば売れるじゃろう」

そうだったのか。王立学校はまだ送風機だけだったから、貴族の冷房事情は知らなかった。季節的にも一番暑い夏は休みだし。

「じゃあ、管の周りを冷やす方法を試してみましょうか！」
「そうじゃな」

そうしてまたケースを改良して、管の周りを氷で冷やす方法を試してみた。すると結果は大成功！　湿度が高くならずに、ケースの中を冷やすことに成功した。
後の問題は結露だけど、それは水魔法を使っても解消できるし、室温を調節すればそこまで問題にはならないと思う。この方法が成功したから、エアコンのような魔法具も作れそうだし！

「マルセルさん、これならお店でも使えそうです。本当にありがとうございます！」
「役に立てて良かったわい」
「本当に、マルセルさんのおかげです！」
「お主の発想があってこそじゃよ」
「いえ、今回は完全にマルセルさんの手柄です。そうだ、実際にスイーツを入れてどうなるか試してみても良いですか？　明日スイーツをいくつか持ってきます」
「良いぞ。じゃあこれは床に置いておくかのぉ」
「確かに……、これ邪魔ですね」
「そこまで邪魔ではない。床に置いてもらえれば大丈夫じゃ」

こんなにどでかいもの絶対に邪魔なのに……。マルセルさんが良い人すぎる。

「本当にありがとうございます。じゃあ床に下ろしちゃいますね」
「ああ、一人で持てるのか？」
「もちろん、身体強化を使えば楽勝です」

俺はそう言って、全身に身体強化をかけてケースを持ち上げて床

に置いた。
身体強化って魔力量が多いと本当に便利なんだ。こんなに大きいケースがあまり重さを感じないとか、怖いレベルだよね。これに慣れたら絶対に鍛えなくなるから、使うのは最低限にしてる。

「ここで良いですか？」
「ああ、良いぞ」
「じゃあ置いておきます。それじゃあ、また明日来ますね！」
「ああ、待ってるぞ」
「ありがとうございます！」

そうして俺はマルセルさんの工房を出て、家に戻った。

１７２、冷蔵設備の完成

そうして次の日。
午前中にスイーツ作りの準備だけをして、お昼の後に急いでスイーツを作ってマルセルさんのところまで走った。
スイーツはカゴに入れるフリをしてアイテムボックスに入れているので、いくら走っても問題はない。
とりあえず、すぐに作れるパンケーキやクレープを作って持ってきた。

「マルセルさん、レオンです」

俺は工房に辿り着くとカゴをアイテムボックスから取り出して、マルセルさんに声をかけた。すると、マルセルさんがすぐに出迎えてくれる。

「そろそろ来るかと思って準備しておいたぞ。もうケースの中も冷えてるはずじゃ」
「本当ですか？　ありがとうございます！」
「そのカゴの中身がスイーツか？」
「はい。とりあえずいくつか作ってきました」

そうして俺は工房に入り、ケースの中にスイーツを入れた。ケースの中には棚を作ってあったので、いくつかの場所に離して置いてみる。
これで一時間ぐらいは待ちかな。
「マルセルさん、これで一時間ぐらい待って、どうなったかを確か

めてみます」
「ああ、それが良いじゃろう」

じゃあ、その待ち時間何してようかな……。マルセルさんは何してるんだろう？　俺はそう思ってマルセルさんの手元を覗き込んだ。何かを紙に書いてるみたいだ。

「マルセルさんは何をしてるんですか？」
「わしは冷風機を考えてるんじゃ。昨日売れるかもしれないと言ったじゃろう？」
「ああ、部屋を冷やす機能の方ですよね？」
「そうじゃ」
「冷風機って名付けたんですね。管の周りを冷やす方法が成功したので、売れるでしょうか？」
「これは売れると思うぞ。ちょっとこれを見てくれんか？　こんなふうに管の周りを氷で冷やして、さらにその外側を箱で覆えば良いと思ったんじゃ。そうすれば湿度が部屋中に広がらないじゃろう？」

マルセルさんが紙に絵を描きながら、そう説明してくれる。確かにそうすれば、部屋の中には管の中の湿度が上がらない冷たい空気が循環して、湿度が上がった外側の箱の中の空気は密閉されるのか。完璧じゃん！
というかこれ、ショーケースにも適用できるよね。ショーケースの管を冷やす機能の外側も箱で覆って、室内の湿度が上がらないように改良しよう。

「それ完璧だと思います。ショーケースにも応用できますね！　冷風機の形としては、鉄の管を作ってその管を氷で外から冷やす。そして氷の湿度が放出されないように管の周りを箱で覆う。管の両端だけその箱から飛び出るようにして、風魔法で管の中を空気が通る

ようにする。そういうことですよね？」
「その通りじゃ」
「じゃあ、魔法は俺が込めるので作ってみましょう！」
「本当か？　じゃあとりあえず作ってみよう」

そうしてマルセルさんは器用に冷風機を作り出した。やっぱりマルセルさんが魔鉄を変形させる様子は綺麗だ……
俺は魔力量に任せてるから効率も何も考えずに、とにかくグニャグニャにしてから作り上げる。でもマルセルさんは魔力を節約するために、最低限の変形で作り上げるんだ。それが洗練されていて綺麗なんだよな。

俺がそんなことを考えつつマルセルさんの手元に見惚れているうちに、マルセルさんは製氷機を使って氷を作り出して、氷を管の周りの箱の中に入れた。箱は閉めれば隙間が全くわからない、完璧だ。
排水機能もしっかり付いている。排水機能は出来れば外に繋げた方が良いけど、まあ、それは設置場所によっても変わるか。

「レオン、この魔石に風魔法を込めてくれるか？　送風機より少し弱いくらいの風にしてくれ」
「わかりました。……はい、これで大丈夫だと思います」
「ありがとう。ではいくぞ」

マルセルさんがそう言って魔石をはめ込むと、管の中から空気が出てくる。おおっ、既に少し涼しい風だ。

「マルセルさん、完璧ですね！」
「そうじゃな」

返事はそっけなかったけど、マルセルさんは完成品を見て嬉しそ

うに笑った。やっぱり新しいものを作れた時って嬉しいよね！

「これは魔法具登録でしょうか？」
「そうだろう。レオン一人でいけるか？」
「え？　何で俺ですか？」
「これはお主のアイデアじゃろう？」
「いやいやいや！　これは絶対にマルセルさんです！　このケースの冷蔵設備の方もマルセルさんです！」

今回は俺ほとんど何もしてないからね？　マルセルさんがほとんど考えたから！

「だが、お主が冷蔵設備が欲しいと言わなければできなかったし、やはりレオンの方が……」
「それはおかしいです！　とりあえずこの冷風機は絶対にマルセルさんです。それは譲りません！」

俺がそう言ったのに、マルセルさんはまだ納得いかない顔をしている。

「じゃあ、仕方がないから一緒に登録するか？」
「それはっ……」
「レオンと一緒に登録……、それも良いな」

俺が一緒に登録するのも断ろうとした時、マルセルさんが一緒に登録できることに凄く嬉しそうな顔をした。
うっ……そんな顔されたら断りづらいじゃないか！

「レオン、仕方がないから一緒に登録しよう。確かに二人で意見を出し合ったのだしそれが良いじゃろう」

マルセルさんはそう言いながら顔が緩んでいる。断れない、絶対に断れない。そんなに嬉しそうな顔されたら断れないよ！
今回はマルセルさんが一人で登録すべきだと思うんだけどな。……まあいいか。そこまでこだわって、マルセルさんを落ち込ませることでもないだろう。

「じゃあ一緒に登録しましょう。冷風機とショーケース、後は厨房に置く冷蔵庫も作りましょう」
「そうじゃな」

マルセルさんはそっけなくそう答えつつ、顔はすっごく笑顔だ。俺はその顔にいたずら心が湧いて、少しだけマルセルさんをいじることにした。

「マルセルさん、顔がゆるゆるですよ。そんなに嬉しいんですか？」

俺がそう言うとマルセルさんは一気に顔を引き締めた。しかしその後すぐニヤッと俺の方を見て言った。

「孫と一緒に名を連ねられるのは嬉しいに決まってるじゃろう？」
「なっ……」

そんなにストレートに言われると照れる。孫って思ってもらえてるの嬉しいし……。俺がからかってたはずなのに！
俺は顔が少しだけ赤くなるのを感じつつ、話を変えることにした。何が嬉しくてマルセルさんと顔を赤くしなきゃいけないんだ！　どうせなら可愛い女の子とか、俺の天使マリーとやりたかった！
心の中でそう叫んで、気を紛らわせた。

「マ、マルセルさん、冷蔵庫は基本的に木造にするか鉄製にするか、どちらかですよね？　どちらにしても繋ぎ目部分を魔鉄にすれば、密閉にも問題はないですか？」

俺がそう言って話を逸らすと、マルセルさんはニヤッとしつつも俺の話に乗ってくれた。

「そうじゃな。枠の部分だけを魔鉄にしてそれ以外は他の材質で良いじゃろう。鉄板でも木板でも良いな。そこは個人の自由で良い。基本的には木造にして、鉄板を内側に貼るのでも良いな」
「ではそこは選んでもらうとして、基本的な形は作ってしまいましょうか」
「そうじゃな」
「このケースよりも横幅は短くして、縦に長くしたら良いと思うんですけど。流石にこの横幅は邪魔ですよね」
「確かに厨房に置くとしたら、横に長いのは邪魔じゃな。では縦長で作ってみよう。今は木板ならばあるからそれで良いか？」

そうしてマルセルさんと冷蔵庫を作り上げた。うん、完璧だ。これお店の厨房にも入れよう。

「完璧ですね」
「ああ、この三つで登録しようかの。運ぶには馬車が必要じゃな。いや、ここに来てもらう方が良いか……」
「え？　ここに来てもらうことなんて出来るんですか？」
「ああ、魔法具登録も技術登録も、持ち運びが難しい場合は来てもらうことも可能じゃ。事前に申請してお金はかかるがな」
「そうなんですね。そうなると来てもらった方が良いかもしれませんね」
「では申請しておこう。風魔法は知り合いに込めてもらったことに

するから話を合わせるんじゃぞ」
「分かってます」
そうして開発している間に、一時間どころか二時間近く経っていた。
「レオン、もうかなり時間が経ってるぞ。スイーツは良いのか？」
「あ！　開発に夢中で完全に忘れてました……取り出してみますね」
そうして俺は順番にスイーツを取り出していった。カゴにカトラリーも入れてきたので、それを取り出してマルセルさんにも渡す。
「マルセルさんも味見手伝ってください。まずはこれが、管の近くに置いておいたものです」
冷えた空気が出てくる場所に置いておいたものだ。他には一番上の段に置いておいたもの、二段目や三段目、それから空気が管に戻る場所の近くに置いておいたものがある。
それを順番に食べていくと……。うーん、空気の通り道の近くのやつは、ちょっとだけパサパサ気味な気がする。
「マルセルさんどう思いますか？」
「そうじゃな。これとこれ、それからこれの方が美味いな。まあ、そこまで気になるほど変わらないが」
「やっぱりそうですよね」
多分風が直に当たるのがダメなんだろう。ちょっと魔法を調整して、スイーツに直接当たらないようにしよう。
後は使いながら調整だな。もう少し湿度があった方が良ければ、氷が溶けた箱の中の空気を少し入れるとかもありだろう。

「魔法を調節して、スイーツに直に風があたらないようにしようと思います」
「それが良いかもしれんな。後の細かい調節は、使う店ごとにする方が良いじゃろう」
「はい！　後は店で調節します」

そうしてガラス窓付きのショーケース、冷蔵庫、冷風機を作って開発は大成功で終わった。

「魔法具登録をするのは早くて数日後になる。日程がわかったら連絡するので良いか？」
「はい、お願いします。……そういえば、マルセルさんって俺の家知ってましたっけ？」
「そういえば……、知らんな」

マルセルさんはそう言いつつ、愕然とした顔をしている。

「やっぱりそうですよね。そうだ、一度うちに来ませんか？　家族にも紹介したことなかったですよね？」
「……良いのか？」
「もちろんです！」

俺がそう言うと、マルセルさんは今までで一番嬉しそうな顔をして頷いた。

「じゃあ、よろしく頼む」
「はい！　いつが良いですか？」
「わしはいつでも良いぞ」
「うーん、じゃあ明日にしましょう。俺が迎えに来ますね」

「わかった。お主の家族は何人家族なんじゃ？」
「母さんと父さん、それから妹のマリーです。従業員のイアン君もいるかもしれません」
「そういえば、食堂をやってるんだったか？」
「はい！　なので明日の昼営業が終わった後の時間になると思います」
「わかった」

そうしてマルセルさんを家族に紹介する約束をして、俺は足取り軽く家に帰った。

173、マルセルさんを紹介

マルセルさんの工房から家に帰り、母さんと父さんにマルセルさんが来ることを知らせると、一度会ってみたかったと言われてすんなりと了承してくれた。

そうして次の日の午後になり、俺はマルセルさんを連れて実家に向かっているところだ。

「マルセルさん、こっちです」

「レオンの家はこっちにあったんじゃな」

「そうなんです」

「大通りで良い立地じゃな」

「はい！　知り合いの伝手で運良く買えたらしくて、家に井戸もあるんです」

そんな話をしつつ、二人で家までの道を歩いていく。

「そういえば、お主の家族はわしのことをどれだけ知っているんじゃ？」

「そうですね……、確かマルセルさんが魔法具を作ってるということは知ってます。俺がマルセルさんの開発の手助けをして、それでお金をもらったことも。後は……、一緒に中心街に行ったことも知ってますね」

「そうか。お主が王立学校に行くきっかけを作ったと怒られるじゃろうか？」

「え？　何でですか？」

「レオンはわしの工房に来なければ、王立学校に行くこともなかったかもしれんじゃろう？」

確かにそうか……最初はマルセルさんの工房で魔法具と王立学校のことを知ったんだ。それからマルセルさんと中心街に行った時に、フレデリック様と再会したんだっけ？
その辺から王立学校に行く道が拓けたんだよな……

でも、マルセルさんと会わなくても、最終的には王立学校に辿り着いていた気がする。もしかしたら、今より悪い環境だった可能性もあるよな。というか、今より良い環境なんて殆どないし。
マルセルさんを責めることなんて絶対にない。どちらかといえば感謝だ。改めて考えてみると、本当にマルセルさんのおかげで俺は今の生活が出来ている。

母さんと父さんはその辺を詳しく理解してはいないだろうけど、それでもマルセルさんを責めるようなことはないはずだ。母さんと父さんは子供のやりたいことを尊重してくれるし、俺の手助けをしてくれたマルセルさんを悪く言うことはないだろう。

「心配しないで下さい。マルセルさんが悪く言われるなんてことはないです。どちらかといえば感謝されるほうですよ。俺も、本当にありがたいと思っています。マルセルさんがいなければ今の俺はいません」
「そんなことはないじゃろう。お主の能力があれば何でもできる」
「いえ、何も知らない段階で上手く利用されていた可能性もありますし。何かをやらかして捕まってたなんて可能性も……」

そう考えると怖っ……マルセルさんと出会えて良かった。マルセルさんと公爵家の皆さん、本当に良い人たちに巡り会えたよなぁ。もう一生分の運を使ったレベルだ。

「まあとにかく、心配しないで下さい！　もう着きますよ」

そうして実家に着き、俺は食堂のドアを開けてマルセルさんを中に招いた。

「ただいまー。マルセルさんどうぞ」

「ああ、ありがとう。……ここがレオンの家なのか」

マルセルさんはそう言って、食堂をぐるっと見回した。母さんと父さんはまだかな？　俺がそう思った時、廊下と繋がっているドアが開き二人が食堂に入ってきた。

二人は朝からかなり緊張していたけど、今も顔が強張ってなんだかぎこちない動きをしている。

マルセルさんは貴族じゃなくて準貴族だって言ったんだけど、二人にしたら貴族は皆同じらしい。

「初めまして、レオンの母です。いつもレオンがお世話になっております」

「初めまして、レオンの父です。いつもレオンの助けになってくださり、本当にありがとうございます。どうぞ中にお入り下さい」

「初めまして。マルセル・ロンコーリと申します。ありがとうございます」

母さんと父さんがそう言って、マルセルさんをリビングに案内する。

二人には挨拶の言葉だけ敬語を教えたんだけど、結構スムーズに話している。かなり練習したんだろうな……二人ともありがとう。

そうして皆でリビングに入ると、リビングにはマリーが待っていた。マリーはマルセルさんに席を勧める役目のようだ。

マリーはマルセルさんのために用意した椅子を引き、満面の笑みで言った。

「お席どうぞ！」

そのマリーの顔を見たマルセルさんは、一瞬で顔が崩れた。わかります。その気持ち、めちゃくちゃわかります。

「ありがとう。君はレオンの妹さんかな？」

「うん！　マリーだよ」

「マリーちゃんというのか。わしはマルセルじゃよ」

「マルセル……おじいちゃん？」

「そう！　そうじゃよ、マルセルおじいちゃんと呼んでくれるか？」

マルセルさんは、マリーにマルセルおじいちゃんと呼んでもらえてかなり嬉しかったようで、食い気味に肯定している。

「うん！　マルセルおじいちゃんよろしくね！」

「ああ、よろしくな」

そうしてマリーと会話をしたマルセルさんは、崩れた顔のまま椅子に座った。もうマリー最強だな。

そうして俺たちも席に座って、まず口を開いたのは父さんだ。

「マルセル様、改めてお礼を言わせて下さい。レオンの助けになってくださり、本当にありがとうございます。おかげでレオンは王立学校に入学出来ました」

「わしは何もしていません。レオン君の実力ですよ」

「いえ、レオンに話を聞きました。マルセル様に助けられたと。私からもありがとうございます」

そう言って父さんと母さんは頭を下げた。やっぱりこうなるよね、マルセルさんに感謝こそすれ文句を言うなんてありえない。本当に助けられている。

マルセルさんはそんな二人の様子にかなり戸惑っているようだ。

「わしも、レオン君に助けられていることもありますし、お互い様です。それに様などと他人行儀ではなく、もっと普通に接してください。わしは平民のようなものですから」

マルセルさんがそう言うと、二人は戸惑ったような顔をした。確かにこういう場合が一番困るよね。本当に言葉を崩していいのか、断られる前提で言ってるのか判断が必要だ。

俺は困っている二人に助け舟を出すことにした。

「母さん父さん、マルセルさんって呼べば良いよ。俺もそう呼んでるし」

「じゃ、じゃあ、マルセルさんと、そう呼びます。ありがとうございます。これからもレオンをよろしくお願いします」

「よろしくお願いします」

父さんと母さんは、そう言ってまた頭を下げた。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

マルセルさんが優しい顔でそう言うと、二人は少しだけ緊張が解れてきたのか、肩の力を抜いて顔に笑顔を浮かべた。

なんか、俺のことを話されているのかと思うと照れくさいな。これあれだ、三者面談みたいな恥ずかしさがある。

俺がそうして恥ずかしさに耐えていると、マリーが首を傾げつつマルセルさんに質問した。

「マルセルおじいちゃんは、お兄ちゃんのお友達なの？」

「そうじゃな……、お友達かもしれないが、それよりも孫と祖父という感じじゃな。レオンがどう思ってるかは知らんが……」

マルセルさんはそう言うと、俺の方を見た。え？　俺に決定権を委ねるの？

「……そうですね。マルセルさんは俺の第三の祖父でもあり、魔法具作りの師匠でもあるって感じです」

「じゃあ、お兄ちゃんにはおじいちゃんが三人もいるんだ！　いいなぁ」

マリーは目をキラキラとさせて、羨ましそうな顔でそう言った。

「ふふっ、羨ましい？」

「うん！」

「じゃあ、マリーもマルセルさんの孫にしてもらおうか？」

俺はマリーにそう言って、マリーの耳元に口を寄せた。そしてマルセルさんに聞こえないようにマリーに教える。

「マリー、マルセルさんに私も孫にしてって言ったら、マルセルさんはマリーのおじいちゃんになるよ」

「本当に？」

「うん、本当だよ」

俺のその言葉を聞いてマリーは、にっこりと笑顔でマルセルさん

に言った。

「マルセルおじいちゃん！　マリーも孫にしてくれる？」

マリーがそう言った途端、マルセルさんの顔が再度崩れた。それはもう盛大に崩れた。

マルセルさんは家族と疎遠で結婚もしてないって言ってたから、子供との関わりもあまりないんだろう。でもマルセルさんって結構子供好きだよね。俺にも最初から好意的だったし、今もマリーにデレデレだし。

「も、もちろんじゃよ」

「本当！？　やったー！　じゃあ、これからはお家に遊びに来てね！」

「それは、いいんじゃろうか？」

マルセルさんはマリーに返事をしつつ、父さんと母さんの方を向いた。二人はマリーに対するマルセルさんの態度を見ているうちに、完全に緊張感は無くなったようで、今では微笑ましげに二人のやりとりを見ている。

これからはうちの家族とも、もっと交流してくれたら嬉しいな。マルセルさんは基本的にあの工房で一人みたいだし。一人って寂しいよね。俺は頻繁に行くことはできないし。

「もちろん、いつでも来て下さい」

「良いって！　じゃあ、今度一緒に屋台巡りしようね！」

「そうじゃな」

マルセルさんはマリーのその言葉に、本当に嬉しそうに頷いている。

凄く微笑ましいんだけど、これは危険だ。マルセルさんはマリーに際限なく何でも買い与えるだろう。絶対にそうなる。俺と中心街に行った時がそんな感じだったし。
マリーのためにも平民としての限度を教えておこう。このままだとマリーがダメ人間になる。

「マリー、良かったね」
「うん！！」

そうしてその後は皆で穏やかに談笑をして、マルセルさんは帰っていった。

それから数日後。
マルセルさんから連絡があり、無事に魔法具登録は完了した。全てマルセルさんと連名での登録だ。
ショーケースの方はそこまで売れないかもしれないけど、冷風機と冷蔵庫はかなり売れるだろうと言われた。
またお金増えるよね。うん、まあお店を作るのに使ったし、ありがたくいただいておくけど。でもこれ以上俺一人にお金が貯まったら、経済に悪影響がありそうだ。
スイーツのお店を増やしたり、他にも使い道を考えよう。お金がありすぎて悩むなんて、本当に贅沢だな。

174、中心街へ

それから数週間。
マルセルさんの工房に行ったり、マリーとニコラやルークと遊んだり、森で鍛錬したりと充実した休みを過ごした。
毎晩寝る前に鉄の生成を忘れずにやっていたことで、また魔力量も結構増えている。
実は途中で鉄以外も精製できるんじゃないかと思って、他のものを生成しようとしたんだ。まずは魔石や魔鉄、この二つは魔力量が足りないとかではなく生成不可能だった。それからダイヤモンドなど他の鉱石。これは生成可能だった。
しかしダイヤモンドなんて、米粒より小さなものを作るのに俺の魔力が空っぽになるんだ。それよりも鉄を作った方が後に使える気がして結局は鉄を作っている。

そうして有意義な休みを満喫して、遂に今日は中心街に帰る日だ。早めに帰ってやることがたくさんあるので、流石にそろそろ帰らないとまずい。本当はもう少し早く帰る予定だったんだけど……、もう少しいいかなと延ばして延ばして今日まで来てしまった。
マルティーヌ達とお茶会の約束もしてるし、従業員寮も整備しないとだし、うん、帰らないとだよね。

そう思って俺は昨日のうちに今日帰ることを告げていたんだけど、それからマリーはずっとご機嫌斜めだ。
俺が帰ることを悲しんでくれるのは凄く嬉しいんだけど……帰りたくなくなる！　マリーの悲しそうな顔を見るだけで帰るのを一日延ばしちゃうんだ！

でも流石にもう延ばせない。俺はそんな後ろ髪引かれる思いで帰る準備をした。
そして今から家を出るところだ。
「父さん、母さん、マリー、そろそろ行くね。秋の休みは王立学校の行事で出かけることになるから、あまり帰ってこれないかもしれないんだ。でも、絶対に暇を見つけて帰ってくるから」
「ええ、身体に気をつけるのよ。しっかりとご飯を食べるのよ」
「うん。ちゃんと気をつけるよ」
「勉強頑張るんだよ。友達は大切にね」
「もちろんだよ」

母さんと父さんはそう笑顔で送り出してくれたけど、マリーはむすっとしたままだ。泣きそうというか、不機嫌な顔をしている。
「マリー、また帰ってくるから。そんな顔しないで」
「本当に帰ってくる？　今回だって全然帰って来なかった。それに、次のお休みは予定があるんでしょ？」

マリーはそう言って下を向いてしまった。
確かに……忙しくて結局夏の休みまで帰って来れなかったんだよね。またそうなるかな……
でも、秋の休みには絶対に帰って来る。
「予定はあると思うけど、少しでも絶対に帰ってくるよ。もし無理だったら他の日にお休みを作り出して帰ってくるから」
「うん」

それでもマリーはまだ下を向いている。泣いてはいないけど……納得してない感じだ。俺の大好きな笑顔を見せてくれない。

「マリー、何かあるならなんでも言って良いよ」
俺が優しい声を心掛けてそう言うと、マリーはポツポツと話し始めた。
「……ニコラお兄ちゃんは、いなくならないよ？　なんでお兄ちゃんだけ、いなくなっちゃうの？」
……そっか。確かにニコラがずっといるのを見てると、羨ましくなっちゃうのか。
「マリー、お兄ちゃんは中心街の学校に行かないといけないんだ。遠いからここから通うことはできないんだよ。だから中心街に住んでるんだ」
「でも！　ニコラお兄ちゃんは、行ってないよ？　なんでお兄ちゃんだけ、学校行くの……？」
そう言って顔を上げたマリーは涙を堪えている様子だ。俺までもらい泣きしそうだ。
「……お兄ちゃんが行きたいからだよ。それから、お兄ちゃんが助けてもらっている人のために行ってるんだ」
俺がそう言うと、マリーは理解できるけど理解したくないような複雑な顔をして、また俯いてしまった。
しかし今度は、それからすぐに顔を上げた。
「わかった。お兄ちゃん……、頑張ってね」

そして小さな声でそう言った。涙はかろうじて溢れていない。
うぅ……こんなの俺までもらい泣きする！　俺がいなくなることをこんなに悲しんでくれるなんて……心が痛い。
それに、泣かずにいられているマリーは成長したな。そんなマリーの成長も感じられて、俺の方が泣きそうだ。
俺はまだ笑顔になってないマリーを、ギュッと抱きしめて言った。
「絶対にまた帰ってくるから、今回もちゃんと帰ってきたでしょ？　だからそれまでは、母さんと父さんと食堂をよろしくね。これはマリーにしか頼めないんだ」

俺がそう言ってマリーの顔を覗き込むと、泣くのを我慢しながらも何とか笑顔を浮かべてくれた。
そして決意の籠もった顔で頷いた。

「……うん。任せて！」
「マリーがいたらお兄ちゃん安心だよ。……じゃあ、またね。皆行ってきます！」
「いってらっしゃい」
「気をつけるんだよ」

そうして家族と別れ、俺は一人で乗合馬車に乗った。
やっぱり寂しいなぁ。乗合馬車で二時間以上かかるから、気軽に帰って来れる距離じゃないのが難点だ。回復の日一日だけで帰るのは大変なんだよね。
やっぱり転移を使いたい……。転移なら回復の日にいくらでも帰ってこれるし、毎日夜に帰ることもできる。というか転移があれば、実家から通うこともできる。まあ、それは転移を完全に公表できないと無理だけど。

リシャール様達に報告して、公表はしなくても転移を使えるようにするか……どうしよう。めちゃくちゃ悩む。他の魔法についても報告するか考えないと……

そうして悩みつつ馬車に揺られていると、すぐに中心街の広場についた。馬車を降りるとロジェが迎えにきてくれている。

帰る時は連絡をしてくれとロジェに言われたので、手紙を出しておいたのだ。ロジェには中心街の広場に迎えをよろしくと伝えておいた。

「レオン様、おかえりなさいませ。お久しぶりでございます」

「ロジェただいま。久しぶりだね」

「またお会いできる日を心待ちにしておりました。では、馬車はあちらにご用意してありますので、あちらまで移動していただけますか？」

「うん、ありがとう」

そうしてロジェとともに公爵家の馬車に乗り換えて、公爵家の屋敷に向かう。なんかこの感じ久しぶりだな。

馬車の乗り心地も天と地ほどの差がある。綺麗さも全く違うし。中心街に、公爵家に帰ってきたって感じだ。

「十週間ぐらいだったけど、ロジェは何をしてたの？」

「はい。私は他の使用人の仕事の手伝いや、大旦那様に命じられて書類仕事などをしておりました」

「休みはなかったの？　というか今更だけど、ロジェってずっと俺に付いてるよね。休みは……？」

「基本的に従者に休みはございません。どうしても休みをいただかなければならない時は、信頼できる別の使用人に仕事を任せ休みを

いただきます」

マジか……従者って結構ブラックだった。

でもそうか、確かこの世界ってあんまり休みの日の概念がないんだよね。平民は何か予定がない限り仕事を休むことはないし、だから貴族の使用人もそうなのかな……

「じゃあ今回も、ロジェはずっと仕事をしてたの？」

「いえ、今回は特別に大旦那様から一週間ほどお休みをいただきました。たまには休息も必要だとのことで……」

「そうなんだ！　それは良かったね。お休み満喫できた？」

「いえ、何をして良いものかわからず……」

俺がそう聞くと、ロジェは困惑したような表情を浮かべた。休みの日に何をして良いのかわからないって……仕事人間すぎる！　典型的な社畜だよ！

「結局一週間どうしてたの？」

「最初はお屋敷の自分の部屋にいたのですが、何もしないというのも落ち着かず仕事を手伝おうとしました。しかし休みだからと断られ、お屋敷にいるとダメだと思い外に出ました。しかし何もすることはなく、結局はレオン様のお店の掃除や改装の見回りなどを……」

「結局仕事してるじゃん！」

ダメだ。ロジェは休めないタイプの人だ。ベッドでゴロゴロとしてるのも良いし、友達や家族に会いに行くとか、趣味を満喫するとかあるのに！

でも休みの日に家族に会いに行かないってことは、ロジェに家族はいないのかな……？

俺がそのことを聞いても良いのか悩んでいると、ロジェがそのこ

とを察してくれたのか、話をするきっかけを作ってくれた。

「レオン様、私の生い立ちをお伝えしたことはありませんでしたが、お聞きになられますか？　珍しい話でもありませんが、あまり楽しい話ではないと思われます」

「うん。……ロジェが嫌じゃなければ、聞いても良い？」

「かしこまりました。ではお屋敷に着くまでの時間、話させていただきます」

175、ロジェの過去と帰宅

ロジェはいつものような無表情で口を開いた。いや、無表情というよりも、少し悲しそうな表情だ。他の人にはわからないかもしれないけど俺には分かる。

俺はロジェがあまり思い出したくもない過去を話してくれるのだと思い、しっかり聞こうと居住まいを正した。

「レオン様にお伝えしたことはありませんでしたが、私は孤児なのです。親のことは全く覚えていません。覚えている幼少の頃の思い出は、少ない食べ物を奪い合う子供達とそれを放っておく大人達。そのうち自分がいる場所が孤児院だと知りました。私がいた孤児院はかなり酷いところで、食べ物も少なく皆生きるために必死でした。したがって争いが絶えず、身体の小さかった私はいつも野菜の皮などしか食べられませんでした」

俺は話の初めから衝撃を受けた。……そんなに酷いところがあるのか。予想以上だ。

そう考えると、ロニーの孤児院って本当に当たりなんだね。あれが普通じゃなくて、あれが特殊なのか。

というか、そんな環境だったら最低限生きていくこともできない子供が絶対いるよね……

「私はあの場所にいても生きていけない、そう思い七歳の時に孤児院を出ました。それから向かったのは中心街です。孤児院でなんとか集めた少ない情報から、他の孤児院に行っても同じだろうと思い、仕事がたくさんあるという中心街に行こうと思いました。そして中心街がある方向へ歩き続け、どれほど歩いたのかはわかりませんが、

ある路地裏にたどり着きました。もう夜になっていたので、そこで身体を休めてまた明るくなったら歩き出そう、そう思って道路の端に座り込んだところ、三人の男達に囲まれたのです」

路地裏で三人の男達に囲まれる七歳のロジェ。嫌な予感しかしない……

「私は突然男達に桶の水を掛けられて、布でゴシゴシと顔を磨かれました。そして、まあ悪くはないんじゃないか？　そう言われ、無理やり腕を引いてどこかに連れて行かれそうになりました。幼い私は何が起きているのかわかりませんでしたが、男達の乱暴な様子に助けてくれる人ではないと確信し、男達が油断したところでなんとか逃げ出したのです」

ロジェはそこで一度言葉を切った。ふぅ～、無意識のうちに身体に力が入ってたよ。俺は意識的に力を抜いて、握りしめていた拳を解いた。

俺の今の気持ちはただ一つだ。七歳のロジェを助けてあげたい！

今この場にロジェがいるんだから助かったのだろうと思うけど、それでも心配だ。

そうして一息つくと、またロジェが話し始めた。

「しかし子供の身体です。必死に走りましたが、すぐに追いつかれてまた捕まえられる、そう思った時にちょうど通りかかった男性が私を救ってくれたのです」

七歳のロジェ助かったのか。本当に良かった……。

というか、やっぱりこの世界ってそういうことあるんだな。この

国は基本的に奴隷禁止って聞いたことがあるけど、裏では人身売買とかあるのだろうか。
確か、重罪を犯した犯罪奴隷だけが認められてるんだったはずだ。犯罪奴隷は例外なく全員が鉱山などの過酷な労働に従事させられるらしいから、俺は見たことがないけど。
でもそれ以外で、隠れてやっている人はいるんだろうな。全てを防ぐのは難しいんだろうし。その場合、しっかりと管理されてない孤児院なんて真っ先に標的にされるよね……。
孤児院の改革、本当にやるべきだな。

「助けて下さった男性は、タウンゼント公爵家の使用人の方で、ちょうど実家に一時帰宅するところだったそうです。たまたま通り掛かったら逃げている子供がいたのでとりあえず助けたと、後に話してくれました。そうしてその男性に保護された私は、一晩男性の実家でお世話になり、次の日に公爵家の屋敷に連れて行かれました。本当は孤児院まで送ると言われたのですが、私が頑なに拒否したため仕方なく公爵家まで連れていってくれたのです」

その男性ナイス！　素晴らしい！
本当に助けられて本当に良かった。ロジェが今ここにいてくれて良かった。

「そしてお屋敷に行き、そのまま公爵家で下働きとして雇っていただけることになりました。外部から雇う場合は基本的に成人後の者を雇うのですが、例外として雇っていただけたのです。したがって、私は七歳の時からずっと公爵家で過ごしています。そのため、休みをいただいても帰る場所もなく、途方に暮れてしまうのです」

タウンゼント公爵家って、本当に良い貴族だよね……。孤児でなんの能力もない七歳の子供を、下働きとはいえ雇って教育をしてく

れるんだから。
今のロジェは本当に立派で頭も良い、従者として完璧だ。元の頭の良さもあるだろうけど、教育の良さもあるだろう。
というか、本当にロジェが今ここにいてくれて良かった。奇跡のような巡り合わせがなければ、今こうしていることはなかったんだな……

「ロジェ、仕事は楽しい？」
俺がそう聞くと、ロジェは少しだけ顔を緩めて頷いた。
「はい。とても充実した毎日を過ごしています」
「そっか。じゃあ、これからもよろしくね。休みはあんまりないかもしれないけど、俺の従者でいてくれる？」
「もちろんでございます」

そう言って嬉しそうに微笑んだロジェをみて、俺も凄く嬉しくなった。今のロジェが幸せそうで良かった！
でもロジェは俺の従者なんだ。もっと幸せになってほしいよね。これからロジェの趣味を見つける大作戦やろうかな。

「話は変わるんだけど、ロジェは趣味ある？」
「いえ、特には……」
「じゃあ、仕事で一番楽しいものは何？」
「そうですね……、掃除でしょうか」
「掃除？」
「はい。私の手で綺麗になっていくのが楽しいのです。どんなに汚れていても、時間を掛ければ最終的には綺麗になってくれます。成果が目に見えるのが楽しいと言いますか……」

ロジェはそう話しつつ、いつもより瞳が輝いているように見える。本当に好きなんだな。確かに綺麗になるから掃除が好きって人はいるよね。

でもそれを趣味にすると、どうなるんだ……？

ロジェって掃除が仕事の一部だし……、まあ趣味を仕事にしていると思えば良いのか。でもそれだとリフレッシュにはならないよね。

うーん、掃除道具を買い集めるのを趣味にするとか、使いやすい掃除道具を開発するのを趣味にするとか、そういうのありなんじゃないかな？

「ロジェは掃除道具って興味ある？」

「掃除道具ですか？　公爵家にあるものしか使ったことはありませんが……」

「じゃあ、もっと便利な道具を開発したり、掃除道具を買い集めるのはどう？」

「もっと便利な道具……」

ロジェはそう呟くと目を輝かせた。おおっ、興味持ってくれたみたい。

この世界の掃除道具は、基本的に竹の箒とちりとり、擦り切れた布だからな。この三つで綺麗にしてる使用人の方々は本当に凄いと思う。

もっと細かい箒とかタオルとか、日本にあったお掃除便利グッズを開発するのも面白いよね。

「何かあったら良いなと思うものとかある？」

「床掃除をする時にどうしても腰を痛めてしまうので、もう少し楽にできれば良いなとは思います。あとは高い位置の掃除も布で拭き

掃除するのですが、どうしても埃が舞ってしまうのでそれもなければ良いなと。……こうして考えてみると、たくさん出てきます」
「じゃあ、その悩みを解消できるようなものを、考えてみるのも面白いんじゃない？」
「確かにそれは……、面白そうです」

ロジェがかなり興味を持っているみたいだ。多分他の人にはわからない変化だと思うけど、俺にはわかる！
今のロジェは凄くウキウキしてテンションが上がっている。
これでロジェにも趣味ができて、休みも充実させられるようになったら良いな。
俺が思いつくものをいくつかだけ話しておこう。日本には便利グッズっていっぱいあったよね。例えばお掃除スリッパとか、床を拭くモップとか、高いところの埃取りとか。
全部言ったら面白くないし少しだけ……

「箒の先端に布をつけたら便利かもしれないよね。あとは布の種類も、もっと埃を吸着するものだと良いかな。あとは……、足も有効的に使えると便利だね」
「確かに、そうですね……」

ロジェはそう言ったっきり、黙って考え込んでしまった。うん、ロジェの好奇心を刺激できたみたいで良かった。これからは趣味も増やしてほしいな。

それから公爵家まではしばらく無言で馬車が進み、そのまま屋敷にたどり着いた。
そして馬車が止まったところで、やっとロジェが我に返ったようだ。

「はっ、も、申し訳ございません。少々お待ちください！」

ロジェはそう言って急いで馬車を降りていった。そしてすぐに俺も馬車から下ろしてくれる。

馬車を降りると、そこにはカトリーヌ様とリュシアンがいた。

「おかえりなさい」

「レオン久しぶりだな。待ちくたびれたぞ」

そう言って二人は俺を笑顔で出迎えてくれた。俺にもおかえりって言ってくれるんだな、凄く嬉しい。

「ただいま戻りました」

「疲れたでしょう？　応接室にお茶を準備してあるから行きましょう」

「私のためにありがとうございます」

「当然よ」

そうしてカトリーヌ様に促され、俺は屋敷の中に入る。でも、お茶を準備してくれたのはありがたいんだけど、今貴族の恰好してないんだよね。平民でも目立ち過ぎない恰好だから、身綺麗ではあるけど質は低い服装だ。

やっぱり着替えた方が良いよね。

「カトリーヌ様、お茶をいただく前に身支度を整えてきても良いでしょうか？」

「そのままでも良いわよ？」

「いえ、流石にそれは……」

「では、待っているので素早く着替えるのですよ」

「かしこまりました」

そうして俺はロジェに手伝ってもらい服装を整え、応接室に向かった。

「お待たせいたしました」

「来たわね。では話をしましょう！　私はレオンとたくさん話したいことがあります。スイーツの進捗について聞きたいですわ」

「私もレオンと夏の休みのことについて話したいぞ。十週間も会えなかったのだからな」

俺が席に着くと、二人にすぐそう言われた。俺と話したいと思ってもらえるなんて、本当に嬉しい。

俺は思わず笑顔になり応えた。

「私もお二人に話したいことがたくさんあります。夏の休みには色々なことがありました。聞いていただけますか？　もちろんスイーツについても」

「もちろんよ」

「時間はたくさんあるぞ」

そうして二人と夏の休みのことについて、楽しく話をした。時間を忘れて話し過ぎて、夕食の時間になったので止められたぐらいだ。

本当に楽しい時間だった。俺の家族はもちろん母さんと父さんとマリーだけど、公爵家も第二の家族だ。俺は勝手にそう思っている。公爵家の皆さんもそう思ってくれていると信じてる。

二つも家族があるなんて、俺は本当に幸せだな。

176、従業員のリーダー

そうして二人と話し込んだ日の夕食の席。
俺はリシャール様にも帰宅の挨拶をして、早速従業員のことについて相談することにした。

「リシャール様、本日帰宅いたしました」
「ああ、無事で何よりだ。久しぶりの実家は満喫できたか？」
「はい。久しぶりに家族にも会えて、充実した時間を過ごすことができました」
「それは良かった」

リシャール様はそう言って優しい顔で微笑んでくれる。やっぱりリシャール様は本当に良い人だ。なんか話してると安心する。
相談もしやすいから、ついつい色々と話しちゃうんだよね。

「実はリシャール様に相談したいことがありまして、今お話ししても良いでしょうか？　お店のことなのですが」

俺がそう言うと、少しだけ表情を引き締めたリシャール様が話の続きを促してくれる。

「もちろんだ。なんでも相談してくれ」
「ありがとうございます。お店の従業員についてなのですが、実は今回の休みの間に従業員を数人雇いました。しかし全員まだ歳若く、経験がほとんどありません。そこで経験豊富な方を雇いたいと思っています。どのようにしてそのような方を募集したら良いのか、教えて頂きたいです」

「ふむ、どのような仕事をする者を雇いたいのだ？」
「はい。お店で給仕をする者と警備担当の者です。それぞれの部門の従業員を、まとめる立場になってもらいたいと思っています」
俺がそう言うと、リシャール様は少しだけ考え込むような仕草をしたあと、口を開いた。
「普通であれば店の従業員は、教会で募集するか伝手で雇い入れる。しかしレオン君の場合はまだ伝手はないだろう。そうなると教会で雇い入れるしかないのだが、それだと良い者を雇い入れられるとは限らない。そうだな……、私がレオン君の店で働きたい者を紹介しよう」
リシャール様はそう言って、それが一番だというように頷いてくれた。でも俺はすぐに頷くことができない。だって、リシャール様に頼りすぎじゃないか？
このお店は絶対にリシャール様がいなければここまで上手くはいかなかった。そう思うとちょっと悔しいんだよね。
人脈も才能だとロニーに言ったことがあるけど、そう割り切れないのも事実だ。
……でも、現実的に考えたら紹介してもらうのが一番だろう。教会で募集するとなると、信用できる人かどうか自分で見極めないといけないし、万が一人選を間違えたら大変だ。
うん、俺のちっぽけなプライドのために危険を冒す意味はないな。従業員の皆もリシャール様の紹介なら安心だろうし。
俺はそう結論づけて、リシャール様に返事をした。
「良いのでしょうか？　もし紹介していただけるのでしたら、お願いしたいです」

そう言って、リシャール様に頭を下げた。

「もちろんだ。レオン君のお店は公爵家が後援するのだから、従業員を紹介するのも当然だろう？」

するとリシャール様は、少し軽い口調でそう返してくれた。俺が遠慮しないように気をつけてくれてるんだろうな……本当に優しい人だ。

そんなリシャール様の様子に心が軽くなり、俺は先程よりも明るい口調で言った。

「では、よろしくお願いいたします」

「わかった、本人の意思と私からの推薦を加味して決めておく。明日中には決められるだろう。従業員の待遇はもう決めてあるのか？」

確かに、待遇が分からないと働きたいって人はいないよね。

「はい。まだ正確に給金などを決めているわけではないのですが、相場程度かそれ以上は出す予定です。また、住む場所は従業員寮を作ろうと考えています」

「従業員寮とはどのようなものだ？」

「建物を一棟購入し、そこを従業員が住む建物として改装しようと思っています。そうでした、そのご相談もしたかったのです。私のお店の近くに、従業員寮として良い建物をご紹介いただけないでしょうか？」

建物はお店を決める時に思ったけど、絶対にコネや伝手がある方が良いものを手に入れられる。ここはプライドや遠慮などと言っている場合じゃない。

リシャール様に負担をかけて本当に申し訳ないけれど、できれば紹介して欲しい。リシャール様にはどうやって恩を返していくか、真剣に考えないとだ。

「もちろん紹介しよう。この前に店舗を見つけた時、一通り情報は手に入れたからすぐに候補を提示できるだろう。それも明日中に、従業員の紹介と一緒に渡そう」

「本当にありがとうございます。助かります」

俺がそう言うと、リシャール様は優しく微笑んでくれた。そして真剣な話がとりあえず終わったところで、また表情を少し緩める。

「店の準備は順調か？」

「はい。内装も整ってきていますし、必要なものは一通り注文出来ています。後は一部の改装が終わるのを待ち、細かい装飾品なども揃えていきます」

「そうか、それは楽しみだ」

俺はそう言いつつ、リシャール様に報告しなければいけないことがあるのを思い出していた。冷蔵庫や冷風機のことを話さないと。

既に登録したからリシャール様も知ってるだろうけど、やっぱり俺の口から報告すべきだよね。

「リシャール様、お店関係でもう一つお話があります。今度は相談と言うより報告なのですが……」

「何だ？」

「冷風機、冷蔵庫、冷蔵ショーケースのことです。実はマルセルさんの工房でともに開発をして、魔法具登録を済ませてあります。こちらは私の店に設置する予定です」

「ああ、その魔法具についてならば確認した。また新しい魔法具が

開発されたとの報告を聞き、多分レオン君だろうと思い情報を見てみたら案の定だった」

やっぱり魔法具開発は俺だと思われてるんだな……まあ、その通りなんだけど。

「あの魔法具はどれも素晴らしかった。特に冷風機は革命だ。この屋敷でも送風機を使い、製氷機ができてからは氷と送風機を組み合わせていたんだが、問題点も多かった。それが改善されていて、画期的だったぞ」

「そう言っていただけて嬉しいです。夏の辛さが少しでも軽減できたらと思っています」

「ああ、またすぐに売りに出される予定だ。その時はこの屋敷にも取り入れようと思っている。レオン君のおかげで日々の暮らしが次々と快適になるな。ありがとう」

そうしてお店のことや夏の休みの出来事に関して談笑を続け、しばらくして夕食は終わりとなった。

そしてその日は疲れていたのか、ベッドに入りすぐ眠りに落ちた。

そして次の日の午後。

「レオン様、連れてきました」

ロジェがそう言って、リシャール様が推薦してくれた従業員候補を連れてきてくれた。給仕として女性が一人と警備として男性が一人だ。

俺はそのうち一人の顔を見て凄く驚いた。女性の方は俺がよく知っている人だったのだ。

「アンヌさん！」
「レオン様、私のことを覚えて下さり光栄でございます。よろしくお願いいたします」

アンヌさんは俺が初めて公爵家に来た時に、色々と世話をしてくれたメイドさんだ。四十代ぐらいで少しふくよかな、凄く優しい人だ。
ロジェが俺の従者になってからはたまに姿を目にするぐらいだったんだけど、アンヌさんが働いてくれるなら嬉しい！

「では既に面識がある方もいるようですが、今一度紹介いたします。右側の女性がアンヌ、給仕担当です。そして左側の男性がエバン、警備担当です」
「レオン様、改めましてよろしくお願いいたします」
「レオン様、何度かお手合わせいただきましたが、しっかりと挨拶するのは初めてですので、改めて挨拶させていただきます。エバン・ベラールと申します。エバンとお呼びください。よろしくお願いいたします」

ロジェが二人を紹介してくれて、二人が俺に挨拶をしてくれた。アンヌさんの驚きで気づかなかったけど、この男性も何度か剣術の訓練に付き合ってくれた人だ。確かにエバンって他の人から呼ばれてた気がする。
エバンさんは三十代ぐらいに見える、青みがかった黒髪に濃い青の瞳ですらっとした体型の人だ。兵士としては珍しく、細マッチョって感じなんだよね。背も高すぎなくて、俺としては親しみやすい。
でもそんなエバンさんだけど実力はかなりあって、剣は凄く強いんだ。

「アンヌさんお久しぶりです。エバンさんも改めてよろしくお願いします。お二人とも、俺のお店で働いてくれるんですか？」
「はい。レオン様のお店で働かせていただきたいと思い、立候補いたしました」
「私もです。働かせていただけたら嬉しいです」
「こちらからお願いしたいぐらいです。本当にありがとうございます。これからよろしくお願いします」

この二人が働いてくれるなんて、本当に嬉しい。というか、二人とも公爵家のメイドさんと兵士だったんだよね。そんな二人を紹介してくれるなんて、本当にリシャール様には感謝してもしきれない。
人材を育成するのって大変だろうし……、本当にありがとうございます。

「ロジェ、二人にはいつから働いてもらえるの？」
「はい。レオン様が二人を雇うことをお決めになられたのであれば、本日からレオン様に雇われることになります」
「そうなの！？　そんなにすぐで大丈夫なの？　引き継ぎとか、後進の育成とか……」

俺が心配してそう告げると、ロジェは問題ないというように頷いてくれた。

「公爵家の使用人には余裕があり普段から後進の育成に力を入れていますので、二人が抜けても大きな問題にはなりません。また、使用人全員がどの仕事もできるように教育されていますので、二人が抜けた穴はどの使用人でも埋めることができますので、心配いりません」

そうなんだ……そんなところまでちゃんとしてるなんて、公爵家

凄すぎる。

「それなら良かった。じゃあ、今日からよろしくお願いします。あっ……二人は俺が雇うんだから敬語はおかしいかな？」

「できればロジェと同じようにお話ください」

「じゃあアンヌとエバン、これからよろしくね」

「はい」

「よろしくお願いいたします」

二人はそう言って優しく微笑んでくれた。俺の周りって本当に良い人ばかりだ。俺は幸せだな。この二人がいればお店は上手くいく気がする。

俺がそう思って、これからのお店の成功を確信していると、ロジェがもう一つ報告をしてくれた。

「レオン様、従業員寮候補の建物も決まったようです。建物の鍵も預かってきたのですが、いかが致しますか？」

うーん。今の時間は午後二時。まだ時間あるし従業員寮も決めちゃおうかな。

皆が来るまであんまり日はないし、早い方が良いだろう。

「じゃあこれから見に行って決めちゃおうかな」

「かしこまりました。では馬車を手配してきますので、少しお待ちください」

「うん。よろしくね」

二人にも住んでもらうところだし、二人にも一緒に行ってもらおうかな。

「二人も一緒に行ってくれる？　二人もこれから住むところになるし……」
「もちろん、お供させていただきます」
「護衛はお任せください」
「良かった、ありがとう」

そうして四人で従業員寮を見に行くことになった。どんどんお店の準備が進んできたな。従業員寮、良い物件を選ぼう。

１７７、従業員寮の候補

ロジェが馬車を用意してくれて、皆でそれに乗って公爵家を出た。候補の建物は二つあるみたいで、まずはお店に近い方に向かっている。やっぱり職場への近さって重要だよね。

そして従業員寮候補の建物に着くまで、俺は二人と仲を深めるために少し話すことにした。

「二人とも、俺のお店で働いてくれて本当にありがとう。……何で俺のお店で働こうと思ってくれたの？」

俺は二人が公爵家からこっちに来てくれた理由がわからなくて、恐る恐るそう聞いた。

「私はレオン様が開発されたスイーツを何度かいただいて、レオン様の手助けをしたいと思ったのです。こんなにも素晴らしいものを開発されるレオン様を、お近くで御支えしたいと。また、レオン様と接して主としてお仕えしたい方だと思っておりました」

「私もです。レオン様が毎日訓練に励んでいる様子を見て、お仕えしたいと思いました。もちろん公爵家の方々にもその気持ちはずっと持っていましたが、レオン様のところでなら、より近くでお守りすることができると考えた次第です」

……俺に仕えたいって思ってくれたなんて。なんか恥ずかしい、でも嬉しい。

その期待に応えられるように頑張らないと。

「二人ともありがとう。二人に相応しい雇い主になれるように頑張

るよ。……そ、そうだ。エバンは名字があったけど、実家は貴族なの？」

俺は二人にそうお礼を言ったけど、少し恥ずかしくなって慌てて話を逸らした。エバンのことが気になっていたのも事実だけど、とにかく恥ずかしかった。

主としてお仕えしたいって言われるの、結構恥ずかしいんだな。

「はい。実家はベラール男爵家です。私は三男で、現当主は私の兄です。ただ既に兄の子も育っていますので、私が実家と関わることは多くありません。また、私は結婚の予定もありませんので、仕事で遠くに行くことなどがあっても気になさらないでください」

やっぱり貴族だったのか。でも三男でお兄さんには子供もいるなら、エバンが関わることは本当に少ないのだろう。

結婚はしたいのなら全然してくれていいんだけど、騎士や兵士の人って結婚しない人も結構多いんだよね。危ない仕事だからなのだろうか。

「そうなんだ。結婚はしたい人が現れたら、遠慮しなくて良いからね」

「ありがとうございます」

「うん。エバンは王立学校に行って、その後タウンゼント公爵家に雇われたの？」

「はい。最初は騎士になろうと考えていたのですが、大旦那様と縁があり兵士に誘われまして、タウンゼント公爵家で兵士となりました。騎士は王立学校を卒業しなければなれませんので、その地位も高く私の友人は皆騎士となりましたが、私は自分の選択を後悔したことはありません。タウンゼント公爵家の皆様をお守りしてきたことは私の誇りです」

エバンは清々しい表情でそう言った。何か、かっこいいな。俺もこういう男になりたい。

「エバン、カッコいいね」

俺が思ったことをそのまま口にすると、エバンは一気に慌て出して少しだけ恥ずかしそうに言った。

「も、申し訳ありません。先程の話は忘れてください。偉そうに語ってしまいすみません……」

「謝らないでよ。感動したよ！　というか、そんなタウンゼント公爵家での仕事を辞めて、俺のお店で働くので良かったの？」

「はい。公爵家での仕事は後進も育ってきていますし、今はレオン様の手助けをしたい気持ちが強いのです」

「そっか、それなら良かった。これからよろしくね」

「よろしくお願いいたします」

そうしてエバンは深く頭を下げた。本当にカッコいい人だ、俺も見習おう。仕事の合間にでも鍛錬に付き合ってもらおうかな。うん、今度お願いしてみよう。

そう考えつつ、今度はアンヌの方に身体を向けた。エバンのことについて聞いたのなら、アンヌにも平等に聞いた方が良いよね。

「アンヌは何でタウンゼント公爵家で働くことになったの？　もし話しても良いなら、教えてくれる？」

「かしこまりました。ごくありふれた話で恐縮なのですが、私の実家は王都の外れにある貧しいアパートでした。父は私が幼い頃に病死し、母が女手一つで私と妹二人を育ててくれていました。そんな貧しい生活でしたので、早くに働いてお金を稼ぎたいと思い、私は

八歳で魔力測定をしてすぐに家を出ました。そして中心街に来て運良く住み込みの仕事を見つけることができ、それが食堂の給仕でした。それからは人の縁にも恵まれ、十五の時にタウンゼント公爵家で使用人として雇っていただき、現在までずっとお仕えしておりました。そしてこれからはレオン様にお仕えいたします」

……結構壮絶な人生だと思うけど、それがごくありふれた話だなんて。俺、というかレオンの生まれって、本当に恵まれてたんだな。他の人の話を聞くとそう気づく。

「アンヌがタウンゼント公爵家で働いてくれていて良かったよ。そのおかげでこうして俺のお店で働いてくれるわけだし。アンヌはもう、タウンゼント公爵家での仕事に未練はないの……？」

「はい。タウンゼント公爵家には娘も雇っていただいておりまして、まだ半人前ですがお役に立てるようになってきましたので、そちらは娘を信じて任せようと思っています。また、他の使用人の教育もしっかりと行ってきましたので、問題ありません」

「娘さんがいるんだ」

「はい。今年でちょうど十五歳、成人いたしました」

「そうなんだ！　それはおめでとう」

「ありがとうございます」

「じゃあ、安心なんだね。これからよろしくね」

「よろしくお願いいたします」

そうして二人と話しているうちに、馬車が止まった。もう着いたのかな？

「レオン様、到着したのですが門が開いていませんので、門を開けて参ります。それから敷地内に馬車が入りますので、今しばらくお待ちください」

「わかった。よろしくね」

そうしてロジェが門を開けてくれて、馬車は敷地内に入った。馬車が二台ほど置ける広さの庭があるようだ。

建物は大通りから少し中に入ったところにあるけれど、中心街だから大通りではなくても馬車が普通に通れるし、不便は全くないだろう。周りにはアパートのような建物や普通の住宅がいくつか建ち並んでいる。

やっぱり中心街なだけあって、貴族の屋敷には遠く及ばないとしても小綺麗な建物が並んでいるな。雰囲気としては日本の住宅街が近いかも。中心街の外とは大違いだ。

この辺の建物って誰が住んでるのかな？　多分家賃も高いよね。中心街のお店の従業員とか、あとは誰だろう？　貴族の使用人は屋敷に住むし、商会も同じだし、お店くらいしかない気がするけど……

……そうだ、あとは準貴族やその家族が住んでたりするのかも。うん、それが一番ありそうだな。

従業員寮候補の建物は、外から見た限りだと木造二階建ての建物で、横に大きい建物だった。外見ではまだ新しい。

「レオン様、こちらが一つ目の候補の建物です」

ロジェがそう言いつつ、俺を馬車から下ろしてくれる。馬車から降りて周りを見回すと、敷地が塀で囲まれているのがわかる。出入り口はさっき馬車で入ってきた門だけのようだ。門には馬車用の扉と人間用の扉がある。

さっき馬車から見てた感じだと、この辺りの建物は基本的に周りが塀で囲まれていて、各建物に小さな庭がついているのが普通のよ

うだった。なのでこの建物も、この辺では普通なのだろう。凄いよな、格差社会だ。俺はロニーのアパートを思い出しながらそう思った。

そうして外から建物をしばらく観察して、玄関から建物の中に入った。この建物は各部屋に外から直接入るタイプではなく、玄関は一箇所で中で部屋が分かれているタイプらしい。

玄関は建物の真ん中にあり、中に入ると左右に廊下が伸びていた。階段は玄関を入ってすぐのところにある。

「レオン様、この建物は二階建てとなっております。では、まず一階の右側の廊下からご案内いたします」

そうしてロジェが右側の廊下を進んでいく。

「レオン様、こちらが台所と食堂でございます」

「食堂なんてあるんだ」

「はい。実はこの建物、ある貴族が使用人を教育する場として建設したようなのですが、結局使われることなく一年間以上放置されていたものなのです。一応定期的に清掃はされていたようですが、今まで誰も住んだことはありません。そのような事情から、購入者がいればすぐにでも売りたいと言われております」

そんな建物もあるのか。結局使わなかったなんて、その貴族が何でこの建物を建てたのかよく分からないけど、俺にとってはありがたいな。

「それなら少し掃除をすれば、すぐ使えるよね」

「はい。使用人の教育のためにと作られたので、設備も新しいものが揃っております。もちろん水洗トイレやお風呂もございます」

それは凄い。もしなかったら改築しないとダメだと思ってたんだけど、それなら改築の必要もないな。
厨房を覗いてみると、ちょうど良い広さで使い勝手が良さそうだ。設備は一度も使われていないので全て新品だし。
食堂の家具とか厨房の各種調理道具はそのままあるけど、これって貰ってもいいのかな？

「ロジェ、家具とか調理器具はどうなるの？」
「それらは購入者が全て貰えることになっております」

この建物凄い。もうここまで見ただけでここに決めたいぐらいだ。細々としたものを揃えるのって意外と大変なんだよね。

「では次にお風呂をご案内いたします」

そうしてお風呂とトイレ、それから洗濯場などを案内してもらって、次は居住スペースに来た。部屋は全て同じ作りで、一階に六部屋、二階に十二部屋あるらしい。
俺達は一階の端の部屋まで移動して、その部屋のドアを開けた。そして皆で中に入る。

１７８、従業員寮の決定

部屋に入るとまず目に入るのは、木で作られた簡素な机と椅子。それから壁際にはタンスがあって、部屋の奥にはカーテンが掛かったガラスの窓がある。そして部屋は左側に広がっていて、左奥にはベッドがある。

これだけの簡素な部屋だけど、最低限のものは揃ってる感じだ。広くはないけど一人で住むには十分だろう。

「アンヌとエバン、この建物どう思う？」

「はい。私としましては、とても住み心地の良さそうな建物だと思います。お部屋も公爵家で住まわせてもらっていた部屋と似た作りで、とても落ち着きます。お風呂も水洗トイレもあるのならば、文句などありません」

「私も同じです。お風呂があるのはとてもありがたいです。また食堂も広く、皆で集まり話し合いなどにも使えると思いました」

やっぱり好印象だよね。この建物は文句の付け所がないと思う。もうここで決まりで良いんじゃないだろうか？

「やっぱり、この建物凄く良いよね。ロジェ、もう一つの建物ってどんな感じなの？」

「はい。もう一つの建物は、今までアパートとして使われていたものです。しかし建物が老朽化し、管理していた者は修繕して管理を続けるという選択肢は選ばなかったようで、住民には引っ越してもらい建物は売りに出されています。とはいっても、料金はかなり安く建物の値段は無料でございます。そちらの良さは、安さと建物を取り壊せば好きなように一から建て直せることです」

それは……もうこっちで決まりかな。イチから建て直してる時間はないし、この建物に文句はないし。何なら一から作るとしても、ここと同じような建物を作ると思う。

「この建物は凄く良いと思うし、一から建て直しはかなり時間がかかるだろうから、もうこっちで決めちゃおうかな。二人はそれでいい？」

「勿論でございます」

「私もです」

「じゃあ、ここで決まり！」

予想以上に良い物件だった。こんな物件を持ってきてくれたリシャール様に大感謝だな。

この建物は見た限りだとすぐにでも引っ越して来れそうなんだけど、どこか改装したり設備を足したりするところはあるだろうか。

基本的な設備は全部あるし、何なら細々とした家具や道具などもある。うーん、もう買い足すものが思い浮かばない。

俺は自分では思い付かないので、二人に聞くことにした。

「二人とも。何か改装して欲しいところとか、買い足して欲しいものとか、それ以外にもここに住む上で気になることはある？」

「では、一つ気になっていることがあるのですが良いでしょうか？」

「うん。なんでも言って」

「ありがとうございます。食事はどうするのかについてお聞きしたいです。公爵家の屋敷では、兵士や使用人の食事は料理人がまとめて作ってくれていましたが、ここではどうなるのでしょうか？　それぞれで作るのでしたら、練習しなければいけないと思いまして……」

エバンが苦笑しつつそう言った。確かにエバンは貴族出身だし、そのあとはタウンゼント公爵家で働いてたのなら料理の経験なんて一切ないよね。

貴族の屋敷では料理人が全て作るのが普通だし、ここにも一人料理人を雇った方が良いのかな？

うーん、結構悩む。従業員に使用人をつけるって考えると微妙だけど、寮って管理する人がいるのが普通だよね。それに俺は商会を立ち上げた訳だから、皆は商会で雇ってることになる。商会の使用人は、多分料理人が皆の食事を作るだろう。

それに、皆には結構長時間働いてもらうことになると思うんだ。ヨアン達料理人は朝早くからスイーツを作り始めないとだし、お店は朝から夜までやる予定だから他の皆の勤務時間も長くなる。

その辺を諸々考えると、寮の料理人が一人いても良いかもしれない。勤務条件が良くないと従業員も定着しないし増えないだろう。

従業員のお昼ご飯もどうするか悩んでたけど、ここで作ってお店まで運んで貰えば良いよね。

うん、一人料理人は雇うことにしよう。

……日本で考えたら甘いのかもしれないけど、この世界ならこれが普通な気がする。

「確かに料理は問題だね。勤務時間的にお店の料理人に作ってもらうのは難しいと思うから、寮に一人料理人を雇うのはどうかな？朝昼夜全部作ってもらって、昼はお店まで届けてもらうことにする。どう思う？」

俺がそう言うと、エバンは食い気味に頷いた。

「それはありがたいです！」

「良かったよ。アンヌはどう思う？」
「料理はほとんど経験がありませんので、凄くありがたいです」
アンヌも少し恥ずかしそうにそう言った。貴族社会で生きていると、料理は料理人がやるものだから他の使用人がやることもないんだな。
「じゃあ、料理人を一人雇うことにするよ。ロジェ、どこで募集をしたらいいかな？」
「はい。お店にも出入りすることになりますし、やはり大旦那様へご相談された方が良いと思われます」
「やっぱりそうか、じゃあ帰ったら相談しようかな」
俺がそうロジェと話していたら、アンヌがおずおずと口を開いた。
「あの、レオン様、大変差し出がましい申し出かもしれないのですが……、私の息子を紹介しても良いでしょうか？」
「アンヌの息子？　息子もいたの？」
「はい。娘が一人と息子が一人おります。息子は十八歳なのですが、料理が好きだと言って今は食堂で働いています。しかし息子は少し変わっていまして……、料理以上に、その料理を食べている様子を観察しているのが好きなのだそうです。それゆえに貴族様のお屋敷では働きたくないと言って食堂で働いているのですが、自分が作った料理が運ばれると客席の方を気にしすぎる所為か、仕事が疎かになるので今まで何度もクビになっているのです……」
……結構変わった人なんだな。でも料理が好きで、その料理を美味しく食べてくれるところを見るのが好きってことだよね？　それならこの仕事はかなり向いているだろう。
食事を作ったら一緒に食べてもらっても良いし、皆が了承すれば

観察してもらってもいい。お昼も届けてさえもらえれば、食べてる様子を見ているのは構わない。
アンヌの息子なら身元はしっかりしているし、ちょうど良い気がする。

「仕事内容を聞いて息子にもできるかと思ったのですが、変わっている子ですので断ってくださってももちろん構いません。むしろこのようなことを提案してしまい申し訳ございません……」

アンヌはそう言って申し訳なさそうにしている。

「ううん、紹介ありがとう。話を聞く限りだと息子さんはこの仕事に向いてるよ。一度会ってみたいな」
「ほ、本当ですか！？　……ありがとうございます」

アンヌはそう言って、深々と頭を下げた。

「ロジェ、アンヌの息子なら雇っても問題ないよね」
「はい。私も面識がありますが、先程指摘された点以外は問題ありませんので、レオン様が雇いたいと仰られるのでしたら構いません」

ロジェも面識があるのか。というかそうだよね、使用人の子は屋敷に住むよね。ロジェも小さい頃から屋敷にいたんだから、面識あるのが普通か。
使用人は家族で別の家に住んでいる通いの人もいるけど、基本的には屋敷に住んでる人が多い。
そういえば、アンヌの旦那さんって誰なんだろう？　聞いても良いのかな……。でも何も言われないし、もしかしたら既に亡くなってる可能性もある。
この世界は医学が発展してないから、聞いたら既に亡くなってた

ってことがかなりあって、もう聞かないのが一番なんだ。とりあえず話してくれるまでは聞かないでおこう。

「じゃあアンヌの息子を雇う予定にする。アンヌ、息子さんとはいつ会える？」

「最近また仕事をクビになったらしく、いつでもレオン様のご予定に合わせてお連れいたします」

「そっか……、じゃあ早い方が良いし明日でもいい？」

「かしこまりました」

「あと、この建物すぐにでも引っ越しできそうだから、明日から早速引っ越してもらえる？　そして住んでみて足りないことがあったら教えて欲しい。それ以外は、他の従業員が来るまでは休みってことで自由にしてくれていいから。俺が雇ったのにずっと公爵家にいるのも微妙だと思うし」

「かしこまりました、配慮ありがとうございます。では明日までに引っ越しの準備もしておきます」

「うん、よろしくね」

そうしてこの日は従業員寮を決定して、公爵家に戻った。明日はアンヌの息子さんと会う予定、ちょっと楽しみだ。

179、アンヌの息子

従業員寮を決めた次の日。
俺はロジェとともに寮まで馬車で向かっている。アンヌとエバンは朝早くから引っ越しをして既に寮にいるので、今は一緒ではない。アンヌの息子さんとは寮で話をする予定だ。そして話をした後に、お昼ご飯を食べさせてもらう。

実は昨日あの後、アンヌの息子さんについてもう少し詳しく聞いたんだけど、なんでも食べてる人を観察するだけじゃなくて、変な料理を考えるのも好きらしいのだ。
料理の腕は良いので普通の料理も作れるらしいんだけど、趣味で変な料理開発をずっとしているらしい。
その料理はかなり手間がかかったり、一般的に受け入れられるような見た目ではなかったり、美味しいけど馴染みのない味だったり、普通に不味かったりと、流行るようなものではないとのことだ。
ただ、たまには美味しいものもあるらしく、身内や仲間内では人気の料理もあるのだとか。そういう料理はお店で出したりすることにならないのかと思うけど、総じてかなり手間がかかるのと、一部の人にしか受けないものらしい。

そんなことを言われたらすっごく気になって、今日は一番自信作の料理を振る舞ってもらうことにした。今からかなり楽しみだ。どんな料理なんだろうか。

そうしてワクワクしながら馬車に揺られることしばし、俺は寮に到着した。

ロジェと共に馬車から降りると、玄関前に三人が出迎えに来てくれていた。右端の人がアンヌの息子さんのようだ。小柄で黄緑色の髪に同系色の瞳で……、十八歳には見えないな。背が低いのもあるけど、顔も童顔で幼く見える。

……背が低い仲間ゲットだ。俺は密かにそう喜んだ。

そうして三人に近づいていくと、アンヌの息子さんにじっと見られているみたいだ。興味津々な様子だけど、食べてる人だけじゃなくて普通に人間観察が好きなのかな？

……確かにこの様子だと、貴族の使用人には向かないかも。俺はそんなことを思いながら苦笑を浮かべつつ、皆に声を掛けた。

「皆、出迎えありがとう。君がアンヌの息子かな？」

「はい！　ティノと申します。よろしくお願いいたします」

ティノはそう挨拶をしつつ綺麗な所作で頭を下げた。こういうところはしっかりと教育されてるんだな。流石アンヌの息子だ。

だけど挨拶が終わったら、また好奇心旺盛な様子で俺のことを見てくる。なんだろう、子供が蟻の行列をキラキラした瞳で見つめているときの、あの顔だ。

この表情がより一層ティノを幼く見せているのかもしれない。

俺もそんなことを考えつつ、負けずにティノを観察していると、横にいたアンヌがティノの頭をガシッと掴んで無理矢理に下を向かせた。

「レオン様、足をお運びくださりありがとうございます。それから、息子が本当に申し訳ございません。今からでも雇うのをやめてくださっても構いませんので……」

アンヌはそう言って、申し訳なさそうに謝っている。俺からしたらティノの様子は、別に咎めるほどのものではないんだけど、公爵家でメイドとして働いてたアンヌにとっては許せない態度なんだろう。

「アンヌ、別に大丈夫だからそんなに気にしないで。とりあえず中に入ろうか」

「かしこまりました」

そうして場所を食堂に移して、俺はティノと向き合って座っている。目の前にはティノが座っていて、少し離れたところにアンヌとエバン、ロジェは俺の後ろだ。

「改めて、俺はレオン。ジャパーニス商会の商会長で、今度スイーツ専門店を開く予定なんだ。そこで従業員としてアンヌには働いてもらう。ティノにはここ、お店の従業員寮の料理人をしてもらいたいと思ってるんだけど、どうかな？」

俺がそう聞くと、ティノは食い気味に頷いてきた。

「はい！　この度は私に仕事の話をくださって、本当にありがとうございます。是非こちらで働かせていただきたいと思っています。ただ私は、自分が作った料理を食べている人を見るのが好きで、また料理を創作するのも好きでして……、それによって今までいくつもの職場をクビになってきました。それでも、大丈夫でしょうか？」

ティノは前のめりで働きたいと言いながらも、少しだけ不安そうな表情でそう聞いてきた。

やっぱりアンヌの息子だからか、言葉遣いや態度など凄くちゃん

としてる。なのにクビになってるってことは、料理のこととなると暴走するのかな。

「ここでの仕事は朝昼夜の料理をすることだけだから、それ以外の時間は自由にしてくれて構わないよ。だから料理を作ったら皆と一緒に食べても良いし、食べてるところを見ていても別に良い。でも、嫌がる人がいたらそこは配慮して欲しいかな」

「そこはしっかりと配慮いたします！　私は私の料理を食べて喜んでいる人を見るのが好きなので、嫌がられるのは本意ではありません」

「それなら良かった。あと、料理の創作も仕事以外の時間なら好きにやってくれて構わないよ。というか、上限は決めるけど材料費は支払うから、積極的にやって欲しい」

実際、料理の研究が好きなだけで大歓迎なんだ。今はスイーツの研究ばかりだけど、料理ももっと発展させたいからね。

いずれ醤油とか作ってくれたら嬉しすぎる。変な料理を作ってるみたいだし、そのうち発酵とかにも手を出してくれないかな？

「本当ですか！？　今までの職場では、自分で材料を調達して料理をしていたのにも関わらず、匂いがキツイとか邪魔だとか見た目が気持ち悪いとか、色々と言われて結局禁止させられていたんです！

……レオン様が輝いて見えます。眩しすぎて直視できません。レオン様は、私の神だったのですね……」

ティノはそう言って祈るように手を合わせ、本当に眩しそうに目を細めた。俺はそんなティノの様子を見て思わず吹き出してしまう。

「ふっ……ふふっ……、ティノ、めちゃくちゃ面白い、面白すぎる」

真面目な様子とテンション上がってる時のギャップが凄い。さっきまでは完璧な使用人のようだったのに、急に神に祈る人になってるし。

俺は込み上げてくる笑いを、何とか抑え込んで耐えている。急に笑い出したらティノに失礼だろうと思ったのだ。でも苦しい、腹筋が限界だ。何かツボに入った。これ苦しいやつだ。

ティノはそんな俺の様子を見て、不思議そうに首を傾げた。そして心配そうな表情になる。

「レオン様、大丈夫でしょうか？　体調でも悪いのですか……？」

ティノは俺がお腹を押さえて俯いているのを、体調が悪いと勘違いしたみたいだ。でも違う、体調は万全だから。これは笑いを堪えて苦しいだけなんだ。

そう伝えようと思って、何とか顔を上げた。

「だ、大丈夫、なんか、ツボに入っただけだから、ごめんね。ちょっと待って……」

俺ってツボに入ると、なんでも面白く感じるようになっちゃうんだよね。貴族の人達やその関係者って、笑っちゃうようなことがあってもポーカーフェイスを貫けるのは、本当に凄いといつも尊敬してる。俺はその能力身に付かないんだよね。頑張ってはいるんだけど、笑いには弱い。

――はぁ、もう苦しいから収まって！

それからしばらくして、やっと笑いが収まった。もう疲れた、めちゃくちゃ疲れた。

「ティノ、本当にごめん。何の話してたんだっけ？」
「いえ、大丈夫です。また何か私が面白いことをしてしまったのでしょうか？　私が話しているとよく笑われるのです。……何故でしょうか？」

ティノはそう不思議そうに言った。

「うん、ティノが面白いからだね」
「自分では面白いことを言っている認識はないのですが……。改善した方が良いのでしょうか？」
「ううん、ティノはそのままが良いよ。面白いのも才能だし。それに面白いことを言っているというよりも、全体で面白いって感じだから。ギャップが良いっていうのかな？　最初は笑っちゃうかもしれないけど、慣れてきたら微笑ましい感じになって、雰囲気を明るくする良いキャラになれるよ」

ティノはムードメーカーになれる。ティノが一人いたら雰囲気が明るくなる、そういうタイプだ。そういう人って貴重だよね。

「それは、喜んで良いのでしょうか？」
「うーん、貴族の屋敷で働くのだと微妙かもしれないけど、ここや平民の食堂とかで働くのだとしたら良い能力じゃないかな？」

俺がそう言うと、ティノは嬉しそうに笑顔になった。

「それならば、気にしないようにいたします」
「うん、それが良いね。じゃあ話の続きをしようか」
「かしこまりました。先程は仕事内容の話をしておりました。朝昼夜の料理をしっかりとすれば、他は自由時間で良いと。それから料理の創作の材料費も払っていただけると」

「そうだった、その話だったね。じゃあ仕事の話に戻るけど、朝と夜はここの食堂で、昼はここで作ってお店まで運んで欲しいんだ。その仕事内容でよければティノを雇いたいと思ってる。ここで働いてくれる？」
「はい！　勿論です。断るなどあり得ません。本当にありがとうございます！」

ティノはそう言って、また綺麗な所作で頭を下げた。本当に、ギャップが凄い。

「じゃあ、これからよろしくね。そうだ、ティノはここに住む？」
「よろしくお願いいたします。私もここに住んで良いのでしょうか？」
「うん。住んでくれた方がありがたいかな。朝ご飯はかなり早い時間になると思うから」
「かしこまりました。ではこちらに越してきます」
「ありがとう。できる限り早めに越してきてくれるとありがたいな」
「では、本日中に引っ越しの準備を整え、明日にでもこちらに参ります」

それならアンヌとエバンの食事も心配しなくていいな、良かった。

「ありがとう。じゃあ早速明日から仕事よろしくね。仕事は毎日になるけど、休みが欲しければ言ってね。ティノが休んでる時は外で食べたり、他の料理人が料理をしたりしても良いから。それから何か足りないものがあったり、疑問点とかあったらいつでも言って。俺への連絡は……とりあえずアンヌにお願いしても良い？　アンヌなら公爵家に来るのも問題ないだろうし」
「勿論でございます」
「じゃあよろしくね。そういうことだから、何かあったらアンヌに

伝言頼んで」

「かしこまりました。明日からよろしくお願いいたします」

そうしてティノを雇うことで話はまとまった。予想以上に礼儀正しいし、予想以上に面白い人だったし、良い人材を雇えて良かった。

１８０、ティノの料理　前編

よしっ、次はお昼ご飯だな！　ティノの料理、めちゃくちゃ楽しみだ。実はさっきからいい匂いがしていて、かなりお腹が空いていた。早く食べたい。

「じゃあ話はこの辺で終わりにして、お昼ご飯をいただいても良いかな？」

「かしこまりました！　あとは仕上げだけですので、少しお待ちください」

「うん。ティノの料理、凄く楽しみにしてたんだ。時間は気にしなくていいからしっかりと仕上げてね」

「……レオン様、俺の創作料理を楽しみだなんて。本当にありがとうございます！　少々お待ちください！」

ティノはそう言って、スキップでもしそうな勢いで厨房に入っていった。本当に料理が好きなんだな。

そうしてティノが厨房に行くと、食堂には少しの間沈黙が流れた。勢いで皆の意見も聞かずに、ティノを雇うことにしちゃったけど大丈夫かな？

そう思って、俺は皆の方に身体を向けた。

「料理人はティノに決めちゃったけど、大丈夫だった？」

「もちろんです。誰を雇うかはレオン様が決めることですので」

「レオン様、ティノを雇っていただいて本当にありがとうございます」

「ティノは全く問題なかったからね。アンヌ、素敵な息子さんを紹

介してくれてありがとう」

俺が本心からそう言うと、アンヌは一瞬泣きそうな顔になったあと、直ぐに顔を隠すようにして頭を下げてしまった。

「ティノに対してそう言っていただけたのは、レオン様が初めてでございます。本当に、本当にありがとうございます」

「じゃあ他の人は見る目がないんだよ。料理に情熱がありそうだったし、礼儀はしっかりしてるし。まあ確かに、貴族相手に働くとなると難しいのかもしれないけど……。貴族の屋敷では、料理人が主人をジロジロ見たりできないからね」

俺がそう言って顔に苦笑を浮かべると、アンヌさんも同じような表情をして顔を上げてくれた。

「あの子にとっては、ここでの仕事は天職だと思います」

「それなら良かった。そういえばちょっと思ったんだけど、エバンはティノと面識があるの？」

「はい。ティノが公爵家の屋敷にいた時に少し面識がございます。……ティノは、変わらないですね」

やっぱり面識あるんだ。そしてティノは、やっぱり昔からあんな感じなのか。子供の好奇心旺盛な様子をそのままに大人にした感じだもんね。

「ティノをここの料理人として雇ったから、また仲良くしてあげてね」

「かしこまりました。料理の腕は確かですので、これからの食事が楽しみです。ただ、変な料理を食べさせられない限りですが……」

「それなら良かった。じゃあティノには、基本的に朝昼夜は普通の

料理を作るように言っておくよ」
「ありがとうございます」
そうして皆と話しているうちに、ティノが食堂に戻ってきた。料理が完成したようだ。
「レオン様、料理が完成いたしました」
ティノがそう言うと、ロジェが食堂に向かっていく。そしてティノと共に俺の前に食事を並べてくれる。
えっと……、俺一人分だけなの？　皆の分は？
「皆はもう食べたの？」
「いえ、私たちは後でいただきます」
「そんなの寂しいよ。一緒に食べない？」
俺がそう言うと、ティノは途端に顔を輝かせた。
「いいんですか！？」
「もちろん！　俺は雇い主だけど貴族じゃないし、皆で一緒に食べた方が美味しいからね」
「レオン様素晴らしいです！　そこのところをわかってない人が多いんです。食事は大勢で楽しく食べるのが一番です！」
ティノはそう言って、他の皆の分も準備していく。それに困惑したのはアンヌとエバン、それからロジェだ。
やっぱり貴族の屋敷で働く経験が長いと、主と食事を共にするのは抵抗感が強いんだな。
「主人と共に食べるなど……」

「そんなに細かいことは気にしなくて良いから。お店のオーナーと従業員は、一緒に食事をすることもあるでしょ？　それと一緒だよ。ロジェは……俺の従者だから慣れてね？」

俺がロジェを見上げてそう言うと、ロジェは少しだけ顔に苦笑を浮かべて了承してくれた。

「かしこまりました」

ロジェも段々とこういうことに慣れてきたよね。ダリガード男爵家で食事を共にした経験があるからだろうか。これからはもっと慣れてもらわないと。

そうして全員分の食事が準備されて、皆で席に着いた。

「ティノありがとう。じゃあいただこうか」

「いただきます」

俺の声に合わせて皆で食前の挨拶をして、一斉に食べ始める。ティノはまだ自分の食事には手をつけずに、皆の様子を観察するようだ。凄く嬉しそう。

何から食べようかな……。目の前にあるのは、野菜とお肉が入ったスープと、黒いソーセージ？　みたいなやつ。それから何か見慣れないお肉が入っている野菜炒め。あと、これなんだろう？　茶色い……野菜？

それからパンと水。この二つは流石に普通みたいだ。

うーん、とりあえず普通に見えるスープからいただこうかな。俺はそう思ってスープを一口飲んだ。そして、驚きのあまりしばらく言葉を失ってしまった。

美味しすぎたのだ、あまりにも美味しすぎた。いや、美味しいというか、懐かしい！！

日本で飲んでたスープの味がする。この世界のスープは塩や香草などで味付けされているけど、どこか物足りないスープが多かった。出汁がないからだと思ってたけど、このスープはめちゃくちゃ美味しい！

でもこれは出汁じゃないと思う。出汁の繊細な味じゃなくて……、中華風の味というか、そう、ラーメンのスープみたいな味！

「ティノ！　このスープどうやって作ったの！？」

俺は思わず身を乗り出して、勢いよくティノにそう聞いた。

「気に入ってくださいましたか？　私の力作です」

「美味しすぎるよ！　これだけでお店を出せるぐらいなのに、何で広めてないの！？」

「私もこのスープには凄い力があると思っているのですが、私が今まで働いてきた食堂では、とにかく手間がかかるから美味しくても使えないと言われてしまって。このスープは鳥の骨などから作っているのですが、このスープになるまでに三、四時間はかかるのです……」

鳥の骨ってことは……鶏がらスープみたいな感じか。そうだ、そうだよ、その味だよ。これが使えないなんて、その料理人見る目が無さすぎる！

……貴族向けじゃない食堂だと、手間がかかる料理はダメだってなっちゃうのかな。貴族向けのレストランや貴族の屋敷だったらま

た違ったんだろうな。
とにかく、これをこのまま眠らせておくなんて勿体なさすぎる。
こうなるとやっぱり、食事のお店も作りたいよな……でも、今はスイーツのお店で手一杯なんだ。他にもやることはたくさんあるし。
うーん、やっぱりしばらくは手を出せない。
それまでの間、ティノにはレシピ開発だけやって貰おうかな。ティノは絶対に才能あると思うんだ。この才能を腐らせるのは勿体無い。
だって鶏がらスープってどうやって作るのかよく知らないけど、ただ骨を煮込めばいいだけじゃないことは俺にもわかる。臭みを取るための工程とかあるんだろう。それを自分で編み出したなんて……ティノはマジで凄い。ティノとは後で真剣に料理開発について話し合おう。
もしティノが良ければ、今後色々と開発に協力してほしいな。切実に欲しいのは醤油と味噌だ。大豆から作られてるってことと、とりあえず発酵させるってことしかわからないんだけど、何とか作り出したい。
今はそんなに色々手を出せるほど時間がないけど、時間が作れるようになったらお願いしてみよう。

１８１、ティノの料理　後編

俺はテンション上がって色々と考えたので、とりあえず落ち着くためにスープをまた一口飲んだ。うん、やっぱり絶品だ。美味しすぎる、幸せ。

「ティノ、本当に凄いよ。このスープだけで俺がお店を出したいぐらい」

「……それほどでしょうか？」

ティノは俺の言葉に半信半疑の様子だ。まあ、今まで認められなかったんだからしょうがないか。本当に今までの職場の料理人はセンスない。

「絶対人気になる。これ凄く美味しいし、色々な料理に応用できるでしょ？」

「確かに、これは応用可能なものだと私も思います。しかし最近作り出したものなので、まだそこまで試行錯誤していないのです」

「ティノ、材料費は出すから色々と試行錯誤してみて」

「本当ですか！？　レオン様、本当にありがとうございます！」

俺が材料費を出すと言うと、ティノは一気に笑顔になった。そして勢いよくお礼を言いながら頭を下げる。

はぁ～、一品目からかなり驚いたな。でも後三品もあるんだ。とりあえず次に行こう。

次は……、黒いソーセージみたいなやつにしようかな。俺はそう決めて、そのソーセージを一口食べた。

すると、さっきとは逆の意味で驚いた。

……不味い。これは不味い、何これ？　何の味？

「ティノ、これは何？　あんまり美味しくない……」

「ああ～、やっぱりそれはダメでしょうか？　それは結構昔に開発したものですが、一部の人にはうけるのです。ただ大多数の人には微妙だと言われます」

「何で作られてるの？」

俺が今まで食べたことがない味なんだよな。全く想像がつかない。でもとりあえず不味い。吐き出すほどではないけど、二口目は食べない。

「これは豚の血と油、それから香草などと小麦粉で作ってます。俺はかなり好きなんですけど……」

「血！？　これ血なの！？　……何で血を料理にしようと思ったの？」

「はい。血は毎回捨ててしまうのが勿体無いと思ってまして、どうにか美味しい料理にできないかと考えて辿り着いたのがこれです。他にも煮込み料理や調味料としての使い方など色々と試したのですが、これが一番美味しくできました」

「そ、そうなんだ……。アンヌとエバン、ロジェはどう？」

俺は他の三人にそう聞いてみた。エバンは普通に食べていて、アンヌは一切手をつけていない。ロジェは恐る恐る一口食べて止めたようだ。

「私は普通に好きです。クセになる味と言いますか……」

「だよね！　エバンさんわかってる！」

「私は苦手で食べられません。初めてティノに食べさせられた時、あまりの不味さに飲み込めませんでした……」
「やっぱりそうだよね。ロジェはどう？」
「私も苦手です……」

うん、やっぱり苦手な人の方が多いよね。これは日本で言うところの、塩辛とかこのわたとか、そういうタイプのやつだな。お父さんが好きでよく食べてたけど、俺は何が美味しいのか理解できなかった。それと同じだな。

「とりあえずこれは苦手かな……」
「私の料理は人を選ぶものもありますので、苦手なものは避けていただければと思います」
「そうするよ。じゃあ次を頂くね」

そうして俺は、次に野菜炒めに手を出した。茶色のものは怖いので後回しだ。
野菜炒めに入っているお肉のようなものを一つ取り、近くでまじまじと眺めた。前回の反省から、とりあえず外見を観察することにしたのだ。
そうして観察することしばし、俺はそれの正体がわかった気がした。多分アレだ。もしアレなら絶対美味しい、そう思って躊躇いなく口に入れる。

……やっぱり！　美味しい！

これ、もつだ。弾力があって噛めば旨味が出てきて本当に美味しい。これって確か下処理とか大変なんじゃなかったっけ？　臭みなんてほとんど感じなくなってる、凄いな。

「このお肉凄く美味しいよ」
「本当ですか！　それも苦手という方が結構いるものでして、普段は捨てる豚の臓物なのです。最初は臭くて不味くて食べられるものではなかったのですが、色々と試行錯誤して美味しく食べられるまでになりました」

凄い、ティノの料理に対する情熱が本当に凄い。もう尊敬だ。ティノ先生と呼びたいぐらいだ。

「ティノは本当に凄いよ。美味しいものができるまで諦めない姿勢が凄い。尊敬する」
「そこまで言っていただけるなんて……。ありがとうございます」

俺がそう言うと、ティノは照れたように笑った。今までこの才能が埋もれてたことが本当に勿体ない。ティノと出会えたことに感謝しないと。

よしっ、あと一皿も食べよう。俺はもつが美味しかったことでまた安心して、残っていたもう一つの料理も食べることにした。茶色くてよくわからないやつだ。
少量だけをフォークで取り口に運ぶ。そしてゆっくりと咀嚼した。

……あれ？　これ意外と美味しいかも。

よくわからない見た目とは違い、味はかなり良い。だけど何の味かと聞かれると困る。しょっぱいんだけど、塩をかけた感じじゃない。
でも、なんかこれ、どこかで食べたことがある味な気がする。うーん、何だっけ……
ちょっと硬くて筋があるけど、噛めば噛むほど美味しい。野菜か

な？　野菜の茎とか。でも、何の野菜だろう？

「ティノ、これは何？　野菜？」

「いえ、こちらは竹でございます。簡単に言えば、竹を塩漬けしたものです」

「竹って、タケノコじゃなくて竹そのもの？」

「はい。竹の中でも柔らかくて食べられる部分ですが、竹そのものです」

「竹って食べられたんだ……」

竹なんて初めて食べたよ。でも、別に不味くない。ちょっと硬いけど歯応えがあると思えばそこまで気にならない。何か、白米が欲しくなる味なんだよな。

本当にこれ何の味だっけ。絶対に似たものを食べたことがあるはずだ。でも思い出せない。竹は流石に食べたことないし……

「レオン様はこちらがお好きですか？」

「うん。これは嫌いじゃない。というか好きかも。クセになる味だね」

「気に入っていただけて良かったです。これも他の方にあまり受け入れられないのです」

「そうなの？　皆はどう？」

俺が皆を見回してそう言うと、アンヌとエバンは好きじゃないようで、ロジェは意外と気に入っているらしかった。

「アンヌとエバンは苦手なの？」

「はい。硬くて食べ物とは思えません……」

「私も竹を食べるのは流石に……」

確かにこの歯応えが苦手な人は多いよね。それに竹って聞いたら食欲無くなるのもわかる。俺は何となく懐かしい味だから、抵抗感はあまりないけど。

「ロジェはこれ好きなの？」

「はい。最初は微妙かと思いましたが、食べ慣れたらずっと食べ続けたい味です」

「やっぱりクセになるよね」

本当にこれ何の味だっけ……

俺はそう考えながら、一つ二つと食べ進めていく。そうしてずっと食べ続けていると、ティノが他の食べ方を提案してくれた。

「これは細かく刻んで、こちらのスープに入れても合います。それから硬いパンに乗せても結構合うのです。肉との相性も悪くありません」

俺はそう言われて、スープにいくつか入れて一緒に口に入れてみた。うん、確かに意外と合う。でも俺はそのままの方が好きかなぁ。

と、そこまで考えたところで閃いた。わかった、これが何に似てるのかわかった。これ、メンマだ！！　味はかなり似てる。食感もそこまで外れてない気がする。メンマも歯応えがある感じだったはずだ。

はぁ～、スッキリした。そうだよ、メンマだよ。メンマって竹から作られてたのかな？　それともこれが似てるだけ？

よく考えれば、メンマの原材料なんて考えたことなかったな。ラーメンに乗ってたのしか食べたことないし。

でも、思い出したらより懐かしい味だ。今日は、ティノのおかげ

で懐かしい味に沢山出会えた。本当に嬉しい。

「ティノ、今日は沢山の料理をありがとう。苦手なものもあったけど、このスープと竹、あと野菜炒めは凄く美味しかったよ」

「そう言っていただけて良かったです！」

「さっきも言ったけど、材料費は渡すからこれからも料理の研究を続けてほしい。そして何か出来上がったら教えてくれる？　俺も絶対味見するから」

俺がそう言うと、ティノは今日一番の笑顔を浮かべた。

「もちろんです！　こちらからお願いしたいぐらいです。本当に、本当にありがとうございます！」

「こちらこそありがとう、期待してるよ。じゃあとりあえずは、あのスープの使い道を考えてくれたら嬉しいかな。そうだ、食材を無駄にすることだけは極力避けてね」

「かしこまりました。そこは心得ております。これからよろしくお願いいたします！」

そうして驚きの連続だった昼食を終えて、俺は公爵家に戻った。ティノを雇えたし、これで従業員についての諸々は整ったかな。ロニーと一緒に皆が中心街に来ても、もう大丈夫だろう。

でもまだまだやることは沢山ある。マルティーヌ達とお茶会の予定もあるし、ヨアンのところにも行かないと。その後は従業員の皆を寮に案内して、ロニーにも引っ越してもらって、従業員の皆が集まったら仕事を割り振って。

そうして慌ただしく過ごしてたらすぐに学校が再開するな。

……俺って、まだ十歳のはずなのに忙しすぎる。

でも自分から仕事を増やしてるようなもんなんだけどね。うん、ちょっと大変だけど、楽しんでやってるし頑張ろう！　でも今日は、とりあえずゆっくりしようかな。

そうして今後の予定を頭の中で考えつつ、馬車に揺られた。

１８２、夏の休みの思い出

そうしてティノと会った次の日。
今日はマルティーヌ達とお茶会の予定が入っている。お茶会兼昼食会なので、お昼前にマルティーヌとステファンが来る予定だ。
俺とリュシアンは既に応接室に集まり、二人を待ちながら話をしていた。部屋には二人だけだ。

「リュシアンは夏の休みの間何してたの？」
「基本的には鍛錬と勉学だな。ただステファン達と数回は会ったぞ。それから他の友人にも会ったな。後は貴族の集まりに参加したぐらいだ」
「貴族の集まり？」
「ああ、同じぐらいの年齢と爵位の者達が集まる茶会のようなものだ。友好を深めるのが目的だとか言っているが、婚約者探しの意味合いが強い」
「そんな集まりあるんだ……」

まだ十歳なのに、もう婚約者か。貴族って大変だ。

「リュシアンは婚約者っているの？」
「いや、私はまだいない。ただ数人には絞られているぞ」
「え、そうなの！？　俺も知ってる人？」
「いや、レオンとの面識はないだろう。まだ王立学校に入学してない歳の者がほとんどだからな。私も名前を知っているぐらいで会ったことはない」

会ったことはない婚約者候補、そんなの嫌だなぁ。これは俺が日

本人的な自由恋愛の考えを持ってるからなんだろうけど。
マルティーヌとステファンも候補はいるのかな？　いや、あの二人は決まってる可能性もあるのか……

「マルティーヌとステファンはもう決まってるのかな？　第一王子と第一王女だし……」
「いや、決まっていないぞ。だから二人の婚約者になろうと必死な者が大勢いるのだ。ただ、あと数年以内には決めなければならないだろう」
「……そっか」

何か、皆が遠くに行っちゃうみたいでちょっと寂しいな。俺はそんな寂しい気持ちを振り払うように、前に思った疑問を聞いてみることにした。

「前に考えたことあるんだけど、マルティーヌとリュシアンが婚約するって可能性はないの？」
「私とマルティーヌ？　それは絶対にないぞ？」
「絶対になの？　爵位的には十分あり得るんじゃない？」
「そうか、レオンは知らなかったのか……」

リュシアンがそう言って、驚いたような表情で呟いた。なに、何か秘密とかあるの？

「何かあるの？」
「いや、私とマルティーヌは従兄弟だぞ。従兄弟は一応結婚できるが、推奨はされていない。よって私がマルティーヌと婚約することはないな」
「え、従兄弟なの！？　じゃあステファンも！？」
「そうだぞ」

待って、そんな衝撃の事実初めて知ったんだけど！　だって、二人とは初対面みたいだったじゃん！　そんなこと今まで一度も聞いてないよ！

リュシアンと二人が従兄弟ってことは、親が兄弟ってことだよね？

「誰と誰が兄弟なの？　クリストフ様とエリザベート様？　それともアレクシス様とソフィア様？」

「陛下と母上だ」

「ということは、ソフィア様って元王女様だったの！？」

「そうだぞ。知らなかったのか？　お祖父様も母上のことはソフィア様と呼んでいただろう？　昔からの癖だと聞いたことがある」

「確かに……そんな気もする」

そんな細かいことまで気づくわけないよ！　今年一番の衝撃だった。いや、人生で一番ぐらいの衝撃だった。

じゃあ、アレクシス様とソフィア様、それから王立学校の校長先生であるトリスタン様が兄弟ってことか。確か前に、三人兄弟だって聞いたことがあるような気がする。あの時は聞き流しちゃったけど、まさかすでに面識がある人だったなんて。

でも従兄弟なんてまだ信じられない。全くそんな雰囲気なかったよね？

「でも、リュシアンと二人は王立学校で初対面だったんだよね？」

「ああ、覚えていないほど小さな頃には会ったこともあるらしいが、それ以降は会っていないからな。貴族は基本的に領地にいて、会う機会はあまりない。気軽に会えるような立場でもないし、タイミングを逃して王立学校入学になったんだ」

「そうなんだ……。兄弟仲が悪いとか、そういうことではないんだよね？」

「そういう話は聞いたことがないぞ。ただ、貴族は嫁いだら実家にはあまり帰らないのが普通だからな。よほど仲が良くない限り頻繁に会いに行くようなことはないんじゃないか？　私が当主の座を継いで父上と母上が王都に住むようになれば、今よりも会えるようになるのだろう」

貴族って里帰りもあまりできないなんて、窮屈だな。それにしても本当に驚いた。じゃあマルティーヌもソフィア様みたいにどこかの貴族に降嫁して、そうしたら王都に来ることもほとんど無くなるんだな……

リュシアンも領地に住むようになるし、本格的に寂しくなりそう。

リュシアンにはまだ転移で会いに行けるかもしれないけど、マルティーヌには難しいだろう。だって、妻に頻繁に会いに来る男なんて騒動の元にしかならない。どんなに懐の深い旦那さんだって嫌だろう。

はぁ～、なんか落ち込む。今の楽しい時間にも終わりはあるんだよな。

そうしてリュシアンから衝撃的な話を聞いていると、マルティーヌとステファンが到着したと知らせが入った。そしてすぐに二人が部屋まで来る。

「ステファン様、マルティーヌ様、お久しぶりでございます」

「レオン久しぶりね。会えて嬉しいわ！」

「レオン、やっと帰ってきたんだな」

「はい。数日前に戻って参りました」

使用人がいるので硬めの挨拶をして、昼食を準備してもらってから部屋には四人だけになった。

まず口を開いたのはマルティーヌだ。

「レオンがいなかったから、夏の休みが楽しくなかったわ」
マルティーヌは少し不満げな顔で、頬を膨らませてそう言った。
そんなふうに言ってもらえるなんて、本当にありがたいことだ。
でもこれも今だけか……、俺はさっきリュシアンとした話を引きずって、少しだけ寂しい気持ちになってしまう。
でも皆にはバレないように、いつも通りの笑みを浮かべてマルティーヌに返す。
「ごめんね。またこれからはしばらく中心街にいるから、お茶会しようか。マルティーヌは夏の休みの間何をしてたの？」
俺がそう答えると、マルティーヌは途端に笑顔から心配そうな表情に変わった。
「……レオン、何かあったの？」
そして顔を覗きこまれながらそう聞かれる。いつも通りに笑ってたはずなのにな……
何でいつもマルティーヌにはバレちゃうんだろうか。そう思いながらも気づいてもらえたことが嬉しくて、複雑な気持ちになる。
「さっきリュシアンから衝撃的な話を聞いて、まだ思考がまとまってないんだ。それだけだから大丈夫だよ」
「衝撃的な話って、リュシアンは何を話したんだ？」
ステファンにそう聞かれたので、俺は簡潔にさっきの話をすることにした。

「リュシアンとマルティーヌ、ステファンが従兄弟だって話を聞いて、本当に驚いたんだよ」
「レオンは知らなかったのね」
「確かに私たちも従兄弟ということは知っているが、日頃意識することはないからな。どちらかといえば友達という認識が強い」
「でも、それがそんなに驚くこと？」
「すっごく驚いたよ。皆が従兄弟で、まさかソフィア様が元王女様だったなんて」
「確かにそうかしら？　でも何でそんな話になったの？」
「皆の婚約者の話をしてたんだ。まだリュシアンは決まってないけど候補はいるって。二人は決まってないらしいけど……、候補はいるの？」

俺がそう聞くと、マルティーヌが途端に嫌そうな顔をした。

「ここでも婚約者の話なの？」
「ははっ……マルティーヌは婚約者の座を狙う貴族に嫌気がさしてるんだ。男性と会えば自分を売り込み、女性と会えば家族を売り込み、そんな人ばかりだって」
「本当に嫌になるわ！　皆は私をアクセサリーか何かだと思ってるのよ」

マルティーヌは怒ったようにそう言った。確かに、前もそんなこと言ってたな。そうだ、貴族を昼食会に招待する話の時だ。

「確かに前も言ってたね」
「もううんざりよ！　私は私のことを見てくれる人じゃなければ結婚なんてしないわ」
「マルティーヌはこう言って一向に婚約者を決めないから、多分決まるのはもっと先になる。今この国にはマルティーヌを嫁がせてま

で関係を強化したい国はないからな。そこまで急ぐ必要はないんだ。私は一応候補は決まっている」

そっか、マルティーヌの婚約者が決まるのはまだ先になるのか。じゃあまだしばらくは、今みたいに楽しく話せるんだな。

その事実を認識したら、さっきまでの落ち込んだ気持ちが嘘のように晴れていくのを感じた。

俺の今のこの気持ちはちょっとまずい気もするけど……まあ、今は気にしないようにしよう。とりあえずこの瞬間を楽しもう。そう思ったら本当に気持ちが軽くなり、何だか楽しくなってきた。

「じゃあ、マルティーヌと会えなくなることはしばらくないね」

「たとえ結婚しても私は四人で会うわ。それを許してくれる方とじゃないと結婚なんてしないもの」

「ふふっ……そんな人いないんじゃない？」

「いないなら結婚なんてしなくて良いのよ」

「ははっ……今のこのマルティーヌを見たら、同年代の貴族は皆ガッカリするぞ」

リュシアンがそう言って笑った。

「いいのよ！　もうこの話は終わり、もっと楽しい話をしましょう。私はレオンの話を聞きたいわ。夏の休みに何をしてたの？」

「そうだね。俺は基本的には実家にいたけど、それ以外にロニーの孤児院に行ったり、マルセルさんの工房に行ったりしたよ。後は、料理の開発とか」

「また新しい料理を開発したの！？」

「今度はどんな料理なんだ？」

皆は料理の話になった途端、目を輝かせている。やっぱり子供は婚約者より美味しい食べ物だよね。

そうしてそれからは皆で楽しく休みの間の話をして、夕食の時間まであと一時間という時間に、名残惜しく解散となった。

やっぱり皆と話すのは楽しい。俺はこれからもこうして皆と仲良くしていきたいな、そう強く思った。

１８３、ステイシー様との再会

そうしてマルティーヌ達と楽しい時間を過ごした次の日、俺はヨアンのところに行くことにした。
午前中は屋台をやっているはずなので、驚かせるために広場の手前で馬車を降りて、ロジェと共に歩いて屋台まで行く。
服装が良いものだからちょっと目立ってるけど、まあ下級貴族程度の服装だしそこまで問題にはならないだろう。

そうしてロジェと共に歩いていくと、俺の屋台が見えてきた。おおっ、数人並んでるみたいだ。結構繁盛してるな。
俺は屋台の裏側に周り、後ろからバレないようにヨアンに近づいた。そして待っているお客さんがいなくなったところで、ヨアンに話しかけた。

「ヨアン、久しぶり！」
「うわぁっ！！」

ヨアンは俺のその言葉に飛び上がって驚き、恐る恐る後ろを振り返った。そして俺の顔を見た瞬間に安堵の溜息を吐いた。

「レオン様……悪戯はやめてください！　本当に驚きました」
「ははっ、ヨアンごめんね。そんなに驚くなんて思わなかったんだ」
「次はやめてくださいよ！」
「わかったわかった」

ヨアンはガタイが良い大男なのに、意外とビビリなのかな。俺はヨアンの意外な一面を知ることができて、ちょっとだけ嬉しくなっ

た。

「レオン様、中心街にお戻りになったんですね」
「うん。数日前に戻ってきたんだ。今日はヨアンにその報告と、研究の進みを聞こうと思って」
「かしこまりました。では屋台を片付けてダリガード男爵家に向かいますので、レオン様は先に向かわれていてください。ステイシー様もレオン様に会いたがっておられましたよ」
「そっか、じゃあ先に向かってるね。ヨアンは急がなくていいから後から来て」
「かしこまりました」

そうしてヨアンとまた別れて、俺は馬車でダリガード男爵家に向かった。

ダリガード男爵家に着くと、久しぶりだからかステイシー様が出迎えに来てくれる。

「ステイシー様、お久しぶりです」
「レオン、帰って来たのですね！　レオンに話したいことがあるのです。実はユキがとても大きく成長しました。是非会ってあげてください。ユキも喜びます！」

俺がステイシー様に挨拶をすると、ステイシー様は凄く嬉しそうに弾んだ声でそう言うと、俺の手を取り屋敷の中に入った。
えっと、急展開すぎる。どこに連れて行かれてるんだ？　それに、ユキって誰だっけ？
そうして俺が考えを巡らせている間に、一つの部屋に辿り着いた。

「ここです！」
「えっと、ステイシー様？　こちらは何の部屋でしょうか？」
「私の部屋ですよ？」

ステイシー様の部屋！？　二人きりで入ったらまずい予感しかしない！　ステイシー様のメイドや護衛はいないみたいだし……
俺はそう思って、とりあえずロジェに絶対俺のそばを離れないように目線で伝えた。そして部屋のドアも開けたままにしてもらう。
「ステイシー様、お部屋に入るのは無作法ですので、応接室に案内していただけませんか？」

俺がそう言うと、ステイシー様は何かに気づいたような顔をして、途端に少し恥ずかしそうな様子になった。
「も、申し訳ありません。ついレオンが来たことが嬉しくて……暴走してしまいました。殿方を私の部屋にお連れするのは、はしたなかったですね。では応接室にご案内いたします」

そうしてステイシー様は、今度はしっかりとメイドさんに指示を出して俺を応接室に案内してくれた。
ステイシー様って少し他の人と違う感性を持ってるんだけど、基本的には礼儀正しくて普通に良い子なんだよね。友達としてなら仲良くしていける気がする。

そうして応接室に移動して、今度こそしっかりとユキを見せてもらった。
「レオン、ユキは大きくなったでしょう？　あの頃は少ししか咲いていなかった花も、沢山咲きました。ユキは毎年この時期が、一番

綺麗でたくさんの花を咲かせてくれるのです」

そうしてステイシー様が見せてくれたユキは、確かにとても可愛くて綺麗な花を咲かせていた。そうだよ、ユキってこの花のことだったよ。

毎年ってことは、ユキは多年草なんだな。

「とても可愛いですね」

「そうなのです！　是非ユキに挨拶してあげてください」

挨拶……、花に挨拶するのって、地味にメンタル削られるんだよな……。まあ、やるしかないか。

「ユキちゃん、お久しぶりです。レオンです」

俺がそう言ってユキに頭を下げてからステイシー様を見ると、未だ期待の眼差しが俺に向けられている。

えっと……まだ何か言わないとダメなの？　これ以上は辛いよ！

「……とても、可愛らしく、なりましたね？」

「レオン、ユキがとても喜んでいます！」

良かった。俺のセリフは正解だったみたいだ。

「良かったです」

そうしてステイシー様とユキと共に、夏の休みのことについて少しだけ話して、俺は厨房に向かった。

ふぅ〜、久しぶりに話すのは楽しかったけど、ちょっと疲れた。ステイシー様の夏の休みは基本的に料理をしていたらしい。レシピ

を考えていたら、同時に料理にもハマったみたいだ。
その代わりレシピ開発は進んでないみたいだけど、まあステイシー様のお店は早くても卒業後だから、あと四年半はある。まだまだ時間があるから良いのだろう。

厨房に行くと、既にヨアンが待ってくれていた。

「ヨアン遅くなってごめんね。ステイシー様と話してたんだ」
「いえ、謝られるようなことではありません。待っている間に準備を進めておきましたので」
「準備？」
「はい。実はレオン様から研究を任されていたものが形になりましたので、今出来立てを食べていただこうかと」
「本当に！？」

凄い！　ヨアン凄すぎる！

「私の中ではかなり美味しいものが作れました。あとはレオン様に判断していただければと思います」
「わかった。しっかり確認するね」
「ありがとうございます。では、あと数十分お待ちください」

どんな仕上がりだろうか。ちゃんとスポンジケーキになっているのかな。すっごく楽しみだ。
スポンジケーキになってたら、やっとショートケーキが作れる！
やっぱりイチゴがいいけど、盛り付けるフルーツを変えて季節のケーキって売り出しても良いよね。
この世界でショートケーキが食べられるなんて……。本当にワクワクする！　本当に嬉しい！

よしっ、これを皮切りに次々と日本にあったケーキを再現したい。他に何のケーキがあったっけ？

ええと、チーズケーキ、チョコレートケーキ、タルト、パイ、モンブラン、ミルクレープ、シフォンケーキ、ティラミス、シュークリーム、ロールケーキ、カップケーキ……こんな感じかな。

この中でスポンジケーキがあれば作れそうなのは、ロールケーキとカップケーキ。

……あれ？　もしかしてこれだけ？　他のやつは、どうやって作られてたのかわからないかも。え！？　そんなことある？　ケーキって基本的にはスポンジだよね？

でもよく考えたら、チョコレートケーキはチョコがない。チーズケーキは……、全く作り方がわからない。レアチーズケーキにスポンジが使われないのは何となくわかるけど……、ベイクドチーズケーキとかスフレチーズケーキとかは、何で作られてたの？　スポンジにチーズ混ぜれば良いの？

うわぁ～、またしても壁にぶち当たったな。

でも、他には作れそうなのもある。うん、ミルクレープはクレープの皮を重ねるやつだから多分できるし、シフォンケーキもスポンジケーキと似てる、気がする。スポンジケーキをそのまま売り出せばシフォンケーキになるかな？

まあ、誰も正解は知らないから、極論美味しければ良いんだ。モンブランもカップケーキに栗のクリームが乗ってるイメージだから、作れる可能性はある。

そう考えたらとりあえず十分だろう。この世界にはケーキが全くないんだから、一種類だけでも流行るはずだ。

とりあえず、種類を増やすよりも一つ一つのクオリティを上げることを重視するかな。

１８４、ヨアンの成果

そこまで俺が考えをまとめたところで、ついに焼き上がったようでヨアンに声を掛けられた。さっきから凄く良い匂いがしてたんだよね。

日本で実家にいるときに、お母さんがお菓子作りをしてた時の匂いに似てる。……本当に懐かしい。

「レオン様、焼き上がりました」

「ありがとう。このまま食べても良いのかな？」

「はい。出来立てはやはり美味しいです。しかしこれは、出来上がった後にすぐに濡らした布を被せて冷やすと、しっとりとして冷めても美味しくなります」

確かに、ケーキにするならスポンジは冷まさないとダメだよね。生クリームが溶けちゃうし、結局冷やすんだし。

そのことを伝えてなかったのに美味しく冷やす方法を考えてくれるなんて……ヨアン天才！！

「そこまで考えてくれるなんて、ヨアンありがとう。実は俺が考えてるスイーツのレシピは冷たいものなんだ。だから本当にありがたいよ」

「いえ、レオン様は持ち帰りが基本のお店になると仰られていましたので、出来立てよりも時間をおいても美味しいものをと考えました」

……ヨアン、本当に素晴らしすぎる！

めちゃくちゃ給金弾むし、研究費もいくらでも出す。特別手当とかも出す。本当にありがとう！

「俺、ヨアンと出会えて良かったよ」

「なっ……大袈裟です！　……では、今味見される分を少し取り分けて、残りは冷やす方に回します」

そうしてヨアンは少しだけ照れた表情を隠すように、黙々とケーキを取り分けてくれた。俺の分とロジェにもだ。

「では、召し上がってみてください」

ヨアンは少しだけ緊張した面持ちで、そう言って俺とロジェにケーキとカトラリーを渡してくれた。

「ロジェも食べたら感想をお願いね」

「かしこまりました」

「じゃあヨアン、いただくね」

そうして二人でスポンジケーキを一口食べる。

……やばい。これスポンジケーキだ。めちゃくちゃ美味しい！

美味しすぎる！！

ふわふわで甘くて口の中でとろけちゃうような感じ。これだよ、これだ！

やばい、泣きそうなぐらい感動する。

「ヨアン、すっっごく美味しい。これだけでも確実に売れるよ。こんな食感と味の食べ物なかった！」

俺がそう言うと、ヨアンは途端に安心したような顔をして笑顔に

なった。

「良かったです！　私もとても素晴らしいものができたと思っています。ただ一番凄いのはレオン様です。材料を曖昧ながらも指定してくださったので、ここまで美味しいものが作れました。本当に、本当にありがとうございます！」

「そんなことない、俺は適当なレシピを思いつくだけだから。それを実現させたヨアンが凄いんだよ。今回のこれなんて何となくの材料を伝えて、それで美味しいものが作れる気がするってかなり曖昧な指示だったし……」

本当にこれを作り上げたヨアンには感謝しないとだ。俺一人だったら絶対に作れなかった。

「いえ、私に研究の機会を与えてくださったのはレオン様ですし、実際にレオン様と出会うまでは全く上手くいかない研究でした。やはりレオン様のおかげです！」

「いやいや、違うよ……って、ふふっ、お互いに感謝してるってことでいいか」

俺は二人で感謝し合っているのが途端に面白くなって、少し笑いながらそう言った。

「確かにそうですね」

「うん。そうだ、ロジェはどう？」

俺はまだロジェの感想を聞いていなかったと思いロジェの方を見ると、予想だにしない光景が待っていた。

ロジェが、思いっきり微笑んでいたのだ。というよりも、幸せそ

うな顔をしている。こんな顔初めてみた！
最近は感情も出すようになったけど、それでも無表情がデフォルトだったのに。

「レオン様、これは、これは、本当に素晴らしいです！　ふわふわで口の中で溶ける食感も、甘くて優しい味も、全てが完璧です！」

ロジェは興奮した様子でそこまで言うと、途端に我に返ったようで、少しだけ慌てた後にいつもの無表情に戻った。
いつもさっきみたいに感情を出してくれていいのに。

「それは良かった。これ売れると思う？」
「はい。確実に売れます。貴族で大人気となるでしょう。連日待ちができるでしょう。予約制にするべきかもしれません」

無表情に戻ってもいつもより饒舌だな。俺はその様子に思わず顔が緩みそうになりつつ、それを何とか抑え込んだ。

「そこまでかな？」
「そこまでです。普通の店は最初に流行るまでのきっかけが必要ですが、レオン様の場合は大奥様が広めてくださると思いますので、すぐに客が殺到すると思われます」

確かにそうかも。そうだ、マルティーヌも絶対にお店に行くって言ってたよな。王女殿下が来たってなったら、とりあえず貴族は皆来そうだ。そこで味を気に入ってくれたなら、贔屓にしてくれるだろう。
忙しくなりそうだな。嬉しい悲鳴だ。
「じゃあ販売方法も考えないとだね。とりあえず、これは大成功！

この後どうやって使うのか考えようか。後これに名前もつけないとだね」

俺がそう言うと、二人は不思議そうな顔をした。

「レオン様、これで完成ではないのですか？」
「え？　違うよ？　これを使っておいしいスイーツにするんだ」
「これ以上ですか……？」
「もちろん！　とりあえずこれの名前だけど、俺が決めちゃっても良い？」
「はい。もちろん構いませんが……」

ヨアンは少し戸惑いつつも了承してくれたので、俺はこれをスポンジケーキと名付けることにした。やっぱり名前はそのままが覚えやすくてわかりやすいからね。日本の名前を覚えているものはそのままが良い。

「じゃあ、これはスポンジケーキって名前ね」
「スポンジケーキ、ですか？」
「そう。覚えにくい？」
「いえ、発音もしやすいですし良いと思います」
「じゃあ決定ね。これはスポンジケーキ。そしてこれをどうやってアレンジするかなんだけど……」

そこから俺は、ヨアンに俺が知っている限りの知識を教えた。まずは生クリームで全体を覆うことや、中に生クリームを挟むこと、それからフルーツを飾ることや、生クリームを綺麗に盛ること。
生クリームとフルーツなどを挟んで巻くこと。焼くときに型を小さいものとすることでカップケーキになること。
ただ、日本にあったような耐熱紙のカップケーキはできないので、

ちょっと違うものになりそうだけど。小さなホールケーキみたいな感じとかかな。まあ、美味しければ良いよね。

あとはマロンクリームが作れないかとか。チーズを使って美味しいケーキにできないかとか。クレープに生クリームを挟んで重ねてデコレーションできないかとか。とにかくそんな感じで、ヨアンに無茶振りをしまくった。

途中で止めようかと思ったんだけど、ヨアンは凄く瞳をキラキラとさせてやる気に満ちてたから、多分止めなくても良かったと思う。

「レオン様、レオン様の発想力は素晴らしいです！　今レオン様が仰られたことを全て再現できるかは分かりませんが、とりあえずできそうなところからやってみます！！」

ヨアンは頼もしい顔でそう言ってくれた。

「ヨアン、本当にありがとう。何か足りないものとかあったらすぐ言ってね」

「かしこまりました」

「そうだ、お店の厨房がもうすぐ使えるようになるから、そしたらそっちに移ってもらいたいんだ。あと、従業員専用の寮を作ったから、そっちにも引っ越してもらいたいんだけど……」

「それはありがたいです！」

ヨアンは食い気味にそう言って、俺の方に身を乗り出してきた。凄いな、ヨアンのテンションも上がりまくってる。

「ヨ、ヨアン、ちょっと落ち着こうか」

「はっ……、も、申し訳ありません。つい嬉しくて」

「それはわかるよ。その情熱は研究にぶつけてね」

「もちろんです！」

この勢いなら、たくさんのケーキを作り出してくれそうだ。本当に頼もしい。

１８５、ダリガード家への感謝

「じゃあ引っ越しのことだけど、いつ頃引っ越せるかな？　できれば早い方がありがたいんだけど……」
「そうですね……明日一日荷物をまとめて、明後日には」
「じゃあ明後日に引っ越しでお願いしても良い？　そうだ、ロジェ、馬車って借りられるかな？」
「もちろんでございます」
「良かった。そしたら明後日のお昼前ぐらいに、ヨアンの家に馬車を手配しておくよ」
「かしこまりました。ありがとうございます」

ヨアンが引っ越したら、そのついでにお店の厨房に拠点を移しちゃうのもありだな……。本当は改装が完全に終わってからにしようと思ってたんだけど、店内の改装は既に終わっていてあとは外だけなんだ。だから中で仕事をする分には問題ないと思う。
それにお店には冷蔵庫なども入れる予定だから、そっちの方が便利だろう。

「じゃあヨアン、引っ越したあとは仕事場所をお店に移してくれる？」
「もう使えるのですか？」
「うん、店内の改装は終わったんだ。それに箱の中を冷やす魔法具、冷蔵庫って言うんだけど、それも設置する予定だから便利になると思う」
「箱の中が冷えているのですか？　……冬のように、ですか？」
「そうだよ」
「それは、素晴らしいです！　ではそちらに移動します」

ヨアンは輝くような笑顔を見せた後、すぐに仕事場を移すことに頷いた。かなり食い気味に頷いた。
俺はその様子に思わず苦笑してしまう。早めに冷蔵庫を設置しないとだな。

「ありがとう。じゃあ、ピエール様とキャロリン様に話してくるよ。ヨアンも一緒に行く？」
「ご一緒させていただきます」

そうして俺たちは屋敷の使用人に伝言を頼み、少し待った後にピエール様とキャロリン様と応接室で会うことができた。

「ピエール様、キャロリン様、お久しぶりでございます」
「久しぶりね。実家に帰っていると聞いたけれど、中心街に戻ってきたのですね」
「はい。先日戻って参りました」
「怪我もなくて良かったわ」
「ありがとうございます」

キャロリン様がそう言って優しく笑いかけてくれる。

「レオン君がいない間、ヨアンの作ったスイーツを食べることができて幸せだったよ」
「そう言っていただけると、本当にありがたいです」

本心もあるだろうけど、俺に気を遣わせないためにも言ってくれてるんだろう。本当に良い方達だ。これからもずっと仲良くしていきたいな。

「それで、今日は話があるんだったかな？」
「はい。実はお店の改装が終わり厨房が使えるようになりまして、仕事場所をお店に移そうと思っております。長い間厨房をお貸しいただき、本当にありがとうございました」

俺はそう言って深く頭を下げた。

「また、ヨアンのことを紹介いただいたことにも、本当に感謝しております」

この二人がヨアンを紹介してくれなかったら、スイーツ店は夢のまた夢だったと思う。本当に感謝しかない。

「そんな、いいのよ。私たちもこれからたくさんのスイーツが生まれるのを、楽しみにしているわ」
「ああ、レオン君のお店に行くのが楽しみなんだ」
「ありがとうございます。お二人には定期的にスイーツをお届けいたします。新作もいち早くお届けいたしますので、ぜひ楽しんでいただければと思います」
「凄く楽しみにしているわ。レオン君のスイーツを楽しむために、できる限り長生きしないとね」
「本当だな」

二人はそう言って優しく笑いあった。素敵な方達だな。

「レオン君、これからもいつでもこの屋敷に来て良いからね。ステイシーに会いに来るのでも、特に予定がなくても」
「ええ、たまには一緒にスイーツを食べましょう」
「……はい！　ぜひまたご一緒させてください」

そうしてピエール様とキャロリン様との話を終えて、その後はヨアンがお二人と話して、ダリガード男爵家を辞去することになった。ちょうど馬車もあったので、荷物も全て引き上げる。

そうして馬車に乗り込もうとしたとき、ステイシー様が見送りに来てくれた。

「レオン、ここの厨房から仕事場をお店に移すのですね」
「はい。ステイシー様のお姿が見えなかったので、学校でお伝えすれば良いかと思っていたのですが……」
「少し出掛けていて先ほど帰って来たのです。レオンが来なくなると、……寂しいですね」

ステイシー様はそう言って、少しだけ寂しそうに笑った。その笑い方がなんだか大人びていて、ちょっとドキッとしたのは内緒だ。

「また王立学校でいつでも会えますよ。それに私たちは友達ですから、予定がなくても遊びましょう」
「……そうですね！　では、またここに遊びに来てください。ユキもレオンに会えたら喜びます」
「かしこまりました。ではまた学校で」

そうしてステイシー様にも挨拶をして、ダリガード男爵家を後にした。
ついでにヨアンを馬車で送ることにしたので、ヨアンも馬車に乗っている。

「ヨアン、引越しの手伝いとか必要？」
「いえ、そこまで沢山の荷物はないので問題ありません。明後日ま

でには準備を整えておきます」
「それなら良かった。よろしくね」
「かしこまりました」

ヨアンが引っ越せたら、あとはロニー達だけだな。そういえば、ロニー達ってそろそろ中心街に来るよね。
いつだっけ……あれ？　もしかして、ちょうど明後日かも。それならちょうど良いな。皆一緒に引っ越しちゃおう。
確かロニー達が中心街に着くのはお昼の便で、その頃に馬車で迎えに行く約束をしたんだよな。迎えに行ってからロニーの家に行って荷物をまとめて、それからヨアンのところに行って皆で寮に行く方が良いかな？
でも、そんなに荷物乗らないかな？

「ロジェ、今思い出したんだけど、ロニー達が中心街に来るのもちょうど明後日なんだ。だから皆を中心街の広場まで迎えに行って、それからロニーの家に荷物を取りに行って、その後でヨアンを拾って寮に行くことってできる？　流石にそんな馬車に乗らないかな？」
「そうですね。人数は何人でしょうか？」
「えっと……」

俺とロジェ、ロニーとポール、ドニ、キアラ、リビオ、エマ、リズ、あとヨアン。十人と引越しの荷物だ。流石に無理かも……

「俺とロジェも含めて十人と皆の引越し荷物だよ」
「それは……流石に難しいかもしれません。しかし、荷物だけを別の馬車に乗せれば可能です。そのようにいたしますか？」
「それもありなの？」
「もちろんでございます」
「じゃあそれでよろしく。ヨアン、ということだから、ヨアンのと

ころに行くのはお昼過ぎになると思う」
「かしこまりました」

よしっ、これで従業員は皆寮に住める！　皆に寮に入ってもらったら、早めに仕事の割り振りをしないとだな。給金の話もしないとだし。でも最初の数日は、生活に慣れてもらう意味でも仕事はなしの方が良いのかも。うん、とりあえずそうしよう。

そして皆が慣れてきたら仕事を始めてもらおう。というか、最初は研修からだな。

屋台もやめたくないから、ローテーションで屋台もやってもらわないとだし、考えることはたくさんだ。

大変だけど頑張ろう。お店が形になってきてワクワクするし、今ならいくらでも頑張れそうだ！

そうしてワクワクしつつ馬車に揺られ、ヨアンを送って公爵家まで帰った。

明日はアンヌ達に皆が来ることを伝えて、ティノに食材費を渡して明後日のお昼から皆の分も作ってもらうようにしないと。それから寮のルールとかも決めた方が良いのかな？

そんなことを色々と考えつつ、疲れていた俺は寝る準備をしてベッドで横になると、すぐに眠りに落ちた。

１８６、皆の引っ越し

今日はロニー達が中心街にやって来る日だ。
俺は昨日のうちに寮に行きアンヌ達にそのことを伝え、ティノにお昼ご飯からは皆の分を頼んでおいた。くれぐれも普通のご飯でよろしくと、念押しも忘れていないので大丈夫だろう。

そして今はお昼の少し前、俺はロジェと共に馬車で中心街入り口の広場まで来た。乗合馬車乗り場から少し離れたところに馬車を止めて辺りを見回すと、ロニーと皆の姿が見える。ロニー、リズ、エマ、キアラ、ポール、ドニ、リビオ、皆いるみたいだ。
まだこっちには気づいていないようだな。皆は緊張した様子で直立不動で立っている。

「ロジェ、皆を呼んでくるね」
「私も参ります」

そうしてロジェと一緒に皆のところまで行くと、最初に気づいたのはロニーだ。

「あっ、レオン！」
「ロニー久しぶり。スムーズに会えて良かった。皆も久しぶり、まずは馬車に乗ってくれる？」
「うん。ありがとう」
「か、かしこまりました」

皆は結構緊張しているようだ。まあ孤児院にいたのなら、馬車に乗ったのも中心街に来たのも初めてだろうし、緊張するのも当たり

前か。
俺も最初に来た時は、ワクワクしつつも少し緊張してたよな。マルセルさんに連れて来てもらったんだ。何だか懐かしい。
そんなことを思い出しつつ皆を馬車に案内する。
「荷物を後ろの馬車に置いて、前の馬車に乗ってね」
「こ、こんなに立派な馬車に乗っても良いんですか！」
そう嬉しそうに声を上げたのはエマだ。ロニーの妹のリズもその隣で目を輝かせている。
この馬車は公爵家のお忍び用の馬車だから、立派ではあるけど豪華ではない。だけど、乗合馬車と比べたら天と地ほどの差があるから嬉しいよね。俺も最初は感動してた……。なんか皆を見てると最初の頃を思い出すな。
「勿論だよ。どんどん乗ってね」
そうして皆が荷物を置いて馬車に乗り込むと、馬車はロニーの家に向かって進み出した。
「じゃあ改めて、皆中心街に来てくれてありがとう。これから長い付き合いになると思うけど、よろしくね。ちなみに俺と一緒にいる人は従者のロジェ。これから接することもあると思うから覚えておいて」
「ロジェさんですね！　かしこまりました！」
そう元気に言ったのは警備担当予定のドニ。警備担当はドニとリビオの二人なんだけど、ドニは背が低めでかなりがっしりとした体型なのに対し、リビオはかなり背が高くシュッと精悍な感じで対照的だ。もちろんリビオもガタイはいいんだけど、背が高いのでシュ

ッとした印象になる。
性格も対照的で、ドニは元気で活発な感じなのに対し、リビオは落ち着いて寡黙な感じだ。
「ロジェと申します。レオン様にお仕えしておりますので、これから関わることもあるでしょう。その際はよろしくお願いいたします」
ロジェはそう言って綺麗な礼をした。
「よろしくお願いします」
そう言って皆も頭を下げる。孤児院の教育のおかげで最低限の礼儀作法は身についているから、皆が孤児院出身だとは思えない。本当にあの孤児院、いやアシアさんが凄い。
「じゃあ早速これからの予定だけど、まずはロニーの家に行く予定なんだ。早速今日から引っ越してもらおうかと思って、それでも大丈夫？」
俺がロニーにそう聞くと、ロニーは嬉しそうに笑って頷いた。
「うん！　今日から皆と一緒に暮らせるなんて嬉しいよ。ありがとう」
「それなら良かった。じゃあこのままロニーの家に行くね。そしてロニーの荷物も全部馬車に乗せたら、次は料理長のヨアンの家に行くよ。そしてヨアンの荷物も持って、従業員寮に向かう。とりあえずそんな予定かな。その後の予定はまた従業員寮に着いてからね」
「かしこまりました。ヨアンさんと会えるの楽しみです！」
嬉しそうにそう言ったのは、料理人志望のポールだ。ポールはヨ

アンと関わることが一番多いだろうし、仲良くなってくれたらいいな。

「ヨアンは料理人として本当に凄いから、たくさん教えてもらうと良いよ」

「はい。頑張ります！」

「それから、従業員寮には皆の朝昼夜のご飯を作ってくれる料理人もいるんだ。後で紹介するけど、その料理人も凄いから時間がある時に教わると良いよ」

二人に教わって技術を磨けば、スイーツも食事も極められるだろう。料理人志望の人にとってはかなり良い環境かもしれないな。

「朝昼夜のご飯も頂けるのですか！？」

俺がそんなことを考えていたら、キアラがそう驚いたように言った。キアラは給仕志望のハキハキと話す女の子だ。

「うん。だから皆は食事の心配はしなくて良いからね」

「ですがそれは、あまりにも高待遇すぎませんか？　住む場所と食事まで提供していただけるなど……」

確かにその辺の食堂とかに雇われることを考えると、破格なのかな？　でもまあ、やっぱり職場によるよね。貴族の使用人は皆その仕組みだし。商会とかでもそういうところが多いだろうし。

それに、ちゃんと皆の給金から差し引く予定だから大丈夫だ。

「ううん。皆の給金から寮の管理費と食事代は引くことにするから大丈夫だよ。あっ、もしそれが嫌で自分で好きなものを食べたいって人がいたら言ってね」

「そんなことないです！　むしろ食事を三食出していただけるなんて、本当にありがたいです」

キアラがそう言うと、皆が同意するように激しく頷いた。

「それなら良かったよ。凄く美味しいと思うから期待しててね」

「楽しみです」

そうして話しているうちに、ロニーの家の近くに着いた。ロニーの家の前まで馬車が入れないので、手前の大通りまでだ。

「ロニー、荷物運ぶ手伝いはいる？」

「うん。でもそんなに荷物はないから、ドニとリビオの二人だけ手伝ってくれる？」

「わかった！」

「もちろんだ」

そうしてロニーは二人を連れて家まで行き、しばらくして幾つかの木箱を持って戻ってきた。

「それで全部？」

「うん！　これで引っ越し完了だよ。大家さんにも話して鍵を返して来たから大丈夫」

「それなら良かった。じゃあ次に行くね」

そうしてまた馬車を動かして、ヨアンの家に来た。ヨアンの家の場所は俺も知らなかったけど、事前に知らせてもらっていたのでロジェがわかっていた。

ヨアンの家は馬車でかなり近くまで行けたので、馬車が止まるとすぐにヨアンが家から出て来てくれる。多分頻繁に外を確認してた

んだろう。
俺は皆には馬車に乗っていてもらって、ヨアンを案内するために馬車を降りた。

「ヨアンお待たせ」
「いえ、迎えに来てくださってありがとうございます。荷物はこちらで全部ですので、馬車に載せればすぐに行けます」
「わかった。じゃあ後ろの馬車に荷物を置いてね。それで前の馬車に乗って」
「かしこまりました」

そうして俺はヨアンと共に馬車に乗り込んだ。皆は大柄で強面なヨアンに一瞬びっくりしたようだけど、ヨアンが皆に笑いかけたことですぐに警戒心は解けたようだ。
ヨアンって意外と親しみやすいから、すぐに慣れるだろう。

「じゃあ紹介するね。こちらがお店で料理長をしてくれる予定のヨアン。スイーツの開発を一人で頑張ってくれてるんだ」
「ヨアンさん！　僕はポールです。料理人になりたいと思っていて、これからよろしくお願いします！」
「そうか。これからよろしくな」

ポールのかなりテンション高めのそんな挨拶を皮切りに、皆が次々とヨアンと挨拶を交わした。
そうして皆が挨拶を終えて少し打ち解けた頃、やっと馬車は従業員寮に辿り着いた。
馬車の中から寮を見上げて、まず声を上げたのはロニーだ。

「……え！？　こんなに綺麗な建物なの！？　それに、大きいし新しいし……」

ロニーはそう言って呆然と建物を見上げている。他の皆も同じような感じだ。

「そうだよ。この建物丸ごと従業員寮だからね」

俺がそう説明しながら馬車から降りるように皆を促していると、すぐにアンヌとエバン、ティノが出迎えに来てくれた。

187、入寮

「アンヌ、エバン、ティノ、出迎えありがとう」
「レオン様、本日は足をお運びくださりありがとうございます。準備は整っております」
「ありがとう。じゃあ新しい従業員を紹介するね。左からリズ、エマ、キアラ、ポール、ドニ、リビオだよ。詳しい自己紹介はまた後でかな」
「かしこまりました。皆さん、私はアンヌです。よろしくお願いします」
「俺はエバン。よろしくな」
「僕はティノだよ。よろしくね」

そうして三人が皆に向けて簡単な挨拶をすると、皆も慌てて頭を下げた。

「よろしくお願いします」
「よしっ、じゃあとりあえず、荷物を運び込んじゃおうか。それが終わったら食堂に集まろう。ロニーとヨアンは俺が案内するから、他の皆はアンヌとエバンにお願いしても良い？」
「かしこまりました」
「お任せください」

そうして皆で馬車から荷物を下ろし、部屋に荷物を運び込む。皆のことはアンヌが上手く統率を取ってくれているようだ。皆が良い子だっていうのもあるけど、やっぱりアンヌは使用人を育てていたこともあって、凄く頼りになるな。まとめるのがうまい。
俺がそうして皆の様子を見ていると、ロニーが不思議そうな顔で

聞いて来た。
「レオン？　何で僕たちだけ別なの？」
「皆は二階だけど、二人の部屋は一階なんだ。だから別で案内しようと思って」
「そうなの？」
「うん。重要な役職を任せる人の部屋は一階にまとめたんだ。だからロニーとヨアン、アンヌ、エバンは一階だよ。ティノも厨房が近いほうが良いってことで一階」
「そうなんだ。なんか何もしてないのに偉くなったみたいだね……」
ロニーがそう言って微妙そうな顔をした。確かにロニーは人の上に立つ経験ってないのか……。それにも慣れてもらわないとだな。実際に偉い立場になるんだし。
「ロニーにはまずお店の店長を任せたいと思ってるし、実際に偉い立場になるんだよ。それにも慣れないとだね」
「……うん、そうだね。今はかなり違和感あるし慣れないけど、これから店長として皆に認められるように頑張るよ！」
ロニーは腹を括ったようで、覚悟を決めたような顔でそう言った。凄く頼りになるな。
「うん、頼りにしてるよ。よろしくね。じゃあ荷物を運んじゃおうか。二人の部屋はこっち」
そうして俺は二人を部屋の前まで案内し、それぞれの部屋の鍵を渡した。この建物は各部屋に鍵がついてるんだ。
それによってフロア別などで男女を分ける手間も無くなったし、貴重品の管理の心配も無くなったし、凄く便利だ。やっぱり鍵は必

要だよね。

ロニーとヨアンは受け取った鍵を使って、部屋のドアを開けた。ヨアンは普通に部屋に入っていったけど、ロニーはドアを開けたところで固まっている。

「ロニー、入らないの？」

「レオン……、こんなに広い部屋を一人で使っていいの！？」

ロニーはそう言って、後ろにいた俺に対して勢いよく振り返った。部屋の広さにかなり驚いているようだ。

別にそこまで驚くほど広くはないんだけど、前のロニーの部屋と比べたらかなり広いからね。あの部屋は本当に狭かった。木箱のベッドを置いたら、ほぼ足の踏み場がなくなるレベルだったからな……

「一人一部屋だからいいんだよ」

「でも、この部屋ベッドが三つは入るよ。三人で使えるよ？」

ロニーがそう心配そうにそう聞いてくる。

この部屋にベッドが三つも入ったら、それこそ足の踏み場なんてなくなるよ。俺はそう思って苦笑しつつ、ロニーに言った。

「ロニー、部屋はベッドを置くためだけのものじゃないから。他の荷物とか、あとは机とテーブルも置かないとでしょ？　それに、部屋はたくさんあるから一人一部屋でも問題ないよ」

「そっか……。でもなんか、この辺の空きスペースが勿体無くない？」

ロニーはそう言って、部屋の中の空いているスペースを指差した。俺からしたら空きスペースがない部屋の方がおかしいんだけど、ロ

ニーからしたら空きスペースがあることがおかしいみたいだ。
確かに、今まで住んでたところが孤児院とあの部屋だからな。孤児院は四人部屋だったけど、ほぼベッドで部屋が埋まってた。
この常識の差は、追々慣れていくしかないな。

「スペースがあれば私物をたくさん置けるし便利だよ。ロニーはこれから働くにつれて私物も増えるだろうし、このぐらいの広さは必要だよ」
「確かに、そうなのかな？」
「うん。まあそのうち慣れていくよ。じゃあどんどん荷物を入れちゃおう」

そうしてロニーが常識の壁にぶつかりつつ、部屋に荷物を運び入れた。ヨアンは貴族の屋敷に住んでいたので、かなりスムーズだった。

「じゃあ二人とも、食堂に行こうか」
「うん」
「かしこまりました」

そうして三人で食堂に向かうと、食堂ではティノがお昼ご飯を準備してくれていて、凄く良い匂いが漂っていた。お腹空くな……。
俺たちが食堂に着くとちょうど他の皆も片付けを終えて食堂に来たようで、全員が揃った。

「アンヌ、皆は荷物を片付けられた？」
「はい。一人一部屋というところに驚いてはいましたが、しっかりと部屋を決めて荷物を運び込みました」
「それなら良かった、ありがとう。じゃあとりあえずお昼にしようか。この匂いの中お預けは辛いからね」

俺が笑いながらそう言うと、皆がぶんぶんと縦に首を振ってくれた。皆お腹が空いてるんだろう。
孤児院の様子では、お腹いっぱいまで食べられることはなさそうだったもんな。

「かしこまりました。では、レオン様はこちらでお待ちください。配膳は給仕志望の者に練習でやらせます。エマとキアラ、私と一緒に厨房へ来なさい」
「かしこまりました」

そうしてアンヌは二人を連れて厨房に行ってしまった。

「じゃあ、他の皆は席に着いて待とうか。席順は……後で決めるとして、今日は適当に座っちゃって。話がしたいから離れずに座ってね」
「はい」

そうして俺たちが席に座って待つこと数分、三人にティノも加えた四人が食事を運んできてくれた。
パンと肉の煮込み料理に野菜炒めという普通の料理だ。でも、凄く美味しそう。
皆は目の前に運ばれたその料理を見て、わかりやすく顔が緩んだ。喜んでくれたみたいで良かった。
しかし料理が次々と運ばれてくるにつれて、皆がだんだんと心配そうな表情になっていく。どうしたんだろうか？　苦手なものでもあったのかな？

「皆どうしたの？　嬉しくない？」
「いえ、凄く嬉しいのですが……、その、こんなに沢山の豪華な料

理を、本当に食べても良いのでしょうか……？」

恐る恐るそう聞いてきたのはドニだ。逆に量が多すぎて心配になってるのかな？　確かに、何か裏があるんじゃないかと考えちゃうのかも。

「勿論だよ。これぐらいの量がこれからの普通になるからね。目の前にあるのは一人分だから食べられるだけ食べて。もっと食べたければ多分おかわりもあると思うよ？」

俺がそう言うと、ティノが頷いてくれた。

「はい。育ち盛りの年齢の子ばかりだとレオン様から聞いていたので、少し多めに作ってあります」

「ティノありがとう。……そういうことだから、もっと食べられるならおかわり自由だよ。まあ、食べ過ぎには気をつけて欲しいけど」

「……ほ、本当ですか！？」

「もちろん！」

「ありがとうございます！！」

この量がこれからの普通で更におかわり自由と聞いて、ドニはかなり嬉しそうだ。他の皆も似たような表情で、あまり表情が変わらないリビオでさえ顔を緩ませている。

……皆、どんどん食べて大きくなるんだぞ。

俺がそんな親目線なことを考えていると、昼食の準備が整ったようだ。

「じゃあ皆、まずはお昼を食べよう。いただきます」

「いただきます！！」

俺の号令に従って皆が一斉に食前の挨拶をし、食事が始まった。でもさすがアシアさんの教育の賜物か、がっつきすぎずに最低限の作法は保って食べているようだ。それでも凄いスピードだけど。

俺も皆に少し遅れて食べ始める。まずは煮込みからだ。フォークで肉を押さえてナイフで切ると、肉はかなり柔らかくあまり力を入れずにスッと切れる。そして口に入れると、口の中で肉の旨みとソースの旨みが合わさって、絶品だ。本当に美味しい。

「ティノ、凄く美味しいよ。やっぱりティノは料理が上手いね」

「本当ですか！？　ありがとうございます！」

俺の食べる様子をニコニコと観察していたティノにそう言うと、ティノは途端に破顔した。

でもお世辞でもなんでもなく、本当に美味しい。

１８８、自己紹介

「皆はどう？　ティノの料理は美味しい？」

皆の食べるスピードから確実に美味しいのだろうということは分かったけど、一応聞いてみたら案の定凄い勢いで首を縦に振られた。皆口の中がいっぱいで喋れないらしい。

一番に口の中のものを飲み込めたのがエマだったようで、エマが口を開いた。

「レオン様、ティノさん、本当に美味しいです！　こんなに美味しい料理は生まれて初めてです。それに、こんなに沢山……、本当にありがとうございます！」

「そっか、それなら良かったよ。これからは毎日三食ティノの料理だからね。お店が始まったらお昼はお店に運んでもらうから、もう少し簡単な料理になると思うけど」

「……この料理は、今日だけの特別ではないのですか？」

そう聞いたのはリズだ。

「うん。これからもこんな感じの料理だと思うよ？　だよね、ティノ？」

「はい。レオン様から食材費は多めにもらっていますので、今回のような料理が基本になります。ただ先程レオン様も仰られたように、お昼はもう少し軽いものになると思います」

ティノがそう答えると、皆は感動したようで言葉も出ない様子だ。確かに、孤児院の食事はかなり少なかったからね……

皆にはしっかり食べて健康的な見た目になってもらわないと、逆に困るんだ。接客業は見た目重要だからね。
ドニとリビオは稼いだお金で食料を買っていたみたいでガタイはいいんだけど、他の皆はかなり細い。一目で貧しい育ちだということがわかるほどには細い。とりあえず、しっかり食べてもらうことも仕事のうちだな。
俺が皆を見回しながらそんなことを考えていたら、隣に座っていたロニーに小声で話しかけられた。

「レオン、こんなに豪華な料理を毎日なんて大丈夫なの？」
「うん。そこまで豪華ってほどでもないし大丈夫だよ。高価な食材を使っているわけじゃないし」
「それならいいんだけど……。レオン、僕ちょっと考えたんだけど、このお店ってどのぐらい経費がかかるのかな？　どのぐらい売り上げがあれば黒字になるの？」

ロニーに恐る恐るそう聞かれて、俺は結構驚いた。既にそんなことまで考えてくれてたなんて……ロニーは本当に頼もしい店長だ。
でも、頼りきりじゃなくて俺も頑張らないとだよな。確かにそろそろしっかりと考えた方が良いと思ってたんだ。趣味の延長みたいな感じで、とりあえずお金は気にしないで始めちゃったけど、どうせやるなら売り上げも伸ばしたい。今度ロニーとその辺も話し合った方が良いな。

「まだちゃんと計算してみたことないんだけど、今度大体で計算してみようかな。一緒にやってくれる？」
「もちろん。あと、もし嫌じゃなかったらでいいんだけど、レオンがどれだけお金を持ってるのか教えてくれない？　それを知らないから心配で。こんなに大きな寮を買ったり、お店も買って、皆も雇って。……破産しない？」

ロニーは真剣に心配してくれているようで、深刻な表情でそう聞いて来た。
確かにロニーには、具体的な値段とか俺の持ってる資産とか教えたことないよね……。うん、ここは一度教えておこうかな。ロニーなら信用できるし。
というか、俺も自分の持っているお金がどれほどの価値なのかよく理解できてないんだけどね。最初にこの国のお金を安易に日本円に直したけど、あれもそこまで正確じゃない気がしている。それに、物価も違うから一概には言えないなということに気づいた。

日本での価値を正確には知らないから正しいかわからないけど、この国は建物や土地はかなり安い気がする。ただ建物や土地が安い割に、服とか装飾品、貴族向けのお店で売っているものなどはかなり高いと思う。

うーん、だから俺が持っているお金がどれほどなのかっていうのが、上手くイメージできないんだよな。他の人の資産を知る機会なんてないし。
地球みたいに長者番付とかしてくれたらわかりやすいんだけどね。あとは国の年間予算とか、貴族家の資産とか、平民の平均年収とか、その辺を知れるとまた判断材料になるんだけど、何も知らないから本当に比較できない。

でも、こうしてお店を始めるのにお金を使っている感じからして、余程のことがない限りお金の心配がいらないということはわかる。あとお店を十店でも二十店でも始められる。
だから、破産の心配はとりあえずないはずだ。俺の資産って時間が経つとどんどん増えていくし……

「とりあえず、破産の心配はいらないから大丈夫。どれほどお金を持ってるのかも今度教えるよ」
「わかった。じゃあよろしくね」

そうしてロニーと話したり、他の皆と話したりして昼食を終えた。

昼食が終わったら次は自己紹介タイムだ。食器などを皆で片付けてまた席に座る。

「じゃあ、改めてまずは自己紹介からしてもらおうかな。まずはロニーから」
「僕からなの？」
「うん。店長でしょ？」
「そっか……わかった。あっ、僕もレオンに敬語の方が良いかな？」
「それだけはやめて！　ロニーに敬語で話されたら悲しい……。余程公的な場とか敬語を使わないといけない場面なら仕方がないけど、基本的には今まで通りでよろしく」
「わかったよ」

ロニーは少しだけ苦笑いをしてそう頷いてくれた。ロニーに敬語で話しかけられるなんて、距離ができたみたいで悲しいからな。

「では改めまして、僕はロニーです。レオンから店の店長を任されました。店長とは言ってもまだ経験もなく若輩者ですので、皆さんと力を合わせて頑張っていきたいと思っています。よろしくお願いいたします」

ロニーは堂々とそう挨拶をした。最初に会った時のロニーとは比べ物にならない。本当にロニーは成長したよね。

「ありがとう。じゃあ次はヨアン」
「かしこまりました。改めまして、私はヨアンです。料理長としてスイーツを作る仕事と、スイーツの研究をする予定です。料理人志望の方は勿論、それ以外の方々もよろしくお願いいたします。新しいスイーツの試食など、手伝っていただけたら嬉しいです」

ヨアンがスイーツの試食と言ったところで、皆の瞳が輝いた。多分、試食要員に困ることはないな。

「ありがとう。じゃあ次はアンヌかな」
「かしこまりました。改めまして、私はアンヌです。先日まではタウンゼント公爵家でメイドをしておりましたが、レオン様にお仕えしたいと思い、現在はレオン様に雇っていただいています。レオン様より給仕担当の責任者を仰せつかっておりますので、よろしくお願いいたします」

アンヌはそう丁寧に挨拶をして、綺麗な礼をした。うん、さすが公爵家のメイドだった人だ。

「じゃあ、次はエバン」
「かしこまりました」

そうしてエバン、ティノ、給仕志望としてエマとキアラ、料理人志望としてポールとリズ、警備志望としてリビオとドニが自己紹介をした。
こうして皆の挨拶を聞くと、ずいぶんと従業員も増えた。本格的にお店が始まるって感じだ。

「皆ありがとう。そうだ、一応俺の紹介もしておくね。既に知ってると思うけど、俺はレオン。生まれは王都の西の外れにある食堂な

んだけど、色々とあって今はタウンゼント公爵家に住まわせてもらって、公爵家から王立学校に通ってる。そしてジャパーニス商会の商会長でもある。今回のお店は俺の商会の一号店だよ。そしてこちらの男性がロジェ。俺の従者で基本的にはいつも一緒にいるから、皆も覚えてね」

俺がそう言ってロジェに目配せをすると、ロジェは立ち上がり綺麗な礼をした。そして口を開く。

「ロジェと申します。レオン様の従者をしております。よろしくお願いいたします」

ロジェはそれだけ言って椅子にまた座ってしまった。なんか、ロジェが最初の頃の無表情になってるんだけど。最近は無表情の中にも感情が読み取れたのに……

……もしかして、ロジェって人見知り？

確かに、それあり得る。初対面かつ大人数の前で話すのは、仕事としてならいけるけど感情を出すのは難しいのかな？

そう思ったら、途端にロジェの無表情が焦りを隠す必死の仮面に見えて来た。うん、またロジェの新たな一面発見かも。でもこれは言わないでおこう。せっかく必死に頑張ってるんだし。

「じゃあ、これで顔合わせは終わりでいいかな？　ここまでで質問とか、一度休憩したいとかあるかな？」

俺がそう聞くと、リズが恐る恐る手を挙げた。

「あの、レオン様、お手洗いに行きたいのですが……」

「そっか、気づかなくてごめんね。じゃあ一度休憩にしよう。二十分後……そういえば、皆は時計読める？」

俺が突然思い出してそう聞くと、皆は頷いてくれた。さすがアシアさん。本当に教育って大切だ。

「じゃあ、その時計で二十分後まで休憩ね」

そうして一度休憩を取ることにして、そのついでに皆には水洗トイレの使い方とお風呂の使い方を、アンヌが簡単に説明してくれた。

この寮に時計は食堂に一つあるんだけど、皆には一人一つ時計を持ってもらったほうが便利だよな。それも支給しちゃおうかな……

そんなことを考えつつ、俺も食堂で少し気を抜いて休んでいると、すぐに二十分が経った。

１８９、今後の予定と買い物

「じゃあ、これからの予定を話すよ。まずは今日これからなんだけど、とりあえず皆の服と時計を買いに行きたいんだ。それが終われば今日は終了。明日から数日は、ここでの生活に慣れてもらうために仕事はなしで、皆は市場の場所を覚えたりお店までのルートを覚えたりしてね。それで数日後からは仕事を始めてもらう。その時にはまた俺がここに来るから、どんな感じで仕事をしてもらうかはその時に説明するよ」

俺がそう言うと、一番に声をあげたのはヨアンだ。

「レオン様、数日は仕事なしとのことですが、私は研究を続けても良いでしょうか？　もうお店の厨房は使えるのですか？」

「うん。お店はほとんど改装が終わって、あとは裏庭に増築している更衣室とお風呂だけだから、お店の中は普通に使えるよ。厨房にはダリガード男爵家に置かせていただいてた物も運び込んである。でも毎日仕入れて届けてもらってた材料は、とりあえず止めてるんだよね。だからヨアンも数日は休みで良いよ？」

俺がそう言うと、ヨアンはかなり落ち込んだ様子になった。休んで良いと言われて落ち込むって、ここにも社畜がいた……

「レオン様、もしよろしければ材料を明日から再開することは可能でしょうか？　研究をしたいのです……」

「それは勿論良いけど……、休まなくて良いの？」

「はい！　私は研究がしたいのです！」

「そ、そっか。じゃあ手配しておくよ」

「ありがとうございます！」

ヨアンは手配しておくと言った途端、凄く嬉しそうな顔になった。まあ、ヨアンが楽しそうだから良いか。何か、ロジェと似たタイプな気がするな。

早めに冷蔵庫とか設置してあげよう。

「他の皆は休みで良いからね。何か質問ある人はいる？」

「あの、服や時計は自腹でしょうか？」

そう聞いたのはキアラだ。

「ううん。その二つは支給するから大丈夫。汚れたり古くなったり壊れたりしたら、その都度言ってくれれば新しいものを支給するから遠慮しないでね。ただ、わざと壊したりはダメだけど」

「かしこまりました。ありがとうございます！」

「他にはある？」

「はい。先程お店にもお風呂と更衣室があるとのことでしたが、何のためでしょうか……？」

そうなんだよね。お風呂はこの従業員寮を作っちゃったら、そこまで必要じゃなくなった。でもまあ、使い道はあるだろう。

「更衣室はできるだけ清潔なお店にするために、お店までは私服で行って、更衣室で仕事着に着替えて仕事をして欲しいんだ」

そうだ、だから私服も必要だよね。皆の私服は……うん、ちょっとボロボロすぎてお店のイメージも悪くなりそう。私服も最初は支給しよう。

「私服も最初は支給するから、そのあとは自分で買って欲しい。この辺でも悪目立ちしない程度の質があれば良いから。それからお風呂なんだけど、例えば仕事で汗をかいたとしたら、休憩中にお風呂で軽く流して着替えてからまた仕事をするとか、そういうふうに使ってくれるとありがたいかな。お店のイメージ的に汗だくとかは避けたいからね」

俺がそうして説明すると、納得できたのか頷いてくれた。

「他には何かある？　……もうないかな？　それなら早速、買い物に行くので良い？」

「はい」

「もちろんです！」

そうして、皆で買い物に行くことに決まった。基本的にこれから皆には歩いて移動してもらうから、今日も歩きで行こうと思ったけど、荷物が多くなるので急遽馬車にした。今日はちょうど馬車も二台あるし。

皆で馬車に乗り込んでまず訪れたのは、服飾品店だ。貴族向けと言うよりも、従業員向けの服を多く取り扱っている。

店内に入るとドレスを身にまとった、四十代ほどに見える綺麗な女性が出てきてくれた。

「いらっしゃいませ。本日はどのようなものをお探しでしょうか？」

「はい。お店の従業員の服を探しています。店長と警備担当、給仕担当、それから料理人の服が欲しいです」

「かしこまりました。新しくお店を開店されるということですか？」

「はい」

「それはおめでとうございます。既存の服でよろしければいくつか

種類はございますが、お店の制服として新たなデザインでお作りすることも可能です。いかがいたしますか？」

確かに、お店独自のおしゃれな制服とかもありだよね。でも俺ってその辺のセンス皆無だからなぁ。この世界ではどんな服装が良いのかよく分かってないし、やっぱり既存のものが一番無難で良い気がする。

とりあえず既存のものにして、後でちょっとしたワンポイントを入れるとかは、また考えようかな。

「とりあえず既存のもので良いです。着替え込みそれぞれ三着ほど見繕っていただけますか？」

「かしこまりました。では皆さん、奥へどうぞ」

そうして皆はそれぞれ採寸をされて、合うサイズの服を選んだ。合うサイズがなかった人は少し調節して、数日のうちに届けてくれるようだ。

「では、こちらが本日お渡しできる服でございます。それからこちらの男性とそちらの女性の分、合計六着は数日以内にサイズを直し、指定の場所までお届けいたします。料金は全て本日お支払いいただくのでよろしいでしょうか？」

「はい。それで大丈夫です」

「かしこまりました。では少々お待ちください」

そうして服を受け取り馬車に積み、お金を支払って店を後にした。大量に購入したからか、店員さんは凄く笑顔で見送ってくれた。

「よしっ、とりあえずこれで仕事着は買えたかな。あとは靴と私服、時計、それから警備のための剣と簡易の鎧も買わないとだ。まずは

どこから行くのが近いかな？」

俺がそう聞くと、すぐにロジェが答えてくれる。

「はい。ここから馬車で数分ほどの場所に中古の服屋がありまして、そこでは裕福な平民が着る程度の中古服が多く売られています。まずはそこで私服を揃えるのが良いのではないでしょうか？」

中古服か。確かにサイズが合えば安いし質の良いものもあるだろうし。皆の私服にはいいかも。

「じゃあそこに行こう」

「かしこまりました」

俺がそう決めると、ロジェはすぐに頷いて御者に行き先を告げてくれる。そして馬車が動き出した。

「皆、これから行くお店では私服を一人三セット選んでね。今日は仕事着と同じで支給品として俺が支払う。でもこれからは、私服は自分で買ってもらうことになるから、なるべく長持ちしそうなのを選んだり工夫してね」

「かしこまりました。……あの、レオン様。私服まで頂いても良いのでしょうか？　先程の仕事着はとても質の良いものでしたし、かなり高いのではないでしょうか……？　私服は今着ているものがありますし、新しく買う必要はないと思うのですが……」

そう恐る恐る聞いてきたのはエマだ。確かに皆が今まで着ていた服と比べたら、さっきの仕事着は天と地ほどの差がある値段だろう。この世界って安い服と高い服の差が激しいし。

そんな服を何着も買ってたら心配になるのもわかる。でも皆はこ

れから貴族向けのお店で働くことになるんだし、その辺の価値観も変えていかないとだよね。

「お店は貴族向けのスイーツ店だから、イメージも大事なんだ。従業員の皆が勤務中じゃなくて通勤中とはいえ質の低い服を着ていたら、高級なイメージが損なわれるでしょ？　だから服を揃えるのは必要なことなんだよ」

俺がそう言うと、皆は納得したように頷いてくれた。

「かしこまりました。ではこれからは、私たちも身だしなみに気をつけます」

「うん、ありがとう。何かわからないことがあったらアンヌに聞くといいよ」

俺がそう言うと、アンヌは心得たように頷いてくれた。

「お任せください」

そうしてそれから中古服のお店に行き私服を購入し、その後も次々とお店を回り数時間かけて買い物は終了した。

馬車の中は荷物でいっぱいだ。でも、これでとりあえず準備は整っただろう。

……凄く長かった。お店を一店舗始めるのがこんなに大変だなんて。最初はロニーの将来の希望を聞いて安易な気持ちで始めたけど、こんなに大変だとは思わなかった。

でも大変だけど、かなり楽しいんだよね。お店を始めて良かったと今では心から思っている。

そうして達成感を得つつ、俺たちは馬車に揺られて従業員寮に戻った。そして皆と荷物を下ろして、俺はそのまま公爵家に帰った。

１９０、授業再開と遠征について

遂に昨日で夏の休みも終わり、今日からまた王立学校に通う日々が始まった。
俺は夏の休み前を思い出しつつ朝から準備を整えて、リュシアンと共に馬車で学校まで来た。そしてＥクラスの教室に入る。
教室には既にロニーが来ていて、他の皆も集まっているようだ。長い休み明けの初日って、何故かいつもより早く来る人が多いよな。そんなことを考えながら、俺はロニーの隣である自分の席に向かう。

「ロニーおはよう」
「あっ、レオン。おはよう」
「皆はどう？　馴染めてる？」
「うん、問題ないよ。今までの生活との違いに驚いてはいるんだけど、それよりも毎日楽しそうかな。三食ご飯があることが一番嬉しいみたい。ティノさんがご飯を作る様子を、暇があれば厨房の入り口から眺めてるんだ」

ロニーはそう言って少しだけ苦笑した。

「そうなんだ。まあ馴染めてるのなら良かったよ。じゃあ、そろそろ仕事を始めても大丈夫かな？」
「うん！　全く問題ないと思う。皆に市場の場所もお店の場所も教えたし、お店の中を見学もしたんだ」
「そっか。じゃあ明日の放課後に寮に行って、これからの仕事について話そうかな。売り上げと経費のこともその時に話し合おうか」
「うん、僕はそれで大丈夫だよ。皆も大丈夫だと思う」
「じゃあ、明日の放課後はロニーも馬車で一緒に帰ろう。帰りはリ

ュシアンと別の馬車にしてもらうように頼んでおくから」
「いいの？」
「もちろん！」
「ありがとう。じゃあ、皆にも明日レオンが来るって伝えとくね」
「よろしくね」

そうしてロニーとこれからの予定について話し合っていると、教室にEクラス担当のスティーブ先生が入ってきた。久しぶりだ。

「皆揃ってるかー。夏の休み明けでまだ休み気分が抜けないだろうが、しっかり切り替えて勉学に励むように！　それから、今日は一つ重要な連絡があるからちゃんと聞くんだぞ」

スティーブ先生はそう言って、少し真剣な表情になった。

「次の秋の休みのことなんだがな、魔物の森へ課外授業に行くことになった」

スティーブ先生がそう言うと、クラスは騒然となる。
確かにいきなりこんなことを聞いたら混乱するよな。今までは魔物の森の存在を知ってはいても、遠くの出来事だったんだから。
でも俺は自分が提案したことだし、遂に決まったのかと感慨深い。これでやっと魔物の森に行けるんだな。

「騎士がしっかりと護衛につくから危険は殆どないとのことだが、強制はできないので自由参加だ。ただ参加しなかった者は、魔物の森について秋の休みに研究レポートを書くことが義務付けられることになる。それから、参加した者には魔物の森へ挑んだものに贈られる、勲章が授与される。その辺も考えて実家で相談し、参加するか決めて欲しい。参加するかは来週までに決めてくれ。来週末に参

加者を募るからな」

スティーブ先生がそこまで言うと、一人の女の子が手を挙げた。騎士爵の子供で、本人も騎士を目指しているかっこいい女の子だ。

「先生。なぜ魔物の森に行くのでしょうか？　今までそのような遠征はなかったと思うのですが……。もしかして、この国が魔物の森にいずれ飲み込まれるというのは、本当のことなのですか……？」

「俺も父上から聞いたぞ。だが大袈裟に言っているだけだと深刻な様子ではなかったが……」

「家ではかなり深刻な様子で父上と執事が話し合っていたぞ」

「私はそんなこと聞いてないわ。どういうことなの！？」

その女の子の言葉を皮切りに、皆が一斉に話し始めた。

実は数日前にリシャール様に聞いたんだけど、遂に魔物の森のことを貴族全員に伝えることにしたらしいのだ。前に俺がリシャール様と話してから、ずっと詳細を詰めていたらしい。

そしてそれに伴って、数日以内に平民にも魔物の森の脅威について発信するようだ。どうなるのか……ちょっと怖いけど、魔物の森の脅威は避けられないんだ。仕方がないことだよな。

俺がそんなことを考えつつ一気に大混乱に陥った教室を眺めていると、隣のロニーに小声で話しかけられた。

「レオン、どういうこと？　魔物の森に飲み込まれるって……、抑え込めてるんじゃないの？」

「ううん。いずれ平民にも公布されることだから言うけど、抑え込めてないらしい。段々と飲み込まれてるんだって。だから皆で危機感を共有して力を合わせましょうって感じなんだ。そうすれば抑え込めるだろうって……」

俺がそう言うと、ロニーは俺の言葉を上手く飲み込めないような顔をした。そして不安そうな表情で口を開く。

「それ、本当に力を合わせれば抑えられるの？」

……どうしよう。貴族には本当に危ないって事実を教えてるんだよね。でも平民には、混乱を避けるために頑張れば抑え込めるって公布するんだ。

ロニーは平民だけど……、混乱を煽るようなことはしないだろうし、何より王立学校にいればそのうち知ることだよな。

俺はそう考えて、小声でロニーの耳元で言った。

「本当はかなり大変な状況らしいよ……。でもそれを素直に伝えたら混乱するから、平民向けには力を合わせて乗り越えようって感じにするんだ」

「大変って……どのぐらい？」

「正確なことはわからないけど……、俺たちが大人になれるかどうかぐらいかな……」

俺がそう言うと、ロニーは驚愕の表情を浮かべた。

「それ、本当に？」

「うん。でも、これからどうなるかは誰にもわからないから。それに、対策も考えるだろうし」

「そっか……」

「大丈夫！　ロニーと他の皆も、俺の知り合いは皆守るから。俺って魔法は凄く得意なんだ」

俺がそう言うと、ロニーは俺が強がってそう言ったと思ったのか、少しだけ笑顔を浮かべた。

「ありがと。僕も魔法は使えないけど、皆を守るよ」

そうして二人で話していると、スティーブ先生が声を上げた。

「お前ら、一旦静かにしろ！」

そう言うと、皆は途端に静かになる。

「混乱するのはわかる。というか、俺も混乱してるんだ。魔物の森に飲み込まれるって話は俺も数日前に聞いたが、俄かに信じがたい。ただ、王家からの情報だ。デマだとも思えない。とりあえず、その話も加味しつつ魔物の森に行くか行かないか考えろ。一度見に行ってみるのもいいと思うぞ。真偽がわからないことは、自分の目で見るのが一番だ。それから遠征にかかる金は国から出されるらしい。だから金の心配はいらない。じゃあ、来週末までに決めておけよ！」

スティーブ先生はそう言い残して、教室から出て行った。

先生が出ていくと、また皆はざわざわと話し出す。ただ皆同じような情報しか持っていないので、結局魔物の森に行くか行かないか決めかねているようだ。

しかしこのクラスは騎士志望が多いこともあり、騎士を目指している人は行くみたいだ。

「ロニーはどうする？」

「……レオンは？」

「俺は行くよ。一度行ってみたかったんだ。何も知らずに気付いたら手遅れだっていうのは嫌だからね」

「……そうだよね。うん、僕も行くよ」

ロニーは少しだけ考えていたがすぐに決意を固めたようで、何かを見据えたような表情でそう言った。

「じゃあ、一緒に魔物の森の真実を見に行こうか」

「うん。それから対策を考えることにするよ。家族の皆は助けたい。僕みたいな子供一人じゃ何もできないかもしれないけど、何もしないよりはマシだと思うから」

「そうだね。俺も家族や大切な人達は助けたい」

……それからできることなら、この国を助けたい。

その言葉を口にするのはやめておいた。俺の能力を知らないロニーからしたら、壮大すぎる話だからな。

でも、できる限りなんとかしたい。そのためにはまず、魔物の森に一度行って現状を知り、魔力を増やして魔物の森まで転移できるようにすることだ。

日常も忙しいけど、その日常を守るためにも頑張らないと。

それからは少し落ち着かない雰囲気ながらも、いくつもの授業をこなし休み明け初日の学校は終わった。

１９１、仕事の割り振り

そして次の日。
普通に授業を受けてその放課後、ロニーと共に従業員寮に向かっている。

昨日公爵家の夕食時にも魔物の森のことが話題になったけど、平民には来週の頭、火の日に公布するらしい。
とりあえず貴族の反応は完全に二分しているみたいだ。重く受け止めて戦力を増やしたり、魔物の森に私兵を貸そうと言ってくれる人もいるらしいけど、全く信じていない人もやはりいるそうだ。
これは今までと変わってない。やっぱり貴族に伝えるだけじゃ認識の変化は起きないんだろう。平民に公布してどうなるかだな。

そんなことを考えつつロニーと共に馬車に揺られていたら、すぐ寮に着いた。ずっと悩んでても仕方ないし、とりあえず切り替えないとだな。日常も普通に過ぎていくんだから。

「ロニー、いつも通りで行こうか。皆も数日後には知ることになるし、わざわざ不安にさせることもないよ」
「そうだよね……。うん、そうするよ」

そうして二人で笑顔が不自然ではないか確認して、馬車から降りた。馬車を降りると皆が出迎えに来てくれている。

「皆、出迎えありがとう」

そうして皆と簡単に挨拶をして、食堂に移動した。

「皆、ここでの生活には慣れた？」

「はい！　とても快適な生活でご飯もたくさんいただけて、本当にありがとうございます」

キアラがそう言って頭を下げると、それに伴って皆が一斉に頭を下げた。

「そんなにかしこまらなくても良いよ。皆にはこれからたくさん働いてもらうからね」

俺がそう少しだけ軽い口調で言うと、皆は力強く頷いてくれた。

「もちろんです。精一杯頑張らせていただきます！」

「頼りにしてる。じゃあ、今日はこれからの予定を決めたいんだけどいいかな？」

「はい！」

「ありがとう。まずお店なんだけど、お店は次の春の初めに開店することになる。だから、それまでは皆に仕事を覚えてもらったり、あとは屋台での仕事をしてほしいんだ」

屋台の仕事は客商売の経験ということで、皆でローテーションで良いと思うんだよね。そしてそれ以外の人は教育って感じで回していけば。

その仕組みだと、春にお店が開くことになったら屋台で働いてくれる人をさらに雇わないとなんだけど、まあそれは仕方がない。

とにかく今は、皆に練習も兼ねてやってもらうことが大切だ。

「とりあえず基本的には、警備担当はエバンが中心で剣術の鍛錬や

基礎鍛錬をしつつ、警備のやり方を決めてほしい。給仕担当はアンヌが中心で給仕の練習や、言葉遣い礼儀作法等、貴族向けのお店で必要なことの練習をしてほしい。そして料理人はヨアンが中心でスイーツの研究と、それから完成したスイーツを全員が同じクオリティで作れるようになってほしい。ここまではいいかな？」

「はい。問題ありません」

「じゃあそれが基本で、回復の日は休み、それ以外の日は仕事でよろしくね。それから屋台なんだけど、クレープの屋台の運営をローテーションで任せたいんだ。皆に客商売を学んでもらうって意味も込めてやってもらいたいんだけど、警備担当と給仕、料理人の三人一組でローテーションでやってほしい。アンヌとエバンとヨアンは免除でも良いから、他の皆でローテーションになるかな」

まあローテーションていうか、これでいくと一日交代になるんだけどね。

「ローテーションて言いつつ一日交代になっちゃうんだけど、もし慣れてきたら二人一組にしても良いよ。クレープは作り方簡単だし、誰でも慣れればできると思う。平民向けだからそこまでのクオリティは求めないし」

俺がそう言うと、皆は頷いてくれた。

「じゃあ、これから半年ぐらいはそのスケジュールでお願い。たまに進捗を見にくるよ」

「かしこまりました」

「俺の話は以上なんだけど、何か質問がある人はいる？」

俺はそう聞いて皆を見回したが、誰も質問はなさそうだ。よしっ、じゃあ皆は解散としようかな。そしたらロニーと仕事の話をしない

と。

「それじゃあ、これからはロニーと仕事について話すから皆は解散して良いよ。屋台の組とか決めておいてね」

そうして俺は皆を解散させて、ロニーと二人で話すことにした。とは言っても、皆も食堂でこれからのことについて話し合ってるんだけどね。

「じゃあ、ロニーの仕事について話そうか」
「うん、よろしく」
「まずはロニーの仕事だけど、まあ簡単に言えば全体の調整とお金の管理かな。帳簿をつけたりもお願いしたいんだ」
「お店全般の雑事と管理が僕の仕事だね」
「そうなるね。それでお店が開店するまでなんだけど、その間は屋台の管理と研究で使う材料の管理、それから皆の教育状況の管理などをやってほしいんだ。ロニーは学生だから大変だと思うけど、開店する前の練習も兼ねてって事で……いいかな？」

王立学校に通いながらは大変だと思うけど、それでも今慣れておいた方が後々楽だと思うんだ。

「もちろん！　僕もお店が開く前に練習したいし、お店のことはちゃんと知っておきたいからね」
「そう言ってもらえて良かった、ありがとう。そうだ、あと皆への給金もロニーの管理として良い？　ロニーへの給金は俺の管理とするつもりなんだけど……」
「確かに僕は店長だからね、給金の管理もやるよ」
「じゃあそれもよろしくね。最初は一緒にやろうか」
「そうだね、それが良いかも」

ロニーは本当に頼りになる。多分ロニーがいなかったら、俺はかなり不安だったと思う。ロニーがいるだけでなんとか上手くやっていけそうって気がするんだよね……

でもまあ、頼りきりはダメだから俺も頑張らないと。

「じゃあ、ロニーの仕事はとりあえずそんな感じかな」

「わかった。じゃあ話を変えるけど、お金の話をしても良い？　約束だったでしょ？」

そうだった。ロニーと今まで掛かった金額についての話をして、さらに経費と売り上げの予測を立てようって言われてたんだ。俺の資産のことも話す約束だったな。

「お店の売り上げ予測とどれほどの経費がかかるのか、それから今までにかかった金額を教えてくれる？　あと出来れば、レオンの資産も」

「うん、ちゃんと話すよ。それを知らないとロニーの仕事は出来ないからね。まず何から知りたい？」

「うーん、じゃあレオンの資産から。それを知らないで掛かった金額とか聞いたら、倒れそう……」

ロニーは苦笑しながらそう言った。

「わかった。じゃあ資産からね」

１９２、お金の話　前編

俺の収入は、光球の改良とスイッチの技術登録をした段階では、三週間に一度振り込まれる収入が白金貨五枚ぐらいだった。

でもその後にピュリフィケイションの魔法具など各種魔法具を開発、登録して、魔石連結の技術も登録して、それからは馬鹿みたいに収入が増えている。

実は魔石連結や各種魔法具は基本的に皆と連名で登録したんだけど、皆が収入の等分はおかしいと主張して、九割が俺で残りの一割が皆で分配になっているのだ。だからかなりお金が入ってくる。

さらに魔石連結では王家から報奨金も貰えたんだよな。なんと、白金貨一千枚だ。もう桁が増えすぎて良くわからない。

それから、毒除去の魔法具を王族やタウンゼント公爵家の方々に密かに作ったものも、ひとつ白金貨百枚ほどで買い取ってもらえたし、定期的に魔力を込め直す際にもかなりの金額を貰っている。

また、マルセルさんが俺の代わりに登録してくれた製氷機と火魔法の魔法具三つ。これはマルセルさんから開発時に白金貨五枚を貰ってるのに、予想以上に収入が多いということで、マルセルさんが勝手に俺の口座に収入の半分以上を振り込んでくれるのだ。

最初はいらないって言ったんだけど、マルセルさんはレオンが考えたものだ、と言って譲らないから渋々受け取っている。実際に三週間で白金貨数枚は振り込まれてるから、本当に最初の値段設定は少なかったみたい。マルセルさんも驚いていた。

マルセルさんが光球を作った時はまだ魔石と魔鉄があまりなくて、光球を開発しても一気に流通しなかったことで、収入が急に増えることはなかったらしいのだ。

でも今は魔石と魔鉄が豊富にあるから、収入が驚くほど一気に増えたみたい。さらに戦争が終わってしばらく経ち、魔法具にお金を使える貴族が増えたことも要因の一つだろうと、マルセルさんが言っていた。

そんな感じで定期的に大きな収入がある。さらにそれプラス、屋台も黒字経営で収入があるし、マルティーヌの先生をしていた時も給金が出たし。そういう細々とした収入もあるのだ。

だからもう、とにかくお金が貯まる。全く使いきれていない。

よって今の俺の口座には、白金貨三千枚から四千枚くらいある。いや、最近確認してないからもっとあるかも。

使用料は三週間に一度振り込まれるからどんどん増えていくし、さらに他にも収入源はあるから……うん、多分もっと増えてる。

そういうわけで、今の俺の資産は白金貨数千枚ほどなんだ。

俺はとりあえずロニーにその金額を告げるため、顔を近づけて周りに聞こえないよう少し小声で言った。

「最近見てないから正確な数字はわからないんだけど、多分白金貨三千枚か、四千枚くらいはあるかも」

俺がそう言うと、ロニーは何を言われたのか良くわからないような顔をして首を傾げた。

「……えっと、……レオン？　さっき、理解できないような金額が聞こえたんだけど、僕の聞き間違い、だよね？」

「ううん。白金貨三千枚から四千枚ぐらいだよ」

「け、桁を間違えてない……？　三十枚じゃなくて？」

「間違えてないよ」
「……」

俺が改めてそう言うと、ロニーは完全に固まってしまった。処理しきれない情報に困惑しているらしい。
その気持ちわかる。そこまで金額が上がると、どれほどの金額なのかイメージしづらいんだよね。多分ロニーは、今必死に身近にある一番高いものを思い浮かべて、それが何個分買えるのかを考えているのだろう。
わかる、俺もそれやったから。

だけどそれでもこの金額がどれほど多いのかは、俺もまだよくわかっていないんだよね。
とりあえず、身分としてはただの平民の子供である俺が持っているお金としては、あり得ない程多いことは確かだ。
でも、貴族の資産と比べてどうなのか、大商家の資産と比べてどうなのか、はたまた国家予算と比べてどうなのか。その辺を比べられないのでよくわからないのだ。
まあ、流石にその辺よりは少ないと思うんだけど……。でもダリガード男爵家とかはもっとお金なさそうだったし、貴族と言っても下位貴族はそんなに資産がないのかもしれないよな。

俺が最初にこの国のお金を日本円に換算してみたところによると、白金貨は一枚で百万円ほどになったんだ。だから単純に考えると、俺の資産は日本円にすれば数十億円ってことになる。でもこの換算があっているのか、確信が持てない。
実際にお店を始めるのに掛かった金額などから考えると、俺の資産があれば中心街に何十店も何百店もお店ができる程になるんだ。
数十億円あれば、東京の一等地に独立店舗を何十店も何百店も持てるのだろうか？　日本で東京にお店を開こうなんて考えたことな

いから詳しくはわからないけど、答えは否だろう。

そう考えるとやっぱり、日本円換算はもう一桁、桁を増やすべきなのかな？　でもそうすると、安い方の貨幣が高く換算しすぎている気もするんだよね……。こうして思考はいつも堂々巡りだ。

結局はこの国と日本じゃ物価もかなり違うし、平均収入も違うだろうし、単純に比べられないんだよね。

この国は貴族がいるからなのか物の値段は差が激しいし、人々の収入も中間層がいなくて貧困層と富裕層しかいないような感じだし、土地や建物は安いのに馬鹿みたいに高い食べ物とかあるし……

と、俺がそこまで考えたところで、ロニーが遂に口を開いた。随分と長い間固まってたな。

「ええと……レオン？　本当の本当に、本当に、白金貨三千枚以上もあるの……？」

ロニーは恐る恐るそう聞いてきた。やっと事態が飲み込めてきたらしい。

「うん。本当だよ」

「そっか……。もう、金額が大きすぎて、よくわからないよ」

「実は俺もよくわかってないんだ。凄い金額だろうってことはわかるんだけど……」

「うん、とにかく凄い金額だよ。僕、レオンはお金を持ってそうだったから、資産は白金貨数十枚ぐらいかなって予想してたんだ。多くても百枚ぐらいだろうって。でも、数千枚だなんて……凄すぎるよ。まあとりあえず、お金の心配がいらないってことはわかった」

「うん、その認識でいいよ。とりあえずお金の心配は全くいらない

かな。お店を始めるのにお金はかかったけど、その分以上にもう増えてるから」
「そっか……」
ロニーはそう言ってまたしばらく黙ったあと、急にさっきまでのどこかぼんやりとした顔からキリッとした顔になり、瞳に決意を浮かべて言った。
「でも、それはレオンの収入で補填できてるだけで、このお店の収支って考えたら完全に赤字だからね。多分レオンはそれだけお金があると赤字でもいいとか思ってそうだけど、商売をやるからには黒字にしないと！」
ロニーは急に頼りになる表情になってそう言った。うん、やっぱりロニーは頼もしい。
ここまでお金があるのならお店経営なんて適当でもいいじゃんって考えるんじゃなくて、それでもちゃんとしなきゃダメだよって言ってくれる人は、本当に貴重だ。大切にしないと……
……ロニーと友達になれて、本当に良かった。
「そう言ってくれてありがとう」
「当然だよ、僕は店長だからね！　それで、今までいくらぐらいかかったの？」
「うーん、建物の値段、改装費、各種魔法具代金、そのほかにも細かいものが色々と掛かって……。全て合わせて、白金貨四十枚ぐらいかな」
日本で東京の真ん中に広くて立地も良いおしゃれなカフェを買って、中を改装して綺麗にして、各種機械も全て新しくして、そんな

ことをしていたらいくらかかるかわからないだろう。
それがこの国では全部合わせて白金貨四十枚ほどなのだ。日本円換算があっているのかわからないけど、換算すると四千万円ほどだ。
「白金貨四十枚……凄く高いんだけど、普通に考えて平民には一生かかっても稼げないような金額なんだけど、さっきの金額が凄すぎて、安く感じてる自分がいるよ……」
ロニーはそう言いつつ、愕然とした表情を浮かべた。
「わかる。俺も結構安いんだなと思ったから」
でも思い出してみたら、数年前は中心街までの乗合馬車料金である銅貨一枚が払えなかったんだよな。お小遣いを全部合わせても小銅貨数枚、日本円にして数百円だったんだ。更に屋台で買う鉄貨数枚、数十円の串焼き肉をめちゃくちゃ高いと思ってた……。実際平民には安くないものだ。
……その頃を忘れないようにしよう。
「ロニー、そうなった時は昔を思い出せば大丈夫だよ」
俺がそう言うと、ロニーは昔の生活、とは言っても数ヶ月前の生活を思い出したのか、急に慌て始めた。
「レ、レオン、改めて考えたら白金貨四十枚なんて……そんな大金取り戻せるかな！？　なんか不安になってきたよ……」
「大丈夫だよ。力を合わせればいける」
「……そ、そうだよね。うん、僕頑張るよ。なんか凄くやる気出てきた！」

ロニーは拳を握りしめて、キラキラした瞳でそう言った。

「じゃあ、一緒に頑張ろうか！」

「うん！　それじゃあ、たくさん話し合わないといけないことがあるよ。まずは商品をどれほどの値段で売るのかと、これからの経費について計算してみよう。まずは経費より売り上げが高くないと、どんどん赤字が膨れちゃうからね」

ロニーはそう言って、カバンから紙とペンを取り出した。そしてそこに今まで話したことをメモしていく。さらにどんな経費がかかるのかも書き出しているようだ。

１９３、お金の話　後編

「まず経費だけど、皆の給金はどのぐらいにする予定？」
「そこが結構難しいんだよね。貴族の使用人と同等ぐらいでも良いかなと思ってるんだけど、それだとこの辺のお店の従業員としてはかなり高くなるんだ。どう思う？」
「うーん、難しいところだね。とりあえず、アンヌさんとエバンさん、それからヨアンさんは貴族の使用人と同等で良いと思う。それも使用人の中でも上の立場の人と同等かな。やっぱり能力がある人にはそれ相応の給金が必要だと思うんだ。ずっと働いてもらうためにもね」

確かにその三人は、俺も今までより下げることは考えていなかった。今までもらっていただろう給金に少し上乗せするぐらいかな。

「俺もそう思う。じゃあその三人はそれで良いとして、あとは他の皆だね。他の皆はまだ能力もあるわけじゃないから、今はまだそこまで高くしない方がいいかと思ってるんだ。能力がついてきたら段々と給金が上がる方が、やりがいもあると思うし」
「うん、僕もそれで良いと思う。じゃあこの辺のお店の従業員の相場より、少し高いぐらいでどう？」
「うん。それでいこう」

そうして話し合ったことをロニーが書き込んでいく。
俺はその様子を眺めつつ、ロニーの給金についても考えていた。ロニーの給金はとりあえずアンヌ達よりも多くすべきだよな。やっぱり店長は一番給金をもらう立場にすべきだし、ロニーの働きは大きいからね。仕事も責任あって大変だろうし。

そうして考えていると、ロニーが書き込み終わったようでまた次の議題だ。

「あとは材料費と、各種魔法具の維持費が一番かかるのかな？　確か新しい魔法具も増えるんだよね？」

「うん。魔法具の維持費が一番かかるかな。でも俺も魔石に魔力を込めるし、魔力量が五の人にはできれば手伝ってもらうことにするから、少しは節約できると思うよ」

「確かに魔力量が多い人も結構いるんだよね。じゃあそこも考慮に入れておくよ。材料費は……どれぐらいかかるんだろう。砂糖とかはかなり使うよね？」

「うん。あとは牛乳やバターとかもかなり使うし、果物とかも使う予定だから……結構かかると思う」

今ヨアンが試作してくれている材料費の、数倍は考えた方が良いだろうな。

「これからヨアン達が試作や研究で使った材料費の、数倍って考えれば良いかな」

「わかった。うーん、かなり大雑把だけど、三週間で白金貨二枚ぐらいはかかるかも。あっ、給金は三週間に一度にする？　それとも六週間？」

「振り込むのが大変だから六週間でも良いかなって思ってるんだけど……」

この世界は一月が九十日なので、月単位ではなく三週間や六週間ごとに給金を渡されるケースが多いのだ。平民は手渡しで大金を持ち歩くのは大変なので、三週間に一度が普通。貴族の使用人や中心街のお店の従業員などは、口座を作って六週間に一度振り込みの場合が多い。ただ中心街でも、給金の低い下働きなどは手渡しのケー

スも多いらしい。

「確かに、このお店だと振り込みになるのか。それだと六週間が良いかもね。じゃあ、皆の銀行口座も作らないとだよ？　僕も持ってないし」

そうだ！　作ろうと思って忘れてたよ。

「すっかり忘れてた。それよりも、口座に振り込みでいいのかな？　手渡しの方が良い？」

「うーん、手渡しだと安全に保管しておくのが大変だし、銀行口座を作れるのならやっぱりそっちがいいんじゃない？」

「そうだよね。じゃあ皆で作りに行こう。この後話が終わったらでいいかな？」

「うん。早い方がいいよ」

皆に口座を作ったら、カードを無くさないように首から下げるタイプの財布も買ってあげよう。俺からの支給品ってことにすれば良いだろう。これからは絶対に必要だろうからな。俺もマルセルさんに買ってもらって今でも重宝してる。

「じゃあ経費は六週間の計算なら、白金貨三枚ぐらいかな。それで、どれほど売り上げは伸びると思う？」

「そこが難しいんだけど、俺のお店の商品はかなり値段設定を上げられると思うんだ。味は文句なしに美味しいし、今までにないスイーツだし、見た目も綺麗で華やかにする予定だから」

中心街の真ん中にあるお店ということも考慮すると、カットケーキは一つ銀貨二枚、日本円換算で二万円でも売れると思うんだよね。日本円換算すると高すぎるって思うんだけど、前に王城近くのお

店で食べた、フレンチトーストを砂糖コーティングして砂糖漬けの果物を盛り付けて砂糖がまぶしてあるスイーツ、あれ銀貨三枚もしたんだ。
俺には甘すぎて微妙だったあれが銀貨三枚なら、中心街の真ん中でもヨアンのケーキなら銀貨二枚でいけると思う。もう少し高くても良いぐらいだ。
そしてホールケーキなら金貨で売れると思う。パーティーに特別のデコレーションケーキを金貨三枚とかもありだよね。貴族には絶対に売れるはずだ。

あとは包装をどうするのかなんだけど、おしゃれで可愛い木箱を用意して、それに入れるのを今のところ考えている。この世界には厚紙というものがあまりないから、それなら木箱の方が手に入れやすいのだ。木箱も材質を考えれば質の良いものになるし。
そしてその木箱のお金ももちろん取るけど、二回目からは木箱を持参したらそのお金は取らないとかにするのもありだよね。さらに木箱のバリエーションを増やしてコレクション欲を刺激するとか。
貴族の馬車はそれほど揺れないし、さらに中心街はしっかりと舗装されているから持ち運びに問題はないだろう。

そうだ、冬以外は製氷機の氷を適当な大きさにして布で包んで、箱の上部に入れられるようにしたい。その部分も箱に組み込んだ方が良いな。
ちょうど俺の店は中心街の真ん中にあるから、どの貴族の家にも、長くて馬車で三十分程度だろう。それならば氷があれば大丈夫だと思う。それも実験しないとだ。
まあ、貴族の馬車ってこれからは冷風機完備になっていくんだろうし、多分問題ないと思う。

あとはパーティーには、大きなデコレーションケーキをお届けす

るサービスもありかなと考えているところだ。ウエディングケーキみたいな大きいやつ。多分貴族は好きだよな。
でも流石にそれは持ち運べないから、準備はお店でして仕上げは貴族の屋敷でやらないといけない。その場合は派遣費用も上乗せしないと。

――そうして色々と考えていると、経費分はすぐに回収できる気がする。俺の見通しが甘いのかもしれないけど、でも今までにないスイーツだし、さらに簡単には真似できないものだ。味も見た目も貴族に受けると思う。
また、マルティーヌやカトリーヌ様達が宣伝もしてくれそうだし……うん、控えめに見積もっても黒字になる気がする。

「俺の控えめな予想でも黒字になると思うんだ」
「本当？　いくらぐらいで売るの？」
「基本的には一番安いもので銀貨二枚ぐらいかな。大きなものは金貨もありだと思う。あとは貴族向けに特別なスイーツを出張サービスとかで、金貨数枚とか」

それから俺は、色々と考えているプランをロニーに話した。ロニーはまだケーキの完成形を知らないからそんなに高く売れるのか半信半疑だったけど、とりあえず納得してくれたらしい。
そして木箱については、ロニーにはかなり高評価だった。

「木箱は凄く良いと思う。僕、レオンのお店の店長になることが決まってから色々と調べたりしたんだ。多分貴族様に受けると思う。あとは木箱の外側や内側を、綺麗な布で装飾したり、特別品で宝石をはめ込んだりするのもアリじゃないかな？　そこまで高くはない宝石で良いと思う。貴族様達は頻繁にお茶会をやるでしょ？　お茶

会にお気に入りの箱とケーキを持ち寄ったりとか、色々考えられるよ」
「確かにそうだね。じゃあ、とりあえずこのプランでやってみようか。後で各種工房にお願いしておくね」
「うん！　あとはお店の紋章を決めた方が良いんじゃない？　お店の紋章というか、レオンの商会の紋章かな。それを決めて木箱にも印字した方が良いよ。お店の外にも」
「確かに、考えてみるよ」

紋章あった方が良いな。商会の紋章って自由なのかな？　もし自由ならまた漢字にしようかな。真似されないものが良いよね。

「商会の紋章ってなんでも良いの？」
「うーん、確かなんでも良かったはず。貴族様お抱えの商会は、貴族様の紋章を少し変えたやつとかが多いけど、そうでないところは自由だったよ。文字を少し変えたり、記号みたいなやつとか、動物とかだったり。でも何かしらの意味があることが多いみたい」
「そうなんだ」

うーん、漢字は真似されないという点ではいいけど、他の人に全く意味は伝わらないよね。
じゃあ、何かイラストにしようかな。食べ物のお店をやるんだから食べ物に関わるものが良いだろう。それに地味じゃなくて華やかなもの……。苺のショートケーキにしようかな。イラストとして描きやすいし。苺のショートケーキの周りに、花とかでいい感じに装飾した紋章で良いんじゃないだろうか？
そう思って俺が、思いついたものを紙に書いてみると、ロニーに得体の知れないものを見るような目で見られてしまった。

「レオン……それは何？」

「え？　紋章だよ。今思いついたやつ」
「えっと……何が書いてあるの？　三角の何かに、丸い何かとぐるぐるしてるやつ……？」
「真ん中のがケーキだよ。これから売り出すスイーツ。そして周りがお花のつもり」

俺がそういうと、ロニーは紙をぐるぐると回転させながらしばらく眺めて、ため息をついた。

「はぁ、レオン。レオンが考えるの禁止！　さすがにこれは……、下手すぎるよ」

ロニーは言葉を選ぼうとしたけれど、結局諦めてストレートにそう言った。
そんなに下手かな？　まあ、確かに上手くはないけど……。何が描いてあるかはわかると思うんだけどな。
でもそういえば、俺って美術の通知表欄にいつも絵を頑張りましょうって書かれてたな……。最近絵を描くことなんてないから忘れてた。

「レオン、紋章は絶対に絵師に考えてもらってね！」
「わかったよ。ちゃんとそうするから心配しないで」

そうしてそれからも色々と話し合い、今日の話し合いは終わりとなった。凄く良い時間になったな。

それから夕食まであと少しだったけど、今日は夕食の時間を少しだけ遅らせてもらい、皆で銀行に口座を作りに行った。皆は初めて入る銀行にビクビクしていたけど、口座を作る頃には少し慣れたようだったので大丈夫だろう。

そして口座を作ったあとは皆で革製品を売っているお店で財布を買い、従業員寮に帰ってきた。

「じゃあ皆、これから頻繁に来ることはできないけど、回復の日はできる限り様子を見にくるようにするよ。これからよろしくね」

「かしこまりました。精一杯頑張ります」

そうして皆と挨拶をして、俺は公爵家に戻った。

ふぁ～、有意義な時間だったけどすっごく疲れたな……帰ったら早く寝よう。俺は馬車の心地よい揺れで眠くなる目を擦りつつ、なんとか寝ずに公爵家まで辿り着いた。しかしそこで力尽き、夕食を食べずに眠ってしまった。子供の身体は眠気に抗えないのだ。

次の日と朝、公爵家の皆さんにかなり体調を心配されたことから、これからは心配かけないように気をつけようと心に誓った。

１９４、各種魔法具設置と調理器具

次の日の放課後。
昨日疲れて寝落ちした反省からしばらくはゆっくりしようかと思ったんだけど、ヨアン達のためにお店に魔法具だけは設置したいと思い、今日も学校が終わってすぐにお店までやってきた。
もう少しだけ頑張れば、しばらくは俺がやることは無くなるはずだから、あと少し頑張ることにする。

今日はこの時間からお店に誰も入らないように言ってあるから、中には俺とロジェだけだ。ロジェは全属性のことを知っているし、中にいても問題ない。
唯一アイテムボックスが使えないことが不便だけど、そこは魔石と魔鉄を馬車で運んできたから大丈夫だ。
よしっ、頑張って作るかな。

今回追加でお店に設置する魔法具は、魔石と魔鉄をリシャール様から買って自分で作ることにしたのだ。魔法具店から購入した方が正規のルートで良いんだろうけど、自分で作った方が細かい調整もやりやすいし、今回はこういう形にした。
普通は魔石と魔鉄を直接手に入れることは不可能で、国営の魔法具店から魔法具を買うしかないんだから、俺が使う分はいつも特別に用意してくれるリシャール様には、本当に感謝だ。ありがたい。
「レオン様、魔石と魔鉄はこちらにお運びすれば良いでしょうか？」
ロジェが馬車から荷物を運んできて、俺にそう問いかけた。

「うん、ありがとう。全部そこに置いておいてくれる？」
「かしこまりました」

俺はお店のカウンター前のスペースを臨時の魔法具作成場所として、そこの床に直接座り込む。行儀悪いけど、ロジェと俺しかいないからいいだろう。

まずは何から作ろうかな。今日必ず作りたいのは、冷蔵機能付きガラスのショーケースと、厨房に置く冷蔵庫、それから店内の室温を管理するために、冷風機と温風機だな。

そう、この温風機、リュシアンが作ったドライヤーから派生して作られたものなんだ。俺がリュシアンに提案して二人で作りあげた。これによってストーブの売り上げは減ったんだけど、ストーブよりも温まると評判らしい。

でもストーブの方が好きという方もいて、意外とどちらにも需要はあるようだ。俺も実はストーブの方が好きだったりするんだけど、この店は広いから温風機の方が良いだろうな。

冷風機と温風機は、お店スペースと厨房、それから休憩室に欲しいから三つずつ必要だな。

とりあえずこれらを作って、あとは使いつつ改良していけばいいだろう。不便なとこがあったらそれを補う魔法具も作れるし。

よしっ、そうと決まれば早速作ろう。俺はそう気合を入れて、まずはお店に置いてあるガラス板を手に取った。このガラス板は新たにガラス工房に注文しておいたものだ。前に作ってもらったガラスのショーケースは、とりあえず公爵家の俺の部屋に移動してある。

あのショーケース、大きいしあまり使い道はないんだけど、解体して魔法具のショーケースに作り替えるのはなんだか悪い気がしてやめたのだ。工房の人たちが隙間を極力無くすために頑張ってくれたみたいだし、それを解体するのはね……

だから、今は俺の部屋で埃が被って欲しくないものを飾るケースとして置かれている。

俺はそんなことを考えつつ運んできたガラスの板をとりあえず床に置き、次に魔鉄を手に持ち魔力を流し込んだ。そして魔鉄がぐにゃぐにゃに変形したところで、ガラスに魔鉄を沿わせていく。

練習では長方形の箱型で、お客様側に一箇所だけガラスを付けたけれど、今回は使い勝手と見やすさを考えて少し形を変形させることにした。

お客様側の方は、ガラスの付け方を斜めにして屈まなくても見やすいように工夫する。それから店員側の引き戸にもガラスを嵌め込んだ。

そうしてできる限り魔鉄部分を少なくすることで、重厚感を減らせるように工夫する。おしゃれなカフェにゴツい金庫みたいなカウンターじゃ雰囲気壊れるからね。

――うん、上手くできた！

しばらくどんな形にするか試行錯誤して、遂に納得のいくものが仕上がった。我ながらいい感じだ。

あとはカウンターの上に設置してみて微調整だな。

カウンターはレンガで作り直してもらったんだけど、凄くおしゃれな仕上がりになっている。お会計をする部分は成人の腰より少し上ぐらいの高さになっていて、ショーケースを置く部分は土台だけ作られている。

そんなカウンターの上に、先ほど作ったショーケースを移動させた。身体強化を使って一人でも楽勝だ。

それからカウンターに合うように大きさを調整して、ショーケースの中に注文しておいた棚を入れ、光球をケーキがよく見えるよう

にセットして……完成だ！
うん、凄くおしゃれになった。俺はお店の入り口付近からショーケースを眺めて、その出来上がりを確認する。

「ロジェはどう思う？　お店の雰囲気に合ってる？」
「はい。お店の雰囲気にとても合っていると思います。さらに新しいものですので、このお店の目玉になるでしょう」
「本当？　なら良かった！　じゃあ続きも作っちゃうね」

俺はそうして、ショーケースに冷蔵機能を取り付けて、冷蔵機能付きショーケースを完成させた。
うん、完璧だ。これで魔石を嵌め込めばいつでも使える。でも一つ問題なのは、カウンター裏に冷やす機能である管や箱があるから、ちょっと邪魔なことだな。
うーん、ショーケースの裏側に長机でも置こうかな。その机の下に冷やす機能をしまい込めば、誰かが躓くこともないだろうし、さらに机があれば箱詰めなどの作業もしやすいよね。そうだ、カウンター裏に備品を入れておく棚も必要かも。とりあえず購入リストに入れておこう。

それからは冷蔵庫、冷風機、温風機と次々と魔法具を作って設置していった。形が決まっているものは悩むこともなくすぐに出来上がるので、俺は一時間ほどで全てを作り終えた。

「とりあえず、このぐらいかな」
「凄いですね……。レオン様の魔法について知ってはいますが、普段拝見することがないので驚きます」
「そうかな？　でも確かに普段は隠してるからね。ロジェの前でもあまり使ったことなかったかも」

今日は魔法を使いまくって頑張ったからな。身体強化はずっと使いっぱなしだったし、埃を綺麗にするのに風魔法を使ったり、汚れを拭き取るのに水魔法を使ったり、色々やった。
やっぱり魔法を自由に使えると楽だ。本当に魔法って不思議な力だけど凄いよな。

そんなことを考えながら疲れた身体をほぐすように伸びをして、俺は次に作るもののことを考えた。
本当はここまででやめようと思ってたんだけど、思いのほか早く作り終えたから、いくつか挑戦したかった魔法具を作ってみたい。
どんな魔法具かというと、調理器具だ。いくつか作りたいものはあるんだけど、特にハンドミキサーだけは作ってあげた方が良いと思ってたんだよね。あれがあれば時間短縮にもなるだろうし。マヨネーズにも生クリームにも使えるはずだから。

この世界には、お菓子作りに使える器具は結構ある。日本のものとそのまま同じ形ではないけど、泡立て器として使えるものや、ケーキの型になるようなものはあるのだ。でも流石に機械はない。だからそこは魔法具の出番だよね。

「ロジェ、俺はいくつか開発したい魔法具があるから、もう少しここにいても良い？」
「もちろんですが、また開発されるのですか……？」
「うん。ダメかな……？」
「いえ、大旦那様も既にたくさんの魔法具を登録している今、全属性ということがバレなければ良いと仰っておられましたので、問題はないかと思います。しかし、そこまで新しいものが思い浮かぶ発想力に驚いております……」

ロジェはそう言って、俺に対して少しだけ尊敬するような顔をし

た。
でも、俺の知識は日本の優秀な技術者のおかげなんだよな。だから素直に喜べないんだけど……まあ、それを言うわけにもいかない。
「ありがとう。俺は少しでも便利になればと思ってるだけだよ」
「素晴らしいです。私もレオン様に負けないよう、素晴らしい掃除道具を作り出してみせます」
ロジェはそう言って、決意を込めた目で頷いた。ロジェは俺が掃除道具開発について話してから、凄くやる気を見せているのだ。仕事が終わった後の時間や俺が学校に行っている時に空いた時間を使って、色々と考えているらしい。
ロジェが熱中できるものが見つかって良かった。俺はそう思って少し顔を緩めた。
「じゃあ、俺もロジェに負けないように頑張るよ」
そうして気合を入れて、調理器具開発を始めた。
まずはハンドミキサーだ。ハンドミキサーは泡立て器が自動で高速で回るやつなんだけど、どんな形なのか詳細は全くわからない。だけど、とりあえず泡立て器が自動で高速で回れば良いんだよね。
そう考えて、俺は買ってきた頑丈そうな泡立て器の持ち手部分に、魔鉄で長方形の羽根を取り付けた。そしてその羽が一周するよりも少しだけ大きな筒で、持ち手部分を覆う。それから筒の下部は泡立て器が落ちないように魔鉄で少し隙間を作って塞いだ。
よしっ……これで筒の中で羽根を押すように強めの風魔法を使えば、泡立て器が回るはず。
そう思って風魔法を使ってみた。すると確かに泡立て器は回ったけど、羽と筒の下部が擦れて嫌な音がする。それにその摩擦で速度も落ちちゃうみたいだ。

それを解消するためには、泡立て器を筒の上部にも固定して羽根を浮かせないとダメだな……

そうして試行錯誤を繰り返すこと数十分、ついに自動泡立て器が完成した。今までの泡立て器より持ち手が少しだけ太くなる程度で、自動で泡立て器が回転する。

うん、我ながら完璧だな。あとはヨアン達に使ってもらって速度調節をすれば良いだろう。

そうして泡立て器を完成させたあとは、泡立て器と同じような仕組みでフードプロセッサーも作って、魔法具開発は終了とした。

この二つは近いうちに登録しておこう。

１９５、お店の装飾品

「う～ん！　全部終わったぁ……」

俺は声に出して思いっきり伸びをして、大きく息を吐き出した。やっぱりずっと下を向いてると肩凝るし疲れるんだよね。まだ十歳なのに肩凝るって……俺は自分で考えて自分で落ち込んだ。

うん、考えないようにしよう。多分この肩こりは気のせいだ。

「レオン様、お疲れ様でございます。ではこちらは片付けてしまって良いでしょうか？」

ロジェがそう言いつつ、魔石と魔鉄を箱にしまって持ち上げた。

「うん、ありがとう。あっ、そうだ、馬車から俺の鞄持ってきてもらっても良い？」

「かしこまりました」

そうしてロジェから受け取った鞄から紙とペンを取り出し、これからの購入リストを作っていくことにした。やっぱりお店にいる時の方がイメージ湧くからね。

とりあえず、カウンター裏の長机と棚は絶対に必要だ。それから、貴族向けのお店に必要な装飾品もそろそろ揃えるべきだろう。基本的には貴族女性がターゲットで、でも男性も入りづらくならないようにしたい。

だからピンクとか可愛らしい色よりも、水色や黄色、白などを使おう。カーテンはレースのカーテンとその上に淡い水色がいいかな。

机の上には小さな花瓶に毎日花を生けることにして、机の数だけ

花瓶が必要だ。あとは、カウンター横のスペースにも何か置いた方が良いかな。実際に使うものじゃなくて、展示用のお皿やティーカップを飾るのはありかも。そうだ、戸棚の開戸にガラスを嵌め込んでもらって、おしゃれな展示にするのありかも。

あとそうだよ、お客さまにお出しするお皿やティーカップ、それからカトラリーも買わないと。

……そういえば、ケーキは作ってるけど飲み物って考えてなかったな。最低でも紅茶は必要だ。数種類の紅茶を用意して、紅茶が苦手な人のために水や緑茶も選んでもらえるようにしよう。

あとはケーキをお出しする時のトレーも必要だな。それからナプキンも買わないと。この世界はテーブルクロスはあまりなくて、個人にナプキンがあるのが普通だ。

このぐらいかな……？　あっ、お会計用のお金を入れる箱も買わないと。

やばいな、足りないものがありすぎる。とりあえずこのぐらいだろうか？

「ロジェ、今このお店に足りないものを書き出してみたんだけど、これだけで良いと思う？」

「そうですね……。あとは壁に絵画を飾ったり、壁紙としてレースのような布を飾ると良いかと思います」

「壁紙としてレース？」

「はい。最近上位貴族の奥様方の間で流行っているようです。大奥様が、公爵家の応接室の一室をそのように変えられておりました」

壁にレースみたいな布を貼り付けるってことだよね？　そんなのが流行るのか……よくわからないけど流行りには乗るべきだろう。

教えてくれたロジェには感謝しないとだな。貴族向けのお店をす

るなら、貴族の流行りを知ることも大切だ。そうなると、定期的にマルティーヌやカトリーヌ様とお茶会をすべきかもしれない。
いつもマルティーヌとのお茶会は別の話で終わっちゃうから、これからは貴族の流行についても聞いてみよう。

「ロジェありがとう。じゃあそれもリストに入れておくよ」
「いえ、それからもう一つ気付いたのですが、絨毯は注文されているのでしょうか？」

絨毯……忘れてたよ……。

「忘れてた……。絨毯って必要かな？」
「貴族の屋敷には必ず絨毯が敷かれておりますし、給仕の足音を消すためにもあった方が良いと思われます」
「やっぱりそうだよね。じゃあそれもリストに追加しておく」

絨毯は汚れが目立たないように濃いめの色にしたいよな。予定では茶色にしておこう。
俺はそこまで書いたところで、一度リストを見直した。うわぁ、凄い量だ。これは一度アンヌに確認したほうが良いかも。他にも抜けてるものありそうだし、アンヌに追加してもらってから全部注文しよう。

「ロジェありがとう。これ凄く大量だしまだ抜けてるところがあるかもしれないから、アンヌに確認してもらおうかと思うんだけど、これから寮に寄っても良い？」
「確かにそれが良いでしょう。一度話をするべきだと思います。今からならば……夕食にはギリギリ間に合うと思われます」
「じゃあお願い」
「かしこまりました」

そうして俺はお店を出て寮に向かった。そして寮で皆の教育をしていたアンヌを呼んだ。

「アンヌ、仕事中にごめんね」

「いえ、レオン様を優先するのは当然のことです。本日はいかが致しましたか？」

「実はお店に足りないものを全て注文しようと思ってリストを作ったんだけど、まだ抜けてるところがあるか確認してもらえる？」

俺はそう言って、さっき書いたリストを渡した。

「かしこまりました。少々お待ちください」

アンヌはそう言って、リストに真剣に目を通し始めた。そして途中からペンを取り出して、リストに書き加えていく。

「レオン様、いくつか修正点や足りないものを書き加えてみましたが、いかがでしょうか？」

「ありがとう」

そうしてアンヌからリストを受け取り見てみると、従者やメイドが待機するための椅子が書き加えられていて、さらに食器のところに砂糖を入れるポットが付け足されていた。また、食器の数は逆に減らされていた。

確かに砂糖を入れるポットは必要だな。でも使用人が待機する椅子ってなんだろう？　それに食器を減らしたら少なくないか？

「アンヌ、使用人が待機する椅子って何？　あと、食器は少なすぎない？」

「はい。貴族様方がお店で食事を召し上がられる際、基本的に食器類は従者が持参いたします。したがって、それほどの数は必要ないかと思われます。しかしレオン様のお店はスイーツ専門店ですので、食器類を持参されない方もいるということを考慮し、普通のお店より多めにしております。それから使用人が待機する椅子ですが、お店で主人が食事を召し上がられている際、基本的に従者は壁際まで下がり立ったまま控えています。しかしお店側の配慮として、使用人が座って待てるように椅子を準備するのが普通でございます。たまに使用人に座って待つようにと仰られる貴族様もおります」

そうなんだ……知らないことだらけだな。

「アンヌありがとう。じゃあ、椅子は準備する。そして食器類も少し減らしておくね」

俺はアンヌにそう答えつつ、今の食器類を減らすって話でふと思いついたことについて考えていた。

この前持ち帰りのケーキは木箱に入れるって決めたけど、直に木箱に入れるわけにはいかないよね。せめて何か敷かないと。

木箱の中に綺麗布を敷くのはいいとして、さらにその上にお皿か何かを挟まないとダメだろう。

紙が使えたらいいんだけど……どうだろうか。

「あと、今ふと思いついたことがあるんだけど聞いてくれる？」

「もちろんでございます」

「実は作ったスイーツはカットしたら、ガラスのショーケースに入れてカウンターのところに展示しておく予定なんだ。あと、スイーツは店内で食べるのじゃなくて持ち帰りもできるようにするから、持ち帰り用の木箱を作る予定。その時に、ケーキって何の上に乗せれば良いかな？　紙でも良いと思う？」

俺がそう聞くと、アンヌは難しい顔をして少し考え込んだ。
「確かに紙に食品を乗せることが全くないとは言いませんが、あまり馴染みはありません……」
「そっか、じゃあどうしようか……」
紙がダメだとなると途端に難しくなる。一つ一つお皿に乗せてショーケースに展示して、お持ち帰りの時もお皿に乗せるのが良いのかな？
うーん、ショーケースは別に問題ないだろう。ただ展示できる量が減ることが問題だけど、でもそこは裏に冷蔵庫をたくさん作って、そこに保管すれば良いから解決できる。
問題は持ち帰りの時だよな……割れないように木箱の中に布をしっかりと貼り付けて、お皿が動かないように突起を作るとか？
「お皿に乗せるとして、お持ち帰り用の木箱の中にお皿に乗せたケーキって、途中で割れたりしないかな？」
「木箱の中にしっかりと布を貼れば問題ないとは思います。しかし他にお皿を固定できる仕組みがあったほうが安全でございます」
「じゃあ、お皿を固定できるように突起を作るのはどう思う？」
「確かにそれがあれば十分でしょう」
「アンヌが使用人だとして、木箱にお皿ごと入ったスイーツを持ち帰るのって大変？」
俺がそう聞くとアンヌは少しだけ考え込んだあと、首を横に振った。
「いえ、それならば木箱を傾けないようにするだけですし、特に問題はないかと思います。他店でも持ち帰りはありますが、鍋のまま

だったりお皿に乗せられていたりしますので」
「それなら良かった。じゃあ紙じゃなくて、お皿に乗せることにしよう」

そうなると、お皿の数は逆に増やした方が良いよな。持ち帰り用のお皿を持ってきてくれる人もいるだろうけど、最初は少ない気がする。特に最初は、お皿もこちらで準備すべきだろう。そして木箱と同じで次回から持参したらその分のお金は取らないことにしよう。

「それだとお皿は逆に増やした方が良いよね」
「はい。お皿は増やして、他のものは減らすという形で良いかと思います」
「わかった。じゃあそうするよ」

よしっ、これであとは注文すれば完璧だな。

「アンヌ、今日は本当にありがとう。じゃああとは注文しておくよ」
「レオン様、差し出がましい申し出かもしれませんが、もしよろしければ私にお任せいただけませんか？」
「アンヌに？　注文まで頼んでいいの？」
「はい。給仕担当の者たちの勉強にもなりましょう」

確かにそうか、内装を整える仕事も工房に注文する仕事も、それから商会で購入する仕事も、全部できればプラスになるのか。
ロニーにも経験させてあげた方が良いかも。

「じゃあお願いしようかな。店長であるロニーも一緒によろしくね。支払いはジャパーニス商会でいいから」
「かしこまりました」
「ありがとう。もし途中で何か足りないものに気づいたら、ロニー

と相談して買い足していいからね」
「はい。では万事整えておきます」
「よろしくね」

そうして俺はお店の内装やその他諸々必要なものについては、アンヌたちに任せて従業員寮を後にした。
俺ってなんでも自分でやろうとしてたけど、もう従業員の皆がいるんだし任せてもいいんだな。この時初めてそう思った。

196、アルテュルの現状

次の日の放課後。
今日こそ仕事をせずに、研究会で皆とゆっくり話して学生生活を満喫しよう！
そう思って研究会に向かっていたら、途中でリュシアンに捕まって馬車まで連れてこられた。今日は研究会には行かずに帰るらしい……俺ののんびり学生生活が……

そう嘆きたかったが、リュシアンがいつになく真剣な表情で話があると言ってくるから、俺まで緊張して全くふざけられる雰囲気じゃなかった。
そうしてリュシアンに連れてこられた馬車の中。

「リュシアン、そんなに怖い顔でどうしたの？　何かあった？」
「……ああ、実は今日アルテュルと話したんだが、その話が結構辛いものでな……私たちに責任の一端があると思う。だから、レオンには話しておこうかと思ったんだ」

アルテュル様？
前に平民のことを教えた日からほとんど関わりなかったんだけど……、もしかして、なんかやばいことになってるのかな？
アルテュル様のお父さんってかなりヤバそうな人だったよな。アルテュル様を、傀儡化しようとしているかのような教育をしてた……

「アルテュル様、何かあったの？」
「ああ、まずアルテュルはあの後平民についての認識を改めたが、家の中では今まで通りに振る舞っていたらしい。しかし夏の休みの

終わり頃、アルテュルの父親であるプレオベール公爵が、平民の使用人に罰を与えていたところに遭遇したらしい。なんでも下働きの者だったが、プレオベール公爵の前に姿を現してしまったようだな。それでひどく罵声を浴びせられて暴力を振るわれているところを、アルテュルが咄嗟に庇ってしまったらしいのだ。そして、この者も私たちのために働いてくれているのだから許すようにと、そう言ったらしい」

待って……、まずアルテュル様のお父さんが酷すぎて言葉にならない。姿を現しただけで暴力を振るわれるって、どういうこと？

確かに、使用人は極力主人の前に姿を現さないようにと教育される家もあると前に聞いたけど、姿を見せただけでそこまでされるのは……、流石におかしいよね？

でもそれがプレオベール家の、いや敵対勢力の貴族家の普通なのかな……そんな貴族、絶対に嫌だ。

というか、アルテュル様ってそんな家に育ったのに、よくあそこまで素直な性格になったよね。最初は上から目線でなんて生意気な子なんだと思ったけど、知れば知るほどよくここまで素直な子になったなと、逆に驚くほどだ。

「そしてプレオベール公爵は、下働きの者を庇ったアルテュルに激怒し、一週間水と少しのパンしか与えずに部屋に閉じ込めたらしいんだ。なぜそんなことをしたのか理由を答えろと言って。そこでアルテュルは我慢の限界になり、王立学校で知り合った友人に平民の大切さを学んだと答えたらしい。するとそれによりさらにプレオベール公爵の怒りを買い、これからは閉じ込められた部屋から一歩も出さないと言われたようだ。しかし王立学校を卒業しなければ貴族になれないからか、その数日後に学校だけは行くようにと厳命され、やっと部屋から出れたらしい。しかし授業が終わった五分以内に馬車に乗り屋敷に帰るという条件付きで」

……マジか。なんかもう、言葉が出ない。とりあえずそのまま監禁されたりしなくて本当に良かった。もしそのまま外に出られなければ、俺たちが現状を知ることもできなかっただろうからね……

それにしても、実の父親にそんなことされるなんて、想像するだけで辛くて悲しい。

……どうしよう。どうすれば助けられるんだろう。俺は血の気が引いて、手足がどんどん冷たくなるのを感じた。

だって、リュシアンが言うようにこの状況になった原因は俺だよね。俺のせいで、アルテュル様が苦しんでるなんて……

「リュシアン、……どうすればいいかな？」

そう聞いた俺の声は少し震えていた。

「レオン、落ち着け。話を聞いた限りでは、アルテュルはその後教育し直されているらしいから、とりあえず命の危機にさらされるようなことはないだろう」

そうか……、それなら、とりあえずは良かった。

俺は命の危険はないと言うことを聞いて、少しだけホッとした。でもまだ全然安心できない。

「アルテュル様は、これからどうなるのかな？」

「アルテュルは、父上や執事の言うことを信じるのではなく自分の目で見たものを信じると言っていたから、これからも溝が埋まることはないだろうな……」

「何か、してあげられないかな？」

「そうだな……他人の家のことだから、私たちができることは少ないだろう。王立学校の中で話し相手になるぐらいだな。ただ、レオンはそれも控えたほうが良いと思うぞ」
「確かに、平民と話すのはやめたほうが良いよね」
「ああ」

じゃあ俺にできることは何もないのかな……。でも何かしてあげたい。アルテュル様は本当は良い子なんだ。あの短時間で十分それが伝わってきた。父親が最悪なだけなんだよな……
そういえば、他の家族ってどうなんだろう？　それにそもそも、普通は父親って領地にいるはずだよね？

「ねぇ、アルテュル様の他のご家族は？　それになんで父親が王都にいるの？」
「ああ、アルテュルの祖父母は数年前に事故で亡くなったんだ。そして母親はアルテュルを産んで数年後に病気で亡くなった。貴族の間では有名なことだ。それから、確かプレオベール公爵には妹がいたらしいが、他家に嫁に出ていると思う。それからアルテュルには歳の離れた後妻の妹と弟がいるらしいが、まだ二歳と生まれて間もない子だと言っていたな。そんな状態だからか、領地は代官と後妻に任せてプレオベール公爵は王都にいるんだ」

それじゃあ、王都の屋敷にはお父さんとアルテュル様の二人だけってこと……？　それって、逃げ場ないよね。
何かしてあげられることないかな。何か助けられるようなことできないかな……
このまま何もせずにアルテュル様に何かあったら、絶対に後悔する、一生後悔するだろう。ダメだ、何かできることを考えよう。
でも全く関係のない公爵家での出来事だ。根本から解決するのは俺には不可能だろう。それならば、最低限命の危機からは助けたい

……

そうしてしばらく何かできないかを考えて、俺は一つの決意をした。

バリアの魔法具を、アルテュル様に渡そう。

今まではこれ以上使徒様として疑われないように隠してきたけど、空間魔法のことについてリシャール様に報告しようと思う。これもいつかは報告すべきだと思ってたんだ。

そして、アルテュル様にロニーにも渡したバリアの魔法具を渡しておこう。そうすれば、もし命の危険が迫った時でもバリアを発動して逃げられるだろう。

俺はそう覚悟を決めて、リュシアンの方に顔を向けた。

「リュシアン、アルテュル様を少しでも助けるために、リシャール様に報告したいことがあるんだ。もちろんリュシアンにも」

俺がそう真剣な表情で言うと、リュシアンは何かを察してくれたのか、真剣な表情で頷いてくれた。

「わかった。じゃあ今日お祖父様が帰ってきたら、話を聞いてもらおう。私も同席するぞ？」

「うん。ありがとう」

そうしてこれからの予定を決めたあとは、二人とも一言も話さずに馬車に揺られた。

公爵家に着き俺とリュシアンが馬車から降りると、俺たちのいつ

もと違う重い雰囲気に、ロジェとリュシアンの従者の方が緊張したような表情を一瞬浮かべた。しかしそれを悟らせないようにすぐ表情を元に戻すあたり、二人はプロだよね。

「レオン様、おかえりなさいませ」
「ただいま。ロジェ、このあとリシャール様に報告があるんだ。リシャール様がお帰りになられたら話せるように調整してくれる？リュシアンも一緒に」
「かしこまりました。では、それまではお部屋でお寛ぎください。軽食などご用意できますがいかが致しますか？」
「お腹空いてないからいいかな。お茶だけお願い」
「かしこまりました」

そうして俺はロジェにこの後の調整を頼み、一先ず自室に帰って落ち着くことにした。まだ衝撃で頭が纏まってないから、何を話すのかとまとめておかないと。

197、衝撃の事実

そうしてしばらく休んだ後、リシャール様の準備が整ったようなので、俺はリシャール様の自室に向かった。
部屋に入ると既に人払いがされていて、テーブルには軽食が乗っていた。夕食が少し遅くなるから軽く食べられるようにだろう。
既にリュシアンも来ているようだ。

俺は入室の挨拶をして、ロジェに廊下で待機してもらうようにお願いし、ソファに座った。

「さて、レオン君から話があると聞いたんだが、なんの話だ？」
「はい。お時間をいただいてありがとうございます。まずは、アルテュル様のことについてリシャール様は知っておられますか？」
「ああ、リュシアンから聞いた。それにプレオベール公爵家のことはできる限り情報を集めているからな。敵対勢力の筆頭だ」
「それでしたら、その話は省かせていただきます。私はアルテュル様が今のような状態に陥った原因の一端は、私にあると思っています。そこでなんとかアルテュル様の助けになりたいと思い、アルテュル様にある魔法具を送りたいと考えています」

俺がそう言うと、リシャール様は少しだけ優しげな顔になって言った。

「まず、レオン君の責任だということはない。プレオベール公爵家は最近、目に余るほど平民に対して当たりが強い。しかしそれを取り締まれていないのは、ひとえに国を動かす立場である私の責任だ。申し訳ないと思っている。しかし貴族は影響力も強く、容易に取り

締まれないのだ。貴族と平民が助け合うとは言っても、近年はその決まりがあってないようなものだからな……。本当に悲しいことだ。話を聞く限り、アルテュルという少年は立派なように思える。そのような者が力を振るえないようではダメなのだが、これは国の責任だ。アルテュルにも申し訳ないと思う」

リシャール様はそう言って頭を下げた。俺はそれに慌てて頭を上げてもらう。

「リシャール様、頭を上げてください！　確かに国の責任がないとは言いませんが、貴族という身分がある仕組みなのですから、仕方がないことだと思っています。……そういえば細かい事例について知らないのですが、貴族が平民に暴力を振るった場合、基本的にはどうなるのですか？　まだ授業でも習っていなくて……」

「そうだな、基本的には注意を受ける程度だろう。それも証拠がしっかりとあり目撃者がいる場合に限る。基本的に平民と貴族の言い分が食い違った場合、貴族の言い分が優先される。しかし、それも個々の事例にはよるがな」

「そうなのですね……」

やっぱり身分がある世界だな……。要するに、貴族は平民に対して何をしても、大きな罪にはならないということだろう。この世界では動画を撮ることもできないし、平民は泣き寝入りするしか方法がないよな……

昔はもっと厳格だったのかもしれないけど、近年の風潮ではこうなるのも仕方がないのだろう。

王立学校で習っている感じだと、この国の法は日本とはかなりタイプの違うものだ。憲法のように絶対の法はなく、それは王家が担うことになっている。しかし貴族の力も無視できないため、国の重

鎮による会議などで方針が少しずつ変わったりするらしい。
殺人はダメとか人身売買はダメとか、盗みはダメとか基本的に守るべきところは変更されないらしいけど、それでも貴族という身分の者がそれを犯した場合、平民より罪が軽くなったりするのだという。
一応細かい法律のようなものもあるにはあるけれど、トップの方針が流動的なため、法律もそこまで厳格に施行されるわけではないみたいだ。俺からすればそんなに曖昧なものを法っていうのか？　って感じだけど、とりあえずそれで国が回っているらしい。

でも多分、その曖昧な感じでもこの国がうまく回っていたのは、使徒様の教えが絶対的なものであったからだと思うんだよね。それが揺らいでいる今、この国ってそのうち滅びるんじゃないか？　と思ったりもしている……

まあそんな国の現状だから、アルテュル様のことを根本から助けるのはかなり難しい。というよりも方法がないだろう。
国の仕組みを大きく変えられたらできるかもしれないけど、それは流石に無理だからな……。例えやるとしても長い年月が必要だ。
そうなると、密かに手助けするか、無理矢理プレオベール公爵家から攫ってきて匿ったりなど強硬手段を取るしかない。でも無理矢理攫うのはバレたらこちらが犯罪者になるし、アルテュル様も外を出歩けなくなるという点では、状況は結局変わらない。それに貴族が他家のことに口を出すのは基本的にタブーとされているしな……
……やっぱり、バリアの魔法具を渡すことが今できることの限界だろう。

「……アルテュル様の現状は、今の時点では仕方がないことだと思っています。他家の事情に口を出すのは難しいこともわかっています。しかし現状を引き起こした原因が私にもある以上、少しでも助

けになりたいのです。そこで、バリアの魔法具を、アルテュル様に渡したいと思っています。」

俺がそう言うと、リシャール様は不思議な顔をした。

「バリア、とはなんだ？」

「はい。実は私……、一般的に言われている属性以外にも使える魔法があるのです。空間属性と名付けた魔法が使えます。バリアとは空間属性魔法の一つで、さまざまな攻撃から身を守る透明な盾のようなものです」

俺がそう言うと、隣のリュシアンはかなり驚いたような様子で固まっていたが、リシャール様は冷静だった。

「そうか、あの魔法がバリアという名前なのだな」

「……驚かないのですか？　それにあの魔法って？」

俺は思わずそう聞いてしまった。すると、リシャール様の口から衝撃的な事実が語られた。

「ああ、実はレオン君が他の魔法も使えることを、私は知っていたのだ」

……え！？　どういうこと！？

俺言ってないよね？　覚えてないだけで言ったっけ？　いや、流石にこの話をしたことを忘れるってことはないだろう。じゃあ、なんでだ？

「なぜご存知なのか、聞いても良いのでしょうか？」

「ああ、もちろんだ。私からレオン君に話そうと考えていたのだが、影から入手した情報は基本的に明かさないことがマナーだからな。迷っていたんだ」

……影。

そうだよ。完全に存在を忘れてた。確か、俺にもついてるって言われた気がする。存在を感じたことは一度もなかったし、紹介されたこともなかったから忘れてたよ……

護衛として俺の家族や知り合いと、更に俺自身にも影がついてるんだったな。

……なんで忘れてたんだろう。じゃあ、今までの俺の行動は、全て筒抜けってことじゃないか！？

俺はその衝撃の事実に本気で驚き、思考が停止してしまう。そうしてぼーっとしていると、リシャール様が少しだけ申し訳なさそうに口を開いた。

「レオン君にも影をつけることは伝えたから知っていると思っていたのだが、その様子ではやはり忘れていたのか？　確かに最初に許可を得てから話に出したこともなかったな。もう少し定期的に影がついていることを伝えれば良かったかもしれない。これからは改善しよう」

「い、いえ、忘れていた私が悪いので、気にしないでください……」

俺はリシャール様になんとかそう返して、また頭の中で今までのことをぐるぐると考えはじめた。

何か、やばいことが見られたりしてないだろうか？　でも、秘密にしてることなんてほとんどないよな。秘密にしてるのは、空間属性のことと転生したことぐらいだ。空間属性のことは伝えるから見

られていても問題ない。
　ということは、転生したことがバレてなければ大丈夫だろう。転生したことを話したのは、マルティーヌに対してだけだ。
　マルティーヌと日本のことを話したのは、王宮でのお茶会の時と馬車の中でだけ。どちらも声は抑えていたし、すぐ近くに人がいない限り聞かれていたということはないだろう。

　……多分、大丈夫なはずだ。

「……リシャール様、影の方達はどこまで入っているのでしょうか？　建物の中などはどうなのでしょうか？」
「ああ、基本的には建物の中までは護衛しない。中に入ったのを見届けたら外から建物の周りを監視するだけだ」

　そっか。それなら転生のことがバレたということはないだろう。とりあえず、良かった……。
　転生のことを伝えるのはかなり怖いから、できる限り秘密にしたいんだ。特に家族には知られたくない。
　いずれリシャール様やリュシアン達には教えるかもしれないけど、それでも家族にだけは秘密にすると決めた。知らない方がお互いに幸せなこともあると思うから……。
　だから、今回バレていなくて本当によかった。

「そうなのですね」
「レオン君はずっと監視されているのは嫌かも知れないが、護衛という意味も込めているからこれからも付けさせてくれるか？」
「もちろんです。というよりも、こちらからも改めてお願いします。守っていただけているのは心強いです」

　俺はそう言って、しっかりと頭を下げた。家族はもちろんだけど、

俺も守ってもらえているのは凄く心強い。

「そう言ってもらえて良かったよ。ではこれからも影は付けておく」

「ありがとうございます」

「それでは話を戻すが、私は影からの報告でレオン君の魔法について既に知っている。しかし詳細はわからないのだ。できれば詳しいことを教えてくれるか？」

そうだよ、その話だった。影の存在が衝撃的すぎて元の話を忘れてた。リシャール様は、というか影の人は見ていてどこまで分かったんだろう？

「リシャール様、影の方からの報告ではどこまで知っておられるのですか？」

俺がそう聞くと、リシャール様は心得たように頷いてくれた。

「確かにそうだな。先に私が聞いた報告について話そう」

１９８、影と空間魔法

「私が最初に聞いた報告は、レオン君が王立学校の訓練場で奇妙な魔法を使っていたというものだ。透明なガラスのようなものを空中に作り出して、それに向かって攻撃をしていたという話。それから巨大な岩を一瞬にして消し、また出現させたという話。更に瞬きほどの時間で別の場所に移動したという話。この報告を聞いた時点で、私はレオン君が使徒様が使われていたとされる魔法と、似た魔法を使えるのではないかという結論に至った」

バッチリ全部見られてたぁ～。

あれを見られてたら使徒様と結びつけるよね。だって、俺も使徒様が使っていた魔法の本を読んで、俺にもできるのか試したんだから……

使徒様と結びつけられるのが嫌で隠してたんだけど、意味なかったな。

あれ、でもその割には使徒様だと祭り上げられたり、使徒様じゃないのかとしつこく聞かれたりしなかったな。

確かリシャール様達って、俺を使徒様だとまだ疑ってるって話だったよね？　マルティーヌが前に言ってたはずだ。

でもさすがにその疑いも晴れたのかな。俺が否定し続けた甲斐あったのかも。

「レオン君、この際もう一度聞くが、レオン君は本当の本当に、使徒様ではないのか？　使徒様であるならば今のように回りくどいことをする必要はないのだ」

おおぅ……。全然まだ疑われてたよ。
まあ、俺の能力だと完全に疑いを晴らすのは無理だよね。俺も神様に直接聞いてみたいぐらいだ。俺はなぜ転生したのか、なぜ使徒様と同じような能力を持っているのかって。

「使徒様ではないんです」
「……そうか」
「使徒様だと今のようなことをする必要がないって、どういう意味ですか？」
「使徒様ならば、特別待遇で王立学校を卒業せずとも貴族とすることが可能だ。護衛もたくさん付けられるし、家族や友人知人全てに護衛をつけることも、安全な場所に引っ越してもらうことも可能だ。レオン君には屋敷が与えられるだろうから、その敷地内に親しい人の家を建ててもいいだろう。国として公に守ることができるようになる」

使徒様って、そんなに凄いことになるんだ。
もういっそのこと使徒様だったら楽だったのに。逆になんで俺は使徒様じゃないんだ！

「本当に使徒様じゃないんです。確かに似ているところは多いですが……。私は、使徒様ではないのに使徒様を騙ったら、神の怒りに触れるのではないかと怖いんです。なので、私のことを使徒様だというのは、極力やめていただけませんか？」

俺が真剣な表情でそう言うと、リシャール様は同じく真剣な表情で頷いてくれた。

「分かった。もちろんレオン君の意に反することをするつもりは全くないから安心してくれ」

なんだ、ちゃんと話せば分かってもらえるのか……
隠す必要なんてなかったな。というか、隠そうとしてたってことは、俺がリシャール様を信じきれていなかったってことだよな。
ここまで誠実に対応してくれる方を信じられないなんて……なんて申し訳ないことをしてしまったんだろう。

俺はその事実に気づいてかなり落ち込んだ。でも、ここで俺が謝ってもそれは自己満足なだけだろう。これからの態度で示していくべきだよな。
まずこれからは、隠し事をしないでなんでも話そう。なんでも話し合って、一緒に解決策を探らせてもらおう。

「ありがとうございます」
「では、レオン君は使徒様ではないが同じような魔法を使えるということだな」
「そうです。今ここで使ってみますね。まずはバリア、これは基本的には攻撃を防いだりする目的の魔法なのですが、形は自由自在でかなり頑丈な物質なので攻撃にも使えます。例えばナイフの刃の部分をこれで覆うと驚くほどの切れ味になります」

俺はそう説明しつつ、自分の前に小さめのバリアを出現させた。

「触ってみてもいいか？」
「……はい。ただ、外側からではなく私の方から触っていただけますか？　触っても何も起こらないとは思いますが、万が一何かあると大変ですので……」
「そうか、ならばまずは物で触れてみよう」

リシャール様はそう言って、まずはペンでバリアをつついた。そ

して何事も起こらないのを確認して、次は指先でちょんっと少しだけバリアに触れた。

「ふむ、つるりとした材質でガラスと似ているな」
「はい。ただガラスの何十倍、いや何百倍も頑丈かも知れません」
「それは凄い……」
「レオン、私も触っていいか？」
「もちろんです」

そうしてリシャール様とリュシアンは、しばらくの間バリアを手でペタペタ触ったりナイフで傷付けようとしてみたり、色々と確認をしていた。
そして数分でとりあえず満足したようだ。

「レオン君ありがとう」
「いえ、またいつでも出しますので仰ってください。それでは次に行きます。次は転移です。転移は魔力を多く使えば使うほど遠くに転移できます。たくさんの荷物と一緒に転移も可能です。一応魚で試したところ生物との転移も可能でした。しかしまだ人で試したことはありません。それから私が触れていないものでも魔力を広げれば転移対象として一緒に転移できますが、私以外のものだけを転移させることはできません。転移をする時は必ず私と一緒にとなります」

そう説明をして、俺はその場で立ち上がり部屋の隅まで転移した。

「こんな感じです」
「これは……実際に見ると驚くなんて物ではないな……」
「レオン！　これは凄いぞ！」

リシャール様は凄く驚いてる様子だけど、リュシアンは身を乗り出して興奮している様子だ。珍しくリュシアンが子供っぽくなってるな。

「レオン！　私も連れて転移してくれ！」

「いや、流石に最初をリュシアン様で試すのは……」

生き物を連れて普通に転移できたし、なんとなく感覚的にも人間を連れて転移できるのだろうと思ってるんだけど、やっぱり絶対とは言えないことだからな。流石に最初をリュシアンで試すのは違うだろう。

まあ、最初は誰ならいいんだって話なんだけどね。

「だが、それならば最初は誰で試すのだ？」

「それは、まだわからないですが……」

俺がそうして答えに詰まっていると、リシャール様が驚くことにリュシアンの味方についた。

「レオン君、使徒様の魔法でもたくさんの者を一気に別の場所へ移動させたと記述があったはずだ。なのでレオン君の魔法も大丈夫だろう」

いやいやいや、俺は使徒様ではないですからね！　やっぱり俺の意は尊重してくれるけど、まだ疑いは晴れてないのか。まあ、無理矢理使徒様として祭り上げられないならいいんだけど。

「レオン、お祖父様もこう言っているし早くするんだ！」

リュシアンはそう言って、未だ部屋の隅に立っていた俺の方にや

ってきた。さあ早く！　と言わんばかりの期待した目をしている。

「リュシアン様は、怖くないのですか？」

「レオンの魔法だろう？　それならば大丈夫だ」

何でそんなに信頼できるの！？

「ですが……、万が一ということがあります」

「だが、生き物と転移しても大丈夫だったのだろう？　それならば心配いらないんじゃないか？」

確かにそうなんだけど、多分大丈夫だろうと思ってるんだけど、万が一の可能性を考えちゃうんだよな……

まあ俺が転移して普通に大丈夫なんだから、大丈夫だとは思うんだけど……

「レオン君、使徒様と同じ魔法だから大丈夫だ。やってみてくれ。リュシアンで試すのが嫌ならば私からでもいい」

リシャール様はそう言ってソファから立ち上がった。

リシャール様は使徒様への信頼が厚すぎます！　俺は使徒様じゃないんですよ！

「お祖父様、最初は私です！」

リュシアンも反応するとこそこじゃないから！

「ほらレオン、早く。お祖父様に先を越されてしまう前に転移するぞ」

「ですが……」

俺がそうしてまだ渋っていると、リュシアンに手をぎゅと握られた。

「これで転移できるか？　レオンと手を繋いでいれば、転移の途中で迷子になることもないだろう？」

リュシアンはそう言って、期待した目でこちらをみてくる。これは絶対に引かないな……。

はぁ～、仕方ないか。何かあったら俺が全力の回復魔法で治そう。生き物も大丈夫だったから人間も大丈夫なはずだ。使徒様の魔法でも大丈夫だったのなら大丈夫なはずだ。

俺はそう自分に言い聞かせてリュシアンの手をぎゅっと強く握り返し、意を決して転移魔法を使った。

そして転移後に恐る恐る隣を見ると、リュシアンが輝かしい笑顔で俺を見つめていた。

……はぁ。本当に、本当に良かった。人生で一番緊張した。

「レオン凄いぞ！　もう一回だ！」

「分かったよ。でもちょっと待って。めちゃくちゃ疲れたから」

「どうしたんだ？　早くもう一回やってくれ！」

「すっごく緊張してたんだから！　もしリュシアンに何かあったらどうしようって！」

「大丈夫だと言ったぞ？」

「なんの根拠もなかったけどね！」

「大丈夫だ。私はこういう時の直感はあたるんだ」

「それは根拠になってないから！」

俺は思わず敬語も崩れ、リュシアンにそう怒った。はぁ〜、本当に怖かった。

「レオン、早く次の転移をしてくれ！」

「だからっ……はぁ〜」

こんなに危ないことをしてはダメだとリュシアンに言い聞かせようと思ったけど、リュシアンのキラキラした瞳を見た途端に気が抜けてそんな気持ちもなくなってしまった。

まあ、また後でちゃんと言い聞かせればいいか。俺はそう考えて、今度はさっきよりもかなり軽い気持ちで転移をした。

「本当に凄いな！　もっと遠くに転移できないのか！？」

「リュシアンの部屋とかならできるけど、でも人がいたら驚かれるし転移がバレちゃうから」

「大丈夫だ！　今私の部屋には誰もいないぞ」

そうしてテンション爆上がりのリュシアンにしばらく付き合って転移をし、その後隠そうとしてはいるが隠しきれていない期待の目をリシャール様に向けられ、リシャール様とも何度か転移をし、やっとソファに戻った。

疲労感が凄いよ……

１９９、新バリアの魔法具

「おほんっ。えー、それで、一度に何人まで転移可能なのだ？」

リシャール様がはしゃいだことを誤魔化すようにわざとらしく咳払いをし、話を戻した。

「はい。それは未だ検証できていないので、いずれ機会があれば検証したいと思っています。しかし物はいくら増やしても大丈夫でしたので、人も同じように増えても大丈夫な可能性が高いです」

「そうか……、本当に凄いな。では、どれほどの距離を転移可能なのだ？」

「魔力が最大残っている状態ならば、現状ではここから私の実家まで転移することは可能です。もう少し遠くにも行けます」

「なっ……。それは本当なのか！？」

「はい。それからしっかりと報告したことはありませんでしたが、私の魔力量はどんどん増えているのです。魔力を使えば使うほど、特に魔力を使い切るほど増えていきます。よって、そのうち国内どこでも転移可能になると思います」

俺がそう言うと、二人はさっきまでのはしゃいだ様子から一転、驚愕の表情を浮かべた。

魔力量が多いってことは全属性のことからも暗黙の了解みたいになってたんだけど、魔力量が増えることはしっかりと報告したことなかったんだよね。

「ま、魔力量が増えていたのか！　魔力量が多いということは分かっていたが、まさか増えていたとは……。まあ、そうだな、でもレ

オン君ならば、魔力量が増えるぐらい、大したことではないだろう」
リシャール様は自分に言い聞かせるようにそう言って、なんとか納得している。
「では、これからどれほどの距離を転移できるようになるのかは未知数ということだな」
「その通りです」
「分かった。心得ておこう」
「よろしくお願いします」

俺はそこまで話したところで、ふぅ～と大きく息を吐いてソファーの背もたれに寄りかかった。
なんか、もうここで話を終わりにしたいぐらい疲れた。でも最後まで話さないとだよな。というか、まだ本題を話してないし。
リシャール様とリュシアンも転移魔法ではしゃいだからか、少し疲れた様子だ。

「少し休憩されますか？」
「いや、大丈夫だ。レオン君こそ大丈夫か？　魔法をたくさん使わせてしまったが」
「はい。先程のような近距離の転移ならば、魔力の消費量も多くないので大丈夫です」
「そうか、それならばこのまま続けよう」
「かしこまりました。では最後の空間魔法なのですが、アイテムボックスというものです。これはここと違う空間に物をいくらでも収納しておけるという魔法です」

俺はそう説明をして、アイテムボックスから塩や砂糖、調理済みの料理、大きな椅子などを次々と取り出していった。

「こんな感じで、無限に物が仕舞えて取り出せるという魔法です。さらに中は時間停止なので、出来立ての料理を仕舞っておけば、いつでも出来立ての状態で取り出せます。ちなみにこのスープは数カ月前に仕舞ったものです」

俺はそう言って器に入ったスープを取り出した。これは屋台で買ってそのままアイテムボックスに仕舞っていたものだ。

「そ、その、湯気が出ているスープが、数ヶ月前のものなのか！？」
「そうです」
「レ、レオン、それはいくらでも物を仕舞えるのか？　どんなに大きな物でも？」
「うん。大きさは何でも」

そうして俺にいくつかのことを確認すると、二人は驚きで固まってしまった。今日は驚かせすぎかもな……
でも、まだ他の属性魔法についての報告もしたいんだけど。

「な、何ともまた、便利すぎる魔法だな……」
「はい。これは本当に便利です。しかし気をつけなければいけない点もあって、生物を仕舞うとその時点で息絶えてしまいます。以前試しに魚を仕舞ってみたことがあるのですが、取り出した時には生きていませんでした」
「なっ……、そ、それは、人間も仕舞えるのか！？」

リシャール様は、少しだけ引き攣った顔でそう聞いてきた。

「それは試せないのでわかりません。ただ私は入れませんでしたので、仕舞えない可能性が高いと思います。まずは他の動物や魔物な

どで試してみたいと思っています」
「そ、そうか、それならば良かった。確かに他の生物で試してみた方が良いな。とりあえずは、くれぐれも安全に配慮して使ってくれ」
「かしこまりました」

よし、これで空間魔法のことは全部話したな。後は他の魔法属性の使い方も報告してしまおう。

「リシャール様、後一つ魔法について報告がありまして、一般的な魔法属性の使い方についてなのですが……」

それからは水魔法で衣服や髪、死んだ生物の水分が取り出せること、またその応用で湿度も変化させられること。さらに土魔法で鉄を作れることなどを話した。

「確かに水魔法でそのようなことができるという事実は報告されている。しかし魔力量がかなり必要なため、結局は使う者がいなくなったはずだ。普通に乾かしたり血抜きをすれば良いからな」
「そうなのですね」

やっぱり魔力消費量が割に合わない魔法なのか。それだと広がることはないな。普通に服を干せば乾くし、髪の毛もそのうち乾くからな。

「ああ、しかし土魔法で鉄が作れるというのは驚いた。ただそれもレオン君にしかできないだろう」
「鉄を作るのにはかなりの魔力を消費するので、私にしかできないと思います。一応伝えるだけ伝えておこうと思い、報告いたしました」
「ああ、どんなことでもとりあえず報告してくれたら嬉しい」

「かしこまりました。これからはしっかりとご報告いたします」
「よろしく頼む」
「はい。ではやっと大元の本題に戻れるのですが、先ほど説明したバリアの魔法具を、アルテュル様にお渡ししたいのです」

そうしてやっと元の話題まで辿り着くと、リシャール様は一気に難しそうな顔になり考え込んだ。

「まず大前提だが、空間魔法も今まで通り、周りに明かさないよう気をつけてほしい。それは分かっているか？」
「はい。心得ています」
「ではレオン君は、それを分かった上で公に明かされる危険を冒してまでも、アルテュルの助けになりたいということだな」
「その通りです」

俺はリシャール様の目を見て、しっかりと頷いた。するとリシャール様は少しだけ顔を緩めてくれた。

「わかった。それならば許可しよう。ただ万が一公にレオン君の能力が広まってしまった場合、君の身はかなり危険になる。特に貴族になるまでの期間が危険だ。そのため今よりもよほど厳しい護衛がつくことになる。更に自由もなくなる。それでも良いか？」
「……はい。覚悟の上です」

それは何度も考えた。ロニーにバリアの魔法具を渡すことと、敵対貴族の筆頭であるプレオベール公爵家の嫡男に渡すのとでは天と地ほどの差があるだろう。でも、やっぱりアルテュル様を放っておくことはできない。
もし俺の力がバレて今より危険になったら、家族は中心街に連れてくることになるだろう。更に親戚や知人友人にも護衛がつくこと

になるかもしれない。皆に迷惑をかけるだろう。
でも、それでも、ここで何もしなかったら後悔すると思うんだ。
……皆、わがまま言ってごめんなさい。もしもの時は俺が皆を守るから許して！
俺は心の中でそう皆に謝って、覚悟を決めてリシャール様を見返した。
「わかった。では魔法具を早急に作成し、アルテュルに渡すといい。手渡すのはリュシアンが良いだろう。周りに悟られぬよう、何でもないことを装って渡すのだ。魔法具もそれとわからないようなものを作るべきだろう」
「かしこまりました」
「では、今ここで作ってしまうか？　今ならば人払いも済んでいる」
確かにそうだな。そうさせてもらおう。
「そうさせていただきます。ありがとうございます」
俺はそう答えて、どんな魔法具にするか考え始めた。ロニーと同じだとダメだ。パッと見て魔法具だとわかったら直ぐに不審に思われてしまうだろう。肌身離さず身につけていられるもので、魔法具だとわからない物。しかし、もしもの時は直ぐにバリアを発動できる物。
難しいな……やっぱり一番はネックレスだと思う。ネックレスの形をどうするかが問題だ。魔石は隠して更に普段は魔鉄に触れないように、でもいざというときはすぐに魔鉄に触れてバリアが発動するように。

うーん……そうだ！！

今いい形が思いついたかも。ひょうたんみたいな形のペンダントトップはどうだろうか？

上半分は普通の鉄で作って下半分は魔鉄で作るんだ。そして真ん中の通り道を鉄の棒などで塞ぎ、上部分に魔石を入れ込む。何かあった時はその棒を引き抜けば、魔石が下に落ちてバリアが発動する。

うん、我ながら良いアイデアかも。

俺は思いついたアイデアを早速試すために、アイテムボックスから魔鉄と魔石を取り出した。しかしそれを使うより先に、まずは土魔法からだな。

さっき転移で魔力を使ったけど、小さなペンダントトップの上半分を作るぐらいなら魔力も足りるだろう。形はひょうたんというよりも……砂時計みたいな感じの方がオシャレかな？　でも魔石が通るようにしないとだから通り道は広く、更に差し込んだ鉄の棒は普段は抜けないけど、力を入れれば抜ける程度。

そうして頭の中でイメージしていき、俺は砂時計のような形の上半分だけを作り出した。そして鉄の棒を抜き、バリアを込めた魔石を中に仕舞う。

そうしたら次は魔鉄だ。魔鉄に魔力を注ぎ込みぐにゃぐにゃにして、上手く上半分と繋げるように魔鉄を形作っていく。

よしっ、完璧だな。後はこれをチェーンに通せば完成だ。でももうチェーンを作り出す魔力がない。

「リシャール様、とりあえずペンダントトップだけは完成しました。しかしチェーンを作り出す魔力が残っていないので、チェーンだけはこれから用意する必要があります」

「そうか……、いつものことだが本当に凄いな。こんなに短時間で作り出してしまうとは……。チェーンならばこの部屋にあるものをいくらでも使うと良い。そうだな、これなんてどうだ？」

リシャール様はそう言って、箱から一つのチェーンを取り出した。

「よろしいのですか？」

「ああ、いくらでもあるからな」

「ありがとうございます」

そうしてリシャール様のチェーンを一つ貰い、バリアの魔法具は完成した。この世界は男性でもネックレスをする人は多く、リシャール様もその一人のようだ。

服の内側に見えないようにつけている人が多いので、着ける意味あるのかと思うけど、見えないオシャレというやつらしい。

うん、俺には理解できそうにない。

まあそんなことは置いておいて、とりあえず完成だ！

「これで完成いたしました。この棒を引くと魔石が下に落ち、バリアが発動する仕組みです。ではリュシアン様、アルテュル様にお渡ししていただいても良いでしょうか？」

「ああ、アルテュルには危険なことがあったらこの棒を引けと伝えておく。必ず守ってくれるものだから肌身離さず持っていろと」

「ありがとうございます。しかし、それだけで信じてもらえるでしょうか？　どのようなものなのか聞かれませんか？」

「確かに聞かれるとは思うが、事情があって話せないことを伝えれば納得してくれるだろう」

「そうですか……。でもそれだと、本当に危険な状況になった時に使っていただけるでしょうか？」

「ああ、アルテュルは良くも悪くも素直なやつだからな、疑うことはしても約束は守ると思うぞ」

確かに、アルテュル様ならそうなのかな？　でも、自分の目で見たものを信じるタイプでもあるんじゃないか？

……まあ、そんなこと考えても仕方がないか。俺はできる限りのことをやったんだから、後はアルテュル様次第だな。

「では、よろしくお願いします」

そうしてアルテュル様に渡すバリアを作ったところで、今日の報告会は終了となった。

隠していることがなくなって、なんだか気が軽くなった気がする。そう感じて少し軽い足取りでリシャール様の部屋を辞去しようとしたその時、後一つ聞きたいことがあったのを思い出した。

「リシャール様、私の家族には転移のことを伝えても良いでしょうか？　実家にも頻繁に帰りたいのですが……」

「そうだな。レオン君の家族は全属性のことも知っているしいいだろう。ただ、口止めは忘れずに頼む」

「かしこまりました！」

やった～！　これでいつでも実家に帰れる！

そう考えたら思いのほか嬉しくて、俺はるんるんな気分でリシャール様の部屋を後にした。

そんな俺の後ろ姿を見て微笑ましいような顔をしているリシャール様と、呆れたような顔をしているリュシアンには全く気が付かなかった。

閑話　規格外の魔法（リシャール視点）

昨日報告をいただいたレオン様の魔法には、本当に驚かされた。影から事前に報告を受けていたとはいえ、実際に見て体験すると更に驚くものなのだな。

しかしレオン様は、あのような素晴らしい能力を公表されたにも関わらず、未だに使徒様ではないと仰られた。理由はなぜなのだろうか……。お聞きしたいが、ご本人に否定されると聞きづらい。

ただ今回はヒントのようなことを仰っていた。使徒様を騙れば神罰が怖いというのは、どういう意味なのだろうか。レオン様は使徒様で間違いないはず……。つまり、レオン様はミシュリーヌ様と何かしらの確執があるということだろうか？

……まあ、私のようなただの人間が考えてもわかることではないな。なんにせよ、とにかく陛下にご報告だ。

そうして私は王城の廊下を進み、陛下の執務室に入った。

「陛下、おはようございます。早速ですがご報告がございますので、人払いをお願いいたします」

「わかった。では人払いを」

最近はレオン様のことで二人きりでの相談も多く、陛下も他の者もこの展開に慣れてきている。

そうしてかなり手慣れた様子で執務室が片付けられ、部屋の中には私と陛下だけになった。

「今回は何の報告だ？　レオン様に何かあったのか？」

「いえ。以前にご報告した、使徒様と同じ特別な魔法についてです」

私がそう言うと、陛下は心得たように頷いてくれた。
「その話か。物を何もないところから取り出したり、一瞬で他の場所に移動したり、後はガラスのような物を作り出す魔法だったな」
「仰る通りです。レオン様から昨夜、その魔法についてご報告がありました」
「おおっ、遂にレオン様からのお話があったのだな！　何か特別な意図があったのか？」
「いえ、それが……」

レオン様が私たちに魔法を見せながらも何も話されないことから、何か特別な意図があるのではないかと陛下と散々議論したのだ。
しかし……、レオン様が影の存在について忘れていたとは。あの時は思わず脱力しそうになり何とか耐えた。

「レオン様は、影の存在を忘れていたようなのです」
「なっ……！　それでは、この前数時間も話し合ったあれは……」
「あまり、意味がない議論でした」

私がそう言うと陛下がガクッと脱力して、ソファに深く倒れ込んだ。
陛下、お気持ちお察しいたします。

「使徒様は、少し抜けているところもあるのだな」
「……はい。確か使徒様の伝記にも、そのような部分があると記述があったかと思います」
「……確かにそうだった。すっかり忘れていたな。ただ、日頃から使徒様の一挙手一投足に注意するのは悪いことではないだろう」
「私もそう思います。もしかしたら何かしらの意図があるのかもし

れませんし、注視しておくべきでしょう」
「そうだな。して、レオン様の報告はどのようなものだったのだ？」
私は陛下のその言葉に頷き、昨日レオン様に見せていただいた魔法の数々を陛下に説明した。今思い出しても、本当に驚きの魔法ばかりだ。
「凄い魔法ばかりだな……俄には信じられん。……レオン様は、未だ使徒様だとお認めになってはいないのか？」
「はい。私はレオン様にもう一度尋ねる良い機会だと思い、使徒様ではないのかと尋ねたのですが、やはりそうではないと仰られました」
「そうか……」
「しかし、一つヒントをくださいました。レオン様は、使徒様だと騙ったことによる神罰を恐れているそうです」
「それは……、どういうことだ？」
「私にもわかりかねますが、何かしらミシュリーヌ様との間に確執などあるのではと愚考しております。しかし、神の御心は私たちにはわからないものです」
私がそう言うと、陛下は真剣な表情で頷いた。
「確かにそうだな。私たちには分からない関係性があるのだろう。しかし、ミシュリーヌ様と使徒様の間で何かしらがあったとしても、私たちのすべきことは変わらない」
「おっしゃる通りでございます」
そこまで話をすると、陛下は少しだけ顔を緩めた。
「レオン様に貴族になっていただくのが一番楽なのだが、仕方がな

いな。これからも今まで通りお守りしよう」
「はい。今現状でできる最大の力を使ってお守りいたしましょう」
「ああ。……このままいくとレオン様には、タウンゼント公爵家の養子になってもらうことになりそうだな」

レオン様の進路についてたびたび議論を重ねていたが、使徒様という特別扱いができない以上、貴族の当主になっていただくには、成人していなければならない。
そのため平民でも王立学校を卒業した者ならば正式に貴族の養子になれるという制度を使い、タウンゼント公爵家の養子になっていただく予定なのだ。

「そうなった場合は、タウンゼント公爵家でしっかりとお守りいたします。レオン様にそのことはいつお伝えいたしますか？」
「そうだな……。卒業が決まってからで良いだろう。手続きは進めておき、後はレオン様の了承だけという状態にしておこう。レオン様の家族の待遇についても進めておくべきだな」
「かしこまりました。ではそのように進めておきます」

そこで話が一段落し、お互いに冷めた紅茶を飲み休憩の時間をとった。
そしてしばらくしてから、徐に陛下が口を開く。

「それにしても、空間属性とは本当に凄い魔法だな。どの程度の人数が一度に転移できるのか、どの程度の荷物を運べるのか、またアイテムボックスに魔物を入れたらどうなるのかなど、検証していただきたいことがたくさんある」
「はい。レオン様も検証したいと仰られていました。しかし魔物の検証などは危険も伴いますので、安全な状態で検証するべきではないかと思っております」

私が少しだけ意味深な表情で陛下にそう言うと、陛下には私が何を言いたいのか的確に理解していただけたらしい。

「では、捕まえている魔物を一匹渡そうか？」

「よろしいのですか？」

「ああ、一番弱い魔物で良いだろう。それならばいくらでも補充できる」

「ありがとうございます。よろしくお願いいたします」

実は王宮の端にある魔物研究所では、魔物を効率よく倒すための研究を行なっていて、制御して連れてこれる魔物はそこで飼育している。魔物の暮らしを観察して弱点を突き止めるためだ。

ごく一部のものしか知らない施設で、中の魔物を外に出すことは禁止となっているが、今回は特別に一匹いただけるようだ。これで安全に検証できるだろう。

「……いざという時、レオン様に力をお貸しいただけるだろうか。一瞬で騎士を移動できるなど、計り知れないほど有益なお力だ。物資を送っていただけるだけでも本当にありがたい」

「そうですね。……お力をお貸しいただきたい時は、そろって頭を下げることにいたしましょう」

「ははっ……そうだな。私の頭なんぞいくらでも下げる」

陛下は顔に苦笑を浮かべながらそう仰った。

普通なら一国の王が頭を下げるなどあってはならないと窘めるところだが、レオン様に対しては陛下にも頭を下げてもらうべきだろう。

私はそう思い、陛下と同じように顔に少しの苦笑を浮かべて頷くに留めた。頭を下げるぐらいで使徒様のお力を貸していただけるの

ならば安いものだ。

「では、検証は頼んだぞ。流石に私が行くことはできないからな」
「はっ、レオン様のお力を知っている者のみで内密に行います。その詳細はまたご報告いたします」
「よろしく頼む。そうだ、レオン様さえ良ければステファンとマルティーヌも参加させてやってくれ」
「かしこまりました。しかしお二人には、私が声をかけずともレオン様が声をかけられると思われます」

私がそう言うと、陛下は途端に笑顔になった。王としての顔というよりも父親としての顔だ。

「そうか、仲良くしていただいているようで何よりだ。あの子たちにも打算のない友達が出来て良かった。王族は孤独だからな」
「そうでございますね」

そうして陛下への報告は終了となった。
今この国は、いやこの世界は大変なことになっているが、レオン様の存在が確かな希望になっている。レオン様を最大限お守りして、レオン様に対しては最大限の助力をしよう。
私はその決意を再度固めた。まずは魔法の検証への助力からだな。

２００、魔法の検証について

次の日の夕食後。
俺はまたリシャール様の部屋にいる。夕食が終わった後すぐに呼ばれたんだけど、何かあるのかな？
そう疑問に思いながらリシャール様の部屋に入ると、リュシアンも部屋の中にいた。俺がソファに座ると早速本題に入る。

「レオン君、先程陛下にも昨日の話を報告したのだが、話し合いの中で魔法の検証を近いうちにやってはどうかという話になった」
「空間魔法の検証ですか？」
「そうだ。魔物をアイテムボックスに入れる検証や、何人までなら転移可能かなどの検証だな。いずれはしてみたいと話していただろう？」
「はい」
「それをできる限り早めにやってほしいということになったのだ。さらに魔物の検証については危険も伴うため、危険の少ない魔物を準備するから安全に検証してほしいとのことだ」

凄くありがたい申し出なんだけど……魔物なんて準備できるのかな？　魔物の森にしかいないんじゃないの？

「魔物は、魔物の森にしかいないのでは？」

俺がそう聞くと、リシャール様はかなり真剣な表情に変わる。

「いや、実はそうではないのだ。……これから話すことは他言無用だ。守れるか？」

また機密事項を知ることになるのか……。できれば知りたくないんだけど、リシャール様が話してくれるということはその必要があるからだろう。なら聞くべきだな。

「はい。私の中だけに留めておきます」

「お祖父様、私もです」

「ありがとう、よろしく頼む。実は王宮の端に、ごく一部の者しか知らない施設があるんだ。その施設の名は魔物研究所。比較的弱く制御できる魔物を連れてきて、その生態などを調査している。基本的には魔物を効率的に倒すため、また魔物の弱点を探すための施設だ」

そんな施設あったのか……驚きだ。こんな近くに魔物がいたなんて。

「そのような施設があったのですね……」

「私も全く知らなかったです」

「魔物の持ち出しは禁止されているし、公には全く明かされていないからな。だが今回は特別に、弱い魔物を一匹いただけることになった。その魔物を使いレオン君の魔法の検証に役立ててほしい」

これは凄くありがたい話だ。魔物を使った検証は魔物の森に行った時にこっそりやろうと思ってたけど、俺は魔物に対する知識なんてないし困ってたんだ。

安全にできるに越したことはない。まずは魔物を転移させられるのか、その後にアイテムボックスに入れられるのかを検証だな。

「ありがとうございます。是非、検証をやらせてください」

「ああ、精一杯助力しよう。魔物については日時が決まり次第、私

が責任を持って検証場所まで運ぶ」
「よろしくお願いします。検証場所はどこが良いのでしょうか？」
「そうだな……この屋敷の裏庭でいいだろう。あまり使われていない一角があるから、そこを外から見えないようにすれば問題ないと思う」
「かしこまりました。ではその場所は、私が土魔法で囲って外から見えないようにいたします」

土魔法で囲って、さらにその内側をバリアで補強すれば誰も入ってこられないだろう。

「ああ、よろしく頼む。では日時はいつが良い？」
「そうですね……。転移魔法の人数上限の検証をするのであれば、集める方達の予定に合わせる必要があります。しかしそもそも、誰が参加可能なのでしょうか？　私の空間魔法を明かせる人しかダメですよね」
「そうなるな」

そうすると、リシャール様とリュシアン、マルティーヌ、ステファン、カトリーヌ様、フレデリック様、このぐらいだよな。
さすがに国王と王妃であるアレクシス様とエリザベート様は呼べないだろうし……

……あっ、俺の家族はどうだろうか？　後マルセルさんも。呼んでも良いかな？

「リシャール様とリュシアン様にはご参加いただけますか？」
「もちろんだ」
「当たり前だろう」
「ありがとうございます。後はカトリーヌ様とフレデリック様にも

お声がけしたいです。それからステファン様とマルティーヌ様にもお声がけいたします」
「わかった。カトリーヌとフレデリックには声をかけておこう。それからジュリアンも王都にいるから声をかけておく」

そうだった。フレデリック様の下のお兄さんであるジュリアン様は、王城で役人として働いてるんだったな。全属性のことも知っているはずだったし協力してもらおう。

「よろしくお願いいたします。それから……、私の家族とマルセルさんにも声を掛けていいでしょうか？」
「確かにそうだな。その方々は全属性のことも知っているしいいだろう。後はレオン君の全属性を知っているこの屋敷の一部の使用人も呼んでおこう。君の従者であるロジェもだな」

確かにそっか。ロジェも呼べるな。空間魔法のことはまだ知らせてなかったから今日この後知らせておこう。

「かしこまりました。ではタウンゼント公爵家の方々と一部使用人の方々、ステファン様とマルティーヌ様、マルセルさんと私の家族ということになりますね」

意外と大人数だな……。家族皆も流れで巻き込んじゃったけど良かっただろうか。
でも集まるのは特に信用できる方々だけだし、ここらで一度顔を合わせておくのもいいだろう。これから一度も交流なしってことはないだろうからね。ここは皆に頑張ってもらおう。マルセルさんは……まあ、貴族だし大丈夫だろう。

……後で謝っておこう。

「日程はいつならば良いでしょうか？　タウンゼント公爵家の方々に合わせたいと思います」
「そうだな……それならば回復の日がいい。今週は流石に早すぎるから、来週の回復の日でどうだ？」
「かしこまりました。ではその予定で皆に連絡いたします。私は家族とマルセルさん、それからステファン様とマルティーヌ様への声掛けをすれば良いですか？」
「ああ、他の者には私が伝えておく」
「よろしくお願いします」

家族とマルセルさんには転移で伝えに行って、連れてくるのは乗合馬車に乗ってもらおうかな。多分あまり転移での移動はしない方が良いだろう。移動時間の矛盾が生まれるし、誰も乗合馬車に乗っているところを見てないのに移動したことになっちゃうし。
それに、マリーは馬車が好きみたいだった。この前乗合馬車に少しだけ乗せてあげた時、かなりはしゃいで楽しそうだったんだ。

うん、また乗せてあげよう。

「家族とマルセルさんには私が転移で伝えに行き、こちらに来てもらうときは乗合馬車で来てもらうことにします。検証の前日と検証の日は屋敷に泊めていただくことはできますか……？　もし難しければ私のお店の従業員寮の部屋を使うことにしますが……」
「もちろん客人として迎え入れるから心配しなくて良い。レオン君の両親を屋敷に招待したという名目で良いだろう。実際一度は招待しようと思っていたのだ。更に乗合馬車ではなく、迎えの馬車も遣わすぞ」

迎えの馬車も寄越してくれるのか。……多分、マリーは凄い馬車

に大喜びだろうな。

「ありがとうございます！」

俺は乗り心地の良い馬車にはしゃいでいるマリーを思い浮かべて、満面の笑みでお礼を言った。

「ああ、任せておけ。ではその予定でよろしく頼む」

そうしてリシャール様からの話は終わり、俺は自室に戻った。

部屋に戻ってロジェにお茶を入れてもらい一息ついてから、ロジェに魔法のことを伝えることにした。

「ロジェ、俺って全属性魔法が使えるでしょう？」

「はい。存じ上げております」

「でも、全属性以外にも使える魔法があるんだ」

「……全属性以外、ですか？」

「うん。空間属性って言うんだけどね、バリアと転移、それからアイテムボックスっていう魔法が使える」

俺はそう言って徐に立ち上がり、まずは転移を見せることにした。ソファから脱衣所までの転移だ。

「レッ、レオン様！？」

俺が脱衣所に転移すると、部屋の方からかなり焦った様子のロジェの声が聞こえる。確かに突然消えたら焦るよね。

俺はロジェを安心させるために、すぐに部屋へのドアを開けた。するとそこには、俺の方を見て驚愕の表情を浮かべるロジェがいた。

凄いな……ロジェの表情がここまで崩れるのは初めてかも。

「驚かせてごめんね。こんな感じで一瞬で別の場所に移動できる魔法なんだ。これが転移だよ」
「レ、レオン様、お身体は大丈夫なのですか？」
「うん。大丈夫だよ。ロジェも一緒に転移してみる？」

俺がそう聞くと、ロジェはかなり悩んでいる様子だったけれど小さく頷いた。怖さよりも好奇心が勝ったらしい。

「よろしくお願いいたします」
「じゃあ手を繋ぐね。別に繋がなくても良いんだけど、こっちの方が魔力を使わないんだ」
「かしこまりました」

そうして恐縮そうに差し出されたロジェの手を握り、俺は転移魔法を使った。今度は部屋の隅まで転移だ。
転移した後のロジェはしばらく呆然としていたけど、だんだんと状況を把握できたようで瞳が輝き始めた。
やっぱり皆テンション上がるんだな。

「レオン様、本当に素晴らしいです。このような魔法も使えるなど驚きました」
「ありがとう。でもまだ後二つあるよ？」

そうして俺はアイテムボックスとバリアについてもロジェに説明した。ロジェは終始驚いている様子で、特にアイテムボックスを羨ましがっていた。なんでもこの能力があれば従者としてレベルアップできるから、らしい。やっぱりロジェはどこまでも仕事人間だ。
そして魔法の説明が終わったところで、来週の回復の日に魔法の

検証を行うことと、俺の家族とマルセルさんが屋敷に来ることを報告した。そして俺はいつもより少し遅い時間にベッドに入り、眠りに落ちた。

２０１、一時帰宅

次の週の火の日。
今日は魔物の森についての情報を平民に公布する日だ。今日の夕方にはかなり情報が広がっているだろうから、俺は夜に一度実家に帰る予定でいる。皆の様子を見にいくためと、今週末の魔法の検証についての話をするためだ。

俺は王立学校での授業を終え、研究会には参加せず屋敷に帰った。
そしてまずは自分の部屋に籠り、家族全員分のバリアの魔法具を作る。家族皆には影がついてくれているとはいえ、万が一ということもあるからね。少しでも危険を排除するためには、バリアの魔法具を持ってもらっていた方が良いと思ったのだ。
そうしてバリアの魔法具を四人分作り上げ、俺はロジェに声をかけた。なぜ四人分なのかは、マルセルさんにも渡そうと考えたからだ。マルセルさんもかなり危ない立ち位置だろう。

「ロジェ、じゃあ俺は実家に行ってくるね。明日の朝早くにはこの部屋に帰ってくるから、それまでこの部屋には誰も入れないようにしておいてくれる？　転移して帰ってきたところが見られたら大変だから」
「かしこまりました。この部屋には私以外入れないようにしておきます」
「ありがとう。そうだ、今日の夜ご飯と明日の朝ご飯は準備されちゃうのかな？」
「はい。レオン様がお出かけになられていることは大旦那様とリュシアン様、それから私とごく一部の使用人しか知りませんので、レオン様はこのお部屋にいる前提となります。しかし、レオン様の本

日のご夕食はお部屋で召し上がられる予定にしておりますので、他の者に不審に思われる心配はございません」
「そっか。それなら安心だね」

でも、その料理もったいないよな……。ロジェが食べてくれるのかな？

「その料理、ロジェが食べてくれるの？」
「いえ、そのまま廃棄するしかないと思っていたのですが……」
「そうなの？　ロジェが食べても良いよ？」
「それはありがたいのですが、私にも夕食は用意されますので二人分は流石に食べきれないかと……」
「そっか……、確かにそうだよね」

仕方がないのか。でも、勿体無いよなぁ。

「そうだ、夕食ってもうできてたりするかな？　今運んでもらうことってできる」

俺がそう聞くと、ロジェは時計を確認して頷いた。

「そうですね。今の時間ならばほとんどの料理は仕上がっていると思われます」
「なら今できてる料理だけでいいから、俺の分だけ準備してもらえないかな？　そしたら料理をアイテムボックスに入れちゃうから」
「確かにそれならば無駄にならずに済みますね。確認して参ります」

そうしてロジェが確認に行ってくれて、そのまま夕食を運んできてくれた。今日の夕食のメインはチキンステーキみたいだ。凄く美味しそうだな……

でも、今日は母さんと父さんの料理を食べるのだ。それにこの料理はマリーにあげたら喜ぶだろう。うん、喜んでるマリーを思い浮かべたら持ち帰り一択だ。

俺はあまりにも空腹を刺激する匂いに誘惑に負けそうになりながら、なんとか思いとどまり料理を別の器に移し替えた。アイテムボックスにたくさんの器やお皿を入れておいたのだ。

そして移し替えた料理をまたアイテムボックスに仕舞う。これでここに残るのは食事後のお皿だけだ。

「これで大丈夫かな？　じゃあ、行ってくるね。また明日の朝帰ってくるよ」

「いってらっしゃいませ。お帰りをお待ちしております」

そのロジェの声を聞いて、俺は転移魔法を発動させた。

行き先は実家のリビングだ。今の時間は夜営業が始まる少し前だから、母さんと父さんは厨房にいてマリーは食堂で準備中のはず。だからリビングなら突然現れても誰かを驚かすことはないだろう。

更にイアン君はこの時間には仕事が終わっててていないはずだ。

そう考えて俺は、この時間を選びリビングに転移した。

転移するとリビングには案の定誰もいなく、厨房や食堂からは物音や話し声が聞こえてくる。

なんか落ち着くな……やっぱり実家はいい。

俺はすぐにリビングを出てまずは厨房に向かう。厨房のドアを開けると、母さんと目があった。

「母さんただいま」

俺がそう言うと、父さんも勢いよくこちらを振り返り俺を凝視した。

「父さんもただいま」

「レ、レオン……？　本当にレオンかい？」

父さんは俺が本物か疑っているようだ。

「ふふっ……父さんなら俺が本物か分かるでしょ？」

「ああ、うん、本物だ。本物だけど……なんでここにいるんだ？　え、レオンは中心街に帰ったんじゃ？　あれ？　それは夢だったのか？　いや、これが夢？」

父さんは大混乱だ。俺が中心街に帰ったのが夢だったのか、今の現状が夢なのか悩んでいるらしい。

「父さん、どっちも現実だよ」

「じゃあ……どういうことだ？」

「わかったわ！　今度こそ学校を辞めることになったのね！？　大丈夫よ、いつでも帰ってきていいって言ったものね。レオンの居場所はいつでもここにあるのよ」

母さんは盛大な勘違いをしたらしい。俺に駆け寄って優しく抱きしめてくれる。凄く嬉しい……

でも誤解は解かないと。

「母さん違うよ。実は俺の魔法で転移っていう一瞬で遠い場所に移動できる魔法があってね。それで一晩だけ帰ってきたんだ」

「そんなに……、凄い魔法があるの？」

「そう、その魔法についての話があるから帰ってきたんだ。あと、

魔物の森についての話を聞いた？　それで皆が不安を感じてないかなと思って帰ってきたんだけど……大丈夫だった？」

俺がそう聞くと、母さんは首を縦に振った。

「大丈夫よ。最初は皆凄く不安がってて大変だったけど、力を合わせればどうにかなるんでしょう？　その事実で皆は安心したみたいだわ。だから皆張り切っているの」

「そうなんだ。それなら良かった！」

そこまで混乱が酷くなさそうで良かった……。上手く公布してくれたんだろうな。

「ロアナ、今日の夜営業は休みにしようか？　準備しちゃったものは僕たちの夜ご飯と朝ご飯にすればいいし」

「確かにそうね。レオンの話の方が重要よね。じゃあ夜ご飯を作ってリビングに行きましょう」

そう言って父さんが料理を作り始め、母さんは食堂にいるマリーを呼びにいった。俺は母さんに付いていく。

「マリー、今日の夜営業はお休みになったわ」

「そうなの？　……え！？　お兄ちゃん！！」

マリーは俺の姿を見た途端に凄く嬉しそうな声で俺を呼び、俺のところまで走ってきた。

「お兄ちゃんなんでいるの？　何かあったの？」

「大丈夫だよ。ちょっと用事があっただけ。これから皆にはお兄ちゃんから話があるから聞いてくれる？」

「お話？　いいよ！」
「ありがとう。じゃあマリーはお兄ちゃんとリビングに行ってようか」

そうして俺とマリーは、リビングで夕食ができるまで待つことになった。
しかしリビングの椅子に座って少し経った後、マルセルさんもこの場に呼んだ方が早いんじゃないかと気づいた。家族に話してから次はマルセルさんなんて大変だし、時間も遅くなるだろう。
そう考えて俺はマリーにはリビングにいてもらい、厨房にまた戻った。

「母さん父さん、マルセルさんにも一緒に話したいからここに呼んでもいい？」
「料理はたくさんあるからいいけど……もう暗くなってきたわよ？危ないわ」
「大丈夫。さっき言った転移で行けば一瞬だから」
「……よくわからないけど、レオンが大丈夫ならいいわ。あなたはもう子供じゃないものね」

母さんが少しだけ寂しそうにそう言って了承してくれたので、俺はその場で転移を使いマルセルさんの工房に向かった。マルセルさんの工房を往復するぐらいの魔力ならばまだ残っていたのだ。

２０２、家族皆で夕食

マルセルさんの工房への転移場所は悩んだけど、二階の生活スペースではなく工房の中にした。この時間ならば多分二階にいるだろうと予測してだ。

しかしその予測は外れた。マルセルさんはまだ工房で熱心に仕事をしていたのだ。下を向いているので俺が現れたことに気づいている様子はない。

俺はマルセルさんをできる限り驚かせないように、身体は動かさずに小さな声でマルセルさんに呼びかけた。

「……マルセルさん」

すると、マルセルさんはガバッと顔を上げて俺を視界に収めた。そして五秒ほど固まってから勢いよく立ち上がったかと思ったら、手に持っていた魔鉄を俺の方に投げてきた。

「あっ、危ないですよ！！」

俺は咄嗟にバリアを発動させたので無事だったが、後少し遅れたらやばかった。セーフだ。

「も、もしかして本物か！？」

「本物です！　なんだと思ったんですか」

「いや、幻覚か何かだと……」

「こんなにはっきりとした幻覚なんてないですよ！　もう、気をつけてくださいね」

「ああ、わかった……って、わしは悪くないわい！　なぜこんなところに突然現れるんじゃ！！」

まあ確かに、マルセルさんは悪くないな。

「ごめんなさい。俺って全属性以外にも使える魔法があって、その魔法でここにきました」

「全属性以外の魔法……？」

「はい。一瞬で場所を移動できる転移だったり、さっき魔鉄を防いだバリアだったりです。他にもあるんですけど、その魔法の説明とお願いしたいことがあるのでここに来ました。急に押しかけてすみません」

「そ、そうか……。別にいつ来ても構わんが驚いたぞ。そんなに急ぐことなのか？」

「はい。できる限り早くお伝えした方が良いと思います。それで、今から一度うちの実家に来ていただけませんか？　家族とマルセルさんに一緒に説明しようと思いまして」

俺がそう言うと、マルセルさんは一度大きく息を吐いて強張った体の力を抜いた。

「わかった行こう。それにしても、お主は非常識なことしかせんな……」

「そんなことは……ある、かもしれません……」

「分かってるのなら良い。とにかくレオンの家に行けばいいんじゃな？」

「はい。今すぐに行けますか？」

「ああ、ちょっと待っておれ、家の鍵だけ持ってくる」

そう言って立ちあがろうとしたマルセルさんを制して、俺はマル

セルさんに尋ねた。

「それって外から鍵を閉めるためですよね？　今は鍵閉まってますか？」

「ああ、少し前に閉めたからな」

「それならこのまま行けますよ？　転移で家まで行くので」

「そうなのか？　だが、帰りはどうなんじゃ？」

確かに……帰りのこと考えてなかった。流石にまたマルセルさんを送り届けるだけの魔力はないな。

「……帰りは魔力が足りないかもしれません。すみません」

「やっぱりか。お主はそういうところが抜けとるからな」

マルセルさんは少しだけ呆れたような表情でそう言った。うぅ……返す言葉もない。実際に帰りのことは全く考えていなかった。

勢いだけで突き進むんじゃなくて、ちゃんと周りを確認しよう。

「いつもご迷惑をかけてすみません。では、鍵を持ってきてもらえますか？」

「別にいいんじゃよ。レオンは有能すぎるんじゃから、そういうところも少しはないとな。鍵を持ってくるから待っておれ」

……マルセルさん、良い人すぎる！

「どうする？　レオンの家にも歩いていくか？」

鍵を持ってきたマルセルさんがそう聞いてきた。

「いえ、行きだけは魔法でいけますけどどうしますか？」

「そうじゃな、転移と言ったか？」
「はい。一瞬で別の場所まで移動できる魔法です」
「じゃあ、行きはその魔法で行くとしよう」

マルセルさんはキラキラと期待した瞳でそう言った。

「マルセルさんも体験してみたいんですね？」
「ち、違うわい！　ただあれじゃ、弟子の魔法を確認するのも師匠の務めじゃからな」
「ふふっ、そうですね。じゃあ行きますよ」

俺はそうしてマルセルさんの手を握り、マルセルさんと共に家のリビングに転移した。
するとそこには母さんと父さんとマリーがいて、ちょうど夕食の準備をしているところだった。

「おおっ、凄いな」

マルセルさんが隣でそう呟いたのが聞こえる。

「母さん父さんただいま。マルセルさん連れてきたよ」

俺がそう言うと、皆は疲れ切ったような表情でため息を吐いた。
なんか、皆に呆れられてる気がするんだけど。

「わかったわ。それよりレオン、その転移とか言うのは驚くからあまり使わないようにしなさい」
「え！？　でもそれだと頻繁に実家に帰ってこれなくなっちゃうよ……」

俺が少しだけ焦ってそう言うと、母さんは妥協案を示してくれた。
「じゃあ、物置部屋にレオンが転移するスペースを作っておきなさい。これからはそこに転移するように」
「わかった！　ありがとう」

これからの転移についてとりあえず決まり事を作ると、母さんはマルセルさんの方に身体を向けた。そして親しげな様子で話しかける。

「マルセルさんいらっしゃい。どうぞ座ってください。うちの子が突然ごめんなさいね」
「いいんじゃよ。レオンはいつものことじゃからな。それよりも今日の夕食は豪華じゃな」
「マルセルおじいちゃん！　今日は皆で豪華な夜ご飯なんだよ！お兄ちゃんもだよ！」
「それは良かったな」

なんか、マルセルさんめちゃくちゃ馴染んでない！？　あんなにぎこちなかったのに！
マルセルさんどれだけうちに来てるんですか！！

「早くレオンも座りなさい。まずは夜ご飯よ」
「は～い」

俺はマルセルさんに問い詰めようと思ったが、その前に夜ご飯の準備が整ったようなので、まずは食べることにした。だって、凄く美味しそうなんだ！

「じゃあ、いただきます」

「いただきます！」

そう言って皆で一斉に食事を始める。うん、やっぱり母さんと父さんの料理美味しい！

「そうだ、皆にお土産があるんだ」

俺は公爵家の夕食を持ってきていたことを思い出し、それをアイテムボックスから取り出した。

「チキンステーキとポタージュスープとパン、後付け合わせのお野菜。今日は向こうで食べられなかったからもらってきたんだ」

「うわぁ！　美味しそう！　お兄ちゃん、これ食べていいの！？」

「いいんだよ。あっ、でもチキンステーキはまだ切ってないからお兄ちゃんが切っちゃうね」

「うん！」

俺はマリーの嬉しそうな顔が見れて大満足で、アイテムボックスからナイフを取り出してチキンステーキを一口サイズに切った。ナイフはピュリフィケイションで綺麗にして、またアイテムボックスに仕舞う。

「はい、どうぞ」

「ありがとう！　……きゃー、何これ！！　すっごく美味しいよ！」

「そんなに喜んでもらえるなら、持ってきて良かったよ。パンも食べてみて。貴族のパンはふわふわなんだ」

「本当だ！　ふわふわだ！」

そうして俺とマリーが公爵家の食事を楽しんでいると、マルセルさんが口を挟んできた。

「レ、レオン！　今のはなんじゃ！？　どこからこの料理を取り出したのだ！」
「もう、訳がわからないことが多すぎて、私には理解できないわ……。もう考えないことにしましょう。レオン、このお料理は公爵家の夕食なの？　母さんも食べていいかしら？」
「レオン、父さんもいいかい？」

マルセルさんは魔法の方に気が取られているらしいが、母さんと父さんはもう考えないことにして料理を楽しむことにしたらしい。
美味しいものの力は凄い。

「もちろんいいよ。あんまり量はないんだけど、俺はいらないから皆で食べて」
「ありがとう。じゃあいただくわね。……まあ、このスープ凄く美味しいわ。時間がかかってるわね。それに、なんだかうちのものよりも味が複雑よ」
「このチキンステーキのソースもだよ。これ何で作ってるのかな？　トマトソースっぽくないし……」
「お兄ちゃん！　皆でご飯楽しいね！」
「そうだね」

そうしてマリーは純粋にご飯を楽しんで、マルセルさんは魔法のことを気にしていて、母さんと父さんは公爵家の料理に夢中で、なんだかカオスな感じで夕食の時間はすぎていった。

２０３、話し合いと貴族の動向

そして夕食を食べ終わり、やっと皆が落ち着いた。

「それでレオン、なんの話なの？　さっきから使ってるよくわからない魔法のこと？」

「そう。この世界にある属性は六つでしょ？　でも俺はそれ以外にも使える魔法があるんだ。空間属性って言うんだけど、バリアっていう攻撃を防ぐ魔法と、アイテムボックスっていう大量のものをいつでも取り出せて仕舞っておける魔法と、転移っていう一瞬で移動できる魔法。この三つが使えるんだ」

「……そうなのね。もうレオンの魔法については驚かないわ。その魔法が使えることでレオンの身体に悪いことがあったりはしないのよね？」

「うん。それは大丈夫だよ」

「それならいいわ」

俺は母さんのその言葉を聞いてなんだか泣きそうになった。俺の力じゃなくて、俺自身を心配してくれるって嬉しい。

「……ありがとう。皆には伝えておきたかったんだ。また話せないことを増やしちゃってごめんね。これも秘密にして欲しいんだけど……」

「いいのよ。レオンも一人で抱えているのは大変でしょう？　私たちにはなんでも話しなさい。隠されている方が悲しいわ」

「そうだよ。父さん達にはなんでも話していいんだからね」

「……うん。ありがとう！」

二人のその言葉を聞いて、俺の顔には自然に笑みが浮かんだ。母さんと父さんも穏やかに笑いかけてくれる。
本当に俺は幸せだな。

「お兄ちゃんは、他の人が使えない魔法が使えるってこと？」
「そうだよ」
「お兄ちゃん凄いね！」
「マリーありがとう。でも、今話したことは他の人に言っちゃダメだよ。言うと家族が危険になるんだ。前にお兄ちゃんが全ての魔法を使えることを言っちゃダメって言ったけど、それと同じだよ」
「うん！　もちろん分かってるよ！！」

俺がマリーにそう言い聞かせると、マリーはちゃんと分かっているという顔で少し得意げに頷いてくれた。
マリーももう八歳だし段々と話も理解してきてるんだろう。マリーも大人になったな……

「マリーは偉いね」

俺がそう言ってマリーの頭を優しく撫でると、マリーは嬉しそうに満面の笑みを浮かべてくれた。
うん、可愛い。

「マルセルさんも秘密でお願いします」
「当然じゃよ」
「ありがとうございます。……それで、ここからが本題なんだけど、今度俺の魔法の検証を公爵家の裏庭でやるんだ。それに皆も参加して欲しい」

俺が皆を見回しつつそう言うと、母さんと父さんは途端に焦った

様子になる。
今までの話ではほとんど動揺を見せなかったのに、自分が公爵家に行くとなるとまた話は違うんだな。
「レオン、もしかして、父さん達が、公爵家のお屋敷に行くのかい……？」
「うん。次の回復の日が検証する日だから、その前日に公爵家に一泊して、次の日が検証。その日も泊まって貰って次の日に帰る予定かな。マルセルさんもその予定でお願いします」
「そ、それは、絶対に行かないといけないの？」
「うーん、絶対ではないけどできれば来て欲しいかな。リシャール様も、一度俺の家族を屋敷に招待したかったみたいなんだ。あっ、リシャール様は公爵家の前の当主で、今は宰相様だよ」
「さいしょうさま？」
「宰相は国で二番目に偉い人、なのかな？　ちょっと違うかもしれないけど、王様と一緒に仕事をしてる偉い人だよ」
俺がそう言うと、二人はより青ざめて少し震え始めた。
「そんなに心配しなくて大丈夫だよ！　すっごく良い人達ばかりだから。皆信頼できるよ。これからもお世話になるし、皆も一度顔を合わせておいた方が良いと思ったんだけど……」
「ほ、本当？」
「もちろん！」
「そ、そうなのね。レオンがそう言うなら大丈夫よね」
「父さん達も、頑張るよ」
二人は俺の様子に少しだけ肩の力を抜いて、恐る恐る頷いてくれた。

「二人ともありがとう！　マリーも公爵家のお屋敷に来てくれる？」
「お兄ちゃんが住んでるところだよね？」
「そうだよ」
「私行ってみたかったの！　もちろん行くよ！」
「そうなの？　マリーありがとう。……マルセルさんも来てくれますか？」

俺はマルセルさんの方に身体を向けてそう聞く。

「公爵家の屋敷に行くなど本当は気が進まんが、これから先避けては通れんじゃろう。わしも行こう」
「本当ですか！？　ありがとうございます」
「いいんじゃよ」
「じゃあ、今週の土の日に公爵家の馬車が迎えに来るのでそれに乗ってください。皆もそれに乗ってね」
「わ、分かったわ」
「つ、土の日だね」
「うん！　皆ありがとう」

あとは伝え忘れてることないよな……あっ、バリアの魔法具渡してなかった。

「皆、これを肌身離さずいつも着けていてくれる？　これ、さっき説明したバリアの魔法具なんだ。何かあった時に鉄の棒を引けば、バリアが発動して皆を守ってくれるよ」

俺はアイテムボックスからバリアの魔法具を取り出して、皆に渡していく。

「そんなに凄いものいいのかしら……？」

「いいんだよ。俺が作ったんだし」
「お兄ちゃん、ここを引くの？」
「そうだよ。マリーが悪い人に何かされそうになったり、自分で危険だと思ったら引くんだよ」
「分かった！」

マリーはそう元気に答えて、嬉しそうにネックレスをつけてくれた。うん、可愛い。似合ってる。

「マルセルさんもつけていてください」
「ああ、レオン、これはどんな仕組みなんじゃ？」

マルセルさんはこの魔法具の仕組みに興味津々らしい。瞳が輝いている。さすがマルセルさんだな。

「それはまた後でゆっくり話しましょう。今日はもう遅くなっちゃいましたし」
「確かにそうじゃな。では、わしはそろそろ帰るとするかのぉ」

マルセルさんがそう言って椅子から立ち上がると、マリーがマルセルさんの手を掴んだ。

「マルセルおじいちゃん、帰っちゃうの？」
「もう遅いからな。帰らないとじゃよ」
「また、泊まっていかないの？」

え、マルセルさんうちに泊まったことまであるの！？

「マルセルさん泊まったことまであるんですか！？」
「ああ、マリーちゃんに引き止められてな」

マルセルさんはそう言って、顔をデレっと崩れさせた。

「なっ……」

「マルセルさん、今夜ももう遅いですし泊まりますか？　床に布を敷くぐらいしかできないけれど……」

「そうか？　じゃあ、お言葉に甘えさせてもらおうかのぉ」

「マルセルおじいちゃん泊まってくれるの！？」

「ああ、そうするぞ」

「やったぁ！　じゃあ、もっとお話ししよう！　そうだ、この前森で拾った綺麗な葉っぱがあるの。見せてあげる！」

俺を抜きにしてどんどん話が進み、マルセルさんはうちに泊まることが確定してしまった。マリーはその事実に大喜びで、自分の荷物が入った木箱までマルセルさんの手を引いている。

なんか……マルセルさんにマリーを取られた気分だ。というか、俺よりもマルセルさんの方が実家に馴染んでないか！？

こんなんじゃダメだ。転移を使えるようになったんだし、これからはもっと家に帰ってこよう！

そうして実家での夜は、マルセルさんに対抗してマリーの気を引くのに必死になり過ぎていった。

そして次の日の朝、魔力が回復した俺はマルセルさんをしっかりと家まで送り届け、公爵家に戻った。

そして公爵家に戻った日の夕食後。

リシャール様に家族皆とマルセルさんが参加してくれる旨を伝えた。

「そうか、それは良かった。レオンのご家族と会えるのは楽しみだな」
「はい。ただ私の家族は礼儀作法など全くできませんので、そこはご容赦いただければと思います」
「ああ、そこは気にしなくて良い。使用人も厳選するし気にするな」
「ありがとうございます」

良かった。これでもう心配事はないな。あとは当日が来るのを待つだけだ。
そう安心して、俺はお茶を飲み一息ついていると、リシャール様が途端に真剣な表情になった。

「レオン君、魔物の森についての情報を平民に公布したことによる変化について、レオン君にも話しておこうと思うのだが良いか？」
「……はい。それについてはこちらからお聞きしたいぐらいです」

これはしっかりと聞かないとだな。

「それならば良かった。まずは平民の混乱状況だが、これは然程ではないらしい。まず信じていない層も一定数いること。さらに力を合わせれば立ち向かえるということで、安心感が持てる内容だったこと。この二つが混乱を引き起こすことを回避させたのだろう。これからは真実だということを知りその上で協力してもらうため、定期的に情報公開をする予定だ」

母さんが言っていたのと同じような感じだな。これは結構上手くいったと言っても良いだろう。

「それから貴族については前にも伝えたが、魔物の森の現状に全く目を向けずに己の私利私欲ばかりを考えているバカな者ども、あい

つらはやはりダメだな。国を混乱させて滅亡させることを企んでいるのではと、訳のわからない戯言を言い出した貴族までいた！」

リ、リシャール様、随分とお怒りなのですね……。初めてこんなに怒ってるリシャール様見たよ。それほどイラついてたんだな。

まあ確かに、その貴族達本当に、本当に馬鹿だな。馬鹿すぎて呆れたため息しか出ない。

「ただ、一部今まで信じてこなかった敵対貴族の家が意見を変えたため、効果がなかったわけではないだろう。あちらは味方が減ったことでとりあえず様子見を継続するようだ」

「そうなのですね。少しでもそういう家があるのならば良かったです」

「貴族達にはまだこれからも訴えかけていくが、あの馬鹿な貴族達は己の目の前にまで魔物が迫らなければ信じないのだろう。とりあえず国の方針としては、内戦にだけはならぬよう水面下で抑えつつ、魔物の森への対処に力を尽くすという今までの方針を継続することになった」

確かにそれが一番だな。話が通じない人って世の中にはいるんだよね。全く何を言っても話が通じないし、相手の主張も理解できないんだ。そういう人が貴族として権力を持ってるなんて、厄介すぎるな。

「私にできることは少ないですが、何か力になれることがありましたらお声がけください」

「ああ、頼りにしているよ。よろしく頼む」

「かしこまりました」

２０４、初めての中心街

それから数日後の土の日。
今日は家族皆が中心街に来る日だ。俺は今まで一度も休んだことのなかった王立学校の午後の授業を休んで、皆を中心街入り口の広場に迎えに来ている。
皆はまず公爵家に向かうのではなく、広場で俺と合流したら中心街を観光し、それから公爵家に向かう予定なのだ。

皆は初めての中心街だからね。楽しんでもらわないと！
俺はそう考えて今日はめちゃくちゃ気合を入れている。昨日までにプランを考えてきたんだけど、まずは合流したらおしゃれなカフェに行きお昼ご飯を食べる。それから服飾店で皆の服を買う。これは公爵家で過ごす時のための服だ。そこまで豪華でなくても良いけど、従業員の皆に買った以上のものは買おうと思っている。
さらにそのあとは市場を回り、最後に俺のお店を見てもらおうと思っている。スポンジケーキも食べてもらう。

すっごくワクワクする。俺は皆を楽しませる立場なんだけど、一番ワクワクしてるのは俺かも。そんなことを考えながら馬車を待っていると、遠くから質素だけどしっかりとした作りの馬車が来た。
多分アレだ！　自分がいつも乗っている馬車なので、公爵家のお忍び用の馬車はパッと見ただけで分かるようになっているのだ。
「レオン様、楽しみなのはわかりますが、そんなに身を乗り出されると危ないです」
ロジェに注意されてしまった。

そう、今は広場の端に馬車を停めて、馬車の窓から外を見ていたのだ。この馬車は俺とロジェが降りたら公爵家に戻ることになっている。俺たちは皆が乗ってきた馬車に合流する予定だ。

「でもロジェ、あれ公爵家の馬車じゃない？」

「確かにそうかもしれませんが……他の貴族のお忍び用の馬車もあのような作りですし、まだわかりません。もう少々お待ちください」

ロジェはそう言って俺が指差した馬車をじっと見ている。そしてその馬車がもう少し近づいてきたところで、ロジェは外から中に視線を戻した。

「レオン様、先程の馬車が公爵家の馬車で間違いないようです」

「なんで分かったの？」

「御者の顔が見えればわかります」

凄っ……御者さんって沢山いるけど覚えてるんだ。それに顔を見るにはまだ結構遠いけど、ロジェって目が良いんだな。

この世界って目の悪さは回復魔法で治せるから、基本的に目が悪い人はいないんだ。でも治せるとは言っても日常生活に支障はないほどまで治せるだけで、目が凄く良くはならない。

だから目が良い人は、一度も目が悪くなっていない人ってことなんだ。まあ、そもそもこの世界って目が悪くなる人は少ないんだけどね。日本みたいにずっとスマホを見てるとかないし。

でもやっぱり生まれつきの視力に差はあるから、ロジェは目が良い人達の中でもさらに良いのだろう。

「ロジェは目が良いんだね」

「昔から目だけは良いのです」

「目だけじゃないけどね。……まあ今はいいか、早く行こう！」

「かしこまりました」

そうして俺とロジェは馬車から降りて、皆が乗ってきた馬車へ近づく、すると馬車の御者さんがドアを開けてくれた。

「お兄ちゃん！！」

俺が馬車に乗るとマリーが大興奮の様子で俺に抱きついてきた。か、可愛い……。

「お兄ちゃん！　この馬車凄いんだよ！　すっごくふわふわでね、明るくてね、柔らかくてね、すっごいんだよ！」

多分だけど、絨毯でふかふかで光球で明るくて椅子がクッションで柔らかいってことだろう。

「本当？　それは凄いね。馬車に乗るの楽しかった？」

「うん！！」

やばい、マリーがリアル天使。可愛すぎる。

俺はマリーの可愛さにノックアウトされそうになりながらもなんとか踏みとどまり、他の皆にも挨拶した。

「母さんと父さんも何か問題なかった？　マルセルさんも大丈夫でしたか？」

「わしは大丈夫じゃよ」

「ええ、問題ないどころか、こんなに凄い馬車に乗れるなんて驚きよ」

「本当に凄いよ。こんな馬車に乗れるなんて……」

「この馬車乗り心地いいよね。問題ないなら良かったよ。じゃあこ

のまま中心街の観光に向かうけど良い？　凄く楽しみにしてたんだ！！」

俺がマリーのテンションに若干引きずられて勢いよくそう言うと、マリーはテンション高く飛び跳ねてくれた。

「私も楽しみだったよ！！」

三人はその様子を微笑ましげに見守ってくれている。なんか……、はしゃぎすぎてちょっと恥ずかしいな。でも楽しいんだから仕方ないよね。

そうして俺とロジェと皆の合計六人で、中心街観光は始まった。

「お兄ちゃん、まずはどこに行くの？」
「まずはカフェに行こうと思ってるんだ」
「カフェって何～？」
「カフェはおしゃれな食堂みたいな感じかな。まずはお昼ご飯を食べないとだからね」
「本当！？　やった～！　私お腹空いてたの」
「じゃあたくさん食べようね」

俺はマリーとそんな会話をしつつ、人生で一番楽しい馬車移動を経験した。永遠に続いてほしい時間だった……

他の皆はロジェと話したり、それぞれ有意義な時間を過ごせたようだ。ロジェは俺の家族とはすでに面識があるからか、結構穏やかな様子で会話をしていた。ロジェも楽しめているなら嬉しいな。

そうして楽しい雰囲気で馬車は進んでいき、しばらくして目的のカフェに着いた。

馬車が止まると、ロジェはすぐに降りて席が空いてるかを確認してきてくれて、空席があったようなので俺たちはカフェに入る。
ロジェには、今日は仕事を忘れて一緒に楽しもうよって言ったんだけど、どうしても仕事が抜けないらしい。まあ、ロジェが仕事をしたいのなら無理に止めることもないよね。

「お兄ちゃん！　すっごく可愛いお店だね！」
「可愛いよね。お料理も美味しいんだよ」
「楽しみ～！」

マリーは今にも店の中に駆け出して行きそうな様子だけど、母さんにがっしりと肩を掴まれて止められている。

「マリー、走り回るのはダメよ。あと大声もダメ」
「そうだよ。ゆっくりと動くのが大人なんだ。マリーならできるよね？」

マリーは母さんと父さんにそう言われ、家で散々注意されたことを思い出したらしい。はっと何かに気づいたような顔をして、手で口を押さえた。
実は公爵家に来ることが決まったあと、最低限無礼にならないようにどうすればいいのかと母さんと父さんに聞かれたから、マリーは大声を出さないことと走らないことを守れば大丈夫って言ったんだ。
母さんと父さんには使えそうな挨拶などと、また少しだけ敬語を教えておいた。

「マリー偉いね。じゃあ中に入ろうか」

そうして俺たちは四人掛けのテーブルを近づけてもらい、六人で

席につく。すると店員さんがメニューを持ってきてくれた。
「こちらがメニューでございます。ご注文が決まり次第またお声がけください」
「はい。ありがとうございます」
俺とマルセルさん、ロジェは普通にメニューを受け取ったけど、家族の皆は不思議そうだ。
「レオン、なんであの店員は注文も聞かずに行ってしまったんだい？」
「そうよ。私たちが貧乏に見えるからってあの態度はないわよね」
母さんと父さんはそう言って、先程メニューを渡してくれた店員さんをチラチラと見ている。俺は二人のその話を慌てて止めた。
そうだよね。平民の食堂ならメニューは多くても二、三個だから、すぐにどれがいいか注文聞くのが当たり前なんだ。だからここに来たらそうなるよね。
「母さん父さん、ここのお店はメニューを紙で渡してくれて、ゆっくり選んで注文を決めたら店員さんをまた呼ぶんだよ」
「あら、そうなの？」
「なんでそんなに回りくどいことをするんだい？　その場でどれがいいか聞いたほうが早いんじゃないか？」
「ううん。メニュー数が多いから口頭だとわからないんだ。ほら、この紙見て」
そうして俺は母さんと父さん、それからマリーにお店の仕組みを教えて、さらにメニューの内容も読んであげて注文を決めた。
皆も読み書きの勉強をしたほうが良いよね……。俺が教えてあげ

られるのが一番なんだけど、俺って日本語を書くとこの世界の言葉に自動変換される仕組みでこの世界の言語を扱えてるだけだから、俺よりも他の人に教えてもらったほうが良い気がする。
誰か教えてくれる人を見つけようかな。読み書きできたら便利だし仕事の幅も広がるだろうし。うん、そのうち考えよう。

「じゃあ、母さんはジャムトーストと緑茶、父さんはサンドウィッチと紅茶、マリーはフレンチトーストと水でいい？」
「ええ、それで良いわ」
「わかった。じゃあ注文しちゃうね。ロジェとマルセルさんも決まってますか？」
「ああ、決めてあるから大丈夫じゃ」

そうして俺たちは、お店に入って十分ほどでやっと注文を終えた。ロジェは仕事を完璧にこなしつつも、俺が一緒に楽しもうと言った言葉があるからなのか、当たり前のように席に座って料理を注文してくれた。多分俺の家族が気を遣わないようにとの配慮もあるのだろう。本当にありがたい。
ロジェとももっと仲良くなれたら嬉しいな。

２０５、家族旅行！

「レオン、今更だけどお会計は大丈夫かしら？　さっき値段聞かなかったけど……」

やっと注文を終えて一息ついた時、母さんがこそっと聞いてきた。

「心配しないで。前にも言ったけど、今日の支払いは全部俺がするから大丈夫。公爵家に招待するからってことで公爵家からお金も預かってるんだ」

これは事実だ。実際にリシャール様から、公爵家で過ごす服を買うようにとお金を預かっている。

俺の家族が屋敷で悪目立ちしないように配慮してくれたのだろう。リシャール様って本当に尊敬できる素晴らしい方だ。

「そうなの？」

「うん。だから母さんは気にしなくていいよ。父さんもね」

「……そう。レオンが言うなら気にしないことにするわ。どうせなら楽しまなきゃね」

「そうだよ！　家族旅行みたいな感じだからね。楽しまなきゃ損だよ」

そうして話していると、料理が運ばれてきた。

「お待たせいたしました。こちらフレンチトーストでございます」

「私の！」

マリーが大きく手を挙げて、店員さんをキラキラの瞳で見つめた。すると店員さんは一瞬だけ笑み崩れたが、すぐに元の優雅な微笑みに戻りマリーにフレンチトーストを渡してくれた。この人絶対に良い人だ。

「蜂蜜はお掛けいたしますか？」
「蜂蜜って甘いやつ？　掛ける！」
「かしこまりました」

そうしてマリーの目の前には、蜂蜜が掛かった暴力的に良い匂いのフレンチトーストが完成した。やばい……めちゃくちゃ美味しそう。

そしてフレンチトーストに続いて皆の料理も次々と運ばれてきて、全て揃ったところで食べることにした。

「じゃあ食べよう！　いただきます！」
「いただきます！」

人一倍大きなマリーの声に釣られて皆も挨拶をして、各々食べ始める。

「うぅ～ん！　美味しい！」
「マリー美味しい？　良かったね。もしもっと食べたければおかわりもできるからね」
「うん、ありがと！」

マリーはそう言ったっきり夢中で食べ始めた。気に入ってくれたのなら何よりだ。

「まぁ、このジャムトースト絶品だわ！　ジャムは甘くてなめらか

で、さらにパンは柔らかくて味も良い。中心街のお店はここまで凄いのね……」
「ロアナ、このサンドウィッチも最高だよ。特にパンが美味しい」
母さんと父さんも気に入ってくれたみたいだ。
「このパンを仕入れることができたら、うちの食堂のカツサンドとコロッケサンドももっと美味しくなるよね」
「本当ね。でもこのパン高いんじゃない？　うちの辺りでは見たこともないわよ。レオン、これはどこで売ってるのか知ってる？」
そのふわふわのパンね。それは中心街の一部のパン屋でしか売ってないんだ……多分製法を公開してないんだろう。だから今は中心街のお店の一部と貴族家の一部でしか食べられない。
もっと広めればいいのにと思っちゃうけど、まあ利益を考えたらそんなわけにはいかないのだろう。
「それは中心街でしか食べられないんだよ。だから高いかな」
「やっぱりそうなのね……」
「まあ、それなら仕方ないね。今味わっておこうか」
「そうね」
そうして皆で楽しんで昼食を食べて、大満足で昼食は終わった。
それからまた馬車に戻ってきて、次に向かうは服飾店だ。質の良い商品を売っている中古服屋に向かう。
「お兄ちゃん、お洋服買うの？」
「そうだよ。すっごく可愛いものを選ぼうね」
「本当に？　買ってもいいの？　私の服まだ雑巾になってないよ？」

マリーはそう言って本当に不思議そうな顔をしている。マリーの中で基本的に服を買う時は、着ていた服がボロすぎて雑巾になった時なのだ。なんか……世知辛いな。

「今日は特別なんだよ。今日着るお洋服と、明日着るお洋服の二着買うんだよ？」

「二つも？」

「そう、一緒に選ぼうね」

「うん！」

「母さんと父さんも二着ずつね。これから何かで必要かもしれないし、とりあえず公爵家で必要だから」

「わかったわ。でもどんな服が良いかわからないから、レオンが選んでくれるかしら？」

「父さんもわからないな。いつも同じ服しか着てないから……」

「わかった。じゃあ俺とロジェで選ぶよ！」

俺がそう言ってロジェに目線を向けると、ロジェは心強く頷いてくれた。

「お任せください」

そうして辿り着いた服飾店は、小さな店ながらも質の良さそうな建物と落ち着いた雰囲気のお店だった。出迎えてくれた店員さんは壮年の男性だ。渋い感じのイケメンなおじさんって感じ。なんかカッコいい。

「いらっしゃいませ。本日はどのようなご用件でしょうか？」

「今日はここにいる三人の服を探しにきました。平民が着る程度の質だけど、その中では一番質の良い服が欲しいです。貴族の屋敷を

訪れる時に着用する予定です」
「そうですね……それでしたら布の質は高いものにして、装飾がないものがおすすめでございます。貴族様方は装飾を沢山お付けになられます。ですのでそこを抑えることで、質の良いものを身につけつつ嫌味ではない服装となりましょう」

そういうものなんだ。でも確かにそれ良いな。
装飾がついてなければ着やすいだろうし、後から付け足してより豪華にすることもできるし。

「じゃあそれでお願いします。マリー、この子には可愛さも重視してあげてください」
「かしこまりました。では皆様、奥へお願いいたします」

そうして皆はお店の方に寸法を測ってもらい、合うサイズの服の中から俺とロジェの意見も合わせて服を選んだ。
マリーは可愛い服が二つも買えて大満足だ。

「あの、今購入した服に着替えさせていただいてもよろしいでしょうか？」
「もちろんでございます。奥の試着室をお使いください」

そうして皆は購入した服に着替えて、どこかの裕福な家族に大変身して店を後にした。
母さんはウエスト部分が細くなっているデザインのワンピースで、露出は少なめで首元まで隠れるタイプのものだ。スカートの丈は足首が少し見える程度で、ワンピースの色は濃いめの緑。靴も新調して高さのないヒールのような靴。首もとや袖口に少しだけついたレースも良いアクセントになっている。
うん、見違えた。綺麗な母さんだと思ってたけど、こういう格好

すると途端にお淑やかな感じになる。

父さんはグレーの細身のパンツに、上は黒の丈が短いジャケットだ。その中には白いシャツを着ている。ジャケットにもボタンなどはなく、タイなどもつけていなく、かなりシンプルな感じだ。

なんか父さんは、優しくて面倒見が良い文官の上司って感じだ。

マリーは薄い黄色のような色のワンピースだ。スカートの長さは膝丈で、ウエスト部分にはオレンジ色の帯が締まっていて、後ろでリボンになっている。

半袖の袖口は少しだけフリルがついていて可愛い。首元はブラウスのような感じで襟があって、その下にはいくつかボタンがついている。

うん、マリーは何を着ても可愛い。

「皆、すっごく良い感じだよ！！」

「本当！？　似合ってる？」

「マリーのために作った服みたいに似合ってるよ。うん、本当に可愛い」

「やったぁ！」

「レオン、私は変じゃない？　こんな服初めて着たのよ」

「僕もだよ。なんか変じゃないかい？」

母さんと父さんは着なれない服が落ち着かないようで、仕切りに服を触って確かめている。

「全然変じゃないよ。完璧！　そうだ、父さんは暑かったらジャケット脱いでもいいからね。公爵家に着く前に着れば良いよ」

「そうかい？　じゃあ脱ごうかな」

「うん！　母さんは暑くない？」

「私は一枚だけだから大丈夫だけど……本当に変じゃないかしら？」
「大丈夫、母さん凄く綺麗だよ。ね、マルセルさん！」
マルセルさんは突然俺に話を振られて驚いたのか、一瞬間が空いたけどすぐに慣れた様子で母さんを褒めていた。
さすが、準貴族と言っても貴族は貴族だな。
そうして皆で着替えた服にはしゃぎつつ馬車に乗って市場を回り、最後に俺の店にやってきた。

２０６、家族のお店見学

しばらく馬車に揺られていると、スイーツ店に着いた。お店には馬車を停められるスペースがないので、大通りの端に馬車が止まる。
基本的に中心街の全てのお店は馬車の駐車スペースはなく、前の通りに馬車を停めてお店を利用する。短時間の利用なら馬車はそのままで、長時間の利用ならば馬車は中心街のあちこちにある馬車を停めるスペースに向かうことがマナーだ。

そうして馬車がお店の前に止まり俺たちが馬車から降りていくと、お店からアンヌとキアラ、エマが出てきてくれた。
実は俺の家族がお店に行くからスイーツの準備をよろしくと頼んだ時、アンヌに給仕の練習もさせてほしいと言われたのだ。俺の家族だと貴族とかけ離れすぎていて練習にならないのではないかと思ったけど、態度が良い貴族ばかりではないから様々なお客様へ対応するための練習と言われたら、頷くしかなかった。
確かにいるよね。権力振りかざすような貴族とか、自分の主張が全て通ると信じて疑わない貴族とか、考えるだけでめんどくさい。
でも、そんな貴族の対応もしないとだからな。俺もちゃんとどう対応するのか頭に入れておかないと。

「ようこそお越しくださいました。どうぞ、店内へお入りください」

三人が声を揃えてそう言うと、俺の家族はビクッと反応して一歩後ずさった。確かに、びっくりするよね。

「レオン、このお店が本当にあなたのお店なの？」
「そうだよ。じゃあ中に入ろうか」

「うん！　お兄ちゃんのお店、すっごく可愛いし、すっごくかっこいい！！」
「本当？　マリーありがと～！」

もうマリーに褒められただけで、今まで頑張ってきた甲斐あったな。嬉しすぎる。
そうして緊張感の全くない俺とマリーに続いて、いつも通りのロジェ、それからかなり驚いた様子のマルセルさん、さらに緊張している様子の母さんと父さんが続き店内に入った。
店内に入るとマリーが一際楽しそうな声を出す。

「わぁ、何これ。この大きいの綺麗！　中に何か入ってる？」
「これはショーケースだよ。この中は冬みたいに寒くなってて、そこで作ったスイーツを保管してるんだ」

ヨアンが気を利かせていくつかスイーツを入れてくれていたみたいだ。うん、こうしてみてもこのショーケースいい出来だな。頑張って調整しただけある。

「これは、随分と形を変えたんじゃな」
「そうなんです。こうしたほうがお客様から見やすいと思って。それから重くて重厚な感じもなくなりますし」
「確かにそうじゃな。この店の雰囲気と合ってるわい」
「本当ですか！？　嬉しいです！」
「それに……この部屋は冷風機で冷やしとるな」
「はい！　冷風機もしっかり使ってます」

今のところ好感触みたいで良かった。これなら大きな問題はなさそうだな。

「じゃあ皆、席に座ろうか？　厨房とか裏側は後で案内するとして、まずはスイーツを食べよう？」
「食べる～！」
「では、お席にご案内いたします」

そうして俺たちはキアラの案内で席に座った。するとすぐにスイーツが運ばれてくる。

「本日のメニューはスイーツの盛り合わせでございます。こちらがスポンジケーキの生クリーム添え、こちらが生クリームクレープ、こちらがバター蜂蜜クレープでございます。ごゆっくりとお召し上がりください」

そうして皆が給仕してくれたお皿には、三つのケーキがとても綺麗に飾られていた。凄い、ヨアンのセンスが凄すぎる。もうここまで綺麗なプレートを作れるようになっていたなんて……

スポンジケーキの生クリーム添えは、焼いたスポンジケーキをちょうど良い大きさに切り、そのそばに生クリームを添えただけだ。多分まだ生クリームを塗ったりが上手くいってないのだろう。しかし生クリームと共にフルーツも飾られていておしゃれになっている。多分これだけでも商品化できるな……

そして生クリームクレープ、これは驚きだ。見た目は完全にミルクレープになっている。一番上は生クリームではなく何かのジャムが塗られているようで、凄く美味しそう。見た目も良い。うん、これも商品化できそうだ。

最後はバター蜂蜜クレープ。これはずっと屋台で売っていたものだ。しかしクレープの畳み方や盛り付け方を工夫しているので、屋台のものと同じには到底見えない。

これも貴族向けのクレープとしてもう少し豪華にすれば商品化で

きそうだ。

……ヨアン本当に凄いな。ヨアンと出会えたことで運を使い果たしたんじゃないかってぐらい凄い人材だ。ヨアンが作ったスイーツをちゃんとリスト化して、名前もつけていかないとだな。

「じゃあ皆食べようか。一応ここでは左手にフォークを持って右手にナイフを持って、こんなふうに切り分けながら食べるんだけど……まあ、皆は難しいと思うからフォークだけで食べるので良いよ。とにかく味わって楽しんで食べよう！　じゃあ、いただきます」

「いただきます！」

そうして皆で美味しそうなスイーツを食べ始めた。俺はまず、ミルクレープからいただく。

一口サイズにカットしてミルクレープを口に運ぶ。うわぁ……これ本当に美味しい。クレープが何層にもなったことによる食感も楽しいし、何より一番上にかかっていたジャムが良いアクセントになっている。生クリームも甘すぎなくて……うん、美味しすぎる。

「マリー、美味しい？」

俺はスポンジケーキをフォークで頑張って食べていたマリーにそう聞くと、マリーは口の周りに生クリームをつけながら満面の笑みを浮かべてくれた。

「うん！　これ今まで食べたものの中で一番美味しい！」「それは良かった。母さんと父さんはどう？」

「本当に、本当に美味しいわ！」

「これ、何で作られてるんだい？　なんでこんなに甘くて美味しいのに、ふわふわでとろけるような食感で、うん、とにかく美味しす

ぎるよ」

母さんはミルクレープを食べてとろけるような笑みを浮かべ、父さんはスポンジケーキを食べて好奇心旺盛な顔をしている。うん、皆気に入ってくれたみたいで良かった。

ロジェとマルセルさんの方を見ると、二人とも優雅に、でもかなりのハイペースで食べすすめている。

ロジェはいつもの無表情が完全に崩れて口角が上がり、目を瞑ってケーキを食べつつ至高のひと時を楽しんでいるようだ。

マルセルさんは、ミルクレープの食感が気に入ったのか、ミルクレープを食べる手が止まらない様子だ。

「ロジェ、美味しい？」

「はい。これらのスイーツは、本当に美味しいです。甘いだけではなく絶妙な甘さの中にある酸味。口の中でとろけるような、それでいて満足感のある食感。他にもたくさんの素晴らしいところがあります。素晴らしいところを挙げ始めたらキリがありません」

「そ、そう。そこまで言ってくれて嬉しいよ。ありがとう」

ロジェは相当ケーキが気に入ったみたいだな。この前の試食の時から、ケーキを食べると途端に饒舌になるしキャラが変わるんだ。

まあ、ロジェが好きなものが増えたのなら良かった。

「マルセルさん、お口に合いましたか？」

「ああ、これは美味しいなんて言葉では言い表せないほど素晴らしいものだ。このお店は貴族向けなんじゃな？」

「そうです」

「多分相当流行る。覚悟すべきじゃな。混雑対策なども考えたほうが良い」

そこまでなのか……ロジェにもそう言われたよな。謙遜なんてせずに、お客さんが殺到する予定で準備したほうが良いかも。

「はい。そうします」

そうして皆でスイーツを堪能して、その後少し休んでから、俺は皆にお店の中を案内することにした。ついでに従業員の皆を紹介していく。

「皆、最初に迎えに出てきてくれた三人が左からアンヌ、キアラ、エマ。給仕担当の三人だよ。それからお店の入り口に立っているのがドニとエバン、お店の奥にいるのがリビオ。警備担当の三人だよ」

俺がそう言って、お店にいる従業員を紹介していくと、皆が軽く自己紹介をしてくれた。そして店舗側を全て案内したところで、カウンター裏に入っていく。

「ここが厨房なんだ」

中に入ると、片付けをしていた料理人の三人がいた。

「一番奥にいる大きな人がヨアン、その隣の女の子がリズでその隣の男の子がポール。皆料理人だよ」

俺がそう言うと、マリーはヨアンのところに一直線に走って行き、ヨアンの足にガシッと抱きついた。

「おじちゃんがあれ作ったの？　すっっごく美味しかった！！」

マリーがヨアンに抱きついたままキラキラした瞳で見上げてそう

言うと、ヨアンは完全に固まった。多分今までその外見から子供に好かれることはほとんどなかったんだろう。マリーは隣のおじさん然り、大きくて筋肉ムキムキな感じの人が好きだからな。

「ヨアン、大丈夫？」

俺がそう声をかけると、ヨアンはやっと我に返りマリーの前にしゃがみ込んだ。

「レ、レオン様の妹さんか？　ありがとな」

ヨアンがそう言ってぎこちなく頭を撫でると、マリーは満面の笑みを浮かべた。

その笑顔を真正面から見てしまったヨアンはもうデレデレだ。強面なんて面影もなくなるほど顔が崩れている。

マリー、怖い子だ。

「本当に美味しくてびっくりしたの！　ふわふわで口の中でとろけちゃう甘いやつ、あれが一番好き！」

「スポンジケーキか？　少し残ってるから食べるか？」

ヨアンはそう言って、冷蔵庫から残っていた切れ端を取り出した。多分後で皆で食べるつもりだったのだろう。

良いのだろうか？　そう思いつつも、ヨアンが凄く嬉しそうにしているから口を出すのはやめておいた。

「食べて良いの！？」

「ああ、切れ端でごめんな」

「おじちゃん大好き！　ありがと！」

マリーはそう言って、ヨアンからお皿を受け取りケーキを食べ始めた。うん、マリーが幸せそうだからなんでも良いや。

そうしてマリーに翻弄されつつもお店の見学は進み、最終的に皆がマリーにデレデレになったところで見学は終わった。やっぱりマリー最強だな。

２０７、初めての公爵家

中心街の観光を終えて、俺たちは馬車で公爵家に向かっているところだ。

母さんと父さんは公爵家が近づくに連れてかなり緊張しているようで、さっきから口数は少なく顔色も少し悪い。マリーもこの後は行儀良くしないとって言われたからか、いつもよりキリッとした顔で姿勢を正そうと頑張っている。うん、可愛い。

マルセルさんもかなり緊張している様子だ。

準貴族のマルセルさんが緊張するんだから、公爵家って凄いんだよな。俺はもう自分の第二の家みたいになってるから全く緊張しなくなっちゃって、皆の様子を見て改めて公爵家の凄さを実感してる。

そんな妙に緊張感の漂った馬車に揺られ、しばらくすると公爵家に着いた。

馬車を降りると、リシャール様とカトリーヌ様、リュシアンに続き、たくさんの使用人が並んでいる。

いつもこの時間にはまだリシャール様はいないのに、今日は早めに帰って来てくれたんだな。それでお客様を出迎える準備をしてくれたんだろう。

俺の家族を正式なお客人として迎え入れてくれるのは凄くありがたいけど、でも、でも……、リシャール様ちょっとやりすぎです！

もう家族皆真っ青だよ。

「ロンコーリ殿、レオン君のお母様お父様、それから妹君。ようこそお越しくださいました。私はタウンゼント公爵家の前当主、リシャール・タウンゼントと申します。ご挨拶が遅れてしまい申し訳ご

ざいません。こちらは私の妻のカトリーヌ、それからこちらは孫のリュシアンです」
「リシャールの妻、カトリーヌ・タウンゼントでございます」
「リュシアン・タウンゼントと申します」

おぅ、凄く貴族っぽい。そして何より、リシャール様敬語使ってるよ。客人だからなんだろうけど、皆はそれを聞いてより一層真っ青な顔になり完全に萎縮しちゃっている。
リシャール様に気軽な感じでお願いしますって言ったんだけどな……。もしかして、これでも普段より崩した感じの出迎えだったりするの？　もしそうなら認識が違いすぎる。

「レ、レオンの、父で、ジャンと申します」
「レオンの母、ロアナと申します」
「マリーです」

父さんが付け焼き刃の敬語でなんとか声を絞り出してそう挨拶をし、母さんもそれに続いた。いつもは元気一杯のマリーでさえ、雰囲気に呑まれて元気がない様子だ。

「ではこんなところで立ち話も何ですので、早速屋敷にお入りください。馬車での長旅でお疲れだと思います。それぞれ客室をご用意しておりますので、まずはそちらで疲れを癒してください」

リシャール様がそう言うと、四人の使用人が前に進み出た。

「こちらは皆様を担当する使用人です。何かありましたら、担当の者にお申し付けください。できる限り対応させていただきます」

そしてその言葉を合図に、四人が一斉に頭を下げた。

「よろしくお願いいたします」
「では皆様、中へどうぞ」

リシャール様がそう言って中に歩き出したので、俺たちもそれについて行く。母さんと父さんは手と足が同時に前に出てるぐらい、ギクシャクしながら歩いている。逆にマリーはエントランスに入るとその豪華さに目を輝かせ、さっきまでの緊張はどこかに飛んでいったらしい。

「うわぁ、凄い！　広いしキラキラだしふかふかだよ！」

マリーは大興奮でそう言って、楽しそうに辺りをキョロキョロと見回している。一応大声を出さない、走らないは守っているけれど、今にも走り出しそうな雰囲気で声も玄関ホールに響いている。
まあ、そのぐらいは仕方ないだろう。俺は苦笑しながらそう思ったけど、母さんと父さんはそう思わなかったらしい。
二人は楽しそうにしているマリーの肩を同時に掴み引き寄せ、もう片方の手でマリーの口を塞いだ。そして小声で言い聞かせている。

「マリー、ここではしゃべるのもダメよ。静かにするのよ」
「マリー、走らないのは当然だけど、その場で飛び跳ねたりキョロキョロ見回すのもダメだからね」

マリーはそんな二人の必死な様子に、よく分からないながらも必死に頷いた。
そこまで気にしなくてもいいんだけどな。でも確かに他の貴族家ではそこまで気にしないとダメだよね……、俺はそう考えて皆にどう声を掛けようか少し迷っていると、リシャール様が先に口を開いた。

「レオン君のご両親、そこまで気にしなくても構いませんよ。子供は元気が一番です」
「そうですわ。マリーちゃんと言ったかしら？　このお家は気に入った？」

リシャール様がこちらを振り返り二人にそう言って、カトリーヌ様はマリーに優しそうに微笑みかけながらそう問いかけた。
二人がいいって言うなら……ここはもう少し緩くても良いことにしよう。皆が他の貴族家に行く可能性なんてかなり低いし。
俺はそう結論づけて、皆を安心させるために口を開いた。

「母さん父さん、リシャール様もカトリーヌ様もそう言ってくれてるんだから、もう少しリラックスしても大丈夫だよ。マリーも大きな声を出したり走り回ったりしなければ、普通にお話ししていいからね」
「本当に？」
「もちろん」
「分かった！！」
「じゃあ、カトリーヌ様にお返事しようね」
「うん！　カトリーヌ様、このお家すっごく素敵だよ！」

マリーは嬉しそうに頷いたあと、カトリーヌ様のところに近づいて笑顔で話し始めた。カトリーヌ様も嬉しそうだから大丈夫だろう。
母さんと父さんはまだまだ固い感じだけど、とりあえずマリーから手を離してくれたので良しとしよう。

そうしてぎこちないながらも何とか屋敷の中を歩き、客室まで辿り着いた。客室は俺の部屋の近くにあるものを使うようだ。俺の部屋の隣がマリーで、その隣が母さん。俺の向かいが父さんで、その

隣がマルセルさんみたいだな。

「ではこちらでごゆっくりと休まれてください。また夕食の時にお話しいたしましょう」

リシャール様達はそう俺たちに声をかけて、早々に下がっていった。多分皆がかなり緊張してる様子だったから気を遣ってくれたのだろう。ありがたい。

「レ、レオン、こんなに広い部屋を一人で使うのかい？」

父さんは使用人の方に部屋のドアを開けてもらい中を覗いたようで、顔を真っ青にしてまた廊下に戻ってきた。

「レオン、どうしましょう。母さん緊張して震えが止まらないわ。ゆっくり休むなんて無理よ！」

「お兄ちゃん、こんなに広いお部屋を一人で使うの？　ちょっと寂しいの……」

母さんとマリーもそう言って、俺のところに戻ってきた。マルセルさんはまだ皆よりは落ち着いている様子で、使用人に連れられて部屋の中に入っていった。

どうしようか……。皆は多分それぞれの部屋に入っても、ひたすら緊張するだけで全く休まらないだろう。

それなら、とりあえずは俺の部屋に来てもらおうかな。

「ロジェ、この後の予定ってどうなってるの？」

「はい。この後皆様には夕食会への準備のために、ご入浴していただく予定です。ご入浴いただきましたらお洋服を再度お召しになっ

ていただき、お髪を乾かしてセットさせていただきます。それからは時間になるまで待機をしていただき、その後は夕食の席へとご案内いたします」
「もうあんまり時間ないのかな？」
「そうですね……三十分ほどでしたら余裕がございます」
三十分か。じゃあその時間を使って、皆にもう少し落ち着いてもらうことにしようかな。
「じゃあ、とりあえず皆で俺の部屋に入るからお茶を準備してくれる？　少し休憩してから準備をすることにする。俺の部屋に入るのはロジェだけで、他の皆はそれぞれの部屋でこの後の支度の準備をしてくれるかな？」
俺がそう言うと、家族につけられた使用人の皆さんは一礼してそれぞれの部屋に入り、ロジェは俺の部屋のドアを開けた。
「かしこまりました。では皆様、どうぞ中へお入りください」
「皆、ここは俺の部屋だから緊張しなくていいよ。とりあえず皆で一緒に休憩しようか。急に一人になるのも不安でしょ？」
「それはありがたいわ……」
「ああ、一人はさすがに怖かったんだ……」
「お兄ちゃんのお部屋！」
「じゃあ中に入って。マリー、そこのソファに座ろうね」
「うん！」
そうして俺たちは四人で部屋に入り、ロジェがお茶の準備で部屋を出たので、部屋の中には四人だけになった。そこでやっと母さんと父さんの緊張が解けたらしい。
さっきよりもリラックスした様子でソファに座っている。

「皆大丈夫？　後三十分したらそれぞれの部屋で準備をしないといけないんだけど……」
「そうね。とりあえずここで一度休めたからさっきよりは大丈夫よ」
「父さんもだよ。とりあえず少しだけリラックスできたかな」
「それなら良かった。準備は使用人の方に任せれば大丈夫だからね」
「わかったわ」
「マリーもこの後は、使用人の方の話をよく聞くんだよ」
「うん！！」

俺がそう言うと、マリーは無邪気な笑みを浮かべつつ元気に頷いてくれた。とりあえず、マリーが元気そうで良かった。

２０８、部屋の見学とブレスレット

そこまで話したところで少しだけ落ち着いて周りを見る余裕ができたのか、母さんが俺の部屋をぐるっと見回した。

「それにしても、ここがレオンの部屋なのね。こんなに広くて豪華なところに住んでいたなんて……」

「この部屋凄いよね。俺も最初は緊張したよ。でも流石にもう慣れたかな」

「本当に凄いよ。向こう側には何があるんだい？」

父さんが衝立を指差してそう聞いてきた。

「向こうはベッドがあって、後トイレとお風呂に繋がるドアがあるよ。そうだ、皆の部屋もこの部屋と基本的には同じ作りだから、緊張しないためにも部屋を案内するよ！」

「それはありがたいわ」

「じゃあまずは衝立の向こう側からね。マリー、お部屋の探検しようか」

俺がそう言ってマリーに手を差し出すと、マリーは天使の笑顔で頷いて俺の手を取った。幸せだ……

「まず衝立を越えると、ベッドと小さなテーブルと椅子があるんだ」

「凄いわね……このベッド一人用なの？　うちのベッドと同じぐらいの大きさよ……」

「これで一人用なんだよ。ちょっと大きすぎるよね」

「レオン、この机の上に置いてあるのはなんだい？」

父さんがそう言って指差したのは時計だ。
「それは時計だよ。正確な時間がわかるものなんだ」
「正確な時間？」
「そうだよ、えっと……」
時計を知らない人に時計を教えるのって難しいかも……
「父さんたちはいつも鐘の音で時間を把握してるでしょ？」
「うん」
「でもその鐘の間はどのぐらいの時間か正確にわからないから、それを分かるようにするものなんだ。例えばなんだけど……昼の鐘は時計がこの形になっている時に鳴るんだ。夜の鐘はこの位置。その間でもずっと針が一定の速度で動いてるから、後どれぐらいしたら夜の鐘がなるのか、正確に把握できるんだ」
俺がそう言うと、三人は首を傾げながらも少しだけ納得してくれたようだ。
「ということは、昼の鐘と夜の鐘のちょうど真ん中の時間を正確に把握できるってことかしら？」
「うん！　正確にわかるよ。針がこの位置に来たらちょうど真ん中だよ」
「凄く便利なものね」
「そうなんだ！　これすっごく便利だよ。うちにも一つ買う？」
「でも、これ高いだろう？」
まあ確かに高いんだよな……。俺が買ってあげるのでも良いんだけど、あまりにも何でも俺が買うってことになると、母さんと父さ

んも微妙な気持ちになると思うんだよね……
　そうだ、時計が壊れた時のために何個かアイテムボックスの中に買い足してあるから、そこから一つあげるって形にすればいいかな？　もう使わなくなったからみたいな感じで。

「父さん、俺がもう使わなくなったやつがあるからそれ欲しい？俺は新しいのがあるからもう使ってないやつがあるんだ。このまま使わずに持ってるのは勿体無いし……」

　俺が恐る恐るそう問いかけると、父さんは少し悩んだ後に頷いてくれた。

「ありがとう。じゃあそれを貰おうかな。物は最後まで使ってあげないと可哀想だからね」
「うん！　じゃあ後で渡すね！」

　渡す時に時計の読み方をイラストで書いた紙も一緒に渡そうかな。とりあえず、昼の鐘と夜の鐘、それからその間の時間がいくつかわかるだけでも便利だろう。
　そのうちは完璧に時計が読めるように教えてあげたいし、やっぱり文字も教えてあげたいな……
　どこかで時間取れないか、真剣に考えようかな。

　俺がそんなことを考えていると、マリーが時計に飽きたようで俺の腕を引っ張った。

「お兄ちゃん、私あっちの透明なやつが見たい！」
「透明なやつ？　ああ、ガラスのショーケースのことかな」
「ガラスのショーケース？」
「そう。ガラス製の物を展示する箱のことだよ。中のものが外から

見えるようになってるんだ」

マリーをショーケースの前に案内しながら、そう説明する。このショーケースはお店で使わなかったので、とりあえずこの部屋に運び込んだものだ。飾っておくものがなかったので、今は装飾品を仕舞うケースになっている。

ロジェがかなり綺麗に配置してくれているので、宝石店のような雰囲気になっている。

「凄い。綺麗なものがいっぱいだね！」

「宝石とか金や銀で作られた物だよ。マリーもつけてみる？」

「いいの！？」

「もちろん。これは全部俺のだからね」

俺がマリーに答えてそう言うと、大きく反応したのは母さんだ。

「レオン！　これがレオンのものって本当なの！？」

「そ、そうだよ……？」

「息子に先を越されるなんて……」

「ロアナ、ごめんね」

「ジャン、別にいいのよ。仕方がないことだってあの時二人で決めたんだもの」

え？　何の話？

「……何の話？」

「実はね、母さんと父さんが結婚する時、お揃いのブレスレットを買おうとしてたのよ。でも今のお家を買うお金で貯金は全部なくなって、その時は諦めたの。それでそのうち余裕ができたら買おうって言ってたんだけど、レオンが生まれてマリーが生まれて、忙しく

てタイミングを逃してたのよね……」
「そうだったんだ」
この世界にもお揃いのアクセサリーを買う習慣があったのか。でも、今までそんな話一度も聞いたことない。
「お揃いのブレスレットを買うのが結婚の時の習慣なの？」
「違うわ。ブレスレットじゃなくても、何かなくならないお揃いの物を買うと、末長く幸せになれるって言われてるのよ。大体平民はアクセサリーなんて買えないから、お揃いの手拭いや食器なんかを買うわね」
「そうなんだ。じゃあ、母さんたちは何も買ってないの？」
「いや、一応お揃いの手拭いは買ったんだよ。でもそのうちブレスレットも買おうって言ってたんだ。ロアナがどうしても欲しいって言うからね」
父さんはそう言って少し苦笑している。
「母さんは何でブレスレットが良いの？」
「商家に嫁いだ母さんの友達がブレスレットを貰ったって見せてくれて、それが凄く素敵で憧れだったのよ」
「そうなんだ……」
「でもまあ、私達にもレオンがくれたこのネックレスがあるし、これで十分よね」
母さんはそう言って、この前渡したバリアの魔法具であるネックレスを指で触った。確かにお揃いのネックレスだけど……、それはまた違うよね。
母さんの夢を叶えてあげたい。でも、俺があげたり買ったりする

のじゃ意味ないのだろう。ちょっと寂しいけど、ここは二人でお金を出して買うから意味があるんだよな。
食堂は最近お客さん多いみたいだし、ブレスレットを買うお金ぐらい貯まるんじゃないかな？

「今はブレスレットを買える余裕はあるの？」
「そうね……安いものなら買えるかしら？」
「うん。レオンのおかげで少しは余裕もできたからね」
「じゃあ思い切って買う？　俺の魔法で作ることもできるんだけど……、やっぱり二人で買ったものの方が良いよね」

俺がそう言うと、母さんと父さんは顔を見合わせて微笑んだ。そして俺に目線を合わせて口を開く。

「レオンが作ってくれるのならば、それに勝るものはないわ」
「……え？　でも、二人の思い出になるものでしょう？」
「そうだけど、二人の思い出よりも家族皆の思い出の方が嬉しいじゃない？　ジャンもそうよね？」
「そうだね。レオンがプレゼントしてくれたら何倍も嬉しいよ」
「本当？」
「もちろんよ。さらにマリーもデザインを考えてくれたらもっと嬉しいわ」

母さんがそう言ってマリーの頭を優しく撫でた。

「私がブレスレットのデザインを考えるの？」
「そうよ。母さんと父さんに似合うものを考えてくれる？」
「うん！　素敵なの考えるよ！」
「ありがとう。そうだわレオン、四人分作ることはできるの？」

ブレスレットを四人分か……二回に分ければ作れるかな。でも鉄じゃなくて他の金属も使うとなると、もっとかかるかも。

「一回では無理だけど、二回に分ければ作れるよ。鉄じゃないものも使うとなると、もっとかかるかも」

「高価なものじゃなくて良いのよ。だから鉄で十分よ」

「それなら二回に分ければ作れるよ」

「なら四つお願いしようかしら。それで四人でお揃いにしましょう。このネックレスはレオンだけ着けていないし、皆でお揃いって素敵よね」

「それ良いね。家族皆でお揃いだ」

「皆とお揃い！？　それ嬉しい！！」

家族皆でお揃い……それ良いな。かなり嬉しい。俺は自分がどんどん笑顔になっていくのを感じた。

「じゃあ、頑張って作るよ！　マリー、どんなデザインがいい？母さんと父さんもどんなのがいいか考えて」

そうして皆でどんなデザインがいいのか話し合い、シンプルな細身のブレスレットに星のデザインが付いたものに決めた。そして小さなプレートも付けて、そこには家族皆の名前を刻むことにした。

多分素敵な仕上がりになるはずだ。早く作りたいけど明日は魔法の検証だから、それが終わったらすぐに取り掛かろう！　何度も試行錯誤して完璧なものを作らないと。俺はウキウキしながらも、そう気合を入れた。

２０９、緊張の夕食会

そうして家族皆で色々と話していると、部屋のドアが開きロジェが中に入ってきた。

「ご歓談中失礼いたします。お茶をお持ちしました」

そのロジェの言葉に俺たちはまたソファに戻り、今度は落ち着いてお茶を飲んだ。うん、いつ飲んでも美味しい。

そしてそれから少しの間休憩をして、三十分経ったのでそれぞれの部屋に行き準備をすることにした。最初よりはリラックスしてるみたいだから大丈夫だろう。

「じゃあ皆、そろそろ準備をしてきてね」

「わかったわ」

「マリーも一人で行ける？」

「うん！　私もう八歳だよ？　大丈夫！」

「そっか。マリーはもう大人だったね」

「そうだよ！」

マリーは大人という言葉に嬉しそうに反応し、腰に手を当てて胸を反らしてドヤ顔だ。すっごく可愛い。でもその仕草、大人じゃなくて子供っぽいけどね。

俺はそんなマリーの様子に思わず笑いそうになりつつも、何とか抑えてマリーの頭を撫でた。

「マリーは偉いね。しっかり準備するんだよ」

「うん！」

そうして家族皆がそれぞれの部屋に行ったところで、俺も準備を始めた。

そしてそれから一時間後。

皆で俺の部屋に集まり一緒に食堂に行く予定なので、俺は皆が来るのを待っている。まず来たのはマルセルさんだ。

「マルセルさん、あまり気にかけられなくてごめんなさい。皆が思った以上に緊張してて……」

ソファに座ったマルセルさんにそう言うと、マルセルさんは顔に少しの苦笑を浮かべて言った。

「それも仕方ないことじゃろう。わしだってこういう場に少し慣れているとはいえ、公爵家の屋敷にいると考えただけで緊張で手が震えそうになるわい」

「マルセルさんでもそうなんですか？」

「そうじゃよ。わしの実家は男爵家だったからな。公爵家などと関わるようなことはほとんどなかった。さらにわしは三男じゃったから、社交の場に出されることもなかったんじゃ」

「そうなんですね……。でも皆よりは堂々としてて落ち着いているように見えます」

「そこは一応、貴族教育は受けているからな」

確かにそうか。やっぱり教育って重要だよな。

マルセルさんとそんな話をしていると、部屋がノックされ、マリーが入ってきた。さらに母さんと父さんもその後すぐに入ってくる。

「よしっ、じゃあ皆集まったし行こうか」

俺がそう声をかけると、皆は緊張した様子ながらも頷いてくれた。
そうして皆で食堂まで移動し、中に入ると既にリシャール様たちは席に着いていた。

「さあ皆さん、緊張せずに座ってください。作法などは気にしませんので、リラックスして楽しんでください」

リシャール様がさっきよりも砕けた感じでそう言った。多分あまりにも皆が緊張してるから配慮してくれたんだろう。母さんと父さんもリシャール様のその様子に、少しだけ肩の力が抜けたようだ。
そうして皆が席に着くと、リシャール様がまた口を開く。

「本当はもっと早くレオン君のご両親には挨拶をしたかったのですが、遅くなってしまい申し訳ありません。今日は身分など気にせず、友好を深められればと思っています。では、料理もお楽しみください」

そうして夕食は始まった。まず運ばれてきたのはスープとふわふわのパンだ。

「もし追加で食べたいものがあれば、使用人に告げてください。すぐに用意しますので」
「ありがとうございます。でも沢山あって十分です」
「とても美味しいです」
「これ、ふわふわですっごく美味しいよ！」
「それなら良かった。メインは肉料理ですので楽しみにしていてください」

そうして和やかに談笑しつつ、マリーの様子を皆で微笑ましげに

見つめつつ、良い雰囲気で夕食会はすぎていった。
そしてあらかた食事が終わった時、リシャール様が徐に口を開いた。

「レオン君には本当に感謝しています。私たちの助けになってもらっているのです」
「そんな……レオンが助けになっているのなら良かったです。ズレているところもある子ですが、見捨てないでやって下さい」

リシャール様の言葉に母さんがそう返した。ズレてるって……母さん俺のことそんなふうに思ってたのかよ！

「レオンを、よろしくお願いします」

父さんもそう言って頭を下げた。

「こちらこそお礼をしなければならないのです。本当にレオン君の存在は大きいです。特にその魔法の才能は素晴らしい。ご両親もレオン君の魔法については知っているのですよね？」
「はい。全部の属性魔法と、さらに凄い魔法、空間魔法？　が使えるということはレオンから聞きました」
「その魔法は、この国の行く末を変えられるほどの大きな力です」
「この国の行く末……？」

父さんと母さんはその言葉の意味がよくわからなかったようで、首を傾げている。

「この国の未来は、レオン君によって変えられるということです」
「レオンが国の未来を？　いや、流石にそこまでは……」

父さんはそう言って話を信じられない様子だ。まあ、全部の属性魔法が使えることの凄さは貴族こそ理解しているから、二人がよくわからなくても仕方ないだろう。それに二人は、国なんて大きな単位の行く末を考えたことなんてないのだろうし。

「レオン君のご両親。レオン君の力は、ある人は全てを投げ打ってでも欲しがり、ある人は全てを投げ打ってでも消したくなるようなものなのです」

リシャール様が二人の顔を交互に見つつ真剣な表情でそう言うと、二人はその真剣な様子に気圧されたのか、唾をごくっと飲み込み小さく頷いた。

「そのような力ですから当然危険も伴います。レオン君本人だけではなく、そのご家族にまで」

「家族も、ですか？」

「はい。怖いことを言ってしまい申し訳ありません。しかし、現実は認識しておくべきだと思います。レオン君を手に入れたい、または陥れたいと考えた場合、一番簡単なのはご家族を盾にレオン君に何かを迫ることです。それゆえに、レオン君本人よりもご家族の方が危険だと言っても過言ではありません」

母さんと父さんはそんなリシャール様の話を聞いて、顔を青ざめさせている。唇や手は少し震えている様子だ。

……本当はこの話、俺がしないといけないことだよな。

影が守ってくれているって聞いてたし、怖がらせない方がいいだろうと思って今まで話してこなかったんだ。

でも皆を怖がらせないためじゃなくて、俺が皆に疎ましがられる

のが怖くて言えなかったんだよね……

リシャール様はそんな俺の気持ちをわかって、今ここでこの話をしてくれてるのかな。リシャール様、本当にありがとうございます。それから、皆巻き込んでごめんね……

そうして俺が皆を危険に巻き込んでいることに落ち込んでいると、父さんの少し震えた、でも決意を込めた声が聞こえてきた。

「ぼ、僕たちも危ないことは、わかりました。でも、私たちはレオンの親なので、子供に迷惑をかけられるのは当然ですから」

そしてそれに続いて母さんが声を発する。

「そ、そうです。親は子供に迷惑をかけられると嬉しいものですから。だから、レオンは母さん達のことは気にせず、伸び伸びとやりたいことをやりなさい」

母さんはそう言って俺の方を向き、俺を安心させるように優しく微笑んでくれた。父さんも同じように微笑みかけてくれる。

「……母さん、父さん、本当にありがとう……。俺、迷惑ばっかりかけてるのに、見捨てないでくれてありがとう」

「迷惑だなんて思ってないし、子供は親に迷惑かけて育っていくものなのよ。レオンは家を出るのが早すぎたぐらいだから、たくさん迷惑をかけてちょうど良いわ」

「そうだよレオン、見捨てるなんてあり得ない。伸び伸びとやりたいことをやればいいよ」

……やばい、泣きそうだ。絶対、絶対に皆は俺が守る。本当に家族の皆が大好きだ。

「……うん、ありがとう。皆は絶対に俺が守るよ」
俺は涙声でそう言った。
「レオンが守ってくれるのならば心強いわ」
「レオンは自慢の息子だからね。頼りにしてるよ」
「……うん！　安心してね」
俺たちの話がそうしてお互いに笑い合ったところで、リシャール様がまた口を開いた。
「突然このような話をしてしまい、申し訳ございませんでした」
「いえ、話してもらえて良かったです」
「そう言っていただけるとありがたいです。皆さんのことは公爵家の者も影から護衛しておりますので、ご安心くだされば と思います。……事後承諾になってしまい申し訳ないのですが、護衛はこれからも継続してよろしいでしょうか？」
「私達を、護衛してるのですか？」
「はい。建物の外からですが、護衛を指示してあります」
「それは、も、もちろん、ありがたいです……」
父さんは自分に護衛がいたという事実にかなり驚きながらも、なんとかそう返した。
「それは良かったです。ではこれからも継続させていただきますので、ご心配しすぎずにいつも通りお過ごしください」
「は、はい、あの、本当にありがとうございます」
そうして真面目な話もしつつ夕食会はすぎていき、ついにお開き

となり各々自室に戻った。
皆は緊張の連続と慣れないことをした疲れで疲労が蓄積していたようで、すぐに自分の部屋に戻っていった。マリーは話し合いの途中で寝落ちして、担当の使用人さんに部屋まで連れて行ってもらっていた。
これならば緊張で寝られないということはなく、皆朝までぐっすりだろう。そう安心して、俺もその日はすぐに眠りに落ちた。

２１０、空間魔法の検証

次の日の朝。
俺はいつもより早い時間に目覚め、いつもより素早く準備を済ませた。今日は朝早くから魔法の検証が始まるのだ。
集合場所は屋敷の裏手にある、俺が即席で作った魔法検証場だ。かなりの高さがある壁を土魔法で作りその壁で広範囲を覆った。その内側で魔法の検証をするのだ。
万が一にも外から侵入されないようにバリアで壁の内側を覆ってあるし、完璧だと思う。出入り口も皆が中に入ったら塞ぐ予定だ。

俺が集合場所に向かうと、すでに参加してくれる使用人の方々は集まっていて、マルセルさんも既に来てくれていた。

「マルセルさん、おはようございます」
「ああ、おはよう」
「お疲れですか……？」
「公爵家にいてぐっすり寝られるほどわしは図太くないんじゃ。ただ一晩よく寝られないぐらい大丈夫じゃよ」

マルセルさんって、意外と繊細だったんだな……

「マルセルさん、今回は俺のわがままで参加してくださって、本当にありがとうございます」
「いいんじゃよ。レオンの役に立てるのならば嬉しいからな」

マルセルさんは小さな声でそう言って、誤魔化すように欠伸をし

た。

「ありがとうございます」

そうしてマルセルさんと話をしていると、母さんと父さん、それからマリーがやってきた。

「皆おはよう。昨日はよく眠れた？」

「うん！」

マリーは朝から元気一杯にそう答えてくれた。母さんと父さんは顔に疲れが滲んでいる様子だ。

「二人は眠れなかった？」

「いや、ぐっすり眠れたんだよ。だから体は疲れてないんだけど、気持ち的に疲れてるんだ……」

「そうね。私もなんだか疲れてる気がするわ……」

「ごめんね。もう少し付き合ってね」

「ええ、もちろんよ」

それからしばらく皆で談笑していると、カトリーヌ様、フレデリック様、ジュリアン様が屋敷から出てきた。

「皆様、おはようございます。本日はよろしくお願いいたします」

「ええ、もちろんよ」

そしてそのすぐ後に、リシャール様とリュシアンがステファンとマルティーヌを連れて来た。これで全員揃ったな。

「レオン来たわよ。私、今日をとても楽しみにしていたの！」

「マルティーヌ様、おはようございます。わざわざお越しいただきありがとうございます」
「こんなに面白そうなこと、逃したら損だからな」
ステファンがいつになく楽しそうにそう言っている。ステファンは魔法の検証とかそういうのが好きなのか。
二人には王立学校の帰りに馬車の中で、この魔法の検証についてと俺が空間魔法を使えることについて話した。実際に使ってみせた時は本当に驚いていたけれど、その時は馬車の中だったので少し見せただけだから、今日の検証を楽しみにしていたらしい。
「ご期待に添えるかどうかわかりませんが、本日はよろしくお願いいたします」
「ああ、よろしく頼む。それよりもレオン、後ろの方々は？」
「ああ、紹介いたします。私の父と母、それから妹のマリーです」
「まあ、レオンのご家族なのね。私はマルティーヌ・ラースラシアと申します。これからよろしくお願いいたします」
「私はステファン・ラースラシアです。よろしくお願いします」
二人は俺が紹介すると、家族皆に向けて丁寧に挨拶をした。
「皆、この方々はこの国の第一王子殿下と第一王女殿下だよ」
「お、王子様と王女様……？」
「そう。王立学校で仲良くさせていただいてるんだ」
「王子様と王女様と、仲良く……？」
母さんと父さんはあまりにも上の存在の登場に、かなり混乱しているらしい。
事前に知らせておいてあげた方がよかったかな？　でもそうした

ら昨日の緊張感がより強かっただろうし……難しいところだ。できる限り緊張しないように驚かないようにと思ってるんだけど、凄い人たちすぎてどうしても難しい。

「お兄ちゃんのお友達なの？」
「そうだよ」
「じゃあ、私もお友達になれるかな？」

マリーが少しだけ不安な様子でそう聞いてきた。
俺は、二人は偉い人だから友達にはなれないんだ、そう言おうと思ったけれど、不安気に聞いて来たマリーが本当に、本当に可愛かったので言えなかった。
なのでステファンとマルティーヌの方をチラッと見て、マリーと友達になってくれるかを確認する。すると二人は頷いてくれたので、俺は笑顔でマリーに向き直った。

「マリー、お友達にはなれるけど、凄い人たちだからちゃんと様をつけて呼ぶんだよ。ステファン様とマルティーヌ様ね」
「ステファン様と、マルティーヌ様……？」
「そう。覚えた？」
「うん！」
「じゃあ行っておいで」

俺がそう言うとマリーは二人の下に駆けて行き、笑顔で可愛らしく挨拶をしている。二人はそんなマリーの様子に嬉しそうだ。とりあえず仲良くなれそうで良かったな。
そうして二人とマリーが話している様子を微笑ましく見守っていたら、リシャール様に話しかけられた。

「ではレオン君、全員揃ったので出入り口を塞いでくれるか？」

「かしこまりました。では塞ぎますね」
俺は一箇所だけ開けていた出入り口を完全に塞ぎ、誰も出入りができないようにした。
「これで大丈夫です」
「ありがとう。では皆聞いてくれ」
リシャール様がそう言うと、皆は会話をやめてリシャール様の方に体を向ける。
「これからこの場で行われた検証については他言無用だ。ここにいる者は信頼できるから大丈夫だとは思うが、今一度確認しておく」
リシャール様のその言葉に皆が力強く頷いた。
「よしっ、では早速魔法の検証を始めよう。まずは魔物を使った検証からだ。この箱の中に魔物が一匹入っている。危険度はかなり低いが、急所に攻撃を喰らえば危険なので十分注意してくれ」
リシャール様がそう言って示したのは、俺の胸ほどの高さの鉄の箱だった。さっき身体強化魔法が使える使用人数人で運んでいたことから見ても、かなり頑丈なものだろう。
中にはどんな魔物が入っているんだろうか？
「リシャール様、中にはどのような魔物が入っているのですか？」
「ツノウサギだ。魔物の中では弱い部類だが、風魔法を使い素早く動くので、慣れていないものには厄介だと言われている。基本的には風魔法を使い加速をし、ツノで突進する攻撃をしてくる」

それ、結構怖いな……油断したらダメなやつだ。

「できれば箱から出さずに検証を終えられたらと思っている。それでも大丈夫か？」

アイテムボックスの検証は箱に入った状態でも大丈夫だろう。転移は……一応箱なしでもやってみたいかな。多分関係ないだろうけど、せっかくの機会だから試しておきたい。

「魔物を転移させられるのかだけは、箱なしで試してみたいです」

「分かった。ではそれ以外は箱から出さずに頼む」

「かしこまりました。まずは箱に入ったまま転移させられるのかを試してみます」

そうして俺は箱に手を触れ、まずは自分と一緒に転移できるかを試してみた。すると問題なく転移できる。

「おおっ」

転移魔法を見て皆から歓声が上がった。やっぱりいつ見ても転移は興奮するみたいだ。

それから箱に入れたまま色々と検証をして、やっぱり転移は俺と一緒じゃないとできないことが分かった。ただ岩などと同様に俺が触れてなくても、魔力を広げれば同じ場所へと転移することはできる。

あとの検証は箱から出してみてかな。

「リシャール様、箱から魔物を出してみたいのですが構いませんか？」

「十分注意してくれ」
「かしこまりました」

リシャール様に返答して、まずは箱と自分の周りをバリアで覆った。こうしておけば万が一何かあっても他の人に危害が加わることはない。
そして厳重な蓋を開いた。開く前に蓋があった部分をバリアで塞ぐのも忘れない。

……ガキンッ。

蓋を開いた瞬間、上に向かってツノウサギが突進して来たみたいだ。バリアをしといて良かった……
上から中を覗いてみると、そこには日本によくいたウサギよりも二回りほど大きくて、額の部分に大きなツノが生えているウサギがいた。顔は可愛いというよりも、ちょっと怖い感じだ……。それに毛並みもふわふわというよりも硬くて指に刺さりそうな毛が生えているように見える。
この魔物が弱い部類なのか。魔物って予想以上に怖い存在かも。

そんなことを考えつつバリアでツノウサギを覆い、俺の目の前まで運んだ。そしてバリアの箱ごと、俺と一緒に転移させてみる。うん、問題なくできるみたいだ。
これは……魔物も他の物と同じように転移させられるって結果で良いだろう。転移には生物や無機物だったり、その辺のことは関係ないのかもしれないな。

「リシャール様、魔物も他と同じように転移させられるようです」
「分かった」
「では次の検証にいきますね。アイテムボックスの検証ですので、

まずはこの鉄の箱ごとツノウサギを仕舞ってみます」

俺はバリアから鉄の箱の中にツノウサギを戻し、箱ごとアイテムボックスに仕舞おうとした。

……あれ？　仕舞えないかも。

何度やってもうまくいかない。箱から出したらできるのだろうか。そう考えてツノウサギをさっきと同じように箱から取り出し、アイテムボックスに入れようとしてみる。しかしこれも上手くいかない。ツノウサギを取り出した鉄の箱は問題なく収納できる。

ということは、魔物は収納できないってことだろう。何か法則があるのかな……

「リシャール様、魔物はアイテムボックスに収納できないようです。……これは仮説ですが、魔力がある生物は収納不可能なのかもしれません」

「ふむ、そうなのだな。では死んだ魔物ならばどうだ？」

死んだ魔物……そっか。それも検証すべきだよね。それって、このツノウサギを殺して検証するってことだ。

俺は一瞬だけツノウサギを殺すのを躊躇った。今まで俺が殺したことがあるのは、いずれも自分を襲って来ていた動物だけだったからだ。

このツノウサギは、今俺の命を脅かしている訳ではない……。でも、この世界で魔物を殺すのを躊躇っていちゃダメだよな。その一瞬の油断が命取りになるかもしれない。魔物の森で俺が魔物を見逃したら、その魔物が他の人を襲うかもしれない。

そう考えて一度目を閉じて息を吐き、決意を固めて顔を上げた。そしてさっきと同じようにバリアでツノウサギが外に出られないようにして鉄の蓋を開ける。ツノウサギはいつでも攻撃できるようにか、こちらを睨むように見ている様子だ。

「……ごめんね」

俺は小声でそう呟いて、土魔法で小さめのバレットを箱の中に作り出し、ツノウサギの脳天に向けて放った。

ツノウサギは狭い箱の中で逃げることはできなかったようで、そのまま攻撃を受けて息絶えた。

俺はその様子を静かに見つめ、震えそうになる手をぎゅっと握って押さえつける。そして一度深呼吸をして気持ちを落ち着けてから、ツノウサギをアイテムボックスに仕舞った。するとさっきは全く仕舞えなかったのに、当たり前のように収納できる。

ということは、魔力を持った生きているものが収納できないのかもしれない。

そう結論づけて顔を上げた。

「リシャール様、死んだ魔物は収納可能なようです。ですので、魔力を持った生きているものが収納不可の可能性が高いと思います」

「そうか、それは朗報だな。それならば万が一にも事故が起きて、人が巻き込まれる心配は低くなった。ただ絶対ではないのだ、これからも気をつけてくれ」

「かしこまりました」

そうして魔物を使った検証は終わり、次は転移魔法の検証をする

ことになった。

211、安らげる場所

俺は気持ちを切り替えて、こちらの様子を見守ってくれていた皆の方に向かう。

「皆さん、これから転移魔法の検証をしたいと思います。手助けをよろしくお願いいたします」

「うん！　私がお手伝いするよ！」

「マリー、ありがとう」

俺はマリーの無邪気な笑顔に、冷えた心が少しだけ温かくなる気がした。でも、マリーの頭を撫でる気にはなれないな……

そう思っていると、マルティーヌが近くにやってきて俺の顔にそっと触れる。

「レオン、顔色が悪いけど……大丈夫？」

「うん。もちろん……」

俺はそう言って大丈夫だと笑顔を浮かべようとしたけれど、それはうまくいかず変な顔になってしまった。

ダメだ、上手く笑えないかも。そう思ったら急にこの世界に一人きりのような寂しい気持ちが湧き出てきて、また気持ちが沈んでしまう。最近はもうこんな気持ちを感じることなんてなかったのに……

俺はそんな寂しい気持ちを自分だけで上手く消化することができず、思わずマルティーヌの温かい手に縋ってしまった。ゆっくりと手を動かして、いまだ俺の顔に触れているマルティーヌの手に触れる。

マルティーヌなら俺の前世を知っているから、今の複雑な心の内も話せる……。そう思ったらどうしても我慢できなくなり、俺は思わず転移魔法を使った。マルティーヌと俺だけに。

そうして転移した先は屋敷の中の一室だ。今日の転移魔法を検証するために用意した部屋で、この部屋には絶対に入ってはいけないと他の使用人は厳命されている。

たくさんの人が入れるように家具は全て端に寄せてあるので、凄く広い空間が広がっているように感じる。そんな部屋の真ん中で、俺とマルティーヌは二人でさっきと同じ態勢でいる。

「え……？　レオンが転移魔法を使ったの？」

マルティーヌが周りの景色が変わったことに気づいたようで、部屋を見回しながらそう言った。

「うん……。急にごめんね」

「別に私は良いけれど、他の皆は心配しているのではないかしら？」

「すぐ戻るよ。でもちょっとだけ……」

俺はそう言って、マルティーヌの体を優しく抱き寄せた。安心する……

「ちょっ、ちょっと、レオン！？」

「ちょっとだけこうしてていい？　落ち着くんだ……」

「別に良いけど、どうしたの？　先程も顔色が悪かったわよ？」

「うん。さっきツノウサギを殺したでしょ？」

「ええ、それがどうかしたの？」

「俺が前いた世界では、生き物を殺すなんてほとんどの人が経験し

ないんだ。だから、ちょっと辛かった……」

俺がそういうと、マルティーヌは不思議そうに首を傾げた。

「でも、前の世界でも肉料理はあるのよね？」

「うん。だから前の世界でもその役割を担ってくれる人はいたんだと思う。でも、そんなことを想像することもなく生きていける世界だったんだ。俺はそういう厳しさを全く感じずに生きてきたから……。今まで熊を殺したりしたこともあったんだけど、あの時は命を狙われてて必死だったから大丈夫だったんだ。一方的にって結構キツイんだね……」

俺がゆっくりとそう話すと、マルティーヌは少し時間を置いてから答えてくれた。

「そうね……。私も生き物を殺すのは可哀想だと思うこともあるわ。王族の教育にあるのよ。生き物を殺す場面を目を逸らさずに見ること。それから処刑の場面を目を逸らさずに見ること。そういう教育があるの。王立学校に入る前に全てこなさないといけないわ。生き物の方は食事に感謝をするように、そして処刑の方は、目の前で護衛が殺されても動揺せずに行動できるように」

俺はその話を聞いて、思わずマルティーヌから体を離し顔を覗き込んでしまう。

マルティーヌは、少しだけ辛そうな顔をしていた。

「王族は狙われることも多いし、戦争となった場合に戦場に赴かなければならないことがあるかもしれない。だから、人の死に動揺しないようにと教育されるの。でも辛いわ。辛いけど……、私がやらなければならないことだと思っているわ」

そう言って顔を上げたマルティーナの顔は、凄く、凄く、綺麗だった。

「だからレオンも頑張りましょう。私も頑張るから、一緒なら頑張れるでしょう？」

そう言っていつもの笑顔で、いや、いつもよりも大人びた笑顔で微笑んでくれた。

「うん、ありがとう。なんか元気出たよ。大切な人たちを守るためにも、頑張るよ」

「頼りにしてるわ！」

マルティーヌはそう言って、今度こそいつもと同じ笑顔で、パァッと花が咲くように笑った。

……好きだな。

俺は素直にそう思った。

マルティーヌの婚約者って、俺じゃダメなのかな。いくら全属性が使えるとは言っても、やっぱり元平民じゃダメかな……この世界って身分が重要だし。

俺が、本当に使徒様だったら良かったのに。

頭の中でそんなことを考えていると、マルティーヌが少し焦ったように声を発した。

「あっ、早く戻らないと！　多分皆心配してるわよ？」

「そうだった。戻ったら、なんて言えばいいかな……？」

突然転移しちゃったんだ。絶対理由聞かれるよな……
うわぁ～、最悪だ。何か言い訳考えないと。

「レオン、言い訳は私に任せなさい！」

俺がどうしようか途方に暮れていると、マルティーヌが自信ありげな様子でそう言ってくれた。

「本当に任せていいの？　大丈夫？」
「ええ、こういう時は身分が高いと便利なのよ。はい、じゃあ転移をお願いするわ」

マルティーヌはそう言って手のひらを差し出した。俺は少し緊張しつつその手を軽く握り、転移魔法を使った。
そしてまた皆の目の前に戻る。

皆はそのままの場所で談笑をしていたようで、特に焦っているような様子はなかった。とりあえず大事になってなくて良かった。

「レオン、突然どこかに行くなんて酷いぞ！　せっかく転移するのを楽しみにしていたのに」

俺とマルティーヌが戻ると、まず一番に口を開いたのはリュシアンだ。リュシアンのその言葉で場の雰囲気がかなり和んだ。リュシアンの転移好きが役に立ったな。

「リュシアンごめんなさい。私がレオンに頼んで先に転移させてもらったの。だって、リュシアンばかり先に体験してるだなんてずるいじゃない？」

マルティーヌはそう言って、リュシアンに向けて少しだけ頬を膨らませてみせた。

「そ、それは……まあ、確かに、そうですが」

リュシアンはそんなマルティーヌにたじたじだ。

「レオン！　それならば私も先に体験したい」

今度はステファンがそう言って前に出てきた。皆転移を体験したいみたいだな。

「じゃあ、とりあえず体験したい人に一人ずつ転移してもらい、それが終わったら全員での転移を試してみようと思います」

そうして何人か一人ずつ転移を試してもらった後、集まった全員で転移してみた。

結果は大成功。消費魔力量もほとんど増えてないことから、転移の人数はほとんど制限がないという結果になった。

ただ、皆に広範囲に散らばってもらい転移をした時が一番魔力の消費量が多かったから、数ではなく面積は関係があるらしい。

そうして魔法の検証は、大きな問題が起こることもなくスムーズに終わった。

212、魔法具と癒し

「では皆、これにて魔法の検証は終了とする。使用人は通常業務に戻るように。それ以外の者も各自解散だ」

リシャール様がそう言って、使用人の方々は素早く屋敷に戻っていく。ジュリアン様とフレデリック様も仕事に戻り、カトリーヌ様も屋敷に戻っていった。

家族の皆とマルセルさんは、戻っていいのか迷っている様子だ。俺はそんな皆と一緒に屋敷に戻ろうとそちらに向かっていると、リシャール様に呼び止められた。

「レオン君、ちょっといいか？」

「はい。何でしょうか？」

「アイテムボックスと転移は、魔法具にできるのだろうか？」

そういえば、バリアは魔法具にしてたけどその二つは作ったことなかったな。

「試したことがありません」

「では、今ここで試してみてくれないか？　今日試してもらおうと思い魔石と魔鉄は持ってきてある」

「かしこまりました。では、試してみます」

「ありがとう」

そうして俺はリシャール様から魔石と魔鉄を受け取った。アイテムボックスと転移の魔法具となると、まず一番の問題は消費魔力量だな。転移はかなり魔力を消費するから、連結魔石を使ってもそこ

まで遠くへの転移はできないだろう。
俺はそんなことを考えつつ素早く連結魔石を作り、そこに転移魔法をイメージして空間属性の魔力を込めた。とりあえず見える範囲で数十メートル先に転移できるように魔力を込めてみたんだけど……、これ、失敗しそうだ。
なんだろう、なんとなくだけど、魔力を込める時に魔法として完成せずに、魔力だけが魔石に流れ込んでいくような感じがしたのだ。

でも魔石は綺麗な黒になっていて、空間属性の魔力が込められているのは確実だ。
俺は魔法が発動するのか試してみようと思い、連結魔石を右手に持ち魔鉄を左手に持ち、二つを触れ合わせた。

……何も起こらない。

「リシャール様、転移を魔法具にするのは難しいみたいです。なんといいますか、魔石の中に転移という魔法は入らないのです。私にも理由はわからないのですが……」
「ふむ。……そうか、それならば仕方がない。アイテムボックスの方も試してもらえるか？」
「かしこまりました」

俺は先ほど転移魔法を込めようとして失敗した連結魔石に、今度はアイテムボックスの魔法をイメージして魔力を込めた。すると、今度はすんなりと魔力が込められる。
こっちは成功するかも。
連結魔石に魔鉄を触れ合わせてみると、魔石から少し上空にアイテムボックスの入り口が作り出された。
「リシャール様、アイテムボックスはできたみたいです」

「おおっ、凄いな……」
「物が入るのか試してみますね」
俺は自分のアイテムボックスから熱々のスープを取り出して、魔法具の方に仕舞ってみた。すると問題なく収納できる。おおっ、凄い。後は取り出せるかだけど……、これって取り出せるのか試すためには、この魔法の中に腕を入れないとだよね？　それは怖い……。
「リシャール様、とりあえず普通に収納できます。しかしこの中に腕を入れるのは怖いので、どうやって取り出すのかが問題ですね。人間は中に入らないという確証が持てれば良いのですが……」
「確かにそうだな。レオン君、その魔法具を預からせてくれないか？　厳重に保管して決して悪用しないと誓おう。そして、人間が中に収納されるのかされないのか、された場合どうなるのか。それから魔法具でも時間停止機能はあるのか、どの程度の量を収納できるのか。さらに魔力が切れた場合中に収納されたものはどうなるのか。これらの検証をしたいと思っている」
人間が収納されるのか検証するって……、実際に人間でやるってこと……？
「人間が収納されるかって、実際に試すのですか……？」
「ああ、死刑を受ける者で試すことになるだろう」
死刑を受ける者で試すのか……、それって、ありなのかな。この世界では普通にありなんだろうな……
死刑を受けるほどの重罪を犯した人なんだから、同情する余地なんてないのだろう。でも、こんな実験みたいなことで死んじゃうかもしれないなんて、しかもそれが俺の魔法によってだなんて……

自分が間接的にでも人を殺してしまうかもしれないと考えるだけで、怖くて手が震える。
でも、これは乗り越えないといけないことだ。さっきマルティーヌとも頑張るって約束したんだ。

俺は震える手をぎゅっと握りしめてなんとか震えを止めて、魔法具をリシャール様に渡した。

「よろしく、お願いします」
「ありがとう。結果は改めて報告する」
「はい」

そうしてこの世界の厳しさや俺の弱さを痛感した魔法の検証は、完全に終わった。

リシャール様は俺が震えているのがわかったからなのか、魔法具を受け取った後労わるような視線を向けてくれたが、俺の後ろをチラッとみるとそちらに軽く頭を下げて屋敷に戻って行ってしまった。
その様子に不思議に思い後ろを振り返ると、そこには母さんと父さん、マリーがいた。

「お兄ちゃん、大丈夫？　お顔が真っ青だよ？」

そう言って俺の手を握ってくれたマリーの手はとても温かくて、俺は自分の手が冷え切っていることを今更実感した。

「マリーありがとう」

マリーは凄い。マリーが触れて温かくなった手のひらから、じんわりと全身がほぐれていくような気がする。そこで全身にも力が入

っていたことに気づく。

「お兄ちゃん冷たいね」

「うん。でもマリーのおかげでどんどん温かくなってるよ」

「それなら良かった！」

「うん。本当にありがとう」

俺はマリーにそう言って、マリーをぎゅっと抱きしめた。

「ちょっとお兄ちゃん、苦しいよ？」

「でもお兄ちゃん寒いんだ。ちょっと我慢して温めてほしいな」

「もう～、しょうがないなぁ～」

マリーは少し不満気にそう言いつつも、俺をぎゅっと抱きしめ返してくれた。

マリーは俺の癒しだ。マリーがいると強張った心もするっと解けていく。マルティーヌに対してとはまた違う感情だけど、マリーのことも大好きだ。

「マリー、今日は楽しかった？」

「うん！　魔法凄かったの！　転移ってやつ！　またやりたいなぁ」

「マリーがやりたい時はいつでもやってあげるよ？」

「本当！？　じゃあ今！　もう一回！」

マリーはキラキラと期待した瞳を俺に向けてくる。俺はその様子に自然と笑みが溢れた。

「ふふっ……そんなに楽しかった？」

「うん、すっごかった！　気づいたら別の場所にいるんだよ！」

「じゃあもう一回やろうか」

俺はそう言ってマリーの両手を握りしめ、母さんと父さんの後ろ側に転移した。そしてマリーにしーっと唇に手を当てて静かにするように言って、母さんと父さんを指差す。二人は突然消えた俺たちをまだ見つけられてないみたいだ。

するとマリーは俺の言いたいことが分かったのか、キラキラした瞳で大きく頷いてくれた。

「せーのっ」

俺はかろうじてマリーに聞こえるぐらいの声量でそう言って、マリーと共に母さんと父さんに後ろから抱きついた。

「わぁ！！」
「きゃっ、ちょっと、レオン！」
「うわぁ、っと、マリー？」

二人はかなり驚いた様子で声を上げたが、後ろを振り向いて俺達だとわかると、すぐに安堵のため息を吐いた。母さんはちょっと怒ってるけど。

「びっくりするじゃない！」
「ははは っ、ごめんね。母さん凄く驚いてたよ」
「もうっ、驚かすのはダメって言ってるのに」

母さんはそう言いつつも、顔は笑顔だ。

「きゃ～、父さん凄い！」

マリーは父さんに捕まって抱き上げられたようで、キャッキャっ

と楽しそうだ。
その様子を見て俺の顔にはまた笑みが浮かぶ。その頃には身体中がぽかぽかと温かくなって、気持ちも晴れやかになっていた。

２１３、ヨアンの要望

魔法の検証をしてから数週間。
俺は基本的にのんびりと学生生活を謳歌していた。放課後には、魔法具研究会の教室で皆と魔法具談義をしたり普通に雑談をしたりと、のんびりとした時間を過ごした。
さらに回復の日には転移魔法を使って実家に帰り、マリーと森に行ったり家族皆でご飯を食べたりした。マルティーヌ達と頻繁にお茶会をやる時間も確保できるようになった。

そんな今までの生活と比べたらかなりゆったりとした毎日を過ごしていたある日、ヨアンにお店に来て欲しいと呼ばれた。

「ロジェ、ヨアンはなんの話があるか言ってた？」
「いえ、ただ相談があるとだけ伺っております」
「そっか」

じゃあ、ケーキが出来上がったわけじゃないのかな？

「何か問題かな？」
「そうですね……、何か困り事があるような雰囲気でしたが、そこまで深刻な様子ではありませんでした」
「そうなんだ……」

ヨアンの仕事に大きな問題があったら、お店が開店できるかどうかの問題になる。ちゃんと話を聞かないとだな。

そうしてロジェと話しつつ馬車に揺られ、お店に辿り着いた。
馬車を降りて厨房に向かうと、厨房には必死にクリームを塗っているヨアンと、その手伝いをするポールとリズがいる。凄く真剣な様子だ。これは……、まだ話しかけない方が良いな。

俺はヨアン達がキリの良いところまで作業を進めるのを待ち、それから声をかけた。

「……ヨアンお疲れ様。ポールとリズもお疲れ」
「レっ、レオン様、いつからそこに！？」

本当に気づいてなかったんだな。凄い集中力だ。

「数十秒前ぐらいだよ。そんなに待ってないから大丈夫」
「わざわざ足をお運びくださったのに、お待たせして申し訳ございません」
「気にしないで。何かあったら気軽に呼んでくれていいから。それよりも真剣に仕事をしてくれて嬉しいよ」
「ありがとうございます」
「それで、今日は何の用だったの？　問題でもあった？」
「いえ、問題というよりも相談なのですが……。こちらを見ていただけますか？」

そう言ってヨアンが差し出してきたのは、先程真剣な様子で作っていたショートケーキだ。でも、なんか、ちょっと不恰好だ。

「どう思われますか？」
「そうだね……、ちょっと不恰好かな」
「やはりそうですよね……。どう頑張ってもこのような仕上がりになってしまうのです。そこでなんとか綺麗に塗れるようなアイデア

がないかと思いまして、レオン様にご連絡いたしました」

ヨアンはそう言って、申し訳なさそうに頭を下げた。

そういえば今思い出したんだけど、日本では生クリームを塗るために台が回るんだっけ？　テレビでそんなのを見たことがある。それに、生クリームで飾るための絞り袋と金具もあったはず。

……なんで今まで忘れてたんだ！　それが全部なければ流石に難しいよね。

「ヨアン、本当にごめん。色々と必要なものが足りてなかったかも。ちょっと待っててくれる？　魔鉄と魔石は少し持ってるから、改善できるものを考えてみるよ」

「もう思いつかれたのですか！？」

「いや、今というか、前から少し考えてたんだ。でも忘れてて、今それを思い出しただけだよ」

「それでも凄いです！」

ヨアンが尊敬の眼差しでこちらを見つめてくる。

うぅ……俺はそんなに凄い人じゃないのに、ヨアンの評価がどんどん上がっていくよ。なんか騙してるみたいだ。ヨアンごめんね。

「そんなに凄いものじゃないよ。それで、少し従業員の休憩室を借りてもいい？」

「もちろんです！　いくらでもお使いください！」

「今日は他の皆はいないの？」

「警備と給仕の者達は、勉強会をするということで早めに寮に帰りました」

「そっか、ありがとう。じゃあ休憩室借りるね」

そうして俺は従業員の休憩室に入った。他には誰もいないので俺

一人だ。あっ、ロジェもいるから二人だな。

「ロジェ、これからこの部屋に誰も入れないようにしてくれる？アイテムボックスを使いたいんだ」

「かしこまりました」

ロジェのその言葉を聞いて、俺はアイテムボックスから色々と材料を取り出した。魔石と魔鉄。それから紙とインクも必要だな。

まずは考えやすそうな絞り袋から作ろう。とりあえず袋部分は、ビニールなんてないので革袋にするしかない。出来るだけ薄い革袋を使って、使い捨てにできないからピュリフィケイションで毎回綺麗にすることにしよう。

革袋はどれが良いだろうか……、うーん、とりあえずこれかな。ちょっと古いやつだけど使い込まれてるから革は柔らかい。でもいくらピュリフィケイションで綺麗にしても、これに生クリームを直接入れるのは嫌だな……。でも今日だけは仕方がないか。後でもっと適したものを見つけよう。

そうしてとりあえず革袋を決めて、ピュリフィケイションの魔法具を作り完璧に綺麗にした。よしっ、後は絞り袋の金具部分だ。

皆は俺が全属性を使えることも土魔法で鉄が作り出せることも知らないから、今回は魔鉄で作ろう。形は……なんか、ギザギザしたやつだった気がする。

とりあえず、色々作って試してもらうしかないな。丸い形、星のような形、ギザギザした形、四角、三角、ひし形、思いつく限りいろいろな形を作った。

とりあえずこれで試してもらって、出来の良いものを後で作り直そう。

よしっ、これで絞り袋は終了だな。次は回る台だ。でも回る台っ

て……、改めて考えるとどんな仕組みだったのだろうか？
やばいかも、仕組みが一切思い浮かばない。その場で回るものと言えば、中華屋さんのテーブルとか、回る椅子とかもあったよね。でも、あれの裏側って見てみたことないし……
ダメだ、全く見当がつかない。とりあえずお盆の下にキャスターでも付けて、その下にキャスターが沿うように道を作ればいいのか？

そう考えてお店にあったお盆に魔鉄でキャスターをつけてみたけど、何か、違う気がする。
いや、でもやってみないとわからないよね。俺は自分にそう言い聞かせ、魔鉄で下に敷くレールのようなものを作り、その上にキャスター付きのお盆を置いて必死に微調整した。

その結果……何とか回るようにはなった。でもとにかく動きがスムーズじゃない。引っかかってガツッと止まるし、気づいたら脱線してるし。これだと結局生クリームがガタガタになって使えないだろう。
これキャスターじゃなくて、もっと滑らかに回るやつ何かないかな。滑らかに転がるものといったら……

そこまで考えた時、ふと魔石が目に入った。魔石って例外はあるけど基本的には球体だから、何かの中に入れたりしないとコロコロと転がっていくんだ。これ、使えないかな？
そう考えた俺は、お盆とレールの間にキャスターではなく同じ大きさの魔石を選び並べてみた。
すると、さっきよりよほどスムーズにお盆が動く。

「おおっ、これ凄い」

俺は思わずそう声に出してしまった。

これをもっと安定させて、球がどこかに飛び散らないようにすれば意外とうまくいくかも。
それからしばらく、俺は回るお盆を作るために奮闘した。試行錯誤しまくってどうにか実用できるものを作り出そうと頑張った。

「あぁ！　もう無理！」

でもそんなに上手く行かなかった。俺の貧相な知識と発想力じゃ不可能だ。
とりあえず使い勝手はそこまで良くないけど、お盆がスムーズに回るという一点だけは達成できたのでそれで完成ということにしよう。……後で、マルセルさんにどう改良すればいいか相談しよう。

「レオン様、少し休まれますか？」
「ううん、大丈夫だよ。あっ、どのぐらい時間経ったかな？」
「一時間ほどです」
「もうそんなに経ったの！？　じゃあヨアン達のところに戻ろう」
「かしこまりました。ではこちらの荷物は私がお持ちいたします」
「ありがとう。あっ、それ傾けたりできないから俺が持つよ」

そうしてロジェと共に作ったものを持って、厨房に戻る。

「皆待たせてごめんね」
「いえ、なにかお作りになったのですか？」
「うん。馬車にあった材料を使ったから仮のものだけどね。まずはこれから説明するね」

俺はそうして革袋と金具を手に取った。

「この革袋の小さく穴が空いてる方に金具を装着するんだ。そして

こっちの大きく穴が空いてる方から生クリームを中に入れる。そしてぎゅっと絞るとこっちから生クリームが均等に出てくるから、それで飾り付けができると思う。革袋はピュリフィケイションの魔法具で毎回綺麗にして使って欲しい」

そう説明をしてヨアンに絞り袋を手渡す。すると、ヨアンは金具の形や革袋をじっくりと観察してから口を開いた。

「これは……素晴らしいものかもしれません。試してみても良いでしょうか？」

「うん。ピュリフィケイションで綺麗にしてからね」

「かしこまりました」

そうしてヨアンが冷蔵庫から生クリームを取り出して、革袋に詰めていく。金具はギザギザしたものを付けたようだ。

「では、絞ってみます」

そして準備を整えて、生クリームをお皿の上に少し絞った。すると、予想以上に綺麗に絞れている。あり合わせのもので作ったにしては上出来だな。

ヨアンは小さく生クリームを飾ってみたり、線のように描いてみたりと色々試しているようだ。

「ヨアンどうかな？　使えそう？」

「レオン様、これは素晴らしいです！！　これでとても華やかで綺麗なスイーツが作れます！」

ヨアンは紅潮した顔でそう言った。とりあえず使えそうなら良かった。

「それなら良かったよ。この金具部分を変えると生クリームの形が変わるんだ。何か欲しい形はある？」
「そうですね……とりあえずはもう少し細いものが欲しいです。それからいくつも小さな穴があるものや、このギザギザが深いものもあれば良いと思います。他には……難しいですね。実際に使ってみるとまたわかるかと思います」
「わかった。じゃあとりあえずは、今ヨアンが言ったものを作ってみるね。今ここにあるのは魔鉄で仮に作っただけだから、ここのも鉄で作り直してもらうよ」
「かしこまりました。よろしくお願いいたします！」

とりあえず絞り袋は上手くいってよかった。問題は回る台だな。

「あと、これも作ってみたんだけど……」
「これは、何なのでしょうか？」
「この上の台が回るようになってるんだ。でもとりあえず作っただけだから使い勝手は悪いと思うんだけど……」
「回してみても良いですか？」
「うん。台の下に球があるから、球が飛び散らないように注意してね」
「かしこまりました」

ヨアンはそう言って、真剣な表情で台を回し始めた。そしてスポンジケーキが載ったお皿と生クリーム、それから生クリームを塗るための細長いヘラのようなものを持ってきて、スポンジケーキに生クリームを塗り始めた。
おおっ、思ったより使えそうかも。
「意外と使えるかな？」

「レオン様……意外とどころではありません！　これは素晴らしいです。これがあれば均等に生クリームを塗ることができます。仕上がりがより美しくできます！」
「本当？　それなら良かったよ」

とりあえず使えるものなら良かった。でもこれは要改良だな。

「レオン様、色々と考えてくださってありがとうございます！　この御恩に報いるためにも、素晴らしいスイーツを作り上げてみせます」
「ははっ、大袈裟だよ。でも楽しみにしてる」
「はい！」

そうして俺は何とかヨアンの悩みを解決して、お店を後にした。
日本にあった回転テーブル、あれどんな仕組みだったんだろう……。日本にいるときは全く気にもならなかったのに、今になって知りたい。
本当にこの世界に来て何度も思ったけど、日本にいた俺、もっと色々に好奇心持って！　周りにたくさんの凄いものや面白いものが溢れかえっていたのに、一つも興味を示すことなく過ごしてたよな……勿体なかった。
進んだ科学技術は魔法と変わらないって何かで聞いたことがあるけど、本当にそれを実感してるよ。

２１４、緊急の知らせ

ヨアンに呼ばれてお店を訪れてからさらに数週間。
その間に俺は頻繁にお店に顔を出した。まずやったことは、ヨアン達料理人の意見を聞きながら色々な道具を作り直すことだ。絞り袋は革製じゃなくて布製の方が良いことがわかり、コットンのような素材を最終的には選んだ。金具部分は鉄じゃなくて錆びにくい金属に変更した。
さらに道具作成だけではなく、給仕担当の練習でお客様役をやったり、護衛担当の練習で襲撃者役をやったり、結構忙しい毎日を過ごしていた。

しかし学生の本分も忘れてはいない。しっかりと王立学校にも毎日通い授業を受けている。
今はちょうど歴史の授業を受けているところだ。先生の言葉が子守唄に聞こえながらも、必死に目を擦って頑張っている。
……歴史の授業って、なんでこんなにも眠くなるんだろう。かなりのおじいちゃん先生が、小さな声で一定のトーンで喋り続けてるのがダメなのかな。しっかりと聞き取ろうと耳を澄ましていると、気づいたら目が閉じてるんだ。
ダメだ、寝るなんてダメだ。頑張れ俺。

そう自分に言い聞かせて何とか歴史の授業を聞いていたそのとき、教室に誰かが入ってくるのが見えた。
俺はその人物が使用人の服を着ているのを見て、またいつものやつか、そう思った。この学校では何か急用があった場合、生徒の従者やメイドが連絡を伝えにくることが結構あるのだ。急用と言っても来客があるから帰ってこいとか、食事に出かけるから帰って来い

とか、結構どうでも良い内容だったりする。
この世界は学校第一じゃなくて家のことが優先されるからな……、そんな感じで早退したり遅刻してきたりする人は結構いるのだ。
だから今日も誰かが帰るんだろう。そんな風に呑気に考えつつその使用人の顔を見てみると……、まさかの、ロジェだった。

……え？　何かあったのかな？　ロジェが来ることなんて今まで一度もなかったのに。

俺はタウンゼント公爵家に来客があっても呼ばれることはない。俺が必要な場面と言ったら……誰かが大怪我をしたとか？
そう考えたら、心臓がどきりと嫌な音を立てて鳴った。手足が冷たくなり冷や汗が滲んでくる。

いや、まだそうと決まったわけじゃない。何でもないことかもしれない。大丈夫だ。
そう自分に言い聞かせていると、ロジェが先生に一言断りを入れ俺の席までやってきた。皆は珍しい俺の従者をジロジロと見ている。

「ロジェ、どうしたの？」

俺はかろうじてロジェに聞こえるかどうかという声の大きさでそう聞いた。

「レオン様に至急お伝えしなければならないことがございます。ここでは詳細は述べられませんので、まずは馬車まで参りましょう」
「わかった」

そうして俺は慌ただしく鞄に荷物を片付けて、心配そうにこちらを見ているロニーを安心させるように少しだけ頷いて、教室を出た。

そして急いで馬車に向かい、すぐに乗り込む。

「ロジェ、何があったの？」

「レオン様、落ち着いて聞いてください」

ロジェがいつになく真剣な表情でそう言ってきた。

「……うん。わかった」

「先程、レオン様のご家族に付いていた影の一人から連絡が入りました。レオン様のご実家が、何者かに襲われたようです」

……俺の実家が、襲われた？

俺は一瞬何を言われたのか理解できずに思考が停止してしまったが、じわじわと言葉の意味を理解し始める。そしてそれと同時に、体全体が冷たくなっていくのを感じた。

「み、皆は！？　母さんと父さん、マリーは！？」

「落ち着かれてください。皆様ご無事です」

無事。無事なのか……

「よ、良かったぁ～」

俺は一気に体の力が抜けて、椅子からずるずると滑り落ちてしまった。

「レオン様、大丈夫ですか？」

「……うん。俺は大丈夫。ちょっと力が抜けちゃって」

俺はロジェにそう答えつつ、また椅子に座り直した。

「皆は怪我してないんだよね？」

「はい。皆様は傷一つないとのことです。しかし、ご実家は争った影響でかなり酷い有様のようでして……。それから、イアンが怪我をしています」

イアンって……、イアン君！？

「イアン君怪我してるの！？　すぐに行って治してあげないと！」

俺は慌てて立ち上がり、その場ですぐに転移を使おうとした。しかし、寸前でロジェに止められる。

「レオン様お待ちください！　急にレオン様が現れるのは不自然ですので、このまま馬車で向かうことになっています。イアンは命に別状はありませんので大丈夫です。そこまで酷い怪我ではないようですので、普通の治癒師にも治癒できるでしょう」

「……そっか、確かにそうだね。止めてくれてありがとう」

最近よく転移を使ってたから思わず使いそうになっちゃったよ。気をつけないとだな。

「イアン君が酷い怪我じゃないのなら良かった。でも、治癒院に行くとお金かかるし俺が治してあげたいな。イアン君は巻き込まれただけなんだし……」

俺がそう言うと、ロジェは少しだけ悩む仕草をした後に口を開いた。

「いえ、イアンは公爵家で治療を受けると思われますので大丈夫です。実はレオン様にお伝えしなければならないことがあります。……イアンは、タウンゼント公爵家の影なのです。皆様を一番近くでお守りするために、従業員として平民になりきり働いておりました」

……え、そうだったの！？　全く気付かなかったよ。

「全く気付かなかった……。影の人たちって、隠れて護衛するだけじゃないんだね」

「はい。時には何者かになりきって、表から護衛をすることもございます」

「そうなんだ。というか、イアン君が影だって伝えて良かったの？」

「今まではイアンが護衛であることを周りに気づかれないように、また護衛対象者であるレオン様のご家族が怖がらないようにと秘密にしておりました。しかし、今回のことでレオン様のご家族には正体を明かすことになりますので、レオン様にもお伝えすることに問題はありません」

「そうなんだ。というか、ロジェは影について詳しいんだね。それにイアン君のことを呼び捨てにしてたし……、友達なの？」

俺はロジェにも友達がいたんだということに感動して軽い気持ちでそう聞いたんだけど、ロジェは俺のその言葉に顔を暗くした。

「いえ……、その……」

そしてそう言ったきり、口を閉じて俯いてしまった。凄く珍しいことだ。……何かあるのだろうか？

「言いづらいことでもあるの？　それなら無理には聞かないけど」

「……いえ、いずれお伝えしなければならないことですので。大旦

那様にもレオン様にお伝えして良いと許可をいただいておりますし……」

ロジェはそう言うと、顔を上げて俺の方をしっかりと見た。そして口を開く。

「レオン様、実は私も……、影に所属しているのです。今までお伝えせずにいて申し訳ございませんでした」

ロジェは暗い表情でそう言った後、静かに頭を下げた。

「えっと……じゃあ、ロジェもイアン君と同じように、俺の従者として俺の護衛をしてたってこと？」

「おっしゃる通りです」

……そうだったのか。確かにロジェって、身のこなしとか軽くて凄いって思ってたんだよね。

でもそれ、そんなに言いづらいことかな？　俺がそう思って少し首を傾げていると、ロジェが恐る恐る聞いてきた。

「レオン様、これからもレオン様の従者として、お仕えさせていただいてもよろしいでしょうか？」

「え？　逆にロジェやめちゃうの！？」

「いえ、レオン様は隠し事をするような従者はお嫌かと思いまして……」

「そんなことないよ！　いや、できれば隠し事してほしくないけど、人には言いたくないことは誰にでもあるし。それに、ロジェの場合はリシャール様に口止めされてたとかじゃないの？」

「はい。レオン様が緊張されないように、生活に慣れるまでは秘密にしておくようにと」

「それならロジェが秘密にしたわけじゃないよ」
「ですが……本当ならばもっと早い段階でお伝えすべきだったのです。しかしレオン様にお伝えしたら怖がられるのではと思い、言えずにここまできてしまいました……」

怖がる？　何で俺が怖がることになるんだ？

「俺がロジェを怖がることなんてないよ？」
「ですが、近くに暗器を使える者がいるのは、嫌ではないかと思いまして……」

暗器、ロジェが使えるのか！

「暗器使えるの！？　カッコいい！」
「カッコいい……ですか？」
「うん！　え、今も持ってるの！？」
「レオン様の護衛も兼ねていますので、常日頃持ち歩いておりますが……、怖くは、ないのでしょうか？」
「心強いと思うことはあるけど、怖いって思うことはないよ？」

俺も鍛えてるし魔法はかなり得意だけど、不意打ちとかには弱い。やっぱりその辺は経験値の差がものを言うんだ。だからロジェが強いってわかったらかなり心強い！
強いのは誇ることで隠すことじゃないと思うんだけど、何でそんなに怖がられるって思うんだろう。

「怖がられたことがあるの？」
「……仕事上のことで詳しい話は言えないのですが、私がまだ幼かった頃、今回のイアンのように護衛対象を守りました。しかしその時に、護衛対象に怖いと言われてしまって……、私の力は怖いもの

なんだと思いました」

守った人に怖いって言われたのか……それはトラウマになるのかも。しかも子供の頃のそういう経験ってずっと覚えてるものだよね。

「その人はロジェのことを怖いって言ったんじゃなくて、襲ってきた人のことも含めての言葉だったんじゃないのかな？」

「そうでしょうか……？」

「その可能性もあると思うよ。それにその人がロジェのことを怖いって言ったとしても、俺はロジェのことを怖くないからね。逆に心強いよ」

「心強い、ですか？」

「うん！　だってロジェが守ってくれるんでしょ？」

「もちろん、お守りいたします」

「ありがとう。頼りにしてるよ！」

俺がそう言うと、ロジェは一瞬だけ泣きそうな表情を見せた。しかし、直ぐに深く頭を下げて顔を隠してしまう。もうちょっと珍しい表情を見てたかったのにな……

まあ、流石にここで顔を覗き込むなんてことはしないけどね。俺は空気の読める大人ですから！

……自分で言うと軽い感じになるな。

そんな馬鹿なことを考えていると、ロジェが顔を上げた。

「レオン様、本当にありがとうございます。これからもよろしくお願いいたします。従者としても護衛としても、レオン様のお役に立てるように頑張ります」

「うん！　頼りにしてるよ。これからもよろしくね」

「はい」

そうして少しだけ微笑んだロジェの表情は、今までで一番晴れやかなものだった。

215、家族の下へ

家族も無事でイアン君の怪我も酷くはないということがわかり、俺は少し安心しながら馬車に揺られること二時間、実家に着いた。

馬車から降りて見上げた実家はいつもと同じにも見えるけど、地面が荒れていたりドアが傷付いていたりと襲撃があったことが分かる。

それを見て痛い気持ちになりながらも静かにドアを開けると……、食堂は机と椅子が壊れていてカウンターは黒く焦げ、中はかなり悲惨な状況だった。

俺たち家族の大切な食堂だったのに……、悔しい。

そう思って食堂を眺めながら無意識に唇を噛み締めていると、奥に続くドアが勢いよく開く。

「お兄ちゃん！！」

そしてマリーが俺のところに駆けてきた。父さんと母さんも後ろから顔を出してくれた。

「……マリー、大丈夫だった？　怪我はない？」

俺は悔しさや悲しさ、家族が無事な安堵感、犯人への怒り、そんな複雑な気持ちを感じながらも、とりあえずはそれらを心の奥底に仕舞い込んでマリーにそう問いかけた。

するとマリーは、顔を歪めて目に涙を浮かべ、俺にぎゅっと抱き

ついてきた。

「お、おにい、ちゃん、こ、こわかったぁ。ひっ、ひくっ……」

「そっか……怖かったよね。ごめんね」

俺はマリーを抱き寄せて優しく頭を撫でる。

何でここが襲撃されたのかはまだ分からないけど、高確率で俺のせいだよな……

皆を守るって言ったのに、結局こんなことになっちゃうなんて。俺なりにできることはやってきたつもりだったけど、もっとできることがあったんじゃないか。

そう思うと悔しくて、俺は強く唇を噛んだ。

しかしそんな時、マリーが未だ泣きながらも顔を上げてくれる。

「でも、でもね、お兄ちゃんがくれたネックレスが守ってくれたよ！　お兄ちゃん、ありがとう」

マリーはそう言って、にっこりと笑った。

「本当……？　役に立った？」

「うん！　怖い人たちがお店に入ってきて、もうダメだと思ったの。でもお兄ちゃんのネックレスを思い出して棒を抜いたらね、怖い人たちから守ってくれる盾が出てきたの！　誰も私に近づけなくて、凄かった！」

そっか、バリアはちゃんと役に立ったのか。……本当に良かった。

「役に立って良かった。皆を守れて良かった……」

「レオンありがとう。レオンのおかげで父さん達は怪我一つないよ」

「ええ、レオンのおかげね」

母さんと父さんも俺のところに来てそう言って微笑んでくれる。俺のせいで襲われたようなものなのに、それを責めずに俺のおかげで助かったと言ってくれるなんて……

俺は皆のその言葉を聞いて、思わず涙が溢れ出てくる。

「み、みんな、本当にごめん……ひっ、ひっく、お、俺のせいで、食堂が、家が、こんなことになっちゃって……」

「悪いのはレオンじゃないわ。ここを襲った犯人達よ」

「そうだよ。レオンは悪いことしてないだろう？」

「でも、でもっ……」

俺が母さん達の言葉を素直に受け入れられずに泣きながら首を横に振っていると、母さんがマリーごと俺を抱きしめてくれた。

「レオン、こうして皆無事なのだからいいのよ」

「でも、家が……」

「物はいつか壊れるものよ。直せば良いだけじゃない」

「最近古くなってきたと思ってたからね。この機会に新しくしようか？」

「それもいいわね！」

母さんと父さんはそう言って優しく微笑みかけてくれる。俺は二人のその顔を見て、より涙が溢れ出てくるのを感じた。

「あらあら、そんなに泣いたら目が腫れちゃうわ」

母さんがそう言って、手拭いで優しく涙を拭いてくれた。

俺はそれから、しばらく泣き続けていた。自分でも驚くほど涙が止まらなかったのだ。
今まで感じてきた漠然とした寂しさやプレッシャー、迷惑をかけている申し訳なさ、そういうものが一気に溢れ出てきたみたいだった。

そうして思いっきり泣いたおかげで、泣き止んだ時にはかなりすっきりとした。憑き物が落ちたような感じだ。
でも落ち着いてくると同時に、子供みたいに大号泣したことが恥ずかしくなってくる。

「やっと泣き止んだかしら？　レオンの泣き顔なんて久しぶりね」
「ご、ごめん……」
「謝ることじゃないわ。レオンは随分早く大人になっちゃったから、子供らしいところがみれると安心するのよ。悲しい時や辛い時は、いつでも母さんのところに来ていいのよ？」
「も、もう大丈夫！　俺は大人だから！」

こんなに大号泣した後に全く説得力ないけど、俺は照れ隠しでそう言った。

「ふふっ、そうよね」
「じゃあ、レオンも落ち着いたところでとりあえずリビングに行こうか？」

俺は父さんのその言葉で、未だに食堂に立ったままでいることに気づいた。あれ、というか……ロジェは？
俺はロジェの存在を思い出して、恐る恐る後ろを振り返った。するとそこには……、温かい目をしてこちらを見つめるロジェがいた。

……うわぁ！！　めちゃくちゃ恥ずかしい！！
大号泣してるところ見られてたよ。しかも母さんの腕の中で！
「ロ、ロジェ、記憶を消してくれたり、しないかな？」
「目に焼き付けさせていただきました」
「やめてー！！」
「ふふっ……冗談でございます。私は目を逸らしておりましたのでご安心を」

ロジェが冗談を言うなんて、それに今笑った！！
俺はロジェのそんな珍しい様子に、思わず恥ずかしさも吹き飛んでしまった。
しかしロジェは、すぐにいつもの表情に戻ってしまう。

「レオン様、落ち着かれたのでしたら今後のお話をさせていただいてもよろしいでしょうか？」
「う、うん。いいよ」
「かしこまりました。場所は移動されますか？」

ロジェがそう言って周りを見回すので、俺もその視線に従って食堂の様子を改めて見る。
机も椅子も全部壊れてるんだよね……

「母さん父さん、リビングとかもこんな感じなの？」
「ううん。荒らされたのはここだけよ。イアンが守ってくれたのよ。イアンは公爵家から派遣された護衛だったのね。全然気づかなかったわ」
「そうだ！　イアン君は？　怪我してるんだよね？」

「ええ、リビングにいるわよ。治してあげてくれるかしら？　私たちを守ろうとして怪我をしたから……」
「もちろんだよ！」
泣いてる場合じゃなかったよ！
「じゃあ皆でリビングに行きましょう。無事な椅子を運んであるから皆で座れるわ」
そうして俺たちは皆でリビングに移動した。

216、事の顛末

リビングに入ると椅子に座って辛そうな様子のイアン君と、その隣に一人の男性がいた。多分この人も影の一人なんだろう。

俺はすぐにイアン君の元に駆け寄る。すると、俺が話しかける前にイアン君に頭を下げられた。

「いっ……、レオン様、食堂を守りきれず、大変申し訳ございませんでした」

イアン君は頭を下げたことで体に痛みが走ったのか、一瞬だけ顔を顰めた。

「大丈夫！？　頭なんか下げなくていいから。イアン君は家族を守ってくれたんでしょ？　謝る必要なんかないよ。とにかくすぐに怪我を治すから」

「……ありがとうございます」

俺はまだ何か話したそうにしているイアン君を制して、とりあえず怪我を治すことにした。

イアン君の体全体をスキャンすると、予想以上に酷い怪我がわかる。全体的に打撲がたくさんあるのと左足は折れてるし、肋骨もヒビが入ってるし……

「イアン君、こんなになってまで守ってくれて、本当にありがとう」

「いえ、この怪我は私の力不足の結果ですので」

そんなことない！　そう言おうと思ったけれど、イアン君の瞳は

かなり真剣だったので、俺はその言葉に反論するのはやめて治療に集中した。

「よしっ、これで全部治ったと思う。痛いところとか違和感があるところはない？」

「いえ、素晴らしいです。……さすがレオン様ですね。こんなに早く治るなんて、完全に元通りです」

イアン君は体を動かしながら、目を見開いてそう言った。

「そんなことないよ。……というか、さっきから気になってたんだけど、何で敬語なの？」

さっきからかなり違和感があったんだ。とりあえず治療を優先させたけど……

「既にご家族にもレオン様にも私の正体はバレておりますので、丁寧な言葉遣いは当然でございます」

「別に、丁寧な言葉遣いなんて必要ないよ？　なんか違和感あるし……」

「そうですか？　……じゃあ、普通に話すよ」

「うん！　そっちの方がイアン君ぽい」

「なんかそれ、喜んでいいのかわからないんだけど」

イアン君はそう言って、少しだけ拗ねたように唇を尖らせた。多分これが素なんだな。これからは隠し事も無くなってもっと仲良くなれたらいいな、そう思った。

そうしてイアン君を治療して、皆で円卓のように向かい合って椅

子に座った。
まずは現状の把握からしないとだよね。
「とりあえず、今日起きたことを聞いても良い？　ほとんど何も聞いてないんだ」
「うん。俺が話すよ」
そう言ったのはイアン君だ。
「今日もいつも通り昼営業をして、最後のお客さんが帰ってもうお店を閉めようか、そう思った時に事件は起きたんだ。突然五人の男達が食堂に入ってきた。全員が鉄の棒を持って大声を上げていて、明らかに普通のお客さんじゃなかった。一人は古かったけど剣も持ってたよ」
マジか……、そんなにやばい奴らがきたのか。
「その時入り口のドア近くにいたのが運悪くマリーちゃんで、マリーちゃんは一度男の一人に捕まった」
え？　マリーが、捕まった……？
その男、絶対に、ぜっったいに、許さない。地の果てまでも追いかけてやる……
「マリー、悪い人に捕まったの？」
「うん、大きな男の人に急に捕まえられたの。でも、よく分からないうちに助けてもらえたから大丈夫だよ？」
マリーはそう言っているけれど、もしかしたら自分でも気づかない内にトラウマになっているかもしれない。マリーのことは今まで

以上に気をつけて見ていくべきだな。
俺はそう誓うと共に、そんなことをしでかした犯人達への怒りがどんどんと湧き出てくる。

「イアン君、その馬鹿な男はどこにいるのかな？　今ここにいるの？　ちょっと会わせてくれないかな？」
「レ、レオン君？　ちょっと抑えて、怖いから！」

俺はイアン君に慌ててそう言われて肩を掴まれ、いつの間にか立ち上がっていた椅子に強制的に座らせられた。

ふぅ～、そうだよね。ここで怒りをあらわにしてもしょうがない。マリーを怯えさせるだけだ。落ち着け俺。
そう自分に言い聞かせて、何度か深呼吸をして何とか怒りを抑え込んだ。

「ふぅ～、ごめん。ちょっと怒りで我を忘れそうになった」
「大丈夫だけど……、落ち着いた？」
「うん」
「じゃあ、話を続けるね」

犯人たち絶対許さん！　そう思いつつ、とりあえずはイアン君の話を聞くことにした。

「俺はマリーちゃんが捕まったとき食堂の奥にいて、犯人たちはマリーちゃんを捕まえられたことで安心したのか、かなり油断してる様子だったんだ。だから警戒されないうちにすぐ助けるべきだと判断して、暗器で犯人の男を殺してマリーちゃんを取り返した」

ということは、マリーが捕まってたのは本当に短い時間だったっ

てことか。不幸中の幸いだな。……イアン君にはいくら感謝しても
し足りない。

「……イアン君、本当にありがとう」

「当たり前のことをしただけだから。それに……、本当は気絶させてマリーちゃんを取り返せたら良かったんだけど、俺の技量的に殺す方が確実だったからそっちを選択したんだ。……マリーちゃん、改めて嫌な光景を見せてごめんね」

イアン君はそう言って、マリーに申し訳なさそうな顔で謝った。

「ううん、悪い人達から助けてくれて嬉しかったよ。ありがと！」

マリーはそう言って、イアン君ににっこりと笑いかけた。マリーは強いな。俺は目の前で人が殺されるところを見たら動揺しちゃうかもしれない。

……でも今、人が殺されたという話を聞いてもあまり動揺していない自分がいる。この世界では大切な人を守るためには仕方がないことだよね。そう思えている。

そんな自分になれていて良かった。そう思った。

「助けるための最善手を取るのは当たり前のことだよ。イアン君が謝る必要なんてない」

「そう言ってもらえるとありがたいよ。それで、そうして男からマリーちゃんを助けた後に、マリーちゃんを食堂の端に避難させてバリアを発動してもらったんだ。ロアナさんとジャンさんもカウンター越しにこちらを覗いてたから、二人にもバリアを発動してもらって、皆にその場から動かないように頼んだ。バリアがあったから皆を守る必要がなくてかなり助かったよ。ありがとう」

そっか、バリアも役に立ったのなら良かった。でもやっぱり、咄嗟の攻撃にはかなり弱いよね……。もっと改良が必要かな。

「そうして俺は犯人達を取り押さえにかかったんだけど、相手が火魔法を使える奴らでファイヤーボールをどんどん使われて、その消火をしつつ戦ってたから何回か攻撃を受けちゃって、それで怪我をしたんだ。でもその後すぐ、周りに待機してた影の仲間が加勢に来てくれたから、男達はすぐに制圧できたよ。一人も逃さなかったからバリアの魔法具の情報も漏れてないと思う。建物の中での出来事だったし」

「そっか……イアン君。改めて、皆を守ってくれて本当にありがとう」

俺はそう言ってイアン君に深く頭を下げた。

「当然だよ。仕事だっていうのもあるけど、大切な人たちだからね」

「……本当にありがとう」

「うん。それでその後、犯人の男達は縛り上げて手配した馬車で公爵家まで運んだよ。俺ともう一人の影がここに残って、他の影は犯人の輸送をしてる。犯人達はもう情報も持ってなさそうだったし、多分そのまま犯罪奴隷として鉱山行きかな」

じゃあもう、その犯人達は公爵家に行ってるのか。実際に会ったら怒りが抑えられなさそうだから良かったかも。

あと問題は、犯人達の目的だよね。それからどこの手の者かだな。

217、目的と黒幕

「犯人達の目的ってわかる？」
「捕まえてから尋問したら簡単に吐いたよ。でも使い捨ての奴らでほとんど情報を持ってなかったんだ。ローブで顔がわからない男から金を渡されて、平民の家族を攫ってきたら三倍の報酬を貰えるって言われたらしい」
「俺の家族を攫おうとしたってことは、目的は俺ってことだよね」
「うん。言いづらいんだけど……、レオン君を手に入れるか消すかの目的のために、家族を攫おうと思ったんだと思う。レオン君は全属性こそ明かしてないけど、優秀な成績と魔法具登録の件でかなり目立ってるんだ。貴族の中には、今後邪魔になりそうだから今のうちに手を打とうと考える人がいても不思議じゃない」

確かに、全属性を明かしてないから爆発的に目立ってるわけじゃないんだけど、最近じわじわ俺のことが広まってる感じはあったんだよね……
まあ、そもそもタウンゼント公爵家の勢力のために有能な部分を見せるのが俺の役割だから、俺のことが広まるのは狙い通りなんだよね。だからいずれにせよ、こういう事態にはなっていたんだろう。

リシャール様達は、全属性を明かしたらもっと強硬手段に出る貴族が増えて他国も手を出してくるって言ってたけど……、今以上に狙われるようになるなんて先が思いやられるな。
なんか俺って、結構やばい選択肢を選んだのかな。というか、俺よりもそれに巻き込まれてる家族だよね。俺が責任を持ってしっかり守らないと……

はぁ～、卑怯に家族を狙うんじゃなくて、俺のところに直接来ればいいのに！！　それならいくらでも襲ってくれて構わないんだけど。返り討ちにしてやるし、万が一捕まったとしても自業自得だと諦められる。

ほんと、弱いところを狙うのは卑怯だ。

「イアン君、そのローブの男が誰かは分かるかな？」

「それは、かなり難しいと思う。男達から声をかけられた場所と時間は聞いてあるから、後は聞き込みや偵察をするしかないんだけど……、情報が少なすぎる。でも男達に渡した金はかなりの金額だったから、お金を持ってるってことは間違いないと思う。だから、やっぱり貴族かな」

そうだよね。やっぱり貴族かぁ～。

……アルテュル様のお父さんとかもあり得るのだろうか。候補の一人ではあるよね。アルテュル様の話を聞いた限りだと、目立ってる平民は端から消したいと思ってそうな勢いだったし。

俺とアルテュル様の関係が知られてなかったとしても、普通に狙われそうだ。そして他にもそんな貴族家はたくさんあるんだろうな……

「やっぱり、そうだよね」

「うん。でもここから先は難しいと思う。候補が多すぎて絞りきれない」

「敵対勢力の貴族達？」

「そうだね。その中でも特に怪しい家はいくつかあるんだけど、今回がそこの仕業とは限らない。何よりも証拠がないから、黒幕まであぶり出すのはかなり難しいと思う」

証拠がなければ、いくら黒に近いグレーでもどうすることもでき

ないのか。……悔しいな。
俺は犯人への怒りをぶつける先が分からなくて、拳に力を入れた。手のひらに爪が食い込んで痛いけど、そうでもしていないと怒りや悔しさが収まらないのだ。

多分今回の襲撃は、最終的に黒幕はわからない可能性が高い。すっごく悔しいけど、黒幕まで炙り出してその家を潰してやりたいけど、証拠もないのなら仕方がない……
でも、いつか絶対に犯人を突き止めてやる。そしてその時は、絶対に今回のことを償わせてやる……

俺はそう考えて犯人への怒りを深呼吸で押さえ込み、気持ちを整えてまた口を開いた。

「確かに、こういう場合は黒幕まで辿り着けないんだね」
「うん。そもそも黒幕まで辿り着けることの方が少ないんだよ。よほど馬鹿な人じゃなければ証拠を残すようなことはしないし。使い捨てのコマを使うのが普通だから」

確かに普通はそうだよね。そう考えると、サリムってちょっと馬鹿だったんだな……

「イアン君、これからもこういうことってあるよね？」
「あるだろうね」
「俺は、どうすればいいかな？　何が最善策か教えてほしい」

俺がそう聞くと、それに答えてくれたのはロジェだった。

「レオン様、今後のことについては私からお話しさせていただいても良いでしょうか？　リシャール様からの提案がございます」

「リシャール様から？」
「はい。レオン様のご家族を、中心街にお連れしてはどうかとのことです」
「中心街に？」
「はい。中心街ならばお店に護衛がいるのも当たり前ですので、守りやすくなります。それから何よりも、今回のような使い捨ての素人を使った襲撃というものはほとんどなくなります。中心街は兵士の見回りが頻繁に行われていますし、騎士の見回りも行われています。さらには各店に護衛もおります。よって中心街の外よりも圧倒的に犯罪は少ないのです」

そうなんだ……確かに、中心街の中にごろつきっていないよね。いるとしても入り口の広場までだ。

「確かに中心街の方が格段に安全だよね。……でも、皆はそれでもいい？」

俺が家族の方を向きながらそう聞くと、皆は困惑した様子だ。

「……別に中心街に行くのは構わないのよ。でも私たちは礼儀もわからないし、仕事があるかしら？」
「父さんは料理しかできないからね。他の仕事となると、慣れるまでが大変そうだ」

確かに一番の問題は仕事だよね。でもそれは、食堂を中心街に作れば解決だろう。中心街だからどうしても高級なお店になっちゃうけど、食堂を作ることはできる。
ただ礼儀と読み書きは必要になるから、勉強してもらわないとだな。

「仕事は心配しないで。中心街でも食堂をやればいいよ」
「……でも、そんなお金はないわ」
「そこは俺が出すから大丈夫だよ」
「そんなのダメよ。レオンに頼り切りになっちゃうもの」
「ううん。こんな状況にしてるのは俺の責任だから、それぐらいはやらせて？」

俺が母さんを見上げながらそう言うと、母さんは渋々ながらも頷いてくれた。

「レオンがそう言うなら、甘えちゃうけど……」
「でもレオン、中心街で食堂なんてお客さんは来るのかい？」
「うん。お店の従業員とか貴族の使用人とか、その他にもいろんなところで働いてる人がいるから、お客さんはたくさんいるよ。でも、礼儀とかは勉強してもらわないとだけど……」

俺がそう言うと、父さんは少しだけ何かを考えるそぶりを見せた後、すぐに笑顔で頷いてくれた。

「そうか、それなら中心街で食堂をするのも良いかもしれないね」
「……本当？」
「うん。それも楽しそうだ。礼儀や敬語も学びたいと思ってたんだ」

父さんはそう言って、俺に優しく笑いかけてくれる。

「確かにそうね。こんな機会でもなければ中心街でお店をすることなんてできないものね」

母さんもそう言って笑ってくれる。

「私たち、中心街に引っ越すの？」
「そうよ。前に馬車に乗って行ったでしょう？」
「覚えてるよ！　すっごく綺麗なとこ！」
「あそこに引っ越すのよ。そしてそこで新しい食堂をやるの」
「本当！？　じゃあ、お兄ちゃんも近くにいる？」
「ええ、いつでも会えるわ」
「やった～！」

マリー、俺といつでも会えることを一番に喜んでくれるなんて……幸せすぎて泣きそう！　でもここでまた泣いたら話がややこしくなるから我慢だ！

「じゃあ、皆中心街に来てくれる……？」
「ええ、もちろんよ」
「逆に父さんからお願いしたいぐらいだよ。中心街でお店をするなんて憧れだからね」
「お兄ちゃんのとこ行く！」
「皆……本当にありがとう」

俺はなんとか涙を堪えようとしたんだけど、それには失敗してまた涙が溢れてしまった。でも、顔は笑顔だ。

「では、このまま馬車で中心街に移動していただいても良いでしょうか？　今回の襲撃が失敗したことで、次はもっと徹底的に襲われる可能性もありますし、できる限り早めに移動すべきかと……」

俺たちが中心街に引っ越すことを決めたら、ロジェにそう言われた。確かに、その可能性もあるよね……
早く引っ越すべきだろう。

「皆、いますぐでも大丈夫？」
「そうね……サラとベンには伝えたいわ。少し前に心配して来てくれたんだけど、とりあえず危険かもしれないから帰ってもらったのよ」
そうだよね、ニコラとルークにも伝えないとだろう。というか、隣の家族とはかなり仲良かったけど、大丈夫なのだろうか？　頻繁にお互いの家を行き来してるし……

218、マルセルさん

「ロジェ、隣の道具屋の人たちとはかなり仲が良いんだ。おじさんとおばさんと、ニコラとルークっていう同い年の友達もいるんだけど……狙われないかな？　後はマルセルさんもこの家に頻繁に来てたんだけど……」

この家に頻繁に出入りしてた人は危ないよね。多分調べられてるんだろうし……

「存じ上げております。ロンコーリ様とそちらのご家族にも影がついておりますので、とりあえずはご安心ください。しかしできるのならば、中心街に来ていただけると守りやすくありがたいです。中心街ならばすぐに増援も呼べますし……」

確かにそうだよね。ここだと報告に行くだけでかなり時間がかかってしまう。増援が来る頃には全てが終わっているだろう。

やっぱりニコラ達とマルセルさんには中心街に来てもらいたいな。マルセルさんの家の方が少し距離があるし、とりあえずそっちから行こう。影が護衛してくれてるって言っても、やっぱり心配だし。

でも確か、マルセルさんは中心街にいるのは嫌だから、王都の外れに工房を建ててもらったんだよね。家族との仲も良くないし貴族社会も嫌だから、老後ぐらいはのんびりしたかったって言ってた気がする。

そうすると、マルセルさんに中心街に来てもらうのは申し訳ないな……。どうしようか、危険を許容するか安全をとって嫌な場所に居てもらうか。かなり難しい選択だ。

……これは、直接本人に聞いてみるしかないかな。

「ロジェ、もしマルセルさんが中心街に行きたくないって言ったら、それでも守ってもらうことはできる？」

「はい。中心街に来ていただいた方がより安全というだけで、守れないということではありませんのでご安心ください」

「良かった、ありがとう。じゃあとりあえず、マルセルさんに直接聞いてくるよ。転移を使ってもいい？」

「はい。ここでなら問題ありません」

「分かった」

俺はそうしてロジェに答えた後、家族皆の方に体を向けた。

「皆、まずはマルセルさんに事情を話してくるね。そして帰ってきたらニコラ達にも話すよ」

「わかったわ。母さん達はここで待ってればいいの？」

「うん。ちょっと待ってて欲しい」

「急がなくても良いからちゃんと話してくるんだよ」

「うん！　じゃあ行ってくるね」

そうして俺はマルセルさんの工房に転移した。転移先は工房の中に直接だ。転移する時は工房にしろと、マルセルさんに言われたのだ。

工房の隅に転移すると、マルセルさんは机に座って熱心に何かを書いていた。設計図とかかな？

「……マルセルさん、レオンです」

驚かせないように小声でそう話しかけると、マルセルさんは既に転移のことを知っているからか、ほとんど驚かずに顔を上げた。しかしすぐに首を傾げる。

「……レオン？　今は学校の時間じゃないか？」
「はい。実は緊急事態で学校は早退しました」
「何があったんじゃ？」
「俺の実家が何者かに襲われたんです」
「な、なんじゃと！？」

俺がそう言うと、マルセルさんは大声で叫びながらガタンッと大きな音を立てて立ち上がった。

「マ、マ、マリーちゃんは、無事なのか！？」

そして、俺から見てもヤバいほどに狼狽えている様子だ。マリーのことをそんなに心配してくれるのは嬉しいんだけど……、流石にマリーのこと好きすぎじゃないですか？
俺は思わずジト目になりつつ答えた。

「皆無事です。なので安心してください」
「そ、そうか。それなら良かったわい。マリーちゃんも無事なんじゃな？」
「はい。……マルセルさん、マリーのこと大好きですね？　マリーはあげませんからね？」
「べ、別にもらおうなんて思っとらんわ！　ただ、一番好きなおじいちゃんだと思ってもらえたら、まあ、嬉しいな」

なんかマルセルさん、キャラ崩れてません？　マリーとの出会い

で崩れすぎてませんか？

「うぉっほん、それで、何用だ？　わしをお主の家に連れて行ってくれるのか？」

めちゃくちゃわざとらしく話を変えたよ。というかこの後真剣な話があるのに、マルセルさんのおかげで雰囲気が緩んじゃったじゃないか。

俺は緩んだ雰囲気を変えるように、真剣な表情を作り一つ咳払いをした。

「オホンッ……実は、マルセルさんの身の安全についてのお話があります」

「わしの？」

「はい。今回実家を襲った犯人の目的は、家族を攫って俺を誘き出すことだったんです。なので今後は……、マルセルさんも危険な状態になるかもしれません」

「ふぅ～、なんだそのことか。もっと重大なことかと緊張したわい。それならレオンと出会ってからずっと考えていたことじゃよ」

マルセルさんは、少しホッとしたような表情でそう言った。

「……そうなんですか？」

「少し考えれば、わしが狙われる可能性には思い至るからな」

「……すみません、巻き込んでしまって」

「いいんじゃよ。レオンのせいじゃない」

マルセルさんはそう言って、今度は優しく微笑んでくれた。

「あの、マルセルさんは中心街にいるのが嫌だから、王都の外れに工房を建ててもらったんですよね？」
「そうじゃな」
「そんなマルセルさんに本当に申し訳ないんですけど、もし良ければ……、中心街に来てもらえませんか？　私の家族も来るんです。中心街の方が安全ですし守りやすいので……」

俺が申し訳なさから少し俯きつつそう言うと、マルセルさんはあっさりと了承の意を示した。

「良いぞ」
「やっぱり嫌ですよ……え！？　いいんですか！？」
「ああ、もちろん良いぞ」
「え、でも、中心街は嫌だったんじゃ？」
「もちろん貴族社会が面倒くさいというのもあるが、一番はそこまでして近くにいたい者がいなかったから離れたんじゃよ。今はその面倒くささを許容しても、レオンの家族の近くにいたいからな。もちろんお主の近くにもじゃぞ」

マルセルさん……
俺はマルセルさんのその言葉に感動して、思わず泣きそうになっていた。なんか、一度泣いたら涙腺弱くなったかも。気をつけないとだ。

それにしても、マルセルさんには本当に助けられているな。物理的にも精神的にも助けられてる。
マルセルさんは、軽口も言い合えて真剣な話もできて、さらにものづくりの相談もできて、おじいちゃんであり師匠である感じなんだ。
そんなマルセルさんが近くにいてくれるってなったら、予想以上

に嬉しいし安心するかも。

「……マルセルさん、ありがとうございます。俺もマルセルさんが近くにいてくれたら嬉しいです。たくさん相談したいこともあるんです」

「ああ、いつ相談してくれても構わんよ。……また忙しくなるな」

マルセルさんはそう言いつつ、凄く嬉しそうな顔をした。

「そうですね。忙しいけど楽しくなりそうです」

「ああ、そうじゃな」

そうして二人で顔を見合わせて、笑い合った。マルセルさんと出会えて本当に良かった。

「じゃあ、今からうちの食堂に来てもらえますか？　危険なのでできる限り早くに移動して欲しいんです。あっ、でも荷物の整理とかありますよね。それだと数日後とかが良いですか？」

「……いや、レオンのアイテムボックスを借りても良いなら今すぐでも良いんじゃが」

「それはもちろん、いくらでも使ってください。でもこんなに急で良いんですか？」

「別に何日もかける意味はないじゃろう？」

「……そうですか？」

「そうじゃよ。よしっ、どんどん荷物を仕舞ってくれるか？」

そうしてそれから三十分ほどかけて、マルセルさんの家にあるものを粗方アイテムボックスに仕舞い終えた。

もっと時間がかかるかと思ってたけど、マルセルさんは工房以外にほとんど物を持ってなかったので、かなりスムーズに終えられた

のだ。

「これで最後じゃな」
「はい。意外と少ないですね」
「わしは一人暮らしじゃからな。そんなに物はいらないんじゃよ」
「そうなんですね」
「じゃあ行くかのぉ」
「わかりました。では俺の家に転移します」

そうしてマルセルさんを連れて、俺はまた実家のリビングに戻った。すると皆はロジェが入れたお茶を飲んでいるところだったようで、リビングには和やかなムードが漂っていた。

「あっ、レオンやっと帰ってきたのね」
「お兄ちゃん遅いよ！」
「ごめんごめん。マルセルさんも中心街に来てくれることになって、荷物を全部仕舞ってたんだ」
「え、マルセルおじいちゃんも中心街に来るの！？」
「ああ、マリーちゃんが住む所の近くじゃよ」
「やった～！！」

マリーはマルセルさんも一緒に行くことに大喜びだ。マルセルさんはそんなマリーにデレデレな様子。
マルセルさん、ノックアウト早すぎます。わかりますけどね、マリーの可愛さに抗えないのはわかりますけどね。

「レオン様、ロンコーリ様も中心街に来ていただけるのですか？」
「うん。荷物も全部アイテムボックスに仕舞ってきたから、すぐにでも行けるよ」
「かしこまりました。では後は、隣に住む方々ですね」

「そうだね」

219、皆で引っ越し

ニコラ達はどうだろうか。ニコラは兵士になりたいらしいから中心街でも大丈夫だろうけど、問題は道具屋だよね。道具屋は中心街の中にもあるんだけど、大きな商会がやっているから個人店は難しい。中心街すぐ近くの市場にはあるから、そこにお店を移してもらうのかな……？

「ロジェ、中心街のすぐ近くに市場があるけど、そこに引っ越してもらうのでも問題ない？　やっぱり中心街の中がいい？」

「そうですね……あの場所ならば問題ありません。中心街の中より安全性は劣りますが、それでもこの場所と比べたらかなりの差がございます。すぐに駆けつけられる距離ですし、兵士の見回りが頻繁に行われていますので問題ないでしょう」

「それなら良かった。じゃあおじさん達には、市場に引っ越してもらうってことで話を進めるね」

後は本人達の意思次第だな。引っ越すのは嫌だと言われてしまったら仕方がない。その時の対応策は……、また考えよう。今はとりあえず話をしてみてだ。

そう結論づけて、俺はマルセルさんと親しげに話している母さんと父さんに話しかけた。

「母さん父さん。できればおじさん達にも中心街に来て欲しいと思うんだ。やっぱり危険だと思うから……。話をするために皆を呼んで来るね」

「そうね。来てくれるのなら母さんも嬉しいわ。近くに知ってる人がいないのも心細いもの」

「そうだよね。レオン、父さんが皆を呼んでくるよ。落ち着いたら話をするって約束したんだ」
「そっか、じゃあお願いするね」
「うん。ちょっと待ってて」

そうして父さんがおじさん達を呼びに行ってくれて、数分後リビングに戻ってきた。おじさんとおばさん、ニコラとルークもいる。

「ロアナ……食堂の様子を見たわ。なんて言ったらいいのか……」

おばさんはリビングに入ってくるなりそう言って、自分の家が襲われたように泣きそうな顔をしている。

「サラ、私たちは怪我もないし大丈夫よ」
「マリー、マリーは怪我してないのか！？」

ルークは一直線にマリーのところに向かった。

「うん！　皆が守ってくれたから大丈夫だよ」
「そっか……良かったぁ～」
「レオン、何があったんだ？」

ニコラは厳しい顔で俺にそう聞いてくる。

「俺を狙った犯人が、家族を攫おうとして食堂を襲ったんだ」

話が重くなりすぎないように、少しだけ軽い口調でそう言った。しかしおじさん達は、俺のその言葉に一気に顔を強張らせた。

「レオンが、狙われてるのか？」

おじさん達に全属性のことは話せないから、上手く説明しないと。俺は本当のことを言えない罪悪感を抱えつつ、それを悟られないように口を開く。

「……うん。俺って平民にしては頭がいいでしょ？」

「それ、自分で言うのか？」

俺がそう言うと、ニコラは途端に呆れた顔になった。良かった、ちょっと緊張感が解けた。

「事実だからね」

「まあ、確かに。王立学校ってところに入れるぐらいだからな」

「そう。それでね、平民の俺が王立学校に通って活躍してるのが迷惑な貴族もいるんだ。だから俺を排除したくて家族を狙ったり、逆に俺の力が欲しくて家族を狙ったり、そういうことをされてるんだよ」

「……頭が良いのも、大変なんだな」

「そうなんだよ。それでここからが本題なんだけど……、もしかしたら皆も危険かもしれないんだ。巻き込んで本当にごめん！！」

俺はそこまで言って、皆に深く頭を下げた。俺の存在がここまで皆に迷惑をかけるってなると、やっぱり落ち込む。

「俺たちも、危険、なのか？」

おじさんが恐る恐るそう聞いてきた。

「犯人もわからないしどこまで危険かはわからないんだ。でも皆は俺の家族と仲が良いし、頻繁に家を行き来してるし、危険がないと

は言えない。ごめんね……」

俺はおじさんに、皆に申し訳なくて、俯きながらそう言った。するとおじさんはいつものように激しく頭を撫でてくれる。

「ちょっ、ちょっと、おじさん！」

「子供がそんな顔するんじゃねぇよ。……辛かったな」

「おじさん……、ありがと」

「それで、俺達はどうすればいいんだ？　何か話があるから呼んだんだろ？」

「うん。……あのね、俺たちは皆で中心街に引っ越すんだ。それでおじさん達も、一緒に来てくれない……？」

「俺達が、中心街に行くのか？」

おじさんは凄く驚いたようにそう言ったきり、難しい顔で黙ってしまった。

「無理、かな？」

「いや、無理というか想像もできねぇよ。中心街は貴族様がいるところだろ？　そんなところに俺らみたいなのが行ってもいいのか？」

「貴族もいるけど平民もたくさんいるよ。でも中心街の中で暮らすとなると、少しは礼儀作法を学ばないといけないかも」

「礼儀作法なんて、全くわからねぇぞ？　それに、仕事はあるのか？」

「うん。仕事は紹介できる。おじさん達が道具屋を続けたいのなら、道具屋を中心街に移すこともできるよ」

俺がそう言うと、おじさんは途端に興味深そうな表情に変わった。

「中心街に、道具屋を開けるのか？　俺が？」

「うん。厳密には中心街じゃなくて、中心街のすぐ近くにある市場の中になると思うけど」
「それは……、ちょっと惹かれるな」
「本当？」
「ああ、そうだ。――ルークはどう思う？」

おじさんは一人でしばらく悩んでいたけど、突然ルークに話を振った。

「え！？　俺？」
「ああ、お前は道具屋を継いでくれるんだろう？　それならお前の意見も聞かないとな」
「でも、俺、わかんねぇよ。中心街なんて行ったことないし……。でも、マリー達は中心街に行くんだろ？　それなら、俺も、行きたいというか……」

ルークは後半聞き取れるかどうかぎりぎりの音量でそう言った。そうだ、ルークはマリーのことが好きなんだよね。それは離れたくないだろう。
今まで強張った顔をしていた大人たちも、ルークのその言葉に一気に顔が緩む。ただマリーは全く気づいていない様子だ。ルークがちょっと不憫に思えてきたよ。

「そうか、じゃあ俺達も行くか！」

おじさんはそんなルークの様子を見て、ニカっと笑ってそう言った。そしてルークの頭をガシガシと撫でている。

「ちょっと、父ちゃん！」
「おじさん、そんな簡単に決めちゃっていいの？」

「ああ、別にどこにいるかは関係ねぇからな。家族皆が元気でいられればそれでいい！」

……おじさん、マジでかっこいいよ。

「サラも付いてきてくれるか？」
「ええ、もちろんよ」
「ニコラはどうだ？」
「俺は中心街に行けるのなら嬉しいな。兵士はどこでもなれるし」
「そうか、なら決まりだな。レオン、俺達家族も連れて行ってくれるか？」

そうしておじさん達は皆、俺に向かって笑顔を向けてくれた。俺は……、本当に優しい人たちに囲まれてるな。

「もちろんだよ。逆に巻き込んじゃってごめんね。もしよければ、これからも、仲良くして欲しい、な……」

俺が緊張しつつそう言うと、おじさんは俺の頭を少し優しく撫でてくれた。

「これからもニコラとルークと仲良くしてやってくれな」
「……うん！」

そうして、おじさん達も中心街に引っ越すことが決まった。これで皆の安全が担保できる。そう思うとかなり安心した。
あと危険があるとしたら親戚達だけど、そこはほとんど交流がないからそこまで危険じゃないと思う。ロジェに聞いたら影はついているらしいし、引っ越してもらうほどじゃないだろう。

「じゃあ早速、引っ越し準備をしないとだな」
「そうね。馬車は借りられるかしら？」
「そうだな。確かあそこのうちは馬車があったよな？　ほら、大通りを入って少し行ったところにあるでかい家だ」
「ああ、あのお店ね。確かにあったかもしれないわ。借りられるか聞いてみましょうか」
「そうするか」

二人がそんな会話をしているのが耳に入り、俺は思わず口を挟んだ。馬車は俺が用意すべきだろう。

「おじさんおばさん、馬車は俺が準備するから心配いらないよ。ロジェ、馬車って借りられるよね？」
「はい、公爵家の馬車をお使いください」
「だって。だから心配しないで」

そうして俺がロジェに確認を取ると、二人は驚いたようにロジェを見た。

「レオン、そういえばその人は誰だ？　さっきまで色々あって聞きそびれてたが……」
「紹介してなかったっけ。この人はロジェ、俺の従者だよ」
「ロジェと申します。レオン様にお仕えしております。よろしくお願いいたします」

ロジェはそう言って丁寧に頭を下げた。その様子におじさん達は唖然としている。

「レ、レオンにはこんなにすげぇ人が付いてるのか？　従者って、貴族様に付いてる色々やる人のことだろ？」

「うーん、その認識で間違ってはいないかな。俺の世話をしてくれたり手助けしてくれる人だよ」
「なんか、よく分からないけどレオンって凄いんだな」
ニコラには少しだけ尊敬したような顔でそう言われた。
「そんなことないよ。まあそんなに気にしないで、ロジェもよろしくね」
「あ、ああ、ロジェさん？　俺はベンって言うんだ。よろしくな」
おじさんはそう言ってロジェ向けて手を差し出した。ロジェはそれに一瞬困惑したような表情を浮かべながらも、ゆっくりと手を差し出す。
「よろしくお願いいたします」
「ロジェさん、私はサラよ」
そうしてロジェとおじさん達の初対面の挨拶が終わり、今後の予定を決めておじさん達は家に戻って行った。公爵家の馬車が数日後に迎えにくる予定に決まったので、これから急いで引っ越しの準備をしてくれるらしい。
とりあえずはおじさん達もうちの家族も、皆公爵家の屋敷に仮住まいをしてもらうことになる。
でも、できる限り早くお店を整えて住居も決めるべきだよね。またやること増えたけど、これは俺がやらなければいけないことだ。最優先でやろう。
「母さん父さん、おじさん達は数日かけて引っ越しするけど、うちは今日中に引っ越すのでもいい？」

俺は話の行方を静かに見守ってくれていた二人にそう問いかけた。
「いいけど、今日中になんて引っ越せるかしら？　荷物がたくさんあるわよ？」
「うん。俺の魔法を使えば全部仕舞えるから」
おじさん達には全属性を明かしてないから使えなかったけど、家族の引っ越しにならアイテムボックスが使えるから引っ越しもすぐに終わる。
「確かにそうだったわね」
「じゃあ、荷物をレオンにお願いしても良いかい？　それなら今すぐにでも引っ越せるよ」
「うん！　とりあえず全部持っていくから、向こうで必要な荷物を選んでね」
「分かったわ」
そうして俺は、家中にある荷物を端からアイテムボックスに仕舞い始め、一時間ほどで全てを収納した。
「これで大丈夫かな？」
「え、ええ、いつ見ても凄いわね……」
「お兄ちゃん凄い！！」
「レオンありがとう」
皆はガラッとした家の中を見回しながら、少し呆れたような表情だ。イアン君やロジェ、マルセルさんまでそんな表情をしている。
「じゃあ中心街に行こうか。イアン君達はどうするの？」

「俺は一緒に中心街に行くよ。護衛の任は続くから」
「そっか。もう一人の方は？」
「私はお隣のご家族の護衛として残ります」
「……そうなんだ。よろしくお願いします」

イアン君の隣にいた男性が初めて声を発して、驚きで反応が遅れてしまった。でも、優しそうな声だったな。

「じゃあ、これから移動する人数は七人かな？　ロジェ、全員乗れる？」
「はい。荷物もございませんので、問題なくお乗りいただけます」
「それなら早速向かおうか。もう時間も遅くなってきたし」

外はかなり暗くなってきている。これから中心街に向かったら、着いた頃には寝る時間だろう。途中で屋台に寄って夕食かな。

「夜ご飯は途中の屋台で食べようか」
「え！？　お外でご飯なの！？」
「そうだよ。何か食べたいものがある？」
「串焼き！　串焼きが食べたい！」

マリーは外でご飯を食べられるという事実に大興奮だ。うちは食堂をしているから、基本的には家でご飯を食べる。外でのご飯はかなり貴重なのだ。

「串焼き美味しいよね。少し馬車で進んでから夕食にしようね」
「うん！」

そうして俺たちは、皆で馬車に乗り込んで中心街に向かった。もうここへ来ることはなくなるんだと思うと寂しかったけど、家族皆

とまた近くで暮らせるのは嬉しくて、なんだか複雑な気持ちで馬車に揺られた。

２２０、新しい道具屋

それから数日後の回復の日。
今日はおじさん達が中心街に越してくる日だ。今日までの数日間は、家族皆とマルセルさんが公爵家での暮らしに慣れるように尽力したり、ロニーにある程度の事情を話したりと忙しく過ごしていた。
ロニー達も同じようなことに巻き込まれる可能性があるからね……ちゃんと話しておくべきだと思ったのだ。

今日おじさん達には、中心街に着いたらそのまま新居に向かってもらう予定。本当はこっちに来てしばらくは公爵家で過ごしてもらうつもりだったんだけど、公爵家の屋敷では気が休まらないだろうと思い、早めに店舗兼住宅を探したのだ。
そしたらちょうど市場に空いている店舗があり、そこを購入した。本当に良いタイミングだった。

俺は今、家族皆と馬車でおじさん達の新居に向かっているところだ。俺の家族の新居はまだ見つかっていないので、先におじさん達の引っ越しになった。

「お兄ちゃん。おじさん達の新しいおうちに行くんだよね？」
「そうだよ。市場の中にあるから賑やかなところだよ」
「いいなぁ～。私も早く新しいおうちに住みたい！」
「ごめんね。今探してるからもうちょっと待っててね」

マリーはやっぱり公爵家での暮らしはなんだか落ち着かないようで、最近は早く新しいおうちに住みたいとよく言っている。

でもいいところが見つからないんだよね……。中心街の中でも入り口近くで、どちらかといえば平民向けのお店にできるように見つけてるんだけど、ここだという建物に出会えていない。
妥協すればたくさんあるんだけど、どうせなら良いところにしたいからなぁ。

そんなことを考えながら馬車に揺られていると、おじさん達の新居に着いた。
新しいお店は表側が市場の大通りに面していて、テントのように屋根を出してお店を広げられるようになっている。居住スペースには基本的に裏側から出入りする。
しかし馬車が裏通りには入っていけないので、俺たちは表通りから新居に向かい、店の前に馬車を止めた。すると既におじさん達は着いていて、荷物の整理を始めていたらしい。

「おじさんおばさん、ニコラにルークも久しぶり！　何か問題とかなかった？　今のところ大丈夫？」
「ああ、全く問題はないぜ。それにしても良い店だな。立地も最高だ」
「それなら良かった。お店が外に広がるタイプだから、居住スペースとか倉庫のスペースは前より広くなってると思う。家の中全部見てみた？」
「ええ、前よりも広くて部屋数も多かったわ。レオン、ありがとう」

おばさんがそう言って微笑んでくれる。

「うわぁ～。ここが新しいおうちなの？　いいなぁ～」

俺がおじさん達と話していると、マリーが馬車から降りてきてそう言った。それに反応したのはルークだ。

「マ、マリー、久しぶり」
「久しぶり！　新しいおうちいいね。羨ましい！」
「じ、じゃあ、いつでも遊びに来いよな！」

ルークは顔を赤くして、少し照れつつそう叫んだ。

「本当？　たくさん遊びに来る！」
「お、おう」

でもマリーはそんなルークの様子に全く気づいていない。今はおじさん達の新居に夢中みたいだ。
最初の頃は「マリーはやらない！」って気持ちしかなかったけど、だんだんとマリー気づいてあげて……って気持ちになってきたよ。

「ニコラ、ルークはあんなにわかりやすいのに、マリーは気づかないのかな？」
「ルークも頑張ってるんだけどな。多分マリーにとって、ルークはそういう対象じゃないんじゃないか？」
「……ルークが、可哀想に思えてきた」
「まあ、そのうちどうにかなるだろ」
「なんかニコラって、子供っぽくないよね？　達観してるというか、年寄りくさい？」
「それ、レオンにだけは言われたくないな」

ニコラは呆れたような表情でそう言った。

「ちょっと、それどういう意味！」
「まあ気にするな。それよりも、井戸はどこにあるんだ？」
「井戸？　……どこにあるんだろう？」

「知らないのかよ」

そういえば、ここって中心街の外だし普通に井戸を使うんだったな。最近は水道が普通にある生活だったから忘れてた。

「ロジェ、井戸ってどこにあるの？」

俺は今日も当たり前のように付いてきてくれたロジェにそう聞いた。

「はい。裏通りを少し進んだところにあります。すぐ近くですので裏側に回ればわかるかと思います」

「ニコラ、だってよ」

「ああ、ありがとな。というか、レオンもロジェさんに頼らないで自分でも覚えてろよな」

「そうなんだけど……、ロジェが優秀すぎるんだよ……」

確かに最近ロジェに頼りすぎてたかも。自分でも頑張ろう……

「頼ってばかりだと愛想尽かされるぞ」

「確かに……、ロジェ、いつも頼ってばかりでごめんね」

「いえ、レオン様に頼っていただけるのは嬉しいので、これからも今までのようにしていただければと思います。レオン様は、他の方と比べたら従者に頼ることは格段に少ないお方ですし」

「そうなの？　じゃあ、これからも頼らせてもらうよ」

俺とロジェがそうして話していると、ニコラは微妙そうな表情で俺たちをみた。

「まあ、二人がいいならいいけどよ。それにしても、レオン様とか

慣れないな。それにレオンに従者っていうのも違和感がすごい」
「それは俺も思う」
「レオンは中心街でどんな生活をしてるのかと思ってたけど、レオンってやっぱり、凄いやつだったんだな」

ニコラ達には俺の力が公爵家の役に立っているから、良い立場として遇してもらっていると説明してある。
細かいところは話してないけど、そもそも皆は貴族の仕組みなどをしっかりと理解してるわけじゃないから、なんとなくで受け入れてくれている。

「本当に、公爵家の皆さんには感謝してるよ」
「そうだな。愛想尽かされないようにしろよ」

そこまで話してニコラは家の中に入っていってしまった。

そのあとは俺も荷物を運び入れるのを手伝い、数時間かけてとりあえず住むのに不便がない程度には整えられた。

「皆手伝ってくれてありがとな。家の中入ってくれや。何もないが水ぐらいは出せるからよ」
「じゃあ少し休憩させてもらうよ。流石に疲れた」
「そうね。少し休みたいわ」
「じゃあ入ってくれ。椅子は足りないから、床に座るのでもいいか？」
「いいよ」

そうして皆で家の中に入って、水を飲んで休憩した。

「皆、かなり急な引っ越しになっちゃってごめんね」

「気にすんな。逆にこんなに立派な店を準備してもらって良かったのか？」
「うん！　それは全然大丈夫だよ。俺のせいだからお店を準備するのは当然だし、公爵家にも援助してもらってるから大丈夫」
おじさん達には、俺が大金を持っているということを話すのではなく、公爵家の援助があったということにしてある。その方が受け入れやすいだろうと思ったのだ。
「それならいいんだけどよ。レオンが公爵家とそんなに深い仲だってことに今でも驚くな。従者なんて存在もいるし……おまえ、やっぱりすげぇやつだったんだな」
おじさん、ニコラと全く同じこと言ってるよ。さすが親子。
「ははっ、そうなんだけど、でも俺は俺だから気にしないでよ」
「まあ、そうだな」
おじさんはそう言って、俺の背中をバシンッと強く叩いた。
ちょっ……、おじさん叩くの強すぎる！　水が口から噴き出るかと思ったじゃん。
「レオン、これからもニコラとルークと仲良くしてあげてね」
俺がおじさんにそのことを抗議しようとすると、おばさんが微笑んでそう言ってくれた。
「うん！　もちろんだよ。ニコラ、ルーク、これからもよろしくね！」
「ああ、これからもよろしくな」

「ずっと仲良くしようぜ！」
「マリーも！」
「ふふっ、そうだよね。マリーもだね」
「うん！」

そうして皆で笑い合って、穏やかに時間は過ぎていった。

２２０、新しい道具屋（後書き）

書籍について活動報告に詳細を載せましたので、読んで頂けたら嬉しいです。書籍版の方もよろしくお願いいたします！

221、新しい食堂

それからまた数週間が経過し、ついに家族皆の引っ越しの日となった。

今日はマルセルさんの引っ越しも一緒に行う。なぜ同じ日に引っ越すのかと言うと、マルセルさんの工房と俺の家族の食堂は路地を挟んで隣同士となったからだ。できれば近くが良いと言われて、物件探しはさらに難航した。

そして数日前にやっと良い物件が見つかったのだ。見つからないかと思ったよ……良かった。

この数週間で新居に必要なものは買い揃えてあるので、俺が基本的にはアイテムボックスに仕舞い、カモフラージュのために馬車にも荷物を載せて、今は皆で新居に向かっている。

「お兄ちゃん！　新しいおうちに行くんだよね！」

「そうだよ。これからずっと住む家だよ」

「やったー！　私すっごく楽しみ！　マルセルおじいちゃんのおうちもお隣なんでしょ？」

「うん。路地を挟んだ向かいだからね」

「マルセルおじいちゃんの家にいつでも行けるね！」

「そうだね。でもちゃんとマルセルさんに迷惑がかからないようにするんだよ」

俺がマリーにそう言い聞かせると、マルセルさんが首を横に振った。

「いや、マリーちゃんならいつでも大歓迎じゃよ」

「本当！？　ありがと～！」

それで良いのかよ、マルセルさん！

「お兄ちゃん、おうちはどこにあるの？」

「家はね、中心街の入り口の広場から少しだけ進んだところにあるんだ。大通りに面していて、広い厨房があるんだよ。お部屋もいっぱいあるからマリーの部屋も作れるよ？」

家族の新しい店舗は、中心街に入って少しだけ進んだところにある、木造二階建てのかなり大きな建物だ。前の家よりも一回りほど大きい。

「私のお部屋！？」

「そうだよ。マリー専用のお部屋」

「本当？　自分の好きなもの置いてもいいの？」

「うん。自分のお洋服置いたり、ベッドを置いたり、机とか椅子も置こうか。この前新しいの買ったでしょ？」

「うん！！　……でも、私のお部屋にベッド置いたら、もう皆と一緒に寝られないの？」

マリーは少し寂しそうにそう言った。かっ、可愛すぎる……。

「マリー、そんなことないよ。お部屋にベッドがあっても母さんと父さんの部屋で一緒に寝るのもいいし、その時の気分で決めればいいんだよ」

「そうなの？」

「そうだよ。ね、母さんと父さん」

俺が二人にそう話を振ると、二人は笑顔で頷いてくれた。

「ええ、いつでもいらっしゃい」
「父さんもマリーと一緒に寝たいな」
「じゃあ、マリーが一緒に寝てあげる！」
「ははっ、ありがとう」
「待ってるわね」
「うん！」

なんかいいな……俺も、たまには転移で家に行こうかな。夜にならベッドから抜け出してもバレないだろう。ロジェにだけ伝えておけば大丈夫なはずだ。

そうして皆で新しい家のことについて話していると、馬車が止まった。

「レオン様、到着いたしました」

ロジェがそう言って馬車のドアを開けてくれる。もうロジェがいることには皆も慣れたみたいだ。

「うわぁ、すっごく大きいおうち！」

馬車から降りたマリーが、嬉しそうに駆け出しながらそう言った。

「あら、本当ね。こんなに立派な家、高かったんじゃないの？」
「大丈夫！　この辺りでは標準的な大きさだよ」
「そうなのかい？　本当に大きいな」
「この家は表が食堂の入り口で、裏側に住居への玄関があるんだ。今は表側から入るね」

俺はそう言って、ロジェから受け取った鍵で表のドアを開けた。
このお店は表側が大通りに面していて横側も路地に面しているから、横の路地を通れば簡単にお店の裏側に行くことができる作りだ。そして裏側には住居の玄関があるので、基本的にはそちらから出入りすることになる。前の家は表側にしか出入り口がなかったから、かなり便利になるだろう。
そしてお店の裏側の路地の向かいがマルセルさんの工房だ。今日はまず、食堂を整えてからマルセルさんの工房に行く予定。

「凄い、綺麗な建物ね」
「本当だね。前は食堂だったのかい？」
「本当じゃな。これは元はカフェか？」
「凄い！　可愛いね！」

中に入ると皆が驚いたようにそう呟いた。この建物は前がカフェだったので、内装がおしゃれで綺麗なのだ。
中心街だからもちろん水洗トイレもあるし、水道とコンロも設置されている。凄く良い家だろう。
冷風機と温風機は今日持ってきてるから設置するし、お風呂も改装して設置してもらう予定だ。流石にそれは間に合わなかった。

「前はカフェだったんだ。だから内装がオシャレになってるんだよ」
「そうなのね。これだとメニューを変えることも考えた方がいいかしら？」
「確かにそうだね。この辺は客層も違うし、もう少しオシャレな物がいいかな？　レオンはどう思う？」
「うーん、そうだね。カツサンドとコロッケサンドがあるでしょ？
あれを持ち帰りだけじゃなくて食堂のメニューに加えたらいいと思うよ。多分この辺だとガッツリ系より軽く食べられるものの方が人気になると思う」

カツサンドとコロッケサンドは確実に人気メニューになるだろう。あと、卵サンドとかもっと軽いものを追加したらいいかな。

「卵焼きを挟んだものとか、目玉焼きを挟んだものとか、野菜がメインのやつとか、サンドウィッチを増やしたらいいんじゃないかな？　後ふわふわのパンを仕入れて、それでサンドウィッチを作るともっと良いかも。中心街のお店だから、単価は前よりかなり上げられるよ」

中心街にはもともとサンドウィッチがあったんだけど、ソースもなくてただ野菜とお肉を挟んだだけで、可もなく不可もなくって感じのものだった。

だからいろんな種類の美味しいサンドウィッチは流行るはずだ。

「サンドウィッチか……確かに持ち帰りだけじゃなくて、食堂でも出したらどうかって話してたんだよ」

「ええ、この機会に始めましょうか」

「そうだね」

俺たちが食堂を見学しつつこれからについて話していると、焦れたマリーが母さんの手を引いた。

「早くおうちを見て回ろうよ！」

「確かにそうね。お店についてはまた後で話し合うことにしましょう」

「そうだね。じゃあまずは一階から探検しようか」

「うん！」

そうして皆は食堂から奥の居住スペースに入っていった。

俺もしばらくは食堂の様子を見にくるようにしよう。この食堂は中心街で平民向けにするとはいえ、いままでのようにはいかないだろう。接客も丁寧にすべきだし、カトラリーなども今までとは違う。

皆には公爵家にいる期間で最低限の礼儀作法と敬語を習ってもらったんだけど、まだまだ身に付いてはいなそうだった。これから大変になるだろう……、俺もできる限りサポートしないと。

そんなことを考えつつ皆を追いかけていくと、皆は厨房に集まっていた。

「レオン、これ凄いわ！」
「本当に便利だね」
「お兄ちゃん、このおうちもお水が簡単に出てくるの！」
「マリーちゃん、これは水道って言うんじゃよ」
「水道？」
「そうじゃよ」
「水道凄い！」

皆は水道とコンロに感動しているようだ。公爵家にも普通にあったと思うけど、自宅にあるってことが感動するのだろう。

「今までより便利になると思うよ。魔石に魔力を込めるのは魔法具店に行くんだけど、基本的には俺が込めるから早めに言ってね」
「ええ、わかったわ」
「レオンが忙しい時はわしでも構わんよ。わしは知り合いも多いからな」
「マルセルさん、助かるわ」
「当たり前じゃよ」

やっぱりマルセルさんが近くにいてくれるとありがたいな。俺の

家族は中心街では右も左も分からないだろうから、マルセルさんが助けてくれると本当に助かる。

……マルセルさん、いつもありがとうございます。

「お兄ちゃん、このドアは？」

そうして俺がマルセルさんに感謝していると、マリーは既に他の場所を探検しているようで、少し遠くから声が聞こえてきた。

222、新しい工房

「あっ、このドアは外に繋がるところだよ。基本的にはここから出入りするんだ」
「そうなの？」
「うん。さっき入ってきたところはお客さん用の入り口になるんだ」
「そうなんだ。開けてもいい？」
「いいよ」

俺がそう言うと、マリーは嬉しそうに鍵を開けてドアを開いた。そして外の景色を興味深そうに眺めている。

「こっちにも道路があるんだね！」
「こっちは裏通りだよ。そっちの横にも路地があって、さっきの大通りと繋がってるからね」
「そうなんだ。あのおうちは？」

そうしてマリーが指差したのは、マルセルさんの工房になる予定の建物だ。うちの玄関を出て裏通りを挟んですぐ目の前にある。

「あれがマルセルさんの工房になるんだ」
「そうなの！？　見に行きたい！」

マリーはそう叫ぶと、突然玄関から道路に飛び出してしまった。

「マ、マリー！　危ないからダメ！」

俺はそんなマリーをすぐに追いかけ、お腹に手を回して後ろから

抱き上げる形でマリーを止める。

「マリー、道路に飛び出しちゃダメっていつも言ってるでしょ。馬車が通れない細い道路も馬が通ってるかもしれないんだよ。馬に蹴られたりぶつかられたら、マリーなんて吹っ飛んじゃうんだからね。馬だけじゃなくて荷車を引いてる人がいるかもしれないし、他にも危ないものは沢山あるんだからね」

俺は心を鬼にして厳しい声と口調でそう言い聞かせる。するとマリーの顔は段々と歪んでいき、目に涙が溜まってきた。

うぅ……泣かれると罪悪感が……。それにマリーの涙には弱いんだ。

「……マリー、怒っちゃってごめんね。でもマリーの為なんだ。突然道路に飛び出さないで周りを見てからだよ」

「……うん。わかった……ひっ……ひっく……」

「ま、待って、泣かないで」

マリーが本格的に泣きそうになってきたので、俺はマリーを慌てて地面に下ろして目線を合わせた。そして周りに誰もいないことを確認し、アイテムボックスからヨアンが作ったスポンジケーキを取り出す。一口サイズに切ってあるものだ。

「マリーごめんね。はい、これ食べたらまた新しいおうちを見て回ろう？　まだ二階見てないでしょ？」

俺がそう言ってスポンジケーキをマリーに差し出すと、マリーは一気に瞳を輝かせた。

……急に明るい顔になったな。

流石スイーツは凄い。そして、やっぱりマリーは大人っぽいけど

まだ子供だな。俺はそんなことを考えて少しだけ苦笑を浮かべながら、マリーにスポンジケーキを渡した。
マリーはそれを受け取ると、さっきまでのことはなかったかのように嬉しそうにスポンジケーキを食べている。

「レオン、マリー、どうしたの？」

そうしてマリーのご機嫌をとっていると、家の中から母さんが顔を出した。

「お兄ちゃんから甘いのもらったの！」
「あら、良かったわね。でもレオン、甘いものはあげすぎてはダメよ」
「わかってるよ。緊急事態だったんだ」
「そうなの？」

母さんはそう言って首を傾げながらマリーの顔を覗き込んだ。そしてマリーの瞳が涙に濡れているのに気づいたらしい。マリーの顔に伝った涙をさりげなく指で拭いながら、涙には気づかないふりをしつつマリーに笑いかける。
多分泣いていることを指摘したら、またマリーがその出来事を思い出すと思ったのだろう。

「凄く美味しそうね」
「うん！　美味しいよ！」
「じゃあマリーは先に中に入ってなさい。マルセルさんに一口あげたら喜ぶわよ」
「本当？　じゃあ、あげてくる！」

そうしてマリーが家の中に駆けて行くのを見送って、母さんが俺

の方を振り返った。
「何があったの？　またマリーが何かやらかしたのかしら？」
母さんはもう、俺がマリーに何かをしてマリーが泣いたって選択肢は全く考えてないらしい。まあ、俺がマリーを泣かせるようなことはしないんだけどね。この数年でその信頼は確実なものになっているようだ。
「マリーが周りを見ないで道路に飛び出していったから怒ったんだ。そしたら泣き始めちゃって……でもスポンジケーキをあげたらすぐに泣き止んだよ」
「そうだったのね。レオンいつもありがとう。マリーにはまた言い聞かせておくわ」
「うん。結構反省してたみたいだから優しくしてあげてね……？」
「わかったわ。じゃあ私たちも中に戻りましょう」
「うん！」

そうしてマリーもすっかりご機嫌に戻ったので皆で家の見学を再開し、それに満足したところで荷物を整えることにした。
「じゃあ、荷物を次々に出していくね。大きい荷物は指定の場所に出すけど、小さいものは机に載せちゃうから皆よろしく。俺は荷物を出し終えたらマルセルさんの工房に行くから」
「わかったわ」
「じゃあいくよ」

そうして、まずはリビングに机と椅子を出した。そしてその上にリビングに置くための木箱や棚、その他細かいものを取り出して行

く。
よしっ、これでリビングは全部かな？
「多分これで全部だよ」
「ありがとう。じゃあ母さんはリビングを片付けるわね」
「ロアナありがとう。じゃあ僕は厨房を片付けるよ。レオン、次は厨房でいいかい？」
「もちろん！」
そして厨房に、細かい調理器具から大きな棚や台まで取り出して設置していく。
「とりあえずこれだけかな……凄くいっぱいだけど、大丈夫？」
机に載り切らないほどたくさんの調理器具が積み上げられている。たくさんの調味料などもある。
「大丈夫。逆にやる気が出るよ」
父さんは楽しそうな顔でそう言って、腕まくりをした。かなりのやる気みたいだからここは任せても大丈夫だろう。
「じゃあマリーとマルセルさんと、食堂に机と椅子を設置したら二階に行ってるね」
「よろしく」
「うん。じゃあマリー、まずは食堂に行こうか。マルセルさんも手伝ってもらえますか？」
「うん！」
「もちろんじゃよ」

そして二人と食堂を整えて、それから二階に向かった。二階には四つの部屋があり、一つは父さんと母さんの部屋、一つが物置部屋、そして後の二つがそれぞれ俺とマリーの部屋になった。
俺の部屋は一応整えることにしたのだ。なんだか嬉しい。転移する時も部屋に転移できるし便利だろう。

「お兄ちゃん！　私のベッド出して～」
「はいはい。……よしっ、ここでいい？」
「ううん、こっちがいい！」
「こっちね。はい、これでいい？」
「うん！　じゃあ次は棚ね。棚は……ここ！」

俺はそうしてマリーの指示に従い、ひたすら荷物を出したり入れたりを繰り返した。マリーは自分の部屋を持つことが殊の外嬉しかったようで、かなりテンション高く時間がかかった。
やっとマリーの部屋が整った時には、母さんと父さんが一階をほとんど整え終わったほどだ。

「あら、まだマリーの部屋しか終わってないの？」
「マリーが凄く張り切ってたんだ」

俺が顔に苦笑を浮かべてそういうと、母さんは事情を察したのか俺と同じような表情を浮かべた。

「見て！　私のお部屋だよ！」

マリーは母さんと父さんが来たことに気づき、二人に部屋を紹介している。

「あらあら、凄く良い部屋じゃない」

「そうでしょ！」
「じゃあ私はマリーのお部屋を見せてもらうわ。レオンとジャンは他の部屋をお願いね。マルセルさんも他をお願いします」
「わかったよ」

そうして母さんがマリーに付き合ってくれたので、俺とマルセルさんと父さんは、その間に他の部屋を最低限整えた。

「父さん、ベッドはこっちでいい？」
「うん、そこでお願い。あとは机と椅子と棚を出してくれたら、他はとりあえず机の上に全部置いてくれればいいかな」
「わかった。じゃあここに出しておくね」
「ありがとう。あと物置部屋に入れる荷物は、とりあえず部屋の床に全部置いておいてくれるかい？　それも後で片付けるから。それが終わったらマルセルさんの工房に行っていいよ」
「はーい」
「マルセルさん、長々と手伝ってくれてありがとう」
「良いんじゃよ」

そうして俺は持ってきた全ての荷物をとりあえず部屋に入れて、マルセルさんと工房に向かった。

「マルセルさん、手伝ってくださってありがとうございました」
「別に良いんじゃよ。わしも楽しかったからな。それよりも、この建物がわしの工房か？」
「はい。前の建物と同じぐらいの広さです。広すぎても掃除が大変だと言っていたので……」
「そうじゃな。この大きさが一番じゃ」
「それなら良かったです！」

そうして話しながら工房の入り口に辿り着いた。するとロジェがマルセルさんに鍵を渡す。

「ロンコーリ様、こちらが工房の鍵でございます」
「ありがとう。そうじゃ、わしのことは家名ではなくマルセルで良いぞ。もう家とはなんの関係もないからな」
「かしこまりました。ではマルセル様と呼ばせていただきます」
「ああ。じゃあ開けるぞ」

そうして入った工房の中は、前の工房とあまり変わらない作りだった。もちろん部屋の位置などは変わっているけど、部屋数などは同じだ。

「良い家じゃな」
「気に入っていただけましたか？」
「ああ、年甲斐もなくワクワクするわい。じゃあ荷物を片付けるかのぉ」
「はい！　荷物を出していきますね。工房は、この部屋ですか？」
「そうじゃな」

そうしてマルセルさんの工房も、俺とマルセルさん、それからロジェの三人で整えた。

「よしっ、これで最後です！」
「ふぅ～。すぐ終わるかと思ったが意外と重労働じゃな」
「工房は細かいものも沢山ありましたからね」
「よしっ、ではレオンの家の方に戻るとするか？」
「そうですね。このまま戻らなかったらマリーが拗ねますよ」

そうして三人で俺の家に戻ると、家の片付けは既に終わったのか、

三人はリビングで休憩中だった。

「レオン、工房の片付けはもう終わったの？」
「うん！　完璧だよ」
「それなら良かったわ。休憩したら手伝いに行こうと思っていたのよ」
「もう大丈夫だよ」
「じゃあ、これで今日は終わりかな？」

父さんは少し疲れた様子でそう言った。

「食堂の片付けが終わったなら、とりあえず終わりかな？」
「食堂はとりあえず終わったわ。でもまだ二階とか細かいところは片付けてないから、これから数日かけて家を片付けて、できる限り早めに食堂を始めたいわね」
「そうだね。イアンも明日から来てくれるし、できる限り早く始めたいかな」

そう、イアン君は今まで通り、食堂で従業員として働きつつ護衛をしてくれることになったのだ。影からも護衛できるけど、やはり近くにいる方が守れる確率も上がるらしい。俺としても凄くありがたいことだ。

「そういえば、教師の方はいつ来てくれるんだったかしら？」
「毎週風の日だよ。風の日の午後二時に来てくれるからね」
「そうだったわね。ちゃんと覚えておかないと」
「紙に書いて貼っておく？　曜日と時間なら少しは読めるようになったんじゃない？」
「……確かにそうね。じゃあそうしてくれるかしら？」
「うん！」

家族皆には、公爵家の使用人の方が一人教師として礼儀作法や敬語、読み書きなどを教えてくれているのだ。公爵家を出てからも週に一回授業を続けてくれることになっている。もちろんその分の費用は俺が公爵家に払う予定だ。リシャール様にはいらないって言われたんだけど、流石にそれはダメだろう。感謝も込めて少し多めに支払いたいぐらいだ。

皆はこれからの人生に必須だからか、かなり真剣に学んでいて少しずつ上達している。でもやっぱり、母さんと父さんは結構苦戦しているみたいだ。マリーの方が子供だからか飲み込みが早い。

「じゃあ、とりあえず大丈夫かな？　他に何か気になることある？」
「うーん、まだ住んでみないとわからないわ。また何かあったら連絡するわよ」
「そうだね。じゃあ何かあったらイアン君に言ってね。あとは直接公爵家に来るのでも母さん達なら入れてもらえるし、俺も頻繁にこっちにも来るよ。夜とか突然来るかもしれないけど驚かないでね」
「わかったわ。来る時はレオンの部屋にしてちょうだい」
「お兄ちゃん、たくさん来てね！」
「マリー……、もちろん、たくさん来るよ！」

マリーにそんなこと言われたら、毎晩でも帰ってきちゃいそうだ。

「じゃあ、俺は公爵家に戻るね。また来るから」
「ええ、わかったわ」
「レオン、いつでも帰ってくるんだよ」
「お兄ちゃんまたね！」
「うん！　マルセルさんもまた工房に行きます」
「ああ、いつでも良いぞ」
「ありがとうございます。じゃあまたね」

そうして家族とマルセルさんの引っ越しを終えて、俺は公爵家に帰った。結構疲れた……

223、アイテムボックスの魔法具

ある日の夕食後。リシャール様に真剣な表情で部屋に呼ばれた。アイテムボックスの魔法具について検証が終わったみたいだ。

「レオン君、度々呼んでしまってすまないな」
「いえ、ほとんどは私が何かをやらかしてですので、こちらこそいつもありがとうございます」
「レオン君がやっていることは凄く有益なことなのだ。ただ……、凄すぎるゆえに繁雑なことも付き纏う。それだけだ。自分を卑下することはない。誇っても良い能力と知識だからな」
「……そう言っていただけるとありがたいです。これからもよろしくお願いします」

リシャール様は本当に素晴らしい人だ。次々に厄介ごとを持ち込んでめんどくさいって言われても仕方ない気がするけど、そんなこと一度も言われたことないし、そんな表情をされたこともない。
何度も思うけど、リシャール様と出会えて良かった。

「では、早速本題に入るが良いか？」
「はい」
「先ほども伝えたがアイテムボックスの魔法具のことだ。実は全ての検証が終わった。まずは一番重要なところ、人間を収納できるのかどうかだが……、これは収納不可能だった」

収納不可能ってことは、生きた人間が間違えて収納されて死亡する事故は起こらないってことか。
……良かったぁ。俺は心から安堵して思わず深く息を吐き出した。

「良かったです。怖い性能でなくて」
「ああ、しかし魔物と同様、死亡した人間ならば収納可能だ。それも一応伝えておく」
「……そうなのですね。かしこまりました」

目を逸らしたい事実からも目を逸らさない。俺はそう自分に言い聞かせて、しっかりと頷いた。

「では次だが時間経過と容量についてだ。時間経過は全くなかったので、レオン君の魔法と同じく時間は停止していると思われる。また容量だが、時間の許す限りさまざまなものを収納したが限界が来ることはなかった」
「では、私の魔法と同じ性能ということですね」
「そうだな。取り出す時も、中に手を入れるとリストが頭に思い浮かぶようになっていた。レオン君が言っていた通りだったので、基本的な性能はほとんど同じだろう」

それは凄いな……これ、良くも悪くも影響力が凄そうだ。

「唯一違うところは、魔力がなくなると使えなくなるところだな。そこで魔力がなくなったこの魔法具に、再度魔力を込めてみて欲しい。これで前回収納したものが引き継げるのかどうか確かめたいのだ」

確かにその検証必要だよね。中身を引き継げなくて全て消えちゃうのだとしたら、使い勝手が悪いだろう。

「分かりました。では魔力を込めてみますね」

そうして俺はリシャール様からアイテムボックスの魔法具を受け取り、そこに再度魔力を込めた。前の魔法を引き継げるようにイメージしながら頑張ってみたんだけど、新しい魔法が込められただけな気がする……

「魔力を込めました。確認してみても良いでしょうか？」
「ああ、よろしく頼む。中に入れておいたのは大きな岩と細かい石、作りたてのスープ、氷、魔物の死体だ」
「かしこまりました」

俺は魔石を魔鉄に触れさせて、アイテムボックスの魔法を発動させた。そして中に手を入れてみる。
すると頭の中にリストが思い浮かぶけど……、中身は空だった。

「リシャール様、中には何も入っていません」
「本当か！？」
「はい。リシャール様も確認してみてください」

魔法具を手渡すと、リシャール様も手を入れて中身を確認する。

「本当だ……、何も入っていないな。中のものはどこに行ったのだろうか？」

アイテムボックスは俺のイメージでは、時空間に物を収納する魔法だ。俺が魔法を使うと毎回同じ空間と繋がって物を出し入れできる。多分俺が物を収納している時空間を開けなくなる時は、俺が死んだときだけだろう。
それが魔法具だと、魔力がなくなった時点で魔法の使用者が死んだ時と同じになってしまうのだろうか。

「推測ですが、魔力がなくなった時点で空間との繋がりがなくなる、またはその空間自体がなくなってしまうのだと思います」
「では、中に入っていたものはこの世界から完全に消え去るということだろうか？」
「……そうだと思われます」

それって結構やばい性能だよね。やっぱりアイテムボックスはあまり広めないほうがいい気がする。
リシャール様は今の検証結果を受けてしばらく考え込んだ後、真剣な表情で口を開いた。

「レオン君、このアイテムボックスの魔法具は凄く有用な物なのだが、私としては基本的に広めたくないと思っている」
「はい。私もそう考えていました」
「そうか。まず第一の問題は、魔力が切れた時に中のものが全て消えてしまうということだ。犯罪の証拠隠滅にはもってこいのものになってしまう」

そうだよね、その心配もある。それにリシャール様達はそこまで考えが及ばないかもしれないけど、この星にある物質を綺麗さっぱり消してしまうのって世界全体に悪影響がありそうだ。
アイテムボックスのせいで世界のバランスが崩れたとなったら目も当てられない。まあ、この魔法を俺が使えるってことは、悪影響がないように何かしらの作用が働くのだろうけど……

「それからこちらの方が問題だが、この魔法具を広めた場合、大量の物が簡単に運べるようになってしまう。保存も容易になる。それによって仕事を失う者が大量に出るだろう。それだけでも問題なのだが、これから先レオン君が魔法具を作れなくなるときがあったと

したら、その瞬間に一気に輸送が滞る。やはり一人の力に頼るのは危険性が高い」

確かにそうだよね。俺が魔力を込めるしかないんだから、俺がいなくなったらすぐにアイテムボックスの魔法具は作れなくなる。今までアイテムボックスに頼ってきたところから、急に通常の輸送体制を整えるのは不可能だろう。

そう考えると広めるのは得策じゃないな。

「おっしゃる通りだと思います。アイテムボックスの魔法具を広めるには、デメリットが大きいですね」

「ああ、だから基本的には魔法具を作らないでもらいたい。お願いしても良いだろうか？」

「もちろんです」

「しかし、一つだけお願いをしても良いか？　先ほどまでの話と矛盾するのだが……、魔物の森に対応する場合のみ、アイテムボックスの魔法具を貸し出してもらえないだろうか？　魔物の森にたくさんの騎士を送り込んでいるが、その騎士達の兵糧の輸送。それから倒した魔物の片付けに使わせて欲しい。もちろん、これはレオン君が王立学校を卒業し、その能力を公表してからの話だ」

王立学校を卒業するまでは秘密って言われてたけど、やっぱり卒業したら公表するんだ。そしたら俺は貴族になるんだよね……。まだ先のことは何も聞いてないんだけど、ちょっと不安だ。

公表する時は、使徒様じゃないことだけは強調してもらおう……

「卒業したら公表するのですね」

「ああ、卒業したら貴族になることができるからな。そのタイミングでの公表が一番だ。いつまでも隠しておけることではないだろう」

「確かにそうですね」

そうなると、断る理由はないな。魔物の森への対処は今だけだろうし、そういう世界的な有事を乗り越えるためには使ってもいいだろう。
世界のバランスとかを考えるとダメなのかもしれないけど、そもそも魔物によって人間は絶滅するかもしれないって時なんだ。使えるものは全て使うべきだろう。

「では、その時が来たらアイテムボックスの魔法具は作ります」
「本当か！　レオン君、感謝する」

でも、王家の管理下で使うことは前提とした方がいいよね。誰かに悪用されても困るし。

「はい。どのような用途で使うのかをしっかりと定めた上で、王家の管理として使用することを約束していただけますか？」
「勿論だ。約束する」
「ありがとうございます。ではその時にお作りいたします。……しかし魔物の片付けと仰いましたが、今まではどうしていたのですか？」
「基本的にはまとめて焼いていたのだが、運ぶのが難しいような魔物はその場に放置をしていた。それによりその魔物を餌とする魔物がそれを食べにきてと、悪循環だったのだ……」

確かに放置してたら魔物が群がってくるよね。それは改善すべきだな。

「それは改善すべきですね。少しでも役立てるのであれば嬉しいです」
「少しどころではない、誰よりも多大な貢献だ。報酬はしっかりと

支払うので受け取ってほしい」
「……別に良いのですが、そういうわけにもいきませんよね。では報酬は受け取らせていただきます。ありがとうございます」
そうしてアイテムボックスの魔法具をどう活用するのかまで決めて、俺とリシャール様の話し合いは終了となった。

２２４、スイーツ店のメニューと店名決定

だんだんと夏も過ぎ去り、肌寒さを感じるようになってきた頃。俺はヨアンとロニーに呼ばれてお店まで向かっている。なんでも一通りスイーツが完成したので、メニューを決定するらしい。

俺は今日が凄く楽しみで、昨日の夜はワクワクしてあまり眠れなかった。どんなメニューになるだろうか。ヨアンはどこまでのものを完成させたのだろうか。

そんなことを考えながらそわそわと馬車に揺られていると、すぐお店に辿り着く。そしてロジェとともに厨房まで向かうと、ロニーとヨアンが迎え入れてくれた。

「あっ、レオン来たね」
「うん。他の皆はどうしたの？」
「今日はメニュー決めでお店を使うから、皆は屋台と寮にいるよ」
「そうなんだ」
「レオン様、もう少しお待ちください。今最後の仕上げをしているところですので」

そう言ったヨアンの手元には、とても美味しそうなケーキが作られている。

「うん。待ってるから急がなくていいよ」
「ありがとうございます」
「じゃあレオン、ヨアンが作り終わるまで休憩室で色々と話し合いをしても良い？」
「もちろん良いよ。じゃあヨアン、休憩室にいるから終わったら声

をかけてね」
「かしこまりました」
そして俺とロニーは休憩室に移動した。もちろんロジェも一緒だ。
「たくさん話し合いたいことがあるんだけど、まず一番に決めたいのはお店の名前なんだ。まだ決めてなかったよね？」
「そういえば、決めてなかった……」
完全に忘れてたよ……。商会の名前だけ決めて満足してた。確かにないと不便だよね。
「忘れてた？」
「うん、完全に」
「やっぱり、そうだと思ってたんだ。とりあえず今日決めちゃおうか。あとそろそろ木箱も発注するから商会の紋章も知りたいんだ。確か絵師に頼んでたよね？」
「そうだ、その話をしようと思ってたんだよ。ちょうどこの間紋章が決まったんだ」
商会の紋章を決めるのは予想以上に大変だった。紋章を決める専門の絵師に頼んだんだけど、貴族家で使われている紋章は基本的にダメとか、似ているものも避けるとか、制約が多かったのだ。
でもなんとか時間をかけて決定した。最終的にメインはカトラリーになって、周りを果物などで華やかにした感じだ。さすがプロって感じでおしゃれに仕上がっている。
「ロジェ、紋章の紙をくれる？」
「かしこまりました」

俺はロジェから紋章が描かれた紙を受け取り、机の上に広げた。

「これに決まったんだけど、どう思う？」

「うわぁ、凄いね。さすがプロだよ。この前レオンが考えてたやつとは天と地ほどの差がある」

「ロニー、それは忘れて！」

「ははっ、ごめんごめん。でもこれ本当に良いと思う。スイーツ店の木箱につける紋章としても完璧だね。この紙もらってもいい？これを工房に持っていって焼印を作ってもらうから」

「もちろん。何枚か描いてもらったから大丈夫だよ」

「じゃあ借りるね」

「うん。よろしくね」

ロニーはそうして紙を受け取ると、折らないように丁寧にカバンに仕舞い込んだ。

「じゃあ紋章はこれで大丈夫だね。あとはお店の名前だけど、どうする？」

「うーん、実は何も考えてなかったんだよね……」

スイーツ店の名前と言ったら、日本では可愛らしい名前が多かった。その辺からもらってこようかな。

シュガーとかミルクとかフラワーなどをいい感じに組み合わせて……シュルクワー、ミルフラ、ガーミルフ。うーん、……何かどれもピンとこない。

「ロニーは何か候補がある？」

「そうだね……やっぱり商会の名前を一部入れたり、レオンの名前を入れた方がいいんじゃない？」

「そうするのが普通？」

「そうする人が多いかな」
「そうなんだ……」

じゃあジャパーニスかレオンを一部入れて、さっき考えた名前と組み合わせようかな。
うーん……、シュガニスとかどうだろう！　結構いいんじゃない？

「ロニー、シュガニスとかどうかな？」
「シュガニスね。シュガニス、シュガニス……うん、結構いいかも」

ロニーは口の中で何度か名前を復唱してから、大きく頷いてくれた。

「良かった。ロジェはどう思う？」
「そうですね。名前の雰囲気がとても良いと思います。発音もしやすいですし、覚えやすい店名でございます」
「本当？　それなら良かった。じゃあシュガニスで決定でいいかな？」
「うん！」

結構良い名前になった気がする。ジャパーニス商会の一号店シュガニス。おしゃれだよね。

「お店の外に店名の看板も作ろうか。商会の紋章も入れた方が良いよね」
「確かに。目立つところに作りたいな」
「じゃあそれも頼んでおくね」
「ありがとう」

そうしてロニーと他にも細々としたものについて話し合っていると、休憩室のドアが叩かれた。

「ヨアン？　入っても良いよ」

「失礼いたします。レオン様、スイーツが完成いたしました」

「ありがとう。じゃあ話し合いはやめて試食にしようか」

「そうだね。続きはまた今度にしよう」

「では、こちらに準備をすれば良いでしょうか？」

「うん。よろしくね」

そうしてヨアンとロニー、ロジェの三人が、休憩室のテーブルの上に試食の準備をしてくれた。

「うわぁ、本当に凄い。さすがヨアンだ」

机の上には綺麗で美味しそうなスイーツがいくつも並んでいる。まるで宝石店にいるように一つ一つのスイーツが輝いて見える。本当に感動するよ……、遂にここまで来たんだな。

俺はなんだか感慨深くなって、少しだけ泣きそうになった。

「ありがとうございます。そう言っていただけると嬉しいです」

ヨアンはそう言って嬉しそうに笑った。

「本当にありがとう」

「いえ、こちらこそ思う存分研究させていただいて感謝しています。では、一つ一つ説明していきますね。まずはこちらのスイーツですが、スポンジケーキに生クリームと季節の果物を挟み込み、周りにも生クリームを塗り仕上げた物です。上には生クリームと果物で華

やかにデコレーションしております」

一つ目は季節の果物を使ったショートケーキだ。すっごく華やかで美味しそう。日本のケーキ屋で売っててても目を引くだろう。

「凄く華やかで可愛くて、絶対人気になるよ」

「ありがとうございます。レオン様が八等分にして売りたいとおっしゃられていましたので、等分しやすいようなデコレーションに仕上げてあります」

「確かにそうなってるね……本当に完璧だ。じゃあ食べてみても良い？」

「かしこまりました。では切り分けます」

そうしてヨアンは、ショートケーキを八等分に切り分けてくれた。断面も綺麗で文句の付け所がない。

「いただくね」

俺は少し緊張しながらフォークを手に持ち、綺麗なケーキを損なわないよう慎重に一口分を切り分けた。そしてゆっくりと口に入れる。

うん、スポンジはふわふわだけど少しだけ硬めでしっかりとしていて、生クリームは軽くてとろける。果物のみずみずしさもケーキとマッチしている。

やばい……泣きそうなぐらい美味しい。

「ヨアン。本当に、本当に美味しいよ」

「ありがとうございます」

「これは絶対人気になる。皆はどう思う？」

「僕は何回か試食してるんだけど、何度食べても美味しすぎて幸せになれるよ」
「これは幸せの味だよね。ロジェはどう？」
スイーツにハマったロジェは、スイーツの試食の時だけは遠慮しなくなったのだ。最近は自ら自分の分も準備するほどになっている。
「はい。……幸せです」
ロジェはそう言ってうっとりとした表情を浮かべた。ロジェの表情が一番崩れる時がスイーツを食べた時っていうのはちょっと悔しいけど、まあしょうがないよね。本当に好きみたいだから。ロジェにそういうものができて良かった。
「良かったよ。じゃあヨアン、これはメニューに採用！　名前は季節のフルーツショートケーキでいこう」
「本当ですか！？　ありがとうございます！」
俺がそう言うと、ヨアンは途端に表情を明るくしてガバッと勢いよく頭を下げた。
本当は俺が採用の可否を決めるのも烏滸がましいんだけど、一応代表的な立ち位置だからね。でもこの後のスイーツも全て採用の予感しかしない。俺はそう考えて、思わず顔に苦笑を浮かべた。
「レオン、季節のフルーツショートケーキって？　季節のフルーツはわかるけど、ショートケーキって何？」
ロニーはケーキがメニューに採用されたことよりも、名前が引っかかっているみたいだ。確かにそれも説明しなきゃだよね。自分がわかりやすいように日本の名前をそのまま流用することにしたので、

皆には覚えてもらわないとだ。

225、今後の予定

「まず、スポンジケーキに生クリームを塗ったものをショートケーキって名付けたんだ。そしてショートケーキに季節のフルーツをプラスしてるから、これは季節のフルーツショートケーキって名前にしたよ」

改めて考えてみたらショートケーキってどういう意味なのかよく知らないんだけど、とりあえず一番オーソドックスな生クリームとスポンジのケーキがショートケーキだと俺の中では認識している。

「ケーキっていうのに何か意味があるの？　スポンジケーキとショートケーキで同じだけど？」

「ケーキはこれらのスイーツ全般を広くケーキって名付けたんだ。何て言えばいいんだろう……、生菓子のことをケーキっていうのかな？」

「生菓子？」

「うん。冷蔵庫で保存する必要があるスイーツのこと」

多分、そんな意味だと思う。俺もよく知らないけど……

「ふーん、何となくは理解できたよ。まあ、レオンが付けた名前を覚えればいいか」

ロニーはそう言って、メニューを決める紙に季節のフルーツショートケーキと書き込んでいく。

「よしっ、じゃあこれが一品目ね」

「うん。ヨアン次をお願いしていい？」
「かしこまりました。次は……」

そうして季節のフルーツロールケーキ、シフォンケーキ、ミルクレープ、キャラメルナッツケーキ、バタークリームケーキを皆で試食して、全てメニューに採用した。
カラメルに少しだけ手を加えてキャラメルを作り出してくれたり、バターを色々と改良してバタークリームを作ってくれたりと、ヨアンは俺の想像以上の成果を出してくれていた。
どれも文句なしに美味しくて、迷うことなくメニューに採用だ。
本当に、ヨアンは凄い。

「これで全てです」
「ヨアン、何度も言うけど、本当に凄すぎるよ。もう感動してる」
「……ありがとうございます。そこまで褒められると照れますね」
「これはいくら褒めても足りないぐらいだよ！　本当にどれも最高だった」
「ですが、チーズを使ったケーキは完成しませんでした。なのでこれからも頑張ります！」

こんなに作り出してまだモチベーションがあるなんて。本当に凄いな……

「ありがとう。楽しみにしてるよ。チーズの仕入れ量を増やしてもいいからね」
「本当ですか！？　ではチーズと牛乳、それから生クリームの仕入れを少し増やしても良いでしょうか？」
「もちろんだよ。足りないと思ったらいつでも言って」
「レオン様、ありがとうございます！！」

ヨアンは瞳を輝かせて少し身を乗り出し、感動した様子でそう言った。俺はその様子に思わず苦笑いだ。
これは近いうちにチーズケーキも形になるかもしれないね。無理はしないようにしてやってもらおう。でもチーズケーキが完成するの、かなり楽しみだ。

これでメニューが決まったから、一気にお店の準備が進んだよね。商品さえあればあとはどうにでもなるし、ちょっとだけ肩の荷が降りたかも。

「ねえレオン、店頭で売るのは基本的に八等分したものなんだよね？　切り分けないものは売らないの？」
「そうだ、その話もしようと思ってたんだよ。切り分けないケーキのことをホールケーキって名付けたんだけど、ホールケーキは予約限定で売ろうかなって思ってるんだ。どう思う？」

俺がそう言うと、ロニーは少しだけ考え込んだ後、徐に口を開いた。

「確かに予約なら無駄になることもないし、混雑も減らせるからいいかもしれないね。じゃあ店頭で買えるのは切り分けたケーキのみで、予約はホールケーキにするってことでいい？」
「うん。それでいいかな。ヨアンはどう思う？」
「はい。確かにホールケーキを買いに来る方の人数が事前にわかると、とてもありがたいです。それからこれは提案なのですが、予約ならばリクエストケーキというのもありかなと思いました」
「リクエストケーキ？」
「はい。ケーキは果物の種類やクリームの種類、トッピングや生地などを自由に組み合わせることができるので、お客様に選んでいただくのもありかなと思いました」

確かにそれはありかもしれない。自分で選ぶにはまず、クリームや生地などがどんな味かを確かめないといけないだろう。よってお客さん達は、そのためにお店のケーキを食べてくれるはずだ。
そしてその上でリクエストケーキを注文してくれるなら、最高の流れだな。

「それいいね。やってみようか」
「本当ですか！？　ありがとうございます」
「じゃあ、予約は既存のホールケーキとリクエストケーキのみ。店頭で売るのはカットケーキ。カフェスペースで売るのもカットケーキのみにしようか」
「分かった。じゃあその予定にしておくよ。そうだ、注文を受けてパーティーにケーキを配達するって話はどうするの？　前に言ってたよね？」
「それ悩んでるんだけど、とりあえず最初はやらなくていいかなと思ってるんだ。慣れてきて余力が出てからにするよ。その頃にはケーキも貴族社会に広まってるだろうし」

色々に手を出しすぎても上手くいかないから、欲張らない方がいいだろう。

「分かった。じゃあ後の予定に入れておくね」
「うん、よろしく。あっそうだ、ヨアン。ヨアンはクッキーって作れるよね？」
「はい。最近はあまり作っていませんが、前に教えていただいたので作れます。ポールとリズには練習としてよく焼かせています。あれはオーブンの使い方を覚えるのに良いのです」
「そうなんだ、ならちょうど良いかも！　クッキーもケーキと一緒に売りに出したいんだよね。ケーキを買いに来た人が一緒に買って

くれると思うんだ。クッキーも作ることはできる？」

俺がそう聞くとヨアンは少しだけ悩んだけど、すぐに顔を上げて頷いた。

「はい。クッキーはそこまで大変でもないですし、一度に大量に作れるので問題ありません」

「それなら良かった！　じゃあクッキーもお願いするね。そうだ、クッキーにナッツやドライフルーツ、あとお茶の葉を入れたりした味も余裕があれば作ってくれたら嬉しいな」

「ナッツにドライフルーツ、お茶の葉ですか……？」

「そう。細かくして入れたり少し食感を残したり、そこはヨアンに任せるよ」

「かしこまりました。お任せください」

「ありがとう」

クッキーって軽くつまめるものだし結構売れると思うんだよね。冷蔵も必要ないしケーキより日持ちするし。

「レオン様、先程のクッキーのように、ケーキの改良案などがありましたなんでも仰ってください。他に思いついたことなどはございませんか？」

「うーん……」

ケーキの改良案はヨアンに全部話したんだよね。他に何かあったかな……

そうしてしばらく考えていると、前に手に入れてアイテムボックスに仕舞い込んでいた物の存在を思い出した。

そう、カカオだ。前に市場を巡っていたら売っているお店を見つ

けたのだ。何でも遠くの国からの輸入品で、その国では細かく砕いて飲み物にしたりパンに混ぜたりしているらしい。
この国ではあまり売れないってことで安くなっていたので買い占めたんだけど、かなり大きな実だったのでどうすればいいのか分からず、結局放置してたんだ。

ヨアンも今なら少しは余裕があるだろうし、この機会に渡してみようかな。そう考えて、俺はカバンから取り出すふりをして、アイテムボックスからカカオの実を一つだけ取り出した。
アイテムボックスを誤魔化すために、いつでも鞄を持ち歩いているのだ。

「これなんだけど、知ってる？」

そしてヨアンにカカオの実を見せながらそう聞いた。

「これは何ですか……？　初めて見ました」
「これは遠くの国で栽培されている物で、輸入品を市場で見つけて買ってきたんだ。その国では細かく砕いて飲み物にしたり、パンに混ぜたりしてるらしいよ」
「そうなのですね。このまま砕いてみれば良いのでしょうか？」
「ううん、お店の人が中にある種を使うんだって言ってたけど、よくわからないんだ」
「種を使うのですね。ナッツみたいなものでしょうか？」
「そうかもしれないね。だからケーキのアレンジに使えるかなって思ったんだ。どう、研究してみない？」

俺がそう言うと、ヨアンは途端に瞳をキラキラとさせて頷いた。
「もちろんです！　新しいものを使って研究ができるなんて……最

高です！」
「それは良かった。じゃあ、まだ買った分がたくさんあるから後で持ってくるね」
「ありがとうございます！」

俺もカカオからどうやってチョコレートにすればいいのか全くわからないから、とりあえずカカオに関しては変な先入観を与えずに自由にやってもらうことに決めた。
多分牛乳や砂糖と混ぜるのだと思うけど……、そんな程度の知識しか持ち合わせていないからね。

「多分これを使うのは大変だから、もし研究が成功しなくてもいいからね。無理せず気長にやってほしい」
「かしこまりました！　頑張ります！」

ヨアンは無理せずにって言葉が聞こえてないみたいで、やる気満々だ。まあ、それでチョコレートに近づけるのならありがたいし、無理に止めることもないだろう。体を壊さない程度に抑えつつ頑張ってもらおう。

「じゃあ、今日はもう終わりでいいかな？　メニューも決まったしヨアンは新しい材料にそわそわしてるし」

ロニーが色々と書き込んだ紙を片付けながらそう言った。

「確かにそうだね。じゃあ解散にしようか」
「了解」
「かしこまりました！」

そうして初期メンバー三人での話し合いは終わった。メニューも

決まったし、準備は順調だ。

２２６、ダリガード男爵家でのお茶会

お店のメニューを決定してから最初の回復の日。
俺はヨアンとロジェと共にダリガード男爵家を訪れていた。もちろん目的はスイーツのお披露目だ。

タウンゼント公爵家の皆さんや王家の方々を招待したスイーツのお披露目は、お店を使って冬頃にやろうかなと思っている。しかしその前に、ダリガード男爵家の皆さんにはお披露目したかったのだ。
ピエール様とキャロリン様がいなかったら絶対にスイーツは完成していなかったし、それにお店でのお披露目にお二人を呼ぶのは酷だろう。公爵家や王族なんていたら楽しめないよね。

だからここには一番にスイーツを持ってきた。今日は喜んでもらえたら嬉しいな。

「ピエール様、キャロリン様、本日はお招きありがとうございます」

俺は通された応接室に入り、勧められた席に座ってからそう挨拶をした。

「いや、いいんだよ。レオン君からスイーツが完成したと連絡を聞いた時は本当に嬉しくてね。すぐにお茶会をセッティングしてしまったよ」

ピエール様は顔に苦笑を浮かべながら少し照れた様子だ。

「この人その日からずっとソワソワしていたのよ。もう落ち着きが

なくて困っちゃったわ」
「キャロリン、それは内緒だろう？」
「あら、本当のことじゃない」

ふふっ、この二人は本当に仲がいいな。見ているといつも和む。俺はそんな二人の平和なやりとりを眺めたあと、徐に口を開いた。

「楽しみにしていただけて嬉しいです。これまで研究に励んできたヨアンも喜ぶでしょう」
「ヨアンをレオン君に紹介したのは大正解だったよ。あの時の私を褒めてやりたいな。ははは っ」

ピエール様はそう言って上機嫌に笑った。キャロリン様はそんなピエール様に呆れた様子ながらも、優しく微笑んでいる。

「ヨアンのことを見出したピエール様のその慧眼、さらに成果が出なければお金ばかりかかるスイーツの研究を続けられていた熱意、全てにおいて尊敬しています」

これは俺の本心だ。本当にピエール様は凄い。ヨアンほどの逸材は見つけようとしても見つかるものではないだろう。

「そう言われると照れるな。ありがとう。……ただ、私の方こそレオン君を心から尊敬しているよ。私がスイーツの研究を続けていたところで成果は挙げられなかっただろう。そこはレオン君の手腕だ」
「……ありがとうございます」

なんか素直に褒められると、ちょっと照れる。
そうしてお互いに褒め合ってなんだか微妙な雰囲気になったところで、キャロリン様が口を開いた。

「ではレオン君、そろそろスイーツをいただいても良いかしら？」
「は、はい。もちろんです！」
「そうだな。レオン君お願いするよ」
「かしこまりました。ロジェ」

俺がロジェに合図を送ると、ダリガード男爵家の使用人の方が部屋の扉を開けてくれて、ヨアンが部屋に入ってきた。ヨアンが押してきたワゴンには、今は蓋が被せられて中身がわからないけれど、たくさんのスイーツが並んでいるようだ。
ヨアンは部屋に入ってきて一礼すると、一つのお皿を手に持った。そして蓋を開けて中身を見せる。

「こちらが季節のフルーツショートケーキでございます」
「わぁ、なんて素敵なの！」
「本当だ……。なんて綺麗なスイーツなんだ……」

キャロリン様はかなり気に入ってくれた様子で、瞳を輝かせてショートケーキに魅入っている。ピエール様も目が釘付けになっている。

「こちらはスポンジケーキというスイーツを基本として、その間に季節のフルーツと生クリームを挟み、周りも生クリームとフルーツで飾り付けてあるものです。今回のフルーツは葡萄でございます」
「素晴らしいわ。これは、どのようにして食べるのかしら？」
「こちらは八等分に切り分けて召し上がっていただきます。切り分けてしまっても良いでしょうか？」
「……勿体無いけれど仕方がないわね。お願いするわ」
「かしこまりました」

そうしてヨアンが綺麗にホールケーキをカットしてくれて、俺たちの前には八等分されたケーキが並ぶ。

「このサイズと同等のものがいくつもございますので、多いようでしたら少しずつ召し上がってください」

「分かった。ではいただこう」

「いただきますね」

ピエール様とキャロリン様はお二人とも緊張した様子でゆっくりとケーキを口に運び、少しだけ驚いた表情をした後に目を閉じて深く味わった。

そしてお二人とも目を開けると静かにフォークを置き、俺に向かって頭を下げた。

「レオン君、私は今感動しているよ。私たちが目指していたのはこれだ。こういうものが作りたかったんだ。レオン君……、私たちの夢を、叶えてくれてありがとう」

「レオン君、私からも、本当にありがとう」

二人はそう言って頭を下げたあと、顔を上げて綺麗に微笑んだ。その顔には涙が伝っていたけれど、とても綺麗な笑顔だった。

「お二人の夢を叶える手伝いができたこと、本当に嬉しく思います」

「レオン君、本当にありがとう。……ははっ、泣くなんてこんなに素晴らしいスイーツを前に失礼だな。辛気臭い雰囲気はやめて楽しもうか」

「そうですわね。どうせならば皆で楽しみましょうか。レオン君、使用人も一緒に良いかしら？」

キャロリン様はそう言って楽しそうに微笑んだ。

「もちろんです。じゃあヨアン、全てのスイーツをお二人に紹介しながら切り分けてくれる？　ロジェは切り分けたスイーツを机に並べてくれる？」
「かしこまりました」
「貴方達も追加でお皿とカトラリー、それからお茶も持ってきて。一緒に食べましょう」

そうしてピエール様とキャロリン様と、たくさんの使用人の方々と数時間に渡ってお茶会を楽しんだ。皆で一通りのスイーツを食べてから一番好きなものを話し合ったり、他にもどんなケーキが作れるのかアイデアを出し合ったり、本当に楽しい時間となった。
やっぱりダリガード男爵家のこの緩い雰囲気が好きだな、そう思った。

「レオン君、今日は本当にありがとう。私にとって今日は人生最良の日だよ」
「私からもお礼を言いたいわ。本当にありがとう」
「こちらこそ、たくさんお話ができて楽しい時間を過ごせました。ありがとうございます。また定期的にスイーツをお届けいたします。それから、新作ができた時にはこうしてお茶会を開いてはいただけませんか？」
「本当か？　それは私からお願いしたいところだ。いつでもここに来てくれていい」
「ありがとうございます」

これからも定期的に来よう。この家の雰囲気が、このお二人の雰囲気が俺は大好きだ。

「そうだ、ステイシーを呼んでも良いか？」
「もちろん断ることなどありませんが、ステイシー様は本日屋敷におられないのでは？」

もしステイシー様もお茶会にいるのなら、卵を使ってないスイーツを準備しようかと思ったんだけど、今日はいないと言われたのだ。

「今日は予定があって出掛けていたが先程帰宅したと連絡があった。ステイシーもレオン君には会いたがっていたからな、このままレオン君を帰らせてしまっては私が怒られてしまう」

ピエール様は顔に苦笑を浮かべながらそう言った。

「そうだったのですね。私もステイシー様とお話しするのは好きですので、ぜひお願いしたいです」
「ありがとう。……では、ステイシーを呼んできてくれ」
「かしこまりました」

ピエール様のその言葉で使用人の方が一人部屋から出ていき、その数分後にステイシー様が応接室に現れた。

「レオン！　ここではお久しぶりですね」
「そうですね。こちらにお邪魔するのも随分と期間が空いてしまいました」
「もっと来てくれてもいいのですよ。皆もレオンが来ないことを寂しがっています。ユキなんて最近しょんぼりとしているのです……」

……ユキってあれだよな。あの花だよね。ついに名前を覚えた！

「それは心配ですね」

「そうなのです。できればレオンももっと会いにきてあげてください」
「……かしこまりました。時間が取れましたら、その時は是非」
「本当ですか！　では来週の回復の日にしますか？　それとも王立学校の帰りでも良いでしょうか？」

ステイシー様はとても嬉しそうな表情で俺にそう提案してくる。
えっと……、そんなにすぐなの？

別にここに来るのが嫌なわけではないんだけど、貴族女性の家に頻繁に通うのってどうなんだろうって思うんだよね。それにこれ以上仲良くなったら、また嫁にって勧められそうな予感がするし……
ピエール様とキャロリン様はステイシー様が大好きだから、そこは結構強引になるんだ。ステイシー様のことは友達としては好きだけど、それ以上の関係性になりたいとは思えないし……

この世界って、特に貴族社会って異性の友達は難しいんだ。本人達が友達だと思っててもそう見てくれないし、部屋に二人きりでいただけで責任取ってとかいう話も聞く。

どうしようか、どう答えれば良いかな。ステイシー様を悲しませたくはないんだけど……
そう考えてぐるぐると悩んでいると、ピエール様が助け舟を出してくれた。
「ステイシー、レオン君も忙しいんだ。困らせてはいけないよ」
……ピエール様、ありがとうございます！　強引に嫁に勧められるかもなんて考えてごめんなさい！

「……そうでした。レオン、無理に誘ってしまってごめんなさい。久しぶりにレオンがうちに来ていたのが嬉しくて」
「いえ、誘っていただけて嬉しいです。……こちらに頻繁に来るのは難しいのですが、こうして訪れた時にはお茶会などいたしましょう」

俺がそう言うと、ステイシー様はまた笑顔に戻ってくれた。

「はい！　では、今日はまだお時間ありますか？　私にお付き合いくださいませんか？」
「もちろんです。ステイシー様、最近お料理の方はどうですか？」

確かステイシー様はお店のためのレシピ作りの過程で、料理にハマっていたはずだ。

「はい。最近は簡単なお料理ならば、一人で作れるほどになりました」
「そうなのですか。それは凄いですね」
「もう少し上手になったら食べていただけますか？　私の料理は野菜が基本ですが……」
「よろしいのですか……？」
「ええ、レオンに食べていただきたいです」
「ではお言葉に甘えて、その時はいただきますね」

俺がそう言うと、ステイシー様は満面の笑みを浮かべて頷いた。

「はい！　私、これからもっとお料理を頑張りますね。レオンのお店はどうなのですか？」
「お店は順調に準備が進んでいます。既にメニューも決まりましたし、従業員の教育も進んでいます。あとは細かい調整などですね」

「そうなのですね！　レオンのお店が開店したら絶対に伺います。私は食べられませんけれど、お祖父様とお祖母様にお土産を買って帰ります」
「ありがとうございます。お二人は絶対に喜ばれますね」

ステイシー様みたいに卵を食べられない人向けのスイーツを作ったら需要あるかな……。あと乳製品がダメな人とかもいたら、それを使わないスイーツも。
ちょっと考えるのはありかもしれない。でも、お店が軌道に乗ってからになるな……。どの程度の需要があるかも調べないとだし。

「お店が軌道に乗ってからなのでまだ先になるとは思いますが、ステイシー様にも召し上がっていただけるスイーツを考えたいと思っています。もしそれが完成したならば、是非お店でスイーツを召し上がってください」
「……本当ですか！？　私、凄く嬉しいです……。その時を楽しみにしています」
「はい、頑張りますね」

そうして最後はステイシー様と楽しく談笑して、ダリガード男爵家でのお茶会は終わった。……楽しかったな。

227、秋の休み開始

秋も深まり朝晩には肌寒さを感じるようになった頃。王立学校は秋の休みに入る。

今日は秋の休み前最終日、いつもならゆるい雰囲気が漂う校内も、今日ばっかりはピリピリとしていた。なぜなら明後日から魔物の森への遠征があるからだ。

結局遠征にはかなりの人数が参加することになり、敵対勢力の子供達も一部は参加する予定らしい。勲章目当ての貴族も多いみたいだけど、それでも参加することに意義があるだろう。

俺のクラスであるEクラスも例外ではなく、教室に入るとどこか緊張感のある雰囲気が漂っていた。

「ロニー、おはよう」

「レオンおはよう」

俺はロニーにいつもより小声で挨拶をして、静かに席に着いた。

「なんか、今日は皆緊張してるみたいだね」

「明後日から魔物の森に行くからね。それに、今日が馬車の席とかを決める日だし……」

「確かにそっか。馬車の席は重要だよね、長時間一緒にいることになるし」

「うん。僕も結構緊張してるよ。レオンと同じならいいんだけど……。多分身分ごとに分けるんだよね？」

「いや、もしかしたら違うかも」

マルティーヌが魔物の森への道中は皆一緒だって言ってたんだよね……だから、身分が高い人から同行者を決められるとかじゃないのかな？

俺がその話をロニーにしようとしたところで、教室にEクラスの担任であるオーブリー先生が入ってきた。

「皆おはよう。揃ってるか？」

オーブリー先生はそう言って教室をぐるりと見回す。

「皆いるみたいだな。では今日の予定だが、まず一限目の授業はなしだ。その時間で魔物の森への遠征について、色々と確認をすることになっている。しっかりと聞くように。遠征に行かない者は静かに自習をしててくれ」

その言葉に自習を始めたのは数人程度。このクラスはほとんど全員が遠征に行くらしい。

「よしっ、ではまず明後日の集合場所だが、ここ王立学校の馬車乗り場だ。九時には出発予定なので早めに来るように。Eクラスが遅れると印象が悪いから、そうだな……、八時過ぎには来るように」

当日はリュシアンとは別で来た方がいいかな。リュシアンが早い時間に来ても他の人が困るだろうし、俺が遅れていったら印象悪いだろうし。

こういうところが身分がある世界の面倒くさいところだ。ロニーと待ち合わせして歩いてこようかな。

「道中は六人一組で馬車に乗り移動することになる。基本的に遠征の最中はその六人の班で活動をしてもらうことになるから、班の中

では仲良くな。ではその班をこれから発表する」
「先生、班はもう決まっているのですか？」
前の方に座っている女の子がそう聞いた。
「ああ、既に決まっている。班分けは基本的に身分が高い方々から同じ班になりたい者を指定してもらい、それを先生達で調整し班分けをした」
やっぱりその仕組みだったんだ。それなら俺は皆と一緒の班になれるかな。多分ロニーも大丈夫だろう。
俺は少しだけ安心してオーブリー先生の発表を待った。
「班には一から番号が振られているから、自分の班を覚えておくように。まず第一班、このクラスからは二名選ばれている。レオンとロニーだ。同じ班のメンバーは、ステファン・ラースラシア、マルティーヌ・ラースラシア、リュシアン・タウンゼントだ。この班は数を合わせるために五人だけとなっている」
よしっ、俺的には最高のメンバーだ。魔物の森への遠征、楽しみになってきたかも。
最初はステファンとマルティーヌは行けないのかなと思ってたんだけど、聞いてみたら王族だからこそ見てこなければいけないらしい。確かに、実際に見たことがあるのとないのとでは違うよね。
二人は大変なこともあるだろうけど、それでも二人と一緒に行けて嬉しい。
本当はアルテュル様もここに入る予定だったんだけど、遠征参加が許可されなかったようだ。アルテュル様……大丈夫かな。俺はもうできることがないんだけど、やっぱり心配だ。

「二人は大変だろうが、まあ、頑張れよ」

オーブリー先生は同情するような表情で、俺たちに向けてそう言った。まあ普通に考えて、高位貴族の班に放り込まれるただの平民って大変そうだよね。俺からしたらこのメンバーが一番落ち着くんだけど。

「……レ、レオン、今のメンバー本当に！？　僕の名前もあったけど間違えてない？」

しかし喜んでいる俺とは裏腹に、ロニーは衝撃を受けているらしい。俺に顔を近づけて小声でそう叫んだ。

オーブリー先生はもう他の班分けを発表しているから、少しは話しても大丈夫だろう。そう判断して、ロニーの方に体を向ける。

「間違えてないよ。俺とロニーとあの三人だよ」

「な、なんで僕も一緒なの？　レオンはわかるけど……」

「うーん、ロニーも友達だからじゃない？」

「僕も友達枠だったの！？　ちゃんと話したのは一度だけだよ？ありがたいけど、ありがたいけど緊張してやばいよ。最低でも五週間はずっと一緒ってことだよね？」

「そうなるね。でも緊張しなくて大丈夫だよ。皆は身分を笠に着て何かをするような人たちじゃないし」

「それは僕もわかってるんだけど……、なんかオーラが、雰囲気が、緊張するんだよ！」

「……そうかな？」

最近は慣れちゃって全く緊張しなくなったんだよね……そんなオーラなんて出てるっけ？　意外と普通な感じだと思うけど。

「レオンはもう慣れてるからわからないんだよ。凄いからね。そこにいるだけでキラキラして威圧感あるから」
「……気のせいじゃない？」
「そんなことない！」
「まあ、ロニーも五週間も一緒にいれば慣れるよ。最初は俺が仲を取り持つから」
「……絶対だよ？　僕と他の方達だけにしないでね？」
「分かった分かった。気をつけるよ」

そうして話していると、班分けの発表が終わったらしい。

「今発表した班分けを覚えておくように。では次は持ち物だが、まず班ごとに乗る馬車は基本的に王立学校の馬車となる。しかし班で別の馬車も用意することが可能だ。よってそれぞれの班により馬車の大きさが異なるので、持っていける荷物の量も変わる。基本的には王立学校の馬車で行くという前提で荷物をまとめて持ってくるように。必要な荷物は事前に知らせておいたものと変わらないから、前に渡した一覧を参考にするように」

馬車って自分たちで用意することもできるんだ。皆王立学校の馬車で行くのかと思ってた。
それだと俺たちは王家の馬車なのかな……、凄く目立ちそう。まあ、快適であるのに越したことはないよね。

「それから、男爵位以上の爵位を持つ家の子息子女は従者を一名連れて行けることになっている。しかし騎士爵以下の者は連れていけないから、Ｅクラスのお前たちは当日一人だけで来るように」

男爵位以上は従者を連れて行けるのか。王立学校にはダメだった

から遠征でもダメなのかと思ってた。
　でもそうだよね、生まれた時から従者やメイドに世話をされている貴族達が、何週間も一人で生活するなんて普通に考えて無理なんだろう。
　そうすると予想以上の大人数になりそうだな。従者も全員馬車に乗れるのだろうか？

「先生、従者の方が馬車に乗り切れない場合はどうするのですか？」
　クラスの男の子が俺の疑問をちょうど質問してくれた。

「ああ、その場合は従者が乗る馬車をもう一台増やしても良いことになっている」

　もう一台増やすって、そんなことをしてたら馬車の数がかなり多くなりそうだけど……。予想以上に大規模な遠征なのかも。

「ですが、それだと馬車の数が凄いことになりませんか？」
「そうなるな。だから道中はかなり大変だ。魔物の森への最前線の街、リオールの街までは二週間ほどかかるが、その道中はできる限り街の宿に泊まることになっている。しかし街の規模の問題で全員が宿に泊まることはできないことも多い。そういう時は一班から順番に宿に泊まることができ、後半の班は街の外で馬車泊になる。だからお前たちは馬車泊が多いだろうな」

　確かに、全員が泊まれるほどの宿がある街は少ないよね。そうなると馬車泊になるのか。馬車泊って、結構大変そう。だって椅子に一人ずつと床に寝るとして、そんなにたくさんの人数が寝れるわけないし……

「馬車泊って、六人全員が横になって眠れるほどの広さはないですよね？」
「そうだな。だから宿に泊まることができた者達の馬車も馬車泊に使う予定だ。要するに、一班からの高位貴族の方々に宿を使ってもらって、お前たちはその方々が乗ってきた馬車を借りて馬車で寝るってことだ。馬車泊の時も基本的には班ごとだが、男女は分けることになるからその場での指示に従うように」

それって、貴族でもないのに宿に泊まってる俺とロニーは、ギリギリ馬車泊になった中位貴族や下位貴族にかなり恨まれそうだな。まあ、仕方がないんだけど。

「そうして二週間ほど馬車で進むと、今回の目的地であるリオールの街に着く。リオールの街では騎士が滞在している簡易宿泊所に全員滞在してもらう。そこには一週間滞在し、リオールの町の見学や魔物の森の見学、弱い魔物との戦い、魔物の森の外縁部の探索をしてもらう予定だ。それから領主であるマレシャル伯爵の話も聞く予定だ」

マレシャル伯爵って確か、タウンゼント公爵家と同じ勢力だったはず。あんまり緊張しなくて良さそうでよかった。良い人だったらいいな。

「とりあえず予定はこんな感じだな。何か質問はあるか？」
「はい。道中の食事はどうするのですか？」
「基本的には街で食べることになる。しかし食堂などではなく、街で食料を買って馬車で食べることになるだろう」
「街がない場合はどうするのですか？」
「そういう時のために保存食も持っていくので心配するな。――他にはあるか？」

「はい。護衛などはいるのですか？」
「ああ、騎士団から道中の護衛が出されるらしい。しかしお前たちも自分の身はできるだけ自分で守るんだぞ」
一応道中の護衛もいるんだ。また大所帯になったな。
「他には質問あるか？　――ないみたいだな。よしっ、じゃあ明後日遅れるなよ。また何か質問があれば誰でもいいから先生に聞くように」
そうして説明を終えて、オーブリー先生は教室から出て行った。
行き先は魔物の森だけど、修学旅行前みたいにうきうきする気持ちもある。楽しみながらも真剣に魔物の森の様子を見てこよう。

２２８、出発日の朝

そうして二日後の朝。俺は朝早くロジェに起こされた。

「レオン様、そろそろ起床のお時間です」

「う、う～ん……」

「レオン様、本日は食堂での朝食ですので、早く起きられませんと遅れてしまいます」

……そうだった。今日は遠征の出発日だから、リシャール様達と一緒に朝ごはんを食べる予定なんだよね。でも、眠い。

昨日の夜ドキドキして眠れなかったんだ。遠足に行く前の小学生かって感じだった。

俺、成人してたはずなのにな……。まあ、もう流石にこの体になって何年も経ってるから、自分が子供だって事に違和感は無くなったけど。逆に成人してた時の記憶の方が薄れつつある。日本での生活は、記憶としては残ってるんだけど実感は伴わなくなってきている。

「起きるよ……。でもあと五分……」

「レオン様、今すぐ起きてください」

ロジェはそう言って俺の布団を剥ぎ取った。

「さ、寒い……」

最近は秋も深まってきて、朝方は冷えるのだ。

「では、早く起きてください」
「分かったよ、起きるよ……」
「はい。本日はリュシアン様よりも早くに屋敷を出られるのですから、より早く起きませんと」
「そうだったね……」

やっぱり子供の体はこういう時に言うことを聞かない。どうしても眠気が勝つのだ。
それでも俺はなんとか眠気と戦いつつベッドから起き上がり、ロジェに手伝ってもらいながら準備を整えた。そして食堂に向かう。

「レオン君おはよう。待たせたかな？」

俺が食堂に向かい他の皆が来るのを待っていると、まずはリシャール様がやって来た。

「おはようございます。私も今来たところです」
「それなら良かった。昨日は眠れたか？」
「恥ずかしながら昨日はドキドキしてあまり眠れず……」
「そうだったのか。やはり魔物の森へ行くのは緊張するのだな」
「いえ、緊張というかその、楽しみだったと言いますか……」

俺がそう言うと、リシャール様はぽかんと一瞬固まった後に笑み崩れた。

「ははっ、そうか。レオン君にもそういう一面があるのか。ははっ」
「リシャール様、そんなに笑わないでください！」
「すまんな、レオン君はいつも大人びているから年相応なところが

見れて嬉しいんだ。確かにそうだな。今まで行ったことのない場所へ行くのは楽しみだよな。ははは っ」

リシャール様は何かがツボに入ったのか、笑いを堪えようとしてはいるけど全然成功してない。もう、リシャール様笑いすぎです！

そうしてリシャール様が笑っているところに、カトリーヌ様とリュシアンもやって来た。

「あなた、何をそんなに笑っているのですか？」

「……いや、なんでもないんだ。レオン君と楽しい話をしていただけだ」

リシャール様は二人が食堂に来たことでやっと笑いが収まってきたようで、滲み出ていた涙を拭い笑いを収めた。

「それならば良いですけれど……」

「ああ、気にするな。では、皆揃ったところで朝食を頂こうか。今日は二人の出発日で豪華な朝食だ。冷めてしまっては勿体無い」

「そうですわね」

そうしてかなり久しぶりの、食堂での朝食が始まった。今日の朝食はいつものパンとスープなどに加えて、手の込んだ肉料理がある。いつもは卵焼きにベーコンのような肉を焼いたものが多いけれど、今日は豪華だ。特別感があってちょっと嬉しい。

最初の頃は貴族の食事は朝昼晩と全て豪華なのかと思っていたけど、実際はそんなことなくて朝はシンプルなのだ。平民はどちらかというと朝が豪華で夜が軽い感じなのでその違いも面白い。

「やはり皆で食べる朝食は良いな」

「そうですわね。たまにはこうして時間を合わせるのも楽しいです

わ」
「回復の日などで時間が合わせられる時は、こうして一緒に食べるのも良いな」
確かにそれはありかも。部屋で一人で食べるのは楽なんだけど、ちょっと寂しいからね。
そうして終始和やかなムードで朝食は進み、あらかた食事が終わり食後のお茶を飲んでいる時、リシャール様が少しだけ真剣な表情で口を開いた。
「二人とも、ついに魔物の森へ向かうことになるが、自分の目でしっかりと魔物の森の実情を見てくると良い」
「はい。現状を把握し、できるならば対策を考えたいと思っています」
「私もです。少しでもお祖父様のお役に立てるよう、務めて参ります」
「それは頼もしいな。ただ一番は身の安全だ。そこは忘れないようにな」
「そうよ。危ないことをしてはダメよ」
そうだよね。全属性が使えるからといって慢心せず、身の安全を一番に考えよう。魔物がどれほどの強さなのかもわからないし。
「はい。慎重に行動します」
「無茶なことは致しません」
「ああ、約束だ」
そうして真剣な表情で話を終えると、リシャール様は紅茶を一口飲んで少し顔を緩めた。

「魔物の森へ行くとなれば気を引き締めなければいけないことは確かだが、道中は長い道のりだ。ずっと気を張っているのではなく楽しんでもくると良い。まあ、レオン君は楽しみで眠れなかったようだから心配はしていないが」

リシャール様、それをここで言うのですか！

「リシャール様！」

「レオン、そうなのか？」

「……はい。皆で遠出をするというのが楽しみで……」

「確かにそうだな。私も少し楽しみだ」

「本当ですか！？　やっぱり楽しみですよね！」

「あ、ああ……」

リュシアンは俺の勢いに少しだけ引いたような様子でぎこちなく頷いた。

思わず凄い勢いで迫っちゃったよ……

「ははっ、楽しみなのはいいことだ。そこで私から渡すものがあるんだ」

リシャール様はそう言って従者の方に何かを告げた。すると従者の方は小さく頷いた後、厨房に繋がるドアの向こうに消えていった。そしてすぐにワゴンを押して戻ってくる。ワゴンにはたくさんの木箱が載っているようだ。

あれは何だろう……

「中身は馬車の中でも食べられるようなサンドウィッチやクッキーなどだ。道中皆で食べられるようにと用意した。レオン君のアイテ

ムボックスに入れておけば腐ることはないだろう？　馬車の中でならばアイテムボックスを使うことも問題ないから楽しんでくれ」

今日は使用人の数が少ないと思ってたけど、俺の能力を知ってる人に厳選してたから少なかったのか。

「……いただいても良いのですか？」

「もちろんだ」

「嬉しいです。ありがとうございます」

「お祖父様ありがとうございます。今回の遠征がもっと楽しみになりました！」

リュシアンはそう言って嬉しそうな笑みを浮かべている。やっぱりリュシアンも楽しみだったのか。

目的地が魔物の森とはいえ、皆で旅に出るなんて楽しみなのが普通だよね。なんか、またウキウキしてきた。

「では、この場で収納しても良いでしょうか？」

「ああそうしてくれ。そうだ、ロニーに伝えるのも忘れずにな。突然アイテムボックスを使ったら驚くだろう」

そうだった。ちゃんと忘れずに伝えないと。今日の朝にまず伝えよう。

実はロニーにも俺の魔法について話すことを決めたのだ。全属性ってことと空間魔法のことについて、それから魔力量やその他の特殊な魔法についても全て伝える。

今まではロニーの身の安全を考えて伝えてなかったんだけど、ロニーも従業員寮に引っ越して前よりも安全を確保できるようになったし、何よりもずっと隠しているのは難しいと思ったから伝えることにしたのだ。

リシャール様達と話し合って、今回の遠征前に伝えると決めた。遠征中にアイテムボックスを使えないのはかなり不便だからね……

「かしこまりました。本日王立学校に向かう馬車の中でしっかりと伝えます」

「そうしてくれ。ロニーはレオン君とかなり親しい関係だ、一緒に仕事もしていくのだから伝えておいた方が良いだろう」

「はい」

そうして俺は、アイテムボックスの中にリシャール様からの贈り物を仕舞っていった。

元々今回の遠征のために、アイテムボックスには沢山の食べ物やスイーツを入れてあったんだけど、時間停止だからいくらあっても問題はない。公爵家の料理人さんのご飯は美味しいから嬉しいな。

「これで最後ですね。リシャール様、改めてありがとうございます」

「ああ、道中楽しんでくれ」

そうしてリシャール様からの贈り物をもらって、今日の朝食はお開きとなった。

俺は朝食が終わるとすぐ部屋に戻り準備を整え、公爵家を出発した。荷物がたくさんあるので歩きではなく馬車だ。この後はロニーを迎えに行って二人で王立学校に向かうことになっている。

結局は同じ馬車に乗るんだしリュシアンも一緒に行けたら良かったんだけど、本当に身分は面倒くさいよね。

公爵家を出てしばらく馬車が進むと従業員寮に辿り着いた。寮の外には従業員が皆で見送りに出てきてくれていて、俺の家族まで来

てくれている。
家族皆には昨日会いに行ったんだけど、当日も見送りに来てくれたみたいだ。

「皆おはよう」
「おはようございます」
「レオン、おはよう」
「母さん達も見送りに来てくれたんだ」
「もちろんよ。……魔物の森に行くなんて心配だもの」

母さんは少しだけ寂しそうな表情でそう言った。

「騎士の方達がしっかり守ってくれるし大丈夫だよ。危ないこともしないから」
「レオン絶対だよ。危ないことはしないこと、騎士の方に従うこと、いい？」

父さんは真剣な顔で俺にそう言ってくる。

「父さん、それは昨日何度も聞いたよ。それにもう子供じゃないから大丈夫！」
「そうなんだけど、まだまだ父さんにとっては子供なんだ。しっかり気をつけるんだよ」
「うん。ちゃんと気をつけるよ」
「……お兄ちゃん。帰ってきたらお話聞かせてね」

マリーもしばらく会えないということに少しだけ寂しそうだ。うぅ……マリーにそんな顔をされると遠征に行きたくなくなる。

「もちろんだよ。帰ってきたらどんな旅だったかお話しするからね。

マリーは俺がいない間、母さんと父さんをよろしくね」
「……うん！」

そうして家族皆と話してから、従業員の方に体を向けた。

「皆、俺が遠征に行ってる期間についてはこの間話した通りだからよろしくね。アンヌ、ロニーもいないから俺達が帰ってくるまでは店長代理としてよろしく」
「かしこまりました。精一杯努めさせていただきます」
「うん、頼んだよ。じゃあロニー、行こうか」
「うん！」
「じゃあ、行ってきます！」

そうして俺とロニーは馬車に乗り込んだ。

229、秘密を明かす

馬車の中には俺とロニーとロジェの三人だけだ。
基本的には男爵家までの貴族のみが従者を連れていくことを許されるんだけど、俺は例外としてロジェを連れていくことを許可された。
なんでも王族は人数上限なく使用人を連れていけて、公爵家も数人程度なら増やせるらしい。なのでロジェは、対外的にはリュシアンの従者として付いてくることになっている。でも基本的にはいつものように俺に付いてくれるようだ。
ロジェがいると心強いので結構嬉しかった。

「ロニー、緊張してる？」
「うーん、もうなるようになると思ってるからそこまで緊張してないかな？　何回か会ってるし」
「あっ、緊張してるってそっちの話？」
「え？　違うの？」
「いや、魔物の森に行くことについて緊張してるのかなって思ったんだ」
「あ～、確かに。普通はそっちだよね。それよりも馬車のメンバーが凄すぎて、魔物の森のこと全然考えてなかったよ」

確かに魔物の森に着くのはまだ二週間後とかだし、直近に緊張する出来事があったら後回しになるか。

「まあ、緊張してないなら良かったよ」
「うん。僕って王都から出るのも初めてだから、今はちょっと楽しみかも。王都の外の景色とか、他の街とか楽しみだよ！」

ロニーはそう言って目を輝かせた。これからステファンとマルティーヌとリュシアンと同じ馬車で何週間も過ごすのに緊張してなくて楽しみだなんて、ロニーまじで成長した。楽しめるのならそれが一番だよね。

「それなら良かった。……あのさ、そんな楽しい気分を壊すかもしれないんだけど、一つだけ話があるんだ。聞いてくれる？」

俺は少しだけ緊張してロニーにそう告げた。

ロニーに全属性のことを話すのは結構緊張してるんだ。ロニーなら普通に受け止めてくれるとは思うんだけど、もしかしたら怖がられるかもとか、そんな考えがどうしても少し残る。

「いいけど、そんな真剣に話すことなの……？」

「うん。かなり大切な話」

「……分かった。ちゃんと聞くよ」

ロニーは真剣な表情で頷くと、居住まいを正して聞く体勢になってくれた。

「ありがとう。俺の魔法についての話なんだ」

「レオンの魔法？」

「うん。俺の魔法は回復属性だったでしょ？」

「知ってるよ。確か魔力量は五だったよね」

「そう。でも実際は回復属性だけじゃなくて……、他の全ての属性魔法が使えるんだ。それに使徒様が使っていたと言われていた魔法も使える。……いままで隠しててごめんね」

「ん？　ちょっと待って、え、全ての属性魔法？　使徒様？　……どういうこと？」

ロニーはかなり混乱している様子だ。俺の言った言葉をなんとか理解しようと考え込んでいる。

「レオンが、全ての属性魔法を使えるの……？」

「そうなんだ」

「使徒様が使っていたとされる魔法って、どんな攻撃も効かないとか、何もないところから物を取り出せるとか、長い距離を一瞬で移動できるとかだよね？　レオンも、そういうことができるの……？」

「うん、できるよ」

俺がロニーからの質問に頷くと、ロニーは今度こそ固まってしまった。

「ロニー？　大丈夫？」

「えっと、ちょっと待って。今までで一番衝撃的なこと言われた気がする。レオンの資産の話より衝撃なんだけど！　レオンが、全部の属性魔法を使えるの！？」

「そう。使ってみようか？」

「う、うん。使ってみてくれる？」

そうして俺は、馬車の中でも使える簡単な魔法を全ての属性で使ってみせた。もちろん空間属性もだ。

「目の前で起きてることが信じられないよ。待って、じゃあレオンは……使徒様なの！？」

やっぱりそうなるよね。これ全員に聞かれるな。

「ううん、俺は使徒様じゃないんだ。使徒様じゃないのに全部の魔

法が使えるんだよね」
「そうなの……？　え、使徒様じゃないのに使えるなんてことあるんだ」
「それが俺にもよくわからないんだけど、実際に俺は使えるんだよね」
「……レオンが、使徒様じゃないっていう根拠はあるの？　使徒様だって考えた方が自然じゃない？」
「根拠はないから俺もそれは考えたんだけど、自分が使徒様だと知らない使徒様なんてあり得ると思う？」

俺がそう聞くと、ロニーは真剣な様子で考え込んだ。そしてしばらくしてから口を開く。

「歴史の授業で、使徒様がいらっしゃったときには定期的に神託があって、使徒様は女神様と直接対話できたって習ったよね。だからそれは考えにくい……かな」
「そうなんだよね。だからもし俺が使徒様だったとしたら、女神様からなんらかのアプローチがあると思うんだ」
「うん、確かにそうかも。レオンは女神様と話したりできないんだよね？」
「うん。それどころか一度も会ったことないし、存在を感じたこともないよ」
「じゃあ違う気がするね……。そうなると、なんでレオンは全属性なんだろう？」

ロニーはそこが不思議で引っかかるみたいだ。ロニーって意外と研究者とか向いてるのかも。

「そこが不思議なんだよね。女神様が間違えたとか？　もしくは別の何者かにこの力を与えられたとか……」

もし邪神とかがいて、そういう存在に与えられた力だった場合が一番最悪だ。神様にバレたら消されそう。

「女神様は間違えることなんてなさそうだけど……」

「確かに神様だからね」

「別の何者かっていうのも、そんな存在いるの？」

「もしかしたらいるのかも、ぐらいかな。調べる術もないし」

「そうだよね」

ロニーはそう言ってまた考え込んでしまった。このままだと話が終わる前に王立学校に着いちゃうな。

「俺もずっと考えてるけどわからないんだ。でもとりあえず全属性は使える、ここまではいい？」

「あっ、うん、いいよ。話を逸らしてごめんね」

「全然いいよ、気になるのはわかる。俺も知りたいと思ってるんだ。……それで話の続きだけど、俺には全属性と使徒様の魔法以外にも色々と人と違う能力があって、まずは魔力量かな。普通の人は生まれた時から魔力量が決まってて変化することはないでしょ？　それが俺はどんどん増えていくんだ」

「増えていくって、そんなことあるんだね……具体的にはどのぐらいの魔力量なの？」

「うーん、もう自分でもよくわからないんだけど、魔力量が五の人の数百倍とか数千倍とかかな？」

最近は魔力量が増えすぎて普通の人の魔力量がどの程度かわからなくなって来てるんだけど、たぶんそのぐらいの差はあるはずだ。

最近転移とか使ってたらまた結構増えたんだよね。もうピュリフィケイションとかも普通に使えるレベルだ。

「もう想像できないよ」
「うん。とにかく魔力量が馬鹿みたいに多いと思ってて。それから他にも色々とできることがあって……」

それからは他にも使える魔法について、毒除去や殺菌、病気の治療などについても説明した。

「なんか、凄いね。凄すぎると逆に驚けないってことがわかった。現実感がないっていうのかな？」
「確かにそれはあるかもね」
「あっ！！　もしかしてこれって、使徒様の魔法なの？」

ロニーはそう言って、首にかけていたネックレスを取り出した。俺が前に渡したバリアの魔法具だ。

「そう！　よく分かったね」
「この魔法具をもらった時に公爵家の秘密だって言ってたでしょ？　でもそれがずっと引っ掛かってたんだ」
「確かに、今思えば適当な言い訳だったかも」

俺が苦笑しつつそう答えると、ロニーも同じような表情になった。

「流石に嘘が下手だよ。でも公爵家の秘密って言われたら暴こうと思う人なんていないから、効果はあるのかも」
「確かにそうか。ならまあ、良かったってことで。あっ、そうだ。そのネックレス貸してくれる？　あと指輪も」
「うん、いいけどどうするの？」
「ちょっと改良するんだ」

そうして俺は、ロニーのバリアの魔法具を家族に渡したものと同じ形に作り替えた。

「これなら外見では魔法具だってわからないから、隠そうと気をつけなくていいし前のよりもいいと思う。今度は指輪じゃなくてこの棒を引いたら発動するよ」

「分かった。ありがとう」

「うん。……それからこんな話をしておいて申し訳ないんだけど、俺の魔法については全部秘密にして欲しいんだ。伝えといて誰にも言わないでって迷惑かもしれないけど、ごめんね……」

「もちろん誰にも言わないよ。というかこれ、言ったらかなりの大事になるでしょ。逆にレオンがむやみやたらと言いふらしてたら僕が全力で止める」

ロニーはそう言って頷いてくれた。やっぱりロニーは最高の友達だ。いや、親友だ。

「ロニー、ありがとう」

「うん。他には誰が知ってるの？　さっきリシャール様って言ってたけど」

「他には公爵家の方達と一部の使用人、それからステファンとマルティーヌとリュシアン、あと俺の家族とマルセルさんとロジェだよ。あっ、アレクシス様とエリザベート様も知ってる。陛下と王妃様ね」

「凄いメンバーだね……」

「うん、皆俺の能力を知って守ってくれてるんだ。本当にありがたいよ」

改めて、本当に凄いメンバーだ。国の中枢の中でも一番上にいる人たちだよね。

「そんなメンバーに加わることを考えたら、眩暈がしてきたかも……」
「ロニー、俺の魔法について聞いた時よりも衝撃受けてない？」
「そんなことないけど、でもそうかも。だってレオンの魔法についてはなんとなく察してたというか、もうレオンには何があっても驚かないというか……」
「……そうなの？」
「うん。だって明らかにおかしいでしょ。王都の外れにある食堂の息子が公爵家で家族と同等の扱いを受けてて、次々と新たな魔法具を開発して莫大なお金を稼いでて、さらに大人も知らないような知識をたくさん持ってて、明らかにおかしいからね！　もう僕はレオンについて深く考えないことにしてるから」

ロニーから見るとそう見えるのか……
確かにそんな子供がいたらかなり異質だ。それが俺だなんて、ちょっと落ち込む。上手く溶け込めてるはずだったんだけど。

「確かに、そう言われるとそうかも」
「レオンは上手く隠してたと思ってるだろうけど、全く隠せてないからね。あまり関わりがない人たちには隠せてるかもしれないけど、レオンと仲が良い人達には確実に普通の子供じゃないってことはバレてるよ」
「そっか……、でも仲が良いのってロニーぐらいだから大丈夫だよ。あとステイシー様かな」

なんか、言ってて悲しくなってきた……
「確かにそうだね。僕たち友達いないもんね……」

ロニーまで落ち込んじゃったよ。

「まあ、量より質って言うからね、一人親友がいればいいんだよ！」
「親友？」
「うん。俺とロニーは親友でしょ？」
「……そっか、そうだね。うん！」

そうしてロニーに俺の魔法のことについて全てを明かしたところで、馬車は王立学校に到着した。

２３０、校長先生

「レオン様、王立学校に到着いたしました」
「ありがとう。荷物ってどうすればいいのかな？」

大きな鞄と木箱がいくつかあるから、流石に持ち歩くのは無理だ。

「レオン様とロニー様は王家の馬車で遠征に向かわれることになりますので、お二人のお荷物は王家の馬車が到着し次第、私が移動しておきます」
「そっか、ありがとう。じゃあお願いするね」
「かしこまりました」

そうしてロジェに荷物を預けて、俺とロニーは馬車から降りて集合場所に向かった。まだ先生達以外は誰もいないようだから一番乗りだ。まあ、身分的には一番じゃないといけないんだけどね。

「オーブリー先生、おはようございます」
「おはようございます」
「レオンとロニーか、おはよう。緊張してるか？」
「いえ、そこまではしていません。少しだけ楽しみな気持ちが強いです」
「僕もです」
「お前達……凄いな。道中大変だろうけど、まあ、頑張れよ。何かあったら先生に言えば、できることはやってやろう」

オーブリー先生は多分、俺とロニーが三人のパシリみたいな役割で同じ班に指名されたと思ってるよね。やっぱり公爵家の後見があ

るとは言っても、使用人のような立場だと思ってるんだろうな。
確かに王立学校では三人に対して敬語を使って敬った態度で接してるし、そう思うのも無理ないのかもしれない。

「ありがとうございます。先生方は全員一緒に行かれるのですか？
それぞれの班に分かれるのでしょうか？」
「いや、行くのは半数程度だな。先生達専用の馬車でまとまって行く」
「そうなのですね。……あの、オーブリー先生は魔物の森に行かれたことはありますか？」
「ああ、俺はあるぞ。そもそも俺は元騎士だからな。第二騎士団の所属で一年のほとんどは魔物の森にいた」

え、オーブリー先生って元騎士だったんだ！　全然知らなかった……。でも確かに、剣術の先生だし明らかに強そうだよね。

「そうだったのですね。……聞いて良いのかわからないのですが、先生はなぜ王立学校に？」
「ああ、俺は子供好きで人に教えるのも得意だったからな。前の先生が引退する時にやらないかって言われたんだ。ちょうど結婚を考えてた時だったから、二つ返事で頷いたさ。騎士の仕事にも誇りを持ってやっていたが、やっぱり家族からしたら命の危険がある仕事はやめて欲しいって思うだろ？」

オーブリー先生は照れ臭そうにそう言った。先生、結婚もしてたのか……
確かに家族がいるのなら騎士より先生を選ぶよね。俺も家族や友達が魔物の森で働く騎士になるって言ったら、一度は止めると思う。

「確かにそうですね」

「先生、魔物の森はどんなところですか？」

今度はロニーがそう聞いた。

「そうだな。一言で言えば、恐ろしい場所だ。ただ俺が魔物の森にいた頃はそこまで焦るような状況じゃなかったはずなんだ。だから今の現状はわからないな……」

「恐ろしい場所って、具体的に聞いても良いですか？」

「……いや、それは自分の目で見て確かめると良い。どうせこれから行くんだからな」

「……確かにそうですね。わかりました。しっかりと確かめます」

「ああ、それが良い」

そうして先生と話していると、クラスメイトが続々と集まってきた。Eクラスは騎士爵の子供が多いからか、ほとんどの生徒が参加するのでかなりの人数だ。

今回の遠征は上級生も希望すれば参加可能なので、知らない顔もちらほらと見かける。来年からは一年生だけになるそうだからもう少し数も減るのだろう。

「ロニー、あっちに行ってようか。ここは皆が集まってくるし」

「そうだね」

皆がオーブリー先生のところに集まるので、俺たちは先生から少し離れることにした。俺とロニーはクラスの中心にいるような立ち位置じゃないので、クラスメイトに囲まれているのは居心地が悪いのだ。

それから数十分後。ステファンとマルティーヌが到着して、やっ

とAクラスまでの全員が揃った。
「では皆、班ごとに固まって並んでくれ。ここが一班で、こっちに向けて二班三班と続いてくれるか」
「ロニー、一班はあっちだってよ」
「じゃあ行こうか」
「うん」

一班の方に向かうと、いつもの三人が既に集まっていた。
「ステファン様、マルティーヌ様、リュシアン様、おはようございます」
「おはようございます」
「レオン、ロニーおはよう。ついに遠征当日ね！　私凄く楽しみだったわ」
「二人ともおはよう。ついに出発だな」

マルティーヌとステファンはうきうきした様子を隠せていないようだ。やっぱり緊張より楽しみな気持ちが勝つよね！　だって友達との長旅なんて、楽しいに決まってる。
「私も楽しみでした。これから五週間よろしくお願いいたします」
「迷惑をかけしないよう努めますので、よろしくお願いいたします」
「ああ、よろしく頼む」

そうして三人と当たり障りのない挨拶をしていると、先生の声が聞こえてきた。
「並んだら静かにしてください。出発前に校長先生からのお話があります」

「叔父上の話があるのか」
「そういえば、叔父様は校長先生でしたね。普段学校で会わないので忘れてましたわ」

俺も完全に忘れてたよ……。そういえば、この学校の校長先生ってアレクシス様の弟なんだよね。確かトリスタン様だ。存在は知ってるけど話したことはない。

トリスタン様は堂々とした足取りで皆の前に姿を現した。入学式の時以来だけど、やっぱりキラキラオーラが出ててカッコいい人だ。
アレクシス様と似てるんだけど雰囲気は結構違うんだよね。なんだろう、トリスタン様の方が良く言えば親しみやすい雰囲気、悪くいえばちょっとチャラい感じかな。
そんなことを考えつつぼんやりと眺めていると、不意にトリスタン様がこっちに顔を向けた。

……え？　なんか今、一瞬目があった気がするんだけど。絶対目が合った。そしてウインクされた！　俺、トリスタン様とは一度も話したことないはずだよね？

「生徒諸君。まずは王族の一員として、魔物の森への遠征に参加してくれたことに感謝する。今回遠征が行われる理由は皆ももう知っていると思うが、魔物の森の広がりを抑えるのが難しくなっているからだ。皆にはその現状を自分の目で見て把握してきてほしい。そして遠征から戻ったら、国のために何を為すべきかをしっかりと考えてほしい。今回の遠征は、皆にとってとても貴重な経験となるだろう。しっかり学んできてほしい」

俺が狼狽えているうちにトリスタン様の話は始まったけれど、全く頭に入らない。ウインクされたのが衝撃すぎた。トリスタン様っ

て、俺のこと知ってるのかな？
俺はその疑問を解消するため、前にいたマルティーヌに小声で話しかけた。

「……マルティーヌ、トリスタン様って俺のこと知ってるの？」
「叔父様が？　そうね……、多分知ってると思うわ。お父様と叔父様はかなり仲が良くて頻繁に食事を共にしているから、話しているんじゃないかしら？」
「そうなの？」
「そうよ。私達もよく会うわ。でも王宮で会うばかりで王立学校で会ったのは久しぶりだけど……」
「そうなんだ。……そういえば、トリスタン様って結婚してるの？　というかどこに住んでるの？」
「叔父様は結婚して、王宮の側に屋敷を建ててそこに住んでるわよ」

そうなんだ……、そうなると、トリスタン様の立場ってどうなってるんだろう？
今まで考えもしなかったけど、王位を継がなかった王族ってどんな立場になるんだろうか。王女だと降嫁するって聞いたことあるけど、王子はどうなるんだ？　婿入りするとか？

「トリスタン様の立場ってどうなってるの？」
「叔父様は王族のままよ。あえていうならば王弟かしら？」
「王位を継がない王族って、立場は王族のままなの？」
「全員がそうじゃないわね。降嫁したり婿入りして貴族になることもあるし、他国の王族に嫁ぐ、または婿入りすることもあるわね。そのどちらでもない場合は王族の立場のままのことが多いわ」
「王族の立場のままだと、子供はどうなるの？」
「子供には基本的に子爵位が与えられるわ。ただ三人までだったかしら？　それ以外の子は騎士爵になるのよ。でも確か、その辺はし

っかりとした決まりがなくて曖昧なのよね」
「そうなんだ……」
そんな仕組みなんだ。そうなると、王族のままが良いとは言えないよね。
やっぱりイメージと違うな。王族や貴族に生まれたら一生安泰だと思ってたけど、全くそんなことはない。
「トリスタン様って子供はいるの？」
「いいえ、叔父様は子供は作らないと宣言しているのよ。余計な争いの種は増やしたくないっていつも言ってるわ。でもそれは口実で、実際は二人きりの時間を邪魔されたくないだけよ」
マルティーヌは苦笑しつつそう言った。トリスタン様は奥様が大好きってことか……
「では、私の話はこのくらいにしておこう。君達の遠征の成功を祈っている」
マルティーヌとそんな話をしていたら、トリスタン様の話が終わったみたいだ。
「では、皆さんそれぞれの馬車に乗ってください。皆が準備できたら出発します」
そして先生にそう促され、俺達は馬車まで移動することになった。

２３１、魔物の森へ出発

「では私達も馬車へ向かおう」
「はい。馬車はどちらに？」
「あそこだ」

ステファンがそうして指し示した先には……なんだか凄く豪華な馬車が一つと、それよりも少しは劣るけどかなり豪華な馬車が二つあった。全部王家の紋章入りだ。
……三つも馬車あるの？　というか、大きすぎない？　一番大きい馬車は馬が四頭で引いてるし。

「凄く大きな馬車ですね……」
「ああ、中はかなり快適な作りとなっている」
「なぜ三つも？」
「使用人が乗る馬車と荷物を入れる馬車だ。特別に三つ許可された」

さすが王族……なんでも特別に許可されるね。
というか周りに騎士がいるんだけど、あれって全体を守ってくれる騎士の方達だよね……？

「周りの騎士の方達は……？」
「あの者たちは私とマルティーヌの護衛である近衛騎士団の者達だ。遠征全体を護衛するのは第一騎士団の一部の者だが、私達のみを護衛する近衛騎士団の者もいる。まあ、気にする必要はない」

……うん、これは気にしないに限るな。王族なんだから特別扱いは当たり前だ。いちいち気にしても仕方ないよね。

「かしこまりました」

そうして話しながら馬車まで歩いて行くと、馬車の直前で後ろから誰かに話しかけられた。

「ステファン、マルティーヌ」

この声と二人を呼び捨てにする人物は……

「叔父上、どうしたのですか？」

「叔父様！」

ですよね～。トリスタン様だ。俺は後ろを振り向いてトリスタン様を初めて間近で眺める。

うん、やっぱり近くで見るとすっごくキラキラしてる人だ。金髪に金眼なのもいかにも王族って感じだし、オーラがキラキラしている。でも近くで見ると、チャラいって感じよりも親しみやすい雰囲気が勝つかも。

「二人とも、安全には気をつけるんだよ。危ないことはしないようにね」

「はい。分かっています」

「もちろんですわ。というか叔父様、それは何度も聞きました」

「そうなんだけどやっぱり心配なんだ。可愛い甥っ子と姪っ子が危険な目にあったらと思うとね」

「騎士もいますし大丈夫です」

「そうだね。……お前達、命に代えても守るんだ」

トリスタン様は馬車の周りにいた近衛騎士の皆さんに、二人に話

している時よりも数段低い声でそう言った。

「はっ、この命に代えてもお守りいたします」

「頼んだぞ」

「かしこまりました！」

「二人とも、本当に気をつけるんだよ。わかったね？」

「もう、叔父様しつこいですわ！」

「ごめんごめん。そうだ、レオンは初対面だったね。私はトリスタン・ラースラシア。君のことは兄さんから聞いてるよ。よろしく頼む」

トリスタン様はそう言って、微笑みながら右手を差し出した。俺は恐る恐るその手を取り握手を交わす。

「はじめまして、レオンと申します。こちらこそよろしくお願いいたします」

「うん。二人をよろしくね」

「かしこまりました」

「あとは……君はリュシアンだね！　こうしてしっかりと話すのは久しぶりかな。大きくなったね～」

「はい。お久しぶりでございます」

「そんなにかしこまらなくてもいいよ。今度姉さんも一緒に遊びに来てくれたら嬉しいな」

「ありがとうございます。母上に伝えておきます」

リュシアンのお母さんはアレクシス様の妹で、トリスタン様のお姉さんなんだ。ということは、アレクシス様、ソフィア様、トリスタン様っていう順番の三人兄弟なんだな。

「それで君は、誰だったかな？　ごめんね、名前を知らなくて……」

トリスタン様はロニーの方を向いてそう言った。ロニーの話は聞いたことがなかったんだろう。

「叔父上、私から紹介します。レオンの友達で私たちの友でもあるロニーです。孤児院出身ですがとても優秀で、将来有望な人物です」
「ロ、ロニーと申します。よろしくお願いいたします」
「ロニーだね。二人と友達になってくれてありがとう。これからよろしく」
「は、はい。こちらこそよろしくお願いいたします」

ロニーは少し青褪めながらも、なんとかそう挨拶をした。

「じゃあ皆、安全には気をつけて楽しんで来るんだよ」
「はい。行って参ります」

そうして俺たちは、トリスタン様と別れて馬車に乗った。ふぅ〜、出発前からちょっと疲れた。
でもトリスタン様凄く良い人だったな。甥っ子と姪っ子大好きって感じだったし、俺たちにもフレンドリーで優しかった。本当に王族って良い人ばかりだな……

「叔父上が突然すまなかったな。以前から私たちの友と話したいと言っていたのだ。それからレオンとも話したいと」
「そうだったんだね。でも凄く優しそうで良い人だね」
「ああ、叔父上は本当に素晴らしい人だ」
「それが伝わってきたよ」
「それならば良かった。……それでは話は変わるが、これから五週間改めてよろしく頼む」

ステファンはそう言って楽しそうに笑った。

「うん！　なんか楽しみだよ。皆で旅をするなんて」

「私もずっと楽しみだったわ。ずっと皆と一緒にいられるなんて……」

「私も楽しみだったぞ。そうだ、ロニーにはレオンの魔法について話したんだよな？」

「うん。今日の朝に話したよ」

「では話してはいけないことなどもないし、皆で友好を深めるぞ。もちろんロニーも」

リュシアンがそう言うと、ロニーはまだ緊張した様子ながらもコクッと頷いた。

「はい。よろしくお願いいたします」

「ロニーは固いな。敬語でなくても別にいいんだぞ？」

「ええ、敬語でなくても良いわよ。ねえ、お兄様？」

「もちろん構わん」

「い、いえ、流石に僕は敬語を使わせていただきます！　ただ、少しは崩して話させていただきますね……」

「まあそうだな。最初はそのぐらいか。だんだんと仲良くなっていけば良い」

「ありがとうございます。よろしくお願いします」

そこまで話したところで一旦話が終わり、皆でソファに深く座り込んで一息ついた。ロニーも体の力が少しは抜けたようだ。

俺はそんなロニーの様子に安心して、馬車の中をぐるりと見回す。

本当にこの馬車凄いな……。まず何よりも驚くのは、馬車の座席

がソファになっていることだ。馬車に合うように作られた簡易的なものなのだろうけど、それでもソファだ。
それに豪華な机もあるし、絨毯は敷かれてふかふかだし、光球で中は明るいし。そして極め付けは、馬車の中にドアがあることだ。
普通の馬車は御者席に続く窓と景色を見る窓、それから出入りするドアがついているだけなんだけど、この馬車はそれに加えてドアがもう一つついている。
そう、外に出るのではなく馬車の中で他の部屋があるということだ。なんの部屋なんだろうか……

「ステファン、あのドアの先には別の部屋があるの？」
「ああ、あのドアの先はトイレだ」
「え、トイレ！？　この馬車トイレあるの？」
「あるぞ。私達で持ち運びトイレを開発しただろう？　それが設置してある。この馬車はトイレの空間を他と区切って作り出すために大きめになっているんだ」
「そうなんだ……、めちゃくちゃ便利だね」

トイレがあるなんて最高だ。基本的に馬車での旅は外に簡易的なトイレを作って用を足すか、何処かでトイレを借りるしか方法がなかったから。トイレの心配がいらないなんて素晴らしすぎる。
やっぱり頑張って開発して良かった。

「それでは準備ができましたので、出発いたします！」

馬車の外で先生がそう声を張り上げるのが聞こえた。

「おおっ、ついに出発だね」
「そうだな」
「馬車ってどんな順番で行くのかな？」

「確か真ん中が一班だったはずだよ。それで二班三班と前後に順番で並んでいくんだ」

そう答えてくれたのはロニーだ。

「そうなんだ。やっぱり真ん中が一番安全なのかな？」
「多分そういうことだろうね。僕はただの平民なのに、ちょっと申し訳ないよ……。こんなに豪華な馬車にまで乗れて」
「それはロニーの人脈のおかげだから、ロニーが自分で勝ち取ったものだよ」
「そうだぞ。人脈作りも能力の一つだ」
「……そうですね。ありがとうございます。では胸を張ってご一緒させていただきます」
「ああ、それが良い」
「では、しばらくは景色も変わらないでしょうし、友好を深めるためにもお茶会をしましょう！」
「そうだね。じゃあ準備するよ」

２３２、馬車の中でお茶会

俺はアイテムボックスからお茶会に必要なものを次々と取り出していく。アイテムボックスには暇さえあれば色々なものを保存していて、さらに今回の遠征のために沢山のものを追加したから何でも入っていると言っても過言ではない。

その中からまず、蓋つきの木製のコップと鉄製のコップ置きを取り出した。

「レオン、これは何かしら？」

マルティーヌがコップ置きの方を指差しながら首を傾げる。

「それはコップを固定するものだよ。馬車は揺れるから固定しないとコップが倒れちゃうと思って準備したんだ。結構重さがあるから机に置けばズレることはないと思う。あとは陶器のカップだと割れる心配もあるから、木製で蓋付きのコップも作ってもらったよ」

ここ最近は遠征をどうしたら快適に過ごせるかを考えて、色々と物を買い込んだり作ってもらったりしていたのだ。途中から楽しくなって余分なものもかなり買った気がするけど、まあアイテムボックスは容量無限だからいいだろう。

「凄いな。これは便利だ」

「でしょ？　お茶もロジェに淹れてもらった淹れたてが沢山あるよ。緑茶と紅茶、フルーツジュースと水があるけどどれがいい？」

「アイテムボックスってあり得ないほど便利だね……」

ロニーが俺の隣で呆れたようにそう言った。馬車の席順は俺の右隣がロニーで左隣がリュシアン。そして目の前がマルティーヌでリュシアンの前がステファンとなっている。

「私はフルーツジュースがいいわ」
「私は紅茶だな」
「私も紅茶がいいぞ」
「僕は緑茶かな」
「わかった。じゃあ紅茶から淹れていくね。俺も紅茶にしようかな」

そうして俺は、皆のコップに飲み物を順番に注いでいった。

「はい、どうぞ」
「レオンありがとう。馬車の中でここまで素敵なお茶会ができるなんて凄いわね」
「本当にアイテムボックスは凄いよね。食べ物もあるけどどうする？　基本的にどんな食べ物もあるから何でも出せるよ」
「そんなにたくさん入ってるのか？」
「うん。……何年も暮らせるほどは入ってるかな」
「何年も！？」
「一人だけならだよ」
「それでも凄いぞ……」

アイテムボックスが時間停止なのをいいことに、屋台で買った食べ物などをたくさん収納してあるのだ。皆にアイテムボックスのことを伝えてからは自重もなしにたくさん収納したから……うん、本当にたくさん入っている。
最近アイテムボックスの中身を充実させるのが趣味になりつつあるんだよね。

「皆はお腹空いてる？」
「まだ空いてないわ。でも甘いものなら食べられるわよ！」
「ふふっ、マルティーヌは本当にスイーツが好きだね」
「当然よ。あんなに美味しいんだもの」
「じゃあスイーツにしようか。何がいい？　実はお店で発売予定のスイーツも特別にあるんだ」

本当はお店のメニューとなったスイーツのお披露目は冬頃にやる予定なんだけど、魔物の森への道中は長いし、ここで皆にだけお披露目することに決めたのだ。ヨアンにたくさん作ってもらってアイテムボックスに仕舞ってある。

「本当に！？　じゃあそれにしましょう！」

マルティーヌは瞳を輝かせて身を乗り出してそう言った。顔には満面の笑みが浮かんでいる。……可愛い。

何がいいかな。やっぱりまずは王道のショートケーキかな。俺はそう考え、アイテムボックスから季節のフルーツが載ったショートケーキを取り出した。

「わぁ！　凄く素敵ね」
「なんだこれは、スイーツなのか？」
「レオン、これは食べたことがないぞ！」

マルティーヌは瞳を輝かせてケーキに見入り、ステファンはスイーツなのか疑いの目で見つめ、リュシアンは今までお披露目しなかったことに少しだけむくれている。

「ごめんごめん。本当はもう少し先にお店でメニューのお披露目会

をやろうと思ってたから、それまで内緒にしておくつもりだったんだ。でも魔物の森への道中はたくさん時間があるし、皆にだけはここでお披露目することにしたんだ」
「そうだったのか……」

リュシアンはまだ少し納得できない様子ながらも頷いた。マルティーヌに隠れてあまり目立たないけど、リュシアンってかなりのスイーツ好きだよね。

「レオン、これはどのように食べるのかしら？」
「これは八等分に切り分けるんだよ」
「では、早く切り分けましょう！」
「分かった分かった。ちょっと待ってね」

俺は身を乗り出して瞳を輝かせているマルティーヌに少しだけ苦笑しつつ、アイテムボックスからケーキを切り分ける用のナイフを取り出した。
そしてケーキを切り分けようとしたその時、ロニーに手を掴んで止められた。

「レオン、僕が切り分けるよ。ヨアンからケーキの切り分け方を教えてもらったから」
「そうなの？」
「うん。断面が綺麗に見えるにはどの果物の間を切ればいいのか、色々と教えて貰ったんだ」
「そんなのあったんだ……」

ヨアンは断面の綺麗さまで考えてくれてるのか。確かに重要だよね……、ヨアン本当にありがとう。

「今度俺も教えてもらおうかな」
「うん、それが良いと思うよ。じゃあ今回は僕がやるね」
「じゃあよろしく」

そうしてロニーは俺からナイフを受け取ると、真剣な表情でケーキを切り分け始めた。揺れる馬車の上では相当難しいと思うけど、器用にケーキを切り分けていく。

「……よしっ、これで良いかな。レオンお皿ちょうだい」
「はい」
「ありがと。うん、完璧！」

ロニーが切り分けて八等分になったケーキは本当に美味しそうだ。断面まで美しく仕上がっている。日本のものと大差ないどころか、俺がいつも食べてたスーパーのケーキより美味しそう。

「わぁ。本当に素敵ね！　食べるのが勿体無いわ」
「でも、食べないとダメになっちゃうからね」
「そうなのよね……。今この時にしか輝かない宝石ね。儚さも相まって本当に素敵」

マルティーヌはうっとりとした表情でケーキを眺めつつそう言った。

「本当だな。綺麗で食べられるものだとは思えない。飾っておきたいほどだ」
「この見た目で食べることができて、さらに美味しいだなんて素晴らしすぎる」

皆はケーキをベタ褒めだ。この三人がここまで褒めてくれるなら

貴族に流行る可能性は高いだろう。
俺はお店が成功するという確かな手応えを感じた。

「じゃあ食べようか。これがお店のメニューの一つで季節のショートケーキだよ。その季節で採れる美味しい果物を載せるから、季節ごとに味が変わるんだ」
「それは良いな。季節の味を楽しめるのならば飽きも来ないだろう。……では早速、皆でいただこう」
「そうね。いただきます！」

そうして皆で一斉にケーキに手をつけた。一口食べて、まず口を開いたのはマルティーヌだ。

「うぅ～ん！　何これ、美味しすぎるわ！」
「本当？　それを聞いたらヨアンも喜ぶよ」
「本当に凄いぞ！　なんだこれは！？」
「驚いたな……。レオン、これは確実に流行るだろう。今から混雑対策を考えるべきだな」

マルティーヌとリュシアンは大興奮でケーキを食べ進めている。ステファンは驚いてはいるものの、少し冷静だ。ここがスイーツ大好きかそうでないかの違いだよね。
俺とロニーは何回も食べたから、もう驚きはない。でもめちゃくちゃ美味しいことに変わりはないけどね。

「やっぱりそうだよね。混雑対策も色々と考えてるところなんだ。最悪店頭販売は停止して、予約だけにすることも考えないとかな？」
「考えた方が良いだろう」
「わかった。その辺もロニーと相談するよ」

そうしてステファンと真剣な話をしているうちに、リュシアンは既にケーキを食べ切ってしまったようだ。

「レオン……もう食べ終わってしまったぞ」

そして愕然とした表情でそう言った。

「ははっ、そんなこの世の終わりみたいな顔しなくても良いのに。食べたければおかわりもあるよ？」

「本当か！？」

「うん。さっき切り分けたのも残ってるし、まだまだたくさんあるからね」

「じゃあ、もう一つくれないか！」

「わかったよ、じゃあもう一つね。でも三つ目はダメだよ。体に悪いし普通のご飯が食べられなくなるから」

「……わかった。我慢しよう」

そうして、結局はリュシアンとマルティーヌとステファンが二つずつケーキを食べて、皆でホールケーキを食べきっておやつの時間は終了となった。

２３３、馬車での遊び

ケーキを堪能してからは、皆でお茶を飲みながら楽しく雑談をして馬車での時間を過ごした。そしてお昼に一度馬車が止まり昼食を食べ、今はまた馬車が動き出したところだ。

「皆とずっと話していられるのは楽しいけれど、ずっと馬車の中っていうのも疲れるわね」
「この馬車は快適だけど、どうしても座りっぱなしが疲れるよね」
「それに話していられるのは楽しいが、これが二週間も続くとなると流石に退屈になるな」
「確かに二週間は長いぞ……」

まあそうだよね。流石に二週間は長い。というか、俺たちの馬車はめちゃくちゃ快適でケーキでお茶会とかしてて、それでもこういう言葉が出て来るんだから他の馬車は地獄だろうな。
あまり仲良くないメンバーの馬車とか、想像しただけで最悪だ。本当にこのメンバーで良かった。

リュシアンはソファーから立ち上がって、その場で軽くストレッチを始めた。やっぱり動きたいよね。毎日剣術の鍛錬をしているから尚更だ。俺も鍛錬をしないとちょっと落ち着かない……

「何か馬車の中でできる楽しいことがないか？　体を動かすのは難しいから……勉強はどうだろう？」
「そうね。後は魔法具を考えるのもありかしら？」
「確かにそれはありだな。皆で魔法具を考えるか。あっ、でもそれだとロニーが退屈じゃないか？」

ステファンがそう言ってロニーの方を見る。

「い、いえ！　僕のことは気にしないでください！」

「いいえ、皆で楽しめるものがいいわ。他を考えましょう」

「そうだな。では何がいいか……」

そうして皆で馬車の中でできる楽しいことを考えたけれど、良いアイデアが出てこない。

日本だったらスマホでゲームとか音楽聴くとか、バスならカラオケとかあったんだけどな。後はトランプとか。

……あっ、トランプって作れるかな？

あれなら紙とインクさえあれば作れるだろう。少し厚い紙も持ってるし、それを均一に切り分ければ作れる気がする。このメンバーでトランプは絶対に楽しい！

問題は何で俺がそんな遊びを知ってるのかってことだけど……、昔に思いついたことにすればいけるかな。

最近は皆、俺の知識に疑問を持たなくなってきてるんだよね。レオンがやったことだから仕方ないみたいな感じで納得される。それに喜んでいいのかわからないけど……、こういう時には楽だ。

今回はこの馬車の中で使うだけだし、このメンバーなら問題ないだろう。俺はそう結論づけてトランプを作ってみることにした。

「皆、この馬車の中でできる遊びを一つ思いついたんだけど、それに使う道具を作るの手伝ってくれない？」

「それはいいけれど、どんな遊びなの？」

「トランプっていうんだけど、俺が昔に思いついた遊びなんだ」

俺がそう言うと、マルティーヌは日本での遊びだとすぐに気づいたのか上手く話に乗ってくれる。

「そうなのね！　レオンは遊びまで考えていたなんて凄いわ。それをやってみましょう」

「確かに孤児院でも面白い遊びを教えてくれたよね」

そういえば、前に孤児院でもケイドロを教えたな。そんなに前のことじゃないのに懐かしい。あそこにいた子たちは元気かな……

「そうなのか？　やっぱりレオンは凄いな。それでどんな遊びなんだ？」

「それをやることにしよう！」

ステファンとリュシアンも乗り気だ。

「ありがとう。じゃあとりあえず道具を作ろうか」

確かトランプは、一から十三までの数字が四つの記号ごとにあるんだよね。それでジョーカーが二枚で全部で五十四枚だったはず。十一から十三は絵があったけど、それは再現しなくても良いか。

「まずは同じ大きさの紙を五十四枚作るんだ。大きさは掌サイズぐらいの長方形で」

「五十四枚も作るのか？」

「うん。できる限り正確にね。紙は……、これでいいかな」

アイテムボックスの中を探って、大きめの厚紙を数枚取り出した。

「こんなに厚い紙なのか？」
「うん。しっかりしてる紙の方がやりやすいんだよ。後は書いてある文字が透けちゃうとダメなんだ。じゃあ、まず印をつけていくね」
「私も手伝うわ」
「ありがとう。じゃあ、定規を押さえるの手伝ってくれる？」
「もちろんよ！」

そうして皆で協力し合いながら丁寧に線を引いていった。馬車が揺れてるから線は曲がったりしてるけど、まあとりあえず良いことにしよう。

「うん、いい感じ！　あとはこれを切るんだけど……。この机の上で切ったら机が傷ついちゃうよね」
「確かにそうだな。適当な大きさの木の板とか持ってないのか？」
「うーん、大きいのばかりなんだよね……」

そもそも木材はあまり持ってないし、さらに大きいものばかりだ。これからは小さいサイズもアイテムボックスに入れておかないとダメだな。

「この馬車に取り出すのはちょっと危険だと思う。それに突然馬車が重くなったら馬達も驚くよね？」
「確かにそうだな……」

どこかに転移して木材を切り分けてこようかな。そう思って窓の外を見てみると、既に王都の農業地帯を抜けているのか、街道沿いにはあまり整備されてない土地が広がっていた。少し先には森も見える。
街道沿いにも所々に木が生えてるし、あの裏側に転移すれば誰に

も見られないよね？　こんなところに人なんていないだろうし。

「外に転移して木をちょうど良いサイズに切って戻ってくるよ」

「危なくないの？」

「うん。こんなところに誰もいないだろうし、すぐに戻って来れるから」

「じゃあよろしく頼む」

「りょーかい」

そうして俺は、窓から見える範囲で一番近くにある大きな木の裏側に転移した。

「うわぁ……」

転移して一番に感じたのは、少しの恐ろしさだった。街道とは反対側を向くように転移したので、目の前には大きくて広大な森が広がっている。

今までは人が住む場所から大きく外れたところに来たことがなかったけど、こうして自然と対峙すると抗えない自然の力を感じる……

それから俺は、しばらくぼーっと森を眺めていた。しかしハッとここにきた目的に気づいて我に返る。

早く帰らないと皆を心配させちゃう。そう思って急いでアイテムボックスから木材を一つ取り出し、バリアの魔法で適当な大きさに切り分けた。

バリアの魔法は自分の意思で自由に動かすことができる上に、かなり頑丈で形は自由自在、なので切れ味抜群の剣を作ってそれで木材を切ることもできるのだ。

バリアの魔法って万能すぎるよね。でも弱点はあって、細かい形

を作るほど消費魔力が増えるし、動かすたびに魔力を消費する。さらにバリアをいくつも作り出すのは無理なのだ。大きさは自由だけど、バリアを二つ作ることはできない。なので実戦の時は、バリアは防御に使って他の魔法や剣で攻撃する方が良いかなと思っている。

よしっ、これで良いだろう。帰ろうかな。そう思って街道の方を振り返ると、最後尾の馬車がまだ見える範囲にいた。

……転移。

「レオン！　良かったわ。少し遅いから心配してたのよ」
「何かあったのか？」
「ごめんね。何もなかったから大丈夫。それよりも木の板を作ってきたから続きをしようか」

俺は机の上に木の板を敷いて、その上に紙を乗せた。そしてナイフを取り出す。

「レオン、ナイフを貸してくれればこっちでも切るぞ？」
「本当？　じゃあナイフと定規を渡すね。馬車が揺れてるから気をつけて」
「わかった」

そうして皆で手分けして、五十四枚の厚紙を作り終えた。

「よしっ、これで五十四枚！」
「結構上手くいったんじゃないか？」
「うん！　馬車で作った割には頑張ったよね」

真っ直ぐに切れてないところも結構あるけど、馬車の中でやって

いるのだから上出来だろう。

「それで、これをどうするんだ？」

「まずは数字を書いていくんだ、一から十三までを四つずつ。そしてその一つずつに別の記号をつけるんだよ」

俺はそう説明をしつつ、試しに紙に数字を書いていった。

「とりあえず一から十三まで一通り書いてみたけど、これをあと三セット作るんだ。そしてそれぞれのセットごとに違う記号を書き加える。それで完成だよ」

「記号はどんなものなんだ？」

「それは特に決まりはないんだけど……」

何がいいかな。日本だとハート、ダイヤ、スペード、クラブだけど……この世界でハートの記号って見たことがない。スペードもクラブも何のことかわからないだろうし……というか、よく考えたら俺も何を表してるのか知らないな。

どうせならもっとわかりやすいやつにしようかな。丸と三角、四角、ひし形とかでいっか。

「丸、三角、四角、ひし形にしようか」

「四角とひし形は似ていてわかりづらくはないか？」

「確かに、そうかな？」

「ああ、こんな形はどうだ？」

「これって盾？」

「そうだ。かっこよくて良いだろう」

確かにただのひし形よりはカッコいいかも。

「うん。じゃあひし形を盾に変えよう」
「レオン、それならばこの丸も変えたいわ。こんな感じはどうかしら？」
「これはりんご？」
「そう！　可愛いでしょ？」
「確かに可愛い。じゃあ丸はりんごに変更しよう」

こうなってくると、ただの三角と四角が味気ない気がしてくる。

「リュシアン、三角と四角を何かに変更する案はある？」
「そうだな。三角は剣にしたらいいんじゃないか？」
「了解。じゃあロニー、四角は何にする？」
「え、僕！？」
「うん。皆の意見で決めようかと思って」
「えーと、そうだね。本とかどう？」
「確かにありかも。じゃあそれにしようか」

そうして結局はりんご、剣、本、盾という四つのイラストに決定した。全く統一感はないけど、俺達で使うだけだから良いよね。

「それじゃあ手分けしてイラストを描いていこうか！」
「わかったわ！　じゃあそれぞれ自分が決めたイラストを描きましょう」
「そうだな。それが良い」

そうして皆は楽しそうにペンを持ち、それぞれのイラストを描き始めた。俺は皆の手伝いとジョーカーの作成だ。ジョーカーは魔物の森のイメージで木が生い茂るイラストにした。多分、木ってことはかろうじてわかると思う……

「よしっ、これで完成だね」
「楽しかったわ！　でも、これで何か遊びができるのよね？」
「そうなんだ。いろいろな遊びができるんだけど、まずは一番簡単なのを教えるね」

一番簡単なのは、やっぱり神経衰弱だろうか。

「神経衰弱って遊びなんだけど……」
「……神経衰弱？　神経が、衰弱するのか？」

リュシアンに不思議そうに聞かれた。
……確かに、今まで神経衰弱の名前の由来なんて考えたことなかったけど、改めて考えると不思議な名前だな。何か意味があるんだろうか？
うーん、よく分からないけど名前は変えようかな。もっとわかりやすくしちゃおう。

「やっぱりさっきの忘れて。数字合わせ遊びっていう名前にする」
「……そうなのか？　さっきの名前はどこから出てきたんだ？」
「……まあいいじゃない！　それでレオン、その遊びはどうやってやるの？」

リュシアンはまだ納得してない感じだったけど、マルティーヌが良い感じに誤魔化してくれた。
マルティーヌ、マジでありがとう。固有名詞には気をつけないとだな。

「まず机の上にさっきのカードを裏返しで全部並べるんだ。それで一人二回ずつ順番に好きなカードを表にして、数字が揃ったらそのカードは貰える。違う数字だったら貰えないからまた裏返す。それ

を順番にずっと繰り返して、カードがなくなった時に一番多くカードを持ってた人が勝ちだよ」
「簡単だな」
「じゃあとりあえずやってみようか！」

そうしてとりあえずのお試しで、神経衰弱改め数字合わせ遊びを一通りこなした。

——勝ったのは俺だ！

なぜなら、皆は数字の配置を覚えないといけないってことに最初は気づいてなかったからね。かなりずるいけど、最初ぐらいは勝たせてもらってもいいだろう。発案者特権だ。

「ルールはわかったぞ！　もう一回だ！」
「これ楽しいわね。もう一回よ！」
「これ、楽しいね。僕ハマりそうだよ」
「本当に？　良かったよ。じゃあもう一回やろうか」

そうしてその日は、それから何回も数字合わせをやって時間が過ぎていった。これでこれからの道中も退屈しないだろう。トランプの遊びは沢山あるし。
……ルールを忘れないうちに紙にでも書き出しておこうかな。

２３４、温泉地

遠征が始まってから数日が過ぎた。
今までの数日間は、皆でお茶を飲んでスイーツを食べながら、ひたすらトランプで遊んで過ごした。皆がハマりにハマってしまったのだ。
そして今日もそんな優雅な？　馬車の旅を満喫して、今はちょうど今夜宿泊する予定の街に着いたところだ。

侯爵家の領都らしく、今まで寄ってきた街とは比べ物にならないほど大きい。さっき街中に入ったけど、王都と同じぐらい栄えているかもしれない。いや、観光地としては王都以上に賑やかだ。
そう、昨日聞いてめちゃくちゃ驚いたんだけど、この街には温泉があるらしいのだ！
なんでも領地内に温泉が沢山出る土地があって、そこに領都を作ったらしい。今回の遠征では少し遠回りだけどここに寄ってくれたみたいだ。遠征の予定を決めた人、本当にありがとう！！

「皆、温泉だよ？　楽しみだね！」
「レオンは今日そればかり言っているな」
「当たり前だよ！　だって温泉だよ？」
「それはもう分かっている。レオンは本当に風呂が好きだよな」

温泉なんてテンションが上がるに決まってるよね！　大浴場とかあるのかな？　露天風呂とかあるのかな？

俺はそんなことを考えながら、馬車の窓から街の様子を眺める。
他の街との明確な違いは、そこかしこに湯気が散見されることと、

木で作られた四角いものが設置されていることだ。
あの四角いのはなんだろうか？
「皆、あの木でできた四角いやつが何か知ってる？」
「ああ、あれは温泉の熱い湯気で食材を蒸してるやつだな。確か学んだことがある」
「食材を？」
「そうだ。確か野菜や肉、芋などだな」
「へぇ～、食べてみたいな。食べられるかな？」
蒸し料理ってこの世界で見たことなかったけど、ここにあったんだな。
「宿の夕食で出るんじゃないかしら？　この街の特産品だもの」
「そっか、じゃあ楽しみにしてようかな」
基本的にこの遠征中は宿からの外出禁止だから、街の様子を見て回ることはできないんだ。だから宿の夕食に期待だな。
「もし宿の夕食で出なかったら、レオンが転移でこっそり買いに行ってくれる？」
そう言ったのはロニーだ。ロニーはこの数日でかなり皆に慣れたみたいで、緊張せずに話せるようになった。嬉しい変化だ。
「そんなこと言っていいの？　ロニーはルールは守らなきゃってタイプなのに」
俺が少し揶揄うようにそう言うと、ロニーはちょっとだけむくれたような顔をした。

「そうだけど……。せっかく来たのに名物を食べられないのは悲しいし、それにレオンなら大丈夫でしょ？」
「まあ、確かにそうなんだけどね」

ロニーは俺の能力を聞いて、さらに数日間その力を目の当たりにして、俺への評価をかなり上げたみたいだ。
前は一人で出歩いてるのでも結構心配してくれたのに、今は全く心配してくれなくなった。信頼してくれてるってことで嬉しいんだけどね。

「私もせっかくなら食べたいわ！」
「確かにそうだな」
「レオン、頼むぞ」

ふふっ、結局皆はルールより食欲みたいだ。まあ、ルールを破ってちょっとハラハラするのも旅行の醍醐味だったりするよね。
俺も高校の修学旅行で、部屋から出るの禁止なのに友達の部屋に行ったりした。あれってなんだか楽しいんだよね。

「わかったよ。宿の食事で出なかったらね」

そんな話をしながら馬車に揺られていると、今日泊まる宿の前に着いた。
馬車が止まると従者の皆が外からドアを開けてくれて、皆で馬車から降りる。そして宿の中に足を踏み入れた。

「うわぁ～、凄いね」

そう声を上げたのはロニーだ。でもわかる、この宿は凄い。公爵家の屋敷と比べても遜色ないぐらいだ。この宿の方がお淑やかな豪華さって感じがする程度の違いだな。

これは俺が元日本人で、繊細で無駄を省いた美しさに感動する心を持ってるからかもしれないけど。

そうして宿の内装を眺めつつ中に進んでいくと、沢山の宿の従業員がずらっと並んでいるホールに辿り着いた。

「皆様、ようこそお越しくださいました」

代表の人がそう言って全員が一斉に頭を下げる。王族がいるからこその対応なんだろうけど、俺も凄い人になれたみたいでちょっと嬉しいかも。

こういう場面で緊張したり恐縮しなくなったってことは、俺も貴族社会に慣れたよね……

「出迎え感謝する」

「労いの言葉をいただき、感謝の念に堪えません。では早速ですが、皆様のお部屋をご案内させていただきます」

そうして宿の従業員と俺達、それから俺達の従者が団体で宿の中を進んでいき、それぞれの部屋に向かった。部屋は二人一部屋で全部で三部屋。三つとも隣同士の部屋だった。

「では元々決めてた通り、ステファン様とリュシアン様で一部屋。マルティーヌ様で一部屋。私とロニーで一部屋でよろしいでしょうか？」

宿の従業員や皆の従者もいるので敬語でそう問いかける。

「ああ、それで良いぞ」
「ではこれからですが、とりあえずはそれぞれの部屋で休まれますか？」
「そうだな……、夕食まであとどのぐらいだ？」
ステファンが従者にそう聞いた。
「あと一時間ほどでございます」
「一時間か……。その程度ならば各自休むのでいいのではないか？」
「そうですわね。私も疲れたので、夕食までは少し休みたいです」
「では夕食までは各自休むことにしよう。……それではまた夕食で」
そうして俺たちはそれぞれの部屋に入った。俺の部屋には、俺とロニーとロジェの三人だ。
「ふぁ～、疲れた……」
「僕もだよ。凄く乗り心地の良い馬車なんだけど、流石に連日は疲れるよね……」
そうしてロニーと会話をしながら、部屋に置いてある大きなソファーに腰掛ける。
この部屋には、備え付けのソファーとローテーブルがあり、その他に大きなベッドが二つ、トイレ、小さめのお風呂、それから従者が泊まる用の部屋が二つある。
本当はベッドが一つしかなくて一人で泊まる用の部屋らしいんだけど、今回は遠征のメンバーが全員どこかしらの宿に泊まれるように、こうして一人部屋を二人部屋にしたりと工夫がなされているのだ。

でも二人で泊まったって、全く狭さを感じない。それどころかあと二人ぐらいは泊まれそうな広さだ。これに一人で泊まるのは贅沢というか、ちょっと寂しそうだ。

「レオン様、ロニー様、お茶をお入れいたしましょうか？」
「うーん、俺はいいかな。ロニーは」
「僕も良いや。馬車で飲みすぎたぐらいだよ」
「ということだからお茶はいいよ」
「かしこまりました。では控えておりますので、何かございましたらいつでもお声がけください」

ロジェはそう言って、部屋の壁際に下がりそのまま待機の姿勢に入る。ロジェも疲れてるだろうし休んでくれていいのに…

「ロジェ、ロジェも疲れてるでしょ？　座って休んでいいよ。それか使用人の部屋に下がってもいいし」
「いえ、これが私の仕事ですのでお気になさらず。それに、この程度の馬車移動は全く問題ありません」

そういえばロジェは影なんだったな……。体も鍛えてるみたいだし本当に疲れてないのかも。それなら無理に勧めるのも良くないか。

「わかったよ。じゃあ何かあったら呼ぶね」
「かしこまりました」

俺はロジェの方に向けていた体を戻し、また力を抜いてソファーに沈み込む。本当に結構疲れてるかも。

「ロニーって王都から出たのも初めてだったんだよね？」
「そうだよ」

「王都の外はどうだった？　他の街の様子とかを見て」
「そうだね……。まず一番驚いたのは、世界って本当に広かったんだなってことかな。別の街があってそこまで馬車で何日もかかるとか、この国の外にも別の国があるとか、知識としては知っていてもイメージできなかったんだ」

……確かにそうか。俺は当たり前のように世界が広いことを知っているけど、生まれた時からずっと王都の中の狭い世界で育って外の世界を見る手段もなければ、イメージ湧かないのかも。

「今はイメージできる？」
「うん。王都は広くてそこが世界の全てのように感じてたけど、王都はこの広い世界の本当に小さな一つの場所でしかないんだなって。なんか僕、感動してるんだ。もっとこの世界の色々なところに行ってみたいな」

そう語るロニーの瞳は、キラキラと輝いていた。

「良いね。俺ももっとこの世界を見てみたいよ。じゃあジャパーニス商会の大きな目標は、他国に出店することかな？」
「本当！？　そんなことできるの？」
「まずはこの国の王都以外の領地に出店して、それが成功したら他国への出店も可能性はあると思うよ。他国の商会や貴族と提携するとか。かなり大変だとは思うけどね」
「それできたら凄いね。ワクワクするよ！」
「じゃあ、目指せ国外進出だね。頑張ろー！」
「おー！」

そうしてロニーと一緒に拳を突き上げた。なんか楽しいな。いつかは絶対に達成しよう。そう心に誓った。

２３４、温泉地（後書き）

書籍一巻発売中ですのでお手に取っていただけたら嬉しいです。書籍版にはオリジナルストーリーが追加され、書き下ろし番外編も収録されています！とっても素敵なイラストも沢山描いていただきました。書籍版も楽しんで頂けたら嬉しいです！

詳しい情報は活動報告の方に上げてありますので、興味がある方はそちらも覗いていただければと思います。よろしくお願いいたします。

２３５、宿の食事と温泉

部屋でロニーと話していたらあっという間に夕食の時間になり、俺たちは夕食の会場に向かった。
夕食は部屋で食べることもできるのだけど、食堂で食べることも可能だ。俺たちは十人ほどが入れる食堂を貸し切っての夕食となった。

「ついに夕食ね。楽しみだわ」
「ここは名物の温泉蒸しがありますからね。私も楽しみです」
「そうよね！　夕食で食べられるかしら」

温泉の蒸気を使って蒸す調理法のことは、温泉蒸しと言うらしい。さっき宿の従業員の方が教えてくれたのだ。
ついでに夕食のメニューも聞いたところ、温泉蒸しを使った料理が出されるみたいでかなり楽しみだ。

「先ほど聞いたところ、夕食でも温泉蒸しを使った料理が出されるようです」
「そうなのね！　それは楽しみだわ」
「夕食でも出されるのか？　先ほど宿の従業員に聞いたのだが、この宿には宿の食事とは別で温泉蒸しが食べられる場所があるらしいぞ」

そう言ったのはリュシアンだ。

「そうなのですか？」
「ああ、自分で好きな食材を選び出来立てを食べられるらしい。…

…夕食が終わって少し休んだら皆で行ってみませんか？」

リュシアンは全員の顔を見回しながらそう問いかけた。それは行きたい。自分で材料を選べるなんて最高だし絶対に楽しい！

「行きたいです！」

「私も行ってみたいですわ」

「確かに気になるな」

「僕もです」

「では決まりですね。夕食後に向かいましょう」

そうして皆で温泉蒸しに行くことを決めていると、宿の夕食が運ばれてきた。まず運ばれてきたのは前菜のようだ。温泉蒸しの野菜をソテーしてソースをかけたものらしい。

一口食べてみると口の中に野菜の甘みが広がり、さらにソースがその甘みを引き立てているのが分かる。これ、めちゃくちゃ美味しい。

「とても美味しいですね……」

「ええ、驚いたわ。温泉蒸しのお野菜はいつも食べているものより甘いのね。特に人参が美味しいわ」

「私はカボチャが好きです。甘みが引き立っています」

本当に美味しい。でも素材が美味しいからこそ、ソースはなしで蒸したままのものも食べてみたくなる。それはこの後のお楽しみだな。

「この後に蒸し立てを食べるのも楽しみになりますね」

「そうだな。これは期待できる」

前菜が終わると次はスープとパンが運ばれてきた。その二つはいつも通りだろうなと思っていたけれど、そんなことは全くなかった。なんと、パンがいつもの焼いたパンじゃなかったのだ！

説明によると、温泉蒸しで作った蒸しパンらしい。食感は結構ふわふわとしていて、日本で食べた肉まんの皮部分だけという感じだった。この世界にも蒸しパンがあったなんて驚きだ。これがあれば肉まんとか色々作れるよね。

でもこのふわふわした蒸しパンはこの高級な宿ならではだそうで、この街で普通の人が一般的に食べている蒸しパンはもっともっちりとしていて重い食べ物だそうだ。

多分膨らます技術があまり浸透してないのだろう。普通に焼くパンも、貴族の間や一部のお店だけでしかふわふわのパンはないからね。

「このパン、とても美味しいですね」

「ああ、いつも食べているものとまた違って良いな」

「私これ好きですわ」

皆の反応からして、王都でも蒸し料理を広めたら人気出そうだよね。今後ジャパーニス商会のお店で蒸し料理を出すことも考えてみようかな。

そうしてこの街特有の食事もいただきつつ夕食は終わった。凄く美味しくて満足だ。でも満足だからこそ、温泉蒸しに行くのがより楽しみになったな。蒸し立ては絶対に美味しいと思う！

「これはこの後が楽しみだな」

そう呟いたのはステファンだ。やっぱりそう思うよね。温泉蒸し

早く行きたいけど、流石に少し休まないとお腹に入らないかな。

「この後はどのような予定にいたしますか？　流石にすぐ温泉蒸しは食べられないかと思いますが……」

「そうだな。各自部屋で休んだ後温泉を堪能し、その後で温泉蒸しに向かうのはどうだ？」

「私はそれで構いません」

「私も問題ありませんわ」

その提案に皆が頷いたので、この後の予定は温泉に入ってから温泉蒸しに行くことになった。

「この宿の温泉はどのような仕組みなのでしょうか？」

「確か、大浴場と貸切風呂があるのだったな」

「そうなのですね。ステファン様はどちらに入られるのですか？」

「私は貸切風呂だ。王族は不特定多数の前で無防備に裸を晒すわけにはいかないからな。危険を回避するためにも仕方がないことだ」

「そうなのですね……」

確かに裸になるって結構危ないよね。もし誰かに狙われてたりしたら隙を作るようなものだ。それに、裸を他人に晒すという行為自体が避けるべきことなのだろう。

「ではリュシアン様も貸切風呂ですか？」

「ああ、そうなるな」

どうしようか。俺も貸切風呂にしたほうがいいのかな？　でも大浴場も捨て難いんだよなぁ～。諦めきれない。

俺は小声でロジェを呼び、まずはロジェにお風呂の作りを尋ねることにした。

「ロジェ、貸切風呂は露天風呂ってあるの？」
「いえ、露天風呂は大浴場のみだと聞いております。貸切風呂は五人ほどが入れる大きさのお風呂だそうです」
「大浴場は？」
「大浴場は数十人が入れるほどの広さだと聞いております」

うぅ～、やっぱり大浴場が良い！　俺は平民だから裸を晒すこと自体に問題はない。後は危険かどうかだけど……まあ、襲ってくる人がいたら自分でなんとかできるよね。
だからいいかな……？

「そういえば、お風呂に入るときはロジェの手伝い付きなの？　大浴場でも？」
「いえ、貸切風呂の場合は従者が入れますが、大浴場の場合は禁止されております」
「……この宿って高級宿なんだよね？　貴族が基本泊まるのなら、それだと大浴場を使う人なんていないんじゃない？」
「いえ、この宿は基本的に商人が使うのです。もちろん貴族様方が泊まられることもあるのですが、その場合は貸切風呂をお使いになられることがほとんどのようです」

商人なのか……確かに貴族って意外と忙しいし領地から離れられないことも多いし、温泉地に旅行に来るのは商人の方が多いのかも。

「そうなんだ。あのさ、俺は大浴場でも問題ない？」
「……そうですね。できれば貸切風呂か部屋のお風呂を使用していただきたいですが、どうしてもと仰られるのであれば大浴場でも問題はありません」
「じゃあ、俺は大浴場でいいかな！」

俺は大浴場に行く許可が出たことがかなり嬉しくて、それまで小声で話していたのに思わず大きな声を出してしまった。

「なんだ、レオンは大浴場に行くのか？」

リュシアンにそう聞かれた。皆にも聞こえちゃったみたいだ。

「はい。皆様が貸切風呂を使用される中で申し訳ないとは思うのですが……」

「いや、別に構わないぞ。レオンは風呂をかなり楽しみにしていたみたいだからな。私はそこまで風呂にこだわりはない」

「私もだな」

「そこまでして大浴場に入りたいとは思えないわ」

そーなの！？　皆は温泉の良さを分かってないよ。大浴場って最高なのに。露天風呂なんて至福だよ！

そう言って皆に温泉の良さを説こうかと思ったけど、結局皆は入れないんだと思い反論する寸前で踏みとどまった。やっぱり貴族や王族は大変だよね……

「ロニーはどうする？」

「僕？　僕はもちろん大浴場に行くよ」

「じゃあ一緒に行こうか」

「うん！」

それから部屋で一時間ほど食休みをして、各々風呂に向かった。今俺は、ロニーとともに露天風呂に入ったところだ。

「うぅ〜、温泉が体に染み渡る……最高すぎる」

俺は肩まで温泉に浸かりだらっと体の力を抜いた。横にいるロニーはそんな俺を呆れた目で見てくる。

「レオン、さっきからおじいちゃんみたいだよ？」

「だって、温泉が気持ち良すぎるんだ……」

「確かに気持ちいいけど、そんなにかな？」

「そんなにだよ……」

本当にすっごく気持ちいい。やっぱり温泉ってお風呂とはまた違うよね。体がほぐれる気がする……

「僕は従業員寮に住み始めてからお風呂に入るようになったけど、まだお風呂に浸かる気持ちよさは理解できないんだよね……逆に苦手かも」

「……そうなの？」

「うん。だって綺麗に体を洗ったら、お湯に入る意味なくない？」

「うーん、なんて言うんだろう。こう、体がぽかぽかになって疲れが取れる感じがしない？」

「……そう？　逆に疲れない？」

疲れる？　お風呂に浸かると疲れることなんてあるかな。俺はもう慣れてるからわからないだけとか？

「俺は疲れないけど……。どんな感じになるの？」

「……風邪を引いた時みたいな感じかな？」

「それって浸かる時間が長すぎるんじゃない？　暑くなってきたら止めるとか、半身浴にするとかしてみたらいいかも。後は水分補給をしっかりすれば大丈夫じゃないかな」

「そうなの？　じゃあこれからは工夫してみるよ」

そこまで話したところで二人の間に少しの沈黙が流れたので、俺は露天風呂をぐるっと見回してみた。するとちょうどさっきまでいたおじさんとお兄さんがいなくなり、露天風呂には俺とロニーだけだ。

誰もいなくなったってことは……あれをやっても良いかな。

何かというと、温泉で泳ぎたい！

俺は日本人だった頃から、広い温泉で泳ぐのが憧れだったのだ。泳ぐと言ってもクロールとかじゃなくて、顔を付けない静かな平泳ぎぐらいだけど。

日本だと温泉プールみたいなところでしかできなかったから、この世界で夢を叶えたい。この温泉はかなり深めだし、ちょっとぐらい良いよね。

水面に顔を出したままでさりげなく平泳ぎで泳ぎ始めると、ロニーに不審者を見るような目で見られた。

「レオン、何してるの？」

「ちょっとだけ泳ごうかなと思って」

「……何でここで？」

「うーん、気持ちいいから？」

「そうなんだ。……というか、なんで泳げるの？」

そうだ、この世界の人ってほとんどの人が泳げないんだった。泳ぐには川に行くしかないけど、わざわざ川まで行って泳ぐ人はあんまりいないから。

「森の中に川があって、そこで練習したんだ」
「へぇ～凄いね。僕からみたら変な動きだけど」
「これだと顔を出したまま泳げるし、結構便利なんだよ。水飛沫も立たないし。ロニーもやってみる？」

俺のその言葉に、ロニーは興味があるのか悩んでいる様子だ。

「そんなに難しく考えないで一度やってみたら？　足はこんな感じで、手はこんな動き」
「えっと……こう？」

バシャバシャバシャ……ブクブクブッ……

「ロ、ロニー！？　大丈夫！？」

ロニーは泳ぎ始めたと思ったら、溺れかけの人のようにもがいて沈んでいった。
助けるために急いでロニーのところに向かうと、俺が手を貸す前にロニーが自力で起き上がった。そうだよね、温泉はそんなに深くないから足を付けば顔は出るもんね。
でも、かなり焦った。

「ロニー大丈夫？」
「うぅ、レオン。まずい……」
「温泉飲んじゃった？　大丈夫？」
「うん、多分大丈夫……。それよりも難しいね。レオン軽くやってるけど」
「慣れればできるんだよ。ロニーも練習すればできるよ」
「そっか、じゃもう一回やってみる！」

それからはなぜかロニーの負けず嫌いが発揮され、適度に温泉から出て体を冷やしつつ泳ぎの練習を続けることになった。

途中で思ったよ、俺たち温泉で何やってるんだろうって。でもロニーが意外と真剣で、止めるに止められなかったのだ。

途中で誰も露天風呂にこなかったことも幸い、いや、災いした。

その結果、すっかり二人とものぼせて部屋でダウンすることになった。本当、馬鹿なことやったなぁ。でもそれが楽しかったりするんだよね。

そうして俺達はお風呂を出た後、皆との約束の時間までとにかく体を冷やしながら寝て過ごした。

236、温泉蒸し

それからしばらく涼んだことで俺とロニーが回復した頃、皆で温泉蒸しに向かう時間となった。

「レオンとロニー、疲れてるみたいだが大丈夫か？　熱でもあるんじゃないのか？」

皆と部屋の前で合流すると、開口一番リュシアンにそう聞かれた。

「いや、これはちょっと、温泉でのぼせただけなので大丈夫です……」

「温泉でのぼせるって、そんなに長時間入っていたのか？　いくら風呂が好きだからって入りすぎるのも良くないぞ」

「その、少し事情があって……、ね、ロニー」

「そ、そうなんです。全然大丈夫ですので気になさらないでください」

流石に温泉で泳いでたらのぼせましたなんて恥ずかしくて言えず、二人で何とか誤魔化した。

「そうか。ならいいが……」

「はい。ご心配ありがとうございます。全く問題ありませんので行きましょう！」

「そうだな。では行こうか」

そうして皆で温泉蒸しができる場所に向かうと、そこには馬車の

中から見ていた釜がいくつも並び、その隣で食材を選ぶことができるようになっていた。
各種旬の野菜から肉や卵、果物までである。ちょっとテンション上がるかも。

「ようこそお越しくださいました。こちらからお好きな食材を籠にお取りいただき、籠ごと釜にお入れください。食材によって適切な蒸し時間がございますので、そちらは食材の前にある数字を参考にしてください」

皆で食材が置かれている場所に向かうと、従業員の方がそう説明をしてくれた。

「では、それぞれ好きなものを選ぶことにしよう」
「そうですわね」

ステファンはそう言って、従者の方と共に次々と食材を選んでいく。マルティーヌとリュシアンもそれに続いた。

「レオン様、気になるものを教えてくだされば私がお取りいたします」

ロジェもそう言ってトングと籠を準備してくれる。ロニーは従者がいないので自分でその二つを持った。

「ありがとう。じゃあまずは野菜かな。玉ねぎとさつまいもをお願い」
「かしこまりました」
「それから……、お肉は鶏肉にしようかな。卵も一つ」
「はい」

「後は果物か……」

果物って蒸して美味しいのだろうか？　でもちょっと興味あるよね。この中ならりんごかな。

「果物はりんごでお願い。とりあえずこれだけでいいかな」

「かしこまりました。では私が釜に入れて出来上がったものからお持ちいたしますので、レオン様は席に座ってお待ちください」

「分かった。よろしくね」

「はい。それからロニー様、ロニー様の分も私が調理いたしますので、レオン様と共に席でお待ちください」

ロジェは食材を選んで釜のほうに向かおうとしていたロニーをそう呼び止めた。

「えっ、でも、悪いです」

「いえ、レオン様のものと一緒に蒸しますので問題はありません」

確かにロニーだけ自分でっていうのも仲間はずれな感じがして嫌だよね。かといって俺がロジェの仕事を奪うわけにはいかないし。

ロニーの分もやると申し出てくれたロジェに感謝だな。俺もその辺もっと配慮できるように気を付けよう。

「ロニー、ロジェに頼んじゃってもいいと思うよ。自分でやりたいならそれも良いとは思うけど……」

「いや、別にそうじゃないんだけど。二人分するのは大変だろうし……」

「それならロジェにお願いしよう。皆もロニーと話したいと思うよ」

「……そうかな。じゃあ、よろしくお願いします」

「かしこまりました。ではお待ちください」

そうして従者の皆が温泉蒸しの釜で食材を蒸してくれている間、俺たちは席に座って出来上がるのを待っていた。もちろん途中で釜の見学にも行ったけどね。どうしても気になったのだ。

そうしてしばらく待っていると、早いものは出来上がってきた。

「レオン様、こちら出来上がったものです。調味料として塩もございますのでお好みでお掛けください」

「ありがとう」

「レオンは卵を選んだのね。私も同じよ！」

そう言ったマルティーヌのお皿には、綺麗に剥かれたゆで卵が乗っていた。

「やはり卵は気になりますよね。他には何を選ばれましたか？」

「先程食べて美味しかった人参と、果物をいくつか選んだわ」

「私もりんごを選んでみました。果物を蒸すなんて味が気になります」

「ええ、初めて食べるから楽しみね！」

「私は果物は選ばなかったな……」

そう言ったのはステファンだ。ステファンはあんまり冒険せずに、確実に美味しいだろうものを選んだみたいだ。

「ではお兄様、美味しかったら私のものを少し差し上げますわ」

「ああ、ありがとう。では早速食べようか」

「はい。いただきます！」

俺はまず玉ねぎを選び、何もつけずに口に入れた。うん、これ美

味しい。玉ねぎの甘さが際立っている。

「美味しいですね。やはり甘さが際立ちます」

「本当ね。卵も美味しいわ」

「このキャベツ、かなりいけるぞ」

リュシアンはキャベツを食べてるみたいだけど、良い感じにしんなりとしてかなり美味しそうだ。キャベツを選んでも良かったかも。そう思いつつ、次は玉ねぎに塩をかけて食べてみた。

「おおっ……、塩を少しかけると甘みがさらに引き立ちます！」

「本当か？　私も試してみよう。……ふむ、確かに美味いな」

そうして玉ねぎと卵を味わっていると、りんごが蒸し終わったようでロジェが持ってきてくれる。

「レオン様、りんごが出来上がりました。鶏肉とさつまいもはもう少しお待ちください」

「分かった。ありがとう」

ロジェから受け取ったリンゴを蒸したものは、結構トロトロな様子で凄く美味しそうだった。

熱々のリンゴを一口分だけ取り、少し冷ましてから口に入れる。

「う～ん！　これ、美味しいです！」

凄い、りんご美味しい！　生で食べるより好きかもしれない。

「……そんなに美味しいのか？」

「はい。これは凄いです」

「わぁ、本当ね！　これは美味しいわ」
「確かにこれは美味いぞ。りんごをもう一つ追加するか……」
俺と同じようにりんごを選んでいたマルティーヌとリュシアンも食べたようで、美味しさに驚いている。その様子に自分も食べたくなったのか、ステファンとロニーが立ち上がった。
「私はりんごを追加してくる」
「僕も追加してきますね」
そうしてそれからも皆でわいわいと、食材を追加しながら温泉蒸しを楽しんだ。俺的にはさつまいもとりんごが一番美味しかったな。それからキャベツに塩をかけたものもかなり美味しかった。
「ふぅ、凄く美味しかったです」
「ああ、これはまた来たいな。王都でも出来ればいいのだが」
「温泉蒸しはできなくても、蒸し料理ならばできるのではないですか？」
「本当か？　王都では見たことも聞いたこともないが」
「そうですね……」
確かにそうなんだよね。王都で蒸し料理って全く発展してない。今まで見たこともないかも。
蒸し料理って時間かかるし面倒くさいのかな？　いや、わざわざ蒸すっていう調理法を選ぶ必要がないのかもしれない。
それなら、蒸すという調理法でしかできない料理があるといいのかも。
この温泉蒸しは、温泉の湯気という高温で一気に蒸してることとか、温泉に含まれる何かしらの成分とか、後はこの釜で蒸すという

楽しさとか、そういうの込みの美味しさだと思う。
だから王都で普通に野菜を蒸す料理は広まらないよね。何かもっと広まるような料理があると良いんだけど……

俺が思い浮かぶ蒸し料理っていったら、茶碗蒸しとお饅頭、あとは肉まんぐらいだ。
茶碗蒸しって何で作られてたんだろうか。卵と……出汁とか？そうなると出汁が手に入らないからダメだ。お饅頭も中身の餡子を作れないからダメだよね。
可能性があるとしたら肉まんかな。というか、あのふわふわの蒸しパンなら中身がなんでも合うと思う。最悪野菜炒めとかでも普通に美味しいだろう。

でもそれには大きな問題が一つある、パンの製法だ。パンをふわふわに膨らませる方法は多分教えてもらえないだろう。王都でも製法が広まらないようにされてるみたいだし。
うーん、こうして色々と考えてみると、王都で蒸し料理を流行らすのは結構難しいのかも。それに蒸しパンの料理だけじゃそこまで流行らないよね……

「王都で蒸し料理を流行らせるには蒸すという調理法でしか完成しない料理があると良いと思ったのですが、すぐには難しいですね……」
「そうか、やはり王都では難しいのかもしれないな。改めて考えてみても、今食べた温泉蒸しが王都で貴族に流行ることはないだろう。これは面白い調理法や温泉地という場所も込みで貴族も食べるものになるからな。そうでなければ質素すぎる」
「やはりそうですよね……」

とりあえず平民向けのお店にするとしても、わざわざ手間をかけ

て蒸すほどの味に仕上げなければダメだろう。母さん達に蒸し料理を教えたら「わざわざ蒸すのが面倒くさいわね、焼けばいいじゃない」って言われる気がする……

うーん、やっぱり難しいな。

「また時間に余裕ができたら考えてみます」

「ああ、楽しみにしている」

「レオンが考えてくれるのなら、いつかは王都でも楽しめるようになりそうね」

「あまり期待せずにお待ちください」

そうして皆で温泉蒸しを堪能して、その日は眠りについた。この街は本当に楽しかったな。

237、到着

それから一週間、ついに目的地のリオールの街に辿り着いた。かなり長い旅路だったけれど、俺達はトランプという救世主のおかげで退屈することなく、一週間の旅を終えた。

「やっと着いたね」
「ああ、流石に疲れたな」
「でもトランプのおかげで楽しかったわ。帰りもまたやるわよ」

そんな話をしつつ馬車から降りる。
馬車を降りた場所は何もない広場だった。隣には大きな木造の建物が見える。

「皆さん、ここはリオールの街の簡易宿泊所に併設された広場です。これからこの広場に集合してもらうことも増えると思うので、覚えておいてください」

先生のうちの一人がそう声を張り上げた。ということは、隣にある大きな建物が簡易宿泊所なのか。
俺たちが一週間滞在するのは簡易宿泊所らしいから、ここに泊まるってことだな。

「それから班ごとにまとまっていてください。マレシャル伯爵がお越しになられるので、それまでその場で待機していてください」

マレシャル伯爵って、確かリオールの街が所属する領地の領主様だよね。そういえばオーブリー先生が領主様の話もあるって言って

たな。

「リュシアン、マレシャル伯爵って同じ勢力の人なんだよね？」

俺は周りに聞こえないように小声でそう聞いた。

「ああ、だからそこまで心配する必要はないぞ」

「だよね、良かったよ。それにしても到着したその日に来るんだね」

「聞いた話によると結構身軽な方らしい」

「そうなんだ。そういう人もいるんだね」

そうしてリュシアンと話していると、マレシャル伯爵が俺達の前に現れた。伯爵はかなりガタイが良く強そうな人で、金色の髪を短くしていて肌は日に焼けて小麦色だ。領主というよりも騎士みたいな人だな。

皆は伯爵が現れると途端に口をつぐみ、辺りはしんと静かになった。

「皆、長旅で疲れているところだとは思うが私の話を聞いてくれたら嬉しい。知っている者も多いとは思うが、私はジョアサン・マレシャル。このリオールの街を含むマレシャル伯爵領を治めている。まずは王立学校の学生諸君、この街に来てくれてありがとう。皆の勇気に心からの感謝と敬意を」

マレシャル伯爵はそう言って、皆を見回した。

「私からはこのリオールの街の実情と、魔物の森の実情を軽く話したいと思う。これから実際に見学してもらう前の知識として聞いてほしい。まずこのリオールの街だが、数年前までは他の街同様に多くの民が暮らしていた。しかし魔物の森の広がりが抑えきれなくな

り、この町の住民は皆移住し、ここは魔物の森に対処する騎士団のための街となった。この街には食堂や屋台、居酒屋などの店はあるが、全て騎士団が雇った者によって運営されている」

じゃあ、本当に普通の平民は一切いないってことなんだ。馬車から少し見ただけだけど、結構広い街だったのに……

「基本的にここに滞在しているのは、第二騎士団と第三騎士団に所属する騎士達の一部。それから我が伯爵家の私兵団だ。皆、簡易宿泊所や騎士団の詰所として使用している建物に寝泊まりし、交代で二十四時間魔物の森への対処を行なっている」

二十四時間体制なのか……。夜は昼間よりも危ないと思うけど、それでも二十四時間体制で臨まないといけない理由があるのだろうか。

本当に、危険と隣り合わせで大変な仕事だ……

「このリオールの街は魔物の森への最前線だが、他にも同じような街はいくつもある。魔物の森は大陸を全て覆うように広がっているからな……。しかし広がる速度も一定ではなく、魔物の森が一番侵攻している場所の近くがこのリオールの街だ。よって今この街には、どうにか押し返そうとたくさんの騎士が集まっている。皆にもそんな街の現状をしっかりと見ていってほしい」

確かこの国がある大陸って、横に長い長方形のような形で、その東側が魔物の森に覆われてるんだったよね。そして魔物の森がどんどん西に向けて広がっていて、このままだといずれ大陸全体が飲み込まれてしまうんだ。

でも線を引いたように、どこでも一定の速度で広がってるわけではないってことか。そうなると……、もしかしたら他国ではもっと

魔物の森が西に侵攻してるところもあるのかもしれないよね……

だってこの国は、この大陸で一番の大国だったはず。だからこそ魔物の森と接してる部分も多いんだけど、大国だからこそ騎士の数も多い。

小さな国とか、大丈夫なのかな……？

この国は大陸の南側をほぼ全て支配してるけど、北側は大丈夫なのだろうか？　もし北側の国々が魔物の森へ碌な対処もできずに滅びていっていたとしたら、この国はいずれ北側からも魔物の森の侵攻を受けることになる。そうなったら、予想以上に早く危機が訪れるんじゃないのかな？

本当に、もう猶予がなさそうだ。

「それから魔物の森の現状だが、このリオールの街が担当する範囲のみを考えれば、なんとか抑え込めている。今はこの街に騎士がたくさん集まっているからな。しかしそれによって、他の場所では前線を後退させざるを得ない状況になっているようだ。そうなると、他の場所でもリオールの街と同程度まで魔物の森が侵攻してくることになる。するとどこの場所にも騎士を集中させることができず、全体的に後退を余儀なくされ、そのうちこの大陸は全て飲み込まれるだろう」

やっぱり、本当にやばい状態なんだな……

周りを見回してみると、ほとんどの生徒がマレシャル伯爵の話に呆然としている様子だ。やはり実際現地に来て話を聞くとまた違うのだろう。

この遠征、馬鹿な貴族たちにも参加させてやりたいな。多分この話を聞いても鼻で笑うのだろうけど、強制的に騎士と一緒に魔物の森に放り込んでやりたい。

そこまですれば流石に危機感を持つだろう。

「貴族の中には、魔物の森の脅威をしっかりと認識していない者も多い。大袈裟だ。同情票を狙ってるのか？　救援物資を受け取って他国にでも売りつけるんだろう。税金を免除してもらうための嘘だろう。そのようなことは飽きるほど言われて来た。……しかし、これは現実だ。たしかに数年前はまだ抑え込めると考えられていた。しかし魔物の森の勢いは増すばかり。魔物の強さもどんどん上がって来ている。楽観的に見ても抑え込める状態じゃない。国を挙げて、皆で力を合わせて取り組むべき最優先課題だ。そのことを帰ったら家族に伝えてくれると嬉しい」

マレシャル伯爵はそう言って、もう一度皆の顔を静かに見回した。

「では私の話はこれで終わりだ。一週間、しっかり学んでくれ」

そうしてマレシャル伯爵は下がっていった。皆は伯爵がいなくなってからも、呆然としていて誰も動き出さない。先生達も同様だ。皆、心の中では信じてなかったんだろう。でも伯爵にあそこまで言われたら信じるしかないよね。思考停止するのも仕方ないか……

「先生方、次の指示をお願いします」

そんな沈黙を破ったのはステファンだ。よく通る声でそう言った。その言葉に慌てて先生方が動き出す。

さすが王族だな……

「で、では、次は各自滞在する部屋に荷物を運び入れます。班ごとに案内するので、呼ばれるまでその場で待っていてください」

そうして一班から順に部屋へと案内された。簡易宿泊所は木造で無駄の一切ない建物って感じだ。基本的に二人部屋でベッドと机と椅子がある程度。
トイレとお風呂は共同のものがいくつかあり、時間を区切って使うようだ。一応下水は引いてあるようで水洗トイレらしい。俺はロニーと二人部屋だ。

「ロニー、どっちのベッドがいい？」
「どっちでもいいよ」
「じゃあ、俺は右側にするね」
「うん。じゃあ僕はこっちね」
「レオン様、必要最低限のお荷物はこちらに置いておきますが、それ以外は私の部屋に保管しておくので良いでしょうか？」

従者は基本的に主人の隣の部屋が与えられている。本当なら俺とロニーの従者の二人で隣の部屋を使うはずなんだけど、ロニーには従者がいないからロジェは一人部屋だ。

「そうだね。ここはロニーの荷物も置くし、ロジェの部屋に置いてくれるとありがたいかな」
「かしこまりました。ではそのようにいたします」
「ありがとう」

そうして荷物整理を整えて、俺たちはさっきの広場にまた戻った。今は午後三時ぐらいで、早速今日から予定が組まれているらしいのだ。

２３８、対魔物訓練場

広場に戻るといくつかの班ごとにグループ分けされ、俺たちのグループは騎士団の訓練を見学することになった。
今は案内してくれる騎士の方を待っているところだ。

「僕、騎士団の訓練なんて初めて見るからワクワクするよ」
「そっか、ロニーは見る機会なんてなかったもんね」
「うん！　かっこいいんだろうなぁ」

ロニーはキラキラした瞳でそう言った。やっぱり騎士団の訓練とか男の子は例外なく憧れるよね。

「王都での訓練はよく見てるけど、かなり迫力あるよ。ここでも同じ訓練かはわからないけど」
「そっか、レオンは回復魔法の授業で訓練に参加してるんだよね」
「うん。第三騎士団の訓練に参加してるから、ここにも知ってる人がいるかもしれないよね」

毎週顔を合わせていれば、だんだんと顔と名前を覚えるのだ。第三騎士団の人にはかなり情が湧いている自覚がある。危険な仕事だし、あんまり良くないとは思ってるんだけどね……

そうしてロニーと話していると、案内の騎士の方が歩いてくるのが見えた。
え？　あの人って……

「待たせたな。俺が今日から一週間、このグループの案内をするジ

エラルド・フェヴァンだ。第三騎士団の団長をしている。よろしくな」

やっぱりそうだよね！　フェヴァン第三騎士団長が何でここにいるの！？

フェヴァン第三騎士団長は、いつも俺たちが参加している王都の訓練を指揮している人だ。フェヴァン侯爵家の次男で、今はフェヴァン騎士爵で第三騎士団の団長をしている。凄い人だけど親しみやすい性格で、フェヴァン侯爵家はタウンゼント公爵家と同じ勢力に属しているから結構仲良くなったのだ。

でも、団長は基本的に前線には行かずに王都で訓練と仕事だって言ってたのに……

「フェヴァン第三騎士団長、なぜここに？　王都にいらっしゃるのではないのですか？」

「レオン、二週間ぶりだな。普段は王都にいるんだが、たまにこうして現場を確認に来るんだ。今回は王立学校の生徒の案内も兼ねている」

「そうなのですね……」

事前に教えてくれればいいのに！　結構驚いたじゃないか。

「驚きました」

「ははっ……驚いた顔を見たかったから黙っていたのだ」

フェヴァン第三騎士団長はそう言って笑った。この人、こういうところがあるんだよな。

「王子殿下、王女殿下、ようこそお越しくださいました」

「ええ、案内よろしくお願いいたします。この遠征も王立学校の行事ですので、私は一生徒として扱っていただければと思います」
「私もそのように」
「かしこまりました。……では、早速訓練所に行こう。そうだレオン、フェヴァン第三騎士団長は長いから別の呼び方にしろと言っているだろう？」

そうは言われても……、ただの平民が騎士団長を崩して呼ぶのは流石に周りの目が気になるんだよね。
というか、俺って何でこの人に気に入られてるんだろうか？　ありがたいんだけど理由がわからない。俺の回復魔法が他の人より上手いからかな？　でもいつもは力がバレないように抑えてるんだけど。

「ですが、流石に周りの目も気になりますし……」
「では、皆が同じ呼び方ならば良いだろう？　皆、これから俺のことはジェラルドと呼ぶように」
「良いのですか……？」
「ああ、これは決定事項だ」
「……かしこまりました。ではジェラルド様とお呼びいたします」

俺がそう言うと、ジェラルド様は満面の笑みを浮かべた。この人も大概、貴族っぽくないよね。
俺はそういう人の方が好きだけど。

そうして話しながら歩くこと数分、訓練場に辿り着いた。
「ここからは危ないから絶対に俺の言うことを聞くように。ここは対魔物訓練場だ」
「魔物が、いるのですか？」

「ああ、魔物の倒し方を安全に学ぶための訓練場だからな。新人が主に使う場所だ」

そんな場所があるのか……でも確かに捕まえられるレベルの魔物なら、こうして安全な場所で訓練した方が良いよね。実戦は何が起こるかわからないし。

「皆には訓練場の様子を上から眺めてもらうことになる。そこまで飛んでこられる魔物はいないから安心してくれ」

そう言われて俺はふと一つ疑問に思った。空を飛べる魔物っていないのだろうか？　鳥の魔物とかいそうだよね。

もしそういう魔物がいるのなら、完全に防ぐことなんて出来ずにどんどん人間の街を襲いそうだけど……そんな話は聞いたことがない。

「ジェラルド様、鳥の魔物はいないのですか？」

「鳥の魔物？　いるぞ？」

「では、なぜそれらの魔物は空を飛んで人間の街を襲わないのでしょうか？」

「ああ、それは魔物の森の特性があるからだ。魔物は魔物の森から自発的にはほとんど出てこないんだ。出てくるのは獲物を追っているときぐらいだな。だから魔物は森の外に出ると弱るのではないかって一時期言われてたんだが、それはないらしい。実際に魔物を強制的にここに連れて来ているが、弱ったりはしていないからな。だから単純に、魔物の森の居心地がいいんじゃないかって今は言われている」

……そんな特性があったんだ。

じゃあ、森の広がりを抑えられれば魔物はあまり気にしなくても

良いってことだよね？

「ということは、魔物の森の広がりを抑えられれば魔物を倒す必要はないんですか？」

「理屈ではそうだな。だから俺たちの仕事は基本的に、魔植物を倒して広がりを抑えることだ。しかしその過程で魔物とも当然遭遇する。魔物は基本的に好戦的な性格だからな、遭遇したら倒さなければならない」

「魔植物ってなんですか……？」

「ああ、魔物の森の植物をそう呼んでいるんだ。この森の植物は普通の植物とは全く違うからな。まず植物も全てが魔力を持っている。繁殖力も驚くほど高い。……この辺は実際に見た方が早いだろう」

「……そうですね。ありがとうございます」

「いや、質問はいくらでも受け付ける。皆も好きに質問してくれ。では入るぞ」

そうしてジェラルド様が俺達を、訓練場の中に招き入れてくれた。

「ダメだ！　そんなんじゃすぐにやられちまうぞ！　ロックワームは足元を取られたら終わりだ。絶対に立ち止まるな！」

「は、はいっ！　ファイヤーボール！」

「こんな敵に魔法なんて使ってたら魔力がいくらあっても足りねぇよ！　剣で倒すんだ！　こいつは固くないし剣で倒せるぞ」

「はい！」

訓練場に入った途端そんな声が聞こえてきた。

「ちょうど新人が魔物相手に戦ってるみたいだな。あれはロックワームだ。獲物の足元を土魔法で固めて動けなくなったところを丸呑みする」

ジェラルド様にそう言われて訓練場の様子を覗いてみると、そこには人間の背丈ほどある巨大な芋虫がいた。顔部分にはでかい口があり、牙のようなものまで見える。

……きもちわるっ！！

やばい、めちゃくちゃ寒気がした。何あいつ、あんなのいるの？マジで無理、生理的に無理、火魔法で燃やし尽くしたい。

「ちょっと、気持ち悪いわね……」

「ああ、あれとは戦いたくないな」

「私もです……」

マルティーヌ、ステファン、リュシアンがそう呟いた。ロニーは言葉も出ないようだ。

「ジェ、ジェラルド様、あのロックワームは、よくいる魔物なのですか……？」

「ああ、結構頻繁に遭遇するな。だがそこまで強くないから大丈夫だ」

いや、強くないとかいう問題じゃないです！　気持ち悪すぎるんです！　あれと頻繁に遭遇するとか、想像しただけで鳥肌が……

「強くはないのですか……？」

「ああ、体が柔らかいからな。剣ならばすぐに倒せる。魔法には気をつけなければいけないが、発動する前に声を出すからすぐに分かる。それに、その場に立ち止まったりしない限り問題はない」

そうジェラルド様が説明してくれている最中に、下からおぞましい声がした。

「ギュボォォォ！」

声まで気持ち悪い！

「魔法が来るぞ、気をつけろ！　今が狙いどきだ！」

「はいっ！」

ロックワームと戦ってる騎士の方はロックワームが魔法を発動してる隙をつき、横に回り込み剣で胴体を一刀両断した。とは言っても胴体が太すぎて半分ほどしか切れてないけど。

その切れた部分から白っぽい液体が染み出してくる。ヤバい、さらに気持ち悪い……しかも切られたのにまだ動いてるんだけど！？

あれ、まだ生きてるの……？

「ま、まだ動いてますが、生きてるんですか？」

「いや、死んでからもしばらく動いてるだけだ」

そ、そうなんですね……。最後まで気持ち悪いな……

「ほら、動かなくなった。死んだようだな」

「……良かったです」

「ここでは毎日こんな感じで新人が訓練をしている。ここで最低限の魔物の倒し方を身につけて、魔物の森の任務につくんだ」

騎士団の皆さんには頭が上がらないと思ってたけど、その気持ちはめちゃくちゃ強くなった……マジで、マジでありがとうございます。

「こんな辛い訓練をして任務に当たってくださってるなんて、本当にありがたいです」
「そう言ってもらえると嬉しいな。ありがとよ」
そうして精神的にかなりのダメージを受けた訓練見学は終わった。
とにかく一旦寝て疲れを癒したい……

239、リオールの街を見学

次の日の朝。
俺達は早起きして準備を整え、昨日と同じ広場に集まっていた。
今日俺達のグループはリオールの街を見学できるらしい。

「街の見学は楽しみだわ」
「そうですね。私も街の見学はかなり楽しみでした。昨日のは、衝撃的な体験でしたからね……」
「そうね。夢にあの魔物が出てきてよく眠れなかったわ」
「私もです……」
「僕もです……」

皆もよく寝られなかったみたいだ。俺は昨日のことを思い出して思わず遠い目になる。
昨日の夜は本当に最悪だった。あの芋虫が大量に夢に出てきて、俺はその大群に追われてるんだ。どこかの草原をひたすら走って逃げるんだけど、あの芋虫がすごいスピードで追いかけてきて……、最後はその群れに飲み込まれるところで目が覚めた。

はぁ～、今思い出しても寒気がする。それからは一睡もできなかった。うん、軽くトラウマだよ。逆にあの魔物を火魔法で燃やさせて欲しい。そうした方が怖くなくなる気がする。

「とりあえず昨日のことは一旦忘れて、今日は楽しむことにしよう」
「そうですね。本当は昨日のことは重要な経験なのでしょうけど、今日ぐらいは忘れても許されるでしょう……」

ステファンとリュシアンもそう言って、疲れたような顔で笑い合っている。

「皆集まってるか？」

そんなところにジェラルド様がやってきた。

「なんだ、皆疲れてるみたいだな？」

「あまり眠れなくて……」

「そうなのか？　……枕が合わなかったか？」

「いえ、昨日のロックワームが夢に出てきて……」

「ははは、そうか。確かに忘れてたが新人もよく言ってるな。最初の頃は気持ち悪い魔物が夢に出てきて寝られないって。すぐに慣れるから大丈夫だ」

「……そうなのですね」

「まあ、今日は魔物は見ないだろうから安心してくれ。じゃあ案内していくぞ」

そうして俺達はとりあえず気持ち悪い魔物のことは忘れて、リオールの街を進んでいった。リオールの街は広いけれど実際に使っているのは一部分だけらしく、今日は徒歩での見学だ。

簡易宿泊所にある広場から細い路地を通っていくと、すぐ大通りに出た。

「ここが今のリオールの街の中心だ。この大通り沿いにたくさんのお店があり、その周りに訓練施設などが配置されている。今日はこの大通りを案内するからな。午前中に案内を終え、午後は大通り沿いに限り自由行動とする」

そうしてジェラルド様がまず案内してくれたのは、大通りの端に

こじんまりと建てられた木造平屋の建物だった。ここ、何のお店だろう？
そう不思議に思いつつ店内に入ると、建物の中に商品は置いていなく、狭い店内にはカウンターとそこに一人の男性がいるだけだった。

「これはこれは、第三騎士団長様。またこちらにお越しだったのですね」
「ああ、そうなんだ。今回は王立学校の生徒の案内も兼ねてるんだよ」
「ええ、昨日到着したと聞いております。皆様ようこそお越しくださいました」

店員の男性はそう言って、穏やかに微笑んでくれた。

「さて、それじゃあここがどんな場所だかわかるか？　すぐ教えても面白くないからな」

ジェラルド様が悪戯を思いついたような顔でそう言って、俺たちに問いかけた。
うーん、そう言われても難しい。この建物の中は本当に何もないんだ。カウンターとその内側に座ってる男性。それからカウンターの上にペンとインクが置かれてるぐらいだ。
何か物を売ってるんじゃないとしたら、観光案内所的なところかな？　それか役所のような役割をしてるとか？
俺がそうして考えを巡らせていると、別の班の女の子が口を開いた。

「本屋でしょうか？　本屋ならば店頭に商品を並べず倉庫に保管す

るということも考えられます」
「確かにそうだな。だが本屋ではない」
「では、教会なのでは？」

そう言ったのは別の班の男の子だ。

「惜しい！　だが厳密には教会でもない。教会はもともとこの街にあったものを使っているから、大通りからは少し外れた場所にあるんだ。そこで教会の業務の中でかなりの頻度で必要になるものが、簡易宿泊所に近いここに設置されている。それがなんだかわかるか？」

教会の業務の一部分で、かなりの頻度で必要になるもの。教会の業務といえば屋台申請とか、従業員募集とか……

……あっ、わかったかも！！

「ジェラルド様、もしかして手紙の配送や受け取りの手続きですか？」
「正解だ、よく分かったな。ここは王都に住む家族や友人に手紙を出せる場所だ。また王都からの手紙もここで受け取ることができる。個別に頼むのも大変だからここで一括管理しているんだ」

確かにここに住んでる人は頻繁に手紙を出すよね。家族と離れて暮らしてる人も多いだろうし。

基本的にこの国は手紙を出したい時、その方向に行く商人などに個人で依頼して手紙を預けるか、もしくは教会に依頼するかの二択だ。
教会に依頼された手紙は、教会が商人を選別してしっかりと託し

てくれる。依頼料は高いけど万が一届かなかった場合は返金してくれるし、商人も教会の信頼が厚いと何かと便利だからしっかりと届けてくれるのだ。教会の信頼が厚いってことは国の信頼が厚いってことになるからね。

よってほとんどの人は教会を利用する。

「ここには食料などが定期的に届きますからね。その馬車に手紙も乗せるんです。騎士は特別に依頼料が一般的な値段の半額以下になっているので、頻繁に手紙を出す方も多いですよ」

そう説明してくれたのは、カウンターにいるお兄さんだ。確かに俺も家族を置いてここに一人で来てたら……、頻繁どころじゃなくて毎日手紙を書くかも。

「よしっ、じゃあわかったところで次に行くか。次は隣の建物だ」

そうしてお兄さんに見送られて建物から出て、すぐ隣の建物にまた入る。

今度はさっきの建物とは違い、物が乱雑に置かれた工房のようなところだ。奥からは大きな音がしている。ここって……鍛冶屋かな？

「ここは鍛冶屋だ。騎士の持つ剣は自分の命を守る大切な物だからな。毎日しっかり手入れをして、定期的にここに持ち込んでメンテナンスをすることになっている。修理もここでできる」

やっぱり鍛冶屋だった。確かに武器のメンテナンスは絶対に欠かしちゃいけないことだよね。武器の良し悪しは自分の命に直結するだろう。

「爺さん！　いるか！」

ジェラルド様はそう言って、奥に続くドアを無造作に開けた。勝手に入っていいの？

「なんだよ、いるじゃないか」

「わしは今仕事中なんじゃ。邪魔せんでくれるか？」

「今日は王立学校の生徒達が見学に来るって伝えただろう？」

「そんなものわしは知らん。見学したければ勝手に見るが良い」

「はいはい、わかったよ」

そんな会話をして、ジェラルド様は奥に続くドアを閉めた。

「皆ごめんな。爺さんはかなり頑固でいつもああなんだ。ただ腕は確かで信頼できる人なんだけどな……」

ジェラルド様はそう言って顔に苦笑を浮かべる。多分鍛冶屋ってことは平民だよね？　それでジェラルド様にあの態度が取れるのは……、凄い。というか命知らずだ。

もしかしたらこの街は常に死と隣り合わせだから、身分があまり重視されないのかもしれないな……

「ジェラルド様。先程の者は貴族なのですか？」

「いや、爺さんは平民だ」

「では、なぜあのような態度を許すのですか？」

プライドが高そうな中位貴族の男の子がそう言った。やっぱりそう思うよね。俺でさえ思うんだから、ずっと貴族社会で暮らしてきたのなら当然の疑問だろう。

「別に害はないからな。それに丁寧に話されるよりも砕けた態度の

方が、話も早く進むし便利だ」
「……そのような理由で許してしまうのですか？」
「ああ、この街では当たり前になっている」
「ですが、貴族に対してあのような態度は許されません」

男の子は全く納得していない様子だ。その様子を確かめたジェラルド様は、少しだけ悩むような仕草を見せた後に口を開く。

「例えばだが、お前とあの爺さんはどっちが偉い？」
「それはもちろん私に決まっています」
「そうだな。でもそれは平和な街ならばの話だ。この街では爺さんの方が必要な人材だ。役に立つからな」

ジェラルド様、結構凄いこと言ってませんか？　暗に貴族は役に立たないって言ってますよ……？

「なっ、そのようなことはありません！　貴族は平民を導くべき存在で、この世に必要不可欠で選ばれた存在です」

この男の子、敵対勢力の家の子供なんだな。敵対勢力の家でも遠征参加を許可された子がいるんだ……

ジェラルド様、もっと常識を崩してやってください！　そして少年、王都に帰ったら友達にここで知った事実を話すのだ。
俺は内心でそんな偉そうなことを考えながら、二人のやり取りを見守った。

「そう考えるのは勝手だが、ここでお前が役に立たず爺さんが役に立つのは事実だ。お前は何ができるんだ？　爺さんは騎士達の剣をしっかりメンテナンスしてくれている。お前は騎士として戦えるの

か？　鍛治ができるのか？　それとも飯が作れるのか？」
「私はっ……」
男の子はそこで言葉に詰まってしまったようで、悔しそうに唇を噛んで俯いた。その様子を見てジェラルド様は男の子から顔を逸らす。
ここで騎士達をまとめ上げて統率することができる、とか言えたのなら貴族として少しは有能な人材だったのかもしれないけど、そこまでは思いつかなかったみたいだ。
「では他に質問がある者はいるか？　爺さんがあの状態だから俺が答えよう」
「はい！　騎士の方が使う剣はオーダーメイドなのですか？　それとも支給品でしょうか？」
「ああ、それはどちらでもいいんだ。基本的には支給されるが……」
そうしてそれからは他の人の質問にジェラルド様が丁寧に答え、質問がなくなったところで鍛治屋を後にした。

それからは居酒屋や食堂、道具屋、服屋など様々な場所を案内された。どこも貴族に対するお店というよりは平民向けのお店に近い雰囲気で、気さくなところばかりだった。
騎士達はほとんどが貴族だけど、この街では本当に身分があまり関係ないらしい。魔物の森がすぐ側にあるという状況がこの街の雰囲気を作り出してるのだろう。どことなく一致団結しているような雰囲気がある。
前にリシャール様から敵対勢力の貴族で騎士になった者はすぐに辞めて貴族の私兵になることが多いって聞いたけど、この街を見れ

ばそれも納得だ。この雰囲気に馴染めなかったらすぐ嫌になるんだろう。敵対勢力の貴族達は貴族こそ至上って感じだし。

最後に案内された服屋を出て少し歩くと、屋台がたくさん並んでいる広場に辿り着いた。するとジェラルド様がグループの皆を近くに集めて口を開く。

「昼も過ぎたし案内はここで終わりにする。この後は自由時間だから好きに見て回ってくれ。二時間後またここに集合だからな。ここにある屋台で昼食を食べるのも良いし、大通りのお店を回るのも良いだろう。各自楽しんでくれ。じゃあ解散」

ジェラルド様のその言葉に、皆は仲の良い友達とこれからどこに行くか話し合いを始めた。

結構気になるところがいくつもあったんだよね。どこに行こうか悩む。でもお昼を過ぎてお腹も空いたし、やっぱり何かを食べられる場所かな。屋台からも美味しそうな匂いがしてるしお腹が空く。

さっき見て回った中でかなり気になるお店があったんだ。皆はあのお店に行くのを了承してくれるだろうか。そんな少しの期待と不安を胸に抱きながら、俺は皆の方を振り返った。

２４０、魔物肉

「皆様、お腹空きませんか？」

俺がそう聞くと皆は一斉に頷いた。子供の体は燃費が悪いからすぐにお腹空くんだよね。

「かなり空いたな。もう十三時を過ぎている」
「さっきから良い匂いがしてお腹が鳴りそうだったわ」
「では、自由時間で昼食を食べにいきませんか？」
「行きましょう！」

マルティーヌが満面の笑みでそう答えてくれる。

「行くとしたらあそこしかないよな？」
「ええ！　あそこよね」
「かなり気になりました。ただ好みが分かれるってところは少し心配ですが……」
「でも挑戦すべきよ。ここでしか食べられないのよ？」

ステファンとマルティーヌ、リュシアンがそう話している。皆もやっぱり興味あったのか！

あそことはそう、さっきジェラルド様が紹介してくれた魔物の肉が食べられるお店だ。
なんでも魔物の肉は基本的に硬くて筋張ってて美味しくないらしいんだけど、物資を無駄にしないためにも比較的美味しくて食べられるものは食堂で出しているらしいのだ。これは食べるしかないよ

ね！

「私も挑戦してみたいです」

「レオン、そうよね！」

「はい。ここでしか食べられないものですし、騎士達の間では癖になるとかで通っている方もいるみたいですし」

「じゃあそこに決めましょう。ロニーも良いかしら？」

「はい。僕も気になってました」

「じゃあ決定ね」

そうしてお昼ご飯は、魔物の肉料理を食べに行くことに決まった。凄く楽しみだ。

食堂の中に入ると、店内は四人掛けの机がいくつかとカウンターがあるだけの小さめのお店だった。

「いらっしゃい！」

中には騎士の方が数人いて、恰幅の良いおばさんが俺達を迎え入れてくれる。

「ああ、学生さんだね。五人でいいかい？　うん？　後ろの四人もかい？」

おばさんは軽い感じでそう話しかけてくれた。ここは本当に身分をあまり気にしない風潮のようで、平民である店員さん達も皆こんな感じだ。

魔物の森の最前線にいるなんて、かなり肝が座ってる人達なんだろうな。こういう人達がいないと成り立たないんだから、本当にあ

りがたいよね。

「後ろの四人は従者だ。できれば従者の席も確保してもらいたい。席は一緒でなくても構わない」

「わかったよ。じゃあ五人と四人だね。奥に個室が一つあってそこが六人だからそこを使っていいよ。それでそちらの四人はこっちのテーブルを使いな。メニューはおまかせしかないけど良いかい？」

「ああ、それで構わない。よろしく頼む」

「はいよ。すぐ作るから待ってな」

おばさんはそう言って個室へのドアを開けて、奥に入っていった。

俺たちは五人で個室に入り席に座る。従者の皆は二人ずつ交代で休憩を取ることにしたらしく、今は二人だけ個室の中に立って待機している。

「楽しみだわ。おすすめってどんな料理なのかしら？」

「どのような魔物の肉なのかも気になりますね。ジェラルド様の話ではウォーターボアの肉が多いとのことですが」

「確か不思議な食感なのよね。楽しみだわ」

ウォーターボアは比較的弱く、水魔法で視界を奪って突進して攻撃をしてくる魔物らしい。他の魔物の肉は筋が多くて噛みきれないことがほとんどなのに対し、ウォーターボアは噛み応えが一切ない不思議な肉だと聞いた。

それは逆に美味しくなさそうだけど、でも楽しみだ。

そうして皆で期待しつつ話していると、おばさんが料理を運んできてくれた。

「お待たせ。今日はウォーターボアの煮込みと串焼き。それからマ

ッドフロッグのステーキだよ！　今日は運良くマッドフロッグがあったんだ」

マッドフロッグってなんだろう。ジェラルド様は言ってなかったな。

「マッドフロッグって何ですか？」

「マッドフロッグはでかい蛙だよ。土魔法と水魔法の二つの魔法を使って泥で攻撃してくるらしくてね、結構強いからあんまり入ってこないんだよ！　だからお客さんラッキーだね」

おばさんはそう言って、からからと笑いながら部屋を出て行った。

待って、情報量が多い！

まず何よりも驚きなのは、魔物が二属性以上の魔法を使えることだ。人間は使徒様以外には例外なく、一属性しか使えないのに……

今度ジェラルド様に聞いてみよう。他にも複数属性を使ってくるやつがいるのかもしれないし。

それからもう一つの驚きは、蛙ってことだ。うん、皆も蛙って聞いて固まってるよ。

「ね、ねぇ、さっき蛙って言ったわよね？」

最初に口を開いたのはマルティーヌだ。確かに蛙って言ったよね。……ちょっと食べるの躊躇うな。

いや、見た目はかなり美味しそうなんだけど、蛙を食べるのに抵抗がある。この世界では蛙って食べないんだよね……

でも確か地球では蛙を食べる人もいたはずだ。鶏肉に似てるって話を聞いたことがある。

ここは、俺がまず食べてみるべきかな。

「私が最初に食べてみますね」

「……いいのか？」

「はい。見た目は美味しそうですし」

さっきステファンの従者の方が毒見は完了してるって言ってたから、あっちで休んでいる二人が既に食べたんだろう。全然休んでないじゃんって感じだけど、すでに二人が食べたという事実は心強い。

「……レオン、大丈夫？」

「もちろんです。美味しかったらマルティーヌ様も召し上がってくださいね」

俺は覚悟を決めて皆に安心させるように笑いかけ、蛙を小さく切って口に入れた。

……え、待って、めちゃくちゃ美味しいんだけど。

何これ。鶏肉ともまた違う。鶏肉より少しだけ歯応えがある。でもジューシーだ。なんて例えればいいんだろう。そうだな……ささみ肉の固さなのにもも肉のジューシーさがある感じ。

「これ、めちゃくちゃ美味しいです」

「本当？」

「はい。鶏肉より好きって方もいると思います。ささみ肉の固さにもも肉のジューシーさって感じですね」

「……じゃあ、私も食べてみるわ」

マルティーヌはそう言って、恐る恐るマッドフロッグの肉を口に入れた。そして数回咀嚼し驚きに目を見開く。

「本当だわ！　これ、凄く美味しい……」

「では私も食べてみよう」

そうして皆がマッドフロッグの肉を一口ずつ食べた。全員気に入ったみたいで次々と二口目に手が伸びている様子だ。

よしっ、じゃあ次はウォーターボアも食べてみようかな。皆はやっぱり躊躇してるみたいだし。

「ではウォーターボアの方も食べてみますね」

ウォーターボアの煮込みは、全く力を入れなくてもナイフが入っていくほど柔らかかった。しかしほろほろと崩れる感じではない。どちらかといえば、とろけていく感じだ。

そんなウォーターボアの肉をフォークで一口分取り、恐る恐る口に入れる。

……うん？　これ、なんだろう。今まで食べたことのない食感だな。

とりあえずわかるのは、肉じゃない。……前に似た食感のものを食べたことがある気がする。なんだっけ、うーん、そうだ、胡麻豆腐！

あれに凄く近い。あれをもう少ししっかりとさせた感じだ。すごく滑らかな口当たりで口の中でとろける。肉ではないけどこれはこれで美味しいかも。

「ウォーターボアは不思議な食感です。表現が難しいのですが、口

の中でとろける滑らさで……、食感は肉ではないですね。ただ、味は噛み応えのある肉と同じです」
「それは不思議だな、私も食べてみよう。……うん？　何だこれは、ナイフがいらないぐらいだ」

ステファンはそう言って、ウォーターボアの煮込みを一口食べる。そしてゆっくりと首を傾げた。

「これは……何だ？　よくわからない食べ物だな」
「お兄様、美味しいのですか？」
「……そうだな。美味いのか？　うん、確かに味は肉だから美味いな。だが、食感が違いすぎて違和感がある。マルティーヌも食べてみると良い」
「かしこまりました。――本当ですわね。私はあまり好きではないかもしれません」

二人はあんまり好きじゃないみたいだ。でもわかる、確かに俺ももう一度食べたいとは思わない。

「これは、美味しいですね！」

突然そう声を上げたのはロニーだ。

「ロニー、美味しい？」
「うん！　この滑らかな食感が凄く美味しいと思う！」

ロニーはキラキラした瞳でそう言って、ウォーターボアの煮込み肉を見つめている。ロニーって、意外とゲテモノ好きなのかも？

「ロニー、私の分も食べて良いわよ」

「私のもあげよう」
「本当ですか！？　ありがとうございます！」
ロニーはマルティーヌとステファンから煮込み肉をもらって嬉しそうだ。
「確かに、私も嫌いじゃないぞ」
「リュシアン様もですか？　では私の分も召し上がりますか？」
「いや、そこまではいらないな」
「かしこまりました」
リュシアンは食べられるけど二度目は頼まないって感じだな。その気持ちめちゃくちゃわかる。俺もそんな感じだ。
そうして皆で魔物肉の料理を楽しんで、昼食の時間は終わった。ウォーターボアのお肉は煮込みよりも焼き肉の方が、とろける食感が少なくて美味しかった。
総合的には大満足のお昼ご飯だ。
そしてお昼の後は、集合時間まで屋台を回ったり服屋を巡ったりして皆で過ごした。今日は楽しい一日だったな。

２４１、騎士の戦い

リオールの街を見学した次の日。
今日は実際に魔物の森で騎士が戦っている様子を見学する日だ。
俺達は今日魔物の森の様子をしっかりと見て、明日は訓練場で魔物を倒す練習をして、そして明後日には騎士付き添いの下で魔物の森の外縁部を探索するらしい。
かなり緊張するけど貴重な経験だから頑張らないと。そう気合を入れて朝の準備をした。

そして今は馬車で移動しているところだ。リオールの街が魔物の森への最前線とはいえ、実際の魔物の森は馬車で一時間ほどの場所にあるらしく、向かう時はいつも馬車みたい。
まあ、徒歩で行ける距離にあったらすぐに街が飲み込まれちゃうよね。でも馬車で一時間という距離も結構やばいそうだ。

「遂に魔物の森に行くんだね」
「私、緊張しているわ」

マルティーヌは少し強張った表情を浮かべている。

「俺も少し緊張してる。でもやっと行けるっていう高揚感もあるかな」
「そうだな。私も少し楽しみだ」
「リュシアンも？」
「ああ、騎士がどんな戦いをしているのか気になるからな」

確かに騎士の戦いは気になる。それによって今後どんな鍛錬をすればいいのかも変わってくるだろう。

「マルティーヌ、王族としての役割をしっかりと果たそう。今回は魔物の森の実情をこの目で見てくることだ」

ステファンが緊張している様子のマルティーヌに真剣な表情でそう言った。王族って重い肩書きだよね……。まだ二人とも子供なのに、既に背負っているのが本当に凄いと思う。

「お兄様……、そうですわね。王族としての務めをしっかりと果たします」

マルティーヌはしっかりと頷きながらそう答えたものの、まだ怖さが抜けないのか手が少し震えている様子だ。両手をぎゅっと握り締めて震えを抑えようとしている。

俺はマルティーヌのそんな様子を見て、何とか強張った気持ちを和らげてあげたいと思い、思わず身を乗り出してマルティーヌの手を優しく包み込んだ。

「マルティーヌ、もし何かあっても俺が守るから大丈夫だよ。……魔法だけは得意だからね？」

少し明るい口調でそう言って、マルティーヌの手をぎゅっと強めに握った。するとマルティーヌは少しだけ驚いたような表情をした後に、ふっと表情を緩める。

「レオンの手、温かいのね……」

そしてゆっくりとそう口にした。確かに俺の手は子供体温なのかいつも温かいけど、今マルティーヌがそう感じるのは、マルティーヌの手が氷のように冷たいからだろう。最初に触れた時は結構驚いた。

でもそれには触れないことにする。

「確かにそうかな？　ロニーは？」

俺はそう答えて自分の席に座り直し、隣に座っていたロニーの手を取った。

「ロニーの手、結構冷たいね？」

「僕も緊張してるんだよ……というか、レオンの手が温かすぎるんじゃない？」

「そうかな？　リュシアンは？」

俺がそう言うとリュシアンはすぐに手を差し出してくれる。

「うわっ、リュシアンの手めちゃくちゃ熱い！　これ熱あるんじゃない？　大丈夫？」

「ああ、私はいつも熱いんだ。だから大丈夫だぞ？」

「凄いね……人間カイロだよ」

「かいろって何だ？」

あっ、使い捨てカイロなんてこの世界にないか。またやっちゃった……

「あの、温かいやつ。懐とかに入れるやつ。なんて言うんだっけ？」

地球の歴史でも温めた石とかあったし、なにかしらあるだろう。

あんまり興味がなくて気にしてなかったけど、確かマルセルさんが使っていた気がする。
そう思ってリュシアンに聞くとすぐに答えをくれた。
「温石のことか？」
「そうそれ！」
そうだ、あの石を温めるやつ温石って言うんだった。聞いたことがある。
「かいろってどこから出てきたんだ……？」
リュシアンに少し呆れた表情でそう言われた。
「そこは気にしないで。何かと勘違いしてたみたい。リュシアンの手、温石の代わりになるぐらい熱いよ」
「そんなにか？」
「うん。俺はほとんど温石なんて使ったことないから正確じゃないと思うけど」
というか一回も使ったことないけど。
「私も最近は温風機があるから使ってないな。というよりも、私は体が暖かいから以前からほとんど使ったことがない」
「確かにそこまで手が熱かったらいらないね」
俺たちがそうして話していると、マルティーヌは少し緊張が和らいできたようだ。顔の強張りは取れて血色が良くなっている。手も震えてないみたいだ。

「レオン、私の手は温かいか？」
ステファンにもそうして手を差し出されたので、俺はステファンの手も握ってみる。
「うーん、結構冷たい方じゃないかな？」
「レオンの手は熱すぎないか？」
「俺の手なんて普通だよ。リュシアンの手を握ってみて。多分びっくりするから」
「――リュシアン、熱があるんじゃないか？」
「だから熱はないぞ！」
「そうか。……人の手を触ることはあまりないが、こんなにも違うものなのだな」
ステファンは感慨深そうに自分の手を眺めつつそう言った。そんなに感動するようなことじゃないんだけどね……
そうして皆でお互いの手を握り合うという不思議な時間を過ごしていると、馬車が止まった。
「皆馬車から降りてこい！　馬車から降りたらその場に待機だからな」
ジェラルド様の声が外から聞こえて来る。魔物の森に着いたみたいだ。
「え……なに、あれ。森、なの……？」
俺は馬車から降りて魔物の森を視界に収めると、思わずそんな言

葉を呟いてしまった。それほど衝撃的な光景が目の前には広がっていたのだ。
木の幹が真っ赤で葉は黒色の大きな植物。竹のように細長い幹を持ち、天辺には大きな黄色い球体をつけているもの。真っ青な葉を付けているもの。白い蔦のようなもの。俺の背丈以上はある紫色の大きな花。
それだけでも驚きなのに、動いてる植物まである気がするんだけど……あの花びらがバサバサ動いてる花、誰かが動かしてるわけじゃないよね？

「皆見えるか？　あれが魔物の森だ。驚いたか？」
「ジェラルド様、驚いたなどというものではありません……あれは何ですか！？」
「いつ見ても凄いよな。色も凄いし動く植物もあるし魔法も使うし。毒に気をつけないといけないものも多々ある」

植物が魔法も使うの！？　マジか……やばい、予想以上にやばいな魔物の森。

「ほら、騎士達の様子も見てみろ」

ジェラルド様がそう言って指差したのは、巨大な森の入り口で奮闘している騎士達だった。騎士達は植物を剣や魔法で攻撃して、根から引き抜いたり斧で切り倒したりしている。
……もしかして、あんなに地味な作業で広がりを抑えてるの！？

「ジェラルド様、一つ一つああして魔植物を処理しているのですか？　それで広がりを抑えているのですか？」
「そうだ。最初は火で全て焼いてしまおうとか、土魔法で地面ごと掘り起こしてしまおうとか、色々と考えたんだ。しかし結局はこれ

に落ち着いた」
「……何故ですか？」
「魔物の森の植物はまず火に強いんだ。水魔法を使える植物が多くてな、すぐに消火されてしまう。さらに土魔法も難しい。普通の植物は地面から抜いたら枯れてしまうが、魔物の森の植物はそのまま枯れずに生きていたり、また自分から土の中に戻ったりもする。一番良い倒し方は基本的に真っ二つにすることだ。そして倒したものをまとめて焼く」
「そうなのですね……」

魔物の森、はっきり言って予想以上だ。これはかなり厄介だろう。

そうして俺たちがジェラルド様の話を聞いていると、騎士達の方から大きな声が聞こえてきた。

「フラワーボムが破裂するぞ！　皆持ち場につけ！」
「はっ！」
「早くしろ！　一つ残らず抜き取れよ！」

魔物の森の外縁で戦っていた騎士達が突然俺たちの方に走ってきて、俺たちと魔物の森のちょうど中間あたりで止まる。そして綺麗に横一列に並んだと思ったら、また魔物の森の方を向いた。

「ジェラルド様、あれはなにをしているのですか？」
「ああ、お前達は運が良い。ちょうどフラワーボムが破裂するみたいだ。フラワーボムとは鉄よりも硬い実の中に数十の種を蓄えていて、だんだんと肥大化して破裂する魔植物だ。破裂すると種がそこかしこに飛び散り、地面についたと同時に発芽して成長する。このフラワーボムが魔物の森を広げる大きな原因の一つとなっているんだ。フラワーボムが生えている土地は数週間で完全に魔物の森に侵

略されるからな。よってフラワーボムが破裂する時はすぐに対処が必要だ」

そんな不思議生物までいるのか……。というか、植物で鉄よりも硬いとか何事？

「事前に破裂を防げないのですか？」

「以前色々試したが無理だった。事前に燃やしてしまおうとしても鉄が溶ける温度でも耐える。そのまま土に埋めたら地中で破裂してそこかしこからフラワーボムが生えてくる。石造の箱に閉じ込めたが、しばらくすると中でフラワーボムが育っていたようで破裂の影響で石造の箱が壊れる。結局は破裂した時に全ての芽を摘み取ってしまうのが一番なんだ。フラワーボムの芽は摘み取れば成長は止まり、その状態ならばすぐに燃えるからな」

凄すぎないかフラワーボム。意味不明な能力なんだけど。

「どのぐらいで破裂するまで育つのですか？」

「十日ほどだ」

十日！？　早すぎる！

「実が赤くなってきただろう？　あれが破裂の合図だ。もう少し色が濃くなれば破裂する。後一分ってところだな」

それから俺達は、フラワーボムが破裂するまで固唾を飲んで見守った。そしてついに、その時が来た。

２４２、フラワーボムと魔物

バッンッッッ！！

フラワーボムは、遠くから眺めている俺たちにとってもかなりうるさい爆音を響かせて破裂し、中の種が四方に飛び散った。

うわっ、種は結構デカくてかなりのスピードで飛び散っている。あれ、直撃したら危ないんじゃないか？

そう思って騎士達を心配していたら、騎士達がいるところまではぎりぎり種が届いていない。多分、最大飛距離をわかっていて後ろまで下がったのだろう。

魔物の森は予想以上に厄介だな。事前知識がなかったら思わぬところで危険に晒されそうだ。

「お前たち、一つも取り逃がすなよ！」

騎士達のまとめ役のような人がそう叫ぶと、騎士達は横一列でしゃがみながら前進していく。

……いや、これは凄く大切な仕事だということはわかってるんだよ？　失敗したらマジでやばい仕事だってことはわかってるんだよ？

でも、それにしても、絵面がシュール！！

騎士の格好をして帯剣した騎士達が、横一列にしゃがみ込んで草むしりしながら前進していくんだ。うん、凄い光景。

しかし安心して見ていられるのはそれまでだった。俺達の目から見てもわかるほどフラワーボムが育ってきているのだ。成長早すぎるよ……

「実ができ始めたらもう終わりだ。その前に全て摘み取るんだ！デカくなったものは茎を斬るのでも構わない。時間は……後十分！」

後十分ってことは、二十分ぐらいでもう実を作り始めるってこと？　本当に常識が通じないな。

「魔物の森とは、本当に常識が通じぬところなのだな」

「本当ですね。実際に見たならば誰でもその脅威を理解できると思いますわ」

ステファンとマルティーヌが騎士達の方を真剣に見つめながらそう言った。

「本当に、別世界という感じですね」

「ああ、この世の光景とは思えんな。魔物の森とは、何なのだろうな」

俺が思ったことをそのまま口にすると、ステファンが皆が疑問に思っていることを言葉にした。

本当に、魔物の森って何なんだろう。どうやって生まれたんだろう。この世界の動物も植物も基本的には魔力なんて持っていない。なのに魔物の森の植物や動物は全てが魔力を持っている。

突然変異とか？　でも、こんなに同じ場所で一斉に起こらないよね。じゃあ、宇宙から何かが降ってきたとか？　そもそもこの世界にも宇宙ってあるのかな？

……ダメだ。わからないことだらけだ。でも一つ確かなのは、この世界が本当に危険な状況ってことだ。

「ウォーターボアとロックモンキーが来たぞ！　気をつけろ！」

魔物の森の不思議について考え込んでいたら、騎士のまとめ役の人がそう叫んだ。そしてそのすぐ後に魔物が走ってくるのが見える。

あの魔物達、騎士達の方に一直線に向かってないか？　魔物って基本的には魔物の森から出ないんじゃなかったの？

「ジェラルド様、魔物は魔物の森から出ないのでは？」

「ああ、基本的にはそうだ。しかしフラワーボムが育っている間は別だ。フラワーボムが実を付けるまでの約二十分間、魔物が何かに惹かれるように寄ってくるんだ。魔物にだけがわかる匂いなどを発してるんじゃないかと言われている。何故そんな特性を持っているのかはわかっていない」

普通植物が良い匂いをさせるのは、受粉などのために虫を誘き寄せるためとかだよね。魔物がくることで受粉になるのかな？

うーん、でもそんな様子じゃなさそうだけど。

「ジェラルド様、フラワーボムって飛び散った全ての種がしっかりと成長して実を付けるのですか？　例えば魔物が近づかなかった種は育たないなどはありますか？」

「いや、そのようなことはない。全てが例外なくかなりのハイペースで成長する。そして二十分ほどで実をつけ始める」

改めて聞くと意味不明植物すぎる。だって受粉とかしてないってことだよね？

……これは、俺の常識で考えても意味がないな。何か俺にはわか

らない理由でもあるんだろう。

「レオン、ロックモンキーってやつ凄い数がいるよ……」

ロニーが一歩後ずさりながらそう言った。

「本当だね、凄い数……」

「ここまで来ないよね？　僕、魔法も使えないし剣術も苦手なんだけど……」

「大丈夫だと思うけど……」

断言できないほどたくさんのロックモンキーが集まってきている。あれ、百は超えてるよ。大丈夫なのかな？

ロックモンキーは、一匹一匹の大きさは人の膝ぐらいまでだけど、たくさんの数がいると圧倒されそうになる。

「大丈夫だ。あの程度なら騎士達が怪我ひとつせずに倒し切れる」

俺たちの会話にそう答えてくれたのはジェラルド様だ。ジェラルド様に言われると、ちょっと安心して見てられるな。

「連携が凄いですね……」

そう呟いたのはリュシアンだ。リュシアンは恐怖を感じているというよりも、騎士達の戦いに瞳を輝かせている。

でもちょっとわかる。騎士達は完全に息を合わせて、連携し魔物を圧倒している。これは憧れる。

「魔物の森への対処には連携も大切だからな、訓練で重視しているんだ。特にロックモンキーは個人で立ち向かったらすぐにやられて

しまう。ほら、ロックモンキーが何かを投げているのがわかるか？」
確かにさっきから何かを投げて攻撃してるんだけど、どこに投げるものを隠し持ってるんだろう？
「はい。確かに何かを投げていますけど……何を投げているのですか？　それに、どこに隠し持っているのでしょう？」
「あれは石だ、隠し持っているわけじゃない。ロックモンキーは土魔法で石を作ってそれを投げて攻撃してくるんだ」
……そっか、魔物は魔法が使えるんだったよ。やっぱり魔法って便利だけど敵になったら厄介だな。
「一匹ではそこまで強くはないが、必ず群れで行動し、全方向から石を投げて攻撃してこようとする。よってこちらも連携をとり、ロックモンキーを包囲しながら倒していくんだ」
「凄いですね……」
魔物って知能まで高いのかな。舐めてかかったら大変なことになりそう。

それから数十分。騎士達の戦いにひたすら見入っていると、フラワーボムに寄ってきた魔物は全て倒し終えたようだ。
しかし勝利を喜ぶのではなく、疲れたと倒れ込むのでもなく、騎士達は倒した魔物を荷台の上に乗せて何処かへ運んでいく。
「ジェラルド様、魔物はどうするのですか？」
「魔物も魔植物も、倒したものは基本的に焼却処分だ。すぐ近くに大きな穴が掘ってあり、そこで倒したものを燃やしている。放置し

ておくとそれに向かって魔物が寄ってきてしまうからな。焼却が一番なんだ」

そういえば前にリシャール様が言っていたな。

アイテムボックスの魔法具を魔物の森に対してだけ使いたいって言われたけど、あれがあれば本当に便利になるんだね……。実際に見て改めて実感できた。

「確かにそうですね。埋めるにしても大変ですし、燃やすのが一番ですね」

「ああ、火魔法を使いなんとか焼いている。ただ持ち運びが難しい魔物や森の中で倒した魔物などは放置も多いんだがな。それに燃やすのも大変だ」

アイテムボックスの魔法具はしばらく公開できないけど、魔物や魔植物の水分を除去する魔法具を作ったらどうだろう？

あれなら水魔法だし、魔力がかなり多くて運良く魔法を使える人が作成者だとか言って誤魔化せないかな？　水分がなくなるだけで焼く労力がかなり減らせるだろう。

……帰ったらリシャール様に相談してみようかな。

「よしっ、今日の見学はここまでだ。何か質問があるものはいるか？」

ジェラルド様が空気を変えるように明るい声でそう聞くと、皆が詰めていた息を吐き出したようで雰囲気が緩んだ。

「――質問はないか？　じゃあ帰るから馬車に乗ってくれ」

そうして俺達はリオールの街まで帰った。帰りの馬車の中は、皆

口数が少なく静かに過ぎていった。

２４３、魔物との模擬戦　前編

次の日の朝。
今日は実際に魔物と戦ってみる日だ。昨日は色々と衝撃すぎて頭が回ってなかったけど、今はやる気に満ち溢れている。知識をできる限り吸収して体も鍛えて魔法も鍛えて、魔物の森をなんとかしたい。そう思っている。

昨日は圧倒されてたけど、実際俺なら一人で森に入っても大丈夫だと思うんだよね。まずバリアで全身を覆って完全に防御した状態で森に入る。そして一匹の魔物には基本的には剣で、剣が通らない魔物には魔法で、それから群れで行動する魔物には広範囲魔法で。
そうして戦えば問題はない気がする。唯一魔力が切れた時がやばいんだけど、そこは残りの魔力を把握して気をつければ大丈夫だろう。

慢心は良くないけど、事実をしっかりと把握することも大切だよね。過度に怖がるのは良くない。今日魔物と戦ってみてどれだけやれるのか把握しよう。

そうして朝から気合を入れて、集合場所の広場まで向かった。

「レオンおはよう。なんだか楽しそうだけど、どうしたの？」
「マルティーヌ様おはようございます。魔物と戦うのが少し楽しみでして……。自分の実力を把握したいのです」
「レオンもか。俺も楽しみなんだ！」
「リュシアン様もですか？」
「ああ、昨日の戦いを見ていたら自分がどこまでやれるのか気にな

った」
「わかります」
そうしてリュシアンと意気投合していると、そこにステファンも加わってきた。
「二人とも、私も同じ気持ちだ」
「ですよね！」
「……男の人って何故こうなのかしら。ロニーはどう？　魔物と戦うのは楽しみ？」
マルティーヌにそう聞かれたロニーは、顔を真っ青にしてぶるぶる首を横に振っている。
「僕は、とても怖いです……」
「そうよね。私もよ」
「今日は全員魔物と戦うのでしょうか？」
「ええ、特別な事情がない限りは全員らしいわ。ただ一番弱い魔物から始めて、危なそうだったらすぐ中止になるそうよ」
「そうなのですね。ロニー、剣術の授業でやってるみたいに剣を振れば大丈夫だよ。相手をしっかりと見て目を逸らさないように」
「わ、わかった。頑張るよ」
一番弱い魔物が何かわからないけど、ロニーもちゃんと授業を受けてるんだからできるはずだ。
「マルティーヌ様も参加されるのですか？」
「ええ、参加するわ。ただ危なくないように配慮はしてくれるみたい」
「そうなのですね。お互い頑張りましょう」

「頑張るわ」

マルティーヌはそう言って笑顔を浮かべた。昨日みたいに強張った表情じゃないし大丈夫そうだ。昨日のがトラウマになってないみたいで良かった。やっぱりマルティーヌは強いよね。俺も見習わないと。

「皆集まってるか？　早速行くぞ」

そうして話をしていると、ジェラルド様が広場に俺達を呼びにきた。そしてまた対魔物訓練場に案内される。

「今日は一人ずつ魔物と戦ってもらう。俺が隣につくから万が一の時も安心してくれ。最初にロックモンキーと戦い、次に行けそうなものはツノウサギ、さらに次に行けるものはロックワームと戦ってもらう。無理そうなら途中で止めるから安心してくれ。順番は一班からだ。班の中での順番は好きに決めてくれ」

ジェラルド様はそう言って、俺たちに話し合う時間をくれた。

「どうしますか？　何番目が良いなど要望はあるでしょうか？」

「私は最初にやっても良いかしら？　後になるとどんどん緊張しそうだわ……」

マルティーヌはそう言って、少しだけ顔に苦笑を浮かべた。そしてそれに続いたのはロニーだ。

「僕もその次でも良いでしょうか？　皆さんの後はプレッシャーが凄くて……」

「分かった。では一番がマルティーヌ、二番がロニーだな。レオン

は最後として、リュシアンは三番と四番どっちが良い？」
「私はどっちでも良いです」
「では私が三番でリュシアンが四番としよう。異論はないか？」
そうしてどんどん話が進んでいき、あっという間に決まってしまった。
「ちょ、ちょっとお待ちください！」
「なんだ？」
「順番に問題はないのですが、何故私が最後なのかと疑問に思いまして……」
「そんなの決まっているだろう？　レオンの後など見劣りするからやりたくないだけだ」
……確かにそうなのか？　でも皆が見てるとこで全属性は使えないし、剣術だけで頑張るんだけどな。まあ、身体強化は使ってみようかなと思ってたけど。
「かしこまりました」
「では決まりだな」
そうしてマルティーヌがジェラルド様に連れられて訓練場の下に降りていき、俺たちは上で見学だ。
「マルティーヌ様は大丈夫でしょうか？」
「マルティーヌも少しは剣術をやっているから大丈夫だろう」
「確かに、剣術の授業の様子はカッコ良いですね……」
この国は基本的に女子も剣術をやることが多くて、王立学校の授業では男女合わせてやっているのだ。その時のマルティーヌの様子

は、何というかいつもと雰囲気が違って凛としていてかっこいい。

「始まるみたいだぞ」

リュシアンのその言葉に、俺は訓練場に目を向けた。マルティーヌは真剣な表情で渡された剣をしっかりと構えている。その視線の先にはロックモンキーが入れられた檻がある。

「では行きます！」

騎士の方がそう宣言して檻を開けた。

するとロックモンキーが甲高い奇声を上げながら檻から飛び出してくる。そして一番近くにいたマルティーヌを敵として定めたようで、マルティーヌの剣の間合いに入らないように、一定の距離を保って周りから様子を窺っている。

それからしばらくはお互いに仕掛けることなく緊張感のある時間が過ぎた。しかしマルティーヌが一歩後ろに下がったその瞬間、ロックモンキーが動く。

マルティーヌに向かって一直線に突進していき、剣の間合いに入るというその時、上にジャンプして上から石を投げつけた。

ロックモンキーってあんなに飛べるの！？　というか危ない！

俺は心臓がドキッとして冷や汗が滲んでくるのを感じた。

しかしマルティーヌはロックモンキーの様子を冷静に見ていたようで、一歩横にずれて石を避けると、ロックモンキーが地面に着地する前に剣を振り下ろし、ロックモンキーの肩から胴体までを斬りつけた。

……マルティーヌの勝利だ。

はぁ～、俺は心の底から安堵して、大きく息を吐き出した。思わず息を止めていたらしい。やばい、これ心臓に悪い。

それからしばらくするとマルティーヌが上に戻ってくる。そして俺のところにやってきて、さっきまでの凛とした様子とは対照的な柔らかい笑顔を浮かべた。

「レオンどうだったかしら？　変じゃなかった？」

……ギャップ、やばいな。

「あの、すっごく綺麗でした。なんていうか、凛とした雰囲気というか」

俺が思わず本音でそう言うと、マルティーヌは凄く嬉しそうに、でも少し恥ずかしそうにはにかんだ。

「ありがとう。そう言ってもらえて良かったわ。……お兄様、私はどうでしたか？」

やばいな……やばい。俺は自分の頬が熱くなっているのを感じた。可愛くて普段はふんわりとした雰囲気なのに、たまに浮かべる真剣な表情は凛として美しいとか、反則だ！

はぁ～、落ち着け俺の心臓。俺は自分に言い聞かせながらしばらくの間深呼吸を繰り返した。

「レオン大丈夫か？　ロニーの試合が始まるぞ？」

リュシアンにそう言われて、やっとロニーが訓練場にいることに気づいた。

「……大丈夫、ありがと」

リュシアンに小声でそう答えて、ロニーの試合に集中する。ロニーは遠目で見てもかなり緊張している様子だ。なんとか剣を持って構えてはいるけれど、手は震えている。

「では行くぞ」

その合図とともにロックモンキーが檻から出された。しかし今度のロックモンキーはマルティーヌが戦ったやつとは違い、勢いよく飛び出してこない。周りの様子を注意深く観察し、恐る恐る檻から出てきているみたいだ。

かなり用心深いやつなんだな。

ロニーはそんなロックモンキーの様子を見て自分から仕掛けることを決めたらしく、ロックモンキーに向かってジリジリと近づいていく。

しかしその動きを気づかれたようで、ロックモンキーもロニーに近づき始めた。そして剣の間合いまで後数歩というところで、ロックモンキーが魔法を使い石を投げつけた。

予備動作もあるし正面からだったのでかろうじて避けられたみたいだけど、ロニーは完全に萎縮してしまっている。確かに自分に当たったらって考えたら怖いよね。

それからも、お互いにほとんど動かず膠着したまま時間が過ぎていった。先に焦れたのはロニーだ。ロニーは意を決したようにロックモンキーに向かって剣を構えたまま走っていき、大きく振り上げた剣を思いっきり振り下ろした。しかし動作が大きすぎてロックモンキーに容易に避けられる。さらに地面に剣がめり込んでしまい抜けなくなったようだ。

「あ、あれ？　どうしよう？」

そうこうしているうちにロックモンキーは石を作り出し、上に飛んでロニーの顔目掛けて思いっきり振りかぶった。

ロニーは何もできずにその様子を見つめているだけだ。そして石が投げられる、そう思った時にジェラルド様が割って入りロックモンキーを倒した。

「ロニーは実戦に慣れてなさすぎるな。模擬戦などを増やしたら良いだろう」

「……は、はい」

ジェラルド様のアドバイスにロニーは呆然としたままそう答え、トボトボと上に戻ってきた。

「僕、全然ダメだったよ……。剣術の授業でやる模擬戦もいつも負けてたからダメなんだろうなとは思ってたけど、予想以上で落ち込む……」

ロニーは不甲斐ない結果にかなり落ち込んでる様子だ。

「ロニーは他に得意なことがあるんだからいいんだよ。誰でも苦手なものはあるでしょ？　それが剣術だってだけ」

「そうだけど……僕だって男だから強くなりたいのに」

ロニーは少しだけ口を尖らせてそう言った。それは……難しい気がするな。ロニーは典型的な運動音痴って感じなのだ。剣術の授業の様子を見ている限り、別のことに時間を割いたほうが良い気がする。

「武力じゃなくて、知力の強さを磨けば良いよ。知力ではロニーを上回る人なんてあんまりいないよ？」

「……そうかな？」

「そうそう。でも最低限の自衛ができるように、これからも剣術は続けたほうが良いと思うけどね。健康にも良いし！」

俺がそう言うと、ロニーは少しだけ笑顔を浮かべた。

「また出たよ、レオンの健康にいいから」

「だって健康は大事なんだよ？」

「分かった分かった。これからもやるよ」

日本ではかなり健康的な生活について言われていたけれど、この世界では誰も気にしないから思わず言ってしまうのだ。わざわざ意識しなくても、否が応でも健康的な生活になるからなんだろうけどね。

でもロニーは座ってやる仕事が多くなるだろうし、健康のための運動は大切だよね。病気は俺が治せるけどこの世の全ての病気を治せるかなんてわからないし、健康に越したことはない。

「では、次行ってくる」

そうしてロニーと話していたら、ステファンがそう言って下に降

りていった。

２４４、魔物との模擬戦　後編

それからステファンとリュシアンは、特に危なげなくロックモンキー、ツノウサギと剣で倒し、ロックワームには魔法も使いながら戦い勝利を収めていた。
やっぱりこの二人って凄いね。頭も良くて剣の腕も凄くて、それでいて身分も申し分ない。外見も完璧だ。
何この二人、二人こそ主人公だよ。

「ロックワームは少しだけ苦戦しました。まだまだ鍛錬が必要ですね」
「実際に魔物と戦い自分に足りないものが分かったからな。これからは少し鍛練のメニューを変えよう」
「そうですね。私も帰ったら護衛の兵士と相談することにします」

二人はそんな会話をしている。まだ強くなるつもりなのか……まあ、強くて悪いことはないだろうけど。これからの世界には一番重要な能力かもしれないし。
それにしても、まだ十歳や十一歳で新人騎士が苦戦してた魔物に勝っちゃうんだもんな。俺よりも全然凄い気がする。俺のはよくわからないチート能力のおかげだから。

「次はレオンだな。どんな戦いになるのか楽しみにしているぞ」
「はい。頑張って参ります！」

俺はそう答え、気合を入れて訓練場に入った。訓練場に降りていくとジェラルド様が声をかけてくれる。

「次はレオンだな。レオンの戦いは初めて見るが楽しみだ。ここから剣を選んで準備ができたら言ってくれ」
「かしこまりました」

十本ほどある剣の中から一番しっくりくるものを選び、俺は訓練場の真ん中まで歩いていった。訓練場は実際に降りてみると結構広い。

「準備完了です」
「わかった。ではまずロックモンキーからだ」
「では行くぞ！」

騎士の方がそう言って檻を開けてくれる。すると中からロックモンキーが飛び出してきた。
この戦いでは回復魔法と身体強化しか使えないので、俺は他の人に不自然に思われない程度の強化を全身にかけ、ロックモンキーに向かって駆け出した。
さっきまでの試合を見ていると、ロックモンキーは石を作り出すまでに数秒かかるみたいだったのだ。だからその前に倒す作戦でいく。

俺はロックモンキーが飛び出したと同時に地面を蹴って走り出し、間合いに入るとそのまま剣を右下から左上に振り上げてロックモンキーに切り掛った。
避けられたら後ろに飛んで距離が取れるように準備していたけど、そのままロックモンキーは絶命した。

……なんだ、呆気なかったな。

「レオン、お前剣術までそんなにできるのか！　回復魔法もあんな

に使えるのに……。騎士にならないか？」

ジェラルド様は興奮した様子で俺のところに駆けてきて、肩を掴んでそう言った。

「そ、そんなにですか？」

「ああ、さっきの二人も凄かったがお前はそれ以上だな！　どんな鍛錬をしたんだ？」

……もしかして、身体強化をかけすぎたかも。でも今更弱くしても仕方ないし……、まあいいか。魔法も実力のうちだ。実際頑張って鍛錬したから身体強化が有効になったわけだし。

「お二人と同じような鍛錬です」

「ならばお前は才能があるんだ。こんなにも才能溢れる者がたくさんいるとは、この国の未来に希望が見えてきた！　さあ、次にいこう。……だが、レオンはツノウサギと戦っても意味ないな。飛ばすか？」

確かにツノウサギは倒したことあるし、いいかな？　あれは倒すって言えないぐらい一方的だったけど……

でも戦ったとして、突進してきたツノウサギを一刀両断すれば終わってしまうだろう。それならいいかな。

「ではロックワームをお願いします」

「分かった。おい、次はロックワームにしてくれ！」

「はっ！」

そうして俺はロックワームと戦うことになった。ロックワームは何かを投げたりする魔法は使わないからか、檻の間隔がかなり広い

ので開く前から中が見える。
うん、やっぱり気持ち悪い。こうして対峙するとより思う。芋虫と深海魚を足して二で割って、さらにサイズを巨大化させた感じだ。

「では行くぞ！」

騎士の方がそう言って檻を開くのと同時に、ロックワームは以前も聞いた気持ち悪い叫び声を上げながら俺の方に向かってきた。
芋虫だから動きが遅いと思うかもしれないけど、人が走るぐらいのスピードでは動いている。予想以上に早いな……

多分近づいて側面から切りつければ直ぐに倒せるけど、それだと面白くないよね。そう思って俺は少し様子を見てみることにした。
ロックワームが一直線に向かってくるので横方向に走って避けてみる。するとロックワームは器用に方向転換して追ってくる。ロックワームの進行方向とは逆向きに逃げてみても、器用に小回りして追いかけてくる。

うん、結構小回りも効くし自由に動き回れるみたい。それが分かったところで、今度はロックワームに正面から対峙し、牙の生えた丸くて気持ち悪い口で襲われる直前に、横に避けて胴体部分を浅く傷つけた。

何故殺さなかったのかは、ロックワームの魔法を体験してみたかったからだ。ロックワームは胴体を傷つけられた痛みでその場に止まり、悲痛な叫び声を上げている。

「グモォォ！」

そしてすぐにそう叫び魔法を使ったようだ。俺の足元に土で山が

作られ、それが段々と固くなっていく。
時間にして十秒ぐらいかな？　それぐらいで土の硬化が終わった。でもこれ、石ってほど固くなってない。足に身体強化をかければボロボロ崩れて抜けられそうだし、剣で上手く壊しても抜けられそうだ。

それでもほとんどの獲物に効果がある魔法なんだろう。足元が固まったら焦るし。
ロックワームは俺が魔法にかかったことが嬉しいのか、さっきよりも嬉しそうな叫び声を上げて全速力で俺の方に突進してくる。口を大きく開けて俺を食べる気満々だ。

……本当に気持ち悪い。

検証はここまでかな。俺はそう考えて足にビルドアップをかけて魔法から抜け出し、獲物を捕らえて安心しきっているロックワームを剣で斬りつけた。今度は倒す意思を込めて首であろう場所を深々と。
それによってロックワームはすぐに絶命した。

うーん、魔物が弱すぎてあんまり参考にならない。とりあえずこの程度なら、全属性を明かさなくても楽勝だな。

「レオン、お前遊んでなかったか？」
「いえ、少し検証をしただけです」
「検証って……。まあ、レオンだからな。俺はお前は只者じゃないと思ってたんだ！」

ジェラルド様はそう言って俺の背中をバシッと叩いた。ジェラルド様、痛いです！

「これからに期待してるからな」
「は、はい。ありがとうございます」

そうして魔物との戦いを終えて階段を登っていると、身体中の力が抜けていくのを感じた。余裕だったけれど結構緊張してたみたいだ。自分でも気づかなかった。
ふぅ～、俺は大きく息を吐き出して気持ちを落ち着かせ、それから皆の場所に戻った。

すると皆からじーっと見つめられる。え、何？

「えっと、なんでしょうか？」
「レオン、やりすぎだ」
「え、何もやってませんよ？」
「身体強化を使っていただろう！？　あれは剣術に長けた者ならすぐに気づくぞ！　ジェラルド様も気づいてるだろうな」

リュシアンが小声で怒鳴るという器用なことをして、俺にそう教えてくれた。

「え、本当？　だってかなり弱くしかかけてないよ？」
「たまに一瞬だけ強くかけていただろう？　走り出す時とか！　常人にはあり得ないようなスピードだったぞ」
「本当……？」
「本当だ」

マジか、完全に無意識なんだけど。確かにリュシアンと模擬戦をする時とか公爵家で鍛錬する時とか、もう無意識と言えるほど自然

に身体強化を使っている。
……うわぁ、やっちゃったかな。

「リュシアン、どうすればいい？」
「帰ったらすぐお祖父様に報告だ。他の者は気づいてないだろうし、ジェラルド様ならば大丈夫だとは思うが……」
「ごめん……」
「やってしまったものは仕方がない。これからの対応が大事だ。まずは帰ったらすぐに報告だからな！」
「はい！　ちゃんと報告するよ」

そうして俺がちょっとやらかしたけれどそれ以外は特に問題もなく、俺たちは魔物との戦いを終えた。これで明日は魔物の森だな。今日が余裕だったからと気を緩めずに行こう。

それから他の班の皆も一通り魔物と戦い、今日の予定が終わった。

「これで全員戦ったな。皆よくやっていたぞ。これからも鍛錬に励んでくれ。では、何か魔物についてなど質問がある者はいるか？」

俺はやらかしたという事実に落ち込んでいたけど、ジェラルド様のその言葉で思い出した。一つ聞きたいことがあったのだ。

「ジェラルド様、一つ良いでしょうか？」
「レオンか、なんだ？」
「魔物は二属性以上の魔法を使えることがあるのですか？　マッドフロッグのことを聞きまして……」
「ああ、確かにその話をしていなかったな。魔物は複数の属性を持つことは多々ある。ただ知られている魔物の中で四つ以上の属性を

使えたやつはいなかった。よって、今のところは三つまでだな」
「そうなのですね……」
やっぱり魔物は複数属性が使えるのか。本当に、この世界の理に反してるよね。まあ、それは俺もなんだけど。
というか魔物と俺って何か関係があるのだろうか？　複数属性って共通点あるけど……
魔物と共通点あるなんて、なんか嫌だな。
「他に質問がある者はいるか？　――いないならば今日は解散とする。明日は魔物の森に入るからしっかりと寝ておくように」
そうして解散になり、俺たちは明日に備えて早めに眠りについた。

２４５、魔物の森の内部へ

今日はついに魔物の森に入る日だ。入ると言っても一つの班に同じ人数の騎士がつき、いつも騎士たちが入っている外縁部まで。それでもかなり緊張している。いや、緊張もあるけど高揚感もあるな。

「皆は緊張してる？　大丈夫？」

今は馬車で魔物の森に移動しているところで、俺は皆にそう問いかけた。皆は一昨日よりもリラックスしている様子だけど、やっぱり落ち着かない雰囲気もある。

「私は大丈夫よ。一昨日に魔物の森を見て昨日実際に戦って、未知のものではなくなったもの」

マルティーヌはそう言って元気に笑った。完全にいつも通りのマルティーヌになっている。本当に良かった。

「やっぱり未知のものって怖いよね」

「ええ、それに昨日のレオンを見ていたら大丈夫だと思ったのよ」

「……そうなの？」

「だって、何があってもレオンが守ってくれるでしょう？　レオン凄く強かったもの」

マルティーヌは完全に信頼してる様子でそう言った。

うぅ……これ計算でやってる？　それとも素でやってる？　どっちにしても小悪魔だ！

「う、うん。それはもちろん」
「ふふっ。ありがとう」
そして今度は綺麗な笑顔を浮かべた。もう、いちいち心臓に悪い！
俺は落ち着かない気分になり、マルティーヌから視線を逸らしてステファンに話しかけた。
「ス、ステファンはどう？　緊張してる？」
するとステファンは、一瞬だけ微笑ましげな表情を浮かべた後に、いつも通りを装い答えてくれた。何か、皆に色々とバレてる気がするな……
「私は楽しみだ。やはり一度直近で見てみたい。新しいことを知ることができるという高揚感もある」
「やっぱりそうだよね。危険があることはわかってるけど、それでも知りたいよね」
新しいことを知る高揚感って凄く良くわかる。危険な冒険に出る人の気持ちっていうのかな。未知の大陸を冒険した人はこんな気持ちだったのかもしれないって思う。
異世界に来て初めて、歴史上の冒険家たちの気持ちが分かった気がする。
「わくわくする気持ちがあるのは確かだな。それから、自分の力がどれほど通じるのかも確かめたいぞ」
「僕は怖いけど未知のものを知るのは好きだから、確かに楽しみな気持ちもあるかも」

リュシアンとロニーもそう言って、俺達の意見に賛同した。全員緊張よりも、楽しみという気持ちが勝ってるみたいだ。緊張しすぎていると動きも鈍くなるし、ちょうど良い雰囲気だろう。

そうして比較的明るい雰囲気で馬車は進み、しばらくして魔物の森に着いた。

馬車から降りると班ごとに集められ、同行してくれる騎士と合流する。俺たちの班には六人の騎士の他にジェラルド様も付いてくれるらしい。

「皆、今日は魔物の森に入る。外縁部とはいえ危険だ。絶対に俺の言うことを聞いてくれ」

「分かっています。よろしくお願いします」

「よしっ、全員気合十分だな。では行くぞ」

そうしてジェラルド様を先頭に、俺たちの前後左右を騎士の方達に囲まれる形で魔物の森に向かった。既に魔物の森までは歩いて数分ってところまで近づいている。

「ジェラルド様、このように横に広がって通れるほどの道があるのですか？」

「ああ、本当に外縁部のみだがしっかりと道を作ってある。毎時間騎士がその道を見回って魔植物を倒しているから、道がなくなっていることはないだろう」

毎時間って、そんなに見回らないと道が無くなっちゃうのか。やっぱりやばいな魔植物。

「私はフラワーボム以外の魔植物をほとんど知らないのですが、他

にも成長が早いものがあるのですか？」
「ああ、沢山あるな。ただ成長が早いものだけではなく、場所を移動できるやつもいる」

確かに、遠くから眺めただけで動いてるやついたよね。本当にあり得ない。でもこの森では普通なんだよね……

「確かに花びらが動いているものなどがいましたね」
「ああ、あの巨大な赤い花か？　あれはストームバタフライだ。風魔法で花びらを動かして、鳥のように飛びながら移動するんだ。飛べるのはかなり低空を少しの距離だけだがな」
「飛びながらって……根はどうなるのですか？」
「飛ぶ時は花だけで飛ぶ。そして地面に着地したらまた花から根が生えて茎が伸びるんだ」
「そうなのですね……」

うん、理解不能。

「ストームバタフライは怖いものですか？」
「いや、あれは風魔法で砂を巻き上げる程度のことしかできない。しかし魔物との戦いの最中にやられると視界が遮られてかなり厄介になる。よって見つけたら早めに倒した方が良い」
「魔植物ってどうしたら倒したことになるのですか？」
「基本的には茎を斬ってしまえば大丈夫だが、ストームバタフライは花の根元を斬らない限り動き続ける。他にもそういう魔植物はいくつかいるな」

そうなのか。というか、魔植物って生物なの？　その辺がよく分からない……
大きな意味では植物も生物なんだろうけど、生きているとか死ん

でしまったとか、そういう表現を使うものなのか悩むところだ。
普通なら植物は枯れた、抜いた、そんなふうに表現するよね。でも魔植物の場合は自分で動いたりするから……というか、そもそもあれって植物なの？　自分で動くから動物？　あっ、バタフライだし虫？

ダメだ、全く分からない。

「ジェラルド様、魔植物って動物、植物、虫、どれなのでしょうか？」
「ああ、その議論は何度かなされたことがある。結局は地面に根を張るものは植物ということになった。よって先程のストームバタフライも、地面に根を張ることから植物だな。ただまあ、魔植物という分類だと思っていた方が良い。普通の植物とは明らかに違うからな」

確かにそうだよね。既存の枠にハマらないものってことだな。

そうして話しながら進んでいると、魔物の森への入り口に辿り着いた。ちゃんと道が確保されているので、見た目では歩きやすそうだ。
でも両脇に聳え立つ魔植物たちが不気味で……なんか、魔物の森という大きな一つの生命体の開いている口に入っていくような、そんな薄寒い感覚になる。

「では入るぞ。いくつか特に気をつけるべき魔植物を説明しながら行くことになる。驚いても大声を出したり突然走り出したりしないように」
「はい」

最後にそんな怖い忠告をされて、俺たちは魔物の森に足を踏み入れた。中に入ってまず思ったのは、やけに騒がしい森だということだ。

普通の森なら音を発するのは動物だけだけど、この森では植物もたくさんの音を発しているからかなり騒がしい。これって、魔物が近づいてきても気付くのは難しいだろうな……

「魔物の森に入って何か気づいたことはあるか？」

「はい。かなり騒がしい森ですね。魔物の接近に気付けない気がします」

「レオン正解だ。それがこの森の厄介なところの一つなんだ。慣れてくると魔植物が発する音と魔物が発する音の違いを聞き分けられるようになるが、相当この森になれるまでは難しい。よって初心者がこの森に入ることは自殺行為だ。騎士たちも熟練の者が初心者を連れてこの道を歩き、何度も何度も音の違いを聴かせて慣れさせているんだ」

本当に、常識は一切通じない森なんだな。いくら腕自慢でもこの森のことを知らずに安易に足を踏み入れたら、多分すぐに森の養分となるのだろう……

俺はそんな想像をしてしまい、思わずブルっと体が震えた。

「皆、次はこれを見てくれ」

ジェラルド様がそう言って指差したのは、魔物の森の中に一番多く生えている木だった。木の幹は一切ごつごつしていなくて、見た目ではつるりとした金属のように見える。幹の色はグレーのような感じで葉の色は青だ。

「これは、触っても大丈夫なのですか？」

そう聞いたのはマルティーヌだ。

「ああ、この木は特に害はない」

「そうなのですね。……これは気持ちいいですわ」

「そうなのか？　……ふむ、確かに滑らかな質感だ。高級な木製家具のようだな」

俺も近くにあった木の幹に恐る恐る触れてみた。うん、確かにかなり滑らかだ。職人が丁寧にヤスリをかけた高級家具みたい。これ、テーブルにしたい。

「この木は家具に加工できないのですか？」

「ああ、この木の幹はほぼ水で作られているんだ」

「水……ですか？」

「そうだ。中は空洞になっていてその中は水で満たされている。この木の厄介なところはこの水なんだ。少し下がっていてくれ」

ジェラルド様にそう言われて騎士と俺たちが後ろに下がると、ジェラルド様は火魔法で木の下にある枯れ葉に火をつけた。ジェラルド様って火属性だったんだな。

それにしてもかなりの勢いで燃えてるけど、大丈夫なの？　このまま行くと山火事になりそうなんだけど……

そう俺が心配したその時、突然燃えているあたりにだけ局地的に滝のような大雨が降ってきた。時間にして五秒ほど。雨が止んだ時には火は完全に消えていた。

……えっと、今の何？

「驚いただろう？　今のがこの木の能力だ。この木の近くに火があると、木の幹に溜め込んでいる水を葉から放出して消火する。よってこの木はウォーターウッドと呼ばれているんだ。このウォーターウッドが魔物の森に沢山あることから、魔物の森を燃やすことはほぼ不可能になっている」

マジか。本当に不思議な植物ばっかりだ。

「では少し奥に行くぞ」

２４６、非常識な森

それからまた数分、ジェラルド様に付いて慎重に魔物の森を進んでいくと、ジェラルド様が片手を少し上げて俺たちに止まるよう促した。

「皆、あそこにある白い小さな花がわかるか？」
「ウォーターウッドに巻き付いてるツタの花ですか？」
「そうだ。あれはかなり危険なものなんだ。今から実演するので見ていてくれ」
「かしこまりました」

ジェラルド様はそう言うと、その花に向かって地面に落ちていた小さな石を投げつけた。

……ガキンッ！！

え、何この音。あの花にぶつかったんだよね！？

「音が聞こえたか？」
「は、はい。なんの音でしょうか？　あの花は、金属でできているのですか……？」
「よくわかっていないが、近づくと硬化する花だ。身体強化属性ではないかと言われている。花びらの縁はかなり鋭利になり触れたら確実に指が切れる。絶対安易に近づくな。気づかないうちに体のどこかがぶつかっただけで大怪我になるぞ」

怖っ……この道がなくて草木を掻き分けながら魔物の森に入るの

って、死にに行くようなものだな。
俺は今のところバリアを使えばなんとかなるだろうけど、魔物の森の中で魔力が切れたら本当にやばい。マジで気をつけよう……
「ジェラルド様、あの花の名前はなんというのですか？」
そう聞いたのはリュシアンだ。
「アイアンフラワーだ」
「どれもそのままの名前なのですね」
「わかりやすいのが一番だからな。名前からどんな特性を持つか連想できるようなものにしている」
確かに名前を覚えれば特徴もわかるのはありがたい。
「ジェラルド様、アイアンフラワーの茎部分というのでしょうか？そこも硬化するのですか？」
「ああ、ツタのことか？　そこは硬化しないはずだ。よってアイアンフラワーを倒す時はツタを狙うと良い。ツタを斬って根から切り離された部分は、硬化した花も含めて三十分ほどでボロボロに朽ちてしまうからな」
そうなのか。それなら注意深く進めばこの花はなんとか防げそうだ。でもあまりにも普通の見た目の白い花で、見落とす可能性が高い気がする。この個性的な森の中では全く目立たないんだよね……
「こうして見つけた場合はできる限り駆除することになっている。よしっ、誰かやってみるか？」
「私がやってみても良いでしょうか？」

そう言ったのはステファンだ。

「もちろんだ。では周りに気をつけてここまで来てくれ。アイアンフラワーを倒す時は剣を使う。剣が届く範囲内で一番遠いところから攻撃するんだ」

「なぜ離れたところからなのですか？」

「アイアンフラワーは木に巻きついているからな。ほとんどあり得ないことだが、斬ったことによって上から硬化した花が落ちてきたら困る。それによる怪我を防ぐためにも離れてくれ」

「かしこまりました」

「よしっ、ではやってみろ」

ステファンは剣の間合いギリギリまでアイアンフラワーから離れ、剣を小さく横に一閃。アイアンフラワーの茎を斬った。

「……これで良いのでしょうか？　根と繋がっている部分はそのままですが……」

「ああ、これで良い。本当ならば根の部分まで辿ってそこから斬ってしまった方が良いのだが、魔物の森でそんなことをしていたら命に関わるからな。目に見える部分だけを対処すれば良い」

確かにこの森でそんなことをしてたら、何かしらの魔植物にやられるか魔物が来てやられるかになるな。

それからも道をゆっくりと進みながら、その両側にある魔植物についての説明を受けて俺たちは先に進んだ。途中でいくつかの分かれ道をジェラルド様の指示に従って進んでいると、いつの間にか魔物の森の外に向かっていたようだ。道の終わりが見える。

「今回は魔物に遭遇しなかったな。一度ぐらいは遭遇したかったのだが……」
「普通この程度の時間では魔物と遭遇しないのですか？」
「いや、今回魔物の森に入っていたのは三十分ほどだが、普段なら魔物と二、三匹は遭遇するはずだ。多い時はもっとになる。こんなことはかなり珍しいな……」

ジェラルド様はそう言って、難しそうな顔で考え込んでしまった。そうこう話しているうちに、俺たちは魔物の森の外に出る。

「まあ、魔物は昨日も戦ったし良いだろう。今日見たこの森の環境で、魔物がいつ襲ってくるかわからないと考えてくれ。では馬車があるところまで下がって他の班を待とう」
「かしこまりました」

そうして俺たちは少しだけ体の力を抜いて、魔物の森から離れる。

「魔物の森から出ると自分がかなり緊張していたことがわかりますね……」
「そうだな。必要以上に力が入っていたらしい。全身が痛くなりそうだ」

ステファンはそう言って顔に苦笑を浮かべた。

「魔物の森は、予想以上に厳しいところね……」
「そうですね。あの森で普段から活動している騎士の方々には感謝してもしきれません」
「本当ね。とてもありがたいわ」
「騎士達に今の言葉を伝えておく。多分泣いて喜ぶぞ」

ジェラルド様がそう言うと、俺たちに付いてくれていた六人の騎士達が大きく頷いた。涙ぐんでる人までいるみたいだ。
でもそうだよね。こんなに必死になって頑張ってるのに、かなりの数の貴族から魔物の森は大したことないとか思われてたらそれは悔しい。

魔物の森の脅威を排除するにはどうしたらいいんだろうか。こっそり試してみた限りだと魔植物も倒せばアイテムボックスに入るから、端から斬り倒してアイテムボックスに収納していくのが一番かな。
俺がバリアで完全に防御を固めて、端から剣やロックトルネードなどで魔植物を倒して、それをアイテムボックスに収納していく。今のところその解決策しか思いつかない……

でも俺一人でできることには限りがあるんだ。うーん、もっと効率良い方法ないかな……

「レオン、魔物の森を実際に見た感じ、レオンの力ならどうにかなりそうなの？」

ロニーに周りに聞こえないほどの小声でそう聞かれた。

「うーん、魔物の森の問題を俺一人でっていうのは難しいかも。魔力にも限りがあるし、やっぱり数の力って強いから」
「そうなんだ……。じゃあ、魔法具を大量に作ったらいける？」

確かにそうかも。攻撃魔法の魔法具をたくさん作ればいけるかな？
そういえば……、連結魔石を作ったことで攻撃魔法の魔法具が実戦で使えるようになったってリシャール様言ってたけど、もう実用化されてるのかな？

「ジェラルド様、攻撃魔法の魔法具は魔物の森対策に使用しているのですか？」
「ああ、最近少しずつ試しているところだ。魔物を焼くのにファイヤーボールの魔法具を使ったり、魔物と戦う時に前衛に剣を使う者、後衛に魔法具を使うものと分けたりもしている。しかしまだ騎士達が慣れないこともあり、実戦に導入されているわけではない。管理も大変だからな」

確かに管理の問題もあるのか。盗まれたりして王家の敵対勢力に渡りでもしたら、かなり大変なことになる。
それに魔法具に込めた魔法は一定の威力のものだから。実戦で使うのは意外と難しいのだろう。

「まだまだ問題があるのですね」
「そうだな」

そうして話しながら歩き、馬車が置かれている場所までもうすぐだ。そう思った時、魔物の森の方から叫び声や悲鳴、怒鳴り声が聞こえてきた。
咄嗟に振り向くと、一心不乱にこちらに走ってくる生徒とそれを補助する騎士達が見える。

「早く走れ！！　逃げろ！！」
「きゃー！　やだ！　死にたくないわ！」
「叫ぶより走れ！！　絶対転ぶなよ！」

……何があったんだ。

「ジェラルド様、何が……」

そうしてジェラルド様に状況を聞こうとしたその時、走って逃げてきた人たちの後ろから人の二倍は背が高くがっちりとした筋肉質の、熊のような魔物が現れた。

「グギャゴォォォォ！！！」

その熊はビリビリと振動を感じるような雄叫びを上げて、しんがりを務めていた騎士に向かって突進していく。

……速いっ！　あんなに大きいのに！

「あれはマッスルベアだ！　なんでこんなところにいるんだ！？」

ジェラルド様がそう叫んだのが聞こえた。その頃には熊、いやマッスルベアは騎士のすぐ近くまで迫り、騎士を攻撃しようと左腕を振り上げているところだった。あんなに鋭い爪でやられたら、多分一瞬で絶命する……

247、マッスルベア

ヤバいと思ったら体が勝手に動いていた。俺は転移を使い、一瞬でマッスルベアと騎士の方の間に入りバリアを発動させる。

ガキンッッッ！！

そして間一髪、マッスルベアの攻撃をバリアで防ぐことに成功した。

でもマジで怖かった。目の前に攻撃してくるマッスルベア、気を失いそうな怖さだ。バリアが壊れなくて本当に良かった……

俺は後から押し寄せてくる恐怖に震えそうになる体を押さえ込み、腰に差していた剣を抜く。そして剣にバリアを纏わせて大剣サイズに大きくし、全身に全力で身体強化魔法をかけてマッスルベアの首元目掛けて飛び上がった。

そしてその勢いのままマッスルベアの首を一閃。一撃で首と胴体を切り離した。

マッスルベアは一瞬何が起きたのかわからないような顔をした後、ズドンッと大きな音を響かせて地面に倒れ込みそのまま息絶えた。全力の身体強化とバリアの切れ味が凄すぎる。でも倒せて良かった……

俺はしっかりと地面に着地してマッスルベアが息絶えたのを確認した後、剣に纏わせたバリアを解除して鞘に収める。ふぅ〜、やばい。今更手が震えてきたよ。

突然だったけど体が動いてくれて良かった。今俺ができる最善の行動をしたはずだ。バリアだけの剣より自分で剣を振るった方が正確だから、そっちを選択したのは良かったはず。遠くからのバリアよりも近くからの方が正確だから、転移したのも間違いではなかったはず。

そうして長かったような一瞬のような戦いを振り返っていると、少しだけ落ち着いてきた。でも落ち着いてくると現実が見えてくる。これ、めちゃくちゃやらかしたよね。

今の場面はたくさんの騎士と王立学校の生徒達が目撃していただろう。俺は転移もバリアも使って、身体強化も慌ててたから全力で使っちゃったし……

もう言い訳できないよね。どうしよう、リシャール様に報告してアレクシス様にも報告しないと。そうしたら使徒様って公表されちゃうのかな？　それは避けたい。

というか今以上に危険になるんだよね。全属性がバレたら他国にも狙われるようになるって聞いたし……

うわぁ～。考えれば考えるほどこの先が憂鬱だ。

でも騎士の人を助けないという選択肢はなかった。もう仕方がないことだよね……。俺はとりあえずそう受け入れて、助けた騎士の方の様子を確認することにした。

後ろを振り返ると、騎士の方は呆然としたような表情で尻餅をついたまま固まっている。

「大丈夫でしたか？　お怪我はありませんか？」

「き、き、君は、な、何者なんだ？　今のは？　魔法？　なんだ、夢か？」

騎士の方は大混乱中みたいだ。

「落ち着いてください。現実です」

「げ、現実、そうか……」

「とりあえず立ち上がりましょう」

「そ、そうだな。……痛っ！」

「どこか怪我してるんですか！？」

「そういえば、逃げる時に必死でアイアンフラワーにぶつかったんだ。今まで驚きすぎて忘れていた……」

騎士の人はそう言って右足を指差した。右足の太ももの裏あたりだ。

……え、ヤバいよ！　騎士服ごとざっくりと切れていてかなり血が流れてる。めちゃくちゃ重傷だよ！

「やばいですよ！　すぐに治しますから」

「き、君は回復魔法も使えるのか……？」

「はい。じゃあ治しますよ」

もうやらかしたんだから隠す必要もないだろう。そう思った俺は、全力で回復魔法を使い騎士の方を治療した。

そしてものの数秒で完治させる。

「はい、治りました。もう痛いところはないですか？」

「え、もう？　あれ、痛くない！？」

騎士の方はそう言って驚いたように足を動かしている。

「良かったです、大丈夫そうですね。では皆のところに行きましょうか。あっ、マッスルベアはどうしますか？」
「……後で運ぶから、とりあえずはいい、と思う」
「かしこまりました。では行きましょう」
「あ、ああ」

騎士の方は終始混乱した様子だったけどとりあえず話を進めて、皆のところに戻ることにした。

そして皆のところに戻ってみると、ステファン、マルティーヌ、リュシアン、ロニーは顔に苦笑を浮かべていて、ジェラルド様や他の騎士達、それから他の王立学校の生徒達は、皆唖然とした表情で俺を凝視していた。

「皆ごめん。やっちゃった……」

俺は四人に向かってそう謝る。多分これから迷惑をかけることになるだろう……

「まあ、今回は仕方がないな」
「そうね。レオンらしくて素敵だったわよ」
「私も一緒にお祖父様に報告するぞ。だから心配するな」
「レオン、本当に凄かったよ。僕は能力を隠して騎士の方を見捨てるレオンよりも、能力を隠せなくても助けるレオンの方がいいと思う」

皆がそう言って仕方ないなという様子で微笑んでくれる。

「皆ありがとう……」
「とりあえずこれからのことを考えないとだな。まずこの場は私に任せておけ」
ステファンはそう言うと、未だ固まっている皆に向けて声を発した。
「皆の者。本日の魔物の森の見学だが、トラブルもあった為ここで終了としよう。全ての班がすでに集まっているか？」
「ま、まだ二つの班が森の中に……」
「ではその二つの班が帰還し次第、リオールの街へ戻ろう。騎士達にはまた護衛を頼む。付き添いの先生方、それからフェヴァン第三騎士団長もそれで良いか？」
「か、かしこまりました」
さすが王子様！　王子様オーラ出してる時のステファンは、なんか従いたくなるんだよね。威厳があるって言うのかな？　雰囲気がガラッと変わるんだ。
そうしてステファンがその場はとりあえず収めて、俺たちは馬車に乗り込んだ。この後は馬車の中で今後の相談だ。
「さて、これからどうするか」
「ステファン、まずこれから何が起こるのかな……？」
「そうだな、かなりの人数が見ていたからすぐに情報が広まるだろう。まずはリオールの街で騎士達の間に、そしてすぐに手紙や早馬で王都にも」
「それって、どんな内容だと思う……？　皆から俺の様子はどんなふうに見えてた？」
「レオンが一瞬で別の場所に移動したこと。魔物の一撃を何かしら

の魔法で防いだこと。剣を巨大化させたこと。あり得ないレベルの身体強化で人間離れした動きをしたこと。そしてマッスルベアを一撃で倒したこと。とりあえずこんな感じだな」

うっ……客観的に聞くとかなりヤバい。もう誤魔化せないよね。うん、ちょっと色々とやりすぎたな。あの時はとにかく倒さなきゃって必死だったんだ。

「俺たちから見たら転移とバリア、そして身体強化を使ったってことはすぐに分かったが、それ以外の者は何が起きたのかまだ理解していないだろう。しかし冷静になって考えてみれば使徒様の魔法に考えがいくはずだ。それにレオンは回復属性だということになっている。身体強化が使えるのもおかしい」

「やっぱり、もうバレるのは確定だよね……」

「ああ、開き直って公表すべきだな。下手に隠した方が探られるし危険も増えるだろう」

やっぱりそうなるか。……もうそれは仕方ないな。俺がやらかしたことだ。

「公表するのはいいんだけど、使徒様って言葉は使わないで欲しいんだ。全属性魔法と空間属性魔法が使えるって感じにできないかな？」

「ふむ、それは問題ないだろう。そのように公表して王家と公爵家で王立学校卒業までは保護していたことにすればいい」

「それなら良かった。でも王立学校卒業まで隠すってことになってたのは、身の危険が高まるからなんだ。そこはどうなると思う……？」

俺がそう聞くと、ステファンは難しい顔をして考え込んだ。

「そうだな。レオンはまだ王立学校を卒業していないため貴族になれない。強固な立場もなく危険な状態になるだろう。それゆえに王立学校の中でもずっと護衛がついたり、最低限の外出しか認められないだろうな。さらに家族も公爵家の屋敷に匿うことになるだろう。他の知り合いなどにも護衛や影を増やすことになる」

……やっぱりそうなるか。家族はもちろんだけど、リシャール様やアレクシス様にかなり迷惑と負担をかけることになる。……本当にごめんなさい。

「とりあえず今重要なことは、まず無事に王都まで帰ることだ。リオールの街に戻ったら予定を早めてもらおう。すぐに帰還すれば少しでも危険は防げる。それからレオンの魔法はもうバレたんだ。馬車をバリアで覆って防御もしておくべきだな」

「分かった。できる限り皆を守るから。いや、絶対に皆は守るよ」

「ありがとう。だが自分の身を守ることを忘れるな」

ステファンは優しい顔でそう言ってくれた。

「うん。ありがとう……」

「レオン、大丈夫よ。そんなに気負わないで。レオンの魔法は素晴らしいものなのよ。誇っても良いわ」

マルティーヌが俺の手を握ってそう笑いかけてくれる。

「うん、そうだね。……ありがとう」

「お父様がなんとかしてくれるわ。ここで力を発揮しなかったら何のための国王なのって話よ！」

「ふふっ……それは言い過ぎだよ。アレクシス様は素晴らしい方だ

よ」
「ええ、私もそう思ってるわ。だから大丈夫」
「そうだね。うん、なんか元気出てきたよ」
俺はこれからの展開を考えてかなり落ち込んでいたけれど、自分の気持ちが上がっていくのを感じた。やっぱり、マルティーヌは凄い。
「マルティーヌありがとう。皆もありがとう。迷惑かけちゃうと思うけど、これからもよろしくね」
「もちろんよ」
「ああ、よろしくな」
そうして今後についての大まかな対応を決めながら、俺達は馬車に揺られた。

２４８、奇跡の魔法と使徒疑惑

リオールの街に戻り馬車から降りると、想像以上の事態になっていた。誰かが早馬で使徒様が現れたとでも知らせたのか、馬車を降りると跪いて深く頭を下げた騎士達、一般的には国王にするような礼をした騎士達がずらっと並んでいたのだ。

そして一番先頭にいた壮年の騎士が口を開く。

「使徒様、またこの世にご降臨されましたこと、心から嬉しく存じます」

……うん、完全に使徒様ってことになってるよ。あの魔法は使徒様だって気づいて伝えるまでが流石に早すぎない？　使徒様の影響力が怖い……

ここはちゃんと否定しておくべきだな。

「あの、ちょっと待ってください。私は使徒様ではないんです」

「……しかし、使徒様がお使いになられていた魔法を使い、騎士の一人を助けていただいたと聞いております。その慈悲深き心に感謝を」

「いや、私は使徒様と同じような魔法は使えますが使徒様ではないんです」

「……ご謙遜はいりませぬ。身体強化属性と回復属性を使われたとの話も聞いております。回復魔法は神の御業であったと」

「いや、だから……」

使徒様じゃないんだって！！　もう完全に使徒様だと信じて疑ってないよ。こうなると使徒様じゃないって証明する方が難しいかも

……
はぁ〜、どうしよう。本当に困る。
俺がそうして大勢の騎士を前に混乱していると、ステファンに強く腕を引かれた。
「皆の者。レオンは疲れているゆえこれにて失礼する」
ステファンはそう言い放つと、足早に騎士達の前から去り簡易宿泊所に入った。ステファンにしては結構強引だ。
その後も無言で簡易宿泊所の中を進んでいき、俺達の部屋まで辿り着くと皆が部屋に入ったのを確認してすぐにドアを閉める。部屋には俺とステファン、マルティーヌ、リュシアン、ロニーの五人だけとなった。
「ステファンどうしたの？　凄く急いでるみたいだったけど……」
「レオン、気づいていたか？」
「えっと……何に？」
「跪いていた者たちの後ろに、明らかに悪意を持った目でレオンを睨んでいる者が一定数いた」
「……本当？」
「ああ」
「私も気づいたわ」
マジか、全然気づかなかった……
俺は人から明確に悪意を向けられているという状況に、手足の先が冷たくなっていくのを感じる。人の悪意って、やっぱり怖いな。
「とりあえずこの部屋にバリアを張ってくれ。バリアはどのくらい

維持できる？」
「分かった。ずっとは難しいと思うけど数週間ならできるよ」
「では、明日馬車で帰る時までは張っておいてくれ」
「うん。……あのさ、悪意がある人達って敵対勢力の人達かな？貴族の力を強くしたいのに俺は邪魔ってことだよね？」
「多分、そうだろうな」

やっぱりそうだよね……
使徒様だと広まってもこんなにすぐ悪意を向けられるなんて、実際思ってもみなかった。全属性の平民に対しては悪意を向けても、使徒様なら少しは違うのかとも思ってたんだけど……

敵対勢力の人達って、もうとにかく自分の立場を脅かす存在は排除したいのかな。もっと平和に楽しく生きればいいのに。

「敵対勢力の人達ってどのぐらいの数がここにいるのか知ってる？
そんなにいないって聞いたことがあるんだけど」
「そうだな。確かにあまり数はいないがいることはいる。今の王家の方針、使徒様の教えを守るということに反対している家の騎士は、ほとんどの者がまとめてここを含めた前線に送られるからな。ただすぐに辞めていく者が多いのでそこまで数は増えない」

そういえば前にリシャール様が言っていた。王家に忠誠を誓っている家や考え方が似ている家の者以外は、王宮の安全のためにもまとめて魔物の森に派遣してるって。

すぐに辞めるとは言っても少しは仕事をするんだろうから、その辞める前の人達がいるってことだよね。辞める前に大きな成果を上げてから辞めてやる！　とか考えて何かやらかしそうで怖いな……

そんなことをするぐらいなら、ここでしっかり働いて魔物の森の脅威を認識して、さらにそれを実家に伝えるぐらいはしてほしいものだ。
多分そこまで認識せずに辞めていくんだろうな……元騎士って肩書きだけ欲しいんだろう。

「その人達は行動を起こすかな？」
「……可能性は高いだろう。もしここでレオンを捕らえることができたら大手柄になる」
「やっぱりそうだよね……」
「ああ、とりあえずレオンの、そして皆の安全が第一だ。今夜は一つの部屋に固まって夜を明かそう。従者もだ」
「確かにそれがいいね」

やっぱりかなりの大事になっちゃったな……もう使徒様って広まってるみたいだし、これから先どうなるのだろうか。

……天罰とかありませんように。俺はそう必死に祈った。でもこの世界の神様に祈るわけにもいかないし、何に祈ればいいのかわからない。

「ではこれからの予定だが、私は明日の予定を繰り上げることを先生方に伝えて来る。最悪は私達だけでも帰還しよう。皆は従者と共に荷物をまとめてくれるか？　荷物はレオンのアイテムボックスに入れておいてくれ」
「分かった。いつでも移動できるように準備しておく」

そうしてとりあえず話し合いを終えて、俺達はそれぞれ準備をすることになった。もちろん細心の注意を払ってだ。

それから数時間、準備を全て終えてステファンとリュシアンの部屋に全員で集まった。

「先生方に予定の繰り上げを伝えたところ、先生方もその方針を決定するところだったらしい。すんなりと認められた。よって明日の早朝にはここを出ることになる」

「お兄様、先生方のレオンについての反応はどうでしたか？」

「先生方は比較的、悪意のある感情は少なかったように思う。しかし数名の先生は平民が使徒様などあり得ないと主張していたな。とりあえずレオンは魔法が使えるだけで使徒様ではないと伝えてきた。そのほうが危険は増すかもしれないが、それで良いのだよな？」

使徒様だって思われた方が手を出してくる人は減るのかもしれないけど、やっぱり神様が怖いから少しでも予防線を張りたくなるんだ。俺が使徒様だと言ったわけじゃありませんって言い訳ができるように、使徒様ではないというところだけは強調しておきたい。

まあ、そんな言い訳が通じる気はしないんだけど……俺の気持ちの問題だ。

「はい。それでお願いいたします」

俺は従者の方もいるので、ステファンに敬語を使い頭を下げた。

「そういえば伝えていなかったが、ここで私に対して敬語は必要ないぞ。従者がいる時にまで敬語にするのは大変だろうと思って、先ほど皆に伝えておいたのだ」

「……そうなの、ですか？」

「ああ、今まではレオンの能力も隠していたし、外では極力敬語を使うべきだと思っていたから何も言わなかったが、レオンの能力を

明かせば外でもあまり気にすることはない」
「……それは何故でしょうか？」
「レオンは使徒様でないとはいえ使徒様と同じ能力を持つ者だぞ。王族と同程度の扱いでもおかしくはないだろう？」

そ、そうなのか……。ずっと凄いと思ってたけど、改めて使徒様って凄い。

「……分かった。じゃあここでは普通に話すよ」
「ああ、そうしてくれ。では次の話だが、王家の影からの情報が入った。やはりレオンを誘拐する計画が持ち上がっているそうだ。騎士数十名が関与しているらしい」
「え……、王家の影ってここにもいるの？」

俺は誘拐の計画よりも王家の影に驚いた。だって王都から相当離れてる場所だよ？

「私とマルティーヌの護衛として数名ついてきているからな」

……マジか。全く気づかなかった。
影の人達って本当に能力が高いよね。いつも思うけど凄すぎる。全員が身体強化魔法を使えるのかな。

「そうだったんだ」
「ああ、そこで影の一人に探らせたところすぐに計画がわかった」
「どんな内容だった？」
「これがな、呆れるほどお粗末なものなのだ。今日の夜皆が寝静まった頃、簡易宿泊所のレオンの部屋の前に火をつけるらしい。そして煙が充満し始めたところで水魔法で消火して風魔法で空気を入れ替える。そしてその後にレオンの部屋へ火事から助けに来た体で侵

入し、混乱に乗じてそのままレオンを攫うそうだ」
「えっと……それ、上手くいくと思ってるのかな？　肝心の俺の魔法への対策とかは……？」
「それが、まだ子供だし魔法を使いこなせているわけない。捕まえて腕を縛り上げ口を塞いでしまえばこっちのものだ。そう話はまとまったらしい」

え……転移魔法を使ったとか言ってるのに？　腕を縛れば大丈夫だと思ってるの？

……どんな馬鹿なんだ。俺は思わず脱力した。

敵対勢力って基本的に馬鹿なのかな。思わずそう思ってしまうほど頭が残念な方達が多い気がする。

「まあ、危険度が低いってところはありがたいかな。でも火事は万が一敵が消火できなかったら大変だし、火事を起こされる前に捕まえたいね」
「ああ、そこは王家の影と近衛に任せておけばいい。もう指示は出してある」
「そうなんだ。ありがとう」

敵ながら残念な人達だ。

「ということで、今のところ敵はそこまで怖くないとは思うが、用心するに越したことはない。気を抜かずにいくぞ」
「そうだよね。気をつけるよ」

そうして俺達は気を抜かずに、交代で見張りをしつつ夜を明かした。そして遂には一度も襲われることなく朝となった。

ちなみに俺への襲撃計画を立てていた人達は、全員王家の影と近衛兵に捕らえられたらしい。ちょっと顔を見てみたかった気もするけど、睨まれるだけだろうし顔を合わせずに済んで良かったかな。

そして次の日の早朝。俺達は馬車でリオールの街を後にした。この後の道中も王都に着いてからも不安なことだらけだけど、俺が弱気になっちゃダメだ。

そう気合を入れて馬車に揺られた。

閑話　火急の知らせと神託（リシャール視点）

今日も今日とて忙しく、陛下の執務室で仕事に追われていた日の昼下がり、かなり急いだ様子の騎士が執務室に駆け込んできた。

「失礼致します！　第一王子殿下より火急の知らせがございます！」

「ステファンからとは、何かあったのか？」

「至急こちらの手紙を渡すようにと、それから内容は陛下と宰相様にのみ伝えるようにとのことです」

「そうか、皆の者下がってくれ。片付けずにそのままで良い」

陛下は厳しい表情で文官たちにそう告げ、部屋には私と陛下、報告に来た騎士の三人だけになった。

「では手紙を」

「はっ」

陛下は騎士から手紙を受け取ると、すぐに中身を読み始める。

「――リシャール、レオン様の魔法がバレたらしい。向こうではレオン様が使徒様だと騒ぎになっているそうだ」

「なんと……！　それは大変なことになります……」

「今すぐ対策を話し合うべきだな。……急ぎの報告感謝する。数日はしっかりと体を休めるように」

陛下は報告に来た騎士に向かってそう告げ、騎士が退出していくのを確認するとソファーに座った。

「リシャールも座ってくれ」
「かしこまりました。失礼いたします」
「手紙の内容だが、普段なら魔物の森の外縁部にはほとんど現れないマッスルベアが出たらしい。そしてマッスルベアに襲われて死ぬところだった騎士をレオン様がお助けになったそうだ。その際にバリアと転移、身体強化に回復を使ったと書かれている」
「それは……、その様子を見ていた者がいたのならば誤魔化せないでしょう」
「王立学校の生徒、教員、多くの騎士が見ていたようだ」

それはもう誤魔化せないだろう。レオン様の身に危険は及ぶが公表するしかない。

「もう公表するしかないでしょう」
「ああ、私もそう思う。ステファンによると、使徒様だという言葉はなしで、ただ全属性と空間属性魔法が使えるという発表だけにしてもらいたいと、レオン様が仰ったらしい」
「……それだと危険度が上がるのですが、レオン様がそう仰ったのならば仕方がないでしょう」

今後どうやって守っていくのかが大切だ。まずはこの後すぐにレオン様のご家族を公爵家に匿い、その他にもレオン様と関わりのある者には、極力家から出ないように通達し護衛を増やすべきだな。王家の影も借りてなんとか守り切れるだろうか……

『貴方達、聞こえているかしら』

私がそうして今後のことについて考え込んでいると、どこからか女の声が聞こえてきた。

……今の声はなんだ？　ここには陛下と私しかいないはずだが。

「陛下、何か仰いましたか？」

「いや、リシャールこそ何か言ったか？」

「いえ、私は何も……」

『貴方達、聞こえてるなら返事をしなさい！』

「……女の声だな。侵入者か？」

「護衛を呼びましょう」

『ちょ、ちょっと待って！　私は侵入者じゃないわ！　もうっ、失礼しちゃうわね。私はこの世界の神、ミシュリーヌよ』

「ミシュリーヌ、様……？　ほ、本当に、ミシュリーヌ様であらせられるのですか！？」

陛下はかなり驚いた様子でそう叫んでソファーから立ち上がった。私は驚きすぎて腰が抜けて立ち上がれない……

『さっきからそう言ってるでしょ！』

確かにこの頭の中に直接響いてくるようなお声は、歴史書にあった神託そのものだ……

「も、申し訳ございません。何卒、何卒罰するのであれば私だけでお願いいたします……」

『ん？　別に罰したりしないわよ。というよりも時間がなくなっちゃうわ！　貴方に伝えたいことがあるの。レオンって男の子がいるでしょう？』

「レオン様ならば、存じ上げております」
『レオンは私の使徒だからよろしくね』
「やはり……そうだったのですね」
『それで、レオンに私が昔に落とした本を渡して欲しいのよ。この王宮の奥で研究されているやつあるでしょう？』
「……未だ、解読がなされていないものでしょうか？」
『そう、それよ！　あれをレオンに渡してちょうだい。絶対に渡すのよ。あっ……もう時間がないわ。絶対よ！　頼んだわよ！』

その言葉を最後に、ミシュリーヌ様の声は一切聞こえなくなった。

――今のは、現実だったのだろうか。

「リ、リシャール、今のは聞こえてたか？」
「……はい」
「夢、だろうか？」
「い、いえ、多分現実かと……」

未だに信じられない気持ちだが、あれは夢などではないだろう……

「やはり、レオン様は、使徒様だったのだな」
「……そうでございますね」
「ミシュリーヌ様は、本当にこの国を見守ってくださっているのだな」

魔物の森の脅威によってこの国は滅びるのではないか、心の奥底ではその気持ちがずっと燻っていた。しかしミシュリーヌ様に見守られているならば、これからこの国は良い方向に向かう。素直にそう思える。

「陛下、この国はまだまだこれからですね」
「ああ、そうだな。ミシュリーヌ様が見守って下さっているならば大丈夫だろう。……それにしても、ミシュリーヌ様は元気なお方なのだな」

陛下は言いたいことを飲み込んだような表情でそう言った。確かに、少しイメージと違った。お淑やかで静かに全てを包み込んでくれるようなイメージだったのだが、どちらかといえば活発で、お転婆な感じだろうか？
まあ、こんなこと声に出しては言えないが……

「確かに、気力が満ち溢れているお方でしたね」
「ああ、とても頼りになりそうだった」

そうして顔に苦笑を浮かべながらミシュリーヌ様の印象について話し、その後に今後の話を始めた。

「リシャール、まずはミシュリーヌ様に託されたことを確実に完遂しなくてはならない」
「心得ております。レオン様が王都に帰還されたら、すぐに例の本をお渡ししましょう。それからあの本を今すぐに安全な場所へ移動するべきです。万が一にでも紛失したとなればどうなるか……」
「そうだな。すぐに護衛を増やして絶対に安全な場所に保管しよう」
「今後のことについての話し合いは、レオン様に本をお渡ししてからで良いでしょう。それによって何かしら事態が動く可能性もあります」

レオン様の能力がバレてしまったことの対処は、レオン様の立ち位置がしっかりと明確になってからがいいだろう。この出来事で使徒様だという事を公表できるようになる可能性もある。もしそうな

らば対応も変わる。

「そうだな。ではレオン様が王都に帰還されるまでについて話し合おう。まず一番にすべきなのはレオン様のご家族の保護だ。それからレオン様の知り合いもより強固な護衛体制にしよう」

「かしこまりました。レオン様のご家族は公爵家の屋敷で保護いたします。その他の者には護衛を手厚くしますが、公爵家の人材だけでは手が足りません。王家からも影と護衛を借りても良いでしょうか……？」

「ああ、もちろんだ。今この国での最重要事項だからな。第一騎士団による見回りも強化しよう」

「よろしくお願いいたします」

他には何か話し合っておくことはないだろうか。……そうだ、先ほどの声がどこまで聞こえていたのか確認が必要だ。

「陛下、ミシュリーヌ様のお声がどこまで聞こえていたのか、確認が必要では？」

「……確かにそうだな」

そうして陛下が護衛の一人を部屋に呼んだ。

「何か私に報告するような出来事があったか？」

「いえ、尋ねてきたものはおりませんでした」

「そうか。他には何かなかったか？　声が聞こえたとか」

「声、ですか……？　まさか！　部屋の中から不審者の声がしたのですか！？」

「いや、違うから安心してくれ。もう下がって良い。また護衛を頼む」

「……はっ、かしこまりました」

陛下の護衛は少しだけ不思議そうな表情をしながらも、深く聞くことはなくまた下がっていった。

「リシャール、先ほどの声は私達だけに聞こえていたということだな」

「そうでございますね」

「では、必要な時以外は口外無用とする」

「かしこまりました。私の心に留めておきます」

そうしてその後もいくつか今後についての話をし、私は陛下の執務室を後にした。

２４９、王都に帰還

遂に、遂に王都に着いた！

俺達の馬車は今やっと王都に入ったところだ。二週間前に俺の能力がバレてすぐにリオールの街を出発したけど、その道中がとにかく大変だった。

途中立ち寄った街で刺客に襲われたり、領地の領主に待ち伏せされていて無理矢理屋敷に連れていかれそうになったり、食事に毒が盛られていたり、泊まっていた宿が火事になったり……

本当に、本当に大変だった。リシャール様に隠しておくようにって言われてたのもわかる。俺が使徒様だったらまた違ったんだろうけど、力だけ持ってる平民って立場が混乱を生む元なんだろう。やっぱり使徒様だってことを否定しないほうがいいんだろうか……

……本当にこれから先が思いやられる。俺が貴族になれるとしても王立学校を卒業してから、冬の月はなんとか凌がなければならない。

本当は王都の近くまで来たら俺だけ転移で帰る予定だったんだけど、ずっとバリアや他の魔法も使っていたので魔力が回復していなく、結局馬車で最後まで帰ることになった。

マリーは、父さんは母さんは、他の皆は大丈夫だろうか。それが本当に心配だ。

「レオン、この馬車は王立学校に行かずそのまま公爵家に行くことになっている。後少しだから少し休んでいた方がいい」

ステファンが心配そうにそう言ってくれた。
「レオン、さっきからずっと歩き回っているが、レオンがここを歩いていても馬車は早く進まないぞ」
「そうよ。レオン、座っていなさい」

リュシアンとマルティーヌにもそう言われて、俺はマルティーヌに強制的にソファーに座らせられた。

「それは分かってるんだけど、落ち着かないんだ」
「レオン、この馬車の中はバリアの魔法具で守られてるんだよね？」
「うん」
「じゃあ少し寝た方が良いよ。ステファン様、公爵家までは後どのぐらいでしょうか？」
「二時間ってところだな」
「じゃあレオン、二時間寝ること」
「でもロニー、寝られないんだよ」
「寝られなくても横になる！」

そうしてロニーに怒られて、俺はソファーに無理やり横にさせられた。そして絶対に寝られないと思っていたけれど、自分で思っていたよりも疲れていたのか横になった途端に深い眠りに落ちた。

「レオン、レオン」
「はっ……、マルティーヌ？」

俺はマルティーヌに起こされて目が覚めた。

「もう公爵家に着くわ」
「俺寝てたんだ……」
「横になってすぐに寝ていたわ。それだけ疲れてたのよ」
「そっか、ソファーを占領してごめんね」
「大丈夫よ。少しでも休めて良かったわ」

マルティーヌはそう言って優しく微笑んでくれる。俺はその笑顔に疲れが抜けていくのを感じた。

「レオン、もう馬車が止まるから降りる準備をしてくれ。お祖父様が出迎えに来てくれているぞ」
「分かった」

そうして馬車が公爵家の屋敷の前に止まり、俺達は全員で馬車から降りた。

「タウンゼント卿、私達まで押しかけてしまい申し訳ない。魔物の森でのことは父上から聞いているだろうか？」

ステファンが代表してそう口を開く。

「王子殿下、王女殿下、ようこそお越しくださいました。十分なもてなしもできず申し訳ございません。魔物の森でのことは陛下から伺っております」
「気にしなくて良い。それなら話は早いな。そのことでここまでの道中、様々な刺客に襲われてきた。今後のことについて早急に話し合うべきだろう」
「心得ております」
「あの、リシャール様、その前に家族の安否だけでも聞いて良いでしょうか？」

俺はどうしても家族の安否が気になり、思わず二人の会話に割って入ってしまった。しかし誰にも注意を受けることなく、リシャール様は俺の方に顔を向けてくれる。

「確かに先に伝えるべきだったな。レオン君のご家族は公爵家で匿っていて無事だ。今は厨房で働いている時間だと思うが、呼んでこようか？」

「……それは、良かったです」

俺は家族が無事だという話を聞いて、思わず体から力が抜けてしまう。

「レオン、大丈夫！？」

「あっ、ロニーごめん。ちょっと力が抜けちゃった……」

「レオン君大丈夫か？」

「はい、大丈夫です。家族を守ってくださって本当にありがとうございます。無事だということがわかれば十分ですので、話を進めてください」

「ではそうさせてもらおう。レオン君の体調が大丈夫ならば、これからすぐに王宮へ来てもらいたいんだ。そこで陛下と私から話がある」

リシャール様はかなり真剣な表情でそう言った。

何か俺の能力がバレたことで問題があったのかな……。疲れてるけど、俺が向き合わないといけない問題だ。

「もちろんです」

「ありがとう。ではリュシアンとロニー君はうちの屋敷で休んでいてくれ。……殿下はいかがなさいますか？　うちの屋敷でお休みい

ただくことも可能ですが」
「いや、私達は一度王宮まで帰ろう。急いでいるのだろう？　私たちのことは気にしなくても良い」
「かしこまりました。ご配慮感謝いたします。……ではレオン君、こちらの馬車に乗ってくれるか？」
「はい」

そうして俺はリシャール様と共に公爵家の馬車に乗り込んだ。ステファンとマルティーヌはここまで俺達が乗ってきた馬車で王宮へ、リュシアンとロニーはこの屋敷で休むことになった。

「リシャール様、何かあったのですか？」

俺は馬車に乗ってすぐリシャール様にそう聞く。するとリシャール様は雰囲気をより真剣なものに変えて深く頭を下げた。

「レオン様、まずは先ほどまでのご無礼をお許しください。まだ公にはレオン様のご身分を明かしてはならないかと思い、今まで通りにさせていただきました」

えっ、なんで急にこんな話し方なの？　それにレオン様とか呼ばれてるし……

俺がその疑問をリシャール様にぶつけるより先に、リシャール様が続けて口を開いた。

「数日前、私と陛下はミシュリーヌ様より神託を受けました。使徒であるレオン様に神の遺物である本を渡すようにとのことです。できる限り早い方が良いと思い、このように急がせてしまったこと申し訳ございません」

……えっと、マジでどういうことだ。ちょっと色々ありすぎて頭が働かない。神託？　神の遺物？

「リシャール様、よく理解できないのですが……」

「レオン様、私などに敬称を付ける必要はございません。どうぞお好きにお呼びください」

「ちょっ、ちょっと待ってください。一旦落ち着きましょう。……まず、私は使徒様ではないですよ？」

今までは俺の言葉を信じてくれて使徒様扱いはせずにいてくれたのに、なんで急にこんなことになってるんだ。

確かにマルティーヌが、アレクシス様やリシャール様は俺のことを使徒様だと思っていると前に教えてくれたけど、それでも使徒様扱いはされなかったし、最近はやっと理解してくれたと思ってたんだけど……

「レオン様、どのような理由があって使徒様であることを隠されているのか存じませんが、ミシュリーヌ様からレオン様が使徒様だと拝聴しましたので、レオン様を使徒様として扱わないわけにはまいりません」

そうだよ、そこが全ての元凶だ。ミシュリーヌ様って、この世界の女神様だよね……？

「あの、ミシュリーヌ様のお声を聞かれたということでしょうか？」

「おっしゃる通りです。陛下と私の二人でお声を拝聴しました」

――女神様の神託って本当にあるんだ。なんか、現実感があまりない。

「それで、女神様がなんと仰ったんでしたっけ……」
「レオン様が使徒様であると。それからレオン様に神の遺物である本を渡すようにと仰せでした」
「俺が、使徒様……」

確かに今俺が使徒様って言ったよね。俺が使徒様なんだ。俺が使徒様……って、俺は何も知らないんだけど！？

なんで本人は何も知らないのに他の人が知ってるんだよ。最初に俺に言ってよ……

というか、最初から言ってくれれば今までの苦労は殆ど要らなかったじゃん！

そうして俺が内心で驚いて憤ってと忙しく思考を巡らせていると、馬車は王宮に着いた。

「レオン様、これから先で他の者がいる場では今までのように振舞わせていただきます。大変申し訳ございません」
「は、はい」

俺は急展開すぎて思考が追いつかず、とりあえず頷いてリシャール様の後をついて行った。

そうして王宮の中をしばらく歩いていると、一度も足を踏み入れたことのない部屋の前に辿り着く。かなり奥にある部屋で、厳重な警備体制が敷かれているようだ。

「私とレオン君の二人で中に入る」
「はっ！　少々お待ちください」

ドアの前で警備をしている騎士はリシャール様から紋章を受け取るとそれを念入りに確認し、リシャール様の顔と俺の顔を確認して中に入れてくれた。
中に入るとそこはあまり広くない部屋で、高そうなものがいくつも置かれている。宝物庫だろうか？

そしてそんな部屋の中にはアレクシス様がいた。

「レオン様、足をお運びくださりありがとうございます」

アレクシス様は俺の前に跪くと深く頭を下げた。リシャール様もアレクシス様の斜め後ろに移動し同じ体勢をとる。

「お、お二人とも、頭を下げるなんてやめてください！」

俺が慌ててそう止めると、二人は顔を上げてくれたけれど跪いた体勢はそのままだ。完全に俺が使徒様だと思っているらしい……
とにかく先に、ミシュリーヌ様からの本ってやつを受け取ってみた方が良いのかもしれない。それで何かがわかるのだろう。
もし俺が本当に使徒様なら話は変わるし……

「アレクシス様、ミシュリーヌ様からの本を受け取っても良いでしょうか？」
「もちろんでございます。リシャール」
「はっ！」

アレクシス様がリシャール様を呼ぶと、リシャール様はすっと立ち上がり奥から一冊の本を手に戻ってきた。

「こちらがミシュリーヌ様からの本でございます」

リシャール様がそう言って差し出したのは、両手で抱えるほどの大きな本だった。革で作られた表紙には宝石も散りばめられていて凄く高そうだ。

「ありがとうございます」

俺はリシャール様から本を両手で受け取る。そして落とさないように本を抱え直したその時、

――突然真っ白な光に包まれて、何も見えなくなった。

250、女神様

突然眩しい光に包まれてキツく目を瞑っていると、だんだんとその光が弱まってきたようだったので、俺は恐る恐る目を開いた。

するとそこには……、絶世の美女がいた。

真っ白なストレートのロングヘア、瞳は綺麗な金色だ。服装は白を基調として、アクセントに金色が映えているドレス。そしてその上にベールのようなものを纏っている。

――もしかして、女神様？

「やっと神物に触れてくれたわね！　あなたが神物に触れないと連絡もできないし神界に呼ぶこともできないし、本当に大変だったのよ。神力を頑張って溜めて神の領域の外に神託までしたんだから！」

女神様っぽい女性は突然そう話し始めた。そして今までの苦労をつらつらと語ってるみたいなんだけど……急にそんなに話されても頭に入りませんよ。そしてクレープとかケーキが話に出てきてるけど、マジでなんの話ですか？　というかここどこ？

でも話の感じ的に俺が罰せられるって雰囲気じゃなさそうだ。俺はその事実に内心でかなり安堵した。

そうすると、やっぱり俺が使徒ってことなのかな？

というかこの女性さっきからずっと喋り続けてるんだけど、とりあえず本当に神様なのかを確認させて欲しい。

「あ、あの……、話の前に一ついいですか？　あなたはミシュリーヌ様ですか？」

俺は女性の言葉を恐る恐る遮りそう聞くと、女性はパァッと輝やかんばかりの笑顔を浮かべた。美人の笑顔は破壊力が凄いな……

「良かった！　ちゃんと見えてるし話せるのね。もう、反応しないから聞こえてないかと思ったじゃない！」

いや、あなたがずっと話してるから口を挟む余裕がなかったんです……

「あなたを神界に呼ぶために神界用の体を作ったの。レオンの体と同じにしてあるけど、どうかしら？　不便はある？」

「えっと、見えてるし話せるので大丈夫だとは思います。それで、ここはどこですか？」

「さすが私ね！　完璧じゃない！　動いてみてちょうだい。はい、ジャンプ」

「ジャ、ジャンプ？」

「そうよ！　早くしなさい」

「は、はい」

……この人全然俺の話聞いてくれない！！

でも神様なら流石に逆らっちゃダメだろうと思い、とりあえず従ってその場でジャンプをした。

「動きも完璧ね。素晴らしいわ！」

「はぁ……あの、ところであなたは誰ですか？」

「遂にここまで来たのね……。毎日血の滲むような努力をして神力

を貯めたのよ！　今までの我慢の日々、思い出しただけで泣けるわ……」
「あの、あなたは……」
「あの我慢の日々から遂に解放されるのよ。クレープ、ケーキ、クッキー、生クリーム……想像だけで幸せ」
……ダメだこの人。マジで一切話を聞かない！　俺はこの人が神様なのかなと思って遠慮していたのをやめて、強気に行くことにした。
「あの！　一旦話を聞いてもらっていいですか？」
「そうだわ、レオン！　洋菓子の次は和菓子よ。次は和菓子を作るのよ！」
「話を聞いて……」
「まずはどら焼きがいいわね。後は羊羹も食べたいわ。お饅頭も絶対よ」
「話を……」
「アイスも欲しいし、チョコも作って欲しいわね！」
あぁ、もう！！
「ミシュリーヌ様、一旦黙ってください！！」
「……何よ。そんなに大声を出さなくてもいいじゃない」
「まず、あなたはミシュリーヌ様ですか？」
「そうよ、私が女神なの。凄いでしょ！」
ミシュリーヌ様は腰に手を当てて胸を逸らし、得意げな顔をした。すっごく美人だからその様子だけを見れば可愛いんだけど、さっきから残念なところを見てるからか、とにかく残念だとしか思えない。外見詐欺だよ……

というかこの世界、こんな神様で大丈夫なの？　めちゃくちゃ心配になってきたんだけど。

「そうですね。凄いですね」

「心がこもってないわ。もっと心を込めなさい！」

「凄いですねー」

俺は思わず遠い目をしつつそう言った。なんか女神様って、もっと厳かな雰囲気で全てを包み込むようなタイプかと思ってた。イメージと違いすぎる。

そして俺はこの女神様のことを今まで怖がってたのか。その事実に思わず深いため息が漏れる。

「はぁ～、ミシュリーヌ様。俺が使徒様ってどういうことなんでしょうか？　そんなこと今まで一度も聞いていませんが……。それにここはどこですか？　俺はさっきまで王宮の宝物庫にいたはずなんです」

「そうね、その話をしないとよね。そこのソファーに座っていいわよ」

そう言ってミシュリーヌ様が指差したのは、白くてどこまでも続く空間にぽつんと一つだけあるソファーだった。改めてこの空間を見回してみると、この空間にはソファーと机にいくつかの棚しかない。

そしてそんな空間に、ミシュリーヌ様とレオンの姿の俺がいるだけだ。

「では失礼します」

聞きたいことは山ほどあるけれど、とりあえずソファーに腰掛け

た。

「まず最初から説明するわね。この世界が魔物の森に侵略されそうなのは知ってる？」

「はい」

「その原因は私が以前に作った魔物が暮らす世界とこの世界を繋げてしまったからなの。本当は繋ぐつもりなんてなかったのよ。でもどこで間違えたのか小さな穴で繋がってて、それが時間の経過と共に大きくなって……それで今の現状になったの」

「では、魔物の森は別の世界からやってきているということですか？」

「そうよ。魔物の森をずっと進んだ先に大きな穴が開いていて、そこから植物や魔物が入ってきてるわ」

待って、ということは、この世界が滅びかけてるのってミシュリーヌ様のせいなの！？

「ミシュリーヌ様、俺達が危機に陥っているのって……」

俺は流石にミシュリーヌ様のせいですか？　とは言えずにそこで言葉を濁した。しかし意味はしっかりと伝わったらしい。ミシュリーヌ様は少しだけ気まずそうな表情で口を開く。

「ま、まあ、私が原因、とも、言えなくはないわね」

いや、そうとしか言わないし！

はぁ～、さっきから残念感漂ってるって思ってたけど、もう残念どころかこの神様ポンコツすぎる。

本当は神様に会ったら畏れる気持ちとか敬う気持ちとか、そういうのが自然と湧いてくると思ってたんだけど、ミシュリーヌ様に対

しては一切湧いてこない。

まあ、親しみやすいって点では、いいと思うよ、うん。

「なんでそんなことしたんですか……」

「私だってそんなことしたくなかったのよ！　私は人間が好きなのよ。なのに、なのに……いつも人間は滅びちゃうんだから！　なんであんなミスをしたのよ、私のバカ！」

ミシュリーヌ様は一応反省はしているようで、自分のミスに落ち込んだ後、自分で自分の頭を叩いている。

というかさっき重要な情報があったな。ミシュリーヌ様は人間が好きなのか。それなら魔物の森に関しては俺達の味方になってくれるってことだ。

「ミシュリーヌ様の力で魔物の森をどうにかできないのですか？魔物の森を全て消してその穴を塞ぐとか」

「そんなことできたらとっくにやってるわよ！」

意外と神様も万能じゃないんだね……

「そんなに大掛かりなことをするにはいくら神力があっても足りないのよ。それに穴を塞ぐことはできたとしても、魔物の森を消すなんてことはできないわ」

「そうなんですね」

「そこでレオン、あなたなのよ！」

「俺、ですか？」

「そうよ。あなたは魔物の森をどうにかしてもらうために、私が地球の神から魂をもらって転生させた存在なの」

「それでは、俺は使徒ってことですか？」

「そうよ！」

やっぱり俺は使徒であってるのか。でもなんで今までは音沙汰なかったんだ？

「普通は転生させる時に説明とかしませんか……？」

「……もちろんそのつもりだったのよ。でも、あなたの魂がレオンの体に引っ張られて神界から下界にいっちゃったんだもの。それで、連絡を取る術がなくなって……」

「ではその時も、失敗したってことですか……？」

「……まあ、そうとも言うわね」

だからそうとしか言わないから！

はぁ～、この女神様ミスばっかりじゃないか。そしてそれにめちゃくちゃ振り回されてるよ、俺。

「で、でも、全言語理解と全属性魔法は付与したのよ！」

「ああ、今まで不思議に思ってたんです。何で言葉が通じるのかなって」

「ふふっ、私のおかげよ！　ちゃんとこの世界の人間が話す言葉は全て読み書きできるようにしたの。固有名詞とかどうしても変換できないものはそのままになるところが難点だけど、不自由はないでしょ？」

「はい。ありがとうございます。全属性魔法は一般的な六属性に加えて空間属性のことですか？」

「そうよ！　便利でしょう？」

便利っていうか、凄すぎる能力です。

「この能力を持っていることによって大変なこともありますが、大

切な人を守ることができる力なので感謝しています。ありがとうございます」

俺はちゃんとお礼を言うべきだろうと思って、しっかりと頭を下げてお礼をした。するとミシュリーヌ様は、途端に顔を赤くして照れたような表情を見せる。

……可愛いじゃないか。本当にこの外見は詐欺だな。

「べ、別に、お礼なんていいのよ！」

そしてツンデレだ……美少女残念女神様のツンデレ。ミシュリーヌ様、属性多いよ。

「……逆に私の方こそレオンに謝らないといけないのよ。この世界に連れて来てしまってごめんなさい。地球と違って大変でしょう……？」

ミシュリーヌ様は急にしおらしくなり、小首を傾げて俺の顔を下から覗き込むようにしてそう言った。

うぅ……そんな感じで来られたら責められないじゃないか。それに最初は混乱したけど、意外とこの世界を楽しんでるし、今となってはこの世界が俺の生きる世界だと思ってるし……

「大変なこともありましたが、素敵な方々に囲まれて楽しく過ごしています。逆にこの世界に連れて来てくださってありがとうございます」

「そう、それなら良かったわ。少し心配してたのよ」

「……あの、一つどうしても気になることがありまして、俺は日本で死んだのですよね……？」

「まあそうなるわね。ただ私は日本のことは知らないの。日本のことは地球の神の領分だから」

そういえばさっきも地球の神って言ってたよね。さっきは流しちゃったけど、やっぱり地球にも神様っていたんだな。もっと神社とかで真剣に祈れば良かったかも。

日本での最後がどんな感じだったのか知りたい気もするけど、ちょっと怖い気持ちもある。知る術がないのならそれがいいのかもしれない。

俺はそう思いそれをミシュリーヌ様に告げようとしたその時、一足先にミシュリーヌ様が口を開いた。

「シェリフィーに聞いてあげるわね！」

そしてそう言った後、すぐどこかに飛んでいってしまった。

……えっと、俺この空間に置いてけぼりですか？　そしてシェリフィーって誰ですか？　もしかして、地球の神だったりします？

そしてこの空間に置き去りはめちゃくちゃ心細いです。ミシュリーヌ様、ちゃんと帰って来てくれますよね！？

251、地球の神様

それから体感にして十分ほどが経過して、やっとミシュリーヌ様は帰って来てくれた。ミシュリーヌ様の顔を見た時は安堵して、思わずソファーに深く沈み込んでしまったほどだ。

だってこのよくわからない空間、ただひたすらに静かでどこまでも広くて怖いんだ。ずっと一人でいたら気が狂いそうな気がする。

そう考えると、神様って大変なのかもしれないな。

「レオン、待たせたわね！」

ミシュリーヌ様はそう言って元気に戻って来て、またソファーに座った。連れて来たもう一人の方はそのまま放置だ。

それでいいんですか……？　というか、この方ってやっぱり、地球の神様？

「ミシュリーヌ！　突然一緒に来なさいって連れて来たと思ったら説明もなしとはどういうことなの！？　あなたはいつもそうなのよ。もっと事前に連絡をしなさい！」

もう一人の人物は、十代後半ぐらいに見える黒のロングヘアがとても綺麗な女の子だ。瞳も黒なので俺にとっては親しみやすい。服装はかなり懐かしい着物を着ている。黒を基調として、豪華な花柄が白や金であしらわれている感じだ。

うん、凄く大和撫子って言葉が似合う。今はかなり怒ってるけど……まあ、全てはミシュリーヌ様のせいだな。

「こ、これから説明する予定だったのよ。ちょっとその拳を緩めて

！　しょ、紹介するわね、レオンよ」

ミシュリーヌ様は俺を盾にするように引っ張って、自分は後ろに隠れた。ちょっとミシュリーヌ様、酷いです！

「ミシュリーヌ様、自分が前に出てくださいよ」

「シェリフィーは怖いのよ……」

「だからって俺を盾にしないでください！」

そうしてミシュリーヌ様と押し問答をしていると、地球の神様らしい人が近づいて来た。そして俺の顔をジロジロと見てくる。うぅ……怖いんだけど。俺まで怒られたりしないよね？

そう思って緊張して体を固くしていると、突然地球の神様に肩をぐいっと掴まれた。そして引き寄せられてぎゅっと抱きしめられる。

「……やっと会えたわ。大丈夫？　生活は辛くないかしら？　ミシュリーヌの馬鹿のせいで平民に転生したんでしょう？　ミシュリーヌの言葉を信じて安易に魂を渡した私が悪かったの。本当にごめんなさい。ここまで馬鹿だとは私も思ってなかったのよね……」

「ちょっとシェリフィー、私が馬鹿って言い過ぎよ！」

「その通りでしょう？」

「あれは、不可抗力のミスなのよ」

「それでもあなたの神力が潤沢ならば、こんなに長い間苦しませることもなかったでしょう！」

「……そ、それは、確かに、そうだけど…」

ミシュリーヌ様は反論の術を失ったらしい。この二人はシェリフィー様の方が強いのかもしれないな。ポンコツな妹としっかり者のお姉ちゃんって感じだろうか？

シェリフィー様の方が圧倒的に頼りになりそう。

「あなたの今の名前はレオンって言ったかしら？　私はシェリフィーよ。地球の神をしているわ」

「は、初めまして、レオンです」

「これからは私もあなたを助けるから、何かあったらいつでも言ってね。ミシュリーヌは役に立たないでしょう？」

「まぁ……」

俺はその言葉になんて返したら正解なのかわからず、かなり曖昧な返答になってしまった。確かに役に立たなそうな雰囲気しかないけど。

するとそのタイミングでちょうどミシュリーヌ様が口を開く。

「シェリフィー、レオンが日本での最期を知りたいって言うからあなたを呼んだのよ」

「そうなの？　レオン、日本での最期を知りたいのかしら？」

「は、はい。もし知ることができるならば……」

「あなたの最期ははっきりと覚えているわ。あなたは工場の爆発に巻き込まれたのよ」

「工場の、爆発……？」

最後の記憶になんとなく爆発の記憶があったのはそういうことだったのか。それにしても、爆発に巻き込まれるなんて運がない死に方だな……

「ええ、あの爆発で死んだのは全部で三十七人だったわね。その中であなたが一番の即死だったから、死ぬ時の記憶がほとんどないだろうと思って転生させる魂に選んだの。多分何処かを歩いていたら気づかないうちに死んでたって感じじゃないかしら？」

「確かに、その程度のことしか覚えてません」
「良かったわ。死ぬ時の記憶があるとそれに一生苦しむ人もいるのよ」

もう日本でのことは過去の思い出になっている俺からしたら、苦しまずに死ねたのなら良かったのかなって感情しか湧いてこない。それだけこの世界に適応したんだな。

「教えてくださってありがとうございます。少し気になっていたので知ることができて良かったです。あの、俺を転生させる魂に選んでくださってありがとうございます。俺はこの世界に来れて良かったと思っています」
「そうなの？　そう思ってくれてたのなら良かったわ。ミシュリーヌに失敗したって聞いた時は、本当に申し訳ないことをしたと思ったのよ」
「いえ、今の家族の一員になれて良かったです」
「それなら良かった。私も安心よ」

そうしてシェリフィー様が微笑んでくれたところで、皆でやっとソファーに座ることになった。

「じゃあ話の続きだけど、どこまで話したんだったかしら？」
「俺を転生させた目的の話です」
「そうだったわね。あなたに魔物の森への対処してもらうために転生させて、それが失敗したところまで話したのよね」
「はい。そのあとはどうして今まで連絡がなかったのですか？」
「それには深いわけがあるのよ……」

それからのミシュリーヌ様の説明をまとめると、神力という神様が力を振うのに必要なものが足りなくて連絡が取れなかったらしい。

さらに神力を増やそうにも信仰もされていなくて、全然貯まらなかったんだとか。
そこで女神像を光らせてたんだそうだ。あの話にこんな裏話があったなんてね……

「レオン、あとミシュリーヌは少ない神力を使ってクレープを作り出してたから、より神力が貯まるのが遅くなったのよ」

シェリフィー様が口を挟んでそう教えてくれた。そういえば、最初にクレープとかスイーツの話をたくさんしてたよな。和菓子が食べたいとかチョコも欲しいとか色々言われた気がする。下界にあるものはミシュリーヌ様が神力で作り出せるってことなんだろうか。
それならこれ以上作らない方がいい気がしてきた……でも、俺も食べたいんだよね。

「シェ、シェリフィー、それは内緒でしょ！」
「全部話さなきゃダメに決まってるじゃない」
「で、でも最近は、ちゃんと我慢して神力を貯めて人間の王に神託したのよ！　ずっと我慢してたんだから！」
「私が地球からスイーツをあげてたから我慢できたんでしょう？」

え、地球からスイーツとか持って来られるの！？　それ俺も食べたい！

「それはそうだけど……」
「あら、もう必要ないのかしら。じゃあもう持ってきてあげないわよ」
「それはダメ！　……シェリフィーごめんなさい。これからもスイーツのお土産をお願いします」

ミシュリーヌ様はスイーツをもらえないと言われたら、途端に下手に出ている。現金な女神様だな……

「しょうがないわね」
「シェリフィーありがとう！　やっぱり大好きよ！」
「はいはい。私もよ」
「レオン、私はちゃんと我慢したのよ！」

ミシュリーヌ様はシェリフィー様には褒めてもらえないと思ったのか、俺に話を振ってきた。

「それは……ありがとうございます？」
「もっと褒めてくれてもいいのよ！」
「……遠慮しておきます」
「なんでよ！」

いや、そもそもミシュリーヌ様が使いすぎた神力を回復させるために我慢してたんだから、自業自得というか……

「話が進まないので、続きをお願いします」
「……褒めてくれてもいいのに」

ミシュリーヌ様はそう呟いていじけたような顔を見せる。面倒くさい女神様だな！

252、魔物の森への対処法

「まあいいわ。それでこれからレオンにやってもらいたいことなんだけど、まずは魔物の森の穴を塞いで欲しいの」

おおっ、やっと本題に戻った。

「先程聞いた、別の世界と繋がっている穴ですか？」

そんなの俺が塞げるのだろうか？　どうやって塞げばいいのか見当もつかない。バリアとかじゃ魔力が切れたらダメだし、物理的に岩とか？

「そうよ。レオンがここに来る時に手にした本があるでしょう？あれと一緒に下界に落とした杖があるから、その杖を使って穴を塞いでほしいのよ」

「杖をどうやって使うのですか？」

「基本的には何もする必要はないわ。杖を穴の中に放り込めば繋がっていた空間が分断されるようにしてあるから」

そんなに凄いものを作り出せるのか！　初めてミシュリーヌ様が神様な気がしてる。

「凄い杖があるのですね。ただ、それをミシュリーヌ様が神界からできなかったのですか？」

そんなに高性能な杖が作れるなら神界から穴を塞ぐこともできそうだ。それに、杖を穴に直接落とすとかもできなかったのかな？

「穴が大きすぎて直接でなければ塞げなかったのよ。私は下界に降りることはできないから直接空間に干渉できないし、そこで下界の人間に頼もうと思ったの」
「では、穴に直接杖を落とせなかったのですか？」
「神物を下界に落とすのに正確な座標は指定できないわ。そうね、誤差数十キロって感じかしら？」

それは……落として穴に直接入ったら奇跡だな。下界の人間に頼んだ方が確実だろう。

「そうなのですね。事情は理解できました」
「じゃあ、頼めるかしら！　もうあなただけが頼りなのよ。……私の世界をお願いします」

ミシュリーヌ様は急に真剣な表情になって俺に頭を下げる。こういうところを見せられるとついつい助けたくなっちゃうんだよな……
まあ、自分の住む世界は助けたいから断るなんてことはないんだけど。

「もちろん、自分の住む世界は守りたいですから全力を尽くします」
「本当！？　レオンありがとう！」

ミシュリーヌ様は顔を上げて凄く嬉しそうな笑顔を浮かべた。うん、こういう素直なところはいい女神様だよね。俺に頭を下げるところを見ても、神様だっていうプライドとかもあんまりなさそうだし。
ただやっぱりポンコツすぎるけど。

「それで、その穴は魔物の森のどこにあるのでしょうか？」

「それは私が分かるわ。かなり奥の方にあるのよね、もう海に近いところよ」
「奥とはどの程度の距離なのですか？　そもそも魔物の森とはどれほど広いのか知らないのですが……。私は大陸の大きさなどもよくわかっていないのです」
公爵家で見せてもらった地図には、どこから魔物の森が広がっているのかは描かれていたけど、どこまでが魔物の森なのかは描かれてなかったんだよね。
「確かに下界から知るのは難しいわね」
ミシュリーヌ様はそう言って、一枚の巨大な紙を出現させた。
「これがこの世界の地図よ。この辺り一体がラースラシア王国ね。そしてこの辺からは全て魔物の森よ」
マジか……魔物の森、大陸の半分ぐらいを埋め尽くしてるじゃん！　想像以上だよ。流石に広すぎる。
「あの、もしかして既にいくつもの国が、魔物の森に飲み込まれてるんですか？」
「うーん、多分そんなことはないわよ。魔物の森があそこまで勢いを増したのは最近だから。前はもっと緩やかに広がっていたのよね。その頃は大国があるわけでもなくて小さな国と呼べるかどうかって集団がたくさんある程度だったから、魔物の森で国がなくなるというよりは、戦争で国がなくなりその混乱に乗じて魔物の森が広がったってところかしら」
「……そうなのですね。あの、ミシュリーヌ様はその時代に魔物の森の広がりに気づかなかったのですか？　穴はだんだんと大きくな

った、それから大きすぎて塞げなかったと仰りましたよね？　それならばまだ小さかった時に塞げば良かったのでは？」

俺がそう聞くと、ミシュリーヌ様は気まずそうに少しだけ視線を逸らした。これはまたやらかしてるな……

「それは、あれよ。神は全世界を隈なく観察しているわけじゃないし、その頃はあなたの前の使徒の子に集中してたのよ……」

「レオン、尤もらしいことを言ってるけど実際は神力が足りなかったのよ。あの頃のミシュリーヌは使徒の子に言われるがまま神力を消費してたから、下界を覗く神力も残ってなかったんじゃないかしら？」

ミシュリーヌ様はいつでも神力不足なんですね……もう呆れる。後先考えずに使っていつでも金欠の人と完全に同じだよ。何度も言うけど残念すぎる。

「ミシュリーヌ様、神力も計画的に使わないとすぐになくなってしまうんですよ。ちゃんとどの程度あるのかを確認して、これから必要になる分を少し多めに残して使うんです」

俺は小学生の子供にお金の使い方を教える気持ちでそう言った。

「それは、分かってるのよ。でも私も無駄にしてるわけじゃないのよ？　その時に必要なものにしか使ってないのになくなるんだから、仕方がないのよ……」

「でも有限なものはちゃんとやりくりしないとダメですよ。後で大変になるのは自分自身なんですから」

「まあ、そうなのよね……」

うん、ミシュリーヌ様は小学生だと思って接した方がいいかもしれないな。これからこの世界のためにもミシュリーヌ様の再教育をやろうかな。

「レオンは素晴らしいわ。その通りなの。私がずっと昔から言ってることよ」

やっぱりシェリフィー様も言ってたのか。シェリフィー様とは仲良くなれそうだ。

「うぅ……二人でそんなに責めなくたっていいじゃない」
「あなたが責められるような事をするからでしょう！」
「私だって、頑張ってるのよ！　今回もちゃんと我慢したんだから……」

ミシュリーヌ様はかなり落ち込んだ様子で俯いた。瞳には涙が浮かんでいて、それが溢れないように必死に堪えている様子だ。
なんか、ちょっとだけだよ、ちょっとだけ可哀想に思えてしまう……。俺、ミシュリーヌ様の教育係向いてないかも。

「そんな顔をしたってダメよ」
「シェリフィー酷い！」
「あら、そんなこと言っていいのかしら？　今度こっちに遊びに来たとき、漫画を貸してあげないわよ？」
「それはダメよ！　お願いだから続きを読ませて！　すっごく気になってるの。この前やっと二人がデートして、これから観覧車に乗るのよ！」

ミシュリーヌ様、少女漫画読んでるんですね……というか地球の神界が羨ましすぎる。漫画まであるとか最高でしかない。俺も地球

の神界に行きたい……

「じゃあ、これからは神力を無駄にしない？」
「しないわ」
「スイーツも自制する？　ちゃんと一日に食べる個数を決めること。分かった？」
「う……それは……」
「分かった？」
「わ、分かったわ」

シェリフィー様強いです。流石です。もう一生付いていきます！

「レオン、ミシュリーヌはこんなポンコツだけどよろしくね。悪い子じゃないのよ。本当に申し訳ないのだけど……私もできる限り手助けするわ」
「はい。これからもよろしくお願いいたします」
「もちろんよ」

うん、シェリフィー様がいれば大丈夫な気がしてきた。さすが地球の神様だ。
俺はシェリフィー様と顔を見合わせて、お互いに笑い合った。あなたも苦労するわね。シェリフィー様こそ。視線でそんな会話をしてわかり合う。

「……なんであなた達がそんなにわかり合ってるのよ。レオンは私の世界の人間よ？」
「それは分かってるわよ。でも同じ地球出身だもの。分かり合えるところがあるのよ」
「なんかそれは悔しいわ……」

ミシュリーヌ様はなんだか納得のいかない顔をしている。俺たちがわかり合ってる原因はミシュリーヌ様ですからね。そう答えを教えてあげようかとも思ったけど、それはやめることにした。今まで散々振り回されてきたんだから少しの意地悪は許されるだろう。

「それではミシュリーヌ様、話を戻しても良いでしょうか？」

俺がミシュリーヌ様にそう言うと、ミシュリーヌ様はまだ納得がいかない顔をしながらも頷いてくれた。

「……ええ、いいわよ」

「ありがとうございます。では、この広い魔物の森のどこに穴があるのですか？」

「うーん、そうね。この辺りよ」

そうしてミシュリーヌ様が指差したのは、大陸の東の果てのやや北寄りの部分だった。

……これはマジで遠いな。

魔物の森が大陸のほぼ半分を覆ってるってことは、魔物の森の最奥に辿り着くには馬車で二週間以上かかるってことだ。

その距離をあの魔物の森で戦いながら進むとなると……スムーズに行っても九十日。この世界での一ヶ月ぐらいはかかるだろう。

うわぁ～、結構厳しくないか。俺一人で行くのは無理かもしれない。アイテムボックスで食料は大丈夫だと思うけど、バリアをそんなに長い時間張り続けることは不可能だ。それに途中で魔力がなくなった場合は悲惨すぎる結末になるよね。

どうしよう……国を挙げての人海戦術で穴まで一本の道を作るように進んでいくとか？　そっちの方がまだ実現可能かな？

253、神界

「ミシュリーヌ様、この場所へは当然自力で辿り着かなければいけないのですよね？」
「そうよ」
「俺をこの穴の場所に落としてもらうことはできませんか？」
「それは無理ね」
「では、俺の魔力量を無限にしてもらうことはできますか？」
「それもできないわ。ただあなたの魔力量は使えば使うほど増えるから、無限に近づくことはできるわよ」

無限に近づくのじゃあダメなんだよな。やっぱり穴まで辿り着くのが厳しそうだ。辿り着きさえすれば、杖を投げ込めば良いんだから簡単だけど……
でも、どうにか頑張るしかないよね。

「……わかりました。かなり難しいとは思いますが、どうにか頑張ってみます」
「ええ、頼んだわ。私もできることは手助けするから」
「ありがとうございます」

まずは杖を手に入れるところからかな。本と一緒に落としたってことは宝物庫にあるだろうか。ミシュリーヌ様は知ってるのかな？
「あの、杖のありかってご存知ですか？」
「ええ、本と同じところに置いてあったはずよ」
じゃあ宝物庫にあるってことか。それなら良かった。

「分かりました。では頑張ります」
「頼んだわ。じゃあもう一つのやってほしいことの話に移っても良いかしら？　レオンにはこの世界の文化を日本にできる限り近づけてほしいの！」
「日本に、ですか？」

この世界って日本に似てるところも多いなと思ってたけど、もしかして故意にやってたの？

「ええ、実は私は日本が大好きなのよ！　だから食事も文化もできる限り日本に近づけてほしいの」

やっぱりそうなのか。……でも下界が日本文化になったからって、ミシュリーヌ様にメリットある？

「それをすることでミシュリーヌ様へのメリットってあるんですか？　日本風の生活を眺めたいとか……？」
「違うわよ。私は神力を使って何でも作り出せるけど、基本的には下界にあるものしか作り出せないの。だから私が日本の和菓子を食べたいと思っても今は無理。そこで下界を発展させてほしいのよ！」

ああ、やっぱりそういう仕組みになってたのか。だからさっきも和菓子をとかチョコをとか言ってたんだな。

「そういう仕組みになってるんですね」
「そうよ。だからレオンには感謝しているわ。クレープもケーキも最高！」
「それは良かったです」
「でもまだまだよ。最終目標は日本を超えることなんだから！」

「はぁ……」

何その意味わかんない最終目標。そもそも何を以て日本を超えることになるのかわからないし。

でもまあ、この世界が日本より文化的に発展していないっていうのは正しいだろう。それを発展させるのは俺もやりたかったことだし、協力するのもやぶさかではない。

でもそもそもなんだけど、何で今の世界はあんなに中途半端な感じなんだろうか？　そんなに日本が好きなら最初からそういう国を作れば良かったんじゃないの？

「ミシュリーヌ様、何故今の国は日本みたいになっていないのですか？　途中から変えるよりも最初からの方が楽だと思うのですが」

「……それは、前の使徒だった子が中世ヨーロッパ風が好きなの！　とか言って日本風にしてくれなかったからよ」

ミシュリーヌ様は少し遠いを目をしてそう教えてくれた。そうだ、前の使徒様のことも聞きたかったんだよね。

「前の使徒様って、俺と同じように日本からの転生者だったんですか？」

「そうよ。でもあの子は漫画やアニメが大好きで、中世ヨーロッパ風な世界で恋をするゲームだったかしら？　そんなのにハマってて、この世界を日本みたいにしてくれなかったのよ。しかもあの子、食に一切興味がなかったし」

「あの、ちょっと待ってください。使徒様がいたのって何百年も前だって話ですけど、日本でも何百年も前ではないんですか……？」

日本で何百年も前って言ったら、江戸時代とかじゃないの？　ゲ

ームとか漫画とかないよね？

「違うわ。地球とこの世界では時間の流れが違うのよ。だからあの子がこっちに来たのは、日本時間ではレオンと数年しか変わらないはずよ」

「そうなんですね……」

世界間は時間の流れ方まで違うのか。俺ってさっきから凄い話聞いてるよな……なんか、色々と話を聞きすぎて訳分かんなくなってきた。

とりあえず、今まで聞いたことを整理しようかな。

まず俺は魔物の森をなんとかするために、それからこの世界に日本文化を広めるために使徒としてこの世界に転生した。しかし転生の際にミシュリーヌ様が失敗し、連絡を取るのが今になってしまった。

また、魔物の森はミシュリーヌ様が作ったもう一つの世界からやって来ている。

それから前の使徒様は日本からの転生者で、食に興味がなかったので食の発展はほとんどしてないし、中世ヨーロッパに憧れていたからこの世界は今のような状況になっている。

こんな感じかな……？

待って、今いるここがどこなのかとか、根本のところを説明してもらってないじゃん。まずはそこを聞こう。

「ミシュリーヌ様、色々と質問をしても良いですか？」

「もちろんよ」

「まず、ここはどこですか？」

俺がそう聞くと、ミシュリーヌ様より先にシェリフィー様が反応した。

「ミシュリーヌ、その説明もまだしてなかったの！？」

「わ、忘れてたわ。今からするところだったのよ。レオン、ここは神界よ。そうね、その世界の神がいるところって認識でいいわ」

「分かりました。では、俺はなぜここにいることができるのでしょうか？」

「あなたの意識だけを神界に呼び寄せてるからよ。私が神力で作った体にその意識を定着させているの」

……うん、ちょっとよくわからない。でもここを詳しく聞いてたらキリがないな。とりあえず次行こう。

「では、今俺の本来の体はどうなっているのですか？」

「下界のこと？　それなら時を止めているから大丈夫よ」

「そんなことができるのですね……」

「神なんだから当然でしょ！」

残念でポンコツそうな女神様だけど、やっぱり神様は神様なんだよね。

「ミシュリーヌ、偉そうに言ってるけど最近まで神力がなくて何もできなかったでしょ？」

俺が少しだけミシュリーヌ様を見直していたら、シェリフィー様がそう突っ込んだ。

「そ、それは言わない約束でしょ！」
「大体レオンに感謝しないといけないんじゃなかったの？　レオンのおかげで神力を貯める方法を見つけたんでしょう？」
「そうだったわ！　レオン、アイテムボックスの魔法具を作ってその中身を時空間に放置したでしょう？　あれをこれからももっとやりなさい！」
「どういうことですか……？」
「時空間に放置されたものは神力となって私の所に還って来るのよ！　あれは凄いわ。あれがあればいくらでもスイーツが食べられる！　この前は放置されたものが少なかったから少しの神力にしかならなかったけど、もっとたくさんのものを放置してくれれば凄いわよ！」

いや、それは凄いのかもしれないけど、使い道はスイーツなんかい！
はぁ、やっぱり残念だ。でもミシュリーヌ様の神力が増えればこの世界が助かる可能性も上がりそうだし、そこはちゃんと協力しようかな。ただスイーツに全て消費されないかが心配だ。そこは要監視かな。

「ではとりあえず、魔物を倒したら時空間に放置することにしますね」
「ええ、頼むわね！　それでこれからの連絡方法なんだけど、あなたに本を渡したでしょう？　あれは神物だからあれに触れば私といつでも話せるわ」
「今みたいに神界に来なくても話せるのですか？」
「そうよ。使徒のあなたなら、ほとんど神力も消費せずに話せるから」
「ではこれからはいつでも連絡していいのですか？」
「もちろんよ。私を頼りになさい！」

うん、めちゃくちゃ不安だけど神様は神様だからね。何かあったら助けてもらおう。

「よろしくお願いします」

「こちらこそよろしくね！　レオン、色々と頼んだわよ。この世界はあなたにかかってるの」

「もちろん全力を尽くします。自分が住む世界や大切な人達を守りたいですから。あっ、なので日本の文化については後回しにしますね」

「え、なんでよ！？　私の和菓子は！？」

「あの、そもそも和菓子の作り方なんて知らないですよ？」

「な、な、何ですってぇ！」

そんなに驚くことかな？　和菓子の作り方なんて知ってる人の方が少ないよ。日本の文化っていうのも、どういうものをイメージしてるのかによって変わるよね。

２５４、使徒としての今後

「日本の文化ってどういうものを想定してるんですか？」
「漫画とかアニメよ！　他にも各種娯楽用品や遊園地、テレビとか。あと着物や畳なんかも好きよ。和楽器も良い音色よね」
「それを、俺に再現しろと……？」
「そうよ？」

そんなの、無理に決まってるから！！　どれだけ俺が万能人間だと思ってるんだよ。ケーキ一つとっても自分じゃ再現できなくて、ヨアンに丸投げした俺だよ？

「絶対に無理です」
「なんでよ！」
「だって機械の仕組みなんて知らないですし、漫画も書けないしアニメも作れないです。楽器なんてもってのほかだし、着物とか畳も原料すら知りません。あ、でも畳はい草だっけ……？　それにしても、それがどういう形のものなのか知りません」
「な、な、なんてことなの！？」
「俺だってできれば日本文化を再現したいんですよ。というか、それを全て再現できる人なんていないと思います」
「わ、わ、私の日本が……」

ミシュリーヌ様はかなりショックを受けたみたいで、もう俺の声が届いていないようだ。目に見えて落ち込んでいる。
でも、できないものはできないよね。というか俺よりもミシュリーヌ様がなんとかできないの？

「ミシュリーヌ様がなんとかできないんですか？」
「人間の営みにまで手を出せないわよ。うぅ……私の第二の日本創作計画が……」

そんな動機でこの世界作ったんかい！　ミシュリーヌ様は本格的に泣き出して、相当落ち込んでいる様子だ。

「シェリフィー様はどうにかできないのですか？　例えばなんですけど、スマホを用意するとか、ネットに繋がれるようにするとか」

俺がかなりの期待を込めてシェリフィー様にそう聞くと、シェリフィー様には首を横に振られた。やっぱりダメなのか……

「それは流石にできないわ。――でも、地球から本を持ってくるぐらいならできるわね。それでも下界には無理で神界までだけど」
「え……それ本当ですか！？　シェリフィー様に俺が欲しい本を頼めば、それを地球からここに持って来ていただけるのですか！」
「そうね、物理的には可能よ。ただ神力が結構必要なのだけど……」
「シェリフィー様、そこをなんとか！」

俺は思いっきり頭を下げてシェリフィー様にお願いした。だって本を持って来てもらえたら、今までわからなかったレシピとか全部わかるじゃん！　味噌と醤油もできるかも！

「そうね……レオンには悪いことをしたと思っているし、ミシュリーヌのことでこれからも苦労をかけるし、そのぐらいならしても良いかしら？」
「……本当ですか！」
「ええ、ただ制限はつけさせてもらうわ。あまりやりすぎるのは良くないのよ」

「全然大丈夫です。持ってきていただけるだけで本当にありがたいです」

やばい、めちゃくちゃ嬉しい。嬉しすぎて踊りたいぐらい嬉しい。

「じゃあ、月に一冊にしようかしら？」

「月に一冊ですね。その月ってこっちの世界のひと月ですか？　日本のですか？」

こっちの世界はひと月が九十日で、日本では約三十日で全然違う。

「こっちのよ。だから一年に四冊までね」

こっちのかぁ～。でも一年に四冊もあれば十分だよね。まず何を持って来てもらおうかな。考えてるだけでテンション上がる！

「わかりました。シェリフィー様、本当にありがとうございます。ミシュリーヌ様、これで日本のものが再現できますよ！」

俺は未だに落ち込んでいて、話を聞いていない様子のミシュリーヌ様の肩を揺すってそう言った。するとミシュリーヌ様は面白いぐらいに表情を明るくしていく。

「それ、ほんとう？」

「はい。シェリフィー様が月に一冊、日本の本を持って来てくださるみたいなんです。俺が欲しかったものが色々作れます！」

「シェリフィーいいの？　こっちに持ってくるのは大変だから地球で読みなさいっていつも私に言うのに……。食べてしまうものはいいけど残るもの、特に知識が書かれてるものは神力の消費が激しいんじゃないの？」

「そうだけど、今回は特別よ」
「……本当？」
「ええ」

やっぱり別の世界に持っていくのは神界間だけでも大変なんだ。それなのに持って来てくれるシェリフィー様、マジで神。いや、本当に神様なんだけど。

「シェリフィー、大好き！」

ミシュリーヌ様はシェリフィー様のところに飛んでいき、そのままの勢いでぎゅっと抱きついた。

俺も抱きつきたいぐらいだ。本当に嬉しい。ミシュリーヌ様に負けず劣らず大喜びしている。

だってこれで味噌と醤油が作れるかもしれないんだ。チョコの作り方だって調べられるし、ヨアンにたくさんのレシピを提供できる。考えただけで楽しくなって来るよ！

「ミシュリーヌ様、本はこの神界までしか持って来られないみたいなので、また俺をここに呼んでくれますか？　ここにはいつでも来れるのでしょうか？」
「神力があれば基本的にはいつでも呼べるわよ。ただ連続しては無理だから……数日に一度ね」
「分かりました。ではとりあえずアイテムボックスを使って神力を増やしておきますね。くれぐれも、くれぐれもスイーツに使いすぎないでくださいね！　俺をここに呼ぶための神力ですから」
「も、もちろんよ」

ミシュリーヌ様はそう肯定したけれど目が泳いでいる。

「シェリフィー様、大変申し訳ないのですがミシュリーヌ様の見張りをお願いしても良いでしょうか？」
「ええ、定期的に見に来るわ」
「ありがとうございます」
「何よそれ、少しは私を信頼しなさい！」
「信頼したいのは山々なのですが、信頼できる情報がないといいますか……。ミシュリーヌ様は見張りなしで神力が潤沢にある状態で、スイーツに使わずに貯めて置けるのですか？」
「そ、それは、ちょっと難しいかもしれないわ……。でも、一つで我慢するわよ」
「本当ですか？　後一つが永遠に続くことになりませんか？」
「そ、そんなことは、あるかもしれないわね……」

あるんかい！　まあでも自覚があるだけいいんだろうな。

「ではシェリフィー様、お願いいたします」
「任せておきなさい」

シェリフィー様、めちゃくちゃ頼りになる。でも頼りすぎないで俺もミシュリーヌ様に定期的に連絡しよう。それで神力を使いすぎてないか確認した方がいいよね。

……これからやるべきことが多すぎるな。色々話しすぎて頭が混乱してきたし。何かメモ帳とか欲しい。

「ミシュリーヌ様、色々と話したので頭を整理したいのですが、メモ帳などを貸していただけませんか？」

ここではアイテムボックスも魔法も何も使えないから、ミシュリーヌ様に頼むしかないのだ。

「メモ帳を貸すことはできるけど、それを下界に持って行くのは無理よ」

「そうなのですか？」

「ええ、神界のものを下界に落とすのには色々と制限があるのよね」

「……そうなのですね。そういえば、神の遺物ってミシュリーヌ様が落とされたものなんですか？」

「そうよ。私達は神物って呼んでるけど」

やっぱりそうなのか。神の遺物はあんまり増やせないってことなんだな。

「では、一度下界に戻していただくことはできますか？　話したことを忘れないうちに書き留めたいので」

「別に良いけど他に聞きたいことはないの？　さっきも言ったけど、一度下界に戻したら数日は呼べないわよ」

「そうですが、連絡はいつでも可能なのですよね？」

「もちろん」

「ならば問題ありません」

「……確かに、それもそうね。じゃあ下界に戻すわよ。準備はいい？」

ミシュリーヌ様はそう言って、俺の方に手のひらをかざした。俺はその様子を見て、ひとつ言い忘れていたことを思い出す。

「あっ、ちょっと待ってください」

「何かしら？」

「あの、アレクシス様とリシャール様、この国の王様と宰相様なん

ですけど、その二人にレオンは使徒様だけど無理に敬う必要はないって言ってもらえませんか？」

多分戻ったらめちゃくちゃ敬われたままだろう。俺が言っても使徒様にそんな態度はできませんって言われそうだし、ミシュリーヌ様に言ってもらうのが一番だよね。

あの二人に敬語で話されるのは、ちょっと寂しいし。

「それはいいけど、神力が足りないわよ。神の領域外に神託をするにはかなりの神力が必要なの」

「神の領域外ってなんですか……？」

「神の領域っていうのは、下界風に言うと神の遺物の中のことよ。具体的には王都の礼拝堂の中ね。その中なら神力も少なく神託できるわ」

「そんな仕組みなのですね。では二人を王都の礼拝堂に連れて行けば神託していただけますか？」

「ええ、それなら神託してあげるわ」

「ありがとうございます」

よしっ、これで大丈夫かな。そう思って俺が下界に戻してもらおうと口を開く寸前、今度はシェリフィー様が口を開いた。

「レオン、戻る前にどんな本が欲しいか言ってくれればすぐに用意しておくわよ？」

「本当ですか！？　ではお願いします」

そんなにすぐ用意してくれるなんて、シェリフィー様最高です。

最初は何がいいかな。ここはやっぱりスイーツ系のレシピ集だろうか。でも醤油と味噌も欲しいんだよね……

あっ、でもそうだ、この世界ってなぜか米がないんだった。

「ミシュリーヌ様、この世界ってなんで米がないんですか？」

「ああ、米は前の世界で魔物が大繁殖して人間を滅ぼす原因になったから無くしたのよ」

「……なんでそんなことしたんですか！？　米は日本に必須ですよ！！」

「そ、そんなにかしら……」

「ミシュリーヌ様、もしかして日本好きはにわかですか？」

「そ、そんなことないわよ！　確かにそうよね、米は欲しいわね。……一応この世界にもあるのよ。魔物の森に」

「魔物の森に。それって稲も魔植物ってことですか？」

「ええ。ただ稲は土魔法と水魔法が使えて、何も手を加えなくても大繁殖するって感じだったはず。危ない能力はなかったはずだわ。それで魔物達の主食になってるのよ」

そうなんだ。それなら逆に良いのかもしれない。うまく育てれば簡単に大量の米が手に入るってことだ。

でも魔物の森だとまだ先の話になるかなぁ。そうなると味噌と醤油はもう少し後でもいいか。

「教えてくださってありがとうございます。ではシェリフィー様、最初の一冊はスイーツの基本レシピ集でお願いします」

最初はこれを頼んで、その中の材料でわからないものや手に入らないものがあったら、その材料をどうやって作るかの本を貰えばいいだろう。

「スイーツの基本レシピ集ね。探しておくわ」

「よろしくお願いします。ではミシュリーヌ様、下界へお願いしま

す」
「分かったわ。じゃあいつでも連絡するのよ」
「はい！　これからよろしくお願いします」
そうして二人に挨拶をしたところで、また目の前が白い光で何も見えなくなり、その光が収まると俺は王宮の宝物庫に戻っていた。

255、レオンの今後

「レオン様、レオン様？　いかがいたしましたか？」

あっ……戻ったんだ。

目の前には俺に本を手渡したばかりのリシャール様がいる。本当に時間が止まってたんだな……、なんだか変な感じだ。

「今、ミシュリーヌ様に会いに行っていました」

俺はなんて言ったらいいのか分からず、とりあえずそう口にした。するとアレクシス様とリシャール様は俺の言葉を完全に信じてくれたようで、かなり驚いている様子だ。使徒様の信頼度が凄い。

「な、なんと！　そのようなことができるのですか！？」

「ミシュリーヌ様にお会いになられたのですね！」

「はい。あっ、ミシュリーヌ様にこの本と一緒に杖があると聞いたのですが、ここにあるのでしょうか？」

「ございます。リシャール」

アレクシス様がそう言うと、リシャール様が奥から杖を手に戻ってきてくれる。そして跪いて俺に掲げた。

「こちらでございます」

「ありがとうございます」

俺は恐る恐るリシャール様から杖を受け取った。

杖は予想よりかなり軽い。パッと見たところは何の変哲もない普

通の杖だ。縦にすると俺の胸あたりまでの大きさで、材質は多分木かな？　豪華でおしゃれな杖だけど、特に何か力がありそうとかではない。
本当にこれで合っているのだろうか？　……ミシュリーヌ様に聞いてみようかな。

「あの、ミシュリーヌ様と連絡が取れるのか試してみても良いでしょうか？」

杖がこれで良いのかも確かめたいし、本当に連絡が取れるのかも試してみたい。さっきのは現実だと思うけど、こうして下界に戻ってくると夢だったんじゃないかと思ってしまう。

「もちろん何でもなさって下さい」
「ありがとうございます。では試してみますね」

そうして俺は神の遺物である本をしっかりと抱え直し、ミシュリーヌ様に呼びかけた。

「ミシュリーヌ様、聞こえますか？」
『レオン？　聞こえてるわよ～』

すると本当にミシュリーヌ様の声が聞こえて来る。これ凄い、めちゃくちゃ便利じゃん。

「本当に話せるんですね、凄いです」
『私の力なんだから当たり前じゃない。それよりも近くの二人に跪かれてるわね』
「……あれ？　ミシュリーヌ様って下界の様子を見れるんですか？」
『もちろんどこでも見れるわよ』

「じゃあ、覗きとかし放題なんじゃ……」
『失礼ね！　そんなことしないわよ！』
「ちょ、ちょっとした冗談じゃないですか……」

神様って本当になんでもありなんだな。俺が今までバレないように教会を避けてた意味、マジでなかった。

『もう、本当に失礼なんだから。それで何の用なの？』
「すみません、一つ聞きたいことがあって。この杖が神物で合っていますか？」

俺はミシュリーヌ様が上から下界を見ているのかなと思い、杖を上に掲げた。

『ええ、それで合っているわ。なくさないようにレオンのアイテムボックスにでも入れておきなさい』
「そうなのですね。良かったです！」

これで穴を塞ぐための杖はゲットだ。あとはその穴に辿り着けばいいだけだな。

『じゃあ早くその二人を神の領域に連れて来なさいね。私は神託したらケーキを楽しむんだから。シェリフィーがとりあえず一つなら良いって言ってくれたのよ！』

ミシュリーヌ様は凄く嬉しそうにそう言った。うん、ミシュリーヌ様は期待を裏切らないね。

「それは良かったですね。じゃあ急ぎます」
『頼んだわよ』

ミシュリーヌ様ってスイーツのこととなると周りが見えなくなるし、新しいスイーツを開発するために必要なんだって言えば何でもやってくれそうだよね……

俺が悪い使徒だったらどうするつもりだったんだか。

そんなことを考えつつ、俺はアレクシス様とリシャール様の方に向き直る。

「アレクシス様、リシャール様。ミシュリーヌ様と話すことができました」

「このように気軽に話ができるとは……素晴らしいです。やはりレオン様は使徒様なのですね」

「はい、私は使徒みたいです。今まで否定していたのにすみません……」

俺は今まで散々否定してきたので、二人に頭を下げて謝った。すると二人は途端に慌て始める。

「レオン様、私たちに頭を下げるなどおやめ下さい！　何か理由があるのでしょうし、私達は気にしていませんので」

「ありがとうございます。……あの、お二人にもいつも通りに話していただけたらと思うのですが」

俺はミシュリーヌ様に神託をしてもらう前に、とりあえず自分でそう言ってみた。

「いえ、使徒様に対してそのようなことはできません」

しかしすぐにそう断られてしまう。

やっぱりダメかぁ。もうミシュリーヌ様に神託をしてもらうしかないな。そしてその後に色々話し合いをしよう。こんなに敬われてたら話しづらすぎる。

「分かりました。アレクシス様、こちらの杖と本をいただいても良いでしょうか？　これから必要になるのですが」
「もちろんでございます。どうぞご自由にお持ち下さい」
「ありがとうございます。では遠慮なくいただきます。それからこの後なのですが、まずは私と一緒に中心街の教会へ向かっていただけませんか？　そこでミシュリーヌ様からお二人に対して神託があるそうです」
「なっ……それは本当ですか！？」

そんなに驚くことなんだね……

「はい。出来るだけ早くとのことです」
「かしこまりました。今すぐに手配いたします」

リシャール様はその言葉を聞いた途端に立ち上がり、すぐに手配をするために部屋を出て行った。
あのミシュリーヌ様だからそんなに急いだりする必要はないんだけど、俺はそれを言うのはやめておいた。ミシュリーヌ様はなんかんだ神様だし、ミシュリーヌ様が敬われている方が今後俺がやり易いし。

もしミシュリーヌ様の正体がバレて信仰心がなくなったら、俺もかなり生きづらくなるだろう。今後一番気をつけないといけないところはそこかも。

そうしてリシャール様がすぐに教会へ向かう段取りを整えてくれて、俺達は最速で王都の礼拝堂に辿り着いた。すでに人払いもされているようで中には誰もいない。

「ミシュリーヌ様、着きましたよ～」

俺は礼拝堂の中に入るとまた本を手に持ち、ミシュリーヌ様に話しかけた。

『むぐっ、ちょ、ちょっと、待ちなさい、もぐっ……』

はぁ～ミシュリーヌ様、絶対我慢できずに何か食べてるよ。この後食べるって言ってたケーキかな。

「ミシュリーヌ様、何か食べてますよね？」

『……さっきも言ったでしょ。ケーキよ』

「神託をしてからケーキを楽しむんじゃなかったのですか？」

『……こ、これはあれよ。つまみ食い……、味見よ！』

いやつまみ食いって言ったし、それに手作りな訳でもないケーキに味見なんか必要ないから。

やっぱりミシュリーヌ様には我慢を覚えてもらわないとダメだな。別にそのケーキを今食べるのに問題はないんだけど、我慢できないってところに問題がある。

「ミシュリーヌ様、神力を全てスイーツに使うのならば神力は増やしてあげませんからね」

『なっ、そ、それはダメよ！　無駄遣いしないから、お願いします……』

「ちゃんと自制してくださいね」

『分かったわ……だから、神力を増やしてね。お願いよ』

涙目で俺に神力を乞うミシュリーヌ様の様子が思い浮かぶな……それでいいのか女神様。

それに何故か俺が神様を説教して、神様が俺に神力を乞うっていう意味不明な構図になってるし。

まあ、もう気にしない方がいいな。神様に対するイメージなんて俺が勝手に思ってた先入観だし、ミシュリーヌ様みたいな神様もいるんだろう。

なんだかんだミシュリーヌ様って、この世界を助けようとしてるから良い神様だと思うし。

「分かりました。ではミシュリーヌ様、神託をお願いします」

『分かったわ！』

256、中心街の教会

『――おほんっ、えー、聞こえてるかしら？』
「ミ、ミシュリーヌ様！」
「またお声が聞けるとは。光栄でございます！」

二人は感激な様子でその場に跪き深く頭を下げた。神様ってこんなに敬うべき対象なんだな……

二人の様子を見てるとちょっと不安になってくるかも。俺大丈夫かな？　ミシュリーヌ様に対して軽く接しすぎかな？
うーん、でもミシュリーヌ様のあの様子だとどうしても敬う気になれないんだよね……
というか違うな、まず神様だっていう実感があまりないのかもしれない。あんなに普通な感じの女の子達が神様なんて、実際に会っても信じきれない。現実感がないんだよね。確かに凄い力は持ってるんだけど……

『久しぶりね』
「わ、私達のことを覚えてくださっているのですか！？」
『ええ、この国の王とその側近でしょう？　レオンとこれからも関わりそうだし覚えてるわよ』
「なんと……」

アレクシス様とリシャール様は瞳に涙を浮かべるほど感激している。
なんか、そんなに信仰してくれてるのにこんな神様でごめんなさいって気持ちになるな……

『貴方達にはレオンが使徒だってことは伝えたわよね？　その補足があるの。レオンは敬われたりするのが好きじゃないみたいだから絶対に敬う必要はないわ。レオンの好きなようにさせてあげてちょうだい』

「かしこまりました」

おおっ、ミシュリーヌ様が言うとこんなにすんなり通るのか。やっぱり使徒様よりもミシュリーヌ様の方が上なんだな。

『それだけを伝えたかったの。レオンを頼むわよ』

「はっ！」

『レオン、他に何か伝えるべきことはあるかしら？』

「そうですね……、とりあえずは大丈夫です。また何かあったら連絡します」

『分かったわ。じゃあまたね』

そうしてミシュリーヌ様の声は聞こえなくなった。ミシュリーヌ様って神託でも結構軽い感じなんだね。

今度厳かな話し方の本とかをシェリフィー様にお願いして、勉強してもらおうかな。それでここに敵対勢力の貴族を連れて来て神託を聞かせれば、かなり意見を変える人もいるんじゃないだろうか。

それにはあの話し方じゃダメだろう。

「アレクシス様、リシャール様。先程ミシュリーヌ様も仰っていた通り私は使徒なのですが、今まで通りに接していただけないでしょうか？　お二人に敬われるのは少し寂しいのです……」

そうして俺が本音を打ち明けると、二人は徐に立ち上がって口を

開いた。

「本当に、良いのだろうか……？」

「はい。そちらの方が嬉しいです。私は使徒ですが、レオンであることに変わりはないので」

「……確かにそうだな。レオン、では今まで通りに接させてもらう」

「はい！　ありがとうございます！」

「だが公の場などでは敬う必要がある時もあるだろう。そういう時は申し訳ないが……」

公の場でって、俺の方が立場が上になるの？

「あの、俺の方が立場が上になるのですか？」

「そうだな。ただそこはレオンが選ぶことができる。望めば王位も手に入るぞ？」

アレクシス様は少しだけ揶揄うような口調でそう言った。俺がその選択肢を選ばないことをわかっているのだろう。

「王位は謹んで辞退させていただきたく……」

「ははっ、そう言うと思っていた。ではどうしたい？　レオンが使徒であるとお披露目することは確定だが、その先の身分は選べる。まあ、王位がいらないとなると選択肢はあまりないが……」

やっぱり使徒のお披露目はやるんだね。まあ複数属性が使えることもバレてるし、もうお披露目するしかないだろう。というか俺もお披露目してほしい。

ちゃんと使徒だってお披露目したら、これからは魔法を隠す必要もないし楽で良いだろう。それに家族を大々的にも守れるし良いことづくめだ。

というか当たり前だよね、今まで俺が使徒じゃないからこそ色々と大変だったんだから。改めて使徒で良かった。もっと早く言って欲しかったけど。

「ちなみにどのような選択肢があるのでしょうか？」
「そうだな。公爵家を新しく作りレオンが公爵になるか、公爵家の上に使徒様のための新たな爵位を作りレオンがその爵位を名乗ることにするか。そのどちらかだな」

どっちも凄いな……というか俺ってまだ十五歳になってないけど貴族の当主になれるの？　確か成人しないとなれないんだよね。

「アレクシス様、成人していなくても爵位を頂けるのですか？」
「ああ、そこは使徒様の特別扱いでどうにでもなる」

そうなのか。凄いな使徒様……

「凄いですね」
「使徒様はこの国の始祖で、ミシュリーヌ様と使徒様は世の混乱を収めてくださった方々だからな。いくらでも特別扱いができる。私たちが絶対に敬わなければならない方々なのに、今の貴族たちときたら……」

アレクシス様はそう言って黒い笑顔を浮かべた。
うん、確かに人間は忘れる生き物だから何百年も経ってれば仕方がないのかもしれないけど、それにしても酷いよね。もう少し敬意を持っても良いと思う。人じゃなくて神様なんだし。
それに貴族達は国に属してるんだから、私利私欲のためじゃなくて国のために動けって感じ。

というかこの世界ってなんでこんなに信仰心が下がったんだろう。ミシュリーヌ様から音沙汰がなかったとはいえ、信仰ってそんなに早くなくなるものなのかな？

……まあ、いろんな原因が組み合わさってなんだろうけど。これからは信仰も増やしていきたいな。

「それでレオン、公爵と新たな爵位どちらが良い？」

「あの、もう少し下の爵位とかはダメなのですか？」

「……それは国が混乱するので難しい。レオンは使徒様というだけで国で一番偉い存在のようなものだ。公爵ならばまだ許容できるがそれ以下は無理だな。できれば新しい爵位を作って、王家に忠誠を誓ってくれるとありがたい」

やっぱりそうなのか。この国で生きていくならその辺のルールは守った方が良いよね。もう少し下の爵位で気軽に生きていきたい気もするけど、使徒という立場でそれは無理なんだろう。そこは諦めて頑張ろう。

「では新しい爵位をお願いいたします。王家に忠誠も誓います」

「本当か！？　レオン、本当にありがとう。これでこの国の悩みはほとんど解決したようなものだ」

「陛下、これで魔物の森への対策へ集中できますね」

「国の悩みとは、内戦のことですか？」

「ああ、敵対勢力はミシュリーヌ様や使徒様の教えを積極的に破っている者達だろう？　またミシュリーヌ様の神託があり使徒様が現れたとなれば、一気に勢いを失うだろう」

そういえばこの世界って、使徒様の教えによって貴族は平民を守るべきって決められてたんだよね。その教えをミシュリーヌ様が考

えたとは思えないし、多分前の使徒様が考えたんだろう。
　そうなると今度は俺が考えても良いことになるのかな。うーん、それならとりあえずは前の教えの継続かな。そして時間に余裕ができたら問題があるところは少しずつ変えていきたい。

「では内戦は防げますね」
「ああ、もしそれでも謀反を企てる者がいたならば、その時は全力で潰すまでだ。数が少なければどうとでもなる」

　そう言ったアレクシス様の顔は、ちょっとだけ微笑んでいたけど目が全く笑っていなくてかなり怖かった……
　アレクシス様は優しくていい人だけど、やっぱり一国の王だよね。俺に王は務まらないってことはアレクシス様を見ていればわかる。

「ではレオン、日程はこれから細かく決めるが、近いうちに王宮に貴族を集めて使徒としてのお披露目をしたい。そしてその時に叙爵をして、レオンに王家への忠誠を宣言してもらいたい」
「かしこまりました」
「レオンの屋敷も準備しなければいけないな。それから服も最上級のものを作らなくては。爵位は何がいいだろうか？」

　アレクシス様はなんだか楽しそうだ。今まで目の上のたんこぶだった貴族達を排除できそうで嬉しいんだろう。この国って綱渡りのような危険な状態だったからね。

「陛下、大公家はいかがでしょうか？　使徒様が存命だった時代には公爵家の上に大公家があったはずです」
「ふむ、確かにそうだったな。……それは良いかもしれん。ではレオンには大公家の爵位を与えよう。家名はどうする？　レオンが決めても良いが」

大公家か。なんか凄いのか凄くないのかももうよくわからない。公爵家の上って現実感がないよ。

「どのようなものでも良いのですか？」

「ああ、今ある家名と被らなければ問題はない」

どうしようかな。家名って突然言われても結構困る。でもこれからずっと使うんだから大切だよね。

……そういえば、俺が貴族になったら商会はどうなるんだろう？

「あの、私の商会はどうなるのでしょうか？」

「そういえば、レオンは商会を持っていたのだったな。商会の機能は全て爵位で賄えるので、商会はなくなり大公家に引き継がれることになる」

「そうなのですね。では商会の名前を家名にするのはどうでしょうか？　商会名はジャパーニスというのですが」

「ふむ、確かにそれは悪くないな。そうなるとレオンの名前はレオン・ジャパーニスになるが良いか？」

レオン・ジャパーニス。うん、悪くない気がする。ちょっと日本感も残るし。

「はい。問題ありません」

「ではそれで決まりだな」

そうして王都の教会でこれからの予定について少し話し合い、この日はもう遅い時間になってしまったので教会からそのまま公爵家の自分の部屋に帰った。

そして部屋に辿り着くと、そのまま疲れて眠ってしまった。

257、使徒としての役割

そして次の日の朝。俺は朝早くからまた王宮に向かっている。
昨日公爵家に帰るとロニーとリュシアンはまだ起きていたので、事の次第は大まかには伝えてある。二人は俺が使徒だということに驚いていたけれど、今まで通りに接してくれたので本当にありがたかった。
やっぱり突然敬われるのって悲しいよね。

王宮に到着し陛下の執務室に通されると、そこにはアレクシス様とリシャール様の他にステファンとマルティーヌもいた。

「皆様おはようございます」
「ああレオン、よく来たな。まず座ってくれ」
「かしこまりました」

俺はアレクシス様に示された場所、マルティーヌの向かいの席に腰を下ろした。

「そうだ、レオンは私達に使徒として敬う必要はないと言っただろう？」
「はい」
「私達に対しても特に敬う必要はないからな。まあ、公の場では敬語ぐらい使ってもらうことになるだろうが……」
「かしこまりました。ありがとうございます。ですがこれが癖ですので、このままでご容赦いただければと。慣れて来たら少しずつ崩れるかもしれませんが……」
「ああ、無理にとは言わない。そうだ、ステファンとマルティーヌ

ともいつも通りに話して良いぞ。いつもは敬語など使っていないのだろう？」
「……知っておられたのですか？」
「昨日二人にレオンが使徒様だと話した時に聞いたのだ。二人と話す時は公の場以外ではあまり気にする必要はない。従者やメイド、護衛も気にしなくて良い」

それはめちゃくちゃ楽になるな。使徒になって一番良いことかも。

「レオン君、リュシアンも同じだからな。リュシアンには公の場であっても敬語は必要ない」
「かしこまりました。……ステファン、マルティーヌ、これからは周りの目を気にしなくても良いね」

俺が二人にそう話しかけると、二人は嬉しそうに笑いかけてくれた。

「これからはもっとたくさん話せるわね。やっと周りを気にしなくても良くなったわ！」
「ああ、これからは楽になるな。それにしてもレオン、レオンが使徒様だったとは驚いた」
「私もよ。レオンは使徒様じゃないと言っていたでしょう？」

だよね。俺が一番驚いたかも。

「そうなんだよ。俺も昨日知ったんだ」
「え……、そうだったの？」
「うん。ミシュリーヌ様の事情で伝えるのが遅くなったんだって」
「そのようなこともあるのだな……」

事情って言っても神力を無駄遣いしすぎて足りなかっただけなんだけどね。あとは転生時のミス。
これはずっと秘密かな……
「レオンは使徒様であることを隠しているのではなかったのか！？」
俺たちの会話にアレクシス様がかなり驚いた様子で割り込んできた。そんなに驚くこと……？
「えっと……、はい。私も昨日ミシュリーヌ様に会って初めて知ったのです」
「まさか……」
「陛下、私たちの話し合いはあまり意味がなかったと言うことですね……」
アレクシス様とリシャール様は疲れたような表情でそう言って顔を見合わせ、同じタイミングで大きく溜息を吐いた。
「あの、私のことをどのように思われていたのですか……？」
「何か理由があって、使徒様であるという身分を明かせないのだろうと考えていたのだ。――まあしかし、結局レオンは使徒様だったのだから、私達は間違えていなかったということだな」
「確かにそうですね。レオン君が使徒様だと見破った我々は、良い仕事をしていたということですね」
今度は二人ともお互いを労うような表情で顔を見合わせている。お二人とも、色々大変なんだな……
「レオン、ミシュリーヌ様とはどのような話をしたの？」
「基本的には俺が使徒として力を与えられた理由と、今後やってほ

しいことについてかな」
「理由は何だったのかしら？」
「魔物の森の問題を解決することと、この世界の文化を発展させてほしいんだって」
「魔物の森の問題が解決できるのか！？」

そう勢いよく話に割って入ってきたのは、今度はリシャール様だ。二人と昨日話したのは俺の今後の待遇についてだけだったから、使徒としての役割とかは全く話してないんだよね。
今ちゃんと話しておこう。かなり重要な話だ。

「相当難易度は高いですが、国を挙げて取り組めば解決できる可能性はあります」
「本当か！？　……それは、本当に良かった」

アレクシス様はポツリとそう声を漏らして、ソファーに深く沈み込んだ。魔物の森の問題はかなりのストレスになっていたのかもな。
でもそうだよね。あと十数年で人間が住む場所はなくなりますって言われたら、それは途方に暮れるだろう。
解決法もわからない、さらにこんな情勢にも関わらず自分本位なことしか考えていない馬鹿な貴族もたくさんいる。その中でアレクシス様はこの国をまとめてたんだ。生半可な努力じゃなかっただろう。

「アレクシス様、私も最大限問題解決のために力を振るいますので、協力よろしくお願いいたします」
「ああ、もちろんだ。こちらこそよろしく頼む」
「はい」

そうしてアレクシス様と頭を下げあって、顔を見合わせてお互い

に笑い合った。これから頑張ろう。

「レオン君、実際にどんな方法なのか聞いても良いか？」

「もちろんです。昨日頂いたこの杖なのですが、この杖が必要みたいなんです」

俺はそう言いながらアイテムボックスから杖を取り出した。

「魔物の森の奥に別の世界と繋がっている時空の穴があるのですが、その穴に杖を放り込むとその穴が閉じ、魔物の森がこの世界に流入してくることを止められるらしいです。よってまずは穴を塞ぐこと。そしてそれから魔植物と魔物を根絶やしにすること。この順で対処していけば魔物の森の問題は解決できます」

俺がそう言うと、皆はポカンとしたような表情で首を傾げた。……あれ、全然通じてない？

「レオン、ちょっと待ってくれ。まずその時空の穴？　とはなんだ？」

そっか……俺は別の世界とか言われてもすんなりと理解できたけど、普通は理解できないよね。この世界にはアニメとかもないからその概念すらないんだろう。

なんて説明すればいいんだろう……別の神様が管理する世界とかが分かりやすいかな？　いや、魔物の森の世界はミシュリーヌ様が管理してるのか。

でもそれを素直に言ったらまたややこしくなるよね。だってこの国を滅ぼそうとしているものが、この世界の神からもたらされてる

って……うん、ここは誤魔化そう。
そしてミシュリーヌ様のせいってことは黙っておこう。俺の立場も危うくなる気がするし。

「……説明が難しいのですが、この世界はミシュリーヌ様が治められていますよね？」
「そういうことになるのか……？」
「はい。しかしミシュリーヌ様とは別の神様が治める世界も沢山あるのです。そしてそれら全てを別の世界と表現します」

俺がそう言うと、アレクシス様はかなり驚いたような表情を浮かべた。

「神様とは……ミシュリーヌ様だけではないのか？」
「はい。この世界にはミシュリーヌ様だけですが、別の世界のことも考えればもっといるのだろうと思います」

今はミシュリーヌ様とシェリフィー様しか知らないけど、多分もっと他の世界もあって、それぞれに神様もいるのだろう。ちょっと神界の仕組みも気になるよね。

「では、その別の世界というのがあるのだとして、それはどこにあるのだ……？」
「私にもわかりません。私達が普通なら絶対に行けない場所にあります。しかし今回はある特殊な事情で、その別の世界とこの世界の一部が繋がってしまったようなのです。それが魔物の森の奥にある穴で、その穴から魔物の森の植物や魔物は出現しています。要するに、魔物の森は本来別の世界のものなのです」

特殊な事情って言ったけど、ただミシュリーヌ様が大ぽかをやら

かしただけなんだけどね。
「俄には信じられない話だな……。別の世界だと言われても、想像ができない……」
まあそうだよね。俺も自分が転生してなかったらそこまで素直に信じられなかったかもしれない。
「そうですよね。とりあえず今はその事実だけを分かっていれば良いと思います」
「……確かにそうだな。ではまず、とにかくその別の世界と繋がっている穴を塞がなければいけないんだな」
「はい。そしてそれから魔物の森を駆逐していくのが良いかと思います」
「分かった。ではその穴とはどこにあるんだ？　そこまで辿り着けるのだろうか？」
「それがかなり難しいのです。この大陸の地図はありますか？」
「ああ、あるぞ」
そう言ってリシャール様が机に広げた地図は、やはり魔物の森の大きさはわからない地図だった。

258、時空の歪み

「この地図は、魔物の森の正確な大きさがわからないのでこのような表記になっているのですよね？」
「そうだ。奥まで向かうこともできないので、誰もどこまで広いのかは知らない」
「やはりそうなのですね。実はミシュリーヌ様に正確な広さを教えていただいたのですが、魔物の森は現在人が住んでいる地域全域と同じ程度の広さがあるのです。……そうですね、この地図と同じ大きさの紙を横に付け足して、この辺りまでです」

俺がそう言って魔物の森の広さを示すと、皆は唖然とした表情で俺が指差したところを見つめている。

「それは、本当なのか……」
「はい。そして別の世界と繋がる穴、そうですね、時空の歪みとでも言いましょうか。時空の歪みはこの辺りです」
「時空の歪み、時間と空間が歪んでいるということか？」
「はい。そう呼ぶことにしても良いでしょうか？」
「ああ、では私たちもそう呼ぼう。……それにしても、かなり遠いな」
「そうなのです。ここまで辿り着かなければいけないのですが、流石に私でも難しくてどうすれば良いか悩んでいます」

これから時間をかけて魔力を増やしたとしても、魔物の森の奥がどれほど危険かもわからないし、やっぱり俺が一人で挑むのは無謀だろう。

「どうすれば、良いのだろうか……」
「一つ考えられるのは、時間と人とお金を注ぎ込んでの人海戦術です。魔物の森の外縁部に騎士の方々が道を作っていました。あのような道を作りながら時空の歪みまで進んでいく、今のところはそれが一番かなと思います」
「確かに道を作れば補給も撤退も容易になるのか。だが、その道を維持するにはどうするのだ？」
「はい、そこが問題なのです。土魔法を使って地面を固めて壁を作って進んでいけばかなり維持できるとは思うのですが、それでも定期的に見回って魔植物を倒して道を維持する必要があります。道が途絶えてしまっては元も子もないですから」
「それは、ほぼ不可能ではないか？　距離が長すぎる」
「やはり、そうですよね……」

やっぱり流石に無謀な話だよね……
他に何かいい方法ないかな。陸から突っ切るのがダメなら、海から回るとか……？

「あの、海から回るのはどうでしょうか？」
「船、ということか？」
「はい。魔物の森を突っ切るよりは楽かなと思ったのですが。漁なども行われていますよね？」
「それはもちろん行われているが、陸が見える近場での漁のみだ。長距離を船で進むのは、難しいのではないか？」

この世界ってどこまで造船技術が発達しているんだろう。それにもよるな。というか、この世界ってこの大陸以外に大陸はないのかな？　ミシュリーヌ様の地図もこの大陸だけの地図だったし……
流石に他に大陸がないってことはあり得ないと思うんだけど、海上貿易とかは聞いたこともない。

「あの、海の向こうには何があるのでしょうか？」
「海の向こう？　とは、どういうことだ？」
「別の大陸などがあるのではと思ったのですが……」
「そんなものがあるのか……？」

アレクシス様は心底驚いたような顔をしている。えっと、この世界ってそんなに進んでなかったの！？

「あの、海をずっと進んでいくとどこに辿り着くと思われていますか？」
「海は、ずっと続いているものだろう？」

これあれだ、俺達が宇宙はずっと続いているんでしょ？　っていうのと同じ感じだ。海の向こうに冒険に出た人とかいなかったのかな。いや、いたけど帰ってきた人がまだいない時代なのかな……

やばい、気になり始めたらどうしても気になる。この世界って他に大陸がないんだろうか？　ミシュリーヌ様に聞いちゃおうかな。

「あの、ちょっとすみません。ミシュリーヌ様と少しだけ話してもいいですか？」
「ああ、もちろん構わない」
「ありがとうございます」

俺は皆にそう断ってから本をアイテムボックスから取り出した。そしてミシュリーヌ様に呼びかける。

「ミシュリーヌ様、ちょっと聞きたいことがあるんですけど。ミシュリーヌ様？　ミシュリーヌ様～」

『むぐっ、もがもがっ……もぐっもぐ……ごくん。――レオンね？』

ミシュリーヌ様、何事もなかったかのように返事したけど全部聞こえてましたよ！　絶対何か食べてましたね！

「ミシュリーヌ様はいつでも何かを食べているんですね……」

『そ、そんなことないわよ！　レオンのタイミングが悪いだけよ。今回だってちゃんとシェリフィーが持ってきてくれた日本のスイーツなんだから！』

「そうなんですね……」

『そ、そうよ！　それで何の用かしら』

「ああ、そうでした。一つ聞きたいことがあって。この世界ってこの大陸以外にも大陸がありますよね？」

『ないわよ』

「やっぱりありま……え！？　ないんですか！？」

マジか。だってこの大陸そこまで大きくないよね？　日本をひと回り大きくしてちょっと太らせた感じだよね？

「この世界って結構小さいんですか……？」

『そうなのよ。前の世界を大きくしすぎて神力が足りなくて、最低限しか作れてないのよね。地球は大きくて羨ましいわ……』

「そうなんですね……」

また原因は神力不足なんですね！

「では私が大陸を船で出発してひたすらまっすぐに進めば、大陸の裏側に辿り着くのですか？」

『まあ、そうなるわね。実際はズレると思うけど』

それだと船なんて発達しないのかもしれないな。海に出る目的がないんだから。
はぁ～、そう考えると海からも無謀か……どうしよう。陸からも海からもダメなら、空とか？
「ミシュリーヌ様、俺は空を飛べますか？」
『飛べないわ。それ前の使徒の子にも言われたけど、重力系の魔法は大変なのよ。空間魔法だって頼み込まれて何とか神力を工面したんだから！　もう新しい魔法なんて作れないわよ。神力も足りないし』
空もダメか……じゃあもう全部ダメじゃん！　どうしよう。やっぱり人海戦術で陸から行く？
でも流石に無謀すぎる。俺の魔力が無限なら話は簡単なんだけど……
……あれ、ちょっと待って。今凄いこと思いついたかも。バリアの魔法具って作れるよね？　バリアの魔法具を持っていけば全部解決じゃない！？
魔力がなくなったらバリアの魔法具を起動してその中にいて、回復したらまた進めばいいんだ。それならいくらでも進めるし魔力切れの心配もないじゃん！
何で今まで思いつかなかったんだろ……
「ミシュリーヌ様、色々と教えてくださってありがとうございました！　今いい方法を思いついたので一旦切りますね」
『……そうなの？　まあ何でもいいけど、とにかく頼んだわよ』
「はい！」

俺はそうしてミシュリーヌ様との話を終えて、四人に思い付いた計画を話した。

「アレクシス様、リシャール様、良い方法を思いつきました！　俺が一人で魔物の森に入って、バリアの魔法具を持っていけば完璧です。魔力がなくなれば魔法具を起動して休めばいいですし、夜も魔法具の中で眠れますし！」

「確かに……理論上は可能なのか……？」

「はい！」

これで時空の歪みを塞ぐことができれば、あとは魔物の森を何とか駆逐していくだけだ。でもまあ、それもかなり大変だけどね。穴を塞いだからといって魔物の森の進行が止まるわけでもないし、魔植物や魔物が滅びるわけでもない。そこは人海戦術だな。

「時空の歪みは私が塞ぎに行きますので、その後に魔物の森を駆逐する時は、アレクシス様にもご協力をお願いいたします。そこは人海戦術が一番だと思うので。時空の歪みを塞いだからといって、魔物の森の広がりが止まるわけでも魔植物や魔物が滅びるわけでもありませんから」

「それは凄くありがたい提案なのだが、良いのだろうか？　レオン一人に頼ってしまって……」

「そうよ。レオン、それはダメ。一人で魔物の森に入るなんて危なすぎるわ。夜の見張りもできないし、なによりも話し相手がいないのは精神的に辛いわよ」

マルティーヌが厳しい表情でそう意見を言った。

「でも、他の方を連れていくわけには行かないし、俺一人で行くのが一番効率的なんだ」

「ダメよ。レオンが一人で行くのなら私も一緒に行くわ」
「それはダメ！　絶対にダメだよ」
「ではレオンも一人で行ってはダメよ。確かに弱い者が付いていくのは足手まといかもしれないけれど、少数精鋭の仲間ならば役に立つはずよ。……私がそのメンバーに入れたら良かったけど、私では足手纏いなことはわかるから無理に連れていけとは言わないわ。でもこの国の騎士には頼りになる者もいるはずよ」

確かに、夜はバリアがあるとは言っても見張りをした方が安全性は上がるだろう。それに複数の敵に囲まれた時は仲間がいて助かることもあるかもしれない。

「それは確かにそうだけど、でも、一緒に来ることになる騎士の家族は心配するだろうし……」
「それはレオンも同じよ。たくさんの人達がレオンを心配するわ。もちろん私も。レオンの力が必要なことは分かっているから行くなとは言えないけど……それでも、少しでも安全に帰って来られる可能性を上げてほしいの。……レオン、お願い」

マルティーヌは真剣な表情で、瞳にはうっすらと涙を滲ませて俺にそう懇願した。俺はマルティーヌのその勢いに押され、思わず頷く。

「う、うん。分かったよ……」

やばい、今絶対に顔を緩ませちゃいけない場面だと思うんだけどめちゃくちゃ嬉しい。マルティーヌがそこまで真剣に俺のことを心配してくれるなんて……
確かにマルティーヌの言う通りだ。自分のことも大切にしよう。

「ではアレクシス様、精鋭の騎士数名に同行いただけないでしょうか？」
「ああ、もちろんだ。本人の意思を確認し有能な者を選ぼう」
「ありがとうございます」

一緒に行く人達のことは、絶対に守ろう。そして自分も絶対に生きて帰ろう。俺はそう心に誓った。

259、お披露目と婚約

「ではこれからの予定だが、昨日も言ったがまずはレオンのお披露目を行う。本当は国中の貴族を集めてやりたいのだが、それだと早くても冬の終わりになる。よってとりあえずは二週間後、すぐに駆けつけられる貴族のみを集めてお披露目をする。全貴族へお披露目できるのは冬の終わりに王宮で開かれる、春の月を祝うパーティーだな」

二週間後ってすぐだな。色々と忙しくなりそうだ。

「かしこまりました」

「それからこれは提案なので断ってもらっても構わないのだが……レオン、マルティーヌと婚約しないか？」

……え。え！　え！？

俺はアレクシス様のその言葉が一瞬理解できなかった。マルティーヌと婚約って言ったよね。絶対言ったよね！？

「え、えっと、あの、なんでそんな急に……」

「はははっ、そんなに慌てているレオンは初めて見たな」

「だって……それは慌てます！」

慌てるに決まってるじゃん！　こんな急に言わないで。

「それでどうだ？　レオンは今婚約者がいないが、使徒様だと発表し叙爵すれば、適齢期の娘を端から紹介されることになるだろう。

それを防ぐためにもお披露目で婚約発表までして仕舞えば良いと思ったのだ」

それは……俺からしたらめちゃくちゃ嬉しいんだけど。でもマルティーヌが乗り気じゃなかったら断るべきだよね。俺はマルティーヌに幸せになってほしいし……

「マ、マルティーヌは、どう思ってるの……？」

俺は人生で一番緊張しつつマルティーヌにそう問いかけた。一瞬マルティーヌの顔を見たけど、怖くてすぐに逸らしてしまう。うぅ～、俺のヘタレ。

でも本当にやばい、心臓がバクバクしすぎて死にそうだ。手には汗が凄いし口の中はカラカラだし。もう倒れそう。

そうして実際には数秒、俺からしたら数分にも感じるような時間が過ぎ、マルティーヌが口を開いた。

「私はずっと、レオンの下に嫁げたらいいと思っていたわ」

その言葉を聞いて、俺は思わず勢いよく顔を上げた。すると俺の方を見て綺麗に微笑んでいるマルティーヌがいる。

やばい……心臓がもたない。

「ほんとう……？」

「本当よ。今まではそう思っていながらも、レオンの立場は平民だったから口に出すことは避けていたの」

「全然気づかなかった……」

「もうっ、レオンってそういうところ鈍いわよね」

マルティーヌはそう言って少しだけ拗ねたように唇を尖らせた。

「なんか、ごめん」
「別にいいわよ。それでレオンは？　レオンは私のことをどう思ってるの？」
「それは……」

やばい、改めて口にするのめちゃくちゃ緊張する。でもここで言えなかったら男じゃない！　俺、頑張れ！

「俺は、その、マルティーヌが……、好きです。……俺と婚約してくださいますか？」
「はい！　喜んで」

そう言って笑ったマルティーヌの笑顔は、多分一生忘れられないと思う。
俺はマルティーヌのその笑顔に完全にやられて、しばらくの間ぼーっとマルティーヌを見つめ続けていた。

「――レオン、顔が真っ赤だな」
「っ！！　あ、ス、ステファン」

すると横からステファンに話しかけられる。
そうだよ。ここにはステファンもアレクシス様もリシャール様もいたんだった。完全に視界に入ってなかった。

……めちゃくちゃ恥ずかしいじゃん。穴があったら入りたいとはこのことだ。

「では、二人は婚約するということで話を進めていいか？」

俺が恥ずかしさに悶えていると、アレクシス様が温かい目で俺にそう聞いてくれた。アレクシス様、お願いですからその目はやめて下さい！

「……はい。お願いいたします」
「お父様、お願いいたします」
「ではマルティーヌのドレスも準備しなくてはいけないな。エリザベートに話しておこう。レオンの衣装もエリザベートに任せればいいだろうか？」
「はい。お母様は張り切って準備してくださると思います」
「ではエリザベートに頼んでおく。レオン、また明日王宮に来てくれるか？」
「かしこまりました」

ふぅ～、俺はさっきまでの緊張が少しだけ和らいで、思わず深く息を吐いた。本当に、人生で一番緊張した。

「では二週間後のお披露目ではレオンへの大公位叙爵と婚約発表、それからレオンによる王家支持の宣言を行う。それで良いか？」
「はい。私は衣装以外に準備することはあるでしょうか？」
「そうだな。基本的にはこちらで準備するので特にはない。しかし前日には流れの確認に王宮へ来てもらいたい。あとは作法などだが、レオンは王立学校でも学んでいるので大丈夫だろう。それにレオンの身分は王に次ぐものになるからな、そこまで気をつけることもない」
「かしこまりました。では準備をよろしくお願いいたします。……お披露目までの間は王立学校に通っても良いのでしょうか？　それとも公爵家から出ない方が良いでしょうか？」

あと数日で王立学校の授業がまた始まるのだ。もう俺は通えないのかな。学校生活も結構好きだったんだけど……

「そうだな。少なくともお披露目まで王立学校に通うのは禁止だ。そのあとは好きにしても良いが、もう王立学校を卒業する必要はない。王立学校へは貴族となる資格を得るために通ってもらっていたからな」

「そうなのですね……」

せっかくここまで通ったんだから最後まで通いたかったけど、忙しくなるしもう通えないかな。

魔物の森に行くとなると厳しいだろう。そのために必要な話し合いとか訓練とかもあるだろうし。時空の歪みを塞ぐのはできる限り早い方がいいだろうから……

「では、王立学校へ通うのはここでやめようと思います。魔物の森へ行くのも早い方が良いと思うので。そうなると私は退学ということになるのでしょうか？　できれば卒業したかったのですが……」

「そうか、では授業を受けなくても卒業試験に合格すれば卒業できるようにしておく。それで良いか？」

「本当ですか！　ありがとうございます。よろしくお願いいたします」

ちゃんと卒業できるのは嬉しいな。試験勉強も少しはしておこう。

「分かった。ではそのようにしよう。……では本日話したことをまとめるが、まずは二週間後のお披露目の準備をする。そしてお披露目が終わり次第、レオンは魔物の森へ向かう準備を開始する。それでいいか？」

「はい。大きな流れはそれで大丈夫です」

「分かった。ではお披露目が終わる頃までには同行する騎士を決めておこう」
「よろしくお願いいたします」

これから忙しいだろうけど、頑張ろう。まずはとにかくお披露目だな。危ない貴族とか調べておいた方がいいかもしれない。というか、貴族達の名前覚えないと……

「それからレオン、お披露目後のレオンの立ち位置についてだが、私の側近となってくれないだろうか？」
「側近ですか……？」
「ああ、相談役のような立ち位置で、国政に意見する立場に就任してほしい」

それって、かなり発言力あるやつじゃないの？　そんなのに俺がなっていいのだろうか……

「いいのでしょうか。私で務まるのか少し不安なのですが……」
「大丈夫だ。今までは誰もいなかった役職なので、特にこれといって仕事があるわけではない。ただ相談に乗ってもらいたいだけなのだ。それから、何かこの国を良くする政策などがあれば教えてもらいたい。爵位以外にも王宮での役職があった方が、レオンも色々と動きやすいだろう」

それなら俺でもできるかな。それに実際この国には改善したいことがたくさんあるんだよね。俺の意見を聞いてくれるのならありがたいかも。役職もあったら便利なんだろう。

「では、謹んでお受けいたします」
「ありがとう。ではこれからの予定はそのように。また話し合いな

がら進めよう。……では、本日はこれからお披露目の準備に入るので解散としよう。レオンはまた明日も来てくれ。リシャール、レオンも一緒に執務室に連れて来てくれるか？」
「かしこまりました」

そうして今日は早めに解散となった。俺が帰ってきてから、連日話し合いに参加してることも考慮してくれたんだろう。確かに結構疲れている。

「レオン、また明日話しましょう。今日はしっかり休んでね」
「う、うん。マルティーヌもちゃんと休んでね。ま、また明日」
「ふふっ、レオン緊張してるでしょ」
「だって……」
「私も少し緊張しているわ。でも凄く嬉しいの」
「……俺もだよ。凄く嬉しい」
「ありがとう」
「こちらこそ」

そうして帰り際にマルティーヌと話して、また心臓がバクバクとうるさくなり始めたところで俺は王宮を後にした。

２６０、お披露目の衣装

そして次の日、俺はまた王宮に来ている。
今日は執務室に行くとすぐに俺だけ別の場所に案内された。そこにはエリザベート様とマルティーヌ、それから仕立て屋さんが待機しているらしい。

王宮の使用人に連れられて歩くこと数分、煌びやかなドアの前に着いた。

「レオン様がお越しです」

その声に反応して、部屋の中にいたマルティーヌのメイドさんが部屋のドアを開けてくれる。
中に入るとソファーに腰掛けたエリザベート様とマルティーヌ、それから仕立て屋だろう方達が五人いた。テーブルの上には大量の布と装飾品が置かれていて、紙には沢山のデザインが描かれているようだ。

「レオンいらっしゃい」
「エリザベート様、お久しぶりでございます」
「ええ、これからはもっと頻繁に顔を出すのよ。私達は家族になるのだから」
「かしこまりました。ありがとうございます」
「ではレオンはそこに座りなさい。今日は忙しいわよ！」

エリザベート様はかなり楽しそうな様子だ。俺達の婚約を喜んでくれているようで良かった……

前に凄い衣装をもらった時にも思ったけど、エリザベート様は服とか好きなんだろうな。

「マルティーヌおはよう」

「レオンおはよう。……お母様凄く張り切っているから今日は長くなるわよ」

マルティーヌに小声でそう言われた。

「確かに、エリザベート様楽しそうだね」

「ではあなた達、まずはレオンの採寸をしてちょうだい。レオン、衝立の向こうで採寸してもらいなさい」

エリザベート様は仕立て屋の方にそう告げて、俺にも衝立の向こうに行くように指示した。

「分かりました。ではよろしくお願いします」

「かしこまりました。衝立の向こうまでお願いいたします。私と一緒に一人来なさい」

仕立て屋の五人の方は壮年の男性と女性が一人ずつソファーに座り、他の三人の若い方が後ろで立って待機している。今回口を開いたのはソファーに座っていた男性だ。

多分俺の担当がこの男性で、マルティーヌの担当が座っている女性、そして後ろの三人がその補助って感じだろう。

そうして仕立て屋の方二人とロジェと共に衝立の向こうに行き、丁寧に採寸をしてもらった。

「レオン、マルティーヌのドレスの布だけどどちらがいいかしら？」
採寸から戻るとエリザベート様にすぐそう聞かれる。えっと……この二つの布に何か違いがあるの？
「……どのような違いがあるのでしょうか？」
「もう、これだから殿方はダメなんだわ。アレクシスもいつ聞いてもどちらでも同じだ。どちらでも似合っている。それしか言わないのよ！　レオン、それではダメよ！」
「は、はぁ……」
「いい、まずこちらの布の方が少しだけ目が細かいでしょう？　それからこちらの方が生地は薄いわ。もう一つの布は目が荒いけれど分厚い布ね。あ、それからこっちの布は……」
それから数分間、エリザベート様にここにある布の違いをレクチャーされた。うん、もう何が何だかわからなくなってきたよ。
「それでレオン、どの布がいいと思うかしら？」
はい、よくわかりません。そう答えたい！　でも絶対に選ばないといけない雰囲気だ。
……どうしよう。確か最近の流行は薄くて綺麗な布を何枚も重ねたドレスだったはず。カトリーヌ様がそんな話をしていた気がする。
ということは、目が細かくて薄いやつを選べば大きくは外れないだろう……
「そうですね。こちらの綺麗な薄い布を何枚も重ねるのはどうでしょうか……？」
「まあ、やっぱりレオンもそう思うのね！　私もその布がいいと思

ったのよ」

ふぅ～、正解だったらしい。本当に良かった。

「マルティーヌはどう思うかしら？」

「そうですわね……、そちらの布は上に数枚重ねる形にして、こちらのしっかりとした布をその下に重ねるのはどうでしょうか？　冬は寒いですもの」

「確かにそうね。ではこちらの布を一番下にして、上にこちらの布を数枚重ねる形を基本にしましょう」

やっと布の種類が決まってきたみたいだな。

「では次はデザインを決めましょう。婚約発表ですしマルティーヌはまだ成人していません。露出は極力減らしてスカートはくるぶしまでの長さにしましょう。何か良いデザインはあるかしら？」

「かしこまりました。こちらはいかがでしょうか？」

仕立て屋の女性がすぐさま一枚のデザイン画を取り出して机の上に広げる。

「こちらはハイネックのドレスとなっておりまして、上半身はピッタリとしたスタイルを際立たせるもので、スカート部分はふんわりとボリュームを作り出すデザインです」

「あら、可愛いわね」

「お母様、私こちらのデザインが気に入りましたわ」

「ありがとうございます。ではこちらのデザインを基本として、色々と変更を加えていくのでよろしいでしょうか？」

「ええ、それでお願いするわ」

「かしこまりました。では先ほど皆様が選ばれた布ですが、スカー

ト部分は重ねる枚数を増やしてボリュームを作りだし、逆に上半身は薄い布だけにするのはいかがでしょうか？」
「それはいいけれど、透けているのは相応しくないわ。薄い布では透けないように結局何枚も重ねることになるでしょう？」

確かに俺たちが選んだ薄い布はレースみたいな感じだ。これ一枚だけは流石にダメだろう。

「ではお母様、上半身は薄い布を使わずにこちらのしっかりとした布だけを使うのはいかがでしょうか？」
「それもいいけれど、できればこの綺麗な布を使いたいのよね……。レオンはどう思うかしら？」

エリザベート様、そこで俺に聞くのですか！　そこは仕立て屋に聞いてください……

「私に聞かれましてもドレスには詳しくなく……」
「それでもいいわ。マルティーヌもレオンが考えてくれたら嬉しいと思うわよ」

エリザベート様はそう言って綺麗に微笑んだ。うぅ……俺には荷が重いです。
でも何かしら言わないとだよね。えっと、上半身が透けるのは嫌だけど薄い布を使いたくて、薄い布を重ねるのはスカートと被るから避けたいってことだよね。
「ではそちらのしっかりとした布の上に、薄い布を一枚だけ重ねるのはいかがですか？」

確か日本にもそんな服あったよね。俺からしたらその重ねてる薄

いレース意味なくない？　って思ってたけど、結構着てる人がいたってことは人気のデザインだったのだろう。
確かに透けてるけど素肌は見えないってところが良いのかもしれない。スカートとかでも結構そういうのあったよね。透けない布のミニスカートの上にめっちゃ透けてるレースのロングスカートが重なってるやつとか。
確かにあれは、良かった。

「一枚だけでは貧相ではないかしら？」
「いえ、一枚だけなので下の布が透けて見えるというところがおしゃれだと思ったのです。もちろん素肌が透けて見えるのは避けるべきだと思いますが、下の布が透けて見えるのは良いのではないでしょうか？　上の薄い布を白にして、下の布の色がうっすらと透けて見えるのも良いかなと思いました……」

なんか思わず力説しちゃったけど、これ結構恥ずかしいこと言ってない？　大丈夫かな、セクハラとか言われないかな？　そう思って緊張しながらエリザベート様の答えを待っていると、エリザベート様は瞳を輝かせて興奮気味に口を開いた。

「レオン、それは素晴らしいわ！　今までにないような新しいデザインで、マルティーヌの婚約発表の場にふさわしいわね。レオンの案を採用しましょう。そちらでデザインを描き直せるかしら？」
「もちろんでございます」

なんか、凄く好評みたい……良かったのかな？

「マルティーヌ、エリザベート様が凄く乗り気みたいだけど良かったの？」
「勿論よ。新しいデザインの服なんて嬉しいわ。……もしかして、

レオンの前の世界のデザイン？」

マルティーヌは他の人には聞こえない声量でこそっとそう聞いてきた。

「……そうだよ」

「他にもこの世界にないような服がたくさんあったの？」

「そうだね……かなりあったかな」

「じゃあ、今度その話を聞かせてね。それで私の新しい服を作るわ」

「分かった。思い出しておくよ」

次のシェリフィー様にもらう本、服のデザイン一覧の本にしようかな。俺の記憶は当てにならなすぎる。

「マルティーヌ、袖口のレースはどちらがいいかしら？　それから首元の形だけれど……」

――それから数時間かけて、やっとマルティーヌの服のデザインや色、それから靴と装飾品が決まった。本当に疲れたよ。

マルティーヌのドレスは二週間後に着る物はその期間でできる限りのものを、そして冬の終わりに着る物は時間をかけて布から最高級品を作るらしい。二週間じゃ作り終わらない服って凄いよね。

「ではマルティーヌのドレスはこれで決まりね。次はレオンの礼服よ！」

そうしてそれからまた二時間ほどかけて、俺の礼服も決めた。俺の礼服はなんだかキラキラゴテゴテしていて本当にこれ着るの？ってデザインになった。この世界では身分が上がるほど男性も色々

と着飾るのが普通らしい。

ジャケットは前側は短めなのに後ろは膝より少し長いほどの長さがある。なんでも、身分が上がるほどジャケットの後ろ側の長さが長くなるらしい。

俺は大公となり使徒という立場なので、ほぼ王族の方々と同じような服装で良いそうだ。というか、王族と同じ服装をしてくれると仲の良さが強調できてありがたいらしい。

ジャケットやズボンの色は濃いめの青と決まった。この国の王族は正装では基本的に青を纏うらしく、俺もこれからは青を纏っていくことになるらしい。なのでマルティーヌのドレスも薄い水色だ。

「ではあなた達、二人の衣装を頼んだわよ」

「かしこまりました。仮縫いは数日で終わりますので、終わり次第ご連絡いたします」

「分かったわ」

「では本日はこれで失礼いたします」

そうして仕立て屋の方達は帰っていった。この後お店で早速仕事に取り掛かるんだろう。これからほとんど休みなく作業するんだろうな……

頑張ってください。俺は心の中でそう応援して五人の方を見送った。

「とっても楽しい時間だったわ！」

エリザベート様は、仕立て屋の方達が帰った後にお茶を飲んで休憩している時、満足そうにそう言った。

エリザベート様全然疲れてなさそうなんだよね……凄すぎる。俺は一日中鍛錬してるのより疲れた気がする。

「そうですわね。素敵なものが仕上がりそうで安心しました」

マルティーヌもそう言ってエリザベート様に同意している。マルティーヌも服とか好きなんだね……やっぱり親子だな。

俺はもう、布なんてしばらく見たくないよ……

「マルティーヌ、お披露目が終わって時間が作れたら今度はレオンとお揃いの普段着を作るのはどうかしら？　色を揃えたりデザインを似せたりするのもいいんじゃない？」

「お母様！　それは素敵ですわ」

「装飾品も二人で合わせてもいいわよね」

マジですか……俺は服なんてなんでもいいのでその場にいなくてもいいですよね？

「レオン、またその時は時間を作ってくださいね」

やっぱりそうですよね～、俺も来ないといけませんよね。でもまあ、マルティーヌが楽しそうなところを見てるのは嬉しいからいいんだけど。

「かしこまりました」

「楽しみだわ！」

そう言って満面の笑みを浮かべたマルティーヌを見ていると、今日の疲れは全て吹き飛んだ気がした。うん、また服を作るのも悪くないかも。

そうしてその日は衣装を決めるのに一日を費やした。帰り際にア

レクシス様にまた明日も来てくれって言われたからまた明日も王宮だ。……俺、忙しすぎるよね。

２６１、家族の今後

そして次の日、俺はまた王宮に向かっている。今日の行き先はアレクシス様の執務室だ。

「陛下、おはようございます」
「アレクシス様、おはようございます」

リシャール様と共に執務室に入ると、中にはアレクシス様しかいなかった。すでに人払いがされているようだ。

「レオン、連日来てもらってすまないな」
「いえ、こちらこそ連日私のことに時間を割いてくださり感謝しております。ありがとうございます」
「それは当然のことだ。それで早速今日なんだが、レオンの屋敷をどのように作るかについて話し合いたい。それからレオンの家族の今後の扱いについてもだ」

家族の今後の扱いか……。確かに俺が使徒ってなったら今までのようにはいかないよね。
家族とは公爵家で少しは話しているけど、時間が取れなくてまだ俺が使徒だということは話してないんだ。ちゃんと時間をとって話さないと。というか、皆は使徒様って言われてもよくわからないだろうな……

とりあえず、貴族になるってこととマルティーヌと婚約することは話さないとだな。

「私の家族はどのような扱いになるのでしょうか」
「それが前例がないので難しいのだ。レオンが大公となるのだから平民のままというわけにもいかないが、どのような爵位を与えるのかが問題でな……」

母さん達も爵位を貰うことになるのか。そうなれば生活は一変するよね。できればそれは避けたいんだけど……

「あの、平民のままではダメなのでしょうか？」
「そうだな、対外的にあまり良くない。それに爵位は武器になるんだ。平民のままでいるよりは身の安全が保証されるだろう」
「……確かにそうですね。ではもし爵位を頂くとなれば、どの程度の爵位となるのでしょうか？」
「そこで今悩んでいるのだが、第一候補は使徒様をこの世に生み出した者ということで一代限りの伯爵位を与えるというもの。第二候補は形式的にまずはレオンの父へ大公位を与えその場でレオンに爵位を譲るという形にして、レオンの父を前大公、母を前大公の妻、そして妹をその子供という形にすること」

父さんを形式的に大公にしてすぐ俺に爵位を譲るなんて、そんなことできるんだ。伯爵位と前大公、どっちがいいんだろうか。

「第一候補を選んだ場合にマリーはどうなるのでしょうか？　確か爵位は基本的に成人しなければ得られないのですよね？」

俺は使徒だから特別に成人しなくても爵位をもらえるって話だったはずだ。

「そうだ。その規則を曲げることはできないので、妹君は十五歳になった後で叙爵することになる。そこが第一候補のデメリットだな。

逆に第二候補の場合はすぐに大公の娘という肩書きは得られる。しかし爵位は継げないので成人すれば準貴族となる。第二候補はそちらがデメリットだ。ただそのデメリットはどこかの貴族に嫁げば解決するし、さらに準貴族とはいえ実家の爵位によって扱いは変わるから、そこまで悲観することでもないだろう」

どっちが良いのだろうか、俺には判断がつかない。というかどちらを選んでも、家族皆には貴族になってもらわないといけないんだよね……

そうなれば当然貴族としての立ち居振る舞いが求められるだろう。できる限り公の場には出なくても良いようにしてくれるだろうけど、貴族となったからには完全に表に出ないのは難しいと思う。

そうなったら、皆には今までとは比べ物にならないほど、きつい教育を受けてもらわないといけなくなる。それに食堂を続けられるのかもわからないよね……

「アレクシス様、爵位を頂くのが一番だと分かってはいるのですが、もし私の家族が貴族の身分を得なければ今まで通りに生活することができますか？」

「……いや、それは難しい。レオンが使徒様として公表されれば、レオンの家族には少し調べれば辿り着けるだろう。そうなれば少しでもレオンと縁を結ぼうと、貴族や商人などが群がるのは容易に想像できる。レオンが家族には近づかないようにと言えば表立っては無くなるだろうが、それでも狡猾な方法でレオンの家族に近づく者はいるだろう。やはりそう考えるとレオンの家族に爵位を与え、レオンではなく家族にも力を持ってもらった方が良い」

結局爵位を得なくても今まで通りには過ごせないってことか……

「では、爵位を得たらどうなりますか？」
「まず住む場所がレオンの屋敷となる。ただレオンの家族に王宮で仕事をしろなどとは言わないので、そこは心配いらない。貴族としてやることはレオンの家族として公の場に出ることだけだな。それも機会はあまりないだろう。というよりも極力減らそう」

そうするとやっぱり貴族になった方が良いかな……
でも、できる限り今まで通りの生活を続けさせてあげたい。せめて食堂を継続できないかな。

「アレクシス様、食堂を続けることってできるでしょうか？」
「それは構わないが……、ジャパーニス大公家の店にする必要はある。大公家の店ならば下手なちょっかいを出してくる者はほぼいないだろう」
「本当ですか！」

食堂続けられるのか！　それは良かった、本当に良かった……。母さんも父さんもマリーも皆食堂での仕事が好きだと思うから、それを奪うことにならなくて良かった。
今までのようにはいかないかもしれないけど、ずっと食堂を続けられるように俺も頑張ろう。この機会に食事に手を出してもいいかもしれないな。

「ああ、食堂を続けるという点にしても、貴族となった方が今までと同じ生活を送れるだろう。全く同じようには無理だが……」
「それは仕方がないことです。ありがとうございます！　では家族にも意見を聞いてからお返事をするのでも良いでしょうか？　基本的には貴族になる方向で、第一候補と第二候補のどちらが良いか家族とも話し合いたいと思います」
「分かった。では話し合ったら結果を教えてくれ」

「かしこまりました」

俺的にはマリーも貴族の一員となれる第二候補がいいかなと思ってるけど、そこは皆の意見も聞くべきだろう。貴族の仕組みを理解してもらうのは大変だと思うけど、これからの皆には大切な知識だしちゃんと話そう。

「では次の話だ。レオンの屋敷なんだが、できる限り早く建設を始めたいと思っている」
「私の屋敷は新しく作るのですか？」
「そうだ。場所はもう決めてある。……ここだ」

アレクシス様は王都の詳細地図を取り出し、俺に屋敷の場所を示してくれた。ここって……タウンゼント公爵家にめちゃくちゃ近いじゃん。空いてる土地なんてあったっけ？

「こんな場所に空いている土地がありましたか？」
「ああ、実はここには二つの屋敷があるんだが、今はもう使われていないので取り壊すことにした」
「何の屋敷だったのですか？」
「王位を継がなかった王族が前に住んでいた屋敷だ」
「そのような屋敷があったのですね」

王都にある屋敷は全部誰かが住んでるのかと思ってたけど、意外と無人の屋敷もあったんだな。

「すでに取り壊しの予定は立てているので、それが終わり次第新たな屋敷を建てる。取り壊すのにそうだな……五週間ほどかかるだろう」

「あの……、取り壊さなくてもその屋敷をそのまま使うのでも良いのですが」

王族の人が住んでたならかなり豪華な屋敷だろうし、この世界って貴族や王族の家は石やレンガで作られてるから壊すの大変だろうし、使えるならそのまま使った方が良いよね。

「いや、それはダメだ。まず使徒様の住む屋敷が中古などあり得ない。さらにそれらの屋敷は公爵家と同程度の広さなのだ。使徒様の、大公家の屋敷はもっと広くしなければいけない」

いや、公爵家と同程度とかめちゃくちゃ広いじゃん！　あれより広かったら逆に不便だよ。というか公爵家でも広すぎると思ってるからね。

でも身分の問題で広い家にしないといけないんだろうな……ちょっと面倒くさい。

「あの、どれほどの広さになるのでしょうか？」

「ちょうど隣り合っている屋敷をどちらも取り壊して一つの敷地にするので、公爵家の屋敷の二倍近くだな」

二倍、あの広い屋敷の二倍……

「それは広すぎじゃないですか……？」

「いや、使徒様の屋敷としては普通だろう」

そうか、そうなのか。もう何も言うまい。ありがたく土地をもらおう。

「では、ありがたくそちらの土地をいただきます。ちなみになのですが、土地の代金と取り壊し費用、それから屋敷を建てるお金は合計どれほどになるのでしょうか？」

お金はたくさんあるから足りないってことはないと思うけど、万が一足りなかったらヤバいから聞いておかないと。そう思って何気なく尋ねた言葉に、アレクシス様から思わぬ言葉が返された。

「どれほどかまだ正確にはわからないが、レオンが気にする必要はない。屋敷は王家からの贈り物とするからな」

「……え！？　いや、流石にそれは悪いです！」

絶対めちゃくちゃ高いのに、それを贈り物ってあり得ないよ！

それに俺にもお金を使わせて欲しい。

「いや、レオンが王家への忠誠を誓ってくれるだろう？　そのお礼の意味も込めて、王家から何かしら贈り物をする必要があるのだ」

「ではもう少し安いものにしていただければ……」

「いや、屋敷ぐらいインパクトあるものの方が良いのだ。言い方は悪いが、レオンをこの国に縛るという意味もある」

確かに屋敷にはそういう意味もあるのか……そう言われると断りづらい。ここはありがたく貰っておくべきかな。

「では、ありがたく頂戴いたします」

「そうしてくれるとありがたい。ではどのような作りにするのか決めていこう」

「かしこまりました」

２６２、レオンの屋敷

アレクシス様は執務机の方まで歩いていき、引き出しから何枚かの紙を取り出してテーブルに並べた。

「取り急ぎいくつか屋敷のデザイン画を取り寄せておいた。ここから大まかなデザインだけは決めてしまいたい。詳細はまた後で詰めることになるだろう」

「かしこまりました」

テーブルの上に並べられたデザイン画を見比べてみると、どれも似たようなものであまり違いがわからない。

……ぶっちゃけどれでもいい気がする。

「あの、どのような基準で決めれば良いのかよくわからないのですが……」

俺が困ったようにそう聞くと、リシャール様が助け舟を出してくれた。

「例えばだが、こちらとこちらはかなり作りが違う。こちらは使用人の住む場所も同じ屋敷の中にあるタイプだ。そしてこちらは使用人が別館に住むタイプの作りだ」

へぇ～、この二つはそういう違いだったのか。それだと俺は前者がいいかな。使用人の人たちとも仲良くなりたいし。それに公爵家も前者の作りだよね。そっちの方が慣れていていいだろう。

「その二つのタイプならば前者が良いです」
「分かった。ではこちらとこちらは却下だな。こうして少しずつ減らしていき残ったものを選べば良い」
「ありがとうございます。ではそうして選んでみます」

次は何階建てかで選ぼうかな。デザイン画には三階建てと四階建てのものがある。でも確かこの国の貴族の屋敷って、あんまり階数を高くしない方がいいんだよね。基本的には爵位が上がるほど横にでかくなるのだ。

「こちらの四階建てのものはなぜここにあるのでしょうか？　貴族の屋敷は三階までが多いと思っていたのですが」
「ああ、そちらは最近流行っているデザインらしい。四階というよりも広めの屋根裏部屋があるという感じだな。その屋根裏部屋を使用人の居住空間にするそうだ。ただ流行っているのは下位貴族が多いので、強く気に入ったとかでなければ省いて良い」

それじゃあ省いてもいいかな。わざわざ屋根裏部屋を使用人の部屋にしなくても、俺の屋敷は部屋が余りまくるだろうし。

「ではこちらも省かせていただきます」

あとは……、お風呂の大きさで決めようかな。さっきから一つ気になっているやつがあるんだよね。基本的に貴族の屋敷のお風呂は各部屋に個人用のものがあるだけなんだけど、一つのデザインだけは大浴場のようなものが設置されているのだ。
広い大浴場欲しいよね。絶対に気持ちいいよね。うん、これに決めちゃおうかな。
そんな決め方でいいのかって感じだけど、どんなデザインの屋敷だって住み心地はいいだろう。プロが考えたデザインなんだし。

「ではこのデザインに決めたいと思います」
「こちらだな。ではこのデザインを基本にして詳細な設計図を描いてもらう。何か伝えたい要望などはあるか？」

そうだな……俺の屋敷で重視したいと言ったらやっぱり厨房かな。広くて最新設備の整った厨房が欲しい。あとそれとは別に、俺が個人で使える小さめの厨房も欲しいな。何か作りたい時に厨房に俺が行ったら、多分料理人さん達は迷惑だろう。

それに母さんと父さんも一緒に住むのだから、二人がいつでも使える厨房も欲しい。

「まず、この大きな厨房の他に小さな厨房が二つ欲しいです。私専用と私の家族専用のものにします。あっ、要望は紙に書いておきますね」

アイテムボックスから紙とペンを取り出して要望を書き込んでいく。

「小さめの厨房か。どの場所に欲しいのかも書いておくといい」
「かしこまりました」

厨房の中に、テーブルと椅子が置けて休憩できるぐらいのスペースも欲しいと書いておこう。そこで試食とかもできたら便利だろう。

よしっ、他に何かあるかな。うーん、そうだ。食堂も大きなもの以外に小さめの食堂を作ってもらおう。皆が大きな食堂が落ち着かなかったらそっちで食べてもいいし。

とりあえずこんな感じかな……

「アレクシス様、屋敷については今思いつくのはこの程度です」
「分かった。ではこちらで設計図を描いてもらおう。あとはその後に設計士と相談して詳細を詰めれば良い」
「かしこまりました」
「では屋敷はこれで終わりだが、庭もどのようにしたいか決めてもらえるか？」
「庭、ですか……？」

庭なんてわからないな。公爵家の庭は花が綺麗に咲いていて凄いけど、ちゃんとみたことはない……

「そうだ。例えばだが表の庭よりも屋敷の裏の庭を広くしたいとか、訓練する場所をどこにしたいかなどだ」

なんだ、そういうことか。それなら俺でも考えられる。
裏庭は広く欲しいかもしれない。基本的には裏庭を訓練する場所にしよう。あとは家庭菜園もできたら楽しいだろうから、畑にする場所も取っておこう。マリーと一緒にやったら楽しそうだ。

あとはあれだ、東屋を作ろう！　綺麗な庭を見ながらピクニックみたいな感じで皆も楽しめるだろう。それに、マルティーヌとのお茶会にも良いだろうし……

「レオン、なんだか楽しそうだな」

色々と楽しい妄想を膨らませていたら、アレクシス様が少し揶揄うようにそう言ってきた。

ヤバい、考えてたら楽しくなってきてニヤニヤしてたかも。めちゃくちゃ恥ずかしい……

「すみません。考えていたら楽しくなってきてしまって……」
「子供らしくて良かったぞ」
「もう、子供扱いしないでください」

俺が少しだけむくれたようにそう言うと、リシャール様が隣で笑い出した。

「ははは っ、最近のレオン君は私たちの前でも体の力が抜けていて良いな」
「確かにそうだな。前はもっと遠慮というか緊張している様子があったが、最近は自然体になってきた」

……そう言われると、確かにそうかも。最近は二人の前でもかなり自然体でいられる気がする。いや、最近というか俺が使徒様だと分かったからかな。
今まではどうしても色々と迷惑をかけてるなって気持ちが抜けなかったから遠慮があったけど、使徒だと分かったことで俺でも正式に役に立てるって分かったし、前よりも気持ちが楽になった。

「もっと気を抜いてもいいんだが、それは追々だな」
「はい。あの、ありがとうございます」

俺が色々な気持ちを込めて一言そう告げると、二人は優しい笑顔で笑いかけてくれた。何度も思うけど、本当に良い人達だ。

「では話を戻すが、庭の要望も紙に書いておいてくれ。それは庭師に渡しておく」
「かしこまりました」

そうして俺はどんな庭にしてほしいか妄想を膨らませて色々と書き込み、アレクシス様に紙を手渡した。

「確かに受け取った」

「よろしくお願いいたします」

「取り壊しが終わるまでには設計図も出来上がるので、その頃には設計士とレオンで話し合いをしてくれ。そして実際に着工してから半年程度で出来上がるだろう。庭も含めたらもう少しかかるだろうが、住めるようになるまでは半年程度だろう」

半年って、かなり早いよね？　相当大きな建物なのにそんなに早いの？

「そんなに早くできるのですか？」

「ああ、土魔法が使える者と身体強化が使える者を総動員してかなり急がせるからな。早くできるだろう」

確かにそうか、魔法を使えばスピードアップできるんだな。

「あの、俺も手伝えるので何かあったら言ってください。石とかも自在に作り出せますし、重いものもいくらでも持てますし、アイテムボックスに仕舞って重いものの移動も一瞬ですし……」

あれ、よく考えたら俺って大工になるべきなんじゃないか……？

「使徒様の魔法をそのようなものに使うのもどうかと思うのだが、確かに期間短縮はありがたい。では力を貸してもらいたい時は連絡をすることにしよう」

「はい。よろしくお願いします」

そうして屋敷についてと家族の扱いについての話をして、今日の話し合いは終わりとなった。自分の屋敷、ちょっと楽しみかも。

２６３、家族への告白　前編

そして次の日。今日はやっと落ち着いて家族皆と話す時間が取れた。
俺は朝食を食べてから皆を部屋に呼び、今はロジェにお茶を入れてもらって一息吐いたところだ。

「皆、帰ってきてから色々と忙しくて話せなくてごめんね」
「別に大丈夫よ。それよりも何があったの？　私達は危険かもしれないからとりあえず公爵家に匿うと言われただけなのよ……」
「何かあったのかい？」
「お兄ちゃん、お家に帰れないの……？」

母さんと父さんは俺をかなり心配してくれているようだ。マリーは俺達の不穏な空気を悟ったのか、これから先の心配をしているらしい。

「とりあえずここにいれば危険はないから心配しなくていいよ。でも家に帰るのは難しいかもしれない。マリー、ごめんね」
「……私のお部屋は？」

マリーは家に帰れないと聞いて目に涙を浮かべている。初めて自分の部屋を持てて凄く嬉しそうにしてたから、俺としても本当に心が痛い。
……新しく作る屋敷のマリーの部屋は、マリーの好きなように作ってあげよう。

「マリーごめんね、お部屋にも帰れないんだ……。また新しいお家

を作ったらそこにマリーのお部屋をつくろうね」
「いやだ！　私はあのお部屋がいいの！　うぅ……っ……うぇ～ん……わぁぁぁん、お兄ちゃんの、ばかぁ……」
「ちょっ、ちょっとマリー、泣かないで」

マリーは今まで見たことがないほど大号泣している。俺はそんなマリーの様子を見たことがなくて、ただ狼狽えるしかできない。

「か、母さん、どうしよう！」
「大丈夫よ。泣いたらスッキリして落ち着くわ。マリーは突然公爵家に住むことになってずっと不安だったみたいだから、家に帰れないと言われてそれが爆発しただけよ」
「そっか……」
「それでレオン、家に帰れないってどういうことなんだい？」
「話を続けても大丈夫……？」

マリーは母さんの膝の上に乗って抱き締められたら少しは落ち着いたようだけど、まだ泣き続けている。

「大丈夫よ。もうぐずっているだけだから」
「……なら、話を続けるね。あのさ、俺って全部の属性魔法が使えたでしょう？」
「それは知ってるわよ」
「それでね、その理由がわかったんだ。俺が使徒様だから全部の属性魔法が使えるんだって」

その言葉を聞いて母さんと父さんは不思議そうに首を傾げた。やっぱりこんな反応だよね……

実は使徒様のことが平民の間に殆ど広まっていないことが問題だ

とアレクシス様も認識したみたいで、これからは広場などで今までの使徒様の功績や使徒様の強さなどを広めるのだそうだ。だからそのうち母さん達も使徒様のことを知る機会があるだろう。
でも今、少しは理解してもらわないとなんだけどね……

「使徒様って、なんだい？」
「簡単に言うと、神様から特別に力を与えられた存在って感じかな」
「神様……？」
「そう。教会に女神様の像があるでしょ？　あの女神様」
「女神様って、本当にいるの？」
「本当にいるんだ。俺も実際に会ったよ」

そう言っても二人の反応はイマイチだ。多分話が壮大すぎて逆によく理解できないのだろう。

「とりあえず女神様は本当にいて、その女神様に力を貰ったのが俺、ここまではいい？」
「……ええ。とりあえずいいわ。続けてちょうだい」
「うん。それで女神様から力を貰った使徒様って存在は過去に一人しかいないほどの凄い人なんだって。それで俺もその凄い人だから、王様から貴族の身分が貰えるんだ。母さん達が今ここにいないといけない理由は、前に襲われたみたいにまた襲われる可能性が高いからだよ」

二人は少しなら理解してくれてるみたいだけど、まだ首を傾げている。

「でも、中心街なら大丈夫じゃなかったの？」
「そのつもりだったんだけど、使徒様だってなるとまた話が変わるんだ。もっと強硬手段に出る人がいる可能性もあるんだ。だから皆

にはここにいてもらってるんだよ」
「そうなのね……じゃあこれからはどうなるの？」
「実は、母さん達にも貴族の身分が与えられるんだ」
その言葉を発すると、やっと二人は少しだけ驚いたような表情を浮かべた。
「……レオン、それは本当かい？　父さん達が貴族になる？」
「うん。平民のままよりも貴族になって力を持たないと危ないからってアレクシス様、この国の王様に言われたんだ」
「でも、母さん達が貴族になるなんて無理よ。それにレオンは凄いけど母さん達は普通の平民よ……？」
母さんはマリーの頭をゆっくりと撫でながら、困惑した表情を浮かべた。マリーはまだ母さんの肩に顔を押し付けている。
やっぱり戸惑うよね……突然貴族になってなんて。しかも騎士爵とかじゃなくて大公や伯爵だし。
「それでも貴族になってもらわないといけないんだ……ごめんね。多分平民のままだとずっとこうして隠れて過ごすことになると思う。俺と縁を結びたい貴族、俺を排除したい貴族、俺を手に入れたい他国、そんな人達が母さん達に押し寄せることになるから……」
「それは貴族になっても変わらないんじゃないのか？」
「そうなんだけど、貴族になれば力を持てるから対処できるようになるよ。爵位が低い貴族は無理に突っぱねることもできるし。それに貴族ってだけで手を出す人はかなり減ると思う。後は堂々と護衛もつけられるし」
「平民のままで護衛をつけるのではダメなのかい？」
「それでもいいんだけど、やっぱり護衛対象が平民か貴族かってところで護衛の人の心情は違うと思う。自分より低い身分の人を守る

っていうところに疑問を持つ人もいるだろうし……」
「そっか……」
父さんはそう言うとそれきり黙ってしまう。母さんも口を開かない。……やっぱり貴族になるのは嫌なのかな。でもそうだよね、大変だろうって想像はできるし。
本当に俺のせいで申し訳ないな……

それからしばらく重苦しい空気が流れて、それを破ったのはマリーだった。
マリーは静かに母さんの膝の上から降りてソファーに座ると、泣き腫らした顔で俺の方を見る。

「お兄ちゃんは、貴族様になるの……？」
「そうなんだ。お兄ちゃんは大公様っていうのになるんだよ」
「私達も……？」
「うん。皆にも貴族になってほしいと思ってる。凄く大変だと思うんだけど……、平民のままだと危ないんだ」

マリーが真剣に話を聞く体勢になってくれたので、俺もマリーと視線を合わせるようにしてそう説明した。

「じゃあ、私も貴族様になる。お兄ちゃんと一緒がいいもん。……あのね、お兄ちゃん、さっき馬鹿って言って、ごめんなさい」

マリーはそう言ってしょんぼりとした顔を見せた。マリーはそのことをずっと気にして反省してたのか……
俺はマリーのそんな様子にぐわっと感情が昂り、思わずソファーの反対側にいたマリーの元に駆け寄ってマリーをギュッと抱きしめ

た。

「マリー、お兄ちゃんは気にしてないから大丈夫だよ。急に不安にさせるようなこと言ってごめんね」

「ううん、大丈夫。……お兄ちゃん、くるしい……」

「あっ、ごめん！　大丈夫？」

思わず強く抱きしめすぎたらしい。

「……もう、ちゃんと手加減してよね」

マリーは少しいつもの調子に戻ったようで、頬を膨らませて俺にそう言った。

「気をつけるよ。ごめんね」

俺はそう謝りながらも自分の顔が緩んでいくのを止められない。マリーが可愛い……

そんなマリーの様子に、いつの間にか部屋に漂っていた重い空気もなくなっている。やっぱりマリーは凄いな。

「マリーの言う通り、深く考えても意味ないわね。私達は家族だもの。レオンが貴族様になって私達もなれるっていうなら、ありがたく貴族になるべきよね」

「ふふっ……確かにそうだったね。レオン、父さん達も貴族になるよ」

母さんと父さんはさっきまでの厳しい表情を緩めて、少しだけ笑顔でそう言ってくれた。……本当に嬉しい。

「母さん父さん……ありがとう。貴族になるのは大変なこともたくさんあると思うけど、全力でサポートするから」
「頼むわよ。私達は何も知らないんだから」
「うん！」

俺は今日初めて心からの笑顔を浮かべて頷いた。

「それでレオン、貴族様になるって具体的にはどうなるんだい？」
「うん。まず貴族になるにしても二種類の道があるんだ。一つは一代限りの伯爵位を貰うこと。この場合俺は個人で大公位を貰うことになるよ。そしてもう一つは、父さんが大公位を貰って俺達家族を大公家にして、すぐに父さんの大公位を俺に譲ること。このどちらかを選べるんだって」
「……全く理解できないわ」
「そうだよね。えっと、まず貴族には種類があるんだけどそれは知ってる？」
「貴族様の中にも偉い人がいるのは知ってるわよ」

やっぱりその程度の知識しかないか……これは説明するの大変だ。

「まず大前提だけど、爵位をもらえると貴族になれる、ここまではいい？」
「……ええ、爵位はあれよね。貴族様の偉い基準みたいなやつよね」
「そう！　爵位をもらったら貴族になれるんだけど、その爵位にも種類があって強い爵位と弱い爵位があるんだ。弱い爵位から順番に言っていくね。一番下は騎士爵、次が男爵、子爵、伯爵、侯爵、最後が公爵だよ。全部で六つあるんだ」
「……とりあえず六つあることはわかったわ」
「公爵っていうのが一番偉いのはなんとなく知ってたよ」

確かに今いるのがタウンゼント公爵家だから、貴族の中で一番上の爵位だとかって話も聞くのだろう。

「それなら良かった。それで俺の爵位なんだけど、公爵の上に新しい爵位を作ってくれるんだって。それが大公って爵位なんだ」

「ということは、レオンは貴族様の中で一番偉くなるのかい！？」

おおっ、ここに来て初めて父さんが驚いてくれた！　やっと話が通じてきた！

２６４、家族への告白　中編

「そう！　理解できた？」
「少しは理解できてきたわ……多分」
「それなら良かった。じゃあ話を続けるね。それで皆の爵位なんだけど、一つ目はさっき言った上から三番目の伯爵位を貰う事。そして二つ目は俺が貰う予定の大公位を父さんが貰って、すぐ俺に爵位を譲ること」
「……だめよ。もう理解できなくなったわ」
「えっと、その二つは何が違うんだ？　それと父さんが爵位を得て、すぐレオンに譲ることに何か意味があるのかい？」

やっぱりここの理解は難しいか。そもそも貴族の爵位の仕組みを理解してもらわないとだよね。

「まず貴族の爵位って、子供が十五歳になると譲ることになるんだ。そして爵位を譲ったら前に貴族の当主だったよ、っていう身分を得ることになる。例えばだけど、この公爵家でリシャール様は公爵様じゃなくて前公爵様なんだ。もうリシャール様の子供のクリストフ様が公爵位を継いでるから、公爵様はクリストフ様。でもリシャール様は平民になるわけじゃなくて、前公爵様っていう身分はずっと持ってることになるんだよ」

貴族の説明って難しいな。父さん達にも理解してもらえるようにって考えると難易度が上がる……
俺って先生にはなれないかも。

「だから父さんが最初に大公位をもらって俺に譲ると、父さんは前

大公って身分を得られて、母さんは前大公の妻、そしてマリーは前大公の娘って身分を得られるんだ。……分かった？」
「……なんとなくは分かったよ。とりあえず、なんでそんなに面倒なことをしないといけないのかは、少し分かった」
「本当？　少しでも理解できたのなら良かった」
「じゃあ一つ目の伯爵位って方は何なんだい？　一代限りだっけ？」
「うん。一代限りの爵位っていうのは子供に引き継げない爵位のことだよ。だからその人が死ぬまでその爵位を持っていて、死んだらそこで終わりなんだ」

この話には父さんと母さんも大きく頷いてくれた。

「今の話は理解できたわ。一生持ち続けられる爵位ってことよね」
「そう！　そういうこと！」
「じゃあ、一生持ち続けられる方がいいのかな？」
「そうとも言えなくて、爵位って基本的には十五歳にならないと貰えないんだ。だから伯爵位の方だとマリーだけは長い間平民の身分のままになっちゃう。でも大公位の方ならマリーも大公の娘ってことですぐに貴族の仲間入りができるよ」
「じゃあ大公の方で決まりでいいじゃない」
「でもそっちにもデメリットがあって、貴族の子供で爵位を継がなかった人は、成人すると準貴族って身分になるんだ。準貴族も実家の身分によって扱われ方が変わるからそこまで心配することじゃないんだけど、貴族ではなくなるんだ」

そこまで話すと、二人は完全に分からなくなったようで遠い目をした。マリーはずっと理解できていなくて足をぶらぶらとさせて遊んでいる。
やっぱり難しいか……

「……もうわからないわ。レオンはどっちがいいと思うの？　レオンが決めていいわよ」
「いいの……？　俺は大公の方がいいかなと思ってるんだ。マリーもすぐに貴族の身分を得られるし、成人はまだ先だから色々と対処もできるだろうし」

マリーが成人するまでに教育を受けて完璧な貴族の淑女になれれば貴族に嫁ぐのもありだし、騎士爵を貰えるように取り計らうこともできるはず。もし貴族は嫌だってなったとしても、準貴族なら普通に平民として生きていくこともできるだろう。
その為には皆の身に危険が及ばないように、俺の力を絶対的にしないとだけどね。

「それなら大公の方でいいよ。父さんはよく理解できないからレオンの選択を信じる」
「母さんもよ。正直話の規模が大きすぎてよくわからないわ」
「じゃあ、父さんが大公位を貰って俺に継がせる方向で話を進めてもいい？」
「それでいいわ」
「レオン頼むよ」
「分かった、任せておいて」

そこで一旦話に区切りがつき、少しの間沈黙が流れた。母さんと父さんはかなり疲れているようだ。マリーはもう完全に飽きている。
ここで話を終わりにした方がいいかな。そう思ったけど、さすがに婚約をする話は後回しにしちゃダメだよね。
「母さん父さん、あともう一つ話しというか報告があるんだけど……俺、婚約することになったんだ」

家族にこの報告をすることに少しの恥ずかしさを感じながらも、俺は照れ隠しからなんでもないことのようにそう告げた。
すると母さんと父さんは、ポカンとして固まってしまう。さっきまではかなり反応が鈍かったから、驚いてくれるだけで何だか嬉しいな。

「婚約って……婚約！？」

母さんが少しだけ固まった後に、今日で一番の大声を出した。

「そ、それってあれかい？　結婚の約束をしたってことだよね！？」

父さんもかなり狼狽えている様子だ。確かに平民は婚約ってほとんどないから、流石に俺の歳じゃ結婚の話は早すぎるよね。

「それで合ってるよ。今度俺が使徒で大公になるよってお披露目のパーティーをやるんだけど、そこで婚約も発表するんだ。あっ、そのパーティーには父さんと母さんは出席しなくていいから心配しないでね。流石にまだ貴族のパーティーは酷だろうってアレクシス様が言ってくれたから」

本当は父さんと母さん、マリーも出席した方がいいんだけど、全ての貴族が集まるような大規模なパーティーに今の段階で出てもらうのは流石に無理だろうって、アレクシス様が言ってくれたんだ。
色々と配慮してくれてありがたい。でもこれから先は顔を出す機会を設けないとなのだろうから、皆には勉強を頑張ってもらわないとだよね。

「そんなパーティーまであるのね……」
「うん。でも今回母さん達は出席しなくていいって」

「本当に良かったわ……じゃあとりあえずそのパーティーのことは置いておいて、婚約の話よ。相手は誰なの？　挨拶をしないといけないでしょう？」

母さんはパーティーの話を挟んだことで少し落ち着いたようで、いつもの調子でそう聞いてきた。

「相手は……マルティーヌだよ」

俺はマルティーヌの名前を口にする瞬間、自分の顔が緩むのを感じた。最近は忙しすぎて嬉しさに浸る時間もなかったけど、これから先ずっとマルティーヌと一緒にいられるってことなんだよね……

なんか、それってめちゃくちゃ嬉しい。

母さんと父さんはその名前を聞いて一気に慌て始めた。さっきは少し落ち着いたのにまた逆戻りだ。

「マ、マルティーヌ、様って、確か王女様よね？　なんでそんな人とレオンが婚約するのよ！？　どうしましょう。どうすればいいの！」

「レ、レオン、本当なのかい？　本当の本当に？　同じ名前の違う人かい？」

母さんと父さんは、俺が使徒様だって話よりも自分達が大公家の人間になるって話よりも、この話が一番驚いてるな。

「王女様のマルティーヌで合ってるよ。まだ結婚は先だと思うけど、婚約はすることになったんだ。だから結婚したら母さんと父さんもマルティーヌとは家族になる。王家とも親戚だよ」

「……私、なんだか気が遠くなってきたわ」

「ロアナ、僕も何が起きてるのか理解できないよ」

……二人には相当な負担を強いてるよね。少し前までは王家どころか貴族とも全く関わりがなかったのに、俺のせいで貴族と関わりを持つことになって、今度は自分達が貴族になるって言われて、王家とも親戚になるって言われて。

そう考えたらやばいな。なんか本当にごめん……

「突然こんなこと言ってごめんね。俺のせいで母さんと父さんとマリーの人生を変えちゃって……。でも皆がこれから先の人生不自由しないように、さらに好きなことをして楽しく生きていけるように頑張るから、一緒に頑張ってくれる？」

もう皆を巻き込まないのは無理だから巻き込んだ上で幸せにしようと、そう決意を表明すると、母さんと父さんも少し落ち着いたのかゆっくりと頷いてくれた。

「ええ、まだよくわからないけど、とにかく母さんも頑張るわ。別に嫌な訳じゃないしレオンを責めてるわけでもないのよ、ただあまりにも突然のことで混乱してるだけよ」

「父さんもだよ。父さんに何ができるのかわからないけど、これから先もレオンのことを守っていきたいと思ってるんだ。レオンはよくわからないほど凄いけど、それでも僕たちの子供だからね」

「母さん父さん、ありがとう……」

こんな子供をずっと愛してくれる二人は本当に凄いよ。母さん達を取り巻く環境は変わりすぎていて、性格が変わって傲慢になっても、逆に塞ぎ込んでしまってもおかしくないと思う。それなのに皆は今までの本質は変わらず、でも環境の変化には対応してくれている。

本当にありがたいし凄いことだよ……

２６５、家族への告白　後編

そうして俺が皆への感謝と敬意を募らせていると、今まで話が理解できていなかったのかずっと口を開かなかったマリーがソファーから立ち上がった。
そして俺の方に歩いてきて隣に座ると、俺の服をぎゅっと握りしめる。

「お兄ちゃん、結婚しちゃうの……？」

ポツリとそう呟いたマリーは少しだけ寂しそうな表情で、でももう泣かないと必死に笑顔を作ろうとしている様子で、その健気さに心を打たれた。

「マリー、寂しい？」

俺はマリーにそう問いかけつつ、マリーをギュッと抱きしめた。
するとマリーも俺を抱きしめ返してくれる。
うぅ……俺の妹が可愛すぎる。なんでこんなに可愛いんだ。それにいい子すぎる。

「うん、だって結婚したら、遠くにいっちゃうんでしょ……」
「ううん、遠くには行かないよ？」
「……そうなの？　でもお友達のお姉ちゃんがね、結婚したらもう会えないほど遠くにいっちゃったんだって……」

そっか、その話を聞いてたからこんなに寂しそうだったのか。確かに別の街に嫁ぐとかだと、この世界では会えなくなることも珍し

くないのかもしれない。

「そういう人もいるけど、お兄ちゃんは結婚しても遠くには行かないよ。マリーとも一緒に住めるよ？　だからお兄ちゃんが結婚して変わることは、マリーにお姉ちゃんが一人増えるだけかな」

「そうなの？」

その話を聞いたマリーはさっきまでの寂しそうな表情を消し去り、今度は不思議そうな顔をしている。

「そうなんだ。皆には今から新しく作る俺の屋敷で暮らしてもらうことになるんだけど、そこに俺が結婚する相手、マルティーヌが引っ越してくるんだ。だから一人家族が増えるだけだよ」

そう詳しく説明をするとマリーはなんとなく理解できたようで、表情を途端に明るくしていく。

「じゃあ、お兄ちゃんはずっと一緒？」

「もちろん！」

「お姉ちゃんが増えるだけ？」

「そうだよ。結婚するのはもう少し先だからしばらくお姉ちゃんは増えないけどね。お兄ちゃんがいなくなることはないよ」

「そうなんだ。えへへっ、嬉しい……」

マリーはそう言って少しだけ恥ずかしそうに、でも凄く嬉しそうに笑った。マジで天使……

「ねぇお兄ちゃん、お兄ちゃんのお屋敷って何？」

マリーは俺と離れることはないと安心したからか、今度は屋敷の

方に興味が移ったみたいだ。

「新しく俺が建てるお屋敷だよ。ここより大きくてすっごく広いんだ。そこにマリーも住んでくれる？」

「このお屋敷みたいなお家が、私のお家になるの！？」

マリーはわかりやすく顔を輝かせた。自分の家に帰れないって事実は不安になるけど、広い屋敷が自分の家になるのなら嬉しいんだな。

「そうだよ。もうどんな屋敷にするのかは決まっててね、これから作るんだ」

「本当？　私のお部屋もある？」

「もちろん！　今よりも広い部屋にできるよ」

「そーなの！？　嬉しい！」

マリーはそれを聞いて大喜びだ。さっきまで落ち込んでいたのはなんだったのかというほど嬉しそうにしている。

「レオン、私達がここみたいなお屋敷に住むの？」

そんな俺とマリーの話に反応したのは母さんだ。

「うん。この公爵家にかなり近い土地で、その屋敷が大公家の屋敷になるんだ。どんな屋敷にするのかも大体は決めたよ」

「そこに住むのはもう決定なのかい？」

「うん、そうなると思う。……やっぱり嫌？　前の家がいい？」

父さんと母さんはマリーと違って全然嬉しそうではない。やっぱり広い屋敷は落ち着かないのかな。

「別に嫌じゃないのよ。ただ想像できないだけよ。今ここに住んでるのは、あくまでも部屋を借りてるって感じだから……」
「父さんもうまく想像できないな……。さっきから凄いことを聞きすぎて、自分に起きることだと思えない」

確かにそうだよね。父さんと母さんからしてみたら現実感のない話だろう。

「確かにそうだよね。そこは段々と慣れてくれればいいよ。マルティーヌのこともまた会う機会を作るから、少しずつ仲良くなってくれればいいし」
「……そうね、そうするわ。今日はいろんな話を聞きすぎて混乱してるもの」
「少し頭を整理したいな」

整理する時間も必要だよね。時間が経てば受け入れられて、そのうち慣れていってくれると思う。

「そうだよね。じゃあ今日の話はこのぐらいにしようか。また何か疑問とかあったらいつでも俺に聞いてくれればいいから」
「分かったわ。そうだレオン、母さん達はその屋敷に引っ越すまではずっとここにいるの？　家に戻ることはできないのかしら？」

できれば家に戻してあげたいんだけど、やっぱり安全を考えたらここにいるのが一番なんだよね……

「まだしばらくはこの公爵家にいてほしいかな。そして屋敷が完成したら俺と一緒に引っ越しになると思う。だから、家には戻れないかな……」

「そうなのね……分かったわ。そうだ、食堂はどうなるの？」
「食堂は続けられるよ。俺達の家、名前はジャパーニス大公家ってなるんだけど、その家に属するお店としてから営業できると思う」
「本当かい！　それは嬉しいよ」
「ジャン、良かったわね！」

父さんと母さんはここで初めて心からの笑顔を見せてくれた。食堂を続けることができて本当に良かった……

「貴族になってからのことは実際にその時にならないとわからないけど、とりあえず皆には食堂を続けてもらうことはできると思う。でも護衛とかはちゃんと付けてだけどね」
「それは仕方がないわ。ジャン、貴族のお店にするならメニューをもっと変えた方がいいんじゃない？」
「確かにもっと新しいものを考えてもいいかも知れないね」
「材料も高いものを使えるんじゃないかしら？　貴族向けならば値段を上げられるでしょう？」

母さんと父さんは途端にイキイキと話し合いを始めた。やっぱり二人は食堂の仕事が好きなんだな。俺も二人のお店を最大限応援しよう。

新しい料理の開発ならティノと協力してもらうのもいいよね。そして食堂を新しい料理を出すお店にするんだ。従業員寮の料理人をもう一人雇えばティノの時間も作れるだろう。
母さんと父さんが料理の研究にハマればそっちに特化してもらってもいいし……。その辺は追々考えていこう。

「俺の店の従業員寮で料理人をしてくれてるティノが、新しい料理を作るのが好きなんだ。だから協力して新しい料理を開発して、そ

れを出すお店にしてもいいかもしれないね」
「それ、楽しそうだわ！」
「それはいいね。今度ティノと会ってみたいな」
「うん。色々落ち着いたらその辺も考えようか。食堂のことに手を出せるのは、早くても屋敷に引っ越しを終えたぐらいになっちゃうと思うんだけど……」
「それは仕方ないわよ。楽しみにしてるわ」
「私も！　私も楽しみにしてる！」

マリーは話の内容を理解したのかしていないのか、そう言って元気よく手を上げた。その様子に母さんも父さんも笑顔になる。

「じゃあ、とりあえず私達はここで今まで通りに過ごしていればいいのね？」
「うん。でも色々と学んでもらうことにはなると思う。読み書きから礼儀作法、立ち居振る舞いとか。貴族になるには本当にたくさんのことを学ばないといけないんだ」
「それは仕方がないわ。母さん頑張るわよ！」
「父さんもだよ。ロアナより覚えるのが早いからね」
「少しだけじゃない！　これからは私の方が上達が早くなるわよ」
「違うの！　マリーが一番だもん！」

皆は誰が一番上達してるかで競い合っている。こうして楽しんで学んでくれると本当にありがたい。俺も少しでも皆が楽しく学べるように色々と手を尽くそう。

「アレクシス様が家庭教師の斡旋をしてくれて数日以内にはここに来てくれるらしいから、そうしたら本格的に勉強が始まると思うよ」
「分かったわ」
「もしどうしても大変だったら俺に言ってね。少しは減らしてもら

うとかやり方を工夫するとか色々考えるから。後は途中で気分転換にでも料理をできるように、皆が厨房を借りられるようにお願いしておくね」

「それは嬉しいよ。ありがとう」

そうして色々と報告をして今後の予定を決めて、家族皆での話し合いは終わりとなった。どこまで理解してくれてるのかわからないけど、とりあえず今日はここまでが限界だろう。

多分これから色々と学ぶ中で使徒様のことを知って、貴族の仕組みを理解して、自分たちの爵位や俺が使徒様だということに驚く時が来ると思う。その時はまたしっかり話し合おう。

266、久しぶりのマルセルさん

昨日は家族皆に俺のことを話したので、今日は他の人達にも話をして回る予定となっている。まずはマルセルさんのところに行き、次はニコラ達の家、最後は従業員寮だ。

俺はいつも通りの朝を迎え、ロジェとともに馬車でマルセルさんの工房までやってきた。

もちろんロジェには今までのことを全て説明してある。ロジェは少し驚いていたけれど、俺が使徒様だってことを意外にもすんなりと受け入れてくれた。逆に使徒様でない方が驚きますって言われたぐらいだ。

ロジェが入り口のドアをノックすると、すぐにマルセルさんが顔を出してくれた。

「マルセルさん、お久しぶりです」

「レオン！　心配してたんじゃ。危ないからとわしのところにも護衛が増えとるし、何があったのかと思ってたんじゃよ」

マルセルさんは俺の顔を見て安堵した表情を浮かべ、そう言ってくれた。ここまで心配してくれる人がいるって幸せだよね。

「心配してくれてありがとうございます。とりあえず俺は大丈夫です。詳しい話をしたいので中に入ってもいいですか？」

「もちろんじゃ」

そうしてマルセルさんの工房に入り勧められた席に着く。工房の

中はいつものように雑多な様子で、俺はなんだか気持ちが落ち着くのを感じた。
ここ数日はとにかく忙しくて気を張っていたから気づかなかったけど、結構疲れていたみたいだ。

「それで、何があったんじゃ？」
「はい。実は魔物の森の遠征で……」

それからは魔物の森で俺の魔法がバレたところから、王都に帰ってきてミシュリーヌ様と会い、使徒様としてお披露目をすることになったところまでを簡潔に話した。
話している最中、マルセルさんは驚いた様子を見せながらも口を挟まず最後までしっかりと聞いてくれた。

「やはり、使徒様だったんじゃな……」
「そうだと思っていたのですか……？」
「レオンが使徒様である方が、全てのことに納得がいくとは思っておったわい」
「そうだったのですね」

まあ、全属性を使うし誰も知らないような知識を持ってるし、あまつさえ使徒様が使っていたとされる魔法まで使えるし。使徒様じゃないって方が疑問だよね……
俺も自分でそう思うよ。でも今までは本当に使徒様じゃないと思ってたんだ。まさか女神様があそこまで抜けてて自分の使徒に連絡も取れないなんて予想できないし……

「俺は使徒ですが、別に何かが変わるわけではないので今まで通りに接してください。変わるところは俺と家族皆が正式に身分を得ることぐらいです」

「そうじゃな。レオンがそう言うならそうするわい」
「ありがとうございます」
「それにしても大公位とは驚いた。レオンの家族もだとは……。これからは気軽に遊びに行けなくなるな」

マルセルさんは少しだけ寂しそうにそう呟いた。

「いえ、確かに公の場などで親しく話すことは難しいかもしれませんが、屋敷には気軽に遊びにきてください。私達がこの工房を訪れても良いですし」

マルセルさんとあまり会えないとなったら皆も寂しいだろう。マリーなんてまた号泣しそうだ。

「良いのか？」
「もちろんです！　当主は俺になるんですから、屋敷の中は自由です」

実際はそう上手くいかないことも多いだろうけど、俺はそう言って笑顔を見せた。
でも転移魔法があるし、いつでもこっそり会えるよね。マルセルさんを屋敷に連れてきても良いし、皆をこの工房に転移させても良いし。

……そうだ。マルセルさんはこの工房に住み続けること前提で話してたけど、あの広い敷地の中に工房を作るのもありなのかな？
「マルセルさん、俺の屋敷を建てる敷地内にマルセルさんの工房を作るのはダメなのでしょうか……？」

俺がそう言うとマルセルさんはかなり驚いたような顔をした後、嬉しそうに破顔した。しかし首を横に振る。

「そう言ってくれるだけで嬉しい。ただそれはやめておいた方がいいな。わしは準貴族で既に実家とも縁が切れているとはいえ、一応貴族に連なる者じゃ。わしの実家が何かを言ってこないとも限らん。大公家と親密な関係だと言いふらす可能性は高い」

確かにそうか……貴族って面倒くさいな。良い案だと思ったんだけど。

「……では止めておきます。忠告ありがとうございます」

「いや、いいんじゃよ。わしはこの工房を気に入っとるからな。レオンの屋敷もそこまで遠くない。それに食堂も続けるんじゃろう？」

「はい。どんな形になるのかはわかりませんが、食堂は続けます。始められるのはもう少し先になりますが」

「では食堂にも遊びに行くかのぉ。食堂ならすぐそこじゃしな」

「是非来てください！　マリーも喜びます」

「マリーちゃんが喜んでくれるなら毎日でもいいな」

マルセルさんはそう言ってデレっと笑み崩れる。出たよマルセルさんの、親バカじゃないから……祖父バカ？

「毎日は流石にやりすぎだと思いますけど、いつでも遊びに来てください」

「ああ、そうするわい」

そうしてそれからはマルセルさんと一時間ほど雑談をしてから工房を後にした。久しぶりの魔法具談議、めちゃくちゃ楽しかった……

「レオン様、昼食の時間まで後一時間ほどですがいかがいたしますか？」

馬車に戻るとロジェにそう問いかけられた。確かにマルセルさんのところに長居しすぎたよね。うーん、ニコラ達のところで一緒にお昼ご飯を貰えばいいかな。

そうだ、俺の魔法のことを明かせるんだし、アイテムボックスからいくつか食べ物を提供すればいいか。

「予定通り道具屋に行くのでいいよ。そこでお昼ご飯を食べることにする。ロジェもそこで一緒にお昼でいい？」

「問題ありません」

「じゃあ道具屋までよろしくね」

「かしこまりました」

そうして道具屋に向かうと、お店にはお客さんが数人いて賑わっている様子だった。見たことない店員さんが何人かいるけど、多分護衛の人なんだろうな。威圧感ないように店員に扮してるのだろう。

俺は馬車から降りて、そんな店先で商品を並べているおじさんに声をかけた。

「おじさん久しぶり！」

「おおっ、レオンじゃねぇか！　お前に何かがあって俺たちも危険だって言われて心配してたんだ。無事でよかった」

おじさんはそう言って俺の頭をぐしゃぐしゃにかき回す。

「心配かけてごめんね。話があるんだけど皆を集められる？　お店が開いてるから難しいかな……？」

「いや、店は大丈夫だ。皆家の中にいるから行くぞ」

おじさんは護衛の人だろう店員さんに店番を任せると、ズンズンと店の奥に入っていき居住スペースに向かった。おじさんに一歩遅れて俺も慌てて店に入る。

「皆、レオンが来たぞ！」

おじさんはリビングに入ると開口一番そう告げた。するとリビングにいたおばさんとニコラ、ルークが椅子から立ち上がり俺のところに駆けてきてくれる。

「レオン大丈夫だったのか！」

「ニコラ、心配かけてごめんね。全然大丈夫だよ」

「レオン心配したんだぜ」

「ルークもごめんね」

「本当に無事で良かったわ。私達は何が起きているのかわからなくて。ロアナ達は無事なの？」

「うん！　母さんも父さんもマリーも皆無事だよ」

「そう、それなら良かったわ」

おばさんはそう言って体の力を抜き、少し疲れたような笑顔を見せた。だいぶ心配させちゃったみたいだな……

267、ニコラとルークの今後

「それでレオン、何があったんだ？」
「うん、説明するよ。皆座って。――王立学校の遠征で魔物の森に行くって話はしたよね？　実はその遠征でちょっとトラブルがあって、俺の魔法の秘密が大勢の人にバレちゃったんだ。それでその秘密が知られると、俺を欲しがる人や逆に消そうとする人も出てくるから、その影響で皆にも危険が及ぶ可能性があるってことで護衛がついたりしたんだ。俺の家族もその影響で安全なところ、公爵家の屋敷に今はいるよ」
「魔法の秘密って、なんなんだ？」
「実は話してなかったんだけど、俺って全部の属性魔法が使えるんだ。さらに他の誰も使えない魔法も使える」

そう言っても皆はいまいちピンと来てない様子だ。実際にやってみせたほうが早いかな。

「じゃあ実際にやってみせるね。まずこれが火魔法」

俺はまず指先に火を灯らせた。そして次は水魔法、風魔法と全ての魔法を使っていく。皆は俺が魔法を使えば使うほど顔が驚きの表情に変わり、ポカンと口が開いていく。

「あと他の人が使えない魔法が三つあって、まずはバリア。これはどんな形にもできるんだ。ほとんどの攻撃を防ぐよ。それから転移。――ほら、一瞬で他の場所に移動できるんだ」

転移で皆の背中側に移動し、後ろから声をかけた。後ろを振り返

った時の皆のお化けを見るような顔に、ちょっと笑いそうになったのは内緒だ。

「あとはアイテムボックス。ここと違う時空間っていうのかな。そこに物を収納できる魔法なんだ。例えばスープとか、串焼きとか。焼きたてのパンとか」

俺はアイテムボックスから次々と食材を取り出していく。すると今までずっと無言だった皆の中から、ニコラが遂に口を開いた。

「レ、レオン、ちょっと待ってくれ。俺達は何を見てるんだ？　これは……夢？」

「ううん、現実」

「全部の魔法が使えるなんて、あり得るのか？　今まで聞いたこともない」

「まあそうだよね。使徒様だけがあり得るんだってさ」

「しとさま、ってなんだ？」

案の定ニコラ達は使徒様って単語に首を傾げている。ニコラ達にも最低限の説明はしないとだな……

それから俺は家族皆に話した時のように、俺が使徒様だということ、それによって様々なところから狙われる危険性があること、さらに貴族になることなどを話した。

話を聞いた皆はげんなりとした顔をしている。やっぱり難しいよね……。でもなんとか大筋だけでも理解してもらいたい。そう思ってまた口をひらこうとしたところで、おじさんが顎に手を当てて思案顔をした。

もしかしておじさん、理解できたの！？

「レオン、正直に言っていいか」
「もちろん！　なんでも聞いて」
「何を言ってるのかさっぱりわからん！」

そっちかい！　俺は思わずずっこけそうになるのを寸前で堪えた。

「……えっと、どこまではわかった？」
「レオンが神様に選ばれた凄いやつで、貴族様になるってことはわかったな」

それだけかよ！　もっと色々話したんだけどな……でも仕方ないか。おじさん達は貴族になるわけじゃないし、とりあえずそれだけでも理解してくれればいいことにしよう。
というかそう考えると、母さんと父さんは昨日かなり頑張って話を理解してくれてたんだな。やっぱり少しでも教育を受けたり公爵家に住んだりしてると変わるのかも。

「とりあえずそこまで理解してくれたのならいいや。それで俺達は貴族になるから、屋敷を中心街の奥に建ててそこに引っ越すことになる。それを伝えたかったんだ」
「じゃあ、もう会えないってことか……？」

ニコラが寂しそうにポツリとそう言った。

「ううん。今よりも気軽には会えなくなるけど会うことはできるよ。さっき見せた俺の魔法あるでしょ？　あの一瞬で移動できるやつ。あれでこの家に飛んでくることもできるし」
「そんなことできるのか！？」
「うん。だから会えなくなることはないよ」

「レオン、マリーとも会えるか……？」
そう聞いたルークは今にも泣きそうだ。
「もちろん会えるよ。今すぐは無理だけど落ち着いたら必ず」
「そっか、じゃあ、待ってるぜ……」
ルークの恋は前途多難だよね……。マリーは身分が前大公の娘になっちゃうし、二人が結ばれるのは難しい気がする。でもこんなに落ち込んでるルークの様子を見てると応援してあげたくなる。
ルークも貴族になるとか、せめて商会長とかになればまだ可能性はあるだろうか……
「ルークは道具屋を継ぐんだよね？」
「そうだけど、なんで今その話なんだ？」
「道具屋を継ぐんならそれをもっと大きくして商会にすれば、例えばだけど俺たちの家の御用商会にすることもできるなと思って」
「ごようしょうかい？」
「そう。いつも注文する商会ってこと」
「それになったら、マリーともっと会えるのか？」
「うーん、それはわからないけど、今のままより近づくことは確かかな」
俺がそう言うとルークは途端に瞳を輝かせた。そして期待に満ちた表情で口を開く。
「じゃあ俺、ごようしょうかいになる！」
「うん。そのために勉強したいこととかあったらいつでも俺に言ってね。紹介するしお金も貸すよ」
「わかった！　レオンありがとう！」

「頑張ってね」

この提案がルークにとっていいことなのかはわからないけど、何をやってもいいのかわからないままマリーと遠くなっちゃうよりは、やるべきことがある方がいいよね。

本当に商会を立ち上げられれば、例えマリーとは結ばれなくても良いことだし、学ぶのはいくらでも学んだ方がいいし。

そうして俺がルークと話していると、ニコラが少しだけ緊張した様子で口を開いた。

「レオンは、貴族になるんだよな？」

「そうだよ」

「じゃあ、護衛とか兵士を雇うのか……？」

確かにその辺の人たちも雇わないとだよね。人選が大変だろうな……

「うん。雇うことになると思う」

「じゃあ、俺を雇ってくれないか！」

ニコラはいつものクールな雰囲気を一変させて、期待を込めた目で俺にそう頼んできた。確かにニコラは兵士になりたいって言ってたけど、王都の兵士じゃなくていいのかな？

「王都の兵士じゃなくていいの？」

「ああ、貴族の屋敷に雇われる兵士は皆の憧れだ！」

「……そうなの？」

「そんなことも知らないのか！　王都の兵士は皆貴族に雇われたいと言っているぞ」

全然知らなかった。でも確かに王都の兵士って基本的には平民しかいない。貴族は皆騎士になるから、わざわざ王都の兵士になる人はいないのだ。
しかし貴族に雇われた私兵は貴族もいれば平民もいる。そうなると貴族に雇われる方が憧れってなるのかな？

うーん、俺からしたらどっちも一緒というか、王都の兵士の方が理不尽な命令とかなさそうだけど。でもニコラが貴族に雇われたいと思ってるならいいか。

「雇うのは別にいいんだけど、貴族の人と一緒に仕事をするかもしれないし、言葉遣いや礼儀作法を学んでもらうことになると思うよ？」
「それでもいい！　というよりも学ばせてもらえるならありがたい！」

そうか、平民はそもそも学ぶ機会なんてないし、その辺のことを学べるって意味でも貴族に雇われたい人が多いのかな。下働きとかは別にして、貴族家の従者やメイドも憧れだったりするよね。

「後は俺の家で雇ったら、仕事中はこうして軽い口調では話せなくなるよ。もちろん仕事中以外なら今まで通りでいいんだけど」
「それは、レオンにも敬語を使うってことだよな？」
「うん。後はマリーや母さん、父さんにも」
「そうか……でも仕事中だけなら仕方ないしそれでもいい。俺を雇ってくれないか？」

ニコラは真剣な表情で再度そう言った。そこまで覚悟してるのなら俺としても断る理由はない。ニコラなら信頼できるしこっちから

勧誘したいぐらいだ。

「分かった。じゃあニコラは俺の家で雇うよ。ジャパーニス大公家って名前だから覚えておいてね」

「ジャパーニス大公家だな。覚えておく」

「うん。じゃあまた落ち着いたら雇うことになるから、それまでは今まで通りに過ごしていてくれる？」

「わかった。あっ、でも早めに学びたいんだが……」

確かにできる限り早い方がいいか。ここにも先生を派遣するかな……うーん、そんなに大袈裟にするのもな。

あっ、さっき外にいた護衛の人達にお願いしようかな。

「ロジェ、このお店にいる護衛の人達ってどこからの護衛なのか分かる？」

「タウンゼント公爵家だと思われます」

「ありがとう」

じゃあリシャール様に話を通して、空いてる時間で少しずつニコラに礼儀作法とか教えてもらえるようにしよう。ルークも一緒にした方がいいかな。

「じゃあここに来てる護衛の人に教えてもらえるよう手配しておくね。ニコラとルーク、二人ともでいい？」

「ありがとう！」

「俺もいいのか！　もちろんだぜ！」

「じゃあそうしておくね」

二人はなんだかやる気満々のようで、希望に満ちた表情をしている。話がどんどん逸れていったけど、まあ良かったかな。

「レオン、色々とありがとう。この子達のことこれからもよろしくね」
「おばさん、もちろんだよ。これからも気軽に遊びに来てもいい？」
「ええ、いつでもいらっしゃい」
「ありがとう」
「レオン、無理しすぎるんじゃねぇぞ。お前もまだ子供なんだからな」
「おじさん、ありがとう」

そうして皆に現状を話して今後の話をした後、アイテムボックスに入っていた食事で一緒に昼食を取り、俺はおじさん達の家を後にした。

そして最後は従業員寮だ。従業員の皆は使徒様のことも貴族の制度も知っていたのでスムーズに話は進んだ。反応としてはかなり驚いてはいたけれど、雇い主が大公家に代わるということを純粋に喜んでくれた。
商会だと何かあって潰れることもあるけど、大公家ならその心配もないからね。結構皆は強かだ。頼もしい従業員だな。

そうして三か所を周りとりあえずすぐに現状を伝えるべき人達には伝えて、俺は公爵家に帰った。最近忙しすぎるな……

２６８、五人でのお茶会

それから数日間、俺はまた王宮に通い詰めてお披露目の準備をした。そして今日はやっと一日仕事がない日だ。
もう本当に疲れた。魔物の森から帰ってきてその日からずっと働き詰めだ。アレクシス様容赦ない！

でも今日は皆とのお茶会があるから、疲れた体も少しは軽くなっている。帰ってきてからずっと忙しかったので、公爵家に着いて解散してから一度も五人で集まれてないのだ。今日はついに五人でのお茶会ができる。
場所は公爵家の応接室だ。

「リュシアン、もう本当に疲れた……」
「レオンはかなり忙しそうだったな。でも使徒様としてお披露目をするのだから仕方がない。それに婚約発表もするのだろう？　ここまで短い準備期間でその二つをやるのだから、忙しいに決まっている」
「それは分かってるけど、俺はまだ子供なんだよ。アレクシス様はそこのところわかってない！」
「レオンは子供に見えないからな……」

まあそうなんだけどね。多分アレクシス様も元々俺のことを子供と思ってなくて、さらに使徒様だったことが判明しちゃったから、すっごく有能でなんでもできるとか思ってるんだ。そんなことないのに……

「失礼いたします」

そんなことを話していたら部屋にロニーがやってきた。

「あっ、ロニー！」

「レオン来たよ。リュシアン様、お久しぶりです」

この前従業員寮に行った時はあんまり話せなかったから、俺も久しぶりの気分だ。

「レオン疲れてるね」

「そうなんだよ。もう凄い疲れてる。仕事量が半端ないんだ……」

「色々凄いことになってるみたいだもんね。僕詳しいことは全然知らないんだけど、話してくれる？」

「うん。ステファンとマルティーヌが来たら話すよ」

「ありがとう」

「ロニー、レオンはマルティーヌと婚約するんだぞ」

リュシアンは少し揶揄うような口調でそう言った。するとロニーは少しだけ驚いたような表情をした後に口を開く。

「やっと告白したの？　レオンはヘタレだからできないかと思ってたけど」

「……え、なんで知ってるの」

マルティーヌが好きなことは誰にも言ってなかったのに……

「レオンは分かりやすいから誰でもわかるよ。マルティーヌ様も僕達しかいない時はわかりやすかったし、なんでくっつかないのかなと思ってたんだ。でも貴族様は色々あるんだろうと思って口出しするのはやめてたんだけど……」

俺はそんなロニーの言葉を聞いてガクッと体の力が抜けた。そして顔が少し熱くなる。絶対にバレてないと思ってたのにバレバレだったなんて、めちゃくちゃ恥ずかしい。
というか俺、そんなにわかりやすかったら貴族向いてないじゃん。これからはもっと気をつけよう……

「今凄く恥ずかしい……」
「ははっ、レオンが照れてるの珍しい。でも良かったね。おめでとう」
「ロニー、ありがとう」

そこまで話したところでステファンとマルティーヌも部屋にやってきた。

「あっ、二人とも来たね」
「待ったか？」
「ううん。全然大丈夫」
「マルティーヌ様もお疲れのご様子ですね」
「ええ、お母様がドレス作りに張り切ってるのよ」

マルティーヌとは数日前に会ったきりだけど、その時よりも疲れている様子だ。でもドレスはもう決めたよね？

「ドレスはもう決めたはずだけど、変更になったの？」
「違うわ。お母様が春の月を祝うパーティーで着るドレスをもっとたくさん仕立てましょうって張り切ってるのよ」

そっちか……確かにエリザベート様凄く張り切ってたよね。あのテンションに毎日付き合ってたら流石に疲れるだろう。

「頑張れ……」
「私も楽しいからいいのよ。ちょっとお母様が張り切りすぎてるだけで……」

そうして俺とマルティーヌが顔を見合わせて、お互いを労うように笑い合っていると、リュシアンが改めて口を開いた。

「マルティーヌ、レオン、改めて婚約おめでとう」

それにステファンとロニーも続く。

「二人ともおめでとう。レオンとは義兄弟になるんだ、これからもよろしく頼む」
「マルティーヌ様、レオン、ご婚約おめでとうございます」

俺は皆からそうして祝われて、今までは忙しくて感じている暇がなかった嬉しさを感じた。胸がポッと温かくなったようだ。

「皆ありがとう。嬉しいわ」
「リュシアン、ステファン、ロニー、皆ありがとう」
「マルティーヌはやっと婚約者が決まったな」
「ああ、レオンがいなかったら一生決まらないところだった」

リュシアンとステファンが苦笑しながらそう話す。そんな二人の会話にマルティーヌが少し拗ねたように口を開いた。

「私は素敵な婚約者が現れるのを待っていたのよ。実際今まで断っていて大正解だったわ」

俺はその言葉を聞いて頬が熱くなるのを感じた。素敵な婚約者って、なんか照れる……

「確かにレオン以上の婚約者はいないな」

「何せ大公だからな」

「そうよ。それに性格もレオン以上に素敵な人はいないわよ」

マルティーヌはそう言って俺に向かって笑顔を見せた。うぅ……だから心臓に悪いって。マルティーヌは結構ストレートに言うんだよね。凄く嬉しいんだけど、とにかく照れる。俺は奥手な日本男児なんだ。

「ありがとう……」

「レオン、顔が真っ赤だよ？」

隣に座っていたロニーに顔を覗き込まれながら、少しだけ揶揄うようにそう言われた。

「それは言わないで……！」

「はははっ、レオンが照れてるのはなんだか新鮮だな」

そうして皆で笑い合って、部屋には和やかな楽しいムードが漂った。俺はめちゃくちゃ恥ずかしいけどね！

「え、えっと、王立学校の様子はどう？」

俺は恥ずかしさに耐えかねて無理やり話題を変える。それに乗ってくれたのはリュシアンだ。

「そうだな。レオンが使徒様だということは噂でかなり広がってい

る。しかし信じていない者も一定数いるな。それから魔物の森についての話もかなり広がっているぞ。本当に危機的状態なんじゃないかと、皆の間で不安が広がっている様子だ」

おおっ、じゃあ魔物の森への遠征は効果あったってことだよね。それなら良かった。これで少しでも協力的な貴族家が増えたらいいんだけど。

「それからお披露目の話もかなり話題になっている。全ての貴族家に招待状が届いたからな」

「その招待状ってどんな内容だったの？」

「確か使徒様御降臨に伴うパーティー、だったな」

御降臨って、確かにそうなのかもしれないけど大袈裟だよ……そんなパーティーの主役になるのか。改めて考えたらかなり緊張する。

「使徒様が俺だってことはまだ公式には明かされてないんだよね？」

「そうだ。だから様々な憶測が飛び交っているぞ。ただレオンがバリアや転移を使うところを見た者が多くいるから、レオンが使徒様ではないかって説が一番有力だな」

実際に見た人がいるんだからそうなるよね。でももうお披露目するんだし、俺的にはレオンが使徒様って噂が広まった方がありがたいな。その方がパーティーの時に出ていきやすい。

使徒様は可憐な美少女で慈悲の心を持つ素晴らしいお方だ、なんて噂が一人歩きしてたら出ていきにくいなんてものじゃない。

「じゃあ王立学校も落ち着かない感じ？」

「そうだな……ただ普通に授業は行われているぞ」

「休み時間に少し騒がしい程度よね」

その程度で収まってるのなら良かった。
今までは毎日通うの面倒くさいなとか思ってたんだけど、もう通えないってなると王立学校に行きたくなる。ちょっと皆が羨ましい。

「レオンはもう王立学校には来ないの？　レオンの机とかはそのまま置いてあるけど……」
「うん。これからは忙しくなるし、もう通うことはないと思う。でも卒業試験だけは受けさせてもらえるみたいなんだ」
「そうなんだ、それは良かったね。確かにレオンは王立学校に通ってる場合じゃなくなるよね……」
「うん。魔物の森にも行かないといけないし、アレクシス様の側近もやることになったし。あっ、この話してなかったっけ」
「聞いてないよ」
「実はね……」

それからは皆に、というよりもリュシアンとロニーに、魔物の森に数人の騎士と向かう予定のことやアレクシス様の側近をやることなどを話した。

「魔物の森の奥まで行くなんて……本当に大丈夫なの？」
「かなり危険ではないのか？」

この話を知らなかったリュシアンとロニーが険しい顔をしてそう口を開く。やっぱりそう思うよね。

「うん。俺の魔法と魔法具を駆使すれば大丈夫だよ。心配しないで」
実際は奥にいる魔物がどの程度の強さなのかもバリアで防げるのかもわからないけど、でも大丈夫だと信じたい。それにヤバい時は

撤退すればいいし、ミシュリーヌ様も助けてくれるだろう。

「本当に……？」

「大丈夫。俺にはミシュリーヌ様がついてるから」

そう言うと二人は少し表情をやわらげた。やっぱり神様への信頼は厚いな。実際はかなりのポンコツなんだけどね……。それでも神様だということに変わりはない、はずだ。

「そうだよね。……レオン、この国をよろしくね」

俺はロニーにそう言われて、初めて俺の働きに世界中の人の命がかかっているということを実感した。そしてそれと同時に気が引き締まった。

「うん、任せて。絶対に救ってみせるから」

２６９、お披露目前日

明日は遂にお披露目の当日だ。俺は今日から王宮に詰めて最終チェックをする予定となっている。
いつもはすぐにアレクシス様の執務室に向かうけど、今日は直接お披露目の会場となるホールに集合だ。まずはそこで全体の流れを覚えるらしい。

リシャール様と共にホールに向かうと、そこではたくさんの使用人が忙しく作業をしていた。しかし俺たちが中に入ると、全員その場に跪き頭を下げる。奥にはアレクシス様とエリザベート様、それからマルティーヌもいるようだ。

「リシャール、レオン、こっちに来てくれ。皆は気にせず仕事を続けてくれ」

アレクシス様がそう言うと跪いていた使用人達はまた素早く動き始めて、ホールの準備を再開した。
ホールには煌びやかなシャンデリアが輝き、幾つものテーブルが設置されている。まだ飾り付けなどは途中のようだ。
この国のパーティーは基本的に立食形式なので、椅子は少ししか置かれていない。休みたい人や気分が悪くなった人は休憩室を借りられるようになっている。

そんなホールの様子を横目に見つつ、俺達はアレクシス様達の元に向かう。

「陛下、王妃殿下、王女殿下、おはようございます」

「おはようございます」
「二人ともおはよう。朝早くから悪いな」
「いえ、当然のことです」
「私のためにご尽力いただきありがとうございます」
「それこそ当然だ」

そうしてアレクシス様と話していると、マルティーヌが笑顔で俺に話しかけてくれた。

「レオンおはよう。遂に明日ね」
「うん。結構緊張してるんだ。こんなに大きなホールでお披露目するなんて……」

このホールの奥には階段がありその上に舞台があって、その舞台に直接出られるドアがある。俺は当日そこから舞台上に姿を表す予定だ。めちゃくちゃ目立つよね……

「大丈夫よ。私も隣にいるわ。それにお父様もお母様もお兄様も」
「そうだね。頑張るよ」
「ええ、私達もいますから気負わずに」
「はい。エリザベート様、ありがとうございます」

ホールの雰囲気に気圧されてちょっと緊張してたけど、二人の笑顔に少し和らいだ。

「ではレオン、早速当日の流れについて確認しても良いか？」
「はい。よろしくお願いします」
「明日のパーティーの開始時間は十二時だ。今回は昼のパーティーになる。十時ごろから騎士爵の者が段々と集まり始め、十一時半過ぎには公爵家の者が会場に来る予定だ。リシャールもそのぐらいに

は来るだろう？」
「はい。当日は十一時半に屋敷を出ますので、それから十分ほどでここに着くかと思います」
騎士爵の人は十時に来るんだね。待ち時間長くて大変そうだ。
「そして貴族が皆集まったところで私達が会場に出て、パーティーは始まることになる。とりあえず舞台上に行ってみよう」
そうして連れてこられた舞台の上は、会場全体を容易に見渡せる場所で少し怖いほどだった。
「この舞台に出てきたらまずはそのまま席に着く。基本的には貴族は立食だが王族だけは座るのが基本だ。レオンも王族と同じ扱いになるからな」
「分かりました」
「そして私達が席に着いたら正式にパーティーの始まりだ。私が開始の挨拶をしてそのあとは自由に談笑となる。しかし明日はこの挨拶の時にレオンが使徒様だと公にし、その後にレオンの挨拶と宣言。それからマルティーヌとの婚約を発表する。それが終わってから談笑タイムだ」
最初からハードだな。でもお披露目しないとなんで俺がそこにいるんだって話になるもんね。頑張ろう……
「談笑タイムは貴族が家ごとにレオンの元を訪れる時間となるだろう。公爵家から順番に来るのでその挨拶を聞くのがレオンの仕事だ。貴族は階段を中腹まで上がり、そこで跪き挨拶をする決まりだ」
そんなルールがあるんだ。だから階段の途中に踊り場みたいな広

い場所があるんだな。真っ直ぐの階段なのに必要なのかなって思ってたんだ。

「全ての家からの挨拶を受けなければいけないのですか？」

「いや、基本的には伯爵家か子爵家までだな。王族としての披露目の時もやるのだが、基本的にはそこで打ち切る。レオンが最後までやると言うのなら止めはしないが……」

「いえ、伯爵家までお願いします」

俺のことを憎い貴族もいるだろうし、そんな貴族の挨拶をずっと受けなきゃいけないなんて拷問でしかない。できる限り人数は少なくするべきだろう。

「ではそのように取り計らおう」

「よろしくお願いします」

「そしてその挨拶が終わり次第、ダンスの時間となる。階段の下にテーブルが置かれていない広い空間があるだろう？　あそこがダンススペースだ。明日のファーストダンスはマルティーヌとレオンだ。そのあとは誰でも自由に踊れることになる」

そうだった……ダンスもあるんだよね。

ファーストダンスとはパーティーで最初に踊るダンスのことだ。この国のパーティーでは必ずと言っていいほどダンスを踊るんだけど、最初の一曲は必ず主役の二人だけでダンスを踊るのだ。そしてその後は誰でも自由に踊って良いことになる。

毎年冬に開かれる王宮でのパーティーは、アレクシス様とエリザベート様がファーストダンスを踊っているし、貴族が開くパーティーはその貴族家の当主と妻が踊ることが多いらしい。

このダンスも俺が緊張してる原因なんだよね……。ダンスはちゃ

んと練習してたし、ここ数日復習してたから大丈夫だとは思うけど心配だ。

「マルティーヌ、明日のドレスでダンスの練習に付き合ってくれない？　服が違うとまた感覚が違うかもしれないから……」
「もちろんいいわよ。お母様、もうドレスはありますよね？」
「ええ、昨日届いているわ」
「じゃあ練習しましょうか」
「うん。ありがとう」

当日の服で練習すれば少しは緊張も和らぐだろう。いつもの服と違ってマルティーヌのドレスの裾を踏んじゃったとか、そんなミスをしたら目も当てられない。俺は別にいいんだけど、マルティーヌに恥をかかせるのだけは嫌だ。

「では早めに準備を終えてしまおう」
「ありがとうございます」
「そしてダンスの後だが、レオンの要望通りにスイーツのお披露目をする予定だ。ヨアンという料理人は数日前から必死に準備をしているぞ」
「時間を作ってくださり、ありがとうございます」

実はお披露目の中で何かやりたいことはあるかとアレクシス様に聞かれて、スイーツのお披露目がしたいと何気なく口にしたらそれが採用されたのだ。
なので明日のパーティーでは、ヨアンが作った渾身のスイーツがたくさん並ぶことになっている。ヨアンとポール、リズは数日前から王宮の厨房の一つを借りて準備に尽力してくれてるので、明日は素晴らしいものが出来上がるだろう。

別にここで大々的にお披露目をしなくてもお店は上手くいく気もしたんだけど、どうせなら使徒様というネームバリューも使って、ジャパーニス大公家のお店として大々的に広めることにしたのだ。

多分これで貴族のハートをがっちりと掴めるだろうから問い合わせが殺到するはずだ。そして少し焦らして春に開店すれば、お店は大繁盛間違いなしだろう。

春の開店までの間に予約でホールケーキのみの販売をしてもいいかもしれない。いずれにしてもお店は大成功だ。

俺はそんなことを考えて自分の顔が緩んでいくのを感じた。ふふっ……お金はたくさんあるけど、やっぱりお店が成功するかもって思ったら嬉しいな。

ロニーも忙しくなるけど協力してくれるって言ってたし、というかこの提案を最初にしたのはロニーだし、皆も協力して頑張ってくれるだろう。使徒になっても食文化向上は頑張ろう。

「そしてスイーツのお披露目をしたら私達は下がって、パーティーも終わりだ。流れはわかったか？」

「はい。大丈夫です」

「では場所を移動しよう。レオンはこれからもたくさんやることがある。衣装の最終チェックをして、身体中を磨き上げなければいけないからな」

え、身体中を磨き上げるって、それ男もやるんですか！？

それからはマルティーヌとダンスの練習をして軽く昼食を食べた後、俺は三人の使用人に隅々まで磨き上げられた。お風呂でいつもより念入りに洗われた後、全身をオイルのようなものでマッサージされて指先まで綺麗にされた。爪もいつもより丁寧に整えられたし、かなり疲れたよ。

女性は毎日これをやってるって聞いた時はマジで尊敬した……俺には無理だ。

270、パーティー会場へ

そして次の日の朝。俺はロジェに起こされて気持ちよく目覚めた。
前日の夜は緊張して寝られないかもって思ってたんだけど、お風呂から全身のケアをされたのが思いのほか疲れてそのまま深い眠りに落ちたのだ。昨日のは疲れたけど、あれはあれで良かったのかもしれない。よく眠れたし。

「レオン様、本日のご朝食はお部屋でお召し上がりいただきます。そして朝食が終わり次第パーティーの準備となりますので、よろしくお願いいたします」

昨日は王宮に泊まったのでいつもの環境とは全く違うだろうに、ロジェはいつものように完璧な仕事をしている。やっぱりロジェは凄いな。
……そういえば、ロジェはタウンゼント公爵家から借りてるって形だけど、俺が大公になったらどうなるのだろう。俺はこれからもロジェに従者でいて欲しいんだけど……

「ロジェ、ロジェを大公家で雇いたいって言ったら頷いてくれる？
……いや、今気づいたんだ。ロジェはタウンゼント公爵家から借りてるだけだったなって。でも俺はこれからもずっとロジェに従者でいてほしいし……」

ロジェなら従者じゃなくて執事でもいいかもしれない。でも執事だとずっと俺についてもらうことは難しくなるのか。それだと従者のままでいて欲しい気もする……

「レオン様、私はずっとレオン様にお仕えしたいと思っております。私を大公家に雇っていただけるのであればそれ以上の幸せはありません」
「本当！？」

俺はロジェのその言葉に思わず食い気味に反応してしまった。だってロジェは公爵家に助けてもらったっていう恩があるし、もしかしたら断られるかなって思ってたんだ。凄く嬉しい。

「はい」
「ありがとう、嬉しい。じゃあリシャール様と話をしておくね」
「よろしくお願いいたします。ただ大旦那様からは、レオン様のところに行きたければ自由にして良いとのお言葉を頂いておりますので、問題はないかと思います」
「そうだったんだ……」

流石リシャール様だ。でもちゃんと俺から話をしておこう。

「わかった。でもちゃんと俺から話をしておくね」
「よろしくお願いいたします。では、朝食を運んで参ります」

そうしてそれからは素早く朝食を終えて、その後はパーティーの準備だ。また何人か使用人の方が来てくれて、俺に衣装を着せて髪を整えていく。装飾品も完璧な配置に仕上げてくれた。マネキンになった気分だ。

「レオン様、お支度が終わりました。これからは王族専用の控室でパーティーが始まるまでお待ちいただくことになります」
「うん。じゃあ行こうか」

今の時間は十一時ぐらいだ。後一時間ほどでパーティーが始まる。そう思ったらかなり緊張してきたかも……

でも大丈夫だ。ちゃんと流れも確認したし、宣言の内容も考えたし、ダンスも練習したし。うん、大丈夫、俺ならできる。

そうして自分に言い聞かせながら王宮の廊下を歩いていると、すぐに控室に着いた。

「レオン様がお越しです」

ロジェがノックをした後に声をかけると、部屋の中にいた使用人の方がドアを開けてくれる。まだアレクシス様達は来てないみたいだ。

「レオン様、お茶をお淹れいたしますか？」

「ううん。今はいいかな」

「かしこまりました」

パーティーの途中でトイレに行きたくなるのも嫌だし、極力水分は取らないほうがいいだろう。でもさっきから緊張して手汗が凄いんだけど大丈夫かな？

この手汗が服に染み込んだら、せっかくパリッと決まってる服がよれよれになっちゃうよね。俺はそう思って頻繁に手のひらにピュリフィケイションをかけながら皆を待った。

そうして十分ほど待機していると、部屋にアレクシス様とステファンが入ってきた。アレクシス様は豪華なマントを付けているみたいだ。凄く王様っぽい。いや、ぽいというか王様なんだけど。

「レオンおはよう」

「おはよう」

「アレクシス様おはようございます。ステファンおはよう」
「緊張しているか？」
「はい、かなり緊張しています。アレクシス様は緊張なさらないのですか？」
「いや、緊張はするな。ただ隠すのが上手いだけだ」
……凄いな、全く緊張しているように見えないのに。俺も上手く隠せるようになりたい。
「私もそうできたら良いのですが」
「そうだな……コツは演じることだ。本来の自分と公の場に立場を伴って出る自分。その二つを使い分けると良い」
「演じる、ですか？」
「レオンならば公の場でのみ使徒様を演じれば良いのだ。そうすると常に冷静でいられる」
「そうなのですね……やってみます。ありがとうございます」
使徒様を演じる……確かに良いかもしれない。演じる意識で頑張ってみよう。
そうして俺が使徒様になり切ろうと奮闘していると、部屋のドアが開きエリザベート様とマルティーヌが入ってきた。
俺は部屋に入ってきたマルティーヌを見た途端、目が釘付けになり思わず立ち上がってしまう。目を奪われるとはこういうことだったのかと、初めて理解した。
「レオン、どうかしら？」
マルティーヌは少しだけ恥ずかしそうに頬を赤く染めながら、小首を傾げて俺に聞く。

俺はその言葉に返答しようとしたんだけど、言葉を失って身動きが取れなかった。だって、可愛すぎる、綺麗すぎる。
昨日ダンスの練習の時にドレスを着たのは見たんだけど、髪をセットして装飾品も全て身に付けたら全然違う。

「レオン？　似合ってないかしら……」
「ちっ、違う！　あの、すっごく、綺麗だ」

少しだけ夢見心地な気分で思わずストレートにそう口にすると、マルティーヌは頬を赤く染めて花が咲くように笑った。

「ありがとう。嬉しいわ」

俺はその笑顔にまた心を奪われる。胸がドキドキしてぎゅっと痛いぐらいだ。
マルティーヌを抱きしめたい、その想いに支配され無意識のうちに一歩前に足を踏み出すと、エリザベート様の声に遮られた。

「二人ともそろそろ座りましょうか」

そうだ、ここは控室だ。周りに皆もいたんだった。抱きしめちゃダメだろ。というか、二人きりでもダメだ。
俺は思わず湧き上がった衝動を拳をぎゅっと握って押さえ込み、さっきまで座っていたソファーにまた腰掛けた。ふぅ……危なかった。

「マルティーヌ、似合っているな」
「お兄様、ありがとうございます」
「さて、皆揃ったわけだがパーティーまでは後十分ほどだ。最終確認をしておこう」

そうしてそれから十分間、今日の流れをさらっとおさらいして、ついにパーティーが始まる時間となった。

「皆様、会場までお願いいたします」

「分かった。では行こう」

王宮の廊下を緊張しつつ歩き、舞台上につながるドアまで辿り着く。ドアはまだ閉まっているけれど、ホールのざわめきがここまで漏れ聞こえる。そのざわめきにまた緊張が高まるけど、深呼吸をしてなんとか自分を落ち着かせた。

「では扉を開きます」

扉が開くと、さっきまで微かに聞こえていたざわめきが途端に大きくなった。シャンデリアが煌めき豪華に彩られたホール、そしてそのホールに集まる煌びやかな衣装を着た貴族達。そんな様子がよく見える。

最初に舞台に出ていくのはアレクシス様とエリザベート様だ。アレクシス様がエリザベート様をエスコートする形で歩いていく。そして次はステファンだ。ステファンに婚約者がいればその女性がここでエスコートされることになるらしいけど、まだ正式に決まっていないのでステファンは一人だ。

そして最後が俺とマルティーヌ。俺がマルティーヌをエスコートして舞台上に出る。

俺が舞台に姿を現した時の反応はそれぞれだった。ある貴族は感動した面持ちで俺に対して膝をつき、ある貴族は俺を憎むように睨

みつけ、ある貴族は素直に驚き、ある貴族は訝しみ、ある貴族は歓迎の意を示してくれた。

さまざまな思惑が絡み合う貴族達の視線に尻込みしそうになるけど、腕に触れるマルティーヌの体温に力をもらい、背筋を伸ばして一歩足を踏み出した。

271、お披露目

俺達全員が舞台上にある席に着くと、示し合わせたように貴族達は口をつぐみ会場はしんっと静かになった。
完全に会場が静かになったところでアレクシス様が立ち上がり、舞台の前まで歩いていく。

「皆の者、本日は急な招待にもかかわらず集まってくれたことに感謝する。本日は使徒様お披露目のパーティーだ。この国に使徒様がいらっしゃったのは数百年前。使徒様はこの国の祖であるお方だ。この国が今大国として力を持っているのは、使徒様のお力の賜物であろうことは想像に難くない。皆ももう知っているとは思うが、今この国には危機が訪れている。魔物の森が広がり、このままの勢いならば十数年で私たちが築き上げてきたもの全てが滅びるだろう」

アレクシス様がこの話をすると顔を引き締める貴族が半数、残り半数のうちの七割ほどは困惑した表情、そして最後に残った貴族が馬鹿にしたような表情や憎悪の表情を浮かべている。
遠征や平民への公布、それから使徒様が現れたという事実。これらで思いのほか敵対勢力も減らせたみたいだ。

「しかしそんな時に、またこの地に使徒様が御降臨してくださったのだ。女神様が使徒様を遣わして下さったのだ。なんと光栄なことだろうか。最近はミシュリーヌ様への信仰心も減り、その教えを忘れている者も多いようだ。しかしここで今一度思い出す時が来た。女神様の、使徒様の教えを。ではレオン、こちらへ」

アレクシス様のその言葉に従って俺は椅子から立ち上がり、アレ

クシス様の隣に並んだ。そして使徒様を演じて口を開く。

「女神ミシュリーヌ様よりこの地へと遣わされた使徒であるレオンだ。この国、いやこの世界を魔物の森の脅威から守り、この国をより一層発展させる使命を授かってきた」

そうして話し始めると、九割ほどの貴族はその場に跪いた。しかしまだ信じていないのか信じたくないのか、跪かずにその場でこちらを睨みつけている貴族が何人かいる。

ここでこんなに目立つことしたらこの後不利になるだろうに、やっぱりちょっと馬鹿なのかな。ずっと特権を持っていると思考停止になるのだろうか。

「私はミシュリーヌ様より使命を与えられた使徒だが、この国で生まれ育ったレオンという一人の人間でもある。そこで私は王家への忠誠を誓うことと決めた。これからは王家のため、この国のために働こうと思う。皆の者、これからは同じ国に仕える者としてよろしく頼む」

俺がそこまで言うと、アレクシス様が一歩前に出た。

「今レオンから宣言があった通り、レオンはこの国に忠誠を誓ってくれた。これにより立場は王族の方が上になったが、レオンが使徒様であることに変わりはない。私達はレオンを敬う気持ちは持ち続ける。よってレオンと私達の立場は対等なものになったと思ってくれ」

一連の流れに貴族達はかなり驚いていて、追いつくのに必死という感じだ。

「それから後二つ発表がある。まずはレオンの家に爵位を与えることとする。レオンはまだ未成年であるので、レオンの父ジャンへ大公位を与える」
「ありがたき幸せ」

父さんはこの場にいないので俺が代わりに答える。

「しかしレオンの父からレオンに爵位を譲りたいと申し出があった。本来ならばレオンが成人してからでなければ爵位は継げない決まりだ。しかしレオンは使徒様である。そこで特例として、未成年への爵位譲渡を認めることとした。よって今この時からレオンが大公となる。家名はジャパーニスだ。覚えておくように」

アレクシス様がそこまで話すと俺に目配せをする。そこで俺は一歩前に出てまた口を開いた。

「ジャパーニス大公家をよろしく頼む。今日ここにはいないが、前大公である父の後を立派に引き継げるよう努力する」

かなり強引だけど、これで父さんが前大公で母さんがその妻、マリーが前大公の娘ってことになるらしい。多分使徒様じゃなければできないゴリ押しだろうな。

「それからもう一つ報告だ。マルティーヌ前へ」

アレクシス様のその言葉にマルティーヌがゆっくりと舞台の上を歩いてくる。そして俺の隣に並んだ。

「私の娘であるマルティーヌと、ジャパーニス大公家当主であるレオンの婚約をここに発表する」

その言葉にほとんどの貴族達は拍手をして祝ってくれたけれど、一部の貴族や貴族子息にはめちゃくちゃ睨まれた。この場所って思ってる以上に下にいる人たちの表情が見えるんだよね……

「では報告は以上だ。パーティーを楽しんでくれ」

アレクシス様がそう告げると貴族達が一斉に話し始め、会場のホールはざわめきを取り戻した。

俺達はその間にテーブルまで戻りまた席に着く。

「ふぅ〜……」

俺は席に着いた途端に思わず大きく息を吐き出した。めちゃくちゃ緊張した。でも一番重要なところはやりきったよね。俺頑張った……

「レオンお疲れ様」

「うん。大丈夫だったかな？　変じゃなかった？」

「威厳があってカッコよかったわよ」

「本当？」

「ええ」

マルティーヌにかっこいいって言ってもらえるなら、たまには使徒モードをやろうかな。そんな馬鹿なことを考えているとだんだんと体の力が抜けてくる。

まだ気を抜いちゃダメだけど、少し休むぐらい良いだろう。そう思ってお茶を飲みながら少し休憩をした。

「レオン、貴族達が順番にやってくる。そろそろ向こうの席に移動しよう」
「はい」

俺はアレクシス様のその言葉に再度気を引き締めた。貴族の挨拶を受ける場所は今座っているテーブルではなく、舞台の先に置いてある椅子なのだ。よしっ、もう少し頑張るかな。

椅子に座るとまず挨拶に来てくれたのはタウンゼント公爵家の皆だった。俺は皆の顔を見た途端に思わず顔が緩んでしまうほど安心した。

「レオン様、大公位の叙爵おめでとうございます。この国に忠誠を誓う者同士、これからも懇意にしていただければと思います」

リシャール様は流石に公の場では敬語を使わないといけないらしい。それで俺は敬語を使ってはいけない。ちょっと寂しいけど公の場では仕方ないよね。

「共にこの国を良くしていこう」

そう言いつつ親しみを込めて笑いかけた。するとリシャール様の後ろにいたリュシアンが同じように笑いかけてくれる。リシャール様も少しだけ苦笑いだ。うん、やっぱり皆大好きだ。

その次に来たのはプレオベール公爵家だった。プレオベール公爵本人とアルテュル様が二人で階段を登ってくる。あっ、もう敬称はつけなくてもいいのか。でもしばらく慣れないだろうな。

プレオベール公爵は俺を睨みつけていて、アルテュル様は何かを言いたそうな表情で、でも口を開けずにいるようだ。

「レオン様、お初にお目にかかります。ディミトリ・プレオベールと申します。以後お見知り置きを」
「ああ、これからよろしく頼む」
「……それにしてもレオン様はご自身の足でしっかりと歩かれるのですね。確かに歩かなければ健康に悪いとも聞きますし、そちらの方が良いのでしょう。あっ……もし未だ力を振るえないのでしたら申し訳ありません。責めるような意図はありませんのでご容赦いただきたく。……レオン様はまだ可愛らしいですから、焦ることはありません」

……なんか、なんかイラつくな。
前の使徒様は転移を使ってたけど使えないのか？　まあ、まだ子供だから気にしなくていいよ。でも子供で力を持ってないならでかい顔するなよ。って感じに聞こえる。

「突然能力を使っては皆が驚くからな」

俺は少しだけ驚かしてやろうと転移を使って一瞬でプレオベール公爵の元に移動し、耳元でそう言った。
その様子に会場は騒然となる。やっぱり実際に見ると驚くんだな。プレオベール公爵も顔を青くして驚愕の表情だ。本当に俺が転移をできないって思ってたのかな？　やっぱりこの人頭悪い？

「下がれ」

そんなことを考えつつまた転移で席まで戻り、足を組んで少し威厳を出して低い声でそう告げた。俺のその言葉を聞いたプレオベール公爵は、慌てて階段を降りていく。アルテュル様は少し名残惜しげに俺の顔を見てから階段を降りていった。

何か言いたいことがあるのかな……後でアルテュル様と話す時間を作れたらいいんだけど、多分難しいよね。

それからはさっき力を使ったのが功を奏したのか、挨拶に来る貴族全員が低姿勢でとにかく持ち上げられた。

側室にって娘を紹介してくる貴族もたくさんいたな……ちょっと、いやかなりうんざりした。マルティーヌの気持ちが初めて心から分かったよ。

272、ダンスとスイーツ

貴族からの挨拶が終わり、それからしばらくは食事を食べつつパーティーの雰囲気を楽しんだ。

そしてついにダンスの時間だ。ダンスホールだけに強い光が当てられ、周りの光が少し落とされた。

「此度のファーストダンスはレオンとマルティーヌだ」

アレクシス様のその声に合わせて楽器が奏でられ、俺とマルティーヌはゆっくりと階段を下っていく。そしてダンスホールの中央で立ち止まると、ダンスの音楽が流れ始めた。それに合わせてマルティーヌと共に踊る。

滑らかに、優雅に、微笑みを絶やさず、背筋を伸ばして。ダンスの先生に注意されてきたことを頭の中で復唱しながらダンスを踊っていく。

ダンスも中盤になりこのままいけば完璧だ。そう思ったその時、マルティーヌが練習と少しだけ違う動きをした。

「どうしたの？」

「レオン、もっと楽しく踊りましょう？　別に完璧でなくてもいいのよ」

俺はそう言われてハッと気づいた。失敗しちゃいけないと思いすぎて全く楽しめてなかったことに。パーティーのダンスなんだから楽しんでこそだよね。

そう思った途端、体に入っていた余分な力が抜けてさっきよりも

気持ち良く踊れるようになる。

「マルティーヌありがとう。大切なことを忘れてたよ」

「そうよ。せっかく公の場で初めて二人で踊るダンスなんだから楽しまなきゃ損だわ」

「そうだよね」

俺はさっきまでの微笑みではなく、心からの笑顔を浮かべてマルティーヌに笑いかける。するとマルティーヌも楽しそうに笑ってくれた。

さっきまではマルティーヌの顔も見てなかったな……本当に余裕なかったみたいだ。

それからは自分らしく楽しくダンスを踊った。煌びやかなホールで着飾ったマルティーヌとダンスをする。夢みたいな時間だ。

ダンスが終わり音楽が止まると、俺達には割れんばかりの拍手が送られた。周りを見回してみると、ほとんどの人がキラキラした瞳で俺達のことを見ている。

拍手をするのはマナーだけど、貴族達の瞳を見ると本心からの拍手だとわかる。なんだか嬉しいな。こうして全員と仲良くなれたらいいのに。

「レオン、戻りましょう」

「うん」

それからは貴族達が思い思いの相手とダンスを踊る様子を舞台から眺めた。こういうパーティーは年頃の男女が相手を探す場でもあるようで、初々しい二人のダンスがあちこちに見られて微笑ましい。俺達もそんなふうに見られていたと考えたらちょっと恥ずかしいけどね。

そうしてパーティーも終盤となり、ついにスイーツのお披露目だ。
「皆の者、パーティーの最後にジャパーニス大公家が新たに始めるスイーツ専門店、シュガニスのスイーツをお披露目したい。今までにない画期的なスイーツだ。楽しんでくれ」

俺が会場に向かってそう告げると、ヨアン達料理人や給仕担当のアンヌ達、それからロニーがスイーツを運んで会場に入って来た。王宮の使用人達も手伝ってくれているようだ。
各テーブルにカットされたケーキが全種類並ぶように盛り付けてある。そしていくつかはカットされていないホールケーキも見える。これはいい宣伝になりそうだ。

「あれはなんですの？　美しいわ」
「大公様はスイーツと仰られていましたわ」
「あれほど美しいスイーツなどあるのかしら」

そんな会話がそこかしこで聞こえる。貴族の奥様方や御令嬢の心はバッチリ掴めてそうだ。

「こちらはケーキというスイーツだ。いくつか種類があるので、どのようなものかは近くにいる給仕の者に聞いてくれ」

そう言って下の様子を何気なく眺めていると、ロニーが俺の方を見ていてバチッと視線があった。するとロニーは頼もしい笑顔で微笑んで貴族の方に向き直る。
ロニーは王立学校で学んでるし、アンヌにも作法をより良くできるように学んでるみたいだし、こういう場でも全く浮いていない。ロニーは本当に凄い。最初に会った時は孤児院出身でおどおどして

るって印象だったのに、今では凄く頼もしくて仕事も任せられる。

「レオン、私達も食べましょう」

皆が働いている様子をじっと眺めていたら、いつの間にか俺達にもケーキが運ばれて来ていたようだ。マルティーヌに呼びかけられて俺も席に着く。

「今日のパーティーは大成功だったな」

「ええ、レオンもマルティーヌも堂々としていて素晴らしかったわよ」

「本当ですか！　嬉しいです」

「良かったです」

やった。アレクシス様とエリザベート様のお墨付きなら本当に上手くできてたんだろう。良かった。

「しかし使徒様モードのレオンは、まだ慣れていない感じが残っているな」

アレクシス様はそう言って少しだけ苦笑した。確かに使徒様モードは全然慣れてない。俺でも違和感が凄いんだよね。まずあんな口調使ったことないし。

基本的には今まで通り過ごして、こういう場でのみあのモードを使うとするとずっと慣れないだろうな……

「自分でも違和感が凄いです。……もう少し大人になったら似合うようになるかもしれません」

今の俺は十歳、もう少しで十一歳だからね。まだまだ外見も子供

で威厳なんか出てこないんだ。

……いや、でもステファンには威厳あるな。

「レオンは大人になっても似合わなそうだ」

そう思っていたらステファン本人にそう言われた。うぅ……やっぱりそうなのかな。なんで威厳が出ないんだろうか。外見？　内面？

「どうやったら威厳って出るのかな？」

「そうだな……うん、レオンはそのままでいいと思うな」

「ちょっと諦めないで！」

「だがな……強いて言えば、顔つきか？」

顔つき、それ一番難しいやつだよ！　俺の顔つきはぽわんとしてるってこと？　厳しい感じにすればいいのかな？

「どんなふうに変えればいいかな。眉間に皺を寄せてみるとか？」

俺は眉間に皺を寄せて目の二重を強調させるようにして、さらに腕を組んで少し踏ん反り返ってみた。

「どう？　こんな感じ？」

「ぶはっ……ははは、レオン、やめてくれ……」

ステファンに大爆笑された。別に変顔をしたわけじゃないのに！

「レオン、レオンは今のままでいいわよ。そのままで素敵よ」

マルティーヌにまで慰めるようにそう言われた。うぅ……厳しい

顔そんなに似合わないかな。
アレクシス様とかは普段あまり厳しい雰囲気を出してないのに、王として公の場に出る時は一気に雰囲気が変わるんだよね。その技を身につけたい。

これは要練習だな。最悪バリアでちょっと空を飛ぶとかライトで輝かせるとか、そういう方法でいこう。

そうしてパーティーの最後は少しだけ気を抜いて、皆でケーキを食べながら雑談を楽しんだ。そして最後にお店の紹介と、近いうちにケーキの予約を受け付けることを宣伝し、パーティーは終了となった。
これからは使徒としても頑張ろう。そしてこの国を魔物の森から守りより発展させよう。そう決意を固めた。

273、アルテュルの覚悟

パーティーが終わりやっとゆっくりできる時間が取れたので、俺は公爵家でとにかくのんびりと過ごしていた。使徒として仕事を始めるのは一週間後からに決まったので、この一週間はずっと休みなのだ。本当に久しぶりの長期休暇でかなり嬉しい。

家族皆も屋敷にいるので一緒に料理をしたり、東屋でお茶をしたり、勉強をしたりと充実した日々を過ごしている。

俺のお披露目をしたことで敵対勢力の貴族達がこぞって使徒様支持を表明し、王家への忠誠を誓っているらしい。

この前までと意見が全く違うじゃん、そんなのあり？　って感じだけど、中位貴族や下位貴族はその時々の情勢でより有利な方に付くのが普通なので、意見を翻すことはよくあるそうだ。

ちょっと納得いかないけど、とりあえずは味方が増えた、いや敵が減ったということで喜んでおこうと思っている。

でも高位貴族で貴族至上主義を掲げていた人たちはもう後戻りできないと思ったのか、使徒様の教えを守るのがよほど嫌なのか態度は頑ならしい。というよりも、何か仕掛けてくる動きすらあるそうだ。

物騒だよね……。家族皆にはこの屋敷から絶対に出ないように言い聞かせているし、従業員の皆にも寮にいて貰って護衛を増やして貰った。マルセルさんやニコラ達のところもだ。

そのおかげでケーキの予約が始められないんだよね……大々的に宣伝したんだから始めたいのに。はぁ～、敵対勢力の貴族達、どこまでも迷惑だ。

そんなことを考えつつ公爵家の庭を散歩していると、門のほうに兵士が集まり何だか騒がしくなっているのが確認できた。

「ロジェ、何かあったのかな？」

「確かに騒がしいですね……確認して参りますのでレオン様はここでお待ちを」

そう言ってロジェは足早に門のほうへ行ってしまう。

ロジェは無事に公爵家を退職という形になり、そのまま俺の従者として雇うことができた。これからもずっとロジェが支えてくれると思ったら結構嬉しい。

最初は従者なんていらないって思ってたけど、本当に助けられてるし今となってはいないと寂しい。俺とロジェの関係性も随分変わったよね。

「レオン様、アルテュル様がお越しのようです。……いかが致しますか？」

ロジェは門から戻ってくると困惑した様子でそう告げた。

「アルテュル様って、プレオベール公爵家のアルテュル・プレオベール様で間違いない？」

「はい。間違いありません」

なんで公爵家に……

「一人で来てるの？」

「はい。徒歩で来られたようです。レオン様と話がしたいと仰っております」

「じゃあ屋敷に案内して。あっ、リシャール様に連絡した方がいい

よね。あとカトリーヌ様の許可ももらわないとか。じゃあアルテュル様には兵士の詰所で待って貰って、その間にカトリーヌ様にアルテュル様を招き入れる許可を貰って来て。それからリシャール様にも連絡を」
「かしこまりました。少々お待ちください」
ロジェは兵士達のところに向かい、俺の指示を伝えてまた戻って来た。
「じゃあ俺達は屋敷に戻って応接室で待ってようか。アルテュル様をもてなす準備もしないとね」
「かしこまりました。では戻りましょう」

そうして屋敷に戻り応接室で待つこと十分ほど、カトリーヌ様からの許可が出て、俺はアルテュル様と応接室で向かい合っていた。アルテュル様は憔悴した様子で、緊張しているのか手をぎゅっと握り締めている。

「アルテュル様、本日はどうされたのですか？」
「……まず、屋敷に迎え入れていただけたことに感謝いたします。それからジャパーニス大公様は使徒様であらせられますので、私などに敬語や敬称は必要ありません」
「……分かった。じゃあこれからはアルテュルって呼ぶよ。でもアルテュルもせめてレオンって呼んで。公の場じゃなければ敬語とかも使わなくてもいいし」
これからは俺の方が立場が上ってことに慣れていかないとだけど、周りに人がいない時はいいよね。

「ご配慮ありがとうございます。ではレオン様と呼ばせていただきます」
「うん。それで今日はどうしたの？」
「実は……私の父、プレオベール公爵が……」
アルテュル様はそこまで言うと一度大きく息を吸い込んで静かに吐き出した。そして決意を固めた表情で俺の方を見る。
「レオン様を、暗殺しようとしています」
「……っ」
ロジェが息を飲む音が聞こえた。ロジェが感情を表に出すなんて珍しい。しかも後ろに控えている時になんて初めてかもしれない。
もしかして、その動きは察知できてなかったのかな。
「計画を聞いたの？」
しかし俺は意外と冷静だった。たくさんの人に狙われてるっていう状況に慣れたのかもしれない。俺本人を狙ってくれるのならありがたいぐらいだ。
「はい。……昨夜父が執務室で数人の貴族達と計画を話しているところを聞いてしまって、それだけは止めなければと思い王立学校をなんとか抜け出してここに来た次第です。本当ならば私が直接父を止められたら良かったのですが……」
「ううん、それは危ないから英断だよ。教えてくれてありがとう。他の貴族って誰かわかる？」
「はい」
そうして聞き出した貴族は、侯爵家や伯爵家で敵対勢力の筆頭だ

った人達だ。やっぱりまだ諦めてなかったのか。普通に考えて俺を暗殺するのってかなり難しいと思うけど、どんなふうにやるんだろう……

「計画の内容はわかる？」

「分かります。明日の早朝、日が昇った頃に挙兵して王宮を攻めるそうです。そしてその混乱に乗じてレオン様を暗殺すると。目的は王宮制圧ではなくレオン様暗殺の方です」

え！？　そんなに大胆なことやっちゃうの？　それもう内戦だよね。謀反を起こすってことだよね？

「それって、勝ち目がなさそうに思えるんだけど……。もし万が一に俺の暗殺に成功したとしても、王族に逆らったとなれば一族郎党処刑になるよね？　それとも俺も暗殺できてさらに王族も討ち取れるって思ってるのかな。でももしそこまで成功したとしても、プレオベール公爵が王になるのは難しい気がするけど……他の貴族が認めないと思う。そうなったらそれこそ泥沼の内戦状態になって国はボロボロになるよ」

考えれば考えるほどメリットなくない？　今のまま公爵の地位にいればいいのに。そこまでして使徒様の教えが嫌なのかな？　そこまでして王位が欲しいのかな？

「……父は、おかしいのです。昔から平民には厳しく、いや、平民を蔑んでおりましたが、貴族としての誇りは持っていたはずなのです。しかし最近はかなり攻撃的になっていて、目的がなくとも暴れるといいますか……。なので今回の作戦も深く考えていない可能性があります。ただ自分の思い通りにいかないから邪魔な奴は全員排除する。最近の父からはそんな考えばかりが滲み出ていて……私も

少し怖いのです」

……なんでそんなふうになっちゃったのだろうか。プレオベール公爵の真意がわからない。

アルテュルへの教育方針もおかしかったけど、あれは自分がずっと権力を持ち続けるためかなとか、アルテュルを自分の思い通りに操りたいからかなとか、色々と理由が推測できた。でも今回はそんな理由も推測できないし、明らかに正常じゃない気がする……

何か危ない薬に手を出してて正常な思考ができないとか、そんなことはないのだろうか……

あり得る気がする。その方がまだ納得できる。

「アルテュル、プレオベール公爵が好んで口にしてるものってない？　煙を吸ってるとか、飲み物とか、食べるものでもなんでもいいんだ」

俺がそう聞くと、アルテュルは深く考え込んだ後に何か思い当たるものがあったのか、ハッと顔を上げた。

「紫色の飲み物をいつも飲んでいます。スプーン一杯の紫色の粉をお湯に溶かして毎朝。父はこれを飲むと強くなれるんだとよく言っていました」

「それ、多分それだ」

それ絶対に怪しいやつだ。でも紫色の粉ってなんだろうか。見当もつかないな……

「ロジェ、紫色の粉で思い浮かぶものはある？」

「……いえ、私も存じません」

「そっか……」

この国では、中毒性がある植物は全て栽培も輸入も禁止されていたはずだ。俺もいくつか習ったけど、その中に紫色の粉なんてなかった。

これは早急にアレクシス様に話をした方がいいかな。

「アルテュル、その粉って手に入れられる？」

「……いいえ、私は父がいつも持ち歩いているものしか知りませんので難しいかと」

「そっか、分かった。じゃあここからは俺に任せて。アルテュルはプレオベール公爵家に戻ったら危ないだろうからこの屋敷から絶対に出ないでね。ロジェ、アルテュルには使用人と護衛をつけてくれる？」

「かしこまりました」

「レオン様、よろしくお願いいたします」

アルテュルはそう言って深く頭を下げた。

「うん、アルテュルは久しぶりにのんびりしてたらいいよ」

多分家ではずっと気を張ってたはずだ。そう思ってその言葉をかけたら、アルテュルは堪えきれない涙を浮かべ、寂しそうに微笑んだ。

……なんだかやるせない。もうアルテュルのお父さんを助けるのは難しいだろう。それでも、アルテュルが必死に伝えてくれた情報を無駄にしないようにしよう。俺はそう決意した。

274、話し合い　前編

応接室から出て、俺の部屋に向かって足速に歩きながらロジェに尋ねた。

「ロジェ、リシャール様に報告したいけどリシャール様はこちらに帰られるかな？」

「アルテュル様が一人でこちらに来られたとなれば一大事、すぐにお帰りになるかと」

「じゃあリシャール様が帰られたら、そのまますぐに転移でアレクシス様のところに行ってくるよ。王宮にいける服装に着替えさせてくれる？」

「かしこまりました」

「あと時間がなくて俺から説明できないから、カトリーヌ様にも説明を頼んでいい？　カトリーヌ様にはさっき聞いたことは話していいと思う」

「では私からご報告しておきます」

「よろしくね」

そうして話しながら素早く着替えさせて貰っていると、リシャール様が帰ったとの連絡が入った。

その連絡を聞いて急いで玄関ホールに向かうと、執事のアルバンさんとリシャール様が真剣な様子で話し合っている。

「リシャール様」

「レオン君、何があったのだ？　アルテュルが屋敷に来たと聞いたが」

「はい。説明はアレクシス様もご一緒の方が良いのでこのまま王宮

に転移していただけますか？　こちらに呼び出しておきながら申し訳ございません。話を聞いてみるとかなりの大事でして……」

俺がそう言うとリシャール様は一層表情を険しくして頷いた。

「分かった、すぐに行こう」

「ロジェが事情を知っておりますので、カトリーヌ様には報告を頼んでおきました」

「ありがとう。ではその報告をアルバンも聞いておいてくれ」

「かしこまりました」

「では行ってくる」

「行ってらっしゃいませ」

そうして慌ただしく俺とリシャール様はアレクシス様の執務室に転移した。執務室ならばいつでも転移してきて良いと言われているのだ。

執務室に転移するといつもいる文官達は既にいなく、アレクシス様が一人だけでソファーに座っていた。

「やっぱり来たな。ここで話をするだろうと思い人払いは済ませてある」

「アレクシス様、ありがとうございます」

「とりあえず座ってくれ。それで早速だが何があったのだ？」

「では私から説明いたします。先程アルテュルが一人でタウンゼント公爵家に現れました。話を聞いてみると、プレオベール公爵と他いくつかの貴族家が結託し、私を暗殺する計画を立てているとのことです」

「なっ……」

俺がそう言うと、アレクシス様とリシャール様は相当驚いたようだった。流石にそこまでするとは予想してなかったのかな。確かにそんなことしたら神に背くようなものだよね。普通はやらないだろう。どう考えてもうまく行きそうにない計画だし。

「まさかそこまでとは……。計画の内容はわかるのか？」

「はい。明日の早朝、日が昇った頃に挙兵して王宮を攻めるそうです。そしてその混乱に乗じて私を暗殺する予定とのことです」

「まさか、今の状態で内乱を起こそうと言うのか……」

今度はアレクシス様も驚きつつ、少し疑問に思っているようだ。普通そんな無謀なことしないと思うよね。

「王都に兵士を集めているという報告もないと思うのだが、リシャールそんな動きはあるか？」

「いえ、確かに他の貴族家よりは兵士の数が多いですが、内乱を起こすような人数には到底届きません。せいぜい数百人、王宮への侵入も叶わずに制圧されると思いますが……」

「何故そんなことをするのか不気味だな。他に目的があるのだろうか」

二人はそうして話し合い、首を傾げている。

「アレクシス様、リシャール様、ここで一つ気になる情報があります。アルテュルからの情報なのですが、プレオベール公爵は毎朝お湯に溶かして紫色の粉を飲んでいるのだそうです。それを飲むと強くなれるのだとか。そして最近のプレオベール公爵はとにかく攻撃的で、誰彼構わず邪魔なものは排除すると、そう言っているようです。何か変だとは思いませんか……？」

その言葉を聞いて二人は一気に表情を険しくした。

「それは、まさか……薬物か。中毒性のあるものや人体に悪影響があるものは取り締まっているはずだが……」

「しかし紫色の粉など聞いたこともありません。もしや新しいものでしょうか……？」

「……それは厄介だな。どのような悪影響があるのか、どこまで広がっているのか、それから作り方や原料、全てを早急に調べなければならない」

やっぱりこれかなりの大事だよね。地球の歴史でも薬物などで国が荒れた歴史があったはずだ。プレオベール公爵が定期的に飲めるってことは、定期的に手に入れられる伝手があるってことだろう。

「陛下、プレオベール公爵の屋敷を取り押さえますか？　使徒様暗殺疑惑で可能かとは思いますが……」

リシャール様がそう聞くと、アレクシス様は少しだけ悩んだ後に首を横に振った。

「いや、明確な証拠もあるわけではないうちにそんなことをしてしまえば、他の貴族からも反発を受けるだろう。ここは明日の挙兵を待ち、謀反を起こしたという明確な証拠を持って捕らえた方が良い」

「……確かにその方が確実ですね。では明日の早朝の挙兵を待ち早急に取り押さえ、その後謀反を起こした貴族家を捜索。貴族家に連なるものは皆捕らえる、それでよろしいでしょうか？」

「ああ、そしてその紫色の粉については、捕らえた後で本人に聞くのが一番早いだろう。国家反逆罪と使徒様暗殺未遂だ、当然死刑だから拷問しても構わん」

やっぱり死刑なのか……

「かしこまりました。ではそのように手配しておきます。貴族家のものは地下牢に捕らえるので良いでしょうか？」

「それで良い。私達に情報が渡っているということが敵に伝わらぬよう、細心の注意を払え」

「心得ております」

なんか凄いことになって来たな。明日何事もなく制圧できればいいけど……。一番は無関係な人に犠牲が出なければいい。

「レオン、この情報を伝えてくれて感謝する。事前に情報があるのとないのとでは大違いだからな」

「その言葉は私にではなくアルテュルに。私はアルテュルの言葉を伝えただけですので」

「確かにそうだな。アルテュルはどうするか……」

アルテュルはプレオベール公爵の息子だから、どうなるのだろうか。もしかして一緒に罪を被って処刑とかになっちゃうのかな。それは……、嫌だな。

「アレクシス様、アルテュルは……、どうなるのでしょうか」

「そうだな。普通ならば国家反逆罪など一族郎党処刑だが、この情報を事前に伝えてくれたという功績もある。それも加味し、アルテュルは処刑から免れる可能性はある。それから幼いものも免除になるかもしれんな」

「本当ですか！」

……良かった。本当に良かった。これでアルテュルも処刑される

となったら、アルテュルの人生は悲しすぎる。生き残ってもこの後の人生大変なことは多いだろうけど、それでも生きてればいいこともあるはずだ。そう信じたい。

「ただこれからの流れ次第ではどうなるのかわからん。そこは心得ておいてくれ」

「……かしこまりました」

275、話し合い　後編

「では絶対に情報が漏れぬよう、明日の準備を進める。レオン、アルテュルは今タウンゼント公爵家にいるのか？」
「はい。帰ったら危険だと思いまして、屋敷にいるようにと手配しておきました。今日は王立学校からなんとか抜け出して来たそうです」
「そうか……アルテュルの不在がプレオベール公爵にバレた場合が困ることになる。今はまだ気づかれていないのだろうか？　もし気づかれていないのならば、また気づかれぬよう王立学校へ戻ってほしいが……」

確かにそうだよね。王立学校からならまだ公爵にはバレてなさそうだけど……

「アルテュルに一度聞きに戻っても良いでしょうか？」
「ああ、頼めるか？」
「かしこまりました。では行って参ります」

そうして俺はまたタウンゼント公爵家に戻った。転移先は先程までアルテュルと話していた応接室だ。
転移してみるとアルテュルはまだその応接室にいた。

「レオン様！」
「アルテュル、一つ聞きたいことがあるんだけどいいかな。アルテュルがここに来てることはプレオベール公爵家の人にバレてると思う？」
「……いえ、多分バレてないかと思います。実はちょうど二時間連

続で授業が自習となりまして、各自図書館でも訓練場でも好きなところで学ぶようにと言われました。私はその時間を好機と捉えこっそり抜け出して来たので……」

それならバレてない可能性は高いかもしれないな。このままアルテュルを王立学校に戻せば問題ないかも。

「その自習って後何分で終わるか分かる？」

「後……十分ほどです」

「じゃあ俺が転移でアルテュルを学校内に送り届けるから、今日はこの後いつも通りに過ごして欲しいんだ。明日は屋敷に騎士が来てアルテュルも捕えられると思うけど、アルテュルが伝えてくれたことはアレクシス様にも伝えてあるから悪いようにはされないと思う。だから心配しないで、いつも通りに過ごしてて欲しい」

俺がそう言うと、アルテュルは不安そうな表情を浮かべながらも頷いてくれた。

「……かしこまりました」

「ありがとう。アルテュルのことは助けられるように頑張るよ。でもお父さんは難しいかもしれないんだけど……」

「それは仕方がないことです。父上は、やりすぎましたから」

アルテュルはそう言って寂しそうに笑った。この歳でこんなに辛い立場になるなんて……

「ただ叶うのならば、幼い弟と妹は助けていただければと思います。どうか、よろしくお願いいたします」

確か二歳の子と生まれたばかりの子なんだっけ。領地にいるんだ

よね……。多分そこまで処刑ってことにはならないと思うけど、絶対なんて言えないよね。

「アレクシス様に伝えておくよ。アルテュルはこうして情報を持って来てくれたんだし、そこも考慮されると思う」

「……ありがとうございます」

アルテュルは俺のその言葉に、泣きそうな顔で微笑んだ。

「……じゃあ、王立学校に転移してもいいかな？」

「お願いいたします」

転移するなら人がいないところじゃないとダメだよね。どこがいいだろうか。教室は論外だし図書館も人がいるだろう。トイレはもし誰か入ってたら悲惨だし……そうだ、魔法具研究会の教室ならこの時間は誰もいないかな。

俺はそう結論づけて魔法具研究会の教室に転移した。そこには案の定誰もいない。

「ここは……？」

「魔法具研究会の教室だよ。誰もいないところがここしか思いつかなくて」

「かしこまりました。レオン様、色々とありがとうございます。では私は教室に戻ります」

アルテュルは少し不安そうにしながらも、さすが公爵家子息と思うような堂々とした態度で俺に向かって深く頭を下げた。そして教室のドアを開けて出て行く。

俺はアルテュルが去った後もしばらくその後ろ姿を眺めていた。なんか、本当にやるせない。なんでこんなことになってるんだろう

か。ただの理想だとは分かっているけど、皆が幸せに生きていけたらいいのに。

それから俺はまた王宮の執務室に転移した。

「レオン、どうだった？」

執務室に転移すると、開口一番アレクシス様にそう聞かれる。

「アルテュルは自習の時間に王立学校を抜け出して来たようで、誰にもバレていないだろうということで私が転移で学校内に送り届けて来ました。このままいつも通りに過ごしてくれるそうです」

「そうか、それは良かった。では後は明日だな」

「はい。あの、アルテュルからの願いなのですが、弟と妹は助けて欲しいとのことです。一応伝えておこうと思いまして……」

「ああ、承知した。考慮しよう」

「ありがとうございます」

多分アルテュルもその弟妹も大丈夫だろう。そう信じたい。

「レオン、明日は王宮を攻めるだけではなくレオンの暗殺も計画されているが、それは大丈夫か？」

「はい。私はずっとバリアを張っている予定ですし大丈夫かと。油断せずに警戒も強めておきます」

「陛下、屋敷の警備も増やしておきますのでご安心ください」

「そうか。頼んだぞ」

「かしこまりました」

俺はそこまで心配いらないと思うんだ。誰が来てもバリアがあれ

ば防げるし。
だから俺よりもステファンやマルティーヌの方が心配だ。王宮の中にまで突入されることはないと思うけど、もしかしたら既に刺客が中に入るとか、暗殺者が入り込んでるとか。そんなことがないとは言い切れない。
王族の人を囲うバリアの魔法具を作って渡しておこうかな。今日の夜からそこの中にいてもらえば、万が一王宮に攻め入られても大丈夫なはずだ。

「アレクシス様、王族の皆さんの安全を最大限確保するため、バリアの魔法具を作っても良いでしょうか？　十人ほどが入れる大きめのバリアにしておきますので、その中にいていただければと思うのですが……」
「作ってもらえるのであればありがたい。問題ないとは言っても万が一ということがあるからな」
「ではお作りいたします」

そうして俺はその場でバリアの魔法具を作り、アレクシス様に渡した。これで万が一にも危険なことにはならないだろう。後は明日の騒動が終わってからだな。

「レオンありがとう。では各自準備に取り掛かろう。そしてまた明日、騒動を収めた後に集まろう」
「かしこまりました」

そうして話し合いを終えて、俺は公爵家に戻った。リシャール様はこのまま王宮で準備を進めるらしい。明日は何事もなければいいんだけど……俺は少しの不安を感じながら王宮を後にした。

276、強敵

そして次の日。
俺はロジェとともに夜中から自分の部屋でバリアを張り、ずっと刺客を警戒していた。しかし予想に反して夜には何事もなく、外が明るくなって来る。

「ロジェ、何もなかったね」
「はい。ですがまだ警戒を緩めないでください、元々挙兵は早朝とのことですし、これから襲われる可能性の方が高いのです」
「分かってるよ。でも明るくなってからの方が身を隠し難いし、普通は暗い時に暗殺するよね？」
「はい。ですが暗い中では暗殺する方も動き難いもの。早朝に動くというのはよくある話です」
「そうなんだ」

そうしてロジェと話していると、外から騒がしい声が聞こえて来た。本当に挙兵したのかもしれないな……

「外騒がしいね」
「もし本当に戦いとなっているのであれば、王宮の門前での戦いでしょう。ここは近いので声も聞こえると思われます」
「……一般人は、巻き込まれてないかな」
「王宮近くにはほとんどいませんし、時間も早いので大丈夫だと思いますが……」
「祈るしかないね」

それからしばらく不安を感じながらロジェとともに警戒している

と、公爵家の兵士の一人が部屋にやって来て情報を伝えてくれた。
「レオン様、プレオベール公爵を筆頭に五つの貴族家が結託し挙兵、王宮に攻め入りました。現在は王宮の門前で第一騎士団と交戦中。敵の数は約三百とのことです」
「ありがとう。戦況は？」
「第一騎士団が優勢。しかし敵は街中にも関わらず魔法を使用しているとのことで、周辺の建物への影響が懸念されます」
魔法まで使ってるのか。もう街がどうなってもいいってこと？本当に理解できないな……
「ありがとう。下がっていいよ」
「はっ！」
「ロジェ、大丈夫かな？　加勢に行った方がいいんじゃない？」
「いえ、騎士団は強いので問題ありません。それよりもレオン様はご自分の身の安全をお考えください」
「それはそうだけど……」
それから数分間、怖いぐらいに何事も起きず、部屋の中はしーんと静まり返っていた。だからこそ、その音を聞き取れたのだと思う。
カタッ……
何かが動く音が少しだけしたのだ。俺はその音に驚いて急いで振り返ると、しっかりと締めていたはずの窓が開いていて、窓辺には男が佇んでいた。
その男はかなり背が高く肌が黒い。そして驚くことに頭にはツノがあり、口には牙も生えている。瞳は綺麗な紫色で髪の毛も同じ色をしている。

「お前は誰だ！」

俺はその男にそう問いかけつつ内心ではかなり狼狽えていた。だって、こんな人間見たことない。まるで日本のアニメとかに出て来てた魔人族とか、そんな存在に見える。この世界にそんな種族いたの！？

「せっかくあと少しでこっちの世界も手に入れられるところだったのに、お前が邪魔なんだ。お前に恨みはないが、死んでくれ」

男はそう口にすると、俺に向かって飛びかかり心臓に剣を突き立てようとしてきた。

「っ！！」

俺はその咄嗟の攻撃に全く反応できず、ただ立ち尽くしてるだけ。というよりもバリアがあるから大丈夫だと、頭のどこかでは思っていたのかもしれない。

ピシッ……ピシピシッ……バリッンッッ！！

しかし男の攻撃によってバリアは粉々に砕け散り、男の剣はそのまま俺の心臓に突き刺さる、そう思った瞬間に男が突然目の前から消えた。

「かはっ……」

ロジェが蹴りで男を突き飛ばしたのだ。男は壁に激突し、その場に倒れ込んだ。ロジェが倒れ込んだ男の急所を狙い暗器を放つが、

男はすぐに立ち上がりそれを防ぐ。

「レオン様、油断なさらないでください！」

「ごめん！　助けてくれてありがとう」

俺はここまで来てやっと混乱から抜け出し、全力で身体強化をかけて剣を構えた。やっぱり実戦経験のなさがこういう場面で出るんだよね。バリアを過信しすぎるのはダメだ。

「意外と硬かったか……」

男はそう呟くとまた俺の方に飛びかかってくる。そのスピードは相当なもので、やっと目で追い切れるレベルだ。身体強化を全力でかけていなければ絶対に追いつけない。ほんとにこいつ誰なんだ。

ガキンッッ……！！

俺と男の剣がぶつかり合う。全力を出しているけど、力は拮抗していて競り勝てない。

「ほう、意外と強いな。この世界の者にしてはやるではないか」

男はそう呟くと俺の剣を弾くようにして後ろに下がり、そのすぐ後にナイフを投げてきた。凄い速度だ。俺がそれを剣で弾いてる間に、男は俺に迫って来る。このままだと剣で防ぐのは間に合わないっ！

そう思った俺は、バリアで剣を作り出し男の剣を受け止めた。

「……っ！！」

重い。魔力がどんどん減っていく！　でもまだバリアは壊されてない。
俺は男の剣をバリアで受け止めてる間に後ろに下がり、男から距離を取った。その間にロジェがナイフを男の心臓目掛けて投げたけれど、それは難なく防がれる。
「その魔法は厄介だな。あちらの世界にはないものだが……」
さっきからこの世界とかあちらの世界とかどういうことなんだ。もしかして、この人って別の世界から来たのか？
今度はこちらから仕掛けてやろうと思い、俺は男の正面から心臓めがけて飛びかかった。そしてそれと同時に、男の死角からバリアの剣でも攻撃をする。流石にこれは防げないだろう。
そう思ったけれど男はどこからかナイフを取り出し、両方の剣を難なく受け止める。……こいつ、俺より強い。
でもこっちは二人いるんだ。これで両手が塞がったのだからロジェが攻撃すれば……
俺がそう思うのよりも早く、ロジェはナイフを男の心臓と頭に狙いを定めて投げていた。さらに自分も男めがけて飛びかかる。
これで勝てる……！　そう思った瞬間、男が魔法を使って爆発を起こした。
「なっ……！」
俺は咄嗟に察知して、間一髪のところでバリアの剣を解除しロジェにバリアを纏わせた。そして自分の前にはロックウォールを作り爆発を防ぐ。

さっきあの男、火魔法と風魔法を組み合わせて爆発を作ってた。さらに自分を守るように風魔法で自分の周りの空気を動かないようにしてたと思う。その上で水魔法を使って熱の影響も受けないようにガードしてたし……。かろうじて分かったのはそこまでだった。

……俺以外にも複数属性を使えるやついるじゃん。本当にこいつ誰なの。

「ロジェ大丈夫！？」

「はい。バリアをありがとうございます」

「二対一は分が悪いな。先にそっちのを殺すか」

男はそう言って標的をロジェに変えた。

ロジェは絶対に守る、絶対に殺させなんかしない。そう気合を入れて剣を構えたけれど、どうすれば良いのかは分からない。

今の俺ではこの男に勝てそうにない。転移を使えば逃げられるけど、ここで逃げたら屋敷の皆が危険になるかもしれない。

……それなら倒すしかないよね。幸い転移はまだバレてないはずだから、今あいつの後ろに転移してそれで後ろから心臓を一突きすれば倒せるだろうか。

もうそれしかない……

俺はそう思って剣をぎゅっと握りしめ、男の後ろに転移した。そしてそのまま後ろから心臓を一突き、しようと思ったけど寸前で男に防がれた。何でこれが防げるんだ！

「今のは危なかった。もしかして別の場所に一瞬で移動できるのか？　それは厄介だな」

「……何で気づいたんだ」
「まあ、教えてやってもいいか。答えは角だ。俺は目だけでなく角で空間を把握して敵の位置を知ることができる」
その角にそんな役割があったのか……勝てない。この男には今の俺では勝てない。……どうすればいい。どうすればこの場を乗り切れる。
男と剣をぶつけ合いながら俺は必死に考えた。でも思いつかない。この男に勝てる未来が見えない……
そもそも何が目的なんだ。何で俺を殺そうとするんだ。それにこいつはどこから来たんだ。
「レオン様、ご無事ですか！？」
そんなことを考えていたら部屋の外から兵士の声が聞こえて来た。さっきの爆発で気づいたのだろう。
「ちっ、もう気づかれたか。人数が増えるのは厄介だ……まあいい。また次の機会だな。おいお前、次は殺してやるからせいぜいそれまで人生を楽しむんだな」
男はそう呟くと、素早く窓から去っていった。助かった、のか……？

277、騒動の後始末

俺は男がいなくなって自分が助かったという事実を認識すると、途端に安堵して体の力が抜けた。やばい、めちゃくちゃ怖かった。本当に死ぬかと思った。この世界に来て初めて命の危険を感じた。

さっきまではがむしゃらで感じていなかった恐怖心が、後からどんどん増してくる。手も今更ながら震える。

「レオン様、お怪我はございませんか？」

「……うん、大丈夫。すぐに治せる程度だよ。ロジェは大丈夫？」

「レオン様がお守りくださったので大丈夫です。……レオン様、大変申し訳ございませんでした。私を守ることで御身を危険に晒してしまうなど、従者としても護衛としても万死に値します。是非処罰を」

ロジェはそう言って俺の前に跪く。そんなこと気にしなくていいのに、それにロジェがいなかったら最初の時に俺は死んでたし。謝ることなんか一切ない。

「ロジェ、謝らないでよ。最初の攻撃から守ってくれて本当にありがとう。ロジェがいなかったら俺は死んでたよ」

「ですが、爆発から私を守った代わりにレオン様がお怪我を……」

「こんなの擦り傷ですぐに治るから大丈夫」

俺はそう言ってすぐにヒールで怪我を治した。

「ほらね？　……俺はロジェにも死んでほしくないんだ。ロジェは

自分が死んでも俺を助けるって言うだろうけど、そしてそれが当たり前だということもわかってるけど、俺はロジェにも死んでほしくないからロジェを助けるよ。だからロジェは、俺を助けたかったら危険な目に遭わないでよね」

俺が少しだけ明るい口調でそう言うと、ロジェは不本意そうな表情を浮かべた。

「レオン様、大人しく守られてください」
「俺にそれは無理だよ」
「……では、私は自分の身を最大限守りつつ、レオン様をお守りしなければいけないのですね」
「そういうこと」
「……何よりも難しい命令です」
「ふふっ、俺に仕えるのが嫌になった？」

俺がそう聞くと、ロジェはすぐに首を横に振った。そして少しだけ顔を緩める。

「いえ、よりやる気が出ました。これからはもっと鍛錬に励みます」
「俺も付き合うよ。もっと強くならないとあいつには勝てない」
「そうですね。よろしくお願いいたします」
「うん」

そうして俺とロジェは笑い合った。するとその瞬間、部屋のドアが壊され部屋に兵士たちが入り込んでくる。部屋のドアは爆発で歪んでいて開かなくなっていたみたいだ。

「レオン様ご無事ですか！？　なっ……」

兵士たちは部屋の惨状を目の当たりにし言葉を失っている。うん、この部屋ぐちゃぐちゃだよね。家具やベッドなどは全て壊され、中に入っていたものもそこかしこに散らばっている。ガラスのショーケースもガラスの窓も割れてそこかしこに散らばってるし、焼け焦げた後も沢山ある。

水魔法ですぐに消火したけど、ちょっと焦げちゃったみたいだ。

「俺は無事だから大丈夫。敵ももういないよ。逃げられちゃった」

「それならば良かったのですが……。レオン様が勝てない相手とは、どのような人物だったのでしょうか？」

そう、そこが問題だよね。

「ロジェ、この国や他国にさっきの男みたいな特徴を持つ人っている？」

「いえ、私は存じ上げません」

ロジェも知らないのか。そもそもあいつ、複数属性使ってたし明らかに普通の人間じゃなかったよね。もしかして俺とは別の使徒様がいるとか……？

でももしそうなら、流石にミシュリーヌ様が教えてくれるはずだ。

「そうだ。さっきの男が話してた言葉、分かった？」

「はい。普通に聞き取ることができました」

ということは、少なくともこの国の言葉を話すことはできるってことだ。でもこの世界とか言ってたのが気になるんだよね……

とりあえずアレクシス様とリシャール様に報告かな。

「王宮の方はどうなってるか分かる？」

俺が部屋に入ってきた兵士にそう聞くと、その中の一人が答えてくれた。

「はい、既に制圧されています。先程王宮からの使者が来まして、レオン様には王宮の陛下の執務室に向かってほしいとのことです」

「そっか。ありがとう」

リシャール様も昨日から王宮に詰めてるし、まずは執務室に行ってこっちで起きたことも報告しようかな。疲れたけど早い方がいいだろう。

「ロジェ、俺は王宮に行ってくるよ。この部屋はとりあえずこのままにしておいて。さっきのやつは俺を狙ってるみたいだから大丈夫だと思うけど、もしまた現れたら絶対に逃げてね。倒そうなんて考えなくていいから。バリアの魔法具もいくつかおいていくからこれも使って」

「かしこまりました」

「それからカトリーヌ様達に報告もお願いしていい？　とりあえず詳細は伏せて何があったのかだけ」

「はい。お伝えしておきます」

「ありがとう。じゃあ行ってくるね」

そうして俺は、アレクシス様の執務室まで転移をした。するとそこには優雅にお茶を飲むアレクシス様とリシャール様がいた。こっちは特に問題なかったみたいだな。

「レオン……レオン！？　どうしたんだ！？」

俺が転移したことに気づいたアレクシス様が、かなり狼狽えた様子でそう叫んで俺のところに駆けてきた。リシャール様もその言葉に俺の方を向くと顔を青くする。

「レオン君、大丈夫なのか！？」

俺は二人のその反応にやっと気づいた。服を着替えるのを忘れたことに。急いでたからそこまで考えが回ってなかった、爆発の影響で服は薄汚れてあちこちが破れている。

「服を着替えるのを忘れてしまいました。申し訳ございません」

また転移で戻っても俺の部屋はあの有様で服も全滅だろうし……、とりあえずピュリフィケイションで綺麗にすればいいか。

俺はそう考えて全身にピュリフィケイションをかけた。

「私の服は全てダメになってしまったと思うので、今はこのままでよろしいでしょうか？」

「どういうことなんだ？　公爵家では何があった？」

「はい。その報告をしに参りました」

「ソファーに座ってくれ」

「失礼いたします」

ソファーに腰掛けるとそのまま身を委ねて眠ってしまいたくなるけれど、それは少し我慢だ。

「本日の早朝、外が騒がしくなってきた頃に公爵家の私の部屋に一人の男が現れました。その男は長身で肌が黒く、紫色の瞳に同じ色の髪。更に頭には角が生えていました」

「角……？　それは、ツノウサギのようにか？」

「はい。この国や他国にでも、そのような人種はいるのでしょうか？」
「いや、聞いたことがないな……」
「さらにその男は私よりも強く、魔法も複数の属性を使っていました」
「なっっ！！　それはどういうことだ。その男も使徒様、なのだろうか……？」
「それがわからなくて……」

……そうだ。今まで思い至らなかったけど、わからないならミシュリーヌ様に聞けばいいのか。何で今まで忘れてたんだ。今すぐ聞こう。

「ミシュリーヌ様に確認しても良いでしょうか？」
「……確かに、それが一番良いな。直接ミシュリーヌ様に伺えるなどなんと素晴らしい……」

アレクシス様が何故か今更感動しているようだ。俺はとりあえずそんなアレクシス様をそのままに、アイテムボックスから本を取り出しミシュリーヌ様に呼びかけた。

「ミシュリーヌ様。聞きたいことがあるのですが今お時間大丈夫ですか？」
『きゃゃゃぁぁ！！！』

え、今の悲鳴！？　ミシュリーヌ様に何かあったの！？

「大丈夫ですか！？　何かあったのですか！」

俺が思わず立ち上がってそう叫ぶと、アレクシス様とリシャール

様も何事かと緊張した面持ちになる。
『はぁはぁはぁ。凄い……楽しすぎるわ！』
え、楽しい……？
「あのー、ミシュリーヌ様？　どうされたのですか？」
『うん？　あれ、レオン？　どうしたの？』
「ミシュリーヌ様こそどうされたのですか？　悲鳴が聞こえましたが……」
『ああ、今シェリフィーのところにいるのよ！　遊園地で遊んでるの。このジェットコースターってやつ楽しいわよね。自分で飛ぶのとはまた違うわ！　やっぱり地球は最高よ！』
ジェットコースター、遊園地……シェリフィー様のところにはそんなものまであるの！？
凄いな、羨ましい。俺も遊びたい。ミシュリーヌ様のところにはソファーと机と棚しかなかったのに。
「シェリフィー様のところは凄いですね」
『そうなのよ！　今久しぶりに遊びに来てるところよ！』
『ミシュリーヌ、誰と話してるの？』
『シェリフィー。レオンよレオン！』
シェリフィー様の声も聞こえてきた。
『あら、レオン久しぶりね。そういえばあなたから頼まれてた本、スイーツの基本レシピ集があったからミシュリーヌに渡しておいたわよ』
「本当ですか！　ありがとうございます！　ミシュリーヌ様、後で

俺を神界に呼んでください。一度自分で読みたいので」
『分かったわ。それで今日は何の用なのよ？　用がないなら私はもっと遊園地を堪能するわ』
そうだった、二人の緩い雰囲気に本題を忘れるところだったよ。めちゃくちゃ重要な話なんだ。

278、黒幕

「ミシュリーヌ様、凄く大切な話なんです。実はさっき俺は殺されかけたのですが、その殺しに来た相手が人間とは思えないような外見だったのです。肌は黒く背が高く、頭には角が生えていて牙もあって、紫色の髪の毛に紫色の瞳をしていました。この世界にそんな人種がいるのですか？　さらにその男は複数属性を使っていたのですが、俺の他に使徒様などはいるのでしょうか？」

『何よそれ。そんなやつ知らないわ……』

「え、ミシュリーヌ様もご存じないのですか……？」

神様が知らないなんてことあるの！？　本当にあいつ誰なんだよ……

『そもそもこの世界には複数属性を持つ者なんてレオン以外にはいないはずよ。私が作ってないもの。普通の人間は一つの属性しか持てないし、人間以外はそもそも魔力も持てないわ』

「では、あの男は誰なのでしょうか？　私を狙っていたようでした。そしてこちらの世界も私のものにする、みたいなこと言ってたのですが……」

『こちらの世界……？　もしかして！！』

ミシュリーヌ様は何かを思いついたのか、焦ったような声を出した。

『シェリフィー、緊急事態だから私は一度帰るわ！　またね！』

『分かったわ。気をつけなさいよ』

『もちろんよ！　レオン、私の世界に帰るからちょっと待ちなさい』

「わかりました。というよりも、別の世界にいても連絡は通じるんですね」
『もちろんよ。私が作ったのだから万能なのよ』
「凄いですね。すぐに帰れるのですか？」
『ええ、もう着くわ』

世界間の移動ってそんなに早くできるんだ。いいな……俺もシェリフィー様のところに行けたら行きたい。多分ダメなんだろうな。

『よしっ、着いたわ。それでレオン、その男が今どこにいるのかわかる？』
「いえ、一時間ほど前までは俺の部屋にいましたが……」
『じゃあまだそんな遠くには行ってないわね。広範囲を検索して……。ああっ、神力が足りないわ！　レオン、アイテムボックスに物を入れて神力を増やして』
「今すぐですか？」
『今すぐよ！』
「ちょっと待ってください」

そんなに大量に消してもいいものなんてないんだけど。ゴミとかないかな……

「アレクシス様、ミシュリーヌ様が思い当たることがあるみたいなのですが、調べるために力が必要なようでいらないものが大量に欲しいのです。ゴミでいいのですが大量にありませんでしょうか……？」

俺がそう聞くとアレクシス様は困惑したような表情を浮かべた。神様のためにゴミを集めるなんて普通抵抗あるよね。でも神力に変わっちゃうのだからゴミでいいのだ。

「ミシュリーヌ様へのお供えならば最高級の食べ物や宝石などを用意するが……？」
「いえ、お供えではなく……この世界の汚れを浄化してミシュリーヌ様の力にする、という感じなのです。なのでゴミがたくさんある場所を教えて欲しいのですが」

我ながら上手い言い訳だ。

「そうか、それはありがたいことだ。それならば王都のゴミ溜めがある」
「それはどこにあるのですか？」

それから俺はアレクシス様にゴミ溜めの場所を聞き、その近くの知っている場所まで転移して、そのあとは身体強化をかけてそこまで走った。今日はめちゃくちゃ働いてるよ……

そうして辿り着いたゴミ溜めのゴミを、バリアを駆使してアイテムボックスにどんどん収納していく。そしてゴミがほとんどなくなったところで魔法具にピュリフィケイションをかけて、魔法具と共に執務室に転移で戻った。
今日は魔力を使いすぎててもう半分を切ってる。ちょっと気をつけないとだな。

「戻りました」

俺が戻るとアレクシス様とリシャール様は仕事をしながら待っていたようで、机にはさまざまな書類が広がっていた。

「戻ったか。場所はわかっただろうか？」

「はい。ありがとうございます。ではまたミシュリーヌ様に連絡をしますね」
「よろしく頼む」
「ミシュリーヌ様、今から渡しますね」
『やっとなのね！　お願いするわ！』
「はい。じゃあ行きますね」

俺はミシュリーヌ様にそう告げて、アイテムボックスの魔法具から魔力を全て抜いた。

『何よこれ！　素晴らしいわ……これだけ神力があればケーキが何百、何千、何万個も食べられる……』
「ミシュリーヌ様、あの男の謎を探るためですよ！」
『はっ！　そうだったわ……うぅ、私のケーキ……』
「後でその分の神力も増やしますから、今はあの男に集中してください！」
『レオン本当！？』
「本当です」
『さすが私の使徒！　素晴らしいわ。人格者だわ。最高の男よ』

こんな時だけ調子いいんだよな。

「はぁ～、ありがとうございます。なので今は頑張ってください」
『分かったわ！　じゃあ広範囲検索をしてあの男を見つけて……
……いたわ』
「今はどこにいるんですか？」
『そうね……王都の外を魔物の森の方に向かって全速力で走ってるわ。これ、身体強化魔法も使ってるわね。やっぱり私の予想が当たってるのかしら……』
「その予想ってなんなのですか？」

『もしかしたらこの男、もう一つの世界に住む者かもしれないわ』

もう一つの世界って、魔物がいる世界ってこと！？

「今この世界と繋がってる魔物の世界のことですか？　あっちに人間みたいな存在いたんですか！？　人間は絶滅したんじゃ……」

『私もそうだと思ってたんだけど……』

「ミシュリーヌ様はあちらの世界のことを把握していないのですか？」

『それは、あれよ。もう興味が無くなったから、ほら、自然に任せてたというか……』

放っておいたんですね。さすがミシュリーヌ様、興味のあることにしか力を割かない神様だ。

「じゃああの人は向こうの世界の人間ってことですか？」

『そうね……それよりも、魔物が進化して人型になって知能を持ったって感じかしら……』

「進化って、そんなに長い時間放っておいたのですか？」

『まあ、この世界を作ってからはずっとだわ……』

そんなに長い時間放っておいて時間の流れがこの世界と同じなら、それは進化もするよ！！

「ミシュリーヌ様、ではあの男はもう一つの世界に住む魔物が進化した人間、魔人とでも呼べばいいのでしょうか？　そんな存在ってことですね」

『そういうことね』

「ではこちらの世界も手に入れるなどと言っていたのは、なんらかのきっかけで時空の歪みの存在に気づいた魔人が、こちらの世界も

手に入れたいと考えたってことでしょうか？」
『そうね』
「ミシュリーヌ様はどちらを応援するのですか？　この世界を魔人が手に入れても良いと思われますか？」
『そんなのいい訳ないじゃない！　そしたら日本風な世界を作る夢は途絶えるし、何よりこの男は人間じゃないわ！　私は人間が好きなのよ！』

ミシュリーヌ様の人間の基準がよくわからないんだけど、地球の人間と同じ生物がミシュリーヌ様の中では人間なのかな。地球に憧れてるみたいだし。
まあなんにせよ、ミシュリーヌ様が手助けしてくれるのはありがたい。

「では魔人をどうすれば良いのか手助けをお願いします。まずはあちらの世界にどれほどの魔人がいるのか、それからどんなことを企んでいるのか知りたいです」
『わかったわ！　あっちの世界を覗いてみるからちょっと待っていなさい』

ふぅ～、これで相手の計画がわかれば対処もしやすくなるだろう。あの強さの魔人がどれほどの人数いるのかも重要だ。あんなのがもし何十万人もいるとかって言われたら、本当にこの世界は終わりだよ。
でもそれならその大勢でこっちの世界に侵攻してきてもいいはずだ。それをしないってことはそれほどの人数はいなくて、魔物の森がこちらの世界の人間を滅ぼすのを待っているのかもしれない。

「レオン君、ミシュリーヌ様はなんと……？」
「はい。魔物の森が別の世界から来ていることはお伝えしましたよ

ね？」
「ああ、それは聞いたが……」
「実は先ほど私を殺しに来た男は、その別の世界から来た魔物が進化した人間、魔人の可能性が高いそうです」
「魔人……」

俺がそう告げると、二人は絶望したような表情を浮かべる。まあそうなるよね。一対一で俺が勝てない魔人なんて、この国で勝てる人はほとんどいないだろう。

「ですがミシュリーヌ様はこちらの味方をしてくれるようですので、ご安心ください。今は別の世界を偵察に行ってくれています」
「そうか、ミシュリーヌ様が。それは安心だな」
「陛下、良かったですね」

二人はミシュリーヌ様が味方だというだけでかなり安心したようだ。俺からしたらそんなに安心できる話じゃないんだけど、安心できるならしておいた方がいい。不安だと思考も鈍るだろう。

そうして三人で話していると、執務室のドアが外から叩かれた。

279、紫色の粉

「尋問が終わりましたので結果をお持ちいたしました！」

そんな騎士の声が聞こえる。もう終わったのか。思いのほか早く喋ったんだね。

「入って良いぞ」

アレクシス様がそう言うと、部屋には騎士とアレクシス様の従者が入ってきた。そして騎士が持つ紙を従者がアレクシス様に渡す。

「ご苦労。またしばらくは外に出てくれるか？」

「はっ！」

「かしこまりました。失礼いたします」

そうして二人はまた外に出ていき、執務室は三人だけになる。

「レオン、例の紫の粉だが、肌が黒く紫の瞳と髪色をした男にもらったとプレオベール公爵は言っているようだ。それから他の貴族家当主も同じ粉を毎日飲んでいたらしい。同じくその男にもらったと」

……それも魔人の仕業だったのか。でもそうだよね、俺の暗殺にあいつが来るんだから魔人と貴族たちは結託してたってことだろう。というか、貴族たちが魔人に操られてたって言ったほうが正しいかも。

魔人は、王国を混乱させようとしてたのかな？

さっきの魔物の森によってこの世界が滅ぶのを待っていたという仮説が当たっていたのなら、国が荒れた方が魔物の森への対処ができずに滅ぶのが早くなるだろう。
俺を殺しに来たのも、魔物の森への対処ができそうな人材だから。そう考えたら辻褄が合う。

「その紫色の粉は、いつ頃から飲んでいたのですか？」
「尋問の結果によると二年ほど前からだそうだ」

二年も前からなの！？　そんなに前から魔人がこの世界、この国にはいたってことなのか……
それならあいつがこの国の言葉を話せたのも、こちらに来て覚えたのかもしれないな。

「何故そんな得体の知れない男が渡してきた物を飲んでしまったのでしょうか？　姿も人間とは違いますが……」
「それが他国の商人だと言われて信じたそうだ。飲むと魔力が増えて力が強く体が軽くなるという効果も、まずは平民に試させて効果を確認してから自分も飲んだと言っているらしい。実際に魔力が少しずつ増えたそうだ」

本当に魔力が増える効果や体が軽くなる効果があって、飲み続けてると段々と精神がおかしくなっていくものなのかな……凄く厄介だ。

「他国と言っても牙や角が付いているのは明らかにおかしいとは思うのですが、上手く隠していたのでしょうか？」
「頭にはいつも布を巻いていて、口元も布で覆っていたらしい。それが伝統衣装だと言われていたそうだ」

確かにそう言われたら疑問に思わないのか……？　他国の者なら言葉が少し拙くてもそんなものかと思うのだろうか。

「紫の粉は他には流通してないのですか？」

「尋問によれば、最初に数人の平民に試させた後は自分一人で独占したとのことだ」

「それは不幸中の幸いですね」

貴族のがめつさが良い方向に働いた結果だな。

「ああ、その数人の平民は口封じのために殺したと言っているらしいから、粉の存在を知っているのは本当に少数だと思われる」

「……そうなのですね」

その人たちはなんの罪もなかったはずなのに。本当に酷い……

そうしてアレクシス様と話していると、ミシュリーヌ様の声が聞こえてきた。ずっと本を持っていたので通信は繋がっている。

『レオン、見つけたわ！』

「本当ですか！　どんな状況なのでしょうか？」

『魔人はそこまで人数はいないみたいよ。全部で数百人ね。しかもその人数が一つの集団というわけではなく、数十人単位の集団がいくつもある感じみたい。それでこちらの世界の存在に気づいてるのは一つの集団のみ。だから数十人ね』

数十人……それでも十分多いな。あの男が二人いるだけで俺は殺されるだろう。

「全員があの男ほど強いのですか？」

『そうじゃないみたいよ。話を聞いていると、あの男が一番強くて、それに並ぶほどの者は三人ぐらい。あとはもう少し弱いけど戦える者。それ以外は非戦闘員みたいね。それでもこっちの世界の一般的な人間よりは強いでしょうけど』

三人か……それならまだ勝ち目はあるのか？　いや、でも別に勝たなくてもいいんだよね。魔人があっちの世界にいる間に穴を塞いじゃえばいい。

「魔人はあっちの世界で暮らしてるんですよね？」
『そうみたいね。こっちの世界の人間が滅んだら移住する予定らしいわよ』
「じゃあ気付かれないうちに穴を塞いでしまえば、戦わなくても大丈夫ってことですね」
『そうね。早めに穴を塞いだほうがいいわ』
「分かりました。そうだ、紫の粉について何か分かりましたか？こちらの世界にあの男が持ち込んだものみたいで、飲むと魔力が少し増える代わりに段々と精神異常をきたすのだそうです」
『ちょっと待ってなさい。――あれかしら？　ひとり紫色の花のような物をすり潰しているわ。これで面白いぐらいに操れるとか話してるし、多分あれじゃない？』

それだ！　その花には気をつけないとだな。この世界の魔物の森にもあるだろう。

「どんな特徴の花ですか？」
『そうね……かなり小さめの花よ。指先ぐらいの小さな花。それが木にたくさん咲いてるみたい。魔人達がちょうど今、その木から花を摘んですり潰してるのよ。乾燥させたりはせずにそのまますり潰してるわ』

「木ってどのぐらいの大きさでしょうか？」
『そうね……人間の腰ぐらいの高さよ』
「分かりました。ありがとうございます。……アレクシス様、人間の腰ほどの高さの低木に咲く紫色の小さな花。指の先ほどの大きさだそうです。それをすり潰したものが紫色の粉の正体かもしれません。この世界の魔物の森にもある可能性は高いので、見つけ次第アイテムボックスに入れてそのまま消すように指導していただけますか？　燃やすのも良くないと思うので」

煙を吸っても悪影響があるかも知れないし、一番はアイテムボックスに入れて消しちゃうことだろう。

「分かった。すぐに通達を出そう」
「よろしくお願いします。ではミシュリーヌ様、こっちの世界にいる男と向こうの世界の魔人たちの動きを監視していてもらえませんか？　そして何かしらの動きがあったら俺に教えてください。……そういえば、ミシュリーヌ様から俺に連絡をすることもできるのですか？」
『分かったわ。今回こそはちゃんとやるわよ！　私からの連絡はレオンがその本を持っていないと難しいから、肌身離さず持ち歩いていなさい』
「それって、アイテムボックスに入れているのじゃダメですか？」
『それでも問題ないわ。でも実際に持ってるほうが繋がりやすいから、私からの声が聞こえたら本を持つのよ』
「分かりました。ではいつでも連絡してください」
『ええ！　レオン、私の世界を頼んだわ』
「はい。任せてください」

そうして俺はミシュリーヌ様との通信を終えた。通信は意図して声が届くようにと思っていないと繋がらないので、切ろうと思った

らいつでも切れる。凄く便利だ。

「アレクシス様、リシャール様、こちらの世界に気づいている魔人は数十人程度で、魔人の動向はミシュリーヌ様が監視してくれるそうです。今はまだあちらの世界にいるみたいなので、その間に時空の歪みを塞いでしまったほうが良いとのことでした。なので早めに魔物の森へ行こうと思います」

「……分かった。レオン、よろしく頼む」

「レオン君、この国を頼む」

二人はそう言って深く頭を下げた。

「お任せください。必ずこの国は守ります」

俺は力強くそう答えた。実際はもし魔人が数人で乗り込んできたらこの世界は終わりかもしれないけど、最悪の状況は考えないようにする。そしてこの世界を救うために全力を尽くそう。

「ありがとう。それにしても魔人とは……厄介だな。魔人の存在は秘匿した方がいいだろうか？」

「そのような存在がいると知られたら大騒ぎになるでしょう。できる限り秘密にした方がいいとは思いますが……」

「……そうだな。では魔人の情報は基本的にここだけで留めてもらえるか？　各々必要だと思った相手には話しても良いが、基本的には秘密としてほしい」

こう言ってもらえるってことは、信頼してくれてるってことだよね。ちょっと嬉しいな。

「かしこまりました」

「承知いたしました」

280、騒動の終わり

「ではここからは、謀反を起こした貴族たちの処罰についての話に移っていいだろうか？」

アレクシス様が真剣な表情でそう話を変えた。

「はい」

「先ほどの話から、黒幕はあちらの世界の魔人で貴族家当主も操られていた、そう捉えることができる。しかし正体不明の者に踊らされ騙され、国を危機に陥れたのは事実だ。やはり予定通り本日謀反を起こした貴族家の当主は皆処刑とする。さらにその側近と家族もだ。貴族家は全て取り潰す。しかし五歳未満の者は処刑を免れ孤児院に送られるものとする。その後の人生については自由だ」

それじゃあ、アルテュルは……

俺はアレクシス様のその言葉を聞いて手足が一気に冷たくなるのを感じた。

「しかしアルテュル・プレオベールは、事前に謀反の情報を伝えたという功績から処刑は免れることとする。五歳未満の者と同様に孤児院に送られるものとする」

よ、良かったぁ……。アルテュルはなんとか助かるのか。でも本当にギリギリだな。それにアルテュルの家族は殆どが皆処刑されてしまうだろう……

「リシャール、異論はないか？」

「はっ、妥当な判断だと思います」
「ではレオン、異論はないか？」
「……はい。アルテュルへの恩赦、感謝いたします」

本当はもっと個別に判断して助けてあげてって思っちゃうけど、今までこれで回ってきたんだし、この国の方針を大きく変えるのは良くないだろうから口は挟まない。
俺は使徒様だから意見を言えば通るのかもしれないけど、それをやりすぎてもダメだよね……

「では今決めた内容を細かくまとめよう。レオンはどうする？　話を聞いていてもいいが疲れているだろう？　戻っても構わない」
「ありがとうございます。……それならば、アルテュルに会うことはできないでしょうか？」

アルテュルのことを救えなかったという事実がずっと心に重くのしかかっているんだ。俺なら救えたかもなんて傲慢かも知れないけど、どうしても考えちゃう。
俺が気づいた時にはもう手遅れだったのだろうけど、それでもアルテュルのお父さんがおかしいのは前から知っていたんだ。

だから迷惑かもしれないけど、これからのアルテュルの人生を手助けできるのならしてあげたいと思う。孤児院に行くのじゃなくて俺のお店で雇ってもいいし、ジャパーニス大公家で雇ってもいいし……
もちろんアルテュルが嫌じゃなければなんだけどね。でもそれなら、弟と妹とも一緒にいられると思うんだ。孤児院だとバラバラにされる可能性もある。

「アルテュルの今後の人生には関与しない。レオンの好きにして良

い」
「……ありがとうございます！」
「では騎士を呼ぼう。案内させる」
「よろしくお願いします」

そうして俺はアルテュルのところに向かった。アルテュルがいたのは一般的な牢屋ではなく、檻の中が普通の部屋になっている牢屋だった。多分アレクシス様が配慮してくれたんだろう。

「アルテュル」

俺が檻の外からそう声をかけると、椅子に座って俯いていたアルテュルがガバッと顔を上げた。

「レオン様！」
「ちょっと中に行くから待ってて。ドアを開けてもらえる？」
「かしこまりました」

そうして騎士の方がドアを開けてくれて、俺はアルテュルの牢屋の中に入った。そしてアルテュルの向かいに腰を下ろす。

「レオン様、何故このようなところへ……」
「アルテュルに話があって。実はさっき処罰の内容が決まったんだ。基本的には今回の王宮襲撃に関わった家は全てお取り潰しの上、一族郎党処刑になる。でも五歳未満の子供だけは孤児院送りになるって。だから弟と妹は助かるよ」

俺がそう言うと、アルテュルはホッとしたような少し寂しいような、そんな複雑な表情を浮かべた。

「……良かったです。あの子達はまだ何もわからないような歳ですから。最初は悲しむかもしれませんが、そのうち私達のことは忘れて楽しく生きてくれるでしょう」

そう言った時のアルテュルの表情が凄く悲しくて、俺は自分の方が泣きそうになった。アルテュルだってまだ十歳でどちらかといえば被害者なのに、もう自分の人生は諦めてるなんて……

「アルテュルもだよ。アルテュルも弟と妹と一緒に生きていける」

俺は少しでも早くこの事実を伝えてあげたくて、少し早口でそう言った。

「それは……どういうことでしょうか？」

「アルテュルは事前に謀反の情報を流してくれた功績で、恩赦をしてもらえることになったんだ。だからアルテュルも処刑は免れて孤児院送りだって」

「それは、本当ですか……？」

「うん。それ以外の家族や使用人は、助からないんだけど……」

「いえ、十分です。弟妹を助けていただいただけではなく、私にまで一緒に生きていく機会を与えてくださるなんて……本当に、十分です」

アルテュルはそこまでを口にすると静かに涙を流した。そうならざるを得なかったのかもしれないけど、最初に会った時よりも本当に大人びたな。

リュシアンが図書館で必死に勉強するアルテュルを見かけたと言っていたし、あの時から隙を見ていろんな情報を得たんだろう。

アルテュルって素直だし努力家だし本当に良い子なんだ。それに貴族でありがちなプライドを捨てられないってこともなさそうだし。
生まれる家が違えば人生は全く違ったのだろうけど、そんなことを考えても仕方ないか……

俺はそれからしばらくアルテュルが落ち着くまで待ち、また口を開いた。

「それでここからが俺からの提案なんだけど、アルテュルが嫌じゃなければ弟さんと妹さんと一緒に、俺のお店かジャパーニス大公家で働かない？」
「レオン様のところで……」
「そう。どこの孤児院になるのかもまだわからないけど、孤児院によってはかなり大変な環境になるし、あとはそれぞれバラバラの孤児院に送られるってこともあると思うんだ。だから……俺のところで雇えば三人一緒に暮らせるかなと思って」
「何故、レオン様がそこまでしてくださるのですか？」

アルテュルは心底不思議な顔でそう聞いてきた。
俺もよくわからないんだよね……別に凄く仲が良い友達ってわけでもないし、クラスメイトだったわけでもないし、義理があるわけでもない。
でも何でだろう、助けたいと思っちゃうんだ。やっぱりアルテュルが良い子だからかな？

「アルテュルが……良い子だから」
「良い子って、私はもう幼い子供ではありませんよ？」
「そうなんだけど、なんて言えばいいんだろう。アルテュルの人柄？」
「……私の人柄はそんなに良いでしょうか？」

確かに以前は平民を見下してた嫌なやつだったよね。でもあれは偏った教育のせいだし……

「とにかく、俺が助けたいなって思ったの。うん、深い理由は特にない！」

俺が潔くそう宣言すると、アルテュルは思わずと言った様子で笑い出した。少しでも笑えるのなら良かった。

「ふ……ふふっ、何ですかそれ」

「理由はよくわからないけど好きとか嫌いとかあるでしょ。それと一緒だから」

「確かにそうですね」

アルテュルは笑いを収めて姿勢を正し、また真剣な表情に戻る。そして深く頭を下げた。

「レオン様、ご温情に感謝いたします。レオン様のところでお世話になりたいと思います。しかし私の弟妹が王都に来るまでまだ時間もかかるでしょう。それまでは私を孤児院へお願いいたします」

「……いいの？」

「はい。私は仕事などしたことがありませんから、まずは孤児院で平民の暮らしを学んでこようと思います」

確かに孤児院なら掃除洗濯料理を学べるかもしれない。でもダメな孤児院だったら完全放置になるよね……

アシアさんの孤児院、ロニーの出身の孤児院にアルテュルが行けるようにお願いしてみようかな。それぐらいなら意見を言ってもいいだろう。あそこなら心配いらない。

「じゃあアルテュルの弟妹がこっちに来るまでは孤児院で、こっちにきたら三人まとめて俺が雇うよ。まだジャパーニス大公家の屋敷はできてないから、スイーツ店シュガニスの従業員寮かな。妹と弟は乳母が必要？」
「妹はまだ一歳にもなっていないかと。弟は二歳半ほどだったはずです」
「じゃあ必要だね」

乳母さんも雇おう。それで大きくなったらちゃんと教育をして、将来はジャパーニス大公家の主要ポストについてもらうのもありかもしれない。やっぱり子供の頃から学んでる方が圧倒的に吸収率はいいし、それに公爵家の血筋なら頭もいいだろう。

「よろしくお願いいたします」
「うん、こちらこそこれからよろしくね。じゃあ今日はそろそろ行くよ」
「はい。こんな場所までご足労いただきありがとうございました」

そうして俺はアルテュルと別れて今度こそ公爵家に戻った。これでやっと一連の騒動が終わった。屋敷に戻ったらまずは部屋を整えて服や装飾品を揃えないと。そして使徒としての仕事を開始だな。

２８０、騒動の終わり（後書き）

ここまで読んでくださった皆様、本当にありがとうございます。楽しんでいただけたのであればとても嬉しいです。
ここで二章が完結となりますので、明日から一週間ほど投稿はお休みいたします。３月２５日からまた三章を投稿していきますので、お待ちいただければと思います。

三章は魔物の森への対処のお話に加え、レオンの使徒としてのお仕事の話、それからスイーツ店であるシュガニスについての話など、シリアス展開もありつつ基本的にはほのぼのとした話が展開されていく予定です。楽しみにしていただけたら嬉しいです。ちなみに３月２５日投稿予定の第２８１話は、レオンの使徒としての仕事初日のお話です！

お休みの一週間で、ご興味がおありの方は新作や書籍版の方も楽しんでいただけたらと思います。よろしくお願いいたします！

蒼井美紗

281、仕事初日

アルテュルと話してから公爵家に帰り、それから数日間は様々な後処理に追われた。一番大変だったのは俺の部屋の修理だ。いや、修理はできてないから片付けかな。

装飾品や服がほとんどダメになったので、急遽いくつか既製品を買ってきて、さらにちょうどいい機会だからと大公としてふさわしい服をいくつも仕立てた。靴や装飾品も大量に購入したので、俺の大量に余っている資産が少しは市中に戻ったと思う。

そしてアルテュルもあの後すぐに釈放となり、牢屋を出たその足でアシアさんの孤児院に向かった。今頃はあの孤児院で何とか暮らしていると思う。

アルテュルの弟妹を含めた領地にいる貴族家の者達も、捕らえるために騎士達がそれぞれ出立した。数週間後には皆が王宮に集められ裁定が下されるらしい。

「レオン様、そろそろお時間ですので馬車までお願いいたします」

「分かった。じゃあ行こうか」

俺は今日からアレクシス様の側近としての仕事が始まる。これからは回復の日以外、毎日王宮に向かい仕事をする予定だ。ロジェは俺の従者としてずっと付いてきてくれる。

屋敷のエントランスに降りていくと、既にリシャール様が待ってくれていた。

「レオン君おはよう。では行こうか」

「はい。よろしくお願いいたします」

これからは何か事情がない限りリシャール様と一緒に出勤となる。ちょっと大人になったみたいで嬉しい。

そうしていつもより姿勢良く気合を入れて馬車に揺られること数分、王宮に着いた。馬車から降りてアレクシス様の執務室まで歩いている途中、すれ違った騎士や文官のほとんど皆に頭を下げられた。ここまで敬われるとちょっと落ち着かないね……

「陛下、おはようございます」

「おはようございます」

俺とリシャール様が執務室に入ると既に他の文官の方は仕事を始めていた。アレクシス様も書類に目を通している。

「ああ、来たな。では皆、私の新たな側近を紹介する。レオンこちらへ」

アレクシス様に呼ばれたのでそちらに向かうと、皆の注目を浴びた。

「皆も既に知っているとは思うが、女神ミシュリーヌ様の使徒でありこの国の貴族でもある、レオン・ジャパーニス大公だ。これからは私の側近として仕事をしてくれる」

「レオン・ジャパーニスです。ジャパーニスは呼ばれ慣れてないので、レオンと呼んでいただけると嬉しいです。よろしくお願いします」

俺もアレクシス様の後に続いてそう挨拶をすると、他の文官達は

ポカンと惚けた顔をした後、慌てて跪いて頭を下げた。

「レオン、頭を下げては皆が混乱する」

そっか……今普通に敬語で話してぺこって頭下げちゃったよ。いや、でも初対面の挨拶では普通そうするよね。

その普通は日本の普通か……ああ、もう難しい。この世界の普通に合わせるの難しすぎる！　しかも俺の立場がどんどん変わっていくから余計に混乱する。

「アレクシス様、私はどこまで使徒様モードをやれば良いのでしょうか……？」

思わずそう聞くと、アレクシス様は苦笑しつつ答えてくれた。

「そうだな。基本的には大勢の前に出る時だけで構わん。よってここではレオンの自由な振る舞いで良い。ただ文官達のためにも頭は極力下げないように、あとはできるだけ敬語は使わないようにしてくれるとありがたいな」

「かしこまりました」

じゃあそこまで威厳を出す感じにはしなくてもいいけど、俺は謙らないようにってことか。うん、極力頑張ります。皆さん年上だから慣れるまでは思わず敬語を使っちゃいそう。

「では改めて、皆これからよろしく。あっ、ごめんね。頭を上げていいよ。公の場以外では態度とかそんなに気にしなくていいから」

俺がそう言うと、文官さん達は恐る恐る立ち上がり顔を上げてくれた。

「かしこまりました。レオン様と、お呼びすれば良いでしょうか？」
「うん！」
「レオン様は……とても親しみやすい方だったのですね」
「そうだよ。だから仲良くしてくれたら嬉しいな」
「かしこまりました。よろしくお願いいたします」

文官さん達は最初よりも顔を緩ませて頷いてくれた。仲良くなれそうで良かった。

「では皆はそのまま仕事を続けていてくれ。レオンはこちらへ」

アレクシス様に呼ばれたのでソファーに向かう。

「これからのレオンの仕事だが、こちらからお願いしたいことは大きく二つある。一つはもちろん魔物の森への対処だ。同行の騎士も既に決めてあるのでこの後顔合わせをしてもらい、その騎士達と訓練などをしてもらいたい。それからもう一つは魔法の授業だ」
「魔法の授業とは、マルティーヌ様にやっていたようなことでしょうか？」
「そうだ。魔物の森を押さえ込むためにも個々の力を上げることが必要不可欠だ。そのためにお願いしたいのだが……」
「はい。もちろん問題ありません」

確かに魔力量が四と五の人に授業をしたら、今までの倍ほどの魔法が使えるようになるだろう。それだけでかなり戦況が変わるかもしれない。

「ありがとう。魔法の授業については既に授業を受ける人選は終わっている。まずは王都にいる第三騎士団に対して頼みたい」

第三騎士団は魔法と剣を両方使って戦う騎士団だし、だからこそ魔力量が多い人ばかりだし、最初に授業をする相手としては一番だな。

それに俺も回復魔法の授業で慣れてるし。

「かしこまりました。では日程を組んでくださればいつからでも授業をできます。できれば属性ごとに分けていただければと思います」

「分かった。では一日に一属性ずつで予定を組もう。また正式に決まり次第レオンにも伝える」

「よろしくお願いします」

今日中にでも属性ごとに効果的なイメージを紙に書き出しておこう。そういえば……、何でイメージで魔力の消費効率が上がるのかミシュリーヌ様に聞けば答えをくれるのかな。この前は色々あってそこまで意識が向かなかった。

今度本を読ませてもらうためにも神界に行くし、その時にでも聞いてみようかな。

あの女神様だと深く考えてないとか言われそうな気もするけど、もしかしたら何か意味があるのかもしれないし。

「基本的にレオンにお願いしたいのはその二つだ。後はレオンが気になっていることを意見してくれれば、それについて国政に反映しよう」

「かしこまりました。では改善案など思い浮かびましたらお話しさせていただきます」

孤児院のことや衛生関係のこと、後は教育のこととか色々と言いたいことはあるんだ。でも具体的には何も考えてないし、もう少し

自分の中で意見を煮詰めてから話すことにしよう。
孤児院の現状はどうにか変えたいよね。後は貧富の差ももう少しどうにかならないのかな……まあ、現代日本でもずっと問題になってたんだから難しいのだろうけど。でもこの国の方がトップの力が強いから、上手くやればもっと改善できる気もしてる。
うん、俺のあまり良くない頭をフル回転させて頑張ろう。

「よろしく頼む。では魔物の森に同行する者と早速顔合わせをしてもらえるだろうか？　実は隣の応接室に既に集まってもらっている」
「そうなのですね。では早速挨拶をしてきます」

そうして俺は一度アレクシス様の執務室を出て、王宮の使用人に案内されて隣の応接室に向かった。

２８２、同行の騎士達

部屋に入ると三人の男性が跪いて頭を下げていた。俺はその髪型や体型から何となく見覚えがある気がするなと思いつつ、まずは挨拶をした。

「初めまして、レオン・ジャパーニスです。よろしくお願いします。頭を上げてください」

その言葉に従って三人がゆっくりと頭を上げる。

え……なんでこの三人がいるの！？　俺はその三人の顔を見て思わず数秒固まってしまった。だって全員知ってる顔だったのだ。

「トリスタン様とジェラルド様、それにフレデリック様！？」

「ははっ、凄く驚いてるね」

「だ、だって、え？　皆さんが一緒に行くんですか！？」

「そう決まったんだよ」

マジで驚いた。いや、ジェラルド様は第三騎士団の団長だしまだ分かるかもしれない。フレデリック様も近衛騎士団所属だしまだ、分からなくもない。でもトリスタン様は何で？　戦えるのだろうか。そもそもそんな危険な場所に王族が行っても良いの？

俺が大混乱で二の句を告げないでいると、トリスタン様は悪戯が成功したような顔をして立ち上がった。

「レオン、まずは座っても良いかな？」

そしてソファーを示してそう口を開く。

「は、はい。座りましょう」

俺は大混乱のまま、とりあえずソファーに腰掛けた。三人も俺の向かいのソファーに腰掛ける。真ん中がトリスタン様で俺から見て右側がフレデリック様、左がジェラルド様だ。改めて凄いメンバーだな……

「えっと、もう一度お聞きしますが、皆さんが魔物の森の奥まで付いて来てくださるのですか？」

「そうだよ」

「……どのように選んだのでしょうか？」

「私は王族だからだよ。使徒様が国のために魔物の森へ出立されるのに、王族が誰も付いていかないというのは流石にね。兄上が危険な場所へ行くわけにはいかないし」

……そうか、そういうのもあるのか。王族も大変なんだね。

「ではフレデリック様は？」

「私はマルティーヌ様にレオン様の手助けをするようにと命じられましたので、ご同行させていただきます」

フレデリック様は俺に対して敬語を崩さずにそう言った。そっか、今は俺の方が身分が上なんだよね。

でもフレデリック様にそれをやられるのは寂しい。

「あの、今まで通りに話してください。他人行儀みたいで寂しいので」

「……良いのですか？」

「はい。逆にこちらからお願いしたいです」
「では、今まで通りに話すぞ。ただレオンの方も敬語を使わなくても良いからな」

フレデリック様はそう言って顔に笑みを浮かべてくれた。いつものフレデリック様だ。

「はい！　そこは善処しますね。ジェラルド様も今まで通りにしてください」
「分かった。そうさせてもらう」
「ありがとうございます。……それで、ジェラルド様は何故選ばれたのでしょうか？」
「俺は自分で志願したんだ。この世界を救うメンバーに入れるなんて、こんなに光栄なことはないだろう？　それに第三騎士団の団長として魔物の森にはかなり詳しいつもりだ。俺は役に立つぞ」

確かに世界を救うか、そうだよね。それにジェラルド様がいてくれるのは実際ありがたい。魔物の森はどれだけ知識があるのかも大切なところだから。

「ジェラルド様、志願ありがとうございます。これからよろしくお願いします」
「おう、任せとけ！」

ジェラルド様はニカッと気持ちのいい笑顔で笑いかけてくれた。うん、やっぱり敬われるのより今まで通りに接してもらえた方が嬉しい。

そうして一通り挨拶が済んだところで、トリスタン様がまた口を開く。

「じゃあ挨拶も済んだところで、これからの詳しい予定を決めていこうか。それから魔物の森でどう行動するのかも詳しく聞かせてほしい」
「かしこまりました。皆さんはどこまで話を聞いているのでしょうか？　時空の歪みのことや魔人については聞いていますか？」
「ああ、兄上から説明があったよ。魔物の森は別の世界からやって来ているもので、今回はその繋がってる部分を塞ぎに行くんだよね？　そして魔人はその別の世界に住む魔物が進化した存在で、今回の王宮襲撃事件の黒幕でもある。レオンのことも襲ったと聞いたよ」

そこまで話してくれてるのなら話は早いな。

「その通りです。今回の私達の目的はとにかくその穴を塞ぐこと。そのために魔物の森の奥まで向かわなくてはなりません。魔植物と魔物、それから魔人がその障害となります。まずは魔植物と魔物ですが、この二つは基本的に私の魔法であるバリアで対処します」

そう説明をしつつ、ソファーから立ち上がり自分を全て覆うような大きめのドーム型バリアを作った。

「基本的にはこんな感じのバリアをずっと張っていくので、警戒すべきは足元だけです」
「ほう、これがバリアなのか。足元にまでバリアを張ることはできないのか？」

感心したような声を上げたのはジェラルド様だ。

「出来るのですが、それだと空気の問題や移動のしづらさという問題もあるので今回はなしとしています」

「ほう、分かった」
「そしてこちらのバリアなのですが、私が魔力を使うのではなく魔法具に頼ろうと思っています。まず私が魔力を使った場合に作れるバリアは一枚だけなのです。それで全員を覆うよりも、個人個人でバリアを張った方が安全だろうということで魔法具にすることにしました。また、私の魔力を温存したいという意図もあります。実はこのバリア有能ではあるのですが、一番の問題がこちらからの攻撃もできないということなのです。なので基本はバリアの中から魔法を使って攻撃、剣を使いたい場合はその時だけバリアを解除するということになります」

バリアの一番の欠点がそこなのだ。普通に戦ってる時に自分でバリアを発生させて使うのにはかなり有能なんだけど、常時発動させておくのは意外と邪魔になる。でも魔物の森では常時発動のデメリットを考えてもメリットの方が大きいだろう。

「俺達もそれぞれで魔法具を持つということだな」
「はい、そういうことです。バリアの魔法具は基本的に攻撃を一切受けなければ数日は持つのですが、魔物の森では大事をとって一日ごとに魔力を込め直します。基本的には日が昇ったら移動開始して、日が沈み始めたら移動終了。魔植物を切り倒して開けた場所を作り、そこに夜用のバリアの魔法具を発動させてその中で寝ます。そしてその中にいる間に日中のバリアの魔法具には魔力を入れ直します」

俺はそう説明をして、今度は俺と三人を大きな箱形のバリアで覆った。今度は足元にまでバリアがある。

「夜はこうして全てを覆ってしまいます。そして交代で見張りをしながら睡眠をとりましょう」
「こうして全部を覆ってしまえば、バリアが破られない限りは安全

ってことだな」
「その通りです」
「バリアの魔法具の予備は持っていくのか？」
「私のアイテムボックスに大量に入れていきます。魔石と魔鉄も大量に入れていく予定なので、万が一全てが壊れるなんてことになってもまた作れます」
「それは心強いな」

バリアの魔法具は今回の作戦の生命線だから、準備し過ぎだと言われるほどの量を確保するつもりだ。さらに他にもピュリフィケイションとか使えそうな魔法具はたくさん入れていく。

２８３、魔物の森での過ごし方

「レオン、バリアの魔法具はどんなものかな？　実物を見せてほしい」

トリスタン様にそう言われた。

「はい。ですがまだ実物はなくて、というのも形を決めかねているんです。実戦でバリアを咄嗟に張ったり消したりしたいので、それをやりやすい形状はどんなものだろうかと考えているのですが……」

「ふむ、確かにそれは重要だね」

連結魔石と魔鉄を触れ合わせていればバリアが発動するから基本的には触れていて、しかし咄嗟の時にはすぐに離すことができるような、そんなふうにしたいんだけど……

「何か案はありますか？　こちらの連結魔石と魔鉄を触れ合わせればバリアが発動、離せばバリアが消えます。魔鉄はどのような形状にでもできます」

そう説明をしつつアイテムボックスからその二つを取り出した。すると三人はそれをじっと眺めて深く考え込む。

「やはりネックレスでしょうか？」

「でもそれだと離すのが大変じゃないかな？」

「確かにそうですね。では指輪にして……」

三人はそうしてしばらく悩んでいるけれど、良い案が思いつかな

いみたいだ。俺も色々考えているけどこれだというものがない。

それから数十分悩んだ結果、とにかくバリアが何らかの拍子に消えないことを重視することにした。バリアを消すことは基本的にはやらない。しかしバリアを過信することなく、魔物や魔植物からの攻撃を受けたらしっかりバリアの中で剣を構える。バリアで防げたらラッキーくらいにしようという話になった。

なのでバリアの形状を少し変えて、前側には剣を構えられるだけの幅を持たせることにした。

そして魔法具の形は結局ブレスレット型にして、魔鉄で作ったブレスレットに連結魔石のブレスレットを嵌め込む形にした。しっかり固定されるようにしたのでこれならバリアが消えることはないだろうし、ちょっと大変だけど固定を外して連結魔石のブレスレットを外せばバリアも解除される。

「ではこれで完成で良いでしょうか？」
「うん、これで完成で良いんじゃないかな」
「俺は良いと思う」
「俺もだな」
「ではこれで完成とします。今皆さんに一つずつ配っておきますね。バリアに慣れておくのも大切だと思うので」

そうして俺は、三人にそれぞれバリアの魔法具を作って渡した。

「ありがとう」
「魔力を込めてほしい時はいつでも言ってください。あっ、それから魔法具のバリアはもし壊された場合、復活までに三十秒ほどかかるので気をつけてください」

これも実験したが基本的には三十秒近くかかるのだ。魔物の森での三十秒は結構長いと思う。

「そうなのか、気をつけよう。バリアがどの程度で壊れるのかも知りたいから、後で試しても大丈夫か？」

「はい。魔法具のバリアを壊しても、魔法具自体が壊れるわけではないので大丈夫です」

「分かった。では後で試しておく」

よしっ、じゃあこれでバリアの魔法具は大丈夫かな。

「では話を戻しますが、先ほど説明したようにバリアの魔法具を使って魔物の森の奥まで向かいます。そして時空の歪みまで到達できたならば、こちらの杖をその歪みに投げ込めば終わりです」

ミシュリーヌ様が下界に落とした、神の遺物である杖を三人に見せると、三人は揃って微妙な表情を浮かべた。

「これがそうなのだな……」

「特に、特徴はないんだね」

「凄い力を持つ杖なのだから、もっと豪華なのかと思っていた」

そうなのだ。この杖は特徴がないどころかデザインがシンプルすぎて安物に見える。俺の予想ではミシュリーヌ様がデザインを凝る神力をケチったんだと思ってる。多分、いや絶対にそうだ。

「少し不安な見た目ではありますが、ミシュリーヌ様からこの杖の能力は保証されていますので安心してください」

「……それなら大丈夫だね。この杖はレオンのアイテムボックスに

入れていくのかな？」

……そこはまだ迷っている。というのも、俺のアイテムボックスの中身は俺が死んだら誰も取り出せなくなると思うんだ。だから万が一俺が死んじゃって他の三人が生き残った時に、杖を三人が手に出来るところに仕舞っておいた方が良いんじゃないかとも考えている。

でも今回の作戦って、俺が死ぬような状況になったのならほぼ終わりだよね……だってそうなればバリアの魔法具に魔力も補充できなくなるし、他の三人も余程の幸運じゃない限り生き残れないだろう。

三人にアイテムボックスの魔法具を配って、そこにバリアの魔法具をたくさん入れておくことも考えたけど、そもそもアイテムボックスの魔法具の魔力が切れたら終わりだ。

……うん、やっぱり俺に何かがあった場合のことは考えないことにしよう。絶対そんなことにならないように頑張ろう。

「私のアイテムボックスの中に入れていきます」

俺が決意を込めた瞳でトリスタン様を見返しつつそう言うと、トリスタン様は頷いてくれた。

「分かった。じゃあ私達はレオンを全力で守らないとね」

「よろしくお願いします」

「じゃあ後は、そうだ。食料はどうする？」

「それも基本的には私のアイテムボックスに入れていきます。数年は暮らせるほどの食料を持っていく予定ですので心配しないでください」

でも待って……食料ぐらいはそれぞれのアイテムボックスの魔法具に入れておいても良いのかもしれない。アイテムボックスの魔法具って、魔力がなくなる前に俺がもう一度魔力を注げば中身が消えることはないんだ。

だから定期的に魔力を注げば食料は分散して持っていられる。途中でアイテムボックスの魔法具のために魔力を消費してまで、そのリスク分散をする必要はあるのかって話だけど……

でもよく考えたら、それぞれ持っていきたいものとか日用品もあるよね。荷物が全部アイテムボックスの魔法具に入れられるのなら便利だろう。いちいち俺に取り出してもらうのも面倒だろうし。

うん、やっぱりアイテムボックスの魔法具は作ろうかな。そしてバリアの魔法具の予備も幾つかずつは持っていてもらおう。

「それからアイテムボックスの魔法具を皆さんに一つずつ渡しますので、その中にも食料をそれぞれ入れることにしましょう。荷物は基本的に全部その中に入れるということで」

「それはありがたいな」

「ではそちらも今作ってしまいますね。アイテムボックスの魔法具は魔力が切れたら中身が消えてしまうので、十分に気をつけてください。魔石の色が薄くなり始めたら早めに私に言っていただければ、すぐに魔力を補充します。魔物の森では毎晩魔力を込め直すことにしますね」

「ありがとう。アイテムボックスの魔法具はどんな形にするのか決まってるかな？」

「いえ、皆さんの要望で決めたいと思います」

そうしてそれからアイテムボックスの魔法具の形も考えて、最終的にはネックレスと指輪になった。

「よしっ、じゃあとりあえず決めることはそのぐらいかな？」
「はい。あとはどのように戦うのか、戦う際の連携などについて話しましょう。私はトリスタン様の戦うところを見たことがないのですが……」
「レオン、トリスタン様はかなりお強いぞ。剣術の腕前は俺よりも強いぐらいだ」

そう言ったのはフレデリック様。フレデリック様の腕前は訓練で見たことはあるけどかなり強かったと思う。それよりもってことは心配いらないな。

「それならば心配要りませんね。魔力属性と魔力量を聞いても良いですか？」
「私は土属性の魔力量が五だよ」

おおっ、魔力が五。さらに土属性！　なんだかんだ土属性って一番使えるんだ。

「それは素晴らしいです。確かフレデリック様も土属性でしたよね？　魔力量は？」
「俺も五だ」
「ちなみに俺は火属性で魔力量五だぞ」

皆優秀！　さすがここに選ばれてるだけある。

「皆さん素晴らしいですね。では基本的にはバリアの中から魔法で攻撃するので、その際に攻撃が被らないよう合図などを決めておきましょう。あとは剣で戦う場面もあるかもしれませんので、その場合の連携も後で確認しましょう。また、皆さんに魔法の授業をした

いと思います」

俺のその言葉に、三人は途端に目を輝かせる。

「レオンが魔法の授業をするって話は聞いてたんだ。今までの倍以上の効率で魔法が使えるようになるんだろう？　それは楽しみだ」

「私も早く知りたい」

三人は今すぐに授業をしてくれと言わんばかりに身を乗り出してくるけれど、俺は苦笑しつつそれをいなす。さすがに今からはもう時間が遅い。

「今日は時間もかなり過ぎていますので、また後日連携の確認も兼ねてにしましょう。魔法の使い方を教えるのには時間がかかるので……」

「それならば仕方がない。では後日楽しみにしている」

そうしてその日は色々な話し合いをして、後日皆の予定が合う日に連携の確認と魔法の授業をすることを決めて解散となった。

２８４、大人の仲間入り？

昨日はトリスタン様達との話が長くなり、お昼の時間を大幅に過ぎて執務室に戻ったらそのまま帰宅して良いことになったので、早めに公爵家に帰った。

そして仕事二日目である今日は、ちゃんと執務室で仕事をするぞと意気込んで王宮に向かっている。今日の朝はマリーとも会えたしやる気十分だ。

家族皆は連日様々な勉強をこなしていて、最近は結構疲れている様子だ。なので朝の時間が合わないことが多くてあまり話す時間がない。

今度皆のリフレッシュも兼ねてどこかに出かけようかなと考えている。

執務室に入ると昨日と同じように既に文官達は仕事を開始していて、アレクシス様も書類にサインをしていた。

「陛下おはようございます」

「アレクシス様、おはようございます」

「二人ともおはよう。リシャールはいつも通りに。レオンは机が来たから荷物を整理してくれ」

アレクシス様にそう言われて視線の先を見てみると、昨日はなかった机と椅子が準備されていた。

俺の仕事机！　ちょっとテンション上がる！！

「用意してくださってありがとうございます」

俺は内心の喜びを悟られないように、落ち着いて感謝を述べた。ちょっとは貴族らしく感情を隠せるようになっただろうか。

……いや、アレクシス様が微笑ましげに俺を見てるから隠せてないかもしれない。まだまだだな。

「使いやすいように整えてくれ」

「かしこまりました」

どうしようかな。俺って机の上に色々と飾るの好きなんだよね。日本でも自分の部屋の勉強机の上には、海に行った時に拾ってきた貝殻とか、ほとんど使わないけどなんかおしゃれなペンとか、何で買ったのかわからない動く花の置物とか、色々と飾っていた。

でもこの世界ではそんなにごちゃごちゃ飾ってたらダメだろうから、とにかくスタイリッシュにオシャレを目指そう。

まずはペンとインク、これは絶対に必要だ。あとは紙も何枚か置いておきたいよね。いや、紙は引き出しに入れて取り出せるようにしておこうかな。あとペンとインクの予備も引き出しに入れておこう。

他には何が必要かな……流石にこれだけは寂しすぎる。そう思って周りの人の机の上を見てみると、ほとんどの人の机には時計が置いてあった。あとカレンダーのような予定表も置かれている。

時計はちょうどアイテムボックスにいいサイズのやつがあるからそれを置こう。あとは予定表だけど……今はいい感じのを持ってないんだよね。とりあえず簡易的なやつを自分で紙に書いちゃおうかな。

俺は白紙をアイテムボックスから取り出し、それにこれから数週間分の予定だけをとりあえず書き込んだ。そしてそれを机の上に置く。うん、いい感じ。

あとはやっぱり資料かな。他の人の机にはいろいろな資料が乗っている。紙だったり本の形だったりだ。

でも資料として置いておくようなものがないか……あっ、王立学校の教科書とか？

王立学校の教科書は基本的には卒業時に返却するんだけど、これからも役立ちそうな内容だしそのまま持っていられないか聞いてみたら、普通に許可されたのだ。それどころか新品を用意してくれるとまで言われた。俺のはかなり年季が入った教科書だったからね。

でもこの教科書に愛着もあるし、新しいのは断って今まで使っていた教科書をもらったのだ。ここに飾るにはちょうど良いだろう。とりあえず政治関係のやつと歴史系の教科書を置いておこう。

うん、完璧！　俺は自分の机をぐるりと見回して心の中でそう評価した。なかなか良い感じに整った気がする。できる男の仕事机って感じ。

そうして俺が自分の仕事机の出来に満足していると、リシャール様が一枚の紙を持って来てくれた。

「レオン君、魔法の授業の日程が決まったから渡しておく。もし日程を変更したい日があったら教えてくれ」

「ありがとうございます。かしこまりました」

紙にはどの日に何属性の騎士を集めて授業をやるのかが書かれていた。一番近い日はもう来週だ。結構すぐなんだな。それほど魔物の森の現状がやばいってことか……

「レオン君には何かしてもらいたい仕事があれば声をかけるから、それ以外の時間は自由にしてもらって構わない。ただ極力この部屋にいて欲しい。どこかに行くときは一言声をかけてくれ」
「かしこまりました」

自由にしていて良いよって言われるのが一番困るんだよね……でも折角だし、この時間を有効活用するか。
とりあえずは属性ごとにどういう授業をするのかまとめたい。さらに魔物の森に行く際の非常事態への対処なども一通りまとめておきたいかな。
あとはジャパーニス大公家の今後、使用人を雇ったり内装を整えたりする話も進めないといけないだろうし、シュガニスをいつ開店させるのかも決めないとだよね。この国の孤児院のこととかもできれば改善したいし、その具体案も……

……うん、やることたくさんあった。時間が足りないぐらいだ。とりあえずやるべきことを書き出して、優先順位つけるところからかな。

そうして俺はやらなければいけないことを書き出していった。そしてそれが終わったところでまずは優先順位第一位、魔物の森に向かう三人への魔法の授業の準備をすることにした。

えっと……トリスタン様とフレデリック様が土属性で、ジェラルド様が火属性なんだよね。土属性はとにかくイメージと実際の土を使うことで魔力の消費を少なくして、狙いを定める正確性が重要だ。
小さいけど硬いバレットを作って、心臓か頭を狙うのが一番だ。上手く当たれば一撃で絶命させられる。

イメージはまず無重力だな。土属性の人はそもそも作った石などを空中に浮かせられない人が多い。浮かせられても魔力の消費が激しくて、わざわざ浮かせる意味がないと思ってる人もいる。
でもそれは大きな間違いだ。石を作ってそれを投げるのでは、正確性も飛距離もスピードも何もかも落ちる。まずは無重力の説明をして、いや、まずは重力があることの説明からして少しでも理解してもらおう。

あとはできる限り作り出す石を硬くするために、物質は小さな原子が集まって形作られてることも理解してもらいたいかな。俺もそこまで詳しくはないんだけど、原子が隙間なくくっついている様子を思い浮かべると石が硬くなるのだ。でもこれはやりすぎると失敗する。石のレベルを超え始めると、急速に魔力の消費量が増えてしまう。だからあくまでも石の範囲内でってところが重要になる。

とりあえず土属性はこんなところかな。火属性はとにかく酸素の概念、いや空気の概念から教えていけばかなり消費魔力量は抑えられるはずだ。
でも俺的には火魔法ってそこまで攻撃力が強くないんだよね。どうしても火って実態がないものだから、土魔法の方が攻撃力が高い。でも火力を強くすれば一瞬で全身火傷のようにすることも可能だし、使い方次第でもあるけど。

魔物の森では、基本的に土魔法でトリスタン様とフレデリック様に攻撃してもらって、皮膚が硬くて土属性じゃ攻撃が効かないときはジェラルド様の火魔法かな。あとは毛皮があって燃えやすいやつとかも火魔法が良いかも。
その辺は臨機応変にだな。うん、とりあえずこんな感じで良いだろう。

俺はそこまで考えて授業の予定を立てたところで、ペンを置いて紙から顔を上げ大きく伸びをした。すると後ろに控えてくれていたロジェが俺のところに近づいてくる。

「レオン様、お茶をお淹れいたしましょうか？」
「じゃあお願いしようかな。ありがとう」
「かしこまりました」

この部屋にはロジェの他にも、アレクシス様やリシャール様の従者もいる。従者は基本的に後ろで控えて呼ばれるまで待機してるんだけど、今日の様子だと結構仕事を手伝ったりもしてるみたいだ。

他の文官の人達にも何人か従者が付いている人がいるので、多分その人達は爵位を継ぐ予定の貴族子息や貴族子女か、既に爵位を継いだ下位貴族なのだろう。逆に従者が付いてない人は準貴族や平民なのかな。アレクシス様は近くに置く者は特に実力で選びそうだし、平民がいてもおかしくないと思う。

「お待たせいたしました」
「ありがとう」

ロジェが淹れてくれたお茶を飲むと、その美味しさといつもの味にほっと体の力が抜ける。やっぱり気を張ってたみたいだ。もうロジェのお茶は俺にとって実家の味と同じレベルになっている。

そうして一息吐き、また仕事を再開した。それからしばらく仕事に集中していると、お昼の鐘が聞こえてくる。もう十二時になったみたいだ。

「皆、お昼の休憩に入るように」

鐘が鳴り終わるとアレクシス様がそう言って、皆が続々と執務室から出ていく。
そういえば考えてなかったけど、お昼ご飯ってどうするのだろうか。もしかしてお弁当とか持ってくるべきだったのかな。
「アレクシス様、お昼ご飯はどうすれば良いのでしょうか？」
執務室にまだ残っていたアレクシス様とリシャール様に素直に聞いてみた。
「ああ、私達はいつも隣の応接室で食べているんだ。今日からはレオンの分も用意するように言ってある」
「そうなのですね。私の分までありがとうございます。では他の皆さんはどこへ行かれたのですか？」
「東宮殿の食堂だろうな。王宮には二ヵ所食堂があって東宮殿が文官用、西宮殿が騎士用となっている」
王宮に食堂なんてあったんだ。確か東宮殿が文官の仕事場で西宮殿が騎士団の仕事場なんだよね。
いつか機会があったらそっちにも行ってみたいな。でも今の俺が行ったら立場的にダメなのだろうか。いや、俺の姿は貴族以外には知られてないだろうし、そこまで騒ぎにならない可能性も……あるかもしれない。
うん、後でちょっと覗いてみようかな。
そんなことを考えていたら、執務室にアレクシス様の従者の方が入ってきて昼食の準備が整ったと伝えてくれた。
「では隣に行こうか」

そうしてそのあとは昼食を食べてしばらく休憩をして、十三時からはまた仕事に戻り夕方まで仕事に精を出した。

一日仕事をするのは予想以上に大変で疲れたけど、大人の仲間入りをしたみたいで嬉しかった。

285、護衛

今日もいつものように執務室に入り、まずはアレクシス様に挨拶をする。そして一緒に働く文官達にも挨拶をして、スマートに自分の席に着いた。席についてまずやることは今日の予定の確認。仕事に優先順位をつけて効率よくこなしていくためにも必要な時間だ。

ロジェに紅茶を入れてもらい、それを飲みながら予定を決めていく。

執務室で仕事をするようになって数日経った。もう仕事にも慣れて執務室には完全に溶け込んでいる。ふっ、俺も大人になったな……

「レオン、こっちに来てくれるか？」

そんな馬鹿なことを考えつつ今日も機嫌良く仕事を始めようとしたら、アレクシス様にソファーに座るように言われた。アレクシス様もそっちに移動するみたいだ。

「はい。何のお話でしょうか？」

俺はソファーに移動してアレクシス様の向かいに座った。

「実はレオンの護衛についての話だ。レオンのというよりも、ジャパーニス大公家のだな」

護衛か、確かに俺も考えてたんだよね。今までは貴族じゃなかったから護衛はいなかったけど、高位貴族は基本的にどこにいくにも護衛がついているし、俺にも必要だろうなって。それに家族皆にも

護衛をつけていたら安心できるし。
　でも信頼できる護衛を見つけるのが大変すぎて困ってたところだったんだ。適当な人を選んで身内の裏切りに合うのが一番最悪だし、かといってタウンゼント公爵家から引き抜くわけにもいかないし……

「私も考えていたのですが良い人材が見つからず……」
「そうだろうと思って私が厳選して選んでおいた。とりあえず四名いれば良いだろう？　そこから増やすのは自分で人材を見つければ良い」

　え、選んでくれたの！？　それはありがたい。凄くありがたい。アレクシス様が厳選してくれた人なら安心だ。

「ありがたいです。本当にありがとうございます」
「このぐらい当然だ。私が信頼できると思った騎士に声をかけて、その中から特にやる気がありそうな者を選んでおいた。それからレオンのご家族には身分が低い者や平民出身のものを選んだ。その方が打ち解けやすいだろう」
「そんな配慮まで……、本当にありがとうございます」
「良いんだ。それで顔合わせはどうする？　今で良ければ隣の部屋にでも呼ぶが……」
「では、よろしくお願いいたします」
「分かった。ではレオンは少し仕事をして待っていてくれ」

　そうして数十分仕事をして待っていると、騎士の方達の準備できたと言われて隣の部屋に案内された。
　部屋に入るとこの前トリスタン様達と会った時と同じように、四人の騎士が跪いていた。

「初めまして、レオン・ジャパーニスです。顔を上げて」

俺がそう言うと四人は顔を上げた。二人は女性騎士だ。母さんとマリーのために女性を選んでくれたのだろう。

「ではこちらから自己紹介を」

「はっ！　私は第一騎士団所属の騎士であり、ディタリー騎士爵家三女、ニコール・ディタリーでございます」

そう挨拶をしたのは、綺麗な金髪を後ろでポニーテールにしている若い女性騎士だ。凛々しくてかっこいいって雰囲気を醸し出している。まだ二十代前半ぐらいに見える。

「ニコールだね。よろしく」

「よろしくお願いいたします」

「では次の人」

「はい。私は第二騎士団所属、サンドラと申します。ラファン商会の長女ですので平民です」

この子は平民なのか。平民の女の子でしかも商会の長女。何で騎士になったのか不思議だ。よほど剣術が好きとか、それとも何かしらの事情があるのかな？

でも雰囲気は柔らかくて良い子に見える。正直強そうには見えないんだけど、第二騎士団所属ってことは魔物の森に行ってるってことだし強いのだろう。

「サンドラだね。よろしく」

「よろしくお願いいたします」

「じゃあ次の人」

「はっ！　私はローラン・ヴィッテでございます！　ヴィッテ男爵家四男で、現在は第一騎士団に所属しております！　ジャパーニス

大公様のお姿をお披露目のパーティーで拝見し、心奪われまして志願いたしました。どうぞよろしくお願いいたします！」

ローランは俺のことを崇拝するように見つめ、凄い勢いでそう言った。うん、まずはとにかく暑苦しい。そしてキャラが濃い！

「よ、よろしくね」

俺はちょっとだけ引き気味でそう声をかけると、ローランは感動したように瞳を潤ませる。

「大公様に声をかけていただけるとは……」

そしてそう呟くと思考がどこかにトリップしたのか、俺をぼんやりと見つめ続けている。うん、とりあえず放っておこう。俺の手に負えない。

でもここまで慕ってくれてるなら良い護衛にはなってくれそうだよね。ちょっと毎日疲れそうだけど……

「じゃあ最後の人お願い」

「はっ！　私はロレシオ・フォーニエと申します。現在は近衛騎士団に所属しております」

この人はさっきのローランと違って凄く普通だ。黒髪短髪で真面目そうな雰囲気を出している。でもとっつきにくさのようなものはあまり感じない。いいね、ロレシオいいよ。さっきのローランと比べるから凄くいい！

「ロレシオだね。よろしく」

「よろしくお願いいたします」

そうして全員に自己紹介をしてもらい、俺はまずソファーに移動することにした。

「じゃあとりあえず座って話そうか」
「はっ！」
「ロジェ、全員分のお茶をよろしく」
「かしこまりました」

ロジェにお茶を頼んで四人に向き直る。

「じゃあ改めて、神の使徒でありジャパーニス大公であるレオンです。よろしくね。そうだ、俺のことはレオンって呼んでくれたら嬉しいかな。ジャパーニスは呼ばれ慣れてなくて」
「かしこまりました」

俺がそう言うと皆は頷いてくれた。

「ありがとう。皆はジャパーニス大公家で俺と俺の家族の護衛をしてくれるって事で間違いない？　本当は嫌だとかそんな気持ちがあるのなら無理にとは言わないけど……」
「そんなことはあり得ません！　私はこの命をかけてレオン様をお守りいたします！」

そう叫んだのはローランだ。うん、それは知ってた。ローランはそう言うだろうなと思ってたよ。ありがとね。

「ローランありがとう。他の人はどうかな。ニコールは？」
「私はレオン様とそのご家族をお守りさせていただけるのであれば、それ以上の幸運はないと思っております。それに……女が騎士を続

けるのは大変なことも多く、貴族女性の警護の任に就かせていただけることはとても光栄な出世でございます」

女性騎士はやっぱり苦労もあるんだな……確かに圧倒的な男性社会だもんね。

「それなら良かったよ。サンドラはどう？」

「私は強い人が好きなので、この世界で最も強いレオン様のお役に立てるのであればこれ以上の幸せはありません。たまに、気が向いたら、年に一度でも構いませんので、手合わせ願えればと思っております」

サンドラはそう言ってうっとりとした表情を浮かべた。うん、この子も癖強めだった。何よりも強さを求めてる感じなのかな？　戦いが好きとか……？

まあ、たまに手合わせするぐらいで気持ち良く働いてくれるならありがたいか。

「別に構わないよ。俺の練習にもなるし一緒に訓練しよう」

「本当ですか！　ありがとうございます！」

サンドラが大人しくて強くなさそうとか言ったの誰だよ。全然大人しくなんかないし、どちらかといえば戦闘好きだよ！

ふぅ～、俺はここまででかなり疲れていたけど、最後のロレシオにも聞かなきゃ公平じゃないのでそちらに話を振った。

「ロレシオは？」

「私は今まで近衛として王族の方々をお守りしてきましたが、今度はお近くで使徒様ご一家をお守りさせていただけるなど光栄の極み。ぜひ私を雇っていただけたらと思います。命をかけてお守りいたし

ます」
「ロレシオありがとう。他の皆もありがとう。じゃあ皆をジャパーニス大公家で雇いたいと思う。これからよろしくね」
「ありがとうございます。よろしくお願いいたします！」
四人は声をそろえて頭を下げた。さすが騎士って動きだ。
「じゃあこれからの話なんだけど、皆は騎士をいつ頃辞められるのかな？」
「陛下から、レオン様がお望みならば今すぐにでも辞めて構わないと言われております。既に引き継ぎも済ませてありますので、今この時からでも」
マジか……本当にありがたいな。でも今日から来てもらうとして、公爵家に皆が住んでも良いのだろうか。客間には騎士用の部屋も併設されてたから、住む場所は大丈夫だと思うけど……
というか四人だと一人につき一人ついてもらうことになるから、本当なら交代要員も入れて二、三人は護衛が欲しいところだな。やっぱり早めに増やすべきか。
まあそれは後で考えよう。今はこの四人だ。
「ロジェ、リシャール様に話が聞けそうなら、四人が公爵家に住んでも良いか聞いてきてくれる？」
「かしこまりました」
ロジェは綺麗に一礼すると、素早く部屋から出ていき執務室に向かってくれた。
「俺は今タウンゼント公爵家に住んでて、ジャパーニス大公家の屋

敷は建設中なんだ。だから半年ぐらいは、タウンゼント公爵家で暮らしてもらうことになるかもしれないけど良いかな？」
「問題ありません」

そうして話しているとすぐにロジェが戻ってくる。

「レオン様、騎士の方が住むことに関しては問題ないそうです」
「ありがとう。じゃあそういうことだから、今日から早速来てもらおうかな。これから荷物をまとめて元の職場に挨拶をして、今日の夕方に俺が公爵家に帰る時までにはまた執務室に来てくれる？」
「かしこまりました」
「じゃあまた夕方に。屋敷に戻ったら家族を紹介して、誰が誰の護衛になるか決めるからね」
「はっ！」

そうして四人の騎士との顔合わせは終わった。ちょっと癖が強めの人もいたけど、皆良い人みたいで良かったな。

286、久しぶりのマリー

その後はいつも通りに執務室で仕事をした。そして仕事が終わる時間より少し早くに四人が来たので、俺はいつもより早めに仕事を終えて公爵家に帰ることとなった。

今日はリシャール様と一緒ではなく俺だけが先に帰るので、馬車の中には俺とロジェと護衛の四人だけだ。

「皆は俺と話してみてイメージと違うな、とか思った？」

俺はパーティーの時は使徒様モードでやっていたのでそう聞いてみると、皆は予想に反して首を横に振る。

「いえ、私は近衛としてパーティー会場におりましたが、レオン様は威厳もありながら優しいお方だと見ていてわかりましたので、予想通りのお方で安心しております」

ロレシオが少しだけ微笑みつつそう答えてくれた。やっぱり使徒様モードで頑張っても雰囲気までは変わってなかったってことか……まあ、結果オーライかな。

「私は実際にレオン様とお話しさせていただいて、よりレオン様の素晴らしさを実感しております！　使徒様であらせられるのにそれをひけらかすわけでもなく、威厳も持ちながらやさしさも兼ね備えている。本当に素晴らしいお方です！」

ローランはそう褒めちぎってくれた。俺はそんなに凄い人じゃな

いんだけど……でもちょっと嬉しい。

「ありがとう。これからも良い主でいられるように頑張るよ。俺の家族のこともよろしくね」

「お任せください！」

そうして馬車で皆と友好を深めていると、すぐにタウンゼント公爵家に着いた。屋敷に着いてまず皆には俺の部屋に待機していてもらう。

「ロジェ、家族皆はどこにいるのか分かる？」

「この時間ならば授業は終わっておりますので、お部屋でお休みになられているかと思います。マリー様のお部屋にお集まりになることが多いようです」

「ありがとう。じゃあマリーの部屋に皆を迎えに行こうかな」

「かしこまりました。ではマリー様付きのメイドへ連絡をいたしますので少しお待ちください」

「よろしくね」

貴族の屋敷では連絡をしないと気軽に訪ねられないところが不便だ。俺の屋敷では家族間なら遠慮なく行き来できるようにしたいよね。

というかとりあえず護衛は一人ずつ雇うことができたけど、メイドと従者も雇わないとだ。そこも信頼できる人をとなると大変だな……

やっぱりリシャール様とアレクシス様に相談した方が良いかな。これからは使える人脈は使っていく方針でいこう。俺が一人でできることには限りがあるし、それで変な人を雇ったとなればジャパー

ニス大公家全体の問題となる。使徒様の問題は国の問題にも発展しそうだし……うん、とにかく相談大事だな。

でも全員信頼できる人をっていうのも難しいんだろうし、とりあえず一人は信頼できる人を入れてあとは雇ってみて判断って感じになるのかな。ふぅ、やるべきことが多すぎる。

「皆、座って待ってて良いよ？」

俺はとりあえず護衛の皆に寛いでもらおうと思い、皆にソファーを進めた。すると皆は困惑したような様子でその場から動かない。

「……レオン様、レオン様のご家族は大公家の皆様ですので、私達が座って待つことは遠慮したいのですが……」

ロレシオにそう言われて初めて気づいた。そうだよね、俺の家族は大公家なんだ。なんとなく平民のままだっていう感覚でいたし、俺もまだ大公だって自覚があんまりなかった……

それだと周りの人を困惑させるだけだし、ちゃんとしないとだな。

「確かにそうだね。じゃあ皆はそっちに立って待っててくれる？」

「かしこまりました」

そうして皆が俺の部屋の一角に綺麗に並んだところで、ロジェが戻ってきた。

「レオン様、今すぐ訪ねても良いそうです。皆様マリー様の部屋に集まっておられます」

「分かった。じゃあ行こうか」

ロジェと共に自分の部屋を出てマリーの部屋に向かう。部屋に入るとマリーがソファーから勢いよく立ち上がり、俺のところに駆けてきてくれた。

「お兄ちゃん！　今日は帰ってくるの早かったんだね！」
「そうなんだ。今日は皆に紹介したい人達がいて早く帰ってきたんだよ」
「紹介したい人？」
「そう。俺の部屋にいるから来てくれる？　母さんと父さんもお願い」
「良いけど、どんな人なの？」
「皆の護衛をしてくれる人だよ」

俺のその言葉に皆は不思議そうな顔をした。

「護衛をしてくれる人ならもういるわよ？」
「うん。でもそれはタウンゼント公爵家に雇われてる人なんだ。今から会ってもらう人はジャパーニス大公家で雇う人だよ」
「そういうことなのね。分かったわ」
「じゃあ皆で行こうか。それにしても四人で集まるのは久しぶりだね」

父さんが嬉しそうにそう呟いた。確かに最近は俺も皆も忙しくて、夜ご飯の時ぐらいしか会わなかった。やっぱり皆でどこかに出かけたいな。街よりも自然なところ、森とかが皆は落ち着くかな。
転移を使えば、今の俺の魔力なら前の家の近くの森にまで転移できて、ここにまた戻ってくることも可能だろう。ピクニックとかやりたい。

「最近忙しくて夜ご飯の時しか話せてないよね」

「お兄ちゃんが近くにいるのに遠くにいて寂しいの……」

マリーは俺の服をぎゅっと掴んでそう言った。うぅ……マリーが可愛い。これは絶対に休みを作って皆で出かけないとダメだ。ピクニックの決行は決定だな。

「マリーごめんね。今度時間を作るから皆でどこかに出かけようね。マリーも勉強で疲れてるでしょ？」

「本当！？　お出かけしたい！」

「じゃあ、お兄ちゃんが予定を立てるよ」

「やったー、お兄ちゃん大好き！」

お兄ちゃん大好き、お兄ちゃん大好き……いい響きだ。この言葉だけでしばらくは頑張れる。

俺は自分の顔がデレっと崩れるのを実感しつつ、それを引き締める術が思いつかなかった。だってマリーが可愛いんだ。

うふふ、ふふふふ、お兄ちゃん大好きかぁ。嬉しすぎる。やっぱりマリーはいつまでも天使だ。そうして俺がデレデレとしていると、マリーに服を引っ張られた。

「……お兄ちゃん！　もう、ちゃんとお話聞いて！」

そう怒られてやっと現実に戻る。幸せすぎて思考が飛んでた。

「ごめんごめん。なんの話だっけ？」

「お勉強のお話！　私いつも褒められてるんだよ」

「そうなんだ。さすがマリーだね。最近は何を勉強してるの？」

「うーんとね、敬語と礼儀作法だよ。そうだ、ちょっとお兄ちゃんそこにいて、見ててね！」

マリーはそう言うと廊下の先まで走っていき、そこから俺の方に優雅に歩いてきた。凄い、歩き方が今までと全然違う……

そして俺の前でまで来ると立ち止まり、綺麗に微笑みながら右足を少し後ろに下げて膝を曲げ頭を少し下げるという、貴族女性がよくする挨拶をした。

そして挨拶を終えると途端にいつものマリーに戻り、キラキラした瞳を俺に向けてくる。

「よく出来てたでしょ！」

「……うん、うん、凄いよマリー！　どこかのお嬢様みたいだった！」

「えへへ。先生にも褒められたんだよ！」

「さすがマリーだね。完璧だよ」

俺のその言葉にマリーは嬉しそうに飛び跳ねている。うん、こういうところもマリーらしくて好きだな。

「もう一回やってあげる！」

マリーはそう言ってまた廊下の先に走っていった。褒められたのが殊の外嬉しかったのだろう。もう一度マリーの歩きと挨拶を見て、また褒める。俺の部屋はすぐそこなのに全然辿り着かないな。でもそれも幸せだ。

他の皆はその様子に苦笑を浮かべているようだ。まあ、こんなこともたまには良いよね。

そうしてしばらくマリーに付き合って俺も楽しんで、部屋で待っている四人のことも考えてそこそこのところで止めた。

「マリー、また今度見せてもらうから今日はお兄ちゃんのお部屋に行こうか。お部屋で待ってる人がいるんだ」
「そっか。じゃあまた今度ね！」

そうして俺の部屋に入ると、四人は綺麗に跪いて待っていた。俺はそんな四人の隣に行き家族皆の方を向く。

「じゃあ紹介するね。ジャパーニス大公家に仕えてくれて、皆の護衛をしてくれる四人だよ。皆顔を上げて」

四人は跪いた体制のまま顔を上げた。この世界では跪くのって相当身分が上の人、基本的には王族とかにしかしないんだけど、大公家は跪くほどだってことだよね。改めて凄い身分になっちゃったことを実感する。

「こっちからニコール・ディタリー、サンドラ、ローラン・ヴィッテ、ロレシオ・フォーニエ。皆今までは騎士として働いてたんだ。じゃあ皆自己紹介をしてくれる？」
「かしこまりました。私はニコール・ディタリーと申します……」

そうして順番に四人全員が自己紹介を終えた。

287、家族との顔合わせ

「皆ありがとう。じゃあ今度は皆が自己紹介をしようか。父さんから」

俺のその言葉に、父さんは緊張した面持ちで一歩前に出た。そして恐る恐る口を開く。

「ジ、ジャパーニス前大公の、ジャン・ジャパーニスだよ。よろしく」

「私はその妻、ロアナ・ジャパーニスよ。よろしくね」

「私はマリー！　あっ、マリー・ジャパーニス！」

おおっ、皆は自分の身分を覚えたみたいだ。それだけでもかなり凄い。やっぱり教育って大切だよね。

「よろしくお願いいたします」

護衛の四人は三人に向けて声を揃えて、また頭を下げた。

「じゃあ皆でソファーに座って話そうか。マリー、ソファーに座ろう？　母さんと父さんも」

「うん！」

「分かったわ」

「護衛の皆もね。ゆっくり話したいから座って」

「かしこまりました」

「ロジェはお茶をお願い」

そうして皆でソファーに座り、お茶を準備してもらって一息つく。
四人はソファーに座ってそわそわしているマリーを見て微笑ましげな視線を向けているので、ジャパーニス大公家で働いてもらうのに問題なさそうだ。
やっぱりマリーはまだじっと座ってるのが大変みたい。というか普通の子供はこうなんだよね。俺の周りにいる子供がおかしいんだ。

「じゃあさっきも言ったけど、改めてこの四人が皆の護衛をしてくれる人達だよ。ジャパーニス大公家で雇うことになったから、これからは皆も雇い主になるからね」

母さんと父さんはその事実に困惑しながらも、何とか頷いてくれた。公爵家で暮らしているうちに段々と護衛や従者、メイドがいる生活に慣れてきたみたいだ。

「母さん達にずっと付いて守ってくれる人ってことよね」
「そうだよ」
「皆さん、よろしくお願いします」

母さんは護衛の皆の方にしっかりと体を向けて頭を下げた。父さんもそれに合わせて頭を下げる。マリーもその二人を見てなんとなく頭を下げている。
うん、やっぱりすぐに意識は変わらないか。俺もいまだに頭を下げそうになるんだ。平民は貴族がいたらとりあえず頭を下げとけって感じだからね……

でも四人が相当焦ってるから、そろそろ止めてあげた方が良いかな。

「母さん父さん、皆は大公家の人間になったから頭を下げなくて良

いんだよ。というよりも下げちゃダメかな。頭を下げるのは王族の方々相手の時だけで良いんだ」
「……でも、それならどうやって頼めば良いんだい？」
「うーん、よろしく頼むって言えば良いんじゃないかな」

でも父さんのキャラじゃないよね。というか俺のキャラでもないんだよね……でも段々と慣れていかないと。

「よ、よろしく頼む。こんな感じかい……？」

父さんはちょっと吃りながらそう言った。うん、すっごく違和感。でもそれで正解だ。

「そんな感じで良いと思うよ。というよりも、普通に敬語を知らなかった時みたいに話せば良いんじゃないかな？　隣のおじさんに話す時みたいに話せば良いんだよ」

皆は今まで敬語なんて知らなかったんだからその時のように、そして平民同士で話す時のように話せば自然になる気がする。皆が敬語を使う相手なんてあんまりいないんだし、それで良いよね。ちょっと盲点だったかも。
一気に身分が上がりすぎて、逆にほとんど敬語が必要ないって凄いな。

「そうなのかい？」
「うん！　それを意識してみたら良いよ」
「それなら簡単そうだ」
「レオン、母さんもそれで良いのかしら？」
「母さんもそれで大丈夫だと思うよ！　じゃあとりあえずその話は置いておいて、誰が誰の護衛をするか発表しても良いかな？」

俺がそう言うと皆は頷いてくれた。皆で話してみてから決めてもらおうかとも思ったんだけど、それだと結局決まらなそうだし俺が決めてしまったのだ。

なんとなくこの子はマリーかなとか父さんかなとか、話しながら思いついたっていうのもある。そういう直感は大事だよね。

「じゃあ発表します。まずはニコール。ニコールにはマリーの護衛をしてもらいたい。頼めるかな？」

「はっ！　命に代えてもお守りいたします」

ニコールはその場で立ち上がって深く頭を下げた。

「マリー、マリーのことはこの女の人が守ってくれるからね。名前はニコールって言うんだ。仲良くしてね」

俺がマリーにそう言うと、マリーはソファーから立ち上がりニコールのところにたたっと駆け寄った。そして下から見上げてニコッと笑いかける。

「お姉ちゃんが私を守ってくれるの？」

「はい。必ずお守りいたします」

「ありがとう！　じゃあこれからずっと一緒？」

「いつでもお側についております」

「やったー！　じゃあ仲良くなろうね」

マリーがニコッと笑いかけると、ニコールの凛々しい顔がちょっとだけ崩れた。何とか顔がデレデレしてしまうのを耐えているのか、口元がひくひくしている。

うん、仲良くなれそうで良かった。

「じゃあマリー戻って。ニコールも座ってね」
「かしこまりました」
「はーい」
「じゃあ次はサンドラ、サンドラは母さんの護衛をよろしく頼むよ」
「かしこまりました。大奥様、私が護衛を務めさせていただきます」

サンドラも立ち上がりそう言って頭を下げた。

「お、大奥様……？」

母さんはその呼び名に首を傾げている。確かに旦那様は俺ってことになるから父さんが大旦那様、母さんが大奥様ってことになるのか。

でも流石にその呼び方は慣れないだろうし、基本的には名前で呼んでもらうことにしようかな。

「母さんの立場は大奥様ってことになるからそう呼ばれるんだけど、慣れないから名前で呼んでもらうことにする？」
「ええ、名前の方が良いわ」
「じゃあサンドラ、皆も名前で呼んであげて。父さんも母さんもね」
「かしこまりました。ではロアナ様、これからよろしくお願いいたします」
「はい。こちらこそよろしくね」

母さんはサンドラに向けてにっこりと微笑み、サンドラもそれに笑顔で返した。うん、この二人も問題なさそう。サンドラは平民だし話も合うだろう。

「じゃあ次はロレシオ。ロレシオは父さんの護衛をよろしく」

「はっ！　ジャン様、これからよろしくお願いいたします」
「うん、よろしく頼むよ。僕はわからないことも多いから迷惑をかけるかもしれないけど、色々教えてもらえると嬉しいかな」
「かしこまりました。私にできることでしたら」

うん、真面目なロレシオと優しい父さん、相性良さそう。そして最後だ……

「じゃあローランは俺の護衛をよろしくね」
「かしこまりました！　レオン様の護衛を務めさせていただけるなど光栄の極み。私はこの命に代えても、いえ、この命が尽きようともレオン様をお守りいたします！」

命が尽きようともって……本当に幽霊とかになりそうで怖いよ。というかその前に命を大事にしてほしいし。
まあ、護衛に命を大事にしてなんて言っちゃいけない言葉なんだけど。

「ローランありがとう。頼んだよ」
「はっ！」
「じゃあ、今日から今決めた配置で護衛をよろしくね。これから護衛も増やすと思うけど、今のところは一人しかいないから公爵家から借りてる護衛の方々と協力してね」
「かしこまりました！」

よしっ、これでとりあえず一人ずつは護衛がついたから、四人が慣れた頃にもう二人ずつぐらい追加したい。あとはメイドや従者もだな。

「お兄ちゃん、ニコールお姉ちゃんに私のお部屋を案内してきても

良い？」
「もちろん良いよ。じゃあ、とりあえず今日は解散にしようか。他の皆も護衛するのに必要だと思うからそれぞれの部屋を確認して、これから自分が住むことになる部屋も整えてね」
「かしこまりました」

そうして護衛の皆はそれぞれの部屋に散っていった。これで少しはジャパーニス大公家として体裁が整ってきたかな。いや、まだまだか……

２８８、雇用についてと西宮殿

それから数日後。
今日は魔物の森に向かうメンバーに魔法の授業をして、戦う際の連携について確認をする予定だ。

俺は公爵家を出て馬車で王宮に向かう。今日は執務室には行かないのでリシャール様とは別の馬車だ。馬車の中には俺とロジェ、それからローランの三人。ローランは俺の護衛に就任してから毎日とても楽しそうに、でも真剣に護衛をしてくれている。
最初はちょっと疲れそうとも思ったんだけど、ローランは意外と無駄口叩かず職務を全うするタイプのようで、たまに、いや頻繁に尊敬の眼差しを向けられる以外に支障はない。

「ローラン、数日護衛の仕事をしてみてどう？　不便はない？」
「はい。とても素晴らしい職場環境です！」
「それなら良かったよ。あと護衛を増やすとしたら何人ぐらい必要だと思う？　家族の護衛も考えると」

俺のその言葉にローランは少しだけ考え込み、ゆっくりと口を開いた。

「やはり、それぞれに最低二人は必要かと思います。レオン様には三人ほどいても良いかと。護衛は権力の象徴でもありますので」

やっぱりそうか。じゃあ最低でもあと八人は個人について貰う護衛が必要ってことだ。さらにそれ以外にも屋敷を警備して貰う兵士も必要だし、相当な人数が必要になるな。

「今回は騎士の皆を引き抜いたけど、兵士からでも良いと思う？あと全く未経験の平民とか」
「そうですね……護衛ではなく兵士として雇う場合でしたら、未経験の平民などでも良いと思います。しかし隊長や副隊長などの立場の者は、しっかりと訓練を受けた元騎士、最低でも元兵士が良いでしょう。護衛は皆様の安全に直結しますので、未経験の者は避けるべきです。まずは兵士として雇い、経験を積んでから護衛に引き上げるのでしたら可能かと思います」

そうなると護衛として雇う八人と兵士をまとめて貰う立場の人を数人、合計十人程度は経験者から雇わないといけないってことだ。そんなに引き抜けるかな……

「ロジェ、そんなに経験者を引き抜けるものなの？　例えば他の貴族家に仕えてた人が、そこを辞めて別の貴族家に行くとかある？」
「家同士が親しい場合はよくあることですが、そうでない場合は情報が渡る可能性もありますし、ほとんど行われません。ですのでレオン様が経験のある騎士や兵士を引き抜くのならば、タウンゼント公爵家やタウンゼント公爵家と懇意にしている貴族家からとなります」

やっぱりそうなのか。そうなるとリシャール様にかなりお世話にならないとだ……
迷惑かけすぎてないかな。リシャール様の仕事を増やしすぎてる気がする。

「リシャール様に迷惑をかけすぎてないかな？」
「あまり気にされる必要はないかと思います。新しい貴族家を作るとなれば大変であることは明白ですので、頼りにされた方が他の貴

族に繋がりも示せて良いのではないでしょうか」

……そんな考え方もあるのか。確かに貴族は政略結婚とかで繋がりを作るんだもんね。じゃあ、そこまで気にしすぎずに助けてもらおう。

「確かにそうだね。じゃあまたリシャール様に相談しつつ、護衛と兵士の代表となる人は雇うことにするよ。それ以外の兵士はジャパーニス大公家の名前で広く募集することにしようかな。教会とかに募集出せる？」

「はい。王都中の教会に広く出すことも、中心街の教会にのみ出すことも可能です」

「じゃあ王都中に広く出そうかな」

流石にそこまで募集すればたくさん集まるだろう。そこから面接して良い人を見つければ良いかな。

「かしこまりました。では準備しておきます」

「ありがとう」

今はこういう準備も全部ロジェがやってくれるけど、こういうのって普通は執事やそれ以下の使用人がやるんだよね。他の使用人も雇わないと……

今度護衛と兵士について相談するときに、執事と皆につける従者やメイド、その他の使用人についても相談しよう。そしてそっちも最低限経験者でまとめたら、あとは教会で募集だな。

あとシュガニスで雇ってる皆は今のところお店での雇用になってるんだけど、ロニーとヨアン、それからアンヌとエバンは早めにジャパーニス大公家で雇うことにしよう。

それでロニーにはジャパーニス大公家で文官になってほしいんだ。大公家は領地がないからそこまで仕事はないんだけど、これからもお店を展開していくとなれば必要な人材だろう。

ヨアンはジャパーニス大公家所属のスイーツ主任みたいな感じで、お店でスイーツを作るのではなく屋敷で研究をやって貰うことにしたい。これからはいろんなレシピも手に入ることだし、研究が忙しくなると思うんだ。

アンヌはもし断られなかったら、ジャパーニス大公家のメイド長を務めてもらいたい。アンヌになら安心して任せられる。

そしてエバンには兵士をまとめる立場になってほしい。

今度皆にも話をして意見を聞いてみてかな。またお店か寮に行こう。

そんなことを話し合いながら馬車は進み、王宮に到着した。馬車を降りて向かうのは西宮殿だ。今日は連携の確認のために騎士団の訓練場を借りるので、魔法の授業もその近くの一室ですることになっている。

馬車から降りて西宮殿に向かっていると、たくさんの騎士たちとすれ違う。ほぼ例外なく俺に気づくと跪かれるから凄く居心地が悪い。

俺の顔ってお披露目パーティーの絵姿とかで、結構広まってるのかな？　というかあれか、騎士達はあのパーティーにいた人も多いのかもしれない。

敵対貴族はいなくなったから、あからさまに俺を睨んで来る人とかはいないし、どちらかといえば尊敬の眼差しを向けられるので嫌ではないんだけど……うん、とにかく慣れない。

そうしてかなりの注目を浴びながら王宮の使用人の方に案内されること数分、一つの部屋に辿り着いた。中に入ると三人がいる。

「トリスタン様、ジェラルド様、フレデリック様、おはようございます」

「レオンおはよう」

「……凄く注目を浴びていて居心地が悪かったです。俺の顔ってかなり知られてるんですか？」

ソファーに移動しながらそう聞くと、トリスタン様が苦笑しつつ答えてくれた。

「もう貴族で知らない人はいないよ。パーティーに出ていた貴族も多いし、絵姿も出回っているからね」

「やっぱりそうなのですね……」

これからはあれがデフォルトなのか。中央宮殿はあまり人がいないから今まで気づかなかった。

これからの目標の一つに、敬われすぎない親しみやすい使徒を目指すっていうのを追加しようかな。

「じゃあローラン、ローランは部屋の外で誰も中に入ってこないように、また聞き耳を立てないように見張っていてくれる？」

これから話すのは魔法のイメージの話だし、とりあえず不特定多数の人には聞かれない方が良いだろう。

「かしこまりました。では失礼いたします！」

ローランは素直にそう言って部屋の外に出ていく。
「では早速魔法の授業を始めても良いでしょうか？」
「勿論だよ」
「この日を楽しみにしていた」
「俺もだ」

三人は瞳をキラキラとさせてかなり期待している様子だ。いい大人が子供っぽくなるほど魔力効率を上げる方法って魅力的なんだな。

「では土魔法と火魔法、どちらからにいたしますか？」
「それはもちろん土魔法で」

トリスタン様がいい笑顔でそう言って、ジェラルド様が目に見えて落ち込んだ。フレデリック様は密かにガッツポーズをしている。ジェラルド様は流石に王弟に対して反論できないらしい。ジェラルド様、どんまい。

「では土魔法からにいたします」

２８９、魔法の授業

「まずお二人は、土魔法でどのようなことができますか？」
「私は地面の土を盛り上げたり、穴を作ったりかな」
「俺もそれはできるな。それから前に少しだけレオンに教えてもらったから、遠くに石を作り出したりそれを浮かせたりもできる」

そういえばフレデリック様には、公爵領に行ったときにちょっと教えたよね。あれから色々ありすぎて忘れかけてた。

「ではトリスタン様に合わせて授業をしていきますが、フレデリック様も聞いていてください」
「分かった」
「まず土属性の方は魔法を攻撃に使うことが少ないと思うのですが、土属性は一番汎用性が高い魔法だと認識してください。攻撃にも有効なのです」

俺のその言葉に、トリスタン様は不思議そうに首を傾げた。

「だけど土属性で攻撃と言えば、石を作ってそれを投げるぐらいしかないと思うんだけど……」
「いえ、それは大きな間違いです。土魔法は小さな矢じりのようなものを作り、それを魔力で浮かせて敵に命中させる攻撃こそ有用です。一つ作ってみますね」

俺は自分の手のひらの上にバレットを一つ作った。このバレットの形も試行錯誤して、一番強度があって小さく殺傷能力が高い形にしてある。

「まずはこの形を覚えてください。そしてこのバレットを一瞬で作れるようにしていただきたいです。フレデリック様もどうぞ」

もう一つバレットを作りフレデリック様に渡す。

「不思議な形だね……」

「私が試してみた結果、これが一番小さくて殺傷能力が高い形なんです」

「興味深い。でもこれを作れるようになったとしても、浮かせたら魔力がすぐになくなると思うけど？」

「いえ、そこはイメージで補えます。まずこの世界の魔法は、どれだけ詳細なイメージをするかによって魔力消費量が変わるのです」

俺がそう言うと、トリスタン様はしばらく難しい顔をした後にポツリと呟いた。

「それは……大発見じゃないかい？」

やっぱり結構驚くことなんだね。

というか、アレクシス様はトリスタン様にもこの話をしてなかったんだな。俺に関しての情報は本当に狭い範囲にしか流してなかったんだろう。

「そうかもしれません。今からそのイメージをお教えしますので、実際に体験してみてください」

「分かった。よろしくね」

「はい。ではまずこの世界には重力というものがあるのですが、その存在をご存知ですか？」

「いや、初めて聞く言葉だよ」

「かしこまりました。……ではこのバレットを今私が指で掴んでいますが、指を離すと下に落ちますよね？　これはなぜだと思いますか？」
「それは……そういうものとしか考えたことがなかったな。しかし改めてそう問われると不思議だ。なぜ上や横に行かないで下に落ちるのか……興味深いね」

トリスタン様はさすが王族なのか頭が良い。スムーズに話が進みそうだ。

「その理由が重力なのです」
「では重力とは、物を下に引っ張る力のことかな？」
「その認識で問題ありません。私達が地面に立っていられるのも座っていられるのも重力があるからです」
「立っていられるのも座っていられるのも……確かによく考えてみたら不思議だ。天井に椅子は固定できないけど床にならば簡単に固定できる。それは下に引っ張られている力が働くからなのか……」

トリスタン様の瞳がどんどん輝いていく。新しいことを知るのが好きな人なんだろう。
対照的にジェラルド様はよく分かっていない様子だ。最初はちゃんと聞こうとしてたけど、途中から難しくて自分の属性には関係ないってことで諦めたみたい。
確かにジェラルド様は勉強が得意っていうよりも、ずっと剣を振ってたいって感じだもんね。
「ではレオン、月が落ちてこないのはなぜかな？」
おおっ、突然難しいこと聞くな……

というか深く考えたことなかったけど、この世界の外側って地球と同じように宇宙が広がってるのだろうか。月や星も普通にあるからそうだと思い込んでたけど……もしかしたら違うのかな。

うわぁ、一度気になり始めたらめっちゃ気になる。これもミシュリーヌ様に聞けば教えてくれるのだろうか。不正確な情報を教えるのも微妙だし、一度聞いてみようかな。

「私の知識が正確かどうか、ミシュリーヌ様に確認しても良いでしょうか？」

この三人の前でならミシュリーヌ様と話すことに問題はないだろうし、魔物の森でも話すことはあるだろうから慣れてもらった方が良いよね。

「確認とはどうやってするのかな？」

「私はいつでもミシュリーヌ様に連絡を取れるのです。神物に触れ、連絡を取りたいという意志をのせて話しかければ私の声が届きます」

俺のその説明に三人は絶句だ。確かにこれ本当に凄いよね、神様といつでも話せるなんて。

「使徒様だとは分かっているんだけど、本当に驚くね」

「ああ、レオンはそんなことまでできるんだな」

「ミシュリーヌ様と、話せるのか」

「魔物の森でも連絡を取ることがあると思いますので、知っていただければと思います」

「分かった。では好きなだけ話してくれて構わないよ。というよりもぜひ話してくれ」

トリスタン様は期待した眼差しを俺を向ける。トリスタン様って好奇心旺盛な人なんだな。

「ありがとうございます」

俺は手に持った本にしっかりと触れ、ミシュリーヌ様に呼びかけた。

「ミシュリーヌ様、お久しぶりです。今お時間大丈夫ですか？」

『ちょっ、ちょっと待ちなさい！』

「どうしたのですか？」

『今久しぶりのスイーツタイムなの！　魔人の監視をするために神力を使ってるから、下界の時間で一週間に一個しか食べられないのよ』

「そうなのですね。じゃあスイーツタイムは後にしましょう。先に話をしてもいいですか？」

『な、なんでよ！　私の至福の時なのよ！』

「でもミシュリーヌ様、よく考えてください。今スイーツは途中まで食べているのですよね？」

『そうよ』

「なら今やめてまた後で食べれば、二回も至福の時を味わえますよ」

さっきまで騒いでいたミシュリーヌ様が途端に黙った。そして葛藤するような声が聞こえてくる。

『た、確かに、それもそうね。先に話を聞いてあげるわ』

「ありがとうございます」

ミシュリーヌ様って本当に乗せられやすいなぁ。ちょっと心配になるレベルだ。俺にとっては扱いやすくて楽なんだけど。いや、神

様を扱いやすいとか言っちゃいけないか。

『それで何の話なの？　魔人の動きはないわよ』

「監視ありがとうございます。でも今日はその話じゃなくて、いくつか気になる点を質問したいんです」

『別に良いけど……でもその代わりに神力を増やしてくれない？週に一回は寂しすぎるのよ……』

確かにずっと監視してくれてるんだし、甘いもの欲しくなるよね。ここはちゃんと神力を渡そうかな。ミシュリーヌ様も頑張ってくれてるし。

「では後でアイテムボックスから神力を増やしておきますね」

『本当！？　ありがとう！』

「その代わり、しっかり監視をお願いしますね」

『任せておきなさい。今回こそは完璧にやり遂げるわよ！』

「……よろしくお願いします」

うん、ミシュリーヌ様がやる気になってると逆に不安感が漂う。でもミシュリーヌ様はかなりやる気みたいだし大丈夫だろう。大丈夫だと信じたい。

290、宇宙について

『それで結局、今日は何の話なの？』
「今日は宇宙の話を聞きたくて。この星の外側も宇宙なんですか？」
『そうよ？』

おおっ、そうなんだ。凄くあっさり認めてくれた。

「では地球と繋がっているということでしょうか？　例えばこの世界で宇宙船を作ってひたすら進めば、いずれは地球に辿り着きますか？」
『それは無理ね』
「……何故でしょうか？」
『宇宙が繋がってないからよ』

宇宙が繋がってない……ってことは、宇宙っていくつもあるの！？　なんか凄い話聞いてる。ちょっとテンション上がるんだけど！
今の俺って地球の研究者にめちゃくちゃ羨ましがられる立場だな。

「宇宙はいくつもあるのですか？」
『うーん、いくつもあるって表現はちょっと違うわね。宇宙という一つの空間、いや概念というのかしら、それは一つしかないわ。でも宇宙はある一定の範囲ごとに区切られているの。そしてその区切られた範囲を私のような神がそれぞれ管理しているのよ。そしてそれぞれの範囲間の移動はできないわ』

宇宙ってそんな感じで区切られてたのか……ちょっとイメージと違った。どこまでも広がってるものじゃないんだね。

「では宇宙をひたすら進んでいくとして、壁に当たるのですか？」
『違うわ。ひたすら進んで宇宙の区切り部分に辿り着いたら、後はその区切りの部分をまたひたすら進み続けることになるのよ。本人達はそこに辿り着いたことにも気づかず、あとはずっと宇宙の外周を回り続けることになるわ』

……うーん、納得できるようなできないような。要するにその宇宙の中に住んでいる人達にとっては、宇宙は無限に広がる場所ってことなのかな？
というかこれはあれだな、俺の知識じゃ壮大すぎて理解できないんだ。

「ではこの星の外側には宇宙が広がっていて、月や太陽、その他の星もあるということで良いでしょうか。地球があった宇宙と違う点はありますか？」
『基本的にはその認識で良いけれど、厳密には結構違うのよね』
「そうなのですか？　具体的にはどこが違うのでしょうか？」
『そうねぇ……例えばこの星を照らす太陽のエネルギーは地球を照らす太陽とは全く違うものよ。魔素がある関係でそうせざるを得なかったのよね』

太陽のエネルギーにまで魔素が関係してくるんだ。でもそうだよね、その辺も変えないと魔法のある世界なんか無理なのだろう。

「では月はどうですか？」
『月？　そういえば月も全然違うわね。この星に引っ張られないようにするのが大変で大変で結局諦めて、遠くにある巨大な星にしたのよ。地球から見える月と同じようにするのが本当に大変だったわ。まあ全く同じは無理だったけど……月の見え方は地球と違うでしょ

う？』

確かにそう言われてみると、最初の頃はちょっと違うなって思ってた気がする。多分満ち欠けとかは全然違う。もう完全に慣れちゃったけどね。

「確かに最初の頃は思ったかもしれません」

『やっぱりそうなのね。私的には凄く頑張ったんだけど……まあとにかくそういう感じで、この星をできる限り地球に近い環境にするために、色々と他の部分は違うことが多いってことよ。やっぱり魔素があると完全に同じは無理なのよ』

「そういうものなんですね。ありがとうございます、勉強になりました」

とりあえずこの星を地球に近い環境にしたことによって、その他の部分では調整をするためにかなり違う状態になってるってことだろう。

ミシュリーヌ様も大変なんだね。だってこの星だけじゃなくて他の星も全部管理してるってことだろうから。

あれ、ということは魔物の森の世界って、宇宙船があれば物理的に行けたりするの……？　ミシュリーヌ様が作った星なら同じ宇宙にあるんだよね？

「あの、ミシュリーヌ様、魔物の森がある星もミシュリーヌ様が作ったのなら、同じ宇宙の範囲にあるってことですよね？」

『そうよ？』

「じゃあ宇宙船があれば行けるのですか……？」

『まあ理論としては行けると思うけど、実際は不可能よ。遠すぎるもの。……というかこれ何の話なの？　こんな話を聞いても楽しく

ないでしょう？』
「いえ、すっごく楽しいです」
『そうかしら？』

この話はほとんどの人がテンション上がるはずだよ。なんだかんだ宇宙とか夢なんだよね。

「色々と教えてくださってありがとうございます」
『別にこの程度ならいつでも話すわよ。……あっ、そうだ。そんなことよりも大事な話があったわ！　レオン、早めに神界に来てシェリフィーの本を読みなさいよ』

そうだ、色々あって忘れてたよ。本を手に入れてくれたんだよね。

「今度読みに行きますね」
『早めにするのよ！　……今からでも良いわよ？』
「いえ、今は忙しいのでまた今度でお願いします。連絡しますので」
『そうなの？　まあ良いわ、待ってるわよ！』

そうしてミシュリーヌ様との通信が切れた。
ミシュリーヌ様は魔人のことで少し懲りたのか、スイーツを我慢して真面目に監視してるみたいだったな。ちゃんと神力を増やしておいてあげよう。

「皆様お待たせいたしました」
「いや、大丈夫だよ。本当にミシュリーヌ様と話せるんだね……」
三人は驚いたような、逆にもう驚けないような、そんな複雑な表情を浮かべていた。

「はい。こうしてこれからも話すことがあるかもしれませんが、あまり気にしないでください」

こうして事前に伝えておけば、独り言が激しい変な奴だとは思われないだろう。ミシュリーヌ様の声は聞こえないからそこが難点なんだ。

「分かったよ。それで、さっきの疑問の答えはわかったのかい？」

トリスタン様は待ち切れないようにそう聞いた。ミシュリーヌ様の話をまとめると、遠くにある惑星だから落ちてこないってことだよね。

「はい。月が何故落ちてこないのかですよね。それは月がこの星の重力が及ばない場所にあるから、だと思います。難しくて言い切れなくてすみません。……まずそもそもなのですが、私たちが暮らすこの星がどのような形をしているかご存知ですか？」

「どのようなとは、どういう意味だい？」

「大陸の形のことか？」

「いえ、大陸や海、空も含めた全体のことです」

前の使徒様ってこういう知識を何も伝えてないよね。何か理由があったのだろうか？　魔法のイメージについても全く伝えられてないみたいだし。日本出身なら絶対に気づくはずなのに。

「どのようなと言われても……ずっと海が続いているんじゃないのか？」

「ではその海の先には何があると思われますか？」

「――考えたこともなかったよ。海はどこまでも続くものだと」

確かにこの世界ってここしか大陸がないから海に出ることもほとんどないし、海が無限に広がってるって考えられててもおかしくないのかも。

「そうなのですね。実はその認識は間違いで、この世界は球体となっているのです」

俺はそう説明しつつ、土魔法で丸い球体を作り出す。そして大陸部分だけを少しだけ張り出させ、それ以外のところに水魔法で海を作り出した。

「この飛び出た部分が私達がいる大陸です。そしてそれ以外は全て海です。この球体の真ん中に引っ張られるように重力があるので、私達は球体のどこにいても放り出されることなく、地面に立ち海に浮かぶことができます。そして月があるのはこの星の外です。この星の外には宇宙という重力のない空間が広がっていて、その宇宙のずっと遠くにある別の星が月なので、今私達がいる星の重力は影響しません」

トリスタン様はその説明を聞いて難しい顔をして考え込んでいる。俺の説明下手だよね……でも俺もそこまで詳しくないし、人に教えるのは得意でもないんです。ごめんなさい！

「では私達は、この球体の表面に住んでいるということか？　重力があるからここに居続けられると？」

「そういうことです！」

トリスタン様の理解力が凄すぎる！　俺の拙い説明で理解してくれるなんて……

「そしてこの星の外側には重力がない空間が広がっていると」
「はい。宇宙と言います」
「そしてその宇宙に月があるのだね」
「そうです。月とはこの星と同じようなものなのです。凄く遠くにあるので小さく見えています。他にもたくさんの星が見えますが、それらが全て宇宙に浮かぶ星のようなものです。今私達がいるのもその中の一つです」
「ふむ……なんとなくは理解できたかな。だけどまだ疑問点が多い。また考えをまとめてからいろいろ質問してもいいかい？」
「もちろんです。では今は話を続けますね」

これでやっと無重力の話に辿り着ける。

「先ほどから説明していた重力ですが、それがない場合はどうなると思いますか？」
「それは……浮かぶのかな？」
「そうです。どこにも引っ張られないのでふわりと浮かびます。重いものも軽いものも関係なく浮かびます。大きな岩も小さな葉も同じように重さは感じません」
「確かに、重力があるから重さがあるのか」
「はい。イメージが固まってきたでしょうか？　ではそのイメージを保持したまま、先ほどのバレットを浮かべてみてください」

トリスタン様とフレデリック様はかなり真剣な表情で、バレットを掌の上に置き魔法を使った。

「おおっ！　レオン、前よりもかなり消費魔力量が減ったぞ」
「多分より深く理解してイメージできるようになったからだと思います。トリスタン様はいかがでしょうか？」
「これは凄い……十分の一ほどの魔力しか使ってないよ」

「良かったです！　これができればあとは敵に向けて飛ばすだけです。それも無重力のイメージで消費魔力を減らしてバレットを飛ばせます。正確性については練習あるのみですね」

やっとここまで来た。本当はバレットの強度を上げるために原子の話もしようと思ったんだけど……とりあえずそれはやめようかな。あれは調節が難しいし、普通に石の硬さで攻撃力には問題ないし。

「しっかりと練習しておくよ」

「よろしくお願いします」

「じゃあレオン、次は俺か！？」

ジェラルド様が待ち切れないようにそう聞いてきた。ずっとそわそわしてたもんね……それほど魅力的な知識なんだろう。

「はい。では次は火魔法についてお教えしますね。まず火は何故燃えるのかご存知ですか？」

「いや、知らん！」

ジェラルド様、もうちょっと考えて！　俺は思わず顔に苦笑を浮かべてしまう。

「基本的に火が燃えるには必要なものが三つあるんです。可燃物と熱、それから酸素です」

でもこの世界だと、これら全てがなくても魔力さえあれば火がおこせるんだから凄い。

「可燃物と熱は分かるが、酸素とはなんだ？」

「酸素とは空気中にある、人が生きていくのに必要不可欠なもので

す。火が燃えるのにも必要なものになります。例えば今ジェラルド様の目の前には何もありませんよね？　でもここには目に見えないけど空気があります。その空気の中の一つの成分が酸素です」
「うん？　うーん、なんとなく分かる気がするな。空気というのは風のことだろう？」
「まあ……そういう感じです。その風の中にもいろんな成分があって、その中の一つが酸素です」

なんとなくは理解してくれてるみたい、かな？

「その酸素をイメージして火魔法を使うと、消費魔力量が減らせるんです。とりあえずやってみてもらえますか？」
「分かった。――おおっ？　今までの三分の一ぐらいになった。これは凄い！」
「本当ですか！」

成功して良かったぁ～。俺もそんなに詳しく説明できるわけじゃないから、これ以上の説明は難しかったのだ。
でもアレクシス様は同じ説明で十分の一になったって言ってたから、そこは理解力によるのかもな……
まあ、とりあえず良いってことにしよう。またこのあと自分で整理して、理解力が上がることもあるだろう。

「これで魔物の森でも攻撃として使えるな」

ジェラルド様はそう言ってやる気満々だ。でも火魔法って攻撃にはちょっと微妙なんだよね……

「あのジェラルド様、こんなことを言って良いのかわからないのですが、私の中で火魔法はあまり使い勝手が良いものではないのです。

なので基本的にはトリスタン様とフレデリック様に攻撃していただき、バレットで効果がない相手にだけ火魔法で攻撃をしていただきたいです」
「……そうなのか？」
「はい。火魔法は敵を貫くことができませんので、基本的には敵の広範囲を焼いて火傷を負わせて倒すことになります。しかしそれには魔力がかなり必要です。それならば土魔法の方が効率がいいのです」

この世界で魔法は剣で倒す時の補助的存在だから、魔法だけで敵を倒すって考えがあんまりないんだよね。補助なら火魔法も有効なんだけど今回は魔法で魔物にトドメを刺さないといけないから、それなら断然土魔法が便利だ。

「確かにそうだな……分かった。では俺は土魔法が効かない相手に対してだけ魔法を使おう」
「ありがとうございます。よろしくお願いします」

よしっ、これで話は終わりで良いかな。あとは実践あるのみだ。

２９１、魔法の試し撃ち

「では早速、実践してみませんか？」

俺のその言葉に三人はすぐに立ち上がった。早く試したかったみたいだ。

「ああ、それが良いな。第三騎士団の訓練場を一つ貸し切ってあるから、そこへ行こう」

「そうなのですか！　ありがとうございます」

貸切なんて凄い、さすが団長だ。でも使徒と王弟と第三騎士団団長と近衛騎士なんだもんね……改めて凄いメンバーだ。

ロジェがドアを開けてくれたので部屋から出て、ローランとも合流して訓練場に向かう。トリスタン様の護衛の人も部屋の外にいたみたいだ。

「そういえば、皆さんバリアは使ってみましたか？」

「ああ、俺はどこまでやれば壊れるのか試してみたんだが、あれは相当頑丈だな……」

「私もやってみたよ。正直あのバリアが壊される想像ができないぐらいだったかな」

やっぱりそう思うよね。俺もやってみたけど、かなり魔力を込めたバレットを近距離から撃っても壊れないほどだった。

「やはりそうですよね……ですが油断しないようにお願いします。

……魔人の件もありますし」

俺は最後の言葉を三人にしか聞こえないよう口にした。この三人には魔人のこともちゃんと伝えてある。

「あのバリアを簡単に破ったんだったね。それにレオンより強いとか……」

「はい。正直かなり怖いです」

魔物の森で鉢合わせたらどうなるのかわからない。あれから魔力を増やすために頑張ってるし、鍛錬も増やしてはいるけど……

「私達もそこは覚悟してるよ」

「ああ、最悪レオンだけでも逃げてくれ」

「……はい」

魔人ともし鉢合わせして勝てないと思ったら、俺は三人を囮にして逃げてくれと言われているんだ。絶対に了承したくない事なんだけど……、使徒としては生きて逃げることが最優先だと、三人はレオンを助けるためにいるんだと、そう言われたら頷くしかなかった。

でも絶対に三人を見捨てるなんてことしたくない。だからあの魔人に勝てるようにもっと強くなれば良いんだと、最近はとにかく鍛えている。

向こうが使えないバリアと転移、それからアイテムボックスを使ってなんとか勝ちたい。一番は魔人が向こうの世界にいるうちに穴を塞げる事なんだけどね。

そんなことを考えつつ歩いていると、訓練場に辿り着いた。かな

り広い訓練場を貸し切ってくれたみたいだ。
「ではまず何からしようか。魔法の試し撃ちからでも良いかな？」
「はい。ただこの後のためにも、魔力は残しておいてください」
「分かっているよ。ではジェラルド、魔法を撃つ的はあるかな？」
「もちろんです。準備いたします」

そうしてジェラルド様が魔法を撃つための的を三つ設置してくれて、その前にそれぞれ三人が並んだ。距離は十メートルほど離れている。

「じゃあ私からいこう」

トリスタン様がそう宣言をして、空中にバレットを作り出し的に向かって打ち出した。するとバレットはかなりの速度で木製の的を突き抜けて、その後ろに積んである藁に突き刺さった。
うん、的のど真ん中を突き抜けてるし威力も申し分ない。完璧だな。

「レオン、どうだろうか？」
「素晴らしいです。あとは動いているものに当てられるよう、魔物の森に行くまで練習していただけますか？」
「分かった。しっかりやっておくよ。では次はフレデリック」
「かしこまりした。『バレット』」

フレデリック様のバレットもトリスタン様と同じような軌道を辿り、藁に突き刺さった。問題なさそうだな。

「フレデリック様も問題ないですね」
「ああ、魔力の消費量も少なくなっている」

「それなら良かったです。では最後にジェラルド様お願いします」
「分かった。『ファイヤーボール』」

ジェラルド様のファイヤーボールは的に当たると、的を少しだけ焦がして消えた。……やっぱりバレットの方が圧倒的に威力があるな。

ファイヤーボールももう少し魔力消費を増やせば、火力が上がって一瞬で的を黒焦げにできるのだろうけど、それをすると数回で魔力が尽きてしまう。

やっぱりファイヤーボールは燃えやすい毛皮を持つ魔物や、バレットが通らない魔物に対してかな。

「ジェラルド様もコントロールに問題はないですね。しかしやはりバレットの方が少ない魔力で攻撃力が高いので、基本的にはトリスタン様とフレデリック様に攻撃はお願いします。毛皮が燃えやすそうな魔物やバレットが通らない魔物は、ジェラルド様にお願いしたいです」
「確かにそうだな。了解した」
「ありがとうございます。皆さんは今使った魔法を魔力が最大あるところから何回程使えますか？　どの程度で魔力が尽きるのか把握しておきたいのですが……」

俺がそう言うと三人は難しい顔で考え込んだ。そして最初に顔を上げたのはジェラルド様だ。

「多分だが、十回は難しいと思う」
「では余裕を考えると八回ほどでしょうか？」
「そうなるな」
「分かりました」

やっぱりジェラルド様は魔力の消費効率がそこまで上がってないな。でも一日で八回ということは、バレットが通らない魔物に対してだけなら問題ないだろう。

「俺は三十回ほどだ。もう少し多いかもしれない」

「私は五十回かな」

おおっ、二人とも優秀！　それだけ使えれば十分だろう。この二人の魔力がなくなりそうになったら休んで休憩、魔力が回復したらまた先を急ぐって感じになるかな。

あとは俺の魔力をどこまで消費するかが問題になるけど、ほとんど残ってない状態で強い魔物が来たり魔人が来たら困るから半分は残しておきたい。

「お二人とも素晴らしい数ですね。それだけ使えれば一日で移動できる距離も増えそうです。では魔物の森での移動についてなのですが、隊列はいかがいたしますか？」

「隊列は縦にするんだよな？」

そう聞いてきたのはジェラルド様だ。

「はい。誰も足を踏み入れたことのない森に入るとなると狭い場所も通りますし、一列が良いかなと思っています」

「俺も同意見だ。あとは順番が問題だな」

順番はかなり悩むんだよね。でも先頭は絶対に俺が良いと思う。というよりも俺じゃないと進めないだろう。

人の手が一切入ってない魔物の森に足を踏み入れるのだから、魔植物を切り倒して進まなきゃいけないところも多いと思う。そうなった時に一々バリアを解除して剣で道を作っていたら、何年経って

も魔物の森の奥に辿り着けない。

だから先頭は俺で、バリアの剣でどんどん道を作り出しつつ進みたい。自分を守るのはバリアの魔法具にするからバリアの剣も使えるし、あれならかなり硬いものでもスパスパ切れるから問題ないと思う。

「先頭は俺でいきます。魔植物が生い茂っているので、それをバリアの剣で切り倒して道を作る役をやります」

「確かに、その役目私達にはできないな。ではレオンに頼むよ」

「お任せください。そしてその後ろの隊列なのですが、トリスタン様、ジェラルド様、フレデリック様の順はいかがでしょうか？」

俺が悩みながらも決めた隊列を話すと、三人は不思議そうに首を傾げた。

「理由を聞いてもいいか？」

「はい。まず魔物が襲ってくる場合はどこからくるのかわかりません。なので土属性のお二人を離れた場所に配置したいです。そしてバレットが効かない魔物に対してはジェラルド様がファイヤーボールを使う予定なので、ジェラルド様はどちらにもすぐに駆けつけられるよう真ん中にした方が良いと思いました」

「ふむ、確かにそれは一理あるな」

ジェラルド様はその説明に納得してくれたようだ。

「レオン、では私とトリスタン様の順序はどのように決めたんだ？」

「はい。そこは経験の差を重視しました。フレデリック様は近衛騎士なので、後ろからの攻撃にも即座に反応できるように訓練されているかなと……。もしお二人で話し合い変更されるのでしたら構い

ません」
「いや、そう言われると確かにそうだな。ではレオンが決めた隊列でいこう」
フレデリック様が納得してくれて、他の二人も頷いてくれたところで隊列は決定した。
「ありがとうございます」

２９２、連携の確認と今後の予定

「じゃあ決めた隊列で、いくつものパターンを想定して連携の確認をしようか」
「はい。ではまず前から魔物が来た場合、さらにその魔物がバレットで倒せる想定からいきましょう」

魔物は前からも後ろからも横からも上からも来る。いくらバリアで守られているとはいえ、万が一もあるのだからしっかりと警戒しながら進まないとダメだろう。それから魔物の種類によって対処も変わる。

「分かった。前から魔物が来た場合は基本的にレオンが倒すので良いのか？」
「はい。それで問題ありません。しかし私の魔力は何か想定外の事態が起きた時のために半分は残しておきたいので、もし私の魔力が半分を切りトリスタン様かフレデリック様の魔力があった場合は、お二人に攻撃をお願いするかもしれません」
「ではその時は臨機応変に動こう。もし三人とも魔力がなければ？」
「その場合は、もうその日の移動はやめて休憩をします」

とにかく魔力が切れるまで移動して、魔力がなくなったら大きなバリアを発動させてその中で休憩。交代で寝て魔力と体力を回復させる。そして全員が回復したらまた移動。その繰り返しだ。

「夜は大きなバリアの中で寝るんだよな？」
「はい。魔物の森の中に私が開けた空間を作り、そこにバリアを張ってその中で寝ます。二人一組で見張りをしつつ交代で休みましょ

う」
「分かった。それも一度ここで試してみたいね。どんな感じになるのか」
「わかりました。では先に連携の確認をやってしまいましょう。次は右側から魔物が現れた場合です。今度の魔物は……」

――そうして、それから二時間ほどかけて様々なパターンを想定して連携の確認をした。バリアが解除されて剣で戦うことになる想定もして、隣り合って剣で戦う時にお互い邪魔にならないように、そんなことも考えた。

これで当日は慌てることなく対処できると思う。あと必要なのは連携ではなく個人での鍛練だ。俺はとにかく魔力を増やして転移やバリアの精度を高める。それから身体強化をもっと効率よく使えるようにする。

他の三人はとにかく魔法の命中率を上げること。そして持久力を高めるために基礎的な鍛練が中心だ。

「とりあえず今後の方針は分かったよ。どんな鍛練をすれば良いのかも」
「ああ、とにかく魔法の命中率と体力だな。俺は体力には自信があるが怠らずに鍛練をしておく」
「俺もしっかりと鍛練しておこう」
「よろしくお願いします」
「じゃあ最後に休憩時や夜寝る時の確認をして、今日は終わりとしようか」
「はい。ではバリアを出しますね」

俺はアイテムボックスから休憩時用のバリアの魔法具を取り出し

て、それを起動させた。

「おおっ、結構広いね」

「はい。この中で食事も睡眠もとるので広くしてあります。ここにベッドを二つ設置して、テーブルと椅子、さらにトイレを設置して……これで完成です」

魔物の森の中で何週間も、下手したら季節ひとつ分ぐらいは過ごすかもしれないのだ。この中は最低限でも快適にしようと思ってこれらの家具は持ち込むことにした。

トイレは持ち運びトイレを設置して、その周りを大きな木箱で覆う。もちろん木箱はドア付きだ。本当はお風呂とかも設置したいけど、流石に魔物の森で裸になるのは危険すぎるからやめた。数日に一度ピュリフィケイションをすれば良いだろう。

「レ、レオン……？　本当に魔物の森でこの空間を作り出すのか？」

「はい。快適で良いと思いませんか？」

「確かにそうだが……何というか、非常識だな」

「ふふっ、ははは っ、レオン流石だよ。こう来るとは思わなかった。これは快適で良いね」

フレデリック様には非常識と言われたけど、トリスタン様は肯定してくれている。うん、やっぱり快適さ重要ですよね！

「レオン、これはもし魔物に襲われた場合はどうするのだ？」

ジェラルド様は冷静な意見だ。

「はい。すぐにアイテムボックスに仕舞うこともできますし、それが無理だとしても代えはいくつもあるので大丈夫です」

「そうか、それなら良いんだ。それにしても凄いな……」
「料理も私が基本的にはアイテムボックスで持ち込みますので、出来立てを食べていただけます。皆さんにお渡ししたアイテムボックスの魔法具に、ご自分が食べたい物を入れていただくのでも大丈夫です。もし魔力が切れてしまった時が心配でしたら、言っていただければ私のアイテムボックスにお入れします」

俺がそうして説明をしていると、皆はもう苦笑いだ。

「テーブルについて出来立ての食事をいただくなど、魔物の森の中とは思えないね……」
「それにベッドで寝られるのもあり得ませんよ」
「トイレまであるんだぞ……」

ぽつぽつとそんな話をしながら遠い目をしている。確かに自分でも常識ないかなぁとは思ったんだよ？　でも使える能力はフル活用しないとね。

俺はまだ遠い目をしている三人を現実に引き戻すために声をかけた。

「ではこれで本日の確認は終わりで良いでしょうか？」
「そうだね、もう十分だよ。あとは魔物の森に行く日まで鍛練をして情報収集しておく」
「ありがとうございます」
「そういえばレオン、魔物の森へはいつ出立するんだ？」

そう聞いたのはフレデリック様だ。
時期をいつにするのかも大切だよね。実はまだ決まってないんだ。魔物の森の被害を少しでも減らすためにはできる限り早めが良いと

思うんだけど、もう少し準備期間も欲しいんだよね……

「アレクシス様には出立する日は自由に決めて良いと言われています。しかし出立のパレードをするので、一週間は余裕をもって伝えて欲しいとのことです」

「出立のパレード？」

「はい。中心街からその外までパレードで回りながら王都を出るそうです。さらに王都を出てからも、途中にある街へは極力寄ってパレードをするとのことです」

「そんなことをやるのか……」

アレクシス様曰く、使徒様が魔物の森への脅威から国を守ってくれるというアピールなんだそうだ。平民にも使徒様の素晴らしさを広めたので、パレードはかなりの効果が見込めるらしい。

そしてその使徒様はこの国の貴族で王女様と婚約中、これ以上王家の人気を高められる機会はないと、アレクシス様は黒い笑顔を浮かべていた。

まあ、俺はこの国が平和でいて欲しいからその手助けならいくらでもするけどね。

そんな催しをやるからこそ、トリスタン様が参加することがより活きてくるそうだ。やはり使徒様と王族でってところが重要なんだろう。

もう表立って王家に反発する貴族はいなくなったけど、王家の力が強い方が色々やりやすいんだろうからね。俺としてもアレクシス様がその力を悪い方に使うとは思えないし、利用されるのも問題はない。

さらに時空の歪みを塞いでも魔物の森がなくなるわけじゃないから、魔物の森の駆逐は人海戦術でやっていかないといけない。その

モチベーション維持や人員確保のためにも大々的なパレードが効果的らしい。それを見た平民の力自慢が、俺も自分の住んでる国を守るんだ！　って兵士の募集とかに応募してくるんだそうだ。

「それは凄く目立ちそうだね」
「かなり目立つと思います。ちょっとだけ憂鬱です……」
「分かるよ。でも国のためによろしく頼むよ」
「はい。しっかりと役目は果たします」

ちょっとというか、結構憂鬱だけどやるしかないよね。確かに魔物の森の脅威を周知することと、それを抑え込むための策は必要だ。

「では話を戻すけど、出立日はいつにする？」
「そうですね……三週間後ではどうでしょうか？」

そのぐらいあれば準備は十分終わるだろう。

「ふむ、確かに準備も終わって良い頃合いかもしれないね。使徒様の存在もその頃にはかなり知れ渡っているだろうし」
「では三週間後にいたしましょう。フレデリック様とジェラルド様もそれでよろしいでしょうか？」
「ああ、問題ない」
「俺もだ」
「ではアレクシス様に伝えておきます」

そうしてその日は魔法の授業から連携の確認、さらにその他各種話し合いをして終わりとなった。
魔物の森に行くのはかなり怖いけど、とにかく頑張ろう。そう心に誓った。

２９３、二度目の神界

今日は仕事が一日休みの日。
いつもならこんな日はお店を覗いてみたり鍛練をしたり、さらにはマリーと遊んだりと楽しく過ごしているんだけど、今日は予定があるので朝からそわそわと自分の部屋で待機している。
そう、今日は神界に呼んでもらってシェリフィー様が持ってきてくれた本を読む日なのだ！　ミシュリーヌ様との約束は午前九時なのであと三十分ぐらいだけど、さっきから今か今かと待っている。やっぱり日本の本を読めるのは嬉しいよね。

まあ神界に行ったら下界の時間は止まるから、下界に帰ってきてからいつも通りの休日が過ごせるんだけど。なんかそう考えると、時間が止まってるって本当に凄いし変な感じだ。
こっちに帰ってきたらヨアンのところに行って新しいレシピの伝授かな。考えるだけで楽しくなってきた！

「レオン様、まだ約束の時間は先ですので落ち着かれてください」
「でもロジェ、今日は凄く楽しみなんだ」

さっきからこの会話は何度もしている。ロジェは少し呆れた様子だ。ロジェって俺が使徒になっても態度は今まで通りだし、さらにミシュリーヌ様に会いに行くと言ってもほとんど表情を変えないし、本当にありがたい。
でももう少し驚いたりしても良いと思うけどね？

「ロジェは最初の頃から俺が使徒ってことにもあまり驚いてなかったけど、ミシュリーヌ様と会う予定にも普通に頷いてくれて……何

というか凄いね？　普通はもう少し驚いたりしない？」
「レオン様にお仕えしていると驚くことが多すぎて慣れると言いますか……。逆に使徒様だと分かったことで全てが納得できましたので」
「そうなんだ」

確かにそんなものなのかな……アレクシス様も最初は驚いてたけど、今では当たり前みたいになってるし。
皆慣れていくのか。まあそれならそれで良いことだろう。俺も周りを気にしなくて良いならやりやすいし。

そうしてロジェと話しながらお茶を飲んでいると、遂に時間が午前九時となった。

「ミシュリーヌ様、時間ですよ」

俺は時間ぴったりに本を取り出してしっかりと抱え、ミシュリーヌ様に呼びかけた。

『ふわぁ～、分かったわ、ちょっと待ちなさい～』

ミシュリーヌ様なんか眠そう？　でも神様って睡眠必要なのかな？　そんなことを考えながら不思議に思っていると、前回と同じように真っ白な光に包まれた。
そして目を開けると……ソファーで寝ているミシュリーヌ様がいた。

「ミシュリーヌ様どうされたんですか？　神様も眠くなるんですか？」

「違うのよ。魔人を観察してたんだけど、さっきからあくびを連発するから私にも移ったのよね。ふわぁ～」
「そうなんですね。魔人の様子って俺も見ることはできますか？」
「別に良いわよ。はい」

ミシュリーヌ様はそう言うと、空中に巨大なスクリーンを出現させてくれた。あっ、あいつだ……

「これってリアルタイムですか？」
「そうよ。今は夜で見張りをしてるのよ。多分あと数時間で交代が来てこの魔人も寝るわ」

スクリーンに映るのは月明かりしかない薄暗い森にある、物見櫓？　みたいなやつで見張りをしているのはあの魔人だ。ほとんど周りが映ってないからわからないけど、一応定住する生活なのかな？

「この魔人の名前って分かりますか？」
「ええ、クドゥフェーニって名前らしいわよ」
「く、くどぅふに？」
「クドゥフェーニよ。」
「くドゥフぁーニ？」
「違うわ。クドゥフェーニ。クドゥフェーニよ」

発音しづらい！　何だよその名前。もうちょっと覚えやすくしてよ。えっと……クドゥフェーニだな。うん、流石に覚えた。

「クドゥフェーニ、ですね」
「そうよ。そんな名前らしいわ」
「発音しづらいですね……」
「そうかしら？　別に普通だと思うけど？」

神様には発音のしづらさとかないのかもしれないな。それよりもこうしてみてると、普通の人だよね。

「この人って家族とかもいるんですよね……？」

「いるわよ。この集団は全部で十の家族が纏まってるみたいね」

「そうなんですね」

こうして普通に暮らしているところを見ちゃうと、このまま何事もなく時空の歪みを塞ぐことができて、お互いにもう干渉せず平和に生きていけたら良いのになと思ってしまう。お互いに大切な人もいるんだし。

相手は殺しに来てるんだから、甘い考えだってことは分かってるんだけどね……

「ミシュリーヌ様ありがとうございます。もう見るのはやめておきます。戦いの時に躊躇いたくないので」

俺がそう言うと、ミシュリーヌ様は何かを察してくれたのかすぐにスクリーンを小さくして、自分だけが見えるように変えてくれた。ミシュリーヌ様も良いところあるんですね……！

そんな失礼なことを考えつつ、少し沈んだ気持ちを持ち上げるようにわざと明るい声を出した。

「ではミシュリーヌ様、本を読んでも良いでしょうか！」

するとミシュリーヌ様の瞳も輝く。本の内容はレシピ集だからね。

「もちろんよ！　私は読んでもよく分からなかったけど、レオンなら分かるのよね？　そこに載ってる絵が美味しそうで美味しそうで

美味しそうで……もう見るだけで涎が垂れてくるのよ」

ミシュリーヌ様は俺に本を手渡してくれた。うわぁ……日本語だ。久しぶりすぎる。なんか日本語を見るだけで泣きそうなぐらい懐かしい。

それに本のカバーの手触りも、カラーでの印刷も、綺麗に撮られたおしゃれな写真も、全てが懐かしい。懐かしすぎて、少し切なくなる。

「日本、ですね」

「……懐かしい？」

「はい。……でもそれだけです。もう俺はレオンですから」

少し切なくはなるけれど、それだけだ。涙が浮かんでくることもない。日本人が田舎の原風景を見て、自分の故郷じゃないのに懐かしく感じるのと同じだ。

「それなら良かったわ。じゃあレオン、私のスイーツを頼むわよ！」

「ミシュリーヌ様のものではないですけどね」

「私の世界なんだから私のもので良いのよ！」

「ふふっ、確かにそうですね。じゃあ頑張ります」

俺はいつも通りのミシュリーヌ様に釣られて笑顔になり、本の表紙を開いた。

おおっ、この本は洋菓子編と和菓子編に分かれてるみたいだ。それにそれぞれのレシピ数もかなり多い。シェリフィー様がたくさんレシピが載ってるのを選んでくれたんだろうな。

シェリフィー様、本当にありがとうございます！

「ミシュリーヌ様、紙とペンをもらっても良いですか？」
「下界には持って帰れないわよ？」
「それでも大丈夫です。そのメモをミシュリーヌ様に読んでもらうので」

レシピ本をそのまま読んでもらうのでも良いんだけど、それだと要点が掴めなそうなので、事前に要点をまとめたメモを作り、それをミシュリーヌ様に渡しておく方が良いかなと思ったのだ。

「確かに私もその方が楽で良いわ。じゃあ頑張ってね」

ミシュリーヌ様はそう言って、机の上に紙とペンを出現させてくれた。よしっ、頑張るかな。

２９４、スイーツのレシピ集

まずは洋菓子からだ。スポンジケーキとロールケーキはもう完成してるから、まずはシフォンケーキかな。シフォンケーキの作り方は卵黄にグラニュー糖、油、水、薄力粉、メレンゲ……

そうだ、メレンゲだ！！

あの白いやつ。卵白を混ぜるとできるやつ。あれメレンゲって名前だったよ。あぁ～めちゃくちゃスッキリした！

思い出せなくてヨガードって名前にしちゃったんだよね。もう今更メレンゲには戻せないよな……

まあ仕方ないか。この世界でメレンゲはヨガードってことにしよう。

それにしてもレシピ本って凄すぎる。うろ覚えの知識で試行錯誤して失敗しつつ作ってたのに、ここには完璧な正解が書いてあるんだ。この本プライスレスだよ。日本では数千円で売ってたことが信じられない。

ちゃんと隅々まで読んで有効活用しよう。よしっ、それでシフォンケーキはこの世界で作れるかな？

……うん、シフォンケーキは作れる気がするね。だってスポンジケーキのバターを油に変えただけだ。バターを油に変えるとスポンジケーキがシフォンケーキになるって書いておこう。

じゃあ次は……チーズケーキだ。チーズケーキ作りたかったんだ

よね。材料はクリームチーズ、生クリーム、ヨーグルト、ゼラチン、水、レモン汁、砂糖。それから土台はビスケット、牛乳、バター。

はい、ちょっと無理かもしれない。一番難易度高そうなのがヨーグルトだ。この世界でヨーグルトは見たことがない。ヨーグルトって牛乳から作られてるんだよね……？　乳酸菌とか聞いたことあるから、牛乳を発酵させたやつかな？

よく分からないから自分で作るにしても難しいな。今の俺には不可能だ。次の本は自家製ヨーグルトの作り方にしてもらうか……でも日本でしか手に入らない作り方が載ってても意味ないんだよね。

とりあえずヨーグルトは後回しにしよう。次に問題なのがゼラチンだ。そもそもなんだけど、ゼラチンってなに？　いや、名前は知ってるんだよ。でも実物は見たことない。どうやって手に入れれば良いのか見当もつかない。

植物なのか、何かしら化学物質的なものなのか、動物性のものなのか。それすらも全く分からない。何となく俺の予想だと……植物かな。完全に勘だけど。……ヨーグルトよりこっちの方が手に入らないかもしれないな。

それにクリームチーズも手に入れるのは大変だろう。この世界にチーズは普通にあるんだけど、日本にあったようにたくさんの種類があるわけじゃないんだよね。だからこのレシピ本で想定されているクリームチーズがなかった場合は厳しいと思う。

……うん、あれだね、レアチーズは後回しだ。こっちのベイクドチーズケーキならまだいけるかも。これならヨーグルトもゼラチンもないし。クリームチーズだけ手に入れられれば作れそうだ。クリームチーズはこの世界で手に入るチーズを全て試してみれば良いもんね。

よしっ、チーズケーキはまずベイクドチーズケーキからにしよう。

――それから数時間、俺はひたすらレシピ本を読み込んで、この世界で作れそうなレシピをメモしていった。その結果分かったことは、洋菓子は作れそうなやつが多い！

レアチーズケーキみたいにいくつか例外はあるけど、ほとんどのものが今すぐ手に入る材料で作れそうだったんだ。洋菓子はかなり種類が増やせると思う。

でも和菓子は手に入らない材料のオンパレードだった。まず上新粉とか白玉粉とか団子粉とか、この辺の粉って多分原料が米だと思うんだよね。だから今は手に入らない。

それから重曹やベーキングパウダーが必要なものも結構あって、生地を膨らませるためだと思うんだけど、この世界でどうやって手に入れれば良いのか分からない。

あとは寒天もこの世界で一度も聞いたことないし、みりんもこの世界では聞いたことがない。

唯一餡子だけは作れそうだった。小豆はこの世界でも売ってるから、それを買えば作れる。でも餡子だけ作ってもね……

だからとりあえず和菓子は後回しかな。まずは洋菓子を充実させて、それがひと段落してから和菓子に取り掛かろう。俺も洋菓子の方が好きだし。

そうなると次に欲しいのは、カカオをどうやってチョコレートにするのかについての本かな。ヨアンもかなり苦戦してるみたいだし、やっぱりこうして見てるとチョコのお菓子ってかなり多い。

俺はそこまで考えたところで大きく伸びをして体をほぐした。うぅ～ん、疲れた……

「終わったの？」

目の前のソファに座ってずっとあの魔人、クドゥフェーニを監視していたミシュリーヌ様が口を開いた。今回で一番驚いたのは、ミシュリーヌ様も真面目に仕事するんだなってことかもしれない。

ミシュリーヌ様のことだいぶ見直したよ。

「とりあえず終わりました」

「どうかしら？　作れそう！？」

ミシュリーヌ様は途端に瞳を輝かせて身を乗り出してくる。ははっ、こういうところはやっぱりミシュリーヌ様だな。

「洋菓子は結構作れそうです。チョコが必要なものとそのほかにいくつか難しいものはありますが、それ以外は大体作れると思います」

「さすがレオンよ！　やったわ！」

「でも和菓子は難しいですね。まず米がないと作れないものがたくさんあるんです。それに寒天や重曹、ベーキングパウダーとかがないので……」

「米は……魔物の森にあるわよ。後のやつは知らないけど」

神様も知らないことってあるんだね。でもそうか、これって日本の知識か。そうなるとシェリフィー様に聞けば寒天はどうすれば手に入るのかとか教えてくれるんだろうな……

まあ知識を別の世界に持ち込むのは大変って言ってたし、多分教えてくれないだろうけど。

あれ？　でもミシュリーヌ様がこの世界を日本風の世界にしたんだよね？　それなら寒天とか知らないのかな？　寒天って多分なんだけど、何かの植物とか、そんなやつから作られるんだった気がする。

「この世界の植物って日本と同じものがたくさんありますけど、それってミシュリーヌ様が作ったんですよね？」

「そうよ！　ふふっ、凄いでしょ」

そうですね、ドヤ顔が凄いです。

「凄いですね。それでなんですけど、寒天って多分何かの植物からできているんだと思うのですが、ミシュリーヌ様はご存知ないのでしょうか？」

「うーん、そんなの覚えてないわね。最初の頃はシェリフィーに日本の植物一覧を貰って、とにかく必死にそれに近いものを作ったのよ。数が多すぎて覚えてないし、そもそもその植物が何に使われてたのとかは一切知らないもの」

へぇ～神様ってそんな感じなんだな。でもこの国にいて日本と同じような植物をかなり見るから、ミシュリーヌ様が頑張ったんだろうなってことはわかる。日本に似せなかったら、魔物の森みたいに意味不明な森になってた可能性もあるんだもんね……

「そうなのですね。ではやっぱり和菓子は後回しにします。まずは魔物の森の問題を解決して、米を定期的に得られるようになってからですね」

「……しょうがないわね。でも洋菓子は頼むわよ！」

「分かってます」

ミシュリーヌ様の勢いに思わず苦笑いだ。本当にスイーツが好きだよね。日本のスイーツバイキングとかに行ったら大興奮で倒れそう。

「何笑ってるのよ……」
「ふふっ……ごめんなさい。本当にスイーツが好きなんだなと思って」
「当然でしょ！　あんなに甘くてふわふわでとろけるのよ！　口の中が幸せになるのよ！？」

ミシュリーヌ様が熱弁を振るっている。確かにそれは分かるんだけどね。

「確かに俺も好きなので分かりますよ」
「レオン本当！？　仲間じゃない！」

いや、ミシュリーヌ様の仲間ってほど俺は熱量がないんですけど……

「あっそうだ、ミシュリーヌ様、そういえば聞きたいことがあったんです」

俺はミシュリーヌ様の熱量が凄いので一度話を逸らそうと思い、少し不自然ながらもスイーツの話を遮った。実際にずっと聞きたかったことが一つあるのだ。

２９５、魔法の仕組み

「スイーツの話？」
「違います。魔法の話なんです」

俺がそう言うとミシュリーヌ様は途端に落ち着いたようで、すとんとソファーに座ると首を傾げた。

「何の話かしら？」
「一つ疑問に思ってることがあって、なんでこの世界の魔法ってイメージで、それも日本の法則に当てはめたイメージで魔力消費量が減るのですか？」
「イメージで魔力消費量が減る……？」

あれ、ミシュリーヌ様が首を傾げたままなんだけど。もしかして意図的な設定じゃないの？

「例えば火魔法では酸素をイメージするとか、土魔法では無重力とか、回復魔法では傷が治る仕組みとか」
「……ああ！　分かった！！」

おお、やっと思い当たることがあったみたい。

「あの子にせがまれたのよ。戦乱の世を終わらせて大国を作るにはもっと使徒様が強くないとダメだって言われて、イメージで魔力消費量が減るようにしたのよね」

あの子って前の使徒様のことだよね。またその子の仕業か……で

もなんでそんな回りくどい感じにしたんだろう。
魔力量を無限にはできないって言われたけど、イメージで魔力消費量を減らせるのなら、魔力消費量が減る神物とかを渡せば良かったんじゃないの？

「何か魔力消費量が減る神物を渡すとかじゃダメだったんですか？」
「それだと人に奪われた場合に困るって言われたわね。あとは平和な世になったら一般人にもイメージを教えるから誰でも使えるもの、かつこの世界の人が思い浮かばないものが良いって話になったのよね」

そうだったんだ……確かにそれだとイメージが一番なのかな？

「ではなぜ今の人達は、誰もそのイメージを知らないのでしょうか？」
「教えたらもっと人が死ぬからって言ってた気がするけど……結局あの子が生きてるうちに平和は実現できなかったのよ」
「確かに……戦争が多発してる状態であれは危ないですよね」

俺も情報が敵に渡ったら危ないよなって思ったんだ。でも今の俺は皆に教えようとしている。
教えないで済むのならその方が良いだろうけど……今の状態だとそんなことは言ってられないんだよね。魔物の森に対処するには一人の巨大な力じゃなくて、大勢の小さな力が必要なんだ。そしてその小さな力は少しでも大きい方が良い。

「ミシュリーヌ様、俺はそのイメージを広めようと思っていますが良いでしょうか？」
「もちろん良いわよ。元々広める予定で作ったものだし」
「それなら良かったです」

一度教えちゃったら自ずと広まるだろうし、もう躊躇いなく教えてしまうことにしよう。そうしないと人間はいずれ滅びちゃうんだし。

後何か聞きたいことってあったかな……そうだ、水魔法で作り出す水について聞きたかったんだ。

水魔法で作り出す水って温度を下げるのは液体ギリギリまで温度を下げられるのに、温度を上げることができないのが不思議だったんだよね。

俺の中では火属性は温度上昇、水属性は温度低下ができるのかなって結論づけてたんだけど、答えを聞けるのなら知りたい。

「ミシュリーヌ様、もう一つ質問良いですか？」

「良いわよ」

「ありがとうございます。あの、水属性って魔力から水を作り出せるじゃないですか？　あの水ってなんで常温以上に温度を上げられないんですか？　お湯や熱湯を作り出せたら便利なのにってずっと思ってたんです」

「ああ、それはあれよ。水属性の魔力による魔力変換の試行範囲に温度上昇を加えると、例えばだけど数千度のお湯が一瞬だけ作れるのよ。でも数千度のお湯なんて一瞬で蒸発するでしょう？　そうなった時に水蒸気爆発が起きて危ないから、制限をかけたのよね」

怖っ！　水蒸気爆発を起こせる魔法とか……制限一択だな。でもそれならお湯は作れるようにしてくれても良かったのに。

「例えばなんですけど、百度のお湯までなら作れるとかにはしなかったのですか？」

「それも考えたのよ。でもそれには試行範囲に温度上昇を加えて、

さらにその上で細かく制限をかけないといけないでしょ？　だから温度上昇は火属性、温度低下は水属性って分けちゃったのよね」

ふ～ん、仕組みを作るっていうのも結構大変なんだな。

あれ？　今までの話をまとめると、温度低下の権限でマイナス百度の水も千度の水も作れるって話にならない？

それもミシュリーヌ様に聞いてみると、首を横に振られた。

「それはできないわ。そっちはちゃんと試行範囲に温度低下を加えた上で、さらに制限をかけたから。それが本当に大変で神力を馬鹿みたいに消費して……温度上昇の方は嫌になったのよね。確か水が液体として存在できる範囲までしか温度を下げられないようにしたはずよ」

「そうなのですね。なんでそこでもう少し温度を下げられるようにするとか、氷属性を作るとかしなかったのですか？」

氷属性ってあったら絶対に便利だと思うんだ。とりあえず水魔法でなんとか氷を作り出せたから良かったけど、もしそれが出来てなかったら、この世界でスイーツは発展しなかっただろう。

「私も作ろうと思ってたわ。だからこそ水魔法では液体として存在できる温度までにしたのよ。でもいざやってみると氷魔法は作れなかったのよね……」

「なんでですか？」

「色々理由はあるんだけど……レオンに説明するのは難しいわね。まあ魔力も万能じゃないってことよ」

なんかちょっと納得いかないけど、確かに魔力がなんでもできるものだったら凄すぎるし、そんなものなのか。

「そうなのですね。では水魔法の制限を変えようとは思わなかったのですか？」
「一度設定したものを変えるのはかなりの労力だし、神力も沢山必要だし……まあ、はっきり言えば面倒くさかったのよ」
随分はっきり言ったな。まあ、良いけどね。氷はもう作れるから。
でもなんとなく聞けてスッキリしたかな。よくわからないところも多いけど、そもそも全てを理解するのなんて無理だろうし。俺に話せない部分もありそうだし。
「色々と教えてくださってありがとうございます。少しは納得できました。では今日はそろそろ戻りますね。あっそうだ、このメモを持っていてもらえますか？　それで俺が連絡したらこのメモの内容を読んでもらえるとありがたいです」
「分かったわ、任せておきなさい！」
ミシュリーヌ様はやる気満々の様子で笑顔を浮かべた。そこはかとなく不安感が漂ってるけど……こんなに何もない空間でメモをなくすこともないだろうし、多分大丈夫だろう。
「よろしくお願いします」
「じゃあ下界へ送るわね。魔人の動きがあったら連絡するわ。またね！」
「はい。あっ、ミシュリーヌ様、色々教えてくださったお礼に神力を少しだけ増やしておきますから、それでスイーツ食べてください」
「レオン、レオン……あなたはなんて良い子なの！？　大好きよぉぉ」

ミシュリーヌ様のその叫びを最後に、俺はまた白い光に包まれた。ちょっとミシュリーヌ様に甘いかな？　でもあの静かな空間でずっと魔人を監視してるのって大変だと思うんだ。ちょっとぐらいは楽しみもないとね。

そして白い光が収まって目を開けると……そこは俺の部屋だった。時間は午前九時ちょうど。二回目だけど改めて驚くな。本当に時間が止まってるなんて。

「ロジェ、ただいま」

俺がロジェにそう声をかけると、ロジェは目を見開いて驚きの表情を浮かべた。ロジェがここまで表情を変えるのは久しぶりだ。

でも確かに驚くよね。ロジェにとっては九時になったところで、つい数秒前に俺がミシュリーヌ様に時間ですよって話しかけたところなんだから。

「もう、お会いになられたのですか？」

「うん。時間が止まるって言ったでしょ？」

「そうですが……やはり実際に目の当たりにすると驚くと言いますか、信じられないと言いますか……。どのぐらいの時間お会いになられていたのですか？」

「うーん、三時間ぐらいかな？　もう少し長いかな？」

「そ、そんなにですか……」

ロジェにとっての一秒を三時間って言われても困るよね。それは分かる。俺もちょっと不思議な感じだ。

もう一日分は頑張った気がするけどまだ朝なんだよね。

「これからもあると思うから段々と慣れてね」

「かしこまりました」
「よしっ、じゃあこの後はお店に、シュガニスに行こうかな。新しいレシピを色々と仕入れたんだ」
俺がそう言ってまだ淹れたてのお茶を飲むと、ロジェはもういつも通りの表情に戻っていて一礼した。
「かしこまりました。では馬車の手配をして参りますので少しお待ちください」
「分かった。よろしくね」
今は従者がロジェしかいないから、ロジェが何か用事で抜けると従者がいなくなっちゃうんだ。今までは別にそれでも良かったんだけど、これからは大公だしやっぱりもう一人は必要だよね。
護衛も従者も足りないし、足りないところだらけだ。
そんなことを考えつつお茶を飲んで待っていると、ロジェはすぐに戻ってきた。
「レオン様、馬車の手配ができましたのでいつでも向かえます」
「ありがとう。じゃあ行こうか」
「かしこまりました」
「ローランも護衛よろしくね」
「はっ！」
そうして俺は馬車に乗り込んだ。これからヨアンにレシピを渡すことを考えると、かなりワクワクするな。

２９６、皆の今後

お店に着きロジェとローランと共に中に入ると、飲食スペースには給仕担当の皆がいた。貴族に対する接客の実践練習をしているらしい。貴族のお客様役はアンヌみたいだ。

「レオン様、お久しぶりでございます」

俺が中に入ると皆が一斉に頭を下げてくれる。ここには使徒だってことと、ジャパーニス商会が大公家になるってことを知らせに来て以降ほとんど来てないから久しぶりだ。忙しくて完全にお店のことは後回しになってるんだよね……

でも俺のところにケーキの販売はいつからだ、お店はいつ開店するんだって問い合わせがかなり来てるし、そろそろお店のこともやらないと。結局は予約での販売もまだ開始してないから、まずはそこからかな。

今日は新しいレシピよりもまずはそっちを話し合うか。うん、その方が良い気がしてきた。それにロニーとアンヌ、ヨアン、エバンには大公家で雇いたいって話もしたかったんだ。

とりあえず皆を集めてもらって午前中はその話、そして午後に新しいレシピの話にしようかな。

「皆久しぶり。アンヌ、ロニーとエバン、ヨアンはいる？」

「ヨアンは厨房におります。ロニーとエバンは屋台に行っております」

そうだった……屋台のこともどうにかしないとだよね。商会じゃなくて大公家になっちゃったし、屋台はとりあえずやめようかと思ってるんだ。それで屋台の代わりに平民向けのスイーツ店を作りたい。

まあでも他が色々落ち着いてからになると思うけど。そうじゃないと俺が過労死しそうだ。

「じゃあ仕事中悪いんだけど、ロニーとエバンを呼んできてもらえるかな？」

「かしこまりました。ではキアラ、二人を呼んできて」

「かしこまりました」

キアラはアンヌのその言葉にキリッと答えると、俺に向かって深く頭を下げてお店を出て行った。なんか前よりも皆の態度が恭しくなったな。

教育の成果なのか、俺が使徒で大公になったからか。多分後者だろう。

本当はもっと崩した態度でも良いんだけど、これからたくさんの従業員や使用人を雇う中で、あんまり親しい態度を許しすぎるのも良くない。

もうここは俺が諦めないといけないところだよね。それにこれから時間が経てば皆が慣れて、もっと態度が崩れるかもしれないし。それまでは我慢かな……

とりあえず崩した態度を許すのは、本当に仲の良い少数の人だけにしよう。ロニーは絶対にその少数の中だ。ヨアンもかな。アンヌとエバンは……元々ちゃんとしてるからね。

「ではレオン様、奥の休憩室へどうぞ」

「うん、ありがとう」

俺はアンヌに案内されて奥の休憩室に向かった。そしてそこにあるソファーに腰掛ける。

「ロジェ、お茶の準備をお願い。五人分ね」

「かしこまりました」

「それからアンヌ、五人で話したいからこの机の周りに椅子をいくつか持ってきてくれないかな？」

休憩室には三人掛けのソファーが二つあるんだけど、多分俺の隣に座るのは断られるだろうし、そもそも横に座ったら話しづらい。

「かしこまりました」

そうしてロジェとアンヌが休憩室で話をできるように準備を整えてくれていると、ヨアンが休憩室にやってきた。

「レオン様、お久しぶりです」

「ヨアン久しぶり。最近はどう？　研究の進捗とか他の二人の様子は」

「はい。研究の方はあまり成果は上げられていません。最近はカカオをどうにかスイーツにできないかと試行錯誤しているのですが、あまり上手くいかず……」

やっぱりカカオは難しいか。これはシェリフィー様にチョコレートの作り方の本を頼んだ方が早いかもしれない。カカオからどうやってチョコレートになるのか、みたいな本あるかな？

「そっか。すぐには難しいと思うから気長にやろう。それからもし

かしたらなんだけど、カカオの調理法が分かるかもしれないからその時はすぐに教えるよ」
「本当ですか！？」
「うん。まだ先だけどね。冬の終わり頃かな」
「かしこまりました。その時を楽しみにしております！」

ヨアンは新しい調理法を知れるかもという情報に瞳を輝かせている。やっぱりヨアンは研究に向いている。
それにしても使徒になったら、俺がいろんな知識を知っていることを誰も疑問に思わなくなったな。前みたいに誤魔化したりしなくて良いから凄く楽だけど。多分ミシュリーヌ様から教えてもらってるって思われてるんだろう。実際はシェリフィー様なんだけどね。

「それから他にもたくさんの新しいスイーツのレシピがあるんだ。それは今日の午後にでも教えるね。まだお店のメニューには加えなくても良いけど、美味しいものが作れるように研究は始めてほしいんだ」
「なんと、新しいスイーツまで。レオン様にお仕えできて本当に幸せです……」

ヨアンはもう嬉しいを通り越して感激している様子だ。ヨアンは大袈裟だけど、そう言ってもらえるとやっぱり嬉しいよね。

「ありがとう。じゃあとりあえず座って、午前中は別の話があるんだ」
「かしこまりました。失礼いたします」

そうしてヨアンが座った頃にはアンヌも席に着き、それからすぐにロニーとエバンもやってきた。

「ロニー久しぶり。エバンも久しぶりだね」
「レオン久しぶり、最近は忙しそうだね」
「お久しぶりです」

そんな挨拶をしながら二人にも席を勧める。

「そうなんだ。色々やることがあって大変かな。ロニーは学校はどう？」
「王立学校はそろそろ卒業試験も近くなってるでしょ？　だから少し忙しくなったかも。一年間学んできたことの復習の授業が増えたかな」

確かに秋の休みが終わってもう完全に冬だ。冬の終わりの少し前に卒業試験をして、その後に卒業パーティーだったはずだから……段々と試験も近づいて来てるね。

「ロニーはどう？　卒業試験受かりそう？」
「うん、問題ないかな。心配なのは剣術だったんだけど、最近はエバンさんに教えてもらったりしてるから」
「そーなんだ。それなら問題なさそうだね」
「だから今年で卒業できると思うよ」

この様子ならほぼ確実に今年で卒業できそうだ。それならロニーは卒業したら本格的に働いてもらうって感じにしよう。

「良かったよ。じゃあロニーも春からは本格的に働けるね」
「うん。精一杯頑張るよ！」

ロニーもやる気十分みたいだ。やっぱり頼もしい。
俺はそこでロニーとの話を一度切って、四人全員の顔を見回した。

「じゃあ今日の一番重要な話なんだけど、皆の今後についてなんだ。今の皆はシュガニスというお店で雇っている状態なんだけど、ここにいる四人には是非ジャパーニス大公家で働いてほしいと思ってる」

俺がそう言うと、皆は一気に真剣な表情に変わった。

「俺が考えているのは、アンヌはジャパーニス大公家のメイド長、エバンは兵士隊の隊長、ヨアンはジャパーニス大公家に作る予定のスイーツ研究室の研究者、ロニーは文官として雇いたいと思ってる。……急に言われて戸惑うと思うんだけど、どうかな？　もちろん断ってくれても構わないよ。その場合は今まで通りお店の従業員として雇うから。それにまだ決められないってことなら返答を延ばしてくれても構わない」

そこまで言い切ると、まず口を開いたのはヨアンだ。

「レオン様！　スイーツ研究室というのは一日中スイーツの研究だけをしていれば良いのですか！？」

「うん。新しいレシピを開発したり、よりスイーツが美味しくなるような工夫を編み出して欲しいんだ。そこで開発されたものが実際にお店にレシピとして渡り、お客様に提供されるって形になるよ」

「そのような素晴らしい場所に、私を雇っていただけるのですか！？」

「ヨアンしか適任はいないと思ってるんだ。どうかな？」

「こ、断るなどあり得ません！　レオン様、ありがとうございます。よろしくお願いいたしますっ」

ヨアンはかなり興奮した様子でそこまで話すと、椅子から立ち上がりその場に跪いた。そして深く頭を下げる。

最近はよく跪かれるな……やっぱりそこは使徒という身分というか、肩書きのせいなんだろうな。

それにしてもヨアンの反応は概ね予想通りだね。ヨアンは確実に喜んでくれるだろうとは思ってたんだ。ちょっと予想よりも激しかったけど。

「ヨアンありがとう。顔を上げて。これからもよろしくね」

「……はいっ！　よろしくお願いいたします！」

そうしてヨアンがジャパーニス大公家のスイーツ研究室の一員になることが決まったところで、次に口を開いたのはロニーだ。

「レオン、僕を文官として雇うっていうのは具体的にどんな仕事をするのか聞いても良い？」

「もちろん。基本的に貴族家に雇われている文官って領地経営の補佐をするんだけど、俺は領地を持たないからそこの仕事はないんだ。その代わりにお店の経営の補佐をしてほしい。これからももっと店舗数を増やしていきたいし、後々にはスイーツだけじゃなくて食事系のお店もやりたいんだよね。だからロニーは、ジャパーニス大公家の系列店をまとめる立場になるって感じかな。それから大公家の経理もお願いしたい」

ロニーはそこまで話を聞くと大きく頷いてくれた。

「うん、どんな仕事かは分かったよ。正直僕にどこまでできるのかって不安はあるんだけど、精一杯役目を果たせるように頑張るから是非僕を雇ってほしい。よろしくお願いします」

ロニーはそう言って頭を下げた。そして顔を上げると笑顔になり

一言。

「レオン、これからもよろしくね」

「……うん！　ロニーよろしく」

そうしてお互いに笑い合った。ロニーが今までと変わらない態度で接してくれて、さらにそんなロニーがずっと側で支えてくれることが思いのほか嬉しい。

やっぱり俺に遠慮せずに意見を言ってくれる存在って貴重だと思うんだ。これから先は俺を煽てたり持ち上げる人はたくさんいるだろうけど、窘めてくれる人はほとんどいないと思う。だからロニーが近くにいてくれると心強い。

297、後任の店長

「文官って僕以外には何人雇うの？」
「まだ全然決めてないんだよね。でも経験者は一人いた方が良いかな？」
「そうだね。お店の経営の方ならまだしも、貴族家の経理とかは経験者がいた方が絶対に良いよ。僕も学べたらありがたいし」
「じゃあそこもアレクシス様とリシャール様に相談してみるよ」
「ありがとう」

そうしてロニーとの話が一段落し、俺はアンヌとエバンの方に体を向けた。

「アンヌとエバンはどうかな？」
「私は喜んでお受けいたします。これからはジャパーニス大公家の兵士として、レオン様とそのご家族をお守りできればと思います」
「エバン、ありがとう」
「私も喜んでお受けいたします。私の経験がレオン様のお役に立てるのでしたら、それはとても嬉しいことでございます」
「そう言ってもらえると俺も嬉しいよ。アンヌもありがとう」

皆快く頷いてくれて良かった……。皆が気持ちよく働けるように頑張ろう。

「皆、本当にありがとう。これからもよろしくね」
「はい。よろしくお願いいたします」

これでジャパーニス大公家の主要メンバーが少しは決まったかな。

まだまだ足りないけど中心となる人物が決まると、さらにその人物が信頼できる人達だと一気に安心できる。やっぱり信頼できる人材って大切だ。

「じゃあこれからの皆の仕事についてだけど、とりあえずは今のままこのお店で働いていてほしいんだ。大公家の屋敷もまだないし他の使用人も雇ってないからね。最低でも冬の間はこのお店で働いてもらうことになると思う。だからその期間で、皆がこのお店にいなくても問題なくお店が運営できるようにしてもらえないかな？　ちょっとそれは難しい？」

「いえ、問題ありません。私がいなくても完璧な仕事ができるよう、給仕担当を鍛えておきます」

「護衛もです」

「厨房も、私がいなくても完璧なスイーツを作れるように技術を伝えておきます」

「良かった。ありがとう」

とりあえずこれで四人がいなくなってもお店は回せるかな。あとは皆が後任を育ててくれている間に、新しい従業員を入れよう。四人の抜けた穴を埋める人材が必要だ。できる限り早めに募集したいな。

「レオン、僕はどうすれば良いかな？　しばらくはこのお店の店長としてやってれば良い？」

「うん、今まで通り店長としてお願い。そして新たに店長となる人が決まったら、その人に早めに引き継ぎをしてほしいんだ。ロニーは他の三人よりも早くに大公家の方で仕事を開始して欲しいから。屋敷がないからしばらくはタウンゼント公爵家が職場になるんだけど……」

「分かった。じゃあすぐに引き継げるように色々と整理をしておく

ね」
「ありがとう。よろしくね」
店長となる人材はかなり大切だし、どうやって選べば良いのか。信頼できて能力もあってなおかつ従業員とも仲良くできて、全体をまとめるロニーとも仲良く出来る人が良い。そんな人見つかるだろうか。
平民からだと教育が大変すぎるから、せめて最低限の能力がある人が良いよね。そうなるとやっぱり王立学校を卒業してる人が良いんだけど……
うーん、難しい気がするな。狙い目は準貴族の子供達あたりかな。その辺ならまだ教育も受けてるだろうし。
あっ……待って、今適任を思いついたかも。アルテュルはどうだろう？　アルテュルなら能力は申し分ないと思うし、貴族のこともちゃんと知っている。偏ってた知識も今は改善されてるし。
ちょっと心配なのは貴族と関わって嫌味を言われないかなってことだけど、多分それは今後一生アルテュルに付き纏うことだと思うし、乗り越えるしかないだろう。
アルテュルの弟妹が王都に来たら、三人合わせて従業員寮に入れようと思ってたんだよね。ちょうど良いかもしれない。
「あのさ、ロニーの後任にアルテュルはどうかな？」
「アルテュルって……王立学校のAクラスにいたアルテュル様？」
「そう。色々あって今はもう貴族じゃなくなったけど、アルテュル本人は悪い人じゃないんだ。この前の時も事前に危険を知らせてくれて、俺を助けようとしてくれたし」

皆はアルテュルのことは知らないだろうけど、色々あって貴族じゃなくなったという話でこの前の騒動が思い当たったらしい。
この前のいくつかの貴族家による謀反はすぐに鎮圧されたけれど、噂は市井にまで広がっている。それによって貴族家のいくつかがお取り潰しになったことも。

「レオンはアルテュル様のことを信頼できるの？」

ロニーに真剣な表情でそう聞かれた。俺はそれにしっかりと頷く。

「うん、信じられるよ」
「……それなら僕は、反対しないよ」

ロニーは表情を緩めてそう言ってくれた。

「本当……？」
「まあちょっとやりづらい気もするけど……貴族じゃなくなったのなら対等ってことだよね？」
「うん。ロニーの方が上司ってことになるかな」
「それなら普通に接するよ。元貴族ならちゃんと教育を受けてるだろうし、平民で教育を受けたことない人を連れて来られるよりはありがたいかな」

ロニーは少し苦笑しつつそう言った。
凄く嬉しい……アルテュルのことを普通に受け入れてくれたっていうのもそうだけど、何よりも俺のことを信じてくれてるっていうのが嬉しい。

「ロニー本当にありがとう。皆はどう思う……？」
「私はレオン様の決定に従います。それにこの前の騒動で生き残っ

ているのならば、本当にレオン様の助けになったのでしょうし……」

そう言ったのはエバンだ。

「私も問題ありません」

「私は貴族のことはよくわかりませんが、レオン様が信じている方なら大丈夫だと思います」

アンヌとヨアンもそう言ってくれる。

「皆、俺を信じてくれてありがとう。じゃあ後任の店長はアルテュルにする」

「分かった。そのつもりで心構えをしておくね」

「うん。……あとそのアルテュルの話で、皆にしておかなければならないことが一つあるんだけど」

俺はそう言って皆の顔を見回した。

「実はアルテュルには二人の弟妹がいて、その二人はまだ幼いからってことで今回の処罰の対象からは逃れたんだ。そこで俺がアルテュルと一緒に面倒を見る約束をしたんだけど、しばらく三人を従業員寮に住まわせても良いかな？　アルテュルはここで働くからもちろんなんだけど、幼い二人も一緒でも良い……？」

「弟妹とは、歳は幾つなのでしょう？」

「まだ一歳になってない子と、三歳ぐらいの子だって」

それを聞いたアンヌは少し難しい顔をする。

「その歳ですと、世話をするのは流石に難しいかと……」

「あっ、アンヌ達に世話をしてほしいわけじゃないんだ。そこは乳

母さんを雇うから。でも子供がいたら騒がしくなるでしょう？　そこが大丈夫かなと思って……」
「そういうことでしたら私としては全く問題ありません。もし夜泣きなどがうるさいようでしたら、部屋割りを考えれば良いですし」
「皆はどうかな？」

皆を見回すと、特に嫌そうな顔をしている人はいない。

「乳母がいるのでしたら問題ありません」
「私もです」
「僕もだよ。小さな子がいる環境には慣れてるし」

確かにそうか。ロニーは孤児院出身だし他の皆も孤児院から来たから、小さい子の世話は慣れてるのかも。二人を育てるには良い環境なのかもしれないな。

「ありがとう。じゃあ、あと数週間で三人が来ると思うけどよろしくね」
「かしこまりました。……レオン様、私たちはいつまで従業員寮にいても良いのでしょうか？」

そう聞いたのはアンヌだ。確かにもうジャパーニス大公家で雇うことになるんだよね。うーん、でも屋敷ができるまでは引っ越してもらう場所もないし仕事もお店のままだし……、しばらくは今のままかな。

「屋敷が完成するまでは従業員寮かな。そのあとは屋敷に引っ越してもらうよ」
「かしこまりました。ではそのように心得ておきます」
「うん、よろしくね」

とりあえず話はこんな感じかな。あとこれからやるべきことは……そうだ、とりあえず早急に従業員の募集をしないと。流石にこの四人が抜けたらこのお店が回らなくなる。

「ロニー、四人がこのお店から抜けるから、給仕と護衛、料理人を二人ずつ追加で雇いたいんだ。募集を出しておいてくれる？」
「それは良いけど、一人ずつじゃなくて良いの？」
「うん。皆ができる仕事量を一人でこなせる人なんていないだろうから。それに新しい店舗を作る時のためにも、従業員は少し余裕を持った人数にしておきたいんだ。だから給仕と護衛はそれぞれ三人でも良いかも」
「確かにこの店って余裕ないよね。分かった、じゃあ募集を出しておくね」
「ありがとう。人選はロニーに任せるよ。ロニーがこのお店で働くに値すると思った人を雇って欲しい」
「それ責任重大だね……分かった。頑張ってみる」
「うん、よろしくね」

よしっ、とりあえず皆に話すことはこのぐらいかな。あとはこのお店の開店についてと新しいレシピについてだけど、そこはロニーとヨアンと話し合えば良いだろう。

「じゃあこの後はお店をいつ開店させるのかと新しいレシピについて話したいから、ロニーとヨアンだけ残ってくれる？　アンヌとエバンは仕事に戻って良いよ。集まってくれてありがとう」
「いえ、またいつでもお呼びください。では失礼いたします」
「失礼いたします」

そうして、二人は休憩室から出ていった。

298、シュガニスの今後　前編

「じゃあロニーとヨアン、二人ともソファーに座って」

アンヌとエバンがソファーに座り二人は椅子に座っていたので、ソファーに移動してもらう。

「ロジェ、お茶を淹れ直してくれる？」

「かしこまりました」

「レオン様、クッキーを焼いてあるのですが召し上がられますか？」

俺がロジェにお茶を頼むとヨアンがそう聞いてくれた。もちろんクッキーならいつでもいくらでも食べる。最近はまた美味しくなったんだよね。

「もちろん食べるよ。ありがとう」

「かしこまりました。では準備して参りますので少々お待ちください」

そうしてロジェとヨアンが部屋から出ていき、部屋には俺とロニーとローランだけになった。

「ふわぁ～、疲れたね……」

「レオンは最近忙しすぎるんじゃないの？」

「うーん、そうなのかな？　でも確かにやることはたくさんある」

「仕事は忙しい？　陛下の側近として働き始めたんだよね」

「うん。でも俺に特別仕事があるっていうよりも、いろんなことの相談を受けてる感じかな。あと今は魔物の森の対処の話があるから、

そのことで忙しいんだよね」

ロニーは魔物の森と聞いて少しだけ表情を暗くした。ロニーは俺が魔物の森の奥に行くことを、かなり心配してくれているのだ。

「魔物の森……怖かったよね。あの奥にレオンが行くと思うと心配になる」

「心配してくれてありがとう。でも俺は強いから大丈夫、無事に帰ってくるよ」

「うん……そうだよね」

そう言ってもロニーの表情は晴れない。ロニーの周りにいる人はまだ俺が魔物の森に行くことを知らなくて、その不安を共有できないのもダメなんだろうな……

魔物の森にどう対処するのかについての情報は、まだ公開してないんだ。とりあえず市井にも公開したのは、ミシュリーヌ様の使徒であるレオンが降臨したって話だけ。

でも俺とトリスタン様達が魔物の森に行くときにはパレードをするし、その前には色々と公開するらしいけど。

この前アレクシス様と、どういう情報を公開するのかについて話し合って決めたのだ。

最終的には魔物の森の最奥に邪悪な魔物が住んでいて、それを倒さない限り魔物の森の勢いは止まらない。その邪悪な魔物を倒しに、使徒様と王族を含めた三人の騎士が魔物の森に入る。そんな感じのエピソードになった。

ほとんどがフィクションだけど本当のことを言うわけにもいかないし、時空の歪みなんて言われても理解できないだろうし必要な嘘

だよね。

それで俺達が時空の歪みを塞ぐことに成功して凱旋したら、後は邪悪な魔物は倒したが残された影響が大きく、魔物の森の勢いは弱まってはいるが止まらない。あとは自分達の手でこの世界を救おうじゃないか。

みたいな感じで兵士を集めて魔物の森を駆逐していく予定らしい。

「そういえばロニー、魔物の森に同行してくれる騎士の方が決まったんだ。トリスタン様とジェラルド様、それからフレデリック様だよ」

「え……、本当にそのお三方なの？」

「そう、驚くよね。でも三人とも本当に強くて頼りになるんだ。だから心配はいらないよ。それに俺にはミシュリーヌ様もついてるし」

ロニーを心配させないように、努めて明るい声を出した。するとロニーは少しだけ笑顔になる。

「そっか……そのお三方が付いてくれるならちょっと安心かも。それに女神様がついてくれてるなら大丈夫だよね。もちろんレオンも強いんだし」

「うん、だから心配しないで。それよりも問題は俺がいない間のお店なんだ。多分魔物の森に行ったらしばらくは帰ってこれないから。短くても半月ぐらいかな」

「そんなに長いんだ……」

「遠いからね。だからその間のお店はロニーに完全に任せることになる」

「分かった、お店の心配はしないで。僕がしっかりとやっておくよ。だからレオンは気にせずに行ってきて」

ロニーは頼もしい顔でそう言ってくれた。もうさっきまでの不安げな表情はない。

「ありがとう。頼んだよ」

そこまで話したところでヨアンとロジェが休憩室に戻ってきた。部屋の中には途端にクッキーの良い匂いと淹れたてのお茶の香りが充満する。

「お待たせいたしました」

「美味しそうだね」

「こちらはリズが一人で作ったものです。もうクッキーならば私が作るものと遜色ありません」

「そうなんだ！　凄い成長だね。見た目だとほとんど違いがわからないかも」

リズも最初は心配だったけど、もう一人前になりつつあるんだな。後任が育ってるというのは頼もしい。ヨアンが抜けてもお店をうまく回してくれるだろう。

「じゃあいただくね」

あぁ〜、美味しい。サクサクで甘さもちょうどいい。幸せの味だ。

「本当に美味しい。リズは凄いね」

「僕も驚いてるんだ。リズがここまでスイーツ作りの才能を持っていたなんて。人見知りな子だったから、僕の妹として贔屓目に見ても仕事を探すのは大変かなと思ってたんだけど、本当に嬉しいよ」

そう言って嬉しそうに笑うロニーは兄の顔をしていた。分かる、妹の成長って嬉しいよね。ちょっと寂しいこともあるんだけど……

それからしばらく雑談しつつ皆でクッキーを楽しんで、本題に入ることになった。

「じゃあシュガニスの今後についての話なんだけど、まずいつ開店するのか、ここで少し悩んでるんだ。王宮でのパーティーでスイーツをお披露目したでしょ？　それで貴族からかなり問い合わせが来てて、春の初めの開店だと少し遅いかなと思ってるんだよね」

「やっぱり問い合わせが来てるんだね。たまにこのお店にも貴族の使用人が来るんだよ。問い合わせはレオンにって言うとすぐに帰っていくんだけど……あっ、そう言って良かった？」

やっぱりこっちにも来てたのか。

「もちろん。すぐに俺の名前を出して良いよ。でもそうしてずっと断るのも販売機会を逃してるし、せっかくお披露目したのなら売るべきだと思うんだ。でもお店を始めたら多分お客さんが殺到して大混乱になる。だから春までの間は予約でお持ち帰りのみで販売しようかと思ってるんだけど、どう思う？」

その提案に二人はかなり真剣に考えてくれているようだ。それからしばらくして、まず口を開いたのはロニーだった。

「僕は賛成かな。でもその予約をどうすれば混乱なくできるのかなってちょっと思ったんだけど、レオンの名前を使えば大丈夫だよね？」

「うん。例えば初日は高位貴族だけとか、身分で分けちゃっても良いと思う」

「それができるなら僕は賛成かな。そうして貴族様が事前にスイーツを楽しんでくれていたら、開店しても混乱が抑えられるだろうし」

やっぱりそうだよね。開店時の混乱を抑えるのにも有効だろうし、お店を始めても予約は続けることになるから従業員が業務に慣れることもできるし。

「ヨアンはどう？」

「私も賛成です。ただ予約の場合は、カットケーキはなしでホールケーキのみにするべきかと思います。カットケーキですと余ってしまう部分も増えると思いますので」

確かにカットケーキの注文を一つ受けたら、ホールケーキを一つ作らないといけない。まあ余ったところは俺のアイテムボックスに仕舞っておけば問題はないんだけど……

毎日余りのケーキを仕舞いにくるのも大変だし、貴族ならホールケーキの値段でも売れるだろう。

「確かにそうだね。じゃあ予約での販売はホールケーキのみにしよう。クッキーとかはどうする？」

「クッキーならば日持ちもしますし、一緒に販売しても良いかと思います」

「分かった。じゃあホールケーキとクッキーを予約で売り出すことにする」

「了解。ホールケーキは全種類？」

「うん。どれでも選べるようにしようか」

ロニーが話し合いの内容を紙に記してくれている。ちゃんと話し足りてないところも聞いてくれるし、本当にロニーって優秀だ。

「分かった。それで予約はいつから開始する？」
「そうだね……まずは予約をどんな形式でやるのかによるけど……問い合わせがあった貴族家に予約用紙を送ることにしようかな。貴族は横の繋がりが強いから、それで直ぐに貴族全体へシュガニスが予約を開始したって広がると思うんだ」
「その予約用紙はどこに持ってきてもらうの？」
「このお店にしよう。予約用紙にお店の営業時間を書いておいて、その時間内に受付しますって感じで」
「分かった。新たに予約用紙が欲しい人には？」
「それもお店に用紙を取りに来てもらうことにしようか」
「分かった。じゃあ予約の受付をする人が必ず一人はお店に必要だね」
「うん」

後は予約が殺到しすぎた場合だよね。基本的には予約用紙を受け取るときに、受け取りに来てもらう日時と時間を指定したい。そこまで殺到しない限りは次の日で問題なく作れると思うんだけど、最初は殺到するかな……

「それで予約を受理するときに、受け取り日時も指定して欲しいんだ」
「確かに必要だよね。じゃあ予約用紙には店で予約を受理したサインをして、お客様に持ち帰ってもらうことにする？　予約の内容はお店の台帳を作って記入することにして」
「確かにその方が良いかも。じゃあそれでいこう。それで受け取りの時に予約用紙を持参して貰えば、間違えることはないね」
「うん。じゃあそれも準備するよ」

あとは混雑対策だな。

「それから最初は予約が殺到すると思うんだ。だから下位貴族の予約は基本的に受け取りの日時を二日後や三日後にして、高位貴族の予約を次の日にして欲しい。下位貴族の方が先にスイーツを受け取ったってなったら、絶対に苦情がくるから。特に最初の一回目は身分を気にした方が良いと思う」

「確かにその苦情絶対に来る」

ロニーはうんざりしたような表情を浮かべて、身分順で受け取り日時を指定と紙に記した。

２９９、シュガニスの今後　後編

「とりあえず予約で決めておくのはこのぐらいかな？」
「あとは……そうだ、木箱とか諸々準備はできてる？」
「うん。全部完成しててもうお店にあるよ」
「じゃあこれで予約販売はできそうだね。いつから始めようか。ヨアンはいつでも問題ない？」
「はい。材料は毎日十分に入ってきますので問題ありません。しかし販売するとなるともう少し増やした方が良いかと」
「確かにそうか。じゃあ仕入れ量も少し増やそう。もし使い切らなくてダメになりそうなら言ってね。俺のアイテムボックスに入れておけばいつまでも保存可能だから」
「かしこまりました」

時間停止で容量無限のアイテムボックスを一番羨ましがったのはヨアンだった。それがあれば材料が劣化することもないし最高ですね！　ってすぐに言われた時は思わず苦笑しちゃったよ。
さすがヨアンだよね。ミシュリーヌ様がスイーツを食べることしか考えてないように、ヨアンも新しいスイーツを開発することしか考えてない。

「じゃあ仕入れを増やすことも考えて、一週間後なら予約を始められる？　一週間後に予約開始で、実際に受け取りに来てもらうのはその次の日からでどうかな？」
「それで問題ないよ。問い合わせがあった貴族家に予約用紙を送るのはいつにする？　出来ればぎりぎりが良いんだけど……」
確かに余裕を持たせたらお店に予約用紙をもらいに行く人が殺到

して、結局初日にお店が大混乱になるか……

「じゃあ予約用紙を送るのは予約開始日の前日にする。ちょっと不作法だけど大公家だし許されると思う。そうすれば初日は予約用紙を受け取った家しか来なくて、その次の日からだんだんと噂を聞いた人がやってくる感じになるかな」

「それなら大きな混乱はなさそうだね」

「うん。あっそうだ、俺が送った予約用紙には印をつけておくから、その人達の予約は早めの受け取り指定にしてくれる？　流石にこっちから送ったのに後回しはまずいだろうし」

「了解」

貴族を相手に商売をするのって色々と気を遣って大変だな……でも俺が大公ってだけでほとんどの揉め事は起こらなくなるんだろうし、これでもかなり楽だよね。

そう考えたらただの平民の身分でこのお店をやろうとしてた過去の俺、凄いチャレンジャーだな。まあリシャール様の後ろ盾があったからこそだけど。

「じゃあ一週間後から予約販売は開始するってことで準備するね」

「よろしく。他の皆にも共有してそのつもりで準備してね。お店が開店したら予約業務と並行してカフェスペースもだから、それも考えて事前練習って認識でお願い」

「分かった。そう言っておくよ。あとさっき話してた新しい従業員だけど、予約販売を始めて数週間経ってから雇うことにするね。皆が慣れてからの方が良いと思うし」

「うん。そこは任せるよ」

これで予約販売の方は大丈夫かな。あとはシュガニスを正式にいつ開店させるのかだけど、今の段階で予約販売を始めるなら開店の

時期は早めなくても良いかな。

「あとは正式な開店の時期だけど、予定通りに春の初めで良いかな？　予約販売をしてるなら早める必要はないと思うんだ」

「そうだね。冬の一月あれば予約販売も完全に慣れるだろうし、そのあとならカフェスペースを始めても問題ないと思うよ」

「じゃあ開店予定は春の始めにしよう。予約のケーキを取りに来てくれた人の目に入るように、お店の中にお知らせの看板でも飾っておこうか。春に開店しますって内容のやつを」

「それ良いね。ちゃんと木工工房に頼んで作る？」

「うん。彫ってもらって色もつけて華やかなやつにしよう。値段は気にしなくて良いから」

「分かった。じゃあそれも注文しておくね」

「ありがとう」

これでお店の今後については完璧かな。

ふぅ～、ロニーと話すと次々と話が決まっていくからかなり楽しい。やっぱりロニーとは気が合うし、仕事仲間としても相性が良い。

「とりあえずこれで決めることは全部かな？　また何か問題があったらその都度話し合うことにしようか」

「そうだね」

「じゃあ次は新しいレシピについての話かな」

俺がそう話を変えると、さっきまでは俺とロニーの会話に少し口を挟む程度だったヨアンが、途端に身を乗り出してきた。

「その話がとても気になっていました！　新しいレシピとは、またレオン様が考えられたのですか？」

「ううん。使徒としての知識なんだ」

「やはりそうなのですね……！　使徒様の知識にある新たなスイーツを最初に作らせていただけるとは、感動です。レオン様に雇っていただいている自分が幸運すぎて怖くなります……」
「ははっ、大袈裟だよ。俺はヨアンには本当に感謝してるんだ。最初は曖昧な知識だったのにそれを形にしてくれたんだから」

そう言うと、ヨアンは頭をブンブンと横に振る。

「そんなことはありません。ゼロから一を作るのは本当に難しいのです。少しでもヒントがいただけるだけで、とてもありがたいです」
「ありがとう。でも今度はもっと正確なレシピがわかるんだ。でもそこからもっと試行錯誤して美味しくしてもらいたいけど……」
「もちろんです！　自分の中で最高の味を追求します」
「期待してるよ」

俺はアイテムボックスから紙とペン、それからミシュリーヌ様と繋がる本を取り出した。

「レシピはミシュリーヌ様に聞きながらだから、ミシュリーヌ様と繋げても良い？」
「え、えっと、ミシュリーヌ様と、お話しをされるということでしょうか……？」
「そう。この本に触れると俺限定で話ができるんだ」
「レオンってそんなこともできたんだ……なんか凄いね。僕達にもお声が聞こえたりするの？」
「ううん。俺にしか聞こえないって。だから独り言を言ってるみたいになるんだけど、気にしないでね」
「分かった。じゃあ僕達は特に跪いたりしなくて良いってこと？」
「うん。別に必要ないよ」

確かにそういう心配もするのか。ミシュリーヌ様は別にいつでも跪く必要はあんまりない気もする……。でも信仰心が高まると神力も増えるんだし、跪いてもらえるのならその方が良いのか。

「じゃあ僕達のことは気にせず話して良いよ」

「ありがとう。ヨアンも気にしないでね」

「は、はい」

俺はその返答を聞いて、本をしっかりと抱えてミシュリーヌ様に話しかけた。

「ミシュリーヌ様、今大丈夫ですか？」

『大丈夫よ～。さっき帰ったばかりじゃない。何か忘れ物？』

いや、そっちの世界に忘れ物なんて出来ませんから。

「違います。ミシュリーヌ様ご所望の新しいスイーツを作ってくれる料理人にレシピを説明したいので、あのメモを読んでくれませんか？」

『ほ、本当！？　まさかこんなに早いなんて！　レオンでかしたわ！』

ミシュリーヌ様は一気にテンションが上がったようで、声が数倍大きくなった。ちょっとうるさいです……

「では今から俺が聞いたスイーツのレシピを教えてください」

『もちろんよ！』

「じゃあヨアン、今からレシピの説明をするね」

俺がヨアンの方に向き直りそう告げると、呆然としていたヨアン

は意識を取り戻したようで慌てて背筋を正した。

「じゃあこの紙とペンを使ってね」

「あの、レオン様、大変申し訳ないのですが、私はまだ字を書くのが苦手でして……」

当たり前のように紙とペンを渡したらヨアンにそう言われた。確かにそうだった、読み書きなんてできない人の方が多いんだよね。最近は周りにできる人が多すぎて忘れかけてた。ヨアンは普通の平民だしできない方が自然だ。

「いや、俺の方こそごめん。最近は周りにできる人が多くて忘れてたよ。でもまだ苦手ってことは練習してるの？」

「はい。幸い周りには読み書きできる人が多いですから、いつでも教えてもらえるので……」

大人になってから学ぶのが大変なのは母さんと父さんを見てればわかる。それに周りの読み書きができる人って年下が多いよね。それでも教えてもらってるって、ヨアンは凄いな……

「ヨアン凄いね。もし何か教材が欲しいとかあったら言ってね」

「はい。ありがとうございます」

「じゃあレシピは俺が書こうか？」

「レオン、僕が書くよ。レオンは説明に集中した方が良いと思うし」

ロニーが横からそう言ってくれた。確かに書きながら説明って難しいかも。

「じゃあお願いするね」

「うん。任せて」

そうしてロニーが紙とペンを持ち、話をする態勢が整って俺はまたミシュリーヌ様に呼びかけた。

３００、新しいレシピ

「ミシュリーヌ様、ではまずシフォンケーキの作り方からお願いします」

『分かったわ。材料は卵黄、砂糖、油、水、小麦粉、メレンゲよ』

「ありがとうございます。ヨアン、まず最初のレシピはシフォンケーキって名前のケーキだよ。これはスポンジケーキみたいな感じなんだけど、それよりもふんわりと軽い食感かな。生クリームとかを塗らないで、そのまま食べると美味しいかも。あとは紅茶の葉や果物、ナッツ類とかを色々と混ぜても美味しくなると思う」

ロニーは重要な点だけを紙に書いていき、ヨアンは必死に覚えようとしているみたいだ。ロニーの要点をまとめる能力が凄いんだよね。俺も真似できないっていつも思う。

「材料は卵黄、砂糖、油、水、小麦粉、ヨガードだよ」

「スポンジケーキと余り変わりませんね。バターが油に変更になるだけでしょうか？」

「うん。それだけでも結構食感が変わるんだと思う。あとは色々と試行錯誤をしてみてかな。この材料を使って、ヨアンの中で一番美味しいと思うものを作ってくれれば良いから」

最初はそれぞれの分量とかも伝えようかなと思ったんだけど、この世界と日本じゃ小麦粉の種類とか挽き方とか、さらに油の種類も砂糖の種類や精製法も、色々なところに差があるから止めた。

この世界の材料を使った最適な分量は、試行錯誤していくしかないと思う。日本の分量を伝えて先入観を与えるよりは、ヨアンの今までの経験に基づいて試行錯誤してもらった方が美味しいものが出

来上がる気がするんだよね。

だからヨアンには悪いけどここからは頑張ってもらおう。ヨアンは試行錯誤が好きみたいだし喜んでやってくれるだろう。今もかなり楽しそうだし。

「かしこまりました。最適な分量を見定めて最高に美味しく仕上げてみせます！」

「期待してるよ。よろしくね」

「はい！」

「じゃあ次はベイクドチーズケーキだったかな？　ミシュリーヌ様、次のケーキはなんでしたか？」

『ベイクドチーズケーキよ』

「じゃあそれを教えてください」

『材料はクリームチーズ、小麦粉、卵、砂糖、生クリーム、レモン汁、クラッカー、バターって書いてあるわよ』

「ありがとうございます。あとその下にクラッカーの作り方って書いてありませんか？」

自家製クラッカーを作るにはってコラムがあって、そこに作り方が書いてあったのだ。あれを見つけた時は嬉しかった。

『あるわね。小麦粉、水、塩、油って書いてあるわよ。あっ、あと砂糖を入れても良いって書いてある』

「ありがとうございます。ヨアン、じゃあ次はベイクドチーズケーキって名前のケーキね」

「ベイクドチーズケーキですね。チーズを使ったケーキですか！」

「うん。これはちょっと難しいかもしれないけど挑戦してみて欲しいんだ」

「分かりました」

「じゃあまず材料からね。クリームチーズ、小麦粉、卵、砂糖、生クリーム、レモン汁、クラッカー、バター」

ロニーが書き写せるぐらいの速度で材料を挙げていく。こうしてみるとやっぱり必要なものも多いな。しかもこの世界では難しいものもいくつかある。

でもレアチーズケーキより簡単だろうし、ここは頑張ってもらいたいんだよね……チーズケーキ食べたい。

「かなりたくさんのものが必要なのですね」

「うん。じゃあ次は調理過程ね。まずは材料の一つであるクラッカーなんだけど……」

それから俺はミシュリーヌ様にメモを読み上げてもらいつつ、ヨアンにベイクドチーズケーキの作り方を説明した。

「どう？　できそうかな？」

「……そうですね。難しいとは思いますが、聞いていた限りでは何度も試せば形にはなると思います。あとはチーズの種類やそれぞれの分量を変えて美味しくしてみせます」

そう言ったヨアンの表情は真剣だけれど輝いていた。やっぱり難しい壁に挑むのってやる気でるよね。

「じゃあ完成を楽しみにしてるよ」

「はい！」

――そうしてそれからいくつものレシピをヨアンに説明し、お昼の時間もとうに過ぎて夕方ごろに説明し終えた。

相当疲れたけどやり切った感はある。ヨアンは今すぐに研究をしたくてうずうずしているようだ。ロニーはかなり疲れてるかも。

「ミシュリーヌ様、長い間付き合ってくださりありがとうございました」

『スイーツのためだもの当たり前でしょう！　それで完成しそうかしら？　いつ出来上がるの？』

「そんなに早くは無理ですよ」

流石に今完成しそうはないだろ。俺は期待して瞳を輝かせているミシュリーヌ様が思い浮かび、思わず笑ってしまう。

『そうなの？　じゃあ何時ごろかしら。明日？』

「そうですね。何週間もかかって一つって感じですね」

『な、な、なんてこと！？　そんなにかかるの！？』

「当たり前じゃないですか。完成させるには何度も試行錯誤しないとなんですよ。こっちの世界には便利な機械があるわけでもないですし」

『そうなのね……』

「そんなに落ち込まないでください。後で楽しみがあると思ったら頑張れるじゃないですか。新しいスイーツを食べる想像をしながら仕事を頑張ってください」

『……分かった。じゃあ頑張るから、絶対に完成させなさいよ！』

「分かりました。じゃあ切りますね」

そうして俺はミシュリーヌ様との通信を切った。ふぅ～かなり疲れたな。俺は本を仕舞って二人に向き直る。

「二人ともお昼も食べないでごめんね」

「いえ、とても楽しかったので大丈夫です！」

確かにヨアンはそうだろうね。今すぐ厨房に行って試したいって感じだし。

「ロニー、こんなに付き合わせちゃってごめんね」

「大丈夫だよ。これも仕事の内だし、新しいレシピを知るのは楽しかったから」

「本当にありがとう」

二人には休日手当を渡しておこうかな。というかそもそも今日って回復の日なんだよね。最初に回復の日は仕事休みで良いからって伝えたんだけど、結局皆は休みがあってもやることがないからって仕事をしてるみたいなんだ。

確かに平民は回復の日だって仕事を休まないのが普通で、基本的には何か用事がある時か体調が悪い時しか休まない。貴族の使用人だって休みなしでずっと働いている。

そういう世界だから無理に休ませるのも違うのかなと思って、働きたい人は働いても良いよって言ってるんだけど、結局全員が休みなく働いてるみたいだ。

もう休日手当じゃなくて全員にボーナスをあげようかな。うん、今度ロニーとも相談しよう。従業員の給金はロニーの管轄だし。そしてロニーのボーナスはあげること決定だ。そこは俺の裁量だからね。

「じゃあ今日は解散にしようか。二人とも今日はもう帰って休んで。ヨアンも研究は明日から、仕事に支障が出ない程度にしてね。大公

家に来たらいくらでも研究できるから」
「かしこまりました」
「じゃあレオンもお疲れ様」
「うん。お疲れ」

そうして今日の話し合いは解散となった。かなり疲れたけど有意義な時間になったな。

301、バーベキュー　前編

今日は家族皆でお出掛けをする日だ。皆が勉強に疲れているようだったから俺が企画をした。仕事は一日休みをもらったし、朝早くからたっぷりと時間があるので遊び尽くせる。久しぶりだからワクワクするな。

「お兄ちゃん！　もう準備終わった？」

昨日の夜に明日お出掛けするよって話してからマリーはずっと大興奮で、今日の朝も早く起きてずっとはしゃいでいるらしい。さっきからマリー付きのメイドさんが大変そうだ。

マリーも余り表には出さないけど、勉強漬けの毎日に疲れてきていたんだろうな。今日は皆のリフレッシュになってくれたら良いよね。

「マリー、まだ朝ご飯も食べてないよ。ちゃんと自分のお部屋で朝ご飯を食べてくるんだよ」

「そうだった。じゃあすぐ食べてくるね！」

マリーはキリッとした顔で元気よく返事をして、俺の部屋から自分の部屋に駆け出していった。うん、メイドさんが振り回されている。今度特別手当てとか出しておこうかな……

それから俺は素早く朝食を食べて、久しぶりに動きやすい服装に着替えた。質は良いものだけど豪華ではない服装だ。やっぱりこのぐらいの方が落ち着く。

「ロジェ、皆を呼んできてくれる？」
「かしこまりました」

今日は転移で目的の場所に向かうので、集合場所は俺の部屋だ。メイドと従者、それから護衛なしではダメだと言われたので護衛の皆も。かなりの大所帯だけどそれでも楽しめるだろう。

「お兄ちゃん！　ルークとニコラも一緒なんだよね？」

マリーが勢いよく俺の部屋に入ってきてそう言った。マリーは本当に楽しそうだ。

「そうだよ。これから迎えに行くからね」

昨日の夜マリーにお出掛けすることを告げたら、ルークとニコラも一緒が良いと言われて、可愛い妹の要望を聞くことにしたのだ。慌ててニコラ達にも行けるかを転移で聞きに行ったら、お店も閉められるし大丈夫だってことだった。

だから今日は転移でニコラ達の家に四人を迎えに行き、それから目的の場所まで転移する。そして十分楽しんだらまたニコラ達を家まで送り、それから屋敷に帰ってくるってスケジュールだ。ちょっと距離がある転移だから魔力量が心配だけど、最近はどんどん増やしてるしこの程度なら問題ないと思う。

「やったー！　ルークとニコラと会うの久しぶりだよね」
「そうだよね。久しぶりに楽しもうね」
「うん！」

そうしてテンションが高いマリーの相手をしていると、部屋に母

さんと父さんも入ってきた。

「マリーはしゃぎ過ぎよ」

「だって、久しぶりのお出かけだよ！」

「マリー少し落ち着かないと途中で疲れて楽しめないよ」

母さんと父さんはマリーの様子に苦笑いだ。

「はーい。でも楽しみなんだもん！」

「ふふっ、じゃあマリーが疲れないうちに早速行こうか。まずはおじさん達の家からだよ」

おじさん達の家には、昨日のうちに大勢が転移できる場所を作ってもらっている。だからそこに転移すればこの人数でも問題はない。

「じゃあ皆、できる限り俺の近くに寄ってくれる？」

「分かった！　私がお兄ちゃんのお隣ね！」

そう言って俺の手を繋いでくるマリー、本当に可愛い。

「そうだね」

俺は顔がデレデレと崩れるのを抑えきれずにマリーの手をぎゅっと握った。そしてその近くに父さんと母さんも来て、その周りに皆が集まってくれる。

「じゃあ行くよ『転移』」

ニコラ達は準備を終えて転移場所の周りで待っていたようで、俺

達が突然現れたことに相当驚いている様子だ。やっぱり事前に転移のことを聞いてても驚くよね。

「おじさんおばさん！　ルークとニコラお兄ちゃんも！」

マリーは久しぶりに皆に会えたことが嬉しいのか、すぐに四人の下へ駆け寄っていった。

「マリー久しぶりだな！」

「きゃあ～！」

おじさんが駆け寄ってきたマリーをそのままの勢いで抱き上げる。マリーはそれに大興奮だ。最近は大人っぽくなってきたと思ってたけど、やっぱりまだまだ子供だよね。

「皆、急にごめんね。もう準備できてる？」

「ええ、準備は終わってるわ」

「いつでも行けるぜ！　父ちゃんはそろそろマリーを下ろせよ」

「レオン、俺達は昼ご飯も持たなくて良いんだよな？」

「うん。準備したから大丈夫だよ」

「じゃあいつでも行ける」

「りょーかい！」

ニコラは大公家の兵士として雇うことが決まっているからか、少しだけ緊張しているみたいだ。確かにここにいる護衛の皆はニコラにとっては上司になる。

「じゃあおじさん達もこっちに寄って～」

「おうっ、それにしても凄い人数だな」

「それぞれに従者やメイドと護衛が付いてるから。あんまり気にし

なくて良いからね」

そうして皆で一ヶ所に固まった。

「じゃあ行くよ。『転移』」

転移した先は、俺達の実家近くにあった森の中。その森の中を流れる川のほとりに転移した。懐かしい場所だしバーベキューには最適だと思ったのだ。

そう、今日やるのは皆でバーベキュー！　めちゃくちゃ気合いを入れて準備したから、楽しんでもらえたら嬉しいな。

「うわぁ、森の中だ！」

「久しぶりだな」

「すっげぇ久しぶり！　やっぱり中心街もいいけど森の中も良いな」

マリー、ニコラ、ルークは凄く喜んでくれているようだ。中心街にいると森に行くこともないし自然と触れ合うことが極端に減るから、こういう場所に来たくなるんだよね。喜んでもらえて良かった。

「あら、懐かしいわね。空気が澄んでいるわ」

「本当だね」

母さんと父さんはそう笑い合っている。

「レ、レオン！　ここは前の家の近くにあった森か！？」　「そうだよ」

「転移って本当にすげぇな……」

「本当ね。こんなところまで一瞬で来れるだなんて」

おじさんとおばさんは転移に驚いているようだ。確かに初めて体験するとそんな反応になるよね。

「お兄ちゃん、何して遊ぶ！？　木苺探すか、お魚釣るか……」

マリーは指折り数えて、今まで森でやってきたことを思い出しているみたい。うん、可愛い。

「今回はね、バーベキューをしようと思ってるんだ」
「バーベキュー？」
「そう。皆でお肉やお野菜を焼いて楽しく食べるんだよ」
「ここでお肉を焼くの！？」
「そうだよ。マリーも準備を手伝ってくれる？」
「うん！　楽しそう！」

喜んでくれて良かった。楽しくなさそうとか言われたら本格的に落ち込むところだったよ。

「ここで料理をして食べるのか。面白いな」
「楽しそうだぜ！」
「でもレオン、なんの準備もしてないわよ？」
「大丈夫！　俺が全部準備してきたんだ」

このバーベキューのために色々と材料や必要なものは仕入れてある。その準備も結構楽しかったんだよね。ついつい買いすぎたから、多分三回はバーベキューできると思う。

「じゃあまずは火をおこして、その周りに石を綺麗に並べてこの網が乗るようにしてね」

俺はそう説明をしながら、アイテムボックスの中から網を取り出した。この網は俺が土魔法で作ったものだ。

「それから今日は薪じゃなくてこれを使うから」

「これって……炭じゃないか！？　使って良いのかい！」

「う、うん。もちろんだよ」

父さんが凄い勢いで食い付いてきた。この世界の炭って高級品の部類に入るから、平民はほとんど使うことができないんだ。今回はバーベキューと言ったら炭焼きでしょってことで、大量に買ってきた。

でも火魔法の魔法具でコンロを作り出したから、そのうち炭も安くなって平民でも手に入るようになるんじゃないかな。というか父さんはいつでも手に入るんだけどね。もう大公家の人間になったんだから。

「じゃあ父さんが火をおこすよ！」

「ありがとう。じゃあ大人数だから三ヶ所ぐらいで火をおこそうか。後二ヶ所はおじさんとロジェにお願いしても良い？」

俺の家族とおじさん達家族、それから使用人一同って感じの分け方で良いだろう。今日は使用人の皆も一緒に楽しんでもらうって決めたのだ。最初皆は遠慮してたけど、皆で楽しんだ方が家族も喜ぶって言ったら頷いてくれた。

「おうっ、任せとけ！　ニコラが火魔法使えるからな」

「かしこまりました。お任せください」

じゃあ皆が火をおこしてくれている間に、俺は机や椅子を準備しておこうかな。
まずはこの辺一帯の小石をアイテムボックスに仕舞って、土が剥き出しになったところを土魔法で固めて平にする。そして平にしたところに、アイテムボックスに入れてある机と椅子を並べていく。

後は取り皿用のお皿やコップを出して、さらにカトラリーに塩やハーブなどの調味料も出しておこう。もうお肉も出して良いかな？
今は寒いし大丈夫だよね。

串に刺した鶏肉と牛肉に豚肉、それから薄切りにしたお肉や厚切りのステーキ肉も用意した。後は野菜も出しておいて、それからパンや飲み物も。

うん、とりあえず完璧かな。他にも色々あるけどまずはこのぐらいで良いだろう。あっ、後あれも準備しよう。その名もガーリックバター！

日本でバーベキューした時に、アルミホイルの中でバターを溶かして少しオリーブオイルを入れて、さらにスライスニンニクを入れたソースを作ってたのを思い出したのだ。あれならこの世界でも再現できると思って材料は揃えてきてある。
アルミホイルはないから小さな鉄鍋で作ってみれば良いよね。

「お兄ちゃん凄いね！！　たくさんのお野菜とお肉があるよ！」
「いっぱいあると嬉しくなるよね」
「うん！　楽しいなぁ～」

マリーが楽しいって笑ってくれるだけで準備した甲斐があったよ。

302、バーベキュー　後編

「マリー、火はついた？」
「うん！　父さんが完璧だって言ってたよ」
「じゃあお肉を持って行こうか、早速焼き始めよう。あとお野菜も」
「はーい！」
「ニコラとルークも野菜とお肉持っていって良いよ～。ロジェ達も自由に食べてね！　焼いた肉と野菜は塩とかハーブとか色々あるからそれ付けて食べて。後これからガーリックバターを作るからそれも試してみてね」

皆の方にそう呼びかけると、ニコラとルークがすぐに駆け寄ってくる。

「うわぁ、すげぇな！」
「こんなにたくさんの肉が並んでいるのは壮観だな」

二人の瞳は輝いていて楽しそうだ。

「好きなお肉を持っていって良いからね。ここに出てるのが終わってもまだまだあるし」
「じゃあ俺はこの牛串が良い！」
「おじさん達の分も持っていってあげて」
「それならこっちの鶏肉も持っていくぜ。父ちゃんは鶏肉が好きなんだ」
「母さんは豚肉だな。野菜も持っていこう」

二人は楽しそうな笑みを浮かべながらあれもこれもと欲張って、

最終的には両手で持ちきれないほどの食材をお皿に乗せて持っていった。

「レオン様、私達までいただいても良いのでしょうか」

そんな二人の様子を横目に見ながら、ロジェがお肉と野菜を前に困惑した表情で立ち尽くしている。

「まだ遠慮してるの？　今日は良いんだよ。自由に食べて楽しんで」
「ですが……」
「俺はロジェも一緒に楽しんでくれたら嬉しいと思ってるんだけど、ロジェは嫌？」
「い、いえ、そういうわけでは……」

珍しくロジェがちょっと焦ってる。俺は久しぶりにロジェの新たな表情が見れて嬉しくなった。

「じゃあ一緒に食べようよ。ロジェは何が好きなの？　牛肉と豚肉、鶏肉、野菜と色々あるけど」
「……自分の好みを考えたことがありませんでした。食事は出されたものをいただくだけでしたので」
「そうなの？」
「はい。レオン様のお好みならわかるのですが……」

いやいや、俺の好みが分かって自分の好みが分からないって。じゃあ今回はロジェの好きな食べ物を見つけよう。

「それならロジェは端から一つずつ食べてみれば良いよ。それで一番美味しかったやつを教えてね」
「……かしこまりました。頑張ってみます」

頑張ることじゃないんだけどな……でもまあいっか。これでロジェの好きなものが見つかるなら。

「楽しみにしてる。ローランも好きなやつを持っていってね。他の皆にも伝えて」

「かしこまりました！」

そうして皆と話して家族のところに戻ると、既に肉を焼き始めているところだった。

「どう、上手く焼けてる？」

「焼けてるよ。それにしても良い肉だね」

「ちょっと奮発したんだ」

お肉は良い部位を買ったから結構なお値段がしたけど、その分めちゃくちゃ美味しそうだ。

「レオンありがとう」

「気にしないで。あっそうだ、端のところでガーリックバターを作っても良い？」

「さっきもそれ言ってたわね。何なの？」

「お肉をつけると美味しいソースみたいな感じかな。とりあえず作ってみるよ」

俺はアイテムボックスから鉄鍋を取り出して、それを網の上に乗せた。そして中にバターの塊を贅沢に入れる。

「えっ……レオン！　なんて勿体ない使い方をするの！」

すると母さんが鍋に入れられたバターを凝視してそう叫んだ。確かにバターは安くないし、こんな使い方は普通しないか。
でも母さんだって貴族になったんだから、バターぐらいいくらでも買えるのに。まあ庶民思考が抜けないのはよく分かるけどね……俺もまだ抜け切ってないから。

「これはこのバターが大切なんだ。ここにニンニクのスライスとオリーブオイルを入れて、火にかけると美味しいソースになるんだよ」
「……これが美味しいのかしら？」
「お肉に合うと思うから焼けたら付けてみて。じゃあ皆のところにも行ってくるね」

あっ、待って、このソースって硬めのパンにつけたら絶対に美味しいはずだ。焼いたパンをこのソースにつけたら……完全にガーリックトーストだよね。
それもやろう。やばい、よだれ出てくる。

「母さん、このパンをスライスして少し焼いておいてくれない？多分このソースに合うと思う」
「分かったわ」

俺は最後にパンを手渡して、一度家族の元を離れた。そしてまずはおじさん達のところに向かう。マリーも一緒に行くみたいだ。

「おじさん、上手く焼けてる？」
「ああ、良い感じだ。このバーベキューって言ったか？　すげぇ贅沢だな」
「頑張って準備したんだ。楽しんでもらえたら嬉しいよ」
「すげぇ楽しいぞ」

おじさんはそう言って、いつものように俺の頭をガシガシと撫でてくれた。この遠慮のない感じが嬉しい。

「マリー、この肉は俺が焼いたんだ。食べるか？」
「良いの？　食べる！」

ルークはマリーに自分の焼いた肉を勧めている。なんかルークが健気でどんどん可愛く見えてきてるんだよね……最初は断固反対の立場だったのに、だんだんとルークを応援したくなっている。

「レオン、さっき言ってたガーリックバターって何だ？」
「あっそうそう、それを作りに来たんだ。ニコラ、そこのお肉ちょっと寄せられる？　端に小さい鉄鍋を置けるようにして欲しいんだ」
「分かった。これで良いか？」
「うん、ありがとう」

さっき母さん達にしたのと同じように説明しつつガーリックバターを作ると、おじさん達は全員で溶けていくバターを凝視している。やっぱり勿体ないって思ってるんだろうな。

「レオン、バターをこんな使い方するのにも驚いたけど、このスライスニンニクって何だ？」
「あれ、ニンニクって食べたことない？」
「聞いたこともない」

そういえばニンニクって最近流行り出したんだっけ。まだ貴族の間でぐらいしか流行ってないのかも。確かにニンニクって他の野菜とかより高いし、平民には手が出ないのかな……

「ニンニクは野菜というか、ハーブとかの香辛料、調味料みたいな

ものかな。それを入れるだけで料理が美味しくなるんだ。例えばステーキを焼く時にニンニクと一緒に焼くと風味が出て美味しくなるとか」
「へぇ～そんなのがあるんだな」
「美味しいから試してみて。あとこのパン、スライスして焼いてガーリックバターにつけたら美味しいと思うからやってみて」
「分かった。ありがとな」
「うん！　じゃあ楽しんでね」

マリーはルークと楽しそうに肉を焼いていたので、俺は一人でロジェ達の下に向かった。

「皆楽しんでる？」
「はい！　バーベキューとは新鮮で良いですね。とても楽しいです」

そう答えてくれたのはローランだ。皆の表情がいつもより緩んでいて楽しんでいるのが伝わってくる。俺達がいるから完全に気は抜けないだろうけど、少しでも楽しめてるなら良かった。

「遠慮せずに楽しんでたくさん食べてね」
「ありがたくいただきます」
「うん。じゃあここでもガーリックバターを作るね。ロジェ、ちょっと端の野菜を避けてくれる？」
「かしこまりました」

そうして本日三度目のガーリックバターを作ると、ここにいる皆は貴族出身の騎士や公爵家でずっと働いていた使用人なので、バターの使い方やニンニクに驚くことはなかった。しかしその組み合わせに興味津々だ。

「これで美味しいものになるのですね。興味深いです。今まで実家でも食べたことがありません」

そう口にしたのはマリーの護衛であるニコールだ。

「俺が考えたからまだ他にはないと思うよ。でもニンニクとバターは料理に使うでしょ？　美味しいものと美味しいものを掛け合わせたら美味しくならないわけがないから、これも美味しいはず！」

俺がこの世界で色々と試行錯誤して辿り着いた結論だ。とりあえず美味しいものを組み合わせれば余程のことがない限り美味しくなる。

「確かにそうですね。では試してみます」

「うん、皆も食べてみてね。あとロジェ、このパンもスライスして焼いて食べて。ソースにつけたら美味しいと思うから」

「かしこまりました」

「じゃあ楽しんでねー」

そうして皆のところを周り家族の下に戻ると、お肉は続々と焼けていてバターもかなり溶けたみたいだ。凄く美味しそうな匂いが漂ってくる。ニンニクとバターって暴力的な匂いだよね。

「美味しそうだね」

「凄く良い匂いだよ。この肉はもう焼けたから食べるかい？」

「うん、ありがと！」

俺は父さんから牛串を受け取った。まずはやっぱり塩かな。う～ん、何これ美味しすぎる！　炭火焼きの香りが鼻に抜けて最高だし、牛肉の旨味たっぷりな肉汁が口の中に広がって幸せを感じられる。

そして最後には塩味が油をさっぱりとさせてくれて……とにかく美味すぎる。

よしっ、次はガーリックバターだ。俺は肉にたっぷりとソースをつけて、ガブっと豪快に一口食べた。

「美味っ！　これ凄いよ！」
「それほどかい？」
「うん！　父さん達も食べてみて、早く早く！」
「じゃあ食べてみようかな……」

父さんと母さん、マリーもガーリックバターを少し付けてお肉を口にした。すると三人が驚愕に目を見開き、咀嚼するごとに顔を綻ばせる。

「あらやだ、何でこんなに美味しいのかしら」
「これは……凄いね」
「お兄ちゃん、これ美味しい！！」
「だよね！　大成功だよ」

記憶にある味とほとんど変わらない。美味すぎていくらでも食べられそうだ。

「父さんもっと肉を焼こう！」
「分かったよ。ちょっと待って」

――それからは肉を食べて野菜を食べてパンを食べてと、最高に美味しくて楽しいバーベキューを満喫した。

使用人や護衛の皆とも前よりは仲良くなれた気がするし、家族皆とおじさん達も楽しんでくれたようで本当に良かった。そして俺も楽しかった！

３０３、家族への説明

「レオン、急に話があるってどうしたの？」
「また何かあったのかい？」

ここは公爵家の俺の部屋だ。夕食を食べ終わった後に、話があると家族皆を呼んだ。

「うん。実は使徒としての仕事のことで話さないといけないことがあって、まずはソファーに座ってよ」
「分かったわ」

実はまだ家族皆には、俺が魔物の森に行くことを伝えていないのだ。最近は色々あって皆も大変だったから、少し落ち着いたら話そうと思って今になってしまった。

平民の間にも使徒のことが少しずつ広まって来ているので、近いうちに使徒と三人の騎士が魔物の森に行くという情報を大々的に公布する。だからその情報が出る前に、家族皆には俺から伝えようと思ったのだ。

「お兄ちゃん、大丈夫？」
「うん、大丈夫だよ。マリーもお話聞いてくれる？」
「もちろん！」
「ありがとね」
「それで何の話なの？」
「……皆はさ、魔物の森のことは知ってるよね？」

魔物の森のことは平民にも公布したから皆も知ってるはずだ。

「ええ、知ってるわよ。魔法を使う怖い動物や植物がたくさんいる森で、このままだと人間が住む場所が全て飲み込まれてしまうのよね？　でも騎士の方々が抑えてくれているから、皆で力を合わせて対抗すれば大丈夫だって話だったはずだけど」

「うん。でも実はその魔物の森の勢いが予想よりも強いんだ」

「それじゃあ、私達が住む場所も飲み込まれてしまうってこと……？」

母さんが一気に顔色を悪くしてそう呟く。そうならないために俺が頑張らないと。

「何もしなければそうなるかもしれないけど、心配はいらないよ。魔物の森の勢いを抑える方法が分かったんだ。でもその方法を実行するには魔物の森の一番奥まで行かないといけなくて、俺は使徒で強いから俺が行くことになった」

俺がそこまでを口にすると、母さんと父さんは深刻な表情を浮かべる。マリーも暗い雰囲気が伝わっているのか不安そうだ。

「レオンが、危険なところに行くのね」

「うん。でも俺が行かないとこの国が危険になるから、頑張ってくるよ」

俺はもう自分の中では魔物の森に行くことは決めていたので、決意を込めて母さんと父さんとマリーにそう告げる。すると母さんと父さんは少しだけ表情を緩めてくれる。

「もう決めているのね」

「この国を助けたいんだ。大切な人達がたくさんいるから」
「そうか。……心配だけど、父さんはレオンを応援するよ」
「母さんもよ。本当は危険なところに行ってほしくないけど、レオンの決意は応援するわ。……絶対に元気に帰ってくるのよ。それだけは約束して」

母さんは瞳を潤ませながら静かにそう言った。

「うん。約束するよ」

絶対に皆で怪我なく帰ってこよう。そのために全力を尽くそう。

「それなら良いわ。……頑張るのよ」

母さんはそこまで言うと立ち上がり、俺のことをぎゅっと抱きしめてくれた。母さんに抱きしめられたのは久しぶりだけど、やっぱり落ち着くな……

「お兄ちゃんは、危険なところに行くの……？」

不安げに俺達の話を聞いていたマリーが、ポツリとそう呟く。

「そうなんだ。この国が大変だから助けに行くんだよ」
「……ちゃんと、帰ってくる？」
「うん。ちゃんとマリーのところに戻ってくるよ」
「いなくなっちゃわない？」
「いなくならないよ。ほら、おいで」

マリーがあまりにも寂しそうだったので腕を広げてマリーを呼ぶと、マリーは俺の腕の中に飛び込んできた。そしてギュッとしがみ

ついてくる。

「じゃあお兄ちゃんが帰って来たら、またバーベキューしよう？」
「そうだね。またしようか」
「今度はお肉をもっとたくさんだよ。甘いものも食べたいよ」
「じゃあ今度はお肉いっぱいのバーベキューで、デザートも準備しようね」
「ジュースも飲みたい」
「いろんな種類のフルーツジュースを準備しておくよ。マリーは何が一番好き？」
「……リンゴ」
「じゃあリンゴジュースを沢山準備しないとね」
「後は……釣りもしたい」
「釣り楽しいよね。釣った魚もその場で焼いて食べようか」
「……うん。絶対、約束だよ」

マリーは約束をすればその分俺が安全に帰ってくると思ったのか、たくさんの約束を口にした。そんなマリーの様子を見ていると何だか俺まで泣きそうになってくる。
絶対に元気で帰ってこよう。マリーの涙を拭いながら改めてそう誓った。

「じゃあここからは楽しいお話をしようか」
俺は暗くなった部屋の雰囲気を変えるために、意図して明るい声を出す。
「何のお話？」

俺の腕の中にいたマリーも少し期待した顔で見上げてきた。
「そうだね……じゃあお洋服のお話をしようか。マリーも新しいお洋服を沢山作るんだよ」
家族皆の服装はとりあえずサイズが合う中古服で間に合わせてるんだけど、大公家の人間になるんだししっかりとした服を作らないといけない。
まだ公には顔を明かしてないし外に出ることもないからいらなかったけど、早めに作らないとね。公爵家に仕立て屋を呼んでもらわないと。
「私の新しいお洋服！？」
おお、マリーが一気に元気になった。やっぱり女の子だからなのか新しい服が好きみたいだ。
「そうだよ。沢山作ろうね」
「でもこの前いっぱいもらったよ？」
「あれも可愛いけど、もっと可愛くて豪華なお洋服を沢山作るんだ」
「あれよりも？」
中古服とはいえかなりの高級店で買ったから、マリーからしたら今着てる服も十分豪華なんだろう。でも大公家の娘としては全然だ。
「もちろん」
「やったー！」
「ふふっ、良かった。後は装飾品も買わないとね。もちろん母さんと父さんもだよ」
「やっぱりそうなのね……今のお洋服で十分なのだけど」

「この服は凄く上等だよね。父さんはこの服でも着ていると緊張するよ」

母さんと父さんは今着ている服にも慣れない様子だ。確かに今までの服と比べたら値段も天と地ほどの差があるからね。でも多分大公家の人間として作る服装は、その今着てる服とまた天と地ほどの差があると思うな……

皆には値段は教えないことにしよう。

「あんまり気にしないで。お金はあるんだし」

「それでもやっぱり気になるのよね。レオンはお金を気にせず何でも買って良いと言ってくれるけど、今までの感覚は抜けないのよ……」

この国の貴族の資産は基本的に領地からの収入なんだけど、それ以外にも毎年王家から俸給が支払われる。大公家にも例外なく支払われているので、お金は十分にあるのだ。

さらに今後は分けようと思ってるけど、今のところは俺の資産もイコール大公家の資産のようなものだし、お店が始まればその利益も大公家を潤すだろうし、お金の心配は全くいらない。

まあでも、感覚が変わらないっていうのはよく分かる。俺もいまだに日本での庶民感覚と、この世界の実家での貧しい感覚が抜けきらないから。

「まあ段々と慣れていってくれれば良いよ」

「そうね、そうするわ」

「父さんも段々と慣れるように努力するよ。……まずは貴重な調味料を沢山使えるところからかな」

「確かにそれにもまだ慣れないわ」

「調味料？」
「ええ、公爵家の厨房を借りてたまに料理をするんだけど、砂糖とか蜂蜜とか、後はいくつかの香辛料とか。高くてとてもじゃないけど使えなかったものが、普通に渡されるから驚くのよ」
確かにその辺にもギャップがあるのか……平民は基本的に塩しか使わないことが多いからね。
「確かにまずは身近なとこからだね」
そうしてそれからは、家族皆と平民としての暮らしと公爵家での暮らしの違いについてで盛り上がった。そして時間も遅くなって来たので今日の話し合いは終わりとなり、皆はそれぞれの部屋へと戻っていった。

３０４、マルティーヌとのお茶会

今日はかなり久しぶりに、マルティーヌと二人きりでお茶会をする予定がある。仕事の合間などに少しずつ会ってはいたんだけど、婚約してからはお互いに忙しくてゆっくり話す機会がなかったので、魔物の森に行く前に一度時間を作ろうって話になったのだ。

なので今日は朝からロジェが張り切っている。いつもより上等な服装に装飾品、念入りに髪型も整えられたし、いつもより三割り増しぐらいでキラキラしている気がする。

「ロジェ、もっと普通で良いんだけど……」
「いえ、王女殿下にお会いになるのですからこれぐらいはしなければ」
「でも、普段からたまに会ってるよ？」
「それと正式に約束をしてのお茶会は違います」
「そういうもの……？」
「はい」

……まあ良いか。ロジェに任せておこう。
ロジェは前から俺の服装をその場面に合わせて最適なものを選んでくれてたんだけど、最近は何だか俺を飾り立てるのにハマってる感じなんだよね。

あの魔人、クドゥフェーニとの戦いで俺の服や装飾品が全てダメになって新調してから、ロジェは今までよりも念入りに服や装飾品を整えて保管するようになった。
何かがきっかけでロジェのやる気に火をつけたみたいなんだけど、

ロジェの好きなものが増えるのは俺も嬉しいので指摘せずに任せている。
実際必要以上にゴテゴテに飾られるとかは全くなくて、俺の立場や場面に相応しく完璧に仕上げてくれるので、全く文句はない。

「お待たせいたしました」

ロジェが服装の乱れを最終チェックし、少しだけ満足げに頷いてからそう頭を下げた。

「ありがとう。ねぇロジェ、従者を増やすとしたらどんな人が良い？　経験豊富な人とか、経験はないけどやる気はある人とか、そういう感じで要望はある？」

俺の従者は今のところロジェだけだけど、流石に大公として少なすぎるので後二人は増やそうと思っている。ロジェも休みを取れるようにしてあげたいし。

「そうですね……まず第一条件は、レオン様をしっかりと敬えること。上辺だけではなく心からです。そこさえクリアしていればどんな人物でも問題ありません。しかし欲を言えば、あまり経験がない方がレオン様や私のやり方を受け入れやすいと思います」

その第一条件は確かに大切だけど……一番難しい条件でもあるな。でもできる限り探してみよう。

「分かった。じゃあ今の条件を前提に探してみるね。とりあえず二人で良い？」
「はい。教育も大変ですのでとりあえずは二人ほどがありがたいです。しかしその二人が使えるようになれば、あと数人は増やしても

良いかと思います」
「そんなに必要……？」
「これからレオン様はさまざまな雑務に追われることが予想されます。経理やお店経営のことは文官に、屋敷に関わることは執事にと仕事を振ることになるかと思いますが、それ以外の細かい雑務などは従者に振るのが一番楽かと思われます。よって五人ほどいると便利かと」

確かにどこに頼めば良いのか明確でない仕事とかは、従者に頼んで上手く采配してもらえたらありがたいよね。職種を横断するような仕事では、調整役とかもやってもらえるとありがたいし。実際にロジェは今でもやってくれている。
そう考えたら五人ぐらいは必要なのかな。交代で休憩や休みを取ってもらうことも考えると……必要だな。

「確かに必要だね。じゃあまずは二人、それから時期を見てまた二人追加しようか」
「よろしくお願いいたします」
「うん。魔物の森から帰って来てからでも良い？」
「はい。やはりレオン様がいらっしゃらなければ、雰囲気も掴めず教育もしづらいので」
「分かった。じゃあ帰って来たら雇おう」

最終的にはそう決めてロジェの方を向いて笑いかけると、ロジェは俺の顔をじっと見つめて来た。そして少しだけ沈黙が場を支配した後に口を開く。
「……レオン様、魔物の森からのご無事のご帰還、お待ちしております」

そして深く頭を下げた。やっぱりロジェにも心配かけてるんだな……でも心配してくれるのが嬉しい。

「うん。無事に帰ってくるから、その間のことはよろしくね」
「かしこまりました」
「よしっ、じゃあ行こうかな。もう馬車は準備できてる？」

俺は少しだけ暗くなった雰囲気を変えるように話題を変えた。するとロジェもすっかりいつも通りに戻って答えてくれる。

「既に準備できております。ではエントランスまでお願いいたします」
「うん。行こうか」

そうして俺は馬車に乗って王宮に向かった。いつもは執務室がある王宮の中央宮殿に向かうんだけど、今日の行き先は王族の居住スペースである北宮殿だ。

そこの中庭にある東屋で今日のお茶会は行われるらしい。従者も護衛も声が聞こえないほど遠くまで下がらせて二人きりだ。本当に久しぶりだよね。

王宮に着くとマルティーヌのメイドさんが出迎えに来てくれて、東屋まで案内される。

「レオン！　今日は来てくれてありがとう。嬉しいわ」

東屋まで向かうと、既に席に着いて待っていたマルティーヌが笑顔で出迎えてくれた。

「マルティーヌ、今日は招待ありがとう」
「ええ、今日は楽しみましょう」

俺はロジェが引いてくれた椅子に優雅に座った。机の上には既にたくさんの食事やスイーツが並べられている。

「ロジェ、ローラン、下がっててね」
「かしこまりました」
「はっ！」
「あなたたちも下がってなさい」
「かしこまりました」

お互いの従者や護衛を下がらせると完全に二人きりだ。いや、東屋なので遠くからこちらを見ている皆はいるんだけど、声は聞こえない距離だから二人きりのようなものだ。まだ婚約者の立場では部屋で二人きりとかは許されないんだよね。

「こうしてお茶会をするのは本当に久しぶりね。王立学校に入学する前以来かしら？」
「多分そうだよ。もう一年も経っているなんて、時が経つのは早いなぁ」

でもこの一年で本当にいろんなことがあった。もう一年なのかまだ一年なのか。

「本当ね。それにしても一年で色々変わったわよね。あの頃はレオンが使徒様だなんて思っていなかったわ」
「俺も思ってなかったよ。本当に俺が一番驚いてるんだ」
「ふふっ、レオンはずっと否定していたものね」
「そうなんだよ……今となってはちょっと恥ずかしい」

全てはミシュリーヌ様のせいなんだよ。もう責めるつもりはないけど。

「そういえば私、ずっと気になっていたことがあったの。聞いても良い？」

「もちろん」

「ありがとう。……レオンは別の世界で生きた記憶があるのよね？」

「そうだよ」

「もしかして使徒様って、別の世界から来た人のことなのかしら？それがずっと気になっていて……」

マルティーヌは少しだけ聞きづらそうにそう言った。確かに今までの話を合わせたらそこ気になるよね。

「実はそうみたいなんだ。前の使徒様も、俺と同じ場所から転生した人だったみたい」

「やっぱりそうだったのね！　やっとスッキリしたわ」

「あのマルティーヌ、俺は使徒だってことはもう公にしてるけど、別の世界から来たってことだけはずっと明かさないようにしようと思ってるんだ。どうしても家族にそのことを知られたくなくて……だから、秘密にしてくれる？」

もし俺に家族がいなかったらいくらでも公表して良いんだけど、俺には大切な家族がいる。家族の気持ちを考えたらずっと秘密にしておいた方が良いと思ったのだ。世の中には秘密にしておいた方が良いこともあるよね。

「分かっているわ。この話はレオンと私が二人きりの時だけにしましょう。別の人生を生きた記憶があると聞いたら、レオンのご両親

は複雑に感じるものね……」

マルティーヌはそう言って少しだけ寂しそうな顔をする。マルティーヌは俺の心の中を読めるんじゃないかって言うほど、その時に欲しい言葉をくれるんだよな……

その度にマルティーヌのことが好きになる。

「うん。ありがとう」

「お礼を言われることじゃないわ。私はレオンの前の世界の話もいくらでも聞くから、遠慮せずに話してね。たまには話したくなることもあるでしょう？」

「……うん。じゃあその時はマルティーヌに話すよ。長い話になるかもしれないけど」

「いくらでも聞くわ。楽しみね」

そう言って笑ったマルティーヌの笑顔に見惚れる。本当に好きだなぁと、心から思う。

「そういえば前の世界にあった服や装飾品の話をしてくれるって約束だったわよね。是非聞きたいわ！」

うっ、マジか……その話は苦手分野だ。でもマルティーヌが楽しそうだから頑張って話したくなる。なんとか記憶を探って雰囲気だけでも話そう。

「俺の前の世界の服は、本当に自由だったんだ。世の中にはさまざまなデザインの服が溢れていて、誰がどんな服装をしても良かった。この世界にない服と言ったら……例えばミニスカートとか」

「ミニスカート？」

「そう。膝上二十センチぐらいまでの長さしかないスカートとか、

履いてる人結構いたよ」
「な、え、それって、それで外を出歩くの……？」
マルティーヌは衝撃を受けているみたいだ。この世界って膝を出すことはないからね。特に貴族女性は素肌をあまり見せない。スカートは足首までを隠す長さが普通だし。
「それで出歩くんだよ」
「な、な、なんて恥ずかしいの……」
「でもそれが普通だったから、誰も恥ずかしく感じてなかったんだよね」
本当に文化って面白いよね。ある国ではめちゃくちゃ恥ずかしいことでも、ある国ではごく当たり前のことだったりするんだから。
「そうなのね……驚きだわ。他には何か面白い服はあったのかしら？」
マルティーヌの瞳が輝いている。この話をかなり気に入ってくれたみたいだな。
――それから数時間、マルティーヌとさまざまな話をした。いつまで話しても話が途絶えることも尽きることもなく、本当に楽しい時間になった。
これからもずっとマルティーヌとこうして生きていけるなんて幸せだな。改めてそう思った。

３０５、アルテュルの弟妹

平民にも使徒様が魔物の森に行くという事実が大々的に公開されて、ついに俺達が出立する日時も正確に決まった。
今日からちょうど一週間後の火の日だ。出立までの一週間は仕事を休んでも良いと言われたけれど、俺はいつも通りに仕事をすることを選んだ。その方が落ち着くからね。

そして今日はかなり大事な仕事がある。実は今日の午前中に、アルテュルの弟妹が王都にやってくるのだ。
俺は午後に二人を引き取り、そのまま従業員寮に連れて行く予定だ。アルテュルにも既に連絡をしていて、今日の昼頃に中心街の広場に乗合馬車で到着するらしい。

「レオン様、昼頃に中心街の入り口広場へ公爵家の馬車を一台手配しておきました」
「ありがとう」

アルテュルには、公爵家の馬車を手配しておくからそれに乗って従業員寮に向かうように伝えてある。ロニーとアンヌにもちゃんと伝えてあるから大丈夫だろう。
今日は本当は王立学校がある日なんだけど、ロニーは学校を休んで寮にいてくれるらしい。本当にありがたいよね。

「じゃあ俺も王宮に行こうかな。今日は午後から仕事ができないから、早めに行って仕事を進めたいし」
「かしこまりました」

そうして俺はいつもより少し早めに執務室へ向かった。今日はリシャール様とは別の馬車だ。というよりも、最近は時間が合わないことが多くて別の馬車で仕事に向かうことが多い。

「アレクシス様、おはようございます」

執務室に入ると既に何人かの文官が仕事を始めていた。

「レオンおはよう。今日は早いな」
「今日は午前中しか仕事ができないので早めに来ました」
「そうか、アルテュルの弟妹を引き取るのだったな」
「その予定です。……もう王都に着いているのでしょうか？」
「ああ、先ほど連絡があった。そろそろ王宮にも着いただろう」

そうなのか……じゃあこれからアルテュルの弟妹は、母親や使用人と引き離されることになるんだな。そしてアルテュルの弟妹以外は、そのうちに処刑や重い罰を受けることになるのだろう。

……そう考えると悲しいし辛いしやりきれない。でもその決定に異を唱えることはしないと決めたんだし、俺ができることは二人をアルテュルの下に連れて行ってあげることだけだ。

「では二人を引き取ることができるようになりましたら、教えていただければと思います」
「ああ、分かった」
「よろしくお願いいたします」

アレクシス様にそうお願いをして、俺はいつものように自分の机に座り仕事を開始した。今日はふとした時に思考が暗い方に行って

しまうので、とにかく仕事に熱中した。そのおかげでかなり仕事が捗ったよ。

「レオン、アルテュルの弟妹を引き渡す準備ができたそうだ」

そろそろ昼の鐘が鳴るか鳴らないかくらいの時間に、アレクシス様がそう声をかけてくれた。予想より早かったな。

「早いですね」

「まだ話を聞けるような年齢でもないからな」

「確かにそうですね。……ではアレクシス様、本日はここで失礼しても良いでしょうか？」

「ああ、もちろん構わない。また明日もよろしく頼む」

「かしこまりました。また明日も参ります」

そうして俺は執務室を後にして、王宮の使用人に案内されてアルテュルの弟妹のところに向かった。

二人がいたのは王宮の応接室だ。二歳半だという弟は不安そうにソファーに座っていて、まだ一歳にもなっていない妹はお兄ちゃんにしがみついて泣いていた。

本当に幼い子達だ……こんなに小さな頃に親を失うなんて、どれだけ辛いのだろうか。もちろん悪いことをしたから仕方がないんだけど、この子達に罪はないのに……

俺は部屋に入ると二人のソファーまで向かい、二人の前にしゃがんで目線を合わせた。

「こんにちは。俺はレオンって言うんだ。君たちの名前を教えてく

れる？　名前わかるかな？」
「……だれ？」
「俺は君達を引き取る人だよ。これから君達は俺のもとで暮らすんだ」
「……ピエリック。なまえ」

弟の方が名前を答えてくれた。この子も不安で泣きたいだろうに、ギュッと拳を握り締めて泣くのを我慢しているみたいだ。二歳半だと貴族って教育が始まってるのかな？　少しは今の現状を理解しているのだろうか。

「妹さんのお名前はわかる？」
「……ヴァレリア」
「ピエリックとヴァレリアか。良い名前だね」

そう笑いかけてもピエリックは不安げに瞳を揺らし、ヴァレリアは泣き続けている。

「君たちが何でここにいるのかは分かる？」
「よくわかんない。でも、わるいことをしたから、もういっしょにいられないって、ははうえが……」

ピエリックはそこまで話すと涙を堪えきれなくなったのか泣き始めてしまった。大きな瞳からボロボロ涙が溢れていく。
……やばい、俺が泣きそうになる。

「そっか」
「ひっ……ひっく、おにい、ちゃん、もう、ははうえとは、会えないの？」
「……うん。もう会えないんだ。君たちのお母さんはお空にいっち

ゃうんだよ。だから、これからはお兄ちゃんと暮らそうね」
「な、なんで……ははうえ……」
そこまで話をすると、ピエリックは本格的に泣き出してしまった。それに釣られてヴァレリアも激しく泣き始める。
「うわぁぁぁぁん」
……どうしよう。こうなるんだろうなとは思ってたんだけど、実際に目の当たりにすると可哀想で辛い。
――それからしばらくは、二人の背中を撫で続けて少し落ち着くまでひたすら待った。すると途中でヴァレリアは泣き疲れたのか寝てしまって、ヴァレリアが泣き止んだことでピエリックも少し落ち着いたみたいだ。
「ピエリック、アルテュルのことは覚えてる？　君のお兄さんなんだけど……何回か会ったことがあると思うんだ」
俺はピエリックが少し落ち着いてきたところでアルテュルの話をしてみることにした。アルテュルは何度か会ったことがあるって言ってたんだ。
「あにうえ？」
「そう。分かる？」
ピエリックはその問いに小さく頷いてくれた。良かった……
「良かった。じゃあこれからお兄さんのところに会いに行こうか」

「……会えるの？」
「うん。お兄さんとはこれからずっと一緒にいられるよ」
「ほんとう？」
「本当」
「……会いたい」
「よしっ、じゃあお兄ちゃんと一緒に馬車に乗ってくれる？」
「うん」

良かった。とりあえずアルテュルに会えば少しは落ち着くだろうし、従業員寮に行けば乳母さんもいる。早めに移動した方が良いな。

「ロジェ、ヴァレリアを抱いてあげてくれる？」
「かしこまりました」
「ピエリックは自分で歩けるかな？」
「うん。歩ける」
「よしっ、じゃあ馬車まで行こうか」

そうして俺は二人を連れて馬車に乗り、従業員寮に向かった。ヴァレリアは余程疲れたのか、抱き上げても馬車に揺られても起きなかったので、馬車の中は静かな空間となった。

３０６、従業員寮へ

従業員寮に着くと、外にはロニーとアルテュルが出迎えに出てきてくれていた。ロジェがヴァレリアを抱いて、俺はピエリックを連れて馬車から降りる。

「あ、あにうえ～！」

馬車から降りてアルテュルに気づいた途端、ピエリックは小さな体でアルテュルのところへ走りだした。やっぱり数回会っただけでもお兄ちゃんのことは覚えてるんだね。

一人でも頼れる身内がいるだけで全然違うだろう。アルテュルと一緒にいさせてあげられて、本当に良かった。

「ピエリック！」

「ひっぐ……ひっ……は、ははうえが、もう会えないって……うわぁぁぁぁん」

ピエリックはアルテュルに会えたことで安心したのか、アルテュルの足にしがみついて泣き出してしまった。

「ピ、ピエリック。ここでは泣くな。……レオン様、お見苦しいところをお見せして大変申し訳ございません」

「ううん、気にしないで。突然親と引き離されて子供達だけで知らないところに連れてこられたら、不安なのが普通だよ。ヴァレリアはさっきまで泣いてたんだけど泣き疲れて眠ってるんだ。とりあえず二人を休ませてあげようか」

「ありがとうございます」

そうして皆で寮の中に入った。ピエリックとヴァレリアの部屋はしばらくアルテュルと同じ部屋だ。

「もうアルテュルの部屋は整えたの？」

「はい。先程こちらに着きまして、まずは部屋を整えさせていただきました」

「それなら良かった。二人もくつろげるね」

「乳母の方に二人に必要なものも整えていただきましたので、今日から暮らしていくのに問題はないかと思います」

そんな話をしながらアルテュルの部屋に向かうと、部屋の中にはお年を召した優しそうなお婆さんがいた。この人が乳母さんか。誰を雇うのかは完全に任せちゃったから俺は初めて会う。

「レオン・ジャパーニスです。二人の世話をお願いしますね」

「かしこまりました。精一杯努めさせていただきます」

乳母さんは優しく微笑んで挨拶をしてくれた。この人なら問題なさそうだな。

「じゃあアルテュル、二人を寝かせたら食堂に来てくれる？」

ヴァレリアは完全に寝ているし、ピエリックもさっきからかなり眠そうだ。多分横になったらすぐに寝ると思う。

「かしこまりました。すぐに参ります」

「ゆっくりで良いからね」

そうして二人をアルテュルと乳母さんに任せ、俺達は食堂に向か

った。そして席には俺とロニーが座る。

「ロニー今日はありがとう。学校まで休んでくれて」

「もう学校は復習中心だし全然大丈夫だよ。それよりも泣いてて可哀想だったね……」

「……そうなんだ。そうだロニー、アルテュルと少しは話した？」

「うん。最初に来た時に丁寧に挨拶されたよ。何か、別人みたいだったね」

ロニーは少し困惑した表情でそう話す。確かに王立学校にいた時のアルテュルと比べたら別人だよね……それだけお父さんの影響が強かったんだろうけど。

「色々あってアルテュルも変わったから。孤児院にも行ってたし」

「そう。素晴らしい孤児院で得難い経験をさせてもらえたって言ってたよ。院長先生も皆も元気だったって」

「そっか、それなら良かった」

あの孤児院での数週間は、アルテュルにとって良い経験になっただろう。

「そうだ、まだアルテュルに店長になって欲しいって話はしてないんだけど、今日話をしても良い？」

流石にこういう大切なことは面と向かって伝えるべきだろうと思って、手紙に書くのはやめたのだ。

「分かった。じゃあそれで了承してもらえたら、僕は引き継ぎを始めれば良いんだね」

「うん。よろしく」

「了解」

そこまで話したところで、アルテュルが足速に食堂へ戻ってきた。

「アルテュル、二人は大丈夫？」

「はい。二人ともぐっすり寝ましたので、乳母に任せてきました」

「それなら良かった。じゃあ今後の話をしたいから座ってくれるかな」

「良いのでしょうか？　私は立ったままでも構いませんが……」

「ううん、気にしなくて良いよ。座ってる方が話しやすいし」

「かしこまりました。では失礼いたします」

俺とロニーは隣同士で座っていたので、アルテュルは俺の向かいの席に腰掛けた。

「レオン様、改めまして私達を一緒に雇ってくださり、本当にありがとうございます。まだ弟妹は迷惑をかけるばかりでお役に立てないかと思いますので、私が二人の分も働かせていただきます」

「うん。そう思ってくれるのは嬉しいけど、体調を崩したら元も子もないし頑張りすぎないようにね。ピエリックとヴァレリアにだって成長したら働いてもらうから問題ないよ」

「……本当に、ありがとうございます」

なんかアルテュルにここまで感謝されるとちょっとやりづらいというか、調子が狂うな。

「アルテュル、ピエリックとヴァレリアって教育は始まってたのかな？」

「はい。確か二歳になると家庭教師がつきますので、ピエリックは少しは学んでいたかと。ヴァレリアはまだだと思います」

「そっか。じゃあピエリックがここでの生活に慣れたら家庭教師もつけるね。これから先大公家で働いてもらうためにも、教育は受けてもらいたいんだ。それでも良いかな？」
「教育を受けさせていただけるのは本当にありがたいことです。よろしくお願いいたします」
「分かった。じゃあピエリックには落ち着いた頃に、ヴァレリアは二歳になった時に家庭教師をつけよう」

これで二人にはしっかり学んでもらって、大公家で有能な使用人になってもらいたい。大人になってから学んでも成長はするけど、やっぱり子供の頃から学んだ方が定着するし伸びる。それに貴族の子なら頭が良い可能性も高いだろうし。

「それからアルテュルにしてもらいたい仕事の話なんだけど、アルテュルには俺のお店シュガニスの店長として働いてもらいたいと思ってるんだ。どうかな？」
「店長、ですか？」
「そう。あっ、俺のお店のことは知ってる？」
「もちろん存じておりますが、私なんかが店長などという重要な役職についても良いのでしょうか？」
「うん。アルテュルはしっかりと教育を受けてきたから有能だし、俺は店長として頑張って欲しいと思ってる。今の店長はここにいるロニーなんだけど、ロニーには大公家で文官として働いてもらう予定なんだ。だから店長の方はアルテュルに任せたい」

俺がそこまで話をすると、アルテュルは少し不安そうにしながらもしっかりと頷いてくれた。

「……かしこまりました。私に任せていただけるのであれば、精一杯努めさせていただきます」

「アルテュルありがとう。じゃあ引き継ぎはロニーからしてもらってね。でもロニーは王立学校にまだ通ってるから、夕方以降と回復の日に」
「はい。ロニーさん、よろしくお願いいたします」

ロニーさん、確かにそんな呼び方になるのか……なんか違和感。

「ちょっ、ちょっと待ってください。アルテュル様にそう呼ばれるのは……」

ロニーも同じことを思ったらしい。少し慌ててそう言った。

「いえ、私はもう貴族ではなく平民です。ロニーさんは上司となりますのでその呼び方が良いかと……あっ、それともロニー様の方が良いでしょうか？」
「い、いえ、ロニーと呼び捨てで良いです！　平民ならば対等ですし……あっ、なので僕もアルテュルと、呼んでも良いでしょうか？」

ロニーが恐る恐るそう問いかけると、アルテュルは躊躇いなく頷いた。

「もちろんです。私に敬語も敬称も必要ありません。ですが……私も呼び捨てにして良いのでしょうか？」
「もちろんです。じゃあ僕もアルテュルって呼ぶから、アルテュルもロニーって呼んでね。敬語もなしで」
「……良いのですか？」
「うん。アルテュルに敬語を使われるのはなんかむずむずするというか、居心地が悪いから……」
「……分かった。ではロニーと呼ぶ。これからよろしく頼む」
「うん！　よろしくね」

なんとなく二人も上手く行きそうでよかった。アルテュルとロニーは同い年だし、アルテュルが俺に対して態度を崩すことはないだろうから、ロニーと良い友達になってくれたら良いな。

「じゃあそういうことで、これから引き継ぎをよろしくね。俺はしばらく王都を留守にすることになるから、ロニー頼んだよ」

「うん、任せて。アルテュルへの引き継ぎも、二人がここに馴染めるようにも気を配っておくよ。レオンは心配しなくて良いからね」

そう言ってロニーは、頼もしい顔で笑いかけてくれた。本当にロニーは頼りになる。

「ありがとう。よろしくね」

そうしてロニーにアルテュルと弟妹のことを頼み、俺は従業員寮を後にした。これから三人の人生が良い方向に進めば良いな。

３０７、出立前日

遂に今日は出立の前日だ。明日は朝早くから支度をして王宮に行きそこからパレードが始まるので、今日のうちに皆のところに出立の挨拶に回ることになっている。

マルセルさんのところに行き、次にマルティーヌのところ、それから家族皆のところだ。他の人達には今までの一週間で挨拶に行った。まずマルセルさんのところには転移で向かう。

「ロジェ、じゃあマルセルさんのところに行ってくるね。帰ってきたらマルティーヌのところに馬車で向かうから、準備だけはよろしく。お昼ご飯はマルセルさんと食べてくるよ」
「かしこまりました。では準備をしておきます」
「ありがとう」

そうして俺はマルセルさんの工房に転移をした。

「マルセルさん、レオンです」
「おおレオン、久しぶりじゃな」
「はい。忙しくてあまり来られなくてすみません……」
「良いんじゃよ。たまに顔を出してもらえるだけで嬉しいからな。それにこの前マリーちゃんと来てくれたじゃろう？」

マルセルさんはそう言ってでれっと笑った。この前マリーがどうしてもマルセルさんに会いたいと言ったので、護衛と一緒に俺が転移で連れて来たのだ。

「マリーは嬉しそうでしたね。……あのマルセルさん、マリーは慣れない環境に慣れない勉強で少し不安定なところもあるので、たまに会いに行ってもらえませんか？　俺はしばらくマリーの近くにいてあげられないので……」
「そうか……、もう行くのか？」
「はい。明日出立します」
「レオン、この国を頼むぞ。それから絶対に無事に帰ってくるんじゃ」

マルセルさんは真剣な、でも心配しているのを隠しきれていない表情でそう言った。

「はい。まだまだやりたいこともありますし、大切な人もたくさんいます。俺は帰ってきますよ」

絶対とは言えないけど……でも、気持ちでは絶対に帰ってくると決意している。

「そうじゃな。レオンは強いから……大丈夫じゃよな」
「はい。大丈夫です。俺にはミシュリーヌ様もついていますし」
「……そうじゃな。ミシュリーヌ様、レオンをお守りください」

マルセルさんはそう言ってミシュリーヌ様に祈り始めた。マルセルさんって元々信仰心を捨ててなかった貴重な人だから、ミシュリーヌ様の名前を出したら安心できたみたいだ。
マルセルさんには絶対、ミシュリーヌ様の実態はバラさないようにしよう……

「じゃあマルセルさん、暗い話はやめてお昼ご飯を一緒に食べませんか？　お昼を持ってきたんです」

「そうなのか？　確かにレオンと食事を共にするのは久しぶりじゃな」
「ですよね。何が良いですか？　基本的になんでもあります」
「そうじゃな……ステーキが食べたいな」
「おおっ、マルセルさん若いですね。じゃあステーキとパンにしましょう！」

俺はアイテムボックスから、焼き立てで仕舞ったふわふわのパンと、とても良い部位を使っている赤身のステーキを取り出した。

「このステーキは相当良い部位を使ってるな？」
「そうなんです。俺はこの部位が一番好きなんですよね。赤身だけど固くなくて肉の味がしっかりしていて」
「わしも脂が多いと胃もたれするから、このぐらいがちょうど良いわい」
「それなら良かったです。じゃあ食べましょう」

俺はカトラリーや飲み物も取り出して机に並べ、マルセルさんに手渡した。

「ありがとう。じゃあ早速いただくとするかのぉ」
「どうぞ。俺もいただきます」

そうしてマルセルさんとたくさんの話をしながら、とても楽しい昼食を終えた。そして転移で自分の部屋に戻る。

「レオン様、おかえりなさいませ」
「ロジェただいま」

自分の部屋の隅に転移をすると、部屋の中にはロジェが待機して

くれていた。

「馬車の準備はできておりますが、少しお休みになられますか？」

「うーん、疲れてないからこのまま行こうかな」

一度休んでゆっくりしちゃうと出かけるのが嫌になるんだよね。俺は結構面倒くさがりなのだ。

「かしこまりました。では連絡をしてきますので少しお待ちください」

「ありがとう」

すぐにロジェは戻って来て、俺は馬車に乗り王宮へ向かった。王宮に着くと顔パスで中に入れてくれて、すぐにマルティーヌのところへ案内される。

マルティーヌとは約束もしていたけれど、それにしてもスムーズだ。やっぱり使徒と婚約者って立場は凄い。

案内されたのは北宮殿の東屋だった。まだ王立学校入学前に、マルティーヌとはお茶会をした場所だ。

「レオンいらっしゃい」

「マルティーヌ、今日は時間を作ってくれてありがとう。こうして会えることも少なくてごめんね」

「気にしなくても良いわ。レオンが忙しいのは仕方がないことだもの。魔物の森の問題が解決して余裕ができたら、私との時間も確保してね？」

「もちろん」

もっとマルティーヌとの時間を確保したいし、家族皆やマルセル

さんとの時間も確保したい。そのためには魔物の森の問題を解決しないとなんだ。
今回の遠征で時空の歪みを塞いで、この世界が滅びるかもしれないという憂いを絶って、絶対にまたここへ戻ってこよう。

「マルティーヌ、魔物の森に行ってくるね」
「……ええ。行かないでとは言えないけれど、絶対に生きて帰ってきて」

マルティーヌは少しだけ泣きそうな、でも決意を込めた瞳でそう言ってくれた。

「うん。俺の帰る場所はここだから。絶対に帰ってくる」
「帰ってきたら美味しいものをたくさん用意して、楽しいお茶会をしましょう。だから、だから絶対よ……」

マルティーヌはそこで耐えきれなくなったのか、大きな瞳から涙を溢した。しかし顔には笑顔を浮かべる。

「信じているわ」
「……うん。ありがとう」

マルティーヌは本当に強い。もし俺がマルティーヌの立場だと考えたら、泣いていかないでと引き留めてしまうかもしれない。信じてると送り出してくれるその信頼を、絶対に裏切らないように頑張ろう。俺は改めて気合を入れた。

そうしてマルティーヌにも挨拶をして公爵家の屋敷に戻ってきた。最後は家族皆の部屋だ。父さんの部屋に全員いるみたいなのでそこに向かう。

「レオン来たのね」
「うん。待っててくれたの？」
「そうよ。レオンが来るって言ってたから。ついに明日行くんでしょう？」
「うん。行ってくるね」
「……レオン来なさい」

母さんが両手を広げてそう言ってくれたので、俺は躊躇いなくそこに飛び込んだ。もう母さんに抱きしめられるのはちょっと恥ずかしいけど、でも凄く安心する。

「レオン、危なかったらすぐに逃げるのよ。失敗しても良いんだから。無理はしないのよ」
「……うん。無理はしないよ。もしダメそうだったら引き返して、また次の手を考えるよ」
「約束よ……」

母さんが俺を抱きしめている手は震えていて、声は涙で掠れている。こんなに心配させて申し訳ないと思うと同時に、こんなに心配してくれて嬉しいとも思う。

「レオン、父さん達が一番嬉しいのはこの国が助かることじゃなくて、レオンが無事に帰ってくることだから、それを忘れないように」

母さんに抱きしめられている俺の顔を覗き込み、優しく頭を撫でながらそう言ってくれた。

「うん。ここに帰ってくることを第一に考えるよ」
「ありがとう。待ってるからね」

「お兄ちゃん……頑張ってね。また一緒に遊ぼうね」

マリーに服を引っ張られながらそう言われたので、俺は母さんに離してもらってマリーに向き合った。

「マリー、帰ってきたら少しは時間に余裕もできるだろうからまた遊ぼうね。お兄ちゃんが転移でどこにでも連れて行ってあげるよ」

「……うん。楽しみにしてるね」

マリーは不安そうに、けれどそれを隠すように俺を見上げた。そしていつものように元気はないけれど、ニコッと笑みを浮かべてくれる。

まず一番に考えないといけないのは、四人で怪我なく帰ってくることだ。時空の歪みを塞げるのが一番良いけど、もし今回失敗したとしてもまだ猶予はあるはず。だから自分を大事にして頑張ろう。

俺は今日会った皆の涙と笑顔を思い出し、絶対に悲しませないと誓った。

308、出立

遂に今日は出立の日だ。俺は朝早くに公爵家を出て王宮に来ている。今日のパレードは王宮から始まり、中心街の中から外までをゆっくりと進み、そのまま王都の外に出る予定だ。

使徒様の情報を王都全体に広めた後のパレードなので、物凄い盛り上がりらしい。王都全体がお祭り騒ぎで、俺達が通る道には既に人が集まっているんだとか。

「アレクシス様、おはようございます」

「レオンおはよう」

王宮の一室に向かうと、中にはアレクシス様とリシャール様の他に、トリスタン様、ジェラルド様、フレデリック様もいた。

「皆さん早いですね」

「ついさっき集まったところだ。では早速だが本日の予定を再度確認しても良いか？」

「もちろんです」

「ありがとう。もう出立予定の時間まで後一時間ほどしかないので、四人にはすぐに身だしなみを整えてもらいたい。そしてそれが終わり次第、馬車に乗り込んでもらう。そのあとは馬車で待機だ」

今日俺たちが乗るパレードのための馬車は、屋根がないパレード専用のものだ。その馬車に魔法具を使いバリアでカバーをする。王都の外に出たら普通の馬車に乗り換える予定だ。

「パレードの前に式典のようなものはないのですよね」

「ああ、今回は行わない。四人には馬車に乗ってもらうだけで構わないのでよろしく頼む」
「かしこまりました」
「そうだレオン、使徒様なのかと皆が疑わないようなパフォーマンスを考えると言っていたが、それはどうなったのだ」
「はい。ちゃんと考えてきました」

この国には使徒様の凄さは広まっているけれど、俺が使徒様だということは信じない人は多いと思うんだ。まず見た目は普通に子供だし、さらに筋肉ムキムキでもないし。
だから使徒様だとすぐにわかってもらえるようなパフォーマンスを、パレードの最中に何回かやろうと思っている。
もう使徒様だとお披露目をした以上、たくさんの人が俺を使徒様だと認識して、恐れ敬ってくれた方が色々とやりやすいからね。

「パレードの最中でたくさんの人が集まる場所。そうですね……例えば広場などを通る時に魔法を見せようかと思います。転移で何処か建物の上に転移するとか、複数の属性魔法をその場で使うとか」
「ふむ、確かにそれを見ればすぐに信じるだろう。ではよろしく頼む」
「かしこまりました」

そこまで話を終えると、アレクシス様は姿勢を正し表情をより真剣なものに変えた。

「レオン、トリスタン、ジェラルド、フレデリック。君達四人にこの国の命運はかかっている。どうか、どうかこの国を救ってくれ。健闘を祈っている」
「お任せください」
「はっ、必ずやこの国の脅威を排除して参ります」

「この国のお役に立てるよう、全力を尽くして参ります」

トリスタン様、ジェラルド様、フレデリック様は一斉に跪いて頭を下げ順番に決意を口にした。俺もその後に続く。

「アレクシス様、この国のために全力を尽くします」

「本当にありがとう。頼んだぞ」

「はっ！！」

そうしてアレクシス様からの激励を受け、俺達はそれぞれの控室に向かった。そしてそこで衣装を完璧に整えられて、馬車に案内される。馬車はかなり豪華なもので王家の紋章が入っていた。

「レオン、遂に魔物の森だな」

「はい。少し緊張しますね」

まだ馬車にはフレデリック様しかいなかったので、話しながら他の二人を待つ。

「それは分かる。でも今から緊張してたら体がもたないぞ。魔物の森までは二週間ほどかかるんだからな」

「確かにそうですね。じゃあ、リラックスします」

「それが良い」

確かに出立が今日だとは言っても、実際に魔物の森に入るのは二週間以上先になる。そして魔物の森に入ってからも奥までは何日もかかるのだ。

今から緊張してたら途中で力尽きるよね。

「うわっ、やっぱり豪華な馬車だな……」

「ジェラルド様、そんなに嫌そうにしないでください」
「嫌ではないんだが、俺はキラキラしたものは苦手なんだ。だから騎士になったのにな……」

ジェラルド様の実家はフェヴァン侯爵家なのに、貴族らしいパーティーなどは苦手らしいのだ。そんな性格だからこそリオールの街でもやっていけてるんだろうね。

「皆早いね」

最後にトリスタン様も馬車にやってきた。トリスタン様は凄くキラキラしている。今回はパレードのために衣装も豪華だからか、一段とキラキラだ。

「レオン、改めてこれからよろしくね。かなり長い期間一緒にいることになると思うから。ジェラルドとフレデリックも」
「はい。よろしくお願いします」

俺も含めた四人は今までの準備で頻繁に会ったり、連携の練習で一緒に訓練をしたりしているうちに、かなり仲良くなった。一応建前上目上の人には敬語は使っているけれど、もうそれも形式的なものになってるぐらいだ。
凄く良い関係性が築けていると思う。この四人なら魔物の森でもやっていけるはずだ。

「皆様、門が開きますので準備をお願いいたします」

王宮の門番さんが声を掛けてくれて、遂にパレードが始まる。

「じゃあ皆、とりあえずパレードの間は笑顔で、観衆にもたまに反応するぐらいで良いかな？」
「はい。ずっとは疲れるので、たまに手を上げて反応するぐらいにしましょう」
「分かった」

ゆっくりと、王宮の門が開いていく。いつもは正門の隣にある小さな門から出入りするので、この大きな門が開くのは初めて見る。ちょっと感動だ。

門が開くと物凄い人数が街道沿いに集まっているのが見えてきた。……こんなに王都に人がいたのか。それに歓声も凄い音量だ。

「凄い人ですね……」
「ちょっと予想外だね」

トリスタン様が予想外って相当だな。どこを見ても人がひしめき合っていて、あの中にいたら押しつぶされそうだ。道に観衆が出てこないように、騎士や兵士が必死に押さえている。

「それだけ使徒様のことが市井にまで広まったんだろう。皆レオンを見にきているのだと思うぞ。これから国を救ってくれる英雄だしな」
「凄く出て行きづらいです……使徒様はどんなイメージなんでしょうか？」
「……まあ、少なくとも子供を想像している者はいないだろうな」
「やっぱりそうですよね……」

平民の間に使徒様のことを広める際、俺のこととは関連付けずに客観的な使徒様像を広めたのだ。

そしてその後に、現世にも使徒様が現れて魔物の森の脅威からこの国を守ってくれるって情報を流したから、多分皆の頭の中には筋骨隆々の大男とか、すらっと背が高いイケメン魔法使いとか、そんなイメージがあると思う。

俺の絵姿も出回ってはいるんだけど、基本的には貴族の間だけで平民には広まってないんだよね。それに俺の年齢も明かしてない。力を見せずに年齢だけを明かしたら舐められるかもしれないからって、公開はやめたのだ。

だから俺を使徒様だと思う人は少ないと思う。

そんなことを考えているうちに馬車は進み、観衆が集まる道に入った。

「きゃー！　カッコいいわ！　どのお方が使徒様なのかしら？」
「あの金髪のお方じゃない？　とっても素敵だもの！」
「青髪の方じゃないの？　強そうだわ！」
「赤髪の方も素敵よ！」

カフェの店員の服装をした女性達の声が聞こえてくる。やっぱりそうなるよね……。金髪がトリスタン様で青髪がジェラルド様、赤髪がフレデリック様だろう。俺も一応金髪だけど、絶対に俺のことじゃないよね。

「あの子は誰かしら？　あの可愛い子」
「本当ね。従者とか？」
「でも従者を連れて行くかしら……？」

やっぱり……しかも可愛いとか言われてるし。俺はカッコいいって言われたいのに！

「ははははっ、レオンは可愛いと言われてるぞ」
「むぅ……俺はカッコいいって言われたいです」
「レオンは、まあ、成長すれば可能性はある！」

ちょっとジェラルド様、そんな哀れみの目で見ないでください！
俺も大人になったら筋肉ムキムキで背が高くてキリッとした感じになるんだから。
今は……まあちょっと、ぽわんとしてる感じだけど。それに筋肉がついても全くムキムキにならないんだよね。どんなに鍛えても細マッチョになる。まあそれも良いんだけどさ、俺はムキムキになりたい。

「この先の広場にたくさんの人がいるだろうから、そこで転移を見せてあげたら良いんじゃないかな？」
「そうですね。そうします！」

皆を驚かせてやる。俺はそう気合を入れて、とりあえず今はにこやかに観衆に反応することにした。

３０９、パレードと最終確認

にこやかに観衆に手を振って不思議そうな顔をされること五分ほど、心が折れそうになってきたところで広場に入った。広場にはさっきまでの比でないほど人が集まっているみたいだ。

広場の周りには石造りの頑丈なお店がいくつもあるので、転移するにはもってこいだ。高さもあるから皆から見えるだろう。

「じゃあ俺は転移してきますね。うーん、あのお店の屋根に」

「分かったよ。気をつけてね」

「はい。じゃあ行ってきます」

俺は馬車の中で立ち上がり目立つように両手を振って視線を集めた後、屋根に転移をした。

おおっ……結構高い。でも風が気持ちいいな。下を見てみると、数えきれないほどの人が広場に集まっている。しかもほぼ全員が俺に気づいているようだ。

馬車を見てみると、トリスタン様達がこっちを示してくれているらしい。

「皆の者、本日は集まってくれてありがとう。私が使徒であるレオン・ジャパーニスだ」

声を張ってさらに風魔法で遠くまで広がるようにしてそう宣言すると、突然の事態に静まり返っていた広場が途端に喧騒に包まれる。

「使徒様ってあの子だったの！？」

「まさかあんな子供が……」

「でも一瞬であそこまで移動したぞ。使徒様の魔法だ！」

そんな声が微かに聞こえてくる。うんうん、皆驚いてるみたいだ。俺はさっきまで無視され続けてきたので、ちょっとだけ良い気分になった。別に力をひけらかしたいわけじゃないけど、俺が使徒だとカケラも思われないのはちょっと寂しいのだ。

本当は転移だけの予定だったけど、ちょっとテンションが上がった俺は他の魔法も使うことにした。ファイヤーボールとウォーターボールを同時に作り出して、それを俺の周りでぐるぐると回す。そしてその二つをぶつけたり、広場の上を縦横無尽に飛び回らせる。

観衆はその魔法に完全に見入っているようだ。子供達は綺麗だとはしゃいでくれている。うん、満足だ。

最後にウォーターボールを上空で霧のように霧散させて、転移で馬車に戻った。

「レオン、派手にやったな」

馬車に戻ると苦笑いの三人に出迎えられる。確かにちょっとやりすぎたかも……子供っぽいことしたよね。

「楽しくなっちゃって」

「まあ良いんじゃないか。凄く好評みたいだぞ」

「皆がレオンを見てるよ」

馬車の外を見てみると、さっきまではほとんど俺に向いてなかった視線が全て俺に向いている。しかもキラキラとした尊敬の眼差しがほとんどだ。

「なんかここまで注目されると今度は恥ずかしいですね……」
「これからは注目され続けるんだから、慣れといた方が良いぞ」
「確かにそうですね」

それからは広場に入るたびに同じようなことを繰り返して、かなりの時間をかけてパレードは終わった。緊張したけど結構楽しかったな。

そして王都から出て少し進んだところで馬車を乗り換えて、今度はスピード重視で魔物の森へ向かった。

それから約二週間。途中に立ち寄った街でも簡易的なパレードをこなし、ついに魔物の森に着いた。リオールの街ではなく別の最前線の街だ。一番時空の歪みまで最短距離で行ける街を選んだ。

「ようこそお越しくださいましたっ！」

街に着くと、ここにいる騎士団の中で一番偉い人に迎えられる。そして挨拶もそこそこにそれぞれの部屋へ案内してもらった。今日はとにかく体を休めることに専念して、明日の早朝から早速魔物の森に入るのだ。

「じゃあ最終確認を始めよう。準備は良いかな？」
「はい。大丈夫です」

それぞれの部屋に荷物を置いて、すぐに俺の部屋に全員で集まった。魔物の森での行動について最終確認だ。

「まず今回の作戦の第一目標は時空の歪みを塞ぐこと。方法は神の

遺物である杖を時空の歪みに投げ入れるだけ。時空の歪みの場所は魔物の森の最奥にある。ここまでは良いかな？」
「はい。問題ありません」
「そして私達の脅威は基本的には魔植物と魔物。どちらも進行を妨げるものや振り切れないものだけを倒すことになる。倒す方法はバリアがあるから基本的に魔法を使う。しかしそこは臨機応変に、バリアを解除してでも剣を使った方が良い時は各自の判断に任せる。隊列はレオン、私、ジェラルド、フレデリックの順。魔力が尽きそうになった時点で進むのはやめて、大きなバリアを張り休憩」

今日この日までにまた魔力を増やしまくったから、そうそう魔力切れはないと思うんだけど、魔物の森の奥にどれほど魔物が生息しているのかによるんだよね。あんまりいなければ良いんだけど……

「荷物は各自アイテムボックスの魔法具に収納。毎晩レオンに魔力を補充してもらい、魔力が切れて中身を失わないように気をつけること。大切なものはレオンのアイテムボックスに預けるように。バリアの魔法具についても各自予備を持ち、夜に魔力を込め直してもらう。レオンよろしく頼むよ」
「かしこまりました」
「この流れで大きな問題がなければ魔物の森の奥まで行けるはずだね。しかし魔物の森の奥にどれほど強い魔物や魔植物がいるのか見当もつかないため油断はしないように。それからこれが一番大事だけど……魔人について」

トリスタン様がその言葉を口にすると、一気に雰囲気が重くなった。

「魔人が襲ってきた場合は逃げるのは不可能であると予想されるため、とにかく迎え撃つ。主に戦うのはレオン。他の皆はその援護に

徹する。そしてレオンは私達のことは気にせず、魔人を倒すことだけに専念してほしい」
「……はい。分かっています」
「ではレオン、今の魔人の現状は分かるかな？」
「ミシュリーヌ様に聞いてみますね」

俺は本を取り出してミシュリーヌ様に呼びかけた。

「ミシュリーヌ様」
『は～い』
「今下界を見てましたか？」
『見てたわよ。魔人の現状でしょ？』
「そうです。教えてもらえますか？」
『良いわよ。あのレオンを襲ってきた魔人クドゥフェーニが、頻繁に時空の狭間に偵察に来てるわね。でもそれ以外は来てないわ。話を聞いてると次の作戦があるみたいで、その準備ができるまではとりあえず行動は起こさないみたいよ』

そうなのか、それは僥倖かもしれない。作戦の準備が整う前に穴を塞いでしまいたいな。

「どんな作戦でしょうか？」
『こっちの世界で魔物は魔物の森からほとんど出ないでしょう？それだと魔物の森が広がるのを邪魔されるといつまでもこっちの人間が滅びないからって、今度は魔物に街を襲わせるそうよ』
「そんなこと……できるのですか？」
『話を聞いてる限りだと、この前の紫の粉あるじゃない。あれを食べた魔物は混乱して理性を失い、手当たり次第に全てを破壊するようになるらしいのよ。それをうまく誘導して魔物の森の外へ魔物を向かわせるみたいだけど……うまくいくのかは知らないわ』

それがうまくいったら今度こそ終わりだ……魔物への対処に騎士を動員しなければいけなくて、そんなことをしているうちに魔物の森への対処ができずにどんどん森が広がるだろう。

本当に最悪だな……

３１０、魔人の作戦

『後はレオンをどうやって倒すのか、作戦も考えていたみたいよ。一般の騎士では対処できない魔物を操って、それを倒しにきたレオンを狙うらしいわね。戦いの最中って周りには無防備になるからそこを狙うって』

強い魔物と戦ってる時にあの魔人が死角から襲ってきたら……間違いなく避けられないだろうな。

というか今更だけど、なんでそこまでしてこっちの世界を滅ぼしたいんだろう。数十人なんて土地が足りないわけでもないだろうし……

「ミシュリーヌ様、魔人の目的は何なのでしょうか？　そこまでしてこの世界を滅ぼして、何か手に入れたいものでもあるのですか？」

『ええ、地中に埋まっている魔素の結晶よ。空気中に魔素があることは知ってるわよね？　その魔素が土に染み込んで、それが何千年何万年と時が経つと結晶化するらしいのよ。私もこの前初めて気がついたんだけどね……』

いや、神様なのに魔人より気付くのが遅いって何事！？　ミシュリーヌ様、もうちょっと頑張ってください……確かに神様って意外と万能じゃないんだなってことは分かってるけど。

『あの魔人はその結晶を体に取り込んだ魔物が進化した存在らしいのよ。あの結晶を定期的に体に取り込むことでほぼ永遠の命を手に入れてるみたいね』

「ということは、それを取り込んでいる限り不老ってことですか…

…？」

『まあ、その認識で良いわ』

マジか……つくづく人間離れした種族だな。いや、元々人間じゃなくて魔物か。そもそも人間と比べるのがおかしいのかも。

『それでその結晶があっちの世界では少なくなってきてるみたいなのよね。実際は調べてみたらそんなことなくてもっと沢山あるんだけど、簡単に掘り出せる場所って目線で見ると確かに少なくなってきてるのよ。その点レオン達の世界ではその結晶の存在すら知られてない。それに気づいた魔人達は、レオン達の世界の人間を滅ぼして魔素の結晶を独り占めしようとしてるって感じね』

そんな理由があったのか……それなら平和に交渉はできないのかな。結晶を採掘してあげるから魔物の森がこれ以上広がらないようにしてほしいとか。取引できないのかな……

「ミシュリーヌ様、魔人と取引はできないのですか？　結晶を定期的に渡す代わりに不可侵を誓ってもらうとか。さらに魔物の森の広がりを抑えてもらうとか……」

『それは無理ね。あの種族、元が魔物だからかすごく好戦的なのよ。それに放っておいてもそのうち滅びそうな世界と取引する理由なんてないじゃない？　滅ぼしてしまった方が楽だもの』

確かにそうなんだけど……もっと皆には平和を愛してほしい。これは俺が日本での記憶を持ってるからこそ、思うことなのかもしれないけど。

『それに魔素の結晶の存在を知ったら、魔人に渡すなんてあり得ないってなると思うわ』

「なんでですか？　何かこっちの世界でも使えるものなのでしょうか？」
『色々調べてみたんだけど、魔素の結晶はエネルギーの塊みたいなものなのよ。なんて言えば良いのかしら……属性がない魔力って言えば分かる？』
「……よく分からないのですが、例えばどのように使えるのですか？」
『魔力が込められた魔石があるでしょう？　今までは魔力がなくなったらまたその属性が使える人に魔力を込め直してもらわないといけなかったじゃない。さらに込める魔法が使えるほどの魔力量を有してる人じゃないといけなかった。でも魔素の結晶を使えばそれがいらなくなるのよ。一度魔力が込められた魔石はその魔力を記憶していて、魔素の結晶を魔石に触れさせると全く同じ魔力が再度込め直されることになるわ』

ということは、アイテムボックスや毒除去の魔法具に、俺が魔力を込めなくても魔素の結晶から魔力を補充できるってこと……？
それは凄い、凄すぎる。

「その結晶ってどの程度の大きさで、何回ほど使えるのですか？」
『かなり膨大なエネルギーが凝縮されていて、手のひらサイズの小さな魔素の結晶で、魔石一つなら百回はいけそうだったわね』

マジか……それやばいよ。この世界でも存在が知られたら混乱を生みそうだ。だって攻撃魔法の魔法具と魔素の結晶を組み合わせたら……

「ちなみに、どの程度の数が地中に眠っているのでしょうか？」
『相当量、としか言えないわね』
「それは本当にやばいですね……」

これは絶対にここだけの秘密にしておいた方が良いやつだ。それが悪用され始めたら酷いことになる。魔素の結晶の存在をこの世界に知らせないためにも、魔人をこの世界に入れちゃいけないな。

でもそのうち誰かが魔素の結晶を見つけて、結局は掘り出されることになるのかな。……まあいずれはそうなるんだろうけど、でもそれは絶対に今じゃない方が良い。もっと平和で文化的にも発展した後に発見されたのならば、この世界にとって有益な使い方をされるかもしれないし。

「とりあえず今の話は聞かなかったことにします。今この世界では手に余るものだと思うので」

魔物の森への対策に使えるのならとも思ったけど、そんなにすぐに人員を確保できないだろうし、魔素の結晶を掘り出すのに気を取られて魔物の森への対策がおざなりになったら本末転倒だし、魔素の結晶の有益性に目が眩んだ人が国をまた混乱させるかもしれないし、今軽く考えてもデメリットがメリットを上回るだろう。

『確かにそうね』

「それでは話を戻しますが、今はクドゥフェーニが時空の狭間を頻繁に訪れる以外、他の魔人は来ていないのですよね？」

『そうよ。皆準備で忙しくしてるわ。日々の糧も獲らないといけないし』

「分かりました。ではまだ余裕がある今のうちに時空の歪みを塞いでしまうのが一番ですね。今ならば最悪魔人と対峙しても、クドゥフェーニ一人だけと」

『多分そうなるわ』

あいつ一人だけならなんとかなるかもしれない。この前よりもまた鍛えたし、大丈夫なはずだ。自分を信じよう。

「ではミシュリーヌ様、また監視をお願いします。もし魔人に動きがあれば教えてください」

『分かったわ。じゃあまたね』

「はい」

そうしてミシュリーヌ様との話を終わらせて、俺は三人に向き直った。ミシュリーヌ様の声は聞こえてないから魔素の結晶のことは気づかれてないはずだけど……魔人が何かの結晶を手に入れたいってことは分かったよね。

「話は終わったかな？」

「はい。あの、魔人が何かの結晶を手に入れようと画策しているということが伝わってしまったかと思いますが、その結晶のことについては他言無用でお願いしたいです。この国を混乱させてしまうので」

俺は素直に誰にも言わないで欲しいと頼むことにした。すると三人は神妙な顔つきで頷いてくれる。

「もちろんだよ。レオンがミシュリーヌ様と話している内容は、レオンが私達に直接話してくれたこと以外は聞かなかったことにすると決めてあるんだ。まあレオンの声しか聞こえないからよく分からないのだけれど……」

そう言って苦笑したトリスタン様に俺はホッと安堵の息を吐く。本当にできた人達だよね。

「ありがとうございます」
「当然だよ。それで魔人の様子は聞けたかな？」
「はい。現在の魔人は次の作戦への準備をしているようでして……」
そこからは魔素の結晶のことは話題に出さず、魔人の作戦とクドゥフェーニが偵察に来ている現状だけを話した。
魔人の作戦を聞いた三人は深刻な表情を浮かべる。もし俺達の今回の作戦が失敗したら、それはイコールでこの世界の滅亡を意味するかもしれないのだ。
「その作戦はかなり危険だね。今でさえ魔物の森を広げないように、魔植物と対峙するだけで精一杯なのに……」
「もし魔物が森から出てきて街や村を襲い始めたら、一気に魔物の森が進行してくるでしょう」
「そうなったらもう、飲み込まれるのを待つだけになってしまいます……」
部屋の中に重苦しい空気が流れる。この世界は本当にギリギリの状態だ。この世界を救ったら、ミシュリーヌ様にたくさんご褒美をもらわないとだな。
「でも考え方を変えれば、今がチャンスということだよね。今のうちに時空の歪みまで辿り着ければ、最悪でも魔人一人と対峙するだけで済む」
トリスタン様が声を明るくしたそう言った。それに部屋の雰囲気が一気に変わる。やっぱりこういうのが上手いのは王族だよね。
「その通りです。なのでできる限り急ぎましょう。もし魔人に何か動きがあれば、ミシュリーヌ様が知らせてくださるそうです」

「これから私達にできることは、とにかく急ぐことだけだね」
「はい。でも無理はしすぎずに、途中で倒れないように気をつけましょう」
「分かっているよ」
「今のチャンスを逃さないようにいたしましょう」
「なんとか今回で時空の歪みまで辿り着きましょう」

そうして最後には、皆で明日からの魔物の森攻略に向けてやる気を高め合い、早めに解散となった。
そして自分の部屋に戻ってベッドに入る。ついに明日からは魔物の森だ。俺はその事実に緊張してなかなか眠りにつけなかったけれど、何とか目を瞑って気持ちを落ち着かせることで眠りに落ちることができた。

寝る前に考えていたことは俺の大切な人達のことだ。マルティーヌ、母さん父さんマリー、マルセルさん、ロジェ、ロニー、リュシアン、ステファン、他にもたくさんの大切な人達がこの世界にいる。
その人達のことを守るために、絶対成功させよう。そしてその人達を悲しませないために、絶対に生きて帰ろう。

311、魔物の森へ

「では皆さん、準備は良いでしょうか？」
「うん。バリアはちゃんと張ったしアイテムボックスの魔法具に荷物も全部詰めた。体調も完璧だよ」
「俺も大丈夫だ」
「ああ、いつでも行ける」

俺達は朝早くに起きて馬車に乗り、ついに魔物の森が見える場所までやってきていた。見送りには騎士の方達が集まってくれている。

「じゃあ行きましょうか」
「そうだね。あまり気負わずにリラックスしていこう。ずっと緊張しっぱなしでは疲れてしまうから」
「そうですね」

俺達はビシッと整列してくれている騎士の方々に顔を向ける。そして一言、「行ってきます」と告げた。

「ご武運をお祈りしておりますっ！！」

すると騎士の方々は皆で声を揃えて、一糸乱れぬ動きで敬礼をしてくれた。今一番嬉しい見送りかもしれない。気合が入る。
俺達はそんな騎士達を背に、魔物の森に向かって歩き出した。今は不思議とあまり緊張をしていない。適度な緊張感で良いコンディションだ。このまま順調に作戦が終わると良いんだけど……

それから数時間後、俺達は魔物の森の一角に休憩用のバリアを張り昼食を食べていた。今日のお昼は軽めにサンドウィッチだけだ。
しかし地面に直に座って、居心地悪くサンドウィッチを食べているのではない。しっかりと机に並べられたおしゃれなサンドウィッチを、椅子に座ってカトラリーで食べている。さらにバリアの中にはトイレも完備だ。

「本当に魔物の森の中だとは思えないよ……」
「こうして机の上だけを見ていると、カフェみたいだな」

そう口にしたのは見張り中のトリスタン様とジェラルド様。流石にバリアの中とはいえ見張りなしは危ないので、二人ずつに分かれて食事をしている。今は俺とフレデリック様が食事の順番だ。

「でも外を見ると魔物や魔植物がたくさんいますよ」
「この差が凄いな……」
「あっ、ウォーターベアが来ましたね」
「本当だ」

ウォーターベアは俺達に気づくと、獲物を見つけたと言わんばかりに一直線に近づいてきて、そのままバリアにぶつかり気絶した。一応ジェラルド様がバリアが壊された時のために剣を構えているけれど、今のところ剣が使われたことはない。

「本当にこのバリアは頑丈だね」
「はい。でも魔人には破られましたし、魔物の中にも壊せる奴がいるかもしれませんから、油断はしないでください」
「分かってるよ」
「当然だ」

そうこう話しているうちにウォーターベアが目を覚ましたみたいで、今度は慎重にバリアの周りをぐるぐる回っている。そして時折腕を振り上げて攻撃してくるが、ガキンッという音と共に弾かれているようだ。
それからしばらくして、諦めて去っていった。

「行ったな」
「良かったです。どうしても諦めてくれない時は、バリアの中から魔法で攻撃しちゃってください。攻撃されるとバリアの魔力も消費するので」
「ああ、しつこいやつにはそうするよ」

サンドウィッチを食べ切ったところで、お皿とカトラリーにピュリフィケイションの魔法具をかけてアイテムボックスに仕舞った。

「では順番にトイレに行ってまた進みましょうか」
「そうだね」

事前に決めた隊列で魔物の森の中を進んでいく。森の中には獣道しかなく、ほとんどはそれすらもないような場所ばかりなのでとても走れるような環境ではない。
俺達は出来るだけ早歩きで、でも慎重に進んでいた。

「本当に、レオンの魔法は規格外だ……」

後ろからそう呟いたジェラルド様の声が聞こえてくる。もうこの森に入ってから何度も聞いてるな。
俺は隊列の先頭に立ち、バリアを剣の形にして邪魔な魔植物を端から切り落としてアイテムボックスに収納しているのだ。だから予

想よりもかなりスムーズに進めている。
魔力を多めに込めたバリアの剣は切れ味抜群だ。たまにアイアンフラワーのように硬い魔植物があると流石に切れないけれど、そこまで多くないのでその場合は少し迂回している。

「レオンはこうして私達と気安く接してくれているけれど、使徒様だからね」
「そうですよね……レオンがあまりにも今まで通りなので、使徒様だということを忘れてしまいそうです」
「ふふっ……それは私もそうかもしれないね」

そんな会話を聞きつつ魔物の森を進んでいると、身体強化魔法で強化していた耳に魔物の走る音が聞こえてきた。これは……俺達の方に向かってるな。
かなりの数だからロックモンキーかもしれない。

「皆さん、ロックモンキーの群れがこちらに来ています」
「じゃあロックトルネードだね」
「はい。群れをできる限り一箇所に集めたいので、追い込むのを手伝ってもらえますか？　そうですね……あのあたりに」
「分かったよ」
「了解した」

ロックモンキーはバリアを壊せないから脅威ではないんだけど、かなりしつこく攻撃してくるので倒してしまったほうが楽なのだ。

「あちらの方向から来ます」
「じゃあ俺はこっちから回るな」
「私はこちらだね」
「俺はできる限り後ろに回り込んでみる」

「はい。よろしくお願いします」

ロックモンキーには囲まれる前に、こっちから囲んでしまうのが一番有効的だ。そして集まったところにロックトルネードを使えば、一度で壊滅させられる。

俺は三人がロックモンキーを追い込んでくれるのを、少しだけ緊張しつつ待った。

「ギギッー！」
「ギッギッ！」

すると遠くからロックモンキーの鳴き声が聞こえてくる。苛立っているようだし、皆が上手くやってくれたみたいだ。

あっ、先頭のロックモンキーが見えてきた、俺はバレットなどを駆使して、ロックモンキーがこれ以上進めないように攻撃を開始した。

ロックモンキーは危険を察知すると群れで固まる習性があるので、仲間がやられると後ろに戻っていくことが多いのだ。そして本来であればまた仲間と連携して襲ってくる。だからその固まってる時に倒してしまうのが一番だ。

『ロックウォール』

ほとんどのロックモンキーが一箇所に集まった時点で、逃さないようにロックウォールを使った。

『ロックトルネード』

そしてその中にロックトルネードを放つ。この方法なら自分達に

被害が及ぶこともないしグロい光景を見なくて済むから、最近はいつもこうしている。

しばらく後にロックトルネードを解除すると……、もうロックモンキーの鳴き声は聞こえなかった。

「レオン、成功したか？」
「はい！　完璧です」
「それなら良かった。追い込む時に数匹は逃げたが、逃げるやつまで追わなくても良いと思ってそのままにしたぞ」
「さすがに群れのほとんどを失ってまた襲ってくることはないだろ」
「そうだね。じゃあ成功ってことで先を急ごうか」
「はい」

ロックモンキーの討伐大成功だ。これは完全に作戦勝ちだな。

――それからも同じように俺が道を作りながら先へ進み、魔物が出てきたら魔法を使って確実に倒していった。そして辺りが暗くなってきたところで、魔植物を切り倒してちょっとした広場を作り、野営の準備を始めた。

野営とは言ってもベッドがあるから、一般的なものとは違うけどね。

「はぁ～疲れたな」
「全く問題はないけれど、ずっと魔物の森の中にいるという事実に疲れるよね」
「気を張りっぱなしですからね」
「では皆さん、早めに休みましょうか？」

皆が疲れているみたいだったから、俺は手早く夕食の準備を進めていく。といってもアイテムボックスから出すだけなんだけど。
確かに魔物の森にいるという事実だけで精神的に疲れるんだよね。鬱蒼とした森の中って感じだし、何より気を抜いたら命の危険があるし。

「レオンありがとう。魔力は大丈夫かな？」
「はい。今日ぐらいならばまだ半分以上残っています。一晩寝れば完全に回復するでしょう。あっ、皆さんのバリアとアイテムボックスの魔法具に魔力を込め直しますね」
「そうだった。よろしく頼むよ」
「レオン頼む……なんか俺達足手まといか？」

フレデリック様が少しだけ申し訳なさそうにそう聞いてきた。
「確かに……レオンが凄すぎて俺なんか全く役に立っていない」
「それを言ったら私もだよ」
「いえ、そんなことないです！　皆さんがいるだけで本当に心強いです」

実際一人でこの森の中にいたら、とにかく孤独でおかしくなってたかもしれない。それに今よりも絶対緊張してただろうし。

「皆さんが見張りをしてくださるのでゆっくりご飯を食べられますし、夜も安心して眠れると思います」
「そうか。少しでも役に立ててるのなら良かった」
「とてもありがたいです。……じゃあお昼と同じように交代でご飯を食べて、早めに眠りましょうか。先にご飯を食べた方が先に寝るということで」
「では昼間は私達が最初だったのだから、夜はレオンとフレデリッ

クが最初で構わないよ。私は夜更かしは得意なんだ」
「私もそれで大丈夫です」
「ではお言葉に甘えさせていただきます。毎日交代にしましょう」
そうして二人一組で見張りを交代しつつ食事を取って眠りについた。ベッドは疲れが取れるように高級なやつにしたからか、魔物の森の中でもぐっすりだった。

３１２、魔物の森の奥での出会い

魔物の森に入ってから三週間が経過した。魔物の森は奥に行けば行くほど魔物が強くなる……という傾向はそれほど強くなかった。
確かに奥にいる魔物の方が強いやつが多いけれど、そこまで顕著な差もないという感じだ。そのおかげで俺達は特に問題なく、初日と変わらないペースで先に進むことができていた。しかし突然強い魔物が現れる危険性もあるし、油断は禁物だ。

「もう半分は過ぎただろうか？」
「どうでしょうか……かなりのペースで進んでいるので、半分は来たと思いたいですが」
「一週間前にミシュリーヌ様は、まだ半分も過ぎていないと仰ったんだよな」
「はい。今日の夜にでももう一度聞いてみましょうか」

ずっと変わらない景色の中を進んでいくと、とにかく達成感がなくて気持ちが参ってくる。四人で励まし合いながら進んでいるから良いものの、ここで一人だったらリタイアしていただろう。
……仲間がいた方が良いと主張してくれたマルティーヌには感謝しないとだよね。

マルティーヌは今頃何をやってるのかな。まだ王立学校があるし、卒業試験に向けての最後の追い込みかな。
マルティーヌの笑顔がみたい。それに皆ともお茶会をしたい。シュガニスは上手くいってるだろうか、ロニーとアルテュルは上手くやれてるかな……

「それにしても、一時間ほど前から魔物が全く現れないな」
「確かにそうですね。何かあるのでしょ……」

バリンッ！！　え、今何が……

「っ……」

何の前触れもなく俺のバリアが壊された。そして現れたのは……俺の背丈よりも大きな真っ白い獣だ。犬というよりも、狼って感じ。

「レオン大丈夫かっ！？」
「……は、はい！」

俺は急いで剣を構える。バリアは割られてしまうのなら意味はないので、張り直すことはしない。

……他の魔物と存在感がまるで違う。どうすれば良いんだ、勝てるイメージができない。この魔物、あの魔人と良い勝負なんじゃないか……？　威圧感が同じだ。いや、この魔物の方が何故か膝をつきたくなるような雰囲気が……

『我の寝床に入り込むとは命知らずなやつめ。……ん？　魔物ではなく人間だったのか。人間は我が助けねばならぬ存在。そこの小さいの、すまなかったな。だが我はまだ眠いのだ。もう少し寝たらまた助けてやるからしばし待て』

え、これってミシュリーヌ様と話す時みたいに、頭に直接話しかけられてる、よね？　この魔物何者なんだろう。ミシュリーヌ様と関係があるのかな……

「……あの、君は誰？」
『我を知らんのか？　あれだけ助けてやったというのに。はぁ、人間は面倒くさいしすぐに死ぬし忘れるし、ミシュリーヌ様は何故このような生物が好きなのか』

今ミシュリーヌ様って言った！　やっぱり関係があるんだ。もしかしたら俺と同じような立場とか……？

「ミシュリーヌ様と何か関係があるの？　俺はミシュリーヌ様の使徒なんだけど、君は……？」
『なんと！　お主はミシュリーヌ様の使徒なのか。どのような使命を持っておるのだ？　我の使命は人間を魔物から救うことだ』

人間を魔物から救うこと……確かにこの世界には今一番必要な存在だけど、なんで今までミシュリーヌ様からこの子の話を聞いたことがないんだろうか。この子と力を合わせたら、ここに来るのももっと楽だったかもしれないのに。

「俺はこの世界を魔物の森の脅威から救うことと、この世界の文化を発展させることだよ。それにしてもなんでお互いの存在を知らされてないんだろ。――ミシュリーヌ様に聞いてみようか」
『確かにそれが良いな。ふわぁ～、我は寝ていたからミシュリーヌ様と話すのも久しぶりだ』

白い獣の大きなあくびで鋭そうな牙が見えて警戒心を高めつつ、アイテムボックスから本を取り出しミシュリーヌ様に呼び掛けた。

「ミシュリーヌ様、今大丈夫ですか？　聞きたいことがあるんですけど」
『大丈夫よ～どうしたの？　ちなみに魔人に大きな動きはないわ』

「ありがとうございます。実は魔物の森で……そういえば君の名前は？」
『我はファブリスだ』
ファブリスがそう口を開いた途端、ミシュリーヌ様が高いところから転げ落ちるような音が聞こえてきた。
「ミシュリーヌ様、大丈夫ですか？」
『お、お、お前は……ファブリスじゃない！？　なんで今更そんなところにいるのよ！？』
やっぱり知り合いだったんだ。こんなに心強い仲間がいるならもっと早く教えて欲しかったよ。
『ミシュリーヌ様、おはようございます』
『おはようございます、じゃないわよ！？　私がいくら呼び掛けても起きなくて、通信を遮断までしたでしょ！！』
『そうでしたか……？』
『はぁ～、なんでこんな神獣を作ったのかしら。過去の私を殴りたいわ』
……どういうこと？　ミシュリーヌ様も今まで連絡が取れなかったのかな。
「あの、ミシュリーヌ様、詳しい説明をお願いします。このファブリスとは何者なのでしょうか？」
『はぁ、そうだったわね。……ファブリスは私が何十万年も前、いやもっと前かしら？　とにかくずっと昔にあなたの世界と繋がっている魔物の世界、その世界にまだ人間がいた頃に作った神獣なのよ』

そんなに前の話なの！？　え、じゃあこいつ何歳……？
それに神獣なんて存在は初めて聞いた。そんな存在がいたなんて……

『あの頃は魔物がどんどん勢力を拡大していて、人間が数を減らしていた時だったの。私はなんとか人間を守ろうと思って、あの頃にはまだ潤沢だった神力をかなり注ぎ込んでファブリスを作ったわ。人間を助けてもらうために、そして魔物を倒してもらうために。それからそうね……数千年はファブリスのおかげで人間の世界は保たれたのよ。でもある時急にファブリスが疲れたから寝たいって言い始めて、私が止める声も聞かずに森の奥深くで眠りについて、そのせいで人間の世界は滅亡したのよ！　今の今までずっと眠ってたんだから！』
『え……人間は絶滅したのですか？　ですが今目の前に四人おりますが？』

待って、前の世界の人間が絶滅したことを今知ったの！？　いや、今更すぎる。

『それは新しい世界の人間よ！　はぁ、人間は少し放っておいたらすぐ死ぬってあれほど言い聞かせたのに』

ということは、ファブリスは何万年も寝てたってことだよね。人間の感覚ではあり得ないな……
なんかこの子もミシュリーヌ様の神獣らしく、ちょっと常識はずれというか、ちょっと残念感漂うというか……そんな感じがヒシヒシと伝わってくる。

『ですが、我は新しい世界になど移動した記憶はないのですが……』
『私がちょっと失敗して、前の世界と新しい世界を穴で繋げちゃっ

たのよ。多分あなたは寝ぼけながらその穴を通ったんでしょ』
『確かに少し前、一度だけ目が覚めて歩き回り、また眠くなって移動先で寝たような？』
『その時ね。もう、なんでその時に連絡してこないのよ！　あなたと連絡が取れればあなたに穴を塞いで貰えば良かったのに……』

本当だよ。その時ならまだ魔物の森もそこまで広がってなかったかもしれないし、その時に穴を塞げてたらどれだけ良かったか。俺ももっと平和な世界に転生して、日本の食べ物の普及に専念できたよね……
でも魔物の森の脅威がなければ、俺が転生することもなかったのかな？　いや、ミシュリーヌ様の本命は日本風の世界を作り上げて欲しいってところだったし、多分その場合でも転生してもっと平和な世界への転生になってたんだろう。……そっちの方が良かった。

『まさか、我が寝ている間にそのようなことになっているとは知らず。申し訳ありません。人間とは本当にすぐ死ぬのですね』
『だからそう言ったでしょう！　あなたが眠ってから百年も経たずに絶滅したわよ』
『なんと……たった百年とは。昼寝にもならないではないですか』

だからその感覚がおかしいんだって。もっと人間の感覚と似た神獣にすれば良かったのに。想像できないほど長生きをするものに、人間と同じような時間感覚を与えるのは不都合があるのかな……？

313、神獣の今後

「あの、ミシュリーヌ様はファブリスが起きたことには気づかなかったのですか？」

『何千年も何万年も眠ってるようなやつよ？　ずっと見てられるわけないでしょ。もうほとんど記憶から消えてたわよ』

まあ確かにそうか……何万年も眠ってる間に数日起きていたとして、ちょうどピンポイントでファブリスの様子を見てたら奇跡だな。

『それにファブリスは私からの通信がうるさいからって遮断したのよ！　だからこっちから連絡を取る術はなかったの』

『遮断なんて、そんなことができるのですか？』

『ファブリスは私の眷属だからできるわ。眷属は使徒とはまた違って……そうね、私の子供みたいなものだから』

眷属なんて存在もいるのか……改めて俺って凄いことに関わってるなぁ。

まあとにかく、ファブリスが眠りを妨げるミシュリーヌ様からの通信を遮断したから、連絡を取る術もなくずっと放置してて存在を忘れかけてたってことか。

『ではミシュリーヌ様、話していたらついに目覚めましたので何かご命令を』

『だ～か～ら～、今更遅いのよ！！』

うわぁっ、ミシュリーヌ様の雷が落ちた。……ファブリスって凄いな、ミシュリーヌ様がツッコミ役になれるって凄いことだよ。さ

すがミシュリーヌ様が作った眷属だ。

『ファブリス、もうあなた神界に戻ってきなさい』

『戻ってもよろしいのですか？』

『だって下界にいても役に立たないじゃない。また通信を遮断して眠られたら連絡もできないし、とにかく帰ってきなさい』

『かしこまりました。ミシュリーヌ様のお側にいられるのはとても嬉しいことでございます』

『はぁ、そういう素直なところは可愛いのに……一度眠ったら起きないところが難点なのよね』

ファブリスは神界に戻るのか。じゃあこれからはあの神界にファブリスもいることになるんだね。

……って、ちょっと待って！？　せっかく起きたのにこのまま神界に行っちゃうなんて勿体なさすぎる！

「ミシュリーヌ様待ってください！　ファブリスがせっかく目を覚ましたのだから、俺達の手伝いをしてもらえないでしょうか？　この世界が平和になるまでいてもらえませんか？」

ここまでの話を聞いていた限り、ファブリスはかなり強いみたいだし今この世界に必要な存在だと思う。一度寝たら起きないのは難点だけど、さすがに何万年も寝たのなら何十年かは普通に起きててくれるんじゃないのかな？

『確かにそれはありね……ファブリス、やっぱり訂正よ。レオンがこの世界にいる間は神獣としてレオンを助けなさい。レオンを主人と敬うのよ』

『かしこまりました。ではレオン、これから頼むぞ』

「そんな簡単に決めて良いの？」

まさかこんなスムーズに認められるとは思わなかった。

『ああ、レオンがこの世界にいる間ということは長くて数百年だろう？　その程度の時間は誤差だ』

「いや、俺は人間だから長生きしても後百年もないよ？」

『そこまで短いのか……！　人間とは大変だな』

俺達にとってはこれが普通だから良いんだけどね……逆に何万年も生きられるってなったらやることなさすぎて暇でしょうがないでしょ。だからこそずっと眠ることになるのかな。

「まあ、俺達はこれが普通だから」

『そうか。では短い間だがよろしく頼む』

「うん。よろしくね」

『じゃあファブリス、今までサボってたんだからちゃんと働くのよ。そして早く問題を解決しちゃって。平和な世になったらレオンにはやってほしいことがたくさんあるんだから！　うふふ、これは思わぬ幸運ね』

早く魔物の森の問題を解決して、日本の食べ物を作って欲しいんですね……

まあ俺としても早めに問題は解決したいから、利害は一致している。とにかく頑張ろう。でもなんか、ファブリスがいればもう解決したも同然な気がするのは気のせいかな。

『じゃあレオン、私はちゃんと魔人を監視してるからよろしくね～』

「はい。また連絡しますね」

『ミシュリーヌ様、これからはいつでも連絡を』

『はいはい、分かったわよ。じゃあね』

そうしてミシュリーヌ様との通信は途切れた。それと同時に辺りには静寂が訪れる。三人を完全に置き去りにしちゃったし、説明しないとだな……

「えっと、皆さんファブリスの声は聞こえていましたか？　あっ、ファブリスとはここにいる白い獣？　のことです」

その問いかけに答えてくれたのはトリスタン様だ。

「最初の声は聞こえていたんだけど、それから先はいつものようにレオンの声しか聞こえなかったよ」

「そうなのですね。……ファブリスは誰とでも意思疎通をできるの？」

『勿論だ。ほら聞こえるであろう？』

「おおっ、聞こえたぞ」

「聞こえてるね」

「俺もだ」

ファブリスの声が他の人にも聞こえるのなら楽だ。本人にも話してもらいつつ説明しよう。

「聞こえるのであれば良かったです。じゃあファブリスから自己紹介する？」

『そうしよう。そこの人間達、我はミシュリーヌ様の眷属であり神獣のファブリスだ。これからはレオンに仕えるのでよろしく頼む』

ファブリスのその挨拶を聞いて、三人は慌ててその場に跪き深く

頭を下げた。そして代表してトリスタン様が口を開く。

「神獣様にお会いできまして光栄でございます。私はラースラシア王国現国王の弟、トリスタン・ラースラシアでございます」

そっか、神獣に対してはミシュリーヌ様と同等に敬わないといけないのか。……面倒くさいから公の場だけじゃダメかな。

「ファブリス、俺は使徒だけど公の場以外では仲の良い人とは気安く話してるんだ。だからファブリスに対しても同じで良い？」

『我は人間の態度などなんでも構わん。国が変われば人間の行動も変わるからな』

確かにそっか。何千年も人間を守って来たのなら国もかなり変わっただろうし、それぞれの国で礼儀作法も違っただろう。神獣に人間目線での礼儀作法は意味ないんだな。そう考えるとミシュリーヌ様に対してもあんまり意味ないのかもしれない。

「確かにそうだよね。トリスタン様、ジェラルド様、フレデリック様、そういうことなのでそこまで礼儀を気にする必要はないです」

俺のその言葉に三人は恐る恐る顔を上げた。そしてファブリスのことを見て、その後に俺に視線を向けて口を開く。

「良いのだろうか……？」

「はい。問題ありません」

「……分かった。では普通に接することにする」

「よろしくお願いします。では話を戻しますが、神獣であるファブリスが私のことを助けてくれることになりました。時空の歪みを塞ぐことも魔物の森を駆逐していくことも、どちらも助けてくれる…

…よね？」

そういえばファブリスに直接確認していなかったと思って問いかけると、ファブリスは鷹揚に頷いてくれる。

『もちろん主人に仕えるのだから、主人に言われたことには従うぞ』

「ありがとう。ということです」

今度は三人に向けてそう言うと、三人は驚きの表情を浮かべた後にほっと安心したように息を吐いた。

「それは……とても心強いです。感謝いたします」

やっぱりこの三人も普段通りを装いつつ、ずっと命の危機を感じて緊張していたのだろう。魔物の森は人間には厳しい環境だから当然だよね。

『我は強いから安心すると良い。魔物など簡単に蹴散らしてくれる』

ファブリスのその言葉は俺達全員に安心感を与えた。ファブリスってなんだか信じられる雰囲気があるんだよね。……ミシュリーヌ様よりも神様っぽいかも。

「ファブリスってどのぐらい強いの？　例えばどんな魔物を倒せるとか、どういう攻撃ができるとか」

『我は身体強化魔法を使って爪を強化し、敵に斬撃を与えるのだ。それから風魔法で全ての攻撃を跳ね除け敵を縛り付ける。今まで我が倒せなかった魔物はいないな。ただ何体か苦戦する奴らはいたが』

「身体強化と風魔法なんだ。魔力量は多いの？」

『我の魔力は尽きることはない。神獣の体は空気中の魔素を吸収で

きるからな。それから魔素を吸収することで、即死の怪我でなければ自然に回復していく』

そんなことができるのか。ここに来て俺よりもチートな存在来たよ。俺の存在が霞みそう……

「ファブリス凄いね」

『ふん、そうであろう？』

褒められてかなり嬉しそうだ。動物の顔なのにドヤ顔してるのが分かる。表情が分かるのは神獣だからなのかな。

……ちょっと可愛く見えてくるかも。

314、移動手段

「俺達の敵で一番強いのが魔人ってやつなんだけど、それには勝てる？　魔物が進化して人型に近い形になった種族なんだ。俺よりも強いと思うんだけど……」

『そのような存在がいるのか。……ふむ、主人よりも強いとなると少し厳しいかもしれない。主人と我は戦えば互角だろう』

「え、そうなの？　そんなの分かるんだ」

『身のこなしや魔力量で相手の強さは分かるものだ。我は相手の魔力量を感じ取れるからな』

ファブリス本当に凄いな……それにしても俺と互角か。それなら二人で力を合わせれば勝てる可能性はあるよね。

「それなら魔人にも、力を合わせれば勝てるかもしれない」

『主人と共闘か。それは良い』

「じゃあその辺の魔物で連携の練習をしようか。俺は基本的に身体強化を使って剣で戦うんだ。あとはバリアっていう攻撃を防ぐ魔法をよく使うかな。その他にも全部の属性魔法が使えるからそれも適宜使うよ」

『主人は剣が基本でそれを魔法で補助するという形だな。我は爪での攻撃が基本で、それを風魔法で補助するのだ。戦い方が似ているので連携しやすいだろう』

「確かに」

俺はそこまでファブリスと話したところで、また三人の方に顔を向ける。

「ではこれからファブリスの強さと連携の確認をして、それからまた奥に向かって進むので良いでしょうか？」
「私達は構わないよ」
「ありがとうございます。じゃあファブリス、奥に進みながら魔物を探そうか」
『いや、我のオーラにほとんどの魔物は近づいてこない。だから我らから探して近づかねばならないぞ』
「え、そうなの？」
『ああ、特に弱い魔物はそうだ。今この周りには弱い魔物しかいないようだし、寄ってはこないだろう』

それって魔物の森を進むという点では最高の存在だな。やっぱり最初からファブリスがいてくれたら何倍も楽だったのに……今更考えても仕方ないけど。

『あちらの方角にいくつか強そうな反応がある。そちらに向かえば魔物と戦えるぞ』
「魔物の位置まで分かるんだ……」
『魔力量を感知できる能力の応用だ。それであちらに向かうか？』
「うん。そうしよっか。じゃあ俺達が隊列を組んで進むから、その後ろからついて来てくれる？」
『分かった』
「では向かいましょう。またいつも通りの隊列で、油断せずに行きましょう」
「分かった」
「おう！」

そうして俺達は新たな仲間を加えて、魔物の森の奥に向かっていった。

しかし歩き出して十分ほどで、ファブリスが俺達の足を止める。どうしたんだろうか。

『主人、このようにゆっくりな速度では日が暮れても辿り着けんぞ』

「でも……これでも俺達の最速なんだ。魔植物があるから走れないし、魔物への警戒もしないとだし……」

『魔物は我が居れば近づいてこないぞ。それに魔植物も魔力を読めば安全なルートが分かるだろう？』

「いや、俺達は魔力を読めないから」

『そうだったか……』

ファブリスはそう言ったっきり考え込んでしまう。それから少しして顔を上げた。

『分かった。では我が主人達を乗せていこう。そこの三人も我の背中に乗ることを許可しよう』

「え……背中に乗っても良いの！？」

まさか触っても良いとは思わなかった。神獣だからか、野生のくせに白くて綺麗な毛並みだと思ってたんだ。

『主人はいつでも構わん。他の人間も主人が信用している者ならば問題ない』

「ファブリスありがとう！　じゃあお願いしても良いかな？　あっ、皆さんもファブリスに乗っていくので良いですか？」

「だが、神獣様のお背中に乗るなど……」

「そこは気にしなくても大丈夫です。本人が良いと言っているので」

三人は神獣の背中に乗るということが恐れ多いみたいでしばらく迷っていたけれど、結局は頷いてくれた。

「……では神獣様、失礼致します」
『うむ、背中に乗ることを許そう』
「ありがたき幸せ」

ファブリスは立ってると俺の身長の二倍はあるし、しゃがんでくれたとしてもよじ登るのは難しそうだな……
ここは転移で登った方が楽だろう。

「ファブリス、転移っていう別の場所に一瞬で移動できる魔法があって、それでファブリスの背中に乗るね。突然重みが増えるだろうけど驚かないでね」
『分かった』
「では皆さん、ファブリスの背中の少し上に転移するので、そのままファブリスに乗ってください。順番は隊列の順にしますね。では行きます」

うわぁ～、なにこの毛並み！！　凄くサラサラでふわふわでもふもふしてる。極上の毛並みだ。ここで寝たいレベル。

「ファブリス！　凄く良い毛並みだね。なんでこのふわふわを維持できるの？」
『神獣とは姿形は変わらぬものなのだ』
「そーなんだ。じゃあずっとこの毛並みってことだよね。うわぁ……永遠に撫でてられる」
『主人ならばいつでも乗せるぞ。それにいつでも撫でてくれて構わん』

ファブリスはさっきよりもワントーン高くなった声音でそう言った。褒められて相当嬉しいみたいだ。

「ありがとう」
『では早速走るぞ』
「ちょっと待って！」
『なんだ？』
「どのぐらいのスピードなのか分からないけど、このままだと振り落とされちゃうよ。背中の毛は掴んでも大丈夫？」
『問題ない』
「ありがとう。それから万が一にも落ちないように、バリアで背中を囲っても良い？」
『それも構わないぞ。では我も風魔法で主人らには風が当たらないようにしよう』
「ありがとう」

俺はそこまで聞いて後ろを振り返る。すると後ろには堂々とした様子でファブリスにまたがる三人がいた。三人は馬に乗れるから慣れてるんだね。
この国では乗馬が必須ではなく、騎士や兵士で必要な人だけ練習する感じだ。だから俺は馬に乗れない。でも三人の様子を見ていると、今度練習しても良いかもしれないな。リュシアンやステファンも少しは乗れるって言ってたし。

「皆さん先程の会話は聞こえていましたか？」
「背中の毛を掴んで良くて、レオンがバリアを張ってくれるんだよね？　しっかりと聞こえていたよ」
「俺も聞こえていたから大丈夫だ」

最後尾のフレデリック様まで聞こえていたみたいだ。
じゃあバリアを四人全員を囲うように張って……準備完了だ。

「ファブリス、準備完了だよ。魔物の場所までよろしくね」
『承知した。では行くぞ』
「っ！！」

やっ、やばい……予想以上に速すぎる。口を開いたら舌を噛みそうだから歯を食いしばってないとだし、毛を掴む手にかなり力を込めないと、すぐに投げ出されてバリアの中であっちへこっちへ激突しそうだ……

こんなに速いなんて聞いてないよ。逆に魔物の森の中をなんでこんなに早く走れるの！？　さっきから右へ左へ少しずつ進路を変えながら全くスピードを落とすことなく走っていく。そしてたまに爪で攻撃しているのだろう、進行方向で木が倒れることがある。
俺達が今までコツコツと進んできたのは何だったんだ。ファブリスに頼めば数日で魔物の森の最奥まで辿り着けそう……

315、ファイヤーリザード

それから体感で二時間ほど、ひたすら振り落とされないようにファブリスの背中の上で耐えていたら、少しずつ速度が緩みしばらくして止まった。はぁ……本当に地獄の時間だった。

後ろを振り返ると疲れを隠せていない三人がいた。もう最初の頃の凛々しさのかけらも無くなっている。でもこれは仕方ないよね……

「ファブリス、速すぎるよ」

俺は舌を噛みそうで言いたくて言えなかったことを、やっと口にした。

『……そうか？　いつも通りの速度だが』

「そうなんだ。でも俺達には速すぎたみたい。次からはさっきの半分ぐらいの速度にしてくれる？」

『それでは駆け足程度だぞ？』

「うん。駆け足程度が良いんだ」

俺達のその会話に後ろの三人も激しく頷いている気配がする。俺達四人は今が一番分かり合えてるかも。

『ならばそうするが、本当に良いのか？』

「もちろん。絶対に次はゆっくりにしてね」

『了解した』

ふぅ～納得してくれて良かった。これでもうあの地獄を味わうことはないだろう、多分。

「それでここはどこなの？　魔物はいる？」
『魔物まであと少し走れば辿り着ける。しかしその前に止まったほうが良いかと思ったんだ』
「止まってくれて助かったよ。ありがとう」

この疲労感でそのまま魔物に突撃されたら悲劇だった。ここで一息吐けたのはありがたい。

「ふぅ……よしっ、じゃあこれからはさっきよりもゆっくりのペースで魔物まで近づいて、気づかれないギリギリの場所で俺達を下ろしてくれる？　その後は俺達も歩いていくから」
『了解した。ではもう少し進もう』

それからはさっきよりもかなりスピードを抑えてくれたことにより、快適にファブリスの背中に乗っていることができた。そしてまたファブリスが止まったところで背中から降りる。

『この先に魔物がいる。この魔力は……ファイヤーリザードだな』
「ファイヤーリザードとは、どのような魔物でしょうか？」
「俺も聞いたことがないな」
「ファブリス、どんな魔物なの？」
『火を吐く大きなトカゲだ。尻尾を硬化させて振り回してくるのが厄介だな』

それって一般的には、ドラゴンとか恐竜とか言われる感じのやつだったりしないよね……？

「大きいってどのぐらい？」
『そこまででもない。我の二倍程度だ』

ファブリスの二倍って十分大きいし！　ファブリスが俺の二倍ぐらいだから、俺の四倍の大きさか……

「かなり大きいよ。うーん、どうやって戦おうか。今回の目的はファブリスの戦い方を見ることと、俺との連携を確認することだから……とりあえず俺とファブリスだけで戦っても良いですか？」

「もちろん構わないよ」

「ありがとうございます。ではファブリス、どうやって戦う？」

『そうだな。あいつはとにかく体が硬いことが厄介なんだ。身体強化を全身にかけられると我の爪でも致命傷は与えられん。だからいつも目を狙うのだが、それには口から吐く火と尻尾が厄介なのだ』

じゃあ俺がファイヤーリザードの意識を逸らして、その間にファブリスが攻撃する感じが良いかな。

「じゃあ俺が陽動をするね。その間にファブリスは攻撃してくれる？」

『了解した』

「じゃあ行こう」

それからファブリスの指示に従って進むこと三十分、ついに俺達はファイヤーリザードと相まみえている。途中で向こうも俺達に気づき向かってきたので、不意打ちはできなかった。俺はとにかく正々堂々、ファイヤーリザードと戦うことに決めた。

まずは俺の全力がどれほど通じるのか知りたくて、剣にバリアを纏わせてさらに身体強化を強くかけ、ファイヤーリザードに飛びかかった。しかし俺の剣がファイヤーリザードに届く前に尻尾の攻撃が襲ってくる。

そこで巨大なファイヤーバレットを作り出し、それを全力で尻尾に当てその攻撃を防いだ。しかしファイヤーリザードにはほとんど傷がついていないみたいだ。あの攻撃でほとんどダメージなしはやばいな……

横目でその様子を確認しつつ、ファイヤーリザードに向けて全力で剣を振り下ろした。

「おりゃゃっあ！！」

ガキンッッ！　しかしファイヤーリザードにはほとんどダメージを与えられずに剣が弾かれる。これはマジで硬いよ……鉄より硬いんじゃないか？

俺はその反動で空中で体勢を崩した。そんな俺の様子を見てファイヤーリザードがニヤッと笑った気がする。落ちていく俺にファイヤーリザードの爪が襲って……スカッと何もない空中を切り裂いた。ファイヤーリザードは確実に殺ったと思っていたのか、不思議そうにキョロキョロと辺りを見回している。

「こっちだよっ！」

今度は上から攻撃を仕掛ける。そう、転移でファイヤーリザードの上空に避難したのだ。本当に転移は戦いで便利だよね。

魔力をこれでもかと注ぎ込んで鉄よりも硬くなるようにバレットを作り、それをファイヤーリザードの頭に思いっきり放った。

ドンッッ。おっ、今度の攻撃はちょっとダメージを与えられたみたいだ。頭から少しだけ血を流している。ファイヤーリザードはその攻撃が痛かったのか、さっきからちょこまかと逃げては攻撃して

くる俺のことが憎かったのか、上に向けて火を吐くべく口を開いた。
「ファブリス！」
『分かっている』

しかしそんな隙を逃してやるほど優しくない。ファイヤーリザードが火を吐く寸前に、ファブリスが遠くから一気に跳躍してきてファイヤーリザードの頭を貫いた。あの爪ってあんなに伸びるんだね……ちょっと、いやかなり怖いんだけど。

その攻撃でファイヤーリザードは絶命したらしく、その場にどさっと倒れ込んだ。ふぅ……勝てたな。久しぶりに強い敵と戦った気がする。

『主人は強いな。一人でファイヤーリザードと戦うよりもよほど楽だった』
「それなら良かったよ。じゃあ俺達の連携は問題ないかな？」
『ないだろう』

ファブリスと待機してくれていた三人のところに戻ると、三人はどこか遠くを見るような目で佇んでいた。

「どうしたのですか？」
「いや、ちょっと私達がここにいる意味を考えてしまってね……」
「ああ、戦いが異次元すぎて参考にもならないというか」
「もしあの戦いへ手助けに入ったら、敵に攻撃されたわけでもないのに巻き込まれて死にそうだ」
「多分そうなるだろうね……」
「俺もそんな予感しかしないな……」

確かに俺も自分で異次元の戦いだよなって思う。俺の魔力量で体が保つ程度の最大まで身体強化をすると、もう動きが人間じゃなくなるから……

そこにバリアとか転移とか入ってきたらもうあり得ないよね。元一般人としてその気持ち凄く分かる。

でも三人がここにいる意味がないなんてことは絶対にない。だって三人がいなかったら、俺は絶対にここまで辿り着けなかったし。

「皆さんのおかげでここまでこれたのですから、意味がないなんてことは絶対にありません。本当にたくさん助けていただきました」

俺のその言葉に三人の表情が少し和らぐ。

「そうか。レオンの役に立てていたのなら良かったよ」

「はい！」

316、初めての魔物調理

それからファイヤーリザードをアイテムボックスに片付けて、俺達は少し場所を移して野営の準備をすることにした。

「ファブリスもバリアの中に入りたい？　俺達は大きなバリアの中で皆で休むんだけど……」

『いや、我は外で構わない』

「そっか。じゃあ自由に休んでてね。あっ、ファブリスはご飯って食べるの？」

『そうだな……魔素を取り込めば食べなくても問題はないのだが、久しぶりに人間の食事を食べるのも良いな。昔に分けてもらっていた料理は美味かった……』

ファブリスはそう言いながら少しだけ尻尾を揺らした。食べたいんだな……感情が分かりやすくしっぽに現れていてちょっと可愛い。

「じゃあファブリスの分も準備するね。何か要望はある？　何の肉が好きとか野菜が好きとか」

『そうだな……では先程のファイヤーリザードが食べたいぞ』

「え、魔物を食べるの？」

『……主人は食べないのか？』

「いや、食べたことはあるんだけど、この世界では一般的に魔物は食べないかな。普通の動物の肉の方が美味しいから」

『そうなのか……主人が言っている普通の動物とは魔力がない獣のことだろう？　我がいた世界には魔力のないものはいなかったからな。皆魔物を食べていたぞ』

そうなんだ……衝撃の事実。俺はこっちの世界に転生させてもらえて良かった。

「じゃあファブリスは魔物の肉にする？」

『そうだな……だが魔力のない獣の肉も気になる』

「それなら両方準備しようか。俺達の料理は既に準備してある状態でアイテムボックスに入れてるから、作る時間もかからないし。あっ、アイテムボックスは時間停止の時空間に物を収納しておける魔法ね。魔力を少し使えばどこでも取り出せるんだ」

『ふむ、それは便利だな。さすがは使徒である主人だ。では両方頼む』

「はーい。じゃあちょっと待ってて」

ファブリスとそこまで話したところで、俺は三人の方に向き直った。

「皆さんそういうことなので、ファイヤーリザードの料理を手伝ってもらっても良いでしょうか？　といっても調味料をつけて焼くだけのつもりですが」

「もちろんだよ」

「料理はできないが、指示して貰えば動くぞ」

「俺もだ」

「ありがとうございます。ではまず解体からですね」

よしっ、野外でする料理、しかも魔物の調理なんて初めてだけど頑張るか。

俺はまず適度に広い空間を確保して、そこにアイテムボックスからファイヤーリザードを取り出した。ファイヤーリザードが地面に置かれると、ドスンッと振動が伝わってくる。やっぱり流石の大きさだな。

そういえばさっきはかなりの硬さだったけど、どうやって解体したら良いんだろうか。中まであの硬さってことはないよね……？

「ファブリス。あんなに硬かったけど、どうやって解体すれば良いのか分かる？」

少し遠くに寝ていたファブリスにそう問いかけると、のそりと起き上がり近くに来てくれた。

『ファイヤーリザードの鱗は身体強化魔法で硬くなっているだけなのだ。よって今ならば簡単に剣が通るぞ』

そう言いながら爪でファイヤーリザードの首元をザシュッと切り裂いた。おおっ……確かに簡単に爪も通ってるみたいだ。

『主人の剣でも問題なく解体できるだろう』

「ありがとう。じゃあやってみるよ」

とにかく一箇所に切れ込みを入れて、そこから皮と鱗を剥いでいく感じかな。魔物どころか動物の解体が初めての経験だけど、見た目が日本にいなかったような動物だったからか、鱗があるところが魚と似ているからか、理由はわからないけどそこまでの忌避感はない。

魔物の森に入って何度も魔物を倒しているうちに、こういう光景にも慣れてきたのかもしれないな……

「では皆さん、俺が一箇所切れ込みを入れていくので、そこから皮を剥ぎやすいように持ち上げて手伝っていただけますか？」

「分かった」

「ではいきます」

バリアの剣は繊細な動きをさせると魔力消費が激しいので、自分の剣を取り出してそこにバリアを纏わせる。そして剣先をファイヤーリザードに押し当てた。すると予想以上に軽く剣が通る。おおっ、生きてる時とこんなに違うんだ。

それからは三十分ほどかけて慣れない解体をやり遂げた。素人だけで解体できたのはひとえに魔法のおかげだ。少し失敗して内臓を傷つけてしまってもピュリフィケイションで全てが綺麗になるし、回復属性の魔力をファイヤーリザード全体に行き渡らせて悪いところがないか確認したので完璧だ。

「終わりました。皆さんお疲れ様です」
「解体とは、こんなにも大変なのだな……」
「肉屋に感謝しなければいけないね」
「ふぅ、だが苦労しただけあってかなりの量の肉が取れたな」
「はい。では早速調理していきますね。皆さんは少し休んでいてください。あっ、調理をしている時だけこの辺一帯に広くバリアを張ってるので心配しないでください」

魔法具よりも魔法で張るバリアの方が圧倒的に自由度が高いので、イレギュラーな今回はとりあえず俺がバリアを張っていた。夜用のバリアの魔法具にはさすがにファイヤーリザードは入らないし、ギリギリ入ってもそんな中で解体なんてしたくないからね。

「分かった。では休ませてもらうな。料理は助けになれないだろうし」
「はい。手早く焼いちゃいますね」

解体した場所からまた少し移動して、アイテムボックスに入れておいた石を取り出し即席の竈を作った。そしてその中に枯れ木を入れてファイヤーで火をつけ、そこにフライパンを乗せて油を引く。これで油が温まったらとにかくたくさんステーキを焼けば良いだろう。

油が温まるのを待つ間に、ピュリフィケイションで清潔にした大きな木の板に肉塊を取り出す。そしてフライパンで焼けるサイズに切り分けていった。ファイヤーリザード一匹で何百人分のステーキができそうだ。

ファイヤーリザードの肉は凄く美味しそうな赤身肉って感じで、見た目ではかなり美味しそうに見える。リオールの街で食べた魔物料理も美味しかったし、もしかしたらこれも美味しいのかもしれないな。

よしっ、油が温まったからステーキをフライパンに乗せて……おおっ、ジュュゥと美味しそうな肉の焼ける音がしてきた。この音が食欲をそそるんだよね……

とりあえず味付けは塩胡椒かな。胡椒は高いから昔は使えなかったけど、最近はそこまで気にすることなく普通に使えるんだ。それ以外のスパイスもあるけど、やっぱりステーキは塩胡椒だよね。

しばらく待っていい感じに焼けたところで、ナイフで一口分を切り分けて味見してみた。え……、何この肉、めちゃくちゃ美味しいんだけど！！

日本で食べてたかなり高めのヒレ肉って感じだ。肉の味が凄く濃くて、噛むたびにジュワッと控えめながらも美味しすぎる肉汁が口の中に広がる。でもしつこくもない。すっきりとした後味だ。

これは魔物の森を駆逐して食べられなくなるのが惜しいぐらいに

美味しい肉だ。魔物の肉って美味しいのはかなりレベルが高いのかも……

317、ファブリスとご飯

それからはひたすらステーキを焼き続け、途中でフライパンを増やして三十枚ほど焼いたところで、とりあえず終わりにした。冷めないようにアイテムボックスに保存していたものを、また取り出してお皿に取り分ける。

ファブリスにはとりあえず五枚、俺達には一枚ずつで良いかな。

「焼き終わりました」

「おお、それがファイヤーリザードの肉か？」

フレデリック様が興味深そうにお皿の中を覗き込んでくる。見た目はいつも食べてる牛肉と変わらない感じだ。

「はい。ちょっと味見したんですが驚くほど美味しいです。皆さんの分も準備したので一枚ずつ食べませんか？」

「それは是非食べてみたいね。美味しそうだ」

「ああ、さっきから良い匂いがしてて食べたかったんだ」

トリスタン様とジェラルド様も興味がありそうだ。

「では今日の夕食は、このステーキにパンとスープにしましょう。今日は私とフレデリック様からなので、トリスタン様とジェラルド様は見張りをお願いします」

「分かった。できるだけ早く頼むぞ」

「ははっ、分かりました。ではまずはファブリスにご飯を届けてきますね」

ファブリスの近くまで転移で移動すると、さっきからステーキの焼ける匂いに尻尾を揺らしていたファブリスがすぐに立ち上がった。動きが俊敏すぎてちょっと面白い。

「ファブリスお待たせ。ファイヤーリザードのステーキだよ。お皿ごと置いておけば良い？」

『ああ、美味しそうだ。主人ありがとう』

「これからはいつでも作るよ。あとはこれの他にも色々と料理を置いておくから、好きなやつを食べてね」

俺はもう一つ大きなお皿を取り出して、そこに普通の牛肉のステーキ、それから鶏肉や豚肉のステーキ、カツやビーフシチューなどたくさんの料理を盛り付けた。

「じゃあどうぞ。もしお代わりが欲しかったら言ってね。ファイヤーリザードもこの世界のご飯もどちらもお代わりあるから」

『うむ。ではいただく』

ファブリスがご飯にがっつくのを確認して、三人の元へ戻りいつものバリアを起動した。そして自分で張っていたバリアを消して、アイテムボックスから机や椅子を取り出す。

ファイヤーリザードのステーキとパン、スープとカトラリー、よしっ完璧だ。

「ではいただきましょうか」

「そうだな。いただきます」

ステーキをフォークで抑えてナイフで切る。おおっ、めっちゃ柔らかい。ほとんど力を入れずにスッと切れるところから、この肉の美味しさが窺えるよね。

そして口に入れると……うぅ～ん、やっぱり美味しい！　このステーキの虜になりそう。これヒレカツにしたら絶対に美味しいよ。今度やろう、絶対やろう。

「……何だこれは。本当に魔物の肉なのか？」
「はい。驚きの美味しさですよね」
「ああ、魔物の肉がこんなに美味いとは……だが基本的に魔物の肉は美味しくないというのが通説だったよな？　たまに例外はあるようだったが」
「そうでした。癖があって美味しいものもあるけれど、基本的には微妙だと。ファイヤーリザードも例外の一つなのでしょうか？」
「そうかもしれないな」

フレデリック様とそんな話をしながら美味しい食事を堪能していると、俺の耳にファブリスの叫びが聞こえてきた。

『主人！！』
「っ……何？　急に大声出されると驚くよ」
『こ、こ、これは何だ！？　この白いものだ！』
「ああ、白くて甘いやつのこと？　それはショートケーキだよ」

驚くかなと思って、こっそりとショートケーキもお皿に盛っておいたのだ。ミシュリーヌ様の神獣なら気に入りそうだし。

『ショートケーキというのか……！　これをもっと欲しいぞ！　何という美味しさなんだ！』

ファブリスの方に視線を向けると、立ち上がって尻尾をちぎれんばかりに振っているのが見える。さすがミシュリーヌ様の眷属だ……予想以上の反応。

俺はちょっと苦笑しながらも、ファブリスに向けて声を張った。
「ファブリスー、それはデザートだから食後に少しだけしか食べられないんだよ。それとご褒美の時かな」
『何と……！　それは本当か！？』
「うん。甘いものは食べすぎると体に良くないからね～」
最初から際限なく与えたらいくらでも欲しがりそうだから、ちゃんと個数を決めておいたほうが良いよね。
『……ご褒美とは。何をしたらもらえるのだ！』
「うーん、何か仕事をした時とかかな？」
『では我に仕事を！』
ファブリスの必死な様子に思わず笑いが込み上げてくる。本当にミシュリーヌ様に似てる。
「今は仕事はないからまた後でね。じゃあ後一つあげるから今日はそれで我慢して」
『良いのか！？　主人ありがとう』
「ファブリスにケーキを一つあげてお皿を回収してきます。ちょっと待っていてもらえますか？」
「分かった。ではバリアを一度解除するか？」
「いえ、転移で行くので大丈夫です」
夜用のバリアは出入り口もないので、外に出るにはバリアを解除しないといけないのだ。でも俺には転移があるから関係ない。
「本当に転移とは便利だな」
「そうですよね。では行ってきます」

またファブリスの目の前に転移をすると、今度はずいっと顔を近づけられる。ファブリス近い……息がかかる距離なんだけど！

『主人、あのショートケーキとは美味しすぎる！　こちらの世界にはあのように美味しいものがあるのだな。前の世界にはなかったぞ』

「そうなんだ。あれは俺が開発したものなんだよ」

『主人は天才か……』

こんなところで見直されたけど、どうせなら戦った時が良かったよ。俺は苦笑しつつ返事をする。

「ありがとね。じゃあ今日は特別で一つサービスだから。これからは一日ひとつだよ」

『分かった。それを楽しみに毎日頑張ろう』

何をあげようかな。さっきショートケーキはあげたからちょっと違うやつが良いだろう。……あっ、ミルクレープが良いかも。食感がまた違って楽しめるよね。

俺は切り分けてないホールのミルクレープをファブリスの前に置いた。

「じゃあこれ、ミルクレープだよ」

『おお、先程のものとはまた違うな』

ファブリスは瞳を爛々と輝かせてミルクレープを凝視した。そして思いの外器用にミルクレープを口にする。

『こ、こ、これは！　なんて美味しさなんだ！　我は先程のショートケーキよりもこちらの方が好きだ。このなんとも言えぬ食感が最

高だ。この上にかかってるソースも良い』
「気に入ってもらえて良かったよ」

ファブリスはふわふわのスポンジケーキよりも、クレープが何層にもなってる食感の方が好きみたいだ。これからはミルクレープのストックを増やしておこう。

『うむ、とても美味であったぞ』
「ふふっ、それなら良かった。じゃあまた明日ね」
『そういえば人間は暗くなると寝るのだったな。我がいれば殆どの魔物は近づいてこないだろうが、我も見張りをしておいてやろう。近づく魔物は排除する』
「それは心強いよ。ありがとう」
『そのぐらい我にとっては造作もない』
「本当にありがとね。じゃあまた明日」

ファブリスとそんな話をして皿を回収し、またバリアの中に転移で戻った。するとフレデリック様も夕食を食べ終えていたので、見張りを交代してトリスタン様とジェラルド様にも夕食を出す。

そしてその後は寝る準備を済ませ、二人ずつ交代で眠りについた。見張り番の時にファブリスの様子を見ていたけれど、ファブリスは基本的に地面に丸まって目を瞑っていた。しかしたまに目を開けて顔を上げることがあり、その時に見ている方向が毎回違ったので、多分その視線の先には魔物がいたのだろうと思う。

そうしていつもより何倍も静かな夜が過ぎていった。いつもなら夜中に魔物が数回は襲ってきていたのに、今日の夜は一度もなかったのだ。やっぱり神獣は凄い、改めてそう実感した。

３１８、魔物の森の奥へ

そして次の日の朝、いつもよりぐっすりと眠ることができて疲れも取れ、爽やかな気分で朝食を取っている。もちろんファブリスも一緒だ。

「やはり神獣様は凄いんだね。昨夜は全く魔物が現れなかったよ」

トリスタン様がファブリスの方に視線を向けつつそう言った。その視線の先には、スイーツを前にして理性を失いかけているファブリスがいる。完全にミシュリーヌ様と一緒だよ。

「私達が見張りの時もでした。たまにファブリスが顔を上げてどこかを見つめていたので、そこから魔物が来るのかなとも思いましたが、結局一度も来なかったです」

「久しぶりに途中で起こされることなく眠れたな」

「ああ、いつもよりスッキリとしている」

「感謝しないといけないね。……今日はどうするのだろうか？　神獣様はずっと私達と共に来てくれるのかな？　例えば別行動をしたりとか……」

確かに別行動ってこともあるのか。その辺は全然考えてなかった。……でもファブリスはスイーツのこともあるし、ずっと俺に付いて来てくれる気がする。ミシュリーヌ様にも俺を主人としてこの世界を救うようにって言われてたし、それには近くにいるのが一番便利だよね。

……でも一応確認してみるか。俺はそう考え、少し遠くでご飯を

食べているファブリスに声をかけた。

「ファブリスー、今日も俺達と一緒に来てくれるの？　というかこれからずっと一緒にいてくれるのか、それとも基本的には自由にしててたまに俺のところに来るのか、どっちにする？」

『我はずっと主人と共にいるぞ。そうでなければスイーツが貰えぬし、ミシュリーヌ様にも主人を助けるようにと言われているからな』

「そっか、凄く心強いよ。ありがと！　……ということらしいので、これからもずっと一緒に来てくれるみたいです」

俺のその言葉に三人は安心したように顔を緩めた。魔物の森という空間の中でのファブリスの存在は、砂漠にぽつんとあるオアシスみたいなものなのだ。ずっと一緒に来てくれるとなればこれ以上心強い存在はいない。

「本当にありがたいね。では今日も昨日のように移動するのかな？」

「そうですね。かなり速かったので今日も背中に乗せてもらえないか聞いてみます。もし了承してくれたら昨日のように進みましょう。あの速度なら数日以内には魔物の森の奥まで辿り着けそうですね」

「そうだね。まだまだかかるなと思ってたけど、思わぬ幸運だよ」

それから朝食を食べ終えて少しだけ休むと、またファブリスに乗って魔物の森を進んで行った。魔物が全くと言っていいほど出てこないので、今までと比べ物にならないほど楽だ。さらに今までの何倍ものペースで進んでいる。

俺達が快適に乗っていられるスピードでこのペースなのだから、本当にファブリスは凄い。

「ファブリス、このペースだと時空の歪みまでどのぐらいで着くか

な？」
『そうだな……明日ぐらいには着くかもしれぬ』
「明日！？」
『正確ではないから分からんがな。数時間の誤差はある』
「いや、それにしても早すぎるよ。俺達は後何週間か、かかる予定だったのに……」

相当早いペースで進んでるとは思ってたけど、そこまでとは。このままいけば魔人と戦わずに時空の歪みを塞いでしまえるかもしれない。

「ファブリス、ミシュリーヌ様と少し話していても大丈夫かな？」
『もちろん良いぞ』
「ありがとう。――ミシュリーヌ様、ミシュリーヌ様？」
『はいはーい。何かあったの？』
「あの、今俺達ってどの辺にいますか？」
『……この前教えなかったかしら？　まあ良いわ、ちょっと待ってなさい……え！？　なんでこんなに進んでるの！？』

やっぱりかなり進んでたんだな。ファブリスの能力が凄すぎる。

「ファブリスの背中に乗せてもらってたらかなり進んでたみたいです」
『……確かにあの子が本気で走れば、この広さの森なんて一日で縦断できるのかしら？　そう考えればレオン達を乗せても相当のスピードよね。ファブリス良くやったわ！』

ミシュリーヌ様のその言葉はファブリスにも聞こえていたのか、走る速度が少しだけ上がった。うん、褒められて嬉しいのは分かるよ。でもこれ以上の速度になると俺達が大変だから自重しようか。

「この速度ならばどのぐらいで辿り着けそうですか？」
『そうね……明日の夕方ごろには着けるんじゃないかしら？』
「おおっ、早いですね。魔人は今どうしていますか？」
『今はちょうど集落に戻ってるのよ。タイミングも最高ね。このまま気付かれずに穴を塞げれば完璧よ！』

それは最高だ。できる限り早く辿り着きたい。でも焦っても良いことはないし、今夜はしっかりと休んで明日に備えよう。そして明日は絶対に成功させよう。

「では明日は絶対に成功させます。魔人に動きがあったらまた教えてください」
『分かったわ。じゃあ頼んだわよ』
「はい。任せてください」

それからその日の夜も昨日と同じように食事をとって眠りにつき、次の日の朝、時空の歪みに向けて出発した。そして今は昼食を食べてまたファブリスの背中に乗っている。

「そろそろ時空の歪みに着くかな？」
『後二時間ほどで着くだろう』
「もう少しだね」

後少しで辿り着けるという場所まで来たら、なんだか緊張してきた。言葉にできない、気持ち悪い焦りが浮かんでくる。魔人がいない今のうちに早く早くと焦ってしまう。
やっぱり俺はあの魔人と戦ったのが結構なトラウマだったのかもしれない。初めて死に直面したからね……

それから順調に進むこと二時間弱、もう後少しだと思ったところで急にファブリスが立ち止まった。

『主人、こちらに魔物が向かってくる。かなり強い魔物が三体だ。ファイヤーリザードと同等以上の強さだな』

「もうすぐに時空の歪みまで辿り着けるのに……その魔物達を避けて、先に穴を塞ぎに行くのは難しい？」

『かなりのスピードでこちらに向かってきているので、それは難しいだろう。油断すれば魔物にやられるぞ。多分魔物の巣穴が近いのだろうな……』

せっかく後少しだったのに……！　しょうがない、最短で魔物を倒して時空の歪みまで行こう。

「じゃあ魔物を倒してから行こう。俺達は一度降りるね」

『うむ。では迎え撃つぞ。ここに来るまで後三分ほどだ』

「了解。……皆さん、一度ファブリスから降りるので転移しますね！」

俺は後ろに声をかけて三人と一緒に地面まで転移をした。そしてすぐにいつものバリアを張ってもらう。

「話が聞こえていたかもしれませんが、この前のファイヤーリザードと同等以上の強さを持つ魔物が三体、こちらに向かっているそうです。私とファブリスだけでは厳しいかもしれないので、皆さんにも援護をお願いします」

「分かった。今日は魔力も使っていないし体力も余っているから、十分戦えるよ」

「ああ、自分の身は守りつつ戦うから安心しろ」

「ありがとうございます。では後一分もしないうちにやってくると思うので、よろしくお願いします」

そうして三人と素早く今後の動きを話し合い、ファブリスがじっと凝視をしている方向に向けて剣を構えていると、遠くに凄い勢いでこちらへ向かってくる巨大蛇が見えてきた。

うわぁ……今度は蛇なのか。気持ち悪い、かなり気持ち悪い。我先にと三体で競うように向かってきている。

『あれはウォーターサーペントだ。体表には水のような粘液が分厚く纏わり付いていて、剣はほとんど効かぬ。一番効果的なのは火魔法だ。我は彼奴と戦うのは苦手だ……』

ファブリスが苦手な相手もいるんだ。……確かに爪の攻撃と風魔法は相性が悪そうだね。

「今まではどうやって倒してたの？」

『風魔法で粘液をなんとか吹き飛ばし、吹き飛ばせた瞬間にその部分に爪で攻撃を加える。その繰り返しだ。吹き飛ばしてもすぐに粘液が再生されるのが厄介なところだ』

「向こうの攻撃は？」

『攻撃はあのでかい胴体で締め上げようとしてくる。後は牙で噛みつかれる。あの牙には毒があるから注意したほうが良いぞ』

毒は厄介だな……もし噛まれたら俺がすぐに治癒をしないと。

「了解。皆さん、牙には毒があるので絶対に噛み付かれないよう注意してください。もし噛まれてしまったら私が治すのですぐに教えてください。では火魔法が使える俺とジェラルド様が中心となって、他の方は敵に隙ができたところにそれぞれ魔法と剣で攻撃をお願い

します」
「分かった」
「了解」
「おうっ」

よしっ、最速で倒して早く時空の歪みへ行こう。

319、ウォーターサーペントと直接対決

『ファイヤーストーム』

まず一番に攻撃をしたのは俺だ。魔物の森で使えるかなと開発した魔法の一つ、ファイヤーストーム。かなり高温の炎の嵐を巻き起こす魔法で、一定範囲内にいる魔物全てを焼き尽くすのだ。

どれほどウォーターサーペントに効くか……そう思いながら俺の莫大な魔力を注ぎ込んでファイヤーストームを維持していると、炎の中から断末魔のような叫び声を上げたウォーターサーペントが這い出てきた。

「ギャォォォォッッ！！」

うわっ、相当怒ってるっぽい。でも粘液があちこちで剥がれ落ちているようだ。ウォーターサーペントの魔力に俺の魔力が勝ったらしいな。

さすが俺だ、頑張って鍛えた甲斐があった。

『主人凄いぞ！　あそこまで高温ならば彼奴らも粘液を維持できぬ』

「ふふっ、凄いでしょ！」

俺は一人で練習していた魔法が誉められてかなり嬉しく、ドヤ顔が止められない。だって普段は俺の魔法を披露する場がないんだ。平和なのは良いことなんだけど、ちょっと寂しかったんだよね。やっとお披露目の機会が来た。

「じゃあ粘液が再生する前に攻撃しちゃおう。とりあえずファブリスが左のやつで俺が真ん中、皆さんが右で！」
『相分かった』
「了解っ！」

俺は剣にバリアを纏わせて真ん中のウォーターサーペントに向けて駆け出した。そしてそれと同時にファイヤーストームを消して、高温のファイヤーボールを飛ばす。

『ファイヤーボール』

ファイヤーボールはかなりの速度でウォーターサーペントの胴体に当たり、元々ボロボロになっていた粘液をさらに蒸発させた。
そしてその剥き出しになった皮膚に、バリアで切れ味を強化させた剣を全力で突き立てる。グサッ……おおっ、相当深く刺さったな。

「ギャッ、グギャォッ！」

うわぁっ、ウォーターサーペントは最後の力を振り絞っているのか、剣を突き立てた俺を振り払おうと体を振り回す。バシンッ、ズドンッと地面や魔植物にぶつかりながら苦しんでいるようだ。

「うわっ、ちょっ……」

俺は剣を抜くタイミングを逃して、ウォーターサーペントの動きに振り回されている。ダメだ……足場が滑ってて上手く体勢が立て直せない。剣を抜くにも踏ん張れないし……
とにかく魔物の動きを止めなくちゃダメだな。バリアは自分の身を守るのに使ってるから……そうだ。ファブリスが風魔法で敵を押しつけて動けなくするって言ってたよね。それをやってみよう。

『ウインド』

まだ詠唱が決まっていないのでとりあえずウインドと呟き、風でウォーターサーペントが地面に縫い付けられるようにイメージした。おっ、成功だ。

ウォーターサーペントが苦しげなうめき声をあげて動きを止めたところで、俺は落ち着いて剣を握り直し、再度ウォーターサーペントの顔の近くを狙って剣を振り下ろした。

それによってウォーターサーペントは絶命したようだ。

ふぅ……ちょっと苦戦したけどなんとか倒せたな。ファブリスの方も問題なく倒せたようだ。三人は……ちょっと苦戦してるかな。助けに行こう。

『レオンっ！！』

そう考えた瞬間、頭の中にミシュリーヌ様の声が響いた。かなり焦っている様子だ。俺は慌てて本を取り出して返答する。

「どうしたのですか？　あっ、ちょっとだけ待ってください。ファブリス！　三人を助けてあげて！」

『了解した』

「もう大丈夫です。それでどうしたのですか？」

『魔人が動き出したのよ！　レオン達もしかしてだけど、穴の近くで戦闘をしてる！？　激しい戦闘音が聞こえて、一応様子を見てくるってクドゥフェーニがレオン達の方に向かってるわ！』

マジか……穴の近くではあると思ってたけど、向こうの世界に戦闘音が聞こえるほどだったなんて。確かにウォーターサーペントは

相当暴れてたし、地響きとか凄かった。うわぁ……最悪だ。

「あと何分ぐらいで来ますか？」

『あと五分ほどでこっちの世界に来るわ。そしてさらに十分ほどで今のレオン達がいるところに来るわね』

「俺達が先に時空の歪みに向かったら間に合いますか？」

『ファブリスの全力なら、もしかしたら……』

ウォーターサーペントの方を見てみると、ついさっき三体目も倒したらしい。これなら行けるかも……！

「分かりました。では今すぐ向かってみます！」

一秒でも俺の方が早くて、杖さえ投げ込めてしまえば良いのだ。

「ファブリス！　魔人が来てるらしいから全力で時空の歪みまで向かって！」

俺は転移で全員をファブリスの背中の上に乗せ、バリアで強制的に固定してファブリスにそう叫んだ。それと同時にファブリスは最初に乗った時よりも速いペースで走ってくれる。

『了解した』

うっ……やばい、早すぎて景色も見れないレベルだ。後ろからもうめき声が聞こえてくる。皆さんごめんなさい。

ただ今回はバリアで体が動かないように固定したので、振り落とされることはない。

俺はそんなファブリスの背中の上で、アイテムボックスの中から

頑張って杖を取り出した。そしてそれを絶対に落とさないように手で握りしめる。これを時空の歪みに投げ込めば終わりだ。

それからしばらくぎゅっと体を丸くして耐えていると、ファブリスが急停止した。それによって体に負荷がかかりバリアに押しつけられる。うぅ……マジで辛い。

『主人、少し間に合わなかったかもしれぬ』

ファブリスのその言葉に前を向くと……そこにはタウンゼント公爵家で会った、あの魔人が一人で佇んでいた。そしてその背後には空間が歪んでいるような、そこにだけオーロラがあるような、そんな時空の歪みが存在していた。

「何の音かと偵察に来てみれば、まさかお前からこちらにやってきてくれるとは。殺しに行く手間が省けたな。礼を言うぞ」

……もう逃げられないな。戦うしかない。

どうせ戦うなら正々堂々と戦って、今度こそ俺が勝ってやろう。俺はそう気合を入れて一つ息を吐いた。杖は一度アイテムボックスの中に逆戻りだ。

「ファブリス、とりあえず俺が一人で戦うから見守っててくれる？もし危なかったら助けてくれたら嬉しいんだけど……できれば一人で戦いたくて。この前負けたのが悔しかったから」

俺の力がどこまで通用するのか試したいっていうのも本心だし、こう言っておけばファブリスが三人を守ってくれるだろう。

『了解した。危なそうなら手助けするぞ。しかしあいつは強いな……』
「ありがとう。皆さんもファブリスと待っていてもらえますか？」
「ああ、俺達は自分の身ぐらい守れるから気にするな」
「ありがとうございます」
俺はクドゥフェーニから一切視線を逸らさずにファブリスの背中から飛び降りた。そして相手の様子を窺いながら少しずつ近づいていく。
「また会えるなんて嬉しいよ。あの時逃げられたのが悔しかったんだ」
俺のその言葉に、クドゥフェーニは少しだけ眉間に皺を寄せた。
「逃げてなどいない……」
「そうだったの？　俺の記憶では分が悪くなって逃げたはずだけど？」
少しでも冷静さを失ってくれれば隙も生まれるだろう。そう思って挑発するような話をする。すると俺の思い通りにイラついたのか、クドゥフェーニは俺に向かって真っ直ぐに飛び掛かってきた。
よしっ、俺は内心ガッツポーズをしつつ、俺に向かって一直線に飛んでくるクドゥフェーニの背中側に転移をした。そして全力で剣を振り下ろす。
ガキンッ……しかしやったと思った瞬間に、クドゥフェーニは後ろを振り向き俺の剣を受け止めた。けれど空中で踏ん張れないからか、そのまま吹き飛ばされて魔植物に激突する。
俺はその隙を逃さずにすかさず追撃をした。

『ファイヤーストーム』

さっきウォーターサーペントをかなり弱体化させた魔法だ。これで倒せてくれ……そう願いながら魔力を注ぎつつ剣を構えて待つと、クドゥフェーニは炎の中から飛び出してきた。

ガキンッ……うっ、やっぱり力も強いな……

今度は互角の力でどちらの剣も一歩も引かない。クドゥフェーニの服や髪は少し燃えているが、そこまでダメージはなかったようだ。

「お前、前より強くなったか？」

「お前が弱くなったんじゃないの？　今日は俺が勝つから」

そんな会話をしてお互い後ろへ一度退く。ふぅ……やっぱり鍛錬の成果が出てるのかな。一人でも戦えるようになっている。

でもこれからどうすれば良いのか……戦えはするけれど決め手にかける。

320、決着

今度はクドゥフェーニから攻めてきた。水魔法と風魔法を融合させているのか、水の竜巻が凄い勢いで俺に襲いかかって来る。
俺はそれを咄嗟にロックウォールで防ぎ、高温のファイヤーストームで水を蒸発させた。そして蒸気で視界が悪くなっているところに、自分の体を風魔法で守りながら飛び込み、向こう側にいるクドゥフェーニへとファイヤーバレットを放った。

ガキンッ……防がれたっ！

クドゥフェーニはそれを正確に剣で弾くと、そのままの勢いで俺に向かって剣を振り下ろしてきた。俺はその剣を受け止める……瞬間に転移でクドゥフェーニの真後ろに移動して剣を振り下ろした。
今度こそいける……そう思ったけど、凄い勢いのファイヤーボールが襲ってきてそれをウォーターボールで打ち消している間にクドゥフェーニには逃げられた。

はぁ～、マジで強い。後少しが届かない。あの角を切り落とせたら良いんだろうけど、まずそれが難易度高すぎる。

「ねぇ、お前の住む世界は向こうの世界で、俺が住む世界はこっちの世界。お互い不干渉を守れば争う必要はないと思わない？　何でこっちの世界も欲しいの？」

俺はこのままだと戦いが長引きそうだと思ったので、一息吐くためにもクドゥフェーニに話しかけてみた。

「お前に話す義理はない。俺達はこちらの世界が欲しい、それにはお前達が邪魔、それだけだ」
「でもお前にも家族がいるんでしょう？　俺にもいる。どっちが勝っても誰かが悲しむんだよ？」

クドゥフェーニには命を狙われているんだから俺も殺すつもりで戦っているけれど、ミシュリーヌ様のところで魔人の集落を見て、できれば争わずに解決できたら良いのにと思ったのだ。

「戦い死んだ者を家族は誇りに思うだろう。悲しむことはない」
「いや、そんなことないでしょ。もう奥さんや子供、友達に会えなくなるんだよ？　そんな存在がいるのか知らないけどさ」

俺のその言葉にクドゥフェーニは一瞬だけ悲しそうな顔をした。やっぱり大切な存在がいるんじゃん……

……どっちの家族も悲しませない方法は一つだけだ。あの時空の歪みの中にクドゥフェーニと杖を両方同時に投げ入れること。俺にできるだろうか……頑張ってみようかな。

今度は俺が先手をとった。アイテムボックスの出口をクドゥフェーニの真上に作り出し、そこから巨大な岩を落とす。クドゥフェーニはそれを軽く避けたけれど、俺はその避けた先に岩を盾にするようにして転移をした。するとクドゥフェーニは火魔法と風魔法を組み合わせたような、爆発を起こす魔法を使い岩を粉々に砕く。
俺はその飛び散る岩の中をバリアで自分を守りながら突き進み、クドゥフェーニへとファイヤーバレットを放った。そしてファイヤーバレットが剣で弾かれる瞬間に、クドゥフェーニの後側にファイヤーバレットと共に転移をした。

物だけじゃなくて俺も一緒に転移しないといけないところが大変だけど、上手く転移を駆使していく。転移させるとファイヤーバレットの勢いは全てなくなるのでその場にポトリと落ちるだけだけど、ファイヤーバレットが消えたという事実が相手を動揺させる。

その動揺の隙をついてクドゥフェーニへと正面から剣を振るうと、わずかに反応が遅れたのか俺の剣が少しだけクドゥフェーニの顔を傷つけた。

よしっ、俺はその勢いのまま剣を振るうが、持ち直したクドゥフェーニに全て防がれる。やっぱり持ち直されるとダメだ……

後一つ何かで動揺させて、その隙を突いてクドゥフェーニを上手く時空の歪みの方に突き飛ばせれば……

そうだ、あれが良いかもしれない。動揺させられるかも。

俺はそれを実行するためにクドゥフェーニと剣を合わせつつ、魔法も使いながらなんとかクドゥフェーニを時空の歪みの前にまで誘導した。クドゥフェーニは俺達がなぜここにいるのか知らないので、時空の歪みが塞がれることは警戒していない。警戒されたら一気に難易度が上がるし、勝負は一回だ。

カキンガキンッ……と剣を振りつつ上手く隙を作れるタイミングを窺う。そしてここだと思った瞬間に、俺はそれを口にした。

「クドゥフェーニ！」

クドゥフェーニは俺が発した自分の名前に酷く驚き、動きを一瞬止めた。名前をミシュリーヌ様に教えてもらっていて良かった。

クドゥフェーニは名乗ってもいない名前をなぜ俺が知っているの

かと、もしかしたら俺も魔人なのかと、そう混乱しているのだろう。
俺はその隙を逃さずに剣に力を入れてクドゥフェーニの体勢を崩し、体勢を崩したところにミシュリーヌ様の杖を取り出して、クドゥフェーニと共に時空の歪みに向けて蹴り飛ばした。

「がはっっ」

クドゥフェーニが杖と共に時空の歪みに消えていく瞬間、一瞬だけこちらを見た。その表情は驚愕に染まっていて、俺は最後に一泡吹かせられたことに満足してクドゥフェーニを見送った。
そしてクドゥフェーニと杖が時空の歪みの向こうに消えていった瞬間、ピカッとあり得ないほどの眩しい光が辺りを包み込み、それが治まるともうどこにもあのオーロラのような歪みは存在しなかった。

……成功、したのか。

「ははっ、やった。遂にやった！」

段々と成功した実感が湧いてきて、顔に笑みが浮かんでいく。よしっ、遂にやり遂げた。これでもうこの世界に脅威は入ってこなくなるはずだ。

「ミシュリーヌ様！」
『レオン遂にやってくれたわね！　本当にありがとう！』

本当に成功したのか確認するためにミシュリーヌ様に話しかけると、俺が聞く前にテンション高いミシュリーヌ様の声が聞こえてき

た。

「じゃあ成功したんですね！？」

『ええ！　これでもう穴が開くことはないわ！』

「やったぁ……」

俺はその事実に今度は体の力が抜けるのを感じる。

「レオン、大丈夫か！？」

倒れそうになった体を支えてくれたのはトリスタン様とジェラルド様、フレデリック様だ。それにファブリスも近くに来てくれている。

「はい。遂に成功しました……」

「やったな！」

「レオン、凄い戦いだったよ。本当に感動した」

「レオン凄いな！」

「本当に成功して良かったです。これで後は、この魔物の森をどうにか抑え込めば大丈夫ですね」

俺のその言葉に三人は真剣な表情で頷く。遂にここまで来たな。魔物の森を押さえ込むのは大変だけど、人海戦術に、俺とファブリスがいればどうにでもなるだろう。

「そっちは帰ったらまた頑張りましょうか。とりあえず今は喜びましょう」

「そうだな」

「あっ、そうだ。ミシュリーヌ様」

俺は聞き忘れたことがあったと思って、またミシュリーヌ様に話しかける。

『どうしたの？』

「あの、クドゥフェーニはどうなりましたか？　向こうの世界に帰れたでしょうか？」

それだけが気になってたのだ。あいつのことは好きじゃないけど、無事に帰れていたら良いなとは思う。やっぱり俺は殺し合いとか向いてないんだよね……

『ちゃんと帰れたわよ。今は時空の歪みがあった場所を呆然と眺めているわ。そのうち現実を受け入れるでしょう』

「そうですか。それなら良かったです」

『レオンはお人好しね～。まあ私は嫌いじゃないけどね』

「ありがとうございます。じゃあまた連絡しますね。これからは魔物の森をどうにか駆逐して、それと並行してミシュリーヌ様のもう一つの願いにも着手します」

『本当！？　レオン大好きよ！　待ってるわ！！』

ミシュリーヌ様は時空の歪みが塞がった時よりもさらに嬉しそうにそう叫ぶと、俺との通信を切った。

「ミシュリーヌ様からも、もう時空の歪みが出現することはないとのことです。それから魔人はしっかりと向こうの世界へ帰ったみたいです」

「魔人の脅威が無くなったのは大きいね」

「はい。本当に良かったです。ふぅ……疲れましたね」

「今日はどうする？　ここで一泊してまた明日から帰るか？」

確かにもう時間も遅いし、今日はここで泊まるのが一番かな。

「そうしましょう」

『明日からは我が乗せていくからな。魔物の森は数日で抜けられるぞ』

「ファブリスありがとう」

「予想以上の早い帰還になりそうだね」

「ファブリスを見たら誰もが驚くだろうな」

そんな会話をしながら、今までで一番穏やかに時はすぎていった。

本当に成功して良かった。

321、帰還

次の日の朝、俺は帰路につく前に魔植物の採取に精を出していた。なんの魔植物かというと……もちろん稲だ！

ミシュリーヌ様が魔物大繁殖のきっかけになったと言っていた通り、魔物の森にはそこかしこに生えている。そんな稲を採取してアイテムボックスにたくさん収納しているのだ。魔植物は土に生えたままでは収納できないので、土から引き抜いて収納している。

これで持ち帰ってから植えてまた育つのかは分からないけど、とりあえずやってみないとね。後はアイテムボックスに入れないものもいくつか持って帰ろう。

今後の展望としては、大公家の屋敷ができたら裏庭で栽培してみて、後々にはこの世界のもう一つの主食としたい。放っておいても勝手に育つレベルなんだから、主食にもってこいだと思うんだ。まだ食べてみてはいないし、味も確かめてみてからだけど。楽しみだなぁ。

とりあえず米さえあれば塩をかけて塩おにぎりが作れるし、おにぎりで良いから和食が食べたい。もうパンには飽き飽きしてるんだ。やっぱり俺は元日本人だよね、主食は米がいい。

「レオン、何をやってるんだ？」

「魔植物の採取です。稲って名前の植物で主食になるんです」

「……これがパンになるのか？　小麦とは少し違うみたいだが」

「いえ、パンとはまた違うものになります。持ち帰ったら育ててみるので食べてみてください。ミシュリーヌ様からも主食になるってお墨付きをもらってますし、小麦よりも簡単に育つらしいです」

俺のその言葉に目を光らせたのはトリスタン様だ。

「それは興味深いね。帰ったら育て方や食べ方を私にも教えてもらえるかな？」

「もちろん構いません。パンと並ぶ主食になってくれたら良いなと思っています。アレクシス様にも相談しようかと」

この稲がどれほど簡単に育つのか分からないけど、ミシュリーヌ様が放っておいても大繁殖するって言ってたレベルだし、餓死者を減らせるんじゃないのかな。飢饉の時とかもかなりの人を救うかもしれない。

「それが良いね。帰っても忙しくなりそうだ」

「ですね」

帰ったらまずは魔物の森を駆逐するためにかなり忙しくなるだろうし、シュガニスのことや日本食の充実にも力を入れたい。国の制度をもっと良くするための政策も考えたいし……

まだまだやることはたくさんある。魔物の森は他国の方にまで広がっているから、そっち側はどうするのかも考えないとだよね。この世界に来てから他国のことはほとんど考えてなかったけど、どうなってるのだろうか。

ミシュリーヌ様も過去の使徒が作った国だからか、この国を世界の中心として見てて他の国はおざなりにしてるところがあるんだ。今度他の国の様子も聞いてみよう。

他の国の生活様式とか気になる。たまに輸入品だって食べ物が売られてることもあるから、少なくとも植生はラースラシア王国とは違うんだと思うけど……

ミシュリーヌ様は日本の植生にするために頑張ったって言ってた

けど、多分それはラースラシア王国の周辺だけで、もっと遠い国になると別の植生になっているんだろう。カカオとかも輸入品だったし。

――よしっ、このぐらいあれば十分かな。魔物の森を完全に駆逐できるのなんて相当先の話だろうし、また足りなければ採取に来れば良い。

そうして俺が採取を終えて立ち上がると、ファブリスと三人は準備完了で待ってくれていた。

「お待たせしました」

「問題ないよ。神獣様がいらっしゃると魔物もほとんど来ないからね」

「確かにそうですね。では行きましょうか。ファブリスよろしくね」

『うむ。任せておけ』

帰りもファブリスの背中に乗せてもらうことになったので、俺は三人と一緒に転移で背中に乗る。そしてバリアで落ちないように固定した。

「皆さん準備はいいですか？」

「大丈夫だよ」

「いつでも行けるぞ」

「俺もだ」

「では行きますね。ファブリスよろしく」

『了解した』

――そうしてファブリスの背中に乗ること数日、俺達はほとんど

魔物と戦うこともなく、行きの数倍の速さで魔物の森からの脱出に成功した。

「うぅ～ん、やっと魔物の森から出られた！」

魔物の森の中は陽の光が届かないわけではないんだけど、それでもどこか薄暗いし居心地は良くなかった。外に出られて爽快感が凄い。

「やっぱり陽の光は良いね」
「もうしばらくは中に入りたくないな」
「しばらく魔物の森は見たくない」
「その気持ち分かります……でも魔物の森はまだまだ広がってますからね。本番はこれからかもしれません」

新しいものが入ってこなくなっただけで、今この世界にある魔物の森は今まで通りにどんどん広がって行くだろう。でも少しはそのペースも遅くなるのかな。

楽観視はせず、今まで以上に魔物の森の駆逐に尽力しないと。とりあえずファブリスの力を借りて俺が頑張るしかないか……

「そうだね。早く帰ってこの後の話し合いをしないと」
「この後はどう帰りますか？　このままファブリスに乗って帰るので良いのでしょうか？」
「確か馬車が待機してくれているはずだけど……」

そこまで話したところで、遠くから騎士団が隊列を組んでこちらに向かってくるのが見えた。

「あっ、迎えに来てくれたみたいです」

「そうだね……って、あれ攻撃しようとしてないかな？」
「あれは確実に攻撃体制です。多分私達が見えていなくて神獣様のみだと思っているのでしょう。大型の魔物が出現したと捉えられているのかと」

ジェラルド様によるとあれは魔物と戦う時の隊列らしい。こっちに気づいてもらわないと。

「誤解を解かないと大変だね……」
「では私が転移で知らせてきますね」
「確かにそれが一番だ。よろしく頼むよ」
「かしこまりました。ファブリス、ちょっと行ってくるけど三人のことよろしくね」
『分かった』

転移で騎士団から少しだけ離れたところに飛ぶと、一斉に剣を向けられたけれどすぐに俺だと気づいて剣を下ろしてくれた。

「ジャパーニス大公様、大変申し訳ございません！」
「気にしてないから良いよ。それよりもあそこに見えるのは神獣のファブリスなんだ。だから攻撃する必要はないよ」
「……神獣様、でございますか？」
「うん。魔物の森の中で会って、これから俺とずっと一緒にいることになるからよろしくね。あそこにトリスタン様達もいらっしゃるから、こっちに来てもらうね」
「はぁ……」

ここにいる騎士の中で一番立場が上に見える人にそう話をしたけれど、よく理解できてないみたいだ。急に神獣とか言われても理解できないよね。

とりあえず皆を呼んでこよう。そう考えて俺はもう一度転移をした。

「ただいま戻りました」
「大丈夫そうだったかな？」
「はい。一応攻撃対象でないということは分かってもらえたと思います」
「それなら大丈夫だね。では行こうか」
「じゃあファブリスよろしく。あっちにいる人達の少し離れた場所まで行ってくれる？」
『了解した。では行くぞ』

そうして騎士団の元にファブリスに乗って向かうと、総勢数十人の騎士達はかなり警戒していた。一応剣を向けてくることはなさそうだけど、ファブリスを恐れてるみたいだ。

「では転移して地面に降りますね」

俺達がファブリスから降りると、警戒していた騎士達もやっと安心したようでその場に跪く。

「皆様、ご無事のご帰還何よりでございます」
「出迎え感謝する。そして任務は無事成功したことをここに宣言しよう」
「何と……！　騎士団一同、心よりお慶び申し上げます」

その言葉にトリスタン様は、鷹揚に頷きながら騎士全体を見回した。こういう態度が威厳につながるのかもな……俺も見習おう。

「では早速だが街に向かっても良いだろうか？」

「もちろんでございます」

そうして俺達はとりあえず一番近くの街に向かい、そこで一泊して疲れを癒した。ベッドに横になった瞬間深い眠りに落ちたから、自分で思っていた以上に疲れていたみたいだ。ファブリスは建物の中では窮屈そうだったので、訓練場の一角に簡易のベッドを作ってもらってそこで寝ていた。大公家の屋敷の庭に、ファブリスの家も作らないとかな。

322、王都へ

次の日の朝。すっきりとした気分で目が覚めて、見張りの必要ない朝食を四人で一緒に食べ、応接室のようなところに集まって今後の話し合いをすることになった。

「やっぱり魔物の森では疲れが溜まっていたんだね。昨日はベッドに入った途端に寝てしまったよ」

「私もです。バリアがあってベッドを持ち込んでいたとはいえ、やはり完全に気は抜けなかったですからね」

「バリアとアイテムボックスがなかったらと思うと、想像するだけで恐ろしいよ」

その二つがなかったらもう地獄だったよね。絶対序盤で引き返してたと思う。

「本当にそうですね。その二つがなければ奥まで行くことはできなかったと思います。それに皆さんがいなくても無理でした。ついて来てくださって、本当にありがとうございました」

「こちらこそ、この国を救ってくれてありがとう。感謝しなければならないのはこちらだよ」

「レオンそうだぞ。本当に感謝する」

「ありがとう。そしてこの後もよろしく頼む」

三人は晴れやかな表情でそう口にした。俺もその様子に自然と笑顔になる。

「はい。この後もお互い頑張りましょう」

「そうだね。それで王都までの帰還はどうする？　馬車でも行けるけれど、その場合は時間がかかってしまう。神獣様に乗せていただければかなり早く帰れるけど」
「ファブリスに聞いてみたところ、私達を乗せるのは問題ないそうです。後は街道をファブリスが走り抜けても良いのかどうかですが……」
「それは問題ないよ。というよりも、問題ないことにしよう。歩いている人や馬車にさえ気をつけてくれれば大丈夫」

問題ないことにするのか……王弟と使徒がいれば少しの無理は通るんだろうな。ここは甘えちゃっても良いか。ファブリスのスピードに慣れたら、馬車でゆっくりと帰るのはちょっと面倒くさい。

「ではファブリスに乗って帰ることにしましょう。そして私が転移で往復できるほどの距離にまで王都に近づいたら、一度ファブリスのことを知らせに行きます。そしてアレクシス様の指示を仰ぎ、また戻りますね」
「確かにそれが一番だね。流石に何も知らせずに神獣様が王都に入ったら、かなりのパニックになるだろうし」

何も知らせなかったら巨大な魔物が襲ってきた！　って騎士団が出動する事態になるよね。一度怖いイメージがついちゃうとファブリスが王都で暮らしにくくなるだろうし、最初は重要だ。

「ではその予定で行きましょう。出発はいつになさいますか？」
「私は今日でも大丈夫だよ」
「俺も大丈夫だ。早い方が良いだろう」
「俺も大丈夫だぞ」

今はお昼まで後一時間ほどの時間だから……お昼を食べて少し休

んだら出発にしようかな。そして王都までは街に寄らずに野営で良いだろう。

「では本日の十三時に出発でよろしいでしょうか？　夜は魔物の森の時のように野営しましょう。街に寄るのも大変ですし……」

「そうだね。魔物の森の外で野営なんて、全く問題はないよ」

「確かにあの中にずっといたら、逆に天国ですよね」

苦笑しつつそんな会話をして、今後の予定が決まった。そして予定通りにお昼を食べて出発だ。

「じゃあファブリス、王都までよろしくね。途中で馬車や歩いてる人間がいるかもしれないけど、絶対に怪我をさせないように気をつけて」

『分かっている。街道を少し外れたところを走る予定なので問題はないぞ』

「そうなの？」

『ああ、我は整った道よりも自然の道のほうが好きだからな』

「そんなものなんだ。じゃあファブリスが走りやすいところで良いよ。背中に乗るね」

そうしてファブリスに乗り、騎士の皆さんに挨拶をして街を出る。

「では魔物の森の押さえ込み、これからも頼んだぞ」

「はっ、お任せください！」

「今回の任務も成功したのでもう少しの辛抱だろう。辛いとは思うが耐えてほしい」

「かしこまりました。我らの剣は国のために」

トリスタン様と騎士の代表の方がそう話をして、俺達は街を出た。

そしてまたひたすらファブリスの背中で景色を眺める。ここ数日はずっとこうして揺られてるよね……そのおかげで背中に乗りながら会話ができるほどに慣れた。

「トリスタン様、この前いくつもの貴族家がお取り潰しになりましたが、その領地はどうなっているのでしょうか？」

俺はファブリスに乗りながら国の様子を眺めて、気になったことを口にした。

「領地は再編成をしているところだよ。でもどの貴族も少しでも多く、少しでも良い領地を欲しがるからね。話し合いはあまり進んでないみたいだ」

「やはりそうなのですね……」

かなりヤバい敵対貴族はいなくなって、表面上は国が一つにまとまったように見えても、やっぱり自分の利益を重視したいのが人間だよね……揉めずにスムーズに行く方がおかしいか。

「でも今の貴族は王家に反発しようとする家もないし、そこまでひどく揉めているわけでもないみたいだよ。どちらかと言うと下位貴族が争ってるみたいだね」

確かに下位貴族は領地も狭いのだろうし、少しでも多くもらってあわよくば陞爵をって感じなのかな。

「では近いうちに決まるのでしょうか？」

「そうなるね。ただ決まった後の方が大変だよ。この前取り潰しになった領地は他と比べてかなり疲弊しているみたいで、まずは復興から手をつけないとだと思う。それをどれだけの貴族がやってくれ

るのか……」
「疲弊しているとは、税が高かったのでしょうか？」
「そうみたいだね、ギリギリまで搾り取っていたみたいだよ。この国の制度だと税は領主が決められるから。でも普通はそんなことをすればいずれダメになるとわかるものだけど、そんなことも分からない貴族が多くて……貴族を一新したいぐらいだよ」

トリスタン様は、最後に微かに俺に聞こえる程度の声量でそう呟いた。確かにそれが出来たら良いのだろう。でもそんなことしたら国が回らなくなるから、どこかで妥協は必要だよね……

「現状できる範囲で少しでも良くしていかないとですね」
「そうだね。まずは餓死者がでないようにしなければ……それからこの国では基本的に奴隷や人身売買は禁止されてるけど、それも横行してるからね」
「確か犯罪奴隷だけは認められているのですよね？　重犯罪を犯した人は鉱山などに送られるとか……」
「そうだよ。本当はそれだけのはずなんだけど、貧しい田舎では普通に人身売買が行われていたりするんだ。口減らしのために子供を商人に売って、商人はその子供を貴族や裏社会に売る。その流れは分かってるんだけど、あれは取り締まるのが難しくてね。奉公に出すだけ、職場を斡旋しただけ、そう言われるとそれ以上追求できないことが多くて……」

確かに改めて考えてみると難しいのかも。というか自分の子供を売ってしまうほど貧しいってことがまず問題だよね。田舎の村でも、裕福とはいかなくても衣食住に困らないようになってほしい。

「かなりの問題ですね。そうして売られた子供はどんな仕事をさせられるんでしょうか？」

「そうだね……運が良ければ普通に貴族家や商家の下働きになれるよ。でも運が悪いと悪どい商売の矢面に立たされたり、言いづらいんだけど、愛人のような感じになったり……」

……最悪だな。確かロジェも孤児院から逃げ出してる途中で、捕まって売られそうになったんだったよね。

はぁ、問題がそこかしこにありすぎる。孤児院の問題も解決しないと。

323、この国の現状

「トリスタン様、孤児院は教会には必ず併設されているのですか？」
「いや、必ずではないよ。王都や大きな街では併設されているところが多いけど、ないところもあるかな。それに教会は一応どこにあるものも王家管理なんだけど、やっぱり領主の意向が優先されるからね」

やっぱりそうなんだ。どこの世界でも国を健全に運営するのって至難の業だよね。

「では孤児院がないところで孤児になったものはどうなるのですか？」
「それは……遠くの孤児院を目指すか、どこか住み込みで働ける場所を探すかになる。でもそう簡単にいかないだろうね……」
「スラムのような場所はあるのでしょうか？」
「一応ないことになっているけれど、あるところにはあるよ。王都にもそう呼んでも違和感がない場所はあるね」

じゃあ孤児となって孤児院に辿り着けなかった子供は、その辺で野垂れ死ぬか誰かに捕まって売られるかスラムに辿り着くか、そんな将来しかないってこと？　この国ヤバいよ……この文化レベルだと仕方がないのかもしれないけど。
それに孤児院に辿り着いたとしても、ロジェがいたような孤児院じゃ結局ダメだし。最悪孤児院の大人に売られる可能性もあるよね。

問題点が多すぎてどこから手をつけて良いのか難しい。まずは……孤児院の運営を健全にして、それを増やしていくところからかな。

あとは貧しい村を無くすことと……こんなことやりたくないけど、育てられない子供を国が買い取るっていうのもありなのかな？
いや、買い取ったら人身売買を容認したことになっちゃうからダメか。……国が雇って教育する、給料は成人するまでは実家に支払われる。そんな制度にしたらどうだろう？

こっちの方がありかもしれない。でも給料が良いと子供を預ける親が増えすぎるよね。そこは最低限にして、でも商人に売るよりは利益がないとダメだ。それに本当に子供を育てられない環境なのか、監査をすることも必要かな。

色々と無理があるけど、今すぐに子供を救うことを考えたらありな気がする。それに子供の頃から教育できれば、将来国のために働いてくれるだろう。田舎に戻ったとしても教育は無駄にはならない。

あっ、平民のための学校って形にすれば良いのかな？　簡単な学力検査を受けてもらって、受かった人は一定額が実家に給付されるとか。それなら子供に少しは教育を施そうって気持ちにもなるんじゃないだろうか。
でもそれにはまず教育を受けられる環境を整備しないとダメか。じゃあまずは教会に平民のための教室を開くところからかな？

――ああ！　もう問題が多すぎる！

何かをやろうとしてもあちこちに問題があってうまくいかない。やっぱりとにかく最初は教会の運営を健全化することからかもしれない。国立の機関が国に散らばってるって、健全に運用できれば凄く有用なはずなんだ。
そしてそこで教育を受けられるようにして、孤児院併設も義務と

するのが良いかも。そして王都とそれぞれの領都に平民のための学校を作って、そこに受かったらちょっとだけお金がもらえるとか。そんな制度もありかな。

トリスタン様と話をしつつ、今後この国をどう良くしていくのかについて思考を巡らせていると、いつの間にかお昼を過ぎていたようなのでファブリスに止まってもらった。

「ファブリスありがとう。皆さんお昼ご飯にしましょう」
「確かにもうそんな時間か」
「では降ろしますね」
「ふぅ、やっぱり地に足がつくのは良いね」

トリスタン様は地面に降り立つと大きく伸びをしながらそう言った。

「分かります。神獣様のお背中も乗り心地抜群ですが、やはり自分の足で立つのは良いですよね。馬に乗って降りた時もそう思います」
「やっぱりどこか安心するよね」
「そうですね」
「皆さん、今日はバリアなしで良いでしょうか？」

もうここはほとんど危険はないし、バリアがないと自然な風が感じられて気持ち良いのだ。

「なくても構わないよ」
「ここならばほとんど危険はないから良いだろう」
「やっとバリアなしで開放的な中、食事ができるな」
「ではバリアなしで食事の準備だけいたしますね」

今日のお昼は何にしようか……魔物の森から無事生還できた記念にバーベキューにしようかな。前に皆でやったから道具は全部揃ってるし、実は材料もまだまだ残ってるんだ。アイテムボックスはいつまでも保存できるからと思って準備しすぎた。

「皆さん、今日は無事に魔物の森から生還できたお祝いでバーベキューをしませんか？」

「バーベキューとは何かな？」

「外で火をおこして、自分で肉や野菜を焼いて食べることです。焼くのも楽しいし焼き立てを食べるのも美味しいですよ」

「それはやったことがないね……じゃあやってみようか」

「本当ですか！　では準備しますね」

自分で焼いて食べるなんて断られるかなと思ったけど、頷いてくれて良かった。俺って結構バーベキュー好きなんだよね。肉と向き合って自分にとって最適なところまで焼いて、さらに焼きたてをそのまま食べられるのがとても良い。炭の匂いも最高だし。

この前準備した肉とガーリックバターソース、それからパンや野菜も取り出して……後はファイヤーリザードの肉も切り分けよう。ファブリス用にはステーキに、俺達には小さめにカットする。

あとは石を積み上げて炭に火をつけてその上に網を載せ、その周りに土魔法で椅子を作る。便利なように低い机も作り出しておくか。よしっ、完璧だな。

「では皆さん、本日はこちらに腰掛けていただけますか？　いつも使っている椅子だと高すぎるので魔法で作ってみました。クッションなどが欲しければ仰ってください」

「レオンはやっぱり……規格外だね」

「……本当ですね」

「魔法をこのように使うなど、初めて見ました」
三人に呆れた目で見られている。今までの方がもっと凄い魔法を使ってたのに何故だ……
「あまり気にしないでください。では食べましょう！」
「そうだね。ではありがたく楽しませてもらうことにするよ」
「そうしてください。どれでも好きなものを焼いてくださいね」

俺のその言葉に三人は思い思いの食材を手にした。トリスタン様とフレデリック様は牛肉からいくらしい。ジェラルド様は意外にも野菜からみたいだ。
俺はそんな三人を横目に、まずはファブリスのステーキを焼き始めた。そしてその横で自分が食べる用の鶏肉を焼いていく。やっぱりバーベキューって楽しい。

「これはどのぐらいまで焼いたら良いのかな？」
「さあ……私もよく分からないです」
「いつも食べているものよりも赤いですから、もう少し焼いた方が良いのでは？」
「あれ？　こっちは黒くなってきたよ。いつも食べているものとまた違うね」
「確か黒くなっては焼き過ぎなのでは？」
「そうだったかな？　ではこれはもう食べられるね」
隣からそんな不穏な会話が聞こえてきて思わず三人の網を覗くと、そこには焼き過ぎて焦げた牛肉が煙を出していた。
「ちょ、ちょっと待ってください！　それ食べないで！」

俺はその黒い塊を食べようとしていたトリスタン様を必死で止めた。それは流石に焼き過ぎてるよ。
貴族や王族は料理を全くしないから、焼き加減とか分からないんだね…盲点だった。

「黒くなっているから、もう火は通っているのではないのかな？」
「いえ、それは火が通り過ぎていて美味しくないと思います。もう少し早めに食べて大丈夫です。その隣で焼いているお肉を裏返してみてください」
「これだね……おおっ、いつも食べている色だよ」
「その色で両面焼けば大丈夫です。牛肉は少しぐらい赤い部分が残っていても食べられます。豚肉や鶏肉は赤い部分が完全になくなるまで焼いてください。しかし黒くなってきたらそれは焼き過ぎです」

俺のその言葉を聞いて、三人は真剣に網の上の食材を見つめ始めた。バーベキューの楽しさを少しは分かってくれるかな？

「ジェラルド様、野菜は生で食べても大丈夫なものが多いですし、黒く焦げないうちに早めに食べられます」
「そうなのか。ではこれはもういけるか？」
「はい。大丈夫だと思います。もし食べてみて少し硬かったりしたら、その時はもう少し網に戻して焼いてください」
「分かった」

それから三人は完全に肉を焼くことにハマったみたいで、自分で食べきれない量の肉を焼いて残った分は全部ファブリスの食事となった。ファブリスもお腹いっぱいで満足そうなので、結果的には良かっただろう。

３２４、王都へ帰還

「バーベキューとは楽しいね。肉を焼くことにハマりそうだよ。屋敷で妻とやろうかな」
「楽しめると思います。バーベキューは大人数の方が楽しいので、ご友人などを呼んでも良いかもしれません」
「確かにそうだね。帰ったら考えよう」

トリスタン様は凄く楽しそうに、バーベキューパーティー開催について考えている。これで貴族の主流がお茶会じゃなくてバーベキューになっちゃったらどうしよう……
服とか匂いつくし大変だよね。何よりも大変なのは使用人だろう……なんかごめんなさい。

「では王都に向かうか？」
「そうですね。早めに帰りたいですし早速行きましょうか。ファブリス、もう走れる？」
『問題ないぞ。たくさん肉を食べて力が漲っているからな』
「それなら良かった。じゃあよろしくね」
『任せておけ』

――そうしてたまに休憩を挟みつつ数日走り続け、俺達はついに王都の近くまで帰ってきた。もう王都の農業地帯に入ってしばらく進んだので、このまま行けばすぐに王都へ到着するだろう。

「ファブリスちょっと止まって？　そこの木の下で」
『分かった』

ファブリスが止まってくれたところで後ろを振り返る。

「皆さん、そろそろ王都に着くところまで来たので、私が転移でアレクシス様に知らせてきます。少しここでお待ちいただいても良いでしょうか？」

「もちろんだよ。報告よろしくね」

「はい。皆さんは軽食でも食べて待たれますか？　お茶やスイーツを準備できますが」

「いや、大丈夫だよ。アイテムボックスに飲み水は入ってるし、それでも飲んで待ってるよ」

「かしこまりました。では行って参ります。ファブリスもここで待っててね」

『了解した』

そうして皆に一声かけて、俺は王宮にあるアレクシス様の執務室に転移をした。執務室ならいつでも転移して良いと言われているのだ。

「うわぁっ！！」

転移をすると文官の方達の大声に迎えられる。やっぱり俺が転移で現れる可能性があると言われてても、どうしても驚いちゃうよね……

どこか転移専用の部屋でも準備してもらった方が良いのかな？でもそうすると俺の危険度も増すから悩みどころだ。

「レオン、何か問題でもあったのか！？」

「レオン君、怪我はないか！？」

アレクシス様とリシャール様が手にしていた書類を投げ出して駆け寄ってきてくれた。かなり心配してくれていたみたいだ。

「いえ、怪我もないですし問題も起きてないので大丈夫です」

「ではどうしてこんなに早く帰って来れたんだ？　それにレオン達が帰還したとの早馬も来てないが……」

俺達はファブリスに乗って来ちゃったからね。どんなに急いでも馬ではファブリスに勝てないだろう。

「陛下、まずは座ってから話をしましょう」

リシャール様がそう提案をして、アレクシス様も頷いた。

「確かにそうだな。ではレオン、そこのソファーに座ってくれ。他の者は一度外に出ていてくれるか？」

「かしこまりました」

そうして人払いも済ませ、すぐに執務室の中には俺とアレクシス様、リシャール様の三人だけになった。

「先程は取り乱して済まない。まずはレオン、無事の帰還を嬉しく思う。本当に良かった……」

「無事に帰還できました。さらに時空の歪みを塞ぐことにも成功いたしましたことを、ここに報告いたします」

「それは本当か！？」

「はい。トリスタン様、ジェラルド様、フレデリック様もご無事です。今は王都から少し離れた農業地帯に待機していただいています」

俺のその言葉に二人は心から安堵したような表情を浮かべた。俺

はその二人の表情を見て、本当に皆で無事で帰って来れたのだと実感する。

「本当に良かった。レオン、改めてこの国を救ってくれてありがとう」

「私だけの力ではありませんよ。それにこれからが本番です。魔物の森の進行は止まるわけではありませんので」

「確かにそうだな。またこれからも力を貸してほしい」

「もちろんです」

三人で顔を見合わせて力強く頷き合った。やっぱりこのお二人も凄く心強いな。これからもまだ大変だけど、トップがこの二人なら何とかなるだろう。

「では私がなぜここに一人で来たのかについての話に移っても良いでしょうか？」

「勿論だ」

「ありがとうございます。……実は魔物の森の中で神獣と出会いまして、あっ、神獣とはミシュリーヌ様が遣わした存在のことです。その神獣は名をファブリスというのですが、ファブリスが私の手助けをしてくれることになりました。そのため現在も一緒に王都まで来ていて、突然ファブリスが王都に姿を現したら騒ぎになると思い私が先に参りました。王都に早く着いたのはファブリスの背中に乗ってきたからです」

俺のその説明の途中から、二人は驚愕の表情を浮かべて固まっている。

「その……神獣様とは、レオンと同じような存在ということだろうか？」

「うーん、多分少し違うんですけど、同じような認識で大丈夫だと思います。ミシュリーヌ様に遣わされたことは確かです。凄く強くて人の言葉を話せます。姿形は狼をかなり大きくした感じで色は真っ白です。それから人が四人乗れるほどの大きさですね」

こうして客観的にファブリスの姿形を説明すると、やっぱり神々しさを感じるよね。……ミシュリーヌ様より信仰されそう。でもファブリスはミシュリーヌ様が遣わした存在で、そのファブリスが信仰されるってことはミシュリーヌ様が信仰されることと同義なのかな？

「真っ白で狼を大きくしたようなお姿だな」

「そうです。ミシュリーヌ様から私の手助けをするようにと言われていたので、これからは基本的に私の側にいることになると思います」

「分かった。では王都の皆に神獣様の存在を知らせなければいけないな」

アレクシス様はそこまで話を聞くと、難しい顔をして考え込んでしまった。この国で平民にまで情報を伝えるのって意外と大変なんだよね。

「陛下、神獣様に乗って凱旋パレードをしてもらうのはいかがでしょうか？　最短距離で騎士と兵士を動員して道を固め、その中を歩いていただけば存在を広めるには最適かと思います。ただ最短でも準備に一日は欲しいですが……」

「そうだな。レオン、明日まで王都の外で待っていてもらうことはできるだろうか？」

「問題ありません」

「ありがとう。では明日の昼に凱旋パレードをするという予定でい

こう。それまでに少しでも神獣様のことを広めて騎士や兵士を動員しておく。パレードでは神獣様の存在を皆に知らしめるようにしてもらいたい」

ファブリスのことを知らせるのなら、やっぱりファブリス本人に話してもらうのが一番かな。

「かしこまりました。ではそちらの準備もしておきます」

「よろしく頼む。……それでパレードが終わり王宮に着いてからなのだが、神獣様に挨拶をすることはできるだろうか？」

「もちろんです。お二人だけでなく、他の方々にもファブリスを紹介したいと思っています」

マルティーヌには早めに紹介したいし、マリーにも早く会わせてあげたい。マリーはファブリスの背中に乗せてあげたら絶対に喜ぶと思うんだよね。ロニーやリュシアン、ステファンも驚くだろうな。

「ありがとう。では神獣様にお会いする準備も早急に整えておこう」

「お会いする準備って……別に特別な準備は要りませんよ？　今日のように普通にしていただければ……」

「いや、神獣様にお会いするのだから、せめて服装は正装を着なければ」

アレクシス様は真剣な表情でそう言った。ファブリスは人間の礼儀なんて分からないって言ってたから、いつも通りで全く問題ないと思うんだけど……

でも準備することでアレクシス様達が満足するのなら良いか。

「では明日、よろしくお願いいたします。私はトリスタン様達の元へ戻りますので」

「分かった。ではまた明日会おう」

そうして今後についての話し合いをして、俺は転移で皆のところに戻った。

325、凱旋パレード

「皆さん戻りました」
「結構早かったね。兄上と話し合いはできたかな？」
「はい。アレクシス様にファブリスのことを説明して、これからの予定を決めてきました。まず今日ですが、このままこの場所で野営をすることになります。そして明日の昼頃にファブリスに乗って凱旋パレードをして、王宮に戻る予定です」

俺のその言葉に三人は納得したように頷いてくれた。

「確かにパレードで神獣様の存在を示せば、今後王都の中で過ごしやすくなるよね」
「行きにあれだけ大々的なパレードをやったんだし、凱旋パレードをやることに違和感もないな」
「またかなり目立つが、まあそれは今更か」

確かに相当目立つだろうけど、もう仕方がないよね。でも今回一番目立つのはファブリスのはずだ。俺達はおまけ程度だよね。

「ファブリスはその予定で大丈夫？　俺達を乗せて王都の中を歩いて欲しいんだけど」
『人の街を歩けば良いのだろう？　そのぐらい造作もないことだ』
「ありがとう。スピードはかなりゆっくりで良いからね。俺達が歩くスピードよりもゆっくりを意識して歩いて欲しいんだ。それからたまに自己紹介もしてもらいたいんだけど」
『自己紹介とは、どのようなことを言えば良いのだ？』

ファブリスの自己紹介はやっぱり神獣であることと、俺を助けることは言って欲しいな。あとはミシュリーヌ様の宣伝もしてもらおうかな。

俺が使徒としてお披露目されて平民の間にも少し信仰心が戻ったみたいだけど、やっぱりまだまだなんだ。ここでもう一段階高めておきたい。神力を増やしておけば、万が一の事態がまた起きてもすぐに対処できるだろうし。

「ミシュリーヌ様に遣わされた神獣であることと名前、それから俺の手助けをすること。この国を魔物の森から救うこと。その辺を言えば良いと思うよ」

『ふむ……我は女神ミシュリーヌ様から下界へと遣わされた神獣、名はファブリスと言う。ミシュリーヌ様の使徒であるレオンを助け、レオンと共にこの国を魔物の森から救い発展させる役目を担う。よろしく頼むぞ。……こんな感じで良いか？』

「ファブリス凄い！　完璧だよ！」

『そ、そうか？　まあ、この程度造作もないことだ』

ファブリスが照れてる……！　凄く大きな体で顔も可愛い系じゃないのに、照れてるとなんか可愛さを感じる。でも神獣の威厳は全くなくなってるけどね……

「じゃあ明日もそれでよろしくね」

『了解した』

「それから歩く速度なんだけど、ゆっくり歩いてみてくれる？」

『……こんな感じか？』

「いや、もっとゆっくりにして欲しいかな」

『……こうか？』

「そのぐらい！　その速度を覚えておいて。じゃあ明日はよろしく」

『相分かった』

そうしてファブリスとの打ち合わせも終わり、俺達は夕食を食べてのんびりと過ごした。そして夜は一応バリアを張り、その中のベッドで快適に眠りについた。

――そして次の日。

「王弟殿下、ジャパーニス大公様、ジェラルド第三騎士団長、フレデリック様、パレードの準備が整いましたので王都までお願いいたします！」

のんびりとお茶を飲みながらケーキを食べていたところに騎士がやってきて、パレードの準備が整ったことを知らせてくれた。

「知らせてくれてありがとう。では行こうか」
「はい。じゃあファブリスよろしくね。上手くできたらご褒美にケーキ二つあげるから」
『本当か！？』
「もちろん。だからゆっくりと歩いて、昨日の自己紹介をちゃんとしてね。後は何があっても人間を攻撃しないこと。これは守って」
『分かっている』
「ただしファブリスが命の危険に陥る時は例外で良いよ。まあそんなことはないと思うけど」
『了解した。では行くぞ。主人乗ってくれ』

俺は三人と共にファブリスの背中の上に転移をして、バリアで落ちないように固定した。

「よしっ、大丈夫かな。皆さんも大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ」
「では行きますね。……ファブリスよろしくね」

それから走ること数分、すぐに王都の街並みが遠くに見えてきた。こうして王都を見るとついに帰ってきたって実感するな……

「ファブリス、あれが王都だよ。あの中に入ったら昨日の速度だからね。進むべき道は騎士や兵士の人が示してくれるから分かると思う」
『主人は心配性だな。ちゃんとやるから大丈夫だ。我は何千年も人間と共に暮らしていたんだぞ』
「確かにそっか……でもなんか心配になっちゃうんだよ」

ファブリスは悪いことをしないっていうのは分かってるんだけど、人間と価値観が違うから思わぬことをしでかしそうで怖いんだよね。もしそれで何か起きたら俺の責任だし……これからはこの国の常識なんかも少しは教えていこうかな。

ファブリスとそんな話をしていたら、もう王都は目の前まで来ていた。大通りにはずらっと騎士や兵士が並んでいて、俺達が通る道を作ってくれている。そしてその外側には、出立のパレードの時と同じぐらいの人が集まっているようだ。

「あれが神獣様、確かにとても神々しいわ……」
「あの凛々しいお姿。一眼でも見ることができてもう人生に悔いはない」
「使徒様もいらっしゃるわ。魔物の森の奥に巣食う巨大な魔物を倒されたとか。本当にありがたいことね……」
「ああ、皆様のおかげで我らは安心して暮らしていける」

まず大通りに入って目につくのは、手を組んで祈りを捧げるようにファブリスのことを見ている人達だった。多分この人達は信仰心を持ち続けてくれた人だろう。ファブリスもその声が聞こえているからか、かなりのドヤ顔で歩いている。

それからしばらく歩くと集まっている人の様子が変わってくる。

「あれが神獣様なのか。確かに上に使徒様が乗ってるな」
「大きな狼みたいね。危なくないのかしら？」
「神獣様にそんなこと言っちゃダメだろ！」
「あら、ごめんなさい」

声の大きな夫婦がそんな会話をしているのが聞こえる。一応神獣の存在は浸透しているらしい。昨日の今日でそれだけでもめちゃくちゃ凄いよ。アレクシス様とリシャール様、ありがとうございます。

「使徒様ー！　魔物を倒してくれてありがとう！」

今回の遠征の目的は、魔物の森の奥に住む強い魔物を倒しに行くってことになってたからか、さっきからこうして感謝をされることが多い。実際の内容とは違うけど、それでも感謝してもらえるのは嬉しいよね。

そうこうしているうちに最初の広場に辿り着いた。まずはここでファブリスに話してもらおう。

「ファブリス、ここで一度自己紹介しておこうか。たくさんの人が集まってるみたいだし」
『分かった。我の言葉はかなりの広範囲に届けられるが、この広場

の外にまで届いても良いのか？』
「そんなことできるの？」
『できるぞ。我は人間のように声を発しているわけではないからな』
確かにファブリスの声は、ミシュリーヌ様みたいに頭に直接響くんだよね。
「じゃあ広範囲でお願い」
『了解した。……皆の者、聞こえているか？　我は女神ミシュリーヌ様から下界へと遣わされた神獣、名はファブリスと言う。ミシュリーヌ様の使徒であるレオンを助け、レオンと共にこの国を魔物の森から救い発展させる役目を担うことになった。これからよろしく頼むぞ』
ファブリスの声は力強いけれどどこか優しく、神聖な雰囲気を纏って俺達の頭にふわっと流れ込んだ。いつも話している声音とは全然違った……さすが神獣だね。ミシュリーヌ様より優秀なんじゃない？
そんなファブリスの声を聞いた王都の民達は、さっきまでの騒がしさから一転、物音一つ立てない。ある人は驚愕を、ある人は敬愛を、ある人は礼賛を顔に浮かべ、誰もがファブリスをじっと見つめている。
「ファブリス、凄く良い機会だしミシュリーヌ様をもっと宣伝してあげて。この世界での信仰心を高めたいんだ」
俺がファブリスにだけ聞こえるようにそう呟くと、肯定するように少し体を揺らした。そしてまた先ほどの声が聞こえて来る。
『レオンも我の主人ではあるが、我ら共通の敬うべき主人はミシュ

リーヌ様である。この国が、この世界がこうして存在していること、作物が育つこと、魔法が使えること、全てミシュリーヌ様のお力によるものだ。ミシュリーヌ様への感謝を忘れず祈りを捧げれば、必ず其方らの人生に幸福がもたらされるだろう』

ファブリスのその言葉に一人が膝をついて頭を下げた。するとそれを皮切りに集まっていた人々がどんどん跪いていく。ファブリス凄い……これは相当信仰心が回復したんじゃないかな。

『主人、これで良いか？』
「完璧だよ。ありがとう」
『このぐらい造作もないことだ』

ファブリスは俺にだけ聞こえるようにそう言うと、さっきまでよりもドヤ顔でより優雅に、跪く人の間を歩いていった。

326、王宮へ

王宮に辿り着くとすぐに広い応接室に案内された。中に入るとアレクシス様とリシャール様が跪いて待っている。この二人に跪かれてるのは本当に居心地が悪いな。

トリスタン様達三人も、部屋の中に入ると端に移動してその場で跪いた。

「ファブリス、この方がこの国の国王であるアレクシス・ラースラシア様。そして隣にいるのが宰相であるリシャール・タウンゼント様だよ」

『この国の長ということだな。我はファブリス、ミシュリーヌ様の神獣である。これからはレオンの手助けをすることになったのでよろしく頼む』

「神獣様、お初にお目にかかります。私はラースラシア王国国王、アレクシス・ラースラシアでございます。神獣様にお会いできましたこと、とても嬉しく存じます」

「私はリシャール・タウンゼントでございます。この国の宰相をしております。神獣様にお目見えできるなど、大変光栄でございます」

二人は少し顔を上げてそう挨拶をすると、また頭を下げてしまった。ファブリスも自己紹介は終わったからかもう何も話さない。……この沈黙めっちゃ気まずい。

「ではお互い紹介も終わったことですし、あまり畏まらずに話しましょう。ファブリス良いよね？」

結局は俺が口を開き、少し強引に雰囲気を和ませた。

『勿論だ。そもそも人間の礼儀の良し悪しなど我には分からん』
「ということなので、皆さんソファーに座ってください。トリスタン様達も座りましょう？」
「……良いのだろうか？」

アレクシス様が少しだけ顔を上げて困惑したような表情を見せる。

「もちろんです。顔が見えなかったら話しづらいですから」
「……では、ソファーに座らせていただくことにしよう」

そうして皆でソファーに移動し、ファブリスは俺が座ったソファーの横に寝そべった。大公家の屋敷にはファブリス用の大きなクッションが必要かな。

「ではアレクシス様、改めてこちらが神獣であるファブリスです。これからは私に付いて色々と手助けをしてくれるみたいなので、こうして側にいることも増えるかと思います」
「分かった。神獣様の存在については広く周知をしている最中で、さらに先ほど神獣様のお言葉が聞こえたので、この王都内で活動されることに問題はないだろう。順次他の領地へも神獣様のことを広めていくので、国内では伸び伸びと過ごしていただけることになるだろう」
「ありがとうございます」

それならこれから移動する時は、ファブリスに乗って移動すれば早くて良いね。転移はまだまだ魔力が足りなくて国内を自由に飛び回れないし。

「ファブリス、この国の中なら自由に動いても良いってよ。でも建

物を壊したりしないように気をつけてね」
『分かっている。ただ我が動く時は基本的に主人が動く時だ。一人では動かないので心配するな』
「そうなの？　それなら怖がらせることも減るだろうしありがたいけど……、ファブリスは自由に動きたくならない？」
『百年程度、ずっと動かなくとも問題はない。ただ起きているのだから食事は欲しいな』
「じゃあファブリスのご飯は、毎日美味しいものをたくさん作ってもらうようにしようか」

久しぶりに食べた人間のご飯が美味しかったのか、ファブリスは食事の時間をかなり楽しみにしてるみたいなんだよね。色々と助けてもらうことになるんだし、ご飯は奮発して美味しいものをたくさん用意してあげよう。

『感謝するぞ。食事の時間が楽しみだな』

ファブリスの尻尾がふさぁ、わさぁ、と揺れている。あまり揺れない尻尾が揺れてるから相当嬉しいことが分かる。……分かりやすくて可愛いやつだ。

「アレクシス様、今回の遠征で時空の歪みは塞ぐことができて魔人の脅威も去りました。しかし未だに魔物の森の脅威は残っています。これから時間をかけて魔物の森を駆逐していくことになるかと思いますが、その手助けも私とファブリスでやりますので、計画には私達の戦力も加味してください」
「それは本当にありがたい。実はレオン達が魔物の森の奥に行っている間にも、前線の街がまた一つなくなったのだ。やはり魔物の森の勢いが速く押さえ込むのは難しい。なんとか進行を食い止めるか、進行を遅くするかしか今のところできていないのが現状だ」

やっぱりその現状は変わらないのか……山火事が起きた時に原因となったタバコの不始末に対処したとしても、もう燃え広がっている火の勢いは変わらないのと一緒だよね。

やっぱりここからは人海戦術で頑張るしかないだろう。騎士や兵士、さらには募集で集まってくれた平民になんとか食い止めてもらいつつ、俺とファブリスが遊撃するのが一番かな。

魔植物には火があんまり効かないし、とにかく物理的に切り刻んでアイテムボックスに入れて消してしまうのが一番早い。でもやっぱりファブリスがいたとしても、二人でできることは高が知れているんだよね……戦ってくれる人数を増やすのが一番だ。

「やはりそのような現状なのですね……一番足りないのは人手ですか？」

「そうだ。しかし段々と戦ってくれる者の数も増えている。今回レオン達が帰還したことでより増えるだろう。さらに少し前にいくつもの貴族家が取り潰しになったが、その領地でその日暮らしが精一杯という者達が多く志願してくれている」

それは良いことなのか悪いことなのか……でもその人達が今現在生きる術を見つけられてるって考えたら良いことなのかな。

「その人達は魔物の森の駆逐が完了したら、仕事を斡旋するのですか？」

「ああ、もともと住んでいた土地に農地を与えたり、仕事はそれぞれ紹介する予定だ。勿論それ以外の領地や王都から志願してくれた者に対しても、魔物の森を駆逐できた後については保障する」

そこまで考えてくれてるのなら志願してくれる人もどんどん増え

るかもしれないな。でもこんなこと聞いて良いのか分からないけど、そこまでお金があるんだろうか？

「それならば安心ですね……あの、一つだけ心配事があるのですが聞いても良いでしょうか？」

「勿論なんでも構わない」

「この国の財政は、その……問題ないのですか？　それだけの人数に給金を出して、さらにその後の生活まで保障するのは大変なことだと思うのですが……」

「そうだな。確かに厳しいがそこまで大きな問題にはならない。レオンには詳しく話したことはなかったが、この国はとても裕福な国なのだ。理由は魔法具だな」

この国が大国だってことは知ってたけど、アレクシス様が言い切るほど裕福な国だったのか。

「魔法具が一番発展しているということでしょうか？」

「というよりも、この国でしか魔法具は作れないというのが正しいな」

「それは、何故でしょうか？　技術面ですか？」

「いや、材料の問題だ。魔法具に必要な魔石と魔鉄、それが産出する場所はこの国にしかないのだ」

え……まじか。それは知らなかった。かなりの衝撃事実なんだけど。

「魔石と魔鉄は王都より少し東に向かった場所にある二つの山から産出する。というよりもそこからしか産出しない。したがって魔法具を作れるのはこの国だけで、それを輸出することで裕福さを実現できるのだ」

それはこの国が大国になるのも分かる。というかこの国からしか出土しないって、ミシュリーヌ様がそうしたんだよね？　今度なんでこの国だけなのか聞いてみよう。

「それは外交という面ではかなり有利となりますね。しかしその分狙われることも増えそうですが……」

「そこが一番の問題だな。しかしだからこそ軍備を増強してきたことで、現在魔物の森の進行を止められているのだから、何が功を奏するかなんて分からないものだ」

「確かにそうですね。……私の疑問に答えてくださってありがとうございました」

「この程度ならいくらでも話そう。これから先、もしかしたら他国に赴いて魔物の森への対処を助けることになるかもしれない。だから他国のことも少しは知っておいてもらえるとありがたい」

「かしこまりました。その可能性も考えておきます」

そこまで話したところでお茶を飲んで一息吐き、アレクシス様は雰囲気を明るいものに変えた。

327、再会と慶事

「ではレオン、レオン達が帰還したとの報告を聞きステファンとマルティーヌが会いたいと言っているのだが、ここに呼んでも良いか？」

「ステファンとマルティーヌが！　勿論です」

やっと会える！　魔物の森に行く前にはマルティーヌを泣かせちゃったし、早く無事な姿を見せたかったんだ。というよりも、俺がマルティーヌと会いたいだけかもしれない。

「神獣様も良いでしょうか？　私の息子と娘なのですが……」

『勿論構わんぞ。我のことは気にせんで良い』

「ありがとうございます」

それからアレクシス様が従者に二人を呼んでくるように伝えて、数分後に二人は部屋の中に入ってきた。しかしさすが王子殿下と王女殿下、まずはファブリスに対してしっかりと挨拶をしている。

周りも見ずに俺のところに駆け寄ってきてくれないのはちょっと寂しいけど、王女様だから仕方ないよね。俺はマルティーヌのこういうしっかりとしたところも好きなんだ。

それから二人はファブリスと話をして、話が終わると俺の方に視線を向けた。

「レオンっ！　本当に良かったわ。無事で良かった……」

マルティーヌは俺と視線が合った途端に顔を泣きそうに緩め、す

ぐに駆け寄ってきて抱きついてくれる。その腕が少しだけ震えていたのが分かり、俺は優しくマルティーヌを抱きしめ返した。

「マルティーヌただいま。一つも怪我してないし大丈夫だよ」
「……うん、本当に良かった」
「心配かけてごめんね」
「ううん。無事に帰って来てくれたのなら良いわ。約束のお茶会をしましょう」
「そうだね。ちゃんと時間を作るよ」

マルティーヌは少し落ち着いたのか俺から体を離した。そして至近距離で綺麗に微笑む。その瞳はまだ涙に濡れていて……光を反射してキラキラと光り輝いていた。その光がマルティーヌの美しさをより一層際立たせているようだ。……本当に何度見ても綺麗だな。

それからしばらくマルティーヌに見惚れて二人で見つめ合っていると、苦笑しつつステファンが声をかけてくれた。

「レオン、無事に帰って来てくれて良かった」
「ステファン……心配してくれてありがとう。また皆と会えて嬉しいよ」
「リュシアンもかなり心配していたから早めに会いに行ってやってくれ」
「うん。皆にすぐ会いに行く」
「それにしても神獣様とお会いできるとは……レオンといると驚くことばかりだな」

ステファンはファブリスを見る時の瞳が輝いているので、動物が好きなのかもしれない。

「ファブリスを撫でてみる？　毛並みがふわふわのサラサラで凄く気持ち良いんだ」
「え……良いのか？」
「ファブリス良いよね？」
『別に構わんぞ。痛くするなよ』
「だってよ。マルティーヌも撫でてみる？」
「ええ、では少しだけ」
「神獣様、失礼致します」

まずはステファンが恐る恐る手を伸ばした。そしてファブリスの毛並みをひと撫ですると……顔を輝かせる。

「素晴らしい毛並みです……」
「本当ね。とても綺麗ですわ」

マルティーヌも気に入ったようだ。二人とも撫でる手が止まらない。

「ファブリス良かったね」
『まあ、我の毛並みは極上だからな。当然だ』
「ふふっ、そうだね」

ファブリスの尻尾が揺れているのを見て思わず笑ってしまう。尻尾が揺れてるのは完全に無意識みたいなんだよね。他の皆も視線が尻尾の動きを追ってるみたいだ。

「そういえば、エリザベート様はいらっしゃらないのかな？」

エリザベート様にも帰還の挨拶をしたいなと思って何気なくその言葉を口にしたら、何とも微妙な雰囲気が応接室に流れた。もしか

して聞いちゃいけなかった……？

「あの、もし今はお会いできないとのことでしたら、またご都合の良い時で構わないのですが……帰還のご挨拶をしたいと思っただけですので」

「……そうだな。ここにいるメンバーならば話しても良いだろう。実はエリザベートは子を身籠っていてな、体調が悪くここへは来れなかったのだ。もう少しして落ち着いた頃に会ってやってくれるか」

アレクシス様が嬉しそうな表情でそう教えてくれた。子を身籠ってるってことは……ステファンとマルティーヌの弟妹ってことだよね。それはおめでたい！

「それはおめでとうございます。無事に生まれて来るのが楽しみですね」

「そうなんだ」

「ステファンとマルティーヌも良かったね。弟妹、絶対に可愛いよ。うちのマリーは天使だから」

「生まれてくるのが楽しみだ」

「絶対に可愛がるわ」

応接室の雰囲気が心地よい明るさになる。赤ちゃんって凄いよね。まだ生まれてもいないのに存在しているだけで皆を笑顔にできるんだから。

「レオンも義弟か義妹になる。仲良くしてやってくれ」

確かにそうか……なんか良いな。この世界でこうして家族がどんどん増えていくのは本当に嬉しい。

「勿論です。凄く可愛がります」
「ははっ、ほどほどにな」

そうして皆で幸せを感じながら話をして、今日は解散となった。俺はファブリスに乗って公爵家に帰ることにする。国内ならどこでもこうして移動して良いそうだ。

「ファブリス、改めてこれからよろしくね。この国はどうだった？」
『我はこの国が好きだな。先程会った者達は皆良い人間だった』
「うん。勿論この国にも悪い人はいるんだけど、さっきいた人達みたいにこの国を良くしようと頑張ってる人もたくさんいるんだ」
『我も手助けをしよう』
「ファブリスありがとう！」

俺はファブリスの背中にぎゅっと抱きついた。やばい、ふわふわで温かくて適度に揺れる、ここで寝れるよ……

……あっ、そうだ。寝る前にミシュリーヌ様に確認したいことがあったんだ。

「ファブリス、俺の声が周りに聞こえないようにしてくれない？」
『了解した。……これで良いぞ』
「ありがと。ちょっとミシュリーヌ様と話すね」

風魔法を上手く使うことで周りからの音や周りへの音を遮断できるらしいんだけど、まだ俺は上手くできないのでファブリスにやってもらっている。
周りの音が聞こえなくなったのを確認して、本を取り出しミシュリーヌ様に話しかけた。

「ミシュリーヌ様」
『ふぁに？　ふぁたひしょっほいほはしいふあへと』
「ちょっと何言ってるか分かりません」
『しょっほはっえ――ふぅ、それで何かしら？　もう、せっかく穴を塞げたお祝いパーティーをやってたのに』
「一人でですか……？」
『違うわよ！　ちゃんとシェリフィーがいたわ。まあもう帰っちゃったけど……』
「じゃあ今はただスイーツを食べる会ですね」
『……まあ、そうとも言うわね』

今回はミシュリーヌ様もかなり頑張ってくれたし、ご褒美でスイーツを食べるぐらいは良いけどね。でも食べ過ぎていざという時に神力がないなんてことになったら困るから、やっぱり自重はしてもらおう。

「ちゃんとこれからも自重してくださいね。神力は何かあった時のためにも貯めておくべきです」
『分かってるわ。ちゃんと貯めて神界も充実させるんだから』
「そういえば、俺が使徒としてお披露目されたことで神力の回復速度は変わりましたか？」
『うーん、多分ちょっとは増えてると思うんだけど、そこまで変わらないっていうのが正直なところね』

そうなのか……俺の存在をしっかりと知らせたのは王都といくつかの街だけだし、使徒イコール女神様ってならないのかな？　やっぱり俺ももっとミシュリーヌ様の宣伝をしないとダメかな。……ファブリスを見習おう。
ミシュリーヌ様への信仰心が高まるほど、必然的に俺の地位も確

固たるものになるだろうし、そこは手を抜かない方が良いよね。

「ではミシュリーヌ様への信仰心がもっと増えるように頑張りますね。なので、ミシュリーヌ様ももっと信仰されるような神らしさを身に付けてください」

『神らしさって、どういうのが神らしいの？』

「え、それは……厳かな感じというか、ありがたいお言葉を賜われるとか、人間とは違う、凄い力がありそうな雰囲気とか？」

『……漠然としてるわね。今の私じゃダメなの？　神は私なんだから、私らしさが神らしさじゃない？』

……確かに。そう言われると神らしさだってミシュリーヌ様が好きに決められるのか。それに何が神らしいかなんて俺の何となくのイメージでしかないし。

328、ミシュリーヌ様と作戦会議

目から鱗の考え方だ。そうなると、親しみやすい神様がミシュリーヌ様の目指す路線で良いのかな？　確かにそっちの方が上手く行く気がする。

「今のミシュリーヌ様の良いところって、親しみやすさだと思うんです。なのでそれを全面に出していくのが良いのかもしれませんね……」

『例えば何をすれば良いの？』

「そうですね……週に一回、例えば回復の日にミシュリーヌ様が王都の中心街にある教会に顔を出すっていうのはどうですか？　ちゃんとお祈りにくる人の話を聞くんです。あっ、お祈りしてる内容って聞けますか？」

『王都の中心街にある教会は神域だから聞こうと思えば聞けるわね』

「じゃあミシュリーヌ様が気になった人のお祈りを聞いて、その中で助けてあげたいと思った人にランダムで助言を与えるとか。そういうのはどうですか？　あんまりやりすぎるとありがたみが減るので、年に四回、一月に一度ほど助言をしたり助けてあげたりするんです」

我ながら名案な気がする。ミシュリーヌ様も神界で退屈だからこそスイーツに逃げるんだし、仕事があれば良いんだよね。それに熱心に祈ってれば願いを叶えてもらえるかもとなれば、皆が祈りに来てミシュリーヌ様を信仰するだろう。

『確かに最近は神力も増えてるし、神域の中への神託ならそこまで神力も必要ないし楽しそうね！　それやってみるわ！』

「ありがとうございます」

俺は思わず苦笑しつつ答えた。ミシュリーヌ様は人間がどういう神様を信仰したがるのかっていうのがよく分かってないんだろうな。ミシュリーヌ様って神の中ではまだまだ若い方なのだろうか。

「じゃあ毎週回復の日、六時の朝の鐘から十八時の夜の鐘までで良いですか？」

『分かったわ！』

後は俺がアレクシス様にこの事実を伝えて、国中に公布してもらおう。そうすれば王都に旅行に来る人も増えて、経済も回るんじゃないかな。

ただ王都に人が集中しすぎないように気をつけたり、礼拝客が集まりすぎることによって引き起こされるトラブルへの対処とか、色々と考えないといけないことも多そうだけど。

「そういえばミシュリーヌ様、他国はどうなってるのですか？　ミシュリーヌ様が信仰されているのですか？」

『他国ね……私への信仰が少しあるところはあるけど、ほとんど信仰されてないわ。もう完全に別の神を信じてる国もあるし、そもそも信仰がない国もあるし』

「神物である教会はこの国の王都にしかないのですか？」

『違うわ。後いくつかあるのよ。でも森の中で忘れ去られてるものとか、劣化しないのを良いことにスラムのような場所で人の住処になってたりとか、まあそんな感じね。この国の王都にある教会は前の使徒の子がちゃんと整備してくれたから。それに使徒が作った国だから、今でもここまで信仰心が残っていたのよ』

そうなのか……この国がいくら大国とはいえやっぱり一つの国だ

から、できれば他の国でも信仰してもらいたいよね。信仰がない国はそこまで忌避感なく受け入れてくれるだろう。だけど問題は他を信仰してる人達だ。
うーん、無理に広めなくてもまずはこの国からにしようかな。段々と他国にも広がっていくかもしれないし。

「では他国についてはまた後で考えることにします。まずはこの国からですね。ミシュリーヌ様にとってはこの国が総本山？　みたいなものでしょうし」
『そうね！　まずは回復の日に頑張るわ』
「お願いします。それから何かしらのイベントもやりたいですね」
『お祭りみたいなことかしら？』
「そうです。日本でも宗教イベントは結構ありましたよ。この国でもそういう日を作れば、その時はたくさんの人がミシュリーヌ様への信仰心を持ってくれると思いますし、何よりたくさんの人に知ってもらうことができます」

日本でも初詣や七五三、クリスマスとか色々イベントがあった。まあ日本はいろんな宗教のイベントがごちゃごちゃだったけど……

『それ良いわね！　じゃあ私の宗教イベントはスイーツを食べる日にしましょう！』

あっ、やっぱりそうなった。絶対そう言うと思った。でもクリスマスだってクリスマスケーキを食べてたし、スイーツを食べるイベントは悪くないかな。

「じゃあそれでいきましょう。時期はいつ頃で、どんな理由のイベントにしますか？　ミシュリーヌ様の誕生日とか？」
『私の誕生日なんて分からないわよ？』

「うーん、じゃあ適当に誕生日を決めちゃいます？」
いや、さすがにそれは適当すぎるか。誕生日がダメなら使徒様が初めて降臨した日とか……
『それで良いわ！　楽しみね～』
え、良いの！？　……まあ、ミシュリーヌ様が良いって言うなら良いのかな？　誕生日って誰にでも分かりやすいし祝いやすいよね。それにミシュリーヌ様を直接祝うことになるのも、信仰心を高めるという点ではプラスだろう。
「では誕生日にしましょう。いつ頃が良いですか？」
『そうね～レオンに任せるわ。別にこだわりはないもの』
「分かりました」
祭りは外でやるんだから暑くもなく寒くもない季節が一番良いよね。後は雨があまり降らない季節にすべきだろう。それにこれから準備をするとして……春の月の終わり頃か夏の月の初めが良いかな。うーん、何となく夏の月にしよう。
「ではミシュリーヌ様、夏の月第一週、回復の日で良いですか？」
『分かったわ！　その日がスイーツ食べ放題の日ね！』
「まあ、その日ぐらいはミシュリーヌ様も好きなだけ食べて良いと思いますよ」
『最高の日ね！！　早くその日にならないかしら』
まだ冬の月なのに気が早すぎるよ。
「まだ先ですよ。それでどんなイベントにしますか？　どんなスイ

ーツを食べるとか、色々と決めた方が良いと思うんです」

平民も参加できるイベントじゃないと意味ないから、その日だけ特別に食べられる程度の金額のもの……やっぱりクレープが良いかな。屋台で売るのも簡単だし、クレープなら甘いものの他にもおかずクレープを作れるし。

「ミシュリーヌ様、クレープを食べる日というのはどうですか？それならば平民でも楽しめると思います」

『そうね……それも良いんだけど、クレープだけはちょっと寂しいわ。後ショートケーキとクッキーも食べる日にしましょう！』

いや、それは欲張りすぎだから！　うん、ミシュリーヌ様に聞いたのが間違いだった。俺が勝手に決めることにしよう。

でも確かにクレープだけだと寂しいっていうのも分かる。そうだな……貴族にはミルクレープを食べてもらうことにしようかな。ミルクレープをその日だけの特別で盛りに盛って、かなり豪華に仕上げればイベント感も出るよね。

「ではミシュリーヌ様、平民は基本的にクレープで、貴族の間ではミルクレープを食べてもらうことにしましょう。そしてそのミルクレープをそれぞれ好きなように飾って貰えば、たくさんの種類のミルクレープが作れますよ」

『それ良いわね！　楽しそうだわ！』

「じゃあスイーツはそんな感じで、後は礼拝をしてもらえるように何か考えないとですね」

せっかく宗教イベントをやっても、クレープの屋台がたくさん出て楽しくて美味しい日！　みたいな認識になっちゃったら意味がない。やっぱり教会で何かを販売するとかが一番かな。

――そうだ、教会で何も巻かないクレープの皮のみを売って、それを食べると一年間幸せになれるよって感じで広めるのはどうだろう。そういうのって実際に幸せになれるかどうかは別として、なんとなく食べに行きたくなるものだよね。

「ミシュリーヌ様、教会でクレープの皮のみを売ることにします。それをイベントの日に食べると一年間幸せになれるかも、って感じで」

『そんなので教会に人が集まるの……？』

「実際にやってみないと分からないですが、こういうのって意外と集まるものだと思います。俺もそう言われたらとりあえず行っておこうってなりますし」

それに今この国ではミシュリーヌ様が存在することは周知の事実になっているし、なおさら皆教会に行くと思う。

『そういうものなのね。まあレオンに任せるわ』

「ありがとうございます。では今決めたことをアレクシス様に相談して、まずは王都でやってみますね。上手くいったら段々と他の街にも広げましょう」

『分かったわ、よろしくね。……レオンが使徒として来てくれて本当に良かった』

いつもよりも数段落ち着いた声音で、しみじみとそう呟くミシュリーヌ様の声が聞こえた。そんな雰囲気を出されたら調子狂うんだけど……やっぱりミシュリーヌ様は騒がしくてちょっと抜けてるぐらいがちょうど良い。

「ではミシュリーヌ様、今日はもうスイーツ禁止ですからね。これ

から色々に神力を使うんですから」
『……わ、分かったわ』
「本当に分かってます？」
『分かってるわ！　後一個、後一個だけ食べたら終わりにするから』
「ははっ……本当に後一個だけですからね」

俺はいつもの調子に戻ったミシュリーヌ様に何だか安心して、思わず笑いが込み上げてきてしまった。なんだかんだこの駄目な感じのミシュリーヌ様のこと、嫌いじゃないんだよね。

『約束は守るわ』
「よろしくお願いします。……ではかなり話が逸れたんですけど、聞きたいことがあって質問良いですか？」
『なんだ、まだ本題じゃなかったの？』
「はい。ミシュリーヌ様がスイーツを食べてるから話が逸れました」
『私のせいじゃないわよ！』
「そうですね。ふふっ、じゃあまた話が逸れるので本題いきます」

そう前置きして、俺は聞きたかったことを口にした。

329、公爵家へ帰還

「今日聞きたかったのは魔石と魔鉄のことなんです。さっきアレクシス様から一箇所からしか産出しなくて、それがこの国にあるから他国との関係で有利になれると聞いたんですけど、それって本当なんですか？」

『あー、その話ね。魔石と魔鉄が産出する山は、今現在レオンがいる国にしかないのは事実よ』

そう話したミシュリーヌ様の声は、さっきまでの明るさとは一転かなり暗い様子だ。あんまり聞かないほうが良かったのかな……

『その二つは前の使徒の子と話し合って作ったものなの。この世界にも地球の機械みたいなものを作ろうってことで色々と考えて、結局は魔石と魔鉄の二つに落ち着いたのよね。それでまずは使徒の子がいた国で産出するようにって、今レオンがいる国にある山を魔石と魔鉄が生み出される山に変更したの』

「そんな経緯だったのですね。それで他の場所にはその後に作らなかったのですか？」

俺のその質問の後でしばらく沈黙が流れる。……この話はやめた方が良いのかな。そう思って口を開こうとした矢先に、ミシュリーヌ様の声が聞こえてきた。

『最初の山を作った時点でもう神力が空っぽだったのよ。それで予定通りいけば使徒の子が魔法具を作って、それによって信仰心を集めて神力も増やすつもりだったんだけど、ちょっと誤算があってね。あの山の魔石と魔鉄は魔素を取り込んで時間経過と共に作られるよ

うになってるんだけど、最初に産出するまでに十年以上の月日が必要だってことが作った後に分かったの。そしてそれを待ってる間に使徒の子は亡くなっちゃったのよ。もうあの時はかなり歳をとっていたから』

……そっか。この話は前の使徒の人が亡くなった時のことを思い出しちゃう話だったのか。悪いこと聞いちゃったな。

それにしても今までの話からして、ミシュリーヌ様と前の使徒の人ってあんまり良い関係性じゃなかったのかなって思ってたんだけど、今のミシュリーヌ様の感じからするとそんなことはなさそうだ。なんだかんだ仲良かったのかな。

……ずっと存在し続けるっていうのも辛いんだね。

「辛い話を思い出させてしまってすみません」

『いや、別に良いのよ。随分と昔の話だもの。もう何百年も経ってるのね……』

……何百年って、やっぱりミシュリーヌ様は神様なんだね。最近は全然神様っぽくないと思ってたけど、こういう話を聞くと実感する。

「これから先、新たな産出場所を作る予定はないのですか？」

『そうね～、一応他の場所にも作ろうとは思ってるんだけど、あれを作るのにはあり得ないほどたくさんの神力が必要なのよ。だからもっと余裕が出来てからになるわ。でもさっき言ったように、あの山の魔石と魔鉄は時間経過とともに魔素を取り込んで新たに作られるから、尽きることはないはずなの。だから他の場所に作るのは当分後回しになるわね』

まさかの尽きることがない鉱山だったのか。それはラースラシア王国としては最高だよね。毎年少しずつでもずっと魔石と魔鉄を手に入れられて、それを他国に売り続けられるんだから。

……でも一歩間違えたら確実に争いの種になるだろうな。ミシュリーヌ様の神力が溜まったら、他の場所にもいくつか産出する場所を作ったほうが良い気がする。

「色々と教えてくださってありがとうございました。また気になることがあったら聞きますね」

『分かったわ。じゃあ、イベントの話は頼んだわよ！』

ミシュリーヌ様はさっきまでの暗い雰囲気を払拭するかのように、明るい声でそう言った。俺はその声に少しだけほっとして言葉を返す。

「はい、ちゃんと計画するので安心しててください。ではまた連絡しますね」

『ええ、頼んだわよ。ファブリスもちゃんとするのよ』

『分かっております』

そうしてミシュリーヌ様との通信は切れた。ふぅ、予想以上に長い話になっちゃったな。途中で公爵家に着きそうだったから、無駄に中心街を散歩しちゃったよ。

「じゃあファブリス、公爵家に戻ってくれる？　道はあっちね」

『もう戻って良いのか？』

「うん。話は終わったから」

『了解した』

ファブリスに乗って公爵家に向かうと、既に情報が行き渡っているのか門番さんはすぐに門を開けてくれた。そして中に入ると、ロジェが迎えに来てくれる。ロジェはまた門番の詰所で待ってたんだな。

「レオン様、ご無事のご帰還心よりお祝い申し上げます。それから神獣様、お初にお目にかかります。レオン様に従者として仕えておりますロジェでございます。よろしくお願いいたします」

「ロジェただいま、出迎えありがとう」

ロジェを見るとやっと帰って来たなと改めて実感する。なんか安心するんだよね。

「ファブリス、この人は俺の世話をしてくれたり仕事を手伝ったりしてくれる人だよ。これから関わることも多いと思うから仲良くしてね」

『ロジェだな。主人共々よろしく頼む』

「よろしくお願いいたします。ではレオン様、神獣様、お屋敷までご案内いたします」

そうしてロジェの先導で屋敷の前まで向かうと、そこには家族皆とカトリーヌ様、リュシアンが待ってくれていた。俺はすぐにファブリスから降りて皆のところに向かう。

「父さん母さんマリー！」

「お兄ちゃん！　おかえりなさい！」

マリーが俺のところまで駆け寄って来てぎゅっと抱きついてくれた。……もう今死んでも良いぐらい幸せ。本当に俺の妹可愛い、天使以外の何者でもない。

「マリー、寂しくなかった？」
「うん！　私ね、たくさんお勉強したよ。先生にも褒められてるよ」
「さすがマリー、偉いなぁ」
「えへへ」

うちの妹まじ天使、この笑顔プライスレス。

「レオンお帰りなさい」
「怪我はなさそうだね。元気そうで良かったよ」
「うん！　どこも怪我してないし大丈夫だよ」
「本当に良かったわ」

父さんと母さんは優しい笑顔を浮かべて、俺が帰って来たことを喜んでくれた。この場所に帰って来られて本当に良かった……

「レオン、無事で良かったわ」
「レオンなら大丈夫だとは思ってたが、心配していたんだぞ」
「カトリーヌ様、心配してくださってありがとうございます。リュシアン、ただいま」
「ああ、おかえり」

俺は皆と挨拶をして改めてぐるりと周りを見回した。すると皆の従者や護衛も無事の帰還を喜んでくれているのが伝わる。俺の護衛のローランなんて、泣きすぎてて顔がぐちゃぐちゃだ。

「ローラン、そんなに泣かなくても良いのに」
「レ、レオン様の、ご無事の帰還が嬉しく……それから、神獣様と並んだお姿が神々しく……」

あ、そっち？　さすがローランブレないなぁ。俺は思わず苦笑いだ。でもとにかく喜んでいるのは伝わるから良かった。こんなにたくさんの人に喜んでもらえて出迎えてもらえるなんて……本当に幸せだ。

「皆出迎えありがとう。ただいま戻りました。じゃあ早速だけど皆にも紹介するね、ミシュリーヌ様の神獣で、これからは俺に仕えてくれるファブリスだよ」

『我はファブリスだ。皆は主人の家族か？』

「俺の家族も親友も従者も護衛も、色んな人がいるよ」

『そうなのか、分かった。では皆の者、これからよろしく頼む』

ファブリスのその言葉に皆は跪いて頭を下げた。俺の家族も同じようにしていて、俺がいなかった期間にかなり勉強を頑張ったことが窺える。皆凄いよ……

「ファブリスにはかしこまった態度は必要ないから、あんまり気にしないで過ごしてね。そうだね……俺に対する態度と同じで良いよ」

俺への態度はあまり敬わないでほしいと何度も伝えて、最近やっと普通な感じになって来たからファブリスも同じで良いだろう。

「かしこまりました。ではレオン様、こんな場所で話すのもお身体が冷えますので、どうぞ中へお入りください。神獣様もどうぞ」

ロジェが頷いてそう言ってくれて、俺達は屋敷の中に移動することになった。そしてこの屋敷で一番広い応接室に入る。

「ねぇお兄ちゃん、この子に触っても大丈夫？」

「ファブリスのこと？　もちろん大丈夫だよ」

俺が頷いたのをしっかりと確認して、マリーはファブリスにゆっくりと近づいていった。そして少し遠くで立ち止まるとファブリスに話しかける。

「私はお兄ちゃんの妹のマリーだよ。撫でても良い？」
『主人の妹か。もちろん構わんぞ』
「ありがと。――うわぁ、すごい、すっごくふわふわ！」

マリーはちょっと怖がっていたけれど、少し撫でるとその気持ちよさに顔を輝かせた。ファブリスもまんざらでもない様子だ。

『我の毛並みは極上なのだ。いくらでも触って良いぞ』
「本当！？　ありがと！」
『お主マリーと言ったか？　我のことはファブリスと呼べ』
「ファブリス様？」
『様はいらん。我の名前はファブリスだ』
「分かった。じゃあファブリスって呼ぶね！」

マリーがそう言ってにっこり笑いかけると、ファブリスはマリーに顔を擦り付けた。

「あははっ、くすぐったいよ」
『もっと撫でろ』

マリーは神獣さえもすぐに手懐けてしまうのか……さすがマリー！　でもファブリス、マリーにくっつきすぎだ！

「レオン、私も神獣様に触れて良いか？」

リュシアンはマリーがファブリスと戯れているのを見て羨ましくなったらしい。

「もちろん良いよ。でも神獣様じゃなくてファブリスって呼んだ方が喜ぶと思う」

「それは……良いのだろうか？」

「本人が望んでるんだから良いんじゃない？」

「そうか」

リュシアンは俺とそこまで話をすると、ファブリスの下へゆっくりと向かっていった。

「私も、触れてよろしいでしょうか？」

『もちろん構わんぞ。お主も主人と仲が良いようだな』

「はい。友達……いや、親友です」

『そうか。ではこれからよろしく頼むぞ。我のことはファブリスと呼べ。敬称はいらん』

「分かりました。ではファブリスと呼ばせていただきます」

リュシアンは恐る恐る手を伸ばして、ファブリスの綺麗な毛並みに触れた。

「とても、とても綺麗です」

『そうだろう？　もっとしっかり撫でろ。そのように恐る恐る触られるとくすぐったい』

「分かりました」

マリーもリュシアンもファブリスと仲良くなれそうで良かった。やっぱり大人よりも子供の方が仲良くなれるのかも。

そうしてそれからはファブリスと触れ合ったり皆でお茶を飲んだりしながら、とても穏やかな心温まる時間を過ごした。

330、ロジェの今後

昨日は帰って来て皆とお茶を飲み、それからは夕食も食べずにベッドに入ってひたすら眠った。やっぱり相当疲れていたみたいだ。安心できる屋敷に戻って来て、一気に疲れが襲って来て抗えなかった。

でもそのおかげで今日は朝からとてもスッキリとしている。久しぶりに最高の目覚めだ。ちょうど今から一週間後に王立学校の卒業試験があるらしく、俺も受験するのでそれまでは仕事も休みとなった。なので今日から一週間は色々とやりたいこと、やるべきことをこなしていこうと思う。

まず今日の行き先はシュガニスだ。俺が魔物の森に行っている間の経営状況も聞きたいし、新しい従業員との顔合わせも済ませたい。

「レオン様、馬車の準備が整いました」

「ロジェありがとう。じゃあ行こうか。ローランも護衛よろしくね」

「はっ」

ロジェは他の人が見てわからない程度だけど少し口元が緩んでるし、ローランは俺が言葉を発するごとに感激している。俺に仕えられることをここまで喜んでくれる人がいるのって本当にありがたいよね。そして凄く嬉しい。

俺は自分の顔が緩むのを止められず、ちょっとニヤニヤしながら馬車に乗り込んだ。ファブリスは馬車の隣を歩いて付いて来てくれるみたいだ。ファブリスのことも皆に紹介しないとだからね。

「そういえばロジェ、兵士の募集ってどうなってる？」

「王都中の教会に募集を出してまして、予想以上の応募が来ております。レオン様が全員を面接するのは不可能な人数でしたので、私が全員と面談して数を絞っておきました。……よろしかったでしょうか？」
「そんなに応募が来たんだ」
「はい。千人を超えまして……」
「え、そんなに！？　ということは、ロジェはその全員と面談してくれたってこと……？」
「公爵家の兵士詰所をお借りして全員と面談いたしました。その中で魔力量が多く体格に優れ、人格にも問題がなさそうな人物を五十人ほど選出しておきましたので、最終的な判断はレオン様にお任せいたします」

千人を超える人数と面談なんて、一日中やっても終わらないよね……本当にロジェには感謝だ。

「ロジェ、本当にありがとう。かなり大変だったよね」
「いえ、レオン様がいらっしゃらないことで私の仕事は殆どありませんでしたので、そこまで負担にはなりませんでした」
「それなら良かった、本当にありがとう。じゃあその五十人とは俺が直接話をするね」
「かしこまりました。日程はいつがよろしいでしょうか？」
「そうだね……今日から一週間は仕事がないから、できればその間が良いかな」

屋敷もそろそろ出来上がるだろうし、もう雇っても問題はないだろう。あとは早めにリシャール様に相談して、これから雇うメンバーをまとめる立場に就いてもらう人も決めないとだな。

「では早速明日で日程を調節いたします。その五十人はレオン様が

いらしたらすぐに召集できるよう、中心街近くのアパートに滞在してもらっていますので。その滞在費用は大公家の予算を使わせていただきました」
「分かった。色々と本当にありがとう」

ロジェには俺がいない間に大公家の予算を使っても良いと言っておいたのだ。ロジェなら信頼できるし絶対に有意義な使い方をしてくれるだろうから。
やっぱりロジェが大公家の執事に最適なのかな……でもこの国って執事は従者でなくなるから、もしロジェを執事にした場合は従者を別の人にしないとなんだ。
もちろんロジェだけじゃなくて従者は増やす予定なんだけど、ロジェはずっと従者としていて欲しいんだよね……

でもロジェは執事になりたいかな？　やっぱり執事って皆の上に立つ立場だし、そこを目指してる人も多い。

「ねぇ、ロジェ……」
「何でしょうか？」
「大公家の執事をお願いしたいって言ったら、ロジェはどうする？」
「執事ですか……」
「うん。ロジェは信頼できるし、ロジェがトップに立っていたら使用人は問題なく働けるんだろうなって思うから。ロジェの本心を教えて欲しい」

俺のその言葉に嬉しいような少しだけ寂しいような複雑な表情を浮かべて、ロジェは深く頭を下げた。

「過分な評価をいただき光栄です。……もしそれが命令であれば、もちろん執事として精一杯勤めさせていただきます。しかし私の望

みとしては、執事ではなくレオン様の従者として仕えさせていただきたいです」

ロジェは真っ直ぐな揺らぎのない瞳でそう告げた。

「本当に？　ほとんどの人は執事になりたいって言わない？」

「そうかもしれませんが、私はレオン様に直接お仕えできる立場の方が嬉しいです」

「……そっか、本音を話してくれてありがとう。じゃあロジェはこれからも従者としてよろしくね！」

ロジェがこれからも俺の従者としていてくれるとなって、俺は予想以上に心が浮き上がるのを感じた。

「良いのですか？」

「うん！　俺としてもロジェには従者でいて欲しかったんだ。でもロジェは執事になりたいかなと思って」

「そうでしたか。それならば私は従者のままでお願いいたします」

「もちろん。これからもよろしくね」

俺はほっと息を吐き出して少し体の力を抜いた。結構体に力が入ってたみたい。

「レオン様、私も一生レオン様をお守りいたしますっ！」

ロジェと俺の話が一段落したところで、ずっと話を聞いていたローランが突然そう宣言した。ちょっと声が大きすぎてびっくりしたよ……

「ローランありがと。心強いよ」

最初は大変そうって思ったけど、ここまで言ってくれる護衛って本当に貴重だよね。それにローランは職務には忠実だし、雇ってみればかなり優秀な護衛だ。

「レオン様を絶対にお守りできるよう、より精進いたします！」
「本当にありがとう。これから雇う護衛とも協力してよろしくね」
「もちろんです」

そうしてロジェとローランと久しぶりにゆっくりと話しつつ馬車に揺られていると、シュガニスに到着した。馬車を降りるとかなり注目されているみたいだ。確実にファブリスの影響だね。

「ファブリスお疲れ様、馬車に乗れなくてごめんね」
『別に構わん。それよりも人間に凄く見られているぞ』
「まあしばらくは仕方ないよ。ファブリスが珍しいんだと思う。もし何か嫌なことを言われたりされたりしたらすぐ俺に言ってね。間違えてもファブリスはやり返さないで欲しい。やり返しても良いのは、そうしないと命の危険がある時だけにして」
『分かっている。しかしこの世界で我に傷をつけられるのは主人ぐらいだ』
「それもそうか。……そういえばさ、なんで馬はファブリスを怖がらないのかな？　魔物の森では魔物は逃げて寄ってこなかったでしょ？」
『それは我が気配を消してるからだ』

気配を消すなんてことできるんだ。俺には全く違いがわかんないけど……人間の世界で暮らしていくのなら便利で良いね。

「そんなことできるんだね」
『我には造作もないことだ』
「ふふっ、凄いね。じゃあお店に入ろうか……と言ってもファブリスは入れないか。じゃあファブリスは裏庭に行っててくれる？　このお店は裏庭があって、そこならファブリスでも入れるから」
『分かった。では行ってるぞ』
「うん、ちょっと待っててね」

そうしてファブリスを裏庭に送り出し、俺はロジェとローランと共に店内に入った。中に入ると既に予約販売は開始しているので店内は豪華に彩られていて、中ではたくさんの従業員が働いていた。

331、久しぶりのシュガニス

「あっレオン、帰って来たんだね！」

今日お店に行くと連絡しておいたからか、店内に入るとすぐにロニーが出迎えてくれる。

「ロニー久しぶり」

「怪我とかないよね？　大丈夫だった？」

ロニーは怪我がないかを確認するように、俺の周りをぐるぐると回り始めた。俺は思わずその様子を見て笑ってしまう。

「どこも怪我してないし大丈夫だよ」

「本当？　でも魔物の森の中にいたんだから、危険なこともあったでしょ」

「確かにあったけど大丈夫だったよ」

「……そっか、それなら良かった」

ロニーは自分の目で見てやっと安心したのか、ほっとしたように顔を緩めた。

「ロニーはどうだった？　シュガニスは上手くいってる？」

「うん！　凄く絶好調なんだよ。あと一時間ぐらいでお客さんも来るし奥の休憩室で話そうか」

「そうだね」

「あっ、でもその前に新しい従業員を紹介させて」

店内には見たことのない顔がちらほらとあり、俺がお店に入った段階で仕事の手を止めて頭を下げてくれている。

「皆顔を上げて。レオン、あっちにいるのが給仕として雇った三人、それから壁際にいるのが警備として雇った二人だよ。料理人として雇った二人は厨房にいるからまた後で紹介するね」

「ありがと。皆初めまして。俺はレオン・ジャパーニスです。このお店は貴族もたくさん訪れるし大変だと思うけど頑張って欲しい。よろしく頼むよ」

「かしこまりました。精一杯努めさせていただきます」

俺の挨拶に五人は再度頭を下げた。五人とも礼儀や敬語はもう身についてるみたいだし、全く問題なさそうだ。

「それから他の皆も久しぶり。また今日からは王都にいるからたまに見に来るね」

「お久しぶりでございます。ご無事のご帰還、心より嬉しく思います」

アンヌが代表してそう答えてくれた。アンヌやエバン、他の皆も久しぶりに見るな。孤児院から雇った子達は結構成長したかも。顔つきが大人っぽくなった。

「ありがとう。これからもよろしくね」

「じゃあレオン、奥に行こうか。皆はいつものようによろしく。今日は高位貴族の方が来るから失礼のないように、何かあったら僕を呼んでね」

「かしこまりました」

ロニーが従業員にそう声をかけて、俺達は奥に向かってドアを潜

った。
　さっきから思ってたんだけど、ロニーが店長っぽくなってる気がする。やっぱり予約を開始して店長としてお客様と接することも増えたからかな。一気に成長した感じだ。

「なんかロニー、カッコ良くなったね」
「本当！？」
「うん。前よりも大人っぽくなったというか、店長が板についた感じ」
「それ嬉しい！　貴族様と接することも多いし、舐められないように店長として侮られないようにって頑張ったんだ」
「凄いよ。前とは全然違う」
「じゃあ僕の努力の方向性は間違えてなかったってことだよね。良かった」

　俺もロニーに負けないように頑張らないと。ロニーに会うといつももっと頑張ろうと思える。本当に最高の親友だ。

「皆ちょっと手を止めてくれる？　あっ、手が離せない人は区切りが良いところまではやっても良いよ」

　ロニーは厨房に入るとそう声をかけ、料理人たちは各々キリの良いところでケーキを作る手を止めた。俺は全員が手を止めたところで一歩前に出て口を開く。

「皆久しぶりだね。元気だった？」
「レオン様！　ご無事のご帰還とても嬉しく思います。レオン様から教えていただいた新しいメニューを少しずつ開発しておりますので、またお時間ができましたらご試食をお願いいたします」

「凄いね、さすがヨアン。また時間を作って試食させてもらうよ」
「はい！」
「それからそっちの二人が新しい料理人かな？」
「は、はい。ジャパーニス大公様、お初にお目にかかります」

料理人は女の子が一人と男の子が一人だった。二人が慌てて跪いたので俺は緊張させないように声をかける。

「そこまでかしこまらなくても良いよ。新しいレシピを覚えるのは大変だと思うけど頑張ってね」
「かしこまりました。精一杯頑張ります！」

二人ともやる気十分みたいだ。この分なら今の主要メンバーが抜けてもお店を回していけそうかな。

「じゃあ皆、また後で」

そうして厨房にも挨拶をして、俺はロニーと一緒に休憩室に向かった。そして中に入るとそこにはアルテュルがいた。

「アルテュル久しぶり」
「レオン様、お久しぶりでございます」

アルテュルは俺のことを跪いて待っていて、頭を下げたままそう挨拶をした。やっぱりまだアルテュルとの距離は縮め切れてないな。……まあ段々とだよね。

「このお店での仕事はどう？　アルテュルをここに置いて俺はすぐに出立しちゃったから、全然フォローできなくてちょっと気になってたんだ。弟妹のこともあったし」

「ここでの仕事はやりがいもあり、とても楽しい毎日を過ごしております。ロニーは丁寧に仕事を教えてくれますし、他の従業員も私のことを特別意識することなく接してくれます。さらに弟妹は従業員寮の方で健やかに暮らしており、今では毎日楽しそうです。全てレオン様のおかげです……本当に、本当にありがとうございます」

そっか、弟妹ももうここでの生活に慣れたのかな。それなら良かった。泣きながらここに来たときは本当に可哀想だったからね……

「そう言ってもらえて良かったよ。これからアルテュルにはこのお店を任せたいと思ってるからよろしくね」

「精一杯努めさせていただきます」

「よしっ、じゃあアルテュルも座って。そんなところに跪いてたら話しにくいよ」

「いえ、私はここで構いません」

「いやいや、俺が話しにくいからね。はい、立とうか」

俺はずっと跪いたままのアルテュルの腕を取り、半ば強引にソファーに座らせた。ちょっとぐらい強引じゃないとアルテュルの態度は変わらなそうだし、これからはこうしよう。

「俺がいなかった間の話を聞かせてくれる？」

「もちろん。じゃあまずは新しい従業員のことから。さっきも紹介したけど給仕担当が三人、警備担当が二人、料理人が二人の合計七人を新しく雇うことにしたよ。教会に募集を出して面接して採用したのが五人、一人は僕がいた孤児院から、もう一人はヨアン推薦の子。全員とても真面目に働いてくれていて今のところは問題ないかな」

「うん、そこはロニーを信用してるよ。従業員寮の部屋は足りてるかな」

七人も増えたらさすがに足りない気がする。増築しないとダメかな……

「一人一部屋は無理だけど、広い部屋だから二人部屋にして対応してるから大丈夫だよ。それに大公家の屋敷が完成したら何人も引っ越すでしょ？　そうしたらまた部屋が余るかな」

二人部屋にしてるのか……確かにあの部屋ならベッドが二個ぐらい余裕で入りそうだった。

「それなら増築とかは考えなくて大丈夫？」

「うん、今のところはね。ただこれからも店舗を増やしてさらに従業員を寮に住まわせるのだったら、増築や寮をもう一つ増やしたりが必要かな」

これからも店舗は増やす予定だけど……全員に寮に住んでもらわなくても良いかな。自宅がある人はそこから通ってもらうことも視野に入れよう。その上で足りなかったら増築か、もう一つ建物を買うかだな。

「了解、これからは増やすことも考えるよ」

「ありがと。じゃあ次はレオンがいなかった間の予約状況についてね」

ロニーはそう言って、机の上に置いてあった紙を手に取った。

322、売上と引継ぎ

「えっと、この紙だ。これ見てくれる？」

ロニーが渡してくれた紙を見てみると、そこには毎日の売り上げと経費が書かれていて、一日の利益が計算されているものだった。ロニーが有能すぎる……

「それを見たら分かるように、毎日凄い額の利益が出てるんだ。もちろん材料費も高いんだけど、それ以上に貴族向けってことで値段を高くしてるから一つ一つの利益が大きくて、さらにそれが大量に売れるから凄いよ。毎日いくら作っても追いつかないほどの予約が来てて、今では三日待ちとか一週間待ちとかになってる。一度買った人は必ずと言って良いほどリピートしてくれて、さらに周囲の人にも広めてくれてるみたいなんだ」

そんなに凄いことになってたなんて……売り上げには期待できるかなと思ってはいたけど、ここまでとは正直予想してなかった。これは大公家の資金も安泰かも。この利益を大公家の資金にして、早々に俺の個人資産とは分けようかな。

「凄いことになってるね。予想以上だった」

「王族の方々がおすすめしてくれたり高位貴族の奥様方の間で流行ったりして、一気に下位貴族にまで広まったみたい」

マルティーヌやエリザベート様、カトリーヌ様だよね。後でしっかりお礼をしないと。新作スイーツを持ってお礼に行こうかな。

「ダリガード男爵家にもスイーツを送ってくれた？」
「うん。ちゃんと定期的に送ってるよ」
「ありがとう」

この現状じゃ下位貴族だと手に入れるのが難しくなってるだろうし、少しでもダリガード男爵家の地位向上に役立てたら良いけど……でもピエール様とキャロリン様は、そんなこと考えずに使用人達とスイーツパーティーでも開いて楽しんでそう。
俺はそのパーティーの様子を思い浮かべて思わず顔を緩めた。絶対にそのパーティー楽しいよね、俺も参加したい。

「あと数週間で開店日になるけど、カフェスペースも開いて回せそう？」
「そこが正直厳しいんだよね……でもカフェスペースを開いたらそっちで食べていこうって人が増えて持ち帰りは減るだろうから、そうなれば何とかなると思う。給仕は問題ないんだけど、料理人の方が追いつかないんだ。かと言ってあまり人数を増やしすぎても厨房が狭くなっちゃうし」
「確かに料理人はこれ以上増やすのは難しいよね」

でも増築するっていうのも踏み切れないよな……ここまで大盛況なのは最初だけで、さすがに少し経てば落ち着くだろうから。

「落ち着くまでは何とか皆に頑張ってもらって、予約の待ちを伸ばしてもらう感じになるかな」
「分かった。じゃあそれで対応するよ。アルテュルよろしくね、僕はもう店長じゃなくなるから」

今まで俺とロニーの会話を真剣に聞いていたアルテュルは、ロニーのその言葉に少しだけ躊躇いながらも頷いた。

「ああ、精一杯頑張る。……だが、私にできるだろうか」
「アルテュルは凄く仕事できるから大丈夫だって。あっ、でも笑顔は忘れちゃダメだからね」
「分かった。笑顔だな」

ロニーがアルテュルに笑いかけて、アルテュルはそれにぎこちない笑顔を返している。うん……それ笑顔というよりも変顔！

「ははははっ、何でそんな笑顔になっちゃうの？」
「レオン様、おかしいでしょうか？」
「うん、笑顔っていうよりも変な顔？　って感じだよ。前は自然に笑ってなかったっけ？」
「それがさ、貴族様らしいニヤッとした感じの笑みとか人を見下すような笑顔とか、裏で何か悪いこと考えてそうな黒い笑顔とかそういうのはできるんだけど、自然な接客の笑顔ができないんだよ」

ロニーはため息を吐きながらそう言った。確かにアルテュルの笑顔ってそんなのしか見たことないかも……あれ、でも牢屋で話した時に笑ってたよね。あれは自然だった気がする。

「アルテュル、無理に笑おうとしなくて良いんだよ。思わず溢れた笑いを想像すれば良いんだ。例えば……ピエリックとヴァレリアを想像して。二人がアルテュルの元に小さい体で頑張って駆け寄ってくるんだ。そして精一杯手を伸ばして兄上～って笑顔を向けてくる。どう、可愛いよね？」
「……ああ、可愛いな」

アルテュルは二人の様子を想像したのか、ふっと優しい顔で笑った。

「そう、その笑顔！」
「アルテュル今のやつだよ！　さすがレオン！」
「今笑っていましたか……？」
「笑ってたよ。じゃあこれからアルテュルは毎日鏡の前で今の想像をして、笑った自分の顔を覚えること。そしてその顔を意図的に作れるようになること。頑張ってね」
「は、はい。頑張ります」

今まで自然に笑うってことをほとんどしない人生を送ってきたのかもしれないけど、これからは弟妹もいるしどんどん笑えるようになるだろう。

「じゃあアルテュルは、あと笑顔さえ作れれば店長としてやっていけるってことかな？」
「うん。引き継ぎはもう済ませてあるから大丈夫だよ」
「ありがとう。いつから店長を交代しようか。ロニーはいつが良いとか希望はある？」
「そうだね……シュガニスの開店は店長として見届けたいかな」

確かにそうだよね。せっかくここまで頑張ってきたんだし、開店まではロニーを店長としよう。

「分かった。じゃあ開店まではロニーに店長として頑張ってもらって、アルテュルはその補佐でよろしく。そして開店して落ち着いたらアルテュルに完全に引き継いでくれる？」
「レオンありがとう。あと少し頑張るよ」
「お礼を言うのはこっちだよ。ロニーがいなかったら絶対にこのお店は上手くいってなかったから。本当にありがとう。そしてこれからも大公家の文官としてよろしくね」

「うん！　これからはもっと大変そうだね」

ロニーは苦笑しつつそう呟いた。確かに一店舗の店長よりも全ての店舗をまとめる立場の方が大変だよね。しかも仕事はそれだけじゃないし。大公家の経理も仕事の内容になる。

あとはこの前ミシュリーヌ様と話し合ったイベントのことでも、色々と動いてもらうことになるかもしれないな。給金は奮発しよう、そしてしっかり休みも取れるようにしよう。

「かなり大変になるかもしれないけど、できる限り休みを取れるようにしたり給金を増やしたり要望は聞くから、遠慮せずに言ってね」

「ありがとう。じゃあ言いたいことはどんどん言うことにしようかな」

「そうして。大公になったら意見を言ってくる人も減ったから貴重なんだよ」

「ふふっ、確かに大公様に意見を言う人なんてあんまりいないよね～」

「ちょっとロニー、大公様って言い方は止めて！」

ロニーに大公様って言われるのは冗談でも寂しい。というか全員に大公じゃなくて普通にレオンって呼んで欲しいんだけどね。まあそれが難しいのは分かる。

「分かったよ。ちゃんとレオンって呼ぶから」

ロニーは俺の反応に笑いながらそう言ってくれた。ロニーが俺に対して敬語も敬称も使わなくて、それでも何も文句を言わない人しかロニーの周りには雇わないことにしようかな。リシャール様に相談する文官経験者の人選はこだわろう。

「ありがと。じゃあとりあえずあと数週間はこのままで、またこれからのことはシュガニスが開店してから決めようか。その頃には屋敷も完成してるかもしれないから、ロニーとアンヌ達には引っ越してもらうことになるかもしれないし」
「そうだね。じゃあまたその時に話し合おう」

屋敷もそろそろ完成するし、本格的に大公家の使用人を雇わないとだよね。……本当にやること多すぎて大変だ。
何で俺ってこんなに忙しくなってるんだろう？　自分ではのんびりしたいと思ってるのに不思議だ。

「よしっ、今日の話はこのぐらいにして、皆にファブリスを紹介しても良いかな？」

333、ファブリスを紹介

俺のその言葉にロニーは不思議そうに首を傾げる。

「ファブリスって、誰だっけ……？」

「そっか、まだ名前は知られてないよね。神獣だよ。ファブリスって名前なんだ」

「……凱旋パレードの時にレオン達が乗ってた、あの神獣様？」

「うん。ロニーも見たの？」

「レオンの無事を確認したくて、遠くからちょっとだけ見たんだ。でも神獣様の迫力に圧倒されてレオンを見るの忘れたんだけど」

何それ、俺はロニーのその言葉に思わず笑ってしまう。なんかちょっと、ツボに入った。ロニーでもそんな間抜けなことあるんだね。

「ははは っ、ロニー、面白い」

「ちょっとレオン、笑ってる場合じゃないよ！　神獣様が今ここにいるの！？」

「うん。一緒に来たから。裏庭で待っててもらってるよ」

「神獣様を待たせるとか……絶対ダメでしょ！」

ロニーが急に慌てて立ち上がり始めた。でも何をしたら良いのか分からずにうろうろしている。久しぶりにこんなロニー見たかも。最近は昔のロニーとは比べ物にならないほどしっかりしてたから。

「ロニー慌てすぎだよ。ファブリスは気にしてないから大丈夫、時間の感覚も俺達と違うんだ。多分ファブリスにとっては一分も一日もそんなに変わらないよ」

「……そうなの？」
「うん。長い時を生きてるとそうなるんじゃないのかな」
「そっか、まあそれなら良いんだけど……って良くないよね！　できるだけ待たせない方が良いでしょ！」
「まあ確かにそうかな。じゃあファブリスのところに行こうか。アンヌとエバン、ヨアンも呼んできてくれる？　アルテュルにも紹介するからアルテュルも来てね」
「かしこまりました」

そうして俺はロニー、アルテュル、アンヌ、エバン、ヨアンの五人を引き連れて裏庭に向かった。裏庭に続くドアを開くと、ファブリスが地面に丸まって気持ちよさそうに目を瞑っている。ファブリス曰く、この体勢の時は本格的に寝ているわけじゃないけど体力を回復させているらしい。

「ファブリスお待たせー」
『ん？　主人か』
「待たせてごめんね。紹介したい人達を連れてきたよ」
『そうか』

ファブリスはのっそりとその場に立ち上がる。やっぱり寝てる時も大きいけど立ち上がるとかなりデカい。連れてきた五人はファブリスを目の前にして完全に固まっているみたいだ。
俺はそんな五人の背中を押してファブリスに近づける。
「ファブリス、一番右にいるのがロニーだよ。俺の親友で大公家で文官として働いてもらうことになってるんだ」

俺のその言葉にロニーはぎこちないながらも動き出した。そして跪き深く頭を下げて口を開く。

「し、神獣様、ロニーと申します。お会いできて光栄でございます。よろしくお願いいたします」
『ロニーだな。我はファブリスだ、よろしく頼むぞ』
「じゃあ次ね、次はアルテュルだよ。俺が始めたシュガニスっていうスイーツ専門店の店長になってもらう予定なんだ。ちなみに今の店長はさっきのロニーね」
『アルテュルだな。我はファブリスだ、スイーツの供物ならいくらでも受け取ろう』

そうしてアンヌ、エバン、ヨアンと紹介してファブリスは皆と挨拶を交わした。一番ファブリスが食いついたのは予想通りヨアンだった。さすがミシュリーヌ様の神獣だ。

「じゃあファブリス、これからこの五人とは関わることも多いと思うから仲良くしてね」
『了解した。名前と匂いと姿形は覚えたからもう完璧だ』
「ファブリスって匂いとか見分けられるんだ」
『当たり前だろう？』

まあこの見た目ならそうか。逆に鼻が利きませんって言われたら、何でこのビジュアルにしたのって疑問になる。ミシュリーヌ様ならありそうだけどね……

よしっ、とりあえず今日シュガニスでやるべきことは終わったかな。皆の様子も見れたしお店の売り上げの話も聞いたし。また何か忘れてたら来れば良いだろう。
俺はそう考えて皆の方に向き直った。

「じゃあ俺はこの辺で帰ろうかな。もうお客さんも来てる時間だし皆も忙しいでしょ？」
「確かにもうそんな時間だね」
「だよね。じゃあ最後に一つだけ。アンヌとエバンとヨアン、あと数週間でシュガニスは正式に開店になるけど、開店して少し経った頃には大公家の屋敷も完成してると思うんだ。だからその頃には仕事を完全に引き継いでもらって、大公家に引っ越してもらうことになると思う。そのつもりで準備をお願いね」

俺のその言葉に三人は力強く頷いてくれた。ヨアンは瞳をキラキラさせている。よっぽどスイーツ研究だけの仕事が嬉しいんだな。

「かしこまりました。しっかりと仕事を引き継いでおきます」
「引っ越しの準備も進めておきます」
「その日を楽しみにしております！」
「よろしくね、じゃあ今日は帰るよ。皆はお店に戻って良いよ」

それから皆がお店に戻ったのを見届けて、俺も店を後にすることにした。

「ロジェ、マルセルさんのところにも行きたいんだけど、ファブリスを連れて行きたいから馬車を出してもらえる？」

最近マルセルさんのところに行く時はいつも転移だったんだけど、さすがにファブリスと一緒に工房内に転移したらキツイだろうし、かといって前の通りに転移したらそこにいる人達を相当驚かせちゃうだろう。ここは潔く馬車で向かった方が良いよね。

「もちろん構いません。どこへでも自由に馬車をお使いください」
「ありがとう。ローランはマルセルさんと会うの初めてだよね？」

「はい。お会いしたことはございません」
「マルセルさんとはずっと前からの付き合いなんだ。俺にとっては魔法具の師匠であり、返しきれない恩のある恩人って感じかな」

最初にマルセルさんと出会った頃はまだこの世界のこともよく分かってなくて、さらに転生という訳のわからない事態に混乱していてかなり奇妙な子供だったと思う。そんな俺がこうして今幸せでいられるのは確実にマルセルさんのおかげだ。
色々と忠告をしてくれて俺のことを守ってくれて、本当に感謝している。

「レオン様にとって大切な方なのですね」
「そうなんだ。だからローランのことも紹介するね」
「ありがとうございます」

そんな話をしつつ馬車に乗り込み、マルセルさんの工房まで向かった。

「マルセルさんこんにちはー」

ノックをして中に呼びかけようとしていたロジェを止めて、俺は自分でマルセルさんを呼ぶ。すると中からドタドタと足音が聞こえてきてバンッと勢いよくドアが開いた。

「レオン！」
「お久しぶりです」
「怪我はないのか？　魔物の森に行って大丈夫じゃったのか？　お主ならどんな怪我でも治せるだろうが、万が一ということもあり得る」

マルセルさんはそう捲し立てながら、俺の体を身体検査するように触って怪我がないか確かめている。マルセルさんのその様子が完全に孫を心配するおじいちゃんそのもので、俺は心が温かくなるのを感じた。

「マルセルさん、どこも怪我はないので大丈夫です。心配かけてすみません」

「……そうか。本当にレオンは最初の頃から心配ばかりかけおって、わしの心臓がいつ止まるかと気が気ではないわい」

「ごめんなさい。マルセルさんには長生きしてもらわないと困るので、心配しすぎないように気を付けてください」

そういえば最近はマルセルさんをスキャンしてなかったな。また病気などがないかちゃんと調べさせてもらおう。これを怠って手遅れだなんてことになったら、悔やんでも悔やみきれない。マルセルさんには長生きして欲しいからね。

「こんなとこで立ち話もなんじゃし、中に入るか？」

「はい。あっ、でもその前にファブリスを紹介させてください。神獣であるファブリスです」

『我はファブリス。ミシュリーヌ様の神獣であり今はレオンに仕えておる。よろしく頼むぞ』

マルセルさんはその声でやっとファブリスの存在に気づいたらしく、ギギギっと音がしそうなぎこちない動きで首を横に向けた。そしてファブリスを視界に収めると途端に跪く。

３３４、魔法具談義

「神獣様、お初にお目にかかります。マルセルと申します。お会いできて光栄でございます」

マルセルさんが涙声だ。そういえばマルセルさんは、この国で珍しく信仰心を持ち続けてた人なんだよね。やっぱり信仰心があまりない人とはまた反応が違う。感激してる感じだ。

「マルセルさん、そこまでかしこまらなくても大丈夫ですよ？」

「いや、神獣様を前にしてそれは無理じゃ」

「でもずっと顔を伏せていたらファブリスのことが見えないと思うんですけど……」

「直視など恐れ多くてできんのじゃ。こうして側にいるだけで神々しさを感じ取れる……」

「……そうでしょうか？」

ファブリスからそんなに神々しさが感じ取れるかな？　うーん、俺には分からない。まあミシュリーヌ様も神様だとは思えないなっていつも思うし、そんなものなんだろう。

「じゃあファブリスは外で待っててくれる？　俺はマルセルさんと話してくるから」

『分かった。ゆっくりしてきて良いぞ』

「ありがとう。じゃあちょっと待っててね」

そうして俺は跪いて動かないマルセルさんを連れて工房の中に入った。マルセルさんの家なのに何故か俺が家主みたいになってるよ。

「マルセルさん大丈夫ですか？」
マルセルさんを椅子に座らせて、俺は顔を覗き込みながらそう聞いた。
「ああ、大丈夫じゃ。しかし凄いオーラをお持ちだな。わしは緊張して殆ど動けなかったぞ」
「……俺はもう慣れたのかよく分からないんですよね」
「まあレオンも使徒様じゃからな。――そう考えると緊張が解けてくるから不思議じゃ」
「ちょっとそれどういうことですか！」
俺は使徒様らしくないって聞こえる。まあ否定はできないけどさ。自分でも使徒様らしさはないなって思ってるから。
冗談を言い合っているとマルセルさんも少しは落ち着いてきたみたいなので、俺も向かいの席に腰を下ろした。
「では改めて魔物の森から無事に生還しました。作戦も成功です」
「……本当に良かった。わしも安心じゃ」
「魔物の森ではバリアの魔法具が大活躍でしたよ。それから持ち運びトイレも凄く役立ちました」
「そうなのか。魔法具で何か改善点はあったか？」
マルセルさんは魔法具の話になると途端に真剣な表情になる。こういう部分が職人って感じでカッコ良いんだよね。
「そうですね……改善を考えても良いかなと思ったのは、水道です。俺は水魔法が使えるので直接水筒に水を発生させていましたが、そ

れができない人は水筒を持ち、さらに水道の魔法具も持つことになりますよね？」
「そうじゃな。騎士達は二つを持っていると聞く」
「はい、それが煩わしいなと思って。水筒と水道が合体したような魔法具を作ったら便利じゃないかなと思いました。基本的に使う人は騎士に限られると思いますが、貴族が馬車で移動する時にも従者にとっては水をこぼす心配も減り便利ではないかと」
俺以外の三人が水筒と水道を持参していて、ジェラルド様から水の確保ができないような魔物の森に入る時はこの二つを持参すると聞いて、改良できないかなと思ったのだ。
「確かにそれはありじゃな……どんな改良が良いだろうか」
マルセルさんの瞳が途端に輝く。やっぱりマルセルさんは魔法具作りが好きだよね。そして俺も好きなんだ。マルセルさんと工房で魔法具について話し合ってる時間は楽しいし落ち着く。
「まずこの世界の水筒って基本的に竹じゃないですか。竹って軽いし水筒には便利だと思うんです。なのでそこはそのままに、蓋だけを魔法具にするのはどうでしょうか？」
「ふむ、確かにそれならば魔鉄の消費も少なくて、値段を抑えられるかもしれんな」
「そうですよね！　しかも竹部分がダメになったら、蓋はそのままに竹部分だけを新しくすることもできると思うんです」
「確かに可能じゃな。ネジではめておけばすぐに外せるじゃろう」
魔法具のメンテナンスは基本的に魔法具工房に持ち込むのが普通だし、竹を取り替えるぐらいすぐにできるだろう。

「じゃが、魔石はどのようにつけるんじゃ。魔石をいちいち取り外して嵌めるのならば、水道を持つのとそこまで変わらない気もするが…」
「そこもちゃんと考えたんです！　まず蓋を二重にしたいです。上部分に使うのは普通の鉄で、下部分にだけ魔鉄を使います。そして魔石は上部分に嵌め込んでおきます。その上で二重の蓋の間にバネを入れて、押し込めば魔石が魔鉄に触れる、離せばバネによって魔石が魔鉄から離れる。これならば魔石を少し押すだけで水が出せると思うんです」

イメージはプッシュ式のスイッチだ。日本のは押し込むとそこで固定されて、それをもう一度押し込むと今度はスイッチが戻ってくるっていう仕組みになってたけど、それのやり方はわからないので押し込む固定はなしにしてある。
水筒が満タンになるまでに必要なのは数秒だと思うから、逆に押し込まれた状態で固定されない方が使い勝手は良いと思うんだよね。

「レオンはあれじゃな、やはり天才じゃな」

マルセルさんは驚いてるような呆れたような、複雑そうな表情でそう言った。

「ありがとうございます。でも俺はアイデアは出てくるけど洗練されてないので、マルセルさんの方が凄いと思います。マルセルさんは魔鉄の変形もデザインも洗練されてますから」
「そ、そんなことはないわい」
「ではマルセルさん、俺がさっき思いつきで口にしたアイデアはもっと良くなると思いますか？」

マルセルさんは少し照れながらも真剣に考え始める。それから数

分経って、徐に紙とペンを取り出して設計図を描いていった。
マルセルさんって絵も上手いんだよね。俺は絵が下手だから設計図もかなり下手なんだ……

「さっきのレオンの説明だと、蓋はこんな構造になるってことじゃよな？」
「そうです。……やっぱり上手いですね」
「このぐらい当然じゃ。しかしこれだと上の鉄と下の魔鉄がバネだけで繋がっていて、横から見たらかなり不恰好じゃ。これなら魔鉄で横の壁まで作って、さらに上の板も魔石に触れない部分は魔鉄にした方が良い。そして上の板は少しだけサイズを小さくするんじゃ、横の壁の内側にピッタリと張り付く、しかしスムーズに動く大きさじゃな。その繊細なサイズ調整は鉄ではなく魔鉄の方がやりやすい」

確かにマルセルさんの改良案の方がカッコ良い。そしてこれなら間に埃とかも入り込まないし衛生的かも。

「確かに改良後の方が良いですね……この横の壁の上部はそのままだと危ないので、最後にくるっと丸めた方が良くないですか？　その方がデザイン的にも豪華になりますし」
「それはありじゃな。魔石を嵌めた鉄板を上に引っ張っても丸みに引っかかって取れなくなるし、故障防止にも役立ちそうじゃ」
「確かにそうですね。いくらバネで繋がってるとはいえ、無理やり引っ張ったら壊れますよね」

そうしてそれからしばらくは、マルセルさんと魔法具について話し合った。かなり久々に魔法具談義をして、時間を忘れて熱中してしまった。

「レオン様、ご昼食を召し上がられなくてもよろしいのでしょうか？　マルセル殿や神獣様もいらっしゃいますが……」

ロジェのその言葉でハッとして時計を見ると、すでにここに来てから三時間が経過していて昼もとっくに過ぎていた。熱中しすぎた、声をかけてくれたロジェに感謝だ。

「ロジェ、完全に忘れてたよ。声をかけてくれてありがとう。ロジェもローランもお腹空いたよね。それにファブリスも待たせてたんだった。マルセルさんもお腹空きましたよね」

「いや、わしは大丈夫じゃ。しかし熱中しすぎたな」

「ですね。ここでお昼ご飯を食べても良いですか？　ロジェとローランも一緒に」

「構わんよ。では机を片付けるか」

マルセルさんが机の片付けを始めてくれたところで、俺は後ろを振り返った。

３３４、魔法具談義（後書き）

「転生したら唯一の魔法陣継承者になりました。この不便な世界を改革します」
という新作を投稿始めました。気になる方は覗いていただけたら嬉しいです！よろしくお願いいたします！

335、お昼ご飯と兵士の面接

「二人ともごめんね。ここで一緒にご飯を食べようか。食べ物ならたくさん持ってるから」
「いえ、私達は一食抜いても問題ありませんので」
「ううん、ご飯はちゃんと食べた方が良いよ。遠慮しないで座って。やっぱり従者も護衛も交代要員が早急に必要だよね……」

この一週間のうちにリシャール様に相談に行こう。今までは俺が平民だったしロジェ一人だったから、従者が側にいない時間ってい うのもあったんだけど、俺が大公となったからそういう訳にもいかないみたいなんだ。ロジェやローランの負担ばかりが増えている。

「では失礼致します」

ロジェは俺と一緒にご飯を食べることが何度かあり慣れたのか、素直に席に着いてくれた。そしてそんなロジェを見てローランも席に座る。

「失礼いたします」
「うん。何が食べたいかリクエストある？　基本的にはなんでもあるけど」
「レオン、わしはステーキが良いな」
「ステーキですね。あっ、そういえばファイヤーリザードって名前の魔物を倒したんですけど、この肉がとても美味しいんです。食べてみますか？」

ファイヤーリザードはかなり大きかったから、まだまだ肉が残っ

てる。

「魔物は食べたことがないんじゃが、美味いのか？」
「微妙なのも多いですが、ファイヤーリザードはかなり美味しいです。ファブリスのお墨付きです」
「神獣様の……ではいただこう」

マルセルさんのファブリスに対する信頼が高すぎる。こうしてマルセルさんを見てると、宗教って良い面もあるけどやっぱり怖い面もあるよね。

「ロジェとローランはどうする？」
「私も魔物肉を試してみたいです」
「私もです。どのような味なのか気になります」
「じゃあ皆でファイヤーリザードを食べようか」

俺は焼いた状態でアイテムボックスに保存しておいたファイヤーリザードの肉を取り出す。そして好みで味付けを変えられるように塩胡椒、各種ハーブなども机に並べた。後はスープとパンがあれば良いかな。そうだ、フルーツジュースも出そう。
よしっ、これで十分かな。

「じゃあ食べましょうか。足りなかったら言ってください。二人も足りなかったら遠慮しないでね」
「ありがとうございます」
「いただきます」

ファイヤーリザードの肉をフォークで固定して、ナイフでスッと一口サイズに切り分ける。本当に柔らかくてナイフが簡単に通るお肉だ。

……うん、やっぱりこの肉は絶品だ。牛の赤身ヒレ肉のような感じだけど、それよりも旨味が強くてより柔らかくて、でもしつこくない。美味いなぁ。

「なんと……魔物肉がこれほど美味いとは驚きじゃ」
「お口に合いましたか？」
「ああ、これは相当美味いぞ」
「やっぱりファイヤーリザード美味しいですよね。でも他の魔物肉は微妙なやつが多いので、これが特別なんです」

最初は恐る恐る肉を口に運んだマルセルさんが、かなりスピードアップしてステーキを食べ進めるのを横目に、俺は二人の様子も観察した。

ロジェは微かに口角が上がっているので相当美味しいと感じているみたいだ。ローランも肉を口に運ぶペースが早いから美味しいみたい。

「二人とも美味しい？」
「はい。このお肉は柔らかくてとても食べやすい食感ながらも、旨味が強くてとても美味しいです」
「今まで食べたステーキで一番かもしれません」
「ふふっ、そんなに？」
「これはそれほど美味しいです。ファイヤーリザードを畜産できないのでしょうか……？」

ファイヤーリザードを畜産、凄いパワーワードだ。あの大きさにあの強さだからね……

「多分それは難しいと思うな」
「やはりそうですか。では今味わっておきます」

そうして皆でファイヤーリザードを堪能して、俺はマルセルさんの工房を後にした。久しぶりに凄く楽しい時間だったな。

そして次の日、今日は兵士の面接の日だ。

「レオン様、公爵家の兵士詰所に五十人集まりました。屋敷の応接室に呼び寄せるか、レオン様が詰所に向かわれるかどちらになさいますか？」

「俺が詰所に行くよ。いちいち移動してもらうの大変だろうし。詰所にも応接室になるような個室はあるんだよね？」

「ございます」

「じゃあそこで一人ずつ話をしようかな」

「かしこまりました。では準備をして参りますので少々お待ちください」

公爵家の屋敷の隣には兵士が住む建物があるけど、俺はそっちに行ったことがないんだ。だから今日はちょっとだけワクワクしている。王都の屋敷だからそこまで常駐の兵士は多くないし詰所も大きくないけど、兵士詰所っていう場所に心惹かれるよね。

やっぱり男の子は騎士とか兵士とか憧れるんだよ。これはもうしょうがない。

「ローランは兵士詰所に行ったことある？」

「いえ、私はずっとレオンさまのお側におりますので、まだ行ったことはありません。しかしレオン様の護衛が増えましたら、一度兵士達とも有事の際の対応についてなど話し合いたいと思っております」

確かにそういう話し合いも必要なのか……俺の知らないところで色々と動いてくれてるんだな。

「ありがとう。早めに護衛を雇わないとね」
「よろしくお願いいたします」
「明日はリシャール様に時間を取ってもらってるから、大公家で雇う人達について色々と相談してくるよ」

そうしてローランと話していると、ロジェが準備ができたと呼びにきてくれた。

詰所の中に入ると、タウンゼント公爵家王都邸兵士団の団長さんが出迎えてくれる。

「レオン様、このような場所まで足をお運びくださりありがとうございます」
「ううん。逆にこんなところまで来ちゃってごめんね。今日は一部屋お借りします」
「一部屋と言わずに何部屋でもお使いください。こちらが応接室でございます」

詰所の中は特別珍しい作りをしているわけでもなく、ごく一般的な石造の建物で応接室も普通だった。もうちょっと剣が飾ってあるとか色々期待してたんだけど……まあ普通は剣なんか飾らないよね。よく考えたら剣を飾るのは屋敷の方だよ。

「案内ありがとう」
「では何かありましたらお声がけください」

団長さんが出ていくと部屋の中には俺とロジェ、ローランだけに

なる。早速面接をしていくかな。五十人って一人五分でも数時間かかるよね、早く始めないと。

「じゃあロジェ、最初の人を呼んできてくれる？」

「かしこまりました」

ロジェが部屋から出ていき、数十秒後に一人の男性を連れて部屋に戻ってきた。二十代前半ぐらいに見える人で、ガタイはかなり良さそうだ。でもやばいぐらい緊張しているようで、汗がダラダラと垂れている。

「し、失礼します！」

「いらっしゃい。そこに座ってくれるかな」

「は、はい！」

男性はカチコチとぎこちない動きを見せてソファーに腰を下ろした。服装はかなり貧相だし、礼儀作法や敬語はこれからって感じかな。でもその辺は兵士なら雇ってから教えるのが普通だし、とにかく人柄と強さ重視だよね。

俺はそう考えて口を開いた。

「俺はレオン・ジャパーニス。ジャパーニス大公家の当主だよ。君は大公家の兵士になりたいってことで間違いはないかな？」

「はいっ！」

「そんなに緊張しなくても良いよ。別に礼儀がなってないとか敬語が使えてないとか、そういうので落とすつもりはないから。それはこれから覚えてくれれば良いよ」

「……はい」

「ふふっ、さっきから『はい』しか聞いてないよ」

男性が同じ言葉でバリエーション豊かな返事を聞かせてくれるのが面白くて思わず笑いながらそう言うと、途端に男性は顔を青くした。

「あ、あの、俺は敬語が使えないから。部屋に入る時の挨拶と返事だけは教えてもらったんだ。だからそれ以外は話せないと思って……」

あ、怖がらせちゃったかも。全然そんなつもりはなかったのに。

「そんなの気にしなくて良いよ。敬語が話せる人なんて平民にはほとんどいないことはわかってるから」

「……そ、そうか。ありがとな」

「うん、だから好きに話して。それで早速だけど、魔力量と魔力属性を聞いても良い？」

「ああ、俺は身体強化属性で魔力量は五だ。今まではそれを活かして荷運びの仕事をしてたから、魔法は使い慣れている。剣は王都の兵士になった友達にたまに教えてもらってたから、少しはできる」

おおっ、身体強化の魔力量五は上手くやればかなり強くなれる。もうこれだけで採用したい。話してる感じ絶対に良い人だし。というかこれ、ロジェが厳選したなら誰一人落とす必要なさそう……まあ、俺がちゃんと面接することに意味があるのだろうけど。

「なんで王都の兵士にならなかったの？」

「父ちゃんから荷運びの仕事を引き継ぐことになってたから諦めたんだ。俺は長男だし」

「そっか。じゃあなんで今回は応募してくれたのかな？」

「それが……王都の兵士になるって言った時は父ちゃんに反対されたんだけど、父さんが使徒様のことをかなり好きになったみたいで、

使徒様を守る兵士になりたいって言ったら即答で頷いてくれたから……」

今までは兵士になんかならないで家業を継ぐのが長男だろ！　って言われてたのが、お父さんが使徒様ファンになっちゃって、使徒様を守る兵士なら許す！　ってなったってことか。こんなところにも使徒様のことを広めた恩恵があるなんて。

「そういうことね。お父さんに許してもらえて良かったね」
「俺はずっと兵士になりたかったから、今回は凄く嬉しいんだ。精一杯頑張るからぜひ雇ってくれ」

男性はそう言って少しだけ笑顔を見せた。うん、もうこの人は採用で良いかな。やる気十分だし性格も良さそうだし、何よりも魔力量と魔力属性が完璧だし。

「色々と聞かせてくれてありがとう。じゃあ今日はこれでおしまい。結果は明日また聞きにきてね」
「わ、分かった。今日はありがとな」

男性は最初の頃よりは緊張感が薄れた様子で部屋から出て行った。

336、ニコラの覚悟

「凄く緊張してたね。皆あんな感じなのかな？」

俺は男性が外に出てからポツリとそう呟く。最後は少しマシだったけど、終始動きはぎこちなかったし笑顔は強張ってたし、可哀想なほど緊張していた。

「やはり使徒様であり大公様であらせられるレオン様とお会いになるのですから、緊張は仕方がないかと思います」

「……確かにそうだよね。少しでも緊張を解してあげられたら良いんだけど」

客観的に考えると俺って凄い立場だよね……自分ではあまり実感がないから忘れそうになる。もしこの世界に転生してきた頃の俺が今の俺と会うってことになったら、さっきの人と似たような感じになるかも。しかも面接ってより緊張するし。

「先程の男性は途中から少しは体の力が抜けたようでしたので、先程のように声をかけていただければ問題ないかと思います」

「本当？　それなら良かった。じゃあ次の人お願いしようかな。どんどんやらないとね」

「かしこまりました」

――それから数時間かけて面接を行った。基本的には最初の人と同じように、皆緊張してて礼儀作法や敬語は全く分からない人ばかりだった。

でもロジェが厳選しただけあってほとんどの人は人柄が良かったので、意外と楽しく面接できた気がする。

そしてついに最後の一人だ。

「では最後の応募者を連れて参ります」

「よろしくね」

やっと最後だ～と緩みそうになる体に叱責をして、ソファーに姿勢よく、でもゆったりと座って待っていると、部屋に最後の一人が入ってきた。俺はその人を見て思わず目を見開く。

……ニコラだ。ニコラも応募って形にしたんだね。でも確かにそっちの方が平等だし軋轢を生まないか。

「いらっしゃい。そこに座って」

俺はニコラが真剣な表情で入ってきたので、ちゃんと大公として接しようと思って、他の受験者に対する対応と同じようにした。

「ありがとうございます。失礼いたします」

するとニコラはしっかりとそう返してソファーに座る。ニコラが学びたいって言ったから学べるように環境は整えたけど、かなり頑張ったのかな。動きも洗練されたし何より普通に敬語を使っている。

「俺はレオン・ジャパーニス。ジャパーニス大公家の当主だよ。君は大公家の兵士になりたいってことで間違いはないかな？」

「はい。間違いありません」

「ありがとう。じゃあ魔力量と魔力属性を教えてくれる？」

「かしこまりました。魔力量は五で、属性は火属性です」

本当に敬語の勉強相当頑張ったんだろうな。俺が魔物の森に行ってる期間で勉強したってことだから、半月……九週間ぐらいだよね。もしかしてニコラって相当頭良い？

……確かに俺が転生した時から、普通に同じレベルで会話をしていた。よく考えたらおかしい、だって俺は成人した記憶持ち、ニコラはただの八歳だったんだから。こんなところにも天才がいたなんて……

ロニーにしろヨアンにしろロジェにしろ、この世界って凄い人が多すぎて、俺は使徒なのに大したことないじゃんって思われそうで怖い。俺も努力しろってことかな……うん、頑張ります。

「剣を習った経験はある？」

「近所に住む兵士の先輩から習っていました」

「それは王都の兵士団だよね？　そっちじゃなくて大公家の兵士団を選んだ理由は？」

「それは、大切な人達の近くで剣を振るうことができるからです」

――それって、俺達家族のことだよね。

うぅ……ニコラが知らないうちにカッコよくなってる。俺もこういうカッコ良さを身につけたいのに完全に負けてる！　でも、凄く嬉しい。

「……ありがと」

俺は大公の仮面を脱ぎ捨ててレオンとしてそう呟いた。するとニ

コラはそれが分かったのか、いつものようにニッと明るい笑顔を浮かべてくれる。
なんかニコラが一気に大人になっちゃった気がするな。俺も負けないように頑張らないと。

「じゃあ今日は終わりだから帰って良いよ。結果はまた明日聞きにきてね」
「かしこまりました。では失礼いたします」

ニコラは最後まで完璧な作法で部屋を後にした。

「……先程の青年は素晴らしいですね。今すぐにでも兵士としてやっていけそうでした」

ニコラが部屋から出るとローランがそう呟く。まあ驚くよね、他の人と明らかにレベルが違った。

「実はニコラは俺の幼馴染なんだ。兵士を目指してたんだけど俺が大公ってことを知って、大公家の兵士として雇ってもらえないかって言われたんだよね。そしてその時に今から礼儀作法や剣術を学んでおきたいって頼まれて、公爵家の兵士の方に教えてもらえるように場を整えたんだ」
「そのような経緯があったのですね。それならば納得です」
「うん。でも学べた期間は半月ぐらいだと思うから、俺もかなり驚いたよ」

ローランが俺のその言葉に目を見開く。

「半月は凄いですね……」

やっぱり半月であそこまでって凄いことだよね。相当頑張らないと無理だろう。ニコラには感謝しないと。最初から絶対に信頼できる兵士がいるっていうのは本当にありがたい。

「よしっ、じゃあ屋敷に戻ろうか。いつまでもここを占領してたら申し訳ないし」

「かしこまりました。では団長殿に伝えて参ります」

それからロジェが団長さんを連れてきてくれて、今日の感謝を伝え俺は屋敷に戻った。そして自分の部屋で面接者の情報が書かれている紙を眺める。

「ロジェ、兵士って何人必要なの？」

「基本的に王都の屋敷に常駐する兵士はそこまで多くありません。下位貴族は護衛以外はいない場合もあります。高位貴族は二十名程度が普通です」

「じゃあ俺は多くても三十人ぐらいにした方が良いのかな？」

「そうですね……しかしレオン様は領地をお持ちではありませんので、もう少し増やしても良いかと思います。他の貴族家は領地に大きな兵士団を抱えておりますので」

そっか……じゃあ四十五人を雇っても良いかな？　今日面接した感じ、五人だけちょっと俺と合わなそうだなって思った人がいたんだ。でもそれ以外は皆文句なしに雇いたいって感じだったから、さらに絞るのは難しい。

「じゃあロジェ、この五人以外の四十五人を雇うのでも良い？」

「そうですね……問題ないとは思いますが、一応陛下とタウンゼント前公爵様に話は通しておいた方が良いかと思います。その人数にさらに兵士や騎士から引き抜く経験者もプラスされますので」

「確かにそっか。じゃあ話をしてこようかな」

今の時間は午後の執務の時間だし、ちょっと執務室にお邪魔して了承を得るぐらいなら迷惑じゃないだろう。

「じゃあロジェ、ちょっとだけ出かけてくるね。転移で行くからここにすぐ帰ってくるよ」

「かしこまりました。ではお茶を淹れてお待ちしております」

「よろしくね」

そうして執務室に飛んでアレクシス様とリシャール様に確認をしたところ、四十五人を雇っても全く問題はないということだった。むしろ使徒の威厳を示すためにもう少し増やしても良いらしい。

そういうことなら今回雇った皆が慣れた頃に、また少し増やすことも考えようかな。

二人から了承を得て屋敷に戻った俺は、ロジェの淹れてくれたお茶で疲れを癒しながら、雇うことになった兵士四十五人の名前を覚えるために奮闘した。

337、リシャール様に相談

兵士の面接をした次の日、俺はリシャール様と共に王宮の応接室に向かっていた。執務室の隣にある部屋で、いつも三人で昼食を食べている場所だ。

リシャール様に大公家の使用人について相談があると持ちかけて時間を作ってもらったら、何故かアレクシス様も同席することに決まったのだ。大公家のことだし国としても重要事項なのだろう。

それに俺としてもこれはラッキーだった。この前ミシュリーヌ様と話し合った宗教行事とミシュリーヌ様が人々の願いを聞くことについて、アレクシス様に相談したいと思ってたんだ。今日はその話までしようと思う。

部屋に入ると中には、淹れたてのお茶の香りとクッキーの甘い香りが漂っていた。

「二人とも良く来たな。座ってくれ」

「失礼いたします」

俺とリシャール様が席に着くと、アレクシス様の従者がすぐにお茶をカップに入れて出してくれる。

「今日はレオンの店から買ったクッキーを用意した。食べ慣れてるかもしれないが、是非楽しんでほしい。私は最近これがお気に入りなんだ」

アレクシス様はそう言いつつ、微笑みながらクッキーを口に入れた。分かります、そのクッキー何枚でも食べられますよね。俺もついついアイテムボックスから取り出して食べちゃうんだ。

「ありがとうございます。いただきます」

「レオン君の店のスイーツは公爵家でも大人気です。カトリーヌが手に入れようと躍起になっていて大変です」

リシャール様が苦笑しつつそう言った。カトリーヌ様は甘いもの好きだからね……この前スイーツを差し入れしたらかなり喜んでくれたし、また今度差し入れとしてホールケーキを一つ持っていこうかな。かなり力を入れて宣伝してくれてるみたいだし。

「たくさんの方にご購入いただけてありがたいです。この国全体にスイーツが広がれば良いなと思っております」

「それは素晴らしいな」

それから少しだけ他愛もない雑談をした後、人払いをして本題に入る。

「ではレオン、本日はどんな相談があるんだ？」

「はい。本日は二つ相談したいことがございます。まずは大公家で雇う使用人についてです。まだほとんどの人員が決まっていなく、教会で広く募集をするつもりではあるのですが、数人は経験者を雇いたいと思っております。そこで良い人材をご紹介いただけたら嬉しいのですが……」

兵士と同じように使用人もほとんどは教会での募集で雇おうと思っている。でもやっぱりまとめ役の人は経験者が必要だよね。全員初心者とか……絶対にまとまらない。

「確かに大公家の使用人について、まだ決めていなかったな」
「はい。今のところメイド長と兵士団団長、スイーツ開発部門の主任、文官一名は決まっております。それから教会で募集をして兵士四十五名も決まっております。よって早急にご紹介いただきたいのは、執事と文官経験者、それから経験のある従者とメイドを数人ずつ、さらに料理人、庭師、馬丁などです」

俺のその言葉に二人はしばし考え込んだ。そしてまず口を開いたのはリシャール様だ。

「執事だが、アルバンの息子はどうだろうか？」
「アルバンさんの息子さんは……公爵家の執事を引き継ぐのではないのですか？」
「そうなのだが、実はアルバンの息子は二人いてな。どちらか一人は懇意にしている貴族家へ紹介しようと思っていたのだが、ちょうど良かった。どちらもアルバンに似てとても仕事熱心で忠誠心は高い。さらにレオンはアルバンの命を助けているから、どちらでもよく仕えてくれるだろう」

それはかなりありがたい提案だよね。アルバンさんは文句なしの執事だなってずっと思ってたんだ。公爵家の屋敷が円滑に回ってるのは、明らかにアルバンさんのおかげだし。

「ぜひご紹介いただきたいです」
「分かった。ではすぐに本人へ話をしよう。それからアルバンの息子はどちらもメイドの妻を持つが、一緒に紹介しても構わないか？
幼い子供もいるので引き離すのは良心が痛む」

もう結婚してお子さんまでいるのか。それは絶対に引き離しちゃ

ダメだ。家族は一緒にいるべきだと俺は思っている。特に子供が幼いうちは尚更だ。

「もちろんです。経験のあるメイドさんはこちらからお願いしたいほどですので。あっ、大公家のメイド長はアンヌに頼む予定なのですが、アンヌの下につくことに問題はないでしょうか？」

「アンヌは公爵家でも上の立場だったので、問題ないだろう」

「それなら良かったです。では一緒に紹介をお願いいたします」

よしっ、これで執事とメイドさんゲットだ。アルバンさんの息子さんご家族なら信頼できるし優秀だろうし、とてもありがたい。

「では文官だが、王家で働く文官から一人紹介しようか？　大公家で働きたい者を募ればかなりの人数が手を上げるとは思うが」

次はアレクシス様がそう提案してくれた。

「ありがとうございます。しかし文官はロニーと一緒に働いてもらうことになるので、ロニーのことを下に見ない人、さらにロニーと俺が気安く話していても気にしない人が良いのですが……難しいでしょうか？」

「ふむ……それなら一人ぴったりの人材が思い当たる。もう三十代後半ほどの年齢だが、ロニーと同じように孤児院出身で王立学校に入学し王宮の文官になった者だ。礼儀作法も敬語も完璧にできるのだが、それを面倒くさいと思っているらしい。何年も前に敬語の廃止について、という文書を提出したことがある。あの提案書は私も読んだが、面白いと思ったものだ」

アレクシス様は顔に苦笑を浮かべつつ、その人のことを説明してくれた。敬語の廃止についてをこの身分がある国で提案するのは勇

気あるな……ちょっと会って話してみたい。面白そうな人だ。

「ではその方を紹介していただけますか？　公の場以外では礼儀作法、敬語に関して指摘しない職場だと伝えてください」

「分かった。そのように伝えておく」

「ありがとうございます」

それからも二人から色んな人を紹介されて、本人に打診をしてみるということで話は終わった。これで遂に使用人も充実しそうだ。執事としてアルバンさんの息子さんを雇えたら、初仕事としてその他の使用人を教会で募集する仕事を任せようかな。ロジェの負担をどんどん減らしていかないとね。

「では大公家の使用人については一旦終わりにするか」

「たくさん紹介していただき、ありがとうございます」

「新しい貴族家、それも大公家を作るのだから当然だ。ではもう一つ相談があるのだったか？」

「はい。もう一つの相談というのは、ミシュリーヌ様からの提案のことです」

俺がミシュリーヌ様という言葉を発した途端、少しだけ空気が引き締まって二人の顔が真剣になる。あんな感じでもさすが女神様。

「それはどのような提案だろうか」

「この国ではミシュリーヌ教の宗教行事というものが全くないのですが、それを始めたいとのことです。さらにミシュリーヌ様が人々の祈りの声を聞く時間を毎週設けてくださるそうです」

この国の宗教ってミシュリーヌ様を信仰するから、ミシュリーヌ教って言うらしいんだ。あんまり宗教名を言う人がいなかったから

今まで知らなかったんだけど、この前ついに知った。
なんかちょっと、いやかなり微妙な気分になる宗教名なんだけど、まあ名前がそのまま宗教名になるのって結構スタンダードだし仕方ないよね。と自分に言い聞かせている。

「なんとそのような催しを……！　それは素晴らしいお考えです。さらに祈りを聞いてくださるなど……」

二人は今この場で祈り始めるんじゃないかというほどに感動している。ほとんど俺が考えた内容だってことは、絶対に内緒にしておこう……

「詳細を聞かせてもらえるか？」

予想以上にこの提案に前のめりな二人を前に、俺はこの間話し合ったことを思い出しつつ口を開いた。

338、宗教行事

「ではまずミシュリーヌ様が祈りを聞いてくださる話からですが、毎週回復の日に六時の朝の鐘から十八時の夜の鐘まで、中心街にある教会の礼拝堂で祈りを聞いてくださるそうです。そしてその中でも熱心に祈っている者や心が清らかな者、そういう者達の祈りを叶えてくださるとのことです」

俺のその言葉に、二人は感激した様子でしばらくその事実を噛み締めていた。そして少しすると落ち着いたのか徐に口を開く。

「ミシュリーヌ様がそこまでこの国を気にかけてくださるとは……本当に、本当にありがたいことだ」

「陛下、ミシュリーヌ様のお気持ちを無碍にせぬよう大々的に国民に公布し、さらに混乱が起きぬよう努めねばなりません」

「そうだな。これから忙しくなるぞ」

忙しくなると言いつつも二人は凄く生き生きとしている。今まで絶望しか見えなかった国が、どんどん良い方向に向かってたらそれは嬉しいよね。俺もできる限り協力しよう。

「では公布と祈りに来る者への対処はお願いいたします。王都に住んでいない者が中心街まで旅をするということも増えると思われますので、経済的な発展も見込めるでしょう。街道の整備や領地間の乗合馬車なども良いかもしれません」

歩いて旅をする人が増えたら、それに伴って宿場町が増えたりもしそうだよね。この前咄嗟に思いついたにしては良い提案だったか

も。でもその分混乱も生まれるだろうから、そこは上手く対処しないとだ。

「任せてくれ」

「よろしくお願いいたします。ではもう一つの宗教行事についてですが、ミシュリーヌ様の降誕祭を開催したいと思っています」

生誕祭や誕生祭など誕生日にはいろんな呼び方があって、どれが正しいのか日本にいた時に調べたことがあるんだ。その中でこの言葉を知ったんだけど……多分宗教行事なら一番適切だと思うんだよね。後はこの国に同じような単語があるかどうかだけど……

「なんと……ミシュリーヌ様がお生まれになった日を、我々に祝わせていただけるということか！」

あるみたいだ。ならこの名称で決まりだな。

「はい。ミシュリーヌ様がお生まれになったのは、夏の月第一週の回復の日辺りとのことですので、その日を降誕祭と定めてほしいとのことです」

「分かった。先程の公布と合わせて国民全員に知らせよう」

「よろしくお願いいたします」

アレクシス様とリシャール様が予想以上に乗り気でどんどん話が進む。やっぱり国としても、ミシュリーヌ様への信仰心を高めておきたいのだろう。そうすればこの先内乱の危機に陥る可能性も減るだろうし。

「どのような催しにするのかは、私達が決めるのだろうか？」

「基本的にはそれで良いと思いますが、ミシュリーヌ様と話し合い

色々と考えてきた案を聞いていただけますでしょうか？」
「祭りの内容まで考えてくださったのか……！　ありがたいことだ。是非聞かせてもらいたい」
「かしこまりました。ミシュリーヌ様からの提案は二つです。一つ目はミシュリーヌ様がお好きな食べ物、クレープを皆に食べて欲しいそうです」

俺がそれを口にした途端、二人は一瞬だけ微妙な顔をした。やっぱりそういう顔になるか……なんでクレープ？　って思うよね。この国では昔からずっとある食べ物じゃないし。

「クレープ、なのか……？」
「はい。クレープとは中にどのようなものを挟んでも美味しい料理です。なので降誕祭の日に様々な憂を払い、またまっさらな気持ちで日々過ごせるように、そのような思いが込められているそうです」

俺が数日かけて考えたその説明を二人は真剣に聞いてくれる。うぅ……罪悪感が。でも宗教行事だから何かしらの意味が必要だし、俺が考えるしかなかったんです。二人ともごめんなさい。俺も使徒だし許してください！

内心で謝りながら二人の反応を待っていると、二人は感動したように口を開いた。

「クレープとは、そのように素晴らしいものだったのか」
「もっと味わって食べなければいけないものだったのだな……」
「は、はい。なので降誕祭ではクレープの屋台をたくさん出して、甘いクレープから食事のクレープまで様々なものを楽しむ日にして欲しいそうです」

たくさんの人がメニューを開発して、日本でも見たことのないような面白いクレープができたら良いよね。俺もちょっと楽しみだ。

「それからもう一つの提案ですが、これもクレープについてです。屋台などでは様々な美味しいクレープを楽しみつつ、やはり何も挟まないまっさらなクレープも食べた方が良いそうです。それを食べながら身を清めてほしいと。なのでこれは私からの提案なのですが、それぞれの教会でクレープの皮だけを販売するのはどうでしょうか？　教会に礼拝してその後にまっさらなクレープを食べる。この流れで様々な憂を払ってもらえるかと」

こうして説明すると色々と無理がある気もするんだけど……何年か経てば様々な理由づけが行われて、段々とそれを行う意味も変化していくよね。

とにかく一番大切なのは、ミシュリーヌ教の存在をもっと意識してもらうことだ。教会に礼拝に行くということが日常になること。または日常ではなくとも、何か大切なことがある時に祈りに行く場所となること。これが目指すべきところだ。

「とても素晴らしい行事となるだろう。国民は精神的な支柱を得ることになる」

アレクシス様は俺の話を最後まで聞くと、感動していた様子から表情を真剣なものに変える。

「では話をまとめるが、夏の月第一週の回復の日、ミシュリーヌ様の降誕祭を行う。その内容は、クレープというミシュリーヌ様の祈りが篭ったものを食することにより、それまでの憂を払いその後の生活の幸せを願うというもの。教会ではまっさらなクレープの皮の

みを食し、それぞれの屋台では様々なものを挟んだバリエーション豊かなクレープを楽しむ。……合っているか？」
「はい。概ねそのような行事がミシュリーヌ様の望みです。今年から早速開催できるでしょうか？　まずは試しに王都だけでも良いと思うのですが……」

もう今は冬の終わりに近い。さすがに国中の街や村に広めるのは無理だろう。それはこれから何年もかけて広めていけば良いと思う。

「そうだな。まずは今年の夏の初めに王都で開催しよう。そのためにもすぐに準備を進めなければならないな」
「陛下、まずはクレープを王都中に広めなければなりません。どのようなものなのか知らなければ、祭りの想像もつかないでしょうし、屋台を出す者が集まらないかと」
「そうだな……レオン、クレープの作り方は広めても構わないのか？」
「もちろんです。と言ってもとても簡単なものなので、すぐに広められるかと思います。後は中に挟むものはそれぞれの好みです」

クレープは慣れれば子供でも作れるほどのお手軽なものだ。それなのにデザートにも食事にもなるってポテンシャル高いよね。

「ではクレープの作り方は大々的に公布し、皆にクレープを知ってもらうために様々な場所で屋台を開くことにしよう。その屋台をやる者をどうやって確保するか……」
「アレクシス様、孤児院の子供達にやってもらうのはどうでしょうか？　降誕祭当日に教会でクレープを売るとなれば人手が必要です。それを孤児院の子供達にお願いして、売上の一部を給金として渡すことにすれば皆が協力してくれるかと。したがって降誕祭の事前準備として各地で開くクレープの屋台も、孤児院の子供達にお願いす

るのはどうでしょうか？」

これってちょうど良い機会だよね。酷い環境の孤児院にテコ入れするチャンスだ。ぜひ健全な運営体制を構築してほしい。

339、孤児院改革とミルクレープ

「確かに孤児達は今回の屋台にちょうど良い人材だな」
「はい。孤児院の子供達は生活が苦しく必死に仕事を探して働いているようですから、屋台で働けて給金をもらえるとなれば喜ぶ子も多いかと。孤児達の生活改善にもつながる可能性があります」
「ふむ、確かにそれは一理ある。孤児院はいつか改善せねばと思っていたが、後回しになっていたからな……」

アレクシス様は悔しそうな表情でそう呟いた。悔しがるならもっと早く改善してあげれば良かったのに。そう言いたいけど言えない。この国の状態ではとても孤児院に構っている余裕はなかっただろうから。

内乱を起こしそうな貴族とか、国を飲み込みそうな魔物の森とか、本当に問題だらけだった。まだまだ問題は残ってるけどね。魔物の森も駆逐はこれからだし。

「ではこの機会に運営の方も健全にしましょう。孤児院の職員達は運営費を私的に流用したり、孤児を裏で売り渡したりもしていると噂で聞きました。ミシュリーヌ様の教会があるすぐそばの建物でそのようなことが行われているなど、今すぐに改善すべきかと」
「確かにそうだな。……この国はまだまだ多くの問題がある」

そう呟いたアレクシス様は、顎に手を当てて真剣に考え込み始めた。そしてたまにリシャール様に意見を求め、それをもとにまた考え込むこと十分ほど、遂にまとまったようだ。

「では王都の孤児院全てに王宮の文官を派遣し監査をする。孤児に

も聞き取りをし悪質な職員は解雇の上罰を与えよう。そしてその上で新たな職員を雇い、これからは王宮の文官が各エリアごとの孤児院をまとめる立場に就くことにする。そしてその文官は二年ごとに入れ替えよう」
「かしこまりました」

リシャール様はアレクシス様が決めたことをサラサラっと紙に書いていく。有能な側近って感じでカッコいい。

「またクレープの屋台をする上での経費は、全て孤児院の運営費で賄う。もちろん運営費は増やそう。その上で利益も運営費とするが、利益の一部は孤児達に平等に分配されることとする。そして孤児達の個人資産は孤児院に預けることも可能とし、預けていたお金は孤児院を出る際に全額受け取れることとする。お金については書面でしっかりと記録を残すことにしよう」
「その預けたお金は、孤児院を出る時以外でも引き出し可能としますか？」
「もちろんだ」
「かしこまりました」

やっぱりアレクシス様とリシャール様って王と宰相なんだよね……そんな当たり前のことを二人のやりとりを聞きながら考えていた。凄く重大なことが、こうしてどんどん決まっていくのは凄い。
これで少しでも辛い思いをする孤児を減らせるだろうか。俺のやりたいことが一つ前に進んだかな。

後はこれが上手くいったら、今度は教会で平民のための学校とかやりたいよね。それはもう少し先になるだろうけど。

「ではレオン、先ほど述べたように孤児院の改革をし、その上で各

地でクレープの屋台を孤児達に運営してもらう。そして降誕祭当日も教会で孤児達にクレープを売ってもらう。それで良いか？」
「はい。迅速な対応、感謝いたします」
「今まで後回しにしてきたのだから褒められるようなことではない。後は王都だけではなく、他の街でも対処を考えなければいけないな」

そうだよね、孤児院は王都だけじゃなくて国中にあるんだ。でもこういう時は焦りすぎると失敗する。

「王都で上手くいってから、それを他の領地にも広めていけば良いと思います」
「……そうだな。ではまずは王都から改善していく」
「よろしくお願いいたします」

これで大公家の使用人の話はしたし、ミシュリーヌ様についての話もした。さらに孤児院の運営改善までできるようになったし、今日の話し合いは十分だろう。
後はお二人に頑張ってもらって、俺も手助けできるところは側近として手助けしよう。

あっ、そういえばミルクレープについて話をしてなかった。……というか今思いついたけど、降誕祭の日にシュガニスで豪華なミルクレープを売ったら、貴族達に売れまくりそうじゃない？
これは来た、確実に商売チャンスだ。ミルクレープは持ち帰りの予約のみにして、カフェスペースではその場で焼いたおしゃれな盛り付けのクレープを出すっていうのもありかな。……またロニー、アルテュル、ヨアンと話し合いだ。

「アレクシス様、降誕祭の日のクレープについてなのですが、中心街でクレープを広める役目はシュガニスに任せていただけませんか

？　中心街に孤児院はないですし」
「任せてしまっても良いのか？」
「はい！　他とは一線を画した豪華なミルクレープや、とてもおしゃれなクレープの盛り合わせなど考えたいと思います。貴族街では貴族街に適した祭りを楽しんでいただければと」
「ミルクレープとはこの前食べたな。あの不思議な食感が美味しかった。ただあれはクレープとは違うのではないか？」

アレクシス様も食べてくれたのか。あのなんともいえない食感が魅力だよね。

「あれはクレープを贅沢に何層も重ねたものなのです。したがって貴族街での降誕祭にぴったりなスイーツかと」
「そうだったのか。分かった、貴族街についてはレオンに任せよう」
「ありがとうございます！」

早く皆と話し合わないと。降誕祭当日まではさりげなくクレープを看板などで推して、早い段階から当日の予約を開始しよう。
宗教行事のことならまずは貴族に周知するだろうし、開店した頃からもう予約開始にしようかな。上にのせる果物やソースをカスタマイズできるのも良いかも。考えたら楽しくなってきた。

「本日は色々と相談に乗っていただき、ありがとうございました」
「またいつでも時間を作るので話がある時は言ってくれ。大公家の使用人についてはこのあとすぐに声をかけ始める。ミシュリーヌ様のことについても、色々と調整が済んだら速やかに公布する」
「よろしくお願いいたします」

そうして俺は王宮を後にして、ロジェとローランと共に馬車に乗

った。

「ロジェ、大公家の使用人が何人も決まりそうだよ。執事としては、アルバンさんの息子さんのどちらかを紹介してくれるって」

俺のその言葉を聞いて、ロジェが少しだけ嬉しそうに表情を変える。ロジェがこの顔をするのなら問題なさそうだな。

「それは良かったです。お二方ともとても尊敬のできる方々ですので。ご家族もご一緒にでしょうか？」

「うん。奥さんはメイドとして来てくれるって。もちろんお子さんもね。……そういえば、お子さんっていくつぐらいなの？」

「一番大きい子が十歳だったはずです。既にいくつかの仕事はこなせるようになっていましたので」

十歳でもう仕事をこなせるのか。早いなと思っちゃうけど……この国では普通か。

「そうなんだね。これからは執事となってくれた人にいろんな仕事を任せていって、ロジェの負担を減らしていくから。とりあえず主要な使用人は紹介してもらうけど、それ以外の使用人を募集して雇ってもらう仕事から始めてもらおうと思ってるんだ」

「かしこまりました。では私はより一層レオン様の身の回りのことを完璧に整えましょう。それから何か雑務がございましたら、遠慮なくお申し付けください」

「うん。ありがとう」

その後も文官やそれ以外の使用人について、どんな人を紹介してもらえるのかを話しつつ馬車に揺られた。

これでやっと大公家が機能し始めるな。

３４０、執事と文官

アレクシス様とリシャール様に相談をした次の日。早速執事と文官が決まったということで、公爵家で顔合わせをすることになった。

ロジェに準備が整ったと言われ応接室に向かうと、そこには三十歳ぐらいに見える男女と十歳に満たないほどに見える子供が二人、それから三十代後半に見える男性が一人いた。

男女の方がアルバンさんの息子さん夫婦だろうけど……全く記憶にない顔だ。俺の行動範囲とは別のところで働いてたのかな。

「初めまして、レオン・ジャパーニスです。早速だけど自己紹介をしてもらっても良いかな？」

「かしこまりました。では私から」

まず口を開いたのは、アルバンさんの息子さんだろう男性だ。目が細めでキリッとした顔つきをしている。黒髪黒目なので俺としては親しみが持てる容姿だ。

「お初にお目にかかります。アルノルと申します。タウンゼント公爵家の執事である、アルバンの息子でございます。……その節は父の命を救っていただき、誠にありがとうございました。御礼が遅くなってしまい大変申し訳ございません。ジャパーニス大公様に仕えられることは私にとって人生最大の喜びでございます。これからよろしくお願いいたします」

「アルノルだね。これからよろしく頼むよ」

アルバンさんを治した時はマルティーヌのこともあってバタバタ

してたからね……

「治療した時は俺もご家族にまで意識が回らなかったし、謝らなくても良いよ。治せて本当に良かった」

今のアルバンさんの元気な様子を思い出して思わず顔を緩めると、アルノルもふっと顔を緩めてくれた。さっきまではキリッとした印象だったのに、笑みを浮かべると途端に優しい雰囲気になる。

「本当にありがとうございました」

「そうだ、俺のことは基本的にレオンって呼んでね。もちろんその場に合わせてジャパーニス大公の方で呼ぶべき時はしょうがないんだけど。旦那様とかは呼ばれ慣れないから」

「かしこまりました。ではレオン様と」

「うん。他の皆もそれでよろしくね」

俺が皆を見回してそう言うと、全員が頷いてくれた。

「では次に私の家族を紹介させていただきます。隣にいるのが妻のベレニスです」

「ベレニスと申します。タウンゼント公爵家ではメイドとして仕えておりました。夫と共に雇ってくださり感謝いたします。子供達も八歳を超えていますので、少しはお役に立てるかと思います。まだまだご迷惑をお掛けするかと思いますが、親子共々よろしくお願いいたします」

「ベレニスだね。これからよろしく。子供達はもちろん大公家で働きたいのならば雇うし、もし他の仕事をしたいのならその支援もするから言ってね。その場合でも成人までは屋敷にいてくれて良いから」

俺のその言葉を聞いて、アルノルとベレニスは同時に驚いたような表情を浮かべた。やっぱりこの国では使用人の子はそのまま使用人になるのが普通なのかな。

「寛大なお言葉感謝いたします。では子供達も紹介いたします」

それから十歳の長男と八歳の長女の紹介を受け、アルノルの家族との初顔合わせは円滑に終わった。次は文官として雇う男性だ。

「次は私の番ですね。私はルノーと申します。王宮で文官をやっておりました。この度は陛下から直々のご指名をいただきまして、ジャパーニス大公家へと参ることになりました。王宮での仕事は楽しかったのですが、身分差が煩わしくそろそろ辞めようかとも考えていましたので、今回雇っていただけてとても感謝しています。これからよろしくお願いいたします」

「ルノーだね。これからよろしく頼むよ。事前に伝えていたように俺は礼儀作法、敬語などは気にしないから好きなように仕事をしてくれれば良いよ。ルノーと一緒に働いてもらうもう一人の文官は俺の友達だから、普通に砕けて話したいんだ」

俺のその言葉にルノーは瞳を輝かせる。……最高の人選だったかも。

「それは私にとって最高の職場です。これからよろしくお願いいたします」

「うん、よろしくね。まあ公の場ではちゃんとしてもらわないとなんだけど。屋敷の中でなら基本は自由で良いかなと思う」

「かしこまりました。レオン様の下で働けて良かったです」

本当は使用人全員がこんな感じで砕けてくれたら嬉しいんだけど、

ほとんどの人には逆にその方が落ち着かなくて難しいって言われるから、強制はしないようにしている。
　でも敬語や礼儀はしっかりとしてても雰囲気が緩んでるような、俺に対しても話しかけやすいような、そんな屋敷の雰囲気にできたら良いなと思ってる。

「じゃあ皆これからよろしくね。それで早速アルノルに頼みたい仕事があるんだけど良いかな？」
「もちろんでございます」
「ありがとう。実は今皆を雇ってることからも分かるように、大公家はまだまだ使用人が足りないんだ。だから足りない分の使用人を教会などで募集して人選して、雇うところまでをやって欲しくて」
「かしこまりました。今現在どの役職が埋まっているのかなどは、資料をいただけますでしょうか？」
「うん。ロジェ」

　ロジェを呼ぶとすぐにまとめた資料を持ってきてくれた。そしてアルノルはそれを受け取るとさっと目を通す。

「まだまだ足りない部分が多いですね……すぐに募集を始めます。いつ頃までに集めれば良いでしょうか？」

　うーん、出来れば屋敷が出来上がったら早めに引っ越したいんだよね。公爵家にいつまでも間借りしてるのも悪いし。

「ロジェ、屋敷っていつ頃に完成するのか分かる？」
「はい。あと二週間ほどだと聞いております」
「もうそんなにすぐなんだ。じゃあアルノル、できれば二週間で集めてくれると嬉しい。もし難しかったらもう少し延びても良いよ」
「かしこまりました。では二週間でできる限り使用人を揃えましょ

う。ですがレオン様、二週間で使用人を集めたとして、できれば一週間は屋敷を整えるために時間をいただきたく思います。使用人の配置を考え、使用人達が屋敷の作りを覚える時間が必要です」

確かにそっか……それに家具なども最低限は注文したけど、まだまだ足りない部分はあるだろう。

「じゃあアルノルにとって、俺達が引っ越しても問題ないほど整ったら教えてほしい。多分家具や細かいものとか、色々と足りないものもあると思うから」

「かしこまりました。猶予をいただきありがとうございます」

「うん。あと俺達に付く従者やメイドなんだけど、その人達だけは屋敷の様子を確認したらこっちに送ってくれないかな？　今少ない人数で回してるから、できる限り早くに皆の負担を減らしてあげたくて」

アレクシス様達との話し合いで、護衛は騎士からそれぞれ二人ずつ紹介してもらえることになった。そして家族皆のメイドや従者は、今まで付いてくれていた公爵家の人達がそのまま付いてきてくれることになった。

でもそれでは一人ずつで大変だから、早めにもっと人数を増やさないといけないのだ。

「ではその者達を先に雇ってしまいます」

「ありがとう、よろしくね」

アルノルに頼みたいことは、とりあえずこのぐらいかな……とにかく今一番足りないのは人手だから、そこから着手してもらうのは間違いではないだろう。

これで俺の従者が増えるし護衛も二人増える。ロジェとローラン

も少しは楽になるかな。

「じゃあアルノル達は下がって良いよ。ルノーはもう少し残ってくれる？　一緒に働いてもらう文官を紹介したいから」

「かしこまりました。では下がらせていただきます」

「失礼いたします」

アルノル達が皆下がっていったところで、俺はロジェに頼んでロニーを呼んでもらった。ロニーにもこの屋敷で待機してもらっていたのだ。

341、ロニーとルノー

ロジェが部屋から出ていき数分後、ロニーを連れて応接室に戻ってきた。

「失礼いたします」

ロニーはしっかりと頭を下げて俺に挨拶をする。こうして見てるとロニーの仕草って、他の使用人に全く引けを取っていない。それって結構凄いことだよね。

「ロニー座って。ここではいつも通りで良いから」

「……良いの？」

「うん。いつもと違うのはルノーがいるぐらいだし。あっ、紹介するね。ロニーの上司になるのかな。王宮の文官として働いてたルノーだよ」

俺のその紹介に、ロニーはソファーに座る前にきっちりと挨拶をした。

「ルノーさん初めまして。ロニーと申します。文官としてはまだまだ未熟ですので、ご指導いただけたら嬉しいです」

「ああ、よろしくな。俺は孤児院出身の平民だし、そんなに固くならなくても良いぞ」

「そうなのですか？　僕も孤児院出身です」

「そうなのか！　まさか他にもそんなやつがいるなんてなー。この国で孤児院出身で貴族社会にいるのは大変だろ」

ルノーは色々な記憶を思い出しているのか、悲しいような寂しいような、それでいて少しだけ懐かしいような、そんな表情を浮かべた。

「確かに大変なことも多いです。しかし僕にはレオンがいましたので、レオンに助けられて楽しく過ごせています」

「そういえば……レオン様は元は平民でしたっけ？　前に噂で聞いたような……」

「そうだよ。俺達家族は元々王都の外れにある小さな食堂をやってたんだ。使徒だからってことで今はこんな立場になっちゃったけど、やっぱり考え方とかは平民時代のものが抜けなかったりするんだよね。だから使用人の皆が敬ってくれるのはありがたいんだけど、もっと態度を崩してくれても良いのにって思っちゃうんだ」

俺がそう本音を打ち明けると、ルノーは納得したのか大きく頷いた。

「だから礼儀や敬語については気にしないとか、そんな言葉が出てくるんですね。最初に聞いた時はそんな貴族がいるのかって驚きました」

「まあ貴族にはほとんどいないよね。身分を弁えないといけない場所もたくさんあるし。だから二人にも俺に対してしっかりとした態度で接してもらうときもあると思うんだけど、こうして三人で話してる時とか、屋敷の中では砕けた感じで良いからね」

「分かりました」

「僕も分かったよ」

文官として雇ったのがルノーで良かった。親しみやすいし頭も柔らかそうだ。ロニーとも仲良くなってくれそうだし、俺も仲良くなれそう。

「じゃあお互いに打ち解けてきたところで、これからの仕事の話をしようか。まず大公家は領地を持たないから、他の貴族家みたいに領地経営の仕事は今のところないんだ。その代わりに大公家で運営しているお店についての仕事をしてほしい。それからもちろん大公家の経理もお願いしたい。使用人の給与とか消耗品の購入や食費とかね」

俺のその言葉にルノーとロニーはそれぞれ鞄から紙とペンを取り出して、簡潔に俺の話をまとめ始めた。気が合いそうな二人で良かった……良い師弟関係になれそうだよね。

「かしこまりました。どのようなお店なのでしょうか？」

「シュガニスって名前でスイーツ専門店だよ」

「……聞いたことがあるような、ないような。申し訳ございません」

ルノーは貴族の流行りなんて興味なさそうだもんね。それにまだ平民には広まってないし予約のみだし。

「まだ正式開店してないから知らなくてもしょうがないよ。最近貴族の間で流行ってるんだ」

「今は貴族様向けに予約のみの販売ですが、利益はこのぐらいです」

ロニーが鞄から一枚の紙を取り出してルノーに渡し、ルノーはそれに目を通すと驚愕に目を見開いた。

「なんだこの利益は……どれだけ儲かるんだよ」

そしてポツリとそう呟く。そこまで驚いてもらえるほど利益が出てるのなら良かった。貴族向けで利益を確保しないと、平民向けは

利益が少なくなるだろうから。
平民向けは目指せ薄利多売だ。
「春の初めに正式開店の予定なんだ。それから平民向けのスイーツ店も出店したいと思ってるし、まだ先だろうけど食事処も始めたいんだよね」
「……かしこまりました。ではそれも今後の予定に入れておきます」
「お願いね。……それで、実際にお店を見てもらった方が良いかな？」
「ご案内していただけるのであれば是非。どのようなお店なのかは見に行くのが一番早いですから」
やっぱりそうだよね……この後時間もあるし、二人を連れてお店に行こうかな。降誕祭の話もヨアン達にしたかったからちょうど良い。
「じゃあ早速今から行こうか。もうお客さんは来店してる時間かな？」
「うん、時間的にはそうだね。でも予約した商品を取りに来るだけだからお客様がいない時間も結構あるし、店内も見てもらえると思う。とりあえず最初は裏口から入れば大丈夫だよ」
「それなら良かった。じゃあお昼までに戻って来れるように早めに行こうか。ロジェ、馬車の手配をお願いね」
「かしこまりました」
それからロジェが馬車を手配してくれるのを少し待ち、ルノーとロニーと共にシュガニスに向かった。
「レオン、僕が裏口から入ってお客さんがいるか確認してくるよ。

もしいなかったら表から入れるだろうし」
「確かにそっか。じゃあお願いしても良い？」
「うん。ちょっと待ってて」

ロニーが馬車から降りて裏口に向かうのを見届けると、馬車の中は途端に静かになる。ルノーはシュガニスの外観をじっと観察しているようだ。

「ルノー、外観はどうかな？　ルノーの目から見て改善した方が良いところとか思い浮かぶ？」
「いえ、高級志向のおしゃれなカフェという雰囲気でとても良いと思います。……ただ私は貴族向けのお店についてはあまり詳しくないので、これから学んでいきたいと思っています」
「ありがとう。俺もまだまだ学ぶべきことがたくさんあるからもっと頑張らないとだ。貴族向けのお店って色々配慮しないといけなくて大変なんだよね」

少し苦笑しつつそう本音を溢すと、ルノーも苦笑しながら頷いてくれた。

「私も貴族様のことはまだまだ理解できないことも多いです。しかしお店をやる時にお客様を貴族と想定するのはありだと思います。少しミスをしたら大きな損失が出る可能性もある危険な賭けですが、その分大きな利益が見込めますので。……そう考えると、大公様という立場のレオン様が貴族向けにお店をやるのは強いですね」

そうなんだよね。大公という立場でお店を宣伝することもできるし、他の貴族が大公家に少しでも好印象を持って欲しくてお店を利用してくれる。問題が起きた時も大公家より身分が上の貴族家はないからスムーズに対処できる。そもそも大公家がやってるお店とい

うだけでほとんど問題は起きなくなる。
その上で売っている商品が素晴らしいものなら流行らない方がおかしいだろう。

「有利な立場にいることはしっかりと自覚しつつ、それも利用してお店を大きくしていく予定だからこれからよろしくね」
「かしこまりました。……これからの仕事がとても楽しみです」

ルノーが悪巧みをしているような顔でニヤッと笑ってくれたところで、馬車にロニーが戻ってきて話は中断となった。
ルノーは清濁併せ呑むことができるタイプだろう。ロニーも結構そういうタイプだし、俺も清らかすぎる人よりもそういう人との方が仕事をやりやすい。本当に良い人を紹介してもらったな。

俺は新しく雇った大公家の文官に満足しつつ、これからお店をどんどん大きくしてこの国の食文化をもっと発展させることを夢見て、馬車から降りた。まずはルノーにお店を案内しないと。

３４１、ロニーとルノー（後書き）

いつも読んでくださっている皆様、本当にありがとうございます。皆様のおかげでここまで書き続けられてると言っても過言ではありません。感想や評価などとても励みになっています！

今日は皆様にお知らせがあります。この小説は連載開始してから一年間、ずっと毎日投稿を続けて来たのですが、これからは週に四回の投稿に変更したいと思います。火曜、木曜、土曜、日曜に投稿する予定です！

毎日楽しみにしてくださっている皆様には申し訳ないのですが、余裕が生まれた分より一話一話を面白くしていけたらと思っています。

これからもよろしくお願いいたします！

３４２、降誕祭について

今はちょうどお客さんがいないということで、馬車から降りて正面から店内に入った。中に入るとルノーは感嘆の声をあげる。

「……内装、とても素敵ですね」

「本当？　内装はかなりこだわったから、そう言ってもらえると嬉しいよ」

「そうなのですね」

ルノーは机や椅子の質からその配置、絨毯やカーテンの色合いなどまでしっかりと確認しているようだ。そうしてぐるっと店内を回り、最後にやってきたのはショーケースの前。少しだけ身を屈めて中を覗き込んでいる。

今ショーケースの中には、今日予約のケーキでまだ受け取りに来ていないものだけが入っている。ショートケーキが二つにロールケーキが一つだ。

「これはガラスですよね？　こうして商品を並べているのは新鮮ですね……」

「この中は魔法具を使って常に冷やされた状態になってるんだ。だから展示用の冷蔵庫って感じかな」

「中は冷えているのですか！？　……素晴らしいです」

それからしばらくショーケースをいろんな角度から見て周り、やっとルノーが満足したので奥に向かう。

「アンヌとエバンも来てね。他の皆はお店をよろしく」

「かしこまりました」

ルノーのことを紹介するためにアンヌとエバンを呼び、さらに厨房からヨアンも呼んで皆で休憩室に入った。

そしていくつか椅子を追加して全員が座ったところでルノーを紹介する。

「紹介するね。この人はジャパーニス大公家で、ロニーと一緒に文官として働いてくれるルノーだよ」

「ルノーと申します。今までは王宮で文官として働いていました。これからよろしくお願いいたします」

ルノーが簡単な自己紹介をしたところで、俺はアンヌ、エバン、ヨアン、アルテュルのことを紹介した。この四人とはこれから関わることも多いだろうから。

「アンヌさん、エバンさん、ヨアンさん、アルテュルさんですね。よろしくお願いいたします」

「これからは大公家の主要な使用人同士、職務は違うけど情報交換しつつよろしくね」

「かしこまりました」

「よしっ、じゃあルノーの紹介はこの辺にして、一つ話があるんだ」

俺はそう前置きをして、降誕祭に向けて色々考えたアイデアをまとめた紙を取り出した。そしてそれを見せながら皆に話をする。

「実は今年から、ミシュリーヌ様の誕生を祝う降誕祭というお祭りを開催することになったんだ。日時は夏の月第一週回復の日。……皆はクレープを知ってるよね？　実はクレープってミシュリーヌ様の好物で、穢れを祓うという意味も込められてるんだって。だから

そのお祭りの日は、さまざまな憂を祓うために皆でクレープを食べるんだ。そこでこのお店でも、降誕祭に向けた特別なクレープを売り出したいと思ってる。貴族向けだから基本はミルクレープかな」

俺はそこまで説明したところで一度言葉を切り、皆の顔を見回した。すると全員が真剣な表情を浮かべながらも、どこか嬉しそうに顔を緩めている。

「それは素晴らしい催しだよ」

「ええ、ミシュリーヌ様の誕生を祝わせていただけるなど……光栄でございます」

ロニーがポツリと呟いた言葉にアンヌが肯定の意を示す。予想以上に皆にスッと受け入れられたみたいだ。

やっぱりお祭りって楽しいし、何よりも最近はミシュリーヌ様の存在が広く知られているからこそだろう。それはひとえに俺が使徒として頑張って名を広めてるからであって……うん、ミシュリーヌ様に何かしらご褒美をもらわないとだな。

「レオン様、特別なミルクレープとはどのようなものでしょうか！」

ヨアンはやっぱりブレずに、特別なミルクレープに惹かれたらしい。

「それはヨアンにも考えて欲しいんだけど、俺も一応考えてきたから提案するね。まずこのお店で売るのは貴族向けの豪華なものだから、とにかくいつもより見た目を派手にしたいんだ」

いつものミルクレープは生クリームとフルーツソースのみで作ってるから、豪華というよりも優美という感じだ。そのミルクレープ

を、降誕祭の時だけは豪華にして特別感を出したい。

「ミルクレープに果物を載せたり、生クリームを上に盛り付けても良いかもしれない。それから食用のお花があるよね？　あれを使うのもありかな。あとはミルクレープに載せるために小さく焼いたクッキーを飾るとか。お花の形やドレスの形とか……色々とクッキーで作れると思うんだ。色も野菜を練り合わせたら色々と作れると思う。カボチャで黄色とかね」

そこまで俺の話を聞いたヨアンは瞳を輝かせて立ち上がった。そして拳を握り締めて天井を見上げる。

「レオン様……たくさんのアイデアが思い浮かんできました！　今すぐに実践してみたいです。クッキーに野菜を練り込むなど……今まで考えたことがありませんでした！」

「それなら良かった。じゃあヨアンはいつもの業務と並行して降誕祭のメニュー作りをお願いね。大公家の屋敷が完成したら新商品開発だけに専念できると思うから、それまでは無理しすぎないように」

ヨアンはストンッと椅子に戻ると大きく頷く。

「かしこまりました。ではシュガニスが開店するまであと少しの期間は、後継の育成に力を入れます」

「よろしくね。じゃあ降誕祭のメニューはヨアンに任せるとして、次は予約のことなんだ。ギリギリの予約だと混乱すると思うから早めに予約開始したいんだよね。でもどうしようか、メニューが決まってないとやりづらい？」

というかそもそも、降誕祭を行うってことを貴族に公布してからじゃないとダメか。多分早めに公布するだろうけど……情報が行き

渡るまで一週間はかかるかな。
今から一週間経ったら、本当にあと少しで開店のタイミングだ。そうすると予約と開店が被って混乱するよね……
「やっぱりメニューが決まってた方が良いと思うな。どんなケーキなのかって聞かれて、すぐに答えられないのも困るし」
俺がぐるぐると悩んでいるとロニーがそう意見をくれたので、やっぱり予約開始はもう少し先にすることに決めた。
「じゃあ予約の開始は、シュガニスが開店して数週間経ってからにしよう。ヨアンにはそれまでにメニューを決めて欲しい。それから、その頃の店長はアルテュルだけど大丈夫？」
俺のその問いかけに、アルテュルは頼もしく頷いてくれた。
「もちろん問題ありません。しかし一つだけ提案しても良いでしょうか？」
「もちろん。何かな？」
「降誕祭当日のことです。ほとんどの貴族は当日の朝早くに受け取りたいと希望するかと思いますが、さすがに同じ時間に受け渡しは不可能ですし、作る方も間に合わないと思います。なので降誕祭の二日ほど前から臨時休業とし、料理人はミルクレープ作りに邁進、さらに下位貴族から順に受け取りに来てもらうというのはいかがでしょうか？」
「それは、下位貴族はミルクレープを降誕祭の二日前に受け取るということだよね？」
「仰る通りです」
うーん、これは悩むな。確かに作るのにも時間がかかるし受け取

りも分散したいけど……二日前だと当日までケーキが保つのか心配だ。
基本的には当日に、遅くとも翌日までには召し上がってくださいと明言してるし、それを曲げるのも微妙だよね。
でも当日だけでは作りきらないことは確かだし、前日を入れても間に合うかどうか。どれぐらい予約が入るかにもよるけど……ここは謙遜せずに、かなりの数を予想しておいた方が良いだろう。
「確かにどれほどの量が当日に作れるのかって問題はあるね。……ここは思い切って、数量限定にしようかな。高位貴族から降誕祭でのミルクレープ予約についての案内を送って、早い者勝ちで数量限定。そして予約できなかった人は、降誕祭が終わった後に優先的に予約できる権利をあげるとか……どうかな？」
俺のその提案にアルテュルは少しの間だけ考え込み、俺の意見を採用してくれた。
「確かに数量を限定してしまうのは良いかと思います。高位貴族と中位貴族だけならばそこまで多くもないので、全ての家から予約が入っても問題ありません。下位貴族は早い者勝ちでも問題ないでしょう」
「じゃあ今話した方法で予約をするから準備をお願いね」
「かしこまりました」
これで降誕祭用の豪華なミルクレープと、その予約も問題なくできそうだ。
そうしてシュガニスで色々と話し合い、俺はロニーとルノーと共に公爵家に戻ってきた。本当に開店まであと少しになってきた。な

んだか楽しみだな。

３４３、卒業試験　前編

遂に今日は王立学校、卒業試験の日だ。この日までに魔物の森から帰ってこられて本当に良かったと思っている。やっぱりせっかく入学したのだから、ちゃんと試験を受けて卒業したいよね。

秋の休みに魔物の森へ遠征をしてそこで使徒だと分かり、それからは全く学校に行っていないのでかなり久しぶりの登校だ。

俺は久しぶりすぎて少し緊張しつつ王立学校へ向かうための準備をし、リュシアンと共に馬車に乗った。

「……本当に久しぶりだ」

「秋の休み明けから登校していなくて、今はもう冬の終わりだからな。ひと月も過ぎてるぞ」

「そうなんだよね。うわぁ、魔物の森に行ってたら一気に月日が進んじゃった気がする」

「そういう感覚になるのか……？　まあでも試験に間に合って良かったな」

本当に間に合って良かったよ。この日に間に合わなかったら、もう学校に入ることもなかったかもしれないし。半年以上通ってればやっぱり愛着は湧く。最後に王立学校の様子を目に焼き付けておこう。

……まあ、入りたいと思えばいつでも入れるんだけど。転移もあるからね。

「それよりも試験は大丈夫なのか？　忙しくて勉強もできてないだ

ろう？」
「そうなんだよね……でも隙間時間で復習してたし、多分大丈夫だと思う。ちょっと危ないのは歴史かな」
俺って暗記が苦手なのだ。政治や経済の授業内容は実際に使う知識だから覚えられるんだけど、歴史は日常で使わないし詰め込んでもすぐに忘れてしまう。……でも昨日の夜に頑張ったから、大丈夫だと思いたい。
リュシアンとそんな会話をして少し不安を感じながらも馬車に揺られ、王立学校に到着した。
「なんか懐かしいって感じかも」
馬車から降りて感じたのは懐かしさだ。約一年前には入学試験のためにここに来たんだよね……この一年で立場変わりすぎだよ。
リュシアンと共に教室に向かって歩いていると、周りの生徒がギョッとしたように二度見してくる。さらにその場に跪く人もちらほらといる。
前は完全に下に見られてて居心地が悪かったけど、敬われるのも居心地が悪いんだな……
そうして色んな人にジロジロと見られつつ、何とか教室まで辿り着き中に一歩入ると……、さっきまで騒々しかった教室が途端に静かになる。しかも皆が俺を凝視している。
「えっと……、おはよう？」
とりあえず挨拶をしてみたら、教室内は蜂の巣を突いたような大騒ぎだ。ガタガタッと机や椅子の音を立てながら、皆はその場に跪

いていく。

「ジャパーニス大公様、おはようございます」

そしていつもクラスの中心にいた男の子がそう挨拶をすると、それに続いて他の人にも挨拶をされた。数人事態を飲み込めずに突っ立っている人は、俺が使徒であるということを知らないのだろう。相当驚いている。

しかしその生徒も近くにいたクラスメイトに無理矢理引っ張られ、その場に跪かされていた。

この事態どうすれば良いんだろう……

「あの……皆、そんなに跪いたりしなくても良いよ？　王立学校は平等が原則だし、今まで通りで良いからね。それに今日が最後だしさ」

とりあえずそう言ってみたけど誰も立ち上がってくれない。うぅ……誰か助けて。俺がクラスメイトの態度に困り果てていると、後ろのドアが開き教室にロニーが入ってきた。ロニーは中に入った途端に異様な空気に気付いたのか一瞬固まり、その後に俺をみて深く理解したように頷いた。ロニー、そこで頷かないで！

「レオンおはよう。なんか凄いね」

「ロニー！！　おはよう！！」

俺はロニーが普通に話しかけてくれたことが嬉し過ぎて、思わず食い気味に挨拶を返した。するとロニーは苦笑しつつ自分の席に座る。

「レオンも座れば？　レオンが立ったままだと皆が座れないんじゃない？」
「確かに……」

俺が急いで自分の席に座ると、皆がゆっくりと動き出してそれぞれ自分の席に座った。しかし誰も喋らないので教室内はシーンと静まり返っている。

なんか悪いことしちゃったかな。王立学校最後の日かもしれないのに、こんな雰囲気にして。

「ねぇロニー、どうすればいつも通りになるかな？」

俺はロニーに小声で解決策がないか聞いた。するとロニーには首を横に振られる。

「レオンがいる限り無理だよ。今日だけだしこのままで良いんじゃない？」
「でも、今日が王立学校最終日でしょ？」
「そうだけどここは一年生クラスだよ。多分ほとんどの皆はこのまま二年生になるから大丈夫」
「あ……、そういえばそうだったね。じゃあ気にしなくても良いか」
「うん、そう思うよ」

俺はその事実に少しだけ安心して、クラスメイトに今日だけはごめんねと内心で謝り静かに席に座っていた。そしてしばらく待っていると、担任のオーブリー先生が入ってくる。先生は教室に入って一瞬ギョッとしたように目を剥いたけど、俺の姿を視界に捉えて納得したのか深く頷いた。やっぱりそこで納得するんだね……

「おはよう。皆も既に知ってるかと思うが今日は王立学校の卒業試

験だ。この学校の卒業試験はどの学年の生徒も例外なく受験し、合格点に達した者は一年生であっても卒業できることになる。一年での卒業は今後の人生で一目置かれることにもなるので頑張るように。では試験の流れを説明しよう」

それからオーブリー先生の説明を聞いたところによると、試験は各科目三十分ずつ行われるらしい。科目の間には休憩が十分間あり、午前中に四教科と午後に五教科の筆記試験が行われる。そして筆記の後には剣術と魔法の試験があるそうだ。

「筆記試験は全てこの教室で行うので、試験開始時間の五分前にはできる限り席に座っているように。そして昼食はいつも通り食堂が開いているのでそこで食べてくれ。筆記試験が終わったら学年ごとに剣術の試験だ。二年生が終わる頃に職員が呼びに来るだろうから、それまでは教室で待機だな。何か質問は？」

オーブリー先生がぐるっと教室を見回したが誰も手を上げなかったので、そのまま説明は終わりとなった。もっと元気が良いクラスだったはずなんだけど……本当に身分って大きいんだなと実感する。

「じゃあ一つ目の試験開始までもう少し待っているように。健闘を祈る」

一つ目の試験が始まるまでは後二十分ぐらいか。それまでこの気まずい雰囲気が漂う教室にいるのは居心地が悪い。……トイレにでも避難しようかな。

そう考えて立ち上がろうとした時、俺の机に影ができる。誰だろうと上を見上げると……そこにいたのはステイシー様だった。

「ジャパーニス大公様、こうしてお声がけする御無礼をお許しください」

ステイシー様は、普段のちょっと不思議な雰囲気を全く感じさせない完璧な所作で挨拶をした。ダリガード男爵家にも最近は訪れてないし王立学校にも通ってないし、ステイシー様と会うのは本当に久しぶりだ。

「ステイシー様お久しぶりです。顔を上げてください」

「ありがとう存じます。今はお時間大丈夫でしょうか？　レオン様はジャパーニス大公様となられましたのでお屋敷に招待するわけにもいかず、本日は直接お声がけさせていただきました」

「今は暇を持て余していたので大丈夫ですよ。何かありましたか？」

俺のその言葉にステイシー様は少しだけ顔を綻ばせる。やっぱりこの子って普通に可愛いよね……ピエール様達はかなり心配してたけど、嫁ぎ先も見つかると思うんだけどな。ちょっと植物大好きで不思議なところもあるけど、普段は凄くしっかりとしているし。

３４４、卒業試験　後編

「実はレオン様からアドバイスいただいた野菜中心のレシピが数点完成いたしまして、このレシピをダリガード男爵家で使用しても良いか伺いに参りました」
「レシピができたのですか！」
「はい。まだ改良する部分などはたくさんありますが、基本となるレシピは完成いたしました」
「それはおめでとうございます。……そのレシピをダリガード男爵家で使用することに私の許可が必要なのでしょうか？」

俺は最初の頃に本当に少しアドバイスしただけで、ほとんど関与してないのに。

「アドバイスいただいて完成したものでございますので、やはり報告は必要かと考えた次第です」

そういうものなのか……確かに後から権利を主張されても困るよね。こういうのは最初にきっちりやっとかないとだ。

「丁寧なご報告感謝いたします。レシピについてはステイシー様のものですので、私は一切権利は主張しません。ステイシー様がお好きなように使用してください」
「かしこまりました。ありがとうございます」

ステイシー様は再度綺麗な所作で頭を下げた。そして無駄な話は一切せずに別れの挨拶を始める。

「本日は私のためにお時間をくださり感謝いたします。では御前失礼いたします」

やっぱり俺が大公となっちゃったことで、男爵家の娘であるステイシー様は俺に今までのように話しかけられないんだろうな。それにもう婚約者がいる身として、ステイシー様と屋敷で会って話すっていうのも避けるべきだろうし。仕方がないんだけどちょっと寂しいな……

「ステイシー様」

俺は教室から出て行こうとするステイシー様を、思わず呼び止めた。

「ステイシー様が完成させたレシピをもとにお店を始めるとなった時には、ぜひジャパーニス大公家も協力させていただけたら嬉しいです。例えば卵不使用のスイーツや乳製品不使用のスイーツなど、ステイシー様のお店に適しているかと思いますし、需要も存在すると思います。我が家で開発したものをステイシー様のお店に卸すという形でも構いません。まだ先のことだとは思いますが、頭の片隅にでも覚えておいていただけたら幸いです」

そしてこれから先にも繋がりそうな提案をする。これからも友人としての関係を続けていきたい、そしてダリガード男爵家に少しでも恩返ししたい、そんな気持ちからの提案だったけど……迷惑だったかな。

少し緊張しつつステイシー様の反応を待っていると、ステイシー様は植物を前にした時のような無邪気な笑顔を浮かべて頭を下げた。少なくとも迷惑ではなかったみたいだ……良かった。

「過分なご配慮感謝いたします。では私がお店を開くことができた暁には、ジャパーニス大公家にご連絡をさせていただいてもよろしいでしょうか？」
「もちろんです。楽しみにしていますね」

そうして最後に約束を交わしてステイシー様は教室を出て行った。この立場だと友達と会うのにも、何かしらの理由がないといけないっていうのが大変だ。
多分この後でダリガード男爵家には他の貴族家からそれとなく探りが入るのだろうし、ステイシー様と仲良くなろうとする貴族子息子女も増えるだろう。

やっぱり貴族って、特に高位貴族って面倒くさい立場なんだな。ダリガード男爵家の様子はそれとなく情報として集めることにしよう。俺の言動がきっかけでピエール様達が大変なことになってるなんて、そんな事態は避けたいからね。

「ねぇレオン、さっきの人ってヨアンが前に働いてたダリガード男爵家の人？」
「そう。ステイシー様っていうんだ。一時期はダリガード男爵家の厨房を借りてたから、その関係で仲良くなったんだよ。それに回復魔法の授業も一緒だったし」
「そうなんだ。存在は知ってたけど初めて会ったよ。凄く可愛い人なんだね」
「え、本当？　本当にそう思った？」

ロニーから誰かが可愛いとか初めて聞いた気がする。でも確かにステイシー様は可愛いけどね。マルティーヌは美しさもある可愛さなのに対して、ステイシー様はとにかく可愛いを追求した感じだ。

見た目だけならふわふわしてておっとり可愛いって感じかな。

「うん。貴族様にしては珍しいタイプかなって」

「……確かに言われてみればそうかも」

貴族女性って顔は整っていても雰囲気がキツいというか……強い感じというか、まあとにかく凛々しさが滲み出てる人がほとんどだ。でもステイシー様は見た目にそれを感じさせない。

……そう考えるとステイシー様って結構凄いのかも。実際はしっかりしてるけど、それを表に出さないのだから。

「もしかしたらこれから先、お店のことで関わることがあるかもしれないから、その時はよろしくね」

「分かった。覚えておくね」

「うん」

そこまで話したところで二十分が過ぎ、筆記試験が始まる時間となった。そこで俺は頭を切り替えて試験に集中することにする。

試験の内容は一年生ではまだ習ってない部分も含まれるのでかなり難しいけれど、教科書を先取りして勉強した成果でなんとか解いていく。計算や読み書きは日本の教育に感謝しつつスラスラと解いていく。

――そうして全ての教科の試験が終わった。本当に、本当に疲れた。ずっと全力で試験を受けてるのってこんなに辛かったっけ。

「レオンどうだった？　試験できた？」

ちょっと疲れた様子のロニーにそう聞かれ、俺は机に突っ伏したまま顔だけをロニーの方に向ける。

「何とか……ロニーは？」

「僕も頑張ったけど、多分大丈夫だと思う……ぐらいかな。ちょっと難しかったよね？」

「うん、歴史の試験が特に難しかった」

「僕は数学かな。最後の問題の答えがちょっと自信なかったんだ」

「ああ、あれか。確かに難しかったよね」

そんな会話をしつつだらっと机に体を預けていると、他のクラスメイト達も試験の出来を周りの人と話し始めた。やっと俺がいることにも慣れてくれたのかな。

それから数十分ほど雑談しつつ教室で待機していると、職員の人が教室にやって来て剣術の試験の順番が来たことを告げられた。

職員の案内で訓練場に向かって服を着替えると、ランダムに五つの列に並ばせられる。俺が一番右側の列でロニーは真ん中の列になった。

まだ前に十人はいるからしばらく待機だな……そんなことを考えつつ何となく周りを見回していると、前の方にリュシアンがいるのが見えた。

あっ、マルティーヌもいる。マルティーヌはシュッとしたシンプルな訓練着に身を包み、髪を高い位置に結い上げていた。

やっぱり普段のドレス姿も良いけど、この姿もいつもとのギャップがあって良いんだよね……カッコいいし可愛い。最近は王立学校に通えなかったからこの姿を見るのも久しぶりだ。

たまにはマルティーヌと一緒に剣術の鍛錬をするのもありかも……今度提案してみようかな。

そんなことを考えつつマルティーヌのことをぼんやりと見つめていると、視線を感じたのかマルティーヌが後ろを振り返った。そして俺と目が合うとふわっと笑いかけてくれる。

うぅ……可愛い、反則だ。この姿での笑顔はいつも以上の破壊力だよ。俺はギャップに大ダメージを受けつつ、何とかにこやかに笑い返した。

やっぱり学校という場所で会うのもいつもとは違った良さがあるよね……もう一年間王立学校に通いたくなってきた。

「次っ、マルティーヌ・ラースラシア」

「はいっ！」

マルティーヌの順番が来たみたいだ。名前が呼ばれると凛とした声音で返事をして、数歩前に出て試験官から木剣を受け取る。

「では始めっ」

試験開始の合図とともに、マルティーヌは垂直の振り下ろしから素振りを開始した。剣術の試験は素振りの形を見ることと、規定数を遅れずに素振りできるかの体力を見るものだ。

剣を振るたびに艶やかな金髪が揺れて本当に綺麗、それに素振りの姿勢も洗練されている。そんなマルティーヌの素振りにかなりの人数が見惚れているらしく、皆の視線を集めているようだ。

マルティーヌのことを自慢したい気持ちと誰にも見せたくない気持ち、両方がせめぎ合って……ちょっと複雑な気持ちになる。でも

どちらかといえば誇らしさの方が強いかもしれない。この素振りは努力の賜物だよね。

それから数分間剣を振り続け、マルティーヌの剣術の試験は終わった。思わず拍手を送りたくなる美しさだった。

そしてその後はすぐに自分の順番もやってきて問題なく剣術の試験は終わり、場所を移動して魔法の試験も受けて卒業試験は終了となった。最後に学生気分を味わうことができて、大変だったけれど満足な一日となった。

３４５、二つのパーティーについて

「レオン様、王立学校卒業試験の結果が送られてきたようです。こちらが結果でございます」

王立学校の卒業試験を受けた二日後、いつも通り仕事に向かおうとしていた俺を呼び止めてロジェにそう告げられた。

「早いね。もう来たんだ」

「高位貴族から採点をして結果を送っているようですので、レオン様の元に届くのが一番早いかと思われます」

「そうなんだ。じゃあ結果を見てみるよ」

俺は仕事に向かうのを少しだけ遅くすることに決めて、ロジェに手渡された封筒から一枚の紙を取り出した。そして内容を確認すると……おおっ、卒業認定通知書って書いてある！

「ロジェ、卒業が認められたみたい！」

「レオン様、おめでとうございます」

「ありがとう！」

ふぅ……マジで安心した。あの試験内容だと絶対に安全とは言い切れなかったんだよね。とりあえずこれで使徒としての威厳は保てたかな。

「よしっ、じゃあ仕事に行こうか」

「かしこまりました」

俺は無事卒業できたことに安堵して、いつもより軽い足取りで執務室に向かった。そして仕事に入る前にアレクシス様とリシャール様に報告をする。

「アレクシス様、リシャール様、先程卒業認定通知書が届きました。無事卒業できるようです」
「そうか、それはめでたいな。レオンおめでとう」
「ありがとうございます」
「先程ステファンとマルティーヌも卒業が認められたと報告に来た」
「そうなのですね！　それは良かったです」

あの試験に受かるなんて……前世チートがないのに本当に凄い。やっぱり周りの皆の方が圧倒的に頭が良い気がする。

「レオン君おめでとう。今日はお祝いで夕食を豪華にしなければいけないな。屋敷に使いを出そう」
「本当ですか！　お心遣いありがとうございます。凄く楽しみです」

そうして二人に祝ってもらい、さらにはいつも一緒に仕事をしている文官達にも祝ってもらった。やっぱり無理してでも卒業試験を受けて良かったな。受けなくても卒業はできたけど、達成感が段違いだ。

「そういえばアレクシス様、卒業パーティーへの出席とはどうすれば良いでしょうか？」

卒業認定通知書の他に、卒業パーティーへのご案内という紙も封筒に入っていたのだ。王立学校の卒業パーティーはその年の卒業試験に合格した人だけが参加できるものなんだけど、ちょっと参加しようか悩んでいる。俺が行くと皆が楽しめないかなとも思うし……

「レオンが出席したければ出席すれば良いと思うが、何か心配事でもあるのか？」
「実は……」
そこで俺は卒業試験当日の様子についてをアレクシス様に伝えた。するとアレクシス様は苦笑しつつ心配いらないと言ってくれる。
「それはEクラスに大公がいればそうなるのも無理はない。卒業パーティーは元々AクラスからEクラスまで合同だから、特別気にする必要はないだろう。もちろんマルティーヌもステファンも参加する」
そう言われてみればそうか。もし俺が卒業試験の日にAクラスで試験を受けていたら、何も問題は起きなかったんだろう。
「確かにそうですね。では参加しようと思います」
「ああ、そうしてくれ。マルティーヌもダンスを踊る相手がいた方が楽しめるだろう」
「かしこまりました」
卒業パーティーは三日後だったはず。ダンスを復習しておこう……使徒としてのお披露目パーティー以来、一度も踊ってないよ。
「そうだレオン、春の月を祝うパーティーも一週間後に迫っているのだが、そちらの打ち合わせもついでにやってしまっても良いだろうか？」
「あ、もう一週間後なのですね」
色々あって忘れてた。卒業試験が終われば結構暇になると思って

たのに……もうちょっと頑張ろう。
「ではソファーに座ってくれるか？」
「かしこまりました」
俺がソファーに座ると、すぐにアレクシス様の従者の方が二人分のお茶を準備してくれる。アレクシス様はそれを一口飲んでから口を開いた。
「前にも説明したと思うが、春の月を祝うパーティーは毎年行われているもので、領地にいる貴族達も王都に集まりパーティーに参加する。レオンにもこれからは毎年参加してもらうのだが、今年は使徒としてのお披露目も行う予定だ。この前の披露目のパーティーには参加できなかった貴族も多いからな」
「かしこまりました。この前のお披露目のパーティーと同じ会場でしょうか？」
「ああ、あの会場に前よりも多くの者が集まる」
あの時もかなり人数が多いなと思ったのに、あれ以上集まるのか……今から胃が痛くなりそう。
「流れは前のパーティーとほとんど同じだ。私が春を寿ぐ言葉を述べ、その後でレオンのことを紹介する。レオンには前と同じように挨拶をしてもらえれば良い」
「かしこまりました。また威厳ある感じで話せば良いのですね」
久しぶりの使徒モード発動だ。前は全然威厳ないって言われたし、鏡の前で練習でもしようかな。
……ちょっと落ち込みそうだからやめておこう。

「よろしく頼む。しかし前のパーティーと違うところが一点ある。前はレオンの披露目のパーティーだったので皆の挨拶を順に受けたと思うが、今回はあくまでも春の月を祝うパーティーなのでそれはなくなる。その代わりにレオンとマルティーヌには大公家として、下に降りてパーティーに参加してもらいたい」

「ということは、最初は前と同じように舞台上から姿を現し、挨拶を済ませたら下に降りて他の貴族の方々と同じようにパーティーに参加すれば良いのですね」

前より目立たなそうで嬉しいな。でもいろんな人に話しかけられる可能性は上がったのかな……やっぱりちょっと憂鬱かも。

「その通りだ。基本的にパーティーでは身分が下の者が上の者に声をかけることはないので、レオンは自由にパーティーに参加できるだろう」

「そうなのですか！」

それ最高じゃん。大公位をもらっておいて良かったって初めて思った！

俺の大げさな反応にアレクシス様は苦笑している。

「ああ、しかし自分の爵位よりも二つ下まで、よってレオンにとっては侯爵家までは声をかけることが望ましいとされている。まあ下位貴族になると数が多いのでその辺は曖昧だが、レオンは侯爵家までは一言二言でも声掛けした方が良いだろう」

「……かしこまりました」

結局話さないといけないのか……テンションだだ下がりだ。まあ仕方ないよね。貴族になったのだから仕方ない。威厳ある使徒モードで頑張ろう。

「打ち合わせはそんなところだ。衣装については既に準備は終わっているのだったか？」
「はい。エリザベート様に準備していただきました」
「では当日はその衣装で頼む」
「かしこまりました。しっかりと役目を全ういたします」

そうしてアレクシス様との話し合いは終わり、それからは仕事に集中した。そして仕事を終えて帰宅すると、公爵家の屋敷にはリュシアンとロニーがいた。二人が話している応接室に案内される。

３４６、リュシアンの今後

「二人でいるなんて珍しいね。どうしたの？」

ソファーに座りながらそう聞くと、リュシアンが答えてくれた。

「昼過ぎに卒業試験の結果が二つ届いたんだ。確認してみると私とロニーの分だったからロニーを呼び、今は中身を確認して話をしていたところだ」

「そうだったんだ」

ロニーの所属はジャパーニス大公家に変えてあるから、試験結果もここに届いたのだろう。

「それで……結果はどうだった？」

少しだけ緊張しつつ二人にそう聞くと、二人は深刻そうな顔をして俯いてしまう。えっと……まさかダメだったとか？

いや、でも普通は受からないんだからダメでも仕方ないよね。二年生で頑張れば良いんだし、ロニーも一年ぐらいは放課後しか働けなくても別に問題ないし。あっ、働かせすぎたのがダメだったのかな？　もしかして勉強する時間が足りなかった……？

それなら悪いことしたかも。じゃあ今年一年は回復の日だけ働いてもらうのでも……

「ふふっ……」

そこまで考えて焦りまくっていたら、俯いた二人から笑い声が聞こえてくる。もしかして……

「二人とも、笑い声が聞こえてるよ！」
「こ、ごめんごめん……だって、レオンの慌て方が面白くて」
「ははっ、レ、レオン、予想以上の反応をありがとう」

絶対に揶揄われた！　完全に引っかかったよ……うぅ、悔しい！

「二人とも酷い！」
「本当にごめんって。僕もリュシアン様もちゃんと卒業が認められたよ」
「はぁ……焦ったのに。とりあえずおめでとう」
「ありがとう」
「レオンの焦ってる顔が面白かったぞ」
「まだ言ってるし！」

本当にリュシアンは人を揶揄うのが好きなんだから。

「そうだ、ステファンとマルティーヌも卒業できるってよ」
「そうなのか。全員無事に卒業だな」
「うん。ちょっとだけ寂しいけどね」

王立学校を卒業したらそれぞれ忙しくなるし、今までよりも会うのは難しくなるだろう。特にリュシアンが一番会えなくなる。貴族家の嫡男は王立学校を卒業したら領地に戻って、父親から領地経営を学ぶのだ。

「確かに今までよりは会うのが難しくなるかもな。私も領地に戻らないといけない」

「やっぱりリュシアンは領地に戻るんだね。いつ頃に戻るの？」
「春の月を祝うパーティーが終わってからだ。父上と母上と一緒に領地に戻るぞ。そして戻ったら父上の補佐をしながら領地経営の勉強だな」

じゃあ後一週間か、長くても二週間ぐらいで領都に行っちゃうってことだよね……やっぱり寂しいな。

「レオン寂しいのか？」

リュシアンが揶揄うような表情を浮かべる。なんか認めるのは悔しいけど……それは寂しいでしょ！　だって一年間同じ屋敷で暮らしてたんだし。

「ちょっとだけだよ、ちょっと寂しいかなって」
「ははっ、ありがとう。私も少し寂しいぞ。領地に戻ったら遊び相手もいないからな」
「同年代の貴族が全くいないんだよね」
「そうだな。しかし領地に戻ったら覚えることばかりで遊ぶ時間なんてないだろうし、仕方がないことだ」

そうかもしれないけど……、ちょっとぐらいは息抜きがあった方が仕事にも集中できたりするよね。俺が公爵領の領都まで行けないかな。転移は流石に遠すぎてまだ無理だ。隣の街までなら辛うじて行けるかもしれないけど、そこで魔力が尽きて回復するまで待機しないとだし。
待機している時間で馬車を進めたとしても……領都まで二日はかかるだろう。

それならファブリスに乗っていった方が早いかもしれない。公爵

領の領都へは魔物の森に行くよりも近いから、ファブリスに飛ばして貰えば一日もかからないかも。街道を通るのは他の人を驚かせちゃうから、ちょっと外れた場所を走っていけば良いだろうし……

「俺がファブリスに乗って遊びに行くよ。多分ファブリスなら一日で着くと思うんだよね。途中まで一緒に転移すればもっと早いだろうし」

俺のその提案にリュシアンは嬉しそうに破顔する。

「確かに神獣様ならば領都までの距離も遠くないのか」

「うん。ファブリスは走るのめっちゃ早いから」

「そうか。それならレオンが来るのを楽しみにしてるぞ。ロニーも是非来てくれ」

「ありがとうございます。……でも僕も神獣様に乗せてもらえるのかな？」

「うーん、それは問題ないと思うよ。俺が信頼してる人なら誰でも乗せるって言ってくれたし」

俺はそう答えつつ、応接室から屋敷の外を眺めた。この応接室からはちょうど屋敷の庭が見えるようになっていて、庭で寝そべるファブリスが見えるのだ。

特注で作ってもらったファブリス専用のベッドに気持ちよさそうに寝ている。ただ本人曰く目を瞑っているだけらしいんだけどね。基本的にはあのベッドの上にずっといて、朝昼晩の三度の食事の時のみいそいそと起き上がってくるそうだ。そして食事を堪能したらまた寝る。

完全に怠惰な食べて寝るだけの生活だよ……たまには運動とかさ

せた方が良いのかな。ファブリスの散歩のためにも公爵領に行くのはありかも。

「それなら僕もお願いしようかな。リュシアン様の領地には海があると聞いて、一度行ってみたかったのです」
「ロニーは海に興味があるのか。凄く広くて綺麗だぞ」
「ロニーとステファン、マルティーヌも連れて公爵領の領都に行けたら良いよね。ステファンとマルティーヌは難しいかな……」

さすがに王族を好き勝手に連れ回せないかな。……でも使徒である俺と神獣であるファブリスがいれば、万に一つも危険なことは起きないはず。もうこの世界に魔人はいないし、命が脅かされるような脅威はない。
今度提案してみるのもありかもしれないな……、まずはアレクシス様を説得しないと。

「お二人は難しいかもしれないが、来ていただけたら嬉しいな」
「アレクシス様にも頼んでみるよ。名目上は視察とかにすれば行けるかもしれないし」
「楽しみにしているぞ。そういえばロニーはレオンのところで働くんだよな？」

リュシアンが話を変えてロニーに問いかけた。するとロニーは誇らしい表情でしっかりと頷く。

「はい。ジャパーニス大公家の文官として雇っていただいたので、これからは大公家のために必死で働きます」
「そうか、頑張れよ」
「ありがとうございます」

うんうん、この二人もどんどん仲良くなってくれて嬉しいな。ロニーの人脈って凄いことになってるよね。そのうちロニーも何かしらの爵位が得られると良いんだけど……やっぱり明確な身分があると違うだろうし。

「そういえば、レオンは卒業パーティーに出席するのか？」
「うん、出席する予定だよ。リュシアンは？」
「もちろん参加するぞ。ロニーもだろう？」
「僕も参加予定です。せっかく参加資格のあるパーティーなので、逃したら損かと思いまして」

確かに平民は貴族達が出席するパーティーに出られることなんてないよね。良い思い出になるだろう。

「じゃあ皆で楽しもうか。卒業パーティーってどんな感じなのかな？」
「堅苦しいものじゃなくて、入退場自由で飲み食い自由の緩いパーティーだと聞いたぞ。まだ婚約者が決まってない貴族達が相手探しに躍起になる場だな」

うぇ～、それ一気に行く気無くなるんだけど。でもマルティーヌと婚約してるし、さすがに声はかけられないよね……？

「レオンには令嬢達が群がるだろうな」
「え、やっぱりそうなるかな。マルティーヌがいても？」
「王立学校は身分関係なく平等だと謳っているだろう？　いつもは身分をひけらかすくせに、そういう時だけ都合よく決まりを持ち出してくるんだ。卒業パーティーを逃したらレオンに直接声をかける機会なんてないようなものだから、無礼でも寄って来る者は多いだろうな」

「マジか……一気に憂鬱だよ。そういえばリュシアンは婚約者って決まったの？」

前に候補は絞られてるけど決まってないって話してたけど、そろそろ決めないとだろう。

「まだ決まってないな。少し前にいくつもの貴族家が取り潰しになっただろう？　その影響で貴族は混乱しているから、もう少し落ち着いてから正式に決めようって話になってるんだ」

「……そうなんだね。じゃあ卒業パーティーの時はリュシアンに盾になってもらえるか」

婚約者のいない公爵家嫡男なんて、婚約者がいる大公よりも絶対に優先順位高いよね。リュシアンと一緒にいれば俺に来る令嬢は減りそう。

「なんでそうなるんだ。私はレオンの盾になんてならないぞ」

「ここは俺を助けると思って……！」

「というかレオン、二人で一緒にいたら寄ってくる令嬢達が倍になるだけだと思うぞ。あまり意味はなさそうだ」

確かにそれはあり得る……じゃあもう諦めるしかないのか。普通は可愛い女の子にちやほやされるなんて喜ぶべきことなんだろうけど、貴族令嬢って基本的に怖いんだよね。瞳の奥がギラギラしてて、獲物を狙う狩人みたいなんだ。うん……できる限り逃げよう。そしてマルティーヌに助けてもらおうかな。

いや、さすがにそれは情けなさすぎるか。

「ロニーはどうなの？」

「え、僕？」

ロニーはこの流れで自分に話が来たことに心底驚いてるみたいだ。でもロニーだっていずれは結婚するかもしれないよね。

「ロニーに貴族令嬢が群がることはないだろうけど……好きな子とかいないの？」

「うーん、いないかなぁ。だって王立学校にいるのって貴族令嬢ばかりだし。同じクラスにいるのは騎士になりたい強い感じの人ばかりだし……」

「……まあ確かにね。じゃあ他は？　例えば同じ孤児院出身の女の子とか。エマとかキアラとかいるでしょ？」

「エマとキアラは……好きな人とかじゃなくて家族って感じなんだよね。リズと同じような認識というか」

同じ孤児院で小さな頃から育つとそんな認識になっちゃうのか。じゃあ……待って、他にはロニーの周りに女の子っていないじゃん。出会いがなければ好きな子なんてできないよ。

……まあまだ十一歳だし焦る必要はないのか。普通はこの歳で恋愛に焦ることなんてないよね。俺も貴族の考えに染まってきたなぁ。

ロニーが結婚したいって言ってきたら、盛大にお祝いをする心の準備だけはしておこう。

「そんな認識なんだ。皆が家族ってやっぱり良い孤児院だね」

「うん！　あの孤児院に入れて良かったよ」

それからもリュシアンとロニーといろんな話をして、とても充実した時間を過ごした。

３４７、卒業パーティー　前編

今日は卒業パーティーの日だ。俺は朝からロジェと他数人の手によって煌びやかに着飾られた。鏡を見ても自分だとは思えない豪華さだ。

さすがにこの顔が自分ということには慣れたけど、正装をした時のキラキラ王子様みたいな見た目には慣れない。何のコスプレかって感じで、鏡を見てもテレビに映る別の人を見ている感覚に陥る。

でもこの容姿だからこそマルティーヌと並んでも違和感がないんだから、それには感謝しないとだよね。

そんなことを考えつつ準備が終わるまではマネキンに徹し、やっとロジェからの合格が出たところで王宮に向かった。卒業パーティーは王宮のホールで行われるのだ。

馬車で王宮に着くとそのままパーティーが開かれる一画に案内され、馬車から降りると王宮の使用人の方が案内に来てくれた。

「ジャパーニス大公様、リュシアン・タウンゼント様、ロニー様でいらっしゃいますね。ようこそお越しくださいました。このまま会場までご案内いたしましょうか？　もしお待ちの方がいらっしゃれば控え室もございますが」

「では控え室にお願いします」

俺はマルティーヌをエスコートしないといけないので、控室で待って合流してから会場に行く予定だ。

この卒業パーティーは卒業生しか出席できないから基本的にはエスコートなんてしないんだけど、婚約者がパーティーに参加してる

場合のみエスコートをするのが通例らしい。
「かしこまりました」
リュシアンとロニーと共に控室に案内してもらい、そこでソファーに腰を下ろした。ロニーは落ち着かないのか部屋の中を歩き回っている。
「はぁ、僕緊張して倒れそう。王宮ってこんなに煌びやかなんだ。王立学校で慣れたと思ってたのに……」
「特にこの辺りはパーティーが行われるから豪華な作りになってるんだよ」
「そうなんだ……レオンに一緒に連れてきてもらえて良かった。僕一人だったら怖くて入り口で回れ右してたかも」
この会場には卒業認定書があれば入れるようになってるんだけど、確かに平民が歩きで来るにはかなりの勇気がいるよね。
「ロニー、ずっと立ってたら疲れるぞ。座ってた方が良い」
「は、はい。分かりました。あっ、そういえば僕は先に会場に行くべきなんじゃ……？」
「普通のパーティーでは身分が下の者から入場するのが決まりだが、卒業パーティーは自由だから私達と一緒で問題ないだろう。マルティーヌが来たら皆で会場に行こう」
「そうなのですね……では落ち着いて待ってます」
ロニーはやっと歩き回るのをやめて俺の隣に腰を下ろした。でもやっぱり落ち着かないみたいだ。服装がいつもと違うのも緊張の原因かな。

「それにしてもロニーは見違えたな……その服装も髪型も似合っているぞ」
「本当ですか、ありがとうございます。でもかなり落ち着かないですが……」

一緒に王宮に行くために公爵家を訪れたロニーの格好を見て、公爵家の使用人達がちょっと服装を変えて髪型を整えたのだ。別にロニーの元々の格好でも問題はなかったんだけど、それを少しだけパーティー仕様に豪華にして前髪を流したって感じかな。
それだけで一気に高貴な雰囲気になったんだよね……貴族子息と言っても通る外見になった。

「ロニーは貴族の豪華な服装が似合うね。顔も整ってるし男にしては細身な方だからかな」
「立ち居振る舞いも洗練されているから違和感もない」
「ダンスの授業を受けてて姿勢も良いし、知らない人が見たら下位貴族の子息かなって思うよ」
「それって良いのかな……？　生意気だとか言われない？」
「ジャパーニス大公家の所属なんだから大丈夫。それにちゃんとロニーの立場で最大限の豪華さだから」

ロニーの服装は基本的にシンプルで、ちょっとだけ装飾があったりボタンが豪華だったりといった程度だ。でもその少しの豪華さが上品で良い。
俺もこういう服装の方が好きなんだけどな……大公はもっとキラキラさせないといけないらしい。
「それなら良かった。この服装に恥じないように堂々と頑張るよ」

そうして三人で雑談を楽しんでいると部屋のドアがノックされ、ロジェがドアを開けるとステファンとマルティーヌが入ってきた。マルティーヌはまた新しいドレスを着ているみたいだ。今回のは配色が大人っぽくて、マルティーヌの美人さを際立たせている。

「レオンお待たせ」
「ほとんど待ってないよ。マルティーヌ、そのドレスもとても似合ってる」
「本当？　ありがとう」

マルティーヌはふわっと花が咲くように笑った。こんなに可愛いマルティーヌが俺と婚約してくれてるなんて……何度確認しても現実なのにいまだに夢じゃないかと疑ってしまう。

「リュシアンとロニーも待っていてくれてありがとう」
「ほとんど待っていないから大丈夫だぞ」
「待ち時間で緊張もほぐれましたので、僕の方こそ感謝しなければなりません」
「それなら良かったわ。では皆、パーティーへ行きましょうか」

俺はマルティーヌのことをエスコートして、ステファンとリュシアン、ロニーと共に会場へ向かった。

会場はこの前のお披露目パーティーの時とはまた違い、もう少しカジュアルな雰囲気が漂っていた。ホールの飾り付けも花が多く使われていて可愛い雰囲気だ。既にたくさんの食事もテーブルに載っている。どれも美味しそうだな。

俺達が会場に入ると皆が一斉に動きを止めたけれど、ステファンの「そのまま楽しんでくれ」という言葉を合図にまた談笑が再開さ

れた。こんな緩い感じのパーティーだったらいくらでも参加したいかも。そう思うぐらい楽しい雰囲気だ。

「こんな感じのパーティーならいくらでも参加したいかも」
「本当ね……今日は目一杯楽しみましょう。まずは食事からかしら」
「うん。あのローストビーフ美味しそうじゃない？」
「では早速行きましょう」

ローストビーフに何かのソースがかかってて美味しそうだ。それに隣にあるのはブルスケッタだよね。あれも美味しいんだよね～。

俺はパーティーの緩い雰囲気に緊張も忘れ、豪華な料理を前に鳴りそうなお腹をなんとか宥めてマルティーヌをエスコートした。優雅さを意識してゆっくりと歩いていく。

「マルティーヌは何枚食べる？」
「そうね、二枚お願い」
「分かった。じゃあ俺は五枚ぐらい食べようかな。ブルスケッタも食べる？」
「もちろん食べるわ」

マルティーヌと顔を見合わせて笑い合いながら、お皿にたくさんの料理を盛り付けた。基本的にこのパーティーでは自分で食事を盛り付けるみたいで、俺にとっては一々使用人に頼まなくて良いから楽だ。

「ロニーも食べる？　ステファンとリュシアンも」
「うん。でも自分で取るから大丈夫」
「私達も好きなものを取るから気にしなくて良いぞ」
「了解」

――それから俺達は時には食事を楽しみ、時には音楽に合わせてダンスを踊りと、パーティーを存分に楽しんだ。
そしてパーティー参加から一時間ほど経ち、懸念してたような事態は起こらなかったなと安堵したところで、複数人の令嬢に話しかけられた。

３４８、卒業パーティー　後編

「ジャパーニス大公様、少しお時間をよろしいでしょうか？」

マルティーヌとリュシアンの三人で談笑をしていたところにやってきた五人の令嬢達。少し緊張してるみたいだけど、ここに割り込めるのは逆に褒めたいぐらいの強心臓だね。

「何かな？」

「お初にお目にかかります。私は侯爵家次女で……」

それからその五人の令嬢による自己アピールが始まった。とにかく長い、得意なこととか聞いてないのにめっちゃ教えてくれる。そして最後には第二夫人となった場合の利点まで丁寧に教えてくれる。

でもさ、よく考えたらここにいる令嬢って十五歳ぐらいの年齢だよね？　婚約者決まってないの……？

「申し訳ないんだけど、今は友人と話していたんだ。長くなるようならまた後にしてもらえないかな？」

俺は色々と疑問に思いつつ、とりあえず穏便に話を終わらせようとそう口にした。すると令嬢達は何故か瞳を輝かせる。

「また後でお会いいただけるのですか！　では私の家で開催予定の茶会に是非お越しください」

「私の家にも是非」

「今度屋敷で夜会を開くので、招待させていただいても良いでしょうか？」

あ、そういう解釈になっちゃうのか。凄い勢いで次の約束を取り付けようとしてくる。でも俺は第二夫人を娶る気は無いし、そもそもここまでギラギラした瞳の女性は苦手なんだけど……

「誤解をさせてしまったのなら申し訳ないけど、私は第二夫人を娶るつもりはないんだ。君達にはもっとふさわしいお相手がいるよ」

俺は少しだけ使徒様モードを発動して、なんとか威厳を出すようにそう突き放した。しかしちょっと可哀想だったかなと思って、最後に怒ってないという意味を込めて笑顔を向ける。

すると隣にいたマルティーヌからさりげなく肘で突かれた。……何かダメだった？

「まあとにかく、もう君達と話すことはできないんだ」

マルティーヌにも合図されたし無理やり話を終わらせて、まだ話したそうにしている令嬢達を遠ざけた。そしてマルティーヌの方を振り返ると……、そこにはにっこりと、感情の読めない完璧な笑みを浮かべたマルティーヌがいた。

……俺、絶対に何かやらかしたんだ。

「あの、マルティーヌ？　俺何かやったかな……？」

恐る恐る尋ねると、マルティーヌは顔に苦笑を浮かべてくれた。貴族の張り付けた笑顔よりも苦笑の方がよっぽどマシだ。

「そんなに怖がらなくても別に怒ってないわよ。でもそうね、レオンはもう少し自分の容姿について自覚した方が良いんじゃないかしら？」

「どういうこと？」
「さっき断った後に優しく微笑みかけてたじゃない。あれで当主に言われて無理やり話しかけてた令嬢達も、かなり本気になっちゃったわよ」

……俺の微笑みってそんなに凄いものだっけ？　というか待って、マルティーヌがそう思うってことは、俺の微笑みはマルティーヌから見てカッコ良いと思ってくれてるってこと！？

「マルティーヌってもしかして、俺の容姿を好きでいてくれてるの？」
「……そんなの当たり前じゃない。レオンはかっこいいし時には可愛いし、凄く素敵よ」

マルティーヌは当たり前だという表情でそう伝えてくれる。俺はその返答に自分でも驚くほど舞い上がった。俺の容姿ってもちろん日本人の時と比べたらどこの王子様？　って感じなんだけど、この世界ではごく一般的だと思ってたから凄く嬉しい。

「……嬉しい」

ちょっと照れくさいけど素直に嬉しい。レオンに転生させてくれたミシュリーヌ様、ありがとうございます！　今初めて心からミシュリーヌ様への感謝が湧き上がってきました！

「威厳はないけど良いの？」
「別に良いわ。それに威厳なんて時が経てば備わるのよ。私は今のレオンも好きよ」
「マルティーヌ……俺もマルティーヌが好き。本当に可愛いし美人だし努力家だし笑顔は素敵だし」

俺はニコッと可愛い笑顔を浮かべてくれたマルティーヌに感極まり、マルティーヌの良いところを羅列して思わず抱きしめようと手を伸ばすと……寸前でリュシアンに止められた。
リュシアンが俺とマルティーヌの間に入ってきたことで、間違えてリュシアンを抱きしめそうになってしまう。

「ちょっとリュシアン、邪魔しないでよ」
「レオン、ここはパーティー会場だぞ？　それにこの場でなくても婚約者を抱き締めるのはダメだ」
「……貴族って面倒くさい」

俺がボソッと呟いたその声が聞こえたのか、リュシアンは呆れたような表情で肩をすくめた。

「もう大公なんだから諦めろ。ほら、そんなに抱きしめたいなら私が相手になってやるぞ」
「……リュシアンじゃ意味ないし。それにこんな場所でそんなことしたら、マルティーヌを抱きしめるよりよほど変な噂が広まるから！」
「ふふっ、確かに面白いぐらい噂が広まりそうね」

揶揄うように両手を広げたリュシアンに俺が噛み付くと、マルティーヌは楽しそうに笑った。そんな俺達のところにステファンとロニーも食事を持って戻ってくる。

「二人で騒いでどうしたんだ？」
「ステファン様、レオンが私を抱きしめたいみたいだったので、両手を広げて待っていたのです」
「……レオン、もしかしてリュシアンを？」

「ちょっと、盛大な誤解です！　リュシアンもややこしいこと言わないで！」

最近リュシアンには揶揄われっぱなしだよ……なんか悔しい。リュシアンの背が伸びて俺の背があんまり伸びてないのも悔しい！

リュシアンと並ぶと俺がちょっと見上げないとダメなんだよね。ステファンもだ。ロニーは……まだ同じぐらいだな。ロニー、そのままでいてくれ。

「レオン、僕はレオンが誰を好きでも応援するよ。でも二股はダメだよ……？」

「ロニーまでそんなこと言う！？」

「ふふっ、ははは っ、レオン必死だね」

「もう揶揄わないで」

「だって今、僕の背の低さを見て安心したでしょ」

「……え、何で分かったの？」

「レオンは慌ててる時とか全部顔に出るんだよね。だからすぐに分かるよ」

最近はポーカーフェイスも頑張って練習してたはずなのに。まだ慌てたりすると忘れるんだよね……はっと気づいた時には顔の筋肉が好きなように動いてるんだ。

「ちゃんと顔に出ないように気をつける」

「でも私はレオンの分かりやすい表情も好きなのよね」

「マルティーヌ、本当？」

「ええ。でも貴族としてはポーカーフェイスを練習しないとね」

「うっ……分かってるよ」

ちゃんと練習しよう。ついつい表情筋が動いちゃうんだ。貴族っ

て心の中では笑っててても顔には出ないんだから凄い。俺は頬がピクピクしちゃうよ。

そうしてまた五人で話をして楽しんでいると、今度は三人の令息達がやってきた。

「ジャパーニス大公様、お初にお目にかかります」

五人で話してるにも関わらず、当たり前のように話しかけてくる。でもこのパーティーは緩いからこれもありなんだよね……緩いパーティーは楽だけど、こういう部分はやっぱり困るな。

令息達は令嬢達とは違って、自己紹介はそこそこに領地の特産品についての話をひたすらしてきた。そして三人とも最後には、そんな領地にいる自分の可愛い妹って話になり、妹を第二夫人にってところに話は着地するのだ。

妹の紹介がなくて領地の話だけなら面白いのに勿体無い……王都ではあまり出回ってない香辛料の話とか気になったんだけど。家名は覚えておいて、今度当主に連絡してみようかな。いろんな香辛料を集めたらカレーを再現できるんじゃないかなと最近は思ってるのだ。

「第二夫人を娶るつもりはないけれど、領地の特産品の話は興味深かった。気になったものについては今度正式に買い付けたいな。その時は当主宛に手紙を出しても良いかな？」

「は、はい。もちろんでございます！」

「ありがとう。その時はよろしく頼むよ」

三人の令息達は俺のその言葉に顔を紅潮させ、最後は満足そうに

去っていった。

「レオン、何か気になるものがあったの？」

マルティーヌにそう聞かれたので、耳元に口を近づけてこそっと告げる。

「香辛料で日本の料理を再現できないかと思ったんだ」

「まあ、それは本当？」

「まだ分からないけどね。色々試行錯誤したら可能性はあるかも」

「そうなのね。楽しみにしているわ」

「うん。もし完成したら絶対にマルティーヌのところに持っていくよ」

それからも時折やってくる令嬢、令息の話を適当に聞きつつ、俺は卒業パーティーを楽しんだ。卒業パーティーは予想以上に楽しくて、これから大公家でパーティーを開く時はこんなパーティーにしたいなと、そう思うほどだった。

３４９、春の月を祝うパーティー　前編

卒業パーティーが終わって数週間後に、春の月を祝うパーティーが開かれた。俺は卒業パーティーの余韻も感じられぬほどに忙しく準備をこなし、すぐに当日となった。

今はパーティーが始まりアレクシス様が春を寿ぐ挨拶を終え、さらに俺が使徒としての挨拶を終えたところだ。皆の視線はほとんど全てが俺に向いていて、一挙手一投足まで注目されている。

そんな中で俺とマルティーヌは大公家としてパーティーに参加するため、一段一段舞台から階段を降りていく。

うぅ……もうそんなに見ないで欲しい。俺は注目されるのは好きじゃないんだ。今すぐ転移でこの場から消えたい。

使徒様の降臨に好意的な視線もあれば、あんな若造が大公なんてという批判的な視線もあり、さらに先の粛清で損害を受けた貴族家からは恨まれていたりと。華やかな笑顔の裏に隠した貴族達の裏の感情がなんとなく分かり、見られているだけで辟易する。

まあ全員が好意を持ってくれるなんてことはないから仕方ないんだけどね……表面上は友好関係を築いてくれる人なら良しとしないと。

過激な敵対貴族は全て取り潰されたから、表立って悪意を向けてくる者がいないのはありがたいかな。本当は全員と友好関係を築けるのが理想なんだけど……貴族は少なからず特権意識があって自分の地位を少しでも上げることに心血を注いでるから、どちらかと言えば平民の権利を守ろうとしている俺と仲良くなるのは難しいだろ

う。

俺がこの世界に生きている間に、少しでも良い国にしていけるように頑張ろう。とりあえず日本の憲法のように明確な法が必要なのかな……この国にも法はあるんだけど、トップ数人の会議で変えられてしまうような仕組みなんだ。それってあんまり意味ないよね。

今はアレクシス様が素晴らしい王様でステファンもそうだから良いけど、この先愚王が生まれるかもしれないし、そうなった場合でも法の仕組みで上手く国が回るようにできるのが理想かな。あとは上手く宗教を広めないとね。

ミシュリーヌ様はこの先もずっといるんだろうし、ミシュリーヌ様の力を強くしておきたい。ちょっと、いやかなり抜けてるところもあってポンコツなことは否定しないけど、それでもミシュリーヌ様はこの世界を良くしたいという気持ちを持った良い神様だから。

そのためには信仰が廃れないような仕組みづくりが必須だよね。とにかく継続的な神力が必要だろうし。

俺は貴族達の顔をぼんやりと眺めてそんなことを考えながら階段を降りていき、下り終わると一番前にあるテーブルに腰を下ろした。もちろんマルティーヌのエスコートも忘れてない。

「ふぅ、緊張した」

「本当ね。貴族達の視線が痛かったわ」

俺とマルティーヌは席に着いた後、そっと視線を合わせて小声で話をした。お互いの顔には安堵の表情が浮かんでいる。王女様であるマルティーヌも緊張してたんなら、俺が緊張するのなんて仕方な

いよね。あの雰囲気の中で緊張しない人がいたら会ってみたいよ。

そうこうしているうちにアレクシス様がパーティーの開始を告げて、貴族達は一斉に、けれど優雅に立ち上がった。

この後は高位貴族から王家に挨拶をし、貴族達の社交開始となる。今回大公家は最初に王族と会話をしているので、王家への挨拶は免除だ。なので皆より少しだけ遅れて立ち上がり、王家への挨拶を終えた高位貴族の元に向かった。

大公家は公爵家と侯爵家に声をかけないといけないので、同じ爵位の中でも絶妙な力のバランスに配慮して順番に声をかけていく。凄く美味しそうな食事がたくさんあるのに、ほとんど食べられずに終わるのが普通だそうだ。

……もったいないよね。皆で楽しく食事を楽しむパーティーが良い。パーティーの後で使用人達が食べるみたいだけど、俺もその使用人になりたい。

「クリストフ殿、リシャール殿、本日はおめでとうございます」

俺はまずタウンゼント公爵家の皆さんに声をかけた。声をかける順番は現当主、前当主の順だ。配偶者やその他の家族には必要な時にしか声をかけない。

そして春の月を祝うパーティーなので、最初に春が訪れたことを祝うのも通例だ。さらに俺の方が身分が高いので、クリストフ様、リシャール様と呼んではいけない。

……凄い違和感だし決まりが多すぎて疲れる。

「ジャパーニス大公様、お声がけいただき感謝いたします。今年も良き春を迎えられましたこと、とても嬉しく思います」

クリストフ様が笑顔で答えてくれた。そしてリシャール様も笑顔で頷いてくれる。この貴族達が集まるパーティーでお二人の笑顔に安心する……

「本当ですね。今年の作物はよく育ちそうでしょうか？」

「今のところはよく育ってくれるかと。これからも日照りなどなく順調に行けば良いのですが」

「日照りは全ての民が苦しみますから、ないことを祈るばかりです」

こうして当たり障りのない世間話から始まり、領地の作物の出来や特産品の状況、それから領地で起きた事件や他の貴族の醜聞などに話題は移り変わっていくのだ。

リシャール様とならいくらでも話すんだけど、他の人と話すのは憂鬱だ。もちろん志の立派な素晴らしい貴族もいるんだけど、そもそも俺はコミュニケーションが得意な性質ではないのだ。ほぼ初対面の人とにこやかに当たり障りなく、しかし情報はしっかりと得るように腹を探りながら話すなんて……もう胃が痛くなるなんてものじゃない。

リシャール様と話を終えると、早速次は別の公爵家だ。この国の北東部に広大な領地を持ち、三つの国と国境を接している公爵家。さらに一部魔物の森とも接している。

この家はまさに質実剛健。当主をはじめとして全員が武勇に優れているらしい。

三つもの隣国と国境を接しているので、兵士団の強さは国内一との評判なんだそうだ。俺と近い歳の子供がいなくて今までほとんど関わりがなかった。チラッと顔を見たことはあるけれど、話すのは初めてだ。

俺は緊張しつつその公爵家、コラフェイス公爵家の元に向かった。前公爵は現軍務大臣で、全ての騎士団をまとめる立場にある人だ。凄く体が大きくて目つきの鋭い人。そしてその隣にいるのが現公爵か……こっちも大きい。

リシャール様の話では少々真面目すぎるところがあるぐらいでとても良い男だって話なんだけど、ちょっと、いやかなり怖いです！

もし子供がいたら泣き叫びます！

「コラフェイス公爵殿、軍務大臣殿、お初にお目にかかります。レオン・ジャパーニスと申します」

「ジャパーニス大公様、お声がけ下さり大変光栄でございます。私はアルセン・コラフェイスと申します」

「ジャパーニス大公様、御目通りできましたこととても嬉しく思います。私はヴァルンタン・コラフェイス、軍務大臣の任を拝命しております」

二人ともまだまだ見た目子供の俺にきっちりと挨拶をしてくれた。その様子には子供だからと侮るような雰囲気は一切ない。それだけでもう良い人認定したくなる。

それに現公爵の方は普通ににこやかだし、軍務大臣の方はキリッと厳しそうな感じだけど目元は少し柔らかい。

俺はそんな二人の様子に無駄に入っていた体の力を抜いた。そしてさっきまでよりも少しだけ落ち着いて話を続ける。

３５０、春の月を祝うパーティー　後編

「丁寧なご挨拶ありがとうございます。紹介させてください、私の婚約者であるマルティーヌ王女殿下です」
「マルティーヌ・ラースラシアです。レオン共々よろしくお願いいたします」
「王女殿下にお会いできまして光栄でございます。そして遅ればせながら、この度はご婚約おめでとうございます」

二人が祝いの言葉を述べてくれたので、俺とマルティーヌの二人で返事を返す。今回のパーティーは俺達の婚約を広く印象付けるという目的もあるのだ。

「コラフェイス公爵領は他国と接する場所にあり、他国の文化や食材などが多く輸入されていると聞きます。やはり王都とはまた違った街の雰囲気なのでしょうか？」

挨拶が終わったら次は当たり障りのない雑談開始だ。この雑談って一番スキルが必要だよね……

「そうですね、国境に近い街などは他国の文化が我が国の文化と混じり合い、独特な雰囲気となっております。食事も少し違うものがございますね。王都まで運んでいるものもあるのですが、数は多くありません」
「やはりそうなのですね。私は他国の文化にも興味がありまして、一度訪れてみたいものです」

魔物の森にも接してるんだし、これからファブリスと魔物の森を

駆逐に出掛けるときにでも、寄らせてくれたらありがたいな。他国の食べ物って言ったら、王都にない調味料とか香辛料とかありそうだし。

「そうでしたか。では機会があれば是非お越しください、歓迎いたします。ジャパーニス大公様は使徒様であらせられ、とてもお強いとお聞きしております。その力を一度見てみたいと領地の兵士団でも話題となっておるのです」

「そうでしたか……ご期待に応えられるかは分かりませんが、一度手合わせしてみるのも面白いかもしれませんね」

国内一と言われている兵士団の強さはちょっと気になる。騎士よりも強いのかな？

「本当ですか！　それは是非ともお願いしたいです！」

コラフェイス公爵が思いっきり食いついた。さらに軍務大臣も瞳をギラギラとさせている。……領地を治める貴族本人が強さを追い求めることが好きだからこそ、領地全体が武勇に優れていると言われるんだろうな。

うん、凄く良いと思う。椅子にふんぞり帰って高みの見物で、さらに良いものばかり食べて太ってる貴族より何倍も良いよ。そんな貴族はかなり減ったけどさ。

「ではそのうちにご連絡させていただいても良いでしょうか？」

「もちろんでございます。その時は父にご連絡ください。父がすぐにでも領地と連絡を取りますので」

「はい。私に仰っていただければすぐにでも」

「かしこまりました。よろしくお願いいたします」

コラフェイス公爵領はちょっと楽しみかも。兵士団の訓練法とかも見てきて、それをジャパーニス大公家に取り入れるのもありだよね。

そうして俺はコラフェイス公爵家の皆さんとの話を終えた。そしてそれからもどんどん貴族達に声をかけていき、パーティーもかなり盛り上がってきたなという頃に、やっと最低限の義務を果たすことができた。

「これで終わりだよね」
「ええ、皆さん初対面だし大変だったわね」
「うん、もう転移で帰りたいぐらい」
「ふふっ、確かに転移で抜け出せたら最高ね」

マルティーヌとそんな会話をして癒されつつ、最初の席に戻ってきた。そして少し休憩ということで席に着き飲み物を飲む。

「マルティーヌは小さな頃からこういうパーティーに参加してたの？」
「そうね……ここまで大きなパーティーではないけれど、家族の誕生パーティーなどは参加してたわ。でもパーティーはそこまで多くないのよ。多いのはお茶会ね」
「お茶会か……それも大変そうだね」
「ここだけの話、私はあまり好きではないわ」

マルティーヌがかなり声を潜めてそう呟く。そして俺の方を向いて少しだけ苦笑を浮かべた。

「色々な情報を得られるから大切なのだけれど……仲の良い友達とだけ、情報や派閥なんて気にせずに好きに話せるのが一番だわ」

「確かにそうだよね。また皆で楽しいお茶会をやろうか」

やっぱりタウンゼント公爵家の領地に行くときに、マルティーヌとステファン、ロニーも連れて行ってあげたいな。皆で海とか行けたら絶対に楽しいと思う。

それも一つの目標にしよう。

「そういえば、このパーティーって子供はあんまりいないんだね。リュシアンがパーティーに行ってたって話をしてたから、一定の年齢を超えると皆が参加してるのかと思ってた」

「そうじゃないわ。パーティーで最低限貴族らしく振る舞えるとなったら、一度はお披露目のためにパーティーに出席するの。でもその後毎年参加するのは嫡男だけよ。まあ決まりはないから例外はあるのだけれど」

そうだったんだ。じゃあ嫡男以外はそこそこ成長して挨拶もこなせるってなったら一度このパーティーでお披露目をして、その後はもう王立学校入学までまた領地にいるってことだよね。

やっぱり貴族に生まれるのって大変だし、さらに寂しいな。近くの領地の友達とかはできるのかもしれないけど、それも頻繁には会えないだろうし……

「あっ、音楽が変わったね」

「本当だわ」

「じゃあマルティーヌ、一曲踊ってくれますか？」

「喜んで」

それから俺達は楽しくダンスを踊り、また席の方に戻ってきた。そして席に座ろうとしたんだけど……その時奥にダリガード男爵家

のお二人がいるのが目に入る。
話しかけても良いのかな……お二人にはこれからもスイーツを贈る予定だし、関係性があることはアピールしておいた方が良い気もする。

「レオンどうしたの？」
「マルティーヌ……ダリガード男爵家のお二人に話しかけても良いと思う？」
「ダリガード男爵家は、スイーツ専門の料理人を紹介していただいたのよね？」
「うん。これからもスイーツを贈り続ける予定だし、俺があのお二人のこと好きだから関係性を途切れさせたくないんだ」
「ならば話に行きましょう。大公家と繋がりがあると分かれば、男爵家の社交は途端に楽になるわよ」

やっぱりそうなのか。あのお二人ならこの繋がりを悪いことに使うとは思えないし、それなら話に行こう。

「それに実家と関係があるとなれば、そこの令嬢とレオンが仲良くても不思議に思われなくなるわよ」

マルティーヌがにっこりと微笑みながら、そんな爆弾を放り投げた。

「あの、それって……ステイシー様のこと？」
「ええ、二人で仲良く話をして、さらに今後の約束までしていたと聞きましたわ」

そ、その通りだけどなんか違う。あれは色っぽい話ではなくてどちらかというと商売の話で……でも確かに、ステイシー様と友人関

係は続けたいなっていう気持ちで最後に呼び止めたのは否定しないけど。
なんか……何を言っても言い訳にしかならないような気がしてきた。
「あの、マルティーヌ、ステイシー様との話はそういうのじゃなくて、友達として、ビジネスパートナーとして今後もよろしくねって感じだから……」
俺が焦りながらしどろもどろにそう話すと、マルティーヌはやっといつもの笑顔を見せてくれた。マルティーヌの貴族の笑顔怖い……！
「ふふっ、分かってるわ。ちょっと意地悪を言ってみたかっただけよ。ちゃんとロニーに話の内容を全て聞いたもの」
……ロニーありがとう。マルティーヌを怒らせたら絶対に怖い、怒らせないように気をつけよう。エリザベート様に勝てないアレクシス様の気持ちが分かった気がする。
「じゃあ行きましょう。ダリガード男爵家の皆様はとても良い人達なのでしょう？　そういう人との繋がりは大切にしないとダメよ」
「うん、ありがとう」
そうしてマルティーヌに翻弄され、それを少しだけ嬉しいとか馬鹿な考えが浮かんでくるのをなんとか抑え込みつつ、俺はダリガード男爵家のお二人のところに向かった。
舞台から離れるほど爵位は下がっていくので、俺達が男爵が集まる場所へ歩いていくのを見て、皆驚愕の表情を浮かべる。そしてそ

の後に誰が話しかけられるのかと、探るような視線が巡る。そうして誰よりも驚いているお二人のところに辿り着いた。

「ピエール殿、お久しぶりです」

女性には話しかけてはいけないので、ピエール様にだけ話しかける。するとピエール様は驚愕の表情のまま、なんとか挨拶を返してくれた。

「ジャ、ジャパーニス大公様、お久しぶりでございます。お声がけ下さり、大変光栄でございます」

「最近は忙しくてお会いする機会がありませんでしたので、ここまで来てしまいました。スイーツはいかがでしょうか？」

「はい。とてもとても美味しく、皆で楽しませていただいております」

そう言ったピエール様の顔が少し緩む。本当にスイーツが好きなんだね。

「そう言っていただけると嬉しいです。ヨアンが毎日必死に研究してくれているおかげですね」

「ヨアンが……ヨアンは元気でしょうか？」

「はい。目を輝かせてスイーツの研究に没頭しています。周りの者が止めなければ寝食を忘れるほどでして……」

「それは……目に浮かびます」

やっぱりダリガード男爵家にいる時もそんな感じだったんだ。ピエール様とキャロリン様は懐かしいような表情を浮かべている。

「またヨアンとも会ってあげてください」

「それは私の方から願いたいことでございます」
「ではヨアンに伝えておきますね」
「ありがとうございます」

それから最近の新作の中でどれが美味しいか、どれが一番好みかなどの話をして、俺はお二人に挨拶をしてその場を離れた。
周りの視線が痛かったから、ダリガード男爵家に接触を図る貴族も多いかな。でも懇意にしてることは伝わっただろうし、ダリガード男爵家に無理矢理何かをしようって考える人はいないだろう。

その後はいくつかの高位貴族とまた軽く談笑しつつ時間はすぎ、春の月を祝うパーティーは終わりとなった。

351、遊撃開始

卒業パーティーと春の月を祝うパーティーが終わり、冬の寒さは鳴りを潜めて春の暖かさを感じられるようになってきたこの頃。
春の月が始まったらシュガニスを開店する予定だったんだけど、結局は春の月を祝うパーティーで中心街が慌ただしかった為、開店日を少し伸ばしている。今は春の月が始まって数週間経った時期で、シュガニスの正式な開店日まで後一週間だ。

この一週間をどう過ごすのか、いつも通りに仕事をするか魔物の森に向かうか悩んだんだけど、結局はファブリスと二人で魔物の森に向かうことにした。
アレクシス様からの話によると、二ヶ所魔物の森への前線の村がかなり危険な状態なんだそうだ。このままだと村が飲み込まれるので避難するかどうかの瀬戸際らしい。
そこで俺とファブリスで魔物の森を押し返しにいくことにした。二ヶ所ぐらいなら、なんとか二人だけでも押し返せるだろう。

最近は使徒様効果で魔物の森への兵士募集に応募してくれる人も多いみたいなんだけど、まだその人達の移動や配置を決めたりなど、色々と時間がかかって人員が増えてないらしい。
あと少し耐えれば人海戦術で押し返せるようになるだろうから、俺とファブリスでそれまでなんとか頑張る予定だ。

後は魔法の授業なんだけど、実は第一回は既に行った。第三騎士団の中でも魔力量が多くて人柄も申し分ない人を、アレクシス様とリシャール様、それからジェラルド様が選んで三十人を相手に授業をした。

あの三十人がちょうど魔物の森に着いた頃だろうから、少しは楽になってくれてたら良いんだけど。

「じゃあファブリス、行こうか？」

『了解した』

俺の転移で飛べるところまで飛んで、魔力が回復するまでファブリスに乗せてもらって移動するから……休まず移動すれば二日ぐらいで着くかな。そして現地では一日で何とか魔物の森を押し返して、また急いで帰ってくる。

そうすればシュガニスの開店には間に合うと思う。何とか開店日に間に合いたいんだよね……間に合わなかったら仕方ないって諦めるけど、可能性あるなら頑張りたい。

「レオン、気をつけるんだぞ」

リュシアンが見送りに出てきてくれた。リュシアンともしばらくは会えなくなるな。

「うん。リュシアンも明日出発だよね？　領都まで気をつけてね」

「ああ、いつでも遊びに来てくれて良いからな」

「じゃあ、頻繁に行くよ？」

俺のその言葉にリュシアンは苦笑しつつも、嬉しそうに笑ってくれた。

「楽しみにしてるぞ」

「うん。ファブリスに乗っていくから驚かないでね」

「それは街の者が驚くな……しっかりと周知しておこう」

「よろしく」

しばらくは会えないけど会おうと思えばいつでも会えるし、そんな気持ちで軽く挨拶をして俺はファブリスに乗った。

「じゃあまたね」
「ああ、またな」

最後に手を振って、ファブリスごと転移をした。場所は王都を出て、王都の農業地帯もそろそろ終わるかなというところだ。まだ俺の魔力ではここまでが限界なんだ。
ふぅ……一気に魔力を使うと疲れる。

『この転移という魔法はやはり凄いな。一瞬で移動できるなど』
「便利だよね。もっと魔力が増えたらさらに便利になるから頑張るよ」
『我のように尽きぬ魔力があれば良いのにな』
「ね、羨ましいよ。まあ今の俺の魔力も凄い量なんだけどさ。ふぅ……よしっ、落ち着いたから動いても良いよ」
『分かった。どの程度のスピードにする？』

今回は俺だけだからかなり頑丈にバリアで固定してるし、速いスピードでもいけるかな。

「この前王都に帰ってきた時のスピードの、倍のスピードでお願いしても良い？　もし辛かったら背中を叩くから緩めて欲しい」
『了解した』

ファブリスはやっぱり乗せてるのが一人だけだと走るのが楽なのか、この前よりも軽やかに揺れることなく走り始めた。
これならそこまで辛くないかも。一人だけだからがっちりバリア

で固定してるし。そんなことを思いながらファブリスの背中で心地よい揺れを感じていると……いつの間にか眠りに落ちていた。

――ふと意識が浮上する。あれ、俺寝てた？

「……ファブリス、今どこ？」

『お、主人起きたのか？　寝ていたから休まず走り続けたぞ。スピードを上げても起きぬから全力で走っていたらそろそろ魔物の森だ』

「え、本当に！？　何で今日はこんなに乗り心地良かったんだろ」

『主人一人しか乗せないと走りやすいのだ。それに森の中とは違ってまっすぐ走るだけだから揺れることもない』

確かにそっか……森の中とは違うよね。最初にファブリスに乗った時はぐねぐね走ってたから遠心力も凄かったんだ。

「ありがとう。凄く乗り心地良くて思わず寝ちゃったよ。今の時間は……え、もう早朝なの！？　夕方じゃなくて！？」

俺が王都を出発したのは午前中だ。昼前までは普通に起きててそこで寝ちゃって……次の日の朝まで寝てるとか寝すぎだよ俺。

『疲れていたのではないのか？　主人は働きすぎだ』

「そんなことはないと思ってたんだけど……気をつけるよ」

まだ子供の体だということを忘れないようにしよう。でも今はぐっすり寝て疲れも取れたし、さっそく魔物の森の駆逐へ行こうかな。

「ファブリスは休まなくても大丈夫？」

『我は数年ぐらい休まなくても問題ない』

「数年って、レベルが違った。じゃあこのまま魔物の森に行こうか」
『了解した』
「あっ、でも騎士の方々に挨拶だけはしよう」

俺とファブリスは魔物の森に飲み込まれそうな前線の街に到着すると、その街の入り口にいた騎士の方に声をかける。

「こんにちは」
「だ、誰だっ！！」
「ちょっ、お前！！　この方々は使徒様と神獣様だっ！」

俺が声をかけた騎士はファブリスのことを知らなかったのか、警戒するように剣を向けてきた。しかしすぐそばにいた騎士が必死の形相で駆けつけてきて、剣を向けてきた騎士の頭を地面に叩きつける。……無理矢理だね。

「ぐへっ」

叩きつけられた騎士の方苦しそうだけど……大丈夫？

「大変申し訳ございませんっ！　この者への処罰は必ずいたしますのでご容赦いただければと思います！　上官を呼んで参りますので少々お待ちくださいっ！」

顔を真っ青にしている騎士はそこまで一息に告げると、最初に剣を向けてきた騎士の襟首を掴んで引きずって下がって行った。あまりにもあっという間の出来事で口を挟めなかったよ……

「ファブリス、俺って怖がられてるのかな？」
『主人はわからぬが、我ではないか？』

「……確かに、ファブリスは大きいもんね」

日々魔物と相対している騎士にとって、ファブリスの見た目は恐れるものなのかな。少しずつ慣れてくれたら良いけど。

「ジャパーニス大公様、神獣様、大変お待たせいたしました。部下がご無礼をいたしましたこと、心よりお詫び申し上げます」

真っ青な顔の騎士に連れられて、こちらも負けず劣らず真っ青な顔をした上官が体を小さくしながら駆けてきた。そしてその勢いのまま跪いて深く頭を下げ、謝罪を口にする。

「いや、気にしないでください。まだ私達の姿は広く出回っているわけではないので。顔を上げてください」

俺のその言葉に表情を緩めたお二人は、少しだけ血色の戻った顔を上げてくれた。

「先程剣を向けてきた騎士の方も罰しないであげてくださいね」
「かしこまりました。寛大なご処置に感謝いたします」
「それで早速本題なのですが、アレクシス様からこの街が危ないと聞いて助太刀に来ました。ファブリスと魔物の森の駆逐をするのですが、自由に動いても問題ないでしょうか？」
「もちろんでございます。どうかよろしくお願いいたします」
「ありがとうございます。では早速行ってきますね」

お二人に期待と尊敬と少しの恐怖と、さまざまな感情が混ざったような複雑な眼差しを向けられながら、俺は前線の街を出て魔物の森に向かった。するとすぐに魔物の森が見えてくる。これは相当近づかれてるね……

「ファブリス、騎士達が戦ってるから俺達は中から駆逐していこうか」
『了解した。とりあえず中に入れば良いか？』
「うん。数百メートルぐらい入ってくれる？」
『相分かった』

魔力は満タンでしっかり寝たから体力も回復している。ガンガン魔植物を倒していこう！

352、使徒と神獣

魔物の森の外縁部から数百メートル内側に入ったところで、俺とファブリスは立ち止まっていた。

『この辺で良いか？』

「うん、ありがとう。じゃあとにかく魔植物を一つ残らず倒していこうか。方法としてはファブリスが爪の攻撃で切り倒した魔植物を俺がアイテムボックスに収納していく。そして根の部分は俺が土魔法で掘り返して、それも全部アイテムボックスに収納していくよ」

『相分かった。では行くぞ』

そこからはとにかく魔力と体力が尽きるまで魔植物をひたすらに切り倒した。やっぱり植物を倒すほうが難易度が高かったので、俺もバリアの剣で植物を端から切り倒していく。

しかしウォーターウッドは切り倒すと辺りが水浸しになるほどに水が撒き散らされるし、アイアンフラワーは素手で触ってしまえば指を落とすし、破裂したフラワーボムの種が弾丸のように飛んでくるし。バリアがあるから危険はないんだけど、思い通りに作業が進まないのも事実だ。

魔物の森の奥を目指してた時の方が、厄介なやつは全て避けていたから楽だったかもしれない。これからは全て駆逐しないといけないから大変だな……

『主人、この辺りも全て倒したからアイテムボックスに入れてくれ』

「了解。それにしても本当にキリがないね。これは二人だけでやってても魔物の森の完全駆逐は厳しそうだよ」

『やはり人手が足りんな』

やっぱり人海戦術が一番だ。俺達はこうしてやばいところを手助けしつつ、基本は騎士達の働きにかかってる気がする。

「この辺りに魔物っている？」

『いや、この辺りは弱い魔物しかいなかったのか、我が来てからすぐに森の奥へ逃げて行ったぞ』

「やっぱりそうなんだ」

それならファブリスが魔物の森の外縁部を歩いてるだけでも手助けになりそうだ。魔物が現れないとなったら、騎士達も魔植物の駆除に力を割けるだろうし。

「魔物達ってファブリスがいなくなったらまたすぐここに来るかな？」

『いや、魔物とは強者に対して臆病なのだ。この場所にはしばらくの間、ほとんどの魔物は寄ってこないだろうな』

「それって何日ぐらい？」

『正確には分からんが……十日ぐらいか？』

十日か……それだけの期間魔物が寄って来ないのは凄いけど、全ての場所でその効果を生み出すとなればファブリスが忙しすぎるよね。

でも魔物の森に来た時は、外縁部を全部回るのもありかもしれない。とりあえず今回は到着までほとんど時間がかかってないし、帰る前にこの国と接する場所は全て回ってもらおうかな。

「ファブリス、王都に帰る前に魔物の森とラースラシア王国が接する部分を、できる限り回りたいんだけど良い？　そうすればしばら

く魔物が寄って来なくて、騎士達の作業も捗ると思うんだ」
『ふむ……確かにそうであるな。しかしそれならば我だけで良いぞ？　主人を乗せぬ方が圧倒的に早く走れる』

……確かにずっと一緒に行動しなきゃいけないわけじゃないよね。何故か俺も一緒に行く前提で考えてたよ。
全力で森の中を駆け抜けるファブリスに乗ってるのはちょっと、いやかなり厳しいだろうし、俺はどこかの街に置いてもらった方が良いかも。

「それなら次の街に俺を置いて、ファブリスは走ってきてくれる？」
『了解した。主人はゆっくり待っててくれ』
「ありがとう。お礼に美味しいご飯とスイーツを準備しておくよ」
『それは本当か！？　それなら全力で走って来る！』

ファブリスはお礼の内容を聞いて、今すぐに駆け抜けていきそうなほどテンションが上がり、さっきより倍の魔植物を一度で切り倒している。
美味しいもので釣るのはやり方を間違えたら大変そうだ……気をつけよう。

それからはやる気マックスになったファブリスのおかげで、数百メートルの範囲にある魔植物を全て駆逐することに成功した。本当はもっと早くに終わらせる予定だったんだけど、結構な時間がかかっちゃったな。もうお昼もすぎている。
魔物の森の中から外縁部に向かって魔植物を倒して行ったので、最後まで倒し切ると騎士達がたくさん常駐している場所に出た。急に数百メートルにも渡って開けた視界に、騎士達は唖然としている

ようだ。

「ジャパーニス大公様！」

唖然としていた騎士達の中で上の立場らしき人が、はっと我に返って俺の下に駆け寄ってきてくれたので、俺はファブリスから降りて同じ目線に立つ。

「あ、あの、これは一体……？」

「私とファブリスで魔植物を駆逐しました。これで前線の街が飲み込まれる心配は減ったでしょうか？」

「は、はい。それはもちろん」

騎士の人はまだ状況が理解しきれていないようだ。まあそうだよね、突然目の前にあった魔物の森が消え去ったら驚くのも無理はない。

「では騎士の方々を移動していただけますか？　せっかく魔物の森を押し返しても、放っておくとまたすぐに広がってしまいますから」

俺のその言葉に完全に我に返ったのか、騎士の方はビシッと敬礼をしてくれた。

「かしこまりましたっ！　この度のご助力、心より感謝いたします。後は我々騎士にお任せください！」

「よろしくお願いします」

「はっ、お前達、移動の準備を今すぐにだ！」

騎士達が現状をとりあえず飲み込んで移動の準備を始めたところで、俺はファブリスの上に戻った。

「じゃあファブリス、次の街に行こうか。次はあっちの方向。そんなに遠くないからすぐに着くと思うよ」
『分かった。では行くぞ』

そうして俺達はまた場所を移動して魔植物を倒しまくり、さすがに俺の魔力がそろそろ尽きるという頃にとりあえずの仕事を終えて前線の街に戻った。
この前線の街は元々小さな村だったようで、騎士達の詰所の他にはいくつか小さな木造家屋がある程度だ。その小さな家が食堂などの役割を果たしているらしい。

「ジャパーニス大公様、ご助力感謝いたします」
「これが私の仕事ですから。それで一つお願いがあるのですが……私を一晩泊めてもらうことってできますか？」

前線の街に戻って例によって上官の方が出てきてくれたので、これ幸いと一晩の宿をお願いしてみる。するとその騎士の方は途端に瞳を輝かせた。

「ジャパーニス大公様にお泊まりいただけるなど光栄の極み！　こちらからお願いしたいほどでございます。今すぐに部屋を準備させますのでどうぞこちらへ。神獣様はいかがなされますか？　もちろんお部屋をご準備できますが……」
「ファブリスはこれから予定があるので私だけで大丈夫です。ではよろしくお願いします」

ファブリスには魔物の森に向かってもらい、俺は騎士の方に付いて建物の中に案内された。中は実用一辺倒の作りで煌びやかさは一切ない。しかしまだ新しい建物だからか綺麗で居心地は良い。

「何もないところで申し訳ございません」

応接室というか……騎士達の休憩所のような場所に案内されソファーを勧められた。そして座ったと同時にお茶が用意される。

思った以上の高待遇だな。アレクシス様が使徒の凄さを公布してくれて、さらに魔物の森への遠征が成功したことでより好印象になってるんだろう。今は排除しようっていうよりも、できるだけ気に入られようって方向に雰囲気がシフトしたのかも。

それならこれからはやりやすくて良い。

「あの、部屋の準備できたよ？」

ここまで案内してくれた騎士の方と雑談をしながら待機していると、部屋のドアが開いて俺よりも年下の男の子がそう声をかけてくれた。

その声を聞いて俺がお礼を口にしようとした瞬間、騎士の方が素早く立ち上がって男の子の口を塞ぐ。そして顔を真っ青にして一緒に跪いた。

353、使徒の印象

「ご無礼を申し訳ございません。この子は平民の子で礼儀等分からないもので……ご容赦いただければと」
「いえ、私は気にしないので大丈夫ですよ。その子が苦しそうなので口を離してあげてください」

騎士の方が手の力を緩めると、男の子は必死に騎士の腕の中から逃れた。

「ぷはぁっ、ちょっとおっちゃん、苦しいじゃんか！」
「お前っ、このお方は大公様なんだ。ちょっと大人しくしてろ！」
「大公様って誰だ？」
「貴族様だ！」
「貴族様って……おっちゃんもじゃないか？」
「俺はしがない男爵家の生まれだがな、あのお方は大公様だ。王族の方々の次に偉いんだ。それにあのお方は使徒様だぞ！」

男の子とここまで俺を案内してくれた騎士の方が言い争いを始めてしまった。でも俺はその様子を見ていて思わず顔が緩む。
この騎士の方は良い人だ。平民の男の子でここにいるってことは、多分何かしらの理由で親がいなくてここで雇われてるんだろうけど、その子を虐げてるんじゃなくて対等に関係性を構築してるってことだよね。

「使徒様って……あの皆が話してる凄い人か？」
「そうだ。あの使徒様だ」
「マジかよ！！　それすげぇじゃん！！」

男の子は俺が使徒様だということを認識すると、途端に瞳を輝かせて俺の下に駆け寄ってきた。そしてキラキラした瞳で見上げられる。

騎士の方は一瞬で男の子に逃げられて顔を青くしている様子だ。

「なあ使徒様！　すげぇ魔法使えるんだよな！　それに誰よりも強いって聞いたぞ！」

「魔法は使えるよ。見てみたい？」

「うん！」

「じゃあまずは火魔法から」

俺のことを尊敬の眼差しで見上げてくれる男の子の存在が嬉しくて、俺は気分良く全ての属性魔法を使って見せた。しかし魔力がそこまで残ってないので簡単なやつを少しずつだけど。

それでも男の子には十分だったらしい。

「使徒様凄いな！」

「ありがとね」

素直な賞賛に顔が緩んでしまう。恐れられて敬われるんじゃなくて、こういう賞賛の方が何倍も嬉しいよね。

「あ、あの、申し訳ございません！　使徒様のお力をこんなことに使わせるなど……」

俺の魔法に魅入っていた騎士の方はやっと我に返ったのか、土下座をする勢いで跪いて深く頭を下げてきた。

「気にしないでください。別に大丈夫ですから。……俺は身分とか

そういうの気にしないし、このぐらいならいつでも見せるよ」

俺の態度も緩めた方が騎士の方が緊張しないのかなと思って、途中から砕けた感じで話してみた。すると騎士の方の強張った雰囲気が少し和らぐ。

「なあなあ、もっと見せてくれよ。俺も使徒様みたいに魔法が使えるようになるかな！？」

「見せてあげたいんだけど、実はさっきまで魔物の森にいたから魔力があんまりないんだ。明日ならいくらでも見せるよ」

「本当か！？」

「うん。だから今日は部屋に案内してくれる？」

「分かった！」

そうして俺はやっと部屋に案内してもらうことができ、夕食は宿泊所の中にある食堂で緊張気味の騎士の方々と一緒にとり、その日は早めに眠りについた。

――そして次の日の朝。まだファブリスは帰ってきてないので、俺は昨日の約束を果たすために村の外れにある騎士達の訓練場に来ていた。訓練場には昨日の男の子だけじゃなくて、今の時間が休憩時間の人と宿泊所勤務の人がたくさん集まっている。

「じゃあ何の魔法を見せてほしい？」

昨日の男の子にそう聞くと、男の子は眩しいぐらいの笑顔で「転移！」と叫んだ。

「転移の魔法なんて知ってるんだ」

「皆が言ってるよ、使徒様は転移って魔法で遠くに一瞬で行けるって！」

俺のことはかなり広まってるんだな。騎士達が王都と魔物の森の前線を行ったり来たりしてるから、それでより広まるのが早いのかも。

「じゃあ転移を見せるね。あ、それよりも一緒に転移してみる？」
「え、良いの！？」
「もちろん」
「じゃあしてみたい！」
「分かった。俺の手をしっかりと握っててね」
「う、うん」

男の子はちょっとだけ怖くなったのか、恐る恐る俺の手に自分の手を乗せた。そしてぎゅっと強く握り締めて来る。

どこに転移するか……まずは怖くないように地面の上が良いかな。訓練場の向こう側に転移しよう。

そう決めて男の子と一緒に転移をすると……男の子は一瞬の出来事に驚くよりも呆然としている。

「転移してみたけどどう？」
「さっきまで俺達がいたのって……あそこ？」
「うん。あそこからここに転移してきたんだ」
「す、す、すげぇ！！　マジで凄い！」

転移したという事実を認識した途端、男の子は大はしゃぎだ。ここまで凄いって言われると素直に嬉しい。顔がにやけちゃうほど嬉しい。最近は転移したぐらいじゃ何とも思われなくなってきてるか

ら……

「じゃあ今度は建物の上に転移するから暴れないでね」

「え、建物の上……？」

男の子がそう呟いた時には、既に俺達は宿泊所の屋根の上にいた。訓練場からたくさんの騎士が俺達を見上げている。

「え、ここって……」

「簡易宿泊所の屋根の上だよ」

俺のその言葉に男の子は恐る恐る下を向いて、今いる場所を確認した途端にガシッと俺の腕を掴んだ。

「し、使徒様、落ちないか？　これ落ちたらやばいって」

「落ちないから大丈夫だよ。それに万が一落ちても転移で安全に着地できるし」

「そうか……」

「ほら、遠くを見てみなよ。魔物の森が見えるよ。反対側には長閑な自然も」

こうして遠くから眺めるだけでも、魔物の森の異質さが分かる。明らかにこの世界には馴染んでいない雰囲気だ。早くどこを見ても長閑な景色になるように頑張らないと。

「うわぁ……凄い！」

男の子は恐る恐る顔を上げると、その景色の雄大さに感嘆の声をあげた。見晴らしの良い景色に感動して怖さは忘れたみたいだ。

日本にいる時は高いところって苦手でしかなかったんだけど、こ

の世界に来てからは結構好きなんだよね。一面に広がる自然の景色が凄く綺麗だし、地面よりも強めの風が頬を撫でるのが気持ちいい。

それから訓練場に戻って他にも色々と魔法を見せていたら、ファブリスが戻ってきた。

『主人、最速で戻ってきたぞっ！』
「ファブリスお疲れ様」

少し疲れた様子を見せたファブリスがドヤ顔でそう報告して来るのが可愛くて、俺は思わずファブリスの首元を撫でた。届く範囲だから首というよりも足に近いけど。
するとファブリスは気持ちよさそうに目を細め、首を下げてくれる。……このどんどん心を許して懐いていく感じ、癖になりそう！
ファブリスが可愛い！

「何か飲む？」
『飲み物よりも食べ物が良いぞ』
「え、もう今すぐ食べられるの？」
『もちろんだ』

全力で走ってきてすぐに食べられるって……さすが神獣だ。それならご褒美にお肉とスイーツをあげよう。

「じゃあ準備するよ。あっ、皆さんも一緒に食べますか？」

ファブリスの登場に固まっている騎士の方々と男の子にそう問いかけると、男の子がコクンと頷いてくれたので皆の分も準備することにした。アイテムボックスからテーブルをいくつか取り出して等

間隔に並べ、その上にいろんな食べ物を並べていく。
ファブリスの分はテーブルではなく地面に布を敷き、そこに綺麗に並べた。

「はいどうぞ。ステーキと牛肉の煮込みと串焼きとケーキ各種」
『主人！　これを全部食べても良いのか！？』

ファブリスは尻尾をぶんぶん振り回しながらキラキラした瞳でそう叫ぶ。ファブリスもどんどん威厳が無くなってる感じがするのは気のせいかな……

「もちろんだよ。お仕事お疲れ様」
『主人、感謝するぞ！』

ファブリスは夢中で食事を始めた。ケーキからじゃなくてお肉から食べてるところを見ると、好きなものは最後まで取っておくタイプなのかもしれない。

「皆さんもぜひ食べてください」

急に現れた大量の料理を前に呆然としていた騎士達だったけど、俺のその言葉に一人が手を伸ばすと、そこからは遠慮なく皆が食事を楽しんでくれた。男の子もお腹いっぱい食べられて幸せそうな顔をしてたので俺も満足だ。

そうして前線の街にいる騎士の方々と友好を深め、俺は帰路についた。

354、チョコレートの作り方

前線の街を出て王都に向かってファブリスに揺られていると、突然ミシュリーヌ様の声が頭に響いてきた。アイテムボックスから神物である本を取り出すと、声が鮮明に聞こえてくる。

「レオン、今大丈夫かしら？」
「ミシュリーヌ様、お久しぶりです。今はちょうど暇なので大丈夫ですよ」
「良かったわ！　それなら神界に来ない？　この前シェリフィーに頼んでた二冊目の本が届いたのよ」
「え、本当ですか！？」

二冊目の本は結構悩んだけど、チョコレートの作り方の本にしたのだ。カカオをチョコにするのは相当難易度が高いみたいで、ヨアンが完全に行き詰まってるようだったから。

チョコができたらチョコケーキを食べたいし、ガトーショコラなんかも美味しいよね。それに普通のショートケーキにチョコをトッピングとして使うのもありだろうし。生チョコとかも作れたら人気になると思う。

「神界に来て本を読む？　それならこっちに呼ぶけど」
「もちろん読みます！　ファブリス、ちょっと神界に行ってくるね。あっ、でも神界に行ってる間は下界の時は止まるらしいから、一瞬で戻ってくるけど」
『そうなのか、了解した』
「じゃあ行ってくるね。ミシュリーヌ様、お願いします」

『分かったわ！』

ミシュリーヌ様のその声を聞いたと思った瞬間、瞬きほどの時間で俺は神界にいた。本当に一瞬の移動でいつも驚く。

「レオンいらっしゃい。これがシェリフィーが持ってきてくれた本よ！」

ミシュリーヌ様は俺が姿を現した瞬間、本を手に持ち俺のところまで一瞬で飛んできた。やっぱりスイーツが関係してると動きのキレが違うね。

「ありがとうございます。今回もメモしたいので、紙とペンをお願いしても良いですか？」

「もちろんよ」

ミシュリーヌ様が軽く手を振ると机の上に紙とペンが準備されたので、俺は本を受け取りソファーに向かった。するとミシュリーヌ様も俺の向かいに座って、期待の眼差しで一心に見詰めてくる。

そんなに見詰められるとやりづらいんだけど……まあ良いか。気にしないようにしよう。ミシュリーヌ様の視線から逃れるように本に視線を落とし、早速最初のページに目を通した。

カカオをチョコにするには……、まずはカカオの実を収穫して、カカオ豆を果肉と一緒に取り出し木箱に入れて発酵させるらしい。カカオって発酵食品だったんだね……これはヨアンが辿り着けるわけないよ。

発酵は一週間程度放置しておくだけで良くて、果肉は発酵の過程で液状化して消えるそうだ。そしてその後に、発酵させたカカオ豆を天日で乾燥させる。ここまでやればとりあえずカカオにはなるら

しい。

まさかの衝撃の事実、あのでかい実はまだカカオじゃなかったらしい。……この工程は何十年も使い道を研究するとか偶然発見できたとか、そうじゃないと編み出せないよね。本当に本を貰えて良かった。

「レオンどう？　チョコレートはできそうなの??」

ミシュリーヌ様が待ちきれないというように、ずいっと身を乗り出して聞いてくる。

「ミシュリーヌ様、まだ本を読み出して数分しか経ってませんよ」

「そ、そうだったわね」

俺はページをめくって次の工程も確認していく。次の工程は、焙煎みたいだ。カカオって焙煎してたんだね……

焙煎する時間や温度によって味も風味も変わるらしい。ここはヨアンに試行錯誤してもらうしかない部分だろう。

焙煎した後はカカオ豆を粗く砕いて殻などを取り除き、カカオニブを取り出す。そしてこのカカオニブをすり潰すとペースト状になり、それをカカオマスと呼ぶらしい。

うん、カカオをチョコレートにするのってめちゃくちゃ大変で面倒くさいってことが分かった。これは自力で辿り着くのは無理だよ、ヨアンごめん。

さらにそのカカオマスから脂肪分であるココアバターが取り出せて、ココアバターを取り出して残ったものをココアケーキと呼び、

そのココアケーキを粉砕したものがココアパウダーになるみたいだ。もう呪文だ、どんどん理解不能になってきた。
そしてチョコを作るには……カカオマスにココアバターや砂糖、乳製品などを混ぜれば良いらしい。ココアバターってカカオマスから分離させたやつだよね？　それを分離させる前のカカオマスに混ぜるの？

ダメだ、意味がわからない。とりあえず俺が理解した範囲でヨアンにやってもらって、上手くいかなかったらもう一回読み返そう。後はヨアンの試行錯誤に頼るしかないかな。それにこの世界のカカオと日本のものは全く同じではないのだろうから、本に頼りすぎるのも良くないよね。

俺はそうやって言い訳しつつ、また次のページを読み込んでいく。カカオをより美味しくするためには……、材料をより細かくしたり長時間練ったりすることが必要らしい。
これはヨアンだけだと体力的に辛いかもしれない。身体強化魔法が使える人をヨアンの助手として雇った方が良いかな。いや、いっそのことチョコレート製造を大公家で行う事業にしちゃえば良いのかも。その部門に体力に自信のある人を雇うとか。

とりあえずヨアンにチョコの作り方を教えて、その上で色々と相談してみよう。これからチョコレートを売り出すのならカカオも大量に輸入しないとだし、そこも大公家として動かないとだよね。チョコってそれだけで専門店が作れるほどのポテンシャルがあるスイーツだし、お金をかけても損はないだろう。

そこまで考えて工程を簡潔にメモしたところで、俺はキラキラした瞳で俺のことをずっと見つめているミシュリーヌ様の方に目を向けた。

「ミシュリーヌ様、そんなに見られてたら居心地が悪いです」
「あっ、そ、そうよね。ごめんなさい。でも気になっちゃうのよ！
それでチョコはできそうなの？」
「はい。難易度は高いですがチョコに近いものはできるかと。どこまで美味しくできるのかはまだ分かりません。ただこの世界には魔法がありますから、なんとかなると思います」

すり潰したり練ったりするのが大変なら、どうにか魔法具で代用できないか考えても良い。もし魔法具を作るのならマルセルさんにも協力してもらいたいな。

「本当！？」
「まだ正確なことは言えませんが」
「それでも良いわ！　チョコができれば洋菓子はほとんど作れるようになるじゃない。……後は和菓子だけよ」

和菓子か……難しいんだよね。とりあえず餡子作りから着手するのはありかもしれないけど、餡子が出来たところでそれ以外の材料が足りないのだ。やっぱりまずは米を手に入れてからかな。
魔物の森から持ち帰った稲は大公家の屋敷の畑に植えてもらい、早速庭師に世話をしてもらっている。ちゃんと根付いたみたいだからとりあえず様子見をしているところだ。季節に関係なく、さらに水田を作る必要もなく育つのだから本当に凄い植物だよね。

「和菓子は米の量産体制が整ってからだと思います。米から作られた粉がないとできないものが多いので」
「それもそうだけど……そうだわ！　あんぱんは？」

確かにあんぱんは餡子だけで作れるのか……前に見張りをする時

にあんぱんが欲しいって思ったけど、最近は他のスイーツがあるからその気持ちを忘れてた。

「では餡子だけは先に作ってもらいます。そしてあんぱんも作ってみますね」

「レオンありがと〜！」

「でもヨアンに無理はさせられないので、ヨアンに時間がある時になりますよ」

「それは仕方がないわ。待ってるわね！」

ミシュリーヌ様はキラキラの瞳で大きく頷いてくれた。本当にスイーツのこととなると、テンションがいつもの何倍も高くなるよね。

「そうだ、ミシュリーヌ様。回復の日に祈りを聞くのはどうでしたか？」

「そう、この前やったわよ。これが案外楽しかったのよね。皆いろんな祈りをしてたわよ〜」

「誰かの祈りを叶えたのですか？」

「それはまだね。これは叶えてあげたい！　っていうのがなかったのよ。それに私もなんでもできるわけじゃないでしょ？」

「確かにそうですよね。ではこれからは毎週よろしくお願いします。……そういえば、最近神力はどうですか？」

俺のその質問にミシュリーヌ様は得意げな表情を浮かべる。

「ふふっ、それが凄いのよ。最近はどんどん神力が増えてるわ。前の数倍は一日で回復するようになったの。確実に信仰心が増えてるからね！」

遂に今までの頑張りが実を結んできたのか。努力の方向性は間違

えてないみたいで良かった。これからもこの方向でミシュリーヌ様をさりげなくアピールしていこう。いや、別にさりげなくはないか。

「上手くいってる時こそ気を引き締めて頑張りましょう。とりあえず、神力があるからといって使いすぎないでくださいね」

「分かってるわ。ちゃんと使いたいのを我慢してるのよ」

ミシュリーヌ様は唇を尖らせて拗ねているけれど、一応ちゃんと神力は貯めているようだ。これならこの先何かがあっても少しは安心かな。

「これからもその調子でお願いします。……そのうちこの世界は平和で、さらにミシュリーヌ様が望む文化が発展していくと思います」

「……レオンのおかげね。ありがと」

ミシュリーヌ様が素直にお礼を言うなんて珍しい……そう思って顔を覗き込んでみると、いつもより顔が赤くなっていた。

「ちょ、ちょっと、顔を覗き込むなんて失礼よ！」

「ふふっ、すみません。では俺はこの辺で下界に戻ります。このメモは後で読んでもらうので保管しておいてください」

「分かったわ。じゃあチョコレートをよろしくね」

「はい。頑張ります」

そう話してミシュリーヌ様に笑いかけたところで、俺はファブリスの背中の上に戻ってきていた。

「ふぅ、ファブリスただいま」

『……本当に一瞬なのだな。変な感じだ。用事は済んだのか？』

「うん。これでもっと美味しいケーキが作れるかも」

『それは本当か！？』
「これからヨアンに色々と試行錯誤してもらってだけどね」
『そうか。楽しみにしているぞ！』

それからはもっと美味しいケーキという言葉にはしゃいだファブリスによって、かなりの速度で王都まで運ばれた。やっぱりスイーツの話は慎重にしないとダメだな。

355、シュガニス開店！

王都に帰ってきたのが夜も更けた頃で、俺は転移で自室に入りピュリフィケイションで体を綺麗にして、そのまま眠りに落ちた。

「え……？　だ、誰だ！？」

そして次の日の朝、知らない男の人の叫び声で目が覚める。もうるさいな……俺はまだ眠いのに。

「どうかしましたか？　大声を出すのは従者として失格です」

次にロジェのそんな声が聞こえてきた。

「べ、ベッドに誰かがいるみたいで……頭だけ見えているのですが」

「……それは、本当ですか？」

もしかして昨日転移でここに帰ったから、不審者が入り込んでると思われてる？　俺はさすがにこの流れに目が覚めて、なんとか気力で起き上がった。そして声がする方を振り返る。

「レオン様、おはようございます。朝から騒がしくしてしまい申し訳ございません。何時ごろお帰りになられたのですか？」

ロジェは起き上がった俺に全く動じることなく、いつものように声をかけてくれた。

「ロジェおはよう。昨日の夜中に帰ってきたから、ピュリフィケイ

ションで体を綺麗にしてそのまま寝たんだ。この部屋には転移で入ったよ」
「そうでしたか。これからはどんな時間でも私を呼んでくだされば
すぐに参りますので」
「うん、ありがと。でも寝てるのを起こすのは悪いから。それでそっちの人は……？」

ロジェの隣には、ロジェよりも少し年下かなって感じの男の人が一人いる。使用人の服装をしているけど見たことがない顔だ。

「ご挨拶が遅くなり申し訳ございません。それからレオン様だと気付けずに騒いでしまい大変申し訳ございませんでした。レオン様の従者として働かせていただく、エミールと申します」

ああ、新しい従者が決まったのか！　そういえば引っ越す前に従者だけは先に送って欲しいって言ったよね。これでロジェが楽になるな。

「俺はレオン、よろしくね。新しい従者が決まったんだ」
「はい。エミールの他に従者がもう一人、それから新しい護衛が二人おります。また後で紹介させていただきます」
「うん。よろしくね。ふわぁ……眠い」
「もう一度眠られますか？」
「ううん。今日もやりたいことがあるから起きるよ。朝ご飯の準備をお願いしても良い？」
「かしこまりました。ではエミール、朝食の準備を」

朝食の準備にはエミールが行き、ロジェは俺が身支度を整える手伝いをしてくれるようだ。やっぱり従者が何人もいると便利だね。

「本日はどのようなご予定かお聞きしてもよろしいでしょうか？」
「うん。今日はシュガニスが開店する日なんだ。だから俺もその場に立ち会いたくて」
「かしこまりました。ではそれに相応しい服装にいたしましょう」

ロジェが嬉々として豪華な服装を漁り始めた。いや、それは流石に派手すぎない？　もうちょっと落ち着いたやつでも……

結局はシンプルな服装に高い装飾品を品よくつけて、落ち着いた雰囲気ながらも高貴さを醸し出す感じで決まった。ロジェが満足そうなので問題はないだろう。
それから朝食を食べて他の従者と護衛も紹介してもらい、シュガニスに向かった。

シュガニスに着いて裏口から中に入ると、皆がとても忙しそうに、しかし優雅に働いていた。開店の時間まで後一時間を切っている。既に準備は終わっていて最終確認をしているところらしい。

「食器類の最終確認終わりました。全て傷や汚れなどはありませんでした」
「カトラリーもくすみなどはなく綺麗でした」
「分かりました。では次はカフェスペースの最終確認に参りましょう。塵一つあってはなりません」

給仕担当は忙しくお店全体のチェックをしているみたいだ。厨房では料理人達が予約分は既に作り終え、これからカフェで売れるだろうスイーツを作っていた。
警備の皆はどうしたんだろう……？　そう思って辺りを見回していると、ロニーが俺に気づいて駆け寄ってきてくれる。

「レオン、間に合ったんだね！」
「ロニーおはよう。ファブリスのおかげで間に合ったよ」
「良かった。もう準備はほとんど完了してるんだ。後は開店時間を待つだけだよ。実は開店前からお店の前にお客さんが集まり始めて、急遽整理券を配ったんだ。道路を混乱させちゃいそうだったから」
「そんなにお客さんが来てくれてるんだ」
「うん！　嬉しいよね」

ロニーはそう言いながら心からの笑顔を浮かべている。その笑顔に釣られて俺も思わず顔が緩む。やっぱりたくさんの人に興味を持ってもらえるって嬉しいよね。

「あ、アルテュル。久しぶり」

ちょうどアルテュルが裏にやってきたので声をかけると、アルテュルはしっかりと頭を下げてくれた。

「ついに開店だね。これからは予約だけの時よりもトラブルが起きて大変だと思うけど、アルテュルなら上手くお店を回せると信じてるよ」
「ありがとうございます。ご期待に応えられるよう最善を尽くします」

それからは邪魔にならないように休憩室で待機をして、開店時間になったところで俺もカウンターに顔を出した。するとすぐに最初のお客さんが入ってくる。

「わぁ、とても素敵な店内ね」
「いらっしゃいませ。シュガニスへの御来店、ありがとうございます。スイーツを持ち帰られますか？　それともカフェでお召し上がりになりますか？」
「カフェでいただくわ」
「かしこまりました。ではお席にご案内させていただきます」

お客さんが店内を一通り見回した最適なタイミングで、給仕担当が声をかけて誘導していく。

「こちらがメニューでございます」
「ありがとう」

そうこうしているうちに、次のお客さんが入ってきた。次のお客さんは品の良い年配の夫妻だ。その二人も給仕によって席に案内されていく。
うん、凄く良い感じだ。皆も落ち着いて接客できてるし、店内の雰囲気と接客にとりあえず満足していただけてるみたい。

俺はそこまでを確認すると一度裏に下がった。そしてロニーと休憩室に入る。

「ロニー、凄く良い感じだったね！」
「うん！　とりあえず最初はうまくいったかな。これからはお持ち帰りの人も予約の人も来るだろうから、そこで混乱が起きなければ大丈夫だと思う」
「そうだね。後はカフェスペースが満席になった時も大変にはなるけど」
「そうなんだよね。でもその辺も色々と対策は考えてあるから大丈夫だと思う。……ついにシュガニスが開店できて嬉しいよ」

ロニーは達成感を感じているのか、清々しい笑顔を浮かべている。お店をやろうって決めてから約半年間、ここまで相当頑張ったからね。俺もなんだか感慨深い。

「色々大変だったよね……上手くいきそうで良かった。でもここで終わりじゃなくて、ここから始まりだよ」
「これからはもっとたくさんのお店をやるんだよね」
「うん。楽しみだよね」
「これからは大公家の文官としてその手伝いをするよ。これからもよろしくね」
「こちらこそよろしく」

俺とロニーは握手をしてお互いに笑い合った。これからもロニーと一緒に働けることが嬉しいし頼もしい。ロニーとなら凄いことが成し遂げられそうな気がする。

それからは厨房や店内の様子をしばらく確認して、問題なくお店が開店できたと安心できたところで屋敷に戻った。でもこれからが本番だ。営業していくうちに様々な問題が生まれるのだろうし、頻繁にお店を訪れて様子を確認しようと思う。アルテュルのことも気になるし。

今度は俺もお客さんとしてお店を訪れるのも良いかもしれない。その時はマルティーヌを誘おうかな。一緒に行けたら絶対に楽しいと思う。
俺はマルティーヌと一緒にシュガニスでスイーツを楽しんでいるところを想像して、顔を緩めながら馬車に揺られた。

３５５、シュガニス開店！（後書き）

書籍二巻についての情報です
６月３０日に発売、既に表紙のイラストも公開されています。私のＴｗｉｔｔｅｒに載っていますので、見に行っていただけたら嬉しいです！
書籍二巻にはレオン達がお祭りを楽しむ話や、シェリフィー様の神界でのお話などオリジナルストーリーが盛りだくさんです。さらに番外編も収録されていて、マルティーヌ視点で王女様の一日を覗き見ることができます。

気になる方はぜひお手に取っていただけたら嬉しいです。既に予約等も始まっています！
まだ一巻も読んでないよという方は、今なら二巻同時に楽しめるのでぜひ（≧∇≦）

活動報告にも情報を載せてありますので、そちらもご覧いただけたらと思います。よろしくお願いいたします！

蒼井美紗

356、屋敷の完成

今日はジャパーニス大公家にとって大切な日。そう、ついに屋敷が完成したのだ！

「お兄ちゃん！　新しいお家に行くんだよね！」
「そうだよ。すっごく広くて大きいから驚くよ」
「楽しみ！」

今は家族皆と馬車に乗って、タウンゼント公爵家から移動しているところだ。公爵家の皆さんには今までのお礼をしっかりと伝えて屋敷を出た。一年間暮らした屋敷だから少し寂しかったけど、リシャール様がいつでも来て良いと言ってくれたから笑顔で屋敷を後にすることができた。

馬車に揺られることほんの数分、すぐにジャパーニス大公家の屋敷に到着する。タウンゼント公爵家とはかなり近い場所にあるのだ。立派な新品の門には門番が二人立っていて、俺達を迎え入れてくれた。

敷地内に入るとまずは右側に門番の詰所があり、目の前には馬車が余裕で通れるほどの整備された道が、屋敷までずっと続いているようだ。その道の両脇には綺麗に整備された庭が目に楽しい。

その庭には馬車は通れないけれど、数人が横に並んで歩けるほどの散歩道が整備されているのが見える。さらに遠くには東家も見えるな。

そんな庭を楽しみながら進んでいくと、屋敷がやっと見えてきた。屋敷の前には美しい噴水が設置されていて、その周りにはぐるりと

馬車が通れるような道が整備されている。
馬車は噴水の横を通ってゆっくりと進むと、屋敷の前にぴたりと止まった。
「お兄ちゃん……なんか、凄いね」
マリーが屋敷の大きさと優美さに圧倒されて、逆にはしゃげなくなってるみたいだ。でもその気持ち凄く分かる。ちょっとやりすぎだよ……ここが俺の家だなんて信じられない。
広さはあり得ないほどだし、この噴水だって必要？　って感じだし……高位貴族の屋敷には噴水があることもあるから、まあ、必要なのかな？
庭の植物だって芸術的なほど綺麗に整えられていた。何人の庭師が雇われてるんだろうか……ブラックな職場にならないように、足りないのなら人を増やしても良いって言っておこう。
「じゃあ皆、馬車から降りようか。ここは俺達の家なんだから緊張しなくて良いからね」
「でもレオン、屋敷の前にたくさんの人が並んでるわよ」
「あれって全員使用人、なのかい？」
「お兄ちゃん、人がたくさんだね……」
馬車の窓からチラッと確認すると、総勢何十人、いや三桁いくか？　ってほどの人数がずらっと何列かになって並んでいるのだ。自分の家なのに少し緊張する。
「皆使用人だね、後は兵士もいるかな。でも全員俺が雇ってる人達だから緊張する必要はないよ。あんまり気負いすぎずに行こう？」

俺のその言葉に皆が頷いてくれたところで、俺達は馬車から降りた。すると別の馬車で先に来てくれていた従者や護衛がすぐ側まで来てくれる。馴染みの顔に安心するな。

「旦那様、ご家族様、おかえりなさいませ」

ずらっと並んでいた使用人が完璧に声を揃えて挨拶をしてくれた。そうか、おかえりなさいって言われるんだね。ちょっと嬉しいかも。

「出迎えありがとう。皆の働きには期待してるよ。これからよろしくね」

俺のその言葉に全員が一糸乱れぬ動きで頭を下げる。教育できる期間は二週間ほどしかなかったはずなのに、その期間でここまで仕上げてるのは凄いな。

ロニーとルノーはちゃんといるし……アンヌもいた。エバンも、ヨアンもいるね。全員ちゃんと引っ越せたみたいで良かった。あっ、ニコラもいた。兵士の服装が予想以上に似合っている。やっぱり体格が良いのは羨ましいな……

「アルノル、短い期間でここまで屋敷を整えてくれてありがとう」

俺は執事のアルノルに話しかけた。アルバンさんの息子なだけあって、やっぱり有能だ。

「勿体無いお言葉でございます」

「新しく雇った使用人の紹介を後でよろしくね」

そんな話をしつつ屋敷の中に入る。エントランスは広くて開放的

で、高級感はあるけど嫌味のないほどに洗練されていた。

「うわぁ、すっごく広い！」

マリーがエントランスに入った途端に嬉しそうに声を上げた。そんなマリーの様子を見て顔を顰めてる使用人はいないかと見てみたけれど、誰もがマリーを微笑ましげに見守っているだけだった。アルノル、めっちゃ有能。

「まずは自室に案内してくれる？　少し休んでから屋敷を全部回ってみるよ」

「かしこまりました。こちらです」

アルノルの先導で自室に向かうと、俺の部屋は当初決めていた通り二階に位置していた。家族皆の部屋も二階だ。

「ふわふわだね～。お花も綺麗だね！」

マリーは新しい家にテンションが上がって、淑女教育の内容は全て頭の外に追いやられたみたい。絨毯が敷かれてとても歩きやすい廊下を、あっちへこっちへ駆け回っている。

「じゃあ皆、いったん自分の部屋をそれぞれ確認しようか。従者や護衛の皆も部屋を確認したいだろうし」

「そうね。分かったわ」

「確認したらどうすれば良いんだい？」

「そうだね……三十分後に廊下に集まって、今度は屋敷を案内してもらおうか。それまでは少し休憩で」

俺のその言葉に父さんと母さんが頷いてくれたところで、俺達は

それぞれ自室に入った。マリーもメイドさんに促されて自室に入っていく。

「レオン様どうぞ」
「ありがとう」

部屋の中は予想以上に広かった。公爵家で借りていた客室も広いと思ってたけど、あの部屋よりも一回り以上大きい。それに公爵家の客室では衝立で遮られた同じ部屋の中にベッドがあったけど、この部屋では別で寝室もあるみたいだ。

お風呂はかなり広くて綺麗だし、トイレも無駄に広い空間が広がっている。服や装飾品の収納スペースも沢山あるみたい。後は立派な執務机に、三人掛けのソファーが二つ並ぶ応接セットもある、さらに四人がけのテーブルセットもあるな。

この部屋で何人暮らすんだろうって疑問になるほどの広さだ。でも全て質の良い家具で揃えられていて住み心地は良さそう。雰囲気も派手すぎずに落ち着いていて俺好み。やっぱりアルノルめっちゃ有能。

「レオン様いかがでしょうか？　お気に召さないものなどがございましたら、すぐに変更いたしますのでお申し付けください」
「ううん、凄く素敵な部屋だよ。質は良いけど派手すぎずに落ち着くし、俺が好きなタイプの部屋だね。完璧に整えてくれてありがとう」
「勿体無いお言葉でございます」

アルノルは口元を少しだけ綻ばせて頭を下げた。これからはアルノルともたくさん交流して仲良くなれるように頑張ろう。

「じゃあ俺はソファーで寛いでるから、ロジェ達とローラン達はそれぞれの待機部屋を確認してね」
「かしこまりました」

従者はロジェを中心に、護衛はローランを中心に色々と確認を始めた。そこで俺はアルノルが淹れてくれたお茶を飲んで一息吐く。

アルノルのお茶も美味しい。最近はロジェが淹れてくれたお茶ばかり飲んでたけど、淹れる人が違うと少し味が変わるみたいだ。ロジェのお茶が洗練されたすっきりとしたものだとしたら、アルノルのお茶は少しだけ柔らかさがある感じかな。

「アルノルのお茶も美味しいね」
「レオン様のお口に合ったのでしたら良かったです」
「うん。そうだ、アルノルって今時間ある？」
「もちろんございます」
「じゃあ今の時間で使用人の紹介をしてもらっても良い？　本人は連れて来なくて良いけど、役職と名前と特徴を」

俺のその言葉に、アルノルは数枚の紙束を差し出してくれた。受け取り内容を確認してみると、それは使用人の一覧表だった。しかも役職と名前の他に顔の絵まで描かれている。

357、屋敷の探検

「これは凄いね。ありがとう」

この一覧表があればすぐに顔と名前を覚えられそうだ。普通の貴族は直接関わらない使用人の名前なんて覚えないのかもしれないけど、俺はちゃんと覚えたい。大公家を支えてくれる人達だからね。

「一度に多くの者を雇いましたので、管理する意味でも作成したものでございます」

「俺にとってもありがたいよ。じゃあ一番上の人からどんな使用人か教えてくれる？」

「かしこまりました」

それからはアルノルに、まずは主要な使用人についての話を聞き、顔と名前を一致させる作業に注力した。

それにしても人数が多い……下働きの人達まで全員の名前を覚えるには、相当な時間がかかりそうだ。

「レオン様、そろそろお約束の時間でございます」

ロジェに声をかけられてはっと時計を見ると、皆と廊下で待ち合わせていた時間になっていた。周りには従者と護衛の皆も集まっている。

「声をかけてくれてありがとう。夢中になってて忘れてたよ。じゃあアルノル、屋敷の案内をよろしくね」

「かしこまりました」

急いでソファーから立ち上がり廊下に出ると、ちょうど皆も廊下に出てきたところだった。

「お兄ちゃん、私のお部屋凄く可愛いんだよ！」

「良かったね。気に入った？」

「うん！」

マリーの満面の笑みに俺の顔もついつい緩んでしまう。父さんと母さんも嬉しそうなマリーを微笑ましげに見守っている。

「二人の部屋はどうだった？　問題ない？」

「ええ、とても落ち着く雰囲気で素敵な部屋だったわ」

「父さんの部屋もだよ」

「それなら良かった」

とりあえずそれぞれの自室は完璧かな。皆が満足してくれて一安心だ。

「他の場所も探検に行こうか」

「うん！　まずはどこから行くの？」

「そうだね……やっぱり厨房かな」

俺のその言葉によって、俺達は大人数でずらずらと厨房に向かった。厨房は一階の端にあり、料理人が働く厨房と俺達家族が自由に使える厨房、さらにヨアンがスイーツの研究をする厨房がある。

まず最初にやってきたのは料理人が働く厨房だ。中に入ると料理長を筆頭に、数人の料理人が跪いて待っていた。

「ここが厨房でございます。レオン様の要望通り最新の魔法具を設置してあります。また料理をしやすいようにとのことで、調理台も大きなものを発注いたしました」

新しいのでどこもかしこもピカピカに輝いている。お肉や野菜が台の上に並べられているし、これから昼食を作るところだったのかな。

「皆顔を上げて」

俺のその言葉に、緊張した面持ちの料理人達が顔を上げてくれる。

「初めまして、レオン・ジャパーニスです。これから皆には大公家の料理を作ってもらうことになるけど、よろしくね。早速今日の昼食を楽しみにしてるよ」

「旦那様方のお口に合う料理が作れるよう、精進いたします」

「うん、ありがとう。何か不便なことがあったら遠慮なくアルノルに言ってね。アルノルもよろしくね」

「かしこまりました」

そうして軽く挨拶をして厨房を後にする。次は家族皆で使える厨房だ。

「こちらが皆様専用の厨房でございます」

さっきの厨房よりも屋敷の真ん中辺りにあるのが俺達が使える厨房だった。中に入ると予想以上に広い空間が広がっている。

「あら、とても素敵な部屋ね」

「本当だね。ずっとここに入り浸ってしまいそうだ」

「ここが私達の厨房なの？　すっごく広いね！」

中に入ってまず目に入るのは、とても居心地の良さそうなソファーとテーブルのセット。下には絨毯が敷いてあって、ずっとここで過ごせそうな快適な空間が作られている。

そして左側に目を向けると最新の魔法具を駆使した新しい厨房がある。厨房は広すぎずに、父さんと母さんが二人で料理するのに最適な大きさだ。そして厨房から少し離れたところにはテーブルセットもある。

「このドアは何かしら？」

母さんが部屋の奥にあるドアを開くと、そこはトイレとなっていた。

「トイレまであるのか。便利だね」

「本当ね。一日中ここにいられるわ」

これはあれだ、厨房というよりも日本のマンションの一室みたいだ。俺は厨房にテーブルセットも欲しいなって言っただけなのに、それでここまで整えてくれたアルノルと屋敷の設計士の方々に感謝しないと。

「私このお部屋好き！」

マリーは早速ソファーに座って嬉しそうにそう言った。母さんと父さんも厨房を色々と確認しているようだ。

この部屋は俺達家族の秘密基地って感じがする。あの王都の外れにあった食堂が、少し形を変えてこの屋敷の中に再現されてるよう

な、そんな感じだ。
うん、この部屋凄く良いね。疲れた時はここに来よう。家族皆の避難場所にもなるよね。

「レオン！　こんなに貴重な調味料があるわよ！」
「ロアナ、こっちには一通りの調理器具が揃ってるよ。しかも全て質が良い。鍋もフライパンも歪み一つないよ」
「あ、本当ね！」

母さんと父さんの声に惹かれて厨房に向かうと、戸棚の中に所狭しと調味料が並べられているのが見えた。

「全部二人が自由に使って良いからね。なくなったらいくらでも買えるし」
「ジャン、せっかくだから使わせてもらいましょう。新しい料理が開発できるかもしれないわ」
「そうだね。全く知らない調味料もあるから色々と試してみないと」

二人も公爵家での暮らしを経て、少しは貴族の生活にも慣れてきたみたいだ。前は困惑してばかりだったけど、今は新しい調味料を使えることに前向きな様子だし。

「新しい料理を作れたら食堂の新メニューになるね」
「そうよね！」
「そうだレオン、食堂を再開するのは引越しが終わってからって話だったけど、いつごろ再開できるかな？」

そうなんだよね……いつ再開させるのかはずっと悩んでたんだ。家族皆には護衛がしっかりとついたし貴族の身分を得た。さらに使徒様のことは王都中、国中にまで広がっている。

この状態で皆が危険にさらされることはほとんどないだろう。もう敵対貴族の筆頭だった人達もいないし、今の流れの中では使徒を害するよりも、とにかく使徒を持ち上げて仲良くなって便宜を図ってもらおう。そう考えてる貴族が大半みたいだし。

そうなるといつ再開しても良いかな。あの一瞬だけ皆が暮らした中心街の建物は、人を雇って掃除などは定期的にしてもらっている。だからそこまで再開するのに大変なことはないと思う。

「今はそこまで危険もないし皆の身分もしっかりしてるから、いつから再開しても大丈夫だと思う。二人はいつから再開させたい？」

「そうだね……食堂はジャパーニス大公家の系列店という立場で再開させることになるんだよね？」

「うん。シュガニスと同じように、大公家でやってるお店って感じになるよ。だからできれば名物料理みたいなものがひとつ欲しいんだよね。今までにない新しい料理が」

稲を育て始めたからお米料理を名物にできたら嬉しいけど、まだお米はこれから研究をしないとだし、そんなにすぐ食堂で出せるようにはならないだろう。大量生産も目処は立ってないし。

そうなると今ある材料で名物となる何かが欲しいよね。まだこの世界で作ったことがなくて万人受けしそうなものと言ったら……中華料理とか？

ありかもしれない。前に温泉蒸しを食べて、王都でも流行らせたいなって思ったんだ。中華料理なら蒸し料理もたくさんある印象だし、ピッタリじゃないかな。

肉まんやあんまん、小籠包、焼売とかって確か全部蒸し料理だよね？　この国にある材料でも作れる可能性は高い。あとは蒸し料理

以外にも、餃子とか作れるんじゃないかな。

うわぁ、思い出したら食べたくなってきた。こうなるとラー油と醤油も欲しい！　時間はかかるけど全部開発しようと思えばできるよね。今の俺には強い味方、シェリフィー様からの本があるんだから。

３５８、食堂と探検の続き

「父さん母さん、ミシュリーヌ様からの知識でまだこの国では見たことのない料理があるんだけど、それを開発してみるのはどう？まだ作り方が曖昧なやつが多いから、試行錯誤してもらわないとなんだけど……」

俺のその言葉に母さんと父さんは、途端に瞳を輝かせて詰め寄ってきた。

「そんな料理があるのかい！」

「もちろん開発するわ！　新しい料理の開発なんて楽しそうだもの！」

「どんな料理で、どこまで作り方は分かってるんだい？」

ここまで反応が良いとは思わなかった……でもそうだよね、料理人にとって新しい料理って心躍るよね。

「二人ともちょっと落ち着いて。今は時間がないから、どんな料理かは後でちゃんと説明するよ。とりあえず開発の意思はあるってことで良い？」

「ええ、もちろんよ」

「精一杯頑張るよ」

最近は食堂で働くこともなくて二人の人生にやりがいがなくなってないか心配だったけど、この調子なら大丈夫そうだ。食堂を続けられるようにして本当に良かった……

「じゃあこれから新しいメニュー開発をして、その上で食堂を始められるように色々と準備を進めるね。そうだ、前に少し話したと思うけど、ティノって名前の料理人が新しい料理を開発するのが好きなんだ。その人の力も借りる形にして良い？」
「ええ、もちろんよ。たくさんの人がいた方が良いものができるもの。それにレオンが紹介する人なら問題はないでしょうし」

従業員寮の料理人は別の人を雇えば良いし、ティノには食堂の方で働いてもらうことにしようかな。とりあえず本人の意見を聞いてみよう。もし従業員寮で働き続けたいってことだったら、たまに食堂に出張って形にしても良いし。

「ありがとう、ティノに話をしてみるよ」
「よろしくね」

ジャパーニス大公家としてお店を開くんだから、ロニーとルノーにも話を通さないとだよね。あとは家族皆が毎日食堂で働くのは難しいかもしれないし、他にも従業員を雇わないと。その辺も二人と相談しつつやろう。

「お兄ちゃん、私もまた食堂で働くの？」

ソファーに座って話を聞いていたマリーが立ち上がり、少しだけ不安そうにそう言った。俺はそんなマリーの下に向かい、視線を合わせて問いかける。

「マリーはどうしたい？　マリーが働きたいのなら働けるように環境を整えるし、マリーが他のことをしたいのなら働かなくても良いんだよ」
「……じゃあ、私はお勉強が良い。お勉強楽しいから」

マリーは勉強が好きなのか……だから上達が早かったんだな。まだ幼いからだと思ってたけど、それだけじゃなかったってことだ。

「そっか。じゃあマリーはお勉強を頑張ろうね」

「うん！　でもね……たまには食堂にも行きたいな」

「もちろん、マリーはいつでも食堂に行っていいんだよ。お客さんとして行っても良いし、ちょっと働きたいなと思ったら給仕をするのも構わないよ。でも中心街のお店だから給仕の勉強をしてからになるけどね」

ただマリーは大公家の娘としての教育を受けてるんだから、問題なく給仕ぐらいできるだろう。最近のマリーはたまに昔のようにはしゃいでることもあるけど、基本的には勉強したことが身についてるみたいだし。

「本当？」

「もちろん」

俺の返答を聞いてマリーはとても嬉しそうに顔を綻ばせた。そして随分と大人びた表情を作って貴族の笑みを顔に浮かべる。

「では私はお勉強を頑張ることにいたします。お兄様のように素敵な女性になるのです」

そう言って綺麗なカーテシーをすると、またいつもの表情に戻り無邪気な笑みを浮かべた。

「マ、マリー、今お兄様って言った……？」

「うん！　お兄ちゃんのことはお兄様って呼ぶんでしょ？」

マリーのお兄様呼び、最高すぎる！　なんだろう、お兄ちゃんと呼ばれるのとはまた違った良さがある！

「マリーもう一回、もう一回呼んでみて」

「……お兄様？」

マリーは少し首を傾げながらまた呼んでくれた。うちの妹はやっぱり世界一だ……！

それにこんなにちゃんとした言葉遣いができるようになってるなんて凄い。このままいけば、マリーは王立学校にも入学できるかもしれない。

マリーの意見を尊重するけど、もし少しでも気になってるのなら受験を勧めよう。今後の人生で王立学校を卒業してたら絶対プラスになるし。

「マリー凄いね！　完璧だよ！」

「本当？」

「うん！　もう立派な貴族子女だね。マリーは天才だ」

「えへへ、私頑張ったの！」

そうして俺が兄馬鹿を爆発させてマリーを褒め称えていると、母さんと父さんが俺達の元にやってきてくれた。

「マリー、今までたくさんお手伝いをしてくれてありがとね。母さんはお勉強が苦手だから食堂を頑張るわ。マリーはお勉強を頑張りなさい」

「うん！」

「父さんも勉強は苦手なんだ。今度マリーに教えてもらおうかな」

「教えてあげる！」

マリーは二人にも認められて嬉しそうだ。皆ができる限り好きなことができるように俺も頑張ろう。とりあえずマリーは勉強を、父さんと母さんは食堂だね。

「食堂についてはティノに話をしてみるから、もうちょっと待ってて」

「分かったわ。楽しみにしてるわね」

「うん。近いうちに話を進めるよ。……じゃあここに随分と長居しちゃったけど、屋敷の探検の続きをしようか」

俺のその言葉に皆がハッと何かに気づいたような表情を浮かべる。屋敷を見て回ってる最中だったってこと、絶対忘れてたよね。

「そうね。忘れてたわ」

「この部屋が嬉しくて忘れてたよ」

「私は覚えてたよ。次はヨアンさんのところだよね？」

「そう。マリーは凄いね」

そうして俺達は屋敷の探検を再開した。ヨアンの厨房を確認して応接室やパーティーホール、食堂などを見て周り、次に屋敷の外へやってきた。

「お花がたくさんあって綺麗だね～」

「本当ね。甘い匂いもするわ」

「まだ咲いてないものも多いみたいだし、これからもっと綺麗になりそうだね」

皆と一緒に庭にある散歩道を歩いていく。地面はおしゃれな石畳

が続いていて、周りには綺麗に整えられた草花がたくさんだ。まだ季節的に咲いていないものも多いけど、それでも華やかで目に楽しい。
それからしばらくは庭を楽しみながら進んでいくと、凄くおしゃれな東屋に辿り着いた。ここはお茶会も開けるような作りになっている。

「おしゃれな建物ね」
「お兄ちゃん、ここ何のお家なの？」
「これは東屋って言うんだ。外でお庭を楽しみながらお茶を飲んだり、ご飯を食べたりするんだよ。今度ここでお昼ご飯を食べようか」
「そうなんだ。お外で食べるの楽しいよね！　お肉を焼くんでしょ？」

マリーはバーベキューのことを思い出しているのか、楽しそうに満面の笑みを浮かべる。確かに外で食べるという点は同じだけど……バーベキューと東屋で開かれるお茶会は全く違う。一度お茶会を体験した方が良いかもしれないな。

「今度皆で正装してお茶会をやろうか。マリーはこれからお茶会に参加することがあるかもしれないし、家族から慣れていくのも大切だと思うんだ」
「うん！」

マリーはお茶会がどういうものか分かっていないと思うけど、元気よく頷いてくれた。マリーのメイドさんがこの話を聞いてるし、今度お茶会のことについてマリーに教えてくれるだろう。

それからしばらく皆で庭を見て回り、次に向かったのは兵士詰所

だ。他の使用人は屋敷の中に住んでるけど、兵士だけは別で建物を建ててそこに住んでもらっている。それがこの国では一般的らしい。

「どうぞお入りください」

アルノルがドアを開けてくれて中に入ると、そこには数人の兵士と共にエバンがいた。エバンは元々タウンゼント公爵家の兵士で、さらに男爵家出身の元騎士なので大公家兵士団をまとめる立場に就いてもらった。

「エバン久しぶり」
「レオン様、お久しぶりでございます」
「問題なく引っ越しはできた？　新しい職場はどうかな」
「恙無く引っ越しは終えられました。新しい職場ではやりがいのある仕事を任せていただき、毎日気を引きしてめて職務に当たっております」

エバンは爽やかな笑顔を浮かべてそう言った。うん、特に問題はなさそうだ。エバンがどことなく楽しそうだし。

「新しく雇った兵士の皆はどうかな？　兵士としては初心者ばかりだと思うけど」
「技術的なことはまだまだですが、皆やる気がありしっかりと働いてくれています」
「そっか、それなら良かったよ。じゃあこれから大公家の守りをよろしくね」
「はっ！」

エバンとそんなやりとりをした後に、アルノルとエバンによって兵士詰所の中を案内してもらった。そして俺が面接で雇った兵士の

皆に久しぶりに会って挨拶をされて、皆のエネルギーで俺もやる気に満ち溢れたところで詰所を後にした。

皆が活き活きと働いてくれてるみたいで良かったな。

359、畑と稲の様子

「他にご覧になりたい場所はございますか？」

兵士詰所を出るとアルノルにそう聞かれた。母さんと父さんは普通に付いてきてるけどマリーはちょっと飽きてそうだし、ここで確認してくれたのかな。

「そうだね……畑とファブリスの家は見たいかな。後は最後に執務室にも案内してほしい。皆はどうする、この辺で部屋に戻る？」

俺のその問いかけに母さんと父さんはマリーに目を向けた。マリーは飽きてるのもあるけど、はしゃいで疲れてるみたいだ。

「マリー、疲れたの？」

母さんのその言葉にマリーは素直に頷いた。今日は朝早くから起きてかなりはしゃいでたから仕方ないかな。

「じゃあマリーは部屋に戻ろうか。母さん達はどうする？」

「そうね……母さんも戻ることにするわ。後でマリーと一緒にまた屋敷を見て回れば良いし」

「そうだね。父さんもそうするかな」

「了解。それなら一旦ここで解散にしよう」

俺のその言葉に二人は頷きマリーのところへ向かった。マリーは眠そうに目をこすりながら、母さんと手を繋いでいる。

勉強したから大人びて見えることも多いけど、こういうところを

見るとやっぱりまだ子供だよね。俺はマリーのそんな様子にほっこりとして顔が緩む。

「じゃあ部屋に戻るわね」

「うん。俺はもう少し屋敷を見て回ってから戻るよ。部屋でゆっくりしててね」

「レオンも無理はしないようにね」

皆が屋敷の中に帰っていくのを見送り、俺はアルノルと従者と護衛と共に次は畑に向かった。畑は屋敷の裏側にあるようで、屋敷の周りをぐるっと回るように整備された道を進むとすぐに辿り着いた。

「レオン様のご要望通り畑は広めにとってあります。今はレオン様からお渡しいただいた稲と、各種野菜を育てております」

畑の一角には、ロジェ経由でアルノルに渡してもらった稲がしっかりと植えられていた。予想以上にたくさん生えてるな……しかも大きくない？

「あそこにいるのが畑を担当しております、庭師のジェロムでございます」

アルノルが示した方を見てみると、がっしりとした体型で五十代ぐらいに見える男性がいた。黒髪に少し白髪が混じった短髪で、俺にとってはなんだか落ち着く雰囲気だ。

畑の周りを歩いてジェロムのところに向かうと、稲の様子を観察していたジェロムは俺達に気づいたようだ。

「初めまして。レオンです」

「俺はジェロムだ。よろしく……お願いする」

「ジェロムはまだ敬語や作法を習っている最中でして、申し訳ございません」

ジェロムの挨拶の後に、すかさずアルノルがそうフォローを入れた。

「全然気にしないから大丈夫だよ。ジェロム、敬語とか使わないで普通に話して良いから」

「……良いのか？」

「もちろん。色々話したいことがあるんだ」

俺が稲を見ながらそう言うと、ジェロムは嬉しそうに少しだけ顔を緩めた。外見は無愛想で怖い感じだけど、実際は良い人そうだ。俺はそのことが分かって嬉しくなり、早速ジェロムに近づいて稲の様子を見る。

「稲はどんな感じ？」

「凄い勢いで育ってるぞ」

「いくつか渡したけど全部根付いたの？」

「ああ、全部植えた次の日には元気になってたな」

それならアイテムボックスに入れても問題なく根付くってことか。それは朗報だ。これでいくらでも魔物の森から採取できる。

「これって渡した時は稲が十本ぐらいだったよね。もうこんなに増えたの……？」

ぱっと見だけど四、五十本はあるように見える。稲を持ち帰って渡してから数週間。もうこんなに増えたのなら本当に驚きだ。

「最初は十本を等間隔で植えたんだ。そしたら全部が同じようにどんどん伸びていって、先に種子みたいなやつができた。そこで小麦みたいに収穫するのかと思ったがとりあえずそのまま放っておいたら、そのうちに種子が全部飛び散ってたんだ。そこで観察するためにその種子も放置しておいたら、数日後にはかなりの数の芽が出てきてまたどんどん伸びて、今の現状だ」
「その芽が出たのって何日前？」
「そうだな……二週間ぐらいか？」

目の前にある稲はもう収穫しても大丈夫そうな色になっている。ということは……稲って約二週間で収穫できるまで育つってことだよね？
しかもこの畑は普通の土だ。水田とかでもない。さらに今は春の初めでまだ肌寒いぐらいの季節。その季節でも問題なく育つってことだろう。……確かにミシュリーヌ様がどんな季節でも簡単に育つって言ってた気がするけど。

うわぁ……何このやばい植物。魔物の餌にされて魔物が大繁殖するのも頷けるよ。これは扱いを気をつけないと、この大陸が稲だらけになっちゃうな。害がある植物じゃないから良かったけど、やっぱり魔植物なんだね。
確か土と水属性の魔力持ちだったはず。やっぱり魔力って凄いな……

「二週間で育ちきる植物ってやばいね」
「俺も長く生きてるが初めて見た。これは何なんだ？　麦の新種か？」
「うーん、そういう認識で良いかも。これは稲って名前だけど、収穫すると米って呼び名に変わるんだ。その米が主食になるんだよ」
「主食になるのか！　それは凄いな。この勢いで育つのなら食うに

困るやつがいなくなる」

そうなんだけど、これって意外と扱いが難しいかも。こんな簡単に育つとなると安く売ることもできるけど、そうするとそのうち小麦が売れなくなって小麦農家に大打撃だ。それにパン屋にも。

その辺は上手く調節しつつやらないとダメだよね。どこで育てるのが良いだろう。大公家に領地があればそこで育てて大公家の特産にすれば良いけど、領地ないんだよね。

こうなると領地が欲しくなってきた。米ができたら醤油や味噌も作りたいし、そのためにも広い場所が必要だ。後はいずれ温室を作って、季節関係なく果物や野菜を育てられるようにしたいと思ってたんだよね……

領地が欲しいって言ったらもらえるかな。でも領地をもらったら領地経営もしないといけないし……悩みどころだ。

「とりあえず少し収穫してみようか」

一旦難しいことを考えるのはやめて、米の味を確認してみることにした。米と言っても結構いろんな種類があるはずだからね。日本米に近ければ嬉しいんだけど。

あ、でも米って収穫してすぐは食べられないんだっけ？

「どのぐらい収穫する？」

「そうだね……半分ぐらいは収穫しちゃっても良いかな。根本から刈り取ってみて、その後どうなるのかも気になるし」

「分かった」

ジェロムが鎌を持ってきてすぐに半分の稲を刈り取ってくれた。

その稲は黄色く実っているけれど、まだ茎や葉は青々としている。これって乾燥させた方が良いのかな。
確か実家の周りの田んぼでは、稲が逆さまになって干されていた記憶があるような……

「これをどうするんだ？」
「多分なんだけど、一週間か二週間ぐらい干すんだと思う。そして干したらこの種子？　の部分を茎から分けて、さらに周りの茶色いのを取り除くんだ。すると中から米が出てくるはず」

小学生の時に何かの体験でやったんだよね。あの時は確か……割り箸に挟んで脱穀したはず。そしてその後はすり鉢でゴリゴリして、玄米になるんだった。それでその玄米を棒みたいなやつでついてると、白米になるんじゃなかったっけ？
うろ覚えだな……あと綺麗な白米にはならなかった記憶がある。精米器って凄いんだなって思った記憶が……あるような無いような。

精米機ってどんな仕組みなんだっけ。……うん、全く思い出せない。というか知らない。次にシェリフィー様から本がもらえるのは夏の初めだ。次は醤油と味噌の作り方にしようかなと思ってたんだけど、まずは精米機の仕組みについての方が優先かも。

また遠のいていく……俺の醤油と味噌。あとラー油とか中華料理のレシピ本も欲しかったんだよね。その辺はもっと後回しになりそう。うぅ……シェリフィー様、本の前借りをしたいです。

「とりあえず干しとけば良いのか？」
「そうだね。そうしておいてくれる？　根本を紐で縛ってひっくり返して干してね」
「一週間で良いのか？」

「うーん、じゃあ半分ずつにして、片方は一週間、もう片方は二週間干してみようか。また一週間後ここに来るよ」
「分かった」
一週間後の稲の様子でまた考えよう。二週間で育つような不思議植物なんだし、もしかしたら脱穀や精米も全く違うものになるかもしれないし。
それから他の野菜の様子も確認して、俺はジェロムに稲のことを頼んで畑を後にした。稲が広がりすぎないように、ちゃんと土魔法で石製の囲いも作っておいたよ。

３６０、ファブリスの家と執務室

畑を後にして裏庭を少し進むと、そこには立派なファブリスの家が存在していた。ファブリスからの要望で壁はなくて屋根だけのタイプだ。大きな東屋って感じかな。

その東屋の中には寝心地の良さそうな巨大なクッションが鎮座し、その周りには低木が植えられていた。ファブリス曰く、自然に囲まれてるのが一番安心するそうだ。

「凄く大きいね」

「神獣様が窮屈に感じぬようにと設計されました」

「ありがとう。これならファブリスも満足するよ」

多分居心地が良すぎて、用事がある時以外はここから動かなくなるだろうな。

「雨が降っても中に吹き込まぬよう屋根の設計がなされていますが、風が強い時などは防水加工のしてある布をかけられるようになっております」

「確かに必要だね。ファブリスは濡れても大丈夫だとしても、クッションは濡れたら早めにダメになっちゃうし」

アルノルは痒い所に手が届くって感じで、色々と先回りして整えてくれるから本当にありがたい。俺が思いつかないことばかりだ。

多分俺だったら雨なんて想定せずにいて、実際に雨が吹き込んだ時に焦ってバリアで防ぐことになっただろう。でもバリアで防ぐと空気の流れまで遮断しちゃうから、ファブリス的にも布ぐらいの方が良いと思う。もし布もいらないから濡れたいって言われたら……

クッションだけ避難させよう。

「こちらが神獣様の大きさに合わせた裏口です。ここから中に入りますとすぐに食堂へと向かえるようになっておりますので、ご一緒に食事をされる時はお使いください」

そう言ってアルノルが示してくれたのは、屋敷の裏側にある大きな入り口だった。正面のエントランスに匹敵する大きさだ。

ファブリスを連れて帰ってきてから専用の家を作ってくれて、さらにこんな入口まで増築してくれたってことだよね……やっぱり魔法があると建築も早いな。

「毎回正面のエントランスに向かわなくて良いのは便利だね」

ファブリスの家は正面エントランス近くになる予定だったんだけど、大公家を訪れる人が毎回驚くことになるのも微妙だって話になって、最終的にはファブリスも静かな場所が良いってことで裏になったんだ。さらに魔植物である稲が近くにあるのも、ファブリス的には心地良いらしい。

「早速ファブリスを連れてこようかな。転移ですぐに連れてきても大丈夫？」

「もちろんでございます」

「ありがとう。ちょっと行ってくるね」

ファブリスはまだ公爵家の庭に待機してもらっているので、俺はファブリスの定位置となっている公爵家の訓練場に転移をした。すると珍しく立ち上がってうろうろ歩き回っているファブリスがいた。

『主人！　新しい屋敷はどうだったのだ？』

ファブリスは俺を視界に入れるとすぐに駆け寄って来る。……ファブリスも新しい屋敷が楽しみだったのか。それで落ち着かなくてうろうろしてたってことだよね。

「ふふっ、そんなに楽しみだった？　迎えにくるのが遅くなってごめんね」

『べ、別に気にしてない。だが我がこれから住む場所だからな』

引っ越してすぐは慌ただしくなるだろうからってファブリスには待ってもらってたけど、一緒に連れて行ってあげれば良かったかな。

「そうだよね。凄く良い屋敷だったよ。ファブリス専用の家も居心地良さそうだった」

『それは本当か！』

「うん、一緒に行こうか。転移で良い？」

『もちろんだ』

そうして俺はファブリスと一緒に大公家に戻った。ファブリスは転移を終えるとキョロキョロと辺りを見回して、自分の家で視線を止める。

『主人、あれが我の家か？』

「そうだよ」

ファブリスの顔を見れば瞳がキラキラとしてるから、気に入ってくれたみたいだ。

『とても良い。真ん中にあるのが我のクッションだな。寝ても良いのか？』

「もちろん。寝心地を試してみて。もし改善して欲しいところがあったら言ってね」
『分かった』

ファブリスは俺とそんな会話をすると、尻尾をゆらゆらと機嫌良さげに揺らしながら自分の家の中に入っていった。そしてクッションの真ん中で丸まっていつもの体勢になる。

『これは素晴らしい寝心地だ！』
「本当？　それなら良かった」
『我は主人に呼ばれた時以外はここにいることにしよう』

やっぱり、絶対そう言うと思った。俺は苦笑しつつファブリスに近づく。

「分かったよ。それでファブリス、あそこにある入り口がファブリスでも通れる大きさらしいから、正面にある広いエントランスかこの裏口、どっちかを使って屋敷の中に入ってね。この裏口を入るとすぐ食堂に行けるらしいから、ご飯の時はここから入ってきて。食堂で一緒にご飯を食べるでしょ？」
『そうだな。主人と一緒に食べることにしよう』

食事は大勢で食べた方が楽しいし、ファブリスはこの姿形にしてはかなり上品に、さらに嬉しそうに食べるから見ていて和むのだ。

「アルノル、ファブリスの存在って使用人は知ってるんだよね？」
「全員存じております」
「分かった。ファブリス、暇な時にでもこの屋敷の使用人に挨拶して回ってくれる？」
『了解した』

「よろしくね」

そこまで話したところでファブリスが心地良さそうに目を瞑ったので、俺は屋敷の中に戻ることにした。

「アルノル、最後に執務室へ案内してくれる？」

「かしこまりました」

執務室は屋敷の一階に位置していた。奥に俺の執務机が置かれていて、その手前には大きめの応接セットが設置してある。皆と話し合いができるようにと大きめのものを準備してもらったのだ。

そして部屋の右側にはドアがあり、そのドアを開くと隣の文官部屋と繋がっている。本当は完全に同じ部屋にしようかと思ったんだけど、分かれてる方が色々と便利かなと思ってこの形にした。

そして文官部屋の方には……ロニーとルノーがいた。二人とも真剣に書類を読んでいたみたいだけど、俺が入ってきたことに気付くとすぐに立ち上がって迎えてくれる。

「ルノー、ロニー、久しぶり」

「お久しぶりでございます」

「あっ、この中では敬語とか使わなくても良いからね。アルノルも他の皆も気にしないって言ってくれたから」

俺がアルノルにちらっと目線を向けながらそう告げると、アルノルも同意するように頷いてくれた。この部屋に入れるのはロニーとルノーの他には俺の従者と護衛、後はアルノルとメイド長であるアンヌ、兵士長であるエバンぐらいだ。

「……じゃあ、いつも通りに話すね」

「うん！　ルノーも適当で良いからね」

俺のその言葉に二人ともが苦笑しつつ頷いてくれたところで、俺達は文官部屋にもある休憩用のソファーに移動した。

「仕事はどう？」

「うーん、まだ始めたばかりだから分からないことも多いかな。でもやりがいはあるよ」

「それなら良かった。ルノーはどう？」

「私も楽しいです。特にシュガニスはあり得ないほどの黒字経営ですので、計算するのが楽しくて楽しくて」

ルノーは悪い顔でニヤッと笑った。でもその気持ち分かる。シュガニスは赤字でも良いかと始めたお店だったのに、今となっては利益を量産してるからね。俺もどこまで利益が出てるか確認するのが楽しくなっている。

「シュガニスが上手くいってて良かったよ。大公家全体としてはどう？　屋敷の中を整えるのに色々とお金を使ったと思うけど。従業員もたくさん雇ったし」

「そうですね……とりあえず今の状態ならば、従業員に支払う給与と屋敷で必要な諸々の雑費。それらよりも収入の方が多いです。王家からの俸給も大きいですが、やはりシュガニスでの利益ですね」

全体的に見ても黒字なのか。もう俺の個人資産とは完全に分けたから、魔法具の売上は入ってなくて黒字ってことだろう。これは幸先良いスタートだな。

「それは良い情報だね。シュガニスは今後も同程度の利益を見込めるかな」

「そうだね……少しは下がるだろうけど、赤字になることはないと思う」

それなら安心だ。この現状なら新しいお店を始めるのに支障はないかな。やっぱり食堂は早めに始めてあげたい。

「じゃあそんな現状も加味しての相談なんだけど、新しく大公家として食堂を始めたいんだ。俺の実家が元々食堂だったのは話したよね？　母さんと父さんはやっぱり食堂を続けたいみたいだから、もう一度できるようにしてあげたくて」

「食堂ですか。それはどのようなものにするのですか？」

「場所は中心街の真ん中よりも入り口に近いところにある建物。俺の家族が少しだけ住んでた場所なんだ。出すメニューはこの国にない新たなメニューを開発するつもり。一つでも開発できたらお店を開店して、そこからはお店をやりつつ開発すれば良いかなって思ってる」

俺のその説明に二人の瞳がきらりと光った気がした。そして二人共が楽しそうに顔を緩める。

「それは良いね。新たなメニューなんて絶対に人気間違いなしだ」

「ふふふっ、また利益が量産できそうですね」

うん、二人ともあくどい顔になってるよ～。ロニーも完全にルノーに影響されている。まあ文官としては頼もしいけど。

「それなら開店する方向で進めるね。二人にも色々と手伝ってもらうかもしれないけどよろしく」

「もちろん」

「分かりました」

「ありがとう。そうだ、あと稲のことなんだけど……」

そこからは二人に稲の研究が上手くいけば米という主食を量産できること。それをできれば大公家として売りたいこと。また米料理も広めたいこと。さらに温室を作って季節問わず野菜や果物を育てたいこと。

そんな理想を色々と語って話し合った。そもそも領地もないしまだ実現できないんだけど、とりあえず考えてることの共有は重要だからね。二人共どの話にも前向きに乗ってくれたから話してて楽しかったな。これは本格的に領地が欲しいかもしれない。今度アレクシス様に話だけでもしてみよう……

361、別人？

昨日は大公家の屋敷に引っ越しして、色々と確認をしているだけで一日が終わってしまった。まあその大半はロニー達との話に熱中してたんだけどね……楽しかったんだから仕方がない。

二人との話を夕食の時間になったからと強制的に終わらせられて、夕食を食べて初めて自分の部屋で眠った。夕食は俺好みの味付けで最高に美味しかったし、お風呂は広くて綺麗で気持ち良かったし、ベッドは寝心地最高だし、うん、とりあえずとても住み心地が良かった。

そして今日の朝はスッキリと目が覚めて、俺は家族と共に食堂で朝食を食べている。この家では基本的に、食堂で皆でご飯を食べることに決めたのだ。

「こうして皆で一緒に朝ご飯を食べられるなんて、嬉しいわね」
「公爵家ではそれぞれの部屋だったからね」
「皆と一緒の方が楽しいよね！」

家族皆がそんな話をしながら嬉しそうに席に着いている。マリーも昨日は早めに寝たからか、今日は朝から元気いっぱいだ。

「やっぱり皆で食べた方が良いよね。これからはできる限り一緒に食べようか」
「ええ、そうしましょう」
「それが良いね」
「うん！」

そんな話をしていると朝食が運ばれてきた。ふわふわな美味しいパンと野菜スープ、チキンステーキとオムレツ。オムレツにはトマトソースがかかっていて美味しそうだ。

大公家らしい優美な食堂に品の良いカトラリーやお皿、そして豪華な朝食。家族皆とこんな食卓を囲んでるなんて、転生した当初の俺に言っても絶対に信じないだろう。なんだか感慨深い。

「レオンは今日、何か予定はあるの？」

「うん。実はアルバンさんに少し時間をとってくれないかって言われてるんだよね」

昨日引っ越す前に言われたのだ。引っ越しして少し落ち着いたらで良いから話したいことがあるって。急ぎじゃないみたいだけど気になるし、とりあえず今日公爵家に行ってみようかなと思っている。

「あら、そうなのね。じゃあ今日の屋敷の探検は私達だけね」

「三人で昨日の続きを回ろうか」

「うん！　今日も探検する！」

皆は屋敷の探検の続きか。アルノルに三人の案内をお願いしておこう。

「裏の畑には野菜がいくつも植えられてたよ」

「そうなの？　じゃあまずはそこを見に行くわ」

畑と聞いて二人の瞳が輝いた。やっぱり母さんと父さんは綺麗な服や装飾品よりも、今まで親しんできたものの方が嬉しいみたいだ。

「畑を管理してくれてる庭師のジェロムって人がいるから、色々と話を聞けると思う。あと裏にはファブリスの家もあるから見てあげて」
「ファブリスの家があるの！？　見に行くね！」
『マリーならばいつでも歓迎する』

俺達の横で幸せそうに朝ご飯を食べていたファブリスが、マリーの声に顔を上げた。

「やった～！」

ファブリスはかなりマリーを気に入ってるみたいなんだよね。そのうちあのクッションで一緒に寝てそうなほど仲が良い。

それからも楽しくて穏やかな雰囲気のまま朝食は進み、食後にお茶を飲んでからそれぞれの部屋に戻った。そして俺は公爵家に向かう。

転移で行こうかなとも思ったけど、大公家の馬車に乗ったことがなかったので馬車で行くことにした。屋敷の前に向かうと、新品の豪華な馬車をどことなく張り切った様子の馬が引いている。

「レオン様どうぞ」
「ありがとう」

ロジェとローランを連れて馬車に乗り、大公家の馬車の内装を楽しんでいるうちにすぐ公爵家に着いた。やっぱりかなり近いな。

大公家の紋章とロジェが顔を出したことによって、ほとんど止まることなく馬車は公爵家の敷地内に入り、正面エントランス前に優雅に止まる。ちなみに大公家の紋章は、ジャパーニス商会として作

った紋章をそのまま使っている。

馬車から降りるとアルバンさんが出迎えてくれた。

「レオン様、早速お越しくださいましてありがとうございます」

「アルバンさん、出迎えありがとうございます」

軽く挨拶を交わして応接室に案内される。そしてソファーに座ってお茶を飲んで一息吐き、早速本題に入ることにした。

「それで今回は何のお話でしょうか？」

頑なにソファーに座ってくれないアルバンさんを見上げてそう問いかけると、アルバンさんからかなり懐かしい名前が出てきた。

「実はサリムのことでして……」

サリムってあれだよね、自分は貴族でもない商会の子供なのに何故か上から目線で俺を蔑んできてたやつ。そして最後はごろつきに屋台を襲わせて、実家を放逐されたんだ。そういえばアルバンさんが拾って再教育してくれるって話だったな……完全に忘れてたよ。

「レオン様はサリムのことを忘れていらっしゃるようでしたので、このままでも良いかとは思ったのですが、一応一通りの教育が終わりましたのでそのご報告をさせていただければと思いまして。それから今後のサリムの処遇もご相談させていただければと」

「完全に忘れていました。話をしてくださってありがとうございます」

サリムのことをアルバンさんに頼んだのは俺なのに、今まで頼み

っぱなしで申し訳なかったな……

「サリムはどのような様子なのでしょうか？」
「性根から叩き直すつもりで教育し直しましたので、自分より弱いものを蔑んだり、間違ってもレオン様に対して暴言を吐くようなことはございません。技能につきましては使用人として一通りのものは身に付けさせました」
「それは凄いですね……一度会ってみても良いでしょうか？」
「もちろんでございます。すぐに連れて参ります」

アルバンさんが応接室を出ていき、数分後にはサリムを連れて戻ってきた。サリムは成長期がきたのかかなり背が伸びていて髪型も変わっている。後は何よりも顔つきが全然違うから別人みたいだ。
前は明らかに性格が悪そうな感じだったのに、今では素直で仕事のできる使用人って雰囲気になっている。やっぱり教育者でここまで変わるんだな……アルテュルの時も思ったけど、子供の頃は親の影響って大きいね。

「サリム久しぶり」
「ジャパーニス大公様、お久しぶりでございます。……大公様にとっては今更だとは思いますが、約一年前のあの時は、本当に申し訳ございませんでした」

サリムはそう言って深く頭を下げた。頭を下げる前に見た表情がかなり後悔しているようでちょっと心が痛む。

「サリムは許されないことをしたと思ってるけど、ここまで反省してるんだしもう良いよ」
「……っ、ありがとう、ございます。私はこのお屋敷で拾ってもらい教育をしていただき、自分の世界が今までどれほど狭かったかと

思い知りました……そして私の心がどれほど醜かったのかも。これからは人の役に立つ人生を歩みたいと思っています」

サリムは目に涙を浮かべつつそう語る。ここまで人が変わる教育ってどんなものなんだろうって、ちょっと怖いぐらいだな。隣のアルバンさんが満足そうなのも怖い。でもその手腕は凄いよね……サリムが根っこの部分までは腐ってなかったからこそだろうけど。

「その気持ちを忘れずに頑張ってね。俺ともまた仲良くするっていうのは……難しいかもしれないけど、これからも知り合いとしてはよろしくね」

今までも別に仲良くなかったし身分もかなり違うし、さすがにこれから友達としてっていうのは難易度が高いだろう。そう思って知り合いという微妙な表現になった。

でもサリムとの距離感はそのぐらいがちょうど良い気がする。どこかであったら最近どう？　って会話をするぐらい。

「ありがとうございます。よろしくお願いいたします」

「それでサリムはこれからどうしたいの？　アルバンさん、公爵家ではこのままサリムを雇うことも可能でしょうか？」

「もちろん可能でございます。今までの働きぶりから即戦力になるでしょう。しかし公爵家に縛り付けることもいたしません」

「分かりました。じゃあサリム、これからどうしたいのかサリムが決めて良いよ。このまま公爵家で働くか、俺のところで雇っても良いし、別の仕事をしたいのならその紹介ぐらいはできるんじゃないかな」

俺のその言葉にサリムは少しだけ悩んだけれど、すぐに顔を上げて真剣な表情で口を開いた。

「私はできることなら、このままこのお屋敷で働かせていただきたいと思っております。どうしようもなかった私を拾いさらに教育を施してくれて、皆様には返しきれない恩がございますので」
「そっか。アルバンさん、サリムはこのまま公爵家で雇ってもらえますか？」
「もちろんでございます」

アルバンさんのその答えを聞いて、サリムはホッとしたように少し顔を緩めた。

「俺は公爵家に来ることも多いから、また会うこともあるだろうけどよろしくね」

今まで全く会わなかったのは、アルバンさんが意図的に俺と会わないようにしてたのだろうし、これからは姿を見るぐらいのことはあるだろう。その時は客人と使用人という関係でも、穏やかに話せたら良いな。

「よろしくお願いいたします」

最後まで丁寧な姿勢を崩さず、サリムは応接室を退出していった。そして俺もアルバンさんとアルノルの話を少ししして公爵家を後にする。

何だか晴れやかで清々しい気分だ。サリムと穏やかに話ができて良かった。

362、チョコレート

公爵家から大公家に戻るとちょうど昼時で、俺は家族皆と昼食を食べた。そして午後は勉強をするという皆と別れ、ヨアン専用の厨房にやってきた。

この前知ったチョコレートの作り方を、まだヨアンに話していないのだ。かなり時間がかかって大変そうな内容だったし、早く伝えないと。そしてチョコが形になったら、チョコレートを使ったスイーツを大量に作りたい。

でもそのためにはやっぱりカカオが大量に必要なんだよね……他国に行って直接買い付けるか、温室で育てるか。どちらにしても大変だ。カカオを売ってた商会と契約するのもありかな。まあそれもチョコが完成してからの話だ。

「ヨアンいるー？」

「はい。レオン様、どうかなさいましたか？」

「すっごく良い匂いだね」

厨房に入った途端に幸せな甘い香りが鼻腔をくすぐる。ミシュリーヌ様が狂喜乱舞しそうな厨房だな。

「今クッキーを焼いていまして。レオン様からご助言いただいた野菜を練り込んだものです。それから特別なミルクレープの試作をしております」

広い調理台の上には可愛いクッキーがたくさん並べられ、かなり豪華なミルクレープが一つ鎮座していた。

「美味しそうだし凄く豪華だね。もうこれで完成でも良いんじゃない？」
「いえ、もう少し洗練させたいのです。今の状態では優美さが足りないかと」
「確かにそう、かな？」

俺の目には品が良くて豪華なミルクレープにしか見えない。でもここはヨアンの感性が正しいだろう。

「じゃあヨアンが満足できるまで改良してね」
「はい。ありがとうございます！」
「それで今日なんだけど、カカオってどうなってる？」

ヨアンはカカオという言葉を聞いた途端に、苦々しい表情を浮かべた。やっぱり上手くいってないんだな。

「……あれはとても難しいです。未だ美味しいものにならないどころか、食べられるものにならないのです」

そしてそう言いながらどんどん落ち込んでいく。

「そんなに落ち込まないで。相当難しいと思って頼んだから。それで実はね、カカオの加工方法が分かったんだ」
「……え、それは本当ですか！？」

落ち込んでいたヨアンは一瞬呆然としたような顔をして、すぐ俺に詰め寄ってきた。やっぱりスイーツが関わると凄い勢いだ……

「ヨアン、ちょっと落ち着こうか」

「あ、すみません。でもカカオの加工法が分かったって、教えていただけるのですか！」
「もちろん教えるよ。かなり面倒くさい工程が必要みたいなんだけど、それでも大丈夫？」
「構いません！」

本当に凄い勢いだ。俺は苦笑しつつ厨房の中にあるテーブルにヨアンを促した。そして机の上に一枚の紙を載せる。今回は空いた時間にミシュリーヌ様に俺のメモを読んでもらって、チョコの作り方を紙にまとめておいたのだ。
この前新しいレシピを教えたときにも思ったんだけど、こっちの方が効率的で断然早かった。

「読んでも良いですか？」
「もちろん。分からないところがあったら言ってね」
「かしこまりました」

それからヨアンは真剣な表情になり紙に目を通す。もう文字を読むことに問題はないみたいだ。

「まずは発酵をするのですね……チーズを作るような工程が必要だったなんて」
「驚くよね、俺も全然知らなかったよ。カカオを細かく刻めば良いのかな、ぐらいに軽く考えてたから」
「私も発酵は思いつきませんでした。茹でたり焼いたりは色々と試したのですが……」

ヨアンの瞳がキラキラと輝いている。やっぱり新しいことを知るのって楽しいのだろう。俺もこの世界に来てやっとその面白さが分かった。

日本ではどんなことでもすぐに知ることができるからこそ、逆に何事にも興味を持てなかったような気がする。便利なのは良いことだけど、不便だからこその楽しみもあるよね。

「この焙煎というのは焼くということでしょうか？」

「焙煎は確か……焼くというよりも煎るって感じかな」

そう説明したけど、ヨアンの顔が不思議そうに傾けられた。……これは通じてないな。煎るってこの世界にない概念なのかも。

「焼くっていうよりも、加熱して乾燥させるっていうのかな。フライパンにカカオを入れて、ずっと動かしながら火にかけるんだ」

コーヒーの焙煎も、ずっとぐるぐる動かしてやってた記憶がある。あれって焦げないようになのかな？　それともむらがないように？

……まあどっちもか。

「むらなく焦げないように、ずっと動かしたほうが良いんだと思う。それでどの程度焙煎するのかで味が変わるんだって」

「そうなのですね……焙煎、奥が深そうです」

ヨアンが楽しそうに口元に笑みを浮かべた。この調子なら任せても大丈夫そうだな。

「とりあえず流れは分かりました。かなり大変そうではありますが、試行錯誤して何とか美味しいものを作り上げてみせます！　最終的にはチョコレートというものになるのですね」

「そう。美味しいチョコレートを期待してるよ。でも無理せずにね」

「かしこまりました！」

またヨアンが寝食を惜しんで無理しそうだから、それはできないようにアルノルに話をしておこう。この様子だと気づいたら朝でしたなんてことになりかねない。

「それでレオン様、これらの工程に必要なものは購入していただけるのでしょうか？」

「もちろん。何が欲しい？」

「そうですね……まずは清潔な木箱が欲しいです。それから天日で干すときに平たい籠もあると便利ですね。後はこのカカオを砕いて中身を取り出す時用の、木の棒なども欲しいです。それからペースト状になるまで潰す時は……木ベラで潰せるでしょうか？」

固形のものをペースト状にすり潰すには木ベラじゃ厳しい気がする……やっぱりすり鉢とすりこぎ棒かな？　この世界ではまだ見たことないけど、絶対に存在はしてるはずだ。薬師がいるんだから薬草をすり潰したりするだろう。

「木ベラだと難しいかもしれないから、色々と使えそうなものを探してみるよ。その中から使いやすいやつを選んでくれる？」

「分かりました」

「木箱と平たい籠、それから木の棒はすぐに用意するね」

「ありがとうございます！　ではそれらが届き次第、早速試してみます」

「よろしくね」

後はヨアンに任せるしかないかな。この世界のカカオが日本と同じような流れでチョコレートにできれば良いんだけど。

チョコが作れるようになったらチョコレートケーキが食べたいな……後はガトーショコラも。生チョコやトリュフも美味しいよね。後はチョコレートクッキーも。

「そうだヨアン、今スイーツ研究部門にはヨアン一人だけど、他に人手が欲しい？　カカオの加工が大変だし、ヨアン一人は辛いかなと思ったんだけど」
「そうですね……確かにチョコレートというものが完成して、たくさんカカオの加工をしなければならないとなると私一人では厳しそうです。なのでそうなった時に人を雇っていただければと思います。今はまだ私一人で大丈夫です」
「分かった。人手が欲しくなったら遠慮なく言ってね」
「かしこまりました。ありがとうございます」

チョコレートを本格的に商品として売り出すことになったら、カカオの加工をする専門の部署を作った方が良いかな。多分ここは分業した方が効率的だろう。
チョコレートの作成に成功したら、チョコレート工場を作ることも考えよう。後はカカオを大量に手に入れられるルートも考えないと。

「じゃあヨアン、よろしくね」
「はい。お任せください！」

３６２、チョコレート（後書き）

※本日はお昼に更新させていただきました。次回の更新は明後日のいつもの時間になりますので、よろしくお願いいたします。

～お知らせ～

「転生したら平民でした。～生活水準に耐えられないので貴族を目指します～２」
本日発売となりました！
皆様が応援してくださっているおかげです、本当にありがとうございます。

書籍二巻発売を記念してＳＳを書きました。初めてのマリー視点のお話で、とにかくマリーちゃんが可愛いです。タイトルは「お兄ちゃんがいない朝」活動報告にありますので、ぜひ覗いてみてください！

いつも読んでくださっている皆様、コメントやレビューをくださる皆様、本当にありがとうございます。皆様のおかげでこうして書籍を出すことができました。これからもよろしくお願いいたします！

蒼井美紗

３６３、ティノと家族

今日は仕事が休みである回復の日。俺は朝からのんびりと自堕落な生活を送って……いる訳もなく、今日も朝から忙しく活動していた。

「ティノ、朝早くから来てくれてありがとう」

今は大公家の執務室で、ティノと向かい合ってソファーに座っている。ティノは何で呼ばれたのかと少し緊張しつつも、好奇心を抑えられないような表情で執務室を眺めた。

「いえ、レオン様からのお呼びとあらばいつでも参ります」

「ありがとう。じゃあ早速本題に入るんだけど、実は今度大公家として新しく食堂を開くことになったんだ。新しくというか、俺の両親がやっていた食堂を大公家のお店として再度始めるって感じなんだけど」

「そういえば、レオン様のご実家は食堂だったのでしたね」

ティノは俺が平民の頃からの付き合いだからその事実を知っている。大公になってから知り合った人や大公家に新しく雇った使用人の中には、その事実を知らない人もいるのだ。

「そう。それで両親共に貴族の身分を得たんだけど、やっぱり食堂で働きたいみたいなんだ。だから大公家として食堂を始めようかと思って」

「それはお喜びになりますね。……しかしなぜ私にその話を？」

「実はその食堂ではこの国に今までなかった料理を開発して、それ

を看板メニューとして出すことを考えてるんだ。だからその料理開発をティノに手伝ってもらえないかと思って。後はティノが嫌じゃなければ、食堂の方で働いてもらいたいかな」

俺のその言葉に、ティノは分かりやすく瞳を輝かせた。

「新しい料理開発をやらせていただけるのですか！　しかも仕事として！」

「そうだよ。ティノが嫌じゃなければだけど」

「嫌なわけがありません！　やはりレオン様と知り合えたことは私の人生で最上の幸福でした。レオン様、ありがとうございます！！」

ティノはそう言って俺に向かって熱心に祈り始める。最初に会った時も同じようなことを言われて祈られた気がするな……ティノは変わらないね。なんか安心する。

「大袈裟だよ。じゃあ食堂で働いてくれるってことで良い？　人の食べてるところを見るのが好きだっていうのは、従業員寮の方が堪能できると思うけど……」

「そこは……少し悩みますが、新しい料理の開発という最強の誘いには抗えません！」

「分かった。それならこれからは食堂の方でよろしくね。従業員寮の方は新しい料理人を早急に雇うから、その人に引き継ぎをお願い」

「かしこまりました」

従業員寮の管理はシュガニスの店長であるアルテュルよりも、大公家での管理かな。アルノルとロニーに話をしてすぐに募集してもらおう。一週間ぐらいで雇えたら良いけど。

「今後の話は引き継ぎが終わってからにしようか」

「はい。あっ、一つだけ聞いても良いでしょうか？」
「もちろん」
「従業員寮の料理人は辞めることになりますが、私は引っ越しをした方が良いですか？」

確かにそこの問題があったか……あの寮は大公家が運営するお店で働く人のための寮だから、食堂で働く人が住んでても問題はないはず。
でも食堂って二階が住居になってるんだよね。確か四部屋あったはずだ。あの部分を全く使わないのも勿体無いし、食堂で働く従業員には二階に住んでもらうのもありかな。

そのことをティノに伝えると、一切迷うことなく食堂に引っ越すことを選んだ。

「即答だね」
「職場の近くに住んでいた方が何かと便利ですし、研究の時間もたくさん取れると思うので」
「そこまでやる気になってくれるとありがたいよ。じゃあ引っ越しの準備もしておいてね」
「かしこまりました」

代わりの料理人を雇ったらティノには早急に引き継ぎをしてもらって、できる限り早くに研究を開始できるように手配しよう。そういえば研究をする場所は……大公家の屋敷が良いかな。食堂より厨房は広いし作ったものを食べる人もたくさんいるし。
でもそうするとティノに食堂に引っ越してもらっても、研究のために毎日大公家へ通ってもらわないといけなくなるな。

「ティノ、食堂を開くまでの研究は大公家でやってもらうことにな

ると思うけど、そうなったらしばらくの間だけは大公家に住む？食堂を開店する時に食堂に引っ越すってことで」

こういう時に自分の屋敷だと勝手に決められて楽だ。使用人部屋はまだ余裕あるって話だったし大丈夫だろう。

「良いのですか！？」

「もちろん。二回引っ越しするのが面倒でないなら」

「持ち物は少ないので問題ありません！」

「それならティノは大公家の屋敷に引っ越してもらって、食堂が開店する時に今度は食堂の二階に引っ越しかな。開店してからの研究は毎日じゃないだろうし、そこは大公家に通ってもらうしかないけど」

食堂から大公家まで馬車を出しても良いし、母さんと父さんは馬車で通うんだからティノが一緒に乗っても良いだろう。その辺は開店してから臨機応変に対応しよう。

「かしこまりました！」

「そんな予定でよろしくね。……じゃあ早速だけど、これから母さんと父さんに紹介しても良い？」

「い、今からですか？」

「うん。多分厨房にいると思うから」

「分かりました」

ティノはさっきまでのはしゃいだ様子から一気に緊張の面持ちに変わり、途端に髪の毛をいじって身支度を整え始める。やっぱり初対面だと緊張するのかな。

「そんなに緊張しなくて良いよ。行こうか」

「はいっ」

ティノと一緒に執務室を出て厨房に向かうと、案の定中には母さんと父さんがいた。マリーはいないみたいだ。

「母さん父さん」

「あらレオン、どうしたの？」

「何かあったのかい？」

「紹介したい人がいるんだ。前に話したと思うけど、二人と一緒に料理の開発をしてくれるティノだよ」

俺のその紹介に続いて、ティノは完璧な動作で跪いて頭を下げた。

「ティノと申します。レオン様からお話をいただきまして、新しいメニューの開発に携わらせていただきます。よろしくお願いいたします」

「あなたがティノなのね」

「ティノ、そんなにかしこまられると困るから頭を上げてくれ」

父さんが困ったようにそう言うと、ティノはスッと優雅に頭を上げた。やっぱりティノって今すぐに貴族家の使用人になれるほど、動作は洗練されている。食堂では問題なく給仕もできるだろうな。

「僕たちだけでは難しいから力を貸してもらえると助かるよ。よろしく」

父さんがそう言ってティノに片手を差し出す。ティノは一瞬悩んだようだけど、その場に立ち上がって父さんと握手を交わした。

「レオンが教えてくれたレシピは難しくて。一緒に頑張りましょう」

母さんがそう言って浮かべた笑みに、ティノも顔を緩める。ティノとの相性は悪くなさそうで良かった。

「母さんと父さんは何してたの？」

「今日も料理開発よ。一応形にはなったけど、まだまだ改良して美味しくできると思うわ」

この前思い付いた餃子や焼売、肉まんなどの中華料理は、完成形となんとなくの材料だけ伝えたのだ。それで二人は形にしようと頑張ってくれてるんだけど……そう簡単に上手くはいかないみたい。

でも餃子は比較的形になってるんだよね。後は皮のもちもち感をもっと増やしたいのと、中身の改良みたいだ。

「これなんだけど食べてみる？」

母さんが餃子にフォークを刺してティノに手渡した。

「初めてみる形ですね……いただきます」

ティノは見た目をぐるっと確認してから、躊躇なく一口で口に入れた。そして数回咀嚼すると……目を見開いて動きを止める。そしてまたもぐもぐと、今度は最初よりも味わうように餃子を食べている。

「これは、とても美味しいです。周りは小麦粉でしょうか？　そして中には肉や野菜が入っているのですね。肉はかなり細かいみたいですが、刻んでいるのですか？」

餃子はティノのお気に召したみたい。真剣な表情で二人に質問を

し、まだ調理台の上にたくさんある餃子に目が釘付けになっている。

「周りの皮は小麦粉で作ってるの。でもこの皮はもっと改良できると思うのよね。レオン曰く、もう少し薄くてもちもちとした食感があると良いらしいわ。だからいろんな種類の小麦粉を取り寄せて配合を試してるのよ」

この世界の小麦粉は、一番安くてどこでも手に入るものが一種類。それ以外にも数種類の小麦粉があるんだけど、そっちは専門店でしか売ってない上に結構高めのお値段なんだ。だから安い小麦粉をベースにして、他の小麦粉も混ぜて試すようにお願いしている。

いくら中心街の食堂だからって、あんまり高いと客足が伸びないだろうからね。食堂は中心街の中でも入り口の方に近いし。

「それは楽しそうです。私もお手伝いします！」

「ありがとう。後は中身もいろんな味付けを考えてるのよ。香りが強い野菜を入れるとアクセントになって良いらしいわ。本当は胡椒をたくさん使えると良いんだけど、値段が高くなるでしょう？　だから安めの野菜で代用できないかと思ってるのよね」

「今まで試した中ではにんにくとネギが良かったかな。後はその季節ごとに手に入らない野菜もあるから、季節が変わるごとに改良しないと」

一年中同じ野菜が手に入らないところが難しいのだ。後は醤油がないところもかなり難易度を上げている。

でもないならないなりに、チーズをかけた餃子とかトマトソースに合うような味付けの餃子とか、色々と工夫のしようはあるかなと思っている。

「キャベツは試しましたか？」

一通りの話を聞いて、ティノも色々とアイデアが浮かんできているらしい。

「そういえばまだ試してないな。今の季節なら手に入るね」
「じゃあ試してみましょう」
「はい。後は肉の種類もいろいろ試してみるのが良いと思います。これは豚肉ですよね？」
「そうよ」
「牛肉も入れた方が肉の旨味が出るのではないでしょうか？」
「確かにそうかもしれないな……」

そう言われてみると、日本にも合い挽き肉とかあったな。さすがティノ。

「じゃあ肉の種類も色々と試してみましょう。牛以外に鳥もありかしら」
「そうしましょう。後さっき気になったのですが……」

そうして三人が完全に研究に集中してしまったので、俺はそっと厨房を後にした。母さんと父さんが生き生きとして楽しそうで良かった。

３６４、魔植物である稲

三人が料理開発に没頭してしまったので厨房を後にした俺は、そのままの足で屋敷の畑に向かった。この前ジェロムに乾燥をお願いしてからちょうど一週間が経ったのだ。

いつものようにロジェとローランを引き連れて畑に向かうと、ジェロムはちょうど稲の様子を確認しているところだった。

「ジェロムお疲れ様……って、また増えてるね」

「レオン様、この前半分残してたやつが種子を落として、また芽が出て育ってるんだ」

「本当に驚くほど早いね」

「俺もこいつには驚かされることばかりだ」

ちゃんと石の囲いを作っておいて良かった。これから稲を栽培する時に一番大切なのは、無駄に広がらないための囲いかもしれない。

「一週間前に乾燥を頼んだのはどうなってる？」

「ああ、そうだ。あれで良いのか分からないがちゃんと干してるぞ。こっちだ」

そう言ってジェロムに案内されて畑の近くにある小屋に向かうと、その小屋の前に干されている米があった。そう、稲ではなくもう米だ。薄い木箱に広げて干されている米がある。

「ジェロム、これどういうこと？」

「レオン様に言われた通りに逆さまにして干してたんだが、二日ぐらい経ったら種子が乾燥して勝手に開き始めたんだ。それで中身だ

け落ちてたから拾い集めてまた干してるのがこれだ」
「勝手に開くんだ……」
乾燥すると勝手に開いて中の米が出てくるなんて、やっぱり日本の稲とは違う。さすが魔植物だ。ただ色は茶色いからこれは玄米だと思う。それに日本のお米よりも少しだけ大きい気がする。
ここまで干すだけでできるってことは、俺が考えないといけないのは精米方法だけだ。……それが一番難しかったんだけどね。
でも玄米でも食べられたはず。それならとりあえず玄米で食べてみて、次の時にシェリフィー様から精米のやり方と精米機の仕組みが書いてある本をもらおうかな。そして魔法具で再現できないか考えれば良いだろう。
「もしかして失敗だったか……？」
俺が黙ってしまったからか、ジェロムが恐る恐るそう聞いてきた。
「ううん、逆に大成功だよ。ありがとう」
「そっか、それなら良かった」
「うん。多分もう干す必要もないと思うんだよね。このまま食べられるはず。隣のやつが二週間の方？」
「そうだ」
もちろん二週間の方も全て玄米になっている。これ以上干しても全く意味はないだろう。
「ジェロム、これからは稲を収穫したら干して全部この米の状態にしてくれる？　この中身を米って言うんだ」

日本での呼び方は知らないけど、この世界ではこの中身が米ということにする。俺が分かりやすいし。

「分かった。育ったら収穫して干して、米を取り出して集めとけば良いってことだな」

「うん。大きな麻袋を準備してそれにでも貯めておいて。湿気でカビが生えると困るから、風通しの良い場所に保管をよろしくね。多分日陰の方が良いと思う。それで麻袋がいっぱいになったら俺に渡して欲しい。アイテムボックスに仕舞うから」

「麻袋に入れて、日陰で風通しの良いところに保管だな」

これで俺が食べる分ぐらいの米は余裕で手に入るだろう。ついに米が食べられる！　玄米だけど米は米だ！

「とりあえずこのお米を炊いてみようか」

「たく？」

「そう。米を食べられるようにするんだ。皆も味見してみてね」

俺のその言葉にジェロムは興味深そうに頷いてくれて、ローランは楽しそうに瞳を輝かせ、ロジェは少し戸惑っている様子だった。これがどんな料理になるのか不安なのだろう。

とりあえず普通に白米を炊くようにやってみるしかないかな。でも俺って炊飯器でしか米を炊いたことないんだよね……多分鍋に米を入れて水を入れて、火にかければできると思うんだけど。

失敗したら仕方がないってことで、とりあえずやってみよう。お米の量はそんなにないから全てを使うことにして、まずは洗わないとだ。

アイテムボックスからテーブルを取り出してその上にボウルを置

き、ボウルの中に玄米を入れた。そして水魔法でボウルの中を水で満たして米を洗う。精米もしてないからしっかりと何度も洗った。

そして次に鍋を取り出してそっちに米を移し、米がちょうど浸るぐらいの量で水を入れた。炊飯器だとこのぐらいの水の量だったはずだ……

そこまで準備したところで土魔法を使って、鍋がちょうど置ける大きさの簡易の竈を作る。そしてその上に鍋を置いて蓋を閉め、鍋の下に小さめのファイヤーボールを作り出して調理開始だ。

「多分これで三十分ぐらいかな？　焦げないように気をつけつつ、火にかけてればできると思うんだ」

そう言いつつ皆の方を振り返ると、ジェロムは驚きに目を見開き、ローランは尊敬に瞳を潤ませて、ロジェはちょっと呆れたように目を細め、三者三様の表情で見つめられた。

「どうした……」

「レオン様！　やはりレオン様は素晴らしいです！　様々な属性の魔法を、しかも繊細なコントロールをしながら使いこなし、その全てが詠唱なし！　まるで息をするかのように魔法を使われるそのお姿、とても神々しく感動いたしました！」

俺が皆に話しかけようとした瞬間、ローランが大声で俺への賛美を述べてきた。うん、ありがたいんだけど、恥ずかしいからもう少し声は小さくしようか。

「ありがとう」

「レオン様は、本当に凄いんだな。いや、良いもの見た」

「レオン様の魔法の使い方は本当に規格外ですね」

俺も他の人と違うとは思ってるんだけど、便利だからついつい使っちゃうのだ。もう使徒ってこともバレてるし良いかなって……そのうち皆も慣れるよね。

「段々と慣れてね」

それから十分ほど火にかけて、一度様子を見てみようかと蓋を開けてみた。すると既に水がなくなっていて少し周りが焦げ始めている様子だ。でもその割にはふっくらしてなくて固そう。

スプーンで少し掬って口に入れてみると、ガリッと硬い米の食感がした。全然ダメだ、水が足りないってこと？

そう思ってもう一度最初と同じぐらいの水を足してみた。そして焦げそうな部分を鍋から剥がすように少しかき混ぜて、また蓋を閉める。

この世界のお米の方が水分が必要なのかな？　それとも玄米だから？　そもそも日本で鍋を使って米を炊いたことがないし、玄米も食べたことがないから分からない。

……試行錯誤して最終的に上手くできれば良いよね。

それからまた十分ぐらい放置して蓋を開けてみると、今度はさっきとは全く違う様子になっていた。玄米はふっくらツヤツヤとしていてとても美味しそうだ。やっぱり水が足りなかったのかもしれない。もしかして炊く前に水につけておいたほうが良いとか？　今度はそっちもやってみようかな。

まあとにかく今はこの玄米だ。俺は鍋の中をもう一度覗き込み、

美味しそうに炊けてることを確認してスプーンで掬った。そして目の前に持ち上げて観察し……、少し緊張しながら口に入れる。
恐る恐る咀嚼をすると……炊いたお米独特の弾力を感じる。さらに噛めば噛むほどほのかな甘みが口の中に広がって……

……米だ。これはれっきとしたお米だ。めちゃくちゃ美味しい！！

なんか感動だ。久しぶりすぎて感動する。ちょっとまだ硬めだったかなとか、玄米だからか少し独特な香りがあるなとか、多分日本で食べたら首を傾げる出来だと思う。
でも何年かぶりに食べるお米、この世界で初めて食べる米、美味しすぎて泣きそう！！

３６５、お米の美味しさ

「レオン様……どうでしたか？」

俺が何も言葉を発さないからか、ロジェが心配そうに声をかけてくれた。

「ロジェ、これね、めっちゃくちゃ美味しい！！　俺が求めてたのこれだよ！！　待って、皆も食べてみて」

俺はアイテムボックスからお皿を取り出してお米をよそい、皆にスプーンと共に手渡した。

「少し塩をかけた方が美味しいと思う。まずはそのまま食べて、次に塩をかけて食べてみて」

そう伝えて塩を机の上に置いてから、俺はまた米を口に入れた。次は塩をかけたものだ。うわぁ～、なにこれ、美味しすぎる！　塩めちゃくちゃ合う！

塩ご飯ってこんなに美味しかったっけ？　味噌汁飲みたい、漬物食べたい、焼き魚食べたい。

「うん？　ちょっと甘さもあるんだな。不思議な食感だ」

「初めて食べる食感ですね……」

「美味しい、とは思います。ただ食べ慣れてなくて違和感が大きいです」

三人の反応はそんな感じだった。俺との温度差が凄い。でもまあ

そうだよね。一度もお米を食べたことがない人にお米と塩だけを渡したら、こんな反応だろう。

「これはパンみたいなものだから、本来は他のものと一緒に食べるんだ。例えばステーキとか」

アイテムボックスにステーキがあった気がするな……そう思って中を探ると良い部位のステーキがあったので、それを取り出して切り分け、全員のお皿に乗せた。

「お米と一緒に食べてみて。多分合うよ」
「分かりました……おおっ、これは美味しいです！」
「分かってくれる！？　美味しいよね！」
「確かに合うな」
「パンよりもこれの方が合うかもしれません……」

今度は皆の反応も良いみたい。やっぱりお米って美味しいよね。俺もステーキと一緒に口に運ぶ……うん、もう美味しすぎる。やっぱりステーキにはライスだよ。ずっとパンは何かが違うと思ってたんだ。

「本当に最高。美味しい」

そこからは夢中でお米を食べ進めた。元々そこまで量が多くなかったので、すぐに四人で食べ切ってしまう。
皆で鍋の中を覗き込み米粒一つ残っていないのを確認して、はぁ～とため息を吐いた。

「もう少し食べたかったな。噛めば噛むほど美味しくなるから、ついついもう一口食べたくなる」

そう言ったのはジェロムだ。その言葉にロジェとローランも頷いている。

「お米はどうだった。人気になると思う？」

「絶対になるな。こんなに育てるのが簡単で、しかもパンより楽に食べられるだろう？　これが広まったらパンが売れなくなる」

「私もこのお米というものは凄い可能性を秘めていると思います。鍋で茹でるだけで美味しいというのが特に良いですね。パンはどうしても作るのに手間がかかりますから」

やっぱりそうだよね……問題はどうやって広めるのかだな。後は価格設定も大切だ。二週間で収穫までできて季節関係なく育つってなったら相当安くできるだろうけど、それをしちゃったら小麦農家と小麦を売ってる商人、さらにパン屋などが大打撃だろう。

やっぱりパンと同じぐらいの値段で売るのが一番かな。そして一気に広めるんじゃなくて、少しずつ浸透させていけばそこまで悪影響はないだろう……と思う。これは実際やってみないと分からない。

「ロジェはどう思う？」

「そうですね……とても画期的で今後人類を救う可能性を秘めた作物であると思います。ジェロムの話からして特別な世話は必要なく、ただ広い場所さえあれば育つようですので、この作物があれば飢饉とは無縁になるかと。しかしパンとお米、どちらが好きかと言われたら私はパンを選びます。このお米は少し独特な香りがしますので、それが苦手な者もいるかと思います」

独特な香りか……やっぱり精米してないからだよね。精米できるようになったら玄米は少し安く売って、白米は高級品として売るのもありかな。

「このお米を売りに出しても大混乱はしないかな？」
「どの程度の価格で売られるのかによります。手間暇と収穫量を考えたら小麦の五分の一ほどの価格でも売れるかと思いますが、さすがにそれをしてしまえば大混乱になるかと。小麦と同程度の価格にするのでしたら、問題なく浸透していくのではと思います」

やっぱり問題は価格か。最初は小麦と同じ値段にして、俺がお米専門店を作って米の美味しさを地道に広げていこうかな。
そうなるとやっぱり、大公家の領地で採れる特産品にしたい。とりあえずアレクシス様に相談しよう。

「皆色々と意見をありがとう。皆の意見を参考にアレクシス様に相談してみるよ」
「それがよろしいかと思います」
「うん。……相談には実物があった方が良いよね。ジェロム、今度収穫できたお米はアレクシス様のところに持っていくから、綺麗な布袋にでも入れて保管しておいてくれる？」
「かしこまりました」
「ありがとう。よろしくね」

そうして今後の予定を決めて、その日は畑を後にした。

――それから数週間後。俺は収穫したままの玄米であるお米となんとか手作業で精米した白米に近づいたもの、またその二つを炊いたものをアイテムボックスに仕舞って仕事に向かった。

いつも通り執務室に入り、アレクシス様とリシャール様、それから文官の方々に挨拶をする。文官の人達は一緒に働いているうちに

完全に俺に慣れて、今ではにこやかに挨拶をし雑談までできる関係性だ。

「アレクシス様、本日は少しお話ししたいことがありまして、お時間をいただけないでしょうか？」

「分かった。ここで話せる話か？」

「……いえ、一応人払いをお願いいたします」

俺のその言葉にアレクシス様は立ち上がり、隣の応接室に移動することになった。前は執務室で人払いをしてたんだけど、あまりにも他の人に聞かれない方がいい話が多くて毎回文官達を退出させるのも大変で、最近は俺達が隣の応接室に向かうことが多いのだ。

文官達に軽く指示を出して従者に監督を任せ、アレクシス様とリシャール様、俺の三人だけで隣へ移動する。そしていつもの定位置であるソファーに腰掛けると、早速アレクシス様が口を開いた。

「それで今回は何の話だろうか？」

「今回は稲についてです」

「……そういえばトリスタンが言っていたな。色々と忙しくて話を聞くのを忘ていた。主食になるのだったか？」

魔物の森から帰るときに少し話をしただけなのに、トリスタン様はちゃんと報告してたんだ。

「はい。米という名前の主食になります。こちらが収穫したそのままのもの、そしてこちらがより美味しくなるように手を加えたものです。さらにこの鍋に入っているのが、先ほど説明した二つを食べられるようにしたものです」

玄米、白米、そしてその二つを炊いたものをアイテムボックスから取り出す。炊いたものはすぐに仕舞ったので熱々の炊き立てだ。

「小麦と似たような形だが、これは粉にするのではなくそのまま食べるのか？」

「粉にしても使えますが、そのままでも十分に美味しく食べることができます。とりあえず試食していただけませんか？」

「そうだな」

俺は白米と玄米をお皿によそって、おかずとしてステーキや牛肉の煮込み、野菜炒めなどを準備した。

「お米は主食ですので、おかずと共に食べるのがおすすめです」

「ふむ、ではいただこう。まずはそのままだな」

「私もいただいてみます」

アレクシス様はスプーンを手に取りそっとお米を掬い取ろうとしたけれど、予想以上にもちもちしていたからか、スプーンがお米に触れたところで動きを止める。

「これは……予想以上に弾力があるな。不思議な感触だ。それに粘りもあるのか？」

「本当ですね……パンとは全く違うようです」

二人はお米の不思議な感触を一通り確認し、やっと口にする決心がついたのか今度こそスプーンに一口分のお米を取った。そしてゆっくりと口に入れて咀嚼する。

「不思議な食感だが、ほのかに甘味があって美味しいな」

「そうですね……しかし独特な香りもあるかと」

二人が最初に食べたのは玄米だったので、やっぱり香りは感じるみたいだ。

３６６、大公家の事業

「そちらの色が薄い方が独特な香りは少ないと思います。そちらも食べてみてください」
「……おおっ、本当だ。こちらの方が美味しいな」
「確かに香りはなくなった。しかし私は先程のも好きだったな。あの香りがないと物足りない気がする」

リシャール様は圧倒的に白米みたいだけど、アレクシス様は玄米も好きみたいだ。確かにあの香りが癖になるって人もいるのかも。

「次はおかずと共に食べてみてください。私のおすすめは牛肉の煮込みをソースと共に食べることです」

ソースが浸ったパンはもちろん美味しいんだけど、やっぱりソースをかけたお米には勝てないと思うんだ。完全に俺の好みの話なんだけどね。
牛肉の煮込みのソースをかけたご飯は……やばいぐらい美味しかった。美味しすぎて昨日準備してたときに、三杯も食べちゃったのは内緒だ。

「おおっ、確かに合うな」
「これは合うな……美味しい」

それからアレクシス様とリシャール様は、おかずも含めてお米を完食した。途中からは慣れて来たのか食べるのもスムーズになり、どんどんお米の美味しさに気づいていったようだ。

「これは主食として十分な出来だな。見た目から避ける者もいてすぐには広まらないだろうが、そのうちパンと並ぶほどの定番になるだろう」
「小麦と同様に広く育てるべきかもしれませんね。レオン君、稲というのはどの程度で育つのだ？」
「はい。稲は種が地面に落ちてから数日で発芽し、二週間で収穫できます。そして数日天日で干すとこの玄米の形になります」

俺のその説明に目を剥いて驚くリシャール様とアレクシス様。この顔は初めて見たかもしれない……ちょっと笑いそうになって抑えるのに苦労した。

「二週間で収穫までできて、収穫した後に数日干すだけでこの状態になるのか……？」
「はい。そしてこの状態になれば、よく洗って鍋で炊けばすぐに食べられるようになります」
「そ、それは特別な世話が必要とか。大量には収穫できないとか、限定した季節下でしか育たないとか、そういうのがあるんだよな？」
「いえ、畑にただ種を蒔くだけで発芽します。そして放っておけばそのうちに育って種がまた落ち、どんどん増えていきます。稲を育ててくれているうちの庭師によれば、雨が降らないときにたまに水を上げている程度だそうです。また季節の問題は分かりませんが、今のところ現在の気温下では問題なく育つようです」

俺のその説明を聞いて唖然とするお二人。やっぱり驚くよね……俺も自分で話してて相当規格外な作物だなと思う。さすが魔植物だ。
「やはり魔植物なので常識が当てはまらないのかと。しかしミシュリーヌ様によれば危険はないものですので、そこの心配はいらないと思います」

「そ、そうか……それは良かった」
「……それにしてもそのように簡単に育つものだと、市場を混乱させかねません」
そう言ったのはリシャール様だ。その言葉にアレクシス様も真剣な表情を浮かべる。
「どのように広めるのかが問題だな。ただこれを広めないという選択肢はないだろう。小麦が不作の年や日照り続きの年などは、食料が不足することもある。その時に稲があれば助かる命も増えるからな」
「そうですね。王家の事業としますか？　販売は王家が認めた商人のみとすれば混乱は最小限に抑えられるかと」
「確かにそれもありだな」
二人がそこまで話を進めたところで、俺は口を挟ませてもらうことにした。王家の事業としても良いんだけど、できれば大公家の事業としたいのだ。なぜなら醤油と味噌の研究を大々的にしたいから！
それに日本酒とかも作れたら良いよね。あとお酢も。この世界のお酢って日本で食べ慣れたものと違うから、日本のお酢は米からできてたんじゃないかと思ってるんだ。
あとはみりんも。日本の料理ってみりんを多用するけどこの世界にはない。だから原材料が米の予感がしてるんだよね。
「アレクシス様、リシャール様、一つわがままを言っても良いでしょうか？　もし無理ならば断ってくださっても構いませんので」
「勿論だ。レオンの望みはできる限り叶えよう」
「ありがとうございます。……稲を育てて米を広める事業ですが、大公家に任せていただけないでしょうか？　そしてそれに伴って、

領地をいただけたら嬉しいです」

さすがに要求しすぎで難しいかな……そう思ってお二人が難しい顔を浮かべるのを待っていると、俺の予想に反して二人はとても嬉しそうな表情を浮かべた。

「もちろん構わない。大公家としてレオンが指揮をとってくれるのならば安心だ。領地の選定を早くしなければいけないな」

「先の粛清でまだ王家預かりとなっている領地がいくつかございます。そのどれかでも良いのではないでしょうか」

「そうだな……しかし大公家の領地が他の貴族家より小さいというのも問題だろう」

「確かにそうですね……」

全く躊躇うこともなく了承された。え、良いの！？

「あの、ちょっと待ってください。そんなに簡単に認めてしまわれて良いのですか？」

「勿論だ。今までほとんど望みを口にしなかったレオンからの願いだからな。全力で叶えよう。それに王家の事業を増やすのは負担も大きいので、大公家でやってくれるのならばありがたい。また領地のことも近いうちに考えなければと思っていたのでちょうど良い」

そうなのか……まさか喜ばれるとは思ってなかった。でもそういうことなら遠慮なく領地をもらえるし、稲も育てられるな。

「ありがとうございます。精一杯がんばらせていただきます」

「ああ、よろしく頼む。しかし領地はどこが良いか……」

「……あの、私から一つ提案なのですが、魔物の森を押し返して今は誰も住んでいない土地がありますよね？　そこはどうでしょうか」

これから魔物の森はどんどん押し返していく予定だし、そうなった時に魔物の森があった場所が誰の土地になるのかって揉めると思うんだよね。だけど使徒である大公家の土地となるんだったら、誰も表立って文句は言えないだろう。

「それはありがたい申し出だが、そんな土地で良いのか？　あの土地に人を集めて街を整えるのは相当大変だと思うが……」

「もちろんです。しかし最初は色々と手伝っていただけると嬉しいです。特に人員補充などの面では……」

やっぱり信頼できる人を雇いたいと思ったら、このお二人からの紹介が一番なんだ。

「もちろん手助けは言われなくても行うつもりだ。信頼できる者の紹介も構わない。……本当に良いのか？」

「はい」

「分かった。では魔物の森が存在していた場所は大公家の領地とすることを定めよう。そして大公家の領地となったとしても、今まで魔物の森と接していた領地の私兵団には魔物の森への対処を継続してもらえるように話をしておく」

確かにその問題もあったか。大公家には強い兵士団がいないから……周りとの友好関係を築くのは急務だな。

「ありがとうございます。私からも友好関係を築きたいと思っています」

どんなふうにして領地を活性化させるのかも考えないとだ。……今ある前線の街を大公家の街にして、前線を押し返すたびに定期的

に前線の街を作れば、領地に街が増えるよね。あとは前線じゃなくなっても、その街にそのまま住み続けてもらえるような政策を考えれば領民も増えていくだろう。

とりあえず衣食住が揃ってて仕事があれば人は集まる。その辺の政策も考えないとかな。お金がかかりそうだし、稲で得た利益を使って領地を充実させていこう。

「それでは稲についてはレオンが大公家で生産、販売まで手掛けるということで良いか？」

「はい、それで構いません。しかし大公家だけで独占するのも問題はあるでしょうから、他の領地から育てたいと要望があった場合にはそれを拒むことはしませんので」

この世界の米はあり得ないぐらい育てるのが簡単だから、米そのものでそこまで利益は取れないと思うのだ。だから大公家としては最初に米を売って国全体に広める役目を終えたら、米自体の生産販売よりも米を使った商品の生産販売にシフトチェンジしたい。

味噌や醤油、お酒やみりんなんかを作れたら、絶対に売れるし流行ると思うんだよね。そっちの作り方はできる限り流出を避けて、大公家の特産品としようと思う。

「レオンが良いのならば、国としてはありがたいが……」

アレクシス様は少々困惑気味だ。大公家の事業にしたいって言ってたのに他の領地で作ることを拒まないって、普通に考えたらおかしいからだろう。

「問題ありません」

「……そうか、分かった。ではそう心得ておく」

納得できないところもあるけれど、飲み込んでくれたみたいだ。アレクシス様はこうやって、追及し過ぎないでいてくれるところが本当にありがたい。俺ってこの国でかなり好きにやらせてもらえてるよね……使徒という立場だからこそなのだろうから、もう少しミシュリーヌ様に感謝した方が良いのかもしれない。

「王家としても万が一の備蓄として購入しようと思っているので、よろしく頼むぞ」

「かしこまりました」

そうして稲については大公家が事業を一手に担うことが決まり、魔物の森だった場所が大公家の領地になることになり今回の話し合いは終わった。

色々と調整しなければいけないことが多くて、正式に領地として与えられるのはもう少し先の話みたいだから、それまでに他のやるべきことはやっておいて領地がもらえる時に備えよう。

俺の領地になったら代官の選定も必要だし、何よりも領都を作らないとだ。そして領地の大公邸も作らないと。

……またたくさんの人を雇わないとだな。俺が自ら仕事を増やして大変にしてるから、ロニーやルノー、アルノル、ロジェ達には誠心誠意謝っておこう。忙しくさせてごめんって。仕事が大変そうならすぐに人員を補充しよう。

３６７、他国からの使者

冬の月の終わり頃から春の月に入り数週間は、卒業試験に二つのパーティー、それからシュガニスの開店と大公家の屋敷の完成。こうしてすぐに思い出せるものだけでも、たくさんの予定が詰まっていて忙しい日々だった。しかしそんな予定も全てをこなし、やっといつも通りの平穏な日常を取り戻しつつある。

大公家の屋敷で寝起きすることにも慣れて、いつものように家族皆と朝食を取り仕事に向かった。そしてアレクシス様の執務室で仕事をしていたところ……突然その平穏な時間は終わりを告げた。一人の騎士が慌てた様子で報告に来たのだ。

「ご報告申し上げます！　ヴァロワ王国の第二王子殿下が至急陛下にお会いしたいと、数人の供を連れてお越しです！　現在は門番の詰所にある応接室でお待ちいただいております」

ヴァロワ王国って……確か大陸の北東にある国だったはず。魔物の森と接していて、その辺には小さな国がいくつもあるんだ。その小国の中でも一番力を持っていて大きな国だったから、なんとなく覚えていた。

「ヴァロワ王国だと……用件は？」

「詳しいことは伺えておりませんが、使徒様にお会いしたいとのことです。また民を救うために助力を求めたいと」

騎士の方がその言葉を告げた途端に、アレクシス様とリシャール様の表情が一気に深刻なものに変わる。

「……とりあえず、ヴァロワ王国からここまで来たのであればお疲れだろう。王宮にある客室へご案内を。そして謁見は明日になると伝えてくれ」
「はっ！」

騎士の方はさっとカッコ良く一礼をしてから、足早に去っていった。それにしても他国の人と、さらに王族と会うのは初めてだ。

「皆の者、本日の執務はこれで終わりとする。今から明日の謁見に向けた準備だ。謁見の間の準備は王宮の使用人に頼むとして、皆はヴァロワ王国についての資料を集めてくれ」

アレクシス様のその言葉に文官達は一斉に片付けを始め、次々と必要なものを持って執務室から出ていく。俺は一瞬の出来事に混乱して机に座っていただけだ。

「レオン、リシャール、ソファーに座ってくれるか？」
「かしこまりました」
「は、はい」

アレクシス様の声にやっと我に返り、急いで立ち上がってソファーに向かう。

「ヴァロワ王国から第二王子が突然来るなど、どういうことだ。事前に使者は来てないよな？」
「来ておりません。私としても突然の出来事に混乱しております」

誰も予想もしてない訪問ってことか……普通は王族が他国に向かうのなんて、何ヶ月も前からやりとりをして準備するものだ。それ

がなく突然、さらに数人の供だけを連れて来るなんて……相当な事態が起こったのかもしれない。

「アレクシス様、ヴァロワ王国について詳しく聞いても良いでしょうか？　私は大陸の北東に位置する小国群の一つで、魔物の森に接している国ということしか知りません。確かラースラシア王国と接してはいませんよね？」

他国についても勉強したつもりだったけど、実際に他国に行くことがあれば、その時に改めて勉強すれば良いかと思っていたのも否定できない。もっとしっかり学んでおけば良かったな……

「我が国との間には小国があり、ヴァロワ王国と直接のつながりはない。しかし全く関係がないというわけではないのだ。ヴァロワ王国からはいくつかの香辛料などを輸入している。中心街で売られている珍しい調味料や果物、木の実などはヴァロワ王国から来ているものも多いだろう」

そうなんだ……もしかしてだけど、カカオとかもその国で採れたりするのかな。あとはカレーが作れそうだなって感じのスパイス類も前に買ったけど、あれもヴァロワ王国産だったりして。

「そのような繋がりがあるのですね。……しかしその程度の繋がりの国の王子が、どうして突然やってくるのでしょうか」

「そこが分からない。民を救って欲しいと先ほど言っていたことを考えると……魔物の森に関することかもしれないな。レオンと会いたいというのもそう考えれば辻褄が合う」

確かに魔物の森のことで何か緊急事態が起きたのなら、使者を通してやりとりせずに直接責任者が来るっていうのも理に適ってる。

それが褒められることかは別として。
さらに俺がいるこの国に来るというのも、選択肢としては最適だろう。自分で言うのもなんだけど、この世界で一番魔物の森の問題に対処できるのは俺とファブリスだろうから。

俺が使徒であることは大々的に公表してて、さらに魔物の森に行って強い魔物を倒してきたって話が尾ひれを付けて出回ってるし、他国にも情報が流れてるんだろうな。商人は国を跨いだ移動をすることもあるから。

「ヴァロワ王国は、魔物の森に飲み込まれそうなのでしょうか？」

口にしたい内容ではなかったけど、話を進めるためにもそう言った。すると陛下とリシャール様は、共に難しい表情で小さく頷く。

「まだ分からないが、可能性は高いかもしれない。――何にせよ明日話を聞いてからだ。レオンも謁見の間に来てくれるか？」
「もちろんです。同席させてください」
「ありがとう。ヴァロワ王国から助けを求められた場合はどうする？　レオンは助けに行くか？」

助けを求められた場合はもちろん行きたい。一人でも多くの人を救いたいと思っている。でも国家間の関係もあるし、無条件でいくらでも助けますとは言えないよね。俺はラースラシア王国の貴族なんだから。

「私は行きたいと思っていますが、ラースラシア王国の貴族として、アレクシス様の決定に従います。国と国との関係性は私には分かりませんので……」

俺がヴァロワ王国に助けに行くことで魔物の森の脅威からは助けられても、戦争が勃発しましたなんてことになったら元も子もない。

「そうか、では私に任せて欲しい。……使徒としてレオンが魔物の森に行くというよりも、我が国の貴族と騎士団で助太刀に向かうという形にしよう」

「ありがとうございます。よろしくお願いします」

アレクシス様はこの国の王だからもちろんラースラシア王国が一番だけど、だからといってそれ以外の国はどうなっても構わないなんて言う人ではない。自国を危険に晒さない範囲で、余裕がある分だけなら周りも助ける人だ。だから安心して任せられる。

「それでは急いで明日の準備をしよう。私はヴァロワ王国についての情報をできる限り集める」

「では私は謁見の間を整えて参ります。国内の貴族が謁見するのとは訳が違いますから」

「確かにそうだな。頼んだぞ」

「かしこまりました」

謁見の間って俺は入ったことがないんだけど、相手によって内装とか変えるんだ。ちょっとだけ明日が楽しみかも……緊張の方が圧倒的に大きいけど。

「レオンは私と共に来てくれるか？　明日の全体の流れを説明する。それが終わったら早めに屋敷に戻って明日に備えてくれ」

「かしこまりました。よろしくお願いします」

そうして俺はアレクシス様に連れられて、謁見の間や会議室、図書館などを周り、明日の流れとヴァロワ王国について最低限の知識

を身につけた。
そしていつもより早い時間に大公家の屋敷に戻り、そこからは張り切った従者達に次々と服を着替えさせられて、マネキンに徹することになった。

俺の明日の衣装は凄く豪華でキラキラしたやつに決まったみたい。しかも装飾品がいつもより多いし、髪型も皆が話し合ってたから派手になりそう。
……ちょっとだけ明日が憂鬱になったのは内緒だ。

368、謁見

次の日の王宮。俺は謁見の間でアレクシス様の横に側近として並んでいる。使徒としての威厳を最大限に出すためにということで、ファブリスも一緒だ。

リシャール様もアレクシス様の横に並んでいて、それ以外の多くの貴族は謁見の間の左右に均等に並んでいる。皆がヴァロワ王国の第二王子という人物に興味津々だ。

先ほど優雅な動作で謁見の間に入ってきて跪いている男性は、二十歳ぐらいに見えるワイルド系の男性だった。少しクセのある黒髪に黒の瞳、肌は日に焼けているのか小麦色で、背はかなり高くてガタイも良いから毎日鍛えてる人だと思う。第二王子が騎士になるのかは分からないけど、騎士服が似合いそうな感じ。

「お初にお目にかかります。私はヴァロワ王国第二王子である、フェリシアーノ・ヴァロワと申します。この度は急な訪れにも関わらず謁見の機会を頂きまして、誠にありがとうございます」

「私はラースラシア王国国王である、アレクシス・ラースラシアだ。顔を上げてくれ」

アレクシス様のその声に従って顔を上げた第二王子は、王族らしい優雅な笑みをたたえていた。焦ってる様子は全く感じられない……さすが王族ってところなのかな。

「今回は先触れや書簡も届いていないが、貴殿はなぜ我が国へいらしたのだ？」

「事前にご連絡できなかったことにつきましては、心よりお詫びを

申し上げます。誠に申し訳ございません。しかし事前連絡をできる時間的余裕がなかったのでございます。ご理解いただけたら幸いです」
「それは何故だ？」
「はい。……実は我が国は約三週間前に、巨大な魔物により甚大な被害を受けました。その魔物は人の背丈の数倍ほどもある大きさで、体表は硬い鱗に覆われており口から火を吹く魔物です。鱗がとても硬く物理攻撃は一切効かず、多くの民が犠牲になりました」

その話を聞いて謁見の間には一気に緊張感が漂った。そんな魔物がいるってことは、いつラースラシア王国の方に来るのかも分からない。未知の強大な魔物は怖いだろう。
でも話を聞く限り、その魔物ってファイヤーリザードな気がするんだけど……

「そのようなことがあったとは……、その魔物は倒せたのだろうか？」
「いえ、なんとか戦ってはいましたが倒しきれず、そのうちに魔物の森へ戻って行きました」
「ということは、その魔物は魔物の森から意図的に出てきたということか？」
「……そのようです。魔物の森から一キロほど離れた前線の街を襲いました」

魔物は魔物の森から出てこないっていうのが一般的な考え方なのに、そんなこともあるのか。

「ねぇファブリス、この話の魔物って多分ファイヤーリザードのことだよね？　魔物の森から出て人間の街を襲うなんてことあるの？」

俺は寝そべっていたファブリスの背中を叩いて耳を近づけてもらい、誰にも聞こえないような小声でそう問いかけた。

『この世界は、魔物の森以外の場所に魔力を有したものがほとんど存在しない。魔物は魔力を有したものを糧とするので、魔物の森を出てくることはほとんどないのだ。肉食であれ草食であれ。しかし例外が存在するだろう？　それが人間だ。大方魔物の森に迷い込んだ人間と偶然遭遇し、味を占めたのではないか？』

「想像したくもない話だね……でもあり得るかも。ファイヤーリザードって今までは魔物の森の奥にいたけど、なんで今回はこんな浅いところに来たんだろ」

『別に魔物の森の奥にいると決まっているわけではないだろう？奥の方が森となってからの年数が経っていることで、魔力を多く有している成長した魔植物が多いから、奥に強い魔物が多かっただけだろう』

確かにそうか……なんとなく強い魔物は奥にしかいないって思ってたけど、魔物だって自由に移動できるんだから例外もあるよね。

「今回はあの強大な魔物が気まぐれに森へ戻ってくれたことで、我が国は壊滅を免れたようなもの。もしもう一度襲われたら……今度は国を守れないかもしれません。また騎士団が壊滅的な被害を受けたことで、魔物の森の進行を止められなくなっております。……そこで使徒様がご降臨されたと噂の貴国に、ご助力を賜れないかと参りました。どうか、どうかよろしくお願いいたします」

俺がファブリスと話しているうちに話は佳境に入ったらしい。ヴァロワ王国の第二王子殿下は、深く頭を下げている。

「貴殿が我が国を訪れた経緯は理解した。してレオン、使徒として

の考えを聞かせてほしい」
「かしこまりました。まずフェリシアーノ第二王子殿下、頭を上げてください。私が使徒であり、ラースラシア王国にて大公の位を授かっているレオン・ジャパーニスです。そしてこちらが神獣であるファブリスです」

フェリシアーノ第二王子殿下は俺のその言葉にさすがに驚きを隠せなかったのか、軽く目を見開いた。使徒がまだ子供だって情報は他国に渡ってないみたいだ。それにファブリスのことも。
その状態で謁見の間に入りアレクシス様の横に大きな獣が寝そべってるのを見て、全く動揺を表に出さなかったのは凄いな。俺もこのポーカーフェイスと貴族の笑み、それからカッコ良い威厳を身につけたい。

「御目通り叶いましたこと、光栄でございます」
「いえ、貴国の危機ですから。ミシュリーヌ様も魔物の森が広がっている現状を嘆いておられます。よって私は使徒として、貴国を助けたいと思っています」

俺のその言葉に、フェリシアーノ第二王子殿下は顔に喜色を浮かべる。

「ありがとうございますっ！」

この王子様は国を、そこに住む民を助けるために奔走できる良い人だ。こういう人は助けてあげたくなっちゃうよね。

「レオンもこう言っていることであるし、我が国としては貴国に助力するのもやぶさかではない。しかしそこは国家間の問題、無償で助力をするだけというわけにもいかない。レオンも我が国の貴族で

あるからな」

アレクシス様のその言葉に、フェリシアーノ殿下は再度表情を引き締めた。

「もちろんでございます。ご助力いただけた際には、相応のお礼はいたします」

「ほう、それは具体的にどのようなものだ？」

「我が国にとって無理のない範囲であるならば、できる限り貴国の望みを叶える形で」

その言葉に今度はアレクシス様が少し目を見開いた。多分予想以上に向こうが高い報酬を提示したからだろう。こっちの望みをできる限り叶えるなんて普通言わないよね。そうまでしても早くに助けてほしいってことなのか。

「……分かった。ではこの後会議室で具体的な契約について話し合おう。貴国の助けになることは約束する」

そうして謁見はスムーズに終わり、俺達は場所を会議室に移すことになった。

369、会議

長い机を挟むように、ラースラシア王国の重鎮とヴァロワ王国の重鎮が席に着く。一番上座にいるのはアレクシス様とフェリシアーノ第二王子殿下。そしてラースラシア王国サイドは、俺、リシャール様、軍務大臣であるコラフェイス前公爵と続く。ヴァロワ王国サイドは文官らしき人、騎士らしき人と数人が座っている。

「では早速会議を始めよう。まずは貴国を襲った強大な魔物についてレオンから話がある。レオンよろしく頼む」

「かしこまりました。先程の話を聞く限りですが、貴国を襲った魔物の見当がついております。名をファイヤーリザードと言う魔物です」

さっき少し特徴を聞いただけで魔物を特定した俺に、ヴァロワ王国側から驚愕の眼差しを向けられる。

「あの魔物は、ファイヤーリザードと言うのですね……」

「私は少し前に戦ったことがあるのですが、体表が硬化しているところや口から火を吹く点など、共通点が多くあります」

「た、戦われたのですか！？」

「はい。その時は少し苦戦しつつも倒すことができました」

ファイヤーリザードが何十体も一気に襲ってきたらさすがにやばいかもしれないけど、数体ぐらいなら問題なく勝てそうだった。

「使徒様は、本当にお強いのですね……」

「ミシュリーヌ様のおかげです。また私だけではなくファブリスと

共に戦いましたから。ね、ファブリス」
『うむ、ファイヤーリザードは確かに硬くて厄介だが、倒せぬ敵ではないぞ』

ファブリスの声が会議室中に響いて、その後に静寂が訪れた。ファブリスの声を初めて聞いたヴァロワ王国の人達は、全員が驚愕に目を見開いている。

「あの、驚かせてしまったのならばすみません。ファブリスは人間の言葉を理解して話すこともできるので、ご理解ください」
「は、はい。神獣様のお声を聞くことができて、光栄でございます」

フェリシアーノ殿下は困惑している様子ながらも、何とかそう声を絞り出して頭を下げた。やっぱり見た目が獣だからか、人の言葉を操るのには驚くみたいだ。

「……それでは話を戻しますが、ファイヤーリザードならば倒すことができますので、貴国に助力をするにあたり必要な戦力は私とファブリスのみで問題ありません。しかし脅威はファイヤーリザードだけでなく、魔物の森自体も進行してきているとのことでした。それならば相応の戦力が必要です。私達は強大な一つの敵には強いですが、小さな複数の敵には手が足りませんので」

俺のその言葉を聞いてフェリシアーノ殿下が頷いてくれたところで、アレクシス様が話を引き継いでくれた。

「ということなので、貴国への助力には使徒であり大公のレオンと神獣様、それから第二第三騎士団から騎士を数十名派遣する。また他国に騎士が入ることに対して周辺国を刺激しないためにも、使節団という形を取りたい。そのためレオンの婚約者であり第一王女の

マルティーヌと、騎士団の最高責任者である軍務大臣も同行させる。軍務大臣を同行させるのは、使節団の目的を魔物の森という脅威に立ち向かうための合同演習とするからだ。ここまでで異論はあるか？」

この会議室に集まるまでに二時間ほど休憩兼話し合いの時間が設けられたんだけど、全てそこで決まったことだ。

俺はマルティーヌが一緒に行くことに最初は反対したけど、結局はマルティーヌ本人に押し切られてしまった。レオンがいるなら心配いらないし他国に行ってみたい、そんなことを無邪気な笑みで言われたら頷くしかないよね……絶対にマルティーヌの安全は確保して、どうせ行くのなら最大限に楽しんでもらおうと思っている。

「ございません。周辺国との軋轢まで考えてくださり感謝申し上げます」

「そこは慎重にやらねばならぬからな。しかし一つだけ問題がある。貴国と我が国は接していないので、必ずどこか別の国を通って行かなければならない。何か案はあるのか？」

「はい。我が国と貴国との間にあるチェスプリオ公国ですが、実質的には我が国の属国ですので、こちらを通っていただければと思います」

そうだったのか……初めて知った情報だ。隣をチラッと見てみるとアレクシス様も驚いてるみたい。まだ情報が出回ってないのかもしれないな。

「それは……どのような経緯で属国としたのか聞いても良いか？確か数年前はそのようなことになっていなかったはずだが」

「事の発端は、昨年起きた作物の不作による飢饉です。我が国とその周辺国では日照り続きで深刻な水不足に陥り、特にひどかったの

がチェスプリオ公国でした。元々我が国とチェスプリオ公国は往来も活発で良好な関係を保っていたため、隣国の危機に支援を申し入れ、その見返りとして実質的な属国状態となっております」

去年そんなことがあったんだ……この国では普通に雨が降ってたし知らなかった。やっぱり作物の不作って怖いことだよね。稲が日照り続きの畑でも関係なく育つのだとしたら、間違いなくこの世界の救世主となる。

「そのような経緯が……あまり関わりがないとはいえ、助力できずに申し訳ない。チェスプリオ公国へは、我が国から備蓄してある食料を届けよう」

アレクシス様のその言葉にフェリシアーノ殿下の貴族の仮面が一瞬崩れ、優しげな笑みを浮かべた。

「ありがとうございます。チェスプリオ公爵閣下もお喜びになるかと」

「我が国はチェスプリオ公国と深い繋がりはないが、これを機会に親交を深められたらと思っている。仲介を頼む」

「お任せください」

そうしてヴァロワ王国にラースラシア王国の使節団が向かう道筋ができたところで、アレクシス様が話題を変えた。

「次は貴国から我が国への報酬の件に移っても良いか？」

「もちろんでございます」

「我が国から要求したいのは大きく分けて三つだ。一つ目は貴国の品を優先的に輸入できる権利。特に香辛料の類とカカオを定期的に輸入させてもらいたい。そして二つ目は貴国の特産品を我が国で栽

培する権利。これも先ほどと同様の品だ。そして三つ目は同盟を結びたい。これは一方的なものではなく、互いに危機の時は助け合う事、また互いに剣を向けない事を定めたい」

実はこの要求を決めたのはほとんど俺だったりする。アレクシス様がヴァロワ王国に求めたいのは友好関係と同盟ぐらいだって言ってたから、他は俺に決めさせてもらったのだ。

これから香辛料を使っていろんな料理を開発する予定だし、カカオはチョコレートを作るのなら今までのように少し輸入してるぐらいじゃ足りないだろうから。カカオを輸入してる商家に頼んでたくさん輸入をしてもらおうかとも思ったんだけど、王子に頼めるのならこれ以上はないだろう。

「それは……我が国にとっても利益のあることばかりですが、本当に良いのでしょうか？」

フェリシアーノ殿下は困惑顔で、思わずと言った様子でそう口にした。

「我が国の特産品を輸入していただけるのは嬉しい事ですし、同盟もこちらからお願いしたいほどです。特産品を生産する権利は一見我が国が損失を被るように見えますが……気候の問題でラースラシア王国では育たないかと」

「それでも問題ない。我が国でも育つようにレオンが研究したいのだそうだ」

「使徒様が……」

「はい。もし栽培に成功した暁には、我が国でも好きなだけ作っても良いですか？」

俺が研究するというところで少しだけ躊躇ったようだけど、結局

フェリシアーノ殿下は頷いてくれた。他に厳しい要求がなかったのも幸いしたのだろう。

これで俺の領地でも大々的にカカオが作れる！　基本的には輸入で済まそうとは思ってるんだけど、色々と生育環境を変えたりして品種改良をしてみたいのだ。美味しいチョコレートのためには美味しいカカオからだよね。

「では書面にて契約しよう。リシャール」

そうしてラースラシア王国とヴァロワ王国の間で、正式に契約が交わされた。これから先、この二国は同盟国だ。

370、領地分割

双方合意の上で正式な契約がなされたので、会議室にはさっきまでの張り詰めた空気とは一転、穏やかな雰囲気が漂っていた。

「貴国では魔物の森を押し返した後の領地については、どのようにする予定なのだ？」

アレクシス様が軽い世間話のように、フェリシアーノ殿下に問いかけた。しかし内容は重要なものだ。

「……正直に申し上げますと、魔物の森に土地を奪われることはあっても奪い返すことはできずにいましたので、そのような事態を想定したことがありませんでした」

「まあ、それも無理はないな。我が国でもレオンによって魔物の森を押し返せるようになり、初めて考えたことだ」

魔物の森を駆逐したあとはただの草原や荒野になるから、そこをどうやって活用するのかは難しい問題だ。開拓ってお金がかかるからね……俺はそれに手を出そうとしてる張本人だけど。

でも俺は収入の方が支出より圧倒的に多くて、お金が余ってるから良いのだ。逆にどこかで大きく使わないと、お金を溜め込み過ぎてしまう。

「貴国ではどのように土地を活用するのか、聞いても良いでしょうか？」

「ああ、我が国ではすべて大公家の領地とするつもりだ。そして新しく街を作り人を送り込む政策は、国としても助力しようと考えて

いる」
「使徒様の、ご領地とされるのですね」
フェリシアーノ殿下はどこか羨ましそうに呟いた。国として土地が増えるのは嬉しいかもしれないけど、結局持て余すだけになる可能性もあるからね……それに国内の貴族同士で争いも生みそうだし。
「これは推測ですが……我が国では王家直轄地になると思います。しかし周辺国とも、どこまでが自国の土地であるのか揉めるでしょうし……しばらくは放置されることになる可能性も高いです」
「確かに貴国の周りには多くの国が存在し、領地分割には揉めそうだな」
これから魔物の森を駆逐していく中で、一番揉めるのは確実に領地分割だ。押し返すことができた国がその土地を手に入れることにすれば解決するかとも思うけど、必ずどこかの国が難癖をつけてくるとアレクシス様は言っていた。
「そもそも魔物の森がどこまで広がっているのか、どの程度の土地があるのかも分かりませんので現状ではなんとも……」
そっか、俺はミシュリーヌ様から聞いて魔物の森の広さを知ったけど、他の国では知る術がないんだ。情報を渡しても良いのかな……そう思ってアレクシス様に視線を向けてみると、ハッキリと頷いてくれたので俺は正面に向き直り口を開いた。
「フェリシアーノ殿下、魔物の森の広さならば私が存じております。この大陸の半分は魔物の森が広がっていると考えてもらっても差し支えないかと」
「は、半分ですか……」

殿下は驚愕に目を見開いた。ヴァロワ王国側の他の人達は相当驚いているようだ。

「そ、そこまで広いとは、正直想定外でした……広くとも我が国の国土と同程度かと」

ヴァロワ王国の国土はタウンゼント公爵領よりも小さいぐらいだから、その想定でいたのなら驚くなんてものじゃないだろう。

この大陸は東側半分の全てが魔物の森で、西側半分に人間が住む国がある。そしてその西側の南側約半分は全てラースラシア王国の国土だ。これだけでラースラシア王国がどれほどの大国か分かるだろう。最初はそこまで大きくなかったけれど、今まで何度も行われてきた戦争で国が大きくなっていったらしい。

そして大陸の西側の北半分、ここに大小様々な国が存在し、ヴァロワ王国はその中でも北東方面にある魔物の森と接した国だ。ヴァロワ王国の周りには小さな国がたくさん乱立しているので、ラースラシア王国では小国群と呼ばれている。

「私も初めて聞いた時は驚いた。何せこの大陸で一番の大国である我が国の国土の倍の広さだと言われたのだからな」

「……それは、魔物の森を最後まで押し返した場合はどうすれば良いのでしょうか。我が国ではそこまで管理することは難しいでしょう」

「そうだな……大陸東側の領地分割を話し合うべきかもしれない。鉱山などがあった場合も確実に揉めるだろう」

アレクシス様はそう口にすると、リシャール様に合図をしてテーブルの上に大きな大陸全体の地図を広げた。

「これはレオン達が魔物の森に入った時の地形の様子を聞き取り、また魔物の森があまり広がっていなかった時代の文献を探り、大陸全土の地図を作成したものだ」
「このような機密情報を見ても良いのでしょうか……」
「同盟を結んだのだから構わん」

アレクシス様が何気なく発したその言葉に、フェリシアーノ殿下の表情がより真剣なものに変わった。アレクシス様って隠す情報と与える情報の塩梅がうまいんだよね……この地図だって魔物の森の中は詳細に描かれてるけど、大陸の左側は絶妙に適当だし。

「まず我が国と貴国を含めた小国群との間には、大きな山脈が存在すると思うが、この山脈は魔物の森の中ほどまで続いている。よってこの山脈よりも南側は我が国の領地とするのが妥当だろう」

ちゃっかり魔物の森の南側半分は、全てラースラシア王国の国土にすると宣言している。まあ山脈もあるしそれが妥当だよね。この山脈の先はちょっと揉めるかもしれないけど、そこはまだ先の話だ。

「問題は山脈の北側、つまり貴国らと接する方の土地だ。こちら側にはこの場所とこの場所に山があり、さらにここに大きな川が流れているだろうことが分かっている。しかしこちら側はレオン達も入ってないので正確なことは分からない」

時空の歪みがあったのは、緯度的には山脈よりも少し南側に位置していたので、俺達は北側には行っていないのだ。

「この場所に川があるのでしたら、川の北側が我が国で、南側が他の国と分けることができそうです。さらに……」

それからは地図と睨めっこしながら、どう領地を分割すれば問題が起きないのかについてひたすら話し合った。そして最終的にはここで話し合ったことを持ち帰り、小国群の間で会議を開いて妥協点を探るらしい。
ここから先はヴァロワ王国の仕事だ、頑張ってほしい。

会議が終わりヴァロワ王国の面々が退出していくと、会議室にはラースラシア王国の重鎮達だけが残った。

「ジャパーニス大公様、先程は時間がなくご挨拶できずに申し訳ございません。此度の使節団でご一緒させていただきますので、よろしくお願いいたします」

軍務大臣であるコラフェイス前公爵が話しかけてくれたので、俺も立ち上がって返答する。

「軍務大臣殿、こちらこそよろしくお願いいたします」
「コラフェイス公爵領を訪れていただくという予定が、随分と早い段階で叶いそうで嬉しく思います」

コラフェイス公爵領はちょうどチェスプリオ公国と接している領地で、今回の使節団はコラフェイス公爵領に一泊する予定なのだ。
春の月を祝うパーティーの時にいつかは訪れるって約束したけど、こんなにすぐ行くことになるとは予想してなかった。

「私も楽しみです。しかし今回は一泊だけですので、またゆっくりと訪れることができたらと思っております」
「ぜひお越しください。我が領はいつでもジャパーニス大公様を歓

迎いたします」
「ありがとうございます。……チェスプリオ公国に入るには、どのようなルートで行くのですか？」

俺は当たり障りのない会話が終わったところで、ずっと気になっていたことを聞いてみた。チェスプリオ公国とラースラシア王国の間には山脈があって、あまり往来は活発じゃないはずなんだ。

「選択肢は三つございます。一つ目は一番最短ですが馬車で行くことはできない山越えルート。二つ目は東側にある山脈の谷間を行くルート。こちらは人の手がほとんど入っていない森が広がっています。そして最後が西に大きく迂回するルート。こちらは基本的に整備された街道があり、それがない部分も草原が広がっているので馬車で向かうことができます。しかし他のルートの三倍は距離が長いです」

予想以上に国境越えが過酷だった……でもその三つなら西に迂回するルートだろうな。馬車と騎乗で行きたいし。

「三つ目のルートを選ぶのでしょうか？」
「まだ確定ではありませんがそうなるかと。ヴァロワ王国からの方々も草原を騎乗で駆けてきたようです」
「やはりそうなのですね」
「使節団という名目からも、馬車と騎乗でないと格好もつかないでしょう」

確かに他国の使節団がいかにも山越えしました、みたいな感じで豪華さのカケラもなかったら権威を示せないよね。

それからはコラフェイス前公爵様としばらく雑談をして、陛下や

リシャール様と明日の予定を確認して帰路に就いた。とりあえず大きな問題は起きずに謁見と話し合いが終わって良かった。

閑話　安堵の夜（フェリシアーノ視点）

私は第二王子として父上と兄上を支えるため、騎士団で地位を得て日々国のために働いている。あの日もいつも通り騎士達と訓練をこなし、午後は執務室で書類仕事に精を出していたのだ。

しかしそんな穏やかな日常が、ある一報で一変した。

「殿下、大変ですっ！」

「何だそんなに慌てて。それにいつも言っているだろう、殿下ではなく役職で呼ぶようにと」

「そ、それどころではありません！　先程早馬が来まして、魔物の森への前線の街が巨大な魔物に襲われていると……」

私はこの報告を聞いた時、しばらく事態を飲み込むことができなかった。確かに魔物の森は脅威ではあったが、魔物が街を襲うことなどなかったのだ。

それから急いで騎士団を率いて現地に向かい……そこで目にした光景は、今でも脳裏に焼き付いていて忘れることはできない。

壊されて瓦礫と化した建物、燃えている木造家屋、踏み荒らされた農作物、そしてそこかしこで倒れている民達。

遠くに見えた魔物は厄災か何かだと思うほどに、強大で恐ろしく一目見ただけで戦意を喪失した。あれには勝てない、そう思った。

それからは無我夢中で民達の避難を優先して、逃げることしかできなかった。そして何を思ったのか魔物が森の方に帰って行き……恐怖の時間は終わった。

それから私は数人の忠臣を連れて、すぐに王宮へと帰還した。そして陛下と兄上に使徒様と呼ばれている人物への助力を提案した。使徒様のことはラースラシア王国から来る旅人や商人を通じてヴァロワ王国内でも噂として広がり、王族である私の耳に入るほどになっていたのだ。

使徒様は全ての属性魔法に加え、使徒様しか使えない魔法も操る最強のお方。魔物の森の最奥で強大な魔物を倒したお方。他にもさまざまな噂が流れてきていた。

しかし私はこの噂を半信半疑で聞いていたし、陛下はもっと信じていないようだった。ミシュリーヌ教は我が国であまり流行っていなかったし、使徒という存在が実際にいるなど信じられなかったのだ。

ただ我が国まで噂が届くのだから強い人物であるのは確かなのだろうと思い、一縷の望みにかけて助力を願おうと決意した。そして陛下と兄上もそれに賛同してくれて、私がほとんど休む間も無くラースラシア王国へと馬を走らせることになったのだ。

ラースラシア王国に着いてからは驚きの連続だった。まず驚いたのは突然訪れたにも関わらず、翌日には謁見が認められたことだ。一週間は先だろうと思っていたので、ラースラシア王国側の配慮に感謝した。

そしてその謁見でまず驚いたのは、陛下の近くに大きな獣がいたことだ。ただ歴史上では熊をペットとして側に置いていた王族の話も聞いたことがあったので、驚きを顔に出すことはせずに何とか耐えることはできた。

しかしその後で聞いた衝撃の事実には、さすがに顔を歪めてしまった。なんと陛下のペットだと思っていたのは神から遣わされた神

獣様で、その隣にいる世話係だと思っていた少年が使徒様だというのだ。

私はさすがに信じられずにその事実をうまく飲み込めなかったけれど、ここまで優遇してくれているラースラシア王国側に使徒様である証拠を見せて欲しいだの、どのぐらいの強さなのかお手合わせ願いたいだの、そんな図々しいことを言うことはできなかった。

だから内心では本当にこの子供に我が国を救うことができるのかと疑っていたけれど、それは表に出さずに話を進めた。しかし私はこの後の会議で、一度でも疑ってしまったことを心から悔いることになる。

会議が始まってすぐに使徒様が、我が国を襲った魔物に見当がつくと仰ったのだ。ファイヤーリザードという魔物で一度戦って倒したことがあると。そしてさらに神獣様にも意見を求められて……なんと、神獣様が言葉を発された。

私はその言葉を聞いた瞬間に理解した。このお二方は本当に特別な存在なのだと。ミシュリーヌ様の使徒様と神獣様とは、架空の存在ではなくて実在しているのだと。

お二方に助力に来ていただけるなど、どれだけ幸運なことか。これで我が国の民達がこれ以上理不尽な危険にさらされることはなくなる……本当にありがたいことだ。使徒様に、神獣様に、そしてミシュリーヌ様に感謝をしなくては。

我が国は国教を定めておらず、宗教の力はかなり弱い。しかしこれから先は、ミシュリーヌ教を国教とすることも考えた方が良いのかもしれないな。助けていただいてそれっきりなど……そんな不義理なことをしてはいけないだろう。国に帰ったら陛下と兄上に相談

しなければ。

「殿下、ご準備が整いました」
「ありがとう。では行こう」
「はっ」

今夜は夕食会に招待されているので、準備を整えて会場へ向かう。使徒様と神獣様は参加されないようだが、国王様や宰相様をはじめとした、重鎮の方々が揃って御出席されるらしい。気を引き締めなくては。

「フェリシアーノ殿下、心配事も多く気が休まらないとは思うが、少しでも楽しんでもらえたら嬉しい」
「お気遣いありがとうございます」

夕食会が始まってすぐの挨拶で、アレクシス陛下がそう声をかけてくださった。ラースラシア王国の国王様は気遣いもできるお方なのだな……我が国の陛下も王としてどっしりと構えた頼り甲斐のある方だが、気遣いという点では少々無神経なところもある。
国に帰ったらアレクシス陛下の様子をお伝えして、もう少し柔らかい雰囲気も身に付けてもらうように進言してみよう。怖がられることも王としては重要だが、それだけではダメだからな。

「レオンのことは貴国にまで広まっているのだろうか？」
「はい。噂程度ですが、とても強く様々な魔法を使いこなすお方がいると」
「そうなのだな……ミシュリーヌ様の使徒であるという事実は、あまり知られていないのか？」
「……お恥ずかしい話ですが、我が国では宗教というものが発展し

ていないのです。したがって使徒様という名前を聞いたとしても、ミシュリーヌ様と結びつける者は少ないかと」

私は第二王子として宗教の情報が一通り頭に入っているので、使徒様と聞けばどの宗教だろうと疑問に思い、情報を集めてすぐにミシュリーヌ教、ミシュリーヌ様の使徒様であることがすぐに分かった。

しかし我が国の民達は、そもそも使徒様という名前を聞いても宗教と結びつけて考える者は少ないはずだ。そう呼ばれている強いお方がいる、ほとんどの者はその認識止まりだろう。

今回のように国の危機に陥った場合は、宗教が民達の心を支えることもある。これから先の国家運営を考えても、やはり宗教の力が必要なのかもしれないな。

それからも話をしながら食事は進んでいき、最後に果物を食べて夕食は終わりとなった。

「楽しんでいただけただろうか」

「はい。とても美味しい料理の数々に皆様との有意義な会話。素晴らしい時間を過ごすことができました」

「それならば良かった。では最後に一つだけ、使節団の出立はいつ頃が良いか希望はあるか？」

こちらの希望を聞いてくださるのか。ここまで優遇してもらえると、何か裏があるのではないかと疑いたくなってしまうな……これは王族に生まれた宿命か。とにかくまずは疑いから入ってしまう。

「できる限り早いとありがたいです。魔物がまたいつ我が国を襲う

か分かりませんので」
「分かった。リシャール、最短でいつ出立可能だ？」
「そうですね……二日後ならば可能かと」
「では出立の予定は二日後としよう。それで良いか？」

二日後なんてどれだけ急ピッチで準備を進めるのだろうか。私も組織の上層部にいるから分かる。使節団を二日で編成して出発準備までするのは……よほど優秀な組織で、尚且つかなり無理をしなければできないだろう。

「なぜ、そこまでしていただけるのでしょうか」

思わずそんな疑問が口から溢れてしまった。するとアレクシス陛下は苦笑を浮かべて口を開く。

「せっかく動くのなら最大限の効果を得られるように、そう考えているからというのが理由の一つ。ただ一番の理由は……レオンならばそれを望むと思うからだ。レオンは使徒として強大な力を持っているにも関わらず決して驕らず、自分が手を伸ばせる範囲にいる者はできる限り助けたいと望んでいる。もしあと数日早ければもっと大勢の者を助けられた、そんな事態になったらレオンは自分を責めるだろう。そうならないために、私はできる限りの助力をしたいと思っている」

使徒様はそのように素晴らしいお方なのか……私もその心意気に応えられるように、全力で事に当たろう。

「ありがとうございます。では二日後に出立でお願いいたします」

そうして夕食会を終えた私は与えられた客室に戻り、明日からの

忙しい日々で万が一にも倒れることがないよう早めに眠りについた。

371、使節団会議　前編

次の日も俺はファブリスと共に王宮に来ていた。今日の目的地はアレクシス様の執務室ではなく謁見の間でもなく、昨日の会議室だ。
昨日の夜にはヴァロワ王国の面々を招待したささやかな夕食会が開かれ、そこで出発日が二日後に決まったらしい。よって至急使節団のメンバーを全員集めて、今日は一日会議をすることになったのだ。

しかし王宮に着いて使用人に案内されて向かった先は、会議室とは少し離れた応接室だった。

「今日は会議室ではないのかな？」
「ジャパーニス大公様と神獣様はまず、こちらの応接室にお通しするようにとのことです。中でマルティーヌ様がお待ちです」

マルティーヌがいるのか。俺はその事実を聞いて、少しだけ緊張していた体を緩めた。中に入ると、マルティーヌがお茶を飲みながらゆったりと過ごしている。

「マルティーヌ、おはよう」
「レオン来たのね、おはよう。神獣様もようこそお越しくださいました。そちらのクッションをお使いください」
『うむ』

にっこりと微笑みながら席をすすめてくれるマルティーヌに従って、俺は向かいのソファーに座り、ファブリスは部屋の隅にあるクッションに寝そべった。するとすぐに淹れたてのお茶が出される。

「今日って会議じゃなかったの？」
「いえ、これから会議よ。だからレオンと一緒に行こうと思ってここで待っていたの」
「そうだったんだ。ありがとう」

俺は応接室に案内された理由が分かり、安心してお茶に手を伸ばした。おおっ……美味しい。少し柑橘系の香りがするお茶だ。

「このお茶美味しいね」
「これは最近輸入されるようになった新しいお茶で、私も気に入ってよく飲んでいるのよ」
「俺も買おうかな」
「本当？　じゃあ買い付け先を紹介するわ」

マルティーヌのその言葉にそれぞれの従者が動き、情報交換を始めた。こういう時にサッと動ける従者はやっぱり優秀だ。さすがロジェ、そしてマルティーヌのメイドさん。

「それにしても、二日後に出発だなんて急よね」
「それだけヴァロワ王国の状況が、厳しいのかな……」

昨日の夕食会は公式のものじゃなかったし、俺はまだ未成年だからと参加しなかったので、どんな経緯で二日後の出発になったのか詳しく知らない。でも状況に余裕があったら日程に余裕を持たせるだろうし、一日でも早くと焦るような状況ってことだ。

それに使節団として行くなら、ヴァロワ王国に着いてすぐに魔物の森へと向かうのが難しいのだと思う。多分数日は王宮でさまざまな日程をこなしてから、魔物の森へ向かうことになるはずだ。

この辺は身分があるからこそ動きづらいところだよね。

「強い魔物に街が襲われるなんて……想像もしたくない悲劇だわ」

街の惨状を思い浮かべたのか、マルティーヌは表情を曇らせた。確かにファイヤーリザードが街で暴れたってなったら……木造家屋は口から吐く炎で燃やされ、石造の建物はあの硬化した尻尾で壊され、酷い状況だろう。

「早く助けに行ってあげよう」

「ええ、そうね。確かに準備に時間を取られてる場合じゃないわ」

それからマルティーヌとお茶を飲みつつしばらく雑談をして、会議開始の十分前に応接室を出た。今回の会議は俺達が一番上の身分だから、早く行きすぎるのも避けないといけなかったのだ。

会議室に入ると、既に俺達以外のメンバーは全員集まっていた。

「王女殿下、ジャパーニス大公様、神獣様、ご足労いただきありがとうございます。お二方はこちらへ。神獣様のクッションもご用意してあります」

軍務大臣であるコラフェイス前公爵様が、俺達に席を勧めてくれた。一番上座の席で、ファブリスのクッションは俺の隣に置かれている。

『感謝するぞ』

ファブリスが満足気にそう言ってクッションに寝転び、俺とマルティーヌが席に着いたところで会議は始まった。

今回の使節団の実質的な指揮者であるコラフェイス前公爵様が会議を進行する。

「まず今回の使節団の目的は、両国間での文化的な交流と魔物の森への対処法の共有だ。そしてそれに伴って合同軍事演習も行うことになっている」

やっぱり文化的な交流も目的になってるのか。この世界の他国文化って今まで触れたことがないから楽しみだ。ヴァロワ王国独自の料理とか食べられるかな。

「しかし公になってはいないが、一番の目的はファイヤーリザードと呼ばれる強大な魔物の討伐と、魔物の森を押し返すことだ。同盟国となったヴァロワ王国を助けるため、全力を尽くそう」

「はっ！」

軍務大臣の呼びかけに騎士の方達が、完璧なタイミングで声を揃えて返事をした。やっぱり騎士ってカッコ良いよね。

「ではここからは実際の道中について、話し合いを行う。まずは隊列についてだが、ヴァロワ王国からの客人を乗せた馬車が一つ、そして王女殿下とジャパーニス大公様が乗られる馬車が一つ、さらに文化交流のため数人連れて行くことになった文官達が乗る馬車が一つ、そして最後に王女殿下と大公様の従者と護衛が乗る馬車が一つ、合計四つの馬車が連なって行くことになる」

その説明に騎士達の間では微妙な空気が流れた。そうだよね、俺も一ヶ所おかしいところがあるなって思った。マルティーヌはまだしも俺の従者は別に必要ないだろう。

もちろんいてくれたらありがたいし心強いけど、できる限り人数

は減らした方が楽だと思う。

そのことを口にしようとした瞬間、騎士達の中ではベテランの域に入りそうなガタイの良い人が口を開いた。俺の気持ちを代弁してくれるのだろうか、そう期待して待っていると発せられたのは全く違う内容。

「軍務大臣様、食料を運ぶ馬車はないのですか？」

そしてその言葉にほとんどの騎士が、同意の意味を込めて頷いている。……俺の従者の部分で微妙な顔をしてたわけじゃなかったのか。

「今回は食料を運ぶ馬車は用意しない。しかしその代わりに、大公様がアイテムボックスという魔法で全ての食料を運んでくださるそうだ。またその魔法が魔法具になったものも、いくつか陛下からお借りしている。よって荷物の運搬に関する心配は無用だ」

「そうでしたか、かしこまりました。ジャパーニス大公様、ありがとうございます」

軍務大臣のその説明に、騎士達が揃って頭を下げた。俺はその様子になんだか居心地が悪くなり、話題を変えるためにさっき聞きそびれた質問を口にする。

「軍務大臣殿、私からも一つ良いでしょうか？」

「もちろんでございます」

「先程の話では私の従者と護衛が同行することになっていましたが、私はどちらも連れて行かなくて構いません。人数は極力減らした方が良いと思うのですが」

俺のその提案は通るかなと思っていたら、あっさりと却下された。
「いえ、やはり使徒様としての威厳を見せるためにも、大公様には従者と護衛が必要かと思われます」
確かに威厳と言われると言い返せない。俺自身に威厳がないからね……
「……分かりました。では素直に連れて行くことにします」
「よろしくお願いいたします」
それから他に質問がないかを確認して、次の議題に進んだ。
「次は道中泊まる街について説明をする。まずはこの紙を見て欲しい。王女殿下と大公様もこちらをどうぞ」
「ありがとう」
「ありがとうございます」
それは一枚の紙にまとめられた日程表だった。昨日の今日でこれを作ったのか……凄いな。
「野営は一度もないのかしら？」
「はい。ラースラシア王国側では、宿や貴族の屋敷に宿泊していただきます。しかし国境を超えてからのことは不明瞭でして……裏面をご覧ください」
軍務大臣のその言葉に皆が一斉に裏面を見る。すると裏には、国境越えをする日からの日程が書かれていた。確かに途中で宿が未定のため野営の可能性ありって書いてあるな。

「もしかしたら何度か野営となってしまうかもしれませんが、ご容赦いただけたらと思います」
「別に野営でも構わないわ」
「ありがとうございます」
「マルティーヌ、野営でもベッドがあるから心配しなくても大丈夫だよ。バリアで覆えば誰も中に入れないし、土魔法で中が見られないように壁も作るし」

俺がマルティーヌの方を向いてそう言うと、マルティーヌは少しだけ呆れた表情を浮かべながらも笑顔で頷いてくれた。

「さすがレオンね。じゃあ野営の時はお願いするわ」
「任せて。ということなので、騎士の方々も野営の心配はいりません。あっ、ですがベッドが人数分はないので……人数分購入できるでしょうか？」

俺のその質問に軍務大臣は、微妙な表情で首を横に振る。

「……いえ、騎士達は野営に慣れておりますゆえ、ベッドは必要ありません。お心遣い感謝いたします」

……野営にベッドは非常識だってことを忘れかけてた。確かに騎士の方達は野営に慣れてるから大丈夫だよね。じゃあ俺とマルティーヌとその従者や護衛、そしてヴァロワ王国の方々の分だけは用意しておこう。
何個か足りないからこの後に買いにいかないと。

俺がそんなことを考えているうちに、話は次の議題へと進んでいた。次は国境越えのルートについてみたいだ。

372、使節団会議　後編

軍務大臣は大きな地図を取り出して会議室の机に広げた。そしてコラフェイス公爵領とチェスプリオ公国の国境部分を指し示す。

「今回は我が領を通ってチェスプリオ公国へと入り、それからヴァロワ王国へと向かう。その際に一番の難所となるのがチェスプリオ公国へと抜ける道だ。ルートは三つあり、一つ目が山を越えて行く道、二つ目は山脈の谷間に広がる森を抜ける道、そして三つ目は西に大きく迂回し草原を通る道」

軍務大臣は地図を指し示しながら説明をしてくれる。前に言葉で聞いただけよりも分かりやすいな。でもこうして地図で見てみると……草原を通る道がどれだけ遠回りかが分かる。

「今回はこの三つ目のルートで行こうと思う。かなり遠回りではあるが、使節団として馬車と騎乗で行かなければならないからな。よってこの草原で野営をすることになる可能性もあるので、心に留めておくように。この草原には肉食の獣も多く生息しているので、気を引き締めてほしい」

「はっ！」

肉食の獣もいるのか……確かにいるよね。人間がほとんど入らない場所なら尚更だ。草原で野営をする時だけは、全体にバリアを張ろうかな。

「この草原を抜けてしばらく進むと街道があり、その街道の先にチェスプリオ公国最南端の街がある。しかしその街には寄らずにその

まましばらく進み、チェスプリオ公国の公都まで一気に行く予定だ。……公都では一泊し公家と交流予定ですので、王女殿下と大公様は食事会などに招待されるかと思いますが、そのご準備もお願いいたします」

ここでも食事会か……あんまり食事会とか好きじゃないんだけど、そうも言ってられないし頑張ろう。ロジェ達に正装をいくつも準備してもらわないとダメかな。こうなってくるとアイテムボックス様々だ。

「分かったわ」

「準備しておきます」

「ありがとうございます。……では最後にヴァロワ王国に入ってからについての説明をする。ヴァロワ王国でもすぐに王都まで向かい、王宮の客室に滞在することになる。騎士は騎士団の宿舎を借りることになるかもしれないが、その場合は迷惑をかけないように気をつけること。そして到着してから数日間、騎士達はヴァロワ王国騎士団の訓練に参加する。王女殿下と大公様、文官達はその間に文化交流をお願いいたします」

最初に文化交流なのか……やっぱりすぐ魔物の森に行くわけには行かないんだろう。使節団という立場で行くのだから仕方がないか。

「その数日間が終わると、遂に魔物の森へ向かうことになる。ここではファイヤーリザードを見つけて討伐することと、魔物の森を少しでも多く押し返すことが目標だ。騎士はヴァロワ王国の騎士団と連携してことに当たって欲しい」

「はっ！」

「大公様と神獣様には、ファイヤーリザードをお願いできればと思います」

「もちろんです。ファブリス、ファイヤーリザードを探し出すことってできるよね」
『無論だ。あのようなトカゲは我がすぐに倒してくれる』
ファブリスはドヤ顔で立ち上がってそう宣言した。すると騎士達の羨望の眼差しがファブリスに集まる。ファブリスもカッコつけだな〜。
「ファブリスありがとう。期待してるよ」
『うむ、任せておけ』
ファブリスはカッコよくそう決めてまたクッションに寝そべったけど、さっきまでと違って大きな尻尾がわさぁ、ふさぁ、と揺れている。最後まで決まりきらないところが可愛いんだよね……会議室の全員がファブリスの尻尾に釘付けだ。
「オホンッ、えー、神獣様よろしくお願いいたします。ではこれで道中の説明は終わりとする。帰りは同じルートを帰る予定だ」
軍務大臣がわざとらしく咳払いをして皆の視線をファブリスの尻尾から引き離し、説明の終わりを告げた。
「これからは質疑応答の時間とする。質問のあるものは挙手を」
それからは結局昼食を跨いで会議は午後まで続き、細かい部分を詰めていった。そして先程やっと会議が終わり、俺は大公家の屋敷に戻ってきたところだ。
「レオン様、おかえりなさいませ」

「エミール、ただいま」

今日の会議にはロジェとローランが付いてきてくれたので、屋敷に戻ると新しい従者であるエミールが出迎えてくれた。

「そういえば俺の従者と護衛も一緒に行くことになったけど、ロジェとローランだけで良いのかな？　他の皆も？」

上着を脱いでエミールに手渡し、ソファーに腰を下ろしつつロジェにそう問いかけた。

「使徒様であるという威厳のためにもというお話でしたので、人数は多い方が良いかと思います。なので全員連れて行くべきかと」

「やっぱりそうなんだ……じゃあ皆に話をしておいてね。急で準備が大変だと思うけどごめんって添えて」

「かしこまりました」

準備ができるのは明日一日しかない。明日の夕方には王宮に行って、使節団全員の荷物を受け取りアイテムボックスに仕舞う予定だから、夕方までに自分の準備は終えないと。

「明日は朝から準備だね」

食料は王宮で準備してくれるって話だったけど、自分でももっと追加しておきたいから……まずは朝から屋台巡りをしよう。そして食材も大量に買い込まないと。

あとはベッドも既製品のもので良いから買わないとだ。

「まずはレオン様のお召し物を準備いたします」

「よろしくね。全部アイテムボックスに入れていくから容量の心配

はしないで、とにかく必要そうなものを端から準備してくれれば良いから。あと皆の荷物もアイテムボックスに入れるから多くても大丈夫だからね」
「ありがとうございます。……あの、一つだけわがままを言っても構いませんでしょうか？」

ロジェが聞きづらそうにそう口にした。ロジェからのお願いなんて、初めてレベルで珍しいことだ。
俺はロジェが頼ってくれたことが嬉しくて、食い気味に返事をする。

「もちろん！　なんでも言って、なんでも叶えるよ」
「レオン様……なんでも叶えるのはおやめ下さい」
「でもロジェは変なこと頼まないでしょ。何か欲しいものでもあるの？」
「はい。……アイテムボックスの魔法具を、今回の旅の間だけ貸していただけないかと」
「もちろん貸すよ！　というかあげるよ！」

アイテムボックスの魔法具は俺しか魔力を込められないし、途中で魔力を込め直さずに魔力が尽きてしまうと中身が全部なくなるから、あまり広めてこなかった。でもロジェ達ならいつでも俺と一緒にいるんだし、魔力切れの心配なんていらなかったんだ。
もっと早く気づいてあげれば良かった……！

「ありがとうございます。今回の旅の間だけで大丈夫ですので、お借りできればと思います。私達が必要なものを取り出す際、毎回レオン様にお願いするのも申し訳ありませんので」

確かに俺に取り出してもらうのを頼むのって、結構大変なことな

のか……今までの予定では俺のアイテムボックスに基本的には全てを収納して、魔法具の方はサブの予定だった。でも基本的には魔法具の方に荷物を入れて、俺が毎晩魔力を込め直すようにしようかな。明日王宮で提案してみよう。

「一人一つ欲しい？」

使節団全体のことは明日考えれば良いことにして、俺は思考をロジェ達の魔法具に戻した。

「いえ、皆で一つで問題ありません」
「従者と護衛でも分けなくて良いの？」
「はい。私達はレオン様の供ですので、基本的に同じ場所におりますから」
「……そっか。じゃあ一つだけ作るね」

一人に一つずつ作ってあげたかったなと思いつつ、押し付けすぎるのも迷惑だろうと思って素直に一つだけを作った。そしてロジェに手渡す。

「はいどうぞ。一週間ぐらいなら魔力は切れないんだけど、一応毎晩魔力を込め直すから持ってきてね」
「かしこまりました。ありがとうございます」

お礼を口にしたロジェの口元が緩んでいる。ここまであからさまに緩んでるのは久しぶりに見た！
ロジェはアイテムボックスが使いたかったのか……これからも何かと理由をつけてロジェに貸し出そう。

３７３、裏路地探検

次の日の朝。俺はいつもより早起きをして、平民の服に着替えて王都の外れに転移した。何でこんなことをしているのかというと、屋台を巡って食料を大量に仕入れる為だ。

最初は普通に貴族の服装で中心街の屋台を巡れば良いかなと思ってたんだけど、大公として行くと騒ぎになって屋台巡りを純粋に楽しめないし、平民に扮して俺の顔が知れ渡っていない王都の外れに向かうことにした。

それに今日は明日の準備で皆が忙しそうだし、屋台巡りに付き合わせるのも悪いからね。変装して平民として出掛けるのなら、従者も護衛も付かなくて良いし。

俺の実家がある方面だとレオンを知っている人も多いので、ロニーの孤児院近くの裏路地に転移をした。そして孤児院から遠ざかるように路地を探検しながら歩いていく。

……こういうの、ちょっと楽しいかも。王都もまだまだ行ったことのない場所って沢山あるし、暇な時は王都中を巡る旅をしようかな。

そんなことを考えつつ入り組んだ路地を進んでいくと、荷車さえ入って行けないような狭さの路地に、食堂らしきお店を見つけた。

こんな場所に食堂があることに驚いて、少しだけ中を覗き込もうかな……そう思った瞬間、ドアが内側からバンッと勢いよく開かれる。

「早く仕事を探してきな！！」

そしてそんな叫び声が聞こえて、三十代ぐらいのおじさんが投げ飛ばされて来た。おじさんは顔から地面に突っ込んで、凄く痛そうだ。

「あの、大丈夫？」

恐る恐る声をかけると、おじさんは鼻の頭を擦りながら顔を上げた。擦り切れて血が出てる……痛そう。

「俺、回復魔法が使えるから治してあげるよ」

あまりにも痛そうな傷跡を放っておけなくて、この程度なら簡単に治せるからとおじさんの返事を聞く前にさっと怪我を治した。そしてピュリフィケイションをさりげなく使って汚れも落とす。

「あれ、痛くねぇ。坊主が治してくれたのか？」

「うん。大丈夫？」

「大丈夫だが、俺は金がなくて治療費を払えねぇよ。どうするか……何かお礼になるようなもんがあったか？」

おじさんはそう言いながら、さっき投げ飛ばされたドアを開けようと立ち上がった。

「……中に入って大丈夫なの？　喧嘩してたんじゃ」

俺は思わずドアに手を伸ばしたおじさんを引き留めてしまう。それほどさっきの勢いが凄かったのだ。

「いつものことだから大丈夫だ」
「そうなんだ……」

あれがいつものことって凄いな……女の人の声だったし多分夫婦だよね？　いろんな夫婦がいるなぁ。

「そういえば仕事を探して来なって言われてたけど、ここって食堂じゃないの？」
「食堂だけどよ、客が来なくて稼ぎがないから、嫁さんに仕事を探してこいって言われてんだ」

……そういうことか。まあこの立地でお客さんが来る方が奇跡だろう。よっぽどの名物料理とかなければ……いや、それがあっても難しいかな。

「もう食堂は辞めるってこと？」
「まあそうなるなぁ～、俺の夢だったんだけどな。美味けりゃこんな立地でも人は来るかと思ったんだが」
「ここは相当奥まってるから……なんでこんなとこに食堂？　って思ったよ」

俺のその言葉におじさんは苦笑して頭をかく。

「この建物の持ち主と前に働いてた食堂で知り合って、遠くに引っ越すっていうんで安く譲ってもらったんだ。本当はアパートで、一階が大家の住居になってて二階が貸し出せる部屋になってるんだけど、これで自分の店をもてる！　って嬉しくなって勢いで仕事を辞めて、改装して食堂にしたんだ。嫁さんには散々無理だって言われてたけど無理を通してな……結局このザマだ」

おじさんがそこまで話して自嘲の笑みを浮かべたところで、また勢いよくドアが開いた。

「あんたいつまでこんなところにいるんだい！　早く仕事を探して来なって言ってるだろ！　このままじゃあ、子供たちにご飯も食べさせてあげらんないよ！」

うぅ……耳がキンキンする。俺はおじさんと話していたせいで、おばさんの怒鳴り声を至近距離で聞いてしまった。

「あれ、あんた誰だい？」

おばさんは俺のうめき声で、やっと俺の存在に気づいてくれたらしい。もうちょっと早く気づいて欲しかったです。

「ちょうどうちの食堂を覗き込もうとしてた坊主だよ。俺の怪我を治癒で治してくれたんだ」

「なんだって、それじゃあ早くお礼をしなきゃダメじゃないか！　なんだってこんなところで突っ立って話をしてるんだい！」

おばさんは大袈裟なほど驚いたように目を見開き、おじさんと俺の腕を引っ張って食堂の中に入った。えっと……俺も一緒なんですか？　お昼ご飯までには屋台巡りの他に、ベッドも買いに行きたいんだけど……

そんな俺の心の叫びはもちろん届かず、おばさんは俺を椅子に座らせると水を出してくれた。そしておじさんを厨房に投げ入れる。うん、言葉の通りに投げ入れてた。

強引で豪快な人だな……このぐらいの方が住みやすい世の中なのかもしれないけど、おじさん頑張れ。

「怪我を治してくれたっていうのに、お礼もしないでごめんなさいね。うちの人は気が利かなくて。申し訳ないけどお金はないから食事で勘弁してくれるかい？　この時間ならまだ食べてないだろう？」
「あの、別にお礼はいらないのですが……」
「治癒してもらってお礼もなしなんてダメだよ！　すぐできるからちょっと待ってな」

ニカっと笑ってそう言うと、おばさんも厨房に行ってしまった。ここはありがたく受け取った方が良いかな……実は朝ご飯は屋台で食べれば良いかなと思って食べてないのだ。だからお腹も空いてるしちょうど良い。

食事ができるのを待っている間に中をぐるっと見回してみると、もともと食堂ではなく住居として作られたからか、食堂には向いていない建物だと分かる。

まずはとにかく狭い。小さめのテーブルが三つしか置かれていないし、全部にお客さんが座ったら椅子同士がぶつかりそうな距離感だ。
それに窓が小さい。もう少し大きい方がお店としては明るくて良いだろう。後は厨房がカウンターで繋がっていない。この国の食堂は基本的に厨房と食事スペースはカウンター越しに繋がっていて、それによって解放感が生み出されている。ただでさえ狭いこのお店でその解放感もないと……うん、ちょっと息が詰まりそうな空間だ。

おじさん……この建物で食堂を始めようと思ったのが間違いだよ。ここはアパートとして運営して、その利益で新しく食堂を開くお金を貯めれば良かったのに。

そんな失礼なことを考えながら待っていると、厨房に続いているドアが開き、おじさんとおばさんが部屋に戻って来た。

「待たせたね。はいよ、うちの食堂おすすめだ」

「うちはメインがスープなんだ。それにパンと水も付いてくる。後は追加料金で肉もつけられるんだが、生憎今は在庫がなくて焼けなかった……すまない」

「気にしないで。ありがとう」

スープはラーメンの丼みたいな大きな器に、並々よそられていた。基本的にこの世界の食堂でスープとは、少量がセットとしてついてくる程度でメインというのは珍しい。

「いただきます」

俺はスプーンを手に取って、良い匂いがしているスープをひと掬いして口に入れた。

「え、美味しい」

「そうだろ！　俺もスープには自信あるんだ！」

あんまり期待してなかっただけにかなり驚いた。この時期の野菜がたくさん入っていて、味が凄く良い。場所がここじゃなかったら普通に流行りそうなのに……もったいないな。

３７３、裏路地探検（後書き）

「転生したら平民でした。～生活水準に耐えられないので貴族を目指します～」

書籍の一巻二巻が好評発売中ですが、このたび三巻の刊行も決定いたしました！

いつも応援してくださっている皆様のおかげです。本当にありがとうございます！！

皆様に楽しんでいただけるように、たくさん改稿してオリジナルストーリを書こうと思っていますので、楽しみにしていただけたら嬉しいです。

発売中の一巻二巻もよろしくお願いいたします！

そしてそれに伴ってもうひとつお知らせですが、三巻をより良いものにするために書籍化作業の時間をたくさん確保したいと思っています。

そのため現在週４投稿のＷｅｂ版ですが、基本的には月水金の週３投稿にさせていただきます。ご理解いただけますと幸いです。

いつも本当にありがとうございます。皆様のおかげでここまで来ることが出来ました。これからもよろしくお願いいたします！

蒼井美紗

374、スープの仕入れ

俺はさらに何回かスープを口に運んで美味しい味を堪能すると、一旦スプーンを置いておじさん達の方に顔を向けた。

「これってあと何人分作れる？　二時間以内に」
「……鍋には十人分ぐらいはあるぜ？」
「そうじゃなくて、鍋と材料がいくらでもあったとしたら？」

俺の質問に不思議そうに首を傾げながらも、おじさんはちゃんと考えてくれた。

「二つ並行して、二十分で鍋二つ分が作れるな。一つ分が十五人分ぐらいだから……」
「じゃあ二十分で三十人分、二時間で百八十人分作れるってことか」
「お、おお？　そうなのか？」

おじさんは全く分かってなさそうだけど、そういうことだろう。二時間で百八十人前のスープ、作ってもらおうかな。
それならかなりの売り上げになるだろうし、その売上を元手に屋台でも始めて頑張ってほしい。味は悪くないんだから、このまま辞めるのは勿体ない。

「おじさん、追加注文して良い？　スープ百八十人分を作って欲しいんだ」
「はぁ？」
「これ材料だから使って、それから鍋も」

俺はアイテムボックスから材料を取り出して、次々と机に並べていった。おじさんとおばさんは全く事態を把握できていないのか、呆然とその様子を眺めている。
しかし少し経つとおばさんがハッと何かに気づいたような表情を浮かべ、その場に勢いよく跪いた。

「も、もしかして、使徒様、なのかい？」
「うん。でも今はお忍びだから内緒ね」
「し、使徒様！？　坊主がか！？」

おじさんは素っ頓狂な声をあげて驚きに目を見開く。するとそんなおじさんを横目で確認したおばさんが、立ち上がっておじさんの頭を思いっきり床に押し付けた。

「あんたも早く頭を下げるんだよ！」
「おばさん良いから、頭を下げなくても良いよ。全然気にしないから」
「そうなのかい……？」
「うん！　それでスープを作ってもらえる？　美味しかったから持ち帰りたくて」

俺のその言葉にだんだんと実感が湧いて来たのか、おじさんは顔に喜色を浮かべて立ち上がった。

「もちろんだ！　使徒様に気に入ってもらえるなんて、俺の人生にもう悔いはない！」
「ははっ、大袈裟だよ。ちゃんとお金も払うからね。それでこの先は聞き流してくれて良いんだけど……そのお金を元に屋台を始めるのが良いと思うよ。スープの屋台なら絶対に流行ると思う。この食堂は立地と作りが悪いだけだよ」

屋台はマリーと幾つも回ったけど、もっと微妙な味のスープを売っているお店はたくさんあった。

「そっか、屋台か……なあ、屋台をやってみても、良いか？」

おじさんはおばさんの方を向いて、恐る恐るそう尋ねた。

「やるしかないよ、使徒様に言われちゃあね！」

するとおばさんはそう言って、嬉しそうにおじさんの背中を叩く。なんだかんだ仲良くやってる夫婦なのかな。

それから俺は二人にスープ作りを任せて、自分はゆっくりと食事を再開した。そして食事が終わった頃に最初のスープが出来上がり、それを受け取ってアイテムボックスに仕舞ったところで一度食堂を後にする。

他のスープは一時間半後に取りに戻ってくることにしたのだ。

食堂を出た俺はまた路地をグネグネと進み、大通りに出て広場へ向かった。そしてそこで串焼きやパン、卵焼きなどを大量に購入し、さっき二人に渡してしまった材料も再度買い足した。もうこれ以上は買いすぎかな……そう思ったところで止めて食堂に戻る。

「おじさんおばさん、戻ったよ～」

「おおっ、ちょっど良かった。今最後のスープができたところだ」

おじさんが鍋を手に食事スペースの方に入ってきた。やっぱり凄く良い匂いだ。

「その机の上にあるのが全部だ。どれも絶品だと思うぞ」
「ありがとう！　全部いただくね」

俺は少しでも冷めないようにと、急いで十個の鍋をアイテムボックスに仕舞う。これで当分スープを買い足す必要はないな。

「このスープって一人いくら？」
「いつもはパンと水も合わせて小銅貨五枚だ。だからスープは小銅貨三枚ぐらいか？」
「だけど今回は使徒様に材料を全部もらってるんだ。そんなにお金を取るわけにはいかないよ。一人分小銅貨一枚で良いよ」

確かにお金を払い過ぎも良くないだろうけど……一人分で小銅貨一枚だと、百八十人分で小銅貨百八十枚。たった銀貨一枚と銅貨八枚だけになってしまう。屋台を始めるのって割と初期投資がかかるのに。

前に中心街で屋台を開いた時は、屋台販売権が初期登録に銀貨三枚だった。そして屋台を半年借りるのに銀貨五枚だ。屋台は借りないで自分で作るとしても……お金は結構かかるだろう。とにかくもう少し支払いたい。

「……塩とか水とか、他にも色々とお店にあるのも使ってるでしょ？　だから小銅貨一枚はさすがに悪いよ。小銅貨三枚で良いよ」
「それは貰いすぎだよ！」

おじさんとおばさんはぶんぶんと首を横に振っている。ここは素直に受け取ってくれても良いのに……

「じゃあ、小銅貨二枚で。これ以上は安くしないよ」
何故か支払う方が価格を上げたいという意味不明な状況の中そう言ったら、おばさんは渋々頷いてくれた。
「……使徒様が良いなら、私達はありがたいけど」
「じゃあ決まりね！」
小銅貨二枚だと銀貨三枚と銅貨六枚だ。さっきよりは増えたけど……もう少しあると安心だろう。
「全部合わせて銀貨三枚と銅貨六枚。はいどうぞ」
「おおっ、銀貨だ。銀貨なんて久しぶりに見たぜ」
「久しぶりなんてもんじゃないよ、初めてじゃないかい？」
二人は俺が渡した銀貨を感慨深そうに覗き込んでいる。俺は二人がそうしている間に、食堂をもう一度見回した。ここにある机と椅子はもういらなくなるはずだ。
「おじさん、この机と椅子ってどうするの？」
「ああ、どうすっかな。リビングにはあるし……ここに置きっぱなしにするしかねぇか」
「いや、邪魔だから売るさ。屋台をするならいらないだろう？」
「本当！？　それなら俺に売ってくれない？」
おばさんの言葉に俺は食いつく。これを買い取れば、屋台を始めるのに十分な資金になるだろう。
「別に良いけど……欲しいのかい？　そんなに良いもんじゃないけど」

「どこでも気軽に使える椅子と机が欲しかったんだ。屋敷にあるものは高級すぎて雑に扱えないから」

俺のその言葉に二人は苦笑してくれた。そして全部持っていって良いと言ってくれる。

「なら全部もらうね。えっと、机が三つに椅子が九つ」

多分この質のテーブルセットなら、机と椅子を合わせて新品で銀貨一枚ってところかな。中古なら銅貨数枚だろう。でもここは新品ってことにして……

「全部で銀貨三枚かな。はい、合ってるか確認して」

銀貨をおじさんの手に握らせると、おじさんは激しく首を横に振った。

「も、貰いすぎだ！　これは三つ合わせて買ったら安くなるとかで、全部合わせて銀貨一枚だったんだ。三倍にもなるなんて……！」

「そうなんだ。でも家具って時間が経ってからの方が高くなることもあるんだよ。俺はこのテーブルセットに価値を見出したから良いんだ。それは受け取って？」

少し強引かなと心配になったけれど、実際にテーブル三つと椅子を九脚買ってるのだから良いだろうと思い直す。何も貰わずに施しだけをするっていうのは微妙だけど、対価をもらってるのなら良いよね。

「使徒様、本当にありがとう。銀貨が六枚も……これだけあれば十分に屋台を始められるよ」

「うん。これから頑張ってね」
「使徒様……本当にありがとな！　会えて良かった！」
「俺もおじさんのスープを飲めて良かったよ。また機会があったら寄らせてもらうね」

スープは定期的に仕入れたいし、屋台を巡りながら二人を探してみるっていうのも楽しそうだ。また絶対買いにこよう。

そうして俺は大量の戦利品を受け取り、二人と別れて食堂を後にした。

375、前日準備完了

食堂を出て屋敷の自分の部屋まで転移をすると、部屋の中は未だに慌ただしく、荷物の準備をしているところだった。

「ロジェ、戻ったよ」

「レオン様、お帰りなさいませ」

俺が声をかけると、ロジェは準備をしている輪から抜けて俺のところに来てくれる。

「準備はどう？」

「レオン様からお借りした魔法具のおかげで、かなり進んでおります」

「それなら良かった。……実はこの後中心街に買い物に行きたいんだけど、ロジェは時間が空きそう？」

俺のその質問にロジェは一切迷うことなく頷いた。

「もちろんでございます。レオン様の供をすることよりも大切な仕事などございません。準備は他の従者や屋敷の使用人に任せれば大丈夫です」

「じゃあ買い物に付いて来てもらっても良い？　お昼ご飯を食べた後で良いから」

「かしこまりました」

それからお昼ご飯までは、ロジェ達と一緒に荷物の準備をしながら過ごして、昼食後にロジェとローランを連れて中心街へ買い物に

来た。
まず訪れたのは寝具を売っている商会だ。高級店では既製品は売っていなくて特注だけらしいので、今回は中心街の中でも入り口付近にある、比較的安価なベッドを売っている商会に向かった。下位貴族がよく訪れるお店らしい。

「いらっしゃいませ」

店内に入ると爽やかな笑顔の男性が迎えてくれて……俺の顔を見ると驚愕に目を見開き、少々お待ちくださいと言って後ろに下がっていった。そしてすぐにお年を召した男性を連れて戻ってくる。

「ジャパーニス大公様、倅が失礼をいたしました。当商会にお越しくださり感謝申し上げます」

この連れてこられた男性が商会長で、最初の人が息子さんみたいだ。

「いえ、大丈夫ですよ。丁寧な挨拶をありがとうございます」
「本日は何をお求めでしょうか？」
「実はベッドを購入したいのですが、特注ではなく既製品で今日すぐに持ち帰れるものが良いのです。今ここにはいくつのベッドがあるでしょうか？」

俺のその質問に、商会長はカウンター裏にある帳簿のようなものを確認してくれた。

「本日すぐにお持ち帰りいただけるものとなりますと、店頭に並んでいるベッド三点と、裏にあるベッド七点でございます」
「全て同じものですか？」

「二点だけは大きめのサイズとなっておりますが、他八点は全て一般的な一人用のサイズでございます。また布などは変更可能となっております」

野営の時に大きめのサイズはさすがに邪魔だしいらないかな……野営地が広がるほど見張りも大変になるだろうし。

「では一般的なサイズのベッドを五つください。布はこのお店で最上級のものをお願いします。アイテムボックスに入れて持ち帰りますので、準備が終わったらベッドがある場所に呼んでください」

「っ……かしこまりました！」

商会長は驚きに目を見開くと、すぐに頭を下げて息子さんと他の店員に指示を出し始めた。これでベッドも手に入ったし、後は近くの市場でもう少し食材と鍋やお皿などの調理器具を買い足して、俺の準備は完了かな。

それからは商会の従業員が総出でベッドの準備をしてくれて、あまり待たずに五つのベッドを購入することができた。そしてほくほく顔の商会長に見送られ店を後にする。

その後は市場に行き、端のお店からあまり偏らないように様々なものを買い足して、もうしばらくは何も買わなくても生きていけるほどにアイテムボックスの中が潤沢になったところで、屋敷に戻った。

そしてその日の夕方。俺は王宮の大ホールにいた。大ホールではパーティーが開催されて……ということはなく、ホールの中には使節団が持っていく予定の荷物が所狭しと並べられていた。

今からこれを全部アイテムボックスに仕舞うのだ。ちょっと気が

遠くなりそうな量だね……

「ジャパーニス大公様、ご足労いただきましてありがとうございます」

「いえ、大丈夫ですよ」

軍務大臣であるコラフェイス前公爵様が、紙束片手に近づいて来てくれた。多分その紙束に、ここにある全ての物資がまとめられてるんだろう。

「こちらに使節団が持っていく荷物がまとめられておりますので、アイテムボックスに収納いただけたらと思います」

「分かりました。ですが一つ提案がありまして、私が全ての荷物を持っていると必要な時にすぐ取り出せないのではと思うのです。魔法具のアイテムボックスをたくさん作りますので、それに種類ごとに分けて収納するというのはいかがでしょうか？　もちろん魔法具には毎晩魔力を込めますので、中身が紛失する心配はありません。貴重なものやあまり取り出さないものなどは、私が収納しても良いですし……」

俺がそこまで提案を口にすると、軍務大臣はすぐに頷いてくれた。

「それは願ってもないことでございます。毎晩魔力を込めることがご負担でないのならば、是非お願いしてもよろしいでしょうか？」

「もちろんです。では魔法具を作りましょうか。あっ、アレクシス様からいくつかは借りているのでしたか？」

「三つほど貸していただきました」

俺がアレクシス様からいつも依頼を受けて魔力を込めてるのが三つだし、王家にあるのを全部使うことにしたんだな。

「いくつあるのが理想でしょうか？」
「そうですね……五つほどあるとありがたいです」
「分かりました。では後二つ作ってしまいますね。そこの机をお借りします」

あまり荷物が乗っていない机の上を少しだけ拝借して、そこに魔鉄と魔石を取り出した。そしていつもより魔力を多めに注ぎ込んで、魔力量で押し切る形でぐにゃぐにゃと形を変形させて、一気にアイテムボックスの魔法具を作り上げる。

それを二回繰り返してしっかりと収納から取り出せるところまでを確認したところで、椅子から立ち上がり後ろを振り返った。するとそこには呆然と俺の手元を凝視している軍務大臣がいた。

「軍務大臣殿、出来ました。これを使ってください」

アイテムボックスの魔法具を二つ差し出すと、やっと我に返ったのか驚愕の表情を浮かべながら、なんとか受け取ってくれる。

「今の一瞬で……作られたのですか？」
「はい。私は魔力量が多いので、素早く作るのは得意なんです。洗練された美しさがないところは悩みなのですが」
「い、いえ、とても幻想的な光景でした」
「……そうでしょうか？」

粘土みたいに魔鉄が動き回ってるみたいで、俺としてはあんまり好きじゃない。マルセルさんのはそうだな、綺麗な水飴がスッと形を変える感じでカッコいい。俺もあんなふうに作れるようになりたい。

「とにかくこれで準備ができますね。あまり取り出さないものや貴重なものなど、私が収納すべきものを教えていただけますか？」
「かしこまりました」

それからは軍務大臣と王宮の使用人達、それから何人かの騎士達と共に、五つの魔法具と俺のアイテムボックスに荷物を収納していった。そして全てを収納し終えて準備が終わったところで、俺は屋敷に戻った。

376、皆への話

屋敷に戻って従者の皆と荷物の最終確認をしてから、俺は食堂に家族と主要な使用人達を集めた。

ヴァロワ王国の第二王子殿下が突然やって来て、急遽使節団として他国に行くことになり、まだ皆にしっかりと話をできていないのだ。他国に行くということは伝えてあるけど、どの程度の期間でどこに行くのか、また俺が屋敷にいない時にやっておいて欲しいことなどを話したいと思っている。

食堂に入ると家族皆が席に座っていて、使用人の皆は壁際にずらりと並んでくれていた。

「皆集まってくれてありがとう。夜ご飯の前だけどお腹空いてない？」

「大丈夫よ」

「……私はちょっとお腹空いたかなぁ」

正直にそう言ったマリーが可愛くて、俺は忙しくて疲れていた体が癒やされるのを感じる。

「じゃあクッキーでも食べながら話そうか」

シュガニスでたくさん作ってもらったクッキーと、ヨアンが降誕祭のために試行錯誤している野菜入りのクッキーをお皿に乗せて皆の前に出す。

この野菜入りクッキーが優しい甘さでかなり美味しいのだ。最近のお気に入りで、ヨアンにたくさん作ってもらっていつもお茶と共

に食べている。
「美味しそう！　食べて良いの？」
「もちろん。母さんと父さんも食べてね。他の皆も遠慮せずにどうぞ」
「ありがとう。じゃあいただくよ」
「凄く可愛いクッキーね。いただくわ」
それから皆でクッキーを食べて少しだけ雑談をして、マリーが落ち着いたところで本題に入ることにした。
「改めて報告だけど、明日からラースラシア王国使節団の一員として、ヴァロワ王国に行ってくるよ」
「遠い国なのよね」
「そうだね……近くはないかな。予定では馬車で二週間程度で着くんだ。そして向こうで二週間滞在して、また二週間かけて戻ってくるよ」
俺のその説明を聞いても皆は反対することなく、素直に頷いてくれた。マリーも俺が六週間いなくなることに、あまり動揺してないみたいだ。
王立学校に入学してからは長期に渡って会えないことも多かったし、もう俺がいないことに慣れたのかな。マリーが悲しまないのは良いことだけど……、ちょっと寂しいのは内緒だ。
「お兄ちゃん、今回は何しに行くの？　危ないこと？」
「あんまり詳しくは話せないんだけど、そこまで危ないことはないと思うよ。ファブリスも一緒に行くからね」
「え、ファブリスも行っちゃうの！？」

マリーは俺が他国に行くと聞いた時よりも、よほど驚いた様子で声をあげた。そして悲しげに顔が歪められる。

『我も主人と行くのだ。マリー、我がそなたの兄を守ってやるから安心しておけ』

「うん……ありがと。でもファブリスがいなくなっちゃうの寂しいな」

マリーのその呟きを聞いて、ファブリスは尻尾をふさぁと振りつつ立ち上がった。そしてマリーに近づくと、鼻の頭を擦り付ける。

最近ファブリスとマリーはかなり仲が良いのだ。俺が仕事で王宮に行ってる時は基本的にファブリスは屋敷にいるから、その時間でマリーと遊んでいるらしい。

ファブリスの家で一緒にお昼寝をしたり、マリーが作ったクッキーをファブリスに差し入れてお茶会をしたり、ファブリスがマリーを背中に乗せて庭を散歩したり。

……そんな報告をアルノルからよく聞く。ファブリス、羨ましすぎる！

『六週間などあっという間だ。帰ってきたらまたクッキーを焼いてくれ』

「うん！　もちろん焼くよ！」

『楽しみにしているぞ』

マリーが俺と離れることよりもファブリスと離れることを悲しんでいる事実に納得はいかないけど、マリーも成長して兄離れする時期なんだろうと無理やり自分を納得させて、何とか話を次に進めることにした。

ちょっと泣きそうなのは気のせいだから！

「……そういうわけで俺は約六週間、不測の事態があればもう少し長い期間この屋敷を空けることになる。そこでその期間、皆にやってほしいことがあるんだ」

俺のその言葉に、今までマリーとファブリスのやりとりを微笑ましく見守っていた皆の表情が引き締まる。

「まず母さんと父さんは勉強の継続と、食堂のメニュー開発、後は実際に店舗を開く準備を頼みたい。メニューはかなり形になってるよね？」

「売りに出せる程度のものにはなってるよ。後は趣味も兼ねて味の追求って感じかな」

二人とティノでまず開発していた餃子は、俺が食べて十分に美味しいと感じるほどのクオリティに仕上がっている。後は醤油がないからタネの味付けの程度や、餃子をつけて食べるソースの開発などを行なっている段階だ。

「じゃあ実際に食堂を開く準備も少しずつ進めておいて欲しい。食堂の内装を整えたり開店する際の従業員の確保とか、やることは沢山あると思うから。アルノルとロニー、それからルノーに相談しつつ頑張ってみてくれない？」

母さんと父さんも大公家の人間になったのだから、こうして少しずつ人を使うってことにも慣れた方が良いと思うんだ。中心街で一つのお店を開店させる経験は、絶対に無駄にはならないだろう。

「……分かったわ。頑張ってみるわね」

「父さんも頑張るよ」

俺の真意が届いたのか、二人は真剣な表情で頷いてくれた。

「よろしくね。じゃあ次はマリー、マリーは俺がいない間もお勉強を頑張ってね」

「うん！　帰ってきたお兄ちゃんを驚かせてあげる」

マリーはそう言いながら、いたずらっぽい笑みを浮かべた。そんな笑顔からも成長が見てとれて感動する。

「楽しみにしてるよ。帰ってきたらお茶会でもする？」

「本当！？　じゃあ私が準備しておくね！」

マリーは俺とのお茶会という予定に、飛び上がる勢いで喜んでくれた。そんなマリーの様子を見て、先ほどのくさくさとした気持ちがどこかへ飛んで行く。我ながら単純だなぁ……

「よろしくね。……次はルノーとロニーなんだけど、二人にはシュガニスのことと、食堂の開店準備の手伝いをお願いしたい。シュガニスでは降誕祭に向けた準備もよろしくね」

「かしこまりました」

「お任せください」

ここには多くの使用人がいるからか、ロニーは丁寧な口調で頭を下げた。しかし顔を上げたロニーが、いつものように笑いかけてくれたので満足だ。

「あとヨアンなんだけど、降誕祭のスイーツ開発をよろしくね。まずはそれを最優先で。その上で時間があればチョコレートの方も進

めてくれると嬉しいかな」
「もちろんです！　降誕祭のミルクレープを数種類仕上げた後、チョコレートも形にしておきます！」

ヨアンはやる気に満ち溢れている様子で、拳を握って大きく頷いた。……また無理しそうだな。

「アルノル、ヨアンが暴走して体を壊さないようにだけ気を付けておいてくれる？」
「かしこまりました」
「それから稲をできる限りたくさん作って保管しておくように、ジェロムに伝えてくれるかな。後は……この屋敷全般のことを頼んだよ。父さんはまだ分からないことも多いだろうから、俺がいない間はアルノルに任せる」

俺のその宣言を聞いて、アルノルは感激の面持ちで深く頭を下げた。

「ご期待に応えられるよう、全力を尽くさせていただきます」
「よろしくね。……それからアンヌには屋敷の中のことを頼むよ。エバンには俺がいない間の屋敷の守りを頼んだよ」

そうして俺は屋敷に残る皆に大公家のことを頼み、皆の返事に安心して家族と共に夕食を食べた。出立前日の夕食は料理長が張り切ったのか、とても美味しくて楽しいものだった。

377、使節団の出立

次の日の朝、王宮の大門前は人で賑わっていた。ヴァロワ王国の面々とラースラシア王国の使節団が一堂に会しているのだ。豪華な馬車がいくつも並べられ、その周りに馬に乗った騎士達が集まっている様子は、まさに使節団と呼ぶにふさわしい光景だ。

「凄い人数だね」

「ここにいる全員が使節団ではないわよ」

「確かにそっか……でも数十人の騎士達ってだけでもかなり多く感じるよ。全員が馬と一緒だから余計かな」

「確かにそうね。馬も数に入れると予定の倍近くになるもの」

俺は既に豪華な馬車に乗っていて、中にはマルティーヌと俺達の従者とメイドが一人ずつ同乗している。ヴァロワ王国までは基本的にこのメンバーで進む予定だ。ちなみにファブリスはこの隊列の横を自由に走って付いてくるそうだ。

マルティーヌとゆっくり話す時間もなかったし、この旅の道中は久しぶりに会話を楽しもうと思っている。

「それにしても、二週間もマルティーヌと一緒にいられるなんて嬉しいな」

湧き上がる嬉しさを抑えきれずにそう溢すと、マルティーヌも嬉しそうな笑みを浮かべてくれた。

「私もとても嬉しいわ。道中はたくさん話をしましょう」

「もちろん。マルティーヌに話したいことはたくさんあるんだ。…

…あっ、動き出したかな」

遂に出立の準備が整ったのか、馬車がゆっくりと動き始めた。窓から外を覗いてみても見えるのは騎士達ばかりだけど、歓声は聞こえているから、相当の人数が沿道に集まっているのだろう。

「大公家のお屋敷も一度訪れたいわ」

マルティーヌが屋敷の方向をじっと見つめつつ、ポツリとそう呟く。マルティーヌはまだ婚約者という立場で大公家の人間ではないから、屋敷を一度も見に来ていないのだ。

「屋敷の中も落ち着いてきたし、今度招待するよ」

本当は屋敷を作る段階からマルティーヌにも来てもらって意見を取り入れようと思ってたのに、婚約者といえども王女殿下であるマルティーヌに、まだ整っていない屋敷を見せるなんて絶対にダメだと皆に反対されたのだ。

確かに分かるんだけどね……婚約者の段階ではマルティーヌは王族の立場で、まだ大公家の人間ではない。将来的に結婚する予定なんだから良いじゃんとも思ったけど、貴族の婚約なんていつ解消されるか分からないから、婚約者はあくまでも他家の人間という認識らしい。貴族社会って面倒くさいよね……

「本当？　楽しみだわ。どんな屋敷になったの？」

「とにかく広いよ。アレクシス様が大公家としての威光を示すためにって、広い土地を贈ってくれたから。それから建物もあり得ないぐらい大きい」

俺のその言葉にマルティーヌは苦笑を浮かべる。

「お父様が張り切っている様子が目に浮かぶわ」

「うん、凄く張り切ってたね……なにせ公爵家の二倍の広さだから」

「ふふっ、それは楽しみね」

早くマルティーヌもあの屋敷で一緒に暮らせたら良いのにな……でもまだ俺は十一歳。結婚できるのは早くても成人してすぐの十五歳だから、まだまだ先の話だ。

それに十五歳での結婚はあまりないと聞く。基本的には十八歳過ぎぐらいから皆結婚し始めるそうだ。

「基本的な作りは他の貴族家とあまり変わらないと思うんだけど、全体的に部屋数が増えてたり部屋が大きくなってたりするよ。あと大公家の屋敷で特徴的なのは、ファブリスの家があることと厨房がたくさんあること、それから広い畑かな」

俺のその言葉にマルティーヌの瞳が輝き始める。厨房や畑がある話で瞳を輝かせてくれる令嬢ってなかなかいないよね。俺はマルティーヌのそんな反応が嬉しくて、顔がより一層緩む。

「屋敷に畑があるなんて良いわね。それに厨房がたくさんあるってことは、私も厨房を使えたりするかしら？」

「そうだね……使おうと思えば使えるよ。うちの家族専用の厨房があるから、そこなら料理人もいないし。料理をしてみたかったの？」

「ええ、ずっと興味があったのよ」

そうだったのか。それならマルティーヌと俺専用の厨房を新たに作るのもありかも。あんまり使う予定のない客室を改装するか、いっそのこと増築するか……真剣に考えよう。

「マルティーヌが料理をできるように考えるね」
「レオン、ありがとう」

一緒にスイーツを作って食べるのなんて絶対楽しいだろうな……今度ヨアンにスイーツ作りを習おう。

「そういえば畑の話なんだけど、稲っていう魔植物を育ててるんだ。この話アレクシス様達から聞いた？」
「いいえ、聞いてないわね」
「じゃあ詳しく説明するね。稲は魔植物なんだけど危険はなくて、それどころかパンに代わる主食になるものなんだ。今のところほとんど手をかけなくとも勝手に増えていくほど繁殖力が強いし、この世界の飢饉を救う植物になると思う」

俺のその説明にマルティーヌは驚愕半分困惑半分といった、複雑な表情を浮かべる。そんな夢のような植物があるという事実が飲み込めないのだろう。確かにあの稲はあり得ない性能だ。

「本当にそんなものがあるの？」
「本当だよ。ちょっと待って……これだ」

アイテムボックスに仕舞っておいた炊く前の米を取り出して、机の上に載せた。

「稲を収穫して乾燥させるとたくさん採取できるものなんだ。この状態では米って呼んでるよ。そしてこれを調理すると……この状態になる」

今度はお皿によそった炊き立てご飯をマルティーヌの前に置いた。

まだ湯気が立っていて熱々のものだ。

「……なんだか見た目は奇妙な感じだけど」

「まあつぶつぶしてるからね。でも味は悪くないと思うよ。ちょっと食べてみて」

「分かったわ」

マルティーヌは俺からスプーンを受け取ると、毒味なしで躊躇いなく米を口に入れた。そしてもぐもぐと咀嚼しながら首を傾げる。

「確かに美味しい……のかしら？」

「パンみたいなものだから、そのままだとあまり味がしないんだよね」

俺はそう説明しつつ、今度はアイテムボックスから牛肉の煮込みを取り出した。凄く良い匂いでお腹が空くな……

「パンと同じように一緒に食べてみて。合うと思うよ」

マルティーヌはどうやって食べるのか少しだけ悩んだ結果、牛肉とソースをご飯にかけてその部分をスプーンで掬った。そして恐る恐る口に入れると……マルティーヌの瞳が驚愕に見開かれた。

「何これ、美味しい！」

「だよね！　気に入ってもらえて良かった～」

「本当にパンと同じようなものなのね。そう考えると凄く美味しいわ。このもちもちとした食感も癖になる」

マルティーヌはよっぽど気に入ったのか、出した料理を食べ切る勢いで米を口にしている。俺はしばらくその様子を楽しく眺めて、

マルティーヌが少し落ち着いてきたところで再度口を開く。

「それでこの米なんだけど、これから大公家で生産と販売をしようと思ってるんだ」

「そうなの？　でも大公家は領地がないわよね」

「そうだったんだけど、アレクシス様に頼んだら領地をもらえることになったんだ。まだどの程度の広さになるのか正確には分からないけど、魔物の森を押し返した部分は基本的に大公家の領地になる予定だよ」

俺のその言葉に、マルティーヌは今日一の驚きを顔に浮かべた。しかしついさっき口の中に入れたお米と牛肉の煮込みがあって、口を開けないみたいだ。

こういう部分を見せてくれるのも気を許してくれてるってことだよね……嬉しいな。

「……ごめんなさい。口に入れすぎたわ。それで領地をもらえるって本当なの？」

「うん。ほぼ決まりだと思う」

「そうなのね……これから大変になるわね」

「でも楽しそうじゃない？　領地を持ったらやりたいことがたくさんあるんだ」

俺はマルティーヌの方に身を乗り出して、ロジェとメイドさんに聞こえないように耳元でこそっと呟いた。

「実はこの米って前の世界の主食だったんだ。だからこれで作れる調味料があることも知ってて、それを領地で作りたいんだよね」

「え、そうなの！？」

「驚いた？」

「今日は驚いてばかりよ……これがそうなのね」

マルティーヌはそう呟くと米をじっと見つめた後に、ふっと優しげな笑みを浮かべる。そしてその表情のまま俺の方に顔を向けた。

「レオン、良かったわね。私も食べることができて嬉しいわ」

そんなに優しい表情でそんなことを言われたら……ちょっと泣きそうになるじゃないか。

「うん、俺もマルティーヌに食べてもらえて良かった。これからは米を使った美味しい料理をもっと開発するから」

「楽しみにしているわ」

そうして馬車の中は、穏やかで温かい幸せな時間が過ぎていった。

378、初めての村

道中は順調に進み、王都を出発してから既に一週間が経過した。今は昼過ぎの一番暑い時間帯で、こまめに休憩を挟みつつ今夜泊まる村に向かっているところだ。

今日までの一週間はずっと大きな街に泊まっていたけれど、今日だけはどこにも街がないということで村に宿泊する予定なのだ。

俺とマルティーヌやヴァロワ王国の面々が宿に泊まり、騎士達と文官達は村の広場で野営をするらしい。この国に転生してから村には一度も行ったことがないので、少しだけワクワクしているのは内緒だ。

「マルティーヌは村に行ったことがある？」

「いえ、ないわね。どんな雰囲気なのか少し楽しみなの」

マルティーヌも楽しみなのか。あれだよね、都会に住んでる人が田舎に憧れるのと同じだ。

「今回使節団としてヴァロワ王国に行くことになった原因は悲しいものだけど、私にとっては良い経験になってるわ。こんなことを言っても良いのか分からないけど……楽しいわ」

「良いと思うよ。嫌だなって思いながら行くよりも楽しんだ方が得だよ」

俺のその言葉にマルティーヌの表情が明るくなる。

「そうよね。レオンありがとう」

「うん。……今度、結構先になっちゃうかもしれないけど、純粋に楽しむだけのために二人で旅行に行こうね」

マルティーヌとは行きたいところがたくさんあるんだ。まずは海を見せてあげたい。リュシアンが領地に戻っちゃって頻繁に会えなくなったし、今度マルティーヌとステファン、ロニーを連れてリュシアンのところに行くのもありかな。

それからしばらくして、そろそろ日が沈み始めるかなという時間帯に使節団の車列は村へと到着した。村には数十の家が立ち並んでいて、それぞれの家の周りには畑が広がっている。

ここは近くに小川も流れていて、農業に適した環境のために村ができたそうだ。特産品としてりんごを多く育てていて、この地で育ったりんごは他の場所よりも甘く育つらしい。

田舎だからか広い道路があったため、車列は村の外に止まらずにそのまま中へと入っていった。村に入ると畑にいる村人や家から顔を出している村人達に、興味深げに見つめられる。

村と聞くと排他的で使節団は嫌な顔をされるのかもしれないと思ってたんだけど、意外とそんなことはないみたいだ。まあ王女殿下や他国の王子がいるから、絶対に変なことはしないようにと言い含められてるだけかもしれないけど。

「皆様、ようこそお越しくださいました」

広場に止まった馬車から降りると、この村の村長らしき人に迎えられた。

「出迎えありがとう。一晩だけですけれど、村の皆さんとも交流で

きたらと思っておりますわ」
「本当ですか！　ありがたき幸せにございます」
マルティーヌの挨拶に村長は顔に喜色を浮かべる。王女殿下と交流した村、とかで箔がつくのかな。
「では早速宿へとご案内させてください。辺鄙な村ですのでご満足いただけないとは思いますが、精一杯おもてなしさせていただきます」
「村の暮らしを体験できる良い機会ですもの、気になさらないで」
「そう言っていただけると皆の緊張も和らぐでしょう」
使節団の代表者としてマルティーヌが村長と会話をして、その後に俺やヴァロワ王国の人達も軽く挨拶をして宿に向かうことになった。
宿は木造の二階建てで、よく言えば趣のある、悪く言えば古びた佇まいだった。中に入ると緊張して今にも倒れそうな夫婦を紹介される。この宿の経営主らしい。
「よ、よ、ようこそ、ごゆっくり、してください」
この日のために村長から必死に敬語を習ったのか、なんとか敬語を使って挨拶をしている。けど緊張からか、それもちょっと微妙な感じになってるけど。
「そこまで緊張しなくても大丈夫よ。急に大勢で訪れてしまってごめんなさい」
「い、いえ、光栄です！」
「それなら良かったわ」

マルティーヌの笑顔に少しだけ緊張がおさまったのか、そのあとはスムーズに挨拶をすることができた。

「フェリシアーノ殿下、部屋割りはいかがいたしますか？」

この村までは、ヴァロワ王国側とラースラシア王国側は別の宿に泊まっていたので、同じ宿に泊まるのが初めてなのだ。使節団の道中でもあまり話すことはなかったので、こうして向き合うのも久しぶりな気がする。

「使徒様とマルティーヌ王女殿下がお決めになってください。我々は残った部屋で構いませんので」

王子殿下はそう言って頭を下げた。この人すっごく低姿勢なんだよね……ちょっと居心地が悪いほどに。俺のことを使徒として敬ってくれて、さらにラースラシア王国に助力を求めた側だからなのだろうけど……もっと砕けてくれても良いのに。これからは仲良くなれるように、積極的に話しかけてみようかな。

「では一階には二部屋しかないとのことですので、そちらを私とマルティーヌで使っても良いでしょうか？　二階は全てヴァロワ王国の皆様がお使いください」

軍務大臣も今日は騎士達と共に野営をするらしいので、ラースラシア側で宿を使うのは俺とマルティーヌだけだ。

「かしこまりました。では二階を使わせていただきます」

そうして部屋割りを決めて、俺達は夜ご飯まで各部屋で休むことになった。夜ご飯は広場で村人と使節団が全員参加の食事会をやる

らしい。

「おおっ、意外と広いんだね」

「確かにそうですね……しかし少し埃っぽいかと」

ロジェのその言葉に俺は思わず苦笑してしまう。貴族家で働く使用人達の綺麗と、平民の間での綺麗には天と地ほどの差があるのだ。平民の中では目に見える汚れがなければ綺麗となるけれど、貴族家では塵一つない状態が綺麗となる。

ロジェの基準からいったらこの部屋は綺麗じゃないのだろう。

「俺はこのままでも良いけど、掃除したい？」

「ご迷惑でなければ掃除させていただきたいです。一時間もあれば完璧に整えられますので」

「それなら頼もうかな。じゃあロジェ達が使うベッドも渡しておくね」

この部屋は一人部屋で従者がいることを想定してないので、ロジェ達が休むためのベッドがないのだ。マルティーヌの方にもベッドを渡したほうが良いかな。

「ありがとうございます」

「うん。じゃあ俺は一時間村の周りを散歩でもしてくるよ」

「では私がお供いたします」

「ローランありがとう。お願いね」

そうして従者の皆に部屋をお願いして、俺はローランと共に宿の外に出た。もちろん宿を出る前にマルティーヌにベッドを渡すことも忘れていない。

宿の外に出ると、ファブリスが入り口の横に寝そべっていた。

「あれ、ここにいたの？　広場にいるのかと思ってた」
『主人か……広場は騒がしくてこちらに来たのだ』
「確かに野営の準備と夜ご飯の準備で忙しいよね。村の人達と騎士達は上手くいってるかな？」
『よく分からんが、争いなどはなさそうだったぞ』
「それなら良かった。……ファブリス、村の周りを散歩に行かない？」

この村の周りはすぐに鬱蒼と生い茂った深い森になっていて、ちょっと不気味な雰囲気なのだ。魔物の森は何度も行ってるけど、普通の森の中はほとんど探検してないからちょっと興味がある。

『……確かにこの世界の普通の森には入ったことがないな』

ファブリスはそう呟くと、素早く立ち上がり緩く尻尾を振った。ファブリスも興味があるみたいだ。

「ふふっ、興味ある？」
『まあ、なくはないな』

……ツンデレなファブリスが可愛い！　最近はファブリスが可愛く見えて仕方がない。もちろん強くて頼りになるんだけど、とりあえず可愛い。だってこんなの可愛くてもふもふの大型犬だ。

「じゃあ行こうか。ローランも背中に乗って良い？」
『もちろん構わんぞ』
「ありがとう」

そうして俺達はファブリスの背中に乗って、陽が沈み始めている

森の中に向かって駆け出した。探検みたいでワクワクする！

379、普通の森

森の中は異様なほどに静かだった。いつも入ってる魔物の森が特別うるさいだけなんだけど、あっちに慣れてしまったからか静かすぎる森が逆に怖く感じる。

『ここがこの世界の森か……本当に魔物がいないとは驚きだ。それに植物が自ら動かないからか、静かすぎて変な気分になる』

「いつもうるさい森の中にいるから逆に怖いよね」

「魔物の森の中はうるさいのですか？」

そう疑問を口にしたのは、俺の後ろでファブリスに跨っているローランだ。

「そういえばローランは、第一騎士団の所属だったんだっけ？」

「はい。なので魔物の森へは行ったことがないのです」

「魔物の森はとにかくうるさいんだよ。魔植物がそこかしこで動きまくってるから。魔物が近づいてくる音に気付けないほどだよ」

「それほどなのですね」

でもあのうるささがないと逆に落ち着かない。魔物や魔植物が襲ってこないことがしっくりこないなんて……魔物の森に完全に慣れちゃったな。

「ファブリスは普通の獣の気配も感じられるの？」

『もちろんだ。獣も人間も気配は感じられるぞ』

「それは凄いね」

それからはファブリスが森の木々を最低限のみ切り倒して、たまに目に入る果物や山菜を採取しつつ奥に進んでいった。
そしてそろそろ日も沈みかけてきたし村に戻ろうかな……そう思っていた時、ピタッとファブリスが足を止めた。

「どうしたの？」
『主人、向こうに人間がいるぞ？』

ファブリスが示したのは村とは反対の方角だった。俺達がいるのは森に入ってファブリスの歩みで数十分は進んだ場所。いくらゆっくり歩いてたとは言っても人間の足よりは速いので、この場所は村から徒歩で二時間ほどは離れていると思う。
そんな場所にどうして人なんかがいるんだろう。しかもそろそろ夜になる時間帯だ。盗賊とか、森の奥に住む人とか、それとも狩人とか……？

「何人いるの？」
『一人だけだ』
「ローラン、こんな時間に森の奥に人がいるなんてことある？」
「いや、普通はあり得ないと思いますが……」
「だよね。……とりあえず見に行ってみようか。ファブリス、怖がらせないようにゆっくり近づいてくれる？」
『了解した』

それから五分ほど進んだところで、ファブリスは立ち止まった。そして鼻先で木の上を指し示す。葉が生い茂っていて人がいるのかどうか分からないな……

「誰かそこにいますか？」

とりあえず呼びかけてみることにした。するとファブリスが指し示した場所ががさりと音を立てる。やっぱり誰かいるみたいだ。

「お仕事でここにいるのでしょうか？　もし道に迷われたとかなら村まで送りますが……あっ、村の人ですか？」

「だ、誰だっ！」

聞こえてきた声は予想以上に幼いものだった。もしかして、子供？

「俺はレオンだよ。近くの村に泊まりに来てて、散歩で森の中を歩いてたんだ。そしたら人の気配がしたから」

「俺を、そ、その猛獣の餌にするのか！？」

「そんなことしないよ。それに猛獣じゃなくて神獣だよ。ファブリスって名前なんだ。ファブリスも挨拶してくれる？」

『我はファブリス、ミシュリーヌ様の神獣であり、今は使徒であるレオンに仕えているものだ』

ファブリスが話したことに衝撃を受けているのか、男の子の声が聞こえなくなってしまった。

この子があの村の子だとしたら、使徒や神獣についてを知ってるのだろうか。国中に広めてるとは言っても……やっぱりまだ田舎の村にはあまり情報が浸透してなさそうだ。

「神獣ってなんだ……？」

「村で聞いたことない？」

「俺は最近ずっと森に入ってて、村の人と話してないから」

「森で暮らしてるってこと？」

「違う！　母ちゃんの、母ちゃんの病気を治す薬草を見つけようと思って」

……そういうことだったのか。だから子供が一人で森なんかに入ってたんだな。

「薬草は見つかった？」

「……見つからない。それに、熊に襲われそうになって逃げてたら、帰り道が分からなくなった」

男の子は俺に心を許し始めているのか、警戒心が薄くなって色々と話してくれる。俺がこの森に散歩に来て本当に良かった……俺が来なかったらこの子がどうなっていたかなど考えたくもない。

「ここに何日いるの？」

「……まだ二日だ。果物があるからなんとかなるし、明日こそは帰り道を探そうと思ってたんだ」

「そっか。でも俺達ならすぐに帰り道が分かるよ？　これから村に帰るところだし一緒に行かない？」

それから数分間は場を沈黙が支配した。この誘いに乗りたいけど俺が安全かも分からないし、葛藤してるんだろう。しかしじっと返事を待っていると、男の子が木から降りる音が聞こえた。

「一緒に行きたい」

そして降りたところでそう返事を返してくれる。俺はその返事に満足してファブリスから降り、男の子の元に向かった。

「……え、大丈夫！？　その怪我どうしたの！？」

男の子を視界に入れた途端、俺は衝撃を受けて思わず一瞬立ち止まってしまった。しかしすぐにそれどころではないと駆け寄る。

男の子はそこかしこから出血していて、血まみれの様相だったのだ。しかも頭からも出血してるし！

「別に大丈夫だ。熊に襲われた時に一回引っかかれたのと、木に登ろうとして落ちたのと、その辺の枝で切ったのとそのぐらいだ。……それよりお前も子供じゃないか。本当に村までの道が分かるのか？」

男の子は訝しげに俺の顔を覗き込んだ。ちょうど同じぐらいの身長だから、年も同じぐらいだろう。

「分かるよ、大丈夫。ファブリスもいるし俺の護衛もいるから」

俺に付いてすぐ近くまで来てくれていたファブリスとローランを指し示すと、男の子は驚愕に目を見開く。

「こ、こんなにデカかったのか……それに護衛って、お前何者なんだ？　そういえば服装めっちゃ豪華だな……もしかして、貴族様？」

「そうだけど気にしないで。そんなにそこ重要じゃないから。それよりも君の怪我の方が重大だよ」

「いや、貴族様ってところの方が重要だろ！　俺は貧乏だからお礼とかできないぞ……助けてもらって良いのか？」

男の子は不安そうに少しだけ俯いた。貴族は森で死にかけてる子供がいても、見返りがなければ救わないと思われてるのか。平民の貴族に対する意識も変えていかないとダメだね……

「お礼なんていらないから気にしないで。それよりも名前は？」

「ルイだけど……本当に良いのか？」

「もうしつこいなぁ、俺が良いって言ってるんだから良いの」

「お前、貴族様らしくねぇな」
「知ってる。それから俺はレオンね」

男の子の怪我は出血こそ多く見えるけど、そこまで酷い怪我というものはないみたい、不幸中の幸いだ。この程度ならすぐに治せるし、全身ピュリフィケイションで綺麗にしてあげても魔力は十分に残るだろう。

「ルイ、とりあえず怪我を治すからね」
「え、もしかして回復魔法が使えるのか？」
「そう。ちょっと黙ってて」

俺はルイの全身を回復属性の魔力で覆い、目に見える怪我から目に見えない内臓の損傷までを治癒していった。木から落ちた時にほんの少しだけど、内臓までやられてたみたいなんだ……改めて俺がいて良かった。

全部治し終えたところで最後にピュリフィケイションをかけて完璧だ。健康そのもので綺麗な男の子に戻った。

380、ナイショの治癒

「はい、どこか痛いところはある？」
「え、え、どこも痛くねぇ！　なんだ、レオンすげぇな。お前何者なんだ！？」

男の子は自分の体を見下ろして、怪我どころか汚れひとつなくなったことに驚愕している。

「俺は神の使徒なんだ。そして大公位も貰ってる」
「……あれ、そういえば使徒ってどっかで聞いたことあるような。もしかして、魔物の森の奥にいる強い魔物を倒してくれたっていう、あの？」
「そう、知ってるの？」

意外とこんな田舎の村にまで話が伝わってたみたいだ。

「行商人が言ってたんだ！　村の子供達の憧れだぞ。え、でも待って、レオンが使徒様なの？　使徒様ってもっとでかくてムキムキで強そうなんじゃ？」

こんな田舎にまでその誤解が……！　どうせ俺はムキムキじゃないし威厳もないよーだ。別に良いんだ、誤解されてる方が使徒だとバレなくて動きやすいし良いんだ！

うぅ……泣きたくなってきた。

「た、確かに、今の魔法は凄かったな。レオンはすげぇな、使徒様

なんだな！」
「別に気を遣ってくれなくて良いよ……」
――ぐるぅぅぅ。話をしていたら唐突にお腹の音が辺りに響き渡った。発生源はもちろんルイのお腹だ。
「お腹空いてるの？」
「わ、悪いかよ！　二日前から少しの果物しか食べてねぇんだ」
「ごめん、話に夢中になってて気づいてあげられなくて。とりあえず食事しながら話をしようか」
これから村で夕食を食べるし久しぶりなら消化に良いものが良いよね……そう考えて、スープとパンだけをアイテムボックスから取り出した。そして机と椅子も設置してその上に食事を乗せる。もちろん辺りにバリアを張ることも忘れない。
「はい、これ食べて良いよ。座って」
「え、ちょっ、な、何これ！？　どこから出てきたんだよ！」
狼狽えるルイの様子が新鮮で思わず笑ってしまう。最近はアイテムボックスにも驚かれなくなってるから。
「俺の魔法だよ。使徒だって言ったでしょ？」
「す、すげぇな！」
ルイの俺を見る目がキラキラとしたものに変化した。俺はその視線に少しだけ良い気分になりつつ、もう一度ルイに椅子をすすめる。
「遠慮しないで食べて良いよ。ローランも座って。ファブリスもゆっくりしててね」

「かしこまりました」
『了解した』

ルイは最初こそ遠慮して少しずつスープに口を付けていたけれど、すぐに空腹に勝てなくなったのか、がっついて食事を始めた。食事のマナーなど全く身についてないけれど、一心不乱に食べすすめる様子には思わず顔が緩んでしまう。

やっぱり子供が空腹に耐えてるなんてダメだ。子供はお腹いっぱい食べて元気よく走り回らないとね。俺は自分も子供だということは完全に忘れてそんなことを考えていた。

それからルイが落ち着くまで食事を食べさせてあげて、食後のお茶と果物を取り出す。

「それでルイがここにいた理由だけど、薬草を探してたんだっけ？」
「そうだ。母ちゃんが病気でベッドから起き上がれなくなって、行商人に効く薬草を聞いたんだ。それで森に探しにきてた」
「他の家族は？」
「父ちゃんは数年前に病気で死んだからいない。あとは妹が二人いる」

じゃあお母さんがいなくなったら、ルイは両親を共に失うことになるのか……ルイのお母さんを助けたいな。

でも大々的に治してしまうと、俺が大きな病気まで治癒できることがバレることになる。実は病気の治癒に関しては、あまり情報が出回らないようにしているのだ。この世界に住む人全員を治すわけには行かないし、俺のところに連日大病を患った人が訪れることになっても困るから。

定期的に行っている魔法の授業で、回復属性の人には人体の仕組

みなどを教えていて、センスがある人は数日に分ければ病気も治せるようになってきている。だから俺が治してしまうのではなくて、そうやって治せる人が少しずつ増えていけば良いと思ってたんだけど……いざ目の前に病人がいるとなるとやっぱり治してあげたくなるよね。

それに俺が治さなかったら、ルイのお母さんは助からないだろう。病気を治せる人が増えてるとは言ってもまだ王都や主要都市だけだし、治してもらう治癒費も病気の場合は高くなる。

……ルイ達家族には俺のことを内緒にしてもらって治癒しようかな。ルイが必死に採取してきた薬草が効いたってことにしてもらえば誤魔化せるだろう。この村には薬学に精通してる人なんていないだろうし。

「ルイ、俺なら魔法でお母さんの病気を治せると思う」
「……本当か？　な、治してくれるのか！？」
「うん、でも条件があるんだ。俺に治してもらったってことを秘密にしてほしい。俺のところに世界中の患者が来ても困るし、なんであの人は治したのに私は治してくれないんだって言われるとキリがないから……」

俺は目の前に困ってる人がいたら手を差し伸べるけど、世界中の困ってる人を自分の時間を犠牲にしてまで助けたいとは思えない。それにそんなことをしてたら、俺がいなくなってからの世界が大変なことになりそうだし。
俺以外に病気を治せる人を育成して、さらに薬師という職業も絶対に廃れさせてはいけないと思う。そのためには俺があまり出しゃばらない方が良いのだ。

俺のそんな気持ちをどこまで理解してくれたのかは分からないけれど、ルイは真剣な表情で頷いてくれた。

「分かった。誰にも言わない」
「ありがとう。じゃあルイのお母さんを治しに行こうか」
「……レオン、ありがとう」
「ここで会ったのも何かの縁だからね」

それから俺はルイもファブリスの背中に乗せて、村まで急いで戻った。そして広場の方には寄らずに、人気のない村の外れにやってくる。

「ルイがいなくなってたことは村で騒ぎになってるのかな」
「うーん、母ちゃんが病気になってからうちの畑は管理しきれてなかったし、数日なら気づかれてないかも」
「それならこのまま遭難してたことは内緒にしておいてくれる？俺が助けたってなると、お母さんを治したのは俺だってなるかもしれないし」

このままルイが家に帰って俺は何食わぬ顔で宿に戻れば、俺とルイには何も接点がなくなるから騒ぎになることもないだろう。

「分かった。俺も森で迷ってたなんてカッコ悪いこと言いたくねぇから大丈夫だ」
「それもそっか。家こっちで合ってる？」
「ああ、そこの家だ」

ルイが指差したのは、村の一番端にあるこぢんまりとした平屋だった。家の前にある畑は、半分ほどが管理しきれていないのか雑草が伸びてしまっている。お父さんがいる前提で管理できる広さだっ

たのだろう。

ファブリスから降りると、ルイは家まで駆けて行き玄関のドアをバタンっと開けた。

「母さん、大丈夫か？」

「お兄ちゃん！！」

ルイの声に妹らしき反応が聞こえてくる。妹さんは元気みたいで良かった。それからしばらく家の中から話し声や物音が聞こえ、数分後にルイが俺を呼びに来てくれた。

「レオン、入って良いぞ」

「お邪魔します……あれ、妹さんは？」

「あいつらにレオンを見られない方が良いかと思って、奥の部屋にいてもらってる。母さんはこっちだ」

ルイに連れられて入り口近くの部屋に入ると、そこには俺の母さんと同じぐらいの年齢の女性が横たわっていた。顔色が悪くかなり痩せているし、息苦しそうだ。

「母さん寝てるみたいなんだけど、大丈夫か？」

「うん。今のうちに治してみるよ」

ルイのお母さんに近づき回復属性の魔力で全身を覆うと……これは、肺が悪いみたいだ。アルバンさんを治した時の感じに似ている。

「治せそうか……？」

ルイが不安げにそう問いかけてきたので、俺は安心させるために

にっこりと微笑んだ。

「治せるから心配しないで。ちょっと待っててね」

全身に纏わせた魔力を肺に集中させていき、悪いものがなくなるまで魔力を注ぎ続ける。そしてしばらくすると、完全に治しきれたみたいだ。

「これでもう大丈夫だよ」

「……本当か？」

「もちろん。このまま寝かせておいてあげたほうが良いと思う。目が覚めたら体を清潔にして、少しずつご飯を食べればすぐ元気になるよ。食べやすい食事も置いておくね」

ベッド脇にあったサイドテーブルの上に消化の良い食事を並べ、ルイと妹達の分にとステーキや牛肉の煮込みもいくつか取り出した。

「これ皆で食べて。……じゃあルイ、俺はもう行くよ。早く戻らないとだから」

「そっか……レオン、ありがとな！」

ルイは少しだけ寂しそうな顔をしながらも、笑顔で送り出してくれた。ルイとは仲良くなれそうだからちょっとだけ寂しい。

「あっ、あのさ、また会えたらその時は今日みたいに話しかけても良いか？」

「もちろん！」

俺はルイのその言葉が嬉しくて食い気味で返事をした。そしてお互いに苦笑しつつ手を振って別れる。また会えたら嬉しいな。

「ファブリス、ローラン、宿に戻ろうか」
『うむ、夕食を食べなければな』
「ふふっ、そうだね」

381、コラフェイス公爵領

ルイと別れてから宿に戻り、広場で夕食を食べた後は宿で朝までぐっすりと眠った。そして次の日の朝、俺達は次の街まで距離があるということで、朝早くに村を出発することになった。

「一泊でしたけれどとても楽しい時を過ごせました。ありがとう」
「勿体ないお言葉でございます。またお越しいただける時を、村人一同お待ちしております」

マルティーヌが代表として村長さんと挨拶をし、俺達は馬車に乗り込んだ。そして馬車の窓から見送りに来てくれた村人達を見ていると……後ろの方にルイとお母さんがいるのが見えた。まだ本調子ではないけれど、何とか立ち上がれて歩けているみたいだ。あれならもう大丈夫だろう。

俺は他の人にバレない程度でルイに手を振って、晴れやかな気分で村を後にした。

「レオン、何か良いことがあったの？」
「……分かる？」
「ええ、いつもより楽しそうだから」

そんなに分かりやすいかな……ポーカーフェイスだけはいつまで経っても身につかない。

「昨日散歩に行った時に嬉しい出会いがあったんだ。実はね……」

それからはマルティーヌに昨日の出来事を話して穏やかな時を過

ごし、また馬車での時間が過ぎていった。

――数日後。俺達はついにラースラシア王国の辺境領である、コラフェイス公爵領に到着していた。今は領都に入り公爵邸を目指しているところだ。

街並みは王都ともタウンゼント公爵領とも違い、どこか武骨な雰囲気が漂う街並みだ。

公爵邸の敷地内に入ると、そこには大きな兵士団の訓練施設が鎮座していた。さすが兵士団の強さが国内随一と言われるだけのことはある。

「皆様ようこそお越しくださいました。私はコラフェイス公爵家当主である、アルセン・コラフェイスでございます」

出迎えに来てくれたのは、春の月を祝うパーティーで軍務大臣と一緒にいた現公爵様だ。

「皆様に旅の疲れを癒していただけるよう最大限のおもてなしをさせていただきます。お疲れだろうと思いますので、早速中へお入りください」

俺とマルティーヌ、軍務大臣と文官達、それからヴァロワ王国の面々が屋敷に入った。騎士達は兵士団詰所で待機するらしい。

「ジャパーニス大公様、お約束が早くに叶いましたこと、このような理由では喜ぶことはできませんが、光栄でございます」

コラフェイス公爵様が、俺達を部屋に案内しながら話しかけてく

れた。約束とは春の月を祝うパーティーの時に話した、コラフェイス公爵領を訪れる話のことだろう。

「このような理由にはなってしまいましたが、貴領を訪れることができたことは嬉しく思っています。せっかくの機会ですから以前お話ししたことを遂行いたしますか？」

この領を訪れたら、兵士団の兵士達と手合わせするって約束していたのだ。

「よろしいのですか！　それは皆も喜ぶでしょう」

「ではお部屋で少し休ませて頂きましたら、兵士団の方へ向かいたいと思います」

「かしこまりました。そのように手配しておきます」

それから部屋でお茶を飲み少し休んだ後に、動きやすい服装に着替えてファブリスと共に訓練場へと向かった。訓練場に入ると、何百人もの兵士たちが一糸乱れぬ動きで跪いて迎え入れてくれる。

「ジャパーニス大公様、御目通り叶いましたこと恐悦至極にございます。私はコラフェイス公爵家兵士団の団長を務めさせていただいております」

兵士達の中で一人だけ前に出ていた男性が、代表して挨拶をしてくれる。

「こちらこそ国内一と言われている皆さんとお会いできて光栄です。短い時間しかいられませんがよろしくお願いします。こちらが神獣のファブリスです」

『我はファブリスだ。よろしく頼むぞ』

ファブリスの声が聞こえたことに一瞬驚いたような表情を浮かべるも、すぐに引き締めて全員が頭を下げる。ここまで敬われると逆にやりづらいな……俺はあまりにも神格化されているような雰囲気に、思わず顔に苦笑を浮かべた。

「そんなにかしこまらないでください。あっ、俺がもっと態度を崩した方が良いのかな。もっと気軽に接してくれて構わないよ」

敬語をやめて笑顔で話しかけると、その場の雰囲気が少しだけ緩くなった。やっぱり俺が敬語を使うのって場の雰囲気を固くする……でも初対面の大人には思わず敬語を使っちゃうんだ。完全に日本人の時の癖だよね。

「今日は手合わせをするってことだけど、誰と戦うのかな？　一対複数？」

「もしよろしければ、私と手合わせしていただけたら嬉しいです」

「了解。じゃあ早速やろうか」

名乗りを挙げたのは団長さんだ。一対一で戦うなんて久しぶりでワクワクしてきた。対人戦は魔人クドゥフェーニと戦う時にかなり訓練したから自信はある。

「はっ、よろしくお願いいたします」

訓練場の真ん中に団長さんと俺だけが残り、他の人は端に下がっていった。互いに剣を持ち一定の距離で向かい合う。

「俺は身体強化以外の魔法は使わないようにした方が良い？」

「……いえ、もしよろしければ全力で戦ってはいただけないでしょうか？」
「分かった。じゃあ全力で行くよ」

俺のその言葉を合図にお互いに剣を構え、訓練場には緊迫した空気が流れた。誰も言葉を発さない、風の音に乗って遠くのざわめきが微かに聞こえてくる程度の静けさが辺りを支配する。

その静けさを破ったのは団長さんだった。気合の入った雄叫びを上げながら俺に向かって一直線に駆けてくる。俺はその勢いと体の大きさに見合わない素早さに一瞬圧倒されそうになったけど、すぐに切り替えて冷静に攻撃を見極めた。

右上からの振り下ろしだな……そう判断した俺は、身体強化を全身にかけて攻撃を受け止めた。

ガキンッッ……っ、結構重い。でも押し負けることはない。俺は団長さんの攻撃を受け止めて弾き飛ばし、今度は俺から攻撃を仕掛けた。

弾き飛ばされたことで体勢を崩している団長さんに向かって、剣を振り上げる。しかし剣が届く前に体勢を立て直し軽く受け止められてしまった。

これは身体強化だけだったらかなり良い勝負かもしれない。そんなことを考えつつバリアの剣を発動した。俺の剣を受け止めて身動きが取れないところを狙って、バリアの剣を振り下ろす。すると団長さんは俺の剣を思いっきり弾いてバリアの剣を受け止めたけれど、その隙に背後に転移した俺が団長さんの首筋に剣を触れさせ、試合終了だ。

「ははっ、ははははっ、凄い、凄いですな！　ここまで力の差がある

とは……もう少し粘れると思ったのですが」
「ううん、単純に剣の腕だけなら俺の負けだよ。身体強化しか使わなければ良い勝負だと思う」

剣の技術は確実に負けていた。俺は魔力量でゴリ押ししてる身体強化があるから付いていけて、その上で使徒のチートな魔法があるから勝てただけだ。

……いずれは単純に剣の腕だけで勝ちたいな。

「大公様にそのようなお言葉をかけていただけるとは、身に余る光栄でございます」
「今度はルールを変えてもう一度やる？」
「……いえ、手加減をしていただいて良い勝負をしても嬉しくありませんので、ここで止めておきます。もっと精進したらまた手合わせしていただけませんか？」
「もちろん。俺からもお願いしたいぐらいだよ」

俺のその言葉に団長さんは深く一礼し、訓練場の端に下がっていった。なんか凄くカッコいい人だよね……俺もあんな感じになりたい。

それからは俺の魔法を見せたりファブリスの強さを体感してもらったり、さらに他数人と手合わせをしたりと、騎士達にとっても俺にとっても有意義な時間を過ごした。
もっと鍛練を頑張ろう、そう気合が入る時間だった。

382、チェスプリオ公国

コラフェイス公爵領を出て、チェスプリオ公国に向かって草原をひたすらに進むこと数日。俺達は遂にチェスプリオ公国に入国していた。

「昨日ぐらいから外の景色が変わってきたよね」
「ええ、植物の雰囲気が変わったわ」
「本当に別の国に来たって感じがするね」

草原を抜けたあたりから、ラースラシア王国にはない樹木や草花が目に付くようになった。この様子だと王国にはない香辛料や食べ物がありそうで楽しみだ。

「公都まではあと数時間ってところかな？」
「そうね……もう街道を走ってるし、結構近いかもしれないわね」
「楽しみだな～」

チェスプリオ公国に入ってからいくつかの街があったんだけど、どの街にも寄ってないから街並みが凄く気になる。

「ふふっ、レオン子供みたいよ」
「あっ……ごめん。はしゃぎすぎてた」

俺は一気に自分の顔が赤くなったのを感じて、窓から視線を外して俯いた。前世もいれたらいい大人なのに……

「別に良いわよ。それがレオンの良いところじゃない」

「……それって褒められてる？」
「もちろん」
なんか褒められてる感じがしないんだけど……でもマルティーヌがにっこりと笑ってくれてると、なんでも良いかと思えてくる。
「マルティーヌが嫌じゃないのなら良かった。……あのさ、マルティーヌは俺の嫌なところってないの？　治してほしいところとか」
突然そんなことが気になって恐る恐る聞いてみると、マルティーヌは真剣な表情で考え込む。そんなに考えるほどたくさんあるのかな。
「特に……ないわね」
「え、本当に？」
「考えてみたんだけど、思いつかなくて」
そっか、嫌なところないのか。俺はその返答が思いのほか嬉しくて顔が緩む。嫌なところがないって結構凄いことだよね……なんか照れる、そして嬉しい。
「俺も、俺もマルティーヌの嫌なところなんてないよ」
「ふふっ、ありがとう」
俺の言葉を聞いて、マルティーヌは嬉しそうな笑みを浮かべてくれた。うん、幸せだ。
そうしてマルティーヌと、側から見たらバカップルのような会話を繰り広げていると、馬車はどんどんと進み遂に公都に辿り着いた。

最初はラースラシア王国と同じように畑が広がる中にポツポツと家がある程度だったけれど、次第に家の数が多くなり畑がなくなっていく。そしてしばらくすると、完全に農業地帯を抜けて住宅街に入った。

チェスプリオ公国の家の作りは、ラースラシア王国とは少し違うみたいだ。ラースラシア王国よりも平屋が多くて、さらに街の中に緑が多い。家同士が密集していなくて各家に庭があるのも特徴的だ。

「結構雰囲気が違うんだね」
「本当ね……なんだか長閑な雰囲気で良いところ」
「分かる。しばらく滞在してみたいかも」
「今回は一日だけど、また機会があったら訪れたいわね」

マルティーヌとそんな話をしながら街並みを眺めていると、石畳で綺麗に舗装された道路に変わったようだ。そしてそれを合図に辺りにある家の雰囲気も少し変わる。
平屋ってところは変わらないけれど、木造が石造りに変わり、さらにその大きさが何倍にもなっている。この辺は特権階級の人達が住んでる地区なのだろう。

そしてそんな場所も通り過ぎると、遂に公家の屋敷に到着した。チェスプリオ公家の屋敷は端が見えないほど横に長い建物だった。この国では全ての建物が平屋みたいだ。

マルティーヌをエスコートしつつ馬車から降りると、屋敷の前には多くの人達が出迎えに並んでくれていた。そしてその中央にチェスプリオ公爵一家と思われる人達がいる。

「ラースラシア王国使節団の皆様、ヴァロワ王国の皆様、チェスプ

リオ公国へようこそお越しくださいました。皆様の訪れを歓迎いたします。私はイブライム・チェスプリオと申します」

そう声を発したのは一番真ん中にいた三十代後半ぐらいに見える男性、多分この人がチェスプリオ公爵なのだろう。

そしてその男性が話したすぐ後に、脇に控えた壮年の男性が全く同じ言葉を口にした。この国はラースラシア王国と公用語が違うので、基本的には通訳を介してやり取りが行われるのだ。

俺はこの世界のどの言語も自動的に翻訳されるから、言語が違うということを把握できない。自動翻訳は凄く便利な能力だと思ってたけど、他国に来ても別の言語を聞けないっていうのはちょっと残念だよね。

ちなみにフェリシアーノ第二王子殿下は、ラースラシア王国の言葉を流暢に話していたそうだ。一番の大国だから学んでる人も多いみたい。

「急な訪問にも関わらず、このように盛大な出迎え感謝いたします。私はマルティーヌ・ラースラシアでございます。一日しか滞在できないことが残念ですが、良い関係を築けたらと思っております」

「チェスプリオ公爵様、この度は急な日程に対応してくださりありがとうございます」

チェスプリオ公爵の挨拶にマルティーヌとフェリシアーノ殿下が返して、とりあえずこの場での挨拶は終わりとなった。

今日は歓迎の夕食会が開かれるみたいで、またそこでお会いしましょうって感じで、チェスプリオ公家の人達とは別れて客室に案内される。

「ジャパーニス大公様はこちらをお使いください。……神獣様のお

部屋もご用意してあるのですが、いかがいたしますか？」

俺を客室まで案内してくれた使用人の方が、少しだけ困ったようにそう聞いてくる。ファブリスは俺の部屋に一緒に入って、そのまま部屋の中央で早速寝ているのだ。

「ファブリスー、どうする？　ファブリスの部屋もあるってよ」

『……我はここで良い』

「そうなの？」

『うむ、問題ないぞ』

ファブリスってたまに寂しがりやになるんだよね……これを指摘したら絶対に拗ねちゃうから言わないけど。可愛いから寂しがりやファブリスは結構好きだ。

「すみません、ここで良いみたいなのでファブリスの部屋は使わないことになると思うのですが……」

「かしこまりました。ではそのように手配しておきます」

「よろしくお願いします」

食事会の前にまた呼びに来ますって言って、使用人の方は下がっていった。部屋の中には従者と護衛の皆とファブリスだけだ。ふぅ……やっぱりこのいつものメンバーだけになると落ち着く。

「レオン様、夕食会のお時間まであと二時間ほどですので、早速準備を始めても良いでしょうか？　少し休まれますか？」

「うーん、ちょっとだけ休みたいかも。一杯お茶を淹れてくれない？」

「かしこまりました」

俺は豪華なソファーに腰を下ろして、部屋をぐるっと眺めた。この部屋には光球がなくて、部屋を照らしているのは壁際に並べられたランタンのようなものだ。他国には魔法具がないって本当だったんだね……

「ロジェ、チェスプリオ公国には魔法具を輸出してないのかな？」
「……これは私の推測ですが、輸出はしているものの、客室にまで使えるほどに数がないのではないでしょうか？」
「確かにその可能性は高いか」

公家の人達の私室と……俺が優先するなら夕食会の会場かな。客室全てってなったらかなりの数が必要だよね。

「お茶でございます」
「ありがとう。……ロジェのお茶は美味しいね」

落ち着くなぁ。馬車でものんびりできたけど、やっぱり動かない椅子って素晴らしい。

それからしばらくのんびりしてから、俺はお風呂に入って服を着飾って髪型を整えてと、夕食会のために準備をした。お風呂は水魔法と火魔法を使える人が、人力でお湯を作ってくれるという仕組みだった。やっぱり魔法具って便利だよね……

383、夕食会

夕食会の席はとても豪華だった。たくさんの花や観葉植物が飾られた室内は、豪華だけど自然を感じられて落ち着く装いだ。街中の様子を見ても緑が多かったし、この国は自然を大切にしてるみたいだよね。

「改めまして、イブライム・チェスプリオでございます。本日は皆様と有意義な時を過ごせたらと思っております。私の家族も紹介させてください」

食事会の前にチェスプリオ公家の皆様を紹介してもらって、順番に挨拶をしていった。奥さんは柔らかい笑顔が印象的な優しそうな人で、子供は四人いた。男の人が二人に女の人が二人だ。一番年下の子が俺と同い歳ぐらい、他の人はもう大人と言っても良い歳だった。

挨拶が終わったら早速料理が運ばれてきて、まずは食事を楽しむ時間だ。チェスプリオ公国の正式な食事は、大皿に乗せられた料理を全員で取り分けて食べるタイプのようで、使用人によって一人では持てないほど大きなお皿が次々に運ばれてくる。

机の上が一気に大量の食事で埋まる様子は圧巻だ。凄く良い匂いがして美味しそう……

「我が国では植物油が特産品でして、油を使った料理の種類が多いのが誇りでございます。本日はたくさんの料理をご用意しておりますので、是非ご賞味ください」

パッと見ただけでも揚げ物がたくさんあって、さらに魚もあるみたいだ。この国って海に面してないよね？

「こちらのお魚は川魚でしょうか？」

「はい。我が国には大きな川が流れておりまして、そちらでの漁が盛んなのです」

「そうなのですね、とても美味しそうです」

かなり大きな魚が素揚げになってて、その上に野菜たっぷりのソースがかかってる感じだ。ラースラシア王国にはないタイプの料理で美味しそう。

「レオン様、どちらの料理をお取りいたしますか？」

ロジェが斜め後ろから聞いてくれた。この国では椅子と椅子の間が広く取られていて、そこから従者が食事を取り分けられるようになっているのだ。

「そうだね……魚の料理は食べたいかな。後は揚げ物を中心に取ってもらえる？　それからサラダとスープも。ファブリスにも同じものを取ってあげてね」

「かしこまりました」

俺の後ろでうずうずと食事を待っているファブリスのこともロジェに頼むと、ロジェは当然のように頷いてくれた。

そうしてロジェによって次々と料理が取り分けられていき、俺の目の前はすぐに料理で埋まった。サラダにはひき肉のようなものが上に乗せられていて、スープは赤い色をしている。揚げ物は魚はもちろんのこと、お肉もあるみたいだ。

「とっても美味しそう。あまり嗅いだことのない香りもするわ」
マルティーヌが取り分けてもらった食事を見つめて、楽しそうに呟いた。
「ラースラシア王国にはない食材が使われてそうだよね」
薬味などが違うのだろう。食事の香りがいつも馴染んだものとは微妙に違う。でも決して嫌な香りではなく、食欲をそそられるものだ。
「フェリシアーノ殿下、ヴァロワ王国はチェスプリオ公国とまた違う食文化なのですか？」
「そうですね……似ている部分も多いですが、我が国は香辛料をふんだんに使った料理が特産です。その代わりに油を多く使用した調理法はそこまで広まっておりません」
隣の国だけど結構違うんだね……香辛料、楽しみだ。
「二カ国の食文化の違いまで楽しむことができるなんて、とても光栄ですわ」
「それでは、まずは我が国の食事からお楽しみください」
チェスプリオ公爵のその言葉によって、食事が開始された。この国ではいただきますに当たる言葉はないらしい。
俺はどの料理から手をつけようか少しだけ悩み、まずは汁物ということで赤いスープを手に取った。そしてスプーンで掬って口元に運ぶと……なんだか辛そうな香りが漂ってくる。これって唐辛子と似たようなものが使われてるのかな。

「うわっ、美味しい……」

ラースラシア王国では唐辛子ってあまり使われないから、この辛さの料理は久しぶりに食べた。レオンの体にはかなり刺激が強いみたいだけど、懐かしくて美味しい。

「皆様は辛さに慣れていないと思いましたので、飲みやすいように辛味を抑えてあります。もし物足りないようでしたら、机に置いてある辣油を足してください」

「このように辛いものは初めてですので、ちょうど良い辛さです」

「それならば良かったです。そちらの辣油はどのお料理にも合いますので、お好みでお使いください」

「ありがとうございます」

辣油なんて久しぶりに見たよ……この世界にもあったなんて驚きだ。でも日本で親しんだものよりちょっと色が違う気がするから、厳密に同じものではないのかな。

今度大公家で開く食堂のメニューとして餃子を作ってるけど、そのつけだれに最適かも。

「ロジェ、辣油をこの魚にかけてくれる？」

「かしこまりました。……どの程度の量が最適なのでしょうか」

「本当に少しでいいよ。その小さいスプーンで三分の一ぐらい」

ロジェが慣れない調味料に困惑しながらも素揚げした魚にかけてくれたので、俺はそれを口にした。おおっ……辣油だ。ただ辛いだけじゃなくて、鼻に抜ける香りがより料理を美味しくしている。

これは餃子のタレに採用かな。後で輸入できるように調整しよう。

それからもラースラシア王国とはまた違った食事を堪能して、そろそろお腹も満たされてきたかなというタイミングでマルティーヌが口を開いた。

「貴国は昨年大規模な飢饉に見舞われたとか……一番大変な時に手を差し伸べることができずに申し訳ございません」

「我が国と貴国はほとんど関わりがありませんでしたから、そのように謝られることなどございません。本当ならば自国で食料を備蓄し、危機も乗り越えなければならないのです。あの飢饉で命を落としてしまった者達への責任は、公爵である私にあります」

この公爵様も尊敬できる人だな……そうやって自分の責任だって反省できる人は案外少ないんだよね。

「確かに以前は関わりがありませんでしたので、我が国も助力をすることは難しかったです。しかしこの度こうして関係性を深められたことですし、これからは隣国として助け合っていけたらと思っています」

「そうですね。私もそうなっていけたらと期待します」

チェスプリオ公爵がにこやかな笑顔で答えてくれたところで、マルティーヌの貴族の笑みも少しだけ自然な笑顔に変わる。

「ではお近づきの印にということで、我が国で作られた最高級の布といくつかの魔法具、それから備蓄できる食料を贈らせていただいてもよろしいでしょうか？」

「……ありがたく頂戴いたします」

チェスプリオ公爵は一瞬だけ迷うように沈黙したけれど、すぐに頷いて感謝の意を示した。

「これからもより良い関係を構築していきましょう。よろしくお願いいたします」
「こちらこそ、よろしくお願いいたします」

俺はそのやりとりを聞きながら、やっぱりマルティーヌは王族なんだなと当たり前のことを実感していた。王族に生まれただけで豪華な生活は保障されるけど、こうして責任のある胃に穴が開きそうな仕事をこなさないといけないのは大変だよね。

それから食事は終わりとなり、最後に食後のお茶が出された。チェスプリオ公国をはじめとして、この辺り一帯でよく取れるお花で香り付けしたお茶らしい。
大きなポットに抽出されたお茶が、それぞれのカップに順に注がれていく。お茶が注がれるごとに花の香りが部屋中に広がるのが、とても心地良い。

「この花茶は食後の定番なのです。香り豊かなお茶ですので、ぜひ楽しんでいただけたらと思います」

カップを持って口元に運ぶと、ふわっと花の香りが漂ってくる。しかしお茶を口に含むと、予想よりも甘さのないすっきりとした味わいだった。
これは癖になるかも……飲みやすくて美味しいお茶に、華やかな花の香り。ラースラシア王国でも流行りそうだ。

「とても美味しいですね。こちらはどのような花を……」

どんな花がお茶に合うのかチェスプリオ公爵に聞こうとしたその時、突然うめき声が聞こえて人が床に倒れる鈍い音が食堂に響いた。

３８４、緊急事態と治癒

「うっ、かはっ、か、からだが……」

苦しげな声が聞こえてくる方向に目を向けると、フェリシアーノ殿下の姿が見えない。

「殿下！　殿下！　いかがいたしましたか！？」

俺は一瞬何が起きたのか分からず呆然としてしまったけれど、従者の声を聞いて我に返り、すぐに事態を把握して殿下が倒れているだろうテーブルの向こう側に転移をした。

すると目に飛び込んできたのは、苦しそうに呻いている殿下の姿だった。

「フェリシアーノ殿下！　意識はありますか！」

俺の呼びかけに視線だけは向けてくれたけれど、とにかく苦しいのか指で首を引っ掻いては喘いでいる。さらにその指も動かし辛そうだ。これって……毒かな。

今回の夕食会では国同士の夕食会ということで、主催国に失礼にならないようにと個々に毒味はしていなかった。基本的に国家間の関係を深める時には、相手を信頼するという意味も込めて、毒味はなしが多いのだ。

「殿下、回復魔法を使いますね」

俺はとりあえず回復属性の魔力で、フェリシアーノ殿下の全身を

覆った。うわっ……これってやばいやつだ。致死性の毒だよ。俺がいなかったら絶対に助からなかった。

「ロジェ！　俺は魔力を使い果たして倒れるかもしれないけど、そうなったらこの部屋の中は誰にも触らせないで保存しておいて！　ファブリスもよろしくね！」

「かしこまりました」

『相分かった』

二人に今後のことは頼んで、俺は殿下の治療に集中することにした。とりあえず胃を中心に既に体全体に広がり始めている毒成分の除去からだけど……これを除去しただけでは助からない段階まできている。多分だけど、毒を口にしたのは数十分ぐらい前かな。どの食べ物に入っていたのか……

……いや、考えるのは後回しだ。とにかく今は治療をしないと。

俺は一気に治すためにも、魔力をどんどん消費して治癒を施していった。大量の魔力を消費することによって発生する、回復魔法特有の光を抑える余裕もない。

殿下は手足を動かすことすら難しくなったみたいで、呼吸も苦しそうだしかなりヤバいと思う。急がないと……

――よしっ、とりあえず毒は全部除去できた。あとは毒によって引き起こされた症状の治癒だ。俺は一息つく暇もなく、そのまま魔力を注ぎ続けて治癒を継続した。

今まで治してきた誰よりも魔力が必要だし、上手く治らない。相当魔力が増えたけど、結構ギリギリかもしれない。

致死性の毒が体に回ってからの治癒はかなり厳しいんだな……病気よりも圧倒的に治すのが難しい。全身に作用してるから治さないといけない箇所がたくさんある。

――それから時間にしては数分間。しかし俺にとっては何時間にも感じられたほどの時間が経過し、ついにフェリシアーノ殿下の治癒が完了した。殿下の様子にはもう苦しそうなところはなく、穏やかな寝息が聞こえてくる。

俺の魔力は残り一割ほどだ。なんとか治し切れたんだよね……良かったぁ。そう思って安堵した瞬間、体の力が抜けて床に倒れ込みそうになる。しかしその体を後ろから支えてくれる人がいた。

「レオン、大丈夫？」

「マルティーヌ……うん、大丈夫。ありがとう」

マルティーヌの後ろにはロジェやファブリスもいて、俺のことを心配そうな表情で見つめてくれていた。

「皆ありがとう。なんとか魔力も足りて治しきれたみたい。もう命の危機は脱したと思う」

「使徒様……、殿下の命を救っていただき、なんとお礼を申し上げたら良いか……本当に、本当にありがとうございますっ！」

俺の治しきれたという言葉を聞いて、殿下の従者の方が目に涙を浮かべながら跪いて頭を下げてくれた。周りを見てみると、ヴァロワ王国の人達は全員が深く頭を下げている。

「助けられて良かったです。しかしかなり体力は消耗していると思

うので、ゆっくり部屋で休ませてあげてください」
「はいっ、すぐに！」

そうしてヴァロワ王国の人達は、殿下を連れて食堂から退出していった。食堂に残ったのは厳しい表情をしているラースラシア王国の皆と、青白い顔で今にも倒れそうなチェスプリオ公国の皆さんだ。

せっかく回復魔法で怪我以外も治せることは秘密にしてたのに、他国のしかも重鎮達の前で治癒しちゃったな……あの場で治さないって選択肢はなかったから仕方ないんだけど。これから面倒なことにならないようにしたい。

「フェリシアーノ殿下は、致死性の毒を盛られていたようです。私がいなければ数時間と保たずに亡くなっていたでしょう。さてチェスプリオ公爵、なぜこのような事態に？」

俺はできる限り落ち着いて、そう言葉を口にした。少し怒りの感情が滲んでしまったのは見逃してほしい。俺って毒殺とかそういうの、大嫌いなんだ。

そんな怒りが伝わったのか、チェスプリオ公爵は真っ青だった顔を今度は真っ白にして、今にも倒れそうな様子になっている。

この夕食会でフェリシアーノ殿下が口にしたものは、チェスプリオ公国側から饗されたものだけだ。となると殿下を毒殺しようとしたのは、チェスプリオ公国側の可能性が高くなる。

でも公爵の様子は俺が治癒できたことに驚いているのではなく、そんなことにまで気が回らないほど、フェリシアーノ殿下に毒が盛られたという事実に困惑している様子だ。……これはどういうことなんだろう。

「わ、わ、私も、何が起きているのか……」
「貴方が毒殺を指示したのでは？」
「そ、そのようなことは絶対にあり得ません！！　ヴァロワ王国には昨年国難を救っていただいた大恩がありますし、毒殺どころかどうやって恩を返せば良いかと……」

公爵の様子では嘘は言っていないように見える。でもそれなら誰が……？

「このようなことになってしまって、どうしたら良いんだ。ベアトリクス、すまない。お前との婚姻も破棄になってしまうだろう。それどころか、この国はもう終わりかもしれない……」

公爵が憔悴しきった声音で呟いたその言葉に、公爵の背後で呆然と立ち尽くしていた女性が目に涙を浮かべた。

「婚姻とは？」
「長女であるベアトリクスは、数ヶ月後にはフェリシアーノ殿下の下へ、ヴァロワ王国へ嫁ぐ予定だったのです。それによってヴァロワ王国とより強固な関係性を構築しようと……」

そんな話があったのか。そうなってくるとこの毒殺未遂の動機もなんとなく見えてくる気がする。可能性があるとすれば、二つかな。
一つ目はこの長女がどうしても嫁ぐのが嫌で、フェリシアーノ殿下を亡き者にしようと画策した可能性。そして二つ目は、この婚姻によってヴァロワ王国と距離が近づくのを嫌がった人達による計画の可能性。去年の支援から属国のようになってるって話だったし、それが加速するのを嫌がってる人は多くいそうだ。

「ベアトリクス様、でよろしいですか？」

「っ……は、はい」

俺の呼びかけに涙を流しながら頷いた女性は、華奢で控えめな性格で、夕食会が始まってからも印象に残ることはない人だった。

「単刀直入に聞きますが、殿下の下へ嫁ぐことに不満はあったのですか？」

「い、いえ、そのようなことはありません。殿下とお会いしたのは今回が二度目ですが、最初に会った時もとても優しくて誠実な方で……逆に私なんかで良いのかと、思っていたほどです。な、何故こんなことに……」

ベアトリクス様はそこまでを話すと、耐えきれなかったのか顔を両手で覆って俯いてしまう。

「すみません、責めるような口調になってしまって」

「いえ、大丈夫です……」

この泣いてるのが演技だって可能性はあるけど……そうは見えない。となると可能性が高いのは、さっき考えた二つ目の方か。

「チェスプリオ公爵、ヴァロワ王国へご令嬢が嫁ぐことに関して反対していた人達はいますか？」

「まさか……」

「そのまさかの可能性が高いと思います」

公爵の表情からして心当たりがあるのだろう。どの国だって一枚岩とはいかないだろうから仕方がないけど……その勢力を抑えられなくてこの事態を引き起こしたとなったら、国の主として公爵の責任は重いな。

385、追求

俺の示した可能性に真っ白な顔色のまま怒りの感情を浮かべた公爵は、拳をキツく握りしめて頷いた。

「大至急、確認いたします」

「お願いします。しかしその前に、今この場で毒を盛った者が誰かを明らかにすべきです。計画を立てた人と実行した人は違うでしょうから」

まずはどの料理に毒が入ってるのかを調べて、それからその料理を準備した人に焦点を絞っていけばすぐに見つかるはずだ。

俺はそう考えて、あと一割しか残っていない魔力を使ってフェリシアーノ殿下の食事を調べた。

えっと……辣油に毒が入っている。確かに他のは大皿から取り分けたけど、これは一人一つ目の前に置かれていた。個人を狙うなら辣油が最適だったのか。

「毒は辣油に入っています。こちらを用意した方は誰でしょうか。それからフェリシアーノ殿下が辛いものが好きだと知っていたのは誰ですか」

「殿下が辛いものがお好きだということは、以前訪れてくださった時から周知の事実でございます。辣油を準備したのは……誰だ」

チェスプリオ公爵は食堂の隅に小さくなって並んでいる、給仕達を睨んだ。すると給仕達の中で一番上の立場だろう男性が口を開いた。

「ら、辣油を小皿に移したのは、厨房で給仕が行いました。そしてその辣油は、数人で手分けしてテーブルに設置いたしました」
「では殿下の辣油を設置したのは誰だ」

チェスプリオ公爵のその言葉に誰も声を上げないけれど、数人が一人の女性にちらっと視線を向けた。するとその女性は青い顔でぶるぶると震え始める。

「あなたよね。早く前に出なさい」

隣に立っていた厳しそうな女性に促されて、今にも倒れそうな足取りで女性は一歩前に進み出た。

「君が殿下の辣油を準備したのか？」
「……は、はっ、はいっ」
「では君が、毒を盛ったのか？」
「そ、それは……」

女性は言い淀んで俯いてしまった。ポタポタと床に涙が落ちていくのがここから見ていても分かる。これじゃあ自分が犯人だって言ってるようなものじゃないか。

「嘘をつかずに本当のことを言った方が良いと思うよ。今後のためにも」

このままじゃ埒が開かないと思ってそう声をかけると、その女性は縋るような視線を俺に向けてきた。気が弱そうな女性だ……騙されたのか脅されたのか、でもどんな理由があろうとも、他国の王子に毒を盛ったという事実は変わらない。極刑は免れないだろうな。

「お、お母さんの、病気を治す薬をくれるからと。その代わりに、フェリシアーノ殿下の辣油に粉を入れるようにって言われて……」
「その粉がどんなものか聞いた？」
「殿下の、隠してる体調不良を治すものだと……」
「まさか……それを信じたの？」

そんな言葉を信じるなんて、呆れて何も言えない。

「信じて、しまいました」
「ば、ば、馬鹿者！！　そのように怪しい言葉を信じるやつがあるかっ！！　お前のせいで、お前のせいで我が国は無くなるかもしれないのだぞ！！」

公爵が顔を真っ赤にして、怒りの形相で女性に詰め寄っている。今まではどこにぶつければ良いか分からなかった怒りの矛先が、全て女性に向かっているようだ。
確かに怒りをぶつけたい気持ちは分かるけど……今はそんなことをしても仕方がないのに。それよりもやるべきことがたくさんある。

「あなた、止めなさい。もっと優先すべきことがありますわ」

俺が公爵を止めようかと思っていたところに、突然凛とした声が響いて公爵の動きを止めた。公爵夫人だ。

「そうやって頭に血が上ると周りが見えなくなるのは悪い癖だと、何度言ったら分かるのですか？　あなたはこの国の主なのです。もっと冷静になりなさい」
「……すまなかった」

この夫婦は奥さんがしっかりしてるのか……実質的にはこの人が国を回していたのかもしれない。

「チェスプリオ公爵、今やらなければならないことは、この女性に毒を渡した人物を明らかにすることです」

「……お見苦しいところをお見せして、申し訳ございませんでした。すぐにでも詳細を明らかにいたします」

「私は貴国の事情について深く関わるつもりはありませんので、今後のことはお任せいたします。しかしこれから関係を深めていこうという最中に起こった今回の出来事、色々と話し合いも必要かと。明日の午前中に、ヴァロワ王国の方々も踏まえて話し合いをいたしましょう」

俺のその言葉にチェスプリオ公爵は、先程怒りで真っ赤に変わっていた顔をまた真っ青に変えて、ぎこちない動きで頷いた。いつも通りにしようと思ってるんだけど、どうしても口調が刺々しくなってしまう。

ラースラシア王国で内戦が起こりそうになった時も思ったけど、身内で争って何が楽しいんだか全く分からない。結局は誰も得しない結果になるのが大半なのに。

「毒は私が回収しても良いですか？」

「も、もちろんです。ありがとうございます」

「では私達も部屋に戻ります。後のことはよろしくお願いします」

そうして強引にその場を収めて、俺はラースラシア王国の皆と食堂を出て、与えられた客室に戻ってきた。そしてマルティーヌを俺の部屋に招待する。

ソファーに腰を下ろすと、途端にかなりの疲労感が襲いかかって

きた。

「レオン、大丈夫？　結構魔力を使ったんじゃない？」
「そうだけど、一割ぐらいは残ってるから大丈夫だよ。それよりも……凄いことになっちゃったね」

俺のその言葉にマルティーヌは苦い表情を浮かべる。今後どうするのか悩ましいところなのだろう。

「チェスプリオ公国はどうなるのかな。フェリシアーノ殿下が目を覚まさないとなんとも言えないだろうけど」
「そうね……他国の王子を自国の王宮で毒殺しようとするなんて事件、今まで聞いたこともないからなんとも言えないわ。でもお咎めなしってことは絶対にあり得ない」

改めてそう聞くと、本当に凄い事件に遭遇しちゃったな。そんなことになったら普通は全面戦争だよ。ヴァロワ王国がチェスプリオ公国を攻めたって、周辺国は止めることもしないだろう。なんならヴァロワ王国に加勢するかもしれない。

「その辺は明日の話し合いで少しは決まるかな」
「そうね……問題は我が国がどうするのかよ。チェスプリオ公国と友好関係を築くのは延期にするべきね。最悪国がなくなる可能性もあるでしょうし」
「やっぱりその可能性もあるよね。こんなことが起きなくても、ヴァロワ王国の属国のようになってるって話だったのに……」

もし俺の予想通り、婚姻によってヴァロワ王国と近づくのを嫌がった勢力が今回の計画をしていたとしたら、結果は完全に理想とは逆の形になっているだろう。というかそんな結果になることは分か

りきってるはずなのに。

「そうだわレオン、もっと重要な話があったじゃない。レオンの回復魔法の力が広まってしまったわ」

「そうだった……その話もしなくちゃね。あの場にいた人は全員異常性に気付いたかな？」

「確実に気付いたと思うわ。フェリシアーノ殿下の苦しみ方、それから体が動かしづらくなっていた症状、それらを見てすぐに危険な毒を盛られたんだと分かったもの。それをレオンが治してしまえることも、同様に知ることとなったでしょうね」

やっぱりそうだよね……毒だということが分からなくてもフェリシアーノ殿下の状態はかなりやばそうだった。それを治してしまったんだから、普通の回復魔法と違うということはバレただろう。

「どうすれば良いかな。あんまり広めたくないんだけど」

「そうね……ここは順当に、他言無用だと誓約書を交わすのが良いんじゃないかしら。使徒であるレオンが訪れている時にこのような事態が起こり、レオンの手を煩わせてしまったという負い目がチェスプリオ公国側にはある。そして第二王子の命を助けてもらったというかなり大きな借りがヴァロワ王国側にはある。この状況ならば、レオンの提案に反対することなどできないと思うわ」

確かにそうか。じゃあ明日の話し合いで誓約書に署名をしてもらおう。

「明日までに誓約書を作っておくよ」

「それが良いわね」

ずっと難しい顔をしていたマルティーヌが、俺の言葉に頷きなが

らふっと微笑んでくれた。俺もその笑顔を見て顔が緩み、部屋の空気がゆったりとしたものに変わる。

それからはマルティーヌと取り留めもない話をして、夜は更けていった。

３８６、緊迫の話し合い

次の日の朝食後。俺達は会議室のような部屋に集まっていた。顔色が悪く今にも倒れそうなチェスプリオ公爵を始めとした、チェスプリオ公国側の人間が数人と、既に完全に回復した様子のフェリシアーノ殿下を始めとしたヴァロワ王国の人達。そして俺達ラースラシア王国の面々も数人が席に着いている。

「ジャパーニス大公様、昨日は命を救っていただき、本当にありがとうございます。すぐにお礼の言葉も述べられず申し訳ございません」

まず口を開いたのはフェリシアーノ殿下だ。申し訳なさそうな表情で、深く頭を下げてくれている。

「いえ、気になさらないでください。それよりも回復されて良かったです。体でおかしい所などはありませんか？」

「全くありません。それどころかゆっくり寝たことによって、いつもより体が軽いほどです」

殿下が笑みを浮かべてそう言ったので、俺も良かったですと、柔らかい笑みを浮かべながら答えた。それによって少しだけ部屋の空気が緩んだ気がする。

「このお礼は必ずいたします。国に帰ってからにはなってしまいますが、そこはご容赦いただければと思います」

「お礼なんて良いですよ」

「いえ、そういうわけにはまいりません。受け取っていただけると、

我が国としてもありがたいです」

こういうのって受け取った方が、ヴァロワ王国的にも借りを作らないという点で良いのかな。

「それならば一つお願いがあるのですが、それをお礼の代わりにしていただきたいです」

「どのような内容でしょうか。もちろんできる限りお応えしたいと思っておりますが……」

「難しいことではありません。昨日殿下を治療した能力について、他言無用として欲しいのです。そのことを定めた誓約書にサインいただけませんか？」

俺のその言葉にフェリシアーノ殿下は、思わぬことを聞いたと言わんばかりに目を見開いた。しかしすぐに頷いてくれる。

「それはもちろん構いません。というよりも、元々他に言いふらすつもりもございませんでした」

「本当ですか、ありがとうございます。あの能力が広まってしまうと少々大変なことになるので……」

「確かにそうでしょうね」

殿下は苦笑しつつ俺の言葉に同意の意を示してくれた。ここまでの道中でも思ったけど、フェリシアーノ殿下って基本的に付き合いやすくて良い人だ。無意識のうちにチェスプリオ公爵と比べているからか、フェリシアーノ殿下に対する評価がどんどん上がっていく。

チェスプリオ公爵も別に悪い人ではないんだけど、昨日の感じからして俺の中の評価は下がっている。感情的になっちゃう人って、人の上に立つのは向いてないと思うんだよね……

「チェスプリオ公国にも誓約いただきたいです。問題ありませんか？」

フェリシアーノ殿下に対してよりも少しだけ硬い口調でそう告げると、公爵は全く躊躇うことなく何度も頷いてくれた。

「ありがとうございます。では早速ですが、署名をお願いいたします。ロジェ」

ロジェともう一人の従者であるエミールがそれぞれに誓約書を持っていき、二人が署名したのを確認し、ラースラシア王国で保管する方を回収してくれた。

そうして話が一段落して、会議室にそろっている皆が無意識なのか意図的なのか、どちらにしてもチェスプリオ公爵に視線を向ける。

「ま、まずは、昨日のことを謝罪させていただければと。フェリシアーノ第二王子殿下、謝っても許されることではありませんが……御身を危険に晒してしまい、本当に本当に申し訳ございませんでした」

チェスプリオ公爵はそう言って深く頭を下げた。そして気まずい空気が会議室を支配する。誰も言葉を発さないまま数十秒が経過し、やっとフェリシアーノ殿下が口を開いた。

「謝罪は必要ありません。謝られても起きてしまったことを無かったことにはできませんから」

殿下の声音はかなり冷たく突き放すようなもので、部屋の空気がより緊迫したものになる。やっぱり怒ってるよね……殺されかけて

怒ってないほうがおかしいか。

「も、申し訳ございません……」

「もう一度言いますが、謝罪は必要ありません。まだ謝罪を受け入れる気持ちにはなれませんので」

「は、はい。かしこまりました……」

フェリシアーノ殿下は、チェスプリオ公爵を完全に遮断するような態度をとる。公爵は最初から青白く正気のない顔をしていたけれど、その表情がもっと暗く沈んだものに変わった。

これは関係改善なんて望めなさそうだ。チェスプリオ公国はなくなる可能性が高いかもしれない……

「それで、なぜ昨日のようなことが起きたのですか？　貴国の貴族が起こしたことだと耳に挟みましたが」

「……説明いたします。実は我が国では、ヴァロワ王国の属国のような立ち位置になっていることに反発している勢力がいまして、その勢力にとって殿下とベアトリクスの婚姻は絶対に阻止しなければならないことだと考えたそうです。そこでこの度殿下が王宮を訪れると聞き、毒殺を企てたと……そういう流れでございます」

ほとんど俺の予想通りじゃないか。本当にそんな理由だったなんて……どの国にも馬鹿な人達っているんだね。

「もう黒幕はわかっているのですか？」

「は、はい。昨日から必死に調査をしまして、実際に毒を盛った者から遡り、今朝には首謀者まで行き着きました。尋問も終わり、今は牢屋にいるかと思います……」

国のトップが本気で調査をするとそんなスピードで首謀者まで辿

り着けるのか……まあさすがにこんな事態を起こした人物を見つけられないなんてこと言えないし、結構強引に調査したんだろう。少しでも国を守るために。

「分かりました。しかし黒幕が誰であるかなど私には、そしてヴァロワ王国には関係ありません。その首謀者の扱いはお任せいたします。誰がやったことにせよ、チェスプリオ公国の者が他国の王子である私を毒殺しようとした、という事実は変わりませんので」

「……分かっております。どのような処罰も受ける所存です」

公爵のその返答を聞き、フェリシアーノ殿下は従者に頼んで数枚の紙を机の上に並べた。そしてその紙を指差しながら話を進める。

「今回はあまり時間がないので細かい話し合いはできませんが、とりあえずこちらのチェスプリオ公爵家をヴァロワ王国に併合する書類に署名いただけますか？　またその場合、公爵の地位は次代に譲り隠居すること、そして反乱勢力の鎮圧に尽力すること。この二点もお約束いただきたいです」

「へ、併合、ですか……」

「はい。国民の生活はヴァロワ王国が保障しますのでご安心を。さらにチェスプリオ公爵家もそのまま残すのですから、これ以上ない条件だと思いますが？」

やっぱり併合って話になるのか……チェスプリオ公国は作物が育つ肥沃な土地が多いみたいだし、ヴァロワ王国としても併合のメリットはあるんだろう。

「す、少し考える時間を、いただいても……」

「少しなら良いですが、我々は時間があまりないので早くしていただけると助かります」

フェリシアーノ殿下はそう告げると、厳しい表情でチェスプリオ公爵を見つめた。このプレッシャーの中、碌に話し合いなんてできないよね……公爵は近くにいる側近と小さな声で話をしているけれど、全員が今にも倒れそうな顔色だ。

それにしてもすぐに併合なんて話が出てくるとは、殿下は相当怒ってる。……それからこれは俺の勘だけど、前から併合したいって話がヴァロワ王国の上層部で出てたんじゃないだろうか。そうじゃないと昨日の今日でここまで話を進めることはない気がする。

やっぱり仲良くしていても、裏では何を考えてるのか分からないんだな。国と国の関係って打算ありの付き合いがほとんどで難しい。

387、怒りと決着

それから数分後。フェリシアーノ殿下が結論を急がせると、チェスプリオ公爵は何も考えが纏まっていない様子ながらも口を開く。

「あの、金銭の賠償や……輸出品の優遇措置などはいかがでしょうか？」

やっぱり公爵はチェスプリオ公国を維持させたいみたいだ。まあそうだよね……自分の国を捨てる決断はそんなにすぐできるものではないだろう。

「そ、それから反対勢力は全員極刑にいたします。どうか……それで手を打ってはいただけないでしょうか」

「無理です」

しかしチェスプリオ公爵の必死の訴えは、フェリシアーノ殿下の冷たい声で拒否される。

「貴殿は他国の王族への毒殺未遂ということがどういう事態なのか、全く理解していらっしゃらないみたいだ。これは宣戦布告です。いや、事前の連絡なしに突然殺しにくるのだから宣戦布告よりも酷い。我々は全面戦争を始めても良いのです。それを金銭の賠償と優遇措置で手を打つなど、あり得ません」

フェリシアーノ殿下の怒りに火をつけちゃった気がする……公爵は素直に頷けば良かったのに。併合されたって家が存続するなら良いじゃないか。

殿下の雰囲気を察すれば、そんな提案に頷くことはないってすぐ分かるのに。

「要するに現在貴国は敗戦国のような立場なのです。歴史を遡っても敗戦国は戦勝国に併合されることが多いです。併合はされなかったとしても、国土の大半は持っていかれます。……さて、いかがいたしますか？」

チェスプリオ公爵がここでも首を横に振ったら、多分二国間で戦争になるんだろう。そしてほぼ確実にヴァロワ王国が勝利する。二つの国は国力にかなりの差があるから、どう頑張ってもチェスプリオ公国は勝てないと思う。ただそれを公爵が正しく理解しているか……それが問題だ。

俺は戦争になるかならないかの瀬戸際に、緊張から唾をごくりと飲み込んだ。

もしここで公爵が首を横に振ったとしたら、俺達がこの国から安全に出るのは難しくなるな……今ここにいる戦力だけなら、チェスプリオ公国の方が断然多いから。

フェリシアーノ殿下もそれを分かってるのだろうし、最悪の事態も覚悟してるのだろう。

ただここには戦力が未知数な俺とファブリスがいるし、チェスプリオ公国はそんな強硬手段を選ばないで欲しい。もし公国がフェリシアーノ殿下を始めとしたヴァロワ王国陣営を襲ったとしたら、俺は殿下を助ける。

それにそもそも、今ここでフェリシアーノ殿下を襲って殿下を亡き者にしたとして、最終的な結果が変わる可能性は低いのだ。

次に発する公爵の言葉が今後の展開を決める、そのことに緊張し

てじりじりと待っていると、数分経ってやっと公爵は口を開いた。
「分かりました……併合に、同意いたします」
おお、良かった、本当に良かった。チェスプリオ公爵もそこまで馬鹿な人じゃなかったみたいだ。
今考えればフェリシアーノ殿下のこの強気の姿勢は、チェスプリオ公爵への信頼とも取れるのか。ここで自分を襲うような馬鹿な行いを犯すほど、無能な者ではないっていう。
「ありがとうございます。ではすぐに署名をお願いいたします」
殿下のその言葉に従って、従者が素早く紙とペンを公爵の下に持っていった。殿下にとっては命を失うかもしれなかった重大事件だけど、ヴァロワ王国としては無条件でチェスプリオ公国を手に入れられたのだから、最高の結果だよね。転んでもただでは起きないのがさすがだ。
「これからチェスプリオ公爵家は、ヴァロワ王国の一領主となります。王国の発展に寄与してくださることを祈っております」
「……かしこまりました。精一杯、尽力いたします」
これでラースラシア王国として、チェスプリオ公国と関係を深める必要は無くなったな。せっかく持ってきた贈り物も必要なかった……ヴァロワ王国への贈り物として使い回すのは避けるべきだろうし。
「マルティーヌ王女殿下、ジャパーニス大公様、この度は巻き込んでしまい、本当に申し訳ございませんでした」
「殿下は被害者ですから、謝罪は要りませんわ。これからも良好な

関係を継続していけたらと思っております」

マルティーヌはそんな言葉を口にしてにっこりと微笑んだ。チェスプリオ公爵に対しての皮肉も若干含まれてるよね……気持ちは分かるけど。

反対勢力がいることが分かってたなら、絶対にこんな事態が起きないように国内をコントロールしないとダメなんだ。それをできなかった責任はやっぱり大きい。

「私にも謝罪はいりません。殿下の体が大事に至らなくて良かったです」

「それは大公様のおかげです。心からの謝意を申し上げます」

そうして話し合いは早々に終わりとなった。チェスプリオ公国側は誰もが呆然としていて、事態をうまく飲み込めていないようだ。これからこの地域は荒れるのかな……公爵やヴァロワ王国が上手くやってくれたら良いけど。

「近いうちにこちらへ王宮の文官を派遣しますので、文官から詳細を聞いていただければと思います。それから数年間は監視と治安維持のために騎士を派遣することになりますが、ご了承ください。……では我々は先を急がなければなりませんので、失礼いたします。色々と忙しいでしょうから、見送りなどは結構ですよ」

フェリシアーノ殿下はにっこりと微笑みながらそう告げると席を立った。そして俺達に丁寧に挨拶をして部屋を出ていく。あれはやっぱり相当怒ってる。

「レオン、私達もお暇しましょう。先を急がなければ、予定通りにヴァロワ王国へ着くことができなくなるわ。予想外に時間を取られ

てしまいましたから」

マルティーヌはそう言って公爵に綺麗な笑みを向けた。マルティーヌもかなり怒ってるよ……

他国の王族を毒殺しかけるなんて、普通あり得ないからね。昨日みたいな晩餐では個別に毒味をしないのが礼儀だという代わりに、絶対に毒などが混入しないように細心の注意を払うものなのだ。口に入るものを準備する時には必ず三人以上の目がある場所でやったり、厨房や会場に入る時には身体検査を受けないといけなかったり、さらに料理人や給仕も精鋭を選ぶ。

どう間違っても今回のような話に安易に乗る人など選ばれないし、怪しい粉が身体検査を通ってしまうなんてことも起こらない。杜撰な体制だったのか、管理者が反対勢力の人間だったのか分からないけど、そんな国で食事をしていたのだから怒りが湧くのも当然だろう。もし俺達が標的だったら毒を盛られていたのだから。

チェスプリオ公爵はよく言えば、素直で他人を信用する人なんだろう。しかし国のトップとしてそれは致命的な欠陥だ。使用人の管理もできていないと烙印を押されても仕方がない。

「そうだね。では公爵様、失礼いたします」

部屋に戻るとすぐにフェリシアーノ殿下が訪ねてきて、もう一度巻き込んでしまったことへの謝罪と、命を救ってくれたことへの感謝を伝えられた。

「顔を上げてください。そんなに大層なことはしていませんし、殿下も被害者ですから」

「そう言っていただけるとありがたいです。私がラースラシア王国の皆様に助力を頼み、ヴァロワ王国へ来ていただいているのに……。謝罪の気持ちと治癒へのお礼は、国で必ずお渡しいたします。受け取っていただければ幸いです」

お礼は治癒魔法を広めないでいてくれたらそれで良いんだけど……多分何かしら受け取った方が殿下的にも気が楽になるんだろう。

「分かりました。受け取らせていただきます」

「ありがとうございます」

「殿下、本日の出立はいかがいたしますか？　元々の予定では本日の朝早くでしたが、不測の事態で既に昼前となってしまっています」

「……私としては早くにこの屋敷を辞去したいのですが、皆様の準備もあると思いますのでお任せいたします」

殺されそうになった屋敷に、そしてこの国にこれ以上いたくないよね……また狙われる可能性も完全にないとは言えないし。

「かしこまりました。ではマルティーヌと話し合って時間を決めようと思います。殿下にも知らせを送りますので少しお待ちください」

殿下と別れた俺はすぐにマルティーヌの部屋を訪れて、一時間後に出立という形に決めた。

そして一時間で全ての荷物を馬車に積み込み、チェスプリオ公国を、いやチェスプリオ公爵領を発った。見送りには顔色の悪い公爵家の皆さんと怒りに震えている一部の重鎮達が来ていたけれど、公爵が止めてくれたのか、俺達が襲われるということはなかった。

388、ヴァロワ王国へ

チェスプリオ公爵家の屋敷を発ってから数日後、俺達はついにヴァロワ王国の王都に到着していた。王都は活気に満ち溢れた大きな街で、ラースラシア王国の王都ラスリアにも引けを取らないほどだ。

しかしもちろん違いはあって、一番に目につくのは家の作りだ。ヴァロワ王国は年間を通して比較的温暖な気候が続くからか、開放的な家が多い。平民の家にも一階に屋根付きのベランダがあり、そこにテーブルやイスが設置されている。

「他国の街を見るのって楽しいよね」
「ええ、文化の違いを感じられるわ」

あのベランダで風を感じながらの朝食とか、凄く優雅な暮らしだ。やっぱり気候が違うと文化って変わるんだな。

「ファイヤーリザードに襲われたことは、ここにいる限りでは分からないね」
「確か王都からは離れた場所だったのよね。どこまでの被害を受けているのか分からないけれど……こんなに素敵な街が襲われていたのかもしれないと思うと、心が痛いわ」

ファイヤーリザードは物理的に相当な強さだったし、火魔法も操っていた。こうして街並みを見ても木造建築が多いから、襲われた街はかなりの建物が全壊または焼失しているんじゃないだろうか……

さらにファイヤーリザードからの直接の被害だけじゃなくて、それによって騎士団が被害を受けたことで魔物の森の進行を止められ

なくなってるんだ。もしかしたら、今この時にも飲み込まれそうな街や村があるのかもしれない。

考えないようにと思っていたけど……こうして実際にヴァロワ王国に来るとどうしても考えちゃうな。でも焦っても仕方がない。使節団という名目だし、やることをしっかりとこなしてから助けに行くんだ。

先に文化交流が予定されていることから見ても、数日でどうにかなるほど切羽詰まってはいないのだろう。俺も焦るのはやめよう、焦って良い結果になることはない。

それからは見ているだけで楽しい街並みをマルティーヌと堪能して、俺達はヴァロワ王国の王宮に着いた。王宮は王都を抜けて少し進んだ先の小高い丘の上に位置していた。

ラースラシア王国の王宮は王都の真ん中に堀と塀で囲まれてあるのに対し、ヴァロワ王国の王宮は丘の上にあるからか堀などはなかった。塀もあまり高いものではなく、遠くからでも王宮の上部は目視することができた。

「随分と豪華な王宮なんだね」

「本当ね……うちとはまた違うわ」

ヴァロワ王国の王宮は一言で言えば、金ピカだった。ラースラシア王国の王宮が優美ならば、ヴァロワ王国の王宮は華美だ。

「ちょっとワクワクするかも」

「そうね。服装の違いも楽しみだわ」

「そういえば、正装には違いがあるんだよね」

フェリシアーノ殿下は急いで馬でやってきたから、着ていたのは乗馬用の服で、ラースラシア王国のものとそこまでの違いはなかったのだ。その後はラースラシア王国側が準備した服を着ていたし。

「特に女性のドレスは違いがあるらしいのよ。時間があったら買い物をしたいわ！」

マルティーヌは瞳をキラキラと輝かせてそう言った。エリザベート様に隠れていてあまり目立たないけど、マルティーヌも服や装飾品が好きなのだ。

「買い物の時間を作ってもらおうか。お店に行きたい？　王宮に来てもらう？」

「そうね……時間いっぱい買い物をしたいから、来てもらえると嬉しいわ。レオンも一緒に選んでくれる？」

「もちろん」

マルティーヌが喜んでくれるならいくらでも時間を作ろう。俺も別の国の衣装は気になるし。

「楽しみだわ」

そう言って微笑んだマルティーヌの笑顔に俺の気持ちも持ち上がり、二人で笑い合った。またひとつ楽しみが増えたな。

「あっ、門が開くのかも」

「本当ね……うわぁ、凄く綺麗」

車列は王宮の大門前で止まっていたけれど、手続きが終わったのか遂に門が開かれた。その先にあったのは……完璧と言えるほどに

整えられた庭園とその先で存在感を放っている王宮だ。

「うちの王宮とはまた違うわ。こんなに広い庭園はないもの」

「ラースラシア王国の王宮は王都の真ん中にあるからね。ここは少し離れてるから敷地が広く取れるんだと思うよ」

「確かにそうね」

それに咲いている花や植物が結構違う。やっぱりここまで離れると植生も変わるみたいだ。そこまで花に興味はなかったんだけど、ちょっと楽しいかも。

馬車はゆっくりと進んでいき、王宮の巨大なエントランスの前に停止した。そして馬車を降りると、迎えに来てくれた使用人によってすぐに近くの応接室へと案内される。

「こちらで少しの間お寛ぎください。謁見は三十分後となっております。何かございましたら遠慮なくお申し付けくださいませ」

応接室はいくつも準備されていて、俺はマルティーヌと同じ部屋だった。王宮の外見に引けを取らない豪華な内装で、正直に言っても良いのなら落ち着かない。ラースラシア王国の王宮でも最初はそう思ったけど、それに慣れた今でもここは落ち着かなく感じる。

やっぱり俺って生粋の庶民なんだよね……さすがに貴族社会には慣れたけど、どこまでいっても落ち着くのは、便利だけど装飾などはないシンプルで狭い部屋だ。

「お茶をお淹れいたしましょうか？」

「うん、お願い。マルティーヌも飲む？」

「ええ」

他国の王宮の中だしどこで話を聞かれているか分からないから、この部屋の落ち着かなさをマルティーヌと共有することもできない。ここにいる間は基本的にずっと気を張ってないとかな……疲れる予感しかしない。

「我が国の王宮とは違って、煌びやかでとても素敵な王宮ね。文化の違いを感じられて楽しいわ」

マルティーヌのそんな問いかけに俺も頷く。とりあえず当たり障りのない会話をこなしつつ、さりげなくヴァロワ王国を誉めるように……やっぱり王族や貴族って大変だ。

「この部屋も豪華で目に楽しいよね。それに植物が見たことないものばかりで新鮮だよ」

「本当ね。こちらの国ははっきりとした色の花が多いのかしら？」

「確かに淡い色は少ないかも」

応接室の中にある巨大な花瓶に生けられたたくさんの花達も、どれもが主張の激しい色合いをしている。でもそれらが上手く打ち消し合わずに引き立てあっているように感じるから……生けた人のセンスが良いんだろうな。

「鮮やかな色合いの服がたくさんあるかしら」

確かにそっか、染める色も植物から取るんだよね。俺はそんな当たり前のことを、マルティーヌに言われて今更に気づいた。

「あるんじゃないかな。この色合いなら全身でも華やかだろうし、差し色に使っても良いんじゃない？」

「確かにそうね。染めた布を買って帰るのもありかもしれないわ」

確かにヴァロワ王国に滞在するのは約一週間だから、その期間ではそこまで多くの服を仕立てられないよね。既製品を直すにしても、マルティーヌはまだ大人用を着るには背が低いから、あまり合うものがないだろうし。

それからしばらくマルティーヌと当たり障りのない雑談をしていると、ついにヴァロワ王国の使用人がやって来て謁見室に呼ばれた。

389、謁見

使用人に連れられて辿り着いた謁見の間は、豪華で派手な大扉の先にあるようだった。俺がエスコートする形でマルティーヌと並び、その少し後ろに軍務大臣であるコラフェイス前公爵、それから文官数人が続く予定だ。

「ラースラシア王国使節団の皆様をお連れいたしました」

大扉の前にいる騎士に使用人が声をかけると、騎士達が四人がかりで扉をゆっくりと開く。段々と開いていく隙間から見える謁見室の中は、相当な広さのようだ。

最奥の玉座にはヴァロワ王国の国王が堂々たる風格で座っていて、その一段下には何人か王族の方々がいる。さらに部屋の左右には扉の近くから玉座の方までずらっと、貴族達が並んでいる。

俺はそんな光景に怖気付いて、自分の体が固まるのを感じた。こういう場所は慣れてないんだよ……転移で逃げたい。逃げちゃダメなのは分かってるけど逃げたい。さっきまでは緊張なんてしてなかったのに、こんな直前になって襲ってくるのはやめてほしい。

ふぅ……俺はなんとか緊張を解こうと、周りに分からないように小さく深呼吸を繰り返した。すると俺の緊張が伝わったのか、俺の腕に添えているマルティーヌの手に力が入る。

そうだ、マルティーヌもいるんだから大丈夫だ。もう扉が開いていて横に視線を向けることはできないけど、少しだけ力が込められた手のひらから勇気をもらえる。

マルティーヌありがとう。俺は心の中でそう伝えて、しっかりと

顔を前に向けた。

優雅に笑顔は絶やさずに、しかし威厳を出すためにも顔を緩めてはいけない。ゆっくりと進んでいるように見せつつも、他国の国王をあまり待たせないように早く玉座に近づいていく。

そして示された場所で立ち止まると、その場に跪いて頭を下げた。もしこの場に来たのがアレクシス様だったら跪く必要はないけど、俺達は国王より身分は下なので跪く。

使徒という立場を全面に押し出せば跪く必要はないのかもしれないけど、俺は基本的にラースラシア王国の大公として来ているつもりなので、ちゃんとその身分に合った振る舞いをする。

俺の立場は大公で使徒っていう、他国の王族と関わる時にはかなりめんどくさい立場なんだよね……まあその場面によって臨機応変に立場を変えるしかない。基本的にはこうして大公として、しかしミシュリーヌ教に関する出来事の時には使徒として。

「お初にお目にかかります。ラースラシア王国国王であるアレクシス・ラースラシアが長女、マルティーヌ・ラースラシアと申します。この度は両国間の友好を深める機会をいただけて光栄でございます」

俺が大公ということになっているので、ラースラシア王国側で一番身分が高いことになるマルティーヌが挨拶をする。

「頭を上げてくれ、丁寧な挨拶感謝する。私はヴァロワ王国国王である、エドゥアール・ヴァロワである。此度は遠路はるばる我が国までの遠征、王国を代表して謝意を表したい。――して、隣にいるのが使徒殿であるか？」

「はい。ご紹介いたします。こちらが女神ミシュリーヌ様の使徒である、レオン・ジャパーニスでございます。我が国で大公として国

に仕えてくれています」

マルティーヌに紹介されたので、俺は頭を下げたまま口を開いた。

「レオン・ジャパーニスと申します。陛下に御目通り叶いましたこと、光栄でございます」

「そのようにかしこまらなくとも良い。頭を上げてくれ」

俺がゆっくりと顔を上げて陛下に視線を向けると、陛下は鋭い眼光で俺のことを見つめていた。ヴァロワ王国で俺ってどう思われてるんだろう……そもそもヴァロワ王国では国教がなくて、ミシュリーヌ教もそういう宗教があると知られている程度なのだ。

もちろん少数の信者はいるけれど、ラースラシア王国のように各地に教会があるということはない。

でもそんなヴァロワ王国から俺に助力を願いに来たのだから、少なくとも俺が神の使徒で凄い力を持ってるってことは理解してるんだろうと思ってた。

ただこの陛下の様子だと……少し疑ってるって印象だ。フェリシアーノ殿下からは、疑惑の目を向けられたことはなかったんだけどな。

せっかくこんなに遠い国まで来たんだから、どうせならミシュリーヌ教を広める活動も積極的にやっていこう。この国でも国教にしてもらえれば、また神力の回復速度が上がるだろうし。

とりあえず、俺がミシュリーヌ様の使徒ってところを強調することが大切かな。そうなるとファブリスをこの場に連れて来たほうが良かったかもしれない。あの外見だと怖がらせるかと思って、待機してもらってるんだ。

「貴殿が神の使徒か……噂は聞いているぞ」
「どのような噂なのかは存じ上げませんが、私がミシュリーヌ様の使徒であることは事実です。ミシュリーヌ様から様々な力を授かりました」
「そうか。……ではその能力というものを見せてもらえるか？」

陛下は厳しい視線と声音でそう言った。その隣でフェリシアーノ殿下が、申し訳なさそうに眉を下げているのが微かに見える。

ヴァロワ王国として使徒という存在に助力を願い出ることを決めはしたけど、その能力を信じきれてはいないし、助力を願うことに反対の人達もいるのかもしれない。

確かにいくら凄い噂が流れてきてるとは言っても、自国では存在を知ってる程度の宗教の使徒を名乗っている少年を、無条件で信じるのは難しいか。

でもそうは理解できても、そっちから頼んできたくせにってちょっとだけイラっとするけど。

まあ良いけどね、ミシュリーヌ教を広めるチャンスをもらえたと思えば、この機会を逃すわけにはいかない。そもそもこうして疑いの目を向けられてるのも、ミシュリーヌ様が世界的に信仰されてないことも原因の一つだし。ミシュリーヌ様、もっと頑張らないとダメみたいです！

「では一瞬で別の場所に移動する転移をお見せします。今別の場所に待機している神獣であるファブリスの下に行き、ここにお連れしますね」

分かりやすい能力が良いだろうと思い、俺は転移を選択した。ファブリスのことも連れてきたかったのだ。その提案を受けて、陛下

は側にいる宰相らしき人にいくつか確認を取って頷いてくれた。
「よろしく頼む」
「かしこまりました」
跪いた状態のままファブリスがいる部屋に一瞬で転移をして、ファブリスに触れてすぐにまた謁見室へと戻る。こういうのは早ければ早いほどインパクトあるからね。
案の定謁見室に俺とファブリスが姿を現すと、室内は騒然となった。
『主人、気持ちよく寝ていたのに突然なんだ？　我は留守番ではなかったのか？』
「そうだったけど予定が変わったんだ。とりあえずここで大人しく座っててくれる？」
『別に良いが……』
ファブリスは納得できない様子を見せながらも、俺の隣にペタッと寝そべって大きなあくびをした。このマイペースさ、見習おう。
俺達の登場で騒然となっていた謁見室内は、ファブリスが話したことで今度は誰も言葉を発しなくなっている。
「い、今のは……神からもらった力なのか？」
「はい。もっと遠くにも行けますし、他にも多くの能力があります」
「そうか……」
陛下は目を瞑って俯き少しだけ考え込むと、顔を上げて俺に謝罪した。
「疑うような真似をして、申し訳なかった」

「構いません。この国ではミシュリーヌ様が特別信仰されている訳ではないみたいですし。しかし私に助力を願うということは、ミシュリーヌ様に助力を願うということです。そのところ考えていただければ」

暗にミシュリーヌ様を信仰するように促すと、陛下は難しい表情ながらも頷いてくれた。宗教国家でない国に宗教を広めるのって難しいけど、この世界では実際にミシュリーヌ様の声を聞くこともできるし、使徒や神獣という存在もいる。

その恩恵を感じることができたなら、必然的に信仰するようになってくれるだろう。

それからは当たり障りのない会話をしっかりとこなし、謁見は終わりの雰囲気となった。

「客室を準備してあるので長旅の疲れを癒してくれ。夜には歓迎のパーティーを予定している。我が国の文化を楽しんでもらえたら嬉しい」

陛下のそんな言葉を最後に俺達は謁見室を退出した。部屋から出ると体に入っていた力がスッと抜ける。はぁ〜、緊張した。

３９０、思わぬ会合と束の間の休息

謁見室から出ると従者服を着た男性に声を掛けられ、俺だけこの後に少し時間をとって欲しいと言われた。この場では主人を告げられないとのことだったけど、悪い雰囲気ではなかったし、ファブリスや従者、護衛の皆も一緒で良いと言われたので、了承して男性に従った。

そうしてしばらく王宮の中を進むと……辿り着いた応接室にいたのは、まさかの陛下とフェリシアーノ殿下だった。

「な、へ、陛下。何故このようなところに……」

想像もしていなかった人物の登場に狼狽えていると、陛下はさっきまでよりもかなり雰囲気を柔らかくして、俺にソファーを勧めてくれる。

「使徒殿にどうしても礼が言いたかったのだ。まだ貴族達に公にしてないゆえ謁見の間では口にできなかったのだが、息子を救ってくれてありがとう。君がいなければ助からなかったと聞いた」

そういうことか……この人も一国の王だけど、父親でもあるんだな。そう思ったら途端に親近感が湧いてくる。王としてのモードとそうでない時とは差があるんだろう。

「直接のお礼の言葉、ありがとうございます。私の力が役に立って良かったです」

「うむ。礼として贈る物のリストを後に送るので、受け取って欲し

い」
「ありがたく頂戴いたします」
「それから先程は使徒殿の能力を疑うような言動、本当に申し訳なかった」

そう口にした陛下の表情は、申し訳なさそうに眉が下がっていた。あれは本心からってわけじゃなかったのかもしれないな……国王として求められている言動があるんだろう。
もしかしたらこの国も、前のラースラシア王国のように貴族の力が強いのかもしれない。どこの国も大変だね……この世界に転生して、王族なんてなるもんじゃないと何度も思ってる気がする。

「問題ありません。あの場で能力を示せたことは、今後この国で活動をする上での利益となったでしょうから」

あそこまで力を見せられたら、もう疑うような人なんていないだろう。一気に知らしめることができて逆にありがたかった。

「寛大な対応、感謝する」
「ジャパーニス大公様、私からも改めて、本当にありがとうございました。今後の日程もよろしくお願いいたします」
「こちらこそよろしくお願いいたします」

そうして俺は謁見の後に思わぬ会合に参加し、マルティーヌから少し遅れて客室へと案内された。

「こちらの部屋をお使いください」
「ありがとうございます」

俺に割り当てられた部屋に入ると、中は予想通りの派手さ加減だった。ちょっと、いやかなり落ち着かない。短時間だけ食事を楽しむレストランがこの内装だったら嬉しいのかもしれないけど、ゆっくりと休みたい私室がこの内装なのは疲れる。

「文化の違いとは、凄いのですね……」

ロジェすらも内装を見て呆然とそう呟いた。でもこういう違いを楽しむことも、他国に行く楽しさではあるよね。もうここは素直に受け入れて楽しんだ者勝ちだ。そう思おう。

「凄いよね。こんなに豪華な部屋に泊まれることなんてこれから先ないかもしれないし、堪能しておこうか」

「……そうですね。そういたします」

それから俺はソファーに腰掛け、ロジェが入れてくれたお茶を飲みながら一息ついた。従者の皆はこの部屋で過ごしやすいように荷物を整理してくれていて、護衛の皆は逃走経路などの確認をしている。そしてファブリスは部屋の隅で早速寝ている。

「レオン様、パーティーまでは四時間ほどございますがいかがいたしますか？」

「四時間もあるんだ。それなら……少し横になって休もうかな」

連日の馬車移動とチェスプリオ公国での騒動、さらにはさっきの謁見にその後の予想外の会合。さすがに体が疲れを訴えてきている。子供の体はそこまでタフじゃないのだ。

「かしこまりました。ではゆったりとした部屋着にお召し替えいたしましょう。ホットミルクなどは飲まれますか？」

「ううん、大丈夫。ありがとう」

それから俺はロジェとエミールの二人がかりで素早く着替えさせてもらい、早速ベッドに入った。ベッドはふかふかで横になるとすぐに眠気がやってくる。

「じゃあお休み。二時間ぐらいしたら起こしてね」

「かしこまりました。おやすみなさいませ」

押し寄せてくる強い眠気に抗えず、ロジェのおやすみなさいという言葉を聞いたか聞かないか曖昧なほど、すぐに眠りの世界へと落ちていった。

「レオン様、お時間でございます」

「うぅ……」

もう少し寝たい……このふかふかで幸せな世界にこもっていたい。まだ覚醒しきっていない頭でそんなことを考えて寝返りを打ち、もう一度眠りの世界に戻ろうとしたその瞬間、また声がかかる。

「レオン様、そろそろ準備をしませんと、パーティーに間に合わなくなってしまいます」

「うん、分かってる……って、あれ？」

俺は何とか重い瞼を持ち上げて、そこにいた人物の顔を見た瞬間に目が覚めた。

「ロジェじゃないの珍しいね」

俺を起こしてくれたのはエミールだったのだ。新しく入った従者の中でエミールが一番優秀だって言ってたし、重点的に教育してるのかな。

「ロジェさんはヴァロワ王国側の使用人に呼ばれて、少し席を外しています」

「え、それって俺寝てて大丈夫なやつだった？」

「はい。従者の間で情報共有があるだけみたいです」

「それなら良かった」

ロジェじゃなくてエミールに起こされた意外性が功を奏し、完全に目が覚めた俺は起き上がってベッドから降りた。短い時間でもベッドでちゃんと寝たことで疲れが取れた気がする。

「まだお疲れですか？」

エミールが心配そうに眉を下げているのを見て、俺は慌てて首を横に振った。

「二時間寝て結構スッキリしたよ」

「それならば良かったです。あちらのテーブルに果実水を準備してありますが、こちらにお持ちしましょうか？」

「ううん、向こうに行くよ。エミールは着替えの準備をお願い」

ソファーに向かうとテーブルには、よく冷えた果実水がコップに注がれて置いてあった。柑橘系の味がほのかにして、寝起きには最適な飲み物だ。

それからエミールともう一人の従者の手によって身支度を整えてもらっていると、その途中でロジェが戻ってきた。

「ロジェ、おかえり」
「ただいま戻りました。席を外してしまい申し訳ございません」
「全然大丈夫だよ。情報共有に行ってたんでしょ？　俺が聞いておくことは何かある？」
「いえ、レオン様のお耳に入れなければならないことはございませんでした」

ロジェがそう言うのなら本当に大丈夫なのだろう。使用人も大変だよね……皆が誠実に支えてくれてるからこそ俺は毎日快適に過ごせてるんだから、感謝の気持ちは忘れないようにしないと。

「レオン様、髪型はこちらでよろしいですか？」
「うん、ありがとう」

鏡で全身を見てみると、この国の煌びやかさに合わせたのか、いつもより装飾品が多くてキラキラ度が増してる気がする。キラキラの部屋にキラキラの衣装を着た人達。
……目がチカチカしそうだな。

身支度を整え終わるとちょうど良い時間だったので、俺はそのままマルティーヌを迎えに部屋へと向かった。パーティーにはファブリスの席も準備してくれているということだったので、ファブリスも一緒だ。

『腹が減ったぞ』
「ふふっ、もう少し待ってね。どんなご飯が出るのか楽しみだよね」
『うむ、我がこの国の食事を審査してやろう』

ファブリスって審査できるほどグルメだったっけ……何を食べても基本的に美味いぞ、これも美味い、これも美味いな！　しか言わない気がするんだけど。でも張り切ってるから指摘しないであげよう。

そんな食いしん坊のファブリスを連れてマルティーヌの部屋に着き、ロジェが扉をノックするとすぐにマルティーヌが外に出てきてくれた。

「じゃあ行きましょうか」
「うん。他の皆はもう会場に行ってるのかな」
「今回のパーティーは騎士や文官達も招待されているから、行ってると思うわよ。他国のパーティーなんて初めてだから楽しみね」
「ラースラシア王国とは全然違うって聞くよね」

ラースラシア王国のパーティーは丸テーブルがあって席が一応決まってはいるけど、基本的には立食パーティーだ。それから参加者はダンスを踊れる能力が必要となる。

しかしヴァロワ王国のパーティーは貴族家の食堂にあるような長テーブルがいくつも置かれ、基本的には着席したままパーティーが進むらしい。後半に歓談の時間があり、そこでは立ち上がって話をすることもできるようだけど。

さらにヴァロワ王国のパーティーでは参加者がダンスを踊るということはない。ダンスは専門の踊り子が踊って、参加者の目を楽しませるものみたいだ。

「どんな料理があるのかも楽しみだよね」
「そうね。香辛料が有名だから、それを使った料理が多いのかしら？」

「多分そうだと思うよ。香辛料ってラースラシア王国にあんまり入ってきてないから、今回食べて気に入ったやつがあったら買って帰りたいと思ってるんだ」
「美味しかったら輸入を増やすのもありよね」

マルティーヌとそんな話をしつつ、期待に胸を膨らませて会場までゆっくりと歩いた。そして会場の扉前に辿り着くと……既に良い匂いが漂ってくる。会場には下座に座る人から入るんだけど、その人達のために軽食が出されてるみたいだ。

俺達が会場に足を踏み入れると、皆が視線を向けて歓迎の拍手をしてくれた。予想以上に良い雰囲気で俺の気持ちも上がってくる。さっきの謁見では少し疑われてたけど、やっぱりあそこでちゃんと力を見せつけたのが良かったのかな。

391、歓迎のパーティー

俺達が席に着いてすぐに、フェリシアーノ殿下を始めとした王族の方々が会場に現れ、最後に陛下が王妃殿下と一番の上座に座って全員が集まった。

すると給仕が一斉に現れて、グラスに果実酒を注いでいく。子供の俺達も同じものみたいだ。この世界はお酒に明確な年齢制限はないから良いんだけど、俺はお酒よりもジュースの方が好きなんだけどな……。それも子供の体だからなのだろうか。もう少し成長したら美味しく感じられるようになるかな。

全員の手元に一杯の果実酒が供されると、陛下が徐に立ち上がった。

「今夜はラースラシア王国とヴァロワ王国の友好を深めるため、ささやかながらこのようなパーティーを開催した。参加していただき感謝する。我が国の特産品をふんだんに使った料理の数々や様々な余興、楽しんでいただけたらと思う。ではさっそく……、乾杯」

陛下のその言葉に全員が乾杯とグラスを掲げ、果実酒を口に含んだ。俺もほんの少しだけ口に入れる。

……うぅ、やっぱりあんまり美味しくない。マナー的には一口飲めば大丈夫だから、この後は別の飲み物にしてもらおう。

全員がグラスを置くと、すぐに前菜が運ばれてきた。食事がフルコースになっているところは、ラースラシア王国と変わらないみたいだ。

「こちらはパニルティカでございます。ヴァロワ王国でよく食べられているチーズを、香辛料で煮込んで味付けしたものです」

おおっ、初めて聞く名前の料理だ。日本も含めて俺が今までに遭遇したことのない料理ってことだろう。

見た目は一口サイズの丸いチーズが、赤い香辛料を纏っている感じ。煮込み料理って言ってたけど、スープはなくてお皿の中央にいくつか野菜と共に盛られている。

「初めて見る料理です」

「そうでしたか。我が国では富裕層に親しまれているものなのです。フルコースの時は前菜に、そうでない時にはおつまみとして食べることもございます」

俺の前の席に座っているフェリシアーノ殿下が、にこやかな笑みを浮かべて情報の補足をしてくれた。

やっぱり殿下は良い人だよね……その隣にいる第一王子殿下は陛下と似ていて、基本的にはあまり笑わず寡黙な様子だ。

俺としてはフェリシアーノ殿下の方が好きだなと思ってしまう。王としてどっちが良いのかは難しいけど……それにさっきの陛下のように、素は違う可能性もあるし。

「どのようなお酒と合うのですか？」

「やはり甘くないお酒ですね。果実酒よりはエールなどがおすすめです。お一つ食べてみてください」

「ありがとうございます。ではさっそくいただきます」

フォークで一つ刺してみると、予想以上に柔らかいチーズだった。口に入れると弾力のある食感だと分かる。これ……めちゃくちゃ美

味しいかも。チーズがかなり濃厚で味が濃く、その周りの香辛料がそのチーズの味に完璧にマッチしている。

「とても美味しいですね……このチーズはもちろんですが、味付けが絶妙です。やはりたくさんの香辛料を使っているのでしょうか？」

「はい。しかしどの香辛料を使うのかは料理人次第なので、食べる場所によっては味が違うこともございます」

料理人の腕が試されるメニューなのか。それならこれが美味しければ、他の料理も美味しい可能性が高いってことだろう。これから来る料理への期待が高まる。

「違う味付けも試してみたくなりますね」

「明日から召し上がっていただけると思いますので、期待していてください」

そうだ、明日からも毎日ヴァロワ王国の料理が食べられるんだった。それだけでここまで来た甲斐がある。

『主人、これは美味いな！』

フェリシアーノ殿下と会話をしながら食事を進めていると、俺の後ろに席を置いてもらっていたファブリスが、かなり高いテンションで声をかけてきた。

少し行儀が悪いけど後ろを振り向くと、ファブリスの前にある皿は綺麗に空になっていて、口元を舌でペロリと舐め取っている。

「もう食べちゃったの？」

『美味しかったからな』

「それなら良かったけど……もう少し味わって食べなよね。それか

ら、次の料理が運ばれてくるまで大人しく待ってること」
『もちろん分かっておる』

ファブリスは鷹揚に頷いているけれど、尻尾がゆらゆらと揺れていてなんだか締まらない。最近ファブリスが本当にペットに見えてきてるんだよね……たまにちゃんとしてる時は威厳ある神獣って感じなんだけど、慣れたからか気を抜いている時は完全にペットだ。もう俺の目には大型犬に見えている。

「マルティーヌ、これ美味しいね」

俺はとりあえずファブリスは放っておくことにして、姿勢を正して今度は隣にいたマルティーヌに話しかけた。

「ええ、とても好きな味だわ。レオン、これクレープに合うと思わない？」

マルティーヌは後半のセリフを俺にだけ聞こえるように呟いた。確かに合うかもしれない……これと似たような味付けをしたチキンと、それから野菜を挟めば絶対に美味しい。マヨネーズをかけたらもっと味に深みが出るかも。

「絶対に合うと思う。帰ったら研究してみようか」
「私にも食べさせてね」
「もちろん」

小声でそんな会話を交わし、顔を見合わせて微笑みあった。美味しいものができたら一番にマルティーヌのところに持っていこう。

それからスープや魚料理を堪能して、ついに一番のメインである

肉料理が運ばれて来た。俺はその料理がパーティー会場に入って来た瞬間、思わず声を上げて立ち上がりそうになってしまうところを寸前で耐えた。

「カレーの匂いだ……」

しかしそう呟いてしまったのは許して欲しい。日本でよく食べていた甘いカレーというよりも、もっと本格的なカレーの香り、スパイスの香りが漂って来たのだ。

この世界にもカレー粉に使われてたスパイスが存在してるってことだよね……カレーもあるのかな。あって欲しい、なかったら作りたい。

「こちらはタンドリーチキンという我が国の伝統料理だ。スパイスをふんだんに使ったもので、祝い事の席ではよく出されるものとなっている。気に入っていただけたら嬉しい」

タンドリーチキン！！　俺は陛下の説明を興味深く聞いているふりをしながら、内心で叫んでいた。自動翻訳でタンドリーチキンと訳されてるってことは、似たような香辛料が使われているのだろう。

「とても美味しそうな香りですね」

「私が一番好きな料理です。兄上もそうですよね？」

フェリシアーノ殿下は隣に座っていた第一王子に話を振った。すると第一王子殿下はフェリシアーノ殿下の方を向き、少しだけ頬を緩めて頷く。

「うむ」

この二人は仲が悪いって感じじゃないんだな……雰囲気は悪いどころか良さそうだ。もしかしたら第一王子殿下も実はもっと明るい人なのかも。
この国って、王は寡黙で笑わず厳しいのが良いって教育されるのかな。

「ジャパーニス大公様、ぜひ食べてみてください」

第一王子殿下は俺の方に体を向けると、少しだけ笑みを浮かべてそう言ってくれた。

「はい。ありがとうございます」

この国とは良い関係を築けそうだな……俺はそんな結論に達して、嬉しい気持ちでタンドリーチキンに手を伸ばした。ナイフとフォークで一口サイズに切り取って、一度香りを楽しんでから口に運ぶ。

やばい……めちゃくちゃ美味しい。まさにこれだ、日本で食べたことのあるタンドリーチキンはこんな味だった。もちろん完全に一致はしてないんだけど、かなり似た味だと思う。というか少し違ってても美味しければ良い。

「とても美味しいです。これはどのような味付けなのですか？」
「我が国で採れる香辛料をブレンドしたもので味付けをしています」
「その香辛料を購入することはできるのでしょうか？」
「もちろんです。貴国には我が国の特産品を優先的に輸入する権利がございますから、お望みの分だけ」

そういえば助けてあげる代わりにカカオと香辛料の優先輸入権と、それらヴァロワ王国の特産品をラースラシア王国で栽培できる権利

を得たんだった。

「ありがとうございます。では後ほど輸入品についての話もさせていただければと思います」

「かしこまりました」

それからもパーティーは和やかな雰囲気の中で進み、数時間で終了となった。食事に一度もカカオが出てこなかったので聞いてみると、カカオは基本的に薬として使われ、食べることはないらしい。一部の物好きが中の種を刻んで飲み物にしたり、果肉を食べたりしているぐらいだそうだ。

392、ヴァロワ王国の文化

歓迎のパーティーが終わって客室に戻った俺は、ほとんど記憶もないほどすぐ眠りに落ちて、気づいたら次の日の朝だった。

「ふわぁ～、よく寝た」

ロジェに起こされる前に目が覚めて大きく伸びをしていると、天蓋の布の向こうからエミールに声をかけられる。

「レオン様、お目覚めですか？」

「うん。目が覚めちゃった。昨日早く寝たからかな」

「まだ起床時間まで一時間以上ございますが、いかがいたしますか？」

「もう起きるよ」

「かしこまりました」

エミールは天蓋の布を持ち上げて、部屋のカーテンも開いてくれた。ちょうど日が昇り始めたぐらいの時間らしい。早起きすると気持ちが良いな。

「ファブリス、おはよう」

部屋の隅で丸まって寝ているファブリスの前にしゃがみ、顔を覗き込みながら声をかけた。するとファブリスはうっすらと目を開けて俺を視界に捉える。

『主人、早起きではないか？』

「目が覚めちゃって。……ねぇファブリス、背中に寝ても良い？」
『別に構わんが、今起きたところではないのか？』
「寝るんじゃなくて、ファブリスの毛並みを堪能したいだけだから。ここまではずっと馬車に乗ってたから、ファブリスに乗ってないし」

ファブリスのふわふわでもふもふな最高の毛並みは、定期的にギュッと撫で回したくなるのだ。

『そういうことならいくらでも寝てくれて構わない』

ファブリスがドヤ顔で了承してくれたので、俺は遠慮なく背中に登って体の力を抜いた。あぁ……これこれ。この毛の詰まった絶妙な弾力とふわふわ感。これがめちゃくちゃ気持ち良くて快適なんだよね……

マリーがこの上でよく寝てるのにも頷ける。マルティーヌと話をしたいから馬車に乗ってるけど、ぶっちゃけ移動の快適さという点だけで考えたら、王家の馬車よりもファブリスの勝利だ。

「昨日の夕食で何が一番好きだった？」

昨日はファブリスと美味しさを分かち合って騒げなかったので今聞いてみると、ファブリスは途端に尻尾をぶんぶん振り回し始めた。

『全部美味かったぞ！』
「ふふっ、確かにそんな感じだったよね。特に一つ選ぶとすると？」
『ふむ、そうだな……タンドリーチキンだったか？　あの肉料理が美味かった』
「ファブリスも？　俺もあれが一番好きだったな。でも前菜のチーズも美味しかったよね」
『ああ、あれか！　確かにあれも捨て難い』

ほとんどがラースラシア王国にはない味付けで凄く美味しかった。やっぱり料理に必要なのは調味料なんだと実感したよね……

「香辛料がラースラシア王国でも手に入るようになるから、帰ってからも作ってもらおうか」

『うむ、楽しみだ』

「マリーにも食べさせてあげたいね」

『絶対に喜ぶな』

そうしてファブリスの背中に寝そべりながら話をしていると、最高な毛並みのベッドと絶妙な温かさに次第に瞼が重くなり……俺はファブリスの背中に乗ったまま寝落ちしてしまった。

「レオン様、起床のお時間でございます」

「……あれ？　俺また寝てた？」

ロジェの声に目が覚めると、俺はまだファブリスの背中の上にいた。さすがにはっきりと目が覚めてファブリスの上から降りる。

「ファブリスごめん、重かったでしょ」

『別に問題ない。一人ぐらいなら乗っててもの乗ってなくても変わらんからな』

「それなら良かった。ありがとね」

俺はうつ伏せで寝ていたために固まって痛い肩周りを、ゆっくりと回してほぐしながらソファーに向かった。そして目覚めの果実水を一杯飲んで身支度を整え始める。

「今日はどんな予定だっけ」
「午前中は王都散策をしながらヴァロワ王国の文化を見学、午後はカカオ農園の見学でございます」
そうだった、まずは文化交流からなんだよね。王都散策楽しみだな。昨日は馬車から見てただけだから、実際にお店に寄ってみたい。屋台で買い食いとかもしたいな。
「歩きじゃないよね」
「馬車からと伺っております。しかし幾つかの場所で馬車を降りての見学も予定されていますので、馬車を降りることができないということはないかと」

それから各自の部屋で朝食を取って、俺達は王宮のエントランスに集合した。今日の日程に参加するのは俺とマルティーヌ、ラースラシア王国の文官が数名、それからフェリシアーノ殿下とヴァロワ王国の文官達だ。
基本的に俺達の案内役はフェリシアーノ殿下が務めることになっているようで、帰国まで毎日顔を合わせることになる。陛下と第一王子殿下はたまに顔を出す程度らしく、今日は午後のカカオ農園見学の時に合流するらしい。
「フェリシアーノ殿下、おはようございます」
「ジャパーニス大公様、マルティーヌ王女殿下、おはようございます。旅の疲れは癒せたでしょうか？」
「とても居心地の良いお部屋を貸していただけましたので、疲れを取ることができました」
マルティーヌがにっこりと微笑みながらそう言うと、フェリシア

ーノ殿下も安心したように笑みを浮かべた。

「それは何よりでございます。王都散策では暑い中で外に出ていただくこともございますので、体調の変化等ございましたら遠慮なく仰ってください。では馬車へお願いいたします」

今日の馬車はかなり大型のものが二台で、一台目に俺とマルティーヌ、それからフェリシアーノ殿下と文官一名に三人の従者が乗る事になっている。護衛は馬に乗って馬車の横を並走するらしい。そして二台目の馬車には文官達が全員乗る。

全員が乗り込むとすぐに馬車は動き出して、丘をゆっくりと下って王都の街中へと向かった。馬車は下り坂を下るのは結構大変なんだけど、かなりスムーズだ。

「まずは大通りに向かいます。そこでは馬車から降りていただいて、建物の建築様式やお店の様子など、見学いただけたらと思います」

「かしこまりました。お店で気になったものは購入しても良いでしょうか？」

「もちろんです」

アイテムボックスに入れておけば半永久的に保存できるから、頻繁に来れないところで買い物をするととにかく買い占めたくなっちゃうんだよね……商品が無くならないように自重しつつ楽しもう。

「この街では、貴族が住む場所と平民が住む場所は分かれているのですか？」

マルティーヌが外を眺めた後に、フェリシアーノ殿下にそう聞いた。すると殿下は首を横に振る。

「厳密に分かれているということはありません。高位貴族が多く住む地域はありますが、治安が良く人気の地域ならば貴族は自由に住む場所を決めています」

わざわざ治安が良くって言葉を添えるということは、貴族が住まないような治安の悪い地域もあるってことだろう。やっぱりどんな国にも街にも、そういう場所って作られるんだな。

「では平民が住む場所と貴族が住む場所で、物価は同じということでしょうか？」

「基本的に同じものであるならばどこでも同じ値段です。しかし貴族家が多く集まる地域には貴族通りと呼ばれる場所がありまして、そこにあるお店は高価なものを取り扱っています。ただむやみやたらと高いわけではなく、質が良かったり品種が違ったりするためです」

そうなんだ……そこはラースラシア王国とは違う部分だ。ラースラシア王国の貴族街は、同じものでも平民向けのお店より高い値段で売っていることが多い。

最初はこれだと誰も買わないんじゃないかと思ったけど、平民向けのお店で買うなんて貴族としてあり得ないといった考えが浸透しているので、特に問題なく中心街のお店もやっていけるのだ。

要するにラースラシア王国では、貴族は見栄とプライドのために大金を使っている。その見栄を満たすために、同じものを高価な値段で売るという一見あり得ない商売が成立しているのだ。

日本でいうブランドと似たような構造なのかな……貴族達は貴族街のお店というブランドに惹かれるのだから。

「これから向かうのは貴族通りですか？」
「いえ、本日は一般的な市場に向かっております。貴族通りも予定に組み込みますか？」
「そうですね……気になりますが、貴族通りのお店は王宮に呼ぶこともできるのでしょう？」
「もちろんです。ご要望の品があれば王宮に店の者を呼び寄せます」
「では本日は一般的な市場にいたします」

そうしてマルティーヌとフェリシアーノ殿下の話が一段落したところで、馬車は丘を下り終わって街中に入った。もう少しで目的地みたいだ。

３９３、家の作りと市場

馬車が止まって周囲の安全が確認されたところで、俺達は街に降り立った。ヴァロワ王国は年間を通して気温が高い国だけど、今の時期はそこまでひどい暑さでもないみたいで、直射日光の当たる外にいても短時間ならば辛さは感じない。

「まず見ていただきたいのは家の作りです。馬車からもご覧になっているとは思いますが、我が国の一般的な建築様式ではこのようにベランダを設置します。これは年間を通して温暖な気候が続くことが原因でして、暑い夏を少しでも涼しく過ごすための先人の知恵です。基本的に民達はこのベランダで多くの時間を過ごします」

日本人としてベランダと聞くと、どうしても二階にある洗濯物を干す場所を思い浮かべてしまうけど、これはあのベランダとは用途が全然違う。

この国のベランダは一階の半分を占めるほどの大きさで、そこにテーブルや椅子などが設置され快適に過ごせるようになっている。ベランダというよりも……壁がないリビングって感じだ。

いくつか見える食堂は殆どがベランダ席みたい。冬がないのならこれが一番良い作りなんだろう。

「日陰で風が通れば涼しそうですね」

「はい。この街は山から降りてくる風が多いので、その風が通るように考えて家が建てられています」

こうして見てると一階のベランダが羨ましくなるな。東屋とはま

た違った良さがある。どちらかといえば……日本の縁側に通じるものがあるのかも。
大公家の屋敷にも増築しようかな。テーブルと机にソファーを置いて、屋敷の一室から繋がるようにしたい。帰ったら相談かな……
「次はこちらに来ていただけますか？」
馬車から降りた場所は住宅地だったけど、そこから少し歩くとすぐにたくさんのお店が立ち並ぶ市場に出た。人がたくさん行き交い賑わいを見せている。
「こちらは王都の中でも大きな市場の一つです。この国の特産品も売っておりますので、是非ご覧になってみてください」
「自由に見て回っても良いのでしょうか？」
「もちろんです。しかし昼食の予定もございますので、時間は一時間ほどとさせてください」
「かしこまりました」
フェリシアーノ殿下から自由で良いという言葉をもらってマルティーヌの方を振り返ると、マルティーヌはヴァロワ王国の文官達と話しながら既にお店を見て回っていた。さらにフェリシアーノ殿下は、ラースラシア王国の文官達と話を始めている。
ということは、俺は一人で回って良いってことだよね。内心でガッツポーズをしながら、さっそく目当てのお店を見つけるために大通りをぐるっと見回した。
「ロジェ、この国の貨幣に両替してくれたんだよね？」
「はい。先日両替いたしましたので、ご自由にご購入されてください」
「ありがとう。じゃあまずはあそこに見える香辛料のお店に行こう

か」

お店に近づくと、奥に店員らしきおじさんがいたので声をかける。

「こんにちは。色々と聞いても良い？」

「もちろん良いぞ。何が欲しいんだ？」

店先には麻袋に詰められた数十種類の香辛料が、所狭しと並べられていた。とりあえず全種類買うことは確定なんだけど……どれがどんな味かは大まかにでも知っておきたい。

「タンドリーチキンに使われるのってどの香辛料？」

「そうだな。あれは人によるが……これとこれ、それからこいつは絶対に入れるな。あとは人それぞれだ」

おじさんが指差したのは茶色い粉と黄色っぽい粉、それから黒い種みたいなやつだ。この三つがあのカレーみたいな味を作るのに必要ってことだろう。

「この黒い種はこのまま使うんじゃないよね？」

「こいつは料理に使う直前に潰すのが一般的だ。そうじゃないと味も風味も落ちるからな」

「そうなんだ。じゃあその三つを、大袋で三袋ずつもらって良い？」

このお店では小袋、中袋、大袋があって、そのどれかを選んで一袋単位で買うらしい。大袋は両手で抱えるぐらいの大きさだ。

「毎度あり。他に欲しいものはあるか？」

「他のやつも全部欲しいんだけど……とりあえず大袋で一つずつ買おうかな。あとはおじさんのおすすめと、料理によく使われるやつ

を一袋ずつ追加で」
「そんなに買ってくれんのか！？」
今まで淡々と接客をしてくれていたおじさんも、さすがに驚いたらしく目を見開いている。
「うん。さすがに買いすぎ？」
「いや、ありがたい。今夜は美味い飯が食えそうだ」
おじさんはそう言って笑みを浮かべてくれたので、俺は安心して買い物を再開した。そして結局おじさんのおすすめ三つとよく使われる香辛料二つをさらに追加で購入し、アイテムボックスにたくさんの香辛料をストックできたところでおじさんの店を後にした。
帰るまでにあと何回か香辛料を追加購入したいな。そして帰国してからは気に入ったやつを重点的に輸入しよう。
「ロジェ、次はあの屋台に行こうか。ファブリスにお土産を買って帰るって約束したんだ」
「かしこまりました。……ファブリス様が気に入っていた味付けですね」
漂ってくる香りで香辛料が多く使われた串焼きだと分かる。昨日のタンドリーチキンを彷彿とさせる香りだ。
「俺もかなり気に入ってるんだ。ロジェはどう？　従者の食事も俺達のと同じ内容だったんだよね」
「はい。……正直最初に食べた時は味が濃いと驚きましたが、とても美味しかったです。癖になる味付けだと思いました」
「そうなんだよね……気付いた時には食べすぎてるから気をつけないと」

俺のその言葉にロジェは苦笑を返してくれた。そうして辿り着いた屋台では、まだ年若い男性が串焼きを必死に焼いている。

「こんにちは。串焼きを買っても良いかな」
「いらっしゃい！　もちろん大歓迎だ」
「何本までなら買っても大丈夫？」

見える範囲には十本ぐらいしか串焼きがなかったのでそう聞いてみると、男性はゆっくりと首を傾げて腕で汗を拭った。

「別に何本でも良いけど……どういうことだ？」
「たくさん買って在庫がなくなったら今日のお店は終わりでしょ？　それは申し訳ないかと思って」
「いや、俺としては早くに売り切れるのはありがたいけど……」
「本当？　じゃあ三十分で焼けるだけもらうよ。何本でも上限はなしで」

俺のその注文に、男性は一瞬理解できないというように固まった後、「はぁ！？」と素っ頓狂な声を上げた。

「そ、そんなに買ってくれるのか！？」
「うん。お金はちゃんとあるから大丈夫だよ」

ロジェが後ろからお金を見せたことで、男性はやっと俺に従者がいることに気付いたらしく、さらに俺の服装にも意識が向いたらしい。

とりあえず身分が高い人だと認識してくれたのか、そこからは無言で頷き串焼きを焼き始めてくれた。

「無理に急がなくても良いからよろしくね」
「おう、分かった」

そこから俺は周りのお店を見て気になったものを購入しつつ、たまに屋台に戻って焼き上がった串焼きを受け取りアイテムボックスに収納していった。
既に焼いてあり温めるだけのものもあったらしく、予想以上にたくさん買えたので満足だ。

「いっぱい買ってくれてありがとな！」

三十分の間に緊張も解けたらしく、最後には売上を握りしめた男性に満面の笑みで見送られて屋台を後にした。串焼きは一本食べたけど……凄く美味しかった。ここにいる間にまた時間があったら買いに行こうと思う。

３９４、水浴び文化とお昼ご飯

買い物を終えて集合場所に戻ると、そこにはマルティーヌとフェリシアーノ殿下、それから文官達も皆が集まっていた。

「お待たせしました」

「いえ、まだ集合時間前ですので大丈夫です。ただ全員揃ったことですし、次の場所に向かいましょうか」

「そうですね。次はどちらに向かうのですか？」

「水浴び場と呼ばれる場所です」

水浴び場って……要するにプールってこと！？　この国にはプールがあるのか。それは気になる、冷たい水の中を泳ぎたい。

「少し遠いので馬車で向かいます。また馬車にお乗りいただけますか？」

「もちろんです」

それから馬車に乗って進むこと十分ほど、辿り着いた広場には大人の腰ほどの高さまで水が溜まった、石造りのプール……みたいなものがあった。近くにある建物が更衣室となっているようで、こうして見ている間にもその建物には人が頻繁に出入りしている。

着ている服は水着のようなものではなくて、普通に平民がよく着ている少しごわついた服だ。

「ここが水浴び場です。この国は一年中気温が高く汗をかくので、ほとんどの者は数日に一度はここに来て汗を流します。貴族にはお風呂の文化も広まっていますが、やはり水浴びの方が気持ちが良い

からと、屋敷に水浴び場を持つ貴族も少なくありません」

一年中暑い国だとこういう文化が育つこともあるのか……面白いな。ただ俺が求めていたプールとは違ったけど。さっきから見ていても、顔を水につける人は皆無だ。泳いでる人なんてもちろんいない。

「ここでは体を洗ったりということはしないのですか？」

「はい。あくまでも水に浸かって体を冷やし汗を流すという目的ですので、たとえば洗髪などは各家でやるのが通例です」

「そのような決まりがあるのですね」

それから水浴び場の周りを歩きながら、着ている服の決まりや人気の飲み物などについて話を聞いていると、職員らしき人達が何人も外に出てきた。

「水の入れ替え時間だから、外に出てくれるかー」

真ん中にいたおじさんがそう叫ぶと、水の中に入っていた人達は戸惑うことなくすぐに水から上がる。皆の反応からして、当たり前のことみたいだ。

「じゃあ水を流します」

中に誰もいなくなったところで、職員の女性が水浴び場の端にある木の板を上に引き抜いた。するとかなりの勢いで溜まっていた水が流れ出ていく。

「これってどこに流してるんですか？」

「川の下流に流れるようになっています」

川にそのまま流しちゃうってことか……それってどうなんだろう。環境汚染とかにならないのかな。でも洗剤とか石鹸を使ってるわけでもないし、そんなに汚れてるわけじゃないのか。

「どれほどの頻度で水を入れ替えるのでしょうか？」

次に質問したのはマルティーヌだ。それにはヴァロワ王国の文官が資料をフェリシアーノ殿下に渡し、殿下が自ら答えてくれた。

「基本的には一日に二回が多いようです。朝に水を入れて昼頃に変え、夜は水を抜いて終了となるのが一般的です」

「それならば清潔に保てそうですね」

「はい。そこは国としても気を遣っているところです」

そうして話をしていると、水は綺麗に流されて木の板が再度はめ込まれた。そして外に出てきていた職員全員が水浴び場に向けて手を翳す。

それから数秒後……水浴び場の中は綺麗な水で満たされた。それを確認したお客さん達は、職員に礼を言って我先にと中に入っていく。

俺はその光景を呆然と見つめていた。まさか、水魔法を使って水を貯めてるとは思わなかったのだ。川の上流から水を引いてきてるのだと思い込んでいた。

だってこの水浴び場はかなりの大きさ、これをこの人数で満たせるとなると……多分全員の魔力量が五でないと無理だろう。

「なぜこの場所に、多くの魔力を持つ人達が集まっているのでしょう」

魔力量が五の人はそう多くないし、普通は魔力が多いと分かると騎士団や兵士を目指す人が多数を占めるのだ。理由は給金が高いとか、社会的身分が高いとかそんなものだけど。

「国が支援をしているのです。というよりも、水浴び場はほぼ国営の施設と言った方が適当ですね。したがって給金は一般的な職よりも高くなっていますし、目指す者も多いです。またこの国では生活に欠かせない水浴び場の職員は皆に感謝される立場なので、それも十分な人材が集まる理由だと思います」

……これは国として、最高の選択をしてるんじゃないだろうか。体を清潔にすることは病気を防ぐという観点からも大切なことだし、何よりも一種の娯楽を国が作り出してるのって凄いことだ。最初に支援しようと決めた人、優秀な人だったんだろうな。

「素晴らしいですわ。我が国でも見習わなければなりません」

「そう言っていただけて光栄でございます。――では水浴び場の案内もここまでとなりますので、また馬車の方にお戻りいただいても良いでしょうか」

「かしこまりました。次はどちらへ向かうのでしょう。本日はとても有意義な時間を過ごすことができて、感謝しております」

マルティーヌが綺麗な笑顔で、フェリシアーノ殿下と向かい合った。今回の旅で何度も思い知らされたけど、王族の教育って本当に凄い。俺だったら言葉が詰まったり笑顔が引き攣ったり話の内容が分からなかったり、とにかくスムーズに会話ができない場面でも、マルティーヌはいつも優雅な笑みを携えて的確な言葉を返していく。

何度助けられたか分からないし、何度惚れ直したかも分からない。俺もマルティーヌに負けないように頑張らないとだよね……使徒と

してラースラシア王国の役に立てるように。

「そろそろ移動の疲れも出てくる頃ですから、次は昼食にしようと思っております」

「それはありがたいですわ。ちょうど貴国の美味しい料理を食べたいと思っておりました」

「昼食には疲れた体を癒す料理を選んでおります。ゆっくりと休みを取りつつ、ご賞味いただければと思います」

それから俺達は馬車でおしゃれな食事処に移動し、美味しい昼食を食べた。昼食はこの国でよく食べられているというパン粥だったけど、ラースラシア王国のものとは全く違ってスパイスでガツンとした味付けがされていた。

何でもヴァロワ王国では、疲れた時や体調が悪い時ほどスパイスたっぷりの料理を食べるべき、という考えが浸透しているのだそうだ。

確かに香辛料の中には薬に使われるものもあるし、理に適っている……のかもしれない。まあ健康に効果があるのかはさておき、とりあえず美味しかったから満足だ。

昼食を終えた俺達は、食休みも兼ねて食事処でこの国の文化について雑談を交わし、陛下と第一王子殿下がカカオ農園を訪れる時間に合わせてお店を出た。

カカオ農園は街の外れに位置していて、そこまで大規模の農園ではなかった。やっぱり基本的には薬に使われるということだから、大量生産はしていないのだろう。

馬車から降りると年配の夫婦が俺達を出迎えてくれる。この二人

がカカオ農園を運営しているのだそうだ。今回は俺がカカオを見たいと言ったことでここを訪れることになったけど、普通は王族や貴族が訪れるような場所ではないみたいで、老夫婦は可哀想なほどに緊張している。

「こ、こんな街の外れに、ようこそ」
「ありがとう、ございます」

敬語もほとんど学んでいないのだろう、つっかえながらも何とか丁寧な言葉を使おうと努力している様子が窺える。

「突然訪問することになり迷惑をかけてすまなかった。気にせずいつも通りにしてくれれば良い」

フェリシアーノ殿下のその言葉に、少しだけ体の力が抜けたように見える。

「わ、分かりました」
「では、中へどうぞ」

老夫婦はギクシャクした動きで俺達を農園の中に案内しようとして、それを殿下が止めた。

「いや、これから陛下と兄上が来る予定なのだ。もう少し待ってもらえないだろうか」

そしてその言葉に老夫婦がまた最初のように体を固く強ばらせたところで、俺達の耳に馬車の車輪の音が聞こえてきた。陛下達が来たみたいだ。

395、カカオ農園

豪華な馬車から降りてくるのは厳つい顔の陛下と無表情な第一王子殿下。いや、怖いから。もう少し愛想良くしてあげてください！

俺のそんな心の叫びが届いたのか、殿下は少しだけ頬を緩めて俺とマルティーヌに会釈をしてくれる。しかし陛下はそのままフェリシアーノ殿下の下に向かった。

一国の王としては、周りに隙を見せないためにもこういう態度になるのは仕方がないのかもしれないけど……もうちょっと愛想良くした方が良いんじゃないかと思ってしまう。本当は良い人なのに。

「陛下、お待ちしておりました」
「待たせたな。これから見学か？」
「はい。農園主との対面は済ませてあります」

フェリシアーノ殿下のその言葉に頷いてから、陛下は老夫婦の方に視線を向けて一歩二人に近づいた。

「此度は急に訪れて申し訳ない。我が国の民を支える薬となる原料の生産、感謝する」
「い、いや、こちらこそ……ありがたいことで」
「早速だが、案内を頼んでも良いだろうか？」
「も、もちろんですっ」

陛下に促されて、二人は驚くほどの俊敏さで俺達を農園の中に案内してくれた。中は綺麗に整備されていて、予想以上に歩きやすい。

「こちらが、カカオの木です。今はちょうど収穫前で、実が生ってるところだ……です」

男性が辿々しい敬語を使って説明を始めてくれたところに、陛下が軽く手を上げて割って入る。

「敬語は使わなくても構わない。我々は気にしないのでいつも通りに話してくれ。その方が説明が楽だろう？」

「それはそうだけど……良いの、です？」

「ああ、構わない」

陛下がしっかりと頷いたのを確認して、老夫婦は互いに顔を見合わせた後、困惑しながらも頷いてくれた。

敬語をちゃんと学んでない人が付け焼き刃の知識で敬語を話すのって、聞き取りづらいし話は進まないし良いこと無しなのだ。それなら潔くタメ口で話してくれた方が、こちらとしても聞きやすくて良い。

「分かった、ありがとう。じゃあ説明の続きだが、これがカカオの実だ。これはあと二週間ぐらいで収穫になる。収穫した実は基本的に薬師が買っていくんだが、一部は商人が買っていって、貴族様に売ってるらしい。果肉部分を食べるそうだ。あとは別の国に売られていることもたまにはあるな」

男性が示してくれたカカオは薄い黄色だった。これがもう少し色が濃くなって、オレンジに近くなったら収穫目安らしい。

「カカオって簡単に育つもの？　それとも難しいのかな」

「カカオは難しいぞ。まずこいつは直射日光に弱いし風にも弱い。

農園の周りに背が高い木を植えてるのはそのためだ。あとは温度変化にも弱いな。特に寒いのがダメだ。前に他国の貴族が育てたいと言って苗を数本買っていったが、すぐに枯れたと聞いたことがある」

マジか、カカオってそんなに育てるのが難しいんだ。大公家の領地には温室を作る予定だし、そこなら簡単に育てられるかと思ってたけど……そう上手くはいかないのかもしれない。

「俺が国に戻ってから育てたいって言ったら、苗を買うことはできる？」

「そうだな……数本なら売れるがたくさんは無理だ。俺らもダメになる木が出ることも考えて、苗は残しておきたい。それに二十年ぐらいで木は駄目にならなくても、カカオの実が取れなくなることは多いからな」

カカオって二十年で実がならなくなるのか。そのスパンを考えて事前に入れ替えのための苗も育ててって考えたら、結構大変そうだな。温室を作るにしても、また人をたくさん雇わないとだろう。

「種から育てるのって難しい？」

「やり方を教えても良いが、かなりの数をダメにすると思うぞ。それから種の質も重要だ」

……うん、カカオ栽培は予想以上に難易度が高そうだ。輸入量を増やす方が良いのかな……でもここの現状を見ると、そこまで大量には輸入できないだろう。これから収穫量を増やしてもらう？

でも、他国に依存しないとっていうのもできるだけ避けたい。この世界はいつ争いがあって、国同士の関係性が悪化するのか分からないから。

やっぱり一番の理想は、俺が領地でできる限りカカオを栽培して、足りない分を輸入で補うことだ。……とりあえずはヴァロワ王国に収穫量を増やせないか聞いてみて、できる限り輸入させてもらってる間に、大公家の領地での栽培方法を確立するのが一番かな。

「いろいろと教えてくれてありがとう。とりあえず後で可能な限り売れるだけの苗と、たくさんの種、それから実を買わせてもらうよ」

俺のその言葉に男性は少し呆れた表情を浮かべながらも、俺が陛下に連れられた賓客だからか素直に頷いてくれた。多分成功するわけないって思ってるんだろうな……逆に燃えてくる、絶対に成功させたい。

それからも農園の中を回って収穫方法や保存方法などを教えてもらっていると、陛下が俺とマルティーヌの隣にやってきて口を開いた。今はちょうど移動中なので、話をしていても問題はない。

「使徒殿、マルティーヌ王女、我が国はどうだろうか」

凄く答えづらい質問を投げかけてくるね……そう思って俺が言葉に詰まっていると、マルティーヌが完璧な微笑みを浮かべて陛下の顔を見上げた。

「民達は明るく娯楽を楽しむ余裕があり、食事はとても美味しい。素敵な国だと思います。我が国とは異なる文化の数々も、とても興味深いものばかりです」

「そうか。そう思ってもらえたのなら嬉しい。使徒殿はどうだ？」

「そうですね……私もマルティーヌと同じく、とても素敵な国だと思いました。特に水浴び場など、重要な文化を見極めて支援をして

いるのが素晴らしいと思います」

これはお世辞ではなく本心だ。この国はかなり上手く回っていると思う。ラースラシア王国は、使徒という存在がいなければ崩壊していたも同然だった。

この国はそんな強大な力は無しに上手くいっているのだから、実際ラースラシア王国よりも優秀だと思う。さすがにそんなこと口には出せないけど。

「使徒殿にそう評価してもらえるのは光栄だ。――使徒殿、ずっと気になっていたことがあるのだが……聞いても良いだろうか」

陛下は突然雰囲気を深刻なものに変えて、俺にそう問いかけてきた。何か重大なことでも聞かれるのかな……回復魔法のこととか？

俺は一瞬で頭の中に色々な想像が駆け回ったけれど、それを一旦押し留めて頷いた。

「もちろん構いません」

「ありがとう。これは不敬な問いかもしれないが……、ミシュリーヌ様とは、本当にいらっしゃるのだろうか。いや、もちろん使徒殿の力は目の当たりにして実感している。しかし我が国は宗教とは距離を置いてかなりの時が流れており……民達も信じられぬと思うのだ。使徒殿に助力を賜る以上、ミシュリーヌ様にも感謝すべきと分かってはいるのだが、どのようにそれを民に伝えれば良いかと……」

確かに、それも一理あるな。突然神によって救われましたとか言われても、普通の人達は意味が分からないだろう。

ミシュリーヌ様からの神託もなしに信じろっていうのは難しいか。ミシュリーヌ様、神域外に神託をする神力は余ってるかな……

「ちょっとミシュリーヌ様に確認してみますので、少しお待ちいただけますか？」

カカオ農園の案内も終盤で、あとはカカオの実を実際に食べてみる体験を残すだけだったので、俺は一言断ってから少しだけ皆の輪から外れた。そしてミシュリーヌ様に呼びかける。

396、久しぶりのミシュリーヌ様

「ミシュリーヌ様、聞こえますか？」

他の人からは離れていたけど俺のその言葉が聞こえたのか、ヴァロワ王国側の人達全員に奇妙なものを見る目を向けられる。ミシュリーヌ様の声は皆に聞こえないから、いつも変な人扱いされるんだよね……嫌だけど陛下と次いつ話せるか分からないし、ここは少し我慢だ。

『はいはーい。どうしたの？』

「お久しぶりです。今大丈夫ですか？」

『もちろんよ。何かあったの？　確か今は……別の国に行ってるんだったわよね』

「そうなんです。そこで色々あって、その別の国がミシュリーヌ教を国教としてくれるかもしれないって話に……」

『え！？　それ本当！？』

うっ、うるさい、ミシュリーヌ様は声が大きすぎるんだよな。口を開かず静かにしてれば綺麗で神聖な雰囲気を纏った女神様なのに、こんな感じで落ち着きがないから残念女神様になっちゃうんだ。

俺は心の中でそんな失礼なことを考えつつ、再度口を開いた。

「本当です。でもミシュリーヌ様って、ラースラシア王国以外にほとんどノータッチじゃないですか。だからその存在を信じられない人が大勢いるんです。そこでミシュリーヌ様に、一度神託でもしてもらうのはどうかなと思ったんですけど……神域外に神託できる神力はありますか？」

『そうね、今の神力なら三回ぐらいはできるかもしれないわ』
おおっ、凄い。最近は俺とファブリス、さらにミシュリーヌ様も頑張ってるだけある。やっぱり神力が潤沢だと便利だ。
『でもレオンが今いる場所って……神域の近くよ？　教会の中で神託した方が神力が節約できて良いんじゃない？』
「え、そうなんですか！？」
今度は俺が驚く番だ。神域とはミシュリーヌ様が遥か昔に神力で作った、壊れることも劣化することもない礼拝堂のこと。ラースラシア王国の王都中心街にある礼拝堂がその一つで、他にもいくつかあるって聞いてたけど、まさかこの近くにあるなんて……
そこをヴァロワ王国のミシュリーヌ教、教会本部って感じにすれば良いじゃん。
『今いる場所から一キロも離れてないわよ』
「街の中ですか？」
『そうね、ちょっと待って。――ああ、ここよここ。街の外れね。うわぁ……しばらく見に来てなかったけど、中はかなり汚いわ。一言で言うとゴミ溜めね』
神域がゴミ溜めって……なんでそんなことになったんだ。そんな状態ってことは教会としては使われてないのだろう。
『汚い格好をした大人と子供が住んでるみたい。周りもボロい家ばかりだし、貧民街とかスラム街ってやつじゃないかしら』
「なんで神域である教会がそんなところに……」
もっと普通の場所にあるのなら教会として機能させやすかったの

に……神域がそんな場所にあるのはまずいだろう。

「ミシュリーヌ様、教会の場所を変えることってできないんですか？」

『それは無理よ。下界に落とした時点でその場所に固定されるから』

そうなると、街の方を変えるしかないな。できれば貧民街かスラム街か分からないけど、それを別の場所に移動させて、教会の周りは綺麗な通りにしたい。貴族や裕福な平民も訪れるのを嫌がらないような立地にしないとダメだろう。

「とりあえず、これからその場所に行ってみます。詳しい場所が分かりませんし、また声を掛けるかもしれないのでそのつもりでいて下さい。あとは神託を頼むと思うので、その準備もお願いします。……ちゃんと威厳のある言葉を考えておいてくださいね」

最後の言葉は他の皆に聞こえないように小声にしたけど、ミシュリーヌ様にはしっかりと届いたようだ。少し嫌そうな声音ながらも了承してくれた。

いくら神らしさがミシュリーヌ様基準だといっても、やっぱり最初の印象って大切だから。最初は畏れを感じるぐらいで、段々と親しみやすさを出した方が効果的なはずだ。

俺はミシュリーヌ様との話を終えて皆のところに戻り、上手く事態を飲み込めずに変な表情を晒している陛下の顔を見上げた。

「陛下、お待たせいたしました」

「あ、ああ。今のは……ミシュリーヌ様と、会話をしていたのか？」

「そうです。私は使徒なので、どこでもミシュリーヌ様と自由に話をすることができます」

「……そうか、そうなのか」

まだ混乱してるみたいだ。……この国は宗教がほとんど信仰されていなくて、神の存在も概念的なものとしか捉えられてないようだったから、そこで突然神と話せますって人が出てきたらこんな表情にもなるか……

もし日本で突然神と話しますって言って、独り言を呟き始めた人がいたら……頭がおかしいのかと距離を置くかもしれない。いや、絶対に距離を置く。そして誰も本当に話をしてるなんて思わないだろう。

客観的にみたら、俺ってかなりやばい人じゃん。今更気づいた……ま、まあでも、ラースラシア王国ではミシュリーヌ様の存在は周知されていて、さらに神託もあるんだから変な目では見られないよね。だ、大丈夫なはずだ。

俺は内心でかなり動揺しつつも、深く考えないようにして話を進めることにした。こういうのは深掘りしない方が良いんだ。

「ミシュリーヌ様に確認したところ、王都の外れに神域である礼拝堂があるらしいです。神域の中ならば私以外でもミシュリーヌ様のお声を聞くことができますので、そちらに向かいませんか？」

「まさか……我が国にそのような場所があったのか？」

「はい。言いづらいのですが……、貧民街かスラム街のような場所にあるらしいです。ミシュリーヌ様が神力で作られた礼拝堂は劣化せず壊すこともできないのですが、そのような礼拝堂に心当たりはあるでしょうか？」

俺のその言葉に陛下は難しい顔で考え込み、第一王子殿下とフェ

リシアーノ殿下も顎に手を当てて考え込む。パッと出てこないってことは、この国で全く重要視されてない場所なのだろう。

「申し訳ないが……、私は思い当たる建物がない。お前達はどうだ？」

陛下のその問いかけに殿下達が揃って首を横に振り、文官達も同じ動作をしたところで皆の視線が俺に戻ってきた。

「ではミシュリーヌ様に案内をしてもらいましょう。今から向かうのでよろしいですか？」

「もちろんだ。……逆に私からお願いしたい。神域である礼拝堂への案内を頼む」

「かしこまりました」

そうして急遽行き先が増えることになり、俺達はカカオの果肉を食べて少しだけ休んだ後で、早速礼拝堂へと向かった。

ミシュリーヌ様の指示通りに馬車を進めてもらうと、どんどん街の雰囲気が荒んでいき、壊れた建物や薄汚れた人々が目に留まるようになる。

『レオン、三つ先の角を右よ』

「分かりました」

ミシュリーヌ様からの言葉を御者さんに告げると、ついには馬車が入れない道路になってしまったようで、馬車は減速して停止した。

「フェリシアーノ殿下、いかがいたしますか？」

俺とマルティーヌと同じ馬車に乗っている殿下に判断を委ねると、殿下は従者を陛下達の馬車に使いに行かせた。

「ここからは歩きになると思います。このような場所を王女殿下と大公様に歩いていただくのは、とても心苦しいのですが……」

「構いませんわ。別の国にある神域も見てみたいですから」

「私も問題ありません」

貧民街に入ってから、フェリシアーノ殿下はずっと申し訳なさそうに体を小さくしている。確かに他国の人間に見せたい光景ではないだろうけど……どの国にもこういう場所が存在するのは仕方がないことだ。

それから少し待っていると従者が戻ってきて、俺達は馬車から降りることになった。馬車から降りるとそれぞれの護衛がピッタリと主人に付き、さらにその周りを同行していた騎士達が囲う。かなりの警戒体制だ。

397、神域へ

「使徒殿、案内を頼む」
「かしこまりました」

陛下に促された俺は、ミシュリーヌ様に再度道案内をお願いして、前を歩く騎士に進む方向を告げていった。

『そのまましばらくは真っ直ぐよ。それで……家が完全に壊れて瓦礫の山みたいになってる場所が左側に見えてきたら、その先の曲がり角を左ね』
「三つ先の角を左です」
「かしこまりました」
『左に曲がったら二つ目の角を今度は右。かなり細い道よ』
「えっと……そこの木が生えてる場所の手前を右です」

そうして指示通りに歩みを進めること十分ほど、ついに礼拝堂が俺達の視界に入った。この荒んだ地域の中で異質なほどに綺麗な建物だ。劣化しないって汚れも吸着しないってことなんだな。

「皆様、あちらに見える白い建物が、ミシュリーヌ様が神力で作った礼拝堂です。あの建物の中のみ神域となっております」
「あれがそうなのか……あれほど目立っている建物の存在を、今まで知らなかったとは」

もう視界に入ったのでミシュリーヌ様の案内も必要なく、俺達は足早に礼拝堂へと近づいた。
貧民街に住む人達に不躾な視線を向けられていて、かなり落ち着

かない。確かにこの地域では、綺麗な格好をした俺達は浮きまくっている。

礼拝堂の入り口に着くと扉は付いていなく、中の様子を簡単に見ることができた。床に散らばっている木片があることから、もしかしたらこれが扉だったのかもしれない。

「な……、何の用だっ！」

中では数人の大人と多くの子供達が暮らしているようで、騎士が顔を出したことで中にいる全員が警戒態勢に入った。

「陛下、いかがいたしますか？」

この国の問題はこの国の人に解決させようと思って陛下に振ると、陛下は少しだけ考え込んだ後に口を開いた。

「この地域はミシュリーヌ様の神域がある場所として綺麗に整備をする予定だ。したがって……この地域に住む者達には引越し先の斡旋と、仕事の紹介を行う。そのことを伝えて穏便に外に出てもらってくれ。また今は一時的に中を借りるだけなので、荷物などはそのままでと伝えるように」

「はっ！」

陛下のその言葉に数人の騎士達が中に入っていき、この礼拝堂に住む人達と対話を始めた。そして待つこと五分ほど、中からたくさんの人が外に出て来る。

このスラムのような貧民街でも、一応ちゃんとした部屋を借りるにはお金が必要みたいだから、ここにいるのは部屋を借りるお金もない人達なのだろう。

小さな子供達がガリガリに痩せ細って薄汚れた状態で外に出て来る。この国は孤児院ってないのかな……全員を俺が雇って救ってあげたくなってしまう。でもそんなことはさすがにできないから我慢だ。

「あっ……おい、大丈夫か？」

騎士に連れられて外に出て来ていた子供の中に、明らかに顔色が悪くてふらふらと今にも倒れそうな子がいた。マリーよりも小さな子だ。その子は必死に歩いていたようだけど、眩暈がしたのか騎士の方に倒れ込んでしまう。

騎士は子供が倒れ込んでくるのを嫌がることもなく、沈痛な面持ちでその子を支えた。この騎士は良い人だな。

「うん、だいじょうぶ……」

「おい、そんなにふらふらじゃないか。俺が運んでやるよ」

軽々と抱き上げられた男の子は、力尽きたのか騎士の胸元にぐったりと体を預けている。栄養不足と病気かな……

俺はこのまま見て見ぬふりをすべきだと思いつつ、どうしてもそれができずに男の子を抱き上げた騎士の元に向かった。そしてアイテムボックスから一杯のスープを取り出す。

「これ、薬草が入ってるから病気にも効くかも。栄養もあるし食べてみて」

騎士に降ろされてその場に座り込んでいる男の子の前にしゃがみ込み、スープと木製のスプーンを渡した。実際は薬草なんて入ってないけど、回復魔法を使ったことがバレないようにするための嘘だ。

男の子が弱々しい動きでその二つを受け取ってくれたところで、俺は周りには分からないように回復属性の魔力で男の子の全身を覆った。これは病気というよりも普通に風邪みたいだ……ここまで弱ってるのは、体力がなくてウイルスに勝てないからだろう。

「たべていいの？」

「うん。早く食べないと冷めちゃうよ」

「……ありがと」

男の子が一口目を口に含んだのを確認して、俺は魔力を流し込んでウイルスを体から消し去った。すると急に体が軽くなったことに驚いた男の子は、目をぱちぱちと瞬かせながらスープを凝視する。

「これすごい……」

「効いた？　でも全部飲まないとまた辛いのが戻って来ちゃうかもしれないから、ちゃんと飲んでね。そのお皿とスプーンはあげるよ」

男の子がさっきまでの辛そうな表情から笑顔になったことを確認して、俺はまた陛下の近くに戻った。

「勝手なことをしてしまいすみません」

「いや、我が国の民を救ってくれて感謝する。本当は私が救わなければならない者達だ」

陛下は沈痛な面持ちでそう述べた。でも実際は難しいんだよね……ラースラシア王国にも貧しい人達はたくさんいるけど、すぐにその人達全員を救うことはほぼ不可能だ。自国ですらも達成できてないことで、他国を責めることなんてできない。

それから中にいた人達が全員外に出たのを確認して、俺達は騎士も含めた全員で礼拝堂の中に入った。
中にはここに住んでいる人達の荷物がたくさんあり雑然としていたけれど、奥に鎮座しているミシュリーヌ様の像だけはラースラシア王国のものと全く同じで、綺麗なままそこにあった。

「では使徒殿、よろしく頼む」
「かしこまりました。ミシュリーヌ様、よろしくお願いします」
『分かったわ！』

ミシュリーヌ様のそんな声が多分俺にだけ聞こえて、それから数秒後に神像が光を放ち始めた。ミシュリーヌ様がちょっと成長してるよ……アレクシス様達に神託をお願いした時は、神らしさ無しで友達みたいに話しかけてたのに。

『聞こえているかしら、私はミシュリーヌ。この世界を作り見守る神よ』

ミシュリーヌ様のその言葉は礼拝堂にいる人達全員に聞こえたらしく、室内に動揺が広がったのが伝わってきた。近くにいた陛下を見上げてみると、ポカンと口を開いて間抜けな顔を晒している。

……ちょっと面白い。この陛下がこんな顔を晒してしまうほど、神からの神託は信じられない事態なのだろう。

『そこにいるレオンと神獣であるファブリスは、私の代わりに下界で働いてくれる分身のようなもの。二人には私だと思って接して欲しいわ』
「か、かしこまりました」

そこまでミシュリーヌ様の声を聞いたところで、陛下はその場に跪いて絞り出すように声を発した。するとそれ以外の人達も陛下に続いて一斉に跪く。

３９７、神域へ（後書き）

お知らせです。
「転生したら平民でした。」のコミカライズ一巻が、ついに明日発売されます！！
須藤怜先生が本当に素敵に描いてくださっていて、レオンの物語を、そしてこの世界をより楽しんでいただけると思いますので、是非お手に取っていただけたら嬉しいです。
私は原作者ですが、コミカライズはファンの一人として楽しんでいるので、皆さんもぜひ一緒に楽しみましょう！

ちなみにですが、コミカライズ一巻はカバーはもちろん最高に素敵なのですが、さらにカバー下のイラストが本当に本当に素敵なので、お手に取ってくださった方は是非そちらも覗いてみてください。私は見本誌をいただいて何気なくカバーをめくったら、凄く素敵なイラストが現れて思わず叫びそうになりました。カバー下にカバーとは違うイラストがあるのってなんだか嬉しいですよね笑

では長くなりましたが、ここまで読んでくださってありがとうございました。これからも「転生したら平民でした。」のシリーズをよろしくお願いいたします！

蒼井美紗

３９８、厳かな神託

全員が跪いて礼拝堂の中に静寂が訪れると、またミシュリーヌ様の声が聞こえてきた。

『レオンの隣にいるのがこの国の王かしら？』

「は、はい。私がヴァロワ王国の国王である、エドゥアール・ヴァロワでございます」

『ではあなたに伝えましょう。貴国は魔物による被害を受けたようだけれど、レオンとファブリスが動いているならば心配はいらないわ。二人にとっての保護対象は私にとっても守るべきもの、安心なさい』

「あ、ありがとうございます。……ミシュリーヌ様のお声を拝聴する栄誉を賜り、恐悦至極にございます」

陛下は最大限の敬意を払い、ミシュリーヌ様に神託を受けたことへの礼を述べた。

『構わないわ。では最後に一つだけ、有意義な情報を与えます。数日前にレオンがいた国、チェスプリオ公国で内戦が起きるみたいよ。事前に対処すべきではないかしら』

「なんと……、そのようなことまでお分かりになるのですね」

『神は世界中を監視できるもの。ではまた会える時を楽しみにしているわ』

ミシュリーヌ様は最後に重要な情報を投下して、神託を終わらせたようだった。結局内戦になるのか……公爵は反対勢力を抑えきれなかったんだな。

そしてミシュリーヌ様の声が聞こえなくなると、礼拝堂の中は厳かな静寂に包まれ……

……ていたけれど、俺だけはそうではなかった。

『レオン、私の神託どうだった！？　凄くカッコ良くできてたでしょ！』

俺にだけはミシュリーヌ様の興奮した声が聞こえていたからだ。はぁ……神としての成長ぶりに感動していた気持ちが吹き飛んだよ。でもまあ、俺としてはこっちのミシュリーヌ様の方が好きなんだけど。

「凄く良かったですよ」

周りに聞こえないようにボソッそう告げると、ミシュリーヌ様の喜ぶ声が聞こえてきたので、俺の声は届いたようだ。

『レオンに神らしさの話をされたじゃない？　あの話をシェリフィーにしたら、シェリフィーが勉強しなさいって漫画を読ませてくれたのよ。その漫画に出てくる創造神の真似をしてみたの！』

そういうことだったのか……さすがシェリフィー様だ。ミシュリーヌ様のことをよく分かってる。話し方の本を渡しても真剣に読まないだろうけど、漫画なら読むからね。

「これからも神託をする時は、さっきの感じでお願いします」

『分かったわ。じゃあまた漫画を読んで練習しておくわね！』

その言葉を最後にミシュリーヌ様の声が聞こえなくなったので、俺との通信も切ったみたいだ。俺はそこで一度深呼吸をして、まだ呆然と佇む陛下に声をかけることにした。

「陛下、いかがでしたか。ミシュリーヌ様の存在を信じていただけたでしょうか？」

「それは、もちろんだ。というよりも、私はミシュリーヌ様の存在を疑うなどなんて不敬なことを……使徒殿、いや使徒様、大変申し訳ございませんでした。今までの無礼をお許しください」

陛下は突然丁寧な口調になり謝罪を口にすると、今度は俺に向かって頭を下げた。一国の王に頭を下げられるのって……何度経験しても本当に落ち着かない。

でもここで敬語は必要ないですよとか、そういうことを言わない方が良いだろう。この国では特に使徒として振る舞うべきだと思うのだ。これからミシュリーヌ教を浸透させるためにも、使徒として上位の存在であることを周りに印象付けた方が良い気がする。

居心地悪いしむずむずするけど、この国では敬われることに謙遜するのはやめよう。

「陛下、頭を上げてください。謝罪は必要ありません。ミシュリーヌ様の存在を、そして使徒である私とファブリスのことを、これから知ってくだされば問題ありませんので」

「……寛大なご処置に感謝いたします。改めて、この国を救っていただけるでしょうか」

「それはもちろんです。お任せください」

陛下は俺の顔を眩しそうに見上げると、もう一度丁寧に頭を下げた。思った以上に陛下がミシュリーヌ教の信者になってくれそうだ

な……
陛下を幻滅させないように気をつけてと、ミシュリーヌ様に後で忠告しておこう。さっきの神様らしいミシュリーヌ様がいつまで続くか分からないし。

「これからこの礼拝堂はどうするのですか？」

跪いて立ちあがろうとしない陛下達をマルティーヌと共に説得して、なんとか全員が立ち上がったところでそう疑問を口にしてみた。
すると陛下は決意を込めた瞳で、拳を握り締めて口を開く。

「ミシュリーヌ様が作られた神域が、このような現状となっているのは許せることではありません。まずこの礼拝堂をすぐにでも綺麗にして、さらにこの辺一帯の貧民街を解体することにいたします。そしてその際ここに住んでいた者達には、住居と仕事の斡旋を行います。貧民街の問題はいずれどうにかしなければと思っていたのです。ミシュリーヌ様に良い機会を与えていただいたと、改革することにいたします」

陛下がすぐにここまでを決断するって、ミシュリーヌ様の、というよりも神の影響力が凄い。でも当たり前か、実際に神の声を聞いたら影響されない方がおかしいだろう。人間では想像もできないような次元にいる存在なのだから。
こうして改めて考えると、そのミシュリーヌ様といつでも連絡が取れてお願いまでできる使徒って、本当に凄い立場だよね。

「とても素晴らしい決断だと思います」
「使徒様にそう仰っていただけると、とても心強いです」
「ミシュリーヌ教を広めるのですか？」
「もちろんです。使徒様と神獣様に助けていただくということは、

ミシュリーヌ様に助けていただくということ。助けを乞うて感謝もしないなど不敬にも程があります。ミシュリーヌ教は国教とし、全ての国民に誰の助力を得て国が助かったのか、しっかりと公布をしようと思います」

陛下がここまで気合を入れてるなら、本当に近いうちにミシュリーヌ教が国教となるだろう。ミシュリーヌ様にこっちの礼拝堂にもたまに顔を出して、神託をするように話をしておこう。こういうのは最初が肝心だから。

「国民には受け入れられるでしょうか？」

「そうですね……魔物に襲われた地域ではすぐに受け入れられるかと。それ以外でも魔物の森の脅威は日々感じていますから、受け入れられるどころか心強い存在だと、歓迎する者が多いのではないかと推察できます」

確かに神や使徒という強大な存在が実在していて、さらにその存在が自分達を守ってくれるとなったら普通は信仰するか。……魔物の森という脅威に晒されている国では、ミシュリーヌ教を広めることも難しくなさそうだ。

というかこの世界に実在している神はミシュリーヌ様しかいなくて、ミシュリーヌ様はいろんな制約があれど下界に干渉できるのだ。逆に今のほとんど信仰されてない現状の方がおかしい。どれだけサボって色々と失敗したら、神力をほぼ使い切ってるのに全く信仰されてない神様が出来上がるんだろ。

――やっぱりミシュリーヌ様って、かなりダメダメな神様だな。最近は少し成長が見られるんだけど。

「ミシュリーヌ教のこと、よろしくお願いいたします」
「かしこまりました」

そうして陛下がミシュリーヌ教の布教、神域である礼拝堂の整備、さらに貧民街の解体を約束してくれたところで、俺達は今日の日程を終えて王宮に帰ることになった。

カカオについて詳しい話を聞けたし、ミシュリーヌ教の布教には成功したし、今日は最高の成果を得ることができて満足だ。王宮に帰ったらファブリスにお土産の串焼きを渡しながら、ミシュリーヌ教のことについて報告をしよう。

３９９、伝統衣装

ヴァロワ王国の王宮に来てから三日目の朝。明日の昼頃には魔物の森へ向かう予定となっているので、実質今日が王都滞在の最終日となる。

一日目と二日目はフェリシアーノ殿下によってさまざまな文化を紹介してもらったので、今日は基本的に自由時間だ。俺はマルティーヌと相談して、買い物に時間を費やすことに決めた。

「マルティーヌ、おはよう」

まず午前中は王宮に呼んだ仕立て屋、靴屋、装飾品店で買い物を楽しむ。ロジェに連れられて店の人が来ているという応接室に向かうと、既にマルティーヌもソファーに座って俺を待っていた。

「レオンおはよう。やっと来たわね」

「待たせてごめん。でもマルティーヌが……早くない？」

「楽しみで早く着きすぎたわ」

そう言って無邪気な笑みを浮かべたマルティーヌは、この遠征で一番楽しそうにはしゃいでいる。ずっと王女として気を張ってきたのだろうから、こういう時間も必要だろう。まだまだ帰りも含めたら先は長い。

「俺も楽しみだったよ。じゃあ早速色々と見せてもらおうか」

「ええ、ではお願いします」

マルティーヌがまずは仕立て屋に声をかけると、多くの布と既製

品を持った女性三人が前に出てきた。

「この度はラースラシア王国の王女殿下と大公様にお呼び立ていただき、感謝の念に堪えません。ご滞在が明日までということで既製品と布をご所望でしたが、一から仕立てて後に貴国へ服を送ることも可能ですので、デザイン画も持参いたしました」

あとで送ってもらうことなんてできるんだ……これもフェリシアーノ殿下が配慮してくれたのかな。

「あら、それは本当なの？　それならば、いくつか一から仕立ててもらうことにしようかしら……レオン、どう思う？」

「俺は良いと思うよ。ヴァロワ王国とはこれからも関係が続くだろうし」

俺のその言葉にマルティーヌは少しだけ考え込んでから一つ頷き、仕立て屋の女性達に微笑みを向けた。

「では数着仕立てるわ。デザイン画の方もお願いね」

「かしこまりました。まずはどちらからご覧になりますか？」

「そうね……既製品からにするわ。こちらで気に入ったものを先に購入して、それ以外で欲しいデザインを頼むことにします」

マルティーヌのその言葉に、三人は決して騒々しくはないけれどかなりの速度で動き始めた。そして数分で目の前にはたくさんの服が並べられる。

「うわぁ、素敵だわ」

「本当だね……凄く豪華だ」

この国の女性のドレスは、分厚めのツルツルしている生地が一枚だけで作られているものが多い。スカートはふんわりしていなくて、タイトスカートが主流みたいだ。マーメイドスカートのようなものもある。

何枚も布を重ねて豪華さを表す、ラースラシア王国のドレスとはかなり違う。この国のドレスは布は一枚だけの代わりに、色合いや刺繍で豪華さを表すようだ。

「この国では複数の布を繋ぎ合わせることなく、一枚の布で作られたドレスが良いものだと言われております。伝統的なものはこちらのタイトスカートに少しだけスリットが入ったものに、上半身は長袖のハイネックです」

これはパーティーで王妃殿下が着ていたドレスに形が似てる。伝統衣装だったのか。

「とても素敵だわ。その伝統的な形のドレスは一着購入します。そうね……そちらの青色のものが良いわ。試着をしてみても良いかしら？」

「もちろんでございます」

部屋の隅に事前に準備してあった試着のスペースに、マルティーヌとそのメイドが二名、そして護衛が一名と店員さんが一名向かった。俺はマルティーヌの着替えが終わるまで待機だ。

「伝統的なドレスは長袖みたいだけど、他のデザインは半袖が多いんだね」

マルティーヌが帰ってくるまでに何か雑談をと思い、気になって

いたことを聞いてみた。

「はい。やはり一年を通して温暖な気候のため長袖では暑さが辛いという意見が多く、時が経つとともに半袖が主流となりました。現在は基本的には半袖のまま過ごし、公の場やパーティーなどではこちらの薄いショールを羽織るのが一般的です」

「それは涼しげで良いね。男性の服装も変化してたりするの？」

フェリシアーノ殿下や陛下を見ている限り、男性の服装もラースラシア王国とは雰囲気が違っている。詰襟のシャツのようなものにジャケットを羽織り、下はズボンに革靴なので大きく分けると似てはいるのだけど、ジャケットの丈が短くカラフルで、首元には何も装飾がないところが大きく違う。

多分暑いから、首元にはタイをつけないのが主流なのだろう。その代わりに腰回りに布が巻いてあり、豪華さを示しているようだった。

「男性の衣装も近年変わってきています。やはり長袖のシャツに長袖のジャケットを羽織るのは暑いということで、公の場以外では豪華な染めと刺繍をしたシャツのみを着用されることも多いです。ただ公の場ではジャケットを羽織るのが未だに主流でございます」

「そうなんだ。男性用の服も今ここにあったりする？」

「もちろんでございます」

今日はマルティーヌの買い物予定だったからないかなと思いつつ、ダメ元で聞いてみたらにっこりと綺麗な笑顔で頷かれてしまった。さすが王宮に呼ばれる仕立て屋は、こういうチャンスを逃さないな。

「じゃあ見せてほしい。俺もいくつか購入しても良いかと思ってるんだ」

「かしこまりました」

それから並べてくれた服はマルティーヌのものより種類は少なかったけど、俺にとっては十分な品揃えだった。

「たくさんあるね……」

さっきのマルティーヌのドレスもそうだったけど、サイズが全部俺にピッタリなのが凄い。事前にロジェ達が伝えてるんだろう。

「人気なのはどれかな」

「そうですね……やはり圧倒的に人気なのは青や水色などの涼しげなお色と、緑など自然のお色です」

確かにこの国は暑いから、赤とか黄色はあまり着たくない。黒も陽の光を集めて暑くなるし、必然的に青や緑になるんだろう。俺もこの中だと青を選びたくなる。

「あら、レオンの服をもう見てるのね」

俺が自分の服を吟味していたら、着替え終わったマルティーヌが後ろから声をかけてきた。そこでマルティーヌの意見も聞こうと思って何気なく振り返ると……

……思わず、固まってしまった。

「ふふっ、どうかしら？　似合ってる？」

ヴァロワ王国の伝統衣装を身に纏ったマルティーヌは、いつもの可愛らしい雰囲気から一変していた。凄く上品で清楚で……触れる

のを躊躇ってしまうような、清廉さを感じる。

「う、うん……凄く、似合ってる」

俺はなんとかそう言葉を返しながら、うるさく鳴っている心臓を落ち着かせるために小さく深呼吸をした。いつものマルティーヌと違って緊張する！

「これ凄いのよ。スカートが広がらない作りになっているから動きづらいのかと思ったけど、そんなことないわ。分厚い布を使ってるけどそこまで重くないし、着心地が良いの」

「そうなんだ、凄いね」

全く気の利いた言葉を返せてないけど、マルティーヌは満足げに微笑んでくれた。今度ちゃんと綺麗だったって伝えておこう……

「それでレオンの服は選んだの？」

マルティーヌの意識が俺の服に向いたことで、俺も少しだけ落ち着いて服に視線を戻す。

「まだだよ。今人気の色を聞いてたところなんだ。青系や緑系統が人気なんだって。涼しげで自然の色だから」

「そうなのね。……じゃあこれとかどうかしら？　レオンに似合いそうだわ」

マルティーヌが選んだのは、鮮やかな黄緑色のジャケットだった。刺繍も豪華で俺も目を引くと思ってたやつだ。

「それ良いよね。あと男性はシャツだけでいることも最近は増えて

るらしくて、そのシャツとか良いと思わない？」
「これのこと？　ええ、とても素敵ね」
「ではジャパーニス大公様もご試着されますか？」
「そうだね……お願いしようかな」
「かしこまりました」

そうして俺とマルティーヌはそれぞれ服を五セットずつ購入し、さらに靴やブローチなど、小物もたくさん選んで大満足で買い物を終えた。
大公になっていろんな服を着させられてたからか、今までよりも楽しかったな。ラースラシア王国に帰ったら、エリザベート様に見せてあげよう。

４００、前線の状況

王宮での文化交流を恙無く終えた俺達は、フェリシアーノ殿下を筆頭にヴァロワ王国の軍務の重鎮達、それから大勢の騎士達を引き連れて前線の街に向かった。

ヴァロワ王国はそこまで大きな国ではないので、王都から前線の町まで馬車で一日もあれば辿り着く。近いのはありがたいけど、それだけ脅威が迫っていると考えれば喜べることではない。

「今日は前線の街に泊まって、明日から行動開始で良いのでしょうか」

「はい。その予定でお願いいたします」

フェリシアーノ殿下とはまた同じ馬車だけど、王都を出発してからずっと厳しい表情のままだ。

それだけ被害が酷かったんだろうな……

「殿下、私達は被害を受けた街とは別の街に向かっているのですよね」

「その通りです。被害を受けた街は人が住める部分もあるのですが……今回のファイヤーリザード襲撃で魔物の森が大きく迫り出してきていて、危なくて住むことはできません。このままでは近いうちに飲み込まれてしまうでしょう。民も全て避難させました」

「そうですか……他の前線の街には、普通に国民が暮らしているのですか？」

ラースラシア王国では、前線の街には騎士と少数の平民しかいない。いつ飲み込まれるのか分からない街に、一般人が住み続けるの

は危険だからだ。前もって避難させることで混乱を防ぐという意味もある。
しかしフェリシアーノ殿下は、その問いに頷いた。
詳しく聞いてみると、ヴァロワ王国は国土がそこまで広くないこともあり、前線の街の住民を別の街に避難させる余裕がないのだそうだ。
だからこそ今までは必死に魔物の森を押し返して来たけど、その必死で耐えてたバランスがファイヤーリザードによって壊されてしまい、大変な事態に陥っているらしい。
ファイヤーリザードによる直接の被害ももちろん酷いけど、どちらかというとそのバランスを崩されたことの方が長い目で見たらヤバいのだ。

「魔物の森に一番近づかれているのは、被害があった街でしょうか」
「はい。ファイヤーリザードの襲撃で騎士達もかなりの被害を被り、数日間は魔物の森を放置してしまったこと、さらに対処できる人数が減少してしまったことで厳しい状況となっています」
とりあえずまず駆けつけるべきは、被害があった前線の街かな。あとで街が復興できるように、魔物の森に飲み込まれないよう阻止しないといけない。
……ファイヤーリザードを倒しに行く前に、魔物の森を押し返す方を優先しようかな。
「被害を受けた街まで、本日向かう街からはどの程度の距離がありますか？」
「そうですね……馬車でならば一時間程度です」
そのぐらいならファブリスに乗れば一瞬だ。……今日の夜から森

に行こうかな。最近は精神的な疲れを感じても肉体的な疲れを感じることはなかったから、一日ぐらい寝なくても全然大丈夫だし。

「フェリシアーノ殿下、明日の朝から行動開始ということになっていますが、本日の夜から私とファブリスだけで魔物の森に向かいます」

「よ、夜にですか……？」

「はい。少しでも早く魔物の森を押し返したほうが良いですし、近くまで来てしまったら気になって眠れませんから」

フェリシアーノ殿下は俺のその提案に難色をしていたけれど、結局は俺が折れないと分かったのか、感謝の言葉を述べてくれた。マルティーヌは俺の好きにやらせてくれるみたいで、絶対に危ないことはしないと約束して許可してくれた。

それからも馬車は進み、夕方ごろに前線の街に到着した。中に入ってみるとその街は、前線の街とは全く思えないほどに賑やかだった。

ファイヤーリザードはこんな街を襲ったってことか……どれだけの被害があったのだろう。

俺達は代官邸に案内され、騎士達は騎士団詰所に案内された。そして被害もあったことから質素な夕食会を終え、それぞれ自室に戻った。皆は明日に備えて早く就寝するけれど、俺はここからが本番だ。

「ファブリス、準備は大丈夫？」

俺に与えられた客室でのんびりと寛ぐファブリスに声をかけると、

ぱさっと尻尾を揺らめかせながら頷いてくれる。

『もちろんだ。いつでも良いぞ』

「了解。ロジェ、他の皆も、魔物の森に行ってくるね。とりあえず朝まで頑張ったら一度帰ってくるよ」

「かしこまりした。レオン様、無理はなさらぬよう。お気をつけていってらっしゃいませ」

「もちろん。ありがとう」

心配げな様子が見え隠れしている皆に見送られて、ファブリスと共に街の外まで転移をした。そしてそこからはファブリスに乗って、被害のあった前線の街まで駆け抜ける。思ってた以上の真っ暗闇だ。

「ファブリス、朝までにできる限り魔物の森を押し返したいんだ」

『了解した。我が全力を出せば一晩で相当押し返せよう』

「ありがとう、心強いよ。二人で頑張ろうね」

暗い夜道を駆け抜けていることで少しだけ感じていた恐怖が、ファブリスの言葉で霧散していく。ファブリスがいてくれて良かった……そう思いながら背中にぎゅっとくっついて、温かさを全身で感じ取る。ふぅ、落ち着く。

『主人、目指している街はあれか？』

それから少し進んだところでファブリスに聞かれたので前を見てみたけれど……いくら目を凝らしても何も見えない。

「ごめん、俺には見えないみたい」

ファブリスの方が、暗いところでの視界は圧倒的に良いみたいだ。

俺にとって一寸先は真っ暗闇で、多分目の前に人がいても気づかないと思う。魔物の森ではライトで思いっきり照らす予定だから良いんだけど。

『あと数分で着くぞ。街には寄っていくのか？』

「ううん、もう誰もいないみたいだしいいかな。それよりも街から一番近い魔物の森に向かってくれる？　そこからできるだけ広範囲に押し返したい」

『了解した』

それからファブリスは少しだけ方向を変えて走り続け、気づいた時には魔物の森が目の前にあるところまで来ていた。といってもファブリスにそう言われただけで、俺は何も見えてないんだけど。

「じゃあ光をつけるね。『ライト』」

かなり広範囲を照らすように、上空で強い光を発するようにして魔法を使う。すると突然視界が眩しくなり、目が痛くて開けていられなくなった。ちょっとミスった……

しばらく目をぎゅっと瞑り、眩しさに慣れてきたところで恐る恐る目を開くと……

……目の前に、フラワーボムが鎮座していた。

「ぎゃぁぁぁ！！　ファブリス、なんてところで立ち止まってるの！？」

めちゃくちゃビビった。目を開けたら目の前にフラワーボム、心臓が止まるかと思った。

『破裂しそうだったから対処が必要だろうと思ったのだ』
「だからって事前に言っておいてよ！　というかもう赤くなってるし、あと少しで破裂するじゃん！」

俺は急いでフラワーボムをバリアで覆った。フラワーボムは魔力を込めたバリアを破ることはないので、中で破裂させてからすぐに火魔法で燃やしてしまうのが一番なのだ。俺にしかできない方法だけどね。

バリアで覆ったことでとりあえず落ち着いた俺は、照らした光で見える範囲をぐるりと見回してみた。

「誰もいないね」

ラースラシア王国では、夜でも交代で魔物の森に向かっている騎士がいる。人数が足りないからかもしれないけど、こうして夜に放置してたらどんどん魔物の森が進行してしまうだろう。

『途中ではたまに人間が集まっているところがあったぞ』

数日ごとに少しずつ場所を変えて魔物の森に対峙してるとかなのかな……本当に人手が足りないみたいだ。これは気合を入れてやらないとかもしれない。

「じゃあ魔物の森を駆逐していこうか」
『了解した』

それから俺達は日が昇り始めるまで約八時間、途中で一度休憩を取った時以外はずっと働き続けた。ラースラシア王国側の魔物の森でいつもやっているように、ファブリスと役割分担をしつつ着実に

押し返していく。
　そして八時間頑張った成果は……数百メートル四方に渡る魔物の森の壊滅だ。めちゃくちゃ頑張った。これでこの街の部分だけ迫り出していたところが、他と足並みを揃えるぐらいにはなっただろう。

４０１、ヴァロワ王国騎士団と合流

日が昇ってきてそろそろ終わりか……と頭が認識し始めたところで、途端に欠伸が出て眠気が襲ってくる。

「ふわぁ……ファブリス、そろそろ止めようか」
『うむ、確かに主人は一度休むべきだな』
「そうするよ……ファブリスの背中で寝てて良い？　昨日の街に戻って欲しいんだけど」
『了解した。街の近くに着いたら起こすぞ』
「うん、よろしくね」

俺はファブリスとそんな会話をして背中によじ登り、バリアで自分を固定するとすぐ眠りに落ちた。

そしてファブリスの呼びかけでハッと目が覚める。

『主人、着いたぞ』

ファブリスの背中の寝心地が良すぎて、一瞬で寝落ちしてたみたいだ。でもぐっすり寝たからか疲れは取れている。一度大きく伸びをして体をほぐしてから、ふぅと息を吐き出した。

「ありがとう。じゃあ昨日の客室に戻るよ」

俺はファブリスから降りて自分の足でしっかりと立ち、客室の端にあった広いスペースに転移をした。

「レオン様、神獣様、おかえりなさいませ」

するとロジェが目の前にいて、しっかりと頭を下げて出迎えてくれる。なんで今この時に帰ってくるって分かったんだろ……ロジェって超人？　超能力者？

魔法があるファンタジーな異世界でこんなことを考えるとは思ってなかった。

「ただいま。ロジェずっと待ってたの？」

「いえ、そろそろお帰りになる頃かと思っていたところ、ちょうどタイミングが良かったようです」

「……そうなんだ」

やっぱり第六感的なものがあるんじゃないだろうか。凄いなロジェ、俺より凄いよ。

「まだお時間がありますが、お風呂に入られますか？」

「そうだね……入ろうかな。準備をお願いしても良い？」

「かしこまりました。少々お待ちください」

それから俺はお風呂に入ってさっぱりして、服を着替えて朝食を食べた。そして前日に決めていた集合時間に代官邸のエントランスに向かう。

「マルティーヌおはよう」

「レオンおはよう。昨夜は大丈夫だった？」

「もちろん。かなり魔物の森を押し返せたと思うよ」

「それは良かったけど……疲れてない？」

マルティーヌは心配そうな表情を隠しもせずに、俺の顔を覗き込

んでくれた。俺はそれが嬉しくて思わず顔が綻ぶ。

「大丈夫だよ、心配してくれてありがとう。それよりも本当にマルティーヌも行くの？　ここで待機してても良いのに」

「もちろん行くわよ。私の回復魔法は役に立つと思わない？」

「それは役に立つだろうけど……」

マルティーヌには俺が回復魔法を直接教えたから、他の人とは比べ物にならないほど精度が良い。でも危険なところには行って欲しくないんだけど……マルティーヌはそうして大切に守られるのを好まないタイプだ。

「バリアの魔法具は持ってるよね？」

「もちろん持ってるわ」

「何かあったら絶対に、躊躇いなく使って」

「分かってるわよ。そんなに心配しなくても大丈夫」

そう言って微笑んだマルティーヌに、それ以上心配だと詰め寄ることはできなかった。護衛の騎士達もそれ以外の騎士もたくさんいるから、万が一にも危険なことは起こらないだろうけど……俺もより一層気合を入れよう。絶対にマルティーヌを危険に晒さないために。

「マルティーヌ王女殿下、ジャパーニス大公様、おはようございます」

「フェリシアーノ殿下、おはようございます」

「大公様、昨夜はどうだったでしょうか……？」

殿下はかなり気になっていたのか、挨拶もそこそこにそう問いかけてきた。

「魔物の森に行ってきました。被害を受けた街周辺の魔物の森を、他の部分と同等程度まで押し返すことができたと思います」
「そ、それは本当ですか！？」

殿下がかなり驚いた様子で声を上げたことで、エントランスに集まっていた皆の視線が集まる。

「まさか、一晩でそんなに……？」
「はい。休まずに頑張りましたので」
「使徒様……本当に、本当にありがとうございます」
「ちょっ、ちょっと殿下！　頭を上げてください！」

周りにたくさんの人いるのに頭を下げた殿下に、俺は慌てて頭を上げてもらった。俺は使徒だけど他国の一貴族だから、王族に頭を下げられるなんてあり得ないことなのに。

周りにいた代官邸の使用人や代官本人まで、相当驚いたのか全員が固まっている。はぁ……なんで俺ってこんなに王族に頭を下げられるんだろう。

「貴国を助けるのは我が国との契約ですから、当然のことをしたまでです。感謝ならば騎士達にも言葉をかけてあげてください」

俺はなんとかそんな言葉を口にして、その場を丸く収めた。いや、丸くというか無理矢理かもしれないけど。

そして馬車に乗り騎士達を引き連れて、ヴァロワ王国騎士団の野営場所へと向かう。ヴァロワ王国の騎士達は数日に一度街に戻る程度で、基本的には野営をして過ごすらしい。今日はまずそこに向か

って合流し、俺とファブリスはファイヤーリザード討伐、他の皆は魔物の森の駆逐と別行動をすることになっている。

「あ、見えてきたわね」

馬車から外を眺めていたマルティーヌが声を発したので俺も外を見てみると、遠くにかなりの人数の騎士達がいるのが見える。

「本当だ。フェリシアーノ殿下、今日はこの場所で魔物の森と相対するのですか？」

「いえ、被害を受けた前線の町付近ということになっています。よってあの場所で合流はしますが、馬車を止めることはありません」

「そうなのですね」

殿下の言葉通り、ヴァロワ王国の騎士達がいた場所で馬車は止まることなく、そのまま通り過ぎて進んでいった。窓から見える範囲で後ろを眺めてみると、車列の一番後ろに騎士達が付いてきているようだ。

そうしてまた数十分ほど進み、一行は昨日の夜に俺とファブリスが暴れ回った場所に到着した。改めて見てもかなりの範囲を駆逐したなぁ……思わず感嘆のため息が漏れてしまう。

俺が自分で見てもそう思うのだ、他の皆は目の前のあり得ない光景に呆然と立ち尽くしている。

魔物の森を押し返す時には細かい葉や枝が地面に落ちるけど、放っておいてもそのまま枯れてしまうものは放置しているので、魔物の森を押し返した場所は明らかに他と違っていて一目で分かるのだ。

「で、殿下、これは一体……」

ヴァロワ王国騎士の中でも身分が高そうなおじさんが、なんとか我に返ったようでフェリシアーノ殿下に意見を求めにやってきた。すると殿下は実際に見た衝撃を引きずりつつも、しっかりと事実を述べる。

「実は昨夜、使徒様と神獣様が魔物の森の駆逐をしてくださったのだ。ここはその場所だろう。……使徒様、合っているでしょうか？」

「はい。昨夜俺とファブリスが森を押し返した場所です」

「そ、そうです、か……」

まだ騎士達は事態が飲み込めてない様子だ。まあそうだよね……自分達が命懸けで必死に対処してるのにどんどん進行してきてたんだ。それが一晩でこんなに押し返しましたなんて言われたら、呆然とするのも仕方ない。

「今日はこの場所をさらに押し返して欲しいんです。またそれと並行して、互いの国で効率的な魔物の森への対処法があれば、積極的に共有し合ってください」

俺のその言葉に騎士団代表の人はハッと現実に戻ってきて、真剣な表情で頷いてくれた。

「かしこまりました」

「よろしくお願いします。そして皆さんが魔物の森を押し返してくださっている間に、私はファブリスとファイヤーリザードを倒してきますね」

俺のその言葉を聞き実際にファイヤーリザードの姿を見た騎士達

は、不安と期待の眼差しを向けてくる。あの強大な敵を俺に倒せるのか、この光景を見てもまだ半信半疑なのだろう。
ここは一つ大きな魔法で実力を示した方が、皆の士気も上がって良いかもしれないな。

４０２、使徒の規格外さ

見た目が派手でインパクトを与えられる魔法が良いだろう。そうすると転移とかバリアじゃなくて、もっと攻撃力が重視のやつ……やっぱりロックトルネードかな。

ロックトルネードって最初の頃に作ったはいいんだけど、魔物を倒したらぐちゃぐちゃの肉片にしちゃうし、魔植物を倒すのに使ってもバラバラになって片付けが大変だし、最近はほとんど使っていない。でも見た目の派手さとその攻撃力は凄いものだから、パフォーマンスにはもってこいの魔法なのだ。

「フェリシアーノ殿下、皆を安心させるためにも私の実力を示して良いでしょうか？　それによってファイヤーリザードに恐怖を感じている人も楽になると思うんです」

隣に立つ殿下にそう提案すると、殿下は好奇心を抑えきれない表情で了承してくれた。そういえば殿下も俺が戦ってるところは見てないのか……そんなに期待の眼差しで見つめられると恥ずかしくなってくる。

俺は照れ隠しも込めて皆より魔物の森に近づき、背後にいる全員を覆うようにバリアを発動してから、目の前の森に向かってロックトルネードを放った。

かなりの魔力を注ぎ込んで作った巨大なトルネードは、バキバキバキッと派手な音をたてながら全ての魔植物、さらに魔物をも巻き込んで右へ左へと動き回る。

そして時間にして数十秒、かなりの範囲を蹂躙してトルネードは

消え去った。後に残ったのは、魔植物の残骸の山だけだ。

これで魔物の森を駆逐できるのなら本当に楽なんだけど、これだと根が残ってるし倒しきれてないのもいるから、結局はここからこの残骸をアイテムボックスに収納していく作業をしないといけない。

こうして残骸の山になっちゃうと危険な魔植物が隠れていても分かりづらいし、さらに周りにまで残骸が飛び散ってるし……うん、やっぱり地道にやっていくのが一番だな。

俺はトルネードが消え去った後の惨状を見てそんなことを再確認し、バリアを消して後ろを振り返った。

「こんな感じで使徒の力って結構強いので、ファイヤーリザードに対しても戦えます。皆さんは安心して待っていてください」

そしてそんな言葉をかけたんだけど……誰も全く反応してくれない。ただ呆然と魔植物の残骸を凝視している。そんな居心地の悪い沈黙を破ってくれたのは、フェリシアーノ殿下だった。

殿下はいち早く我に返ると、怖いぐらいの勢いで俺の下まで駆け寄ってきて、跪いて深く頭を下げた。

「使徒様のお力を拝見する栄誉を給われたこと、誠に光栄でございます！」

そして周りの人全員に聞こえるようなよく通る声で、そう発した。それによって固まっていた皆も次々とその場に跪き、立っているのはラースラシア王国側の人間だけになった。

ロックトルネードを使っただけでここまで神格化されるとは……予想外だ。リシャール様達に見せた時は驚いてたけど、ここまで大袈裟じゃなかったのに。

……まあ、ちょっと張り切りすぎたっていうのもあるかもしれない。あの時よりもかなり大きなロックトルネードにしちゃったから。

「フェリシアーノ殿下、頭を上げてください。皆さんも普通に接していただけたら嬉しいです。私は確かにミシュリーヌ様の使徒で強い力を持っていますが、ただのレオン・ジャパーニスでもありますから」

俺のその言葉にヴァロワ王国側の皆は、跪いたままだけど頭を下げることはやめてくれた。ただそれに安堵したのも束の間、今度は騎士達の熱い視線に晒されることになる。

なんかめっちゃキラキラした瞳で見つめられてる気がする……ミシュリーヌ教の普及という点では大成功だったかもしれないけど、居心地の悪さは半端ない。ここはミシュリーヌ様に矛先を向けておこう。

「私にこの力を授けてくださったのはミシュリーヌ様ですから、ミシュリーヌ教の教会にてミシュリーヌ様に祈りを捧げて欲しいです。それによって救われることもあるでしょう」

その言葉を聞いた皆さんは、ミシュリーヌ様へ矛先を向けるというよりは、より一層ミシュリーヌ教への、要するに俺への信仰心が高まったようだった。なんかもう、何を言っても感動される気がする。

どうすれば良いのか分からずマルティーヌに視線を向けると、マルティーヌは労うような笑みを浮かべてくれた。

……俺を特別な存在として見ていない、そんな視線があるだけで

落ち着く。

「ファブリス」

俺はマルティーヌに口パクで行ってくるねと告げてから、ファブリスを呼んで背中に跨った。そしてとりあえずこの居心地の悪い空間から抜け出すために、ファイヤーリザード討伐に向かうことにする。

「ではファイヤーリザードの討伐に行ってきます。皆さんはここをお願いします」

最後までキラキラとした視線を向けられて、俺は魔物の森の中に入った。そして視線から逃れたところで大きく息を吐く。

「ファブリス～ちょっとやりすぎたかも」

『皆に凄い視線で見られていたな』

「だよね、凄かったよね。今にも祈りを捧げられそうな感じだった」

『だが良いことじゃないか？　ミシュリーヌ様への信仰心がまた上がるぞ』

まあそうなんだけど……俺があんな感じで特別扱いされるのが苦手なのだ。仕方がないと割り切るべきなんだろうけどさ。

「これからはああいう扱いにも慣れるように頑張るよ」

『それが良いな』

「よしっ、じゃあ切り替えてファイヤーリザードを討伐に行こう。どこにいるか分かる？」

ファブリスは魔物の位置とその大まかな強さまで分かるので、今

回はファブリス頼りだ。とりあえず強そうな魔物のところに行けば、ファイヤーリザードである可能性が高いと思う。

『ふむ、あちらに一つ強い反応がある。それから向こうに固まって三つ反応があるな。ただどちらもかなり奥に入ったところだが』

「そうなんだ……一体の方がファイヤーリザードかな。とりあえずそっちに行こうか」

『了解した』

それから三十分ほど魔物の森を奥に進むと、ファブリスがぴたりと足を止めた。そして今度は物音を立てずにゆっくりと歩みを進めて行く。俺はその様子に魔物が近いのだろうと思い、気合を入れ直していつでも応戦できるように構えた。

『主人、ファイヤーリザードではないみたいだ』

「え、そうなの？」

こっちがファイヤーリザードじゃないってことは、三体の方だったのか。でもファイヤーリザードが三体もいるなんてことあるのだろうか……もしかしたら別の魔物と戦ってるとこだったとか？

「とりあえず、こっちの魔物はなにか分かる？」

ファブリスにしか聞こえないように小声で呟くと、ファブリスの口から出たのは聞いたことのある名前だった。

『ウォーターサーペントだ』

あれか……あの粘液が気持ち悪いやつだ。高温の火魔法で焼けば粘液が剥がれて攻撃が通るんだったはず。

『倒すか？』
「うん、こいつが街を襲わないとも限らないし、倒しちゃうことにする。それにしても……今回は全然襲ってこないね。前の時は遠くから向かってこられた気がするんだけど」
『ああ、あの時は三体もいたし巣穴が近かったんだ。今回は単体でいるだけだし、我らが縄張りに入っていないから過剰反応されていないのだろう』
「そういうことか。じゃあ俺が魔法で粘液を剥がすから、とどめはファブリスにお願いしても良い？」
『了解した』

それから俺はファブリスから降りて、まだ視界に入っていなかったウォーターサーペントのところまでファブリスに誘導されて向かった。そしてやっと認識できた……と思った瞬間に、向こうもこっちに気づいて凄い勢いで襲ってくる。
しかしウォーターサーペントが、俺にその牙を届かせることはなかった。

『ファイヤーストーム』

かなりの魔力を込めた強力な炎の竜巻をその身に浴びたウォーターサーペントは、断末魔のような叫び声を上げながらその場にのたうち回り、そうして苦しんでいる間にファブリスの爪攻撃で胴体を真っ二つに切断された。
そしてドシンッと地面を震わせて、その場に崩れ落ちる。あまりにも実力差がありすぎてウォーターサーペントが可哀想になるな……
『完璧だな。主人の魔法はやはり凄い』
「ありがと。……そういえば前の時は魔人が来ちゃってウォーター

サーペントを放置したけど、これも食べられたりするの？」
『うむ、普通に食べられるぞ。しかしファイヤーリザードほど美味くはない。噛めば噛むほど味は出るが相当に硬いのだ』
ファブリスが固いって言うってことは、俺達にとっては噛みきれない可能性が高そうだ。解体するのも面倒くさいし見た目も気持ち悪いし……これは放置で良いかな。
「これを食べるのはやめとくよ。それでファイヤーリザードじゃなかったけど、三体いるって方だったのかな？」
『我にも分からんが、その可能性は高いだろう。それ以外でこの辺りに強い魔物はいないからな』
「じゃあ次はそっちに向かおう」
『相分かった』
俺はまたファブリスの背中に跨り、ファイヤーリザード目指して魔物の森を駆け抜けた。

４０３、ファイヤーリザード討伐

今度は一時間ほど魔物の森を駆け抜けると、ファブリスがぴたりと足を止めた。

『主人、今回は当たりみたいだ。ファイヤーリザードが三体いる』

「やっぱりそうなんだ……」

ファイヤーリザードってかなり強いのに、三体もいるとさすがに俺達でも少し躊躇う。前は俺の剣は全く通らなくて、魔力を込めまくって鉄よりも硬く尖らせたバレットがかろうじてぐらいだった。

目と口を狙うにしても、最初からそこを狙わせてくれるほど易しくないし……とりあえず無理せずに攻撃して、隙を見逃さずに急所をつくしかないかな。

「ファブリス、一体ずつ確実に仕留めていこう。前と同じように俺が先制攻撃して隙を作るから、ファブリスは急所を狙ってほしい」

『了解した。三体いるとなればほぼ確実に親子だ。子を守ろうと親はより凶暴になる、油断せずに行くぞ』

「分かった」

ファブリスのその言葉を聞いて、俺は剣に纏わせようと思っていたバリアを解除し、体の周りに纏わせた。危ないから防御重視にしよう。

そして剣での攻撃ではなく、魔法での攻撃メインで戦うことにする。

『では行こう』

ファブリスが駆け出していった方向に俺も走ると、すぐにファイヤーリザードの咆哮が聞こえてきた。そしてその一瞬後に、森を焼き尽くす勢いで炎のブレスが吐かれる。
俺はバリアでそれを防ぎ、ブレスが消えると同時にファイヤーリザードを目視することができた。邪魔な魔植物があらかた消え去ったのだ。

『アイアンバレット』

魔力で金属よりも硬くしてるのだからいつものバレットとは違うかなと思い、ここに来て新たな魔法を作り出して放った。するとアイアンバレットはファイヤーリザードの尻尾に弾かれたけど、少し傷をつけることには成功したようだ。
ファイヤーリザードは痛みに叫び、さっきまでよりも怒った様子で俺達の方に駆けてくる。幸運なことにさっきから攻撃を仕掛けてくるのは一体だけで、他の二体は後ろで様子を窺ってるだけだ。今のうちに一体を倒してしまいたい。

『バレット』

今度は大量の強度を上げていないバレットを作り出し、ファイヤーリザードの顔面に向けて全てを一斉に放った。するとファイヤーリザードはさすがに鬱陶しかったようで、顔を横に振って身を捩る。
俺はその一瞬の隙を見逃さずに、ファイヤーリザードの目の前に転移をして近距離からアイアンバレットを放った。

すると俺が放った魔法は急所にヒットし、ファイヤーリザードを絶命させた。そして仲間が倒れた衝撃で後ろの二体が怒りに我を失い、俺に向かってがむしゃらに攻撃を仕掛けてきたところを……フ

ァブリスが攻撃して一体を絶命させた。
そして最後の一体は俺に向かって鋭い爪で攻撃を仕掛けて来たけど、咄嗟にバリアを纏わせた剣で受け止めて、相手の動きが止まった隙に目を狙ってアイアンバレットを放つと……最後の一体も地に臥した。

「終わっ……た？」
『ああ、三体とも絶命しているぞ』
「……なんか、予想以上にあっけなかった気がするんだけど。俺の攻撃が致命傷を与えられると思ってなかったし、他の二体ももっと苦戦するかと思ってた」

前よりもファイヤーリザードが弱くなってる気がする。ファイヤーリザードの個体差なのか、もしくは……

「俺って、強くなってる？」
『それは強くなっているだろう。魔力量もどんどん増えているし、我と主人は定期的に魔物の森で戦っているのだから。さらに主人は鍛錬も欠かしていないだろう？』
「そっか、そうなんだ」

なんか、凄く嬉しい。俺って強くなってたのか。最近は苦戦する相手なんていないし、自分の成長を感じることができなかったんだ。
思わぬところで成長を実感して大満足だ。ファイヤーリザードも討伐できたし、良いこと尽くめだな。

「魔物は全部倒すつもりだけど、腕試しできる相手がいなくなるって考えるとちょっと寂しいかも」
『確かにこの世界には強きものがいないからな。だが、それならば我と戦えば良いのではないか？』

「……確かに。そういえばファブリスと手合わせしたことってなかったよね」

魔物の森を駆逐できて広くて何もない土地をたくさん手に入れられたら、その一角でファブリスと手合わせをすることにしよう。これは結構楽しみな予定かも。

『我が主人を蹴散らしてくれよう』

「ふふっ、勝つのは俺だから覚悟しといて」

そうして俺達は今後の約束をして、二人で機嫌良く皆のところに戻るために魔物の森を駆け抜けた。もちろんファイヤーリザードは三体ともアイテムボックスの中だ。

魔物の森から抜けられたのは昼を少し過ぎた頃だったので、皆にはあまりにも早い帰還に心底驚かれた。ファイヤーリザードの実物を見てもらって、初めて討伐したことを信じてもらえたほどだ。

ただそれを見せてからは凄かった。キラキラした尊敬の眼差しで見つめられたり祈りを捧げられたり……ミシュリーヌ教の布教という点に関しては完璧だと思う。俺の居心地の悪さも凄かったけど。

午後は一緒に魔物の森の駆逐を行い、夕方に今日の仕事は終わりとなった。ファイヤーリザードの実物を見たからか騎士達がかなり張り切っていたので、予想以上に魔物の森を押し返すことができた気がする。

「フェリシアーノ殿下、ファイヤーリザードはどうすれば良いでしょうか。被害を受けた街の方々にお見せしますか？」

実際に倒されたファイヤーリザードを見ることで安心に繋がるかなと思ってそう提案すると、フェリシアーノ殿下はありがたいと感謝を述べてくれた。

「街に戻り次第、被害を受けた街の者にどうしたいか聞いてみますので、それまで持っていただいても良いでしょうか？」

「もちろんです。よろしくお願いします。……それからこれは不謹慎かもしれないのですが、ファイヤーリザードの肉はとても美味しいので、もし被害を受けて食料が厳しいようでしたら、食材にしてしまうという手もあります。一応参考までに」

フェリシアーノ殿下は俺のその言葉に衝撃を受けた様子で固まった。そして恐る恐る口を開く。

「魔物を、食べるのですか？」

「はい。……貴国では食べないのでしょうか？」

「食べるという話は聞いたことがありません」

「そうなのですね。我が国では珍味として食べられています。そこまで主流ではないですが、前線の街には魔物料理のお店があるんです。ただ美味しい魔物とそうでない魔物がはっきりと分かれていて、特に弱い魔物は美味しくないものが多いそうです。ファイヤーリザードは魔物の中でも上位に位置する美味しさです」

俺のそんな説明に先程は衝撃を受けていた殿下と騎士達は、少し興味が出てきたような表情を浮かべた。しかしまだ魔物に抵抗があるのか、自分の国の街を襲ったファイヤーリザードに抵抗があるのか、食べてみたいとは口にしない。

「以前別の場所で討伐したファイヤーリザードのステーキがまだ残っていますが、食べてみますか？　アイテムボックスは時間経過を

止められるので焼きたての熱々です」

そう提案しながらステーキを一皿アイテムボックスから取り出して、皆の方に近づけた。すると良い匂いが届いたのか、誰かのお腹がぐぅぅと音を立てる。

「遠慮せずにどうぞ」

その音に笑いそうになる顔を何とか引き締め、フォークに刺してステーキを差し出すと、フェリシアーノ殿下が恐る恐る受け取ってくれた。そしてステーキをまじまじと見つめてからパクッと口に入れる。

「な、何だこれ……凄く美味しいです。牛の赤身肉のような食感と味ですが、それよりも旨味が強い気がします。噛めば噛むほど美味しさが溢れてくるような……」

「そうなんです。私も最初に食べた時は高級な赤身肉に似てると思いました」

それからは何回か追加でステーキを取り出して、その場にいる騎士全員に試食をしてもらった。そして大絶賛を受けて、殿下がファイヤーリザードの話を被害者の方々にする時に、食料になることも一緒に伝えてくれることになった。後はその人達が決めたことに従おうと思う。

４０４、強さ

ファイヤーリザードを討伐した次の日。俺は騎士達と魔物の森の駆逐に力を尽くし、少し早めに街に戻って広場に向かった。一緒にいるのはマルティーヌとファブリス、それからフェリシアーノ殿下だ。

「皆の者、待たせたな」

広場に集まっている大勢の人々は、ほとんどが被害を受けた前線の街に住んでいた人で、今はこの街に身を寄せているらしい。まだ家族や友人を失った悲しみが色濃く残っているからか、広場はどこか暗い雰囲気が漂っている。

「いえ、ご足労いただきまして感謝申し上げます」

一番先頭にいた壮年の男性が恭しく頭を下げると、他の人達もそれに倣って頭を下げた。

「気にする必要はない。さて、気持ちは変わっていないか？」
「はい。あの魔物が本当に倒されたのか、この目で見るまで信じられません」
「分かった。ではまず皆に紹介しよう。こちらにいらっしゃるのがミシュリーヌ教の使徒であるレオン様と、神獣であるファブリス様だ。お二人が皆の故郷を襲ったあの魔物を討伐してくださった」

殿下のその紹介に俺とファブリスが一歩前に出ると、街の人達はもう一度深く頭を下げて感謝を口にした。

「本当に、本当にありがとうございます……」
「皆さん顔を上げてください。紹介の通りですが、私はミシュリーヌ様からこの地に遣わされた使徒です」
『我はファブリスだ』

視線でファブリスにも促して二人で軽く挨拶をして、俺は早速ファイヤーリザードを取り出す準備をした。この広場はかなり大きく作られているけど、ベンチなどが置かれていてこのままではファイヤーリザードを横たえる場所がないのだ。
本当は街の外が一番なんだけど、魔物に襲われた人達の心の傷を考慮して、街の中に場所を決めた。街の外だって魔物の森に近づかなければ問題はないけど、そこは理屈じゃなくて怖がる人もいると思ったのだ。街の中は賑やかで気が紛れるだろうし。

「では取り出しますので後ろに下がってください。殿下、もう少し後ろにお願いします」
「……この辺で良いか？」
「はい、ありがとうございます」

広場の中にいた人も皆避難させて、何とかスペースを確保したところでファイヤーリザードを取り出した。ズシンっという音と振動を生み出し、街の中では圧倒的な存在感を放つ。

「……まさか、本当に」
「お、おい、本当に死んでるみたいだぞ！」
「生きてない……のよね？」

視界を埋め尽くしたファイヤーリザードに、ほとんどの人は呆然とその強靭な鱗を見つめている。信じられないと驚愕に顔を歪める

人、倒せたことに驚いて叫ぶ人、本当に死んでるのか分からなくて怖がっている人。
皆がそれぞれ異なる反応を浮かべているので、広場は軽いパニック状態だ。

『皆の者、心配せずともそこのトカゲは我が倒した。安心して良いぞ』

ファブリスの頭にストンと届くその言葉によって、広場はさっきまでと一転して静まり返った。そして今更ファブリスが言葉を発していることに驚いたのか、今度はファブリスに向けて跪き、深く頭を下げている。
この様子ならミシュリーヌ教は、相当に信者が増えそうだな。やっぱり神やその眷属が実在してるって強い。

「ファブリスの言っている通りです。心配は要りませんよ」
「使徒様、神獣様、どれだけ言葉を尽くしても感謝の言葉は伝えきれません。本当にありがとうございました」
「魔物をこの世界から排除するのは、ミシュリーヌ様の願いでもありますから」
「そうなのですね……ミシュリーヌ様にも感謝を込めて、毎日祈りに行かせていただきます」

街の長だろう男性のその言葉に、後ろにいる人達が一斉に首を縦に振った。

「ミシュリーヌ様もお喜びになるでしょう。さて、話は変わりますが、このファイヤーリザードはどのように扱いますか？　もし邪魔だというならば、私が持ち帰るか魔物の森に捨てるかしますが……」
「いえ、朝から皆で話し合った結果、ぜひ我々にいただけたらと思

っております。そして数日後にこの広場で行う予定の、討伐の宴に参加していただけませんか？」

それから詳しく話を聞くと、街の人達でどうにか俺とファブリスにお礼をしたいと考えていて、お金などはないからせめて楽しい食事の席でも、との結論に至ったらしい。

そこでフェリシアーノ殿下からファイヤーリザードが食用になる話を聞き、ファイヤーリザードの肉をメインにした宴をすることにしたそうだ。

今の時期に宴なんて辛くないのかとさりげなく聞いたら、憎き魔物を討伐してくれた方をおもてなしもせずに帰してしまうなんて、死んだ者達に怒られてしまうと、悲しそうな……しかしすでに前を向いている晴れやかな表情で言われた。そんなこと言われたら、断ることなんてできないよね。

「ではありがたく参加させていただきます。……しかし、肉は別のものを準備することも可能ですが」

宴をするにしてもファイヤーリザードの肉を食べるのには抵抗があるかと思ってそう提案したけど、それには首を横に振られてしまった。

「食材は食材、そこに良いも悪いもありません。それにこの魔物は私達を下に見ていたのですから、その私達に食材として扱われるなど最大の屈辱でしょう。一番の復讐になりますので、どうか使わせていただきたいです」

「いや、それはもちろん。抵抗がなければいくらでも差し上げます」

俺はそう答えながら男性の答えにかなり驚いていた。この人達…

…凄く強いな。物理的な強さはそこまでではないだろうけど、とにかく心が強くてカッコいい。
俺は街の人達の考え方に感銘を受けて、もっと手助けをしてあげたいと自然に思った。

「調理しやすいように、私と私の護衛達で解体をしてしまいますね。そして肉がダメにならないように、とりあえず私のアイテムボックスに入れておきます。そこならば生肉も傷まないので。宴の準備があらかた終わり、肉が必要になったら言ってください」
「……そこまでしていただいてよろしいのでしょうか？」
「もちろんです」

それから俺は護衛達に手伝ってもらい、ファイヤーリザードを素早く解体した。そして今日家に帰ってから食べ切れる分をそれぞれ手渡して、残りは全てアイテムボックスに仕舞った。
残り二体のことも殿下と街の人達に伝えたんだけど、その二体は俺が好きなようにして良いと言われたので、ラースラシア王国に帰ったら解体して、また美味しい料理に生まれ変わらせようと思う。今度は煮込みもやりたいな。

「では宴を楽しみにしています」
「使徒様に楽しんでいただけるものになるよう、力を尽くします」

そうして被害を受けた街の人達との話を終えた俺達は、滞在している代官邸に戻るため馬車に乗った。宴をすることで、皆の気持ちに区切りがついたら良いな。できる限り楽しいものになるよう、俺も力を尽くそう。

４０５、討伐の宴

ファイヤーリザードを討伐してから数日間は、時間が許す限りとにかく魔植物を倒して倒して倒しまくった。そしてファイヤーリザードが襲ってくる前の状態よりも魔物の森を押し返すことに成功し、ついに明日は帰還の日だ。

最終日である今日の午後は討伐の宴が行われるので、俺達は昼前に魔物の森から引き上げて街に戻った。すると街中はお祭り騒ぎのように賑やかで、代官邸には陛下と第一王子殿下が到着していた。

俺達使節団はこのまま王都に戻ることなく帰路に就くので、挨拶と御礼にと二人がわざわざ足を運んでくれたのだ。

「陛下、第一王子殿下、足をお運びくださりありがとうございます」

二人が待っていた応接室に向かって対面のソファーに腰掛けると、マルティーヌが口を開いた。

「いや、礼を言うのはこちらだ。……使徒様の慈悲深きお心と、ラースラシア王家の寛大な対応に心からの感謝を申し上げる」

陛下はそう口にすると、座ったままだけどしっかりと頭を下げた。その行動に驚いたのは俺とマルティーヌだ。

俺はまさか頭を下げられるとは思わず完全に固まってしまい、マルティーヌもビクッと体を少しだけ動かした。しかしそこはさすが王族というべきか、動揺したのを悟られない程度の時間ですぐに持ち直し、完璧な返答をした。

「……謝意を受け取ります。しかし我が国と貴国は同盟国となったのですから、同盟国の危機に助力をするのは当然です。これからも良い関係を築いていきましょう」

マルティーヌはそう言ってにっこりと綺麗な笑みを浮かべた。……良いことを言ってるように聞こえるけど、要するにうちが危機に陥ったら絶対に助けろよ。同盟国なんだから当然だろ？　ってことだよね。

最近は貴族同士の会話の裏が分かるようになってきた。もちろんそのままの意味もあるんだろうけど。

「ああ、これからは今までよりも密に連携していこう」

そこで一旦話に区切りがつき、仕切り直すためにも皆がお茶に手を伸ばした。そしてまた陛下が口を開く。

「本日は民が主催で討伐の宴を開くと聞いたが、王女殿下と使徒様は参加されるのだろうか」

「はい。被害を受けた街の皆さんが御礼をしたいとのことで、数日前から準備をしてくれていますので、もちろん参加いたします」

「そうか、では私達も参加しよう」

陛下のその言葉を受けて隣に座っていた殿下も頷いたことで、二人の参加が急遽決まった。

それに慌てたのは屋敷の使用人達だ。お茶などを給仕するために部屋にいたメイドのうちの一人が、静かに廊下へと下がっていく。

「ファイヤーリザードの肉を使った料理なので、陛下にも新鮮かもしれません」

「……ファイヤーリザードを、食べるのか？」

おおっ、陛下が俺に敬語を使うのを止めてくれたみたいだ。良かった、あれ凄く居心地が悪かったのだ。マルティーヌに対して敬語を使わないんだから、大公の俺には敬語っておかしいからね。この方が良いよ。

「はい。とても美味しいお肉でして、街の人達が忌避感はないと言っていたので、本日の宴で使用されることになりました」

陛下と殿下はほとんど表情に出してないけど、若干引いているような雰囲気を感じる。今まで魔物を食べるなんて発想がなかったなら、それも仕方がないだろう。

「陛下、兄上、私は使徒様にステーキを一切れ頂いたのですが、とても美味しかったですよ」

フェリシアーノ殿下が苦笑しつつ付け加えてくれたその言葉で、さっきまでは引いていた二人も少しは興味を持ってくれたようだ。

「もうすぐ宴が始まるでしょうから、一度食べてみてください」

「ああ、分かった。……挑戦してみよう」

挑戦するって言葉が出るあたり、まだまだファイヤーリザードの美味しさを信じてない証拠だろう。実際に食べたら相当驚くだろうな……その時を見逃さないようにしよう。宴での楽しみが一つ増えたな。

それからも五人で雑談しつつ時間を潰し、宴が始まるとなったと

ころで馬車に乗って広場に向かった。今回の宴は、ファイヤーリザードを横たえることができるほどに大きな広場が会場だ。
会場に屋台形式でたくさんの食事が作られていて、あちこちに設置された机やテーブルを自由に使って良いことになっている。
ただ俺達の席は決まっているみたいだ。外には不似合いな程に豪華な家具と日光を遮る布製の屋根が付いた、目立つけど快適そうな席。
馬車から降りて広場のあちこちから感謝の言葉を投げかけられながらその席に向かうと、早速被害を受けた街の代表である男性が近づいてきてくれた。

「使徒様、本日はご出席くださってありがとうございます」
「いえ、こちらこそ盛大な宴を準備してくださって、ありがとうございます」
「それは当然のことでございます。……王女殿下もようこそお越しくださいました。そして陛下と殿下方もごゆっくりと楽しまれてください」

男性は俺達全員に恭しく挨拶をすると、壇上に一人で上がり宴の開始を宣言した。するとそれを受けて一斉に屋台から良い香りが漂ってくる。

『とても美味そうな匂いだな』

俺の横に座っているファブリスが、鼻をクンクンと動かしながら嬉しそうに尻尾を振った。今にも屋台に駆けていきそうだ。

「ファブリスはファイヤーリザードの肉、好きだもんね」
『ああ、あのトカゲは美味だ』

「ファブリスにはエミール達が付いてくれるから、食べたいものがあったら二人に言ってね」
『うむ、そこの男達だな。よろしく頼むぞ』
「こちらこそよろしくお願いいたします」

せっかく屋台形式の宴なので、俺達も席を立って屋台を回る予定なのだ。その時にファブリスは自分で料理を受け取るのが難しいので、俺の従者を付けることにした。

「ではさっそく回るとしよう」
「そうですね。とても良い匂いでお腹が空きましたわ」

陛下とマルティーヌが会話をしながら席を立ったのに続いて、俺と二人の殿下も席を立つ。

「美味しそうなものばかりですね」
「全て食べたくなってしまいます」

そんな会話をしながら端から屋台を見て歩き、まず目に止まったのは串焼きの屋台だ。これめっちゃ良い匂い、香辛料が利いていて美味しそう。

「ロジェ、串焼きを一本お願い」
「かしこまりました」
『我も食べたいぞ。五本頼む』

俺が串焼きを注文していたら、隣からファブリスの顔がずいっと現れて五本も注文した。

「ファブリス、他にもたくさん食べ物はあるんだから、一つを頼み

すぎないようにした方が良いよ」
『うむ、大丈夫だ。……お、あっちのスープも美味そうだ。あれは三杯にしておこう』

これは相当な量を食べそうだな……まあ神獣だから俺達とは消化吸収の過程が違うのだろうし、食べ過ぎても問題ないとは思うから良いけど。

「レオン様、串焼きが出来上がったようです」
「ありがとう」

ロジェに声を掛けられたことでファブリスから視線を外し、俺は次の屋台を見て回ることにした。そしてステーキや香辛料を使った煮込み、さらに肉以外のパンやスープもたくさん取って席に戻った。
ちょっと欲張りすぎた気がする……机の上にずらっと並ぶ食事は、三人分だと言われても納得できる量だ。

「レオン……そんなに食べられるの？」
「俺も今そう思ってたところ。美味しそうなものがたくさんあって、つい選びすぎちゃった」
「使徒様に我が国の食事を気に入ってもらえたようで良かった」

俺の少し後に戻ってきた陛下が机の上を見てそう言ってくれたので、とりあえず良かったってことにしよう。食べきれなかったらアイテムボックスに仕舞って持ち帰れば良いし。

それから全員が料理を選んで席に着いたところで、食事は開始となった。

４０６、まさかの果物

机の上に並んだ美味しそうな料理を見回して、俺はまず串焼きを手に取った。香辛料の香りがしてとても食欲をそそるのだ。
このままかぶりつきたいけどさすがに自重して、フォークを使って串から肉を外す。そして口に入れて数回咀嚼すると……旨味がどんどん溢れ出てきた。

やっぱりこれ凄い。この香辛料の味付けが美味しいのはもちろんだけど、何よりもファイヤーリザードの肉が美味しいんだ。

「……おおっ、これは美味いな」

陛下も肉を口にしたのか、かなり驚いた様子でそう呟いた。第一王子殿下も驚きに目を見開いている。

「ファイヤーリザードの肉は旨味が強いんです。とても良い赤身肉のようだと思いませんか？」
「まさにそうだな。脂がのっているわけではないが、硬さは一切感じない。程良い噛みごたえだ」
「これはハマりそうです……」

その気持ちは凄く分かる。ただ俺もハマりそうだけど、というかもうかなりハマってるけど、この肉には一つ問題点があるんだ。それは……絶滅させることが決定事項だということ。
魔物の森を駆逐し終わるということは、魔植物と魔物が全て絶滅することと同義なのだ。必然的に魔物素材、肉もそれ以上は手に入らなくなる。

これから先も手に入れられるようにする方法を考えたこともあるけど、結局はろくな考えが思いつかなかった。まさかファイヤーリザードを畜産で育てるわけにはいかないし……

「煮込み料理に合いそうだ」

「煮込みならば向こうの屋台にありましたよ」

奥まった場所だったから気付かなかったのかと思って場所を示して教えると、陛下は従者に頼んで煮込みを取りに行ってもらっていた。

とりあえず気に入ってくれたようで安心だ。魔物を食べることに対する忌避感は完全に無くなったらしい。

それからも話をしながら食事を堪能し、お腹がいっぱいになったところで俺は席を立った。準備してくれた街の人達にお礼を言いたかったのだ。

従者と護衛を連れてまずは代表の男性のところに向かうと、男性は笑顔で街の人と談笑しているところだった。街の人達も楽しんでいるようで良かった。

「使徒様、どうかされましたか？」

「いえ、皆さんにお礼を言いたくて来ました。今日はこんなにも楽しい宴をありがとうございます。料理もとても美味しかったです」

俺のその言葉に、男性を筆頭に周りにいた街の人達が笑顔を浮かべる。

「勿体ないお言葉です」

「楽しんでもらえたなら良かったぜ」

「わしの作った串焼きは美味かったじゃろ？」

代表の男性が敬語で返事を返してくれた後に、我慢できないとでも言うように近くの人達が口を開いた。男性が慌てて止めようとしてるし、多分敬語を使えるのが代表の男性だけなのだろう。

「敬語なんてなくて良いですよ。……というか俺も丁寧に話しすぎてたのか。敬語なしで全く問題ないよ」

「それはありがたい、わしは敬語なんて分からんからな。それで串焼きはどうじゃった？」

「すっごく美味しかった。味付けが最高だったよ」

「そうかそうか、そうじゃろう？」

おじいさんは俺の返答を聞いて、嬉しそうに首を縦に振っている。そして笑顔のまま、ごく自然に赤い実を口に含んだ。

かなり小さい実だけど……何かの果物かな。初めて見る気がする。

「それ、何食べてるの？」

気になって思わずそう聞くと、おじいさんは数個を一気に掴んで俺に手渡してくれた。

「これは近くの森にある木に生る実なんじゃ。あんまり人気はないがわしは好きでな、自分で取りに行ってよく食べてるんじゃよ」

「へぇ……名前はないの？」

「わしは知らんな。赤い実って呼んでるだけだ」

赤い実か、見た目は小さなさくらんぼみたいな感じだけど……美味しいのかな。とりあえず食べてみるか。

俺は一粒だけ実を摘み、恐る恐る口に入れた。そしてゆっくりと

噛み砕こうとして、中に種があることに気付く。

「これ種ばっかりじゃない？」

「その周りに果肉があるんじゃ。種の周りを舐めるように食べるのが美味いんじゃよ」

おじいさんに言われた通りにしてみると、確かにほんの少し果肉があるのが分かる。比較的甘くて美味しいけど、あまりにも食べる部分が少なすぎる。

「果肉が少なすぎて、美味しいのかよく分からないんだけど……」

「ははっ、やっぱりそうじゃねぇか。だからほとんど誰も食べないんだ。俺は爺さん以外に食べてるやつを知らねぇよ」

おじいさんの隣にいた男性がそう声を上げる。やっぱりそういう果物なのか……わざわざ採って食べようとは思わないな。

「ふんっ、わしだけで独占できるからいいんじゃよ」

そんな二人のやりとりを聞きながら、俺は口の中に残った種を手のひらに出した。そして何気なくその種を見て何かが引っかかる。

なんか見たことがあるような形なんだけど……これってなんだっけ、絶対に日本で見たことあるはず。

豆のような形だ。……あっ、これってもしかして、コーヒー豆じゃない！？

慌てて他の実を剥いで中の種を出してみると、全部に同じような種が二つずつ入っている。これ絶対にコーヒーだ。でも種の香りを嗅いでみても、コーヒー特有の香りは全くしない。

そういえばあれは焙煎してるんだったっけ。焙煎しないとあの香りは出ないのかな。あとこれ結構湿ってるけど、乾燥もさせた方が良さそうかな……

やり方はよく分からないけど、とりあえずコーヒーかどうかを確かめるために、簡単に乾燥させて焙煎もやってみよう。それで少しでもコーヒーの香りがしたらこれはコーヒーの実だ。

「おじいさん、この実たくさんもらっていい？　とりあえず両手にいっぱいぐらい。お金も払うから」
「おおっ、気に入ってくれたのか！」
「マジかよ……使徒様が気に入るなら俺も食べるかな」
「ううん、実じゃなくて中の種が欲しいんだ」

俺のその言葉におじいさんは首を傾げながらも、快く実を分けてくれた。

「よく分からんが、とりあえずこれだけで良いか？」
「うん、ありがとう。ちょっと机も借りるね」

俺は周りにいる人達全員の視線を集めつつ、コーヒーの種を実から取り出して平皿に並べた。そして温風機を取り出して種を乾燥させる。

少し乾燥させるぐらいしかできないけど、今はそれで良いことにする。

「火を使いたいんだけど、どこかで借りられるかな？」
「おう、それなら俺の屋台を使って良いぞ。すぐそこだからな」
「ありがとう。じゃあ借りるね」

屋台ではまだ火が消えていなかったので、薪を足して火を大きくした。そして乾燥させている種の様子を確認し、とりあえず触った感じでは水分がなくなったので温風機を止めた。

「それをどうするんだ？」

「俺もよく分からないんだけど、焙煎するんだ。焼くのと似てるかな」

「種を焼くのか？」

「うん。とりあえずやってみるね」

フライパンを取り出して火にかけ、そこに少し乾燥させた種を入れた。確かフライパンをずっと動かして焙煎をやってたようなイメージがあるけど……大変だからヘラで混ぜ続けるのでいいかな。

それからヘラで混ぜ続けること五分ほど、ちょっと緑色っぽいかなって感じの豆が、鮮やかな緑色になって来た。なんとなくナッツ系のような香りがするけど……少なくともコーヒーではない。

「色が変わってきたぞ。これを食べるのか？」

「ううん。もっと黒っぽくなるまで焙煎し続けるんだ」

「それは……焦げてるってことじゃねぇのか？」

確かに言われてみればそうだ。でもあれは焦げじゃなくて、豆の色が変化してるんだと思うけど……

「パンを焼いたら色が付くでしょ？　多分そんな感じ」

「ああ、確かにな」

思いつきで適当なことを言ったら思いの外納得できる内容だった

のか、俺の手元を興味深げに覗き込んでいた男性は頷いてくれた。
　そしてそれからも話をしながら焙煎し続け、かなり濃いめの茶色になったところで火から下ろした。香りは……多分コーヒーだと思う。絶対にコーヒーだ！　と言えるほどに強い香りがあるわけではないみたいだ。

407、コーヒー豆

皆でフライパンの中を覗き込み、焙煎が終わったコーヒー豆を眺める。

「皮みたいなやつが付いてるんだな」

「本当だね……剥いた方が良いかな？」

一つをスプーンで掬って近くで見てみると、意外と固そうな皮が一枚あった。日本でよく見てたコーヒー豆はこんな皮なかったはずだし、ここは一手間加えようかな。

「この皮を剥くの手伝ってくれる？」

コーヒーの実を提供してくれたおじいさんと、その周りにいる数人の男性に聞くと、快く頷いてすぐに全ての豆の皮を剥いてくれた。すると俺がよく見ていたコーヒー豆の形になる。

「これで終わりだ。……これを食べたら美味いのか？」

最後の一つを剥いていた男性が、不思議そうに首を傾げて手に持っていたコーヒー豆の香りを嗅いだ。そして何を思ったのか、俺が止める間も無く豆を口の中でガリッと砕き……途端に顔を顰める。

「なんだこれ、めちゃくちゃ苦い、苦いなんてもんじゃねぇ！　全然美味しくないじゃねぇか！」

「おじさん大丈夫！？　これはそのまま食べるものじゃないんだよ！」

「ゴホッゴホゴホ、そ、それを先に、言ってくれ……」
「お主が勝手に食べるからじゃよ。それで使徒様、これはどうやって食べるんじゃ？」

コーヒーの実を提供してくれたおじいさんは、苦しんでる男性を一刀両断してキラキラした瞳で俺に視線を向けた。コーヒーの新たな食べ方に興味津々らしい。
俺は苦しんでいるおじさんに飲み物と口直しの食べ物を渡して、早速コーヒーを淹れてみることにした。

「これは食べ物じゃなくて飲み物なんだ。まずはこの豆を細かく挽くんだけど……道具でやると大変だし、俺が魔法でやるね」
「粉状にして飲み物になるのか。それは楽しみじゃ」

皆に期待の眼差しを向けられながら、目の前にバリアで箱を作ってその中にコーヒー豆を入れた。そしてその箱の上部にもバリアを伸ばして蓋をして、箱の中にコーヒー豆を細かく挽くための刃を作り出す。
バリアってどんな形でも作れて魔力さえあれば自在に操れるから、本当に便利なのだ。最近はバリア本来の用途よりも、こんな風に使ってることの方が多い気がする。

バリアの箱に固定された刃を動かすことはできないので、箱の中で風魔法を使ってコーヒー豆を高速で回転させれば……おおっ、予想以上に上手くいったかも。

「使徒様って、すげぇんだな……」
「さっきから何が起きてるのか分からねぇ」
「この、綺麗な箱はなんじゃ？」

周りからそんな声が聞こえてくるけど、とりあえず笑顔で誤魔化しておくことにした。今の俺はコーヒー優先なのだ。それに俺の能力は使徒様だからってことで大体納得してくれるし。

「多分これぐらいで良いと思う」

何度か風を止めて状態を確認し、微調節しながら出来る限り綺麗な粉末になるよう心がけた。お試しだからこの程度で良いよね。

アイテムボックスから深皿を取り出して、バリアからそっちに粉末を入れると……凄い、コーヒーの香りがする。さっきまでは多分コーヒーぐらいだったけど、粉末にすると一気に香りが強くなった。これは明らかにコーヒーだと分かる。

「これで完成なのか？」

「うん。後はこれを使って飲み物を淹れるんだ」

俺が知ってるコーヒーの淹れ方はドリップ式だけだ。だけどあれにはペーパーフィルターが必要で、今ここには当然だけどない。紙で代用するのも違う気がするし……やっぱりここは布かな。

アイテムボックスを探って、目が粗すぎない適度なサイズの布を取り出し、ピュリフィケイションで綺麗にした。そして机の上に大きめのカップを置いて、その上に布を緩くバリアで固定する。

あと必要なのはお湯だけだ。俺は小さめのウォーターボールを作ってそれを火魔法で一気に沸騰させて、その熱湯をポットに入れた。お湯を沸かす時間の節約だ。

そしてコーヒーの粉末を半分ほど弛んだ布の部分に入れたら……ポットに入った熱湯をゆっくりとコーヒーの粉末に向かって注いでいく。

「おおっ、良い香り……」

布でも意外と上手く抽出できてるみたいだし、手探りで初めてやったにしては大成功と言っても良いんじゃないだろうか。

「すげぇ香りだな」

「これが良いのか悪いのか分からねぇ」

「使徒様はこの飲み物を飲まれたことがあるのですか？」

俺が慎重にお湯を注いでいると、一歩引いたところからずっと様子を見てくれていた街の代表の男性がそう口にした。

「ううん。ミシュリーヌ様からこの実と種の存在と、その使い方を聞いてただけなんだ。だから俺も飲むのは初めてだよ。これはコーヒーって言うんだって」

「コーヒー、聞きなれない名前です」

「それならわしが食べてたあの実はコーヒーの実か？」

「うん。基本的にはそう呼ぶかな」

それからコップがいっぱいになったところで、とりあえずお湯を注ぐのはやめた。そして淹れたてのブラックコーヒーを、いくつもの小さなカップに分けて注ぐ。

「少しずつだけど皆で飲んでみる？　多分これだけだと美味しくないと思うけど、一応お試しで。この後に牛乳や砂糖を入れたものも作るから、全部飲み干さないで少しだけにしてね」

「おうっ、わかったぜ」

「ありがとうございます」

その場にいた皆にカップを手渡して、まずはほんの少しだけブラ

ックのまま飲んでもらった。すると予想通りに全員が顔を顰める。俺も飲んでみると……うへぇ、これは苦すぎる。やっぱりブラックは苦手だ。

「やっぱりこのままだと苦いね」
「ああ、さっきの種をそのまま齧ったのよりはマシぐらいだ」
「これが美味くなるのか……？」
「それがなるんだよ。次は牛乳ね、好きなだけ入れて飲んでみて」

俺は日本にいる時から、コーヒーにはとにかく牛乳を大量に入れたい派だった。もうカフェオレじゃなくてそれほぼ牛乳じゃない？　ってぐらい白に近いのが好きだ。苦いコーヒーが苦手とも言う。なのでコーヒーと同量以上の牛乳をカップに注いで、かなり色が薄くなったカフェオレを飲んだ。

美味しい！！　これ、これだよ。やっぱり牛乳だけだとない美味しさが感じられる。少量でもコーヒーがあると違うんだよね……俺はこれでもう満足だ。砂糖は元々そんなに入れないし。

「どう、美味しくなると思わない？」
「……ああ、なんかよく分かんねぇけど美味い」
「そう思ってもらえて良かった。まだ苦かったら砂糖入れてね」
「砂糖なんぞ本当に使って良いのか？　高いじゃろう？」
「もちろん、好きに使って」

それから皆で各々牛乳を足したり砂糖を入れたりしながら、コーヒーを楽しんだ。結果は概ね好評だ。特におじいさんが少しだけ牛乳を入れた濃いめのコーヒーにハマっていた。

「最初は苦くて飲めねぇと思ったけど、牛乳入れると美味くなるの

が不思議だ」
「予想以上に美味くなるよな。……ただこれは、相当贅沢な飲み物だし俺達が日常的に飲むのは無理だな」
確かに砂糖は高いし、牛乳も流通の問題があるんだろう。この国は一年を通して温暖だからね……製氷器が広まれば違うんだろうけど、まだラースラシア王国にだって広がり始めたところだし。
まず広めるとしたら貴族に対してかな……コーヒーはお菓子にも使えるから定期的に手に入れたい。できればヴァロワ王国で大々的に育ててくれたらありがたいんだけど。
俺も領地で育ててみるつもりはあるけど、やっぱりカカオ同様に気候が合ってる地域の方が育てやすいだろうし。
とりあえず陛下と殿下に飲んでみてもらって、さりげなくヴァロワ王国の新たな特産品にするのを勧めてみよう。
俺はそう結論づけて、おじいさんに残りのコーヒーの実をもらって、お礼に美味しくて新鮮な果物をたくさん渡して席に戻った。

４０８、コーヒー栽培

席に戻ると全員が話を止めて、俺が手に持っている残りのコーヒーの粉と、最後に追加でもらったコーヒーの実を興味深そうに見つめた。

「使徒殿、そちらはなんなのだ？　先程はずいぶんと盛り上がっていたようだが」

「これはコーヒーの実です。そしてこちらの粉はコーヒーの種を乾燥焙煎、粉砕した物です」

俺が説明しながら二つをテーブルの上に置くと、ロジェがそれぞれ少しずつを小皿に取り分けて、皆の前に置いてくれた。

「実は私がミシュリーヌ様から聞いたことがある果実でして、このように実を剥くと中から大きな種が出てきます。この種を乾燥させて火にかけて焙煎し、さらに細かく砕くとこちらの粉になります。こちらの粉から美味しい飲み物になるのです。先程はこの果物を見つけて、おもわず興奮してしまいました」

俺のその説明を受け、従者がそれぞれの香りを嗅いで問題なさそうだと判断したところで、陛下がまずはお皿を手に取った。そして粉に顔を近づけて香りを嗅ぐ。

「……独特な香りだな」

「本当ですね。今まであまり嗅いだことのないような、不思議な香りです」

「ただ、嫌いではないです」

陛下と殿下達がそんな会話をしている横で、マルティーヌもコーヒーの香りを興味深げに嗅いでいた。そして俺の耳元に口を近づけて、「前の世界にあったの？」と聞いてくる。

「そう。世界的に人気の飲み物だったんだ。お菓子にも使ったりできるよ」

小声でそう返すと、マルティーヌの瞳が輝いたのが分かった。……帰ったらコーヒーを使ったスイーツ開発もやろう。

「こちらの粉は、どのようにして飲み物になるのでしょうか？」

「ドリップという手法で淹れるのですが……今やってみますね。ロジェ、手伝ってくれる？」

「かしこまりました」

俺は見栄えを重視してロジェの助けを借りて、さっきよりも優雅にゆっくりとコーヒーを淹れた。そしてカップに少しずつコーヒーを注ぎ、それぞれ三種類ずつ振る舞う。

「お待たせいたしました。左がそのままのコーヒー、真ん中がコーヒーに牛乳を加えたもの、そして右がさらに砂糖を加えたものです。そのままのコーヒーはかなり苦くて人を選ぶのでご注意ください」

「ふむ、ではまずそのままのコーヒーから試してみよう」

毒味が終わったところで、陛下がまずはブラックコーヒーに手を伸ばした。そして香りを楽しんでから少しだけ口に含む。

「おおっ、確かに苦いな。しかし意外といける」

「うっ……に、苦いな」

「ほう、深い味わいですね」

陛下とフェリシアーノ殿下は好感触、第一王子殿下はダメみたいだ。俺もブラックコーヒーに再度挑戦して……うん、やっぱりこれは苦すぎる。うへぇ、口の中が苦さでおかしくなりそう。

「レオン、これが本当に人気だったの？」

マルティーヌはかなり苦手みたいで、潤んだ瞳で疑うように聞いてきた。俺はそれに頷いて小声で返す。

「本当だよ。でもこのまま飲むのが好きな人もいるんだけど、牛乳と砂糖を入れるのが一般的だったかな。だから真ん中のも飲んでみて」

「……分かったわ」

マルティーヌは決死の覚悟を決めたような表情で頷いた。しかしまだ踏み切れないようで、カップに手を添えて固まっている。俺はそんなマルティーヌをそっとしておくことにして、三人の方に向き直った。

「いかがでしょうか？」

「私は真ん中が好きだ。これは癖になる」

「確かに真ん中も良いですが、私は右ですね。砂糖の甘さが加わると苦さを感じなくなって美味しいです」

「私は左です。真ん中もありですが、左の何も混ぜていないものが一番味わい深い気がします」

面白いぐらいにバラバラだな。でもコーヒーは癖があるからもっと微妙な反応をされると思ってたけど、予想以上に好感触で少し驚

く。

「気に入っていただけて良かったです。これは流行ると思いますか？」

「そうだな……少なくとも貴族には流行るだろう。お茶とはまた違った味わいのため、競合も起きない」

陛下がここまで言ってくれるなら本当に流行りそうだ。やっぱりコーヒーのポテンシャルって凄い。

「実はこの果物、貴国の領内に生えているようなのですが、貴国で栽培して特産品とするのはいかがでしょう」

俺が何気なく口にした提案に、今まで穏やかにコーヒーを楽しんでいた陛下がピシリと固まった。そして驚愕の表情で俺と視線を合わせる。

「難しいでしょうか？」

「い、いや、そうではない。その逆だ。使徒殿が見つけたのだから、その功績をそのまま我が国がもらうというのは……」

「ですが、元々貴国にある植物でしたので」

「いや、しかし、使徒殿がいなければ我々は使い道を見出せなかったのだ」

確かにその言い分も理解できるけど……俺が使い道を発見しただけで、その所有権を主張するのも微妙な気がする。

それにこの国じゃないと気候的に栽培が難しいだろうし。やっぱり大規模に栽培するなら、その植物に合った気候の地域が良い。

「では私からのお願いとして、貴国で栽培していただけませんか？

ラースラシア王国で輸入したいのです」
「……本当に良いのだろうか？」
「もちろんです。あっ、私の領地でも栽培を試してみたいので、それも認めていただけるとありがたいです。ただやはり気候的には貴国の方がよく育つでしょうから、基本的には輸入させていただくつもりです」

コーヒーは利益が見込めるものだし、貴族向けなら高く売れるはずだ。俺もたくさん輸入する予定だし、ヴァロワ王国が不利になることはないだろう。

陛下は俺の提案に少しだけ考え込んでから、最終的にはしっかりと頷いてくれた。

「分かった。ではありがたく、我が国で特産品とするべく栽培させてもらう。ラースラシア王国には優先的に輸出しよう」
「本当ですか、ありがとうございます！」

これでコーヒーがいくらでも手に入る。シュガニスで出して少しずつ浸透させようかな。お茶も美味しいんだけど、ケーキを食べる時にはコーヒーを飲みたくなってたんだ。
そうだ、今ケーキも出してみよう。ケーキはレシピを教えられないし輸出もできないけど、こういうのがあるって分かったら開発に力を入れてくれるかもしれない。
そうなったら、ヴァロワ王国で新たなスイーツが生まれる可能性もある。

ミシュリーヌ様がスイーツ好きで、新たなスイーツを開発したら相当喜ばれるってことも教えようかな……事実だし良いよね。

「あの、こちらをコーヒーと一緒に食べてみませんか？」
「これは何だ？　とても綺麗だが……」
「こちらは砂糖を使ったスイーツです。果物が乗っている方がショートケーキ、透明なソースが掛かっている方がミルクレープと言います」

ヴァロワ王国の三人は、全員が興味深げにケーキを覗き込んだ。最近ラースラシア王国では浸透してきたから、こうして驚かれるのも新鮮な反応だ。

４０９、スイーツの重要性と今後の話

「これは、食べられるのか？」

陛下が半信半疑な様子でそう呟く。確かに一度も見たことがなければ、食べ物かどうかも判断できないのか。

「もちろんです。大公家で開発・販売をしていまして、ラースラシア王国の貴族の間ではブームとなっております。コーヒーに合うと思いますので、一緒に召し上がってみてください」

俺のその言葉の後に、ロジェがケーキを切り分けてお皿に盛り付けてくれた。そしてそれぞれ給仕されると、陛下達は目の前に置かれた綺麗なケーキの断面に釘付けになる。

それからしばらくはケーキをただ眺めていたけれど、数十秒後に意を決した様子でカトラリーに手を伸ばし、ケーキにフォークを差し込んだ。そしてゆっくりと口に運ぶと……口に入れた瞬間に驚きの表情を浮かべる。

「……っ、これは、美味いな」

「本当ですね……こんなに美味しいものがあったなんて」

「おおっ、結構甘いのですね。食感が面白いです」

陛下と第一王子殿下は驚愕に目を見開き、フェリシアーノ殿下はキラキラと瞳を輝かせてケーキを凝視している。とりあえず好評みたいで良かった。

「お口にあったのでしたら良かったです。では一緒にコーヒーも飲んでいただけますか？」
「分かった。……ほう、これは合うな」
「ケーキの甘さとコーヒーの苦味が合いますね」
「これは面白い、こんな食べ物があったなんて」

フェリシアーノ殿下はかなり興味を持ってくれてるみたいだ。それに第一王子殿下も反応からして甘いものが好きみたいだし、これからはヴァロワ王国でもスイーツ開発が進むかもしれない。
地球には無かったような、この世界特有のスイーツとかが生まれたら嬉しいな。

「マルティーヌはどう？」

三人がそれぞれケーキとコーヒーを堪能し始めたので、俺は体の向きを変えてマルティーヌの方に向き直った。するとマルティーヌは笑顔でスイーツとコーヒーを楽しんでいる。

「スイーツとこんなに合うなんて驚いたわ。私はコーヒーだけだと牛乳と砂糖が入ってもそこまで好きじゃないと思ったけど、ケーキと一緒に飲むとなると変わるわね。お茶よりも合うわ」
「やっぱりそうだよね！　俺もケーキにはコーヒーが良いと思ってたんだ」

マルティーヌが気に入ってくれたなら、ラースラシア王国で流行ることはほぼ確定だ。早めにシュガニスのメニューにも追加できるように頑張ろう。

「ここまで合うとなると、コーヒーを使ったスイーツというのも楽しみね」

「そっちも凄く美味しいよ。楽しみにしてて」

俺のその言葉にマルティーヌがにっこりと可愛い笑顔を浮かべてくれたところで、ちょうど陛下に話しかけられて俺はまた体の向きを変えた。

「使徒殿、これは輸入できないのか？」

「こちらは長期保存が難しいので、輸出入は不可能だと思います」

「そうか……作り方を聞くわけにもいかんし、我が国でも砂糖を使った料理の開発を進めるべきか」

陛下のその呟きにいち早く反応したのはフェリシアーノ殿下だった。殿下は新しいものが好きなのかもしれない。

「陛下、ぜひ開発を進めましょう！　食が豊かであることは国が豊かであることの証です！」

俺はフェリシアーノ殿下のその必死さにミシュリーヌ様が重なり、思わず苦笑を浮かべそうになったのを何とか抑えた。そして殿下の援護をするために口を開く。

「陛下、実はスイーツはミシュリーヌ様の好物でもあるのです。したがってこれからミシュリーヌ教を広めようとされている貴国では、スイーツ開発をするのにちょうど良いタイミングだと思います」

「なんと……ミシュリーヌ様の」

「はい。さらにクレープには好物というだけではない、深い意味があります」

それから俺は降誕祭のこと、そしてミシュリーヌ教でのクレープの位置付けについて詳しく説明した。そしてその説明を最後まで真

剣に聞いてくれた陛下達は、完全にスイーツ開発に前向きになっていた。

「使徒殿、重要な情報を感謝する。また礼をしなければならないな」
「いえ、この程度の情報共有に礼は必要ありませんよ」

スイーツ開発を進めて欲しいっていう下心ありまくりの情報共有だからね……これで御礼なんてもらってたら罪悪感が生まれる。

「これから友好的な関係を維持していただけたら十分です。どちらが優位ということではなく、対等な関係を築いていきましょう」
「確かにそうだな。使徒殿、マルティーヌ王女、これからもよろしく頼む」
「こちらこそよろしくお願いいたします」
「ええ、もちろんですわ」

ただ対等とは言っても、魔物の森を駆逐できるまでは助力が必要だよな……今回の使節団によってかなり魔物の森を押し返せたし、ヴァロワ王国の騎士達の魔物の森に対する練度も上がった。でもこれから先もまたイレギュラーがないとは限らない。

「陛下、魔物の森の脅威は一旦減りましたが、まだ魔物の森がなくなったわけではありません。いつまたファイヤーリザードと同等の脅威が現れるか分かりません」

俺のその言葉に、陛下達は一気に表情を深刻なものに変えた。忘れていたい事実だけど、しっかりと直視しなければいけない。

「……そうだな。まだまだこれからが大変だろう」
「はい。ヴァロワ王国の騎士達だけで、魔物の森の進行を止めるこ

とは可能でしょうか？　私が見ていた限りでは、やはり人材が不足していると思うのですが」
「ああ、その通りだ。しかし騎士達からの報告を聞く限りでは、なんとか現状維持は可能ということだった。したがって今いる騎士達に頑張ってもらっている間に、人材を補充しようと思う」
……まあそれが一番現実的な手段か。魔物の森には最終的に、数の力で勝つしかないのだから。
「基本的にはその対策が一番だと思います。しかしそれは今回のような事態が起きるとすぐに崩れる脆い物です。したがって、私とファブリスをヴァロワ王国へ自由に出入りできるようにしていただけませんか？」
俺のその提案に、陛下はほとんど迷うこともなく頷いてくれた。
「これから先も危機へ助力してもらえるのならば、それは本当にありがたいことだ。貴殿らの入国の自由はもちろん認めよう。いつでも自由に来てくれて構わない」
「ありがとうございます。ではミシュリーヌ様を通してヴァロワ王国の様子を定期的に確認し、対処しきれない事態が起こりそうな時は助力に来ます」
ミシュリーヌ様には一週間に二、三回は様子を見て欲しいし……スイーツで釣るかな。これからは神力も増えるだろうし、そこそこ使っても問題ないだろう。
「使徒様、本当にありがとうございます。これからもよろしくお願いいたします」
「この御恩に報いられるよう、全力で我が国を良くしていこうと思

います」

殿下達はそう言って、頭を下げられない陛下の代わりに頭を下げてくれた。

「同盟国なのですから当然ですよ。助け合っていきましょう。ミシュリーヌ様も皆が助かることを望んでいますから。……そうだ、貴国の周辺国で魔物の森と接している国がいくつもありますが、そちらとは交流があるのですか？」

「はい。定期的にこの地域の国の長が集まる会議が開かれていますので。私が陛下の代わりにいつも出席しています」

そう言ったのはフェリシアーノ殿下だ。この国はフェリシアーノ殿下が外交担当なのかな。

「ではその際にでも、今回のことを周知しておいていただけませんか？　そして魔物の森は人海戦術で押し返すしかありませんから、できれば協力関係を築いていただけるとありがたいです」

「かしこまりました。いくつか折り合いが悪い国はあるのですが、大部分の国とは話し合いの余地があると思います。使徒様と神獣様、そしてミシュリーヌ教のこともお話ししてしまって良いでしょうか？」

「はい。よろしくお願いします」

その会議の様子もミシュリーヌ様に見てもらって、民のことを思う良い国には同盟を結ぶなど表から助力をしても良いかもしれない。そうでない国は……さすがに放置はできないから、こっそりと脅威だけは排除しよう。国のトップがダメでも平民達が悪いわけではないのだから。

「では周辺国ともできる限り協力して、魔物の森の駆逐にあたろうと思います。その際に使徒様のことについてお話しさせていただきます」

これで周りの国にもミシュリーヌ教が広まっていくかな。今回の遠征はミシュリーヌ教の伝播、その一点だけでも十分な成果があったと言えるだろう。

そうしてこれからの関係性について話を終えた俺達は、また甘いケーキと美味しいコーヒーを楽しみ、和やかなムードで宴を終えた。そして宴の後は明日の出発に向けて早めにベッドに入った。

410、帰路

次の日の朝。遂に今日はヴァロワ王国を出立する日だ。俺はいつもより早めに起きて準備を整え、代官邸のエントランスに向かった。するとそこにはラースラシア王国使節団が全員集まっている。そこまで広くない代官邸の庭は馬車や馬でいっぱいだ。

「皆様おはようございます」

「使徒殿、おはよう」

「陛下も見送りに来てくださったのですね。ありがとうございます」

まだ出立まで少し時間があるというのに、陛下達は全員集まっていた。それだけでラースラシア王国をどれだけ重視しているのかが分かる。

「改めて、此度は貴国と有意義な時間を過ごすことができて良かった。これからも関係を深めていけたらと思っている。貴国に何かあった時には、我が国は助力を惜しまないことを約束しよう」

「ありがとうございます。我が国も同じ気持ちです」

陛下が差し出した手のひらにマルティーヌも手を伸ばし、しっかりと握手を交わした。

「マルティーヌ王女殿下、使徒様、今回は本当にありがとうございました」

陛下の次に口を開いたのはフェリシアーノ殿下だ。フェリシアーノ殿下とは長い間一緒に行動してたから、ここで別れるのは少しだ

け寂しい。

「我が国にも利益があったからこそですわ。これからもよろしくお願いいたします」

「はい。私が外交を担当していますので、これから先も関わらせていただくことは多いかと思いますが、よろしくお願いいたします」

「フェリシアーノ殿下、私がファブリスとこちらに来た時には、ぜひ一緒に食事でもしましょう」

俺のその提案に、殿下は笑顔で頷いてくれた。殿下とは馬車の中でも結構話したりしたけど、意外と話が合って楽しかったのだ。この人が外交担当というのも頷ける。

「ぜひご一緒させてください」

そして次には第一王子殿下とも挨拶を交わし、とても和やかな雰囲気で遠征は終了となり、俺達は馬車に乗り込んだ。そして大勢に見送られながら街を出て、ラースラシア王国に向かって馬車は軽快に走り出した。

馬車の中には俺とマルティーヌ、そして軍務大臣であるコラフェイス公爵がいる。ファブリスはいつものように近くを自由気ままに走っている。

「王女殿下、大公様、同乗させて頂きありがとうございます」

「気にしないでください。これからの予定を確認しなければいけませんから」

基本的に軍務大臣は騎乗で移動してたんだけど、俺達と話し合い

が必要な時だけはこうして馬車に乗ることもある。それにしてもコラフェイス公爵様と話すのも久しぶりだ……軍務大臣という立場から基本的には騎士達と行動を共にすることが多かったので、俺達とは活動範囲が違ったのだ。

「行きとは少しルートが変わるのよね？」
「はい。旧チェスプリオ公国で発生しかけた内戦は事前に防いだようなのですが、未だに街中は荒れているようです。したがって旧チェスプリオ公国内は、街に寄らずに野営で通り過ぎたいと思っています」

ミシュリーヌ様がチェスプリオ公国で内戦が起きそうだと助言して、ヴァロワ王国はすぐに騎士を派遣したらしいけど、まだ反乱勢力を鎮圧しきってはいないみたいなんだ。ヴァロワ王国も魔物の森から周辺諸国との関係まで、気にしなきゃならないことが多くて大変だよね……

チェスプリオ公家はフェリシアーノ殿下の暗殺未遂を防げなかった上に、内乱まで許しちゃったんだから……代替わりしてヴァロワ王国の一貴族家になったとしても、この先は前途多難だろう。

こうして改めて考えると、ヴァロワ王国は問題が山積みだ。ヴァロワ王国が荒れるとコーヒーもカカオも香辛料も手に入らなくなるし……大変そうなら少しずつ助力しようかな。ミシュリーヌ教を国教にしてくれるなら、使徒として手助けする理由は十分だし。

「街に寄らなければ大丈夫なのね？」
「はい。街道を通る馬車を襲うほど、民は困窮していないようです」
「それならば良かったわ。では街に寄らずに通り抜けるルートで行きましょう」

軍務大臣が広げてくれている地図を見ると、少し遠回りになるけど、そこまで日程にも変化はなさそうだった。ただチェスプリオ公国内でも野営で、そこを通り抜けた後はしばらく草原を進まないといけないからまた野営になる。野営が続くから、慣れてない文官達の体力や精神状況には気を配ろう。

「それ以外は特に変更などはないでしょうか？」
「はい。いくつか宿泊する街や村が行きとは変わりますが、こちらは元々の予定通りです」
「分かりました。ではとりあえず、チェスプリオ公国を抜けてラースラシア王国に入るまでは、気を抜かずに行きましょう」

ラースラシア王国に入ればどうにでもなる。どうにでもなるというか、俺達の権力が最大限に使えるから問題が起きても対処が容易いのだ。

「王都に着いてからはどうするのかしら。出発前に決めなかったわよね」
「急いでいて帰国後のことについては何も決まっておりません。したがって王都に近づいたら早馬を出し、我々の到着を知らせる予定です。そうすれば陛下が指示を出してくださるでしょう」
「それもそうね。ではそこまで心配せずに、後は旅を楽しむわ」
「そうなさってください」

そうしてこれからの予定を大まかに話し合うと、軍務大臣は休憩で馬車が止まったタイミングで馬車を降りて行った。そして俺とマルティーヌ、それぞれの従者とメイドだけになった馬車内では、ゆったりとした旅を存分に楽しんだ。

そうしてそれから約二週間、途中で数日に渡り雨が続き少し大変だったけど、それ以外では特に問題もなく王都近くまで帰ってくることができた。今日の午前中には王都に着けるだろう。
今は朝食を終えてそろそろ出発しようかという時間で、俺達は昨日遣いに出した騎士が戻ってくるのを待っている。

「そろそろ戻ってくるかな」
「ええ、多分もう少しよ。お茶でも飲んで待っていましょう」
「そうだね。ただ甘いものは……やめておこうか。この旅で食べ過ぎてる気がするし」

俺のその言葉にマルティーヌは苦笑を浮かべた。行きでは緊張もあってそこまでスイーツを食べなかったんだけど、帰りは緊張感から解放されて、ついつい食べ過ぎてしまった。

「このままだと確実に太るわね」
「……だよね。ちょっと鍛錬を増やそうかな」
「私もそうするわ」
「今度一緒に運動する？　たまには場所を変えても楽しいと思うよ。森の中で鍛錬するとか」

俺も最近は屋敷の訓練場で鍛錬しているだけで、森には行っていなかった。王都の外れにあった実家近くの森に久しぶりに行こうかな……あそこは思い出もたくさんあって好きな場所だ。

「それも楽しそうね。……じゃあ今度こっそり転移で連れて行って」
マルティーヌはメイドさんに聞こえないように、身を乗り出して俺の耳元でそう言った。ただメイドさんが後ろで苦笑を浮かべてい

るのが見えるし、分かってて目を瞑ってくれるのだろう。
マルティーヌの楽しそうな笑顔を見る限りでは、マルティーヌもそのことに気づいているようだ。公然の秘密ってやつだね。

「了解。予定を合わせようか」

俺も話を合わせてそう答えると、マルティーヌは殊更に楽しそうな笑みを見せてくれた。

「ありがとう！　楽しみにしているわ」

そうして一緒に出かける約束をしたところで、ちょうど遣いに出した騎士が帰ってきたと報告が来た。

411、帰国

お茶を片付けてもらって騎士を迎え入れる準備を整えると、すぐに待機していた騎士が部屋に入ってきて跪いた。遣いに出した騎士と同じ人が戻ってきたみたいだ。

「ただいま戻りました」

「ご苦労様。お父様は何か言っていた？」

「はい。本日の昼過ぎに使節団が帰還すると周知し、準備を進めておくとのことです。パレードというほど大々的にはしないようですので、馬車を変える必要はないと仰っていました」

「分かったわ。ありがとう」

馬車を変える必要がないのは楽でありがたい。それならこの後すぐにでも出立できそうだ。

「あなたはここで一日休んでから、明日中に王都に戻れば良いわ。今夜の宿や食事の手配はしておいたから、体を休めてちょうだい」

「ありがとうございます」

「では私達は一時間後に出立としましょう。準備を頼んだわよ」

マルティーヌのその言葉に部屋の中にいた騎士とメイド達が頷き、皆が慌しく動き出した。そしてきっかり一時間後に出立した俺達は、昼を少し過ぎた頃に王都へと到着した。

「凄い人ね……」

「本当だね。やっぱり使節団って珍しいからかな」

パレードをするわけでもないのに、俺達が通る道沿いには人がたくさん集まってくれている。確かにこの世界には娯楽が少ないから、こういうイベントみたいなものがあったら見に行きたくなる気持ちは分かる。

「レオン、呼ばれてるわよ」

マルティーヌが示した窓の外には、使徒様と呼びかけてくれている子供達がたくさんいた。俺が窓から顔を出して手を振ると、嬉しそうにはしゃいでいる。

やっと俺の外見も広まったと考えると嬉しいけど……ちょっとだけ恥ずかしい。やっぱり注目されるのはいつになっても慣れないな。

「使徒様は子供達の英雄になってるわね」

「嬉しいんだけど、どんどん外を歩きづらくなるよね」

そのうち王都の外れでも自由に歩けなくなりそうだ。そうなったら他の街に行くか、別の国に行かないといけなくなるのかな……それは大変だし、変装でも考えようかな。

「それは仕方がないわよ。でも服装を平民のものにすれば案外バレないんじゃないかしら。後は……髪型を変えるとか」

「意外とバレないかな？　でも変えるって言っても髪は短いから難しいよね」

「それもそうね……そうだわ！」

マルティーヌは何を思いついたのか、突然キラキラと瞳を輝かせた。そしてあり得ない提案を口にする。

「女の子の格好をすれば良いのよ！　ショートヘアの女の子だっているもの。頭に大きめのリボンをつけて、ワンピースを着れば体型も隠せるわ」
「ちょっ、ちょっと待って、さすがにそれは……」

それは絶対にやらないから！　それなら使徒だってバレた方がマシだ。ちょっとロジェ、なんで面白そうな顔をしてるの！？

「ダメかしら？」
「うん、ダメ。絶対にやらないから」
「楽しそうなのに……」
「俺にその趣味はないから！　ロジェ、残念そうな顔をしないで！」

ロジェにやらせたら絶対に研究し尽くして、完璧に仕上げるのだろう。絶対に嫌だ、ここは全力で回避だ。

「……まあ仕方がないわ。でも性別を変える変装はありよね。私が今度やってみようかしら」

マルティーヌが男装するのか……うん、それはありな気がする。誰もが振り向く美少年になるはずだ。俺の女装よりは確実に似合うだろう。

「あっ、もう王城に着いたのかしら」

そんな馬鹿な話をしていたら馬車が止まった。ふぅ……やっと帰ってきた。一年前は王城なんて緊張する場所でしかなかったのに、もはや安心感を覚える場所になっている。随分と立場も気持ちも変わったな。

それからは謁見の間でアレクシス様と貴族達に対して正式な帰還の挨拶を済ませ、今は応接室のソファーに腰を落ち着けている。
応接室の中にいるのはアレクシス様とエリザベート様、ステファン、リシャール様、そして俺とマルティーヌ、ファブリスだ。ただファブリスは応接室に入ってすぐに、部屋の隅でゆったりと寝そべって目を閉じてしまった。本当にどこでも自由だよね……まあ神獣だから良いんだろうけど。

「マルティーヌ、レオン、無事に帰ってきてくれて良かった」
「二人ともお帰りなさい」

アレクシス様とエリザベート様の笑顔に、まだ少しだけ残っていた緊張感が全て無くなった気がする。

「お父様、お母様、ただいま戻りました」
「エリザベート様、体調は大丈夫ですか？」

大きく目立つようになってきたお腹を見ながらそう聞くと、エリザベート様はにっこりと微笑んでくれた。最近は悪阻で体調が悪くて会えていなかったので、随分と久しぶりだ。

「ええ、最近は体調も落ち着いてきたから大丈夫よ。秋の終わり頃には生まれる予定なの」
「楽しみですね」

マルティーヌの弟妹になるんだから、俺にとっても義理の弟妹になる。絶対可愛いんだろうな……なんでも買い与える迷惑な叔父さんにならないように気をつけよう。

「レオン、ヴァロワ王国はどうだったのだ？」
ステファンのその言葉によって、エリザベート様に集まっていた視線が俺に集まる。
「ラースラシア王国とはまた違う文化があって、勉強になることも多かったよ。そうだ、色々とお土産を持ってきてるんだ」
俺はアイテムボックスから、マルティーヌと一緒に選んだお土産を次々に取り出して机の上に並べた。並べきれないものはメイドさんと従者に手渡していく。
「凄い量だな」
「頻繁に行けるところじゃないって思ったら、たくさん買っておきたくなっちゃって」
「これは……ヴァロワ王国の伝統衣装か？」
ステファンがまず興味を示したのは、マルティーヌが選んだたくさんの服や布だ。
「ええ、お兄様に似合うものを選びました。もちろんお父様とお母様にもありますわ。それから布もたくさん購入したので、ヴァロワ王国のものとは少し違ってしまうかもしれませんが、我が国の仕立て屋に頼んで仕立てることもできます」
「あら、最高の贈り物ね！」
エリザベート様がマルティーヌのその説明に瞳を輝かせる。やっぱり一番食いつくのはエリザベート様だよね。
「ヴァロワ王国の伝統衣装について、知ってはいたけれど本物は初

めて見たわ。とても素敵ね」
「そうなのです。一見窮屈そうに見えますが、着心地も良いです」
二人が服や布を手に盛り上がってしまったので、俺を含めた男四人は苦笑を浮かべて顔を見合わせ、示し合わせたように少しだけ二人から距離を取った。アレクシス様は席まで移動している。
「お土産を出す順番を間違えましたね」
「……まあ仕方がない。二人が楽しそうだから良しとしよう」
「確かにそうですね。リシャール様、タウンゼント公爵家にも見本として服を一着といくつか布を買ってきてありますので、後で渡します」
「うちにも買ってきてくれたのか。ありがとう、カトリーヌが喜ぶな」
多分だけどカトリーヌ様とエリザベート様、マルティーヌでお茶会をやることになるんだろうな。
「レオン、食べ物はないのか？」
「もちろんあるよ。後で出そうかと思ってたんだけど、今味見する？」
「ああ、食べてみたい」
「じゃあいくつか出すね。エリザベート様は妊娠中なのですぐには食べられないと思いまして、エリザベート様の分はアイテムボックスに別枠で入れてあります。そちらは無事にご出産された後で改めて渡しますね」
俺のその言葉にアレクシス様が頷いてくれたところで、大量に買い込んできた屋台料理をアイテムボックスから取り出した。

「おおっ、良い匂いだな」
「ヴァロワ王国は香辛料がたくさんあって、味付けがラースラシア王国とは結構違うんだ。串焼きは顕著な差があるよ」
「父上、食べても良いですか？」
「そうだな、皆でいただこう」

俺が出したものだから安心してくれているのか、三人は楽しそうに串焼きを吟味して一本手に取り、毒味もなしにそのままかぶりついた。
俺が出すものはちゃんと毒がないか確認してるから問題はないんだけど……もうちょっと警戒しなくて良いのかと問いたくなる。信頼してくれていると思えば嬉しいけどさ。

412、お土産

串焼きを口に運んだ三人は、三人とも同様に瞳を見開いて驚きの表情を浮かべ、それから段々と顔を綻ばせた。

「これは美味い」

「我が国の料理にはない味付けだ。これからはもっと香辛料を輸入するのもありだな……」

相当気に入ったみたいだ。でも分かる、この濃い味付けが嫌いな人はそういないだろう。

「優先的に輸入できる権利を得たのですし、輸入量を増やすのはありだと思います。大公家ではたくさん輸入し、香辛料を使った料理を食堂などで広められたらと思っています」

大量に買って来た香辛料を色々配合してみて、とりあえずカレーを作りたいのだ。やっぱり米を広めるならカレーライスだよね。

タンドリーチキンによく使われる香辛料の種類は聞いて来たから、何とかできると思うんだけど……ティノに話を持っていったらノリノリで研究してくれるかな。

「それは楽しみだな。しかし大公家は……忙しすぎないか？　米の生産と周知、さらに香辛料を使った料理の開発と食堂の運営、スイーツの開発とスイーツ店の運営。それだけでなくこれからは領地運営もするのだろう？　レオンはそれに加えて私の側近としての仕事に魔物の森を駆逐する仕事、さらに使徒としてやるべきこともあるはずだ。私が言うのも何だが……体を壊さないか？」

確かに改めてやるべきことを列挙すると、色々に手を出しすぎてて自分で自分の首を絞めてる気がする。しかも今アレクシス様が挙げた以外に、温室を作って季節関係なく作物が収穫できるようにしようと思ってるし、ラースラシア王国では気候的に育たない植物を育ててさらに品種改良を試みるつもりだ。

コーヒーも広めようと思ってるし、味噌や醤油など米を使った各種調味料開発もやりたい。

あとは平民でも無料で教育が受けられるような体制を整えられたらなとか、もっと衛生状況を向上させるために中心街以外にも下水が欲しいよなとか、色々とやりたいことは思い浮かんでいる。

……明らかに手を広げすぎてるよね。今すぐにやらなければいけないってことはないんだから、優先順位を付けてゆっくりとやっていこう。

「体を壊さないように気をつけます。これから一番に優先すべきことは領地経営になると思うので、後ろに回せるものは回すことも考えます」

ほんとは後に回したくないんだけど、特に醤油や味噌開発とか、今すぐにやりたい！　でも設備はないしまだ本を手に入れてないし人員もいないし、後回しだよね……

領地の体裁が整ってから、開発のために人を雇って大公家の特産品作りとして大々的に始める感じにするかな。

こうして考えてるとこれからも忙しくて大変なのは間違い無いんだけど、どうしてもワクワクしてしまう。多分俺って働くのが好きなんだと思うんだ。何もやることがない日がごくたまにあれば楽し

めるけど、何日も続いたら暇すぎて逆に病みそうって思うし。
「本当に気をつけてくれ。領地経営を始めたら執務室へ顔を出すのは週に一度程度で構わないし、無理をしないように」
「良いのですか？」
「ああ、そもそも我が国では領地を持つ当主は王宮に仕官しないのが当たり前だ。どちらもこなすなど不可能だからな。しかしレオンから助言を得たいことも多くあるため、週に一度は顔を出してほしい」
王宮に行くのが週に一度になれば領地経営が進みそうだ。魔物の森の跡地は遠いから、王都とどうやって行き来するのかが問題だったんだよね。週に一度ならファブリスに走って貰えば、そこまで負担なく行き来できるかな。
「ありがとうございます。短時間で最大限の成果を出せるように頑張ります」
「期待しているぞ」
「レオン、その一日は仕事だけでなく、私やマルティーヌとの時間も作って欲しいからな」
「それはもちろん。俺も二人には会いたいから時間を作るよ。リュシアンのとこにも行きたいよね」
皆で旅行に行くというのはいつ実現できるか……少なくとも直近ではさすがに無理だ。もう少し魔力量が増えて転移でタウンゼント公爵領までいけると、思いついた時にでも皆で行けるんだけど。
……とりあえず最近忙しくてサボり気味だった、魔力量を増やす訓練をちゃんとやろう。訓練とは言っても寝る前に魔力を使い切るだけだけど。

「私のことを置いていくなよ」
「うん。マルティーヌとステファンとロニーで行こうと思ってるんだ。多分一番忙しいのがステファンだから、ステファンの予定に合わせるよ」
「そうだな。では数日時間が取れそうな時に連絡する」
「よろしくね」

そこまでステファンと話したところで、ステファンの隣に座っていたアレクシス様が苦笑を浮かべつつ口を開いた。

「二人とも、私の目の前で堂々と王都を抜け出す計画を立てないでくれるか？」

……確かに。全く気にしてなかったけど、本来ステファンとマルティーヌは、王都どころか王宮からも自由に出られないんだった。

「父上、何も聞かなかったことにしてください」
「アレクシス様、私とファブリスがいるので万に一つも危険はありません」
「それは分かってるんだが……まあ良いか。ステファン、節度は保って王都の外で正体がバレないようにな」
「かしこまりました。ありがとうございます」

さすがアレクシス様、懐が深い。二人を連れ出すときは絶対に正体がバレないように気をつけよう。こうなってくるとさっきマルティーヌと話した、男装と女装はありだな。
まあ転移で建物の中に直接入るならその必要もないんだけど。でも二人は海を見たことないって言ってたし、外にも出たい。……またその時に考えるか。

「そういえばアレクシス様、もう一つお土産というか報告があります」

俺は領地の話から思い出した報告をするために、話を変えた。そしてアイテムボックスからコーヒーを取り出す。

「こちらはコーヒーの実と言って、ヴァロワ王国の森に自生していたものです。実はミシュリーヌ様からこの作物のことを聞いて知っていたのですが、今回の遠征で偶然発見しました。こちらは実を割くとこのように種が入っていて、この種を乾燥焙煎そして粉砕して、その粉を使ってコーヒーという飲み物を淹れることができます。このコーヒーがスイーツによく合うので、たくさん輸入したいと思い、ヴァロワ王国と契約を結んできました」

それから俺はヴァロワ王国でコーヒーを大規模に栽培してくれること、そしてその種をラースラシア王国、特にジャパーニス大公家で大量に輸入することについて説明した。

「ふむ、これが飲み物になるのか」

「はい。今淹れてみても良いでしょうか？」

帰りの馬車の中で有り余る時間があったので、貰って来たコーヒーの実は一部を除いて全て粉状にしてあるのだ。

「よろしく頼む」

「かしこまりました。ロジェ、お願いしても良い？」

部屋の隅でずっと控えてくれていたロジェを呼ぶと、ロジェはすぐに近くまでやって来てくれた。そしてアレクシス様達の目の前で、

慣れた手つきでコーヒーを淹れ始める。
実は使節団のメンバーで一番コーヒーにハマったのがロジェだったのだ。ロジェは粉を無駄にしないように少量ずついろんな淹れ方を試して、約二週間で美味しいコーヒーの淹れ方を習得した。
ロジェ曰くまだまだ研究の余地があるらしいけど、俺からしたら最初よりも格段に美味しくなっている。乾燥の時間や焙煎方法を変えたって理由もあるかもしれないけど、それでも俺が淹れたものとは明らかに味が違うのだ。

413、コーヒーとヴァロワ王国の現状

「不思議な香りがするな」

アレクシス様はカップを手に持ち、手で仰ぎながら何度も香りを確かめている。そして不思議な香りが気になったのか、エリザベート様もマルティーヌとの話を中断してこちらに意識を向けた。

「何の香りかしら？」

「コーヒーという飲み物です。ヴァロワ王国で自生していた木の実から作られるのですが、これからこの国でも流行らせたいと思っています。実はケーキなどのお菓子にとてもよく合うのです」

俺のその説明を聞いて、ケーキという単語に惹かれたのかエリザベート様の瞳がキラキラと輝きだす。この表情が本当にマルティーヌとそっくりなんだよね……さすが親子。

「私も飲んでみたいわ」

「そうですね……少量なら問題ないとは思いますが、たくさん飲むのはやめた方が良いかもしれません。妊娠されているとどんな影響があるのか分かりませんから」

確か妊婦さんって食べたり飲んだりしちゃいけないものがあったはずだ……コーヒーもその中に入ってたような、気がしなくもない。この世界のコーヒーが日本のものと同じかは分からないから何とも言えないけど、あんまり未知のものを飲まないほうが良いだろう。

俺は人体に毒となるものは判別できるけど、特定の人にとっての み毒となるアレルギー食材とかは、体内に入って毒と認識されてか

らじゃないと分からないのだ。

「確かにそうね……飲んでも大丈夫かしら？」

エリザベート様は後ろに控えていたメイドさんに視線を向けた。

「大公様の仰る通り、少量でしたら問題が起きる可能性は低いと思われます。しかしご心配でしたらご出産まで待たれるか、口に含んで味が分かる程度の量にしておくべきかと思います」

「分かったわ。……では私の分は、一口程度にしてもらえるかしら？」

「かしこまりました」

そうしてロジェが全員分のコーヒーを淹れ終わったところで、俺は牛乳と砂糖を取り出してテーブルに置いた。

「コーヒーはそのままだとかなり苦くて好き嫌いが分かれるので、そのままが苦手だという方はまずは牛乳を入れてみてください。そしてそれでも苦い場合は砂糖も合いますので試してみてください」

「苦いのか……確かに色からして甘そうではないが」

「かなり驚かれると思います。しかしその苦味が甘いスイーツと合うので、一緒に召し上がられると良いかもしれません。スイーツも出しますね」

それからはアイテムボックスにあるスイーツから各自好きなものを選んでもらって、テーブルはお茶会の様相に様変わりした。

「ではいただこう」

まずコーヒーを手にしたのはアレクシス様だ。他の皆はアレクシ

ス様の反応を待ってから飲むらしい。マルティーヌは既に味は分かっているので、最初から牛乳と砂糖を入れて甘くして楽しんでいる。

「ふむ、確かに苦味が強い。少しの酸味もあって独特な味だ。しかし不思議と嫌な味ではないな。鼻に抜ける香りがとても良い」

アレクシス様はそう評価すると、口の中にコーヒーの苦味が残っているところに甘いケーキを運んだ。すると表情がどんどん緩まっていく。これは気に入ってくれたかな。

「これは素晴らしい。ケーキは美味しいが甘すぎると思っていたのだ。コーヒーと共に食べると美味しさが倍増する」

「倍増……では私もいただきましょう」

それからエリザベート様とステファン、そしてリシャール様もコーヒーを口に運んだ。その反応は三者三様で面白かった。まずはステファンがうっと声を漏らして顔を顰め、エリザベート様は顔を顰めないまでも首を傾げ、リシャール様は瞳を輝かせて二口目をすぐ口にした。

「ステファン、コーヒーと同量の牛乳を入れると美味しくなるよ」

顔を顰めているステファンにそう伝えると、ステファンはすぐ従者に頼んでカップの中身をカフェオレに変えた。そして恐る恐る一口飲むと……今度は顔を綻ばせた。

「本当だな。牛乳と混ぜるだけで格段に美味しくなる」

「だよね。俺もそのままより牛乳を入れた方が好きなんだ」

やっぱり子供の舌にはコーヒーはまだ早いのだろう。

それから他の皆も牛乳入り、砂糖入りとさまざまなコーヒーの飲み方を試した。そして最終的にはエリザベート様とステファンはカフェオレ、アレクシス様とリシャール様はブラックコーヒーが好みという結果に落ち着いた。

「とても美味しかったわ。スイーツにも本当に合っていたし、これは流行るわね」

「良かったです。安定的に輸入できるようになったら、シュガニスでも販売しようと思っています。それから飲み物だけでなく、コーヒーで味付けをしたスイーツの開発も進めようと思っています」

俺のその言葉に身を乗り出したのはリシャール様だった。リシャール様は一番コーヒーの味にハマってたから。やっぱり歳をとった方がこの苦さが美味しく感じるのだろうか。

「レオン君、それは素晴らしい。是非とも開発を頑張ってくれ」

「もちろんです。……試作ができたら公爵家に持っていきますね」

「ああ、楽しみに待っている！」

相当ハマったみたいだな……まあ日本でもコーヒーが好きな人って凄かったからね、毎日何杯も飲んだりして。

「ヴァロワ王国はコーヒー栽培に着手できるほど、余裕があるのだろうか」

アレクシス様が真剣な表情でそう呟いた。謁見の間ではその辺の詳細までは報告していないのだ。ちょうど良いしここで報告するかな。

「ヴァロワ王国は被害を受けた街は酷い状況でしたが、それ以外の

街は活気がありましたので、そこまで酷い状況ではなかったです。しかし先ほどは報告しなかったのですが、チェスプリオ公国がヴァロワ王国に併合される事態となりまして、そちらの対処に兵力が割かれている現状だと思います」

それから俺は今回の遠征で得た情報を、マルティーヌと協力しながら全てアレクシス様に話した。ファイヤーリザードとの戦いや、魔物の森をどれだけ押し返せたかなどについても言及し、ミシュリーヌ教を国教としてくれること、それに伴って俺がこれからも助力をすることまで話をした。

「チェスプリオ公国については苦労しそうだが、概ね問題なく国家運営ができているようだな。これからも友好的な関係を続ける意義は大いにあるだろう」

「はい。ヴァロワ王国にはラースラシア王国にない食料品や文化がたくさんありますので、私としても関係性を深めていきたいと思っています」

国交断絶なんてことになって、香辛料、コーヒー、カカオが手に入らないなんてことになったら絶望だ。そうならないためにも二国間の関係性を正常に保つため、何かあったら密かに動こう。最悪はミシュリーヌ様にも働いてもらって。

「レオンが助力に行くというのは私が止められることではないので、レオンの判断に任せる。しかし我が国の貴族だということは忘れずにいてくれると嬉しい」

「それはもちろんです。ラースラシア王国が不利になるようなことに手を貸すつもりはありません。使徒としてはあくまでも魔物の森の脅威に対して、それからミシュリーヌ教を広める手伝いのみ助力しようと思っています」

そうしてそれからは外交や俺の活動についてなど色々と話をして、日が暮れてきたところで王宮を後にした。

413、コーヒーとヴァロワ王国の現状（後書き）

～お知らせ～

この度、私が連載している別の作品が書籍化することになりました。タイトルは変更しまして「神に転生した少年はもふもふと異世界を旅します」です！

活動報告に詳細は記載しておりますので、興味がある方は見ていただけたら嬉しいです！

転生平民を読んでくださっている皆様には楽しんでいただけるのではないかと思います。よろしくお願いいたします！

それから転生平民の書籍3巻の方も鋭意作成中ですので、こちらも楽しみにしていただけたら嬉しいです！

蒼井美紗

４１４、大公家に帰宅

王宮に馬車を呼んで帰る選択肢もあったけど、予想以上に長居をしてしまったので少しでも早くに帰るため、俺はファブリスと従者、護衛の皆を連れて大公家のエントランスに転移をした。

するとちょうどエントラスを通り過ぎようとしていたアルノルと、ばったり鉢合わせる。

「っ……レオン様、おかえりなさいませ」

アルノルはさすがに驚いたようで息を呑んだけれど、すぐにいつも通りの表情を作って恭しく頭を下げてくれた。

「ただいま。驚かせてごめんね。早く帰ってきたくて転移を使ったんだ」

「いえ、気になさらないでください。ご無事のご帰還嬉しく思います。ご家族様が応接室でお待ちですが、そちらに向かわれますか？」

「そうなんだ。じゃあ行こうかな。ロジェとローランだけ付いてきてくれれば良いから、他の皆は荷物の片付けをお願いね。ファブリスも一緒に来る？」

俺のその言葉にファブリスが尻尾をゆらめかせながら頷いたところで、俺達はアルノルの先導で広い応接室に向かった。応接室というよりも、リビングのような感じで使っている部屋だ。

アルノルが扉を開けてくれて中に入ると、母さんと父さん、マリーが優しい笑顔で俺を迎え入れてくれる。帰ってきたな……俺はこ

の時心からそれを実感した。やっぱり家族のところが一番安心する、力が抜ける。

「皆ただいま」
「レオンおかえりなさい」
「お疲れ様、怪我はないかい？」
「お兄ちゃん！　おかえりー！」

マリーが駆け寄ってきてくれたので、頭を優しく撫でてから仲良く隣同士でソファーに座った。そしてファブリスもマリーの横に寝そべる。

「ファブリスもおかえりなさい！」
『うむ、久しぶりだな』
「ふふっ、ふわふわだね～」
『いくらでも撫でて良いぞ』

ファブリスはマリーに背中を撫でられてご満悦だ。俺はそんなファブリスの様子に苦笑しつつ、母さんと父さんの方に体を向けた。

「改めてただいま。俺がいない間に何か問題はあった？」
「いいえ、大丈夫だったわ」
「皆が助けてくれたし、快適に過ごせたよ」
「それなら良かった」

俺がいない時に問題が起きないのなら、使用人への教育がしっかり行き届いてるってことだ。それに人選も間違えてなかったってことだよね。

「レオンはどうだったの？　他国に行ったんでしょう？」

「うん。ヴァロワ王国はラースラシア王国とはまた違った文化があって、楽しかったよ。お土産も買ってきてるんだ」
「え、お土産！？」

お土産という言葉に一番反応したのはマリーだった。マリーは俺の顔をキラキラとした瞳で見上げてくる。

「食べ物とか服を買ってきたんだ。まずは……これかな」
「良い匂い！　串焼き？」
「そう。ヴァロワ王国は香辛料の生産が盛んで、ラースラシア王国で買える串焼きとはまた違った味わいを楽しめるんだ」

夕食前なので少しずつということで、串焼きの肉を串から外して、一つずつお皿に乗せて皆に渡した。

「美味しいから食べてみて」
「いただくわね」
「不思議な香りだ」
「いただきます！」

肉にかぶりついた三人は、驚いたように一瞬動きを止めた。そして恐る恐る何回か咀嚼をすると、だんだんと顔が緩んで口角が上がっていく。

「凄く美味しいわ」
「……本当だね。驚いたよ」
「私これ好き！」

香辛料たっぷりの串焼きは大好評みたいだ。やっぱりこれが嫌いな人ってそうそういない。肉の味を楽しみたいときや、さっぱりし

たものが食べたいときはラースラシア王国の味付けが良いけど、お腹が空いてる時とかパンやご飯と一緒に食べる時とか、そういう時はこの濃い味付けの方が美味しいのだ。

「まだまだたくさんあるから食べたいときは言ってね。あと香辛料もたくさん買ってきたから、この味付けの料理が屋敷のご飯で出るようになると思う。それからこれ、父さんと母さんにお土産。マリーはお洋服ね」

父さんと母さんに渡したのは辣油だ。チェスプリオ公国の特産品だったけど、これからはヴァロワ王国から輸入できることになっているので、継続的に手に入れることもできる。

「何かしら、食べ物なの？」
「随分と赤いけど……」

二人が辣油を少しお皿に出してまじまじと見つめていると、マリーが渡した服を持って立ち上がった。

「お兄ちゃん、着替えてきても良い？」
「もちろん。気に入ってくれた？」

マリーに渡したのはヴァロワ王国の伝統衣装だ。マルティーヌと服を買った時に、マリーにも似合いそうだと思って購入していた。うちのために布もいくつか購入したので、作りたければ父さんと母さんの衣装も仕立てることはできる。

「とっても可愛い！」
「ふふっ、良かった。じゃあ着替えて見せてくれると嬉しいな」
「分かった！　ちょっと待っててね！」

マリーはよっぽど嬉しかったのか、かなりテンション高くメイドさんを連れて部屋を出て行った。俺はそれを見送って、辣油に興味津々の二人に意識を戻す。

「それは辣油って言うんだけど、食べ物というか調味料かな。新しく開発してる餃子があるでしょ？　あれはそのままでも美味しいと思うけど、これに付けるとまた違った味わいが楽しめると思うんだ」
「餃子に付けるのね……！　それは試してみたいわ」
「確か作ってまだ焼いてない餃子が冷蔵庫にあったはず。すぐに焼いてこようか」

父さんがそう言って立ち上がったのに、母さんも賛同して二人で忙しく部屋を出ていった。そうして気付いたら、部屋には俺とファブリスだけだ。

「ファブリス、皆いなくなっちゃったよ」

苦笑しながら話しかけると、ファブリスは全く気にしてなさそうに尻尾を一度だけパタンと振って大あくびをした。

『すぐに帰ってくるんじゃないか』
「まあ、そうなんだけどね」
『それよりもレオン、我は串焼きが食べたいぞ』
「あ、そういえばさっき渡さなかったっけ。でもファブリスはもう数え切れないほど食べてるんじゃない？」
『いくらでも食べたいのだ』

……本当に食いしん坊だよな。俺はちょっとだけ呆れつつも、なんだかんだファブリスが可愛いので串焼きの肉を五本分、串から外

してお皿に盛ってあげた。

「はいどうぞ」

『恩に着るぞ！』

「そういえばさ、この串焼きに辣油って合うのかな。しつこくなりすぎる？」

凄い勢いで肉を頬張るファブリスの様子を眺めつつ、ふとテーブルの上に置かれた辣油が視界に入ってそう呟くと、ファブリスはキラキラと瞳を輝かせた。

『それは試してみる価値がありそうだ。主人、辣油を頼む』

「はいはい。こんなものかな？」

たっぷりと辣油をかけたお肉をファブリスが口に入れると……、思いっきり顔を顰めた。やばい、顔が面白い。俺は思わず吹き出しそうになったのを必死で抑えた。

『あ、主人、辛すぎるぞ！』

「ごめん。ちょっとかけすぎた？」

『絶対にかけすぎだ。もう少し減らしてくれ』

「了解」

別のお肉に今度はスプーンで一滴れ程度のラー油をかけてあげると、それを口にしたファブリスは鷹揚に頷く。

『うむ、これは美味い』

「かけた方が良い？」

『……いや、どちらも美味いという感じだな。味変には良いだろう。しかし元の味が濃いので、かけない方が好みという者もいるだろう』

「確かに」

それからは俺もファブリスのお肉を少しもらって辣油の可能性について考えていると、父さんと母さんが着替えたマリーと共に部屋に戻ってきた。

415、マリーの可愛さと辣油の可能性

マリーは無邪気な笑顔を浮かべながらも、優雅な動きで俺の下まで歩いて来てくれる。こうしていると完全に貴族子女にしか見えないな。

「お兄ちゃん！　どう、似合ってる？」
「うん。すっごく可愛い。めちゃくちゃ似合ってる」

本心からマリーのことをベタ褒めすると、マリーは嬉しそうに破顔して、後ろでその様子を見守ってくれていた父さんと母さんには苦笑を向けられた。

「着心地はどう？」
「スカートが細いから歩くのが少し大変だけど、着心地は良いよ！体にピッタリしてる感じ」
「タイトスカートだからね」

歩幅がどうしても小さくなってしまうので、走ったりはできないのだろう。まだ貴族教育を受けていない時のマリーだったら、絶対に嫌だってすぐに脱いでいた気がする。

『マリー、似合ってるな』
「本当！？」

ファブリスが寝そべった状態のまま顔を上げてそう言うと、マリーはよっぽど嬉しかったのかファブリスの体に抱きついた。

「へへっ、ありがとう。ファブリスはいつもふわふわで気持ちいいね」
『我の毛は極上だからな』

なんか、やっぱりファブリスに負けてる気がしてならない。ちょっと悔しい、いや凄く悔しい。
俺は二人がイチャイチャと戯れているのを横目に、間に割って入って邪魔してやりたい気持ちをなんとか抑え込んで、父さんと母さんと辣油についての話を再開することにした。

「父さん母さん、餃子が冷めないうちに試してみようか」
「確かにそうね。せっかくの焼きたてだもの」

父さんが持っていたお皿を机に置いて、母さんが持ってきた小皿に餃子を一つずつ移した。そして辣油をスプーンで掬って、一滴れ垂らす。

「このぐらいで良いの？」
「もう少し多くても良いかもしれないけど、辛いからそのぐらいから試してみたら良いかも」
「分かったわ。マリーとファブリスも食べる？」
「うん！」
『もちろんだ』

母さんが一人一つ準備をしてくれて、皆で一斉に辣油をかけた餃子を口に入れた。
おおっ、やっぱり合う。これは美味しい。でもこうして餃子に辣油と来たら、醤油が欲しくなってしまう。

「美味しいわね」

「良いアクセントになってるね。ただこの辛味って言うのかな、これが苦手な人はいそうだ」
「そうね。任意で味を変えるのに使ってもらうのが良いかもしれないわ」

そうして二人が真剣に話し合っている横で、ファブリスは尻尾を揺らしてご機嫌で、マリーは少しだけ顔を顰めていた。

「マリーは苦手？」
「……うん。舌がヒリヒリする」
「ちょっと辛いからね」

やっぱり子供には不評らしい。確かに俺も辛いものは美味しいっていう記憶があるからこそ美味しく食べられるだけで、それがなかったら舌は痛いし好きにならなかっただろう。

「マリーはこっちを食べる？」

口直しのためにとクッキーを数枚取り出すと、マリーは瞳を輝かせてそれを受け取った。

「ありがとう！」
『なんだ、マリーはこれが苦手なのか？』
「うん。舌が痛くて美味しくない……」
『では残りは我が食べよう。主人、辣油をもう少しかけてくれるか？』
「はいはい」

マリーが少し齧って残っていた餃子は、食いしん坊ファブリスの胃の中に収まった。ファブリスは餃子も辣油もかなり気に入ったみ

たいだ。

「レオン、これは餃子だけじゃなくていろんな料理に使えそうだ。最高のお土産だよ、ありがとう」

「気に入ってもらえたなら良かったよ」

「辣油をもっと美味しくすることもできそうよね……例えばもう少し塩を入れたらどうかしら。後はニンニクも合いそうじゃない？」

そういえば、この辣油にはそういうものって入ってないかも。複雑な味じゃなくてシンプルな辛味が主だ。辣油自体には混ざり物が少なくて赤い油って印象が強い。

「母さん、それ絶対に美味しくなると思う」

「ロアナ凄いよ……ニンニクは生のまま入れるべきかな。それとも火を通してから？」

「そこは試してみましょう。細かく刻むのもありかもしれないわよ」

より美味しい辣油になったら、もっと幅広く料理に使えるようになるだろう。二人が作る料理が楽しみだ。

「ティノにも相談して、また色々と試してみようか」

「そうしましょう」

そうして辣油の扱いについてこれからの方針が決まったところで、俺は気になっていたことを口にした。

「食堂を始める準備ってどこまで進んだの？」

「実は結構頑張ったのよ。内装の工事は数週間前から開始されてるし、従業員の募集もしてるわよ」

「え、そんなに進んだんだ！」

使用人を使って進めないといけないし二人には大変かと思ってたけど、そこまで進んでるのは朗報だ。

「数日後にロニーとティノに立ち会ってもらって、父さんと母さんで面接をする予定なんだ」

「結構応募してきてる人がいる？」

「それが凄い数みたいなのよ。大公家の名前って凄いのね」

大公家が新たに食堂を始めるってなったら、応募する人は多いだろう。貴族家や商家からスパイ的な役割で送り込まれてる人もいそうだ。

「全員と面接するのは大変じゃない？」

「大丈夫よ。ロニーとティノが事前に面接して数を絞ってくれてるから。本当にありがたいわ」

「父さん達も立ち会うって言ったんだけど、最初の面接は人柄や料理スキルじゃなくて、大公家にふさわしいかどうかを見極めるだけだから大丈夫って言われたんだ」

それはロニーとティノに感謝だな。父さんと母さんはまだ貴族社会に慣れてないし、裏の思惑になんて気付けないだろうから。二人がふるい落としてくれてるなら安心できる。

「俺も大公家で働く兵士を面接するときは、事前にロジェが数を絞ってくれたし、それは使用人の仕事だから気にしなくて良いと思うよ」

「そうなのかい？」

「うん。二人はこれからの面接を頑張れば良いんだよ」

俺のその言葉に父さんは納得したように頷いた。俺が面接に顔を出したら二人の練習にならなくなるから行かないけど、後でロニーにどんな様子だったか聞こう。

「それにしてもそこまで進んでるなら、食堂はあと数週間で開店できるかな」

「そうね……そのぐらいかしら」

「一番時間がかかるのは内装だろうから、それが終わり次第かな」

あと二週間で降誕祭があるし、それが終わっても一週間は忙しさが続くはずだ。だからその忙しさを過ぎて落ち着いてからの開店が良いかな。

「そろそろ開店日を決めちゃおう。決まってた方が準備をするのにも予定を立てられやすいと思うから。……例えばだけど、降誕祭が終わって二週間後の火の日はどう？」

「うーん、父さんは良いと思うんだけど、新しく雇う予定の皆は準備期間が短くないかい？」

確かにそうか……今回の食堂は貴族向けでないとは言っても中心街にある食堂だから、最低限給仕の振る舞いは身につけてもらわないといけない。後は新しい調理法もだ。

「ロジェ、中心街の食堂で平民向けにやってる食堂やカフェの給仕レベルだったら、未経験からどのぐらいの期間で身に付くと思う？」

「そうですね……高いレベルを求めないのでしたら、一週間ほどあれば十分かと」

意外と短いんだな……でもこれはロジェの基準だから、一般的にはこれの倍と考えておこう。そうすると今から四週間後の開店はか

なり慌ただしくなりそうだ。まだ従業員の選定も終わってないんだし。

「それなら、今から六週間後の火の日に開店予定はどうかな」
「六週間後か……父さんは良いと思うよ」
「私も賛成よ。それだけあれば準備は完璧にできるもの」
「じゃあその予定で進めて欲しい。人気が出たら二号店、三号店って出す予定だからよろしくね」

俺のその言葉に二人がやる気に満ちた表情で頷いたところで、食堂に関する話は終わりになった。

そうしてその後は料理長が張り切った美味しい夕食を堪能し、屋敷で働く皆にも帰還の挨拶をして楽しく夜は更けていった。

416、ジェロムに相談

次の日の朝。俺は遠征の疲れからか昼頃までぐっすりと眠り、昼食の一時間前にやっとベッドから出た。さすがに子供の体で長期間の旅はキツいみたいだ……マルティーヌもちゃんと休んでるかな。

「レオン様、おはようございます」
「ふわぁ～、ロジェ、おはよ」
「まだ眠られますか？」
「ううん。さすがに寝過ぎたからもう起きるよ」

ロジェが用意してくれた桶を使って顔を洗い、服を着替えた頃にはさすがに目も覚めた。今日はジェロムとヨアン、あとマルセルさんのところに行きたかったんだけど、寝過ぎたから全員を回るのは難しいかな。

マルセルさんのところには明日行くことにして、今日は屋敷にいる二人のところを回るか。

「昼食まで少し時間がありますが、昼食のお時間を早めますか？」
「そうだね、できるのなら早めてくれるとありがたいかな。お腹空いちゃったし」
「かしこまりました」

それからエミールがいつもより三十分早い時間に昼食を手配してくれて、一緒に時間を早めた家族皆と楽しく昼食を済ませた。そして食休みをして、やってきたのは裏庭の畑だ。

「ジェロム、久しぶり」

「レオン様、お久しぶりです」
「あ、敬語を勉強したの？」
「はい。アルノルさんに叩き込まれました」

苦笑しながらそう答えたジェロムの口調には、ほとんど不自然さはなかった。俺がいなかった約六週間で敬語を覚えさせるとか……アルノルが優秀すぎる。

「まだ完璧じゃないので、変な口調だったら申し訳ありません」
「ううん、全然大丈夫だよ。自然に使えてる」
「ありがとうございます」

確かに細部を指摘したらもう少しなのかもしれないけど、ほとんど使えなかったところからここまで上達したんだから凄い。

「勉強頑張ってね。それで今日ここにきた理由なんだけど、ジェロムに育てて欲しいヴァロワ王国産の植物があるんだ」
「それって、他国の植物ですか！？」
「うん。ここで試しに育ててみて、最終的には領地で大々的に育てたい」

ジェロムは他国の植物という言葉に瞳を煌めかせている。やっぱり誰でもいくつでも、自分が興味のあるものにはこんな表情になるんだな。

「まずはこれ。カカオって植物の苗なんだけど」
「カカオって、ヨアンが研究してるやつですか？」
「そう、知ってるの？」
「はい。ヨアンとはよく話をするんです。野菜入りのクッキーを作りたいって時にも相談されました」

この二人が仲良かったのは驚きだ。でも確かに、職務上共通点はあるのかもしれない。これからカカオを育てるにあたって、二人が協力してくれるならより上手くいきそうだから良かった。

「それなら話は早いね。そのカカオはヴァロワ王国周辺でしか上手く育たないんだけど、温室を作ってなんとかラースラシア王国でも育てられないかと思ってるんだ」

「……温室とはなんでしょうか？　室内で、木を育てるのですか？」

ジェロムの頭の上に、はてなマークが浮かび上がっているのが見える気がする。温室なんて概念がないからな。

「そう。でも室内というよりも半分は外みたいなイメージかな。地面はそのままに、空間だけを囲う感じにするから。全面ガラスで作れたら最高なんだけど、それはさすがに難しいから石造りか木造か、その辺は色々試してみようと思ってる。大きめのガラス窓を壁面と天井に付けて日照不足にならないように気をつけて、あと温度調節は冷風器と温風器でやる予定だよ」

そこまで話を聞いて、ジェロムはなんとなく理解できたのか曖昧に頷いた。とりあえず……人為的に気温を調節して、この国では育たない植物を育てるんだと理解してくれれば良いか。

「なんとなくは分かりました。そこでカカオを育てれば良いんですね」

「そう。あとはコーヒーの木と、各種香辛料もできれば育てて欲しい」

俺はそう言いながら、アイテムボックスからそれぞれ種や苗を取

り出した。時間が許す限りたくさん仕入れてきたから、相当な量になっている。

「す、凄いですね……」

「かなり大変だと思うんだけど、頼んでも良い？　一応それぞれ確認できた範囲で育て方はこの紙に書いてあるから、文字が読めなかったら誰かに聞いて頑張ってほしい」

「かしこまりました」

ジェロムは紙を受け取って、反対側の拳を握り締めて大きく頷いてくれた。このやる気なら相当頑張ってくれそうだ。これでとりあえずはジェロムにお任せで良いかな。

「温室は早めに作り始めるけど、今の季節は結構暑くなってるから、外でも育つと思う。もし全部ダメになったとしてもまた買いに行けば良いから、あんまり気にしないで色々と試してね。よく育つやり方とか、より美味しく育てる方法とか、見つけ出してくれたら嬉しい」

「はい。頑張ってみます」

「ありがとう。よろしくね」

後は俺も定期的に見に来て、ジェロムと一緒にどんなふうに育つのかデータを取ることにしよう。それを蓄積して領地で大規模に栽培したい。

どこまでいっても温室が必要だから価格は高くなるんだけど、それなら付加価値をつけて高くても買ってもらえるようにすれば良いのだ。

そうだ、育てた後にどんなものになるのか知っておいた方が良いかな。

「ジェロム、ちょっとこっちで休憩しようか」

庭師が休憩できるようにと日差しが遮れるようになっている場所に、テーブルを取り出してその上に香辛料を使った料理を乗せる。

「香辛料の味付けを知っておいた方が良いと思うんだ。いろんな香辛料を混ぜちゃってるからよく分からないだろうけど、とりあえずどんな系統の味かだけでも食べてみて。あとはコーヒーも飲んでみてほしい。コーヒーの木は実の中にある種を使って飲み物にするんだ」

そう説明しながらいろんな料理を少しずつ取り出すと、ジェロムは真剣な表情で串焼きを手に取った。

「これが香辛料で味付けられているのですか？」

「そう。確かその串焼きは……これとこれ、あとこの辺が使われてたはず」

「独特な香りですね……食欲をそそられます」

ジェロムは真剣に串焼きの香りを嗅いで、俺が後から出した香辛料自体も手に取っている。

「いただきます。……これはっ、美味しいですね」

「ははっ、美味しいよね」

相当驚いたのか、ジェロムが今までにないほどに瞳を見開いている。

「香辛料とは凄く可能性のある植物ですね……こちらをそのまま食

べてみても良いでしょうか？」

「香辛料をそのままってこと？　多分大丈夫だと思うけど……」

そのままって美味しいのだろうか。辛かったり苦かったりするイメージだけど。俺がそんな心配をしている間に、ジェロムはもう香辛料を手に取っていた。

417、香辛料とコーヒー

「そのままだと味が分かりやすいですが、これが美味しいかと言われると……微妙な気がします。いくつかを混ぜただけでなぜここまで美味しくなるのか、不思議ですね」

意外にもそこまで刺激が強いわけではないようで、ジェロムは普通に感想を述べている。そんなジェロムの様子に気になって俺も香辛料を少し舐めてみると……普通に味を楽しめた。

塩みたいなもので、少量なら美味しいのかもしれない。

「こちらの飲み物は……コーヒーでしたか？」

「うん。コーヒーの実の中にある種を粉状にして、その成分を抽出した飲み物なんだ。かなり独特な香りと味がして苦いから、まずは少量を飲んでみてくれる？　苦さが苦手だったら牛乳で割ったり砂糖を入れると美味しくなるよ」

ジェロムはその説明に少しだけ飲むのが怖くなったのか、恐る恐るカップを手に持ち香りを嗅いだ。そしてしばらくコーヒーを見つめてから、意を決したようにぐいっとブラックのコーヒーを口に含む。

「どう？　やっぱり苦手？」

「……いえ、なんだかとてもクセになる味です」

ブラックでも大丈夫みたいだ。それどころか癖になると言いながら、飲み干す勢いで口にしている。

「ちょっと待って！　一応牛乳入りと砂糖入りも飲んでみてくれる？」
「……かしこまりました」
俺が止めなかったら確実に全部飲み干してたな。ジェロムは俺から牛乳を受け取り、少しだけ入れてかき混ぜてから、またカップを口に運んだ。そして首を傾げて、今度は砂糖を追加する。
そうして味を変えながらコーヒーを飲み終え……
「私は圧倒的にブラックが好きですね」
カップを置くとすぐにそう言い切った。やっぱり歳を重ねてる人は、ブラックコーヒーが好きな割合が高いのかもしれない。リシャール様もそうだったから。
「ブラックは苦くない？」
「この苦味がとても美味しいです。最初に口に入れた時には驚きましたが、飲めば飲むほど癖になると言いますか」
「そうなんだ……じゃあコーヒーの栽培も頼んで良いかな？」
「もちろんです！　私にお任せください」
ジェロムはやる気十分な様子で拳を握りしめて、最初に渡した苗や種に視線を向けている。この様子なら任せても大丈夫そうかな。
「カカオとコーヒー、それから各種香辛料。すべて我が国でも育てられるということを証明してみせます」
「ありがとう。頼もしいよ。じゃあ直ぐに温室の設置を依頼するから、設計士が来た時にまた話し合いをしようか」
「かしこまりました。よろしくお願いいたします」

屋敷の庭に温室とか、なんだか夢があるな。設計上できればだけど、温室の中にも一部にお茶会をできるスペースを作りたい。そうすれば冬でも外でお茶会ができることになる。綺麗な花を植えたら、マルティーヌが喜んでくれるかな……

やばい、楽しくなってきた。温室を二つ作るのもありかもしれない。一つは作物の栽培用でもう一つは観賞用だ。設計士に色々と相談しよう。

「そういえばレオン様、レオン様が出かけられている間に米が大量に収穫できております。保管してありますがいかがいたしますか？」

「本当！？　それはもらっていくよ」

米もこれからは大量に手に入るな。いくらでも米料理が食べ放題だ。香辛料を使ってカレーを作ってカレーライスを食べたいし、醤油や味噌を作って米と共に和食を作りたい。

そろそろ領地にも手を出す時期かな……米を大々的に育てるには領地でしか無理だし、醤油や味噌の開発も広い土地が必要だ。

ジェロムが育てるのに成功したら、ヴァロワ王国の植物も大きな温室を作って大々的に育てたい。

これから大きなイベントは降誕祭が終われば しばらくはないだろうし、降誕祭が終わってから領地経営にもついに手を出そうかな。

まずは領都にする街を決めてそこを発展させて、人を雇わないといけないし領民も募集しないとだ。さらに魔物の森への対処にも大公家として対峙しないといけない。そのためには大公家の私兵団も作りたいんだよね……まだまだ数が足りないな。

やりたいこと、やるべきことがたくさんあって大変だけど、ちょ

っとわくわくする。自分の好きなように街を作れるって、責任もあるけど絶対に楽しいだろう。

「レオン様、なんだか楽しそうですね」

「うん。これから大公家としていろんな事業をやるんだけど、それがどれも楽しみなんだ。ジェロムにも色々と手伝ってもらうから覚悟しといてね」

「ははっ、かしこまりました。そろそろ隠居かという歳ですが、長生きしなければいけませんね」

ジェロムはそう言って笑っているけど、まだまだ若く見える。確か歳は五十歳を超えてるんだけど、ガタイが良くて見た目は若々しく健康的だ。

それからはジェロムに米の保管場所まで案内してもらい、大量の米をすべてアイテムボックスに収納してから畑を後にした。ヴァロワ王国の作物がどこまで育つのか楽しみだ。

「ロジェ、次はヨアンのところに行くよ」

「かしこまりました」

ジェロムと別れて畑から屋敷に入り、ヨアン専用の厨房に向かった。中に入るとヨアンは降誕祭用のミルクレープを作っていたようで、真剣な表情で果物を盛り付けているところだった。

「ヨアン、今大丈夫？」

「……もう少しだけ進めて良いでしょうか？」

「もちろん。キリが良いところまでやってて良いよ」

ヨアンは俺の返答を聞くとすぐに作業を再開したので、俺はヨア

ンの作業を待つために、厨房の中に椅子を取り出してそこに座った。そしてクッキーも取り出して、お腹を満たしながら待つ。

厨房を見回すと目に入るのはミルクレープに関係するものばかりで、チョコレートに関しては影も形も見当たらない。さすがにまだ完成はしてないか。まあ急ぐことではないし、ゆっくり開発してくれれば良いんだけど。

「ロジェとローランも食べる？」
「ありがとうございます」
「いただきます」

最近二人はこういう声掛けに、素直に答えてくれるようになったのだ。前は遠慮して食べてくれることはなかったけど、最近は三割ぐらいの確率で受け取ってくれる。

周りに誰がいるのかやその後の予定によるみたいなんだけど、なんにせよ一緒に美味しいものを共有できるのは嬉しい。

「飲み物も飲もうか」

そうして俺達が机も設置して飲み物とクッキー、さらにケーキまで取り出してお茶を楽しんでいたところに、やっと作業が終わったらしいヨアンがやって来た。

418、ヨアンにお土産

「レオン様、お待たせいたしました」

そう言ったヨアンは顔に苦笑を浮かべている。しかし俺がヨアンの分の椅子も準備すると、躊躇いなくそこに座ってくれた。

「さっき作ってたのは降誕祭用のミルクレープ？」

「はい。しかしまだ完成はしていなくて、あと少し改良を加えようと思っています。数日以内に完成する予定ですので、その時には試食と評価をお願いしても良いでしょうか？」

「もちろん。楽しみにしてるよ」

俺から見たらさっき作ってたミルクレープは完璧に見えたけど、まだヨアンは納得できていないようだ。正直に言うとさっきのやつを食べたいけど……ここは我慢して完成品を待つことにしよう。

「今日ここに来た理由なんだけど、ヴァロワ王国のお土産を持って来たんだ。まあお土産というか……新しくスイーツに使えそうな植物なんだけど」

俺がそう言いながらテーブルの上にコーヒーの実、種、粉末にしたもの、そして淹れたコーヒーを取り出して並べると、ヨアンの瞳がキラキラと輝いた。

「初めて見る植物です！」

「コーヒーって言うんだ。この実から取り出した種を乾燥、焙煎して粉末状にして、熱湯で抽出したのがこのカップに入ってるコーヒ

ーだよ。苦いんだけど少し飲んでみてくれる？」
「かしこまりました」

ヨアンは真剣な表情でカップを手に持つと、しばらく匂いを嗅いだり見た目を確かめたりしてから、少しだけ口に含んだ。

「……確かに苦いですね。独特な香りと味です。こちらがスイーツに使えるのでしょうか？」
「うん。次はそのコーヒーに牛乳を入れて飲んでみて。その次は砂糖も入れてみて欲しい」
「牛乳と砂糖ですね。かしこまりました」

ヨアンは立ち上がると棚からカップをいくつも持って来て、それらにコーヒーを少しずつ注いだ。そして冷蔵庫から牛乳を持ってくると、三つのカップにそれぞれ量を変えて注ぐ。分量を変えて味を確かめてみるみたいだ。

「……おおっ、牛乳と合いますね。少しでもコクが出て美味しいのですが、たくさん入れるとほのかな甘味を感じられて好きです」
「そうなんだよね。俺も牛乳をたくさん入れたものが一番好きかな」
「では次は砂糖を入れてみます」

砂糖は牛乳で割られた三種類のコーヒーの他に、ブラックコーヒーにも入れられた。そういえばブラックに砂糖だけを入れる人も……少ないけどいた気がするな。今まで試してなかった。

「砂糖は少量でも甘さが際立ちますね……また違った味わいになります。牛乳と共に入れた方が合う気がしますが、コーヒーに砂糖だけを入れるのも面白いです」

そうしてヨアンは一通りコーヒーを飲むと、最後に多めの牛乳を入れたコーヒーを手にした。それが一番気に入ったのかもしれない。

「コーヒーについてどう思う？」

「とても面白いと思います。このような素敵なお土産をいただけて光栄です。本当にありがとうございます」

「気に入ってもらえて良かったよ」

「それでこのコーヒーを、スイーツに使うのですね」

「うん。クッキーに練り込んだり、ケーキの生地に入れたり、生クリームに混ぜてみたり、色々と使えると思うんだ。時間がある時で良いから試してもらえないかな？」

俺のその問いかけに、ヨアンは食い気味で頷いた。

「もちろんです！　必ず美味しいコーヒーのスイーツを作ってみせます！」

「他にも仕事があるだろうから、無理せずにね」

この様子ならコーヒーのスイーツは早くに完成しそうだ。チョコレートとは違って、比較的そのまま使えるし開発しやすいだろう。

コーヒー味のケーキとかって美味しいんだよね……楽しみだ。

「じゃあコーヒーはこのぐらいにして、他のお土産も出すね」

「他にもあるのですか！」

「うん。ヨアンにとってはコーヒーほどに重要なものではないと思うけど」

俺がアイテムボックスから出したのは、いくつかの香辛料だ。香辛料って基本的には料理に使うものだけど、スイーツにも使えるんじゃないかと思ってヨアンにも渡すことにした。特にこれ、シナモ

ンがあったのだ。

「不思議な香りがするものばかりですね……」

「そこにある筒状の不思議な形のやつがあるでしょ？　それシナモンって言うんだけど、パンやスイーツに合うと思うんだ。例えばパンに溶かした砂糖をかけて、さらにシナモンで香り付けしたりとか。あとは……熱したリンゴにも合うと思う」

俺のその言葉を聞いて、ヨアンはやる気を滾らせたのかガタンっと音を立てて立ち上がる。

「レオン様！　リンゴをお持ちでないですか？」

「もちろん持ってるよ」

苦笑しつつ答えると、ヨアンに良い笑顔で一つくださいと言われたのでリンゴを渡す。

「ヨアン、クレープの中身にシナモンで味をつけて焼いたリンゴとか合うと思うよ。それに生クリームも入れたらもっと美味しいかも。いや、カスタードクリームの方が合うかな」

「リンゴにシナモン、さらにカスタードですね。今作ってみても良いでしょうか？」

「もちろん。楽しみにしてるよ」

俺が思いつきで話したレシピをすぐに作ってくれるようで、ヨアンは楽しそうにリンゴの皮を剥いて小麦粉や卵を冷蔵庫から出している。

こうしてすぐにスイーツを作ってもらえて食べられるなんて、最高の立場だよな……

「レオン様、こちらのシナモンは基本的に粉状にして使うのでしょうか？」
「そうだね。でもさっき飲んだコーヒーやお茶を、スティックのまま混ぜるっていう使い方もあるよ。それで混ぜることで香りがつくんだ。ただスイーツに使う時は基本的に粉末状にしてからかな」
「かしこまりました」

ヨアンがシナモンを砕き始めると、俺がいるところにまで微かに香りが漂ってきた。さらにヨアンはコーヒーも使ってみるようで、コーヒーの香りまでやって来る。

ふぅ……幸せな空間すぎる。コーヒーやシナモンの香りがすると、お洒落な日本のカフェにいるような錯覚に陥る。ついにはこの世界でもこの香りが楽しめるようになったのか。
やっぱりコーヒーって良い、なんだか落ち着く。別にコーヒーが好きなわけじゃないんだけど、コーヒーの香りは凄く好きだ。

「レオン様、本日はどれほどお時間がございますか？」
「今日は他に予定がないから、夕食の時間までは大丈夫だよ。だから急がなくて良いからね」
「かしこまりました。ありがとうございます」

スイーツができるまではのんびりと過ごすことにしよう。ヴァロワ王国に行って帰ってきてからも忙しく動き回ってたから、たまにはこういう時間も良いだろう。

419、スイーツの試食

一時間ほどロジェとローランと話をしながらのんびり過ごしていると、厨房の中に香ばしい良い香りが漂ってきた。ヨアンがオーブンで何かを焼いているようだ。

「良い香りだね」
「本当ですね……お腹が空いてきました」
「レオン様の護衛になり、すっかり甘いものが好きになってしまいました。幸せの香りですね……」

三人で良い香りを堪能していると、大きな皿にたくさんのスイーツを載せたヨアンがテーブルに戻ってくる。

「お待たせいたしました。こちらがレオン様から助言いただいた、クレープのリンゴ入りシナモンです。カスタードも入っています。それからこちらはシュークリームで、シュークリームの皮部分にシナモンをかけ、中のカスタードにも少しシナモンを入れてあります。それからこちらがコーヒーを入れて作ってみたシフォンケーキです」

めちゃくちゃ美味しそう……！！　どれもこれも食欲を刺激する最高の匂いを発してるし、見た目も良い。さすがヨアンだ。

「凄く美味しそうだよ。さっそくいただくね」
「ぜひ召し上がってみてください。ロジェさんとローランさんもどうぞ」
「ありがとうございます。いただきます」
「いただきます。美味しそうですね」

ヨアンが持ってきたお皿にロジェが素早く取り分けてくれたので、俺はカトラリーを受け取って目の前に給仕されたお皿に向き合った。ロジェはさすがの早業だ。

まずはクレープからいくかな。焼きたてで温かそうなクレープの皮にナイフを入れると、中からたくさんのカスタードクリームと焼かれたリンゴが出てくる。さらにシナモンの香りも結構強く香っている。

「え、めっちゃ美味しい」

一口食べて、思わずそう呟いてしまった。これは美味しすぎる、シナモンってこんなに美味しかったっけ……カスタードにもリンゴにも合いすぎている。

「良かったです。私も先ほど味見をしたのですが、シナモンはかなり可能性のある食材だと思います」

「……美味しいですね」

ロジェが珍しく瞳を見開いてクレープを咀嚼している。ローランは満面の笑みで無言で食べ進めているようだ。

「お店でも使えそうかな」

「はい。まだまだ改良が必要ですが、これはクレープの新メニューとして売りに出せると思います」

そうなるとシナモンがたくさん必要になるな。これからさまざまな香辛料を輸入するけど、シナモンは多めに輸入しておこう。

「シュークリームもいただくね」

俺はピュリフィケイションで両手を綺麗にし、素手で掴んでシュークリームを口に運んだ。ロジェには微妙な表情を向けられているけど、ここには体面を気にしなければいけない人はいないから良いのだ。

やっぱりシュークリームは手掴みだよね……ナイフとフォークでは食べ辛すぎる。だからシュガニスでは、シュークリームはあまり人気がないらしいのだ。

平民向けのお店を開いたら、その時はシュークリームが大人気になると思う。これは素手でかぶりついてこそ美味しいから。

「これ、凄く美味しい。普通のやつより好きかも」

「やはりそう思われますか？　私も同じ意見です」

ヨアンはそう言いながら、自分用に持ってきていたシュークリームを一口食べた。そして幸せそうに頬を緩める。シュガニスでは人気がないけれど、ヨアンはシュークリームが好きなのだ。俺も好きなので二人でよく食べている。

「シナモンってカスタードに合うんだね」

「はい。カスタードの美味しさを引き立ててくれる気がします」

「ロジェとローランはどう？」

「美味しいですが……やはりシュークリームは食べ辛さが気になってしまいます」

「私も美味しいと思うのですが、リンゴ入りのクレープの方がより美味しいと感じました」

やっぱりシュークリームはあんまり人気がないな。まあ二人はナ

イフとフォークで食べてるから、それも仕方がないのかもしれないけど。
シュークリームをナイフで切り分けようとすると、潰れてカスタードが飛び出してしまって、どうしても美味しさは半減するのだ。

「手掴みで食べたらもっと美味しいと思うんだけどね」
「……それは、やはり抵抗感が強いと言いますか。前に一度やってみたのですが、手掴みで食べているという方が気になってしまい、味に集中できなかったのです」

これは文化の違いだよな……この国の貴族社会では手を汚すというのをかなり嫌うのだ。だからクッキーもできる限り手に粉がつかないものが好まれるし、パンも同様だ。
サンドウィッチだって手が汚れる可能性が高いからと、ナイフとフォークで食べるのが一般的なのだ。

そんな国でカスタードが手にべったりと付く可能性のあるシュークリームは、手掴みで食べるのに抵抗感が強くなってしまうらしい。
貴族向けに売る時には、その辺の文化の違いも意識して料理を開発しないといけないのが大変だ。

今度お米を広めるために何か料理を作る予定だけど、おにぎりだけは難しいと思っている。海苔も作って巻いたとしても、海苔って割と手に付くイメージだし、何よりもおにぎりはよほど強く握らないと途中で割れて溢れたりするから、それがかなりのマイナス要素になってしまう。
おにぎりを広めるなら平民向けになるかな。

「次はコーヒー入りの方を食べてみようか。多分ロジェはこれが一番好きなんじゃないかな」

俺はおにぎりから思考を戻して、目の前のスイーツに集中することにした。コーヒーにハマっているロジェは、俺のその言葉に少しだけ瞳を輝かせる。俺はそんなロジェに苦笑しつつ、皆が手を出しやすいように、シフォンケーキを口に入れた。

「……これ美味しいかも」

ふわふわで甘いシフォンケーキの中に、コーヒーの苦味と風味がしっかりと存在している。甘いものがそこまで得意じゃない人には凄く喜ばれるだろう。シュガニスには付き添いできた甘いものが得意でないお客さんもいるから、そういう人に勧めたら喜んでくれそうだ。

「本当ですね！　コーヒーの風味が素晴らしいです！」
「ははっ、ロジェは本当にコーヒーが好きだよね」

ロジェは甘いスイーツが好きだから、苦いコーヒーにはハマらないかと思っていたのに、全くの予想外だった。まあこの二つは合うから、そういう人も結構いるのかもしれないけど。

「コーヒーとは本当に素晴らしいです。スイーツを何倍も美味しくしています」
「私もそう思います！　しかしこのシフォンケーキはまだ納得できていません。もう少し……甘みを足した方が良いかもしれません」
「確かにね。蜂蜜とか加えたら美味しいかも」

俺が何気なくそう告げると、ヨアンがその言葉に食いついた。

「レオン様、素晴らしいご提案です！　早急に蜂蜜を加えて作って

みます。コーヒー特有の苦味がどうしても前面に出てしまうのが気になっていたのですが、蜂蜜でそれをまろやかにできるかもしれません」

そこまで深くは考えてなかったけど、確かにそう言われると蜂蜜は合うのかもしれない。苦いのが苦手な人には蜂蜜入りにすると良いのかも。

「楽しみにしてるよ」
「かしこまりました！」
「でもまずは降誕祭のミルクレープをよろしくね。あとはチョコレートも楽しみにしてるよ」

俺のその言葉にヨアンが楽しげな表情で頷いて、急遽行われたスイーツ試食会は終わりとなった。
ミシュリーヌ様は神界で見てたかな……もし見てたら、シナモンスイーツとコーヒー入りのスイーツを食べまくってそうだ。俺はそんなミシュリーヌ様の様子を思い浮かべて、苦笑を浮かべつつ厨房を後にした。

420、おじいちゃんと孫

「お兄ちゃん、今日は何をするの？」

今は家族皆と美味しい朝食を食べているところだ。俺が帰ってきてからも忙しく動き回っているので、マリーは少し寂しいのかそんなことを聞いてきた。

マリーが寂しがってくれるなんて……嬉しすぎる！！

寂しがってるんじゃなくてただ予定を聞いてるだけかもしれないけど、別に表情と声音は寂しそうに見えないけど……多分寂しがってるはずだ、多分。

「今日はマルセルさんのところに行くんだ。お土産を渡しに行こうと思って」

「マルセルおじいちゃんのところ！　私も一緒に行って良い？」

「え、本当に！？　ダメなんて言うわけないよ。一緒に行こうか」

俺が食い気味でそう返事をすると、マリーは満面の笑みで頷いてくれた。やっぱりマリーは天使だ。ミシュリーヌ様じゃなくてマリーの方が女神だよ。

「ファブリスも一緒に行く？」

『いや、我は屋敷でのんびりとしている。マルセルとはあの老人だろう？　あの工房は狭いからな』

「そっか。じゃあお留守番よろしくね！」

『うむ、了解した』

ファブリスはマリーに満面の笑みを向けられて、俺には見せない満更でもない表情を浮かべている。やっぱりファブリスが最大のライバルだな……

「レオン、マルセルさんによろしく伝えてね」
「手土産に餃子を持っていってくれるかい？」
「もちろん。マルセルさんは餃子を食べたことあるの？」
「ええ、食堂に行く時に工房にお邪魔しているし、マルセルさんも食堂に顔を出してくれるのよ」

そういえば食堂は、マルセルさんの工房と道を挟んで隣だったな。今思えばあの配置は大正解だった。

「マルセルおじいちゃんは餃子が大好きなんだよ！」
「そうなんだ。じゃあ一緒に持って行こうか」
「うん！」

そうして賑やかな朝食を終えた俺とマリーは、少しだけ食休みをしてから馬車に乗ってマルセルさんの家に向かった。マリーと二人で出かけるのはかなり久しぶりだ。

工房の前に馬車が止まると、マルセルさんは音で誰が来たのか分かったのか、扉を開けて俺達を出迎えてくれる。

「レオン、無事に帰ってきて良かったわい。それにマリーちゃんもよく来たな」
「マルセルおじいちゃん、久しぶりー！」
「無事に帰ってきました」

マルセルさんは駆け寄ったマリーを優しい表情で迎えて、俺にも同じ表情を向けてくれる。なんかマルセルさんに会うと落ち着くんだよね……

「中へ入るじゃろう？」
「もちろん！　お兄ちゃんのお土産がたくさんあるよ！」
「ほう、それは楽しみじゃ」

マルセルさんとマリーが並んで工房の奥に入っていくのを見届けて、俺も後を追った。ロジェとローラン、マリーのメイドさんと護衛のニコールも一緒だ。

「まだ朝食からあまり時間が経っていないので、食べ物以外から出しますね。まずはこれです」
「ほぅ、とても綺麗な布じゃな……ラースラシア王国にはあまりないほど刺繍がされておる」
「ヴァロワ王国は暑い国だからか、重ね着をして豪華さを示すことが難しいため、刺繍の文化がラースラシア王国よりも広がったのだと思います」

俺が説明をしながら布を広げていくと、マリーが嬉しそうに一つの布を手に取った。

「これ、私のお洋服と同じ柄だよ！」
「そうなのか？」
「うん！　お兄ちゃん、私のお洋服って持ってきてる？」
「持ってきてないけど……すぐ取りに戻るよ」

マリーがキラキラと輝く瞳で見つめてくるので、持っていないとだけ言うことはできなかった。マルセルさんにヴァロワ王国のドレ

スを着た姿を見せたいのだろう。

俺はマリーのメイドさんを連れてマリーの部屋に直接転移し、数分でメイドさんを二人増やして工房に戻った。

本当に転移って便利だよな……どこに行くのにも転移を使うのは面白くないから、普段は馬車を使うようにしてるけど、やっぱりこういう時には便利さを実感する。

「あれ、皆来たんだ」

「マリー様がこちらをお召しになりたいとのことでしたので、参りました」

「ありがとう。マルセルおじいちゃんに見せたいの！」

「かしこまりました。マルセル様、お部屋をお借りしてもよろしいでしょうか？」

「もちろんじゃ」

マルセルさんは少し苦笑を浮かべつつ、メイドさん達に頷いた。マリーは満面の笑みで三人を連れて部屋を出ていく。マリーもメイドさんがいる生活に完全に慣れたな。

「マルセルさんも是非この布で服を作ってください。シャツにするのがおすすめです」

「ああ、もちろんじゃ。マリーちゃんとお揃いになるな」

確かにペアルックだ。いや、マリーと同じ柄の刺繍が施されたシャツなら俺も買ったから、三人でお揃いだ。

同じ服を着て三人で歩いていたら、もう完全に祖父と孫にしか見えないんだろうな……俺はそんな場面を想像して思わず頬が緩むのを感じた。今度皆でお揃いの服を着て、シュガニスに行ったら楽しいかも。

「マリーが戻ってくるまで、他のお土産を渡しますね」

マリーはコーヒーがそこまで好きではないみたいだったので、この隙に渡してしまうことにした。多分マルセルさんはコーヒーにハマると思うんだよね。スイーツも結構好きみたいだし。

「これなんですけど、コーヒーって言います」

「凄い香りがするな……粉か？」

「はい。この粉から成分を抽出して飲み物にするんです。今から淹れてもらいますね。ロジェ、お願い」

「かしこまりました」

ロジェは僅かに口元を緩めて、楽しげな様子でコーヒーを淹れ始めた。洗練された優雅な手つきで、見ているだけで楽しめるほどだ。

ロジェは本当にコーヒーにハマったみたいだな……趣味があんまりないとか言ってたし、こうしてハマれるものがあって良かった。

「おおっ、香りがより強くなったな。今までに嗅いだことのない独特な香りだが、不思議と嫌ではない」

「コーヒーはこのまま飲むのをブラックコーヒーというのですが、それだと苦くて癖が強いので、砂糖や牛乳を混ぜて飲むのが一般的です。まずはブラックで飲んでみて、マルセルさんの好みで牛乳や砂糖を足してみてください。さらにスイーツと食べると合いますので、小さめのケーキを出しますね」

アイテムボックスに数えきれないほど入っているケーキの中から、季節の果物が乗ったショートケーキを取り出した。見たら俺も食べたくなったので、ついでに俺の分も。

カチャっと僅かな陶器の音が聞こえ、マルセルさんの前に一杯のコーヒーが供された。ロジェは満足気に微笑んでいる。

「ありがとう。ではいただこう」

マルセルさんは恐る恐るコーヒーを手にし、近くで香りを嗅いでから少し口に含んだ。

421、楽しいお昼ご飯

コーヒーを口にすると、すぐにマルセルさんの瞳が見開かれた。いつもは細い瞳が見開かれてるのは新鮮だな。

「これは……っ、美味いな」

「本当ですか。良かったです」

やっぱりマルセルさんはコーヒーが好きみたいだ。苦さに顔を顰めることなく、どちらかといえば嬉しそうに頬を緩めてもう一口コーヒーを口にした。

「とても癖になる。それにこの苦味が最高じゃ。不思議と嫌な苦味ではないな」

「では牛乳や砂糖を混ぜて飲んでみてください。俺は苦味がそこまで得意ではないので、牛乳を多めに混ぜたほうが好きなんです。マルセルさんなら少量入れるだけでも良いかもしれません」

それからマルセルさんは真剣に牛乳と砂糖を足して味を吟味し、ケーキには一切手をつけずにコーヒーを飲み切ってしまった。

「わしは牛乳を少量だけ入れたものが好きだな。そのままも良いんじゃが、それに少しの甘みが加わってより美味しくなる」

意外にもブラックが一番じゃないみたいだ。

「牛乳が入ると美味しくなりますよね。ではもう一杯淹れますので、今度はケーキを一緒に食べてみてください」

「ああ、そういえば忘れてたわい。ではもう一杯いただこう」

嬉しそうに顔を緩めたマルセルさんは、ロジェにカップを差し出してケーキを食べるためにフォークを手にした。

そしてコーヒーとケーキの組み合わせを口にしたマルセルさんは、完全にコーヒーにハマったようだ。さっきからその素晴らしさを語っている。この様子だとシュガニスでコーヒーをメニューに加えたら、男性客の増加が見込めそうだな。

俺はそんなマルセルさんの様子を眺めながら、ロジェに淹れてもらった、牛乳の方がコーヒーより量が多いカフェオレ、コーヒー牛乳とも言うを飲みながらケーキを楽しんだ。

そうして工房がカフェに様変わりして、まったりとした時間を過ごしていると、工房のドアがノックされてすぐにドアが開かれた。そしてそのドアからは……可愛く着飾ったマリーが入ってくる。

「お待たせいたしました。どうでしょうか？」

口調も立ち居振る舞いも貴族子女らしくお淑やかなものに変え、さらには優雅な微笑みを顔に湛えている。やっぱりこうしてると、完全に高位貴族のお嬢様だ。

「……マリー様、とてもお似合いです」

「ふふっ、そうでしょう？　お兄様が私に買ってくださったんだもの」

「パーティーでは、皆の目がマリー様に集まることでしょう」

マリーが貴族子女のように振る舞っていたので、というか実際に大公家子女なんだけど、マルセルさんもそれに乗って丁寧な口調と

態度でマリーのことを褒めた。
　するとマリーはお淑やかに微笑んでみせる。しかしすぐにいつも通りの可愛らしい笑顔を見せてくれた。
「マルセルおじいちゃん、どうだった？　ちゃんとできてた？」
「ああ、完璧じゃったよ。マリーちゃん、凄く似合ってるな」
「えへへ、ありがと！」

　マリーは嬉しそうに頬を緩めてから、満足したのか服を見せるのを止めて席に座った。すると机の上に置かれていたケーキに気づいたようで、途端に瞳を輝かせる。
「二人でケーキ食べてたの？　私も食べたい！」
「もちろん良いよ。何ケーキが良い？」
「うーん、ロールケーキが食べたいな」
「了解。ちょっと待ってね」

　俺はアイテムボックスの中から一本のロールケーキを取り出し、それをロジェに綺麗に切り分けてもらった。そしてマリーはコーヒーが苦手なので、ホットミルクもケーキと共に机に並べる。
「はい、どうぞ」
「私が好きなやつだ！　お兄ちゃんありがと！」

　マリーに出したのはキャラメルナッツのロールケーキだ。マリーはスイーツ全般が好きだけど、その中でもキャラメルにハマっている。
「う～ん、美味しい！」
「良かった。ヨアンに言っておくね」

マリーの輝くような笑顔を引き出してくれるスイーツには、そしてそのスイーツを作ってくれているヨアンには大感謝だ。もう少し給料を上げようかな……それかボーナスを支給するのも良いかも。

それから皆でスイーツを楽しんで、さらに一時間以上は最近の出来事についての話をして、楽しい時間は過ぎていった。そしてついに昼食の時間だ。

「マルセルさん、食べ物系のお土産もたくさんあるのですが、そろそろお昼時ですし出しても良いでしょうか？」
「おおっ、そうなのか？　それは嬉しいな。ぜひ出してくれ」
「分かりました」

俺がまず出したのは香辛料で味付けされた串焼きだ。アイテムボックスから出した途端に、空腹を刺激する香りが工房に充満する。ヤバいな……やっぱりこれは圧倒的に香りが良い。

「不思議な香りがするんじゃな」
「香辛料で味付けされてるんです。マリーも好きに食べてね」
「ありがと！　マルセルおじいちゃん、これおすすめだよ」

マリーが串焼きの中から一本手に取り、マルセルさんに手渡した。するとマルセルさんは頬を緩めながら肉を口に運び……数回咀嚼して瞳を輝かせた。

「これは美味いな！」
「良かったです。マルセルさんが好きな味だろうなって思ってたんですよね」

マルセルさんはこの歳にして肉が大好きなので、香辛料たっぷりの串焼きは好みど真ん中だろう。

「あとファイヤーリザードがまた手に入ったのでそのステーキと、それから餃子もどうぞ。餃子は母さんと父さんからです。そしてこれ、辣油っていうんですが、餃子につけて食べてみてください」

そう説明をしながら、俺は机の上に次々と料理を取り出した。お土産と餃子以外にも、パンやスープ、野菜炒めなども並べてテーブルの上を華やかにする。

「これは赤い……油か？」

「はい。少し辛いですが、餃子にかけるとより美味しくなります。辛いのが苦手じゃなかったら試してみて下さい」

マルセルさんは興味深げに辣油を手にし、お皿に取り分けた餃子にスプーンで少しだけ垂らした。そして恐る恐るといった様子で餃子を口に運ぶ。

「おおっ、こ、これは辛いな……」

「そうなんです。辛いのが苦手な人には食べるのが辛いと思います」

「ゴ、ゴホッ、わ、わしには辛すぎるわい」

辛いのは苦手なのか……マルセルさんは涙目で必死にパンを食べて、辛さを誤魔化そうと頑張っている。

「マルセルさん、これ飲んでください。冷たい牛乳です」

俺が渡した牛乳を一気飲みすると、やっと辛さが少し引いたのか

マルセルさんは体の力を抜いた。

「辛いものは苦手だったんですね。この串焼きぐらいの辛さなら大丈夫ですか？」

「ああ、それは美味いぐらいの辛さじゃった。だから辣油もそうかと思ったら、騙されたわい」

「マルセルおじいちゃんもこれ苦手なんだね。私もこれは好きじゃないの。餃子そのままの方が美味しいよ！」

マリーは仲間を見つけて嬉しいのか、満面の笑みで餃子をマルセルさんの取り皿に載せる。

「おお、マリーちゃんも一緒なのか。では二人でそのまま餃子を食べよう」

「うん！」

そうしてそれからは、皆がそれぞれ好きなものを食べて幸せな昼食の時間を過ごした。辣油は微妙だったみたいだけど、ほとんどのお土産は喜んでもらえて良かったな。

「お兄ちゃん、また一緒にマルセルおじいちゃんのところに行こうね！」

「うん。そうしよっか」

俺は楽しい時間を過ごして満足そうなマリーと一緒に、馬車に揺られて屋敷に戻った。

422、約束のお茶会

今日はお茶会にお呼ばれしている。主催はマルティーヌではなく、カトリーヌ様でもエリザベート様でもない。場所は大公家の庭にある綺麗な東屋だ。メンバーは俺と主催の女の子二人だけ。

「本日はお招きありがとうございます」

「いえ、こちらこそ招待に応じてくださってありがとう。席をどうぞ」

東屋に着くととっても可愛い女の子が席を勧めてくれた。俺は思わず緩みそうになってしまう頬に力を入れて、なんとかポーカーフェイスを保って腰を下ろす。

「とても素敵な花が咲いておりますね。思わず立ち止まって魅入ってしまいました」

「うちの庭師が丹精込めて育てているのよ。小さな黄色い花がたくさん咲いている場所は見たかしら？」

「もちろんでございます」

「あの花は私が大好きなお花なの」

「そうでしたか。一番に目が惹かれました」

俺のその言葉に、女の子は優雅に微笑みを浮かべる。そうして最初に当たり障りのない挨拶をして、お茶会は始まった。

「レオン子爵はスイーツがお好きだと伺ったのだけれど」

「お恥ずかしながら、甘いものには目がないのです」

「良かったわ。今日はたくさんスイーツを準備しているから、お好

きなだけ楽しんでもらえたら嬉しいわ」
「ありがとうございます」
俺がお礼を告げると、主催の女の子――マリーがメイドさんに視線を向けて給仕を頼んだ。
そう、今日のお茶会はマリーと俺、二人だけのお茶会なのだ。マリーの勉強の成果を発揮する場ということで、俺は兄という立場じゃなくて、レオン子爵という架空の人物設定になっている。
女性相手のお茶会は相手がたくさんいて、いつでも練習できるけど、男性相手は経験不足だということで俺が男性貴族役をやることになった。
ただ問題は俺の作法が完璧じゃないってことなんだよね……まあこれは半分お遊びみたいなものだし、それでも良いのだろう。
元々は俺がヴァロワ王国に行く前に、帰ってきたら一緒にお茶会をしようって約束したのが発端だから。
「こちらのクッキーは野菜が練り込まれているの。とても美味しいし健康にも良いのよ。ぜひ食べてみて」
「いただきます。……本当ですね。とても美味しいです」
さすがヨアンだな……野菜入りのクッキーはどんどん美味しさが増してる気がする。色合いも最初の頃より何倍も綺麗だ。
「こちらはカボチャが使われているのでしょうか？」
「そうなのよ。レオン子爵は良いものを食べていらっしゃるのね」
「いえ、マリー様ほどでは」
俺のその言葉にマリーがにっこりと笑みを浮かべ、またクッキー

を口に運んだ。マリーは本当に凄いな……子供の頃は何事にも吸収が早いと言ったって、ただの平民の娘からここまで成長するなんて。

貴族らしい言い回しも使えているし、座っている姿勢も笑顔も、さらにクッキーを食べる所作まで凄く綺麗だ。マルティーヌの所作を良く見ている俺からしても気になるところがほとんどないから、かなりレベルは高いと思う。

「こちらのクッキーはシュガニスで売っておられるのですか？」
「ええ、そうよ」
「では今度お店を訪れることにいたします。ただあのお店はとても人気店ゆえ、売り切れていることも多いのですが……」

俺がそう言ってマリーの顔をチラッと伺うと、マリーは少しだけ困ったような仕草をしたけれど、すぐに貴族の笑みに戻して優雅に頷いた。

「では本日のお土産にクッキーを包ませるわ」
「本当ですか！　ありがとうございます」
「ただお店にも足を運んでいただけたら嬉しいわ。あのお店でしか味わえないスイーツもあるのよ」
「そうなのですね……では後日、お伺いさせていただきます」

ちょっと困るような質問をしてみたんだけど、マリーの返答は完璧じゃないだろうか。さすがマリー、本当に可愛くて優秀で最高の妹だ。

そうして俺がマリーのことを心の中でベタ褒めしていると、突然俺達のお茶会に乱入者が現れた。

『む？　二人でお茶会か？』

ファブリスだ。ファブリスは甘い匂いに惹かれたのか、テーブルの上のスイーツに視線が釘付けになっている。

これはお茶会の練習もここまでかな。俺がそう思った瞬間、マリーが貴族の笑みを完全に崩して、いつも通りの可愛らしい笑みを浮かべてファブリスに飛びついた。

「ファブリス！　一緒にお茶会したいの？」

俺はそんなマリーの様子を見て苦笑を浮かべつつ、やっぱりこっちのマリーの方が好きだな、なんて貴族家当主としては微妙なことを考えていた。

貴族らしい態度を完璧に身に付けても、マリーが素を出せる場所はずっと作ってあげよう。

『うむ。美味そうな香りだ』

「じゃあ一緒に食べよ！　お兄ちゃんいいよね？」

「もちろん良いよ。ファブリス、何食べたい？」

『そうだな……シュークリームが食べたいぞ』

「私もあれ大好き！」

ロジェ達や貴族には不評なシュークリームだけど、俺達家族とファブリスには大好評なのだ。俺はヨアンがたくさん作ってくれたシュークリームの中から、カスタードが詰まったものを取り出した。マリーとファブリスは生クリームよりもカスタード派だ。

「美味しそう！」

『主人、我に取り分けてくれるか？』

「ちょっと待ってて」

俺は机の上に並べられていたお茶会用のスイーツをとりあえずアイテムボックスに仕舞い、ファブリス用の巨大な皿を取り出した。そしてそこにシュークリームを二十個載せてあげる。
さらに俺とマリーの皿も取り出して、シュークリームを二つずつ載せた。

「はいこれ、ファブリスのね。これはマリーの」
「お兄ちゃん、ありがとう！」

マリーが無邪気な笑みを向けてくれるのを見て、俺の頬は緩んだ。もう貴族役をやる必要もないし、ポーカーフェイスは良いだろう。

「マリー、両手を出してくれる？　手で食べるならピュリフィケイションで綺麗にしよう」
「分かった。はい、よろしくね」

俺はマリーの手のひらから手首ぐらいまでを魔法で綺麗にした。もちろん自分の手も綺麗にして、ついでにファブリスの口周りも綺麗にしてあげる。

「じゃあ食べようか」
「いただきます！」
『いただこう』

マリーと一緒にシュークリームを手にして口に運ぶと、シュワっと柔らかい生地の中から、溢れるほどにカスタードが飛び出してくる。やっぱりシュークリームはこう食べなくちゃ美味しくないよな……

「う～ん、やっぱりこれ好き！」
「美味しいよね。そうだ、何か飲み物も飲む？」
「うん。りんごのジュースが良いかな」
「了解。ファブリスは何が良い？」
『我は牛乳にコーヒーを数滴垂らしてくれ』
「はーい」

ファブリスはコーヒーの苦味はかなり苦手みたいだけど、あの匂いは気に入ったようなのだ。だからミルクに少しだけ垂らして、香りだけを楽しんでいる。

「やっぱり紅茶よりも、りんごジュースの方が美味しいなぁ」

マリーはジュースを見つめながらそう呟いた。お茶会では紅茶を飲まなければいけないのが嫌なのだろう。
俺は前世の知識があるからか紅茶は美味しく飲めるんだけど、基本的に紅茶って子供の舌にはそこまで美味しく感じられないのだと思う。結構苦味とか渋みがあるからね。

423、フルーツティー

子供には濃い紅茶じゃなくて薄い紅茶が出されるからまだマシだとしても、やっぱり苦味や渋みはある。もっと子供にも美味しい紅茶があったら良いんだけどな……

「そういえば、この国って紅茶に果物を入れたりしないよね」

旧チェスプリオ公国には花の香りがするお茶があったし、他の国にはあるのだろうか。ただ今まで遭遇したことはない。

「ロジェ、フルーツティーってこの国にある？」

「フルーツティーとは、果物の香りがするお茶のことでしょうか？」

「うーん、まあ似たようなものかな」

「それならばございます。ただそこまで主流ではなく、一部の女性貴族の間で飲まれている程度です。……確かお屋敷にもございますが」

「え、そうなの？　じゃあ淹れてくれる？」

「かしこまりました」

まさか存在していたなんて。紅茶の茶葉を売ってるお店には行ったことがないし、今まで紅茶にそこまでの興味はなかったからな……ロジェが淹れてくれたものを美味しく飲んでいただけだった。

ただロジェの言い方的に、生の果物が入ったフルーツティーじゃなくて、果物の皮やドライフルーツが入ったフルーツティーな気がする。それも美味しいけど……マリーが飲むなら、生の果物を紅茶に浸けたあのフルーツティーの方が良いかな。

「お兄ちゃん、果物の香りがする紅茶なら飲んだことあるよ。お茶会で出されることもあるから慣れておきましょうって」
「え、そうなの！？」
「うん。でも……ちょっと苦手だったかも。酸っぱかったの」

ベリー系のフルーツティーだったのかな。それにしてもマリーが飲んだことあって、俺がないなんて。フルーツティーは完全に女性向けなんだな。

「レオン様、お待たせいたしました」

それから数分後、ロジェに頼まれた使用人がフルーツティーの茶葉を持って戻ってきた。ロジェがそれを受け取り、何種類かのフルーツティーを淹れてくれる。

「こちらがベリー系の風味、こちらがりんご、こちらがオレンジ系です」

順番に飲んでみると、味はどれもほとんど変わらずに、香りだけが違う感じのお茶だった。確かにこれも美味しいんだけど……お茶の苦味や渋味が苦手な人は、これも同様に苦手だろう。

「ロジェ、生の果物を入れたフルーツティーはないの？」
「……生の果物を、紅茶に入れるのですか？」
「そう。一口サイズに切ったり輪切りにしたやつを」

日本にはカフェとかにあったよね。何度か飲んだことがあるけど、見た目は華やかだし味も美味しかったイメージがある。あれは贅沢な飲み物だし、貴族に流行ると思うんだけど……

「イメージが、できません。一度淹れていただいても良いでしょうか？」

そう言われても……俺も淹れ方はよく知らない。果物をガラスのポットみたいなやつに入れて、熱い紅茶を注げば良いのかな。

「とりあえずやってみるよ。熱めの紅茶を準備してくれる？」

「かしこまりました」

俺は中身が見えるようにガラス製の小さめなポットを机に置き、一応ピュリフィケイションで綺麗にした。後は果物を入れるだけだけど、何が良いんだろうな……

俺の記憶では輪切りのオレンジは入ってた記憶がある。後はりんごも絶対に入ってた。とりあえずその二つでやってみるかな。

果物と包丁を取り出して、まずはオレンジを輪切りにしようと試みて……さっそく挫折した。オレンジってこんなに切るのが大変なのか。

俺が苦戦していたらよっぽど危なそうだったのか、エミールに包丁を取り上げられた。

「レオン様、私に切らせていただきたいです」

「うん、その方が良いね。お願いしても良い？」

「もちろんでございます」

「オレンジは皮を剥かずに輪切りにして欲しいんだ。りんごは……いつものように一口サイズに切ってくれれば良いよ」

「かしこまりました」

そうしてエミールが手際良く果物を切り分けてくれたので、俺は

それをポットに入れていった。横からオレンジの断面が見えるように、綺麗に入れていく。

「お兄ちゃん、そこに紅茶を入れるの？」

「そうだよ。紅茶が果物で甘く美味しくなると思うんだ。これならマリーも苦手じゃないかなと思って」

「へぇ～、お兄ちゃんありがと！」

俺はマリーの無邪気な笑みに癒されて、マリーのために成功させてやると気合を入れて果物をポットに入れた。

そして十分な量を入れたところで、ロジェが淹れてくれた紅茶を注ぐ。これでしばらく置いておけば良いのだろうけど……これって数十分も置いておいたら冷めるよね？

ポットを熱いお湯にでもつけて、冷まさないようにしたほうが良いのかな。とりあえずやってみるか。俺は小さめの鍋に熱湯を注いでもらい、その中にポットを入れた。

「レオン様、こちらはどのぐらいの時間置いておくのですか？」

「十分ぐらいかな……それぐらいで一度飲んでみようと思う」

「かしこまりました」

それからマリーと話をしながら十分待ち、カップに一口分のフルーツティーを注いで飲んでみた。うーん、まだ果物の美味しさが出し切れてない気がする。

「ロジェ、もう十分追加かな」

後は少し砂糖を入れた方が美味しいかもしれない。確かに果物の甘味で苦味が薄れてはいるんだけど、まだまだ足りない。俺が求め

てるフルーツティーは、もっと甘さがあって紅茶の苦味や渋味はほとんど気にならなくなっているものだ。
さっき飲んだフルーツティーだと、フルーツの美味しい香りが鼻に抜けるので、逆にその後からくるお茶の渋みを強く感じてしまった。

追加で十分待つと、十分前とは明らかに紅茶の色が変わったのが分かる。ポットから慎重にカップへ注ぐと、芳醇な香りがふわっと広がった。

「どうぞ」
「ありがとう」

ロジェがカップに少しだけ注いでくれたフルーツティーを飲んでみると……まず口に入れた瞬間に、果物の甘い香りや爽やかな香りが口の中に広がった。そして次にりんごとオレンジの甘さが味としても感じられ、最後に少しだけ紅茶の苦味が残る。

これは美味いな……俺はかなり好きだ。これからはこの紅茶もバリエーションに追加して欲しい。ロジェが極めたらもっと美味しくなるのだろうし、これから先が楽しみかも。

「美味しいよ。マリーも飲んでみて。ロジェも少しだけで良いから飲んでおいてほしい。これからこの紅茶を淹れてほしいから」
「かしこまりました」

ロジェが俺の言葉に顔を綻ばせて一礼し、マリーにフルーツティーを注いでくれた。そして自分も少しだけ口に含む。

「これは……とても美味しいですね」

「だよね。中に入れる果物を変えれば味も変わると思う。後は時間を変えたりするのもありかな。それから砂糖を少し足しても美味しくなるかも」

俺のその言葉を聞いたロジェは、瞳を輝かせて楽しげな表情を見せた。これはすぐにでも美味しいフルーツティーが飲めるようになりそうだ。ロジェがやる気になったら早いから。

４２４、フルーツティーの可能性

俺はロジェと話を終えてから、マリーの方に向き直って声をかけた。するとマリーは、黙々とフルーツティーを口に運んでいる。これは美味しいのか微妙だから早く飲みきりたいのか……どっちだろう。

「マリー、フルーツティーはどう？　口に合わない？」
「……ううん。お兄ちゃん、これすっごく美味しい！」

恐る恐るマリーに感想を促すと、とても嬉しい返答がきた。顔を上げたマリーは満面の笑みだ。良かった、この笑顔が見たかったんだよね。

「苦くないし果物の味がするよ！」
「そっか。少し砂糖を入れても良いと思うんだけど、試してみる？」
「うん！」

マリーの元気な返事を聞いてから砂糖を追加すると、マリーはもう一度フルーツティーを飲んでさらに顔を輝かせた。

「砂糖が入った方がもっと美味しいかも。お兄ちゃん凄いね！」
「本当？　……本当だ。砂糖は合うね」

俺も試してみたら、少量の砂糖を入れるともっと美味しく感じられた。砂糖のあるなしは好みだろうけど、子供にも美味しいお茶をってコンセプトなら砂糖入りかな。

『主人、我も飲んでみたいぞ』
「ファブリスも？　じゃあもう少し大きいポットで作るから、ちょっと待ってて」
『うむ、分かった』

俺はロジェに追加のフルーツティーを頼んで、改めて手元にあるフルーツティーを観察した。見た目は豪華だし味も良いし……これってシュガニスで売れるんじゃないだろうか。
今ではシュガニスは、貴族達のお茶会のトレンドを生み出す店になっている。そんなシュガニスでフルーツティーを売りに出したら、瞬く間に広がってお茶会の定番になるはずだ。そうなったら、マリーがこれから先で好きじゃない紅茶を飲む必要がなくなる。

これは早急に売り出すべきだな。ガラスのポットに入れたらかなり映えるし、貴族女性にはウケが良さそうだ。これについては……まずはロニーとルノーに相談かな。ヨアンには後で、フルーツティーに合うスイーツについて相談しよう。

「エミール、ルノーとロニーを呼んできて欲しいんだけど、二人って屋敷にいるかな？」
「かしこまりました。いると思いますので、すぐに呼んで参ります」

ロジェはフルーツティーを淹れてくれていたのでエミールに頼むと、すぐに屋敷へと向かってくれた。そしてちょうどフルーツティーが出来上がる頃に、二人がお茶会をしていた東屋へとやってくる。

「レオン様、お呼びでしょうか？」

マリーとさらにそのメイドと護衛がいるからか、しっかりとした態度のルノーとロニーだ。二人と会うのはいつも執務室が多かった

から、敬われるのも久しぶりだ。

「突然呼んでごめん。ちょっと見て欲しいものがあるんだけど」

そう言ってロジェが作ってくれたフルーツティーを示すと、二人は驚いたのか瞳を見開いてから、興味深げにポットを観察し始めた。

「とても面白いですね……紅茶でしょうか？」

「そう。紅茶に生の果物を浸けたもので、フルーツティーっていうんだ。これ、シュガニスで売れると思わない？」

「確かに見た目は素晴らしいです。後は味ですね」

「良かった。じゃあ飲んでみて」

俺のその言葉を聞いてロジェが二人のためにフルーツティーを注いでくれて、ついでにファブリスの分も準備してくれた。

二人は再度フルーツティーを観察してから、ゆっくりと口に含む。

「……驚きました。とても美味しいです」

「見た目から想像した以上の味です。これは……確実に売れますね」

ロニーはそう言って、瞳をキラッと光らせた。ロニーの頭の中ではどれほどの利益が出るのか計算されているのだろう。俺はそんなロニーに苦笑しつつ、ファブリスにも感想を聞いてみることにした。

「ファブリスは……美味しかった、みたいだね？」

ファブリスの方に視線を向けたら、感想を聞くまでもなかった。一心不乱に尻尾を振りながらフルーツティーをがぶ飲みしている。

『主人、これは美味いぞ！　美味すぎる！』
「そんなに気に入ったんだ」
『ああ、我は人間が好む飲み物の良さが分からなかったが、これは美味い！』
「そんなに気に入ったなら良かったよ。これからファブリスの飲み物はフルーツティーにしようか。さすがに毎回は無理だけど」

フルーツティーって意外とたくさんの果物を使うし、高級な飲み物なのだ。ファブリスは一回で飲む量が多いから、毎回あの勢いで消費されたら果物が足りなくなってしまう。

『うむ、一日に一度で良いから飲みたいぞ』
「了解」

そうして俺とファブリスが話をしていると、ルノーに声をかけられた。

「レオン様、果物はフルーツティーに使えるほど入手可能でしょうか？」
「うーん、どれほど売れるのかによるかな。ただ来店者が全員頼むほど確保するのは無理だと思う」
「かしこまりました。では数量限定販売の方が良いかもしれませんね」

まあそれが無難かな。ゆくゆくは果物の生産量を増やしてもらうことも視野に入れるけど、すぐには無理だ。

「フルーツティーだけを数量限定にするか、後はヨアンに頼んでフルーツティーに合うスイーツを作ってもらって、そのセットを数量限定で販売するのもありかなとは考えてるんだ」

「セットを……それは良いですね。ではヨアンとも話し合ってみようと思います。まずはこちらをヨアンにも飲んでもらわないといけませんね」

またヨアンを忙しくしちゃうけど、後回しにできるものはしてもらって、急がずにやって貰えば良いだろう。フルーツティーだってすぐに売りに出さなければいけないわけじゃない。

「そうして欲しい。後はアルテュルにも話を通しておいてくれる？」
「もちろんです。売りに出す時期や宣伝方法などを相談しようと思います」
「こちらのフルーツティーとは、別の果物でも美味しくできるのでしょうか？」
「できると思うよ。だから季節ごとに美味しい果物で作れば良いと思う。一年を通して内容が変われば、目新しさがあるだろうし。そこはケーキのトッピングと同じかな」
「かしこまりました。ではフルーツティーについてはヨアンとアルテュルに相談し、シュガニスでの販売を目指そうと思います」

ルノーが最後にそうまとめてロニーも頼もしく頷いてくれたところで、二人との話は終わりとなった。二人とも本当に頼りになるから、後は任せておけば大丈夫だろう。

それからは残っていたフルーツティーとマリーが好きなクッキーでもう少しだけお茶会を楽しみ、マリー主催のお茶会は大成功で終わりとなった。

「お兄ちゃん、またお茶会やろうね！」
「もちろん。いつでも参加するから言ってね」
「うん！」

425、豪華なミルクレープとチョコレート

マリーとお茶会をしてから数日後。俺はヨアンに呼ばれて、ヨアン専用の厨房を朝から訪れていた。
俺の他にいるのはロジェとローラン、それからロニーだ。本当はルノーも来る予定だったけど、他にどうしても外せない仕事ができたようで今日はロニーだけだ。

「レオン様、朝早くからありがとうございます」
「大丈夫だよ、気にしないで。ミルクレープが出来上がったのは俺にとっても一大事だから」

昨日の夜遅くに降誕祭用のミルクレープが出来上がったと、ヨアンから連絡が来たのだ。本当は昨日の夜に見せてもらいたかったけど、さすがにそれは非常識かと思って今日の朝になった。

「さっそくですが、こちらが完成したミルクレープです」

おおっ、凄く豪華だ！　果物の切り方や飾り方まで計算されているのが分かる。どの方向から見ても隙がない。

「これは凄いね。このソースはいつものと違うの？」
「はい。いつもは柑橘系のソースをかけているのですが、今回のミルクレープは果物のトッピングが多いため、バランスを取るためにソースは甘めにしてあります」
「そうなんだ……本当に美味しそう」
「生クリームもいつもより甘めに作ってあります。さらに一番下の層はクレープではなくタルト生地にしてあり、タルト生地にカスタ

ードクリームを薄く塗って、その上からクレープの層となっています」

ヨアンはそう説明をすると、大きな包丁を取り出してミルクレープを綺麗に切り分けてくれた。切り分けることも計算されて果物は盛り付けられているようで、切ったとしてもその美しさが崩れることはない。

「どうぞ、お召し上がりください」

本当に特別なミルクレープだ。俺はヨアンによって目の前に供されたミルクレープをしばらく見つめ、フォークを手に取って一口分に切り分けた。そしてタルトからクレープ、果物までを上手くフォークに乗せて口に運ぶ。

……凄い、本当に美味しい。いつものミルクレープだって美味しいことに違いはないんだけど、これはその上をいく。頻繁に食べるものではなく、まさに特別な日に食べるスイーツという感じだ。

降誕祭用の特別なミルクレープとして、これ以上の仕上がりはないだろうな。さすがヨアン、本当に凄い。

「ヨアン、完璧だよ。美味しいのはもちろんだけど、降誕祭で売りに出す特別なミルクレープ、それにここまで応えてくれるものは他にないと思う。本当にありがとう」

「そう言っていただけて良かったです。ではこちらで完成としてよろしいでしょうか？」

「もちろん！」

これはシュガニスがより有名になるきっかけとなるだろう。これを食べた人は誰もが感動して、絶対にまたシュガニスを訪れてくれ

ると思う。

「ロニー、予約状況はどうなってるんだっけ」

「予約は一瞬で埋まったよ。高位・中位貴族はほとんど全ての家から予約が来てて、下位貴族は早い者勝ちで勝ち取ったいくつかの貴族家がかなり羨ましがられてるみたい」

「そんなに凄かったんだ」

高位・中位貴族はほとんど全てってことは、今までシュガニスに興味がなかった貴族家も全てってことだ。それって凄いよね……それほど降誕祭が重視されてるってことだろう。

ミシュリーヌ様、良かったですね。ミルクレープも完成したことだし、今夜あたりでミシュリーヌ様のところに行ってみるかな。

「受け渡しは当日の二日前からで、下位貴族からだったよね。二日間はヨアンもシュガニスに応援に行ってくれるんだっけ？」

「はい。頑張って作ろうと思います」

「ありがとう。降誕祭が終わるまでしばらく大変だと思うけど、よろしくね」

これで降誕祭に関する準備は終わったかな。後は当日を楽しむだけだ。それからミシュリーヌ様に当日は何かをやってもらおう。神像を光らせるとか、神域に神託をするとか。その辺も今夜話し合いかな。

「レオン様、それからもう一つご報告があります」

準備が間に合って良かったと安堵していたら、ヨアンが冷蔵庫からもう一つスイーツを取り出してきた。お皿に載せられたそのスイーツは……チョコレートだ！

「チョコができたの！？」
「なんとか形だけは。しかしまだまだ改良しなければなりません。とりあえず美味しいとは思うのですが……売りに出せるほどではないです」

そう言って自信なさげにヨアンが置いたお皿には、とても綺麗な四角形のチョコレートがいくつも載せられていた。凄い、本当にチョコだよ。

「……食べても良い？」
「もちろんです。ご評価いただけたらと思います」

恐る恐る手を伸ばしてチョコを一つ摘み上げると、かなり硬めのチョコだということが分かる。さっきまで冷やされていたからというのもあるだろう。

匂いを嗅ぐと、日本で何度も嗅いできたチョコレートの香りそのものだ。口に入れて硬めのチョコをパキッと噛み砕くと……とても濃いチョコレートの苦味が口の中に広がった。

――感動だ。かなり濃くて苦いけど、チョコレートであることに変わりはない。凄く美味しい、この味わいを求めてたんだ。
でも改良できる部分もまだたくさんある。とりあえずもう少し苦味は無くしたほうが万人受けするだろうし、口の中で溶けると少しだけざらつきを感じる。もっと滑らかにしたい。

「ヨアン、まずはチョコレートを作ってくれて本当にありがとう。俺が求めてた理想にかなり近いよ」
「本当ですか！　良かったです！」

「あと改良できるとしたら、滑らかさと苦味かな。ヨアンはこの苦味が一番だと思ったの？」

俺がそう質問をすると、ヨアンはすぐに首を横に振った。そしてチョコレートを一つ口に運んで味を確かめるようにゆっくりと咀嚼してから、難しい表情で口を開く。

「やはりこれは苦い……と思います。しかしこの段階でかなりの砂糖を使用していますので、どこまで使っても良いのか悩みここで止めてしまいました。またチョコレートとは、この苦味が美味しいスイーツなのではないかと思いまして」

「確かにチョコは苦味も楽しむスイーツなんだけど、もっと甘くしても美味しいと思う。ただこれはこれで苦いのが好きな人や甘いのが苦手な人向けに売れるかな。でももっと甘いのが好きな人向けには、砂糖を……倍ぐらいにしたやつを作っても良いと思う」

このチョコレートは日本だったら、高カカオチョコとかビターチョコとか、そういうパッケージで売られるやつだ。確かにそれも美味しいんだけど、俺はミルクチョコレートの方が好きだった。

「かしこまりました。ではもっと甘くしたものも作ってみます」

「ありがとう。よろしくね」

「後は滑らかさですね。こちらもより追求いたします」

「もっと美味しいチョコレートになることを楽しみにしてるよ」

これでチョコが完成したらチョコレートケーキやチョコクッキー、クレープにもチョコが使えるし、全てのスイーツの種類がもっと増やせるようになる。

想像するだけで幸せになるね……チョコレートケーキとか、大好きだったのだ。クッキーにチョコをかけるだけでかなり美味しくな

るだろう。

「そうだヨアン、フルーツティーについて聞いた？」
「はい。とても美味しくて驚きました。あれに合うスイーツを考えれば良いのですよね」
「うん。でもそれは後回しで良いよ。どちらかといえばチョコを優先してほしい」
「かしこまりました」
「色々と頼んじゃって大変だと思うけど、無理はしないように気をつけてね」

そうして最後にちゃんと休んでとヨアンに釘を刺し、ヨアンがしっかりと頷いたのを確認してから厨房を後にした。

４２６、降誕祭前夜祭ｉｎ神界　前編

その日の夜。俺は寝る準備を整えてベッドに入ってから、神物である本を取り出した。

「ミシュリーヌ様、俺を神界に呼んでくれませんか？」

『はいはーい。ちょっと待ってね』

ミシュリーヌ様はちょうど手が空いていたのか、俺の呼びかけにすぐ答えてくれる。そして気がついた時には、俺は既に神界のソファーに腰掛けていた。

「何度来ても突然場所が変わるのには慣れませんね」

「そんなものかしら？」

「そんなに頻繁に来てるわけじゃないですからね。というか、かなり久しぶりな気がします」

よく考えたら神界に来たのって、チョコレートの作り方に関する本を読んだ時以来な気がする……もう少しここに来る頻度を増やそうかな。神界に来てる時は下界の時間がほとんど進まないんだから、忙しさを気にする必要はないんだし。

考え方を変えれば、忙しくて休みたい時に神界に来るっていうのもありなのか。続けては無理でも、数日空ければ神界に呼べるって言われてるし。

「今日は何の用なの？」

「緊急の用事があるわけではないんですけど、降誕祭用のミルクレープが完成したので、一度ミシュリーヌ様と話し合いをしようかと

思いまして。もうミルクレープって食べましたか？」

ミシュリーヌ様はスイーツに関するセンサーだけは異常に精度が高いから、頷かれるのだろうと思っていると、案の定キラキラとした瞳で大きく頷かれた。

「もちろん食べたに決まってるじゃない！　本当にヨアンは天才ね！　凄く美味しかったわ！」

「分かります。俺もヨアンは凄いと思いました」

「普通のミルクレープも美味しいからそれをより特別にするのなんて難しいと思ってたけど、完璧な仕上がりだったわ。思い出すとまたよだれが……」

ミシュリーヌ様は夢見心地な表情で宙を見上げた。そこにミルクレープでも思い描いてるんだろう。

「ミルクレープはいくつ食べたんですか？　食べ過ぎてませんか？」

「もちろん、ちゃんとレオンとの約束は守ってるわ。一日に五個までなのよね……」

おおっ、ちゃんと約束を覚えて守ってるのか。やっぱりミシュリーヌ様も成長してる気がする。

もっと神力が少ない時は一日の個数を一個に限定してたけど、最近は余裕があるので五個にまで増やしたのだ。

「そこはちゃんと守ってください。でも今日は俺も来ましたし、特別に降誕祭の前夜祭？　みたいな感じにして、好きなだけ食べることにしますか？」

たまには良いかなと思ってそう告げると、ミシュリーヌ様は途端

に瞳をきらめかせて俺の肩をガシッと掴んだ。まだ数日前だから前夜祭ではないんだけど、まあ細かいことは良いよね。

「それ最高じゃない！　そうするわ、そうしましょう！」
「いつもながら、スイーツのこととなると勢いが凄いですね……」
「当たり前じゃない。スイーツ食べ放題なのよ！？」

俺は鼻息荒く力説しているミシュリーヌ様に苦笑しつつ、ミシュリーヌ様の手を肩から外しながら口を開いた。

「じゃあ二人だけも寂しいですし、ファブリスでも呼びましょうか。あとはシェリフィー様とか」
「レオンさすが、名案ね！　まずはファブリスを……」

ミシュリーヌ様が高いテンションのまま右手を少し動かすと、瞬きほどの時間で目の前にファブリスが現れた。

『む、ここは神界か？　ミシュリーヌ様、何か御用でしょうか？』
「レオンの提案でこれから降誕祭の前夜祭をやるの！　ファブリスも参加してちょうだい。じゃあ私はシェリフィーを呼んでくるわね！」

ファブリスを呼んでそれだけを告げると、ミシュリーヌ様はすぐにどこかへ消えていった。地球の神界へ行ったのだろう。

「ファブリス、急にゴメンね」
『いや、別に構わんぞ。だが降誕祭の前夜祭とは何をやるのだ？』
「皆でスイーツを食べまくる会かな」
『おおっ、それは楽しそうだ』

ファブリスは前夜祭の内容を聞いた途端に、尻尾をゆらゆらとご機嫌に揺らし始めた。さすがミシュリーヌ様が作った神獣だ、スイーツに対する反応がそっくり。

それからふわふわなファブリスの背中に寝そべりながらミシュリーヌ様が帰ってくるのを待っていると、十分ほどでシェリフィー様を連れて戻ってきた。

「待たせたわね！　……って、レオンは何をしてるのよ」
「ファブリスの背中は最高の寝心地なんです。ここにはソファーひとつしかありませんし、ここが一番居心地良いなと思って」

ミシュリーヌ様の神界は神力が潤沢になった今でも、まだソファーと机が一つずつに棚がいくつかしかない殺風景な場所だ。

「もう少し神界を充実させないんですか？」
「そうなのよね……やろうとは思ってるんだけど、これに慣れちゃったらもう少し後でも良いかなって」
「まあ不便はなさそうですからね……じゃあこの機会に神界も充実させますか？　快適なお茶会をできる東屋をひとつ作るとか」

俺のその提案に乗ったのはシェリフィー様だ。大きく頷きながらミシュリーヌ様の肩を叩いた。

「絶対にそうすべきよ。ここは寂しすぎるもの。レオン、良いこと言うわね」
「ありがとうございます。それから挨拶が遅れましたが、お久しぶりです」
「久しぶりね。元気そうで良かったわ」

ファブリスから降りて挨拶をすると、シェリフィー様は素敵な笑みを見せてくれた。

「ミシュリーヌ、その辺に東屋を作るのはどう？　あと神力が足りるなら東屋の周りを庭園にしましょう。可愛い花をたくさん楽しめるように」

「確かにそろそろ充実させようとは思ってたのよね……分かったわ、東屋を作りましょう！」

ミシュリーヌ様は皆に勧められてやっとやる気が出たのか、拳を握りしめてそう宣言した。そして右手で宙をなぞると、いくつもの東屋の写真が出てくる。

「下界にある東屋をいくつか選んでみたんだけど、どれが良いかしら？　庭園は……この辺かしらね」

「あれ、これって大公家にある東屋じゃないですか？」

俺は見覚えのある東屋の写真が目に入り、それを拾い上げた。さらに他の写真もよく見てみると、王宮の東屋やタウンゼント公爵家の東屋の写真もあるみたいだ。

「私が一番よく知ってるのがレオンがいる場所なのよ」

「確かにそうですよね……他の国の東屋とかはないんですか？」

神界と下界で同じ光景というのも面白くないと思ってそう聞くと、ミシュリーヌ様は宙にテレビのような感じで下界の映像を映してくれた。

「もちろん他の国のやつでも作り出せるわよ。皆で見ましょうか。

どこの国が良いかしら」
「どうせなら行ったことない国が良いですね。大陸の北西方向にある国とか」
「北西ね……この辺りとか？」

おおっ、全く知らない国の街並みだ！　ちょっと、いやかなり楽しい。やっぱりミシュリーヌ様って本当に神なんだね……こういう力を目の当たりにすると、その事実を思い出す。

４２７、降誕祭前夜祭ｉｎ神界　中編

初めて見る他国の風景を皆で眺めながら心地よさそうな東屋を探していると、この国の特権階級が住んでいるのだろう屋敷の庭に、初めて見るタイプの東屋を見つけた。

ラースラシア王国の東屋は土足でテーブルと椅子があるタイプだけど、今映像に映っているのは靴を脱いで上がるタイプの東屋だ。

東屋の床が一段高くなっていて、そこにふかふかのクッションが敷かれ毛布が置いてあり、真ん中にはテーブルが固定されている。

「この東屋、面白いですね」

「私もそう思ったわ。長方形でかなり大きいし、レオンの国のタイプよりこっちの方が良いかも」

「大人数で寛ぐならこっちの方が良さそうね。それにファブリスも寛げるんじゃないかしら？」

シェリフィー様が発したその言葉に、ファブリスが嬉しそうに尻尾を振りながら頷いた。

『我でも寛げそうです』

確かにファブリスには、このタイプの東屋の方が良いのか。いつもは東屋でお茶会をするとなると、ファブリスは地面に直に座ったり寝そべったりしている。大公家の東屋をこのタイプに変えようかな……それかこのタイプのやつも増設するか。

「じゃあこれにしましょう！」

ミシュリーヌ様は即決したようで、映像をじっと凝視してから両手を振って、目の前に東屋を作り出した。本当に一瞬だ。瞬きほどの時間で音もなく東屋が出現した。

「神力って凄いんですね……」

「神の力なんだから凄いに決まってるじゃない。東屋はこれで完成で良いかしら？」

「良いと思うわよ。じゃあ次は庭園を作りましょうか」

シェリフィー様は花が好きなのか、楽しそうな声音でミシュリーヌ様が作り出した庭園の写真を吟味し始める。

「ミシュリーヌ、この写真の庭園がある国の他の庭園も見てみたいわ」

「この写真ね……確かこの辺りの国だったはずよ」

二人が覗き込んでいる写真に写っていたのは、白い小さな花がたくさん咲き乱れた低木が密集している庭園だった。完璧に整えられた庭園というよりも、自然の雰囲気を残しつつも幻想的な雰囲気を感じられる作りとなっていて、とても目を惹かれる。

「ああ、この国じゃない？」

「ここね！　あっ、あそこの庭園をアップして？」

「ここかしら……」

「そうそう、このピンクの花ってこの写真の白い花と色違いよね？」

「確かにそう言われると……そう見えるわね」

「この花の色違いを上手く設置したら絶対に綺麗よ！」

確かにそれは想像だけで綺麗だ。俺は元々大きな一輪の花よりも、

小さな花が咲き乱れている方が好きなのだ。だから日本では桜の花が凄く好きだった。風に花びらが舞うのって最高に綺麗だよね。

「じゃあこれにしようかしら。この庭園をそのまま作り出せば良いの？」

「それじゃあダメよ！　一本ずつ作り出して、自分で最高の庭園を作り上げないと！」

シェリフィー様が拳を握ってやる気十分でそう宣言すると、ミシュリーヌ様は面倒くさそうなうんざりとした表情を浮かべて一歩後退った。しかしシェリフィー様にすぐ捕まって、東屋の周辺まで連行される。

これは庭園の完成までかなり時間がかかりそうかな。一本ずつ位置を決めて花を作り出していくなんて、早くても一時間はかかるだろう。

「ファブリス、ちょっと寝て待ってようか」

『うむ、時間がかかりそうだからな』

「一足先に東屋で寛いじゃう？」

『そうしよう』

俺の提案にファブリスは楽しそうに頷いて、尻尾をゆらゆらさせながら東屋のクッションの上に寝そべったので、俺も靴を脱いでファブリスの隣に寝転がった。

「ふぅ……幸せかも」

『これは良いな』

「あっ！　二人ともずるいわよ！」

「ミシュリーヌは庭園を作るのが先よ！」

俺達が寛いでるのを見つけてこっちに飛んでこようとしたミシュリーヌ様は、シェリフィー様に腕を掴まれてまた庭園予定地に連れて行かれたみたいだ。

「ミシュリーヌ様、頑張ってください」

それからはファブリスとのんびり寛ぎながら、大公家にもこのタイプの東屋を作るとしたらどこに作るかなんて話をしていたら、二人の歓声が聞こえて来た。やっと庭園が作り終わったみたいだ。

「終わったわ！」

「凄く素敵になったわね」

クッションから起き上がって辺りを見回してみると……色とりどりの小さな花が咲き乱れた、幻想的な花畑が広がっていた。

「綺麗ですね……」

「そうでしょう？　色合いのバランスには特に力を入れたのよ」

「シェリフィーのこだわりには疲れたわ」

「でもそのおかげで綺麗になったでしょう？」

「まあそうだけどね。じゃあ庭園もできたことだし、スイーツパーティーをやるわよ！」

ミシュリーヌ様はやっとスイーツにありつけるとテンション高く拳を掲げ、東屋まで凄い勢いで飛んで戻って来た。俺はそんなミシュリーヌ様の様子を見て、花畑を見て感動していた気持ちが霧散する。

ミシュリーヌ様、せっかく綺麗で幻想的な風景を作ったのに台無しにしてるよ……まあそれこそがミシュリーヌ様なんだけど。

「まずは降誕祭用のミルクレープよね！　あとは新しく開発されたコーヒーのスイーツとシナモンを使ったスイーツ、それからチョコレート。そうだ、フルーツティーもあるわね！　あとはシュークリームとショートケーキ、クレープ、シフォンケーキ、クッキー……」

おお……凄い量だな。ミシュリーヌ様はここぞとばかりにテーブルに乗り切らない量のスイーツを作り出していく。今回で減った神力を補填するために、魔物の森に行って魔植物を討伐しよう……アイテムボックスの魔法具の中身が消滅すると神力に変換される機能、本当にありがたいな。

「ミシュリーヌ、さすがに作り出しすぎよ。そのぐらいにしておきなさい」

「分かったわ。……ふふ、ふふふっ、最高の景色ね！」

ミシュリーヌ様はテーブルからはみ出してクッションの上にまで置かれているスイーツの山に、頬を緩めまくってだらしない笑みを浮かべた。

『最高の光景です』

「ファブリスもそう思う！？　さすが私の神獣ね！」

『さっそく食べましょう』

「ええ、もちろんよ。じゃあ、スイーツパーティーの開始よ！」

ミシュリーヌ様が嬉しそうな声音でそう宣言したことで、降誕祭の前夜祭がスタートした。凄く楽しい一夜になりそうだ。

４２８、降誕祭前夜祭ｉｎ神界　後編

まずは何から食べるかな……シナモンのシュークリームにしよう。俺はスイーツの山からお目当てのものを手に取り、幻想的な光景に癒されながら口に運んだ。

やっぱり美味いな……さすがヨアンだ。シュークリームの皮の焼き加減とカスタードの量、さらにシナモンの量まで完璧だ。甘さはしつこくないけど甘みが足りないこともなく、ちょうど良い塩梅が追求されている。

「うぅ～ん、幸せ！　最高に美味しいわ！」

ミシュリーヌ様は右手にクレープ、左手にシュークリームを持ち、幸せそうな表情で交互に口にしている。

「それはシナモンが掛かったやつですか？」
「そうよ！　これは普通のと違ってまた美味しいわよね」
「もちろん普通のも美味しいですけど、シナモンが加わると別の美味しさになりますよね」
「ええ、しはわせのあしはわ」

口にシュークリームを詰めて喋られても分かりませんよ……俺はとにかく食べることに夢中なミシュリーヌ様に苦笑しつつ、落ち着くまではしばらく放置することに決めてシェリフィー様の方に視線を向けた。

「あっ、それは新作のミルクレープですね」

「このミルクレープ、凄く美味しいわ。地球でもあまりお目にかかれないレベルよ」
「シェリフィー様にそう言っていただけて良かったです。それは今度の降誕祭で貴族向けに売り出す特別なミルクレープなんです」
「だからこんなに豪華なのね」

シェリフィー様は切り分けたミルクレープをお皿に載せて、フォークで優雅に食べている。隣にはフルーツティーも置かれていて、ゆったりと楽しんでいるようだ。

両手にスイーツのミシュリーヌ様とは大違いすぎて、同じ女神なのかと疑いたくなってくるな。

「降誕祭ってミシュリーヌを讃える日なんでしょう？　ミシュリーヌはちゃんとやれるかしら」
「大丈夫だと思いますけど……今の様子を見てると不安になって来ますね」

まあ、やる時はちゃんとやってくれるとは思うけど。ヴァロワ王国での神託だって完璧だったし。

「そうだ、ミシュリーヌ様に威厳の出し方を教えてくれたのはシェリフィー様なんですよね。本当にありがとうございます。おかげで助かりました」
「私は漫画を渡しただけなんだけど。ミシュリーヌがハマって五回も読んでたから、これは良いかもって思ったわ」
「最高でした。これからもよろしくお願いします」
「今度次の巻が出るみたいだから、また渡しておくわね」
「ありがとうございます」

ミシュリーヌ様に聞こえないように小声でそんな会話をして、シェリフィー様と微笑みあった。シェリフィー様と話すのは落ち着くな……ミシュリーヌ様と話すと楽しいけど疲れることも多いから。

『主人、そこにあるショートケーキを取ってくれるか？』

「これ？　はいどうぞ」

ファブリスは寝そべった状態でスイーツに囲まれ、身動きが取れなくなってるようだ。でもそんなことは気にせず着実に空の皿を増やしているのが、まさにミシュリーヌ様の神獣って感じだ。

「ファブリスはあんまり苦いものが好きじゃないよね」

『うむ、我はコーヒーやチョコレートなどよりも生クリームが好きだ』

「じゃあこのミルクレープなんて最高だね」

『それは素晴らしいな。もう五皿食べたぞ』

五皿……マジか。このデカいホールのミルクレープを五皿も食べるとか、さすがファブリス。俺には無理だ。

神界は下界とは全く違う原理が働いているので理論的にはいくらでも食べ続けられるんだけど、そうは言っても甘いものを食べ続けていたら精神的に気持ち悪くなってくる。そうならないファブリスやミシュリーヌ様は異常だと思う。

「とりあえず、無理せずに食べなよ」

『まだまだ問題ない』

「そっか……」

ファブリスがホールのショートケーキを食べ切って、六皿目のミルクレープに向かったところで、俺はファブリスから視線を逸らし

た。なんだか見てるだけで胸焼けがしそうだ。

「チョコレートは美味しいけど、あと一歩よね～」

一心不乱に食べ進めて少し落ち着いた様子のミシュリーヌ様が、チョコを摘みながらそう呟いた。スイーツに対しては盲目になるミシュリーヌ様がそう言うってことは、まだまだ改良すべきってことだろう。

「やっぱり甘さですか？」

「それもあるけど滑らかさと。あとはカカオの種類じゃないかしら？」

確かにそれもあるか……ちょっと苦味というか、口に残る渋みというか、そういうのが強い品種なのだ。やっぱりより美味しいチョコを追い求めるには品種改良かな。

まあそれはしばらく先にならないと無理だから、まずは生クリームを入れたり砂糖を入れたり、あとは製法を少しずつ変えたりして美味しく改良になると思うけど。

「もっと美味しいチョコレートがこの世界でも食べられるように頑張ります」

「楽しみにしてるわね。チョコレートケーキが食べたいわ！」

「分かります。ガトーショコラとかティラミスも良いですよね。チョコチップクッキーとか」

「最高じゃない！　そうだ、あと和菓子も待ってるわよ」

ああ……和菓子ね。ちょっと目を逸らしていた。米もあるし作ろうと思えば作れるものはたくさんあるだろう。でもヨアンも忙しいからな……とりあえず、もう少し落ち着いてから手を出そう。和菓

子を売るのならシュガニスじゃなくて別のお店を作ったほうが良いだろうし。

「和菓子はもう少し待ってください」

「そうなの？　まあ、仕方がないわね。他のスイーツがたくさんあるから我慢するわ」

「そうしてください。――そうだミシュリーヌ様、降誕祭当日のことなんですけど」

俺は大事な話を忘れていたことに気づいて、改良が必要だと言いながらチョコレートを頬張るミシュリーヌ様に声を掛けた。

「何かしら」

「当日は神像を光らせたり神託をしたり、何かしら信仰心を高めるための行動をお願いします」

「やった方が良い……わよね？」

「絶対にやるべきです。当日は大勢の人が教会を訪れますから、定期的にお願いします。ただ神域なのは中心街の教会だけなんですよね？」

「そうよ。だから神像を光らせられるのもそこだけね」

それが一番の問題なんだよね……本当は他の教会でもやってほしい。神力をかなり使えば他の場所にも神託はできるだろうけど……それはさすがに勿体ないよな。

まあ仕方ないか。日頃から神像が光ったり神託を授かるのは中心街の教会だけなんだし、皆もその事実は認識しているだろう。

「とりあえず中心街の教会だけで良いので、忘れずにお願いします。いつもやってるのよりも豪華にしてください」

「分かったわ。私に任せておきなさい！」

ミシュリーヌ様は拳を胸にあてて、自信ありげにそう宣言した。最近はミシュリーヌ様も成長してるし、やる気になってくれたのなら大丈夫かな。

それからは難しい話は終わりにしてスイーツパーティーを楽しみ、東屋を埋め尽くしていたスイーツを皆で食べ終えたところでお開きとなった。久しぶりの神界だったけど、楽しかったな。

429、降誕祭当日

朝起きて窓から空を見上げると、カラッとよく晴れた青空が広がっていた。雨が降りそうな気配などなく、とても良い天気だ。今日は夏の月第一週、回復の日。そう、降誕祭当日だ。

「レオン様、おはようございます」
「ロジェ、おはよう」
「とても良い天気でございますね」
「うん、本当に良かったよ。雨だと皆が外に出なくなっちゃうから」

これなら屋台は賑わって、教会に足を運ぶ人も多くいるはずだ。どれほど盛り上がるのかはまだ未知数だけど、他の昔からある祭りと同じぐらい盛り上がったら嬉しいな。

「本日は皆様で平民街へ赴かれるのですよね」
「そうだよ。降誕祭がどのぐらい盛り上がってるのか確認したいからね。だから今日の服装は平民に紛れられる服装でよろしく」
「心得ております」

降誕祭が盛り上がるのは主に平民達が暮らす地区なので、今日は大公という身分を隠して一日だけ平民に戻り、屋台の賑わい状況や教会の様子を確認するのだ。俺一人で行こうと思ってたんだけど、家族皆にも祭りに参加したいと言われたので、父さんと母さん、マリーと一緒に行く。

皆の顔はほとんど知ってる人がいないし、服装さえ変えれば問題なく溶け込めるだろう。

「お昼時には帰ってくるから、午後の準備はよろしくね」
「もちろんでございます。王女殿下が初めてこちらの屋敷を訪問されるということで、朝から皆が張り切っております」
「そうなんだ。それは頼もしいよ」

今日の午後にはマルティーヌが初めて大公家の屋敷にやって来る。俺からしたら気軽に話せる相手だけど、皆からしたらこの国の第一王女殿下でしかないから、午後に向けて使用人は結構緊張しているみたいだ。

「最初に屋敷の中を案内して、それから東屋でお茶会にするからその予定で」
「かしこまりました。午後にはヨアンが屋敷へ戻り、お茶会のためにスイーツを作る予定となっております。降誕祭用のミルクレープの最高傑作を作ると意気込んでおりました」
「そうなんだ……ヨアンに楽しみにしてるって伝えておいて」

ヨアンはオーバーワークだよな……アイテムボックスに入れられているスイーツを出してくれるんで良いよって何度も言ったんだけど、ヨアンが王女殿下がいらっしゃるのならば出来立てを……！って譲らなかったのだ。

それがヨアンのプライドなら断るのも違うかなと思ってお願いしたけど、やっぱりヨアンの過労が心配だ。今日が終わったら数日は休みにするべきかな。後でアルノルに話をしておこう。

「じゃあ朝食に行こうか」
「お供いたします」

それからいつもより少なめに朝食を食べて出掛ける準備を整えたら、ロジェが用意してくれたお忍び用の馬車に家族皆で乗り込んだ。見た目はかなり質素だけど、中はしっかりとしていて快適な馬車だ。

今日はこの馬車で中心街を出て、王都の外れまでは行かないまでも、中心街から離れた平民達が暮らす地区に向かう。そこからは馬車を降りて歩きでの散策だ。

「お兄ちゃん、皆でお出かけできるの嬉しいね！」

「久しぶりだよね。マリー、今日はお忍びだから大公家であること周りに明かしちゃダメだからね」

「もちろん分かってるよ」

マリーはにっこりと微笑みながら、頼もしい雰囲気で頷いてくれた。これは完全に理解してくれてるな……マリーは本当に成長した。最初の頃は俺に関する隠し事について、よく分かってない感じだったのに。

「母さんと父さんもよろしくね」

「ええ、もちろんよ」

「それにしても楽しみだな。中心街から出るのが久しぶりだよ」

「そうだよね。二人はずっと屋敷と食堂の往復しかしてないんじゃない？」

「そうね。でも毎日忙しくて楽しいから良いのよ」

母さんがそう言って父さんも笑ってくれてるけど、もっと自由に色んなところに行きたいと思ってるだろうな。でも大公家として出かけるのじゃ息抜きにならないんだろうし……もっと俺が転移で連れ出してあげた方が良いのかもしれない。

そうだ、領地が整ったら二人にはそっちに住んでもらうのもあり

かな。ただそうするならマリーが悲しむだろうから、領地と王都を転移で往復できるようにならないと。最近は魔力量を真剣に増やしていてかなり転移距離も伸びてるけど、もっと必要だ。

「それにしても前は普通に着てたのに、貴族の服装に慣れちゃうとこの服は肌触りが悪いな」

「本当ね……知らないうちに私達も贅沢に慣れてるのよ」

「私もそう思った。このお洋服……ちくちくする」

「貴族の服と比べちゃうと仕方ないよね」

俺達が着てるのは平民だった時代に実際に着てた服だから、かなり質は低い。大公家の屋敷では雑巾としても使われないレベルだ。でもだからこそ、お忍びだってことはバレないだろう。

それから馬車に揺られること三十分、俺達は賑わっている広場の端で馬車から降りた。今日は屋台で使う荷物を幌馬車で運んでいる人達もいるみたいで、そこまで目立たず広場に降り立つことができたようだ。

「うわぁ、凄いね！　屋台がたくさん出てるよ！」

「本当ね。なんだか人がたくさんいるところは久しぶりだわ」

「クレープの他にも色々と売ってるな」

予想以上に降誕祭は平民の間で浸透してくれているみたいだ。クレープの屋台がそこかしこに点在していて、さらにはそれ以外にも串焼きやスープ、パンなど普通の食事を売っている屋台もある。また木製のアクセサリーや置物など、贅沢品を扱っている屋台も幾つか目に入る。

「うちのクレープは卵焼き入りだよ！」

「うちのは串焼きクレープだぞ～」

呼び込みの声を聞いていると、個性的なクレープがたくさん作られているようだ。

「気になったクレープを端から買ってみようか」

「うん！　私あのクレープが食べたい！」

「どれどれ……えっと、トマトソースパンクレープ？」

かなり個性的なやつを選んだな。マリーに手を引かれて屋台に向かってみると、店員の若い男性が笑顔で迎えてくれた。

「いらっしゃい！　うちのクレープは絶品だよ。パンにトマトソースを浸してそれをクレープの皮で包んでるんだ」

「すっごく良い匂い！」

「おっ、お嬢ちゃんさすがだな。お目が高い」

男性に褒められて、マリーは若干ドヤ顔で笑みを浮かべた。誇らしげなマリーが可愛い……写真を撮りたいのにカメラがないのが悔やまれる。

「マリー、一つ買おうか」

「うん！　お兄さん、一つお願い」

「はいよ、まいどあり！」

降誕祭一つ目のクレープはトマトソースパンクレープだ。どんな味なのか楽しみだな。男性からクレープを受け取ってお金を払い、家族皆で空いているベンチに腰掛けた。

430、個性的なクレープ

ベンチに座ってまずは皆でクレープの香りを嗅いでみると、かなり美味しそうなトマトソースの匂いを感じることができた。少なくともソースが微妙で美味しくないってことはなさそうだ。

「マリーからどうぞ」

いろんな種類を食べるためにも皆で分けて食べるけど、まずはマリーからということでそう声をかけると、マリーは嬉しそうな笑みを浮かべてクレープにかぶりつく。

「うーん、美味しい！　けど、ちょっと微妙？」

マリーはもぐもぐと咀嚼しつつ、そう言って首を傾げた。美味しいけど微妙ってどういうことだろう。

「俺も食べて良い？」
「もちろん良いよ」
「ありがとう」

マリーからクレープを受け取って食べてみると……マリーの言っていることが理解できた。確かに美味しいのだ。トマトソースは美味しいし、それが染みて柔らかくなったパンも美味しい。しかしそれをクレープで包んでいるのが微妙だ。

これを言ったら元も子もないけど、クレープの皮で包まない方が美味しいと思う。それはもうただのトマトソースに浸けたパンだけ

ど。

「父さんと母さんも食べてみて」

「分かったわ。……確かに、微妙ね」

「なんだろう、食感が合わないのかな。せっかくのジュワッとトマトソースが溢れ出すパンの食感が、クレープの皮に邪魔されているというか……」

これは全員に不評みたいだ。ただ食べられないものではないし、面白い組み合わせではある。こういう微妙な組み合わせの積み重ねで最高のクレープが出来上がったりするんだろうから、こういうのも重要だよね。

「じゃあ次に行こうか。次はあそこのクレープが気になってるんだけど、買ってみても良い？」

「どれかしら……あのステーキクレープってやつ？」

「そう！　味の想像はできるけど食べてみたくない？」

俺のその言葉に母さんと父さんは苦笑しつつベンチから立ち上がってくれた。マリーはかなり乗り気だ。

「ステーキなんて豪華だね！」

「降誕祭だからこそ売れるんだろうね」

値段は周りで売っている他のクレープよりも高いのに、さっきから絶え間なくお客さんがいるのだ。イベントの時に財布の紐が緩むのはどの世界でも同じだな。

「いらっしゃい！」

「ステーキクレープを一つ」

「はいよ」

ちょうどお客さんが途切れたタイミングだったので、すぐに注文することができた。ステーキは注文してから焼いてくれるようで、鉄板に乗せられた牛肉がジュウジュウと音を立てている。めちゃくちゃ美味しそうだな……これをクレープで包むだけなら、不味くなりようがない。

「熱いから気をつけてな」

数分でステーキが焼けて、一口サイズに切り分けられたステーキがたくさん詰まったクレープを渡された。野菜などは一切入っていなく、ステーキオンリーだ。

「ありがと」

また空いているベンチに座って、今度は俺が一番に口にする。肉の主張が激しすぎるクレープにかぶりつくと……口の中にゴロッと大きなステーキ肉が入ってきて、噛めば噛むほどに旨味が溢れてとても美味しい。

……でも美味しいんだけど、これはクレープというよりもステーキだ。クレープの皮の存在感が薄すぎて、クレープを食べているという実感はほとんどない。

食べ歩きできるステーキという売り文句ならかなり売れそうだけど、クレープとしては微妙かな。

「このステーキ美味しいね！」

「本当ね。焼き加減が絶妙だわ」

「凄いな……この焼き加減を実現するのは意外と難しいんだけど」

三人の感想もクレープに対してではなく、ステーキに対してになっている。それほどにステーキが強いってことだろう。

「でも、お兄ちゃんのクレープの方が美味しいね」

「本当？」

マリーがポツリと呟いた言葉がとても嬉しいもので、俺は思わずマリーの顔を覗き込んだ。するとマリーは無邪気な笑みを浮かべて俺が作った豚肉サラダクレープを絶賛してくれる。

「あれは一個食べたらすぐに次を食べたくなるほど好きだよ。毎日食べたいぐらい！」

あのクレープをマリーがそんなに気に入ってくれていたとは。これからはもっと美味しいクレープを開発しよう。醤油を開発できたら照り焼きチキンのクレープとか、後はチーズを使ったクレープもありだよね。それから香辛料を使ってカレー味のクレープとか。

マリーに喜んでもらうためならなんでも開発できる気がする。やる気が出てきた……！

「レオン、次はあのクレープにしましょうか」

俺が拳を握りしめてクレープ開発に意欲を燃やしていたら、母さんが苦笑しつつまた別の屋台を指差した。次の屋台は……卵焼きクレープみたいだ。

「美味しそうだね」

「私も卵焼き食べたい！」

「じゃあ近くだし父さんが買ってくるよ。ちょっと待ってて」

それから俺達は卵焼きクレープと野菜炒めクレープ、それから木苺のジャムクレープを食べて、お腹が満たされたところで広場を後にして教会へ向かうことにした。

ちなみにその三つのクレープはどれも美味しかった。ただやっぱりクレープにする必要はあるのかっていう点では疑問の味で、卵焼きクレープは確実に卵焼きだけの方が美味しいだろうなって味だったし、野菜炒めも甘いクレープの生地よりも普通のパンの方が合いそうだった。

唯一木苺のジャムクレープは美味しかったけど、砂糖をたくさん使った甘いスイーツを食べ慣れている俺達には酸味が強すぎて、食べ進めるのには少し苦労した。

「うわ、凄い混んでる」

教会に到着すると、すぐには中に入れないほど人がたくさん集まっていた。教会の中から外にまで、何十人もの人達が列を作って礼拝の順番を待っているのだ。教会の前にある細い通りには、礼拝の順番を待つ人達に対してなのだろう、屋台がいくつも立ち並んでいる。

「本当だね。ここに並ぶの？」

「時間がかかりそうね……」

王都にある教会の全てがこの状況なら、ミシュリーヌ様の神力の増加率は凄いだろうな……降誕祭は大成功だ。俺は目の前の賑わう光景を見て、無意識に口角が上がった。

これからはミシュリーヌ様がスイーツに神力を消費しても、それ

が気にならないほどに神力が回復していくかもしれない。これでこの世界が滅ぶ可能性はかなり減っただろう。本当に良かった。

４３０、個性的なクレープ（後書き）

本日私が連載している別の小説「神に転生した少年がもふもふと異世界を旅します」の書籍第一巻が発売となりました。
それに伴い活動報告にＳＳを書いたのですが、そこにレオンとファブリスも出ているので、もしよろしければ覗いてみてください。

実はどちらの物語にも違ったタイプのもふもふがいて、いつか二匹？　二柱？　を出会わせてみたい！　と思っていました。それを今回このタイミングで実現させてしまいましたので、読んでいただけたら嬉しいです。
もふもふ品評会というタイトルのちょっとふざけたゆる～い話なのですが、気軽に楽しく読んでいただけると思います！

また、転生したら平民でした。の書籍３巻もかなり完成に近づいてきております。ｗｅｂ版からはかなりパワーアップしていますので、楽しみにしていただけたら嬉しいです！

いつも応援ありがとうございます。これからもよろしくお願いいたします。

蒼井美紗

４３１、教会の様子

家族四人で列の一番後ろに並ぶと、続々と俺達の後ろにも列に並ぶ人達がやってきて、礼拝待ちの列はどんどん長くなっている。

「こんなに人がいるとは驚いたな」

「本当よね～でもミシュリーヌ様にお祈りすると願いが叶うって話じゃない。来ない選択肢はないわよ！」

「確かにそういう噂は聞くけどよ、それは中心街の教会に行かないといけないんじゃなかったか？」

「そんなの分からないじゃない。同じ教会だもの。でもいつかは中心街にも行きたいわね～」

俺達の後ろに並ぶ若い男女二人の会話が聞こえてきた。ミシュリーヌ様がコツコツと神像を光らせて神託をしてる効果は出てるみたいだ。やっぱり実在していて下界に干渉できる神への信仰心を高めるのなんて、そんなに大変じゃないんだよね……今までなんでこんなに信仰されてなかったのか、そっちの方が不思議なぐらいだ。

「お兄ちゃん、あそこのりんごジュース飲みたいから買ってきても良い？」

「もちろん良いよ。一緒に行こうか」

マリーに声をかけられたことで後ろの二人の会話から意識を戻され、マリーが指差した屋台を見た。りんごジュースというか……水で薄めたりんご水を売ってるみたいだ。まあここは中心街じゃないし、果物は高価だから１００％のりんごジュースは無理だろう。

「父さん母さん、並んでてくれる？」
「もちろんよ」
「レオン、父さんにはレモン水を買ってきてくれないか？」
「了解」

そうして屋台で飲み物を買って休憩しながら列に並ぶこと数十分。やっと教会の中に入ることができ、ミシュリーヌ様にお祈りをすることができた。まあ俺は祈ることなんてないから、形だけになったけど。

家族皆はかなり熱心に祈ってたみたいだ。まだ三人はミシュリーヌ様と話をしたことはないんだけど、今の自分達の立場はミシュリーヌ様のおかげだって認識から、熱心な信徒なのだ。
今度中心街の礼拝堂を貸し切って三人を連れて行くのもありかな……あそこならミシュリーヌ様と三人が会話をすることができるし。ただミシュリーヌ様はあんな感じだから、話をしたら夢を壊しちゃうんじゃないかという懸念が拭いきれない。

それから皆の祈りが終わって、教会の出口に大きく設置された屋台でクレープの生地を購入した。周囲の人を観察していると、祈りが届く可能性が上がると思っているのか、縁起が良いと思っているのか、クレープの生地を買っていく人はかなり多いみたいだ。
屋台の中では孤児院の子供達が忙しそうに働いている。

「何も挟んでいないクレープの生地を食べることで、明日からまた一年、良い年になるようにって願いが込められてるんだ」
「一人一枚食べていってね～」

子供達はそんなふうに礼拝客を呼び込んでいる。俺が考えた適当な理由が浸透してるな……

「お兄ちゃん、生地だけも意外と美味しいね」
「焼き立てだと美味しいよね」

生地を焼く時にバターを少し使ってるみたいで、香りがしてとても美味しい。これはちょっと癖になるかも。今度生地だけをたくさんもらって、アイテムボックスに収納しておこうかな。

「もうお腹いっぱいね」
「少し食べ過ぎたよ。たくさん歩いたし疲れたな」
「私も足が痛い」

貴族ってどこに行くにも馬車で移動するし歩かないからね……平民だった時代よりも体力がなくなってるのは仕方がないだろう。平民はどこに行くにも自分の足で歩くしかないから。

「皆も剣術とか習う？　マリーは少しやってるんだっけ？」
「ううん。まだやってないよ」
「そっか。じゃあ三人で一緒にやる？」
「それも良いかもしれないわね。動かないでたくさん食べてて太りそうだもの」
「少しは自衛もできるようになりたいし、ありかもしれないな」

皆はそれぞれ護衛がいるから、護衛に頼むのが一番かな。俺の訓練の時間とも合わせたら楽しいかも。やっぱり一人でやる訓練って退屈なのだ。

「じゃあロジェに言っておくね。皆も従者とメイドに話をしておいてくれる？」
「分かったわ」

「今日帰ったら話をするよ」
「私も！」

これで後はロジェ達が集まって訓練の時間を合わせてくれるだろう。俺は仕事の関係で皆に合わせられなかったら、休みの日だけでも一緒にやりたいな。

それからも皆で話をしつつ屋台を覗いて楽しみながら、最初の広場まで歩いて戻った。そして約束の時間に馬車を降りた場所に向かうと、大公家のお忍び用の馬車が時間ぴったりに迎えに来てくれた。

「楽しかったかい？」
「うん！　すっごく楽しかった！」
「良かったわ。クレープはどれも美味しかったわよね」

皆が楽しんでくれて良かったな。やっぱり貴族としての肩書きがなくなると、いつもよりリラックスしてる気がする。貴族としての生活は豪華だけど、平民時代よりも気が抜けないのは確かだからね。

「皆、これから屋敷に戻ったら少し休んで、午後にはマルティーヌの出迎えだけお願いね」
「分かってるわ。私達は最初に挨拶だけしたら、その後は何もしなくて良いのよね？」
「うん。俺がマルティーヌに屋敷を案内して、その後はお茶会をするから」

俺のその言葉に父さんと母さんはほっと安堵したような表情を見せる。やっぱり王女殿下相手は緊張するんだろう。でも段々と接する機会を増やして慣れてもらわないとだよな。いずれは家族になる

んだから。

マルティーヌと家族になるのか……なんか良いな、楽しみだ。俺は頭の中に将来像を描いて、ゆるゆると頬を緩ませた。

「マルティーヌ様と会うの久しぶりだね」

「マリーはあんまり会う機会がないからね。マルティーヌは喜ぶと思うよ」

「私も楽しみ！」

マリーは満面の笑みでそう言ってくれる。本当にマリーは可愛くて良い子だな……最高の妹すぎる。マルティーヌとマリーがもっと仲良くなってくれたら嬉しいな。

「そうだ、マルティーヌに餃子をお披露目する？　屋敷の案内で家族用の食堂に案内して、食べてもらうのもありだけど」

「良いのかしら……？　餃子なんておしゃれじゃないけど」

「大丈夫だよ。マルティーヌはそういうの気にしないから」

マルティーヌは甘いスイーツも好きだけど、食事も結構好きなのだ。餃子は新しいし気にいるはず。

「それなら……紹介させてもらおうかな。少しは交流を深めたいし」

「それもそうね。じゃあ最初に挨拶をしてから、私達は食堂へ向かうわね」

「了解。そしたら時間に余裕ができるように、食堂は後の方に案内するよ」

「ありがとう。頼んだわよ」

そうして午後の予定を話し合っていると、馬車は大公家の屋敷に

到着した。マルティーヌが来るまであと一時間ぐらいかな、凄く楽しみだ。

432、マルティーヌの来訪

屋敷に帰ってきてから、イレギュラーがありつつも急いで準備を整えていると、すぐにマルティーヌがやってくる時間となった。家族全員と使用人の大半で屋敷のエントランスに集まって来訪を待っていると、大公家の庭をゆっくりと進む王家の馬車が見えてくる。

マルティーヌに対して今更緊張することなんてないと思っていたのに、なぜか少しだけ緊張して手が冷たくなるのを感じた。それだけ王家の馬車は存在感があったのだ。

馬車が止まって扉が開かれると、豪華に、しかし品よく着飾ったマルティーヌが綺麗な笑みを湛えて馬車から降りてくる。

「マルティーヌ、いらっしゃい」

「レオン、お招きありがとう。皆様、お久しぶりです」

堅苦しい挨拶は無しにしようと事前に話し合っていたので気軽に声をかけると、マルティーヌは嬉しそうに顔を緩めてくれた。

「王女殿下、ようこそお越しくださいました」

「またお会いできて光栄です」

「マルティーヌ様、お久しぶりです」

父さん母さんマリーの挨拶を聞き、マルティーヌは自然な笑みを浮かべて皆に視線を向ける。

「私もお会いできて嬉しいです。これからも末長くよろしくお願い

いたします」
「じゃあ、さっそくだけど中にどうぞ。まずは応接室に」
「ええ、ありがとう」
そうして俺達はマルティーヌを出迎えて、応接室に移動した。家族皆はここで一度離脱だ。

「とっても素敵なお屋敷ね」
応接室でソファーに腰掛けてお茶を一口飲んでから、マルティーヌは嬉しそうな笑みを浮かべた。
「ありがとう。まだ婚約者だからってマルティーヌの意見を聞くことはできなかったけど、ここに住むようになったらマルティーヌが好きなように改築して良いからね」
「ふふっ、楽しみね。でもとっても素敵で、改築したい場所は思いつかないわ。使用人への教育も行き渡っているみたいだし、私が連れてくるのは最低限で良いかしら」
「そこはまた相談しないと」
マルティーヌが本当にこの屋敷に越してくるのか……まだ先の話ではあるけど、それが決まっている未来だということを改めて実感できて感慨深い。マルティーヌと一緒に住んだら、毎日が今よりもっと楽しいだろうな。
「そうだ、前に厨房が欲しいって言ってたのは？」
「もちろん、今でも欲しいと思ってるわ。作ってくれるの？」
「マルティーヌ専用の厨房を増築するよ」
「ありがとう。それも楽しみにしているわね」

最新設備完備で、家族の厨房みたいに休めるスペースも作ろう。マルティーヌと一緒に料理をしてその場で食べて楽しむなんて、絶対に幸せだ。

「この後は屋敷の中を案内してくれるんでしょう？」
「うん。全部回る予定だけど、特に見たい場所はある？」
「そうね……神獣様がいる場所は気になってるわ。それからやっぱりレオンの部屋かしら。後は食堂も。それから庭園ね」
「了解。じゃあそこを重点的に案内するよ」

それからは少しだけお茶を飲みながら休憩したら、さっそくマルティーヌを案内するために応接室を出た。マルティーヌは夕食前までには王宮に戻らなくてはいけないので、そんなに時間がないのだ。

「まずはさっきも通ったけど屋敷のエントランスから。ここはかなり広い作りにしてあるんだ。ファブリスにも余裕があるように。基本的にはこの屋敷に狭い場所はないようにしてあるよ」
「確かに神獣様は狭ければ不便よね」

マルティーヌはエントランスをぐるりと見回して、満足そうに頷いた。その様子を見て、傍らに控えていたアルノルが少しだけ口角を上げたのが見える。

「とても良い使用人を雇っているのね」
「うん、皆とても頼りになるよ。マルティーヌ、紹介してなかったけどそこに控えてるのが執事のアルノルだよ」
「あら、そうなの？」
「アルノルと申します。よろしくお願いいたします」
「こちらこそよろしくね。とても素敵なお屋敷だわ」

「お褒めいただき光栄でございます」
マルティーヌにこんなに褒められてるし、使用人の皆には褒美をあげないと。給金の上乗せが良いか現物が良いか、ロジェに相談しよう。
「マルティーヌ、次に行こうか」
次に俺達が向かったのは、パーティーなどを開く時に使うホールだ。まだ一度も使ったことはないけど、毎日綺麗に掃除してくれているのでピカピカに輝いている。
「素敵な内装ね」
「ホールは来客を呼ぶところだから、凝った内装にしたんだ」
この屋敷は基本的に俺達家族が住みやすいようにと、できる限り派手にならないようにしてるんだけど、エントランスとかこのホールとか、お客さんが入るところは煌びやかにしている。
唯一の大公家として、公爵家よりも豪華だというのが一目で分かるようになってるので、俺にとっては落ち着かないんだけど、王宮で暮らすマルティーヌにとっては慣れた光景だろう。
「結婚披露宴はここで開くことになるのよね」
「そうなる……のかな？　王宮の可能性もあるかなって思ってたんだけど」
「王宮でもパーティーを開くかもしれないけれど、最初の披露宴はここになると思うわ。……今から楽しみね」
そう言って微笑んだマルティーヌは凄く可愛くて、俺は自分の頬が緩むのを感じた。

「皆に楽しんでもらえるものにしたいよね。その時のためにも、最高のスイーツをヨアンに作ってもらわないと」
「それは素敵ね！」

ウェディングケーキはこの世界にない概念だけど、俺達の披露宴で初めてお披露目するのもありかなと思ってるのだ。俺のイメージではウェディングケーキって、三段以上のかなり大きなもので果物やお花で華やかに飾られてる感じなんだけど、絶対に貴族社会で受けると思う。
もう少し先の話になるけど、ヨアンに相談しようかな。

それからも俺の部屋やマルティーヌがこの屋敷に越してきたら住む予定の部屋、それから食堂やいくつかある応接室を案内し、屋敷の中では最後となる、俺達の家族専用の厨房へとやってきた。

ロジェが厨房のドアを叩くと、中から父さんの緊張した声が聞こえてくる。マルティーヌには厨房を案内するとしか言ってないので、中から父さんの声が聞こえてきて少し不思議そうだ。
俺はそんなマルティーヌに視線を向けて笑いかけ、ロジェにドアを開けるようお願いした。

433、厨房と餃子

ドアが開いて中に入ると、父さんと母さん、マリーが横一列に並んで出迎えてくれた。マルティーヌはそんな三人に驚きながらも挨拶をして、俺が勧めたソファーに腰掛ける。

「ここは……厨房、なのよね？　ソファーやテーブルもあるのが不思議だけれど。それに料理人はいないの？」

部屋の中をぐるりと見回しながら不思議そうな表情をしているマルティーヌに、父さんが口を開いた。

「ここはレオンが私達のために作ってくれた、家族専用の厨房なんです。ここで自由に料理をして、休んだり食事をしたりもできるようにとテーブルセットを準備してくれました。私達は中心街で食堂を開く予定なので、そこで出す料理の開発を行っています」

「まあ、そうだったのね！」

「マルティーヌが料理をできる厨房もこういうタイプにしようかなと思ってるんだけど、どう思う？」

父さんの話を聞いて瞳を輝かせているマルティーヌにそう聞くと、マルティーヌは嬉しそうに頷いてくれた。

「とっても素敵だと思うわ！」

「良かったよ。じゃあこの厨房をベースに考えて作るね」

マルティーヌはそこまで本格的に料理をするわけじゃないだろうから、ここほどに厨房そのものは大きくなくて良いはずだ。コンパ

クトで使いやすさを重視して、その代わりにソファーとかをより居心地が良いものにしよう。
料理をする時に着替えられるように個室もつけた方が良いかな。
……なんか、楽しいな。まだ何年も先の話なのに、早くマルティーヌと正式に結婚したくなってきた。

「マルティーヌ様、よろしければ私達が開発した料理を召し上がっていただけませんか？　餃子と言って、今度開店する食堂で売りに出す予定のものなんです」
「私が食べて良いのかしら？」
「もちろんです」
「ではいただきます。ありがとう、楽しみだわ」

父さんと母さんはマルティーヌの笑顔に緊張が解れた様子で、ソファーから立ち上がって厨房に向かった。餃子は焼きたてが美味しいから今から焼くのだろう。

「マルティーヌ様、本日のお洋服はとても可愛いですね」
「ありがとう。マリーちゃんもとても可愛くて素敵だわ。そのお洋服は……もしかして最近流行りの布を使っているのかしら？」
「そうなんです！　さすがマルティーヌ様、お詳しいですね。お兄ちゃん……じゃなくて、お兄様は気付いてくれないんです」
「ふふっ、殿方にそれを求めるのは酷だわ。でもレオンはもう少し興味を持っても良いのよ？」

マルティーヌとマリーの二人から視線を向けられて、俺は苦笑を浮かべつつ頑張るよって言うしかなかった。二人が結託したら俺は勝ち目ゼロだよ……まあ二人が仲良く話してると嬉しいし、俺は勝てなくても良いんだけど。

それにしても、マリーは本当に成長したよね。さすがにマルティーヌと並べばまだ粗が目立つけど、年齢を考えたらそこまで気になる程でもない。

「マリーちゃんは凄く可愛くなったわね」
「本当ですか？　嬉しいです」
「もう貴族家のお嬢様にしか見えないわ。とても優秀なのね」
「へへっ、お勉強を頑張りました！」

マリーは褒められて嬉しかったのか、無邪気な笑みを浮かべてお礼を口にした。その様子は貴族令嬢というよりも、平民時代の素のマリーという感じで微笑ましい。プラスでもマイナスでも感情が揺さぶられることがあると、まだ素が出てしまうのだろう。

マルティーヌはそんなマリーの様子を見て、優しい笑みを浮かべている。マルティーヌがマリーのことも大切に思ってくれていることが一目で分かる表情で、俺は嬉しくて頬が緩んだ。

「お待たせいたしました。こちらが餃子でございます」

そうこうしているうちに、餃子が焼き上がったようだ。マルティーヌはお皿に盛られた餃子を前に、瞳を輝かせて顔を少し近づけた。

「とても良い匂いがするわ。美味しそうね」
「そのままでも美味しく召し上がっていただけると思います。味を変えたい時には辣油をお使いください。あっ、毒味は必要でしょうか？」
「いえ、必要ないわ。ではいただくわね」

マルティーヌは毒味を断って、瞳を輝かせたままフォークで刺した餃子をナイフで半分に切って口に入れた。

「……とっても美味しいわ！」

「お口に合ったのならば良かったです」

「今までにあまりなかった不思議な料理ね。この具材を包んでいるのはパスタみたいなものかしら？」

「はい。小麦を使って作っています」

「包むというのは面白いわね」

残り半分も口に入れると、マルティーヌは幸せそうな笑みを浮かべてカトラリーを置いた。次は辣油を試してみるらしい。

「これは旧チェスプリオ公国の調味料よね？」

「そうだよ。俺がお土産に買ってきて、餃子に合うからこれからも輸入する予定なんだ」

「そうなのね……確かこれは一滴ほどで良いのだったかしら？」

「うん。結構辛いから本当に少しでアクセントになるよ」

スプーンで辣油を掬って少しだけ餃子に垂らすと、またさっきと同じように餃子を半分に切って口に入れた。

「本当ね、とても合うわ」

「マルティーヌ様は辣油をかけた方がお好きですか？」

「そうね……悩むけれど、どちらかを選ぶとするならば、かけてない方が好きかもしれないわ」

「私も一緒です！」

マリーはマルティーヌと好みが合って嬉しそうだ。でもマリーよりもマルティーヌの方が、辣油をかけた方も美味しそうに食べてた

な。そこは年齢の差もあるのかもしれない。

「こちらの餃子は食堂で売りに出すのだったかしら？」

「そうです」

「食堂も訪れたいわ。すぐには無理だと思うけど、いつかは訪れても良いかしら？」

「も、もちろんです。ありがとうございます！」

あの食堂にマルティーヌが来るのか……まあお忍びならそこまで騒ぎにはならないだろう。その時は俺も一緒に行こうかな。食堂デートとか楽しそうだ。

それからは皆で餃子を食べながら雑談を楽しみ、マルティーヌと家族皆の仲が少し深まったところで、厨房の見学は終わりとなった。これで屋敷の中の案内は終わったので、次は外だ。

434、ファブリスとマルティーヌ

屋敷の外に出た俺達は、お茶会をする予定の東屋に向かう前に、ファブリスの下へ向かっていた。マルティーヌがファブリスに挨拶をしたいのだそうだ。

「ファブリスの住居は裏庭にあるんだ。正面エントランスの近くにすることも考えたんだけど、落ち着ける場所が良いっていうファブリスの要望と、他にもいろんな理由があって裏庭にしてあるよ」

「そうなのね。神獣様は基本的にそちらにいらっしゃるの？」

「うーん、それが一番多いだろうけど、畑で寝てたり屋敷の中でくつろいでたり、マリーとお茶会をしてたり意外と動いてるかな」

ヨアンの厨房に顔を出して試作のスイーツをもらうことも覚えたらしいからね……最近はスイーツをいくら作っても、ファブリスが食べてくれるから助かるってヨアンが言っていた。

ファブリスって好きな時に寝てたまに散歩して美味しいものを食べてスイーツまで堪能して、マリーと遊んだり屋敷の皆と戯れてって、最高な生活してるよね。何も義務はないしやるべきこともないし、仕事は俺と一緒に魔物の森を駆逐するぐらい。それもファブリスは、たまの運動とストレス発散にちょうど良いとか言ってるし。

本当に世の中の人のほとんどが羨む生活だ。俺も数日ぐらいファブリスみたいな生活がしたいな。

――いや、俺は意外と耐えられないかもしれない。

今だって別にやろうと思えばできるのだ。ただ自分で次々に予定

を入れて忙しくしてるだけで。俺はそれが楽しいんだよね……根っからの仕事人間なのかな。

「裏はこんなふうになっているのね」
「うん。裏庭は基本的に全部畑だよ」
「なんだかワクワクするわ」
「マルティーヌがこの屋敷に越してきたら、マルティーヌ専用の畑を作る？　管理は使用人に任せるとしても、好きな作物を植えて成長を見守るのも楽しいんじゃない？」

畑を目の前に瞳を輝かせているマルティーヌを見てそんな提案をすると、マルティーヌはすぐに頷いて身を乗り出してきた。

「それは素敵だわ！」
「じゃあマルティーヌの畑にできる場所は確保しておくよ」
「楽しみね。何を植えようかしら。私はトマトが好きなのよね」
「トマトならマルティーヌも楽しく収穫できるかも」

収穫したトマトを使ってその場でトマトソースパスタを作ってもらうとか、絶対に楽しいし美味しいだろう。俺は頭の中の将来やることメモに、トマトの収穫とトマトソースパスタ作りを書き加えた。マルティーヌが実際に屋敷に来ると、やりたいことがどんどん増えていく。

「あっ、見えてきた。あれがファブリスの家だよ」

畑の向こうを指さしてファブリスの家を指し示すと、マルティーヌはさっきまでのはしゃいだ様子から一転、真剣な表情になり貴族の笑みを顔に浮かべた。
俺にとってはもうペットみたいな存在だけど、マルティーヌにと

ってはまだまだ緊張する相手なのだろう。

「ファブリス。今日はマルティーヌが屋敷に来てるんだ」

『ん？　ああ、レオンの妻だったか？　よく来たな』

「神獣様、お久しぶりでございます」

まだ妻じゃなくて婚約者だって言ってるのに……これは何度言い聞かせても直らないから、もう半ば諦めている。そのうち妻になるし良いよね。

「遠征から帰還し、疲れは癒えましたでしょうか？」

『うむ、問題ないぞ。お主は大丈夫か？　長旅は人間の方が体に負担だろう？』

「私もしっかりと休めましたので、問題ありません。気にかけてくださってありがとうございます」

そこまで話をすると、ファブリスは寝そべっていた自分のベッドから立ち上がって俺達の方に向かってきた。そしてマルティーヌの目の前に座ると、また口を開く。

『そういえば、お主はずっと我のことを神獣と呼んでいるな。我の名はファブリスだ。そちらで呼ぶと良い』

「本当ですか……！　ありがとうございます。ではファブリス様と」

『うむ、それで良いぞ』

そうしてマルティーヌとファブリスの距離がまた少しだけ縮まったところで、ファブリスは瞳を輝かせながら俺に視線を向けた。

『ところで主人、今日は降誕祭らしいな。降誕祭ではミルクレープを食べるんだろう？』

「……ファブリスも食べたいんだ」

遠回しでのスイーツの催促が面白くて思わず笑ってしまうと、ファブリスは照れたのか顔を横に逸らした。

『別にそういうことではない。ただの事実確認だ』

「ははっ、そっか。今日は降誕祭で合ってるよ。だからもちろん……ファブリスの分のクレープもあるから安心して」

今日の午前中に屋台でお土産として買っておいたクレープと、ヨアンが事前にたくさん作っておいてくれたスイーツ、そして降誕祭の特別仕様のミルクレープ。

その三つを次々とアイテムボックスから取り出すと、ファブリスの瞳が輝いていき、尻尾もぶんぶんと振られ始めた。かなり嬉しいみたいだ。

「これ、全部食べて良いからね」

『それは本当か！？　主人、恩に着る』

ファブリスはご機嫌に尻尾を揺らしながら近くにいた使用人を呼んで、俺が取り出したスイーツを机の上に並べてもらっている。そしてさっそく食べ始めるようだ。

「ファブリスは本当に食いしん坊だね……」

「ファブリス様はスイーツがお好きよね。そうだ、今度王宮でお茶会をするときに、ファブリス様もご参加されますか？　たくさんスイーツを準備させます」

『ぬ、それは本当か？　もちろん参加しよう』

「ありがとうございます。では日程が決まり次第、招待状をお送りさせていただきます」

『うむ、待っているぞ』

王宮でのお茶会にファブリスも参加するのか。確かに今まではあんまり連れて行ったことがなかったかも。

王宮で出てくるスイーツは王宮の料理人さん達の手が加わって、また違う味わいのものもあるから、ファブリスは楽しめるかもしれない。これでマルティーヌとファブリスの仲がもっと良くなったら良いな。

「じゃあファブリス、俺達は行くよ」

「失礼いたします。またお会いできる時を楽しみにしております」

『うむ、お主ならいつでも来てくれてかまわんぞ』

「ありがとうございます」

そうして俺達はファブリスの下を後にして、また屋敷の表側に戻った。これでほとんど案内は終わったから、後は庭園を歩きながら東屋に向かえば良いかな。マルティーヌとのお茶会、楽しみだ。

４３５、特別なミルクレープでお茶会

綺麗に整えられた庭園を楽しみながら歩みを進め、お茶会の準備が整えられた東屋にやってきた。俺達がテーブルにつくとすぐに淹れたてのお茶が供されて、まずはクッキーなど食べやすいスイーツが置かれる。

「このクッキーは新作なんだ。食べてみて」

二人だけのお茶会で形式を守る必要はないので、気楽に話を続けながらクッキーを勧めた。するとマルティーヌは不思議そうな表情でクッキーを一枚手に取る。

「黒っぽいソースが掛かってるのかしら？」
「うん。実はそれがチョコレートなんだ」
「え、チョコレートが完成したの！？」
「まだ完成には時間が掛かるんだけど、とりあえずそこそこ美味しく食べられるようにはなったよ。だからマルティーヌにも食べてもらおうと思って、今日はこれを準備してもらったんだ」

苦くて人を選ぶチョコレートだけど、溶かしてクッキーに掛けるとクッキーの甘さとマッチして美味しいのだ。これなら苦いものが苦手なマルティーヌでも美味しく食べられると思う。

「ありがとう。チョコレートの完成はずっと楽しみにしていたの。……今まで嗅いだことがない香りね」
「コーヒーと同じで初めての人には独特かもしれないけど、味は美味しいと思うよ」

「いただくわ」

マルティーヌはクッキーに掛けられたチョコレートを様々な角度から観察して、しばらくしてから恐る恐る口に運んだ。そして数回咀嚼すると……瞳を見開いて驚きをあらわにする。

「これ、とても美味しいわね」

「気に入った？」

「ええ、私は好きよ。何て表現すれば良いのか難しいけれど……パリッとした食感と鼻に抜ける独特な香り。それからしつこいとまでは言わないけれど、口の中に残る独特な風味。癖になる味ね」

「気に入ってもらえて良かった。苦味はどう？」

俺のその質問を受けてもう一枚クッキーを口に運んだマルティーヌは、難しい表情でゆっくりと咀嚼していく。

「そうね……少し苦味はあるけれど、私はそこまで気にならないわ。ただもう少し甘い方がもっと美味しいかもとは思うわね」

「やっぱりそうだよね。俺ももう少し甘い方が良いかなと思って、ヨアンに開発してもらってるんだ。これはクッキーに掛けてるから良いんだけど、チョコレートだけで食べようと思うとかなり苦味を感じたから」

そんな会話をしている間にも、マルティーヌはまたクッキーに手を伸ばした。このペースで食べてるのは、かなり気に入ってる証拠だろう。マルティーヌはチョコレートケーキとか作ったら、めちゃくちゃ喜ぶかもしれない。

俺はチョコレートケーキを頬張って瞳を輝かせるマルティーヌを思い浮かべ、幸せな気分に浸った。ヨアンにはチョコレートの開発

を最優先でやってもらおうかな。

「レオンは午前中に平民街の降誕祭へ行ったのよね？」
「うん。家族皆と行ってきたよ」
「どうだった？　賑わってたかしら」
「もう凄かったよ。屋台がたくさん出てて広場には人がごった返してた。それに教会も凄い人で、礼拝するにはしばらく並ばないと教会内部にも入れなかったんだ」
「そうなのね。それは凄いわ」

今年が初開催のお祭りとは思えない賑わいだった。やっぱり事前にクレープを広めるために各地で屋台を開いてもらったりして、降誕祭というお祭りの普及に力を入れたからだろう。ミシュリーヌ様には何かご褒美をもらいたいぐらいだ。

「屋台に売ってたクレープをいくつか買ってきたけど食べてみる？」
「本当！　食べてみたいわ！」
「じゃあいくつか出すね」

アイテムボックスから卵焼きクレープとステーキクレープ、それからトマトソースパンクレープの三つを取り出して、ロジェに一口分だけ切り分けてもらった。
マルティーヌはその三つを興味津々な様子で見つめ、フォークを使って優雅に口に入れる。まず食べたのはトマトソースパンクレープだ。

「美味しい……けど、クレープの皮がいらないかしら？」
「ははっ、やっぱりそう思うよね。俺達もそれはトマトソースパンで良いかなって感想だったよ。でもクレープの生地で包むことで持ち運びはし易くなるし、手も汚れなくなるからありと言えばありか

な」
「確かにそうね。クレープは平民の間では、その食べやすさも人気のポイントなのよね？」
「うん。歩いて食べやすいっていうのは屋台の料理で重要だから」
それからマルティーヌはステーキクレープと卵焼きクレープも食べたけど、どちらも微妙な表情をしていた。ただ味は微妙だけど、面白いクレープを食べて楽しそうではあったから、お祭りで売る料理として数年ぐらいはこれらも正解なのかもしれない。
「美味しいクレープが食べたくなっちゃったわ」
「分かる。自分で言うのも微妙だけど、やっぱり俺が最初に作ったクレープが美味しいよね」
「あれは絶品よ」
「今それを出すこともできるんだけど……マルティーヌはまだお腹空いてる？」
「いえ、結構食べてるから空いてはいないけど」
「じゃあ今日はクレープは我慢して、これを食べない？　降誕祭用の特別なミルクレープなんだ」
このお茶会のためにヨアンに準備してもらっていたミルクレープをアイテムボックスから取り出すと、マルティーヌは瞳を輝かせて両手を合わせた。
「凄いわね！　美味しそうだけど、綺麗で壊したくない芸術だわ」
「それを聞いたらヨアンが喜ぶよ」
「切り分けてしまうのが本当にもったいないわ……」
「でもこれ、切り分けても綺麗になるように計算されて盛り付けられてるんだ。あと断面も凄く綺麗だよ」

俺のその言葉を聞いてさらに瞳を輝かせたマルティーヌを見て、俺はロジェにミルクレープの切り分けを頼んだ。ロジェの無駄のない手つきで切り分けられたミルクレープは、やはりまだ芸術のように綺麗だ。

「本当に凄い、感動するわね」
「食べてみて。味も美味しいよ」
「ええ、いただくわ」

ミルクレープに恐る恐るフォークを入れて、ゆっくりと口に運んだマルティーヌは……幸せそうに顔を綻ばせた。俺もそんなマルティーヌの表情が見ることができて、自然と笑顔になる。

「本当に美味しいわ。凄く素敵なスイーツね。この下の層は……タルト生地かしら？　とても良いアクセントになってるわね」
「ヨアンがこだわりだって言ってたよ。あとそのタルト生地の上にカスタードクリームの層もあるんだって」
「確かに……感じるわね。これもよりミルクレープを引き立てているのね。果物の酸味とソースの甘みも絶妙に合っているし、いくらでも食べられそうだわ」

マルティーヌはそう言って、もう一口ミルクレープを口にした。そしてそれからは俺も一緒にミルクレープを堪能し、美味しくて幸せで、最高に楽しいお茶会の時間は過ぎていった。
またマルティーヌを屋敷に呼んでお茶会をやろう。俺は心の中でそう決めて、美味しいフルーツティーを口に含んだ。

４３５、特別なミルクレープでお茶会（後書き）

転生したら平民でした。～生活水準に耐えられないので貴族を目指します～
書籍３巻が１２／２８に発売となります！
Ａｍａｚｏｎ等のサイトやＴｗｉｔｔｅｒに書影を載せておりますので、ぜひ見てみて下さい！
今回もとっても素敵な表紙で、密かに人気のあの女の子が表紙を飾っています。

書籍の３巻はｗｅｂ版とはかなり流れが変わっていて、相当な加筆修正をしております。オリジナルストーリーも追加され、ｗｅｂ版が既読の方にも楽しんでいただけると思いますので、ご購入いただけたら嬉しいです！
今回の書き下ろし番外編はロニー視点となっていますので、そちらもお楽しみ下さい！
ちなみに本編では、ミシュリーヌ様が大活躍するかもしれません。

すでに予約が開始されていますので、ぜひ予約の方もよろしくお願いいたします。
もし書籍版の購入を今まで迷っておられた方がいましたら、３巻発売のこの機会にまとめて楽しんでいただけたら嬉しいです。レオン達の物語をより深く堪能していただけると思います！

活動報告にも書籍に関する情報を載せてありますので、そちらもぜひご覧ください。
いつも応援ありがとうございます。これからもよろしくお願いいたします。

蒼井美紗

閑話　降誕祭の特別な神託（ミシュリーヌ視点）

今日は降誕祭の当日。クレープが食べ放題の日！　のはずだったんだけど、私はこの前の前夜祭で好きなだけクレープを食べたから、今日は五個までしかダメだとレオンに止められたわ。

まあ前夜祭で目一杯楽しんだから良いんだけどね、凄く美味しかったのを覚えてるから良いんだけどね。

――うぅ、泣きたい。下界の皆があんなにクレープを楽しんでるのに、なんで私は五個だけなのよぉぉ！

「とりあえず、気を紛らわせるためにもいつも通り神像を光らせようかしら」

そう考えた私は、ラースラシア王国の王都中心街にある教会の様子を映し出した。礼拝堂の中には、いつもより大勢の人がひしめき合っている。

「光れっ！」

いつもより光を強く大きくして、降誕祭の特別感を出すようにしてみると、神像が光った途端に礼拝堂の中にいる全員が一斉に跪いた。

こんなに私が信仰されてるなんて、少し前には信じられなかったわ。完全にレオンのおかげよね……感謝しないと。レオンのおかげでこの世界は存続できそうだし、私は美味しいスイーツを食べられてるんだから。

さて、今日もいつもみたいに誰かに神託をしようかしら。でもいつもと同じだと特別感がないわよね……

私のいつもの神託はちょっとした悩みにアドバイスを与えたり、夫婦喧嘩をしたとかそんな程度の争いを解決したり、そのぐらいしかできていない。私は下界の個人に直接干渉することができないから、解決する方法がないことが多いのよ。

だけど降誕祭の日ぐらいはもう少し重い悩みを解決してあげても良いわよね……レオンにも特別にしてって言われてるし。

「あれ、あの子また来てるのね」

礼拝堂の中を写している映像に、ふと気になる男の子が目に入った。あの子は私が定期的に人々の祈りを聞くようになった最初の頃から、ほぼ欠かさず来ているのだ。

多分レオンと同じぐらいの歳で、今日は妹も連れて来ている。

――ミシュリーヌ様、母さんの病気を治してほしい。お願いします。

「いつもこの願いなのよね……私には下界の人間の治癒なんてできないから、いつもはスルーしてるんだけど、降誕祭の日ぐらいこの願いを叶えても良いかしら。レオンに頼めば治せるだろうし」

今のレオンは何をしてるのか確認しようと思って大公家の屋敷を見てみると、ちょうどエントランスに馬車が入ってきてレオン達が降りてきたところだった。

どこかに出かけて帰ってきたのね、ちょうど良いわ。

私は少しだけ待ってレオンが私室に入ったのを確認してから、レ

オンに向かって声をかけた、

「レオン、聞こえるかしら。レオン？」

「あれ、ミシュリーヌ様ですか？」

問題なくレオンに声が届いたようで、レオンは神物である本を取り出して手に持った。これで問題なく会話ができる。

「何かありましたか？」

「一つ相談があるのよ。今日は私の降誕祭じゃない？　だからいつもと違った特別な神託をしたいと思ってて、だけど私の力だけだと無理だからレオンに手伝って欲しいの」

「特別な神託って、何をするんですか？」

「母親の病気を治してほしいって願いを聞き入れようかと思って。あっ、レオン。あの子達が礼拝堂から出ちゃうから下界の時を止めるわね！　その代わりレオンを神界に呼ぶわ！」

私はレオンにそう伝えると、すぐに下界の時間を最大限に遅くした。ふぅ……間に合って良かったわ。いつもはもっと長く祈ってるのに、今日は混んでるから周りに流されそうになったみたいね。

「ミシュリーヌ様、間に合いましたか？」

下界の時間を遅くしたのと同時に呼び寄せていたレオンが来たみたいで、慣れた様子でソファーに座って私が見ていた画面を覗き込んだ。

「ええ、間に合ったわ。ここに兄妹がいるのが分かる？」

「分かります。俺とマリーぐらいの歳ですね」

「そうなのよ。この子達がもうずっと、ここの礼拝堂に祈りに来て

るの。私では叶えられない願いだから神託相手に選んだことはなかったんだけど、降誕祭の日ぐらい特別に良いかなと思ってレオンに相談したのよ。レオンが特別感を出すようにって言ってたでしょう？」

私がそう話をすると、レオンは痛ましい表情を浮かべて二人を見た。レオンは優しすぎるのよね……それが良いところだけど、自分を追い込むこともあるはずだわ。

「降誕祭に起きた奇跡ということになると思いますし、ミシュリーヌ様への信仰心も上がって良いと思います。俺がこの子達の母親を治せば良いのですね」

「ええ、頼んでも良いかしら？」

「もちろんです。家は分かりますか」

それからレオンはこの子達の家を聞くと、転移できるようにその内部までしっかりと確認してから下界に戻っていった。私はレオンが戻ってから、下界の時を通常に戻して兄妹に神託をする。

「聞こえるかしら？　そこの男の子よ。赤い髪を短く切りそろえて、左膝と右足の裾に別の布を貼り付けた服を着てるあなたよ」

男の子の特徴を示しながら声をかけると、男の子はきょろきょろと辺りを見回してから、光らせたままの神像に視線を向けた。

この子の家は中心街の外にある貧しい人達が住むアパートなのに、ここまで定期的に歩いてきてるだけで凄いわよね……私が覚えてるほどのその努力が、あなたの母親を救うのよ。

――俺のこと？

「そうよ。あなたに神託を授けるわ。あなたの母親を思う強い愛情とここに足繁く通う努力、その二つによって母親の病気を治しましょう」

私はそこまでを伝えると神託を切った。シェリフィーに教えてもらったんだけど、神託は長く話せば良いってものでもないらしいのよ。このぐらい端的に情報だけ与えるほうが、神聖視して信仰心が上がるみたい。

私のその言葉を聞くと、男の子は妹の手を引き、慌てた様子で礼拝堂を出ていった。

「レオン、男の子達が家に帰っていったわよ」

家で鉢合わせないようにと思ってレオンに伝えると、レオンからはすぐに返事が返ってきた。

「大丈夫です。さっき母親を治してもう屋敷に戻ってきました」

「……早いわね」

「転移なら一瞬で行けますから。さっき神界で見た限りでは母親が寝てるみたいだったので、ちょうど良いと思って。姿を見られることなく治癒できましたよ」

「それなら良かったわ。レオン、ありがとう」

「いえ、また何かあったら言ってください。あっ、でもこれからマルティーヌが来るので、緊急なこと以外は後回しでお願いします」

レオンは嬉しそうなのが分かりやすく伝わってくる、浮かれた声音でそう言った。レオンはあの王女様のことが本当に好きよね……

「分かったわ。じゃあまたね」

そうしてレオンとの通信は終わりにして、私は神界にあるソファーに腰掛けた。ここからは私もお楽しみタイムだ。

「神像は光らせてるし神託も済ませたし、満を持してスイーツを食べるわよ！」

私はこの世界に作り出されたスイーツの数々を思い浮かべ、五個という制限の中でどれを選ぶのか吟味を始めた。やっぱりスイーツは最高ね、考えてるだけで幸せになれるわ！

閑話　降誕祭の奇跡（第三者視点）

降誕祭というお祭りの最中、中心街の大通りを必死の形相で駆け抜ける子供達がいた。そう、先ほどミシュリーヌ様からの神託を授かった兄妹だ。

「お兄ちゃん、止まってよ……苦し、いよ……」
「あっ、ごめん」

兄に手を引かれた妹の方に体力の限界が来たようで、その場に立ち止まって荒い息を吐いている。

「そんなに慌てて、どうしたの？」
「さっき聞こえたんだ、ミシュリーヌ様の声が。母さんを治してくれるって言ってたんだ」
「それ本当？　空耳じゃない？」
「そうじゃない……と思うけど」

男の子は改めて聞かれると自信がなくなったのか、不安げな様子でそう口にする。突然神から神託を受けたとしても、少し時間が経てば夢だったのか、自分の願いが強くて幻覚を見ていたのか、それともただの妄想だったのかと思うだろう。

「とにかく家に帰れば分かるから、早く帰ろう」
「うん。でももう少しゆっくりにして」
「分かった。じゃあ歩いて行こう」

それから気持ちは焦りながらも足はゆっくりと動かして、二人は

中心街を抜けて平民街の路地に入った。
狭い路地を右へ左へと、初めて来た者なら確実に迷っているだろうほどに路地を奥まで進んだところで、二人はやっと立ち止まる。
目の前にあるのは、かなり年季の入った隙間風がそこかしこで吹き抜けていそうなアパートだ。そんなアパートの二階にある真ん中の部屋がこの兄妹の家らしい。

鍵は壊れていて建て付けが悪く、少しだけ開いた状態のまま放置されていた玄関ドアを男の子が大きく開き、二人で部屋の中に入る。中からは一応鍵を閉められるようで鍵を閉めると、二人は狭い部屋の奥に敷いた布の上に横たわっている母親に駆け寄った。

このアパートの一室は六畳ほどの部屋が一つしかないようだが、そんな狭い部屋の中にはほとんどものが置かれていなかった。
寝るときに使うのだろういくつかの布と服が数着、それから生のままでも食べることができる野菜が、部屋の端に萎びた様子で置かれている。他にあるのは木製の桶など生活に最低限必要なものだけだ。

この状態では泥棒が入ることもなく、玄関ドアの鍵が壊れていたところで支障はないのだろう。

「母さん、大丈夫？　寝てる……？」
「お母さん、元気になった？」

二人がベッドで眠る母親に声をかけると……最近はほとんど開かなくなっていた母親の瞳が、ぱっちりと開いた。そして何度か瞬きを繰り返し、ゆっくりと床に手をついて起き上がる。

「母さん、起きて大丈夫なの！？」

「あんなに辛かったのに……辛くない？　もしかして、治ったのかしら」

母親も現状を理解しきれないようで、パチパチと瞳を瞬かせながら部屋の中を見回した。そして徐に立ち上がると、自分の体がしっかりと動くことを確認する。

しばらくの間ほとんど寝たきりだったために動きはゆっくりだが、瞳には生気が宿っている。

「お、おかあさん……っ、よがっだ……」

「うわぁぁぁん、おかあさん、元気になった！」

立ち上がって動き出した母親を見て、男の子は瞳に涙を浮かべて耐えきれない涙を溢し、女の子は声をあげて号泣している。母親はそんな二人を見て優しい笑みを浮かべ、二人を同時にギュッと抱きしめた。

「あなた達、心配かけたわね。お母さんはもう大丈夫よ」

「本当に良かった……っ、母さんっ」

「ひっく……っおかあ、さんっ……」

それからしばらく三人は抱き合い、二人が落ち着いたところで体を離した。しかし二人とも母親にピッタリとついて離れないようだ。母親はそんな二人の様子を見て優しい笑みを浮かべている。

「それにしても、何で急に良くなったのかしら」

「あのさ、ミシュリーヌ様に頼んだんだ。ミシュリーヌ様が願いを叶えてくれたって話を聞いて、神像が光る時間に中心街の教会に通ったんだ。そしたら今日、ミシュリーヌ様の声が聞こえて、母さんを治してくれるって。それで急いで帰ってきたら母さんが元気にな

ってて……」

男の子のそんな説明を聞いて、母親は驚愕に瞳を見開いて動きを止めた。そしてすぐ祈るように頭を下げる。

「ミシュリーヌ様、命を救ってくれてありがとうございます。このご恩は……決して忘れません」

「ミシュリーヌ様、ありがとうございます」

「ありがとう、ございます」

母親に続いて、子供達二人もミシュリーヌ様へのお礼を口にした。

「今度中心街の教会に皆で行きましょうか。しっかりとお礼を言わなければいけないわ」

「うん、行く。一緒に行ける？」

「もちろんよ。これから母さんはどんどん元気になるんだから」

「そっか、良かった」

男の子は母親の元気になるという言葉を聞いて、頬を緩めて力の抜けたような笑みを浮かべた。母親の看病をして妹の面倒を見て、生きていくためになんとか食料を確保してと、今まで必死に頑張ってきたのだろう。

「ねぇお母さん、そこに置いてあるのなに？」

三人で話をしていると、部屋の中を見回していた女の子が突然そう言って部屋の一角を指差した。母親が寝ていた布の近くに置かれた、両手で抱えるほどの木箱だ。

「何かしら……私は知らないわ」

「俺も知らないよ」
「とりあえず、開けてみるわね」
母親はそう言うと二人を下がらせて、少し緊張した様子で木箱の蓋を手にした。そして意を決した様子で蓋を開くと……歓喜の声をあげる。
「食べ物がたくさん入ってるわよ！」
「え、本当！？」
「本当だー！」
「ジャガイモ、にんじん……野菜がたくさんあるわ。それに干し肉がたくさん！　パンもいくつも入ってるわ。それにこれは……スープよ！」
母親が木箱から取り出した鍋の中には、まだ温かいスープがたっぷり入っているようだ。野菜や肉、卵まで入った栄養満点のスープは、今のこの三人にぴったりだろう。
「母さん、紙が入ってるよ」
「本当ね。文字が書いてあるけど……母さんには読めないわ」
「あっ、母さん、俺この字知ってる！　これミシュリーヌ様って意味の文字だ！　教会に何回も通ってたら教えてもらったんだ」
「そうなのね……じゃあこれはミシュリーヌ様からの物なのね」
母親はそれを認識すると、再度深く頭を下げた。そして頭を上げると、二人に器とスプーンの準備を頼む。
「ミシュリーヌ様に感謝して食べましょう」
「うん！　こんなに具がたくさん入ったスープなんて贅沢だ」
「温かい料理久しぶり！」

母親は二人のそんな喜びの声を聞き、苦しい生活を送らせていることへの申し訳なさを感じて微妙な表情になったが、すぐにこれから自分が頑張って少しでも二人を幸せにしようと気合を入れ直す。

「ありがたく味わって食べるのよ」
「うん！　いただきまーす！」
「いただきますっ」

それからその部屋には、親子の楽しそうな笑い声が絶え間なく響いていた。

436、秘密の鍛錬

降誕祭が終わってから数日が経ったある日。俺はマルティーヌとの約束を果たすために、転移でこっそりと王宮を訪れていた。その約束とは、王都の外で一緒に鍛錬をするというものだ。

この前のお茶会の時に日時と時間を定めていたので、その時間ぴったりに転移をした。

「マルティーヌ、お待たせ」

指定の場所、マルティーヌの部屋の中に転移をすると、中にはメイドさんが一人と護衛の女性が一人いるだけだった。一応マルティーヌをこっそりと連れ出してのデートなので、騒ぎにならないようにごく少数の側近にしか今日のことは伝えていないのだろう。

「レオン、来てくれてありがとう！」

マルティーヌはやる気十分な様子で、訓練着に身を包み髪はポニーテイルにして括っている。このマルティーヌの姿は久しぶりに見るな……やっぱりこの姿はいつもとギャップがあって良い。

「当然だよ。今日は抜け出しても大丈夫？」

「ええ、特に予定はないわ。夕食までは部屋で刺繍をやっていることにしてあるから、それまでに戻ってくれれば大丈夫よ」

「了解。それなら三時間はあるね。さっそく行こうか」

俺が差し出した手を、マルティーヌは嬉しそうな笑みを浮かべながら取ってくれた。俺はそんなマルティーヌの様子に頬を緩めなが

ら、二人一緒に転移を発動した。
転移先は王都周辺の森の中だ。それもかなり奥の人が入らない場所。
マルティーヌと鍛錬をするにあたって事前に下見に来て、人目につかない良い場所を探しておいたのだ。そして俺が見つけたのが、川のほとりのこの場所だった。
「わぁ、とっても綺麗ね」
「喜んでもらえて良かった。この川はちょうど良い大きさで綺麗だよね」
「ええ、川が流れる音も良いわね」
マルティーヌは川のせせらぎに耳を傾けながら、森の中をぐるりと見回した。この場所はもちろん草は綺麗に刈ってあるし、木も邪魔なやつは切らせてもらった。
さらに周辺の景色が良くなるように適度に草を刈って木を伐採し、太陽の光がちょうど良く差し込むようにしてある。
俺がやったんだけど、改めて見にくると綺麗に整ってるな……木々が鬱蒼と生い茂った森でデートとか微妙なので、頑張って良かった。まあデートっていうよりも鍛錬なんだけど。
「やっぱり自然の中に来ると気持ちが落ち着くわね。人の手によって完璧に整えられた庭園とは違うわ」
それは分かるな……庭園って綺麗でたまに見るのは良いんだけど、毎日見てると飽きてくるというかなんというか。もう少し手を入れないでほしいと思ってしまうのだ。
庭園は基本的に少しでも伸びたら切り揃えられてしまうから、日

々景色が変わらないのも飽きる原因だと思う。

だからといって、大公家の屋敷の庭で植物を伸ばしっぱなしにしておくわけにはいかないことも分かってるので、無茶なことは言わないようにしてるけど。

「さっそく鍛錬しようか」

「ええ」

「布を敷くからストレッチからね」

アイテムボックスから分厚めの布を出して、マルティーヌの服が汚れないように配慮し、ストレッチを始める。

「マルティーヌって普段は一人で鍛錬してるんだよね？」

「そうよ。王立学校を卒業したし、もう鍛錬はやらなくても良いって言われてるんだけど、健康のためにもやってるわ」

「そうなんだ。絶対にやった方が良いと思うよ。激しい運動はいらないかもしれないけど、ストレッチと体力作りぐらいは」

「これからも続ける予定よ。美味しいスイーツを食べ過ぎて、動かないと太ってしまうもの」

確かにそうなんだよね……俺はちょっとだけ罪悪感を覚えた。貴族全体が太って不健康になったら、俺のせいかもしれない。ここは責任持って低カロリーなスイーツを考えようかな。

「よしっ、もう良いわ。じゃあレオン、手合わせをしない？」

「木剣で？　もちろん良いよ！」

やる気十分なマルティーヌの様子に嬉しくなり、俺はアイテムボックスから木剣を二つ取り出した。そして一本をマルティーヌに手

渡す。

そこからは真剣にマルティーヌと手合わせをした。マルティーヌは毎日コツコツと鍛錬しているだけあって、力はないけど技術は高かった。俺も大いに学ぶところがある、良い鍛錬になった。

一時間ほど木剣を振るって二人ともが汗を流し始めた頃、鍛錬をやめて休憩することにした。アイテムボックスからテーブルと椅子を出して二人で座り、鍛錬して体が温まっているので冷たいジュースを飲む。

「これ美味しいわね」
「本当？　良かった。果物をいくつか混ぜたミックスジュースなんだ。ヨアンが一番合う組み合わせを考えてくれて」
「そうなのね。今まで飲んだことがない味だから、どんな果物かと思ったのよ」
「全部普通に売ってる果物だよ」

マルティーヌはミックスジュースをまじまじと見つめてから再度口に運び、味わいながら頬を緩めた。

「気に入ったならレシピを渡そうか？」
「良いのかしら……」
「マルティーヌになら大丈夫だよ。これは売り物にする予定もないから。果物の組み合わせだけだしね」
「それなら、いただくわ」
「じゃあ後で紙を渡すよ」
「ありがとう」

そんな話をしながら森の中で優雅に休憩をして、疲れが癒えたところでテーブルと椅子を仕舞った。そしてこれからどうするか二人で相談をする。

「まだ一時間ぐらい時間はあるけど、どうする？」
「……もしレオンさえ良ければ、もう少し帰りたくないわ」
「了解。俺はもちろんいつまでも大丈夫だよ」

俺のその返答を聞いて、マルティーヌは嬉しそうな笑みを浮かべた。

「川で釣りをすることもできるし、服を着替えて王都の外れを歩くこともできるよ。後は……農業地帯にも行けるかな」
「それなら釣りをしたいわ！」
「釣りね」

釣りをするのなんてマリーとして以来かもしれない。俺は楽しそうなマルティーヌに釣られて笑顔になりながら、アイテムボックスから釣竿を取り出した。

「釣り竿って初めて見たわ」
「前にマリーとやったことがあって、その時は釣り竿がなくて苦労したから買ったんだ。この針に餌となる虫をくっつけるよ」
「そうなのね。頑張るわ」

それからマルティーヌは驚異の釣りの才能を発揮し、まさかの短時間で三匹も釣り上げるという結果になった。
ちなみに俺はゼロだ。まあ、これが普通だよね……と思いたい。
マルティーヌが釣った魚はせっかくなので、二人で塩焼きにして美味しく食べた。素人が捌いて塩味だけの焼き魚は、普段食べてる

料理と比べたら美味しさは劣るのだろうけど、自分達で釣ったということと二人だけで森の中にいるという状況、それらが作用して本当に美味しかった。

またマルティーヌと遊びに来たいな。そう思いながら、満足した気持ちで王宮に転移した。

437、大公家の食堂開店

今日はとてもめでたい日だ。何の日かというと……大公家の食堂が開店する日なのだ。つまり父さんと母さんの食堂が再開する日でもある。

ついにこの日が来たかと、本当に感慨深い。二人から食堂の仕事を取り上げちゃったのは俺だから、また二人が働けるようになって良かった。

俺は今、食堂の裏にある一室にいる。俺の他にいるのは父さんと母さん、ティノ、マリーだ。開店まで後一時間ほどで、お店では雇った従業員がテキパキと働いて準備をしてくれている。従業員とは何度か顔を合わせてるけど、ロニーとティノが選別してくれただけあって、とても良い人達ばかりだ。

「ついに開店ね。緊張するわ」

「ロアナさん、大丈夫です。ちゃんと準備をしてきたんですから」

ティノはこの食堂にいる時だけ、父さんと母さんのことをさん付けで呼ぶという決まりにしているようだ。確かに様付けで呼んでたら、身分がバレバレだからね。

「ロアナ、頑張ろう」

「ええ、喜んでもらえるように頑張るわ。お客さんは来てくれるかしら」

「母さん、その心配はいらないよ。さっきお店の前に何人もお客さんが並んでるのを、確認したから」

この食堂は大公家によるものだと宣伝しているので、大公家と少しでも縁を持ちたい人達がたくさん訪れているんだと思う。最初のきっかけは大公家だからという理由でも、お客さんを集められれば良い。

そうして一度来て料理を食べてくれさえすれば、このお店にハマってくれるはずだから。美味しさは他の食堂と比べ物にならないからね。さらに新しい料理ばかりだから、珍しさでもお客さんが集まるだろうし。

「貴族様が来たりはするかしら」

「うーん、一応中心街の入り口寄りに位置してるから、貴族はあんまり来ないと思うんだけど……貴族家の使用人は確実に来るだろうし、商人もたくさん来ると思う。貴族も下位貴族は来るかな」

でも貴族が来ても良いように接客を教え込んだし、大丈夫だろう。最低限の礼儀は弁えられているはずだ。

「じゃあロアナ、そろそろ厨房に入ろうか」

「そうね」

それからしばらくは忙しく動き回り、ついに開店となった。開店と同時にお客さんが店内に入ってきて、すぐに席はいっぱいになる。

「いらっしゃいませ。こちらがメニューです。ご注文の品が決まりましたらお声がけください」

「分かりました。ありがとうございます」

そんなやり取りがそこかしこから聞こえてくる。ちなみに俺はお店には出ず、厨房からカウンターを通してお店の様子を伺っている。マリーも一緒だ。

「すみません！」
「はい。お決まりですか？」
「この焼き餃子と水餃子、後はチャーハン？　ってやつをもらえますか？」
「かしこまりました。少々お待ちください」

おおっ、さっそく餃子が頼まれている。さらにチャーハンもだ！
実はこの食堂の開店に合わせてお米も少しずつ広めようと思い、この食堂ではいくつかの米料理をメニューに加えているのだ。その中でも一番の自信作がチャーハンだ。
チャーハンは塩胡椒の味付けでかなり美味しくなるので、醤油なしでも完成度が高くなっている。

「お待たせしました。焼き餃子と水餃子、さらにチャーハンです」

料理を受け取った二人組の男性達は、まずチャーハンを食べるみたいだ。スプーンで恐る恐る掬って口に入れると……驚きに目を見開いた。

「何だこれ、美味っ！」

思わず素が出たようで、そんな男性の声を聞いた周りのお客さんも、次々にチャーハンを頼んでいく。
実はチャーハンには鶏がらスープが使われているのだ。鶏がらスープはティノと初めて会った時に、ティノが出してきた料理の中にあった一つだ。あの時は本当に驚いたんだよね……今となっては懐かしい。
水餃子やスープなどにも鶏がらスープを使っているので、この食

堂の料理は他の食堂とは一線を画しているはずだ。俺は何度も食べてるけど、マジで美味い。鶏がらスープは大公家の料理人達にも伝えられていて、たくさんのアレンジがされている。

ただラーメンはいまだに作れてないんだよね……ラーメンは麺が難しすぎるのだ。ラーメンもどきならできるけど、微妙な味にしかならない。

「お兄ちゃん、見てるとお腹が空いてくるね」
「本当だね。もう少ししたら俺達も奥で食事にしようか」

やっぱりチャーハンと焼き餃子かな。それとも丼ものを食べようか……やばい、お腹が鳴りそうだ。やっぱり中華料理って匂いが最高なんだよね。空腹を刺激する匂いが強く香ってくる。これは外を歩いてる人も思わず中に入ってしまうだろう。

「いらっしゃいませ。お一人ですか？」
「はい」
「カウンターでもよろしいでしょうか？」
「もちろんです」

そんなやり取りをして店内に入ってきた一人の男性に何気なく視線を向けると……その顔は、よく見知ったものだった。

「イアン君！」

俺は驚いて思わず大きな声をあげてしまう。しかし店内はザワザワと騒がしかったので、皆の注目は浴びなかったようだ。ただイアン君には気づいてもらえた。

「お久しぶりです」

イアン君はカウンターの中を覗き込む形で俺達と視線を合わせ、丁寧に、しかし不自然にはならないように挨拶をしてくれる。

「びっくりしたよ……イアン君が来てくれるなんて。そうだ、一緒にお昼を食べない？　俺達もこれからなんだ」

「……良いのでしょうか？」

「もちろん」

イアン君は俺が大公になって家族が大公家の一員になったからか、今までと違って敬語で返事をしてくれる。今まで通りにして欲しいって気持ちもあるけど、それはさすがに難しいよね。困らせることは言わないようにしよう。

「じゃあイアン君、そっちにある扉から中に入ってきてくれる？」

「かしこまりました」

そうして俺とマリーはイアン君を連れて、裏にあるリビングのような部屋に入った。イアン君はその部屋に入って他のお客さんから離れたところで、しっかりと跪いて頭を下げる。

「レオン様、マリー様、お久しぶりでございます」

「本当に久しぶりだよね。元気だった？」

「久しぶりに会えて嬉しい！」

「ありがとうございます。元気に過ごしておりました」

「イアン君、まずは座って」

「ありがとうございます。失礼いたします」

俺とマリーが席に着いてからイアン君も席に座り、俺達は久しぶ

りに三人でゆっくりと話す機会を得た。
イアン君とは、俺が使徒だと分かって家族がこの食堂から公爵家、大公家と居を移してから会ってないから……半年ぶりぐらいだ。

438、久しぶりの再会

マリーはイアン君とまた会えたことがかなり嬉しいようで、ニコニコといつも以上に満面の笑みを浮かべている。俺よりもマリーの方がイアン君と過ごした時間は長かったから当然か。

「今日はどうしたの？　仕事……じゃないよね？」

イアン君の家族に対する護衛の仕事はとっくに終わっているはずなのにと思ってそう聞くと、イアン君は照れくさそうに笑いながら口を開いた。

「実は本日は休みをいただきまして、少しでも祝わせていただければと思い参りました」

「……開店の祝いで来てくれたってこと？」

「はい。ご迷惑ではなかったでしょうか」

「そんなことない、めちゃくちゃ嬉しいよ」

俺が間髪入れずにそう言うと、イアン君は軽く頭を下げてくれた。それにしても祝いでわざわざ休みをとって来てくれるなんて……本当に嬉しいしありがたい。

イアン君は公爵家の影として日々働いてるのだから、今日ここにくるのはスケジュール調整の関係から大変だっただろう。それをしてまで初日に駆けつけてくれるなんて。

「改めまして食堂の新装開店、本当におめでとうございます。私はレオン様のご実家であったあの場所がとても好きでした。温かくて皆様に愛されていて……ここもそんな場所になったら良いと願って

います」

イアン君はあの食堂に対してそんな思いを持ってくれてたのか……確かに常連さんがいて、近所の人が食べにきてくれて、とても良い雰囲気の食堂だったな。

「あの食堂を越えられるように頑張るよ。母さんと父さんにも後で挨拶をしてあげてね」

「かしこまりました」

「じゃあお話が終わったところで、お昼ご飯を食べるので良い？」

マリーが発したその言葉によってお腹が空いてたのを思い出し、俺はマリーに対して大きく頷いた。

すると俺とマリーの後ろに控えていたロジェとメイドさんが、すぐにお店のメニュー表を手渡してくれる。いつの間にメニュー表なんか持ってきてたんだろう。さすがロジェだ。そしてマリーのメイドさんも優秀だね。

「イアン君もメニューをどうぞ」

「ありがとうございます」

ロジェがもう一つメニューを持っていたのでイアン君に声をかけると、すぐにロジェからイアン君にメニューが手渡された。

「たくさん種類があるのですね」

「そうなんだ。新しいものばかりだけど、全部美味しいから気になったやつを食べてみて」

俺は何にしようかな……悩むけど、今日は牛肉の煮込み丼と水餃子にしよう。やっぱりこの食堂で食べるなら米が良いし、チャーハ

ンも良いんだけど今日は丼ものが食べたい気分だ。
「私はチャーハンとスープにしようかな」
俺がロジェにメニューを告げたすぐ後に、マリーもメイドさんに注文を伝えた。するとイアン君も俺達の注文を聞いて決まったようで、メニューを口にする。
「私はチャーハンというものと、焼き餃子にしてみます。注文は厨房へ伝えてくれれば良いのでしょうか？」
「いえ、こちらでまとめて伝えて参ります」
イアン君の言葉にロジェがそう告げて、二人の視線が数秒だけ絡み合った。そういえばロジェって公爵家の影だったんだよね。それでイアン君も公爵家の影。ということは……二人って元同僚なのか。
「二人って仲良かったの？」
「いえ、お互いを認識している程度です」
「そうなんだ」
ロジェの言葉にイアン君も頷いているので、これは嘘じゃなさそうだ。それなら二人で話す時間をーとかは考えなくても良いかな。顔見知りと二人きりとか話題に困るよね。
「じゃあロジェ、注文をお願い」
「かしこまりました」
そうして注文を済ませ、お店は混んでたけど俺達の料理は父さんと母さんが優先して作ってくれたのか、少し待つだけでどんどん料理が運ばれてきた。

部屋の中に料理が来るだけで、とても美味しそうな香りがして一気にお腹が空く。

「先程から思っておりましたが、とても美味しそうな香りがします」

「やっぱりそう思う？　この匂いがよりお客さんを呼び込むんじゃないかなと思ってるんだ」

やっぱりこの香りの理由の一番は鶏がらスープだろうな。本当にこれがあるだけで料理のおいしさが何倍にもなるのだ。ティノには感謝しないと。

「冷めないうちに食べよう。いただきます」

俺はまず牛肉の煮込み丼にスプーンを入れた。そしてタレが染みたご飯と肉を一緒に乗せて、大きく口を開けて一口で食べる。

噛むと口の中でジュワッと美味しい肉汁が溢れ出し、それが米の食感とマッチしている。タレの味も最高だ。ヤバい……めちゃくちゃ幸せ。

俺が幸せを感じている間にマリーとイアン君もチャーハンを食べたようで、二人とも頬を緩めて口を動かしている。

「どう、口に合った？」

「はい。凄く美味しいです！」

「米って美味しいよね」

「不思議な食感ですが、クセになりますね。これは流行ると思います」

イアン君のそんな言葉に俺は嬉しくなり、牛肉の煮込み丼の米をもう一度口に運んだ。うん、やっぱり米は最高に美味しい。絶対こ

の国に、この世界に流行らせよう。

それからしばらく牛肉の煮込み丼を食べ勧めてから、水餃子に手を伸ばした。水餃子は鶏がらスープによって凄く美味しく仕上がっている。口に入れた瞬間から広がる香りと旨みが最高だ。

「幸せ……」

思わず俺がそう呟くと、焼き餃子とスープを食べていた二人が同意するように頷いてくれた。

「本当に美味しくて幸せです」

「美味しいものを食べてる時は幸せだよね！」

そうしてそれからは三人で会話をしながら、楽しくて美味しいひと時を過ごした。そして食堂の客足が収まったところでイアン君が父さんと母さんにも挨拶に行き、久しぶりに五人で楽しく会話をした。今日はイアンくんに会えて良かったな。

439、カレー作成

大公家の食堂が開店してから数日後。
俺は母さんと父さんと共に家族専用の厨房に立っていた。もちろんティノも一緒だ。

「レオン、今日は何をするの？」
「今日は新しい料理を開発したいと思ってるんだ。その名も……カレー！」

俺が拳を振り上げてそう宣言すると、皆はカレーの美味しさを知らないので不思議な表情で首を傾げた。

「それはどういう料理なんだい？」
「タンドリーチキンってあったでしょ？　あんな感じの料理だよ。野菜や肉を煮込んでたくさんの香辛料で味付けするんだ」
「それは美味しそうですね」

ティノはタンドリーチキンを気に入っていたので、俺の言葉を聞いて途端に瞳を輝かせた。

「まずタンドリーチキンに使われてる香辛料が……これで全部かな」

ヴァロワ王国で聞いたタンドリーチキンに使うらしい一般的な香辛料を、全てアイテムボックスから取り出す。これだけでかなりの量だ。これにそれぞれアレンジとしていくつも香辛料を付け足すんだから、相当な量の香辛料を使うよね。

タンドリーチキンには一般的に使われない香辛料も隣に並べて、俺は三人に視線を向けた。

「とりあえずこっちの香辛料に、いくつかずつ皆が選んだ香辛料を追加して、より美味しいカレーを作りたいと思ってる。かなり大変になると思うけど、付き合ってくれたら嬉しいな」

「それはもちろんよ。レオンが教えてくれる料理は全て美味しいもの」

「カレーも楽しみだよ」

「全力でお手伝いいたします！」

皆が笑顔で頷いてくれたのを確認して、俺達はさっそく作業を開始することにした。

まずはタンドリーチキンに使われている香辛料でカレーを作ろうということで、玉ねぎやトマトなど野菜をたくさん切っていく。そしてニンニクや植物油と共に炒め、さらには肉も焦げ目がつくまでしっかりと焼く。そしてそこに水を少なめに投入して、その後に香辛料を加えた。

ちなみにカレーの作り方は適当だ。後でもっと良い方法は料理人たちに開発して貰えば良いかなと思っている。この開発の間にも、ティノや母さん父さんがより美味しい手順を導き出してくれるだろう。

「これを煮詰めれば良いのね？」

「うん。それで完成したら、いくつもの小さい鍋にカレーを分けて、それぞれ違う香辛料を加えてみようかなと思ってるんだ」

「じゃあ、今のうちにどの香辛料を加えるか決めておこうか」

父さんのその言葉によってティノが紙とペンを取り出して、香辛

料を加えるパターンを紙に書き出していく。
皆は香辛料を使った料理も結構開発していてそれぞれの味は分かってるので、どれとどれは合わないとか、この二つは合わないけどそこにもう一つ香辛料を加えると美味しくなるとか、そういうことをたくさん知っているみたいだ。

これって、もしかして俺いらない……？

そんな真実に辿り着いてしまったけど、まあ味見要員は必要だし、そもそもカレーの味を知ってるのは俺だけだしと開き直ることにした。

「そろそろ良いかしら？」

加える香辛料について話し合っているうちに煮込み終わったようで、鍋の中にはドロッとした美味しそうなカレーがぐつぐつと音を立てている。

「めちゃくちゃ美味しそう……！」

俺はさっそく味見をしようと思い、炊き立ての米をアイテムボックスから取り出して四つのお皿によそった。そして母さんに少しずつカレーをかけてもらう。

「何だか色は微妙だけど、いただきます」

訝しみながら恐る恐るカレーを口にした母さんは、口に入れた瞬間に目を見開いて驚愕に固まった。父さんもかなり驚いてる様子で、ティノに至っては感動で瞳を潤ませている。

「これは確実に流行ります！　美味しいし新しいです！」

俺もそんな皆の様子を見てカレーを口に運び……少し首を傾げた。確かにカレーだ。でも美味しいんだけど少しだけ物足りないというか、一味足りないというかそんな感じがする。

これは改良のしがいがある。まずは香辛料をもう少し追加するのもそうだけど、甘味を足しても良いかもしれない。そういえば日本のカレーって蜂蜜とか入ってたよね。

「先程考えたパターン五が良いかもしれません」

「確かにそうね。それか三かしら」

「まずはその二つからやってみようか」

三人は最初こそ驚いていたけど、すぐに料理人の顔になってより美味しくするにはどうするのかを話し合い始めた。凄く頼もしいな。

「レオン、その二つからやってみるから、二つだけ鍋を出してくれるかい？」

「了解」

小分けにしたカレーは冷めないようにアイテムボックスに仕舞っていたので、取り出して料理用コンロに載せる。

「どのぐらいの量が良いかしら」

「少しずつ加えて味見をしていこう」

「まずはこちらの香辛料から加えてみますね」

そうして皆が少しずつ香辛料を足して出来たカレーは、さっきよりも良い香りを放っていた。

味見をしてみると……さっきまでよりも全然美味しい。一味足り

ないカレーが、スパイスの旨みが感じられる美味しいカレーになっている。ただやっぱり日本でよく食べていたカレーとは違う。これはなんていうのか……インドカレーとかそういうやつだ。

俺はもう少し甘くて子供向けの、給食で出てくるようなカレーが好きだった。やっぱりあれを実現するにはまず蜂蜜かな。

「母さん、この蜂蜜を少し加えてみてくれない？　後はトマトソースも加えてみて欲しい」

「蜂蜜なんて……合うのかしら？」

「そこまで大量に入れなければ合うと思うんだ。このカレーはちょっと辛いというか、大人向けのカレーでしょ？　だからもう少し子供も食べやすいやつもあったら良いなと思って」

俺のその言葉を聞いて研究欲に火がついたのか、三人は力を合わせて甘くて美味しいカレーの実現に向けて色々と試してみてくれた。その結果……日本で食べていたやつとまではいかないけど、かなり俺好みの美味しいカレーが出来上がった。

「凄く美味しいよ！」

「良かったわ」

「これはもう少し色々と試したら、そのうち食堂で売りに出せそうだ」

「甘いものと辛いものとって、何種類か別のメニューにするのもありかもしれませんね」

「それは良いな。じゃあその方針でいこう」

そうしてそれからも三人は研究を続け、その日は日が暮れてからも屋敷中にカレーの香りが漂っていた。

閑話　小国連合会議

ヴァロワ王国が属している小国連合の、年に一度の会議が開催されている。最近の議題はもっぱら魔物の森に関することだ。

それも当たり前で、小国連合に属する国は大小様々三十を超える国があるが、その中で半数以上が魔物の森に接し、そうでなくとも一国を挟めばすぐそこに脅威が迫っている国がほとんどなのだ。したがって皆で団結しつつ、魔物の森の脅威に対処をしようと概ね意見は一致している。

しかし多くの国が集まればそうは上手くいかないもので、今回の会議でも一つの街しかない小さな国の王が馬鹿な発言をしている。

「皆さん、我らは魔物の森と長らく対峙してきました。我らが抱える戦力は数は少ないが質は高い。小国連合が力を合わせれば、ラースラシア王国に勝利することも叶いましょうぞ！」

愚王という名にこれほど相応しい王はいないという肥えた醜い男は、自分の発言に浸っているのかぐへぐへと気持ちの悪い笑い声を上げている。

そんな愚王の様子を見る他の王達の視線は冷ややかだ。しかしそんな視線にも愚王は気付かないようで、皆が賛同すると思い込んだまま話を続ける。

「我が国は先日、隣国の援助に魔物の森への遠征部隊を出したのです。そこで数匹の魔物の討伐に成功しております！　しかもその中の一体は巨大な熊でした。あれは噂に聞く凶悪だというマッスルベ

アに違いありません！　そんな魔物も討伐できる我が国の騎士団の力があれば、魔物の森を駆逐することも、他国を侵略することも容易いでしょう！」

この愚王が誇っているマッスルベアの討伐だが、真相は少し違う。実はこの愚王が治める国の騎士団は、手負のマッスルベアにちょうど鉢合わせたのだ。マッスルベアはファイヤーリザードに攻撃を受け、瀕死の状態で騎士団と遭遇した。

そんなマッスルベアにこの国の騎士団は、多くの死傷者を出して討伐に成功した。誰がどう聞いても誇れるようなことではないのだが、都合の良いことしか聞こえないこの愚王にとっては、我が国の騎士団がマッスルベアを討伐した。そんな誇れる戦果だと信じ込んでいる。

本当に何故このような者が王になれたのか……世襲というのも考えものだ。

「小国連合がこの大陸を統一するのです！　大陸統一の夢をともに叶えましょうぞ！」

――そして統一を叶えた暁には、私が小国群の王族を全員殺して大陸の王となるのだ！

この愚王の筋書きは一万人が聞いたら一万人が無理だと答えるものなのだが、なぜかこの愚王はこれを実現できると信じ込んでいる。

自分の部下を信じられる良い王なのか……いや、そうではないだろう。自国の力を正確に測れない迷惑な王だ。

「エスクデ王、使徒様の存在はどうするのだ？」

皆が呆れた表情を浮かべて反論することさえも面倒だと思っていた中、口を開く者がいた。ヴァロワ王国の国王代理として会議に出席している、フェリシアーノ・ヴァロワだ。

「使徒様？　あんなのは眉唾物の話だろう？」

「いや、そうではない。私は実際に使徒様にお会いし、その畏怖の念すら感じるお力を拝見した。使徒様は実在している。さらにミシュリーヌ様のお声を拝聴する栄誉にも賜った。お二方は、特に使徒様はラースラシア王国で大公の地位を持つ貴族でもある。貴殿はそんなお二人に敵対するのか？」

フェリシアーノのその言葉を聞いて、レオンやミシュリーヌのことをあまりよく知らなかった他国の王達が一気にざわついた。

「フェリシアーノ殿、それは誠か？」

「もちろんだ。今回はミシュリーヌ教と使徒様のことを広めるために、この会議にやって来たのだからな」

それからフェリシアーノがラースラシア王国の使節団が来た時の話や、ミシュリーヌ教の話、レオンの能力の話を知っている限り全て話すと、他国の王達は今すぐにでもミシュリーヌ教を国教にしようと側近と話し始める。

ミシュリーヌはヴァロワ王国の神域にもたまに顔を出して神託をしているので、すでにヴァロワ王国でも熱狂的な信者が多く存在しているのだ。それによって国の情勢は今までにないほど安定している。

「エクスデ王、先ほどの発言は撤回された方がよろしいかと」

全てを話し終えたフェリシアーノが愚王に視線を戻すと、愚王は顔を真っ赤に染めて怒りの形相を浮かべていた。

自分の思い通りにならないことがよほど悔しいのだろう。損得も考えられないとは、つくづく王に向いていない男だ。

「そんなもの、ラースラシア王国に騙されているのではないか！？ラースラシア王国は我らに戦争を仕掛けてくるつもりなのだ！」

そんな愚王の発言には全員が呆れた表情を浮かべ、それから愚王はいないものとして会議は進んだ。小国連合のこれからの指針は、ミシュリーヌ教を国教としてミシュリーヌ様と使徒様を信仰し、魔物の森を抑えきれなくなった時はヴァロワ王国を通じてラースラシア王国に助力を願うというものだ。

皆はこれからの未来に希望が見えて、明るい表情で会議室を後にした。

ーエクスデ王視点ー

「腑抜けすぎる！　皆が皆、ラースラシア王国に騙されおって！」

何がミシュリーヌ様だ、何が使徒様だ。この世界の神はエーデン様だというのに何を言っているのか。ミシュリーヌなどという邪神は私が滅ぼしてくれる！

「あいつらがあんなに腑抜けだとは思わなかった……もう良い、小

国連合など抜けてくれるわ！」

まずはラースラシア王国ではなく小国連合の支配が先だな。隣の国から順に攻め入り、兵力を奪いながら侵攻して小国連合を私が統一してやろう。

そしてその後にラースラシア王国だ。ラースラシア王国を併合したらもう大陸は統一したようなもの。他の国など相手にならん。

「ふはははっ、楽しくなってきたな」

数年後に私が大陸の王となっている未来を思い浮かべ、楽しい気分で酒を口にした。

閑話　小国連合会議（後書き）

「転生したら平民でした。～生活水準に耐えられないので貴族を目指します～3」
本日発売となりました！！

皆様のおかげで書籍3巻を発売することができ、本当に本当に感謝しております。書籍をご購入してくださっている皆様、ありがとうございます！

3巻はｗｅｂ版と大筋こそ変えていませんが、展開などはより面白くなるようにかなり改稿しておりますので、ｗｅｂ版が既読の方にも楽しんでいただけます。
王立学校ではｗｅｂ版にはいないキャラが登場したり、ミシュリーヌ様が大活躍したり、番外編ではロニー視点のお話があったりと盛りだくさんの内容となっております。
お手に取っていただけたら嬉しいです！！

まだ1巻と2巻がお手元にないという方がいらっしゃいましたら、この機会にまとめて楽しんでいただけたらと思います。年末年始のお供にぜひ

それから書籍3巻の発売を記念して、活動報告の方にＳＳを載せてあります。よろしければ覗いてみてください。

では長くなりましたが、この辺で失礼させていただきます。いつもありがとうございます。これからもよろしくお願いいたします。

蒼井美紗

４４０、ミシュリーヌ様からの連絡

大きな行事が一通り終わって、忙しいけど穏やかな毎日を過ごしていたある日。王宮で仕事をしている時に、突然ミシュリーヌ様の声が聞こえてきた。

「どうしたんですか？」

『レオン、今大丈夫かしら？　報告しておいた方が良いことがあるんだけど』

「ちょっと待ってください。アレクシス様、ミシュリーヌ様と話をしても大丈夫でしょうか？」

執務室の中なのでアレクシス様に確認を取ると、すぐに頷いてくれたのでそのまま話を続行することにした。リシャール様や文官達は、こっちを気にしている様子を見せながらも仕事を続けているようだ。

「何の報告でしょうか？」

『レオンにたまに見に行って欲しいって頼まれてた国があるじゃない。ヴァロワ王国だったかしら？　あとその周辺の小国』

「はい。何かあったのですか？」

『実は数日前に小国連合会議っていう集まりがあったのよ。そこで小国の王達が集まって話合いをしたんだけど、その中に馬鹿な王が一人いて、その王が小国群を統一してラースラシア王国を攻めようと画策してるわよ』

え、マジか……なんでこの世界にはそんなに馬鹿な人が多いんだろ。そしてなんでその馬鹿な人達ほど立場があるんだ。

「なんて国の王ですか？」
『確かエクスデ王とかって呼ばれてたわね』
「エクスデ王ですね」

俺がその言葉を発した途端に、執務室で働く皆の視線が俺に集まった。もしかして有名な王様なのかな。

『調べてみた限りはかなり小さな国で戦力も少ないんだけど、まずは隣国を攻めようとしてるのよ。多分エクスデ王が負けると思うけど、隣国の圧勝とはならない戦力差だと思うわ。そして隣国は魔物の森に接してるから、戦争となったら隣国がまず魔物の森に飲み込まれて、そのままあの馬鹿な王の国も飲まれるんじゃないかしら？
そうなったら周りの国にも影響は大きいでしょうね』

うわぁ……マジか。予想以上に深刻な事態だ。あの辺の国はそれぞれの国力がかなり弱くて協力しあってるから、一つ穴ができたら共倒れだろう。

「事前に教えてくださってありがとうございます。止めないとですね」
『それが良いと思うわ』

問題はどうやって止めるかだ。ミシュリーヌ様の話を聞く限りどう考えても賢い王じゃないから、説得するのは難しいだろう。かといって物理的に止めるのも避けたい。
魔物に刃を向けるのはもう躊躇わないけど、さすがに人に対して向けるのは俺には無理だ。ここで虚勢を張ったってできないものはできないのだから、事実はしっかり認識しないと。

そうなると……ミシュリーヌ様の名前を使って脅すとかかな。そのためにはまずその王に関する情報が必要だ。

「ミシュリーヌ様はどの程度、そのエクスデ王のことを知ってるんですか？」

『しばらく観察してたから色々知ってるわよ』

「じゃあ知ってる限りのことを教えてください。まず、ミシュリーヌ様のことは知ってるんでしょうか？」

『一応名前は知ってるけど、そんな存在はいないと思ってるみたいね。なんだったかしら、エーデンとかいうよく分からない名前の神がいるって思ってるらしいわよ』

おおっ、この世界で他の神の名前を初めて聞いた。ミシュリーヌ様が下界に干渉してない時期が長いから、いろんな出来事を経て実在してない神を信仰してる人もいるはずだと思ってたけど、やっぱりいるんだ。

「ミシュリーヌ様のことは信じてないんですね」

『そうなるわね』

それだとミシュリーヌ様が神託をしたとしても、すぐに信じるかは微妙かなぁ。何かしらの小芝居が必要かもしれない。

「その王って普段はどんな生活をしてるんですか？」

『酷いものよ。一日中酒を飲んで女性達を何人も側に置いて、仕事はほとんどしないのにたまに口に出しては下を混乱させて』

「……なんで国が存続してるんでしょう」

『それがね、確か第三王子だったかしら？　まだ二十代ぐらいなんだけどその人が優秀で、王がやらない仕事はほとんど全てその王子がやってるのよ』

……その怠惰な王から優秀な子供が生まれるとか奇跡だね。もしかしたら本当は王の子供じゃないんじゃない？
まあそんなのはどうでも良いんだけど。必要なのは国を健全に運営できる人材だ。

「じゃあエクスデ王はどうにかして失脚させて、その第三王子をその国の王にしましょう」
『それが一番ね』
「そのためにどうするのかですが……ミシュリーヌ様の神託は神域外だとかなり神力を消費するんですよね？」
『そうよ。まあ今ならできるけど……スイーツのためにもやりたくないわ』

いや、スイーツの為なんかい！
でもまあ不本意だけど、あんまりやりたくないのには同意だ。神力が勿体ない。そうなると俺とファブリスかな。

「とりあえず、俺とファブリスでエクスデ王のところに行きますね。それでファブリスにミシュリーヌ様の言葉を代弁してもらう方針はどうでしょうか」
『確かにそれはありね。何て言葉を伝えてもらうの？』
「うーん、そうですね。――愚かなる王よ、野心に従い行動すれば、貴様には死が待つのみである。王位を第三王子に譲り退位せよ、さもなくば最悪の未来が待っていようぞ――みたいな感じですか？」

俺がその言葉を発すると、執務室にいた全員がギョッと目を見開きながら俺に視線を向けた。皆さん驚かせてごめんなさい……そう心の中で謝りながら頭を一度下げて、とりあえずはミシュリーヌ様との会話を進めることにする。

『それかっこいいわね！！』
「問題ありませんか？」
『ええ、最高よ！　漫画の主人公みたいじゃない！』
「ありがとうございます。それでこの言葉の後に、人気のない建物とかを爆発させるとより効果的だと思うんですけど、何か良い建物がありますか？」

俺のその言葉を受けて、ミシュリーヌ様はエクスデ王の住む王宮をすぐに確認してくれた。するとエクスデ王がいつも酒を飲んでいるバルコニーみたいなところから、ちょうど目の前に見える塔があるらしい。
監視の役割を担っていた塔だけど、ここ数年は全く使われていないようだ。

「じゃあその塔を、ファブリスに合わせて俺が壊します」

周辺に被害が及ばないようにバリアで囲って、ファイヤーストームとかで派手にやろう。

「このまま貴様が行動した場合のこの国の末路だ。とかファブリスに言ってもらってから壊せば、かなり怖がらせられると思います」
『完璧な作戦ね！』

これでその愚王が退位して第三王子が即位すれば、とりあえず小国群の中で戦争が起きて、その間に魔物の森に飲み込まれるってことは無くなるだろう。今考えたことを実行したら様子見かな。

「ではミシュリーヌ様、これから準備をしてエクスデ王のところに向かうので、また後で連絡します」

『分かったわ。頼んだわよ』

そうしてミシュリーヌ様との通信を切った俺は、途中から仕事の手を止めて俺の言葉を聞いていた皆さんに向き直った。

441、小国群へ

今の内容はここにいる人達になら伝えても大丈夫かな。特に人払いをするほどのものではないだろう。そう判断した俺は、場所は移動せずに自分の机から皆に伝わるように声を張った。

「皆さん、仕事中にすみませんでした。さっきのミシュリーヌ様からのお話ですが、エクスデ王が隣国に戦争を仕掛けようとしているそうです。その影響で魔物の森にエクスデ国だけではなく、近隣諸国まで飲み込まれるのではないかと危惧して、ミシュリーヌ様は私に連絡をくれました」

俺のその言葉を聞いて、ほとんどの人は呆れたような表情を浮かべた。驚くんじゃなくて呆れるってことは、エクスデ王のことは皆が知ってるのかな。

「レオン、エクスデ王については我が国にも情報が入ってきている。信じられないような話ばかりで真偽は定かではないと思っていたが、今まで聞いてきた話は真実だったのかもしれんな……」

「その可能性は高そうですね。ミシュリーヌ様も愚王と仰られていましたので」

「そうか、ミシュリーヌ様がそう仰るのならば、もうどうしようもないな。……それでレオンが動くのか？」

アレクシス様は憐れむような視線で空虚を見つめたあと、俺に視線を戻してそう問いかけた。

「そうなります。周辺国まで巻き込まれて、さらに魔物の森の広が

りを許してしまうのは防がなければなりませんから。私がエクスデ王の下へファブリスと向かい、ミシュリーヌ様のお言葉を代弁して、エクスデ王の退位と第三王子の即位を求めてきます」

それから第三王子が奇跡的に優秀であることや、塔を爆破させる予定であることなど、ミシュリーヌ様と話し合ったことを一通り説明した。それを最後まで真剣な表情で聞いてくれたアレクシス様は、話が終わったところで少し頬を緩める。

「こういう時にレオンが使徒様であるというのを実感するな。執務室にいて他国の様子が詳細に分かり、さらに戦争を簡単に止めてしまえるなど……本当に凄い」

「本当ですよね……ミシュリーヌ様のお力です」

俺が答えたその言葉を聞いて、全員が祈るように少しだけ目線を下げた。改めてミシュリーヌ様がこの国を見守ってくれていることに感謝してるのだろう。

俺もたまにはミシュリーヌ様に感謝しないとだな。こうして俺がこの世界で生きていけているのは、転生させてくれたミシュリーヌ様のおかげなんだし、この地位にいられるのもミシュリーヌ様の使徒だからだ。

今度感謝の気持ちを込めて、和菓子の研究でも始めようかな。ヨアンに相談してみよう。

「では、私はファブリスと合流して行ってきます」

「分かった。レオン、よろしく頼むぞ。無事に帰ってきてくれ」

「もちろんです」

アレクシス様の言葉に力強く頷いたところで、俺は大公家の屋敷

に転移をした。まずはロジェに出かけることを伝えようと私室に転移をしたところ、ちょうど俺の服の手入れをしているところだったようで目の前にロジェがいた。

「レオン様、おかえりなさいませ」

ロジェは俺が突然現れても全く驚きを表に出さず、綺麗に礼をしてくれる。本当にロジェって凄いよなぁ。

「ただいま」

「本日はお早いですが、何かございましたか？」

「実はミシュリーヌ様から連絡が来て、ちょっと遠征しないといけなくなったんだ。ファブリスと二人でエクスデ国まで行くんだけど、ファブリスの速度なら数日で帰ってこれるかな。でもどうせあそこまで行くなら魔物の森の駆逐もやってきたいし……一週間ぐらいは帰らないかも」

俺のその言葉を聞いて、ロジェは懐から取り出した予定表に、立ったまま器用に予定を書き入れていく。

「ではその間の他の予定は、取り止めか延期をしておきます」

「ありがとう。そこまで大切な予定ってないよね？」

「はい。私で動かせる程度のものばかりです」

「じゃあロジェに任せるよ。父さんと母さんには一応伝えていくけど、他の皆にはロジェから伝えてもらっても良い？」

「かしこまりました」

「ありがとう。じゃあ行ってくるね」

そうして俺は有能で頼れるロジェに雑事は丸投げし、父さんと母さん、さらにマリーにはエクスデ国に行くことを伝えてファブリス

と合流した。
ファブリスは俺の説明を聞いて、やる気満々だ。エクスデ王を怖がらせるのが楽しみらしい。

『我の力で其奴を一生表に出られないようにするとしよう』
「ありがと、頼もしいよ。でもやりすぎないように気をつけてね」
『では主人、我の背に乗ると良い』
「うん。とりあえず行けるところまで転移するから、そこからはよろしくね」
『任せておけ』

最近はかなり魔力量も増えたし、王都の農業地帯の外までは余裕で転移できるはずだ。その先の街……いや、もう一つ先まで行けるかな。
もう一つ先の街の近くにある、目立つ一本の木の近くに転移をしよう。

俺はそう決めて転移を発動させると……転移は無事に成功した。まだ魔力が少し残っているほどだ。
転移の目印になると覚えていた大きな木が、目の前に悠然と佇んでいる。この木って樹齢何年なんだろう。そんなことを考えながら何気なく木の幹に手を伸ばすと、力を分けてもらえるような不思議な気分になった。

『主人のこの力は、いつ体験しても便利だな』
「本当にそうだよね。ミシュリーヌ様に感謝しないと」
『そうだな。ではさっそく行くぞ』
「うん、よろしくね」

俺は木の幹に伸ばしていた手をファブリスの背中に戻し、振り落

とされないようにしっかりとバリアで自分を固定した。そしてそこからは、ひたすらファブリスに揺られる時間だ。

心地よい揺れに眠気が来て夢の世界へ遊びに行ったり、現実に戻ってきて凄い速度で後ろに流れていく景色を楽しんだり、ファブリスのふわふわな毛並みに顔を埋めて癒されたり、そうしている間にファブリスが足を止めた。

『主人、この辺じゃないのか？』

その声に従って周囲を確認してみると、街などはまだ見える範囲にはなさそうだ。でもファブリスがこう言ってるなら、近くにはエクスデ国があるのだろう。

そう思った俺は、現在地を確認するためにミシュリーヌ様に呼びかけた。

４４２、レオンの暗躍

「ミシュリーヌ様、エクスデ国はこの辺ですか？」

寝起きで眠い目を擦って伸びをしながらミシュリーヌ様に問いかけると、すぐに返事が来た。

『うーん、もう少し先よ。北東の方角ね』

「ファブリス、北東にもう少しだって」

『相分かった。ではもう少し走るぞ』

それから数十分、ミシュリーヌ様の指示通りに走っていると目の前に街が見えてきた。低めの外壁に囲まれたその街は、あまり家が密集しているという感じではなく長閑な雰囲気だ。

そしてそんな街の雰囲気に全く似つかわしくない豪華な城が、街の中心部に位置しているのが分かる。

「歪な国だね」

『そうなのよ。あの王宮を作るためだけにかなりの税金が投入されていて、国民は厳しい生活を強いられているわ』

「……そのうちクーデターでも起きそうだけど」

『実際に計画されてるらしいわ。ただそれよりもあの愚王が戦争を始める方が早いでしょうから、このままだとクーデターが成功する前に国がなくなるわね』

なんか本当にヤバい国なんだな……今回のことで少しでもこの国の国民生活が上向けば良いけど。

「さっそく作戦を始めようか。俺とファブリスで王宮の中に忍び込んで、俺は途中でファブリスから降りて爆破予定の塔に向かうよ。その間にファブリスはエクスデ王のところに行って、エクスデ王を脅かしておいて」
『分かった。我の言葉は主人と、エクスデ王とその周辺の者にだけ聞こえるようにすれば良いのだな』
「うん、それでお願い。ファブリスの言葉に合わせて俺が塔を爆破させるから、そこまで終わったらファブリスは塔まで来て。あとは俺の転移で街の外まで逃げよう」

これで上手くいくと良いんだけど……もしダメだったら次の作戦を考えないと。

「ミシュリーヌ様は、塔に人がいないかを確認していてもらえますか？　爆破前に声をかけるので」
『分かったわ』
「じゃあファブリス、怪我しないように気をつけて。もし攻撃されたらできれば殺さない程度の反撃でお願い」
『分かっている。人間の攻撃などいくらでも防ぐ手立てはあるから大丈夫だ』

そう言って自信ありげに頷いたファブリスと視線を合わせ、俺達は頷き合ってから街に向かって駆け出した。外壁は低いのでファブリスなら楽々越えられるみたいで、すぐに街中への侵入には成功する。兵士達は何が起きているのかも分からないうちに侵入を許したようだ。

ミシュリーヌ様に確認してもらったところ、エクスデ王はいつもの定位置であるバルコニーにいるらしいので、一直線にそこへ向かう。

「ファブリス、俺は塔に向かうよ。エクスデ王はよろしくね」
『任せておけ』

〜〜〜

エクスデ国の王宮のバルコニーで、肥え太った王が女性を侍らせて酒を飲んでいると、突然王宮の外が騒がしくなった。もちろん原因はレオンとファブリスだ。

「ん？　なんの騒ぎだ？」
「なんでしょう。陛下のお姿を見たい平民が、王宮に殺到しているのではないかしら」
「陛下は素敵な殿方ですものね」
「ぐふっ、ぐふふっ、そうかそうか。それならば我の姿を一目見ることを許そうではないか。見目麗しいのならばお前らの末席に加えてやっても良い」
「ふふふっ、まあ、陛下ったら」
「また増やすのですかぁ？」

しかしエクスデ王は全く危機感を持たず、見当はずれな予想で鼻の下を伸ばしている。こんな時までそのような思考ができるとは、無能すぎて逆に幸せな王なのかもしれない。

しかしバルコニーにファブリスが現れたことで、エクスデ王の表情は一変した。突然現れた強者の気配が漂う神獣、エクスデ王の認識からしたら魔物を前に、顔を強張らせて慌てたように後ずさる。

「な、な、なんでこんな場所に魔物がいるんだ……！　お前達、早

く倒さんか！！」
「は、はっ！」
騎士達は突然の魔物の出現に固まっていたが、エクスデ王のその言葉でやっと剣を手に取り動き出したようだ。しかしファブリスの声を聞いたことで、再度動きを止める。
『愚かなる王よ、我は魔物などではない。この世界の神であるミシュリーヌ様より遣わされし神獣だ。我はミシュリーヌ様からの忠告を伝えにきた。野心に従い行動すれば、貴様には死が待つのみだ。王位を第三王子に譲り退位せよ。さもなくば最悪の未来が待っていようぞ』
ファブリスのその言葉を聞いて、エクスデ王は真っ青を通り越して真っ白な顔色でその場に倒れ込んだ。
『これから起こるのは、貴様がこのまま行動した場合のこの国の末路だ。しっかりとその目に焼き付けるんだな』
ファブリスがそう言ってエクスデ王を睨みつけた直後、突然バルコニーから見える監視塔が……凄い勢いで爆発した。腹に響くような爆音が響き渡り、建物が少し震えている。
エクスデ王はその光景にもう言葉も出ないようで、汚くズボンを濡らしながら床に這いつくばっている。
『こうなりたくなければ、我の忠告を聞くんだな』
最後にそう言葉を発してファブリスはバルコニーから姿を消し、後に残ったのは顔色の悪い王と侍らせていた女達、それから騎士達だけだ。

さっきのは夢かと一瞬頭をよぎる楽観的な思考も、目の前で崩れている塔を見れば現実に戻される。さっきのは実際に起きたことなのだと。

「わ、わ、私は死にたくない……！　死にたくないぞぉぉぉ！！」

エクスデ王はたっぷり三分はその場で固まってから、突然そんな叫び声を上げてバルコニーを飛び出して行った。向かった先はもちろん第三王子のところだ。

先程の塔が爆破するという事態を受けて、父親である愚王のところに向かっていた第三王子は、死にそうな表情の王に廊下で遭遇する。

「……父上？　どうされたのですか？」

「お、お前に、お前に王位をやる！　私はもう王など辞める！　私は死にたくないんだ……た、確か別荘があったよな！？　私はそこに行くから、お前にあとは任せたぞ！」

エクスデ王は第三王子にそれだけを告げると、ぐちゃぐちゃの汚らしい顔面のまま、這う這うの体で自室に向かった。そして従者に最低限の荷物を準備させると、着の身着のままで馬車に乗り込み王宮を後にする。

よっぽど人智を超えた力が怖かったのだろう。この愚王はこれから先の人生で、ついに王都に戻ることはなかったそうだ。

４４３、魔物の森の跡地

塔を爆破させるとすぐにファブリスが戻ってきて、俺達は街の外に逃げ出すことに成功した。とりあえず作戦は成功だけど、これで戦争が止められるかどうか。

「ミシュリーヌ様、エクスデ王はどうですか？」
『ふふっ、ふふふっ、めちゃくちゃ面白いわよ。効果は抜群ね』
「そんなに怖がってますか？」
『おしっこちびって、というよりも垂れ流して、涙と鼻水でぐちゃぐちゃの顔で第三王子を血眼になって探してるわ』

うわぁ……想像もしたくない。めちゃくちゃ汚いじゃん。でも効果があって良かったな。これでもう戦争をするなんて言い出すことはないだろう。

『あっ、第三王子を見つけたみたい。……王位を譲るらしいわよ。それで別荘に隠居するって』
「おおっ、最高の結末ですね。第三王子は困惑してませんか？」
『してるわね。でもバルコニーにいた騎士達に話を聞きに行くみたいだから、大丈夫じゃないかしら。あの様子なら上手くやるわよ』

それならこの国はもう大丈夫かな。とりあえずしばらくは様子見で良いだろう。

「ミシュリーヌ様、しばらくは監視しておいてもらえますか？　また何かをやらかしそうになったら教えてください」
『分かったわ』

「じゃあ、作戦は大成功で終了ですね」
『そうね！　お祝いに三人でスイーツパーティーでもやりましょうか！』
「いや、それほど大変でもなかったですし、スイーツパーティーはいらないんじゃ……？」

俺のその言葉はミシュリーヌ様によって食い気味に否定され、俺とファブリスはその数秒後には神界に呼ばれていた。

「うふふ、たくさん食べるわよー！」

ミシュリーヌ様は満面の笑みを浮かべて拳を振り上げていて、俺とファブリスは苦笑するしかできない。ここでダメっていうのも可哀想だし、スイーツパーティーに付き合おうかな。

「少しだけですよ」
「さすがレオン、話が分かるじゃない！」
「ミシュリーヌ様、我はミルクレープが食べたいです」
「分かったわ！」

それから俺達はハイテンションなミシュリーヌ様につられて、楽しくスイーツを食べた。そしてミシュリーヌ様が三十個目のスイーツを食べ切ったところで、さすがに新たにスイーツを作り出すのを止めてパーティーは終わりにした。

「じゃあミシュリーヌ様、また何かあったら教えてください」
「分かったわ。またね～」

満面の笑みのミシュリーヌ様に見送られて下界に戻ってくると、神界に呼ばれた瞬間の時刻のままだった。改めて神界にいると、下

界の時間が進んでないのが不思議だ。

「うぅ～ん、この体が食べたわけじゃないのにお腹がいっぱいな気がする」

『分かるぞ。我は少し腹ごなしに動きたい』

「そうだよね……ついでに魔物の森に行こうか。ここからならすぐだしさ」

『確かにそうだな。では主人、背中に乗ってくれ』

「了解」

それからファブリスに揺られること三十分ほどで、俺達は魔物の森に辿り着くことができた。魔物の森は俺達と騎士達の頑張りでかなり押し返せていて、すでに数キロにわたって魔物の森の跡地がある。

「そろそろ大公家の領地経営も始めないとかな」

『ここら一帯は全て領地になるんだったか？』

「そうなんだよ。そろそろ前線の街から魔物の森までの距離も遠くなりすぎてるし、領都を作るついでに前線の街も魔物の森に近づけようかなって」

魔物の森に飲み込まれてしまった街はほとんど原型をとどめていなく、街があったことさえも分からない場所がほとんどなので一から作るしかない。

ポジティブに考えれば、全て俺が自由に作れるということだ。

『それは大変そうだな』

「まずは最低限の住環境を準備したら人を連れてきて、建物を作ってもらって、農地を作って、お店を作って……気が遠くなるね。それにそんなに人を集められるのかも問題だよ」

給与とか待遇面を良くすれば人は集まってくれると思ってるけど、魔物の森に近い場所にわざわざ引っ越したい人ってどれだけいるのだろうか。意外と苦戦するかなぁ。

そうだ、神域である礼拝堂をミシュリーヌ様に落としてもらうことってできるのだろうか。誤差が数十キロって言ってたけど、特に街の場所を決めてはないから落ちた場所を街にすれば良い。

ミシュリーヌ様が頻繁に姿を現す教会があると噂が広まれば、その街に移住したい人も増えるんじゃないだろうか。

ちょっとズルな気もするけど、俺は使徒なんだしこのぐらいは良いよね。

「ファブリスは何か欲しいものがある？　なんでも作れるから、領地にこれがあったら良いなとかあれば実現するけど」

『そうだな……我は今の生活に満足しているぞ。ただ我の家がもっと広ければ嬉しいな。それから家の中にも緑があると尚良い』

「もっと広い家と緑ね。了解」

ファブリスの家はおしゃれな別荘みたいなやつを作るかな。ファブリスが自由に食べられるように果物を植えたりするのも良いかも。

温室とか米を大量生産する農地とか、俺も色々と作りたいものがたくさんあるし、やっぱりそろそろ領地にも手を出そう。

大きなイベントは一通り終わったから、ちょうど良い時期のはずだ。

「魔物の森を駆逐するついでに、街を作りたい場所も大体は決めちゃおうか。できれば海の近くが良いかなって思ってるんだよね。海

鮮料理も広めたいから」
『そうだな。ならば今回は海側を駆逐していくか？』
「そうしよう。大公領にも港を作りたいよね」
『うむ。我は海鮮料理も好きだぞ』

領地を一から作り上げるのは想像以上に大変だと思うけど、それ以上に凄く楽しみだ。自分好みの街を作れるなんて最高だよね。
この機会にミシュリーヌ様が望む街も作ろうか。ちょっと昔の日本の街並みを再現した通りとか。着物や浴衣を再現するのもありかも。

着物を着たマルティーヌとか……想像するだけで絶対に可愛いな。よし、着物や浴衣に関する本をシェリフィー様にお願いしよう。これは決定事項だ。
花火大会とかも再現できたら楽しいだろうな……浴衣のマルティーヌと見て回りたい。

ヤバい、領地経営がめちゃくちゃ楽しみになってきた。醤油や味噌も作り方の本を頼んで研究したいし、そろそろ和菓子にも手を出そう。日本風の街並みを再現したところに、和菓子を出すお茶屋さんとかあったら雰囲気あって良いよな。観光地にもなるだろう。

「ファブリス、早く領地を発展させたいから魔物の森の駆逐を頑張ろうか」
『了解した。では行くぞ』
「うん。よろしくね」

そうして俺はこれからの領地経営と、自分が好きなように作り上げた街での生活に想いを馳せながらファブリスに揺られた。これからも楽しみなことがたくさんあるな。

４４３、魔物の森の跡地（後書き）

これにて3章完結となります！
とても長い物語になっていますが、追いかけてくださっている皆様、本当にありがとうございます。皆様のおかげでここまで書き続けられています。
しかしまだまだレオンの物語は続いていきます。書きたいお話がたくさんありますので、この先も今までと同様に楽しんでいただけたら嬉しいです。

レオンがついに大公領の開発に着手する４章ですが、少しお休みをいただいて数週間後からスタートできればなと思っております。
少し本編でも出て来ましたが和菓子など日本風な街並みの再現や醤油や味噌の開発、海産料理の発展や他にも様々なことに挑戦していきます。シュガニスの平民向けのお店もまだ出店していませんし、他国にスイーツを広める計画もまだまだです。領地に戻っているリュシアンもまた登場予定ですし、マルティーヌも婚約者として領地開発にこっそり関わるかもしれません。４章も盛り沢山な内容になる予定ですので、楽しみにしていただけたら嬉しいです！

そんな４章が始まるまで少し時間がありますので、ここで新作のご案内をさせてください。本日「転生したら平民でした」の３章完結を記念して、新たに長編の連載をスタートしました。

「転生少女は救世を望まれる～平穏を目指した私は世界の重要人物だったようです～」というタイトルなのですが、こちらは私がずっと書きたいなと思っていて温めてきたお話です。

私にとってはすっごく面白いお話になっていますので、皆様にも刺さったら嬉しいなと思っています。あとがきの下にリンクを貼っておきますのでぜひ読んでみてください。
面白いと思ってくださった方がいましたら、感想などいただけると作者が飛び上がって喜びます。ぜひよろしくお願いいたします。

では皆様、「転生したら平民でした」ではまた数週間後にお会いしましょう。新作など他の連載作を読んでくださっている方は、そちらもよろしくお願いいたします！

蒼井美紗

４４４、領地へ

夏の暑さのピークが過ぎ、そろそろ涼しくなるかなという頃。俺は大公領の開発に着手するために、少数の使用人を連れて魔物の森の跡地に来ていた。

ファブリスに乗って一緒に来たのは、ロジェとアルノル、ロニー、ローランの四人だ。ファブリスから降りた俺以外の四人は、この光景を見るのが初めてだからか何もない荒野をひたすら眺めている。

「何もないね……」

ロニーがポツリと呟いた言葉が聞こえてきた。

「そうなんだよ。でもだからこそ、なんでも作れるってことだと思わない？」

俺がロニーの顔を覗き込みながらそう言うと、ロニーは途端に楽しそうな笑みを浮かべる。

「レオンっぽいよ。確かにやる気は出るね」

「でしょ？　魔植物の種も残さないようにって、表面の土を焼いたりアイテムボックスで消したりしちゃってるから、雑草もほとんど生えてないし本当に一から作れるよ」

魔物の森を駆逐している時は細かい葉っぱはそのままにしてるんだけど、後から火魔法で焼いたり土を消したりと対処をしているのだ。そのおかげでというか、その影響でというか、ここら一帯は雑草も生えていない荒野になっている。

ただ土が悪いというわけではなくむしろ畑などにも良い土なので、これから街を作るのにあたって問題はないだろう。

「レオン様、街はどこに作る予定なのでしょうか？」

「まだ決めてないんだけど、海の近くが良いかなと思ってるんだ。大公領の特産品は米だけど、それ以外に海産物も特産品にしたいんだよね。というか、観光地にしたいかなと思ってるんだ」

水族館とか海釣りが体験できる施設を作って、さらに美味しい海鮮料理をたくさん開発すれば食べにくる人達はいるはずだ。海鮮で出汁をとった料理とか、他の街と被らないように個性を出せば人は来てくれると思う。

これからこの国はどんどん豊かになっていく予定だし、そうなれば旅行をできるほどに裕福な層が増えると思う。そういう人達に旅行先に選んでもらえるような街づくりが目標だ。

王都や他の街と馬車の定期便を作るのもありだよな。やっぱり足がないと来れないから。

「海の近くですか。それは良いですね」

ロジェは海と聞いて少しだけ頬を緩めた。ロジェは前にタウンゼント公爵家の港町で海を見て感動してたし、あれからも海は憧れなんだろう。

「ではもう少し海側に移動しますか？」

「ううん。実は街の場所は俺達が大体は決めるんだけど、最終的にはミシュリーヌ様が決めるんだ」

俺はアルノルの問いかけに首を横に振り、ミシュリーヌ様に神域

である礼拝堂を作ってもらう話を皆にした。すると皆は驚きながらも、さすがにずっと俺といるから慣れたのか受け入れてくれる。

「その礼拝堂にミシュリーヌ様が神託をしてくださるとなれば、観光客がまた増えそうですね」

「うん。でも王都にも今まで通りに顔を出されるらしいから、来るのは王都が遠い人達になると思うけどね」

これで王都への神託が途絶えて大公領ばかりで神像が光るようなことになってしまったら、最悪は王家と大公家の対立というように見る人もいるかもしれないので、そこには気を配っている。めちゃくちゃ仲良いのに、そんなふうに思われたら最悪だからな。

「じゃあミシュリーヌ様に礼拝堂の建築をお願いするよ」

俺のその言葉に四人とファブリスが頷いてくれたのを確認して、俺はミシュリーヌ様に呼びかけた。

『はいはーい。何かしら？』

「この前に話した大公領の礼拝堂のことなんですけど、今俺がいるあたりに作ってもらうのでも良いですか？　できればもう少し海寄りだと嬉しいです」

『ああ、あの話ね！　もちろんよ。王都にある礼拝堂と同じ作りで良いのよね？』

「はい。同じにしていただけると助かります」

それからミシュリーヌ様の声が途切れて、微かに何かを呟くような声が聞こえてきた。礼拝堂を作って地上に落とす場所を定めているみたいだ。

『できれば海寄りなのよね……このあたりに落とせばいけるかしら？　いや、ここだと最悪は海の中になるわね。それは避けたいからもう少し内陸寄りに……』

そんなミシュリーヌ様の声がしばらく聞こえ、ついには準備が整ったのか、ミシュリーヌ様の明るい声が聞こえてきた。

『準備完了よ！　作っても良いかしら？』

「はい。お願いします」

ミシュリーヌ様によると地上に落とすという表現をしてるけど、物理的に空から落ちてくるんじゃなくて強く光った場所の光が消えると、もうそこには礼拝堂があるのだそうだ。

近くだったらその様子が見れるかな……そう期待しながら待っていると、特に光なんて見えずにミシュリーヌ様の言葉が耳に入ってきた。

『できたわよ！』

もうできたのか。周りを見回してみてもどこにあるのか全く分からないので、かなり遠くだったみたいだ。

『ちょっと予定の場所よりも逸れたわね……海まで十キロってところかしら。魔物の森に結構近い場所になったわ』

「そうなのですね。案内してもらえますか？」

『もちろんよ』

「ファブリス、また乗せてくれる？」

『分かった。全員乗ると良い』

そうして俺達はファブリスの背中に跨り、ミシュリーヌ様の案内

に従って大公領の領都となる場所に向かった。

４４４、領地へ（後書き）

お待たせいたしました。４章スタートです！
また週に3回ほど投稿していきますので、楽しんでいただけたら嬉しいです。
よろしくお願いいたします！

４４５、領都決定

ファブリスに揺られること約十分。俺達は新しい礼拝堂の前に立っていた。何もない荒野にポツンと現れた礼拝堂を見ていると、改めてミシュリーヌ様の凄さを思い知る。

「凄いですね……」

「本当だよね。中に入ってみようか」

呆然と礼拝堂を見上げる皆に先んじて、俺は礼拝堂の扉に手をかけた。そしてゆっくりと開くと……中は王都の中心街にある礼拝堂と全く同じ作りだった。ベンチなどが置かれていないところが違うだけだ。

この礼拝堂は全体が神の遺物で劣化はしないし傷も付かないから、本当にそっくりそのまま同じだな。

「ミシュリーヌ様、完璧です」

『良かったわ！　礼拝堂は一つだけで良いの？　他の街にも作りたいならまた落とすわよ』

「いえ、とりあえず大丈夫です」

まだここを領都として整えるのに精一杯で、他の街づくりに着手できるのなんてしばらく先だ。それに神域である礼拝堂は領都に一つあれば良いかなと思っている。たくさんあったらありがたみが薄れるし、領都にしかないからこそ人が移動してくれるだろう。

『分かったわ。じゃあまた何かあったら呼んでね』

「はい。ありがとうございました」

そうしてミシュリーヌ様との通信を切った俺は、皆と礼拝堂の様子をもう一度見回してから外に出た。

「まずは何からしようか……どんな街にするのか決めないとだよね」

「はい。とりあえず、海までどの程度の距離があるのかを正確に知るべきではないでしょうか。それによってここを港町にするのか、そうは出来ないのかが決まると思います」

ロジェのその提案によって、俺はさっきまでのミシュリーヌ様の言葉は皆に聞こえていなかったことを思い出した。

「それはミシュリーヌ様が教えてくれたんだ。ここから十キロぐらいだって」

「十キロですか……」

「それは少し遠いね」

アルノルとロニーが顎に手を当てて考え込む。日本の街なら十キロはそこまで大きくないだろうけど、この国の街で十キロにも渡って広がってるっていうのは相当に広い街だ。そこまでの街を作り上げるのは大変だよな……

そういう大きな街だって最初はもっと小さくて、だんだんと広がっていったんだろうし。

「領都を港街にするのは難しいかもね。領都はここに作って、港街は漁業を中心とした海産物中心の観光地にしようかな」

できる限り領都を広げるときには港街方面に広げていくことにしよう。そうすれば、将来的には二つの街をくっつけることもできる

かもしれない。
「まずは領都から作られますか？」
「そうだね。とりあえず……今日中に少し礼拝堂の周りを整えようか。大公邸を作ってもらうにしても、雇ってきた人達が住む場所がなかったら大変だから」
それから商会にもいくつか声をかけよう。俺がアイテムボックスから売っても良いんだけど、それだと街は発展しないだろう。
「では簡単な図面を描きましょう。あまりにも適当に建物を作ってしまっては、道を通すのも大変になってしまいます」
「そうだね。まずは大公邸の場所なんだけど、やっぱり礼拝堂の近くが良いと思う？」
「……いえ、少し離れた場所でも良いかと思います。礼拝堂は領民が足を運びやすい場所の方が良いのではないでしょうか。王都の礼拝堂も、中心街の奥にあるので平民が足を踏み入れにくいという声も上がっております」
確かにね……中心街は貴族の屋敷が立ち並んでいて、お店も高級な外観のものが大多数だ。平民は気後れするだろう。
「ロジェ、ありがとう。じゃあ大公邸は礼拝堂から離れた場所にしよう。そうだね、海寄りに一キロは離そうか」
「かしこまりました。では大公邸から大通りを礼拝堂までまっすぐ通して、その通り沿いは高級なお店や商家が連なるようにしましょう。そして礼拝堂から先は平民街です」
「それは良いかも。……あっ、でもそれだと大公邸は海と反対を向くことになるよね。この先で街を海側に広げたいから、できれば逆向きが良いかな」

大公邸の後ろに街を広げるのは少し抵抗がある。広い街になれば大公邸の向きなんて関係ないのかもしれないけど、特に最初のうちは気になるだろう。それに海側にばかり街を広げるのなら、大公邸は街の端にあって街の外を向く形になってしまう。

「確かにそうですね……では礼拝堂からの大通りを海とは反対側に伸ばして、その先に大公邸を海と礼拝堂の方を向くように建てますか？」

「うん、それが一番良いかな。しばらくは大公邸が街の端にあるような形になるけど、街全体を見渡せる位置ってことで良いと思う」

「レオン、それならあの丘の上に大公邸を立てれば良いんじゃない？」

ロニーがそう言って指差した丘を、全員が一斉に視界に入れた。確かにそれはありかもしれない。ここからあの丘までは……二キロぐらいかな。海を背にして右斜め前辺りにあるけど、別に海に対して垂直に大公邸を建てなければならないわけじゃない。

「私は賛成です。丘の上ならば警備もしやすいかと」

護衛のローランが初めて言葉を発した。元々は騎士だったローランがそう言うなら、丘の上は一気に第一候補だ。

「ここから見た限りではなだらかな丘ですし、馬車での行き来も大変ではなさそうですね」

「じゃあ一度見に行ってみよう。この距離なら……転移で行こうか」

その言葉を聞いて皆が周りに集まってくれたので、俺はすぐに転移を発動した。すると瞬きほどの時間で丘の上に到着する。

「おおっ、礼拝堂もよく見えるね」
「何も障害物がありませんと、やはり見晴らしが良いですね」
丘の上は下から予想していた以上に広かった。これなら大公邸を建てて庭も十分な広さが取れるし、さらに俺専用の畑や温室なんかも作れそうだ。
「ここにしようか」
「そうですね。私は賛成です」
ロジェのその言葉に他の皆も頷いてくれて、満場一致でこの場所に大公邸を建てることに決まった。

４４６、簡易的な街づくり

ここに大公邸を建てるとして、今回やっておくべきなのは建築を担当してくれる人達の住まいとなる建物づくりかな。さすがに何もない領地に連れてきて、自分たちが住む場所の建築から始めて欲しいと言うのは酷だろう。

簡易的なものでも家があるっていうのは違うはずだ。

「職人さん達の住まいはどの辺が良いかな？」

「そうですね。先ほどの話を合わせるならば、こちらの丘から礼拝堂までは大通りを通して高級店街とすることになるので、その先が良いかと」

「そうだね。……あのさ、一つ聞いても良い？　高級店街って具体的にどんなお店が入るの？」

王都なら貴族がたくさん住んでいてその貴族向けのお店ができて……と中心街の成り立ちも分かるけど、この国で領地にいるのはその領地を治める貴族だけだ。

今までも公爵領に行ったりしてたけど、あんまりその辺は気にしたことがなかった。

「他の領地の事例から考えますと、まずは大公領に進出したい商会の建物が建てられるかと思います。そしてその商会の方々が、買い物をしたり食事をしたりするお店も作られるかと。さらに別の貴族や商人が大公領までやってきた際の高級宿も必要です」

「確かに。意外と色々必要になるね」

俺はロジェの説明を聞いて何度も頷いた。それは一つにまとめて

おいたほうが便利だし、最初からそういう通りを作るべきだね。
　それにこの街には神域である礼拝堂があるんだから、貴族や商人、その他のお金を持っている人達が礼拝目的で旅行に来ることは多くなるのかもしれない。その場合は、そういう人達向けのお店がたくさん建つことになるだろう。

「じゃあその通りの部分は土地を確保しておいて、礼拝堂よりも向こうにいろんな工房となる建物を作ろうか」
「それが良いかと思います。……建物は、今レオン様が作られるのですか？」
「一応仮のものはね。でもしっかりとしたものは無理だから、それは領地に来てくれた本職の人に任せたいと思ってる」

　俺が作れるのはあくまでも土魔法を駆使した建物だから、平民の間で一般的に作られている木造の建物は無理なのだ。

「仮住まいがないと、領地に来てくれる人を募集しても来てくれないでしょ？」
「……確かに、家があるのとないのとではかなり違うと思います」
「だよね。だからこれから作るよ」

　まず必要なのは、何よりも建築工房で働く人達の住居だ。そして建物を建ててもらうのに必要な材料を運搬、販売してくれる商会の建物も必要になる。

「木材を扱う商会は高級店街じゃないほうが良いよね？」
「はい。王都でも工房が立ち並ぶ場所に位置していることがほとんどです」
「了解」

後は来てくれた人達が食べるものに困らないように食品を運んでくれる商会と、さらに食堂も一つは欲しい。そしてその人達が住む住居も必要だ。

そうして必要な人達の住居とお店や工房を、土魔法を使って次々と建てていった。複雑な作りは無理なので、全て平屋で部屋は一つだけの簡素な建物だ。とりあえずはこれで我慢してもらって、まずは自分たちが住む場所から作り始めて貰えば良い。

「これで良いかな」
「……素晴らしいですね」
「レオンって改めて規格外だよね」

俺がやり切ったと皆を振り返ると、ロニーは苦笑を浮かべていて、ロジェも僅かに呆れたように口元を緩め、ローランは瞳を輝かせて、アルノルは驚いたのか瞳を見開いていた。
アルノルはまだ俺に慣れてないんだな。ローランは……何をしても尊敬してくれるから、慣れるとかいう問題じゃない気がする。まあ俺がやることに瞳を輝かせてくれるのは嬉しいから良いんだけど。

「他に必要なものが思い浮かぶ人はいる？」
「うーん、井戸やトイレはどうするの？　最初に整備しちゃったほうが良い気がするけど」
「確かに！　ロニーさすが」

大公領では平民が住む場所まで全て下水を通そうと思ってたんだ。下水の工事をできる人達も連れてくるのならもう少し住居を増やして……最初の数ヶ月は仕方ないから汲み取り式のトイレかな。街が汚れないように、俺が定期的にピュリフィケイションをすれば良いだろう。

そうしてさらに仮の街を便利に作り上げていく。井戸は掘ったら出てくるのだろうか。

「誰か井戸の掘り方を知ってる？」

「一応存じておりますが、井戸は掘ることよりもその後に使えるように整えるまでが大変らしいです。そこは専門家でなければ難しいかと」

「そうなんだ。じゃあそこも誰かを雇わないとだね。とりあえず、水が出るのかだけ確認しようか」

それから俺はロジェに井戸の掘り方を聞いて、土魔法で簡単に井戸を掘っていった。地球ではもっと大変な作業なんだろうな……土魔法が便利すぎる。

掘ること数分で、地下から水が滲み出てきた。そこからさらに少しだけ掘ると、かなりの量の水が溢れ出てくる。

「これは素晴らしいですね」

「水の量は多いほう？」

「はい。この程度の深さでここまで出るのならば、水の心配は要らなそうです」

「それなら良かったよ」

感心したように地下を覗き込むアルノルは、楽しげな瞳で水が湧き出るのを眺めている。こういうのが好きなのかな。

「これで今できる準備は終わったし、王都に帰ろうか。王都に戻ったら領地に来てくれる人を募集して雇って、その人達を領地に送り込んでって忙しくなるよ」

「またたくさん雇わなければなりませんね」
「本当だよね……何人必要なんだろう」
「たくさん必要だからといって変な人を雇うことはできませんので、大公家が様々な種類の領民を募集していると、国全体に広めるべきかもしれませんね」

ロジェが発したその言葉に、ロニーもアルノルもローランも全員が頷いている。皆はやる気満々みたいだ。凄く頼もしい。

『主人、帰るのか？』
「うん。また乗せてくれる？」
『それはもちろん構わないが……帰る前に魔物の森に寄っていかないか？　我は久しぶりに動きたいぞ』

そういえば、最近は魔物の森の駆逐にあんまり時間を割けてなかったんだよな……確かにここらで思いっきりやっておきたい。

「分かった。じゃあ魔物の森の近くで皆を下ろしてから、俺とファブリスだけで行こう」
『相分かった。では乗ると良い』

そうして俺はファブリスの要望に応えて、半日ほどは魔物の森で暴れまくって森をかなり押し返した。そしてファブリスが満足したところで、皆で王都に戻った。

４４７、領民募集

領地から帰ってきてまずやったことは、とにかく領民の募集を王都中に広めることだ。一応必要な職種は書いているけど、それ以外も幅広く募集することにして人が集まるようにしてみた。

でも数日経って、思ったよりも人が集まらないらしい。その理由はもう分かりきっている。募集の時に伝えている大公領の場所が魔物の森の跡地だということが、皆の足を重くしているのだ。

「ロジェ、このままだと領民がいない領地になるよね？」

「はい。一応領地を作り上げていくことに支障はない程度の人員は集まりそうですが、いくら素晴らしい街を作ったところで、住んでいる人がいなければ意味はありません」

そうなんだよな……やっぱり王都で募集してるっていうのがダメなんだろう。王都はそんなに良いところじゃないことを俺は知ってるけど、それでもこの国で一番の都市なのだ。そこからわざわざ危険な僻地に行こうっていう酔狂な人は、そうそう数がいないのは当然だ。

王都からじゃなくて田舎で生活が苦しい領地での募集も考えるべきかな……でもそれにはその領地の貴族との関係もあるから、簡単に募集はできない。

「アレクシス様とリシャール様に相談するよ」

「それがよろしいかと思います」

数日でそんな結論に達したので、俺は次の日に執務室でさっそく領民募集についての相談をしてみた。
するとアレクシス様とリシャール様は、ちょうど良いとでも言うように数枚の紙を渡してくれる。

「やっと領地開発を始めるのだな。レオンが領民を募集する時が来たらとリストを作ってある。このリストは昨今の敵対貴族による国内の混乱によって、治める貴族家が代わり生活に変化が生じている地域や街だ。もちろん良い変化が起きているところもあるのだが、全員にとって望ましい変化というのも難しく、暮らしづらくなったと感じている者がその地域には多くいるはずだ」
「中には村がいくつか廃村になり、引っ越しを余儀なくされた者達もいる。そういう者達は未だその土地に根付いていないため、大公領に向かうことへのハードルが低いはずだ」
「さらに貴族達もそういう馴染めない領民はトラブルの元だからな、そこまで引き止めないだろう。国から通達すれば素直に応じるはずだ」

そんな便利なリストを作ってくれてたのか……めちゃくちゃありがたいな。大公領は元々国中から人を集めないといけないから、馴染めないことで起きるトラブルは当然予想していたし、それはそこまで大きな問題じゃない。まずは何よりも人がいることが大切なのだから。

「ありがとうございます。ではこの地域を中心に、国中に大公領への移住者を募る通達を出していただけますか？」
「分かった。こちらでも準備をしよう」
「ありがとうございます。領民がたくさん流れてきた領地には、何かしらのお礼とか補填とか、そういうのをしたほうが良いでしょうか？」

「そうだな。大公領では米を輸出するのだろう？　それならばそれに際して、何かしらの優遇措置を約束すれば良いのではないか？」

確かにそれはありだな。米を広めるのにも一役買って、俺にとっても一石二鳥だ。

「ご助言ありがとうございます。そのように取り計らってみます」

とりあえずルノーとロニーに相談だ。領地開発を始めるのなら、これから経理の仕事は爆発的に増えるだろうし、二人の後輩も増やさないとダメかもしれない。

領民だけでなく、主要な使用人も全体的に増やす方向でアルノルに進めてもらおう。

それからも俺はアレクシス様達とこれからの大公領について色々と話をして、手応えを感じて屋敷に戻った。

比較的早い時間に屋敷に戻った俺は、屋敷の裏手にある畑を訪れていた。目的はジェロムだ。ジェロムには米の生産など畑の管理を任せていたけど、その技術を領地で集めた領民に広めて欲しいと思っている。

「ジェロム、今時間ある？」

「レオン様、もちろんです。何かございましたか？」

「ちょっと話があるんだけどさ……もし良ければ、大公領に移住してくれないかな？　これから領地開発を本格的に始めるんだけど、募集した領民に稲やカカオ、コーヒーの育て方を伝えて欲しいんだ」

俺のその言葉を聞いたジェロムは驚いた様子だったけど、すぐに

表情を楽しげなものに変える。

「かしこまりました。精一杯努めさせていただきます」

「本当！？　ありがとう！　ジェロムって確か通いだよね？　家族はいるんだっけ？」

「はい。妻と子供が三人おります」

「ご家族はどうする？　一緒に移住するのなら、もちろん仕事も住居も準備するけど」

「そうですね……妻は足を悪くしていて家にいるので仕事はできないと思うのですが、一緒に連れて行かせていただきたいです。子供達は全員独り立ちしていますので、声を掛ける程度で大丈夫です」

え、ジェロムの奥さんって体を悪くしてたのか。早く言ってくれれば良かったのに……俺に治せるかな。

俺は世界中の人を治す羽目になったら大変すぎるからと回復魔法のことは隠してるけど、身近な人達を治すのには躊躇わない。

足が悪くなってしまった理由が病気や怪我なら問題なく治せるだろう。今は魔力が潤沢にあるから、原因が分からなくて治る過程がイメージできなくても、魔力量でカバーできる。とりあえず、一度会ってみるかな。

「ジェロム、近いうちに奥さんに会わせてくれない？」

「それはもちろん構いませんが……」

「奥さんの体調が良い時で良いから。それからお子さん達も、もし今の仕事を辞めて大公領に来てくれるんだったら仕事はいくらでもあるから、声だけはかけてくれると嬉しい」

「かしこまりました。話をしてみます」

「ありがとう。よろしくね」

そうして俺はジェロムに話をして、少し畑を見て回ってから屋敷に戻った。次に向かうのは執務室だ。

４４７、領民募集（後書き）

新たに最新話まで読んでくださっている方もたくさんいらっしゃるようなので、久しぶりに書籍版の告知をさせてください。

「転生したら平民でした」こちらは現在書籍が3巻まで発売されております。各巻に必ず書き下ろしの番外編がありますので、ｗｅｂ版既読の方にも楽しんでいただける内容となっています。
また番外編以外に本編もかなり加筆修正がされていて、書籍版のオリジナルキャラクターや、ｗｅｂ版にはない他者目線のお話などたくさん収録されています。
個人的には3巻に出てくるレティシア先輩というキャラがとても気に入っています……！

まだお手にとっておられない方は、ぜひこの機会に書籍版の方も楽しんでいただけたら嬉しいです。

それからコミカライズも1巻が発売されていて、2巻の発売も3月の末ごろに予定されています！
漫画になるとより世界観に入り込めてレオンの世界を楽しめますので、ぜひそちらもよろしくお願いいたします。
がうがうモンスター様で連載もされています。
（私はコミカライズが更新されるたびに、嬉しくてニヤニヤ読んでます。何度も読んでます。最近はタウンゼント公爵家の様子も描写されて、どんどん世界観が広がっています。）

では皆様、突然のあとがきを読んでくださってありがとうございました。

これからもよろしくお願いいたします！

蒼井美紗

４４８、使用人の今後

執務室の中に入ると、ちょうどルノーとロニーの二人だけしかいなかった。

「二人とも、ちょっと話があるんだけど良い？」

「レオン。もちろん良いけど、何かあったの？」

「あのさ、この前領地を見に行ったでしょ？　それで本格的に領地開発を進めるのにあたって、二人のどっちかに領地に来て欲しいと思ってるんだ。短期間じゃなくて、移住って形で。大公領の領主邸で領地の経理を任せたいと思ってる」

俺のその言葉を聞いて、二人は顔を見合わせてぱちぱちと瞳を瞬かせた。二人はかなり気が合ったみたいで良かったよな……日に日に良い師弟関係になっている。

「それは楽しそうですね。もう王都へは戻って来られないのでしょうか？」

「ううん。向こうが軌道に乗ったら戻ってもらっても良いし、そうでなくても一年に数回は王都と領地を往復してもらうことになるかな」

「それならば、私がやりたいです！」

そう言って手をバシッと上げたのはルノーだ。ロニーはそんなルノーを尊重するつもりなのか、一歩下がって話の主導権を譲った。

「ありがとう。じゃあルノーが移住するって予定で進めるので良いかな？　これから忙しくなると思うけど」

「問題ありません。こちらのことはロニーに任せられますので」
「了解。まだ向こうで住む屋敷もないから実際に行ってもらうのはもう少し先だと思うけど、よろしくね」
「かしこまりました」
「ただこっちでも領地に関する仕事を色々と頼むことになると思う。……そうだ、ルノーが向こうに行くとなると経理は人手が足りないよね。経理の人員も募集しよう」

本当に数えきれないほどの人手が足りないな……もう最低限の人柄だけをクリアすれば、後は一から育てるぐらいの気持ちで募集した方が良いのかもしれない。

それからも二人とこれからについて話し合い、俺は執務室を後にした。次はアルノルのところだな。

「あっ、アルノル！　ちょっと話があるんだけど良い？」

アルノルは屋敷の中を動き回っているようで、捕まえるのに時間がかかってしまった。屋敷のエントランス近くでやっと捕まえたアルノルと、近くにあった応接室に入って話をする。

「色々と話をしないといけないんだけど……そうだ、まずは領民募集のことなんだけど」

それから俺はアルノルにアレクシス様達と話し合って決まったこと、そしてジェロムとルノーのこと、さらに領民以外にも使用人をたくさん雇いたいこと、また兵士を増やしたいことなど色々と話をした。

アルノルに話ながら俺の中でも情報を整理していたので、まとま

りのない聞きづらかっただろう話を、アルノルは最後までメモをとりながらしっかりと聞いてくれた。

「これから忙しくなりそうですね」
「そうなると思う。負担をかけて申し訳ないんだけど、采配を頼んでも良い？」
「もちろんです。まず決めなければいけないのは……領地をまとめてもらう家令でしょうか」
「うん。早めに決めると楽になるよね」

家令は領地の大公邸を取りまとめ、さらには俺達がいないときに領地を管理してくれる人材だ。この人選はかなり重要だから、できる限り有能で信頼できる人を雇いたいんだけど……

「アルノルの知り合いで誰かいないかな」
「そうですね……一人だけとても優秀な友人がいます。今までは雇われる家に恵まれず力を発揮できていませんでしたが、レオン様の下でならば力を発揮してくれるかと。その者でよろしければ声をかけてみることはできるのですが、いかがいたしますか？」
「そんな人がいるなら声をかけて欲しい！　でも、今も貴族家で働いてるんだよね？」

俺のその言葉に曖昧に頷いたアルノルは、その友人の今までの職歴を教えてくれた。すると不運で不憫で可哀想なその経歴に、思わず涙が浮かびそうになる。
その男性は、今はなき敵対貴族の家を転々としていたのだそうだ。最初に雇われた家がかなりひどくてなんとか辞めたと思ったら、次に雇われた家も最初は普通だったのに次第に敵対貴族に飲み込まれて屋敷の中は殺伐として……

という感じで、不運な人生を送ってきているらしい。でもアルノルが人柄と能力は保証しますとまで言っているのだから、信頼はできるだろう。

「すぐに声をかけてあげて」

「かしこまりました。現在は騎士爵家で下働きをやっているという話でしたので、すぐにお連れできるかと思います」

「下働き……」

アルノルが認めるほど優秀なのに下働きとか、能力の損失も甚だしいな。

「以前働いていた貴族家に次の働き先をご紹介いただけない場合は、基本的には下働きからまた始めることになってしまうのです」

「その仕組み、勿体ないね」

他にもそういう人がいるんじゃないだろうか。貴族家が何個も無くなったばかりなんだし、実力を発揮できてない人はいそうだ。そういう人を上手く拾えないかな……

俺のそんな考えが分かったのか、アルノルは心得たように頷いてくれた。

「使用人募集の際に少し工夫をしてみます」

「ありがとう。頼んだよ。これからは忙しくなると思うけど、その分の給金は上乗せするから頑張って欲しい」

「ありがとうございます。精一杯働かせていただきます」

そうしてアルノルとの話を終えた俺は、もう時間が遅かったので今日の仕事は終わりにして、明日からの忙しい毎日のために早めに

ベッドに入った。

４４９、パワフルな奥さんと回復

次の日の午前中。朝食を食べて少しだけのんびりしていたら、さっそくジェロムが奥さんを連れて屋敷に来たという報告を受けたので、俺は応接室に向かった。

応接室の中に入ると、ジェロムの隣に明るくて元気そうな女性が座っている。ふくよかな見た目からして、パワフルなお母さんという印象を受ける。

「ジェロム、さっそく連れてきてくれてありがとう。こんにちは。レオン・ジャパーニスです」

「私はベルタって言うんだ。いつもジェロムが世話になってるね。この人、毎日楽しそうに仕事へ行くんだ。本当にありがとう」

ベルタはそう言って明るい笑みを浮かべた。なんだかジェロムにピッタリの人だな。

「ベルタは敬語が分からなくて、すみません」

「気にしなくて良いよ。良い奥さんだね」

俺のその言葉を聞いたジェロムは、照れたように首の後ろに手をやって少しだけ俯いた。そんなジェロムを見てベルタがバシッと背中を叩いている。

「昨日この人から聞いたけど、大公領に異動になるんだってね。私も連れて行ってもらえるんだとか」

「もちろん。お子さんも希望があれば大歓迎だよ。仕事も準備する」

「本当にありがたいねぇ～。実は昨日の夜に子供達と話したんだけどね、全員が大公領に行きたいって言ってるんだよ。でも上の子供二人は結婚してて、それぞれ家族がいるんだ。その家族も一緒でいいのかい？」
「本当！？　もちろん構わないよ」

逆にこっちから移住をお願いしたいぐらいだ。そんなにいくつもの家族が来てくれるのなら、一気に人手が増える。

「いいのかい？　あの子達は喜ぶね～。実は私達はあの子達が十歳ぐらいの時に、今の家に越してきたんだ。その前は農家をやってたんだけど私が足を悪くして、農家は続けられなくなってね。でもあの子達は街中よりも自然があるところの方が好きみたいなのさ。それで今回の話には乗り気なんだ」
「そういう事情があったんだ。じゃあ、お子さんたちは農業をやりたいのかな？　それならそういう仕事を割り振るよ」
「いや～本当に感謝だよ。ありがとね」
「レオン様、ありがとうございます」

そこまで話をしたところでベルタが口を閉じたので、俺はさっそく今日の本題に入ることにした。

「ベルタが足を悪くしてるって聞いたけど、どっちの足なの？」
「左足だね。森に入った時に熊に齧られたんだ。でもこうして頑張れば動かせるし歩くこともできる。幸運だと思ってるよ。あっ、でもレオン様には申し訳ないね。こんな足だからできる仕事が少なくて」
「それは構わないんだけど、ちょっと俺に見せてくれる？　俺は回復魔法が得意なんだ。何せ使徒だからね」

そう言ってニコッと笑いかけると、ベルタは楽しそうに笑みを浮かべて頷いてくれた。それを確認してから、俺はベルタの前に跪く。

「じゃあいくよ」

回復属性の魔力をベルタの足に纏わせてみると……確かにかなり酷い怪我だということが分かった。さらに時が経っているからか、悪いものがこびりついているような感じになり、明らかに治すのが大変そうだ。

でも俺の魔力を込めれば……

……うわっ、かなり魔力が必要だな。酷い古傷ってこんなに治すのが大変なんだ。でもこの感じなら半分ぐらいの魔力で綺麗に治るかな――

「――よしっ、これで良いかな。ちょっと立ってみて」

少し時間がかかったけど綺麗に治し終えてベルタに起立を促すと、ベルタは恐る恐るソファーから立ち上がった。そして少し足を動かして驚愕に瞳を見開き、だんだんと歩く速度が速くなる。

「ふ、普通に歩けるよ！　痛みも全く無くなったし、痺れもない！」

「治せて良かった」

「れ、レオン様……本当に、本当にありがとね！　わ、私は、また普通に歩けるなんて……そんなの、期待してもなくてっ」

「レオン様……本当にありがとうございます。こんな奇跡が起きるなんて、いくら感謝してもし足りません」

ベルタが両足でしっかりと立った状態で涙を流し、それを見たジェロムも深く頭を下げて目尻に光るものを浮かべた。

こうして感謝されるとやっぱり嬉しいな……こういう時に一番、この力があって良かったと思う。

「感謝なんて言葉だけで十分だよ。喜んでもらえてよかった。じゃあ、落ち着くためにお茶でも飲もうか」

「はい……っ」

それから二人が落ち着くまで少し待ち、涙が溢れなくなったところで俺はまた口を開いた。

「二人にお願いしたいことがあるんだけど、実はこの力はあんまり大々的に広めてないんだ。これを知ったら世界中の病人が俺のところに集まって対処しきれないから。だから……できれば秘密にしておいてくれないかな？」

俺がゆっくりと伝えたその言葉に、二人は真剣な表情で頷いた。

「もちろんだよ。大恩があるレオン様が困るようなことは絶対にしないさ。私を知ってる人にどうしたのかって聞かれたら、神のご加護だって言っておくよ。実際に似たようなものだしね」

「ははっ、確かにそれが良いね」

「私も絶対に言いふらしたりしませんので、ご安心を」

「ありがとう」

俺は二人の顔を交互に見て、感謝を込めて笑みを浮かべた。本当に俺の周りには良い人達がたくさんいてくれて、幸せな環境だよなぁ。

「じゃあ二人にはさっそく移住の準備をお願いしたい。お子さんたちも移住するなら荷物をまとめたり大変でしょう？　今日はもう帰

って良いから、できる限り早めに準備をよろしくね。分からないことがあったらいつでも聞きにきて」
「分かったよ。任せておいて！　足が動くのなら移住の準備なんて楽勝さ」
「頼もしいよ。ジェロムはその準備と並行して引き継ぎもお願いしたいんだけど、大丈夫？」
「はい。問題ありません」
「良かった。じゃあ二人とも、これからよろしくね」

そうして二人との話を終えた俺は、最後に笑顔で手を振って応接室を後にした。これでジェロムの家族がかなりの人数、移住してくれることになる。少しは領地も賑やかになりそうだ。

４５０、家令候補

ジェロム達と話し合いをしてから昼食をとって午後。俺はまた応接室にいた。今度の面会相手は、アルノルの紹介で会うことになった家令候補の男性だ。

応接室に入ると男性は頭を下げて待っていて、俺が部屋の中に入るとそのまま跪いた。そして震える手を隠すようにギュッと拳を握りしめている。

この様子だけで、どれほど今までの環境が酷かったのか理解できるな……本当に敵対貴族って碌な家がなかったんだな。今も本当に酷かったところ以外は残ってることを考えると、何かしら改善策を考えた方が良いのかもしれない。

「こんにちは。ソファーに座って良いよ」

「あ、ありがたき幸せ……」

男性が青白い顔を上げてソファーに腰掛けたのを見て、俺は怖がらせないように注意しつつ口を開いた。

「初めまして、レオン・ジャパーニスです。君のことはうちの執事であるアルノルから紹介してもらったんだ。自己紹介をしてもらっても良いかな？」

「かしこまりました。……私はティエリと申します。下働きとして三年、その後は従者として五年、従者頭として三年、そして下働きとして一年働いておりました。お屋敷でのお仕事について、基本的なことは把握しております。また計算が得意ですので、経理仕事も

可能です。……よろしくお願いいたします」

ティエリは怯えた様子ながらもしっかりと挨拶をして、自分のアピールポイントも述べた。しかしこの発言で俺が怒る可能性を考えているのか、瞳が不安に揺れている。

さっきから怯えながらも動きは完璧だし、従者としての仕事に加えて人をまとめる立場も三年経験していて、経理もできる。それならもっと自信があっても良いはずなのに、やっぱりずっと叱責されて虐げられるような環境で働いていると、自信もなくなるのかな……

「ありがとう。今回は君を家令として雇うことを考えているんだけど、そのことについてはどうかな」

「……正直、今まで経験がない仕事ですので、最初から完璧には務められないと思います……が、私なりに精一杯頑張ろうと思っております」

できないことを安易にできると嘘もつかない。うん、アルノルは良い人材を紹介してくれたかな。

「じゃあティエリ、君を正式に雇いたいと思う。正直今の大公家には全く人手が足りなくて、君みたいな優秀な人間を雇わないって選択肢はないんだ」

俺が苦笑しながらそう伝えると、ティエリは瞳をぱちぱちと瞬かせた。まだ雇われたことが信じられないのかもしれない。

「最初から完璧にできる人なんていないし、最初は失敗しつつ学んでくれれば良いよ。俺も手探りだから、一緒に頑張って欲しい」

そこまで話をして俺が右手を差し出すと……ティエリはその手をどうすれば良いのか本気で迷ったらしく、数秒後に俺の手の前に頭を下げた。

「……えっと、それはどういうやつ？」

今度は俺が困惑して首を傾げると、ティエリは焦ったように顔を上げて泣きそうな表情になる。

「も、申し訳ございません。お手をどうすれば良いのか分からず、頭を叩かれたいのかと……」

「いやいや、俺は使用人を叩いたりしないからね！？　使用人の皆も家族であり大切な仲間だと思ってるから」

ティエリが今まで雇われてた貴族家、どんだけ悲惨なところだったんだ。これはアルノルが不憫がるのも当然だよ。

「あっ、も、申し訳ございません……とんだ勘違いを。で、では、お手を洗われるのでしょうか……？」

「いやいやいやいや、ここで手を洗わせるとかめちゃくちゃおかしなやつじゃん！」

俺はティエリの発言に思わず吹き出しそうになり突っ込んでしまった。なんでこんな話し合いの最後に手を洗わせるんだ。

「普通に握手をしようと思っただけだよ。これからよろしくねって」

「……あ、握手など、大公様と、良いのでしょうか……」

「良いの良いの。うちはかなりフレンドリーな感じだから。ティエリもこの雰囲気に慣れてね。ロジェなんて、たまに一緒に食事もしてくれるよ？」

俺がそう言って斜め後ろに立つロジェを示すと、ロジェは少しだけ嫌そうに顔を歪めて口を開いた。

「それは、レオン様がしつこく懇願されるからです」

「ふふっ、でも結局は一緒に食べてくれるんだから、ロジェは優しいよ。ね、ローラン？」

「はい。ロジェさんはとてもお優しい方だと思います！　ただレオン様が少々強引だというのもまた事実かと……」

「え～、ローランまでそう思ってたの？　まあ良いや、とにかくこんな感じだから……」

俺が二人との会話を止めてティエリの方に向き直ると、ティエリは口をあんぐりと開けたまま固まっていた。今のやりとり、そんなに衝撃だったのかな。

「え、だ、大丈夫！？」

ティエリ、突然泣き出したんだけど！　ちょっとアルノル、この人大丈夫だよね！？

「も、申し訳ございません……このような、素晴らしい職場が実在する事実に、感動してしまいました……」

「……そっか。これからはティエリもその職場の一員だからね」

俺が笑顔でそう声をかけると、ティエリはまた涙を溢れさせたけど、俺はそのままにしておいた。落ち着くまで待ってた方が良いかな。そうだ、甘いものでも食べたら落ち着くだろうか。

そう思ってティエリにもケーキを出したら、またその事実に感動

して泣かれ、ティエリとの初対面はなんだかよく分からない雰囲気になった。でもまあ、ティエリは何かが吹っ切れたみたいだから良しとしよう。

「じゃあティエリ、これからの話なんだけど、ティエリにはさっそく領地に行って指揮をとって欲しいんだ。ただ最初から一人では無理だろうから、しばらくはアルノルと一緒になるかな。とりあえずこの後はアルノルのところに行ってくれる？　アルノルから色々と教わって、他の使用人にも挨拶をして欲しい」

ティエリは俺のその言葉に深く頭を下げてから、「かしこまりました」と頼もしい表情で頷いてくれた。

451、商会長との話

ティエリと話をした二日後。俺は中心街に大きな店舗を構えるある商会に来ていた。その商会はジャパーニス大公家が懇意にしている商会の一つで、その中でも特に食品に力を入れているところだ。

「レオン様、ご足労いただきまして感謝申し上げます。私がお屋敷に伺わなくてよろしかったのでしょうか……？」

「うん。俺がなんとなく出かけたい気分だったんだ。気にしないで」

マリヴェル商会のダルセルは、申し訳なさそうな表情で眉を下げている。俺はそんなダルセルに、にっこりと笑みを向けた。

「それで今日なんだけど、ダルセルには大事な話があるんだ」

「かしこまりました。マリヴェル商会は、全力でもってレオン様の要望にお応えいたします」

「ありがとう。実はこれから本格的に大公領の運営を始める予定なんだけど、そこでダルセルには……マリヴェル商会の支店を大公領に作ってもらいたいと思ってる。どうかな？」

俺のその言葉を聞くと、ダルセルは真剣な表情で顎に手を添えた。

「……現状、ご領地に我が商会のお客様はおられるのでしょうか？」

「今の段階ではまだ誰もいないんだけど、これからまずは建築工房で働く人たちや下水などインフラ整備の専門家、あとは農家とかその他の様々な工房で働く人。そういう人たちがたくさん移住するよ。だからこれから移住する人全員がお客さんかな。あとは食堂もいくつか作る予定だから、そこにも食材を卸して欲しい」

ダルセルは基本的に貴族向けの食材を扱ってたし、こういう仕事は嫌なのかな……そう思って少しここに来たのを後悔していたら、ダルセルは目に見えて表情を明るくさせた。

「もしかして、まだ本当にご領地には誰もいないのでしょうか？」
「そうだよ」
「そして、街づくりに従事する方々への食材供給を、我々に任せていただけると」
「そういうことだね」
「……ありがとうございます！　そのような名誉ある仕事を任せていただけるなど、光栄でございます！」

――まだ領地には何もないってことを話してなかったのか。確かにそれを知らなかったら、すでに領地には他の商会があるとなると進出も慎重になるよな。

「説明が分かりづらくてごめんね」
「いえ、問題ございません」
「それで、領地に支店を作ってくれる？」
「もちろんでございます。すぐにでも支店で働く人員を確保し、ご領地までの輸送経路も確保いたします」
「おおっ、ありがとう！」

これで食料事情の懸念はなくなるな。それがないだけで一気に領地経営が楽になる。

「こちらこそ、重大な役目を任せていただけて光栄です」
「じゃあまずは一般的な食料をよろしくね。多分そのうち他にも運んで欲しいものが出てくるだろうから、その時はまた相談させて欲

しい」
「かしこまりました」
「あともし向こうで食料が余っちゃって破棄になりそうだったら、俺に言ってくれる？　俺が全部買い取るから」
最初はどのぐらいの食料が必要かも分からないし、どんどん人が増えていくから多めに食料は運んでもらうことになる。そうなると絶対に残っちゃうだろう。
「よろしいのですか？」
「うん。俺ならいくらでも保存できるから」
「ありがとうございます。それならば安心して食料を運ぶことができます」
俺がいない時は領地にアイテムボックスの魔道具を置いておいて、魔力が無くなる前に中身の回収に向かうようにしよう。
「じゃあ今日の話はそんな感じかな。領地に置く家令はティエリって名前の男性だから、今度紹介するよ。しばらくは執事のアルノルも領地にいるかな。俺も行き来はするけど、しばらくは領地メインでいる予定だから、何かあったら遠慮せず言ってね」
「かしこまりました。これからよろしくお願いいたします」
「あっ、そうだ。あと一つだけお願いしたいことがあったんだけど、建築資材を主に扱う商会を知ってる？　ジャパーニス商会は今まで付き合いがないんだ。領地を作るのにたくさんの資材が必要なんだけど……」
貴族家は家具を買うことはあっても建材を買うことはないから、まったく付き合いがないのだ。家具を扱う商会も取引があるのは家具を作る工房で、さらにその先にいる建築工房とはあまり関係がな

いと聞いている。

「それならば友人が建築資材を扱う仕事をしております。その友人をご紹介させていただいてもよろしいでしょうか？　人柄は保証いたします」

「そんな人がいるんだ！　ぜひお願いしたい。助かるよ」

「いえ、こちらこそご紹介させていただきありがとうございます。領地を一から作るという大きな仕事に関わらせていただけるなど、とても喜ぶでしょう」

確かに商会目線で考えたら、大口どころじゃない注文が入ったってことだもんね。そう考えたら、俺の選択一つで色んな人の未来が変わってるんだな……

……なんか、そんなふうに考えるとこれから何を決めるにも悩みそうだ。あんまり気にしないようにしよう。

とりあえず、これで建材確保の目処も立った。最近はかなり忙しかったけど、そろそろ王都でやるべきことも終わりかな。

「じゃあダルセル、これからよろしくね」

「よろしくお願いいたします」

話を終えてマリヴェル商会を出た俺は、忙しくて疲れた体をほぐすようにぐいっと伸びをした。屋敷に帰ってマリーとお茶会したいな。

452、少し休憩

マリヴェル商会を後にした俺は、家族皆に声をかけて外の東屋でお昼を食べることにした。たまにはこういうのんびりした時間も必要だよね。

「レオン、最近忙しそうだけど大丈夫？」

東屋の椅子に腰かけると、すぐに母さんが心配そうに声をかけてくれた。皆に心配されるほど忙しそうに見えてるのか……もう少しゆっくり領地経営しようかな。

「大丈夫だよ。これからはもう少しゆっくりするし」

「それが良いよ。レオンは頑張りすぎるからね」

「空いた時間で私とお茶会しようね！」

マリー、俺とお茶会したいと思ってくれてるのか。絶対に、絶対に時間作る……！

「お茶会しよう。明日が良い？　明後日？　それとも今日この後にする？」

「ふふっ、お兄ちゃんそんなにお茶会したかったの？」

「めちゃくちゃしたかった……！」

俺のその返答にマリーは楽しそうに笑って、お茶会の予定を考え始めてくれた。やっぱりマリーは最高の妹だ……可愛いし優しいし賢いし、欠点が思いつかない。

「明後日で良い？　明日は私が忙しいから」
「もちろん良いよ。明後日は一日空けておくから」
「レオンは本当にマリーが好きよねぇ」
「父さんたちよりもマリーの結婚相手に厳しそうだよ」

父さんが笑いながら言ったその言葉に、俺は真剣に何度も頷いた。マリーの結婚相手は生半可なやつには任せられない。少なくとも俺より強くないと。

いや、でもマリーが選んだ相手なら反対できないかもしれない。だって反対してマリーに嫌われたら……考えるだけで泣ける。

「――マリーの結婚はまだまだ先だから」
「そんなこと言ってたらすぐよ～。マリーは王立学校に行くんでしょ？　それならそこで相手が見つかるかもしれないじゃない」

確かにそうだよな……うぅ、成長して欲しくないけど成長は嬉しい。めちゃくちゃ複雑な気分だ。娘を持つ父親ってこんな感じの気持ちなのかな。

「そういえばお兄ちゃん、領地を作り始めるんだよね？」
「そうだよ。最近は本格的に準備を始めたんだ」
「じゃあお兄ちゃんはこれから領地に住むの？　私たちも？」
「うーん、俺は領地にいることは多くなるだろうけど、こっちにも頻繁に帰ってくるかな。皆は好きに選べるよ。皆が移動したいって時にファブリスでも馬車でも、移動手段は準備するから」

俺は執務室に週に一度は顔を出す予定だから、向こうに行くとしても日数にしたら一年の半分ぐらいだろう。
そのうちもっと魔力量が増えて領地まで一気に転移できるように

なれば、もう少し向こうにいる時間が伸びるかもしれないけど。

「そうなんだ～。私は領地にも行きたいな！　学校に行くようになったらあんまり行けないでしょ？　先生も一緒に領地に来てくれるかな」

「確かに今が一番領地にいられるか。じゃあマリーは向こうに領主邸ができたら移動できるように、色々と手配しておくよ」

「本当！？　ありがと！」

マリーは嬉しそうに満面の笑みを浮かべた。こんなに喜んでくれるのなら調整ぐらいいくらでもやるよ。家庭教師の先生たちは給金を弾めば来てくれるかな……ダメだったら先生の変更も考えよう。

「母さんと父さんはどうする？」

「そうねぇ。私たちは食堂があるから」

「確かにそうだよね……でも例えばだけど、王都の食堂は誰かに任せて、母さんと父さんは領地で新しい食堂を開くっていうのもありだと思うよ。実際に料理をするのじゃなくて、いくつもの食堂を経営する側に回って、ヨアンみたいに開発を仕事にするっていうのもありだと思うし」

俺がその提案をすると、母さんと父さんは瞳を煌めかせた。やっぱり二人は開発が好きなのかな……食堂の新メニューを考えてる時が凄く楽しそうで、なんとなくそんな感じがしてたのだ。

「誰かに任せるなんて良いのかしら？」

「もちろん良いんだよ。本当は二人の立場的には、任せる方が一般的だからね。新メニューを開発した時だけ、お客さんの反応を見るためにお店に行くっていうのもありだと思うし、自由にして良いよ」

「……分かったわ。ジャンと考えるわね」

「レオン、ありがとう」

そこまで話をしたところで、ロジェがスイーツをおしゃれに盛り付けて給仕してくれたので、俺たちはとりあえずお茶会を楽しむことにした。

いくつかのミニケーキと果物で使ったソース、それからクリームなどで一皿が綺麗に彩られている。

「わぁ、凄く綺麗！」

「本当ね。見てるだけで楽しいわ」

「これはシュガニスの新メニューかい？」

「そうだよ。最近大人気なんだ」

日本でよくあったような綺麗に彩られた一皿は、とにかく貴族女性に受けまくっているらしい。ロニーがシュガニスの売り上げが凄いとニコニコしていた。

「この大きさのケーキならたくさんの種類が食べられて良いわね」

「それにソースで絵を描くっていうのも面白い」

「お兄ちゃん、このソースは付けて良いの？」

「もちろん。ちょっと勿体ない気もするけど、全部食べて良いんだよ」

俺のその言葉を聞いて、マリーはシンプルなシフォンケーキをソースに付けた。しかしソースの形を崩さないように少しだけだ。

その気持ち分かるなぁ。俺も日本でなんとなく綺麗なソースを崩したくなくて、少しずつ崩さないように付けていた。

「美味しい！」

「それなら良かった」

それからも皆で美味しいスイーツを味わって、とても楽しいお茶会の時間は過ぎていった。やっぱりこういう時間は大切だな。良い息抜きになった。

453、領地開発開始！

王都やその他の地域にまで広げて大公領に来てくれる人材を募集してから、すでに数週間が経過した。そろそろ大公領に向かってくれた人たちの第一陣が到着する頃なので、俺も領地に向かおうと思う。

家族皆が領地に向かうのはもう少し後なので、今回は俺とロジェ、ローラン、それからアルノル、ルノー、ティエリが一緒に行く。

とは言ってもファブリスに乗れるのが最大で六人なので、大公家で元々働いてくれていた使用人で領地に向かってもらう人たちの中には、もうすでに馬車で出発してもらっている人も多くいる。

ジェロムとその家族皆は少し前に出発していったし、王都邸にいた兵士たちも大部分を領地に送り出した。兵士は圧倒的に数が足りないんだよね……とりあえず王都でならいくらでも兵士を補充できるから、移住をしたくないと希望した人以外はほとんど全員に領地へ行ってもらった。

「アルノル、兵士の補充って上手くいってる？」

「はい。そちらは問題ありません。応募が多く選考に時間がかかっておりますが、有望な者からどんどん採用しております。中には領地に行っても良いという者もおりますので、領地の兵士も少しは増やせるかと」

「そっか。良かったよ」

治安維持のためにも兵士は重要だからな……街を作るにあたって絶対に必要な人材なのだ。

「じゃあ皆、準備は良い？　大丈夫なら順番にファブリスに乗って欲しい。ファブリス、今回もよろしくね。六人も乗るから重いけどごめん」
『問題ない。我にとって人が六人など綿毛が乗っているようなものだ。それよりも主人、向こうに着いたらスイーツが食べたいぞ』

ちょっとドヤ顔で自分の凄さをアピールしてから発した言葉がミシュリーヌ様そっくりで、俺は思わず笑ってしまう。

「分かった分かった。ホールケーキをいくつもあげるよ」
『うむ、楽しみにしている』

ファブリスと話を終えて最後に俺も乗ろうと皆のことを振り返ると、まだ一人だけ乗れてない人がいた。ティエリだ。
前は皆を転移で乗せてたけど、最近は台を置いて乗ってもらうようにしたから怖いのかな。

「ティエリ、怖いなら転移で乗せようか？」
「はっ……い、いえ、申し訳ございません！　すぐに乗らせていただきます……！」

ティエリは呆然と開いた口を慌てて動かすと、身軽にファブリスの上に乗った。怖かったんじゃなくて、ファブリスに乗って移動することに驚いてたのか……確かによく考えたら、神獣に乗るとか凄いことだよな。

他の皆が当たり前のように乗ってくれたから、あんまり考えてなかった。俺の近くでずっと一緒に働いてくれてる人はもう慣れてるだろうけど、新人さんは使徒とか神獣って存在だけで恐れ慄くこと

を忘れないようにしないと。

「じゃあ転移するよ」

俺は皆が乗ったことを確認して、バリアで全員を固定してから転移を発動させた。今の俺の転移だと、大公領まで半分ぐらいのところまでは飛べる。

あと倍の距離を転移できるようにならないといけないのか……遠いな。でもマルティーヌに頻繁に会いに行きたいし、週に一度は執務室に顔を出す約束だし、マリーが王立学校に通い始めたらマリーに会うためにも王都と領地を行き来したいし、やっぱり魔力量を増やすのは必須だ。

「じゃあファブリス、後はよろしくね」

『相分かった』

マルティーヌも一緒に大公領に行ければ良いんだけど。婚約者の立場ではそこまで大公家に長時間いるわけにはいかないし、さらには王女様だから王都から出るのはあまり許可が降りないし難しいんだよなぁ。

早く結婚したい……まだまだ先だけど。

そんなことをつらつらと考えていると、俺は柔らかなファブリスの上で眠りに落ちていて――

――ファブリスの声でハッと意識が覚醒した時には、太陽の位置がかなり変わっていた。

『主人、そろそろ着くぞ』

「え、もう着くの？」

時計を見てみると確かに時間は経ってるけど、前よりも早い気がする。

「ファブリス、走るのが速くなったんじゃない？」

『そうか？　確かに最近は人を乗せて走ることに慣れたかもしれんな』

「そういうことか。凄くありがたいよ。移動時間は勿体ないからね」

『……我に任せろ』

おお、ちょっと速度が速まった。褒められたのが嬉しかったのかも。ファブリスって分かりやすくて可愛いよな。

それからは張り切ったファブリスのお陰もあって、数分で大公領の礼拝堂前に到着した。まだ誰もいないけど途中で馬車が遠くに見えたから、そろそろ第一陣が到着するだろう。

「皆が来るまでに少し整えておこうか。一番最初に来るのって誰か分かる？」

「出発した順ならば最初はマリヴェル商会のダルセルと商会員、さらにジェロムとそのご家族、そして建築工房と食堂で働く予定の者達です」

ダルセルは部下じゃなくて自らここに来てくれるのか。それほど大公領の開発に力を入れてくれるってことだよね……ありがたいな。

「じゃあ商会の予定地近くの住居から整えていこうか」

正式な住宅が完成するまで住んでもらう予定の、ただの土で作った小屋のような建物だけど、ベッドとテーブルと椅子を設置すれば少しは居心地が良くなるだろう。

「かしこまりました。ではレオン様、手分けして整えるためにアイテムボックスの魔法具に家具を入れていただけますか？」

「了解。いくつかに分けるから皆に頼むよ」

それから俺たちは手分けして住居を整えて、さらには商会や工房とする予定の建物の中まで整え始めたところで、第一陣の馬車が到着した。

４５４、割り振りと説明

馬車から最初に降りてきたのは……ダルセルだ。一番最初に駆けつけてくれるなんて、本当にありがたい。食料は一番大事だから、ダルセルがここにいるだけでこれから来る人たちが安心するだろう。

「レオン様、ただいま到着いたしました」

「ダルセル、こんなところまで来てくれてありがとう。見ての通りまだほとんど何もないんだけど、これからここを賑やかで住みやすい街にしていきたいんだ。よろしくね」

「こちらこそよろしくお願いいたします。……しかし、すでに建物があるようですが？」

ダルセルが周囲を見回して発したその言葉に、俺は近くにあった建物に軽く触れながら首を横に振った。

「これは俺が土魔法で適当に建てただけだから、全部簡易的なものだよ。これから建築士の皆に、これを一つずつ壊して木造のしっかりとした建物を作ってもらうんだ。これはそれまでの皆の住居として必要かなと思って作っただけだよ」

「こ、これを……土魔法だけで作られたのですか？」

「うん。構造はかなり簡単だから、そんなに難しくないんだ」

「……そう、なのですね」

ダルセルが唖然として周囲を見回しているけど、俺にとってこの程度は大変でもないんだよな。ダルセルもこれからは俺と関わることが多くなるだろうし、俺の力に慣れてもらおう。

「俺は使徒だからね。このぐらいはできるよ」

俺のその言葉とこの景色に使徒だということを改めて実感したのか、ダルセルはその場で跪いて祈りを捧げた。

「ははっ、俺にはそんなことしなくて良いよ。できればそこの礼拝堂でミシュリーヌ様に祈りを捧げて欲しいかな。ミシュリーヌ様が直接作られたものだから、神域になってて祈りが届きやすいと思うよ」

「そうなのですね……！　では毎日祈らせて頂きます」

ミシュリーヌ様、また熱心な信徒が生まれたかもしれません。

「じゃあダルセル、これが商会の簡易の建物だから中を見てくれる？　住居よりは頑張って作ったから、臨時のものとしては問題ないと思うんだけど」

「ありがとうございます。では、失礼いたします」

それから建物の中を見たダルセルは商会長の顔になって、商会員達に次々と指示を出して内装を整えていった。これなら商会は問題なさそうだね。

「ダルセル、食材は問題なく運べてる？」

「もちろんでございます」

「それなら良かった。じゃあこれから食堂を開いてくれる人が到着するから、まずはその人と取り引きをしてほしい」

「かしこまりました」

後はダルセルに任せても大丈夫だと判断した俺は、商会となる建物を出て次に到着した人達の下に向かった。

「皆、来てくれてありがとう。この中に料理人として来てくれた人はいる？」
「あっ、それ俺たちです」
手を挙げたのはまだ若い男性が三人だ。友人同士とかなのかな。
「じゃあそこの三人はこっちに来て。食堂となる建物に案内するよ。食材を調達してもらう商会も紹介するね」
「ありがとうございます」
「皆は元々食堂で働いてたの？　敬語を話せるってことは中心街で？」
「はい。中心街にあるカフェや食堂で働いてて、俺たち三人は実家が近所で友達なんです。今回は大公領で人員を募集してるって話を聞いて、全員彼女もいない身軽な身なので皆で行くかって話になって」
それで友達三人で実家を出てくるとか仲良いなぁ。なんかこういう関係性って羨ましい。俺にもロニーやリュシアン、ステファンとか友達はいるけど、今から友達を作るのは難しいからなぁ。
「来てくれてありがたいよ。しばらくはこの領地の人間がほとんど皆の食事で暮らしていくことになると思うから、よろしくね。責任重大だよ？」
俺が少しふざけた口調でそう言うと、三人は楽しそうな、しかしやる気に満ちた表情で頷いた。
「お任せください」
「頑張ります！」

それから三人を食堂と商会に連れて行き、また馬車が集まる場所に戻るとちょうどジェロム達が到着したところだった。

「レオン様、皆で参りました」

「ジェロム、ベルタ、来てくれてありがとう」

「思っていたよりも街がしっかりとしていますね」

「土魔法で作った簡易のものなんだけどね」

ジェロム達の住宅はどこにするかな……ジェロムは基本的に大公邸で働いてもらって、その周辺に作る予定の温室や農園の管理、さらには他の農家への知識伝達を任せたいと思っている。

そうなると大公邸の近くが良いけど、ベルタが何の仕事をするかによっては違う場所の方が良いよな。まだジェロムの家族には、何を任せるのか決めていないのだ。とりあえず本人達の希望を聞いてからかな。

「ベルタはジェロムと一緒に農園の管理をやりたい？　それとも他にやりたい仕事がある？　ジェロムの息子さん達も、農業志望だって聞いたけどその意思は変わらない？」

「……実は私はやりたいことがあってね、裁縫が好きなんだ。だからもしレオン様さえ良ければ、服飾工房とかで働けると嬉しいんだけど」

「そうなんだ！」

ベルタは豪快な性格かと思ってたら、意外にも繊細な仕事が得意なんだな。

「ロジェ、アルノルを呼んできてくれる？」

「かしこまりました」

他の移住者の対処にティエリと当たっていたアルノルを呼んでもらい、移住者の中に服飾系の仕事を希望している人がいるのかを聞いた。

「……数人おりますが、皆が年若い女性で工房をまとめるような人物がいないことを危惧していました。なのでベルタが工房長として働けるのならば、それが最適かと」

「分かった。ベルタ、そういうことなんだけどどうかな？　経験がないことは気にしなくて良いよ。この領地にはそんな人ばっかりだからね」

「経験がなくても良いなら、ぜひやらせて欲しい！」

「了解。じゃあ決まりね」

ベルタが服飾工房で働くなら、二人の住居は大公邸に近すぎない方が良いかな。ちょうど中間地点ぐらいにしよう。

それから二人の子供達三人は予定通り農業を希望したので、農業地域にする予定の場所に建てた住宅へ案内して、ジェロム達家族のこれから住む家が決まった。

455、美味しいご飯を

ジェロム達が各々の家を整え始めたところでまた馬車が集まる場所に戻った俺は、今度は建築士の皆のところへ向かった。
第一陣としてこの領地に来てくれた建築士の皆は総勢十五人。この十五人が領地発展の要となる。

「皆、大公領に来てくれてありがとう。皆にはこれから忙しく働いてもらうことになるけど、無理はしすぎないように気をつけて」
「はい！　これからよろしくお願いします！」

俺の声かけに、建築士の皆は元気よく挨拶をしてくれた。凄くやる気がありそうな人たちばかりだ。これは良い人材が集まったかも。

「建築資材を運んでくれる商会は数日後に到着する予定だから、それまでは俺が運んできた資材を使って仕事をしてもらうことになる。まず作って欲しいのは皆の住居かな。そしてそれができたら大公邸。その次は商会、食堂、工房って順番にしようと思ってる。たくさん作るものがあって焦るだろうけど、俺が土魔法で作った建物もあるし、ミスしないよう慎重にお願いね」

皆の顔を見回しながら告げたその言葉に、ほとんどの建築士が首を傾げて複雑そうな表情を浮かべた。そして一番前にいた若い男性が口を開く。

「あの、大公邸を一番に作らなくていいんですか？」
「うん、やっぱり皆の住居が先かなと思って。大公邸は作るとなったらかなりの時間がかかるだろうし、皆はちゃんとした家があった

方が疲れが溜まらないでしょ？　だから住居が先の方が効率的だと思って」

ここはかなり迷ったんだけど、長い目で見た時の効率を重視することにしたのだ。仮住まいとちゃんとした家がある状況、絶対に後者の方が仕事効率は上がるだろう。

「……かしこまりました。そういうことならまずは住居から作らせていただきます」

「お願いね。第二陣の建築士たちが来たら住居の建築はそっちに任せるつもりだから、その時には大公邸を皆にお願いするよ。大公邸の図面は王都で頼んでるから、それも来たら見せるね」

皆は自分たちに大公邸の建築を任せてもらえるという事実にホッとしたのか、少し不安そうな表情を緩めて頼もしく頷いてくれた。

「楽しみにしています。私たちにお任せください」

それからも領地に来てくれた様々な専門家と話をしていき、やっと一息ついた時にはもう辺りはかなり暗くなっていた。領地に着いたのが午後の比較的早い時間だったから、数時間は動き回っていたのか。

「ロジェ、今夜は皆で一緒に夜ご飯を食べようと思うんだけど、アルノルたちに伝えてきてくれる？　礼拝堂前の馬車がたくさん停まってるところの近くで良いかな。俺が食事は提供するし、テーブルとかも準備する」

まだ皆は料理が作れるほどに落ち着けていないだろうし、初日は

こうするつもりだった。やっぱり移住してきて不安はあるだろうから、美味しいご飯が食べられれば少しは安心感に繋がるだろう。

「かしこまりました。ローラン、レオン様を頼む」

「もちろんです」

俺に身の危険なんかないのに護衛のローランに念押しをしたロジェは、アルノルたちがいるだろう方向に向かって足早に去っていった。あの様子ならすぐに戻ってきそうだな。

「じゃあローラン、準備を始めようか」

「かしこまりました！」

俺はまず光源からということで、広範囲を照らすように光魔法のライトを発動し、その下にテーブルと椅子をいくつも並べていった。そしてまずは熱々を提供する必要がない料理を、テーブルに並べていく。

やっぱり大公領だしスイーツは必須かな。クッキーやシフォンケーキなど、アイテムボックスに大量に入っているものを取り出す。

『ん？　主人、スイーツか？』

「ははっ、ファブリスはスイーツに関しては本当に鼻が良いよね。寝てたんじゃなかった？」

『そうだったが、良い匂いがしたからな』

「じゃあ一つだけ先にあげる。何が良い？」

『デカいミルクレープが良いな』

「了解」

俺は苦笑しながらミルクレープをホールのまま取り出し、ファブ

リスの前に置いた。そしてファブリスが幸せそうにミルクレープを食べ始めたのを確認して、準備を再開する。

飲み物はお茶で良いかな。肝心の料理はパンとスープと、ステーキならたくさん入ってるかも。いや、でも焼かれた肉ってそこまでの量がないんだよなぁ。

ここはバーベキュー形式にしようかな。

俺は料理用コンロをテーブルの上に設置していき、その上に鉄板を乗せた。急拵えだから炭火じゃないけど、気分だけは焼肉だ。

「レオン様、アルノルとティエリが皆を呼んできますので少しお待ちください」

「分かった。ありがとう」

準備の途中でロジェが戻ってきたので手伝ってもらい、三人で手分けしたことで一気に準備が進んだところで、皆が夕食の会場へとやってきた。

「なんだこれ、すげぇ！」

そう叫んだのは建築士の若い男性だ。そしてその男性に釣られて、皆が次々と楽しそうに声をあげてくれる。俺はそれが嬉しくて、より一層気合を入れて準備を進めた。

「全員集まったかな？」

準備が終わって席が埋まったところで皆を見回しながら声をかけると、何人かが代表して全員いることを伝えてくれた。俺はその声に笑顔で頷き、食事開始の合図をする。

「足りなくなったら追加もあるから好きなだけ食べて良いよ。肉を焼くのは皆が交代でね。あとスイーツも食べてみて欲しい。知ってるかもしれないけど、大公家が経営してるシュガニスってお店で出してるスイーツなんだ。それからそこまで量はないんだけど、ご飯もあるからパンの代わりに食べてみて。これから大公領の特産品とする予定だから」

それから皆で肉を焼いて白米のおいしさに感動して、パンやスープも楽しんで、最後に甘いスイーツで締めるという幸せな夕食を終えた。

ここから大公領の歴史が始まるな。

４５５、美味しいご飯を（後書き）

皆様に嬉しいお知らせがあります。
「転生したら平民でした。～生活水準に耐えられないので貴族を目指します～」
コミックの２巻が発売となります！！

発売日は今月末の３月３０日です。既に予約等が始まっていますので、お手に取って楽しんで頂けたら嬉しいです！
とっても可愛くて素敵な表紙も公開されていて、そちらは私のＴｗｉｔｔｅｒなどで見ていただけると思いますので、ぜひご覧下さい！
本当に可愛いです……！

蒼井美紗

456、執務室とマルティーヌ

大公領に第一陣の移住者たちが到着してから数日後。俺はアルノル、ティエリ、ルノーたちに領地のことは頼んで、ファブリスに乗って王都に戻った。

明日は週に一度の執務室に顔を出す日なのだ。週一ってかなりの頻度だよなぁ。二週間に一度にしてもらえないか相談するのもありかもしれない。

「ロジェ、領地は上手くいきそうかな」

俺と一緒に王都に戻ってきたロジェに、王宮に向かう馬車の中でそう問いかけると、ロジェは僅かに口元を緩めた。

「皆が熱意を持って仕事に励んでおりましたので、良い方向に発展していくのではないでしょうか」

「そっか、それなら良かったよ」

ロジェのその言葉に安心した俺は、背もたれに体を預けて馬車の窓から街並みを眺めた。ファブリスでの高速移動や転移も良いけど、こうやって馬車でのんびり移動するのもたまには良いよね。

王宮に着いて執務室に向かうと、アレクシス様とリシャール様にすぐソファーへと呼ばれた。お二人とも瞳が楽しそうに煌めいている。

「レオン、領地はどうだ？　問題はないか？」

「はい。おかげさまでとても良い滑り出しとなりました。人員募集に関してなど、ご助力いただきましてありがとうございます」
「そうか、それは良かったな。どのぐらいの期間があれば街として機能しそうだ？」

街として機能するか……それがどの程度を表してるかにもよるけど、一般的な街を想定してるのならまだまだ先だな。とにかく足りないものが多すぎる。

「急ピッチで進めたとしても、年単位の時間が必要です。ただ数ヶ月でとりあえず人が住む場所として問題はなくなると思います」
「随分と早いな……さすがレオンだ」

それから数十分ほど大公領の現状と今後について話をしたところで、アレクシス様から使徒への相談事に回答して執務室を出た。

そして次に向かったのは……王宮の中庭にある東屋だ。実は今日、マルティーヌとお茶会の約束をしている。足取り軽くスキップでもしたい気分で辿り着いた東屋には、可愛らしく微笑むマルティーヌがいた。

「マルティーヌ、久しぶりだね」
「レオン！　来てくれて嬉しいわ」
「こちらこそ時間を作ってくれてありがとう」

やっぱりマルティーヌと会うと一瞬で癒されるな。このためならいくらでも領地から王都に来られそうだ。

「ついに領地の開発を始めたんでしょう？　今はどんな感じなの？」
「まだ本当に開発が始まったばかりだよ。とりあえず俺が土魔法で

必要な建物を全て作ったんだけど、それを一つずつ壊してちゃんとした建物を作ってもらってるところ。井戸とか下水道とか、そういうものの整備はちょうど昨日ぐらいから始まったところかな」
「本当に一から街を作るのね……楽しそうだわ」

マルティーヌは羨ましそうな表情で、大公領を頭の中に思い描いているのか宙を見つめながらそう言った。マルティーヌも一度連れて行ってあげたいよな……今日の帰りにでもアレクシス様に相談しようかな。
王女様としてじゃなくて、俺がこっそり連れて行くなら問題ないんじゃないだろうか。やっぱり王女様が移動するってなると大事になっちゃうから。

「稲の大量生産とか、カカオやコーヒーの木を育ててみるって話はまだ進んでないのね」
「うん。その辺はもう少し先の話かな。とりあえずは皆が住む建物ができないとね。大公家の領地邸もまだないから」
「確かにそうね。じゃあもう少し気長に楽しみにしているわ」
「そうしておいて。そうだ、マルティーヌは何か領地に対して要望がある？　こういう場所が欲しいとか、こういう仕組みを作りたいとか、何でも良いんだけど。一から作るから自由に組み込めるんだ」

俺のその質問にマルティーヌはお茶を一口含んでから真剣に考え、そして予想外な、しかしとても嬉しい希望を口にした。
「……レオンが元いた世界の街並みを見てみたいわ」

俺にしか聞こえないように小声で発されたその言葉は、俺の胸をすとんと軽やかに、しかし深く打ち抜いた。

「マルティーヌ……ありがとう」
行儀は悪いけどテーブルに身を乗り出してマルティーヌの手をぎゅっと握ると、マルティーヌは照れたような笑みを浮かべる。
「わがままじゃないかしら？」
「そんなことない！　絶対に作るよ」
現代の日本というよりも過去の日本の街並みを参考にして、お茶屋さんとか和食を出すお店をたくさん作ろう。それで着物とかも作れたら良いなぁ。
珍しい街並みってことで観光地になるだろうか。いや、珍しいというかミシュリーヌ様が好まれる街の風景、みたいな感じにすれば観光客が殺到するかもしれない。
それでいこう。ここは使徒である権限をフル活用だ。
「楽しみにしてて。住み心地が良い楽しい街にするから」
「ええ、待ち遠しいわね。私が実際に見られるのはいつになるかしら……」
「そのことで一つ提案があるんだけど」
俺はマルティーヌの手を握ったまま椅子から立ち上がって側に向かい、マルティーヌの耳に顔を近づけた。
「もう少し領地が整ってから、こっそり領地に来られるとしたら来たい？　マルティーヌが王女様ってことはバレないようにして、数日だけになると思うけど。もしマルティーヌが乗り気ならアレクシス様に相談しようかなって」
「……本当！？」

マルティーヌは期待の眼差しで俺を見上げた。これは答えを聞かなくてもわかるな。

「相談してみようか」

「すぐ相談に行きましょう。これから時間はある？」

「もちろん」

それから俺は凄い行動力を発揮したマルティーヌによって半ば引き摺られる形で執務室に戻り、アレクシス様からマルティーヌの外出許可を得た。

あんなに期待した瞳で見つめられたら、アレクシス様はダメだなんて言えないよな。俺はさっきまでの二人のやりとりを思い出して苦笑しつつ、楽しそうなマルティーヌの横顔を見て心が満たされるのを感じた。

457、変装と領地へ

大公領の開発を本格的に始めてから季節一つ分ほどの時間が過ぎ、最近はかなり肌寒くなってきている。もう秋の月も終わる頃だ。

「レオン様、そろそろお時間です」

「分かった。転移で行くから、ロジェとローランは俺の近くに来てくれる？」

「かしこまりました」

今日はずっと心待ちにしていた日。そう、大公領にマルティーヌと一緒に行く日なのだ。魔法も駆使して急ピッチで進めてもらっている大公家の領地邸は、主要部分の建設は終わっていてとりあえず住める程度にはなっているので、満を持してマルティーヌを招待だ。

王女ということを明かさずに行く予定だから変装をするって話だったけど、どんな格好になっているのか楽しみだな。

二人を連れてあらかじめ決めてあった王宮の一室に転移すると、そこにはマルティーヌのメイドさんがいて俺たちを案内してくれる。

そうして入ったマルティーヌの私室には……

……とても可愛らしい男の子がいた。

下位貴族の子息が着てそうなシンプルな服装に、丸くてしっかりとした形の帽子を被っている。

「マルティーヌ、だよね？」

「そうよ。どうかしら、男爵家の三男で騎士見習いって設定なの」
「そんなに細かく決めてるんだ。……凄いね」

変装の技術が凄すぎる。よく見れば辛うじてマルティーヌってことは分かるけど、他の人からしたら普通に男に見えるはずだ。
ただやっぱり体格は華奢だし、男にしては可愛さが強い。でも俺らの歳ぐらいなら少し成長が遅いぐらいで通るだろう。

「髪の毛ってどうやってるの？」
「縛ってまとめて帽子の中よ。ショートヘアに見えるように少しだけ出してるの。室内でも帽子を取れないことが難点だけれど、それは仕方がないわね」
「その帽子の中に髪の毛が詰まってるようには見えないよ」
「ふふっ、良かったわ。優秀なメイド達のお陰ね」

これならマルティーヌってことはバレないだろうな。ただ友達って設定で連れていくことになるんだから、接し方には気をつけないと。下手したら友達の男の子に鼻の下を伸ばしてた大公様、みたいなヤバい噂が流れてしまう。

「名前はなんて呼んだら良いかな」
「そうねぇ。クレメントはどうかしら」
「ははっ、弟の名前をそのまま？」

俺はマルティーヌの弟愛が加速していることを悟り、苦笑を浮かべて別案を提示した。

「少し変えてクレンとかにすれば？」
「確かにそのままは避けた方が良いかしら……うん、クレンにするわ。皆もこの格好の時はそう呼んでちょうだい」

「かしこまりました」

メイドさん達は弟の名前を使いたいマルティーヌを、微笑ましげに見つめている。

実は数週間前に、マルティーヌとステファンの弟となる赤ちゃんが生まれたのだ。俺は万が一の時の回復魔法要員で王宮にいたけど、回復魔法は必要ないほどの安産だった。

そうして生まれたクレメントに、マルティーヌだけでなくステファンやアレクシス様、エリザベート様までデレデレだ。

「じゃあレオン、さっそく行きましょう。メイドは一人だけ連れていくわ。メイドも従者に変装済みよ」

「え、もしかしていつものメイドさん！？」

マルティーヌの側に珍しく従者がいたから少しだけ不思議に思ってたけど、まさかのメイドさんだったとは。凄いな……普通に気づかないかった。

「私もお供させていただきますので、よろしくお願いいたします」

「こちらこそ。……凄いね、本当に分からないよ」

「ふふっ、お褒めに預かり光栄です」

おおっ、確かに笑い方とか声とかは女性だ。俺がそう思って安心していたら、「ここからは声も変えますのでご心配なさらず」とメイドさんはにっこり微笑んだ。

声も変えられるとか……やっぱり王女様付きのメイドになるような人は凄いんだな。

「一度大公家の俺の部屋に戻ってファブリスと一緒に転移をするか

ら、周りに集まってくれる？」
「分かったわ」

まだ領地への直接転移は難しいので、途中からはファブリスに乗っていかないとダメなのだ。ただ最近はファブリスに一時間ぐらい走ってもらえば、領地に着けるぐらいにはなっている。近いうちに直接転移もできるようになるだろう。

「ファブリスただいま。俺を含めて五人を乗せてくれる？」
『相分かった。……なんだか奇妙な格好をしてるのだな』
『ファブリス様、お久しぶりです。今回は身分を隠して領地に向かうので、性別を変える変装をしているのです』

マルティーヌのその言葉にファブリスは納得したように頷き、俺たちが乗りやすいように寝そべった。最近はマルティーヌもファブリスにかなり慣れて、普通に会話ができるようになっている。

「ファブリスはマルティーヌだって気付いたんだ」
『当然だろう？　匂いが同じだ』
「……そういえば鼻が良いんだったね」

ファブリスって人間味がありすぎるから、ついつい獣の特性があるってことを忘れるんだよな。まあ獣の特性って言っても、四足歩行と鼻が良い、夜目が効くぐらいかもしれないけど。

『全員乗ったか？』
「うん。じゃあ皆、転移するよ」

魔力が僅かに残るようにコントロールをして、いつも目印としている大木の下に転移をすると……今回も問題なく成功した。

しかし一気に魔力を消費した疲れで体が重くなる。ファブリスの背中の上にぐでっと寝そべると、後ろにいるマルティーヌが心配そうに声をかけてくれた。

「レオン、大丈夫なの？」

「うん。ちょっと休んだら復活するから。……着くまで寝るね」

「分かったわ。着いたら起こすわね」

マルティーヌのその言葉を最後に意識が遠くなり……次に目を開いた時にはもう領地に着いていた。

４５７、変装と領地へ（後書き）

新作の投稿を始めました！
☆評価欄の下にリンクを貼ってありますので、よろしければそちらも読んでいただけたら嬉しいです。
今までのほのぼのとした作風とは少し違うものになっていますので、この作者こんなのも書けるのか！　と楽しんでいただけたらと思います。（そう思っていただけるように頑張ります……！）

「最弱冒険者は神の眷属となり無双する～女神様の頼みで世界の危機を救っていたら、いつの間にか世界中で崇拝されています～」

という作品です！
よろしくお願いします！

458、領地を案内

ファブリスは領地の大公邸前に止まってくれていたようで、目の前に未だ建設途中の大きな屋敷があった。作業中の建築士たちはファブリスにも完全に慣れたようで、軽く俺たちに頭を下げるとすぐ作業に戻っていく。

「ファブリス、ありがとう。じゃあ皆バリアを解除するから降りてくれる？」

寝そべったファブリスからまず飛び降りたのはロジェとローランで、二人はすぐに他の人たちが降りやすいように台を設置してくれた。

「マルティ……じゃなかった、クレンは転移で降りる？」
「ううん、大丈夫。……飛び降りた方が王女だってことを隠せるでしょ？」

マルティーヌは小声で後半の言葉を付け足すと、楽しそうな笑みを浮かべて足を揃えた。そして身軽にファブリスから降りて着地をする。

「おおっ、凄い」
「わ……お、俺も鍛えてるから」

めちゃくちゃ言い慣れてない感じが伝わってくるなぁ。俺はマルティーヌの少し恥ずかしそうな男言葉に、ちょっといたずら心が湧いた。今日はいつも以上に話しかけようかな。

「レオン様、おかえりなさいませ」
「アルノル、ティエリ、今戻ったよ。今日は客人がいるんだけど事前に伝えてなくてごめん。急遽来ることになったんだ。俺の友達でクレン。案内とかもてなしは俺の方でするから気にしなくて良いよ」
「かしこまりました。クレン様、ようこそお越しくださいました」
「ああ、出迎えありがとう。み、短い間だがよろしく頼む」
「もちろんでございます。何かご要望がありましたら、私たちでも他の使用人でも遠慮なくお申し付けください」

アルノルは完璧な仕草で礼をして、顔に微笑を浮かべた。これはマルティーヌだって気付かれてるのか気付かれてないのか、どっちなんだろう。
今回はロジェとローラン以外でマルティーヌが来ることを明かした人はいないから、アルノルたちもクレンが誰なのかを知らないはずなのだ。

「じゃあクレン、まずは大公邸を案内するよ。まだ完成には遠いけど結構できてるんだ」

大公邸はとりあえず外観はほとんど完成している。中も一応部屋という形にはなっていて、今は壁の塗装をやっていたり床に絨毯を敷いていたり、そういう細かい部分の工事になっている。

エントランスを通って中に入ると、そこはがらんとした広い空間だ。まだシャンデリアとか装飾は一切ないので、ちょっと物珍しい光景だよな。

「凄い……。こんな状態の屋敷を初めて見た、よ」
「あんまり見ることはないよね。ここから壁紙を貼ったりして豪華

になっていくんだって」

マルティーヌは瞳を輝かせて、建設途中の大公邸を右に左にと見回している。楽しそうで可愛いなぁ。今回はあんまり近づいたり手を取ったりできないのが辛い。

「クレン、次はこっち。食堂や厨房があるよ」

「右側が食堂なのね」

「うん。エントランスを左に行ったところには客室と応接室があるんだ。後はちょっとしたパーティーを開けるようなホールが二つも。でもその辺は本当に何もないから、今日見てもらうのはこっち側だけになるかな」

「ホールが二つもあるんだ」

「そう。公に使えるホールと、家族用みたいな小さいのが二つ。家族用の方はホールって呼ぶのはちょっと違うかな……お茶会室みたいな感じ」

屋敷の一番端に位置しているその部屋は、ガラスの窓をかなり大きくして庭に咲く花を楽しめるようにする予定だ。普段の食事は食堂になるけど、たまにはそこで昼食とかを食べるのも良いかなと思っている。

「それは楽しみ……だね」

「そうなんだ」

それから屋敷の中を一通り案内した後は、屋敷と同じく丘の上にある果樹園や温室……となる予定の場所を見て回り、馬車に乗り込んで丘を下った。

馬車が止まったのは、高級店が立ち並ぶ予定の大通りだ。マリヴ

ェル商会の建物がついこの間完成して、他の仮の建物にもいろんな商会やお店が入ったので、かなり賑やかになっている。

「ここが王都の中心街みたいな場所？」

「そう。この領地は観光地にする予定だから、これからは宿とかもたくさん建つかな」

「レオン様、またこちらに戻られたのですね！」

「そうなんだ。俺の友達のクレンだよ」

建築士の若い男性たちが声をかけてくれたので、笑顔で答えてマルティーヌを紹介する。

「おおっ、レオン様のご友人なんて珍しいですね」

この領地は少ない人数から始まったので、俺も街にいる皆とはかなり仲を深めることができている。こうして話しかけてもらえると嬉しいよなぁ。

「レオン様に対しても思いましたけど、貴族様は男性でも綺麗ですよね～」

「そ、そうかな。ありがとう。クレンだ」

マルティーヌは綺麗という言葉に正体がバレると少し緊張したのか、焦った様子で声を発した。低い声を出すようにしてるけど、やっぱり声も男とは違うもんな。

「クレン様、まだ慌ただしい感じですけど楽しんでいってください！」

建築士の皆とそんな話をして、次に向かったのは礼拝堂だ。すで

にこの街のシンボルのようになっていて、ここで働く皆は仕事終わりや仕事の休憩、朝の散歩でも礼拝堂に行ってお祈りをしている。

「王都にあるのと同じ、だな」
「ミシュリーヌ様に作ってもらったからね。お祈りしていく？」
「うん。せっかくだから」

俺はマルティーヌの手を引くのを我慢して礼拝堂の中に入ると、中に俺たちしかいないことを確認して入り口のドアを閉めてもらった。
これで中には俺とマルティーヌ、ロジェ、ローラン、マルティーヌのメイドさんの五人しかいない。少しだけマルティーヌも息抜きできるかな。

459、ミシュリーヌ様とマルティーヌ

「マルティーヌ、この中だけならいつも通りに話して良いよ」

俺のその言葉を聞いたマルティーヌは、さっきまでの少し緊張した笑顔をふわっとしたいつもの笑顔に変えた。

「レオン、ありがとう。少し息抜きがしたかったの」
「疲れたらいつでも言って。転移で屋敷に戻ることもできるから」
「ええ、ありがとう」
「男言葉を使うのは大変そうだったね」

ぎこちない口調のマルティーヌを思い出して微笑ましく思っていると、マルティーヌは俺の顔を見て少しだけ唇を尖らせた。

「もう、変だって思ってるんでしょう？」
「ははっ、そんなことないよ。可愛いなって思ってただけ。なんか一生懸命で。参考はステファン？」
「ええ、お兄様とレオンとお父様とって、身近な男性を思い浮かべて頑張ってみたんだけれど……やっぱり普段の口調が出るわね」

マルティーヌは悔しそうに少しだけ眉間に皺を寄せた。

「どうせなら上手くやりたいのだけど」
「参考にする人を一人に絞った方が良いんじゃないかな。騎士志望の設定なら、参考にするのはリュシアンとか。ステファンはちょっと威厳がありすぎるから」
「リュシアンね……レオン、かなり街が賑やかになってきてるな！

こんな感じかしら？」
「ははははっ、それ、めっちゃリュシアン」
懐かしいなぁ。リュシアンにも会いたい。王立学校を卒業してからだから、もう半年以上会ってないのか。結局忙しくてマルティーヌとステファン、ロニーの三人とリュシアンに会いに行くって話も後回しになってるんだよな。
今度まずは俺一人で会いに行こうかな。俺だけならすぐに行って帰って来れるし。
――というか今気づいたけど、今の転移距離ならタウンゼント公爵領まで直接行けるんじゃない？
大公領にあと一時間のところまで行けるんだから、絶対行ける。うわぁ、なんで今まで気づかなかったんだろ。リュシアンマジでごめん！
とりあえずマルティーヌが王都に帰ったら、一度リュシアンのところに行ってみよう。
「これからはリュシアンのイメージでやってみるわ」
「うん。無理せず頑張って。楽しむことを一番にね」
「ええ、ありがとう」
「じゃあ祈ってまた別の場所に行こうか」
今度こそマルティーヌの手を取って一緒に神像の前に行き、俺も祈りの体勢を作った。こうして祈るのってめちゃくちゃ久しぶりかも。というか、もしかしたら初めて？

――ミシュリーヌ様、スイーツの食べ過ぎ注意ですよ。

『レオン、それは祈りの言葉じゃないわよ！？』

「あれ？　聞こえてましたか？」

『聞こえてるわよ！』

「すみません。でも本当に気をつけてくださいね。ミシュリーヌ様、最近は神力が潤沢だからってスイーツを食べすぎてる気が……」

『そ、そんなことないわよ』

そこでミシュリーヌ様の声が聞こえなくなったなと思ったら、隣にいるマルティーヌがハッと顔を上げた。もしかしてミシュリーヌ様、マルティーヌだけに聞こえるように神託してるな。

「か、かしこまりました……」

「マルティーヌ、ミシュリーヌ様の言うことは聞かなくて良いから。どうせレオンにもっと私に優しくするように言いなさいとか、もっとスイーツを食べて良いと言いなさいとか、そんなところでしょ？」

『ちょっとレオン、なんで分かったのよ！』

「ミシュリーヌ様の考えてることは単純すぎてすぐ分かります。ミシュリーヌ様、マルティーヌに変なことを吹き込まないでください」

俺がミシュリーヌ様に抗議していると、隣のマルティーヌが心配そうに俺の顔を覗き込んできた。

「レオン、そんなに強く言っても大丈夫なの？　ミシュリーヌ様が怒られたりとか、気分を害されたりとか……」

そっか。マルティーヌは俺と一緒にいる時間がまだあんまり長くないから、ミシュリーヌ様の本性を分かってないんだな。

ロジェやローランは俺とミシュリーヌ様が話してる様子をよく部

屋で聞いてるから、俺たちの関係性に関しては理解してくれてるだろうけど。

「ミシュリーヌ様にはこのぐらいで良いんだ。いつもこんな感じで話してるから気にしないで」

「……そうなの？」

「うん。これから一緒にいる時間が長くなれば慣れると思う」

「そうなのね……でもレオン、少しは優しくね？」

うぅ、マルティーヌにそう言われたら首を横には振れない。頭の中でミシュリーヌ様の『よく分かってるじゃない！』というテンション高い声が聞こえていたとしても。

「わ、分かった」

『じゃあレオン、私の一日のスイーツ上限を完全に撤廃するっていうのは……』

「それは絶対にダメです」

それから俺たちはミシュリーヌ様と色々な話をして、マルティーヌが少しだけミシュリーヌ様に親近感を覚えたところで礼拝堂を後にした。

460、初めての海

「楽しかったぞ」

リュシアンの口調を真似ることにしたマルティーヌが礼拝堂を出てそう口にしたのを聞いて、俺は微笑ましさに頬が緩んでしまう。

「良かった。じゃあ次は海に行くので良い？」

「もちろん！」

今回の大公領訪問で、マルティーヌが一番楽しみにしていたのが海を見ることなのだ。ステファンに海に行くという話をしたら、凄く羨ましがられたと言っていた。

「馬車だと少し時間がかかるから転移で良い？　まだ道も綺麗に整備できてないんだ。ファブリスは屋敷で寝てるっていうし」

「構わないけど、レオンの魔力は大丈夫……なのか？」

「うん。海は近いし問題ないよ」

「じゃあ、頼む」

「了解」

俺はマルティーヌ達に近くに寄ってもらい、さっそく転移を発動した。転移先は、海が一望できる小さな岩山の上だ。

「うわぁ……凄い」

目の前に突然広がった光景に、マルティーヌは瞳を煌めかせた。大きく息を吸い込むと、海風を全身で感じるように何歩か前に出る。

「不思議な香りがするわね」
「海の香りだよ」
「あっ、口調……は誰もいないから気にしなくて良いわね」
「うん。ここでは自由にして」

マルティーヌはゆっくり頷くと、俺から海に視線を戻した。今日の海は荒れてるということもなく、雄大で穏やかだ。海をぼーっと見てると心が落ち着くよなぁ。

「海とは、とても素敵な場所なのね」
「怖さもあるけど、やっぱり魅力を感じるよね」

ロジェたちにも視線を向けると、ロジェはさすがに海を何度も見ていて慣れたのか表情は変えていなかったけど、じっと水平線を見つめていた。ローランは瞳を煌めかせている。

「皆で海を眺めながらお昼にする？　風もそんなに強くないし」
「それ良いわね。そろそろお腹が空くなと思っていたの」
「じゃあ少し場所を移動しようか。この岩場はさすがに椅子を置くのも難しいし」
「そうね」

転移で砂浜に移動した俺たちは、砂浜に布を敷いてお昼ご飯を食べることになった。やっぱり海といったらこのスタイルだよね。

食べるものは何にしようかな。俺のイメージでは海って焼きそばとかフランクフルトなんだけど、どちらもないからここでもすぐ準備できるものにイメージを広げて……やっぱり串焼きかな。
あとは唐揚げとかフライドポテトとか。この二つは紙コップに入

ってるイメージだ。いや、それってお祭りの屋台だっけ。

まあ、こういうのは雰囲気重視だからなんでも良いか。とりあえず串焼きを一人二本ずつ出して、唐揚げは皆でつまむ感じで大皿で。フライドポテトは木製のコップにそれぞれ入れてみた。そしてトマトソースとマヨネーズを自由につけられるように置いておく。

あとは焼きそばの代わりにチャーハンだ。うん、豪華で良い感じ。こういう食事が並んでるのを見ると落ち着くんだよね。日本人が全員大好きなやつって感じで。

「ふふっ、レオンの好きなものばかりね」

並べられたメニューを見てマルティーヌが楽しそうにそう言った。マルティーヌには好きな食べ物の話なんて何度もしてるから、こういうことはすぐにバレてしまう。

それに唐揚げやフライドポテトは日本のものに近づけようと料理人たちと試行錯誤したから、マルティーヌにも何度も味見をしてもらったのだ。

「俺が選ぶとそうなっちゃうんだよね。マルティーヌは何か食べたいものがある？　ロジェたちも」
「そうね。食後のデザートは食べたいわ」
「それはもちろん出すよ」
「私たちもご一緒してよろしいのでしょうか？」

ロジェのその言葉にすぐ頷くと、ロジェは少しだけ悩んでからまた口を開いた。

「では、餃子を少しいただけたら嬉しいです」
「了解！」

俺はロジェが食べたいものを言ってくれたことが嬉しくて、食い気味に反応してすぐに餃子を出した。餃子に合うだろう各種調味料もだ。

「ありがとうございます」
「ローランとメイドさんは大丈夫？」
「私は大丈夫です！」
「私もこれだけあるならば十分でございます」

そうして皆の要望も聞いたところで、綺麗な海を見ながら食事を開始した。少しだけ風が強くなってきたので、バリアで風を防いで快適な食事だ。

「やっぱり唐揚げ、最高に美味しい」
「外側のパリッとした食感と中のジューシーさが良いわよね」
「チャーハンも最高です。これを食べてからパンよりも米の方が美味しいと思いました」

パンよりもコメ派が増えてくれると嬉しいよな。パンも美味しいことはもちろんなんだけど、この世界ではまだ米の認知度が低いから一人でも多く米派を増やさないと。

「こういうレオンの好物ばかりがメニューの食堂があっても良いかもしれないわね」
「それ良いのかな？　来る人いる？」
「使徒様の好物が食べられるなんて……！　って感じで、礼拝堂に参拝に来た人達が訪れそうだけれど」

確かにそう言われると……ありかも。ミシュリーヌ様への信仰心を持ってくれてる人は、俺に対しても尊敬の心を持ってくれるもんな。

俺の好物が喜ばれるっていうのは、本人的にはちょっと微妙だけど……まあ、喜んでもらえるなら良いか。

「作る方向で考えてみるよ。他にもこういうものがあったら良いんじゃないかとか、意見があったらなんでも言ってね」

「分かったわ。王宮に帰ってじっくり考えるわね」

「ありがとう。心強いよ」

それからも俺達は楽しくご飯を食べて、午後は海をゆっくりと楽しんだ。

４６０、初めての海（後書き）

いつも読んでくださっている皆様、ありがとうございます！
数日前に告知させていただいた新作ですが、まだ読まれていない方はこの週末にぜひ覗いてみてください。

「最弱冒険者は神の眷属となり無双する～女神様の頼みで世界の危機を救っていたら、いつの間にか世界中で崇拝されています～」

という作品です。よろしくお願いいたします！

←このページの広告下にリンクも貼ってありますのでぜひ！

461、リュシアンのところへ

マルティーヌを王宮に送り届けた次の日。俺は王都から転移でタウンゼント公爵領にやってきた。突然屋敷の中に転移するのはどうなんだろうと思い、転移先は屋敷の庭にあった魔法の訓練場だ。

ロジェとローランを連れて転移をすると……すぐ近くで庭の手入れをしていたメイドさんに思いっきり叫ばれた。

「きゃーーーーっ！！　し、侵入者っ、！」

その声を聞いて屋敷を守る兵士達が続々と集まってきて、俺達は取り囲まれる。タウンゼント公爵家の領地邸には王立学校入学前に一度来ただけだから、俺の顔は知られてないのか。

ファブリスを連れて来てたら分かってもらえたのかもしれないけど、今日は一緒に来てないし……

「ち、違うんです！　いや、突然入り込んだのは確かに不法侵入かも……それは大変申し訳ないのですが、リュシアンに会いに来たんです！」

必死に両手を振って弁明していると、兵士たちも普通の侵入者じゃないと分かったのか少しだけ殺気を抑えてくれた。そして今度は困惑の表情で互いに顔を見合わせている。

「貴族様……でしょうか？　本日はお客人のご予定はなかったと思うのですが」

「本当にすみません、混乱させてしまって。俺はレオン・ジャパーニスです。転移で突然来ちゃったので驚きましたよね。えっと……ジャパーニス家の紋章とか見ますか？　あっ、全属性魔法を見た方が分かりやすいですかね」

俺が慌てながら色んな属性魔法を軽く発動させると、兵士の皆さんは困惑の表情を段々と青ざめさせていき……一斉にその場に跪いた。

「た、大変申し訳ございません……大公様にご無礼を」
「わ、私も侵入者などと叫んでしまって、なんとお詫びをしたら良いか……」
「いやいや、お詫びとか良いですから。こちらが悪いんです。本当にすみません」

この場をどう収めれば良いんだとひたすら慌てていると、遠くから駆け寄ってくる人影が見えた。あれは……リュシアンだ。

「リュシアン！　マジで来てくれて助かった……！」
「レオン！　どうしたんだ？　庭で騒ぎが起きていると聞いて来てみたら……」
「本当にごめん。リュシアンに会いたいなと思って転移で突然来たら、めちゃくちゃ驚かせちゃったみたいで」

リュシアンはその説明だけで全てを理解してくれたようで、すぐに兵士たちを持ち場に戻して、不敬なことをしてしまったと泣いている最初のメイドさんを、他のメイドさんに引き渡してくれた。

「メイドさん、大丈夫かな。何かお詫びの品でも送りたいけど……」
「そのうち落ち着くとは思うが……渡したいなら受け取るぞ」

「じゃあお願いするよ。色んなスイーツの盛り合わせを後で渡す」
「分かった」

そこで話を途切れさせると、リュシアンは俺の方に視線を向けてニッと楽しげな笑みを浮かべた。

「レオン、久しぶりだな。会えて嬉しいぞ！」
「本当に久しぶりだよね。会いに行くとか言っててこんなに遅くなってごめん。俺も会えて嬉しいよ」

リュシアンと軽くハグをした俺は、リュシアンに連れられて屋敷の中に入った。

「あっ、クリストフ様、ソフィア様、お久しぶりです」
「随分と珍しいお客だな」
「久しぶりね。ようこそいらっしゃいました」
「突然来てすみません。次からはちゃんと事前に連絡してからにします……」

本当に申し訳ないと思いながら謝ると、クリストフ様とソフィア様は穏やかな笑顔で首を横に振った。

「いや、いつでも自由に来てくれて良い。リュシアンも喜ぶからな」
「レオンならば歓迎します」
「良いんですか……？」
「もちろんだ」
「ありがとうございます」

俺が嬉しさから頬を緩めると、リュシアンが楽しそうに口を開いた。

「レオンが転移する専用の部屋を作るか。それなら使用人や兵士も驚かなくて済むからな。レオンも場所が定まった方が転移しやすいだろう？」
「うん。それ凄くありがたい」
「分かった。このあと決めよう」

それから俺はクリストフ様達と分かれて、リュシアンと一緒に応接室に入った。お茶を出してもらってスイーツは俺が提供して、楽しくお茶会をする。

「半年ぶりぐらいか？」
「そのぐらいは経ったかも。リュシアンは何してた？」
「私は父上と一緒に領地運営の仕事だな。ただそこまで忙しくはないから、のびのびと好きなこともしている。後はアルベールと遊んだりだな」

アルベール様か、懐かしいなぁ。前にここに来た時に会ったきりだから、年単位で会っていない。あの歳で年単位ってかなり大きくなってるんだろうな。

「レオンは何してるんだ？」
「俺は大公領の開発かな。リュシアンは知ってるかもしれないけど、本格的に大公領を整備し始めたんだ。今は大公邸を始めとした色んな建築物を作ってもらってる最中で、そろそろ農地整備にも力を入れようと思ってる。あとは港街も作る予定かな」

俺のその言葉を聞いたリュシアンは、大公領の開発を始めたことは知っていたのか何度か頷いた。

「うちの領地でも大公領への移住者を募ったから知っているぞ」
そういえば国中に移住者募集の情報を流してもらったんだった。
そっか、国中ってことはタウンゼント公爵領も当然入るのか。
タウンゼント公爵領からわざわざ大公領に来る人は、かなり少なそうだな……ここは住み心地が良いだろうし。

「どのぐらい集まったんだ？」
「予想よりは多く集まってるよ。特に敵対貴族が治めてた領地からの移住者が多いんだ」
「……確かに荒れている場所もあると聞くからな」
「うん。七割ぐらいはそういう場所から来た人たちかな」

最初は貴族を必要以上に怖がっていたり憎んでいたり、痩せ細っていて働くのも大変そうだったり、そんな人もたくさんいたけど最近はかなり馴染んでいる。

「もう街は形になってるのか？」
「うーん、主要な大通りとかは整備されてるよ。あとは井戸や下水もかなり工事が進んでるかな。でもまだ狭い範囲だから、これから段々と広げないと。そのうち港街と繋げて大きな都市にしたいと思ってるんだよね」
「ということは、領都が港街になるのか？」
「まあそういうことかな。でもしばらく先だけどね。まだ港街なんて全く作り始めてないし」

そういえば、ここの近くには港街があるんだよな……あの街を参考にさせてもらっても良いだろうか。今思えばよくできた作りになってた気がする。

「リュシアン、港街にこれから行くっていうのはあり？　海産物を食べて街の様子を見て回りたいんだけど」
「別に良いぞ。レオンが転移で連れて行ってくれるのか？」
「うん。このぐらいの距離なら全然いける」
「よしっ、じゃあさっそく行くか」

リュシアンは楽しそうに瞳を輝かせるとソファーから立ち上がり、使用人に少し出かけることを伝えて俺の隣に来た。

「転移するのは従者と護衛一人ずつで良い？」
「それだけで良い」
「了解。転移先は代官邸で良いかな。はっきり覚えてるのが食堂と厨房だから、どっちかに転移になるんだけど」
「そうだな、それなら食堂にしよう」

俺はリュシアンのその言葉に頷くと、タウンゼント公爵領の港街にある代官邸を思い浮かべ……転移を発動した。

462、久しぶりの港街

代官邸の食堂には誰もいなかった。綺麗に整えられた食堂には静かな時が流れていて、微かに他の場所で動く人達の物音が聞こえる。

「代官ってトニーさんだっけ？　挨拶した方が良いかな」
「そうだな。一応執務室に行くか」
「リュシアンってここにはよく来たりするの？」
「ああ、最近はかなり頻繁に来ているぞ。海鮮料理にハマって食べに来てるんだ」
「そうなんだ！　やっぱり海産物って美味しいよね」

大公領でも早く食べられるようにしたいな。皆に海産物の美味しさを知って欲しい。俺は海に行って魔法を使って自分の分を確保するぐらいはできるんだけど、特産品にするなら誰でも獲れるようにしないと。

「最高だな。私が最近ハマっているのはマグロだ。この時期にたくさん取れるらしくて、分厚く切ってステーキにするとめちゃくちゃ美味いぞ」
「え、マグロがあるの！？」
「ああ、知ってるのか？」
「めちゃくちゃ好きな魚なんだ。食べられるかな？」
「市場に行けばあるんじゃないか？」

それは今すぐ行かないと……！　マグロステーキも良いけど、マグロってやっぱり生が一番美味しいよね。毒除去の魔法を使えば生で食べても問題ないだろうし、使徒の特権で食べちゃおうかな……

マグロ寿司。

今までは魔法を使えば俺なら生魚を食べられるだろうなと思いつつ、なんだかんだ手を出していなかった。でもマグロがあるって言われたら、食べないわけにはいかない。

醤油がないのが残念だけど、塩レモンでも十分美味しいだろう。ヤバい、一気にお腹が空いてきた。

「リュシアン、市場で色々と買ったらここの厨房を使わせてもらえるかな。作りたい料理ができたんだけど」

「使っても大丈夫だと思うが、一応トニーに確認するか。着いたぞ、ここが執務室だ」

リュシアンが軽くノックをして中に入ると、凄く懐かしい顔がそこにはあった。トニーさんも同じことを思ったのか驚きの表情から段々と目を細めてくれる。

「ようこそお越しくださいました」

「急に来てすまないな。レオンが転移で連れてきてくれたんだ」

「お久しぶりです」

「またお会いできて光栄でございます。レオン様……ではなく大公様とお呼びすれば良いでしょうか？」

「いえ、レオンで良いですよ」

なんかトニーさんの笑顔、落ち着くなぁ。前に来た時も思ったけど穏やかな人だ。

「本日は海産物を食べにいらしたのですか？」

「ああ、これから市場で色々と買ってくるから厨房を使っても良い

か？」
「もちろんでございます。料理人のナセルは手伝いに必要でしょうか？」
「ナセルさん！　いらっしゃるのですね。もしご迷惑でなければ手伝っていただけるとありがたいです」
「かしこまりました。では手配しておきます」

そうしてトニーさんとの話を終えた俺達は、代官邸を出て海方面に歩いて向かうことになった。リュシアンがよく来ているから街の皆が慣れたのか、俺達を見ても軽く会釈をしてくれるぐらいでそこまで騒ぎにならない。

「こんな街並みだったね。懐かしい」
「素朴な街で良いよな。私はこの街がかなり好きだ」
「でも前より人が増えた……というか、活気が増した？」
「ああ、海産物を王都に輸出するようになったからな。この街は皆が利益を得ていてとても明るくなった」

海産物の輸出が儲かるようになったんだな……海の幸が内陸の人たちにも受け入れられているというのは嬉しい。やっぱり製氷器で鮮度が良いものを運べるようになったからかな。

「観光客って結構来てる？」
「そうだな……この街にというよりは、領都に来て港街に遊びに行くという者が多い。領都と港街間には乗合馬車も出ているんだ」
「そうなんだ。それは良いね」

そんな話をしながら歩いているとすぐに海鮮市場へと到着し、もう時間が遅めということもあったので、俺は残っている魚を全て買う勢いで端から海の幸を購入した。

「あっ、それマグロ！？」
「おおよ。久しぶりにデカいのが釣れたんだ。こいつはまだ捌いてないが、少し時間をもらえればすぐ必要な部位だけ売れるぞ」
「じゃあ……部位ごとに捌いて欲しい。それで全ての部位を俺が買うよ。あとそっちにあるカツオとそれってシャケだよね？　それも全部買いたい」
「そんなに買ってくれんのか！？　ありがとな！　すぐ捌くから待っててくれ」

それから俺は他のお店も回ってサンマ、サバ、アジなどいろんな魚を大量に購入し、全てアイテムボックスに仕舞った。これでしばらくは海に調達に行かなくても、海産物が食べ放題だ。

海鮮市場から代官邸に戻った俺とリュシアンは、代官邸の厨房にやってきた。中には……懐かしいナセルさんがいる。

「ナセルさん！　お久しぶりです……！」
「レオン様、またお会いできて光栄でございます」
「こちらこそ、その節はありがとうございました。今日も手伝っていただきたいのですが、よろしいでしょうか？」
「もちろんです」

俺はナセルさんのにこやかな笑顔に感謝しつつ、寿司のネタとして美味しいだろう魚をアイテムボックスから取り出した。

463、米と海産物

とりあえずマグロの赤身っぽいところと脂が乗ってそうなところ、それからシャケの素人判断で一番美味しそうな部位。

あっ、ブリとかタイも前に手に入れたやつがそのままアイテムボックスに入ってたみたいだ。これもお寿司にしたら最高だし捌いてもらおう。

「このぐらいかな」

「凄いですね……この時期にこれほど新鮮なブリやタイがあるなんて、信じられません」

「アイテムボックスがあるからね。じゃあナセルさん、これを全部一口サイズに切ってもらいたいんだけど……一口サイズと言っても四角じゃなくて、薄い長方形って感じかな」

俺のその説明では二人に全く伝わっていなかったので、俺は近くにあったマグロを引き寄せて実践してみることにした。上手く切れるかな……

……うん、めちゃくちゃ下手。でも辛うじてどんな大きさに切ってもらいたいかは伝わっただろう。

「それほど小さく切るのですね。それを焼くのですか？」

「ううん。これを生のまま握った……というよりも丸めた米って言えば伝わるかな。それに載せて塩とレモンで食べるんだ」

「な、生で食べるのか！？」

俺の言葉に衝撃を受けたのかリュシアンは瞳を見開いて叫び、俺

の顔と魚を交互に見つめた。

「うん。ただこれは俺が魔法を使うことで安全に食べられるだけだから、他に広められる食べ方じゃないけどね。二人も抵抗がなければちょっと食べてみて、美味しいから」

「……確かにレオンなら大丈夫だな。わ、分かった。私は食べてみるぞ！」

リュシアンは死地にでも赴くかのような真剣な表情で拳を握った。

「ははっ、そんなに気合を入れなくても大丈夫だよ。ナセルさんも嫌じゃなければ少し味見をしてみてください」

「か、かしこまりました」

「とりあえず、作っちゃいましょうか」

それからナセルさんが魚を捌いて切ってくれている間に、俺は米の準備をした。米を炊いて少し冷まして握りやすいようにする。本当は酢飯が良いんだろうけど、この世界にはまだ米酢がないので酢を混ぜるのはやめておいた。この国に元々ある酢は癖が強いから。

「これが米か」

「あれ、リュシアンって食べたことないんだっけ」

「ああ、話に聞いたことがあるだけだ」

「マジか」

初めて食べる米が寿司っていうのはちょっと微妙かもしれないな……普通に焼きシャケも作って白米と食べてもらおうかな。

「ナセルさん、シャケは三切れだけ大きめに切ってもらえますか？普通に焼いて食べる用に」

「かしこまりました」

それからもナセルさんのおかげで手際良く調理は進み、約一時間で調理台の上にはツヤツヤとした美味しそうな寿司がたくさんと、ほかほかの白米、さらには塩を振って焼いたシャケが並んだ。

俺はアイテムボックスからコンパクトなテーブルと椅子を取り出して、厨房の中に簡易の食事スペースを作る。

「まずは米と焼きシャケから食べようか。海産物は米との相性が抜群なんだ。こうしてシャケを一口分だけ米に載せて一緒に口に運べば……うん、めっちゃ美味い」

俺の笑顔を見てリュシアンが恐る恐るシャケと米に手を伸ばし、ナセルさんもリュシアンの後に二つを一緒に口へと運んだ。

すると二人の表情はだんだんと驚きに染まっていき、無言で二口目に手が伸ばされた。これは気に入ってもらえたかな。

「……驚いたぞ。米とはこんなに美味しいのだな。パンよりも米の方が何倍も焼いたシャケに合う」

「これは、驚きました」

米はかなりの高評価みたいで、二人とも艶々と輝く米を凝視している。

「特に焼きシャケとか、魚を焼いたものにはパンよりも米の方が合うんだよね」

「レオン……米はこれから普及するんだよな？」

「うん。大公領の特産品とする予定だから」

「それなら、これからは海産物がより売れるな。確実にそうなる」

確かに……そうかもしれない。この国で海産物が流行りきらないのは、パンとあんまり相性が良くないっていうのもあるのだ。米と一緒に食べてもらえば、海産物のおいしさをより理解してもらえるだろう。

「米を広めるために食堂をやってるんだけど、そこで海産物も扱おうかな」

「それ良いな！　レオン、タウンゼント公爵領から食材を仕入れるのを勧めよう」

リュシアンがニヤッと楽しそうな笑みを浮かべながら言ったその言葉に、俺は苦笑しつつ頷いた。

「了解。まだ大公領で海産物を安定供給できるのは先だし、この街から仕入れさせてもらうよ。信頼できる商会を教えてくれる？」

「もちろんだ」

そうして軽い雰囲気の会話でかなり大きな今後の取り引きを決定したところで、俺たちは次に寿司を食べてみることにした。

最後にもう一度だけ魔法を使って食べても大丈夫か確かめてから、マグロの赤身寿司をスプーンに載せる。

塩とレモン汁を少しだけかけて口に運ぶと……その美味しさに、懐かしさに、思わず涙がこぼれそうになった。

やっぱり寿司って、日本を感じるな。素人が作った寿司なんてクオリティはかなり低いんだろうけど、この世界に来てから初めて食べる寿司は感動の美味しさだ。

４６４、次の約束と再会

口の中でとろけるマグロとほのかな甘みがある米と、レモンの爽やかさと適度な塩味と、そんな美味しい寿司を味わったところで、俺はリュシアンとナセルさんに視線を向けた。

「どうかな、これは寿司って言うんだけど苦手じゃない？　ナセルさんもどうですか？」

「……私はとても好きです。生で食べるのがこんなに美味しいとは、驚いています」

そう言って幸せそうな笑みを浮かべたナセルさんに、俺はほっと安堵の息を吐く。

「そう言ってもらえて良かったです」

「普段は食べることができないのが残念ですね……」

「もし食べたければ、リュシアンを通して俺を呼んでください。転移で簡単に来れるのでいつでも来ますよ。俺も寿司を食べたいですし」

「かしこまりました。ありがとうございます」

ナセルさんはにこやかな笑みを浮かべてお礼を口にしたけど……これは遠慮して俺を呼ぶなんてしないだろうな。リュシアンに会いに来た時は、ついでにここにも寄ることにしよう。

ナセルさんとの話に一段落がついてリュシアンに視線を向けると、リュシアンは微妙そうな表情で寿司を見つめ僅かに首を傾げていた。

「リュシアンは好きじゃなかった？」
「うーん、いや、そういうことじゃない。……ただ焼いた魚よりも美味しいかと言われると、すぐには頷けないなと思っていたんだ。例えばこのマグロがステーキだったとしても、十分に美味しいと思うぞ？」

そう言われると、その意見も一理あるんだよな。
でも寿司は生だからこその美味しさがあると思う。なめらかな食感とか繊細な甘さとか、口の中で溶けるような感覚とか。

「もちろん火を通しても美味しいんだけど、生でも食べられると美味しさが二通りになるって感じかな。この形はどう思う？　一口サイズの米の上に魚が載ってて、塩とレモンで味付けされてるのは。生は一般に広げられないけど、火を通した魚や卵焼きとか、ホタテを焼いたものとか、あとは肉とか。色々と載せても美味しいと思うんだ」

俺のその言葉を受けてリュシアンは頭の中に肉寿司や玉子寿司を思い浮かべたのか、美味しそうだなと笑みを浮かべた。

「色んな種類が少しずつ食べられるのは楽しくて良いな。私は多種類の肉が様々な味付けをされていたら嬉しい」
「肉寿司盛り合わせみたいな感じか。絶対に美味しいやつだ」

生の魚を使った寿司は難しいけど、火を通した海産物と肉や玉子、あとは野菜とかの寿司はありだな。それならこの国にも寿司屋を作れるかもしれない。

「食堂でメニューにすることを考えてみるよ」

それからも俺たちは寿司を味わって焼きシャケを味わって、さらにはマグロのステーキまで追加で作って、少し食べ過ぎたところで食事を終えた。
やっぱり海産物は美味しくて、ついつい食べ過ぎてしまう。

「ナセルさん、今日はお時間をいただいて本当にありがとうございました」
「いえ、こちらこそ貴重なものを食べさせていただいて感謝しております。またいつでもいらしてください」
「はい。近いうちに来ますね」

俺とリュシアンはナセルさんに挨拶をして厨房を後にし、トニーさんにも挨拶をして転移でタウンゼント公爵領の領主邸に戻った。
食事だけじゃなくて海産市場に出かけたり話し込んだりもしていたからか、もう日が沈み始める時間だ。

「うぅ～ん、楽しかった」
「私も久しぶりに凄く楽しかったぞ。あの生で食べる寿司の美味しさはいまいち理解できなかったが」
「美味しいと思うんだけどね。でも確かに人を選ぶとは思う。マグロステーキの方が万人受けする……あっ、あれってアルベール様？」

転移で戻った応接室の窓から庭で遊ぶ子供が見えた。木剣を持って、縦横無尽に振り回しながら楽しそうに遊んでいる。

「本当だ。私がいないから一人で遊んでるんだな」
「かなり大きくなったね」
「……そうか？　まだ小さいと思っていたが」
「前に会った時と比べたらかなり大きくなったよ。頭一つ分ぐらい？　もっとかな」

あっ、こっちに気付いたみたいだ。こっちにというよりも、リュシアンにだな。ぱぁっと花が咲くように顔を輝かせたアルベール様は、俺たちがいる部屋に向かって一目散に駆けてくる。

「アルベール様！　そちらには段差がありますので走らず向かわれてください……！」

従者の男性が慌てて追いかけている。このぐらいの歳の子に付くと大変だろうな。

「窓を開けてくれ」
「かしこまりました」

リュシアンの言葉を受けて従者が部屋の窓を開くと……そこからアルベール様の小さな指先だけが見えた。窓の位置が高くて顔が出せないみたいだ。

「兄上！　帰ってきたのですか！」
「ああ、先ほど帰った。アルベール、中に入るならエントランスからだぞ」
「入っていいのですか！？」
「構わない。ただ客人がいるから着替えてからな」
「分かりました。エントランスに行きます！」

窓から身を乗り出してアルベール様を覗き込んだリュシアンの言葉を受けて、アルベール様はまた走り出したらしい。トトトトッという可愛らしい足音が聞こえてくる。

「アルベールを呼んでも良かったか？」

「もちろん。久しぶりに会えて嬉しいよ。アルベール様って俺のことは知ってるの？」
「レオンのことは話してるから知ってるぞ。それに貴族の仕組みも……多分少しは理解している」

リュシアンは自信が無さそうな表情だ。アルベール様ってまだ五歳とか六歳だろうから、いくら教育を受けているとはいえ貴族の仕組みを完全に理解するのは難しいのだろう。

「普通にリュシアンの友達って感じでいれば良いかな」
「そうだな。ただ使徒様のことは色々と知っているから、それは教えてあげてくれ。多分凄く喜ぶ」
「……そうなの？」
「ああ、あいつは使徒様の話を聞くのが好きだからな。憧れらしいぞ」

なんかそれ、ちょっと恥ずかしいな……でも喜んでもらえるなら恥ずかしさは押し殺そう。

それから数分待っていると部屋のドアがノックされ、開いたドアからは瞳を輝かせたアルベール様が入ってきた。

465、アルベール様

アルベール様はニコニコと満面の笑みで、俺とリュシアンの顔を交互に見ながら部屋の中央まで歩みを進める。

「アルベール、良く来たな」
「兄上！　僕も呼んでくださってありがとうございます。こちらの方がお客さまですか？」
「ああ、私の友人でレオンだ」
「レオン・ジャパーニスです。よろしくね。一応使徒です」

俺がアルベール様と視線を合わせるように少しだけ屈んで挨拶をすると、アルベール様はポカンと俺の顔を見上げた。

「しと、……しと、使徒様！？」

そして目の前の俺と憧れの使徒様が一致したのか、瞳をこれでもかと輝かせて尊敬の眼差しを向けてくれる。こんなに純粋な瞳を向けられるとちょっと照れるな。

「そうだよ。ミシュリーヌ様の使徒なんだ」
「あの、一瞬で別の場所に、移動できますか！？」
「おいアルベール、まずは挨拶が先だろう？」

苦笑を浮かべたリュシアンに諭されたアルベール様は、はっと何かに気づいたような表情を浮かべてキリッと目元に力を入れた。

「失礼いたしました。アルベール・タウンゼントです。使徒様、お

会いできてこうえいです！」
「こちらこそ、また会えて嬉しいよ」
「……また、ですか？」
「そう。君が三歳だったかな。その頃に一度だけ会ったことがあるんだけど覚えてる？」

俺のその言葉にアルベール様は眉間に皺を寄せて考え込む。やっぱりあんなに小さい頃の記憶はないのかな。実際に相対してた時間なんて数時間もないぐらいだったし。

「……お祖父様と一緒に来てた人、でしょうか？」
「そう！　覚えてるんだ！」
「少しだけですが」
「そっか」

少しでも覚えていてもらえるのは嬉しいな。

「前にもお会いしていたなんて、嬉しいです！」
「ははっ、そんなに喜んでもらえて良かったよ。それで一瞬で別の場所に移動できる魔法だっけ？」
「はい。兄上がお話ししてくれて、凄いんだって」
「そうなんだ。それは転移って名前の魔法だよ。試してみる？」

俺のその問いかけにアルベール様が瞳を輝かせたので、俺は了承を得るためにリュシアンに視線を向けた。

「一緒に転移しても良い？」
「構わないぞ。ただアルベールの従者と護衛も一緒に連れていってくれ」
「分かった。じゃあ転移する人たちは俺の周りに集まって欲しい。

アルベール様もこっちに」
「はい！」

どこに転移するかな……とりあえず突然の遠距離転移は心配だろうし、屋敷の庭ぐらいにしておこう。窓の外に見えるあの大きな木の下が良いかな。
場所を決めた俺は頭の中で転移先を明確に描き、転移魔法を発動させた。

「――わぁぁぁぁぁ、凄い！　凄いです！」

転移のあと数秒間はパチパチと瞳を瞬かせていたアルベール様だったけど、すぐに顔が喜色に染まって大喜びだ。数秒前までいた屋敷を指差して、「あんな遠くにあります！」と叫んで飛び跳ねている。

「……本当に、凄いですね」
「得難い経験を得ることができました」

アルベール様の従者と護衛の二人も感動している様子だ。その隣で当たり前のようにしているロジェとローランとの対比が面白い。

「楽しんでもらえたなら良かった。もっといろんな魔法があるけど他も見てみる？」
「見たいです！　あの、攻撃を防ぐやつが凄いって聞きました」
「ああ、バリアかな。小さく作り出してみるよ」

バリアは転移ほど楽しい体験ができるわけじゃないけど、アルベール様は楽しそうだ。しかしそれ以上にバリアに興奮している人がいた。それは……アルベール様の護衛の人だ。

バリアの強度を示すために攻撃してもらったら、その凄さに感動したらしい。

それから俺のバリア対アルベール様の護衛で軽い模擬戦みたいなことをやり、十分ほどで屋敷の中に転移で戻った。

「おっ、戻ってきたな」
「お待たせ」
「兄上、凄かったです！」
「そうか、良かったな。そうだレオン、先ほど父上から伝言があって、今夜はレオンの分の夕食も準備してあるから食べていくと良いとのことだ。ついでに客室も準備してあるらしいから、泊まっていけるぞ」
「え、そうなの？　良いのかな？」

久しぶりにクリストフ様達とゆっくり話せるのは嬉しいけど、突然来てめちゃくちゃ図々しいよな。

「遠慮はいらない。というよりも、もう準備されているのだから泊まっていった方が喜ぶと思うぞ」
「確かにそっか……じゃあ泊まっていくよ。ありがとう」
「では、もう少し遊べますか！」
「そうだね。夕食までは一時間ぐらいかな。何したい？」

俺のその問いかけにアルベール様は「全属性魔法が見たいです！」と元気いっぱい言ってくれたので、俺達は薄暗くなり始めていた外に出て魔法の鑑賞会を開いた。

そして夕食を食べた後にはアイテムボックスからたくさんのスイーツを取り出して甘いものを楽しみ、久しぶりのタウンゼント公爵

家領地邸での夜は更けていった。

４６５、アルベール様（後書き）

転生したら平民でした。コミック二巻に関するお知らせです。
３月３０日に発売するコミック二巻ですが、ＣＯＭＩＣ　ＺＩＮ様でご購入いただくと特典のイラストカードが付くようです！
マルティーヌのとっても可愛いイラストなので、皆様ぜひ手に入れてみてください！

サンプル画像が漫画を描いてくださっているの須藤怜先生のＴｗｉｔｔｅｒなどで見られますので、ご興味がある方はぜひ。

コミックの方もよろしくお願いいたします！

蒼井美紗

466、二冊の本

タウンゼント公爵領で目覚めた俺は朝食を食べて少しだけ休んだら、帰還の挨拶をするために屋敷を回った。最後はリュシアンとアルベール様だ。

「昨日はありがとう。楽しかったよ」
「こちらこそ来てくれてありがとな。楽しかったぞ」
「また来るからよろしくね。アルベール様もまた」
「はい！　またいつでも来てください！」

二人に手を振ってロジェとローランが隣にいることを確認してから転移を発動すると……一瞬後には、王都の大公邸にある私室にいた。

「うぅ～ん、久しぶりに凄く楽しかったな」

マルティーヌとデートしてリュシアンと遊んで、ここ最近の疲れが完全に抜けた気がする。やっぱり休養は大事だな。

「ロジェ、今日の予定って王宮に行く以外は何かあるんだっけ？」
「いえ、特にございません。一応午後には領地へお戻りになられるとレオン様が仰っておりましたが、変更可能でございます」
「そっか。じゃあ魔力も使っちゃったし、今日はこのまま王都にいるよ」
「かしこまりました。そのように手配しておきます」
「よろしくね」

今日の午後は……せっかく王都にいるし、忙しくて後回しにしていたことに着手するかな。マルセルさんの予定が空いているか、エミールに聞いてきてもらおう。

王宮でアレクシス様の側近としての仕事をこなした俺は、お昼には屋敷に戻り昼食を家族皆と一緒に食べた。そして午後、まず向かったのは……神界だ。

「ミシュリーヌ様、こうして会うのは久しぶりですね」
「確かにそうかしら？　意外と来てなかったかもしれないわね。今日は本を読むのでしょう？」
「はい。夏と秋の分を溜めてしまっていたので」

シェリフィー様からもらった日本の本。一応神界では読んだんだけど、読んだ内容を下界で形にする時間がなくてずっと後回しにしていたのだ。
夏にもらったのが精米機の仕組みに関する本で、この世界でも魔道具で再現しようと思っている。そして秋にもらったのが醤油や味噌など、日本で昔から作られていた調味料の作り方が載っている本だ。

まずは精米機の方からだけど、醤油や味噌もできる限り早めに研究したいよな。でもそのためには領地に専用の施設を作らないといけなくて、そんな余裕は今のところ全くない。
大規模にはできなくても屋敷の庭で小さくやる程度なら始められるかな……今度ティエリとアルノルに相談してみるか。

「今回の本はあんまり興味ないのよね～」
「ミシュリーヌ様の興味は甘いものばかりですよね」

「もちろんよ。今の一番の興味はヨアンが開発を始めた和菓子ね。ずっと待ってたのよ……！」

ミシュリーヌ様は和菓子を思い浮かべているのか、だらしない顔で宙を見つめている。

ヨアンは最近になってやっとチョコレートの出来に満足してきたようで、和菓子開発にも手を広げ始めたのだ。和菓子のレシピについては俺が本の内容を読んでメモを作ったものを渡してあるので、そのうち美味しいものを作り上げてくれると思う。

「ヨアンを急かしたりしないでくださいね」

「分かってるわよ。神託なんてしないわ」

「……その言葉が出てくるところが怪しいです」

「そ、そんなことないわよ！　神託なんて考えたこともないわ！」

絶対に考えてたな……ミシュリーヌ様からの神託なんて届いたら、ヨアンが寝る間も惜しんで無理をすることが目に見えている。

「ミシュリーヌ様、一番作ってもらいたい和菓子をヨアンに伝えましょうか？」

一つでも出来上がればそれでしばらくは満足してくれるだろうと提案すると、ミシュリーヌ様は人生最大の選択を下そうとしているかのような真剣な表情で考え込んだ。

「やっぱりどら焼きかしら。いや、お饅頭も捨て難いわね。団子も食べたいし、大福も……」

しばらく決まりそうになかったので待っている間に本を読もうと決めた俺は、棚から勝手に本を取り出してソファーに腰掛けた。

精米機の仕組みに関しては一度読んだけど、もう一度大事なところをまとめておこう。

それから体感にして一時間ほどじっくりと本の内容を確認していると……突然ミシュリーヌ様の叫び声が耳に届いた。

「決めたわ！！」

「……びっくりするので突然の大声はやめて下さい。それで、何にしますか？」

「どら焼きにするわ！　他のものも捨てがたいけれど、やっぱりどら焼きの他では味わえない甘さと食感と……」

「分かりました。ヨアンに伝えておきますね」

どら焼き賛美が長くなりそうだったので途中で切ると、それでもミシュリーヌ様は全く気にしていないようで嬉しそうに頷いた。

「レオン、ありがとう……！」

「いえ、このぐらいはいつもお世話になっているので当然です。ではミシュリーヌ様、ヨアンはこれからどら焼き作りに集中するので、邪魔はしないようにお願いします」

「もちろんよ！　それでレオンは進んだの？　それは米を美味しくする機械なんでしょう？」

ミシュリーヌ様が本とメモ用紙を覗き込んだので、俺は本に書いてあるイラスト部分を指差しながら頷いた。

「はい。こういうのを作ろうと思ってます」

「ふーん、そうなのね」

「……本当に甘いもの以外への興味は薄いですね」

「そんなことないわよ。でもスイーツの方が何倍も好きっていうだけね」

そこまでの重いスイーツ愛を持ち続けられるのも凄いよな。俺は結構飽きっぽいから、何かにハマったとしても半年後にはそこまで好きじゃなくなっていたりする。

「ミシュリーヌ様、このメモの内容を今日の午後に聞くかもしれないので、その時は読み上げてもらえますか？」

「分かったわ。任せなさい！　……ご褒美にスイーツを食べても良いかしら？」

瞳を輝かせながら俺の顔を下から覗き込むようにして聞いてきたミシュリーヌ様に、俺は思わずため息が漏れた。

「……ホールケーキ三個です」

「本当！？　レオンありがとう！」

ミシュリーヌ様って本当に神様らしくないよな……俺は改めてそれを実感しつつ、そんなミシュリーヌ様が嫌いじゃないという事実に頬が緩む。

「じゃあ俺は下界に戻ります。午後はよろしくお願いします」

「ええ、もちろんよ！」

４６６、二冊の本（後書き）

コミカライズに関するお知らせです。
明日３月３０日木曜日に、転生したら平民でした。コミック２巻が発売となります！

すでに並んでいる店舗もあるようですので、ぜひお手に取っていただけたら嬉しいです！
コミック２巻、控えめに言って最高です。漫画となって、より生き生きと動いているレオンたちをお楽しみください！
タウンゼント公爵家の様子なども出てくるのですが、背景など楽しめる部分がたくさんあります。

よろしくお願いいたします！

蒼井美紗

467、精米器作成

下界に戻った俺は、さっそく馬車に乗ってマルセルさんの工房に向かった。今日のマルセルさんは朝早くに予定が入っていたけれど、それ以降はずっと空いているのでいつ来ても良いと言われたのだ。

マルセルさんと魔道具開発をするのも久しぶりだな……王都にいる時はよく工房に顔を出してるけど、世間話をしたり一緒に食事をするぐらいなのだ。

「マルセルさん、レオンです」

馬車から降りて工房のドアをノックすると、少ししてからマルセルさんがドアを開けてくれた。顔を出したマルセルさんは、いつも通りに元気そうだ。

「今日は馬車できたんじゃな」

「はい。最近は馬車でのんびりと街中を通るのも良いなと思ってるんです。ファブリスは屋敷で寝てますし」

「そうか。確かに転移というものは情緒がないな」

「そうなんです。一瞬ですからね」

そんな話をしながらロジェとローランを引き連れて工房内に入ると、そこにもいつも通りの光景が広がっていた。なんだか安心する光景だよな。

「それで、今日はどうしたんじゃ？　事前にわしの予定を聞くなんて珍しいじゃろう？」

「はい。実は今日は久しぶりに、魔道具開発をしたいと思ってるんです」
「ほう、それは良いな」

マルセルさんは魔道具開発という言葉を聞いて、瞳の奥を煌めかせた。やっぱりマルセルさんは生粋の魔道具好きだよね。

「どんな魔道具を考えてるんじゃ？」
「精米機です。米を美味しくする道具で……この白い米なんですけど、実はこれって収穫した時にはこんなふうに茶色っぽい色合いなんです」

炊く前の精米と玄米を取り出して並べると、マルセルさんは興味深そうに二つを手に取った。

「確かに全然違うな」
「はい。こちらの茶色の方も美味しいのですが、白い方が癖が抜けてより一般的な美味しさになります。今はそれを人力でやってるのですが、あまりにも時間も人件費もかかるので魔道具を開発したいんです」

俺のその説明を聞いて、マルセルさんは玄米の方を爪で引っ掻いたり指で擦ってみたり、色々と試している。

「人力というのはどうやってるんじゃ？」
「容器に入れて、木の棒などでひたすら叩きます。それによって糠や胚芽と呼ばれる部分が取れると白くなるんですけど、とにかく時間がかかるので今は軽く精米したものを食べたり、そのまま玄米を食べたりしてます」

あれは俺も一度やったけど本当に辛かった。確かに精米した方が美味しいんだけど、その美味しさを得るためにあの辛い時間を過ごすのかと考えると……玄米のまま食べるので良いかなと思ってしまう。

「ほう、木の棒で叩くのか。その衝撃で米を茶色にしている部分が取れるのだな」

「そうです。ただ魔道具にする場合は木の棒で叩くやり方ではなくて、風によって米同士が擦れることによって精米できるようにしようと思っています」

「米同士が擦れる……完成形が頭にあるのか？」

「実はミシュリーヌ様から知識をいただきまして」

俺はそう切り出してから、紙に完成予想図を描いていった。本に書いてあったイラストがほぼそのままで、魔石を嵌め込む場所など追加してある。

「不思議な形じゃな。縦長の大きな筒の真ん中に棒を立てるのか？」

「はい。それも太めの棒です。両手でやっと囲えるぐらいですかね。そして玄米は上部の横に投入口を作ってそこから入れて、風は一番上からとさらには横からもいくつか風を起こして、米が棒の周りを回転しながら下に落ちていくようにします。精米された白米は下に落ち、取れた糠や胚芽は筒の横に穴を開けてそこから出てくるようにしたいです。この時この穴には金網をつけて、その隙間を米は通らないけど糠や胚芽は通る大きさにすればいけると思うんです」

イラストを指差しながら一通り説明すると、マルセルさんは顎に手を当ててしばらく考え込み、それから徐に口を開いた。

「レオン、この筒の真ん中の棒はいるか？　風の流れを作るためな

のかもしれないが、風魔法で最初から下降するタイプの竜巻のような風を起こした方が早いじゃろう」

確かに……言われてみればそうだな。地球の精米機を参考にしたからこの作りになってるけど、この世界では風の向きなんて自由に作り出せるのだ。

うわぁ、盲点だった。さすがマルセルさん、本当に頼りになる。

「その通りですね。この棒をなくすとなると……そこまで筒が長くなくても良いでしょうか」

「そうじゃな。半分ぐらいで十分じゃろう。とりあえず試作をしてみるか」

「はい」

完成品の筒部分は普通の鉄で作る予定だけど、とりあえず作りやすさから全て魔鉄で試作をしてみた。魔鉄に魔力を通してぐにゃぐにゃに変形させ、それを薄く伸ばして筒形にしていく。下半分は金網にして、金網部分の外には糠や胚芽を受け止める部分も作る。

そして魔石を嵌め込む場所を側面に作って……完成だ。

「良い感じじゃな。次は魔石じゃ」

「魔力を込めますね」

あんまり強すぎると米が砕けるだろうから、とりあえずは弱めの風になるようにして……こんなもんかな。

「よしっ、ではやってみるぞ」

楽しそうなマルセルさんの声に釣られて俺も笑顔になり、さっそ

く魔石をセットして上から玄米を投入した。
すると米はイメージ通りに筒の中をぐるぐると回るけど、あまり精米されていない。ちょっと風が弱すぎたかも。
「風を強めにしてみます」
「そうじゃな」
それから風の強さや筒の形、大きさなど何度か調節を重ねることで、
ついに綺麗な白い米を作り出すことに成功した。
今までは何時間もかけて人力でやっていたのが一分もかからない程度でできるなんて、文明の力に感動だ。
「完成ですね！」
「そうじゃな。人力で白くしたものよりもより白さが際立つな」
「はい。美味しいお米になっていると思います」
米を大量生産して大きく広めて、そのついでに精米器も広めればお米の文化は一気に花開く気がする。これからが楽しみだな。
「マルセルさん、精米器の登録は二人の名前でしましょう。いつ登録に行きますか？　今日は……もう遅くなってしまったので、明日は空いてますか？」
「いや、わしは良い。少し手伝っただけじゃからな」
「いやいや、それはダメです！　マルセルさんがいなかったらこんなに早く完成してないですし、もっと効率の悪いものになってたと思います」

魔道具の作成は俺だけだとどうしても日本にあった機械に縛られるから、マルセルさんの意見が本当に重要なのだ。いつも凄く助かっている。

「これからも色々と手伝いを頼みたいので、俺が頼みづらくならないためにも一緒に登録しましょう」

ちょっと狡いかなと思いつつそんな言い方をすると、マルセルさんは苦笑を浮かべて頷いてくれた。

「それは困るな。ではわしも登録するか」
「そうしましょう。じゃあ……明日は空いていますか？」
「午前中なら空いてる。それで良いか？」
「もちろんです。馬車でここまで迎えに来ますね。時間は九時で」
「分かった。準備しておく」
「よろしくお願いします」

それから俺はマルセルさんとしばらく雑談をして、精米器が完成した達成感に包まれながら帰宅した。

４６８、襲撃と連れ去り

王都と領地を行き来しながら忙しくも充実した日々を過ごし、今は冬の月の中頃だ。最近はかなり寒さが厳しくなり、暖かい季節よりは領地の開発速度もゆったりとしたものになっている。

「ロジェ、今日は王都に戻る日だよね」
「予定ではそのようになっております。明日は王宮へ向かわれる日ですので、先延ばしは難しいかと」
「だよね……寒いから外に出たくない」

俺の転移はあと少しで王都と領地を行き来できるんだけど、まだ少し魔力量が足りないのだ。ファブリスに乗って三十分ぐらいだから……あと半年もかからずに直接転移できるようになると思うんだけど、できればこの冬に直接転移がしたかった。

「たくさん着込まれてください」
「そうなんだけどさ……着込むと動きづらいよね」

もっと性能の良い防寒具とか作れないのかな。この世界の防寒具は防寒性能に関しては悪くないけど、たくさん着るからとにかく動きづらいし重くなる。
軽くて一枚着ただけで暖かい、みたいな素材が欲しい。

そんな文句をつらつらと考えつつ準備を整えて、午後のまだ日が高い時間にファブリスに乗って領地を後にした。そしてしばらくファブリスに走ってもらってから、王都にある大公邸に転移をする。
最近は王都の中をファブリスに乗って目立つのを避けるため、最

初にファブリスに走ってもらっているのだ。

「レオン様……！」

いつものように自室に転移をすると、大公邸の中にはいつもと違う雰囲気が漂っていた。

「エミール、どうしたの？」

ロジェとローランと一緒にファブリスから降りて問いかけると、エミールは焦った様子で口を開く。

「午前中のまだ早い時間に王宮からの遣いが来まして、緊急事態のため大至急レオン様に王宮へ来ていただきたいと」

――大至急の緊急事態って、なんだろう。

誰かが急病とか？　事故とか？　何にせよ良いことじゃないのは確かだ。俺は何だか嫌な予感がして、冷や汗がじんわりと浮かび上がってきた。

「王宮へはレオン様は今日中に帰られる予定なので、ご帰宅され次第お伝えしますと返答をしてあります」

「分かった。伝えてくれてありがとう。ロジェ、着替えだけしたらすぐ王宮に行く」

「かしこまりました」

「ファブリス、王宮まで送ってくれる？　もうほとんど魔力が残ってないんだ」

『もちろんだ。任せておけ』

転移で魔力をほとんど使っちゃったし、急病だったらヤバいな……魔力を回復させる時間がなかったら、マルティーヌや他の回復魔法を教えた人たちに何とか命を繋いでもらって、その間に魔力を回復させれば大丈夫だろうか。

それから最速で着替えてまたファブリスの背中に戻った俺は、ロジェとローランだけを連れて王宮に向かった。

王宮の城壁に着くとすぐ中に通され、いつもはファブリスから降りてゆっくりと歩いて向かう執務室への道中も、ファブリスで駆けて良いと許可されて急いで向かう。

この距離を歩いて向かう時間も惜しいとか、マジで何が起きたんだ……それに王宮の中がかなり慌ただしい。

緊張感を高まらせながら執務室に入ると、そこにいたのはアレクシス様とリシャール様、それに騎士団の上層部など軍事関係の人たちばかりだった。

もしかして……戦争とか？

「レオン！　来てくれたか！」

「はい。遅れてすみません。何があったのでしょうか」

ファブリスから降りてアレクシス様の下に向かうと、アレクシス様は憔悴しきった様子でかなり顔色が悪かった。隣にいるリシャール様もだ。

「……レオン、落ち着いて聞いてくれ」

アレクシス様のその言葉にごくりと生唾を飲み込み、一度大きく

深呼吸をしてから頷く。

「――マルティーヌが、攫われた」

告げられた言葉は頭が理解するのを拒むような内容で、俺はその場で固まってしまった。

「なっ……そ、それって……どういう……」

「順を追って説明する。最初に起きた事件は多数の未知の獣による王都襲撃だ。姿形は一般的な獣なのに特殊な能力を持っていたり、魔物のように魔法を使えたり、あり得ない身体能力だったり、そんな獣が街を襲った。その一報が届いたのが朝早い時間で、私は王宮の門を閉じて警備を固めつつ、残りの騎士は全て獣の討伐に送り出した」

魔法を使える獣とか……どういうことだ？　そんなやつがこの世界にいるなんて聞いていない。それに何でこの街を襲うなんてこと……誰かに操られた獣とか？

普通の獣はわざわざ街の中に入ってきたりしない。入ってくるとしても逸れのやつが一体とかだ。多数の獣が王都を襲うなんて、明らかにおかしい。

「しかし獣の脅威は相当なもので、騎士たちを送り込んでもかなり苦戦し討伐に時間がかかっていた。そんな矢先だ、次の事件が起こったのは。次の事件は人による王宮襲撃だった。フード付きのローブを着た十数名の男女が王宮を襲い、その人数差からすぐに鎮圧できると思ったが、こちらも獣同様にあり得ない能力を持っている人間がほとんどでかなり苦戦していた。そして王宮にいる騎士たちが襲撃者への対処に追われていた時……マルティーヌが狙われた」

そんなやつらにマルティーヌが攫われたとか……マルティーヌは無事なんだろうか。俺は最悪の想像をしそうになり、唇を噛んで思考を無理やり中断させた。

大丈夫だ。絶対に大丈夫。俺が助ける、絶対に。

自分に言い聞かせて何とか平静を保つ。

「マルティーヌは、どうやって攫われたのでしょうか。護衛もいたはずです」

「……護衛は全員重体だ。かなり危険な状態の者もいる。そして部屋の窓が割られていたことから、マルティーヌは窓から攫われたと見ている。ただマルティーヌの部屋は高い位置にあるため、攫った人物も何かしら特殊な能力を保持していると予想される。――ここまでが現在分かっていることの全てだ。あの獣や襲撃者の正体、襲撃の理由、マルティーヌを攫った理由、行き先、全てが分かっていない」

アレクシス様はそこで言葉を切ると、手のひらで両目を覆って俯いた。

469、居場所

「……本当にすまない。マルティーヌを守りきれなかった。あの子は、辛い思いをしていないだろうか」
「大丈夫です。絶対に、絶対に助けます」

声に出すことで現実になる可能性が上がるかもしれないと、そんなことにも縋りたくなり俺はそう口にした。拳をこれでもかと強く握りしめて、大きく息を吐き出す。

とにかく取り乱している暇なんてない。攫われてから時間が経っていないほど、マルティーヌが無事である可能性が上がる。早く、早く手掛かりを見つけないと。

「襲撃者は捕えたのですか？」
「ああ、数人は生きたまま捕えられた。しかし誰も一切口を割らないらしい」
「……マルティーヌを連れ出した痕跡は？　王宮の外や王都の外に残っていないのですか？」
「それは調査をさせているが、未だに有益な情報はない」
「マルティーヌが攫われてからは……八時間ほどは経っているでしょうか」
「……それぐらいは経っている」

ということは、もう既に王都にいない可能性が高いな。王都からどの方面に向かったかも分からなければ、闇雲に探すしか道は残されていない。

「ミシュリーヌ様！　下界を見てますか！」

俺ができることはないと判断してミシュリーヌ様に声をかけると、数秒後に呑気なミシュリーヌ様の声が聞こえてきた。これは……この騒動にはまだ気づいてないな。

『どうしたの？　そんなに慌てて』

「ミシュリーヌ様、マルティーヌが正体不明のやつらに攫われてしまったんです。八時間ほど前なので、王都から少し離れたところに怪しい馬車とか旅人とか、そういうのがいないかを確認してください」

八時間だとどこまで行けるんだろう……移動手段にもよるよな。馬車ならまだそこまで遠くには行ってないはずだけど、王都を襲ったっていう特殊能力を持った獣だと全く予想ができない。

『……大変じゃない。すぐに探すわ』

ミシュリーヌ様は声音を真剣なものに変えた。いつもはちょっと残念な女神様だけど、やっぱり頼りになる。

「ありがとうございます。よろしくお願いします」

こっちはこの世界の神様が味方なんだから、絶対に大丈夫だ。万が一なんてことはない。

俺は自分にそう言い聞かせて、ミシュリーヌ様からの良い知らせが来るのを待った。アレクシス様達も俺がミシュリーヌ様と話をしているのを聞くと、口を閉じてじっと動向を待つ姿勢に入った。

それから数十秒後に、ミシュリーヌ様から疲れが滲んだ声が返っ

てくる。

『レオン……やっと見つけたわ……』

「大丈夫ですか？」

『ええ、下界の時間を一番遅くして端から探してたの。下界の時間で数週間もかかったわ……』

俺はミシュリーヌ様からのその言葉を聞いて、衝撃を受けて少しだけ思考が止まった。

そういえば、俺が神界に行く時には時間経過を最大に遅くしてくれてるよな……当たり前だけど、俺が下界にいる時にだってできるのか。

「本当にありがとうございます。助かります」

『良いのよ。じゃあ……とりあえずレオンを神界に呼ぶわね』

「はい。よろしくお願いします」

一瞬後に目の前に広がっていたのは、見慣れたいつもの神界だった。しかしソファーにぐったりと寝転ぶミシュリーヌ様だけは、いつもより元気がない。

「ミシュリーヌ様、本当にありがとうございます」

「良いのよ～。途中でレオンを呼ぼうかと思ったんだけど、レオンはそこまで長時間は神域にいられないじゃない？」

そういえば……神域に呼べるのも何度も連続では無理だとかって前に言われたな。一度に神域にいられる時間にも上限はあるのか。

「お礼にスイーツをいくらでも食べて良いので、体力を回復させてください」

「……え、本当！？」
「本当です。――いや、いくらでもは言いすぎました。百個までにしましょう」
「百個！！」

ミシュリーヌ様の顔には途端に覇気が戻り、瞳には光が宿った。俺はそれを見て安心して体の力を少し抜く。

「それで、マルティーヌはどこにいるんですか？」
「ここよ。この籠の中」

宙に映し出された映像には大きな虎のような獣が映っていて、その上に一人の人間が乗り、大きな籠が括り付けられている。

「中の様子を映すわよ」
「はい。……っ」

マルティーヌは口に布を巻かれて手足を縛られ、クッションも何もない木製の籠の中に無造作に入れられていた。
俺はそんなマルティーヌの様子を見て激しい怒りが込み上げ、目の前が赤く染まるような錯覚に陥る。

「こいつら、何者なんでしょうか」
「それはまだ分からないわ。下界の時間経過を普通に戻して観察しないと」
「……ではミシュリーヌ様にはこのままこいつの監視と、他の仲間の捜索をお願いしても良いですか？　本拠地を知りたいです。マルティーヌは俺が助けるので安心してください」

マルティーヌを助け出して終わりになんて絶対にしない。襲撃者

がどんなやつらなのか知らないけど、マルティーヌを狙ったことを後悔させてやる。

「分かったわ。黒幕やアジト、どんな組織かを調べれば良いのよね」
「はい。よろしくお願いします」

それから俺はミシュリーヌ様が映し出してくれたマルティーヌがいる場所を記憶して、下界に戻って正確に向かえるようにしてからミシュリーヌ様に視線を向けた。

「下界に戻すわよ」
「お願いします」

一瞬後に下界に戻った俺は、マルティーヌを絶対に助けるという決意を込めて口を開いた。

470、マルティーヌのところへ

「アレクシス様、マルティーヌの居場所が分かりました」

俺のその言葉を聞いたアレクシス様は、驚愕に瞳を見開きソファーから立ち上がった。

「そ、それは本当か！？」

「はい。王都から北に少し離れた場所です」

「まだレオン君が来てから数分しか経っていないというのに……さすがだな」

「ミシュリーヌ様が頑張ってくださったんです。今度お礼でも伝えてあげてください。」

リシャール様の言葉にそう返すと、この部屋にいる俺の関係者以外全員がその場で跪いた。しかし少ししてすぐに立ち上がり、俺に続きを促す。

「それで、マルティーヌは無事なのか……？」

「怪我はしているようでしたが無事です。これから俺が助けに行きますので、少し待っていてください」

魔力が潤沢なら転移で助けて帰ってくるのに数秒だったんだけど、魔力はほとんどないのでファブリスに乗っていくしかない。戻って来られるまで……数十分かな。

俺はとりあえず無事という情報に安堵しているアレクシス様たちを横目にファブリスに乗り、バリアで自分を固定した。

「ではさっそく行ってきます。もし何かあったらミシュリーヌ様を通して連絡するかもしれませんので……ロジェとローラン、連絡係として中心街の礼拝堂に居てくれる？」
「かしこまりました。お任せくださいませ」

この中では一番ミシュリーヌ様に慣れてるだろう二人を指名すると、頼もしく頷いてくれた。やっぱりとても頼りになる存在だ。

「じゃあファブリス、行き先は教えるから走って欲しい」
『もちろんだ。任せておけ』
「レオン、マルティーヌのことを、どうかよろしく頼む」
「もちろんです。絶対に助けます」

俺はアレクシス様の言葉にしっかりと頷き、ファブリスと共に王宮を飛び出した。

「街や人に被害が出ないぎりぎりでとにかく急いで」
『難しい注文だな……ただ任せておけ。我に出来ないことはない』

ファブリスは得意げにふんっと笑うと城壁に飛び乗り、さらに頑丈そうな石造りの建物に飛び移る。

さすがファブリス、身軽だな。

『敵はどこにいるのだ？』
「北寄りに王都を出て、街道もない草原の中にいる」
『草原なら見つけやすいな』
「うん。ミシュリーヌ様にも案内してもらえるから、迷うことはないと思う」

屋根を飛び移るファブリスの姿は大勢の人に見られていて、しかしどちらかというと迷惑というよりも、尊敬の眼差しを向けられている感じだ。
街でもかなり被害があったって話だし、俺たちが敵を倒してくれるって期待を向けられてるのかもしれないな。

その期待に応えられるように頑張ろう。使徒がいる国を襲撃したらどうなるのかを知らしめないと。

『そろそろ王都を出る』
「了解。ミシュリーヌ様、マルティーヌはさっきまでと同じ場所ですか？　俺たちが進む方向は合ってますか？」
『そうね……もう少しだけ西寄りよ。マルティーヌは先ほどまでと変わらないから大丈夫』
「ありがとうございます」

ミシュリーヌ様の声がファブリスにも聞こえたのか、ファブリスが少しだけ進行方向を変更する。

『ファブリスの速度なら十分ほどで着くわ。近くに仲間が三人いるから気をつけなさい。全員が違う獣に乗ってるわよ』
「獣も……分かりました。――ミシュリーヌ様、今回の獣ってどういう存在なのでしょうか。それに襲撃者も。特殊能力を持っているみたいなのですが」

俺が聞いたその言葉から数秒間の沈黙が流れ、ミシュリーヌ様の落ち込んだような小さな声が聞こえてくる。

『それが分からないの。また別の世界との繋がりがあったのか、それとは別の理由で生まれたのか……必死に調査をしているところよ』

「そうですか」
『――レオン、ごめんなさい。問題ばかりの世界で』
その言葉は今まで聞いたことがないほどに弱々しく、俺はすぐに首を横に振って否定した。
「そんなことないです。確かに問題も多いですが、俺はここで暮らしていて楽しいですよ」
『……レオン、ありがと』
絶対今照れてるんだろうな……そう考えたら微笑ましくなってきて、少しだけ頬が緩んだ。
それから数分間、ミシュリーヌ様に指示をしてもらいながら走るファブリスに揺られていると……遠くに動くものが見えてきた。
「あれかな」
『そうだな。背中に籠が乗っている。このまま突撃すれば良いか？』
「そうだね……うん、気付かれてないうちにマルティーヌを取り返したほうが良いだろうし、このまま行こう。俺はマルティーヌが閉じ込められた籠を獣から引き剥がすから、ファブリスには獣と乗ってる人への対処をお願いしたい。人は……倒してくれて良いよ。生死は問わない」
直接的な言葉は口にするのが躊躇われてそんな言い方をすると、ファブリスは意図を汲んでくれたのか頷いた。
「それから逃げようとした人がいたら、その人はそのまま逃してほしい。アジトを突き止めたいから」
『分かった。任せておけ』

そんな話をしている間にも敵との距離は近づき、あと数十秒で相対するところまで来た。この辺りまで来るとさすがに相手も気付いたのか、獣に乗る人間が焦ったように鞭を打っているのが見える。

471、救出

「早く走れっ！」

バチンッという鋭い鞭の音と共に俺たちに向かってファイヤーボールが放たれたけど、ファブリスは楽々攻撃を避けて相手に近づいていく。

「くそっ、もう気付かれたのか……！」

「マルティーヌを解放しろ！　大人しく従えば命までは取らない！」

声が届く距離になったので相手に呼びかけると、相手は悩んだのか少しだけ黙り込んだけど……次に発した言葉は魔法名だった。

「ファイヤーウォール！　おい、早く走れ！」

「ウォーター」

俺は相手の攻撃を水魔法で相殺し、ファブリスのふわふわな毛を掴んで体を固定しているバリアを解除した。そして片足を立てる体勢になり……

「ファブリス、行ってくる」

マルティーヌが閉じ込められている籠の上に転移をした。動いているものへの転移は初めてだったけど、無事に成功して籠の上で体勢を整える。

「なっ……っ、おい！　あいつを振り払え！」

敵の男は俺が一瞬にして上に乗ってきたことで混乱しているのか、鞭を必死に叩きながら獣に無茶な命令を下している。
俺はとりあえずその男は無視して、マルティーヌの救出に専念することにした。

籠を固定してる紐は……これとこれだな。バリアを小型ナイフの形にして紐を切ると、籠が一瞬のうちに傾き……しかし地面に落ちる前にまた転移を発動して、俺は籠と共に近くの地面に着地をした。

「マルティーヌ、すぐ助けるからちょっと待ってて！」

安心してもらえるように声を掛けてから、バリアの剣で籠の鍵を壊して扉を開ける。そして中にいるマルティーヌを引き出すと……マルティーヌは大粒の涙を溢れさせていた。

俺はその表情を見て泣きそうになり、目元を拭ってからマルティーヌを縛る布や紐を解いていく。

「ケホッ、……ッゴホゴホッ」

口に巻かれた布を外したところで、マルティーヌは激しく咳き込んで苦しそうな呼吸をした。

「マルティーヌ、大丈夫？　助けに来るのが遅れて本当にごめん。辛いところはある？」
「の、喉が……乾いて、水を」
「水ね、分かった」

マルティーヌの背中を抱えてコップに入った水を口元に運ぶと、

ゆっくりとそれを飲み干してほぅと息を吐く。

「ありがとう。楽になったわ」

「他に辛いところはある？　今はあんまり魔力がなくて回復は少ししかできないんだけど……」

「大丈夫。特に乱暴をされたりはしてないの。ただあの木箱の中が埃っぽくて、口を縛られていた布のせいで口が閉じられなくて、喉がやられてしまって」

俺はマルティーヌのその言葉を聞いて、犯人たちに強い怒りがまた湧いた。そしてそれと同時に、無事に助け出せて本当に良かったと安堵の気持ちも胸に広がる。

「マルティーヌ……」

力なく微笑むマルティーヌを見ていたら堪らない気持ちになり、俺はマルティーヌを強く抱きしめた。

「レオン……本当に、本当にありがとう。助けてくれるって信じてたけれど、怖かったわ」

そう言って俺の肩に顔を埋めてきたマルティーヌの頭を、ゆっくりと撫でて少しでも傷が癒えるようにと強く願った。

「もう大丈夫だよ。ミシュリーヌ様が犯人を特定してくれてるし、すぐに首謀者まで判明するはず。だからもう怖い思いをすることはないし、また攫われるなんてことも絶対にない」

俺のその言葉にマルティーヌは無言なまま頷き、少し体の力を抜いた。

それから数分そのままでいると、マルティーヌは少し落ち着いたようで体を起こしていつも通りの笑みを浮かべた。

「もう大丈夫よ」

「本当に？　無理してない？」

「ええ、私にはレオンがいるって思ったら落ち着けるわ。それにミシュリーヌ様が味方だなんて最強だもの。ファブリス様も助けに来てくださったし」

マルティーヌが視線を向けた先では、敵を倒したファブリスが地面に寝そべって大欠伸をしている。近くに積み重なっている人間や獣は息があるのかないのか……聞きたいような、聞きたくないような。

「マルティーヌ、歩ける？　ファブリスのところに行こうと思うんだけど。無理そうならここにバリアを張ってソファーを出すよ」

「歩けるわ。一緒に行きましょう」

そう言ったマルティーヌは無理をしてる様子はなさそうで、俺は安心してマルティーヌの手を取った。手を繋いでファブリスの下に向かうと、ファブリスはこちらに視線を向けてゆっくりと口を開いた。

『主、二匹の獣とそれに乗る人間は逃げたから逃したぞ。三匹の獣と三人の人間は我に向かってきたので殺した』

「……そっか、ありがと」

こいつらはどうするかな……とりあえず王都に獣の死骸はたくさんあるし、人間も捕らえられている。わざわざ王都まで運ぶ必要は

ないか……

「ファブリス、この人たちはこのまま埋めるから手伝ってくれる？
俺が穴を掘るからその中に入れて欲しい」
『分かった』

土魔法を使って深めの穴を掘ると、ファブリスは獣や人間を咥えて穴の中に落としていく。

『これで最後だ』
「ありがと」

最後にもう一度土魔法を使って、穴を埋めたら終了だ。

「よしっ、じゃあ帰ろうか」

暗い雰囲気を切り替えるように意図的に明るい声を出すと、隣にいるマルティーヌが優しい笑みを浮かべてくれた。

「皆は心配しているかしら」
「それはもう、この世の終わりってほどに心配してたよ。早く帰って安心させてあげよう」
「ええ、そうね」
「転移は使えないから、ファブリスに乗って帰ることになるんだけどごめんね。その格好を人目に晒すのは……避けた方が良いかな。服を着替えるか、上からローブみたいなものを被る？」

籠の中で寝ていたことで服や髪が汚れていたのでそう聞くと、マルティーヌは自分の姿を見下ろしてからすぐに頷いた。

「ローブを借りても良いかしら」
「了解。えっと……これで良い？」
フード付きのやつを取り出すと、マルティーヌは受け取って羽織り、満足そうに頷いてくれた。
「じゃあ帰ろう。ファブリス、また王宮までよろしくね」
『任せておけ』

472、無事の知らせ

行きと同じように街中をファブリスに駆けてもらい、王宮の城壁も飛び越えて敷地内に入ったところで、俺は転移を発動させた。
短距離の転移なら問題なく発動でき、アレクシス様たちが待つ執務室の中に無事着地する。

「レオン！　マルティーヌは……」

俺たちの姿が現れた瞬間にソファーに座っていたアレクシス様が立ち上がり、俺と一緒にファブリスに乗るマルティーヌを視界に入れたところで……瞳を潤ませて動きを止めた。

「お父様、ご心配をおかけして申し訳ございません。レオンのおかげで無事に帰還することができました」

ファブリスから降りたマルティーヌがフードを脱いで笑みを浮かべると、アレクシス様はマルティーヌに一気に駆け寄って力強く抱きしめる。

「マルティーヌ……無事で良かった！」
「ふふっ、お父様、苦しいです」

マルティーヌはそう言いつつも嬉しそうだ。俺は二人の様子を見て安堵し、緊張していた体の力を抜いた。

「マルティーヌを危険に晒すようなことになってしまってすまない。これからはもっと護衛を増やし、城の警備も厳重にしよう」

「はい。お母様やお兄様、クレメントは無事でしょうか？」
「皆は無事だ。王宮ではマルティーヌだけが狙われたらしい」
「そうですか……」

それからエリザベート様とステファンも執務室にやってきて、皆でマルティーヌの無事を喜ぶ。

「本当に良かった。レオン、マルティーヌを助けてくれてありがとう」
「当然だよ。助けられて良かった」
「……敵の正体は分かったのか？　私は正体不明の特殊能力を使う人間と獣に、王都と王宮が襲われたとしか聞いていないのだが」

ステファンのその言葉に、皆の視線が俺に集まった。

「いや、俺もまだ分かってないんだ。敵は何人もいて数人が逃げたから、ミシュリーヌ様に監視してもらってる。そのうちアジトとかに帰ると思うから、どういう組織なのかは分かると思うんだけど……」

あの特殊能力はなんなんだろうな。実際に相対してみて、明らかに普通の人間と獣ではなかった。

まず獣は姿形が変わっていて、身体能力があり得ないほどに上がっていたと思う。それに人間もあの速度で走る獣を乗りこなしていただけじゃなくて、狙いを定めて魔法を放ってきて、その魔法の威力は今まで見てきた他人の魔法の中で一番威力があって……

ファブリスだったから追いつけて倒せたけど、普通の人たちがあの獣や人間と戦うとなると、相当な被害を被るだろう。

「ミシュリーヌ様、敵について何か分かりましたか？」

俺がいくら考えたところで答えは出ないと思ってミシュリーヌ様に呼びかけると、すぐに反応があった。

『まだほとんど分かったことはないわね。とりあえず逃げたやつらが向かってるのは北西方向で、一人の男は火魔法と水魔法を両方使いこなしてるってことぐらいかしら』

「え！？　それってかなり重要じゃないですか……？　この世界の人達は一人一属性ですよね？」

『そうなのよ。だからどこか別の世界とまた繋がったのかと思ったのだけど、探しても時空の歪みは今のところ存在していなくて……』

時空の歪みが存在しないとなると、あいつらはどこからやってきたんだろう。この世界で進化した……って可能性は限りなく低いと思うけど、それぐらいしか思いつかない。

大陸の端で別の進化を遂げていた人たちがいたとか？

『とりあえず、これからも監視を続けるわ』

「分かりました。よろしくお願いします」

ミシュリーヌ様との会話を終えた俺は、得た情報をアレクシス様たちにも共有する。

「北西方向か……いくつかの大国と小国が数十ある地域だな。我が国とは文化が大きく異なる国が大半で、あまり交流が盛んではない」

「そうなのですね……怪しい国や場所に心当たりはあるでしょうか」

「――いや、思い当たることはないな。役に立てずすまない」

「いえ、交流がないならば仕方ないです」

でも交流があんまりないのに、なんで襲ってきたんだろう。マルティーヌを狙ったというのも不自然だ。ラースラシア王国に打撃を与えたいなら、次代の王であるステファンを狙うのが普通だと思うんだけどな……マルティーヌを狙ったとなると、狙いは俺とか？

「レオン、またここが襲われる危険性はあるだろうか」

「そうですね……ないとは言い切れないです。とりあえず俺はしばらく王都にいることにします。マルティーヌはこっそり大公家の屋敷に来る？」

襲われた部屋にいるのは怖いかなと思ってそう提案すると、マルティーヌはほっとしたような笑みを浮かべて頷いてくれた。

「ありがとう。レオンの近くにいられた方が安心できるわ」

「レオン、マルティーヌを頼む」

「はい、任せてください」

それからはマルティーヌが身支度を整え大公家でしばらく暮らす準備をするために自室へ戻り、俺はマルティーヌの準備が終わるまでの間にロジェとローランを迎えに行くことにした。

二人には連絡するかもしれないということで、中心街の礼拝堂に行ってもらっているのだ。

473、街の様子と屋敷へ

「ファブリス、もう急がなくていいから普通に道路を歩いてくれる？」
『了解した。神域に行けば良いのだな』
「うん。よろしくね」

王宮の大門から外に出ると、門の近くにある建物がいくつか被害を受けているのが目に入った。さっきまではマルティーヌを助けないとってところにしか意識が向いてなかったけど、改めて見ると街中の被害も酷そうだ。

「怪我人もいるよね……」
『いるだろうな』

そういえばマルティーヌの護衛は重体って言ってたな。他の人に治せたら良いけど、無理そうなら魔力が回復してから少し手を貸そう。

「ロジェ、ローラン、迎えに来たよ」

ファブリスには礼拝堂の外で待っててもらって中に入ると、二人は祈りを捧げる人たちの横でビシッと姿勢良く待機していた。

「レオン様、ご無事で何よりです」
「もしかして迎えにきてくださったのですか？　王宮の使用人を使いに寄越していただければ良かったのですが」
「それも考えたんだけど、街の様子を少し見てみようと思ったんだ。

……礼拝堂、いつも以上に人が多いね」
「はい。突然未知の存在から襲撃を受け、家族や国の無事を祈っておられる方が多いようです」
「そっか……」

この人たちの期待に応えるためにも事件を解決しないとだよな。

――ミシュリーヌ様、頑張ってください。

届くか分からないけど、いつもの神具を持たずに祈りを捧げた。たまにはこういうのも良いな、ミシュリーヌ様が本当は神聖で遠い存在だということを再認識できる。

「とりあえず王宮に戻ろう。ファブリスに乗って欲しい」
「かしこまりました」

それから王宮に戻った俺は準備を整えたマルティーヌと合流し、少し魔力が回復したので転移で大公邸に向かった。
俺の部屋の中に降り立つと、エミールが目の前にいてホッとしたように頬を緩める。

「レオン様、ご無事のご帰還嬉しく思います」
「出迎えありがとう。色々あってマルティーヌがしばらくこの屋敷にいることになったからよろしくね。説明はロジェから受けて欲しい」
「……かしこまりました」

エミールは少しだけ驚きを露わにしたけど、すぐにいつもの穏やかな笑みに戻り頷いた。最近はエミールもかなり慣れてきたよな。

「ロジェ、マルティーヌの部屋を大至急整えるようメイドたちに伝えてくれる？　それからマルティーヌの存在は秘密ってことも」
「すぐに伝えて参ります」
「よろしくね。エミールは温かいお茶を」
「かしこまりました」

まだ少し不安そうなマルティーヌをソファーにエスコートし、いつもは向かいのソファーに座るところを隣に腰掛けた。こういう時って近くに人の温もりがあると安心するよね。

「ミシュリーヌ様が頑張ってくれてるから、一週間ぐらいで敵の正体が分かると思う。それまでは怖いだろうけどここにいれば安心だから。俺もいるし、ファブリスもいる」
「ふふっ、ここは世界一安全ね。ありがとう」

そう言って笑みを浮かべたマルティーヌに無理をしてるような様子はない。俺はそれを確認してから頬を緩めた。

「スイーツでも食べる？　もし食欲があるなら」
「そうね……いつもは太らないように制限しているけれど、今日は良いかしら？」
「好きなだけ食べて良いと思うよ」
「じゃあ……さっぱりした口当たりのものが良いわ。果物がたくさん載っていて、クリームは少なめで」
「了解」

俺はマルティーヌの今の好みに合いそうなスイーツをいくつも選んで取り出し、ロジェに一口サイズにカットしてもらった。

「ここから好きなだけ食べて。残ったらアイテムボックスに入れて

おけるから気にしなくて良いよ」
「ありがとう。選ぶのも楽しいわね」
「このリンゴのやつとかおすすめ。ヨアンの新作なんだ」

それから俺はマルティーヌが落ち着くまでずっと部屋で話をしていて、落ち着いてからは家族皆にマルティーヌの滞在を伝えて皆でお茶会をして、ファブリスに乗りながら庭園を散策してというふうに、とにかく楽しい時間を過ごした。

「レオン、今日はありがとう。体に入っていた力が抜けたわ」
「それなら良かった。大公家の敷地内にいる限りは安全だから心配しないでね。夜は……一人でも大丈夫？　もし不安ならさすがに俺が一緒に寝るのはダメだと思うから、ファブリスにマルティーヌの部屋で寝てもらうようにお願いすることもできるけど」

俺のその言葉を聞いたマルティーヌは、少しだけ悩む様子を見せてから控えめに頷いた。

「ファブリス様にご迷惑じゃなければ」
「迷惑なんてことはないから大丈夫だよ。じゃあ呼んでくるね」

それから俺はファブリスをマルティーヌの部屋に呼んで、マルティーヌが会話に困らないようにとファブリス用のスイーツをたくさん並べて部屋を出た。

あれだけあれば、マルティーヌが寝るまでに無言で気まずいってことにはならないだろう。

「じゃあ俺も寝ようかな。早く寝て魔力を完全に回復させないと」
「かしこまりました。寝る前にお茶は飲まれますか？」

「うーん、今日は良いかな。着替えだけお願い」

自室に戻った俺は魔力がほとんどないところから動き回った疲れが出たのか、ベッドに入ると一瞬で眠りに落ちた。

474、敵の正体

王都襲撃とマルティーヌの誘拐から一週間が過ぎた。この一週間で敵に関する情報は全く集まらず、既にミシュリーヌ様頼りとなっている。

マルティーヌはファブリスがいなくても寝られるようになったみたいだし、心の傷は癒えてきているようだ。

「今日の午後は王宮に行く予定だよね？」
「はい。午前中は特に予定は入っておりません」

それならマルティーヌと買い物でも行こうかな。外に出られるなら店舗に行っても良いし、まだ怖ければ商人を呼ぶのも良い。

「ロジェ、服飾店に……」
『レオン、敵の正体が分かったわ』

ロジェに声をかけようとした瞬間、ミシュリーヌ様の声が頭に響いた。俺はその声を聞いて慌てて神具である本を取り出し、声がより鮮明に聞こえるようにする。

「分かったのですか！？」
『ええ、遂に監視してたやつらが本拠地に戻ったのよ』
「それはどこなのでしょうか。どういう組織なのかも分かりましたか？」
『もちろんよ。敵は――エリディトラス王国。名前は知っている？』

……聞いたことがある気がするけど、詳細はほとんど知らない国だ。なんでほとんど関わりない国がラースラシア王国の王都を襲って、マルティーヌを誘拐したのだろうか。

「特徴がない小さな国ですよね？」

『そうね。ただ一つだけ、今回の事態を引き起こしたのだろう事実が分かったわ。エリディトラス王国はね、エーデン教を国教にしているの』

エーデン教って……あれか！　小国群でラースラシア王国に侵攻しようと考えていたエクスデ国。そこの王様が信仰してたっていう架空の神だ。

マジか。エーデン教って一国だけじゃなくて、他の国にも広がってるほどにメジャーな神だったのか。

「ミシュリーヌ教が広まっている現状が許せなくてって感じですか？」

『ええ、上層部の会話を聞いた限りだと、マルティーヌを人質にしてレオンを呼び出し、レオンを殺害する予定だったらしいわ』

エーデン教を信仰しているエリディトラス王国からしたら、俺は異教徒で邪魔な存在だもんな……確かに恨まれるのも納得だ。許せはしないけど。

「あの不思議な力を持った獣や人間の正体は分かりましたか？」

『ええ、私としてはそちらの方が驚いたわ。――前に魔素の結晶について話をしたことを覚えているかしら』

「魔素の結晶って……あの、魔人が欲しがっていたものですよね。向こうの世界で枯渇して、こっちの世界にはたくさんあるから、それを得るためにこっちを征服しようとしてたっていう」

確か魔人は魔素の結晶を体に取り込んで、あそこまで強く進化したって話だったよな……って、もしかして。

「あの獣や人間って、魔素の結晶を取り込んだのですか？」

『正解よ。エリディトラス王国では数年前に魔素の結晶の存在に気づいたらしく、密かに動物実験や人体実験が行われていたの。それによって多数の犠牲が出ているけれど、その上に作られたのがあの獣や人間ね』

――動物実験や人体実験、さらに多数の犠牲って……。

「魔素を取り込むのって、命の危険があるのですか？」

『そうみたい。生き残って特別な力を手に入れられるのは一握りで、後は息を引き取ったり重い後遺症が残ったりするらしいわ』

ラースラシア王国を攻めてきたのは少なくとも数十人の人間と、数十匹の獣だよな。ということは、その何十、何百倍の犠牲者がいるかもしれないのか……。

予想以上に重い話に二の句を告げない。でも俺はこの世界の使徒なんだ、どうにかしないと。

「魔素の結晶は、放置してはダメなものでしたね」

『……そうだったようね』

魔物の森で魔素の結晶の話を聞いた時に、まだこの世界では気づかれていないだろうと後回しにしたことが悔やまれる。これからどうするべきか考えないとだよな。

あれは魔道具の魔力の供給源としても使えるから、攻撃魔法具と

組み合わせると大変なことになるのだ。

「またエクスデ国のように脅せば、ミシュリーヌ様のことを信じて馬鹿なことはやめるでしょうか？」

『そうね……それはあまり期待できなさそうよ。エリディトラス王国はエクスデ国と親交があって、エクスデ国に何が起きたのかを知っているみたいだから』

ということは、俺とファブリスがやったあの警告を知ってもなお、俺の殺害を企んだということか。

それだと実力行使しかないかな……放置するという選択肢はない。マルティーヌの脅威になる存在を放っておくことはできないし、そんな非人道的な実験は止めさせないといけない。

世界中に特殊能力を持つ人が溢れるようになったら大変だからな……しかもそんな世界になったということは、あり得ない数の犠牲者が出ているということだ。

「悪いことを企んでるのはエリディトラス王国の上層部ですよね？」

『そうね』

「ではそこに乗り込んで、まずは魔素の結晶を使った実験を止めるように、そしてラースラシア王国や俺たちに手を出さないようにと警告します。それに従わずに反撃してきたら……その時は実力行使しかないですね」

できれば警告を聞いてくれたらいいけど、その可能性は低そうだよな……憂鬱だ。

『魔素の結晶についてはどうするの？　そのうち他の国も存在に気づくわよ』

「それは……回収するのが一番だと思います。例えばミシュリーヌ様に捧げると願いが叶う確率が高まるとか、そんな理由づけで教会に集めるんです。それを俺が回収します。全部を回収することはできないので、そこは世界的に使用のルールを定めるぐらいしかできませんが」

完全にコントロールすることはできないから、できる限り悪用されないようにするしかない。

『確かにそうよね……その辺はレオンに任せるわ。ただ私もできる限り力を尽くすから、何でも言ってね』

「ありがとうございます。ではまた連絡しますね」

ミシュリーヌ様との会話を終えた俺は、隣で俺の言葉を聞いていたロジェに視線を向けた。

475、これからの話

ロジェは俺の言葉から敵の正体や事態の深刻さが分かったのか、少しだけ眉間に皺を寄せているように見える。ロジェが表情に出すなんて珍しいな。

「ロジェ、なんとなく内容は分かった？」

「はい。レオン様のお言葉から大体の状況は掴めました。エリディトラス王国が黒幕なのですね」

「そうみたい。国が相手なんて一番厄介だよね……それに魔素の結晶による実験もかなり大変な事態だと思う」

俺のその言葉を聞いて、ロジェは居住まいを正してから口を開いた。

「これからどう動かれますか？」

「そうだね……まずはマルティーヌに伝えたい。それから王宮でアレクシス様たちに報告かな。その後はすぐにエリディトラス王国に向かうことになると思う。できる限り犠牲者を減らすためには早い方が良いから」

「かしこまりました」

ロジェとローランを連れてマルティーヌのところに向かうと、マルティーヌは部屋に入った俺の表情で何かが分かったのか、笑顔を真剣なものに変えて俺にソファーを勧めてくれた。

「何かあったの？」

「マルティーヌ、さっきミシュリーヌ様から連絡が来て、敵の正体

が分かったよ」
その言葉にマルティーヌは瞳を見開き、ごくりと生唾を飲み込んでから俺に続きを促す。
「まず敵の黒幕だけど――」
それからさっき聞いたことを余すことなく伝えると、マルティーヌは王女の顔で眉間に皺を寄せた。
「大変な事態ね」
「そうなんだ。……マルティーヌ、ここまで聞いても大丈夫？」
「ええ、もう傷は癒えているわ。心配してくれてありがとう」
「それなら良かった」
俺はホッとして、緊張していた体の力を抜いた。マルティーヌのトラウマを呼び起こさせるんじゃないかと心配していたのだ。
マルティーヌはそんな俺の隣に来て、手をぎゅっと握ってくれる。
「私は一緒に行けないけれど、気を付けて。レオンの安全を第一にして欲しいわ」
「もちろん。無理はせず、エリディトラス王国に住む人たちを助けてくるよ。それから魔素の結晶についても、これ以上の悲劇を生まないように対処する」
「信じているわ」
俺はマルティーヌの笑顔と信頼に勇気をもらい、ファブリスに乗って屋敷を出た。
『王宮に行けば良いのだな』

「お願い。少しでも魔力を温存したいから」
『分かった。これから敵と戦うのだものな』

ファブリスは何だか楽しそうに口端を上げている。やっぱりファブリスって好戦的だよね。
ちなみにファブリスは俺とミシュリーヌ様の会話をどちらも聞いていたので、事情は完璧に理解している。ミシュリーヌ様は基本的に俺に話しかける時には、ファブリスにも聞こえるようにしているのだ。

『魔素の結晶とやらで強化された獣がたくさんいるというのは楽しみだ。少しは骨のあるやつがいると良いな』
「骨のあるやつがいない方が良いんだけど……まあ、ファブリスなら負けることはないか」
『我が負けるなどあり得ん』
「でも気をつけてよね。相手は未知の力を持ってるかもしれないんだから」

ファブリスとそんな話をしていると王宮に到着し、俺たちはすぐにアレクシス様の執務室へと案内された。

「レオン、何か分かったのか？」

執務室に入ると、アレクシス様が緊張の眼差しで声を掛けてくれる。

「はい。ミシュリーヌ様から連絡が来まして、敵の正体が分かりました」
「なっ……本当か！？」
「本当です。順を追って説明しますね」

それから俺の話を最後まで聞いたアレクシス様とリシャール様は、厳しい表情で情報をメモした用紙を見つめた。

「まさかエリディトラス王国だったとはな。それに魔素の結晶についても、かなりの重大事項だ」

「地中に埋まっているとしたら、どの国でも同様の実験ができるということになります。これは我々の手に負えませんね」

「レオン、これからどうするのだ？　王宮を襲撃されたという現状では、相手に宣戦布告されたと捉え、エリディトラス王国に侵攻するというのも選択肢の一つだが……」

アレクシス様はその選択肢は極力選びたくないのか、眉間に皺を寄せた。

「いえ、戦争は避けましょう。関係ない多くの人が傷つくのは嫌ですから。今回は魔素の結晶のこともありますし、私がエリディトラス王国に乗り込もうと思います」

「……そんなに頼ってしまって良いのだろうか」

躊躇いを見せるアレクシス様に、俺はしっかりと頷いて見せた。正直に言うと、国として動く方が色々と面倒なのだ。俺が個人で使徒として動いた方がしがらみがなくて楽に対処できる。

「ミシュリーヌ様からも対処をお願いされていますし、気にしないでください」

「……分かった。ではレオンに任せたい。いつも本当に申し訳ないが、よろしく頼む」

「任せてください。私が対処した後に国として動いて欲しいことがあったら、その時には相談して良いでしょうか？　例えばエリディ

トラス王国を支配下に置くとか」

上層部がごっそりいなくなって、国家運営が正常に続けられなくなるのが一番大変なのだ。そうなったら被害を受けるのはエリディトラス王国に住む何の罪もない国民だし、そこは何とかしたい。

「もちろんだ。食料なども送れるようにしておいた方が良いな」

「そうですね。できればよろしくお願いします」

そこで話に一区切りが付いたので、俺はソファーから立ち上がった。

「エリディトラス王国では毎日犠牲者が出てると思うので、さっそく向かいたいと思います。何かありましたら中心街の礼拝堂から、ミシュリーヌ様を通して連絡してください」

俺のその言葉にアレクシス様が恐縮しつつも頷いたところで、俺はファブリスの背中に乗った。

「では行ってきます」

476、エリディトラス王国へ

王宮を出て王都も出たところで、俺はファブリスの背中にベタッと体を預けた。いつ寝てもふかふかで気持ちいいな。

「ファブリス、エリディトラス王国まで走ってもらっても良い？ファブリスばっかり大変で申し訳ないんだけど、魔力をあんまり使いたくなくて」

『別に構わないぞ。数日走り続けるぐらい、疲れもほとんどないからな。その王国にはどれほどで着くのだ？』

「うーん、ミシュリーヌ様、エリディトラス王国ってどのぐらいの距離なんですか？」

アイテムボックスから本を取り出して問いかけると、ミシュリーヌ様はすぐに返答してくれた。

『魔物の森に行くよりは近いわ』

『何だ、そんなに近いのか。ミシュリーヌ様、今走っている方向で合っていますか？』

『そうね……もう少し西寄りよ。近づいてきたら私が案内するわ』

『ありがとうございます』

ミシュリーヌ様とファブリスが会話をしているのを聞いて、俺はしばらく寝てても問題ないかなと瞳を閉じた。このふかふかの毛に埋もれると、眠くなるんだよね。

「ファブリス、ちょっと寝るね」

『了解した』

ファブリスのその言葉が聞こえて、気づいたら俺は夢の中にいて――

――意識が浮上した時にはもう辺りが暗くなっていた。

「うぅ～ん、よく寝た」

ファブリスの背中の上で伸びをすると、ファブリスが少しだけ速度を下げる。

『主人、そろそろ王国の王都に着くらしいぞ。ミシュリーヌ様が仰っていた』

「え、もうそんなに来たんだ。ファブリスありがと～。あとでスイーツたくさん食べて良いよ。ご飯もね」

『ふんっ、これぐらい我には朝飯前だ。しかし褒美は受け取ろう』

ファブリスの声音はかなり嬉しそうだ。ファブリスってツンデレだよね。

『レオン、あと三十分ぐらいで着くけどどうするの？　明るくなるまで待つ？』

「そうですね……暗い方が闇夜に紛れられますし、このまま行こうかなと思います。エスクデ国の時みたいに、王宮に転移するので良いですかね？」

『良いんじゃないかしら？　それでまずは警告するのよね』

「そのつもりです。今回は俺もファブリスに乗って一緒に行こうかと」

『それならばエリディトラス王国の王宮を神界から見ないとよね。神界に呼ぶ？』

ミシュリーヌ様のその言葉にお願いしますと答えると、数秒後には神界のソファー近くに立っていた。
俺がソファーの定位置に腰掛けると、さっそくミシュリーヌ様が目の前に王宮の様子を映し出してくれる。

「ここが王宮よ」

ミシュリーヌ様が指し示したのは、高い尖塔がたくさん立ち並んでいる建物だった。

「不思議な形ですね……」
「この国は高い場所は神に近いと思ってるみたいで、身分が上がるほど高い場所に住むらしいわ。登るだけで大変なのに、馬鹿よねぇ」

ミシュリーヌ様は呆れた表情だけど、それが宗教というものだろう。神のためなら不便を普通に受け入れられるって凄いよな。

「一番高いところに国王がいるんですか？」
「ええ、国王の私室はそこね。ただ今は執務室にいるみたいよ。執務室は尖塔じゃなくて真ん中にあるこの建物の最上階にあるわ。ラースラシア王国への襲撃が失敗したことで、執務室でこれからのことを考えてるみたいね」
「ちなみに……実験施設はどこでしょうか？」
「それは――ここよ」

王宮から視点が遠ざかり街全体を映すようになり、しばらくして画面には街の外れにある巨大な施設が映された。

「大きいですね」

「ええ、ここで生き残った人間や獣が王宮の警備をしているみたいだから、気をつけなさい」
「……分かりました。俺たちの力を見せつけるためにも勝たないとですね」

それから俺は転移先である王宮の執務室内をよく観察し、完全に覚えたところで下界に戻った。

「ファブリス、もうここから執務室の中に転移しちゃうよ。そこまで距離はないと思うし」
『分かった』

俺はファブリスが足を止めたところで大きく深呼吸をして――――転移を発動させた。

「なっ……」

突然俺たちが部屋の中に現れたことで、執務室内にいた約十人ほどは完全に動きを止めた。国王は突然の出来事にこれでもかと瞳を見開いている様子だ。

「て、敵襲だ！！　救援を呼べ！！」

しかしすぐ我に返ったのか、周囲にいる護衛に指示を出す。この国王は無能ってわけじゃなさそうだな。体も鍛えているように見えるし。

「俺はミシュリーヌ様の使徒であるレオンだ」
『我はファブリス。ミシュリーヌ様の神獣である』
「今回は二つのことを伝えに来た。まず一つ目、金輪際ラースラシ

ア王国や俺が関わる全ての人に危害を加えるな。それから二つ目、非人道的な実験は止めろ。ミシュリーヌ様がお怒りだ」

できる限り威厳が出るようにと低い声を意識してそう告げると、国王は少しだけ黙り込んでから……俺に鋭い視線を向けた。

「ミシュリーヌなどという邪神の手下だな！？　エーデン様に危害を加えようというのか！」

やっぱり話し合いは無理か……こうして突然転移してきてることからも俺たちが特別な力を持ってることは明白なのに、それでもエーデンという神を信じ抜けるのは凄いよな。

「エーデンという者に興味はない。お前達がそれを信じるのは自由だ。しかし俺らに危害を加えるな。そして実験を止めろ。それさえ守れば今回の襲撃は見逃す」

「……邪神を世界に広める存在を見逃すわけがないだろう！　実験もエーデン様のためなのだ！　犠牲になった者たちも喜んでいるに違いない！」

国王はそう叫ぶと、自ら近くの壁に飾られていた剣を取って俺に向けた。

477、戦闘

「私が自ら邪教徒を始末してくれる……！」

国王は目を血走らせてそう叫ぶと、床を蹴って俺達に向かって飛び込んできた。その攻撃を俺はバリアで軽く受け止め、国王が困惑の表情で剣を引いたところでバリアの形を変化させる。

突然剣に姿を変えたバリアに国王は目を見開き、俺は動揺で動きを止めている国王の足に向けてバリアの剣を放ったけど……それは三人の護衛によって止められた。

「陛下はお逃げください！」

「ここは我々が！」

三人の護衛は一人がバリアの剣に対処し、もう一人が剣で俺を狙い、もう一人が魔法で攻撃してくる。この三人、思ってたよりもずっと強いな。

実験で強化された人達なんだろうけど、ラースラシア王国への襲撃者よりも強い気がするな。襲撃してきたやつらは、強化された人の中で弱い方だったのかもしれない。

「ファブリス！　襲ってきた人は……生死を問わないから倒してほしい」

三人に対処しながらそう伝えると、ファブリスは楽しそうな声を発した。

『分かった。好きに暴れて良いんだな』

ファブリスがその声を発した瞬間、執務室のドアが凄い勢いで開いて獣や人が流れ込んでくる。

俺たちは執務室の真ん中で、一瞬にして敵に囲まれた。

「多いね……ファイヤーストーム！」

敵の数から大規模魔法を使うべきと判断して、自分たちをバリアで覆って炎の竜巻を発生させると、その竜巻は執務室内の家具や書類を全て燃やしていったけど……被害があまり拡大しないうちに消された。

敵の何人かが水魔法を使ったみたいだ。俺のファイヤーストームを消せるほどの水魔法って、やっぱり魔素の結晶を取り込むと普通ではありえない力を得られるんだな。

「ロックアロー！」

「え……うわっ」

マジか、バリアにちょっとヒビが入ったんだけど。こいつら予想以上に強い……！

俺は割れかけているバリアを消して、転移で敵の背後に回った。そして後ろから……唇を噛み締めて魔法を放つ。俺が放ったいくつものファイヤーバレットは、数人の体に命中した。しかし致命傷にはならない位置だ。

やっぱり……対人間はダメだ。どうしても躊躇ってしまう。もう

そこは諦めて、殺さず戦闘不能にする方向に切り替えよう。その方が迷いなく戦える気がする。

「後ろだ！」

俺が背後にいることに気づいた数人が振り返って一斉に魔法を放ってきたので、俺はバリアでそれを受け止めつつ剣を取り出した。身体強化をかけて、まずは獣からと襲いかかってくる獣に剣を振るう。獣はいつも魔物を倒しているので、さすがに躊躇うことはない。

『主人、ここは狭くて戦いづらい。広いとこに移動するぞ』

「確かにね。……了解」

転移でファブリスの背中に戻ると、ファブリスは風魔法で入り口付近にいる人や獣を蹴散らして、部屋から外に出た。

『ミシュリーヌ様、近くに広い部屋はありますか？』

『ええ。廊下をしばらく右に進んだ大きな扉がホールよ』

『ありがとうございます』

行き先が決まったファブリスは廊下にもたくさんいる敵を上手く避けて時には攻撃して、軽い足取りで目的地を目指す。そんなファブリスを、俺も魔法で援護した。

「ファブリスってやっぱり強いね」

『当然だ。主人とは良い勝負だがな』

扉を風魔法で吹き飛ばしたファブリスは、中に入って大きな雄叫びを上げる。

『何だか楽しくなってきた。いくぞ！』

ファブリスはホール内に入ってきた敵に向かって駆け、すれ違い様に爪の攻撃で次々と致命傷を負わせていった。

魔素の結晶によって強化はされているものの、神獣に勝てるほどではないらしい。敵は仲間がたくさんやられるにつれて、だんだんと逃げ腰になっていく。

しかしさすがに向こうには数の利がある。ファブリスは何度か魔法攻撃を掠ったのか、小さな傷が出来ているみたいだ。俺もさすがに全ては捌ききれず、何度か攻撃を喰らって火傷や切り傷ができている。

その都度回復はしてるけど、またすぐに傷ができる状況だ。

「さすがに数が多すぎるね」

『本当だな。でもそろそろ終わりだと思うぞ。敵が弱くなってきた』

ファブリスのその言葉で顔を上げて廊下の方に視線を向けると……確かにさっきまでよりも敵の密度が下がっている気がする。

「そろそろ降伏してくれるかな」

『それには国王を捕まえた方が良いんじゃないか？』

「確かに。ミシュリーヌ様、国王の居場所は分かりますか？」

『ええと……王宮から出て研究所の方に向かってるわ』

もしかして、まだそっちにはたくさんの強化された人間と獣がいるのだろうか。

「ファブリス、国王を止めたい。行ってくれる？」
『構わないが、主人は一人で大丈夫なのか？』
「うん。もう数も減ってきてるし」
『分かった。すぐにここへ連れてくる』
ファブリスは頼もしくそう告げると、軽い足取りでホールを出て行った。

478、決着

「よしっ、一人で頑張るか」

俺は気合いを入れるために声を出し、剣を握る手に再び力を入れた。襲いかかってくる人を片手剣とバリアで止めて受け流し、それと同時に魔法で攻撃する。

敵の魔法攻撃は相性の良い属性の魔法で相殺し、バリアを板状に変化させて防ぐ。さらに襲いかかってくる獣は、剣で斬りつけ魔法で急所を狙う。

数が減ったとはいえまだ数十以上はいる敵に、俺は小さな傷を負いながらも一人で対処していた。

またどこからか救援が来たのかホール内の密度が上がり、床に倒れてる人や獣が増えたことで戦いづらさを感じるようになってきた頃。やっとファブリスが戻ってきた。

『主人、戻った』

ドサっと鈍い音を立ててファブリスの口から床に落とされたのは、白目を剥いて気絶している国王だ。

「生きてる……？」

『ああ、大きな怪我はない。少し脅してから運ぼうと我が咥えたら、叫んで急に意識を失った』

ファブリスに咥えられたら……確かに気を失っても仕方ないか。

こんな大型の獣に生きたまま食われる寸前とか、何よりも恐怖だよね。

「……っ、陛下！」

ファブリスが連れてきた人物が国王だと誰かが気付いたらしい。国王を助けようとファブリスに矛先を向け……しかしファブリスがうつ伏せで倒れている国王の背中に前足を乗せたところで、皆が動きを止めた。

『お前ら、そろそろ降伏しろ。これ以上続けるなら国王の命はないぞ』

「……っ……」

まだ立っている敵は俺たちを鋭い視線で睨みつけるも、さすがにここから逆転は難しいと思っているのか動くことはしないようだ。

俺はそれを見て、やっと戦闘の終わりを感じた。

「こいつらはどうするか」

縄で縛ったとしても、強化された身体能力や魔力によって縄なんて簡単に切られてしまうだろう。どこかに閉じ込めておくのが一番かな……

「ミシュリーヌ様。頑丈な牢屋とか、それに代わる場所ってないですか？」

『そうね……王宮の地下にかなりの規模の牢屋があるわ。いくつかに魔法を撒き散らして暴れる獣も入ってるし、かなり頑丈なんじゃないかしら。後は研究施設にも同じような場所があるわね。ただこっちはすでにいっぱいよ』

「ありがとうございます。じゃあその地下が一番ですね」

それから俺はファブリスにも手伝ってもらい、転移やバリアを駆使してまだ生きてる人間を全員地下牢に閉じ込めた。

さらに国王以外の王族も全員捕えて、一応貴賓用の牢屋に隔離する。最後に研究施設の職員も捕まえ、研究を止めれば完了だ。

「この後はどうしようか。ここまで上層部がいなくなると、ラースラシア王国の属国にするのが一番だよね」

『そうだな。上層部は特にエーデンとかいう神を強く信じているようだ。意見を変えることはないだろう』

「だよね……じゃあアレクシス様に連絡してここまで騎士団を送ってもらうとして、問題は捕えた魔素の結晶によって強化された人たちだ」

捕まえながら少し話をしただけでも、明らかにエーデン教を信仰していて王族に忠誠を誓っている人と、家族などを人質に取られて仕方なく命令を聞いていた人に分かれていたのだ。

後者の人たちはなんとか救ってあげたい。

「ミシュリーヌ様、魔素の結晶を取り込んだ人たちって、普通に戻ることはないんですか？　時間経過とともに効果が薄れるとか」

『……私にもよく分からないけれど、その可能性は低いんじゃないかしら。少し調べてみた結果、魔素の結晶は肉体自体を変化させるのよ。体内に取り込んだ魔素の結晶が尽きるまで強い力を発揮できるというものではないから、効果がなくなるということはないはずよ』

そうなのか……それだと強化された人たちの今後には悩む。さす

がに一般社会で普通に暮らして良いですよ、というふうにはできないし。

一番無難なのは、強化された人たちだけの街を作ることかなぁ。その中なら自由って感じで。家族は望めば入れるようにした方が良いかも。

何にせよ、まずはアレクシス様に相談だな。街を作るにしても俺では管理しきれないだろうから、ラースラシア王国で管理体制を整えてもらいたいし。

「ミシュリーヌ様、中心街の礼拝堂に誰かいますか？」
『ちょっと待ちなさい。……いるみたいよ。騎士服姿の人間が三人』
「じゃあその人達にアレクシス様への伝言を頼んで欲しいです。明日の午前中に一度転移で帰るので、できれば時間を空けておいて欲しいと」
『分かったわ。私に任せなさい！　その代わり……』
「もちろんスイーツを食べていいですよ」

俺が苦笑しつつ答えると、ミシュリーヌ様の嬉しそうな叫び声が聞こえてくる。

『今回は何個かしら！』
「十個ぐらいにします？　ミシュリーヌ様にはたくさん助けていただいているので」
『レオン……大好きよ！』

そこでミシュリーヌ様からの通信は切れた。多分すぐに神託をして、スイーツタイムに入るんだろう。

「じゃあファブリス、今夜は俺たちも休もうか」
『そうだな』
「あっ、ミシュリーヌ様、捕らえた人たちの監視をお願いします」
もうスイーツに夢中で聞いてないかなと思いつつ声をかけると、モゴモゴと口に物が詰まった声が僅かに届いた。
「ありがとうございます」
多分だけど了承してくれたんだろうと苦笑しつつお礼を伝えると、また聞き取れない声が聞こえて通信は切れた。
「ミシュリーヌ様って本当にスイーツが好きだよねぇ」
思わずしみじみとつぶやくと、隣にいるファブリスが瞳の奥を輝かせて俺に視線を向ける。
『スイーツは美味いから当然だ。……我も腹が減ってるぞ？』
「ははっ、りょーかい。じゃあスイーツは食事の後ね」
ファブリスからの遠回しな催促に、俺たちは適当な部屋に入って食事を済ませ、疲れからすぐ眠りに落ちた。

479、帰国

次の日の朝。捕虜に水と食料を配って回ってから、俺とファブリスはアレクシス様の執務室に転移をした。王都から魔物の森よりも距離が近いので、魔力を二割ほど残して転移に成功する。

「レオン！　待っていたぞ。どうだった？　怪我などはしていないか？」

アレクシス様がすぐ心配そうに駆け寄って来てくれて、俺はその様子を見て心が温かくなった。こうして本心で心配してくれてるのが分かると嬉しいな。

「怪我などはないので大丈夫です。ファブリスも無事です」

「そうか……良かった」

部屋の中を見回すと、リシャール様やその他の上層部の人間、さらには騎士や文官も数人いて、執務室内はかなりの密度だ。

「たくさんの方が集まってくださったのですね」

「ああ、その方が今後の動きがスムーズだと思ったのだ。もしレオンが人払いをと言うならばそうするが……」

「いえ、大丈夫です。皆さんに聞いていただけるとありがたいです」

「分かった。ではレオンはこちらへ」

俺はいつものソファーを勧められて、その周りを集まっている皆が囲んだ。ファブリスは大欠伸をしながら部屋の隅だ。

「では、エリディトラス王国で何があったのか聞いても良いだろうか？」
「はい」

それから俺がエリディトラス王国に転移をしたところから全てを話すと、執務室に集まる皆の表情は厳しいものになった。

「上層部はそんな状態なのか……」
「はい。まさに狂信者といったような感じです」
「しかし騎士や強化された者には、自ら進んでではなく人質を取られてという者もいるんだな」
「そうですね……私の体感では半分以上は止むを得ずといった雰囲気でした。正確なところは分かりませんが、エーデン教は上層部ほど信仰が厚くて、平民はそれほどではないと思います。特に魔素の結晶による研究で犠牲者が出始めてからは、エーデン教、そして王家への不信感は広がっていったのではないでしょうか」

エリディトラス王国の人たちと触れ合った感想を伝えると、アレクシス様は真剣な表情でペンを走らせた。

「それで、上層部やレオンに対して危害を加えようとした者は皆捕えたのだな」
「はい。なので王宮はほぼ空でして、早急に国をまとめ上げる代わりの人や組織がなければ、あの地域はかなり荒れると思います。現時点で平民の生活はとても良いとは言えないもののようですから……」
「分かった。そこは我が国が引き受けよう。ここからは私に任せてくれ」

アレクシス様の頼もしい言葉に、俺は心からの感謝を込めて頭を

下げた。

「ありがとうございます。よろしくお願いします」

武力で制圧するのは簡単だけど、その後で半ば乗っ取った形の他国を上手く立て直すのは相当に大変だろう。それを引き受けてくれるアレクシス様には本当に感謝だ。

俺もできる限り協力しよう。

「エリディトラス王国には転移で行けるのだろうか」

「はい。私が転移で連れて行きます。一日おきになりますが」

「それはもちろん構わない。では先発隊をレオンの転移で移動させ、それ以外は他国への牽制や喧伝のため、馬や馬車での移動としよう。周辺国への周知も必要だろうからな」

「かしこまりました。転移が必要な場合はいつでも言ってください」

「ありがとう」

それからアレクシス様たちは忙しく仕事を始めたので、俺は邪魔にならないようにと執務室を後にした。俺の仕事はここまでだ。

「ミシュリーヌ様、魔素の結晶に関しては俺たちでなんとかしましょう。とりあえず世界中に散らばる神域に神託をお願いします」

ファブリスに乗って屋敷に戻りながらミシュリーヌ様に声を掛けると、ミシュリーヌ様からはすぐに返答が来た。

『分かったわ。魔素の結晶を私に供えて欲しいって伝えれば良いの？』

「そうですね……」

回収するのが一番良いと思ってたけど、魔素の結晶っていくら回収しても新たに生まれるし、回収し切れるわけがないよな。
そうなると、世界中で使用に関する規則を設けたほうが良いのかもしれない。

「とりあえず、魔素の結晶は生活を豊かにするミシュリーヌ様からの贈り物だから、悪意あることに使ったら神罰が下るとでも言ってもらえますか？　それでしばらくは、魔素の結晶を悪事に利用しようと考える人はいなくなると思うんです」
『確かにそのぐらいにしておいた方が良いかもしれないわね。神様らしく神託しておくわ！』
「よろしくお願いします。それで後から……魔法具を他国にも広められるようになったら、魔素の結晶の使い方も同時に広めます」

魔法具の燃料として使えば世界中の魔素の結晶が消費されることになるし、その方が良いだろう。一番の問題は攻撃魔法具が強い力を持つことだけど、それは国同士で使わないというふうに取り決めてもらうしかない。

その辺は今悩んでも仕方ないし、これから臨機応変に、アレクシス様と相談しつつやろう。

『そうね。じゃあ近いうちにやらないといけないのは神託ぐらいかしら』
「はい。よろしくお願いします」

ミシュリーヌ様との会話が終わったところでちょうど屋敷に到着し、エントランスに向かうとマルティーヌが出迎えにきてくれた。

「レオン、無事で良かったわ」

「マルティーヌ、ただいま」

自分の家に帰るとマルティーヌがいるという状況に、俺の頬は緩みきってしまう。いずれはこれが当たり前になるんだよな……幸せすぎる。

「怪我などはしていない？」

「うん、大丈夫。エリディトラス王国もこれからは良い方向に向かっていくと思うよ。あっ、でもエリディトラス領とかになるのかな。ラースラシア王国で統治することになるから」

「そうなのね。それならば安心だわ」

マルティーヌはアレクシス様のことを信頼しているのか、安心したように頬を緩めた。

「レオンはこれからもエリディトラス王国に関わるの？」

「うーん、どうなるだろう。少しは手助けすると思うけど、基本的には国としてアレクシス様やリシャール様が動いてくれるかな。俺は使徒としての力が必要な時だけになるかも」

「それならば大公領の開発に集中できるわね」

俺はマルティーヌのその言葉を聞いて、自分でも驚くほどに心が浮き立った。やっぱり悪意に対峙してるより、幸せな未来のために仕事をしてる方が楽しいよな。

「まだまだやりたいことはたくさんあるから、良い領地になるように頑張るよ」

「応援しているわ。私もまた訪れて良いかしら」

「もちろん！　その時はまた変装する？」

「ふふっ、しようかしら。別人になりきるのは楽しかったわ」

俺とマルティーヌは楽しく談笑しながら屋敷に入り、そのままお茶会室で美味しいスイーツとお茶を堪能しながら話を続けた。

マルティーヌとする未来の話は、とても楽しかった。

エピローグ

季節は流れて俺は十八歳になった。魔物の森は駆逐し終わり、ミシュリーヌ教が世界中に浸透し、ここ数年はとても穏やかで楽しい日々を過ごしている。

「レオン様、そろそろご到着される頃かと」

大公領の領主邸で緊張しつつコーヒーを飲んでいた俺に、ロジェがいつも通りの口調で声をかけてくれた。

今日はついに――マルティーヌが領地に越してくる日なのだ。

すでに国中の貴族や国外の王族までも招待した正式な結婚式は済ませてあるけど、今日はここ大公領でもっとカジュアルな、仲の良い人たちだけを呼んだ披露宴をすることになっている。

「ロジェ、最後に身嗜みを確認してくれる？」

「かしこまりました」

頭のてっぺんからつま先までロジェに確認してもらい、問題ないと太鼓判を押してもらったところで、俺は深呼吸をしてから部屋を出た。そして向かったのは……領主邸の敷地内に造られた、巨大なパーティー会場だ。

この披露宴のためだけに皆が張り切って、数年前から時間をかけて建設されたので、とにかく豪華で美しい。

壁面や天井には計算され尽くしたガラスが嵌め込まれ、会場の中

は日が出ている時間ならばいつでも明るく輝いている。

そんな会場の入り口に向かうと、ちょうど領主邸がある丘の上に向けて登ってくる馬車が見えた。とても豪華で可愛らしい馬車は、マルティーヌのものだ。

もう夫婦となったのに、なんだか緊張しつつ馬車をじっと見つめていると、ゆっくりと会場前で止まった馬車からマルティーヌが降りてきた。俺はその美しさに、思わず息を呑む。

俺からウェディングドレスの話を聞いたマルティーヌが今日のために仕立ててくれた、総レースの純白ドレスだ。日の光に照らされて、キラキラと輝いている。

「レオン、お待たせ」

「……マルティーヌ、凄く綺麗だ」

「ふふっ、ありがとう」

マルティーヌに手を差し出してエスコートすると、マルティーヌは優雅に、しかし嬉しそうな素の笑顔を滲ませた。

「……昨日は大丈夫だった？　一番良い部屋を準備したんだけど」

「とても快適だったわ。皆さんがよくしてくださって、お料理も美味しくて。大公邸に着いてそのまま披露宴が良いだなんて、わがままを聞いてくれてありがとう」

「マルティーヌのわがままなら何でも聞くよ」

「ふふっ、なんでもだなんて言ってはダメよ。私がとても悪ーいことを頼むかもしれないわよ？」

イタズラな笑みを浮かべて俺の顔を見上げたマルティーヌの様子に、俺の緊張はするすると解けていく。

「ははっ、それは困るかも」

俺とマルティーヌはいつものように笑みを向けあって、二人で会場の入り口に向き直った。招待した皆は中で待ってくれているので、後は俺たちが入ればパーティーは開始だ。

「じゃあマルティーヌ、行こうか」

「ええ、行きましょう」

ロジェとエミールが扉を開けてくれて、俺はマルティーヌと一緒に一歩を踏み出した。

俺たちが会場に入ると、集まってくれた皆からの大きな拍手が送られる。こんなにたくさんの人が集まってくれるなんて、本当に幸せだよな……。

会場の一番奥までゆっくりと歩き、二人で壇上に上がって会場全体を見回した。

「今日は俺とマルティーヌの結婚披露宴に集まってくれてありがとう。堅苦しいものじゃないから自由に話して食べて飲んで、楽しく過ごしてほしい」

「皆さんありがとう。これからは私も大公家の一員になります。よろしくお願いします」

俺たちの軽い挨拶が終わると、さっそくそれぞれのテーブルに飲み物と食事が運ばれ始めた。俺たちはそれが一旦落ち着いたところで、二人で一緒に会場を回っていく。

まず向かったのは、マルティーヌの家族がいるテーブルだ。さす

がに王族全員が来ることはできなかったようで、アレクシス様だけはいないけど、エリザベート様、ステファン、クレメントは来てくれている。

「二人とも、改めておめでとう。マルティーヌ、とても綺麗よ」
「お母様、ありがとうございます」
「レオン、マルティーヌを頼んだぞ」
「もちろん。幸せにするよ」
「姉上、義兄上、おめでとうございます」

まだ幼さが抜けきらないクレメントの背伸びをした挨拶に皆が頬を緩め、とても和やかな雰囲気となった。
それから少しだけ談笑し、次に向かったのは俺の家族とタウンゼント公爵家の皆さんのところだ。

「マルティーヌさん、とても素敵ね」

母さんが瞳を輝かせてマルティーヌに笑顔を向ける。

「ありがとうございます。このドレス、とても気に入っているんです」
「お姉様、とても綺麗です」

マリーが母さんと似た瞳でマルティーヌを見上げると、マルティーヌは優しい笑みを浮かべて、マリーの隣にいるリュシアンに視線を向けた。

「マリーちゃんも二年後までに純白のドレスを仕立てたら良いわ。ね、リュシアン？」
「ああ、いくらでも仕立てると良い」

「本当ですか！　ではさっそく仕立て屋に連絡しなくては」
「マリーちゃんは私のドレスより、もう少し腕の部分などがふんわりとした形が良いかもしれないわね。マリーちゃんはとても可愛らしいから」

マルティーヌとマリーが楽しそうに会話をしている中、リュシアンは俺に綺麗な笑みを向けた。

「レオン、おめでとう。私たちもこうした披露宴を開く予定だから出席してくれよな。義兄上？」

うぅ……絶対に楽しんでるよ。リュシアンはまだ俺がマリーの婚約を完全に受け入れてないことを知っていて、こうしてからかってくるのだ。

いや、俺だってもうほとんど受け入れてるんだ。相手がリュシアンなんて考えられる限りで最高の相手だと思う。マリーは楽しそうだし、リュシアンはマリーを幸せにしてくれるだろうし……でも可愛い妹が結婚して別の家に入ってしまう寂しさはどうしても残る。

「……もちろん出席する」
「ははっ、よろしくな」

それからリシャール様やフレデリック様、クリストフ様たちとも話をして、俺たちはまた別のテーブルに移動した。

「お二人とも、来てくださってありがとうございます」
「当然じゃろう？　レオンの晴れ姿だからな」
「マルセルは数日前からそわそわしておったぞ」
「ロンゴ！　余計なことを言うな！」

二人はいつも通りの掛け合いで、まだまだ元気な様子だ。俺はそんな二人の様子に嬉しくなって、笑いながらマルティーヌと顔を見合わせた。

「二人と会うと王立学校時代に戻る感じがするよ」
「分かるわ。魔法具研究会、懐かしいわね」
「お二人ならいつでも大歓迎ですぞ」
「ありがとうございます。王都に行く時には顔を出しますね。もちろんマルセルさんの工房にも」
「楽しみにしておる」

王立学校なんてマリーが卒業してからは一度も行ってないな……ちょっと楽しみかも。最近は平民の学生もかなり増えてるらしいし、雰囲気が変わってるかな。

そんなことを考えながら次のテーブルに向かうと、そこにいるのはロニーとステイシー様だ。二人は一年前に結婚していて、基本的には王都で暮らしている。

「レオン様、マルティーヌ様、この度はおめでとうございます」
「レオン、おめでとう。マルティーヌ様も、おめでとうございます」

祝いの言葉を伝えてくれた二人の雰囲気がなんだか似ているように感じて、俺は安心して頬を緩めた。二人の結婚はステイシー様……というよりも、ピエール様とキャロリン様の激推しによるものだったから、上手くいくのか少し心配していたのだ。

「二人ともありがとう。これからもよろしくね。特にロニーはしばらく領地に来てもらうことになるかも」

「え、そうなの？　何かあったっけ？」
「新たに始める事業の文官が足りなくて、応援に来て欲しいんだ」
「そういうことか。分かったよ」

ロニーはすぐに頷いてくれて本当に頼もしい。今ではロニーは、大きくなったジャパーニス大公家の文官室副室長だ。

「じゃあまた後で」
「了解」
『主人、我にケーキを追加してくれ』

二人のテーブルから離れたところで、会場の端を大きく陣取ったファブリスに声をかけられる。今日のファブリスにはスイーツも食事も食べ放題と伝えているからか、さっきから凄い勢いだ。

「ちょっと待って。給仕を呼ぶから」
『うむ。早めにな』
「はいはい」

俺はこんな時にも自分のペースを崩さないファブリスに苦笑を浮かべつつ、給仕が来るまでの間にとアイテムボックスからいくつかホールケーキを取り出した。

「どうぞ。これ食べて少し待ってて」
『了解した』
『レオン……！　今日は最高の日ね！　毎日披露宴を開きなさい！』

ファブリスから離れてやっと挨拶回りに戻れると思ったら、今度はミシュリーヌ様だ。

「ミシュリーヌ様、披露宴は結婚した時の一回のみです」
『な、な、なんてことなの……！　それなら話してる時間も惜しいわ！　今日は食べまくるわよー！』

荒い鼻息が聞こえてきそうなミシュリーヌ様からの声は、一方的に切れた。ミシュリーヌ様、やっぱり自由だ。

「話は終わった？」
「うん、凄く勝手な二人でごめん」
「気にしていないわ。お二方のおかげで私たちは幸せに暮らせているのだもの」

わがままな二人をそんなふうに言ってくれるだなんて、本当にマルティーヌは優しくて可愛くて心が綺麗で、最高のパートナーだ。

「マルティーヌ、ありがとう」
「こちらこそ、いつもありがとう」

マルティーヌの優しい笑みに俺も笑顔になり、俺たちは二人で挨拶回りに戻った。
そしてそれからもたくさん知り合いのところを回り、とても楽しくて幸せで、一生記憶に残るであろう披露宴は終わった。

平和で便利になった世界で、大切な人たちに囲まれて、隣にはマルティーヌがいて、俺は本当に幸せだ。

—完—

エピローグ（後書き）

これにて「転生したら平民でした。生活水準に耐えられないので貴族を目指します」は完結となります。
とても長い物語に最後までお付き合いくださった皆様、本当にありがとうございます。皆様のおかげで最後まで書き切ることができました。

大公領を発展させていく過程はまだまだ書けること、書きたいことがあるのですが、そこは番外編という形にしようと思っています。
番外編は不定期投稿になると思いますが、投稿した時には読みにきていただけたら嬉しいです。

そして書籍やコミックスも発売されておりますので、ぜひこの機会にそちらもお手に取ってみてください。
ＷＥＢとは違う展開、オリジナルストーリー、書き下ろし番外編、素敵なイラストなど、書籍版にしかない魅力がたくさんあります。
コミックスは言わずもがな、最高です。レオン達が動いています。
マルティーヌがとても可愛いです。
本当におすすめなので、ぜひ読んでみてください。

ＷＥＢ版の本編はここで完結となりますが、これからも「転生したら平民でした。生活水準に耐えられないので貴族を目指します」をよろしくお願いいたします！

この場を借りて、他の物語も紹介させてください。
私は他にもたくさんの長編小説を書いていまして、一番の最新作が

「最弱冒険者は神の眷属となり無双する～女神様の頼みで世界の危機を救っていたら、いつの間にか世界中で崇拝されています～」

こちらの作品です。神の眷属となった主人公リュカが、女神セレミース様の願いを叶えるために力を尽くしていきます。他の眷属との戦いや、仲間との絆、強大な魔物との戦い、ダンジョン攻略などを楽しんでいただけると思います。
書籍化も決まっている作品ですので、ぜひ読んでみてください。

もう一作、こちらは女主人公の物語です。

「転生少女は救世を望まれる～平穏を目指した私は世界の重要人物だったようです～」

スラムに生まれた主人公レーナが、日本人だった前世を思い出すところから物語は始まります。こちらは戦いよりも、着実にレーナが生活環境を高めていく過程を楽しんでいただける物語です。しかし色々な秘密もあって、この世界特有の料理や魔法論理なども楽しんでいただけると思います。

この二作以外にも長編作、さらには中編作、短編作もありますので、ぜひ読んでみてください！

長くなりましたが、この辺で失礼させていただきます。
これからも皆様が私の物語に触れ、楽しんでいただけることを願っています。

これからもよろしくお願いいたします。

蒼井美紗

番外編1、家族と領地へ

今日は家族が大公領に移動する日だ。領地の屋敷がとりあえず形になったので、皆はこれからマリーが王立学校に入学するまでは領地で過ごすことになる。

「お兄ちゃん、早く行こうよ！」
「はーい、ちょっと待ってね」

マリーはやっと領地に行けるということで、数日前からテンションが高い。まだ朝早いのに、向こうに持っていく自分の荷物を持って準備万端みたいだ。

「マリー様、お荷物は私がお持ちいたします……！」
「ううん。これは私が持ちます。だってその方がお引越しっぽいでしょう？」

少し畏まってマリーがそう発すると、メイドさんは苦笑を浮かべつつ頷いた。

「かしこまりました。ではせめてそちらのお荷物をカバンに詰めましょう」

それからもバタバタと朝から準備をして、家族皆が俺の部屋に集まった。ちなみに領地へと向かう方法は転移だ。
数日前にやっと王都の屋敷から大公領の屋敷に直接向かえるようになり、行き来がかなり楽になった。

「ファブリスは一緒に行く？」
『うむ、我も行こう。ついでに魔物の森の駆逐もしたら良いんじゃないか？』
「確かに。じゃあファブリスも一緒ね」

満面の笑みを浮かべて鞄を抱えたマリーと、少しだけ緊張している様子の父さんと母さん、そして皆のメイドや従者、護衛。さらに俺とファブリス、ロジェ、ローランの大所帯で転移を発動させた。

転移先は大人数だし最初ということもあり、大公邸の庭にした。すると目の前に広がった開かれた綺麗な景色に、マリーが感嘆の声を上げる。

「……すっごく綺麗！」
「本当ね。とても見晴らしがいいわ」
「小高い丘になってるんだ。まだまだ発展し始めたところだけど、街になってきてると思わない？」

大公邸を一番に優先してもらったから街にあるのは俺が魔法で建てた簡易の建物ばかりだけど、それでも人の営みがあるからか最初の頃よりも街らしくなってきている。

「ねぇ、お兄ちゃん。あの広場みたいなところは何？　人がたくさん走ってるところ」
「ああ、あそこは広場だよ」

この街には店も少なく屋台なども決まったものしかないので、皆が遊ぶ場所を作ろうということで、とりあえずだだっ広い広場を作ったのだ。

そしてボールを作って、サッカーのルールを知ってる限りで皆に教えた。そしたら皆がサッカーにどハマりして、毎日のようにあの広場では試合が開催されている。

「面白い遊びをやってるから、今度見に行ってみる？　見学するだけで楽しいよ」

俺は何度も試合に参加してるんだけど、さすがに大公家の子女であるマリーを参加させるのはどうかと思い、見学という提案にした。

するとマリーは瞳をキラキラと輝かせながら俺の顔を見上げ、大きく頷く。

「見にいきたい！」

「じゃあ今日は片付けや紹介もあるし、明日か明後日かな」

それから楽しみな予定が決まったことでご機嫌なマリーと共に屋敷に入り、こっちにいる使用人に家族が来たことを伝えて、新しく雇った使用人には皆の紹介をした。

夕方にはもう皆も落ち着いていて、今は皆で夕食前に応接室でお茶を飲んでいるところだ。

「とても良いお屋敷ね」

「父さんもそう思ったよ。それに自然がたくさんあっていいね」

「私もこのお屋敷好き！」

「気に入ってもらえたなら良かった。これからはもっと発展させていくからね。マリーは何かこの街に欲しいものはある？」

俺のその問いかけにマリーはしばらく難しい顔で考え込み、何か

を思いついたのかパッと顔を上げた。

「バーベキューする場所！　あ、あと釣りもできたら嬉しいなぁ」

どちらも俺がマリーと一緒にやったものだ。この二つを選んでくれたということは以前の体験が楽しかったということであり、思わず頬が緩んでしまう。

「了解。じゃあ釣りができる場所の近くにバーベキュー場を作って、釣った魚を自分で焼いて食べられるようにしようか」

いわゆる山の中のキャンプ場みたいなやつだ。ただ問題はここが平地で川がないってことなんだよな……でもマリーの願いを叶えないという選択肢はない。

とりあえず土魔法と水魔法で大きな湖を作って、そこに魚を入れればいいだろうか。そしてその湖の辺りにバーベキューできる場所を作ろう。

綺麗な花を咲かせる木々を中心に植えて、湖には安全対策も万全にしないと。

「できる？」

「もちろんだよ。ただ少し時間はかかるから待って欲しいかな」

「うん！　お兄ちゃんありがとう！」

マリーは俺に向かって満面の笑みを浮かべてくれて、それだけで無限にやる気が湧いてきた。魔法を駆使してファブリスにも手伝ってもらって、一週間で形にしよう。

それから一週間後には街の外れに立派な湖とキャンプ場が完成し

ていて、サッカーが行われる広場と同等、いやそれ以上に大人気スポットとなったのだった。

番外編2、和菓子の作成

今日の俺は領地ではなく王都の屋敷にいる。なぜならミシュリーヌ様に急かされに急かされたからだ。

『レオン！　絶対今日中に和菓子を作るのよ！』

そう、色々と忙しくて和菓子開発を後回しにし続けていたら、ついにミシュリーヌ様が爆発した。

「分かっています。ヨアンには下準備をお願いしてますし、今日中に色々と完成しますよ。今日はあんこを使ったものをたくさん作る予定です」

『ふふっ、ふふふっ、どら焼きね！』

「あとは大福、団子も作ると思います。そうだ、ヨアンが既にあんこは作ってくれてると思うので、それだけなら神界で食べられるんじゃないですか？」

ふと疑問に思って首を傾げると、いかにもミシュリーヌ様らしい返答が聞こえてきた。

『そんなのもうたくさん食べたわ』

「……ですよね。ミシュリーヌ様ならそうですよね」

聞いた俺が間違いだった。

そんな話をしながら自室からヨアン専用の厨房に向かって、一緒に来てくれているロジェがドアをノックした。するとすぐに中から

声が聞こえてくる。

「どうぞ～」

「ヨアン、お邪魔するよ」

「レオン様、お待ちしておりました」

「良い匂いだね。あんこはできてる？」

「はい。レシピ通りに作ってみたのですが、こちらで良いのでしょうか？」

ヨアンが差し出してくれたお皿には、粒あんとこし餡がそれぞれ載っていた。スプーンで掬って口に運ぶと、独特の甘い美味しさが口の中に広がる。

「おお～、凄く美味しい」

「本当ですか？　良かったです。砂糖の量が難しくて」

「そうだね……もう少し増やしても良いかもしれない。でもあんこを使うお菓子によるかな。たとえばどら焼きは皮が甘いからこのままでも良いと思う。でも団子とかに載せるならもう少し甘くても良いかな……」

『もっと甘いのも作って欲しいわ！』

悩んでいたら、ミシュリーヌ様からの願望が頭の中に響いてきた。

「ヨアン、ミシュリーヌ様がもっと甘いのも欲しいって。もう少し甘さを足したやつも作ってあげてくれる？」

「かしこまりました」

俺の言葉にヨアンは苦笑しつつ頷き、まだ鍋に入っているあんこに砂糖を足した。

「じゃあ、さっそくあんこのお菓子を使っていこうか」
「はい！」

それからの俺たちはミシュリーヌ様の要望に応えつつ、たくさんの和菓子を作り上げていった。ヨアンはさすがの手際で、どれも日本で食べた記憶がある和菓子と遜色ない美味しさだ。

「このどら焼き美味しい……」
「私としてはもう少し美味しくできる気がするのですが。これって、生クリームを入れたらどうでしょうか」
「おおっ、生クリームどら焼きだね。そういうのもあるよ」

さすがヨアン、すぐそこに辿り着くなんてセンスがあるな。

「ロジェはどう？」
「とても美味しいです。この皮が特に好みですね」
「分かる。皮だけで食べたくなるよね」

マリーたちにも持ち帰ったら絶対に喜ぶな。後はマルティーヌにも食べさせてあげたい。マルティーヌ、このあと暇な時間あるかな。

「ヨアン、いくつかマルティーヌと家族用に持ち帰っても良い？」
「もちろん構いません……が、できる限りよくできているやつを選んでも良いでしょうか？」
「ははっ、それはもちろん」

ヨアンは真剣な表情でたくさんの和菓子を選び、家族用とマルティーヌ用にそれぞれ盛り付けてくれた。

「こちらをお持ちください」

「ありがとう。じゃあヨアン、そろそろ俺は行くね。今日は急に時間を取ってもらってありがとう」
「いえ、いつでもお申し付けください。本日作った菓子の数々は、より美味しくなるように改良しておきます」
「ありがとう。楽しみにしてるよ」

そうしてヨアン専門の厨房を出た俺は、私室で汚れた服を着替えてから、王宮の執務室に向けてロジェとローランと共に転移をした。

「レオン、来たのか？　今日は仕事の日ではないはずだが」

執務机で仕事をしていたアレクシス様が、突然現れた俺に視線を向けてくれる。もう他の文官たちは完全に慣れていて、驚くこともせずにそのまま仕事を続行中だ。

「突然すみません。仕事ではなくて、マルティーヌに用事があって。本日は暇があるでしょうか」
「確か……特別な予定はなかったはずだ。マルティーヌのメイドにレオンの来訪を知らせようか？」
「お願いします」
「分かった。では従者が戻ってくるまでこちらで待っていると良い」

アレクシス様はそう言うと、お茶の用意を頼んで自分もソファーに腰掛けた。

「今日も何か美味しいスイーツでも完成したのか？」

何気なく発したのだろうアレクシス様の言葉に、俺は思わず苦笑を浮かべてしまう。そう言われるほど、マルティーヌにスイーツを持って来てるのか。

「アレクシス様も召し上がりますか？」
「良いのか？　マルティーヌのだろう？」
「たくさん持ってきているので、マルティーヌに太ってしまうと怒られる可能性が……」
「ははは、それはいけないな。では私もいただこう」
「ぜひ食べてください」

それからアレクシス様にどら焼きと大福、団子を食べてもらっていると、リシャール様が書類を持って戻ってきたので、三人でお茶会を続行した。
すると数分後にマルティーヌのメイドさんが執務室にやってきて、マルティーヌが中庭の東屋で待っていることを教えてくれる。

「ありがとう。ではアレクシス様、リシャール様、俺は行きます」
「ああ、これは私たちでいただくな」
「はい。全部食べちゃってください」
「この和菓子というのはとても美味しい。ぜひ今度買わせてくれ」
「ヨアンに言っておきますね。凄く喜ぶと思います」

二人に見送られてメイドさんの案内で東屋に向かうと、そこにはとても可愛らしく着飾ったマルティーヌが待ってくれていた。

やっぱりマルティーヌ、凄く可愛いな……何度見ても思わず見惚れてしまう。

「レオン、いらっしゃい。会いに来てくれて嬉しいわ」
「いつも突然でごめん」
「良いのよ。気にしないで」

席に着くとすぐにメイドさんがお茶を淹れてくれて、東屋の近くには誰もいなくなった。俺たちが二人だけでお茶会をする時には、マルティーヌがいつも人払いをしてくれるのだ。
今日は和菓子の話をしたかったし、とてもありがたい。

「今日は新たなスイーツを持ってきたんだ。和菓子だよ」
「それって……レオンの記憶にある国のお菓子よね？」
「そう。覚えてくれてたんだ」
「もちろんよ。ずっと食べてみたかったの。嬉しいわ」

どら焼き、大福、団子の順にテーブルに出すと、マルティーヌは瞳を輝かせて三つの和菓子を順に見つめた。

「この茶色いものはチョコレートではないの？　少し色が違うけれど」
「うん。それはあんこっていうものなんだ。今日のは全てあんこの和菓子だよ。俺が一番好きなのはどら焼きかな」
「このパンみたいなものね。これは……ナイフとフォークで食べれば良いのかしら」
「本当は平民向けのクレープみたいに手掴みなんだけど、抵抗があればナイフとフォークでも良いよ。これからシュガニスで出す時には、ナイフとフォークで食べやすいようにするだろうから」

その言葉にマルティーヌは少しだけ悩んでから、恐る恐るどら焼きを素手で掴んだ。

「ここでしか出来ないから、手掴みで食べてみるわ」
「確かに二人だけの時しかできないね」
「ええ……では、食べてみるわね」

指先だけで恐々とどら焼きを持つマルティーヌはゆっくりと口元に運ぶと、パクッと小さくどら焼きにかぶりついた。しかしまだあんこに辿り着かなかったらしい。首を傾げてもう一度口に入れる。

「んっ！」

まだ口にどら焼きが入っている状態で、マルティーヌは瞳を見開いて嬉しそうに笑みを浮かべた。

「これ、美味しい」
「そう言ってもらえて良かった」
「なんだか落ち着く味ね。ホッとするわ」

マルティーヌにそう言ってもらえるのが嬉しくて、口端が緩んでしまう。どら焼きを食べてホッとするのって日本人だけじゃないんだな……確かにケーキとかに比べたら、素朴な味だ。

「皮だけでも結構いけるんだ」
「確かに最初に皮だけを食べたけれど、美味しかったわ」
「だよね。あっ、三つとも全部を食べなくて良いよ。量が多いから」
「ありがとう。では次はこちらを食べてみるわね」

それからの俺たちは美味しい和菓子を堪能しながら、最近の大公領の様子について話に花を咲かせた。
マルティーヌとの時間は本当にあっという間で、とても楽しくて幸せだった。早くマルティーヌと、ずっと一緒にいたいな。

番外編2、和菓子の作成（後書き）

今回は本編の方であまり書けなかった和菓子について書いてみました。私の中で和菓子にハマりそうなのは、リシャール様とロニーです。

ちなみに私が一番好きな和菓子は、今回は登場していないのですがわらび餅ですね。あとフルーツ大福も好きです……って、どちらも餡子はあまり使われませんが笑

餡子がたくさん使われるものとなると、やっぱりどら焼きが一番かもしれません。

番外編まで読みに来てくださっている皆様、本当にありがとうございます。これからもたまに更新していきますので、よろしくお願いします！

番外編3、マリーの婚約者

大公領の開発に精を出していたある日。王都の屋敷に戻ると、王立学校に通っているマリーから応接室に呼び出された。

「マリー、どうしたの？」

「お兄様、お話があります」

マリーは最近、大公家の子女としての振る舞いに完全に慣れてしまったようで、昔みたいに無邪気な笑顔を見せてくれることが少なくなった。

少し……いや凄く寂しいけど、マリーの成長を喜ぼうと毎回自分に言い聞かせている。

「なんでも聞くよ」

向かいのソファーに腰掛けると、マリーはキリッとした真面目な表情で、衝撃的な言葉を口にした。

「私の婚約者は決めないのですか？」

こ、こんやく、しゃ……？

「な、な、なんで、突然そんなことを……！？　もしかして好きな人でもできた！？　誰かに言い寄られたとか！？　よしっ、お兄ちゃんがそいつをボコボコに――」

「違います」

焦って俺が立ち上がったところに、マリーの鋭い声が刺さった。
「お友達とお茶会をしたら、皆さん婚約者がいたのです。私も婚約者とカフェデートをしたいです！」
拳を握りしめてそう宣言するマリーは、なぜかやる気満々だ。
「……お兄ちゃんとカフェに行くのじゃダメ？」
「それはデートじゃないです」
「……婚約者はまだ早いと」
「お兄様が断るのであれば、自分で相手を探します」
マリーの目は本気だった。しばらくどうすれば諦めてくれるかと考えてたけど……マリーもいつかは婚約者を作って結婚する時が来るのだから、ずっとマリーに一人でいてもらうことなんてできない。
それにそもそも、マリーが望んでることを叶えないのも違うよな……。
「分かった。でも一つだけ条件がある」
俺がそう伝えると、マリーはごくりと喉を鳴らした。
「なんでしょうか」
「――家では大公家子女の仮面を脱いで、俺とはただのマリーとして今まで通り接すること！」
ためにためて宣言すると、マリーはガクッと体を傾かせた。

「……お兄ちゃん、そろそろ妹離れしたほうがいいよ？」

マリーが普通に話してくれたことで、俺の気分は急上昇する。

「俺はもう決めたから、妹離れはしないって」

「……宣言するようなことじゃないと思う」

そう呟くと、マリーは切り替えるように顔を輝かせて前のめりになった。

「それで、私の婚約者を探してくれるんだよね！」

「まあ、約束したから、仕方ない……かな。ただ家柄が良くて性格が良くて俺と仲良くできてマリーのことを自分の命よりも大切にしてくれて頭が良くて腕っぷしが強くてマリーを絶対に幸せにしてくれると確信できるやつじゃなきゃダメだ！」

一息にそう告げるとマリーは溜息を吐きかけたけど、何かを思いついたのかパァッと顔を明るくした。

「私、一人だけ心当たりあるよ！」

この条件に当てはまる人に心当たりがあるなんて……自分で言うのもなんだけど、無理難題だと思う。

「それは、俺が知ってる人だったりする……？」

緊張しながら問いかけると、マリーは満面の笑みを浮かべながらその名前を口にした。

「うん！　リュシアン様！」

マリーから名前を聞いた瞬間、俺は衝撃を受けて固まってしまった。リュシアンは、全く候補として考えていなかったのだ。
でも悔しいことに、俺の出した条件をクリアしてる気がする。しかも婚約者がいなくて探してるって言ってたはずだ。

「た、確かに、リュシアンはいいやつだし、家柄的にもマリーと合うし、その他の条件も全て満たしてるけど……」

リュシアン、なんでまだ婚約者がいないんだ！！

「そうだよね！　じゃあリュシアン様に話をしてみてくれる？」
「……マリーは、リュシアンでいいの？　そんなに無理やり決めなくても、これから好きな人が現れるかもしれないし」

最後の足掻きとそう問いかけてみると、マリーからカウンターを食らった。

「うん！　だって私、リュシアン様のこと好きだもん！」
「そ、それは、友達的な？　兄妹的な……？」
「うーん、確かにお友達としても好きだけど、リュシアン様はカッコいいし優しいし好きにならないほうがおかしくない？」

マリーが大人になってる……！

俺は涙を呑みながら、マリーの言葉にぎこちなく頷いた。

「た、確かに、そうかも」
「でしょ？　でもリュシアン様、私じゃ嫌かなぁ」

そう呟いたマリーがなんだか寂しげに見えて、俺は思わずマリーの肩をガシッと掴んで言ってしまった。

「そんなことあるわけない！　マリーが嫌な人なんてこの世界にいるはずない！」

「ふふっ、お兄ちゃんありがと。じゃあリュシアン様に話をしておいてね！」

そう言って席を立つマリーの表情は満面の笑みだ。なんだかマリーの手のひらの上で転がされてる感じがしなくもないけど、もう諦めることにした。

俺はマリーには一生勝てないから。

「――とりあえず、リュシアンのところに行くか」

嫌なことは先に済ませようと、自室に戻ってからすぐにタウンゼント公爵領へ向けて転移をした。

番外編3、マリーの婚約者（後書き）

久しぶりの番外編投稿になりましたが、読みに来てくださった皆様ありがとうございます！
この続きは番外編４として書く予定です。
マリーが成長しちゃってますよね……レオンじゃありませんが、なんだか寂しい気持ちがあります（笑）

また別作品の告知になってしまうのですが、下記にある☆評価欄の下に「図書館の天才少女～本好きの新人官吏は膨大な知識で国を救います！～」へのリンクを貼ってありますので、お時間ありましたらそちらも覗いていただけたら嬉しいです。

完全記憶能力を持った平民の少女が、王宮で官吏となって活躍するハイファンタジーです。
よろしくお願いいたします！

蒼井美紗

番外編4、婚約成立

タウンゼント公爵領の領主邸に転移をした俺は、クリストフ様たちへの挨拶もそこそこに、リュシアンを呼んでもらった。

応接室にやってきたリュシアンに開口一番。

「リュシアン！　婚約者は決まった！？」

そう聞いたら、リュシアンは怪訝な表情で首を傾げた。

「なんでそんなこと聞くんだ？　決まってないぞ」

「なんで、なんで決まってないんだ……」

両手両膝をついて項垂れると、リュシアンに腕を引っ張られて無理やり立たされる。

「どうしたんだ？　悩みがあるなら聞くぞ？」

心配そうに問いかけてくれるリュシアンは、やっぱり良いやつだ。最高の友達だし、リュシアンにならマリーを預けられる――と思ってしまう。

「リュシアン、なんでそんなに良いやつなんだよ！」

「……私は褒められてるのか怒られてるのかどっちだ？」

「どっちも……！」

それから少ししして落ち着いた俺がマリーの婚約者の件をポツポツ

と話すと、リュシアンは全てを聞いてから楽しそうに笑い出した。

「ははっ、それであんな態度だったのか。レオンは本当にいつまでもマリーちゃんが好きだな」

「好きに決まってる」

「分かった分かった。それで婚約者の件だったな」

リュシアンのその言葉に、俺は緊張してごくりと生唾を飲み込んだ。するとそんな俺の緊張が分かったのか、リュシアンはなかなか次の言葉を発さない。

「――――早くっ」

あまりにも焦らされて思わず声を掛けると、リュシアンは楽しそうな笑みを浮かべた。

絶対にわざと黙ってたやつだ……！

「レオンはマリーちゃんが絡むと本当に面白いな。婚約者の件、もちろんありがたく受けさせてもらおう」

今度はさらっと回答を口にしたリュシアンに、俺はどんな反応をすれば良いのか分からなかった。断られても困るけど、受けてもらえるのも素直に喜べない。

「……マリーのことを好きなの？」

思わずそんな質問をすると、リュシアンは少しだけ考えてから首を縦に振った。

「好きか嫌いかで言えば、確実に好きだな。明るくて一緒にいるだけで元気になれるだろう？」
「……分かる」
「それに可愛らしいし、努力家だ」
「……マリーは世界一可愛い」

俺の言葉に苦笑を浮かべたリュシアンは、少し真剣な表情で口を開いた。

「ジャパーニス大公家とならば、家同士の問題も起こらないし、この国の勢力図が大きく変わることもないだろう。またマリーちゃんを得て自らの地位を上げようと考える者は多数いるだろうから、その心配もなくなるぞ」
「……確かにそうなんだ」

実際にマリーとの面会打診は山のように来ている。俺が全部マリーには伝えず破棄してるけど、王立学校に行ってるマリーには直接声をかける子息もいるだろう。

そう考えると、やっぱりマリーを守ってくれる存在が必要だ。

「――リュシアン、マリーを頼む」

小さな声でそう伝えると、リュシアンは楽しそうに口端を持ち上げた。

「もちろんだ。義兄上？」
「リュシアン、楽しんでるだろ！」
「そんなことはないぞ？」

そう言って笑うリュシアンは心から楽しそうで、マリーを託して本当に良かったのかと心配になってくる。

でもリュシアン以上の相手はいないことも事実だ。

「マリーを不幸にしたら許さないからな」

「ああ、絶対幸せにする。とりあえず……私を王都に連れて行ってくれないか？　やはり男である私から正式に婚約打診をしなければな」

「……分かった。今は魔力がないから明日な」

「それまでに準備をしておこう」

そうして俺はリュシアンを連れて、マリーの下へ戻ることになった。

クリストフ様やソフィア様にも二人で話をしたけど、マリーがリュシアンの婚約者となることには大賛成をしてくれた。

次の日の昼過ぎ。俺とリュシアンは王都のジャパーニス大公邸に戻った。今日はちょうど王立学校が休みの日で、マリーは屋敷にいる。

リュシアンを連れて帰ってきたことを伝えたらマリーは急すぎると怒り、それから慌てて準備をして数時間後。二人は庭園の東屋でお茶会をすることになった。

俺は仲人的な立場でとりあえず同席してるけど、正直今すぐに退席したい。いや、二人っきりにするのもまた微妙だけど、この場にいるのも辛い。

「マリーちゃん、久しぶりだな」
「リュシアン様、お久しぶりです！」

二人は色々な場面で交流があるので、結構仲が良い関係性だ。

「今回は光栄な話をありがとう。とても嬉しく思う」
「いえ、急なお話となってしまい申し訳ございません。それで、ご迷惑でしたでしょうか……？」

躊躇いながらもそう聞いたマリーに、リュシアンは笑顔で首を横に振った。

「迷惑などあるはずがない。――マリー嬢、私の婚約者となってくれるだろうか。生涯かけて君を幸せにすると誓おう」

真剣な表情でそう伝えたリュシアンに、マリーは頬を僅かに赤く染めながら嬉しそうに頷いた。

「はい！　よろしくお願いいたします。私も生涯、リュシアン様を隣でお支えします」
「ありがとう。心強いな」

俺が血涙を流しそうになっている横で、そうして二人は婚約者となった。

それからも二人は楽しそうに話をしていて……俺は退席しようとしたんだけど、マリーが優しさを発揮し、「お兄ちゃんも一緒に食べよう？」と言ってくれた。

俺がそれに抗えるはずもなく――楽しいけど寂しいという不思議なお茶会に、結局最後まで参加することになった。

この後、マルティーヌに会いに行こうかな……。

番外編４、婚約成立（後書き）

皆様お久しぶりです。今回は前回の番外編の続きで、マリーとリュシアンの二人が婚約者となった時のことを書いてみました。レオンは……うん、そろそろ妹離れをした方がいいですね（笑）

そして本日はお知らせが二つあります！
本日５／３０に本作の小説４巻（電子書籍のみ）とコミックス４巻が、同日発売となりました！！

小説は３巻の発売から少し間が空いてしまいましたが、電子書籍のみとはいえ発売ができたこと、とても嬉しいです。ｗｅｂ版とはまた違う展開のお話を楽しんでいただけますので、レオンたちの物語がお好きな方は、ぜひお読みください。よろしくお願いいたします。
書き下ろし番外編が二つと電子書籍特典ＳＳが一つ付きますので、合計三つの新しい短編もお読みいただけます。
楽しんでいただけたら嬉しいです！

そしてコミックスの４巻ですが、こちらはマルティーヌの治癒をするあたりからの話になります。漫画には小説とはまた違った魅力があり、本当に面白いのでぜひ読んでいただきたいです……！
漫画のマルティーヌ、本当に可愛いです。レオンも表情豊かでとても楽しく読めます。

では皆様、小説４巻とコミックス４巻、どちらもよろしくお願いいたします！

蒼井美紗

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://ncode.syosetu.com/n2125gz/

転生したら平民でした。生活水準に耐えられないので貴族を目指します。

2024年7月10日21時59分発行